



歳御作

唱法華題目抄

於鎌倉名越

文応元年五月 三十九

有^あ人^よ予^よに問^いうて云^いく世^せ間^{けん}の道^{どう}俗^{ぞく}さ^せる法^ほ華^け經^{きやう}の文^{もん}義^ぎを弁^わ弁^ますとも

一^い部^ぶ一^い卷^{くわん}・四^よ要^{よう}品^{ぽん}自^じ我^が偈^い一^い句^く等^{とう}を受^じ持^じし・或^{ある}は自^{ある}らもよみかき若^もしは

人^らをしてもよみかかせ・或^{ある}は我^{ある}とよみかかざれども經^{きやう}に向^{むか}ひ奉^{たてまつ}り合^あ掌^{しょう}

礼^{らい}拜^{はい}をなし香^{かう}華^わを供^く養^{やう}

し、或^{ある}は上^{かみ}の如^{ごと}く行^{ぎやう}ずる事^{こと}なき人^{ひと}も他^たの行^{ぎやう}ずるを^を見^みてわづかに隨^ず喜^{いき}の

心^{こころ}を・をこし国^{くに}中^{じゆう}に此^この經^{きやう}の弘^{ひろ}ま^まれる事^{こと}を

悦^{よろこ}ばん、是^{これ}体^{てい}の僅^{わず}か^かの事^{こと}によりて世^せ間^{けん}の罪^{つみ}にも引^ひかれず彼^かの功^く徳^{とく}に引^ひか

れて小^{しょう}乘^{じやう}の初^{しよ}果^かの聖^{しょう}人^{にん}の度^た度^{たび}人^{にん}天^{てん}に生^なれ

て而^{しか}も惡^{あく}道^{どう}に墮^おち^おざるがごとく常^{じやう}に人^{にん}天^{てん}の生^{しやう}をうけ終^{つい}に法^ほ華^け經^{きやう}を

心得るものと成つて十方浄土にも往生し又此の

土に於ても即身成仏する事有るべきや委細に之を聞かん、答えて云く

させる文義を弁えたる身にはあらざれども

法華經・涅槃經並に天台・妙楽の釈の心をもて推し量るにかりそめに

も法華經を信じて聊も謗を生ぜざらん人は余の惡にひかれて惡道に

墮つべしとはおぼえず、但し惡知識と申してわづかに權教を知れる人、

智者の由をして法華經

を我等が機に叶い難き由を和げ申さんを誠と思ひて法華經を隨喜せし

心を打ち捨て余教へうつりはてて一生さ

て法華經へ歸り入らざらん人は惡道に墮つべき事も有りなん、仰せに付

いて疑はしき事侍り実にてや侍るらん法華經

に説かれて候とて智者の語らせ給いしは昔三千塵点劫の当初、

大通智勝仏だいづうちしやうぶつと申す仏そいます其の仏ほんぶの凡夫ぼんぷにて

いましける時十六人の王子おうじをはします、彼の父の王おうぶつ仏ふつにならせ給ひて

一代聖教いちだいしやうきやうを説き給たまいき十六人の王子おうじも亦また

出家しゆつけして其その仏おんの御弟子でしとならせ給たまいけり、大通智勝仏だいづうちしやうぶつ・法華經ほけきやうを

説とき畢おわらせ給たまいて定じやうに入らせ給たまいしかば十六人

の王子おうじの沙弥しやみ其の前まへにしてかはるがはる法華經ほけきやうを講こうじ給たまいけり、其その

所説しよせつを聴聞ちやうもんせし人ひと幾千万いくせんまんといふ事をしらず

当座とうざに悟さとをえし人ふたは不退ふたいの位に入りいにき、又法華經ほけきやうをおろかに心得こころう得

結縁けちえんの衆しゆもあり其その人人ひとびと当座中間とうざちゆうげんに不退ふたいの

位に入らずして三千塵点劫をへたり、其の間又つぶさに六道・四生に輪廻し今日・釈迦如来の法華經を説き給うに不退の位に入る所謂・舍利弗・目連・迦葉・阿難等是なり猶猶信心薄き者は當時も覺らずして未来無數劫を経べきか知らず我等も大通智勝仏の十六人の結縁の衆にも・あるらん此の結縁の衆をば天台・妙樂は名字觀行の位にかなひたる人なりと定め給へり名字觀行の位は一念三千の義理を弁へ十法成乗の觀を擬し能義理を弁えたる人なり一念隨喜・五十展転と申すも天台・妙樂の釈のごときは皆觀行五品の初隨喜の位と定め給へり博地の凡夫の事にはあらず然るに我等は末代の一字・一句等の結縁の衆一分の義理をも知らざらんは豈無量の世界の塵点劫を経ざらんや是れ偏に理深解微の故に教は至つて深く機は実に浅きがいたす処なり只弥陀の名号を唱えて順次生に西方極樂世界に往生し西方極樂

世界に永く不退の無生忍を得て阿弥陀如来・観音・勢至等の法華經を説き給わん時間いて悟を

得んには如かじ然るに弥陀の本願は有智・無智・善人・惡人・持戒・破戒等をも扱ばず只一念唱うれば臨終に必ず弥陀如来・本願の故に來迎し給ふ是を以て思うに此の土にして法華經の結縁を捨て淨土に往生せんと・をもふは億千世界の慶点を経ずして疾法華經を悟るがためなり法華經の根機にあたはざる人の此の穢土にて法華經にいとまをいれて一向に念仏を申さざるは法華經の証は取り難く極樂の業は定まらず中間になりて中法華經をおろそかに

する人にてやおはしますらんと申し侍るは如何に、其の上只今承り候へば僅に法華經の結縁計ならば三惡道に墮ちざる計にてこそ候へ六道の生死を出るにはあらず、念仏の法門はなにと義理を知らざれども弥陀

のみようごう名号とをとな唱たてえ奉たてれば浄土じようどに往生おうじようする由よしを申まうすは遙はるかに法華經ほけきようよりも
弥陀みだの名号みようごうはいみじくこそ聞きこえ侍はべれ、答こたえて云いく誠まことに仰おほせめでたき上
智ちしや者の御物語おんものがたり語ごにも侍はべるなればさこそと存ぞんじ候そうらへども但ただし若もし御物語おんものがたりの
ごとく侍はべらばすこし不審ふしんなる事侍はべり、大通結縁だいつうけちえんの者ものをあらあらうちあ
てがい申まうすには名字みょうじ觀行くわんぎやうの者ものとは釈しやくせられて侍はべれども正まさしく名字みょうじ即そくの
位ゐの者ものと定められ侍はべる上退たいだいしゆしやう大取小たいしよくの者ものとて法華經ほけきようをすてて權教ごんきやうにうつ
り後あとには惡道あくどうに墮おちたりと見えたる上正まさしく

法華經ほけきょうを誹謗ひぼうして之これを捨てし者なり、設たとえ義理ぎりを知るようになる者なりとも謗法ぼうぼうの人にあらん上は三千塵点無量塵点さんぜんじんてんむりょうじんてんも経ふべく侍はべるか、五十展転一念隨喜ごじゅうてんでんいちねんずいきの人人ひとびとを觀行初隨喜かんぎしゅうしよずいきの位の者と釈しやくせられたるは末代まつだいの我等われらが隨喜ずいき等は彼の隨喜ずいきの中には入る可べからずと仰おおせ候そうろうか、是これを天台てんだい・妙樂みょうらく・初隨喜しよずいきの位と釈しやくせられたりと申もうさるるほどにては又名字みょうじそく即しやくと釈しやくせられて侍はべる釈しやくはすてらるべきか、所詮しよせん仰おほせの御義おんぎを委くわく案あんずればをそれにては候そうらへども謗法ぼうぼうの一分いちぶんにやあらん

ずらん其そのゆえ故ゆゑは法華經ほけきょうを我等われら末代まつだいの機かなに叶がたい難よしき由よしを仰おほせ候そうらは末代まつだいの一切衆生いっさいしゆじうは穢土えどにして法華經ほけきょうを行じて詮無せんなきことき事ことなりと仰おほせらるるにや、若もしさやうに侍はべらば末代まつだいの一切衆生いっさいしゆじうの中に此の御詞ごことばを聞きて既すでに法華經ほけきょうを信しんずる者も打ち捨て未いまだ行ぜざる者も行ぜんと思おもうべからず隨喜ずいきの心こころも留とどめ侍はべらば謗法ぼうぼうの分にやあるべかるらん、若もし

謗法の者に一切衆生なるならば、いかに念仏を申させ給うとも御往生は不定にこそ侍らんずらめ又弥陀の名号を唱へ極樂世界に往生をとぐべきよしを仰せられ侍るは何なる經論を証拠として此の心はつき給いけるやらん正くつよき証文候か若しなくば其の義たのもしからず、前に申し候いつるがごとく法華經を信じ侍るはさせる解なければども三惡道には墮すべからず候六道を出る事は一分のさとりなからん人有り難く侍るか、但し惡知識に値つて法華經隨喜の心を云いやぶられて候はんは力及ばざるか又仰せに付いて驚き覚え侍り其の故は法華經は末代の凡夫の機に叶い難き由を智者申されしかばさかと思ひ侍る處に只今の仰せの如くならば弥陀の名号を唱うとも法華經をいゐうとむるとがによりて往生をも遂げざる上惡道に墮つべきよし承るはゆゆしき大事にこそ侍れ、抑大通

結縁けちえんの者は謗法ほうぼうの故ゆえに六道ろくどうに回まわるも又名字みょうじ即そくの浅位せんいの者なり又

一念いちねん隨喜ずいき五十展ごじゅうてん転てんの者も又名字みょうじ觀行くわんぎょう即そくの位いと申まをす

釈わすは何いすれの処ところに候そうろうやらん委くわしく承たまわり候そうらはばや、又義理ぎりをも知らざる者

僅わづかに法華經ほけきょうを信はべじ侍あぐちしきるが惡智識あくちしきの教きょうによて法華經ほけきょうを捨はなて權教ごんきょうに移うつる

より外ほかの世間せけんの惡業あくごうに引ひかれては惡道あくどうに墮おつべからざる由よし申まをさるるは

証拠しょうこあるか、又無智むちの者の念仏ねんぶつ申まをして往生おうじやうすると何いかに見みえてあるやら

んと申まをし給たまうこそよに事ことあたらしく侍はべれ、雙觀經そうかんぎょう等の淨土じやうどの

さんぶきよう 三部經・善導和尚等の經釈に明かに見えて侍らん上はなにとか疑い
給うべき、答えて曰く大通結縁

の者を退大取小の謗法・名字即の者と申すは私の義にあらず天台大師

の文句第三の巻に云く 法を聞いて未だ度せず而して世世に相い値うて

今に声聞地に住する者有り即ち彼の時の結縁の衆なり」と釈し給いて

侍るを、妙樂大師の疏記第三に重ねて此の釈の心を述べ給いて云く 但

全く未だ品に入らず、俱に結縁と名づくるが故に「文・文の心は大通結縁

の者は名字即の者となり、又天台大師の玄義の第六に大通結縁の者を

釈して云く 君しは信若しは謗因つて倒れ因つて起く喜根を謗ずと雖も

後要らず度を得るが如し「文・文の心は大通結縁の者の三千塵点を経

るは謗法の者なり例せば勝意比丘が喜根菩薩を謗ぜしが如しと釈す

五十展転の人は五品の初めの初隨喜の位と申す釈もあり、

又初隨喜しよずいきの位の先の名字みょうじそく即と申す釈もあり疏記第十に云く初めに法会ほうえにして聞く是れ初品しよほんなるべし第五十人は必ず隨喜ずいきの位の初めに在る人なり「文・文の心は初會聞法しよえもんぽうの人は必ず初隨喜しよずいきの位の内第五十人は初隨喜しよずいきの位の先の名字みょうじそく即と申す釈なり。

其の上五種法師ごしゆほつしにも受持じゆじ・読・誦・書写しよしやの四人は自行じぎやうの人・大經だいぎやうの九人の先の四人は解げ無なき者なり解説げせつは化他けた後の五人は解あ有ある人と証し給たまへり、疏記第十に五種法師ごしゆほつしを釈しやくするには「或あるは全く未だ品いまだに入らず」又云く二向未いっかういまだだ凡位ぼんいに入らず「文・文の心は五種法師ごしゆほつしは觀行五品かんぎやうごほんと釈しやくすれども又五品ごほん已前いぜんの名字みょうじそく即の位とも釈しやくするなり、此等これらの釈しやくのごとく如くんば義理ぎりを知らざる名字みょうじそく即の凡夫ぼんぶが隨喜ずいき等の功德くどくも經文きやうもんの一偈いちげ・一句いっく・一念隨喜いちねんずいきの者ご五十展轉等じちゆうてんでんの内に入るかと覚え候おほ、何に況いかや此の經を信ぜざる謗法ほうぼうの者の罪業ざいごうは譬喩品ひゆほんに委くわくとかれたり持經者じきやうを謗ぼうず

る罪は法師品ほうしほんにとかれたり、此の経を信ずる者の功德くどくは分別功德品ぶんべつくどく

随喜功德品ずいきくどくに説いけり謗法ぼうぼうと申すは違背いはいの義ぎなり随喜ずいきと申すは

随順ずいじゆんの義ぎなりさせる義理ぎりを知らざれども一念いちねんも貴とうとき由申すは違背いはい

随順ずいじゆんの中うちには何れいずれにか取られ候べき、又末代まつだい無智むちの者のわづかの供養くよう

随喜ずいきの功德くどくは経文きやうもんには載のせられざるか如何いかに、其その上天台てんだい・妙楽みやうらくの釈しゃくの

心は他の人師にんしありて

法華經の乃至童子戲・一偈・一句五十展転の者を爾前の諸經のごとく
上聖の行儀と釈せられたるをば謗法の者と定め給へり、然るに我が釈
を作る時機を高く取りて末代造惡の凡夫を迷はし給わんは自語相違に
あらずや故に妙樂大師五十展転の人を釈して云く、恐らくは人謬りて
解せる者初心の功德の大なる事を測らず而して功を上位に推り此の
初心を蔑る故に今彼の行浅く功深き事を示して以て経力を顯わす」文
・文の心は謬つて法華經を説かんの

此の經は利智精進・上根・上智の人のためといはん事を仏をそれて下根
下智・末代の無智の者のわづかに浅き隨喜の功德を四十余年の諸經の
大人上聖の功德に勝れたる事を顯わさんとして五十展転の隨喜は説
かれたり、故に天台の釈には外道・小乘・權大乘までたくらべ来て
法華經の最下の功德が勝れたる由を釈せり、所以に阿闍多仙人は十二

年が間恒河の水を耳に留め耆毘仙人は一日の中に大海の水をすいほす
此くの如き得通の仙人は小乗・阿含經の三賢の浅位の一通もなき
凡夫には百千万倍劣れり、三明六通を得たりし小乗の舍利弗・目連
等は華嚴・方等・般若等の諸大乘經の未断三惑の一通もなき一偈・
一句の凡夫には百千万倍劣れり華嚴・方等・般若經を習ひ極めたる
等覺の

大菩薩は法華經を僅かに結縁をなせる未断三惑・無惡不造の末代の
凡夫には百千万倍劣れる由釈の文顯然也、而るを当世の念仏宗等の
・我が身の權教の機にて実經を信ぜざる者は方等・般若の時の二乗の
ごとく自身をはぢしめてあるべき処に敢えて其の義なし、あまつさへ
世間の道俗の中に僅かに觀音品自我憫なんどを読み適父母孝養な
んどのために一日經等を書く事あればいるさまたげて云く善導和尚は

念仏ねんぶつに法華經ほけきょうをまじうるを雜行ぞうぎょうと申し百の時もつは希まれに一二を得千の時とくせんは希まれに三五を得ん乃ないし至千中無一せんちゅうむいつと仰おおせられたり、何いかにに況いわんやや智慧ちえ第一だいいちの法然上人ほうねんしやうにんは法華經等ほけきょうを行ずる者ものをば祖父そふの履くつ・或あるは群賊等ぐんぞくにたとへられたりなんどいゝうとめ侍はべるは是かくくの如ごとく申もうす師しも弟子でしも阿鼻あびの焰ほのおをや招まねかんずらんと申もうす。

問いうて云いく何いかなるすがた並ことばに語もつを以もつてか法華經ほけきょうを世間せけんにいゝうとむる者はべには侍はべるやよにおそろしくこそおぼ

え候へ答えて云く始めに智者ちしやの申され候と御物語候おんものがたりいつるこそ法華經ほけきやうをいゝうとむる惡知識あくちしきの語ことばにて侍れ、末代まつだいに法華經ほけきやうを失うしなうべき者は心いちだいしやうきやうには一代聖教いちだいしやうきやうを知りたりと思いて而も心には權實二經ごんじつを弁わきまへず身みには三衣一鉢さんねいちぼつを帶し、或は阿練若あれんにやに身をかくし、或は世間せけんの人ひとにいみじき智者ちしやと思はれて而も法華經ほけきやうをよくよく知る由よしを人に知られなんととして世間せけんの道俗どうぞくには三明六通さんみりくつうの阿羅漢あらかんの如ごとく貴とうとばれて法華經ほけきやうを失うしなうべしと見えて候。

問うて云く其の証拠しやうこ如何いかん、答えて云く法華經ほけきやう勸持品かんじほんに云く諸もろの無智むちの人惡口罵詈あくぐめり等おとし及び刀杖とうじやうを加うる者有らん我等われら皆當みなまさに忍しのぶべし」文・妙樂大師みやうらくだいし此の文の心を釈しやくして云く初めの一行は通じて邪人じやにんを明すなわす、即ち俗衆ぞくしやうなり」文の心は此の一行は在家の俗男・俗女が權教ごんきやうの比丘等びくにかたらはれて敵をすべしとなり、經に云く惡世あくせの中の比丘びくは

邪智^{じやち}にして心諂曲^{てんく}に未だ得ざるを為^{これえ}得たりと謂^{おも}い我慢^{がまん}の心充滿^{じゅうまん}せん」
文妙樂大師^{みょうらくだいし}此の文の心を釈^{しゃく}して云く次^いの一行は道門増上慢^{どうもんぞうじょうまん}の者を
明^みす「文・文の心は惡世末法の權教^{あくせまつぽう こんきやう}の諸^{もろもろ}の比丘我れ法を得たりと慢^{まん}じ
て法華經^{ほけきやう}を

行ずるものの敵となるべしといふ事なり、經に云く「或は阿練若^{あれんにや}に納衣^{のうえ}
にして空閑^{くうげん}に在^あつて自ら真^みの道を行ずと謂^{おも}いて人間を輕賤^{きやうせん}する者有ら
ん利養^{りやう}に貪^{とんじやく}するが故^{ゆえ}に白衣^{びやくえ}の与^{ため}に法を説^とき世に恭敬^{きやうけい}せらるる事
ろくつう六通^{ろくつう}の羅漢^{らかん}の如^{ごと}くならん是^この人惡心^{あくしん}を懷^{いだ}き常に世俗^{せぞく}の事を念^{おも}い名を
阿練若^{あれんにや}に仮^かりて好んで我等^{われら}が過^{とが}を出^{いだ}さん而^{しか}も是^{かく}の如^{ごと}き言^{こと}を作^なさん此
の諸^{もろもろ}の比丘等^{びく}は利養^{りやう}を貪^{むさぼ}るを為^もつての故^{ゆえ}に外道^{げどう}の論義^{ろんぎ}を説^とき自ら此^{みずか}の
經典^{きやうてん}を作りて世間^{せけん}の人を誑惑^{おどわく}す名聞^{みやうもん}を

求^{もと}むるを為^もつての故^{ゆえ}に分別^{ぶんべつ}して是^この經を説くと、常に大衆^{たいしゅう}の中に在^あり

て我等を毀らんと欲するが故に國王・大臣・婆羅門・居士及び余の比丘衆に向つて誹謗して我が惡を説いて是れ邪見の人外道の論議を説くと謂わん」已上妙樂大師・此の文を釈して云く「三に七行は僭聖増上慢の者を明す」文・經並に釈の心は惡世の中に多くの比丘有つて身には三衣一鉢を帶し阿練若に居して行儀は大迦葉等の三明六通の羅漢のごとく在家の諸人にあふがれて一言を吐けば如来の金言のごとくをもはれて法華經を行ずる人をいるやぶらんがために國王・大臣等に向ひ奉つて此の人は

邪見じやけんの者なり法門ほうもんは邪法じやほうなりなんどいゐうとむるなり。

上かみの三人の中に第一だいいちの俗衆ぞくしゅうの毀そしりよりも第二じやちの邪智じやちの比丘びくの毀そしりは猶なお

しのびがたし又第二にの比丘びくよりも第三さんの大衣あれんにやの阿練若あれんにやの僧そうは甚はなはだし、此

の三人は当世とうせの權教ごんきょうを手本てほんとする文字もんじの法師ほつし並に諸經論しよきょうろんの言語道斷ごんごどうだん

の文を信ずる暗禪あんぜんの法師ほつし並に彼等かれらを信ずる在俗等ざいぞく四十余年よんじゅうよねんの諸經しよきょうと

法華經ほけきょうとの權實ごんじつの文義もんぎを弁わきまへざる故ゆゑに、華嚴けごん・方等ほうとう・般若等はんによの心仏しんぶつ

衆生しゆじやう・即心是仏そくしんぜふつ・即往十方そくおうじゆつぽう西方等ほうとうの文と法華經ほけきょうの諸法實相しよほうじつそう即往十方そくおうじゆつぽう

西方さいほうの文と語ことばの同じきを以て義理ぎりのかはれ

るを知らず・或は諸經しよきょうの言語道斷ごんごどうだん・心行所滅しんぎやうしよめつの文を見て一代聖教いちだいしやうきやうに

は如來にょらいの實事じつじをば宣のべべられざりけりなんどの邪念やねんをおこす、故ゆゑに惡鬼あくき

此の三人に入つて末代まつだいの諸人しよにんを損こくどじ国土こくどをも破やぶるなり故に經文きやうもんに云く

濁劫惡世じよつじやくあくせの中には多く諸もろもろの恐怖くふ有らん惡鬼あくき其の身に入つて我を罵詈めり

し毀辱きにくせん乃至ないし仏の方便ほうべん隨宜ずいき所說しよせつの法を知らず「文文の心は濁惡世じよくあくせの時比丘びく我が信ずる所の教は仏の方便ほうべん隨宜ずいきの法門ほうもんともしらずして權實ごんじつを弁わきまへたる人出來しゅつたいすれば罵のり破はし

なんどすべし、是偏ひとえに惡鬼あくきの身に入りたるをしらずと云うなり、されば末代まつだいの愚人ぐにんの恐るべき事は刀杖とうじやう・虎狼こうろう・十惡じゅうあく・五逆ごぎやく等よりも三衣さんね一鉢いちぱつを帶おとせる暗禪あんぜんの比丘びくと並なに權經ごんきやうの比丘びくを貴としと見て實經じつきやうの人をにくまん俗侶ぞくりよ等なり。

故ゆえに涅槃經ねはんぎやう二十二に云く惡象あくざう等に於おいては心に恐怖くふふする事無ことなかれ惡知識あくちしきに於おいては怖畏ふいの心を生ぜよ何を以もつての故ゆえに是惡象あくざう等は唯能ただよく身を壞やぶりて心を破やぶること能あたわず惡知識あくちしきは二俱ふたつともに壞やぶるが故ゆえに乃至惡象ないしあくざうの爲ために殺されては三趣さんしゆに至いたらず惡友あくゆうの爲ために殺されては必ず三趣さんしゆに至いたらん」文このもん 此文このもんの心を章安大師しょうあんだいし宣のべべて云く諸もろもろの惡象あくざう等は但是これ惡緣あくえんにし

て人に悪心あくしんを生ぜしむる事能あたわず悪知識あくちしきは甘談かんさん詐媚びまう巧言けんれい令色しよくもて人を牽ひいて悪を作なさしむ悪を作なすを以もつて

の故ゆえに人の善心ぜんしんを破やぶる之これを名づけて殺なと為すす即ち地獄じごくに墮だす」文、文の心は悪知識あくちしきと申もうすは甘くかたらひ詐いつわり媚こび言ねはんぎようを巧たくみにして愚癡ぐちの人の心を取とつて善心ぜんしんを破やぶるといふ事なり、総じて涅槃經ねはんぎようの心は十惡じゅうあく・五逆ごぎやくの者よりも謗法ほうぼう闡提せんたいのものをおそるべしと誡いましめたり闡提せんたいの人と申もうすは法華經ほけきよう・涅槃經ねはんぎようを云いいうとむる者と見えたり、当世とうせの念佛者ねんぶつ

等・法華經を知り極めたる由をいふに因縁譬喩をもて釈しよくよく知る由を人にしられて然して後には此の經のいみじき故に末代の機のおろかなる者及ばざる由をのべ強き弓重き鎧かひなき人の用にたたざる由を申せば無智の道俗さもと置いて実には叶うまじき權教に心移して僅かに法華經に結縁しぬるをも翻えし又人の法華經を行ずるをも隨喜せざる故に師弟俱に謗法の者となる。

之れに依つて謗法の衆生・國中に充滿して適仏事をいとなみ法華經を供養し追善を修するにも念仏等を行ずる謗法の邪師の僧來て法華經は末代の機に叶い難き由を示す、故に施主も其の説を實と信じてある間訪るる過去の父母夫婦兄弟等は弥地獄の苦を増し孝子は不孝謗法の者となり聽聞の諸人は邪法を隨喜し惡魔の眷屬となる、日本國中の諸人は仏法を行ずるに似て仏法を行ぜず適・仏法を知る

智者は国の人に捨てられ守護の善神は法味をなめざる故に威光を失ひ
利生を止此の国をすて他方に去り給い、惡鬼は便りを得て国中に入
り替り大地を動かし惡風を興し一天を悩し五穀を損ず故に飢渴出来
し人の五根には鬼神入つて精氣を奪ふ是を疫病と名く一切の諸人
善心無く多分は惡道に墮つることひとへに惡知識の教を信ずる故なり、
仁王經に云く 諸の惡比丘多く名利を求め國王・太子・王子の前に
於て自ら破佛法の因縁・破国の因縁を説かん其の王別えずして此の語
を信聴し横に法制を作りて仏戒に依らず是れを破仏・破国の因縁と
為す」文、文の心は末法の諸の惡比丘國王・大臣の御前にして国を
安穩ならしむる様にして終に国を損じ佛法を弘むる様にして還つて
佛法を失うべし、國王・大臣此の由を深く知し食さずして此の言を信受
する故に国を破り佛法を失うと云う文なり。此の時・日月度を失ひ時

節もたがひて夏はさむく冬はあたたかに秋は悪風吹き赤き日月出で
望朔にあらずして日月蝕し・或は二つ三つ等の日出来せん大火・大風・
彗星等をこり飢饉疫病等あらんと見えたり、国を損じ人を悪道にを
とす者は悪知識に過ぎたる事なきか。

問うて云く始めに智者の御物語とて申しつるは所詮後世の事の疑わ
しき故に善悪を申して承らんためなり、

彼の義等は恐ろしき事にあるにこそ侍るなれ一文不通の我等が如くなる者はいかにしてか法華經に信をとり候べき又心ねをば何様に思い定め侍らん、答えて云く此の身の申す事をも一定とおぼしめさるまじきにや其の故はかやうに申すも天魔・波旬・惡鬼等の身に入つて人の善き法門を破りやすらんとおぼしめされ候はん一切は賢きが智者にて侍るにや。

問うて云く若しかやうに疑い候はば我身は愚者にて侍り万の智者の御語をば疑いさて信ずる方も無くして空く一期過し侍るべきにや、答えて云く仏の遺言に依法不依人と説かせ給いて候へば經の如くに説かざるをば何にいみじき人なりとも御信用あるべからず候か、又依了義經不依不了義經と説かれて候へば愚癡の身にして一代聖教の前後淺深を弁えざらん程は了義經に付かせ給い候へ、了義經

ふりようぎよう
不了義經も多く候阿含・小乘經は不了義經・華嚴・方等・般若・淨土
の觀經等は了義經、又四十余年の諸經を法華經に對すれば不了義經
・法華經は了義經、涅槃經を法華經に對すれば法華經は了義經、
涅槃經は不了義經、大日經を法華經に對すれば大日經は不了義經
法華經は了義經なり、故に四十余年の諸經並に涅槃經を打ち捨てさ
せ給いて法華經を師匠と御憑み候法華經をば國王・父母・日月・大海
・須弥山・天地の如くおぼしめせ、諸經をば闕白・大臣・公卿乃至万民
・衆星・江河・諸山・草木等の如くおぼしめすべし、我等が身は末代造惡
の愚者・鈍者・非法器の者、國王は臣下よりも人をたすくる人父母は他
人よりも子をあはれむ者日月は衆星より暗を照らす者・法華經は機に
叶わずんば況や余經は助け難しとおぼしめせ、又
釈迦如来と阿弥陀如来・葉師如来・多宝仏・觀音・勢至・普賢・文殊等

の一切いっさいの諸仏しよぶつ・菩薩ぼさつは我等われらが慈悲じひの父母ふぼ・此この仏菩薩ぼさつの衆生しゆじやうを教化きやうけする慈悲じひの極理ごくりは唯ただ法華經ほけきやうにのみとどまれりとおぼしめせ、諸經しよきやうは惡人あくにん・愚者ぐしや・鈍者どんしや・女人にょにん・根欠等こんけつの者を救ふ秘術ひじゆつをば未いまだ説とき顯あらわさずとおぼしめせ法華經ほけきやうの一切經いっさいきやうに勝すぐれ候故そうろうゆえは但ただ此この事に侍はべり、而しかるを当世とうせの學者がくしや・法華經ほけきやうをば一切經いっさいきやうに勝すぐれたりと讃ほめて、而しかも末代まつだいの機かなに叶あはずと申もうすを皆信みなずる事豈謗法あにほうぼうの人に侍はべらずや、

只一口におぼしめし切らせ給い候へ所詮法華經の文字を破りさきなん
どせんには法華經の心やぶるべからず、又世間の惡業に對して云いと
むるとも人人用ゆべからず只相似たる權經の義理を以て云いとうとむる
にこそ人はたばらかさるれとおぼしめすべし。

問うて云く・或智者の申され候しは四十余年の諸經と八箇年の
法華經とは成仏の方こそ爾前は難行道・法華經は易行道にて候へ
往生の方にては同事にして易行道に侍り法華經を書き讀みても十方
の淨土阿弥陀仏の国へも生るべし觀經等の諸經の付いて弥陀の名号を
となえん人も往生を遂ぐべし只機縁の有無に随つて何をも諍ふべからず、
但し

弥陀の名号は人ごとに行じ易しと思ひて日本国中に行じつけたる事な
れば法華經等の余行よりも易きにこそと申されしは如何、答えて云く

おほ 仰せの法門はさも侍るらん又世間の人も多くは道理と思いたりげに
侍り但し身には此の義に不審あり、其の故は前に申せしが如く末代の
凡夫は智者と云うともたのみなし世こそりて上代の智者には及ぶべから
ざるが故に愚者と申すともいやしむべからず經論の証文顯然ならんに
は抑無量義經は法華經を説くが為の序分なり、然るに始め寂滅
道場より今の常在靈山の無量義經に至るまで其の年月日数を委く
計へ挙げれば四十余年なり、其の間の所説の經を挙るに華嚴・阿含・
方等・般若なり所談の法門は三乘・五乘・所習の法門な
り修行の時節を定むるには宣説菩薩歷劫修行と云ひ隨自意・隨他意
を分つには是を隨他意と宣べ四十余年の諸經と八箇年の所説との語
同じく義替れる事を定めるには文辭一と雖ど義各異るととけり成仏
の方は別にして往生の方は一つなるべしとおぼえず華嚴・方等・般若

くきようさいじよう　だいじようきよう
・究竟最上の大乘經・頓悟・漸悟の法門・皆未顯真実と説かれたり此
の大部の諸經すら未顯真実なり何に況や淨土の三部經等の往生極樂
ばかり未顯真実の内にもれんや其の上・經經
ばかりを出すのみにあらず既に年月日数を出すをや、然れば華嚴・
方等・般若等の弥陀往生已に未顯真実なる事疑い無し、觀經の弥陀
往生に限つて豈多留難故の内に入らざらんや、若し隨自意の法華經の
往生極樂を隨他意の

観經の往生極樂に同じて易行道と定めて而も易行の中に取つても猶
観經の念仏往生は易行なりと之を立てられれば權實雜亂の失大謗法た
る上一滴水の水漸漸に流れて大海となり一塵積つて須弥山となるが如く
漸く權經の人も實經にすすまず實經の人も權經におち權經の人・
次第に國中に充滿せば法華經隨喜の心も留り國中に王なきが如く
人の神を失えるが如く法華・真言の諸の山寺荒れて諸天善神・竜神
等・一切の聖人國を捨てて去らば惡鬼便りを得て
乱れ入り惡風吹いて五穀も成らしめず疫病流行して人民をや亡さん
ずらん、此の七八年が前までは諸行は永く往生すべからず善導和尚の
千中無一と定めさせ給いたる上選択には諸行を抛てよ行ずる者は
群賊と見えたりなど放語を申し立てしが、又此の四五年の後は
選択集の如く人を勧めん者は謗法の罪によつて師檀共に無間地獄に

墮つべしと經に見えたりと申す法門出来したりげに有りしを、始めは念仏者こそりて不思議の思いをなす上念仏を申す者無間地獄に墮つべしと申す惡人外道ありなんどののしり候しが念仏者・無間地獄に墮つべしと申す語に智慧つきて各選択集を委く披見する程にげにも謗法の書とや見なしけん千中無一の惡義を留めて諸行往生の由を念仏者毎に之を立つ、然りと雖も唯口にのみゆるして心の中は猶本の千中無一の思ひなり在家の愚人は内心の謗法

なるをばしらずして諸行往生の口にばかされて念仏者は法華經をば謗ぜざりけるを法華經を謗ずる由を聖道門の人の申されしは僻事なりと思へるにや、一向諸行は千中無一と申す人よりも謗法の心はまさりて候なり失なき由を人に知らせ而も念仏計りを亦弘めんとたばかり偏に天魔の計りごとなり。

問うて云く天台宗の中の人の立つる事あり天台大師爾前と法華と
相對して爾前を嫌うに二義あり、一には約部四十余年の部と法華經の
部と相對して爾前はなり法華は妙なりと之を立つ二には約教・教に☆
妙を立て華嚴・方等・般若等の円頓速疾の法門をば妙と歎じ華嚴・方等
・般若等の三乘歴別の修行の法門をば前三教と名づけてなりと嫌へ
り円頓速疾の方をば嫌わず法華經に同じて一味の法門とせりと申すは
如何、答えて云く此の事は不審に

もする事侍るらん然可しとをぼゆ天台・妙樂より已來今に論有る
事に侍り天台の三大部六十卷総じて五大部の章疏の中にも約教の時
は爾前の円を嫌ふ文無し、只約部の時ばかり爾前の円を押ふさねて嫌へ
り、日本に二義あり園城寺には智証大師の釈より起つて爾前の円を
嫌ふと云い山門には嫌はずと云う互に文釈あり俱に料簡あり然れど
も今に事ゆかず、但し予が流の義には不審晴れておぼえ候、其の故は
天台大師四教を立て給うに四の筋目あり、
一には爾前の經に四教を立つ二には法華經と爾前と相對して爾前の円
を法華の円に同じて前三教を嫌う事あり、三には爾前の円をば別教に
攝して前三教と嫌ひ法華の円をば純円と立つ四には爾前の円をば
法華に同ずれども但法華經の二妙の中の相待妙に同じて絶待妙には同
ぜず、此の四の道理を相對して六十卷をかんがうれば狐疑の氷解けた

り一一の証文は且つは秘し且つは繁き故に之を載せず、又法華經の本門にしては爾前の円と迹門の円とを嫌う事不審なき者なり、爾前の円をば別教に摂して約教の時は前三為☆後一為妙と云うなり此の時は爾前の円は無量義經の歴劫修行の内に入りぬ、又伝教大師の註釈の中に爾前の八教を挙げて四十余年・未顕真実の内に入れ・或は前三教をば迂回と立て爾前の円をば直道と云い無量義經をば大直道と云う委細に見る可し。

問うて云く法華經を信ぜん人は本尊並に行儀並に常の所行は何にか候べき、答えて云く第一に本尊は法華經八卷・一卷・二品・或は題目を書いて本尊と定む可しと法師品並に神力品に見えたり、又たへたらん人は釈迦如来・多宝仏を書いても造つても法華經の左右に之を立て奉るべし、又たへたらんは十方の諸仏普賢菩薩等をもつくり

かきたてまつるべし、行儀ぎようぎは本尊ほんぞんの御前おんまえにして必ず坐立行ざりつぎようなるべし道場どうじようを出いでては行住ぎようじゆう坐臥ざがをえらぶべからず、常じょうの所行しぎぎようは題目なむを南無なむ妙法蓮華經みようほうれんげきようと唱となうべし、たへたらん人は一偈いちげ・一句いっくをも読たてまつみ奉べる可べし助縁じょえんには南無釈迦牟尼仏なむしやくかむにぶつ・多宝仏たほうぶつ・十方諸仏じゅうつぱうしよぶつ・一切いっさいの諸菩薩しよぼさつ・二乘にじよう・天人てんにん・竜神りゆうじん・八部等心はちぶどうしんに随したがうべし愚者多ぐしやき世となれば一念三千いちねんさんぜんの觀かんを先とせず其その志こころざしあらん人は必ず習學しやくがくして之これを觀かんずべし。

問うて云く只題目計を唱うる功德如何、答えて云く釈迦如来。
法華經をとかんとおぼしめして世に出でましまししかども四十余年の
程は法華經の御名を秘しおぼしめして御年三十の比より七十余に至る
まで法華經の方便をまうけ七十二にして始めて題目を呼び出させ給へ
ば諸經の題目に是を比ぶべからず、其の上法華經の肝心たる方便・
寿量の一念三千・久遠実成の法門は妙法の二字におさまれり、
天台大師・玄義十卷を造り給う第一の卷には略し
て妙法蓮華經の五字の意を宣べ給う、第二の卷より七の卷に至るまでは
又広く妙の一字を宣べ八の卷より九の卷に至るまでは法蓮華の三字を
釈し第十の卷には經の一字を宣べ給へり、經の一字に華嚴・阿含・方等・
般若・涅槃經を収めたり妙法の二字は玄義の心は百界・千如・心仏
衆生の法門なり止観十卷の心は一念三千・百界・千如・三千世間

心しん仏ぶつ衆しゆ生じやう・三さん無む差さ別べつと立たて給たまう、一いつ切さいの諸しよ仏ぶつ菩ぼ薩さつ・十じゆ界かいの因いん果が十じゆ方ぽう
の草そう木もく・瓦が礫りやく等どう・妙みやう法ぽうの二に字じにあららずと云いう事じなし、華け嚴こん・阿あ含こん等どうの
よんじゆうよねん きやうぎやう しやうじゆうきやう だいもく だいじゆうきやう くだく おさ
四十余年の経経・小乗経の題目には大乘経の功德を収めず又
だいじゆうきやう おうじやう だいもく じやうぶつ くだく
大乘経にも往生を説く経の題目には成仏の功德をおさめず又王にて
あれ おうちゆう
は有れども王中の王にて無き経も有り仏も又経に随つて他仏の功德を
おさめず 平等意趣をもつて他仏・自仏と・をなじといひ・或は法身
びやうどう じぶつ たぶつ いたさいぶつ
平等をもて自仏他仏同じといふ、実には一仏に一切仏の
くだく
功德をおさめず今法華経は四十余年の諸経を一経に収めて十方世界
さんじん えんまん しよぶつ しか ぶんじん しよぶつ だん ゆえ
の三身円満の諸仏をあつめて釈迦一仏の分身の諸仏と談ずる故に一仏
いつさいぶつ みやうぽう しよぶつ みなおさ ゆえ みやうぽうれんげきやう ごじ
一切仏にして妙法の二字に諸仏皆収まれり、故に妙法蓮華経の五字
となく くだく ばくだい しよぶつ しよきやう だいもく ほげきやう しよかい みやうぽう
を唱うる功德莫大なり諸仏・諸経の題目は法華経の所開なり妙法は
もうかい
能開なりとしりて法華経の題目を唱うべし。 ほげきやう だいもく となく

問うて云く此の法門を承つて又智者に尋ね申し候えば法華經のい
みじき事は左右に及ばず候但し器量ならん人は唯我が身計りは然る
べし、末代の凡夫に向つてただちに機をも知らず爾前の教を云い
とめ法華經を行ぜよと申すはとしごろの念仏などをば打ち捨て又法華經
には未だ功も入れず有にも無にもつかぬようにてあらんずらん、又機も
知らず法華經を説かせ給はば信ずる者は左右に及ばず若し謗ずる者
あらば定めて地獄に墮ち候はんず

らん、其その上うへ仏ぶつも四十余年よんじゅうねんの間・法華經ほけきょうを説とき給たまはざる事は
にやくたんさんぶつじょう
若わ但だ讚さん仏ぶつ乘じょう・衆生しゅじょう没ぼつ在ざい苦くの故ゆゑなりと在ざい世せの機きすら猶なほ然しかなり何いかにに況いはんやや
まつだい
末代まつだいの凡夫ぼんぶをや、されば譬ひ喩ゆ品ほんには 仏ぶつ・舍利しやり弗ふつに告つげて言のたまわく無智むちの
人ひとの中に此この經きやうを説とくことなかれ」云云此等これらの道理どうりを申もうすは如何いかにが候あべ
き、答こたえて云いく智ち者しやの御物語おんものがたりと仰おほせ承たまり候あへば所詮しよせん末代まつだいの凡夫ぼんぶには機
をかがみて説とけ左さ右うなく説といて人ひとに謗ぼうぜさする事ことなかれとこそ候あなれ、
彼人そさやうに申もうされ候あへば御返事ごへんじ候あべきやうは抑そも若わ但だ讚さん仏ぶつ乘じょう・乃至ないし
むちにんちゅう
無智むち人中にんちゅう等どうの文ぶんを出だし給たまはば又一また經きやうの内に凡有所見ぼんぬしよけん・我が深敬じんきやう汝等なんじら等
と説といて不輕菩薩ふぎやうぼさつの杖じやうもく木瓦石がしやくをもつて・うちはられさせ給たまいしをば
かえり
顧かみさせ給たまはざりしは如何いかにと申もうさせ給たまへ。

問いうて云いく一經いっけいの内に相違さういの候あなる事ことそよに得心こころえがたく侍はべればく
わしく承たまり候あはん、答こたえて云いく方便品ほうべん等どうには機きをかがみて此この經きやうを説と

くべしと見え不輕品には謗ずとも唯強いて之を説くべしと見え侍り一
經の前後水火の如し、然るを天台大師会して云く、本已に善有るは
釈迦小を以て之を將護し本未だ善有らざるは不輕大を以て之を強毒
す」文・文の心は本と善根ありて今生の内に得解すべき者の為には直に
法華經を説くべし、然るに其の中に猶聞いて謗すべき機あらば暫く
權經をもてこしらえて後に法華經を説くべし、本と大の善根もなく今
も法華經を信ずべからずなにとなくとも惡道に墮ちぬべき故に但押し
て法華經を説いて之を謗せしめて逆縁ともなせと會する文なり、此の
釈の如きは末代には善無き者は多く善有る者は少し故に惡道に墮ちん
こと疑い無し、同くは法華經を強いて説き聞かせて毒鼓の縁と成す可き
か然らば法華經を説いて謗縁を結ぶべき時節なる事靜い無き者をや、
法華經の方便品に五千の上慢あり略開三顯一を聞いて広開三顯一の

時・仏の御力おんちからをもて座をたたしめ給ふ後に涅槃經並に四依の辺にして
今生こんじょうに悟さとを得せしめ給うと、諸法無行經に喜根菩薩・勝意比丘しょういびくに向つ
て大乘だいじょうの法門ほうもんを強しいて説とききかせて謗ぼうぜさせしと、此の二の相違そういをば
天台大師会てんだいだいしえして云く如来にょらいは悲を以ての故ゆえに發遣はつけんし喜根きこんは慈を以ての
故ゆえに強説ごうせつす「文・文の心は仏は悲の故ゆえに後のたのしみをば聞おいて当時とうじ・
法華經ほけきょうを謗ぼうじて地獄じごくにをちて苦にあう

べきを悲み給いて座をたたしめ給いき、譬えば母の子に病あると知れども當時の苦を悲んで左右なく灸を加へざるが如し、喜根菩薩は慈の故に當時の苦をばかへりみず後の樂を思いて強いて之を説き聞かしむ、譬えば父は慈の故に子に病あるを見て當時の苦をかへりみず後を思ふ故に灸を加うるが如し、又仏在世には仏・法華經を秘し給いしかば四十余年の間等覺不退の菩薩名をしらず、其の上寿量品は法華經八箇年の内にも名を秘し給いて最後にきかしめ給いき末代の凡夫には左右なく如何がきかしむべきとおぼゆる處を妙樂大師釈して云く「仏世は當機の故に簡ぶ末代は結縁の故に聞かしむ」と釈し給へり文の心は仏在世には仏一期の間多くの人不退の位にのぼりぬべき故に法華經の名義を出して謗ぜしめず機をこしらへて之を説く仏滅後には當機の衆は少く結縁の衆多きが故に多分に就いて左右なく法華經を説くべしと

云う釈なり是これ体の多くの品あり又末代まつだいの師は多くは機を知らず機を知らざらんには強しいて但実經じつぎやうを説くべきかされば天台大師てんだいだいしの釈に云く等しく是これ見ざれば但大を説くに咎とが無し」文・文の心は機をも知らざれば大を説くに失とがなしと云う文なり又時の機を見て説法せつぽうする方もあり皆みな國中くににじゅうの諸人しよにん・權經こんぎやうを信じて実經じつぎやうを謗し強あながちもちに用いざれば彈呵だんかの心をもて説くべきか時に依よつて用否ようひあるべし。

問うて云く唐土いわもろこしの人師にんしの中に一分一向いちぶんいつこうに權大乘こんだいじやうに留とどまつて実經じつぎやうに入いらざる者はいかなる故か候、答えて云く仏世いに出でましまして先ずよんじゅうよねん四十余年ごんだいじやうの權大乘しやうじやう・小乗しやうじやうの經を説き後には法華經ほけきやうを説いて言のたまわく君にやくいしやうじやう以小乘か・乃至ないし於一人おいちにん・我則墮慳貪がそくだけんどん・此事しじ為不可ふか」文・文の心はほとけただにぜん仏但爾前ばかの經許ばかりを説いて法華經ほけきやうを説き給たまはずばけんどん佛慳貪とがの失ありと説いかれたり、後に属累品ぞくるいほんにいたりてみ仏右の御手てをのべて三たび諫いさめをな

して三千大千世界の外・八方・四百万億那由佗の国土の諸菩薩の頂を
なでて未来には必ず法華經を説くべし、若し機たへずば余の深法の
四十余年の經を説いて機をこしらへて法華經を説くべしと見えたり、後
に涅槃經に重ねて此の事を説いて仏滅後に四依の菩薩ありて法を説く
に又法の四依あり実經をついに弘めずんば天魔としるべきよしを説かれ
たり故に如来の滅後・後の五百年・九百年

の間にいで給たまひしりゅうじゅ竜樹菩薩・天親菩薩等☆く如来のしょうぎょう聖教を弘ひろめ給たまうに天親菩薩は先にてんじん小乗のしょうじょう説一切有部の人・俱舍論を造つて阿含十二年の経の心を宣のべべて一向に大乘の義理を明あかさず次に十地論・撰大乘論・釈論等を造つて四十余年の権大乘の心を宣のべべ後に仏性論・法華論等を造りて粗実大乘の義を宣のべべたり竜樹菩薩亦然なり天台大師・唐土の人師として一代を分わかつに大小・権実顯然なり余の人師は僅かに義理を説けども分明ならず又証文たしかならず但し末の論師並に訳者・唐土の人師の中に大小をば分わかつて大にをいて権実を分わかたず・或は語には分わかつといへども心は権大乘のをもむきを出いでず此等これらは不退諸菩薩・其数如恒沙・亦復不能知とおぼえて候なり。

疑つて云く唐土の人師の中に慈恩大師は十一面觀音の化身牙より光を放つ、善導和尚は弥陀の化身口より仏をいだすこの外の人師通を現

じ徳をほどこし三昧を發得する人・世に多しなんぞ權實二經を弁わきまへて
法華經を證せんとせざるや、答えて云く阿竭多仙人外道は十二年の間・耳
の中に恒河の水をとどむ婆藪仙人は自在天となりて三目を現げんず、唐土
の道士の中にも張階は霧をいだし鸞巴は雲をはく第六天の魔王は仏滅
後に比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷
・阿羅漢・辟支仏の形を現じて四十余年の經を説くべしと見えたり通力
をもて智者愚者をばしるべからざるか、唯仏の遺言の如く一向に權教
を弘めて実經をつるに弘めざる人師は權教に宿習ありて実經に入ら
ざらん者は・或は魔にたばらかされて通を現げんずるか、但し法門をもて
邪正をただすべし利根と通力とにはよるべからず。

文応元年太歲庚申五月二十八日

日蓮

花押

鎌倉名越に於て書き畢んぬ

◆二

立正安国論

ぶんおう がんねん
文応元年七月

三十九歳御作 与

ほうじょうときより
北条時頼書

かまくら
於鎌倉

17P

りよきやく
旅客来りて嘆いて曰く近年より近日に至るまで天変地天・飢饉疫癘

あまねくてんか

ちじょう

きんじつ

いた

てんべんちよう

ききんえきれい

遍く天下に満ち

ちじょう

はびこ

ぎゅうばちまた

たおれ

がいこつみち

あ

招くの輩

ともがらすで

たいはん

こ

やからあえて

一人も無し

然る間

しか

ある

は利剣

りけん

こ

もつばら

さいどきようしゅ

みな

とな

ある

しゅうびよう

は利剣

りけん

こ

もつばら

さいどきようしゅ

みな

とな

ある

しゅうびよう

は利剣

りけん

こ

もつばら

さいどきようしゅ

みな

とな

ある

しゅうびよう

は利剣

りけん

こ

もつばら

さいどきようしゅ

みな

とな

ある

しゅうびよう

は利剣

りけん

こ

もつばら

さいどきようしゅ

みな

とな

ある

しゅうびよう

は利剣

りけん

こ

もつばら

さいどきようしゅ

みな

とな

ある

しゅうびよう

は利剣

りけん

こ

もつばら

さいどきようしゅ

みな

とな

ある

しゅうびよう

は利剣

りけん

こ

もつばら

さいどきようしゅ

みな

とな

ある

しゅうびよう

は利剣

りけん

こ

もつばら

さいどきようしゅ

みな

とな

ある

しゅうびよう

は利剣

りけん

こ

もつばら

さいどきようしゅ

みな

とな

ある

しゅうびよう

は利剣

りけん

こ

もつばら

さいどきようしゅ

みな

とな

ある

しゅうびよう

は利剣

りけん

こ

もつばら

さいどきようしゅ

みな

とな

ある

しゅうびよう

は利剣

りけん

こ

もつばら

さいどきようしゅ

みな

とな

ある

しゅうびよう

は利剣

りけん

こ

もつばら

さいどきようしゅ

みな

とな

ある

しゅうびよう

は利剣

りけん

こ

もつばら

さいどきようしゅ

みな

とな

ある

しゅうびよう

は利剣

りけん

こ

もつばら

さいどきようしゅ

みな

とな

ある

しゅうびよう

懸け若くは天神地祇を拝して四角四堺の祭祀を企て若くは万民百姓を哀んで国主・国宰の徳政を行う、然りと雖も唯肝胆を摧くのみにして弥飢疫に逼られ乞客目に溢れ死人眼に満てり、臥せる屍を觀と爲し並べる戸を橋と作す、觀れば夫れ二離壁を合せ五緯珠を連ぬ三宝も世に在し百王未だ窮まらざるに此の世早く衰え其の法何ぞ廃れたる是れ何なる禍に依り是れ何なる誤りに由るや。

主人の曰く独り此の事を愁いて胸臆に憤☆す客来つて共に嘆く屢談話を致さん、夫れ出家して道に入る者は法に依つて仏を期するなり而るに今神術も協わず仏威も験しなし、具に当世の体を觀るに愚にして後生の疑を發す、然れば則ち円覆を仰いで恨を呑み方載に俯して慮を深くす、倩ら微管を傾け聊か經文を披きたるに世皆正に背き人悉く惡に歸す、故に善神は國を捨てて相去り聖人は所を辭して

還^{かえ}りたまわず、是^これを以^もて魔^ま来^きり鬼^き来^{きた}り災^{さい}起^{おこ}り難^{なん}起^{おこ}る言^のわ^{たま}ずんばある
可^べからず恐^{おそ}れずんばある可^べからず。

客^いの曰^{いわ}く天^{てん}下^かの災^{わざわい}・国^{くに}中^{じゅう}の難^{なん}・余^よ独^{ひと}り嘆^{なげ}くのみ^に非^{あら}ず衆^{しゅう}皆^{みな}悲^{かな}む、

今^{いま}蘭^{らん}室^{しつ}に入^いつて初^はめて芳^{ほう}詞^しを承^{うけ}るに神^{じん}聖^{せい}去^いり

辭し災難並び起るとは何れの經に出でたるや其の証拠を聞かん。

主人の曰く其の文繁多にして其の証弘博なり。

金光明經に云く其の国土に於て此の經有りと雖も未だ嘗て流布せ

しめず捨離の心を生じて聴聞せん事を樂わず亦供養し尊重し讚歎せ

ず四部の衆・持經の人を見て亦復た尊重し乃至供養すること能わず、

遂に我れ等及び余の眷屬無量の諸天をして此の甚深の妙法を聞くこと

を得ざらしめ甘露の味に背き正法の流を失い威光及び勢力有ること

無からしむ、惡趣を増長し人天を損減し生死の河に墜ちて涅槃の路に

乖かん、世尊・我等四王並びに諸の眷屬及び葉叉等斯くの如き事を見

て其の国土を捨てて擁護の心無けん、但だ我等のみ是の王を捨棄

するに非ず必ず無量の国土を守護する諸天善神有らんも皆悉く捨去

せん、既に捨離し已りなば其の国当に種種の災禍有つて国位を喪失すべ

尽く枯涸し土地悉く鹹鹵し☆裂して丘澗と成らん、諸山皆☆燃して
天竜雨を降さず苗稼も皆枯死し生ずる者皆死し尽き余草更に生ぜ
ず、土を雨らし皆昏闇に日月も明を現ぜず四方皆亢旱して数ば諸惡瑞
を現じ、十不善業の道・貪・瞋・癡・倍増して衆生父母に於け

る之を觀ること・鹿の如くならん、衆生及び壽命・色力・威樂減じ
人天の樂を遠離し皆悉く惡道に墮せん、是くの如き不善業の惡王・
惡比丘我が正法を毀壞し天人の道を損滅し、諸天善神王の衆生を
悲愍する者・此の濁惡の國を棄てて皆悉く余方に向わん」已上。

仁王經に云く 國土乱れん時は先ず鬼神乱る鬼神乱るるが故に万民
乱る賊來つて國を切かし百姓亡喪し臣・君・太子・主子・百官共に是非
を生ぜん、天地怪異し二十八宿・星道・日月時を失い度を失い多く賊
起ること有らん」と、亦云く 我今五眼をもつて明に三世を見るに一切
の國王は皆過去の世に五百の仏に侍えるに由つて帝王主と為ることを
得たり、是を為つて一切の聖人羅漢而も為に彼の國土の中に來生して
大利益を作さん、若し王の福尽きん時は一切の聖人皆為に捨て去ら
ん、若し一切の聖人去らん時は七難必ず起らん」已上。

薬師經に云く、若し刹帝利・灌頂王等の災難起らん時、所謂人衆
疾疫の難・他国侵逼の難・自界叛逆の難・星宿變怪の難・日月薄蝕の難
・非時風雨の難・過時不雨の難あらん」已上。

仁王經に云く、天王吾が今化する所の百億の須弥・百億の日月・一

一の須弥に四天下有り、其の南閻浮提に十六の大国、五百の中国、十千の
小国有り、其の国土の中に七つの畏る可き難有り、一切の国王是を難と
為すが故に、云何なるを難と為す、日月度を失ひ、時節返逆し、或は
赤日出で、黒日出で、二三四五の日出で、或は日蝕して光無く、或は
日輪一重・二三四五重輪現ずるを一の難と為すなり、二十八宿度を
失ひ金星・彗星・輪星・鬼星・火星・水星・風星・☆星・南斗・北斗・五鎮
の大星、一切の国主星・三公星・百官星、是くの如き諸星、各各變現す
るを二の難と為すなり、大火国を焼き、万姓焼尽せん、或は鬼火・

竜^{りゅう}火^か・天^{てん}火^か・山^{さん}神^{じん}火^か・人^{じん}火^か・樹^{じゅ}木^{もく}火^か・賊^{ぞく}火^かあらん是^{かく}くの如^{ごと}く変^{へん}怪^げするを
三^{さん}の難^{なん}と為^なすなり、大^ひ水^{やく}百^{ひゃく}姓^{せい}を没^{ひょうもつ}し時^じ節^{せつ}返^{ほん}逆^{ぎやく}して冬^{ふゆ}雨^{あめ}ふり・夏^{なつ}雪^{ゆき}
ふり・冬^{ふゆ}時^{とき}に雷^{らい}電^{でん}霹^{へきれき}・し・六^{ろく}月^{げつ}に氷^{ひょう}霜^{そう}雹^{はく}を雨^ふらし・赤^{せき}水^{すい}・黒^{こく}水^{すい}・青^{せい}水^{すい}を
雨^ふらし・土^ど山^{さん}・石^{せき}山^{さん}を雨^ふらし沙^さ礫^{やく}石^{せき}を雨^ふらす江^{かう}河^か逆^{ぎやく}に流^{なが}れ山^{さん}を浮^うべ石^{せき}
を流^{なが}す是^{かく}くの如^{ごと}く変^{へん}ずる時^{とき}を四^よの

難^{なん}と為^なすなり、大風^{たいふう}・万姓^{ばんしやう}を吹殺^{ふきころ}し国土^{こくど}・山河^{さんが}・樹木^{じゆもく}・一時^{いち}に滅没^{めつぼつ}し、
非^ひ時^じの大風^{たいふう}・黒風^{こくふう}・赤風^{せきふう}・青風^{せいふう}・天風^{てんふう}・地風^{ちふう}・火風^{かふう}・水風^{すいふう}あらん是^{かく}くの
如^{ごと}く変ずるを五^{なん}の難^なと為^なすなり、天地^{てんち}・国土^{こくど}・亢陽^{こうよう}し炎火^{えんか}洞燃^{どうねん}として、
百草^{ひやうかん}亢^{こう}旱^{かん}し・五穀^{ごこく}登^{のぼ}らず・土地^{とち}赫燃^{かくねん}と万姓^{ばんしやう}滅^め尽^{じん}せん是^{かく}くの如^{ごと}く変ずる
時^{とき}を六^{なん}の難^なと為^なすなり、四方^{しほう}の賊^{ぞく}来^きつて国^{くに}を侵^{ない}し内外^{ないげ}の賊^{ぞく}起^おり、
火賊^{かぞく}・水賊^{すいぞく}・風賊^{ふうぞく}・鬼賊^{きぞく}ありて百姓^{ひやくせい}荒乱^{こうらん}し・刀兵^{とうひやう}劫起^{きやうお}らん・是^{かく}くの如^{ごと}く
怪^むする時^{とき}を七^{なん}の難^なと為^なすなり」大集經^{だいしつきやう}に云^いく 若^もし国王^{こくおう}有^あつて無量^{むりやう}世^せ
に於^{おい}て施戒^{せかい}慧^えを修^{しゆ}すとも我^{われ}が法^{ほふ}の滅^めせんを見て捨^すてて擁護^{おうご}せずんば
是^{かく}くの如^{ごと}く種^こゆる所^{ところ}の
無量^{むりやう}の善根^{ぜんこん}悉^{ことごと}く皆滅^{みなめ}失^{しつ}して其^その国^ま当^{まさ}に三^ふの不祥^{ふしやう}の事^{こと}有^あるべし、一^{いち}には
穀^こ貴^き・二^にには兵革^{ひやうかく}・三^{さん}には疫病^{えきびやう}なり、一切^{いっさい}の善神^{ぜんじん}悉^{ことごと}く之^{これ}を捨離^{しやり}せば
其^その王教^{おうきやう}令^{しやう}すとも人随^{ずいじやう}從^{じやう}せず常^{じやう}に隣国^{りんこく}の侵^{しん}☆する所^{ところ}と為^ならん、暴火^{ぼうか}

横よこしまに起り惡風雨多く暴水増長して人民を吹ふきたし内外の親戚其れ共に謀叛むはんせん、其の王久しからずして当に重病に遇い壽終の後、大地獄の中に生ずべし、乃至王の如く夫人・太子・大臣・城主・柱師・郡守・宰官も亦復た是くの如くならん」已上。

夫れ四經の文朗かなり万人誰か疑わん、而るに盲瞽の輩迷惑の人妄に邪説を信じて正教を弁えず、故に天下世上・諸仏・衆經に於て捨離の心を生じて擁護の志無し、仍て善神聖人国を捨て所を去る、是を以て惡鬼外道災を成し難を致す。

客色を作して曰く後漢の明帝は金人の夢を悟つて白馬の教を得、上宮太子は守屋の逆を誅して寺塔の構を成す、爾しより来た上一人より下万民に至るまで仏像を崇め經卷を專にす、然れば則ち叡山・南都・園城・東寺・四海・一州・五畿・七道・仏經は星の如く羅なり堂宇雲の

如く布けり、子の族は則ち鷲頭の月を觀じ鶴勒の流は亦鷄足の風
を伝う、誰か一代の教を傳し三宝の跡を廃すと謂んや若し其の証有ら
ば委しく其の故を聞かん。

主人諭して曰く仏閣墓を連ね経蔵軒を並べ僧は竹葦の如く侶は
稻麻に似たり崇重年旧り尊貴・日に新たなり、

但し法師は諂曲にして人倫を迷惑し王臣は不覺にして邪正を弁ずること無し、仁王經に云く 謂の惡比丘多く名利を求め國王・太子・王子の前に於て自ら破仏法の因縁・破国の因縁を説かん、其の王別えずして此の語を信聴し横に法制を作つて仏戒に依らず是を破仏・破国の因縁となす」已上。

涅槃經に云く 菩薩惡象等に於ては心に恐怖すること無かれ惡知識に於ては怖畏の心を生ぜよ・惡象の為に殺されては三趣に至らず惡友の為に殺されては必ず三趣に至る」已上。

法華經に云く 惡世の中の比丘は邪智にして心諂曲に未だ得ざるを為れ得たりと謂い我慢の心充滿せん、或は阿練若に納衣にして空閑に在り自ら眞の道を行ずと謂いて人間を輕賤する者有らん、利養に貪著するが故に白衣の与めに法を説いて世に恭敬せらるること六通の

羅漢らかんの如ごとくならん、乃至ないし常たいじょうに大衆たいしゅうの中に在あつて我等われらを毀そしらんと欲ほするが故ゆえに國王こくおう・大臣だいじん・婆羅門ばらもん・居士こじ及び余おのれの比丘びく衆しゅうに向むかつて誹謗ひぼうして我が惡あくを説こいて是これ邪見じゃけんの人外道げどうの論議ろんぎを説くと謂いわん、濁劫じよつ惡世あくせの中には多おほくく諸もろもろの恐怖くふ有あらん惡鬼あくき其その身みに入いつて我われを罵詈めり毀辱きにくせん、濁世じよくせの惡比丘あくびくは仏ぶつの方便ほうべん隨宜ずいぎ所説しよせつの法ほふを知らず惡口あくくして顰蹙ひんじゆくし數數しばしば擯出ひんずいせられん」已上。

涅槃經ねはんぎょうに云いく我われ涅槃ねはんの後のち・無量百歲むりやうひゃくさい四道しどうの聖人しょうにん悉ことごとく復またた涅槃ねはんせん、正法しょうほう滅めつして後のち・像法ざうほうの中に於おいて當まさに比丘びく有あるべし、持律じりつに似像じざうして少すくく經きやうを説誦とくじゆし飲食おんじきを貪嗜とんしして其その身みを長養ちやうようし袈裟けさを著じやくすと雖いえども猶なほ獵師りやうしの細こめに視みて徐しゆに行いくが如ごとく猫ねずみの鼠うしかを伺うかがが如ごとく、常ことに是この言ごを唱となえん我羅漢らかんを得えたりと外ぐわいには賢善けんぜんを現げんし内ないには貪嫉とんしつを懷いだく誶法あほうを受うけたる婆羅門ばらもん等らの如ごとく、實じつには沙門しゃもんに非あらずして沙門しゃもんの像かたちを現げんじ邪見じゃけん

熾盛しじようにして正法しょうぼうを誹謗ひぼうせん」已上。

文に就ついて世を見るに誠もつに以て然しかなり惡侶あくりよを誡いましめずんば豈善事あにぜんじを成さんや。

客猶なおいまだ憤いどりて曰いわく、明王みんおうは天地てんちに因よつて化を成し聖人しょうにんは理非りひを察さつして世を治おさむ、世上せじようの僧侶そうりよは天下てんがの歸する所なり、惡侶あくりよに於おいては明王みんおう信べず可べからず聖人しょうにんに非あらずんば賢哲けんてつ仰あおぐ可べからず、今賢聖けんせいの尊重そんちようせるを以て則もつすなわち竜象りゆうざうの輕

からざるを知んぬ、何ぞ妄言を吐いて強ちに誹謗を成し誰人を以て悪比丘と謂うや委細に聞かんと欲す。

主人の曰く、後鳥羽院の御宇に法然と云うもの有り、選択集を作るすなわ、いちだいの聖教を破し、☆く十方の衆生を迷わす、其の選択に云く、即ち一代の聖教を破し、☆く十方の衆生を迷わす、其の選択に云く、道緯禪師・聖道浄土の二門を立て、聖道を捨てて正しく浄土に歸するの文、初に聖道門とは之に就いて二有り、乃至之に準じ之を思うに、応に密大及び実大をも存すべし、然れば則ち今の真言仏心・天台・華嚴・三論・法相・地論・摂論・此等の八家の意正しく、此に在るなり、曇鸞法師往生論の注に云く、謹んで竜樹菩薩の十住毘婆沙を案ずるに、云く菩薩阿毘跋致を求むるに二種の道有り、一には難行道二には易行道なり。

り、此の中難行道とは即ち是れ聖道門なり、易行道とは即ち是れ

浄土門じょうどもんなり、浄土宗じょうどしゅうの学者がくしゃ先すべからず須たといらく此の旨を知るべし設たとい先より
聖道門しょうどうもんを学まなぶ人なりと雖いえども若もし浄土門じょうどもんに於おいて其の志こころざし有あらん者は
須すべかららく聖道しょうどうを棄すてて浄土じょうどに歸かへすべし又云いわく善導ぜんどう和尚わじょう正しょう雜ざうの二行にぎょうを立た
て雜行ざうぎやうを捨すててて正行しょうぎやうに歸かへするの文ぶん、第一だいいちに説誦どくじゆ雜行ざうぎやうとは上かみの觀經かんきやう
等の往生おうじやう浄土じょうどの經ぎやうを除のぞいて已外いげ・大小乘しょうじやう・顯密けんみつの諸經しよきやうに於おいて受持じゆじ・説
・誦ずするを悉ことごとくく説誦どくじゆ雜行ざうぎやうと名なく、第三だいさんに礼拝らいはい雜行ざうぎやう

とは上かみの弥陀みだを礼拝らいはいするを除のぞいて已外いげ一切いっさいの諸仏しよぶつ・菩薩等ぼさつ及および諸の
世天等せてんに於おいて礼拝らいはいし恭敬きやうけいするを悉ことごとくく礼拝らいはい雜行ざうぎやうと名なく、私ひそかに云いわく此の
文ぶんを見るに須すべからく雜ぜんを捨すててて專せんを修しゆすべし豈あに百即ひやくそく百生ひやくしやうの專修せんしゆ正行しょうぎやうを
捨すててて堅けんく千中せんちゆう無む一の雜修ざしゆ雜行ざうぎやうを執ぎせんや行者ぎやうじや能これく之を思量しりやうせよ、
又云いわく貞元ていげん入藏錄にゅうざうろくの中に始め大般若經はんになきやう六百卷りくより
法常ほうじやう住經じゆうきやうに終はうるまで顯密けんみつの大乗經だいじやうきやう總だうじて六百三十七部りく二千八百八

十三卷なり、皆須く読誦大乘の一句に撰すべし、当に知るべし隨他の前
には暫く定散の門を開くと雖も隨自の後には還て定散の門を閉ず、一
たび開いて以後永く閉じざるは唯是れ念仏の一門なりと、又云く念仏
の行者必ず三心を具足す可きの文、觀無量壽經に云く
同經の疏に云く問うて曰く若し解行の不同・邪雜の人等有つて
外邪異見の難を防がん・或は行くこと一分二分にして群賊等喚廻すと
は即ち別解・別行・惡見の人等に喩う、私に云く又此の中に一切の
別解・別行・異學・異見等と

言うは是れ聖道門を指す已上、又最後結句の文に云く、天れ速かに生死を離れんと欲せば二種の勝法の中に且く聖道門を開きて選んで浄土門に入れ、浄土門に入らんと欲せば正雜二行の中に且く諸の雜行を抛ちて選んで応に正行に歸すべし」已上。

之に就いて之を見るに曇鸞・道綽・善導の謬釈を引いて聖道・浄土

・難行・易行の旨を建て法華・真言惣じて一代の大乗六百三十七部二

千八百八十三卷・一切の諸仏・菩薩及び諸の世天等を以て皆聖道・

難行・雜行等に撰して、或は捨て、或は閉じ、或は開き、或は抛つ此の

四字を以て多く一切を迷わし、剩え三国の聖僧十方の仏弟を以て

皆群賊と号し併せて罵詈せしむ、近くは所依の浄土の三部經の唯除

五逆誹謗正法の誓文に背き、遠くは一代五時の肝心

たる法華經の第二の若し人信ぜずして此の經を毀謗せば乃至其の人

いのちおわ 命終つて阿鼻獄に入らん」の誠文に迷う者なり、是に於て代末代に
およ 及び人聖人に非ず 各冥衢に容つて並びに直道を忘る悲いかな瞳瞭を
☆たず痛い

かな徒に邪信を催す、故に上国王より下土民に至るまで皆経は浄土三
部の外に経無く仏は弥陀の三尊の外の仏無しと謂えり。

仍つて伝教・義真・慈覚・智証等、或は万里の波濤を涉つて渡せし所
の聖教、或は一朝の山川を廻りて崇むる所の佛像若しくは高山の巔
に華界を建てて以て安置し若しくは深谷の底に蓮宮を起てて以て崇重
す、釈迦・葉師の光を並ぶるや威を現当に施し虚空地藏の化を成すや
益を生後に被らしむ、故に国王は郡郷を寄せて以て灯燭を明にし地頭
は田園を充てて以て供養に備う。

而るを法然の選択に依つて則ち教主を忘れて西土の仏駄を貴び

付属ふぞくを抛なげつて東方とうほうの如来にょらいを閣おき唯ただ四卷きようてん・三部もつぱらの教典きようてんを専もつぱらにして空むなしく
一代いちだい五時ごじの妙典みょうてんを抛なげつ是これを以もつて弥陀みだの堂だに非あらざれば皆みな供く仏ぶつの志しを
止とどめ念ねん仏ぶつの者ものに非あらざれば早せく施せ僧そうの懐おもいを忘わする、故ゆえに仏ぶつ閣かく零落れいらくして
瓦松かわらまつの煙けむり老おい僧房そうぼう荒廢こうはいして庭草にわくさの露つゆ深ふかし、然しかりと雖いえども各ご護惜ごしやくの心こころを

捨てて並びに建立の思を廃す、是を以て住持の聖僧行いて歸らず守護の善神去つて来ること無し、是れ偏に法然の選択に依るなり、悲しいかな数十年の間・百千万の人・魔縁に蕩かされて多く仏教に迷えり、傍を好んで正を忘る善神怒を為さざらんや円を捨てて偏を好む惡鬼便りを得ざらんや、如かず彼の万祈を修せんよりは此の一凶を禁ぜんには。

客殊に色を作して曰く、我が本師釈迦文浄土の三部經を説きたまいて以来、曇鸞法師は四論の講説を捨てて一向に浄土に歸し、道綽禪師は涅槃の広業を閑きて偏に西方の行を弘め、善導和尚は雜行を抛つて專修を立て、慧心僧都は諸經の要文を集めて念仏の一行を宗とす、弥陀を貴重すること誠に以て然なり又往生の人其れ幾ばくぞや、就中法然聖人は幼少にして天台山に昇り十七にして六十卷に涉り

なら 並びに八宗を究め具に大意を得たり、其の外一切の經論・七遍反覆し章疏伝記究め看ざることなく智は日月に斉しく徳は先師に越えたり、然りと

雖も猶出離の趣に迷いて涅槃の旨を弁えず、故に・く觀悉く鑑み深く思い遠く慮り遂に諸經を抛ちて専ら念仏を修す、其の上一夢の靈応を蒙り四裔の親疎に弘む、故に・或は勢至の化身と号し・或は善導の再誕と仰ぐ、然れば

則ち十方の貴賤頭を低れ一朝の男女歩を運ぶ、爾しより來た春秋推移り星霜相積れり、而るに忝くも釈尊の教を疎にして恣に弥陀の文を譏る何ぞ近年の災を以て聖代の時に課せ強ちに先師を毀り更に聖人を罵るや、毛を吹いて疵を求め皮を剪つて血を出す昔より今に至るまで此くの如き惡言未だ見ず惶る可く愼む可し、罪業至つて重し

科条争か遁れん対座猶以て恐れ有り杖に携われて則ち歸らんと欲す。

主人咲み止めて曰く辛きことを蓼の葉に習い臭きことを溷廁に忘る

善言を聞いて悪言と思ひ謗者を指して聖人と謂ひ正師を疑つて悪侶に

擬す、其の迷誠に深く其の罪浅からず、事の起りを聞け委しく其の趣

を談ぜん、釈尊説法の内一代五時の間に先後を立てて権実を弁ず、

而るに曇鸞道綽善導既に権に就いて実を忘れ先に依つ

て後を捨つ未だ仏教の淵底を探らざる者なり、就中法然は其の流を酌むと雖も其の源を知らず、所以は何ん大乘經の六百三十七部二千八百八十三卷並びに一切の諸仏・菩薩及び諸の世天等を以て捨閉闍拋の字を置いて一切衆生の心を薄んず、是れ偏に私曲の詞を展べて全く仏經の説を見ず、妄語の至り惡口の科言うても比無し責めても余り有り人皆其の妄語を信じ悉く彼の選択を貴ぶ、故に浄土の三經を崇めて衆經を抛ち極樂の一仏を仰いで

諸仏を忘る、誠に是れ諸仏・諸經の怨敵聖僧衆人の讎敵なり、此の邪教広く八荒に弘まり周く十方に遍す、抑近年の災難を以て往代を難ずるの由強ちに之を恐る、聊か先例を引いて汝が迷を悟す可し、止觀第二に史記を引いて云く、周の末に被髮・袒身・礼度に依らざる者有り」弘決の第二に此の文を釈するに左伝を引いて曰く初め

平王の東に遷りしに伊川に髪を被にする者の野に於て祭るを見る、
識者の曰く、百年に及ばじ其の礼先ず亡びぬ」と、爰に知んぬ徵前に
あらわわさわ
顯れ災い後に致ることを、又阮藉が逸才なりしに蓬頭散帶す後に公卿
の子孫皆之に教いて奴苟相辱しむる者を方に自然に達すと云い
そんせつこうじ
☆節競持する者を呼んで田舎と為す是を司馬氏の滅する相と為す已
上。

又慈覺大師の入唐巡礼記を案ずるに云く、唐の武宗皇帝・会昌
元年勅して章敬寺の鏡霜法師をして諸寺に於て弥陀念仏の教を伝え
令む寺毎に三日巡輪すること絶えず、同二年回鶻国の軍兵等唐の堺
を侵す、同三年河北の節度使忽ち乱を起す、其の後大蕃国更た命を
拒み回鶻国重ねて地を奪う、凡そ兵乱秦項の代に同じく災火邑里の
際になる、何に況んや武宗大に仏法を破し多く寺塔を滅す乱を撥るこ

と能あたわらずして遂もつに以て事有あり」取已上意

此これを以て之もつこれを惟おもうに法ほう然ねんは後鳥羽院ごとうばいんの御宇ぎよう・建仁年中けんじんの者なり、

彼の院おんことすの御事がんぜん既に眼前しに在り、然しかれば則すなち大唐だいとうに例だいを残だし吾わが朝あしたに証

を顯あらす、汝なんじ疑なんじうこと莫なかれ汝なんじむあやし怪なむこと莫なかれ唯ただ須すく凶からを捨てて善

に歸みなもとし源みなもとを塞ふさぎ根ねを截たつべし。

客聊いささかか和わぎて日ひく未いまだ淵底えんていを究きめざるに数しばしば其その趣そを知る但ただし華洛からくより柳營りゅうえいに至いたるまで釈門しやくもんに枢すうけん☆在あり仏家ぶつけに棟梁どうりやう在あり、然しかるに未いまだ勘状かんじやうを進まいらせず上奏じやうそうに及およばず汝賤身なんじいやしみを以もつて輒たやすく莠言ゆうげんを吐そく其その義ぎ余そり有あり其その理謂いれ無なし。

主人しゅじんの曰いわく、予少量な為なりと雖いえども忝かたじけなくも大乘だいじやうを学まなす蒼蠅驢尾そうようきびに附ふして万里ばんりを渡わたり碧蘿松頭へきらしやうとうに懸かりて千尋せんじんを延のぶ、弟子でし一仏いっふつの子と生なれて諸經しよきやうの王わうに事ことう、何ぞ仏法ぶつぽうの衰微すいびを見て心情しんじやうの哀惜あいせきを起おこさざらんや。其その上涅槃經ねはんぎやうに云いく、若もし善比丘ぜんびくあつて法ほふを壊やぶる者ものを見て置おいて呵責かしやくし廝遣くけんし拳処こしよせずんば当まさに知るべし是この人は仏法ぶつぽうの中の怨あだなり、若もし能よく廝遣くけんし呵責かしやくし拳処こしよせば是これ我が弟子でし真しやうもんの声聞しやうもんなり」と、余そ善比丘ぜんびくの身み為ならずと雖いえども「仏法中怨ぶつぽうちゅうおん」の責のがを遁のがれんが為ために唯大綱ただたいこうを撮とつて粗一端ほぼはを示しす。

其の上いぬ去る元仁年中に延暦・興福の両寺より度々奏聞を經・勅宣
御教書を申し下して、法然の選択の印板を大講堂に取り上げ三世の
仏恩を報ぜんが爲に之を焼失せしむ、法然の墓所に於ては感神院の
大神人に仰せ付けて破却せしむ其の門弟・隆觀・聖光・成覺・薩生等
は遠國に配流せらる、其の後未だ御勘氣を許されず豈未だ勘狀を
進まいらせずと云わんや。

客則ち和ぎて曰く、經を下し僧を謗ずること一人には論じ難し、
然れども大乘經六百三十七部二千八百八十三卷並びに一切の諸仏・
菩薩及び諸の世天等を以て捨閉閣抛の四字に載す其の詞勿論なり、
其の文顯然なり、此の瑕瑾を守つて其の誹謗を成せども迷うて言うか
覺りて語るか、賢愚弁ぜず是非定め難し、但し災難の起りは
選択に因るの由、其の詞を盛に弥よ其の旨を談ず、所詮天下泰平・

国土安穩は君臣の樂う所土民の思う所なり、夫れ国は法に依つて昌え
法は人に因つて貴し国亡び人滅せば仏を誰か崇む可き法を誰か信ず
可きや、先ず国家を祈りて須く仏法を立つべし若し災を消し難を止む
るの術有らば聞かんと欲す。

主人の曰く、余は是れ頑愚にして敢て賢を存せず唯經文に就いて
聊か所存を述べん、抑も治術の旨内外の間其の文幾多ぞや具に挙ぐ
可きこと難し、但し仏道に入つて数ば愚案を廻すに謗法の人を禁めて
正道の侶を重んぜば國中安穩にして天下泰平ならん。

即ち涅槃經に云く、仏の言く唯だ一人を除いて余の一切に施さば皆
讚歎す可し、純陀問うて言く云何なるをか名けて唯除一人と為す、仏
の言く此の經の中に説く所の如きは破戒なり、純陀復た言く、我今
未だ解せず唯願くば之を説きたまえ、仏純陀に語つて言く、破戒とは

謂く一闍提なり其の余の在所一切に布施すれば皆讚歎すべく大果法を
獲ん、純陀復た問いたてまつる、一闍提とは其の義何ん、仏言わく、
純陀若し比丘及び比丘尼・優婆塞・

優婆夷有つてそ惡の言を發し正法を誹謗し是の重業を造つて永く
改悔せず心に懺悔無らん、是くの如き等の人を名けて一闍提の道に
趣向すと爲す、若し四重を犯し五逆罪を作り自ら定めて是くの如き
重事を犯すと知れども而も心に初めより怖畏懺悔無く肯て發露せず
彼の正法に於て永く護惜建立の心無く毀眚輕賤して言に過咎多から
ん、是くの如き等の人を亦た一闍提の道に趣向すと名く、唯此くの
如き一闍提の輩を除いて其の余に施さば一切讚歎せん」と。

又云く我れ往昔を念うに閻浮提に於て大國の王と作れり名を仙予
と曰いき、大乘經典を愛念し敬重し其の心純善に・惡嫉・有ること無

し、善男子ぜんなんし我爾われの時に於おいて心こころに大乘だいじようを重おもんず婆羅門ばらもんの方等ほうとうを誹謗ひぼうするを聞き聞きこき已おつて即時そくじに其そのの命根みょうこんを断きず、善男子ぜんなんし是この因縁いんねんを以もて是この已来地獄このかたじごくに堕だせず」と、又云いわく如来昔国王にょらいこくおうと為なりて菩薩ぼさつの道みちを行ぜし時爾所そこばくの婆羅門ばらもんの命いのちを断絶だんぜつす」と、又云いわく殺ころに三有さんいうり謂おもく下中上ちくしやうなり、下したとは蟻子ありな乃な至いた一切いっさいの

畜生ちくしやうなり唯ただだ菩薩ぼさつの示現生じげんの者ものを除けく、下殺げせつの因縁いんねんを以もて地獄ちくじごく・畜生ちくしやう・餓鬼がきに堕だして具つに下したの苦くるしみを受うく、何なんを以もての故ゆゑに是この諸もろもろの畜生ちくしやうに微善根ぜんこん有あり是この故ゆゑに殺ころす者ものは具つに罪報ざいほうを受うく、中殺ちゆうせつとは凡夫ぼんぷの人ひとより阿那含あなこんに至いたるまで

是を名けて中と為す、是の業因を以て地獄・畜生・餓鬼に墮して具に中の苦を受く上・殺とは父母乃至阿羅漢・辟支仏・畢定の菩薩なり阿鼻大地獄の中に墮す、善男子若し能く一闍提を殺すこと有らん者は則ち此の三種の殺の中に墮せず、善男子彼の諸の婆羅門等は一切皆是

一闍提なり」已上。

仁王經に云く 佉波斯匿王に告げたまわく是の故に諸の国王に付属して比丘・比丘尼に付属せず何を以ての故に王のごとき威力無ければなり」已上。

涅槃經に云く 今無上の正法を以て諸王大臣宰相及び四部の衆に付属す、正法を毀る者をば大臣四部の衆當に苦治すべし」と。

又云く 佉の言く、迦葉能く正法を護持する因縁を以ての故に是の金剛身を成就することを得たり善男子正法を護持せん者は五戒を受

けず威儀いぎを修しゅうせず応まさに刀劍とうけん・弓箭きゅうせん・鉾むさく槩じを持じすべし」と、又云いく若もし
五戒ごかいを受じゅ持じせん者有あらば名なけて大乘だいじようの人と為なす事ことを得えず、五戒ごかいを受
けざれども正しょう法ほうを護まもるを為もつて乃すなわだいじよう
刀劍とうけん器仗きじようを執しゅう持じすべし刀杖とうじようを持じすと雖いえど我われ是等これらを説ときて名なけて持じ戒かい
と曰いわんと。

又云いく善男子ぜんなんし過か去この世よに此この拘尸那城くしなじように於おいて仏ぶつの世よに出いでたまう
こと有ありき歡喜かんき増益ぞうやく如來にょらいと号なづしたてまつる、仏涅槃ねはんの後のち正しょう法ほう世よに住す
ること無量むりよう億歲おくさいなり余あの四十年よんじゅうねん・仏法ぶつぽうの末のち、爾その時ときに一ひとの持戒じかいの比丘びく有あ
り名なを覺德かくとくと曰いう、爾その時ときに多おほく破戒はかいの比丘びく有あり是この説せを作なすを聞きき
て皆みな惡心あくしんを生おこじ刀杖とうじようを執しゅう持じし是この法師ほうしを逼せむ、是この時ときの國王こくおう名なけて
有德うとくと曰いう是この事ことを聞きき已おつて護法ごほうの為ための故ゆゑに即すな便わち説法せつぽう者しやの所ところに
往じゅう至しして是この破戒はかいの諸もろもろの惡あく比丘びく

と極めて共に戦闘す、爾の時に説法者厄害を免ることを得たり王爾の時
に於て身に刀劍鋒槩の瘡を被り体に完き処は芥子の如き許りも無
し、爾の時に覚徳尋いで王を讃めて言く、善きかな善きかな王今真に
是れ正法を護る者なり当来の世に此の身当に無量の法器と為るべし、
王是の時に於て法を聞くことを得已つて心大に歡喜し尋いで

すなわ みようじゅう
即ち命終して阿☆仏の国に生ず而も彼の仏の為に第一の弟子と作る、
其の王の將 從・人民・眷属・戰鬪有りし者・歡喜有りし者一切菩提の
心を退せず 命終して悉く阿☆仏の国に生ず、覺徳比丘却つて後寿終
つて亦阿☆仏の国に往生することを得て彼の仏の為に声聞 衆中の第
二の弟子と作る、若し正法尽きんと欲すること有らん時当に是くの
如く受持し擁護すべし、迦葉爾の時の王とは即ち我が身是なり、説法の
比丘は迦葉仏是なり、
迦葉正法を護る者は是くの如き等の無量の果報を得ん、是の因縁を
以て我今日に於て種種の相を得て以て自ら莊嚴し法身不可壞の身を成
す、仏迦葉菩薩に告げたまわく、是の故に法を護らん優婆塞等は応に
刀杖を執持して擁護することは是くの如くなるべし、善男子我涅槃の後
濁惡の世に国土荒乱し互に相抄掠し人民飢餓せん、爾の時に

多く飢餓きがの爲ゆゑの故ゆゑに発心出家しゅつけするもの有あらん是かくくの如ごときの人を名けて
禿人とくにんと爲なす、是この禿人とくにんの輩やから正法しょうぼうを護持ごじするを見て廝逐くちくして出いださしめ
若もしくは殺ころし若もしくは害がいせん、是かくの故ゆゑに我今持戒じかいの人諸もろもろの白衣びやくゑの刀杖とうじやうを持
つ者に依よつて以もつて伴侶はんりよと爲なすことを聴ゆるす、刀杖とうじやうを持じすと雖いえども我是等われこれらを
説いいて名けて持戒じかいと曰いわん、刀杖とうじやうを持じすと雖いえども命いのちを断きずべからず」と。
法華經ほけきやうに云いふ、若もしし人信しんぜずして此この經きやうを毀謗きぼうせば即すなわち一切世間いっさいせけんの
仏種ぶつしゆを断だんぜん、乃至其なの人命終みやうじゆうして阿鼻獄あびごくに入いらん」已上。
夫それ經文きやうもん顯然けんねんなり私この詞何ことばぞ加おえん、凡おそ法華經ほけきやうの如ごとくんば
大乘經典だいじやうきやうてんを謗ぼうずる者は無量むりやうの五逆ごぎやくに勝すぐれたり、故ゆゑに阿鼻大城あびだいじやうに墮だし
て永いく出いる期無いけん、涅槃經ねはんきやうの如ごとくんば設たとい五逆ごぎやくの供ゆるを許ゆるすとも謗法ぼうぼう
の施ゆるを許ゆるさず、蟻子ありを殺ころす者は必かならず三惡道さんあくどうに落おつ、謗法ぼうぼうを禁こずる者は
不退ふたいの位ゐに登のぼる、所謂覺徳いゝわゆるかくとくとは是これ迦葉かしやう仏ぶつなり、有徳うとくとは則すなわち釈迦しやか文

なり。

法華・涅槃の經教は一代五時の肝心なり其の禁・実に重し誰か歸仰
せざらんや、而るに謗法の族・正道を忘るの

人・剩あまつさええ法然ほうねんの選択せんちやくに依よつて弥いよよ愚癡ぐちの盲瞽もうこを増もつす、是これを以もつて、或あるは彼の遺体いたいを忍しのびて木画もくえの像あらわに露あるし、或そのは其そのの妄説もうせつを信もつじて莠言ゆうげんを模かたぎに彫これり之かいを海内かいないに弘ひろめ之これを☆外かくがいに翫もてあそぶ、仰あおぐ所すなわは則そち其そのの家風かふう施ほす所こは則すなわち其そのの門弟もんていなり、然しかる間ある、或あるは釈迦しやかの手しゅ指しを切きつて弥陀みだの印相いんさうに結すなわび、或あるは東方とうほう如来にょらいの鴈宇がんうを改あらためて西土さいど教主きしゆの鵝王がおうを居すえ、或あるは四百余回によほつきようの如法經にょほうきやうを止とどめて西方さいほう淨土じやうどの三部經さんぶきやうと成なるし、或あるは天台大師てんだいだいしの講とを停とどめて善導ぜんどう講なと為なす、此かくの如ごとき群類ぐんるい其そのれ誠まことに尽つくし難がたし是破仏はぶつに非あらずや是破法はほうに非あらずや、破僧はそうに非あらずや、此この邪義じやぎ則すなわち選択せんちやくに依よるなり。

嗟呼ああ悲あしいかな、如来にょらい誠諦じやうたいの禁言きんげんに背そむくこと、哀あわれなるかな愚侶迷惑ぐりよめいわくの☆語そごに随したがうこと、早てんがく天下てんがの静謐せいひつを思おもわば須すべからくにじゅうく国中こくちゅうの謗法ほうほうを断たつべし。

客の曰く、若し謗法の輩を断じ若し仏禁の違を絶せんには彼の経文の如く斬罪に行う可きか、若し然らば殺害相加つて罪業何んが為んや。則ち大集經に云く「頭を剃り袈裟を著せば持戒及び毀戒をも、天人彼を供養す可し、則ち我を供養するに為りぬ、是れ我が子なり若し彼を☆打する事有れば則ち我が子を打つに為りぬ、若し彼を罵辱せば則ち我を毀辱するに為りぬ」料り知んぬ善惡を論ぜず是非を択ぶこと無く僧侶為らんに於ては供養を展ぶ可し、何ぞ其の子を打辱して忝くも其の父を悲哀せしめん、彼の竹杖の目連尊者を害せしや永く無間の底に沈み、提婆達多の蓮華比丘尼を殺せしや久しく阿鼻の焰に咽ぶ、先証斯れ明かなり後昆最も恐あり、謗法を誡むるには似たれども既に禁言を破る此の事信じ難し如何が意得んや。

主人の云く、客明に經文を見て猶斯の言を成す心の及ばざるか理の

通ぜざるか、全く仏子ぶつしを禁むるには非ずあら唯偏ただひとえに謗法ほうぼうを惡にくむむなり、夫れ
釈迦しやかの以前ふつきよう仏教そは其の罪を斬ると雖もいんど能忍のうにんの以後いご經說きようせつは則ちすなわ其の施
を止む、然れば則ちしか四海しかい万邦ばんぼう一切いっさいの四衆ししゆう其の惡に施さずほどこ皆此みなの善に歸
せば何なる難いかか並び起り何なる災なんか競ならい来らん。

客則ち席を避け襟を刷いて曰く、仏教斯く区にして旨趣窮め難く
不審多端にして理非明ならず、但し法然聖人の選択現在なり諸仏・
諸經・諸菩薩・諸天等を以て捨閑闕抛と載す、其の文顯然なり、茲れ
に因つて聖人国を去り善神所を捨てて天下飢渴し世上疫病すと、今
主人広く經文を引いて明かに理非を示す、故に妄執既に翻えり
耳目数朗かなり、所詮国土泰平・天下安穩は一人より万民に至るま
で好む所なり樂う所なり、早く一闡提の施を止め永く衆僧尼の供を致
し仏海の白浪を収め法山の緑林を截らば世は義農の世と成り国は
唐虞の国と為らん、然して後法水の浅深を斟酌し仏家の棟梁を崇重
せん。

主人悦んで曰く、鳩化して鷹と為り雀変じて蛤と為る、悦しきか
な汝蘭室の友に交りて麻畝の性と成る、誠に其の難を顧みて専ら此の

言を信ぜば風和らぎ浪静かにして不日に豊年ならん、但し人の心は時に随つて移り物の性は境に依つて改まる、譬えば猶水中の月の波に動き陳前の軍の剣に靡くがごとし、汝当座に信ずと雖も後定めて永く忘れん、若し先ず国土を安んじて現当を祈らんと欲せば速に情慮を回らし☆で対治を加えよ、

所以は何ん、薬師経の七難の内五難忽に起り二難猶残れり、所以他国侵逼の難・自界叛逆の難なり、大集経の三災の内二災早く顕れ一災未だ起らず所以兵革の災なり、金光明経の内の種種の災禍一一起ると雖も他方の怨賊国内を侵掠する此の災未だ露れず此の難未だ来らず、仁王経の七難の内六難今盛にして一難未だ現ぜず所以四方の賊来つて国を侵すの難なり、加之 国土乱れん時は先ず鬼神乱る鬼神乱るが故に万民乱ると、今・此の文に就いて具さに事の情を案

ずるに百鬼ひやくき早く乱れみだ万民多く亡ぶ先難是れ明かなり後災何ぞ疑わん
若し残る所の難惡法の科に依つて並び起り競い来らば其の時何んが
為んや、帝王ていおうは國家を基として天下を治め人臣は田園を領して世上を
保つ、而るに他方の賊来つて其の國を侵逼し自界叛逆して其の地を
掠りやく領せば豈驚かざらんや豈驕がざらんや、國を失い家を滅せば何れ
の所にか世を遁れん汝須く一身の安堵を思わば先ず四表の静謐を
☆らん者か、

就中人の世に在るや各後生を恐る、是を以て、或は邪教を信じ、或は
謗法を貴ぶ各是非に迷うことを惡むと雖も而も猶佛法に歸することを
哀しむ、何ぞ同じく信心の力を以て妄りに邪義の詞を崇めんや、若し
執心翻らず亦曲意猶存せば早く有為の郷を辭して必ず無間の獄に
墮ちなん、所以は何ん、大集經に云く、若し國王有つて
無量世に於て施戒慧を修すとも我が法の滅せんを見て捨てて擁護せず
んば是くの如く種ゆる所の無量の善根悉く皆滅失し、乃至其の王久し
からずして当に重病に遇い壽終の後大地獄に生ずべし王の如く夫人
太子・大臣・城主・柱師・郡主・宰官も亦復是くの如くならん」と。
仁王經に云く、尸・仏教を壞らば復た孝子無く六親不和にして天竜
も祐けず疾疫惡鬼日に来て侵害し災怪首尾し連禍縦横し死して
地獄・餓鬼・畜生に入らん、若し出て人と為らば兵奴の果報ならん、

響ひびきの如ごとく影えいの如ごとく人の夜書よがくに火は滅めつすれども字そんは存ぞんするが如ごとく、
三さん界がいの果報かほうも亦復またまた是かくくの如ごとし」と。

法華經ほけきょうの第二ふたに云いく 若もし人信じんしんぜずして此この經きやうを毀謗きぼうせば乃ない至し其その
人命終みんぎやうして阿鼻獄あびごくに入いらん」と、同第七どうだいなの卷ふき不輕品ふきやうに云いく 千劫阿鼻
地獄じごくに於おいて大苦惱くのおうを受うく」と、涅槃經ねはんぎやうに云いく 善友ぜんゆうを遠離おんりし正法しやうほうを聞
かず惡法あくほうに住すせば是この因緣いんねんの故ゆゑに沈没ちんぼつして阿鼻地獄あびじごくに在あつて、受うくる
所しんぎやうの身形しんぎやう・縱橫じゆうおう八万四千由延はちまんよじゆんならん」と。

広しゆうきやうく衆經しゆうきやうを披ひらきたるに専もつぱら謗法ほうほうを重おもんず、悲かないかな皆正法みなしやうほうの門かどを
出いでて深しんく邪法じゃほうの獄ごくに入いる、愚おろかなるかな各惡教あつぎやうの網あみに懸かつて鎖とこしなえに
謗教ぼうきやうの網まつわに纏まとる、此この朦霧もうむの迷彼まよいの盛焰じやうえんの底しずに沈しずむ豈愁あにえざらんや
豈苦あにまざらんや、汝なんじ早しんこうく信仰しんこうの寸心すんしんを改あらためて速すみに実乘じつじやうの一善いちぜんに歸かへせ
よ、然しかれば則すなわち三界さんがいは皆みな仏国ぶつこくなりそ 其おとろえ衰おとろえんや十方じゅうほうは悉こゝろく

宝土ほうどなり宝土ほうど何ぞ壊やぶれんや、国くにに衰微すいひ無く土つちに破壊はえ無んば身こは是れ
安全あんぜん・心こころは是れ禪ぜん・定じやうならん、此この詞ことば此この言信ごんしんず可べく崇あがむ可べし。

客きやくの曰いわく、今生こんじやう後生ごしやう誰たれか慎つしまざらん誰たれか和なごわざらん、此この經文きやうもんを
披ひらいて具ぐに仏語ぶつごを承うけたまわるに誹法ひぽうの科とが至いたつて

重く毀法の罪・誠に深し、我一仏を信じて諸仏を抛ち三部経を仰いで諸経を聞きしは、是れ私曲の思に非ず則ち先達の詞に随いしなり、十方の諸人も亦復是くの如くなるべし、今の世には性心を勞し来生には阿鼻に墮せんこと文明かに理詳かなり疑う可からず、弥よ貴公の慈誨を仰ぎ益愚客の癡心を開けり、速に對治を回して早く泰平を致し先ず生前を安じて更に没後を扶けん、唯我が信ずるのみに非ず又他の誤りをも誠めんのみ。

◆三 立正安国論奥書

文応元年太歳庚申之を勘う正嘉より

之を始め文応元年に勘え畢る。

去ぬる正嘉元年太歳丁巳八月二十三日戊亥の尅の大地震を見て之を

勘う、其の後文応元年太歳庚申七月十六日を以て宿屋・禪門に付して故

さいみょうじにゆうどう
最明寺入道殿に奉れり、其の後文永元年太歳甲子七月五日常明星の時弥此の災の根源を知る、文応元年太歳庚申より文永五年太歳戊辰後の正月十八日に至るまで九ヶ年を経て西方大蒙古国自り我が朝を襲うべきの由牒状之を渡す、又同六年重ねて牒状之を渡す、既に勘文之に叶う、之に準じて之を思うに未来亦然る可きか、此の書は徴有る文なり是れ偏に日蓮が力に非ず法華經の真文の感応の至す所か。
ぶんえい
文永六年太歳己巳十二月八日之を写す。

◆四 安国論御勘由来

しょうかがんねん
正嘉元年丁巳八月廿三日戌亥の時・前代に超え大に地振す、同二年戊午八月一日大風・同三年己未大飢饉・正元元年己未大疫病同二年庚申四季に亘つて大疫已まず万民既に大半に超えて死を招き了んぬ、而る間

国主こくしゅ之をに驚おどろき内外典ないげてんに仰おほせ付けて種種しゅじゅの御祈きとう☆有あり、爾しかりりと雖いえども
一分いちぶんの験しるしも無なくく還かえつて飢疫等きえきを増長やうちようす。

日蓮世間にちれんせけんの体ていを見て粗一切経ほろいっさいきようを勘かんうるに御祈請きしやうしるし験しるし無なくく還かえつて凶惡きようあく
を増長やうちようするの由道理どうり・文証もんしやう之を得お了わんぬ、終はつに止とむこと無なくく勘文一通かんもん
を造つくり作さして其その名なを立正安国論りつしやうあんこくろんと号なづす、文応元年ぶんおうがんねん申しん七月十六日しちがつじゅうろくにち時辰ときしん
屋戸野入道やどやにゅうどうに付けて

古最明寺入道殿に奏進申し了んぬ此れ偏に国土の恩を報ぜんが為なり、其勘文の意は日本国・天神七代・地神五代
百王百代人王第卅代欽明天皇の御宇に始めて百済国より仏法此の国に渡り桓武天皇の御宇に至つて其の中間五十余代・二百六十余年なり、其の間一切経並びに六宗之れ有りと雖も天台・真言の二宗未だ之れ有らず、桓武の御宇に山階寺の行表僧正の御弟子に最澄と云う小僧有り師と号す、已前に渡る所の六宗並に禪宗之を極むと雖も未だ我が意に叶わず、聖武天皇の御宇に大唐の鑑真和尚渡す所の天台の章疏四十余年を経て已後始めて最澄之を披見し粗仏法の玄旨を覺り了んぬ、最澄・天長地久の為に延暦四年叡山を建立す桓武皇帝之を崇め天子本命の道場と号し六宗の御帰依を捨て一向に天台円宗に歸伏し給う。

えんりやく

同延暦十三年

ながおか みやこ うつ

へいあんじょう

えんりやく

同延暦廿一年正

月十九日

たかおでら

おい

なんと

ななだいじ

ろくしゅう

せきがく

ごんそう

ちようよう

くさう

の

十四人を召し合せ勝負を決談す、

けつだん

ろくしゅう

めいしゅう

もんどう

および

口

を閉ずること鼻の如し華嚴宗の五教・法相宗の三時・三論宗の二藏・

けこんしゅう

ほうそうしゅう

さんろん

の

二藏・

三時

の

三時の所立を破し了んぬ

は おわ

じしゅう

を破らるるのみに非ず

あら

みなほうぼう

の者為る

な

ことを知る、同じき廿九日

こうてい

を詰る、十四人謝表を

作つて皇帝に捧げ奉る、其の後代代の皇帝

こうてい

を詰る、

これ

な

ことを詰る、

な

謝表を

しやひよう

を

作つて皇帝に捧げ奉る、其の後代代の皇帝

こうてい

を詰る、

これ

な

ことを詰る、

な

謝表を

しやひよう

を

の御帰依は孝子の父母に仕うるに超え

ごきえ

こ

れいみん

の王威を恐るるに勝れり、

おうい

を恐るるに

すぐ

るに

勝れり、

・或御時は宣明を捧げ・或御時は非を以て理に処す等云云、殊に

あるおんとき

せんみょう

あるおんとき

を以て

もつ

理に

しよ

処す等

云云、殊に

清和天皇は叡山の惠亮和尚の法威に依つて位に即き

せいわたんのう

えいざん

えりよう

わじよう

ほうい

に依つて

よ

位に

即き

九条右丞相は誓状を叡山に捧げ、源の右將軍は清和の末葉なり

くじよううじようしやう

せいじやう

えいざん

ささ

みなもと

うしやうぐん

せいわ

まつよう

の末葉なり

の御成敗是非を論ぜず

ごせいばいぜひ

えいざん

いはい

てんめい

を恐る有る者か。

あ

者か。

者か。

者か。

然るに後鳥羽院の御宇・建仁年中に法然・大日とて二人の増上慢の
者有り悪鬼其の身に入つて国中の上下を誑惑し代を挙げて念仏者と
成り人毎に禅宗に趣く、存の外に山門の御帰依浅薄なり国中の法華・
真言の学者棄て置かれ了んぬ、故に叡山守護の天照太神・正八幡宮・
山王七社・国中守護の諸大善神法味を☆わらずして威光を失い国土を
捨て去り了んぬ、悪鬼便りを得て災難を致し結句他国より此の国を
破る可き先相勘うる所なり、又其の後文永

元年がんねん甲きのえね子七月五日彗星東方に出で余光大体一国土に及ぶ、此れ又世
始まりてより已来無き所の凶瑞なり内外典の学者も其の凶瑞の根源
を知らず、予弥いよいよ悲歎を増長す、而るに勘文を捧げて已後九ヶ年を
経て今年後の正月大蒙古国の国書を見るに日蓮が勘文に相叶うこと
宛あたかも符契ふけいの如し、仏記して云く我が滅度の後・一百余年を経て阿育
大王出世し我が舍利を弘ひろめんと、周の第四昭王の御宇・大史蘇由が
記に云く「二千年の外声教此の土に被らしめん」と、聖徳太子の記に
云く我が滅度の後二百余年を経て山城の国に平安城を立つ可し」と、
天台大師の記に云く我が滅後二百余年の已後東国に生れて我が正法
を弘ひろめん」等云云、皆果して記文の如し。

日蓮正嘉の大地震同じく大風同じく飢饉・正元元年の大疫等を見て
記して云く他国より此の国を破る可き先相なりと、自讃に似たりと

雖も若し此の国土を毀壞せば復た仏法の破滅疑い無き者なり。

而るに当世の高僧等謗法の者と同意の者なり復た自宗の玄底を知らざる者なり、定めて勅宣御教書を給いて此の凶惡を祈請するか、仏神弥よ曠恚を作し国土を破壊せん事疑い無き者なり。

日蓮復之を対治するの方之を知る叡山を除いて日本国には但一人なり、臂えば日月の二つ無きが如く聖人肩を並べざるが故なり、若し此の

事妄言ならば日蓮が持つ所の法華經守護の十羅刹の治罰之を蒙らん、

但偏に国の為・法の為・人の為にして身の為に之を申さず、復禪門に

対面を遂ぐ故に之を告ぐ之を用いざれば定めて後悔有る可し、恐恐

謹言。

文永五年太歳戊辰四月五日

法鑒御房 日蓮花押

安国論別状あんこくろん

立正安国論りっしょうあんこくろんの正本とぎどの、富木殿とぎどのに候、かきて給たまひ候そうらはん、ときどのか、

又。五月廿六日

日蓮花押にちれんかおう

◆六

守護国家論

正元元年

三十八歳御作

36P

夫れ以んみれば、偶、十方微塵の三惡の身を脱れて希に閻浮日本の
爪上の生を受け亦閻浮日域・爪上の生を捨てて十方微塵・三惡の身
を受けんこと疑い無き者なり、然るに生を捨てて惡趣に墮つるの縁・一
に非ず・或妻子・眷属の哀憐に依り・或は殺生惡逆の重業に依り・或
は国主と成つて民衆の歎きを知らざるに依り・或は法の邪正を知らざ
るに依り・或は惡師を信ずるに依る、此の中に於ても世間の善惡は眼前
に在り愚人も之を弁うべし仏法の邪正・師の善惡に於ては証果の聖人・
尚之を知らず況や末代の凡夫に於ておや。

しかのみならず仏・日・西山に隠れ余光・東域を照してより已来・

四依しえの慧灯えとうは日に滅さんぞうじ三蔵ほうりゅうの法流はつりゅうは月に濁じつぎようる実教じつぎように迷まよいえる論師ろんしは
真理しんりの月に雲そを副ごんきようえ權經しゅうに執やくしゃする訳者じつぎようは実經たまの珠くだを碎ごんきようきて權教ごんきようの石
と成いす、何いに況いや震旦いの人師にんしの宗義しゅうぎ其その誤あやまり無いからんや何いに況いや日本にほん
辺土まつがくの末学あやま誤あやまりは多く実まは少すくき者ものか、随したがつて其その教きょうを学まなぶ人数にんずうは
竜鱗りゅうりんよりも多く得道とくどうの者は鱗角りんかくよりも希まれなり、或あるは權教ごんきように依よるが
故ゆえに、或あるは時機じき不相応ふそうおうの教きょうに依よるが故ゆえに、或あるは凡聖ぼんせいの教きょうを弁わえざるが
故ゆえに、或あるは權実ごんじつ二教にきょうを弁わえざるが故ゆえに、或あるは權經ごんきようを實教じつぎようと謂おもうに依よる
が故ゆえに、或あるは位いの高下こうげを知らざるが故ゆえに、凡夫ぼんぷの習ならい仏法ぶつぽうに就おいて生死しやうじの
業ごふを増そすこと其その縁えん・一いつに非あらず。

中ちゅうじやく昔じやくち・邪智しやくちの上人しやうにん有あつて末代まつだいの愚人ぐにんの爲ために一切いっさいの宗義しゅうぎを破はして
選集せんしやく一卷いっくわんを造つくる、名なを鸞らん・緯しよく・導どうの三師さんしに仮いつて一代いちだいを二門にもんに分わち
実教じつぎようを録ろくして權經ごんきように入れ法華ほつけ・真言しんこんの直道じきどうを閉じやうどじて浄土三部じやうどの隘路あいろを

開く、亦また淨土三部の義にも順ぜずして権実ごんじつの謗法ぼうぼうを成し永く四聖ししやうの種
を断じて阿鼻あびの底に沈しずむ可べき僻見びやくけんなり、而しかるに世人せじん之に順したがうこと譬たとえ
ば大風たいふうの小樹しょうじゆの枝を吹くが如ごとく門弟もんてい此の人を重んずること天衆てんしゆうの
帝釈たいしやくを敬うやうに似たり。

此の惡義あくぎを破らんが爲ために亦多くの書有り所謂・淨土決義鈔・彈選だんせん・
摧邪輪等さいじかりんなり、此の書を造る人・皆碩德みなせきとくの名一天いつてんに弥はびこると雖も恐くは
未だ選せん・集ちやく・謗法ぼうぼうの根源こんげんを顯あらわさず故ゆえに還かえつて惡法あくぼうの流布るふを増す、
譬たとえば盛なる早はやばつの時に小雨しょううを降せば草木そうもく・弥い・枯いよ・兵者つわものを打つ刻に
弱兵じやくへいを先さきずれば強敵かうてき・倍ばい・力を得るが如ごとし。

予此の事を歎なげく間・一卷の書を造つて選せん・集ちやく・謗法ぼうぼうの緣起えんぎを顯あらわし
名づけて守護しゆご・國家論ここつかと号す、願いのちわくば一切いっさいの道俗どうよく・一時いちじの世事せじを止とどめて
永劫えいこの善苗よきなえを種くわえよ、今經論きやうろんを以て邪正しやせいを直ただす信謗しんぼうは仏說ぶつせつに任まかせ敢あえてて
自義じぎを存ぞんする事無ことなかれ。

分ちて七門と爲なす、一には如來にょらいの經教きやうぎやうに於おいて權實二教ごんじつを定さだむるこ
とを明あかし、二には正像末しやうざうまつの興廢こうはいを明あかし、三には選せん・集ちやく・謗法ぼうぼうの緣起えんぎを
明あかし、四には謗法ぼうぼうの者を對治たいじすべき証文しやうもんを出いだすことを明あかし、五には

善知識並に眞実の法には値い難きことを明し、六には法華・涅槃に依る
行者の用心を明し、七には問に随つて答うることを明す。

大文の第一に如来の經教に於て權実二教を定むることを明すとは
此れに於て四有り、一には大部の經の次第を出して流類を撰すること
を明し、二には諸經の淺深を明し、三には大小乗を定むることを
明し、四には且らく權を捨てて實に就くべきことを明す。

第一に大部の經の次第を出して流類を撰することを明さば、問うて
云く仏・最初に何なる經を説きたまうや、答えて云く華嚴經なり、問
うて云く其の証如何、答えて云く六十華嚴經の離世間淨眼品に云く
是の如く我聞く一時・仏・摩竭提国・寂滅道場に在つて始めて正覺
を成ず」と、法華經の序品に放光瑞の時・弥勒菩薩・十方世界の諸仏
の五時の次第を見る時・文殊師利菩薩に問うて云く、又諸仏聖主

師子ししの經典きょうてんの微妙みみょう第一だいいちなることを演說えんぜつし給たまうに

其その聲しょう清淨じやうじやうに柔軟にゅうなんの音こえを出でして諸もろの菩薩ぼさつを教たえ給たまうこと無む數すう億いふ萬まんな

ることを觀みる」亦また方便ほうべん品へんに仏ぶつ、自みづから初しよ成じやう道どうの時ときを説いひて云いく我われ始はめ

道場どうじやうに坐ざし樹じゆを觀かんじ・亦また經行けいぎやうす、乃ない至し・爾その時ときに諸もろの梵王ぼんのう及および諸天しよてん

帝釈たいしやく・護世ごせ四天王してんのう及および

大自在天並に余の諸の天衆・眷属百千万・恭敬合掌し礼して我に
転法輪を請ずと」此等の説は法華經に華嚴經の時を指す文なり、故に
華嚴經の第一に云く毘沙門天王略月天子略日天子略釈提桓因略大梵略
摩醯首羅等略已上。

涅槃經に華嚴經の時を説いて云く既に成道し已つて梵天勸請すら
く唯願わくば如来当に衆生の為に広く甘露の門を開き給うべし、乃至
・梵王復言く世尊一切衆生に凡そ三種有り所謂・利根・中根・鈍根な
り利根は能く受く唯願わくば為に説き給え、仏言く梵王諦に聴け我今
当に一切衆生の為に甘露の門を開くべし」亦三十三に華嚴經の時を説
いて云く十二部經・修多羅の中の微細の義を我先に已に諸の菩薩の
為に説くが如し」。

此くの如き等の文は皆諸仏・世に出で給いて一切經の初めには必ず

華嚴經けこんきようを説とき給たまいし証文しょうもんなり。

問いうて云いく無量義經むりやうぎきように云いく初しめに四諦しだいを説とき、乃ない至し次じに方等ほうとう十
二部經にふく・摩訶般若まかはんにか・華嚴海空けこんかいくうを説とく「此かくの如ごとき文ぶんは般若經はんにかの後ごに
華嚴經けこんきようを説とくと相違そうい如何いかん、答こたえて云いく淺深せんじんの次第しだいなるか、或あるは後分ごぶんの
華嚴經けこんきようなるか、法華經ほけきようの方便品ほうべんに一代いちだいの次第しだい淺深せんじんを列いねて云いく、余乘よじよう
有あること無なし若しは二若には三さん」と此この意いなり。

問いうて云いく華嚴經けこんきようの次つぎに何いの經きやうを説とき給たまうや、答こたえて云いく阿含經あこんきようを
説とき給たまうなり、問いうて云いく何なにを以もて之これを知るや、答こたえて云いく法華經ほけきようの
序品じよほんに華嚴經けこんきようの次つぎの經きやうを説といて云いく若もし人ひと・苦くるに遭あうて老病死らうびやうしを厭いとう
には為ために涅槃ねはんを説とく「方便品ほうべんに云いく、即すく・波羅奈はらなに趣おもむき、乃ない至し・五比丘びく
の為ために説とく」涅槃經ねはんぎきように華嚴經けこんきようの次つぎの經きやうを定さだめて云いく、即すく・波羅奈國はらなに
於おいて正法輪しょうほうりんを転ころじて中道ちゆうだうを宣説せんぜつす」此等これらの經文きやうもんは華嚴經けこんきようより後ごに

阿含經あこんきようを説とくなり。

問いうて云いく阿含經あこんきようの後に何いの經きやうを説とき給たまうや、答こたえて云いく方等經ほうとうきやうなり、問いうて云いく何なにを以もつてのを知しるや、答こたえて云いく無量義經むりやうぎきやうに云いく初はつに四諦しだいを説とき乃ない至し・次つぎに方等ほうとう十二部經じふにぶきやうを説とく」涅槃經ねはんきやうに云いく・修多羅しゆたらより方等ほうとうを出いだす」

問いうて云いく方等ほうとうとは天竺てんじくの語ことば・此こゝには大乘だいじやうと云いう華嚴けごん・般若はんにや・法華ほつけ・涅槃等ねはんとうは皆方等みなほうとうなり何なんぞ独ひとり方等部ほうとうぶに限かぎり方等ほうとうの名なを立たつるや、答こたえて云いく実じつには華嚴けごん・般若はんにや・法華等ほつけ皆方等みなほうとうなり然しかりと雖いえども今方等部ほうとうぶに於おいて別べつして方等ほうとうの名なを

立つることは私の義に非ず無量義經・涅槃經の文に顯然たり、阿含の証果は一向小乘なり次に大乘を説く方等より已後皆大乘と云うといえど、雖も大乘の始なるが故に初に従つて方等を方等と云うなり、例せば十八界の十半は色なりと雖も初に従つて色境の名を立つるが如し。

問うて云く方等部の諸經の後に何の經を説き給うや、答えて云く般若經なり、問うて云く何を以て之を知るや答えて云く涅槃經に云く方等より般若を出す」

問うて云く般若經の後には何の經を説き給うや、答えて云く無量義經なり、問うて云く何を以て之を知るや答えて云く仁王經に云く「二十九年中」無量義經に云く「四十余年」問うて云く無量義經には般若經の後に華嚴經を列ね涅槃經には般若經の後に涅槃經を列ぬ、今の所立の次第は般若經の後に無量義經を列ぬる相違如何、答えて

云く涅槃經第十四の文を見るに涅槃經已前の諸經を列ねて涅槃經に
対して勝劣を論じ而も法華經を挙げず、第九の卷に於て法華經は
涅槃經より已前なりと之を定め給う、法華經の序品を見るに無量義經
は法華經の序文なり、無量義經には般若の次に華嚴經を列ぬれども
華嚴經を初時に遣れば般若經の後は無量義經なり。

問うて云く無量義經の後に何の經を説き給うや、答えて云く法華經
を説き給うなり、問うて云く何を以て之を知るや、答えて云く法華經
の序文に云く「諸の菩薩の為に大乘經の無量義經・菩薩法・仏所護念
と名づくるを説き給う、仏・此の經を説き已つて結跏趺坐し
無量義處三昧に入る」

問うて云く法華經の後に何の經を説き給うや、答えて云く普賢經を
説き給うなり、問うて云く何を以て之を知るや、答えて云く普賢經に

云くいわ卻て後・三月・我当まさに般涅槃はつねはんすべし、乃至ないし如来昔にょらい・耆闍崛山ぎしゃくつせん及び
余の住处じゅうしょに於て已すでに広く一実いちじつの道を分別ぶんべつし今も此の処ところに於てす」
問うて云く普賢經ふげんの後に何いすれの經を説き給うや、答えて云く涅槃經ねはんぎょうを
説き給うなり、問うて云く何を以て之を

知るや、答えて云く普賢經に云く、卻て後三月・我当に般涅槃すべし」
涅槃經三十に云く、如來何が故ぞ二月に涅槃し給うや、亦・如來は
初生・出家・成道・轉法輪皆八日を以てす何ぞ仏の涅槃独り十五日な
るやと云う」と大部の經・大概是くの如し此より已外諸の大小乗經
は次第不定なり、或は阿含經より已後に華嚴經を説き法華經より
已後に方等・般若を説く皆義類を以て之を収めて一処に置くべし。

第二に諸經の淺深を明さば、無量義經に云く、初に四諦を説き次に
方等十二部經・摩訶般若・華嚴海空を説き菩薩の歷劫修行を宣説す」
亦云く、四十余年には未だ眞實を顯わさず」又云く、無量義經は尊く
過上無し」此等の文の如くんば四十余年の諸經は無量義經に劣ること
疑い無き者なり。

問うて云く密嚴經に云く、一切經の中に勝れたり」大雲經に云く

しよきよう

てんりんじようおう

こんごうみようきよう

いわ

しよきよう

「諸經の転輪聖王なり」金光明經に云く「諸經の中の王なり」と此等

の文を見るに諸大乘經の常の習なり何ぞ一文を瞻て無量義經は

しよだいじようきよう

なん

四十余年の諸經に勝ると云うや、答えて云く教主釈尊若し諸經に

よんじゅうよねん

しよきよう

まさ

於て互に勝劣を説かずんば・大小乗の差別・權實の不同有るべから

おい たがい しようれつ

しよきよう

ず、若し實に差別無きに互に差別淺深等を説かば諍論の根源・惡業・

さべつ

たがい さべつ せんじん

きようしゆしやくそんも

起罪の因縁なり、爾前の諸經の第一は縁に随つて不定なり・或は小乗

きざい いんねん

にぜん しよきよう

の諸經に對して第一と・或は報身の寿を説くに諸經の第一なり・或は

だいいち

ある

しよきよう

俗諦・真諦・中諦等を説くに第一なりと一切の第一に非ず、今の

ぞくたい しんたい ちゅうたい

無量義經の如きは四十余年の諸經に對して第一なり。

むりようぎきよう

こと

よんじゅうよねん

しよきよう

だいいち

ある

問うて云く法華經と無量義經と何れが勝れたるや、答えて云く

いわ

ほけきよう

法華經勝れたり、問うて云く何を以て之を知るや、答えて云く

ほけきよう

すく

むりようぎきよう

いすれ

すく

むりようぎきよう

いすれ

すく

法華經勝れたり、問うて云く何を以て之を知るや、答えて云く

むりようぎきよう

いすれ

無量義經には未だ二乗作仏と久遠実成とを明さず故に法華經に嫌わ

むりようぎきよう

いま

にじようさぶつ

くおんじつじよう

あか

ゆえ

ほけきよう

きら

無量義經には未だ二乗作仏と久遠実成とを明さず故に法華經に嫌わ

むりようぎきよう

いま

にじようさぶつ

くおんじつじよう

あか

ゆえ

ほけきよう

きら

無量義經には未だ二乗作仏と久遠実成とを明さず故に法華經に嫌わ

むりようぎきよう

いま

にじようさぶつ

くおんじつじよう

あか

ゆえ

ほけきよう

すく

むりようぎきよう

いすれ

すく

むりようぎきよう

いすれ

すく

法華經勝れたり、問うて云く何を以て之を知るや、答えて云く

むりようぎきよう

いすれ

無量義經には未だ二乗作仏と久遠実成とを明さず故に法華經に嫌わ

むりようぎきよう

いま

にじようさぶつ

くおんじつじよう

あか

ゆえ

ほけきよう

きら

無量義經には未だ二乗作仏と久遠実成とを明さず故に法華經に嫌わ

むりようぎきよう

いま

にじようさぶつ

くおんじつじよう

あか

ゆえ

ほけきよう

きら

無量義經には未だ二乗作仏と久遠実成とを明さず故に法華經に嫌わ

むりようぎきよう

いま

にじようさぶつ

くおんじつじよう

あか

ゆえ

ほけきよう

すく

むりようぎきよう

いすれ

すく

むりようぎきよう

いすれ

すく

法華經勝れたり、問うて云く何を以て之を知るや、答えて云く

むりようぎきよう

いすれ

無量義經には未だ二乗作仏と久遠実成とを明さず故に法華經に嫌わ

むりようぎきよう

いま

にじようさぶつ

くおんじつじよう

あか

ゆえ

ほけきよう

きら

無量義經には未だ二乗作仏と久遠実成とを明さず故に法華經に嫌わ

むりようぎきよう

いま

にじようさぶつ

くおんじつじよう

あか

ゆえ

ほけきよう

きら

無量義經には未だ二乗作仏と久遠実成とを明さず故に法華經に嫌わ

むりようぎきよう

いま

にじようさぶつ

くおんじつじよう

あか

ゆえ

ほけきよう

すく

むりようぎきよう

いすれ

すく

むりようぎきよう

いすれ

すく

法華經勝れたり、問うて云く何を以て之を知るや、答えて云く

むりようぎきよう

いすれ

無量義經には未だ二乗作仏と久遠実成とを明さず故に法華經に嫌わ

むりようぎきよう

いま

にじようさぶつ

くおんじつじよう

あか

ゆえ

ほけきよう

きら

無量義經には未だ二乗作仏と久遠実成とを明さず故に法華經に嫌わ

むりようぎきよう

いま

にじようさぶつ

くおんじつじよう

あか

ゆえ

ほけきよう

きら

無量義經には未だ二乗作仏と久遠実成とを明さず故に法華經に嫌わ

むりようぎきよう

いま

にじようさぶつ

くおんじつじよう

あか

ゆえ

ほけきよう

すく

むりようぎきよう

いすれ

すく

むりようぎきよう

いすれ

すく

法華經勝れたり、問うて云く何を以て之を知るや、答えて云く

むりようぎきよう

いすれ

無量義經には未だ二乗作仏と久遠実成とを明さず故に法華經に嫌わ

むりようぎきよう

いま

にじようさぶつ

くおんじつじよう

あか

ゆえ

ほけきよう

きら

無量義經には未だ二乗作仏と久遠実成とを明さず故に法華經に嫌わ

むりようぎきよう

いま

にじようさぶつ

くおんじつじよう

あか

ゆえ

ほけきよう

きら

無量義經には未だ二乗作仏と久遠実成とを明さず故に法華經に嫌わ

むりようぎきよう

いま

にじようさぶつ

くおんじつじよう

あか

ゆえ

ほけきよう

すく

むりようぎきよう

いすれ

すく

むりようぎきよう

いすれ

すく

法華經勝れたり、問うて云く何を以て之を知るや、答えて云く

むりようぎきよう

いすれ

無量義經には未だ二乗作仏と久遠実成とを明さず故に法華經に嫌わ

れて今説こんせつの中に入るなり。

問うて云く法華經ほけきやうと涅槃經ねはんぎやうと何れいずれが勝れたるや、答えて云く法華經ほけきやう勝るなり、問うて云く何を以て之これを知るや、答えて云く涅槃經ねはんぎやうに自みづから如法華中等によほつちゆうと説き更無所作こうむしよさと云う、法華經ほけきやうに当説とうせつを指して難信なんげと云わざるが故なり。

問うて云く涅槃經ねはんぎやうの文を見るに涅槃經ねはんぎやう已前いぜんをば皆邪見みなじやけんなりと云う如何いかん、答えて云く法華經ほけきやうは如来出世にやらいしむつせの本懐ほんかいなる故にゆえ今者こんじや已満足いまんぞく。今正是其時こんしやうぜごじ・然善男子ねんぜんなんし・我実成仏がじつじやうぶつ已来いらい」等と説く、但し諸經しよきやうの勝劣しやうれつに於ては仏おひ、自らみづか我所説經しよせつきやうてん無量千萬億むりやうせんまん」なりと挙げ了あつて已説いせつ。今説こんせつ・当説とうせつ」等と説く時、多宝仏たほうぶつ・地より涌現ゆげんして皆是真実かいぜしんじつと定め分身ふんじんの諸仏しよぶつは舌相ぜつさうを梵天ぼんてんに付け給う是くかくの如く諸經しよきやうと法華經ほけきやうとの勝劣しやうれつを定め了おわんぬ、此の外しよか・釈迦一仏いちぶつの所説しよせつなれば先後せんごの諸經しよきやうに対して

法華經ほけきようの勝劣しょうれつを論ずべきに非あらざるなり、故ゆえに涅槃經ねはんきように諸經しよきようを嫌きらう中に法華經ほけきようを入れず法華經ほけきようは諸經しよきように勝まさる由これ・之あらを顯あらわす故ゆえなり、但ただし邪見じやけんの文ぶんに至いたつては法華經ほけきようを覺知かくちせざる一類いちるいの人・涅槃經ねはんきようを聞いて悟さとを得ゆえる故ゆえに迦葉童子かしやうどうじ・自身じしん並ならに所引しよいんを指さして涅槃經ねはんきようより已前いぜんを邪見等じやけんとうと云いうなり經きようの勝劣しょうれつを論ずるには非あらず。

第三だいしやうじように大小乘だいしやうじようを定さだむることを明あかさば、問いうて云いく大小乘だいしやうじようの差別さべつ如何いかん、答こたえて云いく常途じやうとの説ごの如ごとくんば阿含部あこんの諸經しよきようは小乘しやうじようなり華嚴けこん・方等ほうとう・般若はんにか・法華ほつぺ・涅槃ねはん等はだいじよう大乘だいじようなり、或あるは六界ろくかいを明あすは小乘しやうじよう・十界じゆつかいを明あすは大乘だいじようなり、其その外ほか・法華經ほけきように對たいして實義じつぎを論ずる時とき・法華經ほけきようより外ほかの四十余年しよだいじやうきようの諸大乘しよだいじやうきよう經きようは皆みな小乘しやうじようにして法華經ほけきようは大乘だいじようなり。問いうて云いく諸宗しよしゆうに亘わたつて我所しよこ抛なの經きようを實大乘じつだいじやうと謂おもい余宗よしゆう所抛しよこの經きようを權大乘ごんだいじようと云いうこと常ならの習ないなり末學まつがくに於おいては是非ぜひ定め難がたし、未だ聞知もんち

せず法華經ほけきように對して諸大乘經しよだいじようきようを小乘しょうじようと稱する証文しやうもん如何いかん、答えて
云く宗宗りつぎの立義互たがいに是非ぜひを論ず就中なかんずく末法まつぽうに於て世間出世せけんしゅつせに就て非を
先とし是これを後とす自ら是非ぜひを知らず愚者ぐしやの歎くべき所なり、但し且く
我等われらが智を以て四十余年もつよんじゅうよねんの現文げんぶんを觀るに此の言を破さする文無ければ人
の是非ぜひを信用しんようすべからざるなり、其の上・法華經ほけきように對して諸大乘經しよだいじようきようを
小乘しょうじようと稱することは自答じとうを存ぞんすべきに非ず、法華經ほけきようの方便品ほうべんに云く
仏みずかは自ら大乘だいじように住し給たまえり、乃至ないし・自ら無上道大乘むじやうどうだいじようびようどう平等へうどうの法を証し
き若し小乘しょうじようを以て化すること乃至ないし一人に於てせば我即すなわち慳貪けんどんに墮だせ
ん、此の事は為て不可ふかなり「此の文の意は法華經ほけきようより外の諸經しよきようを皆
小乘しょうじようと説けるなり、亦また寿命量品じゆりやうほんに云く小法しょうぼうを樂ねがう」と此等これらの文は
法華經ほけきようより外の四十余年よんじゅうよねんの諸經しよきようを皆小乘しょうじようと説けるなり、天台・妙樂
の釈おに於て四十余年よんじゅうよねんの諸經しよきようを小乘しょうじようなりと釈しやくすとも他師たし之これを許ゆるすべか

らず故に但經文を出すなり。

第四に且らく權教を聞いて實經に就くことを明さば、問うて云く

証文如何、答えて云く十の証文有り法華經に云く但大乘經典を

受持することを樂て乃至余經の一偈をも受けざれ」涅槃經に云く

「了義經に依つて不了義經に依らざれ」、是二法華經に云く此の經は

持ち難し若し暫くも持つ者は我即ち歡喜す諸仏も亦然なり是の如き人

は諸仏の歎めたもう所なり、是れ則ち勇猛なり是れ則ち精進なり是を

戒を持ち頭陀を行ずる者と名く」末代に於て四十余年の持戒無し、三

涅槃經に云く乘に緩なる者に於ては乃ち名けて緩と為す戒緩の者に

於ては名けて緩と為さず菩薩摩訶薩・此の大乘に於て心懈慢せずんば

是を奉戒と名づく正法を護らんが為に大乘の水を以て而も自ら澡浴

す是の故に菩薩・破戒を現すと雖も名づけて緩と為さず」

此の文は法華經の戒を流通する文なり是四法華經第四に云く「妙法華經・乃至・皆是眞実」の証明なり法華經第八普賢菩薩の誓に云く如来の滅後に於て閻浮提の内に広く流布せしめて断絶せざらしめん」法華經第七に云く我が滅度の後・後の五百歳の中に閻浮提に於て断絶せしむること無けん」釈迦如来の誓なり法華經第四に多宝並に十方諸仏来集の意趣を説いて云く法をして久しく住せしめんが故に此に来至し給えり」是八法華經第七に法華經を行ずる者の住处を説いて云く如来の滅後に於て応に一心に受持・読・誦・解説・書写して説の如く修行すべし所在の国土に乃至・若は経卷所住の処若は園の中に於ても若は林中に於ても若は樹の下に於ても若は僧坊に於ても若は白衣の舎にても若は殿堂に在つても若は山谷曠野にても是の中に皆塔を起て供養すべし所以は何ん当に知るべし是の処は即ち是れ道場なり諸仏此に於て

阿耨多羅三藐三菩提を得給う」是九法華經の流通たる涅槃經の第九に
云く我涅槃の後正法未だ滅せず余の八十年・爾時に是の經閻浮提に
於て當に広く流布すべし是の時當に諸の惡比丘有るべし是の經を抄掠
して分つて多分と作し能く正法の色香美味を滅す是の諸の惡人復是の
如き經典を讀誦すと雖も如來深密の要義を滅除して世間莊嚴の文を
安置し無義の語を飾り前を抄て後に著け後を抄て前に著け前後を中
に著け中を前後に著けん當に知るべし是くの

如き諸の惡比丘は是・魔の伴侶なり、乃至・譬えば牧牛女の多く水を乳に加うるが如く諸の惡比丘も亦復是の如し雜るに世語を以てし錯りて是の經を定む多くの衆生をして正説・正写・正取・尊重・讚歎・供養・恭敬することを得ざらしむ是の惡比丘は利養の爲の故に是の經を広宣流布すること能わす分流すべき所少く言うに足らず彼の牧牛の貧窮の女人展転して乳を売るに乃至糜と成して乳味無きが如し、是の大乗經典・大涅槃經も亦復是の如く展転薄淡にして氣味有ること無し氣味無しと雖も猶余經に勝る是れ一千倍なること彼の乳味の諸の苦味に於て千倍勝る

と為すが如し何を以ての故に是の大乗經典・大涅槃經は声聞の經に於て最上首爲り」是十。

問うて云く不了義經を捨てて了義經に就くとは、大円覺修多羅

了義經・大仏頂如来密因修証了義經是の如き諸大乘經は皆了義經なり依用と為す可きや、答えて云く了義・不了義は所対に随つて不同なり二乗・菩薩等の所説の不了義に對すれば一代の仏説皆了義なり仏説に就て小乗經は不了義・大乘經は了義なり大乘に就て又四十余年の諸經は不了義經・法華・涅槃・大日經等は了義經なり而るに円覺・大仏頂等の諸經は小乗及び歷劫修行の不了義經に對すれば了義經なり法華經の如き了義には非ざるなり。

問うて云く華嚴・法相・三論等の天台・真言より已外の諸宗の高祖・各其の依憑の經經に依つて其の經經の深義を極めたりと欲えり是れ爾る可しや如何、答えて云く華嚴宗の如きは華嚴經に依つて諸經を判じて華嚴經の方便と為すなり、法相宗の如きは阿含・般若等を卑しめ華嚴・法華・涅槃を以て深密經に同じ同じく中道教と立つると雖も亦

法華・涅槃は一類の一乗を説くが故に不了義經なり深密經には五性各別を論ずるが故に了義經と立つるなり、三論宗の如きは二藏を立てて一代を摂し大乘に於て淺深を論ぜず而も般若經を以て依憑と爲す、此等の諸宗の高祖・多分は四依の菩薩なるか定めて所存有らんと是非に及ばず。

然りと雖も自身の疑を晴らさんが爲に且らく人師の異解を聞いて諸宗の依憑の經經を開き見るに華嚴經は旧訳は五十・六十・新訳は八十・四十・其の中に法華・涅槃の如く一代聖教を集めて方便と爲すの文無し、四乗を説くと雖も其の中の仏乘に於て十界互具・久遠実成を説かず但し人師に至つては五教を立てて先の四教に諸經を収めて華嚴經の方便と爲す、法相宗の如きは三時教を立てる時・法華等を以て深密經に同ずと雖も深密經五卷を開き見るに全く法華等を以て

中道の内に入れず。

三論宗の如きは二蔵を立つる時・菩薩蔵に於て華嚴・法華等を収め
般若經に同ずと雖も新古の大般若經を開き見るに全く大般若を以て
法華・涅槃に同ずるの文無し華嚴は頓教・法華は漸教等とは人師の
意樂にして仏説に非ざるなり。

法華經の如きは序分・無量義經に隨に四十余年の年限を挙げ華嚴・
方等・般若等の大部の諸經の題名を呼んで未顕真実と定め正宗の
法華經に至つて一代の勝劣を定むる時・我が所説の經典・無量千万億
已説・今説・當説の金言を吐いて、而も其の中に於て此の法華經は最
も難信難解なりと説き給う時・多宝仏・地より湧出し妙法蓮華經
皆是真実と証誠し分身の諸仏・十方より悉く一処に集つて舌を梵天
に付け給う。

今・此の義を以て余推察を加うるに唐土・日本に渡れる所の五千・七
千余卷の諸經・以外の天竺・竜宮・四王・天・過去の七仏等の諸經並に
阿難の未結集の經・十方世界の塵に同ずる諸經の勝劣・淺深・難易・
掌・中に在り無量千万億の中に豈釈迦如来の所説の諸經を漏らす
可けんや已説・今説・当説の年限に入らざる諸經之れ有るべきや願わ
くば末代の諸人且らく諸宗の高祖の弱文無義を閑きて釈迦・多宝・
十方諸仏の強文有義を信ず可し、何に況や諸宗の末学・偏執を先と
爲し末代の愚者人師を本と爲して經論を抛つ者に依憑すべきや、故に
法華の流通たる雙林最後の涅槃經に仏・迦葉童子菩薩に遺言して言く
法に依つて人に依らざれ義に依つて語に依らざれ智に依つて識に
依らざれ了義經に依つて不了義經に依らざれ」と云云。

予世間を見聞するに自宗の人師を以て三昧発得智慧第一と称すれ

ども無徳の凡夫として実經に依つて法門を信ぜしめず不了義の觀經等を以て時機相応の教と稱し了義の法華・涅槃を聞いて譏つて理深解微の失を付け如来の「遺言に背いて人に依つて法に依らざれ・語に依つて義に依らざれ・識に依つて智に依らざれ・不了義經に依つて了義經に依らざれ」と談ずるに非ずや、請い願わくば心有らん人は思惟を加えよ如来の入滅は既に二千二百余の星霜を送れり文殊・迦葉・阿難・經を結集して已後・四依の菩薩重ねて出世し論を造り經の意を申ぶ末の論師に至つて漸く誤り出来す亦訳者に於ても梵漢未達の者・權教しゆくじゆう宿習の人有つて実の經論の義を曲げて權の經論の義を存せり、之に就て亦唐土の人師・過去の權教の宿習の故に權の經論心に叶う間、実經の義を用いず・或は少し白義に違ふ文有れば理を曲げて会通を構え以て自身の義に叶わしむ、設い後に道理と念うと雖も・或は名利に

依り・或は檀那の歸依に依つて權宗を捨てて実宗に入らず、世間の
道俗亦無智の故に理非を弁えず但・人に依つて法に依らず設い惡法た
りと雖も多人の邪義に随つて一人の実説に依らず、而るに衆生の機多
くは流転に随う設い出離を求むとも亦多分
は權教に依る、但恨むらくは惡業の身・善に付け惡に付け生死を離れ
難きのみ、然りと雖も今の世の一切の凡夫設い今生を損すと雖も上に
出す所の涅槃經第九の文に依つて且らく法華・涅槃を信ぜよ其の故は
世間の淺事すら展転多き時は虚は多く実は少し況や仏法の深義に於て
をや、如来の滅後二千余年の間・仏法に邪義を副え来り万に一にも
正義無きか一代の聖教多分は誤り有るか、所以に心地觀經の法爾
無漏の種子・正法華經の属累の經末・婆沙論の一十六字・撰論の識の
八九・法華論と妙法華經との相違・涅槃論の法華煩惱所汚の文法相宗

の定性無性の不成仏・撰論宗の法華經のほけきよう一稱南無の別時意趣・此等
は皆訳者人師の誤りなり、此の外に亦四十余年の經經に於て多くの
誤り有るか設たいほつけ法華・涅槃に於て誤有るも誤無きも四十余年の
諸經を捨てて法華・涅槃に隨う可し其の証・上に出し了んぬ況や誤り
有る諸經に於て信心を致す者・生死を離るべきや。

大文の第二に正像末に就て仏法の興廢有ることを明すとは、之に
就て二有り、一には爾前四十余年の内の諸經と淨土の三部經と末法に
於て久住・不久住を明す、二には法華・涅槃と淨土の三部經並に諸經
との久住・不久住を明す。

第一に爾前四十余年の内の諸經と淨土の三部經と末法に於て久住・
不久住を明すとは、問うて云く如来の教法は大小・淺深・勝劣を論ぜ
ず但時機に依つて之を行ぜば定めて利益有るべきなり、然るに賢劫・

大術・大集等の諸經を見るに仏滅後・二千余年已後は佛法皆滅して但
・教のみ有つて行証有るべからず、随つて伝教大師の末法灯明記を開
くに我延暦二十年辛巳一千七百五十歳「説なり」延暦二十年より已後
亦四百五十余歳なり既に末法に入れり、設い教法有りと雖も行証無
けん、然るに於ては佛法を行ずる者・方が一も得道有り難きか、然るに
雙觀經の当來の世・經道滅尽せんに我慈悲哀愍を以て特り此の經を
留め止住せんこと百歳ならん其れ衆生の斯の經に値うこと有らん者は
意の所願に随つて皆得道す可し」等の文を見るに釈迦如来一代の聖教
皆滅尽の後・唯特り雙觀教の念仏のみを留めて衆生を利益す可しと見
え了んぬ。

此の意趣に依つて粗淨土家の諸師の釈を勘うるに其の意無きに
非ず、道綽禪師は当今末法は是れ五濁惡世なり唯淨土の一門のみ通

入すべき路なり」と書し、善導和尚は万年に三宝滅して此の經のみ住
すること百年なり」と宣べ、慈恩大師は末法万年に余經悉く滅し弥陀
の一教利物偏に増さん」と定め、日本国の叡山の先德慧心僧都是一代
聖教の要文を集めて末代の指南を教ゆる往生要集の序に云く天れ
往生極樂の教行は濁世末代の目足なり道俗貴賤誰か歸せざる者あ
らん但し顯密の教法は其の文一に非ず事理の業因其の行惟れ多し
利智精進の人は未だ難しと為す予が如き頑魯の者豈敢てせんや」乃至
次下に云く就中念仏の数は多く末代經道滅尽の後の濁惡の衆生
を利する計りなり」と、総じて諸宗の学者も此の旨を存す可し殊に
天台一宗の学者誰か此の義に背く可けんや如何、答えて云く爾前
四十余年の經經は各時機に随つて而も興廢有るが故に多分は淨土の
三部經より已前に滅尽有る可きか、諸經に於ては多く三乘現身の

得道を説く故に末代に於ては現身得道の者之少きなり十方の往生
淨土は多くは末代の機に蒙らしむ、之に就て西方極樂は娑婆隣近なる
が故に最下の淨土なるが故に日輪東に出で西に没するが故に諸經に多
く之を勸む、随つて淨土の祖師のみ独り此の義を勸むるのみに非ず
天台・妙樂等も亦爾前の經に依るの日は且らく此の筋あり、亦独り
人師のみに非ず竜樹・天親も此の意有り、是れ一義なり、亦仁王經等
の如きは淨土の三部經より尚久く末法万年の後・八千年住す可しとな
り、故に爾前の諸經に於ては一定すべからず。

第二に法華・涅槃と淨土の三部經との久住・不久住とを明さば、問
うて云く法華・涅槃と淨土の三部經と何れが先に滅すべきや、答えて
云く法華・涅槃より已前に淨土の三部經は滅す可きなり、問うて云く
何を以て之を知るや、答えて云く無量義經に四十余年の大部の諸經を

挙げ了つて未顕真実と云う故に雙觀經等の得り此の經を留む」の言
は皆方便なり虚妄なり、華嚴・方等・般若・觀經等の速疾歴劫の
往生成仏は無量義經の実義を以て之を検うるに無量無辺不可思議
阿僧祇劫を過ぐれども終に無上菩提を成ずることを得ず、乃至・險き
逕を行くに留難多きが故にと云う經なり、往生成仏俱に別時意趣な
り、大集・雙觀經等の住滅の先後は皆隨宜の一説なり、法華經に來ら
ざる已前は彼の外道の説に同じ、譬えば江河の大海に趣かず民臣の
大王に隨わざるが如し、身を苦しめ行を作すとも法華・涅槃に至らず
んば一分の利益無く有因無果の外道なり、在世滅後俱に教有つて人
無く・行有つて証無きなり諸木は枯ると雖も松柏は萎まず衆草は散
ると雖も鞠竹は変ぜず法華經も亦復是くの如し釈尊の三説・多宝の
証明・諸仏の舌相偏に令法久住に在るが故なり。

問うて云く諸經滅尽の後特り法華經のみ留る可き証文如何、答えて云く法華經の法師品に釈尊自ら流通せしめて云く我が所説の經典無量千萬億已に説き今説き當に説かん而も其の中に於て此の法華經最も為れ難信難解なり」と云云、文の意は一代五十年の已今當の三説に於て最第一の經なり、八万聖教の中に殊に未來に留めんと欲して説き給えるなり、故に次の品に多宝如來は地より涌出し分身の諸佛は十方より一處に來集し釈迦如來は諸佛を御使として八方・四百万億那由他の世界に充滿せる菩薩・二乘・人天・八部等を責めて多宝如來並に十方の諸佛・涌出來集の意趣は偏に令法久住の爲なり、各三説の諸經滅尽の後・隨に未來五濁難信の世界に於て此の經を弘めんとする誓言を立てよと云える時に二万の菩薩・八十万億那由他の菩薩・各誓狀を立てて云く我身命を愛せず但無上道を惜む」と、千世界の

微塵の菩薩・文殊等皆誓つて云く我等・仏の滅後に於て、乃至・当に広く此の經を説くべし」と云云、其の後・仏十喩を挙げ給う、其の第一の喩は川流江河を以て四十余年の諸經に譬え法華經を以て大海に譬う、末代濁惡の無慚無愧の最早・の時・四味の川流江河は渴ると雖も法華經の大海は減少せず等と説き了つて、次下に正しく説いて云く我滅度の後・後の五百歳の中に広宣流布し閻浮提に於て斷絶せしむること無けん」と定め了んぬ。

傳文の次第を案ずるに我滅度後の次の後の字は四十余年の諸經滅尽の後の後の字なり、故に法華經の流通たる涅槃經に云く・心に無上の佛法を以て諸の菩薩に付すべし諸の菩薩は善能く問答するを以てなり是くの如き法宝は則ち久住することを得・無量千世にも増益熾盛にして衆生を利安すべし」已上此の如き等の文は法華・涅槃は無量百歳に

も絶ゆ可からざる経なり、此の義を知らざる世間の学者・大集権門の五五百歳の文を以て此の経に同じ浄土の三部経より已前に滅尽す可しと存ずる立義は一經の先後起尽を忘れたるなり。

問うて云く上に挙ぐる所の曇鸞・道綽・善導・慧心等の諸師は皆法華・真言等の諸経に於て末代不相応の釈を作る之に依つて源空並に所化の弟子・法華・真言等を以て雑行と立て難行道と疎み、行者をば群賊・惡衆・惡見の人等と罵り、或は祖父が履に類しの語・或は絃歌等にも劣ると云うの語其の意趣を尋ぬれば偏に時機不相応の義を存するが故なり、此等の大師の釈をば如何に之を会すべきや、答えて云く釈迦如来一代五十年の説教・一仏の金言に於て権実二教を分ち権経を捨てて実経に入らしむる仏語顯然たり、此に於て若但讚仏乘・衆生没在苦の道理を恐れ且らく四十二年の権経を説くと雖も若以

しょうじよう
小乗化・乃至於一人・我則墮慳貪の失を脱れんが為に入大乘為本の
義を存し本意を遂げ法華經を説き給う。

然るに涅槃經に至つて我滅度せば必ず四依を出して權実二教を弘通
せしめんと約束し了んぬ、故に竜樹菩薩は如来の滅後八百年に出世し
て十住・毘婆沙等の權論を造りて華嚴・方等・般若等の意を宣べ大論を
造りて若法華の差別を分ち、天親菩薩は如来の滅後九百年に出世し
て俱舍論を造りて小乗の意を宣べ唯識論を造りて方等部の意を宣べ
最後に仏性論を造りて法華・涅槃の意を宣べ了教・不了教を分ちて
敢て仏の遺言に違わず、末の論師並に訳者の時に至つては一向に權經
に執するが故に実經を会して權經に入れ權実雜亂の失・出来せり、亦
人師の時に至つては各依憑の經を以て本と為すが故に余經を以て權經
と為す是より弥仏意に背く。

而るに浄土の三師に於ては鸞・綽の二師は十住毘婆沙論に依つて
難易・聖浄の二道を立つ若し本論に違して法華真言等を以て難易の内
に入れば信用に及ばじ、随つて浄土論註並に安樂集を見るに多分は
本論の意に違わず、善導和尚は亦浄土の三部經に依つて弥陀称名等
の一行一願の往生を立つる時・梁・陳・隋・唐の四代の撰論師総じて
一代聖教を以て別時意趣と定む、善導和尚の存念に違するが故に
撰論師を破する時・彼の人を群賊等に誓う順次生の功德を賊するが
故に其の所行を難行と称することは必ず万行を以て往生の素懷を
遂ぐる故に此の人を責むる時に千中無一と嫌えり、是の故に善導和尚
も難行の言の中に敢えて法華・真言等を入れず。

日本国の源信僧都は亦叡山第十八代の座主・慈慧大師の御弟子なり
多くの書を造れることは皆法華を弘めんが為なり、而るに往生要集

を造る意は爾にぜん前よんじゅうよねん四十余年の諸經しよきやうに於おいて往生おうじやう・成仏じやうぶつの二義有いふり成仏じやうぶつの
難行なんぎやうに對たいして往生おうじやう易行いぎやうの義を存ぞんし往生おうじやうの業ごふの中に於おいて菩提心ぼだいしん觀念かんねんの
念仏ねんぶつを以もつて最上さいじやうと為なす、故ゆゑに大文第十の問答料簡もんどうりやうけんの中・第七の

諸行勝劣門に於ては念仏を以て最勝と爲し次下に爾前最勝の念仏を以て法華經の一念信解の功德に對して勝劣を判ずる時・一念信解の功德は念仏三昧より勝るる百千万倍なりと定め給えり、当に知るべし往生要集の意は爾前最上の念仏を以て法華最下の功德に對して人をして法華經に入らしめんが爲に造る所の書なり、故に往生要集の後に一乗要決を造つて自身の内証を述ぶる時・法華經を以て本意と爲すなり。

而るに源空並に所化の衆・此の義を知らざるが故に法華・真言を以て三師並に源信所破の難聖難並に往生要集の序の顯密の中に入れて三師並に源信を法華・真言の謗法の人と爲す、其の上・日本国の一切の道俗を化して法華・真言に於て時機不相応の旨を習わしめ在家・出家の諸人に於て法華・真言の結縁を留む豈仏の記し給う所の惡世中比丘

邪智心諂曲」の人に非ずや、亦則ち一切世間の仏種を断ずの失を免る可けんや。

其上・山門・寺門・東寺・天台並に日本国中に法華・真言を習う諸人を群賊・惡衆・惡見の人等に誓うる源空が重罪何れの劫にか其の苦果を経尽す可きや、法華經の法師品に持經者を罵る罪を説いて云く君し惡人有つて不善の心を以て一劫の中に於て現に仏前に於て常に仏を毀罵せん其の罪尚輕し若し人・一つの惡言を以て在家・出家の法華經を讀誦する者を毀☆せん其の罪甚だ重し」經文一人の持者を罵る罪すら尚是くの如し況や書を造り日本国の諸人に罵らしむる罪をや、何に況や此の經を千中無一と定めて法華經を行ずる人に疑を生ぜしむる罪をや、何に況や此の經を捨てて觀經等の權經に遷らしむる謗法の罪をや、願わくば一切の源空が所化の四衆頓に選択集の邪法

を捨てて忽たちまちに法華經ほけきように遷うつり今度このたび阿鼻あびの炎えんを脱まぬかれよ。

問いうて云いく正まさしく源空げんくうが法華經ほけきようを誹謗ひぼうする証文しょうもん如何いかん、答こたえて云いく法華經ほけきようの第二だいにに云いく若もし人信じんしんぜずして斯この經きやうを毀謗きぼうせば則すなはち一切世間いっさいせけんの仏種ぶつしゆを断だんぜん」經文きやうもん不信ふしんの相貌そうみやうは人ひとをして法華經ほけきようを捨すてしむればなり、故ゆゑに天親てんじん菩薩ぼさつの仏性論ぶつしやうの第一だいいちに此この文ぶんを釈しやくして云いく若もし大乘だいじやうに憎背ぞうはいする者もの此こは是これ一闡提いつせんだいの因いんなり衆生しゆじやうをして此この法ほふを捨すてし

むるを為もつての故ゆゑに「論文ほうぼう謗法そうみょうの相貌さうめいは此この法はうを捨すてしむるが故ゆゑなり、

選択集せんちやくしゅうは人ひとをして法華經ほけきやうを捨すてしむる書しよに非あらずや閣かく抛ほうの二字ふたごは

仏性論ぶつしやうろんの憎背そうはいの二字ふたごに非あらずや、亦また法華經ほけきやう誹謗ひぼうの相貌さうめいは四十余年よんじゅうよねんの

諸經しよきやうの如ごとく小善成仏しやうぜんじやうぶつを以もつて別時意趣べつじいしゆと定さだむる等らうなり。

故ゆゑに天台てんだいの釈いに云いく若もし小善成仏しやうぜんじやうぶつを信しんぜずんば則すなはち世間せけんの仏種ぶつしゆを

断きずるなり」妙樂みやうらく重かさねて此この義ぎを宣のべて云いく此この經きやうは遍あまねく六道ろくどうの仏種ぶつしゆ

を開ひらく若もし此この經きやうを謗ぼうぜば義ぎ・断きに當あたるなり」釈迦しやか・多寶たぼう・十方じふつぽうの諸佛しよぶつ

・天親てんじん・天台てんだい・妙樂みやうらくの意いの如ごとくんば源空げんくうは謗法ほうぼうの者ものなり所詮しよせん・選擇集せんちやくしゅうの

意いは人ひとをして法華ほけ・真言しんごんを捨すてしめんと定さだめて書かき了おわぬ謗法ほうぼうの義ぎ疑うたがひ

い無なき者ものなり。

大文だいぶんの第三だいさんに選擇集せんちやくしゅう謗法ほうぼうの緣起えんぎを出いさば、問いうて云いく何いれの証しやう拠こ

を以もつて源空げんくうを謗法ほうぼうの者ものと稱しやうするや、答こたえて云いく選擇集せんちやくしゅうの現文げんぶんを見る

に一代聖教を以て二つに分つ一には聖道・難行・難行・二には淨土・易行・正行なり、其の中に聖・難・難・難と云うは華嚴・阿含・方等・般若・法華・涅槃・大日經等なり淨・易・正とは淨土の三部經の稱名念仏等なり取意聖・難・難の失を判ずるには末代の凡夫之を行ぜば百の時に希に一二を得・千の時に希に三五を得ん・或は千が中に一も無し・或は群賊・惡衆・邪見・惡見・邪雜の人等と定むるなり、淨・易・正の得を判ずるには末代の凡夫之を行ぜば十は即十生し百は即百生せん等なり謗法の邪義是なり。

問うて云く一代聖教を聖道・淨土・難行・易行・正行・難行と分ち其の中に難・聖・難を以て時機不相応と稱すること源空一人の新義に非ず曇鸞・道綽・善導の三師の義なり、此亦此等の大師の私の案に非ず其の源は竜樹菩薩の十住毘婆沙論より出でたり、若し源空を

謗法の者と称せば竜樹菩薩並に三師を謗法の者と称するに非ずや、
答えて云く竜樹菩薩並に三師の意は法華已前の四十余年の経經に
於て難易等の義を存す、而るに源空より已来竜樹並に三師の難行等
の語を借りて法華・真言等を以て難・雜等の内に入れぬ、所化の弟子・
師の失を知らずして此の邪義を以て正義と存じ此の国に流布せしむる
が故に国中の万民悉く法華・真言に於て時機不相応の想を作す、其の
上世間を貧る天台・真言の学者世の情に随わんが為に法華・真言に於て
時機不相応の悪言を吐いて選択集の邪義を扶け、一旦の欲心に依つて
釈迦・多宝並に十方諸仏の御評定の「令法久住・於閻浮提広宣流布」
の誠言を壊り一切衆生をして三世十方の諸仏の舌を切る罪を得せし
む、偏に是れ惡世の中の比丘は邪智にして心諂曲に未だ得ざるを
為得たりと謂い、乃至・惡鬼其の身に入り仏の方便隨宜所説の法を知

らざる故なり。

問うて云く竜樹菩薩並に三師は法華・真言等を以て難・聖・雜の中
に入れざりしを源空私に之を入るるとは何を以て之を知るや、答えて
云く遠く余処に証拠を尋ぬ可きに非ず即選択集に之を見たり、問う
て云く其の証文如何、答えて云く選択集の第一篇に云く道緯禪師・
聖道・淨土の二門を立て而して聖道を捨てて正しく淨土に歸するの文
と約束し了つて、次下に安樂集を引いて私の料簡の段に云く初に
聖道門とは之に就て二有り・一には大乘・二には小乗なり大乘の中
に就て顯密・權実等の不同有りと雖も今此の集の意は唯顯大及び
權大を存す故に歷劫迂回の行に當る之に準じて之を思うに応に密大
及び実大をも存すべし」已上選択集の文なり、此の文の意は道緯
禪師の安樂集の意は法華已前の大小乗經に於て聖道・淨土の二門を

わか
分つと雖も我私に法華・真言等の実大・密大を以て四十余年の権大乘
に同じて聖道門と称す 淨之思之」の四字是なり、此の意に依るが故に
亦曇鸞の難易の二道を引く時亦私に法華・真言を以て難行道の中に入
れ善導和尚の正雜二行を分つ時も亦私に法華・真言を以て雜行の内
に入る総じて選択集の十六段に亘つて無量の謗法を作す根源は偏に
此の四字より起る 誤れるかな畏しきかな。

爰に源空の門弟・師の邪義を救つて云く諸宗の常の習い設い經論の
証文無しと雖も義類の同じきを聚めて一処に置く而も選択集の意は
法華・真言等を集めて雜行の内に入れ 正行に對して之を捨つ偏に經
の法体を嫌うに非ず但風勢無き末代の衆生を常没の凡夫と定め此の
機に易行の法を撰ぶ時・称名の念仏を以て其の機に當て易行の法を
以て諸教に勝ると立つ權実淺深の勝劣を詮ずるに非ず、雜行と云う

も嫌つて雑と云うに非ず雑と云うは不純を雑と云う其の上諸の經論並に諸師も此の意無きに非ず故に叡山の先徳の往生要集の意偏に是の義なり。

所以に往生要集の序に云く、顯密の教法は其の文一に非ず事理の業因其の行惟れ多し利智精進の人は未だ難しと為ず予が如き頑魯の者豈敢てせんや是の故に念仏の一門に依る」と云云、此の序の意は慧心先徳も法華・真言等を破するに非ず但偏に我等頑魯の者の機に當つて法華・真言は聞き難く行じ難きが故に我身鈍根なるが故なり敢て法体を嫌うに非ず、其の上序より已外正宗に至るまで十門有り大文第八の門に述べて云く、今念仏を勧むること、是れ余の種種の妙行を遮するに非ず只是れ男女・貴賤・行住坐臥を簡ばず時処諸縁を論ぜず之を修するに難からず乃至・臨終には往生を願求するに其の便宜を得ること

念仏には如かず」已上此等の文を見るに源空の選択集と源信の往生
要集と一卷・三巻の不同有りと雖も一代聖教の中には易行を撰んで
末代の愚人を救わんと欲する意趣は但同じ事なり、源空上人・法華・
真言を難行と立てて惡道に墮せば慧心先徳も亦此の失を免るべからず
如何、答えて云く汝・師の謗法の失を救わんが為に事を源信の往生
要集に寄せて謗法の上に弥重罪を招く者なり其の故は釈迦如来五
十年の説教に総じて先き四十二年の意を無量義經に定めて云く 險逕
を行くに留難多き故に」と無量義經の已後を定めて云く 天直道を行
くに留難無きが故に」と仏、自ら難易・勝劣の二道を分ちたまえり、仏
より外等覺已下末代の凡師に至るまで自義を以て難易の二道を分ち此
の義に背く者は外道魔王の説に同じきか、随つて四依の居士・竜樹
菩薩の十住毘婆沙論には法華已前に於て難易の二道を分ち敢て

四十年已後の經に於て難行の義を存せず、其の上若し修し易きを
以て易行と定めば法華經の五十展轉の行は称名念仏より行じ易きこ
と百千万億倍なり、若し亦勝を以て易行と定めば分別功德品に爾前
四十余年の八十万億劫の間の檀・戒・忍・進・念仏三昧等先きの五
波羅蜜の功德を以て法華經の一念信解の功德に比するに一念信解の
功德は念仏三昧等の先きの五波羅蜜に勝る事百千万億倍なり、難易
・勝劣と云い行淺功深と云い觀經等の念仏三昧を法華經に比するに
難行の中の極難行・劣が中の極劣なり。

其の上惡人・愚人を扶くること亦教の淺深に依る阿含十二年の戒門
には現身に四重五逆の者に得道を許さず、華嚴・方等・般若・雙觀經等
の諸經は阿含經より教深き故に勸門の時は重罪の者を摂すと雖も猶
戒門の日は七逆の者に現身の受戒を許さず、然りと雖も決定性の二乘

・無性むしやうの闡提せんたいに於おいて誠勸共かいこんに之これを許ゆるさず、法華ほっけ・涅槃ねはん等らには唯五逆ただごぎやく・七逆謗法ほうぼうの者ものを撰せんするのみに非あらず亦また定性じやうしやう無性むしやうをも撰せんす、就中末法なかんずくまつぼうに於おいては常没じやうぼつの闡提せんたい之多おほし豈觀經等あにかんきやうの四十余年よんじゅうよねんの諸經しよきやうに於おいて之これを扶たすく可べけんや無性むしやうの常没じやうぼつ・決定性けつじやうの二乗にじやうは但法華ほっけ・涅槃ねはん等らに限かぎれり、四十余年よんじゅうよねんの經に依よる人師にんしは彼の經の機と取る此の人いまは未だ教相きやうそうを知らざる故なり。

但ただし往生要集おうじやうようしゅうは一往序分いちおうじよぶんを見る時は法華ほっけ・真言等しんごんを以もつて顯密けんみつの内に入はいれて殆ど末代の機ほとんまつだいに叶かなわずと書しるすと雖いへども文に入いつて委細いさいに一部三卷しまつの始末しまつを見るに、第十の問答料簡もんどうりやうけんの下に正ただしく諸行しよぎやうの勝劣しやうれつを定さだむる時・觀仏三昧かんぶつさんまい・般舟三昧はんじゆさんまい・十住毘婆沙論じじゆびばしやろん・寶積ほうしやく・大集等だいしつの爾前にぜんの經論きやうろんを引ひいて一切いっさいの万行まんぎやうに對して念仏三昧ねんぶつさんまいを以もつて王三昧さんまいと立たて了おわぬ、最後さいごに一つの問答もんどう有あり爾前にぜんの禪定ぜんじやう・念仏三昧ねんぶつさんまいを以もつて法華經ほっけきやうの一念いちねん

信解しんげに對するに百千万億倍劣ると定む、復問またを通ずる時念仏三昧ねんぶつさんまいを
万行まんぎょうに勝まさると云うは爾前にぜんの当分とうぶんなりと云云、当まさに知るべし慧心えしんの意
は往生要集おうじようようしゅうを造つて末代まつだいの愚機ぐきを調ととのえて法華經ほけきように入れんが為なり、例
せば仏の四十余年よんじゅうよねんの經を以て權機もんきを調ととのえ法華經ほけきように入れ給たまうが如し。
故ゆえに最後さいごに一乗要決いちじようようけつを造る其の序ついでに云く諸宗しよしゅうの權實ごんじつは古來こらいの諍あらそ
なり俱ともに經論きやうろんに拠よつて互いいに是非ぜひを執しゅうす、余みな皆みな方便ほうべんの歲冬十月病中
に歎なげいて云く仏法ぶつぽうに遇いうと雖いえども仏意ぶつゐを了りようせず若もし終ついに手を空むなしうせば
後悔こうかい何ぞ追おわん、爰こゝに經論きやうろんの文義もんぎ・實哲けんてつの章疏しやうじよ・或あるは人をして尋たずねしめ
・或あるは自ら思み忖ずかし全ししやくく自宗じしゅう・他宗たしゅうの偏党へんとうを捨もつつる時・専もつら權智實智ごんちじつちの
深奥しんおうを深ふかぐるに終ついに一乘いちじようは真実しんじつの理・五乘ごべんは方便ほうべんの説を得る者なり、
既すでに今生こんじやうの蒙もうを開ひらく何なんぞ夕死ゆうしの恨うらみを残のこさんや」已上ひとえ此の序の意は偏ひとえに
慧心えしんの本意ほんいを顯あらわすなり、自宗じしゅう他宗たしゅうの偏党へんとうを捨もつつるの時淨土じやうどの法門ほうもんを捨

てざらんや一乗は真実の理と得る時専ら法華經に依るに非ずや、源信僧都は永觀二年甲申の冬十一月往生要集を造り寛弘二年丙午の冬十月の比・一乗要決を作る其の中間二十余年なり權を先にし実を後にする宛も仏の如く亦竜樹・天親・天台等の如し、汝往生要集を便りとして師の謗法の失を救わんと欲すれども敢えて其の義類に似ず義類の同じきを以て一処に聚むとならば何等の義類同なるや、華嚴經の如きは二乗界を隔つるが故に十界互具無し方等・般若の諸經は亦十界互具を許さず觀經等の往生極樂も亦方便の往生なり成仏往生俱に法華經の如き往生に非ず皆別時意趣の往生成仏なり。

其の上源信僧都の意は四威儀に行じ易き故に念仏を以て易行と云い四威儀に行じ難きが故に法華を以て難行と称せば天台・妙樂の釈を破する人なり所以に妙樂大師の末代の鈍者無智の者等の法華經を行

ずるに普賢菩薩並に多宝・十方の諸仏を見奉るを易行と定めて云く
散心に法華を誦し禪三昧に入らず坐立行・一心に法華の文字を念ぜ
よ」已上此の釈の意趣は末代の愚者を摂せんが為なり散心とは定心に対
する語なり誦法華とは八卷・一卷・一字・一句一偈・題目一心
一念隨喜の者五十展転等なり坐立行とは四威儀を嫌わざるなり一心
とは定の一心に非ず理の一心に非ず散心の中の一心なり念法華文字と
は此の經は諸經の文字に似ず一字を誦すと雖も八万宝蔵の文字を含
み一切諸仏の功徳を納むるなり天台大師玄義の八に云く 手に巻を
執らざれども常に是の經を読み口に言声・無けれども☆く衆典を誦し
仏・說法せざれども恒に梵音を聞き心に思惟せざれども普く法界を照
す」已上此の文の意は手に法華經一部八卷を執らざれども是の經を信
ずる人は昼夜十二時の持經者なり口に誦經の声を出さざれども

法華經ほけきようを信ずる者は日日・時時・念念に一切經いっさいきようを読む者なり。

仏にゅうめつの入滅すては既に二千余年を経たり然りと雖も法華經ほけきようを信ずる者の

許もとに仏おんじようの音声ととを留めて時時・刻刻・念念に我死せざる由よしを聞かしむ心

に一念三千いちねんさんぜんを觀ぜざれども・く十方法界あまねじゅうぽうほっかいを照てらす者なり此等の徳は

偏ひとえに法華經ほけきようを行ずる者に備そなわるなり、是かくの故ゆえに法華經ほけきようを信ずる者は

設たとい臨終りんじゆうの時・心に仏を念ぜず口に經を誦じゆせず道場どうじように入らざれども

心無こころなくして法界ほっかいを照てらし音無なくくして一切經いっさいきようを誦じゆし卷軸けんじくを取らずして

法華經八卷ほけきようを拳にぎる徳之有これあり是れ豈あに權教ごんきようの念ねんぶつ仏者ひやくせんまんばいまさの臨終りんじゆう正念しやうねんを期きして

十念ねんぶつの念とな仏とを唱となえんと欲ほする者に・百千万倍勝ひやくせんまんばいまさるる易行いぎきように非あらずや、

故ゆえに天台大師文句てんだいだいしもんくの十に云く都すて諸教しよきように勝まさるるが故ゆえに隨喜功德品ずいきくどくと

云みようらくだいしう「妙樂大師みようらくだいしの法華經ほけきようは諸經しよきようより淺機あさききを取とる而しかを人師にんし此この義ぎを

弁わきまえざる故ゆえに法華經ほけきようの機きを深く取とる事を破はして云いわく恐おそらくは人謬あやまつ

て解する者初心の功德の大なることを測らずして

功を上位に推り此の初心を蔑る故に今彼の行は浅く功は深きことを示して以て経力を顯す「已上以顯経力の积の意趣は法華経は觀經等の權経に勝れたるが故に行は浅く功は深し浅機を摂むる故なり、若し慧心の先徳・法華経を以て念仏より難行と定め愚者頑魯の者を摂せずと云わば恐らくは逆路伽耶陀の罪を招かざらんや、恐人謬解の内に入らざらんや。

総じて天台・妙楽の三大部の本末の意には華経は諸経に漏れたる愚者・惡人・女人・常没闍提等を摂し給う他師・仏意を覺らざる故に法華経を諸経に同じ・或は地住の機を取り・或は凡夫に於ても別時意趣の義を存す、此等の邪義を破して人天四惡を以て法華経の機と定む、種類相對を以て過去の善惡を收む人天に生ずる人豈過去の五戒・

十善無からんや等と定め了んぬ、若し慧心此の義に背かば豈天台宗を
知れる人ならんや、而るを源空深く此の義に迷うが故に往生要集に
於て僻見を起し自ら失ち他をも誤る者なり、適宿善有つて実教
に入りながら一切衆生を化して権教に還らしめ、剩え実教を破せし
む豈惡師に非ずや、彼の久遠下種・大通結縁の者の如き五百・三千の
塵劫を経るが如きは法華の大教を捨てて爾前の権小に還るが故に後に
権經を捨てて六道を回りぬ不輕輕毀の衆は千劫阿鼻地獄に墮つ、権師
を信じ実經を弘むる者に誹謗を作したるが故なり。

而るに源空我が身唯実經を捨てて権經に入るのみに非ず人を勧め
て実經を捨てて権經に入らしめ亦権人をして実經に入らしめず、剩
え実經の行者を罵るの罪永劫にも浮び難からんか。

問うて云く十住毘婆沙論は一代の通論なり難易の二道の内に何ぞ

法華・眞言・涅槃をいれざるや、答えて云く一代の諸大乘經に於て
華嚴經の如きは初頓後分有り初頓の華嚴は二乗の成・不成を論ぜず
方等部の諸經には一向に二乗・無性闡提の成仏を斥う般若部の諸經
も之に同じ總じて四十余年の諸大乘經の意は法華・涅槃・大日經等の
如くには二乗・無性の成仏を許さず、此等を以て之をうるに爾前・
法華の相違は水火の如し滅後の論師・竜樹・天親も亦俱に千部の論師
なり所造の論に通別の二論有り通論に於ても亦二有り四十余年の通論
と一代五十年の通論となり、其の差別を分つに決定性の二乗・無性
闡提の成・不成を以て論の權實を定むるなり、而るに大論は竜樹菩薩
の造・羅什三蔵の訳なり此の論にも亦二乗作仏を許さず之を以て知ん
ぬ法華已前の諸大乘經の意を申べたる論なることを。

問うて云く十住毘婆沙論の何処に二乗作仏を許さざるの文出でた

るや、答えて云く十住毘婆沙論の第五に云く、若し声聞地及び
辟支仏地に墮する是を菩薩の死と名く則ち一切の利を失す若し地獄
に墮すとも是の如き畏れを生ぜじ若し二乗地に墮すれば則ち大怖畏と
為す地獄の中に墮すとも畢竟して仏に至ることを得、若し二乗地に墮
すれば畢竟して仏道を遮す」已上此の文二乗作仏を許さず宛も淨名
等の於仏法中以如敗種」の文の如し。

問うて云く大論は般若經に依つて二乗作仏を許さず法華經に依つて
二乗作仏を許すの文如何、答えて云く大論の一百に云く問うて云く
更に何の法か甚深にして般若に勝れたる者あれば而も般若を以て阿難
に属累し余經を以て菩薩に属累するや、答えて云く般若波羅蜜は秘密
の法に非ず而るに法華等の諸經は阿羅漢の受決作仏を説く所以に大
菩薩能く受けて持用す譬えば大藥師の能く毒を以て藥と為すが如し」

と、亦九十三に云く阿羅漢の成仏は論義者の知る所に非ず唯仏のみ
能く了し給う「已上此等の文を以て之を思うに論師の權實は宛も仏の
權實の如し而るを權經に依る人師猥りに法華等を以て觀經等の權說
に同じ法華・涅槃等の義を仮りて淨土三部經の徳と作し決定性の二乗
・無性の闡提・常没の往生を許す權實雜亂の失脱れ難し、例せば外典
の儒者・内典を賊みて外典を莊るが如し謗法の失免れ難きか仏、自ら
權實を分ち給う其の詮を探るに決定性の二乗・無性有情の成・不成
是なり、而るに此の義を弁えざる訳者・爾前の經經を訳する時・二乗
の作仏・無性の成仏を許す此の義を知る訳者は爾前の經を訳する時・
二乗の作仏無性の成仏を許さず、之に依つて仏意を覺らざる人師も亦
爾前の經に於て決定性・無性の成仏を明すと見て法華と爾前と同じき
思ひを作し・或は爾前の經に於て決定無性を嫌う文を見・此の義を

もつりようぎよう
以て了義經と爲し法華・涅槃を以て不了義經と爲す共に仏意を覓ら
ず權実二經に迷えり、此等の誤りを出さば但源空一人に限るのみに
あらず天竺の論師並に訳者より唐土の人師に至るまで其の義有り、所謂
地論師・摂論師の一代の別時意趣・善導・懷感の法華經の二稱南無仏
の別時意趣・此等は皆權実を弁えざるが故に出來する所の誤りなり、
論を造る菩薩・經を訳する三藏・三昧發得の人師猶以て是くの如し況
や末代の凡師に於てをや。

問うて云く汝末学の身として何ぞ論師並に訳者人師を破するや、
答えて云く敢えて此の難を致すこと勿れ摂論師並に善導等の釈は權実
二教を弁えずして猥りに法華經を以て別時意趣と立つ故に天台・妙樂
の釈と水火を作す間・且らく人師の相違を聞いて經論に付て是非を
☆うる時・權実の二教は仏説より出でたり天親・竜樹重ねて之を定む、

此の義に順ずる人師をば且らく之を仰ぎ此の義に順ぜざる人師をば
且らく之を用いず敢て自義を以て是非を定むるに非ず但相違を出す
計りなり。

大文の第四に謗法の者を対治すべき証文を出さば、此れに二有り、
一には仏法を以て国王・大臣並に四衆に付属することを明し、二には
正しく謗法の人・主地に処るをば対治す可き証文を明す、第一に仏法
を以て国王・大臣並に四衆に付属することを明さば、仁王經に云く、
波斯匿王に告わく、乃至・是の故に諸の国王に付属して比丘・比丘尼
・清信男・清信女に付属せず何を以ての故に王の威力無きが故に、乃至
此の經の三宝をば諸の国王・四部の弟子に付属す「已上大集經二十八
に云く、若し国王有つて我が法の滅せんことを見て捨てて擁護せずんば
無量世に於て施戒慧を修すとも悉く皆滅失し其の国に三種の不祥の事

を出さん、乃至・命終して大地獄に生ぜん」已上

仁王經の文の如くならば仏法を以て先ず國王に付属し次に四衆に

及ぼす王位に居る君・國を治むる臣は仏法を以て先と爲し國を治む

可きなり、大集經の文の如くならば王臣等・仏道の爲に無量劫の間・

頭目等の施を施し八万の戒行を持ち無量の仏法を學ぶと雖も國に

流布する所の法の邪正を直さざれば國中に大風・旱・大雨の三

災起りて万民を逃脱せしめ王臣定めて三惡に墮せん、又雙林最後の

涅槃經の第三に云く、今正法を以て諸王・大臣・宰相・比丘・比丘尼・

優婆塞・優婆夷に付属す、乃至・法を護らざる者をば禿居士と名く」又

云く、善男子・正法を護持せん者は五戒を受けず威儀を修せずして

応に刀劍・弓箭・鉾・鎗・持つべし」又云く、五戒を受けざれども正法を

護るを爲て乃ち大乘と名く正法を護る者は應に刀劍・器械を執持すべ

し「云云四十余年の内にも 梵網 等の戒の如くならば国王・大臣の諸人等も一切刀杖・弓箭・矛斧鬪戰の具を畜うることを得ず、若し此を畜うる者は定めて現身に国王の位・比丘・比丘尼の位を失い後生は三惡道の中に墮つ可しと定め了んぬ。

而るに今の世は道俗を択ばず弓箭・刀杖を帶せり梵網經の文の如くならば必ず三惡道に墮せんこと疑無き者なり、涅槃經の文無くんば如何にしてか之を救はん亦涅槃經の先後の文の如くならば弓箭・刀杖を帶して惡法の比丘を治し正法の比丘を守護せん者は先世の四重五逆を滅して必ず無上道を証せんと定め給う。

亦金光明經の第六に云く 若し人有つて其の国土に於て此の經有りと雖も未だ嘗て流布せず捨離の心を生じ聴聞せんことを樂わらず亦供養し尊重し讚歎せず四部の衆の持經の人を見て亦復尊重し乃至

供養くようすること能あたわず、遂に我等及び余の眷属けんぞく・無量の諸天しよてんをして此の
甚深じんじんの妙法みょうほうを聞くことを得えざらしめん甘露かんろの味に背そむき正法しょうほうの流れを
失うしない威光いこう及び勢力せいりき有ること無く惡趣あくしゅを増長ぞうちようし人天にんてんを損滅そんめつし生死しじうじの
河に墜おちて涅槃ねはんの路に乖そむかん世尊せそん・我等四王並に諸の眷属けんぞく及び葉叉等
斯かくの如ごとき事を見て其の国土こくどを捨てて擁護おうごの心無こころなからん但我等のみ
是この王を捨棄しやきするに非あらず亦無量の国土こくどを守護しゆごする諸大善神しよだいぜんじん有らんも
皆悉みなことごとく捨去しやこせん既に捨離しかりし已りなば其の国当まさに種種しゆじゆの災禍さいか有つて国位こくい
を喪失そうしつすべし一切いっさいの人衆にんしゆう皆善心みなぜんしん無けん唯繫縛ただけいばく殺害さつがい瞋諍しんじやうのみ有つて
互たがいに相讒あいさん諂てんし枉まげげて辜無つみきに及およばん、疫病えきび流行りゆうこうし彗星すいせい数しばしば出いで
両日並りようじつならび現げんじ薄蝕はくしよく恒無なくく黑白こくびやくの二虹不祥ふしやうの相を表あらわし星流ほしながれ地動ちどうき
井の内に声を発はつし暴雨ぼうう惡風あくふう時節じせつに依よらず常に飢饉ききんに遭あひて苗実みょうじつも成
らず多たく他方たほうの怨賊おんぞく有つて国内こくないを侵掠しんりやくし人民じんみん諸の苦惱くなんを受け土地とち

所樂しよらくの処有とこある事無ことなけん」已上。

此きの經文きやうもんを見るに世間せけんの安穩あんのんを祈るとも而しかも国くにに三災さんさい起おこらば惡法あくほう流布るふする故ゆゑなりと知る可べし而しかに当世とうせは随分ずいぶん国土こくどの安穩あんのんを祈ると雖いえども去いぬる正嘉元年しょうかがんねんには大地だいち・大おおに動おおいじ同二年どうにに大雨だいう大風たいふう苗実みょうじつを失うしなえり定めて国くにを喪うしなうの惡法あくほう此この国くにに有あるかと勘かんうるなり、選せん集ちやくの・或あるる段だんに云いく第一だいいちに読誦どくじゆ雜行ざうぎやうとは上かみの觀經かんきやう等の往生おうじやう淨土じやうどの經きやうを除いいて已外いげ・大小だいしやう・顯密けんみつの諸經しよきやうに於おいて受持じゆじ・讀誦ず・誦ずする悉ことごとく讀誦どくじゆ雜行ざうぎやうと名なく」と書かき了おつて次に書いいて云いく次に二行にぎやうの得失とくしつを判はぜば法華ほつけ・真言しんごん等の雜行ざうぎやうは失とが・淨土じやうどの三部經さんぶきやうは得となり」次下つぎしもに善導ぜんどう和尚わじやうの往生おうじやう禮讚れいさんの十即じゆつしやう・百即ひやくそく・百生ひやくしやう・千中無一せんちゆうむいつの文ぶんを書のき載のせて云いく私ひそに云いく此この文ぶんを見るに弥いよ雜ざを捨すてて專せんを修しゆすべし豈あに百即ひやくそく・百生ひやくしやうの專修せんしゆ・正行しやうぎやうを捨すてて堅けんく千中無一せんちゆうむいつの雜修ざしゆ・雜行ざうぎやうを執しゆせんや行者ぎやうじや能よく之これを思量しりやうせよ」已

上、此等の文を見るに世間の道俗豈諸經を信ず可けんや、次下に亦書して法華經等の雜行と念仏の正行と勝劣難易を定めて云く「には勝劣の義・二には難易の義なり初に勝劣の義とは念仏は是れ勝・余行は是れ劣なり次に難易の義とは念仏は修し易く諸行は修し難し」と、亦次下に法華・真言等の失を定めて云く「故に知んぬ諸行は機に非ず時を失う念仏往生のみ機に当り時を得たり」亦次下に法華・真言等の雜行の門を閉じて云く「隨他の前には暫らく定散の門を開くと雖も隨自の後には還つて定散の門を閉ず一度開て以後永く閉じざるは唯、是れ念仏の一門なり」已上最後の述懐に云く「天れ速に生死を離れんと欲せば二種の勝法の中に且らく聖道門を闔いて撰んで浄土門に入れ浄土門に入らんと欲せば正雜二行の中に且らく諸の雜行を抛つて撰んで応に正行に歸すべし」已上門弟此の書を伝えて日本六十余州に

じゅうまん 充滿するが故に門人・世間無智の者に語つて云く「上人は智慧第一の
身と爲て此の書を造り真実の義と定め法華・真言の門を閉じて後に開
くの文無く抛つて後に還て取るの文無し」等と立つる間世間の道俗一同
に頭を傾け其の義を訪う者には仮字を以て選択の意を宣べ或は法然
上人の物語を書す間・法華・真言に於て難を付けて或は去年の曆・
祖父の履に譬え或は法華經を読むは管絃より劣ると是くの如き惡書・
国中に充滿するが故に法華・真言等国に在りと雖も聴聞せんことを
樂わず偶行ずる人有りと雖も尊重を生ぜず一向念佛者・法華經の
結縁を作すをば往生の障と成ると云う故に捨離の意を生ず、此の
故に諸天・妙法を聞くことを得ず法味を嘗めざれば威光勢力有るこ
と無し四天王並に眷属・此の国を捨て日本国守護の善神捨離し已るが
故に、正嘉元年に大地大に震い同二年に春の大雨苗を失い夏の大旱☆

に草木を枯し秋の大風に菓実を失い飢渴忽に起りて万民を逃脱せしむること金光明經の文の如し豈選択集の失に非ずや、仏語虚しからざる故に惡法の流布有り既に國に三災起れり而も此の惡義を対治せずんば仏の所説の三惡を脱がる可けんや、而るに近年より予我身命を愛せず但無上道を惜む」の文を瞻る間雪山常啼の心を起し命を大乘の流布に替え強言を吐いて云く選択集を信じて後世を願わん人は無間地獄に墮つ可しと、爾時に法然上人の門弟選択集に於て上に出す所の惡義を隠し或は諸行往生を立て或は選択集に於て法華・真言を破らざる由を稱し、或は在俗に於て選択集の邪義を知らしめざるために妄語を構えて云く日蓮は念仏を稱うる人は三惡道に墮せんと云うと。

問うて云く法然上人の門弟・諸行往生を立つるに失有りや否や、

答えて云く法然上人の門弟と稱し諸行往生を立つるは逆路伽耶陀の
者なり当世も亦諸行往生の義を立つ而も内心には一向に念仏往生の
義を存し外には諸行不謗の由を聞かしむるなり、抑此の義を立つる
者は選択集の法華・真言等に於て失を付け捨閉闍拋・群賊邪見・惡見
邪・雜人・千中無一等の語を見ざるや否や。

第二に正しく謗法人の王地に処るを対治す可き証文を出さば、
涅槃經第三に云く懈怠にして戒を破し正法を毀る者をば王者・大臣
・四部の衆に苦治すべし善男子是の諸の國王及び四部の衆は當に罪
有るべきや不や・不なり・世尊・善男子是の諸の國王及び四部の衆は
尚、罪有ること無し」と、又第十二に云く我往昔を念うに閻浮提に於
て大國の王と作り名を仙予と曰いき大乘經典を愛念し敬重し其の心
純善にして麤惡嫉妬慳・有ること無かりき、乃至善男子我爾の時に

於て心に大乘を重んず婆羅門の方等を誹謗するを聞き・聞き已つて
即時に其の命根を断ちき善男子是の因縁を以て是より已来地獄に
墮せず」已上。

問うて云く梵網經の文を見るに比丘等の四衆を誹謗するは
波羅夷罪なり而るに源空が謗法の失を顯わすは豈阿鼻の業に非ずや、
答えて曰く涅槃經の文に云く迦葉菩薩・世尊に言さく如来何が故ぞ
彼当に阿鼻地獄に墮すべしと記するや、善男子・善星比丘は多く眷属
有り皆善星は是れ阿羅漢なり是れ道果を得つと謂えり我・彼が悪邪の
心を壞らんと欲するが故に彼の善星は放逸を以ての故に地獄に墮せり
と記す」已上此の文に放逸とは謗法の名なり源空も亦彼の善星の如く
謗法を以ての故に無間に墮すべし所化の衆此の邪義を知らざるが故に
源空を以て一切智人と号し・或は勢至菩薩・或は善導の化身なりと云

う彼あくじやが悪邪あくじやの心を壊やぶらんが為ゆえの故ゆえに謗法ほうぼうの根源こんげんを顕あらわす梵網經ぼんもうきようの説は謗法ほうぼうの者ほかの外ししゅうの四衆ししゅうなり仏誠いましめて云いわく謗法ほうぼうの人ひとを見て其その失とがを顕あらわさざれば仏弟子ぶつでしに非あらず」と、故ゆえに涅槃經ねはんぎように云いわく我涅槃ねはんの後その其の方面ほうめんに随したがい持戒じかいの比丘びく有あつて威儀具足いぎぐそくし正法しょうぼうを護持ごじせば法やを壊やぶる者ものを見て即すなわち能よく驅遣くけんし呵責かしやくし徵治ちやうじせよ当まさに知るべし是人このひとは福を得んこと無量むりようにして称計しょうけいす可べからず」亦云またいく若もし善比丘ぜんびくあつて法やを壊やぶる者ものを見て呵責かしやくし驅遣くけんし拳処こしよせずんば当まさに知るべし是この人ひとは仏法ぶつぼうの中の怨あだなり若もし能よく驅遣くけんし呵責かしやくし拳処こしよせば是我弟子これわがでし真の声聞しょうもんなり」已上。

予ぶつでし仏弟子いちぶんの一分いちぶんに入らんが為ために此の書つを造り謗法ほうぼうの失とがを顕あらわし世間せけんに流布るふす願ねがわくば十方じゆつぱうの仏陀ぶつだ此の書おに於おて力そを副たえ大惡法だいあくほうの流布るふを止とどめ一切衆生いっさいしゆじやうの謗法ほうぼうを救すくわしめたまえ。

大文だいぶんの第五だいふんに善知識ぜんちしき並しんじつに真実しんじつの法あに値がたい難がたきことを明あかさば之あかに付あい

て三有り、一には受け難き人身値い難き仏法なることを明し、二には受け難き人身を受け値い難き仏法に値うと雖も悪知識に値うが故に三惡道に墮する

を明し、三には正く末代凡夫の爲の善知識を明す。

第一に受け難き人身値い難き仏法なることを明さば、涅槃經三十三に云く爾の時に世尊・地の少土を取つて之を爪上に置き迦葉に告げて言く、是の土多きや十方世界の地土多きや、迦葉菩薩・仏に白して言く、世尊・爪上の土は十方所有の土に比べず善男子・人有り身を捨てて還つて人身を得・三惡の身捨てて人身を受くることを得・諸根完く具して中国に生れ正信を具足して能く道を修習し道を修習し已つて能く正道を修し正道を修し已つて能く解脱を得・解脱を得已つて能く涅槃に入るは爪上の土の如く、人身を捨て已つて三惡の身

を得・三惡の身を捨てて三惡の身を得・諸根具せずして辺地に生じ邪倒
のを見を信じ邪道を修習し解脱常樂の涅槃を得ざるは十方界の所有
の地土の如し」經文此の文は多く法門を集めて一具と為せり人身を捨て
て還つて人身を受くるは爪上の土の如し人身を捨てて三惡道に墮るは
十方の土の如し三惡の身を捨てて人身を受くるは爪上の土の如く
三惡の身を捨てて三惡の身を得るは十方の土の如し人身を受くるは
十方の土の如く人身を受けて六根欠けざるは爪上の土の如し人身を
受けて六根を欠けざれども辺地に生ずるは十方の土の如く中国に生
ずるは爪上の土の如し中国に生ずるは十方の土の如く仏法に値うは
爪上の土の如し、又云く二闡提と作らず善根を断ぜず是の如き等の
涅槃の經典を信ずるは爪上の土の如し乃至一闡提と作りて諸の善根
を断じ是の經を信ぜざる者は十方界所有の地土の如し」經文此の文の

如^{ごと}くんば法^ほ華^{っけ}
・涅槃^{ねはん}を信^{しん}ぜずして一^{いつ}闡^{せん}提^{だい}と作^なるは十^じ方^{ゆっぼう}の土^どの如^{ごと}く法^ほ華^{っけ}
・涅槃^{ねはん}を

信ずるは爪上の土の如し・此の經文を見て・弥・感涙押え難し今・
日本国の諸人を見聞するに多分は權教を行ず・設い身口は實教を行ず
と雖も心には亦權教を存ず。

故に天台大師摩訶止觀の五に云く・其の癡鈍なる者は毒氣深く入つ
て本心を失う故に既に其れ信ぜざれば則ち手に入らず、乃至・大罪聚
の人なり、乃至・設い世を厭う者も下劣の乘を翫び・枝葉に攀付し・狗・
作務に狎れ・☆猴を敬うて帝釈と爲し・瓦礫を崇んで是れ明珠なりとす
此黒闇の人豈道を論ず可けんや」已上、源空並に所化の衆深く三毒の酒
に酔うて大通結縁の本心を失う法華・涅槃に於て不信の思を作し
一闡提と作り觀經等の下劣の乘に依て方便・称名の瓦礫を翫び
法然房の☆猴を敬うて智慧第一の帝釈と思ひ法華・涅槃の如意珠を捨
てて如来の聖教を偏するは權實二教を弁えざるが故なり。

故に弘決の第一に云く此の円頓を聞いて崇重せざる者は良に近代
大乘を習う者の雜濫に由るが故なり」大乘に於て權實二經を弁えざる
を雜濫と云うなり、故に末代に於て法華經を信ずる者は爪上の土の
如く法華經を信ぜずして權教に墮落する者は十方の微塵の如し、
故に妙樂歎いて云く像末は情澆く信心寡薄にして円頓の教・法藏に
溢れ函に滿れども暫くも思惟せず便ち瞋目に至る徒に生じ徒に死す
一に何ぞ痛しきや」已上此の釈は偏に妙樂大師・權者たるの間・遠く
日本國の当代を鑒みて記し置く所の未來記なり。

問うて云く法然上人の門弟の内にも一切經藏を安置し法華經を行
ずる者有り何ぞ皆謗法の者と称せんや、答えて云く一切經を開き見て
法華經を読み難行道の由を称し選択集の惡義を扶けんが為なり
經論を開くに付て弥謗法を増すこと例せば善星の十二部經・

提婆達多^{だいばだつた}が六万歳^{ろくまんざい}の如^{ごと}し智者^{ちしや}の由^{よし}を称^{しょう}するは自身^{じしん}を重^{しげ}くし惡法^{あくぼう}を扶^{たす}け
んが為なり。

第二に受け難き人身を受け値い難き仏法に値うと雖も悪知識に
値うが故に三惡道に墮することを明さば仏藏經に云く 天莊嚴仏の
滅後に五比丘あり一人は正道を知つて多億の人を度し四人は邪見に住
す此四人 命終の後阿鼻地獄に墮つ仰ぎ伏し伏に臥し左脇に臥し右脇
に臥すこと各九百万億歳なり、乃至若し在家出家の此の人に親近せ
しもの並に諸の檀越凡そ六百四万億の人あり此の四師と俱に生じ俱に
死して大地獄に在つて諸の燒煮を受く大劫
若し尽くれば是の四惡人及び六百四万億の人此の阿鼻地獄より他方
の大地獄の中に転生す」已上涅槃經三十三に云く 爾時に城中に一の
尼乾有り名を苦得と曰う、乃至善星・善星・苦得に問う答えて曰く我
食吐鬼の身を得・善星諦に聴け、乃至爾の時に善星即ち我所に還つ
て是の如き言を作す世尊・苦得尼乾は命終の後に三十三天に生ぜん

と、乃至ないし・爾時そのときに如来即にやらいすなわち迦葉かしようと善星ぜんしやうの所に往ゆき給たまう善星比丘ぜんしやうびく遙はるかに
我來われるを見・見已みおつて即すなわち惡邪あくじやの心を生おく惡心あくしんを以もつての故ゆゑに生身しやうしんに陷
ち入あつて阿鼻地獄あびじごくに墮だす」已上ぜんしやう善星比丘ぜんしやうびくは仏の菩薩ぼさつたりし時の子なり
仏に隨したがい奉たてまつり出家しゅつげして十二部經じふにぶきやうを受け欲界よつかいの煩惱ぼんのうを壞やぶり四禪定ぜんじやうを
獲得かくとくせり然しかりと雖いえども惡知識あくちしきたる苦得外道くどくげどうに値あひ佛法ぶつぽうの正義せいぎを信せいぜざる
に依よつて出家しゅつげの受戒じゆかい・十二部經じふにぶきやうの功德くどくを失うしなひ生身しやうしんに阿鼻地獄あびじごくに墮だす
苦岸等くがんの四比丘しびくに親近しんこんせし六百四萬億りくしやうの人は四師ししと俱ともに十方じゆっぽうの大
阿鼻地獄あびじごくを経へるなり、今の世の道俗どうぞくは選採集せんちやくしゆうを貴とうとぶが故ゆゑに源空げんくうの
影像えいざうを拜はいして一切經難行いっさいきやうなんぎやうの邪義じやぎを讀よむ例れいせば尼乾にけんの所化しよけの弟子でしが
尼乾にけんの遺骨いこつを礼らいして三惡道さんあくどうに墮だせしが如ごとく願ねがわくば今の世の道俗どうぞく
選採集せんちやくしゆうの邪正じやせいを知しつて後に供養恭敬くようきやうけいを致しせ爾しからずんば定さだめて後悔こうかい有
らん。

故に涅槃經に云く 菩薩摩訶薩惡象等に於て心に怖畏すること無く
惡知識に於ては怖畏の心を生ぜよ何を以ての故に是の惡象等は唯能く
身を壞りて心を壞る能わず惡知識は二俱に壞る故に、是の惡象等は唯
一身を壞り惡知識は無量の善身無量の善心を壞る是の惡象等は唯
能く不淨の臭き身を破壞す惡知識は能く淨身及び淨心を壞る是の
惡象等は能く肉身を壞り惡知識は法身を壞る惡象の為に殺されては
三趣に至らず惡友の為に殺されては必ず

三趣に至る是の惡象等は但身の怨と爲り惡知識は善法の怨と爲らん
是の故に菩薩常に當に諸の惡知識を遠離すべし」已上。

請い願わくば今の世の道俗設い此の書を邪義と思うと雖も且らく此
の念を抛つて十住毘婆沙論を開き其の難行の内に法華經の入不入を
☆がえ選択集の準之思之の四字を案じて後に是非を致せ謬つて
惡知識を信じ邪法を習い此の生を空うすること莫れ。

第三に正しく末代の凡夫の爲の善知識を明さば、問うて云く善財
童子は五十余の善知識に値いき其の中に普賢・文殊・觀音・弥勒等有り
常啼・班足・妙莊嚴・阿闍世等は曇無竭・普明・耆婆・二子夫人に値い
奉りて生死を離れたり此等は皆大聖なり仏・世を去つて後是の如きの
師を得ること難しとなす滅後に於て亦竜樹・天親も去りぬ南岳・天台
にも値わず如何が生死を離る可きや、答えて云く末代に於て眞實の

善知識有り所謂法華・涅槃是なり、問うて云く人を以て善知識と為すは常の習いなり法を以て知識と為すに証有りや、答えて云く人を以て知識と為すは常の習いなり然りと雖も末代に於て眞の知識無ければ法を以て知識と為すに多くの証有り、摩訶止観に云く「或は知識に従い・或は經卷に従い上に説く所の一実の菩提を聞く」已上此の文の意は經卷を以て善知識と為す、法華經に云く「若し法華經を聞浮提に行じ受持すること有らん者は此の念を作すべし皆是れ普賢威神の力なり」已上此の文の意は末代の凡夫法華經を信ずるは普賢の善知識の力なり、又云く「若し是の法華經を受持し誦誦し正憶念し修習し書写すること有らん者は当に知るべし是の人は即ち釈迦牟尼仏を見るなり仏、口より此の經典を聞くが如し当に知るべし是の人は釈迦牟尼仏を供養するなり」已上此の文を見るに法華經は即ち釈迦牟尼仏なり法華經を

信ぜざる人の前には釈迦牟尼仏入滅を取り此の經を信ずる者の前には滅後為りと雖も仏の在世なり。

又云く 若し我成仏して滅度の後十方の国土に於て法華經を説く處有らば我が塔廟是の經を聴かんが為の故に其の前に涌現し為に証明を為さん」已上此の文の意は我等・法華の名号を唱えて多宝如来本願の故に必ず来りたまう、又云く 諸仏の十方世界に在つて法を説くを尽く還し一処に集めたまう」已上釈迦・多宝・十方の諸仏・普賢菩薩等是我等が善知識なり若し此の義に依らば我等は亦宿善・善財・常啼・班足等にも勝れたり彼は權經の知識に値い我等は實經の知識に値えばなり彼は權經の菩薩に値い我等は實經の仏・菩薩に値い奉ればなり。

涅槃經に云く 法に依つて人に依らざれ智に依つて識に依らざれ」已

上えほう依法と云うは法華・涅槃の常住じやうじゆうの法なり不依人とは法華・涅槃に
依よらざる人なり設たといい仏・菩薩ぼさつ為りと雖も法華・涅槃に依よらざる仏・菩薩
は善知識ぜんちしきに非ず況いわんやや法華・涅槃に依よらざる論師・訳者・人師に於てを
や、依智えちとは仏に依よる不依識ふえしきとは等覺とうかく已下なり、今の世の世間の道俗・
源空げんくうの謗法ぼうぼうの失とがを隠さんが為に徳を天下に挙げて権化なりと称しょうす依用
すべからず、外道げどうは五通を得て能く山を傾け海を竭つくすとも神通無き
阿含經あこんきやうの凡夫ぼんぷに及およばず羅漢らかんを得・六通を現げんずる二乗にじやうは華嚴・方等・
般若はんにかの凡夫ぼんぷに及およばず華嚴・方等・般若の等覺とうかくの菩薩ぼさつも法華經の名字・
觀行かんぎやうの凡夫ぼんぷに及およばず設たといい神通智慧ちえ有りと雖も權教の善知識ぜんちしきをば用う
べからず、我等常没われらじようぼつの一闍提いつせんたいの凡夫法華經を信ぜんと欲ほするは仏性を
顯あらわさんが為の先表せんびやうなり。

故ゆえに妙樂大師みやうらくだいしの云く 丙薰ないくんに非あらざるよりは何ぞ能く悟さとを生なぜん故ゆえに

知んぬ悟さとを生ずる力は真如しんにょに在り故に冥薰みやうくんを以て外護ぐわいごと為すなり」已
上法華經ほけきょうより外の四十余年よんじゅうよねんの諸經しよきやうには十界互具じゅうかいこく無し十界互具じゅうかいこくを説か
ざれば内心ないしんの仏界ぶつがいを知らず内心ないしんの仏界ぶつがいを知らざれば外の諸仏しよぶつも顕あらわれ
ず故に四十余年よんじゅうよねんの權行ごんぎやうの者は仏を見ず設いたとい仏を見ると雖も他仏たふつを見
るなり、二乗にじやうは自仏じぶつを見ざるが故に成仏じやうぶつ無し爾前にぜんの菩薩ぼさつも亦自身またじしんの
十界互具じゅうかいこくを見ざれば二乗界にじやうの成仏じやうぶつを見ず故に衆生無辺誓願度しゆじやうむへんせいがんどの願も
満足まんぞくせず故に菩薩ぼさつも仏を見ず凡夫ぼんぷも亦十界互具またじゅうかいこくを知らざるが故に
自身じしんの仏界ぶつがいも顕あらわれず、故に阿彌陀如来あみだにょらいの來迎らいいうも無く諸仏如来しよぶつにょらいの加護かご
も無し譬たとえば盲人めしいの自身じしんの影を見ざるが如ごとし。

今法華經ほけきやうに至いたつて九界ぶつがいの仏界ぶつがいを開くが故に四十余年よんじゅうよねんの菩薩ぼさつ・二乗にじやう・
六凡りくぱん始めて自身じしんの仏界ぶつがいを見る此の時・此の人の前に始めて仏・菩薩ぼさつ・
二乗にじやう立ち給たまう此の時に二乗にじやう・菩薩ぼさつ始めて成仏じやうぶつし凡夫ぼんぷも始めて往生おうじやうす、

此の故に在世滅後の一切衆生の誠の善知識は法華經是なり、常途の天台宗の学者は爾前に於て当分の得道を許せども自義に於ては猶当分の得道を許さず然りと雖も此の書に於ては其の義を尽くさず略して之を記すれば追つて之を記すべし。

大文の第六に法華・涅槃に依る行者の用心を明さば、一代教門の勝劣・浅深・難易等に於ては先の段に既に之を出す、此の一段に於ては一向に後世を念う末代常没の五逆謗法一闡提等の愚人の爲に之を注す、略して三有り、一には在家の諸人正法を護持するを以て生死を離れ惡法を持つに依つて三惡道に墮す可きことを明し、二には但法華經の名字計りを唱えて三惡道を離る可きことを明し、三には涅槃經は法華經の爲の流通と成ることを明す。

第一に在家の諸人正法を護持するを以て生死を離れ惡法を持つに

依よつて三さん惡あく道どうに墮だす可べきことを明あかさば、涅槃ねはんぎよう經ぎやう第三だいさんに云いく、仏ぶつ迦か葉えつに
告つげたままよよく正しょう法ほうを護ご持じするの因いん縁ねんを以もつての故ゆえに是この金こん剛ごう身しんを成じやう就じゆす
ることを得またたり」と亦また云いく、時ときに國王こくおう有うり名なを有う徳とくと曰いう、乃至ないし・法はふを
護まもらんが為もつての故ゆえに、乃至ないし・是この破は戒かいの諸もろの惡あく比ひ丘きうと極きわめて共きに戰せん闘とうす、
乃至ないし・主こ是この時ときに於おいて法はふを聞きこふことを得え已おつて心こころ大おほに歡かん喜きし尋つひで即すなち
命めい終しゆうして阿あ・☆・仏ぶつの國こくに生なまず」已こ上じやう此この文ぶんの如ごとくならば在ざ家いけの諸しよ人にん別べつの
智ち行ぎやう無むしと雖いえども謗ぼう法はふの者ものを對たい治じする功く徳とくに依よつて生しやう死じを離はなる可べきな
り。

問もんうて云いく在ざ家いけの諸しよ人にん、仏ぶつ法はふを護ご持じす可べき様やう如い何かん、答こたえて云いく
涅槃ねはんぎよう經ぎやうに云いく、君きみし衆しゆ生じやう有うつて財ざい物ぶつに貪とん著じやくせば我ま當まさに財さいを施ほし然しかして
後ごに是この大だい涅槃ねはんぎよう經ぎやうを以もつて之これを勸すすめ読よましむべし、乃至ないし・先まづに愛あい語ごを以もつて
其その意いに隨したがい然しかる後ごに漸しやうく當まさに是この大だい乘じやう大だい涅槃ねはんぎよう經ぎやうを以もつて之これを勸すすめて

読ましむべし若し凡^{ぼんしやう}庶^{しよ}の者には当^{まさ}に威^い勢^{せい}を以^もて之^{これ}に逼^{せま}りて読ましむべし
若し慢^{まん}の者には我^{まさ}当^そに其^それが為^{ため}に僕^{ぼく}使^しと作^そり其^その意^いに随^{ずい}順^{じゆん}し其^それを
して歡^{かん}喜^きせしめ然^{しか}して後^{あと}に復^{また}当^{まさ}に大^{だい}涅^{じやう}槃^{きやう}を以^もて之^{これ}を教^{きやう}導^{どう}すべし、若し
大^{だい}乘^{じやう}經^{きやう}を誹^ひ謗^{ぼう}する者有^あらば当^{まさ}に勢^{せい}力^{りき}を以^もて之^{これ}を摧^{くじ}きて伏^ふせしめ既^{すで}に
摧^{さい}伏^{ふく}し已^おつて然^{しか}して後^{あと}に勸^{すす}めて大^{だい}涅^{じやう}槃^{きやう}を讀^よましむべし、若し大^{だい}乘^{じやう}經^{きやう}を
愛^{あい}樂^{らく}する者有^あらば我^{われ}、躬^{みづか}ら当^{まさ}に往^ゆいて恭^{きやう}敬^{けい}し供^く養^{やう}し尊^{そん}重^{ちやう}

讃歎すべし」已上。

問うて云く今の世の道俗偏に選択集に執して法華・涅槃に於ては自身不相応の念を作すの間・護惜建立の心無く偶邪義の由を称する人有れば念仏誹謗の者と称して惡名を天下に雨らす斯れ等は如何、答えて云く自答を存す可きに非ず仏、自ら此の事を記して云く、仁王經に云く天王我が滅度の後・未來世の中の四部の弟子諸の小国の王・太子・王子乃ち是れ三宝を住持して護る者転更に三宝を滅破せんこと師子の身中の虫の自ら師子を食うが如くならん外道には非ざるなり多く我仏法を壞り大罪過を得ん正法衰薄し民に正行無く漸く惡を為すを以て其の寿日に減じて百歲に至らん人、仏法を壞りて復孝子無く六親不和にして天神も祐けず疾疫惡鬼日に來りて侵害し災怪首尾し連禍縦横して地獄・餓鬼・畜生に入らん」亦次下に云く

天王未來世の中の諸の小国の王四部の弟子自ら此の罪を作らん破国の因縁、乃至諸の惡比丘多く名利を求め国王・太子・王子の前に於て自ら破仏法の因縁・破国の因縁を説かん其の王別えずして此の語を信聴し、乃至其の時に當つて正法將に滅せんこと久しからず」已上。

余 選択集を見るに敢て此の文の未來記に違わず、選択集は法華・真言等の正法を定めて雜行・難行と云い末代の我等に於ては時機相應せず之を行ずる者は千が中に一も無く仏、還つて法華等を説くと雖も法華・真言の諸行の門を閉じて念仏の一門を開く末代に於て之を行ずる者を群賊等と定め当世の一切の道俗に此の書を信ぜしめ此の義を以て如来の金言と思えり、此の故に世間の道俗に仏法建立の意無く法華・真言の正法の法水忽ちに竭き天人減少して三惡日に増長するひとえ せんちやくしゅうの惡法に催されて起る所の邪見なり、此の經文を仏記し偏に選択集

て我滅度後めつどと云えるは正法しょうぼうの末八十年像法ざうぼうの末八百年末法まつぼうの末八
千年なり選択集せんちやくしゅうの出る時は像法ざうぼうの末末法まつぼうの始なれば八百年の内なり
仁王經にんのうきょうの記する所の時節じせつに当れり、諸もろもろの小国王こくおうの王とは日本国にほんこくの王な
り中下品ちゅうげほんの善ぜんは粟散王ぞくさん是これなり如師し子身中虫ししんちゅうちゅうとは仏弟子ぶつでしの源空げんくう是これな
り諸惡比丘しよあくびくとは所化しよけの衆しゆ是これなり説破はふつ仏法ぶつぽう因縁いんねん・破国はこく因縁いんねんとは上に
挙あぐる所の選択集せんちやくしゅうの

語ことば是これなり 冥王しんちやう不別信ふべつしん聽此語このことばとは今の世の道俗どうぞく邪義じやぎを弁わえずして
猥みだりりに之これを信しんずるなり。

請こい願がんわくば道俗どうぞく法の邪正じやせいを分別ぶんべつして其その後ご正法しょうほうに就おいて後生ごしやうを願がんえ
今度このたび人身じんしんを失うしない三惡道さんあくどうに墮だして後ごう悔かいすとも何なんぞ及およばん。

第二だいに但法華經ほけきやうの題目だいもく計ばかりを唱となえて三惡道さんあくどうを離はなる可べきことを明あかさ

ば、法華經ほけきやうの第五ごに云いく 文殊師利もんじゆしり是この法華經ほけきやうは無量むりやうの國中くにじゆうに於おいて

乃至ないし名字みょうじをも聞きくことを得うべからず」第八はちに云いく 汝等なんぢら但能よく法華名ほつげ

を受持じゆじする者を擁護おうごする福量はかる可べからず」提婆品だいばに云いく「妙法華經みやうほけきやうの

提婆品だいばを聞きいて淨心じやうしんに信敬しんけいして疑惑ぎわくを生なぜざらん者は地獄じごく・餓鬼がき・

畜生ちくしやうに墮おちず」大般涅槃經だいぱんねはんきやう名字功德品みょうじくどくに云いく 若もし善男子ぜんなんし・善女人ぜんにょにん有

つて是この經の名を聞きいて惡趣あくしゆに生なずと云いわば是この 処こゝ有あること無なけん」

涅槃經ねはんきやうは法華經ほけきやうの流通りつうたるが故ゆゑに引ひけるなり。

問うて云く但法華の題目を聞くと雖も解心無くば如何にして三
惡趣を脱れんや、答えて云く法華經流布の国に生れて此の經の題名を
聞き信を生ずるは宿善の深厚なるに依れり設い今生は惡人無智なり
と雖も必ず過去の宿善有るが故に此の經の名を聞いて信を致す者なる
が故に惡道に墮せず。

問うて云く過去の宿善とは如何、答えて云く法華經の第二に云く
若し此の經法を信受すること有らん者は是の人は已に曾て過去の仏
を見たてまつり恭敬し供養し亦此の法を聞けるなり」法師品に云く又
如来滅度の後若し人有つて妙法華經の乃至一偈・二句を聞いて一念も
隨喜せん者は、乃至・当に知るべし是の諸人等已に曾て十萬億の仏を
供養せしなり」流通たる涅槃經に云く若し衆生有つて毘連河沙等の
諸仏に於て菩提心を発し乃ち能く是の惡世に於て是の如き經典を

受持じゆじして誹謗ひぼうを生ぜず善男子ぜんなんし若もし能よく一恒沙等ごうしやの諸仏しよぶつ・世尊せそんに於おいて
菩提心ぼだいを發おこすこと有あつて然しかる後に乃すなわち能よく惡世あくせの中に於おいて是この法を謗
せず是この典を愛敬あいぎやうせん」經文じやうぶん。

此等これらの文ぶんの如ごとくんば設たとい先いに解心げしん無なくくとも此この法華經ほけきやうを聞きいて謗ぼうぜ
ざるは大善だいぜんの所生しよしやうなり、夫それ三惡さんあくの生なを

受くること大地微塵より多く人間の生を受くるは爪上の土より少し、
乃至四十余年の諸経に値うことは大地微塵よりも多く法華・涅槃に
値うことは爪上の土より少し上に挙ぐる所の涅槃經の三十三の文を見
るに設い一字・一句なりと雖も此の經を信ずる者は宿縁多幸なり。
問うて云く設い法華經を信ずと雖も惡縁に随わば何ぞ三惡道に
墮せざらんや、答えて云く解心無き者權教の惡知識に遇うて實教を
退せば惡師を信ずる失に依つて必ず三惡道に墮す可きなり、彼の不輕
・輕毀の衆は權人なり大通結縁の者の三千塵点を經しは法華經を退し
て權教に遷りしが故なり、法華經を信ずる輩は法華經の信を捨てて
權人に随わんより外は世間の惡業に於ては法華の功德に及ばざる故に
三惡道に墮つ可からざるなり。

問うて云く日本國は法華・涅槃有縁の地なりや否や、答えて云く

法華經第八に云く 如来の滅後に於て閻浮提の内に広く流布せしめ
断絶せざらしむ」七の卷に云く 広宣流布して閻浮提に於て断絶せしむ
ること無けん」涅槃經第九に云く 此の大乗經典大涅槃經も亦復是の
如し南方の諸の菩薩の爲の故に當に広く流布すべし」經文三千世界広し
と雖も仏、自ら法華・涅槃を以て南方流布の処と定む、南方の諸国
の中に於ては日本国は殊に法華經の流布す可き処なり。

問うて云く其の証如何、答えて云く肇公の法華翻經の後記に云く
羅什三藏・須利耶蘇摩三藏に値い奉りて法華經を授かる時の語に云く
「仏日西山に隠れ遺耀東北を照す茲の典東北の諸国に有縁なり汝
慎んで伝弘せよ」上東北とは日本なり西南の天竺より東北の日本を指
すなり、故に慧心の一乗要決に云く 日本一州円機純一なり朝野遠近
同じく一乘に歸し緇素貴賤悉く成仏を期す」已上願わくば日本国の

どうぞくせんちやくしゅう
道俗選択集の久習くしゅうを捨てて法華ほっけ・涅槃ねはんの現文げんぶんに依り肇公慧心じようこうえしんの
日本記にほんきを待たのみて法華修行ほっけしゆぎようの安心あんしんを企くわだてよ。

問うて云く法華經修行ほっけきようしゆぎようの者何いすれの淨土じようどを期ごすす可べきや、答えて云く

法華經二十八品の肝心かんじんたる寿量品じゆりやうほんに云く我常いわに此の娑婆世界しやばせかいに在

り亦云く我常またいわに此處ここに住し亦云く我が此土しどは安穩あんのん文此の文の

如くんば本地久成ほんちくじようの円仏えんぶつは此の世界せかいに在り此の土を捨てて何の土を願いすれ

う可べきや、故に法華經修行ほっけきようしゆぎようの者の所住しよじゅうの處を淨土じようどと思おもう可べし何ぞ

煩わづらいしく他處たしよを求めんや、故に神力品しんりきほんに云く君は經卷所住きようかんしよじゅうの處

若もしは園中おひに於ても若もしは林中おひに於ても若もしは樹下じゆげに於ても若もしは僧坊そうぼうに於て

も若もしは白衣舍びやくえにても若もしは殿堂でんどうに在つても若もしは山谷曠野せんごくこうやにても、乃至ないし

当まさに知るべし是の處ところは即すなわち是道場どうじようなり涅槃經ねはんぎように云く善男子是の大

涅槃微妙ねはんみみょうの經典きようてん流布きふせらるる處ところは當まさに知るべし其の地そは即すなわち是れ

金剛なり此の中の諸人も亦金剛の如し」已上法華・涅槃を信ずる行者は余処に求む可きに非ず此の經を信ずる人の所在の処は即ち淨土なり。

問うて云く華嚴・方等・般若・阿含・觀經等の諸經を見るに兜率・西方・十方の淨土を勸む其の上・法華經の文を見るに亦兜率・西方・十方の淨土を勸む何ぞ此等の文に違して但此の瓦礫荊棘の穢土を勸むるや、答えて云く爾前の淨土は久遠実成の釈迦如来の所現の淨土にして実には皆穢土なり、法華經は亦方便壽量の二品なり壽量品に至つて実の淨土を定むる時・此の土は即ち淨土と定め了んぬ、但し兜率・安養・十方の難に至つては爾前の名目を改めずして此の土に於て兜率安養等の名を付く、例せば此の經に三乗の名有りと雖も三乗有らざるが如し「不須更指觀經等也」の釈の意是なり、法華經に結縁無

き衆生しゅじやうの当世とうせい西方浄土じやうどを願うは瓦礫がりがくの土を樂ねがう者なり、法華經ほけきやうを信ぜ

ざる衆生しゅじやうは誠に分添ぶんぞんの浄土じやうど無き者なり。

第三だいさんに涅槃經ねはんきやうは法華經ほけきやう流通りゆうつうの爲ために之これを説とき給たまうことを明あかさば、問うて云いわく光宅こうたくの法雲法師ほううんほふし並ならに道場どうじやうの慧觀えいかん等の碩德せきとくは法華經ほけきやうを以もつて第四だいよ時の經きやうと定め無常むじやうの熟蘇味じゆくそみと立つ、天台智者大師てんだいちしやだいしは法華ほつげ・涅槃ねはん同味どうみと立つと雖いえども亦また・拾しやくの義ぎを存ぞんす二師にし共に權化ごんげなり互たがいに德行とくぎやうを具そせり何を正ただとして我等われらの迷心まよひを晴はらす可べきや、答こたえて曰いわく設たとい論師ろんし訳者やくしや爲なりと雖いえども仏教ぶつぎやうに違たがひして權實ごんじつ二教にきやうを判はぜずんば且しばらく疑うたがひを加くう可べし何いかに況いわんや唐土やうどの人師にんしたる天台てんだい・南岳なんがく・光宅こうたく

・慧観・智儼・嘉祥・善導等の釈に於てをや、設い末代の学者為りと雖も
依法不依人の義を存し本經・本論に違わずんば信用を加う可し。

問うて云く涅槃經の第十四卷を開きたるに五十年の諸大乘經を
挙て前四味に譬え涅槃經を以て醍醐味に譬う諸大乘經は涅槃經より
劣ること百千万倍なりと定め了んぬ、其の上迦葉童子の領解に云く我
今日より始て正見を得たり此よりの前は我等悉く邪見の人と名く」と
此の文の意は涅槃經已前の法華等の一切の衆典を皆邪見と云うなり、
当に知るべし法華經は邪見の經にして未だ正見の仏性を明らめず、
故に天親菩薩の涅槃論に諸經と涅槃と勝劣を定むる時・法華經を
以て般若經に同じて同じく第四時に摂したり豈正見の涅槃經を以て
邪見の法華經の流通と為んや如何、答て云く法華經の現文を見るに仏
の本懷残すこと無し、方便品に云く「今正しく是れ其時なり」寿量品

に云く毎に自ら是の念を作す何を以てか衆生をして無上道に入るこ
とを得速かに仏身を成就することを得せしめん」と神力品に云く要
を以て之を言えば如来の一切の所有の法、乃至皆此の經に於て宣示
顯説す「已上此等の現文は釈迦如来の内証は皆此の經に尽くし給う
其の上多宝並に十方の諸仏來集の庭に於て釈迦如来の已今當の語
を証し法華經に如く經無しと定め了んぬ、而るに多宝諸仏・本土に
還るの後に但釈迦一仏のみ異變を存じて還つて涅槃經を説いて法華經
を卑まば誰人か之を信ぜん、深く此の義を存ぜよ、随つて涅槃經の第
九を見るに法華經を流通して説いて云く是の經・世に出ること彼の
菓實の一切を利益し安樂する所多きが如く能く衆生をして仏性を見
わさしむ法華の中の八千の聲聞の記☆を授かるを得て大果實を成ずる
が如く秋收冬藏して更に所作無きが如し」と。

此の文の如くごとんば法華經ほけきよう邪見じゃけんならば涅槃經ねはんぎようも豈あにに邪見じゃけんに非あらずや、
法華經ほけきようは大だい呪しゆ・涅槃經ねはんぎようは☆拾くんじゆなりと見え了おんぬ、涅槃經ねはんぎようは自みずから法華經ほけきよう
より劣よじるの由しゆうを称しょうす法華經ほけきようの当説とうせつの文敢あえてて相違そうい無し、但ただし迦葉かしようの領解りようげ
並に第十四の文は

法華經を下す文に非ず迦葉の自身並に所化の衆・今始めて法華經の
所説の常住・久遠・實成を覺る故に我が身を指して此より已前は
邪見なりと云う、法華經已前の無量義經に嫌わるる諸經を涅槃經に
重ねて之を挙げて嫌うなり法華經を嫌うには非ざるなり、亦涅槃論に
至つては此等の論は書付くるが如く天親菩薩の造・菩提流支の訳なり
經文に違すること之多し涅槃論も亦本經に違す当に知るべし訳者の
誤りなり信用に及ばず。

問うて云く先の教に漏れたる者を後の教に之を承け取つて得道せし
むるを流通と称せば阿含經は華嚴經の流通と成る可きや、乃至法華經
は前四味の流通と成る可きや如何、答えて曰く前四味の諸經は菩薩・
人天等の得道を許すと雖も決定性の二乗・無性闡提の成仏を許さず、
其の上仏意を探りて実を以て之を☆うるに亦菩薩・人天等の得道も無

し十界互具を説かざるが故に久遠実成無きが故に、問うて云く証文
如何、答えて云く法華經方便品に云く若し小乗を以て化すること
乃至一人に於てせば我則ち慳貪に墮せん此の事は為て不可なり」已上此
の文の意は今選択集の邪義を破せんが為に余事を以て詮と為す故に
爾前得道の有無の実義は之を出さず追つて之を☆うべし、但し
四十余年の諸經は実に凡夫の得道無きが故に法華經は爾前の流通と
為らず法華經に於て十界互具・久遠実成を顯わし了んぬ故に涅槃經は
法華經の為に流通と成るなり。

大文の第七に問に随つて答うとは、若し末代の愚人上の六門に依つて
万が一も法華經を信ぜば權宗の諸人・或は自惑に依り・或は偏執に
依つて法華經の行者を破せんが為に多く四十余年並に涅槃等の諸經
を引いて之を難ぜん、而るに權教を信ずる人は之多く・或は威勢に

依り・或は世間の資縁に依り人の意に随つて世路を亘らんが為に・或は
權教には學者多く実教には智者少し是非に就て万が一も実教を信ず
る者有るべからず、是の故に此の一段を撰んで權人の邪難を防がん。

問うて云く諸宗の學者難じて云く・華嚴經は報身如來の所説・七処・
八会・皆、頓極頓証の法門なり、法華經は応身如來の所説・教主既に
優劣有り、所説の法門に於て何ぞ淺深無からん随つて対告衆も法慧・
功德林・金剛幢等なり永く二乗を雜えず、法華經は舍利弗等を以て
対告衆と為す」宗難、法相宗の如きは解深密經を以て依憑と為し難を
加えて云く・解深密經は文殊・觀音等を以て対告衆と為す勝義生菩薩
の領解には一代を有・空・中と詮す其の中の中とは華嚴・法華・涅槃・
深密等なり法華經の信解品の五時の領解は四大声聞なり菩薩と声聞
と勝劣天地なり」淨土宗の如きは道理を立てて云く・我等は法華等の

諸經を誹謗するに非ず彼等の諸經は正には大人の爲傍には凡夫の
爲にす斷惑証理・理深の教にして末代の我等之を行ずるに千人の中に
一人も彼の機に当らず在家の諸人多分は文字を見ず亦華嚴・法相等の
名を聞かず況や其の義を知らんや、淨土宗の意は我等凡夫は但口に
任せて六字の名号を称すれば現在に阿彌陀如来二十五の菩薩等を
遣わし身に影の随う如く百重千重に行者を圍繞して之を守り給う、
故に現世には七難即滅・七福即生し乃至臨終の時は必ず來迎有つて
觀音の蓮台に乘じ須臾の間に淨土に至り業に随つて蓮華開け法華經を
聞いて実相を覺る何ぞ煩しく穢土に於て余行を行じて何の詮か有る
但万事を抛つて一向に名号を称せよ」と云云、禪宗等の云く二代
聖教は月を指す指・天地日月等も汝等が妄心より出でたり十方の
淨土も執心の影像なり釈迦十方の仏陀は汝が覺心の所變・文字に

執する者は株くゐぜを守る愚人ぐにんなり我が達磨大師は文字もんじを立てず方便ほうべんを仮からず一代いちだい聖教しやうきやうの外に仏迦葉かしやうに印して此の法を伝つたう法華經ほけきやう等は未だいま眞実しんじつを宣のべふず」已上。

此等の諸宗しよしゆうの難一なんに非ず如何なんぞ法華經ほけきやうの信心しんじんを壞やぶらざる可べしや、答こたへて云いく法華經ほけきやうの行者ぎやうじやは心中しんちゆうに四十余年よんじゆうよねん已今いこんとう當皆是眞実かいぜしんじつ・依法えほう不依ふえ人ひと」等の文を存しし而も外に語ことばに之これを出いさず難なんに隨したがて之を問たずうべし抑そもそも所立しよりゅうの宗義しゆうぎは何いすれの經に依よるや、彼、經を引かば引くに隨したがつて亦また之を尋たずねよ、一代いちだい五十年の間の説の中に法華經ほけきやうより先か後か同時どうじなるか亦また先後不定せんごふじようなるかと、若し先と答こたへば未顯眞実みけんしんじつの文を以もつて之を責せめよ敢あえて彼の經の説相せつそうを尋たずぬること勿なかれ、後と答こたへば當説とうせつの文を以もつて之を責せめよ、同時どうじと答こたへば今説こんせつの文を以もつて之を責せめよ、不定ふじようと答こたへば不定ふじようの經は大部たいぶの經に非あらず一時いちじ一会の説にして亦物またの數に非あらず其その

上、不定ふじようの教と雖いえども三説さんせつを出いでず、設たといい百千万よろずの義ぎを立つと雖いえども四十余年よんじゅうよねんの文ぶんを載のせて虚妄こもうと称よせざるより外ほかは用もちうべからず、仏ぶつの遺言ゆいごんに不依ふえ不了ふりよう義經ぎきやうと云いうが故ゆゑなり。

亦また智儼ちごん・嘉祥かじやう・慈恩じおん・善導ぜんどう等を引ひいて徳とくを立て難なんずと雖いえども法華ほつけ・涅槃ねはんに違いする人師にんしに於おいては用もちうべからず依法えほう不依ふえ人の金言きんげんを抑おさぐが故ゆゑなり。

亦また法華經ほつけきやうを信しんぜん愚者ぐしやの爲ために二種しんじんの信心しんじんを立つ、一には仏ぶつに就おて信しんを立て二には經きやうに就おて信しんを立つ、仏ぶつに就おて信しんを立つとは權宗ごんしゅうの學者がくしや来きり難なんじて云いわん善導ぜんどう和尙わじやうは三昧さんまい発得はつとくの人師にんし・本地ほんち弥陀みだの化身けしんなり慈恩じおん大師だいしは十一面觀音かんのんの化身けしん亦また筆端ひつたんより舍利しやりを雨ふらす此等これらの諸人しよにんは皆みなかれが彼かの經經ききやうに依よつて皆証みな有り何ぞ汝彼なんじの經きやうに依よらず亦また彼の師しの義ぎをもち用もちいざるや、答こたえて云いく汝聞なんじけ一切いっさいの權宗ごんしゅうの大師だいし先德せんとく並ならに舍利弗しやりほつ・

もくれん 目連・普賢・文殊・観音乃至阿弥陀・薬師・釈迦如来・我等並に十方の
しよにん 諸人の前に集まりて説いて法華経は汝等が機に叶わず念仏等の権経の
しゅう 行を修して往生を遂げ後に法華経を覺ると云わん是の如き説を聞く
いんど と雖も敢えて用う可からず、其の故は四十余年の諸の経には法華経の
みょうじ 名字を呼ばず何れの処にか機のかんふかんを論ぜん、法華経に於ては釈迦
たほう 多宝・十方諸仏一処に集りて撰定して云く法をして久住せしむ如来
めつこ の滅後に於て閻浮提の内に広く流布せしめ断絶せざらしむ、此の外に
しゆたい 今・仏出来して法華経を末代不相応と定めば既に法華経に違す知んぬ
ねはんぎよう 此の仏は涅槃經に出す所の滅後の魔・仏なり之を信用す可からず、
そい 其の已下の菩薩・声聞・比丘等は亦言論するに及ばず此等是不審無し
ねはんぎよう 涅槃經に記する所の滅後の魔の所変の菩薩等なり、其の故は法華経の
さんぜん 座は三千大千世界の外四百万億阿僧祇の世界なり其の中に充滿せる

菩薩・二乘・人天・八部等皆如來の告勅を蒙むり各各所在の国土に
法華經を弘む可きの由之を願いぬ、善導等若し權者ならば何ぞ竜樹・
天親等の如く權教を弘めて後に法華經を弘めざるや法華經の告勅の
數に入らざるや何ぞ仏の如く權教を弘めて後に法華經を弘めざるや、
若し此の義無くんば設い仏為りと雖も之を信ず可からず今は法華經の
中の仏を

信ず故に仏に就て信を立つと云うなり。

問うて云く釈迦如来の所説を他仏之を証するを実説と称せば何ぞ
阿弥陀經を信ぜざるや、答えて云く阿弥陀經に於ては法華經の如き
証明無きが故に之を信ぜず、問うて云く阿弥陀經を見るに釈迦如来
の所説の一日七日の念仏を六方の諸仏舌を出し三千を覆うて之を
証明せり何ぞ証明無しと云うや、答えて云く阿弥陀經に於ては全
く法華經の如き証明無く但釈迦一仏、舍利弗に向つて説いて言く我、
一人阿弥陀經を説くのみに非ず六方の諸仏舌を出し三千を覆うて
阿弥陀經を説くと云う此等は釈迦一仏の説なり敢えて諸仏来りたま
わず、此等の權文は四十余年の間は教主も權仏の始覺の仏なり、仏、
權なるが故に所説も亦權なり故に四十余年の權仏の説は之を信ず可
らず、今の法華・涅槃は久遠実成の円仏の実説なり十界互具の実言な

り亦多宝・十方の諸仏来りて之を証明し給う故に之を信ずべし
阿弥陀經の説は無量義經の未顕真実の語に壞れ了ぬ全く釈迦一仏の
語にして諸仏の証明には非ざるなり。

二に經に就て信を立つとは、無量義經に四十余年の諸經を挙げて
未顕真実と云う、涅槃經に云く如來は虚妄の言無しと雖も若し衆生
・虚妄の説に因つて法利を得と知れば宜しきに随つて方便して則ち為に
之を説き給う」又云く「了義經に依つて不了義經に依らざれ」已上是の
如きの文一に非ず皆四十余年の自説の諸經を虚妄・方便・不了義・
魔説と稱す是れ皆人をして其の經を捨てて法華・涅槃に入らしめんが
為なり、而るに何の恃み有つて妄語の經を留めて行儀を企て得道を
期するや、今權教の情執を捨て偏に実經を信ず故に經に就て信を立
つと云うなり。

問うて云く善導和尚も人に就て信を立て行に就て信を立つ何の差別
有らんや、答えて云く彼は阿弥陀經等の三部に依つて之を立て一代の
經に於て了義不了義經を分たずして之を立つ、故に法華・涅槃の義に
對して之を難ずる時は其の義壞れ了んぬ。
守護國家論

◆七

災難対治抄

正元二年 三十九歳御作

78P

国土に大地震・非時の大風・大飢饉・大疫病・大兵乱等の種種の災難の起る根源を知りて対治を加う可きの勘文。

金光明経に云く 君し人王有りて其の国土に於て此の経有りと雖も未だ嘗て流布せず捨離の心を生じて聴聞せんことを樂わず亦供養し尊重し讃歎せず四部の衆の持経の人を見て亦復尊重し乃至供養すること能わず遂に我等及び余の眷属無量の諸天をして此の甚深の妙法を聞くことを得ず甘露の味に背き正法の流を失い威光及び勢力有ること無らしむ惡趣を増長し人天を損滅し生死の河に墜ちて涅槃の路に背かん、世尊・我等四王並に諸の眷属及び藥叉等斯くの如き事を見て其の国土を捨てて擁護の心無けん但我等是の王を捨棄するのみに非ず

亦無量の国土を守護する諸天神有らんも皆悉く捨去せん既に捨離し已れば其の国に當に種種の災禍有つて国位を喪失すべし、一切の人衆皆善心無けん唯繫縛・殺害・瞋諍のみ有つて互に相讒諂し枉げて辜無きに及ばん、疫病流行し彗星數ば出で兩日並び現じ薄蝕恒無く黑白の二虹不祥の相を表わし星流れ地動き井の内に声を発し暴雨・惡風・時節に依らず常に飢饉に遭い苗実も成らず多く他方の怨賊有つて国内を侵掠し人民諸の苦惱を受け土地に所樂の処有ること無けん」と。

大集經に云く若し国王有つて我が法の滅せんを見て擁護せずんば無量世に於て施戒慧を修すとも悉く皆滅失して其の国の中に三種の不祥の事を出さん、乃至命終して大地獄に生ぜん」と。

仁王經に云く天王・国土乱れん時は先ず鬼神乱る鬼神乱るが

ゆえ 故に万民乱ると、亦云く大王・我今五眼をもつて明に三世を見るに
いっさい 一切の国王は皆過去世に五百の仏に侍うるに由つて帝王主と為ること
これ を得たり、是をもつて

一切の聖人羅漢而も為に彼の国土の中に來生して大利益を作さん
若し王の福尽きん時は一切の聖人皆捨て去ることを為さん若し一切の
聖人去らん時は七難必ず起る」と。

仁王經に云く天王吾今化する所の百億の須弥・百億の日月・二一の
須弥に四天下有り其の南閻浮提に十六の大国五百の中国十千の小国
有り其の国土の中に七つの畏る可き難有り一切の国王是の難の為の
故に、云何なるを難と為す日月度を失い時節返逆し或は赤日出で
黒日出で二三四五の日出づ或は日蝕して光無く或は日輪一重二三
四五重輪現ずるを一の難と為すなり、二十八宿度を失い金星・彗星・
輪星・鬼星・火星・水星・風星・☆星・南斗・北斗・五鎮の大星・一切の
国主星・三公星・百宦星・是くの如き諸星・各各・変現するを二の難と
為すなり、大火・国を焼き万姓焼尽し或は鬼火・竜火・天火・山神火

人火・樹木火・賊火・是くの如く変怪するを三の難と為すなり、大水・百姓を漂没

して時節返逆し冬・雨ふり夏・雪ふり冬・時に雷電霹靂し六月に冰霜雹を雨らし赤水・黒水・青水を雨らし土山・石山を雨らし沙礫石を雨らし江河逆まに流れ山を浮かべ石を流す是くの如く変ずる時を四の難と為すなり、大風・万姓を吹殺し国土の山河・樹木・一時に滅没して非時の大風・黒風・赤風・青風・天風・地風・火風・水風・是くの如く変ずる時を五の難と為すなり、天地・国土亢陽し炎火洞然として百草亢旱し五穀登らず土地赫然として万姓滅尽せん是くの如く変ずる時を六の難と為すなり、四方の賊来りて国を侵し内外の賊起り火賊・水賊・風賊・鬼賊あつて百姓荒乱し刀兵劫起せん是くの如く怪する時を七の難と為すなり」と。

法華經ほけきょうに云いく 百由旬ひやくゆじゆんの内うちをして諸もろの衰患すいげん無なからしめん」と。

涅槃經ねはんぎょうに云いく 是この大涅槃ねはん微妙みみょうの經典きょうてん・流布るふせらるる處ところは当まさに知る

べし其その地ちは即すなち是これ金剛こんごうなり是この中の諸人しよにん亦また金剛こんごうの如ごとし」と。

仁王經にんのうきょうに云いく 是この經きやうは常じやうに千ちの光明こうみやうを放はなちて千里せんりの内うちをして七難ひちなん

起おこらざらしむと、又また云いく諸もろの惡比丘あくびく多おほく

名利を求め國王・太子・主子の前に於て自ら破仏法の因縁・破国の因縁を説く其の王別えずして此の語を信聴し横に法制を作り仏戒に依らず是を破仏・破国の因縁と為す」と。

今之を勘うるに法華經に云く「百由旬の内諸衰患なからしむ」と仁王經に云く「千里の内に七難不起らしむ」と、涅槃經に云く「當に知るべし其の地は即ち是れ金剛、是の中の諸人亦金剛の如し」と文。

疑つて云く今此の国土に種種の災難起ることを見聞するに所謂

建長八年八月自り正元二年二月に至るまで大地震非時の大風・大飢饉・大疫病等種種の災難連連として今に絶えず大体国土の人数尽く可きに似たり、之に依つて種種の祈請を致す人之多しと雖も其の驗無きか、正直捨方便・多宝の証明・諸仏出舌の法華經の文の令百由旬内・雙林最後の遺言の涅槃經の其地金剛の文、仁王經の千里の

内に七難不起ひちなん おこらざらむの文皆虚妄に似たり如何。

答えて云く今愚案を以て之を勘うるに上に挙ぐる所の諸大乘經・

国土に在り而も祈請と成らずして災難起ることは少し其の故有るか、

所謂金光明經に云く其の国土に於て此の經有りと雖も未だ嘗つて

流布せず捨離の心を生じて聴聞せんことを樂わず我等四王皆悉く捨

て去り其の国当に種種の災禍有るべし、大集經に云く君し国王有つて

我が法の滅せんを見て捨てて擁護せざれば其の国内三種の不祥を出さ

ん」と、仁王經に云く仏戒に依らざる是を破仏・破国の因縁と為す

若し一切の聖人去る時は七難必ず起らん」已上、此等の文を以て之を

勘うるに法華經等の諸大乘經・國中に在りと雖も一切の四衆捨離の

心を生じて聴聞し供養するの志を起さざる故に國中の守護の善神

・一切の聖人・此の国を捨て去り守護の善神聖人等・無きが故に出来

する所の災難なり。

問うて曰く國中の諸人・諸大乘經に於て捨離の心を生じて供養する志を生ぜざる事は何の故より之起るや。

答えて曰く仁王經に曰く諸の惡比丘多く名利を求め國王・太子・王子の前に於て自ら破仏法の因縁・破国の因縁を説かん其の王別えずして此の語を信聴し横に法制を作りて仏戒に依らず」と、法華經に云く惡世の中の比丘は邪智にして心諂曲に未だ得ざるをこれ得たりと謂い我慢の心充滿せん是の人惡心を懷き國王・大臣・婆羅門・居士及び余の諸の比丘に向つて誹謗して我が惡を説いて是れ邪見の人・外道の論議を説くと謂わん惡鬼其の身に入る」等と云云。

此等の文を以て之を思うに諸の惡比丘國中に充滿して破國・破仏法の因縁を説く國王並に國中の四衆弁えずして信聴を加うるが

ゆえ 故に諸大乘經に於て捨離の心を生ずるなり。

問うて曰く諸の惡比丘等・國中に充滿して破國・破仏戒等の因縁を説くことは仏弟子の中に出来す可きか外道の中に出来す可きか。

答えて曰く仁王經に云く『三宝を護る者にして転た更に三宝を滅し

破らんこと師子の身中の虫の自ら師子を食うが如し外道には非ず』文。

此の文の如くんば仏弟子の中に於て破國・破仏法の者出来す可きか、

問うて曰く諸の惡比丘・正法を壞るに相似の法を以て之を破らんか

當に亦惡法を以て之を破るべしとせんか、答えて曰く小乗を以て

權大乘を破し權大乘を以て実大乘を破し師弟共に謗法破國の因縁を

知らざるが故に破仏戒・破國の因縁を成して三惡道に墮するなり。

問うて曰く其の証拠如何、答えて曰く法華經に云く仏の方便・隨宜

所説の法を知らずして惡口して聲聲し數數擯出せられんと。

涅槃經ねはんぎょうに云いく我涅槃ねはんの後あと当まさに百千無量むりようの衆生しゅじよう有あつて誹謗ひぼうして是この大
涅槃ねはんを信しんぜざるべし三乘さんじようの人ひとも亦復またまた是この如ごとく無上むじようの大涅槃經だいねはんぎょうを憎惡ぞうお
せん已上。

勝意比丘しょういびくの喜根菩薩きこんぼさつを謗ぼうじて三惡道さんあくどうに墮おちし尼思にし仏等ぶつの不輕菩薩ふぎようぼさつ
を打うつて阿鼻あびの炎えんを招まねくも皆大小みなだいしやう・權實ごんじつを弁わえ

ざるより之起れり十惡・五逆は愚者皆罪爲ることを知る故に輒く破国
はぶつぽう
・破仏法の因縁を成ぜず、故に仁王經に云く其の王別えずして此の
ことば しんちよう
語を信聴す」と、涅槃經に云く君し四重を犯し五逆罪を作り自ら定
めて是くの如き重事を犯すと知り而も心に初より怖畏・懺悔無くして
あえ はつろ
肯て発露せず」已上。

此くの如き等の文は謗法の者は自他共に子細を知らざる故に重罪
か こと
を成して国を破し仏法を破するなり。

問うて曰く若爾らば此の国土に於て權教を以て人の意を取り実教
うしな
を失う者之有るか如何、答えて曰く爾なり、問うて曰く其の証拠
いかん
如何、答えて曰く法然上人所造等の選択集是れなり今其の文を出し
かみ きようもん
て上の經文に合せ其の失を露顯せしめん若し対治を加えば国土を安穩
せんちやくしゅう
ならしむ可きか、選択集に云く遁綽禪師・聖道・淨土の二門を立て

聖道を捨てて正しく浄土に歸するの文初に聖道門とは之に就て二有り一には大乘二には小乗なり大乘の中に就いて顕密・権実等の不同有りと雖も今・此の集の意は唯顯大及び権大を存す故に歴劫迂回の行に当る之に準じて之を思うに密大及び実大を存すべし、然れば則ち今真言・仏心・天台・華嚴・三論・法相・地論・撰論此等の八家の意正しく此れに在るなり、曇鸞法師の往生論の注に云く「謹んで竜樹菩薩の十住毘婆沙を案ずるに云く菩薩・阿毘跋致を求むるに二種の道有り一には難行道二には易行道なり、此の中に難行道とは即ち是れ聖道門なり易行道とは即ち是れ浄土門なり、浄土宗の學者先ず須く此の旨を知るべし設い先ず聖道門を學する人と雖も若し浄土門に於て其の志有らん者は須く聖道を棄てて浄土に歸すべし」文、又云く「善導和尚正雜二行を立て雜行を捨てて正行に歸するの文、

第一に読誦雜行とは上の觀經等の往生淨土の經を除いて已外、大小乘・顯密の諸經に於て受持・讀・誦するを悉く讀誦雜行と名く、第三に礼拝雜行とは上の弥陀を礼拝するを除いて已外一切諸余の仏・菩薩等及び諸の世天等に於て礼拝恭敬するを悉く礼拝雜行と名く」
私に云く此の文を見るに須く雜を捨てて專を修すべし豈百即百生の專修正行を捨てて堅く千中無一の雜修雜行を執せんや行者能く之を思量せよと。

又云く貞元入藏錄の中・始め大般若經六百卷より法常住經に終るまで顯密の大乗經總じて六百三十七部二千八百八十三卷なり皆須く讀誦大乘の一句に摂すべし当に知るべし隨他の前には暫く定散の門を開くと雖も隨自の後には還つて定散の門を閉づ一たび開きて以後永く閉じざるは唯是れ念仏の一門なり文、又最後結句の文に云く

そ 天れ速に生死を離れんと欲せば二種の勝法の中に且く聖道門を闍て
選んで浄土門に入れ浄土門に入らんと欲せば正雜二行の中に且く
諸の雜行を抛て選んで正行に歸すべし、「已上 選択集 の文なり。

今之をるに日本国中の上下万人深く法然上人を信じて此の書を

☆ぶ故に無智の道俗此の書の中の捨閉闍抛等の字を見て浄土の三部經

・阿弥陀仏より外は諸經・諸仏・菩薩・諸天善神等に於て捨閉闍抛等の

思を作し彼の仏經等に於て供養受持等の志を起さず還つて捨離の心

を生ず故に古の諸大師等の建立せし所の鎮護国家の道場零落せしむ

と雖も護惜建立の心無し護惜建立の心無きが故に亦説誦供養の音絶

え守護の善神も法味を嘗めざるが故に國を捨てて去り四依の聖人も

来らざるなり、偏に金光明・仁王等の一切の聖人去る時は七難必ず

起らん我等四王皆悉く捨去せん既に捨離し已れば其の國當に種種の

さいかあ 災禍有るべしの文に当れり豈諸悪比丘多く名利を求め、悪世の中の
比丘は邪智にして心諂曲の人に非ずや。

うたがい 疑つて云く国土に於て選択集を流布せしむるに依つて災難起ると

云わば此の書無き已前は国中に於て災難無かりしか、答えて曰く彼の

時も亦災難有り云く五常を破り仏法を失いし者之有りしが故なり

所謂周の宇文・元嵩等是なり、難じて曰く今の世の災難五常を破りし

が故に之起ると云わば何ぞ必ずしも選択集流布の失に依らんや、答

えて曰く仁王経に云く天王・未来の世の中に諸の小国王・四部の弟子

諸の悪比丘横に法制を作りて仏戒に依らず亦復仏像の形・仏塔の形を

造作することを聴さず七難必ず起らん」と、金光明経に云く供養し

尊重し讃歎

せず其の国に當に種種の災禍有るべし」涅槃經に云く、無上の大涅槃經を憎惡す」等と云云、豈弥陀より外の諸仏・諸經等を供養し禮拜し讚歎するを悉く雜行と名くると云うに當らざらんや、難じて云く「佛法已前国に於て災難有るは何ぞ謗法の者の故ならんや、答えて云く「佛法已前に五常を以て国を治むるは遠く仏誓を以て国を治むるなり礼義を破るは仏の出したまえる五戒を破るなり、問うて云く其の証拠如何、答えて曰く金光明經に云く「一切世間の所有る善論は皆此の經に因る」と、法華經に云く「若し俗間の經書・治世の語言・資生の業等を説かんでも皆正法

に順ず」と普賢經に云く「正法をもつて国を治め人民を邪枉せず是れを第三懺悔を修すと名く」と、涅槃經に云く「一切世間の外道の經書は皆是れ仏説なり外道の説に非ず」と、止觀に云く「若し深く世法を

識れば即ち是れ仏法なり」と、弘決に云く、礼樂前に駭せて真道後に啓く」と、広釈に云く、仏三人を遣して且く震旦を化す五常以て五戒の方を開く昔は大宰・孔子に問うて云く三皇・五帝は是れ聖人なるか孔子答えて云く聖人に非ず又問う夫子是れ聖人なるか亦答う非なり又問う若し爾らば誰か聖人なる、答えて云く吾聞く西方に聖有り釈迦と号く」文。

此等の文を以て之を勘うるに仏法已前の三皇・五帝は五常を以て国を治む夏の桀・殷の紂・周の幽等の礼義を破りて国を喪すは遠く仏誓の持破に当れり。

疑つて云く若し爾らば法華・真言等の諸大乘經を信ずる者は何ぞ此の難に値えるや、答えて曰く金光明經に云く枉げて辜無きに及ばんと、法華經に云く横に其の殃に羅る」等と云云、此等の文を以て

之を推するに法華真言等を行ずる者も未だ位深からず信心薄く口に誦すれども其の義を知らず一向名利の爲に之を誦す先生の謗法の失未だ尽きず外に法華等を行じて内に選択の心を存す此の災難の根源等を知らざる者は此の難を免れ難きか。

疑つて云く若し爾らば何ぞ選択集を信ずる謗法者の中に此の難に値わざる者之有りや、答えて曰く業力不定なり順現業は法華經に云く此の人現世に白癩の病乃至諸の惡重病を得んと、仁王經に云く人・仏教を壞らば復孝子

無く六親不和にして天神祐けず疾疫惡鬼日に來りて侵害し災怪首尾
し連禍せん」と、涅槃經に云く君し是の經典を信ぜざる者有らば若は
臨終の時・或は荒乱に値い刀兵競い起り帝王の暴虐・怨家の讎隙に
侵逼せられん」已上、順次生業は法華經に云く君し人信ぜずして此の
經を毀謗せば其の人命終して阿鼻獄に入らん」と、仁王經に云く尸
・仏教を壞らば死して地獄・餓鬼・畜生に入らん」已上、順後業等は
之を略す。

問うて曰く如何にして速かに此の災難を留む可きや、答えて曰く
速に謗法の者を治す可し若し爾らずんば無尽の祈請有りと雖も災難を
留む可からざるなり、問うて曰く如何が対治す可き、答えて曰く治方
亦經に之有り涅槃經に曰く仏言く唯一人を除いて余の一切に施せ
正法を誹謗して是の重業を造る唯此くの如き一闍提の輩を除いて

其の余の者に施さば一切讚嘆すべし已上、此の文の如んば施を留めて
対治す可しと見えたり此の外にも亦治方是れ多く具に出すに暇あら
ず、問うて曰く謗法の者に於て供養を留め苦治を加うるは罪有りや
不や、答えて曰く涅槃經に云く、今無上の正法を以て諸王・大臣・
宰相・比丘・比丘尼に付属す正法を毀る者は王者・大臣・四部の衆當に
苦治すべし尚罪有ること無けん已上。

問うて曰く汝僧形を以て比丘の失を顯すは罪業に非ずや、答えて
曰く涅槃經に云く、若し善比丘あつて法を壞る者を見て置いて呵責し
驅遣し拳処せざれば當に知るべし是の人は仏法の中の怨なり若し能く
驅遣し呵責し拳処せば是れ我が弟子真の声聞なり」已上、予此の文を
見るが故に仏法中怨の責を免れんが為に見聞を憚からずして法然
上人並に所化の衆等の阿鼻大城に墮つ可き由を称す、此の道理を聞

き解くと道俗どうぞくの中に少少は廻心えしんの者有り若しも一度高覽ひとたびこうらんを経へん人は上に
拳あぐる所の如ごとく之これを行ぜずんば大集經だいしつきやうの文もの若もし國王こくおう有つて我が法の
滅みせんを見て捨てて擁護おうごせざれば無量世むりやうせに於おいて施戒慧せかいえを修しゅうすとも悉ことごとく
皆滅失みなめつしつして其その国の内に三種ふしやうの不祥ふしやうを出さん乃至ないし命終みやうじゅうして大地獄だいじごくに
生なぜんとの記文きもんを免がかれ難がたきか、仁王經にんのうきやうに云いく若もし王の福尽つきん時
は七難ひちなん必おこず起おこらん」と、此の文に

云く無量世に於て施戒慧を修すとも悉く皆滅失す」等と云云、此の文を見るに且く万事を聞いて先ず此の災難の起る由を勘う可きか若し爾からざれば弥亦重ねて災難起る可きか、愚勘是くの如し取捨は人の意に任す。

◆八 念仏者追放せしむる宣旨御教書五篇に集列

する勘文状 正元元年 三十八歳御作 八六P

夫れ以みれば仏法流布の砌には天下静謐なり神明仰崇の界には国土豊饒なり、之に依つて月氏より日域に覃んで君王より人民に至るまで此の義改むること無き職として然り。

爰に後鳥羽院の御宇に源空法師と云う者あり道俗を欺くが故に

専修せんしゅうを興おこして顯密けんみつの教理きょうりを破はし男女なんによを誑たぶらかすが故ゆえに邪義じやぎを構かまえて
仏神ぶつしんの威光いこうを滅めつし常に四衆ししゅうを誘いざなうて云いく、淨土三部じょうどの外ほかは衆經しゅうきやうを
棄置きちすべし唱名しょうみやう一行いっぎやうの外ほかは余行よぎやうを廢退はいたいすべし矧いんや神祇冥道しんぎみやうどうの恭敬きやうけい
に於おいておや況いわんや孝養報恩こうようほうおんの事善じぜんに於おいておや之これを信しんぜざる者は本願ほんがんを
疑うたがひなりと、爰こゝに頑愚がんぐの類たぐひは甚深じんじんの妙典みやうてんを輕慢きやうまんし無智むちの族やからは神明しんみやう
の威德いとくを蔑如べつじよす、就なかんずくしかんしやな中止觀遮那ちゅうしくわんしやなの学窓がくそうに臨のぞむ者は出離しゅつりを抑おさゆる癡人ちじん
なり三論さんろん・法相ほつそうの稽古けいこを励はげむ者は菩提ぼだいを塞ふさぐ証人しやうにんなりと云云。
之これに依よつて仏法日ぶつぽうに衰おとろえ迷執めいししゅう・月に増しか然しかる間なん・南都北嶺なんとほくりやうの明德めいとく・
奏聞そうもんを経て天聰てんちゅうに達たつするの刻きざみ・源空げんくうが過咎かぐ遁のがれ難がたきの間遠流おんるの宣せんを
蒙もうむり配所はいしよの境さかいに赴おもむき畢おわんぬ、其その後門徒もん・猶勅命ちやうふくめいを憚はばからずして弥いよいよ
專修せんしゅうを興おこすること殆ほとんど先代せんだいに超こえたり違勅いちよくの至いたり責せめても余あまり有あり
故ゆえに重かさねて專修せんしゅうを停廢ていはいし源空げんくうの門徒もん・徒とを流罪るざいすべきの由りんげんしきり・綸言類りんげんしきりに下くだる

又かんどう関東の御下知・勅宣ちよくせんに相添あいそう。

門葉等もんようは遁のがるべきの術を失うしない・或あるは山林さんりんに流浪るろうし・或あるは遠国えんごくに逃隠とういん

す、爾しかしてより華夷かいい・称名しょうみょうを抛なげうちて男女なんよ・正説せいせつに帰する者なり然しかるに

又近來きんらい先規せんきを弁わきまえざるの輩やから・仏神ぶつしんを崇あがめめざるの類たぐい・再び専修せんしゅうの行を企くわだて

猶なお邪惡じあくを増すこと甚はなはだし。

にちれんふしょう
日蓮不肖なりと雖も且は天下の安寧を思うが為且は仏法の繁昌を
いた
致さんが為に強ちに先賢の語を宣説し称名の行を停廃せんと欲し又
ぐかい かんもん
愚懷の勘文を添え頗る邪人の慢幢を倒さんとす、勘注の文繁くして見
がた
難し知り易からしめんが為に要を取り諸を省き略して五篇を列ぬ、
いさい むね ひろくほん
委細の旨は広本に在くのみ。

そうじよう
奏状篇 詮を取りて之を注す委くは広本に在り

なんと そうじよう
南都の奏状に云く。

一、謗人謗法の事

けんくう けんみつ しよしゅう
右源空・顕密の諸宗を輕んずること土の如く沙の如く智行の高位を
ないがし
蔑ろにすること蟻の如く螻の如し、常に自讃して曰く広く一代聖教を
見て知れるは我なり能く八宗の精微を解する者は我なり我諸行を捨
つ況や余人に於ておやと、愚癡の道俗之を仰ぐこと仏の如く弟子の

偏執遙に其の師に超え檀那の邪見弥本説に倍し一天四海漸く以て☆
し事の奇特を聞くに驚かずんば有る可からず其の中殊に法華の修行
を以て専修の讐敵となす、或は此の経を読む者は皆地獄に墮すと
云い、或は其の行を修せん者は永く生死に留まると云い、或は僅に仏道
の結縁を許し、或は都て浄土の正因を嫌う、然る間本八軸十軸の文を
誦し千部万部の功を積める者も永く以て廃退し剩え前非を悔ゆ、
捨つる所の本行の宿習は実に深く企つる所の念仏の薰習は未だ積ま
ず中途に天を仰いで歎息する者多し、此の外般若・華嚴の歸依真言・
止觀の結縁十の八九皆棄置す之を略す。

一、靈神を蔑如する事

右・我が朝は本是れ神国なり百王・彼の苗裔を承けて四海其の
加護を仰ぐ、而るに専修の輩永く神明を別えず權化・実類を論ぜず

宗廟・祖社を恐れず若し神明を憑まば魔界に墮すと云云。

実類の鬼神に於ては置いて論ぜざるか権化の垂迹に至つては既に是れ大聖なり、上代の高僧皆以て帰伏す行教和尚・宇佐の宮に参るに釈迦三尊の影月の如くに顕れ仲算大徳・熊野山に詣ぬるに飛滝千仞の水・簾の如くに巻く、凡そ行基・護命・増利・聖宝・空海・最澄・円珍等は皆神社に於て新に靈異を感じず是くの若きは源空に及ばざるの人か又魔界に墮つ可きの類か之を略す。

山門の奏状に云く。

一、一向専修の党類神明に向背する不当の事。

右・我が朝は神国なり神道を敬うを以て国の勤めと為す謹んで百神の本を討ぬるに諸仏の迹に非ること無し、所謂伊勢大神宮・八幡・加茂・日吉・春日等は皆是れ釈迦・葉師・弥陀・観音等の示現なり各

宿習しゆくじゅうの地をしトめ専ら有縁うえんの儀を調ととのう乃至其の内証ないしそに随ないしやういて彼の法施ほうせを資たすけ念誦ねんじゆ読經どくきやう神に依よつて事異じいなり世を挙あげて信を取り人毎ひとごとに益を被こうむる、而しかるに今專修せんしゅうの徒・事を念仏ねんぶつに寄せて永く神明しんみやうを敬うやむこと無し、既に国すでの礼を失うしない仍神なおを無なするの咎とがあり、当に知るべし有勢ゆうせいの神祇しんぎ定めて降伏かうふくの眸まなじりを回めぐらして睨にらみたまわん之を略す。

一、一向專修和漢の例・快からざる事

右・慈覺大師じかくだいしの入唐巡礼記にゅうたうじゆんれいきを按あんずるに云く唐の武宗皇帝・会昌元年えしやうがんねん章敬寺しょうけいじの鏡霜法師きやうさうほふしに勅令ちよくれいして諸寺しよに於おいて弥陀念仏みだねんぶつの教を伝え寺毎てらごとに三日巡輪じゆんりんして絶えず同じく二年・廻鶻国かいこつこくの軍兵等ぐんびやう・唐の界を侵おかす同じく三年河北かほくの節度使せつどし・忽たちち乱らんを起おこす其の後大蕃国だいばんこく更に命を拒こほむかいこつこく廻鶻国かいこつこく重おこねて地を奪おといぬ、凡おほそ兵乱秦項ひやうらんしんこの代に同じく災火邑里さいかゆりの際あたに起おこる何に況いかにいや武宗大に仏法ぶつぽうを破はし多く寺塔じとうを滅はつらんす撥乱はつらんすること能あたわ

ずして遂に以て事有り已上取意、是れ則ち恣に浄土の一門を信じて護
国の諸教を仰がざるに依つてなり而るに吾朝一向専修を弘通してよ
り以来・国衰微に属し俗多く艱難す已上之を略す、又云く音の哀樂を以て
国の盛衰を知る詩の序に云く治世の音は安んじて以て樂しむ其の政
和げばなり乱世の音は怨んで以て怒る其の政・乖けばなり亡国の音は
哀んで以て思う其の民・困めばなりと云云、近代念仏

の曲を聞くに理世撫民の音に背き已に哀慟の響を成す是れ亡国の音なる可し 是四、已上奏状。

山門の奏状證を取る此の如し。

又大和の莊の法印俊範・宝地房の法印宗源・同坊の永尊堅者並に僧都と云う等源空が門徒を対治せんが為に各各子細を述ぶ其の文・広本に在り、又諸宗の明德面面に書を作りて選択集を破し専修を対治する書籍世に伝う。

宣旨篇

南都北嶺の訴状に依つて専修を対治し行者を流罪す可きの由度度の宣旨の内、今は少を載せ多を省く委くは広本に在り。

永尊堅者の状に云く彈選択等上送せられて後・山上に披露す彈選択に於ては人毎に之を翫び顯選択は諸人之を謗ず法然上人の

墓所は感神院の犬神人に仰付て之を破卻せしめ畢んぬ其の後奏聞に及んで裁許を蒙り畢んぬ、七月の月上旬に法勝寺の御八講の次山門より南都に触れて云く清水寺祇園の辺南都山門の末寺たるの処に専修の輩身を容れし草菴に於ては悉く破卻せしめ畢んぬ其の身に於ては使庁に仰せて之を搦め取らるるの間・礼讃の声・黒衣の色・京洛の中に都て以て止め畢んぬ、張本三人流罪に定めらると雖も逐電の間・未だ配所に向わず山門今に訴え申し候なり。

此の十一日の僉議に云く法然房所造の選択は謗法の書なり天下に之を止め置く可からず仍つて在在所所の所持並に其の印板を大講堂に取り上げ三世の仏恩を報ぜんが為に焼失すべきの由・奏聞仕り候い畢んぬ重ねて仰せ下され候か、恐恐。

嘉禄三年十月十五日

専修念仏せんしゅうねんぶつの張本ちようほん成覚じやうかく法師ほうし讃岐さぬきの大手嶋おおてじまに経回きやうかいすと云云じつびふんみやう実否分明じつひふんみやう
ならずたしか慥けんちに☆知ちを加えらる可べきの由さんもん山門の

人人申す相尋ね申さしめ給う可きの由・殿下の御氣色候う所なり仍つて執達件の如し。

嘉禄三年十月二十日

参議範輔在り判

修理権亮殿

関東より宣旨の御返事

隆寛律師の事、右大弁宰相家の御奉書披露候い畢んぬ、件の律師

去る七月の比・下向せしむ鎌倉近辺に経回すると雖も京都の制符に

任せ念仏者を追放せらるるの間奥州の方へ流浪せしめ畢んぬ云云、早

く在所を尋ね搜して仰せ下さるるの旨に任せ対馬の嶋に追遣可きな

り、此の旨を以て言上せしむ可きの状鎌倉殿の仰せに依つて執達件の

如し。

嘉禄三年十月十五日

武蔵守在り判

相模守在り判

掃部助殿

修理亮殿

専修念仏の事、停廢の宣下重疊の上儉かに尚興行するの条・更に
公家の知しめす所にあらず偏に有司の怠慢たり早く先符に任せて禁遏
せらる可し、其の上衆徒の蜂起に於ては宜く制止を加えしめ給うべし
天氣に依つて言上件の如し、信盛・頼首恐惶謹言

嘉禄三年六月二十九日

左衛門権佐信盛奉

進上

てんだいざす
天台座主大僧正御房政所

右弁官下す

寺

えんりやく
延暦

早く僧の隆寛・幸西・空阿弥陀仏の度縁を取り進すべき事の書。
こんだいなこんまなもとのあそんまさちかちよく
権大納言源朝臣雅親・勅を宣奉するに件の隆寛等の坐せらるること
はいるよろし
配流宜く彼の寺に仰せて度縁を取り進せしむ可し、者れば宜く承知し
て宣に依つて之を行ふべし違失ある可からず。

嘉禄三年七月六日

左太史小槻

宿禰在り判

左少弁藤原

朝臣在り判

大政官の符・五畿内の諸国司まさに宜く専修念仏の興行を停廃し
早く隆寛・幸西・空阿弥陀仏等の遺弟の留まる処に禁法を犯す所の
輩を捉え搦むべきの事。

弘仁聖代の格条・眼に在り左大臣・勅を宣奉し宜く五畿・七道に

課おせて興こう行ぎやうの道みちを停てい廢はいし違いは犯はんの身みを捉とらえ搦なむべし、者ていれば諸しよ国こく司し宜よろく承しょう知ちして宣せんに依よつて之これを行なえ符ふ・到いたらば奉ぶぎ行ぎやうを致いたせ。

嘉か禄ろく三年七月十七日

修理しゆり右宮城使正四位下行

右中うち弁ゆう藤原朝臣ふじわらあそん

修理しゆり東大寺大とうだいじ仏だ長官正五位下左大史兼備前だいいつちやうかん

権介小槻宿禰おつぎすくね

專修念仏興行の輩停止す可きの由五畿・七道に宣下せられ候い
畢おんぬ、且かつつは御存知有る可く候、者ていれば論言此の如し之を悉つまびらかせよ、
頼隆・誠恐頓首謹言。

嘉禄三年七月十三日

右中うち弁ゆうべん

頼隆在り判よりたか

進上 天台座主大僧正御房政所てんだいざす そうじやうごぼうまんじころ

隆寛・対馬の国に改めらる可きの由宣下せられ畢んぬ、其の由
御下知有る可きの旨仰せ下さる所に候なり此の趣を以て申し入れしめ
給う可きの状・件の如し。

頼隆在り判

右中弁

中納言律師御房

隆寛律師專修の張本たるに依つて山門より訴え申すの間、陸奥に配流せられ畢んぬ而るに衆徒尚申す旨有り仍つて配所を改めて対馬の嶋に追い遣らる可きなり、当時東国の辺に経回すと云云不日に彼の島に追い遣らる可きの由関東に申さる可し、者れば殿下の御氣色に依つて執達件の如し。

嘉禄三年九月二十六日

参議在り判

修理権亮殿

專修念仏の事、京畿七道に仰せて永く停止せらる可きの由先日宣下せられ候い畢んぬ、而るに諸国に尚其の聞え有りと云云、宣旨の状を守りて沙汰致す可きの由・地頭守護所等に仰付けらる可きの由・

山門訴え申し候。御下知有る可く候、此の旨を以て沙汰申さしめ給うべき由。殿下の御氣色候所なり、仍つて執達件の如し。

嘉禄三年十月十日

参議在り判

武蔵守殿

嵯峨に下されし院宣

近頃破戒不善の輩嚴禁に拘わらず猶專修念佛を企つるの由其の聞え有り、而るに先師法眼存日の時・清涼寺の辺に多く以て止住すと云、遺跡を相繼ぎて若し同意有らば彼の寺の執務縦い相承の理を帶すとも免許の義有る可からざるなり、早く此の旨を存して禁止せしめ給う可し院宣此くの如し仍つて執達件の如し。

建保七年二月四日

按察使在り

判

治部卿律師御房

謹んで請う
院宣一紙

右当寺四至の内に破戒不善の専修念仏の輩法に任せて制止ある可
く候更に以て芳心有る可からず候、若し猶寺家の力に拘わらずんば事
の由を申し上ぐ可く候、謹んで請くる所件の如し。

建保七年閏二月四日

権律師良曉

左弁官下す 綱所

まさに諸寺の執務人に下知して専修念仏の輩を糾断せしむべき
事。

右左大臣勅を宣奉す、専修念仏の行は諸宗衰微の基なり、仍つて
去る建永二年の春・嚴制五箇条の裁許を以てせる官符の施行先に畢ん
ぬ、傾く者は進んでは憲章を恐れず退いては仏勅を憚からず・或は
梵宇を占め・或は聚落に交わる破戒の沙門党を道場に結んで偏に

今按の伴を以てす仏号を唱えんが為に妄りに邪音を作し將に蕩して人心を放逸にせんとす、見聞満座の処には賢善の形を現すと雖も寂寔破☆の夕には流俗の睡りに異ならず是れ則ち発心の修善に非ず濫行の奸謀を企つるなり豈仏陀の元意僧徒の所行と謂わんや。

宜しく有司に仰せて慥に糾断せしむべし若し猶違犯の者は罪科の趣き一に先符に同じ但し道心修行の人をして以て仏法違越の者に濫ぜしむること莫れ更に弥陀の教説を忽せにするに非ず只釈氏の法文を全からしめんとなり、兼ては又諸寺執務の人五保監行の輩聞知して言わずんば与同罪會つて寛宥せざれ、者れば宜しく承知して宣旨に依つて之を行ふべし。

建保七年閏二月八日

太史

小槻宿禰在り判

謹つしんで請こく 綱こうしよ所

宣せんじ旨一通載のせらるるはまさに諸しよ寺の執務人しつむにんに下知げちして専修念仏せんしゅうねんぶつの輩やから
を糾断きゆうだんせしむべき事。右宣せんじ旨の状に任まかせ諸しよ寺に告つげ触ふる可べきの状謹つしん
で請こくる所件くだんごとの如ごとし。

建保七年閏二月二十二日之を行う。

頃年以來無慚の徒・不法の侶・如如の戒行を守らず処処の嚴制を恐れず恣に念仏の別宗を建て猥りに衆僧の勤學を謗ず、しかのみならず内には妄執を凝らして仏意に乖き外には哀音を引いて人心を蕩かす遠近併ら專修の一行に歸し緇素殆んど顯密の両教を徧す仏法の衰滅而も斯に由る自由の奸惡・誠に禁じても余り有り。

是を以て教雅法師に於ては本源を温ねて遠流し此の外・同行の余党等儘かに其の行を帝土の中に停廃し悉く其の身を洛陽の外に追卻せよ但し・或は自行の爲・或は化他の爲に至心專念如法修行の輩に於ては制の限りに在らず。

天福二年六月晦日
権弁奉る

藤原中納言

天福二年文暦と改む四条院の御宇後堀河院の太子なり、武蔵前司入道殿の

御時。

祇園の執行に仰せ付けらるる山門の下知状。

大衆の僉議に云く専修念仏者天下に繁昌す是れ則ち近年山門無沙汰の致す所なり、件の族は八宗仏法の怨敵なり円頓行者の順魔なり、先ず京都往返の類在家称名の所に於ては例に任せ犬神人に仰せて宜しく停止せしむべし云云、者れば大衆僉議の旨斯くの如し早く先例に任せ犬神人等に仰せ含めて専修念仏者を停止せしめ給う可し云云、恐恐謹言。

延応二年五月十四日 公文勾当審賢

四条院の御宇武蔵前司殿の御時。 謹上 祇園の執行法眼

御房

逐おつて申もうす、去いぬる夜・大衆たいしゅう僉せん議ぎして先さきず此この異い名みに於おいて殊ことに犬つ神のめ人そうに
付つけて之これを責せむ可べきの由よし仰おおせ含くめぬ仍よつて

実名これ之を獻けんず、専修せんしゅう念仏ねんぶつの張本ちやうほんの事、唯ゆい仏ぶつ・鏡きやう仏ぶつ・智願ちがん・定真ていしん・円真えんしん・
正阿弥陀あみだ仏ぶつ・名阿弥陀あみだ仏ぶつ・善慧ぜんね・道弁どうべん・真如堂しんによ狼藉ろうぜきの張本ちやうほんなり已上、
唐橋油小路並に八条大御堂六波羅の総門そうもんの向いの堂・已上・当時興行
の所なり。

延暦寺えんりやく 別院べついん 雲居寺うんごじ 早く一向専修いっこうせんしゅうの悪行あくぎやうを禁断きんだんす可き事

右頃年けいねん以来いらい、愚蒙ぐもうの結党けつどう・☆☆の会衆かいしゅうを名けて専修せんしゅうと曰いい☆☆聞てんりよに

旁あまねし心こころに一分いちぶんの慧解えげ無なく口くちに衆罪しゅうざいの悪言あくげんを吐はき言ことを一念いちねん十声じしやうの

悲願ひがんに寄よせて敢あえてて三毒五蓋さんどくごがいの重惡じゅうあくを憚はばからず盲暝もうみやうの輩やから是非ぜひを弁わえ

ず唯情ただに順したがずるを以もて多おほく愚誨ぐかいに信伏しんぷくす、持戒修善じかいしゅうぜんの人ひとを笑わらうて

之これを雜行ぞうぎやうと号なづし鎮國護王ちんこくごおうの教しよを謗そしりて之これを魔業まぎやうと称しょうす諸善しよぜんを擯棄ひんきし

衆惡しゅうあくを選せん択たくし罪つみを山岳さんかくに積ほみ報ほうを泥梨ないりに招まねく毒氣どくけ深ふかく入いつて禁かじて

も改かむること無なく偏ひとえに欲樂よくらくを嗜たしなんで自みら止ずむこと能あたわず、猶蒼蠅なの唾つば

の爲に黏さるるが如く、何ぞ狂狗の雷を逐うて走るに異ならん、
恣まに三寸の舌を振いて衆生の眼目を抜き五尺の身を養わんが爲に
諸仏の肝心を滅す、併ら只仏法の怨魔と爲り専ら緇門の妖怪と謂う
可し。

是を以て邪師存生の昔は永く罪条に沈み、滅後の今は亦屍骨を
剋らる其の徒・住蓮と安樂とは死を原野に賜い成覚と薩生とは刑を
遠流に蒙りぬ此の現罰を以て其の後報を察す可し、方に今且は釈尊の
遺法を護らんが爲且は衆生の塗炭を救わんが爲に宜く諸国の末寺・莊
園・神人・寄人等に仰せて重ねて彼の邪法を禁断すべし縦い片時と雖も
彼の凶類を寄宿せしむ可からず縦い一言と雖も其の邪説を聴受す
可からず、若し又山門所部の内に専修興行の輩有らば永く重科に
処して寛宥有ること勿れ、者れば三千衆徒の僉議に依つて仰す所・件の

如し。

延応二年

山門申状

近來二つの妖怪有り人の耳目を驚かす所謂達磨の邪法と念仏の哀音となり。

顯密の法門に属せず王臣の祈請を致さず誠に端拱にして世を蔑り暗証にして人を軽んず小生の淺識を崇めて見性成仏の仁と為し耆年の宿老を笑うて螻蟻☆☆の類に擬す論談を致さざれば才の長短を表さず決択に交らざれば智の賢愚を測らず、唯牆壁に向うて独り道を得たりと謂い三依纔に紆い七慢専ら盛なり長く舒卷を抛つ附仏法の外道吾が朝に既に出現す、妖怪の至り慎まざるばあるべからず何ぞ強ちに亡国流浪の僧を撰んで伽藍伝持の主と為さんや。

御式目に云く右大将家以後代代の將軍並に二位殿の御時に於ての事一向に御沙汰を改ること無きか、追加の状に云く嘉禄元年より仁治に至るまで御成敗の事正嘉二年二月十日評定、右自今以後に於ては

三代の將軍並に二位家の御成敗に準じて御沙汰を改むるに及ばずと云云。

念仏停廢の事、宣旨御教書の趣き南都北嶺の状粗此くの如し、日蓮・弱為りと雖も勅宣並に御下知の旨を守りて偏に南北明哲の賢懷を述べ猶此の義を棄置せらるるに非ずんば綸言徳政を故らる可きか將た御下知を仰せらるる可きか、称名念仏の行者又賞翫せらるると雖も既に違勅の者なり関東の御勘氣未だ御免許をも蒙らず何ぞ恣に関東の近住を企てんや、就中武藏前司殿の御下知に至りては三代の將軍並に二位家の御沙汰に準じて御沙汰を

改むること有る可からずと云云。

然るに今、念仏者何の威勢に依つてか宣旨に背くのみに非ず御下知を輕蔑して重ねて称名念仏の専修を結構せん人に依つて事異なりと

云う此の謂在るか、何ぞ恣に華夷縦横の経回を致さんや。
勘文篇 念仏者追放宣旨御教書の事

◆九

念仏無間地獄抄

建長七年

三十四歳御作

97P

念仏は無間地獄の業因なり法華経は成仏得道の直路なり早く浄土
 宗を捨て法華経を持ち生死を離れ菩提を得可き事・法華経第二
 譬喩品に云く 若人信ぜずして此の経を毀謗せば、即ち一切世間の
 仏種を断ぜん、其の人命終して阿鼻獄に入らん、一劫を具足して劫
 尽きなば更生れん、是くの如く展転して無數劫に至らん」云云此の文の
 如くんば方便の念仏を信じて真実の法華を信ぜざらん者は無間地獄に
 墮つ可きなり念仏者云く我等が機は法華経に及ばざる間・信ぜざる
 計りなり毀謗する事はなし何の科に地獄に墮つ可きか、法華宗云く信

ぜざる条は承伏しょうふくなるか、次に毀謗きぼうと云うは即不信そくふしんなり信は道の源みなもと
功徳くどくの母と云へり菩薩ぼさつの五十二位には十信じゅうしんを本と為し十信じゅうしんの位には
信心しんじんを始なと為し諸もろもろの惡業煩惱あくごうぼんのうは不信ふしんを本と為す云云、然しかば譬喩ひゆ品の十
四誹謗ひぼうも不信ふしんを以て体と為せり今の念仏門ねんぶつは不信ふしんと云い誹謗ひぼうと云い
いかでにゅうあびこく争しやうか入阿鼻獄にゅうあびこくの句を遁のがれんや、其その上浄土宗じやうどには現在げんざいの父たる教主きやうしゆ
釈尊しやくそんを捨て他人たにんたる阿弥陀仏あみたぶつを信ずる故ゆえに五逆罪ごぎやくざいの咎とがに依よつて必ず
無間むげん・大城だいじやうに墮おつ可べきなり、經に今・此さんがいの三界さいがいは皆是かいぜ我有がうなりと説とき
給たまうは主君しゆくんの義ぎなり其その中の衆生しゆじやう悉ことごとく是わがこれ吾子わがこと云うは父子ふしの義なり
而しかるに今・此ところの処ところは諸もろもろの患難げんなん多し、唯我一人ただわれひとり能よく救護くごを為なすと説とき
給たまうは師匠ししやうの義なり而しやうして釈尊しやくそん付属ふぞくの文に此法華經ほけきやうをば付属ふぞく有在しゆししんと
云云何いずれれの機きか漏もる可べき誰人だれびとか信たにんぜざらんや、而しかるに浄土宗じやうどは主師親しゆししん
たる教主きやうしゆ釈尊しやくそんの付属ふぞくに背そむき他人たにんたる西方極樂世界さいほうごくらくせかいの阿弥陀如来あみたによらいを

憑たのむ故に主に背そむけり八逆罪ぎやくざいの凶徒きやうとなり違勅いちよくの咎とが遁のがれ難がたし即すなわち朝敵ちやうてきなり争いかでか咎無とがけんや、次に父の釈尊しやくそんを捨ゆえつる故に五逆罪ごぎやくざいの者ものなり豈無間あにむげん地獄じごくに墮おちざる可べけんや、次に師匠ししやうの釈尊しやくそんに背そむく故に七逆罪しちぎやくざいの人ひとなり争いかでか惡道あくどうに墮おちざらんや此ごとの如ごとく教主きやうしゆしやくそん釈尊しやくそんは娑婆世界しやばせかいの衆生しゆじやうには主師親しゆしんの三徳さんとくを備そなへて大恩だいおんの仏ぶつにて御坐まします此の仏ぶつを捨たて他方たほうの仏ぶつを信じ

弥陀みだ

薬師・大日等を憑み奉る人は二十逆罪の咎に依つて惡道に墮つ可きなり、淨土の三部經とは釈尊一代五時の説教の内第三方便部の内より出でたり、此の四卷・三部の經は全く釈尊の本意に非ず三世諸仏出世の本懷にも非ず唯暫く衆生誘引の方便なり譬えば塔をくむに足代を結ぶが如し念仏は足代なり法華は宝塔なり法華を説給までの方便なり法華の塔を説給て後は念仏の足代をば切り捨てべきなり、然るに法華經を説き給うて後念仏に執著するは塔をくみ立て後足代に著して塔を用ざる人の如し豈違背の咎無からんや、然れば法華の序分・無量義經には四十余年

未顕真実と説給て念仏の法門を打破り給う、正宗法華經には正直行方便・但説無上道と宣べ給て念仏三昧を捨て給う之に依て阿弥陀經の対告衆長老・舍利弗尊者・阿弥陀經を打捨て法華經に

歸伏きふくして華光げこう如來にょらいと成り畢おわんぬ、四十八願付属ふぞくの阿難尊者あなんそんじやも浄土じょうどの
三部經さんぶきやうを抛なげうて法華經ほけきやうを受持じゆじして山海慧自在通王さんかいえじざいつうおうふつ仏ぶつと成り畢おわんぬ、
阿彌陀經あみだの長老舍利弗ちやうろうしやりほつは千二百の羅漢らかんの中に智慧第一ちえだいいちの上首じやうしゆの大
声聞しやうもん・閻浮提第一えんぶだいだいいちの大智者ちしやなり肩を並ぶる人なし、阿難尊者あなんそんじやは
多聞第一たもんだいいちの極聖ごくしやう・釈尊しやくそん一代いちだいの説法せつぽうを空に誦じゆせし広学こうがくの智人ちじんなり、か
かる極位きやくいの大阿羅漢あらかんすら尚往生なほうじやうじやうふつ成仏なげうの望とを遂とげず仏ぶつ在世ざいせの祖師そし此こく
の如ごとし祖師そしの跡あとを踏ふみむ可べくば三部經さんぶきやうを抛なげうちて法華經ほけきやうを信むじじ無上むじやう菩提ぼだいを
成じやうず可べき者ものなり仏ぶつの滅後めつごに於おいては祖師そし先德せんとく多いしと雖いえども大唐だいじやう楊州やうしゆの
善導和尚ぜんどうわじやうにまさる人なし唐土第一もろこしだいいちの高祖こうそなり云云、始はつは楊州やうしゆの明勝めいしやう
と云える聖人しやうにんを師しと為なして法華經ほけきやうを習しゆたりしが道綽どうしやく禪師ぜんしに値あつて
浄土宗じやうどに移ほけきやうり法華經ほけきやうを捨て念仏者ねんぶつものと成なれり一代聖教いちだいいしやうきやうに於おいて聖道しやうどう・
浄土じやうどの二門にもんを立てたり法華經等ほけきやうの諸大乘經しよだいじやうきやうをば聖道門しやうどうもんと名なく自力じりきの

行と嫌きらえり聖道門しょうどうもんを修行しゆぎようして成仏じやうぶつを願ねがはん人は百人にまれに一人・
二人千人にまれに三人五人得道とくどうする者や有あんずらん乃至千人に一人
も得道とくどうなき事も有あるべし觀經等かんきやうとうの三部經さんぶきやうを淨土門じやうどもんと名なけ此この淨土門じやうどもん
を修行しゆぎようして他力本願たのほんがんを憑たのんで往生おうじやうを願ねがはん者は十即じふそく十生じふつじやう・百即ひやくそく
ひやくしひやくし・百生ひやくしとて十人は十人百人は百人決定往生けつじやうおうじやうす可べしとすすめたり、
觀無量壽經くわんむりやうじゆきやうを所依しよえと為なして四卷の疏じよを作る玄義分けんぎぶん・序分義じよぶんぎ・定善義ていぜんぎ・
散善義さんぜんぎ是これなり、其その外ほか・法事讚上下ほうじさんじやうげ・般舟讚はんじゆさん・往生礼讚おうじやうれいさん・觀念法門經くわんねんぽうもん
此等これらを九帖の疏じよと名なけたり、善導ぜんどう念仏ねんぶつし給たまへば口より仏の出給たまうと云
つて称名しょうみやう念仏ねんぶつ一遍いっぺんを作なすに三体づつ口より出給たまけりと伝まいへたり、毎日まいにち
の所作しよさには阿弥陀經六十卷・念仏ねんぶつ・十万遍じゅうまん是これを欠く事なし、諸もろの戒品かいほん
を持もつて一戒いっかいも破やぶらず三依さんえは身の皮かわの如ごとく脱だつぐ事なく鉢はち☆は両眼りやうげんの
如ごとく身を離はなさず精進しやうじん潔齋けつさいす女人にょにんを見みずして一期生いちご不眠ふみん三十年なりと

自歎す、凡そ善導の行儀法則を云へば酒肉五辛を制止して口に齧まず
手に取らず未來の諸の比丘も是くの如く行ずべしと定めたり、一度酒
を飲み肉を食ひ五辛等を食ひ念仏申さん者は三百萬劫が間地獄に墮
す可しと禁しめたり、善導が行儀法則は本律の制に過ぎたり、法然房
が起請文にも書載たり、一天四海善導和尚を以て善知識と仰ぎ貴賤
上下皆悉く念仏者と成れり・但し一代聖教の大王・三世諸仏の本懷
たる法華の文には若し法を聞くこと有らん者は無一不成仏と説き給へ
り、善導は法華經を行ぜん者は千人に一人も得道の者有る可からずと
定む何れの説に付く可きか、無量義經には念仏をば未顯真実とて実に
非ずと言ふ法華經には正直捨方便・但説無上道とて正直に念仏の
觀經を捨て無上道の法華經を持つ可しと言ふ此の兩説水火なり何れ
の辺に付く可きや善導が言を信じて法華經を捨つ可きか法華經を信じ

て善導ぜんどうの義ぎを捨すつ可べきか如何いかに、夫れ一切衆生いっさいしゅじやう・皆成仏道かいじやうぶつどうの法華經ほけきやう、一
たび法華經ほけきやうを聞かば決定けつじやうして菩提ぼだいを成じやうぜんの妙典みやうてん・善導ぜんどうが一言いっぴに破われ
て千中無一虚妄せんちゆうむいつこもうの法ほふと成り、無得道教むとくどうきやうと云はれ平等大慧びやうどうだいえの巨益きやくは虚妄こもう
と成り多宝如来たほうにょらいの皆是真実かいぜしんじつの証明しやうみやうの御言妄語おんことばもうごと成るか十方諸仏じゅうぽうしよぶつの
上至梵天じやうしばんてんの広長舌こうちやうぜつも破られ給ぬ、三世諸仏さんぜしよぶつの大怨敵おんてきと為り十方じゅうぽう
如来成仏にょらいじやうぶつの種子しゆしを失うしなう大謗法ほうほうの科とが甚重しなはだし大罪報ざいほうの至り無間むげん・大城だいじやうの
業因ごういんなり、之に依よつて忽たちまちに物狂ものぐるいにや成おわけん所居しやうきの寺てらの前の柳きびすの木めくらに登
りて自ら頸みずかをくくりて身を投げ死おわし畢じやんぬ邪法じやほうのたたり踵きびすを回めくらさず
冥罰みやうばち愛こころに見あらわれたり、最後臨終さいごりんじゆうの言いに云いく此この身厭いとう可べし諸苦しよくに責しめ
られ暫しばらくも休息きゆうそく無すなわしと即しやうち所居しやうきの寺てらの前の柳きびすの木めくらに登り西にしに向むかひ願ねがつ
て日ひく仏ぶつの威神いしん以もつて我われを取り觀音かんのん・勢至せいし來きたつて又我われを扶たすけたまえと
唱となえ畢おわつて青柳せいりゆうの上うへより身を投なげて自絶じぜつす云云、三月十七日いくびを

くくりて飛たりける程にくくり縄や切れけん柳の枝や折れけん大旱魃^{かんばつ}
の堅土^{かたつち}

の上に落て腰骨を打折て、二十四日に至るまで七日七夜の間・悶絶
壁地しておめきさけびて死し畢んぬ、さればにや是程の高祖をば往生
の人の内には入れざるらんと覺ゆ此事全く余宗の誹謗に非ず法華宗の
妄語にも非ず善導和尚自筆の類聚伝の文なり云云、而も流を酌む者は
其の源を忘れず法を行ずる者は其の師の跡を踏む可し云云浄土門に
入つて師の跡を踏む可くば臨終の時善導が如く自害有る可きか、念佛
者として頸をくくらずんば師に背く咎有る可きか如何。

日本国には法然上人浄土宗の高祖なり十七歳にして一切経を習
極め天台六十巻に渡り、八宗を兼学して一代聖教の大意を得たり
とののしり、天下無雙の智者山門第一の学匠なり云云、然るに天魔や
其の身に入にけん広学多聞の智慧も空く諸宗の頂上たる天台宗を
打捨て八宗の外なる念佛者の法師と成りにけり大臣・公卿の身を捨て

民百姓ひやくせいと成るが如し、選せん集ちやくしゅうと申もうす文を作つて一代いちだい五時ごときの聖教しょうきょうを難破なんはし念仏ねんぶつ往生おうじょうの一門いもんを立てたり、仏説ぶつせつ法滅ほうめつ尽經つじんきように云いく五濁ごじよく惡世あくせには魔道まどう興盛こうじようし魔沙門しゃもんと作まつて我が道を壞え乱らんし惡人あくにん轉くわんた海中かいちゆうの沙いさの如ごとく善人ぜんにん甚はなはだだ少くして若もしは

一人ひとり若もしは二人ならん云云すなわ即すなわち法然ほうねん房是はうこれなりと山門さんもんの狀に書かれたり、我が淨土宗じやうどの專修せんしゅうの一行いっかうをば五種ごしゆの正行しょうぎようと定め權實ごんじつ・顯密けんみつの諸大乘しよだいじようをば五種ごしゆの雜行ざうぎようと簡きらいて淨土門じやうどもんの正行しょうぎようをば善導ぜんどうの如ごとく決定けつじよう往生おうじようと勸すすめたり、觀經くわんきよう等の淨土じやうどの三部經さんぶきようの外いち代いちだい顯密けんみつの諸大乘しよだいじよう經きよう・大般若經はんにゃきようを始はと為なして終はつじり法常住經はうじようじゆうきように至いたるまで貞元錄じやうげんに載のする所の六百三十七部・二千八百八十三卷は皆是みな千中無一せんちゆうむいつの徒物いたずらものなり永く得道とくどう有る可べからず、難行なんぎよう・聖道門しょうどうもんをば門を閉こじ之これを抛なげち之これを闔おき之これを捨すて淨土門じやうどもんに入る可べしと勸すすめたり、一天いつてんの貴賤きせん首を傾しけ四海しかいの

道俗どうぞく たなごころ 掌て を合せ・或は勢至せいしの化身けしんと号し・或は善導ぜんどうの再誕さいたんと仰ぎ
一天四海いつてんしかいになびかぬ木草もくそうなし、智慧ちえは日月にちがつの如く世間せけんを照てらして肩を並
ぶる人なし名徳めいとくは一天いつてんに充ちて善導ぜんどうに超え曇鸞どんらん・道綽どうしやくにも勝れたり
貴賤きせん・上下じょうげ・皆みな選択集せんたくしゅうを以て仏法ぶつぽうの明鏡めいきやうなりと思ひ道俗どうぞく・男女なんよ悉く
法然房ほうねんぼうを以て生身の弥陀みだと仰ぐ、然りと雖も恭敬きやうけい供養くやうする者は愚癡ぐち
迷惑めいわくの在俗ざいぞくの人・歸依渴仰きえかつじやうする人は無智むち

放逸ほういつの邪見じゃけんの輩やからなり、権者ごんしゃに於おいては之これを用もちいず賢哲けんてつ又之またに随したがうこと無し。

然しかる間とが斗賀尾とがのの明慧房みょうえぼうは天下てんが無雙むそうの智人ちじん・広学多聞こうがくたもんの明匠めいしやうなり、摧邪輪さいじゃりん三卷さんくわんを造つくつて選択せんちやくの邪義じゃぎを破はし、三井寺みいでらの長吏ちやうり・実胤大僧正じついん そうじやうは希代きたいの学者がくしゃ・名誉めいよの才人さいじんなり浄土決疑じやうど けつぎ集三卷しゆさんくわんを作つくつて専修せんしゆの悪行あくぎやうを難なんじ、比叡山ひえいざんの住侶じゆうろ・仏頂房ぶつちやうぼう・隆真法橋りやうしんほうきやうは天下てんが無雙むそうの学匠がくしやう・山門さんもん探題たんだいの棟梁とうりやうなり彈選だんせん上下じやうげを造つくつて法然房ほうねんぼうが邪義じゃぎを責せむ、しかのみならず南都なんと・山門さんもん・三井みいより度度たびたび奏聞そうもんを経て法然ほうねんが選択せんちやくの邪義亡国じゃぎぼうこくの基もと為なるの旨訴むねえ申もうすに依よつて人王八十三代つちみかといん・土御門院つちみかどいんの御宇ぎやう・承元元年しやうげん がんねん二月上旬じやうじゆんに専修せんしゆ念仏ねんぶつの張本ちやうほんたる安楽あんらく・住蓮等じゆうれんを捕縛めしどらえ忽たちまちに頭こづへを刎はねられ畢おわんぬ、法然房源空ほうねんぼう げんくうは遠流おんるの重科じゆうかに沈おわみ畢おわんぬ、其の時そのとき・摂政左大臣家実せつしやう さいだいじん いえざねと申もうすは近衛殿このえどの おんごどの御事ごんことなり此の事は皇代記こうだいきに見えた

り誰か之を疑わん。

しかのみならず法然房死去の後も又重ねて山門より訴え申すに依つて人皇八十五代・後堀河院の御宇嘉禄三年京都六箇所の本所より法然房が選択集・並に印版を責め出して大講堂の庭に取り上げて三千の大衆会合し三世の仏恩を報じ奉るなりとて之れを焼失せしめ法然房が墓所をば犬神人に仰せ付けて之れを掘り出して鴨河に流され畢んぬ。

宣旨・院宣・蘭白殿下の御教書を五畿・七道に成し下されて、六十六箇国に念仏の行者・二日片時も之れを置く可からず対馬の島に追いや遣る可きの旨諸国の国司に仰せ付けられ畢んぬ、此等の次第・両六波羅の注進状・関東相模守の請文等明鏡なる者なり。

嘉禄三年七月五日に山門に下さるる宣旨に云く。

専修念仏せんしゅうねんぶつの行ぎやうは諸宗衰微しよしゅうすいびの基もとなり、茲こゝに因よつて代代たいたいの御門みかど・頻しきりに
嚴旨げんしを降くだされ殊ことに禁遏きんあつを加くわうる所ところなり、而しかるを頃年けいねん又興行こうぎやうを構くわへ山門さんもん
訴もつえ申もうさしむるの間まがひ・先符せんぷに任まかせて仰おほせ下くださるること先に畢おわんぬ、其その
上かつ且ぶつぽうは仏法ぶつぽうの陵夷りやうい

を禁ぜんが為・且は衆徒の鬱訴を優に依つて其の根本と謂うを以て
隆寛・成覚・空阿弥陀仏等其の身を遠流に処せしむ可きの由・不日に
宣下せらるる所なり、余党に於ては其の在所を尋ね搜して帝土を追却
す可きなり、此の上は早く愁訴を慰じて蜂起を停止す可きの旨・時刻
を回さず御下知有る可く候、者綸言此の如し頼隆・誠恐・頓首
謹言。

七月五日酉刻

右中弁頼隆

奉わる

進上天台座主大僧正御房政所同七月十三日山門に下さるる宣旨
に云く。

専修念仏興行の輩を停止す可きの由・五畿・七道に宣下せられ
畢んぬ、且御存知有る可く候綸言此の如く之を悉にす・頼隆・誠恐・

頓首謹言。

七月十三日

右中弁頼隆奉わる

進上天台座主大僧正御房政所殿下御教書

專修念仏の事、五畿・七道に仰せて永く停止せらる可きの由・先日
宣下せられ候い畢んぬ、而るを諸国に尚其の聞え有り云云、宣旨の状
を守つて沙汰致す可きの由・地頭守護所等に仰せ付けらる可きの旨・
山門訴え申し候、御存知有る可く候、此の旨を以て沙汰申さしめ給う
可き由・殿下の御気色候所なり、仍て執達件の如し。

嘉禄三年十月十日

参議範輔在り判

武蔵守殿

永尊堅者の状に云く、此の十一日に大衆僉議して云く法然房所造の
選択は謗法の書なり天下之を止め置く可からず、仍て在在所所の所持

並に其の印板を大講堂に取り上げて三世の仏恩を報ぜんが為に之を
焼失せしめ畢ん

ぬ、又云く法然上人の墓所をば感神院の大神人に仰せ付けて破却せし
め畢んぬ。

嘉禄三年十月十五日・隆真法橋 申して云く専修念仏は亡国の本
為る可き旨文理之有りと。

山門より雲居寺に送る状に云く、邪師源空・存生の間には永く罪条
に沈み滅後の今は且死骨を刎ねられ、其の邪類・住蓮・安樂・死を原野
に賜い成覚・薩生は刑を遠流に蒙る殆ど此の現罰を以て其の後・報を
察す可し云云。

嗚呼世法の方を云えば違勅の者と成り帝王の勅勘を蒙り今に御
赦免の天氣之れ無し心有る臣下万民・誰人か彼の宗に於て布施供養を

展のぶ可べきや、仏ぶつ法ぽうの方をを云いえば正しやう法ぽう誹ひ謗ぼうの罪ざい人にん為なり無む間げん地じ獄ごくの業ごう類るい
なり何いづれれの輩やからか念ねん仏ぶつ門もんに於おいて恭きやう敬けい礼らい拜はいを致いたす可べきや、庶こいねがわ幾くば
末まつ代だい今いまの浄じやう土ど宗しゆ・仏ぶつ在ざい世せの祖そ師し・舍し利り弗ふつ・阿あ難なん等とうの如ごとく浄じやう土ど宗しゆを抛なげうつて
法ほけき華きやう經きやうを持たもち菩ぼ提だいの素そ懷かいを遂とぐ可べき者ものか。

日蓮

花押かおう

◆ 一〇

当世念仏者無間地獄事

104P

安房の国・長狭郡・東条花房の郷・蓮華寺に於て

浄円房 に対して日蓮阿闍梨之を註るす、文永元年

甲子九月二十二日。

問うて曰く当世の念仏者無間地獄と云う事其の故如何、答えて云く
法然の選択に就いて云うなり、問うて云く其の選択の意如何、答えて
曰く後鳥羽院の治・天下建仁年中に日本国に一の彗星出でたり名けて
源空・法然と曰う選択一卷を記して六十余紙に及べり、科段を十六に
分つ第一段の意は道緯禪師の安樂集に依つて聖道・浄土の名目を立
つ、其の聖道門とは浄土の三部経等を除いて自余の大小乗の一切経
殊には朝家帰依の大日経・法華経・

仁王經・金光明經等の顯密の諸大乘經の名目阿弥陀仏より已外の諸仏・菩薩・朝家御歸依の真言等の八宗の名目之を挙げて聖道門と名く、此の諸經諸仏諸宗は正像の機に値うと雖も末法に入つて之を行ぜん者は一人も生死を離る可からずと云云、又曇鸞法師の往生論註に依つて難易の二行を立つ第二段の意は善導和尚の五部九卷の書に依つて正雜二行を立つ、其の雜行とは道綽の聖道門の料簡の如し、又此の雜行は末法に入つては往生を得る者の千中に一も無きなり、下の十四段には、或は聖道・難行・雜行をば小善根隨他意有上功德等と名け念仏等を以ては大善根隨自意無上功德等と名けて、念仏に対して末代の凡夫此れを捨てよ此の門を閉じよ之を闔けよ之を抛てよ等の四字を以て之を制止す、而て日本國中の無智の道俗を始めて大風に草木の従うが如く皆此の義に随つて忽に法華・

真言等に随喜の意を止め建立の思を廃す、而る間人毎に平形の念珠を
以て弥陀の名号を唱え、或は毎日三万遍・六万遍・十万遍四十八万遍
・百万遍等・唱る間・又他の善根も無く念仏堂を造ること稲麻竹葦の
如く、結句は法華真言

等の智者とおぼしき人人も皆・或は歸依を受けんが為に・或は往生極樂の為に皆本宗を捨てて念佛者と成り・或は本宗にして念佛の法門を仰げるなり。

今云く日本国中の四衆の人人は形は異り替ると雖も意根は皆一法を行じて悉く西方の往生を期す、仏法繁昌の国と見えたる処に一の大なる疑を發する事は念佛宗の龜鏡と仰ぐ可き智者達念佛宗の大檀那と為る大名・小名並びに有徳の者多分は臨終思ふ如くならざるの由之を聞き之を見る、而るに善導和尚十即十生と定め十遍乃至一生の間念佛者は一人も漏れず往生を遂ぐ可しと見えたり人の臨終と善導の釈とは水火なり。

爰に念佛者会して云く往生に四つ有り、一には意念往生・般舟三昧經に出でたり、二には正念往生・阿弥陀經に出でたり、三には

無記往生群疑論に出でたり、四には狂乱往生觀經の下品下生に出でたり、詰つて曰く此の中の意・正の二は且く之を置く無記往生は何れの經論に依つて懷感禪師・之を書けるや、經論に之無くば信用取り難し、第四の狂乱往生とは引証は觀經の下品下生の文なり、第一に惡人臨終の時妙法を覺れる善知識に値つて覺る所の諸法実相を説かしめて之を聞く者正念存し難く十惡・五逆具諸不善の苦に逼め被れて覺ることを得ざれば善知識実相の初門と爲る故に称名して阿弥陀仏を念ぜよと云うに音を揚げて唱え了んぬ、此れは苦痛に堪え難くし

て正念を失う狂乱の者に非るか狂乱の者争か十念を唱う可き、例せば正念往生の所撰なり全く狂乱の往生には例す可からず、而るに汝等が本師と仰ぐ所の善導和尚は此の文を受けて転教口称とは云え

ども狂乱往生とは云わず、其の上汝等が昼夜十二時に祈る所の願文に云く願くは弟子等命終の時に臨んで心顛倒せず心錯乱せず心失念

せず身心諸の苦痛無く身心快樂・禪定に入るが如し等云云、此の中に錯乱とは狂乱か而るに十悪・五逆を作らざる当世の念仏の上人達・並に大檀那等の臨終の悪瘡等の諸の悪重病並に臨終の狂乱は意を得ざる事なり、而るに善導和尚の十即十生と定め又・定得往生等の釈の如きは疑無きの処に十人に九人往生すと雖も一人往生せざれば猶不審発る可し、何に況や念仏宗の長者為る善慧・隆觀・聖光・薩生南無・真光等皆惡瘡等の重病を受けて臨終に狂乱して死するの由之を聞き又之を知る、其の已下の念仏者の臨終の狂乱其の数を知らず、善導和尚の定むる所の十即十生は關けて嫌える所の

千中無一と成んぬ、千中無一と定められし法華・真言の行者は粗ぼ
臨終の正念なる由之を聞けり、念仏の法門に於ては正像末の中には
末法に殊に流布す可し、利根・鈍根・善人・惡人・持戒・破戒等の中には
鈍根惡人破戒等殊に往生す可しと見えたり、故に道緯・禪師は唯有
淨土一門と書かれ、善導和尚は十即十生と定め往生要集には濁世
末代の目足と云えり、念仏は時機已に叶えり行ぜん者・空しかる可か
らざるの処に是くの如きの相違は大なる疑なり、若し之に依つて
本願を疑わば仏説を疑うに成んぬ進退惟谷れり此の疑を以て
念仏宗の先達並びに聖道の先達に之を尋るに一人として答うる人
之れ無し、念仏者救うて云く、汝は法然上人の捨閑闍拋の四字を
謗法と過むるか汝が小智の及ばざる所なり、故に上人・此の四字を
私に之を書くと思えるか、源曇鸞・道緯・善導の三師の釈より之を出し

たり、三師さんしの釈・文私ひそかに非ず、源浄土みなもとじょうどの三部經さんぶきょう竜樹菩薩りゅうじゅぼさつの十住じゅうじゅう毘婆沙論びばしやろんより出ず、

そうかんきよう

雙觀經そうかんきようの上卷じやうに云く設たといわれほとけい我仏わがぶつを得乃至ないし十念等じゅうねんどうと云云、第十九の願ねんに

云く設たといわれほとけい我仏わがぶつを得乃至ないし十念等じゅうねんどうと云云、第十九の願ねんに

云く設たといわれほとけい我仏わがぶつを得乃至ないし十念等じゅうねんどうと云云、第十九の願ねんに

云く乃至ないし一念等いちねんどうと云云、第十八の願成就じやうじゆの文なり、又下卷げわに云く

其その上・輩者はいしや○一向專念いつじやうせんねん・輩者はいしや○一向專念いつじやうせんねん其下輩者げはい○一向專念いつじやうせんねんと

云云、此これは十九願成就じやうじゆの文なり、觀無量壽經くわんむりやうじゆきやうに云く、佉阿難あなんに告ぐ

汝なんじ好こほく是この語ごを持もて是この語ごを持もつ者は即すなわち是これ無量壽むりやうじゆぶつ佛ぶつの名なを持もつ

等なと云云、阿彌陀經あみだに云く小善根せうぜんこんを以もつ

す可べからず乃至ないし一日七日等いちにちしちにちどうと云云、先そうかんきようず雙觀經そうかんきようの意いは念仏往生ねんぶつおうじやう

諸行往生しよぎやうおうじやうと説しよぎやうけども一向專念いつじやうせんねんと云つて諸行往生しよぎやうおうじやうを捨おて了わんぬ、故ゆゑに

彌勒みろくの付屬ふぞくには一向いつじやうに念仏ねんぶつを付屬ふぞくし了わんぬ、觀無量壽經くわんむりやうじゆきやうの十六觀じふろくくわんも

彌勒みろくの付屬ふぞくには一向いつじやうに念仏ねんぶつを付屬ふぞくし了わんぬ、觀無量壽經くわんむりやうじゆきやうの十六觀じふろくくわんも

彌勒みろくの付屬ふぞくには一向いつじやうに念仏ねんぶつを付屬ふぞくし了わんぬ、觀無量壽經くわんむりやうじゆきやうの十六觀じふろくくわんも

彌勒みろくの付屬ふぞくには一向いつじやうに念仏ねんぶつを付屬ふぞくし了わんぬ、觀無量壽經くわんむりやうじゆきやうの十六觀じふろくくわんも

彌勒みろくの付屬ふぞくには一向いつじやうに念仏ねんぶつを付屬ふぞくし了わんぬ、觀無量壽經くわんむりやうじゆきやうの十六觀じふろくくわんも

彌勒みろくの付屬ふぞくには一向いつじやうに念仏ねんぶつを付屬ふぞくし了わんぬ、觀無量壽經くわんむりやうじゆきやうの十六觀じふろくくわんも

彌勒みろくの付屬ふぞくには一向いつじやうに念仏ねんぶつを付屬ふぞくし了わんぬ、觀無量壽經くわんむりやうじゆきやうの十六觀じふろくくわんも

彌勒みろくの付屬ふぞくには一向いつじやうに念仏ねんぶつを付屬ふぞくし了わんぬ、觀無量壽經くわんむりやうじゆきやうの十六觀じふろくくわんも

上かみの十五じふごの觀かんは諸行しよぎやう往生おうじやう、下輩げはい一觀いつかんの三品さんひんは念仏ねんぶつ往生おうじやうなり、仏阿難あなん尊者そんじやに念仏ねんぶつを付属ふぞくするは諸行しよぎやうを捨すてつる意いなり、阿彌陀經あみだきやうには雙觀經そうかんきやうの諸行しよぎやう觀無量壽經かんむりやうじゆきやうの前十五觀ぜんじふごかんを束たばねて、小善根ぜんこんと名なけ往生おうじやうを得えざるの法ほふと定め畢おひんぬ、雙觀經そうかんきやうの念仏ねんぶつをば無上むじやう

功德と名けて弥勒に付属し、觀經・念仏をば芬陀利華と名けて阿難に
付属し、阿彌陀經の念仏をば大善根と名けて舍利弗に付属す、終の
付属は一經の肝心を付属するなり又一經の名を付属するなり、
三部經には諸の善根多しと雖も其の中に念仏最なり、故に題目には
無量壽經・觀無量壽經・阿彌陀經等と云えり、釈摩訶衍論・法華論等
の論を以て之れを勘うるに一切經の初には必ず南無の二字有り、梵本
を以て之を言わば三部經の題目には南無之れ有り、
雙觀經の修諸の二字に念仏より外の八万聖教残る可からず、
觀無量壽經の三福九品等の説誦大乘の一句に一切經残る可からず、
阿彌陀經の念仏の大善根に対する小善根の語に法華經等漏る可き
や、総じて淨土の三部經の意は行者の意樂に随わんが為に暫く諸行を
擧ぐと雖も、再び念仏に対する時は諸行の門を閉じて捨閉闍拋する事

顕然なり、例せば法華經を説かんに爲に無量義經を説くの時に

四十余年の經を捨てて法華の門を開くが如し、

竜樹菩薩十住毘婆沙論を造つて一代聖教を難易の二道に分てり、

難行道とは三部經の外の諸行なり易行道とは念仏なり、經論此くの

如く分明なりと雖も震旦の人師此の義を知らず唯善導一師のみ此の

義を発得せり、所以に雙觀經の三輩を觀念法門に書いて云く「一切

衆生根性不同にして上中下有り其の根性に随つて仏皆無量壽仏の

名を專念することを勧む」等云云、此の文の意は發菩提心修諸功德等

の諸行は他力本願の念仏に値わざりし以前に修する

事よと有りけるを忽に之を捨てよと云うとも行者用ゆ可からず故に

暫く諸行を許すなり、実には念仏を離れて諸行を以て往生を遂ぐる

者之無しと書きしなり、觀無量壽經の仏告阿難等の文を善導の疏の四

に之れを受けて曰く、上来に定散両門を説くと雖も仏の本願に望めば
意・衆生の一向に専ら阿弥陀の名を称するに在り」云云、定散とは
八万の権実・顕密の諸經を尽して之を撰して念仏に對して之れを捨つ
るなり、善導の法事讃に阿弥陀經の大小善根の故を釈して云く、極樂
は無為涅槃界なり隨縁の雜善恐らくは生じ難し故に如来要法を選んで
教えて弥陀專修を念ぜしむ」等と云云、諸師の中に三部經の意を得た
る人は但導一人のみ、如来の三部經に於ては是くの如く有れども正法
・像法の時は根機猶利根の故に諸行往生の機も之有りけるか。
然るに機根衰えて末法と成る間、諸行の機漸く失い念仏の機と成れ
り、更に阿弥陀如来・善導和尚と生れて震旦に此の義を顯し、和尚
日本に生れて初は叡山に入つて修行し後には叡山を出でて一向に專修
念仏して三部經の意を顯し給ひしなり、汝捨閉闍拋の四字を謗法と咎

むる事未だ導和尚の釈並びに三部經の文を窺わざるか、狗の雷を齧むが如く地獄の業を増す汝知らずんば浄土家の智者に問え。

不審して云く上の所立の義を以て法然の捨閑閑抛の謗言を救うか実

に浄土の三師並に竜樹菩薩・仏説により此の三部經の文を開くに念仏

に對して諸行を傍と為す事粗經文に之見えたり、經文に嫌われし程

の諸行念仏に對して之を嫌わんこと過む可きに非ず、但不審なる処は

雙觀經の念仏已外の諸行觀無量壽經の念仏以外の定散・阿彌陀經の

念仏の外の小善根の中に法華・涅槃・大日經等の極大乘經を入れ念仏

に對して不往生の善根ぞと仏の嫌わせ給いけるを竜樹菩薩三師並に

法然之を嫌わば何の失有らん但三部經の小善根等の句に法華・涅槃・

大日經等に入る可しとも覚えざれば三師並に法然の釈を用いざるな

り、無量義經の如きは四十余年・未顕真実と説いて法華八箇年

を除きて以前四十二年に説く所の大小・權實の諸經は一字一点も
未顯眞實の語に漏る可しとも覺えず、しかのみならず四十二年の間に
説く所の阿含・方等・般若・華嚴の名目之を出だせり、既に大小の
諸經を出して生滅無常を説ける諸の小乗經を阿含の句に摂し、三
にして無差別の法門を説ける諸大乘經を華嚴海空の句に摂し、十八
空等を説ける諸大乘經を般若の句に摂し、彈呵の意を説ける諸
大乘經を方等の句に摂す、是くの如く年限を指し經の題目を挙げ
無量義經に依つて法華經に對して諸經を嫌い・嫌える所の諸經に依れ
る諸宗を下すこと天台大師の私に非ず、汝等が淨土の三部經の中には
念仏に對して諸行を嫌う文は之有りとも嫌わるる諸行は淨土の
三部經よりの外の五十年の諸經なりと云う現文は之無し、又無量義經
の如く阿含・方等・般若・華嚴等をも挙げず誰か知る三部經には諸の

小乗經並に歷劫修行の諸經等の諸行を仏・小善根と名け給うと云ふ事を、左右無く念仏よりの外の諸行を小善等と云えるを法華・涅槃等の一代の教なりと打ち定めて捨閑闕抛の四字を置きては仏意にや乖くらんと不審する計りなり、例せば王の所従には諸人の中諸国の凡下等一人も残る可からず民が所従には諸人諸国の主は入る可からざるが如し、誠に浄土の三部經等が一代超過の經ならば五十年の諸經を嫌うも其の謂れ之有り

なん三部經の文より事起つて一代を撰す可しとは見えず、但一機一縁の小事なり何ぞ一代を撰して之を嫌わん、三師並に法然此の義を弁えずして諸行の中に法華・涅槃並に一代を撰して末代に於て之を行ぜん者は千中無一と定むるは近くは依經に背き遠くは仏意に違ふ者なり、但し竜樹の十住毘婆沙論の難行の中に法華・真言等を入ると云

うは論文ろんぶんに分明ふんみょうに之これ有りや、設たとい論文ろんぶんに之これ有りとたしかもき慥しやうもんなる經文きやうもんこれなくふしん之不ふ審しんの内うちなり、竜樹菩薩りゅうじゆぼさつはこんだいじやう權大乘ごんたいじやう

の論師ろんし爲りし時の論ろんなるか、又やくしや訳者やくしやの入いれれたるかと意得可こころうべし、其そのの故ゆゑは

仏むりやうぎきやうは無量義經むりやうぎきやうに四十余年よんじゅうよねんは難行道なんぎやうどう・無量義經むりやうぎきやうは易行道いぎやうどうと定め給たまう事こと・

金口きんくの明鏡めいきやうなり、竜樹菩薩りゅうじゆぼさつ・仏きもんの記文きもんに當あつて出世しゅつせして諸經しよきやうの意いを

演あぶぶつせつ豈あん説せつなる難易なんいの二道にどうを破ひつて私ひそかに難易なんいの二道にどうを立てんや、随したがつて

十住毘婆沙論じゅうじゆびしやもんろんの一部いちぶ始しちゆうじゆう中終ちゆうしゆうを開ひらくくに全おほく法華經ほけきやうを難行なんぎやうの中うちに入れ

たる文これ之なく只ただ華嚴經けんぎやうの十地じゅうちをしやく積しやくするに第二地だいにちに至いたり畢おわつて宣のべへず、

又この此ろんの論しよきやうに諸經しよきやうの歴劫修行りやくしゆうしゆぎやうの旨むねをあ拳あぐるに菩薩難行道ぼさつなんぎやうどうに墮だし二乘地にじやうち

に墮だして永不成仏ようふじやうぶつの思おもを成なす由ゆ・見みえたり法華ほつげ已前いぜんの論ろんなる事こと疑うたが無ない

し、竜樹菩薩りゅうじゆぼさつの意いを知らずして此このの論ろんの難行なんぎやうの中に法華ほつげ・真言しんごんを入いれ

たりと料簡りやうけんするか、淨土じやうどの三師さんしに於おいては書しよ積しやくを見るに難行なんぎやう・雜行そうぎやう

・聖道しょうどうの中に法華經ほけきょうを入れたる意・粗ほ之これ有あり、然しかりと雖いえども法然ほうねんが如ごとき放言ほうげんの事こと之これ無なし、しかのみならず仏法ぶつぽうを弘ひろめん輩やからは教機き時き国こく教法きやうぽう流布るふの前ぜん後ごを☆む可べきか。

如來にょらい在世ざいせに前ぜんの四十余年よんじゅうよねんには大小だいしやうを説いくと雖いえども説時せつじ至いたらざるの故ゆえに本懷ほんかいを演のべ給たまわず、機き有いりと雖いえども時無なければ大法たふを説とき給たまわず、靈山りやうぜん八年はちねんの間・誰えんか円機えんきならざる時も來ゆる故ゆえに本懷ほんかいを演のべたもうに權機ごんき移うつつて実機じつきと成なる、法華經ほけきょうの流通りつう並なに涅槃經ねはんきやうには實教じつきやうを前ぜんとし權教ごんきやうを後ごとす可べきの由よし見みえたり、在世ざいせには實じつを隱かくして權ごんを前ぜんにす滅後めつごには實じつを前ぜんとして權ごんを後ごと為なす可べき道理どうり顯然けんねんなり、然しかりと雖いえども天竺てんじく三國さんこくには正法しょうぽう一千年いつせんねんの間は外道げどう有あり、一向いっかう小乘しょうじやうの國有こく有あり、又一向いっかう大乘だいじやうの國有こく有あり、又大小兼學だいしやうけんがくの國有こく有あり、漢土かんどに佛法ぶつぽう渡わたつても又天竺てんじくの如ごとし、日本國にほんこくに於おいては外道げどうも無なく小乘しょうじやうの機きも無なく唯大乘ただだいじやうの機きのみ有あり、

大乘だいじように於おいても法華ほっけよりの外ほかの機き無し、但ただし仏法ぶつぽう・日本にほんに渡わたり始めし時、
暫しばらく小乘しょうじようの三宗さんしう權大乘こんだいじようの三宗さんしうを弘ひろむと雖いえども桓武かんむの御宇ぎように伝教大師でんぎようだいし
の御時おんとき六宗ろくしう・情じやうを破やぶつて天台宗てんだいしうと成なりりぬ、俱舍ぐしや・
成実じやうじつ・律りつの三宗さんしうの学者がくしやも彼の教ごうの如ごとく七賢けん三道さんだうを經へて見思けんじを断にじじ二乘にじよう
と成なりらんとは思おもわず、只ただ彼の宗しうを習しゆつて大乘だいじようの初門じよもんと為なし彼の極ごくを得え
んとは思おもわず、權大乘こんだいじようの三宗さんしうを習しゆえる者ものも五性かくべう各別等ごうべつとうの宗義しうぎを捨すてて
一念三千いちねんさんぜん・五輪等みようかんの妙觀みやうかんを窺うかがう、大小だいしやう・權実こんじつを知らざる在家ざいけの檀那等だんな
も一向いつかうに法華ほっけ・真言しんごんの学者がくしやの教ごうに随したがつて之これを供養くようする間かん・日本にほん一洲いっしうは
印度震旦いんどしんたんには似いつかうず一向じゆんえん純円じゆんえんの機きなり、恐おそくは靈山りやうぜん八年はちねんの機きの如ごとし、
之これを以もつて之これを思おもうに浄土じやうどの三師さんしは震旦しんたん・權大乘こんだいじようの機きに超こえじ、法然ほうねんに
於おいては純円じゆんえんの機き純円じゆんえんの教ごう・純円じゆんえんの国こくを知らず、權大乘こんだいじようの一分いちぶん為なる
觀經等かんきやうの念仏ねんぶつ、

権^{ごん}実^{じつ}をも弁^わえざる震^{しん}旦^{たん}の三^{さん}師^しの釈^{しやく}之^{これ}を以^もて此^この国^{こく}に流^る布^ふせしめ実^じ機^きに
権^{ごん}法^{ぽう}を授^{おづ}け、純^{じゆん}円^{えん}の国^{こく}を権^{ごん}教^{きやう}の国^{こく}と成^{なり}し醍^{だい}醐^ごを嘗^ほむる者^{もの}に蘇^そ味^みを与^よ
うるの失^{とが}誠^{まこと}に甚^{はなは}だ多^{ただ}し。

◆ 一一

題目 弥陀名号勝劣事

111P

南無妙法蓮華經と申す事は唱えがたく南無阿弥陀仏・南無薬師
 如来など申す事は唱えやすく又文字の数の程も大旨は同けれども
 功德の勝劣は遙に替りて候なり、天竺の習ひ仏出世の前には二天三仙
 の名号を唱えて天を願ひけるに仏世に出させ給いては仏の御名を唱
 ふ、然るに仏の名号を二天三仙の名号に対すれば天の名は瓦礫のごと
 し仏の名号は金銀如意宝珠等のごとし、又諸仏の名号は題目の
 妙法蓮華經に対すれば瓦礫と如意宝珠の如くに侍るなり、然るを
 仏教の中の大小・権実をも弁へざる人師などが仏教を知りがほにし
 て仏の名号を外道等

に對して如意宝珠に譬へたる經文を見又法華經の題目を如意宝珠に譬へたる經文と喩の同きをもつて念仏と法華經とは同じ事と思へるなり、同じ事と思う故に又世間に貴と思う人の只弥陀の名号計を唱うるに随つて・皆人一期の間・一日に六万遍・十万遍などと申せども法華經の題目をば一期に一遍も唱へず、或は世間に智者と思はれたる人人外には智者氣にて内には仏教を弁へざるが故に念仏と法華經とは只一なり南無阿弥陀仏と唱うれば法華經を一部よむにて侍るなんと申しあへり是は一代の諸經の中に一句一字もなき事なり、設ひ大師先徳の釈の中より出たりとも且は觀心の釈か且はあて事かなんど心得べし、法華經の題目は過去に十億の生身の仏に値ひ奉つて功德を成就する人初めて妙法蓮華經の五字の名を聞き始めて信を致すなり、諸仏の名号は外道・諸天・二乘・

菩薩ぼさつの名号みょうごうにあはすれば瓦礫がりやくと如意宝珠にょいほうじゅの如ごとくなれども法華經ほけきやうの
題目だいもくに対すれば又瓦礫がりやくと如意宝珠にょいほうじゅとの如ごとし、当世とうせの学者がくしゃは法華經ほけきやうの
題目だいもくと諸仏しよぶつの名号みょうごうとを功德くどくひとしと思ひ又同じ事と思へるは瓦礫がりやくと
如意宝珠にょいほうじゅとを同じと思ひ一と思ふが如ごとし、止觀しかんの五ごに云いく設たとい世を
厭いとう者も下劣げれつの乗もてを翫あそび枝葉しやうに攀はん付ふし狗作務いぬさむに狎なれ・猴みどうを敬たいて

帝釈たいしやくと爲なし瓦礫かりやくを崇あがめめて是・明珠みょうじゆなりとす此この黒闇くろやみの人豈あに道を論ろんず
可べけんや」等云云、文の心は設たどひ世をいとひて出家しゆつげ遁世とんせいして山林さんりんに身を
かくし名利みょうり名聞みょうもんをたちて一向いつこう後世ごしやうを祈ひとびとる人人ほけきやうも法華經だいじやうの大乗だいじやうをば
修行しゆぎやうせずして權教ごんきやう下劣げれつの乗のりにつきたる名号みやうごう等を唱となうるを瓦礫かりやくを明珠みょうじゆ
なんどと思おもいたる僻人びやくにんに譬たとへ闍くらき惡道あくどうに行くべき者と書はれて侍はべるなり、
弘決くけつの一いつには妙樂みやうらく大師だいし・善住ぜんじゆ天子てんし經きやうをかたらせ給たまひて法華經ほけきやうの心を
顯いはして云いく法ほを聞きいて謗ぼうを生はじ地獄じごくに

墮だするは恒沙ごうしゃの仏ぶつを供養くやうする者に勝まさる等「云云、法華經ほけきやうの名を聞きいてそ
しる罪つみは阿弥陀あみだ仏ぶつ・釈迦しゃか仏ぶつ・葉師やくし仏ぶつ等の恒河沙ごうがしやの仏ぶつを供養くやうし名号みやうごうを
唱となうるにも過すぎたりされば当世とうせの念仏ねんぶつ者の念仏ねんぶつを六万遍ないしじゆまん乃至乃至十萬遍しじゆまん
申もうすなんど云いへども彼かしこにては終ついに生死しやうじをはなるべからず、法華經ほけきやうを聞きく
をば千中せんちゆう無む一いつ・雜行ぞうぎやう・未有一人みういちにんとくしや得者とくしやなんど名なけて・或あるは抛なげうてよ・或あるは門

を閉じよなんと申す謗法こそ設ひ無間・大城に墮るとも後に必生死は
離れ侍らんずれ、同くは今生に信をなしたらば、いかによく候なん。

問う世間の念仏者なんどの申す様は此身にて法華經などを破する

事は争か候べき念仏を申すもとくとく極樂世界に参りて法華經をさと

らんが為なり、又、或は云く法華經は不淨の身にては叶ひがたし恐れも

あり念仏は不淨をも嫌はねばこそ申し候へなんと申すはいかん、答えて

云く此の四五年の程は世間の有智・無智を嫌はず此の義をば・さなんめ

りと思ひて過る程に日蓮一代聖教をあらあら引き見るにいまだ此の

二義の文を勘へ出さず・詮ずるところ近來の念仏者並に有智の明匠と

おぼしき人人の臨終の思うやうにならざるは是・大謗法の故なり、人

ごとに念仏申して淨土に生れて法華經をさとらんと思う故に穢土にし

て法華經を行ずる者をあざむき又・行ずる者もすてて念仏を申す心は

出来いできたるなりと覚おぼゆ・謗ほう法ぽうの根本こんぽん此この義ぎより出でたり、法ほ華けき經きやうこそ此この穢え土ど
より淨じやうど土どに生なずる正しやう因いんにては侍はべれ念ねん仏ぶつ等らうは未み顯けん真しん實じつの故ゆえに淨じやうど土どの
直ちやく因いんにはあらず、然しかるに淨じやうど土どの正しやう因いんをば極ごく樂らくにして後しゆぎに修しゆ行ぎやうすべき
物ものと思おもひ極ごく樂らくの直ちやく因いんにあらざる念ねん仏ぶつをば淨じやうど土どの正しやう因いんと思おもう事こと僻びやく案あん
なり、淨じやうど土もん門もんは春はる沙さを田いさこに蒔まいて秋あき米こめを求もとめ天てん月げつをすてて

水に月を求めるに似たり人の心に叶かないて法華經を失ふ大術此の義にはす
ぎず、次に不淨念ふじょうねんぶつ仏の事・一切念いっさいねんぶつ仏者の師とする善導ぜんどう和尚・法然上人
は他事たじにはいわれなき事多けれども此の事にをいてはよくよく禁いましめられ
たり、善導ぜんどうの觀念かんねん法門經に云く酒肉五辛を手に取らざれ口にかまざれ
手にとり口にもかみて念ねんぶつ仏を申さば手と口に惡瘡あくそう付くべしと禁いましめ法然
上人しょうにんは起請きしょうを書いて云く、酒肉五辛を服して念ねんぶつ仏申さば予が門弟もんていにあ
らずと云云、不淨ふじょうにして念ねんぶつ仏を申すべしとは当世とうせの念ねんぶつ仏者の大妄語もうごな
り。

問うて云く善導ぜんどう和尚・法然上人の釈を引くは彼の釈を用るや否や、
答えて云く、しからず念ねんぶつ仏者の師たる故に彼がことば己が祖師そしに相違そうい
するが故ゆえに彼の祖師そしの禁いましめをもて彼を禁いましむなり、例せば世間せけんの沙汰さた
彼が語ことばの彼の文書ぶんしょに相違そういするを責るが如し、問うて云く善導ぜんどう和尚・

法然上人には何事の失あれば用いざるや、答えて云く仏の御遺言には
我が滅度の後には四依の論師たりといへども法華經にたがはば用うべか
らずと涅槃經に返す返す禁め置かせ給いて侍るに法華經には我が滅度
の後・末法に諸經失せて後・殊に法華經流布すべき由・一所二所ならず
あまたの

所に説かれて侍り、随つて天台・妙樂・伝教・安然等の義に此事分明
なり、然るに善導・法然・法華經の方便の一分たる四十余年の内の未顯
眞實の觀經等に依つて仏も説かせ給はぬ我が依經の讀誦大乘の内に
法華經をまげ入れて還つて我が經の名号に對して讀誦大乘の一句を
すつる時・法華經を抛てよ・門を閉じよ・千中無一・なんど書いて侍る
僻人をば眼あらん人は是をば用うべしやいなや。

疑つて云く善導和尚は三昧発得の人師・本地・阿彌陀仏の化身・口

より化仏けぶつを出せり、法然上人ほうねんしやうにんは本地ほんち・大勢至菩薩だいせいしほさつの化身けしん既に日本国にほんこくに
生れては念仏ねんぶつを弘ひろめて頭こころより光ひかりを現げんぜり争いかにか此等これらを僻人びやくにんと申もうさんや、
又善導ぜんどう和尚わじやう・法然上人ほうねんしやうにんは汝なんじが見る程ほどの法華經ほけきやう並いっさいに一切經いっさいきやうをば見給たまは
ざらんや定めて其そのの故ゆゑ是あらんか、答えて云いく汝なんじが難なんずる処ところをば
世間せけんの人人ひとびと定めて道理どうりと思はんか、是偏ひとえに法華經ほけきやう並いっさいに天台てんだい・妙樂等みやうらくの
実經じつぎやう・実義じつぎを述べ給たまへる文義もんぎを捨て善導ぜんどう・法然ほうねん

等の謗法ほうぼうの者にたばらかされて年久くなりぬるが故ゆえに思はする処ところなり、先ず通力つうりきある者を信ぜば外道げどう天魔てんまを信ずべきか、或る外道げどうは大海たいかいを吸干すいほし、或る外道げどうは恒河ごうがを十二年まで耳に湛たえたり第六天だいろくてんの魔王まおうは三十二相を具足ぐそくして仏身ぶつしんを現げんず、阿難尊あなんそんじや者・猶魔なごと仏とを弁わきまえん、善導ぜんどう・法然ほうねんが通力つうりきいみじしというとも天魔てんま・外道げどうには勝すぐれず、其の上・仏の最後の禁いましめしめに通を本とすべからずと見えたり、次に善導ぜんどう・法然ほうねんは一切經いっさいきやう並に法華經ほけきやうをばおのれよりも見たり

なんどの疑うたがひひ是れ又謗法ほうぼうの人のためには・さもとと思ひぬべし、然しかりといへども如来にょらいの滅後めつごには先の人たぶんは多分たぶん賢かしこきに似て後の人おおむねは大旨おほむねは・はかなきに似たれども又先の世の人かしこの世に賢かしこき名を取りて・はかなきも是あり、外典げてんにも三皇さんこう・五帝ごてい・老子らうし・孔子こうしの五經等を学びて賢かしこき名を取れる人も後の人に・くつが含これたる例是れ多きか、内典ないてんにも又かくの如ごとし、

仏法・漢土に渡りて五百年の間は明匠・国に充満せしかども光宅の
法雲道場の慧観等には過ぎざりき、

此等の人人は名を天下に流し智水を国中にそそぎしかども天台智者
大師と申せし末の人・彼の義どもの僻事なる由を立て申せしかば初には
用ひず、後には信用を加えし時・始めて五百余年の間の人師の義どもは
僻事と見えしなり、日本国にも仏法渡りて二百余年の間は異義まちな
ちにして何れを正義とも知らざりし程に伝教大師と申す人に破られ
て前二百年の間の私義は破られしなり、其の時の人人も当時の人の
申す様に争か前前の人は一切経並に法華経

をば見ざるべき、定めて様こそあるらめなんと申しあひたりしかども叶
はず経文に違ひたりし義どもなれば終に破れて止みにき、當時も又か
くの如し此の五十余年が間は善導の千中無一・法然が捨閉閣抛の四字

等は権者ごんしゃの積なればゆへこそあらんと思ひてひら信じに信じたりし程に
日蓮にちれんが法華經ほけきょうの・或あるは惡世末法時あくせまつぽう・或あるは於後末世おごまつせ・或あるは令法久住等りようぼうくじゅうの
文を引きむかへて相違そういをせむる時・我が師の私義しぎ破われて疑うたがいいあへるな
り、詮せんずるところ後・五百歳の經文きやうもんの誠なるべきかの故に念仏者ねんぶつの念仏
をもて法華經ほけきょうを失うしひつるが還かえつて法華經ほけきょうの弘ひろまらせ給たまうべきかと覺おぼゆ、
但ただし御用心ようじんの御為ために申もうす世間の惡人あくにんは魚鳥鹿等ぎやちようかを殺して世路せじを渡わたる、
此等これらは罪つみなれども仏法ぶつぽうを失うしふ縁とはならず懺悔ざんげ

をなさざれば三惡道さんあくどうにいたる、又魚鳥鹿等ぎょちょうらを殺して売買ばいばいをなして善根ぜんこんを修しゆうする事もあり、此等これらは世間せけんには惡と思はれて遠く善となる事もあり、仏教ぶつぎようをもつて仏教ぶつぎようを失ふこそ失ふ人も失ふとも思はず只善ただを修しゆうすると打ち思おもうて又そばの人も善と打ち思おもうてある程に思はざる外に惡道あくどうに墮おつる事の出来候しゅつたいなり、当世とうせには念仏者ねんぶつなどの日蓮にちれんに責め落おとしされて我が身は謗法ぼうぼうの者なりけりと思おもう者も是あり、聖道しやうどうの人人ひとひとの御中おんちゆうにこそ実の謗法ぼうぼうの人人ひとひとは侍はべれ

彼の人人ひとひとの仰おほせらるる事は法華經ほけきやうを毀そしりる念仏者ねんぶつも不思議ふしぎなり念仏者ねんぶつを毀そしりる日蓮にちれんも奇怪きかいなり、念仏ねんぶつと法華ほけとは一体の物なり、されば法華經ほけきやうを讀よむこそ念仏ねんぶつを申もうすよ念仏ねんぶつ申もうすこそ法華經ほけきやうを讀よむにては侍はべれと思おもう事に候あらなりと、かくの如ごとく仰おほせらるる人人ひとひと・聖道しやうどうの中にあまた・をはしますと聞きゆ、隨したがつて檀那だんなも此の義を存ぞんじて日蓮並にちれんに念仏者ねんぶつをおこがま

しげに思へるなり、先日蓮が是れ程の事をしらぬと思へるははかなし。

仏法・漢土に渡り初めし事は後漢の永平なり渡りとどまる事は唐の

玄宗皇帝・開元十八年なり、渡れるところの経・律・論・五千四十八卷・

訳者一百七十六人其の経経の中に南無阿弥陀仏は即南無

妙法蓮華経なりと申す経は一卷・一品もおはしまさざる事なり、其の

上阿弥陀仏の名を仏・説き出し給う事は始め華嚴より終り般若経に

至るまで四十二年が間に所所に説かれたり、但し阿含経をば除く一代

聴聞の者は是を知れり、妙法蓮華経と申す事は仏の御年

七十二成道より已来四十二年と申せしに靈山にましまして

無量義処三昧に入り給いし時、文殊・弥勒の問答に過去の日月燈明仏

の例を引いて我・燈明仏を見る乃至法華経を説かんと欲すと先例を

引きたりし時こそ南閻浮提の衆生は法華経の御名をば聞き初めたりし

か、三の巻の心ならば阿弥陀仏等の十六の仏は昔大通智勝仏の御時、
十六の王子として法華經を習つて後に正覺をならせ給へりと見えたり、
弥陀仏等も凡夫にてをはしませし時は妙法蓮華經の五字を習つてこそ
仏にはならせ給ひて侍れ、全く南無阿弥陀仏と申して正覺をならせ
給いたりとは見え、妙法蓮華經は能開なり南無阿弥陀仏は所開な
り、能開所開を弁ずして南無阿弥陀仏こそ南無妙法蓮華經よ

と物知りがほに申し侍るなり、日蓮幼少の時・習いそこなひの天台宗・
真言宗に教へられて此の義を存じて数十年の間ありしなり、是れ存外
の僻案なり但し人師の釈の中に一体と見えたる釈どもあまた侍る、彼
は觀心の釈か・或は仏の所証の法門につけて述たるを今の人弁へずし
て全体・一なりと思ひて人を僻人に思ふなり、御☆迹あるべきなり、
念仏と法華經と一つならば仏の念仏説かせ給ひし觀經等こそ如来出世
の本懷にては侍らめ、彼をば本懷とも・をばしめさずして法華經を出世
の本懷と説かせ給ふは念仏と一体ならざる事明白なり、其の上多くの
真言宗・天台宗の人人に値ひ奉りて候し時・此の事を申しければ、さ
れば僻案にて侍りけりと申す人は是れ多し、敢て証文に經文を書いて
進ぜず候はん限りは御用ひ有るべからず、是こそ謗法となる根本にて
侍れ、あなかしこ・あなかしこ。

日蓮

花押^{かおう}

◆ 一二

法華淨土問答抄

117P

理即

名字即

觀行即

穢土

相似即

法華宗立六即

報土

分真即

究竟即

穢土

理即

三諦の名を聞く

五品を明す

八十八使の見惑を断ず

八十一品の思惑を断ず

九品の塵沙を断ず

四十一品の無明を断ず

一品の無明を断ず

中品戒行世善等

浄土宗じょうとそうの所立しよりゅう

報土ほうど

名字即みょうじそく

觀行即かんぎょうそく

相似即そうじそく

分真即ぶんしんそく

究竟即くきょうそく

淨土下品じょうとげぼん

弁成べんじやうの立、我が身叶かない難がたきが故ゆえに且しばらく聖道しやうどうの行しやうを捨く閉へいし閣かく抛ほうし浄土じやうど

に歸きし浄土じやうどに往生おうじやうして法華ほつけを聞きいて無生むじやうを悟さとることを得うべきなり。

日蓮にぢれんなん難なんじて云いく、我が身叶かない難なんければ穢土えどに於おいて法華ほつけ經きやう等しやうしゆ・教主きやうしゆ

釈尊しやくそん等しやくへいを捨しや閉へいし閣かく抛ほうし浄土じやうどに至いたつて之これを悟べる可べし等云云、何いづれの

經文きやうもんに依よつて此かくの如ごとき義ぎを立たつるや、又天台宗てんだいしやうの報土ほうどは分ぶん真即しんそく・

究竟即くきやうそく・浄土宗じやうどしやうの報土ほうどは名字即みやうじそく乃至究竟即いたしきやうそく等とは何いづれの經きやう・論ろん釈しやくに

出いでたるや、又穢土えどに於おいては法華ほつけ經きやう等しやうしゆ・教主きやうしゆ釈尊しやくそん等しやくへいを捨しや閉へいし閣かく抛ほうし

浄土じやうどに至いたつて法華ほつけ經きやうを悟べる可べしとは何いづれの經文きやうもんに出いでたるや。

弁成べんじやうの立たに、余ほつの法華ほつ等しやうしゆの諸行等しよぎやうを捨しや閉へいし閣かく抛ほうして念仏ねんぶつを用もちゆる文

は觀經かんきやうに云いく、仏あなん・阿難あなんに告なんじぐ汝なんじ好こく是この語ことばを持たもて是この語ことばを持たもつ者

は即すなわち是これ無量壽むりやうじゆぶつ佛ぶつの名なを持もつ」文、浄土じやうどに往生おうじやうして法華ほつを聞きくと云

う事は文いに云いく、觀世音かんぜおん・大勢至だいせいし・大悲だいひの音声おんじやうを以もつて其それが為ために広ひろく

諸法実相・除滅罪法を説く、聞き已つて歡喜し時に応じて即・菩提の心を發す」文、余は繁き故に且く之を置く。

又日蓮難じて云く、觀無量壽經は如来成道四十余年の内なり

法華經は後八箇年の説なり如何んが已説の觀經に兼ねて未説の

法華經の名を載せて捨閉閣抛の可説と為す可きや、随つて「仏告阿難」

等の文に至つては只弥陀念仏を勸進する文なり未だ法華經を捨閉し

閣抛することを聞かず、何に況や無量義經に法華經を説かんが為に先

ず

四十余年の已説の經經を挙げて未顯真実と定め畢んぬ、豈未顯真実

の觀經の内に已顯真実の法華經を挙げて捨て乃至之を抛てと為す

可きや、又云く「欠しく此の要を默して務めて速かに説かず」等云云、

既に教主釈尊・四十余年の間法華の名字を説かず何ぞ已説觀經の

念仏ねんぶつに対して此この法華經ほけきょうを抛なたんや、次つぎに下品下生げぶんげしやう・諸法実相しよぽうじつそう・
除滅罪法等じよめつざいほう」云云、夫それ法華經ほけきょう已前いぜんの实相じつそう其その數・一いちに非あらず先あらず外道げどう・
の内の長爪ちやうそうの实相じつそう・内道ないどうの内の小乘しやうじやう乃至ないしに爾前にぜんの四教しきやう皆みな所詮しよせんの理りは
実相じつそうなり、何なんぞ必かならずずしも已說いせつの觀經かんきやうに載のする所ところの实相じつそうのみ法華經ほけきょうに同
じと意得いじつべきや、

このたびはたしか
今度儲なる証文を出して法然上人の無間の苦を救わるべきか。

又弁成の立に、観經は已説の經なりと雖も未來を面とする故に
未來の衆生は未來に有る所の經卷之を讀誦して淨土に往生すべし、
既に法華等の諸經・未來流布の故に之れを讀誦して往生すべきか、
其の法華を捨閉閣抛し観經の持無量寿仏の文に依つて法然是くの如く
行じ給うか、観經の持無量寿仏の文の上に諸善を説き一向に無量寿仏
を勸持せる故に申せしめ候、実相に於いても多く有りと云う難、彼は
淨土の故に此の難来るべからず、法然上人聖道の行機堪え難き故に
未來流布の法華を捨閉閣抛す、故に是れ慈悲の至進なれば此の慈悲を
以て淨土に往生し全く地獄に墮すべからざるか。

日蓮難じて云く、観經を已説の經なりと云云、已説に於ては承伏
か、観經の時未だ法華經を説かずと雖も未來を鑒みて捨閉閣抛すべし

と法然上人は意得給うか云云、仏・未来を鑒みて已説の經に未来の經を載せて之を制止すと云わば已説の小乗經に未説の大乗經を載せて之を制止すべきか、又已説の權大乘經に未説の實大乘經を載せて未来流布の法華經を制止せば、何が故に仏・爾前經に於て法華の名を載せざる由、之を説きたまうや。

法然上人慈悲の事、慈悲の故に法華經と教主積尊とを抛つなりと云わば所詮上に出す所の証文は未だ分明ならず慥なる証文を出して法然上人の極苦を救わる可きか、上の六品の諸行往生を下の三品の念仏に對して諸行を捨つ豈法華を捨つるに非ずや等云云、觀無量壽經の上六品の諸行は法華已前の諸行なり、設い下の三品の念仏に對して上六品の諸行之を抛つとも但法華經は諸行に入らず何ぞ之を闍かんや、又法華の意は爾前の諸行と觀經の念仏と共に

之これを捨て畢おわりて如来出世によらいしゅつせの本懐ほんかいを遂とげ給たまうなり、日蓮管見にちれんを以もて一代いちだい
聖教しょうきょう並びに法華經ほけきょうの文かんがを勘かんうるに未だ之これを見ず、法華經ほけきょうの名あを挙げ
て、或あるは之これを抛なげうち、或あるは其その門かどを閉しめる等らと云いう事を、若もし爾しからば法然ほうねん
上人しょうにんの憑たのむ所の弥陀本願みだほんがんの誓文せいもん並びに法華經ほけきょうの入阿鼻獄にゅうあびごくの釈尊しゃくそんの
誠文かいもん如何なんぞ之これを免まぬらべ可べけんや、法然上人ほうねんしょうにん・無間獄むげんごくに墮だせば

所化しよけの弟子でし並びに諸檀那しよだんな等共らに阿鼻あび大城だいじやうに墮おちんか、今度このたび分明ふんみやうなる証文しょうもんを出しして法然上人ほうねんしやうにんの阿鼻あびの炎えんを消けさる可べし云云。
文永九年ぶんえい太歳
壬申みずのえさる正月十七日

日蓮にちれん 花押かおう
弁成べんじやう 花押かおう

◆ 一三 法華真言勝劣事ほっけしんこんしやうれつ

120P

東寺とうじの弘法大師こうぼうだいし空海くうかいの所立しよりゅうに云いく法華經ほけきやうは猶華嚴經なわけこんきやうに劣おとれり何いかに

況や大日經等に於いてをやと云云、慈覺大師・円仁・智証大師・円珍・
安然和尚等の云く法華經の理は大日經に同じ印と真言との事に於ては
是れ猶劣れるなりと云云其の所釈は余。空海は大日經・菩提心論等に依つて
十住心を立てて顯密の勝劣を判ず、其の中に第六に他縁大乘・心は
法相宗・第七に覺心不生心は三論宗・第八に如実一道心は天台宗・
第九に極無自性心は華嚴宗・第十に秘密莊嚴心は眞言宗なり、此の
所立の次第は浅き従り深きに至る、其の証文は大日經の住心品と
菩提心論とに出づと云えり、然るに出す所の大日經の住心品を見て
他縁大乘・覺心不生・極無自性を尋ぬるに名目は經文に之有り、然り
と雖も他縁・覺心・極無自性の三句を法相・三論・華嚴に配する名目は
之無し、其の上覺心不生と極無自性との中間に如実一道の文義共に
之無し、但し此の品の初に「云何なるか菩提謂く如実に自心を知る」等

の文之^{これあ}有り、此の文

ちゅうげん

てんだいしゅう

けこんしゅう

を取つて此の二句の中間に置いて天台宗と名づけ華嚴宗に劣るの由、

之を存す、住心品に於ては全く文義共に之無し、有文有義・無文有義

の二句を虧く信用に及ばず、菩提心論の文に於ても法華・華嚴の勝劣

都て之を見ざる上、此の論は竜猛菩薩の論と云う事上古より諍論

之れ有り、此の諍論絶えざる已前に龜鏡に立つる事は堅義の法に

背く、其の上善無畏・金剛智等評定有つて大日經の疏・義釈を作れり

一行阿闍梨の執筆なり、此の疏義釈の中に諸宗の

勝劣を判ずるに法華經と大日經とは広略の異なりと定め畢んぬ、

空海の徳貴しと雖も争か先師の義に背く可きやと云う、難此れ強し

此れ安然の難なり、之に依つて空海の門人之を陳ずるに旁陳答之有り

・或は守護經・或は六波羅蜜經・或は楞伽經・或は金剛頂經等に見ゆ

と・多く会通すれども総じて難勢を免れず、然りと雖も東寺の末学等

大師だいしの高徳こうとくを恐るるの間・強あながちに会通えつうを加えんとすれども結句けつこ会通えつうの術計じゅつけい之これ無く問答もんどうの法そむに背そむいて伝教でんきょう大師だいし最澄さいしやうは弘法こうぼう大師だいしの弟子でしなりと云云、又宗論しゅうろんの甲乙こうおつ等かたがた旁論わうろんずる事こと之これ有りと云云。

日蓮案にちれんじて云く、華嚴宗けこんしゅうの杜順とじゆん・智嚴ちこん・法蔵等ほうざう・法華經ほけきやうの始見しけん今見こんけんの文ぶんに就ついて法華ほつげ・華嚴けこん・齊等さいとうの義ぎ之これを存ぞんす、其その後澄觀ちやうかん始今しこんの文ぶんに依よつて齊等さいとうの義ぎを存ぞんすること祖師そしに違たがはず、其その上うへ一往いちおうの弁べんを加えて法華ほつげと華嚴けこんと齊等さいとうなりと云えり、但ただし華嚴けこんは法華經ほけきやうより先まづなり、華嚴經けこんきやうの時とき・仏最初さいしよに法慧功德林等ほうえくどくじんの大菩薩だいぼさつに對たいして出世しゅつせの本懷ほんかい之これを遂とぐ、然しかれども二乘並にじやうに下賤げせんの凡夫等ぼんぷ根機こんき未熟みじゆくの故ゆえに之これを用もちいず、阿含あこん・方等ほうとう・般若等はんんにやの調熟ちやうじゆくに依よつて還かえつて華嚴經けこんきやうに入いらしむ、此これを今見こんけんの法華經ほけきやうと名なづく、大陣だいじんを破やぶるに余殘よざん・堅けんからざる等の如ごとし、然しかれば實じつに華嚴經けこんきやう・法華經ほけきやうに勝すぐれ

たり等と云云、本朝ほんちように於て勤操きんそう等に値あいて此の義を習学しゅうがくす後に天台てんだい・
真言しんこんを學すと雖いえども旧執改くしゅうまらざるが故ゆえに此の義を存ぞんするか、何いかに況いわんやや
華嚴經けこんきよう・法華經ほけきように勝まさるの由は陳隋ちんすいより已前いぜん・南三なんざん・北七ほくひち・皆此の義を
存ぞんす、天台てんだい已後いごも又諸宗しよしゅう此の義を存ぞんせり但ただ弘法こうぼう一人ひとりに非あらざるか、
但ただし澄觀ちようかん・始見しけん今見こんけんの文ぶんに依よつて華嚴經けこんきようは法華經ほけきようより勝まさると料簡りようけんする
才覺さいかくに於おいては天台智者大師てんだいちしやだいし・涅槃經ねはんきようの是經出世ぜきようしゅつせ乃至ないし如法華中によほつちゅう」等の文
に依よつて法華ほっけ・涅槃ねはん齊等さいとうの義を存ぞんするのみに

非あらず、又勝劣しょうれつの義ぎを存ぞんするは此この才覚さいかくを學まなびて此この義ぎを存ぞんするか此この義ぎ若もし僻案びやくあんならば空海くわかいの義ぎも又僻見びやくけんなる可べきなり、天台てんだい・真言しんごんの書しよに云いく法華經ほけきやうと大日經だいにちきやうとは広略こうりやくの異いなり、略りやくとは法華經ほけきやうなり、大日經だいにちきやうと齊等さいとうの理りなりと雖いも印いん・真言しんごん之これを略りやくする故ゆゑなり、広ひろとは大日經だいにちきやうなり、極理ごくりを説とくのみに非あらず印いん・真言しんごんをも説とく故ゆゑなり、又法華經ほけきやうと大日經だいにちきやうとに同劣どうれつの二義にぎ有あり、謂いく・理同事劣りどうじれつなり、又二義にぎ有あり一ひとには大日經だいにちきやうは五時しごの撰しんなり是これ与よの義ぎなり、二ふたには大日經だいにちきやうは五時しごの撰しんに非あらず是これ奪だつの義ぎなり、又云いく法華經ほけきやうは譬たとえば裸形らぎやうの猛者もさの如ごとし大日經だいにちきやうは甲冑かちゆうを帶たいせる猛者もさなり等らと云いふ、又云いく印いん・真言しんごん無なきは其その仏ぶつを知しる可べからず等らと云いふ。

日蓮にちれん不審ふしんして云いく、何もを以もつて之これを知しる、理ほけきやうは法華經ほけきやうと大日經だいにちきやうと齊等さいとうなりと云いふ事を、答こたえて云いく疏じよと義ぎ釈しやく並なに慈覺じかく・智証ちしやう等らの所しよ釈しやくに依よる

なり。

求めて云く此等の三蔵大師等は又何を以て之を知るや・理は齊等の義なりと、答えて云く三蔵大師等をば疑う可からず等と云云、難じて云く、此の義・論義の法に非ざる上、仏の遺言に違背す髓に經文を出す可し、若し經文無くんば義分無かる可し如何、答う威儀形色經・瑜祇經・觀智儀軌等なり、文は口伝す可し、問うて云く法華經に印・真言を略すとは仏よりか經家よりか訳者よりか、答えて云く・或は仏と云い・或は經家と云い・或は訳者と云うなり、不審して云く仏より真言・印を略して法華經と大日經と理同事勝の義之有りといわば此の事何れの經文ぞや、文証の所出を知らず我意の浮言ならば之を用ゆ可からず、若し經家・訳者より之を略すといわば仏説に於ては何ぞ理同事勝の釈を作る可きや、法華經と大日經とは全躰齊なり能く

能く子細を尋ぬ可きなり。

私に日蓮云く、威儀形色經・瑜祇經等の文の如くば仏説に於ては

法華經に印・真言有るか、若し爾らば經家・訳者之を略せるが、

六波羅蜜經の如きは經家之を略す、旧訳の仁王經の如きは訳者之を

略せるか、若し爾らば天台・真言の理同事異の積は經家並に訳者の時

より法華經・大日經の勝劣なり、全く仏説の勝劣に非ず此れ天台・

真言の極なり、天台宗の義勢才覚の爲に此の義を難ず、天台・真言の

僻見此くの如し、東寺所立の義勢は且く之を置く僻見眼前の故なり、

抑天台・真言宗の所立・理同事勝に二難有り、一には法華經と

大日經と理同の義其の文全く之無し、法華經と大日經と先後如何、

既に義釈に二經の前後之を定め畢つて法華經は先き大日經は後なりと

云へり、若し爾らば大日經は法華經の重説なる流通なり、一法を兩度

之を説くが故なり若し所立の如くば法華經の理を重ねて之を説くを
大日經と云う、然れば則ち法華經と大日經と敵論の時は大日經の理
之を奪つて法華經に付く可し、
但し大日經の得分は但・印真言計りなり、印契は身業・真言は口業な
り身口のみにして意無くば印・真言有る可からず、手口等を奪つて
法華經に付けなば手無くして印を結び口無くして真言を誦せば虚空に
印・真言を誦結す可きか如何、裸形の猛者と甲冑を帶せる猛者との
譬の事、裸形の猛者の進んで大陣を破ると甲冑を帶せる猛者の退いて
一陣をも破らざるとは何れが勝るや、又猛者は法華經なり甲冑は
大日經なり、猛者無くんば甲冑何の詮か之有らん此れは理同の義を難
ずるなり、次に事勝の義を難ぜば法華經には印・真言無く大日經には
印・真言之有りと

云云、印契真言いんけいしんごんの有無うむに付て二經しやうれつの勝劣しやうれつを定むるに大日經だいにちきやうに印・真言しんごん有つて法華經ほけきやうに之これ無むき故ゆゑに劣ると云わば、阿含經あこんきやうには世界建立賢聖せかいこんりゆうけんせいの地位ちゐ是れ分明ふんみやうなり、大日經だいにちきやうには之これ無なし、彼の經あに有る事が此の經あに無なきを以て勝劣もつしやうれつを判ぜば大日經だいにちきやうは阿含經あこんきやうより劣るか、雙觀經そうかんきやう等には四十八願こ是れ分明ふんみやうなり大日經だいにちきやうに之これ無なし、般若經はんんにやきやうには十八空こ是れ分明ふんみやうなり大日經だいにちきやうには之これ無なし、此等これらの諸經しよきやうに劣ると云う可べきか、又印・真言しんごん無なくんば仏を知る可べからず等と云云、今反詰はんきつして云く理無なくんば仏有る可べからず、仏無なくんば印契真言いんけいしんごん一切徒然いっさいと成るべし。

彼難なんじて云く、賢聖けんせい並に四十八願等いをば印・真言しんごんに對す可べからず等と云云、今反詰はんきつして云く最上さいじやうの印真言しんごん之これ無なくば法華經ほけきやうは大日經だいにちきやう等よりも劣るか、若し爾しからば法華經ほけきやうには二乗作仏にじやうさぶつ・久遠実成くおんじつじやう・之これ有あり大日經だいにちきやうには之これ無なし印真言しんごんと二乗作仏にじやうさぶつ久遠実成くおんじつじやうとを對論たいろんせば天地雲泥てんちうんでい

なり、^{しよきよう}諸経に^{しんごん}印真言を^{さう}簡わざるに^{だいにちきよう}大日経に^{これ}之を説いて何の詮^あか有る
可^べき

や、二乗にじようも若し灰断けだんの執あたらたを改めずんば印・真言しんごんも無用むようなり、一代いちだいの聖教しょうきよう
に皆二乗みなにじようを永不成仏ようふじようぶつと簡い随きたつて大日經だいにちきようにも之これを隔へだつ、皆成仏じようぶつまでこ
そ無からめ三分これが二之ふたを捨て百分ひゃくが六十余分得道とくどうせずんば仏の大悲だいひ何
かせん、凡およそ理さんぜんの三千さんぜん之有これあつて成仏じようぶつすと云う上には何の不足ふそくか有る
可べき成仏じようぶつに於おいては☆なる仏・中風の覺者かくしゃは之有ある可べからず、之これを以もつて
案ずるに印・真言しんごんは規模きも無きか、又諸經しよきようには始成正覺しじようしやうかくの旨むねを談じて
三身相即さんじんそうそくの無始むしの古仏こぶつを顯あらわさず、本無今有ほんむこんぬの失有とがあれれば大日だいにち如来にやらいは
有名無実ゆうめいむじつなり、寿量品じゆりようぽんに此の旨むねを顯あらわす釈尊しやくそんは天の一月諸仏しよぶつ・菩薩ぼさつは
万水ばんすいに浮べる影えいなりと見えたり、委細いさいの旨むねは且しく之これを置く。

又印・真言しんごん無くんば祈☆有る可べからずと云云、是れ又もつ以もつての外ほかの
僻見びやくけんなり、過去かこ・現在げんざいの諸仏しよぶつ・法華經ほけきようを離はなれて成仏じようぶつす可べからず法華經ほけきよう
を以もつて正覺しやうかくを成たまじ給たまう、法華經ほけきようの行者ぎやうじやを捨て給たまわば諸仏しよぶつ還かえつて凡夫ばんぶ

と成り給うべし恩を知らざる故なり、又未来の諸仏の中の二乗も

法華經を離れては永く枯木敗種なり、今は再生の華果なり、他經の

行者と相論を為す時は華光如來・光明如來等は何れの方に付く可き

や、華嚴經等の諸經の仏・菩薩・人天乃至四惡趣等の衆は皆法華經に

於て一念三千・久遠実成の説を聞いて正覺を成ず可し何れの方に付く

可きや、真言宗等と外道

並に小乗・權大乘の行者等と敵対相論を為すの時は甲乙知り難し、

法華經の行者に對する時は竜と虎と師子と兎との闘いの如く諍論分

絶えたる者なり、慧亮腦を破りし時・次第位に即き相応加持する時・

真濟の惡靈伏せらるる等是なり、一向・真言の行者は法華經の行者

に劣れる証拠是なり、問うて云く義釈の意は法華經・大日經共に二乗

作仏・久遠実成を明かすや如何、答えて云く共に之を明かす、義釈に

云く此の經の心の実相は彼の經の諸法実相なり」と云云、又云く

本初は是れ寿命の義なり」等と云云。

問うて云く華嚴宗の義に云く華嚴經には二乗作仏・久遠実成之を明かす、天台宗は之を許さず、宗論は且く之を

置く人師を捨てて本經を存せば華嚴經に於ては二乗作仏・久遠実成の

相似の文之有りと雖も実には之無し、之を以て之を思うに義釈には

大日經に於て二乗作仏・久遠実成を存すと雖も実には之無きか如何、

答えて云く華嚴經の如く相似の文之有りと雖も実義之無きか、私に

云く二乗作仏無くば四弘誓願満足す可からず、四弘誓願満たずんば

又別願も満す可からず、総別の二願満せずんば衆生の成仏も有り

難きか能く能く意得可し云云。問うて云く大日經の疏に云く大日

如来は無始無終なり遙に五百塵点に勝れたりと如何、答う毘盧遮那の

無始無終なる事・華嚴・淨名・般若等の諸大乘經に之を説く独り
大日經のみに非ず、問うて云く若し爾らば五百塵点是際限有れば
有始有終なり無始無終は際限無し、然れば則ち法華經は諸經に破せ
らるるか如何、答えて云く他宗の人は此の義を存す天台一家に於て此
の難を會通する者有り難きか、今日日經並に諸大乘經の無始無終は
法身の無始無終なり三身の無始
無終に非ず、法華經の五百塵点是諸大乘經の破せざる伽耶の始成
之を破りたる五百塵点なり、大日經等の諸大乘經には全く此の義無
し、宝塔の涌現・地涌の涌出・弥勒の疑・寿量品の初の三誠四請・
弥勒菩薩領解の文に仏・希有の法を説きたもう昔より未だ曾つて聞か
ざる所なり」等の文是なり、大日經六卷並に供養法の卷金剛頂經・
蘇悉地經等の諸の真言部の經の中に未だ三止四請・三誠四請・二乗の

劫国名号・難信難解等の文を見ず。

問うて云く五乗の真言如何、答う未だ二乗の真言を知らず四諦・十
二因縁の梵語のみ有るなり、又法身平等に会すること有らんや。

問うて云く慈覺・智証等理同事勝の義を存す争か此等の大師等に
過ぎんや、答えて云く人を以て人を難ずるは仏の誠なり何ぞ汝仏の
制誠に違背するや但經文を以て勝劣の義を存す可し、難じて云く
末学の身として祖師の言に背かば之を難ぜざらんや、答う末学の祖師
に違する之を難ぜば何ぞ智証・慈覺の天台・妙樂に違するを何ぞ之を
難ぜざるや、問うて云く相違如何、答えて云く天台妙樂の意は已今当
の三説の中に法華經に勝れたる經之れ有る

可^べからず、若^もし法華經^{ほけきよう}に勝^{すぐ}れたる經^{これ}之^{あり}とわれば一宗^{しゅうぎ}の宗義^をを
壞^{やぶ}る可^べきの由^{これ}之^を存^{ぞん}す、若^もし大日經^{だいにちきよう}・法華經^{ほけきよう}に勝^{まさ}るといわば天台^{てんだい}・
妙樂^{みょうらく}の宗義^{しゅうぎ}忽^{たちまち}に破^{やぶ}る可^べきをや。

問^いうて云^いく天台^{てんだい}・妙樂^{みょうらく}の已^い今^{こん}当^{とう}の宗義^{しゅうぎ}証^{しょう}拠^こ經文^{きやうもん}に有^{あり}りや、答^{こた}えて
云^いく之^これ有^{ほけきよう}り法華經^{ほけきよう}・法師品^{ほうしほん}に云^いく我^{われ}が所說^{しよせつ}の經典^{きやうてん}は無量^{むりやうせんまん}千萬億^{せんまん}
已^{すで}に說^とき今^と說^とき當^{まさ}に說^とかん而^{しか}も其^その中^{うち}に於^{おい}て此^この法華經^{ほけきよう}最^もも為^なれ
難^{なん}信^{しん}難^{なん}解^げなり」等^と云^い云^い、此^この經文^{きやうもん}の如^{ごと}くんば五十余年^{しごねん}の釈迦^{しやか}所說^{しよせつ}の
一切^{いっさい}經^{きやう}の内^{うち}には法華經^{ほけきよう}は最^{さい}第一^{だいいち}なり、難^{なん}じて云^いく真言師^{しんごんし}の云^いく法華經^{ほけきよう}
は釈迦^{しやか}所說^{しよせつ}の一切^{いっさい}經^{きやう}の中^{うち}に第一^{だいいち}なり、大日經^{だいにちきよう}は大日如來^{だいにちにょらい}所說^{しよせつ}の經^{きやう}なり
と、答^{こた}えて云^いく釈迦^{しやか}如來^{にょらい}より外^{ぐわい}に大日如來^{だいにちにょらい}

閻浮提^{えんぶだい}に於^{おい}て八相成道^{じやうじやうどう}して大日經^{だいにちきよう}を說^とけるかは一、六波羅蜜經^{ろくはらみつきやう}に云^いく
過去^{かこ}・現^{げん}在^{ざい}並^{なら}に釈迦^{しやか}牟尼^{むに}仏^{ぶつ}の所說^{しよせつ}の諸經^{しよきやう}を分^わちて五藏^{ござう}と為^なし其^その中^{うち}の

第五の陀羅尼藏は眞言なりと眞言の經・釈迦如來の所説に非ずといわ

ば・經文に違す是二、我所説經典」等の文は釈迦如來の正直捨方便

の説なり大日如來の証・明分身の諸仏広長舌相の經文なり是三、五仏

の章尽く諸仏皆法華經を第一なりと説き給う是四、要を以て之を

言わば如來の一切の所有の法乃至皆此の經に於て宣示顯説す」等と云

云、此の經文の如くならば法華經は釈迦所説の諸經の第一なるのみに

非ず、大日如來・

十方無量諸仏の諸經の中に法華經第一なり、此の外一仏・二仏の

所説の諸經の中に法華經に勝れたるの經之有りと云わば信用す可から

ず是五、大日經等の諸の眞言經の中に法華經に勝れたる由の經文

之れ無し是六、仏より外の天竺・震旦・日本国の論師・人師の中に

天台大師より外の人師の所釈の中に一念三千の名目之無し、若し

いちねんさんぜん
一念三千を立てざれば性惡しやうあくの義ぎ之無これなし性惡しやうあくの義ぎ之無これなくくんば仏・菩薩ぼさつ
の普現色身ふげんしきしん・不動愛染等ふどうあいせんの降伏かうふくの形かたち・十界じゆつかいの曼荼羅まんだら・三十七尊等・
本無ほんむ今有こんぬの外道げどうの法ぽうに同じきか是七。

問いうて云いく七義しちぎの中に一一いちいちの難勢なんぜい之有これあり然しかりと雖いへども六義りくぎは且しばく之これを
置く第七だいしちの義ぎ如何いかん、華嚴けごんの澄觀ちやうかん・真言しんごんの一行等いっけう皆みな性惡しやうあくの義ぎを存ぞんす何なんぞ
諸宗しよしゆに此この義ぎ無なしと云いうや、答こたえて云いく華嚴けごんの澄觀ちやうかん・真言しんごんの一行は
天台所立てんたいしゆりゅうの義ぎを盜ぬすん

で自宗の義と成すか、此の事余処に勘えたるが如し、問うて云く
天台大師の玄義の三に云く 法華は衆經を總括す乃至舌口中に爛る
人情を以て彼の大虚を局ること莫れ」等と云云、釈籤の三に云く
法華宗極の旨を了せずして声聞に記する事相のみ華嚴・般若の融通
無礙なるに如かずと謂う諫曉すれども止まず舌の爛れんこと何ぞ
疑わん、乃至已今当の妙茲に於て固く迷えり舌爛れて止まざるは猶
為れ華報なり謗法の罪苦長劫に流る」等と云云、若し天台・妙樂の釈
実ならば南三・北七並に華嚴・法相・三論・東寺の弘法等・舌爛れんこ
と何の疑有らんや、乃至苦流長劫の者なるか、是は且く之を置く
慈覺・智証等の親り此の宗義を承けたる者・法華經は大日經より劣の
義存す可し、若し其の義ならば此の人人の舌爛口中苦流長劫」は
如何、答えて云く此の義は最上の難の義なり口伝に存り云云。

文永元年甲子ぶんえいがねんきのえね

七月二十九日しちにち之これをしる記す。

日蓮にちれん

花押かおう

◆ 一四 真言七重勝劣事 しんごん しやうれつ

文永七年 ぶんえい 四十九歳御作

与富木常忍 とき じやうにん

128P

一 法華 ほっけ 大日二經の七重勝劣の事。 だいにち しやうれつ

一 尸那扶桑の人師・二代聖教を判ずるの事。 しな ふそう にんし いちだいしやうきやう

一 鎮護国家の三部の事。 ちんここつか

一 内裏に三宝有り内典の三部に当るの事。 だいり さんぼう ないてん

一 天台宗に帰伏する人人の四句の事。 てんだいしゅう きふく ひとびと

一 今經の位を人に配するの事。 こんきやう

一 三塔の事。

一 日本国仏神の座席の事。 にほんこくぶっしん ざせき

一 法華・大日二經の七重勝劣の事。 ほっけ だいにち しやうれつ

已今当第一 いこんとうだいいち

本門第一 ほんもんだいいち

法華經第一 ほけきょうだいいち

乘王今汝に告ぐ・諸經の中に於いて最も其の上に在り」
やくおう なんじ しよきょう

迹門第二 しやくもん

涅槃經第二 ねはんぎょう

是經出世」
しめつせ

無量義經第三 むりやうぎきょう

次に方等十二部經・摩訶般若・華嚴海空を説く・
ほうとう まかはんにや けごんかいくう

眞実甚深・眞実甚深」
しんじつじんじん しんじつじんじん

華嚴經第四 けごんきょう

般若經第五 はんんにゃきょう

蘇悉地經第六

上に云く『三部の中に於て此の經を王と爲す』、中に

云く猶成就せずんば當に此の法を作す

べし決定として成就せん、所謂乞食・精勤・念誦・大

恭敬・巡八聖跡・禮拜行道なり、或は復大

般若經七遍・或は一百遍を転読す、下に云く『三

時に常に大乘般若等の經を讀め』

大日經第七 三国に未だ弘通せざる法門なり。

尸那・扶桑の人師一代聖教を判ずるの事

華嚴經第一

涅槃經第二

南北の義 晋・齊等五百余年・三百

六十余人光宅を以て長と爲す。

法華經第三

般若經第一 はんんにゃきようだいいち

法華經第一 ほけきようだいいち

涅槃經第二 ねはんぎよう

人なり。

華嚴經第三 けこんきよう

深密經第一 じんみつだいいち

法華經第二 ほけきよう

人なり。

般若經第三 はんんにゃきよう

華嚴經第一 けこんきようだいいち

法華經第二 ほけきよう

則そくてんこうこう天皇后ぎようの御宇の人なり。

吉蔵きちざうの義 梁代りようだいの人なり。

南岳なんがくの御弟子おんでしなり。

天台智者大師てんだいちしやだいしの御義おんぎ 陳隋ちんずい二代の

妙楽等みょうらく之これを用う。

玄奘げんじようの義 唐とうの始め太宗たいそうの御宇ぎようの

法蔵ほうざう・澄観等ちようかんの義 唐とうの半ば

涅槃經第三

だい にちきよう だいいち
大日經第一

ほけきよう
法華經第二

ぜんむい ふくこう
善無畏・不空等の義
とう
唐の末・玄宗の御宇の人な

り。

しよきよう
諸經第三

ほけきよう だいいち
法華經第一

ねはんぎよう
涅槃經第二

でんぎよう
伝教の御義人王五十代桓武の御宇及び平城・

さが
嵯峨の御代の人、
ひえいざん えんりやく
比叡山延暦寺なり。

しよきよう
諸經第三

だい にちきよう だいいち
大日經第一

けこんきよう
華嚴經第二

こうぼう
弘法の義
人王五十二代嵯峨・淳和二代の人、

とうじ こうや
東寺・高野等なり。

ほけきよう
法華經第三

だいになきようだいいち
大日經第一

ほけきよう
法華經第二

かんかく
感覺の義

ぜんむいをもつ
善無畏を以て師と為す、仁明・文徳・

せいわ
清和の三代、叡山講堂総持院なり。

しよきよう
諸經第三

ちしよう
智証之に同ず、園城寺なり。

ちんこくか
鎮護國家の三部の事

ほけきよう
法華經

みつしんきよう
密嚴經

ふくうさんぞう
不空三藏

だいいき
大曆に法華寺に之を置く、大曆二年

ごまでら
護摩寺を改めて法華寺を立つ、中央に法華經・

にんのうきよう
仁王經

きようじ
脇士に両部の大日なり。

ほけきよう
法華經・浄名經

しやうとくたいし
聖徳太子

すいこてんのう
人王三十四代推古天皇の御宇、

してんのう
四天王寺に之を置く摂津の国・難波郡・仏法最初

勝鬘經 しょうまん

の寺なり。

法華經 ほけきょう

金光明經 こんこうみょうきょう

伝教大師 でんぎょうだいし

人王五十代桓武天皇の御宇、比叡山

延暦寺止観院 えんりやうしがんいん

に之を置く、年分得度者一人は

仁王經 にんのうきょう

遮那業一人は止観業なり。

大日經 だいにちきょう

金剛頂經 こんこうぎょう

慈覚大師 じかくだいし

人王五十四代仁明天皇の御宇、

比叡山東塔 ひえいざんとう

の西総持院に之を置かる、御本尊は大日

蘇悉地經 そしつちきょう

如来、金蘇の二疏十四卷安置せらる。

内裏に三宝有り内典の三部に当るの事。

神璽 しんじ

国の手験なり。

宝劍

国敵を禦ぐ財なり、平家の乱の時に海に入りて見えず。

ないじどころ
内侍所

てんしょうだいじん
天照太神影を浮かべ給う神鏡と云う、左馬頭頼茂に打

たれて焼失す。
しょうしつ

てんだいしゅう
天台宗に帰伏する人人の四句の事

しんしんとも
一に身心俱に移る

さんろん
三論の嘉祥大師

けこん
華嚴の澄観法師

二に心移りて身移らず

しんごん
真言の善無畏・不空

けこん
華嚴の法蔵

ほつそう
法相の慈恩

三に身移りて心移らず

じかくだいし
慈覚大師

四に身心俱に移らず

智証大師
弘法大師

今經の位を人に配するの事

征夷將軍 鎌倉殿

無量義經

摂政

涅槃經

院

迹門十四品

天子

本門十四品

三塔の事

中堂

伝教大師の御建立

止観・遮那の二業を置く、御本尊は

薬師如来なり、延暦年中の御建立・主城の

丑寅に当る、桓武天皇の御崇重、天子

本命の道場と云う。

止観院 本院

天竺には靈鷲山と云い震旦には天台山

と云い扶桑には比叡山と云う、三国伝灯

の仏法此に極まれり。

講堂 慈覺大師の建立 総持院 鎮護国家の道場と云う、御本尊は大日

如来なり、承和年中の建立、止観院の西

に真言の三部を置き是を東塔

と云うなり、伝教の御弟子第三の座主なり。

西塔

釈迦堂 宝幢院 円澄の建立

伝教の御弟子なり。

観音堂 横川 慈覺の建立

楞嚴院

日本国仏神の座席の事

問う吾が朝には何れの仏を以て一の座と為し何れの法を以て一の座と為し何れの僧を以て一の座と為すや、答う観世音菩薩を以て一の座と為し真言の法を以て一の座と為し東寺の僧を以て一の座と為すなり。

問う日本には人王三十代に仏法渡り始めて後は山寺種種なりと雖も延暦寺を以て天子本命の道場と定め鎮護国家の道場と定む、然して日本最初の本尊釈迦を一の座と為す然らずんば延暦寺の薬師を以て一の座と為すか、又代代の帝王起請を書いて山の弟子とならんと定め給ふ故に法華經を以て法の一の座と為し延暦寺の僧を以て一の座と為す可し、何ぞ仏を本尊とせず菩薩を以て諸仏の一の座と為すや、答う尤も然る可しと雖も慈覺の御時・

叡山えいざんは真言しんごんになる東寺とうじは弘法こうぼうの真言しんごんを建立こんりゅうす故ゆえに共に真言師しんごんしなり、
共に真言師しんごんしなるが故ゆえに東寺とうじを本もととして真言しんごんを崇あがむ真言しんごんを崇あがむる故ゆえに
觀音かんのんを以もつて本尊ほんぞんとす真言しんごんには菩薩ぼさつをば仏ぶつにまされりと談だんずるなり、
故ゆえに内裏だいりに毎年正月八日の内道場とうじょうの法はふ・行ぎやうわる東寺とうじの一いちの長者ちやうじやを召め
して行ぎやうわる若もし一いちの長者ちやうじや暇有あひだらざれば二にの長者ちやうじや行ぎやううべし三までは及およ
ぼす可べからず云云、故ゆえに仏ぶつには觀音かんのん・法はふには真言しんごん・僧そうには東寺法師とうじほふしな
り、比叡山ひえいざんをば鬼門きもんの方かたとて之これを下くだす譬たとえば武士ぶしの如ごとしと云いうて崇あがめ
ざるなり故ゆえに日本国にほんこくは亡国ぼうこくとならんとするなり。

問とう神しんの次第しだい如何いかん、答こたう天照太神てんしょうたいじんを一いちの座なと為なし八幡大菩薩はちまんたいぼさつを第
二の座なと為なす是こゝより已下いかの神しんは三千二百三十二社さんぜんにひゃくさんじふになり。

◆一五

真言天台勝劣事

文永七年四十九歳御作

134P

問う何なる經論に依つて真言宗を立つるや、答う大日經・金剛
 頂經・蘇悉地經並びに菩提心論此の三經一論に依つて真言宗を立つ
 るなり、問う大日經と法華經と何れか勝れたるや、答う法華經は或
 は七重・或いは八重の勝なり大日經は七八重の劣なり、難じて云く驚
 いて云く古より今に至るまで法華より真言劣ると云う義都て之無し之
 に依つて弘法大師は十住心を立てて法華は真言より三重の劣と釈し
 給へり覺鑊は法華は真言の履取に及ばずと釈せり打ち任せては密教
 勝れ顯教劣るなりと世挙つて此を許す七重の劣と云う義は甚珍しき

者をや、答う真言は七重の劣と云う事珍しき義なりと驚かるるは理
なり、所以に法師品に云く「已に説き今説き當に説かん而も其の中に
於て此の法華經は最も為れ難信難解なり」云云、又云く「諸經の中に
於て最も其の上に在り」云云、此の文の心は法華は一切經の中に勝れた
り此其の一、次に無量義經に云く次に方等十二部經摩訶般若・華嚴
海空を説く」云云、又云く「實甚深甚深甚深なり」云云、此の文の心
は無量義經は諸經の中に勝れて甚深の中にも猶甚深なり然れども法華
の序分にして機もいまだなましき故に正説の法華には劣るなり此其二、
次に涅槃の九に云く「是の經の世に出ずるは彼の果實の利益する所多
く一切を安樂ならしむるが如く能く衆生をして仏性を見せしむ、法華
の中の八千の声聞記☆を得授するが如く大果實を成じ秋收冬藏して
更に所作無きが如し」云云、簸の一に云く「家の義意謂く二部同味な

れども然も涅槃ねはん尚劣る」云云、此の文の心は涅槃ねはん經も醍醐味だいごみ・法華經も醍醐味だいごみ同じ醍醐味だいごみなれども涅槃ねはん經は尚劣るなり法華經は勝れたりと云へり、涅槃ねはん經は既に法華の序分の無量義經よりも劣り醍醐味だいごみなるが故に華嚴經には勝たり此其三、次に華嚴經は最初頓說なるが故に般若ゆえにすくは勝れ涅槃ねはん經の醍醐味だいごみには劣れ

り此其四、次に蘇悉地經に云く、猶成ぜざらん者は、或は復大般若經を
転読すること七遍」云云、此の文の心は大般若經は華嚴經には劣り
蘇悉地經には勝ると見えたり此其五、次に蘇悉地經に云く、三部の中
に於て此の經を王と爲す」云云、此の文の心は蘇悉地經は大般若經に
は劣り大日經・金剛頂經には勝ると見えたり此其六、此の義を以て
大日經は法華經より七重の劣とは申すなり法華の本門に望むれば八
重の劣とも申すなり。

次に弘法大師の十住心を立てて法華は三重劣ると云う事は安然の
教時義と云う文に十住心の立様を破して云く五つの失有り謂く一に
は大日經の義釈に違する失・二には金剛頂經に違する失・三には守護
經に違する失・四には菩提心論に違する失・五には衆師に違する失な
り、此の五つの失を陳ずる事無くしてつまり給へり、然る間法華は眞言

より三重の劣と釈し給へるが大なる僻事なり謗法に成りぬと覺ゆ、次に
覺鑊の法華は眞言の履取に及ばずと舍利講の式に書かれたるは舌に
任せたる言なり証拠無き故に専ら謗法なる可し、次に世を挙げて密教
勝れ顯教劣ると此を許すと云う事是れ偏に弘法を信じて法を信ぜざ
るなり、所以に弘法をば安然和尚五失有りと云うて用いざる時は世間
の人は何様に密教勝ると思ふ可き抑密教勝れ顯教劣るとは何れの
經に説きたるや是又証拠無き事を世を挙げて申すなり、猶難じて云く
大日經等は是中央大日法身無始無終の如来法界宮・或は色究竟天
他化自在天にして菩薩の為に眞言を説き給へり法華は釈迦応身靈山に
して二乗の為に説き給へり・或は釈迦は大日の化身なりとも云へり、
成道の時は大日の印可を蒙て・字の觀を教えられ後夜に仏になるなり
大日如来だにもましまさずば争か釈迦仏も仏に成り給うべき此等の

道理を以て案ずるに法華より真言勝れたる事は云うに及ばざるなり、
答て云く依法不依人の故にい恥やうにも経説のやうに依る可きなり、
大日経は釈迦の大日となつて説き給へる経なり故に金光明と
最勝王経との第一には中央釈迦牟尼と云へり又金剛頂経の第一に
も中央釈迦牟尼仏と云へり大日と釈迦とは一つ中央の仏なるが故に
大日経をば釈迦の説とも云うべし大日の説とも云うべし、又毘盧遮那
と云う

は天竺てんじくの語大日ことばだいにちと云うは此の土の語なり・釈迦牟尼しやかむにを毘盧遮那びるしやなと名づくと云う時は大日だいにちは釈迦しやかの異名いみょうなり・加之しかのみならずくやく・旧訳の經に盧舍那るしやなと云うをば新訳しんやくの經には毘盧遮那びるしやなと云う然しかる間・新訳の經の毘盧遮那びるしやな法身ほっしんと云うは旧訳くやくの經の盧舍那るしやな他受用身たじゅうゆうしんなり、故ゆえに大日だいにち法身ほっしんと云うは法華經ほけきようの自受用報身じじゅうゆうほうしんにも及およばず況いはんやや法華經ほけきようの法身ほっしん如來にょらいにはまして及およぶ可べからず法華經ほけきようの自受用身じじゅうゆうしんと法身ほっしんとは真言しんごんには分ぶん・絶えて知らざるなり法報ほうほう不分ぶん二三莫弁てんだいしゅうと天台宗てんだいしゅうにもきはるるなり、随したがつて華嚴經けこんきようの新訳しんやくには・或あるは釈迦しやかと稱あづけ・或あるは毘盧遮那びるしやなと稱あくと説ゆえけり故だいにちに大日ただは只是しやか・釈迦いみょうの異名いみょうなりなにしに別の仏こころうとは意得こころう可べきや、次に法身ほっしんの説法せつぽうと云う事何いすれれの經の説ぞや弘法大師こうぼうだいしの二教論にけうろんには楞伽經りょうがきように依よつて法身ほっしんの説法せつぽうを立て給たまへり、其その楞伽經りょうがきようと云うはしやか釈迦しやかの説にして未顯真実みけんしんじつの權教ごんきようなり法華經ほけきようの自受用身じじゅうゆうしんに及およばざ

れば法身ほつしんの説法せつぽうとはいへどもいみじくもなし此の上に法は定んで説かず
報ほうは二義に通ずるの二身ふたみの有あるをば一向いっこう知らざるなり、故ゆえに大日だいにち法身ほつしん
の説法せつぽうと云うは定んで法華ほっけの他受用身たじゅうみに当るなり、次に大日だいにち無始むし無終むしゅう
と云う事す既に我昔わがむかし道場どうじょうに坐して四魔しぎを降伏こうふくす」とも宣のべべ又四魔しぎを
降伏こうふくし六趣ろくしゆを解脱げだつし一切いっさい智智ちちの明めいを満足まんぞくす」等云云、此等これらの文は大日だいにち
は始はじて四魔しぎを降伏こうふくして始はじて仏ぶつに成るとこそ見えたれ全く無始むしの仏ぶつとは
見えず、又仏ぶつに成りて何程なんぢやうを経る
と説かざる事は権經ごんきやうの故なり実經じつきやうにこそ五百塵点ごひゃくじんてん等をも説きたれ、
次に法界宮ほっかいとは色究竟天しきくきやうてんか又何いずれれの処ところぞや色究竟天しきくきやうてん・或あるは他化たけ
自在じざいてん天てんは法華宗ほっけしゅうには別教べつきやうの仏ぶつの説處せつしよと云うていみじからぬ事に申もうすな
り又菩薩ぼさつの爲ために説くとも高名かうめいもなし例せば華嚴經けこんきやうは一向いっこう菩薩ぼさつの爲ためなれ
ども尚なお法華ほっけの方便ほうべんとこそ云はるれ、只ただ仏ぶつ出世しゅつせの本意ほんいは仏ぶつに成り難がたき

二乗にじようの仏ぶつに成るを一大事いちだいじとし給たまへりされば大論だいろんには二乗にじようの仏ぶつに成るを密教みつぎようと云いひ二乗作仏にじようさぶつを説とかざるを顯教けんぎようと云いへり、此この趣しゆならば真言しんごんの三部經さんぶきようは二乗作仏にじようさぶつの旨むね無なきが故ゆゑに還かえつて顯教けんぎようと云いひ法華ほつけは二乗作仏にじようさぶつを旨むねとする故ゆゑに密教みつぎよう

と云いふ可べきなり、随したがつて諸仏秘密しよぶつひみつの藏ざうと説とけば子細しさいなし世間せけんの人密教みつぎよう勝まさると云いふはいかやうに意得こころうたるや但ただし若もし顯教けんぎように於おいて修行しゆぎようする者ものは久ひさく三大無數劫むしゆこつを經ふ」等らと云いえるは既すでに三大無數劫むしゆこつと云いふ故ゆゑに是三藏さんざう四阿含經あこんきようを

指して顯教けんきょうと云いいて權大乘ごんだいじようまでは云いわす況いはんやや法華實大乘ほつけだじようまでは都すべ
わざるなり。

次に釈迦しゃかは大日だいにちの化身けしん☆字おんじを教おしえられてこそ仏ぶつには成なりりたれと云いう

事こと此こは偏ひとえに六波羅蜜經ろくはらみつぎようの説せつなり、彼の經きやう一部いちぶ十卷じふせんは是これ釈迦しゃかの説せつなり
大日だいにちの説せつには非あらず是これ未顯真實みけんしんじつの權教ごんききやうなり隨したがつて成道じやうどうの相さうも三藏教さんざうきやう
の教主きやうしゆの相さうなり六年くぎよう苦行くぎやうの後の儀式ぎしきなるをや、彼の經説きやうせつの五味ごみを天台てんだい

は盜ぬすみ取とつて己おのれが宗しゆに立たつると云いう無実むじつを云いい付つけらるるは

弘法大師こうぼうだいしの大だいなる僻事ひがことなり、所以ゆゑんに天台てんだいは涅槃經ねはんききやうに依よつて立たて給たまへり全ぜん

く六波羅蜜經ろくはらみつぎようには依よらず況いはんやや天台てんだい死去しきよの後のち百九十年ひやくきゅうじゅうねんあつて貞元じやうげん四し

年ねんに渡わたる經きやうなり何なんとして天台てんだいは見給たまうべき不實ふじつの過とが弘法大師こうぼうだいしにあり、

凡およそ彼の經説きやうせつは皆みな未顯真實みけんしんじつなり之これを以もつて法華經ほつけきやうを下くださん事こと甚はなはだだ荒あ

量りやうなり、猶難なかなんじて云いく如何いかんに云いうとも印しんごん・真言まや・三摩耶尊形さんざぎやうを説せつく

事は大日經程法華經には之無く事理俱密の談は真言ひとりすぐれた
り、其の上真言の三部經は釈迦一代五時の撰屬に非ずされば弘法
大師の宝鑰には釈摩訶衍論を証拠として法華は無明の辺域・戲論の法
と釈し給へり・爰を以て法華劣り真言勝ると申すなり、答う凡そ印相
尊形は是れ權經の説にして実教の談に非ず設い之を説くとも權實
大小の差別淺深有るべし、所以に阿含經等にも印相有るが故に必ず
法華に印相尊形を説くことを得ずして之を説かざるに非ず説くまじ
ければ是を説かぬにこそ有れ法華は只三世十方の仏の本意を説いて其
形がとあるかうある

とは云う可からず、例せば世界建立の相を説かねばとて法華は俱舍よ
り劣るとは云う可からざるが如し、次に事理俱密の事・法華は理秘密・
真言は事理俱密なれば勝るとは何れの經に説けるや抑法華の理秘密

とは何様いかようの事ぞや、法華ほっけの理とは迹門しやくもん・開權顯實かいこんけんじつの理か其その理は眞言しんごん
には分絶ぶんぜつえて知らざる理なり、法華ほっけの事とは又久遠実成くおんじつじょうの事なり此の
事又眞言しんごんになし眞言しんごんに云う所の事理じりは未開會みかいえの權教ごんきょうの事理じりなり何ぞ
法華ほっけに勝る可まさきや、次に一代いちだい五時の撰しやうやく属

に非あらずと云う事是れ往古こより靜あらそいなり唐決とうけつには四教有るが故ゆえに方等部ほうとうぶ
に撰せつすと云へり、教時義きやうじぎには一切智智いっさい・一味いちみの開會かいえを説くが故ゆえに法華ほっけの
撰せつと云へり、二義の中に方等ほうとうの撰と云うは吉よきき義なり、所以ゆえんに一切智いっさい
智いちみ・一味いちみの

文を以て法華の撰と云う事甚だいはれなし彼は法開会の文にして全
く人開会なし争か法華の撰と云わるべき、法開会の文は方等・般若にも
盛んに談ずれども法華に等き事なし彼の大日經の始終を見るに四教の
旨具にあり尤も方等の撰と云う可し、所以に開權顯実の旨有らざれば
法華と云うまじ一向小乗三蔵の義無ければ阿含の部とも云う
可からず、般若畢竟空を説かねば般若部とも云う可からず、大小
四教の旨を説くが故に方等部と云わずんば何れの部とか云わん、又
一代五時を離れて外に仏法有りと云う可からず若し有らば二仏並出
の失あらん、又其の法を釈迦統領の国土にきたして弘む可からず、次
に弘法大師釈摩訶衍論を証拠と為て法華を無明の辺域戲論の法と
云う事はれ以ての外の事なり、釈摩訶衍論は竜樹菩薩の造なり、是は
釈迦如来の御弟子なり争か弟子の論を以て師の一代第一と仰せられし

法華經を押下して戲論の法等と云う可きや、而も論に其の明文無く
随つて彼の論の法門は別教の法門なり權經の法門なり是円教に及ば
ず又実教に非ず何にしてか法華を下す可き、其の上彼の論に幾の
經をか引くらんされども法華經を引く事は都て之無し權論の故なり、
地体弘法大師の華嚴より法華を下されたるは遙に仏意にはくひ違いた
る心地なり、用ゆべからず用ゆべからず。

日蓮 花押

◆ 一六 真言諸宗違目

文永九年五月五十一歳御作

139P

与富木常忍

土木殿等の人人御中

日蓮

空に読み覚えよ老人等は具に聞き奉れ早々に御免を蒙らざる
事は之を欺く可からず定めて天之を抑うるか、藤河入道を以て
之を知れ去年流罪有らば今年横死に値う可からざるか彼を以て
之を惟うに愚者は用いざる事なり、日蓮が御免を蒙らんと欲する
の事を色に出す弟子は不孝の者なり、敢て後生を扶く可からず、
各各此の旨を知れ。

眞言宗は天竺より之無し開元の始に善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵等・天台大師已証の一念三千の法門を盗んで大日經に入れて之を立て眞言宗と号す、華嚴宗は則天皇后の御宇に之を始む、澄觀等天台の十乗の觀法を盗んで華嚴經に入れて之を立て華嚴宗と号す、法相・三論は言うに足らず、禪宗は梁の世に達磨大師楞伽經等を以てす大乘の空の一分なり、其の學者等大慢を成して教外別伝等と稱し一切經を蔑如す天魔の所爲なり、淨土宗は善導等・觀經等を見て一分の慈悲を起し撰地二論の人師に向つて一向專修の義を立て畢んぬ、日本の法然之をあやまれり天台・眞言等を以て雜行に入れ末代不相応の思ひを爲して国中を誑惑して長夜に迷わしむ、之を明めし導師は但日蓮一人なるのみ。

涅槃經に云く 若し善比丘法を壞る者を見て置いて呵嘖し駭遣し

拳^{こしよ}処^せぜずんば^{まさ}当^{まさ}に知るべし是^この人は^{ぶつぽう}仏法^{ぶつぽう}の中の^{あだ}怨^{あだ}なり」等云云、漢^{かん}頂^{ちよう}
章^{しょう}安^{あん}大師^{だいし}云^いく^わ 仏^{ぶつ}法^{ぽう}を^え壊^え乱^{らん}するは^{ぶつぽう}仏法^{ぶつぽう}の中の^{あだ}怨^{あだ}なり慈^{なく}無^{なく}くして^{いつわ}詐^{いつわ}り親^{しん}
しむは^{すなわ}即^こち^こ是^これ^こ彼^{あだ}が^{あだ}怨^{あだ}なり^{あだ}彼^{ため}が^{ため}為^{ため}に^{ため}惡^{あく}を^{あく}除^{たく}くは^{すなわ}即^こち^こ是^これ^こ彼^{あだ}が^{あだ}親^{しん}なり」
等云云、法^{ほう}然^{ねん}が^{しや}捨^{しや}閉^{へい}閣^{かく}抛^{ぽう} 禪^{ぜん}家^け等^{とう}が^き教^{きやう}外^げ別^{べつ}伝^{でん} 若^もし^も 仏^{ぶつ}意^いに^い叶^いわ

ずんば日蓮にちれんは日本国にほんこくの人の為ためには賢父けんふなり聖親せいしんなり導師どうしなり、之を
言のたまわざれば一切衆生の為ために「無慈詐親むじさしん即是彼怨そくぜ」の重禍じゅうか脱だれ難がたし、
日蓮にちれん既に日本国にほんこくの王臣等おうしんの為ためには為彼除惡そくぜ即是彼親そくぜに当れり此の
国す既に三逆罪さんぎやくざを犯す天豈之あにこれを罰せざらんや、涅槃經ねはんぎように云く爾その時に
世尊せそん・地の少しの土を取つて之これを抓つまの上に置いて迦葉かしように告げて言のたまわく
是の土多きや十方世界じゅうっぽうせかいの地土多きや、迦葉菩薩かしようぼさつ・仏に白もうして言もうさく
世尊せそん抓つまの上の土は十方所有じゅうっぽうしいうの土の比ならざるなり○四重禁じゅうしんを犯おかし
五逆罪ごぎやくざいを作つて○一闍提いっせんたいと作つて諸の善根ぜんこんを断ことじ是の經を信ぜざるも
のは十方界じゅうっぽうかい所有しいうの地土ちどの如ごとし○五逆罪ごぎやくざいを作らず○一闍提いっせんたいと作らず
善根ぜんこんを断だんぜず是くかくの如ごとき等の涅槃經ねはんぎよう典を信ずるは抓つまの上の土の如ごとし」
等云云、經文きやうもんの如ごとくんば当世とうせ・日本国にほんこくは十方じゅうっぽうの地土ちどの如ごとく日蓮にちれんは抓つまの
上の土ちどの如ごとし。

法華經に云く、諸の無智の人有つて惡口罵詈等云云、法滅尽經に云く、吾・般泥☆の後・五逆濁世に魔道興盛なり魔沙門と作つて吾が道を壊乱す○惡人転た多くして海中の沙の如し劫尽きんとする時、日月転た短く善者甚だ少くして若しは一若しは二人等云云、又云く衆魔の比丘・命終の後・精神当に無択地獄に墮つべし等云云、今道隆が一党・良觀が一党・聖一が一党・日本国の一切の四衆等は是の經文に當るなり、法華經に云く、假使い劫焼に乾れたる草を担い負いて中に入つて焼けざらんも亦未だ難しとせず我が滅度の後に若し此の經を持つて一人の爲にも説かん是れ則ち為れ難し等云云、日蓮は此の經文に當れり、諸の無智の人有つて惡口罵詈等し及び刀杖を加うる者あらん等云云、仏陀記して云く後の五百歳に法華經の行者有つて諸の無智の者の爲に必ず惡口罵詈・刀杖瓦礫・流罪・死罪せられん

等云云、日蓮にちれんなく無くば釈迦しやか・多宝たほう・十方じゅうぽうの諸仏しよぶつの未来記みらいきは当まさに大妄語もうごなるべきなり。

疑うたがいつて云いわく汝なんじ当世とうせの諸人しよにんに勝まさることは一分爾いちぶんしかる可べし真言しんごん・華嚴けごん・三論さんろん・法相等ほつどうの元祖がんそに勝まさるとは豈あにに慢過慢まんかまんの者あに非あらずや過人法かじんぽうとは是これなり汝なんじ必かなじず無間むげん・大城だいじやうに墮おつ可べし、故ゆえに首楞嚴經しゆりやうこんぎやうに説いわいて云いわくたと響たえば窮人きゆうにん妄みだりに帝王ていおうと号なづして自みづら誅滅ちゆうめつを取とるが如ごとし況いわんや復また法王ほうおう如何なんぞ妄みだりに竊ぬすまん因地いんち直ちからざれば果うきよく紆曲まねを招まねかん」等云云、

涅槃經ねはんぎょう云いく「云何いかなる比丘びくか過人法かにんぼうに墮だする○未いまだ四沙門果しやもんを得ず
云何いかんぞ當まさに諸の世間の人をして我すは已すでに得たりと謂いわしむべき」等云
云、答えて云いく法華經ほけきょうに云いく「又大梵天王だいぼんてんのうの一切衆生の父いっさいしゅじょうの如ごとく」又
云いく此の經は○諸經しよきょうの中の主なり最も為れ第一だいいちなり能よく是この經典きやうてんを
受持じゆじすること有らん者は亦復またまた是かくの如ごとく一切衆生いっさいしゅじょうの中に於おいて亦また為れ
第一だいいちなり」等云云、伝教大師でんきやうだいしの秀句しゅうくに云いく「天台法華宗てんだいほつげしきやうの諸宗しよしゅうに勝すぐれ
たるは所宗しよしゅうの經に抛よるが故なり自讃じさん毀他きたならず庶ねがわくは有智うちの君子くんし經
を尋たずねて宗を定めよ」等云云、星の中に勝すぐれたる月・星月の中に勝すぐれた
るは日輪にちりんなり、小国しやうこくの大臣だいじんは大国たいこくの無官むかんより下る傍例ほうれいなり、外道げどうの五
通を得るより仏弟子ぶつでしの小乗しやうじやうの三賢さんけんの者の未いまだ一通を得ざるは天地猶てんちなお
勝まさる、法華經ほけきょうの外ほかの諸經しよきょうの大菩薩だいぼさつは法華ほつげの名字みやうじそく即すなはち凡夫ぼんぶより下れり
何なんぞ汝なんじ始めて之これを驚おどろかんや教に依よつて人の勝劣しやうれつを定む先ず經の勝劣しやうれつ

を知らずんば何ぞ人の高下を論ぜんや。

問うて云く汝法華經の行者為らば何ぞ天汝を守護せざるや、答えて云く法華經に云く惡鬼其の身に入る」等云云、首楞嚴經に云く修羅王有り世界を執持して能く梵王及び天の帝釈四天と權を請う此の阿修羅は變化に因つて有り天趣の所持なり」等云云。

能く大梵天王・帝釈・四天と戦う大阿修羅王有りて禪宗・念仏宗・律宗等の棟梁の心中に付け入つて次第に国主国中に遷り入つて賢人を失う、是くの如き大惡は梵釈も猶防ぎ難きか何に況んや日本守護の小神をや但地涌千界の大菩薩・釈迦・多宝・諸仏の御加護に非ざれば叶い難きか、日月は四天の明鏡なり諸天定めて日蓮を知りたまうか日月は十方世界の明鏡なり諸仏も定めて日蓮を知りたまうか、一分も之を疑う可からず、但し先業未だ尽きざるなり日蓮流罪に当れば

教主きようしゅ釈尊しやくそん衣えを以もて之これを覆おほいたまわんか、去年こぞ九月十二日の夜中には
虎口ここうを脱まぬかれたるか、必ず心の固かきに仮かりて神の守り即すなわち強し」等とは
是これなり、汝なんじ等ゆめゆめうたがい努うたがい疑うたがいうこと勿なれ決定けつじようして疑うたがい有ある可べからざる者な
り、恐きようきようきんげん恐きんげん謹言。

五月五日

日蓮 花押 かおう

此の書を以て諸人に触れ示して恨を残すこと勿れ。
もつしよにん うらみ なかれ。

土木殿

◆一七 真言見聞 しんごんけんもん

文永九年七月五十一歳御作 与三位

房日行 ぼうにちぎやう

142P

問う真言亡国とは証文何なる経論に出ずるや、答う法華誹謗
しんごん ぼうこく しょうもん いかに きやうろん ぼうこく だごくうたがい
正法向背の故なり、問う亡国の証文之無くば云何に信ず可きや、答
しょうぼうこうはい ぼうこく しょうもん これなく いかに べ
う謗法の段は勿論なるか若し謗法ならば亡国墮獄疑い無し、凡そ
ぼうぼう ぼうぼう も ぼうぼう ぼうこく だごくうたがい およ

謗法とは謗仏・謗僧なり三宝一体なる故なり是れ涅槃經の文なり、
爰を以て法華經には「即ち一切世間の仏種を斷ず」と説く是を即ち
一闡提と名づく涅槃經の一と十と十一とを委細に見る可きなり、罪に
輕重有れば獄に淺深を構えたり、殺生・偷盜等乃至一大三千世界の
衆生を殺害すれども等活黒繩等の上七大地獄の因として無間に墮つ
ることは都て無し、阿鼻の業因は經論の掟は五逆・七逆・因果撥無・
正法誹謗の者なり、但し五逆の中に一逆を犯す者は無間に墮つと雖も
一中劫を経て罪を尽して浮ぶ、一戒をも犯さず道心堅固にして後世を
願うと雖も法華に背きぬれば無間に墮ちて展転無數劫と見えたり、
然れば即ち謗法は無量の五逆に過ぎたり、是を以て國家を祈らんに
天下將に泰平なるべしや、諸法は現量に如かず承久の兵乱の時、
関東には其の用意もなし国主として調伏を企て四十一人の貴僧に仰せ

て十五壇の秘法ひほうを行はる、其その中に守護經しゆごの法はふを紫宸殿ししんでんにして御室始
めて行なはる七日にちに満ぜし日ひ・京方かみがた負け畢おほんぬ亡國ぼうこくの現証げんしように非あらずや、是
は僅わずに今生こんじやうの小事しょうじなり權教ごんきやう・邪法じゃほうに依よつて惡道あくどうに墮おちん事こと浅あさまし・かるべ
し。

問うごんきよう權教じやしゆう邪宗しやうもんの証文いかんは如何すで既にしんごんきよう真言教だいにかかくおうの大日ひほう覺王かくおうの秘法ひほうは
即身そくしんじようぶつ成仏おうちやうの奥藏おくざうなり、故ゆえに上下一同じやうげに是この法はふに歸かへりし天下てんが悉ことごとく大法だいふを
仰あおぐ海内かいないを静しづめ天下てんがを治おさむる事こと偏ひとえに真言しんごんの力ちからなり、權教ごんきよう・邪法じやほうと云いう
事い如何い、答こたう權教ごんきようと云いう事こと・四教しきよう含藏がんざう帶方便ほうべんの説せつなる經文きやうもんけんねん顯然けんねんなり、
然しかれば四味しきの諸教しよきように同おなじて久遠くおんを隠かくし二乗にじようを隔へだつ況いはんや尽形じんぎやうじゆ壽じゆの戒かい
等

を述しぶれば小乘しやうじようごんきよう權教ごんきようなる事こと疑うたがい無し、爰ここをを以もつて遣唐とうの疑問ぎもんに禪林ぜんりん寺じ
の広修くわしゆう・国清こくせい寺じの維ゆい☆の決判けつばん分明ふんみやうに方等ほうとう部の撰せんと云いうなり、疑うたがい
云いく經文きやうもんの權教ごんきようは且しばく之これを置おく唐決とうけつの事ことは天台てんだいの先德せんとく・円珍えんちん大師だいし
之これを破はす、大日だいにか經きやうの指歸しききに法華ほつげすら尚なお及およばず況いはんや自余じよの教きやうをや」云
云、既すでに祖師そしの所判しよはんなり誰たか之これに背そむく可べきや、決いに云いく道理どうり前ぜんの
如ごとし」依法えいふ不依ふえ人の意いなり但ただし此この釈ちやくを智証ちしやうの釈ちやくと云いう事こと不審ふしんなり、

其の故は授決集の下に云く 若し法華・華嚴・涅槃

等の經に望めば是れ撰引門」と云へり、広修維☆を破する時は法華尚

及ばずと書き授決集には是れ撰引門と云つて二義相違せり指歸が

円珍の作ならば授決集は智証の釈に非ず、授決集が実ならば指歸は

智証の釈に非じ、今・此の事を案ずるに授決集が智証の釈と云う事

天下の人皆之を知る上、公家の日記にも之を載せたり指歸は人多く

之を知らず公家の日記にも之無し、此を以つて彼を思うに後の人作つ

て智証の釈と号するが能く能く尋ぬ可き事なり、授決集は正しき

智証の自筆なり、密家に四句の五藏を設けて十住 心を立て論を引き

伝を三国に寄せ家家の日記と号し我が宗を嚴るとも皆是れ妄語胸臆の

浮言にして莊嚴己義の法門なり、所詮法華經は大日經より三重の

劣戲論の法にして釈尊は無明纏縛の仏と云う事・慥なる如来の金言

經文きやうもんを尋ぬ可たずし、証文しやうもん無くんば何と云うとも法華誹謗ほっけひぼうの罪過つみを免まぬかれず此この事・当家の肝心かんじんなり返す返す忘失もうしつする事勿なかれ、何いれの宗しゆにも正法誹謗しやうほうひぼうの失之これあ有り対論たいろんの時は但此ただこの一段いつだんに在り仏法ぶつぽうは自他宗じた・異いると雖いえども翫もてあそぶ本意ほんいは道俗貴賤どうやくきせん共に離苦得樂現當二世りくとくらくげんとうの爲ためなり、謗法ぼうぽうに成り伏あぐして惡道あくどうに墮おつ可べくば文殊もんじゆの智慧ちえ・富樓那ふるなの弁說べんぜつ一分いちぶんも無益むやくなり無間むげんに墮おつる程ほどの邪法じゃぽうの行人こつかにて国家こくかを祈き☆せんに將はた善事ぜんじを成なす可べきや、顯密對判けんみつたいはんの釈しほは且しからく之これを置おく華嚴けこんに法華劣ほっけると云う事こと能よく能よく思惟しゆいす

可きなり、華嚴經の十二に云く四十華嚴なり 又彼の所修の一切功德六分の一常に王に属す○是くの如く修及び造を障る不善所有の罪業六分の一還つて王に属す」文、六波羅蜜經の六に云く 若し王の境内に殺を犯す者有れば其の王便ち第六分の罪を獲ん偷盜・邪行及び妄語も亦復是くの如し何を以ての故に若しは法も非法も王為れ根本なれば罪に於いても福に於いても第六の一分は皆王に属するなり」云云、最勝王經に云く 悪人を愛敬し善人を治罰するに由るが故に他方の怨賊来り国人喪乱に遭わん」等云云、大集經に云く 若し復諸の刹利國王諸の非法を作し世尊の声聞の弟子を悩乱し若しは以て毀罵し刀杖もて打斫し及び衣鉢種種の資具を奪い若しは他の給施に留難を作す者有らば、我等彼をして自然に卒に他方の怨敵を起さしめ及び自の国土にも亦兵起・疫病・饑饉・非時風雨・鬭諍言訟せしめ又其の

王久しからずして復当に己が国を亡失すべからしむ」云云、大三界義に云く爾の時

に諸人共に聚りて衆の内に一の有徳の人を立て名けて田主と為して各所収の物六分の一を以て以て田主に貢輸す一人を以て主と為し政法を以て之を治む、茲に因つて以後・刹利種を立て大衆欽仰して恩率土に流る復・大三末多王と名づく」已上俱舍に依り之を出すなり。

顯密の事、無量義經十功德品に云く 第四功德の下」深く諸仏秘密の法に入り演説す可き所違無く失為し」と、抑大日の三部を密説と云ひ法華經を顯教と云う事金言の所出を知らず、所詮真言を密と云うは是の密は隱密の密なるか微密の密なるか、物を秘するに二種有り一には金銀等を蔵に籠むるは微密なり、二には疵・片輪等を隱すは隱密なり、然れば即ち真言を密と云うは隱密なり其の故は始成と説く

故に長寿を隠し二乗を隔つる故に記小無し、

此の二は教法の心髓・文義の綱骨なり、微密の密は法華なり、然れば
即ち文に云く四の卷法師品に云く、藥王此の經は是れ諸仏秘要の藏な
り「云云、五の卷安樂行品に云く、文殊師利・此の法華經は諸仏如来
秘密の藏なり諸經の中に於て最も其の上に在り」云云、寿量品に云く
如来秘密神通之力」云云、如来神力品に云く如来一切

ひようのぞう
秘要之藏「云云、しかのみならず真言の高祖竜樹菩薩・法華經を秘密
と名づく二乗作仏有るが故にと釈せり、次に二乗作仏無きを秘密とせ
ずば真言は即ち秘密の法に非ず、所以は何ん大日經に云く、仏不思議
真言相道の法を説いて一切の声聞・縁覺を共にせず亦世尊普く一切
衆生の爲にするに非ず」云云、二乗を隔つる事前四味の諸教に同じ、
随つて唐決には方等部の撰と判ず經文には四教含藏と見えたり、大論
第百卷に云く第九十品を釈す、問うて曰く更に何れの法か甚深にして
般若に勝れたる者有つて般若を以て阿難に囑累し而も余の經をば菩薩
に囑累するや、答えて曰く般若波羅蜜は秘密の法に非ず而も法華等の
諸經に阿羅漢の受決作仏を説いて大菩薩能く受用す譬えば大藥師の
能く毒を以て藥と爲すが如し」等云云、玄義の六に云く、譬えば良医の
能く毒を變じて藥と爲すが如く二乗の根敗反た復すること能わず之を

名づけて毒と為す今經に記を得るは即ち是れ毒を變じて藥と為す、
故に論に云く余經は秘密に非ずとは法華を秘密と為せばなり、復本地
の所説有り諸經に無き所・後に在つて當に広く明すべし」云云、籤の六
に云く第四に引証の中論に云く等と言うは大論の文証なり秘密と
言うは八經の中の秘密には非ず但是れ前に未だ説かざる所を秘と為し
開し已れば外無きを密と為す」文、文句の八に云く万等・般若に実相
の藏を説くと雖も亦未だ五乗の作仏を説かず亦未だ發迹顯本せず
頓漸の諸經は皆未だ融會せず故に名づけて秘と為す」文、記の八に
云く「天論に云く法華は是れ秘密諸の菩薩に付すと、今の下の文の
如きは下方を召すに尚本眷屬を待つ驗けし余は未だ堪えざることを」
云云、秀句の下に竜女の成仏を釈して「身口密なり」と云えり云云、
此等の經論釈は分明に法華經を諸仏は最第一と説き秘密教と定め

給へるを經論きやうろんに文証もんしやうも無き妄語もうごを吐き法華ほつけを顯教けんきやうと名づけて之を
下し之を謗ぼうず豈あに大謗法ほうぼうに非あらずや。

そもそも

抑も唐朝とうあしたの善無畏ぜんむい・金剛智等こんごうち・法華經ほけきやうと大日經だいにちきやうの兩經りやうきやうに

りどうじしやう

理同事勝りどうじしやうの釈つを作るは梵華ぼんかり兩國りやうれつ共に勝劣しやうれつか、法華經ほけきやうも天竺てんじくには十六

里ほうやうの宝藏あれに有れば無量むりやうの事有れども流沙りゅうしゃ・葱嶺そうれい等の險難けんなん・五万八千里せんり

じゅうまん

・十万里ろじの路次りやう容易いならざる間・枝葉しやうをば之これを略せり、此等これらは併なが

やくしや

ら訳者いぎやうの意樂したに随したがつて広を好み略を惡にくむむ人も有り略を好み広を惡にくむむ人

しや

も有り、然しかれば即すなわち玄奘げんじやうは広を好んで四十卷はんにやきやうの般若經はんにやきやうを六百卷いんけいと成

らじゅうさんぞう

し、羅什らじゅうさんぞう三藏さんぞうは略を好んで千卷だいろんの大論だいろんを百卷らじゅうしややくに縮めたり、印契いんけい・真言しんごんの

まさ

勝まさると云う事はこれを以もつて弁わえ難がたし、羅什らじゅうしややく所訳ほけきやうの法華經ほけきやうには是これを宗とせ

ふくうさんぞう

ず不空三藏ふくうさんぞうの法華ほつの儀軌ぎきには印・真言しんごん之有これあり、仁王經にんのうきやうも羅什らじゅうの所訳しややくに

しんごんこれな

は印・真言しんごん之無ふくうし不空ふくう所訳しややくの經これには之これを副そえたり知んぬ是これ訳者やくしやの

意樂なりと、其の上法華經には「爲說実相印」と説いて合掌の印之有
り、譬喩品には「我が此の法印世間を利益せんと欲するが爲の故に説
く」云云、此等の文如何只広略の異なるか、又舌相の言語皆是れ真言
なり、法華經には「洎生の産業は皆実相と相違背せず」と宣べ、亦
是れ前仏經中に説く所なり」と説く此等は如何、真言こそ有名無実の
真言未顕真実の權教なれば成仏得道跡形も無く始成を談じて久遠無
ければ性徳本有の仏性も無し、三乗が仏の出世を感ずるに三人に二
人を捨て三十人に二十人を除く、「皆令入仏道」の仏の本願満足す
べからず十界互具は思いもよらずまして非情の上の色心の因果争か説
く可きや。

然らば陳隋二代の天台大師が法華經の文を解りて印契の上に立て
給へる十界互具・百界千如・一念三千を善無畏は盗み取つて我が宗の

骨目とせり、彼の三蔵は唐の第七玄宗皇帝の開元四年に来る如来入滅より一千六百六十四年か、開皇十七年より百二十余年なり何ぞ百二十余年已前に天台の立て給へる一念三千の法門を盗み取つて我が物とするや、而るに己が依經たる大日經には衆生の中に機を簡ひ前四味の諸經に同じて二乗を簡へり、まして草木成仏は思いもよらずされば理を云う時は盜人なり、又印契真言何れの經にか之を簡える若し爾れば大日經にを説くとも規模ならず、一代に簡われ諸經に捨てられたる二乗作仏は法華に限れり、二乗は無量無辺劫の間・千二百余尊の印契真言を行ずとも法華經に値わずんば成仏す可からず、印は手の用、真言は口の用なり其の主が成仏せざれば口と手と別に成仏す可きや、一代に超過し三説に秀でたる二乗の事をば物とせず事に依る時は印真言

を尊む者・劣謂勝見の外道なり。

無量義經說法品に云く 四十余年・未顯真實」文、一の卷に云く

世尊は法久くして後要ず当に真實を説きたもうべし」文、又云く

「大事の因縁の故に世に出現したもう」文、四の卷に云く 棄王今汝

に告ぐ我が所説の諸經あり而も此の經の中に於て法華最も第一なり」

文、又云く 已に説き今説き當に説かん」文、宝塔品に云く 我仏道を

為つて無量の土に於て始より今に至るまで広く諸經を説く而も其の中

に於て此の經第一なり」文、安樂行品に云く 此の法華經は是れ諸の

如来第一の説なり諸經の中に於て最も為甚深なり」文、又云く 此の

法華經は諸仏如来秘密の藏なり諸經の中に於て最も其の上に在り」

文、藥王品に云く 此の法華經も亦復是くの如し諸經の中に於て

最も為其の上なり」文、又云く 此の經も亦復是くの如し諸經の中に

於て最も為其の尊なり」文、又云く此の經も亦復是の如し諸經の中の王なり」文、又云く此の經も亦復是の如し一切の如來の所説若しは菩薩の所説若しは聲聞の所説諸の經法の中に最為第一なり」等云云、玄の十に云く又已今當の説に最も為れ難信難解前經は是れ已説なり」文、秀句の下に云く謹んで案ずるに法華經・法師品の偈に云く藥王今汝に告ぐ我が所説の諸經あり而も此の經の中に於て法華最も第一なり」文、又云く當に知るべし已説は四時の經なり」文、文句の八に云く今法華は法を論ずれば」云云、記の八に云く鐸に當る」云云、秀句の下に云く明かに知んぬ他宗所依の經は是れ王中の王ならず」云云、釈迦・多宝・十方の諸仏・天台・妙樂・伝教等は法華經は眞実・華嚴經は方便なり、未だ眞實を顯さず正直に方便を捨てて余經の一偈をも受けざれ」若し人信ぜずして乃至其の人・命終して阿鼻獄

に入らん」と云云。

弘法大師は法華は戲論・華嚴は眞実なり」と云云、何れを用う可きや、宝鑰に云く此くの如き乗乗は自乗に名を得れども後に望めば戲論と作る」文、又云く謗人謗法は定めて阿鼻獄に墮せん」文、記の五に云く故に

真相の外は皆戲論と名づく」文、梵網經の疏に云く第十に謗三宝戒
亦は謗菩薩戒と云い・或は邪見と云う謗は是れ乖背の名なり☆て是れ
解・理に称わらず言は實に当らずして異解して説く者を皆名づけて謗と
為すなり」文、玄の三に云く「文証無き者は悉く是れ邪偽・彼の外道に
同じ」文、弘の十に云く今の人・他の所引の經論を信じて謂いて憑み
有りと爲して宗の源を尋ねず謬誤何ぞ甚しき」文、守護章上の中に
云く若し所説の經論明文有らば權實・大小・偏円・半満を簡択す
可し」文、玄の三に云く「広く經論を引いて己義を莊嚴す」文。

抑弘法の法華經は眞言より三重の劣・戲論の法にして尚華嚴にも
劣ると云う事大日經六卷に供養法の卷を加えて七卷・三十一品・或は
三十六品には何れの品何れの卷に見えたるや、しかのみならず
蘇悉地經三十四品・金剛頂經三卷・三品・或は一巻に全く見えざる

所なり、又大日經並びに三部の秘經には何れの巻何れの品にか
じゅつかいごくこれあ
十界互具之有りや都て無きなり、法華經には事理共に有るなり、所謂
くおんじつじょう
久遠実成は事なり二乗作仏は理なり、善無畏等の理同事勝は臆説な
り信用す可からざる者なり。

凡そ真言の誤り多き中

一、十住心に第八法華・第九華嚴・第十真言云云何れの經論に出で
じゅうじゅう
たるや。

一、善無畏の四句と弘法の十住心と眼前違目なり何ぞ師弟敵対する
ぜんむい
や。

一、五藏を立つる時・六波羅蜜經の陀羅尼藏を何ぞ必ず我が家の真言
ろくはらみつぎょう
と云うや。

一、震旦の人師争つて醍醐を盗むと云う年紀何ぞ相違するや、其の故
しんたん
ねんきなん
そうい
そのゆえ

は開皇十七年より唐の徳宗の貞元四年戊辰の歳に至るまで百九十二年なり何ぞ天台入滅百九十二年の後に渡れる六波羅蜜經の醍醐を盗み給う可きや顕然の違目なり、若し爾れば謗人謗法定墮阿鼻獄といふは自責なるや。

一、弘法の心經の秘鍵の五分に何ぞ法華を撰するや能く能く尋ぬ可き事なり。

眞言七重難。

一、眞言は法華經より外に大日如來の所説なり云云、若し爾れば大日の出世成道説法利生は釈尊より前か後か如何、対機説法の仏は八相作仏す父母は誰れぞ名字は如何に娑婆世界の仏と云はば世に二仏無く国に二主無きは聖教の通判なり、涅槃經の三十五の卷を見るべきなり、若し他土の仏なりと云はば何ぞ我が主師親の釈尊を蔑にして他方・疎縁の仏を崇むるや不忠なり不孝なり逆路伽耶陀なり、若し一体と云はば何ぞ別仏と云うや若し別仏ならば何ぞ我が重恩の仏を捨つるや、唐堯は老い衰へたる母を敬ひ虞舜は頑なる父を崇む是「一」、六波羅蜜經に云く所謂過去無量・伽沙の諸仏・世尊の所説の正法・我今亦当に是の如き説を作すべし所謂八万四千の諸の妙法蘊なり○而も阿難陀等の諸大弟子をして一たび耳に聞いて皆悉く憶持せし

む」云云、此の中の陀羅尼藏を弘法我が真言と云える若し爾れば此の
陀羅尼藏は釈迦の説に非ざるか此の説に違す是二、凡そ法華經は無量
千万億の已説・今説・當説に最も第一なり、諸仏の所説菩薩の所説
声聞の所説に此の經第一なり諸仏の中に大日漏る可きや、法華經は
正直無上道の説・大日等の諸仏長舌を梵天に付けて真実と示し給う
是三、威儀形色經に「身相黃金色にして常に満月輪に遊び定慧智拳の
印法華經を証誠す」と、又五仏章の仏も法華經第一と見えたり是四、
要を以て之を云わば如来の一切所有の法乃至皆此の經に於て宣示
顯説す」云云、此等の經文は釈迦所説の諸經の中に第一なるのみに
非ず三世の諸仏の所説の中に第一なり此の外一仏二仏の所説の經の
中に法華經に勝れたる經有りと云はば用ゆ可からず法華經は三世
不壞の經なる故なり是五、又大日經等の諸經の中に法華經に勝る

経文之無しきようもんこれな是六、釈尊御入滅しやくそん にゆうめつより已後いご天竺てんじくの論師ろんし二十四人の付法蔵ふほうぞう
其その外大権の垂迹すいじやく震旦しんたんの人師にんし南三なんざん・北七ほくひちの十師さんろん三論ほつそう・法相ほうそうの先師せんしの中
に天台宗てんだいしゅうより外に十界互具じゅつかいごぐ・百界千如ひゃつかいせんによ・一念三千いちねんさんぜんと談だんずる人之無これなし、
若もし一念三千いちねんさんぜんを立てざれば性惡しょうあくの義ぎ之無これなし性惡しょうあくの義ぎ無なくば仏ぼつ・菩薩ぼさつ
の普現色身真言ふげんしきしんごん兩界の漫荼羅まんだら五百七百の諸尊しよそんは本無ほんむ今有こんぬの外道げどうの法に
同ぜんか、若もし

十界互具・百界・千如を立てば本経何れの経にか十界皆成の旨之を説けるや、天台円宗見聞の後・邪智莊嚴の為に盗み取れる法門なり、才芸を誦し浮言を吐くには依る可からず正しき経文金言を尋ぬ可きなり是七。

涅槃經の三十五に云く我処処の經の中に於て説いて言く一人出世すれば多人利益す一国土の中に二の転輪王あり一世界の中に二仏出世すといわば是の処有ること無し」文、大論の九に云く「十方恒河沙の三千大千世界を名づけて一仏世界と為す是の中に更に余仏無し実には一りの釈迦牟尼仏なり」文、記の一に云く世には二仏無く国には二主無し一仏の境界には二の尊号無し」文、持地論に云く世に二仏無く国に二主無く一仏の境界に二の尊号無し」文。

七月日

日蓮 花押

◆一八 蓮盛抄

建長七年 三十四歳御作

150P

禪宗云く涅槃の時・世尊座に登り拈華して衆に示す迦葉・破顔微笑
せり、仏の言く吾に正法眼蔵・涅槃の妙心・実相無相・微妙の法門有
り文字を立てず教外に別伝し摩訶迦葉に付属するのものと、問うて云く
何なる経文ぞや、禪宗答えて云く大梵天王問仏決疑經の文なり、問
うて云く件の経何れの三蔵の訳ぞや貞元・開元の録の中に曾つて此の
経無し如何、禪宗答えて云く此の経は秘經なり故に文計り天竺より
之を渡す云云、問うて云く何れの聖人何れの人師の代に渡りしぞや
跡形無きなり此の文は上古の録に載せず中頃より之を載す此の事

禪宗ぜんしゅうの根源こんげんなり尤もつとも古録ころくに載のすべし知しんぬ偽文ぎぶんなり、禪宗ぜんしゅう云いく
涅槃經ねはんぎょうの二にに云いく我わ今け所有しやうの無上むじやうの正法しやうぽう悉ことく以もて摩訶迦葉まかしょうに付属ふぞく
す」云云此いの文如い何かん、答こえて云いく無上むじやうの言いは大乘だいじやうに似にたりと雖いも是これ
小乘しょうじやうを指しすなり外道げどうの邪法じゃぽうに對たいすれば小乘しょうじやうをも

しょうほう 正法といはん、例せば大法東漸と云えるを妙樂大師解釈の中に通じて
ぶつぎょう 仏教を指す」と云いて大小・権実をふさねて大法と云うなり云云、
げどう 外道に対すれば小乗も大乘と云われ下臈なれども分には殿と云はれ
じょうろう 上臈と云はるるがごとし、涅槃經の三に云く 若し法宝を以て阿難
および諸の比丘に付属せば久住を得じ何を以ての故に一切の声聞及び
大迦葉は悉く当に無常なるべし彼の老人の他の寄物を受くるが如し、
かく ゆえ まさ むじょう 是の故に応に無上の仏法を以て諸の菩薩に付属すべし諸の菩薩は善能
もんどう 問答するを以て是くの如きの法宝則ち久住することを得・無量千世
ぞうやくしじょう 増益熾盛にして衆生を利安せん彼の壮なる人の他の寄物を受くるが
ごと 如し是の義を以ての故に諸大菩薩乃ち能く問うのみ」云云、大小の
ふぞくそ 付属其れ別なること分明なり、同經の十に云く「汝等・文殊当に四衆
ため 爲に広く大法を説くべし今・此の經法を以て汝に付属す乃至迦葉・

阿難等も来らば復当に是くの如き正法を付属すべし」云云故に知んぬ
文殊迦葉に大法を付属すべしと云云、仏より付属する処の法は小乗
なり悟性論に云く、人心をさとる事あれば菩提の道を得る故に仏と名
づく「菩提に五あり何れの菩提ぞや得道又種種なり何れの道ぞや余經
に明す所は大菩提にあらず又無上道にあらず經に云く四十余年
未顕真実」云云。

問うて云く法華は貴賤男女何れの菩提の道を得べきや、答えて云く
乃至一偈に於ても皆成仏疑い無し」云云、又云く正直に方便を捨
て但無上道を説く」云云、是に知んぬ無上菩提なり須臾も之を聞いて
即ち阿耨菩提を究竟することを得るなり」此の菩提を得ん事須臾も此
の法門を聞く功德なり、問うて云く須臾とは三十須臾を一日一夜と云
う須臾聞之」の須臾は之を指すか如何、答う件の如し天台止觀の二に

云く須臾も廃すること無かれ」云云、弘決に云く暫くも廃することを許さざる故に須臾と云う」故に須臾は刹那なり。

問うて云く本分の田地にもとづくを禪の規模とす、答う本分の田地とは何者ぞや又何れの經に出でたるぞや法華經こそ人天の福田なればむねと人天を教化し給ふ故に仏を天人師と号す此の經を信ずる者は己身の仏を見るのみならず過・現・末の三世の仏を見る事・淨頗梨に向ふに色像を見るが如し、經に云く又淨明鏡に悉く諸の色像を見るが如し」云云。

禪宗云く是心即仏・即身是仏と、答えて云く經に云く「心は是れ第一の怨なり此の怨・最も惡と為す此の怨・能く人を縛り送つて閻羅の処に到る汝独り地獄に焼かれて惡業の為に養う所の妻子兄弟等・親屬も救うこと能わじ」云云、涅槃經に云く願つて心の師と作つて心

を師とせざれ」云云、愚癡無懺の心を以て即心即仏と立つ豈未得謂得、
未証謂証の人に非ずや。

問う法華宗の意如何、答う經文に眞三十二相乃是眞実滅」云云、

・或は速成就仏身」云云、禪宗は理性の仏を尊んで己れ仏に均しと

思ひ増上慢に墮つ定めて是れ阿鼻の罪人なり、故に法華經に云く

「増上慢の比丘は將に大坑に墜ちんとす」禪宗云く毘盧の頂上を、

むと、云く毘盧とは何者ぞや若し周遍法界の法身ならば山川大地も

皆是れ毘盧の身土なり是れ理性の毘盧なり、此の身土に於ては狗野干

の類も之を☆む禪宗の規模に非ず若し實に仏の頂を☆まなか梵天

も其の頂を見ずと云えり薄地争でか之を☆む可きや、夫れ仏は一切

衆生に於いて主師親の徳有り若し恩徳広き慈父を☆まは不孝逆罪

の大愚人・惡人なり、孔子の典籍尚以て此の輩を捨つ況んや如来の

しょうほう 正法をや豈此の邪類邪法を讃めて無量の重罪を獲んや云云、在世の
かしよう 迦葉は頭頂礼敬と云う滅後の閻禪は頂上を☆むと云う恐る可し。

ぜんしゅういわ 禪宗云く教外別伝・不立文字、答えて云く凡そ世に流布の教に三種

を立つ、一には儒教此れに二十七種あり、二には道教此れに二十五家

あり、三には十二分教天台宗には四教八教を立つるなり此等を教外と

立つるか、医師の法には本道の外を外経師と云う人間の言には姓のつづ

かざるをば外戚と云う仏教には経論にはなれたるをば外道と云う、

ねはんぎよう 涅槃經に云く 君し仏の所説に順わざる者有らば当に知るべし是の人は

是れ魔の眷属なり」云云、弘決

九に云く「法華已前は猶是れ外道の弟子なり」云云、禪宗云く
仏祖不伝云云、答えて云く然らば何ぞ西天の二十八祖東土の六祖を立
つるや、付屬摩訶迦葉の立義已に破るるか自語相違は如何、禪宗云く
向上の一路は先聖不伝云云、答う爾らば今の禪宗も向上に於ては
解了すべからず若し解らずんば禪に非ざるか凡そ向上を歌つて以て
☆慢に住し未だ妄心を治せずして見性に奢り機と法と相乖くこと此
の責尤も親し旁がた化儀を妨ぐ其の失転多し謂く教外と号し
剩さえ教外を学び文筆を嗜みながら文字を立てず言と心と相応せず
豈天魔の部類外道の弟子に非ずや、仏は文字に依つて衆生を度し給う
なり、問う其の証拠如何、答えて云く涅槃經の十五に云く願わくは
諸の衆生悉く皆出世の文字を受持せよ」文、像法決疑經に云く「文字
に依るが故に衆生を度し菩提を得」云云、若し文字を離れば何を以て

か仏事とせん禪宗は言語を以て人に示さざらんや若し示さずといはば
南天竺の達磨は四巻の楞伽經に依つて五巻の疏を作り慧可に伝うる
時・我漢地を見るに但此の經のみあつて人を度す可し汝此れに依つて
世を度す可し云云、若し爾れば猥に教外別伝と号せんや、次に不伝の
言に至つては冷煖二途・唯自覺了と云つて文字に依るか其れも相伝の
後の冷煖自知なり是を以て法華に云く・惡知識を捨て善友に親近せよ」
文、止觀に云く・師に値わざれば邪慧日に増し生死月に甚し稠林に
曲木を曳くが如く出づる期有こと無けん」云云、凡そ世間の沙汰尚
以て他人に談合す況んや出世の深理寧ろ輒く自己を本分とせんや、
故に經に云く・近きを見る可からざること人の睫の如く遠きを見る
可からざること空中の鳥の跡の如し」云云、上根・上機の坐禪は且く
之を置く当世の禪宗は瓮を蒙つて壁に向うが如し、經に云く・冒冥に

して見る所無し大勢たいせいの仏お及び断苦だんくの法を求めず深く諸もろもろの邪見じゃけんに入つて
苦もを以て苦もを捨てんと欲ほす」云云、弘決くけつに云く世間せけんの顯語けんご尚なお識しらず
況いはんや中道ちゅうどうの遠理おんりをや円常えんじょうの密教みつぎょう寧ろ当まさに識しる可べけんや」云云、
当世とうせの禪者ぜんしや皆是みなこれ大邪見じゃけんの輩やからなり、就な中なか三惑さんかく未断みだんの凡夫ぼんぶの語録ごろくを
用もちいて四智えんみょう円明えんみょうの如来にょらいの言教げんきょうを輕かろんずる返かへす返かへす過あやてる者ものか、疾はの
前に藥きなし機きの前に教きょうなし等覺とうかくの菩薩ぼさつすら尚なお教きょうを用もちい

き底下ていげの愚人ぐにんなん何ぞ經を信ぜざる云云、是これを以て漢土かんどに禪宗ぜんしゅう興ぜしかば其その国たちま忽たちまちに亡びき本朝ほんちようの滅べす可べき瑞相ずいそうに闇証あんしようの禪師ぜんし充滿じゅうまんす、止觀しがんに云く此これ則すなわち法滅ほうめつの妖怪ようかいなり亦是またこれ時代じだいの妖怪ようかいなり」云云。
禪宗ぜんしゅう云く法華宗ほつげしゅうは不立文字ふりゅうもんじの義を破はす何故なにゆえぞ仏は一字不説いちじふせつと説き給たまうや、答なんじりう汝楞伽經なんじりようがきようの文を引くか本法ほんぽう自法じほうの二義を知らざるか学まなばずんば習ならうべし其その上彼の經に於いては未顯みけん眞実しんじつと破おられ畢おわるぬ何ぞ指南しなんと為せん。

問いうて云く像法決疑經そうほうけつぎきように云く如來にょらいの一句いっくの法を説ときたもうを見みず」云云如何いかに、答こたう是は常施菩薩じようせぼさつの言ことなり法華經ほけきようには菩薩ぼさつ是の法を聞きこいて疑網ぎもう皆已みなすでに除く千二百ちふふの羅漢らかん悉ことごとく亦また當まさに作仏さぶつすべし」と云つて八万はちまんの菩薩ぼさつも千二百ちふふの羅漢らかんも悉ことごとく皆列座みなれつざし聽聞ちやうもん隨喜ずいきす、常施じようせ一人は見えいすれず何れの説に依よる可べき法華ほつげの座あに拳けんぐる菩薩ぼさつの上首じやうしゆの中に常施じようせの

名之無し見えずと申すも道理なり、何に況や次下に 然るに諸の衆生
出沒有るを見て法を説いて人を度す」云云、何ぞ不説の一句を留めて
可説の妙理を失う可き、汝が立義一大僻見なり 執情を改めて
法華に歸伏す可し、然らずんば豈無道心に非ずや。

◆十九

八宗違目抄

文永九年二月五十一歳御作 与

富木常忍

154P

記の九に云く 若し其れ未だ開せざれば法報は迹に非ず若し顯本し
已れば本迹各三なり」文句の九に云く 仏・三世に於て等しく三身有
り諸教の中に於て之を秘して伝えず」

法身如来

正因仏性

仏

報身ほうしん如来にょらい
応身おうじん如来にょらい

衆生しゅじょう

了因りょういん仏性ぶつしょう
縁因えんいん仏性ぶつしょう

衆生の仏性

小乗經には仏性の有無を論ぜず。

華嚴・方等・般若・大日經等には衆生本より正因

仏性有つて了因縁因無し。

法華經には本より三因仏性有り。

文句の十に云く「正因仏性 法身の性なり」は本當に通互す、縁了

今・此の三界は皆是れ我が有なり

主

國王世尊なり

法華經第二に云く

其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり

親父なり

而も今・此の処は諸の患難多し

導師なり

唯我一人のみ能く救護をなす

寿量品に云く我も亦為世の父文

主 國王

親師

報身如來 法身如來

五百問論に云く、若し父の寿の遠を知らずして復父統の邦に迷わば徒らに才能と謂うとも全く人の子に非ず」又云く、但恐らくは才一国に当るとも父母の年を識らざらんや」

古今・仏道論衡道宣の作に云く、「三皇已前は未だ文字有らず但其の母を識つて其の父を識らず禽獸に同じなり」等云云、帝を詰る語なり

俱舍宗
成実宗

一向に釈尊を以て本尊と為す爾りと雖も但応身に

限る。

律宗

華嚴宗

三論宗

報身は有始無終、應身は有始有終なり。

法相宗

に云く大日如来は釈迦の法身なり。

真言宗

に云く大日如来は釈迦の法身には非ず。

但し大日経には大日如来は釈迦牟尼仏なりと見えたり人師よりの
僻見なり。

浄土宗一向に阿弥陀如来を以て本尊と為す。

法華宗より外の真言等の七宗並に浄土宗等は釈迦如来を以て父と
為すことを知らず、例せば三皇已前の人・禽獸に同ずるが如し鳥の中
に鶴鵲鳥も鳳凰鳥も父を知らず獸の中には兎も師子も父を知ら
ず、三皇以前は大王も小民も共に其の父を知らず天台宗よりの外・
真言等の諸宗の大乗宗は師子と鳳凰の如く小乗宗は鶴鵲と兎等
の如く共に父を知らざるなり。

華嚴宗に十界互具・一念三千を立つること澄觀の疏に之有り。

真言宗に十界互具・一念三千を立つること大日経の疏に之を出す。

天台宗と同異如何、天台宗已前にも十界互具・一念三千を立つる

や、記の三に云く然るに衆衆を攢むるに既に三乗及び一乘三一同に性相等の十有りと許す何すれぞ六道の十を語らざるや」三藏等の法華經に依る者一念三千の名目を立てざるか。

問うて云く華嚴宗は一念三千の義を用いるや後の御宇に之を立つ、答えて云く澄觀の疏三十三國師に云く正觀の第五に十法成乘を明す中の第二に眞正發菩提心○釈して云く然も此の經の上下の發心の義は文理淵博にして其の撮略を見る故に取つて之を用い引いて之を証とす」と、二十九に云く法華經に云く唯仏与仏等と天台云く○便ち三千世間を成すと彼の宗には此れを以つて実と爲す○一家の意理として通ぜざる無し」文。

華嚴經に云く覺林菩薩之を説くと、弘決には如來林菩薩と引く心は工なる画師の種種の

五陰ごおんを画えくが如ごとく一切世間いっさいせけんの中に法として造らざること無し心の如ごとく
仏またしかも亦爾なり仏ごとの如ごとく衆生しゅじやうも然しかなり心と仏およと及び衆生しゅじやうと是この三差別さべつ
無し若もし人三世さんぜ一切いっさいの仏りやうちを了知りやうちせんと欲ほつせば当まさに是かくくの如ごとく觀かんずべし
心もろもろによちいは諸の如来を造ると」

法華經に云く

「此れは略開三の文なり仏の自説なり」

所謂諸法とは如是相・如是性・

如是体・如是力・如是作・如是因・如是縁・如是果・如是報如是本末

究竟等」又云く唯一大事の因縁を以ての故に世に出現したもう諸仏・

世尊は衆生をして仏知見を開かしめんと欲す」蓮華三昧經に云く

本覺心法身常に妙法の心蓮台に住して本より來た三身の徳を具足し

三十七尊 宅尊なり」心城に住したまえるを歸命したてまつる心王大王日

遍照尊・心数恒沙・諸の如來も普門塵數諸の三昧因果を遠離し

て法然として具す無辺の徳海・本より円満還つて我心の諸仏を頂礼

す」、仏藏經に云く 仏一切衆生心中に皆如來有して結跏趺坐すと

見そなわす」文。

問うて云く真言宗は一念三千を用いるや、答えて云く大日經の

義釈智不空一行に云くは伝教・弘法之を見ず智証之を渡す 此の經は是れ

法王の秘宝なり妄りに卑賤の人に示さざれ釈迦出世して四十余年に
舍利弗の慇懃なる三請に因りて方に為に略して妙法蓮華の義を説きた
まいしが如し、今・此の本地の身又是れ妙法蓮華最深の秘処なるが
故に、寿命品に云く常在靈鷲山及余諸住处乃至我淨土不毀而衆
見焼尽と即ち此の宗の瑜伽の意ならくのみ又補処の菩薩の慇懃の三
請に因つて方に為に之を説けり」と、又云く又此の經の宗は横に一切
の仏教を統ぶ唯蘊無我にして世間の心を出で蘊の中に住すと説くが
如きは即ち諸部の小乘三蔵を撰す、蘊の阿頼耶を觀じて自心の本
不生を覺ると説くが如きは即ち諸經の八識・三性・無性の義を撰す、
極無自性心と十緣生の句を説くが如きは即ち華嚴・般若の種種の
不思議の境界を撰して皆其の中に入る、如実知自心を一切種智と名づ
くと説くが如きは則ち仏性「なり」一乘「なり」如來秘藏「なり」皆其の中

に入る種種しゅじゅの聖言せいごんに於おいて其その精要しやうえいを統すべざること無し、毘盧遮那びるしやな經の疏じょ・伝教でんぎやう・弘法こうぼう之これを見る」第七の下に云いく天台てんだいの誦經じゆは是これ円頓えんどんの數息すそくなりと謂おもう是これ此の意なり」と。

大宋たいそうの高僧こうそう伝卷でんくわんの第二十七の含光くわうくわうの伝でんに云いく、代宗たいそう光くわうを重おもんずること含光くわうくわうは不空ふくう三藏さんざうの弟子でしなり不空ふくうを見るが

如し勅委して五台山に往いて功德を修せしむ、時に天台の宗学湛然

第六の師なり」禪觀を解了して深く智者 天台なり」の膏腴を得たりと、

嘗つて江淮の僧四十余人と清涼の境界に入る、湛然・光と相見て西域

伝法の事を問う、光の云く一国の僧空宗を体得する有りと問うて智者

の教法に及ぶ梵僧云く曾て聞く此の教邪正を定め偏円を曉り止觀を

明して功第一と推す再三光に囑す・或は因縁あつて重ねて至らば為に

唐を翻して梵と為して附し来れ 某願くは受持せんと屢屢手を握つ

て叮囑す、詳かにするに其の南印土には多く竜樹の宗見を行ず故に此

の流布を願うこと有るなりと、菩提心義の三に云く一行和上は元是れ

天台一行三昧の禪師なり能く天台円満の宗趣を得たり故に凡そ説く

所の文言義理動もすれば天台に合す、不空三蔵の門人含光天竺に歸る

の日天竺の僧問わく伝え聞く彼の国に天台の教有りと理致・須ゆ可く

ば翻訳して此の方に将来せんや云云、此の三蔵の旨も亦天台に合す、
今・或る阿闍梨の云く真言を学せんと欲せば先ず共に天台を学せよと
而して門人皆囁る「云云」。

問うて云く華嚴經に一念三千を明すや、答えて云く「心仏及衆生」
等云云、止観の一に云く此の一念の心は縦ならず横ならず不可思議
なり但己のみ爾るに非ず仏及び衆生も亦復是くの如し、華嚴に云く心
と仏と及び衆生と是の三差別無しと当に知るべし己心に一切の法を
具することを「文、弘の一に云く華嚴の下は引いて理の齊きことを証
す、故に華嚴に初住の心を歎じて云く心の如く仏も亦爾なり仏の如く
衆生も然り心と仏と及び衆生と是の三差別無し諸仏は悉く一切は心
に従つて転ずと了知したまえり、若し能く是くの如く解すれば彼の人
真に仏を見たてまつる、身亦是れ心に非ず心も亦是れ身に非ず一切の

仏事ぶつじを作なすこと自在じざいにして未曾有みぞうなり、人若もし三世一切さんぜいっさいの仏を知らんと欲求もろもろせば応まさに是かくくの如ごとき觀かんを作なすべし心諸もろもろの如來にょらいを造すと、若もし今家の諸もろもろの円文の意無なくくんば彼の經の偈げの旨むね・理として實に消し難なんからん」と。

三蔵教 さんぞう

小乗の四阿含經 しょうじょう

心生の六界 ろっかい

心具の六界 しんぐ

明さず あか

大乘 だいじょう

通教 つうきょう

心生の六界 ろっかい

亦心具を明さず またしんぐ

別教

心生の十界 じゅうかい

心具の十界を明さず あか

思議の十界 しぎ

爾前華嚴等の円 にぜんけごん

円教 えんきょう

不思議の十界互具 ふしぎ

法華の円 ほっけ

止の五に云く 華嚴に云く 心は工なる画師の種種の五陰を造るが

如く一切世間の中に心より造らざること莫しと種種の五陰とは前の十

法界の五陰の如きなり」又云く 又十種の五陰一一に各十法を具す

謂く如是相・性・体・力・作・因・縁・果・報・本末究竟等なり」文、又

云く 天れ一心に十法界を具す 一法界に又十法界を具すれば百法界

なり一界に三十種の世間を具すれば百法界には即ち三千種の世間を具す此の三千一念の心^{さんぜんいちねん}に在り」文、弘の五に云く故に大師覺意三昧觀心食法及び誦經法小止觀等の諸の心觀の文に但自他等の觀を以て三^{さん}板^{ばん}を推^{すい}せり並びに未^{いま}だ一念三千具足を云わず、乃至觀心論の中に亦只三十六の問を以て四心を責むれども亦一念三千に涉らず、唯四念処の中に略して觀心の十界を云うのみ、故に止觀に正しく觀法を明すに至^{いた}つて並びに三千を以て指南と為せり、乃^{すなわ}ち是れ終窮究竟の極說なり、故に序の中に說己心中所行法門と云う良に以有るなり請う尋ね讀まん者心に異縁無かれ」、止の五に云く此の十重の觀法は横豎に収束し微妙精巧なり初は則ち境の真偽を簡^{えら}び中は則ち正助相添い後は則ち安忍無著なり、意^い円^{えん}かに法巧みに該括周備して初心に規矩し將に行者を送^{ぎようじや}つて彼の薩雲に到らんとすなり闍証の禪師誦文の法師の能く

知る所に非あらざるなり、蓋けだし如来積劫にょらいしやくこくの懃ごんご求したまえる所・道場どうじょうの妙悟みょうご
し

たまえる所身子の三請する所・法譬の三たび説く所・正しく茲に在る
に由るか、弘の五に云く四教の一十六門乃至八教の一期の始終に遍
せり今皆開顯して束ねて一乘に入れ遍く諸經を括りて一実に備う、
若し当分を者尚偏教の教主の知る所に非ず況んや復た世間闡証の者
をや○、蓋し如来の下は称歎なり十法は既に是れ法華の所乘なり是の
故に還つて法華の文を用いて歎ず迹の説に約せば即ち大通智勝仏の時
を指して以て積劫と為し寂滅道場を以て妙悟と為す若し本門に約せ
ば我本行菩薩道の時を指して以て積劫と為し本成仏の時を以て妙悟
と為す、本・迹二門只是れ此の十法を求悟せるなり、身子等とは寂場
にして説かんと欲するに物の機未だ宜からず其の苦に墮せん事を恐れ
て更に方便を施す四十余年種種に調熟し法華の会に至つて初めて略
して權を開するに動執生疑して慇懃に三請す五千起ち去つて方に

枝葉しやう無し四一を点示して五仏の章を演のべ上根じやうこんの人に被ごうむるを名づけて法
説なと爲し、中根は未いまだ解げせざれば猶なほ譬ひ喩ゆを・う下根げこんは器劣きりやくにして復またた
因縁いんねんを待まちつ、仏意ぶつゐ聯綿れんめんとして茲この十法に在り、故ゆゑに十法の文の末に皆みな大
車たに譬たとえたり今の文の憑たる所意こゝ此に在り、惑者わくしやは未いまだ見みず尚なほ華嚴けこんを指
す唯ただ華嚴けこん円頓えんどんの名を知しつて而してして彼の部の兼帶けんたいの説に味しし、全く法華ほつけ
絶待ぜつたいの意を失うしなつて妙教獨頭めうきやうどくとうの能を貶おとし挫さす、迹本の二文を驗しるしして五時の
説かんがを・うれば円極えんごく謬みうらず何なんぞ須すべらく疑うたがいを致いたすべけん是かくの故ゆゑに結むすして
正まさしく茲こゝに在るかと曰いう、又云いく 初はつに華嚴けこんを引ひくことを者重かきねて初
に引ひいて境相きやうさうを示す文を標ちやうす前に心造しんぞうと云いうは即すなわち是これ心具しんぐなり
故ゆゑに造の文を引ひいて以もつて心具しんぐを証しるす、彼の經第十八の中に功德林菩薩くどくぼさつ
の偈げを説しいて云いうが如ごとく心は工えしなる画師えしの種種しゅじゆの五陰ごおんを造ぞうるが如ごとく
一切いっさい世界せかいの中に法として造らざること無し心の如ごとく仏も亦また爾しかなり仏の

如く衆生も然なり心と仏と及び衆生と是の三差別無し、若し人三世の一切の仏を知らんと欲求せば応に是くの如く観ずべし心は諸の如來を造ると今の文を解せずんば如何ぞ偈の心造一切三無差別を消せん」文、諸宗の是非之を以て之を糾明す可きなり、恐恐謹言。

二月十八日

日蓮 在御判

◆二〇

早勝問答 もんどう

文永八年 ぶんえい

161P

五十歳御作浄土宗問答 じようとしゆう もんどう。

問う六字の名号 みようごう は善惡 ぜんあく の中には何ぞや、答う一義に云く今問う所の善惡 ぜんあく は世出 ぜしゅつ の中には何ぞや、一義に云く云う所の善惡 ぜんあく を治定せば墮獄 だごく 治定なるか、一義に云く名号 みようごう 惡と治定せば墮獄 だごく 治定なるか、一義に云く念仏 ねんぶつ・無間 むげん 治定して其 そ の上に善惡 ぜんあく を尋ぬるか、一義に云く汝 なんじ が依經 えきよう は權實 ごんじつ の中には何れぞや。

問う念仏 ねんぶつ・無間 むげん と云わば法華 ほっけ も無間 むげん なり、答う一義に云く法華 ほっけ 無間 むげん とは自義 じぎ なるか經文 きやうもん なるか、一義に云く念仏 ねんぶつ・無間 むげん をば治定して法華 ほっけ 無間 むげん と云うか、一義に云く祖師 そし の謗法 ほうぼう を治定して法華 ほっけ も無間 むげん と云う

か、一義に云く汝が云う所の法華は超過の法華か又弥陀成仏の法華か。

問うて云く念仏・無間の証拠二十八品の中には何れぞや、答う一義に云く二十八品の中に証拠有らば墮獄治定なるか、一義に云く法華を誹謗するを証拠とするなり、一義に云く法華の文を尋ぬるは信じて問うか信ぜずして問うか、一義に云く直に入阿鼻獄の文を出すなり、一義に云く妙法蓮華經其の証拠なり、一義に云く弥陀の本誓に背く故なり、一義に云く弥陀の命を断つ故なり、一義に云く有縁の釈尊に背く故なり念仏・無間は三世諸仏の配立なり。

問う止観の念仏の事、答う一義に云く法然所立の念仏は墮獄治定して止観を問うか、一義に云く西方の念仏と一なるか異なるか、一義に云く止観の念仏は法華を誹謗するか、一義に云く彼に文段を問う

可^べし、一義に云^いく止^し観^{かん}に依^よつて浄^じ土^よ宗^{とし}を建^{ごん}立^りする^ゆか。

問う観經は法華已後の事、答う一義に云く此の故に法華を謗ずるか、一義に云く已前ならば無間は治定なるか、一義に云く汝が謗法は無間をば治定して問うか。

問う觀經と法華と同時なり、答う一義に云く同時なる故に法華を謗ずるか、さては返つて觀經をも謗ずるなり。

問う先師の謗法は一往なり且くの字を置く故なり、答う一義に云く且く謗ぜよとは自義か經文か、一義に云く始終共に謗ぜば墮獄は治定なるか。

問う未顕眞實は往生に非ず成仏の方なり、答う一義に云く此の故に法華を謗ずるか、一義に云く余經は無得道と云う人は僻事か。

問う法華本・迹の阿弥陀をば如何、答う一義に云く法華の弥陀は法華經を謗ぜんと誓い給いしか、一義に云く法華の弥陀と三部經と同

じきか異なるか、異ならば無間治定なるか。

問う一称南無仏と何んぞ称名を無益と云わんや、答う一義に云く此の故に法華を謗ずるか、一義に云く法華を信じて問うか信ぜずして問うか。

問う法華に 謂の如來に於て 謂仏を恭敬す」と何ぞ弥陀を捨つるや、答う一義に云く此の故に法華を謗ずるか 天旨上の如し。」

問う 余の深法中に示教利喜す」と何ぞ余經を謗ずるや、答う一義に云く此の故に法華を謗ずるや、一義に云く汝が誹謗は治定して問うか又自義か經文か 天旨上の如し」。

問う 普門品に觀世音の称名功德を挙ぐと見えたり何ぞ余の仏・菩薩を捨てんや、答う一義に云く此の故に法華を謗ずるか、一義に云く此の觀音は法華を謗ずるか、一義に云く此の品に依つて念仏を立

つるか、私ひそかに云いく彼が經文きようもん釈義しゃくぎを引かん時は先ず文段を一一問う
可べし、大段万ばんじ事の問には誹謗ひぼうの言を先とす可べきなり、前の当家の義云

云。

禪宗問答。

問う禪天魔の故如何、答う一義に云く仏經に依らざる故なり、一義に云く一代聖教を誹謗する故なり。

問う禪とは三世諸仏成道の始は坐禪し給へり如何、答う一義に云く汝が坐禪は仏の出世に背かば天魔治定なるか、又坐禪は大小の中には何れぞや、一義に云く仏の端座六年は法華に無益と云うか。

問う禪法には仏説無益なり、答う一義に云く是自義なるか經文なるか、一義に云くやがて是が天魔の所為なり。

問う經文には是法不可示」と如何、答う一義に云く此の文は法華無益と云う文なるか、一義に云く爾らば法華に依るか、一義に云く文段を以て責む可きなり。

問う童女は坐禪の成仏なり其の故は經文に深く禪定に入つて諸法に了達すと説き給へり、知んぬ法華無益と云うことを、答う一義に云く此の義は自義なるか經文なるか、一義に云く若し法華の成仏ならば天魔治定なるか、一義に云く文殊海中の教化は論說妙法と宣べたり如何。

問う常に坐禪を好み深く禪定に入つて常に坐禪を貴ぶとも説けり如何、答う一義に云く文段を以て責む可し、一義に云く此の文は法華無益と云う文なるか、一義に云く此の文を以て禪宗を建立するか。

問う唯独り自のみ明了にして余人の見ざる所と云う故に禪宗ひとり真性を見て余人は見ずと云うなり、答う一義に云く文段を以て責む可し經文を見る可し、問う像法決疑經に云く「一字不説」と爾らば一代は未顕真実と聞きたり真実は只迦葉一人教の外に別伝し給へり

如何、答う此の文は仏説ぶつせつか若し仏説ぶつせつならば汝なんじ此の文に依よる故ゆえに自語じご
相違そういなり、一義に云く言う所の迦葉かしようは何いかなる經にて成仏じようぶつするや、一義
に云く言う所の經文きようもんは三說の中には何れぞや、一義に云く楞伽經りようがきようは
仏説ぶつせつなるか。

問う三大部たいぶに觀心かんじん之有これあり何ぞ禪ぜん天魔てんまと云うや、答う一義いぎに云く汝なんじは三大部たいぶにて宗しゆを立つるか、一義いぎに云く三大部たいぶの觀心かんじんは汝なんじが禪ぜんと同じきか、一義いぎに云く汝なんじは天台てんだいを師しとするか、一義いぎに云く三大部たいぶの觀心かんじんは諸經しよきやうを捨すつるか。

問う雙非しやうひの禪ぜんの事い如何い、答う一義いぎに云く一度ひとたびは法華ほつけに依より一度ひとたびは法華ほつけ無益むやくなり、一義いぎに云く二義ふたぎ共に天魔てんまなり一義いぎに云く此この義ぎに背そむかん者ひがごとは僻事ひがごとなるか。

問う法華宗ほつけしゆうは妙法みやうほうの道理どうりを知るや、答う一義いぎに云く汝なんじは天魔てんまを治ち定じやうして問うか、一義いぎに云く汝なんじは法華ほつけを信しんじて問うか、一義いぎに云く妙法みやうほうを知しつて問うか知らずして問うか、一義いぎに云く汝なんじが問う所の妙法みやうほうは今經こんきやうに付ついて百二十ひやくにじふの妙有みやうゆうり其その品しん品しんを問うか、一義いぎに云く汝なんじは此この妙法みやうほうに依よつて禪ぜんを建立こんりやうするか。天台宗問答てんだいしゆもんどう。

問う天台宗を無間むげんという証しょうこ拋い如何い、答う一義に云く法華を誹謗ひぼうする故なり、一義に云く經文きやうもんに背く故なり。

問う余經無益と云う事は・を判ずる一往いちおうの意なり再往さいおうの日は諸乘しよじやう一仏乘いちぶつじやうと開會かいえす何ぞ一往いちおうを執しゅうして再往さいおうの義を捨つるや、答う一義に云く今言う所の開會かいえとは何れの教の開會かいえぞや、一義に云く今經こんきやうに於て本・迹の十妙の下に各二十の開會かいえあり亦また教行人理の四一開會かいえの中には何れぞや、一義に云く能開もうかいしよかい所開しよかいの中には何れぞや、一義に云く開會かいえの後善惡無しと云うか、一義に云く天台宗は法華を信ずるか、一義に云く開會かいえの後諸宗を簡えらばずと云わば天台大師僻事ひがごとなるか其の故は南三・北七云云 伝教大師は六宗と云云、一義に云く天台宗は惡行あくぎやうをも致いたす可べきか性惡不斷しやうあくふだんと云うが故に自語相違じごそういなりと責せむ可べきなり、一義に云く開會かいえの後に權実ごんじつを立つる人は僻事ひがごとなるか爾しからば葉王やくおうの

十じゅう喻ゆ法師ほつしの三さん説しやう超ちやう過か云い云え、一いっ義ぎに云いく此この故ゆえに開かい會いの心こころを以もつて慈じ覺かくは
法ほ華けを謗ぼうずるか、一いっ義ぎに云いく汝なんじは慈じ覺かくの弟で子しなるか爾しからば謗ぼう法ほ治ち定じやう
なるか。

問もんう善ぜん惡あく不ふ二に・邪じゃ正しやう一いっ如にの故ゆえに強あなちがに善ぜん惡あくを云いう可べからず元げん意いの重じゆう
是これなり、答こたえて云いく天てん台だいの出し世ゆせは惡あくを息やめ

んが為か又惡を増さんが為か、一義に云く惡事を致せとは法華經二十
八品の中には何れの処に見えたるや。

問う絶待妙の事、答う一義に云く先ず文段を問う可し、一義に云く
何れの教の絶待ぞや、一義に云く此の故に慈覺は法華を謗ずるか。

問う相待は一往絶待は再往と見えたり如何、答う自義なるか經文
なるか、一義に云く相待妙一往と云うは二十八品の中には何れに見え
たるや、一義に云く相待妙は法華に明すか余經に明すか若し法華に
明さば法華は一往なるか。

問う約教・約部の故に約部の日は一往爾前の円を嫌うなり、答う一
義に云く言う所の約教は天台の判釈の四種の約教の中には何れぞや、
一義に云く約部は落居の釈なるか、一義に云く約部を捨つ可きか、一
義に云く約教の時・爾前の円を嫌わば墮獄は治定なるか、一義に云く

約教やくきょうの辺へにて今昔こんじやく円えん同じとは法華經ほけきやう二十八品の中何れぞや、一義いぎに云く玄文げんもんの第一だいいちの施開廢しかいえの三重ゆえの故ゆゑに開會かいえの後のちも余經よきやうを捨すつると云う文をば知るか知らざるか。

山門流さんもんりうの真言宗問答しんこんしゆうもんどう

問とう法華第一ほつげだいいちと云うは顯教けんきやうの門かどなり真言しんこんに對たいすれば第一だいいちとは云う可べからず、答こたう自義じぎなるか經文きやうもんなるか爰ここをを以もつて慈覺大師じかくだいしを無間むげんと申もうすなり、一義いぎに云く真言しんこんに對たいして法華第一ほつげだいいちならば亡國治定ぼうこくちていなるか、一義いぎに云く真言しんこんは已今當いこんとうの中には何れぞや、若もし外ぐわいと云わば一機いちき・一緣いちえんの一往いちおうにして秘密ひみつとは云わる可べからざるなり。

問とう法華ほつげと真言しんこんとは理同事勝りどうじしやうの故ゆゑに真言しんこんに對たいすれば戲論けろんの法ほつと云うか、答こたう一義いぎに云くさてこそ汝なんじは無間治定むげんちていなれ、一義いぎに云くさては慈覺じかくは真言しんこんをも謗ぼうずるなり其そのの故ゆゑは理同りどうの法華ほつげを謗ぼうずる故ゆゑなり。

問うでんぎよう伝教の本理大綱集たいこうの文を以てもっけんみつ顕密同と云う事、答う一義に
云くい此の書はでんぎよう伝教の御作にあら非ざるなり、一義に云くい此の書によ依つて
法華ほっけを慈覚じかくはぼう謗ずるか。

とうじ
東寺流の問答。

問う真言しんこんは釈尊しゃくそんの説と云う事其の証拠しやうこ如何いかん、答う若し真言しんこん釈尊しゃくそんの説ならば亡国ぼうこくは治定なるか、若し然しかなりと云わば弘法大師こうぼうだいし五藏を立つる時・法華ほっけを六波羅蜜經ろくはらみつぎやうの五藏の第四般若波羅蜜藏はんになやはらみつ第五の陀羅尼藏だらにぞうをば真言しんこんと建立こんりゆうし給たまへり如何いかん。

問う真言宗しんこんしゅうを未顕真実みけんしんじつとは言うべからず其の故そのゆえは釈迦しゃかの説の外に建立こんりゆうする故なり如何いかん、答えて云く若し釈尊しゃくそんの説教せつぎやうならば亡国ぼうこくは治定なるか、一義に云く六波羅蜜經ろくはらみつぎやうは釈迦しゃかの説なるか大日の説なるか、若し釈迦しゃかの説ならば未顕真実みけんしんじつは治定なるか、他云く釈迦しゃか所説しよせつの顯教けんぎやう無益むやくなりと。

尋ねて云く六波羅蜜經ろくはらみつぎやうは顯教・密教みつぎやうの中には何れぞや、他云く六波羅蜜經ろくはらみつぎやうは雜部の真言しんこんなり我が家の三部は純説じゆんせつの真言しんこんなり、答う助

証正証と云う事全く弘法の所判に見えず若し弘法の義ならば墮獄は
治定なるか、他云く真言は速疾の教顕教は迂回歴劫の教なり云云、
自ら云く自義なるか經文なるか、他云く五秘密教に云く若し顕教に
於て修行する者は久しく三大無數劫を經」と説け是れ其の証拠なり
如何、答う、さて此の經は釈迦の説なるか大日の説なるか若し釈迦の説
ならば未顕真實は治定なるか。

問う法華宗は何れの經に依つて仏の印契相好を造るや顕教には無し
但真言の印を盜むと覺えたり如何、答う之に依つて法華を謗するか、
一義に云く汝盜むの義相違せば亡国は治定なるか、一義に云く汝
法華宗の建立する所の大段の妙法蓮華經をば本尊と落居して問うか、
一義に云く釈尊を三部に依つて建立する故に驢牛の三身と下すか
若し爾なりと云わば返つて汝は真言を誹謗する者なりと責む可し、一

義に云く三世の諸仏の印契相好実（いんけいそうごうじつ）に妙法蓮華經に依つて具足するの義
落居せば亡国は治定なるか、又盜人は治定なるか、一義に云く竜女
靈山に即身に印契相好具足し南方に成道を唱えしは真言に依つて
建立するか若し爾なりと云わば直に經文を出せと責む可き

なり。

問う亡国の証拠如何、答う法華を誹謗する故なり云云、一義に云く
三徳の釈尊に背く故なり云云、一義に云く現世安穩・後生善処の
妙法蓮華經に背き奉る故に今生には亡国後生には無間と云うなり、
一義に云く法華經第三の劣とは經文なるか自義なるか若し爾らば
亡国治定なるか。

他云く密教に対すれば第三の劣なり、答う一義に云く此の義經文
なるか自義なるか、一義に云く顯教の内に法華第一なる事落居する
か、若し爾なりと云はばさては弘法は僻事なり顯教の内にして法華を
華嚴に対して第二・真言に対して第三と云う故なり、一義に云く真言
に対して第一ならば亡国は治定なるか。

他云く印・真言を説かざるが故に第三の劣と云うなり、答う此の

故に劣とは經文なるか自義なるか、一義に云く若し法華に説かば亡国は治定なるか。

他云く大日・釈迦各別なり、答う一義に云く此の故に法華を謗ずるか、一義に云く若し一仏ならば亡国は治定なるか、一義に云く各別なれば劣とは經文なるか自義なるか。

他云く顯教は応身密教は法身の説なり此の故に法華は第三の劣なり、自ら云く応身の説の故に法華劣とは經文なるか自義なるか、一義に云く法華法身の説ならば亡国治定なるか、一義に云く真言は応身の説ならば亡国は治定なるか。

他云く五智五仏の時は北方は釈迦中央は大日と見えたり如何、答う一義に云く中央釈迦ならば亡国治定なるか、一義に云く北方釈迦と云う事は三部の内に無し不空の義なり仏説に非ず。

他云く法華は穢土の說なり真言は三界の外ほかにの法界宮ほつかいの說なり、答う
一義に云く真言は三界さんがいの内の說ならば亡國治定ぼうこくちていなるか義ぎ釈やくの文。

他云く顯教の内にて大日・釈迦一体と説くとも密教の内にては二仏各別なり名は同じけれども義異なるなり如何、

答う此の故に亡国と云うなり、一義に云く此くの如く云う事直に經文を出す可きなり。

他云く童女は真言の成仏・法華には三密關くる故なり、答う自義なるか經文なるか。

他云く經文なり 陀羅尼を得 不退転を得たり」云云、陀羅尼は三密の加持なり、答う、此の陀羅尼を真言と云うは自義なるか經文なるか、一義に云くさては弘法の僻事なり其の故は此の陀羅尼を戲論第三の劣と下すなり、一義に云く自語相違なり法華に印有る故なり。

他云く守護經の文に依れば釈迦は大日より三密の法門を習いて成仏するなり、答う此の故に法華を謗ずるか、一義に云く此の文は三説の

内なるか外なるか、一義に云く此れに相違せば亡国は治定なるか。

他云く法華經には、合掌を以て敬心し具足の道は聞かんと欲す」と云へり何ぞ印・真言を捨つるや、答う此の故に法華を謗ずるか、一義に云く自義なるか經文なるか、一義に云く此の故に真言を捨てずとは經文なるか、一義に云く此の文は真言を持つと云う文なるか、一義に文段を以て責む可し。

他云く弘法大師を無間と云うは經文なるか自義なるか、答う經文なり。

他云く二十八品の中には何れぞや、答う二十八品の中に有らば墮獄治定なるか、他云く爾なり、答う法華を誹謗すること治定なるか若し爾らば經文を出して責む可きなり

◆二一 宿屋入道への御状

文永五年八月 四十七歳御

作 与宿屋光則 於鎌倉 169P

其の後は書・絶えて申さず不審極り無く候、抑去る正嘉元年丁巳
八月二十三日戌亥の刻の大地震、日蓮諸経を引いて之を勘えたるに
念仏宗と禪宗等とを御帰依有るが故に日本守護の諸大善神瞋恚を
作して起す所の災なり、若し此れを対治無くんば他国の為に此の国を
破らる可きの由勘文一通之を撰し正元二年庚申七月十六日御辺に付
け奉つて故最明寺入道殿へ之を進覽す、其の後九箇年を経て今年
大蒙古国より牒状之有る由・風聞す等云云、经文の如くんば彼の国
より此の国を責めん事必定なり、而るに日本国の中には日蓮一人当に

彼の西戎を調伏するの人たる可しと兼て之を知り論文に之を勘う、
君の為・国の為・神の為・仏の為・内奏を経らる可きか、委細の旨は見参
を遂げて申す可く候、恐恐謹言。

文永五年八月二十一日

日蓮 花押

宿屋左衛門入道殿

◆ 二二 北条時宗への御状

169P

謹んで言上せしめ候、抑も正月十八日・西戎大蒙古国の牒状
到来すと、日蓮先年諸経の要文を集め之を勘えたること立正安国論の
如く少しも違わず普合しぬ、日蓮は聖人の一分に当れり未萌を知るが

故なり、然る間重ねて此の由を驚かし奉る急ぎ建長寺・寿福寺・極樂寺・多宝寺・淨光明寺・大仏殿等の御歸依を止めたまえ、然らずんば重ねて又四方より責め来る可きなり、速かに蒙古国の人を調伏して我が国を安泰ならしめ給え、彼を調伏せられん事日蓮に非ざれば叶うべからざるなり、諫臣国に在れば則ち其の国正しく争子家に在れば則ち其の家直し、国家の安危は政道の直否に在り仏法の邪正は經文の明鏡に依る。

夫れ此の国は神国なり神は非礼を稟けたまわず天神七代・地神五代の神神其の外諸天善神等は一乘擁護の神明なり、然も法華經を以て食と爲し正直を以て力と爲す、法華經に云く諸仏救世者・大神通に住して衆生を悦ばしめんが爲の故に無量の神力を現ずと、一乘棄捨の国に於ては豈善神怒を成さざらんや、仁王經に云く一切の聖人去る時

七難ひちなん必ず起おこる」と、彼の呉王ごししよは伍子胥ごしよが詞ことばを捨て吾わが身を亡なし・桀けつちゆう紂ちゆうは竜比りゆうひを失うしなつて国位こくゐを喪ぼうぼす、今・日本にほん国既こくすでに蒙古もうこ国に奪うばわれんとす豈あに歎なげかざらんや豈あに驚おどろかざらんや、日蓮にちれんが申もうす事御用もちい無なくんば定なめて後悔こうかい之有ある可べし、日蓮にちれんは法華經ほけきようの御使おんつかいなり經きやうに云いく則すなわち如来にょらいの使し如来にょらいの所遣しよけんとして如来にょらいの事を行なす」と、三世諸仏さんぜしよぶつの事とは法華經ほけきようなり、此この由方かた方たへ之これを驚おどろかし奉たてまつる一所い所に集あめて御評議おひやうぎ有あつて御報おんほうに予あずかる可べく候しよせん、所詮しよせんは万祈ばんきを抛なげうつて諸宗しよしゆうを御前おんまえに召よし合せ仏法ぶつぽうの邪正じやせいを決いし給たまえ、潤底かんていの長松い未いまだ知しらざるは良匠あやまの誤あやまり闇中あんちゆうの錦衣きんゐを未いまだ見みざるは愚人ぐにんの失とがなり。

三国仏法ぶつぽうの分別ぶんべつに於おいては殿前いでんに在あり所謂阿闍世いわゆるあじやせ・陳隋ちんすい・桓武かんむ是これなり、敢あえてて日蓮にちれんが私曲しきよくに非あらず只偏ただひとえに大忠いたを懷ゆえく故ゆゑに身みの為ために之これを申もうさず神かみの為ため・君きみの為ため・国くにの為ため・一切衆生いっさいしゆじやうの為ために言上ごんじやうせしむる所ところなり、恐きよう恐きよう

きんげん
謹言。

ぶんえい
文永五年辰十月十一日

にちれんかおう
日蓮花押

きんじょう
謹上
やどやにゅうどう
宿屋入道殿

◆二三 宿屋左衛門光則への御状

170P

先年勘えたるの書安国論に普合せるに就て言上せしめ候い畢んぬ、
抑正月十八日西戎大蒙古国より牒状到来すと、之を以て之を
按ずるに日蓮は聖人の一分に当り候か、然りと雖も未だ御尋に予らず
候の間重ねて諫状を捧ぐ、希くば御帰依の寺僧を停止せられ宜しく
法華經に歸せしむべし、若し然らずんば後悔何ぞ追わん、此の趣を以て
十一所に申せしめ候なり定めて御評議有る可く候か、偏に貴殿を仰ぎ

奉る早く日蓮が本望を遂げしめ給え、十一箇所と申すは平の左衛門尉殿に申せしむる所なり委悉申し度く候と雖も上書分明なる間省略せしめ候、御氣色を以て御披露庶幾せしむる所に候、恐恐謹言。

文永五年辰十月十一日日

日蓮 花押

謹上 宿屋入道殿

◆二四 平左衛門尉頼綱への御状

171P

蒙古国の牒状到来に就いて言上せしめ候い畢んぬ、抑先年日蓮立正安国論に之を勘えたるが如く少しも違わず普合せしむ、然る間重ねて訴状を以て愁鬱を発かんと欲す爰を以て諫旗を公前に飛ばし争戦を私後に立つ、併ながら貴殿は一天の屋梁為り万民の手足為り争でか此の国滅亡の事を歎かざらんや慎まざらんや、早く須く退治を

加えて謗法の咎を制すべし。

夫れ以れば一乗・妙法蓮華經は諸仏正覺の極理・諸天善神の威食な

り之を信受するに於ては何ぞ七難来り三災興らんや、剩え此の事

を申す日蓮をば流罪せらる争でか日月・星宿罰を加えざらんや、

聖徳太子は守屋の惡を倒して仏法を興し秀郷は將門を挫いて名を後代

に留む、然らば法華經の強敵為る御歸依の寺僧を退治して宜く善神の

擁護を蒙るべき者なり、御式目を見るに非擲を制止すること分明な

り、争でか日蓮が愁訴に於ては御叙い無らん豈御起請の文を破るに

非ずや、此の趣を以て方々へ愚狀を進らす、所謂鎌倉殿・宿屋入道殿

・建長寺・寿福寺・極樂寺・大仏殿・長樂寺・多宝寺・淨光明寺・弥源太

殿並びに此の状合せ十一箇所なり、各各御評議有つて速かに御報に預

るべく候、若し爾らば卞和が璞磨いて玉と成り法王髻中の明珠此の

時に顛あらかれんのみ、全く身の為ために之これを申もうさず、神の為・君の為・国の為・
一切衆生の為ために言上ごんじやうせしむるの処ところなり件の如ごとし、恐恐きようきよう謹言きんげん。

文永五年戊辰十月十一日

日蓮にちれん 花押かおう

平左衛門尉殿さえものじやう

◆二五 北条弥源太への御状ほうじやう やげん た

172P

去いぬる月、御来臨らいらん急ぎ急ぎ御帰宅本意ほんい無く存ぞんぜしめ候こうい畢おんぬ、
抑おさ蒙古国もうこの牒状ちやうじやう到来とうらいの事上かみ一人いちにんより下万民ばんみんに至いたるまで驚動きやうどう極きわり
無なし然しかりと雖いえども何いずれの故なること人未いまだ之これを知らず、日蓮にちれん兼ねて存知
せしむるの間既すでに一論いちろんを造つくつて之これを進覽しんらんせり徴先達しやくせんたつつて顛あらかれ則すなち災必
ず後に来る、去いぬる正嘉元年丁巳八月廿三日戌亥いぬいの刻の大地震だいじしん是併これな
がら此の瑞あらに非あらずや、法華經ほけきやうに云いわく如是相によぜそうと天台大師てんだいだいし云いわく蜘蛛下り

て喜事来り・鵲かんじやく 鳴いて行人来る」と、易に云く吉凶動に於て生ずと
此等の本文豈替るべけんや、所詮諸宗の帰依を止めて一乗妙經を
信受せしむべきの由勘文を捧げ候、日本亡国の根源は浄土・真言・禪宗
・律宗の邪法惡法より起れり諸宗を召し合せ諸經勝劣を分別せしめ
給え、殊に貴殿は相模の守殿の同姓なり根本滅するに於ては枝葉豈榮
えんや、早く蒙古国を調伏し国土を安穩ならしめ給え、法華を謗ずる
者は三世諸仏の大怨敵なり、天照太神・八幡大菩薩等・此の国を放ち
給う故・大蒙古国より牒状来るか、自今已後各各生取と成り他国の
奴と成る可し、此の趣き方方へ之れを驚かし愚状を進ぜしめ候なり、
恐恐謹言。

文永五年ぶんえい 辰十月十一日

日蓮 花押

謹上 きんじょう

弥源太入道殿 やげんたにゅうどう

◆二六

建長寺道隆への御状 けんちようじ どうりゅう

173P

夫れそ仏ぶつ閣軒かくけんを並ならべ法門屋ほうもんいに拒いたる仏法ぶつぽうの繁榮はんえいは身毒支那けんどく ちゅうかに超過ちようかし僧宝しやうぼうの形儀ろくつうは六通らくつうの羅漢らかんの如ごとし、然しかりと雖いえども一代いちだい諸經しよきやうに於おいて未いまだ勝劣しやうれつの浅深せんじんを知らず併さながら禽獸きんじゆうに同じ忽たちまち三徳さんとくの釈迦しやか如来にやらいを抛なげうつて、他方たほうの仏ぼさつ・菩薩ぼさつを信あず是豈あにぎやくろ逆路伽耶陀がやだの者あらに非あらずや、念仏ねんぶつは無間地獄むげんじごくの業・禪宗ぜんしゆうは天魔てんまの所為しよゐ・真言しんこんは亡国ぼうこくの惡法あくほう・律宗りつしゆうは国賊こくぞくの妄說もうせつと云云、爰こゝに日蓮にちれん去ぬる文応元年ぶんおうがねんの比勘かんがえたるの書を立正安国論りつしやうあんこくろんと名け宿屋やどや入道にゅうどうを以もつて故最明寺殿さいみやうじに奉たてまつりぬ、此の書しよせんの所詮しよせんは念仏ねんぶつ・真言しんこん・禪ぜん・律りつ等あくほうの惡法あくほうを信あずる故ゆゑに天下てんがに災難さいなん頻しきりに起あまつさえり、剩たこくえ他国たこくより此の国責ちやうじやうめらる可べきの由これ之かんがを勘かんがえたり、然しかるに去いぬる正月十八日ちやうじやう牒狀どうじやう到来たうらいす

と日蓮にちれんが勘かんえたる所に少しも違たがわず普ふ合ごうせしむ、諸寺しよし・諸山しよざんの祈き☆
威力滅いりよくする故はか將は又また惡法あくほうの故はなるか鎌倉かまくら中の上下じやうげ万人ばんにん道隆どうりゆう聖人しやうにんをば
仏ぶつの如ごとく之これを仰あおぎ良觀りやうかん聖人しやうにんをば羅漢らかんの如ごとく之これを尊そむ、其その外そ寿福
寺たほう・多宝寺たほう・淨光明寺じやうこうみやうじ・長樂寺ちやうらくじ・大仏殿だいぶつでんの長老ちやうろう等はは我慢がまんの心しん充満じゅうまんし、
未いまだ得えざるを得えたりと謂おもう」の増上慢ぞうじやうまんの大惡人あくにんなり、何なんぞ蒙古もうこ國の大
兵へいを調伏じやうぶくせしむ可べけんや、剩あまつさええ日本にほん國中こくじゅうの上下じやうげ万人ばんにん悉ことごとく生取しやうとと成
る可もちく今世こんぜには國を亡こしやうし後世ごしやうには必むげんず無間だに墮だせん、日蓮にちれんが申もうす事ことを
御用ごもちい無なくくんば後悔こうかい之これ有ある可べし此この趣鎌倉かまくら殿・宿屋やどや入道にゅうどう殿・平あの
左衛門さゑもんの尉殿ゑい等らへ之これを進状しんじやうせしめ候いっしよ、一處いつしよに寄より集ありて御評議ごへうぎ有ある可
く候あえて、敢あえてて日蓮にちれんが私曲しきよくの義ぎに非あらず只經論ただきやうろんの文ぶんに任まかす處ところなり、具つぶさには紙
面のに載のせ難がたし併ひながら対決たいけつの時ときを期こすす、書かは言ことを尽つくさず言ことは心しんを尽つくさ
ず、恐恐きようきよう謹言きんげん。

文永^{ぶんえい}

五年^{ごねん}

辰^{たつ}

十月^{じゅうがつ}

十一日^{じゅういちにち}

日蓮^{にちれん}

花押^{かおう}

進上^{しんじょう}

建長寺^{けんちようじ}

道隆^{どうりゅう}

証人^{しやうにん}

侍者^{しやうしや}

御中^{おんちゆう}

◆二七 極楽寺良観への御状

174

西戎大蒙古国簡牒の事に就て鎌倉殿其の外へ書状を進ぜしめ候、
日蓮去る文応元年の比勘え申せし立正安国論の如く毫末計りも之に
相違せず候、此の事如何、長老忍性速かに嘲哂の心を翻えし早く
日蓮房に帰せしめ給え、若し然らずんば人間を輕賤する者・白衣の
与に法を説くの失脱れ難きか、依法不依人とは如来の金言なり、良観
聖人の住処を法華經に説て云く「或は阿練若に有り納衣にして空閑
に在り」と、阿練若は無事と翻ず争か日蓮を譏奏するの条住処と相違
せり併ながら三学に似たる矯賊の聖人なり、僭聖増上慢にして今生
は国賊・来世は那落到墮在せんこと必定なり、聊かも先非を悔いなば
日蓮に歸す可し、此の趣き鎌倉殿を始め奉り建長寺等其の外へ披露せ

しめ候、所詮本意を遂げんと欲せば対決に如かず、即ち三蔵淺近の法を以て諸経中王の法華に向うは江河と大海と華山と妙高との勝劣の如くならん、蒙古国調伏の秘法定めて御存知有る可く候か、日蓮は日本第一の法華經の行者蒙古国退治の大將為り、於一切衆生中亦為第一」とは是なり、文言多端理を尽す能わず併ながら省略せしめ候、恐恐謹言。

文永五年辰十月十一日

日蓮花押 謹上

極樂寺長老良觀聖人・御所

◆二八 大仏殿別当への御状

174P

去る正月十八日西戎大蒙古国より牒状到来し候い畢んぬ、其の状に云く大蒙古国皇帝日本国王に書を上る大道の行わるる其の義・たり

信を構え睦を修す其の理何ぞ異ならん乃至至元三年丙寅正月日と、
右此の状の如くんば返牒に依つて日本国を襲う可きの由分明なり、
日蓮兼ねて勘え申せし立正安国論に少しも相違せず急かに退治を加
え給え、然れば日蓮を放て之を叶う可からず、早く我慢を倒して日蓮
に帰すべし、今生空しく過ぎなば後悔何ぞ追わん委しく之を記すこと
能わす、此の趣方方申せしめ候、一処に聚集して御調伏有る可く候
か。

文永五年十月十一日

日蓮花押 謹上 大仏殿別当御房

◆二九 寿福寺への御状

175P

風聞の如くんば蒙古国の簡牒・去る正月十八日儘に到来候い畢んぬ、然れば先年日蓮が勘えし書の立正安國論の如く普合せしむ、恐くは日蓮は未萌を知る者なるか、之を以て之を按ずるに念仏・真言・禪・律等の惡法・一天に充滿して上下の師と為るの故に此の如き他國侵逼の難起れるなり、法華不信の失に依つて皆一同に後生は無間地獄に墮す可し早く邪見を翻し達磨の法を捨てて一乗正法に歸せしむ可し、然る間方方へ披露せしめ候の処なり、早早一処に集りて御評議有る可く候、委くは対決の時を期す、恐恐謹言。

ぶんえい
文永五年十月十一日

にちれん かおう
日蓮花押

きんじょう
謹上

すふくじ侍司
寿福寺侍司

おんちゆう
御中

◆三〇

浄光明寺への御状

175P

大蒙古国の皇帝日本国を奪う可きの由牒状を渡す、此の事先年
立正安国論に勘え申せし如く少しも相違せしめず内内日本第一の勸
賞に行わる可きかと存ぜしめ候の処 剩え御称歎に預らず候、是れ
併ながら鎌倉中著の類律宗・禅宗等が 同国王・大臣誹謗説我惡
の故なり、早く二百五十戒を抛つて日蓮に歸して成仏を期す可し、
若し然らずんば墮在無間の根源ならん、此の趣き方方披露せしめ候い
畢んぬ、早く一処に集りて対決を遂げしめ給え日蓮・庶幾せしむる処
なり、敢て諸宗を蔑如するに非ざるのみ、法華の大王戒に對して小乗
☆☆戒・豈相對に及ばんや、笑う可し笑う可し。

文永五年十月十一日

日蓮花押

謹上 きんじよう 淨光明寺侍者御中 じようこうみようじ おんちゆう

◆三二 多宝寺への御状 たほう

176P

日蓮 にちれん・故最明寺殿に奉りたるの書・立正安国論御披見候か未萌 みぼうを知
つて之 これを勘え申す処 ところなり、既に去る正月蒙古国 もうここくの簡牒 かんだう到来 とらいす何ぞ驚
かざらんや、此の事不審 ふしん千万 せんまんなり縦 たとい日蓮 にちれんは悪 にくしと雖 いえども勘 かんうる所の
相当 あたいあたるに於 おいては何ぞ用 もちいざらんや、早く一所に集りて御評議 あ有 べる可 べし、
若 もし日蓮 にちれんが申 もうす事を御用 もちい無 なくくんば今世 こんせには国 くにを亡 こしし後世 ごしやうは必 かならずず無間 むげん
・大城 だいじやうに墮 だす可 べし、此の旨 むね方 かた方 がた之 これを申 まうせしめしなり敢 あえてて日蓮 にちれんが私曲 しきよくに
非 あらず委 くわしく御報 ごほうに預 あづかる可 べく候、言 ことは心 こころを尽 つくさず書 かきは言 ことを尽 つくさず併 ひらなが
ら省略 しょうりゃくせしめ候、恐 きよう恐 きよう謹言 きんげん。 〓

文永五年十月十一日

日蓮

花押

謹上

多宝寺侍司

御中

◆三二 長樂寺への御状

176P

蒙古国調伏の事に就いて方々へ披露せしめ候い畢んぬ、既に日蓮
立正安国論に勘えたるが如く普合せしむ、早く邪法邪教を捨て実法
実教に帰す可し、若し御用い無くんば今生には国を亡し身を失い後生
には必ず那落に墮す可し、速かに一処に集りて談合を遂げ評議せしめ
給え日蓮庶幾せしむる所なり、御報に依つて其の旨を存ず可く候の処
なり敢て諸宗を蔑如するに非ず但此の国の安泰を存する計りなり、
恐恐謹言。

文永五年十月十一日

日蓮花押

謹上 長樂寺侍司御中

◆三三三 弟子・檀那中への御状

177P

大蒙古国の簡牒到来に就いて十一通の書状を以て方々へ申せしめ
候、定めて日蓮が弟子・檀那・流罪・死罪一定ならん少しも之を驚くこ
と莫れ方々への強言申すに及ばず是併ながら而強毒之の故なり、日蓮
庶幾せしむる所に候、各各用心有る可し少しも妻子・眷属を憶うこと
莫れ權威を恐るること莫れ、今度生死の縛を切つて仏果を遂げしめ
給え、鎌倉殿・宿屋・入道・平の左衛門尉・弥源太・建長寺・寿福寺・
極樂寺・多宝寺・浄光明寺・大仏殿・長樂寺十一箇所仍つて十一通の状を

書して諫訴せしめ候い畢んぬ、定めて子細有る可し、日蓮が所に來りて
書狀等披見せしめ給え、恐恐謹言。

ぶんえい
文永五年辰十月十一日

にちれん かおう
日蓮花押

にちれん でし だんな
日蓮弟子・檀那中

◆三四

問注得意抄

文永六年五月 四十八歳御作

178P

与富木入道外二人

土木入道殿

日蓮

今日召し合せ御問注の由承り候、各各御所念の如くならば三千年に
一度花さき菓なる優曇華に値えるの身か、西王母の蘭の桃・九千年に
三度之を得たる東方朔が心か一期の幸何事か之に如かん、御成敗の
甲乙は且らく之を置く前立つて懣念を開発せんか、但し兼日御存知有
りと雖も駿馬にも鞭うつるの理之有り、今日の御出仕・公庭に望んでの後
は設い知音為りと雖も傍輩に向つて雑言を止めらる可し両方召し合せ
の時・御奉行人・訴陳の状之を読むの尅何事に付けても御奉行人の御

尋ね無からんの外一言を出す可からざるか、設い敵人等悪口を吐くと
雖も各各当身の事一二度までは聞かざるが如くすべし、三度に及ぶの
時・顔貌を変ぜず・言を出さず・語を以て申す可し各各は一処の同輩な
り私に於ては全く遺恨無きの由之を申さる可きか、又御供雑人等に
能く能く禁止を加え喧嘩を出す可からざるか、是くの如き事書札に尽
し難し心を以て御斟酌有る可きか、此等の矯言を出す事恐を存すと
雖も仏經と行者と檀那と三事相応して一事を成さんが為に愚言を
出す処なり、恐恐謹言。

五月九日

日蓮花押

三人御中

◆三五 行敏御返事

文永八年七月

五十歳御作

与浄土

僧行敏

179P

◆三六 行敏初度の難状

179P

未だ見参に入らずと雖も事の次を以て申し承るは常の習に候か、抑風聞の如くんば所立の義尤も以て不審なり、法華の前に説ける一切の諸経は皆是妄語にして出離の法に非ずと是一、大小の戒律は世間を誑惑して惡道に墮せしむるの法と是二、念仏は無間地獄の業為と是三、禪宗は天魔の説若し依つて行ずる者は惡見を増長すと是四、事若し実ならば仏法の怨敵なり、仍て対面を遂げて惡見を破らんと欲す、将又其の義無くんば争でか惡名を痛ませられざらんや、是非に

付き委くわしく示し賜たまわる可べきなり、恐恐きようきよう謹言きんげん。

七月八日 僧行敏花押かおう

日蓮阿闍梨御房にちれんあじかりごぼう

◆三七 聖人御返事しょうにんごへんじ

179P

条条御不審ふしんの事私の問答もんどうは事行かたき難がたく候か、然しかれば上奏じょうそうを經へられ
仰おほせ下さるるの趣おもむきに随したがつて是非ぜひを糾明きゅうめいせらる可べく候か、此この如ごとく仰おほせ
を蒙ごまり候条尤もつとも庶幾しよきする所に候、恐恐きようきよう謹言きんげん。

七月十三日 日蓮花押にちれんかおう

行敏御房御返事ごぼうごへんじ

◆三八 行敏訴狀御会通

文永八年 五十歳御作

1

80P

とうせ 当世・日本第一の持戒の僧・良観聖人並びに法然上人の孫弟子念
あみだぶつ 阿彌陀仏・道阿彌陀仏等の諸聖人等日蓮を訴訟する状に云く早く
にちれん 日蓮を召し決せられて邪見を摧破し正義を興隆せんと欲する事云云、
にちれん 日蓮云く邪見を摧破し正義を興隆せば一眼の亀の浮木の穴に入るな
らん、幸甚幸甚。

彼の状に云く右八万四千の教乃至一を是として諸を非とする理豈に
然る可けんや云云、道綽禪師云く当今末法は是五濁惡世なり唯淨土
の一門のみ有つて路に導入す可し云云、善導和尚云く千中無一云云、
法然上人云く捨閉閣抛云云、念阿上人等の云く一を是とし諸を非と

す謗法なり云云、本師三人の聖人の御義に相違す豈に逆路伽耶陀の者に非ずや、将又忍性良觀聖人彼等の立義に与力して此を正義と存せらるるか、又云く而るに日蓮偏えに法華一部に執して諸余の大乗を誹謗す云云、無量義經に云く四十余年・未顕真実・法華經に云く要当說真実と・又云く宣示顯說と・多宝仏証明を加えて云く皆是真実と十方の諸仏は舌相至梵天と云う云云、已今当の三説を非毀して法華經一部を讚歎するは釈尊の金言なり諸仏の傍例なり敢て日蓮が自義に非ず、其の上此の難は去る延曆・大同・弘仁の比・南都の徳一大師が伝教大師を難破せし言なり、其の難已に破れて法華宗を建立し畢んぬ。

又云く所謂法華前説の諸經は皆是れ妄語なりと云云此又日蓮が私の言に非ず、無量義經に云く未だ真実を顯さず妄語の異名なり法華經第

二に云く寧ろ虚妄有りや不なり云云、第六に云く此の良医虚妄の罪を説くや不や云云、涅槃經に云く如来虚妄の言無しと雖も若し衆生虚妄の説に因ると知れば云云、天台云く則ち為如来綺語の語云云、四十余年の経經を妄語と称すること又日蓮が私の言に非ず、又云く念仏は無間の業と云云法華經第一に云く我れ則ち慳貪に墮せん此の事為不可なり云云、第二に云く其の人命終して阿鼻獄に入らん云云、大覺世尊但觀經・念仏等の四十余年の経經を説て法華經を演説したまわずんば三惡道を脱れ難し云云、何に況や末代の凡夫・一生の間・但自らも念仏の一行に留り他人をも進めずんば豈無間に墮せざらんや、例せば民と子との王と親とに随わざるが如し、何に況や道緯・善導・法然上人等念仏等を修行する輩法華經の名字を挙げて念仏に對当して勝劣難易等を論じ未有一人得者・十即十生・百即百生・

千中無一等と謂うは無間の大火を招かざらんや、又云く禪宗は天魔
波旬の説と云云、此又日蓮が私の言に非ず彼の宗の人人の云く教外
別伝と云云、仏の遺言に云く我が経の外に正法有りといわば天魔の説
なり云云、教外別伝の言豈此の科を脱れんや、又云く大小の戒律は
世間誑惑の法と云云、日蓮が云く小乗戒は仏世すら猶之を破す其の
上月氏国に三寺有り、所謂一向小乗の寺と一向大乘の寺と
大小兼行の寺となり云云、一向小と一向大とは水火の如し将又道路
をも分隔せり、日本国に去る聖武皇帝と孝謙天皇との御宇に小乗の
戒壇を三所に建立せり、其の後桓武の御宇に伝教大師之を責め破り
たまひぬ、其の詮は小乗戒は末代の機に当らずと云云、護命景深の
本師等其の諍論に負くるのみに非ず六宗の碩徳各退状を捧げ伝教
大師に帰依し円頓の戒体を伝受す云云、其の状今に朽ちず汝自ら開

き見よ、而るを良觀上人当世・日本国の小乗は昔の科を存せずとい
う、又云く年来の本尊弥陀・觀音等の像を火に入れ水に流す等云云、
此の事慥なる証人を指し出し申す可し若し証拠無くんば良觀上人等
自ら本尊を取り出して火に入れ水に流し科を日蓮に負せんと欲するか
委細は之を糾明せん時其の隠れ無らんか、但し御尋ね無き間は其の
重罪は良觀上人等に譲り渡す、二百五十戒を破失せる因縁此の大
妄語に如かず無間・大城の人他處に求ること勿れ、又云く凶徒を室中
に集むと云云、法華經に云く、或は阿練若に有り等云云、妙樂云く東
春云く輔正記云く此等の經釈等を以て当世・日本国に引き向うるに
汝等が挙る所の建長寺・寿福寺・極樂寺・多宝寺・大仏殿・長樂寺・
浄光明寺等の寺寺は妙樂大師の指す所の第三最甚の惡所なり、東
春に云く即ち是れ出家處に一切の惡人を撰す云云、又云く兩行は公

処に向う等云云、又云く兵杖等云云、涅槃經に云く天台云く章安云く妙樂云く法華經守護の爲の弓箭兵杖は仏法の定れる法なり例せば国王守護の爲に刀杖を集むるが如し、但し良觀上人等弘通する所の法・日蓮が難脱れ難きの間既に露頭せしむ可きか、故に彼の邪義を隠さんが爲に諸国の守護地頭雜人等を相語らいて言く日蓮並びに弟子等は阿弥陀仏を火に入れ水に流す汝等が大怨敵なりと云云、頸を切れ所領を追い出せ等と勸進するが故に日蓮の身に疵を被り弟子等を殺害に及ぶこと数百人なり、此れ偏に良觀・念阿・道阿等の上人の大妄語より出たり心有らん人人は驚く可し怖る可し云云、毘瑠璃王は七万七千の諸の得道の人を殺す、月氏国の大族王は卒都婆を滅毀し僧伽藍を廢すること凡そ一千六百余処乃至大地震動して無間地獄に墮ちにき、毘盧釈迦王は釈種九千九百九十万人を生け取りて並べ従え

て殺戮す積屍しやくしくさむら葬ごの如く流血池を成す、弗沙弥多羅王は四兵を興おこして五天を回めぐらし僧侶を殺し寺塔を焼く、説賞迦王は仏法を毀壞す、訖利多王は僧徒を斥逐し仏法を毀壞す、欽明・敏達・用明の三王の詔に曰く炳然として宜く仏法を斷ずべし云云、二臣自ら寺に詣で堂塔を斫倒し佛像を毀破し火を縱つて之を燒き所燒の佛像を取つて難波の堀江に棄て三尼を喚び出して其の法服を奪い並びに笞を加う云云、大唐の武宗は四千六百余處を滅失して僧尼還俗する者計うるに二十六万五千人なり、去る永保年中には山僧・園城寺を燒き払う云云、御願は十五所堂院は九十所・塔婆は四基・鐘樓は六宇・經藏は二十所神社は十三所・僧坊は八百余宇舎宅は三千余等云云、去る治承四年十二月二十二日・太政入道淨海・東大・興福の兩寺を燒失して僧尼等を殺す、此等は仏記に云く此等の惡人は仏法の怨敵には非ず三明六通の羅漢の

如^{ごと}き僧^{そう}侶^{りょ}等^らが我^{われ}が正^{しょう}法^{ぽう}を滅^{めつ}失^{しつ}せん、所^い謂^わ守^{しゅ}護^ご經^{きやう}に云^いく・涅^ね槃^{はん}經^{きやう}に云^いく。

日蓮^{にちれん}花押^{かおう}

◆三八 一昨日御書

文永八年九月 五十歳御作

与平左衛門尉頼綱

183P

一昨日見参に罷入候の条悦び入り候、抑人の世に在る誰か後世を思わざらん仏の出世は専ら衆生を救わんが為なり、爰に日蓮比丘と成りしより旁法門を開き已に諸仏の本意を覚り早く出離の大事を得たり、其の要は妙法蓮華經是なり、一乗の崇重・三国の繁昌の儀・眼前に流る誰か疑網を貽さんや、而るに専ら正路に背いて偏に邪途を行ず然る間聖人国を捨て善神曠を成し七難並びに起つて四海閑かならず、方今世は悉く関東に歸し人は皆士風を貴ぶ、就中日蓮生を此の土に得て豈吾が国を思わざらんや、仍つて立正安国論を造つて故

さいみょうじにゆうどう
 最明寺入道殿の御時宿屋の入道を以て見参に入れ畢んぬ、而るに
 きんねん
 近年の間、多日の程・犬戎浪を乱し夷敵国を伺う、先年勘え申す所
 きんじつ
 近日符合せしむる者なり、彼の太公が殷の国に入りしは西伯の礼に
 よ
 依り張良が秦朝を量りしは漢王の誠を感じればなり、是れ皆時に當つ
 て賞を得・謀を帷帳の中に回らし勝つことを千里の外に決せし者なり、
 そ
 夫れ未萌を

知る者は六正の聖臣なり法華を弘むる者は諸仏の使者なり、而るに
にちれんかたじけな
日蓮忝くも驚嶺・鶴林の文を開いて鵝王・烏瑟の志を覚り 剰え
かんが
将来を勘えたるに粗符合することを得たり先哲に及ばずと雖も定んで
ほほ
後人には希なる可き者なり、法を知り国を思うの志 尤も賞せらる
まれ
べ
可きの処 邪法邪教の輩 譏奏譏言するの間久しく大忠を懷いて而も
ところ
じゃほうじゃきよう
やから
ざんそうざんげん
いまい
未だ微望を達せず、 剰え不快の見参に罷り入ること偏に難治の次第
あまつさえ
まか
ひとえ
なん
しだい

を愁^{うれ}うる者なり、伏して惟^{おも}みれば泰山に昇らずんば天の高きを知らず
深谷^{しんこく}に入らずんば地の厚きを知らず、仍^{よう}て御存知^{ござんじ}の爲^{ため}に立正安国論一
卷^{これ}之を進覧す、勘^{かん}え載^がする所の文は九牛の一毛なり未^{いま}だ微志を尽さざ
るのみ、抑^{そも}貴^き辺^{へん}は当^{とう}時^じ・天^{てん}下^がの棟^{とう}梁^{りよう}なり何^{なん}ぞ国中の良材を損せんや、
早^めく賢慮^{けんりょ}を回^{めぐ}らして須^すく異敵^{いどく}を退^{たい}くべし世を安^{やす}じ国を安^{やす}ずるを忠と
爲^なし孝^なと爲^なす、是^これ偏^{ひとえ}に身^みの爲^{ため}に之^{これ}を

述べず君の為仏の為神の為一切衆生の為に言上せしむる所なり、
恐恐謹言。

文永八年九月十二日

日蓮花押

謹上

平左衛門殿

◆三九 強仁狀御返事

建治元年十二月

五十四歳御作

与真言僧強仁

184P

強仁上人十月二十五日の御勘狀同十二月二十六日に到来す、此の
事余も年来鬱訴する所なり忽に返狀を書いて自他の疑氷を釈かんと
欲す、但し歎ずるは田舎に於て邪正を決せば暗中に錦を服して遊行し
潤底の長松・匠を知らざるか、兼ねて又定めて喧嘩出来の基なり、貴坊

本意を遂げんと欲せば公家と関東とに奏聞を経て露点を申し下し
是非を糾明せば上一人咲を含み下万民疑を散ぜんか、其の上大覺
世尊は仏法を以て王臣に付属せり世・出世の邪正を決断せんこと必ず
公場なる可きなり、就中当時・我が朝の体為る二難を盛んにす所謂
自界叛逆難と他国侵逼難となり、此の大難を以て大藏經に引き向えて
之を見るに定めて国家と仏法との中に大禍有るか、仍つて予正嘉文永
二箇年の大地震と大長星とに驚いて一切經を聞き見るに此の国の中に
前代未起の二難有る可し所謂自他叛逼の両難なり、是れ併ながら真言
・禪門・念仏・持斎等・権小の邪法を以て法華真実の正法を滅失する
故に招き出す所の大災なり、只今他国より我が国を逼む可き由・兼ね
て之を知る故に身命を仏神の宝前に捨棄して刀劍・武家の責を恐れず
昼は国主に奏し夜は弟子等に語る、然りと雖も真言・禪門・念仏者・

律僧等・種種の誑言を構え重重

の讒訴ざんそを企くわだつるが故ゆえに叙用じようようせられざるの間処しよしよ処おに於おて刀杖とうじようを加えられ
兩度りやうどまで御勘氣ごかんきを蒙ごむる剩あまつさえ頭こうべを刎はねんと擬ぎする是この事ことなり、夫それ
おもんればががつしかんどぶつぼうの仏法ぶつぽうの邪正じやせいは且しばらく之これを置おく大日本にほんこく・亡国ぼうこくと為な
べゆらい之これを勘かんうるに真言宗しんこんしゅうの元祖がんそたる東寺とうじの弘法こうぼう・天台山てんだい第三だいの
座主ざす慈覺じかく・此だいしの兩大師りやうだいし・法華經ほけきようと大日經だいにちきようとの勝劣しょうれつに迷惑めいわくし日本にほん第一だいいちの
聖人しょうにんなる伝教大師でんきようだいしの正義せいぎを隱没おんもつしてより已来このかた叡山えいざんの諸寺しよは慈覺じかくの
邪義じやぎに付き神護七まもなな大寺だいいじは弘法こうぼうの僻見びやくけんに隨したがう其それより已来このかた王臣おうしん邪師じしを
仰あぎ万民ばんみん僻見びやくけんに歸かへす、是かくくの如ごとき諂曲てんこく既に久きうしく四百余年しよひやくにんを經歴きやうりやくし
国漸こくぜんく衰おとろえ王法おうほうも
亦また尽つきんとす彼の月支がつしの弗沙弥多羅王ふつしゆみたらの八万四千はちまんの寺塔じとうを焚燒ぼんしやうし
無量むりやう仏子ぶつしの頸はを刎はねし、此かんの漢土かんどの会昌えしやう天子てんしの寺院いえん四千六百しよせんりく余所あしたを
滅失めつしつし九国きゅうこくの僧尼そうに還俗げんぞくせしめたる此等これら大惡人あくにん為なりと雖いえども我が朝あしたの大

謗法には過ぎず、故に青天は眼を瞋らして我が国を睨み黄地は憤
を含んで動もすれば天を發す、国主聖主に非れば謂れ之を知らず諸
臣儒家に非れば事之を勘えず、剩え此の災天を消さんが為に真言師を
渴仰し大難を卻けんが為に持斎等を供養す、譬えば火に薪を加え冰
に水を増すが如く惡法は弥貴まれ大難は益々来る只今此の国滅亡
せんとす。

予粗先ず此の子細を勘うるの間・身命を捨棄し国恩を報ぜんとす、
而るに愚人の習い遠きを尊び近きを蔑るか将又多人を信じて一人を捨
つるかの故に終に空しく年月を送る、今幸に強仁上人・御勘状を以て
日蓮を曉諭す然る可くは此の次でに天聰を驚かし奉つて決せん、誠に
又・御勘文の体為非を以て先と為し若し上人黙止して空しく一生を過
せば定めて師檀共に泥梨の大苦を招かん、一期の大慢を以て永劫の迷

因を殖ること勿れ速速天奏を経て疾疾対面を遂げ邪見を翻えし
給え、書は言を尽さず言は心を尽さず悉公場を期す、恐恐謹言。

十二月廿六日

日蓮 花押

強仁上人座下

◆四〇 開目抄上

文永九年（1172年）二月 五十一歳

御作 与門下一同 於佐渡塚原 186P

夫れ一切衆生の尊敬すべき者三あり、所謂主師親これなり、又
習学すべき物三あり、所謂儒外内これなり。

儒家には三皇・五帝・三王・此等を天尊と号す諸臣の頭目・万民の橋
梁なり、三皇已前は父をしらず人皆禽獸に同ず五帝已後は父母を
わきまえ

弁て孝をいたす、所謂重華はかたくなはしき父をうやまひ沛公は帝
となつて大公を拜す、武王は西伯を木像に造り丁蘭は母の形をきざめ
り、此等は孝の手本なり、比干は殷の世の・ほろぶべきを見て・しゐて帝
をいさめ頭をはねらる、公胤といゐし者は懿公の肝をとつて我が腹をさ

き肝を入れて死しぬ此等は忠の手本なり、尹寿は堯王の師・務成は舜王の師・大公望は文王の師・老子は孔子の師なり此等を四聖とがうす、天尊・頭をかたぶけ万民・掌をあわす、此等の聖人に三墳・五典・三史等の三千余巻の書あり、其の所詮は三玄をいはず三玄とは一には有の玄・周公等此れを立つ、二には無の玄・老子等・三には亦有亦無等・莊子が玄これなり、玄とは黒なり父母・末生・已前をたづぬれば、或は元氣よりして生じ、或は貴賤・苦楽・是非・得失等は皆自然等云云。かくのごとく巧に立つといえども・いまだ過去・未來を一分もしらず玄とは黒なり幽なりかるがゆへに玄という但現在計りしれるにいたり、現在にをひて仁義を制して身をまほり国を安んず此に相違すれば族をほろぼし家を亡ぼす等いう、此等の賢聖の人人は聖人なりといえども過去を・しらざること凡夫の背を見ず・未來を・かがみざること盲人

の前をみざるがごとし、但現在げんざいに家を治め孝をいたし堅く五常ごじょうを行ずればほうはい傍輩ほうはいも・うやまい名も国にきこえ賢王もこれを召して・或あるは臣となし・或あるは師とたのみ・或あるは位をゆづり天も来て守りつかう、所謂いわゆる周の武王には五老きたりつかえ後漢ごかんの光武には二十八宿来つで二十八将となりし此なり、而しかりといえども過去かこ・未来みらいをしらざれ

ば父母・主君・師匠の後世をもたすけず不知恩の者なり・まことの賢聖にあらず。孔子が此の土に賢聖なし西方に仏國という者あり此聖人なりといひて外典を仏法の初門となせしこれなり、礼楽等を教て内典わたらば戒定慧をしりやすからせんがため・王臣を教て尊卑をさだめ、父母を教て孝の高きをしらしめ師匠を教て帰依をしらしむ、妙楽大師云く「仏教の流化実には茲に頼る礼楽前に馳せて真道後に啓く」等云云、天台云く「金光明經に云く一切世間所有の善論皆此の經に因る、若し深く世法を識れば即ち是れ仏法なり」等云云、止観に云く我れ三聖を遣わして彼の真丹を化す」等云云、弘決に云く「清淨法行經に云く月光菩薩彼に顔回と称し光淨菩薩彼に仲尼と称し迦葉菩薩彼に老子と称す天竺より此の震旦を指して彼と為す」等云云。

二には月氏の外道・三目八臂の摩醯首羅天・毘紐天・此の二天をば

一切衆生の尊父・悲母・又天尊・主君と号す、迦毘羅・樓僧ぎや・
勸婆婆・此の三人をば三仙となづく、此等は仏前八百年・已前已後の
仙人なり、此の三仙の所説を四韋陀と号す六万蔵あり、乃至・仏・出世
に當つて六師外道・此の外経を習伝して五天竺の王の師となる支流・九
十五六等にもなれり、一一に流流多くして我慢の瞳高きこと非想天
にもすぎ執心の心の堅きこと金石にも超えたり、其の見の深きこと
巧なるさま儒家には・にるべくもなし、或は過去・二生・三生・乃至七
生・八万劫を照見し又兼て未来・八万劫をみる、其の所説の法門の
極理・或は因中有果・或は因中無果・或は因中亦有果・亦無果等云
云、此れ外道の極理なり所謂善き外道は五戒・十善戒等を持つて有漏
の禪定を修し上・色・無色をきわめ上界を涅槃と立て屈歩虫のごとく
・せめのぼれども非想天より返つて三惡道に墮つ一人として天に留るも

のなし而しかれども天を極きわむる者は永くかへらずと・をもえり、各各・自師
の義をうけて堅く執しゅするゆへに・或あるは冬寒に一日に三度・恒河こうがに浴し
・或あるは髪をぬき・或あるは巖いわおに身をなげ・或あるは身を火にあぶり・或あるは五処を
やく・或あるは裸形あかはだか・或あるは馬を多く殺せば福をう・或あるは草木そうもくをやき・或あるは
一切いっさいの木を礼らいす、此等これらの邪義じゃぎ其の数をしらず師を恭敬きやうけいする事・諸天しよてんの
帝釈たいしゃくをうやまい諸臣しよの皇帝こうてい

を拝するがごとし、しかれども外道の法・九十五種・善惡につけて一人も生死をはなれず善師につかへては二生・三生等に惡道に墮ち惡師につかへては順次生に惡道に墮つ、外道の所詮は内道に入る即最要なり、或外道云く「千年已後・仏出世す」等云云、或外道云く「百年已後・仏出世す」等云云、大涅槃經に云く「一切世間の外道の經書は皆是れ仏説にして外道の説に非ず」等云云、法華經に云く「衆に三毒有りと示し又邪見の相を現ず我が弟子是くの如く方便して衆生を度す」等云云。

三には大覺世尊は、此一切衆生の大導師・大眼目・大橋梁・大船師・大福田等なり、外典・外道の四聖・三仙其の名は聖なりといえども實には三惑未斷の凡夫・其の名は賢なりといえども實に因果を弁えざる事嬰兒のごとし、彼を船として生死の大海をわたるべしや。彼を橋として

六道ろくどうの巷ちまたこえがたし。我が大師だいしは変易へんやく・猶なほを・わたり給たまへり。況いはんやや分段ぶんぶんの生死しょうじをや元品がんぽんの無明むみょうの根本こんぽん猶なほをかたづけ給たまへり。況いはんやや見思けんじ枝葉しえつのそわく・迷惑みわくをや、此この仏陀ぶつだは三十じゅうどう成道じやうどうより八十御入滅にゅうめつにいたるまで五十年が間いちだい・一代しやうきやうの聖教とを説き給たまへり、一字いっく・二句みなしんごん・皆真言みなしんごんなり一文いちもん一偈いちげ・妄語もうごにあらず外典げてん・外道げどうの中の聖賢せいけんの言ことすらいふこと、あやまりなし事と心と相符あひあへり況いはんやや仏陀ぶつだは無量曠劫むりやうかうきやうよりの不妄語もうごの人・されば一代いちだい・五十余年せうきやうの説教せうきやうは外典げてん外道げどうに対すれば大乘だいじやうなり大人だいにんの実語じつごなるべし、初成道しよじやうどうの始はじより泥どろの夕ゆふにいたるまで説くところの所説しよせつ・皆真実みなしんじつなり。

但ただし仏教ぶつぎやうに入いて五十余年きやうきやうの経経けいけい・八万法蔵はちまんぽうざうを勘かんえたるに小乗しやうじやうあり大乘だいじやうあり權經ごんきやうあり実經じつきやうあり顯教けんきやう・密教みつぎやう・☆語なんご・麁語そご・実語じつご・妄語もうご・正見せいけん・邪見じやけん等の種種しゆじゆの差別さべつあり、但ただし法華經計ほけきやうばかり教主きやうしゆ釈尊しやくそんの正言しやうげんなり三世さんぜ・十方じゆつぽうの諸仏しよぶつの真言しんごんなり、大覺世尊だいかくせそんは四十余年よんじゆうよねんの年限ねんげんを指しして

其その内うちの恒河ごうがの諸經しよきやうを未顯みけん真実しんじつ・八年はちねんの法華ほつげは要當ようとう說真実せつしんじつと定め給し
かば多宝たほう・大だい地ぢより出現しゆつげんして皆是かいぜ真実しんじつと証しやう明みやうす、分身ふんじんの諸しよ仏ぶつ・來集らいじゆ
して長舌ちやうぜつを梵天ぼんてんに付く此この赫赫かくかくたり明明めいめいたり。晴天せいてんの日ひよりも・あき
らかに夜中まんげつの満月まんげつのごとし仰あおいで信しんぜよ伏ふくして懷おもうべし。

但し此の經に二箇の大事あり俱舍宗・成実宗・律宗・法相宗・三論宗等は名をもしらず華嚴宗と真言宗との二宗は儼に盗んで自宗の骨目とせり、一念三千の法門は但法華經の本門・壽量品の文の底にしづめたり、竜樹・天親・知つてしかも・いまだ・ひろいださず但我が天台智者のみこれをいだけり。

一念三千は十界互具よりことはじまれり、法相と三論とは八界を立てて十界をしらず況や互具をしるべしや、俱舍・成実・禪宗等は阿含經によれり六界を明らかに四界をしらず、「十方唯一仏」と云つて一方有仏だにもあかさず、一切有情・悉有仏性ところ・とかざらめ。一人の仏性猶ゆるさず、而るを律宗・成実宗等の十方有仏・有仏性など申すは仏滅後の人師等の大乘の義を自宗に盗み入れたるなるべし、例せば外典・外道等は仏前の外道は執見あさし仏後の外道は

仏教をききみて自宗の非をしり巧の心・出現して仏教を盗み取り自宗
に入れて邪見もつとも・ふかし、附仏教・學仏法成等これなり、外典も
又又かくのごとし漢土に仏法いまだ・わたらざりし時の儒家・道家は、
いういうとして嬰兒のごとく・はかなかりしが後漢・已後に釈教わたり
て対論の後・釈教やうやく流布する程に釈教の僧侶・破戒のゆへに
・或は還俗して家にかへり・或は俗に心をあはせ儒道の内に釈教を盗み
入れたり。止觀の第五に云く・今世多く惡魔の比丘有つて、戒を退き家
に還り賄策を懼畏して更に道士に越濟す、復た名利を邀めて莊老を
誇談し、仏法の義を以て儉んで邪典に安き、高を押して下きに就け、尊
を擢いて卑しきに入れ概して平等ならしむし」云云。弘に云く・比丘の
身と作つて仏法を破滅す。若しは戒を退き家に還るは、衛の元嵩等が
如し、即ち在家の身を以て仏法を破壊す、此の人正教を儉・して邪典

に助添す、高きを押して』等とは道士の心を以て二教の概と為し邪正をして等しからしむ。義是の理無し、曾つて仏法に入つて正を偷んで邪を助け八万・十二の高きを押して五千二篇の下きに就け用つて彼の典の邪鄙の教を釈するを推尊入卑と名く」等云云、此の釈を見るべし次上の心なり。

仏教又かくのごとし、後漢の永平に漢土に仏法わたりて、邪典やぶれて内典立つ。内典に南三・北七の異執を

こりて蘭菊なりしかども、陳隋の智者大師にうちやぶられて仏法二ぶつぽうふたび
群類をすくう。其の後・法相宗・真言宗・天竺よりわたり華嚴宗又けこんしゅう
出来せり、此等の宗宗の中に法相宗は一向・天台宗に敵を成す宗・
法門水火なり、しかれども玄奘三蔵・慈恩大師・委細に天台の御釈を
見ける程に自宗の邪見ひるがへるかのゆへに自宗をばすてねども其の心
天台に帰伏すと見へたり、華嚴宗と真言宗とは本は權經・權宗なり
善無畏三蔵・金剛智三蔵・天台の一念三千の義を盗みとつて自宗の
肝心とし其の上に印と真言とを加て超過の心ををこす、其の子細をし
らぬ学者等は天竺より大日經に一念三千の法門ありけりと・うちをも
う、華嚴宗は澄觀が時・華嚴經の心如工画師の文に天台の一念三千の
法門を偷み入れたり、人これをしらず。

日本・我朝には華嚴等の六宗・天台・真言已前にわたりけり、華嚴・

さんろん 三論・法相・諍論水火なりけり、伝教大師・此の国にいでて六宗の
じゃけん 邪見をやぶるのみならず真言宗が天台の法華經の理を盗み取て自宗
の極とする事あらはれ・をはんぬ、伝教大師・宗宗の人師の異執をすて
て専ら經文を前として責めさせ給しかば六宗の高徳・八人・十二人・
十四人・三百余人・並に弘法大師等せめをとされて日本国・一人もな
く天台宗に帰伏し南都・東寺・日本一州の山寺・皆叡山の末寺となり
ぬ、又漢土の諸宗の元祖の天台に帰伏して謗法の失を・まぬかれたる事
もあらはれぬ、又其の

後やうやく世をとろへ人の智あさく・なるほどに天台の深義は習うしな
いぬ、他宗の執心は強盛になるほどにやうやく六宗・七宗に天台宗を
とされて・よわりゆくかの・ゆへに結句は六宗・七宗等にもをよばず、い
うにかいなき禪宗・浄土宗にをとされて始めは檀那やうやくかの

邪宗にうつる、結句は天台宗の碩徳と仰がる人々みなをちゆきて彼の邪宗をたすく、さるほどに六宗・八宗の田畠・所領みなたをされしょうぼう
正法失せはてぬ天照太神・正八幡・山王等・諸の守護の諸大善神もほうみ
法味をなめざるか国中を去り給うかの故に悪鬼・使を得て国すでに破れなんとす。

此に予愚見をもつて前四十余年と後八年との相違をかんがへみるに、
其の相違多しといえども先ず世間の学者もゆるし、我が身にもさもや
とうちをぼうる事は二乗作仏・久遠実成なるべし。法華經の現文を
はいけん
拝見するに、舍利弗は華光如来・迦葉は光明如来・須菩提は名相如来
かせんねん えんぶなだいこんこうによらい かしょう こうみょうによらい しゅぼだい みょうそうによらい
・迦施延は閻浮那提金光如来・目連は多摩羅跋栴檀香仏・富楼那は
ぼうみょうによらい あなん さんかいえじさいつうおうぶつ たまらばせんたこうぶつ ふるな
法明如来・阿難は山海慧自在通王仏・羅喉羅は蹈七宝華如来・五百・
七百は普明如来、学・無学二千人は宝相如来・摩訶波闍波提比丘尼・

耶輸多羅比丘尼等は、一切衆生喜見如来・具足千万光相如来等なり、
此等の人人は法華經を拝見したてまつるには尊きやうなれども、爾前
の經經を披見の時はけをさむる事どもをほし。其の故は仏・世尊は
実語の人なり故に聖人・大人と号す。外典・外道の中の賢人・聖人・天
仙なんど申すは実語につけたる名なるべし此等の人人に勝れて第一なる
故に世尊をば大人とは・申すぞかし、此の大人・唯一大事因縁故・
出現於世」となのらせ給いて 未だ真実を顕さず・世尊は法久しうして
後・要ず当に真実を説くべし・正直に方便を捨て」等云云、多宝仏・
証明を加え分身・舌を出す等は舍利弗が未来の華光如来・迦葉が
光明如来等の説をば誰の人か疑網をなすべき。

而れども爾前の諸經も又仏陀の実語なり・大方広仏華嚴經に云く
如来の智慧・大葉王樹は、唯二処に於て生長して利益を為作すこと

能わ^{あた}ず、所謂^{いわゆる}二乗^{にじよう}の無^む為^い広^{ひろ}大^{だい}の深坑^{じんこう}に墮^おつると、及^{およ}び善根^{ぜんこん}を壊^{やぶ}る非器^{ひき}の衆生^{しゆじよう}は大邪見^{じやくけん}・貪愛^{とんない}の水に溺^{おぼ}れるとなり」等云云、此の經文^{きやうもん}の心は雪山^{せっせん}に大樹^{たいじゆ}あり無^む尽^{じん}根^{こん}となづく。此を大藥王樹^{やくおう}と号^{なづ}す、閻浮提^{えんぶだい}の諸木^{しよ}の中の大王^{だいおう}なり此の木の高さは十六万八千由旬^{ゆじゆん}なり、一閻浮提^{えんぶだい}の一切^{いっさい}の草木^{そうもく}は此の木の根ざし枝葉^{しやう}・華菓^{けか}の次第^{しだい}に随^{したが}つて華菓^{けか}なるなるべし、此の木をば仏^{ぶつ}の仏性^{ぶつじよう}に譬^{たと}へたり一切^{いっさい}衆生^{しゆじよう}をば一切^{いっさい}の草木^{そうもく}にたとふ、但^{ただ}し此の大樹^{たいじゆ}は火坑^{かきよう}とすいりんの水輪^{すいりん}の中に生長せず、二乗^{にじよう}の心中^{しんちゆう}をば火坑^{かきよう}にたとえ一闍提^{いっせんだい}人の心中^{しんちゆう}をば水輪^{すいりん}にたとえたり、此の二類^{にるい}は永^{とこ}く仏になるべからずと申^{もう}す經文^{きやうもん}なり、大集經^{だいじつきやう}に云^{いわ}く「二種^{にしゆ}の人^{にん}有り、必ず死して活^ひきず、畢竟^{ひつぎやう}して恩^{おん}を知^しり恩^{おん}を報^{はう}ずること能^{あた}わず。一には声聞^{しやうもん}、二には縁覺^{えんかく}なり、譬^{たと}えば人有^{にん}りて深坑^{じんこう}に墜^{だつ}し、是^この人^{にん}自^{みづか}ら利^りし他^たを利^りすること能^{あた}わざるが如^{ごと}く、

声聞^{しょうもん}・縁覺^{えんかく}も亦復^{またまた}是^{かく}くの如^{ごと}し、解脫^{げだつ}の坑^{あな}に墮^だして自^{みづか}ら利^りし及^{およ}び他^たを
利^りすること能^{あた}わらずし等^ら云云、外典^{げてん}・

三千余卷さんぜんの所詮しよせんに二つあり所謂いふゆる孝と忠となり忠も又孝の家よりいでたり、孝と申すもうは高なり天高けれども孝よりも高からず又孝とは厚なり地あつけれども孝よりは厚からず、聖賢せいけんの二類にるいは孝の家よりいでたり何に況いかや仏法いふんやぶつぽうを学せん人・知恩報恩ちおんほうおんなかるべしや、仏弟子ぶつでしは必ず四恩をしつて知恩報恩ちおんほうおんをいたすべし、其の上舍利弗・迦葉等しやりほつかしやうの二乗にじようは二百五十戒三千の威儀・持整じせいして味・淨・無漏むろの三靜慮・阿含經あこんきやうをきわめ三界さんがいの見恩けんじを尽せり。知恩報恩ちおんほうおんの人の手本てほんなるべし、然しかるを不知恩ふちおんの人なりと世尊せそん定め給ぬ、其の故そのゆえは父母ふぼの家を出でて出家しゅつけの身となるは必ず父母ふぼを・すくはんがためなり、二乗にじようは自身じしんは解脱げだつと・をもえども利他りたの行かけぬ。設たとい分ぶん分の利他りたありといえども父母等ふぼを永不成仏ようふじやうぶつの道に入るれば・かへりて不知恩ふちおんの者となる。

維摩經ゆいまきやうに云く羅摩詰ゆいまきつ、又文殊師利もんじゆしりに問う、何等なんらをか如來にやらいの種と為

す、答えて曰く一切塵勞の疇は如來の種と爲る、五無間を以て具すと雖も、猶能く此の大道意を發す」等云云・又云く響えば族姓の子・高原陸土には青蓮芙蓉の衡華を生ぜず卑湿汚田に乃ち此の華を生ずるが如し」等云云、又云く已に阿羅漢を得て応真と爲る者は終に復道意を起して仏法を具すること能わざるなり、根敗の士・其の五樂に於て複利すること能わざるが如し」等云云、文の心は貪・瞋・癡等の三毒は仏の種となるべし殺父等の五逆罪は仏種となるべし高原の陸土には青蓮華生ずべし、二乗は仏になるべからず、いう心は二乗の諸善と凡夫の惡と相對するに凡夫の惡は仏になるとも、二乗の善は仏にならじとなり、諸の小乗經には惡をいましめ善をほむ、此の經には二乗の善をそしり凡夫の惡をほめたり、

かへつて仏經とも・をばへず外道の法門のやうなれども證するところは

二乗にじようの永不成仏ようふじようぶつをつよく定めさせ給たまうにや、方等陀羅尼經ほうとうだらにに云く
文殊もんじゆ・舍利弗しやりほつに語かたらく猶枯樹なおこじゆの如ごとく更に華を生ずるや不いなや。亦山水
の如ごとく本処ほんこに還かえるや不いなや。折石しやくせき還かえつて合あうや不いなや。焦種芽いれるたねを生ずる
や不いなや。舍利弗しやりほつの言いわく不いななり、文殊もんじゆの言いわく若もし得うべからずんば云何なんぞ
我わに菩提ぼだいの記きを得るを問うて、心に歡喜かんきを生ずるや」等云云、文の心は
枯かられたる木・華さかず山水・山にかへらず

破れたる石あはず・いれる種をいず、二乗また・かくのごとし仏種をいれり等となん。

大品般若經に云く 諸の天子今未だ三菩提心を發さずんば應に發すべし、若し聲聞の正位に入れば是の人能く三菩提心を發さざるなり、何を以ての故に生死の爲に障隔を作す故」等云云、文の心は二乗は菩提心を・をこさざれば我隨喜せじ諸天は菩提心を・をこせば我隨喜せん。首楞嚴經に云く 五逆罪の人・是の首楞嚴三昧を聞いて阿耨菩提心を發せば、還つて仏と作るを得。世尊・漏尽の阿羅漢は猶破器のごとく、永く是の三昧を受くるに堪忍せず」等云云。淨名經に云く 其れ汝に施す者は福田と名けず。汝を供養する者は三惡道に墮す」等云云。文の心は迦葉・舍利弗等の聖僧を供養せん人天等は必ず三惡道に墮つべしとなり、此等の聖僧は仏陀を除きたてまつりては人天

の眼目^{がんもく}・一切衆生の導師^{いっさいしゅじょう どうし}とこそ・をもひしに幾許^{いくばく}の人天^{にんてん}・大会^{たいえ}の中にし
て・かう度度^{たたびたび}・仰せられしは本意^{ほんい}なかりし事なり只詮^{ただせん}するところは我が
御弟子^{おんでし}を安めころさんとにや、此の外牛驢^{ごうろ}の二乳^{ににち}・瓦器^{がき}・金器^{きんき}・螢火^{けいか}・日
光^{ひかり}等

の無量^{むりやう}の譬^{たとえ}をとつて二乗^{にじやう}を呵噴^{かしやく}せさせ給き、一言二言ならず一日・二
日ならず一月・二月ならず一年・二年ならず一經二經ならず、
四十余年^{よんじゅうねん}が間^ま・無量^{むりやう}・無辺^{むへん}の經經^{きやうきやう}に無量^{むりやう}の大会^{たいえ}の諸人^{しよにん}に對して一言も
ゆるし給^{たま}う事もなく・そしり給^{たま}いしかば世尊^{せそん}の妄語^{もうご}なりと我もしる人
もしる天もしる地もしる、一人・二人ならず百千万人^{ばんにん さんがい}・三界^{さんがい}の諸天^{しよてん}・
竜神^{りゅうじん}・阿修羅^{あしゅら}・五天^{ごてん}・四洲^{ししゅう}・六欲^{りくよく}・色^{しき}・無色^{むしき}・十方世界^{じふつぱう せかい}より雲集^{うんしゅう}せる
人天^{にんてん}・二乘^{にじやう}・大菩薩等^{だいぼさつ みな}皆これをしる又皆これをきく、各各・国国へ還^{かえ}りて
袈婆世界^{しゃばせかい}の釈尊^{しゃくそん}の説法^{せつぽう}を彼れ彼れの国国にして一一にかたるに十方^{じふつぱう}

無^む辺^{へん}の世^せ界^{かい}の一切^{いっさい}衆^{しゆ}生^{じやう}・二人^{ふにん}もなく迦^か葉^{よう}・舎^し利^り弗^{ふつ}等^{とう}は永^{よう}不^ふ成^{じやう}仏^{ぶつ}の者^{もの}・
供^く養^{よう}しては・あしかりぬべしと・しりぬ。

而^{しか}るを後^{あと}八^{はち}年^{ねん}の法^{ほふ}華^け經^{きやう}に忽^{たちま}ち悔^{くゐ}還^{かえ}して、二^に乘^{じやう}作^さ仏^{ぶつ}すべしと仏^{ぶつ}陀^だと
かせ給^{たま}はん^に、人^{にん}天^{てん}大^{たい}会^え・信^{しん}仰^{かう}をなすべしや、用^{もち}ゆべからざる上^{うへ}・先^{せん}後^ごの
經^{きやう}經^{きやう}に疑^ぎ網^{もう}をなし、五^ご十^{じゆ}余^よ年^{ねん}の說^{せつ}教^{きやう}・皆^{みな}虚^こ妄^{もう}の說^{せつ}となりなん、されば
四^{よん}十^{じゆ}余^よ年^{ねん}・未^み顕^{けん}真^{しん}実^{じつ}等^{とう}の經^{きやう}文^{もん}はあらませしか天^{てん}変^{へん}の仏^{ぶつ}陀^だと現^{げん}じて後^{あと}八^{はち}
年^{ねん}の經^{きやう}をばとかせ給^{たま}うかと疑^ぎ網^{もう}するところ^{ところ}に・げ^ぎにげ^ぎに・しげ^{しげ}に

劫国・名号と申して二乗成仏の国をさだめ、劫をしるし、所化の弟子
ななどを定めさせ給へば、教主釈尊の御語すでに二言になりぬ。自語
相違と申すはこれなり。外道が仏陀を大妄語の者と咲いしこと・これな
り。人天大会けをさめて・ありし程に、爾の時に東方・宝浄世界の多宝
如来・高さ五百由旬・広さ二百五十由旬の大七宝塔に乘じて教主
釈尊の人天・大会に自語相違をせめられて・とのべ・かうのべ、さまざま
に宣べさせ給いしかども、不審猶をはるべしとも・みへず・もてあつかいて
・をはせし時・仏前に大地より涌現して虚空にのぼり給う、例せば暗夜
に満月の東山より出づるがごとし七宝の塔・大虚にかからせ給いて大地
にも・つかず大虚にも付かせ給はず・天中に懸りて宝塔の中より梵音声
を出して証明して云く、爾の時に宝塔の中より大音声を出して歎めて
云く、善き哉善き哉・釈迦牟尼世尊・能く平等大慧・教菩薩法・仏所

護念ごねんの妙法華經みょうほけきやうを以もつて大衆たいしゆうの爲ために説ときたもう、是かくくの如ごとし是かくくの如ごとし、釈迦牟尼世尊しやかむにせそんの所説しよせつの如ごときは皆是みなこれ眞實しんじつなり」等云云、又云く爾その時に世尊せそん・文殊師利等もんじゆしりの無量百千万億むりやうせんまんくじゆうしやばせかい・旧住娑婆世界しやばせかいの菩薩ぼさつ・乃至人非人等ないしにんびにん・一切いっさいの衆の前に於おいて大神力を現げんじたもう、広長舌こうちやうぜつを出して上うみ梵世ぼんじに至いたらしめ一切いっさいの毛孔もうくより乃至十方世界ないしじゆつぽうせかい・衆の宝樹の下かみしよぶつの師子ししの座かみの上しよぶつの諸仏またまたかくも亦復またまたかく是ごとくの如ごとく、広長舌こうちやうぜつを出むりやうし無量の光むろもろふんじんを放ちたもう」等云云、又云く「十方じゆつぽうより来りたまえる諸もろもろの分身ふんじんの仏をして各本土ほんどに還かえらしめ、乃至多宝仏ないしたほうぶつの塔かえも、還もとつて故ごとの如ごとくし給たまうべし」等云云、大覺世尊だいかくせそん・初成道しよじやうどうの時しよぶつ・諸仏じゆつぽう・十方げんに現しやくそんじて釈尊しやくそんを慰諭いゆし給たまう上・諸もろもろの大菩薩ぼさつを遣つかわしき、般若經はんにやくきやうの御時おんときは釈尊しやくそん・長舌ちやうぜつを三千さんぜんにをほひ千仏じゆつぽう・十方げんに現たまひ給たまい・金光明經こんぐわうみやうきやうには四方しほうの四仏しほふ現げんせり、阿弥陀經あみだには六方しよぶつの諸仏しよぶつ・舌さんぜんを三千さんぜんにををう、大集經だいしつきやうには十方じゆつぽうの諸仏しよぶつ

・菩薩ぼさつ・大宝坊にあつまれり、此等これらを法華經ほけきように引合せて・かんがうるに
黄石おうしやくと黄金と白雲と白山と白冰はくひようと銀鏡と黒色と青色とをば翳眼えいがんの者
・眇目みようもくの者・一眼の者・邪眼じやがんの者は・みたがへつべし、華嚴經けこんきようには先後せんごの經
なければ仏語相違ぶつごそういなしなにに・つけてか大疑だいぎいで来べき、大集經だいしつきよう・大品經だいほん
・金光明經こんこうみようきよう・阿弥陀經あみだは諸小乘經しよしやうじやうきようの二乗を彈阿だんかせんがために十方じゆつぱう
に浄土じやうどをとき凡夫ぼんぷ・菩薩ぼさつを欣慕こんぼせしめ二乗にじやうを、わずらは

す、小乗經と諸大乘經と一分の相違あるゆえに、或いは或は十方に仏現じ給ひ、或は十方より大菩薩をつかはし、或は十方世界にも此の經をとくよしをしめし、或は十方より諸仏あつまり給う、或は釈尊、舌を三千にをほひ、或は諸仏の舌をいだす、よしをとかせ給う、此ひとえに諸小乗經の十方世界、唯有一仏ととかせ給ひしをもひを、やぶるなるべし、法華經のごとくに先後の諸大乘經と相違、出来して舍利弗等の諸の声聞、大菩薩、人天等に將非魔作仏と、をもはれさせ給う大事にはあらず、而るを華嚴・法相・三論・真言・念仏等の翳眼の輩、彼彼の經經と法華經とは同じと、うちをもへるは、つたなき眼なるべし。

但在世は四十余年をすてて法華經につき候ものもや、ありけん、仏滅後に此の經文を開見して信受せんこと、かたかるべし、先ず一つには

爾前の經經は多言なり法華經は一言なり爾前の經經は多經なり此の經は一經なり彼彼の經經は多年なり此の經は八年なり、仏は大妄語の人・永く信ずべからず不信の上に信を立てば爾前の經經は信ずる事もありなん法華經は永く信ずべからず、当世も法華經をば皆信じたるやうなれども法華經にては・なきなり、其の故は法華經と大日經と法華經と華嚴經と法華經と阿弥陀經と一なるやうを・とく人をば悦んで歸依し別別なるなんと申す人をば用いずたとい用ゆれども本意なき事と・をもへり。

日蓮云く日本に仏法わたりて・すでに七百余年・但伝教大師・一人計り、法華經をよめりと申すをば諸人これを用いず、但し法華經に云く・若し須弥を接つて他方の無數の仏土に擲置かんも亦未だ為難しとせず、乃至若し仏滅後に惡世中に於て能く此の經を説かん是れ則ち

為難しし等云云、日蓮が強義・經文に普合せり法華經の流通たる
涅槃經に末代濁世に謗法の者は十方の地のごとし正法の者は爪上の
土のごとしと・とかれて候は・いかんがし候べき、日本の諸人は爪上の土
か日蓮は十方の土かよくよく思惟あるべし、賢王の世には道理かつべし
の世に非道・先をすべし、聖人の世に法華經の実義顯るべし等と心うべ
し、此の法門は迹門と爾前と相對して爾前の強き

やうに・をばゆもし爾前にぜんつよるならば舍利弗等しやりほつの諸もろもろの二乗にじようは永不成仏ようふじようぶつの者なるべし・いかんが・なげかせ給たまうらん。

二には教主釈尊ききうしやくそんは住劫・第九の滅・人壽百歳の時・師子頻王ししきんおうには孫

・淨飯王じようばんには嫡子・童子悉達太子どうじしつたたいし・一切義成就菩薩いっさいじきうじゆぼさつこれなり、御年十

九の御出家しめつけ・三十成道の世尊じようどうせそん・始め寂滅道場じやくめつどうじようにして実報華王じつほうけおうの儀式を

示現しげんして十玄・六相・法界・円融・頓極微妙とんごくみみょうの大法だいほうを説き給たまい十方じゆっほうの

諸仏しよぶつも顕現けんげんし一切いっさいの菩薩ぼさつも雲集うんしゅうせり、土うといひ機きといひ諸仏しよぶつといひ始

めといひ何事なにことにつけてか大法だいほうを秘たし給たまうべき、されば經文きやうもんには顕現けんげん

自在力じざい・演說円満經等えんぜつえんまん云云、一部六十卷は一字一点もなく円満經えんまんな

り、譬たとへは如意宝珠にようほうじゆは一珠たまも無量珠むりやうも共に同じ。一珠たまも万宝を尽して

雨ふらし万珠も万宝を尽すがごとし、華嚴經けこんきやうは一字も万事ばんじも但同事なるべ

し、心仏しんぶつ及衆生の文しんぶつぎやうしめじようは華嚴宗けこんしんの肝心かんじんなるのみならず法相ほつそう・三論さんろん・真言しんごん

てんだい

・天台の肝要とこそ申し候へ此等程いみじき御經に何事をか隠すべき、

にじようせんたい

じようふつ

たま

なれども二乘闡提不成仏ととかれしは珠のきずと・みゆる上三処ま

しじようしようかく

たまい

くおんじつじよう

じゆりようほん

と

たまい

で始成正覺となのらせ給いて久遠実成の寿量品を説きかくさせ給い

たま

わ

き、珠の破れたると月に雲のかかれると日の蝕したるがごとし不思議な

あこん

ほうとう

はんにや

だいにちきよう

ぶつせつ

ふしぎ

りしことなり、阿含・方等・般若・大日經等は仏説なれば・いみじき事な

けこんきよう

れども華嚴經にたいすれば・いうにかいなし、彼の經に秘せんこと此等

きようぎよう

の經經にとかるべからず、されば雜阿含經に云く「初め成道」等云

だいしつぎよう

いわ

あこんきよう

いわ

じようとう

いわ

云、大集經に云く「如来成道始め十六年」等云云、淨名經に云く

だいにちきよう

いわ

によういじようとう

くた

だいにちきよう

いわ

じようみようきよう

始め仏樹に坐して力めて魔を降す」等云云、大日經に云く「我昔道湯

に坐して」等云云、

仁王般若經に云く「二十九年」等云云。

これら

此等は言うにたらず只耳目を・をどころかす事は無量義經・華嚴經の

ゆいしんほっかい

ほうとう

はんにやきよう

ただじもく

を

むりようききよう

けこんきよう

だいほう

唯心法界・方等・般若經の海印三昧・混同無二等の大法をかきあげて

・或あるは未み顕けん真しん實じつ・或あるは歴り劫やつ修しゆ行ぎやう等らう・下くだす程ほどの御ご經きやうに我われ先さきに道どう場じやう
菩ぼ提だい樹じゆの下したに端たん坐ざすること六む年ねん、阿あ耨く多たら羅さん三さん藐みやく三さん菩ぼ提だいを成じやうずることを
得とくたり」と初しよ成じやう道どうの華け嚴こん經きやうの始し成じやうの文ぶんに同どうせられし不ふ思し議ぎと打うち思しう
ところところに此こは法ほ華け經きやうの序じよ分ぶんなれば正しやう宗しゆの事ことをいはずも・あるべし、
法ほ華け經きやうの正しやう宗しゆ・略りやく開かい三さん・広くわう開かい三さんの御ご時とき・唯ゆい仏ぶつ与よ仏ぶつ・乃ない能のう究く尽じん・

諸法実相等・世尊法久後等・正直捨方便・多宝仏・迹門八品を指して
皆是其実と証明せられしに何事をか隠すべきなれども久遠寿命をば
秘せさせ給いて我始め道場に坐し樹を觀じて亦經行す等云云、最第一
の大不思議なり、されば弥勒菩薩・涌出品に四十余年の未見今見の大
菩薩を仏・爾して乃ち之を教化して初めて道心を発さしむ等と・とかせ
給いしを疑つて云く如来太子為りし時・釈の宮を出でて伽耶城を去
ること遠からず道場に坐して阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得
たまえり、是より已來始めて四十余年を過ぎたり世尊・云何ぞ此の少
時に於て大いに仏事を作したまえる」等云云、教主釈尊此等の疑を
晴さんがために寿命品を・とかんとして爾前・迹門のきを挙げて
云く「一切世間の天人及び阿修羅は皆今の釈迦牟尼仏・釈氏の宮を
出でて伽耶城を去ること遠からず道場に坐して阿耨多羅三藐三菩提

を得たまえりと謂えり」等と云云、正しく此の疑を答えて云く、然るに善男子・我実に成仏してより已来無量無辺・百千万億・那由佉劫なり」等云云。

華嚴・乃至般若・大日經等は二乗作仏を隠すのみならず、久遠実成を説きかくさせ給へり、此等の經經に二つの失あり、一には行布を存するが故に、仍お未だ權を開せずとて迹門の一念三千をかくせり、二には始成を言うが故に尚未だ迹を發せずとて本門の久遠をかくせり、此等の二つの大法は一代の綱骨・一切經の心髓なり、迹門方便品はいちねんさんぜん・二乗作仏を説いて爾前二種の失・一つを脱れたり、しかりと・いえども・いまだ発迹顯本せざれば・まことの一念三千もあらはれず二乗作仏も定まらず、水中の月を見るがごとし・根なし草の波の上に浮べるにいたり、本門にいたりて始成正覺をやぶれば四教の果をやぶる、

四教しきようの果をやぶれば四教しきようの因やぶれぬ、爾前にぜん・迹門しやくもんの十界じゅうかいの因果いんがを打ちやぶつて、本門ほんもんの十界じゅうかいの因果いんがをとき顯あらわす、此すなわ即ち本因ほんいん・本果ほんがの法門ほうもんなり、九界くかいも無始むしの仏界ぶつがいに具ぶつがいし

仏界ぶつがいも無始むしの九界くかいに備そなわりて、真じゅうの十界じゅうかい互具いごぐ・百界ひゃくかい千如せんによ・一念いちねん三千さんぜんなるべし、かうて・かへり・みれば華嚴經けこんきようの台上じゅうたう十方あごんきよう・阿含經あこんきようの小釈迦しゃか・方等ほうとう・般若はんにやの金光明經こんこうみようきようの阿彌陀經あみだの大日經だいにちきよう等の權ごん仏等ぶつは、此じゆりの壽量じゆりようの仏てんげつの天月てんげつしばらく影えいを

だいしやう 大小の器にして浮べ給うを・諸宗の学者等・近くは自宗に迷い遠くは
ほけきやう 法華經の寿量品をしらず水中の月に実の月の想いをなし・或は入つて
てんげつ 取らんと・をもひ・或は繩を・つけて・つなぎとどめんとす、天台云く
『天月を識らず但池月を觀ず』等云云。

にちれん 日蓮案じて云く二乗作仏すら猶爾前づよにをぼゆ。久遠実成は又に
るべくも・なき爾前づりなり、其の故は爾前・法華相對するに猶爾前
こわき上・爾前のみならず迹門十四品も一向に爾前に同ず、本門十四
品も涌出・寿量の二品を除いては皆始成を存せり、雙林最後の
大般涅槃經・四十卷・其の外の法華・前後の諸大經に一字・一句もなく
法身の無始・無終はとけども応身・報身の顯本はとかれず、いかなが
廣博の爾前・本・迹・涅槃等の諸大乘經をばすてて但涌出・寿量の二
品には付くべき。

されば法相宗と申す宗は、西天の仏滅後・九百年に無著菩薩と申す大論師有しき、夜は都率の内院にのぼり、弥勒菩薩に対面して、一代聖教の不審をひらき・昼は阿輸舍国にして法相の法門を弘め給う。彼の御弟子は世親・護法・難陀・戒賢等の大論師なり。戒日大王・頭をかたぶけ五天幢を倒して此れに帰依す、尸那国の玄奘三蔵・月氏にいたりて十七年、印度百三十余の国国を見きて、諸宗をばふりすて、此の宗を漢土にわたして、太宗皇帝と申す賢王にさづけ給い、肪・尚・光・基を弟子として大慈恩寺並に三百六十余箇国に弘め給う。日本国には人王三十七代・孝德天皇の御宇に道慈・道昭等ならいわたして山階寺にあがめ給へり、三国第一の宗なるべし、此の宗の云く始め華嚴經より終り法華・涅槃經にいたるまで無性有情と決定性の二乗は永く仏になるべからず、仏語に二言なし一度・永不成仏と定め給いぬる

上は日月は地に落ち給うとも、大地は反覆すとも、永く変改有るべからず。されば法華經・涅槃經の中にも爾前の經經に嫌いし無性有情・決定性を正しくついさして成仏すとは・とかれず。まづ眼を閉じて案ぜよ。

法華經・涅槃經に決定性・無性有情・正く仏になるならば無著・世親ほどの大論師・玄奘・慈恩ほどの三蔵・人師これをみざるべしや、此をのせざるべしや、これを信じて伝えざるべしや、弥勒菩薩に聞いてたてまつるべしや、汝は法華經の文に依るやうなれども、天台・妙楽・伝教の僻見を信受して其の見をもつて經文をみるゆえに爾前に法華經は水火なりと見るなり。華嚴宗と真言宗は法相・三論にはにるべくもなき超過の宗なり、二乗作仏・久遠実成は法華經に限らず華嚴經・大日經に分明なり、華嚴宗の杜順・智儼・法蔵・澄観・真言宗の善無畏・

金剛智・不空等は天台・伝教には・にるべくもなき高位の人なり、其の上善無畏等は大日如来より系みだれざる相承あり、此等の権化のいいかでかあやまりあるべき、随つて華嚴經には「或は釈迦・仏道を成じ已つて不可思議劫を経るを見る」等云云、大日經には「我れは一切の本初なり」等云云、何ぞ但久遠実成・寿量品に限らん、譬へば井底の蝦が大海を見ず山左が洛中を・しらざるがごとし、汝但寿量の一品を見て華嚴・大日經等の諸經をしらざるか、其の上月氏・戸那・新羅・百濟等にも一向に二乗作仏・久遠実成は法華經に限るといふか。

されば八箇年の經は四十余年の經經には相違せりというとも先判・後判の中には後判につくべしというとも、猶爾前づりにこそをばうれ。又、但在世計りならば・さも・あるべきに滅後に居せる論師・人師・多

は爾前にぜんづりにこそ侯そうらへかう法華經は信じがたき上、世もやうやく末になれば聖賢せいけんはやうやく・かくれ迷者まよいはやうやく多し。世間の浅き事すら猶なおあやまりやすし。何いかに況や出世しゅつせの深法・なかるべしや、犢子・方広そうびんが聰敏そうびんなりし猶なおを大小乘經にあやまてり、無垢☆☆が利根りこんなりし、權実・二教を弁えず、正法しょうぼう一千年の内、在世ざいせも近く月氏がつしの内なりし。すでにかくのごとし、況や尸那いわんやしな・日本等は国もへたて音おともかはれり。人の根も鈍じゆみなり寿命じゆみも日あさし貪・瞋・癡も倍增ばいぞうせり、仏世を去つてとし久し、仏經ぶつきやうみなあやまれり、誰の智解か直かるべき、仏涅槃經に記しるして云く、末法まつぽうには正法の者は爪上の土・謗法の者は十方じゅうぽうの土」とみへぬ、法滅尽經ほうめつじんきやうに云く、謗法の者は恒河沙・正法の者は一二の小石しると記しをき給たまう、千年・五百年に一人なんども正法の者ありがたからん、世間の罪せけんに依よつて惡道あくどうに墮おちる者は爪上の土・佛法ぶつぽうによつて惡道あくどうに墮おちる

者は十方じゅうぽうの土・俗よりも僧・女より尼多く惡道あくどうに墮おつべし。

此こゝに日蓮案にちれんじて云いく、世すでに末代まつだいに入つて二百余年・辺土に生を

うけ、其その上下賤げせん其その上貧道ひんどうの身なり。輪廻りんね六趣の間・人天にんてんの大王だいおうと

生れて、万民ばんみんをなびかす事・大風たいふうの小木の枝を吹くがごとくせし時も仏

にならず、大小乘經だいしょうじょうの外凡・内凡の大菩薩ぼさつと修しゅうしあがり一劫いつじょう・二劫にじょう・

無量劫むりょうじょうを経て菩薩ぼさつの行を立て、すでに不退ふたいに入りぬべかりし時も・強盛じやうじやう

の惡縁あくえんにおとされて仏にもならず、しらず大通結縁だいつくちえんの第三類さんるいの在世ざいせを

もれたるか久遠くおん五百の退轉たいてんして今に來れるか、法華經ほけきやうを行ぜし程に

世間の惡縁あくえん・主難なん・外道げどうの難なん・小乘經しょうじやうきやうの難なんなどは忍しのびし程に權大乘ごんだいじやう

・実大乘經じつだいじやうきやうを極きくめたるやうなる道綽どうしやく・善導ぜんどう・法然等ほうねんがごとくなる

惡魔あくまの身に入りたる者・法華經ほけきやうをつよくほめあげ、機きをあながちに下くだし

理深解微りじんげみと立て、耒有みういちにんとくしや一人得者ひとりうけしや、千中無せんちゅうむいつ一等いちどうとすかししもの

に、無量生が間・恒河沙の度すかされて権經に墮ちぬ権教より
小乗經に墮ちぬ外道・外典に墮ちぬ結句は惡道に墮ちけりと深く
此れをしれり、日本國に此れをしれる者は但日蓮一人なり。

これを一言も申出すならば父母・兄弟・師匠に國主の王難必ず来る
べし、いはずば・慈悲なきに・にたりと思惟するに法華經・涅槃經等に此
の二辺を合せ見るに・いはずば今生は事なくとも後生は必ず無間地獄
に墮べし、いうならば三障四魔必ず競い起るべしと・しりぬ、二辺の中に
は・いうべし、王難等・出来の時は退轉すべくは一度に思ひ止るべしと、
且くやすらいし程に宝塔品の六難九易これなり、我等程の小力の者・
須弥山はなぐとも、我等程の無通の者・乾草を負うて劫火には・やけず
とも我等程の無智の者・恒沙の經經をば・よみをばうとも、法華經は
一句一偈も末代に持ちがたと・とかるるは・これなるべし、今度強盛

の菩提心を・をこして退転せじと願しぬ。

既に二十余年が間・此の法門を申すに日日・月月・年年に難かさなる、少少の難は・かずしらず大事の難・四度なり二度は・しばらく・をく王難すでに二度にをよぶ、今度は・すでに我が身命に及ぶ其の上弟子といひ檀耶といひ・わづかの聴聞の俗人なんと来つて重科に行わる謀反なんどの者のごとし。

法華經の第四に云く「而も此經は如来の現在にすら猶怨嫉多し、況や滅度の後をや」等云云、第二に云く「經を讀誦し書持すること有らん者を見て輕賤憎嫉して結恨を懷かん」等云云、第五に云く「一切世間、怨多くして信じ難し」等云云、又云く「諸の無智の人の惡口罵詈する有らん」等、又云く「國王・大臣・婆羅門・居士に向つて誹謗し我が惡を説いて、是れ邪見の人なりと謂わん」と、又云く「數數擯出見れん」

等云云、又云く、杖木瓦石もて之を打擲せん」等云云、涅槃經に云く
爾の時に多く無量の外道有つて、和合して共に摩訶陀の王・阿闍世の
所に往き、今は唯一の大惡人有り瞿曇沙門なり、一切世間の惡人利養
の爲の故に其の所に往集して眷屬と爲つて、
能く善を修せず、呪術の力の故に迦葉及び舍利弗・目・連を調伏す」
等云云、天台云く、何に況や未來をや。理化し難きに在るなり」等云
云、妙樂云く、障り未だ除かざる者を怨と爲し、聞くことを喜ばざる
者を嫉と名く」等云云。南三・北七の十師・漢土無量の學者・天台を
怨敵とす、得一云く、嗤いかな智公・汝は是れ誰が弟子ぞ。三寸に足
らざる舌根を以て、覆面舌の所説を謗する」等云云、東春に云く、問う
在世の時許多の怨嫉あり仏滅度の後此經を説く時・何が故ぞ亦留難多
きや、答えて云く俗に良藥口に苦しと云うが如く、此經は五乘の異執

を廢して一極の

玄宗げんそうを立つ、故ゆえに凡しりぞを斥け聖を呵し、大を排い小を破り天魔てんまを銘づけ

て毒虫と為し、外道げどうを説いて惡鬼あつきと為し、執小しゅせうを貶して貧賤ひんせんと為し、

菩薩ぼさつを挫くじきて新學と為す、故ゆえに天魔てんまは聞くを惡にくみ、外道げどうは耳に逆い

二乗にじようは驚怪きやうけし、菩薩ぼさつは怯行こきやうす、此かくの如ごときの徒、悉ことごとく留難とどを為す多

怨嫉おんしつの言、豈あに唐たうしからんや」等云云、顯あら・或論いに云く、僧統奏して曰く、

西夏に鬼弁婆羅門ばらもん有り。東土とうどに巧言ぎやうげんを吐く禿頭沙門とくずしやもんあり、此これ乃ち

物類冥もつるいみ召よして世間せけんを誑惑おおわくす」等云云、論じて曰く、晉齊朝せいちようの光統こうずに聞

き今は本朝ほんちようの六統に見る、実なるかな法華ほっけに何況がきようすつをや」等云云、

秀句しゅうくに云く、代を語れば則ち像の終り未の始め、地を尋たずぬれば則ち唐とう

の東、羯かつの西・人を原たすぬれば則ち五濁ごじよくの生・闍靜とうじようの時なり、經に云く

猶多怨嫉ゆたおんしつ・況滅度後きやうめつごと。此の言、良に以有るなり」等云云。夫れ小兒しょうにに

やいと

灸治を加れば必ず母をあだむ。重病じゅうびやうの者に良薬りやうやくをあたらうれば定んで

口に苦しとうれう、在世ざいせ猶なほをしかり、乃至ないし像末ざうまつ辺土へんちをや、山に山をか

さね波に波をたたみ難なんに難なんを加く非ひに非をますべし、像法ざうぼうの中には天台てんだい

一人・法華經ほけきやう・一切經いっさいきやうをよめり。南北これをあだみしかども、陳隋ちんずい・二

代の聖主せいしゅ・眼前がんぜんに是非ぜひを明めしかば敵てきついに尽きぬ、像の末に伝教でんぎやう一人

・法華經ほけきやう・一切經いっさいきやうを仏説ぶつせつのごとく読み給たまへり、南都なんと・七大寺ななだいじ蜂起ほうきせしか

ども桓武かんむ・乃至ないし嵯峨さが等の賢主けんしゅ・我あきと明たらめ給たまいしかば又事なし、今末法まっぽう

の始め二百余年なり況滅度きやうめつど後のしるしに闍諍えつじやうの序ついでとなるべきゆへに非

理さきを前さきとして濁世じよくせのしるしに召合めいあせられずして流罪るざい乃至ないし寿にも・をよば

んとするなり、

されば日蓮にちれんが法華經ほけきやうの智解てんだいは天台てんだい・伝教でんぎやうには千万せんまんが一分いちぶんも及ぶ事な

けれども難なんを忍しのび慈悲じひのすぐれたる事は・をそれをも・いだきぬべし、定

おんはから

いちぶん

んで天の御計いにもあづかるべしと存ずれども、一分のしるしもなし。い

じゅうか

かえ

ほけきょう

ぎようじや

よいよ重科に沈む、還つて此の事を計りみれば我が身の法華經の行者

しよてん

ぜんじん

たま

にあらざるか、又諸天・善神等の此の国をすてて去り給えるか。かたが

うたが

ほけきょう

かんじほん

げ

にちれん

た疑はし、而るに法華經の第五の卷・勸持品の二十行の偈は日蓮だにも

し

あ

せそん

もうこ

な

ゆた

此の国に生れずば・ほとをど世尊は大妄語の人・八十万億那由佗の

ぼさつ

だいは

こおうざい

お

い

もろもろ

むち

菩薩は提婆が虚誑罪にも堕ちぬべし、經に云く 諸の無智の人あつて、

あくめり

とうじよう

がしやく

等云云

今の世を見るに日蓮より外の

しよそう

ほけきょう

しよにん

あくめり

とうじよう

にちれん

ほか

諸僧たれの人か法華經につけて諸人に悪口罵詈られ刀杖等を加えら

るる者ある、日蓮なくば此の一偈の未来記は妄語となりぬ、

悪世の中

の比丘は・邪智にして心諂曲」又云く

白衣の与に法を説いて世に恭敬

せらるること、六通の羅漢の如し」此等の經文は今の世の念仏者・禪宗

・律宗等の法師なくば世尊は又大妄語の人、

常在大衆中・乃至向國王

りつしゅう

ほつし

せそん

もうこ

じようざいたいしゅう

ないし

こくおう

大臣・婆羅門・居士等、今の世の僧等・日蓮を譏奏して流罪せずば此の經文むなし、又云く「數數見擯出」等云云、日蓮・法華經のゆへに度度ながされずば數數の二字いかんがせん、此の二字は天台・伝教もいまだ・よみ給はず況や余人をや、末法の始のしるし恐怖惡世中の金言の・あふゆへに但日蓮一人これをよめり、例せば世尊が付法藏經に記して云く「我が滅後・一百年に阿育大王という王あるべし」摩耶經に云く「我が滅後・六百年に竜樹菩薩という人・南天竺に出ずべし」大悲經に云く「我が滅後・六十年に末田地という者・地を竜宮につくべし」此れ等皆仏記のごとくなりき、しからずば誰か仏教を信受すべき、而るに仏・恐怖惡世・然後末世・末法滅時・後・五百歳など正妙の二本に正しく時を定め給う、当世・法華の三類の強敵なくば誰か仏説を信受せん日蓮なくば誰をか法華經の行者として仏語をたすけん、

南三・北七・七大寺等・猶像法の法華經の敵の内・何に況や当世の禪・
律・念仏者等は脱るべしや、經文に我が身・普合せり御勘氣をかほれば
・いよいよ悦びをますべし、例せば小乗の菩薩の末斷惑なるが
願兼於業」と申して・つくりたくなき罪なれども父母等の地獄に墮ち
て大苦を・うくるを見てかたのごとく其の業を造つて願つて地獄に墮ち
て苦が同じ苦に代れるを悦びとするがごとし、此れも又かくのごとし
當時の責はたうべくも・なければども未來の惡道を脱すらんと・をもえば
悦びなり。

但し世間の疑といひ、自心の疑と申し、いかでか天扶け給わざる
らん、諸天等の守護神は仏前の御誓言あり法華經の行者には・さるに
なりとも法華經の行者とがうして早早に仏前の御誓言を・とげんとこ
そをばすべきに其の義なきは我が身・法華經の行者にあらざるか、此の

疑うたがは此この書しよの肝心かんじん・一期いちきの大事だいじなれば処しよ処しよに・これをかく上うたが疑がいを強く
して答こたをかまうべし。

季札きさつといひし者は心のやくそくを・たがへじと、王わうの重宝じゆうほうたる劍けんを徐じよ
君きんが塚つかにかく・王尹わういんと云いいし人は河かの水みづを飲のんで金がねの鷺目ろもくを水みづに入れ・
公胤こういんといひし人は腹はらをさいて主君しゅくんの肝かんを入いる・此等これらは賢人けんじんなり恩おんをほう
ずるなるべし、況いはんやや舍利弗迦葉等しかりほつかしやうの大聖たいせいは・二百五十戒さんぜん三千いぎの威儀いぎ・一
もかけず見思けんじを断ことじ三界さんがいを離はなれたる聖人しやうにんなり、梵帝ぼんたい・諸天しよてんの導師どうし・
一切衆生いっさいしゆじやうの眼目がんもくなり、而しかに四十余年よんじゆうよねんが間かん・永不成仏ようふじやうぶつと嫌きらいすてはて
られて・ありしが法華經ほけきやうの不死ふしの良藥りやうやくをなめて・種いれるたねの生おい、破石はしやくの合あひ
・枯木からの華菓けかなんどならんとせるがごとく仏ぶつになるべしと許ゆるされて・いま
だ八相はさうをとなえず・いかでか此この經きやうの重恩じゆうおんをば・ほうぜざらん、若もしほ
うぜずば彼彼かれかれの賢人けんじんにも・をとりて不知恩ふちおんの畜生ちくしやうなるべし、毛宝もうほうが龜かめは

あをの恩をわすれず昆明池の大魚は命の恩をほうぜんと明珠を夜中に
ささげたり、畜生すら猶思をほうず何に況や大聖をや、阿難尊者は
斛飯王の次男・羅喉羅尊者は淨飯王の孫なり、人中に家高き上証果の
身となつて成仏を・をさへられたりしに八年の靈山の席にて山海慧・
蹈七宝華なんと如来の号をさづけられ給う、若し法華經ましまさずば
・いかに・いえたかく大聖なりとも誰か恭敬したてまつるべき、夏の桀・
殷の紂と申すは万乗の主・土民の歸依なり、しかれども政あしくして世
をほろぼせしかば今に・わるきものの手本には桀紂・桀紂とこそ申せ、
下賤の者・癩病の者も桀紂のごとしと・いはれぬればのられたりと腹た
つなり、千二百・無量の声聞は法華經ましまさずば誰か名をも・きくべ
き其の音をも習うべき、一千の声聞・一切經を結集せりとも見る人よ
もあらじ、まして此等の人人を絵像・木像にあらはして本尊と仰ぐべし

や、此れ偏に法華經の御力によつて一切の羅漢歸依せられさせ給うな
るべし、諸の聲聞・法華を・はなれさせ給いなば魚の水をはなれ猿の木
をはなれ小児の乳をはなれ民の王を・はなれたるがごとし、いかでか
法華經の行者をすて給うべき、諸の聲聞は爾前の經經にては肉眼の
上に天眼・慧眼をう。法華經にして法眼・仏眼備われり。十方世界す
ら猶照見し給うらん、何に況や此の娑婆世界の中法華經の行者を
知見せられざるべしや、設い日蓮・惡人にて一言・二言・一年・二年・
一劫・二劫・乃至百千万億劫・此等の聲聞を惡口・罵詈し奉り刀杖を
加えまいらする色なりとも法華經をだにも信仰したる行者ならばすて
給うべからず、譬へば幼稚の父母をのる父学これを・すつるや、梟鳥
が母を食う、母これをすてず・破鏡父をがいす父これにしたがふ、畜生
すら猶かくのごとし大聖・法華經の行者を捨つべしや、されば四大

声聞しょうもんの領解りょうげの文に云く我われら等今は真こに是これ声聞しょうもんなり仏道ぶつどうの声を以て一切いっさいをして聞かしむ我等われら今は真こに阿羅漢あらかんなり諸もろもろの世間せけん天人てんにん・魔ま・梵ぼんに於て普あまねく其その中に於て・応まさに供養くようを受くべし、世尊せそんは大恩おほいまいます希有けうの事を以て憐愍れんみん教化きやうけして我等われらを利益りやくし給う、無量億劫むりやうにも、誰たれか能く報ずる者あらん。手足をもつて供給し頭頂をもつて礼敬し一切いっさいをもつて供養くようすとも伴報ずること能あたわじ、若しは以て項戴ちやうだいし両肩りやうけんに荷負おんして恒沙劫ごうしゃに於て心を尽して恭敬きやうけいし又美膳みぜん・無量むりやうの宝衣ほうい、及び諸もろもろの臥具ふぐ・種種しゅんじゆの湯藥とうやくを以てし、牛頭ごう・栴檀せんたん、及び諸もろもろの珍寶ちんぼうを以て塔廟とうびやうを起て宝衣たてを地に布かき斯ごとくの如ごとき等の事を以て供養くようすること恒沙劫ごうしゃに於てすとも亦報またずること能あたわじ」等云云。

諸もろもろの声聞しょうもん等は前四味ぜんしみの經經きやうきやうにいばくぞの呵嘖かしやくを蒙こむり人天にんてん・大会たいえの中に於て恥辱ちじよくがましき事・其その数をしらず、しかれば迦葉尊かしやうそん者の淳泣ていききの

音は三千をひびかし、須菩提尊者は亡然として手の一鉢をすつ。
舍利弗は餌食をはき富楼那は画瓶に糞を入ると嫌わる。世尊、鹿野苑
にしては阿含經を讚歎し二百五十戒を師とせよなんと慇懃にほめさせ
給いて、今又いつのまに我が所説をばかうはそしらせ給うと二言・相違
の失とも申しぬべし、例せば世尊・提婆達多を汝愚人・人の唾を食う
と罵詈せさせ給しかば毒箭の胸に入るがごとく・をもひて・うらみて
云く瞿曇

は仏陀にはあらず我は斛飯王の嫡子・阿難尊者が兄・瞿曇が一類なり、
いかにあしき事ありとも内内・教訓すべし、此等程の人天・大会に此程
の大禍を現に向つて申すもの大人・仏陀の中にあるべしや、されば先
は妻のかたき、今は一座のかたき、今日よりは生生世世に大怨敵となる
べし」と誓いしぞかし、此れをもつて思うに今諸の大声聞は本と外道・

婆羅門ばらもんの家より出いでたり、又諸もろもろの外道げどうの長者ちようじゃなりしかば諸王しよに帰依きえせられ諸檀邦しよたんぱうにたつとまる、或あるは種姓すじよう・高貴かうきの人もあり、或あるは富福ふふく・充滿じゆうまんのやからもあり、而しかるに彼彼かれかれの榮官等えいくわんとうをうちすて慢心まんしんの瞳を倒して俗服を脱ぎ壞色の糞衣を身にまとひ白びやく・弘くわう・弓きゆう・箭等せんとうをうちすてて一鉢いちぱつを手ににぎり貧人ひんじん・乞丐こうがいなんどの・ごとくして世尊せそんにつき奉たてまつり風雨を防ぐ宅もなく、身命しんみやうをつぐ衣食いしょく乏少なりし・ありさまなるに五天いつてん・四海しかい・皆外道みなげどうの弟子でし・檀那だんななれば仏すら九横くかうの大難だいにんにあひ給たまふ、所謂いわゆる提婆だいばが大石をとばせし阿闍世王あじゃせの醉象さいしやうを放ちし、阿耆多王あぎたおうの馬麦めみやく・婆羅門ばらもん

城のこんづ・せんしや婆羅門女が鉢を腹にふせし、何に況や所化の弟子
の数難申す計りなし、無量の釈子は波瑠璃王に殺され千万の眷属は醉
象にふまれ、華色比丘尼は提婆にがいせられ迦盧提尊者は馬糞にうづ
まれ、目・尊者は竹杖にがいせらる、其の上六師同心して阿闍世・
婆斯匿王等に譏奏して云く瞿曇は閻浮第一の大惡人なり、
彼がいたる処は三災・七難を前とす。大海の衆流をあつめ、大山の
衆木をあつめたるがごとし、瞿曇がところには衆惡をあつめたり、
所謂迦葉・舍利弗・目連・須菩提等なり、人身を受けたる者は忠孝を先
とすべし、彼等は瞿曇にすかされて父母の教訓をも用いず、家をいで王
法の宣旨をも・そむいて山林にいたる、一国に跡をとどむべき者にはあ
らず、されば天には日月・衆星・変をなす地には衆天さかなりなんど
うつたう、堪べしとも・おぼえざりしに又うちそうわざわいと仏陀にも

うちそい・がたくて・ありしなり、人天大会にんてんたいえの衆会しゅうえの砌みぎりにて時時じじ呵嘖かしやくの音こえを

ききしかば・いかにあるべしとも・おぼただす只ただあわつる心のみなり、其その

上大だいなんの大難だいいちの第一だいいちなりしは・浄名經じょうみょうきょうの其それ汝なんじに施ほどこす者は福田ふくでんと名

けず汝なんじを供養くようする者は三惡道さんあくどうに墮だす」等云云、文の心は仏・庵羅苑あんらおん

申もうすところに・をはせしに梵天ぼんてん・帝釈たいしやく・日月にちがつ・四天してん・三界さんがい諸天しよてん・地神ちしん・

竜神等りゅうじん・無數恒沙むすうじやうさの大会たいえの中にして云く須菩提等しゆぼだいの比丘等びくを供養くようせん

天人てんにんは三惡道さんあくどうに墮おつべし、此等これらをうちきく天人てんにん・此等これらの声聞しやうもんを供養くようすべ

しや、詮せんずるところは仏の御言おんごごを用つ

て諸もろもろの二乗にじやうを殺害さつがいせさせ給たまうかと思ゆ、心あらん人人ひとびとは仏をも・うと

みぬべし、されば此等これらの人人ひとびとは仏を供養くようしたてまつりしついでに・こそ・

わづかの身命しんみやうをも扶たすけさせ給たまいしか、されば事の心を案ずるに

四十余年よんじゅうよねんの経経きやうぎやうのみとかれて、法華八箇年ほっけはちかねんの所説しよせつなくて、御入滅にやうめつならせ給たまひいたらましかば、誰たれの人か此等これらの尊者そんじやをば供養くやうし奉たてまつるべき現身げんしんに餓鬼道がきだうにこそ・をはすべけれ。

而しかるに四十余年よんじゅうよねんの経経きやうぎやうをば東春の大日輪だいにちりん・寒水しやうめつを消滅しょうめつするがごとく無量むりやうの草露さいろうを大風たいふうの零落れいらくするがごとく一言いちじ一時いちじに未顕真実みけんしんじつと打ちけし、大風たいふうの黒雲こくうんをまき大虚おほそらに満月まんげつの処しよするがごとく青天せいてんに日輪にちりんの懸かり給たまうがごとく世尊せそんは法久後ほうくご、要当説真実ようとうせつしんじつと照てらさせ給たまひいて、華光げかう如来にやらい・光明如来等こうみやうにやらいと舍利弗しやりほつ・迦葉等かしようを赫赫かくかくたる日輪にちりん・明明めいめいたる月輪げつりんのごとく鳳文ほうぶんにしるし、亀鏡ききやうに浮うべられて侯そうらへばこそ如来滅後にやらいめつごの人天にんてんの諸しよ檀那等だんなには仏陀ぶつだのごとくは仰あおがれ給たまひしか。水すまば月・影を・をしむべからず風ふうふかば草木そうもくなびかざるべしや、法華經ほけきやうの行者ぎやうじやあるならば此等これらの聖者せいじやは大火たいかの中をすぎても大石だいせきの中を・とをりてもとぶらはせ給たまうべ

し、迦葉かしようの人定もことにこそ・よれ、いかにと・なりぬるぞ・

いぶかしふかしんとも申もうすばかりなし、優・五百歳ごうせんのあたらざるか 広宣流布くわうせんるふ」

の妄語もうごとなるべきか是こゝが法華經ほけきようの行者ぎやうじやならざるか、法華經ほけきようを教内と

下くだして別伝べつでんと称しょうする大妄語もうごの者をまほり給たまうべきか、捨閉閣抛しゃへいかくほうと定め

て法華經ほけきようの門をとちよ巻まをなげすてよと・ありて法華堂ほつけを失うしなえる者を

守護しゆごし給たまうべきか、仏前ぶつぜんの誓ちかいはありしかども濁世じよくせの・大難だいにんのはげしさ・

をみて諸しよてん天下たまたり給たまわざるか、日月にちがつ・天にまします須弥山しゆみせんいまでも・くづれ

ず海潮やうげんも増減ぞうげんす四季も・かたのごとく・たがはず・いかに・なりぬるやら

んと大疑だいぎいよいよ・つもり候。

又諸大菩薩しよだいぼさつ・天人等てんにんのごときは爾前にぜんの經經きやうぎやうにして記別きべつを・うるやう

なれども水中の月を取らんと、するがごとく影を体とおもうがごとく・

いろかたち・のみあつて実義じつぎもなし、又仏ごおんの御恩ごおんも深くて深からず、

世尊せそん初しよ成道じやうどうの時ときはいまだ説教せつぎやうもなかりしに法慧菩薩ほうえぼさつ・功德林菩薩くどくぼさつ・金剛幢菩薩こんごうちやうぼさつ☆金剛藏菩薩こんごうざうぼさつ等らなど申まうせし六十余ぼくじゆの大菩薩だいぼさつ・十方じゆつぱうの諸仏しよぶつの国土こくどより教主きやうしゆしやくそん・釈尊しやくそんの御前おんまえに來り給たまひて賢首菩薩けんしゆぼさつ・解脫げだつ月等げだつの菩薩ぼさつの請しやうにをもむいて十住じゆうじやう・十行じゆうぎやう・十回向じゆうきやう・十地等じゆうちの法門ほうもんを説とき給たまひき、此等これらの大菩薩だいぼさつの所説しよせつの法門ほうもんは釈尊しやくそんに習ならひたまつるにあらず、十方世界じゆつぱうせかいの諸の梵天等もろもろぼんてんも來つて法をとく又釈尊しやくそんに・ならいたてまつらず、總じて華嚴會座けこんの大菩薩だいぼさつ・天竜等てんりやうは釈尊しやくそん以前いぜんに不思議ふしぎ・解脱げだつに任まかせる大菩薩だいぼさつなり、釈尊しやくそんの過去かこ・因位いんいの御弟子おんでしにや有あらん・十方世界じゆつぱうせかいの先仏おんでしの御弟子おんでしにや有あるらん、一代教主いちだいきやうしゆ・始成しじやうの正覺しやうかくの仏でしの弟子でしにはあらず、阿含あこん・方等ほうとう・般若はんにやの時とき・四教しきやうを仏との説たまひ給たまひし時ときこそ・やうやく御弟子おんでしは出來しゆつたして候そうらへ、此も又・仏の自説じせつなれども正説せいせつにはあらず、ゆへ・いかなとなれば方等ほうとう・般若はんにやの別け・円三教けこんきやうは華嚴經けこんきやう

の別・内・二教

の義趣ぎしゆをいはず、彼の別・円・二教は教主釈尊きようしゆしくそんの別・円・二教にはあらず、法慧等ほうえの別・円・二教べつえんなり、此等これらの大菩薩だいぼさつは人目には仏の御弟子おんでしかとは見ゆれども仏の御師おんしとも・いるぬべし、世尊せそん・彼の菩薩ぼさつの所説しよせつを聴聞ちやうもんして智発ちはつして後・重ねて方等ほうとう・般若はんにかの別・円をとけり、色もかわらぬ華嚴經けこんきやうの別・円・二教なり、されば此等これらの大菩薩だいぼさつは釈尊しやくそんの師なり、華嚴經けこんきやうに此等これらの菩薩ぼさつをかずへて善知識ぜんちしきととかれしはこれなり、善知識ぜんちしきと申もうすは一向いっこう・師にもあらず一向いっこう・弟子でしにもあらずある事なり、藏・通・二教は又・別・円の枝流なり別・円・二教をしる人必ず藏・通・二教をしるべし、人の師もうと申もうすは弟子でしのしらぬ事を教えたるが師にては候なり、例せば仏より前の一切いっさいの人天にんてん・外道げどうは二天・三仙の弟子でしなり、九十五種きやうじゆうしゆまで流派べいしたりしかども三仙の見を出いでず、教主釈尊きようしゆしくそんもかれに習ならひ伝えて外道げどう

の弟子にて・ましませしが苦行・衆行・十二年の時・苦・空・無常・無我の理をさとり出してこそ外道の弟子の名をば離れさせ給いて無師智とはなのらせ給いしか、又人天も大師とは仰ぎまいらせしか、されば前四味の間は教主釈尊・法慧菩薩等の御弟子なり、例せば文殊は釈尊九代の御師と申すがごとし、つねは諸経に不説一字と・とかせ給うも・これなり。

仏・御年・七十二の年・摩竭提国・靈鷲山と申す山にして無量義経を・とかせ給いしに、四十余年の経経をあけて、杖葉をば其の中におさめて四十余年・未顕真実と打消し給うは此なり、此の時こそ諸大菩薩・諸天人等はあはてて実義を請せんとは申せしか、無量義経にて実義と・をばしき事一言ありしかども・いまだまことなし、譬へば月の出でんとして其の体東山にかくれて光り西山に及べども諸人月体を見

ざるがごとし、法華經・方便品の略開三顯一

の時・仏略して一念三千・心中の本懷を宣べ給う、始の事なればほと

ぎすの初音をねをびれたる者の一音ききたるが・やうに月の山の半を

出でたれども薄雲の・をほへるが・ごとく・かそかなりしを舍利弗等・驚

いて諸天・竜神・大菩薩等をもよをして諸天・竜神等・其の数恒沙の

如し仏を求むる諸の菩薩大数八万有り・又諸の万億国の転輪聖王の

至れる合掌して敬心を以て具足の道を聞かんと欲す等とは請ぜしな

り、文の心は四味・三教・四十余年の間

いまだ・きかざる法門うけ給はらんと請ぜしなり、この文に具足の道を聞かんと欲すと申すは大教に云く、**薩**とは具足の義に名く」等云云、**無依無得大乘四論玄義記**に云く、**沙**とは訳して六と云う**胡法**に六をもつて具足の義と為すなり」等云云。吉蔵の疏に云く、**沙**とは翻じて具足と為す」等云云、天台の玄義の八に云く、**薩**とは梵語、此に妙と翻ずるなり」等云云、付法蔵の第十三真言・華嚴・諸宗の元祖・本地は法雲自在王如来・迹に**竜猛菩薩**・初他の大聖の大智度論千卷の肝心に云く、**薩**とは六なり」等云云、妙法蓮華經と申すは漢語なり、月支には薩達磨分陀利伽蘇多覽と申す、善無畏三蔵の法華經の肝心真言に云く、**囊謨三曼陀沒駄南阿暗惡薩縛勃陀枳攖知娑乞葛毘耶見☆☆囊三**姿縛空性羅乞叉・相也薩哩達磨浮陀哩迦蘇駄覽經惹吽・発喜縛日羅固羅乞叉・護吽無願娑婆詞成就」

此の眞言しんごんは南天竺てんじくの鉄塔てつたの中の法華經ほけきょうの肝心かんじんの眞言しんごんなり、此の眞言しんごんの中に薩哩達磨さつりだるまと申もうすは正法しょうぼうなり薩さつと申もうすは正なり正は妙なり妙は正なり正法華しょうぼうげ・妙法華みょうぼうげ是なり、又妙法蓮華經みょうぼうれんげきょうの上に南無なむの二字を・をけり南無妙法蓮華經なむみょうぼうれんげきょうこれなり、妙とは具足ぐそく・六とは六度万行ろくどまんぎやう、諸の菩薩もろもろぼさつの六度万行を具足するやうを・きかんとをもう、具とは十界互具じゅうかいご・足と申もうすは一界じゅうかいに十界あれば当位よういに余界よかいあり満足の義なり、此の經一部八卷

・二十八品・六万九千三百八十四字・一一に皆妙みなの一字を備えて三十二相・八十種好しゆこうの仏陀ぶつだなり、十界じゅうかいに皆己界みなこかいの仏界ぶつかいを顯あらわす妙樂みょうらく云くい尚なお仏果ぶつかを具ぐす、余果またしかも亦然またしかなり」等云云、仏こ此れを答えて云く、衆生しゆじやうをして仏知見ぶつちけんを開ひらか令しめんと欲ほす」等云云、衆生しゆじやうと申もうすは舍利弗しやりほつ・衆生しゆじやうと申もうすは一闍提いつせんたい・衆生しゆじやうと申もうすは九法界ほっかい・衆生しゆじやう無辺誓願度むへんせいがんど・此ここに満足まんぞくす、

我ほんぜい本誓願いっさいを立つ一切の衆をして我が如ごとく等しくして異なること無から

しめんと欲ほす我が昔の願しよだいせし所の如ごとき今は已すでに満足まんぞくしぬ」等云云。

諸大菩薩しよだいぼさつ・諸天等しよてん・此の法門ほうもんをきひて領解りやうげして云く「我等昔より

来数このかたしばしば世尊せそんの説を聞きたてまつれども未いまだ會かつて是かくの如ごとき深妙の上法

を開かず」等云云、伝教大師云く我等昔より来数このかたしばしば世尊せそんの説を聞

く・と謂おもうは昔法華經ほけきやう

の前・華嚴等の大法を説くを聞けども・となり、未だ曾て是くの如き深妙の上法を開かずと謂うは未だ法華經の唯一仏乗の教を聞かざるなり」等云云、華嚴・方等・般若・深密・大日等の恒河沙の諸大乘經はいまだ一代の肝心たる一念三千の大綱・骨髓たる二乗作仏・久遠実成等をいまだきかずと領解せり。

◆ 四一 開目抄下

210P

又、今よりこそ諸大菩薩も梵帝・日月・四天等も教主・釈尊の御弟子にては候へされば宝塔品には、此等の大菩薩を仏・我が御弟子等と・をばすゆへに諫曉して云く 謂の所大衆に告ぐ我が滅度の後、誰か能く

此の經を護持し誦誦する今・仏前に於て自ら誓言を説け」とは・したたかに仰せ下せしか、又諸大菩薩も譬えば大風の小樹の枝を吹くが如し」等と吉祥草の大風に随い河水の大海引くがごとく仏には随いまいらせしか。

而れども靈山日浅くして夢のごとく・うつつならずありしに証前の宝塔の上に起後の宝塔あつて十方の諸仏・來集せる皆我が分身なりとなのらせ給い宝塔は虚空に釈迦・多宝坐を並べ日月の青天に並出せるが如し、人天大会は星をつらね分身の諸仏は大地の上宝樹の下の師子のゆかにまします、華嚴經の蓮華藏世界は十方・此土の報仏・各各に国國にして彼の界の仏・此の土に來つて分身となのらず此の界の仏・彼の界へゆかず但法慧等の大菩薩のみ互いに來会せり、大日經・金剛頂經等の八葉九學三十七尊等・大日如來の化身とはみゆれども其の化身・

三身さんじんえんまん円満こぶつの古仏こぶつにあらず、大品經だいほんの千仏・阿彌陀經あみだの六方の諸仏しよぶついま
だ來集らいじゅうの仏ぶつにあらず大集經だいしつぎょうの來集らいじゅうの仏・文分身ぶんじんならず、金光明經こんこうみょうぎょうの
四方しほうの四仏しふつは化身けしんなり、總じて一切經いっさいきょうの中に各修かくしゅう・各行かくぎょうの三身さんじんえんまん円満こぶつの
諸仏しよぶつを集めて我が分身ふんじんと

はとかれず、これ寿命品の遠序なり、始成四十余年の釈尊が一劫十劫等・已前の諸仏を集めて分身ととかる・さすが平等意趣にもにず・をびただしくをどろかし、又始成の仏ならば所化・十方に充滿すべからざれば分身の徳は備わりたりとも示現して益なし、天台云く、分身既に多し当に知るべし成仏の久しきことを」等云云、大会のをどろきし意をかかれたり。

其の上に地涌千界の大菩薩・大地より出来せり釈尊に第一の御弟子と・をぼしき普賢・文殊等にも・にるべくもなし、華嚴・方等・般若・法華經の宝塔品に來集する大菩薩・大日經等の金剛薩・等の十六の大菩薩なんども此の菩薩に對当すれば☆☆の群る中に帝釈の來り給うが如し、山人に月郷等のまじはるにことならず、補処の弥勒すら猶迷惑せり何に況や其の已下をや、此の千世界の大菩薩の中に四人の大聖ま

します所謂・上行・無逆行・淨行・安立行

なり、此の四人は虚空・靈山の諸菩薩等・眼もあはせ心もをよばず、

華嚴經の四菩薩・大日經の四菩薩・金剛頂經の十六大菩薩等も此の

菩薩に対すれば翳眼のものの日輪を見るが如く海人が皇帝に向い奉る

が如し、大公等の四聖の衆中にありしに・にたり商山の四皓が忠節に

仕えしにことならず、巍巍堂堂として尊高なり、釈迦・多宝・十方の

分身を除いては一切衆生の善知識ともたのみ奉りぬべし、弥勒菩薩・心

に念言すらく、我は仏の太子の御時より三十成道・今の靈山まで四十

二年が間・此の界の菩薩・十方世界より来集せし諸大菩薩皆しりた

り、又十方の淨穢土

に・或は御使い・或は我と遊戲して其の国国に大菩薩を見聞せり、此の

大菩薩の御師などは・いかなる仏にてや・あるらん、よも此の釈迦・

多宝・十方の分身の仏陀にはにるべくもなき仏にてこそをはすらめ、
雨の猛を見て竜の大なる事をしり華の大なるを見て池のふかきことは、
しんぬべし、此等の大菩薩の来る国・又誰と申す仏にあらたてまつりい
かなる大法をか習修し給うらんと疑いし、あまりの不審さに音をも
・いだすべくもなければども仏力にやありけん、弥勒菩薩疑つて云く
無量千万億の大衆の諸の菩薩は昔より未だ曾て見ざる所なり是の
諸の大威徳

の精進しやうじんに菩薩衆ぼさつしゆうは誰そか其たの爲ために法ほふを説といて教化きやうけして成就じやうじゆせる、誰たれに従したがつてか初めて発心ほつしんし何れいずれの仏法ぶつぽうをか称揚しやうやうせる、世尊せそん・我昔このかたより来未きただ曾かつて是この事を見ず、願ねがふは其その所従しよじゆうの国土こくどの名号みやうごうを説ときたまえ、我常しやうじくに諸国しよこくに遊あそべども未だ曾かつて是この事を見ず、我れ此この衆しゆうの中に於おいて乃いまし一人をも識しらず忽然こつねんに地ちより出いでたり願ねがふは其その因縁いんねんを説ときたまえ」等云云、天台云てんだいく寂場じやくじやうより已降このかた今座いおう已往じちゆう十方じふぱうの大士だいし来会らいえ絶えず限べる可べからずと雖いえども我補処ふしよの智力ちりくを以もつて悉まんじふく見悉まんじふく知る、而しかれども此この衆しゆうに於おいて一人をも識しらず然しかるに我れ十方じふぱうに遊戯ゆうぎして諸仏しよぶつに奉こんぶし大衆たいしゆうに快たく識知しちせらる」等云云、妙樂みやうらく云いく智人ちじんは起おを知る蛇じやは自みづから蛇じやを織おる」等云云、經釈きやうしやくの心しん・分明ぶんめいなり詮せんずるところは初成道しよじやうどうより・このかた此この土十方じふぱうにて此等これらの菩薩ぼさつを見みたてまつらず・きかずと申もうすなり。

仏此の疑を答えて云く阿逸多・汝等昔より未だ見ざる所の者は
我是の娑婆世界に於て阿耨多羅三藐三菩提を得已つて是の諸の菩薩を
教化し示導して其の心を調伏して道の意を發こさしめたり」等、又云く
我伽耶城菩提樹下に於て坐して最正覺を成ずることを得て無上の
法輪を転じ爾して乃ち之を教化して初めて道心を發さしむ今皆不退に
任せり、乃至我久遠より來是等の衆を教化せり」等云云、此に弥勒
等の大菩薩大に疑いをもう、華嚴經の時・法慧等の無量の大菩薩あつ
まゐりける人々なるらんと・をもへば我が善知識なりとをほせられし
かば、さもやと・うちをもひき、其の後の大宝坊・白鷺池等の來会の大
菩薩も・しかのごとし、此の大菩薩は彼等にはにるべくもなき・ふりたり
げにまします定めて釈尊の御師匠かなんとおぼしきを令初發道心とて
幼稚のものども・なりしを教化して弟子となせりなんと・をほせあれば・

大なる疑うたがいなるべし、日本にほんの聖徳太子しょうとくたいしは人王第三十二代・用明ようめい

天皇てんのうの御子なり、御年六歳の時・百濟くだら・高麗こま・唐土もろこしより老人ろうじんどものわた

りたりしを六歳の太子たいし・我が弟子でしなりと・をほせありしかば彼の老人ろうじんど

も又合掌がつしやうして我が師なり等云云、不思議ふしぎなりし事なり、外典げてんに申もうす

・或者ある道をゆけば路のほとりに年三十計ばかりなる・わかものが八十計ばかりな

る老人ろうじんを・とらへて打ちけり、いかなる事ぞと・たとえば此の

老翁おうちうは我が子なりなんど申すと・かたるにもにたり、されば弥勒菩薩みろくぼさつ等疑うたがいつて云く世尊せそん・如来太子にょらいたいしなりし時・釈しゃくの宮を出で伽耶城がやを去ること遠からずして道場どうじやうに坐して阿耨多羅三藐三菩提あのかたらさんみやくさんぼだいを成じやうずることを得給たまえり、是より已来このかた始めて四十余年よんじゅうねんを過ぎたり、世尊せそん・云何ぞ此の少時に於て大いに仏事ぶつじを作し給える」等云云、一切の菩薩ぼさつ始め華嚴經けこんきやうより四十余年よんじゅうねん・會會に疑うたがいをまうけて一切衆生の疑網ぎもうをはらす中に此の疑うたがい・第一の疑うたがいなるべし、無量義經むりやうぎきやうの大莊嚴等そうこんの八万の大士はちまん・四十余年よんじゅうねんと今との歴劫りやつちう・疾成しつじやうの疑うたがいにも超過ちやうかせり、觀無量壽經かんむりやうじゆきやうに韋提希夫人いだいけふじんの阿闍世王あじやせが提婆だいばにすかされて父の王をいましめ母を殺さんとせしが耆婆ぎば月光がつこうに・をどされて母をはなちたりし時・仏ぶつを請しやうじたてまつて・まづ第一だいいちの間に云く我れ宿むかし何の罪つみあつて此の惡子を生む世尊せそん・復た何等またなんらの因縁いんねん有つ

て提婆達多と共に眷属となり給う」等云云、此の疑うたがいの中に世尊復た
何等の因縁有つて」等の疑うたがは大なる大事なり、輪王は敵と共に生れず
帝釈は鬼と・ともならず仏は無量劫の慈悲者なりいかに大怨と共に
まします還かえつて仏には・まします

ざるかと疑うたがいうなるべし、而れども仏答え給はず、されば觀經を讀誦
せん人・法華經の提婆品へ入らずば・いたづらごとなるべし、大涅槃經に
迦葉菩薩の三十六の問もこれには及およばず、されば仏・此の疑うたがいを晴させ
給はずば一代の聖教は泡沫にどうじ一切衆生は疑網にかかるべし、
寿量じゆりやうの一品の大切なるこれなり。

其その後・仏・寿量品を説いて云く、一切世間の天人及び阿修羅は皆
今の釈迦牟尼仏は釈氏の宮を出で伽耶城を去ること遠からず道場に
坐して阿耨多羅三藐三菩提を得給えりと謂えり」等云云、此の經文は

始め寂滅道場より終り法華經の安樂行品にいたるまでの一切の大
菩薩等の所知をあげたるなり、然るに善男子・我れ實に成仏してより
已來・無量無辺百千萬億那由佉劫なり」等云云、此の文は華嚴經の「三
処の始成正覺」阿含經に云く「初成」淨名經の「娑坐仏樹」大集經に
云く「娑十六年」大日經の「我昔坐道場」等・仁王經の「二十九年」
無量義經の「我先道場」法華經の方位品に云く「我始坐道場」等を一
言に大虚妄なりと・やぶるもんなり。

此の過去常顯るる時・諸仏皆釈尊の分身なり爾前・迹門の時は
諸仏・釈尊に肩を並べて各修・各行の仏なり、かるがゆへに諸仏を本尊
とする者・釈尊等を下す、今華嚴の台上・方等・般若・大日經等の諸仏
は皆釈尊の眷屬なり、仏三十成道の御時は大梵天王・第六天等の知行
の娑婆世界を奪い取り給いき、今爾前・迹門にして十方を淨土と・が
うして此の土を穢土ととかれしを打ちかへして此の土は本土なり十方
の淨土は垂迹の穢土となる、仏は久遠の仏なれば迹化・他方の大菩薩
も教主釈尊の御弟子なり、一切經の中に此の寿量品ましまさずば天
に日月の・国に大王

の・山河に珠の・人に神のなからんが・ごとくして・あるべきを華嚴・
眞言等の權宗の智者と・をばしき澄觀・嘉祥・慈恩・弘法等の一往・
權宗の人人・且は自の依經を讚歎せんために・或は云く華嚴經の教主

は報身ほうしん・法華經ほけきょうは応身おうじんと・或あるは云いく・法華壽量品ほつけじゆりょうほんの仏ぶつは無明むみょうの辺域へんいき・

大日經だいにちぎょうの仏ぶつは明めいの分位ぶんゐ」等云云、雲うんは月げつをかくし・臣ざんしんは賢人けんじんをかくす

人讚さんすれば黃石おうしやくも玉ぎよくとみ・諛臣ゆしんも賢人けんじんかと・をぼゆ、今濁世じよくせの學者等がくしや・

彼等かれらの語義ごぎに隱こもりされて壽量品じゆりょうほんの玉ぎよくを翫もてあそば

ず、又天台宗てんだいしゅうの人人ひとびともたほらかされて金石こんし・一同いつどうのをもひを・なせる

人人ひとびともあり、仏ぶつ・久成くじやうに・ましまさずば所化しよけの少わすかるべき事わざを弁わきまうべき

なり、月げつは影おしなを慳くざれども水みづなくば・うつるべからず、仏ぶつ・衆生しゆじやうを化くせ

んと・をばせども結縁けちえんうすければ八相はつさうを現げんぜず、例れいせば諸もろの聲聞しやうもんが

初地しよじ・初住しよじゅうには・のぼれども爾前にぜんにして自調じちやう自度じどなりしかば未來みらいの八相はつさう

をごするなるべし、しかれば教主きやうしゆしやくそんしじやう・積尊じくそん・始成しじやうならば今・此この世外ぼかの梵帝ぼんたい・

日月にちがつ・四天してん等は劫初こつしよより此この土つちを領りやうす

れども四十余年よんじゅうよねんの仏弟子ぶつでしなり、靈山りやうぜん・八年はつねんの法華結縁ほつけけちえんの衆しゆ今いままいりの

主君しゅくんにをもひつかず久住くじゅうの者に会あだてらるるがごとし、今久遠実成くおんじつじょうあらはれぬれば東方とうほうの薬師如来やくしにょらいの日光・月光がっこう・西方阿弥陀如来さいほうあみだにょらいの観音・勢至せいしないしじゅつほうせかいの諸仏しよぶつの御弟子大日・金剛頂等こんごうちょうの両部の大日如来だいにちにょらいの御弟子おんでしの諸大菩薩しよだいぼさつ・猶教主釈尊なおきょうしゆしやくそんの御弟子おんでしなり、諸仏しよぶつ・釈迦如来しやくかにょらいの分身ふんじんたる上は諸仏しよぶつの所化申すにをよばず何いかに況いわんやや此の土の劫初こつしよより・このかたの日月・衆星等しゅうせい・教主釈尊きょうしゆしやくそんの御弟子おんでしにあらずや。

而るも天台宗より外の諸宗は本尊にまどえり、俱舎・成実・律宗は
三十四心・断結成道の釈尊を本尊とせり、天尊の太子が迷惑して我が
身は民の子とをもうがごとし、華嚴宗・真言宗・三論宗・法相宗等の
四宗は大乗の宗なり、法相・三論は勝應身ににたる仏を本尊とす天王
の太子・我が父は侍と・をもうがごとし、華嚴宗・真言宗は釈尊を
下げて盧舍那の大口等を本尊と定む天子たる父を下げて種姓もなき
者の法王のごとくなるに・つけり、浄土宗は
釈迦の分身の阿弥陀仏を有縁の仏とをもうて教主をすてたり、禪宗
は下賤の者・一分の徳あつて父母をさぐるがごとし、仏をさげ経を下す
此皆本尊に迷えり、例せば三皇已前に父をしらず人皆禽獸に同ぜし
が如し、寿量品をしらざる諸宗の者は畜に同じ不知恩の者なり、故に
妙楽云く二代教の中未だ曾て遠を顕さず、父母の寿知らずんばある

可からず若し父の寿の遠きを知らずんば復父統の邦に迷う、徒に才能と謂うとも全く人の子に非ず」等云云、妙樂大師は唐の末・天宝安中の者なり三論・華嚴・法相・真言等の諸宗・並に依經を深くみ広く勘えて寿量品の仏をしらざる者は父統の邦に迷える才能ある畜生とかけるなり、徒謂才能とは華嚴宗の法蔵・澄觀・乃至・真言宗の善無畏三藏等は才能の大師なれども子の父を知らざるがごとし、伝教大師は日本顯密の元祖・秀句に云く 他宗所依の經は一分仏母の義有りと雖も然も但愛のみ有つて嚴の義を闕く、天台法華宗は嚴愛の義を具す一切の賢聖・學・無學及び菩薩心を發せる者の父なり」等云云、真言・華嚴等の經經には種熱脱の三義・名字すら猶なし何に況や其の義をや、華嚴・真言經等の一生初地の即身成仏等は經は權經にして過去をかくせり、種をしらざる脱なれば

超高が位にのぼり道鏡が王位に居せんとせしがごとし。

宗宗・互に程を諍う予此をあらそはず但經に任すべし、法華經の種

に依つて天親菩薩は種子無上を立てたり天台の一念三千これなり、

華嚴經・乃至諸大乘經・大日經等の諸尊の種子・皆一念三千なり天台

智者大師・一人・此の法門を得給えり、華嚴宗の澄觀・此の義を盗んで

華嚴經の心如工画師の文のた神とす、真言・大日經等には二乗

作^{さぶつ}仏^く・久^く遠^{おん}実^{じつ}成^{じやう}・一^{いち}念^{ねん}三^{さん}千^{せん}の法^{ほう}門^{もん}これなし、善^{ぜん}無^む畏^い三^{さん}藏^{ざう}・震^{しん}旦^{たん}に來^きつて
後^ご・天^{てん}台^{だい}の止^し觀^{かん}を^を見^みて智^ち發^{はつ}し大^{だい}日^{にち}經^{きやう}の心^{しん}実^{じつ}相^{さう}・我^{われ}一^{いつ}切^{さい}本^{ほん}初^{じよ}の文^{ぶん}の神^{しん}に
天^{てん}台^{だい}の一^{いち}念^{ねん}三^{さん}千^{せん}を盜^{ぬす}み入^いれて真^{しん}言^{ごん}宗^{しゆ}の肝^{かん}心^{しん}として其^その^の上^{うへ}に印^{しん}と真^{しん}言^{ごん}
とを^をかざり法^{ほけ}華^き經^{きやう}と大^{だい}日^{にち}經^{きやう}との勝^{しやう}劣^{れつ}を判^りずる時^{とき}・理^り同^{どう}事^じ勝^{しやう}の積^{じき}をつく
れり、両^{りやう}界^{がい}の漫^{まん}荼^だ羅^らの二^に乗^{じやう}作^{さぶつ}仏^く・十^{じゆ}界^{かい}互^ご具^ぐは一^{いつ}定^{ぢやう}・大^{だい}日^{にち}經^{きやう}にありや
第一^{だいいち}の誑^{おほ}惑^{わく}なり、故^{ゆゑ}に伝^{でん}教^{きやう}大^{だい}師^し云^いく新^{しん}來^{らい}の真^{しん}言^{ごん}家^かは則^{すなわ}ち筆^{ひつ}受^{じゆ}の相^{さう}承^{じやう}
を泯^{みん}じ、旧^く到^{とう}の華^け嚴^{げん}家^かは則^{すなわ}ち影^{えい}響^{きやう}の規^き模^もを隱^{いん}す」等^と云^い云^い、俘^え囚^{じゆ}の嶋^{じま}なん
どに・わたて・ほのぼのといううたは・われよみたりなんと申^{もう}すは・
えぞていの者^{もの}は・

さこそとをもうべし、漢^{かん}土^ど・日^に本^{ほん}の学^{がく}者^{しや}又^{また}かくのごとし、良^{りやう}☆和^わ尚^{じやう}
云^いく真^{しん}言^{ごん}・禪^{ぜん}門^{もん}・華^け嚴^{げん}・三^{さん}論^{ろん}乃^{ない}至^し若^{じやく}し法^ほ華^け等^とに望^{ぼう}めば是^ぜ接^{けつ}引^{いん}門^{もん}」等^と云^い
云^い、善^{ぜん}無^む畏^い三^{さん}藏^{ざう}の閻^{えん}魔^まの責^{せき}にあづからせ給^{たま}しは此^{こゝ}の邪^{じや}見^{けん}による後^ごに心

を・ひるがへし法華經に歸伏してこそ・このせめをば脱させ給いしか、
其の後善無畏・不空等・法華經を兩界の中央にきて大王のごとくし
胎藏の大日經・金剛の金剛頂經をば左右の臣下のごとくせし・これな
り、日本の弘法も教相の時は華嚴宗に心をよせて法華經をば第八にを
きしかども事相の時には実慧・真雅・円澄・光定等の人人に伝え給いし
時・兩界の中央

に上のごとく・をかれたり、例せば三論の嘉祥は法華玄十卷に法華經
を第四時・会二破二と定めども天台に歸伏して七年つかへ廃講散衆し
て身を肉橋となせり、法相の慈恩は法苑林・七卷・十二卷に一乘方便
・三乘真実等の妄言多し、しかれども玄賛の第四には故亦兩存等と我
が宗を不定になせり、言は兩方なれども心は天台に歸伏せり、
華嚴の澄觀は華嚴の疏を造て華嚴・法華・相對して法華を方便とかけ

るに似れども彼の宗之を以て実と為す此の宗の立義・理通ぜざること
無し等とかけるは悔い還すにあらずや、弘法も又かくのごとし、亀鏡
なければ我が面をみず敵なければ我が非をしらず、真言等の諸宗の
学者等・我が非をしらざりし程に伝教大師にあひたてまつて自宗の失
をしるなるべし。

されば諸經の諸仏・菩薩・人天等は彼彼の經經にして仏にならせ
給うやうなれども実には法華經にして正覺なり給へり釈迦諸仏の衆生
無辺の總願は皆此の經にをいて満足する今者已満足の文これなり、
予事の由をし計るに華嚴・觀經・大日經等をよみ修行する人をば
・その經經の仏・菩薩・天等・守護し給らん疑あるべからず、但し
大日經・觀經等をよむ行者等・法華經の行者に敵対をなさば彼の
行者をすてて法華經の行者を守護すべし、例せば孝子・慈父の王敵と

なれば父をすてて王にまいる孝の至りなり、仏法も又かくのごとし、

法華經の諸仏・菩薩・十羅刹・日蓮を守護し給う上・浄土宗の六方の

諸仏・二十五の菩薩・真言宗の千二百等・七宗の諸尊・守護の善神・

日蓮を守護し給うべし、例せば七宗の守護神・伝教大師をまほり給い

しが如しとをもう、日蓮案じて云く法華經の二処・

三会の座にましましし、日月等の諸天は法華經の行者出来せば磁石の

鉄を吸うがごとく月の水に遷るがごとく須臾に来つて行者に代り

仏前の御誓をはたさせ給べしとこそをば候にいままで日蓮をとぶらひ

給はぬは日蓮・法華經の行者にあらざるか、されば重ねて經文を勘え

て我が身にあてて、身の失をしるべし。

疑て云く当世の念仏宗・禪宗等をば何なる智眼をもつて法華經の

敵人・一切衆生の悪知識とはしるべきや、答えて云く私の言を出すべか

らず經きやう釈しやくの明鏡めいきやうを出して謗法ぼうぼうの醜面しゆうめんをうかべ其その失とがをみせしめん
生盲いきめくらは力をよばず、法華經ほけきやうの第四宝塔品ほうとうばんに云く爾その時に多宝仏たほうぶつ・
宝塔ほうとうの中に於おいて半座を分ち釈迦牟尼仏しやかむにぶつに与う、爾その時に大衆二如来たいしゆうにやらいの
七宝の塔の中の師子ししの座の上に在いましして結跏趺坐けつかふざし給うを見たてまつる、
大音声おんじやうを以て普く四衆ししゆうに告げ給わく、

誰よか能く此の娑婆国土しやばこくどに於おいて広く妙法華經みやうほけきやうを説かん、今正しく是れ時
なり、如来久しからずして当に涅槃まさはんに入るべし、仏・此の妙法華經みやうほけきやうを
以て付属して在ること有らしめんと欲す」等云云、第一の勅宣なり。

又云く爾その時に世尊重せそんかさねて此の義を宣べんと欲して偈げを説いて
言く、聖主世尊せいしゅせそん・久しく滅度し給うと雖も宝塔の中に在いましして尚法の
為ために來り給えり、諸人如何ぞ勤めて法に為むかわざらん、又我が分身ふんじんの
無量の諸仏むりやうしよぶつ・恒沙等こんじやうしやの如く來れる法を聴かんと欲す各妙なる土及び

弟子衆・天人・竜神・諸の供養の事を捨てて法をして久しく住せしめ

んが故に此に來至し給えり、譬えば大風のしやうじゆ小樹の枝を吹くが如し、
是の方便を以て法をして久しく住せしむ、諸の大衆に告ぐ我が滅度の
後誰か能く此の經を護持し誦誦せん今・仏前に於て自ら誓言を説け」、
第二の鳳詔なり。

多宝如来および我が身集むる所の化仏当に此の意を知るべし、諸の
善男子・各諦かに思惟せよ此れは為れ難き事なり、宜しく大願を發こ
すべし、諸余の經典數・恒沙の如し此等を説くと雖も未だ為れ難しと
するに足らず、若し須弥を接つて他方無數の仏土に擲げ置かんも亦
未だ為れ難しとせず、若し仏滅後・惡世の中に於て能く此の經を説かん
是則ち為れ難し、假使劫燒に乾れたる草を担い負うて中に入つて焼け
ざらんも亦未だ為れ難しとせず、我が滅度の後に若し此の經を持ちて
一人の爲にも説かん是則ち為れ難し、諸の善男子・我が滅後に於て誰

か能く此の経を護持し読誦せん、今・仏前に於て自ら誓言を説け」等云云、第三の諫勅なり、第四・第五の二箇の諫曉・提婆品にあり下にかくべし。

此の経文の心は眼前なり青天に大日輪の懸がごとし白面に照のあるにいたり、而れども生盲の者と邪眼の者と一眼のものと各謂自師の者・辺執家の者はみがたし万難をすてて道心あらん者にしるしとどめてみせん、西王母がそののもも・輪王出世の優曇華よりもあいがたく沛公が項羽と八年・漢土をあらそいし頼朝と宗盛が七年・秋津嶋にたたかひし修羅と帝釈と金翅鳥と竜王と阿耨池に諍えるも此にはすぐべからずとするべし、日本国に此の法顕るること二度なり伝教大師と日蓮となりとしれ、無眼のものは疑うべし力及ぶべからず此の経文は日本・漢土月氏・竜宮・天上・十方世界の一切経の勝劣を釈迦・多宝・

十方じゅうぽうの仏ぶつ・來集らいじゅうして定め給たまうなるべし。

問いうて云いく華嚴經けこんきょう・方等經ほうとうきょう・般若經はんにやきょう・深密經じんみつきょう・楞伽經りょうがきょう・大日經だいにちきょう・
涅槃經ねはんきょう等は九易くいの内うちか六難なんの内うちか、答こたえて云いく華嚴宗けこんしゅうの杜順とじゅん・智儼ちげん・
法藏ほうざう・澄觀ちやうかん等の三藏さんざう大師だいし。讀よんで云いく華嚴經けこんきょうと法華經ほけきょうと六難なんの内うち・名
は二經にきやうなれども所說しよせつ・乃至理ないしこれ同じ四門觀別しもんかんべつ・見真諦けんしんたいじつ同のごとし、
法相ほつさうの玄奘げんじやう三藏さんざう・慈恩大師じおんだいし等・讀よんで云いく深密經じんみつきょうと法華經ほけきょうとは同く
唯識ゆいしきの法門ほうもんにして第三時だいさんじの教きやう・六難なんの内うちなりし三論さんろんの吉藏きちざう等讀よんで
云いく般若經はんにやきょうと法華經ほけきょうとは名異体同・二經にきやう一法いつぽうなり」善無畏ぜんむい三藏さんざう・
金剛智三藏こんごうちさんざう・不空三藏ふくうさんざう等・讀よんで云いく大日經だいにちきょうと法華經ほけきょうとは理同りどうじ、を
なじく六難なんの内うちの經きやうなり」、日本にほんの弘法こうぼう・讀よんで云いく大日經だいにちきょうは六難なん・
九易くいの内うちにあらず大日經だいにちきょうは釈迦しやか所說しよせつの一切經いっさいきやうの外ほか・法身ほつしん・大日如來だいにちにやらいの
所說しよせつなり」、又また・或人あるひと云いく華嚴經けこんきょうは報身ほうしん如來にやらいの所說しよせつ・六難なん・九易くいの内うち

にはあらずし、此の四宗の元祖等かやうに読みければ其の流れをくむ
数千の学徒等も又此の見をいえず、日蓮なげいて云く上の諸人の義を
左右なく非なりといはば当地の諸人面を向くべからず非に非をかさね
結句は国王に讒奏して命に及ぶべし、但し我等が慈父・雙林最後の御
遺言に云く法に依つて人に依らざれ」等云云、不依人等とは初依・二
依・三依・第四依・普賢・文殊等の等覺の菩薩が法門を説き給うとも經
を手ににぎらざらんをば用ゆべからず、「了義經に依つて不了義經に
依らざれ」と定めて經の中にも了義・不了義經を糾明して信受すべきこ
そ候いぬれ、竜樹菩薩の十住毘婆沙論に云く修多羅黒論に依らず
して修多羅白論に依れ」等云云、天台大師云く修多羅と合う者は
録して之を用いよ文無く義無きは信受すべからず」等云云、伝教大師
云く伝説に依憑して口伝を信ずること其れ」等云云、円珍智証大師

云く文に依つて伝うべし」等云云、上にあぐるところの諸師の釈・皆
一分・經論に依つて勝劣を弁うやうなれども皆自宗を堅く信受し
先師の謬義をたださざるゆへに曲会私情の勝劣なり莊嚴已義の法門な
り・仏滅後の犢子・方広・後漢已後の外典は仏法外の外道の見よりも
三皇・五帝の儒書よりも邪見・強盛なり邪法・巧なり、華嚴・法相・
真言等の人師・天台宗の正義を嫉ゆへに実經の文を会して權義に順ぜ
しむること強盛なり、しかれども道心あらん人・偏党をすて自他宗を
あらそはず人をあなづる事なかれ。

法華經に云く「已今当」等云云、妙樂云く「縦い經有つて諸經の王と
云うとも已今当說最為第一」と云わず」等云云、又云く「已今当の妙
茲に於て固く迷う謗法の罪苦長劫に流る」等云云、此の經釈にをど
ろいて一切經・並に

人師にんしの疏釈じょを見るに狐疑こぎの冰こおりとけぬ今真言しんごんの愚者等ぐしや・印・真言しんごんのあるを・たのみて真言宗しんごんしゅうは法華經ほけきょうにすぐれたりとをもひ慈覺大師等じかくだいしの真言しんごん勝すぐれたりとをはせられぬれば・なんど・をもえるは・いうにかいなき事なり。

密嚴經みつこんきょうに云く干地華嚴等じゅうちけこんと大樹たいじゆと神通勝鬘じんつうしやうまん及および余經よきょうと皆此の經従より出いでたり、是かくくの如ごときの密嚴經みつこんきょうは一切經いっさいきょうの中に勝すぐれたり」等云云、大雲經だいうんきょうに云く是この經は即是諸經そくぜしよきょうの轉輪聖王てんりんじやうおうなり何を以ての故ゆえに是の經典きやうてんの中に衆生しゆじやうの実性・仏性・常住ぶつじやうの法藏ほうざうを宣說せんぜつする故なり」等云云、六波羅蜜經ろくはらみつぎやうに云く「所謂過去無量の諸仏いわゆるかこむりやうしよぶつ・所說しよせつの正法しやうほう及び我今説く所の所謂八万四千の諸の妙法蘊いわゆるはちまんもろもろみやうほうおんなり、撰せんして五分と為す一には索咀纚そたらん・一には毘奈耶びなや・三には阿毘達磨あびだるま・四には般若波羅蜜はんにははらみつ・五には陀羅尼門だらにとなり此の五種の蔵をもつて有情うじやう

を教化す、若し彼の有情契經調伏対法般若を受持すること能わず
ある・或は復有情諸の惡業・四重・八重・五無間罪方等經を謗ずる一闡提等
の種種の重罪を造るに銷滅して速疾に解脱し頓に涅槃を悟ることを得
せしむ、而も彼が爲に諸の陀羅尼藏を説く、此の五の法藏譬えば乳・酪
生蘇・熟蘇及び妙なる醍醐の如し、總持門とは譬えば醍醐の如し醍醐
の味は乳・酪・蘇の中に微妙第一にして能く諸の病を除き諸の有情をし
て身心安樂ならしむ、總持門とは契經等の中に最も第一と爲す能く
重罪を除く

「等云云、解深密經に云く爾の時に勝義生菩薩復仏に白して云く
世尊・初め一時に於て波羅☆☆仙人墮処施鹿林の中に在て唯声聞乘
を發趣する者の爲に四諦の相を以て正法輪を転じ給いき、是甚だ奇
にして甚だ此れ希有なり一切世間の諸の天人等・先より能く法の

如く転ずる者有ること無しと雖も、而も彼の時に於て転じ給う所の
法輪は有上なり有容なり是れ未了義なり是れ諸の評論安足の処所な
り、世尊在昔第二時の中に唯発趣して大乘を修する者の爲にして一切
の法は皆無自性なり無性無滅なり本来寂靜なり自性涅槃なるに依る
隱密の相を以て正法輪を転じ給いき、更に甚だ奇にして甚だ為れ
希有なりと雖も、彼の時に於て転じ給う所の法輪亦是れ有上なり容受
する所有り猶未だ了義ならず、是れ諸の評論安足の処所なり、世尊今
第三時の中に於て普く一切乗を発趣する

者の爲に一切の法は皆無自性・無生無滅・本来寂靜・自性涅槃にして
無自性の性なるに依り顕了の相を以て正法輪を轉じ給う、第一甚だ
奇にして最も爲れ希有なり、今に世尊轉じ給う所の法輪・無上無容に
して是れ眞の了義なり諸の評論安息の処所に非ず」等云云、大般若經
に云く「聽聞する所の世・出世の法に隨つて皆能く方便して般若甚深の
理趣に會入し諸の造作する所の世間の事業も亦般若を以て法性に
會入し一事として法性を出ずる者を見ず」等云云、大日經第一に云く
秘密主大乘行あり無縁乗の心を發す法に我性無し何を以ての故に彼
往昔是くの如く修行せし者の如く蘊の阿頼耶を觀察して自性幻の如し
と知る」等云云、又云く秘密主彼是くの如く無我を捨て心主自在に
して自心の本不生を覺す」等云云、又云く所謂空性は根境を離れ
無相にして境界無く諸の戲論

に越えて虚空に等同なり乃至極無自性」等云云、又云く天日尊秘密
主に告げて言く秘密主云何なるか菩提・謂く実の如く自心を知る」等
云云、華嚴經に云く二切世界の諸の群生声同乘を求めんと欲するこ
と有ること☆し縁覚を求むる者転・復少し、大乘を求むる者甚だ
希有なり大乘を求むる者猶為れ易く能く是の法を信ずる為れ甚だ
難し、況や能く受持し・正憶念し・説の如く修行し真実に解せんをや、
若し三千大千界を以て項戴すること一劫身動ぜざらんも彼の所作
未だ為れ難からず是の法を信ずるは為れ甚だ難し、大千塵数の衆生
の類に一劫諸の衆典を供養するも彼の功德未だ為れ勝れず是の法を
信ずるは為れ殊勝なり、若し掌を以て十仏刹を持し虚空の中に
於て住すること一劫なるも彼の所作未だ為れ難からず是の法を信ずる
は為れ甚だ難し、十仏刹塵の衆生の類に

一劫諸の樂典を供養せんも彼の功德未だ勝れりと為さず是の法を信ずるは為れ殊勝なり、十仏刹塵の諸の如來を一劫恭敬して供養せん若し能く此の品を受持せん者の功德彼よりも最勝と為す」等云云、涅槃經に云く是の諸の大乗方等經典復無量の功德を成就すと雖も是の經に比せんと欲するに喩を為すを得ざること百倍千倍百千万倍、乃至算數譬喩も及ぶこと能わざる所なり、善男子譬えば牛從り乳を出し乳從り酪を出し酪從り生蘇を出し

生蘇しょうそ従り熟蘇じゅくそを出し熟蘇じゅくそ従り醍醐だいごを出いだす醍醐だいごは最上さいじょうなり、若し服もすること有ある者は衆病しゅうびょう皆除みなき所有しいうの諸薬しよやくも悉ことごとく其の中に入るが如ごとし、善男子ぜんなんし仏も亦是またかくくの如ごとし仏よ従り十二部經じふにぶきやうを出し十二部經じふにぶきやう従り修多羅しゆたらを出し修多羅しゆたら従り方等經ほうとうきやうを出し方等經ほうとうきやう従り般若波羅蜜はんにゃはらみつを出し般若波羅蜜はんにゃはらみつ従り大涅槃だいねはんを出いだす猶醍醐なごだいごの如ごとし醍醐だいごと言いうは仏性ぶつじやうに喩たとう」等云云。

此等これらの經文きやうもんを法華經ほけきやうの已今当いこんとう・六難九易なんくういに相對そうたいすれば月に星をならべ九山くせんに須弥しゆみを合せたるにいたり、しかれども華嚴宗けこんしゆうの澄觀ちやうかん・法相ほつさう・三論さんろん・真言等しんごんの慈恩じおん・嘉祥かじやう・弘法等こうぼうの仏眼ぶつげんのごとくなる人なほ・猶此なほの文にまどへり、何いかに況いわんやや盲眼めくらめのごとくなる当世とうせの学者等がくしや・勝劣しやうれつを弁わきまうべしや、黑白こくびやくのごとく・あきらかに須弥しゆみ・芥子けしのごとくなる勝劣しやうれつなを・まどへり・いはんや虚空こくうのごとくなる理まよひに迷まよひわざるべしや、教せんじんの浅深せんじんをしら

ざれば理の浅深せんじんを弁わきまうものなし巻まきをへだて文前後ぜんごすれば教門きょうもんの色いろ弁わえ
がたければ文を出して愚者ぐしゃを扶たすけんとをもう、王に小王だいおう・大王いっさい・一切に
少分・全分・五乳に全喻ぜんゆ・分喻ぶんゆを弁わきまうべし、六波羅蜜經は有情うじようの成仏じようぶつあ
つて無性むじようの成仏じようぶつなし何いかに況いわんやく久遠きうえん実成じつじようをあかさず、
猶なおねはんぎよう
涅槃經の五味ごみにをよばず何いかに況いわんやく法華經の迹門しやくもん・本門ほんもんにたいすべし
や、而しかるに日本にほんの弘法大師こうぼうだいし・此の經文きやうもんにまどひ給たまいて法華經ほけきやうを第四の
熟蘇味じゆくそみに入れ給たまえり、第五の總持門そうじもんの醍醐味だいごみすら涅槃經ねはんぎように及およばずいか
にし給たまいけるやらん、而しかるを震旦しんたんの人師にんし争あらつて醍醐だいごを盗ぬすむと天台等てんだいを
盗人ぬすびととかき給たまへり惜おしい哉かな古賢こけん醍醐だいごを嘗なめず等なと自歎じたんせられたり、此等これら
はさてをく我が一門いちもんの者のためにしるす他人たにんは信ぜざれば逆縁ぎやくえんなるべ
し、一☆いっさいをなめて大海たいかいのしを・をしり

一華を見て春を推すいせよ、万里ばんりをわたて宋に入らずとも三箇年へを経て

りようぜん
靈山にいたらずとも竜樹りゅうじゆのごとく竜宮りゅうぐうに入らずとも無著菩薩むぢやくぼさつのごとく弥勒菩薩みろくぼさつにあはずとも二所三会に値あわずとも一代いちだいの勝劣しょうれつはこれをし
れるなるべし、蛇じやは七日が内の洪水をしる竜の眷属けんぞくなるゆへ鳥は年中の
吉凶きつこうをしれり過去かこに陰陽師おんようしなりしゆへ鳥はとぶ徳人とくじんにすぐ
れたり。

にちれん 日蓮は諸経の勝劣をしること華嚴の澄観・三論の嘉祥・法相の慈恩
しんこん 真言の弘法にすぐれたり、天台・伝教の跡をしのぶゆへなり、彼の人人
てんだい 天台・伝教に帰せさせ給はずば謗法の失脱れさせ給うべしや、当世
にほんこく 日本国に第一に富める者は日蓮なるべし命は法華經にたてまつり名を
ば後代に留べし、大海の主となれば諸の河神・皆したがう須弥山の王に
もろもろ 諸の山神したがはざるべしや、法華經の六難九易を弁うれば一切經よ
まざるにしたがうべし。

ほうとうぼん 宝塔品の三箇の勅宣の上に提婆品に二箇の諫曉あり、提婆達多は
いっせんたい 一闍提なり天王如来と記せらる、涅槃經四十卷の現証は此の品にあ
ぜんしやう 善星・阿闍世等の無量の五逆・謗法の者の一をあげ頭をあげ万を
をさめ枝をしたがふ、

いっさい 一切の五逆・七逆・謗法・闍提・天王如来にあらはれ了んぬ毒藥変じて

甘露かんろとなる衆味にすぐれたり、竜女りゅうにょが成仏じやうぶつ此れ一人にはあらず一切いっさいの女人にょにんの成仏じやうぶつをあらはす、法華ほっけ已前いぜんの諸もろの小乗しょうじやう教には女人にょにんの成仏じやうぶつをゆるさず、諸もろの大乗だいじやう經きやうには成仏じやうぶつ・往生おうじやうをゆるすやうなれども・或あるは改転かいてんの成仏じやうぶつにして一念三千いちねんさんぜんの成仏じやうぶつにあらざれば有名無実ゆうめいむじつの成仏じやうぶつ往生おうじやうなり、拳こい一例諸ちれいしよと申もうして竜女りゅうにょが成仏じやうぶつは末代まつだいの女人にょにんの成仏じやうぶつ往生おうじやうの道をふみあけたるなるべし、儒家じゆけの孝養かうやうは今生こんじやうにかる未来みらいの父母ふぼを扶たすけざれば外家ぐわいけの聖賢せいけんは有名無実ゆうめいむじつなり、外道げどうは過未かうみをしれども父母ふぼを扶たすくる道みちなし仏道ぶつどうこそ

父母ふぼの後世ごしやうを扶たすくれば聖賢せいけんの名はあるべけれ、しかれども法華經ほっけきやう已前いぜん等の大小乗だいしやうじやうの經宗きやうしゆは自身じしんの得道とくどう猶なほかなひがたし何いかに況いわんやや父母ふぼをや但文ただぶんのみあつて義なし、今法華經ほっけきやうの時こそ女人にょにん成仏じやうぶつの時・悲母ひもの成仏じやうぶつも顕あらわれ・達多だつたの惡人あくにん成仏じやうぶつの時・慈父じふの成仏じやうぶつも顕あらわるれ、此の經は内典ないてんの

孝経こうきやうなり、二箇にのいさめ了おんぬ。

已上五箇いじやうごかんの鳳詔ほうしやうにをどろきて勸持品かんじほんの弘経くきやうあり、明鏡めいきやうの経文きやうもんを出いして当世とうせの禅・律・念佛者ねんぶつ・並びに諸檀那しよだんなの謗法ぼうぽうをしらしめん、日蓮にちれんといゐし者は去年こぞ九月十二日子丑うしの時に頸うはねられぬ、此これは魂魄こんぱく・佐土そどの国くににいたりて返年かえるとしの二月・雪中ゆきなかにしるして有縁うえんの弟子でしへをくればをそろ畏しくて・を拍そろしからず・みんないかに・をぢぬらむ、此これは釈迦しやか・多宝たぼう・十方じゅうぽうの諸仏しよぶつの未来日本国みらいにほんこく・当世とうせをうつし給たまう明鏡めいきやうなりかたみともみるべし。

勸持品に云く 唯願くは慮したもうべからず 仏滅度の後恐怖惡世の

中に於て我等當に広く説くべし、諸の無智の人の惡口罵詈等し及び

刀杖を加うる者有らん我等皆當に忍ぶべし、惡世の中の比丘は邪智に

して心諂曲に未だ得ざるを為れ得たりと謂い我慢の心充滿せん、或

阿練若に納衣にして空閑に在つて自ら眞の道を行ずと謂つて人間を

輕賤する者有らん利養に貪著するが故に白衣の与に法を説いて世に

恭敬せらるることを為ること六通の羅漢の如くならん、是の人惡心を

懷き常に世俗の事を念い名を阿練若に仮て好んで我等が過を出さん、

常に大衆

の中に在つて我等を毀らんと欲するが故に國王・大臣・婆羅門・居士

及び余の比丘衆に向つて誹謗して我が惡を説いて是れ邪見の人外道の

論議を説くと謂わん、濁劫惡世の中には多く諸の恐怖有らん惡鬼其身

に入つて我を罵め罵き毀辱くせん、濁世じよくせの惡比丘あくびくは仏ぼうの方便べんずいぎ隨宜ずいぎの所説しよせつの法ほふを知らず惡口ひんじやくし聾しほ聾しほ聲しほ數數しほ擯出ひんずいせられん」等云云、記の八に云く文いふに三初さんしうに一行じやにんは通じて邪人じやにんを明す即ち俗衆やくしゆうなり、次に一行じやにんは道門どうもん増上慢ぞうじやうまんの者を明す、三に七行しちぎやうは僭聖せんしやう

増上慢ぞうじやうまんの者を明す、此の三の中に初は忍にんぶ可べし次の者は前に過すぎたり

第三最はなはも甚はなはだし後後の者は轉識うたたしり難がたきを以ての故に」等云云、東春に

智度法師ちどほふし云く初しうに有諸しよより下の五行ごぎやうは第一だいいちに一偈いけは三業さんぎやうの惡を忍にんぶ

是れ外惡ぐわいあくの人なり次に惡世あくせの下の一偈いけは是上慢じやうまん出家しゆつの人なり第三に

・或有ある阿練あれんにや若にやより下の三偈さんけは即是出家そくぜしゆつの處ところに一切いっさいの惡人あくにんを撰せんす」等云

云、又云く「常じやうざい在大衆たいしゆうより下の兩行りやうぎやうは公處こうじよに向つて法そしを毀くり人を謗わ

ず」等云云、涅槃經ねはんぎやうの九に云く善男子ぜんなんし・一闍提いっせんたい有あり羅漢らかんの像かたちを作なして

空處くうじよに住すし方等ほうとう大乘經だいじやうぎやうてん典てんを誹謗ひぼうせん諸しよの凡夫人ぼんぷ見み已おわつて皆真みなの

阿羅漢是大菩薩なりと謂わん」等云云、又云く爾の時に是の經闍浮提に於て當に広く流布すべし、是の時に當に諸の惡比丘有つて是の經を抄略し分ちて多分と作し能く正法の色香美味を滅すべし、是の諸の惡人復是くの如き經典を讀誦すと雖も如來の深密の要義を滅除して世間の莊嚴の文飾無義の語を安置す前を抄して後に著け後を抄して前に著け前後を中に著け中を前後に著く當に知るべし是くの如きの諸の惡比丘は是れ魔の伴侶なり」等云云、六卷の般泥・經

に云く阿羅漢に似たる一闍提有つて惡業を行ず、一闍提に似たる阿羅漢あつて慈心を作さん羅漢に似たる一闍提有りとは是の諸の衆生方等を誹謗するなり、一闍提に似たる阿羅漢とは聲聞を毀訾し広く方等を説くなり衆生に語つて言く我れ汝等と俱に是れ菩薩なり所以は何ん一切皆如来の性有る故に然も彼の衆生一闍提なりと謂わん」等云云、涅槃經に云く我涅槃の後乃至正法滅して後・像法の中に於て当に比丘有るべし持律に似像して少かに經を誦誦し飲食を貪嗜し其の身を長養す、袈裟を服ると雖も猶獵師の細視徐行するが如く猫の鼠を伺うが如し、常に是の言を唱えん我羅漢を得たりと外には賢善を現わし内には貪嫉を懷かん唾法を受けたる婆羅門等の如し、実に沙門に非ずして沙門の像を現じ邪見熾盛にして正法を誹謗せん」等云云。

夫それ驚じゆう峯ほう・雙そう林りんの日月にちがつ・毘ひ湛だん・東めい春きようの明とう鏡せに當しよ世しゆうの諸しよ宗しゆう並なに國中ちゆうこくの
禪ぜん・律りつ念ねん仏ぶつ者しやが醜しゆう面めんを浮うべたるに一分いちぶんもくもりなし、妙みよう法ほけき華きやう經きやうに云いく
於お仏ぶつ滅めつ度ど後ご恐おそ怖ふ惡あく世せ中ちゆう「安あん樂らく行ぎやう品ひんに云いく 於お後ご惡あく世せ」又また云いく 於お末まつ世しゆう
中ちゆう「又また云いく 於お後ご末まつ世しゆう法ほつ欲よく滅めつ時じ」分ぶん別べつ功く德とく品ひんに云いく 惡あく世せ末まつ法ほつ時じ」
藥やく王おう品ひんに云いく 後ご・五ご百ひやく歲さい」等と云い云い、正ほけき法きやう華きやう經きやうの勸くわん說しやく品ひんに云いく 然ぜん後ご末
世し「又また云いく 然ぜん後ご來らい末まつ世しゆう」等と云い云い、添てん品ぽん法ほけき華きやう經きやうに云いく等と、天てん台だいの云いく
像ざう法ほつのちゆう中ちゆうの南なん三さん北ほく七しちは法ほけき華きやう經きやうの怨おん敵てきなり、傳でん教きやうの云いく 像ざう法ほつの末まつ・
南なん都と・六ろく宗しゆうの学がく者しやは法ほつ華きやうの怨おん敵てきなり」等と云い云い、彼かれ等らの時ときはいまだ分ぶん明めい
ならず、

此きは教きやう主しゆ釈しやく尊そん・多た宝ほう仏ぶつ・宝ほう塔とうのちゆう中ちゆうに日にち月がつの並なぶがことくとく十じゆ方つぽう分ぶん身しんの
諸しよ仏ぶつ・樹じゆ下げに星しやうを列れつねたりし中ちゆうにして正しやう法ほつ一いつ千せん年ねん・像ざう法ほつ一いつ千せん年ねん・二に千せん
年ねんすぎて末まつ法ほつの始しやうに法ほけき華きやう經きやうの怨おん敵てき三さん類るいあるべしと八はち十じゆ万ばん億いふ那な由ゆ佗たの諸しよ

菩薩ぼさつの定め給たまひし虚妄こもうとなるべしや、当世とうせは如来滅後にやらいめつご二千二百余年なり
大地だいちは・指ささばはづるとも春は・花は・さかずとも三類さんるいの敵人てきじん・必ず
日本国にほんこくにあるべし、さるにてはたれたれの人人ひとびとか三類さんるいの内なるらん又
誰人だれびとか法華經ほけきょうの行者ぎやうじやなりとさされた

るらんをばつかなし、彼の三類さんるいの怨敵おんてきに我等われら入りてやあるらん又
法華經ほけきょうの行者ぎやうじやの内にてやあるらんをばつかなし、周の第四昭王しやうおうの御宇ぎよう
二十四年甲寅きのえとら・四月八日の夜中に天そらに五色の光氣・南北に亘わたりて昼の
ごとし、大地だいち・六種

に震動し雨ふらずして江河・井池の水まさり一切の草木に花さき菓なりたりけり不思議なりし事なり、昭王・大に驚き大史・蘇由・占つて云く西方に聖人生れたり」昭王問て云く此の国いかん」答えて云く事なし一千年の後に彼の聖言此の国にわたつて衆生を利すべし」彼のわづかの外典の一毫未断・見思の者・しかれども一千年のことをしる、はたして仏教・一千一十五年と申せし後漢の第二・明帝の永平十年丁卯の年・仏法・漢土にわたる、此は似るべくもなき釈迦多宝十方分身の仏の御前の諸菩薩の未来記なり、当世・日本国に三類の法華經の敵人なかるべしや、されば仏付法藏經等に記して云く我が滅後に正法一千年が間・我が正法を弘むべき人・二十四人・次第に相続すべし」迦葉・阿難等はさてをきぬ一百年の脇比丘・六百年の馬鳴・七百年の竜樹菩薩等・二分もたがはずすでに出で給いぬ、此の

事いかんがむなしかるべき此の事相違せば一經・皆相違すべし、所謂
舍利弗が未來の華光如來・迦葉の光明如來も皆妄語となるべし、爾前
返つて一定となつて永不成仏の諸声聞なり、犬野干をば供養すとも
阿難等をば供養すべからずとなん、いかんがせん・いかんがせん。

第一の有諸無智人と云うは經文の第二の惡世中比丘と第三の納衣
の比丘の大檀那と見へたり、随つて妙樂大師は俗衆」等云云、東春に
云く「公処に向う」等云云、第二の法華經の怨敵は經に云く「惡世中の
比丘は邪智にして心諂曲に未だ得ざるを為れ得たりと謂い我慢の心
充滿せん」等云云、涅槃經に云く「是の時に當に諸の惡比丘有るべし
乃至是の諸の惡人復是くの如き經典を誦誦すと雖も如來深密の要義
を滅除せん」等云云、止觀に

云く「若し信無きは高く聖境に推して己が智分に非ずとす、若し智無

きは増上慢ぞうじょうまんを起し己れ仏ひつに均ひとしと謂おもう」等云云、道綽どうしやく禪師ぜんしが云く「二に理深解微りじんげみなるに由る」等云云、法然ほうねん云く「謂行いわざうは機きに非ず時を失うしなう」等云云、記の十に云く「愍あやまくは人謬しよしんり解くどくせん者初心しよしんの功德くどくの大なることを識しらずして功こうを上位ゆずりに推おしり此この初心しよしんを蔑ないがしろにせん故に今彼の行浅せんく功深こうしんきことを示して以て経力を顯あらわす」等云云、伝教でんぎやう大師だいし云く「正像しやうざう稍しやう過ぎ已おわつて末法まっぽう太はだ近きに有り

法華ほつけ一乘いちじやうの機き今いま正ただしく是その其ときの時ときなり何を以て知ることを得る
安樂あんらく行品ぎやうひんに云いく末世まつせ法滅ほうめつの時ときなり」等云云、慧心えしんの云いく日本にほん一州
円機えんき純一じゆんいつなり」等云云、道綽どうしやくと伝教でんぎやうと法然ほうねんと慧心えしんといづれ此を信ずべ
しや、彼の一切いっけつ經に証文しやうぶんなし此これは正ただしく法華ほけきやう經によれり、其の上・
日本にほん國・一同いどうに叡山えいざんの大師だいしは受戒じゆかいの師しなり何ぞ天魔てんまのつける法然ほうねんに心
をよせ我が剃頭ていずの師しをなげすつるや、法然ほうねん智者ちしやならば何ぞ此の釈しやくを
選択せんたくに載のせて和會わえせざる人の理りをかくせる者ものなり、第二だいにの惡世あくせ中ちゆう比丘びく
と指ささるるは法然ほうねん等の無戒むかい邪見じゃけんの者ものなり、涅槃ねはん經に云いく我れ等ごらう悉ことごとく
邪見じゃけんの人ひとと名なく」
等云云、妙樂みやうらく云いく自みづから三教さんけうを指さして皆みな邪見じゃけんと名なく」等云云、止觀しかんに
云いく天經だいきやうに云いく此こよりの前は我等われら皆みな邪見じゃけんの人ひとと名なくるなり、邪あに豈や惡に
に非あらずや」等云云、弘決くわくけつに云いく邪こは即すなはち是これ惡になり是この故ゆゑに當まさに知しる

べし唯^{ただ}円を善と為す、復^{また}二意有り、一には順を以つて善と為し背^せを以つて悪と為す相待^{ぜったい}の意なり、著を以つて悪と為し達を以つて善と為す相待^{ぜったい}・絶待^{ぜったい}俱に須^{すべから}く悪を離るべし円に著^{じやく}する尚^{なお}悪なり況^{いわん}や復余^{また}をや」等云云、外道^{げどう}の善惡^{ぜんあく}は小乘^{しょうじやう}經に對すれば皆惡道^{みな}・小乘^{しょうじやう}の善道^{しやうじやう}・乃至^{ないし}四味三教^{しみさんきやう}は法華經に對すれば皆邪惡^{みなじやあく}但法華^{ほつけ}のみ正善なり、爾前^{にぜん}の円は相待^{ぜったい}妙なり、

絶待^{ぜったい}妙に對すれば猶惡なり前三教^{ぜんさんきやう}に悞^{せつ}すれば猶惡道なり、爾前^{にぜん}のごとく彼の經の極理^{ごくり}を行ずる猶惡道なり、況^{いわん}や觀經^{かんきやう}等の猶華嚴^{けこん}・般若經^{はんんにやきやう}等に及ばざる小法を本として法華經^{ほけきやう}を觀經^{かんきやう}に取り入れて還^{かへ}つて念仏^{ねんぶつ}に對して闍拋^{かくほう}閉捨^{へいしや}せるは法然^{ほうねん}並びに所化^{しよけ}の弟子^{でし}等檀那^{だんな}等は誹謗^{ひぼう}正法^{しやうほう}の者にあらずや、釈迦^{しやか}・多宝^{たほう}・十方^{じゆつぱう}の諸仏^{しよぶつ}は法をして久しく住せしめんが故^こに此^こに來至^{らいし}し給^{たま}えり、法然^{ほうねん}並に日本國^{にほんこく}の念仏^{ねんぶつ}者等は法華經^{ほけきやう}は末法^{まつほう}に

念仏ねんぶつより前に滅尽めつじんすべしと豈あに三聖さんせいの怨敵おんてきにあらずや。

第三は、法華經ほけきょうに云く「或あるは阿練若あれんにやに有り納衣のうえにして空閑からかんに在あつて

乃至ないし白衣びやくえの与ために法を説いて世に恭敬きやうけいせらるることを為なること六通ろくつうの

羅漢らかんの如ごとくならん」等云云、六卷の般泥☆經はつないおんに云く 羅漢らかんに似たる

一闍提いつせんだい有あつて惡業あくごうを行じ一闍提いつせんだいに似たる阿羅漢あらかんあつて慈心じしんを作さん、

羅漢らかんに似たる一闍提いつせんだい有ありとは是諸しよの衆生しゆじやうの方等ほうとうを誹謗ひぼうするなり

一闍提いつせんだいに似たる阿羅漢あらかんとは声聞しょうもんを毀きして広ほうく方等とうを説とき衆生しゅじやうに語かたつて言いわく我なんじ汝等なんじと俱ともに是これ菩薩ぼさつなり所以ゆえんは何いかん一切いっさい皆みな如來にょらいの性有しやうるが故しに然しかかも彼の衆生しゅじやうは一闍提いつせんだいと謂いわん」等云云、涅槃經ねはんぎやうに云く我われ涅槃ねはんの後・像法ぞうぼうの中に当まさに比丘びく有るべし持律じりつに似像じやうして少わすかに經典きやうてんを誦誦どくじゆし飲食おんじきを貪嗜とんしして其の身を長養ちやうようせん袈裟けさを服きると雖いえども猶りやう獵師りやうしの細視こし徐行じゆかうするが如ごとく猫ねずみの鼠うかがを伺うかがうが如ごとくし、常じやうに是この言ごんを唱なえん我わ羅漢らかんを得えたりと外ぐわいには賢善けんぜんを現げんし内ないには貪嫉とんしつを懷いだく誣法あほうを受うけたる婆羅門ばらもん等の如ごとく実じつには沙門しゃもんに非ひずして沙門しゃもんの像ざうを現げんじ邪見じやけん熾盛しじやうにして正法しょうぼうを誹謗ひぼうせん」

等云云、妙樂みょうらく云く第三だいさん最も甚しし後後うたたしりの者がた轉識うたたしり難がたきを以もつつての故ゆゑに」等云云、東春とうしゆん云く第三だいさんに・或有ある阿練若あれんにやより下げの三偈そくぜしゆつけは即是そくぜしゆつけ出家とこころの処ところに一切いっさいの惡人あくにんを撰せんす」等云云、東春とうしゆんに即是そくぜしゆつけ出家とこころの処ところに一切いっさいの惡人あくにんを

撰する」等とは当世・日本国には何れの処ぞや、叡山か園城か東寺か
南都か建仁寺か寿福寺か建長寺か・よくよく・たづぬべし、延暦寺の
出家の頭に甲冑をよろうをさすべきか、園城寺の五分法身の膚に鎧杖
を帯せるか、彼等は經文に納衣在空閑と指すにはにず為世所恭敬如
六通羅漢と人をもはず又転難識故というべしや華洛には聖一等・鎌倉
には良觀等にいたり、人をあだむことなかれ眼あらば經文に我が身
をあわせよ、止觀の第一に云く正觀の明靜なることは前代未だ聞か
ず」等云云、弘の一に云く漢の明帝夜夢みし自り陳朝に☆ぶまで禪門
に予り廁て衣鉢伝授する者」等云云、補注に云く衣鉢伝授とは達磨
を指す」等云云、止の五に云く又一種の禪人・乃至盲跛の師徒二俱に
墮落す」等云云、止の七に云く凡の意世間の文字の法師と共ならず、
事相の禪師と共ならず、一種の禪師

は唯観心の一意のみ有り・或は浅く・或は偽る余の九は全く此無し虚言
に非ず後賢眼有らん者は当に証知すべきなり」、弘の七に云く文字
法師とは内に観解無くして唯法相を構う事相の禪師とは境智を閑わ
ず鼻膈に心を止む乃至根本有漏定等なり、一師唯有観心一意等とは
此は且く与えて論を為す奪えば則ち観解俱に闕く、世間の禪人偏えに
理観を尚ぶ既に教を諳んぜず観を以つて経を消し八邪八風を数えて丈
六の仏と為し五陰三毒を合して名け

て八邪と爲し六入を用いて六通と爲し四大を以つて四諦と爲す、此くの如く經を解するは偽の中の偽なり何ぞ浅くして論ず可けんや」等云云、止觀の七に云く 晋☆洛の禪師名河海に播き住するときは四方雲の如くに仰ぎ去るときは阡陌群を成し隱隱轟轟亦何の利益か有る、臨終に皆悔ゆ」等云云、弘の七に云く「洛の禪師とは☆は相州に在り即ち齊魏の都する所なり、大に仏法を興す禪祖の一其の地を王化す、時人の意を譲りて其の名を出さず洛は即ち洛陽なり」等云云、六卷の般泥☆經に云く 究竟の処を見ずとは彼の一闡提の輩の究竟の悪業を見ざるなり」等云云、妙樂云く 第三最も甚だし転識り難きが故に」等、無眼の者・一眼の者・邪見の者は末法の始の三類を見るべからず一分の仏眼を得るもの此れをしるべし、向国王・大臣・婆羅門・居士等云云、東春に云く 公処に向ひ法を毀り人を謗す」等云云、夫れ昔

像法の末には護命・修円等・奏状をささげて伝教大師を譏奏す、今
末法の始には良觀・念阿等偽書を注して將軍家にささぐ・あに三類の
怨敵にあらざや。

当世の念仏者等・天台法華宗の檀那の国王・大臣・婆羅門・居士等に
向つて云く・法華經は理深我等は解微法は至つて深く機は至つて浅し
等と申しうとむるは高推聖境・非己智分の者にあらざや、禪宗の
云く・法華經は月をさす指・禪宗は月なり月をえて指なにかせん、禪は
仏の心・法華經は仏の言なり仏・法華經等の一切經をとかせ給いて後・
最後に一ふさの華をもつて迦葉一人にさづく、其のしるしに仏の御袈裟
を迦葉に付属し乃至付法蔵の二十八・六祖までに伝う」等云云、此等の
大妄語國中を誑醉せしめてとしひさし、又天台・真言の高僧等名は其
の家にえたれども我が宗にくらし、貪欲は深く公家・武家ををそれて

此の義を証伏し讃歎す、昔の多宝・分身の諸仏は法華經の令法久住を
証明す、今天台宗の碩徳は理深解微を証伏せり、かるがゆへに日本
に但法華經の名のみあつて得道の人二人もなし、誰をか法華經の行者
とせん、寺塔を焼いて流罪せらるる僧侶は、かずをしらず、公家・武家
に諛う・てにくまるる高僧これ多し、此等を法華經の行者というべき
か。

仏語むなしからざれば三類の怨敵すでに国中に充滿せり、金言のやぶるべきかのゆへに法華經の行者なし・いかがせん・いかがせん、抑たれやの人か衆俗に惡口罵詈せらるる誰の僧か刀杖を加へらるる、誰の僧をか法華經のゆへに公家・武家に奏する・誰の僧か數數見擯出と度度ながさるる、日蓮より外に日本国に取り出さんとするに人なし、日蓮は法華經の行者にあらず天これを・すて給うゆへに、誰をか当世の法華經の行者として仏語を實語

とせん、仏と提婆とは身と影とのごとし生生にはなれず聖徳太子と守屋とは蓮華の花華・同時なるがごとし、法華經の行者あらば必ず三類の怨敵あるべし、三類は・すでにあり法華經の行者は誰なるらむ、求めて師とすべし一眼の龜の浮木に値うなるべし。

有る人云く当世の三類はほほ有るにいたり、但し法華經の行者なし

汝なんじを法華經ほけきょうの行者ぎやうじやといはんとすれば大なる相違そうゐあり、此の經に云く

「天もろもろの諸どうじの童子も以て給使きゆうじを為さん、刀杖とうじやうも加えず、毒も害すること

能あたわざらん」又云く「若し人惡罵あつくすれば口則閉塞そくへいそくす」等、又云く「現世げんせ

には安穩あんのんにして後・善處ぜんしよに生れん」等云云、又「頭破こうべれて七分と作るこ

と阿梨樹ありじゆの杖ごの如くならん」又云く「亦現世またげんせに於て其の福報ふくほうを得ん」等

又云く「若し復是またこの經典きやうてんを受持じゆじする者を見て其の過惡かあくを出せば若しは

実にもあれ若しは不実ふじつにもあれ此の人現世げんせに白癩びやくらいの病を得ん」等云

云、答え

て云く「汝なんじが疑うたがいい大に吉よしついでに不審ふしんを晴さん、不輕品ふぎやうに云く「惡口あくく

罵詈めり」等、又云く「或は杖じやうもく木瓦石がしやくを以て之を打擲ちやうちやくす」等云云、

涅槃經ねはんぎやうに云く「若しは殺若しは害」等云云、法華經ほけきやうに云く「而しかも此の

經は如來にょらいの現在げんざいすら猶怨嫉なのおんしつ多し」等云云、仏は小指こさしを提婆だいばにやぶられ

くおう 九横の大難に値い給う此は法華經の行者にあらざるや、不輕菩薩は
いちじょう 一乗の行者といはれまじきか、目連は竹杖に殺さる法華經記☆の後
ふほうぜう なり、付法藏の第十四の提婆菩薩・第二十五の師子尊者の二人は人に
これら 殺されぬ、此等は法華經の行者にはあらざるか、竺の道生は蘇山に流
ほうどう されぬ法道は火印を面おもてにやいて江南にうつさる・此等は一乗の持者に
かなやき 外典げてんの者なりしかども白居易北野の天神は

遠流せらる賢人にあらざるか、事の心を案ずるに前生に法華經・誹謗
の罪なきもの今生に法華經を行ずこれを世間の実によせ・或は罪なき
をあだすれば忽に現罰あるか・修羅が帝釈を射る金翅鳥の阿耨池に入
る等必ず返つて一時に損するがごとし、天台云く 今・我が疾苦は皆
過去に由る今生の修福は報・将来に在り」等云云、心地觀經に曰く
過去の因を知らんと欲せば其の現在の果を見よ未來の果を知らんと
欲せば其の現在の因を見よ」等云云、不輕品に云く 其の罪畢已」等云
云、不輕菩薩は過去に法華經を謗じ給う罪・身に有るゆへに瓦石をかほ
るとみへたり、又順次生に必ず地獄に墮つべき者は重罪を造るとも
現罰なし一闍提人これなり、涅槃經に云く 迦葉菩薩
・仏に白して言く世尊・仏の所説の如く大涅槃の光一切衆生の毛孔に
入る」等云云、又云く 迦葉菩薩・仏に曰して言く世尊云何んぞ未だ

菩提ぼだいの心を発おこさざる者・菩提ぼだいの因を得ん」等云云、仏・此の問を答えて
云く 仏迦葉かしように告つぐ若もし是だいねはんきようの大涅槃經だいなはんきようを聞くこと有あつて我菩提心ぼだいしんを
發おこすことを用もちいずと言いつて正法しょうぼうを誹謗ひぼうせん、是この人即時そくじに夜夢やむの中に
羅刹らせつの像かたちを見て心中しんちゆう怖畏ふいす羅刹語らせつごつて言いく咄つたなし善男子ぜんなんし汝なんじ今若もし
菩提心ぼだいしんを發おこさずんば當まさに汝なんじが命いのちを斷きつべし是この人惶怖きやうふし寤さめ已おつて
即すなわち菩提ぼだいの心を發おこす當まさに是この人こは是れ大菩薩だいぼさつなりと知るべし」等云云、
いたうの大惡人あくにんならざる者
が正法しょうぼうを誹謗ひぼうすれば即時そくじに夢むみて・ひるがへる心生しんじやうず、又云く 枯木から・
石山いしさん」等、又云く 儼しょうしゆうかん種甘雨しゆかんに遇あはると雖いえども」等・又明珠淤泥みゆうじゆおでい泥でい」等、又
云く 尸いの手に創きずあるに毒藥どくやくを捉とるが如ごとし」等、又云く 天雨たいう空くうに住すせ
ず」等云云、此等これら多くの譬たとえあり、詮せんずるところ上品じやうばんの一闡いつせん提人だいじんになり
ぬれば順次生じゆんじしやうに必ず無間獄むげんごくに墮おつべきゆへに現罰げんばちなし例せば夏かのの祭まつり・

殷いんの紂ちゆうの世には天変てんぺんなし重科じゅうか有て必ず世ほろぶべきゆへか、又守護神しゅごしん此国こくをすつるゆへに現罰げんばちなきか

謗法ほうぼうの世をば守護神しゅごしんすて去り諸天しよてんまほるべからずかるがゆへに正法しやうぼうを行いずるものにしるしなし還かえつて大難だいなんに値あうべし金光明経こんこうみやうきやうに云いく善業ぜんごうを修しゅうする者は日日にじつに衰減すいげんす」等云云、悪国・悪時あくときこれなり具つさには立正安国論りっしやうあんこくろんにかんがへたるがごとし。

詮せんずるところは天てんもすて給たまえ諸難しよなんにもあえ身命しんみづうを期とせん、身子しんしが六十劫ぼくじくの菩薩ぼさつの行を退せし乞眼きがんの婆羅門ばらもんの責を堪たえざるゆへ久遠くおん大通だいづうの者の三五さんごの塵ちりをふる惡知識あくちしきに値あうゆへなり、善に付け惡につけ法華經ほけきようをすつるは地獄じじくの業なるべし、大願を立てん日本にほんの位をゆづらむ、法華經ほけきようをすてて觀經かんきよう等について後生ごしやうをこそよ、父母ふぼの頸くびを刎はなん念仏ねんぶつ申さずば、なんどの種種しゆじゆの大難だいにん・出来しゆでたいすとも智者ちしやに我義にほんやぶられずば用もちいじとなり、其その外ほかの大難だいにん・風ふうの前の塵ちりなるべし、我日本にほんの柱はしらとならむ我日本にほんの眼目がんもくとならむ我日本にほんの大船だいはんとならむ等とちかいし願ねがやぶるべからず。

疑うたがいつて云いわくいかにとして汝なんじが流罪るざい・死罪しざい等を過去かこの宿習しゆくじゆうとしらむ、答こたえて云いわく銅鏡どうきやうは色形しきぎやうを顯あらわす秦王しんのう・駿偽けんぎの鏡きやうは現在げんざいの罪つみを顯あらわす仏法ぶつぽうの鏡きやうは過去かこの業因ごういんを現げんず、般泥はんない☆經おんきやうに云いわく善男子ぜんなんし過去かこに曾かつて

無量の諸罪種種の惡業を作るに是の諸の罪報は、或は輕易せられ：或は形狀醜陋・衣服足らず・飲食ソソ・財を求むるに利あらず貧賤の家邪見の家に生れ：或は王難に遭い・及び余の種種の人間の苦報あらん現世に輕く受るは斯れ護法の功德力に由るが故なり」云云、此の經文日蓮が身に宛も符契のごとし狐疑の氷とけぬ千万の難も由なし一一の句を我が身にあわせん、或被輕易等云云、法華經に云く「輕賤憎嫉」等云云・二十余年が間の輕慢せらる、或は形狀醜陋・又云く衣服不足は予が身なり飲食ソソは予が身なり求財不利は予が身なり生貧賤家は予が身なり、或遭王難等・此の經文疑うべしや、法華經に云く「數數擯出せられん」此の經文に云く「種種」等云云、斯由護法功德力故等とは摩訶止觀の第五に云く「散善微弱なるは動せしむること能わず今止觀を修して健病☆ぎれば生死の輪を動ず」等云云、

又云く『三障四魔紛然として競い起る』等云云我れ無始より・このかた
悪王と生れて法華經の行者の衣食・田畠等を奪いとりせしこと・かずし
らず、当世・日本国の諸人の法華經の山寺をたうすがごとし、又法華經
の行者の頸を刎こと其の数をしらず此等の重罪はたせるもあり・いま
だ・はたさざるも・あるらん、果すも余残いまだ・つきず

生死しやうじを離るる時は必ず此この重罪じゆうざいをけしはてて出離しゆつりすべし、功德くどくは浅輕せんけいなり此等これらの罪つみは深重じんじゆうなり、權經ごんきやうを行ぜしには此この重罪じゆうざいいまだ・をこらず鉄くろがねを熱あつにいたう・きたわざればきず隠れてみえず、度度たびたびせむれば・きずあらはる、麻子あさのみを・しぼるに・つよくせめざれば油少あぶらきがごとし、今こん日蓮にちれん・強盛かうじやうに国土こくどの謗法ぼうぼうを責せむれば此この大難だいなんの来るは過去かこの重罪じゆうざいの今生こんじやうの護法ごぼうに招き出だせるなるべし、鉄くろがねは火に値あわざれば黒し火と合あいぬれば赤し木をもつて急はや流きはをかけば波山なみのごとし睡ねむれる師子ししに手をつくれば大おほいに吼ほゆ。

涅槃經ねはんきやうに曰いわく 響たえば貧女ひんによの如ごとし居家救護くごの者有あること無なくく加くうるに復病苦飢渴またけちに逼せめられて遊行乞丐こうがいす、他の客舎くちやに止り一子を寄生けいじやうす是この客舎くちやの主廬ちう逐ちくして去らしむ、其その産うまゐりて未いまだ久しからず是この児こをけいほう☆☆して他国たこくに至いたらんと欲そし、其その中路ちうぢうに於おいて惡風雨あくふううに遇あて寒苦なん並ならび

至り多く蚊虻蜂☆毒虫の☆い食う所となる、恒河に☆由し児を抱いて渡る其の水漂疾なれども而も放ち捨てず是に於て母子遂に共俱に没しぬ、是くの如き女人慈念の功德

命終の後梵天に生ず、文殊師利若し善男子有つて正法を護らんと欲せば彼の貧女の恒河に在つて子を愛念するが為に身命を捨つるが如くせよ、善男子護法の菩薩も亦是くの如くなるべし、寧ろ身命を捨てよ是くの如きの人解脱を求めずと雖も解脱自ら至ること彼の貧女の梵天を求めざれども梵天自ら至るが如し」等云云、此の經文は章安大師・三障をもつて釈し給へり、それをみるべし、貧人とは法財のなきなり女人とは一分の慈ある者なり、客舎とは穢土なり一子とは法華經の信心・了因の子なり舍主驅逐とは流罪せらる其の産して未だ久しからずとはいまだ信じて・ひさしから

ず、惡風あくふうとは流罪るざいの勅宣ちよくせんなり蚊虻ぶんぼう等とは諸もろの無智むちの人ひと有あり惡口あつく罵詈めり等らなり母子ぼし共に没ぼつすとは終ついに法華經ほけきやうの信心しんじんをやぶらずして頸けを刎はねるなり、梵天ぼんてんとは仏界ぶつかいに生なるをいうなり引業いんごうと申もうすは仏界ぶつかいまでかはらず、日本にほん・漢土かんどの万國まんこくの諸人しよにんを殺ころすとも五逆ごぎやく・謗法ぼうぼうなければ無間むげん地獄じごくには墮おちず、余あの惡道あくどうにして多歳たさいをふべし、色天しきてんに生なるること万戒まんかいを持もてども万善ばんぜんを修しゆすれども散善さんぜんにては生なれず、又梵天王ぼんてんとなる事こと・有漏うろの

引業いんごうの上に慈悲じひを加えて生なずべし、今・此この貧女ひんによが子を念おもうゆへに梵天ぼんてんに生なる常じょうの性相しょうそうには相違そういせり、章安しやうあんの二はあれども詮せんずるところは子を念おもう慈悲じねんより外ほかの事ことなし、念ねんを一境じきやうにする、定じやうに似にたり専もつぱら子を思おもう又慈悲じひにも・にたり、かるがゆへに他事たじなけれども天てんに生なるるか、又仏ぶつになる道みちは華嚴けごんの唯心ゆいしん法界ほつかい・三論さんろんの八不はつふ・法相ほつそうの唯識ゆいしき・真言しんごんの五輪親ごりんしん等も実じつには叶かなうべしともみへず、但天台てんだいの一念三千いちねんさんぜんこそ仏ぶつになるべき道みちとみゆれ、此この一念三千いちねんさんぜんも我等われら一分いちぶんの慧解えげもなし、而しかれども一代いちだい経きやう経きやうの中なかには此この経計けいかり一念三千いちねんさんぜんの玉たまをいだけり、余よ経きやうの理りは玉たまに・にたる黄石おうしやくなり沙さをしぼるに油あぶらなし石女いしにょに子のなきがごとし、諸しよ経きやうは智ち者しや・猶なほ仏ぶつにならず此この経きやうは愚人ぐにんも仏因ぶつじんを種うゆべし

不求解脱ふくげだつ・解脱げだつ自至等じじとうと云云、我われ並びに我われが弟子でし・諸難しよなんありとも疑うたがう心こころなくば自然じねんに仏界ぶつかいにいたるべし、天てんの加護かごなき事を疑うたがはざれ現世げんせの

あんのん

安穩ならざる事をなげかされ、我が弟子に朝夕教えしかども・疑い

ををこして皆すてけんつたなき者のならひは約束せし事をまことの時

やくそく

は・わするるなるべし、妻子を不便と・をもうゆ・現身にわかれん事を・

さいし ふびん げんしん

なげくらん、多生曠劫に・したしみし妻子には心とはなれしか仏道のた

たうじう

さいし

ぶつどう

めに・はなれしか、いつも同じわかれなるべし、我法華經の信心をやぶら

ほけきよう しんじん

ずして靈山にまいりて返てみちびけかし。

りようぜん

疑つて云く念仏者と禪宗等を無間と申すは諍う心あり修羅道に

うたがい

いわ

ねんぶつ

ぜんしう

むげん

もう

あらそ

しゆらどう

や墮つべかるらむ、又法華經の安樂行品に云く・衆つて人及び經典の過

お

またしよよ

ほけきよう

あんらくぎようぼん

いわ

ねが

およ

きようてん

の過

を説かざれ亦諸余の法師を輕慢せざれ」等云云、汝此の經文に相違

またしよよ

ほけき

きようまん

等云云

なんじ

きようもん

に相違

するゆへに天にすてられたるか、答て云く止觀に云く・天れ仏に両説あ

いわ

しかん

いわ

そ

りようせつ

あ

り一には撰・二には折・安樂行に不称長短という如き是れ撰の義なり、

ちようたん

ごと

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

大經に刀杖を執持し乃至首を斬れという是れ折の義なり与奪・途を

だいぎよう

とうじよう

しゅうじ

ないし

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

大經に刀杖を執持し乃至首を斬れという是れ折の義なり与奪・途を

殊にすと雖も俱に利益せしむ」等云

云、弘決に云く 天れ仏に両説あり等とは大經に刀杖を執持すとは
第三に云く正法を護る者は五戒を受けず威儀を修せず、乃至下の文
仙予国王等の文、又新医禁じて云く若し更に為すこと有れば当に其の
首を断つべし是くの如き等の文並びに是れ破法の人を折伏するなり
一切の經論此の二を出でず」等云云、文句に云く問う大經には

國王こくおうに親付しんぷし弓たもを持ち箭やを帶たいし惡人あくにんを摧伏ざいふくせよと明す、此の經は豪勢
を遠離おんりし謙下けんげ慈善じぜんせよと剛柔おお頤そむいに乖なんく云何なんを異いかならざらん、答こたう
大經だいぎやうには偏ひとえに折伏しやくぶくを論ろんずれども一子地いちじに住す何なんぞ曾かつて摂受しやうじゆ無なから
ん、此の經には偏ひとえに摂受しやうじゆを明めいせども頭破ずはしちふん七分しちぶんと云いう折伏しやくぶく無なきに非あらず
各おのおの一端いちたんを挙あげて時ときに適かなう而已のみ」等云云、涅槃經ねはんぎやうの疏じよに云いく、田家しめつけざいけ在家ざいけ
法ほふを護まもらんには其その元心げんしんの所為しよゐを取り事ことを棄すて理りを存ぞんして匡まさに大經だいぎやうを
弘ひろむ故ゆゑに護持ごじ正法しやうぽうと云いうは小節せうせつに拘かかわらず故ゆゑに不修ふしゆう威儀ゐぎと云いうな
り、昔の時むかしは平へいにして法ほふ弘ひろまるるまさるるに戒かいを持もつべし杖じやうを持もつこと勿なけれれ今いま
時は嶮けんにし

て法ほふ翳かくるるにまさ杖じやうを持もつべし戒かいを持もつこと勿なけれれ、今昔こんじやく俱ともに嶮けんならば俱ともに
杖じやうを持もつべし今昔こんじやく俱ともに平へいならば俱ともに戒かいを持もつべし、取捨しゆしや宜よろしきを得いて一向いつこう
にす可べからず」等云云、汝なんじが不審ふしんをば世間せけんの学者がくしや・多分たぶん・道理どうりとをも

う、いかに諫曉かんきょうすれども日蓮にちれんが弟子等も此のをもひをすてず一闡提人
の・ごとくなるゆへに先づ天台てんだい・妙楽等の釈をいだして・かれ
が邪難じやなんをふせぐ、夫れそ摂受しやうじゆ・折伏しやくぶくと申す法門は水火のごとし火は水を
いとう水は火をにくむ、摂受しやうじゆの者は折伏しやくぶくをわらう折伏しやくぶくの者は摂受しやうじゆを
かなしむ、無智むち・惡人あくにんの国土こくどに充滿じゅうまんの時は摂受しやうじゆを前とす安樂行品のご
とし、邪智じやち・謗法ぼうぼうの者の多き時は折伏しやくぶくを前とす常不輕品のごとし、譬たとへ
ば熱き時に寒水を用い寒き時に火をこのむがごとし、草木そうもくは日輪にちりんの
眷属けんぞく・寒月に苦をう諸水しよすいは月輪しよじゆんの所従しよじゆん・熱時に本性うしなを失う、末法まっぽうに
摂受しやうじゆ・折伏しやくぶくあるべし所謂惡国いゝわる・破法はほうの両国りやうこくあるべきゆへなり、日本国にほんこくの
当世とうせは惡国はほうか破法はほうの国かと・しるべし。

問うて云く摂受しやうじゆの時・折伏しやくぶくを行ずると折伏しやくぶくの時・摂受しやうじゆを行ずると
利益りやくあるべしや、答えて云く涅槃經ねはんぎやうに云く迦葉菩薩かしょうぼさつ・仏もうに白して言いわく

如來にょらいの法身ほっしんは金剛こんごう不壞ふえなり未だいま所因しよいんを知ること能あたわず云何、仏いわの言いく
迦葉かしようよ能よく正法しやうほうを護持ごじする因緣いんねんを以もての故ゆえに是この金剛身こんごうしんを成就じやうじゆするこ
とを得たり、迦葉かしよう我護持正法ごじしやうほうの國緣こくごんにて今是この金剛身こんごうしん常住じやうじゆ不壞ふえを
成就じやうじゆすることを得たり、善男子ぜんなんし正法しやうほうを護持ごじする者は五戒ごかいを受けず
威儀いぎを修しゆぜうずまさに刀劍弓とうけんきゆう箭せんを持もつべし、是かくの如ごとく種種しゆじゆに法はふを説とくくも
然しかも故師し子し吼くを作なすこと能あたわず非法ひほうの惡人あくにんを降伏かうふくすること能あたわず、
是かくの如ごとき比丘びくじり自利

し及び衆生を利すること能わず、当に知るべし是の輩は懈怠懶惰なり
能く戒を持ち淨行を守護すと雖も当に知るべし是の人は能く為す所
無からん、乃至時に破戒の者有つて是の語を聞き已つて咸共に瞋恚し
て是の法師を害せん是の說法の者設い復命終すとも故持戒自利利他
と名く」等云云、章安の云く取捨宜きを得て一向にす可からず」等、
天台云く「時に適う而已」等云云、譬へば秋の終りに種子を下し田畠を
かえさんに稲米をうるることかたし、建仁年中に法然・大日の二人・出来
して念仏宗・禪宗を興行す、法然云く「法華經は末法に入つては
未有一人得者千中無一」等云云、大日云く「教外別伝」等云云、此の兩
義国土に充滿せり、天台・真言の学者等・念仏・禪
の檀那を・へつらいをづる事犬の主にを・をふり・ねづみの猫を・をそるる
がごとし、国王・將軍に・みやつかひ破仏法の因縁・破国の因縁を能く

とよ
説き能くかたるなり、天台・真言の学者等今生には餓鬼道に墮ち後生
には阿鼻を招くべし、設い山林にまじわつて一念三千の觀をこらすとも
くうげん
空閑にして三密の油をこぼさずとも時機をしらず 摂折の二門を弁へ
ずば・いかでか生死を離るべき。

問うて云く念仏者・禪宗等を責めて彼等に・あだまれたる・いかなる
りやく
利益かあるや、答えて云く涅槃經に云く 若し善比丘法を壞る者を見
て置いて呵責し廝遣し挙処せずんば当に知るべし是の人は仏法の中の
あだ
怨なり、若し能く廝遣し呵責し挙処せば是れ我が弟子真の声聞なり」
等云云、 仏法を壞乱するは仏法中の怨なり慈無くして詐り親しむは
こ
是れ彼が怨なり能く糾治せんは是れ護法の声聞真の我が弟子なり彼
が為に惡を除くは即ち是れ彼が親なり能く呵責する者は是れ我が弟子
くけん
廝遣せざらん者は仏法中の怨なり」等云云。

そ
夫れ法華經ほけきょうの宝塔品ほうとうぼんを拜見はいけんするに釈迦しやか・多宝たほう・十方分身じゅうほうふんじんの諸仏しよぶつの
来集らいじゅうはなに心ぞ「令法久住りようぼうくじゅう・故来至此らいし」等云云、三仏の未来みらいに法華經ほけきょう
を弘ひろめて未来みらいの一切いっさいの仏子ぶつしにあたえんと・おぼしめす御心ごしんの中をすいす
るに父母ふぼの一子の大苦おほくに値あうを見るよりも強盛じやうじやうにこそみへたるを法然ほうねん
いたはしと・もおもはで末法まっぽうには法華經ほけきょうの門を堅く閉じて人を

入れじとせき狂児をたばらかして宝をすてさするやうに法華經を抛
させける心こそ無慚に見候へ我が父母を人の殺さんに父母につげざ
るべしや、惡子の醉狂して父母を殺すをせいせざるべしや、惡人寺塔に
火を放たんにせいせざるべしや、一子の重病を炙せざるべしや、日本
の禪と念佛者とをみて制せざる者はかくのごとし惡無くして詐り親し
むは即ち是れ彼が怨なり」等云云。

日蓮は日本國の諸人にしうし父母なり一切天台宗の人は彼等が大
怨敵なり 彼が爲に惡を除くは即ち是れ彼が親」等云云、無道心の者
生死をはなるる事はなきなり、教主釈尊の一切の外道に大惡人と
罵詈せられさせ給い天台大師の南北並びに得一に三寸の舌もつて五尺
の身をたつと伝教大師の南京の諸人に「最澄未だ唐都を見ず」等とい
はれさせ給いし皆法華經のゆへなればはぢならず愚人にほめられたるは

第一だいいちのはぢなり、日蓮にちれんが御勘氣ごかんきを・

かほれば天台てんだい・真言しんごんの法師ほつし等悦よろこばしくやをもうらん・かつはむざんなり

・かつはきくわいなり、夫それ釈尊しゃくそんは娑婆しやばに入り羅什らじゅうは秦てんに入り伝教でんぎょうは

尸那しなに入り提婆だいば師子ししは身をすつ薬王やくおうは臂ひじをやく上宮じやうぐうは手の皮をはぐ

釈迦しやか菩薩ぼさつは肉をうる樂法ぎやうぽうは骨を筆とす、天台てんだいの云いわく・通時ちやくじ而已に」等云

云、仏法ぶつぽうは時ときによるべし日蓮にちれんが流罪るざいは今生こんじやうの小苦なれば・なげかしから

ず、後生ごしやうには大樂をうくべければ大おおに悦よろこばし。

◆四二 如来滅後五百歲始觀心本尊抄

本朝

沙門 日蓮撰

238P

摩訶止觀第五に云く開合の異なり

文永十年

五二歳御作

天れ一心に十法界を具す一法界に又十法界を具すれば百法界なり
一界に三十種の世間を具すれば百法界に即三千種の世間を具す、比の
三千・一念の心に在り若し心無んば而已介爾も心有れば即ち三千を
具す乃至所以に称して不可思議と為す意此に在り

問うて云く玄義に一念三千の名目を明かすや、答えて曰く妙樂
云く明かさず、問うて曰く文句に一念三千の名目を明かすや、答えて

曰く妙樂云く明かさず、問うて曰く其の妙樂の積如何、答えて曰く
未だ一念三千と云わず等云云、問うて曰く止觀の一二三四等に
一念三千の名目を明かさずや、答えて曰く之れ無し、問うて曰く其の証
如何、答えて曰く妙樂云く故に止觀に至つて正しく觀法を明かさ
並び三千を以て指南と爲す」等云云、疑つて曰く玄義第二に云く又
一法界に九法界を具すれば百法界千如是」等云云、文句第一に云く
二入に十法界

を具すれば一界又十界なり十界各十如是あれば即ち是れ一千」等云
云、觀音玄に云く干法界交互なれば即ち百法界有り千種の性相。
冥伏して心に在り現前せずと雖も宛然として具足す」等云云、問うて
曰く止觀の前の四に一念三千の名目を明かさずや、答えて曰く妙樂
云く明さず、問うて曰く其の積如何、答う弘決第五に云く若し正觀

に望めば全く未だ行を論ぜず亦二十五法に歴て事に約して解を生ず
方に能く正修の方便と為すに堪えたり是の故に前の六をば皆解に属
す」等云云、又云く故に止觀の正しく觀法を明かすに至つて並びに
三千を以て指南と

為す乃ち是れ終窮究竟の極説なり故に序の中に説己心中所行法門

と云う良に以所有るなり請う尋ね読まん者心に果縁無れ」等云云、

夫れ智者の弘法三十年二十九年の間は玄文等の諸義を説いて五時、

八教・百界・千如を明かし前き五百余年の間の諸非を責め並びに天竺

の論師未だ述べざるを顕す、章安大師云く天竺の大論尚其の類に

非ず震旦の人師何ぞ勞わしく語るに汲ばん此れ誇耀に非ず法相の然ら

しむるのみ」等云云、墓ないかな天台の末学等華嚴・真言の元祖の盗人

に一念三千の重宝を盗み取られて還つて彼等が門家と成りぬ章安大師

兼ねて此の事を知つて歎いて言く斯の言若し墜ちなば将来悲む可し」

云云。

問うて曰く百界千如と一念三千と差別如何、答えて白く

百界千如是有情界に限り一念三千は情非情に亘る、不審して云く

非情に十如是亘るならば草木に心有つて有情の如く成仏を為す可き
や如何、答えて白く此の事難信難解なり天台の難信難解に二有り一に
は教門の難信難解・二には觀門の難信難解なり、其の教門の難信難解
とは一仏の所説に於て爾前の諸經には二乘闡提・未來に永く成仏せず
教主釈尊始めて正覺を成じ法華經迹本二門に來至し給ひ彼の二説を
壞る一仏二言水火なり誰人か之を信ぜん此れは教門の難信難解なり、
觀門の難信難解は百界千如

・一念三千・非情の上の色心の二法十如是是なり、爾りといえども木画
の二像に於ては外典内典共に之を許して本尊と為す其の義に於ては
天台一家より出でたり、草木の上に色心の因果を置かずんば木画の像
を本尊に待み奉ること無益なり、疑つて云く草木国土の上の十如是の
因果の二法は何れの文に出でたるや、答えて曰く止觀第五に云く国土

世間せけんまた亦十種の法を具ぐす所以ゆえに惡国土・相・性・体・力」等と云云、釈證
第六に云く相は唯色ゆいしきに有り性は唯心ゆいしんに在り体・力・作・縁は義色心しきしんを
兼かね因果いんがは唯心ゆいしん・報は唯色ゆいしきにあり」等云云、金☆論こんべいろんに云く乃すなわち是れ一
草・一木・一礫・一塵いちじん・各一仏性ぶつじょう・各一因果いんがあり縁了えんりょうを具足ぐそくす」等云
云。

問うて曰く出處既に之を聞く觀心の心如何、答えて曰く觀心とは我が己心を觀じて十法界を見る是を觀心と云うなり、譬えば他人の六根を見ると雖も未だ自面の六根を見ざれば自具の六根を知らず明鏡に向うの時始めて自具の六根を見るが如し、設い諸經の中に處處に六道並びに四聖を載すと雖も法華經並びに天台大師所述の摩訶止觀等の明鏡を見ざれば自具の十界・百界千如・一念三千を知らざるなり。

問うて云く法華經は何れの文ぞ天台の釈は如何、答えて曰く法華經第一方便品に云く「衆生をして仏知見を開かしめんと欲す」等云云是は九界所具の仏界なり、寿量品に云く是くの如く我成仏してよりこのかたはなほだおおいにおん已来甚大に久遠なり壽命・無量阿僧祇劫・常住にして滅せず諸の善男子我本菩薩の道を行じて成ぜし所の壽命今猶未だ尽きず復上の數に倍せり」等云云此の經文は仏界所具の九界なり、經に云く

提婆達多乃至天王如来」等云云地獄所具

の仏界なり、經に云く「を藍婆と名け乃至汝等但能く法華の名を

護持する者は福量るべからず」等云云、是れ餓鬼界所具の十界なり、經

に云く「竜女乃至成等正覺」等云云此れ畜生界所具の十界なり、經

に云く「婆稚阿修羅王乃至一偈・一句を聞いて・阿耨多羅三藐三菩提

を得べし」等云云修羅界所具の十界なり、經に云く「若し人・仏の為の

故に乃至皆已に仏道を成ず」等云云此れ人界所具の十界なり、經に

云く「天梵天王乃至我等も亦是くの

如く・必ず當に作仏することを得べし」等云云此れ天界所具の十界な

り、經に云く「舍利弗乃至華光如来」等云云此れ聲聞界所具の十界な

り、經に云く「其の緣覺を求むる者・比丘・比丘尼乃至合掌を以て敬心

し具足の道を聞かんと欲す」等云云、此れ即ち緣覺界所具の十界なり、

經に云く、地湧千界乃至真淨大法」等云云此れ即ち菩薩所具の十界なり、經に云く、「或説己身・或説他身」等云云即ち仏界所具の十界なり。

問うて曰く自他面の六根共に之を見る彼此の十界に於ては未だ之を見ず如何が之を信ぜん、答えて曰く法華經・法師品に云く、難信難解、宝塔品に云く、六難九易」等云云、天台大師云く、「門悉く昔と反すれば難信難解

なり」章安大師云く、仏此れを將て大事と爲す何ぞ解し易きことを得
可けんや」等云云、伝教大師云く、此の法華經は最も爲れ難信難解な
り隨自意の故に」等云云、夫れ在世の正機は過去の宿習厚き上、
教主釈尊・多宝仏・十方分身の諸仏・地涌千界・文殊・弥勒等之を
扶けて諫曉せしむるに猶信ぜざる者之れ有り五千・席を去り人天移さ
る況や正像をや何に況や末法の初をや汝之を信ぜば正法に非じ。
問うて曰く經文並に天台章安等の解釈は疑網無し但し火を以て水
と云い墨を以て白しと云う設い仏説爲りと雖も信を取り難し、今數ば
他面を見るに但人界に限って余界を見ず自面も亦復是くの如し如何が
信心を立てんや、答う數ば他面を見るに、或時は喜び・或時は瞋り・或
時は平に・或時は貪り現じ・或時は癡現じ・或時は諂曲なり、瞋るは
地獄・貪るは餓鬼・癡は畜生・諂曲なるは修羅・喜ぶは天・平かなるは

人なり他面の色法に於ては六道共に之れ有り四聖は冥伏して現れざれども委細に之を尋ねば之れ有る可し。

問うて白く六遣に於て分明ならずと雖も粗之を聞くに之を備うるに以たり、四聖は全く見えざるは如何、答えて白く前には人界の六道之を疑う、然りと雖も強いて之を言つて相似の言を出だせしなり四聖も又爾るに可きか試みに道理を添加して万か一之をの宣べん所以に世間の無常は眼前に有り豈人界に二乗界無からんや、無顧の惡人も猶妻子を慈愛す菩薩界の一分なり、但仏界計り現じ難し九界を具するを以て強いて之を信じ疑惑せしむること勿れ、法華經の文に人界を説いて云く「衆生をして仏知見を開かしめんと欲す」涅槃經に云く「大乘を学する者は肉眼有りと雖も名けて仏眼と為す」等云云、末代の凡夫出生して法華經を信ずるは人界に仏界を具足する故な

り。

問うて曰く十界互具の仏語分明なり然りと雖も我等が劣心に
仏法界を具すること信を取り難き者なり今時之を信ぜずば必ず
一闡提と成らん願くば大慈悲を起して之を信ぜしめ阿鼻の苦を救護し
たまえ。

答えて曰く汝既に唯一大事因縁の經文を見開して之を信ぜざれば
釈尊より已下四依の菩薩並びに末代理即の我等如何が汝が不信を
救護せんや、然りと雖も試みに之を云わん仏に値いたてまつつて覺らざ
る者・阿難等の辺にして得道する者之れ有ればなり、其れ機に二有り
一には仏を見たてまつり法華にして得道す二には仏を見たてまつらざ
れども法華にて得道するなり、其の上仏教已前は漢土の道士月支の
外道・儒教・四韋陀等を以て經と爲して正見に入る者之れ有り、又
利根の菩薩・凡夫等の華嚴・方等・般若等の諸大乘經聞きし縁を以て
大通久遠の下種
をする者多々なり例せば独覺の飛花落葉の如し教外の得道是なり、
過去の下種結縁無き者の權小に執着する者は設い法華經に値い奉れど
も小權の見を出でず、自見を以て正義と爲るが故に通つて法華經を

もつ 以て・或ある小乗經しょうじょうきやうに同じ・或あるは華嚴けごん・大日經等だいにとちきやうに同じ・或あるは之これを下す、
此等これらの諸師しよしは儒家外道じゆけげどうの賢聖けんせいより劣おとれる者ものなり、此等これらは且しからく之これを置
く、十界互具じゆつかいご之これを立つるは石中の花・木中の花信なんじ難なんけれども縁に
値あうて出生しゆつしやうすれば之これを信にんず人界所具にんかいしよぐの仏界ぶつがい
は水中の火・火中の水最も甚はなはだだ信がたじ難がたし、然しかりと雖いえども竜火りゅうかは水より
出いで竜水りゅうすいは火より生こころえず心得こころえられざれども現証げんしやう有あれれば之これを用もちゆ、既に
人界にんかいの八界これ之これを信にんず、仏界何ぞ之これを用もちいざらん堯ぎやうしゆん舜等しゆんの聖人しやうにんの如ごとき
は万民ばんみんに於おて偏頗へんげ無にんかいし人界ぶつがいの仏界いちぶんの一分ふぎやうなり、不輕菩薩ふきやうぼさつは所見しよけんの人ひとに
於おて仏身ぶつしんを見る悉達しつたたい太子たいしは人界にんかいより仏身ぶつしんを成じやうず此等これらの現証げんしやうを以もつて
之これを信にんず可べきなり。

問いうて曰いく堅固けんこに之これを秘ひす三惑さんかく已斷いだんの仏ぶつなり又また十方世界じゆつぽうせかいの国主こくしゆ一切いっさいの
菩薩ぼさつ・二乘にじやう・人天等にんてんの主君しゆくんなり行みゆきの時ときは梵天ぼんてん左ひだりに在あり帝釈たいしやく右みぎに侍はべり

四衆・八部後に従い金剛前に導びき八万法蔵を演説して一切衆生を
得脱せしむ是くの如き仏陀何を以て我等凡夫の己心に住せしめんや、
又迹門・爾前の意を以て之を論ずれば教主釈尊は始成正覺の仏な
り、過去の因行を尋ね求めば、或能施太子・或は儒童菩薩・或は戸毘王
・或は薩た王子・或は三祇・百劫、或は
動☆塵劫・或は無量阿僧祇劫・或は初発心時・或は三千塵点等の間七
万・五千・六千・七千等の仏を供養し劫を積み

行満じて今の教主釈尊と成り給う、是くの如き因位の諸行は皆我等
が己身所見の菩薩界の功德か、果位を以て之を論ずれば教主釈尊は
始成正覺の仏四十年の間四教の色身を示現し爾前・迹門・涅槃等を
演説して一切衆生を利益し給う、所謂華藏の時・十万台上の盧舎那・
阿含經の三十四心・断結成道の仏、方等・般若の千仏等、大日・
金剛頂の千二百余尊、並びに迹門宝塔品の四土色身、涅槃經の或は
丈六と見る・或は小身大身と現じ・或いは盧舎那と見る・或いは身虚空
に同じと見る四種の身乃至八十御入滅舍利を留めて正像末を利益し
給う、本門を以て之を疑わば教主釈尊は五百塵点已前の仏なり
因位も又是くの如し、其れより已来十方世界に分身し一代聖教を
演説して塵数の衆生を教化し給う、本門の所化を以て迹門の所化に
比較すれば一たいと大海と一塵と大山とな、本門の一菩薩を

迹門 十万世界の文殊・観音等に対向すれば猴猿を以て帝釈に比する
に尚及ばず、其の外 十方世界の断惑証果の二乗並びに梵天・帝釈・
日月・四天・四輪王・乃至無間・大城の大火等比等は皆我が一念の十界
か己身の三千か、仏説為りといえども之を信ず可からず。

此れを以て之を思うに爾前の諸経は実事なり実語なり、華嚴經に
云く 究竟して虚妄を離れ染無きこと虚空の如し」と仁王經に云く
源を窮め性を尽して妙智存せり」金剛般若經に云く「清淨の善のみ
有り」馬鳴菩薩の起信論に云く 如来藏の中に清淨の功德のみ有り」
天親菩薩の唯識論に云く 謂く余の有漏と劣の無漏と種は金剛喻定が
現在前する時極円明純淨の本識を引く彼の依に非ざるが故に皆永く
喜捨す」等云云、爾前の經経と法華經と之を校量するに彼の
經経は無数なり時説既に長し一仏二言彼に付く可し、馬鳴菩薩は律

法蔵第十一にして

仏記に之れ有り天親は千部の論師・四依の大師なり、天台大師は辺鄙の小僧にして一論をも宣べず誰か之を信ぜん、其の上多を捨て小に付くとも法華經の文分明ならば少し恃怙有らんも法華經文に何れの所にか十界互具・百界・千如・一念三千の分明なる証文之れ有りや、随つて經文を開拓するに斷諸法中惡」等云云、天親菩薩の

法華論・堅慧菩薩の宝性論に十界互具之れ無く漢土南化の諸大人師・
日本七寺の未師の中にも此の義無し但天台一人の僻見なり伝教一人
の謬伝なり、故に清涼国師の云く天台の謬りなり「憲苑法師の
云く然るに天台は小乗を呼んで三藏教と為し其の名謬濫するを以
て」等云云、了洪が云く天台独り未だ華嚴の意を尽さず」等云云、得
一が云く嘸いかな智公汝は是れ誰が弟子ぞ、三寸に足らざる舌根を
以て覆面説の所説の教時を謗ず」等云云、弘法大師の云く震旦の大師
等諍つて醍醐を盗んで各自宗に名く」等云云、夫れ一念三千の法門は
一代の権実の名目を削り四依の諸論師其の義を載せず漢土日域の
大師も之を用いず、如何が之を信ぜん。

答えて曰く此の難最も甚し最も甚し但し諸經と法華との相違は
經文より事起つて分明なり未顯と已顯と証明と舌相と二乗の成不

と始成しじやうと久成くじやうと等これ之をを顯あらわす、諸論師しよろんしの事、天台大師てんだいだいし云く、天親てんじん・
竜樹りゆうじゆ・内鑑ないがん冷然れいねんたり外にには時の宜よろしきに適かない各よ權にに拠よる所あり、而しかるに
人師にんし偏ひとえに解げし學者がくしや苛いやしくも執しゆうし遂にに矢石やせきを興おこし各一辺おおいしやうどうを保たもちて大おおいに聖道しやうどう
に乖そむけけり」等云云、章安大師しやうあんだいし云く、天竺てんじくの大論だいろん尚なお其その類たぐいに非あらず真旦しんたんの
人師にんし何なんぞ勞わすらわしく語かたるに及およばん此これ誇耀こやうに非あらず法相ほつそうの然しからしむるの
み」等云云、天親てんじん・竜樹りゆうじゆ・馬鳴めみやう・堅慧けんね等は内鑑ないがん冷然れいねんなり然しかりと雖いえども時
未いまだ至いたらざるが故ゆえに之これを宣のべべざるか、人師にんしに於おいては天台てんだい已前いぜんは、或あるは珠たま
を含あるみ、或あるは一向いっかうに之これを知らず已後にんしの人師ある、或あるは初これに之はを破はして後に
歸伏きふくする人有あるり、或あるは一向いっかう用もちいざる者こも之これれ有ただり但だんし斷諸法だんしよほうちやうあく中惡ちゆうあくの
經文きやうもんを会えす可べきなり、彼ほけは法華經ほけきやうに爾前にぜんの經文きやうもんを載のするなり往ゆいて
之これを見るに經文きやうもんふんみやう分明じゆつかいごうに十界互具じゆつかいごう之これを説いく所謂いわゆる「欲令よくりやうしゆじやうかいふつちけん衆生しゆじやう開あ仏知見ちけん」
等云云、天台てんだい此きの經文きやうもんを承うけて云いく、君もし衆生しゆじやうに仏ちけんの知見しけん無なんんば何なんぞ

開を論ずる所あらん当に知るべし仏の知見衆生に蘊在することを「云云、章安大師の云く「衆生に若し仏の知見無くんば何ぞ開悟する所あらん若し貧女に蔵無んば何ぞ示す所あらんや」等云云。

但し会し難き所は上の教主釈尊等の大難なり、此の事を仏遮会して云く「已今当説最為難信難解」と次下の六難九易是なり、天台大師云く「二門・悉く昔と反すれば、信じ難く解し難し。鉾に当るの難事なり」章安大師の云く「仏此れを將って大事と為す。何ぞ解し易きことを得可けんや」伝教大師云く「此の法華經は最も為れ難信難解なり。隋自意の故に」等云云。夫れ仏より滅後に至る一千八百余年。三国に経歴して但三人のみ有つて始めて此の正法

を覚知せり。所謂月支の釈尊・真旦の智者大師・日域の伝教此の三人は内典の聖人なり、問うて曰く竜樹・天親等は如何、答えて曰く此等

の聖人は知つて之を言わざる仁なり、或は迹門の一分之を宣べて、
本門と觀心とを云わず。或は機有つて時無きか、或は機と時と共に
之れ無きか、天台・伝教已後は之を知る者多なり。二聖の智を用ゆ
るが故なり所謂三論の嘉祥・南三・北七の百余人・華嚴宗の寶藏・清涼
等・法相宗の玄奘三藏・慈恩大師等・真言宗の善無畏三藏・金剛智
三藏・不空三藏等、律宗の道宣等、初には反逆を存し、後には一向に
歸伏せしなり。

但し初の大難を遮せば無量義經に云く 譬えば國王と夫人と新たに
王子を生ぜん若は一日若は二日若は七日に至り若は一月若は二月
若は七月に至り若は一歳若は二歳若は七歳に至り復國事を領理する
こと能わずと雖も已に臣民に宗敬せられ諸の大王の子以て伴侶と為ら
ん、王及び夫人の愛心偏に重くして常に与共に語らん所以は、何ん稚

小なるを以ての故にと云うが如く、善男子是の持經者も亦復是くの如し、諸仏の國王と是の經の夫人と和合し

て共に是の菩薩の子を生ず若し菩薩是の經を聞くことを得て若しは一句若しは一偈若しは一転若しは二転若しは十若しは百若しは千若しは万若しは億万恒河沙・無量無數転せば復真理の極を体すること能わずと雖も、乃至已に一切の四衆・八部に宗仰せられ諸の大菩薩を以て眷属と爲し乃至常に諸仏に護念せられ慈愛偏に覆われん新学なるを所ての故なり」等云云、普賢經に云く此の大乗經典は諸仏の宝蔵じゅうまんさんぜ十万三世の諸仏の眼目なり乃至三世の諸の如来を出生する種なり乃至汝大乘を行じて仏種を断ぜざれ」等云云、又云く此の方等經は是れ諸仏の眼なり諸仏是に因つて五眼を具することを得・仏の三種の身は方等従り生ず是れ大法印にして涅槃海に印す此くの如き

海中能く三者の仏の清淨しょうじょう身を生ず此の三種さんしゆの身は人天にんてんの福田ふくてんなり」

夫れそ以おもんみれれば・釈迦しやか如に來ようらいいのいちだいいのいちだいい・顯けん密みつ・大だい小しょうのの二に教きょう・華け嚴こん・真しん言ごん等らの

雲集うんしゅうの諸仏しよぶつ如来にょらい・般若はんにや・染淨せんじょうの千仏せんぶつ・示現じげん・大日だいにとち・金剛こんこう・頂等ちやうとうの千二百尊せんにひやくしう・

但其の近因近果を演説して其の遠因果を顯さず、速疾頓成之を説け

ども三五の速化を亡失し化導の始終跡を削りて見えず、華嚴經・

大日經等は一往之を見るに別円四蔵等に似たれども再往之を勘うれ

ば蔵通二教に同じて未だ別円にも及ばず本有の三因之れ無し何を以て

か仏の種子しゅしを定めん、而しかるに新訳しんやくの訳者等漢土かんどに來入するの日・天台てんだいの

いちねんさんぜん ほうもん けんもん
一念三千の法門を見聞し

て・或あるは自ら所持しよじの経きように添加てんかし・或あるは天竺てんじくより受持じゆじするの由これ之を

稱す、天台の学者等・或は自宗に同ずるを悦び・或は遠きを貴んで近きを蔑みし・或は旧を捨てて新を取り魔心・愚心出来す、然りと雖も詮ずる所は一念三千の仏種に非ずんば有情の成仏・木画二像の本尊は有名無実なり。

問うて曰く上の大難未だ其の会通を開かず如何。

答えて曰く無量義經に云く 未だ六波羅蜜を修行する事を得ずと雖も六波羅蜜自然に在前す」等云云、法華經に云く 具足の道を聞かんと欲す」等云云、涅槃經に云く 薩とは具足に名く」云云、竜樹菩薩云く 薩とは六なり」等云云、無依無得大乘四論・玄義記に云く 沙とは訳して六と云う胡法には六を以て具足の義と為すなり」吉蔵疏に云く 沙とは翻じて具足と為す」天台大師云く 薩とは梵語なり此には妙と翻ず」等云云、私に会通を

加え^{けがす}ば本文を黷^しが如^{しか}し爾^いりと雖^いも文の心は釈尊^{しやくそん}の因行果徳^{いんぎやうかどく}の二法は
妙法蓮華經^{みょうほうれんげきやう}の五^ご字^じに具足^{ぐそく}す我^{われ}等^ら・此^この五^ご字^じを受持^じすれば自然^{じねん}に彼の
因^{いん}果^がの功徳^{くどく}を譲^{ゆず}り与^{たま}え給^{たま}う、四^し大^{だい}声^{しょう}聞^{もん}の領解^{りやうげ}に云^いく「無^む上^{じやう}宝^{ほう}聚^{じゆ}・
不^ふ求^ぐ自^じ得^{とく}」云云^{ふん}、我^{われ}等^らが己^こ心^{しん}の声聞^{しょうもん}界^{かい}なり、我^{われ}が如^{ごと}く等^とくして異^いなる
事^{こと}無^なし我^{われ}が昔^{しやう}の所願^{しやうがん}の如^{ごと}き今^{こん}は己^こに満足^{まんぞく}しぬ一^い切^{きつ}衆^{しゆ}生^{じやう}を化^{くわ}して皆^{みな}仏^{ぶつ}道^{だう}
に入^いらしむ」・妙^{みょう}覺^{かく}の釈尊^{しやくそん}は我^{われ}等^らが血^{けつ}肉^{にく}なり因^{いん}果^がの功徳^{くどく}は骨^{こつ}髓^{ずい}に非^ひず
や、宝^{ほう}塔^{とう}品^{ぽん}に云^いく「其^それ能^よく此^この經^{きやう}法^{ぽう}を

護る事有らん者は則ち為れ我及び多宝を供養するなり、乃至亦復諸
の来り給える化仏の諸の世界を莊嚴し光飾し給う者を供養するなり」
等云云、釈迦・多宝・十方の諸仏は我が仏界なり其の跡を紹繼して其
の功德を受得す、須臾も之を聞く・即ち阿耨多羅三藐三菩提を究竟す
るを得ん」とは是なり、寿命品に云く、然るに我実に成仏してより
已来、無量無辺百千万那由佗劫なり」等云云、我等が己心の釈尊は
五百塵点劫乃至所顯の三身にして無始の古仏なり、經に云く、我本
菩薩の道を行じて、成ぜし所の寿命、今猶未だ尽きず、復上の數に倍せ
り」等云云、我等が己心の菩薩等なり、地涌千界の菩薩は己心の釈尊
の眷属なり、例せば大公・周公旦等は周武の臣下、成王幼稚の眷属、武
内の大臣は神功皇后の棟梁、仁徳王子の臣下なるが如し、上行・
無辺行・淨行・安立行等は我等が己心の菩薩なり、妙葉大師云く

當^{まさ}に知るべし身土^{しんどい}一念^{いちねん}の三千^{さんぜん}なり故^ゆに成道^{じやうどう}の時・此の本理^{かな}に稱^なうて一

身^{いちねん}一念^{ほっかい}法界^{あまね}に遍^{あまね}し」等云云。

夫^それ始め寂滅^{じやくめつ}道場^{どうじやう}・華藏^{けざう}世界^{せかい}より沙羅^{しゃら}林^{りん}に終^はるまで五十余年^{じゅうごじゅうねん}の間、

華藏^{けざう}・密嚴^{みつげん}・三變^{さんぺん}・四見^{しつげん}等の三土^{さんど}四土^{しど}は皆成劫^{じやうこく}の上^{うへ}の無常^{むじやう}の土^どに變化^{へんか}する所^{ところ}の方便^{ほうべん}・実報^{じつぽう}・寂光^{じやくくわう}・安養^{あんやう}・淨瑠璃^{じやうるり}・密嚴^{みつげん}等^らなり能變^{のうへん}の教主^{きやうしゆ}涅槃^{ねはん}に入りぬれば所變^{しよへん}の諸仏^{しよぶつ}随^ずつて滅尽^{めつじん}す土^ども又^{また}以^{もつ}て是^こくの如^{ごと}し。

今^{いま}本時^{ほんじ}の娑婆^{しやば}世界^{せかい}は三災^{さんさい}を離^{はな}れ四劫^{しこく}を出^いでたる常住^{じやうじやう}の淨土^{じやうど}なり仏^{ぶつ}既^{すで}に過去^{かこ}にも滅^{めつ}せず未来^{みらい}にも生^なぜず所化^{しよけ}以^{もつ}て同体^{どうたい}なり此^これ即^{すなわ}ち己心^{こしん}の三千^{さんぜん}具足^{ぐそく}・三種^{さんしゆ}の世間^{せけん}なり迹門^{しやくもん}十四品^{じふしひ}には未^{いま}だ之^{これ}を説^はかず法華^{ほふけ}經^{きやう}の内^{うち}に於^{おい}ても時機^{じき}未熟^{みじやく}の故^ゆなるか。

此^{この}の本門^{ほんもん}の肝心^{かんじん}南無^{なむ}妙法蓮華^{みやうほうれんげきやう}經^{きやう}の五字^{ごじ}に於^{おい}ては仏^{ぶつ}猶^{なほ}文殊^{もんじゆ}・藥王^{やくわう}等^らにこれ^{これ}を付屬^{ふぞく}し給^{たま}はず何^{いか}に況^{いはんや}や其^その已外^{いげ}をや但^じ地涌^{ぢゆ}千界^{せんがい}を召^よして八品^{はつひん}

を説いて之を付属し給う、其の本尊の爲体本師の装婆の上に宝塔空に居し塔中の妙法蓮華經の左右に釈迦牟尼仏・多宝仏・釈尊の脇士上行等の四菩薩・文殊・弥勒等は四菩薩の眷属として末座に居し迹化他方の大小の諸菩薩は万民の大地に処して雲閣月卿を見るが如く十方の諸仏は大地の上に処し給う迹仏迹士を表する故なり、是くの如き本尊は在世五十余年に之れ無し八年の間にも但八品に限る、正像二千年の間は小乗の釈尊は迦葉・阿難を脇士と爲し權大乘並に涅槃・法華經の迹門等の釈尊は文殊・普賢等を以て脇士と爲す此等の仏をば正像に造り画けども未だ寿量の仏有さず、末法に來入して始めて此の仏像出現せしむ可きか。

問う正像二千年の間は四依の菩薩並びに人師等余仏・小乗・權大乘・二爾前・迹門の釈尊等の寺塔を建立すれども本門寿量品の

本尊並びに四大菩薩をば三国の王臣俱に未だ之を崇重せざる由之を
申す、比の事粗之を聞くと雖も前代未聞の故に耳目を驚動し心意を
迷惑す請う重ねて之を説け委細に之を聞かん。

答えて白く法華經一部八卷・二十八品・進んでは前四味・退いては
涅槃經等の一代の諸經惣じて之を括るに但一經なり始め寂滅道場
より終り般若經に至るまでは序分なり無量義經・法華經普賢經の十卷
は正宗なり涅槃經等は流通分なり、正宗十卷の中において亦序正
流通有り無量義經並に序品は序文なり、方便品より分別功德品の十
九行の偈に至るまで十五品半は正宗分なり、分別功德品の現在の四
信より普賢經に至るまでの十一品半と一卷は流通分なり。

又法華經等の十卷に於ても二經有り各序正流通を具するなり、
無量義經と序品は序分なり方便品より人記品に至るまでの八品は

正宗分なり、法師品より安樂行品に至るまでの五品は流通分なり、
其の教主を論ずれば始成・正覺の仏・本無今有の百界・千如を説いて
已今当に超過せる隨自意・難信難解の正法なり、過去の結縁を尋れば
大通十六の時・仏果の下種を下し進んでは華嚴經等の前四味を以て助
經と爲して大通の種子を覺知せしむ、此れは仏の本意に非ず但毒発等
の一分なり、二乗凡夫等は前四味を縁と爲し漸漸に法華に來至して
種子を顯わし開顯を遂ぐるの機是なり、又在世に於て始めて八品を聞
く人天等・或は一句一偈等を聞て下種とし・或は熟し・或は脱し・或は
普賢・涅槃等に至り・或は正像末等に小權等を以て顔と爲して法華に
入る例せば在世の前四味の者の如し。

又本門ほんもん十四品しじゅうしほの一經いつきやうに序正流通るつう有り涌出品ゆじゅつぽんの半品はんぽんを序分じよぶんと為し
寿量品じゆりやうほんと前後ぜんごの二半にはんと此これを正宗しやうしやうと為なす其その余よは流通るつう分ぶんなり、其その
教主きやうしゆを論ろんずれば始成しじやう正覺しやうかくの積尊しやくそんに非あらず所說しよせつの法門ほうもんも亦天地またてんちの如ごとし
十界久遠じゆつかいくおんの上に国土世間こくどせけん既に顯あらわれ一念三千いちねんさんぜん殆たいていんど竹膜ちくまくを隔へだつ、又
迹門しやくもん並びに前四味ぜんしみ・無量義經むりやうぎきやう・涅槃經ねはんぎやう等の三說さんせつは悉ことごとく隨他意ずいたいの
易信易解いしんいげ・本門ほんもんは三說さんせつの外ほかの難信難解なんしんなんげ・隨自意ずいじいなり。

又本門ほんもんに於おいて序正流通るつう有り過去大通かこだいづう仏ぶつの法華經ほけきやうより乃至ないしげんさい現在の
華嚴經けこんきやう乃至ないししやくもん迹門しやくもん十四品涅槃經ねはんぎやう等の一代いちだい五十余年しよきやうの諸經しよきやう・十方三世じゆつぽうさんぜ
諸仏しよぶつの微塵みじんの經經きやうきやうは皆みな寿量じよりやうの序分じよぶんなり一品二半しようじやうよりの外ほかは小乘教しやうじやう
・邪教じやきやう・未得道教とくどしやう・覆相教ふさうと名なく、其その機きを論ろんずれば德薄垢重とくはつくじやう・幼稚ようち・
貧窮びんぐ・孤露ころにして禽獸きんじゆうに同おなずるなり、爾前にぜん・迹門しやくもんの円教えんきやう尚なほ仏因ぶつゐんに
非あらず何いかに況いわんやや大日經だいにてち等の諸しよしやう小乘經じよきやうをや何いかに況いわんやや華嚴けこん・真言しんごん等の七

宗等の論師・人師の宗をや、与えて之を論ずれば前三教を出でず奪つて之を云えば藏通に同ず、設い法は甚深と称すとも未だ種熟脱を論ぜず還つて灰断に同じ化の始終無しとは是なり、皆え王女たりと雖も畜種を懷妊すれば其の子旃陀羅に劣れるが如し、此等は且く之を闍く迹門十四品の正宗の八品は二往之を見るに二乗を以て正と為し菩薩・凡夫を以て傍と為す、再往之を勘うれば凡夫・正像末を以て正と為す正像末の三時の中にも末法の始を以て正が中の正と為す、問うて曰く其の証如何ん、答えて曰く法師品に云く而も此の経は如来の現在すら猶怨嫉多し況や滅度の後をや」宝塔品に云く法をして久住せしむ乃至來れる所の化仏当に此の意を知るべし」等、勸持安樂等之を見る可し迹門是くの如し、本門を以て之を論ずれば一向に末法の初を以て正機と為す所謂一往之を

見る時は久種を以て下種と為し大通前四味迹門を熟と為して本門に至って等妙に登らしむ、再往之を見れば迹門には似ず本門は序正流通俱に末法の始を以て経と為す、
在世の本門と末法の始は一同に純円なり但し彼は脱此れは種なり彼は一品二半此れは但題目の五字なり。

問うて白く其の証文如何、答えて云く涌出品に云く爾の時に他方の国土の諸の来れる菩薩摩訶薩の八恒河沙の数に過ぎたる大衆の中に於て起立し合掌し礼を作して仏に白して言さく、世尊若し我等に仏の滅後に於て娑婆世界に在って勤加精進して是の經典を護持し誦誦し書寫し供養せんことを聴し給わば当に此の土に於て広く之を説きたてまつるべし、爾の時に仏諸の菩薩摩訶薩衆に告げ給わく止ね善男子、汝等が此の経を護持せんことを須いじし等云云、法師より已下五品の

きようもんぜんごすいか

經文前後水火なり、宝塔品の末に云く天音声を以て普く四衆に告

よ

ぐ誰か能く此の袈婆国土に於て広く妙法華經を説かんものなる」等云

云、設い教主一仏為りと雖も之を奨勸し給わば藥王等の大菩薩・梵帝

にちがつ

してん

・日月・四天等は之を重んず可き処に多宝仏・十方の諸仏客仏と為て

これ

かんぎよう

たま

もろもろばさつ

之を諫曉し給う、諸の菩薩等

は此の慇懃の付属を聞いて「我不愛身命」の誓言を立つ、此等は偏に

ぶつ

かな

仏意に叶わんが為なり、而るに須臾の間に仏語相違して過八恒沙の此

ぐきよう

せいし

たま

しんたいこ

え

たま

の土の弘經を制止し給う進退惟れ谷まり凡智に及ばず、天台智者大師

ぜんさんごさん

前三後三の六釈を作つて之を会し給えり、所詮迹化他方の大菩薩等に

ないしやう

じゆりようほん

もつじゆよ

我が内証の寿量品を以て授与すべからず末法の初は謗法の国にして

き

ゆえ

これ

とど

惡機なる故に之を止めて地湧千界の大菩薩を召して寿量品の肝心た

みようほうれんげきよう

ごじ

もつえんぶ

る妙法蓮華經の五字を以て閻浮の

衆生に授与せしめ給う、又迹化の大衆は釈尊初発心の弟子等に
非ざる故なり、天台大師云く是れ我が弟子なり応に我が故を弘むべ
し」妙樂云く「子父の法を弘む世界の益有り」、輔正記に云く「法是れ
久成の法なるを以ての故に久成の人に付す」等云云。

又弥勒菩薩疑請して云く經に云く我等は復仏の髓宜の所説、仏
所出の言未だ曾て虚妄ならず、仏の所知は皆悉く通達し給えりと信ず
と雖も、然も諸の新発意の菩薩・仏の滅後に於て、若し是の語を聞か
ば、或は信受せずして法を破する罪業の因縁を起さん。唯然り世尊、
願わくは為に解説して我等が疑を除き給え及び未来世の諸の善男子
此の事を聞き已りならば、亦疑を生ぜじ」云云。文の意は寿量の法門
は滅後の為に之を請ずるなり、寿量品に云く「或は本心を失える
或は失わざる者あり。乃至、心を失わざる者は比の良薬の色香、俱に

好きを見て即便之すなわちこれを服するに病尽く・除癒ぬ」等云云、久遠下種大通くおんげしゅだいてつう結縁けちえん乃至前四味迹門等ないしぜんしみしやくもんの一切いっさいの菩薩ぼさつ・二乘人天等にじようにんてんの本門ほんもんに於て得道とくどうする是なり、經に云く、余の心を失うしなえる者は其その父の来れるを見て亦また歡喜かんきし、問訊もんじんして病を治せんことを求むと雖も、然しかも其その薬を与うるに而しかも肯うけえて服せず、所以ゆえんは何ん。毒氣深く入いつて本心ほんしんを失うしなえるが故ゆえに此この好き色香よしきこうある薬に於おいて美うまからずと謂おもえり。乃至、我今当まさに方便ほうべんを設しけ此の薬を服せしむべし、乃至是ないしかくの好き良薬りようやくを今留とどめて此こに在おく汝なんじ取とつて服す可べし、差いじと憂うれうること勿なかれ、是この教を作なし已おつて、復また他国たこくに至いたつて使つかを遣つかわして還かえつて告つぐ」等云云、分別功德品ぶんべつくどくに云く、惡世あくせ末法まっぽうの時」等云云。

問いうて曰いく此この經文きやうもんの遣使還告けんしげんこうは如何いかん、答こえて曰いく四依しえなり四依しえに四類しりゆ有り、小乘しょうじやうの四依しえは多分たぶんは正法しょうほうの前の

五百年しゅつげんに出現だいいしやうす、大乘たいじやうの四依しえは多分たぶんは正法しやうぽうの後の五百年しゅつげんに出現しゅつげんす、

三しやくもんに迹門しえの四依たぶんは多分やうほうは像法ざうぽう一千年・少分しやうぶんは

末法まつぽうの初はじめなり、四ほんもんに本門しえの四依じゆせんは地涌じゆせん千界せんがい末法まつぽうの始はじに必ず出現しゅつげんす可べし

今げんしげんごうの遣使還告せこうりやうやくは地湧じゆせんなり是ぜ好良藥じやうりやうやくとは寿量品じゆりやうぼん

の肝要かんようたる名体宗用教なむみやうほうれんげきやうの南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやう是これなり、此りやうやくの良藥じやうりやうやくをば仏な猶お

迹化しやつけに授与じゅよし給たまはず何いかに況いわんやや他方たほうをや。

神力品じんりきほんに云いわく爾にの時せかいに千世界微塵等せんかいみじんの菩薩摩訶薩ぼさつまかさとつの地ちより涌出ゆじゆつせ

る者皆みな仏前ぶつぜんに於おいて一心いつしんに合掌がっしやうし尊顏せんげんを胆仰たんじやうして仏もうに白もうして言もうさく世尊せそん

・我等われら・仏めつこの滅後めつこ・世尊せそん分身ふんじんの所在しよざいの国土こくど・滅度めつどの処ところに於おいて当まさに広ひろく此

の經きやうを説とくくべし」等云云、天台てんだいの云いわく但下方ただの発誓はつじゆつのみを見たり」等云

云、道暹どうせん云いわく付属ふぞくとは此たの經だをば唯下方涌出ゆじゆつの菩薩ぼさつに付ゆえす何が故ゆえに

爾しかる法こ是これ久成くじやうの法はうなるに由よるが故ゆえに久成くじやうの人に付くす」等云云、夫それ

もんじゆしりぼさつ 文殊師利菩薩は東方金色世界の不動仏の弟子観音は西方無量寿仏の弟子・葉王菩薩は日月淨明德仏の弟子・普賢菩薩は宝威仏の弟子なり
いちおうしやくそん 一往釈尊の行化を扶けん為に袈裟世界に來入す又爾前・迹門の菩薩
なり本法所持の人に非れば末法の弘法に足らざる者か、經に云く爾の
時に世尊乃至一切の衆の前に大神力を現じ給う広長舌を出して上梵
世に至らしめ乃至十方世界衆の宝樹の下師子の座の上の諸仏も
亦復是くの如く広長舌を出し給う」等云云、夫れ顯密二道・一切の
大小乗經

の中に釈迦諸仏・並び坐し舌相梵天に至る文之無し、阿弥陀經の
広長舌相三千を覆うは有名無実なり、般若經の舌相三千光を放つて
般若を説きしも全く証明に非ず、此は皆兼帶の故に久遠を覆相する
故なり、是くの如く十神力を現じて地涌の菩薩に妙法の五字を囑累し
て云く、經に曰く爾の時に仏・上行等の菩薩大衆に告げ給わく諸仏
の神力は是くの如く無量無辺不可思議なり若し我れ是の神力を以て
無量無辺百千万億阿僧祇劫に於て囑累の爲
の故に此の經の功德を説くとも猶尽すこと能わじ要を以て之を言わば
如来の一切の所有の法・如来の一切の自在の神力・如来の一切の秘要の
藏・如来の一切の甚深の事・皆此の經に於て宣示顯説す」等云云、天台
云く爾時・仏告上行より下は第三結要付属なり」云云、伝教云く
又神力品に云く以要言之・如来・一切所有之法・乃至宣示顯説經文

明かに知んぬ果分の一切の所有の法・果分の一切の自在の神力・果分の一切の秘要の蔵・果分の一切の甚深の事・皆法華に於て宣示顯説するなり」等云云、此の十神力は妙法蓮華經の五字を以て上行・安立行・淨行・無辺行等の

四大菩薩に授与し給うなり前の五神力は在世の爲後の五神力は滅後の爲なり、爾りと雖も再往之を論ずれば一向に滅後の爲なり、故に次下の文に云く「仏滅度の後に能く此の經を持たんを以ての故に諸仏皆歡喜して無量の神力を現じ給う」等云云。

次下の囑累品に云く「爾の時に釈迦牟尼仏・法座より起つて大神力を現じ給う右の手を以て無量の菩薩摩訶薩の頂を摩で乃至今以て汝等に付属す」等云云、地涌の菩薩を以て頭と爲して迹化他力乃至・梵釈・四天等に此の經を囑累し給う・十方より来る諸の分身の仏各

ほんど本土に還り給う乃至多宝仏の塔還つて故の如くし給う可し等云云、薬王品已下乃至涅槃經等は地涌の菩薩去り了つて迹化の衆他方の菩薩等の為に重ねて之を付属し給う☆拾遺囑是なり。

疑つて云く正像二千年の間に地涌千界閻浮提に出現して此の經を

流通するや、答えて曰く爾らず、驚いて云く法華經並びに本門は仏の

滅後を以て本と爲して先ず地涌に之を授与す何ぞ正像に出現して此

の經を弘通せざるや、答えて云く宜べず、重ねて問うて云く如何、答う

之を宣べず、又重ねて問う如何、答えて曰く之を宣ぶれば一切世間の

諸人・威音王仏の末法の如く又我が弟子の中にも粗之を説かば皆誹謗

を爲す可し黙止せんのみ、求め

て云く説かずんば汝慳貪に墮せん、答えて曰く進退惟れ谷れり試みに

粗之を説かん、法師品に云く況んや滅度の後をや」寿量品に云く今

留めて此に在く」分別功德品に云く「惡世末法の時」藥王品に云く
「このこひやくさい えんぶだい
優の五百歳閻浮提に於て広宣流布せん」涅槃經に云く「譬えば七子あ
り父母平等ならざるに非ざれども然れども病者に於て心
すなわ ひとえ
則ち偏に重きが如し」等云云、已前の明鏡を以て仏意を推知するに仏
の出世は靈山八年の諸人の為に非ず正像末の人の為なり、又正像二
千年の人の為に非ず末法の始め予が如き者の為なり、然れども病者に
於いてと云うは滅後・法華經誹謗の者を指すなり、今留在此」とは
おしこうしきこうやくに いふみ
於此好色香藥而謂不美」の者を指すなり。

地涌千界正像に出でざることは正法一千年の間は小乗・權大乘な
り機時共に之れ無く四依の大士小權を以て縁と為して在世の下種
之を脱せしむ謗多くして熟益を破る可き故に之を説かず例せば在世
の前四味の機根の如し、像法の中末に觀音・藥王・南岳・天台等と示現

し出現しゅつげんして迹門しやくもんを以て面おもてと為し本門ほんもんを以て裏うらと為して百界千如ひゃつかいせんによ。
一念三千其の義を尽せり、但理具を論じて事行の南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようの
五字ごじ並びに本門ほんもんの本尊ほんぞん未だ広ひろく之これを行ぜず所詮しよせん円機えんき有つて円時無き故
なり。

今末法まつぼうの初小はつせうを以て大おほを打ち權もんを以て実じつを破はし東西共これに之これを失うしなし
天地顛倒てんちてんどうせり迹化しやくけの四依しえは乱みだれて現前げんぜんせず諸天其の国しよてんそを棄すて之これを守護しゆご
せず、此の時地湧ぼさつの菩薩ぼさつ始めて世しよに出現しゅつげんし但妙法蓮華經みょうほうれんげきようの五字ごじを以て
幼稚ようちに服せしむ因謗墮惡だあく必因得益とくやく」とは是これなり、我が弟子でし之これを推おもえ
地涌千界じゆせんがいは教主きやうしゆ釈尊しやくそんの初發心しよほつしんの弟子でしなり寂滅道場じやくめつどうじやうに來らず☆林そうりん・
最後さいごにも訪ふわらず不孝ふこうの失とが之これ有り迹門しやくもんの十四品しじふひんにも來らず本門ほんもんの六
品ひんには座ざを立つ但人品らいげんの問もんに來還らいげんせり、

是くの如き高貴の大菩薩・三仏に約束して之を受持す末法の初に出で
給わざる可きか、当に知るべし此の四菩薩折伏を現ずる時は賢王と成
つて愚王を誡責し摂受を行ずる時は僧と成つて正法を弘持す。

問うて曰く仏の記文は云何答えて曰く 後の五百歳閻浮提に於て
広宣流布せん」と、天台大師記して云く 後の五百歳遠く妙道に沾お
わん」妙薬記して云く 末法の初冥利無きにあらず」伝教大師云く
「正像稍過ぎ已つて末法太だ近きに有り」等云云、末法太有近の釈は
我が時は正時に非ずと云う意なり、伝教大師・日本にして末法の始を
記して云く 代を語れば像の終り末の初・地を尋れば唐の東・羯の西・人
を原れば則ち五濁の生・闍諍の時なり経に云く猶多怨嫉・況滅度後と
此の言良とに以有るなり」

此の釈に闍諍の時と云云、今の自界叛逆・西海侵逼の二難を指すな

り、此の時地涌千界出現して本門の釈尊を脇士と爲す一閻浮提第一の本尊此の国に立つ可し月支震旦に未だ此の本尊有さず、日本国の上宮・四天王寺を建立して未だ時来らざれば阿弥陀・他方を以て本尊と爲す、聖武天皇・東大寺を建立す、華嚴經の教主なり、未だ法華經の実義を顕さず、伝教大師粗法華經の実義を顯示す然りと雖も時未だ来らざるの故に東方の鵝王を建立して本門の四菩薩を顕わさず、所詮地涌千界の爲に此れを譲り与え給う故なり、此の菩薩・仏勅を蒙りて近く大地の下に在り正像に未だ出現せず末法にも又出で来り給わすば大妄語の居士なり、三仏の未来記も亦泡沫に同じ。

此れを以て之を惟うに正像に無き大地震・大彗星等出来す、此等は金翅鳥・修羅・竜神等の動変に非ず偏に四大菩薩を出現せしむ可き先兆なるか、天台云く雨の猛きを見て竜の大なるを知り花の盛なるを

見て池の深きことを知る」等云云、妙樂云く、智人は起を知り蛇は
自ら蛇を識る」等云云、天晴れぬれば地明かなり法華を識る者は世法
を得可きか。

一念三千を識らざる者には仏・大慈悲を起し五字の内に此の珠を裏
み末代幼稚の首に懸けさしめ給う、四大菩薩の此の人を守護し給わん
こと大公・周公の文王を撰扶し四皓が恵帝に侍奉せしに異ならざる者
なり。

文永十年卯月二十五日

日蓮之を註す

◆四三

観心本尊抄送状

かたじけなく

帷一つ・墨三長・筆五官給ひ候い了んぬ、観心の法門少少之を注し

て大田殿・教信御房等に奉る、此の事日蓮身に当たる大事なり之を秘

す、無二の志を見れば之を開☆せらる可きか、此の書は難多く答少な

し未聞の事なれば人耳目を驚動す可きか、設い他見に及ぶとも三人四

人座を並べて之を読むこと勿れ、仏滅後・二千二百二十余年未だ此の

書の心有らず、国難を顧みず五五百歳を期して之を演説す乞い願くば

一見を歴来の輩は師弟共に靈山浄土に詣でて三仏の顔貌を拝見した

てまつらん、恐恐謹言。

文永十年太齋卯月二十六日

日蓮 花押

富木殿御返事

◆ 四 四

撰時抄 せんじしやう

建治元年 がんねん

五十四歳御作

256P

釈子

日蓮述ぶ にちれん

夫れそ仏法ぶつぽうを学せん法は必ず先づ時をならうべし、過去かこの大通智勝仏だいつうちしやうぶつは出世しゅっせし給たまいて十小劫じゅうせうが間・一經いつきやうも説とき給たまはず經きやうに云く一坐十小劫又云くい仏・時の未だ至らざるを知り請しやうを受けて默然もくねんとして坐す」等云云、今の教主釈尊きやうしゆしやくそんは四十余年よんじゆうよねんの程法華經ほけきやうを説とき給たまはず經きやうに云く説いく時未だ至らざるが故」と云云、老子らうしは母の胎しよに処して八十年、弥勒菩薩みろくぼさつは兜率とそつの内院ないえんに籠こもらせ給たまいて五十六億七千万歳せんまんをまち給たまうべし、彼の時とき鳥とりは春はるを・をくり鶏けい鳥ちやうは曉あけをまつ畜生ちくしやうすらなをかくのごとし何いかに況いわんやふつぽう仏法しゆぎやうを修行しゆぎやうせんに時ときを糾ただざるべしや、寂滅道場じやくめつどうじやうの砌みぎりには十方じゆつぽうの

諸仏示現し一切の大菩薩集會し給ひ梵帝・四天は衣を・ひるがへし竜神

八部は掌を合せ凡夫大根性の者は耳をそばだて生身得忍の諸

菩薩・解脱月等請をなし給ひしかども世尊は二乗作仏・久遠実成をば

名字をかくし即身成仏・一念三千の肝心、其義を宣べ給はず、此等は

偏にこれ機は有りしかども時の来らざればのべさせ給はず經に云く説

く時未だ至らざる故」等云云、靈山會上の砌には閻浮第一の不孝の

人たりし阿闍世大王座につらなり、一代謗法の提婆達多

には天王如来と名をさづけ五障の竜女は蛇身をあらためずして仏にな

る、決定性の成仏は憊種の花さき果なり久遠実成は百歳の叟・二十

五の子となれるかとうたがふ、一念三千は九界即仏界・仏界即九界と

談ず、されば此の經の一字は如意宝珠なり一句は諸仏の種子となる

此等は機の熟不熟はさてをきぬ時の至れるゆへなり、經に云く「今

正しく是れ其の時なり決定して大乘を説かん」等云云。

問うて云く機にあらざるに大法を授けられれば愚人は定めて誹謗をなして惡道に墮るならば豈説く者の罪にあらずや、答えて云く人路をつくる路に迷う者あり作る者の罪となるべしや良医・藥を病人にあたう病人嫌いて服せずして死せば良医の失となるか、尋ねて云く法華經の第二に云く無智の人の中に此の經を説くこと莫れ」同第四に云く分布して妄りに人に授与すべからず」同第五に云く此の法華經は諸仏如来の秘密の藏なり、諸經の中

に於て最も其の上に在り長夜に守護して妄りに宣説せざれ」等云云、此等の經文は機にあらずば説かざれというか、今反詰して云く不輕品に云く而も是の言を作さく我深く汝等を敬う等云云四衆の中に瞋恚を生じ心不淨なる者有り、惡口罵詈して言く是の無智の比丘○又

云く衆人・或は杖木瓦石を以て之を打擲す」等云云、勸持品に云く
諸の無智の人の惡口罵詈等し及び刀杖を加うる者有らん」等云云、
此等の經文は惡口罵詈乃至打擲すれ

どもととかれて候は説く人の失となりけるか、求めて云く此の兩説は
水火なり・いかなが心うべき答えて云く天台云く時に適うのみ」章安
云く「取捨宜きを得て一向にすべからず」等云云、釈の心は或る時は
謗じぬべきにはしばらくとかず・或る時は謗ずとも強て説くべし・或る時
は一機は信ずべくとも万機謗べくとくべからず・或る時は万機一同に
謗ずとも強て説くべし、初成道の時は法慧・功德林・金剛幢・金剛藏・
文殊・普賢・弥勒・解脱月等の大菩薩
、梵帝・四天等の凡夫・大根性の者かずをしらず、鹿野苑の苑には
俱鄰等の五人・迦葉等の二百五十人・舍利弗等の二百五十人・八万の

諸天、方等大会の儀式には世尊の慈父の淨飯大王ねんごろに恋せさせ給いしかば仏・宮に入らせ給いて觀仏三昧經をとかせ給い、悲母の御ために☆利天に九十日が間簞らせ給いしには摩耶經をとかせ給う、慈父悲母などにはいかなる秘法か惜ませ給うべきなれども法華經をば説かせ給はずせんずるところ機にはよらず時いたらざれば・いかにもとかせ給はぬにや。

問うて云くいかなる時にか小乗・權經をときいかなる時にか法華經を説くべきや、答えて云く十信の菩薩より等覺の大士にいたるまで時と機とをば相知りがたき事なり何に況や我等は凡夫なり・いかでか時機をしるべき、求め

て云くすこしも知る事あるべからざるか、答えて云く仏眼をかつて時機
をかながへよ仏・日を用て国土をてらせ、問うて云く其の心如何、答え
て云く大集經に大覺世尊・月藏菩薩に對して未來の時を定め給えり
所謂我が滅度の後の五百歳の中には解脱堅固・次の五百年には禪定
堅固一千年・次の五百年には読誦多聞堅固・次の五百年には多造塔寺
堅固二千年・次の五百年には我法の中に於て闍靜言訟して白法隱沒せん
等云云、此の五の五百歳・二千五百余
年に人人の料簡さまざまなり、漢土の道綽禪師が云く正像二千・四
箇の五百歳には小乗と大乘との白法盛なるべし末法に入つては彼等
の白法皆消滅して淨土の法門・念仏の白法を修行せん人計り生死を
はなるべし、日本国の法然が料簡して云く今・日本国に流布する
法華經・華嚴經並びに大日經諸の小乗經・天台・真言・律等の諸宗

は大集經だいしつぎようの記文きもんの正像しょうざう二千年の白法びやくほうなり末法まつぽうに入つては彼等かれらの白法びやくほうは皆滅尽みなめつじんすべし設たとひい行ずる人ありとも一人も生死しやうじを

はなるべからず、十住毘婆沙論じゅうじゅうびしやもんろんと曇鸞法師どんらんほつしの難行道なんぎやうどう道綽どうしやくの

未有一人得者みういちにんとくしや・善導ぜんどうの千中無一せんちゅうむいつこれなり、彼等かれらの白法びやくほう隱没おんもつの次には

淨土三部經じやうどさんぶきよう・弥陀みだ・称名しょうみやうの一行いっぎやうばかり大白法びやくほうとして出現しゆげんすべし、此を

行ぜん人人ひとひとはいかなる惡人あくにん・愚人ぐにんなりとも十即十生じふそくじふつじやう・百即百生ひやくそくひやくしやう唯

淨土じやうどの一門いちもんのみ有つて路に通入とうにんすべしとはこれなり、されば後世ごしやうを願ねがは

ん人人ひとひとは叡山えいざん・東寺とうじ・園城おんじやう・七なな大寺だいたいじ等の日本にほん一州いっしゅうの諸寺しよし・諸山しよざんの御歸依ごきえ

をとどめて彼の寺山でんぱたぐんしやうによせをける田畠郡郷ねんぶつをうばいとつて念仏堂ねんぶつにつけ

ば決定けつじやう往生おうじやう南無阿弥陀なむあみだぶつ仏ぶつとすすめければ我が朝あした一同いっどうに其その義ぎにな

りて今に五十余年なり、

日蓮此等にちれんこれらの惡義あくぎを難なんじやぶる事はことふり候いぬ、彼の大集經だいしつぎようの白法びやくほう

隠没おんもつの時ときは第五ごの五百歳ごひゃくさい当世とうせいなる事ことは疑うたがひひなし、但ただし彼の彼の白法びやくぼう隠没おんもつの次つぎには法華ほけきやう經きやうの肝心かんじんたる南無なむ妙法蓮華みやうほうれんげきやう經きやうの大だい白法びやくぼうの一閻浮提えんぶだいの内うち八万はちまんの国くにあり其その国くにに八万はちまんの王わうあり王王わうわうごとに臣下しんか並びに万民ばんみんまでも今いま・日本にほんこくに弥陀みだ称名しょうみやうを四衆ししゆうの口口くちに唱となうるがごとく広宣こうせん流布るふせさせ給たまうべきなり。

問いうて云いく其その証文しょうもん如何いかん、答こたえて云いく法華ほけきやう經きやうの第七だいしちに云いく「我が滅度めつどの後ご・後このこひやくさいの五百歳ごひゃくさいの中うちに広宣こうせん流布るふして閻浮提えんぶだいに於おいて断絶だんぜつせしむるこ
と無なけん」等云云きやうもん、經文きやうもんは大集だいしゆきやう經きやうの白法びやくぼう隠没おんもつの次つぎの時ときをとかせ給たまうに
広宣こうせん流布るふと云云い、同第六どうだいろくの卷まきに云いく「惡世あくせ末法まつぽうの時とき能よく是この經きやうを持もつ
者もの」等云云又第五ごの卷まきに云いく「後ごの末世ぼうめつの法滅ほうめつせんとする時とき」等又第四
の卷まきに云いく「而しかも此經しきやうは如來にやらい現在げんざいにすら猶なほ怨嫉おんしつ多おほし況いはんや滅度めつどの後ごを
や」又第五ごの卷まきに云いく「一切世間いっさいせけん怨多あだおほくして信がたじ難がたし」又第七だいしちの卷まきに第

五の五百歳・闍靜堅固の時を説いて云く 惡魔・魔民諸の天竜・夜叉・

鳩槃荼等其の便を得ん」大集經に云く 我が法の中に於て闍靜言訟

せん」等云云、法華經の第五に云く 惡世の中の比丘」

又云く「或は阿蘭若に有り」等云云又云く 惡鬼其身に入る」等云云、

文の心は第五の五百歳の時惡鬼の身に入る大僧等・国中に充滿せん

其時に智人・一人出現せん彼の惡鬼の入る大僧等時の王臣万民等を

語て惡口罵詈・杖木瓦礫・流罪・死罪に行はん時釈迦・多宝・十方の

諸仏・地涌の大菩薩らに仰せつけ大菩薩は梵帝・日月・四天等に申し

だされ其の時・天變地天盛なるべし、国主等其のいさめを用いずば鄰国

にをほせつけて彼彼の国国の惡王

・惡比丘等せめらるるならば前代未聞の大闍靜一闍浮提に起るべし

其の時・日月所照の四天下の一切衆生、或は国ををしみ、或は身を、

をしむゆへに一切の仏・菩薩にいのりをかくともしるしなくば彼のにく

みつる一の小僧を信じて無量の僧等八万の大王等、一切の万民皆頭

を地につけ掌を合せて一同に南無妙法蓮華經となうべし、

例せば神力品の十神力の時・十方世界の一切衆生一人もなく

娑婆世界に向つて大音声をはなちて南無釈迦牟尼仏・南無釈迦牟尼仏

・南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經と一同にさけびしがごとし。

問うて曰く經文は分明に候・天台・妙樂・伝教等の未來記の言はあ

りや、答えて曰く汝が不審・逆なり釈を引かん時こそ經論はいかにと

は不審せられたれ經文に分明ならば釈を尋ぬべからず、さて釈の文が

經に相違せば經をすてて釈につくべきか如何、彼云く道理至極せり、し

かれども凡夫の習・經は遠し釈は近し近き釈・分明ならばいますこし

信心をますべし、今云く汝が不審ねんごろなれば少少釈をいだすべし

天台大師云く 後の五百歳遠く 妙道に

うるお
沾わん」妙樂大師云く、末法の初め冥利無きにあらざ」伝教大師云く
「正像稍過ぎ已つて末法太だ近きに有り法華一乘の機今正しく是れ
其の時なり、何を以て知ることを得る、安樂行品に云く末世法滅の時
なり」又云く代を語れば則ち像の終り末の初め地を尋ぬれば唐の東・
羯の西・人を原ぬれば五濁の生・闍諍の時なり、經に云く猶多怨嫉・
況滅度後と此の言良に以有るなり」云云、夫れ釈尊の出世は住劫第九
の滅・人壽百歳の時なり百歳と十歳と
の中間在世五十年滅後二千年と一万年となり、其の中間に法華經の
流布の時・二度あるべし所謂在世の八年・滅後には末法の始の五百年な
り、而に天台・妙樂・伝教等は進んでは在世法華經の時にも・もれさせ
給いぬ、退いては滅後末法の時にも生れさせ給はず中間なる事をなげ
かせ給いて末法の始をこひさせ給う御筆なり、例せば阿私陀

仙人せんじんが悉達しつたたい太子たいしの生なれさせ給たまいしを見て悲かなんで云いわく現生げんせいには九十くじゅうにあ
まれり・太子たいしの成道じょうどうを見るべからず後生ごしやうには無色界むしつかいに生なれて五十年ごじゅうねんの
説法せつぽうの坐ざにもつらなるべからず正像末しやうざうまつにも生なるべからずとなげきしがご
とし、道心どうしんあらん人人ひとびとは此こを見みききて悦よろこばせ給たまえ正像しやうざう二千年にせんねんの大王だいうおうよ
りも後世ごしやうを・をもはん人人ひとびとは末法まつぽうの今いまの民たみにてこそあるべけれ此こを信こぜ
ざらんや、彼の天台てんだいの座主ざすよりも南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱となうる癡人ちいにんとはな
るべし、梁りやうの武帝ぶていの願いに云いわく
寧ろ提婆達多だいばだつたとなて無間地獄むげんじごくには沈しずむとも鬱頭羅弗うずらんぼつとはならじ」と
云云。

問いうて云いわく竜樹りゅうじゆ・天親てんじん等の論師ろんしの中に此この義ぎありや、答こたえて云いわく
竜樹りゅうじゆ・天親てんじん等は内心ないしんには存ぞんぜさせ給たまうといえども言ことには此この義ぎを宣のべべ
給たまはず、求もとめて云いわくいかなる故ゆゑにか宜のべ給たまざるや、答こたえて云いわく多くの故ゆゑあ

り一には彼の時にも機なし二には時なし三には迹化なれば付囑せられ
給はず、求めて云く願くは此の事よくよくきかんとをもう、答えて云く
夫仏の滅後二月十六日よりは正法の始なり迦葉尊者・仏の付囑をうけ
て二十年、次に阿難尊者二十年

・次に商那和修二十年・次に優婆曇多二十年・次に提多迦二十年、已
上一百年が間は但小乗經の法門をのみ弘通して諸大乘經は名字も
なし何に況や法華經をひろむべしや、次には弥遮迦・仏陀難提・仏駄密
多・脇比丘・富那奢

等の四五人、前の五百余年が間は大乗經の法門少少出来せしかども

とりたてて弘通し給はず、但小乗經を面としてやみぬ、已上大集經

の先五百年解脱堅固の時なり、正法の後六百年已後一千年が前其の

中間に馬鳴菩薩・毘羅尊者・竜樹菩薩・提婆菩薩・羅尊者・僧・難提

・僧伽耶奢・鳩摩羅駄・闍夜那・盤陀・摩奴羅・鶴勒夜那・師子等の十余

人の人人始には外道の家に入り次には小乗經をきわめ後には諸

大乘經をもつて諸小乗經をさんさんに破し失ひ給いき此等の大士等

は諸大乘經をもつて諸小乗經をば破せさせ給いしかども諸大乘經

と法華經の勝劣をば分明にかかせ給はず、設い勝劣をすこしかかせ

給いたるやうなれども本・迹の十妙・二乗作仏・久遠実成・已今当の妙

・百界千如

・一念三千の肝要の法門は分明ならず、但或は指をもつて月をさすが

ごとくし・或は文にあたりてひとはし計りかかせ給いて化導の始終・
師弟の遠近・得道の有無はすべて一分もみへず、此等は正法の後の五百
年・大集經の禪定堅固の時にあたれり、正法一千年の後は月氏に仏法
充滿せしかども・或は小をもて大を破し・或は權經をもつて実經を
隱没し仏法さまざまに乱れしかば得道の人やふやくすくなく仏法につ
けて惡道に墮る者かずをしらず、正法一千
年の後・像法に入つて一十五年と申せしに仏法東に流れて漢土に入り
にき、像法の前五百年の内・始の一百余年が間は漢土の道士と月氏の
仏法と諍論していまだ事さだまらず設い定またりしかども仏法を信
ずる人の心いまだふかからず、而るに仏法の中に大小・權實・顯密をわ
かつならば聖教一同ならざる故・疑をこりてかへりて外典
とともにう者もありぬべし、これらのをそれあるかのゆへに摩騰・竺蘭は

自は知つて而も大小を分けず權實をいはずしてやみぬ、其の後・魏・晉・
齊・宋・梁の五代が間・仏法の内に大小・權實・顯密をあらそひし程にい
づれこそ道理ともきこえずして上み一人より下も万民にいたるまで
不審すくなからず南三・北七と申して仏法十流にわかれぬ所謂南には
三時・四時・五時・北には五時・半滿・四宗・五宗・六宗、二宗の大乗一
音等・各各義を立て辺執水火なり、しかれども大綱は一同なり所謂
一代聖教の中には華嚴經第一・涅槃經第二・法華經第三なり法華經
は阿含・般若・

じようみよう

浄名・思益等の経經 に対すれば真実なり了義經・正見なりしかりと

ねはんぎよう

いへども涅槃經に對すれば無常教・不了義經・邪見の經等云云、漢より

四百余年の末へ五百年に入つて陳隋二代に智☆と申す小僧一人あり後

てんだいちしゃだいし

には天台智者大師と号したてまつる、南北の邪義をやぶりて一代聖教

ほけきようだいいち

の中には法華經第一・涅槃經第二・華嚴經第三なり等云云、此れ像法

だいしつぎよう

の前・五百歳・大集經の読誦多聞堅固の時にあひあたれり、像法の後・

とう

五百歳は唐の始・太宗皇帝の御宇に玄奘三蔵・月支に入つて十九年が

たいそう

間、百三十箇国の寺塔を見聞して多くの論師に値いたてまつりて八万

しやうきよう

聖教・十二部經の淵底を習いきわめしに其の中に二宗あり所謂

ほうそうしゆう

法相宗・三論宗なり、此の二宗の中に法相・大乘は遠くは弥勒・無著

かいけんろんし

近くは戒賢論師に伝えて漢土にかへりて太宗皇帝にさづけさせ給う、

ぶつぎよう

此の宗の心は仏教は機に随うべし一乘の機の

ためには三乗方便・一乗真実なり所謂法華經等なり、三乗の機のため
には三乗真実・一乗方便所謂深密經・勝鬘經等此れなり、天台智者
等は此の旨を弁えず等云云、而も太宗は賢王なり當時名を一天にひび
かすのみならず三皇にもこえ五帝にも勝れたるよし四海にひびき漢土
を手ににぎるのみならず高昌・高麗等の一千八百余国をなびかし内外
を極めたる王ときこへし賢王の第一の御帰依の僧なり、天台宗の学者の
中にも頭をさしいだす人・一人もな

し、而れば法華經の実義すでに一国に隱没しぬ、同じき太宗の太子・
高宗・高麗の繼母・則天皇后の御宇に法蔵法師といふ者あり法相宗に
てんだいしゅう
天台宗のをそわるるところを見て前に天台の御時せめられし華嚴經を
取出して一代の中には華嚴第一・法華第二・涅槃第三と立てけり、太宗
第四代玄宗皇帝の御宇開元四年同八年に西天・印度より善無畏三蔵

・金剛智三藏こんごうちさんぞう・不空三藏ふくうさんぞう・大日經だいにちきよう・金剛頂經こんごうちようきよう・蘇悉地經そしつちきようを持て渡り
真言宗しんごんしゅうを立つ、此の宗の立義りつぎに云く教に二

種あり一には釈迦しやかの顯教けんきよう所謂華嚴けごん・法華等、二には大日の密教みつぎよう所謂
大日經等なり、法華經は顯教けんきようの第一なり此の經は大日の密教みつぎように対す
れば極理ごくりは少し同じけれども事相じそうの印契いんけいと真言しんごんとはたえてみへず三密
相應そうおうせざれば不了義經等云云、已上法相ほつそう・華嚴けごん・真言しんごんの三宗一同に
天台法華宗をやぶれども天台大師程の智人ちじん・法華宗の中になかりけ

るかの間・内内はゆはれなき由は存じけれども天台のごとく公場に
て論ぜられざりければ上国王・大臣・下一切の人民にいたるまで皆佛法
に迷いて衆生の得道みなとどまりけり、此等は像法の後の五百年の前
二百余年が内なり、像法に入つて四百余年と申しけるに百済国より
一切経並びに教主釈尊の木像・僧尼等日本国にわたる、漢土の梁の末
・陳の始にあひあたる、日本には神武天王よりは第三十代欽明天王の
御宇なり、欽明の御子・用明の太子に上宮王子・仏法を弘通し給うの
みならず並びに法華経・浄名経・勝鬘経を鎮護国家の法と定めさ
せ給ひぬ、其の後・人王

第三十七代に孝徳天王の御宇に三論宗・成実宗を觀勒僧正・百済国
よりわたす、同御代に道昭法師・漢土より法相宗・俱舍宗をわたす、
人王第四十四代元正天王の御宇に天竺より大日経をわたして有りし

かども而も弘通せずして漢土へかへる此の僧をば善無畏三蔵という、人
王第四十五代に聖武天皇の御宇に審祥大徳・新羅国より華嚴宗をわ
たして良弁僧正・聖武天王にさづけたてまつりて東大寺の大仏を立て
させ給えり同御代に大唐の鑒真和尚・
天台宗と律宗をわたす、其の中に律宗をば弘通し小乗の戒場を
東大寺に建立せしかども法華宗の事をば名字をも申し出させ給はず
して入滅し了んぬ、其後人王第五十代像法八百年に相当つて桓武天王
の御宇に最澄と申す小僧出来せり後には伝教大師と号したてまつる、
始には三論・法相・華嚴・俱舍・成実・律の六宗並びに禪宗等を行表
僧正等に習学せさせ給いし程に我と立て給える国昌寺・後には比叡山
と号す、此にして六宗の本經・本論と宗宗の人師の釈とを引き合せて
御らむありしかば彼の宗宗の人師の釈・所依の經論に相違せる事多き

上びやうげん僻見多多にして信しんじゆ受せん人皆みなあくど惡道に墮おちぬべしとかんがへさせ給たまう
其その上法ほけきよう華經じつぎの実義は宗宗の人人ひとびと・我も得たり我も得たりと自讃じさんあり
しかども其その義なし、此これを申もうすならば喧嘩しゅつたい出来すべしもだして申もうさ
ずば仏誓ぶつせいにそむきなんとをもひわづ

らはせ給たまいしかども終ついに仏の誠いましめををそれて桓武皇帝かんむこうていに奏し給たまいしかば
帝・此の事を・をどろかせ給たまいて六宗ろくしゆうの碩学せきがくに召し合させ給たまう、彼の
学者等がくしや始めは慢幢山まんどうのごとし惡心あくしん・毒蛇どくじやのやうなりしかども終ついに王の
前みまえにしてせめ

をとされて六宗・七寺一同に御弟子となりぬ、例せば漢土の南北の諸師・陳殿にして天台大師にせめおとされて御弟子となりしがごとし、此れはこれ円定・円慧計りなり其の上天台大師のいまだせめ給はざりし小乗の別受戒をせめをとし六宗の八大徳に梵網經の大乗・別受戒をさづけ給うのみならず法華經の円頓の別受戒を叡山に建立せしかば延暦円頓の別受戒は日本第一たるのみならず仏の滅後・一千八百余年が間身毒尸那一閻浮提にいまだなかりし靈山の大戒・日本国に始まる、されば伝教大師は其の功を論ずれば竜樹・天親にもこえ天台・妙楽にも勝れてをはします聖人なり、されば日本国の当世の東寺・園城・七大寺・諸国の八宗・淨土・禪宗・律宗等の諸僧等誰人か伝教大師の円戒をそむくべき、かの漢土九国の諸僧等は円定・円慧は天台の弟子ににたれども円頓一同の戒場は漢土に

なければ戒にをいては弟子とならぬ者もありけん、この日本国は伝教
大師の御弟子にあらざる者は外道なり悪人なり、而れども漢土・日本
の天台宗と真言の勝劣は大師心中には存知せさせ給いけれども六宗
と天台宗とのごとく公場にして勝負なかりけるゆへにや、伝教大師
已後には東寺・七寺・園城の諸寺日本一州一同に真言宗は天台宗に
勝れたりと上一人より下万人にいたるまでをぼしめしをもえり、しかれ
ば天台法華宗は伝教大師の御時計りにぞありける此の伝教の御時は
像法の末・大集經の多造塔寺堅固の時なり、いまだ於我法中・闍靜
言訟・白法隱没の時にはあたらず。

今末法に入つて二百余歳・大集經の於我法中・闍靜言訟・白法隱没
の時にあたり仏語まことならば定んで一閻浮提に闍靜起るべき時節
なり、伝え聞く漢土は三百六十箇国・二百六十余州はすでに蒙古国

に打ちやぶられぬ華洛からくすでにやぶられて徽宗・欽宗の両帝・北蕃にいけ
どりにせられて韃靼だたんにして終ついにかくれさせ給たまいぬ、徽宗の孫・高宗皇帝
は長安をせめをとされて田舎いなかの臨安行在府に落ちさせ給たまいて今に數年
が間京を見ず、高麗こま六百余国も新羅百濟等の諸国等も皆大蒙古国の
皇帝こうていに・せめられぬ、今の日本国の嵯岐対馬並びに九国のごとし閩諍
堅固けんこの仏語ぶつご

地に墮ちず、あたかもこれ大海のしをの時をたがへざるがごとし、是をもつて案ずるに大集經の白法隱没の時に次いで法華經の大白法の日本国並びに一闍浮提に広宣流布せん事も疑うべからざるか、彼の大集經は仏説の中の權大乘ぞかし、生死をはなるる道には法華經の結縁なき者のためには未顕真實なれども六道・四生・三世の事を記し給いけるは寸分もたがはざりけるにや、何に況や法華經は釈尊・要當說真實となのらせ給い多宝仏は真實なりと御判をそへ十方の諸仏は広長舌を梵天につけて誠諦と指し示し、釈尊は重ねて無虚妄の舌を色究竟に付けさせ給いて後・五百歳に一切の仏法の滅せん時・上行菩薩に妙法蓮華經の五字をもたしめて謗法一闍提の白癩病の輩の良薬とせんと梵帝・日月・四天・竜神等に仰せつけられし金言虚妄なるべしや、大地は反覆すとも高山は顛落す

とも春の後に夏は来らずとも日は東へかへるとも月は地に落つるとも此の事は一定なるべし、此の事一定ならば闍靜とらじやう

堅固けんこの時・日本国にほんこくの王臣おうしんと並びに万民等が仏おんづかいの御使として南無

妙法蓮華經みょうぼうれんげきやうを流布せんとするを・或は罵詈あるめりし・或は惡口あるあくぐちし・或は流罪あるるざいし

・或は打擲あるちやうちやくし弟子眷属等でしけんぞくを種種しゆじゆの難なんにあわする人人ひとびといかでか安穩あんのんにて

は候べき、これをば愚癡ぐちの者は咒詛じゅうそすともひぬべし、法華經ほけきやうをひろむ

る者は日本国にほんこくの一切衆生いっさいしゆじやうの父母ふぼなり章安大師しょうあんだいし云く彼が為ために惡を除

くは即すなわち是れ彼が親なり」等云云、されば日蓮にちれんは当帝の父母ふぼ・念仏ねんぶつ者・

禪衆・真言師等しんごんしが師範しふはんなり又主君しゆくんなり、而しか

を上かみいちにん一人より下万民ばんみんにいたるまであだをなすをば日月にちがついかでか彼等が

頂いただきを照てらし給たまうべき地神ちかみいかでか彼等かれらの足を戴いたき給たまうべき、提婆達多だいばだつたは

仏だんみを打ちたたてまつりしかば大地だいち揺動ようどうして火炎かえんいでにき、檀彌羅王だんみらは師子しし

尊者そんじやの頸を切りしかば右の手・刀とともに落ちぬ、徽宗皇帝きそうこうていは法道ほうどうが面かおにかなやきをやきて江南にながせしかば半年が内にゑびすの手にかかり給たまひいき、蒙古もうこのせめも又かくのごとくなるべし、設たとひい五天のつわものをあつめて鉄圀山てつちせんを城と

せりともかなふべからず必ず日本国にほんこくの一切衆生いっさいしゆじやう・兵難なんに値あうべし、されば日蓮にちれんが法華經ほけきやうの行者ぎやうじやにてあるなきかはこれにても見るべし、教主きやうしゆ釈尊しやくそん記して云く末代惡世まつだいあくせに法華經ほけきやうを弘通くつうするものを惡口罵詈あぐめり等せん人は我を一劫いっこくが間

あだせん者の罪にも百千万億倍すぎたるべしと・とかせ給へり、而るを
今の日本国の国主・万民等・雅意にまかせて父母・宿世の敵よりもいた
くにくみ謀反・殺害の者よりもつよくせめぬるは現身にも大地われて入
り天雷も身をさかざるは不審なり、日蓮が法華經の行者にてあらざる
か・もししからばを・をきになげかし、今生には万人に・せめられて片時
もやすからず後生には惡道に墮ん事あさましとも申すばかりなし、又
日蓮・法華經の行者ならずばいか
なる者の一乗の持者にてはあるべきぞ、法然が法華經をなげすてよ
善導が千中無一・道緯が未有一人得者と申すが法華經の行者にて候
か、又弘法大師の云く法華經を行ずるは戲論なりとかかれたるが
法華經の行者なるべきか、經文には能持是經・能說此經なんどこそと
かれて候へよくとくと申すはいかなるぞと申すに於諸經中最在其上

と申もうして大日經だいにちぎよう・華嚴經けこんぎよう・涅槃經ねはんぎよう・般若經はんにやぎよう等に法華經ほけきようはすぐれて候もうなりと申もうす者をこそ經文きようもんには法華經ほけきようの行者ぎようじやとは

とかれて候へもし經文きようもんのごとくならば日本国にほんこくに仏法ぶつぽうわたて七百余年、
伝教大師でんぎょうだいしと日蓮にちれんとが外は一人も法華經ほけきようの行者ぎようじやはなきぞかし、いかにいかにとをもうところに頭破こうそく作七分口則閉塞へいそくのなかりけるは道理どうりにて候
いけるなり、

此等これらは浅き罰なり但一人・二人等のことなり、日蓮にちれんは閻浮えんぶ第一だいいちの
法華經ほけきようの行者ぎようじやなり此れをそしり此れをあだむ人を結構けつこうせん人は閻浮えんぶ
第一だいいちの大難だいにんにあうべし、これは日本国にほんこくをふりゆるがす正嘉しょうかの大地震だいにじしん
一天いつてんを罰する文永ぶんえいの大彗星すいせい等なり、此等これらをみよ仏滅ぶつめつ後の後・仏法ぶつぽうを行
ずる者にあだをなすといへども今のごとくの大難だいにんは一度もなきなり、
南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようと一切衆生いっさいしゆじようにすすめたる人・一人もなし、此の徳はた

れか一天いつてんに眼まなこを合せ四海しかいに肩かたをならぶべきや。

疑うたがいつて云いわく設たとい正しやう法ほうの時ときは仏ぶつの在ざい世せに對たいすれば根こん機き劣れつなりとも像ざう

末まつに對たいすれば最さい上じやうの上うへ機きなり、いかでか正しやう法ほうの始はつに法ほ華け經きやうをば用もちいざ

るべき・隨したがつて馬め鳴みやう・竜りゆう樹じゆ・提だい婆ば・無む著ぢやく等とうも正しやう法ほう一いつ千せん年ねんの内うちにこそ出しゆ現げん

せさせ給たまへ天てん親じん菩ぼ薩さつは千せん部ぶの論ろん師し・法ほ華け論ろんを造つくりて諸しよ經きやうの中なかつち第一だいの

義ぎを存ぞんす真しん諦たい三さん藏ざうの相そう伝でんに云いわく月がつ支しに法ほ華け經きやうを弘くわつ通つうせる家け・五ご十じゆ余よ家け

・天てん親じんは其その一いつ也やと已お上じやう・正しやう法ほうなり、像ざう法ほうに入いつては天てん台だい大だい師し・像ざう法ほうの

半なかばに漢かん土どに出しゆ現げんして玄げんと文ふみんと止ととの三さん十じゆ

卷を造りて法華經の淵底を極めたり、像法の末に伝教大師・日本に出現して天台大師の円慧・円定の二法を我が朝に弘通せしむるのみならず円頓の大戒場を叡山に建立して日本一州皆同じく円戒の地になして上一人より下万民まで延暦寺を師範と仰がせ給う豈に像法の時・法華經の広宣流布にあらずや、答えて云く如来の教法は必ず機に随うという事は世間の学者の存知なり、しかれども仏教はしからず・上根・上智の人のために必ず大法を説くならば初成道の時なんぞ法華經をとき給はざる正法の先五百年に大乘經を弘通すべし、有縁の人に大法を説かせ給うならば淨飯大王・摩耶夫人に觀仏三昧經・摩耶經をとくべからず、無縁の惡人謗法の者に秘法をあたえずば覺徳比丘は無量の破戒の者に涅槃經をさづくべからず、不輕菩薩は誹謗の四衆に向つていかに法華經をば弘通せさせ給いしぞ、されば機に随つて

法を説くと申すは大なる僻見なり。

問うて云く竜樹・世親等は法華經の実義をば宣べ給わずや、答えて云く宣べ給はず、問うて云く何なる教をか宣べ給いし、答えて云く華嚴・方等・般若・大日經等の權大乘・顯密の諸經をのべさせ給いて法華經の法門をば宣べさせ給はず、問うて云く何をもつてこれをしるや答えて云く竜樹菩薩の所造の論・三十万偈而れども尽して漢土・日本にわたらざれば其の心しりがたしといえども漢土にわたれる十住毘婆娑論・中論・大論等をもつて天竺の論をも比知して此れを知るなり。

疑つて云く天竺に残る論の中にわたれる論よりも勝れたる論やあるらん、答えて云く竜樹菩薩の事は私に申すべからず仏・記し給う我が滅後に竜樹菩薩と申す人・南天竺に出ずべし彼の人の所詮は中論と

いう論に有るべしと仏記し給う、随つて竜樹菩薩の流天竺に七十家あり

七十人ともに大論師なり、彼の七十家の人人は皆中論を本

とす中論四卷・二十七品の肝心は因縁所生法の四句の偈なり、此の四

句の偈は華嚴・般若等の四教三諦の法門なりいまだ法華開会の三諦を

ば宣べ給はず。

疑つて云く汝がごとくに料簡せる人ありや、答えて云く天台云く

中論を以て相比すること莫れ」又云く天親・竜樹内鑒冷然して外は

時の宜きに適う」等云云、妙樂云く破会を論ぜば未だ法華に若かざ

る故に「云云、從義の云く」竜樹・天親未だ天台に若かず」云云、問う

て云く唐の末に不空三蔵一卷の論をわたす其の名を菩提心論となづく

竜猛菩薩の造なり云云、弘法大師云く此の論は竜猛千部の中の

第一肝心の論」と云云、答えて云く

此このの論ろん一部七丁あり竜猛りゅうもうの言ことならぬ事こと処しよ処よに多し故ゆえに目録もくろくにも・或あるは
竜猛りゅうもう・或あるは不空ふくうと両方りょうほうにいまだ事定ことさだまらず、其そのの上うへ此このの論文ろんぶんは一代いちだいを
括くくれる論ろんにもあらず荒量くわうりやうなる事こと此これ多し、先まづ唯真言ただしんごん法中はふちゆうの肝心かんじんの文
あやまりなり其そのの故ゆえは文証もんしやう・現証げんしやうある法華經ほけきやうの即身成仏そくしんじやうぶつをばなきにな
して文証もんしやうも現証げんしやうもあとかたもなき真言經しんごんに即身成仏そくしんじやうぶつを立て候た又唯ただと
いう唯ただの一字だいいちは第一だいいちのあやまりなり、事ことのていを見るみるに不空三藏ふくうさんざうの私ひそに
つくりて候たを時ときの人ひとにをもくせさせ

んがために事ことを竜猛りゅうもうによせたるか其そのの上うへ不空三藏ふくうさんざうは誤あやまりる事ことかずをほ
し所謂いひゆる法華經ほけきやうの觀智かんちの儀軌ぎきに寿量品じゆりやうほんを阿弥陀仏あみだぶつとかける眼まなこの前まへの大
僻見びやくけん陀羅尼品だらにほんを神力品じんりきほんの次にをける属累品ぞくるいほんを經末きやうまつに下くだせる此等これらはい
うかひなし、さるかともれば天台てんだいの大乗戒だいじやうかいを盗ぬすんで代宗皇帝こうていに宣旨せんじを
申し五台山ごとうざんの五寺ごしに立てたり、而しかも又真言しんごんの教相きやうそうには天台宗てんだいしやうをすべし

といえりかたがた誑惑おおわくの事どもなり、他人たにんの訳ならば用ゆる事もあり

なん此の人の訳せる経論きやうろんは信ぜられ

ず、総じて月支がつしより漢土かんどに経論きやうろんをわたす人・旧訳くやく・新訳しんやくに一百八十六

人なり羅什らじゅうさんぞう三蔵一人を除いてはいづれの人人も・らざるはなし、其の中

に不空ふくうさんぞう三蔵は殊ことに誤あやまり多き上誑惑おおわくの心顯あらわなり、疑うたがいつて云く何をもつて

知るぞや羅什らじゅうさんぞう三蔵より外ほかの人人はあやまりなりとは汝なんじが禪宗ぜんしゅう・念仏ねんぶつ・

真言等しんごんの七宗しちそうを破やぶるのみならず漢土かんど・日本にほんにわたる一切いっさいの訳者やくしや

を用いざるかいかん、答えて云く此の事は余が第一だいいちの秘事ひじなり委細いさいには

向つて問うべし、但ただしすこし申すべし羅什らじゅうさんぞう三蔵の云く我漢土かんどの一切いっさい経を

見るに皆梵語みなぼんごのごとくならずいかでか此の事を顯あらわすべき、但ただし一の大願

あり身を不浄ふじやうになして妻を帶すべし舌計はかり清浄しやうじやうになして仏法ぶつぽうに妄語もうご

せじ我死なば必やくべし焼かん時舌焼けるなら

ば我が経をすてよと常に高座こうざにしてとかせ給たましなり、上一人かみいちにんより下
万民ばんみんにいたるまで願ねがじて云く願ねがくは羅什三蔵らしゅうさんぞうより後に死つせんと、終に
死たし給たまう後焼きたてまつりしかば不浄ふじようの身は皆灰みなとなりぬ御舌計おしかり火
中に青蓮華せいれんげ生せいて其の上そのにあり五色の光明ごうみょうを放ちて夜は昼のごとく昼は
日輪にちりんの御光みこうをうばい給たまいき、さてこそ一切いっさいの訳人の経きやうぎやうは軽くなりて
羅什三蔵らしゅうさんぞうの訳たまし給たまえる 経きやうぎやう殊ことに法華経ほけきやうは漢土かんどにやすやすとひろまり
給たまいしか。

疑うたがつて云く羅什らしゅう已前いぜんはしかるべし已後いごの善無畏ぜんむい不空ふくう・等は如何いかに、答
えて云く已後いごなりとも訳者やくしゃの舌の焼けるをば・ありけりとしるべしされ
ば日本国にほんこくに法相宗ほうそうしゅうのはやりたりしを伝教大師でんぎやうだいし責めさせ給たまいしには
羅什三蔵らしゅうさんぞうは舌焼げんじやうけず玄奘じおん・慈恩じおんは舌焼げんじやうけぬとせめさせ給たまいしかば桓武かんむ
天王どうりは道理と・をばして天台法華宗てんだいほつけしやうへはうつらせ給たまいしなり、涅槃経ねはんぎやうの

第三・第九等をみまいらすれば我が仏法は月支より他国へわたらん時、
多くの謬誤出来して衆生の得道あやまりしゆつたい しゆじよう とくどう

うすかるべしととかれて候、されば妙樂大師は並びに進退は人に在り

何ぞ聖旨なん むね かかわに關らん」とこそあそばされて候へ今の人人いかに經のままに

後世をねがうともあやまれる經經ごしよう きようぎようのままにねがはば得道も・あるべか

らず、しかればとて仏の御とがにはあらじとかかれて候、仏教を習ふ法

には大小・權實・顯密はさてをくこれこそ第一の大事にては候らめ。

疑うたがいつて云く正法一千年の論師の内心には法華經の実義の顯密の

諸經に超過してあるよしはしろしめしながら外には宣說せずして但

權大乘計りを宣べさせ給うことはしかるべしとはをばへねども其の義は

すこしきこえ候いぬ、像法一千年の半に天台智者大師出現して題目の

妙法蓮華經の五字を玄義十卷・二千枚にかきつくし、文句

十卷には始めに如是によ我聞がもんより終り作礼而去さらいにこにいたるまで一字・一句いっくに
因縁・約教・本・迹・觀心かんじんの四の釈をならべて又一千枚に尽し給たまう已上
玄義・文句もんくの二十卷には一切經いっさいきやうの心を江河かうかとして法華經ほけきやうを大海たいかいにたと
え十方界じゅうぽうかいの佛法ぶつぽうの露つゆ一☆も漏もさず妙法蓮華經みょうほうれんげきやうの大海たいかいに入れさせ給たまい
ぬ、其その上天竺てんじくの大論だいろんの諸義しよ・一点ももらさず漢土かんど・南北の十師の義

破すべきをばこれをはし取るべきをば此れを用う、其の上止観十巻を注
して一代の觀門を一念にすべ十界の依正を三千につづめたり、此の書の
文体は遠くは月支・二千年の間の論師にも超え近くは尸那・五百年の
人師の釈にも勝れたり、故に三論宗の吉藏大師・南北一百余人の先達
と長者らをすすめて天台大師の講經を聞けと勸むる状に云く、千年の
興五百の実復今日に在り乃至南岳の叡聖・天台の明哲・昔は三業住持
し今は二尊に紹係す豈止甘呂を震旦に灑ぐのみならん亦当に法鼓を
天竺に震うべし、生知の妙悟魏晉以来典籍風謠實に連類無し乃至禪衆
一百余の僧と共に智者大師を奉請す」等云云、修南山の道宣律師・
天台大師を讃歎して云く、法華を照了すること高輝の
幽谷に臨むが若く摩訶衍を説くこと長風の太虚に遊ぶに似たり仮令
文字の師・千羣万衆ありて彼の妙弁を数め尋ぬとも能く窮むる者無し、

乃至ないし義月を指すに同じ乃至ないし宗一極に歸す」云云、華嚴宗けこんしゅうの法藏大師ほうざうだいし、
天台てんだいを讚して云く思禪師ぜんし智者等ちしやの如ごとき神異じんいに感通かんつうして迹登位しやくとういに参まじわ
る靈山りやうぜんの聴法憶しんごんしゅうい今に在り」等云云、真言宗しんごんしゅうの不空三藏ふくうさんざう、含光法師ほっし等
師弟共していに真言宗しんごんしゅうをすてて天台大師てんだいだいしに歸伏きふくする物語ものがたりに云く高僧こうそう伝に
云く不空三藏ふくうさんざうと親まのあたり天竺てんじくに遊あそびたる
に彼かしこに僧有しんり問とうて曰いわく大唐だいとうに天台てんだいの迹教てんてきやう有あり最も邪正じゃせいを簡えらび偏へん円えん
を曉あきらむるに堪たえたり能よく之これを訳まして將まさに此土しどに至いたらしむ可べきや」等云
云、此ものの物語ものがたりは含光みやうくわうが妙樂大師みやうらくだいしにかたり給たましなり、妙樂大師みやうらくだいし・此ものの
物語ものがたりを聞いいて云く豊中国あにちゆうごくに法うしなを失こいて之これを四維ししいに求もとむるに非あらずや
而しかも此方このかたし識しること有ある者少ろじんし魯人ろじんの如ごときのみ」等云云、身毒国けんどくの中
に天台てんだい三十卷のごとくなる大論だいろんあるならば南天なんてんの僧そういかでか漢土かんどの
天台てんだいの釈しやくをねがうべき、これあに像法ぞうぼうの中に法華經ほけきやうの実義じつぎ顯あられて南

閻浮提えんぶだいに広宣流布こうせんるふするにあらずや、答えて云いわく正法しょうぼう一千年・像法やうぼうの前
四百年・已上ふつめつ仏滅後・

一千四百余年にいまだ論師ろんしの弘通くつうし給たまはざる一代超過いちだいちようかの円定・円慧えんねを
漢土かんどに弘通くつうし給たまうのみならず其その声月氏な がつしまでもきこえぬ、法華經ほけきやうの
広宣流布こうせんるふにはにたれどもいまだ円頓えんどんの戒壇かいだんを立てられず小乗しょうじやうの威儀いぎ
をもつて円の慧定じやうに切りつけるはすこし便たよりなきにいたり、例せば日輪にちりんの
蝕するがごとし月輪げつりんのかけたるに似たり、何いかにいわうや天台てんだい

大師だいしの御時おんときは大集經だいしつぎょうの読誦多聞堅固どくじゅたぶんけんこの時ときにあひあたていまだ広宣流布こうせんるふの時ときにあらず。

問いうて云いく伝教大師でんぎょうだいしは日本国にほんこくの士しなり桓武かんむの御宇ぎように出世しゅつせして欽明きんめいより二百余年が間の邪義じやぎをなんじやぶり天台大師てんだいだいしの円慧えんね・円定えんぢやうをせんじ給たまうのみならず、鑒真かんじん和尚わじやうの弘通くわつうせし日本にほん小乗しょうじやうの三処さんぢよの戒壇かいだんをなんじやぶり叡山えいざんに円頓えんどんの大乗別受戒だいじやうべつじゆかいを建立こんりやうせり、此だいじの大事だいじは仏滅後ぶつめつ・一千八百年が間の身毒けんどく・戸那しな・扶桑ふそう乃至ないし一閻浮提えんぶだい第一だいいちの奇事きじなり、内証ないしやうは竜樹りやうじゆ・天台等てんだいには・或あるは劣るにもや・或あるは同じくもやあるらん、仏法ぶつぽうの人をすべて一法となせる事は竜樹りやうじゆ・天親てんじんにもこえ南岳なんがく・天台てんだいにも・すぐれて見えさせ給たまうなり、総じては如来御にょらい入滅にゅうめつの後・一千八百年が間・此の二人こそ法華經ほけきやうの行者ぎやうじやにてはをはすれ、故ゆゑに秀句しゅうくに云いく經きやうに云いく若し須弥しゆみを接とつて他方無数の仏土たほうに

擲なげ置またかんも亦また未いまだこれ難がたしとせず乃ない至しも若もし仏ぶつの滅めつ度ど惡あく世せの中に於おいて
能よく此この經きやうを説せつかん是すなわ則すなわちこれ難がたし云云、此こ經きやうを釈しゃくして云いく淺あは易やすく
深がたは難がたしとは釈しゃ迦かの所しよ判はんなり淺あを去さて深しんに就つくは丈じやう夫ぶの心こころなり
天てん台だい大師だいしは釈しんに信しん順じゆんし法ほつ華け宗しゆを助たすけて震しん旦たん
に敷ふ揚ようし叡えい山ざんの一家いっけは天てん台だいに相そう承じやうし法ほつ華け宗しゆを助たすけて日に本ほんに弘くつ通つうす」云
云、釈しゃくの心こころは賢けん劫けつ第だい九くの滅めつ・人にん寿じゆ百ひやく歲さいの時ときより如に來らい在ざい世せい五ご十じふ年ねん滅めつ後ご・
一いち千せん八はち百ひやく余よ年ねんが中ちゆう間げんに高たかさ十じふ六ろく万まん八はち千せん由ゆう旬じゆん・六む百ひやく六む十じふ二に万まん里りの金きん山ざん
を有ある人ひと五ご尺しゃくの小せう身みの手てをもつて方はう一いち寸すん・二に寸すん等とうの瓦かわら・磔くわしをにぎりて一いち丁てい
二丁にていまでなぐるがごとく雀すずめ鳥とりのとぶよりもはやく鉄てつ圀くわん山ざんの外ぐわいへなぐる者もの
はありとも法ほつ華け經きやうを仏ぶつのとかせ給たまいしやうに説せつかん人にんは末まつ法ぽうにはまれ
なるべし、天てん台だい大師だいし・伝でん教きやう
大師だいしこそ仏ぶつ説せつに相そう似じしてとかせ給たまいたる人にんにてををはすれとなり、天てん竺じく三さんの

ろんし
論師はいまだ法華經ほけきやうへゆきつき給たまはず漢土かんどの天台てんだい已前いぜんの人師にんしは、或あるはす
ぎ・或あるはたらず、慈恩じおん・法蔵ほうぞう・善無畏ぜんむい等は東を西といふ天を地と申せる
ひとびと
人人なり、此等これらは伝教大師でんぎやうだいしの自讃じさんにはあらず、去る延暦えんりやく二十一年正
月十九日高雄山に桓武皇帝かんむこうてい行幸なりて六宗七ろくしゅうななだいじ大寺の碩徳せきとくた
る善議ぜんぎ・勝猷しょう・奉基ほうき・寵忍ちゆうにん・賢玉けんぎよ・安福あんぷく・勤操ごんそう・
修円しゆえん・慈誥じこう・玄耀げんよう・歳光さいこう・道証どうしょう・光証こうしょう・観敏等かんびんの十有余人、最澄法師さいちやうほつしと
召まし合あせられて宗論しゅうろんありしに、或あるは一言に舌を巻いて二言三言に及およば
ず皆みな一同いどうに頭こうべをかたづけ手をあさう、三論さんろん

の二蔵・三時・三転法輪・法相の三時・五性・華嚴宗の四教・五教・根本
枝末・六相・十玄・皆大綱をやぶらる、例せば大屋の棟梁のをれたるが
ごとし十大徳の慢幢も倒れにき、爾の時・天子大に驚かせ給いて同二
十九日に弘世・国道の両吏を勅使として重ねて七寺六宗に仰せ下れし
かば各各歸伏の状を載せて云く竊に天台の玄疏を見れば総じて釈迦
一代の教を括つて悉く其の趣を顯すに通ぜざる所無く独り諸宗に逾え
殊に一道を示す其の中の所説甚深の妙理なり七箇の大寺・六宗の学生
昔より未だ聞かざる所曾て未だ見ざる所なり三論・法相久年の諍い
渙焉として

氷の如く釈け照然として既に明かに猶雲霧を披いて三光を見るがごと
し聖徳の弘化より以降今に二百余年の間講ずる所の經論其の数多く
彼此理を争えども其の疑未だ解けず、而るに此の最妙の円宗未だ

闡揚せんようせず蓋けだし以て此の間の羣生ぐんせい未だ円味いまいに応おわざるか、伏おして惟おもれば
聖朝せいちょう久しく如來にょらいの付を受け深く純円じゅんえんの機きを結び一妙いちぎょうの義理ぎり始めて
乃すなわち興顯こうけんし六宗ろくしゅうの學者がくしや初めて至極しごくを悟る此の界がの含靈がんりやう今より後悉ことごとく
妙円みやうえんの船のに載り早く彼岸ひがに濟わたる事を得ると謂いいつべし、乃至ないし善議ぜんぎ等
牽ひかれて休運きうんに逢い乃すなわち奇詞きしを聞きす深期しんきに非あらざるよりは何なんぞ聖世せいせいに
託たくせんや」等云云、彼の

漢土かんどの嘉祥かじやう等は百余人をあつめて天台大師てんだいだいしを聖人しょうにんと定めたり、今日いまに日本ほん
の七寺二百余人は伝教大師でんぎやうだいしを聖人しょうにんとがうしたてまつる、仏の滅後めつご二千
余年に及んで両国りやうこくに聖人しょうにん・二人出現しゅつげんせり其の上天台大師てんだいだいしの未弘みぐの
円頓大戒えんどんだいがいを叡山えいざんに建立こんりやうし給たまう此これ豈あにぞう像法ざうぼうの末はに法華經ほけきやう広宣流布こうせんるふする
にあらずや、答えて云いく迦葉かしょう・阿難あなん等の弘通くつうせざる大法だいほうを馬鳴めみやう・竜樹りゅうじゆ・
提婆天親等だいばてんじんの弘通くつうせる事前さきの難なんに顕あらわれたり、又竜樹りゅうじゆ・天親等てんじんの流布るふし

残し給える大法天台大師の弘通し給う

事又難にあらはれぬ、又天台智者大師の弘通し給はざる円頓の大戒を

伝教大師の建立せさせ給う事又顯然なり、但し詮と不審なる事は仏

は説き尽し給えども仏滅後に迦葉・阿難・馬鳴・竜樹・無著・天親乃至

天台・伝教のいまだ弘通しましまさぬ最大の深密の正法經文の面に

現前なり、此の深法・今末法の始五五百歳に一閻浮提に広宣流布すべ

きやの事不審極り無きなり。

問ういかなる秘法ひほうぞ先ず名をきき次に義をきかんとをもう此の事も
し実事じつじならば釈尊しゃくそんの二度世しゆつげんに出現たまし給うか上行菩薩じやうぎやうぼさつの重ねて涌出ゆじゆつせ
るか・いそぎいそぎ慈悲じひをたれられよ、彼の玄奘げんじやう三蔵さんざうは六生ろくしやうを経て月氏がつし
に入りて十九年・法華ほつけ一乘いちじやうは方便教ほうべん・小乘しやうじやう・阿含經あこんきやうは真実教しんじつ、不空ふくう
三蔵さんざうは身毒けんどくに返りて寿量品じゆりやうぼんを阿弥陀あみた仏ぶつとかかれたり、此等これらは東を西
という日を月とあやまてり身を苦めてなにかせん・心に染そめてようなし、
幸い我等われら末法まつぽうに生れて一步をあゆまず
して三祇さんぎをこゑ頭こゑべを虎にかわずして無見頂相むけんちやうさうをゑん、答えて云く此の
法門ほうもんを申もうさん事は經文きやうもんに候きこへやすかるべし但ただし此の法門ほうもんには先ず三
の大事だいじあり大海たいかいは広けれども死骸をとどめず大地だいちは厚けれども不孝ふこうの
者をば載のせず、仏法ぶつぽうには五逆ごぎやくをたすけ不孝ふこうをばすくう但ただし誹謗ひぼう一闡提いつせんたい
の者持戒じかいにして第一だいいちなるをばゆるされず、此の三のわざは

ひとは所謂いわゆる念仏宗ねんぶつしゅうと禪宗ぜんしゅうと真言宗しんこんしゅうとなり、一には念仏宗ねんぶつしゅうは日本国にほんこくに充満じゅうまんして四衆ししゅうの口あそびとす、二に禪宗ぜんしゅうは三衣一鉢さんねいちぱつの大慢だいまんの比丘びくのしかい 四海じゅうまんに充満じゅうまんして一天いつてんの明導めいどうとをもへり、三に真言宗しんこんしゅうは又彼等かれらの二宗にしゅうにはにるべくもなし叡山えいざん・東寺とうじ・七寺しちじ・園城おんじょう・或官主あるかんしゅ・或は御室おむろ・或は長吏ちやうり・或は檢校けんぎょうなりかの内侍所ないじどころの☆☆神鏡みかがみじんかい燼灰じんかいとなりしかども大日だいにち如来にょらいの宝印ほういんを仏鏡ぶつきやうとたのみ宝劍ほうけん・西海さいかいに入りしかども五大尊ごだいそんをもつて国敵こくてきを切らんと思おもへり、此等これらの堅固けんこの信心しんじんは設たとい劫石くわくせきはひすらぐとも・かたぶくべしとはみず大地だいちは反覆はんぷくすとも疑心うたがいをこりがたし、彼の天台大師てんだいだいしの南北なんぼくをせめ給たまいし時も此の宗しゅうはいまだわたらず此の伝教大師でんぎょうだいしの六宗ろくしゅうをしゑたげ給たまいし時ももれぬ、かたがたの強敵きやうてきをまぬがれてかへつて大法だいほうをかすめ失うしなう、其の上传教大師でんぎょうだいしの御弟子おんでし慈覚じかく大師だいし・此の宗しゅうをとりたてて叡山えいざんの天台宗てんだいしゅうをかすめをとして一向いっしやう・

真言宗しんこんしゅうになししかば此の人には誰の人か敵をなすべき、かかる僻見びやくけんの

たよりをえて弘法大師こうぼうだいしの邪義じやぎを

もとがむる人もなし、安然和尚あんねんわじょうすこし弘法こうぼうを難なんぜんとせしかども只ただ

華嚴宗けこんしゅうのところ計りばかとがむるににてかへ法華經ほけきやうをば大日經だいにちきやうに対して沈

めはてぬ、ただ世間せけんのたて入の者のごとし。

問うて云く此の三宗の謬みやうご如何答えて云く浄土宗じょうどしゅうは斉の世に曇鸞どんらん

法師ほつしと申す者あり本は三論宗さんろんしゅうの人竜樹菩薩りゅうじゅぼさつの十住毘婆娑論じゅうじゅうびばしやろんを見て

難行道なんぎやうどう・易行道いぎやうどうを立てたり、道綽どうしやく・綽ぜん師しという者あり唐とうの世の者本もとは

涅槃經ねはんぎやうをかうじけるが曇鸞法師どんらんほつしが浄土じょうどにうつる筆でしを見て涅槃經ねはんぎやうをすて

て浄土じょうどにうつて聖道しやうどう・浄土二門じょうどにを立てたり、又道綽どうしやくが弟子でしに善導ぜんどうとい

う者あり難行なんぎやう・正行しやうぎやうを立つ、日本国にほんこくに末法まつぽうに入つて二百余年ふたひゃくねん・

後鳥羽院ごとばいんの御宇ぎやうに法然ほうねんというものあり一切いっさいの道俗どうやくをすすめて云く仏法ぶつぽう

は時機を本とす法華經・大日經・天台・真言等の八宗・九宗一代の
大小・顯密・權實等の諸宗等は上根・上智の正像二千年の機のためな
り、末法に入りてはいかに功をなして行ずるとも其の益あるべからず、
其の上・弥陀

念仏にまじへて行ずるならば念仏も往生すべからず此れわたくしに
申すにはあらず竜樹菩薩・曇鸞法師は難行道となづけ、道綽は
未有一人得者ときらひ善導は千中無一とさだめたり、此等是他宗なれ
ば御不審も・あるべし、慧心・先徳にすぎさせ給へる天台・真言の智者は
末代にをはすべきか彼の往生要集には顯密の教法は予が死生をはな
るべき法にはあらず、又三論の永觀が十因等をみよされば法華・真言等
をすてて一向に念仏せば十即十生・百即
百生とすすめければ、叡山・東寺・園城・七寺等始めは諍論するや

うなれども、往生おうじょう要集ようしゅうの序ことばの詞ことば・道理どうりかとみへければけんしん眞座主しんざす落ちさせ給たまいて法然ほうねんが弟子でしとなる、其その上たとい設ほうねんい法然ほうねんが弟子でしとならぬ人々もみだ弥陀念仏ねんぶつは他た仏ぶつににるべくもなく口ずさみとし心よせにをもひければにほんこく日本国みま・皆一同ほうねんぼうに法然房でしの弟子と見みへけり、此この五十年が間いつてんしかい・一天四海

一人もなく法然ほうねんが弟子でしとなる法然ほうねんが弟子でしとなりぬればにほんこく日本国一人もなく謗法ぼうぼうの者たとなりぬ、譬たとへば千人の子が一同に一人の親を殺害さつがいせば千人共に五逆ごぎやくの者なり一人阿鼻あびに墮おちなば余人墮おちざるべしや、結句けつこは法然ほうねん・流罪るざいをあだみて惡靈あくりょうとなつて我われ並びに弟子でし等をとがせし国主山寺こくしゅの僧等が身に入つて・或あるは謀反あるををこし・或あるは惡事をなして皆みな関東かんとどうにほろぼされぬ、わづかにのこれる叡山えいざん・東寺とうじ等の諸僧しよそうは俗男ぞくなん・俗女ぞくじよになづらるること猿猴えんこうの人にわら

はれ・俘囚えぞが童子どうじに蔑如べつじょせらるるがごとし、禪宗ぜんしゅうは又此またの便たよりを得て
持齋等じさいとなつて人の眼まなこを迷まどかし・たつとげなる氣色きしきなれば・いかに・ひが
ほうもんを・いゐくる・へども失とがとも・をばへず、禪宗ぜんしゅうと申もうす宗しゅうは教外きょうがい
別伝べつでんと申もうして釈尊しゃくそんの一切經いっさいきやうぎやう

の外に迦葉尊者にひそかにささやかせ給へり、されば禪宗をしらずして一切経を習うものは、犬の雷をかむがごとし、猿の月の影をとるにたり云云、此の故に日本国の中に不孝にして父母にすてられ無礼なる故に、主君にかんどうせられ・あるいは若なる法師等の学文にもものうき遊女のものぐるわしき本性に叶る邪法なるゆへに皆一同に持斎になりて国の百姓をくらう蝗虫となれり、しかれば天は天眼をいからかし地神は身をふるう、真言宗と申す

は上の二のわざはひには・にるべくもなき大僻見なりあらあら此れを申すべし、所謂大唐の玄宗皇帝の御宇に善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵・大日経・金剛頂経・蘇悉地経を月支よりわたす、此の三経の説相分明なり其の極理を尋ぬれば会二破二の一乗其の相を論ずれば印と真言と計りなり、尚華嚴・般若の三一相對の一乗にも及ばず

天台宗てんだいしゅうの爾前にぜんの別円程べつえんもなし但藏通二教ぞうつうを面おもてとするを善無畏三藏ぜんむいさんぞうをもはく此の經文きやうもんをあらわにい出だす程ほどならば

華嚴・法相けごん ほうそうにもをこつかれ天台宗てんだいしゅうにもわらはれなん大事だいじとして月支がつしよりは持たもち来りぬ・さてもだせば本意ほんいにあらずとやをもひけん、天台宗てんだいしゅうの中に一行禪師ぜんしといふ僻人びやくにん一人ありこれをかたらひて漢土かんとの法門ほうもんをかたらせけり、一行阿闍梨あじやりうちぬかれて三論さんろん・法相ほうそう・華嚴等けごんをあらあらかたるのみならず天台宗てんだいしゅうの立てられけるやうを申しければ善無畏ぜんむいをもはく天台宗てんだいしゅうは天竺てんじくにして聞きしにもなをうちすぐれてかさむべきやうもなかりければ善無畏ぜんむい一行をうち

ぬひて云いわく和僧わそうは漢土かんとにはこざかしき者にてありけり、天台宗てんだいしゅうは神妙の宗なり今真言宗しんごんしゅうの天台宗てんだいしゅうにかさむところは印と真言しんごんと計ばかりなりといふければ一行さもやと・をもひければ善無畏三藏ぜんむいさんぞう一行にかたて云いわく、

天台大師てんだいだいしの法華經ほけきように疏じよをつくらせ給たまへるごとく大日經だいにちきようの疏じよを造つくりて
真言しんごんを弘通くつうせんとをもう汝なんじかきなんやと・いるければ一行いっけが云いく

やすう候ただ、但ただしいかやうにかき候たべきぞ天台宗てんだいしゆうはにくき宗しゆなり諸宗しよしゆうは
我われも我われ烽ほういあらそいをなせども一切いっさいに叶かなわざる事こと一ひとあり、所謂いふゆる法華經ほけきよう
の序分じよぶんに無量義經むりやうぎきようと申もうす經きようをもつて前まへ四十余年しじゅうよねんの經經きようきようをば其その門かどを
打ちふさぎ候たいぬ、法華經ほけきようの法師品ほうしほん・神力品じんりきほんをもつて後の經經きようきようをば又
ふせがせぬ肩かたをならぶ經經きようきようをば今說こんせつの文ぶんをもつてせめ候た

だいにちきよう

大日經をば三説の中にはいづくにかをき候べきと問ひければ爾の時に

善無畏三蔵大に巧んで云く大日經に住心品という品あり無量義經の

善無畏三蔵大に巧んで云く大日經に住心品という品あり無量義經の

四十余年の經經を打ちあらうがごとし、大日經の入漫陀羅已下の諸

品は漢土にては法華經・大日經とて二本なれども天竺にては一經のご

とし、釈迦仏は舍利弗弥勒に向つて大日經を法華經となづけて印と

真言とをすてて但理計りをとけるを羅什三蔵此れをわたす天台大師

此れをみる、大日如来は法華經を大日經となづけて金剛薩☆に向つて

とかせ給う此れを大日經となづく我まのあたり天竺にしてこれを見

る、されば汝がかくべきやうは大日經と法華經とをば水と乳とのやう

に一味となすべし、もししからば大日經は已今当の三説を

ば皆法華經のごとくうちをとすべし、さて印と真言とは心法の

一念三千に莊嚴するならば三密相応の秘法なるべし、三密相応する程

一念三千に莊嚴するならば三密相応の秘法なるべし、三密相応する程

一念三千に莊嚴するならば三密相応の秘法なるべし、三密相応する程

一念三千に莊嚴するならば三密相応の秘法なるべし、三密相応する程

一念三千に莊嚴するならば三密相応の秘法なるべし、三密相応する程

一念三千に莊嚴するならば三密相応の秘法なるべし、三密相応する程

一念三千に莊嚴するならば三密相応の秘法なるべし、三密相応する程

一念三千に莊嚴するならば三密相応の秘法なるべし、三密相応する程

一念三千に莊嚴するならば三密相応の秘法なるべし、三密相応する程

一念三千に莊嚴するならば三密相応の秘法なるべし、三密相応する程

一念三千に莊嚴するならば三密相応の秘法なるべし、三密相応する程

ならば天台宗は意密なり真言は甲なる將軍の甲鎧を帶して弓箭を横
たへ太刀を腰にはけるがごとし、天台宗は意密計りなれば甲なる將軍
の赤裸なるがごとくならんといふければ、一行阿闍梨は此のやうにかき
けり、漢土三百六十箇国には此の事を知る人なかりけるかのあひだ始
めには勝劣を評論しけれども善無畏等

は人がらは重し天台宗の人人は輕かりけり、又天台大師ほどの智ある
者もなかりければ但日日に真言宗になりてさてやみにけり、年ひさし
くなればいよいよ真言の誑惑の根ふかくかくれて候いけり、日本国の
伝教大師・漢土にわたりて天台宗をわたし給うついでに真言宗をなら
べわたす、天台宗を日本の皇帝にさづけ真言宗を六宗の大徳になら
はせ給う、但し六宗と天台宗の勝劣は入唐已前に定めさせ給う、
入唐已後には円頓の戒場を立てう立て

じの論の計りなかりけるかのあひだ敵多くしては戒場の一事成りがたし
とやをぼしめしけん、又末法にせめさせんとやをぼしけん皇帝の御前
にしても論ぜさせ給はず弟子等にもはかばかしくかたらせ給はず、但し
依憑集と申す一卷の秘書あり七宗の人人の天台に落ちたるやうをかか
れて候文なり、かの文の序に真言宗の誑惑一筆みへて候弘法大師は同
じき延暦年中に御入唐青竜寺の慧果に値い給いて真言宗をならはせ
給へり、御帰朝の後・二代

の勝劣しょうれつを判たじ給たまいけるに第一真言・第二華嚴・第三法華とかかれて候、此の大師だいしは世間せけんの人人もつてのほかにも重おもざる人なり、但ただし仏法ぶつぽうの事は申もうすにをそれあれどももつてのほかにもあらき事どもはんべり、此の事をあらあら・かんがへたるに漢土かんどにわたらせ給たまいては但真言しんごんの事相じそうの印・真言計なりり習ならいつたえて其の義理ぎりをばくはしくもさはぐらせ給たまはざりけるほどに日本にほんにわたりて後大おおいに世間せけんを見れば天台宗てんだいしゅうもつてのほかにかさみたりければ、我が重おもず

る真言宗しんごんしゅうひろめがたかりけるかのゆへに本日本国にほんこくにして習ならいたりし華嚴宗けこんしゅうをとりいだして法華經ほけきょうにまされるよしを申もうしけり、それも常もうの華嚴宗けこんしゅうに申もうすやうに申もうすならば人信じんずまじとやをばしめしけんすこしいろをかえて此これ

は大日經だいにちきょう竜猛菩薩りゅうもうぼさつの菩提心論ぼだいしんろん善無畏等ぜんむゐの実義じつぎなりと大妄語もうごをひきそ

へたりけれども天台宗の人人いたうとがめ申す事なし。

問うて云く弘法大師の十住心論・秘藏宝鑰二教論に云く此くの

如き乗乗自乗に名を得れども後に望めば戲論と作す」又云く無明

の辺域にして明の分位に非ず」又云く第四熟蘇味なり」又云く震旦

の人師等諍つて醍醐を盗んで各自宗に名く」等云云、此等の釈の心

如何、答えて云く予此の釈にをどろいて一切経並びに大日の

三部経等をひらきみるに華嚴経と大日経とに対すれば法華経戲論・

六波羅蜜経に対すれば盗人守護経に対すれば無明の辺域と申す経文

は一字・一句も候はず此の事はいとはかなき事なれども此の三四百余

年に日本国のそこばくの智者どもの用いさせ給へば定めてゆへあるかと

をもひぬべし、しばらくいとやすきひが事をあげて余事のはかなき事を

しらすべし、法華経を醍醐味と称することは陳隋の代なり六波羅蜜経

は唐とうの半はんに般若はんにや三藏さんぞう此れをわたす、

ろくはらみつきよう

だいち

ちんすい

六波羅蜜經の醍醐だいちは陳隋ちんすいの世には・わたりてあらばこそ天台大師てんだいだいしは

しんこん

だいち

をば盗ませ給たまはめ、

ほうれい

傍例ほうれいあり日本にほんの得一いちが云く

天台大師てんだいだいしは

真言しんこんの醍醐だいちをば盗ませ給たまはめ、

じんみつ

さんじきよう

さんずん

深密經じんみつの三時教さんじきようをやぶる三寸さんずんの舌をもつて五尺ごせきの身をたつべしとののし

りしを伝教でんぎよう大師だいち此れをただして云く

深密經じんみつは唐とうの始玄奘げんじようこれ

をわた

す天台てんだいは陳隋ちんすいに人・智者ちしや御入滅にゅうめつの後・数箇年しうこねんあつて深密經じんみつわたれ

す天台てんだいは陳隋ちんすいに人・智者ちしや御入滅にゅうめつの後・数箇年しうこねんあつて深密經じんみつわたれ

す天台てんだいは陳隋ちんすいに人・智者ちしや御入滅にゅうめつの後・数箇年しうこねんあつて深密經じんみつわたれ

す天台てんだいは陳隋ちんすいに人・智者ちしや御入滅にゅうめつの後・数箇年しうこねんあつて深密經じんみつわたれ

す天台てんだいは陳隋ちんすいに人・智者ちしや御入滅にゅうめつの後・数箇年しうこねんあつて深密經じんみつわたれ

り、死して已後にわたれる経をば・いかでか破り給うべきとせめさせ
給いて候いしかば得一はつまるのみならず舌八にさけて死し候いぬ、こ
れは彼にはにるべくもなき悪口なり、華嚴の法蔵三論の嘉祥法相の
玄奘・天台等・乃至南北の諸師・後漢より已下の三蔵・人師を皆をさえ
て盗人とかかれて候なり、其の上又法華経を醍醐と称することは天台
等の私の言にはあらず、仏涅槃経に法華経を醍醐と・とかせ給い天親
菩薩は法華経・涅槃経を醍醐とかかれて候、竜樹菩薩は法華経を妙薬
となづけさせ給う、されば法華経等を醍醐と申す人盗人ならば釈迦・
多宝・十方

の諸仏竜樹・天親等は盗人にてをはすべきか、弘法の門人等乃至日本
の東寺の真言師如何に自眼の黒白はつたなくして弁へずとも他の鏡を
もつて自禍をしれ、此の外法華経を戲論の法とかかるること大日経・

金剛頂經等にたしかなる經文をいだされよ、設い彼彼の經經に
法華經を戲論ととかれたりとも訳者のゝる事もゝあるぞかしよくよく思
慮のあるべかりけるか、孔子は九思一言・周公旦は沐には三にぎり食
には三はかれけり外書のはかな

き世間の浅き事を習う人すら智人はかう候ぞかし、いかにかかるあさ
ましき事はあるりけるやらん、かかる僻見の末へなれば彼の伝法院の本願
とがうする聖覚房が舍利講の式に云く尊高なる者は不二摩訶衍の
仏なり驢牛の三身は車を扶くこと能はず秘奥なる者は両部漫陀羅の
教なり顕乗の四法は履を採るに堪へず」と云云、顕乗の四法と申すは
法相・三論・華嚴・法華の四人、驢牛の三身と申すは法華・華嚴・般若・
深密經の教主の四仏、此等の

仏僧は真言師に対すれば聖覚弘法の牛飼・履物取者にもたらぬ程の

事なりとかいて候、彼の月氏がっしの大慢婆羅門だいまんばらもんは生知けんみつの博学顯密みつにどう二道胸にんしに
うかべ内外ないげの典籍てんじやく・掌たなこころににぎる、されば王臣頭おうしんこうべをかたぶけ万人師範にんし
と仰あおぐあまりの

慢心まんしんに世間せけんに尊崇する者は大自在天じざいてん・婆釳天ばそ・那羅延天ならえん・大覺世尊だいかくせそん此
の四聖ししやうなり我が座の四足にせんと座の足につくりて坐して法門ほうもんを申しけ
り、当時とうじの真言師しんごんしが釈迦しやか・迦留かぶつ等いっさいの一切の仏をかきあつめて灌頂かんちやうする時敷
まんだらとするがごとし、禪宗ぜんしやうの法師等ほうしが云いわく此の宗は仏の頂いただきをふ
む大法だいほうなりというがごとし、而しかるを賢愛論師けんあいろんしと申せし

小僧あり彼をただすべきよし申せしかども王臣万民これをもちゐず、

結句は大慢が弟子等・檀那等に申しつけて無量の妄語をかまへて悪口

ちようちやく

打擲せしかども・すこしも命もをしまずののしりしかば帝王・賢愛を

にくみてつめさせんとし給いしほどにかへりて大慢がせめられたりしか

ば、大王・天に仰ぎ地に伏してなげひての給はく朕はまのあたり此の事

をきひて邪見をはらしめ先王はいかに此の者にたばらされて阿鼻地獄

にをはすらんと賢愛論師の御足にとりつきて悲涙せさせ給いしかば、

賢愛の御計いとして大慢を驢にのせて五竺に面をさらし給いければい

けんあい おんはから

けんあい ろんし

けんあい うま

けんあい たまい

けんあい

よいよ

悪心盛になりて現身に無間地獄に堕ちぬ、今の世の真言と禪宗等とは

こ

こ

こ

こ

こ

此れにかわれりや、漢土の三階禪師の云く教主釈尊の法華経は第一

第二階の正像の法門なり末代のためには我がつくれる普経なり法華経

しょうぞう

しょうぞう

しょうぞう

しょうぞう

しょうぞう

を今の世に行ぜん者は十方の大阿鼻獄に墮つべし、末代の根機にあたらざるゆへなりと申して、六時の礼懺・四時の坐禪・生身仏

のごとくなりしかば、人多く尊みて弟子万余人ありしかどもわづかの小女の法華經をよみしに・せめられて当坐には音を失い後には大蛇になりてそこばくの檀那弟子並びに小女処女等をのみ食いしなり、今の善導・法然等が千中無一の惡義もこれにて候なり、此等の三大事はすでに久くなり候へはいやしむべきにはあらねども申さば信ずる人もやありなん、これよりも百千万億倍・信じがたき最大の惡事はんべり、慈覺大師は伝教大師の第三の御弟子

なり・しかれども上一人より下万民にいたるまで伝教大師には勝れてをはします人なりとをもひり、此の人真言宗と法華宗の実義を極めさせ給いて候が真言は法華經には勝れたりとかかせ給へり、而るを叡山

さんぜん 三千人の大衆・日本一州の学者等・一同の帰伏の義なり、弘法の門人
等は大師だいしの法華經ほけきょうを華嚴經けこんきょうに劣るとかかせ給たまえるは、我がかたながら
も少し強きやうなれども、慈覺大師じかくだいしの釈をもつてをもうに真言宗しんこんしゅうの
法華經ほけきょうに勝すぐれたることは一定な

り、日本国にほんこくにして真言宗しんこんしゅうを法華經ほけきょうに勝まさると立つるをば叡山えいざんこそ強き
かたきなりぬべかりつるに慈覺じかくをもつて三千人の口をふさぎなば
真言宗しんこんしゅうはをもうごとし、されば東寺第一とうじだいいちのかたうど慈覺大師じかくだいしにはす
ぐべからず、例せば

浄土宗・禅宗は余国にてはひろまるとも日本国にしては延暦寺のゆる

されなからんには無辺劫はふとも叶うまじかりしを安然和尚と申す

叡山第一の古徳・教時諍論と申す文に九宗の勝劣を立てられたるに

第一・真言宗・第二・禅宗・第三・天台法華宗・第四・華嚴宗等云云、此の

大謬・釈につひて禅宗は日本国に充滿してすでに亡国とならんとは

するなり法然が念仏宗のはやりて一國を失わんとする因縁は慧心の

往生要集の序よりはじまれり、師子の身の中の虫の師子を食うと仏の

記し給うはまことなるかなや。

伝教大師は日本国にして十五年が間・天台・真言等を自見せさせ

給う生知の妙悟にて師なくしてさとらせ給いしかども、世間の不審をは

らさんがために漢土に亘りて天台・真言の二宗を伝へ給いし時漢土の

人人はやうやうの義ありしかども我が心には法華は真言にすぐれたり

ひとびと

と・をぼしめししゆへに真言宗の宗の名字をば削らせ給いて天台宗の止観・真言等かかせ給う、十二年の年分得度の者二人を・をかせ給い、重ねて止観院に法華經・金光明經・仁王經の三部を鎮護国家の三部と定めて宣旨を申し下し永代日本国の第一の重宝・神璽・宝劍・内侍所とあがめさせ給いき、叡山第一の座主・義真和尚第二の座主・円澄大師までは此の義相違なし、第三の慈覚大師・御入唐・漢土にわたりて十年が間・顯密二道の勝劣を八箇の大徳にならひつたう、又天台宗の人人広修・惟・等にならばせ給いしかども心の内にをぼしけるは真言宗は天台宗には勝れたりけり、我が師・伝教大師はいまだ此の事をばくはし

く習せ給わざりけり漢土に久しくもわたらせ給わざりける故に此の法門はあらうちに・をはしけるやと・をぼして日本国に帰朝し叡山東塔

止觀院しかんの西そうじいんに総持院そうじいんと申もうす大講堂だいこうどうを立て御本尊ごほんぞんは金剛界こんごうの大日如來だいにちにやらい。
此おんまえの御前おんまえにして大日經だいにちきようの善無畏ぜんむいの疏じよを本として金剛頂經こんごうちようきようの疏じよ七卷。
蘇悉地經そしつちきようの疏じよ七卷・已上十四卷をつくる、此じよの疏じよの肝心かんじんの釈いわに云く教
に二種有り一は顯示教おもえらさんじよう謂く三乗教せぞくなり世俗せぞくと勝義いまと未だ円融えんゆうせざる
故ゆえに、二は秘密教ひみつ謂く一乗教おもえらいちじようなり世俗せぞくと勝義いまと一体にして融ゆうする
故ゆえに、秘密教ひみつの中に亦二種有り一には理秘密りひみつの教諸もろもろの華嚴えん・般若維摩はんによ
法華ほつけ・涅槃ねはん等なり但

だ世俗せぞくと勝義しょうぎとの不二ふじを説いいて未だ真言密印しんごんみついんの事を説いかざる故ゆえに、二
には事理じり俱密ぐみつ教くわう謂おもく大日教だいにち・金剛頂經こんこうちやうきやう・蘇悉地經そしつちきやう等またなり亦世俗またせぞくと勝
義しょうぎとの不二ふじを説いき亦真言密印またしんごんみついんの事を説いく故ゆえに「等云云、釈しやくの心は
法華經ほけきやうと真言しんごんの三部さんぶとの勝劣しょうれつを定めさせ給たまうに真言しんごんの三部經さんぶきやうと法華
とは所詮しよせんの理りは同じく一念三千いちねんさんぜんの法門ほうもんなり、しかれども密印みついんと真言しんごん等
の事法じりは法華經ほけきやうかけてをはせず法華經ほけきやうは理秘密りひみつ・真言しんごんの三部經さんぶきやうは事理
俱密ぐみつなれば天地雲泥てんちうんでいなりとかかれたり、しかも此の筆は私の釈しやくにはあ
らず善無畏三藏ぜんむいさんざうの大日經だいにちきやうの疏じよの心なりと・をはせどもなをなを二宗の
勝劣しょうれつ不審ふしんにやありけん、はた又他人たにんの疑うたがいいをさんぜんとやをはしけ
ん、大師だいし覺きやくの伝でんに云いく天師二經だいしにきやうの疏じよを造つくり功こうを成せいし已畢おわつて心中しんちゆう
獨ひとり謂おもえらく此の疏じよ仏意ぶつゐに通とほずるや否いなや若もし仏意ぶつゐに通とほぜざれば世に
流る伝でんせじ仍よつて仏像ぶつざうの前に安置あんちし七日七夜

深誠を翹企し祈請を勤修す五日の五更に至つて夢らく正午に當つて
日輪を仰ぎ見弓を以て之を射る其の箭日輪に當つて日輪即転動す夢
覺めての後深く仏意に通達せりと悟り後世に伝うべし」等云云、慈覺
大師は本朝にしては伝教・弘法の兩家を習いきわめ異朝にしては八
大徳並に南天の宝月三蔵等に十年が間最大事の秘法をきわめさせ
給える上二經の疏をつくり了り重ねて本尊に祈請をなすに智慧の矢す
でに中道の日輪にあたりてうちをどろかせ
給い、歡喜のあまりに仁明天王に宣旨を申しそへさせ給い天台の座主
を真言の官主となし真言の鎮護國家の三部とて今に四百余年が間、
碩学稲麻のごとし渴仰竹葦に同じ、されば桓武・伝教等の日本国建立
の寺塔は一字もなく真言の寺となりぬ公家も武家も一同に真言師を召
して師匠とあをぎ官をなし寺をあづけ給ふ、仏事の木画の開眼供養は

はっしゅう
八宗一同に大日仏眼の印・真言なり。

疑うたがいつて云く法華經を真言に勝ると申す人は此の釈をばいかがせん

用うべきか又すつべきか、答う仏の未來を定めて云く法に依つて人に

依らざれ」竜樹菩薩の云く修多羅に依れるは白論なり修多羅に依ら

ざれば黒論なり」天台の云く復修多羅と合せば録して之を用ゆ文

無く義無きは信受すべからず」伝教大師云く仏説に依憑して

口伝くでんを信ずること莫なれ」等云云、此等これらの經論きようろん積しやくのごときんば夢を本もとに
はすべからずただついさして法華經ほけきようと大日經だいにちきようとの勝劣しょうれつを分明ふんみように説ときた
らん經論きようろんの文こそたいせちに候はめ、但印ただし・真言しんごんなくば木画もくえの像さうの
開眼かいげんの事・此れ又をこの事なり真言しんごんのなかりし已前いぜんには木画もくえの開眼かいげんはな
かりしか、天竺てんじく・漢土かんと・日本にほんには真言宗しんごんしゅう已前いぜんの木画もくえの像さうは・或あるは行き
・或あるは説法せつぽうし・或あるは御物語おんものがたりあり、印・真言しんごんをもて仏を供養くようせしより・この
かた利生りしやうもかたがた失うせたるなり、此れは常じやうの論談ろんだんの義なり、此の一事に
をひては但しただ日蓮にちれんは分明ふんみようの証拠しやうこを余所よそに引くべからず慈覺大師じかくだいしの御積おお
を仰あおいで信じて候なり。

問うて云く何いかにと信ぜらるるや、答えて云く此の夢の根源こんげんは真言しんごんは
法華經ほけきように勝まさると造定つくりめての御ゆめなり、此の夢吉夢じくむならば慈覺大師じかくだいしの
合せさせ給たまうがごとく真言勝しんごんまさるべし、但日輪にちりんを射るとゆめにみたるは

吉夢なりというべきか、内典ないてん五千・七千余卷外典げてんさんぜん三千余卷の中に日を

射るとゆめに見て吉夢なる証拠しょうこをうけ給たまわるべし、少少こ此れ

より出し申もうさん阿闍世王あじやせは天より月落るとゆめにみて耆婆ぎば大臣だいじんに合せ

させ給しかば大臣だいじん合せて云く仏の御入滅にゅうめつなり須拔多羅天しゅばつたらてんより日落る

とゆめにみる我とあわせて云く仏の御入滅にゅうめつなり、修羅しゅらは帝釈たいしやくと合戦の

時まづ日月をいたてまつる、夏の桀かのけつ・殷いんのちゆうの紂と申せし惡王あくおうは常に日をい

て身をほろばし国をやぶる、摩耶夫人まやふじんは日をはらむとゆめ

にみて悉達しつたたいし太子をうませ給たまう、かるがゆへに仏のわらわなをば日種とい

う、日本国にほんこくと申もうすは天照太神てんしやうだいじんの日天にってんにてましますゆへなり、されば此の

ゆめは天照太神てんしやうだいじん・伝教大師でんぎやうだいし・釈迦仏しやくかぶつ・法華經ほけきやうをいたてまつれる矢にてこ

そ二部の疏じよは候なれ、日蓮にちれんは愚癡ぐちの者なれば經論きやうろんもしらず但此の夢を

もつて法華經ほけきやうに真言しんごんすぐれたりと申もうす人は今生こんじやうには

国をほろぼし家を失ひ後生にはあび地獄に入るべしとはしりて候、今
現証あるべし日本国と蒙古との合戦に一切の真言師の調伏を行ひ候へ
ば日本かちて候ならば真言はいみじかりけりと・おもひ候なん、但し
承久の合戦にそこばくの真言師のいのり候しが調伏せられ給し権の
大夫殿はかたせ給い、後鳥羽院は隠岐の国御子の天子は佐渡

の嶋嶋じやうぶくへ調伏しやりまいらせ候いぬ、結句けつくは野干やかんのなきの身にをうなるやうに還著げんちやく於本人おほんにんの経文きやうもんにすこしもたがはず叡山えいざんの三千人さんぜんかまくらに・せめられて一同にしたがいはてぬ、しかるに今はかまぐらの世さかなるゆへに東寺とうじ・天台てんだい・園城おんじやう・七寺しちじの真言師等しんこんしと並びに自立をわすれたるほつげしゅう法華宗ほつげしゅうの謗法ぼうぼうの人人ひとびと・関東かんとうにをちくだりて頭こづべをかたぶけひざをかがめやうやうに武士ぶしの心をととりて、諸寺しよ・諸山しよざんの別当べつとうとなり長吏ちやうりとなりて王位うしなを失あいし悪法あくほうをとりいだして国土こくど安穩あんゐんといのれば、將軍家しやうぐん並びにな所従しよじゆうの侍已下いかは国土こくどの安穩あんゐんなるべき事なんめりとうちをもひて有あるほどに法華經ほけきやうを失うしなう大禍おほわざの僧どもを用もちいらるれば国定めてほろびなん、亡国ぼうこくのかなしき亡身のなげかしさに身命しんみやうをすてて此の事をあらわすべし、国主世こくしゅを持つべきならばあやしと・おもひてたづぬべきところにたださんげんのことばのみ用もちいてやうやうのあだをな

す、而るに法華經守護の梵天・帝釈・日月・四天地神等は古の謗法をば不思議とはをばせども此れをしれる人なければ一子の惡事のごとくうちゆるして、いつわりをろかなる時もあり又すこしつみしらする時もあり、今は謗法を用いたるだに不思議なるにまれまれ諫曉する人をかへりてあだをなす、一日

・二日・一月・二月・一年・二年ならず數年に及ぶ、彼の不輕菩薩の杖木の難に値いしにも・すぐれ覺徳比丘の殺害に及びしにもこえたり、而る間・梵釈の二王・日月・四天・衆星・地神等やうやうにいかり度度いさめらるれども・いよいよあだをなすゆへに天の御計いとして隣国の聖人にをほせつけられて此れをいましめ大鬼神を国に入れて人の心をたばらかし自界反逆せしむ、吉凶につけて瑞大なれば難多かるべきことわりにて仏滅後・二千二百三十余年

が間いまだいでざる大長星いまだふらざる大地しん出来せり、漢土・
日本に智慧すぐれ才能いみじき聖人は度度ありしかどもいまだ日蓮ほ
ど法華經のかたうどして国土に強敵多くまうけたる者なきなり、まづ
眼前の事をもつて日蓮は閻浮提第一の者としるべし、仏法・日本にわた
て七百余年一切經は五千・七千宗は八宗・十宗智人は稲麻のごとし
弘通は竹葦にいたり、しかれども仏には阿弥陀仏諸仏の名号には弥陀
の名号ほどひろまりてをはする

は候はず、此の名号を弘通する人は慧心は往生要集をつくる日本国
三分が一は一同の弥陀念仏者・永観は十因と往生講の式をつくる扶桑
三分が二分は一同の念仏者法然せんちやくをつくる本朝一同の念仏
者、而れば今の弥陀の名号を唱うる人人は一人が弟子にはあらず、此
の念仏と申すは雙観經・觀經・阿弥陀經の題名なり 権大乘經の題目
の広宣流布するは 実大乘經の題目の流布せんずる序にあらずや、心
あらん人は此れをすひしぬべし、権經流布
せば実經流布すべし 權經の題目流布せば実經の題目も又流布すべし、
欽明より当帝にいたるまで七百余年いまだきかずいまだ見ず南無
妙法蓮華經と唱えよと他人をすすめ我と唱えたる智人なし、日出でぬ
れば星かくる賢王来れば愚王ほろぶ 実經流布せば 權經のとどまり
智人南無妙法蓮華經と唱えば 愚人の此れに随はんこと影と身と声と

ひびき 響とのごとくならん、日蓮は日本第一の法華經の行者なる事あえて
疑ひなし、これをもつてすいせよ漢土月支にも一閻浮提の内にも肩を
ならぶる者は有るべからず。

問うて云く正嘉の大地しん文永の大彗星はいかなる事によつて出来
せるや答えて云く天台云く智人は起を知り蛇は自ら蛇を識る」等云
云、問て云く心いかん、答えて云く上行菩薩の大地より出現し給いた
りしをば弥勒菩薩・文殊師利菩薩觀世音菩薩藥王菩薩等の四十一品の
無明を断ぜし人人も元品の無明を断ぜざれば愚人といはれて寿量品
の南無妙法蓮華經の末法に流布せんずるゆへに、此の菩薩を召し出さ
れたるとはしらざりしという事

なり、問うて云く日本・漢土月支の中に此の事を知る人あるべしや、答
えて云く見思を断尽し四十一品の無明を尽せる大菩薩だにも此の事を

しらせ給たまはずいかにいわうや一毫の惑をも断だんぜぬ者どもの此の事を知るべきか、問うて云いく智人ちじんなくば・いかでか此これを対治たいじすべき例せば病

の所起を知らぬ人の病人を治いすれば人必ず死す、此の災の

根源こんげんを知らぬ人ひと人がいのりをなさば国まさひとびとに亡びん事疑うたがいなきか、あ

らあさましやあらあさましや、答えて云いく蛇じゃは七日が内の大だい雨をしり

烏は年中の吉凶きつぎようをしる此これ則すなち大竜の所従しよじゆう又久学のゆへか、日蓮にちれんは

凡夫ぼんぷなり、此の事

をしるべからずといえども汝等にはほこれとさん、彼の周の平王の時・禿かぶろにして裸なる者出現しゅつげんせしを辛有しんゆうといふし者うらなつて云く百年が内に世ほろびん同じき幽王の時山川さんせんくづれ大地ふるひき白陽と云う者勘えていはく十二年の内に大王事に値せ給うべし、今の大地震大長星等は國王・日蓮をにくみて亡国の法たる禪宗と念佛者と真言師をかたふどせらるれば天いからせ給いていださせ給うところの災難なり。

問うて云くなにをもつてか此れを信ぜん、答えて云く最勝王經に云く悪人を愛敬し善人を治罰するに由るが故に星宿及び風雨皆時を以て行われず」等云云、此の經文のごときんば此国に悪人のあるを王臣此れを歸依すという事疑いなし、又此の国に智人あり国主此れをにくみてあだすという事も又疑いなし、又云く『三十三天の衆威忿怒の心を生じ変怪流星墮ち二の日俱時に出で他方の怨賊来りて国

人喪乱に遭わん」等云云、すでに此の国に

天変あり地天あり他国より此れをせむ三十三天の御いかり有こと又

疑いなきか、仁王經に云く、諸の惡比丘多く名利を求め國王・太子・

王子の前に於て自ら破仏法の因縁・破国の因縁を説く其王別ずして信

じて此語を聴く」等云云、又云く「日月度を失い時節・叛逆し・或は

赤日出で・或は黒日出で・二三四五の日出で・或は日蝕して光無く・或は

日輪一重二重四五重輪現ず」等云云、文の心は惡比丘等・国に充満し

て國王・太子・王子等をたばらかして破仏法・破国の因縁をとかば其の

国の王等・此の人いたばらかされてをばすやう、此の法こそ持仏法の

因縁持国の因縁とをもひ此の言を・をさめてをこなうならば日月に變

あり大風と大雨と大火等出来し次には内賊と申して親類より・大兵乱

お

こり我がかたうどしぬべき者をば皆打ち失いて後には他国にせめられ
て・或は自殺し・或はいけどりにせられて・或は降人となるべし是れ偏に
仏法をほろぼし国をほろぼす故なり、守護経に云く、彼の釈迦牟尼
如来所有の教法は一切の天魔・外道惡人五通の神仙皆乃至少分をも
破壊せず而るに此の名相の諸の惡沙門皆悉く毀滅して余り有ること無
からしむ須弥山を假使三千界の中の草木を尽して薪と為し長時に
焚焼すとも一毫も損すること無し若し劫火

起りて火内うちよ従り生じ須臾しゆゆも焼滅しょうめつせんには灰燼かいじんをも余す無きが如ごとし」等云云、蓮華れんげめんきよう面經に云く、仏阿難あなんに告つげわく譬たとえば師子ししの命終みょうじゅうせんに若もしは空も若もしは地も若もしは水も若もしは陸しやう所有しやうの衆生しゆじやう敢あえてて師子ししの身みの穴にくを食くわらず唯ただ師子しし自みづから諸もろもろの虫むしを生みづかじて自みづから師子ししの穴にくを食くうが如ごとし阿難あなん我が之にくのぶつぼう仏法ぶつぼうは余よの能よく壞やぶるに非あらず是これ我法わがぼうの中ちゆうの諸もろもろの惡あく比丘びく我が三あそぎ大こ阿僧祇あそぎこ劫こ積あそぎこ行あそぎこ勤あそぎこ苦あそぎこし集あそぎこむる所あそぎこの仏法ぶつぼうを破やぶらん」等云云、經文きやうもんの心こころは過去かこの迦葉かしよう仏ぶつ釈迦しやか如來にやらいの末法まつぼうの事ことを訖哩きりき枳き王わうにかたらせ給たまい釈迦しやか如來にやらいのぶつぼう仏法ぶつぼうをばいかなるものぶつぼうがうしなうべき、大族だいぞく王わうの五天ごてんの堂舎どうしやを焼やき払はい十六じふ大國たいこくの僧尼そうにを殺ころせし漢土かんどの武宗ぶそう皇帝こうていの九國きゅうこくの寺塔じとう四千六百しよくはちひやく余所よじよを消滅しょうめつせしめ僧尼そうに二十六じふに萬まん五ご百ひやく人にんを還俗げんぞくせし等らのごとくなる惡人あくにん等らは釈迦しやかのぶつぼう仏法ぶつぼうをば失うしなうべからず、三衣さんねを身みにまとい一鉢いちぱつを頸けいにかけ八はち萬まん法藏ほうざうを胸むすうにうかべ十二じふに部經ぶきやうを口

にずうせん僧侶そうりよが彼の仏法ぶつぽうを失うしなうべし、譬たとへば須弥山しゅみせんは金の山なり
三千大千世界さんぜんだいせんせかいの草木そうもくをもつて四天六欲してんに充滿じゅうまんしてつみこめて一年・二
年百千万億年せんまんが間まやくとも一分いちぶんも損こずべからず、而しかるを劫火ごうかをこら
ん時須弥しゅみの根より豆

計ばかりの火いでて須弥山しゅみせんをやくのみならず三千大千世界さんぜんだいせんせかいをやき失うしなうべし、
若もし仏記ぶつきのごとくならば十宗・八宗はっしゅう・内典ないてんの僧等ぶつきようが仏教しゅみせんの須弥山しゅみせんをば
焼やき払はうべきにや、小乗しょうじようの俱舍ぐしや・成実じようじつ・律僧等りつそうが大乗だいじようをそねむ胸むねの
瞋しん恚には炎えんなり真言しんごんの善無畏ぜんむい・禅宗ぜんしゅうの三階等さんかい・浄土宗じようどしゅうの善導等ぜんどうは仏教ぶつきようの
師子ししの肉にくより出来しゅつたいせる蝗虫いなむしの比丘びくなり、伝教大師でんぎようだいしは三論さんろん・法相ほつそう・
華嚴等けごんの日本にほんの碩徳等せきとくを六虫ろくちゅうとかかせ給たまへり、日蓮にちれんは真言しんごん・禅宗ぜんしゅう・浄土じようど
等の元祖がんそを三虫さんちゅうとなづく、又天台宗てんだいしゅうの慈覚じかく・安然あんねん・慧心等えしんは法華經ほけきよう
伝教大師でんぎようだいしの師子ししの身みの中の三虫さんちゅうなり。

此等の大謗法の根源をただす日蓮にあだをなせば天神もをしみ地祇
もいからせ給いて災天も大に起るなり、されば心うべし一閻浮提第一の
大事を申すゆへに最第一の瑞相此れをこれり、あわれなるかなや・なげ
かしきかなや日本国の人皆無間・大城に堕ちむ事よ、悦しきかなや・
樂かなや不肖の身として今度心田に仏種をうえたる、いまにしもみよ
大蒙古国・数万艘の兵船をうかべて日本をせめば上一人より下万民に
いたるまで一切の仏寺一切

の神寺をばなげすてて各各声をつるべて南無妙法蓮華經・南無
妙法蓮華經と唱え掌を合せてたすけ給え、日蓮の御房日蓮の御房
とさけび候はんずるにや、例せば月支のいう大族王は幻日王に掌を
あはせ日本の宗盛はかぢわらをうやまう、大慢のものは敵に随うとい
う・このことわりなり、彼の輕毀大慢の比丘等は始めには杖木をととの
へて不輕菩薩を打ちしかども後には掌をあはせて失をくゆ提婆達多
は釈尊の御身に血をいだししかども臨終の時には南無と唱えたりき、
仏とだに申したりしかば地獄には墮つべからざりしを業ふかくして但
南無とのみとなへて仏とはいはず、今・日本国の高僧等も南無日蓮聖人
となえんとすとも南無計りにてやあらんずらんふびんふびん。
外典に曰く未萌をしるを聖人という内典に云く三世を知るを聖人
という余に三度のかうみようあり一には去し文応元年庚申七月十六日

りつしょうあんごくろん

さいみょうじ

に立正安国論を最明寺殿に奏したてまつりし時宿谷の入道に向つて

いわ

ぜんしゅう

ねんぶつしゅう

うしな

たま

云く禅宗と念仏宗とを失い給うべしと申させ給ひ此の事を御用いなき

云く

ぜんしゅう

ねんぶつしゅう

うしな

たま

云く禅宗と念仏宗とを失い給うべしと申させ給ひ此の事を御用いなき

ならば此の一門より事をこりて他国に

い

ぶんえい

さる

さえもののじょう

たま

去し文永八年九月十二日申の時に平左衛門尉に向つて云く日蓮は

い

ぶんえい

さる

さえもののじょう

たま

去し文永八年九月十二日申の時に平左衛門尉に向つて云く日蓮は

日本国の棟梁なり予を失なうは日本国の

は

し

ただ

じかいほんぎやくなん

た

柱樞を倒すなり、只今に自界反逆難とてどしうちして他国侵逼難とて

此の国の人人他国に打ち殺さるのみならず多くいけどりにせらるべし、

けんちやうじ

てくらく

だいぶつ

ちやうらくじ

いっさい

ねんぶつ

建長寺・寿福寺・極樂寺・大仏・長樂寺等の一切の念仏者・禅僧等が

寺塔をばやきはらいて彼等が頸をゆひのはまにて切らずば日本国必ず

じとう

かれら

か

ゆひ

はま

に

寺塔をばやきはらいて彼等が頸をゆひのはまにて切らずば日本国必ず

ほろぶべしと申し候了ぬ、第三には去年十一年四月八日

ほう

べし

お

わん

こ

ぞ

ほろぶべしと申し候了ぬ、第三には去年十一年四月八日

左衛門尉に語つて云く、王地に生れたれば身をば随えられたてまつる

さえもののじょう

か

た

い

お

お

左衛門尉に語つて云く、王地に生れたれば身をば随えられたてまつる

やうなりとも心をば随えられたてまつるべからず念仏の無間獄禅の

やう

なり

とも

心を

ば

随

やうなりとも心をば随えられたてまつるべからず念仏の無間獄禅の

やうなりとも心をば随えられたてまつるべからず念仏の無間獄禅の

やう

なり

とも

心を

ば

随

やうなりとも心をば随えられたてまつるべからず念仏の無間獄禅の

やうなりとも心をば随えられたてまつるべからず念仏の無間獄禅の

やう

なり

とも

心を

ば

随

やうなりとも心をば随えられたてまつるべからず念仏の無間獄禅の

やうなりとも心をば随えられたてまつるべからず念仏の無間獄禅の

やう

なり

とも

心を

ば

随

やうなりとも心をば随えられたてまつるべからず念仏の無間獄禅の

やうなりとも心をば随えられたてまつるべからず念仏の無間獄禅の

やう

なり

とも

心を

ば

随

やうなりとも心をば随えられたてまつるべからず念仏の無間獄禅の

やうなりとも心をば随えられたてまつるべからず念仏の無間獄禅の

やう

なり

とも

心を

ば

随

やうなりとも心をば随えられたてまつるべからず念仏の無間獄禅の

やうなりとも心をば随えられたてまつるべからず念仏の無間獄禅の

やう

なり

とも

心を

ば

随

やうなりとも心をば随えられたてまつるべからず念仏の無間獄禅の

やうなりとも心をば随えられたてまつるべからず念仏の無間獄禅の

やう

なり

とも

心を

ば

随

やうなりとも心をば随えられたてまつるべからず念仏の無間獄禅の

やうなりとも心をば随えられたてまつるべからず念仏の無間獄禅の

やう

なり

とも

心を

ば

随

やうなりとも心をば随えられたてまつるべからず念仏の無間獄禅の

やうなりとも心をば随えられたてまつるべからず念仏の無間獄禅の

やう

なり

とも

心を

ば

随

やうなりとも心をば随えられたてまつるべからず念仏の無間獄禅の

やうなりとも心をば随えられたてまつるべからず念仏の無間獄禅の

やう

なり

とも

心を

ば

随

やうなりとも心をば随えられたてまつるべからず念仏の無間獄禅の

天魔てんまの所為しよゐなる事は疑うたがひいなし、殊ことに真言宗しんごんしゅうが此この国土こくどの大なるわざ
はひにては候もちなり大蒙古もうこを調伏じょうぶくせん事真言師しんごんしには仰おほせ付けらるべから
ず若もし大事だいじを真言師しんごんし・調伏じょうぶくするならばいよいよいで此この国くにほろぶべ
しと申まをせしかば頼綱あみ問とうて云いくいつごろよせ候もちべき、予言いく経文きやうもんにはい
つとはみ候もちはねども天あめの御氣色みけしき

いかりすくなからず・きうに見へ候よも今生はすごし候はじと語りたりき、此の三つの大事は日蓮が申したるにはあらず只偏に釈迦如来の御神・我身に入りかわせ給いけるにや我が身ながらも悦び身にあまる法華經の一念三千と申す大事の法門はこれなり、經に云く所謂諸法如是相と申すは何事ぞ十如是の始の相如是が第一の大事にて候へば仏は世にいでさせ給う、智人は起をしる蛇みづから蛇をしるとはこれなり、衆流あつまりて大海となる微塵つもりて須弥山となれり、日蓮が法華經を信じ始めしは日本国には一・二微塵のごとし、法華經を二人・三人・十人・百千万億人・唱え伝うるほどならば妙覺の須弥山ともなり大涅槃の大海ともなるべし仏になる道は此れよりほかに又もとむる事なかれ。

問うて云く第二の文永八年九月十二日の御勘氣の時はいかにとして

我をそんなせば自他のいくさをこるべしとはしり給うや、答う大集經十に云く、若し復諸の刹利國王諸の非法を作し世尊の聲聞の弟子を悩亂し若しは以て毀罵し刀杖をもて打斫し及び衣鉢種種の資具を奪い若しは他の給施に留難を作す者有らば我等彼をして自然に卒に他方の怨敵を起さしめ及び自界の国土にも亦兵起り飢疫飢饉非時の風雨・鬭諍言訟譏謗せしめ、又其の王をして久しからずして復当に己れが国を亡失せしむべし」等云云、夫れ諸經に諸文多しといえども此の經文は身にあたり時にのぞんで殊に尊くをぼうるゆへにこれをせんしいます、此の經文に我等とは梵王と帝釈と第六天の魔王と日月と四天等の三界の一切の天竜等なり、此等の上主・仏前に詣して誓つて云く仏の滅後・正法・像法・末代の中に正法を行ぜん者を邪法の比丘等が国主にうつたへば王に近きもの王に心よ

せなる者・我がたつとしとをもう者のいうことなれば理不^{りふじん}尽に是^ぜ非^ひを
糾^{ただ}さず・彼の智^{ちじん}人をさんざんとはぢにをよばせなんどせば、其^{その}の故^{ゆえ}とも
なく其^その国^{こく}ににわか^{しゅ}に・大兵^{ひやうらん}乱^{らん}・出^{しゅつ}現^{げん}し後^ごには他^た国^{こく}に・せめらるべし
其^その国^{こく}主^{しゅ}もうせ其^その国^{こく}もほろびなんずととかれて候^{こう}、いたひとかゆきと
はこれなり、予^こが身^みには今^{こん}生^{じやう}にはさ^させる失^{とが}なし但^た国^{こく}をたすけんがため
生^{せい}国^{こく}の恩^{おん}をほうぜんと申^{まう}せし

を御用いもちなからんこそ本意ほんいにあらざるに、あまさ召めし出して法華經ほけきようの

第五の巻を懷かい中ちゆうせるをとりいだしてさんざんときいなみ、結句けつくはこう

ぢをわたしなんどせしもちば申もうしたりしなり、日月天にちがつに処しょし給たまいながら

日蓮にちれんが大難だいにんにあうを今度このたびかわらせ給たまはずば一つには日蓮にちれんが法華經ほけきようの

行者ぎようじやならざるか忽たちまちに邪見じやけんをあらたむべし、若し日蓮にちれん・法華經ほけきようの行者ぎようじやな

らば忽たちまちに国にしろしを見せ給たまへ若ししからずば今の日月等にちがつは釈迦しやか・多宝たぼう

・十方じゅうほうの仏をたぶらかし奉たてまつる大妄語もうごの人なり、提婆だいばが虚誑罪こおうざい・俱伽利くぎやり

が大妄語もうごにも百千万億倍せんまんすぎさせ給たまへる大妄語もうごの天なりと声をあげて

申せしかば忽たちまちに出来しゅつたいせる自界じかい・叛逆難はんぎやくなんなり、されば国土こくどいたくみだれば

我身わがみはいうにかひなき凡夫ぼんぶなれども御經たもを持ちまいらせ候そうろう・分育ぶんざいは

当世とうせには日本にほん第一だいいちの大人だいにんなりと申もうすなり。

問いうて云いく慢煩悩まんぼんのうは七慢・九慢・八慢あり汝なんじが大慢だいまんは仏教ぶつぎように明すと

ころの大慢だいまんにも百千万億倍せんまんすぐれたり、彼の徳光論師とくこうろんしは弥勒菩薩みろくぼさつを礼
せず・大慢婆羅門だいまんばらもんは四聖ししようを座とせり、大天だいてんは凡夫ぼんぷにして阿羅漢あらかんとなの
る無垢論師むくろんしが五天第一だいいちといひし、此等これらは皆阿鼻みなあびに墮おちぬ無間むげんの罪人ざいにんな
り汝なんじいかでか一閻浮提第一えんぶだいの智人ちじんとなのれる地獄じごくに墮おちざるべしやお
そろしおそろし、答えて云いく汝なんじは七慢・九慢・八慢等をばしれりや
大覺世尊だいかくせそんは三界第一さんがいだいいちとなのらせ給たまう
一切いっさいの外道げどうが云いく只ただ今天けふに罰せらるべし大地だいちわれて入りなんと、
日本国にほんこくの七寺・三百余人いが云いく最澄法師さいしやうほつしは大天だいてんが蘇生そせいか鉄腹てつぷくが再誕さいたん
か等云云しか、而しかりといえども天てんも罰せずかへて左右さうを守護しゆごし地もわれず
金剛こんごうのごとし、伝教大師でんぎやうだいしは叡山えいざんを立て一切衆生いっさいしゆじやうの眼目がんもくとなる結句けつく
七大寺ななだいじは落ちて弟子でしとなり諸国しよこくは檀那だんなとなる、されば現げんに勝すぐれたるを
勝すぐれたりという事は慢まんにて大功徳くどくなりけるか、伝教大師でんぎやうだいし云いく天台てんだい

法華宗の諸宗に勝れたるは所依の經に拠るが

故に自讃毀他ならず」等云云法華經第七に云く「衆山の中に須弥山こ

れ第一なり此の法華經も亦復かくの如し諸經の中に於て最もこれ其の

上なり」等云云、此の經文は已説の華嚴・般若・大日經等、今説の

無量義經、当説の涅槃經等の五千・七千月支竜宮・四王・天・☆利天

日月の中の一經尽十方界の諸經は土山・黒山・小鉄圀山・大鉄圀山

のごとし日本国にわたらせ給える法華經は須弥山のごとし。

又云く罷く是の經典を受持すること有らん者も、亦復是くの如し、

いっさいしじょう

一切衆生の中に於て亦これ第一なり」等云云、此の經文をもつて案ず

るに華嚴經を持てる普賢菩薩・解脫月菩薩等・竜樹菩薩・馬鳴菩薩・

法蔵大師・清涼国師・則天皇后・審祥大德・良弁僧正・聖武天皇・

深密・般若經を持てる勝義生菩薩・須菩提尊者・嘉祥大師・玄奘三蔵

・太宗・高宗・觀勒・道昭・孝德天皇、真言宗の大日經を持てる

金剛薩・竜猛菩薩・竜智菩薩・印生王・善無畏三蔵・金剛智三蔵・

不空三蔵・玄宗・代宗・慧果・弘法大師・慈覺大師、涅槃經を持てる

迦葉童子菩薩・五十二類・曇無讎三蔵、光宅寺の法雲南三・北七の十

師等よりも末代惡世の凡夫の一戒も持たず一闡提のごとくに人には思

はれたれども、經文のごとく已今當にすぐれて法華經より外は仏にな

はれたれども、經文のごとく已今當にすぐれて法華經より外は仏にな

はれたれども、經文のごとく已今當にすぐれて法華經より外は仏にな

はれたれども、經文のごとく已今當にすぐれて法華經より外は仏にな

はれたれども、經文のごとく已今當にすぐれて法華經より外は仏にな

はれたれども、經文のごとく已今當にすぐれて法華經より外は仏にな

はれたれども、經文のごとく已今當にすぐれて法華經より外は仏にな

はれたれども、經文のごとく已今當にすぐれて法華經より外は仏にな

る道なしと強盛に信じて而も一分の解なからん人人は、彼等の大聖に
は百千万億倍のまさりなりと申す經文なり、彼の人人は、或は彼の
經經に且く人を入れて法華經へうつさんがためなる人もあり、或は
彼の經に著をなして法華經へ入らぬ人もあり、或は彼の經經に留逗
のみならず彼の經經を深く執するゆへに法華經を彼の經に劣るとい
人もあり、されば今法華經の行者は心うべし、譬えば一切
の川流江河の諸水の中に海これ第一なるが如く法華經を持つ者も亦復
是くの如し、又衆星の中に月天子最もこれ第一なるが如く法華經を持
つ者も亦復是くの如し」等と御心えあるべし、当世・日本国の智人等は
衆星のごとし日蓮は満月のごとし。

問うて云く古へかくのごとくいえる人ありや、答えて云く伝教大師
の云く当に知るべし他宗所依の經は未だ最為第一ならず其の能く經

を持つ者も亦未だ第一ならず天台法華宗は所持の經最為第一なるが
故に能く法華を持つ者も亦衆生の中に第一なり、已に仏説に抛る豈
自歎ならんや」等云云、夫れ麒麟の尾につけるだにの一日に千里を飛ぶ
といふ、転王に随える劣夫の須臾に四天下をめぐるといふをば難ずべし
や疑うべしや、豈自歎哉の釈

は肝にめいずるか若し爾らば法華經を經のごとくに持つ人は梵王にも、
すぐれ帝釈にもこえたり、修羅を随へば須弥山をものになひぬべし竜をせ
めつかはば大海をもくみほしぬべし、伝教大師云く讃むる者は福を
安明に積み誇る者は罪を無間に聞く」等云云、法華經に云く經を
読誦し書持すること有らん者を見て輕賤憎嫉して結恨を懷か
ん乃至其の人命終して阿鼻獄に入らん」等云云、教主釈尊の金言ま
ことならば多宝仏の証明たがずば十方の諸仏の舌相一定ならば今
日本國の一切の衆生無間地獄に墮ちん事疑うべしや、法華經の八の
卷に云く君し後の世に於て是の經典を受持し読誦せん者は乃至諸願
虚しからず、亦現世に於て其の福報を得ん」又云く君し之を供養し
讚歎する」と有らん者は当に今世に於て現の果報を得べし」等云云、此
の二つの文の中に亦於現世・得其福報の八字・当於今世・得現果報の

八字・已上一六字の文むなしくして日蓮今生に大果報なくば如来の
金言は提婆が虚言に同じく多宝の証明は俱伽利が妄語に異ならじ、
謗法の一切衆生も阿鼻地獄に墮つべからず、三世

の諸仏もましまさざるか、されば我が弟子等心みに法華經のごとく
身命もおしまず修行して此の度仏法を心みよ、南無妙法蓮華經・南無
妙法蓮華經。

抑此の法華經の文に我身命を愛せず但無上道を惜しむ涅槃經
に云く譬えば王使の善能談論して方便に巧なる命を他国に奉るに
寧ろ身命を喪うとも終に王所説の言教を匿さざるが如し智者も亦
爾なり凡夫中に於て身命を惜まざるかならず大乘方等如来の秘藏一切
衆生に皆仏性有りと宣説すべし」等云云、いかやうな事のあるゆへに
身命をすつるまでにてあるやらん委細にうけ給わり候はん、答えて

云く予が初心しよしんの時の存念ぞんねんは伝教でんぎやう・弘法こうぼう・慈覚じかく・

智証等ちしようの勅宣ちよくせんを給たまひいて漢土かんとにわたりし事の我不愛身命がふあいしんみやうにあたれるか、

玄奘三蔵げんじやうさんざうの漢土かんとより月氏がつしに入りしに六生が間・身命しんみやうをほろぼししこれ

等ひじか、雪山童子せつせんどうじの半偈はんげのために身をなげ、薬王菩薩やくおうぼさつの七万二千歳せんざいが間・

臂ひじをやきし事かなんどももひしほどに経文きやうもんのごときんば此等これらにはあら

ず、経文きやうもんに我不愛身命がふあいしんみやうと申もうすは上に三類さんるいの敵人てきじんをあけて彼

等がのりせめ刀杖に及んで身命をうばうともみへたり、又涅槃經の文に寧喪身命等ととかれて候は次下の經文に云く「一闍提有り羅漢の像を作し空処に住し方等經典を誹謗す、諸の凡夫人見已つて皆眞の阿羅漢是れ大菩薩なりと謂わん」等云云、彼の法華經の文に第三の敵人を説いて云く「或は阿蘭若に納衣にして空閑に在つて乃至世に恭敬せらるること六通の羅漢の如き有らん」等云云、般泥☆經に云く羅漢に似たる一闍提有つて惡業を

行ず」等云云、此等の經文は正法の強敵と申すは惡王惡臣よりも外道魔王よりも破戒の僧侶よりも、持戒有智の大僧の中に大謗法の人あるべし、されば妙樂大師かいて云く第三最も甚し後後の者は轉識り難きを以ての故なり」等云云、法華經の第五の卷に云く此の法華經は諸仏如来の秘密の藏なり、諸經の中に於て最も其の上に在

り」等云云、此の經文きようもんに最もつとも在其上そのかみの四文あり、されば此の經文きようもんのご

ときば法華經ほけきようを一切經いっさいきようの頂いただきにありと

申もうすが法華經ほけきようの行者ぎやうじやにてはあるべきか、而しかるを又國王こくおうに尊重そんちようせらるる

ひとびと

人人ひとひとあまたありて、法華經ほけきようにまさりてをはする經經きようぎようましますと申もうす

人にせめあひ候そうらはん時、かの人は王臣おうしんに御歸依ごきえあり法華經ほけきようの行者ぎやうじやは

貧道ひんどうなるゆへに、

國くにこそつてこれをいやしみ候そうらはん時、不輕菩薩ふぎようぼさつのごとく

賢愛論師けんあいろんしが

ごとく申もうしつをらば身命しんみよくに及ぶべし、此これが第一だいいち

だいじ

の大事だいじなるべしとみへ候此この事は今の日蓮にちれんが身にあたれり、予ぶんざいが分齊ぶんざい

として弘法大師こうぼうだいし・慈覺大師じかくだいし・善無畏三藏ぜんむいさんざう・金剛智三藏きんごうちさんざう・不空三藏ふくうさんざうなど

を法華經ほけきようの強敵ごうてきなり經文きようもんまことならば無間地獄むげんじごくは疑うたがいなしなど申もうす

あかはだか

は裸形たいかいにて大火たいかに入るはやすし須弥しゆみを手にとてなげんはやすし大石だいしを

負たいかいうて大海たいかいをわたらんはやすし日本國にほんこくにして此この法門ほうもんを立てんは大事だいじ

なるべし云云。

靈山淨土の教主釈尊宝淨世界の多宝仏・十方分身の諸仏・地涌
千界の菩薩等梵釈・日月・四天等・冥に加之顕に助け給はずば一時一
日も安穩なるべしや。

◆四五

報恩抄ほうおん

日蓮之にちれんこれを撰す

293P

夫それ老狐ろうこは塚をあとにせず白亀はくきは毛宝もうほうが恩をほうず畜生ちくしやうすらかく
のごとしいわうや人倫じんりんをや、されば古いにしえへの賢者けんじや予讓よじやうといゐし者は剣をの
みて智伯が恩にあてこう演と申せし臣下しんかは腹をさひて衛えいの懿公いこうが肝きもを
入れたり、いかにいわうや仏教ぶつぎやうをならはん者父母ふぼ・師匠ししやう国恩をわするべ
しや、此の大恩をほうぜんには必ず仏法ぶつぽうをならひきはめ智者ちしやとならで
叶かなうべきか、譬たとへば衆盲をみちびかんには生盲いきめくらの身にては橋河きやうがをわたし
がたし方風を弁わきまえざらん

大舟は諸商しよを導きて宝山にいたるべしや、仏法ぶつぽうを習ならい極きわめんと・をもは
ば・いとまあらずば叶かなうべからず・いとまあらんと・をもはば父・母・

師匠・国主等に随いては叶うべからず是非につけて出離の道をわきまへ
ざらんほどは父母・師匠等の心に随うべからず、この義は諸人をもは
く頸にもはづれ冥にも叶うまじとをもう、しかれども外典の孝経にも
父母・主君に随はずして忠臣孝人なるやうもみえたり、内典の仏経に
云く 恩を棄て無為に入るは真実報恩の者なり」等云云、比干が王に
随わずして賢人のなをとり悉達太子の浄飯大王に背きて三界第一の孝
となりしこれなり。

かくのごとく存して父母・師等に随わずして仏法をうかがひし程に一代
聖教をさとるべき明鏡十あり、所謂る俱舍・成実・律宗・法相・三論
・真言・華嚴・浄土・禅宗・天台法華宗なり此の十宗を明師として
一切経の心をしるべし世間の学者等おもえり此の十の鏡はみな正直に
仏道の道を照せりと小乗の三宗はしばらくこれを・をく民の消息の

是非につけて他國へわたるに用なきがごとし、大乘の七鏡こそ生死の
大海をわたりて浄土の岸につく大船なれ

ば此を習いほどひて我がみも助け人をもみちびかんと・おもひて習ひみ
るほどに大乘の七宗いづれもいづれも自讃あり我が宗こそ一代の心は
えたれえたれ等云云、所謂華嚴宗の杜順・智儼・法蔵・澄観等、
法相宗の玄奘・

慈恩・智周・智昭等、三論宗の興皇・嘉祥等、真言宗の善無畏・
金剛智・不空・弘法・慈覺・智証等、禪宗の達磨・慧可・慧能等、
浄土宗の道綽・善導・懷感・源空等、此等の宗宗みな本經・本論によ
りて我も我も一切經をさとれり仏意をきはめたりと云云、彼の人人
云く一切經の中には華嚴經第一なり法華經・大日經等は臣下のごと
し、真言宗の云く一切經の中には大日經第一なり余經は衆星のごと
し、禪宗が云く一切經の中には楞伽經第一なり乃至余宗かくのごと
し、而も上に挙ぐる諸師は世間の人人・各各おもえり諸天の帝釈をう
やまひ衆星の日月に隨うがごとし我等凡夫はいづれの師師なりとも信
ずるならば不足あるべからず仰いでこそ信ずべけれども日蓮が愚案はれ
がたし、

世間をみるに各各・我も我もといへども国主は但一人なり二人となれ

ば国土こくどおだやかならず家に二の主あれば其の家必ずやぶる一切經いっさいきやうも又かくのごとくや有あるらん何いすれの經にてもをはせ一經いっさいきやうこそ一切經いっさいきやうの大王だいおうにてはをはすため、而しかるに十宗・七宗まで各各・諍論じやうろんして随したがはず国に七人・十人の大王だいおうありて万民ばんみんをだやかならじ・いかんがせんと疑うたがうところに一の願いを立つ我れ八宗・十宗に随したがはじ天台大師てんだいだいしの専もつら經文きやうもんを師しとして一代いちだいの勝劣しょうれつをかながへしがごとく一切經いっさいきやうを開きみるに涅槃經ねはんきやうと申す經に云く法よに依よつて人に依よらざれ」等云云依法えぼうと申すは一切經いっさいきやう・不依人ふえと申すは仏を除き奉たてまつりて外ほかの普賢ふげん菩薩ぼさつ・文殊師利菩薩もんじゆしりぼさつ乃至上いしにあぐるところの諸もろもろの人師にんしなり、此の經に又云く了義經りやうぎきやうに依よつて不了義經ふりやうぎきやうに依よらざれ」等云云、此の經に指すところ了義經りやうぎきやうと申すは法華經ほけきやう・不了義經ふりやうぎきやうと申すは華嚴經けこんきやう・大日經だいにちきやう・涅槃經ねはんきやう等の已今当いこんとうの一切經いっさいきやうなり、されば仏の遺言ゆいごんを信ずるならば専もつら

法華經ほけきようを明鏡めいきようとして一切經いつさいきようの心をばしるべきか。

随したがつて法華經ほけきようの文を開き奉たてまれば此この法華經ほけきようは諸經しよきようの中に於おいて最も

其その上に在あり」等云云此この經文きようもんのごとくば須彌山しゆみせんの頂いただきに帝釈たいしやくの居おるが

ごとく輪王りんかうの頂いただきに如意宝珠にょいほうじゆのあるがごとく衆木しゆぼくの頂いただきに月のやどる

がごとく諸仏しよぶつの頂いただきに肉髻にくけいの住せるがごとく此この法華經ほけきようは華嚴經けこんきよう・

大日經だいにくきよう・涅槃經ねはんきよう等の一切經いつさいきようの頂上ちようじやうの如意宝珠にょいほうじゆなり。

されば専ら論師・人師をすてて經文に依るならば大日經・華嚴經等に法華經の勝れ給えることは日輪の青天に出現せる時眼あきらかなる者の天地を見るがごとく高下宛然なり、又大日經・華嚴經等の一切經をみるに此の經文に相似の經文・一字・一点もなし、或は小乘經に對して勝劣をとかれ、或は俗諦に對して真諦をととき、或は諸の空仮に對して中道をほめたり、譬へば小国の王が我が国の臣下に對して大王というがごとし、法華經は諸王に對して大王等と云云、但涅槃經計りこそ法華經に相似の經文は候へされば天台已前の南北の諸師は迷惑して法華經は涅槃經に劣と云云、されども専ら經文を開き見るには無量義經のごとく華嚴・阿含・方等・般若等の四十余年の經經をあげて涅槃經に對して我がみ勝るとひとひて又法華經に對する時は是の經の出世は乃至法華の中の八千の声聞に記☆

を授くることを得て大菓実を成ずるが如き秋收冬藏して更に所作無
きが如し等と云云、我れと涅槃經は法華經には劣るととける經文な
り、かう經文は分明なれども南北の大智の諸人の迷うて有りし經文
なれば末代の學者能く能く眼をとどむべし、此の經文は但法華經・
涅槃經の勝劣のみならず十方世界の一切經の勝劣をもしりぬべし、
而るを經文にこそ迷うとも天台・妙樂・伝教大師の御れうけんの後
は眼あらん人人はしりぬべき事をかし、然れども天台宗の人たる慈覺・
智証すら猶此の經文にくらし・いわうや余宗の人人をや。
・或る人疑つて云く漢土・日本にわたりたる經經にこそ法華經に
勝たる經はをはせずとも月氏・竜宮・四王・日月・☆利天・都率天なん
どには恒河沙の經經ましますなれば其中に法華經に勝れさせ給う御
經やましますらん、答て云く一をもつて万を察せよ庭戸を出でずして

天下てんがをしるとはこれなり、癡人ちじんが疑うたがいつて云いわく我等われらは南天を見て東西
北の三空を見ず彼の三方の空に此の日輪にちりんより別べちの日やましますらん、
山さんを隔へだて煙の立つを見て火を見ざれば煙は

一定なれども火にてやなかるらん・かくのごとくいはん者は一闡提いつせんだいの人
としるべし生盲いきめくらにことならず、法華經ほけきようの法師品ほうししほんに釈迦しやか如来にょらい金口きんくの誠言せいげん
をもつて五十余年の一切經いっさいきやうの勝劣しょうれつを定めて云いく 我所說しよせつの經典きやうてんは無量むりやう
千万億せんまんにして

すでに既に説き今説き当に説ん而も其の中に於て此法華經は最も為
難信難解なり」等云云、此の經文は但釈迦如来・一仏の説なりとも
等覺已下は仰いで信すべき上・多宝仏・東方より來りて眞実なりと
証明し十方の諸仏集りて釈迦仏となく広長舌を梵天に付け給て後
・各各・国国へ還らせ給いぬ、已今当の三字は五十年並びに十方三世の
諸仏えの御經、一字一点ものこさず引き載せて法華經に對して説せ
給いて候を十方の諸仏・此座にして御判形を加えさせ給い各各又自國
に還らせ給いて我弟子等に向わせ給いて法華經に勝れたる御經ありと
説せ給はば其の所化の弟子
等信用すべしや、又我は見ざれば月氏・竜宮・四天・日月等の宮殿の中
に法華經に勝れさせ給いたる經や・おはしますらんと疑いをなすはさ
れば梵釈・日月・四天・竜王は法華經の御座にはなかりけるか、若し

にちがつ 日月等の諸天・法華經に勝れたる御經まします汝はしらずと仰せある
ならば大誑惑の日月なるべし、日蓮せめて云く日月は虚空に住し給へど
も我等が大地に処するがごとくして墮落し給はざる事は上品の不妄語
戒の力ぞかし、法華經に勝れたる

御經ありと仰せある大妄語あるならば恐らくはいまだ壞劫にいたらざる
に大地の上にどうとおち候はんか無間・大城の最下の堅鉄にあらず
ばとどまりがたからんか、大妄語の人は須臾も空に処して四天下を廻
り給うべからずとせめたてまつるべし、而るを華嚴宗の澄觀等真言宗
の善無畏・金剛智・不空・弘法・慈覺・智証等の大智の三蔵大師等の
華嚴經・大日經等は法華經に勝れたりと立て給わば我等が分齊には
及ばぬ事なれども大道理のをすところは豈諸仏の大怨敵にあらずや、
提婆・瞿伽梨もものならず大天・大慢・外にもとむべからず、かの人人

を信ずる輩やからはをそろしをそろし。

問て云く華嚴けこんの澄觀ちようかん・三論さんろんの嘉祥かじよう・法相ほつそうの慈恩じおん・真言しんごんの善無畏ぜんむい乃至・
弘法こうぼう・慈覺じかく・智証ちしよう等を仏の敵との給たまうか、答えて云く此大なる難なんなり
仏法ぶつぽうに入りて第一だいいちの大事だいじなり愚眼ぐがんをもつて經文きようもんを見るには法華經ほけきように
勝すぐれたる經ありといはん人は設たといかなる人なりとも謗法ぼうぽうは免まぬれじと見
えて候しか、而るを經文きようもんのごとく申もうすならば・いかでか此の諸人しよにん

仏敵ぶつてきたらざるべき、若し又恐をなして指し申さずは一切經いっさいきやうの勝劣しょうれつむな
しかるべし、又此人人ひとびとを恐れて末の人人ひとびとを仏敵ぶつてきといはんとすれば彼の宗
宗の末の人人ひとびとの云く法華經ほけきやうに大日經だいにくきやうをまさりたりと申すは我れ私の計
にはあらず祖師そしの御義おんぎなり戒行かいぎやうの持破じは・智慧ちえの勝劣しょうれつ・身の上下じやうげはあり
とも所學ほうもんの法門ほうもんはたがふ事なしと申せば彼人人ひとびとにとがなし、
又日蓮にちれんこ此れを知りながら人人ひとびとを恐れて申さずは寧喪身命ねいそうしんみやう・不匿教者ふわくきやうしゃ
の仏陀ぶつだの諫曉かんぎやうを用いぬ者となりぬ、いかんがせん・いはんとすれば世間せけん
をそろし止とすれば仏の諫曉かんぎやうのがれがたし進退しんたい此に谷り、むべなるかな
や、法華經ほけきやうの文に云く而しかも此經は如来にょらいの現在げんざいにすら猶怨嫉多し
況んや滅度めつどの後をや」又云く一切世間怨多いっさいせけんあだおほくして信じ難がたし等云云、
釈迦仏しゃかぶつを摩耶夫人まやふじんはらませ給たまひいたりければ第六天だいろくてんの魔王まおう・摩耶夫人まやふじんの
御腹みはらをとをし見て我等われらが大怨敵おんてき・

法華經ほけきょうと申もうす利劍りけんをはらみたり事の成なりぜぬ先にいかにしてか失うしなうべき、

第六天だいろくてんの魔王まおう・大医だいと變かはじて淨飯王宮じょうばんおうぐうに入り御産安穩あんのんの良藥りょうやくを

もちそうろう

持候もちそうろう大医ありとののしりて毒どくを后きさきにまいらせつ、初生しよしやうの時は石いしをふ

らし乳ちちに毒どくをまじへ城いを出いでさせ給たまいしには黒くろき毒蛇どくじやと變かはじて道みちにふさ

がり乃な至提婆瞿伽利波瑠璃王阿闍世王等あくじんの惡人あくにんの身みに入りて、或あるは大

石いしをなげて仏おんみの御身おんみより血ちをいだし、或あるは釈子せきしをころし、或あるは御弟子等おんでし

を殺ころす、此等これらの大難だいなんは皆遠みなくは法華經ほけきょうを仏せそん・世尊せそんに説せかせまいらせじと

たばかりし如來にやらいげんさい現い在げん猶多怨嫉ゆたおんしつの大難だいなんぞかし、此等これらは遠なんき難なんなり近なんき難なん

には

舍利弗しやりほつ・目連もくれん・諸大菩薩等しよだいぼさつも四十余年よんじゅうよねんが間まは法華經ほけきょうの大怨敵おんてきの内うちぞか

し、況滅度後きやうめつどごと申もうして未來みらいの世よには又此の大難だいなんよりもすぐれてをそろ

しき大難だいなんあるべしととかれて候さう、仏だいなんだにも忍しのびがたかりける大難だいなんをば

凡夫ほんぶはいかでか忍しのぶべきいわうや在世ざいせより大なる大難だいなんにてあるべかな
り、いかなる大難だいなんか提婆だいばが長三丈たけひろさ広一丈六尺じようろくの大石・阿闍世王あじゃせの醉象
にはすぐべきとはおもへども彼かしこにもすぐるべく候なれば小失なくとも
大難だいなんに度度たびたび値う人をこそ滅後めつごの法華經ほけきようの行者ぎようじやとはしり候はめ、付法蔵
の人人ひとびとは四依しえの菩薩ぼさつ・仏おんつかいの御使みつかいなり提婆菩薩だいばぼさつは外道げどうに殺され師子尊者しそんじや
は檀弥羅王だんみらに頭こうべを刎はねられ仏陀密多ぶつだ・竜樹菩薩りゅうじゅぼさつ等は赤幡あかきはたを七年十二
年さしとをす馬鳴菩薩めみようぼさつは金錢三億めみようぼさつがかわりとな

り如意論師は・おもひじにに死す。

此れ等は正法一千年の内なり、像法に入つて五百年・仏滅後・一千五百年と申せし時漢土に一人の智人あり始は智・後には智者大師とがうす、法華經の義をありのままに弘通せんと思ひ給しに天台已前の百千万の智者しなじなに一代を判ぜしかども詮して十流となりぬ所謂南三・北七なり十流ありしかども一流をもて最とせり、所謂

南三の中の第三の光宅寺の法雲法師これなり、此の人は一代の仏教を五にわかつ其の五の中に三經をえらびいだす、所謂華嚴經・涅槃經・法華經なり一切經の中には華嚴經第一・大王のごとし涅槃經第二・撰政・閔白のごとし第三法華經は公卿等のごとし此れより已下は万民のごとし、此の人は本より智慧かしこき上・慧觀・慧嚴・僧柔・慧次なんど申せし大智者より習ひ伝え給るのみならず南北の諸師の義をせめや

ぶり山林さんりんにまじわりて法華經ほけきよう・涅槃經ねはんきよう・

華嚴經けこんきようの功こうをつもりし上・梁りやうの武帝ぶてい召し出して内裏だいりの内に寺を立て光宅こうたく

寺となづけて此この法師ほつしをあがめ給う、法華經ほけきようをかうぜしかば天より花

ふることに在世ざいせのごとし、天璽てんかん五年に大旱魃かんぱつありしかば此この法雲法師ほううんほつしを

請しょうじ奉りて法華經ほけきようを講こうぜさせまいらせしに藥草やくそう喻品ゆひんの其雨こいう普等ふとう・

四方しほう俱下くげと申す二句を講こうぜさせ給たまいし時・天より甘雨かんう下たりしかば

天子てんし御感ぎよかんのあまりに現げんに僧正そうじようになしまいらせて諸天しよてんの帝釈たいしやくにつかえ

万民ばんみんの国王こくおうを・をそるるがごとく我とつかへ

給たまいし上・或人ある夢ゆめみら此人は過去かこの灯明仏の時より法華經ほけきようをかうぜる人

なり、法華經ほけきようの疏じよ四卷あり此この疏じよに云く此經こきやう未だ碩然せきねんならず」亦また云く

異いの方便ほうべん」等云云、正まさく法華經ほけきようはいまだ仏理をきわめざる經と書かれ

て候、此の人の御義おんぎ仏意ぶつゐに相ひ叶ひ給たまいければこそ天より花も下り雨あめ

もふり候けらめ、かかるいみじき事にて候しかば漢土の人人

さては法華經ほけきようは華嚴經けこんきよう・涅槃經ねはんぎようには劣にてこそあるなれと思ひし上・

新羅しらぎ・百濟くだら・高麗こま日本にほんまで此この疏じよひろまりて大体だいたい一同の義にて候しに

法雲法師ほううんほつし御死去しきよありていくばくならざるに梁りやうの末・陳の始に智☆法師ちぎほつし

と申す小僧もう出来こぞうしゅつたいせり、南岳大師なんがくだいしと申せし人の御弟子おんでしなりしかども師の

義ふしんも不審ふしんにありけるかのゆへに一切經藏いっさいきやうに入つて度度たびたび御らん

ありしに華嚴經・涅槃經・法華經の三經に詮じいだし此の三經の中に殊に華嚴經を講じ給いき、別して礼文を造りて日に功をなし給いしかば世間の人もわく此人も華嚴經を第一とおぼすかと思えしほどに法雲法師が一切經の中に華嚴第一・涅槃第二・法華第三と立てたるがあまりに不審なりける故にことに華嚴經を御らんありけるなり、かくて一切經の中に法華第一・涅槃第二・華嚴第三と見定めさせ給いてなげき給うやうは如来の聖教は漢土に

わたれども人を利益することなしかへりて一切衆生を惡道に導びくこと人師の☆により、例せば国の長とある人東を西といふ天を地といふいだしぬれば万民はかくのごとくに心うべし、後にいやしき者出来して汝等が西は東汝等が天は地なりといはば・もちうることなき上・我が長の心に叶わんがために今の人をのりうちなんとすべいかんがせん

とはおぼせしかども・さてもだすべきにあらねば光宅寺こうたくじの法雲法師ほううんほつしは
謗法ぼうぼうによつて地獄じごくに墮おち

ぬとののしられ給う、其の時南北そのときの諸師しよしはちのごとく蜂起ほうきし・からすの
ごとく烏合うごうせり、智ち☆法師ほつしをば頭てうべをわるべきか国を・をうべきかなんど
申せし程に陳主ちんしゅこ此れをきこしめして南北の數人に召し合せて我と列座れつざ
してきかせ給いき、法雲法師ほううんほつしが弟子等でしの慧栄えい・法歳ほうさい・慧曠えこう・慧え☆なんど
申せし僧正そうじよう・僧都そうず・已上ひとびとの人人百余人なり各各惡口あくぐちを先とし眉をあげ
眼をいからし手をあげ柏子ひやうしをたたく、而れども智ち☆法師ほつしは末座まつざに坐し
て色を変ぜず言を☆らず威儀いぎ

しづかにして諸僧しよそうの言を一一に牒ちようをとり言ごとにせめかえす、をしかへ
して難なんじて云く抑いふも法雲法師ほううんほつしの御義おんぎに第一華嚴だいいちけこん・第二涅槃ねはん・第三
法華ほつけと立させ給いける証文しょうもんは何れの経いすれぞ慥たしかかに明かなる証文しょうもんを出だ

させ給えとせめしかば各各頭をうつぶせ色を失いて一言の返事なし。

重ねてせめて云く無量義經に正しく次説方等十二部經・摩訶般若・

華嚴海空等云云、仏・我と華嚴經の名をよびあげて無量義經に對して

未顕真実と打ち消し給う法華經に劣りて候・無量義經に華嚴經はせめ

られて候ぬいかに心えさせ給いて華嚴經をば一代第一とは候けるぞ各

各・御師の御かたうどせんと・をばさば此の經文をやぶりて此れ

に勝れたる經文を取り出だして御師の御義を助け給えとせめたり。

又涅槃經を法華經に勝ると候けるは・いかなる經文ぞ涅槃經の第

十四には華嚴・阿含・方等・般若をあけて涅槃經に対して勝劣は説れて

候へどもまつたく法華經と涅槃經との勝劣はみへず、次上の第九の卷に

法華經と涅槃經との勝劣分明なり、所謂經文に云く、是の經の出世

は乃至法華の中の八千の声聞・記☆を受くることを得て大菓実を成ず

るが如き秋・収・冬・蔵して更に所作無きが如し」等云云、經文明に諸經

をば春夏と説かせ給い涅槃經と法華經とをば菓実の位とは説かれて候

へども法華經をば秋・収・冬・蔵の大菓実の位・涅槃經をば秋の末・冬の始

☆拾の位と

定め給いぬ、此の經文正く法華經には我が身劣ると承伏し給いぬ、

法華經の文には已説・今説・当説と申して此の法華經は前と並との

経経きやうぎやうに勝すくれたるのみならず後に説きかん経経きやうぎやうにも勝まさるべしと仏定め給たまう、すでに教主釈尊きやうしゆしやくそんかく定め給たまいぬれば疑うたがいうべきにあらねども我が滅後めつごはいかんと疑うたがいいおぼして東方宝浄世界とうほうほうじうせかいの多宝仏たほうぶつを証人に立たて

給たまいしかば多宝仏大地たほうぶつだいちよりをどり出いでて妙法華経みやうほけきやう・皆是真実かいせしんじつと証しじゅつぽうふんじんの諸仏重しよぶつかさねてあつまらせ給たまい広長舌こうちやうぜつを大梵天ぼんてんに付け又教主釈尊きやうしゆしやくそんも付け給たまう、然しかして後・多宝仏たほうぶつは宝浄世界ほうじうせかいえかへり十方じゅつぽうの諸仏各各本土ほんどにかへらせ給たまいて後・多宝分身たほうふんじんの仏もおはせざらんに教主釈尊きやうしゆしやくそん・涅槃経ねはんぎやうをといて法華経ほけきやうに勝まさると仰おほせあらば御弟子等おんでしは信しんぜさせ給たまうべしやとせめしかば日月にちがつの大光明どうみやうの修羅しゆらの眼まなこを照てららすのごとく漢王の劍しよの諸侯しよの頸けいにかかりしがごとく両眼りやうげんをとち一頭うなだを低うなだれたり、天台大師てんだいだいしの御氣色みけしきは師子王ししの狐兔ことの前に吼ほえた

るがごとし鷹鷲たかの鳩雉わしをせめたるにいたり、かくのごとくありしかばさては法華經ほけきょうは華嚴經けこんきょう・涅槃經ねはんきょうにも・すぐれてありけりと震旦しんたん一國に流布るふするのみならず・かへりて五天竺てんじくまでも聞が月氏しだいしやう大小の諸論しよも智者ちしや大師だいしの御義おんぎには勝すぐれず教主釈尊きやうしゆしやくそん・兩度出現しゆつげんしまするか仏教ぶつぎやう二度あらはれぬとほめられ給たまいしなり。

其その後天台大師てんだいだいしも御入滅にやうめつなりぬ陳隋ちんすいの世も代わりて唐とうの世となりぬ章安大師しやうあんだいしも御入滅にやうめつなりぬ、天台てんだいの佛法ぶつぽうやうやく習ならい失なせし程に唐とうの太宗たいそうの御宇ぎやうに玄奘げんじやう三藏さんざうといふし人・貞觀じやうかん三年に始めて月氏がしに入りて同十九年にかへりしが月氏がしの佛法ぶつぽう尋ね尽つくして法相宗ほうそうしゆと申もうす宗をわたす、此の宗は天台宗てんだいしゆと水火すいかなり而しかるに天台てんだいの御覽みかんなかりし深密經じんみつ・瑜伽論ゆがいろん・唯識論ゆいしきろん等をわたして法華經ほけきょうは一切經いっさいきやうには勝すぐれたれども深密じんみつには劣ちえるという、而しかるを天台てんだいは御覽みかんなかりしかば天台てんだいの末學まつがく等は智慧ちえの

薄きかのゆへにさもやとおもう、又太宗は賢王なり玄奘の御帰依あさからず、いう

べき事ありしかどもいつもの事なれば時の威をおそれ申す人なし、

法華經を打ちかへして三乘眞実・一乘方便・五性各別と申せし事は心

うかりし事なり、天竺よりはわたれども月氏の外道が漢土にわたれる

か法華經は方便・深密經は眞実といふしかば釈迦・多宝・十方の諸仏の

誠言もかへりて虚くなり玄奘・慈恩こそ時の生身の仏にてはありしか。

其後則天皇后の御宇に天台大師に・せめられし華嚴經に又重ねて

新訳の華嚴經わたりしかば、さきのいきどをりをはたさんがために新訳

の華嚴をもつて天台に・せめられし旧訳の華嚴經を扶けて華嚴宗と

申す宗を法蔵法師と申す人立てぬ、此の宗は華嚴經をば根本法輪

法華經をば枝末法輪と申すなり、南北は一華嚴・二涅槃・三法華・

てんだいだいし
天台大師は一法華・二涅槃・三華嚴・今の華嚴宗は一華嚴・二法華・三
涅槃等云云。

其の後玄宗皇帝の御宇に天竺より善無畏三蔵は大日經・蘇悉地經を
わたす、金剛智三蔵は金剛頂經をわたす、又金剛智三蔵の弟子あり
不空三蔵なり、此の三人は月氏の人・種姓も高貴なる上・人がらも漢土
の僧ににず法門もなにとはしらず後漢より今にいたるまでなかりし印
と真言という事をあひそいてゆゆしかりしかば天子かうべをかたぶけ
ばんみんななごころ
万民掌をあわす、此の人人の義にいわく華嚴・深密・般若・涅槃・
法華經等の勝劣は顯教の内・釈迦如来

の説の分なり、今の大日經等は
大日法王の勅言なり彼の經經は民の
万言・此經は天子の一言なり、華嚴經・涅槃經等は
大日經には梯を立
ても及ばず但法華經計りこそ大日經には相似の經なれ、されども彼の

經は釈迦しやか如来にょらいの説・

民の正言・此の經は天子の正言なり言は似れども人がら雲泥なり、譬へば濁水の月と清水の月のごとし月の影は同じけれども水に清濁ありな
んど申しければ、此の由尋ね顯す人もなし諸宗皆落ち伏して真言宗
にかたぶきぬ、善無畏・金剛智・死去の後・不空三藏又月氏にかへりて
菩提心論と申す論をわたしいよいよ真言宗盛りなりけり、
但し妙樂大師といふ人あり天台大師よりは二百余年の後なれども
智慧かしこき人にて天台の所釈を見明めてありしかば天台の釈の心は
後にわたれる深密經・法相宗又始めて漢土に立てたる華嚴宗・大日經
・真言宗にも法華經は勝れさせ給いたりけるを、或は智のをよばざる
か・或は人に畏るるか・或は時の王威をおづるかの故にいはざりけるか、
かくてあるならば天台の正義すでに失なん、又陳隋已前の南北が邪義
にも勝れたりとおぼして三十卷の末文

を造り給う所謂弘決・釈籤・疏記これなり、此の三十卷の文は本書の重なれるをけづり・よわきをたすくるのみならず天台大師の御時なかりしかば御責にものがれてあるやうなる法相宗と華嚴宗と真言宗とを一時にとりひしがれたる書なり。

又日本国には人王第三十代欽明天皇の御宇十三年壬申十月十三日に百濟国より一切經・釈迦仏の像をわたす、又用明天皇の御宇に聖徳太子仏法をよみはじめ和氣の妹子と申す臣下を漢土につかはして先生所持の一卷の法華經をとりよせ給いて持經と定め、其の後人王第三十七代孝徳天王の御宇に三論宗・華嚴宗・法相宗・俱舍宗・成実宗わたる、人王第四十五代に聖武天王の御宇に律宗わたる已上六宗なり、孝徳より人王五十代の桓武天皇にいたるまでは十四代一百二十余年が間は天台・真言の二宗なし、桓武の御宇に最澄と申す小僧

あり山階寺やましなでらの行表ぎょうひょう僧正そうじょうの御弟子おんでしなり、法相宗ほうそうしゅうを始めとして六宗ろくしゅうを

習ならいきわめぬ而しかれども仏法ぶつぽういまだ極きわめたりともおぼえざりし

に華嚴宗けこんしゅうの法蔵法師ほうざうほふしが造つくりたる起信論きしんろんの疏じょを見給たまうに天台大師てんだいだいしの釈しやくを

引きのせたり此この疏じょこそ子細しさいありげなれ此この国くにに渡わたりたるか又またいまだ

わたらざるかと不審ふしんありしほどに有人あるひとにとひしかば其その人の云いわく大唐だいしやう

の揚州竜興寺

の僧鑒真和尚は天台の末学道遍律師の弟子天宝の末に日本国にわたり
給いて小乗の戒を弘通せさせ給いしかども天台の御釈持来りなが
らひろめ給はず人王第四十五代聖武天王の御宇なりとかたる、其の書
を見んと申されしかば取り出だして見せまいらせしかば一返御らんあ
りて生死の醉をさましつ此の書をもつて六宗の心を尋ねあきらめしか
ば一一に邪見なる事あらはれぬ、忽に願を發て云く日本国の人皆、
謗法の者の檀越たるが天下一定

乱れなんずとおぼして六宗を難ぜられしかば七大寺・六宗の碩学蜂起
して京中烏合し天下みなさわぐ、七大寺・六宗の諸人等惡心強盛な
り、而るを去ぬる延暦二十一年正月十九日に天王高雄寺に行幸あつ
て七寺の碩德十四人善議・勝猷・奉基・寵忍・賢玉・安福・勤操・
修円・慈誥・玄耀・歳光・道証・光証・觀敏等の十有余人を召し合はす、

華嚴・三論・法相等の人人・各各・我宗の元祖が義にたがはず最澄上人
は六宗の人人の所立・一一に牒を取りて本經・本論・並に諸經諸論
に指し合わせてせめしかば一言も答えず口をして鼻のごとくになりぬ、
天皇をどろき給いて委細に御たづねありて重ねて勅宣を下して十四人
をせめ給いしかば承伏の謝表を奉りたり、其書に云く、七箇の大寺・
六宗の学匠乃至初て至極を悟る」等云云又云く、聖徳の弘化より以降
今に二百余年の間、講ずる所の經論其数多し、彼此理を争うて其の
疑未だ解けず而も此の最妙の円宗猶未だ闡揚せず」等云云、又云く
『三論法相・久年の諍渙焉と

して氷の如く解け照然として既に明かに猶雲霧を披いて三光を見るが
ごとし」云云、最澄和尚十四人が義を判じて云く、各一軸を講ずるに
法鼓を深壑に振い寶主三乗の路に徘徊し義旗を高峰に飛す長幼三有

の結を摧破さいはして猶未なおいまだ歴劫りやつうの轍てつを改めず白牛びやくぐしを門外もんがいに混まぜず、豈あに善ぜんく初はつ発はつの位ゐに昇あり阿茶あだを宅内たくないに悟さとらんや」等云云、弘世真綱ひろよますな二人ふにんの臣下しんか云いく「靈山りやうぜんの妙法みやうほうを南岳なんがくに聞きき総持そうぢの妙悟みやうこを天台てんだいに關ひらく一乘いちじやうの權滯ごんたいを慨なげき三諦さんたいの未顯みけんを悲かなしむ」等云云、又十四人しじふにんの云いく「善議ぜんぎ等ひか牽ひれて休やす運おに逢あて乃すなわち奇詞きしを聞きす深期しんこに非あらざるよりは何ぞ聖世なんに託たくせんや」等云云、此この十四人しじふにんは華嚴宗けこんしやうの法藏ほうざう・審祥しんじやう・三論宗さんろんしやうの嘉祥かじやう・觀勒かんろく・法相宗ほうさうしやうの慈恩じおん・道昭どうしやう・律宗りつしやうの道宣どうせん・鑒真かんじん等の漢土かんと・日本にほん元祖がんそ等の法門ほうもん・

瓶はかはれども水は一なり、而るに十四人彼の邪義をすてて伝教の
法華經に歸伏しぬる上は誰の末代の人か華嚴・般若・深密經等は
法華經に超過せりと申すべきや、小乗の三宗は又彼の人人の所学な
り大乘の三宗破れぬる上は沙汰のかぎりにあらず、而るを今に子細を
知らざる者六宗はいまだ破られずと・をもへり、譬へば盲目が天の日月
を見ず聾人が雷の音をきかざるゆへに天には日月なし空に声なしと
をもうがごとし。

真言宗と申すは日本・人王第四十四代と申せし元正天皇の御宇に
善無畏三蔵・大日經をわたくして弘通せずして漢土へかへる、又玄・等
大日經の義釈十四卷をわたくす又東大寺の得清大徳わたくす、此等を
伝教大師御らんありてありしかども大日經・法華經の勝劣いかながと
おぼしけるほどにかたがた不審ありし故に去る延暦二十三年七月御

入唐西明寺の道邃和尚・仏滝寺の行滿等に値い奉りて止観円頓の大戒

を伝受し靈感寺の順暁和尚に値い奉り

て真言を相伝し同延暦二十四年六月に帰朝して桓武天王に御対面・

宣旨を下して六宗の学生に止観・真言を習はしめ同七大寺にをかれ

ぬ、真言・止観の二宗の勝劣は漢土に多く子細あれども又大日經の

義釈には理同事勝とかきたれども伝教大師は善無畏三蔵のあやまり

なり、大日經は法華經には劣りたりと知しめして八宗とはせさせ給は

ず真言宗の名をけづりて法華宗の内に入れ七宗となし大日經をば

法華天台宗の傍依經となして華嚴・大品・般若・

涅槃等の例とせり、而れども大事の円頓の大乘別受戒の大戒壇を我が

国に立う立じの諍論がわずらはしきに依りてや真言・天台の二宗の

勝劣は弟子にも分明にをしえ給わざりけるか、但依憑集と申す文に

まさしく真言宗しんこんしゅうは法華天台宗ほつけてんだいしゅうの正義せいぎを偷ぬすみとりて大日經だいにちきょうに入れて理同りどうとせり、されば彼の宗てんだいしゅうは落ちたる宗そうなり、いわうや不空ふくう三藏さんざうは善無畏ぜんむい・金剛智こんごうち入滅にゅうめつの後がっし・月氏がっしに入りてありしに竜智菩薩ぼさつに値あい奉りたてまつし時がっし・月氏がっしには仏意ぶつゐをあきらめたる論釈ろんしゃくなし、漢土かんとに天台てんだいという人の釈じやせいこそ邪正じゃせいをえらび偏円へんえんをあきらめたる文にては候なれ、あなかしこ・あなかしこ・月氏がっしへ渡わたし給たまえとねんごろにあつらへし事を不空ふくうの弟子でし含光こんこうといゐし者が妙樂大師みょうらくだいしにかたれるを記の十の末に

引き載せられて候をこの依憑集に取り載せて候、法華經に大日經は劣
るとしろしめす事伝教大師の御心顯然なり、されば釈迦如来、
天台大師・妙樂大師・伝教大師の御心は一同に大日經等の一切經の
中には法華經はすぐれたりという事は分明なり、又真言宗の元祖と
いう竜樹菩薩の御心もかくのごとし、大智度論を能く能く尋ぬるなら
ば此の事分明なるべきを不空があらやまれる菩提心論に皆人ばかされて
此の事に迷惑せるか。

又石淵の勤操僧正の御弟子に空海と云う人あり後には弘法大師と
がうす、去ぬる延暦二十三年五月十二日に御入唐、漢土にわたりて
は金剛智・善無畏の両三蔵の第三の御弟子慧果和尚といふし人に両界
を伝受し大同二年十月二十二日に御帰朝平城天王の御宇なり、桓武
天王は御ほうぎよ平城天王に見参し御用いありて御帰依・他にことな

りしかども平城^{へいぜい}ほどもなく嵯峨^{さが}に世をとられさせ給^{たまひ}いしかば弘法^{こうぼう}ひき
入れてありし程に伝教大師^{でんぎょうだいし}は嵯峨天王^{さがが}

の弘仁十三年六月四日御入滅^{にゅうめつ}、同じき弘仁十四年より弘法大師^{こうぼうだいし}・主の

御師^{おんし}となり真言宗^{しんこんしゅう}を立てて東寺^{とうじ}を給^{たまひ}真言和尚^{しんこんわじょう}とがうし此より八宗^{はっしゅう}

始^{いち}る、一代^{いちだい}の勝劣^{しょうれつ}を判じて云^{いわ}く第一真言^{だいいちしんこん}・大日經第二^{だいにちきよう}・華嚴第三^{けごん}は

法華^{ほつげ}・涅槃^{ねはん}等云云、法華經^{ほつげきよう}は阿含^{あこん}・方等^{ほうとう}・般若等^{はんにな}に對すれば真実^{しんじつ}の經な

れども華嚴經^{けこんきよう}・大日經^{だいにちきよう}に望むれば戲論^{けろん}の法なり教主^{きょうしゅ}・釈尊^{しやくそん}は仏なれど

も大日如来^{だいにちによらい}に向うれば無明^{むみょう}の辺域^{へんいき}と申して皇帝^{こうてい}と俘囚^{えびす}との如^{ごと}し、

天台大師^{てんだいだいし}は盜人^{ぬすびと}なり真言^{しんこん}の醍醐^{だいご}を盗んで法華經^{ほつげきよう}を醍醐^{だいご}というなどか

かれしかば法華經^{ほつげきよう}はいみじと・をもへども弘法大師^{こうぼうだいし}にあひぬれば物のか

ずにもあらず、天竺^{てんじく}

の外道^{げどう}はさて置きぬ漢土^{かんど}の南北が法華經^{ほつげきよう}は涅槃^{ねはん}經^{ぎよう}に對すれば邪見^{じやくけん}の經

といふしにも・すぐれ華嚴宗けこんしゅうが法華經ほけきょうは華嚴經けこんきょうに対すれば枝末教しまつと申せしにもこへたり、例ば彼の月氏がっしの大慢婆羅門だいまんばらもんが自在天じざいてん・那羅延天ならえん・婆薐天ばそ・教主釈尊きょうしゅしやくそんの四人を高座こうざの足につくりて其その上うへにのぼつて邪法じゃほうを弘ひろめしがごとし、伝教大師でんきょうだいし御存生ごんしょうならば一言いっぴは出されべかりける事なり、又義真ぎしん・円澄えんちよう・慈覺じかく・智証ちしやう等もいかに御不審ふしんはなかりけるやらんてんがだい天下第一だいの大凶いなり、慈覺大師じかくだいしは去ぬる承和五年じやうわごに御入唐にゅうとう・漢土かんどにして十年が間てんだい・天台しんこん・真言しんこんの二宗をならう、法華ほっけ・大日經だいにかきやうの勝劣しやうれつを習ならいに

法全・元政等の八人の真言師には法華經と大日經は理同事勝等云云、
天台宗の志遠・広修・維☆等に習いしには大日經は方等部の撰等云
云、同じき承和十三年九月十日に御歸朝・嘉祥元年六月十四日に宣旨
くだる。法華・大日經等の勝劣は漢土にしてしりがたかりけるかのゆへに
金剛頂經の疏七卷蘇悉地經の疏七卷已上十四卷此疏の心は大日經・
金剛頂經・蘇悉地經の義と法華經の義は其の所詮の理は一同なれど
も事相の印と真言とは真言の三部經すぐれたりと云云、此れは偏に
善無畏・金剛智・不空の造りたる大日經の疏の心のごとし、然れども我
が心に猶不審やのこりけん又心にはとけてんけれども人の不審をはら
さんとやおぼしけん、此の十四卷の疏を御本尊の御前にさしをきて御
祈請ありき・かくは造りて候へども仏意計りがたし大日の三部やすぐれ
たる法華經の三部やまさ

れると御祈念きねん有りしかば五日と申す五更ごこうに忽たちまちに夢想あり、青天に
大日輪だいにちりんかかり給たまへり矢をもてこれを射ければ矢飛んで天にのぼり日輪にちりんの
中に立ちぬ日輪動転してすでに地に落んとすとをもひてうちさめぬ、
悦よろこんで云く我吉夢あり法華經ほけきょうに真言勝しんごんすくれたりと造りつるふみは仏意ぶつゐに
叶かないけりと悦よろこばせ給いて宣旨せんじを申し下して日本国にほんこくに弘通くわつうあり、而も
宣旨せんじの心に云く、遂に知んぬ天台てんだいの止観しかんと真言しんごんの法義とは理冥あに符え
り」等と云云、祈請きしやうのごときんば大日經だいにちきやうに法華經ほけきやうは劣なるやうなり、
宣旨せんじを申し下すには法華經ほけきやうと大日經だいにちきやうとは同じ等云云。

智証大師ちしやうだいしは本朝ほんちやうにしては義真和尚ぎしんわじやう・円澄大師えんちやうだいし・別当べつとう・慈覚等じかくの弟子でし
なり、顕密けんみつの二道にとうは大体だいたい此の国にして学がくし給たまいけり天台てんだい・真言しんごんの二宗の
勝劣しょうれつの御不審ふしんに漢土かんどへは渡り給けるか、去仁寿二年にんじゆに御入唐漢土にやうかんどにし
ては真言宗しんごんしゆうは法全げんじやう・元政等げんじやうにならばせ給たまい大体だいたい・大日經だいにちきやうと法華經ほけきやうとは

理同事勝・慈覺の義のごとし、天台宗は良・和尚にならひ給い眞言・
天台の勝劣・大日經は華嚴・法華等には及ばず等云云、七年が間・
漢土に經て去る貞觀元年五月十七日に御歸朝、大日經の旨歸に云く
法華尚及ばず況や自余の教をや」等云云、此釈は法華經は大日經に
は劣る等云云、又授決集に云く眞言・禪門乃至若し華嚴・法華・涅槃
等の經に望むれば是れ摂引門」等云云、普賢經の記・論の記

に云く同じ等云云、貞観八年丙戌四月廿九日壬申・勅宣を申し
下して云く聞くなり真言・止観・両教の宗同じく醍醐と号し俱に
深秘と称す」等云云、又六月三日の勅宣に云く先師既に両業を開い
て以て我が道と為す代代の座主相承して兼ね伝えざること莫し在後の
輩豈旧迹に乖かんや、聞くなり山上の僧等専ら先師の義に違いて
偏執の心を成ず殆んど余風を扇揚し旧業を興隆するを顧みざるに似
たり、凡そ厥の師資の道一を闕きても不可なり伝弘の勤め寧ろ兼備せ
ざらんや、今より以後宜く両教に通達するの人を以て延暦寺の座主と
為し立てて恒例と為すべし」云云。

されば慈覚・智証の二人は伝教・義真の御弟子、漢土にわたりては又
天台・真言の明師に値いて有りしかども二宗の勝劣は思い定めざりけ
るか、或は真言すぐれ、或は法華すぐれ、或は理同事勝等云云、宣旨を

申し下すには二宗の勝劣を論ぜん人は違勅の者といましめられたり、
此れ等は皆自語相違といるぬべし他宗の人はよも用いじとみえて候、但
二宗齊等とは先師・伝教大師の御義と宣旨に引き載せられたり、抑
も伝教大師いづれの書にかかれて候ぞ

や此の事よくよく尋ぬべし、慈覚・智証と日蓮とが伝教大師の御事を
不審申すは親に値うての年あらそひ日天に値い奉りての目くらべにては
候へども慈覚・智証の御かたふどをせさせ給はん人人は分明なる証文
をかまへさせ給うべし、詮ずるところは信をとらんがためなり、玄奘
三蔵は月氏の婆沙論を見たりし人ぞかし天竺にわたらざりし宝法師に
・せめられにき、法護三蔵は印度の法華經をば見たれども囑累の先後
をば漢土の人みねども ☆ とい
ひしぞかし、設い慈覚・伝教大師に値い奉りて習い伝えたりとも智証・

義真和尚に口決せりといふとも伝教・義真の正文に相違せばあに不審
を加えざらん、伝教大師の依憑集と申す文は大師第一の秘書なり、彼
の書の序に云く、新來の真言家は則ち筆授の相承を泯し旧到の華嚴家
は則ち影響の軌範を隠し、沈空の三論宗は彈訶の屈恥を忘れて称心の
酔を覆う、著有の法相は撲揚の歸依を非し青竜の判經を撥う等、乃至
謹んで依憑集の一巻を著わして

どうが 同我の後哲に贈る某の時興ること日本第五十二葉・弘仁の七・丙申の
歳なり」云云、次ぎ下の正宗に云く天竺の名僧大唐天台の教迹最
も邪正を簡ぶに堪えたりと聞いて渴仰して訪問す」云云、次ぎ下に云く
豊中国に法を失つて之を四維に求むるに非ずや而かも此の方に識る
こと有る者少し魯人の如きのみ」等云云、此の書は法相・三論・華嚴・
真言の四宗をせめて候文なり、天台・真言の二宗同一味ならばいかで
かせめ候べき、而も不空三蔵

等をば魯人のごとしなにかかれて候、善無畏・金剛智・不空の
真言宗 いみじくば・いかでか魯人と悪口あるべき、又天竺の真言が
天台宗に同じきも又勝れたるならば天竺の名僧いかでか不空にあつらへ
中国に正法なしとはいふべき、それはいかにもあれ慈覚・智証の二人は
言は伝教大師の御弟子とはなのらせ給ども心は御弟子にあらず、

其の故は此の書に云く 譯で依憑集一卷を著わして同我の後哲に贈る」

等云云、同我の二字は真言宗は

てんだいしゅう

天台宗に劣るとならひてこそ同我にてはあるべけれ我と申し下さるる

宣旨に云く 専ら先師の義に違ひ偏執の心を成す」等云云、又云く

凡そ厥師資の道一を關いても不可なり」等云云、此の宣旨のごとくな

らば慈覚・智証こそ専ら先師にそむく人にては候へかうせめ候もをそ

れにては候へとも此れをせめずば大日經・法華經の勝劣

やぶれなんと存じていのちをまとにかくてせめ候なり、此の二人の人人

の弘法大師の邪義をせめ候はざりけるは最も道理にて候いけるなり、

されば糧米をつくし人をわづらはして漢土へわたらせ給はんよりは本師

・伝教大師の御義を・よくよく・つくさせ給うべかりけるにや、されば

叡山の仏法は但だ伝教大師・義真和尚・円澄大師の三代計りにてやあ

りけん、天台座主すでに真言の座主にうつりぬ名と所領とは天台

其の主は真言師なり、されば慈覚

大師・智証大師は已今当の經文をやぶらせ給う人なり、已今当の

經文をやぶらせ給うは・あに釈迦・多宝・十方の諸仏の怨敵にあらず

や、弘法大師こそ第一の謗法の人とおもうに、これはそれにはなるべく

もなき僻事なり、其の故は水火天地なる事は僻事なれども人用ゆる事

なければ其の僻事成ずる事なし、弘法大師の御義はあまり

僻事ひがごとなれば弟子等でしも用ゆる事なし事相計りじそうばかは其の門家もんかなれども其の
教相きようそうの法門ほうもんは弘法の義こうぼうぎいるにくきゆへに善無畏ぜんむい・金剛智こんこうち・不空慈覺ふくうじかく・
智証ちしようの義ぎにてあるなり、慈覺じかく・智証ちしようの義ぎこそ真言しんごんと天台てんだいとは理同りおなじなりな
んど申せば皆人みなさもやとをもう、かうをもうゆへに事勝じしようの印いんと真言しんごんと
につひて天台宗てんだいしゅうの人人ひとびと・画像えいざう・木像こざうの開眼かいげんの仏事ぶつじを・ねらはんがために
日本にほん一同いどうに真言宗しんごんしゅうにおちて天台宗てんだいしゅうは一人もなきなり、例せば法師ほふしと
尼くろきとあおきと黒と青とは・まがひぬべけれ

ば眼まなこくらき人はあやまつぞかし、僧と男と白と赤とは目くらき人も
迷まよひわず、いわうや眼まなこあきらかなる者をや、慈覺じかく・智証ちしようの義ぎは法師ほふしと尼
と黒と青とがごとくなるゆへに智人ちじんも迷まよひい愚人ぐにんもあやまり候て此の四
百余年が間は叡山えいざん・園城おんじょう・東寺とうじ・奈良なら・五畿ごき・七道しちどう・日本にほん一州いちしゅう・皆謗法みなぼうぼうの
者となりぬ。

そもそも

抑も法華經の第五に 又殊師利此の法華經は諸仏如来の秘密の藏な

り諸經の中

に於て最も其の上に在り」云云、此の經文のごとくならば

法華經は大日經等の衆經の頂上に住し給う正法なり、さるにては

善無畏・金剛智・不空・弘法・慈覺・智証等は此の經文をばいかんが

会通せさせ給うべき、法華經の第七に云く 能く是の經典を受持する

こと有らん者も亦復是くの如し一切衆生の中に於て亦為第一なり」等

云云、此の經文のごとくならば法華經の行者は川流江河の中の大海・

衆山の中の須弥山・衆星の中の月天・衆明の中の大日天、転輪王・

帝釈・諸王の中の大梵王なり、伝教大師の秀句と申す書に云く 此の

經も亦復是くの如し乃至諸の經法の中に最も為第一なり能く是の

經典を受持すること有らん者も亦復是くの如し一切衆生の中に於て

亦為第一なり」已上經文なりと引き入れさせ

給たまいて次下つぎしもに云いわく 天台法華玄てんだいほっけに云いわく「等云云、已上玄文げんもんとかかせ給たまいて上かみの心こころを釈しゃくして云いわく 当まさに知るべし他宗所依たしゅうしよえの經きやうは未いまだ最もつともも為なれ第一だいいちならず其その能よく經きやうを持もつ者ものも亦未またいまだ第一だいいちならず、天台法華宗所持てんだいほっけしゅうしよじの法華經ほけきやうは最もつともも為なれ第一だいいちなる故ゆゑに能よく法華ほっけを持もつ者ものも亦衆生またしゆじやうの中の第一だいいちなり已すでに仏説ぶつせつに抛よる豈自歎あにじたんならん哉」等云云、次下つぎしもに讓やうる釈しゃくに云いわく 委曲えひくの依憑具えひようぐさに別卷あに有あるなり」等云云、依憑集えひようしふに云いわく 今いま吾わが天台大師てんだいだいし・法華經ほけきやうを説とき法華經ほけきやうを釈しゃく

すること群ぐんに特秀とくしゅうし唐とうに独歩あきらかす明みに知んぬ如来にょらいの使しなり讃たたうる者は福さいわいを安明あんみょうに積つみみ謗そしる者は罪つみを無間むげんに開ひらくく」等云云、法華經ほけきょう・天台てんだい・妙樂みょうらく・伝教でんぎょうの經きょう・釈しやくの心こころの如ごとくならば今・日本国にほんこくには法華經ほけきょうの行者ぎやうじやは一人もなきぞかし、月氏がつしには教主きやうしゆしやくそん・釈尊しやくそん・宝塔品ほうとうほんにして一切いっさいの仏ぶつをあつめさせ給たまて大地だいちの上に居ゐせしめ大日如来だいにちにょらい計はかり宝塔ほうとうの中の南の下座なんのげざにすへ奉たてまつりて教主きやうしゆしやくそん・釈尊しやくそんは北の上座きたのじやうざにつかせ給たまう、此の大日如来だいにちにょらいは大日經だいにちきやうの胎藏界たいざうかいの大日だいにち・金剛頂經こんごうぢやうきやうの金剛界こんごうかいの大日だいにちの主君しゅくんなり、兩部りやうぶの大日如来だいにちにょらいを郎從等ろうじやうどうと定めたる多宝仏たほうぶつの上座じやうざに教主きやうしやくそん・居ゐせさせ給たまう此れ即すなわち法華經ほけきやうの行者ぎやうじやなり天竺てんじくかくのごとし、漢土かんどには陳帝てんの時とき・天台大師てんだいだいし・南北なんぼくにせめかちて現身げんしんに大師だいしとなる群ぐんに特秀とくしゅうし唐とうに独歩どくぽす」といふこれなり、日本国にほんこくには伝教大師でんぎやうだいし六宗ろくしゅうにせめかちて日本にほんの始だいいち第一だいいちの根本大師こんぽんだいしとなり給たまう月氏がつし・漢土かんど・日本にほんに但三

人計りこそ於一切衆生中亦為第一にては候へされば秀句に云く淺きは易く深きは難しとは釈迦の所判なり

浅きを去つて深きに就くは丈夫の心なり天台大師は釈迦に信順して法華宗を助けて震旦に敷揚し叡山の一家は天台に相承して法華宗を助けて日本に弘通す」等云云、仏滅後・一千八百余年が間に法華經の行者漢土に一人・日本に一人已上二人釈尊を加へ奉りて已上三人なり。

外典に云く聖人は一千年に一出で賢人は五百年に一出づ、黃河は☆渭ながれをわけて五百年には半・河すみ千年には共に清むと申すは一定にて候けり、然るに日本国は叡山計りに伝教大師の御時・法華經の行者ましましけり、義真・円澄は第一第二の座主なり第一の義真計り伝教大師にいたり、第二の円澄は半は伝教の御弟子・半は

弘法こうぼうの弟子でしなり、第三の慈覺じかく大師だいしは始めは伝教でんぎょう大師だいしの御弟子おんでしにたり、御年四十にて漢土かんとにわたりてより名は伝教でんぎょうの御弟そ其あどの跡あとをばつがせ給たまえども法門ほうもんは全く御弟子おんでしにはあらず、而しかれども円頓えんどんの戒計げいかりは又御弟子おんでしににたり蝙蝠へんぷく鳥とのごとし鳥にもあらず・ねずみにもあらず梟きょう鳥ちようきん・破鏡はけい獸じゅうのごとし、法華ほけき經きやうの父を食らい持者じしやの母をかめるなり日ひをいるとゆめにみしこれなり、されば死去しきよの後のちは墓はかなくてやみぬ、智証ちしようの門家もんか・園城寺おんじやうじと慈覺じかくの

門家・叡山と修羅と惡竜と合戦ひまなし園城寺をやき叡山をやく、
智証大師の本尊の慈氏菩薩もやけぬ慈覺大師の本尊・大講堂もやけぬ
現身に無間地獄をかんぜり、但中堂計りのこれり、弘法大師も又跡な
し弘法大師の云く東大寺の受戒せざらん者をば東寺の長者とすべか
らず等御いましめの状あり、しかれども寛平法王は仁和寺を建立して
東寺の法師をうつして我寺には叡山の円頓戒を持ざらん者をば住せし
むべからずと宣旨分明なり、され
ば今の東寺の法師は鑒真が弟子にもあらず弘法の弟子にもあらず戒は
伝教の御弟子なり又伝教の御弟子にもあらず伝教の法華經を破失
す、去る承和二年三月二十一日に死去ありしかば公家より遺体をば、
ほうぶらせ給う、其の後誑惑の弟子等集りて御入定と云云、或はか
みをそりてまいらするぞといふ、或は三鉢をかんどよりなげた

りといふ・或は日輪夜中にいでたりといふ・或は現身に大日如来となり
たりといひ・或は伝教大師に十八道ををしへまいらせ給うといふて、師
の徳をあげて智慧にかゝ我が師の邪義を扶けて王臣を誑惑するなり、又
高野山に本寺伝法院といひし二の寺あり本寺は弘法のたてたる大塔・
大日如来なり、伝法院と申すは正覚房の立てし金剛界の大日なり、此
の本末の二寺昼夜に合戦あり例せば叡山・園城のごとし、誑惑のつも
りて日本に二の禍の出現

せるか、糞を集めて梅檀となせども焼く時は但糞の香なり大妄語を集
めて仏とがうすとも但無間・大城なり、尼☆が塔は数年が間・利生広
大なりしかども馬鳴菩薩の礼をうけて忽にくづれぬ、鬼弁婆羅門がと
ばりは多年・人をたばらかせしかども阿☆縛☆沙菩薩に・せめられてや
ぶれぬ、☆留外道は石となつて八百年・陳那菩薩に・せめられて水とな

りぬ、道士は漢土をたばらかすこと數百年・摩騰・竺蘭に・せめられて
仙經もやけぬ、趙高が国をとり

し王莽が位をうばいしがごとく法華經の位をとて大日經の所領とせ

り、法王すでに国に失せぬ人王あに安穩ならんや、日本国は慈覺・智証

・弘法の流なり一人として謗法ならざる人はなし。

但し事の心を案ずるに大莊嚴仏の末・一切明王仏の末法のごとし、

威音王仏の末法には改悔ありしすら猶・

千劫・阿鼻地獄に墮つ、いかにいわうや日本国の真言師・禪宗・念仏者等は一分の廻心なし如是展転至無數劫疑なきものか、かかる謗法の国なれば天もすてぬ天すつればふるき守護の善神も・ほこらをやひて寂光の都へかへり給いぬ、但日蓮計り留り居て告げ示せば国主これをあだみ数百人の民に・或は罵詈・或は悪口・或は杖木・或は刀剣・或は宅宅ごとにせき・或は家家ごとにをう、それになはねば我と手をくだして二度まで流罪あり、去ぬる文永八年

九月の十二日に頸を切らんとす、最勝王經に云く悪人を愛敬し善人を治罰するに由るが故に他方の怨賊来つて国人喪乱に遭う」等云云、大集經に云く若しは復諸の刹利国王有つて諸の非法を作して世尊の声聞の弟子を悩乱し、若しは以て毀罵し刀杖をもつて打斫し及び衣鉢種種の資具を奪い、若しは他の給施せんに留難を

作さば我等彼れをして自然に他方の怨敵を卒起せしめん及び自らの
国土も亦兵起り病疫・飢饉し非時の風雨・闕靜言訟せしめん、又其の
王をして久しからずして復当に己が国を亡失せしめん」等云云、此等
の經文のごときは日蓮この国になくば仏は大妄語の人・阿鼻地獄はい
かで脱給うべき、去ぬる文永八年九月十二日に平の左衛門並び
に數百人に向て云く日蓮は日本国のはしらなり日蓮を失うほどならば
日本国のはしらを・たをすになりぬ等云云、此の經文に智人を国主等
若は悪僧等がざんげんにより若は諸人の悪口によつて失にあつるなら
ば、にはかに・いくさをこり又大風吹き他国よりせめらるべし等云云、
去ぬる文永九年二月のどしいくさ同じき十一年の四月の大風・同じき
十月に大蒙古の来りしは偏に日蓮がゆへにあらずや、いわうや前よりこ
れをかながたり誰の人か

疑^{うたがい}うべき、弘法^{こうぼう}・慈覚^{じかく}・智証^{ちしよう}の☆国^{あやまり}に年久し其^その上^{ぜんしゅう}禪宗^{ぜんしゅう}と念佛宗^{ねんぶつじゅう}とのわざわい・あいをこりて逆風^{ぎやくふう}に大波^{だいば}をこり大地震^{だいちしん}のかさなれるがごとし、さればやふやく国^{くに}をとろう太政入道^{たいうどう}が国^{くに}をおさへ承久^{じやうきゅう}に王位^{おうい}つきはてて世・東^{とう}にうつりしかども但国中^{たにくにちゆう}のみだれにて他国^{たこく}のせめはなかりき、彼は謗法^{ぼうぼう}の者はあれども又天台^{てんだい}の正法^{しやうぼう}も・すこし有り、其^その上^{うへ}さへ顯^{あら}わす智人^{ちじん}なし・かるがゆへになのめなりき、譬^{たと}へば師子^{しし}のねぶれるは手^てをつけざれば・ほへず迅^{はやき}

流は櫓をささへされれば波たかからず盗人はとめざればいからず火は薪
を加えざればさかならず、謗法はあれどもあらわす人なければ王法
もしばらくはたえず国もをだやかなるにいたり、例せば日本国に仏法
わたりはじめて候いしに始はなに事もなかりしかども守屋・仏をやき僧
をいましめ堂塔をやきしかば天より火の雨ふり国にはうさうをこり
兵乱つづきしがごとし、此れはそれにはにるべくもなし、謗法の人人も
国に充満せり、日蓮

が大義も強くせめかかる修羅と帝釈と仏と魔王との合戦にもをとるべ
からず、金光明經に云く、時に鄰国の怨敵是くの如き念を興さん当に
四兵を具して彼の国土を壊るべし」等云云、又云く、時に王見已つて即
四兵を嚴いて彼の国に発向し討罰を為んと欲す我等爾の時に当に眷属
無量無辺の衆又諸神と各形を隠して為に護助を作し

彼の怨敵おんてきをして自然じねんに降伏こうふくせしむべし」等云云、最勝王經さいしょうおうきやうの文又かくのごとし、大集經だいしつきやう云云・仁王經にんのうきやう云云、此等これらの經文きやうもんのごときんば正法しょうほうを行ずるものを国主こくしゅあだみ邪法じやほうを行ずる者のかたうどせば大梵天王だいぼんてんのう・帝釈たいしゃく・日月にちがつ・四天等してん・隣国りんこくの賢王けんおうの身に入りかわりて其その国をせむべしとみゆ、例せば訖利多王きりたを雪山下王せっせんのせめ大族王だいぞくおうを幻日王まじくおうの失いしがごとし、訖利多王きりたと大族王だいぞくおうとは月氏がつしの仏法ぶつぽうを失いし王ぞかし、漢土かんどにも仏法ぶつぽうをほろぼしし王みな賢王けんおうに・せめられぬ、これは彼かしこにはにるべくもなし仏法ぶつぽうのかたうどなるようにて仏法ぶつぽうを失なう法師ほっしを扶たすくと見えて正法しょうほうの行者ぎやうじやを失うしなうへに愚者ぐしやはすべてしらず智者ちしやなんども常じょうの智人ちじんはしりがたし、天も下劣げれつの天人てんにんは知らずもやあるらん、されば漢土かんど・月氏がつしのいにしへのみだれよりも大なるべし。

法滅尽經ほうめつじんきやうに云く吾般泥はつぱんい☆の後・五逆濁世ごぎやくじよくせに魔道興盛まどうこうじやうし魔沙門しゃもんと

作^なつて吾^わが道^{みち}を壊^え乱^{らん}せん、乃^な至^{いた}惡^{あく}人^{にん}軋^う多^たく海^{かい}中^{ちゆう}の沙^{いさ}の如^{ごと}く善^{ぜん}者^{しや}甚^{はなはだ}
だ少^{すく}して若^もしは一^も若^もしは二^に」云^い云^わ、涅槃^{ねはんぎよう}經^{きやう}に云^いく是^{かく}くの如^{ごと}き等^{とう}の
涅槃^{ねはんぎよう}經^{きやう}典^{てん}を信^{しん}ずるものは爪^{そうじ}上^{じやう}の土^どの如^{ごと}く乃^な至^{いた}是^この經^{きやう}を信^{しん}ぜざるものは
十^{じゅう}方^{ぽう}界^{かい}の所有^{しやう}の地^ち土^どの如^{ごと}し」等^{とう}云^い云^わ、此^この經^{きやう}文^{もん}は時^{とき}に当^{あた}りて貴^{とう}とく予^よ
が肝^{かん}に染^そみぬ、当^{とう}世^せ・日^に本^{ほん}国^{こく}には我^{われ}も法^{ほふ}華^け經^{きやう}を信^{しん}じたり信^{しん}じたり、諸^{しよ}人^{にん}
の語^{ことば}のごときんば一^{ひと}人^{にん}も謗^{ほう}法^{ぽう}の者^{もの}なし、此^こ

の經文きやうもんには末法まっぽうに謗法ぼうぼうの者・十方じゅうぽうの地土ちど・正法しょうぼうの者爪上そうじやうの土等云云、
經文きやうもんと世間せけんとは水火すいかなり、世間せけんの人云く日本国にほんこくには日蓮一人計ばかり
謗法ぼうぼうの者等云云、又經文きやうもんには大地だいちより多からんと云云、法滅尽經ほうめつじんきやうに
は善者ぜんしや一二人、涅槃經ねはんきやうには信者そうじやう爪上土等云云、經文きやうもんのごとくならば
日本国にほんこくは但日蓮一人こそ爪上土一二人にては候へされば心あらん
ひとびと 人人きやうもんは經文きやうもんをか用ゆべき世間せけんをか用ゆべき。

問て云く涅槃經ねはんきやうの文いには涅槃經ねはんきやうの行者ぎやうじやは爪上そうじやうの土等云云、汝なんじが義
には法華經ほけきやう等云云如何いかん、答えて云く涅槃經ねはんきやうに云く法華ほつの中の如ごとし」等
云云、妙樂大師みょうらくだいし云く天經たいきやう自ら法華ほつを指して極ごくと為なす」等云云、大經だいきやう
と申もうすは涅槃經ねはんきやうなり涅槃經ねはんきやうには法華經ほけきやうを極ごくと指さして候しなり、而しかるを涅槃
宗ねはんしゆの人の涅槃經ねはんきやうを法華經ほけきやうに勝まさると申せしは主しよを所從じゆといふ
下郎げらうを上郎じやうらうといふし人なり、涅槃經ねはんきやうをよむと申もうすは法華經ほけきやうをよむを

申すなり、譬へば賢人は国主を重んずる者をば我をさぐれども悦ぶなり、涅槃經は法華經を下て我をほむる人をばあながちに敵とにくませ給う、此の例をもつて知るべし華嚴經・觀經・大日經等をよむ人も法華經を劣とよむは彼れ彼れの經經の心にはそむくべし、此れをもつて知るべし法華經をよむ人の此の經をば信ずるようなれども諸經にても得道なるとおもうは此の經をよまぬ人なり、例せば嘉祥大師は法華玄と申す文十卷造りて法華經をほめしかども妙樂かれをせめて云く毀其の中に在り何んぞ弘讚と成さん」等云云、法華經をやる人なり。されば嘉祥は落ちて天台につかひて法華經をよまず我れ經をよむならば惡道まぬかれがたしとて七年まで身を橋とし給いき、慈恩大師は玄贊と申して法華經をほむる文十卷あり傳教大師せめて云く法華經を讀むると雖も還て法華の心を死す」等云云、

此等をもつておもうに法華經をよみ讚歎する人人の中に無間地獄は多

く有るなり、嘉祥・慈恩すでに一乘誹謗の人ぞかし、

弘法・慈覺・智証あに法華經蔑如の人にあらざるや、嘉祥大師のごとく

講を廃し衆を散じて身を橋となせしも猶已前の法華經誹謗の罪やきへ

ざるらん、例せば不輕輕毀の衆は不輕菩薩に信伏隨從せしかども

重罪いまだのこり

て千劫阿鼻に堕ちぬ、されば弘法・慈覚・智証等は設い・ひるがへず心ありとも尚法華經をよむならば重罪きへがたし・いわうや・ひるがへる心なし、又法華經を失い真言教を昼夜に行い朝暮に伝法せしをや、世親菩薩・馬鳴菩薩は小をもつて大を破せる罪をば舌を切らんとこそせさせ給いしか、世親菩薩は仏説なれども阿含經をば・たわふれにも舌の上にをかじとちかひ、馬鳴菩薩は懺悔のために起信論をつくりて小乗をやぶり給き、嘉祥大師は天台大師を請じ奉りて百余人の智者の前にして五体を地になげ遍身にあせをながし紅のなんだをながして今よりは弟子を見じ法華經をかうぜじ弟子の面をまほり法華經をよみたてまつれば我力の此の經を知るにいたりとて・天台よりも高僧老僧にておはせしがわざと人のみるときをひまいらせて河をこへかうざにちかづきて・せなか

にのせまいらせて高座こうざにのぼせたてまつり結句けつこ御臨終りんじゅうの後には隋の皇帝そうていにまいらせて小児しょうにが母にをくれたるがごとくに足ずりをして・なき給たまひいしなり、嘉祥大師かじょうだいしの法華玄ほっけを見るにいたう法華經ほけきょうを謗ぼうじたる疏じよにはあらず但法華經ほけきょうと諸大乘經しよだいじようきょうとは門は淺深せんじんあれども心は一と・かきてこそ候こへ此これが謗法ぼうぼうの根本こんぽんにて候か。

華嚴けこんの澄觀ちようかんも真言しんごんの善無畏ぜんむいも大日經だいにちきょうと法華經ほけきょうとは理は一とこそかかれて候へ嘉祥大師かじょうだいしとがあらば善無畏ぜんむい三藏さんざうも脱のがれがたしされば善無畏ぜんむい三藏さんざうは中天の国主こくしゅなり位をすてて他国たこくにいたり殊勝しゆしやう・招提しやうだいの二人にあひて法華經ほけきょうをうけ百千の石の塔を立てしかば法華經ほけきょうの行者ぎやうじやとこそみへしか、しかれども大日經だいにちきょうを習ならいしより・このかた法華經ほけきょうを

大日經だいにちきょうに劣るとやおもひけん、始ははいたう其その義もなかりけるが漢土かんとどにわたりて玄宗皇帝けんそうこうていの師となりぬ、天台宗てんだいしゅうをそねみ思う心つき給たまひいけ

るかのゆへに、忽たちまちに頓死とんしして二人の獄卒ごくそつに鉄くろがねの縄・七すぢつけられて
閻魔王宮えんまおうきゆうにいたりぬ、命いまだ・つきずと・いるてかへされしに法華經ほけきようを
謗ぼうずるとやおもひけん真言しんこんの觀念かんねん・卽と・真言しんこん等をば・なげ
すてて法華經ほけきようの今此三界こんしさんがいの文を唱となえて縄も切れかへされ給たまいぬ、又雨あめの
いのりをおほせつけられたりしに忽たちまちに雨ふりは下ふりたりしかども大風吹たいふうきて国
をやぶる、結句死けつくし給たまいてありしには弟子等集でしりて臨終りんじゅういみじきやう
を・

ほめしかども無間・大城に堕ちにき、問うて云く何をもつてかこれをし
る、答えて云く彼の伝を見るに云く、今畏の遺形を觀るに漸く加縮
小し黒皮隱隱として骨其露なり」等云云、彼の弟子等は死後に地獄の
相の顯われたるをしらずして徳をあぐなどをもへども・かきあらはせる
筆は畏が失をかけり、死してありければ身やふやく・

つづまり・ちひさく皮はくろし骨あらはなり等云云、人死して後・色の
黒きは地獄の業と定むる事は仏陀の金言ぞかし、善無畏三蔵の地獄の
業はなに事ぞ幼少にして位をすてぬ第一の道心なり、月氏・五十余箇
国を修行せり慈悲の余りに漢土にわたれり、天竺・震旦・日本一
閻浮提の内に真言を伝へ鈴をふる此の人の徳にあらずや、いかにして
地獄に堕ちけると後生をおもはん人人は御尋ねあるべし。

又金剛智三蔵は南天竺の大王の太子なり、金剛頂經を漢土にわた

す其の徳善無畏のごとし、又互いに師となれり、而るに金剛智三蔵ちやくせん勅宣あめにて雨の祈りありしかば七日が中に雨下る天子大に悦ばせ給うたまほどに忽たちまちに大風吹き来る、王臣等けうさめ給いき使をつけて追はせ給いたましかども・とかうのべて留りしなり、結句は姫宮の御死去しきよ

ありしに、いのりをなすべしとて御身の代に殿上の二女七歳になりしを薪たきぎにつみこめて焼き殺せし事こそ無慚むざんにはおぼゆれ、而れども姫宮もいきかへり給はず不空三蔵は金剛智と月支より御ともせり、此等の事を不審ふしんとやおもひけん畏と智と入滅にゅうめつの後・月氏がつしに還りて竜智に値あい奉り真言を習ならいなをし天台宗てんだいしゅうに帰伏きふくしてありしが心計ばかり

は帰えれども身はかへる事なし、雨の御いのりうけ給わたりしが三日と申すに雨下る、天子悦ばせ給いて我れと御布施ふせひかせ給う、須臾しゆうありしかば大風落たいふうち下りて内裏だいりをも吹きやぶり雲閣月卿の宿所一所も・

あるべし

ともみへさりしかば天子大に驚きて宣旨なりて風をとどめよと仰せ下
さる且らくありては又吹き又吹きせしほどに数日が間やむことなし、
結句は使をつけて追うてこそ風もやみてありしか、此の三人の悪風は
漢土・日本の一切の真言師の大風なり。

さにてあるやらん去ぬる文永十一年四月十二日の大風は阿弥陀堂の
加賀法印・東寺第一の智者の雨のいのりに吹きたりし逆風なり、善無畏
・金剛智・不空の悪法をすこしもたがへず伝えたりけるか・心にくし・心
にくし。

弘法大師は去ぬる天長元年の二月大旱魃のありしに先には守敏・
祈雨して七日が内に雨を下す但京中にふりて田舎にそそがず、次に
弘法承取て一七日に雨氣なし二七日に雲なし三七日と申せしに天子よ
り和氣の真綱を使者として御幣を神泉苑にまいらせたりしかば
天雨下事三日、此れをば弘法大師並に弟子等・此の雨をうばひとり我
が
雨として今に四百余年・弘法の雨という、慈覚大師の夢に日輪をいしと
弘法大師の大妄語に云く弘仁九年の春・大疫をいのりしかば夜中に

だいにちりんしゅつげん
大日輪出現せりと云云、成劫より已来・住劫の第九の滅・已上二十九

劫が間に日輪夜中に

出でしという事なし、慈覺大師は夢に日輪をいるという内典五千・七千

・外典三千余卷に日輪をいるとゆめにみるは吉夢という事有りやいな

や、修羅は帝釈をあだみて日天をいたてまつる其の矢かへりて我が眼に

たつ、殷の紂王は日天を的にいて身を亡す、日本の神武天皇の御時・

度美長と五瀬命と合戦ありしに命の手に矢たつ、命の云く我はこれ

日天の子孫なり日に向い奉りて弓をひくゆへに日天のせめをかをほれり

と云云、阿闍世王は邪見を

ひるがえして仏に歸しまいらせて内裏に返りて・ぎよしんなりしが、お

どろいて諸臣に向て云く日輪・天より地に落つとゆめにみる諸臣の云く

仏の御入滅か云云、須跋陀羅がゆめ又かくのごとし、我国は殊にいむべ

きゆめな

り神をば天照てんしやうという国をば日本にほんという、又教主釈尊きやうしゆしやくそんをば日種もろと申す
摩耶夫人まやふじん日をはらむとゆめにみて・まうけ給たまえる太子たいしなり、慈覺大師じかくだいし
は大日如来だいにとらひを觀山えいざんに立て釈迦しやか仏ぶつをすて真言しんごんの三部經さんぶきやうをあがめて法華經ほけきやう
の三部の敵となせしゆへに此の夢出現しゆつげんせり。

例せば漢土かんどの善導ぜんどうが始は密州めいしやうの明勝めいしやうといゐし者に値あうて法華經ほけきやうをよ
みたりしが後には道綽どうしやくに値あうて法華經ほけきやうをすて觀經かんきやうに依りて疏じよをつくり
法華經ほけきやうをば千中無一せんちゆうむいつ・念仏ねんぶつをば十即十生じゆそくじゆつしやう・百即百生ひやくそくひやくしやうと定めて此の
義ぎを成じやうぜんがために

阿弥陀仏あみだぶつの御前おんまえにして祈誓きせいをなす、仏意ぶつゐに叶かなうやいなや毎夜夢の中に
常ひとに一りの僧有ありて来て指授しじゆすと云云、乃至ないしもつばらきようぼう一經ひと法の如ごとくせよ乃至ないし
観念かんねん法門經等云云、法華經ほけきようには若もし法を聞く者有あれれば一ひとりとして
成仏じやうぶつせざる無し」と善導ぜんどうは千の中に一も無し」等云云、法華經ほけきようと善導ぜんどう
とは水火すゐかなり善導ぜんどうは觀經かんきようをば十即十生・百即百生・無量義經むりやうぎきように
云く觀經かんきようは未だ真実いま しんじつを顯あらわさず」等云云、無量義經むりやうぎきようと楊柳房ようりゆうぼうとは天地てんち
なり此これを阿弥陀仏あみだぶつの僧と成りて來つて汝なんじが疏じよは真なりと証し給たまわん
は・あに眞事しんじならんや、抑阿弥陀おもは法華經ほけきようの座に來りて舌をば出だし
給たまはざりけるか、觀音かんのん・勢至せいしは法華經ほけきようの座にはなかりけるか、此これをも
つて・をもへ慈覺大師じかくだいしの御夢は・わざわひなり。

問いうて云く弘法大師こうぼうだいしの心經しんきようの秘鍵ひけんに云く時ときに弘仁九年こうにんくわねんの春天下てんが
大疫だいえきす、爰こゝに皇帝こうてい自ら黄金こうごんを筆端ひつたんに染め紺紙こんしを爪そうしやう掌てうに握りて般若はんが若

心經しんきやう 一卷いまいを書寫しよしやし奉り給う予、講読かうとくの撰せんに範のつとりて經旨きやうしの宗そうを綴つづる

未だ結願くつがんの詞ことばを吐かざるに蘇生そせいの族途やからにイずむ、夜變やへんじて而しかも日光にっこう赫赫かくかくたり是れ愚身ぐしんの戒徳かいとくに非ず金輪こんりん御信力しんりきの所為しよゐなり、但ただし神舎しんさに詣もうでん輩やからは此の秘鍵ひけんを誦じゆし奉れ、昔予鷲峰じゆふ說法せつぽうの筵むしろに陪まのあたして親まのあたり

其その深文しんぶんを聞きたてまつる豈あにそ其の義に達せざら

んや」等云云、又孔雀經くじやくの音義いむに云く弘法大師こうぼうだいし歸朝きちやうの後真言宗しんこんしゆうを立たてんと欲しよしゆうし諸宗しよしゆうを朝廷てうていに群集ぐんしふす即身成仏そくしんじやうぶつの義うたがいを疑うう、大師智拳だいしちけんの印いんを結びて南方なんぼうに向うに面門めんもん俄ゑに開いて金色こんしきの毘盧遮那びるしやなと成り即便すなわち本体ほんたいに還歸げんきす、入我にうが・

我入われいりの事・即身頓証そくしんとんしやうの疑うたがいい此の日このひ釈然しやくぜんたり、然しかるに真言しんこん瑜伽ゆいがの宗そう・秘密曼荼羅ひみつまんだらの道・彼の時より建立くわんりゆうしぬ、又云く此このの時に諸宗しよしゆうの学徒がく大師だいしに歸して始めて真言しんこんを得て請益しやうやくし習学しゆがくす三論さんろんの道昌どうしやう・法相ほつさうの

源仁・華嚴の道雄・天台の円澄等皆其の類なり、弘法大師の伝に云く、きちようはんしゅう 歸朝泛舟の日、ほつがん 発願して云く、我が所学の教法若し感応の地有らば

此三鈷其の処に到るべし、仍て日本の方に向て三鈷を抛げ上ぐ遙かに飛んで雲に入る十月に歸朝す」云云、又云く、高野山の下に入定の所を占む乃至彼の海上の三鈷今新たに此に在り」等云云、此の大師の徳無量なり其の両三を示すかくのごとくの大徳あり、いかに此の人を信ぜずしてかへりて阿鼻地獄に墮といはんや、答えて云く

予も仰あおいで信たてまつじ奉たてまつる事かくのごとし但古いにしえの人人も不可ふか思議しぎの徳ありしかども仏ぶつ法の邪じゃ正せいは其おれにはよらず、外道げどうが或あるは恒河こうがを耳に十二年留とどめ、或あるは大海たいかいをすひほし、或あるは日月にちがつを手てににぎり、或あるは釈子しやくしを牛羊ぎゆうようとなしなんどせしかども、いよいよ大慢だいまんを、をこして生死しやうじの業とこそなりしか、此これをば天台てんだい云いく、名利みょうりを邀もとめ見愛けんあいを増ふす」とこそ釈しやくせられて候あへ光宅こうたくが忽たちまちに雨あめを下くだし須臾しゆゆに花をさかせしをも妙樂みょうらくは感かん応おう此このの如ごとくなれども猶なほ理かに称なわす」とこそ

かかれて候あへされば天台てんだい大師だいしの法華ほけき經きやうをよみて、須臾しゆゆに甘雨かんうを下くだせ」伝でん教ぎやう大師だいしの三日さんじつが内に甘露かんろの雨あめをふらしておはせしも其それをもつて仏意ぶつゐに叶かなうとはをほせられず、弘法こうぼう大師だいしいかなる徳とくましますとも法華ほけき經きやうを戲論けろんの法ほふと定め釈迦しやくか仏ぶつを無明むみやうの辺域へんいきとかかせ給たまへる御おふでは智慧ちゑかしこからん人は用もちゆべからず、いかにいわうや上かみにあげられて候あ徳とくどもは

不審ある事なり、弘仁九年の春天下大疫」等云云、春は九十日・何の月・何の日ぞは一、又弘仁

九年には大疫ありけるか是二、又夜變じて日光赫赫たり」と云云、此の事第一の大事なり弘仁九年は嵯峨天皇の御宇なり左史右史の記に載せたりや是三、設い載せたりとも信じがたき事なり成劫二十劫・住劫九劫・已上二十九劫が間にいまだ無き天變なり、夜中に日輪の出現せる事如何又如來一代の聖教にもみへず未來に夜中に日輪出ずべしとは三皇・五帝の三墳・五典にも載せず仏經のごときんば壞劫にこそ二の日・三の日乃至・七の日は出ずべしとは見えたれどもかれは昼のことぞかし夜日出現せば東西北の三方は如何、設い内外の典に記せずとも現に弘仁九年の春何れの月何れの日何れの夜の何れの時に日出ずるといふ公家・諸家・叡山等の日記あるならばすこし信ずるへんも

や、次ぎつぎしも下に 晋しん予ぶ鷲峰じゆふ説法せつぽうの筵むしろに陪まのあたそして親まのあたそり其の深文を聞く」等云

云、此の筆を人に信ぜさせしめんがためにかまへ出だす大妄語もうごか、され

ば靈山りやうぜんにして法華ほっけは戲論けろん・大日經だいにちぎやうは真実しんじつと仏の

説とき給けるを阿難あなん・文殊もんじゆが☆りて妙法華經みやうほけきやうをば真実しんじつとかけるかい

ん、いうにかいなき姪女はかい・破戒はかいの法師ほっし等が歌をよみて雨ふらす雨あめを三七日ま

で下さざりし人はかかる徳あるべしや是四、孔雀經くじやくの音義いぎに云く 天師だいし

智拳ちけんの印を結ん

で南方なんぽうに向うに面門めんもん俄かに開いて金色の毘盧遮那びるしゃなと成る」等云云、
此れ又何いすれれの王何いすれれの年時かんどを漢土かんどには建元を初とし日本にほんには大宝を初
として緇素しその日記にっき大事だいじには必ず年号のあるが、これほどの大事だいじにいかで
か王も臣も年号も日時もなきや、又次ぎに云く「三論さんろんの道昌どうしょう・法相ほつそうの
源仁げんじん・華嚴けこんの道雄どうゆう・天台てんだいの円澄えんちよう」等云云、抑も円澄えんちようは寂光大師じゃくくわうだいし・
天台てんだい第二の座主ざすなり、其の時何そのときなんぞ第一の座主ざす・義真根本ぎしんこんぽんの伝教大師でんきやうだいしを
ば召さざりけるや、円澄えんちようは天台てんだい第二の座主ざす・伝教大師でんきやうだいしの御弟子おんでしなれど
も又弘法大師こうぼうだいしの弟子でしなり、弟子を召さんよりは三論さんろん・法相ほつそう・華嚴けこんよりは
天台てんだいの伝教でんきやう・義真ぎしんの二人を召すべかりけるか、而も此の日記にっきに云く
眞言しんこん・瑜伽ゆがいの宗・秘密曼荼羅ひみつまんだら彼の時よりして建立こんりゆうす」等
云云、此の筆は伝教でんきやう・義真ぎしんの御存生おんしやうかとみゆ、弘法こうぼうは平城天皇へいぜいてんのう・大同
二年より弘仁こうにん十三年までは盛に眞言しんこんをひろめし人なり、其の時そのときは此の

二人現げんにおはします又義真ぎしんは天長十年までおはせしかば其そのの時ときまで弘法こうぼうの真言しんごんは・ひろまらざりけるか・かたがた不審ふしんあり、孔雀經くじやくの疏じょは弘法こうぼうの弟子でし・真濟しんざいが自記じきなり信じがたし、又邪見者じやくけんが公家くげ・諸家しよ・円澄えんちようの記をひかるべきか、又道昌どうしやう・源仁げんじん・道雄どうゆうの記を尋ぬべし、面門めんもん俄かに開いて金色きんいろの毘盧遮那びるしやなと成る」等云云、面門とは口なり口の開けたりけるか眉間みけん開くとかかんとしけるが☆りて面門とかけるか、ぼう書をつくるゆへにかかるあやまりあるか、天師智拳たいしちけんの印を結んで南方なんぽうに向うに面門めんもん俄かに開いて金色きんいろの毘盧遮那びるしやなと成る」等云云、涅槃經ねはんぎやうの五いに云く迦葉かしやう・仏ぶつに白もうして言もうさく世尊せそん・我今こ是の四種ししゆの人に依よらず何を以もつての故ゆえに瞿師羅經くくしらかうの中の如ごとき仏ぶつ・瞿師羅くくしらかうが為ために説ときたまわく若もし天魔梵てんまふん破壊はえせんと欲ほするが為ために變じて仏の像なと為り三十二相・八十種好しゆしやうを具足ぐそくし莊嚴そうごんし円光一尋えんまん面部えんまん円満えんまんなること猶月なほの盛明せいめいなるが如ごとく眉間みけんの

毫相ごうそう白きこと珂雪かせつに踰え乃至左の脇

より水を出し右の脇より火を出す」等云云、又六の巻に云く 仏迦葉かしように

告げたまわく我般涅槃はつねはんして乃至後是の魔波旬はじゅん漸く当に我が正法しょうぼうを

沮壞そえす乃至化して阿羅漢あらかんの身及仏の色身しきしんと作り魔王此の有漏うろの形を

以て無漏むろの身と作り我が正法しょうぼうを壞やぶらん」等云云、弘法大師は法華經ほけきようを

華嚴經・大日經だいにくきように對して戲論等云云、而も仏身を現げんず此れ涅槃ねはん

經には魔有漏の形をもつて仏となつて我が正法をやぶらんと記し給う、涅槃經の正法は法華經なり故に經の次ぎ下の文に云く「久く已に成仏す」、又云く「法華の中の如し」等云云、釈迦・多宝・十方の諸仏は一切經に對して「法華經は眞実大日經等の一切經は不眞実」等云云、弘法大師は仏身を現じて華嚴經・大日經に對して「法華經は戲論」等云云、仏説まことならば弘法は天魔にあらずや、又三鈷の事殊に不審なり漢土の人の日本に來りてほりいだすとも信じがたし、已前に人をや・つかわして・うずみけん、いわうや弘法は日本の人・かかる誑乱其の数多し此等をもつて仏意に叶う人の証拠とはしりがたし。されば此の眞言・禪宗・念仏等やうやくかさなり來る程に人王八十二代・尊成・隱岐の法皇・權の太夫殿を失わんと年ごろはげませ給いけるゆへに大王たる国主なれば・なにとなくとも師子王の兎を伏するがご

とく、鷹たかの雉きじを取るやうにこそあるべかりし上・叡山えいざん・東寺とうじ・園城おんじょう・奈良
・七なな大寺だいじ・天照太神てんしょうだいじん・加茂かも・春日等かすがに數年が間・或あるは調伏じょうぶく・或あるは神に
申もうさせ給たまいしに二日三日だにもささへかねて佐渡国さど・阿波国あわ・隱岐国おき等
にながし失うせて終ついに

かくれさせ給たまいぬ、調伏じょうぶくの上首御室じょうしゅおむろは但東寺とうじをかへらるるのみならず
眼まなこのごとくあひせさせ給たまいし第一だいいちの天童てんどう・勢多伽せいたかが頸切けきりられたりしか
ば調伏じょうぶくのしるし還著げんちやく於本人おほんにんのゆへとこそ見みへ候こゝろへこれは・わづかの事
なり此の後定んで日本国にほんこくの諸臣しよじん万民ばんみん一人もなく乾草かれくさを積たみて火を放はなつ
がごとく大山だいざんのくづれて谷やをうむるがごとく我が国たこく・他国たこくに・せめらる
る事出来しゅつたいすべし、此の事日本国にほんこくの中に但日蓮にちれん一人計ばかりしれり、いゝいだ
すならば殷いんの紂王しゆうおうの
比干ひかんが胸むねをさきしがごとく夏かのけつの桀王りゅうぼうの竜蓬りゅうぼうが頸けいを切りしがごとく

檀だん弥み羅ら王わうの師し子そん尊じや者者が頸けいを刎はねしがごとく竺じく二の道どう生しょうが流ながされしがごとく法ほう道どう三さん藏ざうのかなやきを・やかれしがごとくならんずらんとは・かねて知しりしかども法ほう華けき經きやうには我しん身み命めいを愛あいせず、但むじ無よう上どう道どうを惜おししむ」ととかれ涅槃ねはん經きやうには「寧むしろ身しん命めいを喪うしうとも教かを匿かくさざれ」といさめ給たまえり、このたび今いま度たび命めいをおしむならばいつの世にか仏ぶつになるべき、又何いかなる世にか父ふ母ぼ・師し匠しょうをも・すくひ奉たてまつるべきと・

ひとへにをもひ切りて申し始めしかば案にたがはず・或は所をおひ・或は
のり・或はうたれ・或は疵をかうふるほどに去ぬる弘長元年辛酉五月
十二日に御勘氣をかうふりて伊豆の国・伊東にながされぬ、又同じき
弘長三年癸亥二月二十二日にゆりぬ。

其の後弥善提心強盛にして申せばいよいよ大難かさなる事大風に
大波の起るがごとし、昔の不輕菩薩の杖木のせめも我身につみしられ
たり覺徳比丘が歡喜仏の末の大難も此れには及ばじと・をばゆ、日本
六十六箇国・嶋二の中に一日片時も何れの所にすむべきやうもなし、
古は二百五十戒を持ちて忍辱なる事・羅云のごとくなる持戒の聖人も
富樓那のごとくなる智者も日蓮に値いぬれば悪口をはく正直にして
魏徴・忠仁公のごとくなる賢者等も日蓮を見ては理をまげて非とをこ
なう、いわうや世間の常の人人は犬のさるをみたるがごとく獵師が鹿

を。

こめたるにいたり、日本国にほんこくの中に一人として故こそあるらめという人なし道理どうりなり、人ごとに念仏ねんぶつを申す人に向うごとに念仏ねんぶつは無間むげんに墮おつるというゆへに、人ごとに真言しんごんを尊む真言しんごんは国をほろぼす悪法あくぼうという、国主こくしゅは禪宗ぜんしゅうを尊む日蓮にちれんは天魔てんまの所為そいというゆへに我と招けるわざわひなれば、人ののるをも・とがめず・とがむとても一人ならず、打つをもちたまず本より存ぜしがゆへに・かう・いよいよ身もをしまず力にまかせて・せめしかば禅僧数

百人・念仏者ねんぶつ・数千しんごん人・真言師しんごんし・百千人・或は奉行ぶぎようにつき・或はきり人につき・或はきり女房にようぼうにつき・或は後家尼御前等ごけあまごぜんについて无尽むじんのざんげんをなせし程に最後さいごには天下第一てんがだいいちの大事だいじ・日本国にほんこくを失わんと咒じゅうそする法師ほっしなり、故最明寺殿さいみょうじ・極楽寺殿ごくらくを無間地獄むげんじごくに墮おちたりと申す法師ほっしな

り御尋ねあるまでもなし但須臾に頸をめせ弟子等をば又頸を切り・或
は遠国につかはし・或は籠に入れよと尼ござんたちいからせ給いしかば
そのまま行われけり。

去ぬる文永八年辛未九月十二日の夜は相模の国たつの口にて切ら
るべかりしが、いかにしてやありけん其の夜はのびて依智といふところへ
つきぬ、又十三日の夜はゆりたりと・どどめきしが又いかにやありけん・
さどの

国までゆく、今日切るあす切るといひしほどに四箇年というに結句は
去ぬる文永十一年太歳甲戌二月十四日に・ゆりて同じき三月二十六
日に鎌倉へ入り同じき四月八日平の左衛門の尉に見参してやうやうの
事申したりし中に今年は蒙古は一定よすべしと申しぬ、同じき五月の十
二日にかまくらをいでて此の山に入れり、これはひとへに父母の恩師匠
の恩・三宝の恩・国恩をほうぜんがために身をやぶり命をすつれども
破れざればさでこそ候へ

又賢人の習い三度国をいさむるに用いずば山林にまじわれといふことは
定まるれいなり、此の功德は定めて上三宝・下梵天・帝釈・日月までも
しろしめしぬらん、父母も故道善房の聖靈も扶かり給うらん、但疑
い念ふことあり目連尊者は扶けんと・おもいしかども母の青提女は餓鬼
道に墜ちぬ、大覺世尊の御子なれども善星比丘は阿鼻地獄へ墜ちぬ、

これは力のまま・すくはんと・をぼせども自業自得果のへんはすくひがたし、故道善房どうぜんぼうはいたう弟子でしなれば日蓮にちれんをばにくしとはをぼせざりけるらめどもきわめて臆病おくびょうなりし上・清澄をはなれじと執せし人なり、地頭景信じとうかげのぶがおそろしさといふ・提婆・瞿伽利だいはくきやりにことならぬ円智・実成じつじょうが上と下とに居てをどせしをあながちにをそれていとをしとをもうとしごろの弟子でし等をだにもすてられし人なれば後生ごしょうはいかんがと疑うたがわし、但一の冥加みょうがには景信かげのぶと円智・実成じつじょうとが・さきにゆきしこそ一のたすかりとは・をもへども彼等かれらは法華經十羅刹のせめを・

かほりてはやく失ぬ、後にすこし信ぜられてありしは・いさかひの後そのちぎりきなり、ひるのともしびなにかせん其その上いかなる事あれども子・弟子でしなんどいう者は不便ふびんなる者ぞかし、力なき人にもあらざりしが・さどの国までゆきしに一度ひとたびもとぶらはれざりし事は法華經ほけきょうを信じたるに

はあらぬぞかし・それにつけても・あさましければ彼の

人の御死去しきよときくには火にも入り水にも沈み・はしりたちても・ゆひて

御はかをも・たたいて経をも一卷読誦どくじゆせんとこそおもへども賢人けんじんのなら

ひ心には遁世とんせいとは・おもはねども人は遁世とんせいとこそおもうらん・ゆへも

なく・はしり出いずるならば末へも・とをらずと人おもひぬべし、されば・

いかにおもひたてまつれども・まいるべきにあらず、但

し各各二人は日蓮が幼少の師匠にて・おはします、勤操僧正・行表
僧正の伝教大師の御師たりしがかへりて御弟子とならせ給いしがごと
し、日蓮が景信にあだまれて清澄山を出でしにかくしおきてしのび出で
られたりしは天下第一の法華經の奉公なり後生は疑いおぼすべから
ず。

問うて云く法華經一部八卷・二十八品の中に何物か肝心なるや、答
えて云く華嚴經の肝心は大方広仏華嚴經・阿含經の肝心は仏說中
阿含經・大集經の肝心は大方等・大集經・般若經の肝心は摩訶般若
波羅蜜經・雙觀經の肝心は仏說無量壽經・觀經の肝心は仏說
觀無量壽經・阿彌陀經の肝心は仏說阿彌陀經・涅槃經の肝心は
大般涅槃經かくのごとくの一切經は皆如是我聞の上の題目其の經の
肝心なり、大は大につけ小は小につけて題目をもつて肝心と

す、大日經・金剛頂經・蘇悉地經等亦復かくのごとし、仏も又かくのごとし大日如來・日月燈明仏・燃燈仏・大通仏・雲雷音王仏是等の仏も又名の内に其の仏の種種の徳をそなへたり、今の法華經も亦もつてかくのごとし、

如是我聞の上の妙法蓮華經の五字は即一部八卷の肝心、亦復一切經の肝心一切の諸仏・菩薩・二乘・天人・修羅・竜神等の頂上の正法なり、問うて云く南無妙法蓮華經と心もしらぬ者の唱うると南無大方廣仏華嚴經と心もしらぬ者の唱うると斉等なりや淺深の功德差別せりや、答えて云く淺深等あり、疑て云く其の心如何、答えて云く小河は露と涓と井と渠と江とをば収むれども大河ををさめず大河は露乃至小河を摂むれども大海ををさめず、阿含經は井江等露涓ををさめたる小河のごとし、方等經・阿彌陀經・

だいにちきよう

大日經・華嚴經等は小河を・をさむる大河なり、法華經は露・涓・井

たまりみず

江・小河・大河・天雨等の一切の水を一てきももらさぬ大海なり、譬え

たいかい

たと

ば身の熱者の大寒水の辺にいねつれば・すずしく小水の辺に臥ぬれば苦

あつきもの

かんすい

ふし

きがごとし、五逆謗法の大きな一闍提人・阿含・華嚴・觀經・大日經

ごぎやくほうぼう

いっせんだい

あごん

けごん

かんきよう

だいにちきよう

等の小水の辺にては大罪の大熱さんじがたし、法華經の大雪山の上に

たいざい

ほけきよう

せつせん

臥ぬれば五逆・誹謗・一闍提等の大熱忽に散ずべし・されば愚者は必ず

ふし

ごぎやく

ひぼう

いっせんだい

たちまち

ぐしや

法華經を信ずべし、各各經經の題目は易き事同じといへども愚者と

ほけきよう

きようぎよう

だいもく

やす

ぐしや

智者との唱うる功德は天地雲泥なり、譬へば大綱は大力も切りがたし

ちしや

とな

くどく

てんちうん

たと

たいこう

たと

かたきいし

にぶきかたな

小力なれども小刀をもつてたやすくこれをきる、譬へば堅石をば鈍刀

たと

かたきいし

にぶきかたな

をもてば大力も破がたし、利劍をもてば小力も破りぬべし、譬へば薬は

わり

りけん

たと

しらねども服すれば病やみぬ食は服すれども病やまず、譬へば仙薬は

たと

命をのべ凡薬は病をいやせども命をのべず。

うたがい

疑

つて云く

二十八品の中に何か肝心ぞや、

答えて云く、或は云く品

みな

品皆事に随いて肝心なり、

或は云く方便品・寿量品・肝心なり、或は

い

云く方便品肝心なり、

或は云く寿量品肝心なり、或は云く

かいじにゅうかんじん

開示悟入肝心なり、或は云く実相肝心なり。

問うて云く

汝が心如何答う南無妙法蓮華經肝心なり、其の証如何

あなん

・阿難・文殊等如是我聞等云云、問うて云く心如何、答えて云く阿難

もんじゅ

と文殊とは八年が間・此の法華經の無量の義を一句・二偈・一字も残さ

ちようもん

ず聴聞してありしが仏の滅後に結集の時九百九十九人の阿羅漢が筆

を染めてありしに先づはじめに妙法蓮華經とかかせ給いて如是我聞と

とな

唱えさせ給いしは妙法蓮華經の五字は一部八卷・二十八品の肝心にあ

らずや、されば過去の燈明仏の時よ

り法華經を講ぜし光宅寺の法雲法師は如是とは將に所聞を伝えんと

ほけきよう

法華經を講ぜし光宅寺の法雲法師は如是とは將に所聞を伝えんと

こうたく

光宅寺の法雲法師は如是とは將に所聞を伝えんと

ほううん

法師は如是とは將に所聞を伝えんと

によぜ

如是とは將に所聞を伝えんと

まさ

將に所聞を伝えんと

しよもん

所聞を伝えんと

を伝えんと

を伝えんと

を伝えんと

す前題に一部を挙ぐるなり」等云云、靈山にまのあたり・きこしめして
ありし天台大師は如是とは所聞の法体なり」等云云章安大師の云く
記者釈して曰く蓋し序王とは經の玄意を叙し玄意は文心を述す」等
云云、此の釈に文心とは題目は法華經の心なり妙樂大師云く二代の
教法を収むること法華の文心より出ず」等云云、天竺は七十箇国なり

總名は月氏国・日本は六十箇国・總名

は日本国月氏の名の内に七十箇国乃至人畜・珍宝みなあり、日本と
申す名の内に六十六箇国あり、出羽の羽も奥州の金も乃至国の珍宝・
人畜乃至寺塔も神社もみな日本と申す二字の名の内に摂れり、天眼
をもつては日本と申す二字を見て六十六国乃至人畜等をみるべし法眼
をもつては人畜等の此に死し彼に生るをもみるべし譬へは人の声をきい
て体をしり跡をみて大小をしる蓮をみて池の大小を計り雨をみて竜

の分^{ぶんざい}育をかんがう、これはみな一に

いっさい一切の有ることわりなり、阿含經の題目には大旨一切はあるやうなれども但小釈迦・一仏のみありて他仏なし、華嚴經・觀經・大日經等には又一切有るやうなれども二乗を仏になすやうと久遠実成の釈迦仏いまさず、例せば華さいて菓ならず雷なつて雨ふらず鼓あつて音なし
眼あつて物をみず女人あつて子をうまず人あつて命なし又神なし、
大日の真言・藥師の真言・阿弥陀の真言・觀音の真言等又かくのごとし、彼の經經にしては大王・須弥山・
日月・良藥・如意珠・利劍等のやうなれども法華經の題目に対すれば雲泥の勝劣なるのみならず皆各各当体の自用を失ふ、例せば衆星の光の一日輪にうばはれ諸の鉄の一の磁石に値うて利性のつき大劍の小火に値て用を失ない牛乳・驢乳等の師子王の乳に値うて水となり衆狐が術・一犬に値うて失い、狗犬が小虎に値うて色を變ずるがご

とし、南無妙法蓮華經と申せば南無阿彌陀仏の用も南無大日真言の
用も觀世音菩薩の用も一切の諸仏・諸經・諸菩薩の用皆悉く
妙法蓮華經の用に失なはる、彼の經經は妙法蓮華經の用を借ずば皆
いたづらのものなるべし當時眼前のことはりなり、日蓮が南無
妙法蓮華經と弘むれば南無阿彌陀仏の用は月のかくるがごとく塩のひ
るがごとく秋冬の草のかるるがごとく氷の日天にとくるがごとくなり
ゆくをみよ。

問うて云く此の法実にいみじくばなど迦葉・阿難・竜樹・馬鳴・無著
・天親・南岳・天台・妙楽・伝教等は善導が南無阿彌陀仏とすすめて
漢土に弘通せしがごとく、慧心・永觀・法然が日本国を皆阿彌陀仏に
なしたるがごとく・すすめ給はざりけるやらん、答えて云く此の難は
古の難なり今はじめたるにはあらず、馬鳴・竜樹菩薩等は仏の滅後・六

百年・七百年等の大論師なり、此の人人世にいでて大乘經を弘通せしかば諸諸の小乗の者疑つて云く迦葉・阿難等は仏の滅後二十年・四十年住壽し給いて正法をひろめ給いしは如来一代の肝心をこそ弘通し給いしか、而るに此の人人は但苦・空・無常・無我の法門をこそ詮とし給いしに今馬鳴・竜樹等かしこしといふとも迦葉・阿難等にはすぐべからず是一、迦葉は仏にあひまいらせて解をえたる人なり、此の人人は仏にあひたてまつらず是二、外道

は常樂我淨じやうらくがじやうと立てしを仏・世に出でさせ給たまいて苦・空・無常・無我むがと説かせ給たまいき、此のもののどもは常樂我淨じやうらくがじやうといへり、されば仏も御入滅にゅうめつなり又迦葉等かしやうもかくれさせ給たまいぬれば第六天だいろくてんの魔王まおうが此のもののどもが身に入りかはりて仏法ぶつぽうをやぶり外道げどうの法となさんとするなり、されば仏法ぶつぽうのあだをば頭いづへをわれ頸けいをきれ命めいをたて食じきを止めよ国を追へと諸もろの小乗しょうじやうの人人ひとびと申まをせしかども馬鳴めみやう・竜樹等りやうじゆは但・二人なり昼夜あつに惡口あくぐちの声をきき朝暮ちやうぼに杖木じやうもくをかうふりしなり、而れども此の二人は仏の御使おんつかいぞかし、正まさく摩耶經まやきやうには六百年に馬鳴出めみやういで七百年に竜樹出りやうじゆいでんと説かれて候、其の上楞伽經りやうがきやう等にも記せられたり又付法藏經ふぽうざうきやうには申もうすにをよぼす、されども諸の小乗もろもろしやうじやうのものどもは用もちいず但めくらぜめにせめしなり、如来現在にやらいげんざい猶多怨嫉ゆたおんしつ・況滅度後の經文きやうめつごのきやうもんは此の時にあたりて少しつみしられけり、提婆菩薩だいばぼさつの

外道げどうにころされ師子し尊者そんじゃの頸けをきられし此の事をもつておもひやらせ給たまへ。

又仏滅後・一千五百余年にあたりて月氏がしよりは東に漢土かんどといふ国あり陳隋ちんずいの代に天台大師出世てんだいだいししゅつぜす、此の人の云く如来にょらいの聖教しょうきょうに大あり小あり顕けんあり密あり権あり実あり、迦葉かしよう・阿難あなん等は一い向こうに小を弘ひろめ馬鳴めみよう・竜樹りゅうじゆ・無著むちゃく・天親てんじん等は権大乘こんだいじようを弘ひろめて実大乘じつだいじようの法華經ほけきようをば、或あるは但指しやくもんをさして義をかくし、或あるは經の面をのべて始中終しちゆうじゆうをのべず、或あるは迹門しやくもんをのべて本門ほんもんをあらはさず、或あるは本・迹あつて觀心かんじんなしといひしかば、南三・北七なんさんほくひちの十流が末数千万人・時を

つくり・どつとわらふ、世の末になるままに不思議ふしぎの法師ほふしも出現しゅつげんせり、時にあたりて我等われらを偏執へんしゅうする者はありとも後漢ごかんの永平十年丁卯ひのとうの歳より今陳隋ちんずいにいたるまでの三藏さんざう・人師にんし・二百六十余人をもものもしらずと

申す上ほうぼう謗法の者なり惡道あくどうに墜つるといふ者出来しゅつたいせり、あまりの・ものくるはしさに法華經ほけきょうを持たもて来り給たまへる羅什三藏らじゅうさんざうをも・もの

しらぬ者と申すもうなり、漢土かんどはさてもをけ月氏がっしの大論師ろんしりゅうじ竜樹てんじん・天親等の數百人の四依しえの菩薩ぼさつもいまだ実義じつぎをのべ給たまはずといふなり、此をころしたらん人は鷹たかをころしたるものなり鬼をころすにもすぐべしとののしりき、又妙樂大師みょうらくだいしの時・月氏がっしより法相真言ほつそうしんごんわたり漢土かんどに華嚴宗けこんしゅうの始まりたりしを・とかくせめしかばこれも又さはぎしなり。

日本国には伝教大師が仏滅後・一千八百年にあたりていでさせ給い
天台の御釈を見て欽明より已来二百六十余年が間の六宗をせめ給い
しかば在世の外道・漢土の道士・日本に出現せりと謗ぜし上仏滅後・一
千八百年が間・月氏・漢土・日本になかりし円頓の大戒を立てんという
のみならず、西国の観音寺の戒壇・東国下野の小野寺の戒壇・
中国大和の国・東大寺の戒壇は同く小乗・臭糞の戒なり瓦石のごと
し、其を持つ法師等は野干・猿猴等のこととありしかばあら不思議や
法師にいたる大蝗虫国に出現せり仏教の苗一時にうせなん、殷の紂・
夏の桀・法師となりて日本に生まれたり、後周の宇文・唐の武宗・二た
び世に出現せり仏法も但今失せぬべし国もほろびなんと大乘・小乗の
二類の法師出現せば修羅と帝釈と項羽と高祖と一国に並べるなるべし
と、諸人手をたたき舌をふるふ、在世

には仏と提婆が二の戒壇ありてそこばくの人人死にき、されば他宗にはそむくべし我が師・天台大師の立て給はざる円頓の戒壇を立つべしという不思議さよ・あらおそろし・おそろしと・ののしりあえりき、されども經文分明にありしかば叡山の大乗戒壇すでに立てさせ給いぬ、されば内証は同じけれども法の流布は迦葉・阿難よりも馬鳴・竜樹等はすぐれ馬鳴等よりも天台はすぐれ天台よりも伝教は超えさせ給いたり、世末になれば人の智はあさく仏教はふかくなる事なり、例せば輕病は凡藥・重病には仙藥・病人には強きかたうど有りて扶くるこれなり。

問うて云く天台・伝教の弘通し給わざる正法ありや、答えて云く有り・求めて云く何物ぞや、答えて云く三あり、末法のために仏留め置き給う迦葉・阿難等馬鳴・竜樹等天台・伝教等の弘通せさせ給はざる

しょうほう 正法なり、求めて云く其の形 貌如何、答えて云く一には日本乃至一
えんぶだい 閻浮提一同に本門の教主釈尊を本尊とすべし、所謂宝塔の内の
しやか 釈迦・多宝外の諸仏・並に上行等の四菩薩脇士となるべし、二には
ほんもん 本門の戒壇、三には日本乃至・漢土・月氏・一閻浮提に人ごとに有智・
むち 無智をきらはず一同に他事をすてて南無妙法蓮華經と唱うべし、此の
えんぶだい 事いまだひろまらず一閻浮提の内に仏滅後・二千二百二十五年が間・
とな 一人も唱えず日蓮一人南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經等と声

もをしまず唱となうるなり、例せば風に随したがつて波の大小だいしやうあり薪たきぎによつて火
の高下こうげあり池に随したがつて蓮の大小だいしやうあり雨の大小だいしやうは竜による根ふかければ
枝しげし源遠みなもととおければ流ながしというこれなり、周の代の七百年は文王の
礼孝による秦の世ほどもなし始皇の左道によるなり、日蓮にちれんが慈悲じひ曠大
ならば南無妙法蓮華經は万年まんねんの外未來までもながるべし、日本国にほんこくの
一切衆生の盲目をひらける功德くどくあり、無間地獄むげんじごくの道をふさぎぬ、此の
功德くどくは伝教天台にも超へ
竜樹迦葉りゅうじゆかしやうにも・すぐれたり、極樂百年ごくらくへんの修行は穢土えどの一日の功德くどくに
及およばず、正像二千年しょうざうにせんの弘通くわつうは末法まつぽうの一時いちじに劣るか、是れひとへに日蓮にちれん
が智のかしこきにはあらず時のしからしむる耳のみみ、春は花さき秋は菓このみな
る夏はあたたかに冬はつめたし時のしからしむるに有らずや。

我滅度めつどの後・後このごの五百歳ひやくさいの中に広宣流布こうせんるふして閻浮提えんぶだいに於て断絶だんぜつして

悪魔・魔民・諸の天竜・夜叉・鳩槃荼等に其の便りを得せしむること無
けん」等云云、此の經文若しむなしくなるならば舍利弗は華光如来と
ならじ迦葉尊者は光明如来とならじ目☆は多摩羅跋耆檀香仏となら
じ阿難は山海慧自在通王仏とならじ摩訶波闍波提比丘尼は一切衆生
喜見仏とならじ耶輸陀羅比丘尼は具足千万光相仏とならじ、三千
塵点も戲論となり五百塵点も妄語となりて恐らくは教主釈尊は無間
地獄に墮ち多宝仏は阿鼻の炎にむせび十方の諸仏は八大地獄を栖と
し一切の菩薩は一百三十六の苦をうくべし・いかでかその義候べき、其の
義なくば日本国は一同の南無妙法蓮華經なり、されば花は根にかへり
真味は土にとどまる、此の功德は故道善房の聖靈の御身にあつまるべ
し、南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經。

建治二年太歳丙子七月二十一日

之^{これ}を記^{しる}す甲州波木井郷身延山より安房^{あわ}の国・東条^{とうじょう}の郡・清澄山・浄
顯房^{げんぼう}・義成房^{ぎせいぼう}の許^{もと}に奉送す

◆四六

報恩抄送文

330P

御状給り候畢ぬ、親疎しんそと無く法門ほうもんと申すは心に入れぬ人にはいはぬ
事にて候ぞ御心得候へ御本尊ごほんぞん図して進候まいらせそうろう此の法華經ほけきようは仏の在世ざいせい
よりも仏の滅後めつご・正法しやうほうよりも像法ぞうほう・像法ぞうほうよりも末法まつぼうの初はじめには次第しだいに
怨敵おんてき強くなるべき由よしをだにも御心へあるならば日本国にほんこくに是より外に
法華經ほけきようの行者ぎやうじやなし・これを皆人存みなぞんじ候ぬべし、道善御房どうぜんごぼうの御死去しきよの由・
去る月粗承ほろうけたまわり候、自身じしん早々と参上し此の御房ごぼうをも・やがてつかはすべ
きにて候しが自身じしんは内心ないしんは存ぜずといへども人目ひとめには遁世とんせいのやうに見え
て候へばなにとなく此の山いを出でず候、此の御房ごぼうは又内内・人の申し候
しは宗論しゅうろん

やあらんずらんと申せしゆへに十方じゅつぽうにわかつて経論等きやうろんを尋ねしゆへに国
国の寺寺へ人をあまたつかはして候に此の御房ごぼうはするがの国へつかはし
て当時とうじこそ来て候へ又此の文は随分ずいぶん大事だいじの大事だいじどもをかきて候ぞ詮な
からん人人ひとびとにきかせなばあしかりぬべく候、又設たといいさなくともあまたに
なり候はば・ほかさまにもきこえ候なば御ため又このため安穩あんおんならず
候はんか、御まへと義成房ぎせうぼうと二人・此の御房ごぼうをよみてとして嵩かさがもりの
頂いただきにて二三遍又・故道善御房どうぜんごぼうの御はかにて一遍いっぺんよませさせ給たまいては此
の御房ごぼうにあづけさせ給たまいてつねに御聴聞候ちやうもんへたびたびになり候ならば
心づかせ給たまう事候なむ、恐恐きようきよう謹言きんげん。

七月二十六日

日蓮 花押かおう

清澄御房ぼさう

◆四七

法華ほつけ取要抄

文永ぶんえい十一年五月

五十三歳御作

与富木ときじょうにん常忍

於身延

331P

扶桑ふそう沙門しゃもん日蓮にちれん

之これを述ぶ

夫それ以おもんみれば月支がつし・西天さいてんより漢土かんと・日本にほんに渡来とらいする所の經論きやうろん・五千・七

千余卷せんよなり、其中ごちゆうの諸經論しよきやうろんの勝劣しょうれつ・浅深せんじん・難易なんい・先後せんご・自見まかに任せて

之これを弁わきまうことは其その分ぶんに及およばず、人ひとに隨したがい宗しゆに依よつて之これを知る者ものは其その

義紛ふん紕びす、所謂いわゆる華嚴宗けこんしゆうの云いく「切經いつさいきやうの中に此だいの經だい第一だい」と、法相宗ほうそうしゆう

の云いく「切經いつさいきやうの中に深密經じんみつ第一だい」と、三論宗さんろんしゆうの云いく「切經いつさいきやうの中に

般若經はんぎやう第一だい」と、真言宗しんごんしゆうの云いく「切經いつさいきやうの中に大日だいの三部經さんぶきやう第一だい」と、

禪宗ぜんしゆうの云いく・或あるは云いく「教内りやうがきやうには楞伽經だいいち第一だい」と、・或あるは云いく

「首楞嚴經 第一」と、或は云く、教外別伝の宗なり」と、浄土宗の云く、「切経の中に浄土の三部経末法に入りては機教相応して第一なり」と、俱舎宗・成実宗・律宗云く、四阿含並に律論は仏説なり華嚴経・法華経等は仏説に非ず外道の経なり」と、或は云く、或は云く、而に彼れ彼れ宗宗の元祖等・杜順・智儼・法蔵・澄觀・玄奘・慈恩・嘉祥・道朗・善無畏・金剛智・不空・道宣・鑒真・曇鸞・道綽・善導・達磨・慧可等なり、此等の三蔵大師等は皆聖人なり賢人なり智は日月に齊く徳は四海に弥れり、其の上各各に経・律・論に依り更互に証拠有り随つて王臣国を傾け土民之を仰ぐ末世の偏学設い是非を加うとも人信用を致さじ、爾りと雖も宝山に來り登つて瓦石を採取し梅檀に歩み入つて伊蘭を懷き取らば悔恨有らん、故に万人の謗りを捨て猥りに取捨を加う我が門弟委細に之を尋討せよ。

夫れ諸宗の大師等・或は旧訳の經論を見て新訳の聖典を見ず・或は
新訳の經論を見て旧訳を捨置き・或は自宗の曲に執著して己義に
隨い愚見を注し止めて後代に之を加添す、株杭に驚き騒ぎて兎獸を
尋ね求め智円扇に発して仰いで天月を見る非を捨て理を取るは智人な
り、今末の論師・本の大師の邪義を捨て置いて専ら本經・本論を引き見
る

に五十余年の諸經の中に法華經第四法師品の中の已今当の三字最も第一なり、諸の論師・諸の人師定めて此經文を見けるか、然りと雖も或は相似の經文に狂い・或は本師の邪会に執し・或は王臣等の帰依を恐るるか、所謂金光明經の是諸經之王「密嚴經の「一切經中勝六波羅蜜經の總持第一」大日經の「云何菩提」華嚴經の「能信是經・最為難」般若經の「会入法性・不見一事」大智度論の「般若波羅蜜最第一」涅槃論の「今者涅槃理」等なり、此等

の諸文は法華經の已今当の三字に相似せる文なり然りと雖も・或は梵帝・四天等の諸經に對当すれば是れ諸經の王なり・或は小乘經に相對すれば諸經の中の王なり・或は華嚴・勝鬘等の經に相對すれば一切經の中に勝れたり全く五十余年の大小・權實・顯密の諸經に相對して是れ諸經の王の大王なるに非ず所詮所對を見て經經の勝劣を

弁わきまううべきなり、強敵ごうてきを臥伏ふせふするに始はて大力ちりけんを知見しする是これなり、其の上
諸經しよきやうの勝劣しょうれつは釈尊しやくそん一仏いちぶつの浅深せんじんなり全たく多宝分身たほうふんじんの助言しよきやうを加くうるに
非あらず私説もつくじを以もつて公事こうじに混なざる事勿なれ、諸經しよきやうは、或あるは二乘凡夫にじようばんぶに對揚たいようし
て小乘經しやうじやうきやうを演說えんせつし、或あるは文殊もんじゆ・解脫げだつ月がつ・金剛薩こんごうさだ☆等ぐでんの弘伝くでんの菩薩ぼさつに
對向じゆせんがいして全じゆく地涌千界じようぎやうの上行じようぎやう等あらには非あらず、今法華經ほけきやうと諸經しよきやうとを相對そうたい
するに一代いちだい

に超過ちやうかすること二十種これあ之有そり、其の中最要二有いり所謂い三五の二法いなり
三とは三千塵点劫さんぜんじんてんきやうなり諸經しよきやうは、或あるは釈尊しやくそんの因位いんいを明あすこと、或あるは三祇さんぎ
・或あるは動逾塵劫どうゆじんきやう・或あるは無量劫むりやうきやうなり、梵王ぼんのう云いく此の土には二十九劫ごより
已來知行このかたちぎやうの主だいろくてんなり第六天たいしやく・帝釈してんのう・四天王等もつかくも以もつて是かくの如ごとし、釈尊しやくそんと
梵王ぼんのう等と始ちぎやうめて知行せんごこれの先後じやうろん之を諍論しかりす爾いりと雖いも一指あを拏あげて之これを
降伏かうふくしてより已來梵天このかたぼんてん・頭を傾まけ魔王まおう掌たなごころを合さんせ三界さんがいの衆生しゆじやうをして

釈尊しやくそんに歸伏きふくせしむる是これなり、又諸仏しよぶつの因位いんいと釈尊しやくそんの因位いんいと之これを糾明きうめいするに諸仏しよぶつの因位いんいは・或あるは三祇さんぎ・或あるは五劫ごけつ等なり釈尊しやくそんの因位いんいは既すでに三千塵点劫さんぜんじんてんけつより已來このかた娑婆世界しやばせかいの一切衆生いっさいしゆじやうの結縁けちえんの居士けしなり、此の世界せかいの六道ろくどうの一切衆生いっさいしゆじやうは他土たどの他の菩薩ぼさつに有縁うえんの者一人も之これ無し、法華經ほけきやうに云いく爾その時に法を聞く者は各諸仏しよぶつの所に在り」等云云、天台云てんだい云いく西方さいほうは仏・別に縁異ゆえり故に子父の義成ゆえせず」等云云、妙樂云みょうらく云いく彌陀みだ・釈迦しやか二仏ふつ既すでに殊ことなり況いはんやや宿昔むかしの縁別ゆえんべつにして化導けどう同じからざるをや結縁けちえんは生の如ごとく成熟じやうじゆくは

養よの如ごとし生養縁異れば父子成ふぜず」等云云、当世とうせ・日本国にほんこくの一切衆生いっさいしゅじょう
弥陀みだの来迎らいいこうを待つは譬たとえば牛の子に馬の乳を含め瓦の鏡てんげつに天月てんげつを浮ぶ
るが如ごとし、又果位を以て之を論ずれば諸仏如来しよぶつにょらい・或は十劫ある・百劫せんごう・千劫せんごう
已来このかたの過去かこの仏なり、教主釈尊きやうしゅしやくそんは既に五百塵点劫より已来妙覺果満このかたみょうかくかまん
の仏なり大日如来だいにちにょらい・阿弥陀如来あみだにょらい・薬師如来等やくしにょらいの尽じゆつぽう十方しよぶつの諸仏は我
等が本師教主釈尊ほんしきやうしゅしやくそんの所従等なり、天月てんげつの万水ばんすいに浮ぶ是なり、華嚴經けこんきやう
の十方じゆつぽう台上の毘盧遮那びるしやな・大日經だいにちきやう・金剛頂經こんごうちやうきやう・両界の大日如来だいにちにょらいは
宝塔品の多宝如来たほうにょらいの左右さうの脇士きやうしなり、例せば世の王の両臣の如ごとし此の
多宝仏たほうぶつも寿量品の教主釈尊きやうしゅしやくそんの所従しよじゆうなり、此の土の我等衆生われらしゅじょうは
五百塵点劫より已来教主釈尊このかたきやうしゅしやくそんの愛子ふこなり不孝ふこうの失に依よつて今に覺知かくち
せずと雖いふとも

他方たほうの衆生しゅじょうには似にる可べからず、有縁うえんの仏と結縁けちえんの衆生しゅじょうとは譬たとえば天月てんげつ

の清水に浮ぶが如く無縁の仏と衆生とは譬えば聾者の雷の声を聞き盲者の日月に向うが如し、而るに或る人師は釈尊を下して大日如来を仰崇し、或る人師は世尊は無縁なり阿弥陀是有縁なり、或る人師の云く小乗の釈尊と、或は華嚴經の釈尊と、或は法華經迹門の釈尊と此等の諸師並びに檀那等釈尊を忘れて諸仏を取ることは例せば阿闍世太子の頻婆沙羅王を殺し釈尊に背いて提婆達多に付きしが如し、二月十五日は釈尊御入滅の日乃至十二月十五日も三界慈父の御遠忌なり、善導・法然・永觀等の提婆達多に誑されて阿弥陀仏の日と定め畢んぬ、四月八日は世尊御誕生の日なり藥師・仏に取り畢んぬ、我が慈父の忌日を他仏に替るは孝養の者なるか如何、寿量品に云く我も亦為れ世の父狂子を治する為の故に」等云云、天台大師云く本此の仏に従つて初めて道心を発す

亦此の仏に従つて不退地に住す乃至猶百川の海に潮すべきが如く縁に牽かれて応生すること亦復是くの如し」等云云。

問うて云く法華經は誰人の爲に之を説くや、答えて曰く方便品より人記品に至るまでの八品に二意有り上より下に向て次第に之を読めば第一は菩薩第二は二乗・第三は凡夫なり、安樂行より勸持・提婆・宝塔・法師と逆次に之を読めば滅後の衆生を以て本と爲す在世の衆生は傍なり滅後を以て之を論ずれば正法一千年・像法一千年は傍なり

り、末法を以て正と為す末法の中には日蓮を以て正と為すなり、問うて曰く其の証拠如何、答えて曰く況滅度後の文是なり、疑つて云く日蓮を正と為す正文如何、答えて云く諸の無智の人有つて・惡口罵詈等し・及び刀杖を加うる者」等云云、問うて曰く自讃は如何、答えて曰く喜び身に余るが故に堪え難くして自讃するなり、問うて曰く本門の心如何、答えて曰く本門に於て二の心有り一には涌出品の略開近顯遠は前四味並に迹門の諸衆をし

て脱せしめんが為なり、二には涌出品の動執生疑より一半並びに寿量品・分別功德品の半品已上一品二半を広開近顯遠と名く一向に滅後の為なり、問うて曰く略開近顯遠の心如何、答えて曰く文殊・彌勒等の諸大菩薩・梵天・帝釈・日月・衆星・竜王等初成道の時より般若經に至る已來は一人も釈尊の御弟子に非ず此等の菩薩・天人は

初成道の時・仏未だ說法したまわざる已前に不思議解脱に住して我と
別円二教を演説す・釈尊其の後に阿含・方等・般若を宣説し給う然りと
雖も全く此等の諸人の得分に非ず、既に別円二教を知りぬれば藏通を
も又知れり勝は劣を兼ねる是なり委細に之を論ぜば、或は釈尊の師匠
なるか善知識とは是なり釈尊に隨うに非ず、法華經の迹門の八品に
来至して始めて未聞の法を聞いて此等の人人は弟子と成りぬ舍利弗・
目連等は鹿苑より已来初発心の弟子なり、然りと雖も權法のみを許せ
り、今法華經に來至して実法を授与し法華經本門の略開近顯遠に來至
して華嚴よりの大菩薩・二乘・大梵天・帝釈・日月・四天・竜王等は位・
妙覺に隣り又妙覺の位に入るなり、若し爾れば今・我等天に向つて
之を見れば生身の妙覺の仏本位に居して衆生を利益する是なり。
問うて曰く誰人の為に広開近顯遠の寿量品を演説するや、答えて

曰くじゅりようほん寿命品の一品二半は始より終に至るまで正く滅後衆生の為なり
滅後めつごの中には末法まつぽう今時の日蓮等が為なり、疑うたがいつて云く此の法門前代
に未だ之を聞かずいまこれ經文に之れ有りや、答えて曰く予が智前賢に超え
ずたといきようもん設い經文を引くと雖も誰人か之を信ぜんいえどだれびとこれ卞和が啼泣・伍子胥が悲
傷これ是なり、然りと雖も略開近顯遠・動執生疑の文に云くい然も諸の
新發意の菩薩・仏の滅後しんほつちぼさつめつごに於て若し是の語をおいもことば

聞かば・或は信受せずして法を破する罪業の因縁を起さん」等云云、文の心は寿命品を説かずんば末代の凡夫皆惡道に墮せん等なり、寿命品に云く是の好き良藥を今留めて此に在く」等云云、文の心は上は過去の事を説くに似たる様なれども此の文を以て之れを案ずるに滅後を以て本と為す先ず先例を引くなり、分別功德品に云く「惡世末法の時」等云云、神力品に云く「仏滅度の後に能く是の經を持たんを以つての故に諸仏皆歡喜して無量の神力を現じ給う」等云云、藥王品に云く「我が滅度の後・後の五百歳の中に広宣流布して閻浮提に於て斷絶せしむること無けん」等云云、又云く「此の經は則ち為れ閻浮提の人の病の良藥なり」等云云、涅槃經に云く「譬えば七子の如し父母平等ならざるに非ざれども然も病者に於て心則ち偏に重し」等云云、七子の中の第一第二は一闍提

謗ほう法ぽうの衆生しゆじやうなり諸病しよびやうの中には法華經ほけきやうを謗ほうずるが第一だいいちの重病じゆうびやうなり、
諸葉しよやくの中には南無妙法蓮華經なむみよほうれんげきやうは第一だいいちの良葉りやうやくなり、此この一闍浮提えんぶだいは
縱じゆう広かう七千由善那八万ぜんなはちまんの国之これ有り正像しやうざう二千年の間未だ広宣流布かうせんるふせざ
るに法華經ほけきやう当世とうせに當あつて流布るふせしめずんば釈尊しやくそんは大妄語もうごの仏ぶつ・多宝たほう仏ぶつ
の証しやうみよう明めいは泡沫ほうまつに同じく十方じゆつぽう分身ふんじんの仏ぶつの助舌じよぜつも芭蕉ばしやうの如ごとくならん。
疑うたがいつて云いわく多宝たほうの証しやうみよう明めい・十方じゆつぽうの助舌じよぜつ・地涌じゆの涌出ゆじゆつ此等これらは誰人だれびとの爲
ぞや、答こたへて曰いわく世間せけんの情じやうに云いわく在世ざいせの爲ためと、日蓮にちれん云いわく舍利弗しやりほつ・目☆
等は現在げんざいを以もつて之これを論ろんずれば智慧ちえ第一だいいち・神通じんつう第一だいいちの大聖たいせいなり、過去かこを
以もつて之これを論ろんずれば金竜こんりゆう陀仏だぶつ・青竜せいりゆう陀仏だぶつなり、未來みらいを以もつて之これを論ろんずれば
華光げかう如來にやらい・靈山りやうぜんを以もつて之これを論ろんずれば三惑さんかく頓とん尽じんの大菩薩だいぼさつ・本もとを以もつて之これを
論ろんずれば内秘外現ないひがいげんの古菩薩こぼさつなり、文殊もんじゆ・彌勒みろく等らの大菩薩だいぼさつは過去かこの古仏こぶつ・
現在げんざいの応生おうえいなり、梵帝ぼんたい・日月にちがつ・四天してん等は

初成いぜん已前たいせいの大聖だいせいなり、其の上その・前四味ぜんしみ・四教しきよう一言いに之これを覚さとりぬ仏ぶつの在世ざいせ
には一人おひに於おても無智むちの者こ之れ無し誰人だれびとの疑うたがいを晴ためさんが為ために多宝たほう仏ぶつ
の証明しょうみょうを借り諸仏しよぶつ舌しを出でし地涌じゆの菩薩ぼさつを召めさんや方方かたがた以もつて謂いわれ無き
事ことなり、經文きやうもんに随したがつて 沉滅きやうめつ度後どご・令法りやうぽう久住くじゅう」等云云、此等これらの經文きやうもんを
以もつて之これを案あんずるに偏ひとえに我等われらが為ためなり、随したがつて天台大師てんだいだい当世とうせを指しして
云いく 後このごの五百ひやく歳遠さいく 妙道みやうどうに沾うるわん」伝教大師でんぎやうだい当世とうせを記しして云いく
『正像しょうざう稍過ややすぎ已おわつて末法まつぽう太はなだ近ちかきに有

り」等云云、まつぼう 末法太有近」の五字は我が世は法華經流布の世に非ずと云う釈なり。

問うて云くいわ 如来滅後二千余年・竜樹・天親・天台・伝教の残したまえる所の秘法ひほうは何物ぞや、答えて云くいわ 本門の本尊と戒壇と題目の五字となり、問うて曰くいわ 正像等に何ぞ弘通せざるや、答えて曰くいわ 正像に之を弘通せばしょうじよう 小乗・權大乘・迹門の法門一時に滅尽す可きなり、問うて曰くいわ 仏法を滅尽するの法何ぞ之を弘通せんや、答えて曰くまつぼう 末法に於ては大小・權実・顯密共に教のみ有つて得道無し一闍浮提皆謗法と為り畢おわ んぬ、逆縁ぎやくえんの為には但妙法蓮華經みょうぼうれんげきようの五字ごじに限る、例せば不輕品の如し我が門弟は順縁なり日本国は逆縁ぎやくえんなり、疑うたがいつて云く何ぞなん 広略を捨て要を取るや、答えて曰くいわ 玄奘三蔵は略を捨てて広を好み四十卷の大品經を六百卷と成す羅什三蔵は広

を捨て略を好む千巻の大論だいろんを百巻と成せり、日蓮にちれんは広略こうりやくを捨てて肝要かんようを好む所謂いわゆる上行菩薩じょうぎょうぼさつしよでん所伝みようほうれんげきようの妙法蓮華經みょうほうれんげきようの五字ごじなり、九包淵ほうえんが

馬を相するの法は玄黄げんこうを略して駿逸しゅんいつを取る支道林しどうりんが經を講こうずるには細

料を捨てて元意を取る等云云、仏すつ既に宝塔ほうとうに入つて二仏座ふんじんを並べ分身

来集らいじゅうし地涌じゆを召し出し肝要かんようを取つて末代まつだいに当てて五字ごじを授与じゅよせんこと

当世異義とうせいぎぎあ有る可からず。

疑うたがいつて云く今世いまに此この法ほを流布るふせば先相せんそう之れ有りや、答えて曰く

法華經ほけきように如是相によぜそう乃至本末究竟等ほんまつくきよう云云、天台てんだい云く蜘蛛ちちゅう掛りて喜び事

来たり☆鵲鳴かんじやくいて客人きやく来る小事しょうじ猶なほ以て是こくの如ごとし何いかに況いわんやや大事だいじをや」

取意しゆい、問うて曰く若もし爾しかれば其その相こ之れ有りや、答えて曰く去ぬる

正嘉年しょうか中の大地震だいちしん・文永ぶんえいの大彗星すいせい其より已い後今ごに種種しゅじゅの大なる天変てんぺん・

地天ちよう此等これらは此先相せんそうなり、仁王經にんのうきようの七難ひちなん・二十九難なん・無量むりようの難なん、

金光明經・大集經・守護經・藥師經等の諸經に挙ぐる所の諸難皆之有り但し無き所は二三四五の日出る大難なり、而るを今年佐渡の国の土民は口口に云う今年正月廿三日の申の時西の方に二の日出現す、或は云く三の日出現す等云云、二月五日には東方に明星二つ並び出ず其の中間は三寸計り等云云、此の大難は日本国先代にも未だ之有らざるか、最勝王經の王法正論品に云く變化の流星

墮ち二の日俱時に出で他方の怨賊来つて国人喪乱に遭う」等云云、
首楞嚴經に云く「或は二の日を見し・或は兩つの月を見す」等、藥師
經に云く「日月薄蝕の難」等云云、金光明經に云く「彗星數ば出で兩
つの日並び現じ薄蝕恒無し」大集經に云く「佛法實に隱没せば乃至
日月明を現ぜず」仁王經に云く「日月度を失い時節返逆し・或は赤日
出で黒日出で二三四五の日出ず・或は日蝕して光無く・或は日輪一重
二三四五重輪現ぜん」等云云、此の日月
等の難は七難二十九難無量の諸難の中に第一の大惡難なり、問うて
曰く此等の大中小の諸難は何に因つて之を起すや、答えて曰く
最勝王經に曰く非法を行ずる者を見て當に愛敬を生じ善法を行ず
る人に於て苦楚して治罰す」等云云、法華經に云く涅槃經に云く
金光明經に云く惡人を愛敬し善人を治罰するに由るが故に星宿

および風雨皆時を以て行われず」等云云、大集經に云く、佛法實に隱没

し乃至是くの如き不善業の惡王・惡比丘我が正法を

毀壞す」等、仁王經に云く「聖人去る時七難必ず起る」等、又云く法

に非ず律に非ず比丘を繫縛すること獄囚の法の如くす爾の時に當つて

法滅せんこと久しからず」等、又云く諸の惡比丘多く名利を求め國王

太子・王子の前に於て自ら破佛法の因縁・破國の因縁を説かん其の王

別まえずして此の語を信聽せん」等云云、此等の明鏡を齎て當時の

日本國を引き向うるに天地を浮ぶること宛も符契の如し眼有らん我

が門弟は之を見よ、當に知るべし此の國に惡比丘等有つて天子・王子・

將軍等に向つて讒訴を企て聖人を失う世なり、問うて曰く

弗舍密多羅王・会昌・

天子・守屋等は月支・真旦・日本の佛法を滅失し提婆菩薩・師子尊者等

を殺害す其の時何ぞ此の大難を出さざるや、答えて曰く災難は人に
随つて大小有る可し正像二千年の間惡王・惡比丘等は或は外道を
用い或は道士を語らい或は邪神を信ず佛法を滅失すること大なるに
似たれども其の科尚淺きか、今当世の惡王・惡比丘の佛法を滅失する
は小を以て大を打ち權を以て実を失う人心を削て身を失わず寺塔を
燒き尽さずして自然に之を喪す其の失前代に超過せるなり、我が門弟
之を見て法華經を信用せよ目を瞋らして鏡に向え、天瞋るは人に失
有ればなり、二二の日

並び出るは一国に二の国王並ぶ相なり、王と王との闘諍なり、星の
にちがつ日月を犯すは臣王を犯す相なり、日と日と競い出るは四天下一同の
諍論なり、明星並び出るは太子と太子との諍論なり、是くの如く国土
乱れて後に上行等の聖人出現し本門の三つの法門之を建立し一
四天・四海一同に妙法蓮華經の広宣流布疑い無からん者か。

文永十一年五月

在御判

◆四八 四信五品抄

歳御作 与富木常忍

338p

建治三年四月十日 五十六

青鳧一結送り給ひ候おわ了ゆいんぬ。

今がくしゃ来の学者一同の御存知ござんじに云いわく 在世滅後ざいせめつこ異なりと雖いえども法華ほっけを修行しゆぎようするには必ず三学さんがくを具ぐす一を欠くいても成なぜず」云云。

余又年来此としころの義ぎを存そんする処ところ一代聖教いちだいしやうきやうは且しばらく之これを置おく法華經ほっけきやうに入いつて此の義ぎを見聞けんもんするに序正の二段は且しばらく之これを置おく流通りつうの一段は末法まつぽうの明鏡めいきやう尤も依用えようと為なすべし、而しかうして流通りつうに於おいて二有ふたり一には所謂いわゆる迹門しやくもんの中の法師等ほっしの五品ごぼん・二には所謂いわゆる本門ほんもんの中の分別功德ぶんべつくとくの半品はんぽんより經を終おるまで十一品半じふいちぽんなり、此の十一品半と五品ごぼんと合あせて十六品半此の中に末法まつぽうに入いつて法華ほっけを修行しゆぎようする相貌そうみやう分明ぶんめいなり是なほに尚なほ事行じぎやうかずんば普賢經ふげん・涅槃經ねはんぎやう等を引き来きりて之これを糾明きうめいせんそに其その隠かくれ無なきか、其その中の分別功德ぶんべつくとく品の四信ごぼんと五品ごぼんとは法華ほっけを修行しゆぎようするの大要ざいせ・在世ざいせ滅後めつこの龜鏡ききやうなり。

荊谿けいけいの云く「一念信解いちねんしんげとは即ち是れ本門立行の首はじめなり」と云云、

其の中に現在げんざいの四信の初いちねんしんげの一念信解めつこと滅後めつこの五品ごぼんの第一だいいちの初隨喜しよずいきと此

の二処は一同に百界千如ひゃつかいせんによ・一念三千いちねんさんぜんの宝篋ほうきやう十方三世じゆつぽうさんぜの諸仏しよぶつの出る門

なり、天台てんだい・妙樂みやうらくの二の聖賢せいけん此の二処の位を定むるに三の釈有り所謂いゝゆる

・或は相似そうじ・十信じゆつしん・鉄輪てつりんの位・或は勸行五品こぼんの初品しよぼんの位・未断見思みだんけんじ・或は

名字みやうじそく即の位なり、止觀しかんに其の不定ふじやうを会えして云く「仏意ぶつゐ知り難がたし機きに

赴おもむきて異說おもむす此を借おもむつて開解けせば何なんぞ勞わづらわしく苦ねんごろに靜あらそわん」云云等。

予が意に云く、三釈しやくの中名字みやうじそく即は經文きやうもんに叶かなうか滅後めつこの五品ごぼんの初の一

品ごぼんを説いわいて云く「而しかも毀きしぜずして隨喜ずいきの心を起おこす」と若もし此の文相そうじ似

の五品ごぼんに渡わたらば而不にふ毀きしぜずして隨喜たよりの言は便たよりならざるか、就なかんずく中じゆりやうぼん壽量品じゆりやうぼんの失心な不

失心しん等は皆名字みな即みやうじそくなり、涅槃經ねはんぎやうに「若信ふしん若不信ないし乃至きれん至これ應連これ」とあり之を

勘かんえよ、又一念信解いちねんしんげの四字の中の信の一字は四信の初めに

居し解の一字は後に奪わるる故なり、若し爾らば無解有信は四信の初
位に当る経に第二信を説いて云く「略解言趣」と云云、記の九に云く
唯初信を除く初は解無きが故に「随つて次下の随喜品に至つて上の
初随喜を重ねて之を分明にす五十人は皆展転劣なり、第五十人に至
つて二の釈有り一には謂く第五十人は初随喜の内なり二には謂く第五
十人は初随喜の外なりと云うは名字即なり、教弥よ実なれば位弥よ下
れりと云う釈は此の意なり、四味三教よりも円教は機を摂し爾前の
円教よりも法華経は機を摂し迹門よりも本門は機を尽すなり教弥
実位弥下の六字心を留めて案ず可し。

問う末法に入つて初心の行者必ず円の三学を具するや不や、答えて
曰く此の義大事たる故に経文を勘え出して貴辺に送付す、所謂五品の
初二三品には仏正しく戒定の二法を制止して一向に慧の一分に限る慧

又勘かんざれば信しんを以もて慧えに代え・信の一字を詮なと為なす、不信ふしんは一闡いつせん提だい

謗ぼう法の因・信は慧の因・名字みょうじ即すなわの位なり、天台てんだい云く・若もし相似そうじの

益きやくは隔生きやくすれども忘れず名字みょうじ勸行きんぎょうの益は隔生きやくすれば即すなわち忘る・或あるは忘

れざるも有り忘るる者も若もし知識ちしきに値あえば宿善しゆくぜん還かえつて生あず若もし惡友あくゆうに

値あえば則すなわち本心ほんしんを失うしなう」云云、恐らくは中古ちんぐの天台宗てんだいしゅうの慈覺じかく・智証ちしやうの

兩大師だいいしも天台てんだい・伝教でんぎやうの善知識ぜんちしきに違背いはいして心・無畏ふくう・不空ふくう等の惡友あくゆうに

遷うつれり、末代まつだいの學者がくしゃ慧心えしんの往生おうじやう要集ようしゅうの序おほわくに誑惑きやうかくせられて法華ほつけの本心ほんしん

を失うしなひ弥陀みだの權門ごんもんに入る退大取小たいだいしゆしやうの者なり、過去かこを以もて之これを推すいするに

未來みらい無量劫むりやうきやくを経て三惡道さんあくどうに処しよせん若もし惡友あくゆうに値あえば即すなわち本心ほんしんを失うしなう

とは是これなり。

問いうて曰いく其その証いかん如何い答いえて曰いく止觀しかん第六だいろくに云く・前教ぜんぎやうに其その位いを

高ゆえんうする所以ゆえんは方便ほうべんの説えんきやうなればなり・円教えんぎやうの位下いきは眞實しんじつの説えんきやうなれば

なり「弘決くわくけつに云くい前教ぜんきやうと云うより下したは正ただく權實ごんじつを判いず教弥きやういよ実じつなれば位弥いよ下したく教弥きやういよ權ごんなれば位弥いよ高たかき故ゆゑに」と、又記またの九くに云く位いを判いずることをいいわば觀境くわんきやう弥いよ深ふかく実位じつい弥いよ下したきを顯あらわす」と云云いふ、他宗たしゆうは且しからく之これを置てく天台てんだい一門いちもんの學者がくしや等なん何なんぞ実位じつい弥いよ下したの釈しやくを聞きいて慧心えしん僧都そうずの筆ふでを用もちゆるや、畏おそ・智ち・空くうと覺証かくしやうとの事ことは追おつて之これを習しえ大事だいじなり大事だいじなり一閻浮提えんぶだい第一だいいちの大事だいじなり心こころ有あらん人ひとは聞きいて後うしろに我われを外とめ。

問いうて云いく末代まつだい初心しんしんの行者ぎやうじや何物なにものをか制せい止しするや、答こたえて曰いく檀戒だんがい等の五度ごどを制せい止しして一向いっかうに南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと稱いせしむるを一念信解いちねんしんげ初し隨喜しゆいきの氣分けぶんと為なすなり是これ則すなわち此この經きやうの本意ほんいなり、疑うたがひいつて云いく此この義ぎ未いまだ見聞けんもんせず心こころを驚おどろかし耳みみを迷まよわす明あきかに証文しやうもんを引ひて請こつう苦くに之これを示しせ、答こたえて云いく經きやうに云いく須すく我われが為ために復またた塔寺たつじを起たてて及および

僧坊そうぼうを作り四事を以て衆僧しゅうそうを供養くようすることをもちいざれ」此の經文きようもん明かあきらに初心しよしんの行者ぎようじやに檀戒等の五度を制止せいしする文なり、疑うたがいつて云く汝なんじが引く所の經文きようもんは但寺塔じとうと衆僧しゅうそうと計りばかを制止せいしして未だ諸の戒等もろもろに及およばざるか、答えて曰く初

を挙あげて後を略す、問て曰く何を以て之を知らん、答えて曰く次下の第四品の經文きようもんに云く況いわんやや復人有つて能く是の經こを持ちて兼ねて布施ふせ持戒等じかいを行ぜんをや」云云、經文分明きようもんふんみょうに初二三品の人には檀戒等の五度を制止せいしし第四品に至つて始めて之を許ゆるす後に許すを以て知んぬ初に制する事を、問うて曰く經文一往相似きようもんいちおうそうじたり將た又疏釈じよ有り

や、答えて曰く汝なんじが尋ぬる所の釈とは月氏がっし四依しえの論か將た又漢土かんど、日本にほんの人師にんしの書か本を捨て末を尋ね体を離れて影を求め源を忘れて流とうとを貴ふんみょうぶ分明きようもんなる經文さしおを聞いて論釈ろんしやくを請たずい尋ぬ本經ほんきように相違そういする末釈有

らばほんきよう本経を捨てて

末釈に付く可きか然りと雖も好みに随て之を示さん、文句の九に云く
初心は縁に紛動せられて正業を修するを妨げんことを畏る直ちに
専ら此の経を持つ即ち上供養なり事を廢して理を存するは所益弘多な
り」と、此の釈に縁と云うは五度なり初心の者兼ねて五度を行ずれば
正業の信を妨ぐるなり、譬えば小船に財を積んで海を渡るに財と俱に
没するが如し、直專持此經と云うは一經に亘るに非ず専ら題目を持
つて余文を雜えず尚一經の誦誦だも許さず何に況や五度をや、
廢事存理」と云うは戒等の事を捨てて題目の理を専らにす云云、
所益弘多とは初心の者諸行と題目と並び行ずれば所益全く失うと云
云。

文句に云く問う若爾らば經を持つは即ち是れ第一義の戒なり何が
故ぞ復能く戒を持つ者と云うや、答う此は初品を明かす後を以て難を

作すべからず」等云云、当世の学者・此の釈を見ずして末代の愚人を
以て南岳・天台の二聖に同ず誤りの中の誤りなり、妙楽重ねて之を
明して云く問う若し爾らば若し事の塔及び色身の骨を須いず亦須く
事の戒を持つべからざるべし乃至事の僧を供養することを須いざるや」
等云云、伝教大師の云く「二百五十戒
忽に捨て畢んぬ」唯教大師一人に限るに非ず鑒真の弟子・如宝・道忠
並びに七大寺等一同に捨て了んぬ、又教大師・未来を誡めて云く 末法
の中に持戒の者有らば是れ怪異なり市に虎有るが如し此れ誰か信ず
可き」云云。

問う汝何ぞ一念三千の觀門を勸進せず唯題目許りを唱えしむる
や、答えて曰く日本の二字に六十六国の人畜財を撰尽して一も残さず
月氏の兩字に豈七十ヶ国無からんや、妙楽の云く 略して經題を挙ぐ

るに玄はるかにに一部を収おさむ」又云く、略りやくして界如かいにょを挙あぐるに具つづさに三千を撰せんす、文殊師利菩薩もんじゆしりぼさつ・阿難尊者あなんそんじや・三会八年の間の仏語ぶつこ之を挙あげて妙法蓮華經みようほうれんげきやうと題し次下に領解りやうげして云く、如是にやぜがもん我聞がもん」と云云。

問そう其の義を知らざる人唯南無妙法蓮華經ただなむみようほうれんげきやうと唱となうるに解義くどくの功徳を具ぐするや否や、答こたへう小兒乳しょうにちを含むそに其の味を知らざれども自然じねんに身を益やくす耆婆ぎばが妙葉誰めいよくか弁わきまえて之を服これせん水心無こころなけれども火を消し火物を焼く豈あにさとり覺有ありらんや竜樹りゆうじゆ・天台皆此の意てんだいみななり重ねて示かきす可べし。

問う何が故ぞ題目に万法を含むだいにくや、答こたへう章安しょうあんの云く、蓋けだし序王じやおうとは經の玄意げんにを叙じよす玄意げんには文の心を述じゆつす文の心は迹本しよに過すぎたるは莫なし」妙樂みようらくの云く、法華ほつげの文心を出しよきやうして諸教しよきやうの所以ゆえんを弁べんず」云云、濁水心無こころなけれども月を得

て自ら清みづかめり草木雨そうもくあめを得豈あにさとり覺有ありつて花さくならんや妙法蓮華經みようほうれんげきやうの

五ご字じは經きやうもん文もんに非あらず其その義ぎに非あらず唯ただ一いち部の意いなるのみ、初しよしん心しんの行ぎやうじやそ者そ其その心しんを知らざれども而しかも之これを行なずるに自然じねんに意いに当あたるなり。

問なんじう汝でしが弟いちぶん子ぶん一いち分ぶんの解げ無なくして但ただ一いち口くに南な無む妙みやう法ほう蓮れん華げき經きやうと称しやうする其その位い如い何なん、答こたう此この人は但ただ四し味み三さん教きやうの極きよく位い並ならびに爾にぜん前ぜんの円えん人じんに超ちやう過かうするのみに非あらず將はた又また真しん言ごん等らの諸しよしやう宗そうの元がん祖そ・畏おそ・嚴げん・恩おん・藏ざう・宣せん・摩ま・導どう等らに勝しやう出しゅつすること百せん千まん万ばん億いふ倍ばいなり、請こうう国こく中ちゆうの諸しよじん人にん・我われが末ま弟てい等らを輕なずる事な勿なれ進すすんで過か去こを尋たずぬれば八はち十じう万まん億いふ劫けつに供く養やうせし大だい菩ぼ薩さつなり豈あに熙き連れん一いち恒こうの者ものに非あらずや退しりぞいて未み来らいを論ろんずれば八はち十じう年ねんの布ふ施せに超ちやう過かうして五ご十じゆの功く徳とくを備そなう可べし天てん子しの機む襍さつに纏まとれ大だい竜りゆうの始はめて生なずるが如ごとし蔑べつ如じよすること勿なかれ蔑べつ如じよすること勿なかれ、妙みやう樂らくの云いく君もし惱のう乱らんする者ものは頭かう七しち分ぶんに破やれ

供く養やうすること有ある者ものは福ふく十じゆ号かうに過すぐ」と、優う陀だ延えん王おうは寶びん頭ず盧る尊そん者じゃを

蔑如して七年の内に身を喪失し相州は日蓮を流罪して百日の内に兵乱に遇えり、經に云く 若し復是の經典を受持する者を見て其の過惡を出さん若は実にもあれ若は不実にもあれ此の人現世に白癩の病を得ん乃至諸惡重病 あるべし」又云く 当に世世に眼無かるべし」等云云、明心と円智とは現に白癩を得・道阿弥は無眼の者と成りぬ、国中の疫病は頭破七分なり罰を以て徳を推するに我が門人等は福過十号 疑い無き者なり。

夫れ人王三十代欽明の御宇に始めて仏法渡りし以来桓武の御宇に至るまで二十代二百余年の間六宗有りと雖も仏法未だ定らず、爰に延暦年中に一りの聖人有つて此の国に出現せり所謂伝教大師是なり、此の人先きより弘通する六宗を糾明し七寺を弟子と為して終に叡山を建てて本寺と為し諸寺を取つて末寺と為す、日本の仏法唯一門

なり王法も二に非ず法定まり国清めり其の功を論ぜば源已今当の文
より出でたり其の後弘法・慈覚・智証の三大師事を漢土に寄せて大日の
三部は法華經に勝ると謂い剩さえ教大師の削ずる所の真言宗の宗の
一字之を副えて八宗と云云、三人一同に勅宣を申し下して日本に
弘通し寺毎に法華經の義を破る是偏に已今当の文を破らんと為して
釈迦・多宝・十方の諸仏の大怨敵と成りぬ、然して後・仏法漸く廃れ王
法次第に衰え天照太神・正八幡等の久住
の守護神は力を失い梵帝・四天は国を去つて已に亡国と成らんとす情
有らん人誰か傷み嗟かざらんや、所詮三大師の邪法の興る所は所謂
東寺と叡山の総持院と園城寺との三所なり禁止せずんば国土の滅亡と
衆生の惡道と疑い無き者か予粗此の旨を勘え国主に示すと雖も敢て
叙用無し悲む可し悲む可し。

◆四九

下山御消息しもやま しやうそく

建治三年六月 五十六歳御代作

与下山兵庫光基しもやま

343P

例時に於ては尤も阿弥陀経あみだを読まる可きか等云云此の事は仰せ候はぬ已前いぜんより親父の代官といひ私の計もうと申し此の四五年が間は退転たいてん無し、例時には阿弥陀経あみだを読み奉り候しが去年こぞの春の末へ夏の始めより阿弥陀経あみだを止めて一向いつこうに法華経ほけきやうの内・自我偈じがげ誦どくじゆし候又同くば一部を読み奉らむとはげみ候これ又偏ひとえに現当げんどうの御祈きとう☆の為なり、但し阿弥陀経あみだ・念仏ねんぶつを止めて候事は此れ日比ひころ・日本国にほんこくに聞はきりへさせ給たまう日蓮聖人にちれんしょうにん去る文永十一年の夏の比同じき甲州飯野・御牧・波木井の郷の内身延の嶺もうと申す深山みやまに御隠居いんきよせさせ給たまい候へば、さるべき人人ひとびと・御法門承ほうもんうけたまわる

可^べきの由候へども御制^{せいし}止ありて入れられずおぼろげの強縁ならではかなひがたく候しに有人^{あるひと}見参の候と申し候しかば信じまいらせ候^{そうら}はんれうには参り候はず、ものの様をも見候^{そうら}はんために閑所より忍^{しの}びて参り御庵室^{あんしつ}の^{うしろ}後に隠れ人人^{ひとひと}の御不審^{ふしん}に付きてあらあら御法門^{ほうもん}とかせ給^{たま}い候き。

法華經と大日經・華嚴・般若・深密・楞伽・阿彌陀經等の經經の
勝劣・淺深等を先として説き給いしを承り候へば法華經と阿彌陀經等
の勝劣は一重二重のみならず天地雲泥に候けり、譬ば帝釈と猿猴と
鳳凰と烏鵲と大山と微塵と日月と螢炬等の高下勝劣なり、彼彼の
經文と法華經とを引き合せてたくらべさせ給いしかば愚人も弁えつ
べし白白なり赤赤なり、されば此の法門は大体人も知れり始めておど
ろくべきにあらず又仏法を修行する法は必ず經經の大小・權實・
顯密を弁うべき上よくよく時を知り機を鑑みて申すべき事なり、而る
に當世・日本国は人毎に阿みだ經並に彌陀の名号等を本として法華經
を忽諸し奉る世間に智者と仰がるる人人・我も我も時機を知れり知れ
り

と存ぜられげに候へども小善を持て大善を打ち奉り權經を以て実經

を失ふうしなとがは小善還しょうぜんかえつて大惡だいあくとなる藥變じて毒となる親族還かえつて怨敵おんてきと成るが如し難治なんちの次第しだいなり、又仏法ぶつぽうには賢かしこなる様なる人なれども時に依り機きに依り国こくに依り先後せんごの弘通くわつうに依る事を弁わきまえされば身心しんしんを苦めて修行しゆぎやうすれども験しるしなき事なり、設たとい一向いっこうに小乘しょうじやう流布るふの国には大乘だいじやうをば弘通くわつうする事はあれども一向大乘いっこうだいじやうの国には小乘經しょうじやうきやうをあながちにいむ事なり・しるてこれを弘通くわつうすれば国もわづらひ人も惡道あくどうまぬかれがたし、又初心しゆしんの人には二法にぽうを並べて修行しゆぎやうせしむる事をゆるさず月氏がつしの習ならいには一向いっこう小乘しょうじやうの寺の者は王路わうろを行かず一向大乘いっこうだいじやうの僧そうは左右さうの路をふむ事なし井の水・河の水・同じく飲む事なし何いかに況いはんや一房ぼうに栖すみなんや、されば法華經ほけきやうに初心しゆしんの一向大乘いっこうだいじやうの寺を仏説とき給たまうに但だ大乘經典だいじやうきやうてんを受持じゆじせんことを樂ねがつて、乃至余經ないしよきやうの一偈いちげをも受けざれ」又云いわく又声聞しやうもんを求むる比丘びく・比丘尼びくに・優婆塞うぱそく・優婆夷うぱいに親近しんこんせざれ」

又云く 赤間訊せざれ」等云云、設い親父たれども一向小乗の寺に住
する比丘・比丘尼をば一向大乘の寺の子息これを礼拝せず親近せず
何に況や其法を修行せんや大小兼行の寺は後心の菩薩なり。

今・日本国は最初に仏法渡りて候し比・大小雜行にて候しが人王四
十五代聖武天皇の御宇に唐の揚州竜興寺の鑑真和尚と申せし人漢土
より我が朝に法華經・天台宗を渡し給いて有りしが円機未熟とやおぼ
しけんの法門をば

己心こしんに収めて口にも出だし給たまはず、大唐だいとうの終南山ぶとくの豐徳寺どうせんりつじの道宣律師だうせんりつしの
小乗しやうじやう戒けいを日本にほん國こくの三所さんしよに建立こんりやうせり此これ偏ひとえに法華宗ほつげしやうの流布るふすべき
方便ほうべんなり、大乘だいじやう出現しゆつげんの後には肩かたを並べて行ぜよとはあらず例せば
儒家じゆけの本師ほんしたる孔子こうし・老子らうし等の三聖さんせいは仏ぶつの御使おんつかいとして漢土かんどに遣つかされて
内典ないてんの初門じよもんに礼樂れいがくの文ぶんを諸人しよにんに教えたりき、止觀しかんに經きやうを引いて云いく我
三聖さんせいを遣つかして彼の震旦しんたんを化くわす」等云云、妙樂みやうらく大師だいし云いく礼樂れいがく前に馳はせ
真道しんどう後ごに啓ひらくく」と云云、仏ぶつは大乗だいじやうの初門じよもんに且しばらく小乗しやうじやう戒けいを説とき給たまい
しかども時すぎぬれば禁いましめて云いく涅槃經ねはんぎやうに云いく若もし人有につて如來にやらいは
無常むじやうなりと言のたまわん

云何いかんぞ是この人舌墮落だらくせざらん」と等云云、其その後人王第五十代桓武かんむ
天皇てんのうの御宇ぎやうに傳教大師でんぎやうだいしと申せし聖人出現しやうにんしゆつげんせり始めには華嚴けこん・三論さんろん・
法相ほつさう・俱舍くしや・成実じやうじつ・律りくの六宗ろくしゆうを習ならい極きわめ給たまうのみならず、達磨宗だるまの淵底えんでい

を探り究め給ひ剩へいまだ日本国に弘通せざる天台・真言の二宗をも
尋ね顕わして浅深勝劣を心中に究竟し給へり、去延暦二十一年正月
十九日に桓武皇帝・高雄山に行幸なり給ひ、南都・七大寺の長者・
善議・勤操等の十四人を教大師に召し合せて六宗と法華宗との勝劣
を糾明せられしに六宗の碩学宗宗毎に我宗は一代超過の由各各に立
て申されしかども教大師
の一言に万事破れ畢んぬ、其の後皇帝重ねて口宣す和氣弘世を御使と
して諫責せられしかば七大寺・六宗の碩学一同に謝表を奉り畢んぬ、
一十四人の表に云く此界の含靈而今而後悉く妙円の船に載り早く
彼岸に済ることを得」云云、教大師云く「二百五十戒忽ちに捨て畢ん
ぬ」云云、又云く「正像稍過ぎ已つて末法太だ近きに有り」又云く
「一乗の家には都て権を用いず」又云く「糧食を以て宝器に置くこと無

し」又云く、仏世の大羅漢已に此の呵嘖を被むれり滅後の小蚊虻何ぞ
此れに随わざらん」云云、此れ又私の責めにはあらず法華經には正直
に方便

を捨て但無上道を説く」云云涅槃經には邪見の人」等云云、邪見方便
と申すは華嚴・大日經・般若經・阿彌陀經等の四十余年の經經なり、
捨とは天台の云く「廢るなり」又云く「謬とは背くなり」正直の初心の
行者の法華經を修行する法は上に挙ぐるところの經經・宗宗を抛つ
て一向に法華經を行ずるが眞の正直の行者にては候なり、

而るを初心しよしんの行者ぎようじや深位の菩薩ぼさつの様に彼彼かれかれの經經きようぎようと法華經ほけきようとを並べて行ずれば不正直しやうじきの者となる、世間の法せけんにも賢人けんじんは二君に仕へず貞女は両夫に嫁とつがずと申もうす是これなり、又私ひそかに異議を申もうすべきにあらず。

如來にやらいは未來みらいを鑑かんがみさせ給たまひて我が滅後めつご・正法しやうぽう一千年・像法ぞうぽう一千年・

末法まつぽう一萬年まんねんが間我が法門ほうもんを弘通くつうすべき人人ひとびと並に經經きようぎようを一一ききにきりあ

てられて候、而るに此こを背そむく人・世に出来しゅつたいせば設たとい智者賢王けんおうなりとも

用うべからず、所謂いわゆる・我が滅後めつごの次の日より正法しやうぽう五百年の間は一向いっこう

小乘經しょうじようきようを弘通くつうすべし迦葉かしやう・阿難あなん乃至ないし・富那奢等ふなしやの十余人なり、後の五

百年には權大乘經こんだいじようきようの内華嚴けこん・方等深密ほうとうじんみつ・般若はんにか・大日經だいにちきよう・觀經かんきよう・阿みだ

經等を彌勒菩薩みろくぼさつ・文殊師利菩薩もんじゆしりぼさつ・馬鳴菩薩めみやうぼさつ・竜樹菩薩りゅうじゆぼさつ・

無著菩薩むぢやくぼさつ・天親菩薩てんじんぼさつ等の四依しえの大菩薩ぼさつ等の大論師弘通ろんしぐつうすべしと云云、

此れ等の大論師ろんしは法華經ほけきようの深義じんぎを知し食さざるにあらず然しかも而ほけきよう法華經ほけきよう

流布るぶの時も来らざる上しやくそん・積尊おほよりも仰せ付けられざる大法だいほうなれば心には存じて口のべに宣たまへ給はず・或時あるは粗口ほぼに嚙さえずる様なれども実義じつぎをば一向いっこうに隠かくして演のべ給はず、像法やうほう一千年の内に入りぬれば月氏がっしの仏法ぶつほう漸く漢土かんど・日本にほんに渡り来る世尊せそん眼前がんぜんに藥王菩薩やくおうぼさつ等の迹化けた他方たの大菩薩ぼさつに法華經ほけきようの半分しやくもん・迹門しやくもん十四品を譲り給う、これは又地涌じゆの大菩薩ぼさつ末法の初はじめに出現しゆつげんせさせ給いて本門ほんもん寿量品じゆりようほんの肝心かんじんたる南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようの五字ごじを一閻浮提えんぶだいの一切衆生いっさいしゆじように唱となえさせ給うべき先序のためなり、所謂迹門弘通の衆は南岳なんがく・天台てんだい・妙樂みょうらく・伝教等でんぎよう是なり、今の時は世すでに上行菩薩じようぎようぼさつ等の御出現しゆつげんの時剋じこくに相当あいあたれり、而るに余し・愚眼ぐがんを以てこれを見るに先相せんそうすでにあらはれたるか、而るに諸宗所依しよしゆうしよえの華嚴けこん・大日だいにち・阿彌だ經等は其の流布るぶの時を論ずれば正法しやうほう一千年の内、後の五百年乃至像法の始めの諍論じやうろんの

経経きようぎようなり、而しかるに人師等にんし 経経きようぎようの浅深勝劣等せんじんしょうれつに迷惑めいわくするのみならず
仏ゆずの譲ゆずり状じやうをもわすれ時機じきをも勘かんへず猥みだりりに宗宗そうそうを構かまえ像末ざうまつの行ぎやうとな
せり、例せば白田はくでんに種たねを下くだして玄冬げんとうに穀こくをもとめ下弦げげんに満月まんげつを期もちし
夜中やちゆうに日輪にちりんを尋たずぬる如ごとし、何いかに況いわんや律宗りつしゆうなんど申もうす宗そうは一向いっかう小乘しょうじやうな
り月氏がつしには正法しやうぽう一千年の前の五百年の小法しょうぽう又日本国にほんこくにては像法ざうぽうの中比なかごろ
・法華經ほけきやう・天台宗てんだいしゆうの流布るふすべき前に且しばらく機きを調養ちやうようせむがためなり、例
せば日出いでんとて明星前めいせいぜんに立ち雨下あめふらら

むとて雲先^{ます}おこるが如^{ごと}し、日出雨^{ひいであめふり}下て後の星雲はなにかせん而^{しか}るに今は時過ぬ又末法^{まつぽう}に入りて之^{これ}を修行^{しゆぎやう}せば重病^{じゆうびやう}に輕業を授け大石を小船に載^のするが如^{ごと}し修行^{しゆぎやう}せば身は苦く暇は入りて験^{しるし}なく華^{はな}のみ開きて菓^{このみ}なからん、故^{ゆえ}に教大師^{だいいし}・像法^{ざうぽう}の末に出現^{しゆつげん}して法華經^{ほけきやう}の迹門^{しやくもん}の戒定慧^{かいじやうえ}の三が内^そ・其^その中^{えんどん}・円頓^{えんどん}の戒壇^{かいだん}を叡山^{えいざん}に建立^{こんりやう}し給^{たま}いし時二百五十戒忽^{たちまち}に捨^{おわ}て畢^{おわ}んぬ、隨^{したが}つて又鑑真^{かんじん}の末の南都^{なんと}・七大寺^{ななだいじ}の一十四人・三百余人も加判^{だいじやう}して大乘^{だいじやう}の人となり一國^{こく}拳^{こぞ}つて小律儀^{りつぎ}を捨^{おわ}て畢^{おわ}んぬ、其^その授戒^{じゆかい}の書^{しよ}を見る可^べし分明^{ふんみやう}なり。

而^{しか}るを今邪智^{じやち}の持斎^{じさい}の法師^{ほふし}等昔^{しやうじやうきやう}し捨^してし小乘經^{しやうじやうきやう}を取り出して一戒^{いつかい}もたもたぬ名計^{なけい}りなる二百五十戒^{ほふし}の法師^{ほふし}原有^{くげ}つて公家^{ぶけ}・武家^{ぶけ}を誑惑^{おおわく}して国師^{こくし}とののしる 剩^{あまつさえ} 我慢^{がまん}を發^{おこ}して大乘戒^{だいじやうかい}の人を破戒^{はかい}・無戒^{むかい}とあなづる、例せば狗犬^{くけん}が師子^{しし}を吠^{えんごう}え猿猴^{えんごう}が帝釈^{たいしやく}をあなづるが如^{ごと}し、今の律宗^{りつしゆう}

の法師ほつし原はらは世間せけんの人人ひとびとには持戒実語じかいじつごの者の様には見ゆれども其その実を

論ろんぜば天下第一てんがだいいちの大不実ふじつの者なり、其そのの故ゆえは彼等かれらが本文とする四分律

・十誦律等じゅうじゆりつの文は大小乗だいしやうじやうの中には一向いっしやう

小乗しやうじやう・小乗しやうじやうの中にも最下さいかの小律せうりつなり、在世ざいせいには十二年の後・方等ほうとう

大乘だいじやうへうつる程の且しかくのやすめ言ことば・滅後めつごには正法しやうほうの前の五百年は一向いっしやう

小乗しやうじやうの寺てらなり此これ亦また一向いっしやう大乘だいじやうの寺てらの毀謗きぼうとなさんがためなり、され

ば日本国にほんこくには像法半やうほうなかばに鑑真和尚わじやうだいいしやう大乘だいじやうの手習たまたとし給たまう教大師だいいし・彼の宗を

破はし給たまいて人をば天台宗てんだいしやうへとりことし宗をば失うしなうべしといへども後に事

の由よしを知らしめんがために我が大乘だいじやうの弟子でしを遣つかわしてたすけをき給たまう、

而しかに今の学者等がくしやは此よしの由を知らずし

て六宗ろくしゆは本より破われずして有りとおもへり墓無はかなし墓無はかなし、又一類いちるいの者

等天台てんだいの才学を以もつて見れば我が律宗りつしゆは幼弱ゆうじやくなる故ゆえに漸漸ぜんぜんに梵網經ばんもうきやうへ

うつり結句は法華經の大戒を我が小律に盗み入れて還つて円頓の行者
を破戒・無戒と咲へ

ば、国主は當時の形貌の貴げなる氣色にたばらかされ給いて天台宗の
寺に寄せたる田畠等を奪い取つて彼等にあたふ万民は又一向大乘の寺
の歸依を抛ちて彼の寺にうつる、手づから火をつけざれども日本一國の
大乘の寺を焼き失い抜目鳥にあらずれども一切衆生の眼を抜きぬ仏
の記し給ふ阿羅漢に似たる闍提是なり、涅槃經に云く我

涅槃の後・無量百歳に四道の聖人も悉く復涅槃せん正法滅して後・
像法の中に於いて当に比丘有るべし、持律に似像し少く經を誦誦し
飲食を貪嗜して其の身を長養せん、乃至袈裟を服すと雖も猶獵師の
細視徐行するが如く猫の鼠を伺うが如く外には賢善を現し内には
貪嫉を懷き誣法を受けたる婆羅門等の如く実に沙門に非ずして沙門の
像を現し邪見熾盛にして正法を誹謗せん」等云云、此の經文に世尊
未來を記し置き給う。抑 釈尊は我等がためには
賢父たる上明師なり聖主なり、一身に三徳を備へ給へる仏の仏眼を以て
未來惡世を鑑み給いて記し置き給う記文に云く 我涅槃の後・無量百
歳」云云仏滅後・二千年已後と見へぬ、又 四道の聖人悉く復涅槃せ
ん」云云、付法藏の二十四人を指すか、正法滅後」等云云像末の世と
聞えたり、当に比丘有るべし持律に似像し」等云云今

末法の代に比丘の似像を撰び出さば日本国には誰の人をか引き出して
大覺世尊をば不妄語の人とし奉るべき、俗男・俗女・比丘尼をば此の
經文に載たる事なし但比丘計なり比丘は日本国に數を知らず、然る
に其の中に三衣一鉢を身に帶せねば似像と定めがたし唯持斎の法師
計相似たり一切の持斎の中には次下の文に持律ととり律宗より外
は又脱ぬ、次下の文に少し經を讀誦す」云云相州鎌倉の極樂寺の
良觀房にあらずば誰を指し出だし經文を
たすけ奉るべき、次下の文に猶獵師の細視徐行するが如く猫の鼠を
伺うが如く外には賢善を現し内には貪嫉を懷く」等云云両火房にあら
ずば誰をか三衣一鉢の獵師伺猫として仏説を信ず可し、哀れなるかな
当時の俗男・俗女・比丘尼等檀那等が山の鹿・家の鼠となりて獵師・猫
に似たる両火房に伺われ・たばらかされて今生には守護国土の

天照太神・正八幡等にすてられ他国の兵軍にやぶられて猫の鼠を

捺え取るが如く獵師の鹿を射死が如し、俗男・武士

等は射伏・切伏られ俗女は捺え取られて他国へおもむかん王昭君・楊貴

妃が如くになりて後生には無間・大城に一人もなく趣くべし。

而るを余・此の事を見る故に彼が檀那等が大悪心をおそれず強盛に

せむる故に両火房・内内諸方に讒言を企てて余が口を塞がんとはげみ

しなり、又経に云く「汝を供養する者は三惡道に墮つ」等云云、在世の

阿羅漢を供養せし人尚三惡道まぬかれがたし、何に況や滅後の誑惑の

小律の法師原をや、小戒の大科をばこれを以て知んぬ可し、或は又

驢乳にも譬えたり還つて糞となる、或は狗犬にも譬えたり大乘の人の

糞を食す、或は☆猴・或はは瓦礫と云云、然れば時を弁へず機をし

らずして小乗戒を持たば大乘の障となる、破れば又必ず惡果を

招く其の上今の人人まね そ ひとびと

小律の者どもは大乗戒をだいじょうかい しやうじやう小乗戒に盗み入れ驢乳は牛乳を入れて大乗

の人をあざむく、大偷盗の者大謗法の者其のとがを論ずれば提婆達多ちゆうとう ほうぼう そ

も肩を並べがたく瞿伽利尊者が足も及ばざる閻浮第一の大悪人なりくぎやり そんじや およ えんぶ だいいち あくにん

帰依せん国土安穩なるべしや、余此の事を見るに自身だにも弁きえ こくど あんのんへなばわきまえ

さでこそあるべきに日本国に智者とおぼしき人人にほんこく ちしや ひとびと一人も知らず国す

でにやぶれなんとす、其の上仏の諫曉を重んずる上一分の慈悲にそ かんぎやう いちぶん じひ

よをされて国に代りて身命を捨て申せども国主等彼にたばらかされてしんみやう こくしゅ かしこ

用ゆる人一人もなし譬へば熱鉄に冷水を投げ睡眠の師子に手を触るもち たと しし

が如し、爰にごと こじ

両火房と申す法師あり身には三衣を皮の如くはなつ事なし、一鉢はりやうげん ぼどう もう ほうし さんね ごと

両眼をまほるが如し二百五十戒堅く持ち三千の威儀をととのへたり、りやうげん ごと たも さんぜん いぎ

世間の無智の道俗国主よりはじめて万民にいたるまで地藏尊者の
伽羅陀山より出現せるか迦葉尊者の靈山より下来するかと疑ふ、余
法華經の第五の卷の勸持品を拜見したてまつれば末代に入りて法華經
の大怨敵三類あるべし其の第三の強敵は此の者かと見畢んぬ、便宜あら
ば国敵をせめて彼れが大慢を倒して仏法の威験をあらはさんと思う処
に両火房常に高座にして歎いて云く日本国の僧尼には二百五十戒・五
百戒・男女には五戒・八齋戒等を一同に持たせんとおもうに、日蓮が此
の願の障りとなる」と云云、余案じて云く「現証に付て
事を切らんとする處に、彼常に雨を心に任せて下す由披露あり、古へ
も又雨を以て得失をあらはす例これ多し、所謂伝教大師と護命と
守敏と弘法と等なり、此に両火房上より祈雨の御いのりを仰せ付けら
れたり」と云云、此に両火房祈雨あり去る文永八年六月十八日より二

十四日なり、此に使を極樂寺へ遣す年来の御歎きこれなり」

七日が間に若^{もし}一雨^{いちう}も下^ふらば御弟子^{おんでし}となりて二百五十戒具^{つぎ}さに持たん
上に、念仏^{ねんぶつ}・無間地獄^{むげんじごく}と申^{もう}す事^{こと}ひがよみなりけりと申^{もう}すべし余^あだにも
帰伏^{きふく}し奉^{たてまつ}らば我弟子^{でし}等^らをはじめて日本国^{にほんこく}大体^{だいたい}かたぶき候^{こう}なん」と云云、
七日が間に三度の使^{つか}をつかはす、然^{しか}れどもいかんがしたりけむ一雨^{いちう}も
下^ふらざるの上、頽風^{たいふう}・☆風^{ひようふう}・旋風^{せんふう}・暴風^{ぼうふう}等の八風^{はふ}・十二時にやむ事^{こと}なし
あまつさえ 剩^{あまつさえ} 二七日まで一雨^{いちう}も下^ふらず風^{ふう}もやむ事^{こと}なし、されば此^この事^{こと}は何事^{なにこと}
ぞ和泉式部^{いづみしきぶ}と云^いいし色好^{いろこの}み・能因法師^{ねいんぼうし}と申^{まう}せし無戒^{むかい}の者^{もの}・此^こは彼の両火^{りやうか}
房^{ぼう}がいむところの三十一文字^{みそひともじ}ぞかし、彼の月氏^{がつし}の大盗賊^{だうぞく}南^{なん}・無仏^{むぶつ}と称^{なづ}せ
しかば天頭^{てんず}を

得^えたり、彼の両火房^{りやうかぼう}並^{なら}に諸僧^{しよそう}等の二百五十戒^{しんごん}・真言^{ほんげ}・法華^{ほっけ}の小法^{せうぼう}・大法^{だいほう}
の数百人^{ふたばう}の仏法^{ぶつぽう}の靈験^{れいげん}いかなれば姪女^{おやげん}等の誑言^{めずびと}・大盗人^{だうじん}が称^{なづ}仏^{ぶつ}には劣^{せう}
らんとあやしき事^{こと}なり、此^これを以^{もつ}て彼等^{かれら}が大科^{だいか}をばしらるべきにさは

なくして還かえつて譏ざんげん言げんをもちゐらるるは実とはおぼしよせんへず所詮にほんこく日本国・亡ぼうこく国

となるべき期こきた来きたるか、又祈きう雨うの事はたとひ雨あめ下ふらせりとも雨あめの形貌すがたを

以もつて祈きうる者の賢不賢を知る事あり雨あめ・種しゅじゆ種じゆなり・或あるは天雨てんう・或あるは竜雨りゆうう・

・或あるは修羅雨しゆらあめ・或あるは☆雨そいう・或あるは甘雨かんう・或あるは雷雨らいう

等あり、今の祈きう雨うは都すべて一雨いちうも下ふらざる上二七日が間前よりはるかに

超ちよう過かせる大旱魃かんばつ・大惡風あくふう・十二時に止む事なし、両火房真の人ならば

忽たちまちに邪見じゃけんをもひるがへし跡あとをも山林にかくすべきに其その義ぎなくして面を

弟子でし・檀那だんな等にさらす上 剩あまつさ譏えざんげん言げんを企くわだて日蓮にちれんが頸くをきらせまいらせん

と申もう上あけ・あづかる人の国まで状を申もう下くだして種をたたんとする大惡人あくにん

なり、而しかるを無智むちの檀那だんな等は持じ怙こして現世げんせには国をやぶり後生ごしやうには

無間地獄むげんじごくに墮おちなん事の不便ふびんさよ、

起世経に云く 諸もろもろの衆生しゆじやう有りて放逸ほういつを為なし清淨しやうじやうの行を汚ゆえす故ゆえに天雨てんう

を下さず」又云く不如法あり慳貪・嫉妬・邪見・顛倒なる故に天則ち
雨を下さず」又経律異相に云く五事有て雨無し一二三之を略す四に
は雨師姪乱・五には国王理をもつて治めず雨師曠る故に雨ふらず」云
云、此等の経文の亀鏡をもて両火房が身に指し当て見よ少もくも
りなからん、一には名は持戒ときこゆれども実には放逸なるか二には
慳貪なるか三には嫉妬なるか四には邪見なるか五には姪乱なるか此の
五にはすぐべからず、又此の経は両火房一人には限るべからず昔をかが
み今を

もしれ、弘法大師の祈雨の時二七日の間・一雨も下らざりしもあやしき事なり、而るを誑惑の心強盛なりし人なれば天子の御祈雨の雨を盗み取て我が雨と云云、善無畏三藏・金剛智三藏・不空三藏の祈雨の時も小雨は下たりしかども三師共に大風連連と吹いて勅使をつけてをはれしあさましさと、天台大師・伝教大師の須臾と三日が間に帝釈雨を下らして小風も吹かざりしもたとくぞおぼゆるおぼゆる。

法華經に云く「或は阿練若に納衣にして空閑に在りて、乃至利養に貪著するが故に白衣の与に法を説いて世に恭敬せらるること六通の羅漢の如きもの有らん」又云く常に大衆の中に在て我等を毀らんと欲するが故に国王大臣婆羅門・居士及び余の比丘衆に向つて誹謗して我が惡を説き乃至惡鬼其の身に入つて我を罵詈毀辱せん」、又云く濁世の惡比丘は仏の方便隨宜所説の法を知らずして惡口して聲譽し

数数擯出せられん」等云云、涅槃經に

云く「闍提有つて羅漢の像を作し空処に住し方等大乗經典を誹謗

す諸の凡夫人見已つて皆眞の阿羅漢是れ大菩薩なりと謂えり」等云

云、今予法華經と涅槃經との仏鏡をもつて當時の日本國を浮べて其影

をみるに誰の僧か國主に六通の羅漢の如くたとまれて而も法華經の

行者を譏言して頸をきらせんとせし、又いづれの僧か萬民に大菩薩と

あをがれたる、誰の智者か法華經の故に度度處處を追はれ頸をきられ

弟子を殺され兩度まで流罪せられて

最後に頸に及ぼんとせし、眼無く耳無きの人は除く眼有り耳有らん

人は經文を見聞せよ、今の人人は人毎に經文を我もよむ我も信じ

たりといふ只にくむところは日蓮計なり經文を信ずるならば慥にのせ

たる強敵を取出して經文を信じてよむしとせよ、若し爾らずんば

経文きやうもんの如ごとく読誦どくじゆする日蓮にちれんをいかれるは経文きやうもんをいかれるにあらず

や仏ぶつの使しををかろしむるなり、今の代よの両火房りやうぼうが法華經ほけきやうの第三だいさんの強敵かうてきと

ならずば釈尊しやくそんは大妄語もうごの仏ぶつ・多宝たぼう・十方じゆつぽうの諸仏しよぶつは不実ふじつの証しやうみやう明めいなり、

又経文きやうもんまことならば御歸依ごきえの国主こくしゆは現在げんざいには守護しゆごの善神ぜんじんにすてられ国

は他の有あとなり後生ごしやうには阿鼻地獄あびじごく疑うたがいなし、而しかるに彼等かれらが大惡法だいあくぽうを

尊とうまるる故ゆえに理不盡りふじんの政道出来しやうたいす彼の国主こくしゆの僻見びやくけんの心を推すいするに日蓮にちれん

は阿弥陀仏の怨敵・父母の建立の堂塔の讎敵なれば仮令政道をまげたりとも仏意には背かじ天神もゆるし給うべしと・をもはるるか、はかなしはかなし委細にかたるべけれども此れは小事なれば申さず心有らざる者推して知んぬべし上に書挙るより雲泥大事なる日本第一の大科此の国に出来して年久くなる間、此の国既に梵釈・日月・四天・大王等の諸天にも捨てられ守護の諸大善神も還つて大怨敵となり法華經守護の梵帝等鄰国の聖人に仰せ付けて日本国を治罰し仏前の誓状を遂げんとおぼしめす事あり。

(三五二頁)

夫れ正像の古へは世濁世に入るといへども始めなりしかば国土さしも乱れず聖賢も間間出現し福德の王臣も絶えざりしかば政道も曲る事なし万民も直かりし故に小科を対治せんがために三皇・五帝・三王・三聖等出現して墳典を作りて代を治す、世しばらく治りたりしかども

漸漸ぜんぜんにすへになるままに聖賢せいけんも出現しゅつげんせず福德ふく徳の人もすくなければ三災さんさいは多大ひちなんにして七難しちなん・先代せんだいに超過ちようかせしかば外典げてん及びおよびがたし、其そのの時治ときを代えて内典ないてんを用いて世いを治す随したがつ

て世しばら且くはおさまるされども又世末よになるままに人の惡は日日にに増長ぞうちよう

し政道せいどうは月月すいげんに衰滅すいめつするかの故ゆえに又三災さんさい・七難ひちなん先よりいよいよ増長ぞうちようし

て小乗しょうじよう戒等の力験しるしなかりしかば其そのの時治ときをかへて小乗しょうじようの戒等を止め

て大乘だいじようを用ゆ、大乘だいじよう又叶かなわねば法華經ほけきようの円頓えんどんの大戒壇だいかいだんを叡山えいさんに建立こんりゆう

して代を治めたり、所謂いわゆる伝教大師でんぎようだいし・日本三所にほんの小乗しょうじよう戒並に華嚴けごん・

三論さんろん・法相ほつそうの三大乗戒だいじようかいを破失はしつせし是これなり、此だいしの大師ろくしゆうは六宗をせめ落さ

せ給たまうのみならず禪宗ぜんしゆうをも習ならい極め剩あまつさえ日本国にほんこくにいまだひろまらざり

し法華宗ほつげしゆう・真言宗しんごんしゆうをも勘かんえ出して勝劣しょうれつ鏡をかけ顯密けんみつの差別さべつ黒白こくびやくな

り、然しかれども世間せけんの疑うたがいを散じがたかりしかば去いぬる延暦年えんりやく中に御入唐にゅうとう

漢土の人人も他事には賢かりしかども法華經・大日經・天台・

真言の二宗の勝劣・浅深は分明に知らせ給はざりしかば、御歸朝の後

本の御存知の如く妙樂大師の記の十の不空三蔵の改悔の言を含光が

かたりしを引き載せて天台勝れ真言劣なる明証を依憑集に定め給う

剩え真言宗の宗の一字を削り給う、其の故は善無畏・金剛智・不空の

三人・一行阿闍梨をたばらかして本はなき大日經に天台の己証の一念

さんぜん ほうもん

三千の法門を盗み入れて人の珍宝を我が有とせる大誑惑の者なりと

こころえ たま

心得給へり、例せば澄観法師が天台大師の十法成乗の観法を華嚴に

盗み入れて還つて天台宗を末教と下せしが如しと御存知あて宗の一字

を削りて叡山は唯七宗たるべしと云云、而るを弘法大師と申し天下

第一の自讃毀他の大妄語の人、教大師御入滅の後対論なくして公家を

かすめたてまつりて八宗と申し立てぬ、然れども本師の跡を紹継する

ひとびと

人人は叡山は唯七宗にてこそあるべき

に教大師の第三の弟子・慈覚大師と叡山第一の座主・義真和尚の末

弟子・智証大師と此の二人は漢土に渡り給いし時・日本国にて一国の

大事と諍論せし事なれば天台・真言の碩学等に値い給う毎に勝劣・

浅深を尋ね給う、然るに其の時の明匠等も・或は真言宗勝れ・或は

天台宗勝れ・或は二宗齊等し・或は理同事異といへども俱に慥の証文

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

をば出さず、

二宗の学者等併しながら胸臆の言なり然るに慈覺大師は学極めずして
歸朝して疏十四卷を作れり所謂金剛頂經の疏七卷・蘇悉地經の疏七
卷なり此の疏の体たらくは法華經と大日經の三部經とは理は同く事は
異なり等云云、此の疏の心は大日經の疏と義釈との心を出すがなを
不審あきらめがたかりけるかの故に本尊の御前に疏を指し

置て此の疏仏意に叶へりやいなやと祈せいせし処に夢に日輪を射ると
云云、うちをどろきて吉夢なり真言勝れたる事疑なしと・おもひて
宣旨を申し下す日本国に弘通せんとし給いしがほどなく疫病やみて四
ヶ月と申せしかば跡もなくうせ給いぬ、而るに智証大師は慈覺の御
為にも御弟子なりしかば、遺言に任せて宣旨を申し下し給う所謂・
真言・法華齋等なり譬ば鳥の二の翼・人の両目の如し又叡山も八宗な

るべしと云云、此の兩人は身は叡山えいざんの雲の上に臥ふすといへども心は東寺とうじ里中の塵ちりにまじはる本師ほんしの遺跡いせきを紹繼しょうけいする様にて還かえつて聖人しょうにんの正義せいぎを忽こっしょ諸たまし給たまへり、法華經ほけきょうの於諸經しよきょう中最もつとも在其上そのかみの字をうちかへして大日經だいにちきょうの下に置き先づ大師だいしの怨敵おんてきとなるのみならず存外ぞんがいに釈迦しゃか・多宝たぼう・十方分身じゆつぽう ふんじん・大日如来等だいにちにょらいの諸仏しよぶつの讎敵しゅうてきとなり給たまう、されば慈覺大師じかくだいしの夢ゆめに日輪にちりんを射ると見しは是これなり仏法ぶつぽうの大科だいか此れよりはじまる日本国にほんこく・亡国ぼうこくとなるべき先兆しうめうなり、棟梁とうりやうたる法華經ほけきょう既すでに大日經だいにちきょうの椽栢てんりよとなりぬ、王法わうぽうも

げこくじよう

下剋上して王位も臣下に随うべかりしを其の時又一類の学者有りて堅

く此の法門を諍論せし上・座主も両方を兼ねて事いまだきれざりしか

ば世も忽にほろびず有りけるか、例せば外典に云く 天国には諍臣七

人・中国には五人・小国には三人諍論すれば仮令政道に謬誤出来す

れども国破れず乃至家に諫子あれば不義におちず」と申すが如し

仏家も又是くの如し、天台・真言の勝劣・浅深事きれざりしかば少少の

災難は出来せしかども青天にも捨てられず黄地にも犯されず一国の内

の事にてありし程に人王七十七代・後白河の法皇の御宇に当りて天台

座主明雲・伝教大師

の止観院の法華經の三部を捨てて慈覚大師の総持院の大日經の三部に

付き給う、天台山は名計りにて真言の山になり法華經の所領は大日經

の地となる天台と真言と座主と大衆と敵対あるべき序なり、国又王と

臣と諍論して王は臣に随うべき序なり一國乱れて他國に破らるべき
序なり、然れば明雲は義仲に殺されて院も清盛にしたがひられ給う、
然れども公家も叡山も共に此の故としらずして世靜ならずすぐる程に
災難次第に増長して人王八十二代

隱岐の法皇の御宇に至つて一災起れば二災起ると申して禪宗・念仏宗
起り合いぬ、善導房は法華經は末代には千中無一とかき、法然は捨
闍拋と云云、禪宗は法華經を失はんがために教外別伝・不立文字との
のしる、此の三の大惡法鼻を並べて一國に出現せしが故に此の國すで
梵釈・二天・日月・四王に捨てられ奉り守護の善神も還つて大怨敵とな
らせ給う然れば相伝の所從に責隨えられて主上・上皇共に夷島に放
たれ給い御返りなくしてむなしき島の
塵となり給う詮ずる所は実經の所領を奪い取りて權經たる真言の

知行となせし上・日本国の万民等・禪宗・念仏宗の悪法を用いし故に
天下第一・先代未聞の下剋上出来せり而るに相州は謗法の人ならぬ上
・文武きはめ尽せし人なれば天許し国主となす随つて世且く静なりき、
然而又先に王法を失いし真言漸く関東に落ち下る存外に崇重せらる
る故に鎌倉又還つて大謗法一闡提の官僧・禅僧・念仏僧の檀那と成りて
新寺を建立して旧寺を捨つる故に天神は眼を瞋らして此の国を睨め
地神は憤を含めて身を震ふ長星は一天に覆ひ地震は四海を動かす
余此等の災天に

おどろ おどろ

驚いて粗内典五千・七千・外典三千等を引き見るに先代にも希なる

てんべん ちよう

天変地天なり、然而儒者の家には記せざれば知る事なし仏法は自迷な

ればこころへず此の災天は常の政道の相違と世間の謬誤より出来せるに

あらず定めて仏法より事起るかと勘へなしぬ、先ず大地震に付て去る

しょうかがんねん

正嘉元年に書を一卷注したりしを故最明寺の入道殿に奉る御尋ねも

なく御用いもなかりしかば国主の御用いなき法師なればあやまちたり

とも科あらじとやおもひけん念仏者並

に檀那等又さるべき人人も同意したるとぞ聞へし夜中に日蓮が小庵に

数千人押し寄せて殺害せんとせしかども・いかんがしたりけん其の夜の

害もまぬかれぬ、然れども心を合せたる事なれば寄せたる者も科なく

て大事の政道を破る日蓮が未だ生きたる不思議なりとて伊豆の国へ流

しぬ、されば人のあまりに・にくきには我がほろぶべきとがをも・かへり

みざるか御式目をも破らるるか御起請文を見るに梵釈・四天・
天照太神・正八幡等を書きのせたてま

つる、余存外の法門を申さば子細を弁えられずば日本国の御帰依の僧
等に召し合せられて其れになを事ゆかずば漢土・月氏までも尋ねらるべ
し、其れに叶わずば子細ありなんとて且くまたるべし、子細も弁えぬ
人人が身のほろぶべきを指をきて大事の起請を破らるる事心へられず。

三五五頁

自讃には似たれども本文に任せて申す余は日本国の人人には上は
天子より下は万民にいたるまで三の故あり、一には父母なり二には師匠
なり三には主君の御使なり、経に云く即如来の使なり」と又云く
眼目なり」と又云く「日月なり」と章安大師の云く彼が為に惡を除
くは則ち是彼が親なり」等云云、而るに謗法一闡提・国敵の

法師原ほつしが讒言ざんげんを用いて其義を弁わえきず左右さうなく大事だいじたる政道せいどうを曲まげらるるは・わざとわざはひをまねかるるか墓はかな無し墓はかな無し、然しかるに事しづまりぬれば科とがなき事は恥はづかしきかの故ゆえにほどなく召返めがへされしかども故さいみょうじ最明寺にゅうどうの入道にゅうどう殿も又早くかくれさせ給たまいぬ、当御時おんときに成りて・或あるは身みに疵きずをかふり・或あるは弟子でしを殺され・或あるは所所を追れ・或あるはやどをせめしかば一日片時かたときも地上ちじょうに栖すむべき便たよりりなし、是に付けても仏は一切世間いっさいせけん多怨難信たおんなんしんと説とき置き給たまう諸の菩薩もろもろぼさつは

我不愛身命がふあいしんみょう但惜無上道たんしくむじょうどうと誓へり、加刀杖瓦石とうじょうがしやく数数見擯出さくさくけんひんずいの文に任せ
て流罪るさいせられ刀のさきにかかりなば法華經ほけきょう一部よみまいらせたるにこ
そと・おもひきりてわざと不輕菩薩ふぎようぼさつの如く覺徳比丘かくとくびくの様に竜樹菩薩りゅうじゅぼさつ・
提婆菩薩だいばぼさつ・仏陀密多ぶつだ・師子尊者ししそんじやの如く彌強盛いよいよじょうじように申しはる、今度このたび・
法華經ほけきょうの大怨敵おんてきを見て經文きやうもんの如く父母ふぼ・師匠ししやう・朝敵ちやうてき・宿世すくせの敵てきの如く
散散に責るならば定めて万人ばんにんもいかり国主こくしゅも讒言ざんげんを収て流罪いれるさいし頸にも
及およばんずらん、其時そのとき・仏前ぶつぜんにして誓狀せいじやうせし梵釈ばんしやく・日月にちがつ・
四天してんの願をもはたさせたてまつり法華經ほけきょうの行者ぎやうじやをあだまんものを須臾しゆゆ
ものがさじと起請きしやうせしを身にあてて心みん、釈尊しやくそん・多宝たほう・十方分身じゆつぽうふんじんの
諸仏しよぶつの・或あるは共に宿むかし・或あるは衣を覆おおはれ・或あるは守護しゆごせんとねんごろに説
かせ給たまいしをも実まことか虚言そらごとかと知つて信心しんじんをも増長ぞうちやうせんと退転たいてんなくは
げみし程に案にたがはず去いぬる文永八年九月十二日ぶんえいはちねんしふににちに都すべて一分いちぶんの科とがもな

くして佐土の国るざい・流罪せらる、外には遠流おんると聞えしかども内には頸を切ると定めぬ余又兼かねて此の事を推すいせし

故ゆえに弟子でしに向つて云く我が願すで既に遂とげぬ悦よろこび身に余あまれり人身じんしんは受けがたくして破われやすし、過去かこ・遠おん・遠ん・劫ごうより由よしなき事には失うしないしかども法華經ほけきやうのために命をすてたる事はなし、我頸はねを刎はられて師子尊ししそんじや者が絶たえたる跡あとを継つぎ天台てんだい・伝教でんぎやうの功にも超ふほ・付う・法蔵はうざうの二十五人に一を加えて二十六人となり不輕菩薩ふぎやうぼさつの行にも越こえて釈迦しやか・多宝たほう・十方じゆつぽうの諸仏しよぶつに

いかがせんとなげかせまいらせんと思ひし故ゆえに言をもおしまず已前いぜんにありし事後あに有るべき事の様を平の金吾もつに申し含めぬ此の語ことばしげければ委細いさいにはかかず。

抑そもも日本にほんの主こくとなりて万事ばんじを心まかに任せ給たまへり何事なにことも兩方なにを召よし合あせてこそ勝負しやうぶを決し御成敗ごせいばいをなす人のいかなれば日蓮にちれん一人に限かぎつて

諸僧等に召合せずして大科に行わるるらん是れ偏にただ事にあらずた
とひ日蓮はにぢれん大科だいかの者なりとも国は安穩あんのんなるべからず、御式目ごしきもくを見るに
五十一箇条を立てて終りに起請文きしようぶんを記載かきのせせたり、第一・第二
は神事・仏事ぶつじ乃至五十一等云云、神事・仏事ぶつじの肝要かんようたる法華經ほけきようを手に
にぎれる者を讒人ざんにん等に召合せられずして彼等かれらが申すままに頸に及ぶ
然れば他事たじの中にも此の起請文きしようぶんに相違そういする政道は有るらめども此れは
第一の大事だいじなり、

にちれん

日蓮がにくさに国をかへ身を失はんとせらるるか魯の哀公が忘事わすれることの

だいいち

第一なる事を記せらるるには移宅わたましに妻をわすると云云、孔子こうしの云く身

をわする者あり国主こくしゅと成りて政道を曲ぐるなり是云云、将又国主は

此の事を委細いさいには知らせ給はざるか、いかに知らせ給はずとのべらるる

とも法華経の大怨敵おんてきと成給いぬる重科じゅうかは脱るべしや、多宝・十方たほう じゅうっほうの

諸仏しよぶつの御前おんまえにして教主釈尊きょうしゆしやくそんの申す口として末代当世まつだいとうせの事を説かせ給い

しかば諸の菩薩記もろもろぼさつしるして云く悪鬼あくき其の

身に入つて我を罵毀辱めりきにくせん、乃至数数擯出ないししばしばんずいせられん」等云云、又四

仏しやくそん釈尊しよせつの所説さいしよの最勝王経さいしやうおうきやうに云く悪人あくにんを愛敬あいぎやうし善人ぜんにんを治罰ちばつするに

由よるが故ゆえに、乃至他方ないしたほうの怨賊おんぞく来つて国人喪乱そうらんに遭わん」等云云、たとい

日蓮にちれんをば輕賤きやうせんせさせ給うとも教主釈尊きょうしゆしやくそんの金言きんげん・多宝・十方たほう じゅうっほうの諸仏しよぶつの

証明しやうみやうは空むなしかるべからず一切いっさいの真言師・禪宗・念仏者等ぜんしゆう ねんぶつの謗法ぼうほうの惡比丘あくびく

証明は空かるべからず一切の真言師・禪宗・念仏者等の謗法の惡比丘

をば前より御^ご歸依^{きえ}ありしかども其^その大科^{だいか}を知らせ給^{たま}はねば少し天も
許^{ゆる}し善神^{ぜんじん}もすてざりけるにや、而^{しか}るを日蓮^{にちれん}が出現^{しゅつげん}して一切^{いっさい}の人を恐れ
ず身命^{しんみょう}を捨てて指^{さし}し申^{もう}さば賢^{かしこけ}なる国主^{こくしゅ}ならば子細^{しさい}を聞き給^{たま}うべきに聞
きもせず用^{もち}いられざるだにも不思議^{ふしぎ}なるに剩^{あまつぎ}へ額^{おほ}に及^{およ}ばむとせし事は
存外^{ぞんがい}の次第^{しだい}なり、然^{しか}れば大惡人^{あくにん}を用^{もち}いる大科正法^{だいかしやうほう}の大善人^{ぜんにん}を耻辱^{ちじよく}する
大罪^{たいざい}・二惡・鼻^{はな}を並べて此の国^{こく}に出現^{しゅつげん}せり、譬^{たとえ}ば修羅^{しゆら}を恭敬^{きやうけい}し日天^{にってん}を
射奉^{たてまつ}るが如^{ごと}し故^{ゆえ}に前代^{ぜんだい}未聞^{みもん}の大事^{だいじ}此の
国^{こく}に起^{おこ}るなり、是又^{せんれい}先例^{せんれい}なきにあらず夏の桀王^{かのけつ}は竜蓬^{りゅうほう}が頭^{こづへ}を刎^はね
殷^{いん}の紂王^{ちゆうわう}は比干^{ひかん}が胸^{むね}をさき二世王^{よおう}は李斯^{りし}を殺^{ころ}し優陀延王^{うだえんおう}は寶頭盧^{びんずる}
尊者^{そんじや}を蔑如^{べつじよ}し檀弥羅王^{だんみら}は師子尊者^{ししそんじや}の頸^{けい}をきる武王^{ぶわう}は慧遠法師^{ほつし}と諍論^{じやうろん}
し憲宗王^{けんそうわう}は白居易^{はつきよい}を遠流^{おんる}し徽宗皇帝^{きそうこうてい}は法道三蔵^{ほうどうさんざう}の面^{かお}に火印^{かなやき}をさす、
此等^{これら}は皆諫曉^{みなかんぎやう}を用^{もち}いざるのみならず還^{かえ}つて怨^{うら}を成^なせし人人^{ひとひと}現世^{げんせ}には国

を亡し身を失ひ後生には惡道に墮つ是れ又人をあなづり讒言を納れて
理を尽さざりし故なり、而るに去る文永十

一年二月に佐土の国より召返されて同四月の八日に平金吾に對面して
有りし時・理不尽の御勘氣の由委細に申し含めぬ、又恨むらくは此の国
すでに他国に破れん事にあさましきと歎き申せしかば金吾が云く
何の比か大蒙古は寄せ候べきと問いしかば經文には分明に年月を指し
たる事はなけれども天の御氣色を拝見し奉るに以ての外に此

の国を睨にらみさせ給たまうか今年は一定寄せぬと覺おぼふ若し寄するならば一人も面を向う者あるべからず此これ又天の責なり、日蓮にちれんをば和わど殿のばらが用いぬ者なれば力及およばず、穴あな賢かしこ・穴あな賢かしこ・真言師等しんごんしに調伏じょうぶく行ぎやうわせ給たまうべからず若もし行ぎやうわするほどならいよいよ悪かるべき由申付けてさて歸りてありしに上下じやうげ共に先の如ごとく用いさりげに有ある上・本より存知せり国恩を報ぜんがために三度までは諫曉かんきやうすべし用いずば山林さんりんに身を隠さんと・おもひしなり、又上古じやうこの本文にも三度のいさめ用いずば去れといふ本文にまかせて且しかく山中に罷り入りぬ、其の上は国主こくしゆの用い給たまはざらんそに其それ已下いかに法門ほうもん申して何かせん申もうしたりとも国もたすかるまじ人も又仏になるべしともおぼす。

又念仏ねんぶつ・無間地獄むげんじごく・阿弥陀經あみだを讀むべからずと申もうす事も私の言にはあらず、夫それ弥陀念仏みだねんぶつと申もうすは源と釈迦しやか如来にやらいの五十余年の説法せつぽうの内・

前四十余年の内の阿弥陀經等の三部經より出来せり、然れども如来の
金言なれば定めて眞實にてこそあるらめと信ずる處に後八年の法華經
の序分たる無量義經に仏・法華經を説かせ給はんために先づ四十余年
の經經並に年紀等を具に數へあげて未顯眞實・乃至・終不得成・無上
菩提と若干の經經並に法門を唯一言に
打ち消し給う事譬えば大水の小火をけし大風の衆の草木の露を落すが
如し、然後に正宗の法華經の第一卷に至つて世尊法久後・
要當說眞實又云く正直捨方便・但說無上道と説き給う譬へは闇夜に
大月輪の出現し大塔立て後足代を切り捨つるが如し、然実義を定め
て云く今此の三界は皆是れ我が有なり其の中の衆生は悉く是れ吾が
子なり而も今此の處は諸の患難多し唯我一人のみ能く救護を為す、
復教詔すと雖も而も信受せず、乃至經を誦誦

し書き持つこと有らん者を見て輕賤憎嫉して而も結恨を懷かん、其の
人命終して阿鼻獄に入らん」等云云、經文の次第普通の性相の法に
は似ず常には五逆・七逆の罪人こそ阿鼻地獄とは定めて候に此れはさ
にては候はず在世滅後の一切衆生・阿弥陀經等の四十余年の經經を
堅く執して法華經へうつらざらんとたとひ法華經へ入るとも本執を捨て
ずして彼の彼の經經を法華經に並て修行せん人と又自執の經經を
法華經に勝れたりといはん人と法華經を

法の如く修行すとも法華經の行者を恥辱せん者と此れ等の諸人を指
しつめて其人命終入阿鼻獄と定めさせ給いしなり、此の事はただ釈迦
一仏の仰なりとも、外道にあらずば疑うべきにてはあらねども已今当
の諸經の説に色をかへて重き事をあらはさんがために宝淨世界の多宝
如来は自はるばる來給いて証人とならせ給う、釈迦如来の
先判たる大日經・阿彌陀經・念仏等を堅く執して後の法華經へ入らざ
らむ人人は入阿鼻獄は一定なりと証明し、又阿彌陀仏等の十方の
諸仏は各々の国國を捨てて靈山虛空會に詣で給い宝樹下に坐して
広長舌を出し大梵天に付け給うこと無量無辺の虹の虚空に立ちたら
んが如し、心は四十余年の中の觀經・阿彌陀經・悲華經等に法藏比丘
の諸菩薩・四十八願等を發して凡夫を九品の淨土へ來迎せんと説く事
は且く法華經已前のやすめ言なり、實には彼

れ彼れの経経きやうぎやうの文の如くごと十方じゅつぽう西方さいほうへの来迎らいじうはあるべからず実まこととおもふことなかれ釈迦しやか仏の今説たとき給たまうが如ごとし実まことには釈迦しやか・多宝たほう・十方じゅつぽうの諸しよ仏ぶつ寿命じゆみん品の肝要かんようたる南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうの五字ごじを信ぜしめんが為なりと出たし給たまう広長舌こうちやうぜつなり、我等われらと釈迦しやか仏とは同じ程の仏なり釈迦しやか仏は天月てんげつの如ごとし我等われらは水中の影の月なり釈迦しやか仏の本ほん土どは実まことには娑婆世界しやばせかいなり天月てんげつ動たき給たまはずば我等われらもうつるべからず此の土に居住して法華經ほけきやうの行者ぎやうじやを守護しゆごせん事・臣下しんかが主上あおを仰たてまつぎ奉らんが如ごとく父母ふぼの一子ひとこを愛するが如ごとくならんと出たし給たまう舌したなり、其の時そのとき阿弥陀仏あみだぶつの一二いちにの弟子でし・觀音かんのん・勢至せいし等は阿弥陀仏あみだぶつの塩梅あんばいなり雙翼つばさなり左右さうの臣むろなり兩目りやうもくの如ごとし、然而しかして極樂世界ごくらくせかいよりはるばると御供みぐし奉たてまつりたりしが無量義經むりやうぎきやうの時・仏あみだの阿弥陀經等あみだきやうの四十八願等みけんしんじつ・乃至ないし法華經ほけきやうにて一名阿弥陀あみだと名をあげて此等これらの法門ほうもんは真実しんじつならずと説とき

給たまいしかば実まこととも覺おぼへざりしに阿弥陀仏あみだぶつ正まさく来きりて合点がてんし給たまいしをう
ち見みてさては我等われらが念仏者等ねんぶつを九品じゅうひんの淨土じやうどへ来迎らいごうの蓮台れんだいと合掌がっしやうの印いんと
は虚むなしかりけりと聞定めてさては我等われらも本土ほんどに還かえりて何かせんとて
八万二万はちまんにまんの菩薩ぼさつのうちに入り、或あるは觀音品かんのんに遊あそび於お婆娑世界しやばせかいと申もうして此
の土ほけきやうの法華經ぎやうじやの行者しゆごを守護しゆごせんとねんごろに申もうせしかば、日本国にほんこくより
近えんぶだいき一閭浮提なんぼうの内ふだらくさん・南方もよう・補陀落山ふだらくさんと申もうす小所しやかぶつを釈迦しやかぶつ仏ぶつより給たまいて宿
所たまたと定め給あみだぶつふ、阿弥陀仏あみだぶつは左右さうの臣下しんか

たる観音・勢至に捨てられて西方世界へは還り給はず此の世界に留りて
法華經の行者を守護せんとありしかば此の世界の内・欲界第四の
兜率天・弥勒菩薩の所領の内・四十九院の一院を給いて阿弥陀院と額
を打つておはするとこそうけ給はれ、其の上阿弥陀經には仏・舍利弗に
対して凡夫の往生すべき様を説き給ふ、舍利弗・舍利弗・又舍利弗
と二十余処までいくばくもなき經によび給いしはかまびすしかりし事ぞ
かし、然れども四紙の一卷が内すべて舍利弗等の諸声聞の往生成仏
を許さず法華經に來りてこそ始て華光如來・光明如來とは記せられ
給いしか一閻浮提第一の大智者たる舍利弗すら淨土の三部經にて
往生成仏の跡をけづる、まして末代の牛羊の如くなる男女・彼彼
の經經にて生死を離れなんや、此の由を弁へざる末代の學者等並に
法華經を修行する初心の人人かたじけなく阿弥陀經を読み念仏を

申して、或は法華經に鼻を並べ、或は後に此れを讀みて法華經の肝心とし功德を阿弥陀經等にあつらへて西方へ回向し往生せんと思ふは譬へば飛竜が驢馬を乗物とし師子が野干をたのみたるか將又日輪出現の後の衆星の光大雨の盛時の小露なり、故に教大師云く、百牛を賜う朝には三車を用いず、家業を得る夕に何ぞ

除糞を須いん、故に經に云く、正直に方便を捨て但無上道を説く、又

云く、日出でぬれば星隠れ巧を見て拙を知る」と云云、法華經出現の

後は已今当の諸經の捨てらるる事は勿論なりたとひ修行すとも

法華經の所從にてこそあるべきに今の日本国の人人道緯が

未有一人得者・善導が千中無一・慧心が往生要集の序・永觀が十因・

法然が

捨閑閑拋等を堅く信じて、或は法華經を抛ちて一向に念仏を申す者も

あり、或は念仏ねんぶつを本として助けに法華經ほけきょうを持つ者もあり、或は弥陀みだ念仏ねんぶつと法華經ほけきょうとを鼻を並べて左右さうに念じて二行と行ずる者もあり、或は念仏ねんぶつと法華經ほけきょうと一法の二名なりと思いて行ずる者もあり、此れ等こは皆教主みなきょうしゅ釈尊しやくそんの御屋敷しやかしの内に居こして師主をば指し置き奉りて阿弥陀堂あみだだうを釈迦如来しやかにょらいの御所領しよりやうの内に国毎さとに郷毎さとに家家毎しやけいに並べ立て、或は一万、二万、或は七万返、或は一生の間、一向いっかうに修行しゆぎやうして主師親しゆししんをわすれたるだに不思議ふしぎなるに、剩あまつさへ親父たる教主きやうしゅ釈尊しやくそんの御誕生せいにこにうめつ後入滅りようじつの両日を奪い取りて、十五日は

阿彌陀仏の日・八日は薬師・仏の日等云云、一仏誕生の両日を東西二
仏の死生の日となせり是豈に不孝の者にあらずや逆路七逆の者にあら
ずや、人毎に此の重科有りてしかも人毎に我が身は科なしとおもへり
無慚無愧の一闍提人なり、法華經の第二の卷に主と親と師との三大事
を説き給へり一經の肝心ぞかし、其の經文に云く今・此の三界は皆
是れ我有なり其中の衆生は悉く是れ吾が子なり、而も今・此の処は
諸の患難多し唯我一人のみ能く救護を為す
「等云云、又此の經に背く者を文に説いて云く復教詔すと雖も而も
信受せず、乃至其の人命終して阿鼻獄に入らん」等云云、されば念仏
者が本師の導公は其中衆生の外か唯我一人の經文を破りて千中無一
といいし故に現身に狂人と成りて楊柳に登りて身を投げ堅土に落ちて
死にかねて十四日より二十七日まで十四日が間顛倒狂死し畢んぬ、又

真言宗しんごんしゅうの元祖がんそ善無畏ぜんむい三藏さんざう・金剛智こんごうち三藏さんざう・不空ふくう三藏さんざう等は親父おやを兼ねた
る教主きょうしゅ釈尊しゃくそん・法王ほうおうを立下たてくだして大日だいにとち

他た仏ぶつをあがめし故ゆえに善無畏ぜんむい三藏さんざうは閻魔王えんまおうのせめにあづかるのみならず

又また無間地獄むげんじごくに堕おちぬ、汝等なんじ・此この事うたがひ疑うたがひあらば眼前がんぜんに閻魔堂えんまの画えを見

よ、金剛智こんごうち・不空ふくうの事はしげければかず、又また禪宗ぜんしゅうの三階さんかい信行しんぎやう禪師ぜんしは

法華經ほけきやう等の一代いちだい聖教しやうきやうをば別教べつきやうと下くだす我が作なれる經きやうをば普經ふきやうと

崇重すうちやうせし故ゆえに四依しえの大士だいじの如ごとくなりしかども法華經ほけきやうの持者じしやの優婆夷うぱいに

・せめられてこえを失うしなひ現身げんしんに大蛇だいじやとなり数十人すうじゅうにんの弟子でしを吞のみ食くらう。

今いま・日本国にほんこくの人人ひとびとはたとひ法華經ほけきやうを持たもち釈尊しゃくそんを釈尊しゃくそんと崇重すうちやうし奉たてまつる

とも真言宗しんごんしゅう・禪宗ぜんしゅう・念仏ねんぶつ者ものをあがむるならば無間地獄むげんじごくはまぬがれがた

し、何いかに況いわんやや三宗さんしゅうの者共ひとびとを日月にちがつの如ごとく渴仰かつじやうし我が身みにも念仏ねんぶつを事わざとせ

む者をや心あらん人人ひとびとは念仏ねんぶつ・阿弥陀經あみだ等をば父母ふぼ・師君しきん・宿世すくせの敵てきよ

りもいむべきものなり、例せば逆臣が旗をば官兵は指す事なし寒食の祭
には火をいむぞかし、されば古^{いにしへ}への論師^{ろんし}・天親菩薩^{てんじんぼさつ}は小乗經^{しょうじょうきやう}を舌の上
に置かじと誓ひ、賢者^{けんじゃ}たりし吉藏大師^{きちざうだいし}

は法華經^{ほけきやう}をだに読^{たま}み給はず、此等^{これら}はもと小乗經^{しょうじょうきやう}を以て大乘經^{だいじやうきやう}を
破失^{はしつ}し法華經^{ほけきやう}を以て天台大師^{もつてんだいだいし}を毀謗^{きぼう}し奉^{たてまつ}りし謗法^{ぼうぼう}の重罪^{じゅうざい}を消滅^{しょうめつ}せん
がためなり、今^{にほんこく}・日本^{ひとびと}の人人^{ひとひと}は一人もなく不輕輕毀^{ふぎやうきやうき}の如く苦岸勝意^{くがんしょうい}
等の如く^{ごと}一國万人^{ばんにん}・皆^{みな}

無間地獄に墮つべき人人ぞかし、仏の涅槃經に記して末法には法華經
誹謗の者は大地微塵よりもおほかるべしと記し給ひし是なり、而に今
法華經の行者出現せば一国万人、皆法華經の誦誦を止めて吉藏大師
の天台大師に隨うが如く身を肉橋となし不輕輕毀の還つて不輕菩薩
に信伏隨從せしが如く仕うるとも、一日・二日・一月・二月・一年二年
・一生二生が間には法華經誹謗の重罪は尚なをし滅しがたかるべきに
其の義はなくして当世の人人は四衆俱に一慢
をおこせり、所謂念仏者は法華經を捨てて念仏を申す日蓮は法華經を
持といへども念仏を持たず我等は念仏を持ち法華經をも信ず戒をも
持ち一切の善を行ず等云云、此等は野兎が跡を隠し金鳥が頭を穴に
入れ、魯人が孔子をあなづり善星が仏ををどせしにことならず鹿馬
迷いやすく鷹鳩変じがたき者なり、墓無し墓無し、當時は予が古へ申

せし事の漸く合かの故に心中には如何せんとは思ふらめども年来あまりに法にすぎてそしり悪口せし事が忽に翻がたくて信ずる由をせず、而も蒙古はつよりゆく、如何せんと宗盛・義朝が様になげくなり、あはれ人は

心はあるべきものかな孔子は九思一言・周公旦は浴する時は三度にぎり食する時は三度吐給う賢人は此の如く用意をなすなり世間の法にも・はふにすぎば・あやしめといふぞかし、国を治する人などが人の申せばとて委細にも尋ねずして左右なく科に行はれしは・あはれくやしかるらん夏に夏の桀王が湯王に責められ呉王が越王に生けどり

にせられし時は賢者の諫暁を用いざりし事を悔ひ阿闍世王が悪瘡身に出で他国に襲はれし時は提婆を眼に見じ耳に聞かじと誓い、乃至宗盛がいくさにまけ義経に生けどられて鎌倉に下されて面をさらせし時は

東大寺を焼き払はせ山王の御輿を射奉りし事を歎きしなり、今の世も
又一分もたがふべからず日蓮を賤み諸僧を貴び給う故に自然に法華經
の強敵となり給う事を弁了、政道に背きて行はるる間・梵釈・日月・
四天・竜王等の大怨敵となり給う、
法華經守護の釈迦・多宝・十方分身の諸仏・地涌千界・迹化他方・二聖
・二天・十羅刹女・鬼子母神・他国の賢王の身に入り代りて国主を罰し
国をほろぼさんとするを知らず、真の天のせめにてだにも・あるならば
たとひ鉄圀山を日本

国に引回し須弥山を蓋として十方世界の四天王を集めて波際に立て
並べてふせがするとも法華經の敵となり教主釈尊より大事なる行者
を法華經の第五の巻を以て日蓮が頭を打ち十巻共に引き散して散散
にふみたりし大禍は現当二世にのがれがたくこそ候はんずらめ日本
守護の天照太神・正八幡等もいかでかかかる国をばたすけ給うべきいそ
ぎいそぎ治罰を加えて自科を脱がれんとこそはげみ給うらめをそく
科に行う間・日本国の諸神ども四天王にいましめられてやあるらん
知り難き事なり教大師云く竊に以れば菩薩は国の宝なること法華經
に載せ大乘の利他は摩訶衍の説なり弥天の七難は大乗經に非ずんば
何を以てか除くことを為ん、未然の大災は菩薩僧に非ずんば豈冥滅す
ることを得んや」等云云、而るを今大蒙古国を調伏する公家・武家の
日記を見るに、或は五大尊・或は七

仏やくし・或あるは仏眼ぶつげん・或あるは金輪等云云、此れ等の小法は大災を消すべしや
還げん著ちやく於お本人ほんにんと成りて国忽たちまちに亡なびなんとす、或あるは日吉ひよしの社ほつにして法華ほつの
護摩まもを行まもうといへども不空ふくう三藏さんざうがあやまれる法を本として行まもう間祈きとう☆
の儀ぎにあらず、又今いまの高僧等こうそうは或あるは東寺とうじの真言しんごん・或あるは天台てんだいの真言しんごんなり
東寺とうじは弘法大師こうぼうだいし・天台てんだいは慈覺じかく・智証ちしやうなり、此の三人は上に申もうすが如ごとく
大謗法ほうぼうの人人ひとびとなり、其れより已外いげの諸僧等しよそうは或あるは東大寺とうだいじの戒壇かいだんの
小乘しょうじやうの者ものなり、叡山えいざんの円頓戒えんどんは又慈覺じかくの謗法ほうぼう

に曲かげられぬ彼の円頓戒えんどんも迹門しやくもんの大戒だいかいなれば今の時の機きにあらず 旁かたがた
叶かなうべき事ことにはあらず、只今ただ国土こくどやぶれなん後悔こうかいさきにたたじ不便ふびん
不便ふびんと語かたり給たまいしを千万せんまんが一ひとを書き付けて参らせ候。
但ただし身みも下賤げせんに生れ心も愚おろかに候へば此の事は道理かとは承うけたまわり候へ

ども国主こくしゆも御用もちいなきかの故ゆえに鎌倉かまくらにては如何いかにが候ふしんけん不審おほに覺おほえ

候、返す返すも愚意おろかに存じ候はこれ程の国の大事だいじをば・いかに御尋たずねもなくして両度の御勘氣ごかんきには行はれけるやらんと聞食きこしめしほどかせ給たまはぬ人人ひとびとの・或あるは道理どうりとも・或あるは僻事ひがごととも仰おおせあるべき事とは覚え候おぼはず、又此の身に阿弥陀經あみだを読み候はぬも併しかしながら御為父母ふぼの為ためにて候、只ただ理不りふじん尽じんに読むべき由よしを仰おおせを蒙こおむり候はば其の時重そのときかさねて申もうすべく候、いかにも聞食きこしめさずしてうしろの推義すいぎをなさん人人ひとびとの仰おおせをばたとひ身は随したがう様に候え

ども心は一向に用いまいらせ候まじ、又恐れにて候へども兼ねてつみし
らせまいらせ候、此の御房は唯一人おはします若しやの御事の候はん時
は御後悔や候はんずらん世間の人人の用いねばとは一旦のをろかの事
なり上の御用あらん時は誰人か用いざるべきや、其の時は又用いたりと
も何かせん人を信じて法を信ぜず、又世間の人人の思いて候は親には
子は是非に随うべしと君臣・師弟も此くの如しと此れ等は外典をも
弁えず内典をも知らぬ人人の邪推なり外典の孝経には子父・臣君諍う
べき段もあり、内典には恩を棄て無為に入るは真実に恩を報ずる者な
りと仏定め給いぬ、悉達太子は閻浮第一の孝子なり父の王の命を背き
てこそ父母をば引導し給いしか、比干が親父紂王を諫曉して胸をほら
れてこそ賢人の名をば流せしか、賤み給うとも小法師が諫曉を用ひ
給はずば現当の御歎きなるべし、此れは親の為に読みまいらせ候はぬ

阿^あ弥^み陀^だ經^{きやう}にて候^{こう}は・い^いか^かに^にも^も当^{とう}時^じは^は叶^{かな}う^うべ^べし^しと^とは^はお^おぼ^ぼ候^{こう}は^はず、^{きようきよう}恐^{おそ}恐^{おそ}
申^{もう}し^し上^あげ^げ候^{こう}。

建^{けん}治^ち三^{さん}年^{ねん}六^{りく}月^{げつ}日^{にち} 僧^{そう} 日^{にち}永^{えい}

下^{しも}山^{やま}兵^{へい}庫^こ五^ご郎^{らう}殿^{でん}御^ご返^{へん}事^じ

◆五〇

本尊問答抄

弘安元年九月

五十七歳御作 与

淨顯房日仲

365P

問うて云く末代惡世の凡夫は何物を以て本尊と定むべきや、答えて云く法華經の題目を以て本尊とすべし、問うて云く何れの經文何れの人師の釈にか出でたるや、答う法華經の第四法師品に云く、藥王在在處處に若しは説き若しは讀み若しは誦し若しは書き若しは經卷所住の處には皆応に七宝の塔を起てて極めて高広嚴飾なら令むべし復舍利を安んずることを須いじ所以は何ん此の中には已に如來の全身有す」等云云、涅槃經の第四如來性品に云く復次に迦葉諸仏の師とする所は所謂法なり是の故に如來恭敬

供養くようす法常ふつじょうなるを以ての故ゆえに諸仏しよぶつも亦常またなり」云云、天台大師てんだいだいしの法華ほつけ三昧さんまいに云く「道場どうじょうの中に於て好き高座こうざを敷き法華經ほけきやう一部を安置あんちし亦また必ずしも形像ぎやうざう舍利しやり並びに余の經典きやうてんを安くべからず唯法華經ただほけきやう一部を置おけ」等云云。

疑うたがいつて云く天台大師てんだいだいしの摩訶止觀まかしかんの第二の四種三昧ししゆざんまいの御本尊ごほんぞんは阿彌陀仏あみだぶつなり、不空三藏ふくうさんざうの法華經ほけきやうの觀智かんちの儀軌ぎぎは釈迦しやか・多宝たほうを以てもつ法華經ほけきやうの本尊ほんぞんとせり、汝何ぞ此等なんじんの義これらに相違そういするや、答えて云く是れこ私の義わがにあらず上に出だすところの經文きやうもん並びに天台大師てんだいだいしの御釈ごしやくなり、但し摩訶止觀まかしかんの四種三昧ししゆざんまいの本尊ほんぞんは阿彌陀仏あみだぶつとは彼は常坐じやうざ・常行じやうぎやう・非行ひぎやう・非坐ひざの三種さんしゆの本尊ほんぞんは阿彌陀仏あみだぶつなり、文殊問經もんじゆもんきやう・般舟三昧經はんじゆさんまいきやう・請觀音經しやうくわんぎやうきやう等による、是れ爾前にぜんの諸經しよきやうの内、未顯真實みけんしんじつの經きやうなり、半行半坐三昧はんぎやうはんざさんまいには二あり、一には方等經ほうとうきやうの七仏しちぶつ・八菩薩等はつぼさつどうを

本尊ほんぞんとす彼の經による、二には法華經ほけきょうの釈迦しやか・多宝等たほうを引き奉たてまれども
法華三昧ほつげさんまいを以もつて案ずるに法華經ほけきょうを本尊ほんぞんとすべし、不空三藏ふくうさんざうの法華儀軌ほつげぎき
は宝塔品ほうとうぼんの文によれり、此これは法華經ほけきょうの教主きようしゅを本尊ほんぞんとす法華經ほけきょうの正意
にはあらず、上に拳あぐる所の本尊ほんぞんは釈迦しやか・多宝たほう・十方じゅうぽうの諸仏しよぶつの御本尊ごほんぞん
法華經ほけきょうの行者ぎやうじやの正意なり。

問うて云く日本国に十宗あり所謂俱舍・成実・律・法相・三論・華嚴
・真言・淨土・禪・法華宗なり、此の宗は皆本尊まちまちなり所謂俱舍・
成実・律の三宗は劣応身の小釈迦なり、法相・三論の二宗は大釈迦
を本尊とす華嚴宗は台上のるさな報身の釈迦如来、真言宗は大日
如来、淨土宗は阿弥陀仏、禪宗にも釈迦を用いたり、何ぞ天台宗に
ひとり法華經を本尊とするや、答う彼等は仏を本尊とするに是は經を
本尊とす其の義あるべし、問う其の義如何仏と經といづれか勝れたる
や、答えて云く本尊とは勝れたるを用うべし、例せば儒家には
三皇・五帝を用いて本尊とするが如く仏家にも又釈迦を以て本尊とす
べし。

問うて云く然らば汝云何ぞ釈迦を以て本尊とせずして法華經の
題目を本尊とするや、答う上に挙ぐるところの經釈を見給へ私の義に

はあらず釈尊しやくそんと天台てんだいとは法華經ほけきやうを本尊ほんぞんと定め給たまへり、末代まつだい今の日蓮にぢれんも
仏てんだいと天台てんだいとの如ごとく法華經ほけきやうを以もつて本尊ほんぞんとするなり、其そのの故ゆえは法華經ほけきやうは
釈尊しやくそんの父母ふぼ・諸仏しよぶつの眼目がんもくなり釈迦大日しやかだいにち・総じゆつぽうじて十方しよぶつの諸仏しよぶつは法華經ほけきやうよ
り出生しゆつじやうし給たまへり故ゆえに今能生のうしやうを以もつて本尊ほんぞんとするなり、問しやうこう其証拠いかん如何、
答ふげんう普賢經いふに云いく此だいじやうきやうてんの大乗經典しよぶつは諸仏しよぶつ
の宝蔵ほうざうなり十方三世じゆつぽうさんぜの諸仏しよぶつの眼目がんもくなり三世さんぜの諸もろもろの如來しゆつしやうを出生しゆつしやうする種
なり」等云云、又云いく此ほうとうの方等經こは是これ諸仏しよぶつの眼まなこなり諸仏しよぶつは是よに因よつ
て五眼ごがんを具ぐすることを得たまえり仏はつの三種ほうとうの身こは方等ほうとうより生こず是これ大
法印ほういんにして涅槃海ねはんを印かす此ごとくの如かいちゆうき海中よより能よく三種しよぶつの仏しやうじやうの清淨しやうじやうの
身しんを生なず此にんてんの三種ふくでんおうぐの身しんは人天ふくでんおうぐの福田ふくでんおうぐ・應供おうぐの中の最しんなり」等
云云、此等これらの經文きやうもん・佛しよしやうは所生しよしやう法華經ほけきやうは能生のうしやう佛しよしやうは身ほけきやうなり法華經ほけきやうは神たましいな
り、然しかれば則すなわち木像くざう・画像かいげんの開眼供養くゑんくゑうは唯ただ法華經ほけきやうにかぎるべし而しかるに今

もくえ 木画の二像をまうけて大日仏眼の印と真言とを以て開眼供養をなすは
もとも逆なり。

問うて云く法華經を本尊とすると大日如来を本尊とするといづれか
勝るや、答う弘法大師・慈覺大師・智証大師の御義の如くならば大日
如来はすぐれ法華經は劣るなり、問う其の義如何、答う弘法大師の
秘藏宝鑰十住心に云く第八法華・第九華嚴・第十大日經」等云云是
は浅きより深きに入る、慈覺大師の金剛頂經の疏・蘇悉地經の疏

・智証大師の大日經の旨歸等に云く 天日經第一・法華經第二」等云
云、問う汝が意如何、答う釈迦如来・多宝仏・總じて十方の諸仏の
御評定に云く已今当の一切經の中に法華最為第一なり云云、問う今、
日本国中の天台・真言等の諸僧並びに王臣万民疑つて云く日蓮法師
めは弘法・慈覺・智証大師等に勝るべきか如何、答う日蓮反詰して云く
弘法・慈覺・智証大師等は釈迦・多宝・十方の諸仏に勝るべきかは一、
今日本の國王より民までも教主釈尊の御子な

り釈尊の最後の御遺言に云く 法に依つて人に依らざれ」等云云、
法華最第一と申すは法に依るなり、然るに三大師等に勝るべしやとの
給ふ諸僧・王臣・万民乃至所従牛馬等にいたるまで不孝の子にあらず
や是二、問う弘法大師

は法華經を見給はずや、答う弘法大師も一切經を読み給へり、其の中

に法華經・華嚴經・大日經の淺深・勝劣

を讀み給うに法華經を讀給う様に云く文殊師利・此の法華經は諸仏
如来秘密の藏なり諸經の中に於て最も其の下に在り、又讀み給う様に
云く藥王今汝に告ぐ我が所説の諸經あり而も此の經の中に於て法華
最第三云云、又慈覺・智証大師の讀み給う様に云く諸經の中に於て最
も其の中に在り又最為第二等云云、釈迦如来・多宝仏・大日如来、
一切の諸仏・法華經を一切經に相對して説いての給はく法華最第一、
又説いて云く法華最も其の上に在り云云、所詮釈迦十方の諸仏と
慈覺・弘法等の三大師といづれを本とすべきや、但し事を日蓮によせて
釈迦十方の諸仏には永く背きて三大師を本とすべきか如何。

問う弘法大師は讃岐の国の人勤操僧正の弟子なり、三論・法相の
六宗を極む、去る延暦二十三年五月桓武天皇の勅宣を帯びて漢土に

入り順宗皇帝こうていの勅ちよくに依りて青竜寺に入りて慧果和尚けいかわじように真言しんごんの大法だいほうを
相承そうじようし給たまへり慧果和尚けいかわじようは大日如来だいにちにょらいよりは七代になり給たまう人はかはれど
も法門ほうもんはをなじ譬たとえば瓶の水を猶瓶なおにうつすがごとし、大日如来だいにちにょらいと
金剛薩こんごうさつた・竜猛りゅうもう・竜智りゅうち・金剛智こんごうち・不空ふくう・慧果けいか・弘法こうぼうとの瓶ことは異なれども
所伝しよでんの智水ちすいは同じ真言しんごんなり此の大師だいし・彼の真言しんごんを習ならいて三千さんぜんの波濤はとうを
わたりて日本国にほんこくに付き給たまうに平城へいぜい・嵯峨さが・淳和じゆなの三帝にさづけ奉たてまつる、
去いぬる弘仁こうにん十四年正月

十九日に東寺を建立すべき勅を給いて真言の秘法を弘通し給う然らば五畿・七道・六十六箇国・二の島にいたるまでも鈴をとり杵をにぎる人たれかこの末流にあらざるや。

又慈覺大師は下野の国の人・広智菩薩の弟子なり、大同三年御歳十五にして伝教大師の御弟子となりて叡山に登りて十五年の間六宗を習い法華・真言の二宗を習い伝え承和五年御入唐・漢土の会昌天子の御宇なり、法全・元政・義真・法月・宗叡・志遠等の天台・真言の碩学に値い奉りて顕密の二道を習い極め給う、其の上殊に真言の秘教は十年の間功を尽し給う大日如来よりは九代なり嘉祥元年仁明天皇の御師なり、仁寿・斉衡に金剛頂經・蘇悉地經の二經の疏を造り叡山に總持院を建立して第三の座主となり給う天台の真言これよりはじまる。

又智証大師は讃岐の国の人天長四年御年十四・叡山に登り義真和尚の御弟子となり給う、日本国にては義真・慈覚・円澄・別当等の諸徳に八宗を習い伝え去る仁寿元年に文徳天皇の勅を給いて漢土に入り宣宗皇帝の大中年中に法全良☆和尚等の諸大師に七年の間顕密の二教習い極め給いて去る天安二年に御帰朝・文徳・清和等の皇帝の御師なり、何れも現の為当の為月の如く日の如く代代の明主・時時の臣民・信仰余り有り歸依怠り無し故に愚癡の

一切偏に信ずるばかりなり誠に法に依つて人に依らざれの金言を背かざるの外は争か仏によらずして弘法等のの人によるべきや、所詮其の心如何、答う夫れ教主・釈尊の御入滅一千年の間月氏に仏法の弘通せし次第は先五百年は小乗後の五百年は大乗・小大・権実の諍はありしかども顕密の定めはかすかなりき、像法に入りて十五年と申せしに

漢土かんどに仏法ぶつぽう渡る始はつは儒道じゆどうと釈教しゃくぎやうと諍論じやうろんして定めがたかりきされども
仏法ぶつぽうやうやく弘通くつうせしかば小大こんだい・權實こんじつ

の諍論じやうろんいできたる、されどもいたくの相違さういもなかりしに、漢土かんどに仏法ぶつぽう渡
りて六百年ろくひゃくねん・玄宗皇帝げんそうこうていの御宇ぎやう・善無畏ぜんむい・金剛智こんこうち・不空ふくうの三三藏さんざう・月氏がつしよ
り入り給たまひいて後真言宗しんごんしゅうを立てしかば、華嚴けごん・法華ほっけ等の諸宗しよしゅうは以ての外
にくだされき上一かみいちにんよ一人自みづかり下万民ばんみんに至いたるまで真言しんごんには法華經ほけきやうは雲泥うんでいなり
と思おもひしなり、其その後・徳宗皇帝とくそうこうていの御宇ぎやうに妙樂大師みやうらくだいしと申もうす人

眞言しんごんは法華經ほけきょうにあながちに・をとりたりとおぼしめししかども、いたく

立てる事もなかりしかば法華ほつけ・眞言しんごんの勝劣しょうれつを弁わえる人なし。

日本国にほんこくは人王きんめい三十代欽明おんときの御時く・百濟国くだらより仏法ぶつぽう始めて渡りたりし

かども始すいこは神てんのうと仏ぎょうとの諍論じやうろんこわくして三十余年はすぎにき、三十四代

推古天皇すいこてんのうの御宇ぎょうに聖徳太子しょうとくたいし始めて仏法ぶつぽうを弘通くつうし給たまう慧觀觀勒えいかんかんろくの二の

上人しょうにん百濟国くだらよりわたりて三論宗さんろんしゅうを弘ひろめ、孝徳ぎょうとくの御宇ぎょうに道昭だうしやう・禪宗ぜんしゅうを

わたす文武ぶぶの御宇ぎょうに新羅国しらぎの智鳳ちほう・法相宗ほつそうしゅうをわたす第四十四代元正げんしやう

天皇てんのうの御宇ぎょうに善無畏三蔵ぜんむいさんざう・大日經だいにちぎやうをわたす然而しかるに弘ひろまらず、聖武しょうむの御宇ぎょう

に審祥大徳しんじやうだいとく・朗弁僧正等そうじやう・華嚴宗けこんしゅうをわた

す人王きんめい四十六代孝謙天皇こうけんてんのうの御宇ぎょうに唐代とうの鑒真和尚がんじんわじやう・律宗りつしゅうと法華經ほけきょうを

わたす律りつをばひろめ法華ほつけをば弘ひろめず、第五十代桓武天皇かんむてんのうの御宇ぎょうに

延暦えんりやく二十三年七月でんぎやう伝教大師だんぎやう勅宣だいにしちよくせんを給たまいて漢土かんどに渡りわた妙楽大師みやうらくだいしの

御弟子・道邃・行滿に値い奉りて法華宗の定慧を伝え道宣律師に菩薩戒を伝え順・曉和尚と申せし人に真言の秘教を習い伝えて日本国に歸り給いて、真言・法華の勝劣は漢土の師のおしへに依りては定め難しと思食しなければ・ここに於て大日經と法華經と彼の釈と此の釈とを引き並べて勝劣を判じ給いしに大日經は法華經に劣りたるのみならず大日經の疏は天台の心を取りて我が宗に入れたりけりと勘え給へり。

其の後弘法大師・真言經を下されける事を遺恨とや思食しけむ

真言宗を立てんとたばかりて法華經は大日經に劣るのみならず華嚴經に劣れりと云云、あはれ慈覺・智証・叡山・園城にこの義をゆるさずば弘法大師の僻見は日本国にひろまらざらまし、彼の両大師・華嚴・法華の勝劣をばゆるさねど法華・真言の勝劣をば永く弘法大師に

同心せしかば存外ぞんがいに本の伝教大師でんぎょうだいしの大怨敵おんてきとなる、其その後日本にほんの諸しよ
碩徳等せきとく各智慧ちえ高く有るなれども彼の三大師だいいしにこえざれば今四百余年の
間・日本にほん一同に真言しんごんは法華經ほけきょうに勝れけりと定め畢おわんぬ・たまたま
天台宗てんだいしゅうを習ひとへる人人も真言しんごんは法華ほっけに及およばざるの由存てんだいぜども天台てんだいの座主ざす
・御室等おむろの高貴におそれて申もうす事なし・あるは又其その義をもわきまへぬ

かのゆへにからくして同の義をいへば一向・真言師はさる事おもひもよらずとわらふなり。

然らば日本国中に数十万の寺社あり皆真言宗なりたまたま法華宗を並ぶとも真言は主の如く法華は所従の如くなり若しくは兼学の人も心中は一同に真言なり、座主・長吏・檢校・別当・一向に真言たるうへに好むところ下皆したがふ事なれば一人ももれず真言師なり、されば日本国・或は口には法華經最第一とはよめども心は最第二・最第三なり・或は身口意共に最第二三なり、三業相応して最第一と読める法華經の行者は四百余年が間・一人もなしまして能持此經の行者はあるべしともおぼへず、如來現在・猶多怨嫉・況滅度後の衆生は上一人より下万民にいたるまで法華經の大怨敵なり。

然るに日蓮は東海道十五箇国の内第十二に相當る安房の国長狹の

とうじょう

郡・東条の郷・片海の海人が子なり、生年十二同じき郷の内・清澄寺と

もう

申す山にまかり登り住しき、遠国なるうへ寺とはなづけて候へども修学

しかるにずいぶんしよく

の人なし然而随分諸国を修行して学問し候いしほどに我が身は不肖な

しやうれつ

り人はおしへず十宗の元起勝劣たやすくわきまへがたきところに、たま

ばさつ きしやう

たま仏・菩薩に祈請して一切の経論を勘て十宗に合せたるに俱舎宗は

かんがえ

くしやしやう

浅近なれども一分は小乗經に相当するに似たり、成実宗は大小

いちぶん しやうじやうきやう

じやうじつ

だいしやう

けんさつ

兼雜して謬☆あり律宗は本は小乗・中比は權大乘・今は一向に大乘

りつしやう

しやうじやう

なかごろ

こんだいいじやう

いっこう

だいじやう

宗とおもへ

でんぎやうだいし

りつしやう

なら

ほうそうしやう

もとこんだいいじやうきやう

り又伝教大師の律宗あり別に習う事なり、法相宗は源權大乘經の

ほうもん

しだい

ぞうちやう

こんじつ

なら

けつく

は彼の

中の浅近の法門にてありけるが次第に増長して權実と並び結句は彼の

ほうもん

しだい

ぞうちやう

こんじつ

なら

けつく

は彼の

宗宗を打ち破らんと存ぜり譬えば日本国の將軍・將門・純友等のごと

たと

にほんこく

しやうぐん

こんだいいじやう

しやうぐん

い

ちぶん

こ

は

し下に居て上を破る、三論宗も又權大乘の空の一分なり此れも我は

やぶ

さんろんしやう

こんだいいじやう

い

ちぶん

こ

は

実大乘とおもへり、華嚴宗は又権大乘と云ひながら余宗にまされり
譬えば摂政関白のごとし然而法華經を敵となして立てる宗なる故に
臣下の身を以て大王に順ぜんとするがごとし、浄土宗と申すも
権大乘の一分なれども善導・法然がたばかりかしこくして諸經をば上
げ觀經をば下し正像の機をば上げ末法の機をば下して末法の機に相
叶える念仏を取り出して機を以て經を打ち一代の聖教を失いて念仏

の一門いちもんを立てたり譬たとえば心かしこくして身は卑ひしき者が身を上げて心
はかなきものを敬けんいて賢人けんじんをうしなふがごとし、禪宗ぜんしゅうと申もうすは一代いちだい
聖教しょうきょうの外ほかに真実しんじつの法有りと云云た譬たとえばをやを殺して子を用い主を殺
せる所従しよじゅうのしかも其その位につけるがごとし、真言宗しんごんしゅうと申もうすは一向いっこうに大
妄語もうごにて候が深く其その根源こんげんをかくして候へば浅機あさきの人あらはしがたし
一向いっこうに誑惑おおわくせられて数年を経て候先ず天竺てんじくに真言宗しんごんしゅうと申もうす宗なし
然しかれども有りと云云、其その証拠しょうこを尋ぬ可べき

なり所詮しよせん大日經だいにちきようここにわたれり法華經ほけきように引き向けて其その勝劣しょうれつを見候
處ところに大日經だいにちきようは法華經ほけきようより七重下劣ぜつれつの經なり証拠しょうこ彼の經・此の經に
分明ぶんみょうなり此こに之これを引かずしかるを・或あるは云いわく法華經ほけきように三重の主君しゅくん・或あるは二
重の主君しゅくんなりと云云もつ以ての外ほかの大僻見びやくけんなり、譬たとえば劉聰りゅうそうが下劣げれつの身と
して愍帝びんていに馬の口をとらせ超高が民の身として横よこしまに帝位につきしがごと

し又彼の天竺てんじくの大慢婆羅門だいまんばらもんが釈尊しゃくそんを床として坐せしがごとし漢土かんとどにも知る人なく日本にほんにもあやしめずして・すでに四百余年をおくれり。

是かくくの如ごとく仏法ぶつぽうの邪正じやせい乱れしかば王法おうはふも漸ようやく尽つきぬ結句けつこは此の国・

他国たこくにやぶられて亡国ぼうこくとなるべきなり、此の事日蓮にちれん独り勘かんえ知れる

故ゆえに仏法ぶつぽうのため王法おうはふのため諸經しよきやうの要文ようぶんを集めて一卷の書を造る仍よつて

故最明寺入道殿さいみやうじにやうどうに奉たてまつりつしやうあんてくろんと名けき、其その書しよにくはしく申もうした

れども愚人ぐにんは知がり難がたし、所詮しよせん現証げんしやうを引ひいて申もうすべし抑そもそも人王八十二代

隱岐おきの法王ほうおうと申もうす王おう有おわしき去いぬる承久三年じやうきやう太歳かのとみ辛巳五月十五日伊賀

太郎判官光末みつすえを打捕うちとまします鎌倉かまくらの義時よしときをうち給たまはむとの門出かどでな

り、やがて五畿ごき・七道しちどうの兵つわものを召そうして相州そうしやう鎌倉かまくらの権けんの太夫義時よしときを打ち

給たまはんとし給たまう

ところに還かえりて義時よしときにまけ給たまいぬ、結句けつこ我が身みは隱岐おきの国くににながされ

太子二人は佐渡の国・阿波の国にながされ給う公卿七人は忽に頸をはねられてき、これは・いかにとしてまけ給いけるぞ国王の身として民の如くなる義時を打ち給はんは鷹の雉をとり猫の鼠を食むにてこそあるべけれこれは猫のねずみにくらはれ鷹の雉にとられたるやうなり、しかのみならず調伏力を尽せり所謂天台の座主・慈円僧正・真言の長者・仁和寺の御室・園城寺の長吏・総じ

なないじ

て七大寺・十五大寺・智慧戒行は日月の如く、秘法は弘法・慈覚等の三

だいし

しんちゅう

じんみつ

だいほう

大師の心中の深密の大法・十五壇の秘法なり、五月十九日より六月の

十四日にいたるまであせをながしなづきをくだきて行いき最後には御室

ししんでん

にほんこく

・紫宸殿にして日本国にわたりていまだ三度までも行はぬ大法・六月八

日始めて之を行う程に・同じき十四日に関東の兵軍・宇治勢多をおし

らくよう

わたして洛陽に打ち入りて三院を生け取り奉りて九重に火を放ちて

いちじ

しょうしつ

一時に焼失す、三院をば三国へ

るさい

たてまつ

くぎよう

たちまち

流罪し奉りぬ又公卿七人は忽に頸をきる、しかのみならず御室の御所

に押し入りて最愛の弟子の小児勢多伽と申せしをせめいだして終に頸

でし

しょうに

せいたか

たまい

おわ

つい

をきりにき御室思いに堪えずして死に給い畢んぬ母も死す童も死す、

おむろ

た

たまい

おわ

つい

すべて此のいのりをたのみし人いく千万といふ事をしらず死にきたまた

せんまん

まいきたるもかひなし、御室祈りを始め給いし六月八日

おむろ

たまい

より同じき十四日までなかをかぞふれば七日に満じける日なり、此の十五壇の法と申すは一字金輪・四天王・不動大威徳・転法輪・如意輪・愛染王・仏眼六字・金剛童子・尊星王・太元守護経等の大法なり此の法の詮は国敵王敵となる者を降伏して命を召し取りて其の魂を密厳浄土へつかはすと云う法なり、其の行者の人人も又軽からず天台の座主・慈円東寺御室三井の常住院の僧正等の四十一人並びに伴僧等三百余人なり云云、法と云ひ行者と云ひ又

代も上代なりいかにとしてまけ給いけるぞたとひかつ事こそなくとも即時にまけおはりて・かかるはぢにあひたりける事、いかなるゆへといふ事を余人いまだしらず、国主として民を討たん事・鷹の鳥をとらんがごとし・たとひまけ給うとも一年・二年十年二十年もささうべきぞかし五月十五日におこりて六月十四日にまけ給いぬわづかに三十余日なり、

権たゆうどのの大夫殿は此の事を兼かねてしらねば祈きとう☆もなしかまへもなし。

然しかるににちれん而日蓮小智を以もて勘つかんえたるに其そのの故ゆえあり所謂いわゆる彼の真言しんごんの邪法じゃぽうの故

なり僻事ひがごとは一人なれども万国のわづらひなり一人として行ずとも一国

・二国やぶれぬべし況いわんやや三百余人をや国主こくしゅとともに法華經ほけきょうの大怨敵おんてきと

なりぬいかでかほろびざらん、かかる大惡法だいあくほうとしをへてやうやく関東かんとくに

おち下りて諸堂しよの別当べつどう供僧くそうとなり連連れんれんと行えり本より辺域へんいき

の武士なれば教法の邪正をば知らずただ三宝をばあがむべき事とばかり思ふゆへに自然としてこれを用いきたりてやうやく年数を経る程に今他国のせめをかうふりて此の国すでにほろびなんとす、関東八箇国のみならず叡山・東寺・園城・七寺等の座主・別当・皆関東の御はからひとなりぬるゆへに隱岐の法皇のごとく大惡法の檀那と成定まり給いぬるなり、国主となる事は大小皆・梵王・帝釈・日月・四天の御計いなり、法華經の怨敵となり定まり給はば忽に治罰すべきよしを誓い給へり、随つて人王八十一代安徳天皇に太政入道の一門与力して兵衛佐頼朝を調伏せんがために、叡山を氏寺と定め山王を氏神とたのみしかども安徳は西海に沈み明雲は義仲に殺さる一門・皆一時にほろび畢んぬ、第二度なり今度は第三度にあたるなり。

にちれん 日蓮がいさめを御用いなくて真言の悪法を以て大蒙古を調伏せられば
にほんこくかえ 日本国還つて調伏せられなむ還著於本人と説けりと申すなり、然らば
すなわ 則ち罰を以て利生を思うに法華經にすぎたる仏になる大道はなかるべ
きなり現世の祈☆は兵衛佐殿・法華經を讀誦する現証なり。

此の道理を存ぜる事は父母と師匠との御恩なれば父母は・すでに
過去し給い畢んぬ、故道善御房は師匠にて・おはしまししかども法華經
の故に地頭におそれ給いて心中には不便とおぼしつらめども外にはか
たきのやうにくみ給いぬ、後にはすこし信じ給いたるやうにきこへしか
ども臨終にはいかにやおはしけむおぼつかなし地獄までは
よもおはせじ又生死をはなるる事はあるべしともおぼへず中有にやただ
よひましますらむとなげかし、貴辺は地頭のいかりし時・義城房とともに
に清澄寺を出でておはせし人なれば何となくともこれを法華經の御奉

公とおぼしめして生死しやうじをはなれさせ給たまうべし。

此この御本尊ごほんぞんは世尊せそん説ときおかせ給たまいて後二千二百三十余年が間・一

閻浮提えんぶだい

の内うちにいまだひろめたる人候ひとこうはず、漢土かんとの天台てんだい日本にほんの伝教でんぎやうほほ

しろしめしていささかひろめさせ給たまはず当時とうじこそひろまらせ給たまうべき時

にあたりて候へ

経には上行・無辺行等こそ出でてひろめさせ給うべしと見へて候へども
いまだ見合せ給はず、日蓮は其の人に候はねどもほほこころえて候へば
地涌の菩薩の出でさせ給うまでの口ずさみにあらあら申して況滅度後
のほこさきに当り候なり、願わくは此の功德を以て父母と師匠と一切
衆生に回向し奉らんと祈請仕り候、其の旨をしらせまいらせむがため
に御不審を書きおくりまいらせ候に他事をすて此の御本尊の御前に
して一向に後世をもいのらせ給い候へ又これより申さんと存じ候、いか
にも御房たちはからい申させ給へ。

日蓮
花押

◆五一

諸宗問答抄

建長七年 三十四歳御作与

三位房日行

375P

問うて云く抑おも法華宗ほつげしゅうの法門ほうもんは天台てんだい・妙樂みょうらく・伝教等でんぎとうの御釈みしやくをば御もち用もちい候もちや如何いかん、答こたへて云く最も此この御釈みしやく共どもを明鏡めいきようの助証しよしやうとして立たて申もうす法門ほうもんにて候もち、問とて云く何を明鏡めいきようとして立たてられ候もちぞや彼の御釈みしやく共どもには爾前にぜん權教ごんきやうを簡えらび捨すててらる事候ことはず、随したがつて初後ぶつて仏慧ぶつて・円頓えんどん・或あるは・義ぎ齊さいとも・或あるは此妙彼妙しみようひみよう・妙義殊ごなること無なしとも釈しやくせられて華嚴けごんと法華ほつけとの仏慧ぶつて同おなじ仏慧ぶつてにて異ことなること無なしと釈しやくせられ候もち、通教つうきやう・別教べつきやうのぶつて仏慧ほつけも法華ほつけと同おなじと見みえて候もち何を以もつて偏ひとえに法華勝ほつけすぐれたりとは仰おほせられ候もちや意得こころうず候もち如何いかん、答こたへて云く天台てんだいの御釈みしやくを引ひかれ候もちは定てんて天台宗てんだいしゅうにて

御坐候らん、然る

に天台の御釈には教道・証道とて二筋を以て六十巻を造られて候、教

道は即教相の法門にて候証道は即内証の悟の方にて候、只今引れ候

釈の文共は教証の二道の中には何れの文と御得意候て引かれ候ぞや、

若し教門の御釈にて候わば教相には三種の教相を立て爾前・法華を

釈して勝劣を判ぜられ候、先づ三種の教相と申すは何にて候ぞやと

之を尋ぬ可し、若し三種の教相と申すは一には根性の融不融の相・二

には化導の始終不始終の相・三には師弟の

遠近不遠近の相なりと答へばさては只今引かれ候、御釈は何れの教相

の下にて引かれ候やと尋ぬ可きなり、若し根性の融不融の下にて釈せ

らると答へば又押し返して問う可し根性の融不融の下には約教・約部

とて二の法門あり何れぞと尋ぬ可し、若し約教の下と答へば又問う

可し約教・約部に付いて与奪の二の釈候只今の釈は与の釈なるか奪の
釈なるかと之を尋ね可し、若し約教・約部をも与奪をも弁えずと云わ
ばさてはさては天台宗の法門は堅固に無沙汰にて候けり、尤も天台
法華の法門は教相を以て諸仏の御本意を宣られたり若し教相に闇く
して法華の法門を云ん者は雖讚法華經還死法華心とて法華の心を殺す
と云う事にて候、其の上君し余經を弘むるに教相を明ら

めざるも義に於て傷ること無し若し法華を弘むるに教相を明さざれば
文義闕くること有り」と釈せられて殊更教相を本として天台の法門は
建立せられ候、仰せられ候如く次第も無く偏円をも簡ばず邪正も選
ばず法門申さん者をば信受せざれと天台堅く誠しめられ候なり、是程
に知食さず候けるに中々天台の御釈を引かれ候事浅☆・き御事なりと
責む可きなり、但し天台の教相を三種に立てらるる中に根性の
融不融の相の下にて相待妙・絶待妙と

て二妙を立て候、相待妙の下にて又約教・約部の法門を釈して仏教の
勝劣を判ぜられて候、約教の時は一代の教を蔵通・別円の四教に分つ
て之に付いて勝劣を判ずる時は前三為☆後・一為妙とは判ぜられて
蔵通別の三教をば☆教と嫌ひ後の一教をば妙法と選取せられ候へども
此の時もなほ爾前權教の当分の得道を許し且く華嚴等の仏慧と法華

の仏慧とを等から令めて只今の初後仏慧・円頓・義育等の与の釈を作
られ候なり、然りと雖も約部の時は一代の教を五時に分つて五味に配
し華嚴部・阿含部・方等部・般若部・法華部と立てられ前四味為☆
後・一為妙と判じて奪の釈を作られ候なり、然れば奪の釈に云く
細人☆人・二俱犯過・從過辺說俱名☆人」と、此釈の意は華嚴部にも
別円二教を説かれて候へば円の方は仏慧と云わるるなり、方等部にも
蔵通・別円の四教を説れたれば円の方は又仏慧なり
般若部にも通別円の後三教を説いて候へば其れも円の方は仏慧なり、
然りと雖も華嚴は別教と申すえせ物をつれて説れたる間わるき物つれ
たる仏慧なりとて簡わるるなり方等部の円も前三教のえせ物をつれた
る仏慧なり般若部の円も前二☆のえせ物をつれたる仏慧なり、然る間
仏慧の名は同と雖も過の辺に從つて☆・と云われてわるき円教

の仏慧と下され候なり、之に依て四教にても眞実の勝劣を判ずる時は
一往は三蔵を名て小乗と為し再往は三蔵を名て小乗と為すと釈し
て一往の時は二百五十戒等の阿含三蔵教の法門を総じて小乗の法と
簡い捨てらるれども、再往の釈の時は三蔵教と大乘と云いつる通教と
別教との三教皆小乗の法と本朝の智証大師も法華論の記と申す文
を作つて判釈せられて候なり。

次に絶待妙と申すは開会の法門にて候なり、此の時は爾前權教とて嫌ひ捨らるる所の教を皆法華の大海におさめ入るるなり、随つて法華の大海に入りぬれば爾前の權教とて嫌わるる者無きなり、皆法華の大海の不可思議の徳として南無妙法蓮華經と云う一味にたたきなしつる間・念仏・戒・真言・禪とて別の名言を呼び出す可き道理會て無きなり、随つて釈に云く 諸水入海・同一鹹味・諸智入如実智・失本名字」等と釈して本の名字を一言も呼び顯す可らずと釈せられて候なり、世間の天台宗は開会の後は相待妙の時斥い捨てられし所の前四味の諸經の名言を唱うるも又諸仏・諸菩薩の名言を唱うるも皆是法華の妙体にて有るなり大海に入らざる程こそ各別の思なりければ大海に入つて後に見れば日来よしわるしと嫌ひ用ひけるは大僻見にて有りけり、嫌はるる諸流も用ひらるる冷水も源はただ大海より出で

たる一水にて有りけり、然れば何の水と呼びたりとてもただ大海の一水に於て別別の名言をよびたるにてこそあれ、各別各別の物と思つてよぶにこそ科はあれ只大海の一水と思つて何れをも心に任せて有縁に従つて唱え持つに苦しかる可からずとて念佛をも真言をも何れをも心に任せて持ち唱うるなり。

今云う此の義は与えて云う時はさも有る可きかと覺れども奪つて云う時は随分墮地獄の義にて有るなり、其の故は縦ひ一人此くの如く意得何れをも持ち唱るとても万人・此の心根を得ざる時は只例の偏見・偏情にて持ち唱えれば一人成仏するとも万人は皆地獄に墮す可き邪見の悪義なり、爾前に立てる所の法門の名言と其の法門の内に談ずる所の道理の所詮とは皆是・偏見・偏情によりて入邪見稠林・若有若無等の權教なり、然れば此等の名言を以て持ち唱へ此等の所詮の理

を觀みずれば偏ひとへに心得こころえたるも心得こころえざるも皆みな大地獄だいじごくに墮おつべし、心得こころえたり
とて唱たもへ持もちたらん者は牛蹄ぎゆうていに大海たいかいを納おさめたる者の如ごとし是こゝろ僻見びやくけんの者な
り、何なんぞ三惡道さんあくどうを免めんがれん又心得こころえざる者の唱たもへ持もたんは本迷惑めいわくの者な
れば邪見じやけん權教こんきやうの執心しゅうしんによつて無間むげん・大城だいじやうに入いらん事こと疑うたがひい無なき者な
り、開會かいえの後あとも☆教そきやうとて嫌きらい捨すてし惡法あくほうをば名言みやうごんをも其その所詮しよせんの極理ごくり
をも唱たもへ持もつて交まじゆべからずと見みえて候ぐけつ弘決くわつに云いく 相待さうたい・絶待ぜつたい俱ともに
須すく惡あくを離はなるべ

し円じやくに著なする尚惡ななり況いわんやや復余またをや「云云、文の心は相待妙そうたいみょうの時も
絶待妙ぜったいみょうの時も俱ともに須すべからく惡法あくほうをば離はなるべし円じやくに著なする尚惡なし況いわんやや復余またの
法をやと云う文なり、円えんと云うは満足まんぞくの義なり余と云うは闕減けつげんの義な
り、円教えんきようの十界平等じゅうかいびやうどうに成仏じやうぶつする法をすら著じやくしたる方を惡ぞと嫌きらふ、
況いわんややまたじゅうかいびやうどうじやうぶつに成仏じやうぶつする法をすら著じやくしたる方を惡ぞと嫌きらふ、
朝夕ちようせき・受持じゆじ・読誦どくじゆ・解説げせつ・書写しよしゃせんをや、設たとひ爾前にぜんの円えんを今の法華ほっけに
開會かいえし入るるとも爾前にぜんの円えんは法華ほっけの一味いちみと
なる事こと無し、法華ほっけの体内たいいに開會かいえし入れられても体内たいいの權けんと云われて実
とは云わざるなり、体内たいいの權けんを体外たいがいに取出しして且しから於おい一仏乘いちぶつじやう分別說ぶんべつ三
する時・權けんに於おいて円えんの名を付さんじやうて三乘さんじやうの中の円教えんきようと云われたるなり、之
に依よりて古いにしえへも金杖こんじやうの譬たとえを以もつて三乘さんじやうにあてて沙汰さたする事あり、譬たとへば
金の杖を三に打うをりて一つつ三乘さんじやうの機根きこんに与いづれへ何れも皆金みななり然しかれ

ば何ぞ同じ金に於て差別の思をなして勝劣を判ぜんやと談合したり、

此はうち聞く所はさもやと覺えたれ

ども悪く學者の得心たるなり、今云う此の義は譬へば法華の体内の權の

金杖を仏・三根にあてて体外に三度うちふり給へる其の影を機根が見

付ずして皆眞実の思を成して己が見に任せたるなり、其の眞実には

金杖を打折て三になしたる事が有らばこそ今の譬は合譬とはならめ、

仏は權の金杖を折らずして三度ふり給へるを機根ありて三に

成りたりと執著し得心たる返す返す不得心の大邪見なり大邪見な

り、三度振りたるも法華の体内の權の功德を体外の三根に配して三度

振りたるにてこそ有れ、全く妙体不思議の円実を振りたる事無きな

り、然れば体外の影の三乗を体内の本の權の本体へ開会し入るれば本

の体内の權と云われて全く体内の円とは成らざるなり、此の心を以て

体内たいげ体外たいげの権実ごんじつの法門ほうもんをば得意ごころえ弁わふべき者ものなり。

次に禪宗ぜんしゅうの法門ほうもんは、或あるは教外別伝きょうがいべつでん・不立文字ふりゅうもんじと云ひ、或あるは仏祖不伝ぶつそふでん

と云ひ修多羅しゆたらの教は月をさす指さしの如ごとしとも云ひ、或あるは即身成仏そくしんじやうぶつとも云

つて文字もんじをも立てず仏祖ぶつそにも依よらず教法きやうぽうをも修学しゅうがくせず画像えがく・木像もぞうを

も信用しんようせずと云うなり、反詰はんきつして云いく仏祖不伝ぶつそふでんにて候なはば何なんぞ月氏がつしの

二十八祖にじゅうはちそ東土とうどの六祖りくそとて相伝さうでんせられ候なや、其その上かしよう・迦葉尊者そんじやは何なんぞ一

枝はなふさの花房しやくそんを釈尊しやくそんより授おけられ微笑びしょうして心こころの一法いつぽうを靈山りやうぜんにして伝でんえた

りとは自称しやうじやうするや、又祖師そし無用むようならば何なんぞ達磨大師だるまだいしを本尊ほんぞんとするや、

又修多羅しゆたらの法むよう無用むようならば何なんぞ朝夕ちやうせきの所作しよさに真言陀羅尼しんごんだらにをよみつるぞ

や、首楞嚴經しゆりやうごんきやう・金剛經こんごう・円覺經えんかく等を、或あるは談だんし、或あるは説誦どくじゆするや、又

仏・菩薩ぼさつを信用しんようせずんば何なんぞ南無三寶なむさんぽうと行住坐臥ぎやうじゅうざがに唱となうるやと責せむ

可べきなり、次に聞き知らざる言もを以もつて種種しゆじゆ申し狂くるはば云いう可べし、凡およそ

機きには上中下の三根あり随したがつて法門ほうもんも三根に与あたへて説事ぜんしゅうなり、禪宗ぜんしゅうの法門ほうもんにも理致りち・機関きかん・向上こうじょうとして三根に配あてて法門ほうもんを示され候なり、御お辺そばは某それがしが機きをば三根

の中には何いすれれと得意もんちで聞知もんちせざる法門ほうもんを仰おほせられ候ぞや、又理致りちの分ぶんか機関きかんの分ぶんか向上こうじょうの分ぶんに候かと責せむ可べきなり、理致りちと云いうは下根げこんに道理どうりを云いいきかせて禪ぜんの法門ほうもんを知らする名目なめくなり、機関きかんとは中根ちゅうこんには何いかなるか本来もともとの面目めんもくと問とへば庭前ていぜんの柏樹はくじゆし子こなど答こたえたる様の言ことづかひをして禪法ぜんぽうを示す様なり、向上こうじょうと云いうは上根じやうこんの者の事なり此この機きは祖師そしよりも伝でんえず仏ぶつよりも伝でんえず我われとして禪ぜんの法門ほうもんを悟さとる機きなり、迦葉か靈山りやうぜん微笑びしやうの花はなに依よつてて心の一法

を得えたりと云いう時ときに是これ尚なお中根ちゅうこんの機きなり、所詮しよせん禪ぜんの法門ほうもんと云いう事ことは迦葉か一いっ枝しの花房はなふさを得えしより已このかたしゆつたい来出来きらいせる法門ほうもんなり、抑そもそもも伝でんえし時ときの

花房はなぶさは木の花か草の花か五色の中には何様いかようなる色の花ぞや又花の葉は何重いづれの葉ぞや委細いさいに之これを尋ぬ可べきなり、此の花をありのままに云い出したる禪宗ぜんしゅう有らば実に心の一法いちぽふんをも一分得たる者と知る可べきなり、設たとひ得たりとは存知すとも真実しんじつの仏意ぶつゐには叶かなう可べからず如何いかんとなれば法華經ほけきょうを信ぜざるが故なり、此の心

は法華經ほけきょうの方便品ほうべんの末長行くわしに委くわしく見えたり委くわしは引ひて拝見はいけんし奉たてまつる可べきなり、次に禪ぜんの法門ほうもん何としても物ものに著しやくする所を離れよと教おしえたる法門ほうもんにて有あるなり、さと云いへば其それも情じやうなりかうと云いうも其それも情じやうなりとあなたこそなたへ

・すべりとどまらぬ法門ほうもんにて候もとなり、夫それを責せむ可べき様は他人たにんの情じやうに著しやくしたらん計はかりをば沙汰さたして己おのが情量じやうりやうに著しやくし封ふぜらる所をば知らざるなり、云いうべき様は御辺ごへんは人の情計じやうけいりをば責せむれども御辺情ごへんじやうを情と

執しゅうしたる情をばなど離れ得ぬぞと反詰はんぎつすべきなり、凡およそ法として三世さんぜ
諸仏しよぶつの説ときのこしたる法は無きなり 汝なんじ仏祖ぶつそ不伝ふでんと云つて仏祖ぶつそ

よりも伝えずとなのらばさては禪法は天魔の伝うる所の法門なり
如何、然る間汝断常の二見を出でず無間地獄に墮せん事疑無しと
云つて何度もかれが云う言にてややもすれば己がつまる語なり、され
ども非学匠は理につまらずと云つて他人の道理をも自身の道理をも聞
き知らざる間暗証の者とは云うなり、都て理におれざるなり譬えば行
く水にかずかくが如し。

次に即身即仏とは即身即仏なる道理を立てよと責む可し其の道理を
立てずして無理に唯即身即仏と云わば例の天魔の義なりと責む可し但
即身即仏と云う名目を聞くに天台法華宗の即身成仏の名目つかひを
盗み取て禪宗の家につかふと覚えたり、然れば法華に立つる様なる
即身即仏なるか如何とせめよ、若し其の義無く押して名目をつかはば
つかはるる語は無障礙の法なり譬えば民の身として国王と名乗ん者の

如くごとなり如何いかにに國王こくおうと云うとも言に

は障さわり無し己おのが舌かたの和やわかなるままに云うとも其その身みは即そく土民どみんの卑いやしく嫌きらわれたる身なり、又瓦礫がりがくを玉と云う者の如ごとし石瓦いしかわらを玉と云いいたりとも會かつて石は玉にならず、汝なんじが云う所の即身そくしん即仏そくの名目みょうもくも此かくの如ごとく有名無実ゆうめいむじつなり不便ふびんなり不便ふびんなり。

次に不立文字ふりゆうもんじと云う所詮しよせん文字もんじと云う事は何いかなるものと得心こころえ此この如ごとく立てられ候や、文字もんじは是一切衆生いっさいしゆじやうの心法しんぽうの顯あらわれたる質すがたなりされば人のかける物を以もつて其の人の心根しんこんを知しつて相さうする事あり、凡およそ心と色法しきぽうとは不二ふたの法ぽうにて有ある間まかきたる物を以もつて其の人の貧福ひんぷくをも相さうするなり、然しかれば文字もんじは是一切衆生いっさいしゆじやうの色心しきしん不二ふたの質すがたなり汝なんじ若わかし文字もんじを立てざれば汝なんじが色心しきしんをも立たつ可べからず汝なんじ六根ろくこんを離はなれて禪ぜんの法門ぽうもん一句答いっくへよと責せむ可べきなり、さてと云うもかうと云うも有と無と

の二見をば離れず無と云わば無の見なりとせめよと有と云わば有の見なりとせめよ、何れも何れも叶わざる事なり。

次に修多羅の教は月をさす指の如しと云うは月を見て後は徒者と

云う義なるか若其義にて候わば御辺の親も徒者と云う義か又師匠は弟子の為に徒者か又大地は徒者か又天は徒者か、如何となれば父母は

御辺を出生するまでの用にてこそあれ御辺を出生して後はなにかせ

ん、人の師は物を習い取るまでこそ用なれ習い取つて後は無用なり、

夫れ天は雨露を下すまでこそあれ雨ふりて後は天無用なり大地は草木

を出生せんが為なり草木を出生して後

は大地無用なりと云わん者の如し、是を世俗の者の譬に喉過ぬればあ

つさわすれ病愈えぬれば医師をわすると云うらん譬に少も違わず

相似たり、所詮修多羅と云うも文字なり文字は是れ三世諸仏の氣命

なりと天台てんだい釈しやくし給たまへり、天台てんだいは震旦しんたん・禪宗ぜんしゅうの祖師そしの中なかに入いれたり、何ぞ祖師そしの言ことを嫌きらはん其その上うへ・御辺ごへんの色心しきしんなり凡およそ一切衆生いっさいしゅじやうの三世不斷さんぜふだんの色心しきしんなり、何ぞ汝なん本来なんじの面目めんもくを捨て不立文字ふりゆうもんじと云いうや、是これ昔むかしし移宅わたまししけるに我が妻つまを忘れたる者の如ごとし、真実しんじつの禪法ぜんぽうをば何としてか知るべき哀あわれなる禪ぜんの法門ほうもんかなと責せむ可べし。

次に華嚴けごん・法相ほつさう・三論さんろん・俱舍ぐしや・成実じやうじつ・律宗りつしゅう等の六宗ろくしゅうの法門ほうもんいかに花をさかせても申しやすく返事もうごすべき方は能よく能よくいはせて後あと・南都なんとの歸伏きふく状じやうを唯ただ読みきかす可べきなり、既すでに六宗ろくしゅうの祖師そしが歸伏きふくの状じやうをかきて桓武天皇かんむてんのうに奏そうし奉たてまつる、仍よつて彼歸伏きふく状じやうを山門さんもんに納おさめられぬ其外内裏だいいりにも記しるせられたり諸道しよの家いへ家いへにも記しるし留とどめて今いまにあり、其より已来このかた・華嚴宗けごんしゅう等の六宗ろくしゅうの法門ほうもん・末法まつぽうの今いまに至いたるまで一度ひとたびも頭こづべをさし出いささず何なんぞ唯ただ今いま・事こと新あらたく捨すてられたる所の權教ごんきやう・無得道とくどうの法ぽうにをいて真実しんじつの思しをなし此こくの

如く仰せられ候ぞや心得られずとせむべし。

次に真言宗の法門は先ず真言三部經は大日如來の説か釈迦如來の

説かと尋ね定めて釈迦の説と言はば釈尊・五十年の説教にをいて

已今当の三説を分別せられたり、其の中に大日經等の三部は何れの分

にをさまり候ぞと之を尋ね可し、三説の中にはいづくにこそおさまりた

りと云はば例の法門にてたやすかるべき問答なり、若法華と

同時の説なり義理も法華と同じと云はば法華は是純円一実の教にて

會て方便を交へて説く事なし、大日經等は四教を含有したる經なり

何ぞ時も同じ義理も同じと云わんや謬りなりとせめよ、次に大日如來

の説法と云はば

大日如来だいにちによらいの父母ふぼと生ぜし所と死せし所を委く沙汰さたし問うべし、一句いっく一偈いちげも大日だいにちの父母ふぼなし説所しやうじなし生死しやうじの所なし有名無実ゆうめいむじつの大日如来だいにちによらいなり然しかる間殊ことに法門ほうもんせめやすかるべきなり若法門もしほうもんの所詮しよせんの理を云はば教主きやうしゅの有無うむを定めて説教せつきやうの得不得ふとくをば極む可き事なり、設たとひ至極しごくの理密・事密を沙汰さたすとも訳者やくしやに虚妄こもう有り法華ほつげの極理ごくりを盗み取て事密真言しんごんとか立てられてあるやらん不審ふしんなり、之に依りて法の所談しやだんは教主きやうしゅの有無うむに随て沙汰さた有る可きなりと責む可きなり、次に大日如来だいにちによらいは法身ほつしんと云はば法華ほつげよりは未顕みけん真実しんじつと嫌きらひ捨てられたる爾前にぜん権教ごんきやうにも法身ほつしん如来によらいと説たり何ぞ不思議なんふしぎなるべきやと云う可きなり、若無始無終もしむしむしゆうの由よしを云て・いみじき由よしを立て申さば必大日如来だいにちによらいに限らず我等われら・一切衆生いっさいしゆじやう・螻蟻ろうぎ☆☆等もんもうに至るまでみな無始無終むしむしゆうの色心しきしんなり、衆生しゆじやうに於て有始有終うしゆうしゆうと思ふは外道げどうの僻見びやくけんなり汝外道なんじげどうに同ず如何いかんと云う可きなり。

次に念仏ねんぶつは是じ淨土宗じょうとしゅう所用しよくの義ぎなり、此これ又また權教ごんきやうの中なかの權教ごんきやうなり

譬たとえば夢ゆめの中なかの夢ゆめの如ごとし有名無実ゆうめいむじつにして其その実無じきなり一切衆生いっさいしゆじやう願ねんて

所詮しよせんなし、然しかれば云いう所しよの仏ぶつも有う為無常むじやうの阿彌陀仏あみだぶつなり何なんぞ常住じやうじゅう

不滅ふめつの道理どうりにしかなや、されば本朝ほんちやうの根本大師こんぽんだいしの御釈いに云いく有う為いの

報ほう仏ぶつは夢ゆめ中の權果無作ごんかむさの三身さんじんは覺前かくぜんの實じつ仏ぶつと釈しやくして阿彌陀あみだ仏ぶつ等の

有う為無常むじやうの仏ぶつをば大おほいにいましめ捨すてをかれ候すなり、既すでに憑たのむ所しよの

阿彌陀あみだ仏ぶつ有名無実ゆうめいむじつにして名なのみ有そつて其その体たい

なからんには往生おうじやうす可べき道理どうりをば委くわく須彌山しゆみせんの如ごとく高たく立たて大海たいかいの

如ごとくに深ふかく云いうとも何いすれの所詮しよせん有あるべきや又また經論きやうろんに正ただき明文めいぶんども有あと云い

はば明文めいぶんありとも未顯みけん真実しんじつの文ぶんなり、淨土じやうどの三部經さんぶきやうに限かぎらず華嚴經けこんきやう等らう

より初はて何いすれの經きやう・教きやう・論ろん釈しやくにか成じやう仏ぶつの明文めいぶん無ならんや、然しかれども權教ごんきやうの

明文めいぶんなる時ときは汝等なんじが所執しよしやくの拙つたきになてこそあれ經論きやうろんに無なき僻事ひがごとなり、

何れも法門の道理を宣べ蔽り依經を立てたりとも夢中の権果にて無用の義に成る可きなり返す返す。

◆五二

一生成仏抄

建長七年 三十四歳御作

与富木常忍

383P

夫れ無始の生死を留めて此の度決定して無上菩提を証せんと思はば
すべからく衆生本有の妙理を觀ずべし、衆生本有の妙理とは
妙法蓮華經是なり故に妙法蓮華經と唱へたてまつれば衆生本有の妙理
を觀ずるにてあるなり、文理真正の經王なれば文字即実相なり実相即
妙法なり唯所詮一心法界の旨を説き顯すを妙法と名く故に此の經を
諸仏の智慧とは云うなり、一心法界の旨とは十界三千の依正色心非情
草木虚空刹土いづれも除かずちりも残らず一念の心に収めて此の一念
の心法界に☆満するを指して万法とは云うなり、此の理を覺知するを

一心法界

とも云うなるべし、但し妙法蓮華經と唱へ持つと云うとも若し己心の外に法ありと思はば全く妙法にあらず☆法なり、☆法は今經にあらず今經にあらずれば方便なり權門なり、方便權門の教ならば成仏の直道にあらず成仏の直道にあらずれば多生曠劫の修行を経て成仏すべきにあらずる故に一生成仏叶いがたし、故に妙法と唱へ蓮華と読まん時は我が一念を指して妙法蓮華經と名くるぞと深く信心を發すべきなり。

都て一代八万の聖教三世十方の諸仏・菩薩も我が心の外に有りはゆめゆめ思ふべからず、然れば仏教を習ふといへども心性を觀ぜざれば全く生死を離るる事なきなり、若し心外に道を求めて万行万善を修せんは譬えば貧窮の人日夜に隣の財を計へたれども半銭の得分もな

きが如し、然れば天台の釈の中には若し心を觀ぜざれば重罪滅せずとて若し心を觀ぜざれば無量の苦行となると判ぜり、故にかくの如きの人をば仏法を學して外道となると恥しめ

られたり、爰を以て止觀には雖學佛教・遠同外見と釈せり、然る間・仏の名を唱へ經卷をよみ華をちらし香をひねるまでも皆我が一念に納めたる功德善根なりと信心を取るべきなり、之に依つて淨名經の中に
は諸仏の解脱

を衆生しゅじょうの心行しんぎょうに求めば衆生しゅじょう即菩提そくぼだいなり生死しやうじ即涅槃そくねはんなりと明あかせり、又衆生しゅじょうの心がるれば土もけがれ心清しんじやうければ土も清じやうじしとて浄土じやうどと云いひ穢えじ土どと云いうも土に二の隔かたがりなし只我等ただわれらが心の善惡ぜんあくによると見えたり、衆生しゅじょうと云いうも仏と云いうも亦また此かくの如ごとし迷まよう時は衆生しゅじょうと名け悟さとる時をば仏と名けたり、譬たとえば閻鏡えんきやうも磨ときぬれば玉と見ゆるが如ごとし、只今ただも一念無明いちねんむみやうの迷心まよひは磨かざる鏡なり是これを磨かば必ず法性真如ほつしやうしんによめいきやうの明鏡めいきやうと成るべし、深く信心しんじんを發おこして日夜朝暮ちやうばに又懈おこたらず磨くべし何様いかやうにしてか磨くべき只南無妙法蓮華經ただなむみやうほうれんげきやうと唱なへたてまつるを是これをみかくとは云うなり。

抑そも妙そもとは何と云う心ぞや只我ただが一念いちねんの心不思議ふしぎなる処ところを妙とは云うなり不思議ふしぎとは心も及およばず語ことばも及およばずと云う事なり、然しかればすなはち起おこるところの一念いちねんの心を尋たずね見れば有りと云はんとすれば色も

質もなし又無しと云はんとすれば様様に心起る有と思ふべきに非ず無

と思ふべきにも非ず、有無の二の語も及ばず有無の二の心も

及ばず有無に非ずして而も有無に☆して中道一実の妙体にして

不思議なるを妙とは名くるなり、此の妙なる心を名けて法とも云うな

り、此の法門の不思議をあらはすに譬を事法にかたどりて蓮華と

名く、一心を妙と知りぬれば亦転じて余心をも妙法と知る処を

妙経とは云うなり、然ればすなはち善惡に付いて起り起る処の念心

の当体を

指して是れ妙法の体と説き宣べたる経王なれば成仏の直道とは云うな

り、此の旨を深く信じて妙法蓮華経と唱へは一生成仏更に疑あるべ

からず、故に経文には我が滅度の後に於て・応に斯の経を受持すべし

是の人・仏道に於て決定して疑有る事無けん」とのべたり、努努不審

をなすべからずあなかしこあなかしこ穴あな賢けん穴あな賢けん、一生じようぶつ成じやう仏ぶつの信しん心じん南なん無む妙みやう法ぽう蓮れん華げき經きやう。
南なん無む妙みやう法ぽう蓮れん華げき經きやう。

日にち蓮れん
花か押お

◆五三

主師親御書

建長七年

三十四歳御作

385P

釈迦しやかぶつ仏は我等われらが為ためには主なり師なり親なり一人してすくひ護まもると
説とき給たまへり、阿弥陀あみだぶつ仏は我等われらが為ためには主ならず親ならず師ならず、
然しかれば天台大師てんだいだいし是これを釈しやくして日いく西方さいほうは仏・別べつにして縁異えんいなり仏・別べつな
るが故ゆえに隱顯おんけんの義成ぎせいぜず縁異えんいなるが故ゆえに子父しふの義成ぎせいぜず、又此またの經きやうの
首末しゆまつに全く此この旨むね無し眼まなこを閉ふじて穿鑿せんさくせよ」と実じつなるかな釈迦しやかぶつ仏は中
天竺てんじくの淨飯大王じやうはんたいおうの太子たいしとして十九じゅうきゅうの御年家ごねいけを出いで給たまいて檀特山だんとくせんと申もうす
山こゝろに籠こもらせ給たまひ、高峯たかねに登のぼつては妻木つまぎをとり深谷しんこくに下くだつては水みづを結び
難行なんぎやう苦行くぎやうして御年ごねん三十さんじゅうと申まうせしに仏ほとけにならせ給たまいて一代いちだい聖教しやうきやうを説とき
給たまいしに、上うわべ

には華嚴・阿含・方等・般若等の種種の經經を説かせ給へども内心には法華經を説かばやとおぼしめされしかども衆生の機根まちまちにして一種ならざる間・仏の御心をば説き給はで人の心に随ひ万の經を説き給へり、此くの如く四十二年が程は心苦しく思食しかども今法華經に至つて我が願既に満足しぬ我が如くに衆生を仏になさんと説き給へり、久遠より已來・或は鹿となり・或は熊となり・或時は鬼神の爲に食われ給へり、此くの如き功德をば法華經を信じたらん衆生は是れ眞仏子とて是実の我が子なり此の功德を此の人に与へんと説き給へり、是れ程に思食したる親の釈迦仏をばないがしろに思ひなして唯以一大事と説き給へる法華經を信ぜざらん人は争か仏になるべきや能く心留めて案ずべし。

二の卷に云く 若し人信ぜずして此の經を毀謗せば則ち一切世間の

仏種^{ぶつしゆ}を断^たず乃^な至^{いし}余^よ經^{きやう}の一偈^{いちげ}をも受^うけざれ」と文^{ぶん}の心^{こころ}は仏^{ぶつ}にならん爲^{ため}に
は唯^{ただ}法^{ほふ}華^け經^{きやう}を受^う持^じせん事^じを願^{ねが}つて余^よ經^{きやう}の一偈^{いちげ}・一^い句^くをも受^うけざれと、
三^{さん}の卷^{くわん}に云^いく飢^け国^{こく}より来^きつて忽^{たちま}ち大^{だい}王^{おう}の膳^{ぜん}に遇^ぐうが如^{ごと}し」と文^{ぶん}の心^{こころ}は
飢^うえたる国^{くに}より来^きつて忽^{たちま}ち大^{だい}王^{おう}の膳^{ぜん}にあ^いり心^{こころ}は犬^{いぬ}野^や干^{かん}

の心を致すとも迦葉・目連等の小乗の心をば起さざれ破れたる石は
合うとも枯木に花はさくとも二乗は仏になるべからずと仰せられしか
ば須菩提は茫然として手の一鉢をなげ迦葉は涕泣の声大千界を響す
と申して歎き悲みしが今法華經に至つて迦葉尊者は光明如來の記☆を
授かりしかば目連・須菩提・摩訶迦旃延等は是を見て我等も定めて仏
になるべし飢えたる国より來つて忽に大王の膳にあへるが如しと喜びし
文なり、我等衆生・無始曠劫より
已來妙法蓮華經の如意宝珠を片時も相離れざれども無明の酒にたば
らかされて衣の裏にかけたりとしらずして少きを得て足りぬと思ひぬ、
南無妙法蓮華經とだに唱え奉りたらましかば速に仏に成るべかりし
衆生どもの五戒・十善等のわずかなる戒を以て・或は天に生れて大
梵天・帝釈の身と成つていみじき事と思ひ・或時は人に生れて諸の

國王・大臣・公卿・殿上人等の身と成つて是れ程のたのしみなしと思ひ少きを得て足りぬと思ひ悦びあへり、是を仏は夢の中のさかへまぼろしのたのしみなり唯法華經を持ち奉り速に仏になるべしと説き給へり、又四の巻に云く而も此の經は如來の現在すら猶怨嫉多し況や滅度の後をや」云云。

釈迦仏は師子頻王の孫・淨飯王には嫡子なり十善の位をすて五天竺第一なりし美女耶輸多羅女をふりすてて十九の御年出家して勤め行ひ給ひしかば三十の御年・成道し御坐して三十二相・八十種好の御形にて御幸なる時は大梵天王・帝釈左右に立ち多聞・持国等の四天王・先後圍繞せり、法を説き給ふ御時は四弁・八音の説法は祇園精舎

に満ち三智五眼の徳は四海にしけり、然れば何れの人か仏を惡むべき

なれども尚なお怨おん嫉しつするもの多し、まして滅度めつどの後・一毫いちごうの煩惱ぼんのうをも断だんぜず
少しの罪つみをも弁わきまえへざらん法華經ほけきやうの行者ぎやうじやを惡にくみ嫉ねたむ者多からん事は
雲霞うんかの如ごとくならんと見えたり、然しかれば則すなわち末代まつだい惡世あくせに此の經を有りの
ままに説く人には敵多からんと説かれて候に世間せけんの人人ひとびと・我も
持たもちたり我も讀たてまつみ奉り行じ候に敵なきは仏そらごとの虚言ほけきやうか法華經ほけきやうの実ならざ
るか、又実の御經ならば当世とうせの人人ひとびと・經をよみまいらせ候は虚そらよみか実
の行者ぎやうじやにて・はなきか如何いかん能く能く心得こころえべき事なり明あきらむべき物なり、四
の巻に

たほうによらい 多宝如来は釈迦牟尼仏御年三十にして仏に成り給ふに、初には華嚴經と申す經を十方華王のみぎりにして別円頓大の法輪・法慧・垢徳林・金剛幢・金剛藏の四菩薩に対して三七日の間説き給いしにも来り給はず、其の二乗の機根叶はざりしかば瓔珞細☆の衣をぬぎすて☆弊垢膩の衣を著・波羅奈国・鹿野苑に趣いて十二年の間・生滅四諦の法門を説き給ひしに阿若俱鄰等の五人証果し八万の諸天は無生忍を得たり、次に欲色二界の中間大宝坊の儀式・浄名の御室には三万二千の牀を立て般若・白鷺池の辺・十六会の儀式・染浄虚融の旨をのべ給いしにも来り給はず、法華經にも一の卷乃至四の卷・人記品までも来り給はず宝塔品に至つて初めて来り給へり。

釈迦仏・先四十余年の經を我と虚事と仰せられしかば人用うる事なく法華經を真実なりと説かせ給へども仏と云うは無虚妄の人とて永く

虚言し給はずと聞きしに一日ならず二日ならず一月ならず二月ならず一年・二年ならず四十余年の程まで虚言したり仰せられしかば又此の経を實と説き給うも虚言にやあらんずらんと不審なししかば此の不審釈迦一人しては舍利弗を始め事はれがたかりしに此の多宝仏・宝淨世界よりはるばると来らせ給い

て法華経は皆是れ眞実なりと証明し給いしに先の四十余年の経を虚言と仰せらるる事實の虚言に定まるなり、又法華経より外の一切経を空に浮べて文・文・句句・阿難尊者の如く覺り富樓那の弁舌の如くに説くとも其れを難事とせず、又須弥山と申す山は十六万八千由旬の金山にて候を他方世界へつづてになぐる者ありとも難事には候はじ、仏の滅度の後・当世・末代・惡世に法華経を有りのままに能く説かんと是を難しとすと説かせ給ひ、五天竺・第一

の大力なりし提婆達多も長三丈五尺・広一丈二尺の石をこそ仏になげ
かけて候いしか又漢土第一の大力・楚の項羽と申せし人も九石入の釜
に水滴ち候いしをこそひさげ候いしか其れに是は須弥山をばなぐる者
は有りともし此の経を説の如く読み奉らん人は有りがたしと説かれて候
に人ごとに此の経をよみ書き説き候、経文を虚言に成して当世の人人
を皆法華經の行者と思ふべきか能く能く御心得有るべき事なり、五の
卷提婆品に云く君し善男子・

善女人有りて妙法華經の提婆達多品を聞いて淨心に信敬して疑惑を
生ぜざらん者は地獄・餓鬼・畜生に墮せずして十方の仏前に生ぜん」
と、此の品には二つの大事あり一には提婆達多と申すは阿難尊者には
兄・斛飯王には嫡子・師子頰王には孫・仏にはいとこにて有りしが仏は
一閻浮提第一の道心者にてましまししに怨をなして我は又閻浮提第一
の邪見放逸の者とならんと誓つて万の惡人を語いて仏に怨をなして
三逆罪を作つて現身に大地破れて無間・大城
に墮ちて候いしを天王如来と申す記☆を授けらるる品にて候、然れば
善男子と申すは男此の經を信じまひらせて聽聞するならば提婆達多
程の惡人だにも仏になる、まして末代の人とはたとひ重罪なりとも多分
は十惡をすぎずまして深く持ち奉る人・仏にならざるべきや、二には
娑竭羅竜王のむすめ竜女と申すは八歳のくちなは仏に成りた

る品にて候此の事めづらしく貴き事にて候、其の故は華嚴經には 女人
は地獄の使なり能く仏種子を断ず外面は菩薩に似て内心は夜叉の
如し」と、文の心は女人は地獄の使・よく仏の種をたつ外面は菩薩に似
たれども内心は夜叉の如しと云へり、又云く「二度女人を見る者はよく
眼の功德を失ふ設ひ大蛇をば見るとも女人を見るべからず」と云い、
又有る経には「所有の三千界の男子の諸の煩惱を合せ集めて一人の
女人の業障と為す」と三千大千
世界にあらゆる男子の諸の煩惱を取り集めて女人一人の罪とすと云へ
り、或経には「三世の諸仏の眼は脱て大地に墮つとも女人は仏に成る
べからず」と説き給へり、此の品の意は人畜をいはば畜生たる竜女だに
も仏に成れりまして我等は形のごとく人間の果報なり、彼の果報には
まされり争か仏にならざるべきやと思食すべきなり。

中にも三惡道さんあくどうにおちずと説かれて候其その地獄じごくと申もうすは八寒八熱はちかんはちねつ乃ないし至だいじごく八大地獄の中に初め浅き等活地獄とうかつじごくを尋たずぬれば此の一閻浮提えんぶだいの下一千由旬ゆじゆんなり、其その中の罪人ざいにんは互たがいに常に害心をいだけりもしたまたま相見れば獵師りようしが鹿にあへるが如ごとし各各鉄くろがねの爪を以て互たがいにつかみ・さく・血肉けつにく皆尽みなつきて唯残ただつて骨のみあり・或あるは獄卒ごくそつ棒を以て頭もつてよりあなうらにいた至いたるまで皆打ちくたく身も破われくだけで猶沙なおいさごの如ごとし、焦熱しょうねつなんど申もうすは譬たとえん・かたなき苦なり鉄城四方しほうに回つ

て門を閉じたれば力士も開きがたく猛火高くのぼつて金翅こんじのつばさも
かけるべからず、餓鬼道がきどうと申すは其の住处じゅうしょに二あり一には地の下五
百由旬ひやくゆうじゆんの閻魔王宮えんまおうきゆうにあり、二には人天にんてんの中にもまじはれり其の相種種しやうじゆ
なり、或は腹は大海たいかいの如くごとのんどは鍼はりの如くなれば明けても暮れても食
すともあくべからず、まして五百生ひやくしやう・七 百生ひやくしやう なんと飲食おんじきの名
をだにもきかず、或は己おのが頭こうべをくだきて脳を食するもあり、或は一夜
に五人の子を生んで夜の内に食するもあり、万菓林ばんがしんに結べり取らんと
すれば悉く劍けんの林となり万水ばんすい・大海たいかいに流入りぬ飲んとすれば猛火とな
る如何いかんにしてか此の苦をまぬがるべき、次に畜生道ちくしやうと申すは其の住所
に二あり根本こんぽんは大海たいかいに住す枝末しまつは人天にんてんに雜まじれり短き物は長き物に
のまれ小き物は大きなる物に食はれ互たがひに相食んでしばらくもやすむ事な
し、或は鳥ある 獸ちやうじゆうと生れ、或は牛馬ぎゆうばと成つても重き物をおほせられ西へ行

かと思へば東へやられ東へ行かんとすれば西へやらる山野に多くある
水と草をのみ思いて余は知るところなし、然るに善男子・善女人・此の
法華經を持ち南無妙法蓮華經と唱え奉らば此の三罪を脱るべしと説き
給へり何事か是にしかん・たのもしきかな・たのもしきかな、又五の卷に
云く我れ大乘經を闡いて

苦の衆生を度脱す」と心はわれ大乘の教をひらいてと申すは法華經
を申す苦の衆生とは何ぞや地獄の衆生にもあらず餓鬼道の衆生にも
あらず只女人を指して苦の衆生と名けたり、五障三従と申して三つし
たがふ事有つて五つの障りあり竜女我女人の身を受けて女人の苦をつ
みしれり然れば余をば知るべからず女人を導かんと誓へり、南無
妙法蓮華經・南無妙法蓮華經。

◆五四

いちだいしやうきやうたいい
一代聖教大意

しやうか
正嘉二年二月 三

十七歳御作

390P

四教しきやうは一には三藏教さんざう・二には通教つうきやう・三には別教べつきやう・四には円教えんきやうなり。

始はじに三藏さんざうとは阿含經あこんきやうの意いなり・此この經きやうの意いは六道ろくどうより外あかを明あさず

但ただし六道ろくどう修しゆ人にん天てんの内の因果いんがの道理どうりを明あす、但ただし正報しやうほうは十界じゆつかいを明あすなり

地ち・餓が・畜しゆく・修しゆ・人にん天てん・声聞しやうもん・縁覺えんかく・菩薩ぼさつ・仏ぶつなり依報えほうが六ろくにて有あれば

六界ろくがいと申もうすなり、此この教きやうの意いは六道ろくどうより外あかを明あさざれば三界さんがいより外あに

浄土じやうどと申もうす生處しやうじよありと言いわず又また三世さんぜに仏ぶつは次第しだい・次第しだいに出世しゆつせすと

は云いふも横よこしまに十方じゆつぱうに並ならべて仏ぶつ有ありとも云いわず、三藏さんざうとは一ひとには經藏きやうざう

定藏ちやうざう二にには律藏りくざう戒藏かいざう三さんには論藏ろんざう慧藏えいざうなり但ただし經きやう・律りく・論ろんの定戒慧ちやうかいえい・戒定慧かいじやうえ・

慧定戒と云う事あるなり、戒蔵とは五戒・八戒・十善戒・二百五十戒・五百戒なり・定蔵とは味禪・定名・淨禪・無漏禪なり・慧蔵とは苦・空・無常・無我の智慧なり、戒定慧の勝劣と云うは但上の戒計りを持つ者は三界の内の欲界の人天に生を受くる凡夫なり、但し上の定計りを修する人は戒を持たざれども定の力に依つて上の戒を具するなり、此の定の内に味禪・淨禪は三界の内・色無色界

・生ず無漏禪は声聞・縁覺と成つて見思を断じ尽し灰身滅智するなり、慧は又苦・空・無常・無我と我が色心を觀ずれば上の戒・定を自然に具足して声聞・縁覺とも成るなり、故に戒より定は勝れ定より慧は勝れたり、而れども此の三蔵教の意は戒が本体にてあるなり、されば阿含經を總結する遺教經には戒を説けるなり、此の教の意は依報には六界・正報には十界を明せども而も依報

に随したがつて六界ろっかいを明あす経きやうと名なくるなり、又正報しやうほうに十界じゅうかいを明あせども縁覺えんかく・
菩薩ぼさつ・仏ぶつも声聞しやうもんの悟しに過すぎざれば但声聞しやうもん教きやうとも申もうす、されば仏ぶつも
菩薩ぼさつも縁覺えんかくも灰身滅智けしんめちする教きやうなり、声聞しやうもんに付ついて七賢七聖しちけんしちせいの位ゐあり、
六道ろくどうは凡夫ぼんぷなり。

三賢 さんけん

一に五停心

二に別想念処 ねんじょ

外凡

三に総想念処 ねんじょ

七賢 智と言う事なり

一に法

四善根 ぜんこん

二に頂法

内凡

三に忍法

四に世第一法 だいいち

此の七賢の位は六道ろくどうの凡夫ぼんぷより賢かしこく生死しやうじを厭いとひ煩惱ぼんのうを具しながら煩惱ぼんのうを發おこさざる賢人けんじんなり、例せば外典げてんの許由巢父きようそうふが如ごとし。

一に数息すそく息すそくを数えて散乱さんらんを治じす

二に不淨身ふじやうの不淨ふじやうを觀かんじて貪欲とんよくを治じす

三に慈悲じひ慈悲じひを觀かんじて嫉妬しつとを治じす

五停心

四に因縁いんねん十二因縁いんねんを觀かんじて愚癡ぐちを治じす

五に界方便かうべん 地水火風空識すいかの六界ろっかいを觀かんじて障道しょうどうを治じす又

は念仏ねんぶつと云うう

別想念處ねんじょ

一に身

外道げどうは身を淨じやうと言いい仏ぶつは不淨ふじやうと説とき給たまう

二に受

外道げどうは三界さんがいを樂がくと言いい仏ぶつは苦くと説とき給たまう

三に心

外道げどうは心しんを常じやうと言いい仏ぶつは無常むじやうと説とき給たまう

四に法

外道げどうは一切衆生いっさいしゆじやうに我有いりと云いい仏ぶつは無我むがと

説とき給たまう

外道は常心樂受我法淨身じようしん仏は苦・不淨・無常・無我むがと説く總想念ねんじょう処とは
先の苦・不淨・無常・無我を調練して觀ずるなり☆法は智慧の火・煩惱
の薪を蒸せば煙の立つなり故に・法と云う、頂法は山の頂いただきに登つて
四方を見るに雲無きが如し、世間出世間の因果の道理を委く知つて
聞き事無きに譬たとえたるなり、始め五停心より此の頂法に至るまで退位
と申して惡縁に値あへば惡道に墮おつ而れども此の頂法の善根は失せずと
習ならうなり、忍法は此の位に入る人は永く惡道に墮おちず、世第一法は此
の位に至る賢人けんじんなり但今聖人と成る可きなり。

一に見道

二

隨信行

鈍根どんこん

隨法行

利根りこん

信解しんげ

鈍根どんこん

正と言う事なり

七聖三

三

見得

利根りこん

二に修道しゅうどう

身証 利鈍に亘るわた

阿羅漢あらかん

二

慧解脱鈍根えげ どんこん

三に無學道

俱解脱利根げだつりこん

見・思の煩惱ぼんのうを斷ずる者を聖と云う、此の聖人しょうにんに三道あり、見道とは見思けんじの内の見惑けんわくを斷じ尽くす、此の見惑けんわくを尽くす人をば初果しょかの聖者せいじやと申す、此の人は欲界よっかいの人天にんてんには生るれども永く地・餓・畜・修しゅうの四惡趣しあくしゅには墮おちず、天台てんだい云く見惑けんわくを破やぶるが故ゆえに四惡趣しあくしゅを離る」文、此の人は未だ思惑しわくを斷だんぜず貪とん・瞋じん・癡ち有り、身に貪欲とんよくある故ゆえに妻めかけを帶もつ、而しかれども他人たにんの妻を犯さず、瞋しん悲ひあれども物を殺さず、鋤すきを以もて地をすけば虫自然じねんに四寸さう去る、愚癡ぐちなる故ゆえに我が身・初果しょかの聖者せいじやと知らず、婆娑論ばしやろんに云く初果しょかの聖者せいじやは妻を八十一度・一夜に犯すと「取意てんたい天台てんだいの解釋げしやくに云く初果しょか地を耕すに虫四寸を離るるは道共どうくの力なり」と、第四

果の聖者・阿羅漢を無学と云ひ亦は不生と云う、

永く見思を断じ尽して三界六道に此の生の尽きて後生ずべからず見思

の煩惱無きが故なり、又此の教の意は三界六道より外に処を明さざ

れば生処有りと知らず・身に煩惱有りともし知らず又生因なく但

灰身滅智と申して身も心もうせ虚空の如く成るべしと習う、法華經に

あらずば永く仏になるべからずと云うは二乘是なり、此の教の修行の

時節は声聞は三生鈍根六十劫利根又一類の最上利根の声聞一生の内

に阿羅漢の位に登る事あり、縁覚は四生鈍根百劫利根菩薩は一向凡夫

にて見思を断ぜず而も四弘誓願を發し六度万行を修し三僧祇・百

大劫を経て三藏教の仏と成る

仏と成る時始めて見思を断尽するなり、見惑とは一には身見と云う二に

は辺見常見と云う三には邪見と云う四には見取見勝見と云う五には戒禁取

見計道見と云うなり見惑は八十八有れども此の五が根本にて有るなり、

思惑しわくとは一には貪・二には瞋・三には癡・四には慢なり思惑は八十一
有あれれども此の四が根本こんぽんにて有あるなり、此の法門ほうもんは阿含經あこんきょう四十卷・
婆沙論ばしやろん二百卷・正理論・顯宗論しゅうろん・俱舍論ぐしやに具つぶさに明せり、別して俱舍宗
と申もうす宗有り又諸の大乗もろもろだいじょうに此の法門ほうもん少少明す事あり・謂く方等部の經
涅槃經ねはんぎょう等なり但し華嚴けこん・般若はんにか・法華ほっけには此の法門ほうもん無し。

次に通教つうきょうとは大乘だいじょうの始なり又戒定慧の三学かいじょうえあり、此の教の意こころのおきて
大旨むねは六道ろくどうを出いでず少分利根りこんなる菩薩ぼさつ六道ろくどうより外に推おし出いだすことあ
り、声聞しょうもん・緣覺えんかく・菩薩ぼさつ共に一の法門ほうもんを習ならい見思けんじを三人共に断しかじ而も
声聞しょうもん・緣覺えんかく・灰身滅智けしんめつちの意こころに入る者もあり入らざる者もあり、此の教
に十地じゅうちあり。

一 乾慧地

三賢さんけん

二 性地

四善根ぜんこん

賢人けんじん

三 八人地
四 見地

見道位聖人しやうにん
見惑けんわくを断ず
初果しよかの聖人しやうにん

十地 じゅうち

五 薄地

六 離欲地

思惑を断ず しわく

七 已弃地

阿羅漢 見思を断じ尽す あらかん けんじ

八 辟支仏

地習氣を尽す ひやくしぶつ しゅうけ

九 菩薩地

誓つて習を扶けて生ずるなり ぼさつ たす

十 仏地

見思を断じ尽す けんじ

此通教 つうきよう

の法門は別して一經に限らず方等經・般若經・心經・觀經・

阿彌陀經・雙觀經・金剛般若等の經に散在せり、此通教の修行の時節

は動踰塵劫を経て仏に成ると習うなり、又一類の疾く成ると云う辺も

あり・已上・上の藏通二教には六道の凡夫本より仏性ありとも談ぜず

始めて修すれば声聞・緣覺・菩薩・仏と・おもひおもひに成ると談ずる

教なり。

次に別教又戒定慧の三学を談ず此の教は但菩薩計りにて声聞・縁覺

を雜えず、菩薩戒とは三聚淨戒なり五戒・八戒・十善戒・二百五十戒・

五百戒 梵網の五十八の戒・瓔珞の十無尽戒・華嚴の十戒・涅槃經の

自行の五支戒・護陀の十戒・大論の十戒・是等は皆菩薩の三聚淨戒の内

・撰律儀戒なり、撰善法戒とは八万四千の法門を撰す、饒益有情戒と

は四弘誓願なり定とは觀練熏修の四種の禪定なり慧とは心生十界の

法門なり、五十二位を立つ五十二位とは一に十信・二に十住・三に十

行・四に十回向・五に十地等覺一位妙覺二位なり、已上。

十信 退位 凡夫菩薩未だ見思を断ぜず

五十二位 十住 不退位五十二位

十行 十回向見思・塵沙を断ぜる菩薩

十地 じゅうち

無明を断ぜる菩薩 むみょうをだんぜるぼさつ

等覺 とうかく

妙覺 みょうかく

無明を断じ尽せる仏なり むみょうをだんじじんせるぶつなり

此の教は大乗なり戒定慧を明す戒は前の藏通二教に似ず尽未来際 このけうは大じようなりかいぢやうえけいは前のざうつうににじようをみらい

の戒・金剛宝戒なり、此の教の菩薩は三惡道を恐しとせず二乘道を恐 こんごうぼけいはこのけうのぼさつはさんあくどうをおそしとせずにじよう

る地・餓・畜等の三惡道は仏の種子を断ぜず二乗の道は仏の種子を断 がくちう等のさんあくどうはぶつしゆしをだんぜずにじよう

ずればなり、大莊嚴論に云く恒に地獄に処すと雖も大菩提を障えず そうごんろんにいひつねにじごくにしょといえどもぼだいをささ

若し自利の心を起さば是れ大菩提の障なり」と、此の教の習は眞の もしじりしんをおこさばこぼだいはさわりなり」と、このけうのならい

惡道とは三無為の火☆なり眞の惡人とは二乗を云うなり、されば惡を あくどうとはさんむゐのかきようなりあくにんとはにじようをいふなり、さればあくを

造るとも二乗の戒をば持たじと談ず、故に にじようのけいをばもつたじとだんず、ゆゑに

大般若經に云く若し菩薩設い恒河沙劫に妙なる五欲を受くるとも はんにやきやうにいひわもしぼさつたといごうがしやにめうなるごよくを受くるとも

菩薩戒に於ては猶犯と名けずと若し一念二乗の心を起さば即ち名けて ぼさつけいにおいてはなおなほと名けずとももしいちねんにじようしんをおこさばすなわ

犯と為す」文、此の文に妙なる五欲とは色・声・香・味・触の五欲なり。
色欲とは青黛・珂雪・白齒等声欲とは絲竹管絃・香欲とは沈檀芳薰・味
欲とは猪鹿等の味・触欲とは☆膚等なり、此に恒河沙劫に著すれども
菩薩戒は破れず一念の二乗の心を起すに菩薩戒は破ると云える文な
り、太賢の古迹に云く 貢に汚さるる

と雖も大心尽きざるをもつて無余の犯無し起せども無犯と名く」文、
二乗戒に趣くを菩薩の破戒とは申すなり華嚴・般若・方等總じて爾前
の經にはあながちに二乗をきらうなり定慧此れを略す、梵網經に云く
戒をば謂いて大地と為し定をば謂いて室宅と為す智慧は為灯明なり」
文、此の菩薩戒は人・畜・黃門・二形の四種を嫌わず但一種の
菩薩戒を授く、此の教の意は五十二位を一一の位に多俱低劫を経て
衆生界を尽して仏に成るべし一人として一生に仏に成る者無し、又一

行を以て仏に成る事無し一切行を積んで仏と成る微塵を積んで須弥山
と成すが如し、華嚴・方等・般若・梵網・瓔珞等の經に此の旨分明なり、
但し二乗界の此の戒を受くる事を嫌ふ、妙樂の釈に云く「☆く法華
已前の諸經を尋ぬるに実に二乗作仏の文無し」文。

えんきよう

次に円教とは此の円教に二有り・一には爾前の円・二には法華・

えんきよう

にぜん

ほつげ

ねはん

涅槃の円なり、爾前の円に五十二位・又戒定慧あり、爾前の円とは

けこんきよう ほうかいゆいしん ほうもん 文に云く 初発心の時便ち正覺を成ずと」又

にぜん

華嚴經の法界唯心の法門文に云く 初発心の時便ち正覺を成ずと」又

けこんきよう

ほうかいゆいしん

ほうもん

文に云く

初発心の時便ち正覺を成ずと」又

すなわ しょうかく

じよう

華嚴經の法界唯心の法門文に云く 初発心の時便ち正覺を成ずと」又

いわ

云く 円満修多羅」文、 浄名經 に云く 無我無造にして受者無けれ

じようみようきよう

いわ

無我無造にして受者無けれ

むが

ども善惡の業敗亡せず」文、般若經に云く 初発心より即ち道場に坐す」

ぜんあく

ども善惡の業敗亡せず」文、般若經に云く

はんぎきよう

般若經に云く

初発心より即ち道場に坐す」

すなわ とうじよう

ども善惡の業敗亡せず」文、般若經に云く 初発心より即ち道場に坐す」

す」

文、觀經に云く 韋提希・時に応じて即ち無生法忍を得」文、梵網經に

かんきよう

觀經に云く 韋提希・時に応じて即ち無生法忍を得」文、梵網經に

いわ

云く「衆生・仏戒を受くれば位大覺に同じ即ち諸仏の位に入り真に

しゆじよう

云く「衆生・仏戒を受くれば位大覺に同じ即ち諸仏の位に入り真に

いわ

云く「衆生・仏戒を受くれば位大覺に同じ即ち諸仏の位に入り真に

しゆじよう

云く「衆生・仏戒を受くれば位大覺に同じ即ち諸仏の位に入り真に

しゆじよう

云く「衆生・仏戒を受くれば位大覺に同じ即ち諸仏の位に入り真に

いわ

云く「衆生・仏戒を受くれば位大覺に同じ即ち諸仏の位に入り真に

しゆじよう

云く「衆生・仏戒を受くれば位大覺に同じ即ち諸仏の位に入り真に

しゆじよう

云く「衆生・仏戒を受くれば位大覺に同じ即ち諸仏の位に入り真に

いわ

云く「衆生・仏戒を受くれば位大覺に同じ即ち諸仏の位に入り真に

しゆじよう

云く「衆生・仏戒を受くれば位大覺に同じ即ち諸仏の位に入り真に

しゆじよう

云く「衆生・仏戒を受くれば位大覺に同じ即ち諸仏の位に入り真に

いわ

云く「衆生・仏戒を受くれば位大覺に同じ即ち諸仏の位に入り真に

しゆじよう

云く「衆生・仏戒を受くれば位大覺に同じ即ち諸仏の位に入り真に

しゆじよう

云く「衆生・仏戒を受くれば位大覺に同じ即ち諸仏の位に入り真に

いわ

云く「衆生・仏戒を受くれば位大覺に同じ即ち諸仏の位に入り真に

しゆじよう

云く「衆生・仏戒を受くれば位大覺に同じ即ち諸仏の位に入り真に

しゆじよう

云く「衆生・仏戒を受くれば位大覺に同じ即ち諸仏の位に入り真に

無く一善一戒を以ても仏に成る少々開会の法門を説く処もあり、
所謂 淨名經 には凡夫を会し煩惱惡法も皆会す但し二乗を会せず、
般若經の中には二乗の所学の法門をば開会して二乗の人と惡人をば
開会せず、觀經等の經に凡夫一毫の煩惱をも断ぜず往生すと説くは
皆爾前の円教の意なり、法華經の円經は後に至つて書く可し已上
四教。

次に五時、五時とは一には華嚴經 結經 梵網經 別円二教を説く、二
には阿含 結經 遺教經 但三藏教の小乗の法門を説く、三には方等經・
寶積經・觀經等の説時を知らざる 權大乘經 なり 結經 瓔珞經、但し
藏通・別円の四教を皆説く、四には般若經 結經 仁王經 通教・別教・
円教の後三教を説く三藏教を説かず、華嚴經は三七日の間の説・
阿含經は十二年の説・方等 般若は三十年の説、已上華嚴より般若に

至る四十二年なり、山門の義には方等は説時定まらず説処定まらず
般若經三十年と申す、寺門の義には方等十六年・般若十四年と申す、
秘藏の大事の義には方等・般若は説時三十年・但し方等は前・般若は後
と申すなり、仏は十九出家・三十成道と定むる事は大論に見えたり、
一代聖教五十年と申す事は涅槃經に見えたり、法華經已前四十二年
と申す事は無量義經に見えたり、法華經八箇年と申す事は涅槃經の五
十年の文と無量義經の四十二年の文の間を勘うれば八箇年なり、已上
十九出家・三十成道・五十年の転法輪・

八十入滅と定む可し、此等の四十二年の説教は皆法華經の汲引の
方便なり、其の故は無量義經に云く我先に道場菩提樹下に端坐する
こと六年阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たり○方便力を以て
す、四十余年には未だ真実を顯さず初に四諦を説き阿含經なり次に
方等十二部經・摩訶般若・華嚴海空を説く」文。

私に云く説の次第に順ずれば華嚴・阿含・方等・般若・法華・涅槃な
り、法門の淺深の次第を列ぬれば阿含・方等・般若・華嚴・涅槃・法華と
列ぬべし、されば法華經・涅槃經には爾くの如く見えたり華嚴宗と申す
宗は智嚴法師・法藏法師・澄觀法師等の入師・華嚴經に依つて立てた
り、俱舍宗・成実宗・律宗は宝法師・光法師・道宣等の入師・阿含經に
依つて立てたり、法相宗と申す宗は玄奘三藏・慈恩法師等・方等部の
内に上生經・下生經・成仏經・解深密經・

瑜伽論・唯識論等の經論に依つて立てたり、三論宗と申す宗は般若經

・百論・中論・十二門論・大論等の經論に依つて吉藏大師立て給へり、

華嚴宗と申すは華嚴と法華・涅槃は同じく円教と立つ余は皆劣と云

うなる可し、法相宗には解深密經と華嚴・般若・法華・涅槃は同じ程

の經と云う、三論宗とは般若經と華嚴・法華・涅槃は同じ程の經なり、

但し法相の依經諸の小乗經は劣なりと立つ、此等は皆法華已前の

諸經に依つて立てたる宗なり、爾前の円を極として立てたる宗どもな

り、宗宗の人人の諍は有れども經經に依つて勝劣を判ぜん時はいか

にも法華經は勝れたるべきなり、人師の釈を以て勝劣を論ずる事無し。

五には法華經と申すは開經には無量義經一卷法華經八卷結經には

普賢經一卷上の四教・四時の經論を書き挙ぐる事は此の法華經を知ら

ん為なり、法華經の習としては前の諸經を習わずしては永く心を得る

こと莫^なきなり、爾^{にぜん}前の諸^{しよきよう}經^いは一^い經^{きよう}一^い經^{きよう}を習^{なら}うに又余^{よきよう}經^{ひろ}を沙汰^{さた}せざれども苦^くしからず、故^{ゆえ}に天台^{てんだい}の御^お釈^{しやく}に云^いく君^もし余^{よきよう}經^{ひろ}を弘^{ひろ}むるには、
教^{きよう}相^{そう}を明^{あか}さざれども義^ぎに於^{おい}て傷^やむこと無^もし若^もし法^ほ華^{けき}經^{きよう}を弘^{ひろ}むるには、
教^{きよう}相^{そう}を明^{あか}さずんば文^{もん}義^ぎ關^かくること有^あり」文^{ぶん}、法^ほ華^{けき}經^{きよう}に云^いく種^{しゆ}種^{じゆ}の道^{どう}
を示^いすと雖^{いえど}も其^それ実^{じつ}には仏^{ぶつ}乘^{じよう}の爲^{ため}なり」文^{ぶん}、種^{しゆ}種^{じゆ}の道^{どう}と申^{もう}すは爾^{にぜん}前^{ぜん}
一切^{いっさい}の諸^{しよきよう}經^いなり仏^{ぶつ}乘^{じよう}の

為とは法華經の爲に一切の經を説くと申す文なり。

問う諸經の如きは或は菩薩の爲或は人天の爲或は聲聞・緣覺の

爲機に随つて法門もかわり益もかわる此の經は何なる人の爲ぞや、答

う此の經は相伝に有らざれば知り難し所詮惡人・善人・有智・無智・有

戒・無戒・男子・女子・四趣・八部總じて十界の衆生の爲なり、所謂

惡人は提婆達多・妙莊嚴王・阿闍世王・善人は韋提希等の人天の人・

有智は舍利弗・無智は須利槃特・有戒は聲聞・菩薩・無戒は竜畜なり

女人は竜女なり、總じて十界の衆生・円の一法を覺るなり此の事を知

らざる學者・法華經は我等凡夫の爲には有らずと申す仏意恐れ有り、

此の經に云く一切の菩薩の阿耨多羅三藐三菩提は皆此の經に属せり」

文、此の文の菩薩とは九界の衆生・善人・惡人・女人・男子・三藏教の

聲聞・緣覺・菩薩・通教の三乘・別教の菩薩爾前の円教の菩薩皆此の

經の力に有らざれば仏に成るまじと申す文なり、

又此の經に云く、衆王多く人有りて在家・出家の菩薩の道を行ぜんに

若し是の法華經を見聞し誦誦し書持し供養することを得ること能わ

んば當に知るべし是の人は未だ善く菩薩の道を行ぜず、若し是の經典

を聞くことを得ること有らば乃ち能く菩薩の道を行ずるなりと」文、

此の文は顯然に權教の菩薩の三祇・百劫・動踰塵劫・無量阿僧祇劫の

間の六度万行・四弘誓願は此の經に至らざれば菩薩の行には有らず

善根を修したるにも有らずと云う文なり、又菩薩の行無ければ仏に

も成らざる事も顯然なり。

天台・妙樂の末代の凡夫を勸進する文、文句に云く、好堅・地に処し

て牙已に百匝せり頻伽☆に在つて声衆鳥に勝れたり」文、此の文は

法華經の五十展轉の第五十の功德を積する文なり、仏苦に校量を

と
説き給うにごんきよう権教の多劫しゆぎようの修行又大聖たいせいの功德くどくよりも此の經の須臾・結縁しゆゆ けちえん
の愚人ぐにんの隨喜ずいきの功德くどく百千万億勝せんまん すぐれたる事經に見えつれば此の意こころを大師だいし
譬たとえを以て顯し給えり、好堅樹こうけんと申す木は一日に百圍にて高くをう、頻たとい
伽もうと申す鳥は幼おさなきだも諸もろの大小の鳥の聲に勝すぐれたり、権教ごんきようの修行しゆぎようの
久もろきに諸の草木の遅く生長するを譬たとへ法華ほつけの行の速すみやに仏に成る事を
一日に百圍なるに

譬へごんきよう權教の大小だいしやうの聖人しやうにんをば諸鳥しよに譬たとへ法華ほつげの凡夫ぼんぷのはかなきを☆の
声しやうの衆鳥しやうちやうに勝まさるるに譬たとう、妙樂大師みやうらくだいし重かさねて釈しやくして云いわく、恐おそらくば人
謬あやまりて解げせる者しよしん初心くどくの功德くどくの大おほなることを測はからずして功こうを上う位ゐに推ゆずり
此しの初心しよしんを蔑あなどる故ゆゑに今彼けの行ぎやう浅あく功深こうしんきことを示しして以もつて經力きやうりきを
顯あらわす」文まつだい、末代まくだいの愚者ぐしやは法華經ほけきやうは深理しんりにしていみじけれども我等われらが下機き
に叶かなわずと言いつて法ほを拳あげ機きを下くだして退たいする者しやくを釈しやくする文ぶんなり。

又妙樂大師みやうらくだいし末代まつだいに此この法ほの捨すててられん事ことを歎なげいて云いく、此この円頓えんどんを
聞ききて崇重すうちやうせざる者まこときんだいは良だいじやうに近代だいじんに大乘だいじやうを習しやくえる者しやくの雜濫ざうらんするに由よ
が故ゆゑなり、況いはんやや像末しやうまつに情澆じやうしやうく信心しんじん寡薄かはくに円頓えんどんの教きやう・法藏ほふざうに溢あふれ函はこに
盈みつれども暫しばらくも思惟しゆいせず便すなわち目めを瞑ふさぐに至いたる・徒いたずらに生いたずらじ徒いたずらに死しす一ひとに
何なんぞ痛いたましきや有ある人ひと云いく聞きいて行ぎやうぜずんば汝なんじに於おいて何なんぞ預よらん此これ
は未いまだ深くおんく久遠くおんの益えきを知らず、善住ぜんじ天子經てんしきやうの如ごとき文殊もんじゆ・舍利弗しかりふに告つぐ

法を聞き謗を生じて地獄に墮つるは恒沙

の仏を供養する者に勝れたり地獄に墮つと雖も地獄より出でて還つて

法を聞くことを得ると、此れは仏を供し法を聞かざる者を以て校量

と為り聞いて謗を生ずる尚遠種と為す況や聞いて思惟し勤めて修習

せんをや」と、又云く「一句も神に染めれば咸く彼岸を資く思惟修習

永く舟航に用いたり随喜見聞恒に主伴と為る、若は取・若は捨・耳に

經て縁と成り・或は順・或は違・終に斯れに因つて脱すと」文、私に云く

若取・若捨・或順・或違の文は肝に銘ずるなり。

法華翻經の後記に云く釈僧肇記 什羅什三藏なり姚興王に對して曰く

予昔天竺國に在りし時・☆く五竺に遊びて大乘を尋討し大師

須梨耶蘇摩に従つて理味を餐受するに頂を摩でて此の經を屬累して

言く、仏・日西に隠れ遺光東北を照らす茲の典東北諸國に有縁なり

汝なんじつし慎でんぐんで伝弘でんぐせよ」と文、私ひそかに云いわく天竺てんじくよりは此この日本にほんは東北とうほくの州なり
慧心えしんの一乗いちじよう要決ようけつに云いわく日本にほん一州えんき・内機じゆん純熟じゆく・朝野おんごん遠近おんごん・同じく
一乗いちじように歸きし緇素しそ貴賤きせん悉ことごとく成仏じやうぶつを期ごすす・唯一ただいっし師等しとうあつて若もし信受しんじゆせず
権かとや為せん実じつとや為せん権な為ならば責せむ可べし」浄名じやうみやうに云いわく衆の魔事を
覺知かくちして其行したに随したがわらず善力ぜんりき方便ほうべんを以もつて意いに随したがつて度すと実じつ為ならば
憐あわれむ可べし」此經こに云いわく当来世とうらいせの惡人あくにんは仏説ぶつせつの一乗いちじようを聞きいて迷惑めいわくして
信受しんじゆせず法はを破やぶし

て惡道に墮つ」文。

妙法蓮華經・妙は天台玄義に云く「言う所の妙とは妙は不可思議に名くるなり」と、又云く「秘密の奥藏を發く之を稱して妙と為す」と、又云く「妙とは最勝・修多羅・甘露の門なり故に妙と言うなり」と、法は玄義に云く「言う所の法とは十界・十如・權實の法なり」、又云く「權實の正軌を示す故に号して法と為す」と、蓮華は玄義

に云く「蓮華とは權實の法に譬うるなり」、又云く「久遠の本果を指す之を喩うるに蓮を以てし不二の円道に會す之を譬うるに華を以てす」文、經は又云く「声仏事を為す之を稱して經と為す」文、私に云く「法華以前の諸經に小乗は心生ずれば六界・心滅すれば四界なり、通教もつかく以て是くの如し、爾前の別円の二教は心生の十界なり小乗の意は六道・四生の苦樂は衆生の心より生ずと習うなりされば心滅すれば

六道の因果は無きなり、大乘の心より十界を生ず、華嚴經に云く「心は工なる画師の如く種種の五陰を造る一切世界の中に法として造らざることを無し」文、造種種五陰とは十界の五陰なり仏界をも心法をも造ると習う心が過去・現在・未来の十方の仏と顕ると習うなり、華嚴經に云く「若し人三世一切の仏を了知せんと欲せば當なり、是くの如く觀すべし心は諸の如來を造ると」法華已前の經のおきては上品の十惡は地獄の引業・中品の十惡は餓鬼の引業・下品の十惡は畜生の引業・五常は修羅の引業・三歸・五戒は人の引業・三歸・十善は六欲天の引業なり、有漏の坐禪は色界・無色界の引業・五戒・八戒・十戒・十善戒・二百五十戒・五百戒の上に苦・空・無常・無我の觀は聲聞・緣覺の引業・五戒・八戒乃至三聚淨戒の上に六度四弘の菩提心を發すは菩薩なり仏界の引業なり、藏通二教には仏性の沙汰なし但菩薩の

発心ほっしんを仏性ぶつしょうと云う、

別円べつえん二教にぎょうには衆生しゅじょうに仏性ぶつしょうを論ろんず但ただし別教べつぎょうの意いは二乗にじょうに仏性ぶつしょうを論ろんぜず、爾前にぜんの円教えんぎょうは別教べつぎょうに附ふして二乗にじょうの仏性ぶつしょうの沙汰さた無し此等これらは皆みな☆法ほふなり、今の妙法みょうほうとは此等これらの十界じゅうかいを互たがいに具ぐすと説く時・妙法みょうほうと申す、十界互具じゅうかいごぐと申す事は十界じゅうかいの内に一界に余の九界を具し十界互じゅうかいごぐに具すれば百法界ほっかいなり、玄の二に云く又一法界ほっかいに九法界を具すれば即ちすなわ

百法界有り」文、法華經とは別の事無し十界の因果は爾前の經に明す
今は十界の因果互具をおきてたる計りなり、爾前の經意は菩薩をば仏
に成るべし声聞は仏に成るまじなると説けば菩薩は悦び声聞はなげき
人天等は・おもひもかけずなるとある經もあり、・或は二乗は見思を斷
じて六道を出でんと念い菩薩は・わざと煩惱を斷ぜず六道に生れ
て衆生を利益せんと念ふ、・或は菩薩の頓悟成仏を見・・或は菩薩の
多俱低劫の修行を見・或は凡夫往生の旨を説けば菩薩・声聞の爲には
有らずと見て人の不成仏は我が不成仏、人の成仏は我が成仏・凡夫の
往生は我が往生・聖人の見思斷は我等凡夫の見思斷とも知らず四十
二年をば過ぎしなり。

然るに今經にして十界互具を談ずる時・声聞の自調自度の身に菩薩
界を具すれば六度万行も修せず多俱低劫も經ぬ声聞が諸の菩薩のか

らくして修しゅうしたりし無量無辺むりょうむへんの難行道なんぎょうどうが声聞しょうもんに具ぐする間・をもはざる外ぐわいに声聞しょうもんが菩薩ぼさつと云われ人をせむる獄卒ごくそつ・慳貪けんどんなる凡夫ぼんぷも亦菩薩またぼさつと云はる、仏も又因位いんいに居こして菩薩界ぼさつに摂せつせられ妙覺みょうかくながら等覺とうかくなり、葉草喩品やくそうゆほんに声聞しょうもんを説いわいて云く「汝等なんじが所行しぎょうは是れ菩薩ぼさつの道なり」と、又我等われら六度ろくどをも行ぜざるが六度満足まんぞくの菩薩ぼさつなる文・経いわに云く「未だ六波羅蜜ろくはらみつを修行しゆぎようすることを得ずと雖もいふろくはらみつじねんざいぜん六波羅蜜自然ざいぜんに在前ぜんしなん」と、我等われら一戒いつがいをも受けざるが持戒じかいの者と云いわるる文・経いわに云く「是則すなわち勇猛ゆうもうなり是則すなわち精進しやうじんなり是これを戒たいを持ち頭陀ずだを行ずる者と名なく」文。

問いうて云く諸経しよきやうにも悪人あくにんが仏ぶつに成る華嚴經けこんきやうの調達ちやうだつの授記じゆき・普超經ふちやうきやうの闍王じやおうの授記じゆき・大集經だいしつぎやうの婆籤天子ばそてんしの授記じゆき・又女人にょにんが仏ぶつに成る胎經たいきやうの釈女じやくにょの成仏じやうぶつ・畜生ちくしやうが仏ぶつに成る阿含經あこんきやうの鵲雀こくじやくの授記じゆき・二乗にじやうが仏ぶつに成る方等ほうとうだ

らに經・首楞嚴經等なり、菩薩の成仏は華嚴經等・具縛の凡夫の
往生は觀經の下品下生等・女人の女身を転ずるは雙觀經の四十八願
の中の三十五の願此等は法華經の二乘・竜女・提婆菩薩の授記に何な
るかわりめがある、又設いかわりめはありとも諸經にても成仏はうた
がひなし如何、答う予の習い伝うる処の法門・此の答に顯るべし此の答
に法華經の諸經

に超過し又諸經の成仏を許し許さぬは聞うべし秘藏の故に顕露に書さず。

問うて曰く妙法を一念三千と言う事如何、答う天台大師・此の法門を覚り給うて後・玄義十卷・文句十卷・覺意三昧・小止觀・淨名疏・四念処・次第禪門等の多くの法門を説き給いしかども此の一念三千をば談義し給はず、但十界・百界・千如の法門ばかりにて・おはしませしなり、御年五十七の夏四月の比荊州の玉泉寺と申す処にて御弟子・章安大師と申す人に説ききかせ給いし止觀十卷あり、上の四帖に猶をしみ給いて但六即・四種三昧等・計の法門にてありしに五の卷より十境・十乗を立てて一念三千の法門を書き給へり、此れを妙樂大師末代の人に勸進して言く・並に三千を以て指南と為す○請うらくは尋ね読まん者心に異縁無かれ」文、六十卷・三千丁の多くの法門も由無し但

此の初の二三行を意得可きなり、止観の五に云く 天れ一心に十法界を具す一法界に又十法界を具すれば百法界なり一界に三十種の世間を具すれば百法界には即ち三千種の世間を具す此の三千一念の心に在り文、妙樂承け釈して云く 当に知るべし身土一念の三千なり故に成道の時・此の本理に称て一身一念法界に☆ねし」文、日本の伝教大師比叡山建立の時・根本中堂の地を引き給いし時・地中より舌八つある鑰を引き出したり、此の鑰を以て入唐の時に天台大師より第七代妙樂大師の御弟子道邃和尚に値い奉りて天台の法門を伝へ給いし時、天機秀発の人たりし間道邃和尚悦んで天台の造り給へる十五の経蔵を開き見せしめ給いしに十四を開いて一の蔵を開かず、其時伝教大師云く師此の一蔵を開き給えと請い給いしに邃和尚云く 此の一蔵は開く可き鑰無し天台大師自ら出世

して開き給う可し」と云云其の時伝教大師・日本より隨身の鑰を以て
開き給いに此の經藏開けたりしかば經藏の内より光室に満ちたり
き、其の光の本を尋ぬれば此の一念三千の文より光を放ちたりしなり
ありがたき事なり、其の時遂和尚は返つて伝教大師を礼拝し給いき、
天台大師の後身と云云、依つて天台の經藏の所釈は遣り無く日本に
亘りしなり、天台大師の御自筆の觀音經・章安大師の自筆の止觀・今
比叡山の根本中堂に収めたり。

一 自性 自力 迦毘羅外道

四性計 二 他性 他力 ☆樓僧伽外道

三 共性 共力 勒婆婆外道

四 無因性 無因力 自然外道

外道に三人あり、一には仏法外の外道九十五種の外道二に附仏法成

の外道 小乗 三には學仏法の外道 大乘の外道なり。今の法華經は自力も定

めて自力にあらず十界の一切衆生を具する自なる故に我が身に本よ

り自の仏界・一切衆生の他の仏界我が身に具せり、されば今・仏に成る

に新仏にあらず又他力も定めて他力に非ず他仏も我等凡夫の自具な

るが故に又他仏が我等が如く自に現同するなり、共と無因は略す。

法華經已前の諸經は十界互具を明さざれば仏に成らんと願うには

必ず九界を厭う九界を仏界に具せざるが故なり、されば必ず惡を滅し

煩惱ぼんのうを断じて仏には成ると談だんず凡夫ぼんぷの身を仏に具ぐすと云わざるが
故ゆゑに、されば人天にんてん悪人あくにんの身を失うしないて仏に成ると申もうす、此これをば妙楽みょうらく
大師だいしは厭離おんり断九だんきゅうの仏と名なくされば爾前にぜんの經の人人ひとびとは仏の九界の形を
現げんずるをば但い仏の不思議ふしぎの神變と思ひ仏の身に九界が本よりありて現げん
ずるとは言いわず、されば実を以もつてさぐり給たまうに法華經ほけきやう已前いぜんには但い權者ごんしゃ
の仏のみ有つて実の凡夫ぼんぷが仏に成りたりける事は無きなり、煩惱ぼんのうを断じ
九界を厭いとうて仏に成らんと願うは実には九界を離れたる仏無き故ゆゑに
往生おうじやうしたる実の凡夫ぼんぷも無し、人界にんかいを離れたる菩薩界ぼさつも無き
故ゆゑに但い法華經ほけきやうの仏の爾前にぜんにして十界じゅうかいの形を現して所化しよけとも能化のうけとも
惡人あくにんとも善人ぜんにんとも外道げどうとも言のたまわれしなり、実の惡人あくにん・善人ぜんにん・外道げどう・凡夫ぼんぷ
は方便ほうべんの權を行じて真実しんじつの教とうち思おもひなしてすぎし程ほどに法華經ほけきやうに來
つて方便ほうべんにてありけり、実には見思無明けんじむみやうも断だんぜざりけり往生おうじやうもせざり

けりなんとかくち覚知するなり、一念三千は別にくわし委く書す可し。

此の經には二妙あり釈に云くい此の經は唯ただ二妙を論ず」と一には
そうたいみよう相待妙二には絶ぜつ待妙なり、相待妙の意は前の

四時の一代聖教に法華經を對して爾前と之を嫌ひ、爾前をば當分と言ひ法華を跨節と申す、絶待妙の意は一代聖教は即ち法華經なりと開會す、又法華經に二事あり一には所開・二には能開なり開示悟入の文・或は皆已成仏道等の文、一部・八卷・二十八品・六万九千三百八十四字・二一の字の下に皆妙の文字あるべしこれ能開の妙なり、此の法華經は知らずして習い談ずる者は但爾前の經の利益なり、阿含經開會の文は經に云く我が此の九部の法は衆生に隨順して説く大乘に入るに為本なり」と云云、華嚴經・開會の文は一切世間・天人及び阿修羅は皆謂えり今の釈迦牟尼仏等の文、般若經開會の文は安樂行品の十八空の文、觀經等の往生安樂・開會の文は此に於て命終し

て即ち安樂世界に往く」等の文、散善開會の文は「たび南無仏と称せ

し皆みな已すでに仏道ぶつどうを成なりじき」の文、一切衆生開會いっさいしゅじやうかいえの文は 今いま此この三界さんがいは皆みな是これ我が有あなり其そのの中の衆生しゅじやうは悉ことごとく是これ吾わが子こなり」、外典開會げてんかいえの文は 若もし俗間經書治世ぞっかんきやうしよちせい語言資生しせいの業等ごうどうを説とかんも皆正法みなしやうほうに順したがへん」文、兜率開會とそつかいえの文、人天所開會にんてんしよかいの文しげきゆへにいださず。

此このの經きやうを意得いじやくざる人は經の文に此の經を讀んで人天にんてんに生なずと説く文を見・或あるは兜率とそつ・☆利とうりなどなにいたる文を見・或あるは安養あんやうに生なずる文を見・或あるは法華經ほけきやうを行おこなぜば經はいみじけれども行者ぎやうじや不退ふたいの地ちに至いたらざれば穢土えどにして流轉るてんし久くしく五十六億七千萬歳せんまんあかつきの晨あかつきを期もちし・或あるは人畜等じんちくに生なれて隔生きやくする間かん・自みづからの苦しみ限り無なしなると云云・或あるは自力じりきの修行しゆぎやうなり難行道なんぎやうどうなり等云云、此このれは恐おそらくは爾前にぜん・法華ほつけの二途ふたを知らずして自みづから癡闇ちあんに迷まようのみに非あらず一切衆生いっさいしゅじやうの仏眼ぶつげんを閉ふずる人なり、兜率とそつを勧めたる事は小乘經しやうじやうきやうに多おほし少すくしは大乗經だいじやうきやうにも

勸めたり西方さいほうを勸めたる事は大乘經だいじょうきように多し此等これらは皆所開みなしよかいの文なり、
法華經ほけきようの意こころは兜率とそつに即して十方じゅつぽう仏土中・西方さいほうに即して十方じゅつぽう仏土中・
人天にんてん

に即して十方じゅつぽう仏土中と云云、法華經ほけきようは惡人あくにんに対しては十界じゅつかいの惡を説
くは惡人あくにん・五眼ごがんを具しなんとすれば惡人あくにんのきわまりを救い、女人にょにんに即し
て十界じゅつかいを談だんずれば十界じゅつかい皆女人にょにんなる事を談だんず、何いかにも法華圓実ほつけんえんじつの
菩提心ぼだいしんを發おこさん人は

迷まよの九界くかい衆力しゆりきに引ひかるる事こと無なきなり。

此この意いを存ぞんじ給たまいけるやらん法然上人ほうねんしやうにんも一向念仏いっこうねんぶつの行者ぎやうじやながら
選せん択たくと申もうす文ぶんには難行難行道なんぎやうなんぎやうどうには法華經ほけきやう・大日經等だいにちぎやうをば除ぞかれたる
處ところもあり委くわし見みよ又慧心えしんの往生要集おうじやうやうしゆにも法華經ほけきやうを除ぞきたり、たとい
法然上人ほうねんしやうにん・慧心えしん・法華經ほけきやうを難行難行道なんぎやうなんぎやうどうとして末代まつだいの機きに叶かなわずと書か
き給たまうとも日蓮にちれんは全ぜんくもちゆべからず、一代聖教いちだいしやうきやうのおきてに違たがい三世さんぜ
十方じゅうぽうの仏陀ぶつだの誠言せいげんに違ちがひする故ゆゑにいわうやそのぎなし、而しかるに後の人の
消息しやうそくに法華經ほけきやうを難行道なんぎやうどう・經きやうはいみじけれども末代まつだいの機きに叶かなわず謗そらば
こそ罪つみにてもあらめ、淨土じやうどに至いたつて法華經ほけきやうをば覺さるべしと云云いんいん、日蓮にちれんが
心こころは何いかにも此この事ことはひが事ことと覺おぼゆるなりかう申もうすもひが事ことにや有あら
ん、能よく能よく智人ちじんに習ならふ可べし。

正嘉二年二月十四日 日蓮撰にちれん

◆五六

一念三千理いちねんさんぜん事

正嘉二年しょうか三十七歳御作

406P

十二因縁いんねん図、問う流転るてんの十二因縁いんねんとは何等なんらぞや答う一には無明むみょう・
俱舍くしゃに云く宿惑しゅくわくの位は無明むみょうなり」文、無明むみょうとは昔愛欲ぼんのうの煩惱ぼんのう起りし
を云うなり、男は父に瞋いかりを成して母に愛を起す、女は母に瞋いかりを成して
父に愛を起すなり俱舍くしゃの第九に見えたり、二には行・俱舍くしゃに云く宿むかしの
諸業しよを行と名なずく」と文、昔の造業ぞうぎようを行とは云うなり業に二有り一には
牽引けんいんの業なり我等われらが正まさく生を受く可べき業を云うなり、二には円満えんまんの業
なり余の一切いっさいの造業ぞうぎようなり所謂いわず足を折り
手を切る先業せんごうを云うなり是は円満えんまんの業なり、三には識・俱舍くしゃに云く識

とは正く生を結する蘊なり」文、正く母の腹の中に入る時の五蘊なり、
五蘊とは色・受・想・行・識なり亦五陰とも云うなり、四には名色・
俱舎に云く六処の前は名色なり」文、五には六処・俱舎に云く眼等
の根を生ずるより三和の前は六処なり」文、六処とは眼・耳・
鼻・舌・身・意の六根出来するを云うなり、六には触・俱舎に云く「三受
の因の異なるに於て未だ了知せざるを触と名く」文、火は熱しとも知ら
ず水は寒しとも知らず刀は人を切る物とも知らざる時なり、七には受
・俱舎に云く「姪愛の前に在るは受なり」文、寒熱を知つて未だ姪欲を
発さざる時なり、八には愛・俱舎に云く「資具と姪とを食るは愛なり」
文、女人を愛して姪欲等を発すを云うなり、九には取・俱舎に云く
諸の境界を得んが為に☆く

馳求するを取と名く」文、今世に有る時世間を営みて他人の物を食り

取る時を云うなり、十には有・俱舎ぐしやに云く、有は謂く正しく能く当有の
果を牽ひく業を造る」文、未来又此くの如く生を受く可き業を造るを有
とは云うなり、十一には生・俱舎ぐしやに云く、当の有を結するを生と名く
文、未来に正く生を受けて母の腹に入る時を云うなり、十二には老死・
俱舎ぐしやに云く、当の受に至るまでは老死なり」文、生老死を受くるを
老死憂悲苦恼ろうしゆうひくのうとは云うなり。

問う十二因縁を三世兩重に分別する方如何、答う無明と行とは過去の二因なり識と名色と六入と触と受とは現在の五果なり愛と取と有とは現在の三因なり生と老死とは未来の兩果なり、私の略頌に云く過去の二因無明行現在の五果識名色六入触受現在の三因愛取有未来の兩果生老死と、問う十二因縁流轉の次第如何、答う無明は行に縁たり行は識に縁たり識は名色に縁たり名色は六入に縁たり六入は触に縁たり触は受に縁たり受は愛に縁たり愛は取に縁たり

取は有に縁たり有は生に縁たり生は老死憂悲苦惱に縁たり是れ其の生死海に流轉する方なり此くの如くして凡夫とは成るなり、問う還滅の十二因縁の様如何答う無明滅すれば則ち行滅す行滅すれば則ち識滅す識滅すれば則ち名色滅す名色滅すれば則ち六入滅す六入滅すれば則ち觸滅す觸滅すれば則ち受滅す受滅すれば則ち愛滅す愛滅

すなわしめめつすなわしめめつすなわしめめつすなわしめめつすなわしめめつ
すれば則ち取滅す取滅すれば則ち有滅す有滅すれば則ち生滅す生滅
すれば則ち老死憂悲苦惱滅す、是れ其の還滅の様なり仏は還つて煩惱
を失つて行く方なり私に云く中有の人には十二因縁具に之無し又天上
にも具には之無く又無色界にも具には之無し。

一念三千理事

十如是とは如是相は身なり可し文鑑六に云く相は唯色に在り文、

如是性は心なり改めず文鑑六に云く性は唯心に在り文、如是体は身と心となり

名けて体となす文、如是力は身と心となり忍を用となす文如是作は身と心とな

りを作と名く文、如是因は心なり因と為す亦名けて業となす文、如是縁止に云く縁は縁業

を助くるに由る文、如是果止に云く果は剋獲を果と為す文、如是報因を報と曰う文、如是

本末究竟等為し後ちの報を末と為す文、三種世間とは五陰世間に五陰世間と名く

るなり文、衆生世間を得る故に衆生世間と名くるなり文、国土世間じて国土世間

と称す文、五陰とは新訳

には五蘊ごおんと云うなり陰とは聚集じゅしゅうの義なり一に色陰・五色ごしき是なり・二に
受陰・領納りょうのう是なり・三に相陰・俱舍ぐしやに云く想は像を取るを体なと為すと
文・四に行陰・造作ぞうさく是行なり・五に識陰・了別りょうべつ是れ識なり止の五に婆沙
を引いて云く識・先ず了別し次に受は領納りょうのうし・相は相貌そうみょうを取り・行は
違從いじゅうを起し・色は行に由よつて感ずと。

ひやつかいせんによ　さんぜんせけん

百界・千如・三千世間の事、十界互具即百界と成るなり、地獄じごく十如じゅうにょ是

ごおんせけん十如くどせけん十如地、餓鬼がき十如じゅうにょ是五陰世間十如じゅうにょ是国土世間地下ちか

畜生ちくしやう十如じゅうにょ是五陰世間十如じゅうにょ是国土世間水陸空修羅しゆら十如じゅうにょ是五陰世間十如じゅうにょ是国土

せけん十如じゅうにょ是五陰世間十如じゅうにょ是国土世間こくどせけん十如じゅうにょ是須弥しゆみ十如じゅうにょ是五陰世間

世間せけん海畔底、人間にやう十如じゅうにょ是五陰世間十如じゅうにょ是国土世間こくどせけん十如じゅうにょ是五陰世間

十如じゅうにょ是国土世間十如じゅうにょ是宮殿声聞しやうもん十如じゅうにょ是五陰世間十如じゅうにょ是国土世間同居土、縁覚えんかく

十如じゅうにょ是五陰世間十如じゅうにょ是国土世間同居土、菩薩ぼさつ十如じゅうにょ是五陰世間十如じゅうにょ是国土

世間せけん方便実報、仏ぶつ十如じゅうにょ是五陰世間十如じゅうにょ是国土世間寂光土。

止観しかんの五に云く心縁しんえんと合がすれば則ち三種世間・三千の性相しやうさう皆心

より起るおこ「文、弘くわの五に云く故ゆゑに止観しかんに正ただしく観法かんぽうを明いたすに至いたつて

並びに三千を以て指南しんなんと為す、乃すなわち是れ終窮究竟しゆうくよくきやうの極説ごくせつなり故ゆゑに序の

中に説せつ己心中しんちゆう所行しやうぎやうの法門ぽうもんと云う良まことに以有ゆゑるなり、請こうう尋ねて説たすまん者

心に異縁いゑん無かれ「文、又云く妙境めうきやうの一念三千いちねんさんぜんを明あかさずんば如何なんぞ一

に一切を撰えらぶことを識しる可べけん、三千は一念の無明を出いでず是の故に
唯苦因苦果のみ有り」文、又云く「一切の諸業十界・百界・千如・三千
世間を出でざるなり」文、籤の二に云く「假は即ち衆生・実は即ち五陰
及び国土・即ち三世間」

なり千の法は皆三なり故に三千有り」文、弘の五に云く「一念の心に
於て十界に約せざれば事を収おさむること☆からず三諦に約せざれば理を
撰えらぶこと周あまねからず十如を語かたらざれば因果備いんがそなわらず三世間無せけんんば依正
尽つきず」文、記の二に云く「若三千に非あらざれば撰えらぶこと・からず若し円
心に非あらざれば三千を撰えらぶこと」文、玄の二に云く「但衆生法
は太だ広く仏法は太だ高し初学に於て難なんと為し心は則ち易しと為す」
文、弘の五に云く「初に華嚴を引くことは心の工なる画師の如く種種の
五陰を造る一切世界の中に法として造らざること無し、心の如く仏も

亦また爾しかなり仏ぶつの如ごとく衆生しゅじょうも然しかなり心仏しんぶつ及び衆生しゅじょう是この三差別さんさべつ無し若もし人
三さん世ぜ一切いっさいの仏ぶつを求め知らんと欲ほつせば当まさに是かくくの如ごとく觀くわんずべし心しんは諸もろもろの
如によらい來らいを造ぞうる」と、金☆論こんぺいろんに云いく 実相じつそうは必ず諸法しよほう・諸法しよほうは必ず十如・十
如じゆつかいは必ず十界・十界じゆつかいは必ず身土しんど
なり」

三身さんじん釈しやくの事、先まづず法身ほっしんとは大師だいし大經だいぎやうを引ひいて「一切いっさいの世諦せたいは若もし如來にょらいに於おいては即すなわち是第一だいいち義諦ぎたいなり衆生しゆじやう顛倒てんどうして仏法ぶつぽうに非あらずと謂おもえり」と釈しやくせり、然しかれば則すなわち自他じた・依正えしやう・魔界まかい・仏界ぶつかい・染淨せんじやう・因果いんがは異ことなれども悉ことごとく皆諸仏みなしよぶつの法身ほっしんに背そむく事に非あらざれば善星比丘ぜんしやうびくが不信ふしんなりしも楞伽王りやうがの信心しんじんに同おなじく般若蜜外道はんにかやげどうが意こころの邪見じゃけんなりしも須達長者すだつちやうぢやが正見せいけん

正見せいけんに異ことらず、即すなわち知しんぬ此この法身ほっしんの本ほんは衆生しゆじやうの当体とうたいなり、十方じゆつぱう諸佛しよぶつの行願ぎやうがんは實じつに法身ほっしんを証しやうするなり、次に報身ほうしんとは大師だいしの云いふ法如如ほつががの智如ちが如真実しんじつの道みちに乗のりじ來きつて妙覺みやうかくを成じやうず智如ちがの理りに稱かなう理りに従したがつて如ごとく名なけ智ちに従したがつて來きと

名なく即すなわち報身ほうしん如來にょらいなり盧舍那るしやなと名なけ此こには淨滿じやうまんと翻はんず」と釈しやくせり、此これは如如法性ほつしやうの智ち・如真実しんじつの道みちに乗のりじて妙覺みやうかく究竟くきやうの理智りぢ・法界ほつかいと

冥合したる時・理を如と名^なく智は来なり。

◆五五

十如是事

正嘉二年 三十七歳御作

四一〇頁

我が身が三身即一の本覺の如来にてありける事を今經に説いて云く
如是相・如是性・如是体・如是力・如是作・如是因・如是縁・如是果・
如是報・如是本末究竟等文、初めに如是相とは我が身の色形に顯れた
る相を云うなり是を応身如来とも又は解脱とも又は仮諦とも云うな
り、次に如是性とは我が心性を云うなり是を報身如来とも又は般若と
も又は空諦とも云うなり、三に如是体とは我が此の身体なり是を法身
如来とも又は中道とも法性とも寂滅とも云うなり、されば此の三
如を三身如来とは云うなり此の三如是が三身如来にておはしまし

けるをよそに思ひ

へたてつるがはや我が身の上にてありけるなり、かく知りぬるを法華經ほけきょうをさとれる人とは申すなり此の三如是にょぜを本として是よりのこりの七つの如是にょぜはいでて十如是じゆのぜとは成りたるなり、此の十如是じゆのぜが百界にも千如にも三千世間さんぜんせけんにも成りたるなり、かくの如く多くの法門ほうもんと成りて八万はちまん法蔵ほうぞうと云はるれどもすべて只一つの三諦さんたいの法にて三諦さんたいよ

り外ほかには法門ほうもんなき事なり、其の故そのゆえは百界と云うは仮諦けたいなり千如と云うは空諦くうたいなり三千と云うは中諦ちゆうたいなり空と仮と中とを三諦さんたいと云う事なれば百界・千如・三千世間ひゃくかいせんによさんぜんせけんまで多くの法門ほうもんと成りたりと云へども唯一つの三諦さんたいにてある事なり、されば始の三如是さんたいの三諦さんたいと終の七如是しちさんたいの三諦さんたいとは唯一つの三諦さんたいにて始と終と我が一身の中の理にて唯一物たつたにて不可思議ふかしぎなりければ本と末とは究竟くきようして等しとは説き給たまへるなり、

是これを如に是よ本末究竟等ほんまつくきようとうとは申もうしたるなり、始の三如是にを本とし終の七如是にを末として十の如是ににてあるは我が身の中の三諦さんたいにてあるなり、此の三諦さんたいを三身如来さんじんによらいとも云へば我が心身より外には善惡ぜんあくに付けてかみすぢ計ばかりの法もなき物をされば我が身が頓やがて三身即一さんじんの本覺ほんがくの如来によらいにてはありける事なり、是これをよそに思うを衆生しゆじやうとも迷まよいとも凡夫ぼんぷとも云うなり、是これを我が身の上と知りぬ

るを如来にょらいとも覺さとりとも聖人しょうにんとも智者ちしやとも云うなり、かう解さとり明あきらかに観
ずれば此の身頓やがて今生こんじやうの中に本覺ほんがくの如来にょらいを顯あらわはして即身成仏そくしんじやうぶつとはいは
るるなり、譬たとえば春夏しゆんか・田を作りうへつれば秋冬しゅうとうは蔵おさに収めて心のまま
に用うるが如ごとし春より秋をまつ程は久しき様なれども一年の内に待ち
得るが如ごとく此の覺さとりに入つて仏を顯あらわはす程は久しき様なれども一生の内
に顯あらわはして我が身が三身さんじん即一の仏となりぬるなり。

此の道に入ぬる人にも上中下じやうちゆうげの三根はあれども同じく一生の内に顯
はすなり、上根じやうこんの人は聞く所にて覺さとを極きくめて顯あらわはす、中根の人は若もし
一日・若もしは一月・若もしは一年に顯あらわはすなり、下根げこんの人はのびゆく所なくて
つまりぬれば一生の内に限りたる事なれば臨終りんじゆうの時に至りて諸もろのみえ
つる夢も覺さとてうつつになりぬるが如ごとく只今ただまでみつる所の生死妄想しやうじもうそうの邪
思しひがめの理はあと形もなくなりて本覺ほんがくのうつつの覺さとりにかへりて法界ほっかいを

みれば皆寂光の極樂にて

ひころいやし
日来賤と思ひし我が此の身が三身即一の本覺の如来にてあるべきなり、

秋のいねには早と中と晩との三のいね有れども一年が内に収むるが

ごとこ
如く、此れも上中下の差別ある人なれども同じく一生の内に諸仏如来

と一体不二に思い合せてあるべき事なり。

みようほうれんげきよう
妙法蓮華經の体のいみじくおはしますは何様なる体にて・おはします

たす
ぞと尋ね出してみれば我が心性の八葉の白蓮華にてありける事なり、

みようほうれんげきよう
されば我が身の体性を妙法蓮華經とは申しける事なれば經の名にては

あらずして・はや我が身の体にてありけると知りぬれば我が身頓て

ほけきよう
法華經にて法華經は我が身の体をよび顯し給いける仏の御言にてこそ

さんじん
ありければやがて我が身三身即一の本覺の如来にてあるものなり、か

はつろ
く覺ぬれば無始より已来今まで思い

ならわしし・ひが思いの妄想もうそうは昨日の夢を思いやるが如くごと・あとかたも
なく成りぬる事なり、是これを信じて一遍いっぺんも南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと申せば
法華經ほけきやうを覺さとて如法に一部をよみ奉たてまつるにてあるなり、十遍は十部・百遍
は百部・千遍は千部を如法によみ奉たてまつるにてあるべきなり、かく信ずるを
如説修行によせつしゆぎやうの人とは申もうすなり、南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやう。

◆五七

一念三千法門

正嘉二年 三十七歳御作

412P

法華經ほけきやうの余經よきやうに勝すぐれたる事何事なにことぞ此この經きやうに一心三觀いつしんさんかん・一念三千いちねんさんぜんと云
う事ことあり、藥王菩薩やくおうぼさつ・漢土かんどに出世しゅつせして天台大師てんだいだいしと云われ此この法門ほうもんを覺さと
り給たまいしかども先まづず玄義げんぎ十卷しゅく・文句もんく十卷しゅく・覺意三昧かくいさんまい・小止觀しやん・淨名疏じやうみやうじよ・
四念處ねんじよ・次第禪門しだいぜんもん等の多おほくの法門ほうもんを説ときしかども此この一念三千いちねんさんぜんの法門ほうもん
をば談たまじ給たまはず百界ひやくかい・千如せんじよの法門ほうもん計はかりなり、御年おんねん五十七の夏四月こしうの比ひ・
荊州玉泉寺けいしゅうぎよくせんじと申もうす處ところにて御弟子章安大師おんでししやうあんだいいしに教たまえ給たまふ止觀しやんと申もうす文
十卷じしゅくあり、上四帖じやうしふてしに猶秘なほし給たまいて但六即そく・
四種三昧等計ししゆざんまいばかりなり、五の卷いに至いたつて十境じゆきやう・十乘じしゆじやう・一念三千いちねんさんぜんの法門ほうもんを立た

て夫れ一心に具す等と云云是より二百年後に妙樂大師釈して云く
当に知るべし身土一念の三千なり故に成道の時此の本理に称て一身
一念法界に遍し」と云云、此の一念三千・一心三觀の法門は法華經の一
の卷の十如是より起れり、文の心は百界・千如・三千世間云云、さて
一心三觀と申すは余宗は如是とあそばす是れ僻事にて二義かけたり
天台・南岳の御義を知らざる故なり、されば当宗

には天台の所釈の如く三遍説に功德まさる、第一に是相如と相性体力
以下の十を如と云ふ如と云うは空の義なるが故に十法界皆空諦なり
是を読み觀ずる時は我が身即・報身如来なり八万四千又は般若とも
申す、第二に如是相

是れ我が身の色形顯れたる相なり是れ皆仮なり相性体力以下の十なれ
ば十法界皆仮諦と申して仮の義なり是を読み觀ずる時は我が身即・

応身如来なり又は解脱とも申す、第三に相如是と云うは中道と申して仏の法身の形なり是を読み観ずる時は我が身即・法身如来なり又は中道とも法性とも涅槃とも寂滅とも申す、此の三を法報応の三身とも空仮中の三諦とも法身・般若・解脱の三徳とも申す此の三身如来全く外になし我が身即・三徳究竟の体にて三身即一身の本覚の仏なり、是をしるを如来とも聖人とも悟とも云う知らざるを凡夫とも衆生とも迷とも申す。

十界じゅうがいの衆生しゅじやう・各互かくごに十界じゅうがいを具足ぐそくす合がっすれば百界ひやくがいなり百界ひやくがいに各各十
如にょを具ぐすれば千如せんにょなり、此この千如せんにょ是にに衆生しゅじやう世間せけん・国土こくど世間せけん・五陰ごおん世間せけん
を具ぐすれば三千さんぜんなり、百界ひやくがいと顯あらわれたる色相しきさうは皆みな總そうて仮けの義ぎなれば仮諦けたい
の一いなり千如せんにょは總そうて空くうの義ぎなれば空諦くうたいの一いなり三千世間さんぜんせけんは總そうじて法身ほふしん
の義ぎなれば中道ちゆうどうの一いなり、法門ほふもん多おほしと雖いえども但さん三諦さんたいなり此この三諦さんたい
を三身さんじん如來にょらいとも三徳さんとく究竟くきやうとも申もうすなり始はじの三如さんにょ是は本覺ほんがくの如來にょらいなり、
終はつの七如しちにょ是と一體いつたいにして無二むに無別むべつなれば本末ほんまつ究竟くきやう等とうとは申もうすなり、本
と申もうすは仏性ぶつじやう・末まつと申もうすは未顯みけんの仏ぶつ・九界くきやうの名ななり究竟くきやう等とうと申もうすは
妙覺みやうかく究竟くきやうの如來にょらいと理即りそくの凡夫ぼんぷなる我等われらと差別さべつ無なきを究竟くきやう等とうとも
平等びやうどう大慧だいゑの法華經ほふけきやうとも申もうすなり、始はじの三如さんにょ是は本覺ほんがくの如來にょらいなり本覺ほんがくの
如來にょらいを悟さとり出だし給たまへる妙覺みやうかくの仏ぶつなれば我等われらは妙覺みやうかくの父母ふぼなり仏ぶつは
我等われらが所生しよしやうの子こなり、止とどの一いに云いく正ただは則すなわち 仏ぶつの母はは・觀そくは即すなわち 仏ぶつの父ちちなり

り」と云云、譬^{たと}えば人十人あらんずるが面面に藏藏に宝をつみ我が藏

に宝のある事を知らずかつへ死しこごへ死す、或^{ある}は一人此の中にかし

こき人ありて悟り出すが如^{ごと}し九人は終^{つい}に知らず、然^{しか}るに或^{ある}は

教えられて食し、或^{ある}はくくめられて食するが如^{ごと}し、弘^ぐの一の止觀^{しかん}の二字

は正^{まさ}しく聞^{もん}体を示す聞かざる者は本末究竟^{ほんまつくきやう}等も徒^{いたず}らか、子なれども親

にまさる事多し重華^{ちやうか}はかたくなはしき父を敬^{けん}いて賢^{けん}人の名を得たり、

沛公^{はいこう}は帝王^{ていおう}と成つて後も其^その父を拜^そす其の敬われし父をば全く王とい

はず敬^{けん}いし子をば王と仰^{あお}ぐが如^{ごと}し、其^それ仏は子なれども賢^{かしこ}くましまし

て悟り出し給^{たま}へり、凡^{ぼん}夫^ふは親なれども愚癡^{ぐち}にして未^{いま}だ悟らず委^{くわ}しき義を

知らざる人・毘盧^{びる}の頂上^{ちやうじやう}をふむなんど惡口^{あくぐ}す大なる僻事^{ひがごと}なり。

一心三觀^{いっしんさんかん}に付いて次第^{しだい}の三觀^{さんかん}・不次第^{ふしだい}の三觀^{さんかん}と云う事あり委^{くわ}く申^{もう}す

に及^{およ}ばず候、此^{さんかん}の三觀^{さんかん}を心得^{こころえ}すまし成就^{じやうじゆ}したる處^{ところ}を華嚴經^{けこんぎやう}に三界唯^{さんがいただ}

一心いっしんと云云、天台てんだいは諸水入海しよすいとのぶ、仏ぶつと我等われらと総て一切衆生いっさいしゆじやう・理性りしやう

一にて・へたてなき

を平等びやうどうだいえ大慧だいゑと云うなり、平等びやうどうと書いてはおしなべてと読む、此の

一心いっしん三觀さんかん・一念いちねん三千さんぜんの法門ほうもん・諸經しよきやうにたえて之これな無し法華經ほけきやうに遇あわざれば

争いかでか成仏じやうぶつす可べきや、余經よきやうには六界八界ろっかいより十界じゅっかいを明あきらせどもさらに具

を明あきらかさず、法華經ほけきやうは

念念に一心三觀・一念三千の謂を觀ずれば我が身本覺の如來なること
悟り出され無明の雲晴れて法性の月明かに妄想の夢醒て本覺の月輪い
さぎよく父母所生の肉身・煩惱具縛の身・即本有常住の如來となるべ
し、此を即身成仏とも煩惱即菩提とも生死即涅槃とも申す、此の時
法界を照し見れば悉く中道の一理にて仏も衆生も一なり、され
ば天台の所釈に「二色一香中道に非ざること無し」と釈し給へり、此の
時は十方世界皆寂光淨土にて何れの處をか弥陀薬師等の淨土とは云
わん、是を以て法華經に「是の法は法位に住して世間の相常住なり」と
説き給ふさては經をよまずとも心地の觀念計りにて成仏す可きかと
思いたれば一念三千の觀念も一心三觀の觀法も妙法蓮華經の五字に納
れり、妙法蓮華經の五字は又我等が一心に納りて候けり、天台の所釈
に此の妙法蓮華經は本地甚深の奥蔵

三世さんぜの如来にょらいの証得しょうとくしたもう所なり」と釈しゃくしたり、さて此この妙法蓮華經みょうぼうれんげきやうを唱となうる時心中しんちゆうの本覺ほんかくの仏顯あらわる我等われらが身と心をば藏たとに譬たとへ妙の一字を印たとに譬たとへたり、天台てんだいの御釈ぎしやくに秘密ひみつの奥藏おうそうを發ひらく之これを稱しょうして妙と為す、權實ごんじつの正軌しょうきを示す故ゆえに号して法と為す、久遠くおんの本果を指す之これを喩たとうるに蓮を以てす、不二の円道に會えす之これを譬たとうるに華を以てす、声仏事を為す之なを稱しょうして經と為す」と釈しゃくし給う、又妙とは不可思議ふかしぎの法を褒美ほうびするなり又妙とは十界じゅうがい・十如

・權實ごんじつの法なり」と云云、經の題目を唱となうると觀念かんねんと一なる事心得こころえがたとしと愚癡ぐちの人は思たまい給ふべし、されども天台止の二に而於說默に おせつ もくと云へり、説とは經・默とは觀念かんねんなり、又四教義しきやうの一に云く、但功とうこんの唐捐とうけんならざるのみに非あらず亦能またよく理に契あうの要なるをや」と云云、天台大師てんだいだいしと申もうすは藥王菩薩やくおうぼさつなり此この大師だいいしの説而觀而せつにかんにと釈しゃくし給ふ元より天台の

所しよ釈しゃくに因いん縁ねん・約やつ教きよう・本ほん・迹せき・觀かん心じんの四種ししゆの御ご釈しゃくあり四種ししゆの重おもを知らずし
て一ひと・しなを見たる人ひと・二ふた・向かう本ほん・迹せきをむね

とし一向いっこう觀かん心じんを面おもてとす、法ほ華け經きやうに法ほ譬つ因いん縁ねんと云いう事ことあり法ほ說せつの段だんに
至いたつて諸しよ仏ぶつ出しゅ世ぜの本ほん懷かい・二ふた・切い衆さう生じやう・成じやう仏ぶつの直じき道どうと定じやうむ、我われのみならず
一い切い衆さう生じやう・直じき至し道どう場じやうの因いん縁ねんなりと定じやうめ給たまいしは題だい目もくなり、されば天てん台だい
玄げんの一ひとに衆しゆ善ぜんの小せう行かうを会えして広くわ大だいの一いち乘じやうに歸かへす」と広くわ大だいと申もうすは残ざん
らず引ひ導どうし給たまうを申もうすなり、仮たと使い釈しゃく尊そん一ひと人じん本ほん懷かいと宣のべ給たまう

とも等覺とうかく以下は仰あおいで此の經を信ず可べし況いわんやや諸仏出世しよぶつしゅつせの本懷ほんかいなり、
禪宗ぜんしゅうは觀心かんじんを本懷ほんかいと仰あおぐとあれども其は四種いちねんさんぜんの一面なり、一念三千・
一心三觀等いっしんさんかんの觀心かんじん計はかりが法華經ほけきょうの肝心かんじんなるべくば題目だいもくに十如是じゆのぜを置く
べき処ところに題目だいもくに妙法蓮華經みょうほうれんげきょうと置かれたる上は子細しさいに及およばず、又当世とうせの
禪宗ぜんしゅうは教外別伝きやうげべつでんと云いい給たまうかと思おもへば又捨すられたる円覺經えんかく等の文を引
かるる上は実經じつきやうの文に於おいて御綺おいろえに及およぶべからず候、智者ちしやは読誦どくじゆに觀念かんねん
をも並なぶべし愚者ぐしやは題目だいもく計はかりを唱なふ

とも此の理に會あう可べし、此の妙法蓮華經みょうほうれんげきやうとは我等われらが心性しんしよ・總じては
一切衆生いっさいしゆじやうの心性しんしよ八葉はちようの白蓮華びやくれんげの名なり是これを教たまえ給たまふ仏の御詞ごことばなり、
無始むしより以來いらい・我が身中の心性しんしよに迷まよひて生死しやうじを流轉るてんせし身今・此の經に
値あひ奉たてまつて三身さんじん即すなはち一の本覺ほんかくの如來にやらいを唱となうるに顯あらわれて現世げんせに其内証ないしやう
成仏じやうぶつするを即身成仏そくしんじやうぶつと申もうす、死すれば光を放はなつ是れ外用じやうぶつの成仏じやうぶつと

申す

来世得作仏とは是なり、略拳経題・玄収一部とて一遍は一部云云、
妙法蓮華経と唱うる時心性の如来顕る耳にふれし類は無量阿僧祇劫
の罪を滅す一念も随喜する時即身成仏す縦ひ信ぜざれども種と成り
熟と成り必ず之に依て成仏す、妙樂大師の云く若は取・若は捨・耳
に經て縁と成る、或いは順・或いは違終いに斯れに因つて脱す」と云
云、

日蓮云く若取・若捨・或順・或違の文肝に銘ずる詞なり法華経に
若有聞法者等と説れたるは是か、既に聞く者と説れたり觀念計りにて
成仏すべくば若有觀法者と説かるべし、只天台の御料簡に十如是と云
うは十界なり此の十界は一念より事起り十界の衆生は出来たりけり、
此の十如是と云は妙法蓮華経にて有けり此の娑婆世界は耳根得道の国

なり以前に申す如く当知身土と云云、一切衆生の身に百界・千如・三千世間を納むる謂を明が故に是を耳に触るる一切衆生は功徳を得る衆生なり、一切衆生と申すは草木・瓦礫も一切衆生の内なるか、有情、抑草木は何ぞ金☆論に云く「草一木・一礫一塵・各一仏性・各一因果・具足縁了」等と云云、法師品の始に云く「無量の諸天・竜王・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩羅伽・人と非人と及び比丘・比丘尼、妙法蓮華經の一偈・一句を聞いて乃至一念も隨喜せん者は我皆阿耨多羅三藐三菩提の記を与え授く」と云云、非人とは総じて人界の外一切有情界とて心

あるものなり況や人界をや、法華經の行者は如説修行せば必ず一生の中
に一人も残らず成仏す可し、譬えば春夏田を作るに早晚あれども
一年の中には必ず之を納む、法華の行者も上中下根あれども必ず一
生の中に証得す、玄の一に云く、上中下根皆記☆を与う」と云云、
觀心計りにて成仏せんと思ふ人は一方かけたる人なり、況や教外別伝
の坐禪をや、法師品に云く、衆王多く人有て在家・出家の菩薩の道を行
ぜんに若し是の法華經を見聞し誦誦し

書持し供養すること得ること能わずんば當に知るべし是の人は未だ善
く菩薩の道を行ぜず、若し是の經典を聞くこと得ること有らば乃ち能
善菩薩の道を行ずるなり」と云云、觀心計りにて成仏すべくんば争か
見聞誦誦と云わんや、此の經は専ら聞を以て本と為す凡此の經は惡人
・女人・二乘・闍提を簡ばず故に皆成仏道とも云ひ又平等大慧とも云

う、善惡不二・邪正一如と聞く処にやがて内証成仏す故に即身成仏
と申し一生に証得するが故に一生妙覺と

云ふ、義を知らざる人なれども唱ふれば唯仏と仏と悦び給ふ我即歡喜

・諸仏亦然云云、百千合せたる薬も口にのまざれば病愈えず蔵に宝を

持ども開く事をしらずしてかつ懐に薬を持ても飲まん事をしらずして

死するが如し、如意宝珠と云う玉は五百弟子品の此の經の徳も又此く

の如し、觀心を並べて読めば申すに及ばず觀念せずと雖も始に申しつる

ごとく所謂諸法如是相如云云と読む時は如是空の義なれば我が身の

先業にうくる所の相性体力其の

具する所の八十八使の見惑・八十一品の思惑・其の空は報身如来なり、

所謂諸法如是相云云とよめば是れ仮の義なれば我が此の身先業に依つ

て受けたる相性体力云云其の具したる塵沙の惑悉く即身応身如来な

り、所謂諸法如是いわゆるしよほうによぜと読む時は是れ中道ちゅうどうの義に順じて業に依よつて受くる所の相性等云云、其に随したがいたる無明皆退むみょうみなしりぞいて即身法身の如來そくしんほっしんと心を開く、此の十如是じゆのぜ・三転によまるる事・三身即一身・一身即三身さんじんそくの義なり三に分るれども一なり一に定まれども三なり。

◆五八

十法界事

正元元年

三十八歳御作

417P

二乗三界を出でざれば即ち十法界の數量を失う云云、問う
十界互具を知らざらん者六道流轉の分段の生死を出離して變易の土
に生ず可きや、答う二乗は既に見思を断じ三界の生因無し底に由つて
か界内の土に生る事を得ん是の故に二乗永く六道に生ぜず、故に玄の
第二に云く「天れ變易に生るに則ち三種有り三藏の二乗・通教の二乗
・別教の三十心」已上此の如き等の人は皆通惑を断じ變易の土に生ずる
ことを得て界内分段の不淨の国土に生ぜず。
難じて云く小乗の教は但是れ心生の六道を談じて是れ心具の六界

を談ずるに非ず、是の故に二乗は六界を顯さず心具を談ぜず云何ぞ但
六界の見思を断じて六道を出ず可きや、故に寿量品に云える一切
世間・夫人・阿修羅と

は爾前・迹門・両教の二乗・三教の菩薩並に五時の円人を皆天人・修羅
と云う豈に未断見思の人と云うに非ずや、答う十界互具とは法華の
淵底此の宗の冲微なり四十余年の諸經の中には之を秘して伝えず、
但し四十余年の諸の經教の中に無數の凡夫見思を断じて無漏の果を
得能く二種の涅槃の無為を証し塵数の菩薩・通別の惑を断じ頓に二種
の生死の縛を超ゆ、無量義經の中に四十余年の諸經を挙げて未顯真実
と説くと雖も而も猶爾前・三乗の益を許す、法華の中に於て
正直捨方便と説くと雖も尚見諸菩薩授記作仏と説く此くの如き等の
文爾前の説に於て当分の益を

許すに非ずや、但し爾前の諸經に二事を説かず謂く実の円仏無く又
久遠実成を説かず故に等覺の菩薩に至るまで近成を執する思い有り
此の一辺に於て天人と同じく能迷の門を挙げ生死煩惱・一時に断壊す
ることを証せず故に唯未顯真実と説けり、六界の互具を明さざるが
故に出ず可からずとは此の難甚だ不可なり、六界互具せば即ち
十界互具す可し何となれば権果の心生とは六凡の差別なり心生を觀
ずるに何ぞ四聖の高下無からんや。

第三重の難に云く所立の義誠に道理有るに似たり委く一代聖教の
前後を☆うるに法華本門並に觀心の智慧を起さざれば円仏と成らず、
故に実の凡夫にして權果だも得ず所以に彼の外道五天竺に出でて四
顛倒を立つ、如來出世して四顛倒を破せんが為に苦・空等を説く此れ
則ち外道の迷情を破せんが為なり、是の故に外道の我見を破して無我
に住するは火を捨てて以て水に隨うが如し堅く無我を執して見思を斷
じ六道を出ずると謂えり、此れ迷の
根本なり故に色心俱滅の見に住す大集等の經經に斷常の二見と説
くは是れなり、例せば有漏外道の自らは得道すと念えども無漏智に望
むれば未だ三界を出でざるが如し、仏教に値わずして三界を出ずると
いわば是の処有ること無し小乗の二乗も亦復是くの如し、鹿苑施小
の時外道の我を離れて無我の見に住す此の情を改めずして四十余

年草庵に止宿するの思い暫くも離るる時無し、又大乗の菩薩に於て心生の十界を談ずと雖も而も心具の十界を論ぜず、又或る時は九界の色心を断尽して仏界の一理に進む是の故に自ら念わく三惑を断尽して變易の生を離れ寂光に生るべしと、然るに九界を滅すれば是れ則ち断見なり進んで仏界に昇れば即ち常見と爲す九界の色心の常住を滅すと欲うは豈に九法界に迷惑するに非ずや、又妙樂大師の云く但し心を觀ずと言わば則ち理に称わす」文、此の釈の意は小乗の觀心は小乗の理に称わざるのみ、又天台の文句第九に云く七方便並に究竟の滅に非ず」已上、此の釈は是れ爾前の前三教の菩薩も實には不成仏と云えるなり、但し未顕真実と説くと雖も三乗の得道を許ししょうじきしやほうべん正直捨方便と説くと雖も而も見諸菩薩授記作仏と云うは、天台宗に於て三種の教相有り第二の化導の始終の時

過去かこの世よに於おいて法華結縁ほっけけちえんの輩やから有り爾前にぜんの中に於おいて且しばらく法華ほっけの爲ために
三乘さんじょう当分とうぶんの得道とくどうを許ゆるす所謂いわれる種熟脱しゅじゅくだつの中の熟益じゅくやくの位ゐなり是こは尚迹門なとしやくもんの
説せつなり、本門ほんもん觀心くあんの時ときは是これ実義じつぎに非あらず一往いちおう許ゆるすのみ、其その実義じつぎを論
ずれば如来久遠にょらいくおんの本ほんに迷まよい一念三千いちねんさんぜんを知らざれば永えいく六道ろくどうの流轉るてんを
出でず可べからず、故ゆえに釈しやくに云いく「円乘えんじょうの外がわを名なけて外道げどうと爲なす」文ぶん、又
諸善男子しよぜんなんし・樂がく於お小法しょうぼう・德薄垢重者とくはつくじゆう」と説せつく若もし爾しかれば經きやう・積しやく・共きに道理どうり
必然ひつぜんなり、答こたう執難しつなん有ありと雖いえども其その義ぎ

ふか
不可なり、所以は如来の説教は機に備りて虚からず是を以て頓等の
しきよう
四教蔵等の四教八機の爲に設くる所にして得益無きに非ず、故に
むりようぎきよう
無量義経には是の故に衆生の得道差別あり」と説く、誠に知んぬ
ついに無上菩提を成ずる

ことを得ず」と説くと雖も而も三法・四果の益無きに非ず、但是れ
そくしつとんじよう
速疾頓成と歴劫迂回との異なるのみ、是れ一向に得道無きに非ざる
なり、是の故に・或は三明六通も有り・或は普現色身の菩薩も有り縦い
いっしんさんかん
一心三觀を修して以て同体の三惑を断ぜずとも既に析智を以て見思
を断ず何ぞ二十五有を出でざらん、是の故に解釈に云く 若し
しゅじよう
衆生に遇うて小乗を修せしめば我則ち慳貪に墮せん此の事不可なり
として祇二十五有を出す」已上、当に知るべし此の事不可と説くと雖も
しか
而も出界有り但是れ不思議の空を觀ぜざるが故に不思議の空智を

顕あらわさずと雖いえども何なんぞ小分の空解くうげを起さざらん、若し空智くうちを以て見思けんじを断だんぜずと云わば開善しやうぜんの無声聞しやうもんの義に同ずるに非あらずや、況いはんやや今の經は正直捨權しやうじきしやこん・純円じゆんえんいちじつ一実もろもろにぜんの説なり諸の爾前しやうもんの声聞しやうもんの得益とくやくを挙あげて諸漏しよろすで已に尽つきて復煩惱またぼんのう無し」と説とき又実もろもろに阿羅漢あらかんを得・此の法を信ぜず是ここの处こゝ有ありること無し」と云い又三百由旬ひやくくじゆんを過すぎて一城を化作けさす」と説く、若し諸もの声聞もろもしやうもん全く凡夫ぼんぷに同ぜば五百由旬ひやくくじゆん一步も行く可べからず。

又云く、百みづから所得くどくの功德くどくに於て滅度めつどの想を生じて当に涅槃まさはに入るべし、我余国ねはんに於て作仏さぶつして更に異名いみよう有らん是この人滅度めつどの想を生じて涅槃ねはんに入ると雖いえども而も彼の土に於て仏の智慧ちえを求めて是この經を聞くことを得ん」已上、此の文既すでに証果しやうかの羅漢らかん・法華ほつげの座に來らずして無余ねはん涅槃ねはんに入り方便土ほうべんに生じて法華ほつげを説くを聞くと見えたり、若し

爾しからば既すでに方便ほうべん土に生じて何いかんぞ見思けんじを断だんぜざらん是かくの故ゆえに天台てんだい・
妙楽みょうらくも彼土得聞しやく」と釈しやくす、又爾前にぜんの菩薩ぼさつに於おいて始めて我が身を見我
が所説しよせつを聞いて即すなわち皆信受みなしんじゆし如来慧にょらいに入りにき」と説ゆえく、故ゆえに知んぬ
爾前にぜんの諸もろもろの菩薩ぼさつ三惑さんかくを断除だんじよして仏慧ぶつてに入ふつてることを、故ゆえに解釈げしやくに云いく初
後の仏慧円頓ぶつてえんどんの義齊ぎひとし」已上。

・或あるは云いく故ゆえに始終しじゆうを拳あぐるに意こころ・仏慧ぶつてに在あり」と若もし此等これらの説相せつそう
經きやう釈しやく共きに非義ひぎならば正直捨權しやうじきしやくけんの説・唯ゆゑ以一

大事の文・妙法華經・皆是眞実の証・誠皆以て無益なり皆是眞実の言は
豈一部八卷に亘るに非ずや、釈迦・多宝・十方分身の舌相・至梵天の
神力・三世諸仏の誠諦・不虛の証・誠・空く泡沫に同ぜん、但し小乗の
断常の二見に至つては且く大乘に對して小乗を以て外道に同ず小益
無きに非ざるなり、又七方便並に究竟の滅に非ざるの釈・或は復但し
心を觀ずと言わば則ち理に稱わずとは又是れ円実の大益に對して七
方便の益を下して並に非究竟滅・即不称理と釈す
るなり。

第四重の難に云く法華本門の觀心の意を以て一代聖教を按ずるに
菴羅果を取つて掌中に捧ぐるが如し、所以は何ん迹門の大教起れば
爾前の大教亡じ・本門の大教起れば迹門・爾前亡じ・觀心の
大教起れば本・迹爾前共に亡ず此れは是れ如来所説の聖教・從淺至深して

次第に迷を転ずるなり、然れども如来の説は一人の爲にせず此の大道を説きて迷情除かざれば生死出で難し、若し爾前の中に八教有りとは頓は則ち華嚴・漸は則ち三昧・秘密と不定とは前四味に亘る・歳は則ち阿含・方等に亘る・通は是れ方等・般若・円・別は是れ則ち前四味の中に鹿苑の説を除く、此くの如く八機各各不同なれば教説も亦異なり四教の教主亦是れ不同なれば当教の機根余仏を知らず、故に解釈に云く各各仏独り其の前に在すと見る」已上。

人天の五戒・十善・二乗の四諦・十二・菩薩の六度・三祇・百劫・或は動逾塵劫・或は無量阿僧祇劫・円教の菩薩の初発心時・便成正覚・明かに知んぬ機根別なるが故に説教亦別なり、教別なるが故に行も亦別なり行別なるが故に得果も別なり此れ即ち各別の得益にして不同なり。

然るに今法華方便品に「衆生をして仏知見を開かしめんと欲す」と
説き給う爾の時八機並に惡趣の衆生悉く皆同じく釈迦如来と成り
互に五眼を具し一界に十界を具し十界に百界を具せり、是の時・爾前
の諸經を思惟するに諸經の諸仏は自界の二乗を二乗も又菩薩界を具
せず三界の人天の如きは成仏の望絶えて二乗・菩薩の斷惑即ち是れ

自身じしんの斷惑だんかくなりと知らず、三乗さんじょう四乗しじょうの智慧ちえは四惡趣しあくしゅを脱のがるるに似たり
と雖いえども互たがいに界界かいを隔へだつ而しかも皆みな是これ一体いつたいなり、昔むかしの經きやうは二乗にじょうは但ただ自界じかいの
見思けんじを斷除だんじよすると思おもうて六界ろくかいの見思けんじを斷きずることを知らず菩薩ぼさつも亦また
是かくくの如ごとし自界さんかくの三惑だんじんを斷ほ盡じんせんと欲ほすと雖いえども六界ろくかい二乗にじょうの三惑さんかくを斷きず
ることを知らず、真実しんじつに証しやうする時は一衆生しゆじやうそく即しゆじやう十衆生しゆじやう・十衆生しゆじやう即しゆじやう一
衆生しゆじやうなり、若もし六界ろくかいの見思けんじを斷だんぜざれば二乗にじょうの見思けんじを斷べず可べからず
是かくくの如ごとく説いくと雖いえども迹門しやくもんは但ただ九界くかいの情じやうを
改あらため十界じゆつかい互具かいごを明めいす故ゆゑに即すなわち円仏えんぶつと成なるなり、爾前にぜん当分とうぶんの益えきを嫌きらうこ
と無なきが故ゆゑに「三界さんがいの諸漏しよろう已すでに尽つき三百由旬ひやくゆじゆんを過すぎて始はめて我身わがみを見
る」と説いけり又爾前にぜん入滅にゅうめつの二乗にじょうは實じつには見思けんじを斷だんぜず故ゆゑに六界ろくかいを出いで
ずと雖いえども迹門しやくもんは二乗にじょう作仏さくぶつが本懷ほんかいなり故ゆゑに彼かの土どに於おいて是この經きやうを聞
くことを得え」と説いく、既すでに彼かの土どに聞きこふことを得え」と云いう故ゆゑに知しんぬ

爾前の諸經には方便土無し故に實には實報並に常寂光も無し、菩薩の成仏を明す故に實報・寂光を仮立

す然れども菩薩に二乗を具す二乗成仏せずんば菩薩も成仏す可からざるなり、衆生無辺誓願度も満せず二乗の沈空尽滅は即ち是れ菩薩の沈空尽滅なり凡夫六道を出でざれば二乗も六道を出ず可からず、尚下劣の方便土を明さず況や勝れたる實報・寂光を明さんや、實に見思を断ぜば何ぞ方便を明さざらん菩薩實に實報・寂光に至らば何ぞ方便土に至ること無らん、但断無明と云うが故に仮りに實報・寂光を立つと雖も而も上の二土無きが故に同居の中に於て影現の實報・寂光を仮立す、然るに此の三百由旬は實には三界を出ずること無し迹門には但是れ始覺の十界互具を説きて未だ必ず本覺本有の十界互具を明さず故に所化の大衆能化の円仏皆是れ悉く始覺なり、若し爾らば

本無今有の失何ぞ免るることを得んや、当に知るべし四教の四仏則ち
円仏と成るは且く迹門の所談なり是の故に無始の本仏を知らず、故に
無始無終の義欠けて具足せず又無始・色心常住の義無し但し是の法
は法位に住すと説くことは未来常住にして是れ過去常に非ざるなり、
本有の十界互具を顕さざれば本有の大乗菩薩界無きなり、故に知んぬ
迹門の二乗は未だ見思を断ぜず迹門の菩薩は未だ無明を断ぜず六道
の凡夫は本有の六界に住せざれ

ば有名無実なり。

故に涌出品に至つて爾前・迹門の断無明の菩薩を五十小劫・半日の

如しと謂えり」と説く是れ則ち寿量品の久遠円仏の非長非短・不二の

義に迷うが故なり、爾前・迹門の断惑とは外道の有漏断の退すれば

起るが如し未だ久遠を知らざるを以て惑者の本と為すなり、故に四十

一品断の弥勒・本門立行の發起・影響・当機・結縁の地涌千界の衆を知

らず、既に一分の無始の無明を断じて十界の一分の無始の法性を得れ

ば何ぞ等覚の菩薩を知らざらん、設い

等覚の菩薩を知らざるも争でか当機・結縁の衆を知らざらん乃ち不識

一人の文は最も未断三惑の故か、是を以て本門に至つては則ち爾前・

迹門に於て随他意の釈を加え又天人・修羅に摂し「貪著五欲・妄見網

中・為凡夫顛倒」と説き、釈の文には我坐道場不得・一法」と云う

蔵通両仏の見思断も別円二仏の無明断も並に皆見思無明を断ぜず
故に隨他意と云う、所化の衆生三惑を断ずと謂えるは是れ実の断に
非ず答の文に開善の無声聞の義に同ず

とは汝も亦光宅の有声聞の義に同ずるか、天台は有無共に破し給う
なり、開善は爾前に於て無声聞を判じ光宅は法華に於て有声聞を判
ず故に有無共に難有り、天台は爾前には則ち有り今經には則ち無し
所化の執情には則ち有り長者の見には則ち無し」此くの如きの破文
皆是れ爾前・迹門相對の釈にて有無共に今の難には非ざるなり、
但し七方便並に究竟の滅に非ず又但し心を觀ずと云わば則ち理に
称わず」との釈は円益に対し当分の益を下して「並非究竟滅、
即不称理」と云うなりと云うは金☆論には偏に清淨の真如を指す尚
小の真を失えり仏性安んぞ在らん」と云う釈をば云何が会す可き、

但し此の尚失小真の釈は常には出だす可からず最も秘藏す可し、但し

「

妙法蓮華經皆是真実」の文を以て迹門に於て爾前の得道を許すが故に
爾前得道の義有りと云うは此れは是れ迹門を爾前に対して真実と説
くか、而も未だ久遠実成を顕さず是れ則ち彼の未顕真実の分域なり
所以に無量義經に大莊嚴等の菩薩の四十余年の得益を挙ぐるを仏の答
えたもうに未顕真実の言を以てす、又涌出品の中に弥勒疑つて

云く 如来太子にやらいたいしな為りし時し釈の宮を出でて伽耶城がやを去ること遠からず、
乃至四十余年ないしよんじゅうよねんを過ぐす「已上いじやう仏答えて云く「一切世間の天人いっさいせけんてんにん及び阿修羅あしゅら
は皆みな今の釈迦牟尼しやかむに仏は釈氏の宮を出で伽耶城がやを去ること遠からずして
三菩提ぼだいを得たりと謂おもえり我実じやうぶつに成仏してより以来いらい「已上、我実成仏と
は寿量品じゅうりやうほん已前いぜんを未顕真実みけんしんじつと云うに非ずあらや是かくの故ゆえに記の九に云く 晋
七方便ほうべんより誠諦じやうたいに至るまでは七方便ほうべんの権と言いはうは且しばらく昔の権に寄す
若もし果門くわもんに対すれば権実こんじつ俱ともに是これ隨他意ずいたい
なり」已上、此の釈は明あきらかに知んぬ迹門しやくもんをも尚なお隨他意ずいたいと云うなり、
寿量品じゅうりやうほんの皆実不虛かいじつふこを天台てんだい釈しやくして云く 円頓えんどんの衆生しゆじやうに約しやくすれば迹本二
門もんに於おて一実一虚いちじついつこなり」已上、記の九に云く 故ゆえに知んぬ迹しやくの実じつは本に
於おて猶虚なほなり」已上、迹門しやくもん既すでに虚なること論に及およぶ可べからず但ただし
皆かい是いぜしんじつ真実ほんもんとは若もし本門ほんもんに望もちむれば迹しやくは是これ虚なりと雖いえども一座の内に

於て

虚実こじつを論ゆえず故に本・迹両門俱ともに真実しんじつと言うなり、例せば迹門しやくもん法説の時

の譬説いんねん因縁の二周も此の一座に於て聞知もんちせざること無し故に名けて顯

と為すが如し、記の九に云く若し方便教は二門俱ともに虚なり因門開し

竟りて果門に望むれば則ち一実一虚なり本門顯れ竟れば則ち二種

俱に実なり」已上、此の釈の意は本門未だ顯れざる以前は本門に對

すれば尚迹門を以て名けて虚と為す若し本門顯れ已りぬれば迹門の

仏因は即ち本門の仏果なるが故に天月水月本有の法と成りて本・迹

俱に三世常住と顯るるなり、一切衆生の始覺を名けて迹門の円因と

言ひ一切衆生の本覺を名けて本門の円果と為す修一円因感一円果と

は是なり、是くの如く法門を談ずるの時迹門・爾前は若し本門顯れず

んば六道を出でず何ぞ九界を出でんや。

◆五九

爾前二乗菩薩不作仏事

正元元年三十

八歳御作

424P

問うて云く二乗永不成仏の教に菩薩の作仏を許す可きや、答えて云く楞伽經第二に云く天慧何者か無性乘なる、謂く一闍提なり。大慧・一闍提とは涅槃の性無し何を以ての故に解脱の中に於て信心を生ぜず涅槃に入らず、大慧一闍提とは二種あり何等をか二と為す一には一切の善根を梵焼す、二には一切衆生を憐愍して一切衆生界を尽さんとの願を作す大慧・云何が一切の善根を梵焼する謂く菩薩蔵を謗じて是くの如きの言を作す、彼の修多羅・毘尼・解脱の説に随順するに非ず諸の善根を捨つと是の故に涅槃を得ず、大慧・衆生を憐愍し

て衆生界しゅじょうを尽さんとの願ねがひを作おこす者は是これを菩薩ぼさつと為なす、大慧菩薩だいえぼさつは方便ほうべんして願ねがひを作なす若もし諸もろもろの衆生しゅじょうの涅槃ねはんに入いらざる者ものあらば我またも亦ねはん涅槃ねはんに入いらずとは是かくのゆえの故ゆえに菩薩摩訶薩ぼさつまかさつ涅槃ねはんに入いらず、大慧・是これを二種ふたしゅの一闍提いっせんだい無涅槃性ねはんと名なく是この義ぎを以もつての故ゆえに決定けつじよう

して一闍提いっせんだいの行ぎやうを取とる、大慧菩薩だいえぼさつ・仏ぶつに白もうして言いわく世尊せそん此この二種ふたしゅのいっせんだい一闍提いっせんだい何等いっせんだいの一闍提いっせんだいか常ねはんに涅槃ねはんに入いらざる、仏ぶつ、大慧だいえに告つげたまわく菩薩摩訶薩ぼさつまかさつの一闍提いっせんだいは常ねはんに涅槃ねはんに入いらず何を以もつての故ゆえに能よ善いっさいく一切いっさい諸法しよぼう本来涅槃ねはんなりと知るを以もつて是かくのゆえの故ゆえに涅槃ねはんに入いらず一切いっさいの善根ぜんこんを捨せんつる闍提せんだいには非あらず、何を以もつての故ゆえに大慧彼れ一切いっさいの善根ぜんこんを捨せんつる闍提せんだいは若もし諸仏しよぶつ・善知識等ぜんちしきに値あいたてまつれば菩提心ぼだいしんを發おこし諸もろもろの善根ぜんこんを生なじて便すなわち涅槃ねはんを証あかしす」等と云云、此この經文きやうもんに若もし諸もろもろの衆生しゅじょう涅槃ねはんに入いらざれば我またも亦ねはん涅槃ねはんに入いらじ」等云云。

前ぜん四味しほみの諸經しよきやうに二乗にじやう作さ仏ぶつを許ゆるさず之これを以もつて之これを思おもうに四味諸經しよきやうの
四教しきやうの菩薩ぼさつも作さ仏ぶつ有あり難がたきか、華嚴經けこんきやうに云いく衆生界しゆじやう尽つきざれば我が
願またつも亦また尽つきず」等と云云、一切いっさいの菩薩ぼさつ必かならずず四弘誓願しぐせいがんを發おこす可べし其その中
の衆生しゆじやう無む辺へん誓願せいがん度どの願これ之みを満みせざれば無上菩提誓願証むじやうぼだいせいがんの願また又成なじ
難がたし、之これを以もつて之これを案あずるに四十余年よんじゅうよねんの文二乗にじやうに限にらば菩薩ぼさつの

願又成じ難きか。

問うて云く二乗成仏之無ければ菩薩の成仏も之無き正き証文

如何、答えて云く涅槃經三十六に云く、仏性は是れ衆生に有りと信ず

と雖も必ず一切に皆悉く之有らず是の故に名けて信不具足と為す」と

三十六本三十二、此の文の如くんば先四味の諸菩薩は皆一闡提の人なり

二乗作仏を許さず二乗の作仏を成ぜざるのみに非ず、將又菩薩の作仏

も之を許さざる者なり、之を以て之を思うに四十余年の文二乗作仏を

許さずんば菩薩の成仏も又之無きなり、

一乗要決の中に云く、涅槃經三十六に云く、仏性は是れ衆生に有りと

信ずと雖も必ず一切皆悉く之有らず是の故に名けて信不具足と為す

と三十六本三十二、第三十一に説く一切衆生及び一闡提に悉く仏性有り

と信ずるを菩薩の十法の中の第一の信心具足と名くと、三十六本第三十、

一切衆生悉有仏性を明すは是れ少分に非ず、若し猶堅く少分の一切
なりと執せば唯經に違するのみに非ず亦信不具なり何に因つてか樂つ
て一闡提と作るや此れに由つて全分の有性を許すべし理亦一切の成仏
を許すべし○」

慈恩の心經玄贊に云く 天悲の辺に約すれば常に闡提と為る大智の
辺に約すれば亦當に作仏すべし、宝公の云く大悲闡提は是れ前經の
所説なり前説を以て後説を難ず可からざるなり諸師の釈意大途之に
同じ」文、金☆の註に云く 境は謂く四諦なり百界三千の生死は即ち苦
なり此の生死即ち是れ涅槃なりと達するを衆生無辺誓願度と名く百
界三千に三惑を具足す此の煩惱即ち是れ菩提なりと達するを煩惱
無辺誓願断と名く生死即涅槃と円の仏性を証するは即ち仏道無上
誓願成なり、惑即菩提にして般若に非ざること無ければ即ち法門無尽

誓願せいがん知ちなり、惑智わくち無二なれば生仏せいぶつ体同たいどうじ苦集くしゅう唯心ゆいしんなれば四弘しぎゅう融攝りゅうしやくす
一即そくい一切いっさいなりとは斯この言徴ごんしるし有り」文、慈覺じかく大師だいしの速証すみしやう仏位集ぶつゐしふに云く
第一だいいちに唯今ただこんきやう經の力用りきよう仏の下化衆生げけしゆじやうの願みだを満みす故ゆゑに世よに出いでて之これを説しやく
く所謂いふゆる諸仏しよぶつの因位いんゐ・四弘しぎの願みだ・利生りしやう斷惑だんなく・知法ちほふ作さぶつ仏ぶつなり然しかるに因円いんゑん果満かまん
なれば後の三さんの願みだは満みず、利生りしやうの一願いちゑん甚はなはだだ満みじ難がたしと為なす彼の華嚴けこん
の力ちから十界じふかい皆みな仏道ぶつどう

を成じやうずること能あたわず阿含・方等・般若はんやも亦爾またしかなり後番の五味・皆成かいじやう
仏道ぶつどうの本懐ほんかいなる事能あたわず、今・此の妙經みやうきやうは十界皆成じゅうかいがいじやう仏道ぶつどうなること
分明ふんみやうなり彼の達多・無間むげんに墮だするに天王仏の記を授け竜女成りゆうにょじやう仏し
十羅刹女じじうらせつにょも仏道ぶつどうを悟り阿修羅あしゅらも成じやう仏の總記そうきを受け人天・二乗・三教の
菩薩ぼさつ・円妙えんみやうの仏道ぶつどうに入る、經に云く我が昔の所願しよがんの如ごときは今者いま已すでに
満足まんぞくしぬ一切衆生いっさいしじやうを化して皆みな仏道ぶつどうに入らしむと云云、衆生界しじやう尽つきざ
るが故ゆゑに未だいま仏道ぶつどうに入らざる衆生しじやう有りと雖いえども然しかれども十界皆成じゅうかいがいじやう仏す
ること唯今經ただこんきやうの力に在り故ゆゑに利生りしやうの本懐ほんかいなり」と云云。

又云く第一いっに妙經みやうきやうの大意たいいを明あかさば諸仏しよぶつは唯ゆゑ一大事いっだいじの因縁いんねんを以もつ
ての故ゆゑに世に出現しゆつげんし一切衆生いっさいしじやう悉有しつしやう仏性ぶつじやうと説き聞法・觀行・皆當みなまさに作さぶつ仏
すべし、抑そも仏何の因縁いんねんを以もつて十界の衆生しじやう悉しつく三因さんいん仏性ぶつじやう有りと説ときた
もうや、天親菩薩てんじんぼさつの仏性論ぶつじやうろん縁起分えんぎの第一だいいちに云く如來五種にょらいごしゆの過失を除き

五種の功徳を生ずるが爲に故に一切衆生・悉有仏性と説きたもう已上
謂く五種の過失とは一には下劣心・二には高慢心・三には虚妄執・四に
は眞法を謗じ・五には我執を起すなり、
五種の功徳とは一には正勤・二には恭敬・三には般若・四には闍那・五
には大悲なり、生ずること無しと疑うが故に大菩提心を発すること
能わざるを下劣心と名け、我に性有つて能く菩提心を発すと謂えるを
高慢と名け、一切の法無我の中に於て有我的執を作すを虚妄執と名
け一切諸法の清淨の智慧功徳を違謗するを謗眞法と名け意唯己を存
して一切衆生を憐むことを欲せざるを起我執と名く此の五に翻対して
定めて性有りと知りて菩提心を発す」と。

日蓮 花押

◆六〇

十法界明因果抄

文応元年五月三十九歳

御作沙門 しゃもん

日蓮撰 にちれん

427P

八十華嚴經六十九に云く 普賢道に入ることを得て十法界を了知

す」と、法華經第六に云く 地獄声・畜生声・餓鬼声・阿修羅声比丘声

・比丘尼声人道天声天道声聞声辟支仏声・菩薩声・仏声」と已上十法界

名・目なり。

第一に地獄界とは觀仏三昧經に云く 五逆罪を造り因果を撥無し

大衆を誹謗し四重禁を犯し虚く信施を食するの者・此の中に墮す」と

阿鼻地・正法念經に云く 殺盜・婬欲・飲酒・妄語の者・此の中に墮す

と獄なり、正法念經

に云く 昔酒を以て人に与えて酔わしめ已つて調戲して之を翫び彼を
して羞恥せしむるの者・此の中に墮す」と獄なり、正法念經に云く 殺生
・偷盜・邪淫の者・此の中に墮す」と獄なり、涅槃經に云く 殺に三種有
り謂く下中上なり○下とは蟻子乃至一切の畜生乃至下殺の因縁を
以て地獄に墮し乃至具に下の苦を受く」文。

問うて云く十惡・五逆等を造りて地獄に墮するは世間の道俗皆之を
知れり謗法に依つて地獄に墮するは未だ其の相貌を知らざる如何、答
えて云く堅慧菩薩の造・勒那摩提の訳・究竟一乘宝性論に云く 衆
小法を行じて法及び法師を謗じ○如来の教を識らずして説くこと
修多羅に背いて是真實義と言ふ」文、此の文の如くんば小乗を信じ
て真實義と云い大乘を知らざるは是れ謗法なり、天親菩薩の説・真諦
三藏の訳・仏性論に云く 若し大乘に憎背するは此はは一闡提の因な

り衆生しゆじやうをして此この法ぽうを捨てしむるを為なすの故ゆゑに「文、此この文ぶんの如ごとくんば
大小だいしやう流布るふの世よに一向いっかうに小乘しやうじやうを弘ひろめ自身じしんも大乘だいじやうに背そむき人ひとに於おいても
大乘だいじやうを捨てしむる是これを謗法ぼうぽうと云いふなり、天台大師てんだいだいしの梵網經ぼんもうきやうの疏じよに
云いく謗ごは是これ乖背けはいの名な・☆て是これ解す・理りに称かなわらず言実ごんじつに当あたらず異解いげし
て説とくく者を皆名みなけて謗ごと為なすなり己おのが宗そうに背そむくが故ゆゑに罪つみを得え」文、
法華經ほけきやうの譬喻品ひゆほんに云いく 若もし人信しんぜずして此この經きやうを毀謗きぼうせば則すなわち一切いっさい
世間せけんの仏種ぶつしゆを断たんぜん

ないしそ 乃至其の人 命終して阿鼻獄に入らん」文、此の文の意は小乗の三賢
已前・大乘の十信已前・末代の凡夫の十惡・五逆・不孝父母・女人等を
嫌わず此等法華經の名字を聞いて、或題名を唱え一字・二句・四句・一
品・二卷・八卷等を受持し誦誦し乃至亦上の如く行ぜん人を隨喜し
讚歎する人は法華經よりの外、一代の聖教を深く習い義理に達し堅
く大小乗の戒を持てる大菩薩の如き者より勝れて往生成仏を遂ぐ
可しと説くを信ぜずして還つて法華經は地住
已上の菩薩の爲、或は上根・上智の凡夫の爲にして愚人惡人・女人末代
の凡夫等の爲には非ずと言わん者は即ち一切衆生の成仏の種を断じて
阿鼻獄に入る可しと説ける文なり、涅槃經に云く 仏の正法に於て永
く護惜建立の心無し」文、此の文の意は此の大涅槃經の大法世間に
滅尽せんを惜まざる者は即ち是れ誹謗の者なり、天台大師

法華經ほけきようの怨敵おんてきを定めて云く、聞きこく事を喜ばざる者を怨おんと為なす」文、
謗法ぼうぼうは多種たいていなり大小流布だうしやうふの国に生れて一向いつこうに小乘しょうじやうの法がくを学まなして身を
治め大乘だいじやうに遷うつらざるは是れ謗法ぼうぼうなり、亦華嚴またけこん・方等ほうとう・般若等はんにかの諸
大乘經だいじやうきやうを習しえる人も諸經しよきやうと法華經ほけきようと等同の思しを作なし人をして等同の
義ぎを学まなばしめ法華經ほけきように遷うつらざるは是れ謗法ぼうぼうなり、亦偶またたま円機えんき有ある人の
法華經ほけきようを学まなぶをも我が法ほに付つけて世利むさばを貪ためるが為ために汝なんじが機きは法華經ほけきよう
に当あたらざる由よしを称しょうして此の經きやうを捨すてて權經ごんきやうに遷うつらしむるは是れ大謗法ぼうぼうな
り、此こくの如ごとき等は皆地獄みなじごくの業えんなり人間にんげんに生なずること過去かこの五戒ごかいは強
く三惡道さんあくどうの業因ごういんは弱じやくきが故ゆえに人間にんげんに生なずるなり、亦当世またとうせの人も五逆ごぎやく
を作つくる者は少すくく十惡じゅうあくは盛さかんに之これを犯またたます亦偶またたま後世ごしやうを願ねがう人の十惡じゅうあくを犯
さずして善人ぜんにんの如ごとくなるも自然じねんに愚癡ぐちの失とがに依よつて身口しんくは善よくく意こころは
惡にくしき師しを信しんず、但我ただの此この邪法じゃほうを信しんずるに非あらず国くにを知行ちぎやうする人・

人民じんみんを聳すめて我が邪法じゃほうに同ぜしめ妻子さいし・眷属けんぞく・所従しよじゅうの人を以もて亦聳またすめ従

え我が行を行ぜ

しむ、故ゆえに正法しょうほうを行ぜしむる人に於おいて結縁けちえんを作なさず亦民また・所従しよじゅう等に
於おいても随喜ずいきの心を至さしめず、故ゆえに自他じた共に謗法ぼうぼうの者と成りて修善止しゅうぜん
惡ごの如ごとき人も自然じねんに阿鼻地獄あびじごくの業を招まねくこと末法まつぼうに於おいて多分たぶん之れ有あ
か。

阿難尊者あなんそんじやは淨飯王じょうはんの甥こくはんのう・斛飯王こくはんのうの太子たいし・提婆達多だいばだつたの舍弟しゃてい・釈迦しゃか如来にょらい
の従子いとこなり、如来にょらいに仕え奉たてまつて二十年にふたご覺意かくい

さんまい 三昧を得て一代聖教を覚れり、仏入滅の後・阿闍世王・阿難を帰依
し奉る、仏の滅後四十年の此阿難尊者一の竹林の中に至るに一りの
比丘有り一の法句の偈を誦して云く 若し人生じて百歳なりとも水の
潦涸を見ずんば生じて一日にして之を覩見することを得るに如かず」已
上、阿難此の偈を聞き比丘に語つて云く此れ仏説に非ず汝修行す
可らず爾時に比丘阿難に問うて云く仏説は如何、阿難答えて云く若人
生じて百歳なりとも生滅の法を解せずんば生じて一日にして之を解了
することを得んには如かず已上此の文仏説なり、汝が唱うる所の偈は
此の文を謬りたるなり、爾の時に比丘・此の偈を得て本師の比丘に
語る、本師の云く我汝に教うる所の偈は眞の仏説なり阿難が唱う
る所の偈は仏説に非ず阿難年老衰して言錯謬多し信ず可らず、此の
比丘亦阿難の偈を捨てて本の謬りたる偈を唱う阿難又竹林に入りて

之を聞くに我が教うる所の偈に非ず重ねて之を語るに比丘信用せざり
き等云云、仏の滅後四十年にさえ既に謬り出来せり何に況んや仏の
滅後既に二千余年を過ぎたり、仏法天竺より唐土に至り唐土より日本
に至る論師三蔵・人師等伝来せり定めて謬り無き法は万が一なるか、
何に況や当世の学者偏執を先と為し

て我慢を挿み火を水と諍い之を糾さず 偶 仏の教の如く教を宣ぶる
学者をも之を信用せず故に謗法ならざる者は万が一なるか。

第二に餓鬼道とは正法念經に云く 晋財を貪りて屠殺せるの者・此
の報を受く」と、亦云く 丈夫自ら美食を☆い妻子に与えず・或は婦人
自ら食して夫子に与えざるは此の報を受く」と、亦云く 名利を貪るが
為に不浄說法する者・此の報を受く」と、亦云く 晋酒を☆に水を加
うる者・此の報を受く」と、亦云く 君し人勞して少物を得たる

を誑惑おおわくして之これを取り用もちいける者・此むくいの報を受く」と、亦云く・晋行路人の病苦ありて疲極ひごくせるに其その売うりものを欺き取り直あたい与あたうること薄少なりし者・此むくいの報を受く」と、又云く・晋刑獄けいごくを典主つかさどり・人の飲食おんじきを取りし者・此むくいの報を受く」と、亦云く・晋陰涼樹おんりょうじゆを伐り及び衆僧しゅうそうの園林きを伐りし者・此むくいの報を受く」と文、法華經ほけきやうに云く・君もし人信ぜずして此の

經を毀謗せば○常に地獄に処すること園觀に遊ぶが如く余の惡道に在ること己が舍宅の如し」文、慳貪・偷盜等の罪に依つて餓鬼道に墮することは世人知り易し、慳貪等無き諸の善人も謗法に依り亦謗法の人に親近し自然に其の義を信ずるに依つて餓鬼道に墮することは智者に非ざれば之を知らず能く能く恐る可きか。

第三に畜生道とは愚癡無慙にして徒に信施の他物を受けて之を償わざる者・此の報を受くるなり、法華經に云く「若し人信ぜずして此の經を毀謗せば○當に畜生に墮すべし」文已上三惡道なり。

第四に修羅道とは止觀の一に云く「若し其の心念念に常に彼に勝らんことを欲し耐えざれば人を下し他を輕しめ己を珍ぶこと鶏の高く飛びて下視が如し而も外には仁・義・礼・智・信を掲げて下品の善心を起し阿修羅の道を行ずるなり」文。

第五に人道とは報恩經に云く 三歸五戒は人に生る」文。

第六に天道とは二有り、欲天には十善を持ちて生れ色無色天には下地は苦障・上地は静妙離の六行觀を以て生ずるなり。

問うて云く六道の生因は是くの如し 抑同時に五戒を持ちて人界の生を受くるに何ぞ生盲・聾・☆☆☆☆・背僂・貧窮・多病・瞋恚等無量の差別有りや、答えて云く大論に云く 若は衆生の眼を破り若は衆生の眼を屈り若は正見の眼を破り罪福無しと言わん是の人死して地獄に墮し罪畢つて人と為り生れて従り盲なり、若は復仏塔の中の火珠及び諸の灯明を盗む是くの如き等の種種の先世の業・因縁をもて眼を失うなり○聾とは是れ先世の因縁師父の教訓を受けず行ぜず而も反つて瞋恚す是の罪を以ての故に聾となる、復次に衆生の耳を截り若は衆生の耳を破り若は仏塔僧塔

諸の善人・福田の中の☆椎・鈴・貝及び鼓を盗む故に此の罪を得るなり、先世に他の舌を截り・或は其の口を塞ぎ・或は惡業を与えて語ることを得ざらしめ、或は師の教・父母の教勅を聞き其の語を断つ○

世に生れて人と為り唾にして言うこと能わず○先世に他の坐禪を破り
坐禪の舎を破り諸の咒術を以て人を咒して瞋らし闍靜し姪欲せしむ
今世に諸の結使厚重なること婆羅門の其の稻田を失い其の婦復死して
即時に狂発し裸形にして走りしが如くならん、先世に仏・阿羅漢・
辟支仏の食及び父母所親の食を奪えば仏世に値うと雖も猶故飢渴す
罪の重きを以ての故なり、○先世に好んで鞭杖・拷掠・閉繫を行じ種種
に悩すが故に今世の病を得るなり○先世に他の身を破り其の頭を截り
其の手足を斬り種種の身分を破り、或は仏像を壊り仏像の鼻及び諸の
賢聖の形像を
毀り、或は父母の形像を破る是の罪を以ての故に形を受くる多く具足
せず、復次に不善法の報身を受くること醜陋なり」文、法華經に云く
若し人信ぜずして此の經を毀謗せば○若し人と為ることを得ては

諸根闇鈍にして盲・聾・背偃ならん○口の氣常に臭く鬼魅に著せられん貧窮下賤にして人に使われ多病瘠瘦にして依怙する所無く○若は他の叛逆し抄劫し竊盜せん是くの如き等の罪横に其の殃に羅らん」文。

又八の卷に云く 若し復是の經典を受持する者を見て其の過惡を出さん若は実にもあれ若は不実にもあれ此の人は現世に白癩の病を得ん若し之を輕笑すること有らん者は当に世世に牙齒疎欠・醜き脣・平める鼻・手脚繚戻し眼目角☆に身体臭穢にして惡瘡・膿血・水腹・短氣諸の惡重病あるべし」文、問うて云く何なる業を修する者が六道に生じて其の中の王と成るや、答えて云く大乘の菩薩戒を持して之を破る者は色界の梵王・欲界の魔王・帝釈・四輪王・禽獸王・閻魔王等と成るなり、心地觀經に云く 諸王の受くる所の諸の福

樂は往昔會つて三の淨戒じようかいを持し戒徳薰修かいとくくんじゅうして招き感ずる所・人天にんてんの妙果王みょうかおうの身を獲○中品ちゆうばんに菩薩戒ぼさつを受持じゆじすれば福徳自在じざいの轉輪王てんりんおうとして心の所作しよさ

に随したがつて尽ことごとく皆成むりようじ無量にんてんの人天ことごと悉じゆんぼうく遵奉じようばんす、下の上品じようばんに持じすれば大鬼王だいきおうとして一切いっさいの非人ことごと咸りつぷくく率伏かいほんす戒品じゆじを受持けつほんして欠犯いえどすと雖も戒まさの勝まさるるに由よるが故ゆえに王なと為なることを得・下の中品ちゆうばんに持じすれば禽獸きんじゅうの王まさとして一切いっさいの飛走みなきふく皆歸伏しようじようす清淨しやうじやうの戒おいに於おて欠犯けつほん有あるも戒まさの勝まさるるに由よるが故ゆえに王なと為なることを得、下の下品げばんに持じすれば☆魔王えんまおうとして地獄じごく

の中に処して常に自在なり禁戒を毀り惡道に生ずと雖も戒の勝るるに
由るが故に王と爲る事を得○若し如来の戒を受けざる事有れば終に
野干の身をも得ること能わず何に況んや能く人天の中の最勝の快樂を
感じて王位に居せん」文、安然和尚の広釈に云く、菩薩の大戒は持して
法王と成り犯して世王と成る而も戒の失せざることを譬え
ば金銀を器と成すに用ゆるに貴く器を破りて用いざるも而も宝は失せ
ざるが如し」亦云く、無量壽觀に云く劫初より已來八万の王有つて其の
父を殺害すと此則ち菩薩戒を受けて國王と作ると雖も今・殺の戒を
犯して皆地獄に墮れども犯戒の力も王と作るなり」大仏頂經に云く
「究心の菩薩罪を犯せども暫く天神・地祇と作る」と、大隨求に
云く「天帝・命尽きて忽ち驢の腹に入れども隨求の力に由つて還つて
天上に生ず」と、尊勝に云く「善住天子・死後七返畜生の身に墮すべ

きを尊勝そんしょうの力ちからに由よつて還かえつて天てんの報むくいを得たり」と、昔國王こくおう有り千車を
もて水みづを運び仏塔ぶつとうの焼やくるを救きうう自ら☆心こころを起おこして阿修羅王あしゅらと作る、
昔・梁べいの武帝ぶてい五百ごの袈裟けさを須弥山しゅみせんの五百ごの羅漢らかんに施ほどこす、誌公しこう云いく・往五
百ひゃくに施ほどこすに一ひとりの衆しゆを欠つみけり罪つみを犯おかして暫しばらく人王にんわうと作る即すなわち武帝ぶてい是これ
り、昔國王こくおう有あつて民たみを治おさむること

等ひとしからず今・天王てんわうと作なれども大鬼王だいきわうと為なる、即すなわち東南西とうなんせいの三天王さんてんわう是これ
り拘留孫くわうそんの末すえに菩薩ぼさつと成なりて発誓はつせきし現げんに北方毘沙門びしゃもんと作なる是これなり」云
云これら、此等これらの文ぶんを以もつて之これを思しうに小乘戒しょうじやうかいを持もして破やぶる者ものは六道ろくどうの民たみと
作つくり大乘戒だいじやうかいを破はする者ものは六道ろくどうの王わうと成なり持もする者ものは仏ぶつと成なる是これなり。

第七しちに声聞道しょうもんどうとは此この界がいの因果いんがをば阿含あこん・小乘しょうじやう・十二年じふにねんの經きやうに
分明ぶんめいに之これを明あきらせり、諸大乘經しよだいじやうきやうに於おいても大おほいに對たいせんが為ために亦また之これをば明
せり、声聞しょうもんに於おいて四種ししゆ有あり一ひとには優婆塞うばそく・俗男ぞくなんなり五戒ごかいを持もし苦くる・空くう・

無常・無我の觀を修し自調自度の心強くして敢て化他の意無く見思
を断尽して阿羅漢と成る此くの如くする時自然に髪を剃るに自ら落つ
、二には優婆夷・俗女なり五戒を持し髪を剃るに自ら落つること男の
如し三には比丘僧なり二百五十戒具足なりを持して苦・空・無常・無我の觀
を修し見思を断じて阿羅漢と成る此くの如くするの時・髪を剃らざれ
ども生ぜず、

四に比丘尼なり五百戒を持す余は比丘の如し、一代諸經に列座せる
舍利弗・目連等の如き声聞是なり永く六道に生ぜず亦仏・菩薩とも成
らず灰身滅智し決定して仏に成らざるなり、小乗戒の手本たる
尽形寿の戒は一度依身を壞れば永く戒の功德無し、上品を持すれば
二乗と成り中下を持すれば人天に生じて民と爲る之を破れば三惡道
に墮して罪人と成るなり、安然和尚の広釈に云く『三善は世戒なり因
生して果を感じ業尽きて惡に墮す譬えば楊葉の秋至れば金に似れども
秋去れば地に落つるが如し、二乗の小戒は持する時は果拙く破る時は
永く捨つ譬えば瓦器の完くして用うるに卑しく若し破れば永く失する
が如し』文。

第八に緣覺道とは二有り一には部行獨覺・仏前に在りて声聞の如く
小乗の法を習い小乗の戒を持し見思を断じて永不成仏の者と成る、

二には鱗喩^{りんゆどつかく}独覺・無仏の世に在りて飛花落葉^{ひけらくよう}を見て苦・空・無常・無我^{むじよう}の觀^なを作し見思^{けんじ}を斷じて永不成仏^{ようふじようぶつ}の身と成る戒も亦^{また}声聞^{しょうもん}の如^{ごと}し此の聲聞^{しょうもん}・緣覺^{えんかく}を二乗^{にじよう}とは云うなり。

第九に菩薩界^{ぼさつ}とは六道^{ろくどう}の凡夫^{ぼんぶ}の中に於て自身^{おの}を輕んじ他人^{たにん}を重んじ惡^{もつ}を以て己に向け善^{もつ}を以て他に与えんと念^{おも}う者有り、仏此^この人の爲^{ため}に諸の大乗經^{もろもろだいじようきよう}に於て菩薩戒^{ぼさつ}を説きたまえり、此の菩薩戒^{ぼさつ}に於て三有^{さん}り一には摂善法戒^{せつぜんぽうかい}・所謂^い八万四千の法門^{はちまん}を習^{なら}い尽さんと願^{ねが}ふ、二には饒益有情戒^{にようやくうじよう}・一切衆生^{いっさいしゆじよう}を度しての後に自ら成仏^{みずかじようぶつ}せんと欲^ほする是なり、三には摂律儀戒^{せつりつぎかい}・一切の諸戒^{しよ}を盡く持せんと欲^ほする是なり、華嚴經^{けこんきよう}の心を演^のぶる梵網經^{ぼんもうきよう}に云く、仏諸^{もろもろ}の仏子^{ぶつし}に告^いげて言^{いわ}く十重^{じゆじゆ}の波羅提^{はらだい}木叉^{ぼくしや}有り若^もし菩薩戒^{ぼさつ}を受けて此^この戒を誦^{じゆ}せざる者は菩薩^{ぼさつ}に非^{あら}ず仏の種子^{しゆし}に非^{あら}ず我^{われ}も亦是^{また}くのごと^{ごと}誦^{じゆ}す一切^{いっさい}の菩薩^{ぼさつ}は已^{すで}に學^{がく}し一切^{いっさい}の菩薩^{ぼさつ}は

当にまさにがく學いっさいし一切いっさいの菩薩ぼさつは今學まなす」文、菩薩ぼさつと言いわうは二乘にじようを除のいて
一切いっさいの有情うじようなり、小乘しょうじようの如ごときは戒じに隨したがつて異ことなるなり、菩薩戒ぼさつじは爾しからず
一切いっさいの有心いっさいに必かならずず十重じゅうじゆう禁等きんとうを授さずく一戒いっかいを持じするを一分いちぶんの菩薩ぼさつと云いい
具ぐに十分じふぶんを受うくるを具足ぐそくの菩薩ぼさつと名なく、故ゆえに瓔珞經ようらくきやうに云いく「二分にぶんの戒
を受うくること有あれば一分いちぶんの菩薩ぼさつと名なけ乃至な至二分・三分・四分・十分なる
を具足ぐそくの受戒じゆかいと云いう」文。

問うて云く二乗を除くの文如何、答えて云く梵網經に菩薩戒を受くる者を列ねて云く若し仏戒を受くる者は國王・王子・百官・宰相・比丘・比丘尼・十八梵天・六欲天子・庶民・黃門・姪男・姪女・奴婢・八部・鬼神・金剛神・畜生・乃至變化人にもあれ但法師の語を解するは是く戒を受得すれば皆第一清淨の者と名く」文、此の中に於て二乗無きなり、方等部の結經たる瓔珞經にも亦二乗無し、問うて云く二乗所持の不殺生戒と菩薩所持の不殺生戒と差別如何、答えて云く所持の戒の名は同じと雖も持する様並に心念永く異なるなり、故に戒の功德も亦淺深あり、問うて云く異なる様如何、答えて云く二乗の不殺生戒は永く六道に還らんと思わす故に化導の心無し亦仏菩薩と成らんと思わす但灰身滅智の思を成すなり、譬えば木を燒き灰と為しての後に一塵も無きが如し故に此の戒をば瓦器に譬う破れて後用うることに無きが故

なり、菩薩は爾らず饒益有情戒を發して此の戒を持するが故に機を見て五逆・十惡を造り同く犯せども此の戒は破れず還つて彌弼戒体を全くす、故に瓔珞經に云く「犯すこと有れども失せず未來際を尽くす」文、故に此の戒をば金銀の器に譬う完くして持する時も破する時も永く失せざるが故なり、問う

て云く此の戒を持する人は幾劫を経てか成仏するや、答えて云く瓔珞經に云く「未だ住前に上らざる○若は一劫二劫三劫乃至十劫を経て初住の位の中に入ることを得」文、文の意は凡夫に於て此の戒を持するを信位の菩薩と云う、然りと雖も一劫二劫乃至十劫の間は六道に沈輪し十劫を経て不退の位に入り永く六道の苦を受けざるを不退の菩薩と云う未だ仏に成らず還つて六道に入れども苦無きなり。

第十に仏界とは菩薩の位に於て四弘誓願を發すを以て戒と為す

三僧祇の間・六度万行を修し見思・塵沙・無明の三惑を断尽して仏と
成る、故に心地観經に云く三僧企耶大劫の中に具に百千の諸の苦行
を修し功德円満にして法界に遍く十地究竟して三身を証す」文、因位
に於て諸の戒を持ち仏果の位に至つて仏身を莊嚴す三十二相・八十
種好は即ち是の戒の功德の感ずる所なり、但し仏果の位に至れば戒体
失す譬えば華の果と成つて華の形無きが

如し、故に天台の梵網經の疏に云く、佞果に至つて乃ち廃す」文、問うて云く梵網經等の大乘戒は現身に七逆を造れると並に決定性の二乗とを許すや、答えて云く梵網經に云く、若し戒を受けんと欲する時は師・問い言うべし汝現身に七逆の罪を作らざるやと、菩薩の法師は七逆の人の与に現身に戒を受けしむることを得ず」文、此の文の如くんば七逆の人は現身に受戒を許さず、大般若經に云く、若し菩薩設い恒河沙劫に妙の五欲を受くるとも菩薩戒

に於ては猶犯と名けず若し一念二乗の心を起さば即ち名けて犯と爲す」文、大莊嚴論に云く、恒に地獄に処すと雖も大菩提を障らず若し自利の心を起さば是れ大菩提の障なり」文、此等の文の如くんば六凡に於ては菩薩戒を授け二乗に於ては制止を加うる者なり、二乗戒を嫌うは二乗所持の五戒・八戒・十戒・十善戒・二百五十戒等を嫌うに非ず

彼の戒は菩薩も持す可し但二乗の心を嫌うなり、夫れ以みれば持戒
は父母・師僧・国王・主君の一切衆生・三宝の恩を報ぜんが為なり、
父母は養育の恩深し一切衆生は互に相助くる恩重し国王は正法を
以て世を治むれば自他安穩なり、此に依つて善を修すれば恩・重し
主君も亦彼の恩を蒙りて父母・妻子・眷属・所従・牛馬等を養う、設い
爾らずと雖も一身を顧る等の恩・是重し師は亦邪道を閉じ正道に趣か
しむる等の恩・是深し仏恩は言うに及ばす是くの如く無量の恩分之有
り、而るに二乗は此等の報恩皆欠けたり故に一念も二乗の心を起すは
十惡・五逆に過ぎたり一念も菩薩の心を起すは一切諸仏の後心の功德
を起せるなり、已上四十余年の間の大小乗の戒なり、法華經の
戒と言うは二有り、一には相待妙の戒二には絶待妙の戒なり、先ず
相待妙の戒とは四十余年の大小乗の戒と法華經の戒と相對して爾前

を☆戒そかいと云いい法華經ほけきょうを妙戒みょうかいと云うて諸經しよきょうの戒かいをば未顯みけん眞實しんじつの戒かい・
歷劫修行りやくきやうしゆぎやうの戒かい・決定性けつじやうせいの二乗戒にじやうかいと嫌きらうなり、法華經ほけきょうの戒かいは眞實しんじつの戒かい・
速疾頓成そくしつとんじやうの戒かい・二乗にじやうの成仏じやうぶつを嫌きらわざる戒等かいどうを相對そうたいして☆妙みょうを論ろんずる
を相對そうたい妙みょうの戒かいと云うなり。

問いうて云いく梵網經ぼんもうきやうに云いく「衆生しゆじやう・仏戒ぶつかいを受うくれば即すなわち諸佛しよぶつの位いに入いる位大覺だいかくに同おなじ已すでに實じつに是諸佛しよぶつの子みこなり」文。

華嚴經に云く、初發心の時、便ち正覺を成ず。文、大品經に云く、

初發心の時、即ち道場に坐す。文、此等の文の如くんば、四十余年の

大乘戒に於て法華經の如く速疾頓成の戒有り、何ぞ但歷劫修行の戒な

りと云うや、答えて云く、此れに於て二義有り、一義に云く四十余年の間

に於て歷劫修行の戒と速疾頓成の戒と有り、法華經に於ては但一つの

速疾頓成の戒のみ有り、其の中に於て四十余年の間の歷劫修行の戒に

於ては法華經の戒に劣ると雖も四十余年の

間の速疾頓成の戒に於ては法華經の戒に同じ、故に上に出す所の衆生

・仏戒を受けば、即ち諸仏の位に入る等の文は、法華經の須臾聞之、即得

究竟の文に之同じ、但し無量義經に四十余年の經を挙げて、歷劫修行

等と云えるは四十余年の内の歷劫修行の戒計りを嫌うなり、速疾頓成

の戒をば嫌わざるなり、一義に云く四十余年の間の戒は一向に

歴劫修行の戒・法華經の戒は速疾頓成の戒なり、但し上に出す所の
四十余年の諸經の速疾頓成の戒に於ては凡夫地より速疾頓成するに
非ず凡夫地より無量の行を成じて無量劫を経・最後に於て凡夫地より
即身成仏す、故に最後に從えて速疾頓成とは説くなり、委悉に之を論
ぜば歴劫修行の所撰なり、故に無量義經には總て四十余年の經を
挙げて仏・無量義經の速疾頓成に對して宣説菩薩・歴劫修行と嫌いた
まえり、大莊嚴菩薩の此の義を承けて領解して云く「無量無辺
不可思議阿僧祇劫を過れども終に無上菩提を成ずることを得ず、何
を以ての故に菩提の大直道を知らざるが故に險逕を行くに留難多き
が故に、乃至大直道を行くに留難無きが故に」文、若し四十余年の間
に無量義經・法華經の如く速疾頓成の戒之れ有れば仏猥りに
四十余年の実義を隠し給うの失之れ有り云云、二義の中に後の義

を作つくる者は存知そんちの義ぎなり、相待そうたい妙みょうの戒がい是これなり、次に絶待ぜつたい妙みょうの戒がいとは
法華ほけき經きょうに於おいては別べつの戒がい無なし、爾前にぜんの戒がい即すなわち法華ほけき經きょうの戒がいなり其そのの故ゆえは
爾前にぜんの人天にんてんの楊葉ようよう戒がい・小乘しょうじょう・阿含あこん經きょうの二乘にじょうの瓦器がき戒がい・華嚴けごん・方等ほうとう・般若はんんにや
・觀經かんきやう等の

歷劫りやくじやう菩薩ぼさつの金銀戒こんごんかいの行者ぎやうじや・法華ほけき經きょうに至いたつて互たがいに和会わえして一同いつどうと成なる、
所以ゆえんに人天にんてんの楊葉ようよう戒がいの人は二乘にじょうの瓦器がき・菩薩ぼさつの金銀戒こんごんかいを具もし菩薩ぼさつの
金銀戒こんごんかいに人天にんてんの楊葉ようよう二乘にじょうの瓦器がきを具ぐす余もは以もつて知しんぬ可べし、三惡道さんあくどうの
人は現身げんしんに於おいて戒がい

無し過去に於て人天に生れし時人天の楊葉・二乗の瓦器菩薩の金銀戒
を持ち退して三惡道に墮す、然りと雖も其の功德未だ失せず之有り
三惡道の人・法華經に入る時其の戒之を起す故に三惡道にも亦十界を
具す、故に爾前の十界の人・法華經に來至すれば皆持戒なり、故に
法華經に云く是を持戒と名く「文、安然和尚の広釈に云く法華に
云く能く法華を説く是を持戒と名く」文、爾前經の如く師に随つて、戒
を持せず但此の經を信ずるが即ち
持戒なり、爾前の經には十界互具を明さず故に菩薩無量劫を経て
修行すれども二乗・人天等の余戒の功德無く但一界の功德を成ず故に
一界の功德を以て成仏を遂げず、故に一界の功德も亦成ぜず、爾前の
人・法華經に至りぬれば余界の功德を一界に具す、故に爾前の經即ち
法華經なり法華經即ち爾前の經なり、法華經は爾前の經を離れず爾前

の經は法華經を離れず是を妙法と言う、此の覺り起りて後は行者・
阿含・小乘經を讀むとも即ち一切の大乗經
を讀誦し法華經を讀む人なり、故に法華經に云く「声聞の法を決了す
れば是諸經の王なり」文、阿含經即ち法華經と云う文なり、二仏乘
に於て分別して三と説く「文、華嚴・方等・般若即ち法華經と云う文な
り、若し俗間の經書・治世の語言・資生の業等を説かんと皆正法に順
ず」文、一切の外道・老子・孔子等の經は即ち法華經と云ふ文
なり、梵網經等の權大乘の戒と法華經の戒とに多くの差別有り、一に
は彼の戒は二乗七逆の者を許さず二には戒の功德に仏果を具せず三に
は彼は歷劫修行の戒なり是くの如き等の多くの失有り、法華經に於て
は二乗七逆の者を許す上・博地の凡夫・一生の中に仏位に入り妙覺
至つて因果の功德を具するなり。

正元二年庚申四月二十一日

日蓮にちれん

花押かおう

◆六一

教機時国抄

弘長二年二月十日 四十一歳

御作

438P

本朝沙門

日蓮之を註す

一に教とは釈迦如来所説の一切の經・律・論・五千四十八卷・四百八十帙・天竺に流布すること一千年・仏の滅後・二千一十五年に當つて震旦国に仏經渡る、後漢の孝明皇帝永平十年丁卯より唐の玄宗皇帝・開元十八年庚午に至る六百六十四歳の間に一切經渡り畢んぬ、此の一切の經・律・論の中に小乗・大乘・權經・實經・顯經・密經あり此等を弁うべし、此の名目は論師・人師よりも出でず仏説より起る十方世界の一切衆生一人も無く之を用うべし之を用いざる者は外道

と知るべきなり、阿含經あこんきょうを小乘しょうじょうと説く事は方等ほうとう・般若はんにかや・法華ほっけ・涅槃ねはん等の諸大乘經しよだいじょうきょうより出でたり、法華經ほけきょうには一向いつこうに小乘しょうじょうを説きて法華經ほけきょうを説かざれば仏慳貪けんこんに墮だすべしと説きたもう、涅槃經ねはんきょうには一向いつこうに小乘經しょうじょうきょうを用いて仏を無常むじょうなりと云わん人は舌口中くちゅうに爛ただるべしと云。

二に機きとは仏教ぶつぎょうを弘ひろむる人は必ず機根きこんを知るべし舍利弗しかりほつそんじや尊者是金師きんしに不淨觀ふじょうくわんを教え浣衣かんえの者には數息觀すそくくわんを教うる間九十日かんを経て所化しよけの弟子でし仏法ぶつぽうを一分いちぶんも覺さとらずして還かえつて邪見じやけんを起し一闍提いつせんだいと成り畢おわんぬ、仏は金師きんしに數息觀すそくくわんを教え浣衣かんえの者に不淨觀ふじょうくわんを教えたもう故に須臾しゆゆの間かんに覺さとることを得たり、智慧第一ちえだいいちの舍利弗しかりほつすら尚機なおきを知らず何いかに況いや末代まつだいの凡師ぼんし機きを知り難がたし但ただし機きを知らざる凡師ぼんしは所化しよけの弟子でしに一向いつこうに法華經ほけきょうを教うべし、問うて云く無智むちの人の中にして此の經を説

くこと莫^なれとの文は如何^{いかに}、答えて云^いく機^きを知るは智人^{ちじん}の説法^{せつぽう}する事なり又謗法^{ほうぼう}の者

に向つては一向^{いっこう}に法華經^{ほけきょう}を説くべし毒鼓^{どくこ}の縁と成さんが為なり、例せば不輕菩薩^{ふきやうぼさつ}の如^{ごと}し亦智者^{またちしや}と成る可^べき機^きと知らば必ず先^しず小乘^{しょうじやう}を教え次に権大乘^{こんだいじやう}を教え後に実大乘^{じつだいじやう}を教^べう可^べし、愚者^{ぐしや}と知らば必ず先^しず実大乘^{じつだいじやう}を教^べう可^べし信謗^{しんぼう}共に下種^{げしゆ}と為^こればなり。

三に時とは仏教を弘めん人は必ず時を知るべし、譬えば農人の秋冬・田を作るに種と地と人の功勞とは違わざれども一分も益無く還つて損す一段を作る者は少損なり、一町二町等の者は大損なり、春夏耕作すれば上中下に随つて皆分分に益有るが如し、仏法も亦復是くの如し、時を知らずして法を弘めば益無き上還つて惡道に墮するなり、仏出世したもうて必ず法華經を説かんと欲するに縦い機有れども時・無きが故に四十余年には此の經を説きたまわず故に經に云く説時未だ至らざるが故なり」等と云云、仏の滅後の次の日より正法一千年は持戒の者は多く破戒の者は少し正法一千年の次の日より像法一千年は破戒の者は多く無戒の者は少し、像法一千年の次の日より末法一万年は破戒の者は少く無戒の者は多し、正法には破戒・無戒を捨て持戒の者を供養すべし像法には無戒

を捨てて破戒はかいの者を供養くようすべし、末法まっぽうには無戒むかいの者を供養くようすること仏ぶつの
如ごとくすべし但ただし法華經ほけきようを謗ぼうぜん者をば正像末しょうざうまつの三時に亘わたりて持戒じかいの者
をも無戒むかいの者をも破戒はかいの者をも共に供養くようすべからず、供養くようせば必ず国
に三災さんさい・七難ひちなん起り供養くようせし者も必ず無間むげん・大城だいじょうに墮だすべきなり、
法華經ほけきようの行者ぎようじやの權經ごんきやうを謗ぼうずるは主君しゅくん・親しん・師しの所從しよじゆう・子息しそく・弟子でし等を
罰するが如ごとし、權經ごんきやうの行者ぎようじやの法華經ほけきようを謗ぼうずるは所從しよじゆう・子息しそく・弟子でし等の
主君しゅくん・親しん・師しを罰するが如ごとし、又当世とうせは末法まっぽうに入つて二百一十余年な
り、權經ごんきやう・念仏ねんぶつ等の時か法華經ほけきようの時か能く能く時刻じこくを勘かんうべきなり。
四に国とは仏教ぶつぎやうは必ず国に依よつて之これを弘ひろむべし国には寒国かんこく・熱国ねつこく・
貧国ひんこく・富国ちふこく・中国ちゆうこく・辺国たいこく・大国しやうこく・小国いっこく・一向儉盜国いっこくせんとうこく・一向殺生国いっこくせつしやうこく・一向
不孝国等ふこうこくとう之有これあり、又一向いっこく小乗しやうじやうの国・一向大乘いっこくだいじやうの国・大小兼学だいしやうけんがくの国も
之有これあり、而しかに日本国にほんこくは一向いっこくに小乗しやうじやうの国か一向いっこくに大乘だいじやうの国か大小だいしやう

兼けん学がくの国こくなるか能よく之これを勘かんうべし。

五ごに教きょう法ぽう流る布ふの先せん後ごとは未いまだ仏ぶつ法ぽう渡わたらざる国こくには未いまだ仏ぶつ法ぽうを聴きかざる者ものあり既すでに仏ぶつ法ぽう渡わたれる国こくには仏ぶつ法ぽうを信しんずる者ものあり必かならずず先ひらに弘ひろまれる法ぽうを知しつて後のちの法ぽうを弘ひろむべし先ひらに小しょう乗じよう・權ごん大だい乗じよう弘ひろらば後のちに必かならずず実じつ大だい乗じようを弘ひろむべし先ひらに実じつ大だい乗じよう弘ひろらば後のちに小しょう乗じよう・權ごん大だい乗じようを弘ひろむべからず、瓦が礫りやくを捨すてて金こん珠じゆを取とるべし金こん珠じゆを捨すてて瓦が礫りやくを取とること勿なかれ。

已上の此の五義を知つて仏法を弘めば日本国の国師と成る可きか
ゆえん 所以に法華經は一切經の中の第一の經王なりと知るは是れ教を知る者
なり、但し光宅の法雲・道場の慧觀等は涅槃經は法華經に勝れたり
と、清涼山の澄觀・高野の弘法等は華嚴經・大日經等は法華經に勝れ
たりと、嘉祥寺の吉藏・慈恩寺の基法師等は般若・深密等の二經は
法華經に勝れたりと云う、天台山の智者大師只一人のみ一切經の中に
法華經を勝れたりと立つるのみに非ず

法華經に勝れたる經之れ有りと云わん者を諫曉せよ止まずんば現世
に舌口中に爛れ後生は阿鼻地獄に墮すべし等と云云、此等の相違を
よくよく之を弁えたる者は教を知れる者なり、当世の千万の学者等一
一に之に迷えるか、若し爾らば教を知れる者之れ少きか教を知れる者
之れ無ければ法華經を読む者之れ無し法華經を読む者之れ無ければ

国師となる者無きなり、国師となる者無ければ国中の諸人・一切經の大・小・權・実・顯・密の差別に迷うて一人に於ても生死を離るる者之れ無く、結句は謗法の者と成り法に依つて阿鼻地獄に墮する者は大地の微塵よりも多く法に依つて生死を離るる者は爪上の土よりも少し、恐る可し恐る可し、日本国の一切衆生は桓武皇帝より已来四百余年一向に法華經の機なり、例せば靈山八箇年の純円の機為るが如し大師安然和尚慧心等の記に之有り是れ機を知れるなり、而るに当世の學者の云く日本国は一向に称名念仏の機なり等と云云、例せば舍利弗の機に迷うて所化の衆を一闡提と成せしが如し。

日本国の当世は如来の滅後二千二百一十余年後・五百歳に當つて妙法蓮華經広宣流布の時刻なり是れ時を知れるなり、而るに日本国の当世の學者・或は法華經を抛ちて一向に称名念仏を行じ・或は小乘

の戒律を教えて叡山の大僧を蔑り・或は教外を立てて法華の正法を
輕しむ此等は時に迷える者か、例せば勝意比丘が喜根菩薩を謗じ徳

光論師

が弥勒菩薩を蔑りて阿鼻の大苦を招きしが如し、日本国は一向に
法華經の国なり例せば舍衛国の一向に大乘なりしが如し、又天竺には
一向に小乗の国一向に大乘の国・大小兼学の国も之有り、日本国は
一向大乘の国なり大乘

の中にも法華經の国爲る可きなり（後醍醐天皇公の記聖德太子伝教に
大師安然等の記之有り）是れ国を知れる者
なり、而るに当世の学者日本国の衆生に向つて一向に小乗の戒律を
授け一向に念仏者等と成すは譬えば宝器に穢食を入れたるが如し」
等云云の守護章に在り、日本国には欽明天皇の御宇に仏法百濟国より渡り
始めしより桓武天皇に至るまで二百四十余年の間・此の国に小乗・
権大乘のみ弘まり法華經有りと雖も其の義未だ顯れず、例せば震旦国
に法華經渡つて三百余年の間・法華經有りと雖も其の義未だ顯れざり
しが如し、桓武天皇の御宇に伝教大師有して小乗・権大乘の義を
破して法華經の実義を顯せしより已来又異義無く純一に法華經を信
ず、設い華嚴・般若・深密・阿含・大小の六宗を学する者も法華經を
以て所詮と爲す、況や天台・真言の学者をや何に況や在家の無智の者
をや、例せば崑崙山に石無く蓬萊山に毒無きが如し、建仁より已来今

に五十余年の間・大日・仏陀・禪宗を弘め、法然・隆寛・浄土宗を興し実大乘を破して權宗に付き一切經を捨てて教外を立つ、譬えば珠を捨てて石を取り地を離れて空に登るが如し
此は教法流布の先後を知らざる者なり。

仏誠めて云く「惡象に値うとも惡知識に値わざれ」等と云云、法華經の勸持品に後の五百歳二千余年に當つて法華經の敵人・三類有る可しと記し置きたまえり当世は後・五百歳に當れり、日蓮・仏語の実否を勘うるに三類の敵人之有り之を隱さば法華經の行者に非ず之を顯さば身命定めて喪わんか、法華經第四に云く「而も此の經は如来の現在にすら猶怨嫉多し況や滅度の後をや」等と云云、同じく第五に云く「一切世間怨多くして信じ難し」と、又云く、我身命を愛せず但無上道を惜む」と、同第六に云く「自ら

身命しんみょうを惜おしまず」と云云、涅槃經ねはんぎょう第九くわに云く、譬たとえば王使わうしの善能談論ぜんだんろんし
方便ほうべんに巧たくみなる命たこくを他國たこくに奉うけ寧むしろ身命しんみょうを喪うしなうとも終ついに王わうの所說しよせつの
言教げんきょうを匿かくさざるが如ごとし、智者ちしやも亦爾またしかなり凡夫ぼんぷの中に於おいて身命しんみょうを惜おしま
ずして要かならず必だいじょう大乘方等ほうとうを宣說せんせつすべし」と云云、章安大師しょうあんだいし釈しゃくして云く
寧喪身命にようそうしんみょう不匿教ふのくきょうとは身は輕く法は重し身を死して法を弘ひろめよ」等と
云云、此等これらの本文を見れば三類さんるいの敵人てきじんを

顕あらわさずんば法華經ほけきょうの行者ぎょうじやに非あらず之これを顕あらわすは法華經ほけきょうの行者ぎょうじやなり、而しかれども必ず身命しんみょうを喪うしなわんか、例せば師子尊ししそんじや者・提婆菩薩だいばぼさつ等の如ごとくならん云云。

二月十日

日蓮にちれん

花押かおう

◆六二

頭謗法抄

弘長二年 四十一歳御作

44

3P

日蓮撰
にちれん

本朝沙門
ほんちようしゃもん

第一だいいちに八大地獄だいにじごくの因果いんがを明あかし、第二だいにに無間地獄むげんじごくの因果いんがの輕重けいちようを明あかし、第三だいいちに問答料簡もんどうりようけんを明あかし、第四よっしに行者弘經ぎようじやくきやうの用心ようじんを明あかす。

第一だいいちに八大地獄だいにじごくの因果いんがを明あかさば、

第一だいいちに等活地獄とうかつじごくとは此この閻浮提えんぶだいの地ちの下・一千由旬ゆじゆんにあり此この地獄じごくは縦じゆう広かう齊さい等とうにして一万由旬ゆじゆんなり、此この中の罪人ざいにんはたがいがいに害心がいしんをいだく若もしたままた相見さうみれば犬いぬと☆とのあえるがごとし、各おのづか鉄てつの爪つめをもて

互^{たがひ}につかみさく血肉^{けつにく}既に^{すで}に尽きぬれば唯^{ただ}骨^{ほね}のみあり、或^{ある}は獄卒^{ごくそ}手に鉄杖^{てつそう}

を取^とつて頭^{こゝろ}より足^{あし}にいたるまで皆^{みな}打^うくたく身体^{しんたい}くだけで

沙^{いさご}のごとし、或^{ある}は利刀^{りとう}をもつて分^{ぶん}分に肉^{にく}をさく然^{しか}れども又^{また}よみがへり

・よみがへりするなり此^この地獄^{じごく}の寿命^{じゅみょう}は人間^{にんげん}の昼夜^{じゆゐ}五十年^{ごじゅうねん}をもつて第一^{だいいち}

四王^{しおう}・天^{てん}の一日^{いちにち}一夜^{いちや}として四王^{しおう}・天^{てん}の天人^{てんにん}の寿命^{じゅみょう}五百歳^{ごひゃくさい}なり、四王^{しおう}・天^{てん}

の五百歳^{ごひゃくさい}を此^これ等^{どう}活地獄^{かつじごく}の一日^{いちにち}一夜^{いちや}として其^その寿命^{じゅみょう}五百歳^{ごひゃくさい}なり、此^この

地獄^{じごく}の業因^{ごういん}をいばば・もの^{もの}の命^{いのち}をたつもの此^この地獄^{じごく}に墮^おつ

螻蟻^{ろうぎ}蚊^{もん}☆等の小虫^{せうちゅう}を殺^{ころ}せる者^{もの}も懺悔^{ざんげ}なければ必^{かならず}ず此^この地獄^{じごく}に墮^おつべ

し、譬^{たと}へばはりなれども水^{みづ}の上にをけば沈^{しづ}まざることなきが如^{ごと}し、又^{また}

懺悔^{ざんげ}すれども懺悔^{ざんげ}の後に重^{かさ}ねて此^この罪^{つみ}を作^{つく}れば後の懺悔^{ざんげ}には此^この罪^{つみ}き

えがたし、譬^{たと}へばぬすみをして獄^{ごく}に入りぬるもの^{もの}のしばらく経^へて後に

御免^{みゆるし}を蒙^{こゝむ}りて獄^{ごく}を出^でずれども又^{また}重^{かさ}ねて盗^{ぬす}みをして獄^{ごく}に入りぬれば

出ゆるされがたきが如し、されば当世の日本国にほんこくの人は上かみ一人より下
万民ばんみんに至まで此の地獄じごくをまぬがる人は一人もありがたかるべし、何に
持戒じかいのをばへをとれる持律じりつの僧たりとも蟻虱ありしらみなどを殺さず蚊あぶ☆をあ
やまたざる

べきか、況や其外山野の鳥鹿・江海の魚鱗を日に殺すものをや、何に況や牛馬人等を殺す者をや。

第二に黒繩地獄とは等活地獄の下にあり縦広は等活地獄の如し、獄卒・罪人をとらえて熱鉄の地にふせて熱鉄の繩をもつて身にすみうつて熱鉄の斧をもつて繩に随つてきり・さきけづる又鋸を以てひく又左右に大なる鉄の山あり山の上に鉄の幢を立て鉄の繩をはり罪人に鉄の山を・ををせて繩の上よりわたす繩より落ちてくだけ・或鉄のかなえに墮し入れて・にらる此の苦は上の等活地獄の苦よりも十倍なり、人間の一百歳は第二の☆利天の一日一夜なり其の寿一千歳なり此の天の寿一千歳を一日一夜として此の第二の地獄の寿命一千歳なり、殺生の上に偷盜とて・ぬすみをかさねたるもの此の地獄にをつ、当世の偷盜のもの・ものをぬすむ上・物の

主を殺すもの此の地獄に墮つべし。

第三に衆合地獄とは黒繩地獄の下にあり縦広は上の如し多くの鉄の山二つづつに相向へり、牛頭・馬頭等の獄卒手に棒を取つて罪人を蹴りて山の間に入らしむ、此の時・両の山迫り来て合せ押す身体くだけて血流れて地にみつ、又種種の苦あり、人間の二百歳を第三の夜・摩天の一日一夜として此の天の寿二千歳なり此の天の寿を一日一夜として此の地獄の寿命二千歳なり、殺生・偷盗の罪の上に邪淫とて他人のつまを犯す者・此の地獄の中に墮つべし、而るに当世の僧・尼・士・女・多分は此の罪を犯す殊に僧にこの罪多し、士女は各各互にまほり又人目をつつまざる故に此の罪をかさず僧は一人ある故に姪欲とぼしきところに若し有身ば父ただされ・あらはれぬべきゆへに独ある女人を・をかさず、もしや・かくると他人の

妻をうかがひ・ふかく・かくれんとをもうなり、当世とうせのほか・たうとげなる僧の中にことに此の罪つみ又多くあるらんと・をばゆ、されば多分たぶんは当世とうせ・たうとげなる僧此の地獄じごくに墮おつべし。

第四に叫喚地獄きようかんじごくとは衆合の下にあり縦広じゅうこう前に同じ獄卒ごくそつ惡声あらきこえ出して
弓箭きゅうせんをもつて罪人ざいにんをいる、又鉄くろがねの棒を以て

頭こうべを打つて熱鉄あつてつの地をはしらしむ、或あるは熱鉄のいりだなにうちかへし、
うちかへし此この罪人ざいにんをあぶる、或あるは口を開てわける銅のゆを入るれば
五臓ごぞうやけて下より直ただちに出いず、寿命じゅみようをいはば人間にんげんの四百歳を第四とそつの都率
天の一日一夜とす、又都率とそつ天の四千歳せんさいなり都率とそつ天の四千歳せんさいの寿を一日
一夜として此この地獄じごくの寿命じゅみよう四千歳せんさいなり、此この地獄じごくの業因ごういんをいはば、
殺生せつしょう偷盜ちゆうとう・邪淫じやいんの上に飲酒おんじゆとて酒のむもの此この地獄じごくに墮おつべし、当世とうせの
比丘びく・比丘尼びくに・優婆塞うばそく・優婆夷うばい
の四衆ししゆうの大酒なる者、此この地獄じごくの苦免まぬかれがたきか、大論だいろんには酒に三十六
の失とがをいだし梵網經ぼんもうきようには酒盃さかずきをすすめる者五百生ひやくししやうに手なき身と生る
と・とかせ給たまう人師にんしの釈しやくにはみみずていの者と・なるとみへたり、況いはんやや酒
をうりて人にあたえたる者をや何いかに況いはんやや酒に水を入れてうるものをや
・当世とうせの在家ざいけの人人ひとびとこの地獄じごくの苦まぬがれがたし。

第五に大叫喚地獄とは叫喚の下にあり縦広前に同じ、其の苦の相は上の四の地獄の諸の苦に十倍して重くこれをうく、寿命の長短を云わば人間の八百歳は第五の化樂天の一日一夜なり此の天の寿八千歳なり此の天の八千歳を一日一夜として此の地獄の寿命八千歳なり、殺生・偷盜・邪淫・飲酒の重罪の上に妄語とてそらごとせる者・此の地獄に墮つべし、当世の諸人は設い賢人・上人など・いはるる人人も妄語せざる時はありとも妄語をせざる日はあるべからず、設い日はありとも月はあるべからず設い月はあるとも年はあるべからず設い年はあるとも一期生・妄語せざる者はあるべからず、若ししからば当世の諸人・一人もこの地獄をまぬがれがたきか。

第六に焦熱地獄とは大叫喚地獄の下にあり縦広前にをなじ、此の地獄に種種の苦あり若し此の地獄の豆計りの火を閻浮提にをけらんに

いちじ 一時にやけ尽きなん況や罪人の身の ☆ なることわたのごとくなるを
や、此の地獄の人は前の五つの地獄の火を見る事・雪の如し、譬へは人間
の火の薪の火よりも鉄銅の火の熱きが如し、寿命の長短は

にんげん 人間の千六百歳を第六の他化天の一日一夜として此の天の寿千六百歳
なり此の天の千六百歳を一日一夜として此の地獄の寿命一千六百歳
なり、業因を云わば殺生・偷盗・邪淫・飲酒・妄語の上・邪見とて因果
なしという者・此の

中に墮おつべし、邪見じゃけんとは有人あるひとの云いく人飢えて死ぬれば天に生るべし等と云云、総じて因果いんがをしらぬ者を邪見じゃけんと申もうすなり世間の法には慈悲じひなき者を邪見じゃけんの者という、当世とうせの人人ひとびと此の地獄じごくを免まぬれがたきか。

第七に大焦熱地獄だいしょうねつじごくとは焦熱しょうねつの下にあり縦広じゅうこう前の如ごとし、前の六つの地獄じごくの一切いっさいの諸苦しよくに十倍して重しげく受るなり、其の寿命そじゆみようは半中劫はんちゆうけつなり、業因ごういんを云わば殺生せつしょう・偷盜ちゅうとう・邪淫じゃいん・飲酒おんじゆ・妄語もうご・邪見じゃけんの上に淨戒じようかいの比丘尼びくにををかせるもの此の中に墮おつべし、又比丘びく・酒をもつて不邪淫戒ふじゃいんかいを持たもてる婦女ふにょをたばらかし、或は財物さいぶつをあたへて犯せるもの此の中に墮おつべし、当世とうせの僧の中に多く此の重罪じゅうざいあるなり、大悲經の文に末代まつだいには士女しにょは多くは天に生じ僧尼そうには多くは地獄じごくに墮おつべしととかれたるはこれといふ事か、心あらん人人ひとびとははづべしはづべし。

総じて上の七大地獄だいちじごくの業因ごういんは諸經論しよきやうろんをもつて勘かんえ当世とうせ・日本国にほんこくの

四衆ししゅうにあて見るに此の七大地獄だいいじごくをはなるべき人を見ず又きかず、
涅槃經ねはんぎょうに云く末代まつだいに入りて人間にんげんに生ぜん者は爪上そうじょうの土つちの如ごとし三惡道さんあくどうに
墮おつるものは十方じゅうほう世界の微塵みじんの如ごとしと説かれたり、若爾しからば我等われらが
父母・兄弟等の死ぬる人は皆上みなかみの七大地獄だいいじごくにこそ墮おち給たまひては候まいらめ、
あさましともいうばかりなし、竜りゅうと蛇じゃと鬼神きじんと仏ぶつ・菩薩ぼさつ・聖人しょうにんをば未だ
見ずただをとのみに・これをきく当世とうせに上かみの七大地獄だいいじごくの業を造らざる
ものをば未だ見ず又・をとにも・きかず、而しかるに我が身よりはじめて
一切衆生いっさいしじゅう・七大地獄だいいじごくに墮おつべしと・をもえる者・一人もなし、設たとい言には
墮おつべきよしを・さえづれども心には墮おつべしとも・をもわず、
又僧尼そうに・士女しにょ・地獄じごくの業をば犯すとは・をもえども・或は地藏菩薩あるじざうぼさつ等の
菩薩ぼさつを信じ・或は阿彌陀仏あみだぶつ等の仏たのを待あるみ・或は種種しゅじゅの善根ぜんこんを修しゅうしたる
者もあり、皆みなをもはく我はかかる善根ぜんこんをもてれば・なんと・うちをもひ

て地獄じごくをもをぢず、ある或は宗宗を習へる人人ひとびとは各各の智分ちぶんをたのみて又
地獄じごくの因を・をぢず、而しかるに仏菩薩ぼさつを信じたるも愛子・夫婦などをあ
いし父母ふぼ・主君しゅくんなどをうやまうには雲泥うんでいなり、仏・菩薩ぼさつ等をば・かろ
くをもえるなり、されば当世とうせの人人ひとびとの仏・菩薩ぼさつを待ぬれば宗宗を学がくした
れば地獄じごくの苦はまぬがれなんなど・をもえるは僻案びやくあんにや心あらん
人人ひとびとはよくよく

はかりをもうべきか。

第八に大阿鼻地獄とは又は無間地獄と申すなり欲界の最底・大焦熱地獄の下にあり此の地獄は縦広八万由旬なり、外に七重の鉄の城あり地獄の極苦は且く之を略す前の七大地獄並びに別処の一切の諸苦をもつち一分として大阿鼻地獄の苦一千倍勝れたり、此の地獄の罪人は大焦熱地獄の罪人を見る事・他化自在天の楽みの如し、此の地獄の香のくさを人かくならば四天下・欲界・六天の天人皆ししなん、されども出山・没山と申す山・此の地獄の臭き氣を・をさへて人間へ来らせざるなり、故に此の世界の者死せずと見へぬ、若し仏・此の地獄の苦を具に説かせ給はば人聴いて血をはいて死すべき故にくわしく仏説き給はずとみへたり、此の無間地獄の寿命の長短は一中劫なり一中劫と申すは此の人寿無量歳なりしが百年に一

寿を減じ又百年に一寿を減ずるほどに人^{にんじゅう}寿十歳の時に減ずるを一減と申^{もう}す、又十歳より百年に一寿を増し又百年に一寿を増する程に八万^{はちまん}歳に増するを一増と申^{もう}す、此の

一増一減の程を小劫として二十の増減を一中劫とは申^{もう}すなり、此の地獄^{じごく}に墮^おちたる者これ程久しく無間地獄^{むげんじごく}に住して大苦をうくるなり、業因^{ごういん}を云わば五逆罪^{ごぎやくざい}を造る人、此の地獄^{じごく}に墮^おつべし、五逆罪^{ごぎやくざい}と申^{もう}すは一に殺父^{しふ}・二に殺母^{しも}・三に殺阿羅漢^{あらかん}・四に出仏身血^{すいぶつしんけつ}・五に破和合僧^{はわごうそう}なり、今の世には仏ましまさず・しかれば出仏身血^{すいぶつしんけつ}あるべからず、

和合僧^{わごうそう}なければ破和合僧^{はわごうそう}なし、阿羅漢^{あらかん}なければ殺阿羅漢^{あらかん}これなし、但殺父^{しふ}・殺母^{しも}の罪^{つみ}のみありぬべし、しかれども王法のいましめきびしくあるゆへに此の罪^{つみ}・をかしがたし、若爾^{もししか}らば当世^{とうせ}には阿鼻地獄^{あびじごく}に墮^おつべき人すくなし但^{ただ}し相似^{そうじ}の五逆罪^{ごぎやくざい}これあり木^{もく}画^えの仏像^{ぶつぞう}・堂塔^{どうとう}等をやき・かの

仏像等の寄進の所をうばいとり率兜婆等をきりやき智人を殺しなんど
するもの多し、此等は大阿鼻地獄の十六の別処に墮つべし、されば当世
の衆生十六の別処に墮つるもの多きか又謗法の者この地獄に墮つべし。
第二に無間地獄の因果の輕重を明さば、問うて云く五逆罪より
外の罪によりて無間地獄に墮んことあるべし

や、答えて云く誹謗正法の重罪なり、問うて云く証文如何、答えて云く法華經第二に云く君し人信ぜずして此の經を毀謗せば乃至其の人命終して阿鼻獄に入らん」等と云云、此の文に謗法は阿鼻地獄の業と見へたり、問うて云く五逆と謗法と罪の輕重如何、答て云く大品經に云く舍利弗・仏に白して言く世尊五逆罪と破法罪と相似するや、仏・舍利弗に告わく相似と言うべからず所以は何ん若し般若波羅蜜を破れば即ち十方諸仏の一切智一切種智を破るに爲んぬ、仏宝を破るが故に法宝を破るが故に僧宝を破るが故に三宝を破るが故に即ち世間の正見を破す世間の正見を破れば○則ち無量無辺阿僧祇の罪を得るなり無量無辺阿僧祇の罪を得已つて則ち無量無辺阿僧祇の憂苦を受るなり」文又云く破法の業・因縁集るが故に無量百千万億歳大地獄の中に墮つ、此の破法人の輩一大地獄

より一^{だいじごく}大地獄に至^{いた}る若^もし劫火起^{ごうかおこ}る時は他^{たほう}方^{ほう}の大地獄の中^{だいじごく}に至^{いた}る、
是^{かく}の如^{ごと}く十方^{じゅうぽう}に☆^{あまね}くして彼^かの間^まに劫火起^{ごうかおこ}る故^{ゆえ}に

彼^かより死^はし破^は法の業^{ごふのくさ}・因^{いん}縁^{ねん}未^{いま}だ尽^つきざるが故^{ゆえ}に是^この間^まの大地獄の中^{だいじごく}に

還^{かん}来^{らい}す」等^らと云^い云^い、法^ほ華^け經^{きやう}第^{だい}七^{しち}に云^いく「四^し衆^{しゆ}の中^{ちゆう}に瞋^{しん}恚^にを生^なじ心^ふ不^ふ淨^{じやう}

なる者^{もの}有^あり惡^{あく}口^{くち}罵^めりして言^いく是^これ無^む智^ちの比^ひ丘^くと、或^{ある}は杖^{じやう}木^{もく}瓦^が石^{しやく}を

以^もて之^これを打^{ちやう}擲^{ちやく}す乃^{ない}至^し千^{せん}劫^{ごう}阿^あ鼻^び地^じ獄^{ごく}に於^{おい}て大^く苦^く惱^{のう}を受^うく」等^らと云^い

云^い、此^きの經^{きやう}文^{もん}の心^{しん}は法^ほ華^け經^{きやう}の行^{ぎやう}者^{じや}を惡^{あく}口^{くち}し及^{およ}び杖^{じやう}を以^もて打^{ちやう}擲^{ちやく}せる

もの其^その後^ごに懺^{ざん}悔^げせりといえども罪^{つみ}いまだ滅^{めつ}せずして千^{せん}劫^{ごう}阿^あ鼻^び地^じ獄^{ごく}に

墮^おちたりと見えぬ、懺^{ざん}悔^げせる謗^{ほう}法^{ぽう}の罪^{つみ}すら五^ご逆^{ぎやく}罪^{ざい}に千^{せん}倍^{ばい}せり況^{いはんや}や懺^{ざん}悔^げ

せざらん謗^{ほう}法^{ぽう}にをいては阿^あ鼻^び地^じ獄^{ごく}を出^いずる期^きかたかるべし、故^{ゆえ}に法^ほ華^け經^{きやう}

第^{だい}二^にに云^いく「經^{きやう}を誦^{どく}誦^{じゆ}し書^し持^じするこ^と有^あらん者^{じや}を見^みて輕^{きやう}賤^{せん}憎^{そう}嫉^{しつ}して

結^{けつ}恨^{こん}を懷^{いだ}かん乃^{ない}至^し其^その人^{ひと}命^{みやう}終^{じゆう}して阿^あ鼻^び地^じ獄^{ごく}に入^いり一^{いつ}劫^{ごう}を具^ぐ足^{そく}して劫

尽つきなば更生またうまれん、是かくの如ごとく展てん転でんして無む数しゆ劫こうに至いたらん」等と云云。

第三に問答料簡もんどうりょうけんを明あかさば問いうて云いく五逆罪ごぎやくざいと謗法罪ぼうぼうざいとの輕重けいちゆうはし
んぬ謗法ぼうぼうの相貌そうみよう如何いかん、答こえて云いく天台智者大師てんだいちしやだいしの梵網經ぼんもうきようの疏じよに云いく
謗そむとは背そむなり等と云云、法そむに背そむくが謗法ぼうぼうにてはあるか天親てんじんの仏性論ぶつじようろんに
云いく若もし憎そむは背そむくなり等と云云、この文の心は正法しやうぼうを人しやうぼうに捨すてさせる
が謗法ぼうぼうにてあるなり、問いうて云いく委細いさいに相貌そうみようをしらんと

をもうあらあら・しめすべし、答えて云く涅槃經第五に云く「若し人有りて如来は無常なりと言わん云何ぞ是の人舌墮落せざらん」等云云、此の文の心は仏を無常といはん人は舌墮落すべしと云云、問うて云く諸の小乗經に仏を無常と説かるる上又所化の衆皆無常と談じき若爾らば仏・並に所化の衆の舌墮落すべしや、答えて云く小乗經の仏を小乗經の人が無常ととき談ずるは舌ただれざるか、大乘經に向つて仏を無常と談じ小乗經に對して大乘經を破するが舌は墮落するか、此れをもつて・をもうに・をのれが依經には随えども依經よりすぐれたる經を破するは破法となるか、若爾らば設い觀經・華嚴經等の權大乘經の人人・所依の經の文の如く修行すともかの經にすぐれたる經に隨はず又すぐれざる由を談ぜば謗法となるべきか、されば觀經等の經の如く法をえたりとも觀經等を破せ

る經しゅつたいの出来しゅつたいしたらん時そ其の經しんに随したがわらずば破法はほうとなるべきか、小乗經しょうじょうきやうを以もつてなぞらえて心こころうべし。

問いうて云いく雙觀經そうかんきやう等に乃至ないし十念じくんとく・即得そくどく往生おうじやうなんととかれて候まちが彼

のけうの教けうの如ごとく十念じう申もうして往生おうじやうすべきを後の經きを以もつて申もうしやぶらば

謗法ぼうぼうにては候まちまじきか、答こたえて云いく仏ぶつ・觀經かんきやう等の四十余年よんじゅうよねんの經經きやうきやうを

東あづまて未顯真實みけんしんじつと説たまかせ給たまいぬれば此この經文きやうもんに随したがつて乃至ないし十念じくんとく・即得そくどく

往生おうじやう等は實じつには往生おうじやうしがたしと申もうす此この經文きやうもんなくば謗法ぼうぼうとなるべし、

問いうて云いく・或人あるい云いく無量義經むりやうぎきやうの四十余年よんじゅうよねん・未顯真實みけんしんじつの文ぶんはあえて

四十余年よんじゅうよねんの一切いっさいの經經きやうきやう並みなに文文ぶんぶん・句句みみを皆みな

未顯真實みけんしんじつと説たまき給たまにはあらず、但ただ四十余年よんじゅうよねんの經經きやうきやうに処しよ処しよに決定性けつじやうの

二乘にじやうを永不成仏えいふじやうぶつときらはせ給たまい釈迦如来しやくかにょらいを始し成正覺じやうしょうかくと説たまき給たましを

其その言ことばかりをさして未顯真實みけんしんじつとは申もうすなりあえて余事よじにはあらず、

而しかるをみだりに四十余年よんじゅうよねんの文を見て觀經等かんきやうとうの凡夫ぼんぷのために九品往生くしゅうじやうじやうなんぞを説ときたるを妄みだりに往生おうじやうはなき事なりなんと押し申もうすあに・
をそろしき謗法ほうぼうの者にあらずやなんと申もうすはいかに、答えて云いく此の
料簡りやうけんは東土とうどの得とく一いちが料簡りやうけんに似たり、得とく一いちが云いく未顕眞実みけんしんじつとは決定性けつじやうせい
の二乗にじやうを仏に・爾前にぜんの經にして永不成仏ようふじやうぶつととかれしを未顕眞実みけんしんじつとは嫌きらは
るるなり前四味ぜんししみの一切いっさいには亘わたるべからずと申もうしき、伝教大師でんきやうだいしは前四味ぜんししみ
に亘わたりて文文・句句みくくに未顕眞実みけんしんじつと立て給たまいき、さればこの料簡りやうけん

は古の謗法者の料簡に似たり、但し且く汝等が料簡に随て尋ね明ら
めん、問う法華已前に二乗作仏を嫌いけるを今未顕真実というとなら
ば先ず決定性の二乗を仏の永不成仏と説かせ給し処処の經文ばかり
は未顕真実の仏の妄語なりと承伏せさせ給うか、さては仏の妄語は
勿論なり若し爾らば妄語の人の申すことは有無共に用いぬ事にてある
ぞかし、決定性の二乗・永不成仏の語ばかり妄語となり若し余の菩薩
・凡夫の往生・成仏等は実語となるべきならば信用しがたき事なり、
譬へば東方を西方と妄語し申さん人は西方を東方と申すべし二乗を
永不成仏と説く仏は余の菩薩の成仏をゆるすも又妄語にあらずや、五
乗は但一仏性なり二乗の仏性をかくし菩薩・凡夫の仏性をあらはすは
返つて菩薩・凡夫の仏性をかくすなり。

有人云く四十余年・未顕真実とは成仏の道ばかり未顕真実なり

往生等おうじやうは未顕真実みけんしんじつにはあらず、又難なんじて云いく四十余年よんじゅうよねんが間の説せの
成仏じやうぶつを未顕真実みけんしんじつと承伏しやうふくせさせ給たまはば雙觀經そうかんきやうに云いう不取正覺ふしゅしやうかく成仏じやうぶつ
已來凡歷いらいぼんりやく十劫等じくとうの文ぶんは未顕真実みけんしんじつと承伏しやうふくせさせ給たまうか、若もし爾しからば
四十余年よんじゅうよねんの經經きやうぎやうにして法藏比丘ほうざうびくの阿彌陀仏あみたぶつになり給たまはずば法藏比丘ほうざうびく
の成仏じやうぶつすでに妄語もうごなり、若もし成仏妄語じやうぶつもうごならば何いすれの仏ぶつか行者ぎやうじやを迎むかえ
給たまうべきや、又かれ此なんの難なんを通して云いん四十余年よんじゅうよねんが間は
成仏じやうぶつはなし阿彌陀仏あみたぶつは今の成仏じやうぶつにはあらず過去かこの成仏じやうぶつなり等と云云、
今難なんじて云いく今日きやうの四十余年よんじゅうよねんの經經きやうぎやうにして実ほんぶの凡夫ぼんぷの成仏じやうぶつを許ゆるされ
ずば過去遠遠劫かこおんのんしやうの四十余年よんじゅうよねんの權經こんきやうにても成仏叶じやうぶつかないがたきか、三世さんぜの
諸仏しよぶつの説法せつぽうの儀式ぎしき皆みな同おなきが故ゆゑなり、或あるは云いく不得疾成ふとくしつじやう・無上菩提むじやうぼだいと
とかるれば四十余年よんじゅうよねんの經經きやうぎやうにては疾はやくこそ仏ぶつにはならねども遅おそく
劫けつを経てはなるか、難なんじて云いく次下つぎしもの大莊嚴菩薩等だうざうがんぼさつの領解りやうげに云いく

不可思議無量無辺阿僧祇劫を過るとも終に無上菩提を成ずることを得ず」等と云云、此の文の如くならば劫を経ても爾前の經計りにては成仏はかたきか。

有は云う華嚴宗の料簡に云く四十余年の内には華嚴經計りは入るべからず、華嚴經にすでに往生成仏・此ありなんぞ華嚴經を行じて往生成仏をとげざらん、答えて云く四十余年の内に華嚴經入るべからずとは華嚴宗の人師の

義なり、無量義經には正く四十余年の内に華嚴海空と名目を呼び出して四十余年の内にかず今入れられたり、人師を本とせば仏に背くになりぬ。

問うて云く法華經をはなれて往生成仏をとげずば仏世に出させ給ては但法華經計をこそ説き給はめ、なんぞわづらはしく四十余年の經經を説かせ給うや、答えて云く此の難は仏、自ら答え給えり。若し但仏乘を讃せば衆生苦に没在して法を破して信ぜざるが故に三惡道に墜ちなん」等の經文これなり、問うて云くいかなれば爾前の經をば衆生謗せざるや、答えて云く爾前の經經は万差なれども束ねて此れを論ずれば隨他意と申して衆生の心をとかれてはんべり故に違する事なし、譬へば水に石を・なぐるに・あらそうことなきがごとし又しなじなの説教はんべれども九界の衆生の心を出でず

衆生しゅじやう

衆生の心は皆善みなにつけ惡まゐにつけて迷まよを本とするゆへに仏にはならざる

か、問うて云く衆生しゅじやう謗ぼうすべきゆへに仏・最初さいしよに法華經ほけきやうをとき給たまはずして

よんじゅうよねん

四十余年よんじゅうよねんの後に法華經ほけきやうをとき給たまはば汝なんじなんぞ当世とうせに權經ごんきやうをば・とか

ずして左右さうなく法華經ほけきやうをといて人に謗ぼうをなさせて惡道あくどうに墮だすや、答え

て云く仏在世ざいせには仏・菩提樹ぼだいじゆ

の下に坐し給たまいて機きをかがみ給たまうに当時とうじ・法華經ほけきやうを説くならば衆生しゅじやう

謗ぼうじて惡道あくどうに墮おちぬべし、四十余年よんじゅうよねんすぎて後ちけんにとかば謗ぼうせずして初住しよじゆう

不退ふたい・乃至ないし妙覺みやうかくにのぼりぬべしと知見ちけんし・ましましき、末代濁世まつだいじよくせには

当機とうきにして初住しよじゆうの位に入るべき人は万に一人もありがたかるべし、又

能化のうけの人も仏にあらざれば機きをかがみん事もこれかたし、

されば逆縁ぎやくえん・順縁じゆんえんのために先ず法華經ほけきやうを説くべしと仏ゆるし給たまへり、

但し又滅後めつごなりとも当機とうき衆になりぬべきものには先ず權教ごんきやうをとく事も

・あるべし、又悲を先とする人は先ずごんきよう權經をとくしゃかぶつ釈迦仏のごとし慈を
先とする人は先ずじつぎよう実經をとくべしふぎよう不輕菩薩のごとし、又末代まつだいの凡夫ほんぶは
なにとなくともあくどう惡道まぬかを免れんことはかたかるべし同じくあくどう惡道に
墮おちるならばほけきよう法華經をぼう謗ぼうぜさせて墮だすならば世間せけんの罪つみをもて墮おちたるに
は・にるべからず、聞もん法ほう生しょう謗ぼう・墮だ於お地じ獄ごく・勝しょう於お供く養よう・恒ごう沙しゃ仏ぶつ者しゃ等の文の
ごとし、此の文の心はほけきよう法華經をおはうじて地獄じごくに墮おちたるはしゃかぶつ釈迦仏・
阿あ弥み陀だ仏ぶつ等の恒ごう河が沙しゃ

の仏を供養し、歸依渴仰する功德には百千万倍すぎたりととかれたり。

問うて云く上の義のごとくならば華嚴・法相・三論・真言・淨土等の

祖師はみな謗法に墮すべきか、華嚴宗には華嚴經は法華經には雲泥

超過せり法相・三論もてかくのごとし、真言宗には日本国に二の流あ

り東寺の真言は法華經は華嚴經にをとれり何に況や大日經にをいてを

や、天台の真言には大日經と法華經とは理は齊等なり印真言等は

超過せりと云云、此等は皆惡道に墮つべしや、答えて云く宗をたて

經經の勝劣を判ずるに二の義あり、一は似破・二は能破なり一に

似破とは他の義は吉とをもえども此をはすかの正義を分明にあらはさ

んがためか、二に能破とは実に他人の義の勝れたるをば弁えずして迷

うて我が義すぐれたりとをもひて心中よりこれを破するをば能破

という・されば彼の宗宗の祖師に似破・能破の二の義あるべし、心中に

は法華經ほけきょうは諸經しよきょうに勝すぐれたりと思おもえども且しく違ちがひて法華經ほけきょうの義ぎを顯あらわさんとをもひてこれをはする事あり、提婆達多だいばだつた・阿闍世王あじやせ・諸もろもろの外道げどうが仏のかたきとなり

て仏徳ぶつとくを顯あらわし後のちには仏に歸かへせしがごとし、又実じつの凡夫ぼんぷが仏のかたきとなりて惡道あくどうに墮おつる事これ多し、されば諸宗しよしゅうの祖師そしの中に回心えしんの筆ふでをかかずば謗法ぼうぼうの者もの惡道あくどうに墮おちたりとしるべし、三論さんろんの嘉祥かじよう・華嚴けごんの澄觀ちようかん・法相ほつそうの慈恩じおん・東寺とうじの弘法こうぼう等は回心えしんの筆ふでこれあるか、よくよく尋たずねならうべし。

問とうて云いくまことに今この度たび生死しやうじをはなれんと・をもはんになにものをか・いとひなにものをか願ねがうべきや、答こたう諸もろもろの經文きやうもんには女人にょにん等をいとうべしとみへたれども雙林そうりん最後さいごの涅槃經ねはんきやうに云いく・菩薩ぼさつ是この身みに無量むりやうの過患かげん具足ぐそく充満じゅうまんすと見みると雖いえども涅槃經ねはんきやうを受持じゆじせんと欲ほするを為もつての

故に猶好く將護して乏少ならしめず、菩薩惡象等に於ては心に
恐怖すること無れ惡知識に於ては怖畏の心を生ぜよ、何を以ての故に
是れ惡象等は唯能く身を壞りて心を壞る事能わず、惡知識は二俱に
壞るが故に、惡象の若きは唯一身を壞る惡知識は無量の身・無量の
善心を壞る、惡象の為に殺されては三趣に至らず惡友の為に殺されて
は三趣に至る」等と云云此の經文の心は後世を願はん人は一切

の悪縁あくえんを恐るべし一切いっさいの悪縁あくえんよりは悪知識あくちしきを・をそるべしとみえたり。
されば大莊嚴だいそうごん仏ぶつの末の四の比丘びくは自ら惡法あくぼうを行じて十方じゅうぽうの大阿鼻あび
地獄じごくを経るのみならず、六百億人の檀那だんな等をも十方じゅうぽうの地獄じごくに墮だしぬ、
鴛堀摩羅おうくつまらは摩尼跋陀まにばつだが教に随したがつて九百九十九人の指をきり結句けっく・母・
並に仏をがいせんとぎす、善星比丘ぜんしやうびくは仏の御子・十二部經を受持じゆじし四
禪定ぜんじやうをえ欲界よっかいの結を断じたりしかども苦得外道の法を習ならうて生身しやうしん
に阿鼻地獄あびじごくに墮おちぬ、提婆だいばが六万歳・八万歳を暗そらんじたりしかども外道げどう
の五法を行じて現げんに無間むげんに墮おちにき、阿闍世王あじゃせの父を殺し母を害せんと
擬せし大象を放つて仏をうしないたてまつらんとせしも惡師あくし・提婆だいばが
教なり、俱伽利比丘くぎやりびくが舍利弗しやりほつ・目連もくれんをそしりて生身しやうしんに阿鼻あびに墮だせし、
大族王だいぞくおうの五竺ぶつぽうの仏法僧をほろぼせし、大族王だいぞくおうの舍弟しやていは
加☆弥羅國かしやみらくくの王となりて健駄羅國けんだらの率都婆そとば・寺塔じとう・二千六百所をうし

なひし、金耳國王こんにこくおうの仏法ぶつぽうをほろぼせし、波瑠璃王はるりの九千九十万ばんにん人の人をころして血ながれて池をなせし、設賞迦王せつじょうきやの仏法ぶつぽうを滅し菩提樹ぼだいじゅをきり根をほりし、後周の宇文王うぶんの四千六百余所の寺院を失ひ二十六万六百余の僧尼そうにを還俗げんぞくせしめし、此等これらは皆惡師みなあくしを信じ惡鬼あつきそ其の身に入りし故なり。

問うて云く天竺てんじく・震旦しんたんは外道げどうが仏法ぶつぽうをほろぼし小乗しょうじょうが大乗だいじょうをやぶるとみえたり、此の日本國にほんこくもしかるべきか、答えて云く月支いわ・戸那がっしには外道げどうあり小乗しょうじょうあり此の日本國にほんこくには外道げどうなし小乗しょうじょうの者なし、紀典博士等これあれども仏法ぶつぽうの敵となるものこれなし、小乗しょうじょうの三宗これあれども彼宗を用て生死しょうじをはなれんとをもはず但大乘だいじょうを心うる才覺さいかくとをもち、但し此の國には大乘だいじょうの五宗のみこれあり人人皆をもえらく彼の宗宗にして生死しょうじをはなるべしとをもう故ゆえにあらそいも多くいでき

たり、又檀那だんなの歸依きえも多くあるゆへに利養りようの心もふかし。

第四ぎようじゃに行者ぶつぽう・仏法ひろうを弘ひろむる用心ようじんを明あかさば、夫それ仏法ぶつぽうをひろめんと。

をもはんものは必ず五義ごぎを存ぞんして正法しょうぽうをひろむべし、五義ごぎとは一いちには

教きょう・二にには機き・三さんには時とき・四しには国くに・五ごには仏法ぶつぽう流布るふの前ぜん後ごなり、第一だいいちに

教きょうとは如来にょらい一代いちだい五十年

の説教は大小・権実・顕密の差別あり、華嚴宗には五教を立て一代を、
をさめ其の中には華嚴・法華を最勝とし華嚴・法華の中に華嚴經を以
て第一とす、南三・北七並に華嚴宗の祖師日本国の東寺の弘法大師、
此の義なり、法相宗は三時に一代ををさめ其の中に深密法華經を
一代の聖教にすぐれたりとす、深密・法華の中・法華經は了義經
の中の不了義經・深密經は了義經の中の了義經なり、三論宗に又二藏
・三時を立つ三時の中の第三中道教とは般若・法華なり、般若・法華の
中には般若最第一なり、真言宗には日本国に二の流あり東寺流は
弘法大師十住心を立て第八法華・第九華嚴・第十真言・法華經は
大日經に劣るのみならず猶華嚴經に下るなり、天台の真言は慈覺大師
等大日經と法華經とは広略の異法華經は理秘密・大日經は事理俱密
なり、淨土宗には聖道・淨土・難行・易行・

雑行・正行を立てたり浄土の三部經より外の法華經等の一切經は
難行・聖道・雑行なり、禪宗には二の流あり一流は一切經・一切の宗
の深義は禪宗なり一流は如來一代の聖教は皆言説・如來の口輪の
方便なり禪師は如來の意密
言説にをよばず教外の別伝なり、俱舍宗・成実宗・律宗は小乗宗な
り天竺・震旦には小乗宗の者大乘を破する事これ多し日本国には
其の義なし。

問うて云く諸宗の異義区なり一一に其の謂れありて得道なるべき
か又諸宗皆謗法となりて一宗計り正義となるべきか、答えて云く異論
相違ありといえども皆得道なるか、仏の滅後四百年にあたりて健駄羅
国の迦式色迦王・仏法を貴み一夏・僧を供し仏法をといしに一一の僧・
異義多し此の王不審して云く仏説は定て一ならんと終に

脇尊者きょうそんじやに問う、尊者そんじや答て云く金杖こんじやうを折つて種種しゅじゆの物につくるに形は別なれども金杖こんじやうは一なり形の異なるをば静あらそうといへども金こがねたる事をあらそはず、門ふど門ふど不同なればいりかどをば静あらそえども入理は一なり等と云云、又求那跋摩くなばつまいわ云く

諸論しよろん各異いたん端なれども修行しゆぎやうの理は二無し偏執へんしゆに是非ぜひ有りとも達者だつしやは違いじ静じやう無し等と云云、又五百羅漢らかんの真因しんいん各異ことなれども同く聖理しやうりをえたり、大論だいろんの四悉ししつだん檀だんの中の対治たいじしつだん悉しつだん・撰論じやうろんの四意趣いしゆの中の衆生しゆじやう意樂いぎやう意趣いしゆ・此等これらは此の善きんを嫌きらい

此の善をほむ、檀戒進等一一にそしり一一にほむる皆得道みなとくどうをなる、

此等これらを以てこれを思うに護法ごほう・清弁しやうべんのあらそい智光ちこう・戒賢かいけんの空中くうちゆう・

南三なんざん・北七ほくひちの頓漸とんぜん・不定ふじよう・一時いちじ・二時にじ・三時さんじ・四時しじ・五時ごじ・四宗ししゆう・五宗ごしゆう・

六宗ろくしゆう・天台てんだいの五時ごじ・華嚴けごんの五教ごきやう・真言教しんごんきやうの東寺とうじ・天台てんだいの靜じやう・淨土宗じやうどしゆうの

聖道しやうどう・淨土じやうど・禪宗ぜんしゆうの教外きやうげ・教内きやうない、入門にっぽんは差別さべつせりというとも実理じつりに入

る事は但一なるべきか。

難なんじて云いわく華嚴けごんの五教ごきやう・法相ほつそう・三論さんろんの三時さんじ・禪宗ぜんしゆうの教外きやうげ・淨土宗じやうどしゆうの

難行なんぎやう・易行いぎやう・南三なんざん・北七ほくひちの五時等ごじどう・門もんはことなりと・いへども入理にっぽん・一に

して皆仏意みなぶつゐに叶かない謗法ほうぼうとならずといはば謗法ほうぼうという事あるべからざるか

謗法ほうぼうとは法そむに背そむくという事なり法そむに背そむくと申もうすは小乘しょうじやうは小乘經しょうじやうきやうに

背そむき大乘だいじやうは大乗經だいじやうきやうに背そむく法そむに背そむかばあに謗法ほうぼうとならざらん謗法ほうぼうとな

らばなんぞ苦果くかをまねかざらん、此の道理どうりにそむくこれひとつ、大

般若經に云く 般若を謗する者は十方の大

阿鼻地獄に墮つべし」法華經に云く 若し人信ぜずして乃至其の人

命終して阿鼻獄に入らん」と涅槃經に云く 世に難治の病三あり一に

は四重・二には五逆・三には謗大乘なり」此等の經文あにむなしかるべ

き、此等は証文なり、されば無垢論師・大慢婆羅門・熙連禪師・嵩靈

法師等は正法を謗じて現身に大阿鼻地獄に墮ち舌口中に爛れた

りこれは現証なり、天親菩薩は小乗の論を作つて諸大乘經をはし

き、後に無著菩薩に対して此の罪を懺悔せんがために舌を切らんとく

い給いき、謗法もし罪とならずんばいかんが千部の論師懺悔をいたすべ

き、闍提とは天竺の語此には不信と 翻す不信とは一切衆生悉有

仏性を信ぜざるは闍提の人と見へたり。

不信とは謗法の者なり恒河の七種の衆生の第一は一闍提・謗法常没

の者なり、第二は五逆・謗法常没等の者なり、あに謗法を・をそれざらん、答えて云く謗法とは只由なく仏法を謗ずるを謗法といふか我が宗をたてんがために余法を謗ずるは謗法にあらざるか、摂論の四意趣の中の衆生意樂意趣とは仮令人ありて一生の間・一善をも修せず但惡を作る者あり而るに小縁にあいて何れの善にてもあれ一善を修せんと申す・これは隨喜讚歎すべし、又善人あり

一生の間ただ一善を修す而るを他の善えうつさんがためにそのぜんを
そしる、一事の中に於て・或は呵し・或は讃すというこれなり、大論の
四悉檀の中の対治悉檀又これをなじ、浄名經の彈呵と申すは
阿含經の時ほめし法をそしるなり、此等を以てをもふに・或は衆生多く
小乗の機あれば大乘を謗りて小乗經に信心をまし・或は衆生多く
大乘

の機なれば小乗をそしりて大乘經に信心をあつくす、・或は衆生・
弥陀仏に縁あれば諸仏をそしりて弥陀に信心をまさしめ、・或は衆生
多く地藏に縁あれば諸菩薩をそしりて地藏をほむ、・或は衆生多く
華嚴經に縁あれば諸經をそしりて華嚴經をほむ、・或は衆生・大
般若經に縁あれば諸經をそしりて大般若經をほむ、・或は衆生・
法華經・或は衆生・

大日經等同く心うべし、機を見て、或は讚め、或は毀る共に謗法とならず而るを機をしらざる者みだりに、或は讚め、或は告るは謗法となるべきか、例せば華嚴宗・三論・法相・天台・真言・禪・淨土等の諸師の諸經をはして我が宗を立つるは謗法とならざるか。

難じて云く宗を立てんに諸經・諸宗を破し仏・菩薩を讚むるに仏・菩薩を破し他の善根を修せしめんがために、この善根をはする・くるしからずば阿含等の諸の小乘經に華嚴經等の諸大乘經をはしたる文ありや、華嚴經に法華・大日經等の諸大乘經をはしたる文これありや、答えて云く阿含・小乘經に諸大乘經をはしたる文はなければども華嚴經には二乘大乘・一乘をあげて二乘大乘をはし涅槃經には諸大乘經をあげて涅槃經に對してこれをはす、密嚴經には一切經中王ととき無量義經には四十余年・未顯真実ととかれ阿彌陀經には念仏に

対して諸經しよきやうを小善根ぜんこんととかる、これらの例一にあらざ故に又彼の
經經きやうきやうによる人師にんし皆此の義を存せり、此等これらをもつて思うに宗を立つる
方は我が宗に對して諸經しよきやうを破やぶるはくるしからざるか、難なんじて云いく
華嚴經けこんきやうには小乘しやうじやう・大乘だいじやう・一乘いちじやうとあげ密嚴經みつこんきやうには一切經中王いっさいきやうちゆうわうととかれ
涅槃經ねはんきやうには是諸大乘しよだいじやうとあげ阿彌陀經あみだには念仏ねんぶつに對して諸經しよきやうを小善根ぜんこん
とはとかれたれども無量義經むりやうぎきやうのごとく四十余年よんじゅうよねんと年限ねんげんを指して其の間
の大部たいぶの諸經しよきやう・阿含あこん・方等ほうとう・般若はんにか・華嚴等けこんの名をよびあげて勝劣しやうれつを

とける事これなし、涅槃經の是諸大乘の文計りこそ雙林最後の經として是諸大乘ととかれたれば涅槃經には一切經は嫌はるかと・をばうれども是諸大乘經と挙げて次ぎ下に諸大乘經を列ねたるに十二部・修多羅・方等・般若等とあげたり無量義經・法華經をば載せず、但し無量義經に挙ぐるところは四十余年の阿含・方等・般若・華嚴經をあげたり、いまだ法華經・涅槃經の勝劣はみへず密嚴に一切經中王とはあげたれども一切經をあぐる中に華嚴・勝鬘等の諸經の名をあげて一切經中王ととく故に法華經等とはみへず、阿彌陀經の小善根は時節もなし善根の相貌もみへず、たれかしる小乘經を小善根というか又人天の善根を小善根というか又觀經・雙觀經の所説の諸善を小善根というかいまだ一代を念仏に對して小善根というとはきこえず。

又大日經・六波羅蜜經等の諸の秘教の中にも一代の一切經を嫌うて

その經をほめたる文はなし、但し無量義經計りこそ前四十余年の諸經

を嫌ひ法華經一經に限りて已説の四十余年・今説の無量義經・当説の

未来にとくべき涅槃經を嫌うて法華經計りをほめたり、釈迦如来・

過去・現在・未来の三世の諸仏世にいで給いて各各一切經を説き

給うにいづれの仏も法華經第一なり、例せば上郎・下郎不定なり田舎

にしては百姓・郎従等は侍を上郎といふ、洛陽にして源平等已下を下

郎といふ三家を上郎といふ、又主を王といはば百姓も宅中の王なり

地頭・領家等も又・村・郷・郡・国の王なり・しかれども大王にはあら

ず、小乗經には無為涅槃の理が王なり小乗の戒定等に対して智慧

は王なり、諸大乘經には中道の理が王なり又華嚴經は円融相即の王

般若經は空理の王・大集經は守護正法の王・藥師經は藥師如来の

別願べつがんを説く經の中の王・雙觀經そうくわんきやうは阿彌陀仏あみだぶつの四十八願を説く經の中の王・大日經だいにちきやうは印真言しんごんを説く經の中の王・二代・一切經いっさいきやうの王にはあらず、法華經ほけきやうは真諦しんたい・俗諦ぞくたい・空仮中印真言くうけちゆうしんごん・無為むゐの理・十二大願・四十八願・一切諸經いっさいしよきやうの所説しよせつの所詮しよせんの法門ほうもんの大王なり、これ教をしれる者なり而しかるを善無畏ぜんむゐ・金剛智こんごうち・不空ふくう・法蔵ほうぞう・澄觀ちやうかん・慈恩じおん・嘉祥かじやう・南三なんざん・北七ほくひち・曇鸞どんらん・道綽どうしゆく・善導ぜんどう・達磨等だるまの我が所立しよりゆうの依經えきやうを一代第一いちだいだいいちといえるは教をしらざる者なり、但ただし一切いっさい

の人師にんしの中には天台智者大師一人教をしれる人なり、曇鸞・道綽等の
聖道しょうどう・淨土・難行・易行・正行・雜行は源と十住毘婆沙論に依る彼
本論ほんろんに難行の内に法華・真言等を入ると謂は僻案なり、論主の心と
論の始中終をしらざる失あり慈恩が深密經の三時に一代をいちだいをさめた
る事、又本經の三時に一切經の撰らざる事をしらざる失あり、法藏・
澄觀等が五教に一代をいちだいをさむる中に法華經・華嚴經を円教と立て
又華嚴經は法華經に勝れたりとをもえるは所依の華嚴經に二乗作仏・
久遠実成をあかさざるに記小久成ありとをもひ華嚴よりも超過の
法華經を我經に劣ると謂うは僻見なり、三論の嘉祥の二蔵等又
法華經に般若經すぐれたりとをもう事は僻案なり、善無畏等が
大日經は法華經に勝れたりという法華經の心をしらざるのみならず
大日經をもしらざる者なり。

問て云く此等皆謗法ならば惡道に墮ちたるか如何、答て云く謗法に
上中下雜の謗法あり慈恩・嘉祥・澄觀等が謗法は上中の謗法か其上
自身も謗法としれるかの間・悔還す筆これあるか、又他師をはするに二
あり能破似破これなり教はまさりとしれども是非をあらはさんがため
に法をはす・これは似破なり、能破とは実にまされる經を劣と
をもうてこれをはす・これは惡能破なり、又現に・をとれるをはす・これ
善能破なり、但し脇尊者の金杖の譬は小乘經は多しといえども同じ
苦・空・無常・無我の理なり、諸人同く此の義を存じて十八部・二十部
相ひ諍論あれども但門の諍にて理の諍にはあらず故に共に謗法と
ならず、外道が小乘經を破するは外道の理は常住なり小乘經の
理は無常なり空なり故に外道が小乘經をはするは謗法となる、
大乘經の理は中道なり小乘經は空なり小乘經の者が大乘經を

はするは謗法ほうぼうとなる大乘經だいじようきようの者が小乘經しょうじようきようを・はするは破法はほうとならず、諸大乘經しよだいじようきようの中の理みは未開會みかいえの理みいまだ記小久成くじようこれなし法華經ほけきようの理みは開會かいえの理み・記小久成くじようこれあり、諸大乘經しよだいじようきようの者が法華經ほけきようを・はするは謗法ほうぼうとなるべし法華經ほけきようの者の諸大乘經しよだいじようきようを謗するは謗法ほうぼうとなるべからず、大日經だいにちきよう・真言宗しんこんしゅうは未開會みかいえ・記小久成くじようなくば法華經ほけきよう已前いぜんなり開會かいえ・記小久成くじようを許さば涅槃經ねはんきようとをなじ、但ただし善無畏ぜんむい三藏さんざう・金剛智こんごうち・不空ふくう・一行等しやうあくの性惡しやうもんの法門ほうもん・一念三千いちねんさんぜんの法門ほうもんは天台智者てんだいちしやの法門ほうもんをぬすめるか、若しかし爾しからば善無畏ぜんむい等の謗法ほうぼうは似破じはか又雜謗法ほうぼうか五百羅漢らかんの真因しんいんは小乘しょうじよう十二因緣いにねんの事むみようなり無明行等むみようを縁むみようとして空理くうりに入ると見へたり、門あらそは諍あらそえども謗法ほうぼうとならず撰論せんろんの四意趣いしゆ・大論だいろんの四悉檀等ししつだんは無著菩薩むぢやくぼさつ・竜樹菩薩滅後りゅうじゆぼさつめつごの論師ろんしとして法華經ほけきようを以て一切經いっさいきようの心をえて四悉四意趣等いしゆを用いて爾前にぜんの經經きようぎようの意を判ずるなり未開會みかいえの四意趣いしゆ・

四悉檀ししつだんと開會かいえの四意趣いしゆ・四悉檀ししつだんを同ぜば、あに謗法ほうぼうにあらずや此等これらをよくよくしるは教をしれる者なり、四句あり一に信而不解しんにふげ・二に解而不信げにふしん・三に亦信亦解やくしんやくげ・四に非信・非解、問うて云く信而不解しんにふげの者は謗法ほうぼうなるか答えて云く法華經ほけきやうに云く信を以つて入ることを得」等と云云、涅槃經ねはんぎやうの九に云く難じて云く涅槃經ねはんぎやう三十六に云く我契經われがいぎやうの中に於て説く二種の人有り仏法僧ぶつぼうそうを謗ぼうずと、一には不信ふしんにして瞋恚しんにの心あるが故に二には信ずと雖いえども義を解げせざるが故に善男子ぜんなんし若し人信心しんじんあつて智慧ちえ有ること無き是この人は則ち能く無明むみやうを増長ぞうちやうす若し智慧ちえ有つて信心しんじんあること無き是この人は則ち能く邪見じゃけんを増長ぞうちやうす善男子ぜんなんし・不信ふしんの人は瞋恚しんにの心あるが故に説いて仏法僧宝ぶつぼうそう有ること無しと言わん、信者は慧なく無く顛倒てんどうして義を解するが故に法ゆゑを聞きく者をして仏法僧ぶつぼうそうを謗ぼうぜしむ等と云云、

此の二人の中には信じて解せざる者を謗法と説く如何、答えて云く此の信而不解の者は涅槃經の三十六に恒河の七種の衆生の第二の者を説くなり、此の第二の者は涅槃經の一切衆生悉有仏性の説を聞いて之を信ずと雖も又不信の者なり。

問うて云く如何ぞ信ずと雖も不信なるや、答えて云く一切衆生悉有仏性の説を聞きて之を信ずと雖も又心を爾前の經に寄する一類の衆生をば無仏性の者と云うなり此れ信而不信の者なり問うて云く証文如何、答えて云く恒河第二の衆生を説いて云く經に云く是くの如き大涅槃經を聞くことを得て信心を生ず是を名けて出と為す」と又云く仏性は是れ衆生に有りと信ずと雖も必ずしも一切皆悉く之有らず是の故に名けて信不具足と為す」文此の文の如くんば口には涅槃を信ずと雖も心に爾前の義を存する者なり又此の第二の人を

説いて云く信ずる者に

して慧なく無てんどうく顛倒して義を解するが故に」等と云云、顛倒解義とは実經の文を得て權經の義を覺る者なり。

問うて云く信而不解得・道の文如何、答えて云く涅槃經の三十二に云く是れ菩提の因は復無量なりと雖も若し信心を説けば已に摂尽す」文九に云く此の經を聞き已つて悉く皆菩提の因縁と作る法声光明毛孔に入る者は必定して当に阿耨多羅三藐三菩提を得べし」等と云云、法華經に云く信を以て入ることを得」等と云云、問うて云く解而不信の者は如何、答う恒河の第一の者なり、問うて云く証文如何、答えて云く涅槃經の三十六に第一を説て云く凡有りて是の大涅槃經の如来常住無有變易常樂我淨を聞くとも終に畢竟して於涅槃の一切衆生悉有仏性に入らざるは一闡提の人なり方等經を謗じ五逆罪を作り四重禁を犯すとも必ず当に菩提の道

を成じやうずることを得しべし須陀☆の人・斯陀含しゅだこんの人・阿那含あなこんの人・阿羅漢あらかんの人・辟支仏ひやくしふつ等必まさず当まさに阿○菩提ぼだいを成じやうずることを得うべし是この語ことばを聞き已おわつて不信ふしんの心を生ふず」等と云云。

問いうて云いく此この文ふしん不信ふしんとは見みえたり解げ而不に不信ふしんとは見みえず如何いかん、答こたえて云いく第一だいいちの結文いに云いく君もし智慧ちえ有あつて信心しんじん有あること無なき是この人は則すなわち能よく邪見じゃけんを増長やうちやうす」文。

◆六三

持妙法華問答抄

弘長三年 四十二歳

御作 461P

抑^{そもそも}も希^{まれ}に人身^{じんしん}をうけ適^{たまた}ま仏法^{ぶつぽう}をきけり、然^{しか}るに法^{せんじん}に浅深^{せんじん}あり人に
高下^{こうげ}ありと云^いへり何^{いか}なる法^{しゆぎやう}を修行^{しゆぎやう}してか速^{すみや}に仏^{ぶつ}になり候^{こう}べき願^{ねん}くは
其^その道^{みち}を聞^きかんと思^{おも}ふ、答^{こた}えて云^いく家^け家^けに尊勝^{そんしょう}あり国^{くに}国^{くに}に高貴^{こうき}あり皆^{みな}
其^その君^{きみ}を貴^{たつと}み其^その親^{おや}を崇^{あが}むといひども豈^{あに}国^{こく}王^{おう}にまさるべきや、爰^{こゝ}に知^しん
ぬ大小^{だいしやう}・権^{けん}實^{じつ}は家^け家^けの諱^{あそ}ひなれども一^{いち}代^{だい}聖^{せい}教^{ぎやう}の中^{なかつ}には法^{ほつ}華^け独^{ひと}り勝^{すぐ}れ
たり、是^これ頓^{とん}証^{しやう}菩^ぼ提^{だい}の指^し南^{なん}・直^じ至^し道^{どう}場^{じやう}の車^{くるま}輪^{りん}なり、疑^{うたがひ}つて云^いく人^{にん}師^し
は經^{きやう}論^{ろん}の心^{こころ}を得^えて釈^{しやく}を作^{つく}る者^{もの}なり然^{しか}ら
ば則^{すなわ}ち宗^{しゆ}宗^{しゆ}の人^{にん}師^し・面^{めん}面^{めん}・各^{かく}各^{かく}に教^{きやう}門^{もん}をしつらい釈^{しやく}を作^{つく}り義^ぎを立て

証得菩提しょうとくぼだい いとうさしと志しす何ぞ虚むなしかるべきや、然しかるに法華獨り勝ほつけひと まさると候はば
心せばくこそ覺おほえ候へ答えて云く法華獨りいみじと申もうすが心せばく候
はば釈尊しゃくそん程心せばき人は世に候はじ何ぞ誤あやまりの甚はなはだしきや、且しばらく
一經・一流の釈を引いて其その迷まよひをさとらせん、無量義經に云く種種しゅじゆ
に

法を説とき種種しゅじゆに法を説くこと方便ほうべん力を以てす四十余年未だ真実しんじつを
顯あらわさず」云云、此の文を聞いて大莊嚴等そうごんの八万人の菩薩ぼさつ一同に無量むりやう
無辺不可思議むへんふかしぎ・阿僧祇劫あそぎこうを過すぐるとも終ついに無上菩提むじやうぼだいを成じやうずることを得
ず」と領解りやうげし給たまへり、此の文の心は華嚴・阿含・方等ほうとう・般若はんにかの四十余年の
經に付いていかに念仏ねんぶつを申し禪宗ぜんしゆを持ちて仏道を願むねひ無量無辺・
不可思議ふかしぎ・阿僧祇劫あそぎこうを過すぐるとも無上菩提むじやうぼだいを成じやうずる事を得じと云へ
り、しかのみならず方便ほうべん品には世尊せそんは法久くして後要のちかならずまさ當しんじつに真実しんじつを

説きたもうべし」ととき、又唯有一乘法・無二亦無三と説きて此の經ばかりまことなりと云い、又二の卷には唯我一人のみ能く救護を為すと教へ但樂いて大乘經典を受持して乃至余經の一偈をも受け

ず」と説き給へり、文の心はただわれ一人して・よくすくひ・まもる事となす、法華經をうけたもたん事をねがひて余經の一偈をもうけざれと見えたり、又云く君し人信ぜずして此の經を毀謗せば則ち一切世間の仏種を

断ぜん乃至其の人命終して阿鼻獄に入らん」と云云、此の文の心は
若し人・此の経を信ぜずして此の経にそむかば則ち一切世間の仏のたね
を・たつものなり・その人は命をはらば無間地獄に入るべしと説き給へ
り、此等の文をうけて天台は將非魔作仏の詞正く此の文によれりと判
じ給へり、唯人師の釈計りを憑みて仏説によらずば何ぞ仏法
と云う名を付くべきや言語道断の次第なり、之に依つて智証大師は経
に大小なく理に偏円なしと云つて一切・人によらば仏説無用なりと
釈し給へり、天台は若し深く所以有り復修多羅と合せるをば録して
之を用ゆ無文無義は信受す可からず」と判じ給へり、又云く「文証無
きは悉く是れ邪の謂い」とも云へり、いかが心得べきや。

問うて云く人師の釈はさも候べし爾前の諸経に此の経第一とも説き
諸経の王とも宣べたり若し爾らば仏説なりとも用うべからず候か

如何、答えて云く設たとい此の經第一だいいちとも諸經の王とも申し候もうへ皆是れ
權教ごんきょうなり其の語ことばによるべからず、之に依よつて仏は了義經りょうぎきょうによりて
不了義經ふりょうぎきょうによらざれ」と説き妙樂大師は縦たとい經有りて諸經の王と
云うとも已今當説いこんとう最爲第一さいいだいと云わざれば兼けん但对帶其の義知んぬ可べし」
と釈しやくし給たまへり、此の釈の心は設たひ經ありて諸經の王とは云うとも前に
説ときつる經にも後に説かんずる經にも此の經はまされりと云はずば
方便ほうべんの經としれと云う釈なり、されば爾前にぜんの經の習ならいとして今説こんせつく經よ
り後に又經を説くべき由よしを云はざるなり、唯法華經計りこそ
最後さいごの極説なるが故ゆえに已今當の中いこんとうに此の經独ひとり勝すぐれたりと説かれて候
へされば釈には唯法華ただほつけに至いたつて前教の意を説いて今教の意を顯あらわす」と
申もうして法華經ほけきょうにて如来にょらいの本意ほんいも教化きょうけの儀式も定りたりと見えたり、之
に依よつて天台てんだいは如来成道にょらいじょうどう四十余年未だ眞実しんじつを顯あらわさず法華ほつけ始めて眞実しんじつ

を顯すあらわ」と云へり、此の文の心は如来世に出でさせ給たまいて四十余年よんじゅうよねんが間は眞実しんじつの法をば顯あらわさず法華經ほけきょうに始めて仏になる実の道を顯あらわし給たまへりと釈しやくし給たまへり。

問うて云く已今当いこんとうの中に法華經勝ほけきやうすくれたりと云う事はさも候べし、但し有人師にんしの云く四十余年よんじゅうよねん・未顯眞実みけんしんじつと云うは法華經ほけきょうにて仏になる声聞しょうもんの爲なり爾前にぜんの得益とくやくの菩薩ぼさつの爲ためには未顯眞実みけんしんじつと云うべからずと云う義をばいかが心得こころえ

候べきや、答えて云く法華經は二乗の爲なり菩薩の爲にあらず、されば
未顕真実と云う事二乗に限る可しと云うは徳一大師の義か此れは
法相宗の人なり、此の事を伝教大師破し給うに 現在の☆食者は
偽章數卷を作りて、法を謗じ人を謗ず何ぞ地獄に墮せざらんや」と
破し給ひしかば徳一は其の語に責められて舌八にさけてうせ給ひ
き、未顕真実とは二乗の爲なりと云はば最も理を得たり、其の故は
如来布教の元旨は元より二乗の爲なり一代の化儀・三周の善巧・併ら
二乗を正意とし給へり、されば華嚴經には地獄の衆生は仏になるとも
二乗は仏になるべからずと嫌い、方等には高峯に蓮の生ざるように二乗
は仏の種をいりたりと云はれ、般若には五逆罪の者は
仏になるべし二乗は叶うべからずと捨てらる、かかるあさましき捨者の
仏になるを以て如来の本意とし法華經の規模とす、之に依つて天台の

云く華嚴大品も之を治すること能わす唯法華のみ有りて能く無學を
して還つて善根を生じ仏道を成ずることを得せしむ所以に妙と稱す、
又闡提は心有り猶作仏す可し二乗は智を滅す心生ず可か
らず法華能く治す復稱して妙と為す」と云云、此の文の心は委く申す
に及ばず誠に知んぬ華嚴・方等・大品等の法華も二乗の重病をばいや
さず又三惡道の罪人をも菩薩ぞと爾前の經にはゆるせども二乗をばゆ
るさず、之に依つて妙樂大師は余趣を實に會すること諸經に・或は
有れども二乗は全く無し故に菩薩に合して二乗に對し難き
に従つて説く」と釈し給えり、しかのみならず二乗の作仏は一切衆生の
成仏を顯すと天台は判じ給へり、修羅が大海を渡らんをば是れ難しと
やせん、嬰兒の力士を投ん何ぞたやすしとせん、然らば則ち仏性の種
あるものは仏になるべしと爾前にも説けども未だ焦種の者作仏すべし

とは説かず、かかる重病じゅうびょうをたやすく・いやすは独り法華ほっけの

良薬りょうやくなり、只須ただすべからんじく汝なんじ仏にならんと思はば慢まんのはたほこをたをし愈いりの

杖じょうをすてて偏ひとえに一乗いちじょうに歸すべし、名聞みょうもん名利みんりは今生こんじょうのかざり我慢がまん偏執へんしゅう

は後生ごしょうのほだしなり、嗚呼ああ恥はづべし恥はづべし恐るべし恐るべし。

問うて云いわく一を以て万を察する事なればあらあら法華ほっけのいわれを聞

くに耳目じもく始めて明あきらかなり、但し法華經ほけきょうを

ば・いかように心得候てか速に菩提の岸に到るべきや、伝え聞く
いちねんさんぜん おおぞら
一念三千の大虚には慧日くもる事なく一心三觀の広池には智水にこる
事なき人こそ其の修行に堪えたる機にて候なれ、然るに南都の修学に
臂をくだく事なかりしかば瑜伽唯識にもくらし北嶺の学文に眼をさ
らさざりしかば止觀玄義にも迷へり、天台・法相の両宗はほとぎを
蒙りて壁に向へるが如し、されば法華の機には既にもれて候にこそ何ん
がし候べき、答えて云く利智精進にして
觀法修行するのみ法華の機ぞと云つて無智の人を妨ぐるは当世の学者
の所行なり是れ還つて愚癡邪見の至りなり、一切衆生・皆成仏道の教
なれば上根・上機は觀念・觀法も然るべし下根・下機は唯信心肝要な
り、されば經には「淨心に信敬して疑惑を生ぜざらん者は地獄・餓鬼・
畜生に墮ちずして十方の仏前に生ぜん」と説き給へり、いかにも

信じて次の生の仏前ぶつぜんを期てすべきなり、譬たとえば高き岸の下に人ありて登ることあたはざらん、に又岸の上に人ありて繩をおろして此の繩にとりつかば我れ岸の上に引き登さんと云はんに引く人の力を疑うたがいい繩の弱からん事をあやぶみて手を納おさめて是これをとらざらんが如ごとし争いかでか岸の上に登る事をうべき、若もし其その詞ことばに随したがひて手をのべ是これをとらへば即すなわち登る事をうべし、唯我一人・能のう為いく護ごの仏の御力おんちからを疑うたがいい以信得入いしんとくにゅうの法華經ほけきょうの教への繩をあやぶみて決定無有けつじきよう疑うたがいの妙法みょうぼうを唱なへ奉たてまつらざらんは力及およばず菩提ぼだいの岸に登る事難なんかるべし、不信ふしんの者は墮だ在ざい泥梨ないりの根元こんげんなり、されば經には「疑うたがいを生じて信ぜざらん者は則すなわち當まさに惡道あくどうに墮おつべし」と説かれたり、受けがたき人身じんしんをうけ値あいがたき仏法ぶつぽうにあひて争いかでか虚むなしくて候べきぞ、同じく信を取るならば又大小だいしきよう・權實ごんじつのある中に諸仏出生しよぶつしゆつしきようの本意ほんい・衆生成仏しゆじきようじきようぶつの

直道じきどうの一乗いちじょうをこそ信まことずべけれ、持とつ処ところの御經しよきようの諸經しよきように勝すぐれてましまして
ば能よく持もつ人も亦また諸人しよにんにまされり、爰こゝをを以もつて經きやうに云いく能よく是この經きやうを
持もつ者は一切衆生いっさいしゆじやうの中に於おいて亦また為これだ第一だいなり」と説とき給たまへり大聖たいせいの金言きんげん
疑うたがいひなし、然しかる

に人・此の理をしらず見ずして名聞みやうもん・狐疑こぎ・偏執へんしゆを致せるは墮獄だごくの基な
り、只願ただくは經きやうを持もち名なを十方じゆつぽうの仏陀ぶつだの願海がんかいに流ながし譽ほまれを三世さんぜの
菩薩ぼさつの慈天ほどこに施しすべし、然しかれば法華經ほけきやうを持もち奉たてまつる人は天竜てんりゆう・八部はちぶ・
諸大菩薩しよだいぼさつを以もつて我われが眷屬けんぞくと

する者なり、しかのみならず因身の肉団に果満の仏眼を備へ有為の凡膚に無為の聖衣を著ぬれば三途に恐れなく八難に憚りなし、七方便の山の頂に登りて九法界の雲を払ひ無垢地の園に花開け法性の空に月明かならん、是人於仏道・決定無有疑の文憑あり唯我一人・能為救護の説疑ひなし、一念信解の功德は五波羅蜜の行に越へ五十展転の随喜は八十年の布施に勝れたり、頓証菩提の教は遙に群典に秀で顕本遠寿の説は永く諸乗に絶えたり、爰を以て八歳の竜女は大海より来つて経力を刹那に示し本化の上行は大地より涌出して仏寿を久遠に顕す言語道断の経王心行所滅の妙法なり、然るに此の理をいるかせにして余経にひとしむるは謗法の至り大罪の至極なり、譬

を取るに物なし、仏の神変にても何ぞ是を説き尽きん菩薩の智力にても争か是を量るべき、されば譬喩品に云く 若し其の罪を説かば劫を

窮むとも尽きず」と云へり文の心は法華經を一度もそむける人の罪をば
劫を窮むとも説き尽し難しと見えたり、然る間三世の諸仏の化導にも
もれ恒沙の如来の法門にも捨てられ冥きより冥きに入つ
て阿鼻大城の苦患争か免れん誰か心あらん人・長劫の悲みを恐れざら
んや、爰を以て經に云く經を誦誦し書持すること有らん者を見て
輕賤憎嫉して結恨を懷かん其の人命終して阿鼻獄に入らん」と云云、
文の心は法華經をよみたもたん者を見てかろしめ・いやしみにくみ・そ
ねみ・うらみをむすばん其の人は命をはりて阿鼻大城に入らん
と云へり、大聖の金言誰か是を恐れざらんや正直捨方便の明文豈是を
疑うべきや、然るに人皆經文に背き世悉く法理に迷へり汝何ぞ
惡友の教へに随はんや、されば邪師の法を信じ受くる者を名けて毒を飲
む者なりと天台は釈し給へり汝能く是を愼むべし是を愼むべし。

倩つらら世間せけんを見るに法をば貴としと申せども其その人をば万人ばんにん是これを惡にくむ
汝なんじよ能よく能よく法の源みなもとに迷まよへり何いかにと云うに一切いっさいの草木そうもくは地より出生しゅっしやう
せり、是これを以て思うに一切いっさいの仏法ぶつぽうも又人によりて弘ひろまるべし之これに依よつて
天台てんだいは仏世ぶつぜすら猶なほ人を以て法を顯あはす末代まつだいいづくんぞ法は貴たかけれども
人は賤せんしと云はんやとこそ釈しゃくして御坐候おわしへされば持た

るる法だに第一だいいちならば持つ人随したがつて第一だいいちなるべし、然しからば則すなわち其の人を
毀そしりるは其の法を毀そしりるなり其の子を賤しむるは即すなわち其の親を賤しむな
り、爰ここに知んぬ当世とうせの人は詞ことばと心と総てあはず孝經こうきやうを以て其の親を打
つが如ごとし豈冥あにの照覽しょうらん恥かしからざらんや地獄じごくの苦み恐るべし恐るべし
慎つつしむべし慎つつしむべし、上根じやうこんに望めても卑下げこんすべからず下根げこんを捨てざるは
本懷ほんかいなり、下根げこんに望めても☆慢きやうまんならざれ上根じやうこんももるる事あり心をいた
さざるが故ゆえに凡およそ其の里ゆかし

けれども道たえ縁なきには通ふ心もをろそかに其の人恋しけれども憑たの
めず契ちぎらぬには待つ思もなをざりなるやうに彼の月卿雲閣げつけいうんかくに勝れたる
靈山淨土りやうぜんじやうどの行きやすきにも未だゆかず我が即是父の柔☆の御すがた見
奉たてまつるべきをも未だ見奉たてまつらず、是これ誠に袂たもとをくだし胸をこがす歎なげきなら
ざらんや、暮行空くれゆくそらの雲の色・有明方ありあけがたの月の光までも心をもよほす思な

り、事にふれをりに付けても後世ごしやうを心にかけて花の春雪の朝あしたも是これを思ひ
風さはぎ村雲まよふ夕にも忘るる

隙ひまなかれ、出いずる息は入る息をまたず何いかなる時節じせつありてか毎自作さぜねん是念
の悲願ひがんを忘れ何いかなる月日ありてか無む一不成じやうぶつ仏の御経を持たざらん、昨
日きようが今日きようになり去年こぞの今年となる事も是これ期ごすする処ところの余命にはあら
ざるをや、総て

過すぎにし方をかぞへて年の積るをば知るといへども今行末にをいて一日
片時かたときも誰か命の数に入るべき、臨終りんじゆう已すでに今にありとは知りながら我慢
偏執へんしゆう・名聞利養みやうもんりやうに著じゃくして妙法みやうぼうを唱なへ奉たてまつらざらん事は志いしやうの程無下いに
かひなし、さこそは皆成仏道の御法かいじやうぶつどうとは云いながら此の人争いかでか仏道
に・ものうからざるべき、色なき人の袖そでにはそぞろに月のやどる事かは、
又命すで已いちねんに一念いちねんにすぎざれば仏は一念いちねん随喜ずいきの功德くどくと説とき給たまへり、若もし

是れ二念三念を期すと云はば平等大慧の本誓頓教一乘皆成仏の法とは云はるべからず、流布の時は末世・法滅に及び機は五逆・謗法をも納めたり、

故に頓証菩提の心におきてられて狐疑執著の邪見に身を任する事なかれ、生涯幾くならず思へば一夜のかりの宿を忘れて幾くの名利をか得ん、又得たりとも是れ夢の中の栄へ珍しからぬ楽みなり、只先世の業因に任せて営むべし世間の無常をさとらん事は眼に遮り耳にみてり、雲とやなり雨とやなりけん昔の人は只名をのみ

きく、露^{つゆ}とや消え煙とや登りけん今の友も又みえず、我れいつまでか三
笠の雲と思ふべき春の花の風に随^{したが}ひ秋^{もみじ}の紅葉の時雨^{あめ}に染まる、是^これ皆^{みな}な
がらへぬ世の中のためしなれば法華^{ほけきょう}経には世^{みな}皆牢固ならざること水沫
泡^ほ焰^のの如^{ごと}し」とすすめたり、以^し何令衆生得入無上道^{しゆじやうとくに入むじやうどう}の御心のそこ順
縁^{ぎやくえん}逆縁の御ことは已^{すで}に本懐^{ほんかい}なれば暫^{しばらく}くも持つ者も又
本意^{ほんい}にかないぬ又本意^{ほんい}に叶はば仏の恩を報ずるなり、悲母深重^{ひもじんじゆう}の経文
心安ければ唯^{ただわれひとり}我一人の御苦みもかつかつやすみ給^{たま}うらん、釈迦^{しゃか}一^{いち}仏^{ぶつ}の
悦^{よろこ}び給^{たま}うのみならず諸^{しよぶつ}仏出世^{しゆつせ}の本懐^{ほんかい}なれば十方三世^{じゆつぱうさんぜ}の諸^{しよぶつ}仏も悦^{よろこ}び
給^{たま}うべし我^{そく}即^{かん}歡喜^{きんき}・諸^{しよぶつ}仏亦^{やく}然^{ねん}」と説かれたれば仏悦^{よろこ}び給^{たま}うのみならず
神^{すなわ}も即^{ずい}ち随喜^{ずいき}し給^{たま}うなるべし、伝教大師^{でんぎやうだいし}是^{これ}を講^{こう}じ給^{たま}いしか
ば八幡大菩薩^{はちまんだいぼさつ}は紫^{けさ}の袈裟^{ふせ}を布施^{ふせ}し、空也^{くうや}上人^{しやうにん}是^{これ}を讀^{たま}み給^{たま}いしかば松尾^{まつお}
の大明神^{だいみやうじん}は寒風^{かんぷう}をふせがせ給^{たま}う、されば七難^{ひちなん}即^{そく}滅^{めつ}・七福^{ひちふく}即^{そく}生^{しやう}」と祈^{いの}ら

んにも此の御經第一だいいちなり現世安穩げんせあんのんと見えなければなり、他国侵逼たこくしんびつの難なん、
自界叛逆じかいはんぎやくの難なんの御祈きとう☆にも此の妙典みょうてんに過ぎたるはなし、令百由旬内無ひやくゆじゅん
諸衰患しよすいげんと説かれたればなり。

然るに当世しとかとうせの御祈☆はさかさまなり先代流布せんだいるふの權教ごんきやうなり末代流布まつだいるふ
の最上真実さいじやうしんじつの秘法ひほうにあらざるなり、譬たとえば去年こぞの曆れきを用ゐる鳥からすを鵜うにつ
かはんが如ごとし是れ偏ひとえに權教ごんきやうの邪師じやしを貴とうとんで未だ実教じつきやうの明師めいしに値あわせ
給たまはざる故なり、惜おしいかな文武ぶんぶの卞和べんかがあら玉何いずくにか納おさめけん、嬉おさい
かな釈尊出世しやくそんしゆつせの譬たとの中の明珠みやうじゆ今度我身このたびわがみに得たる事よ、十方諸仏じゆつぽうしよぶつの
証しやうじやう誠じやうじやうとしてゐるがせならず、さこそは「一切世間・多怨難信いっさいせけん・たおんなんしん」と知り
ながら争いかでか一分いちぶんの疑心うたがいを残して決定けつじやう
無有疑うたがいの仏ぶつにならざらんや、過去遠遠かこの苦いたずみは徒らにのみこそうけ
こしか、などか暫しばらく不変常住ふへんじやうじやうの妙因みやういんをうへざらん未来永永みらいの樂みみはか

つかつ心を養ふともしゐてあながちに電光朝露の名利をば貪るべからず、さんがい「三界無安・猶如火宅」は如来の教へ所以諸法・如幻如化」は菩薩の詞なり、寂光の都ならずは何くも皆苦なるべし

本覺の栖を離れて何事か樂みなるべき、願くは現世安穩・後生善処」の妙法を持つのみこそ只今生の名聞・後世の弄引なるべけれ須く心を一にして南無妙法蓮華經と我も唱へ他をも勸んのみこそ今生人界の思出なるべき、

南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經。

日蓮 にちれん
花押 かおう

◆六四 木絵二像開眼之事

文永元年 ぶんえいがんねん 四十三歳

御作 468P

仏に三十二相有す皆色法なり、最下の千輻輪より終り無見頂相に至るまでの三十一相は可見有対色なれば書きつべし作りつべし梵音声の一相は不可見無対色なれば書く可らず作る可らず、仏滅後は木画の二像あり是れ三十一相にして梵音声かけたり故に仏に非ず又心法かけたり、生身の仏と木画の二像を対するに天地雲泥なり、何ぞ涅槃の後分には生身の仏と滅後の木画の二像と功德齊等なりといふや又大瓔珞

經には木画もくえの二像は生身しょうしんの仏に

はをとれりととけり、木画もくえの二像の仏の前に經を置けば三十二相具足ぐそくするなり、但心なければ三十二相を具ぐすれども必ず仏にあらざる人天にんてんも三十二相あるがゆへに、木絵もくえの三十一相の前に五戒經ごかいを置けば此の仏は輪王りんおうとひとし、十善論ぜんろんと云うを置けば帝釈たいしゃくとひとし、出欲論しゅつよくろんと云うを置けば梵王ぼんおうとひとし全く仏にあらざる、又木絵二像の前

に阿含經あこんきょうを置けば声聞しょうもんとひとし、方等ほうとう・般若はんにゃの一時一会いちじ いちえの共般若はんにゃを置けば緣覺えんかくとひとし、華嚴けこん・方等ほうとう・般若はんにゃの別円べつえんを置けば菩薩ぼさつとひとし全く仏に非らず、大日經だいにちきょう・金剛頂經こんごうちょうきょう・蘇悉地經そしつちきょう等の仏眼ぶつげん・大日の印真言だいにち しんごんは名は仏眼ぶつげん・大日だいにちといへども其その義は仏眼ぶつげん・大日だいにちに非ず、例せば仏も華嚴經けこんきょうは円仏えんぶつには非ず名にはよらず三十一相の仏の前に法華經ほけきょうを置きたてまつれば必ず純円じゅんえんの仏なり云云、故に普賢經ふげんに法華經ほけきょうの仏を説て

云く「あ仏の三種の身は方等ほうとうより生ず」文、是この方等ほうとうは方等部ほうとうぶの方等ほうとうに
非あらず法華ほっけを方等ほうとうといふなり、又云く此この大乗經だいじょうきようは是れ諸仏しよぶつの眼まなこな
り諸仏しよぶつ是よに因よつて五眼ごがんを具ぐすることを得る」等云云、法華經ほっけきようの文字もんじは
仏ぼんの梵音聲おんじようの不可見ふかけん無對色むたいしきを可見かけん有對色うたいしきのかたちと・あらはし

ぼんおんじょう

ぬれば顚形の二色となれるなり、滅せる梵音声かへつて形をあらはして
文字と成つて衆生を利益するなり、人の声を出すに二つあり、一には
自身は存ぜざれども人をたぶらかさむがために声をいだす是は隨他意
の聲、自身の思を声にあらはす事ありされば意が声とあらはる意は心
法・声は色法・心より色をあらはす、又声を聞いて心を知る色法が心法
を顯すなり、色心不二なるがゆへに而二とあらはれて仏の御意あらはれ
て法華の文字となれり、

もんじ

文字變じて又仏の御意となる、されば法華經をよませ給はむ人は文字
と思食事なかれすなわち仏の御意なり、故に天台の釈に云く「請を受
けて説く時は只是れ教の意を説く教の意は是れ仏意・仏意即是れ仏智な
り・仏智至て深し是故に三止四請す、此の如き艱難あり余經に比する
に余經は則易し」文此の釈の中に仏意と申すは色法ををさへ

ほけきよう

心法といふ釈なり、法華經を心法とさだめて三十一相の木絵の像に印

もくえ

すれば木絵二像の全体・生身の仏なり、草木成仏といへるは是なり、

ゆえ てんだい いっしきいっこうむひちゅうどう

故に天台は「二色一香無非中道」と云云、妙樂是をうけて釈に然るに

またとも しきこうちゅうどう

亦俱に色香中道を許せども無情仏性は耳を惑わし心を驚かす」云

云、華嚴の澄觀が天台の一念三千をぬすみて華嚴にさしいれ法華・

けこん ちようかん てんだい いちねんさんぜん

華嚴ともに一念三千なり、但し華嚴は頓頓・さきなれば法華は漸頓の

けこん いちねんさんぜん ただ けこん とん

ちなれば華嚴は根本さきをしぬれば法華は

けこん こんぽん ほつけ

枝葉等といふて我理をえたりとおもへる意・山の如し・然りと雖も

いちなんさんぜん かんじん そうもくじようぶつ ごと ししか

一念三千の肝心・草木成仏を知らざる事を妙樂のわらひ給へる事な

り、今の天台の学者等我一念三千を得たりと思ふ、然りと雖も法華を

もつて・或は華嚴に同じ・或は大日經に同ず其の義を論ずるに澄觀の

ある けこん ある だいにちきよう そ

見を出でず善無畏不空に同ず、詮を以て之を謂わば今の木絵二像を

い ぜんむいふくう これ

見を出でず善無畏不空に同ず、詮を以て之を謂わば今の木絵二像を

もくえ

真言師しんごんしを以て之これを供養くようすれば実仏じつぶつに非ずあらして權仏ごんぶつなり權仏ごんぶつにも非ずあら
形は仏に似たれども意もとは本の非情ひじょうの草木そうもくなり、又本の非情ひじょうの草木そうもくにも
非ずあら魔なり鬼なり、真言師しんごんしが邪義じやぎ・印真言しんごんと成つて木絵二像もくえの意と成
れるゆへに例せば人の思變じて石と成り俱留くると黄夫石こうふせきが如ごとし、法華を
心得こころえたる人・木絵二像もくえを開眼供養かいげんくようせざれば家に主のなきに盜人ぬすびとが入り
人の死するに其その身に鬼神きじん入るが如ごとし、今真言しんごんを以て日本にほんの仏を供養くよう
すれば鬼入つて人の命をうばふ鬼をば

奪命者だつみょうしやといふ魔入まつて功德くどくをうばふ魔をば奪功德者くどくといふ、鬼をあがむるゆへに今生こんじやうには国をほろぼす魔をたとむゆへに後生ごじやうには無間獄むげんごくに墮だす、人死すれば魂去り其その身に鬼神きじん入り替つて子孫しそんを亡ぼす、餓鬼がきといふは我をくらふといふ是これなり、智者ちしやあつて法華經ほけきやうを讚歎さんたんして骨の魂となせば死人しにんの身は人身じんしん・心は法身ほっしん・生身得忍しやうしんとくにんといへる
法門ほうもん是これなり、華嚴けこん・方等ほうとう・般若はんにやの円をさとれる智者ちしやは死人しにんの骨を生身しやうしん得忍とくにんと成す、涅槃經ねはんぎやうに身は人身じんしんなりと雖いえども心は仏心ぶっしんに同ずといへるは是これなり、生身得忍しやうしんとくにんの現証げんしやうは純陀じゆんだなり、法華ほっけを悟れる智者ちしや・死骨しこつを供養くやうせば生身しやうしん即法身そくほっしん・是これを即身そくしんといふ、さりぬる魂を取り返して死骨しこつに入いれて彼の魂を変えて仏意ぶつゐと成す成仏じやうぶつ是これなり、即身そくしんの二字は色法じきほふ・成仏じやうぶつの二字は心法しんほふ・死人しにんの色心しきしんを変えて無始むしの妙境みやうぢやう・妙智みやうちと成す是これれ則ちすなわそくしんじやうぶつ即身成仏そくしんじやうぶつなり、故ゆえに法華經ほけきやうに云く所謂諸法いゝゆるしよほふ如是相によぜそうしにん死人しにんの身如是性によぜしやう同く心

如によぜたい是は体たい同どうく色しき心しん等ら云い云い、又また云いく深ふかく罪つみ福ふくの相あひに達いたして☆く十あまねくじゅう方ぽうを照てらし
たみようまう微み妙みょうの浄じやうき法ほつ身しん・相あひを具ぐせること三さん十二じふに」等ら云い云い、上かみの二ふた句くは
生しやう身しん得とく忍にん・下したの二ふた句くは即そく身しん成じやう仏ぶつ・即そく身しん成じやう仏ぶつの手て本ほんは童りゆう女にょ是こなり生しやう身しん
得とく忍にんの手て本ほんは純じゆん陀だ是こなり。

◆六五

女人成仏抄

文ぶん永えい二年四十四歳御作

470P

提だい婆ば品ひんに云いく・仏ぶつ告こ諸しよ比ひ丘く未み来らい世せ中ちゆう乃ない至し蓮れん華け化け生しやう」等ら云い云い、此この
提だい婆ば品ひんに二ふた箇かんの諫げん曉ぎやうあり所い謂わ達だ多たの弘くき經きやう釈しやく尊そんの成じやう道どうを明あし又また文もん殊じゆの
通りゆう經きやう・童にょ女にょの作さ仏ぶつを説とくく、されば此この品ひんを長ちやう安あん宮みやうに一品ひとひん切きり留とどめて二

十七品を世に流布する間・秦の代より梁の代に至るまで七代の間の王
は二十七品の經を講讀す、其の後滿法師と云いし人・此の品法華經に
なき由を読み出され候いて後・長安城より尋ね出し今は二十八品にて
弘まらせ給う、さて此の品に淨心信敬の人

のことを云うに一には三惡道に墮せず二には十方の仏前に生ぜん三には所生の處には常に此の經を聞かん四には若し人天の中に生ぜば勝妙の樂を受けん五には若し仏前に在らば蓮華より化生せんとなり、然るに一切衆生は法性真如の都を迷い出でて妄想顛倒の里に入りしより已來身口意の三業になすところ善根は少く惡業は多し、されば經文には一人二日の中に八億四千念あり念念の中に作す所皆是れ三途の業なり等云云、我等衆生三界二十五有

のちまたに輪回せし事鳥の林に移るが如く死しては生じ生じては死し車の場に回るが如く始め終りもなく死し生ずる惡業深重の衆生なり、爰を以て心地觀經に云く有情輪回して六道に生ずること猶車輪の始終無きが如く、或は父母と為り男女と為り生生世世互いに恩有り」等云云、法華經二の卷に云く「三界は安きこと無し猶火宅の如く衆苦

じゅうまん
充滿せり」云云、涅槃經二十二に云く、菩薩摩訶薩諸の衆生を觀ずる
しきじょう
に色香味触の因縁の爲の故に昔無量無數劫より以來常に苦惱を受く、
しゅじょう いっじょう
一一の衆生一劫の中に積る所の身の骨は王舍城の毘富羅山の如く飲む
所の

にゅうじゅう
乳汁は四海の水の如く身より出す所の血は四海の水より多く
ふば・き・ようだい
父母・兄弟・妻子・眷属の命終に涕泣して出す所の目涙は四大海の水
より多し、地の草木を尽くして四寸の籌と爲して以て父母を数うる
また
に亦尽くすこと能わじ、無量劫より已來・或地獄・畜生・餓鬼に在つて
受くる所の行苦稱計す可からず亦一切衆生の骸骨をや」云云、
かくのごと
是くの如くいたづらに命を捨るところの骸骨は毘富羅山よりも多し恩
愛あはれみの涙は四大海の水よりも多けれども仏法の爲には一骨をも
なげず、一句一偈を聴聞して一滴の涙をも・おとさぬゆへに三界の籠樊

を出でずして二十五

有^うのちまたに流^る転^{てん}する衆^{しゆ}生^{じやう}にて候^{こう}なり、然^{しか}る間^{かん}如何^{いかん}として三^{さん}界^{がい}を離^{はな}る
べきと申^{もう}すに仏^{ぶつ}法^{ぽう}修^{しゆ}行^{ぎやう}の功^{こう}力^{りき}に依^よつて無^む明^{みやう}のやみはれて法^{ほつ}性^{しやう}真^{しん}如^にの覺^{さとり}
を開^{ひら}くべく候^{こう}、さては仏^{ぶつ}法^{ぽう}は何^{いか}なるをか修^{しゆ}行^{ぎやう}して生^{しやう}死^じを離^{はな}るべきぞと
申^{もう}すに但^{いちじやう}一^{みやう}乘^{ぼう}・妙^{みやう}法^{ぽう}にて有^あるべく候^{こう}、されば慧^え心^{しん}僧^{そう}都^ず・七^{しち}箇^こ日^{にち}・加^か茂^もに
参^{さん}籠^{ろう}して出^{しゆ}離^り生^{しやう}死^じは何^{いか}なる教^{きやう}にてか候^{こう}べきと祈^き請^{しやう}申^{もう}され候^{こう}いしに明^{みやう}神^{じん}
御^た託^く宣^{せん}に云^いく釈^{しや}迦^かの説^{せつ}教^{きやう}は一^{いち}乘^{じやう}に留^{とど}まり諸^{しよ}仏^{ぶつ}の成^{じやう}道^{どう}は妙^{みやう}法^{ぽう}に在^あり
菩^ぼ薩^{さつ}の六^{ろく}度^どは蓮^{れん}華^げに在^あり二^に乘^{じやう}の得^{とく}道^{どう}

は此の經に在り」云云、普賢經に云く、此の大乗經典は諸仏の宝蔵なり十方三世の諸仏の眼目なり三世の諸の如来を出生する種なり」云云、此の經より外はすべて成仏の期有るべからず候上殊更女人成仏の事は此の經より外は更にゆるされず、結句爾前の經にてはをびただしく嫌はれたり、されば華嚴經に云く、女人は地獄の使なり能く仏の種子を断ず外面は菩薩に似て内心は夜叉の如し」云云、銀色女經に云く「三世の諸仏の眼は大地に墮落すとも法界の諸の女人は永く成仏の期無し」云云、或は又女人には五障三従の罪深しと申す、其れは内典には五障を明し外典には三従を教えたり、其の三従とは少くしては父母に従ひ盛にしては夫に従ひ老いては子に従ふ一期身を心に任せず、されば榮啓期が三樂を歌ひし中にも女人と生れざるを以て一樂とす、天台大師云く 他經

には但菩薩ぼさつ しるに記しるして二乗にじように記せず但男しるに記して女しるに記せず」とて全く
余経よきようには女人にょにんの授記じゆきこれなしと釈しやくせり、其上釈迦しやか・多宝たほうの二仏たつちゆう塔中たつちゆうに
並坐びやうざし給たまひし時・文殊もんじゆ・妙法みやうほうを弘ひろめん為ために海中かいちゆうに入り給たまいて・仏前ぶつぜんに
歸かへり参まゐり給たまいしかば宝浄世界ほうじやうせかいの多宝たほう仏ぶつの御弟子おんでし・智積ちしやく菩薩ぼさつは竜女りゆうにょ成じやう仏ぶつ
を難なんじて云いく 我釈迦しやか如来にやらいを見みたてまつれば無量劫むりやうこくに於おいて難行なんぎやう苦行くぎやう
功こうを積たみ・徳とくを累かさね・菩薩ぼさつの道みちを求もとむること未いまだ曾かつて止息しそくしたまわ
ず、三千大千世界さんぜんだいせんせかいを觀みるに乃至芥子ないしけしの如ごとき許ばかりも是これ菩薩ぼさつの身命しんみやうを
捨すてたもう処ところに非あらざることに有あること無し、衆生しゆじやうの為ための故ゆゑなり」等云云、
所謂いふ智積ちしやく

・文殊もんじゆ・再三問答もんどういたし給たまう間は八万はちまんの菩薩ぼさつ・方二千しようもんの声聞いすれ等何れも耳
をすまして御聴聞計ちやうもんばかりにて一口の御助言およに及およばず、然しかるに智慧ちえ第一だいいちの
舍利弗しやりほつ・文殊もんじゆの事をば難なんずる事なし多くの故を以もつて竜女りゆうにょを難なんぜらる

所以に女人は垢穢にして是れ法器に非ずと小乗・權教の意を以て難ぜられ候いしかば文殊が竜女成仏の有無の現証は今・仏前にして見え候べしと仰せられ候いしに、案にたがはず八歳の竜女蛇身をあらためずして仏前に参詣し価直三千大千世界と説かれて候・如意宝珠を仏に奉りしに、仏悦んで是を請取り給いしかば此の時智積菩薩も舍利弗も不審を開き女人成仏の路をふみわけ候、されば女人成仏の手本是より起つて候・委細は五の卷の經文之を読む可く候、

伝教大師の秀句に云く、能化の竜女、歴劫の行無く所化の衆生も歴劫の行無し、能化所化俱に歴劫無し、妙法経力・即身成仏す。天台の疏に云く、智積は別教に執して疑いを為し、竜女は円を明して疑いを釈く。身子は三蔵の権を挾んで難ず、竜女は一実を以て疑いを除く。海竜王経に云く、竜女作仏し、国土を光明国と号し、名をば無垢証如来と号す。云云、法華已前の諸経の如きは縦い人中・天上の女人なりといふとも成仏の思絶たるべし、然るに竜女・畜生道の衆生として戒緩の姿を改めずして即身成仏せし事は不思議なり、是を始として釈尊の姨母・摩訶波闍波提比丘尼等・勸持品にして一切衆生喜見如来と授記を被り・羅☆羅の母・耶輸陀羅女も眷属の比丘尼と共に具足千万光相如来と成り、鬼道の女人たる十羅刹女も成仏す、然れば尚殊に女性の御信仰あるべき御経

にて候、抑此の經の一文一句を読み一字一点を書く尚出離生死・証
大菩提の因なり、然れば彼の字に結縁せし者・尚炎魔の庁より歸され
六十四字を書し人は其の父を天上へ送る、何に況や阿鼻の依正は
極聖の自心に処し地獄・天宮皆是れ果地の如来なり、毘盧の身土は
凡下の一念を逾ず遮那の覺体も衆生の迷妄を出でず妙文は靈山淨土
に増し六万九千の露点は紫磨金の輝光を副え給うべし、殊に過去
聖靈は御存生の時より御信心他に異なる御事なりしかば今日講經の
功力に依つて仏前に生を受け仏果菩提の勝因に登り給うべし云云、
南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。

◆六六

聖愚問答抄上

上文永二年 四十四歳御

作 474P

夫れ生を受けしより死を免れざる理りは賢き御門より卑き民に至るまで人ごとに是を知るといへども實に是を大事とし是を歎く者千万人に一人も有がたし、無常の現起するを見ては疎きをば恐れ親きをば歎くといへども先立つははかなく留るは・かしこきやうに思いて昨日は彼のわざ今日は此の事とて徒らに世間の五慾にほだされて白駒のかけ過ぎやすく羊の歩み近づく事をしらずして空しく衣食の獄につながれ徒らに名利の穴にをち三途の旧里に帰り六道のちまたに輪回せん事心有らん人誰か歎かざらん誰か悲しまざらん。

嗚呼・老少不定は娑婆の習ひ会者定離は浮世のことはりなれば始めて驚くべきにあらねども正嘉の初め世を早うせし人のありさまを見るに・或は幼き子をふりすて・或は老いたる親を留めをき、いまだ壮年の齡にて黄泉の旅に趣く心の中さこそ悲しかるらめ行くもかなしみ留るもかなしむ、彼楚王が神女に伴いし情を一片の朝の雲に残し劉氏が仙客に値し思いを七世の後胤に慰む予か如き者底に縁つて愁いを休めん、かかる山左のいやしき心なれば身には思のなかれかしと云いけん人の古事さへ思ひ出でられて末の代のわすれがたみにもとて難波のもしほ草をかきあつめ水くきのあとを形の如くしるしをくなり。

悲しいかな痛しいかな我等無始より已来無明の酒に酔て六道・四生に輪回して・或時は焦熱大焦熱の炎にむせび・或時は紅蓮・大紅蓮の水にとぢられ・或時は餓鬼飢渴の悲みに値いて五百生の間飲食の名をも聞

かず、或時^{ある}は畜生^{ちくしやう}・残害の苦みをうけて小さは大きなるに・のまれ
短きは長きにまかる是^{これ}を残害の苦と云う、或時^{ある}は修羅^{しゆら}・閻靜^{えんじやう}の苦を
うけ、或時^{ある}は人間^{にんげん}に生れて八苦をうく生・老・病・死・愛別離苦・怨憎会
苦・求不得苦・五盛陰苦等なり、或時^{ある}は天上^{てんじやう}

に生れて五衰すいをうく、此こくの如ごとく三界さんがいの間を車輪のごとく回り父子の中にも親の親たる子の子たる事をさとらず夫婦の会あい遇あえるも会あい遇あえたる事をしらず、迷まよへる事は羊目に等しく暗き事は狼眼ろうがんに同じ、我を生たる母の由来ゆらいをも

しらず生を受けたる我が身も死の終りをしらず、嗚呼ああ受け難がたき人界にんかいの生をうけ値あい難がたき如来にょらいの聖教しょうきょうに値あい奉たてれり一眼の亀の浮木うきぎの穴にあへるがごとし、今度このたび若もし生死しょうじのきづなをきらず三界さんがいの籠樊ろうはんを出でざらん事かなしかるべしかなしかるべし。

爰こゝに・或あるる智人ちじん来りて示して云く汝なんじが歎なげく所しょ実じつに爾しかなり此こくの如ごとく無常むじょうのことほりを思い知り善心ぜんしんを發おこす者は麟角りんかくよりも希まれなり、此このことほりを覺さとらずして惡心あくしんを發おこす者は牛毛よりも多し、汝なんじ早く生死しょうじを離はなれ菩提心ぼだいしんを發おこさんと思はば吾最第一さいだいいちの法を知れり志しつ あらば汝なんじが

為に之を説いて聞かしめん、其の時愚人座より起つて掌を合せて

云く我は日來外典を學し風月に心をよせていまだ仏教と云う事を委細

にしらず願くば上人。我が為に是を説き給へ

其の時上人の云く汝耳を伶倫が耳に寄せ目を離朱が眼にかつて心を

しづめて我が教をきけ汝が為に之を説かん夫れ仏教は八万の聖教多

けれども諸宗の父母たる事・戒律にはしかずされば天竺には世親馬鳴

等の薩☆唐土には慧曠・道宣と云いし人は是を重んず、我が朝には人皇

四十五代・聖武天皇の御宇に鑒真和尚此の宗と天台宗と両宗を渡して

東大寺の戒壇之を立つ爾しより已來当世に至るまで崇重年旧り尊貴・

日に新たなり、就中極樂寺の良觀上人

は上一人より下万民に至るまで生身の如来と是を仰ぎ奉る彼の行儀

を見るに実に以て爾なり、飯嶋の津にて六浦の関米を取つては諸国の道

を作り七道に木戸をかまへて人別の錢を取つては諸河に橋を渡す慈悲
は如来に斉しく徳行は先達に越えたり、汝早く生死を離れんと思は
ば五戒・二百五十戒を持ち慈悲をふかくして物の命を殺さずして良觀
上人の如く道を作り橋を渡せ是れ第一の法なり、汝持たんや否や。
愚人弥掌を合せて云く能く能く持ち奉らんと思ふ具に我が為に
是を説き給へ抑五戒・二百五十戒と云う事は我等未だ存知せず委細
に是を示し給へ智人云く汝は無下に愚かなり五戒・二百五十戒と云
う事をば孩児も是をしる然れども汝が為に之を説かん、五戒とは一に
は不殺生戒二には不偷盜戒三には不妄語戒四には不邪淫戒五には不
飲酒戒是なり、二百五十戒の事は多き間之を略す、其の時に愚人礼拝
恭敬して云く我今日より深く此の法を持ち奉るべし。

爰に予が年来の知音・或所に隱居せる居士一人あり予が愁歎を

訪わん為に來れるが始には往事渺茫として夢に似たる事をかたり終に
は行末の冥冥として弁え難き事を談ず鬱を散し思をのべて後予に問う
て云く抑人の世に有る誰か後生を思はざらん、貴辺何なる仏法をか
持ちて出離をねがひ又亡者の後世をも訪い給うや、予答えて云く一日
・或る上人來つて我が為に五戒・二百五十戒を授け給へり実に以て心肝
にそみて貴し、我深く良觀上人の如く及ばぬ身にもわろき道を作り深
き河には橋をわたさんと思へるなり、其の時居士示して云く汝が道心
貴きに似て愚かなり、今談ずる処の法は浅ましき小乗の法なり、さ
れば仏は則ち八種の喩を設け文殊は又十七種の差別を
宣べたり・或は螢火日光の喩を取り・或は水精・瑠璃の喩あり爰を
以て三国の人師も其の破文一に非ず、次に行者の尊重の事必ず人の
敬ふに依つて法の貴きにあらず・されば仏は依法不依人と定め給へり、

我伝え聞く上古の持律の聖者の振舞は殺を言い収を言うには知淨の語
有り行雲廻雪には死屍の想を作す而るに今の律僧の振舞を見るに布絹
・財宝をたくはへ利銭・借請を業とす教行既に相違せり誰か是を
信受せん、次に道を作り橋を渡す事還つて人の歎きなり、飯嶋の津にて
六浦の関米を取る諸人の歎き是れ多し諸国七道の木戸・是も旅人のわ
づらい只此の事に在り眼前の事なり汝見ざるや否や。

愚人色を作して云く汝が智分をもつて上人を謗し奉り其の法を誹
る事謂れ無し知つて云うか愚にして云うかおそろしおそろし、其の時
居士笑つて云く嗚呼おろかなりおろかなり彼の宗の僻見をあらあら
申すべし、抑教に

だいしやう

大小有り宗に権実を分かつて鹿苑施小の昔は化城の戸ばそに導くとい

へども驚峯開顕の筵には其の得益更に之れ無し、其の時愚人茫然とし

て居士に問うて云く文証・現証実に以て然なり・さて何なる法を持つ

てか生死を離れ速に成仏せんや、居士示して云く我れ在俗の身なれど

も深く仏道を修行して幼少より多くの人師の語を聞き粗経教をも

聞き見るに末代我等が如くなる無惡不造のためには念仏往生の教にし

くはなし、されば慧心の僧都は天れ

往生極樂の教行は濁世末代の目足なり」と云ひ法然上人は諸経の

要文を集めて一向専修の念仏を弘め給ふ中にも弥陀の本願は諸仏

超過の崇重なり始め無三惡趣の願より終り得三法忍の願に至るまでい

づれも悲願目出けれども第十八の願殊に我等が為に殊勝なり、又

十惡・五逆をもきらはず一念・多念をもえらば上一人より下

ばんみん 万民に至るまで此の宗をもてなし給う事他に異なり又往生の人それ
いくばく 幾ぞや。

其の時愚人の云く実まことに小ちひを恥はじて大おほを慕あそひ浅あさを去すてて深ふかに就つはふつき教きょう
の理ことのみに非あらず世間せけんにも是これ法はなり我われ早く彼の宗しゆにうつらんと思おもふ
委細いさいに彼の旨むねを語かたり給たまへ彼の仏ひがんの悲願ひがんの中に五逆ごぎやく・十惡じゅうあくをも簡えらばず
と云いへる五逆ごぎやくとは何等なんらぞや十惡じゅうあくとは如何いかん、智人ちじんの云いく五逆ごぎやくとは父ちちを殺ころ
し母ははを殺ころし阿羅漢あらかんを殺ころし仏身ぶつしんの血ちを出だし和合僧わごうそうを破はす是これを五逆ごぎやくと云い
うなり、十惡じゅうあくとは身みに三・口くちに四・意いに三なり身みに三とは・殺ころ・盜ぬす・姪いん・
口くちに四とは妄語もうご・綺語きご・惡口あくぐち・兩舌りやうで・意いに三
とは貪とん・瞋じん・癡ち・是これを十惡じゅうあくと云うなり、愚人ぐにん云いく我われ今け解げしぬ今日きようよりは
他力往生たのりきおうじやうに憑たのみ懸かくべきなり、爰こゝに愚人ぐにん又また云いく以もつての外ほか盛さかんに・いみじ
き密宗みつしゆの行人ぎやうじんあり是こゝも予なげが歎なげきを訪とむらわんが為ために來臨らいりんして始はには狂言

綺語きごのことはりを示し終には顯密二宗けんみつの法門ほうもんを談じて予よに問うて云く
抑おさ汝なんじは何なる仏法ぶつぽうをか修行しゆぎやうし何なる經論きやうろんをか誦誦どくじゆし奉るや、

予答えて云く我いわ一日いちにち・或る居士こじの教に依つて浄土じやうどの三部經さんぶきやうを読み奉り
西方極樂さいほうごくらくの教主きやうしゆに憑たのみを深く懸くるなり、行者ぎやうじやの云く仏教ぶつぎやうに二種有り
一には顯教けんきやう二には密教みつぎやうなり顯教けんきやうの極理ごくりは密教みつぎやうの初門じよもんにも及ばずと云
云、汝なんじが執心しゆしんの法を聞けば釈迦しやかの顯教けんきやうなり我が所持しよじの法は大日覺王だいにかかくおう
の秘法ひほうなり、実に三界さんがいの火宅やちを恐れ寂光じやくくわうの宝台ほうだいを願はば須すべからく顯教けんきやう

を捨てて密教につくべし。

愚人驚いて云く我いまだ顕密二道と云う事を聞かず何なるを顕教

と云ひ何なるを密教と云へるや、行者の云く予は是れ頑愚にして敢て

賢を存ぜず然りと雖も今一二の文を挙げて汝が矇昧を挑げん、顕教

とは舍利弗等の請に依つて応身如来の説き給う諸教なり密教とは

自受法樂の為に法身大日如来の金剛薩☆を所化として説き給う処の

大日經等の三部なり、愚人の云く実に以て然なり先非を・ひるがへして

賢き教に付き奉らんと思ふなり。

又爰に萍のごとく諸州を回り蓬のごとく県県に転ずる非人のそ

れとも知らず来り門の柱に寄り立ちて含笑語る事なし、あやしみをな

して是を問うに始めには云う事なし後に強て問を立つる時・彼が云く

月蒼蒼として風忙忙たりと、形質常に異に言語又通ぜず其の至極を

たずぬ 尋れば当世とうせの禅法ぜんぽう是なり、予彼の人の有様を見其の言語ごんごを聞き

ぶつじう

て仏道の良因を問う時、非人の云く修多羅しゆたらの教は月をさす指・教綱は

是れ言語ごんごにとどこほる妄事なり我が心の本分ほんぶんにおちつかんと出立法いでたつは

其の名を禅と云うなり、愚人ぐにん云く願くは我聞んと思ふ、非人の云く実

に其の志いしかん深くば壁に向い坐禅ざぜんして本心の月を澄ましめよ爰こゝを以て

せいてん

西天には二十八祖ふだ系乱れず東土とうどには六祖の相伝明白なり、汝なんじ是を悟

らずして教綱にかかる不便ふびん不便ふびん、是心即仏・即心是仏なれば此の身の

外に更に何にか仏あらんや。

ぐにん

愚人此の語ことばを聞いてつくづく諸法しよぽうを觀かんじ閑かに義理ぎりを案じて云く

ぶつぎよう

仏教万差にして理非明らめ難し宜なるかな常啼じやうたいは東に請こい善財ぜんざいは南に

やくおう

求め藥王は臂ひじを焼き樂法ぎきうぽうは皮を剥ぐ善知識ぜんちしき実まことに値あひ難し、或は教内

と談じ、或は教外と云う此のことはりを思うに未だ淵底えんでいを究めず・法水ほつずい

に臨のぞむ者は深淵しんえんの思おもいを懷いだき人師にんしを見る族やからは薄冰うすらいの心こころを成なりせ
り、爰ここをもつを以もつて金言きんげんには依法えぼう不依人ふえと定め又爪上土そうじょうの譬たとえあり若もし仏法ぶつぽう
の真偽しんぎをしる人あらば尋たずねて師しとすべし求めて崇そべし、夫それ人界にんかいに生なまを
受くるを天上てんじょうの糸いとにたとへ佛法ぶつぽうの視聽しきやうは浮木うきぎの穴あなの類たぐひせり、身みを輕かろく
して法はふを重おもんずべしと思おもうに依よつて衆山しゅうざんに攀よじ歎なげきに引ひれて諸寺しよを回まわる
足あしに任まかせて一つの巖窟いに至いたるに後のちには青山峨峨ががとして松風

・常樂我淨を奏し前には碧水湯湯として岸うつ波・四徳波羅蜜を響か
す深谷に開敷せる花も中道実相の色を顯し広野に綻ぶる梅も界如
三千の薫を添ふ言語道斷・心行所滅せり謂つ可し商山の四皓の所居
とも又知らず古仏經行の迹なるか、景雲朝に立ち靈光夕べに現ず嗚呼
心を以て計るべからず詞を以て宜ぶべからず、予此の砌に沈吟と
さまよひ彷徨とたちもとをり徙倚とたたずむ、此処に忽然として一の
聖人坐す其の行儀を拝すれば法華読誦の声深く心肝に染みて閑☆の
戸ほそを伺へば玄義の牀に臂をくだす、爰に聖人予が求法の志を
酌知て詞を和げ予に問うて云く汝なにに依つて此の深山の窟に至れ
るや、予答えて云く生をかるくして法をおもくする者なり、聖人問て
云く其の行法如何、予答えて云く本より我は俗塵に交りて未だ出離を
弁えず、適善知識に値て始には律・次には念仏・真言並に禪此等を聞

くといへども未だ真偽を弁えず、聖人云く汝が詞を聞くに実に以て然なり身をかるくして法をおもくするは先聖の教予が存ずるところなり、抑上は非想の雲の上・下は那落の底までも生を受けて

死をまぬかるる者やはある、然れば外典のいやしきをしえにも朝に紅顔有つて世路に誇るとも夕には白骨と為つて郊原に朽ちぬと云へり、雲上に交つて雲のびんづらあざやかに廻雪たもとを・ひるがへすとも其の樂みをおもへば夢の中の夢なり、山のふもとと蓬がもととはつるの栖なり玉の台・錦の帳も後世の道にはなにかせん、小野の小町

・衣通姫が花の姿も無常の風に散り・攀☆張良が武芸に達せしも獄卒の杖をかなしむ、されば心ありし古人の云くあはれなり鳥べの山の夕煙をくる人としてとまるべきかは、末のつゆ本のしづくや世の中の・をくれさきたつためしなるらん、先亡後滅の理り始めて驚くべきにあら

ず願ふても願ふべきは仏道ぶつどう求めても求むべきは經教きょうぎょうなり、抑そも汝なんじが云
うところの法門ほうもんをきけば、或あるは小乗しょうじょう・或あるは大乗だいじょう・位いの高下こうげは且しばらく
之これを置く還かえつて惡道あくどうの業わざたるべし。

爰こゝに愚人ぐにん おどろ驚おどろいて云いく如來にょらい いちだい一代之聖教しょうきょうはいづれも衆生しゅじょうを利いせんが為
なり、始め七処しちせつ・八会はつかいの筵えんより終り跋提河ばつだいがの儀式ぎしまで何いれか釈尊しゃくそんの
所説しよせつならざる設たひ一分いちぶんの勝劣しょうれつをば判はずとも何なんぞ惡道あくどうの因いんと云いべきや、
聖人しょうにん云いく如來にょらい いちだい一代之の

しょうぎよう

聖教

に権有り実有り大有り小有り又顕密二道相分ち其の品一に

あら

非ず、須く其の大途を示して汝が迷を悟らしめん、夫れ三界の教主

しやくそん

釈尊は十九歳にして伽耶城を出て檀特山に籠りて難行苦行し三十

じようどう

成道の刻に三惑頓に破し無明の大夜爰に明しかば須く本願に任せて

いちじよう

一乗・妙法蓮華經を宣ぶべしといへども機縁万差にして其の機仏乘に

た

堪えず、然れば四十余年に所被の機縁を調へて後八箇年に至つて出世

ほんかい

の本懷たる妙法蓮華經を説き給へり、然れば仏の御年七十二歳にして

じよぶん

序分・無量義經に説き定めて云く我先きに道場菩提樹の下に端坐す

る

こと六年にして阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たり、仏眼を

もつ

以て一切の諸法を觀ずるに宣説す可からず、所以は何ん諸の

しゆじよう

衆生の性慾不同なるを知れり性慾不同なれば種種に法を説く種種に

法を説くこと方便の力を以てす四十余年には未だ真実を顯わさず」

文、此の文の意は仏の御年三十にして寂滅道場菩提樹の下に坐して
仏眼を以て一切衆生の心根を御覽するに衆生成仏の直道たる法華經
をば説くべからず、是を以て空拳を挙げて嬰兒をすかすが如く様様の
たばかりを以て四十余年が間はいまだ真実を顯わさずと年紀をさして
青天に日輪の出で暗夜に満月のかかるが如く説き定めさせ給へり、此の
文を見て何ぞ同じ信心を以て仏の虚事と説かるる法華已前の權教に
執著して、

めずらしからぬ三界の故宅に歸るべきや、されば法華經の一の卷方便
品に云く「正直に方便を捨て但無上道を説く」文、此の文の意は前四
十二年の經經汝が語るところの念仏・真言・禪・律を正直に捨てよと
なり、此の文明白なる上重ねていましめて第二の卷譬喩品に云く「但
樂つて大乘經典を受持し乃至余經の一偈をも受けざれ」文、此の文の

意は年紀かれこれ煩はし所詮法華經より自余の經をば一偈をも受くべからずとなり、然るに八宗の異義蘭菊

に道俗形ちを異にすれども一同に法華經をば崇むる由を云う、されば

此等の文をばいかが弁へたる正直に捨てよと云つて余經の一偈をも

禁むるに・或は念仏・或は真言・或は禪・或は律・是れ余經にあらずや、

今・此の妙法蓮華經とは諸仏出世の本意・衆生成仏の直道なり、され

ば釈尊は付属を宣べ多宝は証明を遂げ諸仏は舌相を梵天に付けて

皆是真実と宣べ給へり、此の經は一字も諸仏の本懷・一点も多生の助なり一言一語も虚妄あるべからず此の經の禁を用いざる者は諸仏の舌をきり賢聖をあざむく人に非ずや其の罪実に怖るべし、されば二の巻に云く君し人信ぜずして此の經を毀謗せば則ち一切世間の仏種を断ず」文、此の文の意は若人此經の一偈・一句をも背かん人は過去・現在・未来三世十方の仏を殺さん罪と定む、經教の鏡をもつて当世にあてみるに法華經をそむかぬ人は実に以て有りがたし、事の心を案ずるに不信の人・尚無間を免れず況や念仏の祖師・法然上人は法華經をもつて念仏に對して抛てよと云云、五千・七千の經教に何れの処にか法華經を抛てよと云う文ありや、三昧発得の行者・生身の弥陀仏とあがむる善導和尚・五種の雜行を立てて法華經をば千中無一とて千人持つとも一人も仏になるべからずと立てたり、經文

には若有聞法者無一不成仏と談じて此の經を聞けば十界の依正・皆
仏道を成ずと見えたり、爰を以て五逆の調達は天王如來の記☆に予り
非器五障の竜女も南方に頓覺成道を唱ふ況や復☆☆の六即を立てて
機を漏らす事なし、善導の言と法華經の文と實に以て天地雲泥せり
何れに付くべきや就中其の道理を思うに諸仏衆經の怨敵聖僧衆人
の讎敵なり、經文の如くならば争か無間を免るべきや。
爰に愚人色を作して云く汝賤き身を以て恣に莠言を吐く悟つて言
うか迷つて言うか理非弁え難し、忝なくも善導和尚は弥陀善逝の応化
・或は勢至菩薩の化身と云へり、法然上人も亦然なり善導の後身とい
へり、上古の先達たる上・行徳秀発し解了・底を極めたり何ぞ惡道に
墮ち給うと云うや、聖人云く汝が言然なり予も仰いで信を取ること
此くの如し但し仏法は強ちに人の貴賤には依るべからず只經文を先き

とすべし身の賤いやしきをもつて其その法を

輕かろんずる事なかれ、有人うにんらくし樂生あくし惡死うにんらくし・有人うにんらくし樂死あくし惡生うにんらくしの十二字を唱へし

毘び摩ま大國たいこくの狐きつねは帝釈しやくの師あがめと崇められ諸行しよぎやう無常むじやう等の十六字を談ぜし

鬼神きじんは雪山せつせん童子どうじに貴とうとまる是これ必ず狐きつねと鬼神きじんとの貴とうときに非あらず只ただ法を

重おもんずる故なり、されば我等われらが慈父じふ・教主きやうしゆ釈尊しやくそん・雙林そうりん最後さいごの御遺言ゆいごん・

涅槃經ねはんぎやうの第六だいろくには依法えぽう不依人ふいじんとて普賢ふげん・文殊もんじゆ等の等覺とうかく已還いかんの大薩さつ☆・

法門ほうもん

を説き給ふとも經文を手に把らずば用ゐざれとなり、天台大師の云く修多羅と合する者は録して之を用いよ文無く義無きは信受すべからず」文、釈の意は經文に明ならんを用いよ文証無からんをば捨てよとなり、伝教大師の云く「仏説に依憑して口伝を信ずること莫れ」文、前の釈と同意なり、竜樹菩薩の云く修多羅白論に依つて修多羅黒論に依らざれ」と文、意は經の中にも法華已前の權教をすてて此の經につけよとなり、經文にも論文にも法華に対して諸余の經典を捨てよと云う事分明なり、然るに開元の録に挙る所の五千・七千の經卷に法華經を捨てよ乃至抛てよと嫌ふことも又雜行に摂して之を捨てよと云う經文も全く無し・されば慥の經文を勘へ出して善導・法然の無間の苦を救はるべし、今世の念佛の行者・俗男・俗女・經文に違するのみならず又師の教にも背けり、

五種の雜行とて念仏申さん人のすつべき日記・善導の釈之れ有り、其の
雜行とは選択に云く第一に読誦雜行とは上の觀經等の往生淨土
の經を除いて已外・大小乘・顯密の諸經に於て受持・讀・誦するを悉く
讀誦雜行と名く乃至第三に礼拝雜行とは上の弥陀を礼拝するを除い
て已外一切諸余の仏菩薩等及諸の世天に於て礼拝恭敬するを悉く
礼拝雜行と名く、第四に称名雜行とは上の弥陀の名号を称するを
除いて已外自余の一切仏菩薩等及諸の世天等の名号を称するを悉く
称名雜行と名く、第五に讚歎供養雜行とは上の弥陀を除いて
已外一切諸余の仏菩薩等及諸の世天等に於て讚歎し供養するを悉く
讚歎供養雜行と名く」文。

此の釈の意は第一の讀誦雜行とは念仏申さん道俗男女讀むべき經
あり讀むまじき經ありと定めたり、讀むまじき經は法華經・仁王經・

やくし
薬師經・だいしつぎよう
大集經・はんにやしんきよう
般若心經・じようぶつ
転女成仏經・北斗壽命經ことさらうち
まか
任せて諸人読まるる八巻の中の觀音經此等の諸經を一句一偈も読む
ねんぶつ
ならばたとひ念仏を志す行者なりとも雜行に摂せられて往生す
べ
可からず云云・予愚眼を以て世を見るに設ひ念仏申す人なれども此の
きようぎよう
經經を読む人は多く師弟敵対して七逆罪となりぬ。

又第三の礼拝雜行とは念仏の行者は弥陀三尊より外は上に挙ぐる
しよぶつばさつ
所の諸仏菩薩・諸天善神を礼するをば礼拝

ぞうぎよう

雜行と名け又之を禁ず、然るを日本は神国として伊奘諾伊奘册の尊

・此の国を作り天照大神垂迹御坐して御裳濯河の流れ久しくして今に

たえず豈此の国に生を受けて此の邪義を用ゆべきや、又普天の下に生

れて三光の恩を蒙りながら誠に日月・星宿を破する事尤も恐れ有り。

又第四の称名 雜行とは念仏申さん人は唱うべき仏菩薩の名あり

とな 唱えまじき仏菩薩の名あり、唱うべき仏・菩薩の名とは弥陀三尊の

名号、唱うまじき仏菩薩の名号とは釈迦・薬師・大日等の諸仏、地藏

・普賢・文殊・日月星、二所と三嶋と熊野と羽黒と天照大神と八幡大

菩薩と此等の名を一遍も唱えん人は念仏を十萬遍・百萬遍申したり

とも此の仏菩薩・日月神等の名を唱うる過に依つて無間にはおつとも

往生すべからずと云云、我世間を見るに念仏を申す人も此等の諸仏

菩薩・諸天善神の名を唱うる故に是れ又師の教に背けり。

第五の讚歎供養雜行とは念仏申さん人は供養すべき仏は弥陀三尊を供養せん外は上に挙ぐる所の仏菩薩・諸天善神に香華のすこしをも供養せん人は念仏の功は貴とけれども此の過に依つて雜行に摂すとは是をきらふ、然るに世を見るに社壇に詣でては幣帛を捧げ堂舎に臨みては礼拝を致す是れ又師の教に背けり、汝若し不審ならば選択を見よ其の文明白なり、又善導和尚の觀念法門經に云く、酒肉五辛誓つて發願して手に捉らざれ口に喫まざれ

若し此の語に違せば即ち身口俱に惡瘡を著けんと願ぜよ」文、此の文の意は念仏申さん男女・尼法師は酒を飲まざれ魚鳥をも食わざれ其の外にらひる等の五つのからくくさき物を食わざれ是を持たざる念仏者は今生には惡瘡身に出で後生には無間に墮すべしと云云、然るに念仏申す男女・尼法師此の誠をかへりみず恣に酒をのみ魚鳥を食ふ事

・劍を飲む譬にあらざるや。

爰に愚人の云く誠に是れ此の法門を聞くに念仏の法門実往生す
と雖も其の行儀修行し難し況や彼の憑む所の經論は皆以て權説なり
往生す可からざるの条分明なり、但眞言を破する事は其の謂れ無し
夫れ大日經とは大日覺王の秘法なり大日如来より系も乱れず善無畏・
不空之を伝え弘法大師は日本に両界の曼陀羅を弘め、尊高三十七尊・
秘奥なるものなり然るに顯教の極理は尚密教の初門にも及ばず爰を
以て後唐院は法華尚及ばず況や自余の教をやと釈し給へり此の事如何
が心うべきや。

聖人示して云く予も始は大日に憑を懸けて密宗に志を寄す然れ
ども彼の宗の最底を見るに其の立義も亦謗法なり汝が云う所の高野の
大師は嵯峨天皇の御宇の人師なり、然るに皇帝より仏法の浅深を判釈

すべき由の宣旨を給いて十住心論十卷之を造る、此の書広博なる間
要を取つて三卷に之を縮め其の名を秘藏宝鑰と号す始異生羝羊心
より終秘密莊嚴心に至るまで十に分別し、第八法華・第九華嚴・第十
真言と立てて法華は華嚴にも劣れば大日經には三重の劣と判じて此く
の如きの乗乗は自乗に仏の名を得れども後に望めば戲論と作ると書
いて法華經を狂言綺語と云い釈尊をば無明に迷へる仏と下せり、仍て
伝法院建立せし弘法の弟子正覺房は法華經は大日經のはきものとり
に及ばず・釈迦仏は大日如来の牛飼にも足らずと書けり、汝心を静め
て聞け一代五千・七千の經教・外典三千余卷にも法華經は戲論三重
の劣・華嚴經にも劣り釈尊は無明に迷へる仏にて大日如来の牛飼にも
足らずと云う慥なる文ありや、設ひさる文有りと云うとも能く能く
思案あるべきか。

きようぎよう
經教は西天せいてんより東土とうどに☆ぼす時・訳者やくしゃの意樂いぎように随つて經論きようろんの文
ふじよう
不定なり、さて後秦こうしんの羅什らじゅうさんぎう三藏さんざうは我漢土かんどの仏法ぶつぽうを見るに多く梵本ほんほんに違
せり我が訳する所の經も若し誤りあやまなくば我死して後・身は不淨ふじようなれば焼
くると云えども舌計べかり焼けざらんと常に説法せつぽうし給たまいしに焼たき奉まつる時・
おんみ
御身は皆骨みなとなるといへども御舌計べかりは青蓮華せいれんげの上に光明こうみようを放つて
にちりん
日輪えいざつを映奪えいざつし給たまいき有り難がたき事なり、さてこそ殊更ことさら・彼の三藏さんざう所訳しやくの
ほけきよう
法華經もろこしは唐土もろこしにやすやすと弘ひろまらせ給たまいしか、然しかれば延曆寺えんりやくじの根本こんぽん
だいし
大師しよしゅう・諸宗しよしゅうを責め給たまいしには法華ほつげを訳する三藏さんざうは舌の焼やけざる驗しるしあり
なんじ
汝等えきようが依經みなあやまりは皆誤はれりと破たまし給たまふは是これなり、涅槃經ねはんぎようにも我が仏法ぶつぽうは
たこく
他国あやまへ移らん時誤り多かるべしと説とき給たまへは經文きようもんに設たとひ法華經ほけきよう

はいたずら事・釈尊をば無明に迷へる仏なりとありとも權教・實教・

大乘・小乗・說時の前後・訳者能く能く尋ぬべし、所謂老子・孔子は九

思一言・三思一言・周公旦は食するに三度吐き沐するに三度にぎる

外典のあさき猶是くの如し況や内典の深義を習はん人をや、其の上此

の義・經論に迹形もなし人を毀り法を謗じては惡道に墮つべしとは

弘法大師の釈なり必ず地獄に墮んこと疑い無き者なり。

爰に愚人・茫然とほれ忽然となげひて良久しうして云く此の大師は

内外の明鏡・衆人の導師たり德行世に勝れ名譽普く聞えて或は唐土

より三鉢を八万余里の海上をなぐるに即日本に至り或は心經の旨を

つづるに蘇生の族・途にイむ、然れば此の人ただ人にあらず大聖權化

の垂迹なり仰いで信を取らんにはしかじ、聖人云く予も始めは然なり

但し仏道に入つて理非を勘へ見るに仏法の邪正は必ず得通自在にはよ

らず是を以て仏は依法不依人と定め給へり前に示すが如し、彼の
阿伽陀仙は恒河を片耳にただへて十二年・耆兔仙は一日の中に大海を
すひほす張階は

霧を吐き爰巴は雲を吐く然れども未だ仏法の是非を知らず因果の
道理をも弁へず、異朝の法雲法師は講經勤修の砌に須臾に天華をふ
らせしかども妙樂大師は感応斯くの如きも猶理に称わずとていまだ
仏法をばしらずと破し給う、夫れ此の法華經と申すは已今当の三説を
嫌つて已前の經をば未顕眞実と打破り肩を並ぶる經をば今説の文を
以てせめ已後の經をば当説の文を以て破る実に三説第一の經なり、第
四の卷に云く薬王今汝に告ぐ我所説の經典而かも此の經の中に於て
法華最第一なり」文、此の文の意は靈山会上に薬王菩薩と申せし菩薩
に仏告げて云く

始・華嚴より終・涅槃經に至るまで無量無辺の經・恒河沙等の數多し
其の中には今の法華經最第一と説かれたり、然るを弘法大師は一の字
を三と読まれたり、同卷に云く我仏道の爲に無量の土に於て始より今
に至るまで広く諸經を説く而も其の中に於て此の經第一なり」と、此
の文の意は又釈尊無量の国土にして・或は名字を替え・或は年紀を
不同になし種種の形を現して説く所の諸經の中には此の法華經を第一
と定められたり、同き第五卷には最在其上

のべ

と宣べて大日經・金剛頂等の無量の經の頂に此の經は有るべしと説か

れたるを弘法大師は最在其下と謂へり、釈尊と弘法と法華經と宝鑰と

は實に以て相違せり釈尊を捨て奉つて弘法に付くべきか、又弘法を捨

てて釈尊に付奉るべきか、又經文に背いて人師の言に隨ふべきか人師の

言を捨てて金言を仰ぐべきか用捨心に有るべし、又第七

の卷葉王品に十喩を挙げて教を歎ずるに第一は水の譬なり江河を

諸經に譬へ大海を法華に譬へたり、然るを大日經は勝れたり法華は

劣れりと云う人は即大海は小河よりもすくなしと云わん人なり、然る

に今の世の人は海の諸河に勝る事をば知るといへども法華經の第一なる

事をば弁す、第二は山の譬なり衆山を諸經に譬へ須弥山を法華に

譬へたり須弥山は上下十六万八千由旬の山なり何れの山か肩を並ぶべ

き法華經を大日經に劣ると云う人は富士山は須弥山より大なりと云

わん人なり、第三は星月の譬なり諸經を星に譬へ法華經を月に譬ふ
月と星とは何れ勝りたりと思へるや、乃至次下には此の經も亦復
是くの如し一切の如来の所説若しは菩薩の所説若しは声聞の
所説諸の經法の中に最も為れ第一とて此の法華經は只釈尊一代の
第一と説き給うのみにあらず大日及び藥師・阿弥陀等の諸仏・普賢・
文殊等の菩薩の一切の所説・諸經の中に此の法華經第一と説けり、さ
れば若し此の經に勝りたりと云う經有らば外道天魔の説と知るべきな
り、其の上・大日如来と云うは久遠実成の教主釈尊・四十二年・和光
同塵して其の機に應ずる時・三身即一の如来暫く毘盧遮那と示せり、
是の故に開顯実相の前には釈迦の応化と見えたり、爰を以て普賢經に
は釈迦牟尼仏を毘盧遮那遍一切處と名け其の仏の住處を常寂光と
名くと説けり、今法華經は十界互具・一念三千・三諦即是・四土不二

と談だんず其その上に一代いちだい聖教しょうきょうの骨髓こつずいたる二乗にじょう作仏さぶつ久遠くおん実成じつじょうは今經こんきやうに限り、汝なんじ語る所の大日經だいにちぎやう金剛頂等こんじやうちやうの三部ひきやうの秘經ひきやうに此等これらの大事だいじありや善無畏ぜんむい不空等ふくくう此等これらの大事だいじの法門ほうもんを盗み取つて己おのが經の眼目がんもくとせり本經ほんきやう・本論ほんろんには迹形おきぎもなき誑惑おおわくなり急ぎ急ぎ是これを改むべし。

抑おさ大日經だいにちぎやうとは四教しきやう含藏がんざうして尽形じんぎやう寿戒等じゆけいを明せり唐土もろこしの人師にんしは天台所立てんだいしりゅうの第三時方等部ほうとうぶの經なりと定め

たる權教ごんきょうなりあさまし・あさまし、汝なんじ実に道心どうしんあらば急いで先非を悔く
ゆべし夫それ以おもんれば此この妙法蓮華經みょうほうれんげきょうは一代いちだいの觀門くわんもんを一念いちねんにすべ十界じゅうかいの
依正えしやうを三千さんぜんにつづめたり。

◆六六一二

聖愚問答抄下しやうぐもんどうしやう

487P

爰こゝに愚人ぐにん聊いささか和やわら
但ただし法華經ほけきやうは三說さんに秀ひいで一代いちだいに超いゆるといふも言說ごんごに拘かかはらず經文きやうもん
に留とどまらざる我等われらが心こころの本分ほんぶんの禪ぜんの一法いつぽうにはしくべからず凡およそ万法ばんぽうを
弘遺ほつげんして言語ごんごの及およばざる處ところを禪法ぜんぽうとは名けたり、されば跋提河ばつだいがの辺り

沙羅林しゃらりんの下もとにして釈尊しゃくそん・金棺こんくわんより御足ごそくを出し拈華微笑ねんげびしょうして此このの法門ほうもんを迦葉かしように付属ふぞくありしより已來このかた・天竺てんじく二十八祖ふたはちはちそ・系みだ乱らんれず唐土たうどには六祖ろくそ次第しだいに弘通くわつうせり、達磨だるまは西天さいてんにしては

二十八祖ふたはちはちその終とうど・東土とうどにしては六祖ろくその始しうなり相伝そうでんをうしなはず教網きやうもうに滯とどるべからず、爰ここをを以もつて大梵天王だいぼんてんのう問もん仏決疑經ぶつけつぎきやうに云いく吾われに正法眼藏しやうほうげんざうの涅槃ねはん妙心みやうしん実相じつさう無相むさう微妙みみやうの法門ほうもん有あり教外きやうげに別べつに云いふ文字もんじを立てず摩訶まか迦葉かしように付属ふぞくす」とて迦葉かしように此このの禪ぜんの一法いつぽうをば教外きやうげに伝でんふと見えたり、都すべして修多羅しゆだらの經教きやうきやうは月つきをさす指さし・月つきを見て後は指何さしなにかはせん心しんの本分ほんぶん禪ぜんの一理いつりを知しつて後は仏教ぶつきやうに心しんを留とどむべしや、されば古人こじんの云いく十二部經じふにぶきやうは総そうて是これ閑文字もんじと云いふ、仍よつて此このの宗しゆの六祖ろくそ慧能えのの壇經だんきやうを披見ひけんするに実じつに以もつて然しかなり、言下ごんげに契会けいゑして後は教きやうは何なにかせん此このの理り如何いかんが弁わえんや、聖人しやうにん示しして云いふ汝なんじ

先ほうもんず法門を置いて道理どうりを案ぜよ、抑そもそも我いちだい一代の大途だいとを伺うかがわず十宗の
淵底えんていを究きわめずして国を諫いさめ人を教ふべきか、汝なんじが談だんずる所の禪は我最
前ならに習きわい極めて其その至極しごくを見るに甚はなはだだ以もつて僻事ひがごとなり、禪に三種あり
所謂いづゆるによらい如来禪と教禪と祖師そし禪となり、汝なんじが言う所の祖師そし禪等の一端
之これを示さん聞いて其その旨むねを知れ若し教を

離れて之を伝うといわば教を離れて理なく理を離れて教無し理全く教
・教全く理と云う道理汝之を知らざるや拈華微笑して迦葉に付属し
給うと云うも是れ教なり不立文字と云う四字も即教なり文字なり此
の事・和漢両国に事旧りぬ今いへば事新きに似たれども一両の文を
勘えて汝が迷を払はしめん、補註十一に云く又復若し言説に滞ると
謂わば且く娑婆世界には何を將つて仏事と為るや、禪徒豈言説をもつ
て人に示さざらんや、文字を離れて解脱の義を談ずること無し豈に聞
かざらんや乃至次ぎ下に云く豈に達磨西来して直指人心・見性成佛
すと而るに華嚴等の諸大乘經に此の事無からんや、嗚呼世人何ぞ
其れ愚かなるや汝等当に仏の所説を信ずべし諸仏如来は言虚妄無
し、此の文の意は若し教文にとどこほり言説にかかはるとて教の外に
修行すといはば此の娑婆国にはさて如何がして仏事善根を作すべき、

さように云うところの禪人も人に教ゆる時は言を以て云はざるべしや
其の上仏道の

解了を云う時文字を離れて義なし、又達磨西より来つて直に人心を指

して仏なりと云う是程の理は華嚴・大集・大般若等の法華已前の
権大乘經 にも在在處處に之を談ぜり是をいみじき事とせんは無下に

云いがひなき事なり嗚呼今世の人何ぞ甚ひがめるや只中道実相の理
に契当せる妙覺果滿の如来誠諦の言を信ずべきなり又妙樂大師の

弘決の一に此の理を釈して云く世人・教を蔑にして理觀を尚ぶは誤
れるかな誤れるかな」と、此の文の意は今の世の人人は觀心觀法を先

として經教を尋ね学ばず還つて教をあなづり經をかるしむる是れ
誤れりと云う文なり、

其の上当世の禪人・自宗に迷へり、続高僧伝を披見するに習禪の初祖

達磨大師の伝に云く教に藉つて宗を悟ると、如来一代の聖教の道理を習学し法門の旨、宗宗の沙汰を知るべきなり、又達磨の弟子六祖の第二祖慧可の伝に云く達磨禪師四卷の楞伽を以て可に授けて云く我漢の地を觀るに唯此の經のみ有り仁者依行せば自ら世を度する事を得ん」と、此の文の意は達磨大師天竺より唐土に來つて四卷の楞伽經をもつて慧可に授けて云く我此の國を見るに是の經殊に勝れたり汝持ち修行して仏に成れとなり、此等の祖師既に經文を前とす若し之に依つて經に

依ると云はば大乘だいじやうか小乗しょうじやうか權教ごんきやうか實教じつきやうか能く能く弁わきまふべし、或は
經もちを用いるには禪宗ぜんしゆうも楞伽經りやうがきやうしゆりやうごんきやう首楞嚴經こんごうはんきにやきやう・金剛般若經こんごうはんきにやきやう等による是れ
皆法華已前の權教ごんきやう・覆藏ふざうの説なり、只諸經ただしよきやうに是心即仏ぜしんそくぶつ・即心是仏等そくしんぜぶつの
理の方を説ける一兩の文と句とに迷まよいいて大小・權實・顯露・覆藏ふざうをも
尋ねず、只不二ただふたを立てて而二じにを知らず謂己均仏いこきんぶつの大慢だいまんを成せり、彼の
月氏がしの大慢だいまんが迹あとをつぎ此の尸那しなの三階さんかい禪師ぜんしが古風こふうを追う然りと雖も
大慢だいまんは生いきながら無間むげんに入り三階さんかいは死して大蛇だいじやと
成りぬ・をそろしをそろし、釈尊しやくそんは三世さんぜ了達りやうたつの解了あきら・朗かに妙覺果滿みやうかくかまん
の智月潔くして未來みらいを鑒かんみたまい像法決疑經ぞうほうけつぎきやうに記して云く諸の
惡比丘あくびく・或は禪あるを修しゆする有もちつて經論きやうろんに依らず自ら己見みずかを逐おつて非を
以て是と為し是邪是正と分別ぶんべつすること能あたわず☆く道俗どうぞくに向つて
是くのごとく言なを作さく我能よく是これを知り我能よく是これを見ると当まさに知るべし

此の人は速かに我法を滅す」と、此の文の意は諸惡比丘あつて禪を信仰して經論をも尋ねず邪見を本として法門の是非

をば弁えずして而も男女・尼法師等に向つて我よく法門を知れり人はしらずと云つて此の禪を弘むべし、当に知るべし此の人は我が正法を滅すべしとなり、此の文をもつて当世を見るに宛も符契の如し汝慎むべし汝畏るべし、先に談ずる所の天竺に二十八祖有つて此の法門を口伝すと云う事其の証拠何に出でたるや仏法を相伝する人二十四人・或は二十三人と見えたり、然るを二十八祖と立つる事・所出の翻譯何にかある全く見えざるところなり、

此の付法藏の人の事・私に書くべきにあらず如来の記文分明なり、其の付法藏伝に云く復比丘有り名けて師子と曰う☆寶國に於て大に仏事を作す、時に彼の國王をば弥羅掘と名け邪見熾盛にして心に敬信無く

☆寶國けいひんこくに於おいて塔寺たつしを毀壞きえし衆僧しゅうそうを殺害さつがいす、即すなわち利劍りけんを以もつて用もちいて師子ししを斬きる頸くびの中血なく無く唯乳ただのみ流出いす法はふを相付あひする人ひと是こゝに於おいて便すなわち絶たえん」此この文ぶんの意いは仏ぶつ・我われが入涅槃ねはんの後のちに我われが法はふを相傳そうでんする人ひと・二十四人あるべし其その中に最後さいご・弘通くわつうの人ひとに當あたるをば師子しし比丘びくと云いわん、☆寶國けいひんこくと云いう國くににて我われが法はふを弘ひろむべし彼の國くにの王わうをば檀彌羅王だんみらわうと云いうべし邪見放逸じけんほういつにして仏法ぶつぽうを信しんぜず衆僧しゅうそうを敬うやまつはず堂塔どうたうを破やぶり失うしなひ劍けんをもつて諸僧しよそうの頸くびを切きるべし即すなわち師子しし比丘びくの頸くびをきらん時とき

に頸の中に血無く只乳のみ出ずべし、是の時に仏法を相伝せん人絶ゆべしと定められたり、案の如く仏の御言違わず師子尊者・頸をきられ給う事実に以て爾なり、王のかいな共につれて落ち畢んぬ、二十八祖を立つる事甚以て僻見なり禅の僻事はより興るなるべし、今慧能が壇經に二十八祖を立つる事は達磨を高祖と定むる時師子と達磨との年紀遙かなる間・三人の禪師を私に作り入れて天竺より来れる付法蔵・系乱れずと云うて人に重んぜさせん

為の僻事なり此の事異朝にして事旧りぬ、補註の十一に云く、今家は二十三祖を承用す豈有らんや、若し二十八祖を立つるは未だ所出の翻譯を見ざるなり、近來更に石に刻み版に鏤め七仏二十八祖を図状し各一偈を以て伝授相付すること有り嗚呼仮託何ぞ其れ甚だしきや識者力有らば宜しく斯の弊を革むべし」是も二十八祖を立て石にきざ

み版にちりばめて伝うる事甚だ以て誤れり此の事を知る人あらば

あやまり

此の誤をあらためなをせとなり、祖師禪甚だ僻事なる事是にあり

だいぼんてんのうもんぶつけつききよう

先に引く所の大梵天王問仏決疑經の文を教外別伝の証拠に汝之を引

すで

じごそうい

そ

せつそうごんきよう

かいげんじようげん

ん

く既に自語相違せり、其の上此の經は說相權教なり又開元貞元の再

度

の

これろくがい

ごんききよう

然れば

世間の學者用ゐざるところなり証拠とするにたらず。

せけん がくしや

しやうこ

やから しやくもんかいによさんぜん

敗

抑今

ほけきよう

益をうる輩

迹門

界如三千の時

敗

種の二乗・仏種を萌す四十二年の間は永不成仏と嫌はれて在在處處の

しゅうえ

めりひぼう

こえ

にんてんたいえ

すで

集會にして罵詈誹謗の音をのみ聞き人天大会に思いうとまれて既に飢

え死ぬべかりし人人も今の經に來つて舍利弗は華光如來・目連は

た

せんだんこうによらい

あなん

さんかいえじざいつうおうぶつ

げこうによらい

もくれん

多摩羅跋旃檀香如來・阿難は山海慧自在通王仏・羅☆羅は☆七宝華

如來

・

如來

・

・

・

五百の羅漢らかんは普明ふみょう如来にょらい・二千の声聞しょうもんは宝相ほうそう如来にょらいの記☆にきべつ予あずかる。
顯本けんぽん遠寿おんじゅの日は微塵じんじゅ数の菩薩ぼさつ増道ぞうだう損生そんせいして位だい大覺だいかくに鄰となる、されば
天台大師てんだいだいしの釈ひけんを披見ひけんするに他經たきやうには菩薩ぼさつは仏になると云つて二乘にじやうの
得道とくどうは永く之これ無し、善人ぜんにんは仏になると云つて惡人あくにんの成仏じやうぶつを明あかさず男
子は仏になると説いて女人にょにんは地獄じごくの使と定む人天にんてんは仏になると云つて
畜類は仏になるといはず、然しかるを今の經は是等これらが皆みな仏になると説くたの
もしきかな末代まつだい濁世じよくせに生を受くといへども提婆だいば

が如くごとに五逆ごぎやくをも造らず三逆さんぎやくをも犯さず、而しかるに提婆だいば猶な天王てんのう如来によらいの記き☆を得えたり況いや犯はんさざる我等われらが身みをや、八歳りゅうにの竜女りゅうにょ既に蛇身じやしんを改あらためずして南方なんぼうに妙果めうくわを証あす況いや人界にんがいに生なを受けたる女人にょにんをや、只得ただ難がたきは人身じんしん値あい難がたきは正法しょうぼうなり汝なんじ早く邪ひるがえりを翻ひるがええし正ただに付き凡たを転たじて聖せいを証あせんと思おもはば念仏ねんぶつ・真言しんごん・禪ぜん・律りつを捨てて此この一乗いちじやう妙典めうてんを受持じゆすべし、若もし爾しからば妄染もうぜんの塵穢じんえを払はつて清浄しょうじやうの覺体かくたいを証あせん事こと疑うたがいなるべし。

爰こゝに愚人ぐにん云いく今聖人しやうにんの教誡ちやうもんを聴聞ひごろするに日來もうまいの矇昧たちまち忽たちまちに開ひけぬ天真てんしん發明はつめいとも云いつべし理り非顯ひけん然ねんなれば誰たか信仰おほせざらんや、但ただし世上せじやうを見るに上一人かみいちにんより下万民げまんに至いたるまで念仏ねんぶつ・真言しんごん・禪ぜん・律りつを深く信受しんじゆし御座おわすさる前まへには国土こくどに生なを受けながら争いかでか王命わうめいを背そむかんや、其その上うへ・我が親おやと云い祖いと云い旁念仏かたがたねんぶつ等の法理はふりを信しんじて他界たがいの雲うんに交まじり畢おわる

ぬ、又日本には上下の人数・幾か有る、然りと雖も權教・權宗の者は多く此の法門を信ずる人は未だ其の名を

も聞かず、仍て善処・惡処をいはず邪法・正法を簡はず内典五千・七千の多きも外典三千余卷の広きも只主君の命に随ひ父母の義に叶うが肝心なり、されば教主釈尊は天竺にして孝養報恩の理を説き孔子は大唐にして忠功孝高の道を示す師の恩を報ずる人は肉をさき身をなぐ主の恩をしる人は弘演は腹をさき予讓は劍をのむ親の恩を思ひし

人は丁蘭は木をさき伯瑜は杖になく、儒・外・内・道は異なりといへども報恩謝徳の教は替る事なし然れば主師親のいまだ信ぜざる法理を我始めて信ぜん事既に違背の過に沈みなん法門の道理は經文明白なれば疑網都て尽きぬ後生を願はずば来世・苦に沈むべし進退惟谷れり我如何がせんや、聖人云く汝此の理を知りながら猶是の語をなす理の

通ぜざるか意の及ばざるか我釈尊しやくそんの遺法をまなび仏法ぶつぽうに肩を入れしよりこのかたちおん已來知恩をもて最とし報恩ほうおん

をもて前とす世に四恩あり之を知るを人倫となづけ知らざるを畜生とす、予父母ふぼの後世ごしやうを助け国家こつかの恩徳おんとくを報ぜんと思うが故ゆえに身命しんみやうを捨つる事あえて敢て他事たじにあらず唯知恩ただちおんを旨とする計ばかりなり、先ず汝目なんじをふさぎ心を静めて道理どうりを思へ我は善道を知りながら親と主との惡道あくどうにかからんを諫めいさざらんや、又愚心ぐしんの狂ひ酔つて毒を服せんを我

知りながら是をいましめざらんや、其の如く法門の道理を存じて火・血
・力の苦を知りながら争か恩を蒙る人の惡道におちん事を歎かざらん
や、身をもなげ命をも捨つべし諫めても・あきたらず歎きても限りな
し、今世に眼を合する苦み猶是を悲む況や悠悠たる冥途の悲み豈に
痛まざらんや恐れても恐るべきは後世慎みても慎むべきは来世なり、
而るを是非を論ぜず親の命に随ひ邪正を簡ばず主の仰せに順はんと云
う事愚癡の前には忠孝に似たれども賢人の意には不忠不孝是に過ぐべ
からず。

されば教主釈尊は転輪聖王の末師子・頰王の孫・浄飯王の嫡子と
して五天竺の大王たるべしといへども生死無常の理をさとりに出離解脱の
道を願つて世を厭ひ給しかば浄飯大王是を歎き四方に四季の色を顯し
て太子の御意を留め奉らんと巧み給ふ、先づ東には霞たなびくたえま

より・かりがねこしちに歸り☆の梅の香・玉簾の中にかよひ・でうでうた
る花の色・ももさへつりの鶯・春の氣色を顯はせり、南には泉の色白た
へにしてかの玉川の卯の華・

信太の森のほととぎす夏のすがたを顯はせり、西には紅葉・常葉に交れ
ばさながら錦をおり交え萩ふく風・閑かにして松の嵐ものすごし過ぎに
し夏のなごりには沢辺にみゆる螢の光・あまつ空なる星かと誤り・松
虫・鈴虫の声声・涙を催せり、北には枯野の色いつしかものうく池の汀に
つららゐて谷の小川も・をとさびぬ、かかるありさまを造つて御意をな
ぐさめ給うのみならず四門に五百人づつの兵を置いて守護し給いしかど
も終に太子の御年十九

と申せし二月八日の夜半の比・車匿を召して金泥駒に鞍置かせ伽耶城
を出て檀特山に入り十二年高山に薪をとり深谷に水を結んで難行

苦行し給ひ三十成道の妙果を感得して三界の独尊・一代の教主と成つて父母を救ひ群生を導き給いしをばさて不孝の人と申すべきか、仏を不孝の人と云いしは九十五種の外道なり父母の命に背いて無為に入り還つて父母を導くは孝の根本なる事・仏其の証拠なるべし、彼の淨藏・淨眼は父の妙莊嚴王・外道の法に著して仏法に背き給いしかども二人の太子は父の命に背いて雲雷音王仏の御弟子となり終に父を導いて

沙羅樹王

仏と申す仏になし申されけるは不孝の人と云うべきか、経文には棄恩入無為・眞実報恩者と説いて今生の恩愛をば皆すてて仏法の実の道に入る是れ実に恩をしれる人なりと見えたり、又主君の恩の深き事汝よりも能くしれり汝若し知恩の望あらば深く諫め強いて奏せよ非道にも主命に随はんと云う事・佞臣の至り不忠の極りなり、殷の紂王は悪王・比干は忠臣なり政事理に違いしを見て強て諫めしかば即比干は胸を割かる紂王は比干死して後・周の王

に打たれぬ、今の世までも比干は忠臣といはれ紂王は悪王といはる、夏の桀王を諫めし竜蓬は頭をきられぬ・されども桀王は悪王・竜蓬は忠臣とぞ云う主君を三度諫むるに用ゐずば山林に交れとこそ教へたれ何ぞ其の非を見ながら黙せんと云うや、古の賢人・世を遁れて山林に交りし先蹤を集めて聊か汝が愚耳に聞かしめん、殷の代の太公望は

☆溪はけいと云う谷に隠る、周の代の伯夷・叔齊しゆくせいは首陽山と云う山に籠る、秦の綺里季きりきは商洛山に入り漢の嚴光げんこうは孤亭こていに居し、晋の介子綏かいしすいは縣上山めんじょうざんに隠れぬ、此等これらをば不忠ふちゆうと云うべきか愚おろかなり汝忠なんじを存ぜば諫いさむべし孝を思はば言うべきなり。

先ず汝權教・權宗の人は多く此の宗の人は少し何ぞ多を捨て少に付くと云う事必ず多きが尊くして少きが卑きにあらざ、賢善けんぜんの人は希まれに愚悪おろかの者は多し麒麟鸞鳳きりんらんほうは禽獸きんじゅうの奇秀しきうなり然れども是は甚はなはだだ少し牛羊ぎゅうよう・烏鴿うこは畜鳥の拙卑うごうなりされども是は転多し、必ず多きが、たつとくして少きがいやしくば麒麟きりんをすてて牛羊ぎゅうようをとり鸞鳳らんほうを閑さしおいて烏鴿うこをとるべきか、摩尼まに・金剛こんごうは金石の靈異れいゐなり、此の宝は乏しく瓦礫がりやく・土石いたずらものは徒物いたずらものの至り是は又巨多こたなり、汝なんじが言ことの如ごとくならば玉などをば捨てて瓦礫がりやくを用ゆべきか・はかなし・はか

なし、聖君は希^{まれ}にして千年に一たび出^いで賢佐は五百年に一たび顯^{あらわ}る
摩尼^{まに}は空^{むな}しく名のみ聞く麟鳳^{きほう}誰か実を見たるや世間^{せけん}出世^{しゅつせ}・善^よき者は乏
しく惡き者は多き事・眼前^{がんぜん}なり、然^{しか}れば何ぞ強^{あなが}ちに少きを・おろかにし
て多きを詮とするや土沙は多けれども米穀は希^{まれ}なり木皮は充満^{じゅうまん}すれ
ども布絹は些^さ少^{しょう}なり、汝^{なんじ}只正理を以^{もつ}て前^{さき}とすべし別して人の多きを
以^{もつ}て本とすることなかれ。

爰に愚人席をさり袂をかいつくろいて云く誠に聖教の理をきくに
人身は得難く天上の絲筋の海底の針に貫けるよりも希に仏法は聞き
難くして一眼の亀の浮木に遇うよりも難し、今既に得難き人界に生を
うけ値い難き仏教を見聞しつ今生をもだしては又何れの世にか生死
を離れ菩提を証すべき、夫れ一劫受生の骨は山よりも高けれども佛法
の為にはいまだ一骨をもすてず多生恩愛の涙は海よりも深けれども尚
後世の為には一滴をも落さず、拙きが中に拙く愚かなるが中に愚かな
り設ひ命をすて身をやぶるとも生を軽くして仏道に入り父母の菩提を
資け愚身が獄縛をも免るべし能く能く教を示し給へ。

抑法華經を信ずる其の行相如何・五種の行の中には先ず何れの行
をか修すべき丁寧に尊教を聞かん事を願う、聖人示して云く汝蘭室
の友に交つて麻畝の性と成る誠に禿樹禿に非ず春に遇つて榮え華さく

枯草^{から}枯^{から}るに非^{あら}ず夏に入^{あさや}つて鮮^{うるお}かに注^おふ、若^もし先非^くを悔^くいて正理^{しやうり}に入^いらば湛寂^{たんじやく}の潭^{ふち}に遊泳^{ゆうえい}して無^む為^いの宮^{みや}に優遊^{ゆうゆう}せん事^{こと}疑^{うたが}なかるべし、抑^{おさ}仏法^{ぶつぽう}を弘通^{くわうちう}し群生^{ぐんじやう}を利益^{りやく}せんには先^まず教機^{きうき}時^{とき}国教^{こくきやう}法流^{ほつりゆう}布^ふの前後^{ぜんご}を弁^わふべきものなり、所以^{ゆえん}は時^{とき}に正像^{しやうざう}末^{まつ}あり

法^{ほふ}に大小^{だいしやう}乘^{じやう}あり修行^{しゆぎやう}に摂折^{しやうしやく}あり摂受^{しやうじゆ}の時^{とき}・折伏^{しやくふく}を行^{しやくふく}ずるも非^ひなり折伏^{しやくふく}の時^{とき}・摂受^{しやうじゆ}を行^{しやくふく}ずるも失^{とが}なり、然^{しか}るに今世^{しやうじゆ}は摂受^{しやうじゆ}の時^{とき}か折伏^{しやくふく}の時^{とき}か先^まづ是^{これ}を知るべし摂受^{しやうじゆ}の行^{しやくふく}は此^{こゝ}の国^{こく}に法華^{ほふけ}一純^{いつじゆん}に弘^{ひろ}まりて邪法^{じやぽう}・邪師^{じやし}一人^{ひとり}もなしといはん、此^{こゝ}の時^{とき}は山林^{さんりん}に交^かつて觀法^{くわんぽう}を修^{しゆ}し五種^{ごしゆ}・六種^{ろくしゆ}乃至^{ないし}・十種^{じしゆ}等^{とう}を行^{しやくふく}ずべきなり、折伏^{しやくふく}の時^{とき}はかくの如^{ごと}くならず經教^{きやうきやう}のおきて蘭菊^{らんぎく}に諸宗^{しよしゆ}のおぎろ譽^{ほま}れを擅^{ぼん}にし邪正^{じやせい}・肩^{かた}を並^{なら}べ大小^{だいしやう}先^まを争^{あら}はん時は万^{ばん}事を聞^{きこ}いて謗法^{ぼうぽう}を責^せむべし是^{こゝ}れ折伏^{しやくふく}の修行^{しゆぎやう}なり、此^{こゝ}の旨^{むね}を知らずして摂折^{しやうしやく}途^とに違^{ちが}はば得道^{とくだう}は思^{おも}もよらず惡道^{あくだう}に墮^おつべしと云^いう事^{こと}・

法華・涅槃に定め置き天台・妙樂の解釈にも分明なり是れ仏法修行
の大事なるべし、譬ば文武兩道を以て天下を治るに武を先とすべき時
もあり文を旨とすべき時もあり、天下無為にして国土静かならん時は
文を先とすべし東夷・南蛮・西戎・北狄・蜂起して野心をさしはさまん
には武を先とすべきなり、文武のよき事計りを心えて時をもしらず
万邦・安堵の思をなし

て世間無為ならん時おこ甲冑かつちゆうをよろひ兵ひやうじやう杖をもたん事も非なり、又王敵
起らん時戦場にて武具をばさしお閑ひつけんいて筆硯ひつさげを提ひつさげん事是も亦時に相応せず
撰受・折伏しやくぶくの法門ほうもんも亦是くの如またかくのことし正法しやうほうのみ弘ひろまつて邪法じやほう・邪師じやし無から
ん時は深谷しんこくにも入り閑静にも居こして読誦どくじゆ・書写しやしやをもし觀念工夫をも
凝こらすべし、是れ天下てんがの静なる時筆硯ひつけんを用もちゆるが如ごとし權宗ごんしゆう・謗法ほうぼう
国にあらん時は諸事しよじを閑さしおいて謗法ほうぼうを責せむべし是れ合戦の場に兵杖ひやうじやうを
用もちゆるが如ごとし、然しかれば章安大師しやうあんだいし・涅槃ねはんの疏じよに釈しやくして云いわく昔は時平かに
して法弘ひうまる応まさに戒じを持じすべし杖じを持じすること勿なかれれ今は時嶮さかしくして
法かく鬻まさる応まさに杖じを持じすべし戒じを持じすること勿なかれれ今昔俱こんじやくともに嶮さかしくば俱ともに杖
を持じすべし今昔俱こんじやくともに平かならば応まさに俱ともに戒じを持じすべし、取捨宜しゆしやきを得
て一向いつかうにす可べからず」と此の釈しやくの意分明ふんみまうなり、昔は世もすなをに人も
ただしくして邪法邪義じやほうじやぎ・無かり

き、されば威儀をただし穩便に行業を積んで杖をもつて人を責めず
邪法をとがむる事無かりき、今の世は濁世なり人の情もひがみゆが
で權教謗法のみ多ければ正法弘まりがたし此の時は読誦・書写の修行
も觀念・工夫・修練も無用なり、只折伏を行じて力あらば威勢を以て
謗法をくだき又法門を以ても邪義を責めよとなり、取捨其旨を得て
一向に執する事なかれと書けり、今の世を見るに正法一純に弘まる国
か邪法の興盛する国か勘ふべし、然るを
浄土宗の法然は念仏に對して法華經を捨閉闍拋とよみ善導は法華經
を雜行と名け剩へ千中無一とて千人信ずとも一人得道の者あるべか
らずと書けり、真言宗の弘法は法華經を華嚴にも劣り大日經には三
重の劣と書き戲論の法と定めたり、正覺房は法華經は大日經のはきも
のとりにも及ばずと云ひ釈尊をば大日如来の牛飼にもたらずと判せ

り、禪宗ぜんしゅうは法華經ほけきょうを・吐はきたる・つばき・月つきをさす指さし・教網きょうもうなんど下くだす、
小乗律等しょうじょうりつどうは法華經ほけきょうは邪教じやきょう・天魔てんまの所説しよせつと名なけたり、此等これら豈あに謗法ぼうぼうにあ
らずや責せめても猶なおあまりあり禁いましめても亦またたらず。

愚人ぐにん云いく日本にほん六十余州ある・人替ひとかり法異ほふりといへども・或あるは念仏者ねんぶつ・或ある
は真言師しんごんし・或あるは禪ぜん・或あるは律りつ・誠まことに一人ひとりとして謗法ぼうぼうならざる人はなし、
然しかりと雖いえども人の上沙汰さたしてなにかせん只我ただが心中しんちゅうに深く信受しんじゅして人の
誤あやまりをば余所よその事に

せんと思ふ、聖人示して云く汝言う所実にしかなり我も其の義を存
ぜし処に經文には或は不惜身命とも或は寧喪身命とも説く、何
故にかやうには説かるるやと存ずるに只人をはばかりず經文のままに
法理を弘通せば謗法の者多からん世には必ず三類の敵人有つて命にも
及ぶべしと見えたり、其の仏法の違目を見ながら我もせめず国主にも
訴へずば教へに背いて仏弟子にはあらずと説かれたり、涅槃經第三に
云く若し善比丘あつて法を壞らん者を
見て置いて呵責し驅遣し挙処せずんば当に知るべし是の人は仏法の中の
怨なり、若し能く驅遣し呵責し挙処せば是れ我が弟子真の声聞なり」
と、此の文の意は仏の正法を弘めん者・經教の義を悪く説かんと聞き
見ながら我もせめず我が身及ばずば国主に申し上げて是を対治せず
ば仏法の中の敵なり、若し經文の如くに人をもはばかりず我もせめ

国主にも申さん人は仏弟子にして真の僧なりと説かれて候、されば
仏法中怨の責を免れんとて・

かやうに諸人に悪まれるれども命を釈尊と法華經に奉り慈悲を一切
衆生に与へて謗法を責むるを心えぬ人は口をすくめ眼を瞋らす、汝
實に後世を恐れば身を輕しめ法を重んぜよ是を以て章安大師云く
寧ろ身命を喪ふとも教を匿さざれとは身は輕く法は重し身を死して
法を弘めよ」と、此の文の意は身命をば・ほろぼすとも正法をかくさ
ざれ、其の故は身はかく法はおもし身をばころすとも法をば弘めよ
となり、悲いかな生者必滅の習なれば設ひ長寿を得たりとも終には
無常をのがるべからず、今世は百年の内外の程を思ふは夢の中の夢なり、
非想の八万歳未だ無常を免れず・利の一千年も猶退役の風に破らる、
況や人間・閻浮の習は露よりも・あやうく芭蕉よりも・

もろく泡沫ほうまつよりもあだなり、水中に宿る月のあるかなきかの如く草葉くさにをく露つゆのをくれ・さきだつ身なり、若し此の道理どうりを得ば後世ごしやうを一大事いちだいじとせよ歡喜かんき仏の末の世の覺徳比丘かくとくびく・正法しやうほうを弘ひろめしに無量むりやうの破戒はかい此の行者ぎやうじやを怨あだみて責めしかば有徳國王うとくこくおう・正法しやうほうを守る故に謗法ぼうほうを責めて終ついに命終みやうじゆうして阿☆仏あしゆくぶつの国に生れて彼の仏の第一だいいちの弟子でしとなる、大乘だいじやうを重おもんじて五百人の婆羅門ばらもんの謗法ぼうほうを誡いましめし仙予國王せんよこくおうは不退ふたいの位に登る、憑たのみしいかな正法しやうほうの僧を重おもんじて邪惡じやあく

の侶を誡むる人かくの如くの徳あり、されば今の世に摂受を行ぜん人は謗人と俱に惡道に墮ちん事疑い無し、南岳大師の四安樂行に云く若し菩薩有つて惡人を將護し治罰すること能わす乃至其の人命終して諸惡人と俱に地獄に墮せん」と、此の文の意は若し佛法を行ずる人有つて謗法の惡人を治罰せずして觀念思惟を専らにして邪正權實をも簡ばす詐つて慈悲の姿を現ぜん人は諸の惡人と俱に惡道に墮つべしと云う文なり、今真言・念仏・禪・律の謗人をたださすいつはつて慈悲を現ずる人此の文の如くなるべし。

爰に愚人意を竊にし言を顯にして云く誠に君を諫めて家を正しくする事先賢の教本文に明白なり外典此くの如し内典是に違うべからず、惡を見ていましめず謗を知つてせめずば經文に背き祖師に違せん其の禁め殊に重し今より信心を至すべし、但し此經を修行し奉らん事叶い

がたし若し其の最要あらば証拠を聞かんと思ふ、聖人示して云く今汝の道意を見るに鄭重・慇懃なり、所謂諸仏の誠諦得道の最要は只是れ妙法蓮華經の五字なり、

檀王の宝位を退き竜女が蛇身を改めしも只此の五字の致す所なり、夫れ以れば今の經は受持の多少をば一偈・一句と宜べ修行の時刻をば一念隨喜と定めたり、凡そ八万法蔵の広きも一部八卷の多きも只是の五字を説かためなり、靈山の雲の上・鷲峯の霞の中に釈尊要を結び地涌付属を得ることありしも法体は何事ぞ只此の要法に在り、天台・妙樂の六千張の疏・玉を連ぬるも道邃行満の數軸の釈・金を並ぶるも併しながら此の義趣を出でず、誠に生死を恐れ涅槃を欣い信心を運び渴仰を至さば遷滅無常は昨日の夢・菩提の覺悟は今日のうつつなるべし、只南無妙法蓮華經とだにも唱へ奉らば滅せぬ罪やあるべき来

らぬ福や有るべき、真実なり甚深なり是を信受すべし。

愚人掌ぐにん たなしじろ

を合せ膝を折つて云く

貴命肝に染み教訓意を動ぜり然り

しか

と雖も上能兼下の理いえど

なれば広きは狭きを括り多は少を兼ね、然る処ことわり

に五字は少く文言は多し首題は狭く八軸は広し如何ぞ功德齊等ならん

や、聖人云く汝愚かなり捨少取多の執・須弥よりも高く輕狹重広の

しょうにんいわ

なんじおろ

しゅみ

情・溟海よりも深し、今の文の初後は必ず多きが尊く少きが卑しき

めいかい

い

にあらざる事・前に示すが如し、爰に又小が大を兼ね、一が多に勝ると云う事之を談ぜん彼の尼拘類樹の実は芥子・三分が一のせいなりされども五百輛の車を隠す徳あり是小が大を含めるにあらずや、又如意宝珠は一あれども万宝を雨して欠 処之れ無し是れ又少が多を兼ねたるにあらずや、世間のことわざにも一は万が母といへり此等の道理を知らずや、所詮実相の理の背契を論ぜよ強ちに多少を執する事なかれ、汝至つて愚かなり今一の譬を仮らん、夫れ妙法蓮華經とは一切衆生の仏性なり仏性とは法性なり法性とは菩提なり、所謂釈迦多宝・十方の諸仏・

じようぎよう　むへんぎよう　ふげん　もんじゆ　しやりほつ　もくれん　だいほんてんのう　しゆくだいかんにん
・上行・無辺行等・普賢・文殊・舍利弗・目連等、大梵天王・釈提桓因・
にちがつ　日月・明星・北斗・七星・二十八宿・無量の諸星・天衆・地類・竜神・
はちぶ　にんてん　たいえ　えんまほうおう　上は非想の雲の上・下は那落の炎の底まで
八部・人天・大会・閻魔法王

所有一切衆生の備うる所の仏性を妙法蓮華經とは名くるなり、されば一遍此の首題を唱へ奉れば一切衆生の仏性が皆よばれて爰に集まる時・我が身の法性の法報応の三身ともに・ひかれて顕れ出ずる是を成仏とは申すなり、例せば籠の内にある鳥の鳴く時空を飛ぶ衆鳥の同時に集まる是を見て籠の内の鳥も出でんとするが如し。

爰に愚人云く首題の功德・妙法の義趣・今聞く所詳かなり但し此の旨趣正しく經文に是をのせたりや如何、聖人云く其の理詳かならん上は文を尋ぬるに及ばざるか然れども請に随つて之を示さん法華經第八陀羅尼品に云く「汝等但能く法華の名を受持せん者を擁護せん福量るべからず」此の文の意は仏・鬼子母神・十羅刹女の法華經の行者を守らんと誓い給うを讃むるとして汝等・法華の首題を持つ人を守るべしと誓ふ、其の功德は三世了達

の仏の智慧ちえも尚なお及びがたしと説かれたり、仏智の及およばぬ事何かあるべき
なれども法華ほっけの題名だいめい受持じゅじの功德くどくばかりは是これを知らずと宣のべべたり、法華ほっけ
一部の功德くどくは只妙法ただみょうほう等の五字ごじの内に籠こもれり、一部八卷・文文ごとに二
十八品・生起かはれども首題の五字ごじは同等なり、譬たとえば日本にほんの二字の中
に六十余州・島二つ入らぬ国やあるべき籠こもらぬ郡やあるべき、飛鳥とよ
べば空をかける者と知り走獸しゅじゆといへば地をはしる者と心うる一切名いっさいの大
切なる事蓋けだし以て是かくくの

如し、天台は名詮自性・句詮差別とも名者大綱とも判ずる此の謂れなり、又名は物をめす徳あり物は名に応ずる用あり法華題名の功德も亦以て此くの如し。

愚人云く聖人の言の如くば実に首題の功莫大なり但し知ると知らざるとの不同あり、我は弓箭に携り兵杖をむねとして未だ仏法の真味を知らず若し然れば得る所の功德何ぞ其れ深からんや、聖人云く円頓の教理は初後全く不二にして初位に後位の徳あり一行・一切行にして功德備わらざるは之れ無し若し汝が言の如くば功德を知つて植えずんば上は等覺より下は名字に至るまで得益更にあるべからず、今の経は唯仏与仏と談ずるが故なり、

譬喩品に云く「汝舍利弗尚此の経に於ては信を以て入ることを得たり況や余の声聞をや」文の心は大智・舍利弗も法華経には信を以て入る

其の智分の力にはあらず況や自余の声聞をやとなり、されば法華經に
来つて信ぜしかば永不成仏の名を削りて華光如来となり嬰兒に乳をふ
くむるに其の味をしらずといへども自然に其の身を生長す、
医師が病者に薬を与うるに病者薬の根源をしらずといへども服すれば
任運と病愈ゆ若し薬の源をしらずと云つて医師の与ふる薬を服せずば
其の病愈ゆべしや薬を知るも知らざるも服すれば病の愈ゆる事以て
是れ同じ、既に仏を良医と号し法を良薬に譬へ衆生を病人に譬ふさ
れば如来一代の教法を擣☆和合して妙法一粒の良薬に丸ぜり豈知る
も知らざるも服せん者・煩惱の病愈えざるべしや病者は薬をもしらず
病をも弁へすといへども服すれば必ず愈ゆ、行者も亦然なり法理をも
しらず煩惱をもしらずといへども只信ずれば見思・塵沙・無明の三惑の
病を同時に

断じて実報・寂光の台にのぼり本有三身の膚を磨かん事疑いあるべからず、されば伝教大師云く、能化所化俱に歴劫無く妙法經の力即身成仏す」と法華經の法理を教へん師匠も又習はん弟子も久しからずして法華經の力をもつて俱に仏になるべしと云う文なり、天台大師も法華經に付いて玄義・文句・止觀の三十卷の釈を造り給う、妙樂大師は又釈籤・疏記・輔行の三十卷の末文を重ねて判釈す、天台六十卷とは是なり、玄義には名体宗用教の五重玄

を建立ごんりゅうして妙法蓮華經みょうほうれんげきょうの五字ごじの功能くのうを判釈はんしやくす、五重玄ごじゅうげんを釈しやくする中の宗の釈いわに云く、綱維こういを提ひつさぐるに目めとして動かざるなくこと無く衣の一角ひとすみを牽ひくに縷るとして来らざる無きが如ごとし」と、意は此の妙法蓮華經みょうほうれんげきょうを信仰しんこうし奉たてまつる一行に功德くどくとして来らざる事なく善根ぜんこんとして動かざる事なし、譬たとえば網の目無量むりょうなれども一つの大綱たいこうを引くに動かざる目もなく衣の糸あまた筋巨多あまたなれども一角ひとすみを取るに糸筋として来らざることなきが如ごとしと云う義なり、さて文句もんくには如是によぜがもん我聞われもんより作礼さらいに而去こまで文文・句句ごんごに因縁・約教・本・迹・觀心の四種の釈いんねん やつぎょう ほん じき かんじんを設けたり、次に止觀しがんには妙解みょうげの上うへに立てる所

の觀不思議境ふしぎきやうの一念三千いちねんさんぜん是れ本覺ほんがくの立行・本具の理心りしんなり、今爰ここに委くわしくせず、悦よろこばしいかな生うを五濁惡世ごじよくあくせに受くといへども一乘いちじやうの真文しんもんを見聞けんもんする事を得たり、熙連恒沙きれんごうしゃの善根ぜんこんを致せる者・此の經きやうにあい奉たてまつつて

信を取ると見えたり、汝今一念隨喜の信を致す函蓋相応感應道交
疑い無し。

愚人頭を低れ手を挙げて云く我れ今よりは一実の經王を受持し
三界の独尊を本師として今身自り仏身に至るまで此の信心敢て退転無
けん、設ひ五逆の雲厚くとも乞ふ提婆達多が成仏を續ぎ十惡の波あ
らくとも願くは王子覆講の結縁に同じからん、聖人云く人の心は水の
器にしたがふが如く物の性は月の波に動くに似たり、故に汝当座は信
ずといふとも後日は必ず翻へさん魔來り鬼來るとも願乱する事なか
れ、夫れ天魔は佛法をにくむ外道は内道をきらふ、されば猪の金山を
摺り衆流の海に入り薪の火を盛んになし風の求羅をますが如くせば豈
好き事にあらずや。

◆六七

如説修行抄によせつしゆぎよう

501P

夫れ以おもんみれば末法流布まつぽうの時・生を此の土に受け此の経を信ぜん人は如来によらいの在世ざいせより猶多怨嫉ゆたおんしつの難なん甚はなはだしかるべしと見えて候なり、其そのの故ゆえは在世ざいせは能化のうけの主は仏なり弟子又大菩薩阿羅漢ぼさつあらかんなり、人天にんてん・四衆ししゅう・八部はちぶ・人非人等にんびにんなりといへども調機調養ちようきちようようして法華経ほけきようを聞かしめ給ふ猶なほ怨嫉おんしつ多し、何に況いわんや末法まつぽう今の時は教機時刻当来きじこくとうらいすといへども其そのの師そを尋たずぬれば凡師ぼんしなり、弟子又闍靜堅固とうじようけんこ・白法隱没びやくぽうおんもつ・三毒強盛さんどくかうじようの惡人あくにん等なり、故に善師ぜんしをば遠離おんりし惡師あくしには親近しんこんす、其そのの上真実しんじつの法華経ほけきようの如説修行によせつしゆぎようの行者ぎようじやの師弟檀那していだんなとならんには三類さんるいの敵人てきじん決定けつじようせり、されば此の経ちようもんを聴聞し

始めん日より思い定むべし況滅度後の大難の三類甚しかるべしと、

然るに我が弟子等の中にも兼て聴聞せしかども大小の難来る時は今

始めて驚き肝をけしして信心を破りぬ、兼て申さざりけるか經文を先

として猶多怨嫉・況滅度後・況滅度後と朝夕教へし事は是なり予が・或

は所を・をわれ・或は疵を蒙り・或は兩度の御勘氣を蒙りて遠國に

流罪せらるるを見聞くとも今始めて驚くべきにあらざる物をや。

問うて云く如説修行の行者は現世安穩なるべし何が故ぞ三類の強敵

盛んならんや、答えて云く釈尊は法華經の御為に今度九横の大難に値

ひ給ふ、過去の不輕菩薩は法華經の故に杖木瓦石を蒙り竺の道生は

蘇山に流され法道三蔵は面に火印をあてられ師子尊者は頭をはねら

れ天台大師は南三・北七にあだまれ伝教大師は六宗にくまれ給へ

り、此等の仏菩薩・大聖等は法華經の行者として而も大難にあひ給へ

り、此れ等の人人ひとびとを如説修行によせつしゆぎようの人と云わ

ずんばいづくにか如説修行によせつしゆぎようの人を尋ねん、然るに今の世は闔靜堅固・

びやくほうおんもつ

白法隱没なる上・惡国・惡王・惡臣・惡民のみ有りて正法しようほうを背そむきて

じゃほう

邪法・邪師じゃしを崇重すうちようすれば国土こくどに惡鬼あくお乱れ入りて三災さんさい・七難盛ひちなんさかんに起れ

り、かかる時刻じこくに日蓮にちれん仏勅ぶつちよく

こおも

を蒙りて此の土に生れけるこそ時の不祥なれ、法王の宣旨背きがたけ

きようもん

まか

ごんじつ

にんにく

よろい

せんじそむ

を著て妙教の劍

を提げ一部八巻の肝心・妙法五字の旗を指上て未顕真実の弓をはり

しょうじきしゃごん

ひつさ

かんじん

みようほうごじ

みけんしんじつ

だいいやくごしや

ごんもん

はつしゅう

てきじん

こへおしかけここへおしよせ念仏・真言・禪・律等の八宗・十宗の敵人を

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

さいなんの災難を払ひ長生の術を得、人法共に不老不死の理・顕れん時を各御覽ぜよ現世安穩の証文疑い有る可からざる者なり。

問うて云く如説修行の行者と申さんは何様に信ずるを申し候べき

や、答えて云く当世・日本国中の諸人・一同に如説修行の人と申し候は

諸乗一仏乗と開会しぬれば何れの法も皆法華經にして勝劣・淺深ある

事なし、念仏を申すも真言を持つも禪を修行するも總じて一切の

諸經並びに仏・菩薩の御名を持ちて唱るも皆法華經なりと信ずるが

如説修行の人とは云われ候なり等云云、予が云く然らず所詮仏法を

修行せんには人の言を用う可らず只仰い

で仏の金言をまほるべきなり我等が本師・釈迦如来は初成道の始より

法華を説かんと思食しかども衆生の機根未熟なりしかば先ず權教た

る方便を四十余年が間説きて後に真実たる法華經を説かせ給いしな

り、此の經の序分・無量義經にして權實のはうじを指て方便眞實を分け
給へり、所謂以方便力・四十余年・未顕眞實是なり、大莊嚴等の八万の
大士・施權・開權・廢權等のいはれを心得分け給いて領解して言う
法華經已前の歷劫修行等の諸經は終不得成・無上菩提と申しきり給
ひぬ、然して後・正宗の法華に至つて世尊・法久後・要當說眞實と説き
給いしを始めとして

無二亦無三やくむ除ほ方便ほうべん說しやう正直捨方便しやうじきしやほうべん乃至不受余經ないしふじゆよきやう一偈いちげと禁いましめ給たまへり、
是いより已い後はいご唯ゆ有一いち仏乘ぶつじやうの妙法みやうほうのみ一切衆生いっさいしゆじやうを仏になす大法だいほうにて
法華經ほけきやうより外ほかの諸經しよきやうは一分いちぶんの得益とくやくもあるまじきに末法まつほうの今の學者がくしや
何れも如來にやらいの説教せつぎやうなれば皆得道みなとくどうあるべしと思おもいて、或あるは眞言しんごん・或あるは念仏ねんぶつ
・或あるは禪宗ぜんしやう・三論さんろん・法相ほつさう・俱舍ぐしや・成実じやうじつ・律等しよしやうしよきやうの諸宗しよしやうしよきやう諸經しよしやうしよきやうを取しゆじゆ取しゆじゆに信しんずる
なり、是かくの如かくき人にをば若人にやくにんふしん不信毀謗きぼう・此經しきやうそくだん即斷いっさいせけん・一切世間いっさいせけん・仏種ぶつしゆ・
乃至ないし・其人命終ごにんみやうじゆう・入阿鼻獄にやうあびごくと定め給たまへり、此等これらのをきての明鏡めいきやうを本とし
て一分いちぶんもたがえず唯ゆ有一いち乘法じやうじゆと信しんずるを如說修行にやせつしゆぎやうの人とは仏は定め
させ給たまへり。

難なんじて云いわく左様ほうべんに方便權教ほうべんごんきやうたる諸經しよきやうしよぶつ諸仏しよぶつを信しんずるを法華經ほけきやうと云いわは
ばこそ、只一經ただいっきやうに限りて經文きやうもんの如ごとく五種ごしゆの修行しゆぎやうをこらし安樂行品あんらくぎやうほんの
如ごとく修行しゆぎやうせんは如說修行にやせつしゆぎやうの者ものとは云いわわれ候いまじきか如何いかん、答こたえて云いわく

およそぶつぼう 凡仏法を修行せん者は撰折二門を知る可きなり一切の經論此の二
を出でざるなり、されば國中の諸學者等・仏法をあらあら學すと云へど
も時刻相應の道をしらず四節・四季・取取に替れり、夏は熱く冬はつめ
たく春は花さき秋は菓なる春種子を下して秋菓を取るべし秋種子を
下して春菓を取らんに豈取らる可けんや、極寒の時は厚き衣は用なり
極熱の夏はな

にかせん、涼風は夏の用なり冬はなにかせん、仏法も亦復是くの如し
小乗の流布して得益あるべき時もあり、權大乘の流布して得益あるべ
き時もあり、実教の流布して仏果を得べき時もあり、然るに正像二千
年は小乗・權大乘の流布の時なり、末法の始めの五百年には純円一実
の法華經のみ広宣流布の時なり、此の時は闍靜堅固・白法隱没の時と
定めて權実雜亂の砌なり、敵有る時は刀杖弓箭を持つ可し敵無き時

は弓箭兵きゆうせんひやうじやう杖何にかせん、今の時は

權教ごんきやう即實教じつきやうの敵と成るなり、一乘流布いちじやうふの時は權教ごんきやう有つて敵と成りて

まぎらはしくば實教じつきやうより之これを責む可し、是これを撰折しやうしやく二門の中には

法華經ほけきやうの折伏しやくふくとは申もうすなり、天台てんだい云く法華折伏ほつしやくふく・破權門理はごんもんりとまこ

とに故あるかな、然るに撰受しやうじゆたる四安樂あんらくの修行しゆぎやうを今の時行ずるならば

冬種子しゆしを下くだして春菓このみを求る者にあらずや、鶏とりの曉に鳴くは用なり宵よいに

鳴くは物怪もつけなり、權實ごんじつ雜亂ざうらんの時・法華經ほけきやうの御敵ごてきを責めずして山林さんりんに閉

じ籠りこも撰受しやうじゆを修行しゆぎやうせんは豈あに法華經ほけきやう修行しゆぎやうの時を

失う物怪にあらずや、されば末法今の時・法華經の折伏の修行をば誰か經文の如く行じ給へしぞ、誰人にも坐せ諸經は無得道墮地獄の根源法華經独り成仏の法なりと音も惜まずよばはり給いて諸宗の人法・共に折伏して御覽ぜよ三類の強敵来らん事疑い無し。

我等が本師・釈迦如来は在世八年の間折伏し給ひ天台大師は三十余年伝教大師は二十余年今日蓮は二十余年の間・権理を破す其の間の大難数を知らず、仏の九横の難に及ぶか及ばざるは知らず、恐らくは天台・伝教も法華經の故に日蓮が如く大難に値い給いし事なし、彼は只悪口怨嫉計りなり、是は兩度の御勘氣遠国に流罪せられ竜口の頸の座頭の疵等其の外悪口せられ弟子等を流罪せられ籠に入られ檀那の所領を取られ御内を出だされし、是等の大難には竜樹・天台・伝教も争か及び給うべき、されば如説修行の法華經の行者には

三類の強敵打ち定んで有る可しと知り給へされば釈尊御入滅の後二

千余年が間に如説修行の行者は釈尊・天台・伝教の三人は・

さてをき候ぬ、末法に入つては日蓮並びに弟子・檀那等是なり、我等を

如説修行の者といはずば釈尊・天台・伝教等の三人も如説修行の人な

るべからず、提婆・瞿伽利・善星・弘法・慈覚・智証・善導・法然・良觀

房等は即ち法華經の行者と云はれ、釈尊・天台・伝教・日蓮並びに

弟子・檀那は念仏・真言・禪・律等の行者なるべし、法華經は方便權教

と云はれ念仏等の諸經は還つて法華經となるべきか、東は西となり西

は東となるとも大地は持つ所の草木共に飛び上りて天となり天の日月

・星宿は共に落ち下りて地となるためしはありとも・いかでか此の理

あるべき。

哀なるかな今・日本国の万民日蓮並びに弟子・檀那等が三類の強敵

に責められ大苦に値あうを見て悦よろこんで笑ふとも昨日は人の上・今日きようは身の上なれば日蓮にちれん並びに弟子でし・檀那だんな共に霜露そうろの命の日影を待つ計はかりぞかし、只今ただ・仏果ぶつに叶かないて寂光じやくかうの本土ほんどに居住して自受法楽じじゆほうらくせん時、汝等なんじが阿鼻大城あびだいじやうの底に沈みて大苦に値あわん時・我等われら何計いかばかり無慚むざんと思はんずらん、汝等なんじ何計いかばかりうらやましく思はんずらん、一期いちごを過すぐる事程も無ければ・いかに強敵重かうてきなるともゆめゆめ退する

心なかれ恐るる心なかれ、縦たとひ頸をば鋸のこぎりにて引き切り・どうをばひし
ほこを以もつてつつき足にはほだしを打って・きりを以もつてもむとも、命のかよ
はんほどは南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經と唱となえて唱へ死に死るな
らば釈迦・多宝・十方の諸仏靈山会上にして御契約なれば須臾の程に
飛び来りて手を取り肩に引懸かけて靈山へ・はしり給たまはば二聖・二天
十羅刹女は受持じゆじの者を擁護おうごし諸天善神は天蓋を指し旛を上げて我等
を守護しゆごして慥たしかかに寂光の宝刹ほうせつ送り給たまうべきなり、あらうれしや・あら
うれしや。

文永十年癸酉五月日 日蓮在御判

人々御中へ 此の書御身を離さず常に御覧有る可く候

を指すか、伝教大師云く「正像稍過ぎ已つて末法太だ近きに有り」等
云云末法の始を願樂するの言なり、時代を以て果報を論ずれば

竜樹・天親に超過し天台・伝教にも勝るなり。

問うて云く後・五百歳は汝一人に限らず何ぞ殊に之を喜悅せしむるや、答えて云く法華經の第四に云く如来の現在にすら猶怨嫉多し況や滅度の後をや」文、天台大師云く何に況や未来をや理化し難きに在り」文、妙樂大師云く理在難化とは此の理を明すことは意・衆生の化し難きを知らしむるに在り」文、智度法師云く俗に良薬口に苦しと言うが如く此の經は五乗の異執を廢して一極の玄宗を立つ故に凡を斥ぞけ聖を呵し大を排し小を破る乃至此くの如きの徒悉く留難を為す」等云云、伝教大師云く代を語れば則ち像の終り末の始・地を尋れば唐の東・羯の西・人を原れば則ち五濁の生・闍靜の時なり、經に云く猶多怨嫉・況滅度後と此の言良に以有るなり」等云云、此の伝教大師の筆跡は其の時に當るに似たれども意は當時を指すなり

しょうぞうややす 正像稍過ぎ已つて末法太だ近きに有りの釈は心有るかな、經に云く
あくま まみん 惡魔・魔民・諸天竜 夜叉・鳩槃荼等其の便りを得ん」云云、言う所
の等とは此の經に又云わく 若は夜叉・若は羅刹・若は餓鬼・若は
ふたんな 富単那・若は吉遮・若は毘陀羅・若は☆駄・若は烏摩勒伽・若は
あばつまら 阿跋摩羅・若は夜叉吉遮・若は人吉遮」等云云、此の文の如きは先生に
しみさんきよう 四味三教・乃至外道人天等の法を持得して今生に惡魔・諸天・諸人等
の身を受けたる者が円実の行者を見聞して留難を至すべき由を説く
り。

うたがい 疑つて云く正像の二時を末法に相對するに時と機と共に正像は
こと まさ 殊に勝るなり何ぞ其の時機を捨てて偏に當時を指すや、答えて云く
ぶつゐ 仏意測り難し予未だ之を得ず試みに一義を案じ小乗經を以て之を
かんが 勘うるに正法千年は教行証の三つ具さに之を備う像法千年には

教行きやうぎやうのみ有つて証無し末法まっぽうには教のみ有つて行証ぎやうしやう無し等云云、
法華經ほけきやう

を以て之これを探るに正法しやうぽう千年に三事を具ぐするは在世ざいせに於て法華經ほけきやうに
結縁けちえんする者か、其その後正法しやうぽうに生れて小乗しやうじやうの教行きやうぎやうを以て縁もつと為し
小乗しやうじやうの証を得るなり、像法ぞうぽうに於ては在世ざいせの結縁けちえん微薄びはくの故に小乗しやうじやうに
於て証すること無く此この人権大乘ごんたいじやうを以て縁もつと為して十方じゆっぽうの淨土じやうどに生
ず、末法まっぽうに於ては大小だいしやうの益共に之これ無し、小乗しやうじやうには教のみ有つて行証ぎやうしやう
無し

大乘には教行のみ有つて冥顯の証之無し、其の上正像の時の所立の
権小の二宗漸漸末法に入て執心弥強盛にして小を以て大を打ち権
を以て実を破り国土に大体謗法の者充滿するなり、仏教に依つて惡道
に墮する者は大地微塵よりも多く正法を行じて仏道を得る者は爪上
の土よりも少きなり、此の時に當つて諸天善神其の国を捨離し
但邪天・邪鬼等有つて王臣・比丘・比丘尼等の身心に入住し法華經の
行者を罵詈毀辱せしむべき時なり、爾りと雖も仏の滅後に於て
四味三教等の邪執を捨て実大乘の法華經に歸せば諸天善神並びに
地涌千界等の菩薩・法華の行者を守護せん此の人は守護の力を得て
本門の本尊・妙法蓮華經の五字を以て閻浮堤に広宣流布せしめんか、
例せば威音王仏の像法の時・不輕菩薩・我深敬等の二十四字を以て彼
の土に広宣流布し一国の杖木等の大難を招きしが如し、彼の二十四字

と此の五字と其の語殊なりと雖も其の意是れ同じ彼の像法の末と是の
末法の初と全く同じ彼の不輕菩薩は初隨喜の人・日蓮は名字の凡夫な
り。

疑つて云く何を以て之を知る汝を末法の初の法華經の行者なり
と為すと云うことを、答えて云く法華經に云く況んや滅度の後をや
又云く諸の無智の人有つて惡口罵詈等し及び刀杖を加うる者あら
ん又云く數數擯出せられん又云く一切世間怨多くして信じ難し
又云く杖木瓦石をもつて之を打擲す又云く惡魔・魔民・諸天竜・
夜叉・鳩槃荼等其の便りを得ん等云云、此の明鏡に付いて仏語を信
ぜしめんが為に、日本國中の王臣・

四衆の面目に引き向えたるに予よりの外には一人も之無し、時を論ず
れば末法の初め一定なり、然る間若し日蓮無くんば仏語は虛妄と成ら

ん、難^{なん}じて云^{いわ}く汝^{なんじ}は大慢^{だいまん}の法師^{ほつし}にして大天^{だいてん}に過^すぎ四禪^{しぜん}比丘^{びく}にも超^こえたり如何^{いかん}、答^{こた}えて云^{いわ}く汝^{なんじ}日蓮^{にちれん}を蔑^{べつ}如^{じょ}するの重罪^{じゅうざい}・又^{また}提婆^{だいば}達多^{だつた}に過^すぎ無垢^{むくろんし}論師^{ろんし}にも超^こえたり、我^{われ}が言^{こと}は大慢^{だいまん}に似^にたれども仏記^{ぶつぎ}を扶^{たす}け如來^{にょらい}の實語^{じつご}を顯^{あらわ}さんが為^ななり、然^{しか}りと雖^{いえど}も日本^{にほん}國中^{こくじゅう}に日蓮^{にちれん}を除^{のぞ}いては誰人^{たれびと}を取^とり出^だして法華^{ほけき}經^{きやう}の行者^{ぎやうじや}と為^なさん汝^{なんじ}日蓮^{にちれん}を謗^{そし}らんとしして仏記^{ぶつぎ}を虛妄^{こもう}にす豈^{あに}大惡人^{あくにん}に非^{あら}ずや。

うたがい

疑つて云く如来の未来記汝に相当れり、但し五天竺並びに漢土等

ほけきよう

ぎようじや

あ

いかん

い

してんげ

に

全く二の

日

等

にも法華經の行者之有るか如何、

答えて云く

四天下の中に

全く二の

日

等

に

全く二の

日

等

無し四海の内豈両主有らんや、

疑つて云く

何を以て

汝之を知る、

答

えて云く

月は西より

出でて東を照し

日は東より

出でて西を照す

仏法も

又以て是く

の如し

正像には

西より東に向い

末法には

東より西に往く、

妙樂大師の云く

豊中国に

法を失いて之を四維に求むるに非ずや」等

云云、天竺に

仏法無き証文なり

漢土

に於て高宗皇帝の時

北狄東京を領して

今に一百五十余年・

仏法王法共

に尽き了んぬ、

漢土の大蔵の中に

小乗經は一向之れ無く大乗經は

多分之を失す、

日本より寂照等

少少之を渡す

然りと雖も

伝持の人無

れば猶木石の衣鉢を

帶持せるが如し、

故に遵式の云く

娑西より伝う

猶月の生ずるが如し

今復東より返る猶日の昇るが如し」等云云、此等の

猶月の生ずるが如し

今復東より返る

猶日の昇るが如し

」等云云、此等の

猶月の生ずるが如し

今復東より返る

猶日の昇るが如し

」等云云、此等の

猶月の生ずるが如し

今復東より返る

猶日の昇るが如し

今復東より返る

猶日の昇るが如し

」等云云、此等の

猶月の生ずるが如し

今復東より返る

猶日の昇るが如し

」等云云、此等の

猶月の生ずるが如し

今復東より返る

猶日の昇るが如し

今復東より返る

猶日の昇るが如し

」等云云、此等の

猶月の生ずるが如し

今復東より返る

猶日の昇るが如し

」等云云、此等の

猶月の生ずるが如し

今復東より返る

猶日の昇るが如し

今復東より返る

猶日の昇るが如し

」等云云、此等の

猶月の生ずるが如し

今復東より返る

猶日の昇るが如し

」等云云、此等の

猶月の生ずるが如し

今復東より返る

猶日の昇るが如し

今復東より返る

猶日の昇るが如し

」等云云、此等の

猶月の生ずるが如し

今復東より返る

猶日の昇るが如し

」等云云、此等の

猶月の生ずるが如し

今復東より返る

猶日の昇るが如し

今復東より返る

猶日の昇るが如し

」等云云、此等の

猶月の生ずるが如し

今復東より返る

猶日の昇るが如し

」等云云、此等の

猶月の生ずるが如し

今復東より返る

猶日の昇るが如し

今復東より返る

猶日の昇るが如し

」等云云、此等の

猶月の生ずるが如し

今復東より返る

猶日の昇るが如し

」等云云、此等の

猶月の生ずるが如し

今復東より返る

猶日の昇るが如し

今復東より返る

猶日の昇るが如し

」等云云、此等の

猶月の生ずるが如し

今復東より返る

猶日の昇るが如し

」等云云、此等の

猶月の生ずるが如し

今復東より返る

猶日の昇るが如し

今復東より返る

猶日の昇るが如し

」等云云、此等の

猶月の生ずるが如し

今復東より返る

猶日の昇るが如し

」等云云、此等の

猶月の生ずるが如し

今復東より返る

猶日の昇るが如し

今復東より返る

猶日の昇るが如し

」等云云、此等の

猶月の生ずるが如し

今復東より返る

猶日の昇るが如し

」等云云、此等の

猶月の生ずるが如し

今復東より返る

猶日の昇るが如し

今復東より返る

猶日の昇るが如し

」等云云、此等の

猶月の生ずるが如し

今復東より返る

猶日の昇るが如し

」等云云、此等の

猶月の生ずるが如し

今復東より返る

猶日の昇るが如し

今復東より返る

猶日の昇るが如し

」等云云、此等の

猶月の生ずるが如し

今復東より返る

猶日の昇るが如し

」等云云、此等の

猶月の生ずるが如し

今復東より返る

猶日の昇るが如し

今復東より返る

猶日の昇るが如し

」等云云、此等の

猶月の生ずるが如し

今復東より返る

猶日の昇るが如し

」等云云、此等の

猶月の生ずるが如し

今復東より返る

釈しゃくの如ごとくんば天竺てんじく漢土かんどに於おいて仏法ぶつぽうを失うしなせること勿論もちろんなり、問いうて云いく月氏がつし・漢土かんどに於おいて仏法ぶつぽう無なきこと

は之これを知しれり、東西北の三洲さんしゅうに仏法ぶつぽう無なき事は何もつを以もつて之これを知しる、答こたえて云いく法華經ほけきやうの第八はちに云いく如來にやらいの滅後めつごに於おいて閻浮提えんぶだいの内に広ひろく流布るふせしめて断絶だんぜつせざらしめん」等云云、内の字は三洲さんしゅうを嫌きらう文なり、問いうて曰いく仏記ぶつぎ

既すでに此かくの如ごとし汝なんじが未來記みらいき如何いかに、答こたえて曰いく仏記ぶつぎに順したがひて之これを勘かんうるに既すでに後ご・五百歳ごひゃくさいの始はじに相あい當あたれり仏法ぶつぽう必かならずず東土とうどの日本にほんより出でづべきなり、其その前相ぜんさう必かならずず正像しやうざうに超過ちやうかせる天變地天てんぺんちちやう之これ有あるか、所謂いわず仏生ぶつじやうの時とき・転法輪てんぽうりんの時とき・入涅槃ねはんの時とき・吉瑞凶瑞ききうずい共に前後ぜんごに絶たえたる大瑞だいずいなり、仏こは此これ聖人しやうにんの本もとなり經經きやうぎやうの文ぶんを見るに仏の御誕生ぎだんじやうの時ときは五色ごしきの光氣くわうき四方しやうほうに遍あまねくして夜も昼の如ごとし仏御入滅にやうめつの時ときには十二じふにの白虹はくこう・南北なんぼくに

亘^{わた}り大^{だい}日^に輪^{りん}光^{くわう}り無^{なく}くして闇^{やみ}夜^よの如^{ごと}くなりし、其^その後^ご正^{しょう}像^{ざう}二^に千^{せん}年^{ねん}の間^{かん}、
内^{ない}外^{がい}の聖^{しょう}人^{にん}・生^{しょう}滅^{めつ}有^あれども此^この大^{だい}瑞^{ずい}には如^しかず、而^{しか}るに去^いぬる正^{しょう}嘉^か年^{ねん}
中

より今^い年^{ねん}に至^{いた}るまで・或^{ある}は大^{だい}地^じ震^{しん}・或^{ある}は大^{てん}天^{てん}変^{へん}・宛^{あた}かも仏^ぶ陀^たの生^{しょう}滅^{めつ}の
時^{ごと}の如^{ごと}し、当^{まさ}に知^しるべし仏^ぶの如^{ごと}き聖^{しょう}人^{にん}生^{しょう}れたまわんか、大^{おお}虚^こに亘^{わた}つて大^{だい}
彗^{ほう}星^{せい}出^でづ誰^{たれ}の王^{おう}臣^{しん}を以^{もつ}て之^{これ}に對^{たい}せん、当^{とう}瑞^{ずい}大^{だい}地^じを傾^{けい}動^{どう}して三^{さん}たび振^{しん}裂^{れつ}
す何^いれ^ずの聖^{せい}賢^{けん}を以^{もつ}て之^{これ}に課^おせん、当^{まさ}に知^しるべし通^{つう}途^ず世^せ間^{けん}の吉^き凶^{きよう}の大^{だい}瑞^{ずい}
には非^{あら}ざるべし惟^これ偏^{ひろ}に此^この大^{だい}法^{ほう}興^{こう}廃^{はい}の大^{だい}瑞^{ずい}なり、天^{てん}台^{だい}云^いく

雨の猛きを見て竜の大なるを知り華の盛なるを見て池の深きを知る」

等云云、妙楽の云く「智人は起を知り蛇は自ら蛇を識る」等云云、
日蓮此の道理を存して既に二十一年なり、日來の災・月來の難・此の兩
三年の間の事既に死罪に及ぼんとす今年・今月万が一も脱がれ難き
身命なり、世の人疑い有らば委細の事は弟子に之を問え、幸なるか
な一生の内に無始の謗法を消滅せんことを悦ばしいかな未だ見聞せざ
る教主釈尊に侍え奉らんことよ、

願くは我を損ずる国主等をば最初に之を導かん、我を扶くる弟子等を
ば釈尊に之を申さん、我を生める父母等には未だ死せざる已前に此の
大善を進めん、但し今・夢の如く宝塔品の心を得たり、此の経に云く
「若し須弥を接つて他方の無數の仏土に擲げ置かんも亦未だ為難しと
せず乃至若し仏の滅後に惡世の中に於て能く此の経を説かん是れ

則ち為難し」等云云、伝教大師云く、浅きは易く深きは難しとは釈迦の所判なり浅きを去つて深きに就くは丈夫の心なり、天台大師は釈迦に信順し法華宗を助けて震旦に敷揚し叡山の一家は天台に相承し法華宗を助けて日本に弘通す」等云云、安州の日蓮は恐くは三師に相承し法華宗を助けて末法に流通す三に一を加えて三国四師と号く、南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經。

文永十年太歳癸酉後・五月十一日 桑門日蓮之を記す

◆六九

当体義抄

日蓮之を勘う

510P

問う妙法蓮華經とは其の体何物ぞや、答う十界の依正即ち妙法蓮華經の当体なり、問う若爾れば我等が如き一切衆生も妙法の全体なりと云わる可きか、答う勿論なり經に云く所謂諸法乃至本末究竟等」云云、妙樂大師釈して云く実相は必ず諸法・諸法は必ず十如・十如は必ず十界・十界は必ず身土」と云云、天台云く十如三千の諸法は今經の正体なるのみ」云云、南岳大師云く「云何なるを名けて妙法蓮華經と為すや答う妙とは衆生妙なるが故に法とは即ち是れ衆生法なるが故に」云云、又天台釈して云く「衆生法妙」と云云。問う一切衆生の当体即妙法の全体ならば地獄乃至九界の業因・

業果も皆是れ妙法の体なるや、答う法性の妙理に染淨の二法有り染
法は熏じて迷と成り淨法は熏じて悟と成る悟は即ち仏界なり迷は即ち
衆生なり、此の迷悟の二法二なりと雖も然も法性真如の一理なり、
譬えば水精の玉の日輪に向えば火を取り月輪に向えば水を取る玉の
体

一なれども縁に隨て其の功同じからざるが如し、真如の妙理も亦復
是くの如し一妙真如の理なりと雖も惡縁に遇えば迷と成り善縁に遇
えば悟と成る悟は即ち法性なり迷は即ち無明なり、譬えば人夢に種種
の善惡の業を見夢覺めて後に之を思えば我が一心に見る所の夢なるが
如し、一心は法性真如の一理なり夢の善惡は迷悟の無明法性なり、
是くの如く意得れば惡迷の無明を捨て善悟の法性を本と為す可きな
り、大円覺・修多羅・了義經に云く一切

諸の衆生の無始の幻無明は皆諸の如来の円覚の心従り建立す」云云、
天台大師の止観に云く、無明癡惑本是れ法性なり癡迷を以ての故に
法性変じて無明と作る」云云、妙樂大師の釈に云く、理性体無し全く
無明に依る無明体無し全く法性に依る」云云、無明は所断の迷・法性
は所証の理なり何ぞ体一なりと云うやと云える不審をば此等

の文義を以て意得可きなり、大論九十五の夢の譬・天台一家の玉の譬・誠に面白く思うなり、正く無明法性其の体一なりと云う証拠は法華經に云く是の法は法位に住して世間の相常住なり」云云、大論に云く明と無明と異無く別無し是くの如く知るをば是を中道と名く」云云、但真如の妙理に染淨の二法有りと云う事証文之れ多しと雖も華嚴經に云く「心仏及衆生是三無差別」の文と法華經の諸法実相の文とは過ぐ可からざるなり南岳大師の云く「心体に染淨の二法を具足して而も異相無く一味平等なり」云云、又明鏡の譬・真実に一二なり委くは大乗止觀の釈の如し又能き釈には籤の六に云く「三千理に在れば同じく無明と名け三千果成すれば咸く常樂と稱す三千改むること無ければ無明即明・三千並に常なれば俱体俱用なり」文、此の積分明なり。

問う一切衆生・皆悉く妙法蓮華經の当体ならば我等が如き愚癡
闇鈍の凡夫も即ち妙法の当体なりや、答う当世の諸人之れ多しと
雖も二人を出でず謂ゆる權教の人実教の人なり而も權教方便の念仏
等を信ずる人は妙法蓮華の当体と云わる可からず実教の法華經を信
ずる人は即ち当体の蓮華・真如の妙体・是なり涅槃經に云く「一切
衆生

大乘を信ずる故に大乘の衆生と名く」文、南岳大師の四安樂行に
云く天強精進經に云く衆生と如来と同共一法身にして清淨妙無
比なるを妙法華經と称す」文、又云く法華經を修行するは此の一心
一學に衆果普く備わる一時に具足して次第入に非ず亦蓮華の一華に
衆果を一時に具足するが如し是を一乘の衆生の義と名く」文、又云く
「二乘・声聞及び鈍根の菩薩は方便道の中の次第修學なり利根の菩薩

は正直しやうじきに方便ほうべんを捨て次第行しだいを修しゆせず若もし法華三昧ほつげさんまいを証しすれば衆果しゆうか
悉ことごとくく具足ぐそく是これを一乗いちじやうの衆生しゆじやうと名なく」文なん、南岳なんがくの釈しやくの意いは次第行しだいの三字
をば当世とうせの学者がくしやは別教べつきやうなりと料簡りやうけんす、然しかるに此しの釈しやくの意いは法華ほつげの因果いんが
具足ぐそくの道みちに對たいして方便道ほうべんを次第行しだいと云いう故ゆゑに爾前にぜんの円えん・爾前にぜんの諸しよ
大乘經だいじやうきやう並ならびに頓漸とんぜん大小だいしやうの諸經しよきやうなり証しやうこ拠きは無量義經むりやうぎきやうに云いく次ほうに方等とう
十二部經じふにぶきやう・摩訶般若まかはんにか・華嚴けこん海空かいくうを説とくいて菩薩ぼさつの歷劫修行りやくしゆぎしゆぎやうを宣説せんぜつす」
文りこん、利根りこんの菩薩ぼさつは正直しやうじきに方便ほうべんを捨てて次第行しだいを修しゆせず若もし法華經ほつげきやうを
証しする時は衆果しゆうか悉ことごとく

具足ぐそく是これをいちじよう一乘しゆじようの衆生なすと名なくるなり此等これらの文ぶんの意いを案あんずるに三乘さんじよう・
五乘ごじよう・七方便しちはんべん・九法界くほっかい・四味三教しみさんきよう・一切いっさいの凡聖等ぼんせいをだいじようば大乘だいじようの衆生しゆじよう
妙法蓮華みようほうれんげの当体とうたいとは名なく可べからざるなり、設たとい仏ぶつなりと雖いふも權教ごんきようの仏ぶつ
をぶつば仏界ぶつの名言みまうごんを付べく可べからず權教ごんきようの三身さんじんは未いまだ無常むじようを免まぬれざる
故ゆえに何いかに況いわんや其その余みまうごんの界界みまうごんの名言みまうごんをや、故ゆえに正像しょうざう二千年にせんねんの国王こくおう・大臣だいじん
より

も末法まつぽうの非人そんぎは尊貴そんぎなりと釈しやくするも此この意いなり、南岳なんがく釈しやくして云いく
「一切衆生いっさいしゆじよう法身ほふしんの蔵ぐそくを具足ぐそくして仏ぶつと一いつにして異あり有あること無し」、
是かくのゆえの故ゆえに法華經ほけきように云いく父母ふぼ・所生しよしやう・清淨しやうじやう・常眼じやうがん・耳みみ・鼻はな・舌しつ・身しん・意い
亦復またまた如是にやぜ」文ぶん、又云いく問いうて云いく仏何いすれれの經きやうの中に眼等まなこの諸根しよこんを説しやく
いて名なけて如來にやらいと為なすや、答こたえて云いく大強精進經だいきやうしやうじんきやうの中に衆生しゆじようと如來にやらいと
同じ

く共に一法身ほっしんにして清淨しょうじょう妙無比みょうむひなるを妙法蓮華經みょうほうれんげきょうと稱しょうす」文、他經たきょうに有りと雖いえども下文くだしふみ顯あらわれ已おわれば通じて引用することを得るなり、大強精進經だいきやうしんじやうの同共の二字に習ならい相伝そうでんするなり法華經ほけきょうに同共して信ずる者は妙經みょうきやうの体ふどうなり不同共ふどうの念仏者等ねんぶつは既にすでに仏性法身如来ぶつしょうほっしんによらいに背そむくが故ゆえに妙經みょうきやうの体あらに非あらざるなり、所詮しよせん妙法蓮華みょうほうれんげの当体どうたいとは法華經ほけきやうを信ずる

日蓮にちれんが弟子でし・檀那等だんなの父母ふぼ所生しよしやうの肉身こゑ是なり、正直しやうじきに方便ほうべんを捨て但ただ法華經ほけきやうを信じ南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱となうる人は煩惱ぼんのう・業・苦の三道ほっしん・法身ほっしん・般若はんにや・解脱げだつの三徳さんとくと転じて三觀さんかん・三諦さんたい即一心そくいしんに顯あらわれ其その人の所住しよじゆうの処ところは常寂光土じやうじやくかうどなり、能居のうこ・所居しやうこ・身土しんど・色心しきしん・俱体俱用くたいくゆう・無作三身むささんじんの本門ほんもん・寿量じゆうりやうの当体どうたい蓮華れんげの仏ぶつとは日蓮にちれんが弟子でし・檀那等だんなの中の事ことなり是れすなわほっけ・法華ほうけの当体どうたい自在じざい在神じん力の顯あらわす所の功能くのうなり敢て之これを疑うたがいう可べから

ず之を疑う可からず、問う天台大師・妙法蓮華の

当体・譬喩の二義を釈し給えり爾れば其の当体・譬喩の蓮華の様は

如何、答う譬喩の蓮華とは施開廃の三釈委く之を見るべし、当体蓮華

の釈は玄義第七に云く蓮華は譬えに非ず当体に名を得類せば劫初に

万物名無し聖人・理を觀じて準則して名を作るが如し」文、又云く今

蓮華の称は是れ喩を仮るに非ず乃ち是れ法華の法門なり法華の法門

は清淨にして因果微妙なれば此の法門を名けて蓮華と為す即ち是れ

法華三昧の当体の名にして譬喩に非ざるなり」又云く問う蓮華定めて

是れ法華三昧の蓮華なりや定めて是れ華草の蓮華なりや、答う定めて

是れ法蓮華

なり法蓮華解し難し故に草花を喩と為す利根は名に即して理を解し
譬喩を仮らず但法華の解を作す中下は未だ悟らず譬を須いて乃ち知
る易解の蓮華を以て難解の蓮華に喩う、故に三周の説法有つて上中
下根に逗う上根に約すれば是れ法の名・中下に約すれば是れ譬の名
なり三根合論し雙べて法譬を標す是くの如く解する者は誰とか
あらず
諍うことを為さんや」云云、此の釈の意は至理は名無し聖人・理を
観じて万物に名を付くる時・因果俱時・不思議の一法之れ有り之を名
けて妙法蓮華と為す此の妙法蓮華の一法に十界三千の諸法を具足して
闕減無し之を修行する者は仏因・仏果同時に之を得るなり、聖人・此
の法を師と為して修行覚道し給えば妙因・妙果・俱時に感得し給うが
故に妙覺果満の如来と成り給いしなり、故に伝教大師云く「二心の
妙法蓮華とは因華・果台・俱時に増長す三周各各

とうたい 当体・譬喩有り、総じて一經に皆当体・譬喩あり別して七譬・三平等
十無上の法門有りて皆当体蓮華有るなり、此の理を詮ずる教を名け
て妙法蓮華經と為す」云云、妙樂大師の云く、須く七譬を以て各蓮華
権実の義に対すべし○何者蓮華は只是れ為實施権・開権顯実七譬皆
然なり」文、又劫初に華草有り聖人・理を見て号して蓮華と名く
此の華草・因果俱時なること妙法蓮華に似たり故に此の華草同じく
蓮華と名くるなり水中に生ずる赤蓮華・白蓮華等の蓮華是なり、譬喩
の蓮華とは此の華草の蓮華なり此の華草を以て難解の妙法蓮華を顯す
天台大師の妙法は解し難し譬を仮りて顯れ易しと釈するは是の意な
り。

問う劫初より已来何人か当体の蓮華を証得せしや、答う釈尊・
五百塵点劫の当初此の妙法の当体蓮華を証得して世世番番に成道を

とな 唱え能証・所証の本理を顕し給えり、今日又・中天竺・摩訶陀国に
しゅつぜ 出世して此の蓮華を顕わさんと欲すに機無く時無し故に一法の蓮華に
おい 於て三の草華を分別し三乗の權法を施し擬宣誘引せしこと四十余年
な

り、此の間は衆生の根性万差なれば種種の草華を施し設けて終に
みょうほうれんげ 妙法蓮華を施したまわざる故に、無量義經に云く「我先に道場
ぼだいじゅげ 菩提樹下乃至四十余年未だ真実を顕さず」文、法華經に至つて
しみさんきよう 四味三教の方便の權教・小乗・種種

の草華そうけを捨てて唯一みゆほうれんげの妙法蓮華とを説き三の華草けそうを開して一の妙法蓮華みようほうれんげを顕あらわす時、四味三教しみさんきようの權人ごんじんに初住しよじゆうの蓮華れんげを授けしより始めて開近顯遠かいこんげんのんの蓮華れんげに至つて二住・三住・乃至・十住・等覺・妙覺の極果の蓮華れんげを得るなり。

問う法華經ほけきようは何れの品何れの文にか正しく当体・譬喩ひゆの蓮華れんげを説き分けたるや、答う若し三周の声聞しやうもんに約して之を論ぜば方便ほうべんの一品は皆是当体蓮華とうたいれんげを説けるなり、譬喩品ひゆほん・化城喩品けじやうゆほんには譬喩蓮華ひゆれんげを説きしなり、但方便品ほうべんにも譬喩蓮華ひゆれんげ無きに非ず余品にも当体蓮華とうたいれんげ無きに非ざるなり、問う若し爾らば正しく当体蓮華とうたいれんげを説きし文は何れぞや答う方便品の諸法実相しよほうじつそうの文是なり、問う何を以て此の文が当体蓮華とうたいれんげなりと云う事を知ることを得るや、答う天台・妙樂今の文を引て今經の体を釈せし故なり、又伝教大師釈して云く問う法華經ほけきようは何を以て体と

為すや、答う諸法実相を以て体と為す」文、此の積分分明なり。此の文の名を

妙法蓮華と曰う義なり、又現証は宝塔品の三身是れ現証

なり、或は涌出の菩薩竜女の即身成仏是なり、地涌の菩薩を現証と

為す事は経文に如蓮華在水と云う故なり、菩薩の当体と聞たり竜女

を証拠と為す事は靈鷲山に詣で千葉の蓮華の大いさ車輪の如くなる

に坐しと説き

たまう故なり、又妙音・観音の三十三・四身なり是をば解釈には法華

三昧の不思議・自在の業を証得するに非ざるよりは安ぞ能く此の三十

三身を現ぜんと云云、或は世間相常住」文、此等は皆当世の学者

の勘文なり、然りと雖も日蓮は方便品の文と神力品の如来・一切所有

之法等の文となり、此の文をば天台大師も之を引いて今経の五重玄を

釈せしなり、殊更此の一文正しき証文なり。

つぎのかみ

問う次上に引く所の文証・現証・殊勝なり何ぞ神力の一文に執す

るや、答う此の一文は深意有る故に殊更に吉なり、問う其の深意

如何、答う此の文は釈尊・本眷属地涌の菩薩に結要の五字の当体を

付属すと説きたまえる文なる故なり、久遠実成の釈迦如来は我が昔の

所願の如き今は已に満足す、一切衆生を化して皆仏道に入ら令むとて

御願已に満足し、如来の滅後・後・五百歳中・広宣流布の付属を説かん

が為地涌の菩薩を召し出し本門の当体蓮華を要を以て付属し給える文

なれば釈尊出世の本懐・道場所得の秘法末法の我等が現当二世を

成就する当体蓮華の誠証は此の文なり、故に末法今時に於て如来の

御使より外に当体蓮華の証文を知つて出す人都有る可からざるな

り眞実以て秘文なり眞実以て大事なり眞実以て尊きなり、南無

妙法蓮華經・南無妙法蓮華經具足の道を聞かんと欲す云云、是なり、問う当流の

法門ほうもんの意は諸宗しよしゆうの人來つて当体蓮華とうたいれんげの証文しやうもんを問わん時は法華經ほけきやう何れの文ぶんを出す可いきなり、答こたう二十八品の始はじに妙法蓮華經みやうほうれんげきやうと題だいす此の文ぶんを出す可いきなり、問もんう何を以て品品の題目だいもくは当体蓮華とうたいれんげなりと云いう事を知しることを得るや、故は天台大師てんだいだいし・今經こんきやうの首題しゆだいを積しやくする時・蓮華れんげとは譬喩ひゆを挙あぐると云つて譬喩蓮華ひゆれんげと積しやくし給たまえる者をや、答こたう題目だいもくの蓮華れんげは当体とうたい・譬喩ひゆを合説てんだいす天台てんだいの今の積しやくは譬喩ひゆの辺へんを積しやくする時の積しやくなり、
玄文第一

の本・迹の六譬ろくへいは此の意なり同じく第七は当体とうたいの辺へんを積しやくするなり、故ゆゑに天台てんだいは題目だいもくの蓮華れんげを以て当体とうたい・譬喩ひゆの両説りやうせつを積しやくする故ゆゑに失無しつむし、問もんう何を以て題目だいもくの蓮華れんげは当体とうたい・譬喩ひゆ合説ごうせつすと云いう事を知しることを得んや、南岳大師なんがくだいしも妙法蓮華經みやうほうれんげきやうの五字ごじを積しやくする時・妙めうとは衆生しゆじやう妙なるに故ゆゑに法ほふとは衆生法しゆじやうほふなる故ゆゑに蓮華れんげとは是れ譬喩ひゆを借かるなり」文ぶん、南岳なんがく・

天台てんだいの釈すだ既に譬ひ喩ゆ蓮華れんげなりと釈しゃくし給たまう如何いかに、答なんがくう南岳なんがくの釈てんだいも天台てんだいの
釈しゃくの如ごとし云云てんだいすだ、但とうたい当体とうたい・譬ひ喩ゆ合説くわさつすと云いう事き經文きやうもん分明ふんみやうならずと雖いえども
南岳なんがく・天台てんだい既に天親てんじん・竜樹りやうじゆの論ろんに依よつてて合説くわさつの意いを判はん釈しゃくせり、所謂いわゆる
法華論ほつけろんに云いく妙法蓮華みやうほうれんげとは二種にしゆの義ぎ有あり一いちには出水すいしの義ぎ、乃至ないし泥水でいすい
を出でるをば諸もろの声聞しやうもん・如來にやらい大衆たいしゆの中ちゆうに入いつて坐ざし諸もろの菩薩ぼさつの如ごとく蓮華れんげ
の上じやうに坐ざして如來にやらい・無上むじやう智慧ちえ・清淨しやうじやうの境界きやうかいを説せくを聞きいて如來にやらいの密藏みつざう
を証たとするを喩たとうるが故ゆえに二にに華開けかいとは諸もろの衆生しゆじやう・大乘だいじやうの中ちゆうに於おいて其
心怯弱こうじやくにして信しんを生おこずること能あたわず故ゆえに如來にやらいの淨妙じやうみやう法身ほつしんを開示かいじして
信心しんじんを生おこぜしめんが故ゆえなり」文もん、諸もろの菩薩ぼさつの諸もろの字じは法華ほつけ已前いぜんの大小だいしやう
の諸菩薩しよぼさつ・法華經ほつけきやうに來きつて仏ぶつの蓮華れんげを得えると云いう事き・法華論ほつけろんの文ぶん分明ふんみやう
なり、故ゆえに知しぬ菩薩ぼさつ處しよ得入とくにとくにゅうとは方便ほうべんなり、天台てんだい此このの論ろんの文ぶんを釈しゃくして
云いく今論けの意いを解げせば若もし衆生しゆじやうをして淨妙じやうみやう法身ほつしんを見みせしむと言のたまわば

此れ妙因みょういんの開發かいほつするを以もつつて蓮華れんげと爲るなり、若し如来大衆にょらいたいしゅうに入るに蓮華れんげの上に坐ますと云のたまわば此は妙報みょうほうの国土こくどを以もつて蓮華れんげと爲るなり、又天台てんだいが当体とうたい・譬喩ひゆ合説がくせつする様を委細いさいに釈しやくし給たまう時大集經だいしつきぎょうの我今・仏の蓮華れんげを敬礼きやうらいすと云う文と法華論ほつげろんの今の文とを引証いんしやうして釈しやくして云く若し大集だいしつきに依れば行法の因果いんがを蓮華れんげと爲す菩薩ぼさつ上に処しよすれば即ち是れ因の華なり仏の蓮華れんげを礼すれば即ち是れ果の華なり、若し法華論ほつげろんに依れば依報えほうの国土こくどを以もつて蓮華れんげと爲す復菩薩またぼさつ・蓮華れんげの行を修しゅうするに由よつて報・蓮華れんげの国土こくどを得・当まさに知るべし依正因果えしやういんがこくど悉く是れ蓮華れんげの法なり、何ぞ譬たとえをもつて顯あらわすことをもちいん鈍人の法性ほつしやうの蓮華れんげを解げせざる爲の故に世の華を挙あげて譬たとえと爲す亦何の妨またいずれげかあるべき」文、又云く若し蓮華れんげに非あらんば何いかに由よつて遍あまねくく上来の諸法しよほうを喩たとええん法譬雙ほつびならべ弁べんずる故に

妙法蓮華と稱するなり、次に竜樹菩薩の大論に云く、蓮華とは法譬
並びに拳ぐるなり」文、伝教大師が天親・竜樹の二論の文を釈して
云く、論の文但妙法蓮華經と名くるに二種の義あり唯蓮華に二種の義
有りと謂うには非ず、凡そ法喻とは相い似たるを好しと為す若し相い
似ずんば何を以てか他を解せしめん、是の故に釈論に法喻並び
拳ぐ一心の妙法蓮華は因華・果台・俱時に増長す此の義解し難し喻
を仮れば解し易し此の理教を詮ずるを名けて妙法蓮華經と為す」文、
此等の論文釈義分明なり文に在つて見る可し包蔵せざるが故に合説の
義・極成せり、凡そ法華經の意は譬喻即法体・法体即譬喻なり、故に
伝教大師釈して云く、今經は譬喻多しと雖も大喻は是れ七喻なり
此の七喻は即ち法体法体は即ち譬喻なり、故に譬喻の外に法体無く
法体の外に譬喻無し、但し法体とは法性の理体なり譬喻とは即ち妙法

の事相じそうの体なり事相じそう即理体なり理体りたい即事相じそうなり故に法譬ほつび一体とは云
うなり、是これを以て論文山家の釈みなれんげに皆蓮華しやくを釈しやくするには法譬ほつび並べ挙ぐ
等云云、釈しやくの意分明ふんみょうなる故重かさねて云わす。

門かどう如来にやらいの在世ざいせに誰か当体とうたいの蓮華れんげを証得しょうとくせるや、答こたう四味三教しみさんきやうの
時ときは三乘さんじやう・五乘ごじやう・七方便ほうべん・九法界ほっかい・帶權たいこんの円の菩薩ぼさつ並びに教主きやうしゆ乃至
法華迹門ほつげしやくもんの教主きやうしゆ総じて本門ほんもん寿量の教主きやうしゆを除くの外は本門ほんもんの当体とうたい蓮華れんげ
の名をも聞かず何いかに況いわんや証得しょうとくせんをや、開三顯一かいさんけんいつの無上菩提むじやうぼだいの蓮華れんげ
尚なお四十余年じゅうよねんには之これを顯あらわさず、故ゆえに無量義經むりやうぎきやうに終不得成しゆふとくじやう・無上菩提むじやうぼだいとて
迹門しやくもん開三顯一かいさんけんいつの蓮華れんげは爾前にぜんに之これを説かずと云うなり、何いかに況いわんや
開近顯遠かいこんけんのん・本地難思ほんちなんし・境智冥合きやうちみやうごう・本有無作ほんぬむさの当体とうたい蓮華れんげをば迹化しやくけ弥勒みろく等
之これを知る可べきや、問もんう何を以て爾前にぜんの円の菩薩ぼさつ・迹門しやくもんの円の菩薩ぼさつは
本門ほんもんの当体とうたい蓮華れんげを証得しょうとくせずと云う事を知ることを得ん、答こたう爾前にぜんの

円の菩薩は迹門の蓮華を知らず迹門の円の菩薩は本門の蓮華を知らざるなり、天台云く「權教の補処は迹化の衆を知らず迹化の衆は本化の衆を知らず」文、伝教大師云く「是直道なり」と雖も大直道ならず」云云、或は云く「未だ菩提の大直道を知らざるが故に」云云此の意なり、爾前・迹門

の菩薩は一分断惑証理の義分有りと雖も本門に對するの時は当分の断惑にして跨節の断惑に非ず未断惑と云わるるなり、然れば菩薩処処得入と釈すれども二乗を嫌うの時一往得入の名を与うるなり、故に爾前・迹門の大菩薩が仏の蓮華を証得する事は本門の時なり真実の断惑は寿量の一品を聞きし時なり、天台大師涌出品の五十小劫・仏の神力の故に諸の大衆をして半日の如しと謂わしむの文を釈して云く「解者は短に即して長・五十小劫と見る惑者は長に即して短・半日の

如しと謂えり」文、妙樂之を受けて釈して云く、菩薩已に無明を破す
之を稱して解と為す大衆仍お賢位に居す之を名けて惑と為す」文、
釈の意分明なり爾前・迹門の菩薩は惑者なり地涌の菩薩のみ独り
解者なりと云う事なり、然るに当世天台宗の人の中に本・迹の同異を
論ずる時異り無しと云つて此の文を料簡するに解者の中に迹化の衆入
りたりと云うは大なる僻見なり經の文釈の義分明なり何ぞ横計を
為す可けんや、文の如きは地涌の菩薩・五十小劫の間如来を稱揚する
を靈山迹化の衆は半日の如く謂えりと説き給えるを天台は
解者惑者を出して迹化の衆は惑者の故に半日と思えり是れ即ち僻見
なり、地涌の菩薩は解者の故に五十小劫と見る是れ即ち正見なりと
釈し給えるなり、妙樂之を受けて無明を破する菩薩は解者なり未だ
無明を破せざる菩薩は惑者なりと釈し給いし事文に在つて分明なり、

迹化の菩薩なりとも住上の菩薩は已に無明を破する菩薩なりと云わん
学者は無得道の諸経を有得道と習いし故なり、爾前・迹門の当分に
妙覺の位有りと雖も本門寿量の真仏に望むる時は惑者仍お賢位に居
ると云わるる者なり権教の三身未だ無常を免れざる故は夢中の虚仏
なるが故なり、爾前と迹化の衆とは未だ本門に至らざる時は未断惑の
者と云われ彼に至る時正しく初住に叶うなり、妙樂の釈に云く
開迹顯本皆初住に入る」文、仍賢位に居すの釈之を思い合すべし、
爾前迹化の衆は惑者未だ無明を破せ
ざる仏・菩薩なりと云う事真実なり真実なり、故に知ぬ本門寿量の説
顯れての後は靈山一会の衆皆悉く当体蓮華を証得せしなり、二乗・
闡提・定性・女人・惡人等も本仏の蓮華を証得するなり、伝教大師
一大事の蓮華を釈して

云く 法華の肝心一大事の因縁は蓮華の所顯なり、一とは一実相なり
大とは性広博なり事とは法性の事なり一究竟事は円の理教・智行、円
の身・若・達なり一乘・三乘・定性・不定性・内道・外道・阿闍・阿顛・
皆悉く一切智地に到る是の一大事仏の知見を開示し悟入して一切
成仏す」女人・闍提・定性・二乗等の極惡人靈山に於て当体蓮華を
証得するを云うなり。

問う末法今時誰れ人か当体蓮華を証得せるや、答う当世の体を見
るに大阿鼻地獄の当体を証得する人之れ多しと雖も仏の蓮華を証得
せるの人之れ無し其の故は無得道の權教方便を信仰して法華の当体
真実の蓮華を毀謗する故なり、仏説いて云く 若し人信ぜずして此の經
を毀謗せば則ち一切世間の仏種を断ぜん乃至其の人命終して
阿鼻獄に入らん」文、天台云く 此の經は☆く六道の仏種を開く若此の

經を謗せば義・断ずるに当るなり」文、日蓮云く此の經は是れ十界の
仏種に通ず若し此の經を謗せば義是れ十界の仏種を断ずるに当る是の
人無間に於て決定して墮在す何ぞ出ずる期を得んや、然るに日蓮が
一門は正直に權教の邪法・邪師の邪義を捨てて正直に正法・正師
の正義を信ずる故に当体蓮華を証得して常寂光の当体の妙理を顯す
事は本門壽量の教主の金言を信じて南無妙法蓮華經と唱うるが故な
り、問う南岳・天台・伝教等の大師・法華經に依つて一乘円宗の教法
を弘通し給うと雖も未だ南無妙法蓮華經と唱えたまわざるは如何、
若し爾らば此の大師等は未だ当体蓮華を知らず又証得したまわずと
云うべきや、答う南岳大師は觀音の化身・天台大師は藥王の化身なり
等云云、若し爾らば靈山に於て本門壽量の説を聞きし時は之を証得
すと雖も在生の時は妙法流布の時に非ず、故に妙法の名字を替えて

止観と号し一念三千一心三觀を修し給いしなり、但し此等の大師等も南無妙法蓮華經と唱うる事を自行真実の内証と思食されしなり、南岳大師の法華懺法に云く、南無妙法蓮華經」文、天台大師の云く、南無平等大慧一乘・妙法蓮華經」文、又云く、稽首妙法蓮華經」云云、又、歸命妙法蓮華經」云云、伝教大師の最後臨終の十生願の記に云く、南無妙法蓮華經」云云、問う文証分明なり何ぞ是くの如く弘通したまわざるや、答う此れに於て二意有り一には時の至らざるが故に二には付属に非ざるが故なり、凡そ妙法の五字は末法流布の大白法なり地涌千界の居士の付属なり是の故に南岳・天台・伝教等は内に鑑みて末法の導師に之を譲りて弘通し給わざりしなり。

◆七〇

当体義抄送状

519P

問う当体の蓮華解し難し故に譬喩を仮りて之を顯すとは經文に
証抛有るか、答う經に云く世間の法に染まらざること蓮華の水に在る
が如し地より而も涌出す」云云、地涌の菩薩の当体蓮華なり、譬喩は
知るべし以上後日に之を改め書すべし、此の法門は妙經所詮の理にし
て釈迦如来の御本懷地涌の大地に付属せる末法に弘通せん經の肝心な
り、国主信心あらん後始めて之を申す可き秘藏の法門なり、日蓮最蓮
房に伝え畢んぬ。

日蓮
花押

◆七一

小乗大乘分別抄

文永十年

五十二歳御作与

富木常忍

520P

夫れ小大定めなし一寸の物を一尺の物に対しては小と云い五尺の男
に對しては六尺七尺の男を大の男と云う、外道の法に對しては一切の
大小の仏教を皆大乘と云う大法東漸通指仏教以為大法等と釈する
是なり、仏教に入つても鹿苑十二年の説・四阿含經等の一切の
小乗經をば諸大乘經に對して小乗經と名けたり、又諸大乘經
には大乘

の中にとりて劣る教を小乗と云う華嚴の大乘經に其餘樂小法と
申す文あり、天台大師はこの小法というは常の小乗經にはあらず
十地の大法に對して十住・十行・十回向の大法を下して小法と名くと

釈し給へり、又法華經第一の卷方便品に若以小乗化乃至於一人と申す文あり天台・妙樂は阿含經を小乗と云うのみにあらず華嚴經の別教・方等・般若の通別の大乗をも小乗と定め給う、又玄義の第一に會小歸大・是漸頓混合と申す釈をば智証大師は初め華嚴經より終り般若經にいたるまで四教八教の權教諸大乘經を漸頓と釈す混合とは八教を會して一大円教に合すところこととはられて候へ又法華經の寿量品に樂於小法・德薄垢重者と申す文あり、天台大師は此經文に小法と云うは小乘經にもあらず又諸大乘經にもあらず久遠実成を説かざる華嚴經の円・乃至・方等・般若・法華經の迹門十四品の円頓の大法まで小乗の法なり、又華嚴經等の諸大乘經の教主の法身・報身・毘盧遮那・盧舍那・大日如来等をも小仏なりと釈し給ふ、此の心ならば涅槃經・大日經等の一切の大小・權実・

顯密の諸經は皆小乗經 八宗の中には俱舍宗・成実宗・律宗を
小乗と云うのみならず華嚴宗・法相宗・三論宗・真言宗等の諸
大乘宗を小乗宗として唯天台の二宗計り実大乘宗なるべし、彼彼の
大乘宗の所依の經經には絶えて二乗作仏・久遠実成の最大の法をと
かせ給はず、譬えば一尺二尺の石を持つ者をば大力といはず一丈二丈
の石を持つを大力と云うが如し、華嚴經の法界・円融

四十一位・般若經の混同無二・十八空乾慧地等の十地・瓔珞經の五十
二位・仁王經の五十一位・藥師經の十二の大願・雙觀經の四十八願・
大日經の眞言・印契等此等は 小乘經 に対すれば 大法秘法なり、
法華經の二乗作仏・久遠実成 に対すれば 小乘の法なり、一尺二尺を
一丈二丈 に対するが如し、又二乗作仏・久遠実成は法華經の肝用に
て諸經に
対すれば奇たりと云へども法華經の中にてはいまだ奇妙ならず
一念三千と申す法門こそ奇が中の奇・妙が中の妙にて華嚴・大日經等
に分絶たるのみならず、八宗の祖師の中にも眞言等の七宗の人師・名
をだにもしらず天竺の大論師竜樹菩薩・天親菩薩は内には珠を含み外
には書きあらはし給はざりし法門なり、雨衆が三徳・米育が六句の先
仏の

教を盗みとれる様に華嚴宗の澄觀・真言宗の善無畏等は天台大師の
いちねんさんぜん 一念三千の法門を盗み取って我が所依の經の心仏及衆生の文の心とし
心実相と申す文の神とせるなり、かくのごとく盗み取って我が宗の
規模となせるが又還って天台宗を下し華嚴宗・真言宗には劣れる法な
りと申す、此等の人師は世間の盗人にはあらねども仏法の盗人なるべ
し、此等をよくよく尋ね明むべし。

又世間の天台宗の學者並びに諸宗の人人の云く法華經は但二乗
作仏・久遠実成計りなり等云云、今反詰して云く汝等が承伏に付い
て但二乗作仏と久遠実成計り法華經にかぎつて諸經になくば此れな
りとも豈奇が中の奇にあらずや、二乗作仏・諸經になくば仏の御弟子
・頭陀第一の迦葉・智慧第一の舍利弗・神通第一の目連等の十大弟子・
千二百の羅漢・万二千の声聞・無數億の二乘界・過去遠遠劫より未來

無數劫むしゅうこつにいたるまで法華經ほけきやうに値あいたてまつらずば永しきしんどもく色心俱しきしんどもに滅めつして
永不成仏ようふじやうぶつの者となるべし豈あに大なる失とがにあらずや、又二乘界にじやう・仏になら
ずば迦葉等かしやうを供養くやうせし梵天ぼんてん・帝釈たいしやく・四衆ししゆう・八部はちぶ・比丘びく・比丘尼等びくにの二界
・八番の衆はいかんがあるべき、又久遠実成くおんじつじやうが此の經に限ら
ずんば三世さんぜの諸仏しよぶつ・無常遷滅むじやうせんめつの法に墮だしなん、譬たとえば天に諸星しよせいありと
も日月にちがつましまさずんば・いかんがせん地に草木そうもくありとも大地だいちなくばいか
んがせん、是は汝なんじが承伏しやうふくに付いての義なり実をもつて勘かん申もうさば二乗にじやう
作さぶつ仏なきなら

ば九界の衆生・仏になるべからず、法華經の心は法爾のことはりとして
一切衆生に十界を具足せり、譬えば人・一人は必ず四大を以てつくれ
り一大かけなば人にあらじ、一切衆生のみならず十界の依正の二法
非情の草木一微塵にいたるまで皆十界を具足せり、二乗界・仏になら
ずば余界の中の二乗界も仏になるべからず又余界の中の二乗界
仏にならずば余界の八界仏になるべからず、譬えば父母ともに持ちた
る者兄弟九人あらんか二人は凡下の者と定められば余の七人も必ず
凡下の者となるべし、仏と經とは父母の如し九界の衆生は実子なり
声聞・緣覺

の二人・永不成仏の者となるならば菩薩・六凡の七人あに得道をゆるさ
るべきや、今・此の三界は皆是我が有なり其の中の衆生は悉く是吾子な
り乃至唯我一人のみ能く救護を為すの文をもつて知るべし、又菩薩と

申すは必ず四弘誓願をおこす第一衆生無辺誓願度の願・成就せずば

第四の無上菩提誓願証の願も成就すべからず、前四味の諸經

にては菩薩・凡夫は仏になるべし二乗は永く仏になるべからず等云云、

而るをかしこげなる菩薩もはかなげなる六凡も共に思へり我等・仏にな

るべし二乗は仏にならざれば・かしこくして彼の道には入ざりけると思

ふ、二乗はなげきをいたき此の道には入るまじかりし者をと恐れかなし

みしが今法華經にして二乗を仏になし給へる時

二乗・仏になるのみならずかの九界の成仏をも・ときあらはし給へり、

諸の菩薩・此の法門を聞いて思はく我等が思ひは・はかなかりけり爾前

の經經にして二乗・仏にならずば我等もなるまじかりける者なり、

二乗を永不成仏と説き給ふは二乗一人計りなげくべきにあらざりけり

我等も同じなげきにてありけりと心うるなり。

又じゅりよう寿命品ほんの久遠くおん実成じつじようが爾前にぜんの經經きようぎようになき事を以て思ふに爾前にぜんに
は久遠くおん実成じつじようなきのみならずく仏ぶつは天下てんが第一だいいちの大妄語もうごの人なるべし、爾前にぜん
の大乗だいじよう第一だいいちたる華嚴經けこんきよう・大日經だいにちぎよう等に始めて正覺しやうかくを成じ我昔どうじよう道場どうじように坐
す等云云、真実しんじつ甚深じんじん正直捨方便しやうじきしやほうべんの無量義經むりようぎきようと法華經ほけききようの迹門しやくもんには我先
に道場どうじようにして・我始め道場どうじように坐すと説れたり、此等これらの經文きようもんは寿命品じゅりようほん
の然しかるに我実じやうぶつに成仏じやうぶつしてより已来このかた無量無辺むりようむへんなりの文より思ひ見ればあ
に大妄語もうごにあらずや、仏の一身すで

に大妄語もうじの身なり一身に備えたる六根ろくこんの諸法しよぽうあに実なるべきや、大冰
の上に造れる諸舎しよは春をむかへては破れざるべしや水中の満月まんげつは実に体
ありや、爾前にぜんの成仏じようぶつ往生等じやうじやうは水中の星月の如しごと爾前にぜんの成仏じようぶつ往生等じやうじやうは
体に随ふ影ごの如し、本門ほんもん寿量品じゆりやうほんをもつて見れば寿量品じゆりやうほんの智慧ちえをはな
れては諸経しよきやうは跨節かせつ当分の得道とくどう共に有名無実なり、
天台大師てんだいだいし・此この法門ほうもんを道場どうじやうにして独り覚知かくちし玄義げんぎ十卷・文句もんく十卷・
止観しかん十卷等しよきやうかきつけ給うに諸経しよきやうに二乗作仏にじやうさぶつ・久遠実成くおんじつじやう絶えてなき
由よしを書きをき給ふたま、是は南北なんぼくの十師じしうが教相きやうさうに迷つて三時さんじ・四時しじ・五時ごじ・
四宗ししう・五宗ごしう・六宗ろくしう・一音いつおん・半滿はんまん・三教さんきやう・四教等しきやうとうを立てて教の浅深勝劣せんしんしやうれつに
迷いし此等これらの非義ひぎを破らんが為ためにまず眼前がんぜんたる二乗作仏にじやうさぶつ・久遠実成くおんじつじやうを
もつて諸経しよきやうの勝劣しやうれつを定め給いしなり、然りと云つて余界よかいの得道とくどうをゆる
すにはあらず、其その後華嚴宗けこんしやうの五教・法相宗ほうさうしやうの三時・真言宗しんこんしやうの顯密五けんみつ

蔵十住じゅうじゅう 心義釈ぎしやくの四句等は南三・北七なんざん ぼくひちの十師じゅうしの義ぎよりも尚なお☆れる
教相きょうそうなり。

此等これらは他師たしの事なればさてをきぬ又自宗じしゅうの学者がくしゃが天台てんだい・妙楽みょうらく・伝教でんぎょう
大師だいしの御釈ぎしやくに迷まようて爾前にぜんの經經きやうぎやうには二乗にじやう作仏さぶつ・久遠実成くおんじつじやうばか計りこそ無
けれども余界よかいの得道とくどうは有りなんと申もうす人人ひとひと・一人ひとり・二人ふたりならず日本にほん国
に弘ひろまれり、他宗たしゅうの人人ひとひと是こゝに便べんを得えて弥いよいよてんだいしゅう
譬たとえば野馬とんばの蜘蛛ちちゅうの網かわけにかかり渴かわる鹿かの陽炎やうえんをおふよりも・はか
なし例よせば頼朝よりともの右大將家うだいしやうけは泰衡たいへいを討たたんが為ために泰衡たいへいを誑だまして義經よしつねを
討うたせ、太政入道にゅうどう清盛きよもりは源氏げんじを喪そうして世よをとらんが為ために我が伯父おじ
平馬介忠正へいまのすけただまさを切きる義朝よしともはたばらかされて慈父じふ為義ためよしを切きるが如ごとし、此等これら
は墓はかなき人人ひとひとのためしなり、天台大師てんだいだいし・法華經ほけきやうより外ほかの經經きやうぎやうには二乗にじやう
作仏さぶつ・久遠実成くおんじつじやうは絶たえてなしなんと釈しゃくし給たまへば菩薩ぼさつの作仏さぶつ・

凡夫ぼんぷの往生おうじようはあるなんめりとうち思おもいて我等われらは二乗にじようにもあらざれば
爾前にぜんの経経きようきようにても得道とくどうなるべし此この念おもい心中しんちゆうにさしはさめり、其その中
にも觀經かんきようの九品往生きうひんおうじようはねがひやすき事なれば法華經ほけきようをばなげすて
念仏ねんぶつ申もうして浄土じようどに生なれて觀音かんのん・勢至せいし・阿彌陀仏あみだぶつに値あいたてまつて成仏じようぶつを
遂とぐべし云云とうん、当世とうせの天台宗てんだいしゅうの人人ひとびとを始はとして諸宗しよしゅうの学者がくしや皆みな此この
如ごとし実義じつぎをもつて申もうさば一切衆生いっさいしゆじようの成仏じようぶつのみならず六道ろくどうを出いで十方
の浄土じようどに往生おうじようする事はかならず法華經ほけきようの

力なり、例せば日本国の人・唐土の内裏に入らん事は必ず日本の国王
の勅定によるべきが如し穢土を離れて浄土に入る事は必ず法華經の
力なるべし、例せば民の女・乃至閼白・大臣の女に至るまで大王の種
を下せば其の産る子王となりぬ、大王の女なれども臣下の種を懷妊せ
ば其の子王とならざるが如し、十方の浄土に生るる者は三乘・
人天・畜生等までも皆王の種姓と成つて生るべし皆仏となるべきが故な
り、阿含經は民の女の民を夫とし華嚴・方等・般若等は臣の女の臣を
夫とせるが如し、又華嚴經・方等・般若・大日經等の円教の菩薩等は
大王の女の臣下を夫とせるが如し、皆浄土に生るべき法にはあらず、
又華嚴・阿含・方等・般若等の經經の間に六道を出づる人あり
是は彼彼の經經の力には非ず過去に法華經の種を殖えたりし人現在
に法華經を待たずして機すすむ故に爾前の經經を縁として過去の

法華經ほけきょうの種ほつぐくを發得はつとくして成仏じやうぶつ往生おうじやうをとぐるなり、例せば緣覺えんかくの無仏むぶつ世せにして飛花ひけ落葉らくようを觀かんじて獨覺どっかくの菩提ぼだいを証しやうし孝養父母かうようふぼの者ものの梵天ぼんてんに生はるが如ごとし飛花ひけ落葉らくよう孝養父母かうようふぼ等は獨覺どっかくと梵天ぼんてんとの修因しゅういんにはあらねどもかれを緣として過去かこの修因しゅういんを引きおこし彼の天に生じ獨覺どっかくの菩提ぼだいを証しやうす、而るに尚過去なとかこに小乘しやうじやうの三賢四善根さんけんぜんこんにも入らず有漏うろうの禪定ぜんじやうをも修しゅうせざる者は月を觀かんじ花を詠こうじ孝養父母かうようふぼの善を修しゅうすれども獨覺どっかくともならず色天しきてんにも生ぜず、過去かこに法華經ほけきやうの種うえを殖うえざる人は華嚴經けこんきやうの席はべに侍りしかども初地しよじ・初住しよじゅうにものぼらず、鹿苑說教ろくおんせつきやうの砌みきりにても見思けんじをも斷だんぜず觀經等かんきやうにても九品の往生かうじやうをもとげず、但だいしやう大小の賢位けんいのみに入つて聖位にはのぼらずして法華經ほけきやうに來つて始めて仏種ぶつしゆを心田くたに下くだして一生しよじに初地しよじ・初住しよじゅう等に登る者もあり、又涅槃ねはんの座ざへさがり乃至滅後未來ないしめつこみらいまでゆく人もあり、過去かこに法華經ほけきやうの種うえを殖うえたる

ひとびと
人人は結縁けちえんの厚薄こうはくに随したがつて華嚴經けこんきやうを縁えんとして初地しよじ・初住しよじゆうに登る人もあり、阿含經あこんきやうを縁えんとして見思けんじを断きじて二乗にじやうと成る者もあり、觀經等かんきやうの九品の行業を縁えんとして往生おうじやうする者

もあり、方等ほうとう・般若はんんにやも此れをもつて知んぬべし、此等これらは彼彼かれがれの經經きやうきやうの力ちからにはあらず偏ひろえに法華經ほけきやうの力ちからなり譬たとえば民の女むすめに王の種むすめを下くだせるを人しらずして民の子と思ひ大臣等だいじんの女むすめに王の種むすめを下くだせるを人しらずして臣下しんかの子と思へ

ども大王より是を尋ぬれば皆王種となるべし、爾前にして界外に至る人を法華經より之を尋ぬれば皆法華經の得道なるべし、又過去に法華經の種を殖えたる人の根鈍にして爾前の經經に発得せざる人人は法華經にいたりて得道なる、是は爾前の經經をばめのこととしてきさき腹の太子・王子と云うが如くなるべし、又仏の滅後にも正法一千年の間は在世の如くこそなけれども過去に法華經の種を殖えて法華・涅槃經にて覺りをとぐる者もありぬ現在・在世にて種を下せる人人も是多し。

又滅後なれども現に法華經ましませば外道の法より小乗經にうつり小乗經より權大乘にうつり權大乘より法華經にうつる人人数をしらず、竜樹菩薩・無著菩薩・世親論師等是なり、像法一千年には正法のほどこそ無けれども又過去・現在に法華經の種を殖えたる人人も少

少^{これ}之^あ有^り、而^{しか}るを漸^{ぜん}漸^{ぜん}に仏^{ぶつ}法^{ぽう}澆^{ぎやう}薄^{はく}になる程^{ほど}に宗^{しゆ}宗^{しゆ}も偏^{へん}執^{しゆ}・石^{ごく}の如^{ごと}くか
たく我^が慢^{まん}山^{さん}の如^{ごと}く高^{たか}し、像^{やう}法^{ぽう}の末^{まつ}に成^{なり}りぬれば仏^{ぶつ}法^{ぽう}によつて靜^{じやう}論^{ろん}・
興^{きやう}盛^{じやう}して仏^{ぶつ}法^{ぽう}の合^が戰^{せん}ひまなし、世^せ間^{けん}の罪^{つみ}よりも仏^{ぶつ}法^{ぽう}の失^{とが}に依^よつて無^む間^{げん}
地^じ獄^{ごく}に墮^おつる者^{もの}・數^{かず}をしらず。

今^{いま}は又^{また}末^{まつ}法^{ぽう}に入^いつて二^に百^{ひゃく}余^{あまり}歳^{さい}・過^か去^こ・現^{げん}在^{ざい}に法^ほ華^け經^{きやう}の種^{しゆ}を殖^{しょく}えたりし
人^{ひと}人^{ひと}もやうやくつきはてぬ、又種^{しゆ}をうへたる人^{ひと}人^{ひと}は少^{せう}少^{せう}あるらめども
世^せ間^{けん}の大^{だい}惡^{あく}人^{にん}・出^{しゅつ}生^{しょう}の謗^{ぼう}法^{ぽう}の者^{もの}數^{かず}をしらず国^{こく}に充^{じゅう}満^{まん}せり、譬^{たと}えば
大^{だい}火^かの中^{ちゆう}の小^{せう}水^{すい}・大^{だい}水^{すい}の中^{ちゆう}の小^{せう}火^か・大^{だい}海^{かい}の中^{ちゆう}の水^{すい}・大^{だい}地^ちの中^{ちゆう}の金^{きん}なんどの
如^{ごと}く惡^{あく}業^{ごう}とのみなりぬ、又過^か去^この善^{ぜん}業^{ごう}もなきが如^{ごと}く現^{げん}在^{ざい}の善^{ぜん}業^{ごう}
もしるしなし、或^{ある}は弥^み陀^だの名^な号^{ごう}をもつて人^{ひと}を狂^{きやう}はし法^ほ華^け經^{きやう}をすてしむ
れば背^{そむ}上^{じやう}向^{きやう}下^げのとが^{とが}あり、或^{ある}は禪^{ぜん}宗^{しゆ}を立てて教^{きやう}外^{がい}と称^{しょう}し仏^{ぶつ}教^{きやう}をば真^{しん}
の法^{ぽう}にあらずと蔑^{べつ}如^{じよ}して増^{ぞう}上^{じやう}慢^{まん}を起^{おこ}し、或^{ある}は法^ほ相^{そう}・三^{さん}論^{ろん}・華^け嚴^{えん}宗^{しゆ}を立

てて法華經を下し、或は眞言宗・大日宗と稱して法華經は釈迦如来の顯教にして眞言宗に及ばず等云云、而るに自然に法門に迷う者もあり、或は師師に依つて迷う者もあり、或は元祖・論師・人師の迷法を年久しく眞実の法ぞと伝へ来る者もあり、或は惡鬼天魔の身に入りかはりて惡法を弘めて正法ぞと思ふ者もあり、或ははづかの小乗一途の小法をしりて

大法だいほうを行ずる人はしからずと我慢がまんして我が小法せうほうを行ぜんが為ために大法だいほう
秘法ひほうの山寺さんじをおさへとる者もあり、或あるは慈悲魔じひまと申もうす魔身まみに入つて
三衣さんい一鉢いちぼつを身に帶たいし小乗しょうじやうの一法いちぽうを行ずるやから、はづかの小法せうほうを持もち
て国中の棟梁とうりやうたる比叡山ひえいざん竜象りゅうざうの如ごとくなる智者ちしやどもを一分いちぶん我が教きやうにた
がへるを見て邪見じゃけんの者・悪人あくにんなんどうち思おもへり、此このの悪見あくけんをもつて
国主こくしゆをたばらかし誑惑おおわくして正法しょうぽうの御歸依ごきえをうすうなしかへつて破国はこく・
破仏はぶつの因縁いんねんとなせるなり、彼の妹己ばつき・姐己だつき・褒ほう○と申まをせし后きさきは心もお
だやかに・みめかたちも人にすぐれたりき、愚王ぐおうこれを愛あいして国をほろ
ぼす因縁いんねんとなす、当世とうせの禪師ぜんし・律師りっし・念佛ねんぶつ者ものなんど申もうす聖一しょういつ・道隆どうりゅう・
良觀りやうかん・道阿弥どうあみ・念阿弥ねんあい・念阿弥いよいよなんど申もうす法師ほうしどもは鳩鴿いえばとが糞土ふんどを食するが
如ごとし西施しが呉王こをたばらかししに似たり、或あるは我が小乗しょうじやうの臭糞しゅうふん・驢ろ
乳ちちの戒かいを持もて。

◆七二

立正観抄

文永十一年 五十三歳御作

法華

止観同異決

日蓮撰 527P

当世天台の教法を習学するの輩多く観心修行を貴んで法華本・

迹二門を捨つと見えたり、今問う抑観心修行と言うは天台大師の

摩訶止観の説己心中所行法門の一心三観・一念三千の観に依るか、

将又・世流布の達磨の禅観に依るか、若し達磨の禅観に依るといわば教

禅は未顕真實妄語方便の禅観なり法華経妙禅の時には正直捨方便

と捨てらるる禅なり、祖師達磨禅は教外別伝の天魔禅なり、共に是れ

無得道妄語の禅なり仍て之を用ゆ可からず、若し天台の止観一心三観

に依るとならば止観一部の廃立・天台の本意に背く可からざるなり、

若し止觀修行の觀心に依るとなれば法華經に背く可からず止觀一部は法華經に依つて建立す一心三觀の修行は妙法の不可得な

るを感得せんが為なり、故に知んぬ法華經を捨てて但だ觀を正とする

の輩は大謗法大邪見天魔の所為なることを、其の故は天台の一心三觀

とは法華經に依つて三昧開發するを己心証得の止觀とは云う故なり。

問う天台大師止觀一部並びに一念三千・一心三・觀己心証得の

妙觀は併しながら法華經に依ると云う証擲如何、答う予反詰して

云く法華經に依らずと見えたる証文如何、人之を出して云く此の

止觀は天台智者己心中所行の法門を説く、或は又故に止觀に至つて

正く觀法を明かす並に三千を以て指南と為す乃ち是れ終窮究竟の極

説なり

故に序の中に説己心中所行法門と云えり良に以有るなり」文、難じて

云く此の文は全く法華經に依らずと云う文に非ず既に說己心中所行の法門と云うが故なり天台の所行の法門は法華經なるが故に此の意は法華經に依ると見えたる証文なり但し他宗に對するの時は問答大綱を存す可きなり、所謂云う可し若し天台の止觀・法華經に

依らずといわば速かに捨つ可きなりと、其の故は天台大師兼ねて約束して云く修多羅と合せば録して之を用いよ文無く義無きは信受す可からず」云云、伝教大師の云く伝説に依憑して口伝を信ずること莫れ」文、竜樹の大論に云く修多羅に依るは白論なり修多羅に依らざるは黒論なり」文、教主釈尊云く依法不依人」文、天台は法華經に依り竜樹を高祖にしながら經文に違し我が言を翻じて外道邪見の法に依つて止觀一部を釈する事全く有る可からざるなり、問う正しく止觀は法華經に依ると見えたる文之有りや、答う余りに多きが故に少少之を出さん止觀に云く漸と不定とは置いて論ぜず今經に依つて更に円頓を明かさん」文、弘決に云く法華經の旨を攢て不思議・十乘・十境・待絶・滅絶・寂照の行を成ず」文、止觀大意に云く今家の教門は竜樹を以て始祖と為す慧文は但内觀を列ねて視

聴するのみ南岳・天台に及んで復法華三昧陀羅尼を發するに因つて義門を開拓して觀法周備す、

○若し法華を釈するには弥弥須く權実本・迹を曉了すべし方に行を立つ可し此の經独り妙と稱することを得方に此に依つて以て觀意を立つ可し、五方便及び十乘軌行と言ふは即ち円頓止觀全く法華に依る円頓止觀は即ち法華三昧の異名なるのみ」文、文句の記に云く觀と經と合すれば他の宝を数うるに非ず方に知んぬ止觀一部

は是れ法華三昧の筌○なり若し斯の意を得れば方に經旨に會う」云云、唐土の大師・行滿の釈せる学天台宗法門大意に云く摩訶止觀一部の大意は法華三昧の異名を出でず經に依つて觀を修す」文、此等の文証分明なり、誰か之を論ぜん、問う天台四種の釈を作るの時觀心の釈に至つて本・迹の釈を捨つと見えたり、又法華經は漸機の

為に之を説き止観は直達じきたつの機きの為ために之を説くと如何、答う漸機ぜんきの為ために
説けば劣り頓機とんきの為ために説けば勝るとならば今の天台宗てんだいしゅうの意は華嚴けごん・
真言等しんごんの經は法華經ほけきょうに勝れたりと云う可きや、今の天台宗てんだいしゅうの浅あさまし☆さは
真言しんごんは事理俱密じりぐみつの教なる故に法華經ほけきょうに勝れたりと謂えり、故に止観しかんは
法華ほつけに勝ると云えるも道理どうりなり道理どうりなり。

次に觀心かんじんの釈しゃくの時・本・迹を捨つと云う難なんは法華經ほけきょう何れの文人師にんしの釈
を本と為して仏教ぶつぎょうを捨てよと見えたるや設たとい

てんだい 天台の釈なりとも釈尊しやくそんの金言きんげんに背そむき法華經ほけきやうに背そむかば全く之これを用もちゆべ
可べからざるなり、依法えぼう不依人ふえの故ゆえに竜樹りゆうじゆ・天台てんだい・伝教元でんぎやうよりの御約束やくそく
なるが故なり、其上てんだい天台の釈しやくの意は迹おこの大教起れば爾前にぜんの大教亡しやくじ本
の大教興おこれば迹おこの大教亡おこじ觀心かんじんの大教興おこれば本の大教亡おこじと釈しやくするは
本体の本法みやうほうをば妙法みやうほう不思議ふしぎの一法しゆぎやうに取り定めての上に修行しゆぎやうを
立つるの時、今像法ぞうほうの修行しゆぎやうは觀心かんじん修行しゆぎやうを詮なと為るに迹たずを尋ぬれば迹・
広し本たずを尋ぬれば本・高たううして極きわむ可べからず、故ゆえに末學まつがく機かなに叶がたい難がたし但
己心こしんの妙法みやうほうを觀ぜよと云う釈しやくなり、然しかりと雖いえども妙法みやうほうを捨てよとは
釈しやくせざるなり若もし妙法みやうほうを捨てば何物なにものを己心こしんと為なして觀べず可べきや、
如意宝珠にょいほうじゆを捨て瓦石がしやくを取つて宝なと為なす可べきか、悲かなしいかな当世とうせ天台宗てんだいしゅう
の学者がくしやは念仏ねんぶつ・真言しんごん・禪宗ぜんしゅう等どういに同意どういするが故ゆえに天台てんだいの教釈けうしやくを習ならい失うしなつて
法華經ほけきやうに背そむき大謗法ほうぼうの罪つみを得るなり、若もし止觀しかんを法華經ほけきやうに勝まさると云わ

ば種種しゅじゆの過わざわい之有これあり止觀しかんは天台てんだいの道場どうじやう所得じしやうの已証こしやうなり、法華經ほけきやうは
釈尊しかくそんの道場どうじやう所得だいほうの大法だいほうなりは一しかくそん釈尊しかくそんは妙覺果滿みやうかくかまんの仏てんだいなり天台てんだいは住前
未証みしやうなれば名字みょうじ・觀行かんぎやう・相似そうじには過すぐ可べからず四十二重しじふにじゆうの劣せうなり是二
法華ほけきやうは釈尊しかくそん乃至ないうしよ諸仏出世しゆぶつしゆつせの本懷ほんかいなり止觀しかんは天台てんだい出世しゆつせの已証こしやうなり是三
法華經ほけきやうは多寶たほうの証しやうみやう明めいあり來集らいじゅうの分身ふんじんは広長舌こうちやうぜつを大梵天だふんでんに付く
皆是かいぜしんじつ真實じつじつの大白法びやくほうなり是四止觀しかんは天台てんだいの說法せつぽうなり是くかくの如ごとき等の種種しゅじゆ
の相違そうい之有これあれども仍なお之これを略りやくするなり、又一またつの問答もんとうに云いく所被しよひの機き・
上機じやうきなる故ゆえに勝まさると云いわば実じつを捨てて權けんを取とれ天台てんだい云いく教いよく彌いよく權けんな
れば位いよく彌いよく高たかし」と釈しかくし給たまう故ゆえなり所被しよひの機き下劣げれつなる故ゆえに劣せうると云いわ
ば權けんを捨てて実じつを取とれ、天台てんだいの釈しかくには教いよく彌いよく實じつなれば位いよく彌いよく下くだしと云
う故ゆえなり、然しかるに而しして止觀しかんは上機じやうきの爲ために之これを説とき法華ほけきは下機くだきの爲ために之これを
説とくと云いわば止觀しかんは法華ほけきに劣おとれる故ゆえに機きを高たかく説とくと聞きこえたり実じつにさ

もや有るらん、天台大師は靈山の聴衆として如来出世

の本懷を宣べたもうと雖も時至らざるが故に妙法の名字を替えて止觀

と号す迹化の衆なるが故に本化の付屬を弘め給わず正直の妙法を

止觀と説きまぎらかす故に有のままの妙法ならざれば帶權の法に似た

り、故に知んぬ天台弘通の所化の機は在世帶權の円機の如し、本化

弘通の所化の機は法華本門の直機なり、止觀法華は全く体同

と云わんなおにんし尚人師の釈を以てもつ仏説ぶつせつに同ずる失とがはなはだ甚重なり、何に況や止観いわんやしかんは法華經ほけきように勝ると云う邪義じやぎを申し出すは但是これ本化ほんげの弘經くきようと迹化しゃつけのぐつう弘通ぐうほうと像法ざうほうと末法まっぽうと迹門しやくもんの付屬ふぞくと本門ほんもんの付屬ふぞくとを末法の行者ぎようじやに云いあら顯あらわさせん為の仏天ぶつてんの御計おんはからいなり、爰こゝに知んぬ当世天台宗とうせてんだいしゅうの中に此の義を云う人は祖師そし・天台てんだいの為ためには不知恩ふちおんの人なり豈其あにその過とがを免れまぬかんや、夫れ天台大師てんだいだいしは昔靈山りようぜんに在ては薬王やくおうと名け今漢土かんどに在ては天台てんだいと名け日本国にほんこくの中にては伝教でんぎようと名く三世さんぜの弘通ぐつう俱ともに妙法みようほうと名く、是くかくのごとの如く法華經ほけきようを弘通ぐつうし給たまう人は在世ざいせの釈尊しやくそんより外は三国そに其の名を聞かず有かたり難く御坐おわします大師だいしを其その末学まつがく其の教釈なを悪く習ならうて失無とがき天台てんだいに失とがを懸かけたてまつる豈大罪あにたいざいに非あらずや。

今問てんだいう天台てんだいの本意ほんいは何法せきがくぞや碩学等いわの云く「一心三觀いっしんさんかん是なり」今い云く一実円満いちじつえんまんの一心三觀いっしんさんかんとは誠に甚深じんじんなるに似たれども尚なおもつ以て行者ぎようじや

修行しゆぎやうの方法なり三觀さんかんとは因いんの義ぎなるが故ゆゑなり慈覺大師じかくだいしの釈しやくに云く
三觀さんかんとは法體ほつたいを得えせしめんが為ための修觀しゅうかんなり」云云、伝教大師でんぎやうだいし云く今
止觀修行しはんしゆぎやうとは法華ほつけの妙果じやうを成じやうぜんが為ためなり」云云、故ゆゑに知んぬ
一心三觀いつしんさんかんとは果地かじ・果徳かとくの法門ほうもんを成じやうぜんが為ための能觀のうかんの心こころなることを
何いかに況いわんや三觀さんかんとは言説ごんせつに出いでたる法ほふなる故ゆゑに如來にょらいの果地かじ・果徳かとくの妙法みやうほふ
に對たいすれば可思議しぎの三觀さんかんなり。

問いう一心三觀いつしんさんかんに勝すぐれたる法ほふとは何いかなる法ほふぞや、答こたう此この事こと誠まことに
一いち大事だいじの法門ほうもんなり唯仏ゆいぶつ与よ仏ぶつの境界きやうがいなるが故ゆゑに我等われらが言説ごんせつに出いす可べか
らざるが故ゆゑに是これを申もうす可べらざるなり、是これを以もつて經文きやうもんには我われが法ほふは妙
にして思おもひ難がたし言ごを以もつて宣のたまふ可べからず」云云妙覺果滿みやうかくかまんの仏ほとけすら尚なお
不可ふ說かせつ・不思議ふしぎの法ほふと説とき給たまう何いかに況いわんや等覺とうかくの菩薩ぼさつ已い下か乃至凡夫なんふを
や、

問う名字みょうじを聞かずんば何を以て勝法しょうぼう有りと知ることを得んや、答う
てんだいこしょう天台てんたい己証こしょうの法とは是これなり、当世とうせの学者がくしゃは血脈相承けちみやくそうじょうを習ならい失うしなう故ゆえに
之これを知らざるなり故ゆえに相構あいかまええ相構そうかまええて秘ひす可べく秘ひす可べき法門ほうもんなり、
然しかりと雖いえども汝なんじが志こころざし神妙しんめう

なれば其その名なを出いだすなり一言いごの法これ是これなり伝教でんぎょう大師だいしの一心三觀いっしんさんかん一言いごに
伝たうと書たまき給たまう是これなり、問いう未いまだ其その法体ほつたいを聞きかず如何いかに、答こたう所詮しよせん一
言いごとは妙法みょうほう是これなり、問いう何を以もつて妙法みょうほうは一心三觀いっしんさんかんに勝すぐれたりと云いう
事ことを知しることを

得るや、答う妙法は所詮の功德なり三觀は行者の觀門なる故なり此
の妙法を仏説いて言く「道場所得法我法妙難思是法非思量不可以言
宣」云云、天台の云く妙は不思議言語道斷・心行所滅なり法は
十界十如・因果不二の法なり」と、三諦と云うも三觀と云うも三千と
云うも共に不思議法とは云えども天台の已証天台の御思慮の及ぶ所の
法門なり、此の妙法は諸仏の師なり今の經文の如くならば久遠実成
の妙覺極果の仏の境界にして爾前・迹門の教主
諸仏・菩薩の境界に非ず經に唯仏与仏乃能究竟とは迹門の界如三千
の法門をば迹門の仏が当分究竟の辺を説けるなり、本地難思の境智の
妙法は迹仏等の思慮に及ばず何に況や菩薩・凡夫をや、止觀の二字を
ば觀名仏知・止名仏見と釈すれども迹門の仏智・仏見にして妙覺極果
の知見には非ざるなり、其の故は止觀は天台已証の界如三千・

三諦三觀を正と為す迹門の正意是なり、故に知んぬ迹仏の知見なり
と云う事を但止觀に絶待不思議の妙觀を明かすと云えども只
一念三千の妙觀に且らく与えて絶待不思議と名けるなり。

問う天台大師真実に此の一言の妙法を証得したまわざるや、答う

内証爾らざるなり、外用に於ては之を弘通したまわざるなり、所謂

内証の辺をば秘して外用には三觀と号して一念三千の法門を示現し

給うなり、問う何が故ぞ知り乍ら弘通し給わざるや、答う時至らざる

が故に付属に非ざるが故に迹化なるが故なり、問う天台此の一言

の妙法を証得し給える証拠之有りや、答う此の事天台一家の祕事な

り世に流布せる学者之を知らず灌頂玄旨の血脈とて天台大師自筆の

血脈一紙之有り、天台御入滅の後は石塔の中に之有り伝教大師御

入唐の時八舌の鑰を以て之を開き道邃和尚より伝受し給う血脈とは

是なり、此の書に云く「言の妙旨一教の玄義」文、伝教大師の
血脈に云く「天れ一言の妙法とは両眼を開いて五塵の境を見る時は
隨縁真如なるべし」兩眼を閉じて無念に住する時は不變真如なるべし、
故に此の一言を聞くに方法茲に達し一代の修多羅一言に含す」文、此
の兩大師の血脈の如くならば天台大師の血脈相承の最要の法は妙法
の一言なり、一心三觀とは所詮妙法を成就せん為の修行の方法

なり、三観さんかんは因いんの義ぎ妙法みょうほうは果くわの義ぎなり但た因いんの処ところに果くわ有り果くわの処ところに因いん有り因果いんがぐ俱ぐ時の妙法みょうほうを觀かんずるが故ゆえに是かくの如ごとき功能くわのうを得えるなり、爰こゝに知ちんぬ天台てんだい至極しごくの法門ほうもんは法華本ほつげ・迹未分しきふんの処ところに無念むねんの止觀しかんを立てて最祕さいひの大法だいほうとすと云いえる邪義じやぎ大なる僻見びやくけんなりと云いう事を四依弘經しえぐきようの大薩さつ☆は既にすでにぶきように依よつて諸論しよを造つくる天台何ぞてんだいなんに背そむいて無念むねんの止觀しかんを立てたまわんや、若もし此しの止觀しかん・法華經ほつげきように依よらずといわば天台てんだいの止觀しかん教外別伝しはんきようげべつでんの達磨だるまの天魔てんまの邪法じやほうに同おなぜん都すべして然しかる可べからず哀あはれなり哀あはれなり。

伝教大師でんぎやうだいしの云いく国主こくしゆの制せいに非あらざれば以もつて遵行じゆんぎやうする無なくく法王ほうおうの教きやうに非あらざれば以もつて信受しんじゆすること無なけん」と文ぶん、又また云いく四依論しえいを造つくるに權けん有り実じつ有り三乘さんじやう旨むねを述のぶるに三有さん一有いつ、所以ゆえんに天台智者てんだいちしやは三乘さんじやうの旨むねに順したがひて四教しきやうの階かいを定め一実いちじつの教きやうに依よつて一仏乘いちぶつじやうを建たつ、六度ろくだうに別べつ

有り、戒度何ぞ同じからん受法同じからず威儀豈同じからんや、
是の故に天台の伝法は深く四依に依り亦仏經に順う」文、本朝の
天台宗の法門は伝教大師より之を始む

若し天台の止觀・法華經に依らずと云わば日本に於ては伝教の高祖に
背き漢土に於ては天台に背く兩大師の伝法既に法華經に依る豈其の
末學之に違せんや、違するを以て知んぬ当世の天台家の人人其の名を
天台山に借ると雖も所學の法門は達磨の僻見と善無畏の妄語とに依る
と云う事、天台・伝教の解釈の如くんば己心中の秘法は但

妙法の一言に限るなり、然而当世の天台宗の學者は天台の石塔の
血脈を秘し失う故に天台の血脈相承の秘法を習い失いて我と
一心三觀の血脈とて我意に任せて書を造り錦の袋に入れて頸に懸け箱
の底に埋めて高直に売る故に邪義国中に流布して天台の仏法破失する

なり、天台の本意を失い、てんだい ほんい うしな 釈尊の妙法を下す是れ偏へんえに達磨の教訓だるま きょうくん
善無畏の勸すすめなり、故に止觀をも知らず一心三觀・一心三諦をも知らぜんむい ゆえ しかん いっしんさんかん いっしんさんたい
ず一念三千の觀をも知らず本迹二門をも知らず相待いちねんさんぜん

・絶待の二妙をも知らず法華の妙觀をも知らず教相をも知らず權實ぜったい ほっけ みようかん きようそう
をも知らず四教・八教をも知らず五時・五味の施化をも知らず、教・
機・時・因・相応の義は申すに及ばず實教にも似ず權教にも似ざるなきき そうおう もう およ じつきよう ごんきよう
り道理なり道理なり。

天台・伝教てんだい でんぎょうの所伝しよでんは法華經ほけきょうは禪・真言しんこんより劣おとれりと習ならう故ゆえに達磨だるまの邪義じやぎ・真言しんこんの妄語もうごと打ち成なつて權教こんきょうにも似じつず実教じつきょうにも似じつず二途せつに摂せつせざるなり、故ゆえに大謗法罪ほうぼうつみ顕あらわれて止觀しかんは法華經ほけきょうに勝まさると云いう邪義じやぎを申もうし出して過無あやまちなき天台てんだいに失とがを懸かけたてまつる故ゆえに高祖こうそに背そむく不孝ふこうの者・法華經ほけきょうに背そむく大謗法罪ほうぼうざいの者と成なるなり。

夫それ天台てんだいの觀法かんぼうを尋たずぬれば大蘇だいそ道場どうじょうに於おいて三昧さんまい開かい発はつせしより已この来かた目を開ひらいて妙法みょうほうを思おもえば隨緣ずいゑん真如しんにょなり目を閉ふじて妙法みょうほうを思おもえば不ふ變へん真如しんにょなり此この兩種りやうしゆの真如しんにょは只ただ一言いっごの妙法みょうほうに有あり我われ妙法みょうほうを唱となうる時・万法まんぽう茲こゝに達いたし一代いちだいの修多羅しゆたら一言いっごに含がんす、所詮しよせん迹門しやくもんを尋たずぬれば迹おほ広しめく本門ほんもんを尋たずねぬれば本高ほんかうし如しかじ己心こしんの妙法みょうほうを觀みぜんにはと思食おほしめされしなり、当世とうせの學者がくしや・此この意いを得えざるが故ゆえに天台てんだい己証こしやうの妙法みょうほうを習ならい失うしないて止觀しかんは法華經ほけきょうに勝まさり禪宗ぜんしゅうは止觀しかんに勝すぐれたりと思おもいて法華經ほけきょうを捨すてて

止観しかんに付き止観しかんを捨てて禪宗ぜんしゅうに付くなり、禪宗ぜんしゅうの一門いちもん云く松に藤かか懸る松枯かられ藤枯かられて後いかん如何上らずして一枝いちなんと云える天魔てんまの語ことばを深く信ずる故なり、修多羅しゅたらの教主きょうしゅは松の如く其その教法きやうほうは藤の如しごと各各じやうじやうに諍論じやうろんすと雖もいえど仏も入滅にゅうめつして教法きやうほうの威徳いとくも無し愛こひに知んぬ修多羅しゅたらの仏教ぶつぎやうは月を指す指さしなり禪の一法いっぽうのみ独妙どくみやうなり之これを觀かんずれば見性得達けんしやうとくだつするなりと云う大謗法ほうぼうの天魔てんまの所為しよゐを信ずる故なり、然而しかるに法華經ほけきやうの仏じゆみやうは壽命無量じゆみやうむりやう・

常住じやうじやう不滅ふめつの仏じゆみやうなり、禪宗ぜんしゅうは滅度めつどの仏じゆみやうと見るが故ゆゑに外道げどうの無なの見けんなり、是ぜ法住じやうじゆ法位ほうゐ世間相せけん常住じやうじゆの金言きんげんに背そむく僻見びやくけんなり、禪ぜんは法華經ほけきやうの方便ほうべん無得道とくだうの禪ぜんなるを真実しんじつ常住じやうじゆ法ほうと云うが故ゆゑに外道げどうの常見じやうけんなり、若し与えとくて之これを言のたまわば仏ぼつの方便ほうべん三藏さんざうの分齊ぶんさいなり若し奪もつて之これを言のたまわば但外道げどうの邪法じやほうなり与よは当分とうぶんの義ぎ・奪はつは法華ほつの義ぎなり法華ほつの奪はつの義ぎを以もつての故ゆゑに

禪は天魔・外道の法と云うなり、問う禪を天魔の法と云う証拠如何、
答う前前に申すが如し。

◆七三

立正觀抄送状

文永十二年二月

五十四歳御作

与最蓮房日淨

534P

今度の御使このたび おんつかいい誠に御志の程頭あらわれ候い畢おわんぬ又種種しゅじゆの御志たしかた慥たびに給候い畢おわんぬ。

抑おさ承もわり候も、当世とうせの天台宗等てんだいしゅう止觀しかんは法華經ほけきように勝すぐれ禪宗ぜんしゅうは止觀しかんに勝まさる、又觀心かんじんの大教興おこる時は本・迹えいど えしんだんの大教を捨いつと云う事てんだい先えいず天台一宗おに於おて流か流各別かくべつなりと雖いえども慧心えしん檀那だんなの兩流りうりゅうを出いでず候えしんなり、慧心流えしんりゅうの義ぎに云いく止觀しかんの一部いは本・迹二門えいど ねんねんに亘わたるなり謂おもく止觀しかんの六むに云いく觀くわんは仏知ぶつちと名なく止とは仏見ぶつけんと名なく念念ねんねんの中に於おて止觀しかん現前げんぜんす乃至三乘さいさんじやうの近執ごんしゅうを除のく」文、弘決ぐけつの五ごに云いく、干法くわんぽう既すでに是これ法華ほつげの所乘しよじやうなり

是の故に還つて法華の文を用いて歎ず、若し

しやくせつ

迹説に約せば即ち大通智勝仏の時を指して以て積劫と為し寂滅

どうじよう

道場を以て妙悟と為す、若し本門に約せば我本行菩薩道の時を指して

もつ

以て積劫と為し本成仏の時を以て妙悟と為す本・迹二門只是此の十

もつ

法を求悟す」文、始の一文は本門に限ると見えたり次の文は正しく本・

迹に亘る

と見えたり、止観は本・迹に亘ると云う事文証此に依るな

わた

りと云えり、次に檀那流には止観は迹門に限ると云う証拠は弘決の三

い

に云く還つて教味を借つて以て妙円を顕す○故に知んぬ一部の文共

かえ

に円成の開権妙観を成ずるを」文、此の文に依らば止観は法華の迹門

かいじんみようかん

に限ると云う事文に在りて分明なり両流の異義替れども共に本・迹を

い

出でず当世の天台宗何くより相承して止観は法華經に勝ると云うや、

とうせ

但し予が所存は止観法華の勝劣は天地雲泥なり。

若し与えて此を論ぜば止観は法華迹門の分齊に似たり、其の故は
天台大師の己証とは十徳の中の第一は自解仏乘第九は玄悟法華円意
なり、靈応伝の第四に云く法華の行を受けて二七日境界す」文、止観
の二に云く此の止観は天台智者己心中に行ずる所の法門を説く」文、
弘決の五に云く故に止観に正しく觀法を明すに至つて並びに三千を
以て指南と爲す○故に序の中に云く己心中に行ずる所の法門を説く」
文、己心所行の法とは一念三千・一心三觀なり三諦三觀の名義は瓔珞
・仁王の二經に有りと雖も一心三觀・一念三千等の己心所行の法門を
ば迹門十如実相の文を依文として釈成し給ひ畢んぬ。

爰に知んぬ止観一部は迹門の分齊に似たりと云う事を若し奪つて
之を論ぜば爾前權大乘・即別教の分齊なり其の故は天台己証の止観と
は道場所得の妙悟なり所謂天台大師・大蘇の普賢道場に於て

さんまいかいほう
三昧開發し証を以て師に白す師の曰く法華の前方便陀羅尼なりと
れいおうでん
靈応伝の第四に云く智☆師に代つて金字經を講ず一心具足万行の
ところ
処に至つて・疑有り思・為に釈して曰く汝が疑う所は此乃ち大品
しだい
次第の意なるのみ未だ是法華円頓の旨にあらざるなり」文、講ずる所の
すで
經既に 権大乘經 なり又次第と云えり故に別教なり、開發せし
だらに
陀羅尼又法華前方便と云えり故に知んぬ爾前帶權の經・別教の分齊な
りと云う事を・己証既に前方便の陀羅尼なり止觀とは己心中所行の
ほうもん
法門を説くと云うが故に、明かに知んぬ法華の迹門に及ぼすと云う事
を何に況や本門をや、若し此の意を得ば檀那流の義尤も吉なり此等の
趣を以て止觀は法華に勝ると申す邪義をば問答有る可く候か、委細の
むね
旨は別に一卷書き進らせ候なり、又日蓮相承の法門血脉髓に之を註
し奉る、
たてまつ きようきようきんげん
恐恐謹言

文永十二乙亥二月二十八日

最蓮房御返事

日蓮

花押

◆七四

顯立正意抄

文永十一年十二月

五十三歳御

作 536P

日蓮にちれんいぬ去る正嘉元年しょうかがんねん太歳丁巳ひのともし八月二十三日大地震だいいじしんを見て之これを勘かんえ定め
て書ける立正安国論りつしょうあんこくろんに云く、梁師經りやうしきやうの七難ひちなんの内五難なんたちま忽たちまちに起つて二難なん
猶なほ残のこれり所以ゆえん他国たこく侵逼しんびつの難なん、自界叛逆じかいほんぎやくの難なんなり、大集經だいつきやうの三災さんさいの内二
災あらい早く顯あらわれ一災いまい未だ起おこらず、所以ゆえん兵革ひやうかくの災さいなり、金光明經こんこうみやうきやうの内
種種しゅじゆの災過さいか一一起おこると雖いえども他方たほうの怨賊おんぞく国内こくないを侵掠しんりやくする此この災未いまだ
露あらわれず此この難未なんいまだ来きらず、仁王經にんのうきやうの七難ひちなんの内六難なん今盛さかんにして一難なん
未いまだ現げんぜず所以ゆえん四方しほうより賊来ぞくつて国を侵おかす
の難なんなり、しかのみならず国土こくど乱みだれん時は先きず鬼神きじん乱みだる鬼神きじん乱みだる

ゆえ 故に万民乱ると、今・此の文に就て具さに事の情を案ずるに百鬼早く
みだ 乱れ万民多く亡びぬ先難是れ明なり後災何ぞ疑わん若し残る所の難・
あくほう 惡法の科に依つて並び起り競い来らば其の時何為や、帝王は國家を基
てんが として天下を治む、人臣は田園を領して世上を保つ、而るに他方より
しんびつ 賊来つて此の國を侵逼し自界叛逆して此の地を掠 領せば豈驚かざら
あに んや豈驕がざらんや、國を失い家を滅せば何れの所にか世を遁れん」等
りつしょうあんごくろん 云云已上 立正安國論 の言なり。

いまにちれんかき 今日蓮重ねて記して云く大覺世尊記して云く 罽得外道七日有つて
じきどき 死す可し死して後食吐鬼に生れん苦得外道の言く七日の内には死す
べ 可からず我羅漢を得て餓鬼道に生れじと」等云云、瞻婆城の長者の婦
かいにん 懷妊す六師外道の云く 女子を生まん」仏記して云く 男子を生まん」
しる 等云云、仏記して云く 卻て後三月あつて我当に般涅槃般す

べし」等云云、一切いっさいの外道げどう云く是れ妄語もうごなり」等云云、仏の記きの如く二月十五日に般涅槃はつねはんし給たまう、法華經ほけきょうの第二に云く舍利弗しやりほつ汝なんじ未來世みらいせに於おいて無量無辺むりょうむへん不可思議ふかしぎ劫を過なて乃至ないしまさ當に作仏さぶつするを得うべし号ごうをば華光げこう如來にょらいと曰いわん」等云云、又第三の卷に云く我が此この弟子でし摩訶迦葉まかしょう未來世みらいせに於おいて當まさに三百萬億ふごんに奉觀ぶくわんすることを得うべし乃至最後ないしさいご

身に於て仏と成ることを得ん名をば光明如来と曰わん」等云云、又第四の巻に云く又如来滅度の後に若し人有つて妙法華經の乃至一偈、一句を聞いて一念も随喜せん者には我亦阿耨多羅三藐三菩提の記を与え授く」等云云、此等の經文は仏・未來世の事を記し給う、上に挙ぐる所の苦得外道等の三事・符合せずんば誰か仏語を信ぜん・設い多宝仏証明を加え分身の諸仏長舌を梵天に付くとも信用し難きか、今亦以て是くの如し設い日蓮富楼那の弁を

得て目連の通を現ずとも勘うる所・当らずんば誰か之を信ぜん、去ぬる文永五年に蒙古国の牒狀渡来する所をば朝に賢人有らば之を怪む可し、設い其れを信ぜずとも去る文永八年九月十二日御勘氣を蒙りしの時・吐く所の強言次の年二月十一日に符合せしむ、情有らん者は之を信ず可し何に況や今年既に彼の国災兵の上二箇国

を奪い取る設い木石為りと雖も設い禽獸為りと雖も感ず可く驚く
可きに偏えに只事に非ず天魔の国に入つて酔えるが如く狂えるが如く
歎く可し哀む可し恐る可し厭う可し、又立正安国論に云く君し執心
懽えらずして亦曲意猶存せば早く有為の郷を辞して必ず無間の獄に
墮せん」等云云、今・符合するを以て未来を案ずるに日本国の上下・
万人阿鼻

大城に墮ちんこと大地を的と為すが如し、此等は且らく之を置く日蓮
が弟子等又此の大難脱れ難きか彼の不輕輕毀の衆は現身に信伏随従
の四字を加れども猶先謗の強きに依つて先ず阿鼻大城に墮して千劫を
経歴して大苦悩を受く、今日蓮が弟子等も亦是くの如し・或は信じ
・或は伏し・或は随い・或は従う但だ名のみ之を仮りて心中に染ま
ざる信心薄き者は設い千劫をば経ずとも・或は一無間・或は二無間

乃^{ないし}至^{むげん}十百無間・疑^{うたがい}無^なからん者^{もの}か是^{これ}を免^{まぬか}れんと欲^{ほつ}せば各^{やく}・藥王^{ぎやうぼう}・藥法^{ぎやうぼう}の
如^{ごと}く臂^{ひじ}を焼^やき皮^{かわ}を剥^はぎ雪^{せつ}山^{せん}国^{こく}王^{おう}等^らの如^{ごと}く身^みを投^なげ心^{こころ}を仕^しえよ、若^もし
爾^{しか}らずんば五^ご体^{たい}を地^ちに投^なげ・身^みに汗^{あせ}を流^{なが}せ、若^もし爾^{しか}らずんば珍^{ちん}宝^{ぼう}を
以^{もつ}て仏^{ぶつ}前^{ぜん}に積^もめ若^もし爾^{しか}らずんば奴^ぬ婢^びと為^もつて持^じ者^{しゃ}に奉^{つか}えよ若^もし爾^{しか}らず
んば・等^ら云^い云^い、四^し悉^{しつ}檀^{だん}を以^{もつ}て時^{とき}に適^{かな}うのみ、我^{われ}弟^で子^し等^らの中^{なか}にも信^{しん}心^{じん}
薄^{うす}淡^{たん}き者^{もの}は臨^{りん}終^{じゆう}の時^{とき}阿^あ鼻^び獄^{ごく}の相^{さう}を現^{げん}ず可^べし其^{その}時^{とき}・我^{われ}を恨^{うら}む可^べからず
等^ら云^い云^い。

文^{ぶん}永^{えい}十^{じゅう}一^{いち}年^{ねん}太^{たい}歳^{さい}甲^が戌^{しゅ}十^{じゅう}二^に月^{げつ}十^{じゅう}五^ご日^{にち} 日^{にち}蓮^{れん}之^{これ}を記^{しる}す

◆七五 上行菩薩結要付属口伝

建^{がん}治^{ねん}元^{げん}年^{ねん} 五

十四歳御作 於身延 538P

妙法蓮華經見宝塔品第十一 爾の時に仏前に七宝の塔有り」と云

云、又云く 即時に釈迦牟尼仏神通力を以て諸の大衆を接して皆虚空

に在たもう、大音声を以て普く四衆に告げたまわく誰か能く此の娑婆

国土に於て広く妙法華經を説かん今正く是れ時なり如来久しからずし

て当に涅槃に入るべし仏・此の妙法華經を以て付属して在ること有らし

めんと欲す」云云、又云く 諸余の教典数恒沙の如し」と云云、又云く

諸の大衆に告ぐ我滅度の後に誰か

能く斯の經を護持し読誦せん今・仏前に於て自ら誓言を説け」と又

云く 此の經は持ち難し若し暫くも持つ者は我即ち歡喜す諸仏も亦

然なり是の如きの人は諸仏の歎め給う所なり」と云云、妙法蓮華經

勸持品第十三 爾時葉王菩薩摩訶薩及び大衆説菩薩摩訶薩二万の

菩薩眷属と俱に皆仏前に於て是の誓言を作さく唯・願くば世尊以て

慮し
うらおもい

たもうべからず我等・仏の滅後に於て当に此の經典を奉持し誦誦し
説きたてまつるべし、後の惡世の衆生は善根轉た少くして増上慢多く
利供養を貪り不善根を増し解脱を遠離せん教化すべきこと難しと雖も
我等当に大忍力を起して此の經を誦誦し持説し書寫し種種に供養して
身命を惜まざるべし、爾の時に衆中の五百の阿羅漢の

授記を得たる者・仏に白して言さく世尊・我れ等亦自ら誓願すらく異
の国土に於て広く此の經を説かんと、復學無學の八千人の授記を得た
る者有り座從り起て合掌し仏に向いたてまつりて是誓言を作さく世尊
・我等亦當に他の

国土に於て広く此の經を説きたてまつるべし・所以は何ん是の娑婆國の
中は人・弊惡多く増上慢を懷き功德淺薄に瞋濁諂曲にして心不実な

るが故ゆゑに」と云云、又云く爾その時に世尊せそん・八十万億那由なゆ佗たの諸もろもろの菩薩ぼさつ
摩訶まか薩さつを視みす

是の諸の菩薩は皆是阿惟越致なり、即時に諸の菩薩俱に同く声を發して偈を説いて言さく、唯願くは慮したもうべからず仏の滅度の後・恐怖惡世の中に於て我等当に広く説くべし諸の無智の人の惡口罵詈訾し及び刀杖を加うる者有らん我等皆当に忍ぶべし、惡世の中の比丘は邪智にして心諂曲に未だ得ざるをこれ得たりと謂い我慢の心充滿せん、或は阿練若に納衣にして空閑に在り自ら眞の道を行ずと謂いて人間を輕賤する者有らん、利養に貪著するが故に白衣の与に法を説いて世に恭敬せらるること六通の羅漢の如くならん是の人惡心を懷き常に世俗の事を念い名を阿練若に仮りて好んで我等の過を出ださん、濁世の惡比丘は仏の方便・隨宜所説の法を知らずして惡口して聲蹙し数数擯出せられん」と云云。

文句の八に云く 初めに一行は通じて邪人を明す即ち俗衆なり、次

に一行は道門増上慢の者を明す、三に七行は僭聖増上慢の者を明す、故に此の三の中初めは忍ぶ可し次は前に過ぐ第三は最も甚し」と云云。

涌出品に云く、爾の時に他方の国土の諸の来れる菩薩摩訶薩八恒河沙の数に過ぎたり、大衆の中に於て起立し合掌し礼を作して仏に白して言く、世尊若し我等に仏の滅後に於て此の娑婆世界に在つて勤加精進し是の經典を護持し読誦し書寫し供養せんことを聴したまわば當に此の土に於て広く之を説きたてまつるべし、爾の時に仏諸の菩薩摩訶薩衆に告く止みね善男子汝等が此の經を護持せんことを須いじ所以は何ん我が娑婆世界に自ら六万恒河沙等の菩薩摩訶薩有り、一一の菩薩各六万恒河沙の眷屬有り是の諸人等能く我が滅後に於て護持し読誦し廣く此の經を説かん」と云云五卷畢。

属累品ぞくるいばんに云いく爾その時に釈迦牟尼仏しやかむにぶつ法座ほうざ從り起つて大神力じんりきを現げんじた
もう右の手を以もつて無量むりようの菩薩摩訶薩ぼさつまかさつの頂いただきを摩なでて是この言ことを作なしたま
わく我無量百千万億むりようせんまん・阿僧祇劫あそぎこうに於おいて是この得難がたき阿耨多羅三藐三菩提あのかたらさんみやくさんぼだい
の法しゅうしゅうを修習しゅうしゅうせり今以もつて汝等なんじに付属ふぞくす汝等なんじ当まさに一心いっしんに此この法はを流布るふ
して広ひろく増益ぞうやくせしむべし、是かくの如ごとく三たび諸もろもろの菩薩摩訶薩ぼさつまかさつの

頂いただきを摩なでて是この言ことを作なしたまわく我わ無量むりやう百千万億せんまん・阿僧祇劫あそぎこうに於おて
是この得難がたき阿耨多羅三藐三菩提あのくたらさんみゃくさんぼだいの法はふを修習しゅうしゅうせり今いま以もつて汝等なんじに付属ふぞく
す、汝等なんじ當まさに受持じゆじ読誦どくじゆし広ひろく此このの法はふを宣のべべて一切衆生いつさいしじゆをして普あまねく聞知もんち
することを得えせしむべし所以ゆえんは何いかん如來にょらいは大慈悲じひ有あつて諸もろもろの慳けん・無なくく
亦また畏おそる所なく無よくく能しゆじやうく衆生しじゆに仏ちえんの智慧にょらい・如來ちえんの智慧じねん・自然ちえんの智慧ちえんを与あづから
如來にょらいは是いっさいしじゆ一切衆生しじゆの大施主せしゆなり汝等なんじ亦また随したがつて如來にょらいの法はふを學まなぶべし
慳けん・無なくくを生なずること勿なかれ」と云云。

文句もんくの九いくに云いく品下しゆ 如來にょらい之これを止とどめたもうに凡おほそ三義さんぎ有あり、汝等なんじ各おの
各おのに自みづから己おのが任まかり有あり若もし此このの土ちに住すませば彼かの利益りやくを廢やせん、又他方たほうは
此し土ち結縁けちえんの事こと淺せんし・宣授せんじゆせんと欲ほすと雖いえども必かならずず巨益きやく無なからん又若もし
之これを許ゆるさば則すなわち下めを召めすことを得えず下若もし來きらずんば迹はを破やすること
を得えず遠あらかを顯あらわすことを得えず是これを三義さんぎもつて如來にょらい之これを止とどめたもうと

為す、下方を召して来らしむるに亦三義有り是れ我が弟子なり我が法を弘むべし縁深広なるを以て能く此の土に遍じて益し分身の土に遍して益し他方の土に遍して益す、又開近顯遠することを得是の故に彼を止めて下を召すなり」と云云。

記に云く問う諸の仏・菩薩は共に未熟を熟す何の彼此有らん分身散影して普く十方に遍す而るを己任及び魔彼と言うや、答う諸の仏・菩薩は実に彼此無し但機に在無有り無始法爾なり故に第二の義を以て初の義を顯わして結縁事淺と云う、初め此の仏・菩薩に従つて結縁し還つて此の仏・菩薩に於て成就す」と云云、又云く子父の法を弘むるに世界の益有り」と云云、記の八に云く因葉王とは本葉王に託し茲に因せて余に告ぐ此れ流通の初なり

先に八万の大士に告ぐとは、大論に云く法華は是秘密なれば諸の菩薩

に付すと、下の文に下方を召すが如きは尚本眷属を待つ驗し余は
未だ堪えず」云云、問う何が故ぞ他方を止めて本眷属を召すや、答う
私の義有る可らず靈山の聴衆天台の所判に任す可し、疏に云く
涌出に三と為す一には他方の菩薩弘經を請す二には如来許したま
わず三には下方の涌出なり、他方の菩薩は通經の福の大なることを聞
いて咸く願を發し此の土に住して弘宣

んと欲するが故に請ず、之が爲に如来之を止めたもう」等と云云。
結要付属の事

初に称歎付属・爾時仏告 猶不能尽

結要勸持四 二に結要付属以要言之 宣示顯說

三に正勸付属是故汝等起塔供養

四に釈勸付属所以者何而般涅槃

疏の十に云く「爾時仏告 上行の下は是れ第三に結要付属なり」と云

云、又云く「結要に四句有り、一切法とは一切皆是れ佛法なり此は

一切皆妙名を結するなり一切力とは通達無礙にして八自在を具す

此れは妙用を結するなり一切秘藏とは一切処に遍して皆是れ実相な

り此れは妙体を結するなり一切深事とは因果は是れ深事なり此は

妙宗を結するなり、皆於此經宣示顯說とは総じて一經を結する唯四

ならくのみ其^{すうへい}枢柄^とを撮^とつて之^{これ}を授^{じゅ}与^よす」と云云、記に云く「結^{けつ}要有^{よう}四句とは本・迹二門に各宗用有り二門の体は兩^{りょう}処^こ殊^{こと}ならず」と云云輔^ふ正^{しやう}記^きに云く付^ふ属^{ぞく}とは此の經^{きやう}は唯^{ただ}下^{した}方^{はう}涌^ゆ出^{じゅつ}の菩^ぼ薩^{さつ}に付^つす何^{なん}を以^{もつ}ての故^{ゆえ}に爾^{しか}る法^こ是^これ久^く成^{じやう}の法^{はう}なるに由^よるが故^{ゆえ}に久^く成^{じやう}の人^{にん}に付^つす云云。

積^{しやく}す

初^{はつ}に付^ふ属^{ぞく}に三

一 如^に来^{よらい}の付^ふ属^{ぞく}

二 付^ふ属^{ぞく}を

一 正^{しやう}く付^ふ属^{ぞく}

三 付^ふ属^{ぞく}を

誠^{いまし}む余^じの深^{じん}法^{ぽう}の中^{ちゆう}の下^{した}なり

属^{ぞく}累^{るい}品^{ぽん}の文^{ぶん}段^{だん}に二有^{ふた}り

二 菩^ぼ薩^{さつ}の領^{りやう}受^{じう}

三 事^じ畢^ひて唱^{てう}散^{さん}す

次^{つぎ}に時^{とき}衆^{しゆ}の歡^{かん}喜^き

説^{せつ}是^ぜ語^ご時^{とき}の下^{した}三^{さん}行^{ぎやう}余^よ

第一の五百歳 だいいち 解脱堅固 げだつけんこ

第二の五百歳 だいに 禪定堅固 ぜんじやうけんこ

第三の五百歳 だいに 読誦多聞堅固 どくじゆたぶんけんこ

第四の五百歳 だいよ 多造塔寺堅固 たぞうとうじけんこ

第五の五百歳 だいご 闍靜堅固 とうじやうけんこ

大集經の五箇五百歳とは だいしつきやう

夫れそ仏滅度の後二月十六日より正法なり、迦葉仏の付属を請け次に阿難尊者あなんそんじや・次に商那和修しょうなわしゅう・次に優婆☆多うばきくた・次に提多迦だいたか此の五人各各二十年にして一百年なり、其の間は但小乗經しょうじやうきやうの法門のみ弘通して諸大乘經は名字みやうじもなし何に況や法華經をや、次に弥遮迦みしゃか・仏陀難陀ぶつだなんだ・仏駄密多ぶつだみつた・脇比丘きやうきびく・富那奢等の五人は五百年の間・大乘の法門少少出来すと雖も取立てて弘通せず但小乗經しょうじやうきやうを正と為す已上大集經の前の五百年解脱堅固に当れり、正法の後の五百

年には馬鳴・竜樹乃至師子等の十余人の人人始には外道の家に入り次
には小乗經を極め後には諸大乘經を以て散散に小乗經等を破失
しき、然りと雖も權大乘と法華經との勝劣未だ分明ならず淺深を書
かせ給いしかども本・迹の十妙・二乗作仏・久遠実成・已今当等・
百界千如・一念三千の法門をば名をも書き給わず此大集經の禪定
堅固に當れり、次に像法に入つては天竺は皆權実雜亂して地獄に
墮する者數百人ありき、像法に入つて一百余年の間は漢土の道士と
月氏の仏法と諍論未だ事定らざる故に仏法を信ずる心未だ深からず
まして權実を分くる事なし、摩騰竺法蘭は自は知りて而も大小を分た
ず權実までは思いもよらず、其の後・魏・晋・宋・齊・梁の五代の間漸く
仏法の

中に大小・權実・顯密を諍いし程に何れをも道理とも聞えず

南三・北七の十流・我意に仏法を弘む、爾れども大に分つに一切經の中
には一には華嚴・二には涅槃・三には法華と云云、爾れども像法の始の
四百年に當つて天台大師震旦に出現して南北の邪義・一一に之を破し
畢んぬ、此大集經の多聞堅固の時に當れり、像法の後の五百年には

三論・法相・乃至・真言等を各三藏將來す、像法に入つて四百余年あつて日本国へ百済国より一切經並に釈尊の木像僧尼等を渡す梁の末・陳の始めに相當る日本国には神武天皇より第三十代欽明天皇の御宇なり、像法の後の五百年に三論・法相等の六宗・面面の異義あり爾れども各邪義なり、像法八百年に相當つて伝教大師・日本に出でて彼の六宗の義を皆責め伏せ給えりと云云、伝教已後には東寺・園城寺等の諸寺日本一同に云く「真言宗は天台宗に勝れたり」と云云、此大集經の多造塔寺堅固の時なり今末法に入つて仏滅後・二千二百二十余年に當りて聖人出世す是は大集經の闡靜言訟白法隱没の時なり云云、夫れ釈迦の御出世は住劫第九の減・人壽百歳の時なり百歳と十歳との中間は在世は五十年・滅後は正像二千年と末法一万年となり、其の中間に法華經流布の時二度之れ有る可し、

所謂在世の八年・滅後には末法の始の五百年なり。

夫れ仏法を学する法には必ず時を知る可きなり過去の大通智勝仏は出世し給いて十小劫が間一偈も之を説かず經に云く「坐十小劫」と云云、又云く「仏・時未だ至らずと知しめして請を受け默然として坐したまえり」と、今の教主釈尊も四十余年の間は法華經を説きたまわず經に云く「説時未だ至らざるが故なり」等云云、老子は母の胎に処して八十年・弥勒菩薩は兜率の内院にして五十六億七千万歳を待ちたもう仏法を修行する人人時を知らざらんや、爾らば末法の始には純円一実の流布とは知らざれども經文に任するに我が滅度の後・後の五百歳の中に閻浮提に広宣流布して断絶せしむること無けん」と云云、誠に以て分明なり。

◆七六

法華初心成仏抄

建治三年 五十六歳御

作 与岡宮妙法尼

544P

問うて云く八宗・九宗・十宗の中に何か釈迦仏の立て給へる宗なるや、答えて云く法華宗は釈迦所立の宗なり其の故は已説・今説・当説の中に法華経第一なりと説き給う是れ釈迦仏の立て給う処の御語なり、故に法華経をば仏立宗と云い又は法華宗と云う又天台宗とも云うなり、故に伝教大師の釈に云く天台所釈の法華の宗は釈迦世尊所立の宗と云へり、法華より外の経には全く已今当の文なきなり已説とは法華より已前の四十余年の諸経を云う
今説とは無量義経を云う当説とは涅槃経を云う此の三説の外に

法華經計り成仏する宗なりと仏定め給へり、余宗は仏涅槃し給いて後
・或は菩薩・或は人師達の建立する宗なり仏の御定を背きて菩薩・人師
の立てたる宗を用ゆべきか菩薩・人師の語を背きて仏の立て給へる宗を
用ゆべきか又何れをも思い思いに我が心に任せて志あらん經法を
持つべきかと思う處に仏是を兼て知し召して末法濁惡の世に真実の
道心あらん人人の持つべき經を定め給へり、經に云く法に依つて人に
依らざれ・義に依つて語に依らざれ知に依つて識に依らざれ・了義經
に依つて不了義經に依らざれ」文、此の文の心は菩薩・人師の言には
依るべからず仏の御定を用いよ華嚴・阿含・方等・般若經等の真言・
禪宗・念仏等の法には依らざれ了義經を持つべし了義經と云うは
法華經を持つべしと云う文なり。

問うて云く今・日本国を見るに当時五濁の障重く闍靜堅固にして

瞋^{しん}恚^にの心猛^{たけ}く嫉妬^{しつと}の思い甚^{はなはだ}しかかる国かかる時には何^{いづれ}れの經をか弘^{ひろ}むべきや、答^{こた}えて云^いく法華^{ほけ}經を弘^{ひろ}むべき国なり、其^{その}の故^{ゆえ}は法華^{ほけ}經に云^いく閻浮提^{えんぶだい}の内に広^{ひろ}く流布^{りゅうふ}せしめて断絶^{だんぜつ}せざらしめん」等云云、瑜伽^{ゆいが}論に丑寅^{うしとら}の隅^{すみ}に大乘^{だいじょう}・妙法蓮華^{みょうぼうれんげ}經の流布^{りゅうふ}すべき小国^{しょうこく}ありと見えたり、安然^{あんねん}和尚^{わじょう}云^いく我^{われ}が日本^{にほん}国」等云云、天竺^{てんじく}よりは丑寅^{うしとら}の角^{すみ}に此^この日本^{にほん}国は当^{あた}るなり、又慧心^{えしん}僧都^{そうず}の一乘^{いちじょう}

要決に云く日本一州円機純一にして朝野遠近同く一乘に歸し緇素
貴賤悉く成仏を期せん」云云、此の文の心は日本国は京鎌倉・筑紫・鎮
西みちをく・遠きも近きも法華一乘の機のみ有りて上も下も貴も賤も
持戒も破戒も男も女も皆おしなべて法華經にて成仏すべき国なりと云
う文なり、譬えば崑崙山に石なく蓬萊山に毒なきが如く日本国は純に
法華經の国なり、而るに法華經は元よりめでたき御經なれば誰か信ぜ
ざると語には云うて而も昼夜朝暮

に弥陀念仏を申す人は薬はめでたしとほめて朝夕毒を服する者の
如し、或は念仏も法華經も一なりと云はん人は石も玉も上臍も下臍
も毒も薬も一なりと云わん者の如し、其の上法華經を怨み嫉み惡み
毀り輕しめ賤む族のみ多し、經に云く「一切世間・多怨難信」又云く
如来現在・猶多怨嫉・況滅度後」の經文少しも違はず当れり、され

ば伝教大師の釈に云く、代を語れば則ち像の終り末の初め地を尋ぬれば唐の東・羯の西・人を原ぬれば則ち五濁の生・闍靜の時なり經に云く猶多怨嫉・況滅度後と此の言良に以有るなり」と、此等の文釈をもつて知るべし、日本国に法華經より外の真言・禪・律宗・念仏宗等の經教山山寺寺朝野遠近に弘まるといへども正く國に相應して仏の御本意に相叶ひ生死を離るべき法にはあらざるなり。

問うて云く華嚴宗には五教を立て余の一切の經は劣れり華嚴經は勝ると云ひ、真言宗には十住心を立て余の一切經は顯經なれば劣るなり真言宗は密教なれば勝れたりと云う、禪宗には余の一切經をば教内と簡いて教外別伝・不立文字と立て壁に向いて悟れば禪宗独り勝れたりと云う、淨土宗には正雜二行を立て法華經等の一切經をば捨閉闍拋し雜行と簡ひ淨土の三部經を機に叶ひめでたき正行なりと

云う、各各・我慢がまんを立て互たがいに偏執へんしゅうを作す何れいずれか釈迦しゃか・仏ぶつの御本意ごほんいなるや、答えて云く宗宗各別かくべつに我が経こそすぐれたれ余経よきょうは劣れおとりと云いて我が宗・吉よきと云う事は唯是ただこれ人師にんしの言にて仏説ぶつせつにあらず、但し法華經計りこそ仏五味の譬たとえを説きて五時の教に当て此の經の勝すぐれたる由よしを説き、或あるは又已今当いこんとうの三説の中に仏になる道は法華經に及ぶ經なしと云う事は正しき仏の金言きんげんなり、然しかるに

我が經は法華經に勝れたり我が宗は法華宗に勝れたりと云はん人は
下鵬が上鵬を凡下と下し相伝の従者が主に敵対して我が下人なりと
云わんが如し何ぞ大罪に行なはれざらんや、法華經より余經を下す事
は人師の言にあらざる經文分明なり、譬えば国王の万人に勝れたりと
名乗り侍の凡下を下鵬と云わんに何の禍があるべきや、此の經は是れ
仏の御本意なり天台・妙樂の正意なり。

問うて云く釈迦一期の説法は皆衆生のためなり衆生の根性万差な
れば説法も種種なり何れも皆得道なるを本意とす、然れば我が有縁の
經は人の為には無縁なり人の有縁の經は我が為には無縁なり故に余經
の念仏によりて得道なるべき者の為には觀經等はめでたし法華經等は
無用なり、法華によりて成仏得道なるべき者の為には余經は無用なり
法華經はめでたし、四十余年・未顕眞実と説くも雖示種種道・其実為

仏乗ぶつじょうと云うも正直捨方便しやうじきしやほうべん・但説無上道たんせつむじやうどう

と云うも法華得道の機の前の事なりと云う事・世こそつてあはれ然るべき道理どうりかななんと思へり如何心いかんうべきや、若し爾らば大乘・小乗の差別さべつもなく權教・実教ごんきやう じつきやうの不同ふどうもなきなり何れをか仏の本意ほんいと説き何れをか成仏じやうぶつの法とと説き給えるや甚はなはだ・だいぶかし・いぶかし、答えて云く凡そ仏の出世しゆせは始めより妙法みやうほうを説かんと申し食ししかども

衆生の機縁しゆじやう きえん万差にしてととのをらざりしかば三七日の間思惟しゆいし四十余年の程・こしらへおおせて最後に此の妙法みやうほうを説き給う、故に君もし但仏乗ぶつじやうを讃せば衆生苦しゆじやう くるに没在ぼつざいし是の法を信ずること能あたわず、法を破はして信ぜざるが故に三惡道さんあくどうに墜おちんと説き世尊せそんの法は久くして後要かならず当まさに眞実しんじつを説きたまうべし」とも云へり、此の文の意は始めより此の仏乗ぶつじやうを説かんと申し食ししかども仏法ぶつぽうの氣分けぶんもなき

衆生は信ぜずして定めて謗りを至さん、故に機をひとしなに誘へ給う
ほどこに初めに華嚴・阿含・方等・般若等の經を四十余年の間とき最後に
法華經をとき給う時、四十余年の座席にありし身子・目連等の万二千
の聲聞・文殊・弥勒等の八万の菩薩・万億の輪王等・梵王・帝釈等の
無量の天人各爾前に聞きし処の法をば如来の無量の知見を失えりと
云云、法華經を聞いては無上の宝聚求め

ざるに自ら得たりと悦び給ふ、されば我等昔より来このかたしばしばせそん 数世尊の説を
聞きたてまつるに未だ曾いまつて是かくのくの如き深妙の上法を聞かず」とも、
希有けうの法を説き給う昔より未だ曾いまつて聞かざる所なり」とも説き給う、
此等これらの文の心は四十余年の程若干の説法を聴聞せしかども法華經の樣
なる法をば総てきかず又仏も終に説かせ給はずと法華經を讃たる文な
り四十二年の聴と今經の聴とをばわけたくらぶべからず、然るに今經
をそれ法華經得道の

人の為にして爾前得道の者の為には無用なりと云う事大なる誤りな
り、をのづから四十二年の經の内には一機・二縁の為にしつらう處の
方便なれば設たといえん有縁無縁の沙汰はありとも法華經は爾前の經經の座
にして得益しつる機どもを押ふさねて一純に調えて説き給たまいし間・有縁
無縁の沙汰あるべからざるなり、悲しいかな大小・權実みだりがわしく

仏の本懷ほんかいを失うしないて爾前得道にぜんとくどうの者のためには法華經無用ほけきやうむようなりと云へる事を能よくよく能よくよく慎つつしむべし・恐おそるべし、古いにしへの徳一大師だいしと云いひし人・此この義ぎを人にも教へ我が心にも存ぞんして・さて法華經ほけきやうを讀よみ給たまひしを伝教大師でんぎやうだいし・此この人を破はし給たまふ言ことに法華經ほけきやうを讀よみすと雖いえども還かえつて法華ほつけの心こころを死ころす」と責め給たまひしかば徳一大師だいしは舌八だにさけて失うしなせ給たまひき。

問いうて云いく天台てんだいの釈しやくの中に菩薩ぼさつ處處得入しよしよとくにゆると云う文ぶんは法華經ほけきやうは但にじよう二乗ための爲ためにして菩薩ぼさつの爲ためならず菩薩ぼさつは爾前にぜんの經きやうの中ちゆうにしても得道とくどうなると見えたり若もし爾しからば未顕みけん眞実しんじつも正直捨方便しやうじきしやほうべん等らうも總そうじて法華經ほけきやう八卷はくわんの内うち皆みな以もつて二乗にじようの爲ためにして菩薩ぼさつは一人ひとりも有あるまじきと意いうべきか如何いかん、答こたえて云いく法華經ほけきやうは但にじよう二乗ための爲ためにして菩薩ぼさつの爲ためならずと云う事は天台てんだいより已前いぜん・唐土もうこしに南三なんざん・北七ほくひちと申もうして十人じゅうにんの学匠がくしやうの義ぎなり、天台てんだいは其その義ぎを破はし失うせて今は弘ひろまらず若もし

菩薩ぼさつなしと云はば菩薩ぼさつ是この法を聞いて疑網ぎもう皆かい已いに除くと云える豈あに是これ
菩薩ぼさつの得益とくやくなしと云わんや、それに尚鈍根なおどんこんの菩薩ぼさつは二乗にじょうとつれて得益とくやく
あれども利根りこんの菩薩ぼさつは爾前にぜんの經にて得益とくやくすと云はば利根りこん・鈍根どんこん等しく
法雨ほううを雨ふらす」と説き二切いっさいの菩薩ぼさつの阿耨多羅三藐三菩提あのかたらさんみゃくさんぼだいは皆みな此經に属
せり」と説くは何いかに、此等これらの文の心は利根りこんにてもあれ鈍根どんこん

にてもあれ持戒じかいにてもあれ破戒はかいにてもあれ貴もあれ賤もあれ一切いっさいの
菩薩ぼさつ・凡夫ぼんぷ・二乗にじようは法華經ほけきようにて成仏得道じようぶつとくどうなるべしと云う文なるをや、又
法華得益ほつげとくやくの菩薩ぼさつは皆鈍根みなどんこんなりと云はば普賢ふげん・文殊もんじゆ・弥勒みろく・藥王やくおう等の八万はちまん
の菩薩ぼさつをば鈍根どんこんなりと云うべきか、其の外そに爾前にぜんの經にて得道とくどうする
利根りこんの菩薩ぼさつと云うは何様いかようなる菩薩ぼさつぞや、抑そも爾前にぜんに菩薩ぼさつの得道とくどうと云う
は法華經ほけきようの如き得道とくどうにて候か、其ならば法華經ほけきようの得道とくどうにて爾前にぜんの得分
にあらず、又法華經ほけきようより外ほかの
得道とくどうならば已今当いこんとうの中には何れぞや、いかさまにも法華經ほけきようならぬ得道とくどう
は当分とうぶんの得道とくどうにて真実しんじつの得道とくどうにあらず、故ゆえに無量義經むりようぎきようには是かくのゆえの故に
衆生しゆじようの得道差別とくどうさべつせり」と云い又終ついに無上菩提むじやうぼだいを成じやうずることを得じ」と
云へり、文の心は爾前にぜんの經經ききようぎきようには得道の差別さべつを説くと云へども終ついに
無上菩提むじやうぼだいの法華經ほけきようの得道とくどうはなしとこそ仏とは説き給たまひいて候へ。

問うて云くいひ當時とうじは釈尊しやくそん入滅にゅうめつの後・今に二千二百三十余年なり、
一切經いっけいぎょうの中に何いすれの經が時に相応そうおうして弘ひろまり利生りしやうも有あるべきや大集經だいしつきやうの
五箇ごの五百歲ごひゃくさいの中の第五ごの五百歲ごひゃくさいに當時とうじはあたれり、其その第五ごの五百
歲さいをば闍靜堅固とうじやうけんこ・白法隱没びやくほうおんもつと云つて人の心たけく腹あしく貪欲とんよく・瞋恚しんに
・強盛きやうじやうなれば軍・合戰さかんのみ盛さかんにして仏法ぶつぽうの中に先き先き弘ひろまりし所の
真言しんごん・禪宗ぜんしゆう・念仏持戒等ねんぶつじかいの白法びやくほうは隱没おんもつすべしと仏説とき給たまへり、第一だいいちの五
百歲・第二ふたの五百歲・第三さんの五百歲・第四よの五百歲を見るに成仏じやうぶつの道みちこ
そ未顯みけん真實しんじつなれ世間せけんの事法じほふは仏の御言みことば一分いちぶんも違ちがはず是これを以もつて之これを思
うに當時とうじの闍靜堅固とうじやうけんこ・白法隱没びやくほうおんもつの金言きんげんも違ちがう事あらじ、若爾しからば
末法まっぽうには何いすれの法も得益とくやくあるべからず何れいすれの仏・菩薩ぼさつも利生りしやうあるべからず
と見えたり如何いかに、さてもだして何いすれの仏・菩薩ぼさつにもつかへ奉ほうらず何いすれの法を
も行ぜず憑たのむ方なくして候こしやうべきか、後世ごしやうをば如何いかにが思おもひ定め候こしやうべきや、

答えて云く末法当時は久遠実成の釈迦仏・上行菩薩・無辺行菩薩等の
弘めさせ給うべき法華經二十八品の肝心たる南無妙法蓮華經の七字
計り此の国に弘まりて利生得益もあり上行菩薩の御利生盛んなるべき
時なり、其の故は經文明白なり道心堅固にして志あらん人は委く
是を尋ね聞くべきなり。

浄土宗の人人末法万年には余経悉く滅し弥陀一教のみと云ひ又

どうこんまつぽうはこれごじよくあくせただじようど

当今末法は是れ五濁の惡世唯浄土の一門のみ有て通入す可き路なりと

云つて虚言して大集經に云くと引ども彼の經に都て此文なし、其の上

あるべき様もなし仏の在世の御言に当今末法五濁の惡世には但浄土の

一門のみ入るべき道なりとは説き給うべからざる道理顯然なり本經に

は当來の世經道滅尽し特り此の經を留めて止住する事百歳ならん」

と説けり、末法一万年の百歳

とは全く見えず、然るに平等覺經・大阿弥陀經を見るに仏滅後・一千

年の後の百歳とこそ意えられたれ、然るに善導が惑へる釈をば尤も道理

と人・皆思へり是は諸僻案の者なり、但し心あらん人は世間のことはり

をもつて推察せよ、大旱魃のあらん時は大海が先にひるべきか小河が先

にひるべきか仏是を説き給うには法華經は大海なり

観經・阿彌陀經等は小河なり、されば念仏等の小河の白法こそ先にひ
るべしと經文にも説き給いて候ひぬれ、大集經の五箇の五百歳の中の第
五の五百歳・白法隱没と云と雙觀經に經道滅尽と云とは但一つ心な
り、されば末法には始めより雙觀經等の經道滅尽すと聞えたり經道
滅尽と云は經の利生の滅すと云う事なり、色の經卷有るにはよるべか
らず、されば當時は經道滅尽の時に至つて二百歳に余れり、此の時は
但法華經のみ利生得益あるべし。

されば此經を受持して南無妙法蓮華經と唱え奉るべしと見えたり
葉王品には 後の五百歳の中に閻浮提に広宣流布して断絶せしむるこ
となけん」と説き給ひ、天台大師は 後の五百歳遠く妙道に沾ん」と
釈し、妙樂大師は 且らく大經の流行す可き時に抛る」と釈して
後の五百歳の間に法華經弘まりて其の後は閻浮提の内に絶え

失せる事有るべからずと見えたり、安樂行品あんらくぎょうばんに云く、復の末世ぼうめつの法滅せんと欲せん時に於て斯の經典きやうてんを受持し誦誦じゆじせん者」文神力品ぶんしりきばんに云く爾その時に仏・上行じやうぎやう等の菩薩大衆ぼさつたいしゆに告げたまわく属累ぞくるいの爲の故に此の經の功德くどくを説くと

も猶なお尽すこと能あたわじ、要を以て之を云わば如来にょらいの一切いっさいの所有しやうの法・如来にょらいの一切いっさいの自在じざいの神力じんりき・如来にょらいの一切いっさいの秘要ひやうの

藏・如来の一切の甚深の事・皆此經に於て宣示顯説す」と云云、此等の文の心は釈尊入滅の後第五の五百歳と説くも来世と云うも濁惡世と説くも正像二千年過ぎて末法の始二百余歳の今時は唯法華經計り弘まるべしと云う文なり、其の故は人既にひがみ法も實にしろしなく仏神の威験もましまさず今生後生の祈りも叶はず、かからん時はたよりを得て天魔・波旬乱れ入り国土常に飢渴して天下も疫癘し他国侵逼難・自界叛逆難とて我が国に軍合戰常にありて、後には他国より兵どもをそひ来りて此の国を責むべしと見えたり、此くの如き闍靜堅固の時は余經の白法は験し失せて法華經の大良薬を以て此の大難をば治すべしと見えたり。

法華經を以て国土を祈らば上一人より下万民に至るまで悉く悦び榮へ給うべき鎮護国家の大白法なり、但し阿闍世王・阿育大王は始め

は悪王なりしかども耆婆大臣の語を用ひ夜叉尊者を信じ給いて後にこそ賢王の名をば留め給いしか、南三・北七を捨てて知☆法師を用ひ給いし陳主・六宗の碩徳を捨てて最澄法師を用ひ給いし桓武天皇は今に賢王の名を留め給へり、知☆法師と云うは後には天台大師と号し奉る最澄法師は後には伝教大師と云う

是なり、今の国主も又是くの如し現世安穩・後生善処なるべき此の大白法を信じて国土に弘め給はば万国に其の身を仰がれ後代に賢人の名を留め給うべし、知らず又無辺行菩薩の化身にてやましますらん、又妙法の五字を弘め給はん智者をば・いかに賤くとも上行菩薩の化身か又釈迦如来の御使かと思うべし、又薬王菩薩・薬上菩薩・観音・勢至の菩薩は正像二千年の御使なり此等の菩薩達の御番は早過たれば上古の様に利生有るまじきなり、されば当世の祈を御覽ぜよ一切叶

はざる者なり、末法まっぽう今の世の番衆ばんしゆは上行じやうぎやう・無辺行等むへんぎやうにてをはしますなり此等これらを能よくよく能あき明あきらめ信じてこそ法の験しるしも仏ぶつ・菩薩ぼさつの利生りしやうも有あるべしとは見えたれ、譬たとえばよき火打とよき石のかごと・よきほくちと

此の三寄り合いて火もを用もちゆるなり、祈も又是かくのくの如ごとしよき師とよき檀那だんなとよき法と此の三寄り合いて祈を成就じやうじゆし国土こくどの大難だいなんをも払ふべき者なり、よき師とは指したる世間せけんの失とが無くして聊さうのへつらうことなく小欲知足にし

て慈悲有らん僧の經文に任せて法華經を読み持ちて人をも勸めて持たせん僧をば仏は一切の僧の中に吉第一の法師なりと讃められたり、吉檀那とは貴人にも・よらず賤人をも・にくまず上にもよらず下をもいやしまず一切・人をば用いずして一切經の中に法華經を持たん人をば一切の人の中に吉人なりと仏は説給へり吉法とは此の法華經を最為第一の法と説かれたり、已説の經の中にも今説の經の中にも当説の經の中にも此の經第一と見えて候へば吉法なり、禪宗・真言宗等の經法は第二・第三なり殊に取り分けて申せば真言の法は第七重の劣なり、然るに日本国には第二・第三・乃至・第七重の劣の法をもつて御祈☆あれども末だ其の証拠をみず、最上第一の妙法をもつて御祈☆あるべきか、是を正直捨方便・但説無上道・唯此一事実と云へり誰か疑をなすべきや。

問うて云く無智の人來りて生死を離るべき道を問はん時は何れの經の意をか説くべき仏如何が教へ給へるや、答えて云く法華經を説くべきなり所以に法師品に云く若し人有つて何等の衆生か未來世に於て作仏することを得べきと問わば応に示すべし、是の諸人等・未來世に於て必ず作仏することを得ん」と云云、安樂行品に云く難問する所有らば小乗の法を以て答えず但大乘を以て而も爲に解説せよ」云云、此等の文の心は何なる衆生か

仏になるべきと問わば法華經を受持し奉らん人必ず仏になるべしと答うべきなり是れ仏の御本意なり、之に付て不審あり衆生の根性区にして念仏を聞かんと願ふ人もあり法華經を聞かんと願ふ人もあり、念仏を聞かんと願ふ人に法華經を説いて聞かせんは何の得益かあるべき、又念仏を聞かんと願ふ人が爲に請じたらん時にも強て法華經を説くべき

か、仏の說法せつぽうも機きに随したがいて得益とくやく有るをこそ本意ほんいとし給たまうらんと不審ふしんする人あらば云うべし、元より末法まつぽうの世には無智むちの人に機きに叶ひ叶はざるを顧かえりみず但強しいて法華經ほけきようの五字ごじの名号みょうごうを説いて持たすべきなり、其の故そのゆえは釈迦しやか・佛ぶつ・音不輕菩薩ふぎようぼさつと云はれて法華經ほけきようを弘ひろめ給たまいしには男女なんによ・尼ほつし・法師ほふしがおしなべて用ひざりき、或あるは罵ののしられ毀そしられ、或あるは打うれ追はれ一しなならず、或あるは怨あだまれ嫉そねまれ給たまいしかども少しもこりもなくして強しいて法華經ほけきようを説とき給たまいし故ゆえに

今の釈迦しやか仏ぶつとなり給たまいしなり、不輕菩薩ふぎようぼさつを罵ののしまいらせし人は口もゆ
がまず打ち奉たてまつりしかいなもすくまず、付法藏ふほうぞうの師子尊ししそん者じゃも外道げどうに殺さ
れぬ、又法道三藏ほうどうさんざうも火印かなやきを面かおにあてられて江南に流され給たまいしぞかし、
まして末法まつぽうにかひなき僧そうの法華經ほけきようを弘ひろめんにはかかる難なんあるべしと
經文きようもんに正まさしく見えたり、されば人是用これひず機きに叶あはずと云へども強しい
て法華經ほけきようの五字ごじの題名だいめいを聞かすべきなり、是これならでは仏になる道はなき
が故ゆゑなり、又或人ある不審ふしんして
云く、機きに叶はざる法華經ほけきようを強しいて説といて謗ぼうぜさせて・惡道あくどうに人を墮ださ
んよりは、機きに叶へる念仏ねんぶつを説といて・発心ほっしんせしむべし、利益りやくもなく謗ぼうぜさ
せて返つて地獄じごくに墮ださんは法華經ほけきようの行者ぎやうじやにもあらず邪見じやけんの人にてこそ
有あるらめと不審ふしんせば、云うべし經文きようもんには何体にもあれ末法まつぽうには強しいて
法華經ほけきようを説くべしと仏の説とき給たまへるをばさていかが心うべく候や、

釈迦仏・不輕菩薩・天台・妙樂・伝教等はさて邪見の人外道にて・おは
しまし候べきか、又惡道にも墮ち

ず三界の生を離れたる二乗と云う者をば仏の・の給はく設ひ犬野干の
心をば発すとも二乗の心をもつべからず五逆・十惡を作りて地獄には
墮つとも二乗の心をば・もつべからずなんどと禁められしぞかし、惡道
におちざる程の利益は争でか有るべきなれども其れをば仏の御本意と
も思し食さず地獄には墮つるとも仏になる法華經を耳にふれぬれば
是を種として必ず仏になるなり、されば天台・妙樂も此の心を以て
強いて法華經を説くべしとは釈し給へり

譬えば、人の地に依りて倒れたる者の返つて地をおさへて起が如し、
地獄には墮つれども疾く浮んで仏になるなり、当世の人・何となくとも
法華經に背く失に依りて地獄に墮ちん事疑いなき故に、とてもかくて

も法華經ほけきようを強しいて説とき聞きこふべし、信しんぜん人は仏になるべし、謗ぼうぜん者は毒鼓どくこの縁となつて仏になるべきなり、何いかにとしても仏の

種ほけきようは法華經より外になきなり、權教ごんきようをもつて仏になる由よしだにあらば、

なにしにか仏は強しいて法華經を説といて謗ぼうずるも信しんずるも利益りやくあるべしと

説とき我が不愛身命ふあいしんみようとは仰おほせらるべきや、よくよく此等これらを道心どうしんまします人

人は御心得ごころえあるべきなり。

問うて云く無智の人も法華經を信じたらば即身成仏すべきか、又
何れの淨土に往生すべきぞや、答えて云く法華經を持つにおいては深
く法華經の心を知り止觀の坐禪をし一念三千・十境・十乘の觀法をこ
らさん人は實に即身成仏し解を開く事も・あるべし、其の外に法華經
の心をもしらず無智にしてひら信心の人は淨土に必ず生べしと見えた
り、されば生十方仏前と説き・或は即往安樂世界と説きき、是の
法華經を信ずる者の往生すと云う明文なり、
之に付いて不審あり其の故は我が身は一にして十方の仏前に生るべし
と云う事心得られず、何れにてもあれ一方に限るべし正に何れの方を
か信じて往生すべきや、答えて云く一方にさだめずして十方と説くは
最もいはれあるなり、所以に法華經を信ずる人の一期終る時には十方
世界の中に法華經を説かん仏のみもとに生るべきなり、余の華嚴・阿含

ほうとう ほうとう
・方等・般若經を説く浄土へは生るべからず、浄土十方に多くして
しょうもん
声聞の法を説く浄土もあり辟支仏

の法を説く浄土もあり・或は菩薩の法を説く浄土もあり、法華經を信
ずる者は此等の浄土には一向生れずして法華經を説き給う浄土へ直ち
おうじよう
に往生して座席に列りて法華經を聴聞してやがてに仏になるべきな
り、然るに今世にして法華經は機に叶はずと云いうとめて西方浄土に
ほけきよう
て法華經をさとるべしと云はん者は阿彌陀の浄土にても法華經
をさとるべからず十方の浄土にも生るべからず、法華經に背く咎重き
が故に永く地獄に墮つべしと見えたり、其人命終入阿鼻獄と云へる是な
り。

問うて云く即往安樂世界・阿彌陀仏と云云、此の文の心は法華經を
じゆじ
受持し奉らん女人は阿彌陀仏の浄土に生るべしと説き給えり念仏を

申もうしても阿あ弥み陀だの淨じよう土どに生なるべしと云いふ、淨じよう土ど既すでに同おなじ念ねん仏ぶつも法ほけ華き經きやう
も等ひとしと心こころえ候さうべきか如いかん何なん、答こたえて云いく觀かん經きやうは權ごん教きやうなり法ほけ華き經きやうは実じつ教きやう
なり全ぜんく等とうしかるべからず其そのの故ゆゑは仏ぶつ世せいに出いでさせ給たまひて四十よんじゅう余よ年ねん
の間の多おほくくの法ほふを説とき給たまひしかども二に乘じやうと惡あく人にんと女にょ人にんとをば簡かんひ・はて
られて成じやう仏ぶつすべしとは一言ひとことも仰おほせられざりしに此このの經きやうにこそ敗そ種しゆの
二に乘じやうも三さん逆ぎやくの調ちやう達だつも五ご障しやうの女にょ人にんも仏ぶつになるとは説とき給たまひ候さうつれ、其そのの
旨むね經きやう文ぶんに見みえた

り、華嚴經には、女人は地獄の使なり仏の種子を断ず外面は菩薩に
似て内心は夜叉の如し」と云へり、銀色女經には三世の諸仏の眼は抜
て大地に落つるとも法界の女人は永く仏になるべからずと見えたり、又
經に云く、女人は大鬼神なり能く一切の人を喰う」と、竜樹菩薩の
大論には一度女人を見れば永く地獄の業を結ぶと見えたり。さ
れば実にてやありけん善導和尚は謗法なれども女人をみずして一期生
と云はれたり、又業平が歌にも葎をいて、あれたるやどのうれたきは、
かりにも鬼の・すだくなりけりと云うも女人をば鬼とよめるにこそ
侍れ、又女人には五障三従と云う事有るが故に罪深しと見えたり、
五障とは一には梵天王・二には帝釈・三には魔王・四には転輪聖王・五
には仏にならずと見えたり、又三従とは女人は幼き時は親に従いて心
に任せず、人となりては男に従いて

心にまかせず、年よりぬれば子に従いて心にまかせず加様に幼き時より
老耄ろうもうに至るまで三人に従て心にまかせず思ふ事をもいはず見たき事を
もみず聴問したき事をもきかず是を三従とは説くなり、されば榮啓期
が三樂を立てたるにも女人の身と生れざるを一の樂みといへり、加様に
内典・外典にも嫌はれたる女人の身なれども此の經を

読まねどもかかねども身と口と意とにうけ持ちて殊に口に南無
妙法蓮華經と唱へ奉る女人は在世の竜女・☆曇弥・耶輸陀羅女の如く
にやすやすと仏になるべしと云う經文なり、又安樂世界と云うは一切
の淨土をば皆安樂と説くなり、又阿弥陀と云うも觀經の阿弥陀には
あらず、所以に觀經の阿弥陀仏は法藏比丘の阿弥陀・四十八願の主十
劫成道の仏なり、法華經にも迹門の阿弥陀は大通智勝仏の十六王子
の中の第九の阿弥陀にて法華經大願の主の仏なり、本門の阿弥陀は

釈迦分身しやかふんじんの阿弥陀あみたなり随したがつて釈しやくにも 須すべく更からに觀經等かんきやうを指さすべからざるなり」と釈しやくし給たまえり。

問いうて云いく經きやうに難解難入なんげなんにゅうと云いへり世間せけんの人・此この文ぶんを引ひいて法華經ほけきやうは機きに叶あはずと申もうし候こうは道理どうりと覺おほえ候こうは如何いかん、答こたえて云いく謂いれなき事ことなり其そのの故ゆゑは此この經きやうを能よも心こころえぬ人の云いう事ことなり、法華ほつげより已前いぜんの經きやうは解さとり難かたく

入り難しがた法華ほっけの座に來りては解り易く入り易しと云う事なり、されば
妙樂みょうらく大師だいしの御釈いわに云く法華ほっけ已前いぜんは不了義ふりょうぎなるが故ゆえに故ゆえに難解なんと云
う即すなわち今の教こには咸ことごとく皆實みなに入るを指す故ゆえに易知えきちと云う「文、此の文
の心こころは法華ほっけより已前いぜん經にては機きつたなくして解り難く入り難し、今の經
に來りては機き賢かしこく成りて解り易く入り易しと釈しやくし給たまへ
り、其その上難解なんげなんにゆう難入なんにゆうと説かれたる經が機きに叶はずば先念ねんぶつ仏を捨てさせ
給たまうべきなり、其そのの故ゆえは雙觀經そうかんきように難がたきが中の難がたき此なんの難なんに過すぎたるは
無し」と説とき阿彌陀經あみだには難信なんしんの法と云へり、文の心は此の經を受け持
たん事は難がたきが中の難がたきなり此これに過すぎたる難がたきはなし難信なんしんの法なり
と見えたり。

問いうて云く經文きようもんに四十余年よんじゅうふねん未だ眞實しんじつを顯あらわさず」と云い、又無量むりよう
無辺むへん不可思議ふかしぎ・阿僧祇劫あそぎこうを過すくるとも終ついに無上菩提むじょうぼだいを成じようずることを得

じ」と云へり、此の文は何体の事にて候や、答えて云く此の文の心は
釈迦仏・一期五十年の説法の中に始めの華嚴經にも眞實をとかず中の
方等・般若にも眞實をとかず、此の故に禪宗・念仏・戒等を行ずる人
は無量無辺劫をば過ぐとも仏にならじと云う文なり、仏四十二年の歳
月を経て後・法華經を説き給ふ文には世尊の法は久くして後に要らず
當に眞實を説き給うべし」と仰せられしかば、舍利弗等の千二百の羅漢
・万二千の声聞・弥勒等の八万人の菩薩・梵王・帝釈等の万億の天人・
阿闍世王等の無量無辺の国王・仏の御言を領解する文に
は「我等昔より來このかたしばしば數世尊の説を聞きたてまつるに未だ曾つて
是くの如き深妙の上法を聞かず」と云つて、我等・仏に離れ奉らずして
四十二年若干の説法を聴聞しつれども・いまだ是くの如き貴き法華經
をばきかずと云へる、此等の明文をば・いかが心えて世間の人は法華經

と余經よきようと等しく思ひ剎あまつさき機きに叶はねば闇の夜の錦・こそぞ

の曆れきなんど云ひて、適たま持もちつ人を見ては賤いやみ輕かろしめ惡にくみ嫉ねたみ口をすくめ

なんどする是これ併しかししながほうほうほうら謗ほう法ほうなり争いかでか往生おうじようじようぶつ成ぶつ仏ぶつも・あるべきや、必ず無間むげん

地獄じごくに墮おつべき者と見えたり。

問いうて云いく凡おそふつ法ほうを能よく心得こころえてぶつ仏い意いに叶こへる人ひとをば世間せけんに是これを重

んじ一切いっさい是これを貴たがむ、然しかるに当世とうせ法華經ほけきようを持もつ

ひとびと
人人をば世こそつて惡み嫉み輕しめ賤み・或は所を追ひ出し、或は
流罪し供養をなすまでは思いもよらず怨敵の様ににくまるるは、いかさ
まにも心わろくして仏意にもかなはず・ひがさまに法を心得たるなるべ
し、經文には如何が説きたるや、答えて云く經文の如くならば末法の
法華經の行者は人に惡まるる程に持つを實の大乗の僧と
す、又經を弘めて人を利益する法師なり、人に吉と思はれ人の心に
隨いて貴しと思はれん僧をば法華經のかたき世間の惡知識なりと思ふ
べし、此の人を經文には獵師の目を細めにして鹿をねらひ猫の爪を隠し
て鼠をねらふが如くにして在家の俗男・俗女の檀那をへつらい・いつわり
・たばらかすべしと説き給へり、其の上勸持品には法華經
の敵人三類を挙げられたるに、一には在家の俗男・俗女なり此の俗男・
俗女は法華經の行者を憎み罵り打ちはりきり殺し所を追ひ出だし・或

は上さんそうへ讒ざん奏そうして遠流おんるしなさけなくあだむ者なり、二には出家しゅつけの人なり此
の人は慢心まんしん高くして内心ないしんには物も知らざれども智者ちしやげにもてなして
世間せけんの人に学匠がくしやうと思はれて法華經ほけきやうの行者ぎやうじやを見ては怨あだみ
嫉ねたみ輕かうしめ、賤いやしいぬかんみ犬野干いぬかんよりも・わろきようを人に云いいうとめ法華經ほけきやうを
ば我、一人心得こころえたりと思う者なり、三には阿練若あれんにやの僧なり此の僧は
極めて貴とうとき相を形に顯あらわし三衣一鉢さんいいちぼつを帶たいして山林さんりんの閑しずかなる所に籠こもり居
て在世ざいせの羅漢らかんの如ごとく諸人しよにんに貴たかまれ仏ぶつの如ごとく万人ばんにんに仰あおがれて法華經ほけきやうを説
の如ごとくに讀よみみ持ち奉たてまつらん僧を見ては憎にくみ嫉にくんで云く大愚癡ぐち
の者大邪見じやけんの者なり總くわて慈悲じひなき者・外道げどうの法を説くなんと云わん、
上一人かみいちにんより仰あおいで信を取らせ給たまはば其その已下いかばんにん万人も仏ぶつの如ごとくに供養くきやうを
なすべし、法華經ほけきやうを説の如ごとくよみ持たん人は必ず此の三類さんるいの敵人てきじんに
怨あだまるべきなりと仏説とき給たまへり。

問うて云く仏の名号を持つ様に法華經の名号を取り分けて持つべき証拠ありや如何、答えて云く經に云く 仏諸の羅刹女に告げたまわく 善き哉善き哉汝等但能く法華の名を受持する者を擁護せん福量る可からず」と云云此の文の意は十羅刹の法華の名を持つ人を護らんと誓言を立て給うを大覺世尊讃めて言く善き哉善き哉汝等

南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと受け持たん人を守らん功德くどくいくら程ほどとも計りがた
く・めでたき功德くどくなり神妙おほなりと仰せられたる文なり、是れ我等衆生われらしゅじやう
の行住坐臥ぎやうじゆうざがに南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱ふべしと云う文なり。

凡そ妙法蓮華經みょうほうれんげきやうとは我等衆生の仏性と梵王・帝釈等の仏性と
舍利弗・目連等の仏性と文殊・弥勒等の仏性と三世の諸仏の解の妙法
と一体不二なる理を妙法蓮華經みょうほうれんげきやうと名けたるなり、故に一度
妙法蓮華經みょうほうれんげきやうと唱うれば一切の仏・一切の法・一切の菩薩・一切の声聞・
一切の梵王・帝釈・閻魔法王・日月・衆星・天神・地神・乃至・地獄・
餓鬼・畜生・修羅・人天一切衆生の心中の仏性を唯一音に喚び顯し
奉る功德・無量無辺なり、我が己心の妙法蓮華經みょうほうれんげきやうを本尊とあがめ奉り
て我が己心中の仏性・南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうとよびよばれて顯れ給う処を
仏とは云うなり、譬えば籠の中の鳥なけば空とぶ鳥のよばれて集まるが

如し、空とぶ鳥の集まれば籠の中の鳥も出でんとするが如し口に妙法
をよび奉れば我が身の仏性もよばれて必ず顕れ給ふ、梵王・帝釈の
仏性はよばれて我等を守り給ふ、仏・菩薩の仏性はよばれて悦び給ふ、
されば若し暫くも持つ者は我れ則ち歡喜す諸仏も亦然なり」と説き
給うは此の心なり、されば三世の諸仏も妙法蓮華經の五字を以て仏に
成り給いしなり三世の諸仏の出世の本懷・一切衆生・皆成仏道の妙法
と云うは是なり。是等の趣きを能く能く心得て仏になる道には我慢
偏執の心なく南無妙法蓮華經と唱へ奉るべき者なり。日蓮在御判

◆七七

三世諸仏總勘文教相廃立

弘安二年十月

五十八歳御作日蓮之を撰す

558P

夫れ一代聖教とは総べて五十年の説教なり是を一切経とは言うなり、此れを分ちて二と為す一には化他・二には自行なり、一には化他の経とは法華経より前の四十二年の間説き給える諸の経教なり此れをば權教と云い亦は方便と名く、此れは四教の中には三藏教・通教・別教の三教なり五時の中には華嚴・阿含・方等・般若なり法華より前の四時の経教なり、又十界の中には前の九法界なり又夢と寤との中には夢中の善惡なり又夢をば權と云い寤をば実と云うなり、是の故に夢は仮に有つて体性無し故に名けて權と云

うなり、寤うつつは常住じょうじゅうにして不變ふへんの心の体なるが故ゆえに此これを名けて実と
為なす、故ゆえに四十二年の諸もろもろの經教きょうきょうは生死しょうじの夢の中の善惡ぜんあくの事を説く
故ゆえに權教ごんきょうと言う夢中の衆生しゅじょうを誘引ゆういんし驚覺きやうかくして法華經ほけきやうの寤うつつと成さん
と思食おほしめしての支度方便ほうべんの經教きょうきょうなり故ゆえに權教ごんきょうと言う、斯これに由よつて
文字もんじの讀みを糾ただして心得こころうけ可きなり、故ゆえに權をば權と讀む權なる事の
手本てほんには夢を以て本と為なす又実をば実と讀む實事じつじ
の手本てほんは寤うつつなり、故ゆえに生死しょうじの夢は權にして性体無ければ權なる事の
手本てほんなり故ゆえに妄想もうそうと云う、本覺の寤うつつは實にして生滅しょうめつを離れたる心なれ
ば眞實しんじつの手本てほんなり故ゆえに実相じつそうと云う、是これを以て權實ごんじつの二字を糾ただして一代いちだい
聖教しょうきょうの化他けたの權ごんきょうと自行じぎやうの實じつとの差別さべつを知る可べきなり、故ゆえに四教しきやうの中
には前の三教と五時の中には前の四時と十法界じふほっかいの中には前の九
法界ほっかいは同じく皆夢中の善惡ぜんあくの事を説くなり故ゆえに權教ごんきょうと云う、此の

教相きやうそうをば無量義經むりやうぎきやうに四十余年よんじゅうよねん・未顕真実みけんしんじつと説とき給たまう已上みけんしんじつ、未顕真実みけんしんじつの諸經しよきやうは夢中の權教ごんきやうなり故ゆゑに釈籤しやくせんに云いく「性・殊ことなること無しと雖いえども必ず幻げんに藉よりて幻の機きと幻の感かんと幻の応おと幻の赴ふとを發おこす・能応のうおうと所化しよけと並ならびに權實ごんじつに非あらず」已上こ、此これ皆夢幻みなの中なの方便ほうべんの教きやうなり性雖無殊しよすいむしゆ

等とは夢見る心性しんしよと寤うつの時の心性とは只ただ一の心性しんしよにして總て異なること
無しと雖いへども夢の中の虚事そらごとと寤うつの時の実事じつじと二事一の心法なるを以て見
ると思うも我が心なりと云う釈しやくなり、故ゆゑに止觀しかんに云く「前の三教の
四弘・能のうも所みも泯みす」已上、四弘とは衆生しゆじやうの無辺むへんなるを度せんと誓願せいがん
し煩惱ぼんのうの無辺むへんなるを断だんせんと誓願せいがんし・法門ほうもんの無尽むじんなるを知らんと誓願せいがん
し無上むじやう菩提ぼだいを証せんと誓願せいがんす此を四弘と云う、能とは如来にやらいなり所とは
衆生しゆじやうなり此の四弘は能の仏も所
の衆生しゆじやうも前三教ぜんさんきやうは皆夢中の是非ぜひなりと釈しやくし給えるなり、然しかれば法華ほつげ
以前の四十二年の間の説教せつきやうたる諸經しよきやうは未顯みけん眞実しんじつの權教ごんきやうなり方便ほうべんな
り、法華ほつげに取寄とける可べき方便ほうべんなるが故ゆゑに眞実しんじつには非あらず、此これは仏、自みづから
四十二年の間説とき集ため給たまいて後に、今法華經ほけきやうを説かんと欲して先ず
序分じよぶんの開經くわいきやうの無量義經むりやうぎきやうの時、仏、自みづから勘文かんもんし給たまえる教相きやうさうなれば人の語ご

も

入る可べからず不審ふしんをも生す可べからず、故ゆえに玄義げんぎに云く 凡界ぶつかいを權けんと爲なし仏界ぶつかいを實じつと爲なす」已上、九法界ほっかいの權けんは四十二年せつきやうの説教せつきやうなり凡法界ぶつぽうかいの實じつは八箇年はちかねんの説・法華經ほけきやう是なり、故ゆえに法華經ほけきやうをば仏乘ぶつじやうと云う九界じゅうかいの生死しやうじは夢の理りなれば權教ごんきやうと云い凡界ぶつかいの常住じやうじやうは寤うの理りなれば實教じつきやうと云う、故ゆえに五十年ごじきやうの説教せつきやう・一代いちだいの聖教しやうきやう・一切いっさいの諸經しよきやうは化他けたの四十二年ごんきやうの權教ごんきやうと自行じきやうの八箇年はちかねんの實教じつきやうと合あして五十年ごんきやうなれば權けんと實じつとの二の文字もんじを以て鏡かに懸かけて陰無くもりなし。

故ゆえに三藏經さんざうきやうを修行しゆぎやうすること三僧祇さんそうき・百大劫だいくを歴へて終りに仏ぶつに成なりらんと思おもえば我が身みより火ひを出だして灰身入滅にゆうめつとて灰はいと成なりつて失うしなせるなり、通教つうきやうを修行しゆぎやうすること七阿僧祇あそぎ・百大劫だいくを満みてて仏ぶつに成なりらんと思おもえば前こゝの如ごとく同様に灰身入滅にゆうめつして跡形あとかたも無なく失うしなせぬるなり、別教べつきやうを修行しゆぎやう

すること二十二大阿僧祇・百千萬劫を尽くして終りに仏に成りぬと思
えば生死の夢の中の權教の成仏なれば本覺の寤の法華經の時には
別教には実仏無し夢中の果なり故に別教

の教道には実の仏無しと云うなり、別教の証道には初地に始めて一分
の無明を断じて一分の中道の理を顯し始めて之を見れば別教は隔歴
不融の教と知つて円教に移り入つて円人と成り已つて別教には留まら
ざるなり上中下三根の不同有るが故に初地・二地・三地・乃至・等覺ま
でも円人と成る故に別教の面に仏無きなり、故に有教無人

と云うなり、故に守護国界章に云く、有為の報仏は夢中の権果前二教の仏修作の三身は覺前の実仏後二教の仏なり又云く「權教の三身は未だ無常を免れず前二教の修行の仏、實教の三身は俱体俱用後の二教のなり此の釈を能く能く意得可きなり、權教は難行苦行して適仏に成りぬと思えば夢中の權の仏なれば本覺の寤の時には実仏無きなり、極果の仏無ければ有教無人なり況や教法実ならんや之を取つて修行せんは聖教に迷えるなり、此の前三教には仏に成らざる証拠を説き置き給いて末代の衆生に慧解を開かしむるなり九界の衆生は一念の無明の眠の中に於て生死の夢に溺れて本覺の寤を忘れ夢の是非に執して冥きより冥きに入る、是の故に如来は我等が生死の夢の中の入つて顛倒の衆生に同じて夢中の語を以て夢中の衆生を誘ひ夢中の善惡の差別の事を説いて漸漸に誘引し給うに、夢中の善惡の事重疊して様様

に無量無辺なれば先ず善事に付いて上中下を立つ三乗の法是なり、三

三九品なり、此くの如く説き已つて後に又上・上品の根本善を立て

上中下・三三九品の善と云う、皆悉く九界生死の夢の中の

善惡の是非なり今是をば総じて邪見外道と為す記の意、此の上に又

上・上品の善心は本覺の寤の理なれば此れを善の本と云うと説き聞か

せ給し時に夢中の善惡の悟の力を以ての故に寤の本心の実相の理を始

めて聞知せられし事なり、是の時に仏説いて言く夢と寤との二は虚事

と実事との二の事なれども心法は只一なり、眠の縁に値いぬれ

ば夢なり眠去りぬれば寤の心なり心法は只一なりと開会せらるべき

下地を造り置かれし方便なりの中道の理是の故に未だ十界互具・円融相即

を顯さざれば成仏の人無し故に三藏教より別教に至るまで四十二年

の間の八教は皆悉く方便・夢中の善惡なり、只暫く之を用いて衆生を

誘引し給う支度方便なり此の權教の中にも分分に皆悉く

方便と眞実と有りて權實の法闕けざるなり、四教一一に各四門有つて

差別有ること無し語も只同じ語なり文字も異なること無し斯れに由つ

て語に迷いて權實の差別を分別せざる時を仏法滅すと云う是の方便

の教は唯穢土に有つて総じて淨土には無きなり法華經に云く「十方の

仏土の中には唯一乘の法のみ有つて二無く亦三も無し仏の方便

の説をば除く」已上、故に知んぬ十方の仏土に無き方便の教を取つて
往生の行と爲し十方の浄土に有る一乗の法をば之を嫌いて取らずし
て成仏す可き道理有る可しや否や一代の教主釈迦如来・一切経を
説き勘文し給いて言く三世の諸仏同様に一つ語一つ心に勘文し給える
説法の儀式なれば我も是くの如く一言も違わざる説教の次第なり云
云、方便品に云く「三世の諸仏の説法の儀式の如く我も今亦是くの如
く無分別の法を説く」已上、無分別の法
とは一乗の妙法なり善惡を簡ぶこと無く草木・樹林・山河・大地にも
一微塵の中にも互に各十法界の法を具足す我が心の妙法蓮華經の
一乗は十方の浄土に周☆して關くること無し十方の浄土の依報・
正報の功德莊嚴は我が心の中に有つて片時も離るること無き三身即一
の本覺の如来にて是の外には法無し此の一法計り十方の浄土に有りて

余法あ有ること無し故ゆえに無分別法ぶんべつと云う是これなり、此の一乗・妙法いちじょう・みょうぼうの行をば取らずして全く浄土じょうどには無き方便ほうべんの教を取つて成仏じょうぶつの行と為なさんは迷まよいの中の迷まよいなり、我仏われほとけに成りて後に穢土えどに立ち還りて穢土えどの衆生しゅじょうを仏法界ぶつぽうかいに入らしめんが為ために次第しだいに誘引ゆういんして方便ほうべんの教を説くを化他けたの教とは云うなり、故ゆえに權教ごんきょうと言い又方便ほうべんとも云う化他けたの法門ほうもんの有様だいたい大略だいろくを存ぞんして斯かくの如ごとし。

二に自行じぎやうの法ことは是これ法華經八箇年ほけきやうはちかねんの説なり、是この經は寤うつの本心ほんしんを説とき給たまう唯衆生ただしゅじやうの思しい習ならわせる夢中の心地しんじなるが故ゆえに夢中の言語ごんごを借りて寤うつの本心ほんしんを訓おしる故ゆえに語ことばは夢中の言語ごんごなれども意いは寤うつの本心ほんしんを訓おしゆ法華經の文と釈しやくとの意い此この如ごとし、之これを明あめ知らずんば經の文と釈しやくの文とに必ず迷まよい可べきなり、但ただし此この化他けたの夢中の法門ほうもんも寤うつの本心ほんしんに備そなわれる徳用の法門ほうもんなれば夢中の教を取つて寤うつの心こころに撰おさむるが故ゆえに

四十二年の夢中の化他方便の法門も

妙法蓮華經の寤の心に摂まりて心の外には法無きなり此れを法華經の

開会とは云うなり、譬えば衆流を大海に納むるが如きなり仏の心法妙

・衆生の心法妙と此の二妙を取つて己心に摂むるが故に心の外に法無

きなり己心と心性と心体との三は己身の本覺の三身如来なり是を經に

説いて云く 如是相 如来 如是性 如来 如是体 如来」此れを三如是

と云う、此の三如是の本覺の如来は十方法界を身体と為し十方法界を心性^{しんしよ}と為し十方法界を相好^{そうごう}と為す是の故に我が身は本覺三身如来の身体なり、法界に周^{ほつかい}☆して一仏の徳用なれば一切の法は皆是仏法なりと説き給^{たまひ}いし時其の座席に列りし諸の四衆・八部・畜生・外道等一人も漏れず皆悉く妄想の僻目・僻思・立所に散止して本覺の寤に還^{かえ}つて皆仏道を成ず、仏は寤の人の如く衆生は夢見る人の如し故に生死の虚夢を醒^{さま}して本覺の寤に還るを即身成仏とも平等大慧とも無分別法とも皆成仏道とも云う只一つの法門なり、十方の仏土は区に分れたりと雖も通じて法は一乘なり方便無きが故に無分別法なり、十界の衆生は品品に異りと雖も実相の理は一なるが故に無分別なり百界千如・三千世間の法門殊なりと雖も十界互具するが故に無分別なり、夢と寤と虚と実と各別異なりと雖も一心の中の法なるが

故に無分別なり、過去と未来と現在とは三なりと雖も一念の心中の理なれば無分別なり、

一切經の語は夢中の語とは譬えば扇と樹との如し法華經の寤の心を

顯す言とは譬えば月と風との如し、故に本覺の寤の心の月輪の光は

無明の闇を照し真相般若の智慧の風は妄想の塵を払う故に夢の語の扇

と樹とを以て寤の心の月と風とを知らしむ是の故に夢の余波を散じて

寤の本心に歸せしむるなり、故に止觀に云く月・重山に隱る

れば扇を挙げて之に類し風大虚に息みぬれば樹を動かして之を訓ゆる

が如し」文、弘決に云く眞常性の月・煩惱の山に隱る煩惱一に非ず

故に名けて重と為す円音教の風は化を息めて寂に歸す寂理無礙なるこ

と猶大虚の如し

四依の弘教は扇と樹との如し乃至月と風とを知らしむるなり已上、夢

中の煩惱の雲・重 置せること山の如く其の数八万四千の塵勞にて心性
本覺の月輪を隠す扇と樹との如くなる經論の文字言語の教を以て月
と風との如くなる本覺の理を覺知せしむる聖教なり故に文と語とは
扇と樹との如し「文、上釈は一往の釈として実義に非ざるなり
月の如くなる妙法の心性の月輪と風の如くなる我が心の般若の慧解と
を訓え知らしむるを妙法蓮華經と名く、故に釈籤に云く 声色の近名
を尋ねて無相の極理に至る」と已上、声色の近名とは扇と樹との如くな
る夢中の一切經論の言説なり無相の極理とは月と風との如くなる寤の
我が身の心性の寂光の極樂なり、此の極樂とは十方法界の正報の
有情と十方法界の依報の国土と和合して一体・三身即一なり、四土不
二にして法身の一仏なり十界を身と為すは法身なり十界を心と為す
は報身なり十界を形と為すは応身なり十界の外に仏無し仏の外に

十界無くして依正

不二なり身土不二なり一仏の身体なるを以て寂光土と云う是の故に
無相の極理とは云うなり、生滅無常の相を離れたるが故に無相と云う
なり法性の淵底玄宗の極地なり故に極理と云う、此の無相の極理なる
寂光の極樂は一切

有情の心性の中に有つて清淨無漏なり之を名けて妙法の心蓮台とは
云うなり是の故に心外無別法と云う此れを一切法は皆是仏法なりと
通達解了すとは云うなり、生と死と二つの理は生死の夢の理なり
妄想なり顛倒なり本覺の寤を以て我が心性を糾せば生ず可き始めも
無きが故に死す可き終りも無し既に生死を離れたる心法に非ずや、
劫火にも焼けず水災にも朽ちず劒刀にも切られず弓箭にも射られず
芥子の中に入るれども芥子も広からず心法も縮まらず虚空の中に満つ

れども虚空も広からず心法も狭からず善に背くを惡と云い惡に背くを善と云う、故に心の外に善無く惡無し此の善と惡とを離るるを無記と云うなり、善惡無記☆此の外には心無く心の外には法無きなり故に善惡も淨穢も凡夫・聖人も天地も大小も東西も南北も四維も上下も言語道斷し心行所滅す心に分別して思い言い顯す言語なれば心の外には分別も無分別も無し、言と云うは心の思いを響かして声を顯すを云うなり凡夫は我が心に迷うて知らず覺らざるなり、仏は之を悟り顯わして神通と名くるなり神通とは神の一切の法に通じて礙無きなり、此の自在の神通は一切の有情の心にて有るなり故に狐狸も分分に通を現すること皆・心の神の分分の悟なり此の心の一法より国土世間も出来る事なり、一代聖教とは此の事を説きたるなり此れを八万四千の法藏とは云うなり是れ皆悉く一人の身中の法門にて

有^あるなり、然^{しか}れば八^{はち}万^{まん}四^し千^{せん}の法^{ほう}蔵^{ぞう}は我^わ身^{がみ}一^{ひと}人^{にん}の日記^{にき}文^{もん}書^{しょ}なり、此^{この}の
八^{はち}万^{まん}法^{ほう}蔵^{ぞう}を我^わが心^{しん}中^{ちゆう}に孕^{はら}み持^もち懷^{いだ}き持^もちたり我^わが身^み中^{ちゆう}の心^{しん}を以^{もつ}て仏^{ぶつ}
と法^{ほう}と淨^{じやう}土^どとを我^わが身^みより外^{がい}に思^{おも}ひ願^{ねが}ひ

求むるを迷まよいとは云うなり此の心が善惡ぜんあくの縁えんに値あうて善惡ぜんあくの法をば造つくり出せるなり、華嚴經けこんきやうに云く「心は工たくみなる画師えしの種種しゆじゆの五陰ごおんを造るが如ごとく一切世間いっさいせけんの中に法として造らざること無し心の如ごとく仏も亦爾またしかなり仏の如ごとく衆生しゆじやうも然しかなり三界唯さんがいただ一心いっしんなり心の外べちに別の法ほつ無し心しん及および衆生しゆじやう是の三差別さんさべつ無し」已上、無量義經むりやうぎきやうに云く無相むさう・不相ふさうの一法より無量義むりやうぎを出生しゆつしやうす」已上、無相むさう・不相ふさうの一法とは一切衆生いっさいしゆじやうの一念いちねんの心是これなり、文句もんくに釈しゃくして云く生滅無常しやうめつむじやうの相無むきが故ゆゑに無相むさうと云うなり二乗にじやうの有餘・無余の二つの涅槃ねはんの相さうを離るが故ゆゑに不相ふさうと云うなり「云云、心の不思議ふしぎを以て經論きやうろんの詮要せんやうと為すなり、此の心を悟り知るを名けて如來にやらいと云う之これを悟り知つて後は十界じゆつかいは我が身なり我が心なり我が形かたちなり本覺ほんがくの如來にやらいは我が身心しんしんなるが故なり之これを知らざる時を名けて無明むみやうと為す無明むみやうは明あきらかなること無しと讀むなり、我が心

の有様を明かに覺らざるなり、之を悟り知る時を名けて法性と云う、
故に無明と法性とは一心の異名なり、名と言とは二なりと雖も心は只
一つ心なり斯れに由つて無明をば断ず可からざるなり夢の

心の無明なるを断ぜば寤の心を失う可きが故に總じて円教の意は
一毫の惑をも断ぜず故に一切の法は皆是れ仏法なりと云うなり、
法華經に云く如是相本覺の応身如来如是性本覺の報身如来如是体本覺の法身
如来此の三如是

より後の七如是出生して合して十如是と成れるなり、此の十如是は十
法界なり、此の十法界は一人の心より出で八万四千の法門と成るな
り、一人を手本として一切衆生平等なること是くの如し、三世の諸仏
の總勘文にして御判慥かに印たる正本の文書なり仏の御判とは実相の
一印なり印とは判の異名なり、余の一切の經には実相の印無け

れば正本の文書に非ず全く実の仏無し実の仏無きが故に夢中の文書なり
淨土に無きが故なり、十法界は十なれども十如是は一なり譬えば水
中の月は無量なりと雖も虚空の月は一なるが如し、九法界の十如是は
夢中の十如是なるが故に水中の月の如し仏法界の十如是は本覺の寤の
十如是なれば虚空の月の如し、是の故に仏界の一つの十如是顯れぬれば
九法界の十如是の水中の月の如きも一も闕減無く同時に皆顯れて体と
用と一具にして一体の仏と

成る、十法界を互に具足し平等なる十界の衆生なれば虚空の本月も
水中の末月も一人の身中に具足して闕くること無し故に十如是は本末
究竟して等しく差別無し、本とは衆生の十如是なり末とは諸仏の
十如是なり諸仏は衆生の一念の心より顕れ給えば衆生は是れ本なり
諸仏は是れ末なり、然るを經に云く 今・此の三界は皆是我が有なり
其の中の衆生は悉く是吾が子なり」と已上、仏成道の後に化他の為の
故に迹の成道を唱えて生死の夢中にして本覺
の寤を説き給うなり、智慧を父に譬え愚癡を子に譬えて是くのごと
説き給えるなり、衆生は本覺の十如是なりと雖も一念の無明眠りの
如く心を覆うて生死の夢に入つて本覺の理を忘れ髮筋を切る程に過去
・現在・未來の三世の虚夢を見るなり、仏は寤の人の如くなれば生死の
夢に入つて衆生を驚かし給える智慧は夢の中にて父母の如く

夢の中なる我等は子息の如くなり、此の道理を以て悉是吾子と言たまい給うなり、此の理を思い解けば諸仏と我等とは本の故にも父子なり末ゆえの故にも父子なり父子の天性は本末是れ同じ、斯れに由つて己心とぶっしん仏心とは異ならずと観ずるが故に生死の夢を覺まして本覺の寤に還えそくしんじようぶつるを即身成仏と云うなり、即身成仏は今・我が身の上の天性・
地体なり煩も無く障りも無き衆生の運命なり果報なり冥加なり、ちたい わずらい なく さわ しじじよう夫れ以れば夢の時の心を迷いに譬え寤の時の心を悟りに譬う之を以てそ おもんみれば まよい たと うつつ一代聖教を覺悟するに跡形も無き虚夢を見て心を苦しめ汗水と成ついちだい いしきやう かくこ あとかた こむて驚きぬれば我身も家も臥所も一所にて異らず夢の虚と寤の実とのおどろ わがみ ふしど二事を目にも見・心にも思えども所は只一所なり身も只一身にて二のただ虚と実との事有り之を以て知んぬ可し、九界の生死の夢見る我が心もぶっかいじようじゅう うつつ仏界常住の寤の心も異ならず九界生死しやうじ

の夢見る所が仏界常住ぶつかいじょうじゅうの寤うつの所にて変らず心法も替かわらず在所ざいしよも
差たがわざれども夢は皆虚事みなそらごとなり寤うつは皆実事みなじつじなり止觀しかんに云く晋莊周そうしゅうと
云うもの有り夢に胡蝶こちょうと成つて一百年を経たり苦は多く樂は少く汗水あせみず
と成つて驚おどろきぬれば胡蝶こちょうにも成らず百年をも経へず苦も無なくく樂も無なくく
皆虚事みなそらごとなり皆妄想みなもうそうなり」取意已上、弘決ぐけつに云く無明むみょうは夢の蝶ちようの如ごとく三千は
百年ごとの如いちねんし一念実無なきは猶蝶なに非あらざるが如ごとく三千も亦無なくきこと年を
積あむに非あらるが如ごとし」已上、此の釈は即身そくしん

成仏じやうぶつの証拠しやうこなり夢ちゆうに蝶てうと成る時しも莊周しやうしゆうは異ならず寤うつつに蝶てうと成らず
と思おもう時ときも別べつの莊周しやうしゆう無なし、我われが身みを生しやうじ死じの凡夫ぼんぷなりと思おもう時ときは夢ちゆうに
蝶てうと成るが如ごとく僻目ひがめ僻思ひがおもなり、我われが身みは本覺ほんがくの如來にやらいなりと思おもう時ときは
本ほんの莊周しやうしゆうなるが如ごとく即身成仏そくしんじやうぶつなり、蝶てうの身みを以もつて成仏じやうぶつすと云いうに
非あらざるなり蝶てうと思おもうは虚事そらごとなれば成仏じやうぶつの言ことは無なし沙汰さたの外ほかの事ことなり、
無明むみやうは夢ちゆうの蝶てうの如ごとく判わぜれば我等われらが僻思ひがおもは猶なほ昨日きのうの夢ちゆうの如ごとく性体しやうたい
無なき妄想もうそうなり誰たれの人ひとか虚夢こむの生しやうじ死じを信受しんじゆし
て疑うたがい常じやう住じゆう涅槃ねはんの仏性ぶつしやうに生なぜんや、止觀しかんに云いく無明むみやうの癡惑ちわく本ほんより
是これ法性ほふしやうなり癡迷ちめいを以もつての故ゆゑに法性ほふしやう變へんじて無明むみやうと作さり諸しよの顛倒てんたうの善ぜん・
不善ふぜん等らを起おこす寒來かんらいりて水みづを結むすべば變へんじて堅冰けんひやうと作なるが如ごとく又眠來めんらいりて
心こころを變かへれば種種しゆじゆの夢あ有あるが如ごとく今当いままさに諸しよの顛倒てんたうは即すなわち是法性ほふしやうなり
一ひとならず異ちがならずと体ていすべし、顛倒てんたう起滅きめつすること旋火輪せんかりんの

如しと雖も顛倒の起滅を信ぜずして唯此の心但是れ法性なりと信ず、
起は是れ法性の起・滅は是れ法性の滅なり其れを体するに実には起滅
せざるを妄りに起滅すと謂えり只妄想を指すに悉く是れ法性なり、
法性を以て法性に繋げ法性を以て法性を念ず常に是れ法性なり法性
ならざる時無し」已上、是くの如く法性ならざる時の隙も無き理の法性
に夢の蝶の如く無明に於て実有の思を生じて之に迷うなり、止觀の九
に云く響えば眠の法・心を覆う

て一念の中に無量世の事を夢みるが如し乃至寂滅真如に何の次位か有
らん、乃至一切衆生即大涅槃なり復滅す可からず何の次位・高下・
大小有らんや、不生不生にして不可説なれども因縁有るが故に亦説く
ことを得可し十因縁の法生の為に因と作る虚空に画き方便して樹を
種るが如し一切の位を説くのみ」已上、十法界の依報・正報は法身の仏

・一体・三身さんじんの徳なりと知つて一切いっさいの法は皆是れ仏法ぶつぽうなりと通達つうだつし解了げりようする是これを名字即みょうじそくと為す名字即みょうじそくの位より即身成仏そくしんじょうぶつす故に円頓えんどんの教には次位しだいの次第無し・故ゆえに玄義げんぎに云く 耒代まっだいの学者がくしゃ多く經論きょうろんの方便ほうべんの断伏だんぶくを執しゅうして

靜闢じょうはくす水の性の冷かなるが如ごときも飲まずんば安んぞ知らん」已上、天台てんだいの判いはに云く 次位じいの綱目あみは仁王にんのう・瓔珞ようらくに依り断伏だんぶくの高下こうげは大品智論だいほんちろんに依よる」已上、仁王にんのう・瓔珞ようらく・大品だいほん・大智度論だいちどろん是の經論きょうろんは皆法華みなほつけ已前いぜんの八教はつきやうの經論きょうろんなり、

權教ごんきょうの行ぎやうは無量劫むりやうこつを経て昇進しやうしんする次位しだいなれば位の次第しだいを説しけり今
法華ほつげは八教はつきやうに超こえたる円えんなれば速疾頓成そくしつとんじやうにして心しんと仏ぶつと衆生しゆじやうと此この
三さんは我が一念いちねんの心中しんちゆうに摂おさめて心しんの外がに無しと觀かんずれば下根げこんの行者ぎやうじやす
ら尚なほ一生いしやうの中に妙覺みやうかくの位ゐに入る・と多おほと相即そうそくすれば一位いっさいに一切いっさいの位
皆みな是これ具足ぐそくせり故ゆゑに一生いしやうに入るなり、下根げこんすら是かくの如ごとし況いはんやや中根ちゆうこんの
者ものをや何いかに況いはんやや上根じやうこんをや実相じつそうの外がに更さらに別べつの法ほふ無し実相じつそうには次第しだい無
き故ゆゑに位ゐ無し、總いっだいじて一代しやうきやうの聖教しやうきやうは一人ひとりの
法ほふなれば我が身みの本体ほんたいを能よく能よく知る可べし之これを悟さとるを仏ぶつと云いい之これに
迷まようは衆生しゆじやうなり此これは華嚴經けこんきやうの文ぶんの意いなり、弘決くけつの六むくに云いく 此この身
の中ちゆうに具つさに天地てんちに倣ならうことを知る頭かうべの円まじかかなるは天かたどに象かたどり足あしの方かたど
なるは地ちに象かたどると知り身みの内うちの空種うつろなるは即すなわち是これ虚空こくうなり腹はらの温ぬか
なるは春夏しゆんかに法のつとり背そむの剛きやうきは秋冬しゆうとうに法のつとり四体しだいは四時しじに法のつとり大

節の十二は十二月に法とり小節の三百六十は三百六十日に法とり、鼻の息の出入は山沢溪谷の中の風に法

とり口の息の出入は虚空の中の風に法とり眼は日月に法とり開閉は昼夜に法とり髪は星辰に法とり眉は北斗に法とり脈は江河に法とり骨は玉石に法とり皮肉は地土に法とり毛は叢林に法とり、五臓は天に在つては五星に法とり地に在つては五岳に法とり陰陽に在つては五行に法とり世に在つては五常に法とり内に在つては五神に法とり行を修するには五徳に法とり罪を治むるには五刑に法とる謂く墨・☆・☆・宮・大辟たいへき 此の五刑は人を操縦に之を傷ましむ 其の數三千の罰有り此を五刑と云う

首領には五官と為す五官は下の第八の巻に博物誌を引くが如し謂く荀蒯等なり、天に昇つては五雲と日い化して五竜と為る、心を朱雀と為し腎を玄武と為し肝を青竜と為し肺を白虎と為し脾を勾陳こうちんと為す」

又云く『五音・五明・六藝・皆此れより起る亦復当に内治の法を識るべし覺心内に大王と為つては百重の内に居り出でては則ち五官に侍衛せ為る、肺をば司馬と為し肝をば司徒と為し脾をば司空と為し四支をば民子と為し、左をば司命と

為し右をば司録と為し人命を主司す、乃至臍をば太一君等と為すと禪門の中に広く其の相を明す」已上、人身の本体委く検すれば是くの如し、然るに此の金剛不壞の身を以て生滅無常の身なりと思ふ僻思は譬えば莊周が夢の

螺ちようの如ごとしと釈しやくし給たまえるなり、五行ごぎやうとは地水すいか火風くわふう空くうなり五大種ごだいしゆとも五おん蘊おんとも五戒ごかいとも五常ごじやうとも五方ごほうとも五智ごちとも五時ごじとも云うう、只ただ一物いつぶつ・
經經きやうきやうの異説いせつなり内典ないてん・外典げてん名目なみよくの異名いみやうなり、今經こんきやうに之これを開ひらいて一切いっさい・
衆生しゆじやうの心中しんちゆうの五仏性ぶつじやう五智ごちの如來にやらいの種子しゆしと説せつけり是則すなわち妙法蓮華經みやうほうれんげきやうの
五字ごじなり、此この五字ごじを以て人身じんしんの體を造るなり本有常住ほんぬじやうじゆうなり本覺ほんがくの
如來にやらいなり是これを十如じゆのぜ是と云いう此こを唯仏ゆいぶつ与よ仏ぶつ・乃能究尽ないのうくじんと云いう、不退ふたいの
菩薩ぼさつと極果ごくかうの二乗にじやうと少分せうぶんも知らざる法門ほうもんな
り然しかるを円頓えんどんの凡夫ぼんぷは初心しんしんより之これを知る故ゆゑに即身成仏そくしんじやうぶつするなり金剛こんごう
不壞ふゑの體なり、是これを以て明あきらかに知んぬ可べし天崩てんぷうれば我われが身みも崩くずれる可べし
地裂ぢれつけば我われが身みも裂ひく可べし地水火風滅亡すいかせば我われが身みも亦滅亡またもうすべし、
然しかるに此この五大種ごだいしゆは過去かこ・現在げんざい・未來みらいの三世さんぜは替かわると雖いえども五大種ごだいしゆは
替かわること無し、正法しやうほうと像法やうほうと末法まつほうとの三時さんじ殊ことなりと雖いえども五大種ごだいしゆは是これ

一にして盛衰せいすい転変無し、葉草やくそう喩品ゆほんの疏じょには円教えんきょうの理りは大地だいちなり円頓えんどんの教きょうは空くうの雨うなり亦また三蔵教さんざうきょう・通教つうきょう・別教べつきょう

の三教は三草と二木となり、其そのの故ゆえは此このの草木そうもくは円理えんりの大地だいちより生じて円教えんきょうの空くうの雨うに養よわれて五乗ごじやうの草木そうもくは榮えうれども天地てんちに依よつて我榮われええたりと思知おもらざるに由よるが故ゆえに三教さんきょうの人天にんてん・二乗にじやう・菩薩ぼさつをば草木そうもくに譬たとえて不知恩ふちおんと説おかれたり、故ゆえに草木そうもくの名なを得え・今法華いまほつげに始めて五乗ごじやうの草木そうもくは円理えんりの母ははと円教えんきょうの父ちちとを知るなり、一地いちじの所生しよしやうなれば母ははの恩おんを知るが如ごとく一雨いちいうの所潤しよにんなれば父ちちの恩おんを知るが如ごとし、葉草やくそう喩品ゆほんの意いはくのごとく是この如ごとくなり。

釈迦しやくかに如来よらい・五百塵点劫ごひやくじんてんごうの当初そのかみ凡夫ぼんぷにて御坐おわしせし時とき・我が身みは地水火すいか風空ふうくうなりと知ししめして即座さとりに悟さとを開ひらき給たまいき、後に化他けたの為ために世世番じしやうばん番ばんに出世成道しゆつせじやうどうし在在処処しよしよに八相作仏さぶつし王宮おうきゆうに誕生たうじんし樹下じゆげに成道じやうどうして

始めて仏に成る様を衆生に見知らしめ四十余年に方便教を儲け衆生を誘引す、其の後方便の諸の經教を捨てて正直の妙法蓮華經の五智の如来の種子の理を説き顯して其の中に四十二年の方便の諸經を丸かし納れて一仏乗と丸し人・一の法と

名く一人が上の法なり、多人の綺えざる正しき文書を造つて慥かな御判の印あり三世諸仏の手継ぎの文書を釈迦仏より相伝せられし時に三千三百万億那由佗の国土の上の虚空の中に満ち塞がれる若干の菩薩達の頂を摩で

尽して時を指して末法まつぽう近來きんらいの我等衆生の爲に慥たしかかに此の由よしを説き聞かして仏の讓ゆずり状じようを以て末代まつだいの衆生しゆじように慥たしかかに授与じゆよす可べしと慇懃おんこんに三度まで同じ御語おんことばに説き給たまいしかば若干そくばくの菩薩達・各數を尽して☆を曲まがげ頭こゝべを低うなだれ三度まで同じ言に各・我も劣らじと事請しやうを申し給たまいしかば仏・心安く思食おほしめして本覺ほんがくの都に還かへり給たまう、三世さんぜの諸仏しよぶつの説法の儀式・作法には只同ただじ御言みことばに時を指したる末代まつだいの讓ゆずり状じようなれば只一向ただいっそうに後・五百歳を指して此の妙法蓮華經を以て成仏じやうぶつす可べき時なりと讓ゆずり状じようの面のに載のせられたる手継ぎ証文しやうもんなり。

安樂行品あんらくぎやうばんには末法まつぽうに入いつて近來このころ・初心しよしんの凡夫ばんぶ・法華經ほけきやうを修行しゆぎやうして成仏じやうぶつす可べき様を説とき置かれしなり、身も安樂行あんらくぎやうなり口も安樂行あんらくぎやうなり意も安樂行あんらくぎやうなり自行じぎやうの三業も誓願せいがん安樂あんらくの化他けたの行も同じく後の末世おゐに於おいて法の滅ほせんと欲する時と云云、此は近來きんらいの時なり已上四所に

り薬王品には二所に説かれ勸発品には三所に説かれたり、皆近來を指して譲り置かれたる正しき文書を用いずして凡夫の言に付き愚癡の心に任せて三世諸仏の譲り状に背き奉り

永く仏法に背かば三世の諸仏・何に本意無く口惜しく心憂く歎き悲しみ思食すらん、涅槃經に云く法に依つて人に依らざれ」と云云、痛ましいかな悲しいかな末代の学者・仏法を習學して還つて仏法を滅す、弘決に之を悲しんで曰く此の円頓を聞いて崇重せざることは良に近代大乘を習う者の雜濫に由るが故なり況や像末情澆く信心寡薄・円頓の教・法蔵に溢れ函に盈つれども暫くも思惟せず便ち目を瞑ぐに至る徒らに生し徒らに死す一に何ぞ痛ましき哉」已上、同四に云く然も円頓の教は本と凡夫に被むらしむ若し凡を益するに擬せずんば仏・何ぞ自ら法性の土に住して法性の身を以

て諸の菩薩もろもろぼさつの爲ために此の円頓えんどんを説かずして何ぞ諸なんの法身もろもろほっしんの菩薩ぼさつの与ために凡
身みを示し此の三界さんがいに現げんじ給たまうことを須もちいんや、乃至ないし一心凡いっしんぼんに在れば
即すなわち修習しゅうしゅうす可べし」已上すみや、所詮しよせん己心こしんと仏身ぶつしんと一なりと観くずれ
ば速すみやかに仏に成るなり、故ゆえに弘決くけつに又云いわく「一切いっさいの諸仏しよぶつ己心こしんは仏心ぶつしんと
異ならずと観かんし給たまうに由よるが故ゆえに仏に成ることを得る」と已上こ、此れ
を觀心かんじんと云う実じに己心こしんと仏心ぶつしんと一心いっしんなりと悟れば臨終りんじゅうを礙へわる可べき
惡業あくごうも有らず

生死しやうじに留とどまる可べき妄念わうねんも有あらず、一切いっさいの法ほふは皆みな是これ仏法ぶつぽうなりと知りぬ
れば教訓きやうくんす可べき善知識ぜんちしきも入いる可べからず思おもうと思おもい言いうと言いひ為なすと
為なし儀ふるまいと儀ふるまう行住坐臥ぎやうじゆうざがの四威儀いぎの所作しよさは皆みな仏の御心みこころと和合わごうして一
体たいなれば過とがも無なく障さわりも無なき自在じざいの身みと成なる此これを自行じぎやうと云いう、此か
の如ごとく自在じざいなる自行じぎやうの行ぎやうを捨あて跡形あとがたも有あらざる無明妄想むみやうもうそうなる僻思ひがおもひ
心こころに住すして三世さんぜの諸仏しよぶつの教訓きやうくんに背そむき奉たてまれば冥くらきより冥くらきに入り永とこ
くぶつぽう仏法ぶつぽうに背そむくこと悲かなしむ可べく悲かなしむ可べし、

只今ただ打うち返かへえし思おもひ直ただし悟さとり返かへさば即身成仏そくしんじやうぶつは我われが身みの外ほかには無なしと
知しりぬ、我われが心こころの鏡きやうと仏ぶつの心こころの鏡きやうとは只ただ一ひと鏡きやうなりと雖いえども我われ等らは裏うらに向むか
つて我われが性じやうの理りを見みず故ゆゑに無明むみやうと云いう、如來にやらいは面かおに向むかつて我われが性じやうの理り
を見みたまえり故ゆゑに明めいと無明むみやうとは其その体たい只ただ一ひとなり鏡きやうは一ひとの鏡きやうなりと雖いえども
向むかひ様ように依よつて明昧みやうまいの差別さべつ有あり鏡きやうに裏うら有ありと雖いえども面おもての障さわりと

成らず只向い様に依つて得失の二つ有り相即融通して一法の二義なり、
化他の法門は鏡の裏に向うが如く自行の觀心は鏡の面に向うが如し
化他の時の鏡も自行の時の鏡も我が心性の鏡は只一にして替ること無
し鏡を即身に譬え面に向うをば成仏に譬え裏に向うをば衆生に譬う
鏡に裏有るをば性惡を断ぜざるに譬え裏に向う時・面の徳無きをば
化他の功徳に譬うるなり衆生の仏性の顯れざるに譬うるなり、自行と
化他とは得失の力用なり玄義の一に
云く 薩婆悉達・祖王の弓を彎て満るを名けて力と為す七つの鉄鼓を
中り一つの鉄罍山を貫ぬき地を洞し水輪に徹る如きを名けて用と為す
自行の力もろもろほうべん
用なり諸の方便教は力用の微弱なること凡夫の弓箭の如し何となれば
昔の縁は化他の二智を稟けて理を照すこと遍からず信を生ずること深
からず疑を除くこと尽さず化他、今の縁は自行の二智を稟けて仏の

境界きょうかいを極きわめ法界ほっかいの信しんを起おこし円妙えんめうの道みちを増こし根本こんぽんの惑ごくを断ことじ変易へんぎの生なま

を損そんす、但ただ生身しょうしん及び生身しょうしん得忍とくにんの兩種りゅうしゆの

菩薩ぼさつ俱ともに益やくするのみに非あらず法身ほっしんと法身ほっしんの後心ごしんとの兩種りゅうしゆの菩薩ぼさつも亦また以もつて

俱ともに益やくす化けの功こう大だいに利潤りにんぐじん弘深くわふじんなる蓋けだし茲この經きやうの力用りきようなり自行じぎやうと

化他けたとの力用りきよう勝劣しやうれつ分ぶん明めいなること勿論もちろんなり能よく能よく之これを見みよ一代いちだい

聖教しょうきやうを鏡きやうに懸けんたる教相きやうさうなり、極仏境界ききふくきやうかいとは十如じゆじゆ是この法門ほうもんなり十界じゆじかい

に互たがいに具足ぐそくして十界じゆじかい十如じゆじかいの因果いんが・權實ごんじつの二智にち・二境にきやうは我が

身の中に有つて一人も漏るること無しと通達し解了し仏語を悟り極むるなり起法界信とは十法界を体と為し十法界を心と為し十法界を形と為したまえりと本覺の如來は我が身の中に有りけりと信ず増円妙道とは自行と化他との二は相即円融の法なれば珠と光と宝との三徳は只一の珠の徳なるが如し片時も相離れず仏法に不足無し一生の中に仏に成るべしと慶喜の念を増すなり、断根本惑とは一念無明の眠を覺まして本覺の寤に還れば生死も涅槃も俱に昨日の夢の如く跡形も無きなり、損變易生とは同居土の極樂と方便土の極樂と実報土の極樂との三土に往生せる人彼の土にて菩薩の道を修行して仏に成らんと欲するの間・因は移り果は易りて次第に進み昇り劫數を経て成仏の遠きを待つを變易の生死と云うなり、下位を捨つるを死と云い上位に進むをば生と云う是くの如く變易する生死は淨土の苦惱にて

有るなり、爰に凡夫の我等が此の穢土に於て法華を修行すれば
十界互具・法界一如なれば浄土の菩薩の變易の生は損し仏道の行は増
して變易の生死を一生の中に促めて仏道を成ず故に生身及び生身
得忍の兩種の菩薩・増道損生するなり、法身の菩薩とは生身を捨てて
実報土に居するなり、後心の菩薩とは等覺の菩薩なり但し迹門には
生身及び生身得忍の菩薩を利益するなり本門には法身と後身との
菩薩を利益す但し今は迹門を開して本門に摂めて一の妙法と成す
故に凡夫の我等穢土の修行の行の力を以て浄土の十地等覺の菩薩を
利益する行なるが故に化の功広大なり徳用、利潤弘深とは徳用円頓の
行者は自行と化他と一法をも漏さず一念に具足して横に十方法界に
遍するが故に弘きなり豎には三世に亘つて法性の淵底を極むるが故に
深きなり、此の經の自行の力用此くの如し化他の諸經は自行を具せざ

れば鳥の片翼を以て空を飛ばざるが如し故に成仏の人も無し今法華經
は自行化他の二行を開会して不足無きが故に鳥の二翼を以て飛ぶに
障り無きが如く成仏滞り無し、
薬王品には十喻を以て自行と化他との力用の勝劣を判ぜり第一の譬
に云く諸經は諸水の如く法華は大海の如し云云取意、実に自行の
法華經の大海には化他の諸經の衆水を入ること昼夜に絶えず入る
と雖も増ぜず減ぜず

不可思議の徳用を顕す、諸經の衆水は片時の程も法華經の大海を
納めること無し自行と化他との勝劣是くの如し一を以て諸を例せよ、
上来の譬喩は皆仏の所説なり人の語を入れず此の旨を意得れば一代
聖教鏡に懸けて陰り無し此の文釈を見て誰の人か迷惑せんや、三世
の諸仏の總勘文なり敢て人の会釈を引き入る可からず三世諸仏の
出世の本懷なり一切衆生成仏の直道なり、四十二年の化他の經を以
て立る所の宗宗は華嚴・真言・達磨・淨土・法相・三論・律宗・俱舍・
成実等の諸宗なり此等は皆悉く法華より已前の八教の中の教なり皆
是方便なり兼・但・對・帶の方便誘引なり、三世諸仏の説教の次第なり
此の次第を糾して法門を談ず若し次第に違わば仏法に非ざるなり、
一代教主の釈迦如来も三世諸仏の説教の次第を糾して一字も違わず
我も亦是くの如しとて・經に云く三世諸仏の説法の儀式の如く我も今

亦また是かくの如ごとく無ぶん分別べつの法ぽうを説とくく」已も上じやう、若もし之これに違ちがえば永さんく三さん世ぜの諸しよ仏ぶつ
の本意ほんいに背そむく他宗たしゆうの祖師そし各おのづか・我われが宗しゆを立て法華宗ほつげしゆうと諍あらそうこと☆りの中あやま
の☆り迷まよいの中まよの迷まよいなり。

徵ち佗た学がくの決けつに之これを破はして云いく山王院さんかういん 凡おほそ八はち万まん法ぽう藏ざう其その行相ぎやうさうを統すぶ
るに四教しきやうを出いでず頭辺しきやうに示しすが如ごとし藏通ざうつう・別円べつえんは即すなわち声聞しやうもん・縁覺えんかく・
菩薩ぼさつ・仏乘ぶつじやうなり真言しんごん・禪門ぜんもん・華嚴けごん・三論さんろん・唯識ゆいしき・律業りつぎふ・成俱じやうぐの二論等にの能のう
所しよの教理争きやうりでか此このの四しを過すぎん若もし過すぐると言いわば豈あに外邪げじやに非あらずや
若もし出いでずとのたま言すなわわば便すなわち他のの所期しきを問とい得いよの果即ち四乗なり、然しかして後のに答こたに
随したがつて極理ごくりを推たずね徵せめよ我われが四教しきやうの行相ぎやうさうを以もつて並かべ檢かんえて決定けつじやうせよ彼
の所期しきの果おほに於おて若もし我われと違ちがわば随したがつて即すなわち之これを詰しめめよ、且しかく華嚴けごんの
如ごときは五教ごきやうに各各おのづかに修因しゆいん・向果きやうこ有あり初はつ・中ちゆう・後ごの行ぎやう一いつならず一教一果いつきやういつこ
是これ所期しきなるべし

若しも藏通ぞうつう・別円べつえんの因と果とに非あらざれば是れこ仏教ぶつぎょうならざるのみ、三種さんしゆの
法輪ほうりん・三時の教等・中に就おいて定む可べし汝何者なんじなにもを以てか所期の乗と為なる
や若しも仏乘ぶつじやうなりと言のたまわば未いまだ成仏じやうぶつの觀行かんぎやうを見ず若しも菩薩ぼさつと言のたまわば
此れ亦また即離そくの中道ちゆうどうの異なることなり、汝正なんじまさしく何れいづれを取るや設もし離の辺
を取らば果として成じやうず可べき無し如もし即是そくぜを要せば仏に例して之これを難なんぜ
よ謬あやまつて真言しんごんを誦じゆすとも三觀さんかん一心いっしんの妙趣めうしゆを会えせずんば恐くは別人に同
じて妙理みやうりを証せじ所以ゆえんに他の所期の極を

逐おうて理じゆんに準じゆんじて理我が宗のなり徴せむべし、因明どうりの道理げどうは外道しやうじやうと対す多くは小乘
及および別教べつぎやうに在もり若もし法華ほつげ・華嚴けこん・涅槃ねはん等の經に望ねむれば接引せついん門もんなり
權かりに機きに對して設つけたり終ついに以て引進いんしんするなり邪小じやせうの徒とをして會えし
て真理しんりに至いたらしむるなり所以ゆえんに論ろんずる時は四依しえ擊き目くの志こころざしを存ぞんして
之これを執着しやくすること莫なれ又須すべらく他の義ぎを將もつて自義じぎに對檢たいけんし
て隨したがつて是非ぜひを決けすべし執しゆうして之これを怨あだむこと莫なれ円旨えんし至いたつて少せうきのみ」先徳せんとく
大師だいしの所判しよはん是かくの如ごとし、諸宗しよしゆうの所立しよりゆう鏡かうに懸くけて陰くもり無し末代まつだいの學者がくしや何なんぞ
之これを見みずして妄みだりに教門きやうもんを判きぜんや大綱たいかうの三教さんきやうを能よく能よく學まなぶ可べし、
頓とんと漸ぜんと円えんとは三教さんきやうなり是これ一代いちだい聖教しやうきやうの總そうの三諦さんたいなり頓とん・漸ぜんの二は
四十二年しにじふにねんの説せつなり円教えんきやうの一ひとは八箇年はちかねんの説せつなり合あひ
て五十年ごじゅうねんなり此この外ほかに法無ほふし何いかに由よつてか之これに迷まよはん、衆生しゆじやうに有ある時
には此これを三諦さんたいと云いふ仏果ぶつがを成じやうずる時には此これを三身さんじんと云いふ一物ひとものの

異名なり之を説き顯すを一代聖教と云い之を開會して只一の總の
三諦と成ずる時に成仏す此を開會と云い此を自行と云う、又他宗
所立の宗宗は此の總の三諦を分別して八と為す各各に宗を立つるに
依つて円満の理を闕いて成仏の理無し是の故に余宗には実の仏無きな
り故に之を嫌う意は不足なりと嫌うなり、
円教を取つて一切諸法を觀ずること円融・円満して十五夜の月の如く
不足無く満足し究竟すれば善惡をも嫌わず折節をも撰ばず靜処をも
求めず人品をも択ばず一切諸法は皆是れ仏法なりと知りぬれば諸法
を通過す即ち非道を行うとも仏道を成ずるが故なり、天地水火風は
是れ五智の如來なり一切衆生の身心の中に住在して片時も離るるこ
と無きが故に世間と出世と和合して心中に有つて心外には全く別の法
無きなり故に之を聞く時立所に速かに仏果を成ずること滞り無き

道理至極なり、総の三諦とは譬えば珠と光と宝との如し此の三徳有る
に由つて如意宝珠と云う故に総の三諦に譬う若し亦珠の三徳を別別に
取り放さば何の用にも叶う可からず隔別の方便教の宗宗も亦是くの如
し珠をば法身に譬え光をば報身に譬え宝をば応身に譬う此の総の三徳
を分別して宗を立てるを不足と嫌うなり之を丸じて一と為すを総の
三諦と云う、此の総の三諦は三身即一の本覺の如来なり又寂光をば鏡
に譬え同居

と方便ほうべんと実報じつほうの三土さんどをば鏡うつに遷うつる像たに譬たとう四土しども一土さんじんなり三身さんじんも
一仏いちぶつなり今は此さんじんの三身さんじんと四土しどと和合わごうして仏なの一体えんきようの徳うつつなるを寂光じやくかうの仏じつぶつ
と云じやくかうう寂光えんきようの仏えんきようを以なて円教えんきようの仏うつつと為じつぶつし円教うつつの仏じつぶつを以なて寤うつつの実じつぶつ仏じつぶつと
為なす余なの三土さんぜの仏しよぶつは夢中もんちゆうの権ごんぶつ仏たなり、此これは三世さんぜの諸しよぶつ仏ただの只いとは同いとはじ語いとはに
勘かんもん文たまし給きようそうえる総きようそうの教ことば相ことばなれば人ことばの語ことばも入ことばらず会ことば釈ことばも有ことばらず若もし之もに
違たがわば三世さんぜの諸しよぶつ仏そむに背たてまつき奉たいさいる大罪てんまの人げどうなり天魔てんま・外道げどうなり永ぶつぼうく仏法ぶつぼうに
背そむくが故ゆえに之これを秘藏ひざうして他人たにんには見みせざれ若もし秘藏ひざうせずして妄みだりに
之これを披露ひろうせば仏法ぶつぼうに証理しやうり無なくく二世みやうがに冥加みやうが無なくからん謗ぼうずる人しゆたい出来しゆたいせば
三世さんぜの諸しよぶつ仏そむに背ゆえくが故ゆえに二人ふたに乍なら俱ともに惡道あくどうに墮おちんと識しるが故ゆえに之これを
誠いましむるなり、能よく能よく秘藏ひざうして深ふかく此この理ことを証さんぜし三世しよぶつの諸しよぶつ仏しよぶつの
御本意ごほんいに相かない叶かない二聖じゆうらせつ・二天じゆうらせつ・十羅刹じゆうらせつの擁護おうごを蒙こうむり滯とどり無なくく上じやうじやう・上品じやうじやう
の寂光じやくかうの往生おうじやうを遂とげ須臾しゆゆの間に九界生死しやうじの夢かえの中に還かえり来きつて身みを

じゅつぽう ほうかい
十方 法界の国土に遍くどじ心を一切有情の身いっさいうじょう中に入れて内よりは勸かん發はつし外よりは引導ないげし内外相応そうおうし因縁和合いんねんわごうして自在神通じざいじんつうの慈悲じひの力を施ほどこしく衆生しゅじょうを利益りやくすること滞とどこり有る可べからず。

さんぜ
三世の諸仏しよぶつは此これを一大事いちだいじの因縁いんねんと思食おぼしめして世間せけんに出現しゅつげんし給たまえり

一ちとは法華ちゅうだなりなり大とは華嚴けげんなり事とは方等ほうとう・般若はんにかなり已上いちだい一代の總さんたいの三諦さんたいな

り、之これを悟り知る時・仏果ぶつかを成じようずるが故ゆえに出世しゅつせの本懷ほんかい成仏じようぶつの直道じきどうなり

因いんとは一切衆生の身いっさいしゅじょう中に總さんたいの三諦さんたい有あつて常住じようじゅう不變ふへんなり此これを總さんたいじて

因いんと云いうなり縁えんとは三因さんいん仏性ぶつじようは有ありと雖いえども善知識ぜんちしきの縁えんに値あわざれば

悟わらず知しらず顯あらわれず善知識ぜんちしきの縁えんに値あえば必かならずず顯あらわるるが故ゆえに縁えんと云いう

なり、然しかるに今・此この一と大と事と因と

縁との五事わごう和合わごうして値あい難がたき善知識ぜんちしきの縁えんに値あいて五ぶ仏性ぶつじようを顯あらわさんこと

何なんの滞とどこりか有あらんや春の時来りて風雨ふううの縁えんに値あいぬれば無心そんもくの草木そうもくも

皆悉く萌え出生して華敷き榮えて世に値う氣色なり秋の時に至りて
月光の縁に値いぬれば草木皆悉く実成熟して一切の有情を養育し
壽命を續き長養し終に成仏の徳用を顯す之を疑い之を信ぜざ
る人有る可しや無心の草木すら猶以て是くの如し何に況や人倫に於て
をや、我等は迷の凡夫なりと雖も一分の心も有り解も有り善惡も
分別し折節を思知る然るに宿縁に催されて生を佛法流布の国土に受
けたり善知識の縁に

値いなば因果を分別して成仏す可き身を以て善知識に値うと雖も猶草木にも劣つて身中の三因仏性を顕さずして黙止せる謂れ有る可きや、此の度必ず必ず生死の夢を覺まし本覺の寤に還つて生死の細を切る可し今より已後は夢中の法門を心に懸く可からざるなり、三世の諸仏と一心と和合して妙法蓮華經を修行し障り無く開悟す可し自行と化他との二教の差別は鏡に懸けて陰り無し、三世の諸仏の勘文是くの如し秘す可し秘す可し。

弘安二年己卯十月 日

日蓮 花押

◆七八

諫曉八幡抄 はちまん

576P

夫れ馬は一歳二歳の時は設たいつがいのび・まろすねに・すねほそく・う
でのびて候へども病あるべしとも見えず、而れども七八歳なんどになり
て身もこへ血ふとく上かち下をくれ候へば小船に大石をつめるがごとく
小き木に大なる菓このみのなれるがごとく多くのやまい出来しゅつたいして人の用にも
あわず力もよわく寿いのちもみじかし、天神等も又かくのごとし成劫じやうこちの始に
は先生せんしやうの果報かほういみじき衆生しゆじやう生れ来る上・人の惡も候はねば身の光もあ
ざやかに心もいさぎよく日月にちがつ

のごとくあざやかに師子象ししぞうのいさみをなして候いし程に成劫じやうこちやうやく
すぎて住劫になるままに前の天神等てんじんは年かさなりて下旬の月のごとし

今生こんじやう来れる天神てんじんは果報かほう衰滅すいげんし下劣げれつの衆生しゆじやう多分たぶんは出来しゅつたす、然しかる間かん、
一天いつてんに三災さんさいやうやくをこり四海しかいに七難粗出現ひちなんほほしゆつげんせしかば一切衆生いつさいしゆじやう始はめて苦と樂とををもう知る。

此の時・仏出現しゆつげんし給たまいて仏教ぶつぎやうと申もうす業を天と人と神とにあたへ給たまいしかば燈ともしびに油をそゑ老人ろうじんに杖をあたへたるがごとく天神等てんじんかえ還かえつて威光いこうをまし勢力せいりよくを増長ぞうちやうせし事・成劫じやうこくのごとし仏教ぶつぎやうに又五味のあぢわひ分ぶんれたり在世ざいせの衆生しゆじやうは成劫じやうこくほどこそなかりしかども果報かほういたう・をとろへぬ衆生しゆじやうなれば五味の中に何の味をもなめて威光いこう勢力せいりよくををまし候きき、
仏滅度ほとけめつどの後正像しやうざう二千年過まつほうて末法まつぽうになりぬれば本の天も神も阿修羅あしゆら大竜等たいうりやうも年もかさなりて身もつかれ心もよはくなり又今生こんじやう来れる天人てんにん・修羅等しゆらは或あるは小果報かほう・或あるは惡天人てんにん等なり、小乘しょうじやう・權大乘等こんだいじやうの乳・酪しやうそ・生蘇じやうそ・熟蘇味じゆくそみを服すれども老人ろうじんに☆食しじきをあたへ高人こうじんに麦飯等ばくはんを奉たてまつるが

ごとし、而るを当世此を弁えざる学人等古にならいて日本国の一切
の諸神等の御前にして阿含經・方等・般若・華嚴・大日經等を法樂し
俱舎・成実・律・法相・三論・華嚴・淨土・禪等の僧を護持の僧とし給え
る唯老人に☆食を与へ小兒に強飯をくくめるがごとし、何に況や今の
小乗經と小乗宗

と大乘經だいじようきようと大乘宗だいじようしゆとは古いにしへの小大乘だいじようきようの經宗きようしゆにはあらず、天竺てんじくより
仏法漢土ぶつぽうかんどへわたりし時とき小大きようきようの經經きんげんは金言きんげんに私言しきんげんまじはれり、宗宗しゆしゆは又
天竺てんじく・漢土かんどの論師ろんし・人師にんし・或あるは小こを大だいとあらそい・或あるは大だいを小こという・或
は小こに大だいをかきまじへ・或あるは大だいに小こを入れ・或あるは先まづきの經きんげんを後あととあらそ
い・或あるは後あとを先まづとし・或あるは先まづを後あとにつけ・或あるは顯經けんきようを密經みつきようといひ密經みつきようを
顯經けんきようという譬たとへば乳ちに水みづを入れ薬くすりに毒どくを加くわうるがごとし、涅槃經ねはんきように仏
未來みらいを記しるして云いく爾その時ときに諸もろもろの賊ぞく・醍醐だいごを

以もつてての故ゆゑに之これに加くわうるに水みづを以もつてす・水みづを以もつてする事こと多おほきが故ゆゑに乳酪にゅうらく
醍醐だいご一切いっさい俱ともに失うしなす」等ら云云いふこと、阿含あこん・小乘經しょうじようきようは乳味にゅうみのごとし方等ほうとう・
大集經だいじつきよう・阿弥陀經あみだ・深密經じんみつ・楞伽經りやうがきよう・大日經だいにちきよう等は酪味らくみのごとし、
般若經はんにゃきよう等は生蘇味しょうそみのごとく華嚴經けこんきよう等は熟蘇味じゆくそみのごとく法華ほつげ・涅槃經ねはんきよう等は
醍醐味だいごみのごとし、設たといしようじようきよう小乘經しょうじようきようの乳味にゅうみなりとも仏說ぶつせつのごとくならば争いでか

いちぶん 一分の薬とならざるべき、況や諸の大乗經をや何に況や法華經をや。

然るに月氏より漢土に經を渡せる訳人は一百八十七人なり其の中に

羅什三蔵一人を除きて前後の一百八十六人は純乳に水を加へ藥に毒を

入たる人人なり、此の理を弁へざる一切の法師・末学等設い一切經を

誦誦し十二分經を胸に浮べたる様なりとも生死を離る事かたし又現在

に一分のしるしある様なりとも天地の知る程の祈とは成る可からず

魔王・魔民等守護を加えて法に験の有様なりとも終には其の身も檀那

も安穩なる可からず譬ば旧医の藥に

毒を雜へてさしをけるを旧医の弟子等・或は盗み取り・或は自然に取

りて人の病を治せんが如し・いかでか安穩なるべき、当世・日本国の真言

等の七宗並に淨土・禪宗等の諸学者等、弘法・慈覺・智証等の法華經

最第一の醍醐に法華第二・第三等の私の水を入れたるを知らず仏説の

如くならば・いかでか一切俱失の大科を脱れん、大日経は法華経より劣る事七重なり而るを弘法等・顛倒して大日経最第一と定めて日本国に弘通せるは法華経一分の乳に大日経七分の水を入れたるなり水にも非ず乳にも非ず大日経にも非ず法華経にも非ず而も法華経に似て大日経に似たり大覺世尊此の事を涅槃経に記して云く我が滅後に於て正法將に滅尽せんと欲す爾の時に多く惡を行ずる比丘有

らん、乃至ないし牧牛女もくぐにょの如ごとく乳にゅうを売うるに多利たを貪おぼらんと欲もつするを為なすの故ゆえに二分にふの水みづを加くわう、乃至ないし此この乳にゅう・水みづ多おほし、爾その時ときに是この経きやう閻えん浮ぶ提だいに於おいて当まさに広ひろく流布るふすべし、是この時ときに当まさに諸もろもろの惡あく比丘びく有あて是この經きやうを鈔とり・略りやくし分たぶんて多分たぶんと作なし能よく正法しやうぽうの色香しきかう美味みみを滅めつすべし、是この諸もろもろの惡人あくにん復また是かくの如ごとき經典きやうてんを誦どく誦じゆすと雖いえども如來にやらいの深密じんみつの要義ようぎを滅除めつじよせん、乃至ないし前ぜんを鈔とりて後ごに著つけ後ごを鈔とりて前ぜんに著つけ前後ぜんごを中ちゆうに著つけ中ちゆうを前後ぜんごに著つけん当まさに知しるべし是かくの如ごとき諸もろもろの惡あく比丘びくは是これ魔まの伴はん侶りよなり」等な云いふ云いふ。

今いま・日本にほん國こくを案あんずるに代始すでまりて已やに久くしく成なりぬ旧ふるき守護しゆごの善神ぜんじんは定さだめて福ふくも尽つき寿しうも減へじ威光いこう勢力せいりきも衰おとろえぬらん、仏法ぶつぽうの味あじをなめてこそ威光いこう勢力せいりきも増長ぞうちやうすべきに仏法ぶつぽうの味あじは皆みなたがひぬ齡よわいはたけぬ争いでか國くにの災さいを払はらひ氏子ししこをも守護しゆごすべき、其その上うへ謗法ぼうぽうの國くににて候まちを氏神しじんなればとて大科だいかをいましめずして守護しゆごし候まちへば仏前ぶつぜんの起請きしやうを毀そしりる神たましいなり、し

かれども氏子なれば愛子の失のやうにすてずして守護し給いぬる程に
法華經の行者をあだむ国主・

国人等を対治を加えずして守護する失に依りて梵釈等のためには八幡
等は罰せられ給いぬるか此事は一大事なり秘すべし秘すべし、有る經の
中に仏・此の世界と他方の世界との梵釈・日月・四天・竜神等を集めて
我が正像末の持戒・破戒・無戒等の弟子等を第六天の魔王・惡鬼神等
が人王・人民等の身に入りて悩亂せんを見乍ら聞き乍ら治罰せ

ずして須臾もすごすならば必ず梵釈等の使をして四天王に仰せつけて
治罰を加うべし、若し氏神・治罰を加えずば梵釈・四天等も守護神に
治罰を加うべし梵釈又かくのごとし、梵釈等は必ず此の世界の梵釈・
日月・四天等を治罰すべし、若し然らずんば三世の諸仏の出世に漏れ
永く梵釈等の位を失いて無間・大城に沈むべしと釈迦・多宝・十方の

諸仏しよぶつの御前おんまえにして起請きしょうを書き置れたり。

今之これを案ずるに日本小国の王となり神となり給たまうは小乗しょうじょうには三賢さんけんの菩薩ぼさつ・大乘だいじょうには十信じゆっしん・法華ほっけには名字五品の菩薩ぼさつなり、何いかなる氏神有むじんりて無尽くどくの功德しゅうを修すとも法華經ほけきょうの名字みょうじを聞かず一念三千いちねんさんぜんの觀法かんぽうを守護しゅごせずんば退位の

菩薩と成りて永く無間・大城に沈み候べし、故に扶桑記に云く又
伝教大師・八幡大菩薩の奉為に神宮寺に於て、自ら法華經を講ず、
乃ち聞き竟て大神託宣すらく我法音を聞かずして久しく歳年を歴る
幸い和尚に値遇して正教を聞くことを得たり兼て我がために種種の
功德を修す至誠隨喜す何ぞ徳を謝するに足らん、兼て我が所持の法衣
有りと即ち託宣の主・自ら宝殿を開いて手ら紫の袈裟一つ紫の衣一を
捧げ和尚に奉上す大悲力の故に幸に納受を垂れ給えと、是の時に
禰宜・祝等各歎異して云く元來是の如きの奇事を見ず聞かざるかな、
此の大神施し給う所の法衣今山王院に在るなり」云云、今謂く八幡は
人王第十六代・応神天皇なり其の時は仏經無かりしかば此に袈裟衣
有るべからず、人王第三十代欽明天皇の治三十二年に神と顯れ給い
其れより已來弘仁五年までは禰宜・祝等次第に宝殿を守護す、何の王

の時・此の袈裟けさを納めおさけると意こころへし而して禰宜ねぎ等云く元來見ず聞かず等云云、此の大菩薩ぼさついかにしてか此の袈裟衣けさは持たもち給たまいけるぞ不思議ふしぎなり。

又欽明きんめいより已來弘仁五年このかたこうにんに至るまでは王は二十二代・仏法ぶつぽうは二百六十余年なり、其の間に三論さんろん・成実じやうじつ・法相ほつそう・俱舍ぐしや・華嚴けこん・律宗りつしゅう・禪宗ぜんしゅう等の六宗ろくしゅう・七宗しちしゅう・日本国にほんこくに渡りて八幡大菩薩はちまんだいぼさつの御前おんまえにして經を講こうずる人人ひとびと・其の數を知らず、又法華經ほけきやうを讀誦どくじゆする人も争いでか無からん、又八幡大菩薩はちまんだいぼさつの御宝殿ほうでんの傍かたわらには神宮寺じんぐうじと号して法華經等の一切經いっさいきやうを講こうずる堂だいし・大師だいしより已前いぜんに是あり、其の時定めて仏法ぶつぽうを聴聞ちやうもんし給たまいぬらん何ぞ今始めて我法音ほうせいを聞かずして久しく年歳ねんさいを歴へる等と託宣たくせんし給たまふべきや、幾くの人いくばひとか法華經ほけきやう・一切經いっさいきやうを講こうじ給たまいけるに何ぞ此の御袈裟けさ衣いをば進まいらさせ給たまはざりけるやらん、当に知るべし伝教大師でんきやうだいし已前いぜんは

法華經ほけきようの文字もんじのみ読みけれども其その義はいまだ顯あらわれざりける

か、去いぬる延曆二十年十一月中旬の比・伝でん教大師ぎやうだいし比叡山ひえいざんにして南都なんと

・七大寺ななだいじの六宗ろくしゅうの碩德せきとく十余人を奉請ぶじようして法華經ほけきようを講こうじ給たまいに、

弘世・真綱等の二人の臣下しんか此この法門ほうもんを聴聞ちやうもんしてなげいて云いく「一乘いちじやうの

權滯ごんたいを慨なげき三諦さんたいの未顯みけんを悲かなしむ」又云いく「長幼三有の結むすを摧破さいはし猶な

未だ歴劫いまだりやくじやうの轍てつを改めず」等云云、其その後延曆二十一年正月十九日

に高雄寺に主上・行幸ならせ給いて六宗の碩徳と伝教大師とを召し合はせられて宗の勝劣を聞き食ししに南都の十四人皆口を閉ぢて鼻のごとくす、後に重ねて怠状を捧げたり、其の状に云く聖徳の弘化より以降た今に二百余年の間講ずる所の経論其の数多し、彼れ此れ理を争い其の疑未だ解けず而も比の最妙の円宗猶未だ闡揚せず」等云云、比れをもつて思うに伝教大師已前には法華經の御心いまだ顯れざりけるか、八幡大菩薩の見ず聞かずと御託宣有りけるは指なり指なり白なり白なり。

法華經第四に云く我が滅度の後に能く竊に一人の爲にも法華經を説かん、当に知るべし是の人は則ち如来の使なり乃至如来則ち衣を以て之れを覆い給うべし」等云云、当来の弥勒仏は法華經を説き給うべきゆへに釈迦仏は大迦葉尊者を御使として衣を送り給ふ、又伝教大師は

仏おんづかいの御使ほけきようとして法華經とを説たまき給たまうゆへに八幡大菩薩はちまんだいぼさつを使たまとして衣いを送

り給たまうか、又此の大菩薩ぼさつは伝教大師でんぎようだいし已前いぜんには加水ほけきようの法華經ほけきようを服はくしてを

はしましけれども先生せんしやうの

善根ぜんこんに依よつて大王だいうわうと生れ給たまいぬ、其その善根ぜんこんの余慶よけい・神あらかわと顯あらわれて此の国を

守護しゆごし給たまいけるほどに今は先生せんしやうの福ふくの余慶よけいも尽つきぬ、正法しやうほうの味あじも失うせ

ぬ謗法ぼうぼうの者等・国中じゆうまんに充満じゆうまんして年久ねんきうしけれども日本国にほんこくの衆生しゆじやうに久あおく仰

がれてなじみせし大科だいかあれども捨てがたくをばしめし老人ろうじんの不幸ふこうの子

を捨てざるが如ごとくして天てんのせめに合あひ給たまいぬるか、又

此の袈裟けさは法華經ほけきよう最第一さいだいいちと説たまかん人こそ・かけまいらせ給たまうべきに

伝教大師でんぎようだいしの後ごは第一だいいちの座主ざす・義真和尚ぎしんわじやう・法華經ほけきよう最第一さいだいいちの人なればかけさ

せ給たまう事そ其いわれの謂いわれあり、第二だいにの座主ざす・円澄大師えんちやうだいしは伝教大師でんぎようだいしの御弟子おんでしな

れども又弘法大師こうぼうだいしの弟子でしなり・すこし謗法ぼうぼうににたり、此の袈裟けさの人には

有らず、第三の座主・円仁慈覚大師は名は伝教大師の御弟子なれども
心は弘法大師の弟子・大日経第一・法華経第二の人なり、此の袈裟は
一向にかけがたし、設いかけたりとも法華経の行者にはあらず、其の上
又当世の天台座主は一向・真言の座主なり、又当世の八幡の別当は・或
は園城寺の長吏・或は東寺の末流なり、此れ等は遠くは釈迦・多宝・
十方の諸仏の大怨敵・近くは伝教大師の讐敵なり、譬へは

提婆達多が大覺世尊の御袈裟をかけたるがごとし、又獵師が仏衣を被て師子の皮をはぎしがごとし、当世叡山の座主は伝教大師の八幡大菩薩より給て候し御袈裟をかけて法華經の所領を奪ひ取りて真言の領となせり、譬へ阿闍世王の提婆達多を師とせしがごとし。

而るを大菩薩の此の袈裟をはぎかへし給わざるは第一の大科なり、此の大菩薩は法華經の御座にして行者を守護すべき由の起請をかきながら數年が間・法華經の大怨敵を治罰せざる事不思議なる上、たまたま法華經の行者の出現せるを來りて守護こそなさざらめ、我が前にして、国主等の怨する事・犬の猿をかみ蛇の蝦をのみ鷹の雉

を師子王の兎を殺すがごとくするを一度もいましめず、設いいましむるやうなれども・いつわりをろかなるゆへに梵釈・日月・四天等のせめをはちまんだいぼさつ八幡大菩薩かほり給いぬるにや、例せば欽明天皇・敏達天皇・用明天皇

已上三代の大王・物部大連・守屋等がすすめに依りて宣旨を下して金銅の釈尊を焼き奉り堂に火を放ち僧尼をせめしかば天より火下て内裏をやく、其の上・日本国の万民とがなくなして惡瘡をやみ死ぬること大半に過ぎぬ、結句三代の大王・二人の大臣・其の外多くの王子・公卿等・或は惡瘡・或は合戦にほろび給いしがごとし、其の時・日本国の百八十の神の栖給いし宝殿皆焼け失せぬ釈迦仏に敵する者を守護し給いし大科なり、又園城寺は叡山已前の寺なれども智証大師の真言を伝えて今に長吏とがうす叡山の末寺たる事疑いなし、而るに山門の得分たる大乘の戒壇を奪い取りて園城寺に立てて叡山に随わじと云云、譬へば小臣が大王に敵し子が親に不幸なるがごとし、かかる惡逆の寺を新羅大明神みだれがわしく守護するゆへに度度・山門に宝殿を焼る、此のごとし、今八幡大菩薩は法華經の大怨敵

を守護しゆごして天火に焼かれ給たまいぬるか、例せば秦の始皇の先祖・襄王じやおうと申せし王・神となりて始皇等を守護しゆごし給たまいし程に秦の始皇大慢だいまんをなして三皇・五帝の墳典ふんでんをやき三聖の孝經こうきやう等を失うしなしかば沛公はいこうと申す人劍をもつて大蛇だいじやを切り死ぬ秦皇の氏神こらし是これなり、其その後秦こうしんの代だいほどなくほろび候こいぬ此これも又かくのごとし、安芸の国いつく島の大明神だいまうじん

を罰せざる守護神しゅごしんは一切いっさいの人天にんてんの眼まなこをくじる者を結構けつこうし給う神たましひなり、
而しかに弘法こうぼう・慈覺じかく・智証ちしょう等は正まさしく書まを作りて法華經ほけきょうを無明むみょうの辺域へんいきに
して明あきらの分位ぶんゐに非あらず後に望のぞれば戲論けろん

と作る力者ちからに及およばず履者りふとりにとらずとかきつけて四百余年よひにほんこく、日本国にほんこく
の上かみ一人いちにんより下万民ばんみんにいたるまで法華經ほけきょうをあなづらせ一切衆生いっさいしゆじょうの眼まなこ
をくじる者しゆごを守護しゆごし給うはあに八幡大菩薩はちまんだいぼさつの結構けつこうにあらずや、去ぬる
弘長こうちやうと又い去ぬる文永ぶんえい八年九月の十二日に日蓮にちれん一分いちぶんの失とがなくして南無なむ
妙法蓮華經みょうぼうれんげきやうと申もうす大科だいかに国主こくしゆのはからいとして八幡大菩薩はちまんだいぼさつ
の御前おんまえにひきはらせて一國いっこくの謗法ぼうぼうの者どもにわらわせ給たまいしはあに
八幡大菩薩はちまんだいぼさつの大科だいかにあらずや、其そのいましめとをぼしきはただとし
うちばかりなり、日本国にほんこくの賢王けんおうたりし上・第一だいいち・第二だいにの御神たましひなれば八幡はちまん
に勝すぐれたる神は

よもをはせじ、又偏頗へんげはよも有らじとは・をもへども一切經並に法華經ほけきようのをきてのごときんば・この神は大科だいかの神なり、日本にほん六十六箇国二つの島一万一千三十七の寺の仏は皆・或は画像・或は木像・或は真言しんごん已前いぜんの寺もあり・或は已後いごの寺もあり、此等これらの仏は皆法華經より出生しゅつじようせり、法華經をもつて眼まなことすべし、所謂いわゆる此の方等經は是れ諸仏の眼まなこなり」等云云、妙樂みょうらく云く然しかも此の經は常住じようじゅう仏性を以て咽喉いんこうと為し一乗いちじようの妙行を以て眼目がんもくと為し再生敗種を以て

心腑しんぷと為なし顯本遠寿けんぽんおんじゅを以もつて其の命と為なす」等云云、而しかるを日本国にほんこくの
習ならい真言師しんごんしにもかぎらず諸宗しよしゅう一同に仏眼ぶつげんの印をもつて開眼かいげんし大日だいにちの
真言しんごんをもつて五智ぐちを具ぐすと云云此等これらは法華經ほけきやうにして仏になれる衆生しゅじやうを
真言しんごんの權經ごんきやうにて供養くやうすれば還かえつて仏を死こころし眼まなこをくじり壽命じゆみやうを断おんどち喉
をさきなんどする人人ひとびとなり、提婆だいばが教主きやうしゅ釈尊しゃくそんの身より血を出し
阿闍世王あじやせの彼の人を師として現罰げんばちに値あいしにいかでか・をとり候べき、
八幡大菩薩はちまんだいぼさつは応神天皇てんのう・小国しやうこくの王なり
阿闍世王あじやせは摩竭まかつ大國たいこくの大王なり天と人と王と民との勝劣しやうれつなり、而れど
も阿闍世王あじやせ・猶なほ釈迦しゃか・迦か・仏ぶつに敵をなして惡瘡身あくそうしんに付き給たまいぬ、八幡大菩薩はちまんだいぼさつ
いかでか其その科かを脱のがるべき、去いぬる文永ぶんえい十一年に大蒙古もうこよりよせて
日本国にほんこくの兵を多くほろぼすのみならず八幡はちまんの宮殿すでにやかれぬ、
其そのの時何なんぞ彼の国の兵を罰たま給はざるや、まさに知るべし彼の

国の大王だいおうは此の国の神に勝すぐれたる事あきらけし、襄王じやおうと申せし神は漢土かんどの第一だいいちの神なれども沛公はいこうが利劔たみに切られ給たまいぬ。

此これをもつてをもうべし道鏡法師どうきやうほふし・称徳天皇てんのうの心よせと成りて国王こくおうと成らんとせし時清丸きよまる・八幡大菩薩はちまんたいぼさつに祈請きしやうせし時八幡の御託宣たくせんに云く天それ神に大小好悪有だいしやうり乃至彼ないしは衆おおく我は寡すくなし邪は強く正は弱し乃すなわち当まさに仏力の加護かごを仰て為めに皇緒こうちよを紹しやうり隆ゆうすべし」等云云、当まさに知るべし八幡大菩薩はちまんたいぼさつは正法しやうほうを力として王法わうほうを守護しゆごし給たまいけるなり、叡山えいざん・東寺等とうじの真言しんごんの邪法じやほうをもつて権の大夫殿たゆうどのを調伏じやうふくせし程に権の大夫殿たゆうどのはかたせ給たまい隠岐おきの法皇ほうこうはまけさせ給たまいぬ還著げんちやく於本人おほんにんこ此れなり。

今又日本国にほんこく・一万一千三十七の寺並に三千一百三十二社の神はこつかあんのん国家安穩こつかあんのんのために・あがめられて候、而しかに其の寺寺の別当等べつとう・其の社そ社の神主等そはみなみな・あがむるところの本尊ほんぞんと神との御心ごこころに相違そういせ

り、彼れ彼れの仏と神とは其の身異体なれども其の心同心に法華經の
守護神なり、別当と社主等は或は真言師或は念仏者或は禪僧或
は律僧なり皆一同に八幡等の御かたきなり、謗法不孝の者を守護し
給いて正法の者を或は流罪或は死罪等に行な

わするゆへに天のせめを被り給いぬるなり、我が弟子等の内・謗法の
余慶有る者の思いていわく此の御房は八幡をかたきとすと云云、これい
まだ道理有りて法の成就せぬには本尊をせむるという事を存知せざる
者の思いなり付法蔵經と申す經に大迦葉尊者の因縁を説いて云く時
に摩竭国に婆羅門有り尼俱律陀と名づく過去の世に於て久しく勝業を
修し、多く財宝に饒かにして巨富無量なり摩竭王に比するに千倍勝れ
りと為す、財宝饒かなりと雖も
子息有る事無し自ら念わく老朽して死の時將に至らんとす庫藏の諸物
委付する所無し、其の舎の側に於て樹林神有り彼の婆羅門子を求むる
が為の故に即ち往て祈請す年歳を経歴すれども微応無し、時に
尼俱律陀大に瞋忿を生じて樹神に語て曰く、我汝に事てより来已に年
歳を経れども都て一の福応を垂るるを見ず今当に七日至心に

汝に事うべし、若し復驗無ければ必ず相焼剪せん、樹神聞き已て甚だ愁怖を懷き四天王に向つて具さに斯の事を陳ぶ、是に於て四王往て帝釈に白す・帝釈閻浮提の内を觀察するに・福德の人の彼の子と爲るに堪ゆる無し即ち梵王に詣で広く上の事を宣ぶ、爾の時に梵王・天眼を以て觀見するに梵天の當に命終に臨む有り而て之に告げて曰く

汝若し神を降さば宜しく當に彼の閻浮提界の婆羅門の家に生ずべし、梵天對て曰く婆羅門の法惡邪見多し我今其子と爲る事能ざるなり、梵王復言く彼の婆羅門大威徳有り閻浮提の人往て生ずるに堪ゆる莫し汝必ず彼に生ぜば吾れ相護りて終に汝をして邪見に入らしめざらん、梵天曰く諾・敬て聖教を承けん、是に於て帝釈・即樹神に向つて斯の如き事を説く樹神歡喜して尋て其の家に詣で婆羅門に語らく汝

今復恨またうらみを我れに起す事なかれ卻しりぞけて後七日また当に卿が願を満すべし、七日いたつに至て已すでに婦身あむ事有るを覚え十月おほを満足して一男児まんぞくを生めり乃至ないし今の迦葉かしようこれ是なり」云云、時に応じて尼に俱律陀くりりだ大に瞋おおい忿しんぶんを生ず」等云云、常のごときんば氏神に向いて大瞋しんに恚いを生ぜん者は今生こんじようには身をほろぼし後世ごしやうには惡道あくどうに墮おつべし然しかりと雖いえども尼に俱律陀くりりだ長者ちやうじや・氏神に向て大あ瞋く恚しんにを生じて大願じやうじゆを成就し賢子けんしをまうけ給たまいぬ、当まさに知るべししんに瞋恚ぜんあくは善惡ぜんあくに通ずる者なり。

いまだにちれん
今日蓮は去ぬる建長五年癸丑四月二十八日より今年弘安三年太歳庚

辰十二月にいたるまで二十八年が間又他事なし、只妙法蓮華經の七字

五字を日本国の一切衆生の口に入れんとはげむ計りなり、此れ即母の

赤子の口に乳を入れんとはげむ慈悲なり此れ又時の当らざるにあらず

すでに仏記の五五百歳に当れり、天台・伝教の御時は時いまだ来らざり

しかども一分の機ある故に少分流布せり、何に況や今は已に時いたり

ぬ設とひ機なくして水火をなすともいかでか弘通せざらむ、只不輕のご

とく大難には値うとも流布せん事疑なかるべきに真言・禪・念仏等の

讃奏に依り

て無智の国主等・留難をなす此を対治すべき氏神八幡大菩薩・彼等の

大科を治せざるゆへに日蓮の氏神を諫曉するは道理に背くべしや、

尼俱律陀長者が樹神をいさむるに・異ならず、蘇悉地經に云く本尊

を治罰ちばつする事鬼魅きみを治するが如しごと」等云云、文の心は經文のごとく
所願しょがんを成じようぜんがために數年が間・法しゆぎようを修行するに成就じようじゆせざれば本尊ほんぞん
を・或あるはしほり・或あるは打ちなんどせよととかれて候、相応そうおう和尚わじようの
不動明王ふどうみやうおうをしほりけるは此の經文きやうもんを見たりけるか、此は他事たじにはなる
べからず日本國にほんこくの一切いっさいの善人ぜんにんは・或あるは戒たもを持ち・或あるは布施ふせを行じ・或あるは
父母等ふぼの孝養かうようのために寺塔じとうを建立こんりやうし・或あるは成仏得道じやうぶつとくどうの爲ために妻子さいしをやし
なうべき財ととを止めて諸僧しよそうに供養くやうをなし候に、諸僧しよそう謗法ぼうぼうの者たるゆへに謀
反はんの者を知ずしてやどしたるがごとく不孝ふこうの者に契ちぎりをなせるがごとく
今生こんじやうには災難さいなんを招き後生ごじやうも惡道あくどうに墮おち
候べきを扶たすけんとする身なり而しかるを日本國にほんこくの守護しゆごの善神等ぜんじん・彼等かれらにく
みして正法しやうぼうの敵となるゆへに此をせむるは經文きやうもんのごとし道理どうりに任せまかせ
り、我が弟子等でしが愚案ぐあんにをもわく我が師ほけきやうは法華經くつうを弘通ぐつうし給たまうとてひ

ろまらざる上・大難だいなんの来れるは真言しんごんは国をほろぼす念仏ねんぶつは無間地獄・禪

は天魔てんまの所為しよゐ・律僧りつそうは国賊こくぞくとの給たまうゆへなり、例せば道理どうり有る

問注もんしゆに悪口あくぐちのまじわれるがごとしと云云、日蓮にちれん我が弟子でしに反詰はんきつして

云く汝若なんじもし爾しからば我が問を答えよ一切いっさいの真言師しんごんし・一切いっさいの念仏者ねんぶつ・一切いっさい

の禪宗等ぜんしゅうに向て南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようと唱となえ給たまえと勸進かんじんせば彼等かれらの云く我

が弘法大師こうぼうだいしは法華經ほけきようと釈迦仏しやかぶつとを戲論無明けろんむみようの辺域へんいき・力者りきしゃ・はき物とり

に及およばずと・かかせ給たまいて候、物の用にあわぬ法華經ほけきようを誦誦どくじゆせ

んよりも其の口に我が小呪を一反も見つべし一切の在家の者の云く
善導和尚は法華經をば千中無一・法然上人は捨閑闍拋・道緯禪師は
未有一人得者と定めさせ給へり汝がすすむる南無妙法蓮華經は我が
念仏の障りなり我等設い惡をつくるともよも唱えじ一切の禪宗の云く
我が宗は教外別伝と申して一切經の外に伝へたる最上の法門なり
一切經は指のごとし禪は月のごとし天台等の愚人は指をまほつて月を
亡いたり法華經は指なり禪は月なり月を見
て後は指は何のせんか有るべきなんど申す、かくのごとく申さん時はい
かにとしてか南無妙法蓮華經の良葉をば彼れ等が口には入るべき仏は
且らく阿含經を説き給いて後・彼の行者を法華經へ入れんと・たばかり
給いしに一切の聲聞等・只阿含經に著して法華經へ入らざりしをばい
かやうにか・たばかりせ給いし、此をば仏説いて云く

設たひ五逆罪ごぎやくざいは造つくるとも五逆ごぎやくの者をば供養くようすとも罪つみは仏ぶつの種しゆとはなる
とも彼れ等ぜんこんが善根ぜんこんは仏種ぶつしゆとならじ」とこそ説かせ給しか、小乗しょうじやう・大乘だいじやう
はかわれども同じく仏説ぶつせつなり大が小を破はして小を大となすと大を破はし
て法華經ほけきやうに入ると大小だいしやうは異ことなれども法華經ほけきやうへ入れんと思おもう 志しつは是
一つなり、されば無量義經むりやうぎきやうに大を破はして云いく未顕真実みけんしんじつと法華經ほけきやうに云いく
此この事は為さて不可ふかなり」等云云、仏ぶつ、自ら云いく 我世いに出いでて華嚴けごん・
般若等はんにかを説ときて法華經ほけきやうをとかずして入涅槃ねはんせば愛子あいこに財さいを・をしみ病
者りやうやくに良藥りやうやくをあたへずして死しにたるがごとし仏ぶつ、自ら地獄じごくに墮おつべし」と
云云、

不可ふかと申もうすは地獄じごくの名ななり況いはんや法華經ほけきやうの後のち・爾前にぜんの經きやうに著じやくして法華經ほけきやう
へうつらざる者は大王だいおうに民たみの従したがはざるがごとし親おやに子この見まへざるがご
とし、設たい法華經ほけきやうを破はせざれども爾前にぜんの經經きやうきやうをほむるは法華經ほけきやうをそ

しるに当たれり妙樂云く 君し昔を称歎せば豈に今を毀るに非ずや」
文、又云く 禪心せんと欲すと雖も偏円を簡ばず誓の境を解らざれば
未來法を聞くと何ぞ能く謗を免れん」等云云、真言の善無畏・
金剛智・不空・弘法・慈覚・智証等は
設といた法華經を大日經に相對して勝劣を論ぜずして大日經を弘通す
とも滅後めつごに生まれたる三藏・人師なれば謗法はよも免れ候はじ、何に
況や善無畏等の三三藏は法華經は略説・大日經は広説と同じて而かも
法華經の行者を

だいにちきよう

大日経えすかし入れ、弘法等の三大師は法華經の名をかきあげて戲論

なんどかかれて候大科を明らめずして此の四百余年一切衆生を皆

ほうぼう

謗法の者となせり、例せば大莊嚴仏の末の四比丘が六百万億那由佗の

人を皆無間地獄に墮せると、師子音王仏の末の勝意比丘が無量無辺の

持戒の比丘・比丘尼うばそくうばいを皆阿鼻大城に導きしと、今の三

大師の教化に随いて日本国四十九億九万四千八百二十八人・或は云く

日本紀に行基の人数に云く男女四十五

億八万九千六百五十九人云云の一切衆生又四十九億等の人人四百余

年に死して無間地獄に墮ちぬれば其の後他方世界よりは生れて又死し

て無間地獄に墮ちぬ、かくのごとく墮つる者は大地微塵よりも多し

此れ皆三大師の科ぞかし、此れを日蓮此に大に見ながらいつわりをろ

かにして申さずば俱に墮地獄の者となつて一分の科なき身が十方の大

あびしく

阿鼻獄を経めぐるべしいかでか身命をすててよばわらざるべき涅槃經に

云く「一切衆生異の苦を受くるは悉く是如来一人の苦なり」等云云、

日蓮云く一切衆生の同一苦は悉く是日蓮一人の苦と申すべし。

平城天皇の御字に八幡の御託宣に云く我は是れ日本の鎮守八幡大

菩薩なり百王を守護せん誓願あり」等云云、今云く人王八十一・二代

隠岐の法皇・三・四・五の諸王已に破られ畢んぬ残の二十余代・今捨て

畢んぬ、已に此の願破るるがごとし、日蓮料簡して云く百王を守護せ

んというは正直の王・百人を守護せんと誓い給う、八幡の御誓願

に云く正直の人の頂を以て栖と為し、諸曲の人の心を以て亭ず」等

云云、夫れ月は清水に影をやどす濁水にすむ事なし、王と申すは不

妄語の人・右大将家・権の大夫殿は不妄語の人正直の頂八幡大菩薩の

栖む百皇の内なり、正直に二あり一には世間の正直王と申すは

天人地の三を串くを王と名づく、天・人・地の三は横なりたつ

てんは縦なり、王と申すは黄帝・中央の名なり、天の主・人の主・地の主

を王と申す、隱岐の法皇は名は國王・身は妄語の人なり横人なり、權の

大夫殿は名は臣下・身は大王・不妄語の人・八幡大菩薩の願い給う頂

きなり、二には出世の正直と申すは爾前・七宗等の經論釈は妄語・

法華經・天台宗は正直の經釈なり、本地は不妄語の經の釈迦仏・

迹には不妄語もうごの八幡大菩薩はちまんたいぼさつなり、八葉はちようは八幡はちまん・中台ちゅうだいは教主きようしゅ釈尊しやくそんなり、

四月八日・寅への日に生まれ八十年を経て二月十五日申の日に隠れさせ給たまう、豈あにに教主きようしゅの日本国にほんこくに生まれ給たまうに有らずや、大隅しゅうの正八幡宮はちまんぐうの

石の文いふに云く 晋しんし靈鷲山りようじゅうせんに在あつて妙法華經みょうほけきやうを説き今正宮の中に在て

大菩薩ぼさつと示現じげんす」等云云、法華經ほけきやうに云く 今此三界こんしさんがい」等

云云、又 常じょうに靈鷲山りようじゅうせんに在り」等云云、遠くは三千大千世界さんぜんたいせんせかいの一切いっさい

衆生しゅじやうは釈迦如来しやくかにようらいの子なり、近くは日本国にほんこく・四十九億九万四千八百二十

八人はちまんは八幡大菩薩はちまんたいぼさつの子なり、今・日本国にほんこくの一切衆生いっさいしゅじやうは八幡はちまんをたのみ

奉たてまつるやうにもてなし釈迦仏しやくかぶつをすて奉たてまつるは影をうやまつて体をあなづり

子に向いて親をのるがごとし、本地ほんちは釈迦如来しやくかにようらいにして月氏国がつしに出いで

て正直捨方便しやうじきしやほうべんの法華經ほけきやうを説き給たまい、垂迹すいじやくは日本国にほんこくに生れては正直しやうじきの

頂いただききにすみ給たまう、諸もろもろの権化ごんげの人人ひとびとの本地ほんちは法華經ほけきやうの一実相じつそうなれども

垂迹すいじやくの門は無量むりようなり、所謂いわゆる跋俱羅尊者はくくらそんじやは三世さんぜに不殺生戒ふさつしようかいを示し、鶯おうくつ峯ほう摩羅まらは生生せつしように殺生せつしようを示す、舍利弗しゃりほつは外道げどうとなり、是かくのの如ことく門ふ門どう不同ふどうなる事は本凡夫ほんぶにて有りし時の初はつ發得道はつとくの始じようぶつを成仏じやうぶつの後け・化他門けたに出いで給たまう時とき・我が得道とくどうの門かどを示すなり、妙樂大師みやうらくだいし云いく・若もし本もとに従したがて説またこかば亦是またこれ昔殺等せきとの惡あくの中に於おいて能よく出離しゆりするが故ゆゑなり、是かくのの故ゆゑに迹あと中に亦また殺ころを以もつて利他りたの法門ほうもんと為なす」等云云、今八幡大菩薩はちまんだいぼさつは本地ほんちは月支がつしの不妄語もうごの法華經ほけきようを迹あとに日本国にほんこくにして正直しやうじきの二字ふたごとなして賢人けんじんの頂いたきにやどらんと云云、若もし爾しからば此こゝの大菩薩だいぼさつは宝殿ほうでんをやきて天あまのぼり給たまうとも法華經ほけきようの行者ぎやうじや・日本国にほんこくに有あるならば其その所ところに栖すみ給たまうべし。

法華經ほけきようの第五ごに云いく諸天しよてん昼夜しやに常に法ほふの為ための故ゆゑに而しかも之これを衛護えいごす、經文きやうもんの如ごとくんば南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうと申もうす人ひとをば大梵天だいはんてん・帝釈たいしやく・日月にちがつ・

四天等昼夜に守護すべしと見えたり、又第六の巻に云く、「或は己身を説き・或は他身を説き・或は己身を示し・或は他身を示し・或は己事を示し・或は他事を示す」文觀音尚三十三身を現じ妙音又三十四身を現じ給ふ教主・釈尊何ぞ八幡大菩薩と現じ給はざらんや天台云く即是れ形を十界に垂れて種種の像を作す」等云云。天竺国をば月氏国と申すは仏の出現し給うべき名なり、扶桑国をば日本国と申すあに聖人出で給わざらむ、月

は西より東に向へり月氏の仏法の東へ流るべき相なり、日は東より出づ
にほん ぶつぽう がっし
日本の仏法の月氏へかへるべき瑞相なり、月は光あきらかならず在世は
ずいそう
但八年なり、日は光明・月に勝れり五五百歳の長き闇を照すべき瑞相
どうみょう すく
なり、仏は法華經謗法の者を治し給はず在世には無きゆへに、末法には
ぼけきょう ほうぽう
一乗の強敵充滿すべし不輕菩薩の利益此れなり、
いちじょう ぶてきじゅうまん ふぎよう ぼさつ りやくこ

各各・我が弟子等はげませ給へばげませ給へ。
たまた たまた

弘安三年太歳庚辰十二月日
こうあん

日蓮 花押
にちれん かおう

◆七九

二乗作仏事

589P

爾前得道の旨たる文、經に云く見諸菩薩等云云、又云く始見我身
にぜんとくどう むね いわ けんしよ ぼさつ 又云く しかん わがみ

等、此等の文の如きは菩薩初地・初住に叶う事有ると見えたるなり、故に見諸菩薩の文の下には而我等不預斯事と・又始見の文の下には除先修習等云云、此れは爾前に二乗作仏無しと見たる文なり。

問う顕露定教には二乗作仏を許すや顕露不定教には之を許すか秘密には之を許すか爾前の円には二乗作仏を許すや別教には之を許すか、答う所詮は重重の問答有りと雖も皆之を許さざるなり、所詮は二乗界の作仏を許さずんば菩薩界の作仏も許さざるか衆生無辺誓願度の願の關くるが故なり、釈は菩薩の得道と見たる經文を消する許りなり、所詮華・方・般若の円の菩薩も初住に登らず又凡夫二乗は勿論なり化一切衆生・皆令入仏道の文の下にて此の事は意得可きなり。

問う円の菩薩に向つては二乗作仏を説くか、答う説かざるなり

未會向人說如此事の釈に明かなり。

問う華嚴經の三無差別の文は十界互具の正証なりや、答う次下の經に云く如來智慧の大藥王樹は唯二所を除きて生長することを得ず所謂聲聞と緣覺となり等云云二乗作仏を許さずと云う事分明なり、若し爾らば本文は十界互具と見えたれども実には二乗作仏無ければ十界互具を許さざるか、其の上爾前の經は法華經を以て定む可し既に除先修習等云云と云う華嚴は二乗作仏無しと云う事分明なり方等・般若も又以て此くの如し。

惣じて爾前の円に意得可き様・二有り、一には阿難結集の已前に仏は一音に必ず別円二教の義を含ませ一一の音に必ず四教三教を含ませ給えるなり、故に純円の円は爾前經には無きなり故に円と云えども今の法華に対すれば別に撰すと云うなり、籤の十に又一一の位に皆

普賢行布の二門有り故に知んぬ兼ねて円門を用いて別に撰すと

釈するなり此の意にて爾前に得道無しと云うなり、二には阿難結集の

時・多羅葉に注す一段は純別・一段は純円に書けるなり方等・般若も

此くの如し、此の時は爾前の純円に書ける処は粗法華に似たり、住中

多明円融之相等と釈するは此の意なり。

天台智者大師は此の道理を得給いし故に他師の華嚴など惣じて爾前

の經を心得しには・たがい給えるなり、此の二の法門をば如何として

天台大師は心得給いしぞとさぐれば法華經の信解品等を以て一一の

文字別円の菩薩及び四教・三教なりけりとは心得給いしなり、又此の

智慧を得るの後にて彼等の經に向つて見る時は一向に別・一向

に円等と見えたる処あり、阿難結集の後のしはざなりけりと見給える

なり、天台一宗の学者の中に此の道理を得ざるは爾前の円と法華の円

と始終同しじゅうどうの義ぎを思おもう故ゆえに一処いつしよのみの円教えんきようの經きやうを見みて一卷・二卷等に純円じゆんえんの義ぎを存ぞんずる故ゆえに彼かの經等きやうどうに於おいて往生成仏おうじやうじやうぶつの義理ぎりを許ゆるす人ひと人びと是これ多おほきなり、華嚴けごん・方等ほうどう・般若はんにかや・觀經等かんきやうどうの本文ほんぶんに於おいて阿難あなん・円教えんきようの卷くわんを書かくの日に即身成仏そくしんじやうぶつ云云即得往生等そくとしくおうじやうとあるを見みて一生な乃至いし順次生じゆんじしやうに往生成仏おうじやうじやうぶつを遂とげんと思おもいたり、阿難結集あなんけつじゆ已前いぜんの仏口ぶつくより出いす所の説教せつきやうにて意いを案あんずれば即身成仏即得往生そくしんじやうぶつそくとしくおうじやうの裏うらに歷劫修行りやくじやうしゆぎやう・永不往生おうじしやうの心含こめり、句くの三さんに云いく撰論じやうろんを引ひいて云いく了義經りやうぎきやう・依文判義等いぶんぱんぎとうと云いう意いなり、爾前にぜんの經きやうを文ぶんの如ごとく判はんぜば仏意ぶつゐに乖そむく可べしと云いう

事は是なり、記の三に云く法華已前は不了義なる故と云えり此の心を
釈せるなり、籤の十に云く唯此の法華のみ前教の意を説き今經の意
を顯す」と釈の意は是なり。

抑他師と天台との意の殊なる様は如何と云うに他師は一一の
經經に向つて彼の經經の意を得たりと謂へり、天台大師は法華經に
仏四十余年の經經を説き給へる意をもつて諸經を釈する故に阿難
尊者の書きし所の諸經の本文にたがひたる様なれども仏意に相叶いた
るなり、且らく觀經の疏の如き經説には見えざれども一字に於て四教
を釈す、本文は一処は別教・一処は円教・一処は通教に似たり、釈の
四教に亘るは法華の意を以て仏意を知りたもう故なり、阿難尊者の
結集する經にては一処は純別・一処は純円に書き別円を一字に含す
る義をば法華にて書きけり、法華にして爾前の經の意を知らしむるな

り、若し爾らば一代聖教は反覆すと雖も法華經無くんば一字も諸

經の意を知るべからざるなり、又法華經を讀誦する行者も此の意を知らずんば法華經を讀むにては有る可からず、爾前の經は深經なればと云つて淺經の意をば顯さず淺經なればと云つて又深義を含まざるにも非ず、法華經の意は一一の文字は皆爾前の意を顯し法華經の意をも顯す故に一字を讀めば一切經を讀むなり一字を讀まざるは

一切經を讀まざるなり、若し爾らば法華經無き国には諸經有りと雖も得道は難かる可し、滅後に一切經を讀む可き様は華嚴經にも必ず法華經を列ねて彼の經の意を顯し觀經にも必ず法華經を列ねて其の意を顯すべし諸經も又以て此くの如し、而るに月支の末の論師及び震旦の人師此の意を弁えず一經を講して各・我得たりと謂い又超過諸經の謂いを成せるは會て一經の意を得ざるのみに非ず謗法の罪に

墮するか。

問う天竺の論師震旦の人師の中に天台の如く阿難結集已前の仏口の諸経を此くの如く意得たる論師・人師之有るか、答う無著菩薩の撰論には四意趣を以て諸経を釈し、竜樹菩薩の大論には四悉檀を以て一代を得たり、此れ等は粗此の意を釈すとは見えたと雖も天台の如く分明には見えず、天親菩薩の法華論も又以て此くの如し、震旦国に於ては天台以前の五百年の間には一向に此の義無し、玄の三に云く「天竺の大論尚其の類に非ず」云云、籤の三に云く「家の章疏は理に附し教に憑り凡そ立つる所の義他人の其の所弘に随い偏に己が典を讚するに同じからず、若し法華を弘むるに偏に讚せば尚失なり況や復余をや」文、何となれば既に開権顯実と云う何ぞ一向に権を毀る可きや、華嚴經の心仏及衆生・是三無差別の文は華嚴の

人師・此の文に於て一心覺不覺の三義を立つるは、源と起信論の名目を借りて此の文を釈するなり、南岳大師は妙法の二字を釈するに此文を借りて三法妙の義を存せり、天台智者大師は之を依用す此に於て天台宗の人は華嚴・法華同等の義を存するか、又澄觀・心仏及衆生の文に於て一心覺不覺の義を存するのみに非ず性惡の義を存して云く、澄觀の釈に彼の宗には此れを謂つて実と爲す此の宗の立義・理通ぜざる無し」等云云、此等の法門許す可きや否や、答えて云く弘の一に云く、若し今家の諸の円文の意無くんば彼の經の偈の旨理実に消し難し」同じく五に云く、今文を解せずんば如何ぞ心造一切三無差別を消解せん」文、記の七に云く忽ち都て未だ性惡の名を聞かずと云えり、此等の文の如くんば天台の意を得ずんば彼の經の偈の意・知り難きか、又震旦の人師の中には天台の外には性惡の名目あ

らざりけるか、

又ほけき法華經ように非あらずんば一念三千いちねんさんぜんの法門ほうもん・談だんずべからざるか、天台てんだい已い後ごの華嚴けこんの末師なら並びに真言宗しんこんしゅうの人・性惡しやうあくを以もつて自宗じしゅうの依經えきようの詮なと為なすはてんじく天竺てんじくより伝つたわりたりけるか祖師そしより伝つたわるか、又天台てんだいの名目みやうもくを偷ぬすんんでじしゅう自宗じしゅうの内証ないしやうと為なすと云いへるか、能よく能よく之これを驗けんす可べし。

問しやうあくう性惡しやうあくの名目みやうもくは天台てんだい一家いっかに限へる可べし諸宗しよしゅうには之これ無なし、若もし性惡しやうあくを立てずんば九界いんがの因果いんがを如何いかんが仏界ぶつがいの上に現げんぜん、答こたう義例ぎれいに云いく性惡しやうあく若斷等じやくだんどう云云、問えんどんう円頓止觀えんどんしかんの証拠しやうこと一念三千いちねんさんぜんの証拠しやうこに華嚴經けこんきやうの心仏及衆生しんぶつぎやうしゆじやう是三無差別さんむさべつの文を引くは彼の經に円頓止觀えんどんしかん及び一念三千いちねんさんぜんを説くというか、答えて云く天台宗てんだいしゅうの人の中には爾前にぜんの円えんと法華ほっけの円えんと同どうの義を存ぞんす、問もんう六十卷の中に前三教ぜんさんきやうの文を引いて円えんの義を釈しゃくせるは文を借ると心得こころえ、爾前にぜんの円えんの

文を引いて法華の円の義を釈するをば借らずと存ぜんや、若し爾らば三種の止觀の証文に爾前の諸經を引く中に円頓止觀の証拠に華嚴の菩薩於生死等の文を引けるをば、妙樂釈して云く還つて教味を借て以て妙円を顯す」とは此の文は諸經の円の文を借ると釈するに非ずや、若し爾らば心仏及衆生の文を一念三千の証拠に引く事は之を借れるにて有るべし、答う当世の天台宗は華嚴宗の見を出でざる事を云うか、華嚴宗の意は法華と華嚴とに於て

どうしよう
同勝の二義を存ず、同は法華・華嚴の所詮の法門之同じとす、勝には二義あり、古の華嚴宗は教主と対菩薩衆等の勝の義を談ず、近代の華嚴宗は華嚴と法華とに於て同勝の二義有りと云云、其の勝に於て又二義あり、迹門は華嚴と同勝の二義あり華嚴の円と法華迹門の相待妙の円とは同なり彼の円も判☆・此の円も判☆の故なり、籤の二

に云く 故に須らく二妙を以て三法を妙ならしむべし故に諸味の中に
円融有りと雖も全く二妙無し」私志記に

云く 晋の八の中の円は今の相待の円と同じ」と云へり是は同なり記の
四に云く 法界を以て之を論ずれば華嚴に非ざる無し仏慧を以て之を
論ずれば法華に非ざる無し」云云、又云く 応に知るべし華嚴の尽未来
際は即ち此

の經の常在靈山なり」云云、此等の釈は爾前の円と法華の相待妙とを
同ずる釈なり、迹門の絶待開會は永く爾前の円と異なり、籤の十に
云く 此の法華經は開權顯実・開迹顯本の此の両意は永く余經に異な
り」と云えり、記の四に云く 若し仏慧を以て法華と為さば即」等と云
云、此の釈は仏慧を明すは爾前・法華に亘り開會は唯法華に限る
と見えたり是は勝なり、爾前の無得道なる事は分明なり其の故は二妙

を以て一法に妙ならしむるなり、既に爾前の円には絶待の一妙を闕く衆生も妙の仏と成る可からざる故に籤の三に云く妙變為☆の釈是なり、華嚴の円變じて別と成ると云う意なり。

本門は相待・絶待の二妙俱に爾前に分無し又迹門にも之無し、爾前・迹門は異なれども二乗は見思を断じ菩薩は無明を断ずと申すことは一往之を許して再往は之を許さず、本門・寿量品の意は爾前・迹門に於て一向に三乗俱に三惑を断ぜずと意得可きなり、此の道理を弁えざるの間・天台の学者は爾前・法華の一往同の釈を見て永異の釈を忘れ結句名は天台宗にて其の義分は華嚴宗に堕ちたり、華嚴宗に堕ちるが故に方等・般若の円に堕ちぬ、結句は善導等の釈の見を出でず、結句・後には謗法の法然に同じて師子身中の虫の自ら師子を食うが如し文、
仁王經の下に 天王我が

滅度の後・未来世の中に四部の弟子・諸の小国の王・太子・王子乃ち
是れ三宝を住持し護れる者・転た更に三宝を滅破すること師子身中の
虫の自ら師子を食うが如し、外道には非ず多く我が仏法を壊りて
大罪過を得ん」云云、籤の十に云く 娑め住前より登住に至るこのかた
全く是れ円の義・第二住より次の第七住に至る文相次第して又別の義
に似たり、七住の中に於て又一多相即自在を弁ず、次の行向地又是れ
次第差別の義なり、又一一の位に皆普賢行布の二門有り故に知んぬ
兼て円門を用いて別に撰することゝ

◆ 八〇

小乗小仏要文 しょうじょう しょうぶつ ようぶん

595P

華嚴 けこん
阿含 あこん

方等 ほうとう

小乗 しょうじょう

般若 はんにゃ

無量義經 むりょうぎきょう

法華經迹門十四品 ほけきょうしやくもん

・本門藥王品已下の六品並びに普賢・

大日經 だいにちききょう

真言宗 しんこんしゅう

觀經等 かんききょう

淨土宗 じょうどしゅう

深密經等 じんみつ

法相宗 ほうそうしゅう

楞伽經 りょうがきょう

禪宗 ぜんしゅう

三論宗 さんろんしゅう

涅槃經等 ねはんききょう

応身 おうじん

劣応身 おうじん

勝応身 おうじん

小仏

報身 ほうしん

華嚴經るさな仏 けこんきょう

大日經 だいにちきょう

等びるさな仏

並ならび

に迹門涅槃經等の仏 しやくもんねはんぎょう

阿逸

・汝 なんじまさ

当に知るべし是の諸の大菩薩 こもろもろ ぼさつ

序出二云云。

無數劫よりこのかた仏の智慧を修習す、悉く是れ我が所化なり大道心を発さしむ此等は是れ我が子なり是の世界に依止せり、玄の七に云く、六に本説法妙とは経に言く此等我所化・令發大道心・今皆住不退と我所化とは正く是れ説法して大道心を発さしむるは小説に簡非するなり、此れ本時の説を指して述説を簡非するなり述説・多種なれども若し涅槃に依れば」等云云、華嚴經の寂滅是なり始成正覺。

迹仏。増一阿含經の十に云く、仏・摩竭国に在し道樹の下にして爾時に世尊得道未だ久からず」浄名經に云く、始め仏樹に坐して力て魔を降す」大集經に云く、如来成道始めて十六年なり」大日經に云く、我昔道場に坐し四魔を降伏す」仁王般若經に云く、天覺世尊先ず

我が為に二十九年「無量義經」に云く我先に道場菩提樹下に端坐する事六年乃至四十余年「法華經」の方便品に云く我始め道場に坐し樹を觀じ亦經行し三七日

の中に於て是くの如き事を思惟す「籤」の七に云く天乘の融通過ぎたること無し「華嚴經」の初に云く菩提道場にして始めて正覺を成ず、故に知んぬ大小識成皆近なり「壽量品」に云く爾時に世尊・諸の菩薩の三たび請じて止まざるを知ろしめして之に告げて言たまわく汝等諦かに聴け如來の秘密神通の力を一切世間の天人及び阿修羅は皆今の釈迦牟尼仏は釈氏の宮を出でて伽耶城を去るのと遠からず道場に坐して阿耨多羅三藐三菩提を得たりと謂えり、然るに善男子・我実に成仏してより已來無量無辺百千萬億那由佉劫なり」等云云、文句の九に云く仏・三世に於いて等く三身有り諸教

の中に於いて之を秘して伝えず・故に一切世間の天人・修羅は今の仏
は是に始まると謂えるなり、此の三身を得る故に近に執して遠を
疑う「寿量品に云く 諸の善男子・如来

は諸の衆生の小法を樂える徳薄垢重の者を見ては是の人の為に我少
くして出家し阿耨多羅三藐三菩提を得たりと説く、然るに我實に
成仏してより已来久遠なること斯くの若し」文句の九に云く「日○

二現在○三約修行 ○四・果門に約せば近成の小を聞かんと樂う者は

釈氏の宮を出で始めて菩提を得たりとし長大久遠の道を聞かん事を
樂欲せず故に樂小と云う「此等の小心は今日に始まるに非ず若し先
に大を樂わば仏即ち始成を説かず始成を説くことは皆小法を樂う
者の為のみ、又云く 諸の衆生・小法を樂う者とは所見の機なり」
華嚴に云く

「大衆清淨なりと雖も其の余の樂小法の者は、或は疑悔を生じ長夜に衰惱せん此れを慙むが故に黙す」偈に云く其の余の久く行ぜざるは智慧未だ明了ならず識に依つて智に依らず聞き已つて憂悔を生じ彼將に惡道に墮ちんとす此れを念うが故に説かず」と、彼の經を案ずるに声聞・二乘無し但不久行の者を指して樂小法の
人と為すのみ、師の云く樂小は小乗の人に非ざるなり乃ち是れ近説を樂う者を小と為すのみ」文句の九に云く徳薄とは縁了の二善功用微劣なれば下の文に諸子幼稚と云うなり垢重とは見思未だ除かざるなり」記の九に云く徳薄垢重とは其の人未だ実教の二因有らざる故なり下の文に諸子幼稚と云うは下の医子の譬の文
を指す尚未だ円を聞くに堪えず況んや遠を聞かんをや、見思未除とは且く譬の中の幼稚の言を消す定めて未だ遠を知らず」玄の一に

云く厚く善根を殖えて此の頓説を感ず「文、籤の一に云く「二往は
総じて別円を以て厚と為す」五百問論に云く「二經の中に本門を以
て主と為す」云云、又云く「二代教の中に未だ曾て遠を顯さず父母の
寿は知らずんばあるべからず始めて此の中に於いて方に遠本を顯す、
乃至但恐る才一國に當るも父母

の年を知らざれば失う所・小と謂うも辱むる所至つて大なり、若し
父の寿の遠きを知らざれば復父統の邦に迷う徒に才能と謂うも全
く人の子に非ず」文句の九に云く「菩薩に三種有り下方と他方と旧
住となり」玄義の七に云く「若し迹因を執して本因と為さば斯れ迹
を知らず亦本を識らざるなり天月を識らずして但池月を觀る
が如し○、私迹顯本せば即ち本地の因妙を知る影を撥つて天を指す
が如し云何ぞ盆に臨んで漢を仰がざる嗚呼聲駭なんすれぞ道を論ぜ

んや」又云く 君し迹果を執して本果と為す者は斯れ迹を知らず亦
本を識らざるな

り、本より迹を垂るるは月の水に現げんずるが如ごとく迹を払はらうて本を顯あらわすは影かげを撥はらうて天を指すが如ごとし、当まさに始成しじようの果を撥のぞけば皆みな是れ迹果なるべく久成くじようの果を指すは是れ本果なり」又云いわく諸土しよは悉ことごとく迹土しやくどなり一には今・仏の所栖しよせいの故ゆえに二には前後ぜんご修立しゅうりゅうの故ゆえに三には中間ちゆうけん所払しよほつの故ゆえに若もし是れ本土ほんどは今・仏の所栖しよせいに非あらず、今・仏の所栖しよせいは即すなわち迹土しやくどなり、若もし是れ本土ほんどは一土いっさい一切土いっさいにして前後ぜんご修立しゅうりゅうなるべからず浅深せんじん不同ふどうなり○、迹を執しゅうして本と為なす者は此これ迹を知らず亦また本を識しらざるなり、今迹を払はらつて本を指すときは本時しよせい所栖しよせいの四土は是れ

本国土妙こくどなり」

藏因

三祇百劫菩薩さんぎ ばくけつ ぼさつ

未断見思みだん けんじ

通因

動喻塵劫菩薩どうゆじんけつ ぼさつ

見思断けんじ だん

別因

無量劫菩薩むりようけつ ぼさつ

十一品断無明じゅういちひん だんむみょう

迹しやく仏ぶつ

迹ぶっか仏果

円因

劣応

勝応

報ほうしん身

法ほうしん身

果

四十一品断無明むみょう

草座「三十四心断結成道」じょうどう

天衣「三十四心見思・塵沙断の仏」けんじじんじや

蓮華座「十一品断無明の仏」れんげむみょう

虚空座「四十二品断無明の仏」こくうむみょう

◆八一

日月の事 にちがつ

59

9P

誓耶后

麻利支天女 まりしてん

大日天 だいにち

乗輅車

九曜

毘誓耶后

七曜

大月天 がってん

乗鸞

二十八宿

十二宮

金光明經 こんこうみょうきょう に云く い 日の天子 てんし 乃以 がってん 日月天 にちげつてん 是の經典 きやうてん を聞き精氣充實 せいきじゆうじつ す「最勝王經 さいしょうおうきょう に云く い 日出 い でて光を放ち無垢炎 むくしやう 清淨 しやうじやう なり此の經王の力 りき に由て流暉 りゅうい 四天 してん を遶 めぐる る」仁王經 にんのうきょう に云く い 日月度 にちげつど を失 うしな い」等、大集經 だいいしききょう に

云く日月明を現ぜず四方皆亢旱す是の如き不善業惡王・惡比丘我が
正法を毀壞す仁王經に云く非法非律にして比丘を繫縛すること獄
囚の法の如くす法華經に云く色力乃び智恵此等皆減少す華嚴經に
云く大集經に云く。

段食・法食・喜食・禪悅食。

三力、一切衆生力・法力・自身功德力。

戒光 清淨也

日光 定光 定也

恵光 ☆也

人天 にんてん

三学

小乘 しょうじょう

三学

大乘 だいじょう

三学

権大乘 こんだいじょう

三学

実大乘 じつだいじょう

三学

純円 じゆんえん

三学

法身光 ほつしん

般若光 はんにゃ

解脱光 げだつ

此天は初地・或は十廻向なり

十信 じゆつしん

十住 じゅうじゅう

十行

十廻向 えこう

十地 じゅうち

等

妙

初地三惑断 しよじさんなく

初住三惑断 しよじゅうさんなく

北辰

梵帝釈・日月・四天等

衆星

一切の四天下の衆生の眼目

衣食

壽命

肉眼

天眼

恵眼

法眼 ほうげん

仏眼 ぶつげん

有あに非ひず地を離るが故ゆゑに、空あに非ひず有あを照てすが故ゆゑに有あ、辺あに非ひずし
て中ちゆうに処しよするが故ゆゑに、而しかも空くう・空くうに処しよするが故ゆゑに、而しかも有あ・有あを養やううが
故ゆゑに、来きらずして北きたに至るが故ゆゑに、而しかも来きりて南なんに来るが故ゆゑに、一いつなら
ず四州ししゆうを照てすが故ゆゑに、異いならず一いつ日なるが故ゆゑに、断たならず常じようなるが
故ゆゑに、常じようならず一いつ処しよに住せざるが故ゆゑに。

記の三さんに云いく部方等ぶほうとうと雖いも義ぎは円極えんごくなる故ゆゑに・故ゆゑに今こん之これを引く、

◆八二

和漢王代記

602p

伏羲

小昊

三皇 さんこう

神農

☆☆

三墳・五典 さんぶん

黃帝 こうてい

五帝

帝☆

堯王 ぎょうおう

男九人女一人

舜王 しゅんおう

夏 殷

第一文王 だいいち

第二武王

周公旦 しゅうこうたん

第三成王

第四昭王 しやうわう 御宇 ぎよう 二十四年甲寅 きのえとら に当る五色の光氣南北に亘 わた る大史 たいし 。

蘇由之 そゆうこれ を占う四月八日は仏の御誕生なり

ちゅうげん

中間七十九年なり

第五穆王ばくおうの五十二年

壬みずのえさる申さるに当る二月十五日

御入滅にゅうめつ

十二の虹南北

に亘わたる大史たいし屢多これ之を占う

三十七有り・或あるは八

一儒教じゆきよう

五常ごじよう

文武等なり

周

三教

二道教にとう

仙教せんかい孔丘がんかい「顔回」

三釈教しゃつぎよう

一代いちだい五十余年ろうし老子

始皇

儒教 じゅきょう

秦

次生皇

三教

道教

釈教 しゃくきょう

前漢 十四代

漢

至る いたる 一千一十五年に当るなり

仏の滅後一千一十五年に当るなり
又周の第四の昭王二十四年より後漢の第二光武に

後漢 ごかん 光武帝 こうてい 永平十年 ひのとう 丁卯

一千一十五年に当て摩騰迦竺 あたりにまとうかじくぼうらん 法蘭の二人の聖人 しょうにん 四

十二生經 じゅうじふごうきょう 小乘經 じゅうじふごうきょう

十住 じゅうじゅう 断結經 けつぎきょう 大乘經 だいじふごうきょう を

以て白馬 はくば に負せて漢土 かんど に渡す わたす

魏 雙觀經 そうかんきょう 渡る わたる

西晋

正法華經 ほけききょう 十卷 じふけん 渡る わたる

法護 ほも 三蔵 さんぞう 亘 をら す

晉

後秦
こうしん

妙法華經みょうほけきょう渡わたる

七卷・或あるは八卷

羅什らじゅう三藏さんぞう亘ごす

三論宗さんろんしゅう渡わたる

阿彌陀經あみだきょう亘わたる

華嚴經けこんきょう亘わたる

觀經くわんきょう亘わたる

大涅槃經だいなはんきょう亘わたる

三時・四時・五時

五時^一

一音^二

半滿^三

三教^四

四^五

宗

五宗^六

六宗^七

齊

梁

末

通伝に出ず」

始

南三・北七 江南なり」の十師 江北なり」

曇鸞法師 浄土宗を立つ

禅宗渡る 達摩大師なり

撰論亘る 南北

地論亘る 南北

別時意趣の法門出来す

南岳大師亦恵思禅師と云う 観音の化身なり 道宣の感

六根浄の人 日本にほんの浄宮太子たいし是なり

天台大師の御師なり

日本に伝教大師と生る

亦智者と云い

天台大師

亦智・と云い

亦徳安と云い

此の御時

南三・北七並びに前五

百余年の人師・三蔵・

所立の十師の義を破し始めて五時・八教・三觀・六即・十

境・十乘を立て小釈迦と号す、進では天竺の論師にも超え

退ては震旦の人師に勝るなり、玄義の三に云く故に章安

大師の云く天竺の大論尚其の類に非ず震旦の人師何ぞ

勞しく語るに及ばん

此^これ誇^{こよう}耀^あに非^{あら}ず法^ほ相^その然^{しか}るのみ」又^{また}智^ち証^{しょう}大^{だい}師^し 授^{じゅ}決^{けつ}集^{しゅう} 也^や
云^いく天^{てん}台^{だい}世^{せい}に出^いで仏^{ぶつ}意^い快^{かい}く暢^{ちやう}ぶ豈^{あに}万^{まん}教^{きやう}再^{さい}び世^{せい}間^{かん}に演^{えん}
に非^{あら}ずや」

笈^く多^たと崛^{くつ}多^たの両^{りやう}三^{さん}藏^{ざう}添^{てん}品^{ぽん}法^ほ華^け經^{きやう}を渡^{わた}す

道^{どう}緯^{しゆく}善^{ぜん}導^{どう}此^この世^{せい}に在^{ざい}り

華^け嚴^{こん}宗^{しゆく}

後^ご漢^{かん}の世^よ自^{より}り唐^{とう}の神^{しん}武^ぶ皇^{かう}帝^{てい}の開^{かい}元^{げん}十^{じゅう}八^{はち}年^{ねん}庚^{かう}申^{しん}に至^{いた}る六^{りく}百^{ひゃく}

六^{りく}十^{じゅう}四^し載^{ざい}に渡^{わた}す所^{しよ}の經^{きやう}・律^{りつ}・論^{ろん}・五^ご千^{せん}四^し十^{じゅう}八^{はち}卷^{くわん}

訳^{やく}者^{しゃ}百^{ひゃく}七^{しち}十^{じゅう}六^{ろく}人^{にん}なり妙^{みやう}樂^{らく}は是^この世^{せい}の人^{にん}なり

法^ほ相^{そう}宗^{しゆく}は玄^{げん}奘^{じやう}三^{さん}藏^{ざう}西^{せい}天^{てん}自^{より}り之^{これ}を渡^{わた}す

真^{しん}言^{こん}宗^{しゆく}は善^{ぜん}無^む畏^い三^{さん}藏^{ざう}・金^{こん}剛^{かう}智^ち三^{さん}藏^{ざう}之^{これ}を渡^{わた}す

法^ほ相^{そう}宗^{しゆく} 真^{しん}言^{こん}宗^{しゆく}の二^に宗^{しゆく}は天^{てん}台^{だい}之^{これ}を見^みず妙^{みやう}樂^{らく}大^{だい}師^し之^{これ}を

見て天台宗に對当して勝劣を論ず又日本國の傳教慈覺・
智証之を諍う

宋

天台の玄義の十に南北の十師を破して云く、但聖意幽隱にして教法
彌難し、前代の諸師・或は粗名匠に承け・或は思い袖衿より出ず
阡陌縱横なりと雖も孰か是なるを知ること莫し、然るに義雙立せ
ず理兩存すること無し若し深く所以有り復修多羅と合する者は録し
て而て之を用ゆ文無く義無きは信受すべからず」籤の十に云く、「と
して全く是なること無きを以ての故に一一に難破す」玄の三に云く
「輕慢止まざれば舌口中に爛る」又云く「法華は衆經を總括す」
籤の三に云く「已法華已前華阿方般等の一切經今無量義經なり当
涅槃經等の法華已後の一切經なりの妙茲に於て固く迷えば舌爛れ

て止まざるも猶なほ華報かほうと為なす謗法ぼうぼうの罪苦ざいくち長劫ちやうこくに流る」南三北七なら並び

に華嚴宗の法蔵・澄觀・真言宗の弘法等は法華經よりも華嚴經を勝るとするなり、又三論の嘉祥は法華經よりも般若經を勝るとす、又法相の慈恩等は法華經よりも深密經を勝るとす、又真言宗の善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵等は法華經よりも大日經を勝るとするなり、此等の宗宗の相違如何相違如何。

授決集に云く円珍智証大師

文は大經に出でたり人の之を会する無し、光・盲の前に在れども他に於ては無用なり、仏分明に五味の喩を説き五時の教に喩えたもう云云、訳ありてより來講者・路に溢るれども未だ會て五味を談ずるの義を解せず己が胸臆に任せて趣爾囁語す何ぞ象に触る衆盲の者に異らんや、天台世に出で仏意快く暢ぶ豈に万教再び世間に演るに非ずや、南北の講匠經論を釈する者・各教時を立つれども百にして一も是

なること無しただ只ぜんごとんぜんごんじつだいしやう教部の前後頓漸そみやう權実大小の☆妙・寬狹・進否に迷うに縁りてなり・大教の網を張りて法界ほっかいの海を亘わたし人天にんてんの魚を済おさめて涅槃ねはんの岸に置く斯かくの如ごとく

するすら其その遺漏いろうを恐る況いわんやや諸師しよしの輩羅やからあみの一目なり何れいすれの時か其その鳥を得ん、若しも万歳を暗ずと雖いえども此の理趣えを会せざれば年を終るまで他の宝を計りて自ら半錢ばかみずかの分無く虚なくしく諍論じやうろんを益し長水に水を添うのみ。

授決集じゆけつしゅうに法相宗ほうそうしゅうの慈恩大師じおんだいしを破はして云く、五性宗いごしゅうに云く未熟みじゆく
法華論の前に未熟の文也と云うは、応まさに不熟と云うべし、○今謂おもく汎おほく法華ほっけを講こうずるに
すべからは須すく此の義を以て正と為なすべし若しも爾しからずんば經きやうを破はし論ろんを破はし罪つみ
ごぎやく五逆ごぎやくに過すぎたり基公きこうを除きて外は人の彼の不熟の義を伝うる無し、○
もし若し強しいて之これを執しゅうせば公私じゆうぼう十方じゆうぼうの信施しんせ消し難がたし消し難がたし若し

消せずんば何ぞ三途を免れん爾を供養せん者は三惡道に墮せん謗法の罪報は法華般若の諸大乘經に一切明かに説けり智者披く可し、○爾これを信受す可し無間を招く莫れ。

授決集 円珍真言の諸宗を徴して云う

真言・禪門・華嚴・三論・唯識・律業・成俱の二論等、○若し法華・涅槃等の經に望むれば是れ摂引門なり文、又云く大底他は多く三教在り円の旨至て少きのみ弘法大師の二教論に喩して曰く今斯の經文に依るに仏五味を以て五藏に配当す、總持を醍醐と稱し四味を四藏に譬う震旦の人師等諍つて醍醐を盗み各自宗に名く。

一 姐多覽乳」 アナン」 經

二 毘那耶 酪」 ヲハリ」 律

小乘

六波羅經五藏

三 阿毘達磨 空」

「方等經」 論

四般若はんにゃ

熟

はら蜜蔵

文珠

大乘だいじよう

五惣持そうじ

醍醐だいご

だらに蔵

金剛蔵こんかう

一徂多覽乳

二毘那耶酪

三阿毘達磨あびだるま生

弘法大師こうぼうだいし・此の經に

依よつて五蔵を立つ

四般若はんにゃ

はら蜜熟

般

方

華

法華ほっけ

涅槃ねはん

五だら尼蔵

醍醐だいご

大日だいにちの三部經さんぶきよう

二教論に云く加以いかずしかのみなら 釈教しやつきよう 東夏に漸ぜんし微よ自り著しやくに至り漢明を始めと
為なし周文を後と為なす、其その中間ちゆうけん翻伝する所みなこ皆是けんきようれ顯教けんきようなり玄宗げんそう代宗
の時・金智いま広智の日・密教みつぎよう鬱うつとして起り盛さかんに秘趣ひそを談だんず、新葉日に浅
くして旧病未だ除いかず楞伽りやうがの如ごときに至いたつては法ぶつ仏せつ説法の文ち智と度と性と身と妙
色くきようなり句☆憶はに馳しかせ而も文を会えして自宗じしゆうを驅かり而も義しかを取る惜おしいかな
古賢こけん醍醐だいごを嘗なめず
日本にほん

神代十二代

天神てんじん 七代

地神 五代

人代百王ひやくおう

第一神武天皇だいいち てんのう

第十四仲哀

之これを略りやくす

八幡大神はちまんだいの父ちちなり

第十五神功皇后しんこうこうごう

八幡大菩薩の母なりはちまんだいぼさつ

第十六応神天皇てんのう

今の八幡大菩薩なりはちまんだいぼさつ

略

第三十欽明天皇きんめいてんのう

歴記に云く欽明天皇の治天下十三年己申歳いわ きんめいてんのう てんが

冬十月一日百濟国聖明王自り仏像經等始ふつせう

めて日本国に送るにほんこく

第三十一敏達天皇びんたつてんのう

厩戸王子 四天王寺を造るおうじ してんのう

第三十二用明ようめい

聖德太子は用明の御子也しょうとくたいし ようめい

上宮太子守屋を切り四十九院を立つじょうぐう たいし もりや

南岳大師の後身なり救世観音の垂迹なりなんがく だいいし かんのおん すいじやく

第三十三崇峻すしゅん

第三十四推胡

女帝

第三十五舒明

第三十六皇極

第三十七孝德

第三十八斉明

第三十九天智

第四十天武

第四十一持統

第四十二文武

第四十三元明

第四十四元正

女帝

女帝

俱舍宗
ぐしやしゅう

律宗
りっしゅう

六宗 ろくしゅう

成実宗 じょうじつ

法相宗 ほうそうしゅう

三論宗 さんろんしゅう

華嚴宗 けこんしゅう

亦禪宗 またぜんしゅう 有 なり 並びに一切經 いっさいきやう 有 あり

第四十五聖武 しやうむ

聖武 しやうむ 天皇東大寺 とうだいじ の大仏 だいぶつ を造 つく る

欽明 きんめい 自 より 聖武 しやうむ に至 いた るまで二百四十余年 ふんじゅうよねん なり、

震旦 しんたん 国 よ 自 より 鑒真 がんじん 和尚 わじやう 渡 わた り律宗 りつしゅう を亘 わた す、次に

天台宗 てんだいしゅう の玄文 げんもん 止等 しとう を渡 わた す、又東大寺 とうだいじ の小乘 しょうじやう

戒壇 かいだん を立 た つ

聖武 しやうむ の女

第四十六孝謙 こうけん

第四十七淡路

廢帝

第四十八称徳

孝謙又即位也

第四十九光仁

桓武の父なり

欽明自り二百六十余年に及ぶ

第五十

桓武延暦三年に奈良の都自り長岡の京に遷り、延暦十三

年長岡の京自り平の京に遷る、延暦二十五年御崩・

去延暦四年叡山を立つ最澄なり延暦二十年叡山八講を始

め南京の十人を請ず、延暦二十一年の正月十九日高雄

に於て南京の十四人と最澄と宗論あり、同二十九日

六宗の十四人謝表を桓武聖王に奉る、延暦二十三年入

宋同二十四年御帰朝、此の時始めて伝教大師・天台宗を

立て四十余年の文を以て六宗を破り始めて法華の実義

之を顕し、欽明自り二百余年の邪義之を改む、又六宗の

碩徳たる勤操・徳円・長耀等の十四人・桓武皇帝に謝表

を奉りて邪見を翻す。弘法大師空海は延暦二十三年
御入宋・大同元年御帰朝、伝教大師は山階寺の行表
僧正の御弟子・弘法大師は石淵の勤操僧正の御弟子な
り。

第五十一 平城

第五十二 嵯峨弘仁十三年六月四日 伝教大師御入滅 同十一日
慈覚大師「戒壇を立つ。

第五十三 淳和

衆

秀句しゅうくに云くいわ 法華經ほけきょうを賛すと雖も還いんどつて法華ほつけの心を死ころす」文。

選せん集ちやくしゅうに云くいわ 法然ほうねん造捨しやひ閉かく閣ほう抛ほう、善導ぜんどう礼讃れいさんに云くいわ 「千即じゆつそく十生じゆつしやう・百即ひやくそく

ひやくしやう

百生ひやくしやう」又云くいわ 百の時に希まれに一二を得千の時に希まれに三五を得」又云くいわ

千中無一せんちゆうむいつ」道綽どうしやくの安樂集あんらくしゅうに云くいわ 藏經大集月を引く 我が末法まつぽうの時の中の億億いふ

しゆじやう

衆生行しゆじやうを起し道に臨のぞむも未だ一人の得る者有らず、当今とうこん末法まつぽうは是

ごじやく

五濁ごじやくの惡世あくせなり唯淨土ただじやうどの一門いちもんのみ有りて通入べす可べきの路えしんなり」惠心えしんの

おうじやうしゅう

往生要集いわに云く 利智りち精進しやうじんの人は未だ難がたしと為なさず予が如ごとき頑魯がんろの

あにあえて

者豈敢あてせんや」

根本大師こんぽんだいし

伝教大師でんぎやうだいし

山家

天台てんだいの後身ごしんなり

守護章しゆごに「正像しやうざう稍過ややすぎ已おわつて末法まつぽう太はなだ近ききに有ほり法華ほつけ一乘いちじやうの機き今

正まさに是これ其そのの時ときなり」又云いわく「一乘いちじょうの家には都すて用もちいざれ四小乘十年權大乘なり但ただし開あひし已おひつて助道もちに用いたるを除く」

◆ 八三

一代いちだい五時図

文応元年ぶんおうがねん三十九歳御作

6 1 2 P

於総州

大論だいろんに云いく十九出家しゅうけ三十成道じょうどうと

権大乘こんだいじょう

戒

華嚴經けこんきょう

「三七日」

華嚴宗けこんしゅう

定ち智儼ごん

杜順とじゆん

法蔵ほうぞう

「二七日」

慧ち澄觀じやうかん

小乘しょうじょう

俱舍宗くしゃしゅう

戒定慧かいじやうえ

阿含あこん

「中二年」

成実宗じやうじつ

戒定慧かいじやうえ

律宗りつしゅう

戒定慧かいじやうえ

鑒真和尚
がんじんわじょう

玄奘
げんじょう

慈恩
じおん

方等
ほうとう

權大乘
ごんだいじょう

善導
ぜんどう

三十年

大集經
だいしつぎょう

深密經
じんみつ

楞伽經
りょうがぎょう

觀經
かんぎぎょう

雙觀經
そうかんぎぎょう

阿彌陀經
あみだぎょう

金剛頂經
こんごうちょうぎぎょう

法相宗
ほうそうしゅう

禪宗
ぜんしゅう

淨土宗
じょうどしゅう

戒定慧
かいじやうえ

大日經

真言宗

戒定慧

蘇悉地經

百論 提婆菩薩造

權大乘

中論 龍樹菩薩造

般若

十二門論

同

三論宗

戒定慧

大論

同

嘉祥寺

吉藏大師

無量義經に云く 方便力を以て四十余年には未だ真実を顯さず、又

云く無量無辺不可思議阿僧祇劫を過れども終に無上菩提を成ずるこ

とを得ず所以は何ん菩提の大直道を知らざるが故に險逕を行くに

留難多きが故に」と、又云く天直道を行くに留難無きが故に」と。

法華經 八箇年 法華宗

天台宗

戒定慧

世尊せそんは法久ほうひさしくして後かならず

当まさに真実しんじつを説とき給たまうべし、

種種しゅじゆの道を

示いすと雖いえども其それ実じには

仏乘ぶつじやうの爲ためなり、

正直しやうじきに方便ほうべんを捨すてて但むじ無上道むじやうどう

を説とく、今いま此この三界さんがいは皆みな是これ我われが有あり其そのの中なかの衆生しゆじやうは悉ことごとく是これ我われ

が子こなり而しかも今いま此この處ところは諸もろもろの患難げんなん多おほし唯ただ我われ一人ひとりのみ能よく救護くごを為なす

復また教詔きやうしやくすと雖いえども而しかも信受しんじゆせず、

若もし人信しんぜずして此このの經きやうを毀謗きぼう

せば則すなわち一切いっさい世間せけんの仏種ぶつしゆを断たぜん○其そのの人命終みやうじゆうして阿鼻獄あびごくに入いら

ん、○將まさに魔まの仏ぶつと作りて我われが心を悩乱のうらんするに非あらずや疑ぎ二にの卷くわん、妙法華經みやうほけきやう

○皆是みなこれ真実しんじつ明みやうの文ぶん」

多宝蓋たふはふがい

- 1727 -

れ

ねはんぎよう
涅槃經六に出ず

れ

れ

一日一夜

ふりようぎきよう
不了義經に依らざれ

ねはんぎよう
涅槃經

てんだい
天台等

にゅうめつ
八十入滅

法に依つて人に依らざ

ぎに依つて語に依らざ

智に依つて識に依らざ

りようぎきよう
了義經に依つて

ごぼん
五品

ろっこん
六根

しえ
人四依

しよじ
第二依 初地已上

竜樹菩薩等

第三依

第四依

等覺菩薩

天竺 十四五六卷

十住毘婆沙論に云く

竜樹菩薩造羅什三藏訳

難行道

譬えば陸路を歩行せば苦なれども

不退地

易行道

水道を船に乗れば則ち楽なるが如し

十仏・百三十余菩薩並に阿弥陀仏等

曇鸞法師 齊世 本三論宗の人なり 浄土論註二卷を作る

道綽禪師 唐世 善導の師なり 安樂集二卷を作る

安樂集に云く 天集月藏經に云く 我が末法の時の中の億億の衆生

起行修道すとも未だ一人も得る者有らじ

とうこんまつぼう
当今末法は是れ五濁の悪世なり唯浄土の一門のみ有つて通入すべき
路なり」と

とう
唐世

ぜんどう
善導

げんぎ
玄義

じよぶん
一卷・序分義

ていぜんぎ
一卷・定善義

さんぜん
一卷・散善義

かんねん
一卷・観念法門

かんねん
一卷・散善義

かんねん
一卷・観念法門

おき
一卷・往生礼讃

はんじゅ
一卷・般舟讃

ほうじさん
一卷・法事讃

じようげ
上下已上九卷

おき
隱岐院の御宇建仁年中今に五十余年なり

ほうねん
法然

げんくう
源空

せんちやくしゅう
選択集

一卷

いま
未だ一人も得る者有らず千の中に一も無し

じようどさんぶきよう
浄土三部經を除くの外法華經等の一切阿弥陀仏を除く一切の

ぼさつ
仏・菩薩・一切の神祇等

なんぎよう
難行

しようどう
聖道

ぞうぎよう
雑行

てんだいほつしゅう はつしゅう
天台法華宗等八宗を捨閉し閣拋す

易行
淨土 正行

あみだぶつ じゅつそくじゅつしゅう ひやくそくひやくしゅう
阿弥陀仏は十即十生・百即百生

六百三十七部二千八百八十三卷

しゃひい かくほう
捨閉閣拋

そうかんきよう いわ
雙觀經に云く 設い我仏を得んに十方の衆生至心に信樂し我が

くに生れんと欲し乃至十念して若し生ぜずんば正覺を取らじ唯五逆

と誹謗正法とを除く」と、道綽の未有一人得者、善導の千中無一、

法然の捨閉閣拋・此等は豈謗法に非ずや、法華經第二譬喩品に云く

君し人信ぜずして此の經を毀謗せば則ち一切世間の仏種を断ぜん・或

は復聲蹙して而も疑惑を懷かん汝当に此の人の罪報を説くを聴くべし

若しは仏の在世若しは滅度の後に其れ斯の如き

經典きやうてんを誹謗ひぼうすること有らん經きやうを誦誦どくじゆし書持しよじすること有らん者しやを見て
輕賤きやうせん憎嫉ぞうしつして而しかも結恨けつこんを懷いだかん此この人の罪報ざいほう汝なんじ今復また聽またけ其その人
命終みやうじゆうして阿鼻獄あびごくに入らん一劫いつくわうを具足ぐそくして劫尽つきなば更生またうまれん
是かくの如ごとく展轉てんでんして無數劫むしゆくわうに至らん地獄じごく從り出でては當まさに畜生ちくしやうに墮おつべ
し」涅槃經ねはんぎやう第十じゆうに云いく問もんう一闡提いつせんたいとは其その義い云何いかな、仏い云わく純陀じゆんだ若もし
比丘びく

及および比丘尼びくに・優婆塞うぱそく・優婆夷うぱい有あつて・惡あくの言ごんを發はつし正法しやうほうを誹謗ひぼうし是この
重業じゆうごうを造つくりて永とこく改悔かいげせず心こころに慚愧ざんき無なからん是かくの如ごとき等らの人ひとを名な
けて一闡提いつせんたいの道みちに趣向しゆきやうすと為なす、若もし四重しじゆうを犯おかして五逆罪ごぎやくざいを作みり自みづか
定さだめて是かくの如ごとき重事じゆうじを犯かすと知しつて而しかも心こころに初はつより怖畏ふい慚愧ざんき無なく
肯あえて發露はつろせず彼かの正法しやうほうに於おいて永とこく護惜ごしやく建立こんりやうの心こころ無なく毀き皆し輕賤きやうせんして言な
過咎かぐ多おほからん、是かくの如ごとき等らの人ひとも亦また一闡提いつせんたいの道みちに趣向しゆきやうすと名なく、

若し復説いて仏法衆無しと云わん是くの如き等の人も亦一闍提の道に趣向すと名く、唯此くの如き一闍提の輩を除きて其の余に施さば一切讚歎すべし」と。

上品は地獄に墮つ

一 殺生

下殺は螻蟻蚊☆

中品は餓鬼に墮つ

二 偷盜

中殺は凡夫人及び前三

果の聖人

下品は畜生に墮つ

三 邪淫

上殺は阿羅漢・辟支仏・

菩薩父母等

十惡

四 妄語

五 綺語

八 貪

六 惡言

九 瞋

七 兩舌

十 癡

殺生 せつしょう

一 殺父 しごふ

養父母 よふぼ

偷盜 ちゅうとう

二 殺母 しも

四重 しじゅう

五逆 ごぎやく

凡夫 ぼんぷ

上人 しょうにん

邪淫 じゃいん

三 殺阿羅漢 あらかん

木画像等 もくえ

妄語 もうご

四 出仏身血 すいぶつしんけつ

五 破和合僧 はわごうそう

四人

已上凡夫僧 ぼんぷ

此等 これらは皆 みな一業引 いちごういん一生 いっしょうなり故 ゆえに一度 ひとたび惡道 あくどうに墮 だすれば還 かえつて二度 ふたたび惡道 あくどう

に墮 だせず、謗法 ほうぼうは一業引 いちごういん多生 たじふなれば一度 ひとたび三宝 さんぼうを破 はすれば度度 たびたび惡道 あくどうに

墮 だする是 これなり、伝教 でんぎょう大師 だいしの守護章 しゆごしょうに云 いく不正義 せいぎの一切 いっさい学人 がくじんは信受 しんじゆす

べからず所以ゆえんは何いかん其その師しの墮だする所でし弟子でしも亦また墮おち檀那だんなも亦また墮おつ金口きんく
の明説めいせつ何なんぞ愼つつしまざるべけんや愼つつしまざるべけんや」と。

の人人ひとひと

第一だいいち弟子でし

長樂寺多念ちやうらくじ

隆觀

南無房一切鎌倉

第一だいいち

「こさか」

善慧房

雪院洛中一切

諸人しよじん

法然ほうねん

第一だいいち聖光せいこう

筑紫九国一切諸人つくし

一条いちじょう覺明かくみょう

今こんの道阿弥等どうあみ

成覺じやうかく

一念いちねん

法本

一念いちねん

已上でし弟子八十余人

乃至日本ないしにほん国こくの一切いっさい念佛者ねんぶつ並ならに檀那等だんな、又一切いっさい的天台てんだい・真言等しんごんの諸宗しよしゅう

の人人ひとびと又また法然ほうねんが智分ちぶんを出いでず各各それぞれ其の宗を習えども心は皆みな一同に
念仏ねんぶつ者なり、法華經ほけきょうを読めども真言しんごんを行ずれども皆助業みなとなし念仏ねんぶつを
以て正業と為なす謗法ぼうぼうの失脱とがるべからず。

◆八四

一代五時図 いちだい

618P

竜樹菩薩造 りゅうじゅぼさつぞう
大論に云く十九出家浄飯王の太子

しゅつけじょうばん

たいし

三十

成道 じょうどう 悉達太子 しつたたいし

権大乘 ごんだいじょう

杜順法師 とじゅんほふし

六十卷

智儼法師 ちげんほふし

華嚴經 けこんきょう

華嚴宗 けこんしゅう

八十卷

法蔵大師 ほうぞうだいし

三七日

澄観法師 ちやうかんほふし

増一阿含經 あこんきょう

世親菩薩 せじんぼさつ

俱舍宗 くしやしゅう

玄奘三蔵 げんじょうさんざう

小乗經 しょうじょうきょう

中阿含經 あこんきょう

阿含經 あこんきよう

十二年

長阿含經 あこんきよう
雜阿含經 あこんきよう

成実宗 じょうじつ
律宗 りつしゅう

迦梨跋摩 かうりはつ
道宣律師 どうせんりつし

二百五十戒

僧

小乘戒 しょうじょう

五百戒

尼

五戒 ごかい

男女 なんよ

八齋戒

男女 なんよ

深密經 しんみつぎょう

瑜伽論 ゆいが百卷
唯識論 ゆいしきろん

弥勒菩薩造 みろくぼさつ
世親菩薩造 せじんぼさつ

玄奘三蔵 げんじょうさんざう

慈恩大師 じおんだいし

大集經 だいしつきやう

雙卷經

曇鸞法師 どんらんほつし
淨土三部經 じやうどさんぶきやう

觀經 かんきやう

道綽禪師 どうしやくぜん

阿彌陀經 あみだ

淨土宗 じやうどしゆう

善導和尚 ぜんどうわじやう

法相宗 ほうそうしゆう

法然房
ほうねんぼう

大日經
だいにちきょう

七卷

善無畏三藏
ぜんむいさんぞう

權大乘
こんだいじょう

金剛頂經
こんごうちょうきょう

三卷

金剛智三藏
こんごうちさんぞう

方等部
ほうとうぶ

蘇悉地經
そしつちきょう

三卷

真言宗
しんごんしゅう

不空三藏
ふくうさんぞう

慧果和尚
けいかわじょう

弘法大師
こうぼうだいし

慈覚大師 じかくだいし

智証大師 ちしやうだいし

三十年

達摩大師 だいまうだいし

慧可 えいか

僧

道信

楞伽經 りやうがきやう

四卷

十卷

禪宗 ぜんしゆう

求忍

百論

提婆菩薩造

中論

竜樹菩薩造

權大乘
こんだいじよう

慧能
えの

般若
はんにか

十二門論

同

三論宗
さんろんしゅう

興皇
こうこう

四十卷

大智度論
だいちどろん

同

嘉祥大師
かじようだいし

無量義經
むりようぎきよう

七十二歳

吉蔵
きちざう

四十余年には未だ眞實を顕さず、方便の力を以て四十余年には

未だ眞實しんじつを顯あらわさず、無量無辺むりやうむへん不可思議ふかしぎ・阿僧祇劫あそぎこうを過すれども終ついに
無上菩提むじやうぼだいを成じやうずることを得ず、所以ゆえんは何ん菩提ぼだいの大直道じきどうを知らざる
が故ゆえに險逕けんぎやうを行くは留難るなん多きが故ゆえに、大直道じきどうを行くは留難るなん無きが
故ゆえに。

実大乘じつだいじやう

顯露宗けんろしやう

法華經ほけきやう

最秘密宗ひみつ

八箇年はちかねん

仏立宗ぶつりやうしやう

法華宗ほつしやう

天台宗てんだいしやう

世尊せそんは法久ほうひさしくして後に要当まさに眞實しんじつを説とき給たまうべし正直しやうじきに方便ほうべんを

捨すてて但無上道むじやうどうを説しめく種種しゆじゆの道を示すと雖いえども其それ実じつには仏乘ぶつじやうの為ためな

り、今・此の三界さんがいは皆みな是これ我が有そなり其その中の衆生しゆじやうは悉ことごとく是これ吾わが

子なり而も今・此の処は諸の患難多し唯我れ一人のみ能く救護を
為す復教詔すと雖も而も信受せず、若し人信ぜず
して此の経を毀謗せば則一切世間の仏種を断ぜん、或は復☆蹙し
て疑惑を懷かん汝当に此の人の罪報を説くことを聴くべし若しは仏
の在世若しは滅度の後其れ斯の如き經典を誹謗すること有らん経を
誦誦し書持する有らん者を見て輕賤憎嫉し而も結恨を懷かん此の
人の罪報を汝今復聴け其の人命終して阿鼻獄に
入らん一劫を具足して劫尽きなば更生じ是の如く展転して無數劫に
至らん此に於て死し已つて更に隣身を受けん其の形・長大にして五
百由旬ならん、若し是の善男子・善女人・我が滅度の後に能く竊に一
人の為にも法華經の乃至一句を説かん当に知るべし是の人は則・如来
の使なり如来の所遣として如来の事を行ずるな

り、藥王若し惡人有つて不善の心を以て一劫の中に於て現に仏前に
於て常に仏を毀罵せん其の罪尚輕し若人・一の惡言を以て在家・出家
の法華經を讀誦する者を毀訾せば其の罪甚だ重し藥王今汝に告
ぐ我が所説の諸經而も此の經の中に於て法華最も第一なり我が所説
の經典無量千萬億にして已に説き今説き當に説か
ん而も其の中に於て此の法華經最も爲難信難解なり若し法師に親近
せば速かに菩薩の道を得ん是の師に隨順して學せば恒沙の仏を見
上ることを得ん、爾の時に宝塔の中より大音声を出して歎めて言わ
く善哉善哉釈迦牟尼世尊能く平等大慧教菩薩法仏所護念の
妙法華經を以て大衆の爲に説き給う是の如し是の如し
釈迦牟尼世尊の所説の如きは皆是れ眞實なり・諸余の經典數恒沙の
如し此等を説くと雖も未だ難しと爲す

に足らず若し須弥を接つて他方無數の仏土に擲げ置かんも亦未だ
難しと為さず若し仏の滅度に惡世の中に於て能く此の經を説かん
是れ則ち難しと為す、諸の無智の人の惡口罵詈等し及び刀杖を加う
る者有らん我等皆當に忍ぶべし惡世の中の比丘は邪智にして心諂曲
に未だ得ざるを為れ得たりと謂い我慢の心充滿

せん・或は阿練若に納衣にして空閑に在つて自ら眞の道を行ずと謂い
て人間を輕賤する者有らん利養に貪著するが故に白衣の与に法を
説いて世に恭敬せらるること六通の羅漢の如くならん常に大衆の中
に在つて我等を毀らんと欲する故に國王・大臣・婆羅門・居士及び余
の比丘衆に向つて誹謗して我が惡を説いて是れ邪見

の人外道の論議を説くと謂わん・濁劫惡世の中には多く諸の恐怖有
らん惡鬼其身に入つて我を罵詈し毀辱せん・濁世の惡比丘は仏の

方便ほうべん隨宜ずいき所說しよせつの法ほふを知らず惡口あくぐして☆躋しよし數數しよしよ擯出ひんずいせられん、大神力じんりきを現あらわしこうちようぜつ廣長舌こうちようぜつを出だして上梵世じやうばんに至いたらしむ諸しよ仏ぶつも亦また復また是かくの如ごとく

菩薩ぼさつ・

善導ぜんどう等とうなり

淫ねはんぎ槃ぎ經よう 一日一夜

八十にゅうめつ入滅めつ

依報えほう不依人ふえ

依え義ぎ不依語ふえ
依え智ち不依識ふえ
依え了義經りやうぎきやう
不依ふえ不了義經ふりやうぎきやう

文殊もんじゆ・普賢ふげん・觀音かんのん・地藏じぞう・等とう竜樹りゅうじゆ

善無畏ぜんむゐ・弘法こうぼう・慈覺じかく・法藏ほふぞう・嘉祥かじやう・

法華ほけき經きやう

觀經かんきやう等とう

大日だいにちぎ經きやう等とう

深密じんみつ經きやう等とう

華嚴けえんぎ經きやう等とう

般はん若にやき經よう等

◆八五

一代五時鷄図

623P

壽命三百年

羅什訳

百論

法雲自在王如来

觀自在王如来

千卷

仏滅後六七八

大論に云く十九出家三十成道

三十万卷

竜樹菩薩

第十一 馬鳴菩薩の御弟子

付法蔵の第十三

大悲方便論

十万卷

猛

大心論

十万卷

大無畏論

十万卷

実大乘 じつだいじょう

権大乘 こんだいじょう

立五教撰尽一代 しょうごじんいちだい

杜順和尚 とじゅんわじょう

華嚴經 けこんきょう

三七日

華嚴宗 けこんしゅう

智儼法師 ちこんほっし

法藏大師 ほうざうだいし

香

象大師 だいし

賢首法師 けんしゅほっし

結經梵網經 けつきょうばんもうきょう

大乘戒之を出す だいじょうかいこれいだし

華嚴和尚 けこんわじょう

小乘 しょうじょう

十二年

阿含經 あこんきょう

長阿含 あこん
中阿含 あこん

俱舍論 くしゃろん
經 きょう

定

成実宗 じょうじつしゅう

結經遺教經 けつぎょうゆいきょうぎょう

大乘 だいしやう

或說時不定 あるせつじふじょう

增一阿含 あこん
雜阿含 あこん
小乘戒之を出す しょうじやうけいのいだし

律宗 りつしゅう

或云法華已前 あるほうけいせん

或云法華已後 あるほうけいご

弥勒 みろく

菩薩說 ぼさつ

無著菩薩筆 むぢやくぼさつ

或十六年 ある

深密經 じんみつ

一百卷

或八箇年 あるはちかねん

五卷

瑜伽論 ゆいが

世親菩薩造 せじんぼさつ
方等部 ほうとうぶ

唯識論 ゆいしきろん
權大乘 ごんだいじょう

三十頌

摂尽す しやうじん

玄奘三蔵 げんじやうさんざう

慈恩大師 じおんだいし

有相宗 ゆうそう

三時を立て一代を いちだい

法相宗 ほうそうしゅう

六経十一論

瓔珞經 ようらく

結經 けつぎやう

楞伽經 りようがきよう

禪宗 ぜんしゅう

達磨大師 だるまだいし

・或は諸法無行經 ある しょぼうむぎようきよう

・或は金剛 ある こんごう

般若經 はんんにゃきよう

・或は大円覺經 ある えんかく

・或は首楞嚴經 ある しゅりようこんきよう

・或は云く一切經 ある いっさいきよう

・或は云く教外 ある きょうげ

別伝 べっでん

一卷七枚

菩提心論 ぼだいしんろん

・或云 ある

竜樹造 りゅうじゆ

・或云 ある

不空造 ふくう

大日經 だいにちきよう

七卷

善無畏三藏 ぜんむいさんぞう

金剛頂經

『三卷』

真言宗

顯密二道を分ち五藏を立て

或は十住心を立つ

蘇悉地經

『三卷』

金剛智三藏

不空三藏

一行阿闍梨

或は云く方等部

或は云く華嚴部

或は云く般若部

或は云く法華部

或は云く涅槃部

或は一代諸經の外

雙觀經

曇鸞法師

道綽どうしゆく
禪師ぜんし

和尚わじやう

觀經かんぎやう

淨土宗じやうどしゆ

善導ぜんどう

禪師^{ぜんし}

康法師^{こうぼうし}

阿彌陀經^{あみだきやう}

難行^{なんぎやう}

惠感

小

法照

易行^{いぎやう}

聖道^{しやうだう}

淨土^{じやうど}

雜行^{ざうぎやう}

正行^{しやうぎやう}

諸行^{しよぎやう}

念仏^{ねんぶつ}

三十年

或^{ある}は云^いく二十二年

或^{ある}は云^いく十四年

大品^{だいほん}般若^{はんにゃ}

光讚^{こうさん}般若^{はんにゃ}

金剛^{こんごう}般若^{はんにゃ}

天王問^{てんわうもん}般若^{はんにゃ}

摩訶^{まか}般若^{はんにゃ}

般若^{はんにゃ}經^{きやう}

仁王^{にんのう}般若^{はんにゃ}

結^{けつ}經^{きやう}」

百論

竜樹^{りゅうじゆ}菩薩^{ぼさつ}造

中論

同

十二門論

同

大論^{だいろん}

同

或は四論宗といふ

淨影

三論宗

興皇

或は法性宗と云ふ

嘉祥寺の吉藏大師

或は無相宗と云ふ

道朗

三時を立て一代を撰尽す、或は二

藏を立て或は三転法輪を立つ

華嚴三七日阿含十二年方等般若三

十年已上四十二年なり

法界性論に四十二年

無量義經に云く方便力を以ての故に四十余年には未だ眞實を顯さず、又云く無量無辺不可思議・阿僧祇劫を過るも終に無上菩提を成ずるを得ず、所以は何ん菩提の大直道を知らず險逕を行くに

留難るなん多きが故ゆえに、又云く大直道じきどうを行けば留難無きが故ゆえに。

諸宗依憑宗しよしゅうえひよう

世尊法久後・要当說眞実せそんほうくご ようとうせつしんじつ

仏立宗ぶつりゅうしゅう

廢也・或は前三教ある ぜんさんきようと云い・或は前ある

四教前四味しきようぜんぜんしみと云うなり、或は先の三教の円教ある

天台宗てんだいしゅう

に撰尽するを云う。

法華宗ほつげしゅう

正直捨方便・但說無上道しやうじきしやほうべん たんせつむじやうどう

法華經ほけきよう

秘密宗ひみつ

四時・七教・五時・八教はつぎよう

顕露彰灼宗あらわ

雖示種種道・其実為仏乘すいじしゆじゆ ごとじつ いぶつじよう

一仏乘いちぶつじよう

普賢經ふげん 結經けつきよう

將非魔作仏・惱乱我心耶しやうひまさぶつ のうらんわがこころ

叡山戒壇えいさんかいだん

久默此要。不務速說

唯

楞伽經・小品經・般若經等

華嚴經・大日經・深密經・

無量義經
涅槃經等

我が所説の經典は無量千萬億にして已に説き今説き當に説かん
而も其の中に於て此の法華經最も為難信難解なり、記の六に云く
縦い經有つて諸經の王と云うとも已今當説最為第一と云わず、兼
但对帶其の義知んぬべし、玄の三に云く「舌口中に爛る」、籤の三に
云く「已今當の妙此に於て固く迷えば舌爛れて止まざるは猶華報と
為す謗法の罪苦長劫に流る」、又云く「課曉止まず」

法四依第六卷

人四依

結經

依法不依人

像法決疑經 ぞうぼうけつぎきょう

「日一夜」

依義不依語 えぎふえごじば

涅槃經 ねはんぎきょう

仏智

菩薩等識 ぼさつどうしき

八十御入滅 にゅうめつ

七十九・八十・八十一

依智不依識 えちふえしき

爾前の經經 にぜんききょうきょう

八十二・百五・百二十

法華經 ほけききょう

不了義經 ふりようぎきょう

主上

依了義經不依 りようぎきょうふえ

天尊

二天

魔☆

修羅天 しゆら

世尊 せそん

毘紐天 びちゅう

主

梵天 ぼんてん

法王 ほうおう

第六天 だいりくてん

国王 こくおう

帝たいしやく 釈しやく 天

頼王きょうおう

人王
天王

浄飯王じょうばん

八虐に違いす

震旦しんたん

天竺てんじく
師子しし

釈尊しゃくそん
王等

師

三皇さんこう
五帝

天皇てんのう

師匠ししょう

七逆に違いす

日本国にほんこく
神武

涅槃疏云ねはんじよ
一体の仏主しゅ師親しんと作なる

外道師げどう

迦毘羅かびら

三仙

☆楼僧伽

六師

勒沙婆

親
五逆に違いす

六八
親親

四聖外げてん
典師

顔回がんかい
孔子こうし
周公旦しゅうこうたん

呂老務尹
望☆成喜

世尊^{せそん}

三界特尊^{さんがいとくそん}

二十五有

理性の子^{りしやう}

結縁の子^{けちえん}

今此三界^{こんしさんがい}

皆是我有^{かいぜがう}

其中衆生^{こちゆうしゆじやう}

悉是吾子^{しつぜこし}

文句の五に云く一切^{もんく いっさい}

衆生等しく仏性有^{しゆじやう ぶつじやう}

り仏性同じきが故に^{ぶつじやう ゆえ}

等しく是れ子なり^こ

而今此処^{ここ}

多諸患難^{しよげんなん}

唯我一人能為救護^{ただわれひとり のういくご}

玄の六に云く本此の仏に従つて初めて道心^{どうしん}

を發し亦此の仏に従つて不退の地に住す^{ふたい}

文句の六に云く旧は西方の無量寿仏を以て長者に合す今は之を用い^{もち}

ず、西方は仏別に縁異り仏別なる故に隱顯の義成ぜず縁異なる故に子^{ゆえ}

父の義成ぜず又此の經の首末全く此の旨無し眼を閉し穿鑿せよ、舍那^{しゃな}

の著脱じやくだつ近く尚なお知らず弥陀みだは遠なんきに在あり何なぞ嘗かつてて変換かせん」云云、記の六むに云いく西方等いとは弥陀みだ・釈迦しやかの二仏ふつ既に殊ことなり豈あに弥陀みだをしして珍玩ちんがんの服ふくを隠かくさしめ乃すなち釈迦しやかをして弊垢へいくの衣いを著ちやくせ使つかめん状じやう、釈迦しやか・珍服ちんふくの隠かくす可べき無なくく弥陀みだ唯ただ勝妙しょうみやうの形かたちなるに當あたる、況いはんや宿昔むかしの縁別えんべつに化導けどう同じからざるをや、結縁けちえんは生なまの如ごとく成就じやうじゆは養やうの如ごとく生養せいやうの縁異えんいれば父子ふし成なりぜず、珍弊途ちんべいみちを分わち著脱じやくだつ殊ことに隔へだる消経しょうきやう・事關かけて調ちやうじやく・熟じやくの義ぎ乖そむく当部ぶんぶの文永ぶんえいく斯この旨むね無なし、舍那しゃな著脱じやくだつ等らとは舍那しゃなの動うごぜずして而しかも往まゐりに迷まよう、弥陀みだの著弊ちやくへいは諸經しよきやうに文無なし、若もし平等びやうじやう意趣いしゆを論ろんぜば彼此かれこれ奚いずくんか嘗かつてて自みづから矜ほこらん、縦たとい他たを我われが身みとするも還かえつて我われが化くわを成なりす・我他われたの像ざうを立たつれば乃すなち他たの縁えんを助たすく人ひと之のを見みざれば化縁くわえん便すなち乱みだる、故ゆゑに知しんぬ夫その結縁けちえんとは並ならに応身おうじんに約やくすることを我昔われかつ曾かつて二万にんうん億等いふたうと云いうが如ごとし、況いはんや十六王子じゅうろくおうじ始よ縦より今いまに至いたつて機感きかん相成さうじやうし任運にんうん

に分解す、是かくのゆえの故に彼の弥陀みだを以て此の変換と為なす可べからず」

種熟 東方有縁とうほううえん

主

第一阿☆仏だいいちあしゆくぶつ

師

脱

種熟西方有縁

大通の太子
十六王子

第九阿弥陀仏

沙弥

脱

種熟娑婆世界

第十六釈迦牟尼仏

脱

親主師親主師親

記の九に云く初・此の仏菩薩に従つて結縁し還た此の仏菩薩に於て

成熟す、玄の六に云く 仏尚自ら分段に入つて仏事を施作す有縁の

者何ぞ来らざるを得ん譬えば百川の海に潮す応須が如し縁に牽れて応

生すること亦復是くの如し、又云く 本此の仏に従つて初めて道心を

発し亦此の仏に従つて不退地に住す」

本尊

劣応身釈迦如来

俱舎宗
成実宗

盧舎那報身るしゃなほうしん

勝應身しょうおうしんに当る

釈迦如來しやかにらい

勝應身しょうおうしんに当る

釈迦如來しやかにらい

胎藏界たいざうかい

大日如來だいにくにらい

金剛界こんごうかい

華嚴宗の本尊けこんしゅうほんぞん

律宗りつしゅう

法相宗の本尊ほうそうしゅうほんぞん

三論宗の本尊さんろんしゅうほんぞん

真言宗の本尊しんこんしゅうほんぞん

天台は応身てんだい おうじん

劣応しやうれつ

阿弥陀仏あみだぶつ

浄土宗の本尊じやうどしゆう ほんぞん

善導等は報身ぜんどう ほうしん

五百問論に云くい君もし父の寿の遠きを知らず復また父統ふとうの邦くにに迷まよわば徒いたに才さい能のうと謂おもうとも全く人の子に非あらず、三皇さんこう已い前は父を知らず人皆禽獸みなきんじゆうに同じ」

華嚴けごんのるさな真言しんごんの大日等だいにちは皆此みなの仏けんぞくの眷属けんぞくたり

久遠実成実修実証の仏くおん じつじやう じつしゆう

天台宗の御本尊てんだいしゆう ごほんぞん

釈迦如来しやかにょらい

応身おうじん

有始有終うしうしゆう

始成しじようの三身さんじん

報身ほうしん

有始無終うしむしゆう

真言しんごんの大日等だいにち

法身ほっしん

無始無終むしむしゆう

応身おうじん

久成くじようの三身さんじん

報身ほうしん

無始無終むしむしゆう

法身ほっしん

華嚴宗・真言宗けこんしゆう しんごんしゆうの無始無終むしむしゆうの三身さんじんを立つるは天台てんだいの名目みょうもくを盗み取つて

自の依經えきように入れしなり。

◆八六

釈迦一代五時経図

633P

大論だいろんに云いく十九出家しゅつげ・三十成道じやうどう・八十入滅文にゅうめつ、此このの論ろんは竜樹菩薩りゅうじゅばさつの造・寿命じゅみゆう三百年・三十万偈げの論師ろんしなり、付法蔵ふぽうぞうの第十三仏滅後ぶつめつ七百年の人なり。

八会

説処せつしょは中天竺摩竭提国てんじくまかだこくの寂滅道場じやくめつどうじやう菩提樹下ぼだいじゆげ・七処

仮立実報土・別・内の二教を説く

三七日の説なり『三七日は法華ほっけの説二七日は華嚴けごんの

説

華嚴經けごんきやう

兼なすと名く

権大乘ごんだいじやうなり乳味にゅうみと名く頓大とんだいの機きの爲ために説く

なす
名く

頓教とんきようと名くなす 亦また秘密教ひみつ有り亦また不定教ふじよう有り」擬宜と

結經けつぎようは梵網經ぼんもうぎようなり

馬鳴菩薩めみようぼさつ

起信論を造る

天竺てんじく

天親菩薩てんじんぼさつ

十地論を造る

竜樹菩薩りゅうじゅぼさつ

十住毘婆沙論を造る

華嚴宗祖師けこんしゅうそし

漢土かんど

智嚴法師ちごんほふし

澄觀法師ちやうかんほふし

法藏大師ほうざうだいし

杜順和尚とじゆんわじよう

此の華嚴教けごんというは所謂いわゆる仏摩訶陀まかだこくじやくめつどうじよう國寂滅道場ぼだいじゆげ菩提樹下ぼだいじゆげにして始めて
正覺しょうかくを成じたまいし時・七処八会しちこはくわいに於て法惠ほうえ・功德林くどくりん・金剛幢こんこうどう・金剛藏こんこうざう
の四菩薩ぼさつに加して頓大とんだいの根性こんじようの為ために因陀羅網いんだら・無障礙土むざうがいの相さうを現げんじ
別円べつえんの両教りやうけう・住行向地ぢやうかうぢの功德くどく・法界唯心ほっかいゆいしんの理りを説とき給たまう所謂いわゆる華嚴經けごんきやうな
り、此の經には四十一位しゅうじゅういちゐを明いす謂いわく十住じゅうじゅう・十行じゅうぎやう・十廻向じゅうくわう・十地じゅうぢ・仏果ぶつか
な

り、此の經には新古しんこの二訳ふたやく有り六十華嚴けごんは旧訳くやくなり八十華嚴けごんは新訳しんやくな
り、梵網經ぼんもうきやうを以て華嚴けごんの結經けつぎやうと為なす、此の華嚴けごんは化儀けぎは頓部とんぶ化法けほうは
別円べつえんなり、成道じやうどうの最初さいしよに此の教けうを説とき給たまう譬たとえば日出いでて先づ高山こうざんを
照てらすが如ごとし厚殖こうじき
善根ぜんこんは斯この頓說とんせつを感かず、頓說本とんせつほんと小の為ためにせず彼の初分おひに於ては永く
声聞しょうもん無し後分ごぶんには即すなわち有り復た坐またに在ありと雖いえども聲つんばの如ごとくの如ごとし、

經文きやうもんに云いく 即すなわち傍人ぼうにんを遣つかわして急に追おうて將まさに還かへさんとす 乃至な閼絶いしちんぜつして地ちに☆たおる」云云。

說せつ處しよは波羅奈国はらな鹿野苑ろくやおん・同居土どうきよどの說

但さんぞう三藏教さんざうを說せつく・但なずと名なく

十二年じふにねん小乘しょうじやうを說せつく・酪味らくみと名なずく

三乘さんじやうの根性こんじやうの為ために說せつく・漸教ぜんきやうと名なずく 亦また秘密教ひみつ有あり亦また

阿含經あこんきやう

不定教ふじやう有あり」

誘引ゆういんと名なずく

結經けつきやうは遣教經せんきやうなり

俱舍宗くしやしゆ・成実宗じやうじつ・律宗りつしゆ

此この阿含あこんは是こ小乘教しょうじやうなり、仏ぶつ・成道じやうどう五十七日ごじちにちを經へて梵王ぼんのうの請しやうに赴おもむき波羅奈国はらなの鹿野苑ろくやおんに於おいて陳如等ちんによの五人ごにんの為ために三藏教さんざうの四諦しだいの法論ほふろんを

説き給う、謂く四阿含等の小乗經を説くなり、増一阿含には人天の
因果を明し、長阿含には邪見を破し、中阿含には真寂の深義を明し、
雜阿含には禪定を明す、遺教經を以て結經と為す、化儀は漸の部

の初め化法は三藏教なり、三乗の根性の為に此の阿含教を説く經の次第に依れば日の次に幽谷を照すが如し、淺行を偏えに明せば当分に漸を解る三藏本大の為ならず座に在りと雖も多☆婆和す、經に云く將に其の子を誘引せんと欲して方便を説く密かに二人の形色憔悴せる威徳無き者を遣わす」云云。

説処は欲色二界の中間大宝坊同居土の説なり
藏通・別円の四教を説く

十六年の説なり三井寺の義説時不定なり山門の義権大乘

生蘇味

対と名く

四教の機の為に説く漸教と名く亦秘密教有り亦不定教有り
彈訶と名く

方等部
ほうとうぶ

結經は瓔珞經なり
けつぎょう ぎょうらく

深密經
じんみつ
法相宗
ほうそうしゅう
玄奘三蔵慈恩大師
げんじようさんやうじおんだいし

楞伽經
りようがきよう
禪宗
ぜんしゅう
達磨
だるま
曇鸞法師
どんらんほつし

觀經
かんぎよう
道綽禪師
どうしやくぜん

雙觀經
そうかんぎよう
淨土宗
じようどしゅう
祖師
そし
善導和尚
ぜんどうわじよう

阿彌陀經
あみだ
法然上人
ほうねんしやうにん

大日經
だいにちぎよう
善無畏三蔵
ぜんむいさんざう

金剛頂經
こんごうちようぎよう
真言宗
しんごんしゅう
祖師
そし
金剛智三蔵
こんごうちさんざう

蘇悉地經
そしつちぎよう
不空三蔵
ふくうさんざう

此の方等教は謂く鹿苑の後般若の前四教の機に對し処処に四教の法を
説いて唯だ二乗を彈呵し菩薩を稱揚す、所謂密嚴經・厚嚴經・思益經
・方等經・楞伽經・淨名經等なり、瓔珞經を以て結經と為す、化儀
は漸部の中・化法は四教なり、説教の次第に依れば日の次ぎに平地を
照すが如し影万水に臨み器の方円を逐い波の動靜に随つて一
仏土を示すに淨穢不同ならしめ一身を示現するに巨細各異なり、一音
の説法・類に随つて各解なり、恐畏し歡喜し厭離し斷疑す神力不共の
故に見に淨穢有り聞に褒貶有り嗅に胆蘆と不胆蘆と有り華に著身と
不著身と有り淨名方等の如し、經文に云く是を過ぎて已後、心相
体信じて入出難り無し」文。

説処は鷲峯山・白鷲池等の四処十六会・同居土の説なり
權大乘なり

帶なすと名なく

熟蘇じゆくそみ味なすと名なく

十四年の説なり「三井寺みいでらの義」三十年の説「山門さんもんの義」

漸ぜんと名なすく 亦また秘密教ひみつ有つり 亦また不定教ふじよう有つり」

淘汰なすと名なく

結經けつきようは仁王經にんのうきようなり 已上四十二年なり

百論

中論 三論宗さんろんしゅう 祖師そし 嘉祥大師かじようだいし

十二門論

吉藏大師きちざうだいし

此の大般若經はんにやきようは唐とうの玄奘げんじよう三藏さんざうの所説しよやく是れ新訳しんやくなり、此の經は一部六

百卷・二百六十五品こぼん・六十億四十万字・二万

般若部はんにやぶ

六百三十八紙なり、此の般若經は方等の後・法華の前四処十六会の中に於て後三教の機^きの爲^{ため}に広く諸部の般若を説く、所謂光讚般若經・文殊問般若經・金剛般若經・能断金剛般若經・小品般若經・般若經・放光般若經・天王問般若經・大般若經等なり、仁王般若經を以て結經と爲す、唯だ化儀は漸教の後・化法は通別円なり、此の般若經の時も二乗の念処道品は皆是れ摩訶衍と説いて亦身子・須菩提をして菩薩の爲に般若を轉教せしむ。

玄義に云く 天人は其の光用を蒙り嬰兒は其の精明を喪う夜遊の者は伏匿し作務の者は興盛す故に文に云く 但菩薩の爲に其の實事を説いて我が爲に此の真要を説かず、三人俱に學すと雖も二乗は証を取る具に大品等の如し」經文に云く 爾の時に窮子即ち教勅を受けて衆物を領知し乃至而も一☆を☆取するの意無し」云云。

仏・自ら四十余年の諸經を破し給う事、無量義經說法品に云く我
先に道場菩提樹下に端座すること六年にして阿耨多羅三藐三菩提を
成ずることを得たり仏眼を以て一切の諸法を觀るに宣說すべからず
所以は如何諸の衆生の性欲不同なることを知れり性欲不同なれば
種種に法を説き種種に法を説くことは方便力を以てす四十余年には
未だ眞實を顯わさず」云云、又云く又辭は一なりと雖も義は各異な
り」云云、伝教大師の無量義經の注釈に云く

「性欲不同なれば種種に法を説くとは是れ能被の教を挙ぐるなり釈迦
一代四十余年の所説の教略して四教及び八教あり所謂樹王の華嚴・
鹿苑の阿含・坊中の方等・鷲峯等の般若・演說一乘・大小の菩薩の
歷劫修行・小乗の三藏教・
大乘の通教・大乘の別教・大乘の円教・頓教・漸教・不定教・秘密教

かくのごとく是くの如き等の前四味各各不同なり是の故に名けて種種の説法となす云云、又云く但隨他の五種性等門外の方便・差別の權教・帶權の一乘を説いて未だ隨自一仏乘等・露地の眞実・平等の直道・捨權のいちじょう一乘を顯あらわわさず是の故に説いて方便力を以て四十余年未だ眞実を顯あらわさ

ずと言う」と云云、無量義經に云く若し衆生有つて是の經を聞くことすなわを得ば則ち為れ大利なり所以は如何若し能く修行すれば必ず疾くむじょう無上菩提ぼだいを成ずることを得ればなり、其れ衆生有つて聞くことを得ざる者は当まさに知るべ

し是等は為れ大利を失えるなり、無量無辺不可思議阿僧祇劫を過ぐれども終に無上菩提を成ずることを得ず所以は如何菩提の大直道を知らざる故に險逕を行くに留難多きが故に「云云、注釈に云く疾く無上菩提を成ずることを得ずとは未だ直道一乗の海路を解せず未だ純円六度の固船に乘らず未だ実相方便の順風を得ず是の故に横道の三乗嶮路の歩行留難多き処・慙苦妄想夢裏の大河なり是の故に説いて疾く無上菩提を成ずることを得ずと言うなり」云云、秀句の下に云く法華經を讀むと雖も還つて法華の心を死す」云云、無量義經に云く次に方等十二部經・摩訶般若・華嚴海空を説いて菩薩の歴劫修行を宣説せしかども「云云、伝教大師秀句の下卷に云く謹しみて無量義經を案ずるに云く方等十二部經とは法相宗所依の經なり摩訶般若とは三論宗の所依の經なり華嚴海空とは即ち華嚴宗の所依

の經なり但歴劫修行を説いて未だ大直道を知らず」云云、天台大師
玄義の五に云く「成道より以來四十余年未だ真実を顯わさず法華に
始めて真実を顯わす」相伝に云く仏の年七十二歳にして法華經を説く
と云云、慧心僧都の一乗要決の下に云く「仏既に説いて言く法華真実
なり前は未だ真実を顯わさず何ぞ強ちに仏教に背いて法華の怨嫉と
為るや」云云、記の八に云く略して經題を挙げて玄に一部を収む故に
仏欲以此妙法等と云うなり」釈籤一に云く次に經題を釈す初めには
妙法の兩字は通じて本・迹を詮す蓮華の兩字は通じて本・迹を譬う」

説処は靈山虚空の二処三會実報土の説

実大乘

八箇年の説

又開会の妙典とも純円一実の説とも一円機の説とも云う

法華經
ほけきょう

醍醐味
だいにこみ
円教
えんきょう

頓不定と秘密無し

結經は普賢經

ぶつりゅうしゅう

仏立宗

法華宗

天台宗

二処三会の儀式

一に靈山会

序品より法師品に至る十品

二に虚空会

宝塔品より神力品に至る十一

品

三に靈山会

嘱累品より勧発品に至る七品

本・迹の両門

序品より十四品は迹門なり

開権顕実と

名く

涌出品より十四品は本門なり

開近顕遠と

名く

此の法華經は第五時の教なり、無量義經を開經と為し觀普賢經を

結經けつきようと為なす、化儀けぎは会漸えぜん歸頓きとん・会三歸一けほう・化法けほうは純円じゆんえんなり、般若はんにやの後のち・
雙林そうりんの前もつば・純えんきら一の円機えんきに對して真実しんじつを説くなり、日光普あまねく照てらすに
どけい 土圭そくえいしゆくの測影縮そくえいしゆくならず盈えんならざるが如ごとし低頭ていずこしゆ拳手みなぶつじう・皆みな仏道ぶつじうを成じようず汝なんじは
實に我が子・我は實に汝なんじが父・唯ただ如來にやらいの滅後めつこを以て之これを滅度めつどす、此
の第

五時の教は是これ日中にして四時に非あらず是醍醐だいごにして四味あちに非あらず是れ
定じようにして不定じように非あらず是れ顯露あらわにして秘密ひみつに非あらず三乘さんじよう・五乘ごじよう・七方便ほうべん・
九法界ほつかいを會えして一仏乘いちぶつじように入らしむ所以ゆえんに迹門しやくもんには二乗初住にじようしじゆうの位に
叶かなて無生忍むじやうにんを得う・成仏じやうぶつの記を受く八歳の童女りやうによは男子に變成そくしんして即身そくしんに
無垢むくの成道じやうじうを唱となう、本門ほんもんには二世の弟子増道損生でしやうじうそんじやうの益を得お・凡おそ三周
四說ふかしぎ不可思議ふかなり方便品ほうべんに云く世尊せそんの法久くして後要かならず当まさに真実しんじつを
説くべし」又云く未いまだ曾かつて説ゆえんざる所以せつじは説時未いただ至いたらざるが故なり今

まさしく是れ其の時なり決定して大乘を説かん」云云、又云く、乃至
一偈いちげに於おいても皆成仏すること疑うたがい無し十方じゅっぽう仏土の中・唯ただ一乗いちじょうの法のみ
有あつて二も無く亦三も無し仏の方便ほうべんの説を除く」又云く、謂い仏世ぶつぜ

に出る唯此の一事のみ実なり余の二は則ち真に非ず」、普賢經の記に云く故に正説に云く唯此の一事のみ実にして余の二は則ち真に非ずと斯れに多義有り、一には非頓非漸の妙法を指して一事實と為し而頓而漸を余二の權

と為す、二には三教の仮名を呼びて非真と為し一円の実理を指して一実と為す、三には四味を以て非真と為し

醍醐を以て一実と為す」と、方便品に云く終に小乗を以て衆生を

濟度せず」云云、又云く君小乗を以て化すること乃至一人に於ても

せば我則ち慳貪に墮せん此の事不可と為す」又云く正直に方便を捨

てて但だ無上道を説く」と、玄の九に云く廢三顯一とは此れ正しく教

を廢す其の情を破すと雖も若し教を廢せざれば樹想還つて生ず教を

執して惑を生ず是の故に教を廢す正直に方便を捨てて但だ無上道を

説く十方じゅうぽう仏土の中唯ただだ一乗いちじょうの法のみ有り

二も無く亦また三も無し」云云、玄義げんぎの一に云く、華落けらくは権はいを廃はいするを譬たとえ

蓮成れんじょうは実じつを立たてるを譬たとう」文に云く、正直しやうじきに方便ほうべんを捨てて但ただ無上道むじやうどう

を説く」云云、伝教大師でんぎょうだいしの顕戒論けんかいろんに云く、百牛ひゃくごを賜たまう朝あしたには三車を

用もちいず家業けあふんを得る夕ゆうべには何なんぞ除糞じよふんを用もちいん」故ゆえに經きやうに云く、正直しやうじきに

方便ほうべんを捨てて但ただ無上道むじやうどうを説く」と、方便品ほうべんに云く、我が昔しやうがんの所願しよがんの

如ごとく今すで已まんぞくに満足まんぞくす」云云。

玄義げんぎの十に云く、即すなわち方便ほうべんの一乗いちじょうを廃たして唯えんじつだ円実いちじょうの一乗いちじょうなり故ゆえに

云く我本せいがんと誓願せいがんするが如ごとき今まんぞく已まんぞくに満足まんぞくす」方便品ほうべんに云く、当来世とうらいせの

惡人あくにん・仏いちじょう一乗いちじょうを説とき給たまうを聞いて迷惑めいわくして信受しんじゆせず法はを破はして惡道あくどうに

墮だせん」と云云、又云く、法いふを聞き歡喜かんきし讚ほめて乃至ないし一言いっぴを發はつす則すなわち

為これ已すでに一切三世いっさいさんぜの仏くわうを供養くわうするなり」譬喩品ひゆほんに云く、今さんがい此さんがいの三界さんがい

は皆是れ我が有なり其の中の衆生は悉く是れ我が子なり而も今此の
処は諸の患難多し唯我一人のみ能く救護を為す」云云、文句の六に
云く旧は西方の無量寿仏を以て、以て長者に合す今之を用いず西方
の仏・別に縁・異なり仏・別なり故に隱顯の義・成ぜず縁異なるが故に
子父の義・成ぜず又此の経の首末全く此の旨無し閉眼穿鑿せよ」、疏記
の六に云く弥陀・釈迦二仏既に殊なり況や宿昔の縁・別に化導同じか
らざるをや結縁は生の如く成熟は養の如し

生養の縁異なれば父子成ぜず珍幣途を分ち著脱殊に隔たる消經事
關かけ調ちようじゆく 熟義そむ 乖そむく当部の文・永く斯の旨無し」云云、又云く 往昔は
大小の兩縁俱に釈迦に在りとし今は尊特垢衣俱に弥陀に在りとせば
更に笑う可きことを成ず」云云、涅槃經の疏の一に云く 無救無護無所
宗仰とは此れは無主の苦を釈す貧窮孤露・一旦遠離・無上世尊とは
此れは無親の苦を釈す設有疑惑・當復問誰とは此は無師の苦を釈す」
云云、涅槃經の四に云く 我又闍浮提の中
に示現じげんし疫病劫起多く衆生有つて病に悩む所と為んに去つて医薬を
施ほじこし然して後に為に微妙の法を説いて其をして無上菩提に安住せしむ」
云云、涅槃經の一に云く 我等今より救護有ること無く宗仰する所
無く貧窮孤露なり、一旦無上世尊に遠離したてまつらば設たとい疑惑有り
といえども當に復た誰にか問うべし」同二に云く 至無く親無ければ家

を亡^{ほろぼ}し国^{こく}を亡^{ほろぼ}す」又云く、「体の仏^{しゅしん}を主師親^なと作^なす」譬喩品^{ひゆほん}に云く

「一切衆生^{いっさいしゅじょう}・皆是吾^{みなわ}が子なり」云云、

寿量品^{じゆりやうぽん}に云く、我常^{いわ}に此^この娑婆世界^{しやばせかい}に在^あつて説法教化^{せつぽうきやうけ}す亦余処^{またよそ}の百

千萬億那由佉阿僧祇^{せんまんじゅうなんぢうあそうぎ}の国^{こく}に於^おても衆生^{しゅじょう}を導利^{どうり}す」云云、大論^{だいろん}に云く

「十万恒河沙等^{じゅうまんごうがしや}の三千^{さんぜん}の国土^{こくど}を名^なけて一仏国土^{いちぶつこくど}と為^なす是^この中に更に

余仏^{よぶつ}無し実^{ひと}に一^{ひと}りの釈迦^{しやか}仏^{ぶつ}のみなり」云云、寿量品^{じゆりやうぽん}に云く、我^{また}も亦

為^これ世^よの父諸^{もろもろ}の苦患^{くかん}を救^{きう}う者^{もの}なり」云云、宝塔品^{ほうとうばん}に云く、能^よく来世^{らいせ}

に於^おて此^この經^{きやう}を讀^よみ持^もたんは是^これ真^まの仏子^{ぶつし}なり」云云、譬喩品^{ひゆほん}に云く

君^もし人^{ひと}あつて信^{しん}ぜずして此^この經^{きやう}を毀謗^{きぼう}せば則^{すなわ}ち一切世間^{いっさいせけん}の仏種^{ぶつしゅ}を斷^き

ず其^その人^{ひと}命終^{みやうじゆう}して阿鼻獄^{あびごく}に入り一劫^{いつこく}を具足^{ぐそく}して劫尽^{きやくじん}きて更に生^なじ

是^この如^{ごと}く展轉^{てんでん}して無數劫^{むしゆこく}に至^{いた}らん」又云く、但^い大乘經典^{だいじやうきやうでん}を受持^{じゆじ}する

ことを樂^{ねが}つて乃至^な余經^いの一偈^{いちげ}をも受^うけざれ」妙樂大師^{みやうらくだいし}の五百

問論に云くいわ 況や彼の華嚴けこんは但福を以て比す此の經の法を以て之を比
するに同じからず、故に云くゆえ乃至不受余經一偈いちげと人之これを思わず徒らいたずに
引く何んの益あらんな「玄義げんぎの五に云くいわ 究竟くきようの大乗だいじようは華嚴けこん・大集だいしつ・大品だいほん・
法華ほつげ・涅槃ねはんに過ぐる無しす」妙樂みょうらくの釈籤しゃくせんの十に云くいわ 謂う有眼この者委悉いしつ
に之これを尋ねて法華ほつげは漸円ぜん・華嚴けこんの頓極とんごくに及ばずと云うこと勿れなかれ当に知
るべし法華ほつげは部に約するときは則ち尚華嚴すなわ・般若なおを破はし教に約すると
きは則ち尚別教すなわの後心を破はす」

譬喩品に云く初め仏の所説を聞いて心中大いに驚疑す將に魔・仏と
作つて我が心を悩乱するに非ずや」宝塔品に云く爾の時に宝塔の中よ
り大音声を出して歎めて言く善哉善哉釈迦牟尼世尊能く平等大慧
教菩薩法仏所護念の妙法蓮華經を以て大衆の為に説き給うこと
是くの如し是くの如し釈迦牟尼世尊所説の如きは皆是れ眞実なり」又
云く釈迦牟尼仏・快く是の法華經を説き給え我是の經を聴かんが為
の故に而かも此に來至せり」と云云、又云く天音声を以て普く四衆
に告ぐ誰か能く此の娑婆国土に於て広く妙法華經を説かん今正しく
是れ時なり如來久しからずして當に涅槃に入り給うべし仏・此の
妙法華經を以て付屬して在ること有らしめんと欲す」法師品に云く
藥王

もし人有つて何等の衆生か未來世に於て當に作仏することを得べしと

問わば応に示すべし、是の諸人等・未来世に於て必ず作仏することを得
んと何を以ての故に善男子・善女人・法華經の乃至一句に於て受持し
讀誦せん」云云、宝搭品に云く、諸余の經典數恒沙の如くならん、此等
を説くと雖も未だ難しと爲るに足らず若し仏の滅後惡世の中に於て
能く此の經を説く是則ち難しと爲すと」提婆品に云く、仏諸の比丘に
告げ給わく未来世の中に若し善男子・
善女人有つて妙法華經の提婆達多品を聞いて淨心に信敬して疑惑を生
ぜざらん者は地獄・餓鬼・畜生に墮ちずして十方の仏前に生ぜん、
所生の處には常に此の經を聞き若し人天の中に生れば勝妙の樂を受
け若し仏前に在らば蓮華より化生せん」又云く、當時の衆會皆竜女の
忽然の間に變じて男子と成つて菩薩の行を具して即ち南方無垢世
界に往き宝蓮華に坐して等正覺を成じ三十二相・八十種好あつて普く

十方一切衆生の爲に妙法を演説するを見る」又云く「爾の時に
娑婆世界の菩薩・声聞・天竜・八部・人と非人と皆遙かに彼の竜女の
成仏して普く時の会の人天の爲に法を説くを見て心大いに歡喜し悉く
遙かに敬礼す」分別功德品に云く「阿逸多是の善男子・善女人は我が
爲に復た塔寺を起て及び僧坊を作り四事を以て衆僧に供養すること
を須いず、所以は如何是の善男子・善女人是の經典を受持し誦誦する
者は已に塔を起て僧坊を造立し衆僧を供養すと爲す、則ち爲れ仏
舍利を以て七宝の塔を起て

高広漸小にして梵天に至る」と云云、神力品に云く、仏滅度の後に能く是の經を持たんを以ての故に諸仏皆歡喜す」云云、又云く、我が滅度の後に於て応に斯の經を受持すべし是の人、仏道に於て決定して疑有ること無けん」云云、藥王品に云く、罷く是の經典を受持すること有らん者も亦復是くの如し一切衆生の中に於て亦第一と爲す」云云、普賢經に云く、煩惱を斷ぜず五欲を離れず三昧に入らざれども但誦持するが故に」云云、又云く、其れ大乘方等經典を誦誦する有らば當に知るべし此の人は仏の功德を具して諸惡永く滅して仏慧より生ずるなり」云云、一經の始めの如是我聞を釈する文句の一に云く、如是とは所聞の法体を拳ぐ」と則ち妙法蓮華經是なり。

一日一夜の説

権大乘

涅槃經

説処は跋提河の辺

常住四教を説く

同醍醐味

結経は像法決疑経

此の涅槃經は一日一夜の説三藏教・通教・別教・円教を明す、亦是

醍醐味とも名く、釈尊拘尸那城・力士生地・阿利羅跋提河・沙羅雙樹

の間に於て二月十五日の晨朝・面門より種種の光を放ち給う十二由旬

の内十方の大衆を集めて涅槃經を説き給う即ち三十六の涅槃經旧訳

の四十の涅槃經なり、像法決疑経を以て結経と為す、亦☆拾教と

名け亦扶律顕常と云う、化儀は漸部・化法は四教なり法華の時猶未解

の輩有り更に後番五味を以て余残の機を調熟し給う、涅槃の時・

四教の機同く・仏性を見る秋収冬蔵の如し、唯四機有り俱に常住を

知る故に法華と合して同醍醐味と為すなり、凡そ一往此くの如く配立
すと雖も万差の機縁に随つて時節の長短不同なり、或は華嚴の時長は
涅槃の時に至る阿含・方等・般若も亦爾なり云云、涅槃經の六に法に
依て人に依らざれ義に依つて語に依らざれ智に依つて識に依らざれ
了義經に依つて不了義經に依らざれ」と云云、又亦如来隨宜の方便
所説の法の中に執着を生ぜざる是を了義と名く不了義とは經の中に
一切焼然なり一切無常なり一切皆苦なり一切皆空なり一切無我な
りと説くが如し是を不了義と名く何を以ての故に是くの如きの義を了
すること能わざるを以ての故に諸の衆生をして阿鼻獄に墮せしむ」云
云、十七の卷に云く如来は虚妄の言無しと雖も若し衆生の虚妄の説
に因つて○「文、又云く虚妄の法則ち是れ罪と為す是の罪を以ての
故に地獄に墮す」云云。

一、小乗しょうじょうの戒けいを破はする事

涅槃經ねはんぎょうの三の卷くわんに云いく「迦葉かしょうに告たまげ給たまわく能よく正法しょうぼうを護持ごじする因縁いんねんを以もつての故ゆゑに是この金剛身こんごうしんを成就じょうじゆすることを得う・迦葉かしょう我わ往昔むかしに於おいて護法ごぼうの因縁いんねんを以もつて今こ是この金剛身こんごうしんを成就じょうじゆすることを得うて常住じょうじゅうにして壞ませず、善男子ぜんなんし正法しょうぼうを護持ごじする者は五戒ごかいを受けず威儀いぎを修しゅうせず応まさに刀劍とうけん・弓箭ききうせん・鉞むさく・槊しやくを持もして持戒じかい・清淨じやうじやうの比丘びくを守護しゆごすべし」云云、同十七に云いく「佉性ぶつじやうを見るが故ゆゑに大涅槃ねはんを得え・是これを菩薩ぼさつの清淨じやうじやうの持戒じかいにして世間せけんの戒けいには非あらずと名なく」と云云、又云いく

是この經きやうを受持じゆじして戒けいを毀そしる者は則すなわち是これ衆生しゆじやうの大惡知識あくちしきなり我が弟子でしに非あらず是これ魔けんぞくの眷屬けんぞくなり」云云、法師品ほうしほんに云いく「若もし是この深經じんきやう聲聞しょうもんの法けつりやうを決けつ了りやうする是これ諸經しよきやうの王わうなることを聞きいて」云云、安樂行品あんらくぎやうほんに云いく「又聲聞しょうもんを求もとむる比丘びく・比丘尼びくに・優婆塞うぱそく・優婆夷うぱいに親近しんこんせざれ亦また

問訊せざれ若しは坊中に於ても若しは経行の処若しは講堂の中に在ても共に住止せざれ」云云、伝教大師の顕戒論の中に云く、貧人の食は是れ輪王の毒なるが如し、故に二乗の者の持戒精進は即ち菩薩の破戒懶惰なり故に応に親近すべからず、来らば為に法を説け親使・利養・恭敬を☆わざれ」と云云、秀句の下に云く「小乗の持戒は則ち菩薩の煩惱なり」云云、宝塔品に云く此の経は持難し若し暫くも持つ者は我則ち歡喜す諸仏も亦然なり、是の如きの人は諸仏の歎め給う所なり是則ち勇猛なり是則ち精進な

り是を戒を持ち頭陀を行ずる者と名く、則ち疾く無上の仏道を得と
為す能く来世に於て此の經を読み持たんは是眞の仏子なり」云云、
竜樹菩薩の大論に云く、百法愛染の故に他人の法を毀訾す持戒の行人
と雖も地獄の苦を脱れず」云云、涅槃經の十二に云く、仏迦葉に告げ
給わく若し菩薩有つて破戒の因縁を以て則ち能く人をして大乘經典
を受持し愛樂せしむることを知つて又能く其れをして經卷を誦誦し
通利し書寫し広く人の爲に説いて阿耨多羅三藐三菩提を退轉せざらし
めんと、是くの如き爲の故に故さらに戒を破ることを得」云云、安然の
広釈に云く、能く法華經を説く是を持戒と名く律儀を持すと雖も善
法を撰せざれば猶木石の衣鉢を帶持せるが如し」云云、弘決の四に
大論の十九を引いて云く、諸の比丘・仏に問いたてまつる阿蘭若の比丘
死しぬ今何の処にか生ずる・仏の言く阿鼻獄に生ず諸の比丘大いに驚

く、坐禪持戒するに便ち爾るに至すや仏答えて言く多聞・持戒・禪
未だ漏尽の法を得ず」云云、伝教大師云く今より已後声聞の利益を
受けず菩薩は二百五十戒を捨て畢んぬ」云云、涅槃經の四に云く我
涅槃の後・無量百歳に四道の聖人も悉く復涅槃せん正法滅して後・
像法の中に於て当に比丘有べし貌持律に像て少しく經を誦誦し飲食を
貪嗜し其の身を長養し袈裟を服すと雖も猶獵師の如く細めに視て徐
かに行くこと猫の鼠を伺うが如し、常に是の言を唱う我羅漢を得たり
と、諸の病苦多く糞穢に眠臥す・外には賢善を現し内には貪嫉
を懷く誣法を受けたる婆羅門等の如し、実に沙門に非ずして沙門の像
を現し邪見熾盛にして正法を誹謗し及び甚深秘密の教を壞り各自意
に随つて反つて經律を説く」云云、同九に云く善男子・一闡提有り
羅漢の像を作し空処に住して方等大乘經典を誹謗す諸の凡夫人・見

已おわつて皆みな真まの阿羅漢あらかんなり是これ大菩薩摩訶薩だいぼさつまかさつなりと謂おもえり」

一、善導ぜんどう和尚わじょう自害じがいの事

類聚るいじゆ伝でんに云いく導どう・此この身諸苦しよくに逼迫ひつぱくせられて情偽じようぎ反易やすし暫しばくも

きゆうそく

休息きゆうすること無し、乃すなち所居しよいの寺てらの前の柳樹りゆうじゆに登のぼつて西さいに向むかて願ねがつて

云いく仏ぶつの威神いしん驟しば以もつて我われを摂せつし觀音かんのん・勢至せいしも亦また来きたて我われを助たすけ給たまえ、此

の心こころをして正念しやうねんを失うわ

ざらしめ驚怖きようふを起さず弥陀みだの法の中に於おいて以もつて退墮たいだを生ぜざらんと願ねがいし畢おわつて其その樹の上に極いたり身を投なじて自みづから絶えぬ」

一、仏自害じがい・断食だんじき・身根不具しんこんふぐを禁ずる事

涅槃ねはんの七に云く 若もし説いて言えること有らん常に一の脚を翹あげて寂☆として言ものいわず淵ふちに投じて火に赴おもむき自みづから高巖こうがんより墜おち嶮難けんなんを避けず毒を服し食を断じ灰土の上に臥ふし自みづから手足を縛しばつて衆生しゆじやうを殺害さつがいせん、方道じやうじゆつ・呪術じゆじゆつ・旃陀羅せんだらの子・無根・二根及び不定根ふじやうこん・身根不具しんこんふぐならん、是かくのごとくの如き等の事・如来悉く出家して道を為なすことを聴ゆるし給たまうといわば是これを魔説ませつと名なす」云云、涅槃ねはん經の六に云く 大乘だいじやうを学まなぶ者ものは肉眼にくげん有りと雖いえども名けて仏眼ぶつげんと為なす耳鼻五根も例して亦是またかくのごとく云云、像法決疑經やうぼうけつぎきやうに云く 謂もつの惡比丘あくびく我が意いを解げせず己おのが所見しよけんを執しゆして十二部經せんぜつを宣説せんぜつし文に随したがつて義を取り決定けつじやうの説と作なさん、当まさに知るべし此

の人は三世の諸仏の怨なり速かに我が法を滅せん」

云云、涅槃經の十四に云く如来・世尊は大方便有無常を常と説き・
常を無常と説き・樂を説いて苦と爲し・苦を説いて樂と爲し・不淨を淨
と説き・淨を不淨と説き・我を無我と説き・無我を我と説き・非衆生に
於て説いて衆生と爲し・実の衆生に於て非衆生と説き・非物を物と
説き・物を非物と説き・非実を実と説き・実を非実と説き・非境を境と
説き・境を非境と説き・非生を生と説き・生を非生と説き・乃至無明を
明と説き・明を無明と説き・非色を色と説き・色を非色と説き・非道を
道と説き・道を非道と説く」云云。

浄土宗の阿弥陀

父は月淨転輪王鼓音声陀羅尼經の説なり
誓願は執持名号往生極樂

正覺は十劫已来なり

法華宗の阿弥陀

父は大通智勝仏なり

誓願は常樂の說是妙法蓮華經なり

正覺は三千塵点劫なり

薬王品に云く 若し女人有つて是の經典を聞いて説の如く修行せば
此に於て命終して即ち安樂世界阿弥陀仏大菩薩衆の圍繞せる住処に
往き蓮華の中宝坐の上に生ず」云云、疏記の十に云く 若し女人有つて
等とは此の中只是の經を聞くことを得、説の如く修行すと云う即ち
浄土の因更に觀經等を指すことを須いざるなり、問う如何が
修行する答う既に如説修行と云う即ち經に依て行を立つ具さに分別
功德品の中直ちに此の土を觀ずるに四土具足するが如し故に此の仏身
即三身なり」云云、百在所欲生」云云、方便品に云く 舍利弗・如来但
一仏乘を以ての故に衆生の爲に法を説く余乗の若しは二若しは三有る

こと無し」云云、安樂行品に云く、無量の國中に於て乃至

名字を聞くことを得可からず」陀羅尼品に云く、汝等但能く法華の名

を受持せし者を擁護せんすら福量る可からず」釈籤の一に云く、名は

即ち是体・文字解脱なり」又云く、次に經題を釈す初めには妙法の兩

字は通じて本・迹を詮す蓮華の兩字は通じて本・迹を誓う」疏記の一に

云く「妙法の唱は唯だ正宗のみに非ず二十八品俱に妙法と名くが

故に、故に品品の内に咸く体等を具し句句の下に通じて妙名を結す」

云云、藥王品に云く、若し復人有つて七宝を以て三千大千世界に満て

て仏及び大菩薩・辟支仏・阿羅漢に供養せん是の人の得る所の功德此の

法華經の乃至一

四句偈を受持する其の福最も多きに如かず」又云く、罷く是の經典を

受持すること有らん者も亦復是くの如し一切衆生の中に於て亦為れ

第一なり」又云く此の經は能く一切衆生を救う者なり此の經は能く一切衆生をして諸の苦悩を離れしむ此の經は能く大いに一切衆生を饒益して其の願を充滿す」と勸発品に云く君し復是の經典を受持する者を見て其の過惡を出さば若しは実若しは不実にもあれ此の人は現世に白癩の病を得ん、若し之を

輕笑きやうしやう

すること有らん者は当まさに世世に牙齒疎しき欠け

醜しう唇しん平鼻びやうび・手脚しゆきやくり繚り戾らいし眼目角がんもくかく☆身体臭穢しゆうえにして惡瘡あくそう☆血うけつ・水腹みづはら・短

氣き・諸もろの惡重病じゆうびやうあるべし、是かくの故ゆえに普賢ふげん若もし是この經典きやうてんを受持じゆじする者を

見みては当まさに起おこつて遠とほく迎むかえて当まさに仏ぶつを敬うやまうが如ごとくすべし」涅槃經ねはんぎやうの十三

に云いわく我爾その時ときに於おいて思惟しゆいし坐禪ざぜんし無量むりやう歳さいを経へれども亦また如來にやらい出世しゆつせの

大乘經だいじやうきやう

の名有あることを聞きかず」文句もんくの五ごに云いわく所以ゆえんは經きやうに出いでたり人の語ことばを

信しんずること勿なかれ」同三どうさんに云いわく「たとい百千種ひやくせんしゆの師しあつて一一いちいちの師し・百千

種しゆの説せつを作なすとも是これ權ごんならざるは無なし、如來にやらいの所說しよせつ有ある尚復なおまた是これ權

なり況いはんや復また人師にんしをや、寧むしろ權ごんに非あらざることを得えんや前いに出だす所ところの如ごとき

は悉ことごとく皆權みななり」

一いっ、念仏ねんぶつ者しや謗法罪ぼうぼうつみを作つくる事こと 法然ほうねんの選せん択たくに云いわく 道どう綽しやく禪ぜん師し・聖道しやうどう・

浄土の二門を立て聖道を捨てて正しく浄土に歸するの文、初めに
聖道門と云うは之に就いて二有り、乃至之に准じて之を思うに応に
密大及実大を存すべし、然れば則ち今真言・仏心・天台・華嚴・三論・
法相・地論・撰論此等の家の意正しく此に在り、浄土宗の学者先ず
須らく此の旨を知るべし、設い先ず聖道門を学するの人なりと雖も
若し浄土門に於て其の志有らん者は須らく聖道を棄てて浄土に
皈すべし、善導和尚・正雜二行を立て雜行を捨てて正行に皈するの
文、第一に読誦雜行と云うは上の觀經等の往生浄土の經を除いて
已外・大小乗・顯密の諸經に於て受持し読誦するを悉く読誦雜行と
名く、乃至・第三に礼拝雜行と云うは上の弥陀を礼拝するを除いて
已外・自余一切諸余の仏菩薩等及び諸の世天等に於て礼拝し恭敬する
を悉く礼拝雜行と名け、第四に称名雜行とは上の弥陀の名号を

稱するを除いて已外自余一切の仏菩薩等及び諸の世天等の名号を
稱するを悉く稱名雜行と名け、第五に讚歎供養雜行と云うは上の
弥陀仏を除いて已外一切諸余の仏菩薩及び諸の世天等に於て讚歎し
供養するを悉く讚歎供養雜行と名く、乃至、此の文を見るに彌須ら
く雜を捨てて專を修すべし、豈百即百生の專修の正行を捨てて堅
く千中無一の雜修雜行を執せんや、又云く貞元入藏錄の中に始め
大般若經

六百卷より終り

法常住經ほうじやうじゆうきやうに至るまで顯密けんみつの大乗經惣だいじやうきやうすべて六百三十

七部・二千八百八十三卷なり皆須みなすべからく誦誦どくじゆだいじやう大乘の句に撰せつすべし夫れ

速すみやかに生死しやうじを離れんと欲ほつせば二種の勝法しやうほうの中且しばらく聖道門しやうどうもんを闡さしおいて

選んで淨土門じやうどもんに入れ淨土門じやうどもんに入らんと欲ほつせば正雜二行しやうざうの中に且しばらく

諸の雜行もろもろぞうぎやうを抛なげうつて選んで正行しやうぎやうに皈きすべし」云云、大論だいろんに云く百

法愛染あいぜんの故ゆえに他人たにんの法を毀きす持戒じかいの行人いんぎんと雖いえども地獄じごくの苦を脱まぬかれず」

云云、法華經ほけきやうに云く、当來世とうらいせの惡人あくにんは仏いちじやうの一乘とを説たまき給たまうを聞いて

迷惑めいわくして信受しんじゆせず法はを破はして惡道あくどうに墮だせん」又云く、法はを破はして信しんぜざ

るが故ゆえに三惡道さんあくどう

に墜おちなん」雙觀經そうかんきやうに云く、設たといわれほとけ我われ仏ぼつを得えるも十方衆生じゆつぱうしゆじやうの至心ししんに

信樂しんぎやうして我が國くにに生なぜんと欲ほつして乃至ないし十念じゆんせんに若もし生なぜずんば

正覺しやうかくを取とらじ唯ただ五逆ごぎやくと誹謗ひばう正法しやうほうを除のく」譬喻品ひゆほんに云く、若もし人ひとあつて

信ぜずして此の経を

毀謗きぼうするときすなわは則ち一切世間の仏種ぶつしゆを断ず其人命終して阿鼻獄あびごくに入り一劫いつこくを具足ぐそくして劫尽くつじんきて更に生ぜん是くかくの如く展転てんでんして無數劫むしゆこくに至らんいた文句もんくに云くいわ「今経こんきやうに小善成仏しょうぜんじやうぶつを明かす此の縁因えんいんを取つて仏種ぶつしゆと為す、若し小善成仏しょうぜんじやうぶつを信ぜずんば則ち一切世間の仏種ぶつしゆを断ずるなり」云云。

一、真言師謗法罪を作る事

秘藏宝鑰ひざうほうやくの上に云くいわ十住心じゅうじゆうしんとは、

一 異生羝羊心ていじやうしん

凡夫惡人ぼんぷあくにん

二

愚童持齋心ぐどうじさいしん

凡夫善人ぼんぷぜんにん

三 嬰童無畏心えいどうむゐしん

外道げどう

四

唯蘊無我心ゑいゆんむごしん

声聞しやうもん

五 拔業因種心へつごういんしん

縁覺えんかく

六

他緣大乘心だいじやう

法相宗ほうそうしゆう

七 覺心不生心かくしんふしやうしん

三論宗さんろんしゆう

八

如実一道心にょじついちどうしん

法華宗ほつげしゆう

九 極無自性心 華嚴宗

十 秘密莊嚴心 真言宗

又云く 他縁以後は大乗の心なり 大乘において前の二は菩薩乗・後の二は仏乗なり 此くの如きの乗乗は自乗には

仏の名を得れども後に望むれば戲論けろんと作る」云云、又云く「人を謗ぼうじ法ぽうを謗ぼうずれば定めて阿鼻獄あびごくに墮おちて更に出ずる期無し、世人こ斯この義を知らずして舌に任せて輒たやすく談じて深害じんがいを顧みず寧ろ日夜に十惡・五逆じゅうあく ごぎやくを作るべしとも一言一語も人法を謗ぼうず可からず」云云、大日經だいにちきょうに云く

仏不思議の真言相道の法を説くに一切の声聞・緣覺を共

にせず亦普く一切衆生の爲にするに非ず」法華經の二に云く「汝等なんじ若し能く此の語を信受せば一切皆當に仏道を成ずることを得べし是のこ乗微妙にして清淨第一なり」云云、又云く「此の法華經は是れ諸のもろもろ如来第一の説・諸説しよ

の中に於て最も甚深爲り」又云く「此の法華經は諸仏如来の秘密の藏・諸經の中に於て最も其の上に在り」六波羅蜜經に五藏五味を説く、ひそか私に云く此の經は天台御入滅已後百余年に天竺より漢土に來れり

爾しかれば見ざる經きやうの醍醐だいごを盗むと書くは謬失みやうしつなり弘法こうぼうの二教論の下に云いくわ囉さとして曰いく今斯この經文きやうもんに依よらば仏五味を以て五藏に配當

し惣持そうじを醍醐だいごと稱しょうし四味を四藏に譬たとえ給たまえり、振旦しんたんの人師にんし等醍醐だいごをあらそ靜い盗んで各自宗じしゆうに名なく若もし斯この經を鑒かんみば則すなわち掩耳えんにの智割割かつばうを待たじ「云云、又云く毘盧遮那經びるしやなの疏じよに順じゆんぜば阿字あじを釈しやくす」云云、私ひそか云いく毘盧遮那經

疏供養法じよくようほうの卷は竜樹りゆうじゆ入滅にゅうめつ已後いご八百年の造疏じよなり、而しかるに菩提心論ぼだいしんろんに此この事ことを引き載のせたり故ゆゑに知しんぬ菩提心論ぼだいしんろんは竜樹りゆうじゆの釈あに非あらざるなり又云いく唯真言法ただしんごんの中にのみ即身成仏そくしんじやうぶつするが故ゆゑに是三摩地さんまじの法はうを説しく諸教しよきやうの中に於おいて關かいて書かせず「云云。

一、真言しんごんは別仏べつぶつの説あに非あらざる事

大日經だいにかきやうの一の卷の五仏は中央は大日如来だいにちによらいと説く同五卷の五仏は中

央は毘盧遮那と説く第一の卷の五仏は中央は釈迦牟尼仏と説く、文句の九に云く普賢観は法華を結成す文に云く釈迦牟尼仏を毘盧遮那と名くと、乃ち是れ異名なり別体なるに非ざるなり、安然の教時義に云く「真言宗の本地毘盧遮那は即ち天台宗の妙法蓮華經・最深密処同仏なり」、智証大師の授決集に云く眞言・禪門・華嚴・三論・唯識・律宗・成俱の二論等は若し法華・涅槃經等

の經に望むれば是れ撰引の門なり」云云、金剛頂經に云く、
娑伽梵しやかむに・一切平等いっさいびようどうに善く通達するが故に一切方を平等に觀察
して四方に坐し給う不動如来・宝生如来・觀自在王如来・不空成就
如来」云云、大日經普通真言藏品の四に云く、時に釈迦牟尼世尊宝処
三昧に入つて自心及び眷属の真言を説き給う」文、大日經の第二に
云く

我昔道場どうじょうに坐して四魔を降伏かうふくし大勤勇の声を以て衆生の怖畏を除
く、是の時梵天等心喜共に称説す此れに由つて諸の世間号して大勤勇
と名く我本不生を覚る」云云、前唐院金剛頂經の疏に云く「成仏
已来甚大久遠なり未だ所經の劫数を説かざる所以は經に於て各傍正
の義有り故に彼の法華の久遠の成仏も亦是れ此の經の毘盧遮那仏
と異解す可からず」云云、仏法伝来の次第に云く、天師智拳・印を結び

て南方なんぽうに向かう面門めんもん俄かに開けて金色の毘盧遮那びるしゃなと成り即便ち本体に還歸げんきす」云云、涅槃經ねはんぎょうの七の卷に仏迦葉かしょうに告げ給わく我般涅槃はつねはんして七百歳の後こ是の摩波旬まはじゆん漸く當に我が正法しょうぼうを壞乱えらんすべし、乃至ないし化して阿羅漢あらかんの身及び仏の色身しきしんと作らん魔王まおう此の有漏うろの形を以て無漏むろの身と作りて我が正法しょうぼうを壞やぶらん」云云。

一、禪宗ぜんしゅう謗罪ぼうざいを作す事な

円覺經えんかくに云く修多羅しゆたらの教は月を標さす指さしの如ごとし」文方便品ぶんぽうべんに云く「或は修多羅しゆたらを説く衆生しゆじやうに隨順ずいじゆんして説く大乘だいじやうに入るに為れ本なり」梵天ぼんてん王問おうもん仏決疑經けつぎききやうに云く梵天・靈山りやうぜん會上かいじやうに至いたつて金色の沙羅華さらかはを以て仏たまたまに獻たまり仏群生ぶつぐんじやうの為に法とを説き給えと請しやうす世尊せそん坐ざに登り華ねんを拈ねんして衆に示して青蓮せいれんの目を瞬まばたきす天人てんにん百万ひゃくまん悉く皆措おくこと罔なし独ひとり金色の頭陀ずだ破顔はがん微笑びしょうす、世尊せそんの言いわく吾しやうぼうに正法眼藏しょうぼうげんぞう・涅槃妙心ねはんみやうしん・実相じつそう

微妙みひょうの法門ほうもん有り文字もんじを立てず教外別伝きょうがいべつでん・摩訶迦葉まかかしように付属ふぞくす」云云、是
は中天竺てんじくなり仏の御入滅にゅうめつは北天竺てんじく拘尸那城くしなじようなり、涅槃經ねはんぎようの一に云く
爾その時に閻浮提えんぶだいの中の比丘びく・比丘尼びくに・一切皆集いっさいみなる唯尊ただそん者摩訶迦葉まかかしよう・
阿難あなんの二衆にしゆを除く」同經どうきようの三に云く若もし法宝ほうぼうを以て阿難あなん及び諸もろもろの比
丘ふぞくに付属たまたし給たまう久住くじゅうすることを得ず何を以ての故ゆえに一切声聞いっさいしやうもん及大
迦葉かしようは悉ことごとく当まさに無常むじようなるべし彼の老人らうじんの他の

寄物を受くるが如し、是の故に無上の仏法を以て諸の菩薩に付属すべし」云云、像法決疑經に云く、謂の惡比丘・或は禪を修すること有るも經論に依らず、自ら己見を逐うて非を以て是と爲し是れ邪是れ正を分別すること能わず、遍く道俗に向つて是くの如き言を作さん我能く是を知り我能く是を見ると、当に知るべし此の人は速かに我が法を滅せん乃至地獄に入ること猶箭を射るが如し」云云、弘決一の下に云く、世人多く坐禪安心を以て名けて発心と爲す、此の人未だ所縁の境を識らず所期の果無ければ全く上求無し大悲を識らざれば全く下化無し、

是の故に発心は大悲より起るなり」云云、天台の止觀の五に云く又一種の禪人他の根性に達せずして純ら乳藥を教ゆ体心踏心・和融覺覓若しは泯若しは了斯れ一轍の意なり障礙万途紛然として識らず纔か

に異相いそうを見て即ちすなわ是れ道と判ず自ら法器に非ず復他に匠しやうたるを闕かく
盲跛もうはの師徒二り俱ともに墮落だらくす瞽瞍こくつの夜遊甚はなはだだ憐愍れんみんす可べし」云云、
弘決ぐけつの一に云く世人・教を蔑ないがしろにし理觀を尚あやまぶ者☆れるかな☆れる
かな」方便品ほうべんに云く諸法実相・所謂諸法・如是相・如是性・如是体・
如是力・乃至・如是本末究竟等」云云、妙樂大師の金☆論こんべいろんに云く実相
は必ず諸法・諸法は必ず十如・十如は必ず十界・十界は必ず身土しんどなり」
云云、疏記じよきの十に云く直ちに此の土を觀ずるに四土具足ぐそくす故に此の
仏身すなわ即ち三身さんじんなり」云云。

一、權実証拠ごんじつしやうこの事

玄義げんぎの二に云く則ち百法界・千如是有り束たばねて五差と為す一に惡・
二に善・三に二乘・四に菩薩・五に仏なり、判じて二法と為す前の四は
是れ權法・後の一は是れ実法」云云、釈籤しゃくせんの二に云く凡界を權と為し

仏界ぶつがいを實じつと為なす」云云、秀句しゅうくの下したに云いく「定性じやうしやうと不定性ふじやうは位こうの高下げに依より成じやう仏ぶつと不成じやう仏ぶつは經きやうの權實ごんじつに依よる」文句もんくの九くに云いく 漸頓ぜんとん

の益えきは虚こなり」云云、記きの九くに云いく 權ごんを稟りやうけて界かいを出でるを名なけて虚出こしゅつと為なす」云云、玄義げんぎの九くに云いく 化他けたの因果いんがは仏菩提ぼだいを致いたすこと能あたわらず是かくのゆえの故ゆゑに取とて並もち用もちいず化他けたの權實ごんじつも亦また他たをして極ごくに至いたらしむること能あたわらず亦また取とる

応^おらず「云云、止^し観^{かん}の三^{さん}に云^いく、權^{けん}の權^{けん}は実^{じつ}の權^{けん}に非^{あら}ず実^{じつ}の權^{けん}と成^なることを得^え可^べし權^{けん}の実^{じつ}は実^{じつ}の實^{じつ}に非^{あら}ず実^{じつ}の實^{じつ}と成^なることを得^えべからず」云^い。

一、權^{けん}実^{じつ}分別^{ぶんべつ}の事^{こと}

一^いに玄義^{げんぎ}の一^いに云^いく、運^{うん}の爲^{ため}の故^{ゆえ}に華^け・実^{じつ}の爲^{ため}に權^{けん}を施^ほすを譬^{たと}う、權^{けん}は即^{すなわ}ち是^これ苗^{めう}文^{ぶん}に云^いく種^{しゆ}種^{じゆ}の道^{どう}を示^しすと雖^{いえど}も其^それ實^{じつ}には仏^{ぶつ}乘^{じやう}の爲^{ため}なり「云云、二^にに又^い云^いく、華^け敷^ふは權^{けん}を開^{ひら}くるを譬^{たと}う蓮^{れん}現^{げん}は實^{じつ}を顯^{あらわ}すを譬^{たと}う權^{けん}実^{じつ}共^{ども}に稻^{いね}なり文^{ぶん}に云^いく方^{ほう}便^{べん}の門^{もん}を開^{ひら}いて真^{しん}實^{じつ}の相^{さう}を示^しす」云^い、三^{さん}に又^い云^いく、華^け落^{らく}は權^{けん}を廢^{はい}するを譬^{たと}う蓮^{れん}成^{じやう}は實^{じつ}を立^たつるを譬^{たと}う実^{じつ}独^{ひと}り真^{しん}米^{まい}なり文^{ぶん}に云^いく正^{しやう}直^{じき}に方^{ほう}便^{べん}を捨^{すて}て但^{ただ}無^む上^{じやう}の道^{どう}を説^{とく}」云云^い、釈^{しやく}籤^{せん}の一^いに云^いく、開^{かい}廢^{はい}俱^ぐ時^じなり開^{ひら}の時^{とき}已^{すで}に廢^{はい}するが故^{ゆゑ}なり「云云^い、又^い云^いく、開^{ひら}の時^{とき}即^{すなわ}ち廢^{はい}す」又^い云^いく、既^{すで}に實^{じつ}を識^しり已^おれば永^{えい}く權^{けん}を

もち
用いず」云云。

一、破三顯一の事

方便品ほうべんに云く「二いちふつじよう仏乘ぶつりょうに於おいて分別ぶんべつして三と説く」云云、玄義げんぎの九に云く「廢三顯実けんじつ」又云く「施權ほうべん」方便品ほうべんに云く「二も無く亦また三も無し仏ぶつの方ほう便説べんを除く」云云涅槃經ねはんぎようの二十三に云く「実じつには三乘さんじよう無し顛倒心てんどうしんの故ゆえに三乘さんじよう有ありと言いう、一実いちじつの道みちは真実しんじつにして虚きよならず顛倒心てんどうしんの故ゆえに一実いちじつ無しと言いう」云云、方便品ほうべんに云く「阿二乘あにじよう無し何いかに況いわんやや三有さんらんや」云云。

一、入如来慧にょらいの事

法華經ほけきように云く「是この諸もろもろの衆生しゆじよう世世このかたより已来このかた常に我われが化くわを受く此このの諸もろもろの衆生しゆじよう始めて我われが身みを見て我われが所説しよせつを聞きいて即すなわち皆信受みなしんじゆして如来にょらいの慧ちに入る先しゆうしゆうより修習しゆしゆして小乘しよくじようを学まなぶ者ものを除く」云云、文句もんくの九に

云く根利にして徳厚く世世已来常に大化を受け始めて我が身を見て
即ち華嚴を稟けて如来慧に入る菓熟して零ち易し」云云、釈籤の十に
云く当に知るべし法華は部に約するときは則ち華嚴・般若を破す」云
云。

一、余深法中の事

囑累品に云く、若し衆生有て信受せざらん者には、当に如来の余の深法の中に於て示教利喜すべし。文句の七に云く、示教利喜・示は即ち示転・教は即ち勸転・利喜は即ち証転なり。玄義の六に云く、余とは方便を帶するなり。深とは中道を明すなり。方便を帶して中道を明すは即ち別教なり。云云、又云く、但爲に実を弘むるに而も衆生信ぜず。須らく実の爲に權を施すべし。釈籤の六に云く、有深復余とは即ち別教の法なり。入地を深と名け、地前を余と名く。云云、文句の十に云く、汝能く余深の法を以て仏慧を助申せば、即ち善巧に仏の恩を報ず。云云、疏記の十に云く、以偏助円は則ち此の意なり。此の經の上下一切皆然なり。人を見ずして三乗有りと謂うは謬れり。云云。

一、三種教相の事

玄義に「教相を三と為す一に根性の融不融の相・二に化導の始終
不始終の相・三に師弟の遠近不遠近の相」云云、釈籤の一に云く、前の
両意は迹門に約し後の一意は本門に約す」云云、寂滅道場を以て元
始と為す方便以下の五品の意なり。

第一、根性融法華不融爾前の相

華嚴・阿含・方等・般若・法華・各得道有り種熟脱を論ぜず、釈籤の
一に云く「又今文の諸義は凡そ一一の科皆先ず四教に約して以て鹿妙
を判ずるときは則ち前三を鹿と為し後・一を妙と為す次に五味に約し
て以て鹿妙を判ずるときは則ち前四味を鹿と為し醍醐を妙と為す、全
く上下の文意を推求せずして直ちに一語を指して法華は華嚴より劣れ
りと謂えるは幾許の☆りぞや☆りぞや」云云。

華嚴は一鹿一妙

相待妙

鹿妙を判ず

阿^あ含^{ごん}は単^{だん}麁^そ

無^む妙^{めう}

ほうとう 方等は三麁一妙

そうたいみよう 相待妙

そみよう 麁妙を判ず

はんにか 般若は二麁一妙

そうたいみよう 相待妙

そみよう 麁妙を判ず

ほつけ 法華は二妙有り

そうたいみよう 相待妙は

そみよう 麁妙を判ず

ぜったいみよう 絶待妙は

そ 麁を開して妙を顕わす

しやくせん 釈籤の十に云く 唯法華に至つて前教の意を説いて今教の意を顕わ

す、玄義の二に云く 此の妙・彼の妙・妙の義殊なること無し 約教相待

ぜんさん 前三を麁と為し後二を妙と為す 但方便を帶すると方便を帶せざるを以て異

と為すのみ」云云、 約部前四味を麁と為し醍醐を妙と為す 同十に云く 初後の仏慧・円頓の義育

し「一往の釈、文句の五に云く 今の如く始の如く今の如し二無く異無

し」云云、弘決の五に云く 惑者未だ見ず尚華嚴を指す 唯華嚴円頓の

名を知つて彼の部の兼帶の説に味し全く法華絶待の意を失う」云云、

しやくせん 釈籤の二に云く 故に諸味の中・円融有りと雖も全く二妙無し」と同

三に云く君し

但四教しきようの中の円を判じて之これを名けて妙と為す諸經しきように皆是くの如きの円の義なん有り何ぞ妙と称せざる故ゆえに復更またに部に約し味に約して方に今經こんきようの教も円部も円なることを顯あらわすべし、若し教に約せざれば則ち教の妙を知らず若し味に約せざれば則ち部の妙を知らず、爾前にぜんの相待妙そうたいみようとは前三ぜんさんを藏そうづ通別そうづ麤そと為し後・一円を妙と為す」云云、法華ほつけの相待妙そうたいみようとは前四味華嚴ぜんしみ・阿含あくわん・方等ほうとう・般若ぼんぎやを麤そと為し醍醐だいごを妙と為す三千塵点大通さんぜんじんてんを以て元始と為す。

第二、化導始・中間終・靈山の初住不始終の相 化城喻品の意なり

種熟脱しゅじゅくだつを論ず種は大通だいつうなり熟は中間ちゆうけん乃至今日の四味しゆいなり脱は今の法華ほつけなり玄の一に云く異とは余教よきようは当機益物とうきやくぶつにして如来施化にょらいせけの意を説かず此の經は仏の教を設け給たまう元始巧もとくみに衆生しゆじようの為に頓とん・漸ぜん・不定ふじよう・

顯・密の種子しゆしを作なす

を明しやくせんす」云云、釈籤しやくせんの一いちに云いく漸ぜん及および不定じやうに寄よすと雖いも余教よきやうを以もつて種なと為なさず故ゆゑに巧ぎやう為いと云いう」止觀しかんの三さんに云いく君もし初業しよに常じやうを知るを作なさずんば三藏さんざうの歸戒羯磨かつま悉ことごとく成就じやうじゆせず」と、弘決ぐけつの三さんに云いく今日きやう

の聲聞しやうもん・禁戒きんかいを

具ぐすることは良よに久遠くおんの初業しよくに常じょうを聞くに由よる若もし昔聞しやくもんかずんば小尚せうな
具ぐせず況いはんや復大ふたをや」云云、弘決くけつの三さんに云いく君もし全いく未いまだ曾かつて大乘だいじやう
の常じょうを聞きかずんば既すでに小果せうくわ無なし誰たれか禁戒きんかいの具ぐ不具ふぐを論ろんぜんや」云云、
又また云いく羯磨かつま不成ふじやうと言いうは所謂いふゆる久遠くおん必かならずず大無だいむんば則すなわち小乘せうじやうの乗のりる法と
を成なりぜざらしめん本無ほんむきを以もつての故ゆゑに諸行しよぎやう成なりぜざること樹じゆの根無こんむけれ
ば華果けかを成なりぜざるが如ごとし、時機じき未いまだ熟じやくせずんば權ごんに小せうの名なを立たつ汝等なんじ
の行ぎやうずる所こ是これ菩薩ぼさつの道だう、始はめて記きを得えて方まさに大人だいじんと名なくるに非あらず」
釈籤しやくせんの一いつに云いく法譬ほつび二周にしう得益とくやくの徒とは往日やから結縁けちえんの輩やからに非あらること莫なし」
云云。

五百塵点じんでんくおん久遠くおんを以もつて元始げんしと為なす寿量品じゆりやうぼんの意いなり

五百塵点じんでんりやうぜん靈山ちやうげんの中な間かん

第三だいしに師弟しだいの遠近おんこんふおんこん不遠近ふおんこんの相さう

種熟脱を論ず

種は久遠熟は過去脱は近く世世番番の成道今日の法華なり

玄義の一に云く又衆經に咸く云く道樹に師の実智始めて満じ道樹
を起て始めて權智を施す今の經は師の權實・道樹の前に在て久久に
已に満すと明かす、諸經に明かす二乗の弟子は実智に入ることを得ず
亦權智を施すこと能わず、今の經に明かす弟子の入実は甚だ久し、
亦先より解して權を行ず、又衆經は尚道樹の前の師と弟子との近近
の權實を論ぜず況や復た遠遠をや、今の經は道樹の前の權實長遠なる
ことを明かす補処世界を数うるに知らず況や其の塵数をや」經に云く
昔未だ曾て説ざる所今皆當に聞くことを得べし慇懃に称讃すること
良に所以有るなり、當に知るべし此の經は諸經に異なることを「釈籤の一
に云く「二乗猶小果に住す故に不入と云う豈に能く他

を化せんや、故に權を施さず、次に今經を明かす満願等の如き先に
已に實に入る説法第一なり、故に先より解して權を行ずることを」弘の
七に云く過去に種を下すは現在に重ねて聞いて成熟の益を得、未だ
曾て種を

下さざるは現在げんざいに種を成じ未来みらいに方に益やくす故ゆえに三世さんぜの益皆みな法輪ほうりんに
因よる」と藥草やくそう喻品ゆほんに云く「汝等なんじが所行しぎようは是これ菩薩ぼさつの道みちなり漸漸ぜんぜんに
修学しゅうがくして悉ことごとく当まさに成仏じやうぶつすべし」云云、記の一いちに云く「二時いちじ・一説いちねん・一念
の中さんぜ・三世さんぜ・九世しゅじゅくだつ・種熟脱しゅじゅくだつの三あり」弟子品でしに云く「諸もろもろの比丘びく諦あきらかに聴きけ
仏子ぶつし所行しぎようの道善みちよく方便ほうべんを学まなぶが故ゆえに思議しぎすることを得可うべからず衆しゆもんの
小法せうぽうを樂ねがつて而しかうして大智だいちを畏おそることを知る、是かくのゆえの故ゆえに諸もろもろの菩薩ぼさつ・声聞しやうもん
・緣覺えんかくと作る無數なの方便ほうべんを以もつて諸もろもろの衆生しゆじやうの

類たぐいを化くわす」云云、又云く、内に菩薩ぼさつの行を秘ひし外そとに是これ声聞しやうもんなること
を現あらわす小欲せうよくにして生死しやうじを厭いとえども実じつには自みづから仏土ぶつどを淨きよむ、衆さんどくに三毒さんどく
有あることを示しめし又邪見じやけんの相さうを現げんず我が弟子でし是かくのこの如ごとく方便ほうべんして衆生しゆじやうを
度たす」云云、

方便品ほうべんに云く「天乘たいじやうに入る為ためれ本もとなり」云云、分別功德品ぶんべつくどくに云く「願ねがわ

くば我未来に於て長寿を以て衆生を度せん」云云、玄義の七に云く
但本極の法身・微妙深遠なり仏若し説かずんば弥勒尚暗し何に況や
下地をや何に況や凡夫をや」云云、伝教大師の秀句の下に云く淺は
易し深は難し釈迦の所判なり淺を去つて深に就くは丈夫の心なり
天台大師は釈迦に信順して法華宗を助けて震旦に敷揚し叡山の一家
は天台に相承して法華宗を助けて日本に弘通す」云云、又云く謹み
て法華經・法師品の偈を案ずるに云く藥王今汝に告ぐ我か所説の
諸經而も此の經の中に於て法華最も第一なり經文当に知るべし斯の
法華經は諸經の中の最為第一なり」と、釈迦世尊宗を立つるの言は
法華を極と為す金口の校量なり深く信受す可きか。

◆八七

一代五時繼図

658P

だいろん
大論に云く

百番電樹菩薩の通知来滅
後七百年出世の人なり

しゅつげ
十九出家

じょうどう
三十成道

ねはん
八十涅槃

ねはんぎよう
涅槃經に云く

いむ
八十入滅

あこんぎようまた
阿含經亦此

の說有り云云、

兼 說処は中天竺

てんじくじやくめつじよう
寂滅道場菩提樹下

ごんだいじよう
權大乘

べつぎよう
別教

六十卷

くやくぶつだ
旧訳仏陀跋多羅

さんぞう
三歳の訳

三七日

八十卷

しんやく
新訳実叉難陀三歳

の訳

けこんきよう
華嚴經

えんきよう
円教

四十卷

にゅうみ
乳味

結經は梵網經 けつぎょう ぼんもうぎょう

他受用報身如來 たじゅうゆうほうしんにょらい

旧訳の説 くやく

教主 きょうしゅ

毘盧遮那如來 びるしやなにょらい

新訳の説 しんやく

所居の土は仮立実報土又は蓮華藏世界と云う しやうこ かりゅうじつぽうど せんげざうせかい

愚法二乗經 ぐほうにじやう

一に小乗教 しやうじやう

一切の小乗經を いっさい しやうじやうぎやう

撰す せんす

空

華嚴けこんしゅう宗五教を立つ

二に大乘始教だいじょう

方等部ほうとうぶの經を撰せんす

不空ふくう

三に大乘終教だいじょう

般若はんにや・涅槃經ねはんぎょうを撰せんす

三乗さんじょうの中の絶言の理を説く

四に頓教とんきょう

一切經いっさいきょう中の頓悟成仏とんごじょうぶつの旨むねを

撰せんす

別教べつきょう一乗いちじょう

五に円教えんきょう

華嚴けこん・法華ほっけを撰せんす

馬鳴菩薩めみょうぼさつ

起信論を造る

竜樹菩薩りゅうじゅぼさつ

十住毘婆沙論じゅうじゅうびしゃもんろんを造る

天親菩薩てんじんぼさつ

十地論を造る

杜順和尚とじゅんわじょう

終南山の住文殊もんじゅの化身けしん云云

天竺てんじく

智儼法師 ちごんほつし

至相寺の住

唐土 もろこし

法蔵大師 ほうぞうだいし

京兆涼山大華寺の住 又賢首 けんしゅ

大師 だいしと云い又康蔵大師 だいしと云う」

祖師 そし

澄觀法師 ちようかんほつし

清涼山大華寺の住 又清涼国 せいりよう

師と云う」

審祥大和尚 しんじようわじよう

天安寺の住新羅国の人」日本 にほん

最初伝 さいしよ

慈訓小僧都 そうず

明哲律師 りっし

良弁僧正 りようべんそうじよう

東大寺の本願 ほんがん

日本 にほん

等定大僧都そうず

道雄僧都どうゆうそうず

海印寺の住

一向小乗いっこうしょうじょう

波羅奈国・鹿野蘭はらなろくやおん

一に増一阿含あこん

人天の因果を明すにんてんいんが

十二年説

二に中阿含あこん

真寂の深義を明すじんぎ

阿含經あこんきょう

酪味らくみ

三に雜阿含あこん

諸の禪定を明すもろもろぜんじょう

但三藏教さんぞう

四に長阿含あこん

諸の外道を破すもろもろげどうは

結經は遺教經けつきょうゆいきょう

有部顯宗六百頌うぶ

四阿含經あこんきょう

天竺てんじくの人なり

俱舎宗ぐしやしゅう

俱舎論ぐしや「三十卷・三乘法さんじやうを明あきらかす」

世親菩薩せじんぼさつの造によらい如来

滅後めつご九百年の人なり

新訳しんやく

經部密宗十萬頌・天親菩薩てんじんぼさつの造天竺てんじくには婆藪畔豆ばさくはんとうと云

うなり

玄奘げんじやう三蔵さんざう

旧訳くやく

光法師ほつし

宝法師ほつし

唐土もろこし

神泰

円暉

祖師そし

恵暉

道麟

善報

日本にほん

伝灯満位の勝貴えんりやく 延暦えんりやく廿五年法相宗ほうそうしゅうに付す

私ひそかに云いわく余抄いわに云いう延暦えんりやく十三年官付云云

訶梨跋摩さんぞう三蔵てんじく・天竺てんじくの人こゝ此こゝに師し子し鎧よろいと云いう

成実宗じょうじつ

成実論じょうじつ十六卷『二十七賢聖けんせいの位を明す二百二品』

如来滅後にょらいめつご九百年

羅什らじゅう三蔵さんぞう

唐土もうこし

僧叡ちぞう

智蔵ちぞう・開善寺かいぜんじの僧

祖師そし

日本にほん

伝灯満位の賢融えんりやく 延暦えんりやく二十五年三論さんろんしゅう宗東大寺僧とうだいじに

付す余抄に云くいわ延暦十三年云云えんりやく

律宗りつしゅう

如来成道五年の後律を説く、僧祇律之これを説く、或あるは十二

年の後須提によつて戒律を制す四分律之これを説く

一 曇無徳部

二 薩婆多部あるば

五部を明あきらかす

三 弥沙塞部

四 婆龜富羅部

五 迦葉遺部かしよう

五篇七聚を立つ

一には波羅夷

二には僧殘

三には偷蘭遮

四には波逸提

五には波羅提提舍尼

六には突吉羅

七には惡說

一には波羅夷篇

二には僧伽婆尸沙篇

三には波逸提篇

四には波羅提提舍尼篇

五には突吉羅篇

☆多三藏

仏滅後三百年

祖師

天竺

道宣律師

弟子鑒真和尚

唐土

日本

鑒真和尚は唐土の人なり、東大寺戒壇院を立

てし人なり。

蔵通・別円ぞうつう べつえん

十六年説時不定せつじふじよう

対

方等部ほうとうぶ

権大乘ごんだいじよう

生蘇味しょうそみ

結経は瓔珞経けつぎよう ようらく

又有相宗ゆうそうと云う

法相宗ほうそうしゅう

惣じては一切經いっさいきやうに依り別し

も云う

ては六經十一部に依よる」

も云う

とも云う

解深密經げじんみつ

瑜伽論百卷ゆいが 弥勒說みろく 無著筆むちやく

唯識論ゆいしきろん

有初 又有相教ゆうそうと

空昔 又無相教むそうと

中今 又中道教ちゅうどう

如来滅後九百年に出づ

弥勒菩薩みろくぼさつ

無著菩薩むちやくぼさつ

世親菩薩せじんぼさつ

天竺てんじく

祖そ
師し

唐もろこし
土こし

護ご法ほう菩ぼ薩さつ
戒かい賢けん論ろん師し

玄げん奘じょう三さん藏ぞう

慈じ恩おん大だい師し

智ち周しゅう法ほつ師し

智ち鳳ほう

義ぎ淵えん

摩ま訶か陀だ国こくの大だい那な爛らん陀た寺じのの人ひと

弟で子し四し人にん

☆ 法ほつ師し

尚しょう法ほつ師し

光こう法ほつ師し

基き法ほつ師し

日本 にほん

空晴

真喜

善議 ぜんぎ

勤操 こんそう

觀經一卷 かんきょう

・良耶舍の訳

宋の代

雙觀經二卷 そうかんきょう

康僧鎧の訳 ようい

魏の代

淨土宗 じょうどしゅう

阿彌陀經一卷 あみだ

鳩摩羅什の訳 くまらじゅう

後秦代 こうしん

淨土論一卷 じょうど

天親菩薩の造 菩提流支三藏の訳 天竺の人なり てんじんぼさつ

天竺 てんじく

菩提流支三藏 ぼだいりゅうしさんぞう

曇鸞法師 どんらんほふし

難行・易行を立てて一切の經論 なんぎょう いぎょう いっさい きょうろん

を撰するなり せん

道綽禪師 どうしやくぜん

聖道・淨土の二門を立てて一切 しょうどう じょうど いっさい

の經論きやうろんを撰せつするなり

祖師そし 唐土もろこし

を撰せつするなり

判ずるなり

善導ぜんどう和尚わじやう

正雜しやうざうの二行を立てて一切いっさいの經論きやうろん

懷感えかん禪師ぜん

群疑うたがい論を造つて一代いちだいの聖教しやうきやうを

小康ほつし法師

已上もろこし、五人唐土の人なり

日本にほん

法然ほうねん上人しやうにん

選せん択ちやく集しゅう 三卷

摺しやへい閉かく闍ほう拋入

開入かいにん販

禪宗ぜんしゅう

如來にやらい禪

楞伽りやうが經

金剛こんごう般若はんにや經等きやうに依よる、又は教禪とも

云う

祖師そし禪

教外きやうがい別べつ伝でん・不立ふりゆう文字もんじ云云

西天せいてんの二十八祖 別紙これあに之有あり

菩提達磨ぼだいだるま禪師ぜん 天竺てんじくの人なり

祖そ師し

惠可け禪師ぜん

僧☆

東土とうど六祖

道信

弘忍

惠能

真言宗しんこんしゅう

胎藏界たいざうかい

七百余尊よそん

金剛界こんごうかい

五百余尊よそん

大日經だいにちぎょう 六卷卅一品 善無畏ぜんむい三藏さんざうの訳 開元かいげん四年中天竺てんじくの人なり」

供養法くようほうの卷を加えて七卷なり、一卷・五品ごぼん

金剛頂經こんごうぢょうぎょう 三卷・一品 金剛智三藏こんごうちさんざうの訳 開元かいげん八年南天竺てんじくの人なり」

蘇そ悉しつ地ち經きょう

「三卷卅四品」善ぜん無む畏い三藏さんぞうの訳

菩ぼ提だい心しん論ろん

「卷七丁」竜りゅう猛もう菩ぼ薩さつの造ぞう不ふ空くうの訳・或あるは不ふ空くうの造

大日だい にち如に来よらい

金剛こんごう薩さつ捶ち

竜りゅう猛もう菩ぼ薩さつ

天竺てんじく

竜智

已上てんじく天竺てんじくの人なり

祖そ
師し

日に
本ほん

唐もろこし
土こし

善ぜん無む畏い三さん蔵ぞう

金こん剛こう智ち

不ふ空くう

惠え果くわ

弘こう法ぼう

真しん雅が

源げん仁じん

聖せい宝ぼう

淳ちん祐ゆう

元げん杲こう

仁に海かい

成じやう尊そん

又また空くう海かいと云いう

義範

範俊

結集 けつじゅう

迦旃延 かせんねん

華嚴 けごん

方等 ほうとう

般若 はんにゃ

法華 ほっけ

涅槃經 ねはんぎょう

を撰 せんするなり

四に般若波羅蜜多藏 はんにゃはらみつ

熟蘇味文殊 じゅくそみもんじゅ

五藏

二に毘奈耶藏 びなや 酪味律藏 らくみ 優婆利 うぱり

三に阿毘達磨藏 あびだるま 毘蘇味論藏 しよそみ

一に粗多覽藏 にゅうみきようやう 乳味經藏 にゅうみきようやう 阿難 あなんの

五に陀羅尼藏 醍醐味・金剛藏」

大日經・金剛頂經 蘇悉地經を撰す

弘法大師・義立

心 凡夫惡人」

凡夫善人」

十住心

心 外道」

三嬰童無畏住

四唯蘊無我住心

五拔業因種住心

「声聞」

「縁覺」

理趣般若經「卷」惣じて八部の般若有り

六他縁大乘住心

「法相宗」

大品般若 四十卷「羅什三蔵の訳 旧訳」

七覺心不生住

心「三論宗」

大般若經 六百卷「玄奘三蔵の訳 新訳」

八如実一道住

心「法華宗」

般若部

通別円

九極無自性住心

華嚴宗

帶

十秘密莊嚴住心

「真言宗」

権大乘

十四年の説・或は三十年の説

三論宗 さんろんしゅう

熟蘇味 じゅくそみ

結經 けつきょう は 仁王經 にんのうきょう

百論 ひゃくろん 二卷 にかん 提婆菩薩 だいばぼさつ の造

中論 ちゅうろん 四卷 しつかん 竜樹菩薩 りゅうじゅぼさつ の造

十二門論 じふにもんろん 二卷 にかん 竜樹菩薩 りゅうじゅぼさつ の造

大論だいろんを加えて四論宗とも云う。

二蔵

一に声聞蔵しょうもん

二に菩薩蔵ぼさつくわう

三転法輪

一に根本法輪こんぽん

二に枝末法輪しまつ

三に撰末歸本法論きほん

文殊もんじゆ

馬鳴めみよう

竜樹りゆうじゆ

提婆だいば

竜智

清弁しょうべん

智光ちこう

羅什らじゆ

道朗

天竺てんじく

唐土もろこし

祖師そし

日本にほん

法朗

吉蔵きちざう

赤また嘉祥かじよう大師だいしと云いう嘉祥かじよう寺じの僧そうなり」

観勒かんろく僧正そうじよう

百濟くだら国こくの人ひとなり

高麗こま国こくの人ひとなり

恵灌

善議ぜんぎ

勤操こんそう

法華經ほけきょう

妙法蓮華經みょうぼうれんげきょう

羅什三蔵の訳らじゅうさんぞう

正法華經ほけきょう

法護三蔵の訳まもさんぞう

添品法華經てんぽんほけきょう

闍那笈多の訳じやな

薩呬分陀梨法華さつぶんだりほつけ

新訳しんやく

八箇年の説はちかねん

実大乘じつだいじょう

醍醐味だいごみ

純円の説じゅんえん

結経は普賢經けつぎょうふげん

曇無蜜多の訳

宋代

法華宗ほつげしゅう

仏立宗ぶつりゅうしゅう

天台宗てんだいしゅう

四教五時を立てて一代教を撰すしきょう いちだい

依憑宗 えびよう

時

華嚴 けこん
寅

時

阿含 あこん
卯

辰時

一に三藏教 さんざう

諸部小乗の實有の所説を撰す しよ しょうじよう しよせつ

方等 ほうとう

時

般若 はんや
巳

時

法華 ほっけ
午

祖そ師し

涅槃ねはんぎよう經

二つうきように通教

三べつぎように別教

四えんきように円教

諸部しよの如幻そく即空むねの旨せつを撰せんす

諸部しよの大乗だいじようなら並びに歴劫りやつぎよう行ぎやうの所説しよせつを撰せんす

諸部しよの大乗だいじようきよう經きやうの速疾そくしつ頓とん成じやうの所説しよせつを撰せんす

大覺だいかく世尊せそん

天竺てんじく

竜樹りゆうじゆ菩薩ぼさつ

唐土もろこし

天台てんだい大師だいし

日本にほん

章安しやうあん大師だいし

妙樂みやうらく大師だいし

日本にほん

伝教でんぎやう大師だいし

一日一夜いちにちいっやの説

醍醐だいご味み

結經けつぎやうは像法ざうぼう決疑けつぎきやう經

一北地師

涅槃宗の祖師ねはんそし

師

一 虎丘の岌法師ほっし

二 愛法師ほっし

北七

三 光統法師こうずほっし

四 護身のまも

二 菩提流支ぼだいりし

南三法師ほっし

三 法雲法師ほううんほっし

「兜宅寺の僧なり」こうたく

五 耆闍の

法師ほっし

六 北地の

禪師ぜんし

七 北地の

禪師ぜんし

法華の外は小乗の事

寿量品に云く小法を樂う徳薄垢重の者は是の人の為に我少きより

出家して阿耨多羅三藐三菩提を得たりと説く云云。

文句九に云く始成を説きたもうことは皆小法を樂える者と為すのみ云云。

疏記に云く但し近成を樂う者・樂小の者と為すは華嚴の頓部・諸味の中の円なり文。

天親菩薩の法華論に云く一往三藏を名けて小乗と為し再往は三教を名けて小乗と為す文。

文句の九に云く小を樂う者は小乗の人に非ざるなり、乃ち是近説を樂う者を小と為すのみ文。

疏記の九に云く樂小法とは久近を以て相望して小と為す文。

秀句しゅうくの下に云くいく仏滅度の後の六七百年の經宗論宗きょうしゅうろんしんしゅう九百年の中の法相ほつそうの一宗は歷劫修行りゃくかつしゅうぎょうを説いて衆生しゅじょうを引摂いんしやくす是の故に未顯真實みけんしんじつなり云云。

伝教大師でんぎょうだいしの依憑集えびようしゅうに云く新來の真言家しんごんは則ち筆受ひつじゆの相承そうじようを泯みんし旧到くとうの華嚴家けごんは則ち影響すなわの規模きもを隠かくし☆空じんくうの三論宗さんろんしゅうは彈呵だんかの屈耻くつちを忘れて称心しょうしんの心醉しんすいを覆くつがえし、著有じやくしゅうの法相宗ほつそうしゅうは僕陽ぼくようの歸依きえを非して青竜はんぎようの判經はつを撥はつす云云。

秀句しゅうくの下に云く誠いに願いくは一乘いちじようの君子くんし仏説ぶつせつに依憑えびようして口伝くでんを信しんずること莫なれ、仰あいで誠文あおを信しんじて偽會ぎえを信しんずること莫なれ、天台てんだい所しよ釈しやくの法華宗ほつけしゅうは諸宗しよしゅうに勝まさる寧ろ所伝しよでんを空むなしうせんや、又云く謹つしみて無量義經むりやうぎききょうを案あずるに云く次いに方等ほうとう十二部經ま・摩訶般若かはん・華嚴けごん海空かいくうを説いいて菩薩ぼさつの歷劫修行りゃくかつしゅうぎょうを宣説せんぜつす已上きやう大唐だいとうの伝いに云く方等ほうとう十二部經まとは法相宗ほつそうしゅう

の所依しよえの経けいなり、摩訶まか般若はんにかやとは三論さんろん宗しよえの所依しよえの経けいなり、華嚴けごん海空かいくうとは
華嚴宗けごんしよえの所依しよえの経けいなり俱ともに歴劫りやつじやう修行しゆぎやうを説いいて未いまだ大直道じきどうを知らず文。
妙樂みょうらく大師だいしの弘決ぐけつの九くに云いく法華ほつけい以前いぜんは猶なお是これ外道げどうの弟子でしなり文。

伝でんぎ教ぎょう大師だいしの守護しゅご章しやうの上に云いく妙みやう法ほうの外ほか更に一句いっくの經きやう無なし文ぶん。

智証ちしやう大師だいし授決じゆけつ集しゆの上に云いく經きやうに大小だいしやう無なく理りに偏円へんえん無なからん一切いっさい。

人に依よらば仏説ぶつせつ無用むようならん、若もし然しからずんば文ぶんに拠よつて伝でんう可べし己おのが父

は国王こくおうに勝まさると執しゆうすること莫なれ、又他またに劣おとると謂おもうこと莫なれ、然しかも家

家の尊勝そんしやう・国国の高貴かうき大小だいしやう各分ぶん齊さい有あり、土どを以もつて金きんと為なせば家家かいかに

之これ有あり金きんを以もつて金きんと為なせば有無うむ処こを異ことにす、久成くじやうの本ほん・開權かいけんの妙みやう・法華ほつけ

獨ひとり妙みやうに獨ひとり勝まさる、強しいて抑おさえて之これを喪そうし仏説ぶつせつを哽塞こうそくす如來にやうらいを咎とがむ

合あし伝でん者を非ひすること莫なれ、又云またいく国国こくこくとは五味ごみ、家家かいかとは四教しきやう八教はつきやう

なり文。

天台てんだいの玄義げんぎの十じゆに云いく若もし余教よきやうを弘ひろむるには教相きやうそうを明あかさざれども

義ぎに於おいて傷やむこと無なし、法華ほつけを弘ひろむるには教相きやうそうを明あかさざれば文義もんぎ關かく

ること有あり、但聖意ゆういん幽隱ゆういんにして教法きやうほう弥い難やがたし前代ぜんだいの諸師しよし・或あるは名匠めいしやうに

祖承し・或は思おもい袖しゅう衿きんより出でず阡陌せんひやく縦横じゅうおうなりと雖いえども孰いずれか是これなることを知しること莫なし、然しかるに義雙ぎならび立たず理兩ふたつながら存ぞんする無なし、若もし深ゆえんく所以ゆえん有ありて復修多羅またしゆたらと合がつする者は録ろくして之これを用もちゆ文無なく義無ぎなきは信受しんじゅす可べからずと。

一、開會かいえの事

寿量品じゅうりょうぽんに云いく諸もろもろの經方けいほうに依よつて好き藥草しきこうみみなことごとくの色香美味しきこうみみなことごとく皆悉みなことごとくく具足ぐそくするを求もとめて擣とう☆和合わごうす文。

文句もんくの九くに云いく經方けいほうとは即すなわち十二部經じふにぶけいなり藥草やくそうは即すなわち教しよせんの所詮しよせんの八万はちまんの法門ほうもんなり、香美味かうみみとは戒定慧かいじやうえなり、空觀くうかんは擣つくが如ごとく仮觀けかんは☆ふるうが如ごとく中觀ちゅうくわんは合がつするが如ごとし文。

大經だいぎやうに云いく衆流海しゅうりゅうかいに入りて同一鹹味かんみゆえ故ゆゑに海味かいみと云いう文。玄げんの三さんに云いく諸水しよすい・海かいに入いれば同一鹹味かんみなり、諸智しよち・如實智じつちに入いれば本ほんの名字みょうじ

を失すと文。

一、是諸經之王と云う事

信解品に云く並びに親族・国王・大臣を会す。

文句もんくの六ろくに云いく国王こくおうとは一切漸頓いつさいぜんどんの諸經しよきやうなり。

疏記じよきの六ろくに云いく諸しよの小王せうおうを廢たして唯一ただの王おうを立つ是かくの故ゆえに法華ほつげを王中おうちゆうの王おうと名なく文ぶん。

一、法華ほつげ已前いぜんの説せつを權けんと云いう事こと

玄義げんぎの三さんに云いく涅槃ねはんの聖行品しやうぎやうほんに云いく追おつて衆經しゆきやうを分別ぶんべつす故ゆえに具ぐに四種ししゆの四諦しだいを説せつくなり、徳王品とくおうほんに追おつて衆經しゆきやうを泯みす文ぶん。

釈籤しやくせんの三さんに云いく涅槃ねはんに追おと云いうは退たいなり劫かえつて更に前しよの諸味しよみを分別ぶんべつす、泯みとは合会ごうかいなり法華ほつげより已前いぜんの諸經しよきやう皆泯みなす此すなわの意いは則すなわち法華ほつげの部に順しゆんずるなり文ぶん。

弘くわの三さんに云いく彼の經しきやうの四教しよきやう皆常住みなじやうじゆうを知る故ゆえに本意ほんいは円えんに在ありと文ぶん。玄義げんぎの四しに云いく法華ほつげの意いを得える者は涅槃ねはんに於おいて次第しだいの五行ごぎやうをもち用もちいざるなり文ぶん。

一、常好坐禪さぜんと云う事

安樂行品あんらくぎょうほんに云く亦師またと同ずることを樂ねがわらず常に坐禪ざぜんを好む文。
普賢經ふげんに云く専ら大乘だいじやうを誦じゆし三昧さんまいに入らず文、又云く其その大乘經典だいじやうきやうてんを誦誦どくじゆするもの有らば諸惡しよあく永く滅して仏惠ぶつてより生ずるなり文。

一、天台宗阿彌陀てんだいしやうあみだの事

弘決くけつの二に云く諸經しよきやうの讚さんする所多く彌陀みだに在り故ゆえに西方さいほうを以て
一准いちじゆんと為す文、私ひそかに云く此の釈もんじゆ・文殊說もんじゆ・文殊問もんじゆの両經りやうきやうに依よるなり、
常坐三昧さんまいの下。

止觀しかんの二に云く彌陀みだを唱となうるは即すなわち是これ十方じゆつぱうの仏ほとけを唱となうる功德くどくと
等もつぱし但専みだら彌陀みだを以て法門ほうもんの主なと為す、要あを挙あげて之これを言のたまわば歩歩ふふ・
声声ねんねん・念念ただ・唯阿彌陀あみだ仏ぶつに在り文、私ひそかに云く此の釈もんじゆ・般舟はんじゆ三昧經さんまいに依よる
なり常行三昧じやうぎやうさんまいの下。

くせつもく
口説☆の下。

又云く意に止観を論ぜば西方阿弥陀仏を念ず此れを去ること十万億仏刹と文、此の釈般舟三昧の經の文に依るなり常行三昧の下。

又云く陀羅尼咒を誦し三宝十仏を請じ摩訶祖持陀羅尼を思惟せよ文、此の釈は方等陀羅尼經に依る半行半坐の三昧の下。

又云く三宝・七仏・釈尊・弥陀・三陀羅尼・二菩薩・聖衆を礼せよ、此の釈は諸經に依る非行・非坐三昧の下。

玄義の九に云く諸行は傍の実相を以て躰と為し体行俱に麁なり文、又云く諸經の方法に依る常行等の行は傍を以て体と為す体行俱に麁なり文。

已上四十余年の經釈

止觀の二に云く別に一卷有り法華三昧と名く是れ天台大師の著す

所なり、世に流伝るでんして行者之ぎやうじゃこれを宗たつとぶ、此れ則すなわち説せつ☆を兼ね復別またに論ぜざるなり文。

法華三昧ほつげさんまいに云く道場どうじやうの中に於おいて好き高座こうざを敷ほけき法華經きやうてん一部を安置あんちし亦未またいまだ必ず形像ぎやうざう・舍利しやり並に余の經典きやうてんを安やすんずることを須もちいず唯ただ法華經ほけきやうを置おけ文。

止觀しかんの二に云く意の止觀しかんとは普賢觀ふげんに云く専もつぱら大乘だいじやうを誦じゆして三昧さんまいに入いらず日夜六時ろくじに六根ろくこんの罪つみを懺さんす、安樂行品あんらくぎやうほんに云く諸法しよほうに於おいて行いずる所なく無く亦また不分別ふんべつを行いぜざれ文。

法華經ほけきやうに云く乃至余經いふの一偈いちげをも受けざれ文。

又云く復舍利またしやりを安やすんずることを須もちいず文。

一、天台念仏の事

止観しかんの六ろくに云いく見思けんじの惑わく即すなわち是これ仏法界ぶつぽうかいなりと覺さとして法身ほっしんを破やぶせざるを念仏ねんぶつと名なくと文ぶん。

止観しかん二にに云いく意止観いしかんとは普賢觀ふげんに云いく専もつぱら大乘だいじようを誦じゆし三昧さんまいに入いらず日夜六時にちやうろくじに六根ろくこんの罪つみを懺さんす安樂行品あんらくぎやうぽんに云いく諸法しよほうに於おいて行いずる所なくまたぶんべつ無く亦また不分別ぶんべつを行いぜざれ。

秀句しゅうくの下したに云いく能化のうけの竜女りゆうにょ歷劫りやくの行無いし所化しよけの衆生しゆじようも亦また歷劫りやく無いし文ぶん。

一、法華成仏の人数の事

二の卷舎利弗しかりふは華光如来けこうにょらい・三の卷迦葉かしょうは光明如来くわうみょうにょらい・須菩提しゆぼだいは名相みやうそう如来にょらい・迦旃延かせんねんは閻浮那提金光如来えんぶなだいこんこうにょらい・目連もくれん是多摩羅跋旃檀香如来たまらばせんたんかうにょらい・四の卷富楼那ふるなは法明如来ほうみょうにょらい・陳如等ちんにようの千二百せんにひゃくは普明如来ふみょうにょらい・阿難あなんは山海慧自在通王仏さんかいえじざいつうおうぶつ・羅☆羅ららは蹈七宝華如来どうしつほうげにょらい・五の卷提婆達多だいばだつたは

てんのうによらい 天王如来・摩訶波闍波堤比丘尼は一切衆生・喜見仏・耶輸陀羅女は
ぐそくせんまんこうそうによらい 具足千万光相如来・娑竭羅竜王の女の八歳の竜女は無照光如来
の説なり提婆品に云く當時の衆会皆竜女を見る忽然の間に變じて男子と
成て菩薩の行を具して即ち南方無垢世界に往き宝蓮華に坐して等
しょうかくく 正覺を成じ三十二相・八十種好普ねく十方一切衆生の為に妙法を
えんぜつ 演説す文。

又云く爾の時に娑婆世界の菩薩・声聞・天竜・八部・人と非人と皆
はる 遙かに彼の竜女の成仏して普ねく時の会の人天の為に法を説くを見て
心大いに歡喜して遙かに敬礼す文。

一、四十余年の諸の經論に女人を嫌う事

華嚴經に云く女人は地獄の使なり能く仏の種子を断つ外面は菩薩に
ないしん 以て内心は夜叉の如しと文。

又云く一び女人を見れば能く眼の功德を失う縦い大蛇を見ると
雖も女人を見る可からずと文。

銀色女経に云く三世の諸仏の眼は大地に墮落すとも法界の諸の
女人は永く成仏の期無らんと文。

華嚴經に云く女人を見れば眼大地に墮落す何に況や犯すこと一度
せば三惡道に墮つ文。

十二仏名經に云く假使法界に遍する大悲の諸菩薩も彼の女人の極業の障を降伏すること能わず文。

大論に云く女人を見ること一度なるすら永く輪廻の業を結ぶ、何に況や犯すこと一度せば定んで無間獄に墮すと文。

往生礼讃に云く女人と及び根欠と二乗種とは生ぜず文。

大論に云く女人は惡の根本なり一たび犯せば五百生彼の所生の処六趣の中に輪廻すと文。

華嚴經に云く女人は大魔王能く一切の人を食す現在には纏縛と作り後生は怨敵と為る文。

一、真言を用いざる事

伝教大師の依憑集の序に云く新來の真言家は則ち筆受の相承を混す文。

安然あんねんの教時義きようじぎの第二に云く問う天台宗てんだいしゅうの遺唐とうの決義けつぎに云く此の大盧遮那經るしやなきようは天台五時てんだいの中に於て第三時方等部ほうとうぶの撰しやうなり彼の經の中に四乗を説くを以ての故に云云、此の義云何いかなん答う彼の決義けつぎに云く伝え聞く疏じよ二十卷有り但未だ披見ひけんせず云云、此は是れ未だ經意を知らざる誤判ごはんなり、何なれば天台第三時の方等教ほうとうは四教相對して大を以て小を斥きらい円を以て偏を彈ず、今日日經は応供正遍知・衆生の樂に随つて四乗の法及び八部法を説きたもう是は一切智智一味云云、若し爾らば法華と同じと謂う可し何に方等彈斥の教に撰するや文。

広修維こうしゅうい☆の唐決とうけつに云く問う大毘盧遮那一部七卷・薄伽梵・如来加持かじ広大金剛法界宮に住して一切の持金剛者の為に之を演説す、大唐の中天竺国てんじくこくの三蔵・輪婆迦羅・唐には言う善無畏と訳す、今疑う如来によらいの所説しよせつ始め華嚴けこんより終り涅槃ねはんに至るまで五時四教の為に統撰とうせんせざ

る所無し、今・此の毘盧遮那經を以て何の部・何の時・何の教にか之を
撰せん又法華の前説とや為さん当に法華の後説とや為さん此の義
云何、答う謹みて經文を尋ぬるに方等部に属す声聞・縁覺に被らしむ
るが故に不空羂索・大宝積・大集・大方等・金光明・維摩・楞伽・思益等
の經と同味なり、四教・四仏

・四土を具す今毘盧遮那經法界宮に於て説くことを顯す、乃ち是れ
法身寂光土なり勝に従つて名を受くるなり前後詳明す可し云云。

一、法華と諸經との勝劣の事

法華經 第一

本門 第一

已今当第一なり、藥王今汝に告ぐ諸經の中に於て最も其の上に在り又云く
我が所説の諸經此の經の中に於て法華最第一なり云云

迹門 第二

涅槃經 第二
是經出世

無量義經 第三
次に方等十二部經を説く

華嚴經 第四

般若經 第五

蘇悉地經 第六
されば、或は復大般若經を転説すること七遍、或は一百遍せよ

大日經 第七
三国に未だ弘通せざる法門なり

一、鎮護國家の三部の事

法華經 ほけきょう

密嚴經 みつごんきょう

央に法華經 ほけきょう

仁王經 にんのうきょう

法華經 ほけきょう

浄名經 じょうみきょう

勝鬘經 しょうまん

不空三藏大曆に法華寺に之を置く ふくうさんざうだいいき ほつけじ これ

唐の大曆二年に護摩寺を改めて法華寺を立て中 とう だいいき ごまでら あらた ほつけじ

脇土に両部の大日なり きょうじ だいにち

人王三十四代推古天王の御宇聖徳太子 すいこ ぎょうしやうとくだいし

四天王寺に之を置く摂津国・難波郡 してんのう これ せつつ なにわぐん

仏法最初の寺なり ぶつぽうさいしよ

法華經 ほけきょう

人王五十代桓武天皇の御宇伝教大師

金光明經 こんこうみょうきょう

比叡山延暦寺止観院に之を置かる

仁王經 にんのうきょう

年分得度者二人

一人は遮那業

大日經 だいにちきょう

五十四代仁明天王の御宇

一人は止観業

金剛頂經 こんごうちょうきょう

慈覚大師比叡山東塔の西惣持院に之を置か

る

蘇悉地經 そしつちきょう

御本尊は大日如来金蘇二疏十四卷之を安置せ

らる

一、悲華經の五百の大願等の事並びに示現等

第一百十三願に云く我来世穢惡土の中に於て当に作仏することを

得べし則ち十方淨土の擯出の衆生を集めて我当に之を度すべしと文。

第一だいいち百十四願ひやくしじうがんに云く我無始むしより来このかた積集しやくしゅうせる諸もろもろの大善根ぜんこんいちぶん一分我
が身みに留めとどめず悉ことごとく衆生しゅじやうに施ほさんと文。

第一だいいち百十五願ひやくごがんに云く十法界じゅうほっかいの諸もろもろの衆生しゅじやう無始むしより来このかた造作ぞうさくする所
の極重ごくじゅう五無間むげん等の諸罪しよざい合あして我が一人ひとりの罪つみと為なす大地獄だいちじよく等に入いつて
大悲だいひ代だいつて苦くるを受けうけんと文。

悲華經ひけきやうに云く我が滅度めつどの後末法まつぼうの中に於おいて大明神だいまうじんと現げんじて広ひろく
衆生しゅじやうを度あせんと文。

涅槃經ねはんぎやうの二ふたに云く爾その時ときに如来にやらい・棺かんの中なかより手てを出いして阿難あなんを招まねき
密ひそかに言いわく汝なんじ悲泣ひなすること勿なかれ我還かえつて復閻浮またえんぷに生なじて大明神だいまうじんと現げん
じて広ひろく衆生しゅじやうを度あせんと文。

又また云いく汝なんじ等悲泣ひなすること莫なれ遂すなに瞻部州せんぶしゅうに到いたつて衆生しゅじやうを度あせんが
為ゆえの故ために大明神だいまうじんと示現じげんせんと文。

悲ひ華け經きょうに云いく第だい五ご願がんに我わ来らい世せ穢え惡あく土どの中なかに於おいて大だい明み神しんと現げんじて
當まさに衆しゅ生じょうを度たすべし文。

大隅正八幡しやうはちまんの石の銘に云く昔靈鷲山りやうじゅうせんに在つて妙法華經みやうほけきやうを説く衆生しゆじやう

を度せんが為ゆえの故に大菩薩ほさつと示現じげんすと文。

行教和尚ぎやうきやうわじやうの夢の記に云く阿弥陀三尊あみたさんそん

延暦二十三年甲申えんりやく春、伝教大師渡海でんぎやうだいしとかいの願を遂げんが為ために筑前

宇佐うさの神宮寺じんぐうじに向つて自ら法華經ほけきやうを講ず、即ち託宣たくせんして云く我此の

法音ほうせいを聞かずして久しく歳年さいねんを歴たり幸に和尚わじやうに値遇ちぐうして正教せいきやうを聞

くことを得て至誠しじやうに隨喜ずいきす何ぞ徳を謝するに足らん苟いひしくも我が所持しよじの

法衣ほうえ有り即ち託宣たくせんの主・齋殿さいでんを開いて手に紫の袈裟けさ一を捧ささげて和尚わじやうに

上たてまつる、大悲力ゆえの故に幸に納受のうじゆを垂れたまえ、是この時禰宜ねぎ・祝等はふりとう各各

之これを隨喜ずいきす元來か此ごとくの如きの奇事見ず聞かざるかなと、彼の施ほどこす所の

法衣ほうえは山王院さんかういんに在り文。

元慶元年丁酉十一月十三日權大宮司藤原実元女がんねん七歳にして託宣たくせんし

て云く我日本国を持ちて大明神と示現す本躰は是れ釈迦如来なり。

延喜二年四月二日二歳計りの小児に託宣して云く我無量劫自り以来度し難き衆生を教化す未度の衆生の為に此の中に在つて大菩薩と示現すと文。

一、北野の天神法華經に歸して真言等を用いざる事

天神の託宣に云く吾円宗の法門に於て未だ心に飽かず仍つて遠忌追善に當て須く密壇を改めて法華八講を修すべきなり、所以に曼陀羅供を改めて法華八講を始め吉祥院の八講と号す是なり、彼の院は北野天神の御旧跡なり。

一、賀茂大明神法華を信ずる事

一条院の御時年代記に之有り

恵心の僧都加茂社に七箇日參籠して出離生死の道は何れの經にか付

く可^べきと祈^せ誠^じ有^あれば、示^し現^{げん}して云^いく釈^し迦^やの説^せ教^{きょう}は一^{いち}乗^{じょう}に留^{とど}まり諸^{しよ}仏^{ぶつ}の
成^{じやう}道^{どう}は妙^み法^{ぽう}に在^あり菩^ぼ薩^{さつ}の六^{りく}度^どは蓮^{れん}華^げに在^あり二^に乗^{じょう}の作^さ仏^{ぶつ}は此^この經^{きやう}に在^あ
り文^{ぶん}。

伝でんぎ教きやう大師だいし加茂かも大明神だいみんじんに参詣さんけいして法華經ほけきやうを講こうず甲冑かちゆうをぬいで自らみづか
布施ふせし給たまひい畢おわんぬ。

文句もんくの十じふに云いわく得聞とくもん是經ぜきやう不老不死ふろうふしとは此これ須すべらく觀解かんげすべし不老ふろうは
是これ樂らく・不ふ死しは是これ常じやう・此この經きやうを聞きいて常樂じやうらくの解げを得え文ぶん。

涅槃經ねはんきやうの十三じふさんに云いわく是この諸もろもろの大乗方等經だいじやうほうとうきやうてん典てんは復また無量むりやうの功徳くどくを成就じやうじゆ

すいと雖えんも是この經きやうに比ひせんと欲ほす喩たとえと為なることを得えず百倍ひやく千倍せん百千ひゃくせん万まん

億倍いふひ乃至ないし算數さんじゆ譬喩ひゆも及あぶこと能あたわざる所ところなり、善男子ぜんなんし譬たとえば牛うしより乳ちゆう

を出だし乳ちゆうより酪ちやくを出だし酪ちやくより生蘇しやうそを出だし生蘇しやうそより熟蘇じゆくそを出だし熟蘇じゆくそより

醍醐だいごを出だし醍醐だいご最上さいじやうなり、若もし服ふくすること有ある者は衆病しゆびやう皆除みなく所有しやう

の諸葉しよやく悉ことごとく其その中うちに入るこるが如ごとし、善男子ぜんなんし・仏ほとけも亦是またくかくの如ごとし仏ほとけより十二じふに

部經ぶきやうを出だ生しやうし十二部經じふにぶきやうより修多羅しゆたらを出だし修多羅しゆたらより方等經ほうとうきやうを出だし

方等ほうとうより般若波羅蜜はんにかはらみつを出だし般若波羅蜜はんにかはらみつより大涅槃だいねはんを出だす猶なほ醍醐だいごの

如し、醍醐だいごと言うは仏性ぶつしょうを喩たとう仏性ぶつしょうとは即ち是れ如来にょらいなり文。

一、金剛峯寺こんこう建立こんりゅう修業しゅぎ縁記えんきに云く、吾入定われにゆうじょうの間・知足ちそくてん天に往ゆいて

慈尊じそん御前おんまえに参仕さんしすること五十六億七千余歳じそんの後慈尊じそん下生げしやうの時必ず

随従ずいじゅうして吾わが旧跡きゅうせきを見る可べし此の峯・等閑とうかんにすること勿なれと文。

一、弘決くわくつに云く若し衆生しゅじやう・生死しやうじを出いでず仏乗ぶつじやうを慕したわずと知らば魔・

是この人に於おいて猶親想なほおやおもひを生ずと文。

五百問論に云く大千界塵数じんじゆの仏を殺すは其その罪尚輕つみなおかるし、此の經を

毀謗きぼうすれば罪彼つみより多し永く地獄じごくに入あつて出期あ有ること無からん、

読誦どくじゆの者を毀咎きしする亦復また是くかくの如し文。

一、広宣流布こうせんるふす可べき法華ほつけの事

伝教大師でんぎやうだいしの守護章しゆごに云く正像しやうざう稍過おほぎ已おほつて末法まつぽう太はなだ近ちかきに有あり

法華ほつけ一乘いちじやうの機き今正まさしく是これ其そのの時ときなり何を以もつて知しることを得えん

安樂行品あんらくぎょうぽんに云いく末世法滅時まつせほうめつと文。

秀句しゅうくの下したに云いく代しろを語ことばれば則すなわち像ざうの終り末の初め地ちを尋たずぬれば唐とうの
東・羯かつの西・人ひとを原たずぬれば則すなわち五濁ごじよくの生・

闍諍とらじやうの時なり、經きやうに云く如来にやらいの現在げんざいすら猶なほ怨嫉おんしつ多し況いはんや滅度めつどの後を
や、此まことの言良ゆえんに所以ゆゑ有るなり文。

道暹どうせん和尚わじやうの輔正ふしやう記きに云く法華ほつけの教興おこれば權教ごんきやう即すなわち廢はいす日出れば星
隠れ功なるを見て拙ちやうを知る文。

法華經ほつけきやうの安樂行品あんらくぎやうほんに云く一切世間怨多いっさいせけんあだおほくして信がたじ難がたし文。

藥王品やくおうほんに云く我滅度めつどの後・後の五百歲ごのこひやくさいの中・閻浮提えんぶだいに広宣流布こうせんるふして
断絶だんぜつせしむること無けん文。

勸發品かんぼつほんに云く我今神通力つうりきを以ての故ゆゑに是この經きやうを守護しゆごして如来滅後にやらいめつご
閻浮提えんぶだいの内に於ておい広く流布るふせしめて断絶だんぜつせざらしめんと文。

文句もんくの一に云く但とうじ当時大利益りやくを獲うるのみに非あらず後・五百歲遠く
妙道みやうどうに沾うるおわんと文。

一乘要決いちじやうようけつに云く日本一州・円機純一えんきじゆんいつ・朝野遠近おんごん・同く一乘いちじやうに歸し

緇素貴賤悉く成仏を期す、安然の広釈に云く彼の天竺国には外道有つて仏道を信ぜず亦小乗有つて大乘を許さず、其の大唐国には道法有つて仏法を許さず亦小乗有つて大乘を許さず、我が日本国には皆大乘を信じて一人として成仏を願わざること有ること無し、瑜伽論に云く東方に小国有つて唯大乘の機のみ有り豈我が国に非ずや文。

一、不謗人法の事

安樂行品に云く人及び經典の過を説くことを樂わざれ亦諸余の法師を輕慢せざれ文。

止觀の十に云く夫れ仏説に兩説あり一に撰・二に折・安樂行の長短を称ぜざるが如き是れ撰の義なり、大經の刀杖を執持し乃至首を斬る是れ折の義なり、与奪途を殊にすと雖も俱に利益せしむ文。

弘決の十に云く夫れ仏法兩説等は、大經の執持刀杖等は第三に云く

善男子ぜんなんし正法しょうぼうを護持ごじする者もの五戒ごかいを受けず威儀いぎを修しゅうせず乃至ないし下の文は仙預國王等こくおうとうの文なり文。

文句もんくの八はちに云いく大經だいぎょうには偏ひとえに折伏しゃくぶくを論じ一子地いちじに住す何ぞ曾かつてしやうじゆ受無じゆからん、此の經には偏ひとえに受しやうじゆを明せど

も頭七分に破る折伏無きに非ず、各各一端を挙げて時に適うのみ文。

頭戒論の中に云く論じて曰く持品の上位は四行を用いず安樂の下位は必ず四行を修す摩訶薩の言定んで上下に通ずと文。

文句の八に云く持品は八万の大士忍力成ずる者・此の土に弘經す新得記の者は他土に弘經す安樂行の一品文。

疏記の八に云く持品は即ち是れ惡世の方軌・安樂行は即ち是れ始行の方軌なり故に住忍辱地等と云う、安樂行品に云く他人及び經典の過を説かざれ、他人の好惡長短を説かざれと文。

一、念仏の一切衆生の往生せざる事六・道輪廻の事

善導和尚の玄義分に云く問うて曰く未審定散の二善出でて何れの文にか在る今既に教備つて虚しからず何れの機か受くることを得る、答えて曰く解するに二義有り一には謗法と無信八難及び非人と此等は

受けざるなり斯れ乃ち朽林頑石生潤の期有る可からず此等の衆生は
必ず受化の義無し、斯れを除いて已外は一心に信樂して求めて往生を
願ずれば上み一形を尽し下も十念を収む仏の願力に乗じて皆往かざる
と云うこと莫し文。

往生礼讃に云く女人と及び根欠と二乗種とは生ぜずと文。

一、八難処の事

弘決の四に云く北州と及び三惡に長寿天と並びに世智弁聰と
仏前仏後と・諸根不具を加う、是を八難と為すと文。

善導の遺言に云く我・毎日阿弥陀經六十卷・念仏六万返・懈怠無く
三衣は身の皮の如く瓶鉢は両眼の如く諸の禁戒を持ち一戒をも犯さ
ず未来の弟子も亦然り、設い念仏すと雖も戒を持たざる者は往生
即ち得難し、譬えば小舟に大石を載せ大惡風に向つて去るが如し、設い

本願ほんがんの船有りと雖いえども破戒はかいの大石重きが故ゆえに岸に就つくこと万が一な

り文。

観念法門經に云く酒肉五辛誓つて発願して手に捉らざれ口に喫らわ
ざれ若し此の語に違せば即ち身口俱に惡瘡著かんと願せよ文。
法然上人の起請文に云く酒肉五辛を服して念仏を申さば予が門弟
に非ずと文。

観念法門經に云く戒を持ちて西方弥陀を思念せよと文。

無量壽經に云く三心を具する者は必ず彼の国に生ずと文。

善導の釈に云く若し一心も少ければ即ち生ずることを得ずと明らか
に知んぬ一少は是れ更に不可なることを、茲に因つて極樂に生ぜんと
欲するの人は全く三心を具足す可きなり。

月藏經に云く我が末法の時の中の億億の衆生行を起し行を修すと
も未だ一人も得る者有らず、当今は末法なり現に是れ五濁惡世なり唯

浄土じょうどの一門いちもんのみ有つて通入す可べきの路なり文。

遺教經ゆいきょうきょうに云く淨戒じょうかいを持つ者は販売貿易やすし田宅あんちを安置じんみんし人民奴婢ぬび畜生ちくしょうを畜養ちくようすることを得いされ一切いっさいの種植しゅじき及び諸もろの財宝みなまさ・皆当おんりに遠離おんりすること火坑かきようを避さけるが如ごとくすべし草木そうもくを斬伐ざんぱつし墾土掘地こんどくちすることを得えざれ文。

善導和尚ぜんどうわじょうの所しよ釈しゃくの觀念かんねん法門經ほうもんの酒肉五辛しゅにくごしんを禁えずる事の依經えきようをいわば、無量壽經むりやうじゆ一に依より二卷十六觀經かんききやう二に依より一卷・四紙の阿彌陀經あみだ三に依より一卷般舟三昧はんじゆさんまい四に依より十往生經じゆしやうじやう五に依より一卷淨土三昧經じやうどさんまい六に依よる一卷

雙觀經そうかんききやうの下に云く無智むちの人の中にして此の經を説とかざれ文。

一、觀經かんききやうと法華經ほけききやうとの説時せつじ各別かくべつの事

善導和尚ぜんどうわじょうの疏じよの四に云く仏・彼の經を説ときたまいし時・処別べつじ時別・教

別對機別・利益別なり又彼の經を説きたもう時は即ち觀經・弥陀經等
を説き給う時に非ず文。

阿弥陀經に云く況や三惡道無し文、無三惡と説くと雖も修羅・人天之れ有り。

四十八願の第一に云く無し設し我れ仏を得んに国に地獄・餓鬼・畜生有らば正覺を取らじ。

第二の願に云く於て又死す可しと云う設し我れ仏を得るも十方の無量不可思議の諸三惡道には正覺を取らじ文。

第三十五の願に云く往生せざる事設し我れ佛を得んに十方の無量不可思議の諸仏の世界に其れ女人有て我が名号を聞いて歡喜信樂して菩提心を發して女身を厭惡せん寿終の後復女像と為らば正覺を取らじ文。

一、黒衣並びに平念珠地獄に墮つ可き事
法鼓經に云く黒衣の謗法なる必ず地獄に墮す文。

勢至經に云く平形の念珠を以ゆる者は此れは是れ外道の弟子なり我が弟子に非ず仏子我が遺弟必ず円形の念珠を用ゆ可し次第を超越する者は妄語の罪に因つて必ず地獄に墮せん文。

一、天台の念仏の事

一 大意

一 常

坐三昧一文 殊説經文 殊問經に依る

二 釈名

一 発大心

二

本尊は阿彌陀はんじゆさんまい
常行三昧一般舟三昧經に依る

三 鉢相

二 修大行

四種三昧

三

本尊は別有
半行半坐三昧一方等經法華經に依る

止觀十章者 四 撰法 五略者 三 感大果

四

本尊は觀音
非行非坐三昧一説經・説善・説惡・説無記

五 偏円へんえん

四 裂大綱

右

四種三味の次ししゅさんまいでは先段ついでに之これを注す

六 方便ほうべん

五 歸大処

七 正観

八 果報 かほう

九 起教 きぎょう

十 指歸

止觀しがんの七に云く若し四種三昧修習ししゅざんまいしゅうしゅうの方便ほうべんは通じて上に説くが如し、唯法華懺法ただほつげせんぼうのみ別して六時五悔むげに約して重ねて方便ほうべんを作す今五悔むげに就いて其の位相を明す文。

弘決くけつの七に云く四種三昧ししゅざんまいは通じて二十五法を用いて通の方便ほうべんと為す、若し法華ほつげを行ずるには別して五悔むげを加う余行よぎょうに通ぜず文。

第七の正修止觀せいしゅうしがんとは止の五に云く前の六重は修多羅しゅたらに依つて以て妙解みょうげを開き今は妙解みょうげに依つて以て正行しょうぎょうを立つ文。

十疑うたがいの第四に云く釈迦大師一代しやかだいしいちだいの説法處處せっぽうしよしよの聖教しょうきょうに唯衆生心ただしゅじょうしんを專もつぱらにして偏に阿弥陀仏あみだぶつを念じて西方極樂世界さいほうごくらくせかいに生ぜんことを求めよと

勸めたまえり文。

七疑に云く又聞く西国の伝に云く三りの菩薩有り一を無著と名け二を世親と名け三を獅子覺と名く文。

八疑に云く雜集論に云く若し安樂国土に生ぜんと願わば即ち往生を得る等文。

一、天台御臨終の事

止觀の一に云く安禪として化す位五品に居す文。

弘決の一に云く安禪として化す位五品に居す等とは此れ臨終の行位を出すなり、禪定を出でずして端坐して滅を取る故に安禪として化すと云う文、又云く法華と觀無量壽の二部の經題を唱えしむ文、又云く香湯を索めて口を漱ぎ竟つて十如・四不生・十法界・四教・三觀・四悉・四諦・十二縁を説くに一一の法門・一切の法を撰す、吾今最後

に觀を策まし玄を談ず最後善寂なり○跏趺して三宝の名を唱えて三昧に入るが如し即ち其の年十一月二十四日未の時・端坐して滅に入りたもう文。

又云く大師生存に常に兜率に生ぜん事を願う臨終に乃ち觀音來迎すと云う、當に知るべし物に軌とり機に隨い縁に順じて化を設く一准なる可からざることを文、又云く汝善根を種うるに嬾くして他の功德を問う盲の乳を問ひ蹶きたる者の路を訪うが如し実を告げて何の益かあらん文。

選択集の上に云く願くは西方の行者各其の意樂に隨い・或は法華を讀誦して以て往生の業と爲し、或は華嚴を讀誦し以て往生の業と爲し、或は遮那教主及び諸尊の法等を受持し讀誦して往生の業と爲し、或は般若・方等及び涅槃經等を解説し書寫して以て往生の業

と為す是れ則ち浄土宗觀無量壽經の意なり文。

又云く問うて曰く爾前經の中何ぞ法華を撰するや、答えて曰く今言
う所の撰とは權実偏円等の義を論ずるに非ず、読誦大乘の言は普く
前後の大乗諸經に通ず文。

觀無量壽經に云く爾の時に王舎大城に一りの太子有す阿闍世と
名く、調達惡友の教に隨順して父の王の頻婆沙羅を収執して幽閉し
て七重の室内に置く文。

法華經の序品に云く韋提希の子阿闍世王・若干百千の眷屬と俱なり
文。

惠心の往生要集の上に云く夫れ往生極樂の教行は濁世末代の
目足なり道俗貴賤誰か歸せざらん、但顯密の教法其の文一に非ず
事理の業因其の行惟れ多し利智精進の人は未だ難と為さず、予が如き

頑魯がんろの者・豈敢あにあえててせんや、是かくのゆえの故に念仏ねんぶつの一門いちもんに依よつて聊いささかか經論きやうろんの要文ようぶんを集め之これを披ひらき之これを修しゆするに覺さとり易やすく行やじ易やすし文。

惠心えしん往生おうじやう要集ようしゆを破はし二十三年いご已後いちじやうに一乘いちじやう要決ようけつを作つくる、一乘いちじやう要決ようけつの上に云いく諸乘しよじやうの權實ごんじつは古來こらいの諍あらそいなり俱ともに經論きやうろんに拠たつて互たがひに是非ぜひを執しゆす、余寬弘いまくわんこう丙午ひのえうまの歳冬十月病中に歎たんじて曰いく仏法ぶつぽうに遇あうと雖いえども未だ仏意ぶつゐを了おせず若もし

終に手を空うせば後悔何ぞ追はん、爰に經論の文義賢哲の章疏・或は人をして尋ねしめ・或は自ら思忖す、全く自宗他宗の偏党を捨てて専ら權智実智の深奥を探るに遂に一乘は眞実の理・五乘は方便の説なることを得る者なり、既に今生の蒙を開く何ぞ夕死の恨を遣さん文。

一、念仏は末代に流布す可き事

雙觀經の下に云く当來の世に經道滅尽せんに我慈悲を以て哀愍して特に此の經を留めて止住すること百歲ならん、其れ衆生有つて斯の經に値う者は意の所願に随つて皆得度す可し文。

往生礼讃に云く万年に三宝滅して此の經住すること百年、爾の時に聞いて一念もせば皆當に往生を得べし文。

慈恩大師の西方要決に云く末法万年に余經悉く滅して弥陀の一經のみと文。

方便品に云く深く虚妄の法に著して堅く受けて捨つ可からず
是くの如き人度し難しと文。

堅惠菩薩の宝性論に云く過去謗法の障り不了義に執著すと文。

方便品に云く若し余仏に遇わば此の法中に於て便ち決了すること
を得んと文。

玄の七に云く南岳師の云く初依を余仏と名く無明未だ破せず之を
名けて余と為す、能く如来秘密の蔵を知つて深く円理を覺す之を名け
て仏と為す文。

涅槃經疏十一に云く人正法を得るが故に聖人と云うと文。

像法決疑經に云く常施菩薩・初成道より乃至涅槃其の中間に於て
如来の一句の法を説くを見ず、然るに諸の衆生は出沒・説法度人
有りと見ると文。

二十五三昧・二十五有の略頌に曰く四州・四惡趣・六欲並びに梵世
四禪・四無色・無想・五那含文。

一、漢土・南北の十師・天台大師に歸伏する事

国清百録の第四に云く千年と復五百と復実に今日に在り南岳の叡聖天台の明哲昔は三業を住持し今は二尊に紹繼す豈止だ甘露を振旦に灑ぐのみならん亦当に法鼓を天竺に振うべし、生知妙悟なり魏晉より以来典籍風謡實に連類無し云云、乃至禪衆一百余僧と共に智者大師を請し奉る。願川の人なり、後則ち南荊州華容県に遷居す。

一、伝教大師の一期略記に云く

桓武天皇の御宇、延暦廿一年壬午正月十九日伝教大師最澄高尾寺に於て六宗と諍ひ實め破り畢ぬ。仍つて勅宣を下され歸伏の状を召さる、六宗の碩学共に歸伏の状を奉りて云く漢明の年

・教・震旦に被り磯島の代に訓本朝に及ぼす、聖徳の皇子は靈山の聖衆にして衡岳の後身なり經を西隣に

請い道を東域に弘む、智者・禪師は亦共に靈山に侍し迹を台岳に降し同く法華三昧を悟り以て諸仏の妙旨を演ぶる者なり、竊に天台の玄疏

を見れば釈迦一代の教を惣括して悉く其の趣を顯わし処として通ぜざること無し独り諸宗に逾え殊に一道を示す、其の中の所説の甚深の妙理・七箇の大寺・六宗の学匠昔未だ聞かざる所・曾て未だ見ざる所三論・法相の久年の諍い渙焉として氷の如く釈け昭然として既に明かなり雲霧を披いて三光を見るが猶し、

聖徳の弘化より以降今に二百余年の間・講ずる所の經論其の数惟れ多し彼此理を争つて其の疑未だ解けず、此の最妙の円宗猶未だ闡揚せず、蓋し以れば此の間の群生未だ円味に応ぜざるか、伏して惟れば聖朝久しく如来の付囑を受け深く純円の機を結ぶ一妙の義理始めて乃ち興顯す、六宗の学衆初めて至極を悟る、謂つべし此の

界の含靈而今而後悉く妙円の船に載つて早く彼岸に済ることを得と、如来の成道四十余年の後乃ち法華を説いて悉く三乗の侶をして共

に一乗いちじょうの車くるまに駕がせしむるが猶ごとし、善議ぜんぎ等慶躍けいやくの至いたりに堪たえず敢あえてて表あを奉たてまつて陳謝ちんしゃ以て聞きこす云云。

秀句しゅうくの下したに云いく当まさに知しるべし已說いせつの四時しじの經きやう今說こんせつの無量義經むりやうぎきやう・当說とうせつの涅槃經ねはんぎやうは易信いしん易解いげなることを隨他意ずいたいの故ゆゑに、此この法華經ほけきやうは最もつともも為なれ難信なんしん難解なんげなり隨自意ずいじいの故ゆゑに、隨自意ずいじいの說せつは隨他意ずいたいに勝まさる、但ただし無量義むりやうぎを隨他意ずいたいと云いふ

は未合みごうの一辺を指す余部の随他意ずいたいに同じからざるなり文。

文句もんくの八に云く已いとは大品だいほん以上の漸頓ぜんどんの諸説しよなり今とは同一どういの座席ざせき

謂いく無量義經むりやうぎきやうなり当たうとは謂いく涅槃ねはんなり、大品等だいほんの漸頓ぜんどんは皆方便みなほうべんを帶たうす

れば信しんを取ること易やすしと為なす今無量義むりやうぎは一より無量むりやうを生うずれども無量むりやう

未いまだ一いに還かえらず是亦信またじ易やすし、今の法華ほつけは法ほつを論ろんずれば一切いっさいの差別さべつ

融通ゆうづうして一法いっぽうに歸かへす人を論ろんずれば則すなわち師弟していの本・迹とも俱みなく久遠くおんなり、

二門にもん悉ことごとく昔むかしと反はんすれば信しんじ難がたく解げし難がたし、鋒ほこに當あたる難事なんじをば法華ほつけ已すでに

説ねはんく涅槃ねはんは後ごに在あれば則すなわち信しんず可べきこと易やすし、秘要ひようの藏かくとは隠かくして説

かざるを秘なと為なし一切いっさいを惣括そうかつするを要なと為なす真如実相しんにょじつそうの包蘊ほうおんせるを

藏なと為なす、

不可ふか分布ふふとは法妙がたにして信しんじ難がたし深智しんちには授さずく可べし無智むちは罪つみを益やくす

故ゆえに妄みだりに説べかく可べからず、昔むかしより已このかた來未いまだ曾かつて顯説けんせつせずとは三藏さんぞうの中に

於ては二乗の作仏を説かず、亦師弟の本・迹を明かさず、方等・般若に
は真相の蔵を説くと雖も亦未だ五乗の作仏を説かず、亦未だ發迹顯本
せず頓漸の諸經皆未だ融會せず故に名けて秘と爲す、此の經には具に
昔秘する所の法を説く即ち是れ秘密藏を開するに亦即ち是れ秘密藏
なり、此くの如きの秘藏は未だ曾て顯說せず、如來在世猶多怨嫉とい
わば四十余年には即ち説くことを得ず今説かんと欲すと雖も而も五
千尋いで即ち座を退く仏世すら尚爾り、何に況や未來をや理化し難き
に在り。

楞伽經に云く我得道の夜より涅槃の夜に至るまで一字をも説かず
文。

止觀の五に云く是の故に一夜一字を説かずと文、又云く仏二法に
因つて此くの如きの説を作したもう緣自法と及び本住の法を謂う、自

法とは彼の如来にょらいの得る所我またこれも亦之を得文、又云く文字もんじを離るるとは仮名を離るるなり文。

法華ほっけに云く但仮いわの名字みょうじを以て衆生しゅじょうを引導したもう文。

玄義げんぎの五に云く惠能よく惑はを破し理あらわを顯す理は惑はを破はすこと能あたわず、理も若し惑もを破せば一切衆生いっさいしゅじょう・悉こゝろく理性りしやうを

具す何が故ぞ破せざる、若し此の恵を得れば則ち能く惑を破す故に智を用つて乗体と為す文。

弘の五に云く何の密語に依つて此くの如き説を作したもう、仏の言く二の密語に依る・謂く自証法・及び本住法なり、然るに一代の施化・豈権智被物の教無からんや、但此の二に約して未だ曾て説有らざる故に不説と云うのみ文。 籤の一に云く三に廢迹とは後の如く前の如し文を引く中・初に諸仏の下同を引く・為度の下正しく廢迹を明す、廢し已れば迹無し故に皆実と云う、実は只是れ本権は只是れ迹若し同異を弁ぜば広く第七の卷の如し文、籤の一に云く捨は只だ是れ廢・故に知んぬ開と廢は名異跡同なることを文。

止の六に云く和光同塵は結縁の始め八相成道は以て其の終りを論ずと文。

弘の六に云く和光の下・身を現ずるを積するなり四住の塵に同じ
処処に縁を結び浄土の因を作し利物の始めと為す、衆生機熟して八相
成道す身を見・法を聞き終に実益に至る文。

天照大神の託宣に云く

往昔勤修して仏道を成じ求願円満遍照尊・閻浮に在つては王位を
護り衆生を度せんが為に天照神。

◆八九

三論宗御書

691P

三論宗さんろんしゅうの始めて日本にほんに渡りしは三十四代推古すいこの御宇治す十年壬戌みずのえいぬ
の十月・百濟くだらの僧・觀勒かんろく之を渡す、日本記にほんきの太子たいしの伝を見るに異義無いぎな
し、但ただし三十七代との事は流布るふの始めなり、天台宗・律宗りつしゅうの渡れる事は
天平勝宝六年てんぴやうしょうぼう 甲午二月十六日丁未きのえねおま 乃至四月に京に入り東大寺
に入る天台止觀等てんだいしかん云云、諸伝しよ之に同じ、人王第四十六代孝謙天皇こうけんてんのう
の御宇ぎようなり聖武しょうむは義謬あやまりなり書き直す可べきか、戒壇かいだんは以て前に同じ、
大日經だいにちきやうの日本にほんに渡れる事は弘法こうぼうの遺告ゆいこうに云く、伴くだんの經王は大日本国にほんこく
高市郡久米道場たけち どうじやうの東塔の下に在り」云云、此れ又元政天皇げんじやうてんのうの御宇ぎような
り、法華經ほけきやうの渡り始めし事は人王第三十四代推古すいこの四年なり、太子たいし・
惠慈法師ほつしに謂いつて曰く、法華經ほけきやうの中に此の句・落字」と云云、太子たいし

使を漢土に遣わし已前の法華經・此の国に有るか、惟れ知んぬ欽明の
御宇に渡る所の經の中に法華經有るなり、但し自ら御不審有る大事は
所謂日本記に云く、欽明天皇十三年壬申冬十月十三日辛酉百濟国
聖明王始めて金銅釈迦像一軀を献ず」等云云、善光寺流記に云く
阿弥陀並びに觀音・勢至・欽明天皇の御宇治天下十三年壬申十月
十三日辛酉・百濟国の明王・件の仏・菩薩・頂戴」と云云、相違欲
已下欠」

◆八九

十宗判名の事

692P

俱舎宗 ぐしやしゅう

拙度宗

華嚴宗 けこんしゅう

迷經宗 まよいきょうしゅう

半字宗

真言宗 しんこんしゅう

☆范宗

下劣宗 げれつ

法華宗 ほつげしゅう

仏立宗 ぶつりゅうしゅう

成実宗 じょうじつ

驢牛和合乳宗 ろこわごう

律宗 りっしゅう

驢乳宗 ろにゅう

禪宗 ぜんしゅう

趙高宗 ちようこう

殺二世王 よおう

法相宗 ほうそうしゅう

逆路宗 ぎゃくろ

浄土宗 じょうどしゅう

破鏡宗 はけい

獸

梟鳥宗 きようちよう

禽

不孝宗 ふこう

背上向下宗 そむ

三論宗 さんろんしゅう

捨本附末宗

◆九〇

五行御書ごしよ

不殺生戒ふさつしょうかい

肝臓

不飲酒戒おんじゅ

不妄語戒もうご

脾臓ひ

眼根がんこん

舌根ぜつこん

身根

酢味

苦味

甘味

東方とうほう

南方なんぽう

中央

木

青色

火

赤色

土

黄色

春

夏

土用

青雲

赤雲

黄雲

魂

神

意

歳星

☆惑星

鎮星

金

不偷盜戒ちゅうとうがい

肺臟

不邪淫戒ふじやいんかい

鼻根

耳根

辛味

☆味

西方さいほう

北方

白色

水

黒色

秋

冬

白雲

黒雲

魄

志

大白星

辰星

◆九一 浄土九品の事

695P

難行易行・聖道浄土・雑行 正行・諸行念仏、

法然房の料簡は諸行と念仏と相對なり、

二義、一には勝劣・二には難易 廃立

諸行を説くなり

一に諸行を廢して念仏に歸せんが為に而も

助正

二に念仏を助成せんが為に而も諸行を説くな

り

傍正

三に念仏諸行の二門に約して各三品を立てん

が為に而も諸行を説くなり
若善導に依らば初を以て正と為すのみ

読誦大乘

上品じようぼん

六念

上品じようぼん上生
天施戒僧法仏

至誠心深心廻えこう向ほう發願心なり
三種さんしゆの心を發おこして即すなわち往生おうじやうす
復また三種さんしゆの衆生しゆじやう有あり当まさに往生おうじやうを得うべし

一には慈心にして殺さず諸もろもろの戒行かいぎやうを具ぐす

二には大乘だいじやう方ほう等とう經典きやうてんを讀誦どくじゆす

三には六念を修行しゆぎやうす

法然の料簡に云く

華嚴經・方等經・般若經・法華經・涅槃經・大日經・深密經
楞嚴經等の一切の大乗經は誦誦

大乘の一句に撰尽す

解第一義

上品中生

善く義趣を解し第一義に於て一法然の料簡に云く一華嚴
の唯心・法界法相の唯識・三論の八

不・真言の五相成身天台の一念三千・皆解第一義の一句に

撰尽す

上品下生

法然の料簡一深信の因果に十界の因果を撰尽す

ちゅうぼん
中品上生

ちゅうぼん
中品

ちゅうぼん
中品中生

ごかい
五戒・八戒乃至諸戒を摂尽す

あごんきよう
四阿含經・俱舍・成実・律宗は此の二品に摂尽す

八斎戒

じゅぎよう
儒教道教は此の一品に摂尽す

ちゅうぼん
中品下生

こうようふぼ
孝養父母の行なり仁慈

げてんさんぜん
外典三千余卷

げぼん
下品上生

ろうし
老子經

こうきよう
孝經

かんきよう
觀經

此くの如きの愚人多く衆惡を造るも十念せば往生す

下品中生

或は衆生有て五戒・八戒及び具足戒を毀犯す、

此くの如きの愚人は僧祇物を偷み現前僧

下品

物を盜む不淨に法を説いて懺愧有ること無し

は余行に堪えざる所なり、唯念仏の力

下品下生は五逆重罪の者なり而かも能く逆罪を除滅する

のみ能く重罪を滅するに堪る有り、故に極惡最下の人

為に而かも極善最上の説を説く等云云

下品下生

五逆罪の人・十念往生

撰択に云く、念仏三昧は重罪すら消滅す何に

況や輕罪をや余行は然らず、或は輕を滅し

て重を滅せざる有り、或は一を消して二を消せ

ざる有り」等云云

捨しゃ閉へい閣かく拋ほう

法ほけ華き經きょう等らうの一切いっさい經きょう

釈しゃ迦か仏ぶつ等らうの一切いっさい諸しよ仏ぶつ

天てん台だい宗しゅう等らうの八はつ宗しゅう・九きゅう宗しゅうの世せ天てん等らう

淨じよう土ど三さん部ぶ經きょう・阿あ弥み陀だ仏ぶつよりの外がいなり

安あん樂らく集しゅうに

未いまだ一人ひとりも得える者もの有あらなず唯ただ淨じよう土どの一いち門もんのみ有あて通と入にゅうの路みちなるべし

往おう生じよう礼らい讃さんに云いく

千せん中ちゅう無む一いつ十じゅう即そく十じゅう生しやう・百ひやく即そく百ひやく生しやう

殿の御師おんし 後鳥羽院御宇ごとうはいつんぎょう
源空げんくう 建仁年中けんじんねんちゅう
眞座主けんしんざす 法然房ほうねんぼう
八人の碩徳せきとく

頼頭僧上の御師らいどうそうじょうのおんし

法本

聖心せいしん 成覚じやうかく

嵯峨さが

覚明かくみょう

法本

法蓮

一弟子いちでし 一弟子いちでし

一弟子いちでし

一念いちねん

念阿弥陀仏ねんあみだぶつ 諸行往生しよぎやうおうじやう
一条いじやう 道阿弥どうあみ

隆寛りやうかん 長樂寺南無ちやうらくじなむ
故嵯峨法皇の御師さかほけほうこうのおんし
善恵ぜんゑ 小坂こさか 道観だうかん
聖光せいこう 故打宮入道修観ごうちみやうにゅうだうしゆかん

極樂寺ごくらくじ

蘭城寺の長吏おんじょうじ ちようり

集を破す、隨機の諸行皆往生を爲すべし等云云
こういん せいじん じょうじやう じやうど うたがい

故宝地房法印証眞の弟子
こほうちぼう ぽういん しょうしん の だうし

上野清井者

定真ていしん堅者けんじや

彈撰だんせん撰せん二卷を造る隨機きしよぎよう諸行往生しよおうじよう

下輩げはい下三品

証真しやうしんの嫡弟 竹中ほつし法師

值惡あくにん人

宗源そうげん法印ほういん

隆真ほうしん法印

証義者

大和やまとの莊

俊鏤ほういん法印

相生

善人ぜんにん

三塔の總學頭

小乘しょうじよう凡夫ぼんぷ

三千人さんぜんの大衆たいしゆう

中輩

五人探題たんだい 聖覺しやうかく

中三品

貞雲

竜証

值小

華嚴けこん宗しゆう

とがのをの

値大

明恵房ぼう

摧邪輪さいじかりん三卷を造る隨機諸行往生きしよぎようおうじよう

大乘凡夫だいじようばんぶ

深密經じんみつに依るよ

上輩

法相宗ほうそうしゅう

三時教さんじきようをもて一代いちだいを撰尽しやうじんし返かへて深密じんみつ

經を以て法華經ほけきようを下す

三論宗さんろんしゅう

二藏三時にざんさんじをもて一代いちだいを撰尽しやうじんし返かへて妙智みやうち

經を以て法華經ほけきようを下す

上三

華嚴宗けこんしゅう

五教ごけうをもて一代いちだいを撰尽しやうじんし返かへて華嚴經けこんきようを

以て法華ほっけを下す

大乘だいじよう五宗ごしゆ 真言宗しんごんしゆ

五藏ござうをもて一代いちだいを撰しやう尽じんし返へて

大日經等だい にちきやうを以もつて法華經ほけきやうを下くだす

天台宗てんだいしゆ

四教しきやう五時ごじをもて一代いちだいを撰しやう尽じんす

県の額がくを州しゆに打ち牛跡あとを大海たいかいに入る

伝教大師でんきやうだいし・此この義ぎを許ゆるすや不いなや

夫それ三時さんじの教きやうは勝義しやうぎの領解りやうげ一部いちぶの間まは義生ぎしやうの機宜きぎ猶なほ三部さんぶを
闕かく何なんぞ一代いちだいを撰せつせん、華嚴けこん

云いく・三論さんろん云いく真言等しんごん云云

九二 御義口伝目録

701P

南無妙法蓮華經

七〇八

卷上

序品七箇の大事

七〇

九

第一 如是我聞の事

七〇九

第二 阿若・陳如の事

七一〇

第三 阿闍世王の事

七一一

第四 仏所護念の事

第五 下至阿鼻地獄の事

七一二

第六 導師何故の事

七一二

第七 天鼓自然鳴の事

七一三

方便品八箇の大事

七一

三

第一 方便品の事

七一三

第二 諸仏智慧甚深無量

其智慧門の事

七一四

第三 唯以一大事因縁の事

七一六

第四 五濁の事

七二七

第五

比丘・比丘尼有

懷増上慢

優婆塞我慢

優婆夷不信の事

七

一八

第六

如我等無異如我昔

所願の事

七二〇

第七

於諸菩薩中

正直捨方便の事

七二〇

第八

當來世惡人聞

不信受破法墮

惡道の事

七二一

二一

譬喩品九箇の大事

七

第一 譬喩品の事

七二一

第二 即起合掌の事

七二二

第三 身意泰然快得安穩の

七二二

第四 得仏法分の事

七二三

第五 而自廻転の事

七二三

第六 一時俱作の事

七二三

第七 以譬喩得解の事

七二四

第八 唯有一門の事

七二四

第九 今此三界等の事

七二四

信解品六箇の大事

七

二五

第一 信解品の事

七二五

第二 捨父逃逝の事

七二六

第三 加復窮困の事

七二六

第四 心懷悔恨の事

七二六

第五 無上宝聚不求自得の

七二七

第六 世尊大恩の事

七二七

葉草喩品五箇の大事

七

二八

第一 葉草喩品の事

七二八

第二 此の品述 成段の事

七二九

第三 雖一地所生一雨所潤

等の事 七二九

第四 破有法王出現世間の

七二九

第五 我觀一切

普皆平等無有

彼此愛憎之心我

無貪著

事

亦無限礙の事

七三

○ 授記品四箇の大事

七三

○ 第一 授記の事

第二 迦葉光明の事

第三 捨是身已の事

第四 宿世因縁吾今当説の

二 化城喩品七箇の大事

七三

第一 化城の事

第二 大通智勝仏の事

第三 諸母涕泣の事

第四 其祖転輪聖王の事

第五 十六王子の事

第六 即滅化城の事

第七 皆共至宝処の事

四 五百弟子品三箇の大事

第一 衣裏の事

七三四

第二 醉酒而臥の事

七三四

第三 身心遍歡喜の事

七三五

人記品二箇の大事

七三

五

第一 學無學の事

七三五

第二 山海慧自在通王仏の

七三五

法師品十六箇の大事

七三

六

第一 法師の事

七三六

第二 成就大願懃

事

第三

七三六 如來所遣行如來事の

七三六

第四 与如來共宿の事

七三六

第五 是法華經藏

深固幽遠

無人能到の事

七

第六

三七 聞法信受隨順不逆の

衆生故生於
惡世広演此經
の事

事

七三七

第七 衣座室えざしつの事

七三七

第八 欲捨諸懈怠よくしゃしよけたい応おう当たう聴ちやう

此經このきやうの事 七三七

第九 不聞もんぼう法華經ほふしやう去き仏ぶつ智ち

甚はなはだ遠とほの事 七三八

第十 若あるひと説とく此經このきやう時とき

有人あるひと惡わる口くち罵ののし加か

刀とう杖じやう瓦がし石やく

念ねんぶつ仏ぶつ故こ応おう忍にんの

事

七三八

及しに清信きやうしん士し女にょ供養くやう於お

法師ほふしの事 七三八

第十二 若人もしひと欲ほつ加か惡ご

刀杖とうじやう及が瓦石がしやく

則すなは遣はな變へん化が人ひと為な

之作その衛護ゑもの事

七

三八

第十三 若しんこん親近しんこん法師ほふし速得そとく

菩薩ぼさつ道だうの事 七三八

第十四 隨順ずいじゆん是こゝ師し學がくの事

七三八

第十五 師しと學がくとの事

七三九

第十六 得見とくけん恒沙こうしゃ仏ぶつの事

七三九

宝塔ほうとう品ぼん甘かん箇がの大事だいじ

三九

第一 宝塔ほうとうの事

七

七三九

第二 有七宝の事 しっぽう

七三九

第三 四面皆出の事 しめんみな

七四〇

第四 出大音声の事 おんじよう

七四〇

第五 見大宝塔住在 ほうとうじゅうざい

空中の事 くうちゅう

七四〇

第六 国名宝浄彼中有 ちゅう

仙号日多宝の事 ぶつこう

七四〇

第七 於十方国土有 じゅつぱうこくど

說・法華經处 ほけきよう

我之塔廟為 とうび

聽是經故涌現 ゆげん

其前為作 しんぜん

証明讚言 しんめい

善哉の事 ぜんざい

七四〇

第八 南西北方四惟上下 じようげ

の事 七四一

第九 各齋宝華滿掬の事 ほうげ

七四一

第十 如却関鑰開大城 だいじよう

門の事 七四一

第十一 撰諸大衆皆在虚空 しよだい

の事 七四二

第十二 譬如大風吹小樹枝 ひにょたいふうすいしょうじゆえ

の事

七四二

第十三 若有能持則持仏身

の事

七四二

第十四 此經難持の事

七四二

第十五 我則歡喜諸仏亦然

の事

七四二

第十六 讀持此經の事

七四三

第十七 是真仏子の事

七四三

第十八 是諸天人・世間之

眼の事

七四三

第十九 能須臾説の事

七四三

第二十 此經難持の事

提婆達多品八箇の大事 七
七四三

四四

第一 提婆達多だいはだつたの事

七四四

第二 若不違我當為宣説

の事

七四四

第三 採菓汲水拾薪設

食の事

七四四

第四 情存妙法故身

心無懈倦の事七四五

第五 我於海中唯常

宣説せんぜつの事 七四五

第六 年始八歳の事

七四五

第七 言論未訖の事

七四六

第八 有一宝珠の事 ほうしゅ

七四七

勸持品十三箇の大事 かんじほん だいじ

七

四七

第一 だいいち 勸持の事 かんじ

七四七

第二 不惜身命の事 おしんみょう

七四七

第三 心不実故の事 ふじつ

七四八

第四 敬順仏意の事 ぶつゐ

七四八

第五 作師子吼の事 ししきう

七四八

第六 如法修行の事 しゆぎやう

七四八

第七 有諸無智人の事 しよむち

七四八

第八 惡世中比丘の事 あくせ びく

七四九

第九 或有阿練若の事 ある あれんにや

七四九

第十 自作此經典の事 きやうてん

七四九

第十一 為斯所輕言汝等 なんじ

皆是仏の事 みな 七四九

第十二 惡鬼入其身の事 あくき

七四九

第十三 但惜無上道の事 たんしゃく むじやうどう

七四九

安樂行品五箇の大事 あんらくぎやうぼん だいじ

七

五〇

第一 だいいち

安樂行品の事 あんらくぎょうほん

七五〇

第二

一切法空の事 いっさい

七五〇

第三

有所難問不以 なん

小乘法答等の事 しょうじよう

七五〇

第四

無有怖畏加刀杖 ふい

等の事

七五〇

第五

有人来欲難問者 あるひと

諸天昼夜等の事 しよてん

の事

七五二

第二

如来秘密神通之力 にょらい ひみつ しんつう

七五〇

涌出品一箇の大事 ゆじょうぽん

七

五〇

第一 だいいち

唱導之師の事

七五一

卷下

寿量品 じゅうりょうほん

廿七箇の大事 だいいち

七五二

第一 だいいち

妙法蓮華經 みょうほうれんげき

如来寿量品第 にょらいじゅうりょうほん

十六の事

七五二

第三

第四

無辺等の事 むへん

七五三

我実成仏已来無量 がじつじょうぶつらいむりよう

如来如実知見 にょらいにょじつちけん

三界之相無有生さんがいしょうじ死しの事

失者の事

第七五五 擣とう・和合与子令服

七

第五

五三

若くじゅう仏久住於世

の事

第七五五

第九 毒氣どくけ深入失本心故ほんしん

薄はく徳之人不種
善根ぜんこん貧窮下賤
貪著とんじやく五欲入於
憶想妄見網中
の事

第十 是ぜ好良藥こうりやうやく
今留在此汝可こんるさいしなんじ
取服勿憂不差
の事

五六

七

七五四

第十一 自我得仏來の事

第六 飲他毒藥藥發悶乱宛

転于地の事七五四

第七

或ある失本心ほんしん・或不ある

現涅槃げんねはんの事七五六

第十三

常住じやうじゆう此說法せつぽうの事

第十二 為度衆生故方便しゆじやう

七五六

第十四 時・我及衆僧俱出
しゅうそう

靈鷲山りょうじゅうせんの事七五六

第十五 衆生見劫尽○而
しゅじょう

衆見焼尽の事

七五七

第十六 我亦為世父の事
またいせ

七五七

第十七 放逸著五欲墮於
ほういつ

惡道あくどう中の事七五八

第十八 行道不行道ぎやうどう ふぎやうどうの事

七五八

第十九 每自作是念さぜねんの事

七五八

第二十 得入無上道等とくに入 むじやうどうの事

七五九

第廿一 自我偈じがげの事

七五九

第廿二 自我偈始終じがげ しじゅうの事

七五九

第廿三 久遠くおんの事

七五九

第廿四 此の寿命品じゅりやうほん

の所化しよけの國土こくどと修行しゆぎやうとの事

七五

九

第廿五 建立御本尊等こんりゅう ごほんぞんの事

七六〇

第廿六 寿命品じゅりやうほんの対告衆たいこうしゅう

の事 七六〇

第卅七 無作三身の事

七六〇

分別功德品三箇の大事

七六〇

第一

其有衆生聞

如壽命長遠

能生一乃至

信解所得功德

無有限量の事

七

六〇

是則能信受如是

諸人等頂受此經典の事

六二

第一

法師功德の事

七六二

七六一

第三

受用の事七六一

隨喜品二箇の大事

七六

一

第一

妙法蓮華經隨喜

功德の事 七六一

第二

口氣無・穢優

鉢華之香常從

其口出の事

七六

法師功德品四箇の大事

七

仏子住此地則是仏

第二 六根清淨の事 ろくこん しょうじやう

第五 我深敬汝等 がじんきやうなんじ

第三 又如淨明鏡の事 じやうみやうきやう

不敬輕慢 けい けい はん

七六三

所以者何汝 ゆえんなん かなんじ

第四 是人持此經安住

等皆行菩薩道 みな ぼさつ だう

希有地の事 けう ちの こと

七六四

常不輕品三十箇の大事 じやうふきやうほん だいじ

当得作仏の事 たう ぶつ ぞう こと

六三

七六四

第一 常不輕の事 だいいち ふうきやう

第七 乃至遠見の事 なほ いたる けん こと

七六三

七六四

第二 得大勢菩薩の事 たいせい ぼさつ

第八 心不淨者の事 ふじやう

七六四

七六五

第三 威音王の事 いおん

第九 言是無智比丘の事 むち びく

七六四

七六五

第四 凡有所見の事 ほんぬ しょけん

第十 聞其所說皆信伏 しよせつ みな しんぷく

七六四

隨從の事 ずいじゅう

七六五

第十一 於四衆中說法

心無所畏の事七六五

第十二 常不輕菩薩豈異人

乎則我身是の事

第十三 常不值仏不聞法不

見僧の事七六六

第十四 畢是罪已復遇常

不輕菩薩の事

第十五 於如來滅後等の事

七六六

第十六 此品の時の不輕菩薩の体の事

七六七

第十七 不輕菩薩の礼拝

住処の事 六七

第十八 開示悟入礼拝

住処の事 七六七

第十九 每自作是念の文

礼拝住処の事

七六七

第二十 我本行菩薩道の文

礼拝住処の事

六八

第二十一 生老病死礼拝

住処の事 七六八

第卅二 法性礼拝住処の
七六八

第卅三 無明礼拝住処の事
七六八

第卅四 蓮華の二字礼拝
住処の事 七六八

第卅五 実報土礼拝住処の
事 七六九

第卅六 慈悲の二字礼拝
住処の事 七六九

第卅七 礼拝住処分真即の
事 七六九

第卅八 究竟即礼拝住処の
事 七六九

第卅九 法界礼拝住処の事
七六九

第卅 礼拝住処忍辱地の
事 七七〇

神力品八箇の大事
七七

○ 第一 妙法蓮華經如来
神力の事 七七〇

第二 出広長舌の事
七七〇

第三 十方世界衆宝樹下
師子座上の事 七七一

第四 満百千歳の事
七七一

第五 地皆六種震動
其中衆生〇

衆宝樹下の事

七七

一 娑婆是中有仏名

第六 釈迦牟尼仏の事

第七

斯人行世間能滅

衆生聞の事

第八

畢竟住一乘

是人於仏道決定無有疑の事

二 囑累品三箇の大事

七七

第一

從法座起の事

七七二

如來是一切衆生

第二 之大施主の事

第三

如世尊勅当具奉行

の事

七七二

藥王品六箇の大事

七七

三

第一

不如受持此法華經乃至一四句偈の事

七七三

第二

十喩の事

第三

七七三

離一切苦一切

病痛能解一切生死之縛の事

七七三

第四 火不能燒水不能漂

の事

七七三

第五 諸余怨敵皆悉摧滅

の事

七七四

第六

若人有病

得聞是經病即

消滅

不老不死の事

七七四

妙音品三箇の大事

七四

第一

妙音菩薩の事

七七四

第二

肉髻白毫の事

七七四

第三 八万四千七宝鉢の

事

七七五

普門品五箇の大事

五

第一

無尽意菩薩の事

七七五

第二

觀音妙の事

七七六

第三

念念勿生疑の事

七七六

第四

二求兩願の事

七七六

第五

三十三身利益の事

七七七

陀羅尼品六箇の大事

七七

七

第一 だいいち 陀羅尼の事 だらに

七七七

第二 安爾曼爾の事 そ

七七七

第三 鬼子母神の事 きしもじん

七七八

第四 受持法華 じゅじ ほうけ

名者福不可量の事 めいしやふくふかりよう 七七八

第五 皐諦女の事 こうだいによ

七七八

第六 五番神呪の事 じんしゅ

七七八

嚴王品三箇の大事 だいじ 七七

九

第一 だいいち 妙莊嚴王の事 みょうそうこん

七七九

第二 浮木孔の事 うきぎ

七七九

第三 当品邪見即正の事 じやけんそく

七七九

普賢品六箇の大事 ふげん だいじ 七八

○

第一 だいいち 普賢菩薩の事 ふげんぼさつ

七八〇

第二 若法華經行闍浮提 ほけきよう えんぶだい

七八〇

第三 八万四千天女の事 はちまん

七八〇

第四 是人命終為千仏 みょうじゅう

授手の事 七八〇

第五 闍浮提内広令流布 えんぶだい るふ

の事 七八一

第六 此人不久当詣とうけい

道場どうじょうの事 七八一

無量義むりやうぎぎ經六箇の大事だいじ 七八

三

第一無量義むりやうぎぎ經德行品第一だいいち

七八三

第二 量の字の事

七八四

第三義の字の事

七八四

第四処の一字の事

七八四

第五無量義むりやうぎぎ処の事

七八四

第六無量義むりやうぎぎ処の事

七八五

普賢ふげん經五箇の大事だいじ 七八

五

第一普賢ふげん經の事

七八五

第二 不断煩惱ふだんぼんのう不離五欲

の事 七八五

第三 六念の事

七八五

◆九三 御義口伝

708P

南無妙法蓮華經

御義口伝に云く南無とは梵語なり此には歸命と云う、人法之れ有り

人とは釈尊に歸命し奉るなり法とは法華經に歸命し奉るなり又歸と

云うは迹門不變真如の理に歸するなり命とは本門隨緣真如の智に

命くなり歸命とは南無妙法蓮華經是なり、釈に云く隨緣不變・一念

寂照と、又歸とは我等が色法なり命とは我等が心法なり色心不二な

るを一極と云うなり、釈に云く一極に歸せしむ故に仏乗と云うと、又

云く南無妙法蓮華經の南無とは梵語・妙法蓮華經は漢語なり梵漢共

時に南無妙法蓮華經と云うなり、又云く梵語には薩達磨・芬陀梨伽・

蘇多覽と云う此には妙法蓮華經と云うなり、薩は妙なり、達磨は法なり、芬陀梨伽は蓮華なり蘇多覽は經なり、九字は九尊の仏体なり九界即仏界の表示なり、妙とは法性なり法とは無明なり無明法性一体なるを妙法と云うなり蓮華とは因果の二法なり是又因果一体なり經といつさいしめじよう こんごおんじよう は一切衆生の言語音声を経と云うなり、釈に云く声仏事を為す之を名けて經と為すと、或は三世常恒なるを経と云うなり、法界は妙法なり法界は蓮華なり法界は經なり蓮華とは八葉九尊の仏体なり能く之を思ふ可し已上。

の大事

伝云序品七箇の大事

方便品八箇の大事

譬喻品九箇

信解品六箇の大事

藥草喻品五箇の大事授記品四箇の大事

化城喻品七箇の大事

五百品三箇の大事

人記品二箇

の大事だいじ

法師品ほうしほん

十六箇の大事だいじ

の大事だいじ

宝塔品ほうとうほん

二十箇の大事だいじ

提婆品だいば
八箇

勸持品十三箇の大事だいいじ 安樂行品五箇の大事だいいじ 涌出品一箇の大事だいいじ

寿量品二十七箇の大事だいいじ 分別功德品三箇の大事だいいじ 隨喜品二箇の大事だいいじ

法師功德品四箇の大事だいいじ 不輕品三十箇の大事だいいじ 神力品八箇の大事だいいじ

囑累品三箇の大事だいいじ 藥王品六箇の大事だいいじ 妙音品三箇の大事だいいじ

普門品五箇の大事だいいじ 陀羅尼品六箇の大事だいいじ 嚴王品三箇の大事だいいじ

普賢品六箇の大事だいいじ 無量義經六箇の大事だいいじ 普賢經五箇の大事だいいじ

已上二百三十一箇条也此の外に別伝之有べつでんこれあり具つふさに之これを記しるし訖ぬ。

御義口伝卷上おんぎくでん

序品七箇の大事じよばん

第一如是我聞だいいちによぜがもんの事 文句もんくの一いっに云いく如是によぜとは所聞しよもんの法体ほつたいを拏あぐ我聞がもん

とは能持のうじの人なり記しの一いっに云いく故ゆえに始はじと末まつと一經いっぎやうを所聞しよもんの体たいと

為す。

御義口伝に云く所聞の同は名字即なり法体とは南無妙法蓮華經なり能持とは能の字之を思う可し、次に記の一の故始末一經の釈は始とは序品なり末とは普賢品なり法体とは心と云う事なり法とは諸法なり語法の心と云う事なり諸法の心とは妙法蓮華經なり、伝教云く法華經を讀むると雖も還つて法華の心を死すと、死の字に心を留めて之を案ず可し不信の人は如是我聞の聞には非ず法華經の行者は如是の体を聞く人と云う可きなり、爰を以て文句の一に云く如是とは信順の辭なり信は則ち所聞の理會し順は則ち師資の道成ず」と、所詮日蓮等の

類たぐいを以もつて如是によぜがもん是我聞がもんと云うべきなり云云。

第二阿若あにやきようじんによ☆陳如ちんによの事 疏じよの一いちに云く・陳如は姓なり此ここには火器はんと翻はんず

婆羅門種ばらもんなり其その先火しやうに事ことこう此これに従したがて族やからに命もとすく、火に二義ふしやう有り

照しやうなり曉しやうなり照しやうは則すなわち聞生きんぜず焼やは則すなわち物生ぶつぜず・此ここには不生ふしやうを

以もつて姓なと為なす。

御義おんぎ口伝くでんに云く火いとは法性ほつしやうの智火ちなり、火の二義ふたぎとは一ひとの照てらは

隨緣真如ずいゐんしんによの智ちなり一ひとの焼やは不變真如ふへんしんによの理りなり照燒しやうやうの二字ふたごは本・迹二

門もんなり、さて火の能作のうさくとしては照燒しやうやうの二徳ふたとくを具そなへる南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやう

なり、今日蓮等けふにちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつるは生死しやうじの闇やみを照てらし

晴はして涅槃ねはんの智火ち明了めいりやうなり生死しやうじ即涅槃そくねはんと開覺かいかくするを照則しやうそく聞不生きんふしやうと

は云いうなり、煩惱ぼんのうの薪たきぎを焼やいて菩提ぼだいの慧火え現前げんぜんするなり煩惱ぼんのう即菩提そくぼだい

と開發かいぱつするを燒別物不生しやうべつものふしやうとは云いうなり、爰こゝを以もつて之これを案あんずるに陳如ちんによ

は我等・法華經の行者の煩惱即菩提・生死即涅槃を顯したり云云。

第三阿闍世王の事 文句の一に云く阿闍世王とは未生怨と名く、又

云く大經に云く阿闍世世とは未生怨と名く又云く大經に云く阿闍世を不生と名く世とは怨と名く。

御義口伝に云く日本国の一切衆生は阿闍世王なり既に諸仏の父を殺し法華經の母を害するなり、無量義經に云く諸仏の國王と是の經の夫人と和合して共に是の菩薩の子を生む、謗法の人・今は母の胎内に処しながら法華の怨敵たり豈未生怨に非ずや、其の上・日本国当世は三類の強敵なり世者名怨の四字に心を留めて之を案ず可し。

日蓮等の類い此の重罪を脱れたり謗法の人人・法華經を信じ敬尊に歸し奉らば何ぞ已前の殺父殺母の重罪滅せざらんや、但し父母な

りとも法華經不信の者ならば殺害す可きか、其の故は權教の愛を成
す母・方便眞實を明めざる父をば殺害す可しと見えたり、仍て文句
の二に云く觀解は食愛の母・無明の父・此れを害する故に逆と稱す
逆即順なり非道を行じて仏道に通達す」と、觀解とは末法・当今は
題目の觀解なる可し子として父母を殺害するは逆なり、然りと雖も
法華經不信の父母を殺しては順となるなり愛を以て逆即是順と釈せ
り、今日蓮等の

類たぐいは阿闍世王あじゃせなり其そのの故ゆえは南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようの劍けんを取とつて食愛とんあい・
無明むみようの父位ふゐを害がいして教主きようしゅ釈尊しゃくそんの如ごとく仏身ぶつしんを感得かんとくするなり、貧愛とんないの
母ははとは勸持品三類かんじほんさんるいの中第一だいいちの俗衆ぞくしゆうなり無明むみようの父ははとは第二・第三の僧
なり云云。

第四ぶつしよごねん仏所護念ぶつしよごねんの事

文句もんくの三さんに云いく仏所護念ぶつしよごねんとは無量義處むりやうぎちは是これ仏

の証得しやうとくし給たまう所是かくのゆえの故ゆえに如來にやらいの護念ごねんし給たまう所ところなり、下の文ぶんに仏自住ぶつじぢゆう
大乘だいじやうと云いえり開示かいじせんと欲ほすと雖いえども衆生しゆじやうの根鈍こんどんなれば久こしく斯この
要ようを黙もくして務いそぎて速すみやかに説とき給たまわらず故ゆえに護念ごねんと云いう記きの三さんに云いく昔
未だ説いかず故ゆえに之これを名なけて護ごと為なす法はふに約きし機きに約きして皆護念みなごねん
する故ゆえに乃至機ないしき仍なお未だ發おこせず隱かくして説いかず故ゆえに護念ごねんと言いう、乃至
末説まゝを以もつての故ゆえに護ごし未暢みちやうを以もつての故ゆえに念ねんず、久默きうもくと言いうは昔むかしより
今いまに至いたるなり斯要等しやうようの意い之これを思おもうて知しる可べし。

御義口伝に云く此の護念の体に於ては本・迹二門首題の五字なり、
此の護念に於て七種の護念之れ有り一には時に約し二には機に約し
三には人に約し四には本・迹に約し五には色心に約し六には法体に約
し七には信心に約するなり云云、今日蓮等の類いは護念の体を弘む
るなり、一に時に約するとは仏・法華經を四十余年の間未だ時
至らざるが故に護念し給うなり、二に機に約するとは破法不信
故墜於三惡道の故に前四十余年の間に未だ之を説かざるなり、三に
人に約するとは舍利弗に対して説かんが爲なり、四に本・迹に約する
とは護を以て本と爲し念を以て迹と爲す、五に色心に約するとは護
を以て色と爲し念を以て心と爲す、六に法体に約するとは法体とは
本有常住なり一切衆生の慈悲心是なり、七に信心に約するとは
信心を以て護念の本と爲すなり、所詮日蓮等の類い南無妙法蓮華經

と唱え奉るは併ら護念の体を開くなり、護とは仏見なり、念とは
仏知なり此の知見の二字本・迹両門なり仏知を妙と云うなり仏見を
法と云うなり此の知見の体を修行するを蓮華と云うなり、因果の体
なり因果の言語は経なり加之法華經の行者をば三世の諸仏護念
し給うなり、普賢品に云く一者為諸仏護念と護念とは妙法蓮華經
なり諸仏の法華經の行者を護念したもうは妙法蓮華經を護念した
もうなり機法一同護

念一体なり、記の三の釈に約法約機・皆護念故と云うは此の意なり、又文句の三に云く 仏所護念とは前の地動瑞を決定するなり地動は六番破惑を表するなり、妙法蓮華經を受持する者は六番破惑疑い無きなり」神力品に云く 於我滅度後・応受持斯經・是人於仏道・決定無有疑」仏自住大乘とは是なり、又た一義に仏の衆生を護念したもう事は護とは唯我一人能為救護・念とは毎自作是念是なり、普賢品に至つて一者為諸仏護念と説くなり、日蓮は生年三十二より南無妙法蓮華經を護念するなり。

第五下至阿鼻地獄の事

御義口伝に云く十界皆成の文なり提婆が成仏・此の文にて分明なり、宝塔品の次に提婆が成仏を説く事は二箇の諫曉の分なり、提婆は此の文の時成仏せり此の至の字は白毫の行く事なり白毫の光明

は南無妙法蓮華經なり、上至阿迦尼咤天は空諦・下至阿鼻地獄は
假諦・白毫の光は中道なり、之に依つて十界同時の成仏なり天
王仏とは

宝号を送るまでなり、去て依正二報の成仏の時は此の品の下至阿鼻
地獄の文は依報の成仏を説き提婆達多の天王如来は正報の成仏を
説く依報・正報共に妙法の成仏なり、今日蓮等の類い聖靈を訪う
時・法華經を讀誦し南無妙法蓮華經と唱え奉る時・題目の光無間に
至りて即身成仏せしむ、廻向の文此れより事起るなり、法華不信の
人は墮在無間なれども、題目の光を以て孝子法華の行者として
訪わんに豈此の義に替わる可しや、されば下至阿鼻地獄の文は仏・
光を放ちて提婆を成仏せしめんが為なりと日蓮推知し奉るなり。

第六導師何故の事 疏に云く良に以みれば説法入定して能く人を導

く既に導師と称す。

御義口伝に云く此の導師は釈尊の御事なり、説法とは無量義經・

入定とは無量義處三昧に入りたもう事なり、所詮導師に於て二あ

り惡の導師善の導師之れ有るなり、惡の導師とは法然・弘法・慈覺・

智証等なり善の導師とは天台・伝教等是なり、末法に入つては

今日蓮等の類いは善の導師なり、説法とは南無妙法蓮華經・入定と

は

法華受持ほつけじゅじの決定心けつじしんに入る事なり能導のうどう於人おにんの能のうの字じに心を留とどめて之これを案べず可べし涌出品ゆじゅつぽんの唱導しょうどう之師しと同じ事なり、所詮しよせん日本国にほんこくの一切衆生いっさいしゅじやうを導みちびかんが為ために説法せつぽうする人これ是なり云云。

第七天鼓自然鳴じねんの事 疏じよに云く天鼓自然鳴じねんは無間むげん・自説じたまを表するな

り。

御義口伝おんぎくでんに云く此の文は此土しど・他土の瑞同じきことを頌しょうして長出せり、無間むげん・自説じたまとは釈迦如来しやかにょらい、妙法蓮華經みやうほうれんげきやうを無間むげん・自説じたまし給うなり、今日蓮等の類たぐいは無間むげん・自説じたまなり念仏ねんぶつ・無間むげん・禅天魔ぜんま・真言亡国しんごんぼうこく・律国賊りくさくと喚さけぶ事は無間むげん・自説じたまなり三類さんるいの強敵かうてき来る事は此の故なり、天鼓てんことは南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうなり自然じねんとは無障礙むしょうがいなり鳴とは唱となうる所の音声おんじやうなり、一義いっさいに一切衆生いっさいしゅじやうの語言ごげん音声おんじやうを自在じざいに出すは無間むげん・自説じたまなり自説じたまとは獄卒ごくそつの罪人ざいにんを呵責かしやくする音・餓鬼飢饉がきききんの音声等・一切いっさい

衆生の貪・瞋・癡の三毒の念念等を自説とは云うなり此の音声の体とは南無妙法蓮華經なり、本・迹兩門妙法蓮華經の五字は天鼓なり天とは第一義天なり自説とは自受用の説法なり、記の三に云く無間・自説を表するとは方便の初に三昧より起つて舍利弗に告げ廣く歎じ略して歎ず、此土他土言に寄せ言を絶す若は境若は智此乃ち一經の根本五時の要津なり此の事輕からずと、此釈に一經の根源五字の要津とは南無妙法蓮華經是なり云云。

方便品八箇の大事

713P

第一方便品の事 文句の三に云く方とは秘なり便とは妙なり妙に方に達するに即ち是真の秘なり、內衣裏の無価の珠を点ずるに王の頂上の唯一珠有ると二無く別無し、客作の人を指すに是長者の子にして亦二無く別無し、此の如きの言は是秘是妙なり、經の唯我

知是相・十方じゅっぽう仏亦然やくねん・止止ふしゆせつ不須說・我法妙難思なんしの如ごとし故ゆえに秘を以て
方しやくを釈しやくし妙を以て便しやくを釈しやくす正まさしく是これ今いまの品の意いなり故ゆえに方便ほうべん品と
言いうなり記の三に云いく第三に秘妙に約して

釈しやくするとは妙めうを以ての故ゆゑに即そくなり円えんを以て即そくと為なし三さんを不即ふそくと為す
故ゆゑに更に不即ふそくに對して以て即そくを釈しやくす。

御義口伝おんぎくでんに云く此この釈しやくの中に一珠いちしゆとは衣裏珠えりじゆ・即頂上珠そくちやうじやうしゆなり、客作かくさ
の人ちやうじやと長者ちやうじやの子と全く不同ふどう之無なし、所詮しよせん謗法ぼうぼう不信ふしんの人たいげは体外たいげの權に
して法用能通ほうぶんの二種ふたしゆの方便ほうべんなり爰こゝをを以て無二無別むにむべつに非あらざるなり、
今日蓮等こんにんの類たぐひ南無妙法蓮華經なみょうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつるは是秘妙方便ほうべんにして体内
なり故ゆゑに妙法蓮華經みょうほうれんげきやうと題めいして次に方便品ほうべんと云えり、妙樂みやうらくの記の三の
釈しやくに本疏ほんしよの即是真秘そくぜしんひの即そくを以い円えん為い即そくと消釈しょうしやくせり、即そくは円えんなれば
法華經ほけきやうの別名べつめいなり即そくとは凡夫即極ぼんぶ・諸法実相しよほうじつそうの仏ぶつなり、円えんとは
一念三千いちねんさんぜんなり即そくと円えんと言は替れども妙めうの別名べつめいなり、一切衆生実相いっさいしゆじやうじつそうの
仏ぶつなれば妙めうなり不思議ふしぎなり謗法ぼうぼうの人いまま今之いまこれを知らざる故ゆゑに之これを秘ひと
云う、又云く法界三千ほっかいさんぜんを秘妙ひめうとは云うなり秘ひとはきびしきなり三千さんぜん

羅列なり是より外に不思議之無し、大謗法の人たりと云うとも

妙法蓮華經を受持し奉る所を妙法蓮華經方便品とは

云うなり今末法に入つて正しく日蓮等の類の事なり、妙法蓮華經の

体内に爾前の入法を入るを妙法蓮華經方便品とは云うなり、是を

即身成仏とも如是本末究竟等とも説く、又方便とは十界の事なり

又は無明なり妙法蓮華經は十界の頂上なり又は法性なり煩惱即

菩提・生死即涅槃是なり、以円為即とは一念三千なり妙と即とは同

じ物なり一字の一念三千と云う事は円と妙とを云うなり円とは

諸法実相なり、円とは釈に云く円を円融・円満に名く

と円融は迹門・円満は本門なり又は止觀の二法なり又は我等が色心

の二法なり一字の一念三千とは慧心流の秘藏なり、口は一念なり員

は三千なり一念三千とは不思議と云う事なり、此の妙は前三教に

未だ之を説かず故に秘と云うなり、故に知ぬ南無妙法蓮華經は一心
の方便なり妙法蓮華經は九識なり十界は八識已下なり心を留めて
之を案ず可し、方とは即十方・十方は即十界なり便とは不思議と
云う事なり云云。

第二諸仏智慧甚深無量其智慧門の事

次に權を歎ず、実とは諸仏の智慧なり三種の化他の權実に非ず故に
諸仏と云う自行の実を顯す故に智慧と言う、此の智慧の体即ち一心
の三智なり、甚深

無量とは即ち称歎の辞なり仏の実智の豎に如理の底に徹すること
明す故に甚深と言う、横に法界の辺を窮む故に無量と言う無量甚深
にして豎に高く横に広し、譬えば根深ければ則ち条茂く源遠ければ
則ち流長きが如し実智既に然り権智例して爾り云云、其智慧門は
即ち是れ権智を歎ずるなり蓋し是れ自行の道前の方便進趣の力有り
故に名けて門と為す、門より入つて道中に到る道中を実と称し道前
を権と謂うなり、難解難入とは権を歎ずるの辞なり不謀にして了し
無方の大用あり、七種の方便測度すること能わす十住に始めて解
す十地を入と為す初と後とを挙ぐ中間の難示難悟は知る可し、
而るに別して声聞・縁覚の所不能知を挙ぐることは執重きが故に別
して之を破するのみ、記の三に云く豎高横広とは中に於て法譬合あ
り此れを以て後を例す、今実を釈するに

既にすで周くあまね横おうじゆ豎を窮きわめたり下に権をしやくく積するに理深極りじんなるべし、下に
当にまさ権をしやくく積すべし予め其の相を述あらかじそす故に云云と註しるす、其智慧門とは
其とは乃すなわち前の実果の因智を指もす若し智慧即門ちえそくならば門は是れ権な
り若し智慧の門ならば智即すなわち果なり、蓋けだし是等とは此の中に須すべからく
十地を以て道前と為し妙みょうかく覺を道中と為し証後を道後と為すべし、
故に知んぬ文の意は因の位に在りと。

御義口伝に云く此の本末の意分明なり、中に豎に高く横に広しとは
豎は本門なり横は迹門なり、根とは草木なり草木は上へ登る此れは
迹門の意なり、源とは本門なり源は水なり水は下へくだる此れ
は本門の意なり、条茂とは迹門十四品なり流長とは本門十四品な
り智慧とは一心の三智なり門とは此の智慧に入る処の能入の門なり
三智の体とは南無妙法蓮華經なり門とは信心の事なり、爰を以て第

二の卷に以信得入と云う入と門とは之れ同じきなり、今日蓮等の
類い南無妙法蓮華經と唱え奉るを智慧とは云うなり、譬喩品に云く
唯有一門」と門に於て有門・空門・亦有亦空門・非有非空門あるな
り、有門は生なり空門は死なり亦有亦空門は生死一念なり非有非空
門は生に非ず死に非ず有門は題目の文字なり空門は此の五字に万法
を具足して一方にとどころらざる義な

り、亦有やくう亦やくう空門は五字に具足する本・迹なり非有非空門は一部の意なり、此の内証ないしょうは法華ほっけ已前いぜんの二乗にじょうの智慧ちえの及およばざる所なり、文句もんくの三に云く七種ほうべんの方便しきたく測度すること能あたわず」と、今日蓮等の類たぐいは此の智慧ちえに得入とくにゅうするなり、仍ようて偈頌げじゆに除諸菩薩衆信力堅固者と云うは我等われら行者ぎようじやの事を説くなり云云。

第三唯ゆい以い一大事いちだいじ因縁いんねんの事 文句もんくの四に云く一は即すなわち一実相じつそうなり五に非あらず三に非あらず七に非あらず九に非あらず故に一と言ゆえうなり、其その性じやう広博くわくにして五三七九より博ひろし故に名けて大と為なす、諸しよ仏出世ぶつしゆせの儀式ぎしきなり故に名けて事と為なす、衆生しゆじやうに此の機き有あつて仏を感じゆえ故に名けて因と為なす、仏機きを承うけて而しかも応ゆえず故に名けて縁となす、是これを出世しゆつせの本意ほんいと為なす。

御義口伝おんぎくでんに云く一とは法華經ほっけきやうなり大とは華嚴けごんなり事とは中間ちゆうげんの三

味なり、法華已前にも三諦あれども碎けたる珠は宝に非ざるが如し
云云、又云く一とは妙なり大とは法なり事とは蓮なり因とは華なり
縁とは経なり云云、又云く我等が頭は妙なり喉は法なり胸は蓮なり
胎は華なり足は経なり此の五尺の身妙法蓮華經の五字なり、此
の大事を釈迦如来四十余年の間隱密したもうなり今經の時説き出
したもう此の大事を説かんが爲に仏は出世したもう我等が一身の
妙法五字なりと開仏知見する時即身成仏するなり、開とは信心の
異名なり信心を以て妙法を唱え奉らば聽て開仏知見するなり、
然る間信心を開く時南無妙法蓮華經と示すを示仏知見と云うな
り、示す時に靈山淨土の住処と悟り即身成仏と悟るを悟仏知見と
云うなり、悟る当体直至道場なるを入仏知見と
云うなり、然る間信心の開仏知見を以て正意とせり、入仏知見の入

の字は迹門しやくもんの意は実相じつそうの理内きにゅうに歸入するを入と云うなり本門ほんもんの意は
理即本覺りそくほんかくと入るなり、今日蓮等いまにちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつる程
の者は宝塔ほうとうに入るなり云云、又云く開い仏知見かいぶつちけんの仏とは九界所具しよくの
仏界ぶつかいなり知見ちけんとは妙法みょうほうの二字止觀しかんの二字寂じやく照しやうの二徳生しやうじ死じの二法な
り色心因果しきしんいんがなり、所詮知見しよせんちけんとは妙法みょうほうなり九界所具しよくの仏心ぶつしんを法華經ほけきやう
の知見ちけんにて開く事なり、爰ここをを以て之これを思おもう

に仏とは九界の衆生の事なり、此の開覺顯れて今身より仏身に至る
まで持つや否やと示す處が妙法を示す示仏知見と云うなり、師弟
感応して受け取る時如我等無異と悟るを悟仏知見と云うなり、悟つ
て見れば法界三千の己己の当体法華經なり此の内証に入るを
入仏知見と云うなり秘す可し云云、又云く四仏知見とは八相なり
開とは生の相なり入とは死の相なり中間の示悟は六相なり下天託
胎等は示仏知見なり出家降魔成道轉法輪等は悟仏
知見なり、權教の意は生死を遠離する教なるが故に四仏知見に
非ざるなり、今經の時生死の二法は一心の妙用有無の二道は本覺の
真徳と開覺するを四仏知見と云うなり、四仏知見を以て三世の諸仏
は一大事と思召し世に出現したもうなり、此の開仏知見の法華經を
法然ほうねんは捨閑閣しゃくわん抛なと云い弘法大師は第三の劣戲論けろんの法とののしれり、

五ぶつどう仏道同の舌をきる者に非あらずや、慈じかく覺大師・智ちしよう証等は惡子に劍を与

えて我が親の頭こころをきらする者に非あらずや

云云、又云く一とは中諦・大とは空諦・事とは仮諦なり此の円融えんゆうの

三諦は何物ぞ所謂南無妙法蓮華經是なり、此の五字日蓮出世しゅつせの

本懷ほんかいなり之を名けて事と為す、日本国にほんこくの一切衆生の中に日蓮にちれんが弟子でし

・檀那だんなと成る人は衆生有此機感仏故名しゅじやううしきかんぶつこみやういん為因の人なり、夫れそが為ために

法華經の極理ごくりを弘ひろめたるは承機而応故名しょうきにうこみやういん為縁あらに非あらずや、因は下種げしゅな

り縁は三五の宿縁しゆくえんに歸するなり、事の一念三千いちねんさんぜんは、日蓮にちれんが身に當り

ての大事だいじなり、一とは一念いちねん・大とは三千さんぜんなり此の三千ときたるは事の

因縁いんねんなり事とは衆生世間しゅじやうせけん・因とは五陰世間ごおんせけん・縁とは国土世間こくどせけんなり、

国土世間の縁とは南閻浮提えんぶは妙法蓮華經を弘ひろむべき本縁の国なり、

經に云く閻浮提えんぶだい内広令流布使不斷絶ふしふだんぜつ是なり云云。

第四五濁の事

文句の四に云く劫濁は別の体無し劫は是長時・刹那は

是短時なり、衆生濁は別の体無し見慢果報を攬る煩惱濁は五鈍使

を指て体と為し見濁は五利使を指て体と為し命濁は連持色心を指し

て体と為す。

御義口伝に云く日蓮等の類いは此の五濁を離るるなり、我此土安穩

なれば劫濁に非ず実相無作の仏身なれば衆生濁に非ず・煩惱即菩提

生死即涅槃の妙旨なれば煩惱濁に非ず・五百塵点劫より無始本有

の身なれば命濁に

非あらざるなり、正直捨方便しやうじきしやほうべん・但説無上道の行者なれば見濁あらざに非あらるな

り、所詮しよせん南無妙法蓮華經を境として起おこる所の五濁なれば、日本国にほんこくの

一切衆生五濁の正意なり、されば文句もんく四に云く相とは四濁増劇に

して此の時に聚じゆざい在せり瞋恚増劇にして刀兵起り貪欲増劇にして飢餓きが

起り愚癡増劇にして疾疫起り三災起るが故ゆえに煩惱ぼんのう倍增ますますに諸見しよ

転うたた熾さかんなり」經に如來現在猶多怨嫉・況滅度後と云う是これなり、

法華經不信の者を以て五濁障重ごじよくしょうじゆうの者とす經に云く以五濁惡世但ごじよくあくせ

樂ぎやうちやく著諸欲如是等衆生終不求ふぐ仏道ぶつどう」云云、仏道とは法華經の別名な

り天台云く仏道とは別して今經を指す」と。

第五比丘比丘尼有懷増上慢優婆塞我慢優婆夷不信の事 文句の四に

云く上慢じやうまんと我慢がまんと不信ふしんと四衆通じて有り、但し出家だだの二衆は多く道

を修しゆし禪を得て謬あやまつて聖果と謂おもい偏ひとえに上慢じやうまんを起す、在俗ざいぞくは矜高かうかうにして

多く我慢がまんを起す女人にょにんは智浅ちせんくして多く邪僻じゃへきを生ず自ら其みづかの過を見ずとは三失心さんしつしんを覆おほう、疵きずを蔵かくし徳あを揚あげて自ら省みづかること能あたわざるは是これ無慙むざんの人なり、若もし自ら過みづかを見れば是これ有羞うしゆうの僧そうなり記きの四に云いく疵きずを蔵かくす等らとは三失さんしつを積しやくするなり疵きずを蔵かくし徳あを揚あぐは上慢じやうまんを積しやくす、自ら省みづかること能あたわざるは我慢がまんを積しやくす、無慙むざんの人とは不信ふしんを積しやくす、若もし自ら過みづかを見るは此この三失さんしつ無し未いまだ果くわを証しやうせずと雖いえども且しからく有羞うしゆうと名なく。

御義口伝おんぎくでんに云いく此本末ほんまつの積しやくの意いは五千ごせんの上慢じやうまんを積しやくするなり委くわくは本末ほんまつを見る可べきなり、比丘びく・比丘尼びくにの二人ふたりは出家しゆつげなり共に増上慢ぞうじやうまんと名なく疵きずを蔵かくし徳あを揚あぐるを以もて本とせり、優婆塞うばそくは男おとこなり我慢がまんを以もて本とせり優婆夷うばいは女人にょにんなり無慙むざんを以もて本とせり、此この四衆ししゆうは今いま・日本国にほんこくに盛さかんなり経きやうには其数そのかず有五千ごせんと有あれども日本国にほんこくに四十九億しじゅうしちゆういふ

九万四千八百廿八人と見えたり、在世には五千人・仏の座を立てり
今末法にては日本国の一切衆生悉く日蓮が所座を立てり、比丘
比丘尼増上慢とは道隆・良観等に非ずや又鎌倉中の比丘尼等に
非ずや、優婆塞とは最明寺優婆夷とは上下の女人に非ずや敢て我が
過を知る可からざるなり、今日蓮等の類いを誹謗して悪名を立つ豈

不自見其過の者に非ずや大謗法の罪人なり法華の御座を立つ事疑
無き者なり、然りと雖も日蓮に値う事は併ら礼仏而退の義なり此
の礼仏而退は輕賤の義なり全く信解の礼退に非ざるなり此等の衆は
於戒有欠漏の者なり、文句の四に云く「於戒有欠漏とは律義失有る
をば欠と名け定共道共失有るをば漏と名く」と此の五千の上慢とは
我等所具の五住の煩惱なり、今法華經に値い奉る時慢即法界と開き
て礼仏而退するを仏威徳故去と云うな
り、仏とは我等所具の仏界なり威徳とは南無妙法蓮華經なり、故去
とは而去不去の意なり普賢品の作礼而去之を思う可きなり、又云く
五千の退座と云う事・法華の意は不退座なり其の故は諸法実相
略開三顯一の開悟なり、さて其の時は我慢増上慢とは慢即法界と開
きて本有の慢機なり、其数有五千とは我等が五住の煩惱なり若し又

五住の煩惱ぼんのう無しと云うは法華ほつけの意を失うしないたり、五住の煩惱ぼんのう有り乍ながら
本有常住ほんぬじょうじゅうぞと云う時其数有五千と説くなり、斷惑だんなくに取り合あわす
其の儘そのま本有妙法ほんぬみょうほうの五住と見れば不自見其過ごかと云うなり、さて於戒
有欠漏けつろとは小乘しょうじょう權教こんきょうの対治たいじ衆病しゅうびょうの戒法かいほうにては無きなり是名持戒じかい
の妙法みょうほうなり故に欠漏けつろの当体とうたい其の儘ま是名持戒じかいの体なり、然しかるに欠漏けつろを
其の儘ま本有と談だんずる故に護惜其瑕疵ごしゃくごけしとは説くなり、元より一乘いちじょうの
妙戒みょうかいなれば一塵いちじん含法界ほっかいいちねん一念遍じゆつぱん十方じゆつぱんする故に是小智ちいしゆつ已出と云うな
り、糟糠そうこうとは塵塵法ちりちりほんがく・本覺ほんがくの三身さんじんなり故にすくなき福德とくの当体とうたいも
本覺ほんがく無作むさの覺体かくたいなり、不堪受是法ふかんじゆぜほうとは略開りやくかいの諸法実相しよほうじつそうの法体ほつたいを聞き
て其の儘ま開悟かいごするなりさて身子しんし尊者そんじや鈍根どんこんのために分別ぶんべつ解説げせつしたまえ
と請こう広開こうかい三の法門ほうもんをば不堪受是法ふかんじゆぜほうと説く、さて法華ほつけの実義じつぎに歸り
て見れば妙法みょうほうの法体ほつたいは更に能受所受を忘るるなり不思議ふしぎの妙法みょうほうな

り、本法の重を悟りて見る故に此衆無枝葉と云うなり、かかる内証
は純一実相・実相外更無別法なれば唯有諸貞実なり所詮貞実とは
色心を妙法と開く事なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え
奉る處を唯有諸貞実と説くなり、諸とは諸法実相の仏なり諸は
十界なり貞実は十界の色心を妙法と云うなり今經に限る故に唯と
云うなり、五千の上慢の外全く法華經之れ無し五千の慢人とは我等
が五大なり五大即妙法蓮華經な

り、五千の上慢じょうまんは元品がんぽんの無明むみょうなり故ゆえに礼仏らいぶつ而退にたいなり此これは九識八識六識と下る分ぶんなり流転るてん門の談道だんどうなり、仏威徳いとく故去ことは還滅げんめつ門なり然しからば威徳いとくとは南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうなり本迷まよい本悟げんたいの全体ぜんたいなり能よく能よく之これを案べず可べし云云。

第六に如が我が等とう無異むい如に我が昔しやく所願しよがんの事こと 疏じよに云いく因いんを挙あげて信すを勸すすむと。

御義おんぎ口伝くでんに云いく我われとは釈尊しやくそん・我実成仏久遠がじつじやうぶつくおんの仏ほとけなり此ほんもんの本門もんの釈尊しやくそんは我等衆生われらしゆじやうの事ことなり、如我にの我われは十如是じゆしよぜの末すえの七如是しちしよぜなり九界くかいの衆生しゆじやうは始はじめの三如是さんしよぜなり我等衆生われらしゆじやうは親おやなり仏ほとけは子こなり父子ふし一体いつたいにして本末究竟等ほんまつくきやうとうなり、此この我等われらを寿量品じゆりやうぽんに無作むさの三身さんじんと説ときたるなり、今日蓮等けふにちれんの類たぐひい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱となうる者もの是これなり、爰ここをを以もつて之これを思おもひに釈尊しやくそんの惣別しやうべつの二願にがんとは我等衆生われらしゆじやうの爲ために立てたもう処ところの願ねがひなり、此ゆえの故ゆゑに南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつりて

日本国にほんこくの一切衆生いっさいしゅじょうを我が成仏じやうぶつせしめんと云う所の願ねがひ併しあひなら如我昔にやがしやく
所願しよがんなり、終ついに引導いんどうして己身こしんと和合わごうするを今者こんじゃいまんぞく已満足こころうべと意得こころうべ可べきなり、此この今者こんじゃいまんぞく已満足こころうべの已この字じすでにと読よむなり何いづれの処ところを指すして已すに
とは説おけるや、凡おほそ所しよ積しやくの心こころは諸法しよほう実相じつさうの文ぶんを指すして已すにとは云え
り、爾しかりりと雖いえども当家りつぎの立義りつぎとしては南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうを指すして
今者こんじゃいまんぞく已満足こころうべと説おかれたりと意得こころうべ可べきなり、されば此この如我等にやがとうむい無異むいの
文肝要かんようなり、如我昔にやがしやく所願しよがんは本因妙ほんにんみやう如我等にやがとうむい無異むいは本果妙みやうかくなり妙覺みやうかくの
釈尊しやくそんは我等われらが血肉けつにくなり因果いんがの功德くどく骨髓こつずいに非あらずや、釈しやくには拳因こいん勸信くふしん
と拳因こいんは即すなわち本果ほんがなり、今日蓮いまにちれんが唱となうる所の南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうは末法まつぽう
一万年まんねんの衆生しゅじょうまで成仏じやうぶつせしむるなり、豈あに今者こんじゃいまんぞく已満足こころうべに非あらずや、已こと
は建長五年四月廿八日に初めて唱となえ出いす処ところの題目だいもくを指すして已こと
意得こころうべ可べきなり、妙法みやうほうの大良薬りやうやくを以もつて一切衆生いっさいしゅじょうの無明むみやうの大病だいびやうを治なせ

ん事疑うたがい い無きなり此れを思い遣る時まんぞくんば満足まんぞくなり満足とは成仏じようぶつと云う事なり、釈いわに云く 円えんは円融えんゆう・円満えんまんに名け頓とんは頓極とんごく頓足とんそくに名なく」と之これを思おもう可べし云云。

第七於諸菩薩しよぼさつ中正直捨方便しやうじきしやほうべんの事 文句もんくの四に云く於諸菩薩しよぼさつ中下の

三句は正まさしく実あらわを顯あらわすなり、五乗は是これ曲まがにして直ただちに非あらず通別とふべつは偏傍へんぼうにして正ただちに非あらず今皆彼の偏曲へんきよくを捨てて但正直しやうじきの一道いどうを説とくくなり
と。

御義口伝に云く此の菩薩とは九界の第九に居したる菩薩なり又一切衆生を菩薩と云うなり今日蓮等の類いなり、又諸天善神等迄も是れ菩薩なり正直とは煩惱即菩提・生死即涅槃なり、さて一道とは南無妙法蓮華經なり今末法にして正直の一道を弘むる者は日蓮等の類いに非ずや。

第八当来世惡人聞仏説一乘迷惑不信受破法墮惡道の事
御義口伝に云く当来世とは末法なり惡人とは法然・弘法・慈覺・智証等なり、仏とは日蓮等の類いなり一乘とは妙法蓮華經なり不信の故に三惡道に墮す可きなり。

譬喩品九箇の大事

第一譬喩品の事 文句の五に云く譬とは比況なり喩とは曉訓なり

大悲息だいひやまず巧智こうち無辺むへんなれば更に樹を動かして風を訓え扇あを挙げて月を喻たとえすと。

御義口伝おんぎくでんに云く大悲だいひとは母の子を思おもう慈悲じひの如ごとし今日蓮等いまにちれんの慈悲じひなり、章安しょうあん云く彼の為ために悪を除くは即是そくこれ彼の親」と、巧智こうちとは南無妙法蓮華經みょうほうれんげきやうなり諸宗しよしゆう無得道とくどうの立義りつぎなり巧ぎやう於難問答おうなんもんどうの意ぎなり更きやうとは在世ざいせに次つぎで滅後めつこの事と意得こころうべ可べきなり、樹を動すとは煩惱ぼんのうなり風を訓おしうるとは即菩提そくぼだいなり扇あを挙ぐとは生死しやうじなり月を喻たとえすとは即涅槃そくねはんなり、今日蓮等いまにちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつる時大白牛車だいびやくこしやに乗じて直至道場じきしどうじやうするなり、記の五に云く樹と

扇と風と月とは唯円教ただえんきやうの理りなり」と又云く法説いわの実相じつそうは何ぞ隠なんれ何ぞ顯あらわれんや長風息やむこと靡なく空月常くうげつに懸かかれり」と此釈これ之を思おもう可べし、隠おんとは死なり顯おんとは生なり長風とは我等われらが息くうげつなり空月くうげつとは心

月なり法華の生死とは三世常恒にして隱顯之無し我等が息風とは
吐く処の言語なり是南無妙法蓮華經なり、一心法界の覺月常住
にして懸れり是を指して唯円教の理と釈せり円とは法界なり教とは
三千羅列なり理とは実相の一理なり云云。

第二即起合掌の事

文句の五に云く外義を敘するとは即起合掌は身

の領解りようげと名く昔は權實二ごんじつと為すな掌たなごころの合あわざるが如しごと、今は權即實

と解る二の掌たなごころの合あするが如し、向仏とは昔は權・仏因ぶつじんに非ず實・

仏果ぶつかに非ず今權即實と解げして大円因だいえんを成じやうず因は必ず果おもむに趣く故に

合掌向仏がっしやうと言うと。

御義口伝おんぎくでんに云く合掌がっしやうとは法華經ほけきやうの異名いみやうなり向仏むふとは法華經ほけきやうに値あい

奉たてまつると云うなり合掌がっしやうは色法しきしんなり向仏むふは心法しんぽうなり、色心の二法を

妙法みやうぽうと開悟かいごするを歡喜踊躍かんきゆやくと説くなり、合掌がっしやうに於おて又二の意こ之れ

有り合とは妙なり掌たなごころとは法なり、又云く合とは妙法蓮華經みやうぽうれんげきやうなり

掌たなごころとは廿八品なり、又云く合とは仏界ぶつかいなり掌たなごころとは九界くかいなり九

界は權・仏界ぶつかいは實なり、妙樂大師みやうらくだいしの云く凡界ふんかいを權なと為し仏界ぶつかいを實

と為す」と十界じふかい悉く合掌がっしやうの二字おさに納おさまって森羅三千しんらさんぜんの諸法しよぽうは合掌がっしやうに

非あらざること莫なきなり、惣そうじて三種ほっけの法華がっしやうこの合掌これ之れ有いまり今の
妙法蓮華經みやうほうれんげきやうは三種ほっけの法華未分なり、爾しかりりと雖いえども先ず顯說けんせつ法華ほっけを正
意なと為なすなり、之に依よつて傳教でんぎやうだいし大師は於ふつじやう二ふつじやう仏乗とは根本こんぽん法華ほっけの教な
り○妙法みやうほうの外げきやう更いっくに一句よきやうの余經無しと、向ほっかい仏とは二み文な皆金色の仏體
と向たてまつい奉たてまつる事なり合掌がっしやうの二ほっかい字に法界を尽したるなり、地獄じごく 餓鬼がきの
己ここ己とうたいその當さんぜん體しよほう其その外ま三がっしやう千まの諸法其の儘合掌向し仏なり而しかる間ほっかい法界こと悉く
舍利弗しやりほつなり舍利弗しやりほつとは法華經ほけきやうなり、
舍くうたいとは空諦利とは假諦弗とは中道ちゆうどうなり円融えんゆう三諦さんたいの妙法みやうほうなり舍利弗しやりほつ
とは梵語ぼんごこ此ここには身子しんしと云う身子しんしとは十界じゆつかいの色心しきしんなり身とは十界じゆつかいの色
法子じゆつかいとは十界じゆつかいの心法なり、今日蓮等いまにちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうと唱となえ
奉たてまつる者は悉ことごとく舍利弗しやりほつなり、舍利弗しやりほつは即そく釈迦しやか如來にやらい・釈迦しやか如來にやらいは即そく
法華經ほけきやう・法華經ほけきやうは即そく我等われらが色心しきしんの二法なり、仍よつて身子しんし此この品の時間

此ほうせい法音と領解りようげせり、聞きことは名字みょうじ即すなは法音ほうせいとは諸法しよほうの音おとなり諸法しよほうの音おととは妙法みょうほうなり、爰こゝをを以もつて文句もんくに釈しゃくする時じち長風ちやうふう息やすむこと靡なしと長風ちやうふうとは法界ほっかいの音声おんじやうなり、此この音声おんじやうを信解しんげ品ひんに以もつて仏道ぶつどう声令しやうれい一切いっさい聞きこと云いえり一切いっさいとは法界ほっかいの衆生しゆじやうの事ことなり此この音声おんじやうとは南無なむ妙法蓮華みょうほうれんげ經きやうなり。

第三い云わく身意しんにたいぜん泰然たいぜん快得かいとく安穩あんのんの事こと 文句もんくの五ごに云いく從しゆ仏ぶつは是これ身みの喜きを結むすするなり聞法もんぼうは此これ口くちの喜きを結むすするなり

断諸疑悔とは是れ意の喜を結すと。

御義口伝に云く身意泰然とは煩惱即菩提・生死即涅槃なり、身とは生死即涅槃なり意とは煩惱即菩提なり従仏とは日蓮に従う類い等の事なり口の富とは南無妙法蓮華経なり意の喜とは無明の惑障無き故なり、爰を以て之を思うに此の文は一心三觀・一念三千我等が即身成仏なり方便の教は泰然に非ず安穩に非ざるなり行於險逕多留難故の教なり。

第四得仏法分の事

御義口伝に云く仏法の分とは初住一分の中道を云うなり、迹門初住本門二住已上と云う事は此の分の字より起るなり、所詮此の分の一字は一念三千の法門なり其の故は地獄は地相の分で仏実を証し乃至二千の諸法己己の当体の分で仏果を証したるなり真実の我等が

即身成仏なり、今日連等の類南無妙法蓮華經と叫うる分で仏果を証したるなり、分とは權教は無得道・法華經は成仏と分つと意御可きなり、又云く分とは本門壽量品の意なり己己本分の分なり、惣じて迹門初住分証と云うは教相なり眞実は初住分証の処にて一經は極りたるなり。

第五而自廻轉の事 記の五に云く・或は大論の如し經に而自廻轉と云うは身子の得記を聞きて法性自然にして轉じ因果依正自他悉く轉ずるを表すと。

御義口伝に云く草木成仏の証文に而自廻轉の文を出すなり是れ一念三千の依正体一の成仏を説き極めたるなり、草木成仏の証人は日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るを指すなり、廻轉とは題目の五字なり自とは我等行者の事なり記の五の釈能く能く之を思

うべし云云。

第六一時俱作の事

御義口伝に云く一時とは末法の一時なり俱作とは南無妙法蓮華經なり俱とは畢竟住一乘なり、今日蓮等の類い所作には題目の五字なり余行を交えざるなり、又云く十界の語言は一返の題目を俱作したり、是れ豈感応に非ずや。

第七以譬喩得解の事 止觀の五に云く智とは譬に因るに斯の意徴し有りと。

御義口伝に云く此の文を以て鏡像円融の三諦の事を伝うるなり、惣じて鏡像の譬とは自浮自影の鏡の事なり此の鏡とは一心の鏡なり、惣じて鏡に付て重重的の相伝之有り所詮鏡の能徳とは万像を浮ぶるを本とせり妙法華華經の五字は万像を浮べて一法も残る物之れ無

し、又云く鏡に於て五鏡之れ有り妙の鏡には法界の不思議を浮べ・

法の鏡には法界の体を浮べ・蓮の鏡には法界の果を浮べ・華の鏡には

法界の因を浮べ・經の鏡には万法の言語を浮べたり、又云く妙の鏡に

は華嚴を浮べ・法の鏡には阿含を浮べ・蓮の鏡には方等を浮べ・華の鏡

には般若を浮べ・經の鏡には法華を浮ぶるなり、順逆次第して意得

べきなり、我等衆生の五体五輪妙法蓮華經と浮び出でたる間

宝塔品を以て鏡と習うなり、信誦の浮び様能く能く之を案ず可し

自浮自影の鏡とは南無妙法蓮華經是なり云云。

第八唯一門の事 文句の五に云く唯一門とは上の以種種法門

宣示於仏道に譬う、門に又二あり宅門と車門となり宅とは生死なり

門とは出づる要路なり、此は方便教の詮なり車とは大乘の法なり門

とは円教の詮なりと。

御義口伝に云く一門とは法華經の信心なり車とは法華經なり牛とは南無妙法蓮華經なり宅とは煩惱なり自身法性の大地を生死・生死と転ぐり行くなり云云。

第九今此三界等の事 文句の五に云く次に今此三界より下・第二に一行半は上の所見諸衆生為生老病死之所燒煮を頌して第二の所見・火の譬を合す、唯我一人より下・第三に半偈は上の仏見此已便作是念と頌し、驚入

火宅を合するなりと。

御義口伝に云く此の文は一念三千の文なり一念三千の法門は迹門には生陰二千の世間を明し本門には国土世間を明すなり、又云く今此三界の文は国土世間なり其中衆生の文は五陰世間なり而今此処多諸患難唯我一人の文は衆生世間なり、又云く今此三界は法身如来なり其中衆生悉是吾子は報身如来なり而今此処等は応身如来なり。

信解品六箇の大事

第一信解品の事 記の六に云く正法華には信樂品と名く其の義通ずと雖も樂は解に及ばず今は領解を明かす何を以てか樂と云わんや。御義口伝に云く法華一部廿八品の題号の中に信解の題号此の品に之れ有り、一念三千も信の一字より起り三世の諸仏の成道も信の一

字より起るなり、此の信の字元品の無明を切る利剣なり其の故は信は無疑うたがいわっしん曰信とて疑惑を断破する利剣なり解とは智慧の異名なり信は価の如く解は宝の如し三世の諸仏の智慧をかうは信の一字なり

智慧とは南無妙法蓮華經なり、信は智慧の因にして名字即なり信の外に解無く解の外に信無し信の一字を以て妙覺の種子と定めたり、今日蓮等の類い南無妙法達華經と信受領納する故に無上宝聚不求自得の大宝珠を得るなり信は智慧の種なり不信は墮獄の因なり、又云く信は不變真如の理なり其の故は信は知一切法皆是佛法と体達して実相の一理と信ずるなり解は随縁真如なり自受用智を云うなり、文句の九に云く疑い無きを信と曰い明了

なるを解と曰うと、文句の六に云く中根の人譬喩を説くを聞きて、初めて疑惑を破して大乘の見道に入る故に名けて信と為す進んで

大乘だいじょうの修道しゅうどうに入る故ゆえに名けて解なと為す、記の六に云く大を以て之に望むるに乃すなわち両手を分ちて以て二道にどうに属す疑うたがいを破はするが故ゆえに信なり進んで入るを解なずと名く、信は二道にどうに通じ解は唯修ただしゅうに在り故ゆえに

修道しやうどうを解なすと名くと云うと。

第二捨父逃逝しやふじやうぜいの事 文句もんくの六に云く、捨父逃逝とは大を退するを捨と

為し無明むみよう自ら覆おほうを逃と日い生死しやうじに趣向しゆきやうするを逝と為すと。

御義口伝おんぎくでんに云く父に於て三之れ有り法華經・釈尊・日蓮是なり、

法華經は一切衆生の父なり此の父に背く故に流転るてんの凡夫ぼんぷとなる、

釈尊は一切衆生の父なり此の仏に背く故に備さに諸道しよを輪めぐるな

り、今日蓮は日本国の一切衆生の父なり、章安大師の云く彼が

為に悪を除く即ち是れ彼が親なり」と、退大の大は南無妙法蓮華經

なり無明とは疑惑謗法なり、自ら覆うとは法然・弘法・慈覚・智証・

道隆・良觀等の惡比丘・謗法の失を恣ほしいままに覆おほいかくすなり。

第三加復窮困の事 文句の六に云く、出要の術を得ざるを又窮と

為し、八苦の火に焼かるるが故に困と為すと。

御義口伝に云く出要とは南無妙法蓮華經なり術とは信心なり、
今日蓮等の類い窮困を免離する事は法華經を受持し奉るが故なり、
又云く妙法に値い奉る時は八苦の煩惱の火自受用報身の智火と
開覺するなり云云。

第四心懷悔恨の事 文句の六に云く悔を父に約し恨を子に約すと、記

の六に云く父にも悔恨あり、子にも悔恨ありと。

御義口伝に云く日本国の一切衆生は子の如く日蓮は父の如し、法華
不信の失に依つて無間・大城に墮ちて返つて日蓮を恨みん、又日蓮も
声も惜まず法華を捨つ可からずと云うべきものを靈山にて悔ること
之れ有る可きか、文句の六に云く心懷悔恨とは昔・勤に教詔せ
ず訓うることを無くして逃逝せしむることを致すことを悔い子の恩義
を惟わらずして我を疎んじ他に親しむるを恨む」と。

第五 無上宝聚不求自得の事

御義口伝に云く無上に重重の子細あり、外道の法に対すれば三蔵教は無上外道の法は有上なり又三蔵教は有上・通教は無上・通教は有上・別教は無上・別教は有上・円教は無上、又爾前の円は有上・法華の円は無上・又迹門の円は有上・本門の円は無上、又迹門十三品は有上・方便品は無上・又本門十三品は有上・一品二半は無上、又天台大師所弘の止観は無上・玄文二部は有上なり、今日蓮等の類いの心は無上とは南無妙法蓮華經・無上の中の極無上なり、此の妙法を指して無上・宝聚と説き給うなり、宝聚とは三世の諸仏の万行万善の諸波羅蜜の宝を

聚めたる南無妙法蓮華經なり、此の無上宝聚を辛勞も無く行功も無く一言に受取る信心なり不求自得とは是れなり、自の字は十界な

り十界各各得るなり諸法実相是なり、然る間・此の文・妙覺の釈尊
われらしめじやう
我等衆生の骨肉なり能く能く之を案ず可し云云。

第六世尊大恩の事

御義口伝に云く世尊とは釈尊・大恩とは南無妙法蓮華經なり、
釈尊の大恩を報ぜんと思わば法華經を受持す可き者なり是れ即ち
釈尊の御恩を奉じ奉るなり、大恩を題目と云う事は次下に
以稀有事と説く、希有の事とは題目なり、此の大恩の妙法蓮華經を
四十余年の間秘し給いて後八箇年に大恩を開き給うなり、文句の一
に云く「法王運を啓く」と運とは大恩の妙法蓮華經なり云云、
今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉りて日本国の一切
衆生を助けんと思ふは豈世尊の大恩に非ずや、章安大師十種の恩
を挙げたりしなり第一には慈悲逗物の恩・第二には最初下種の恩・第

三には中間ちゅうげん隨逐ずいちくの恩・第四には隱徳いんとく示拙しせつの恩・第五には鹿苑ろくおん施小せしょうの恩・第六には耻小ちしょう慕大の恩・第七には領地家業の恩・第八には父子ふし決定けつじょうの恩・第九には快得安穩あんのんの恩・第十には還用利多げんゆうりたの恩なり此の十恩即すなわち衣座室えざしつの三軌なりと云云、記の六に云く「宿萌しゅくみょう稍割ややけてさ尚なお未いまだ敷榮ふえいせず長遠ちやうおんの恩何いかに由よりてか報へず可べき

「と、又云く、涅槃家は但物として施を天地に答えず子として生を父母に謝せず感報斯に亡するを以てなり、と云えり」、輔正記の六に云く物^{もの}は施^しを天地^{てんち}に答えずとは謂^いく物^{もの}は天地^{てんち}に由^{より}て生^いずと雖^いも而^{しか}も天地^{てんち}の沢^{たく}を報^はずと云^いわ^ず子^こも亦^{また}之^この如^{ごと}し」と、記^きの六^むに云^いく況^{いはんや}復^{また}只^{ただ}だ我^{われ}をして報^は亡^むせしむるに縁^よる斯^この恩^{おん}報^{ほう}じ☆^{がた}きをや」と、輔正記に云^いく只^{しえんり}縁^り令^{りやう}我^が報^は亡^むとは意^いに云^いく只^{ただ}如^に來^{らい}の聲^{しやう}聞^{もん}をして等^としく亡^む報^{はう}の理^りを得^えせしむるに縁^よるなり理^りは謂^いく一大^い涅槃^{ねはん}なり」と。

御^{おん}義^ぎ口^く伝^{でん}に云^いく此^こくの如^{ごと}く重^{じゆう}重^{じゆう}の所^{しよ}積^{じやく}之^これ有^ありと雖^いも所^{しよ}詮^{せん}南^{なん}無^む妙^{みやう}法^{ぽう}蓮^{れん}華^げ經^{きやう}の下^げ種^{しゆ}なり下^げ種^{しゆ}の故^{ゆゑ}に如^に影^{えい}隨^{じゆ}形^{けい}し給^{たま}うなり、今^{いま}日^{にち}蓮^{れん}も此^こくの如^{ごと}きなり妙^{みやう}法^{ぽう}蓮^{れん}華^げ經^{きやう}を日^に本^{ほん}國^{こく}の一切^{いっさい}衆^{しゆ}生^{じやう}等^{とう}に与^{さす}え授^{さす}くる豈^{あに}積^{じやく}尊^{そん}の十^{じふ}恩^{おん}に非^{あら}ずや、十^{じふ}恩^{おん}は即^{すなわ}ち衣^え座^ざ室^{しつ}の三^{さん}軌^きなりとは第一^{だいいち}・第二^{だいに}・第三^{だいに}は大^{だい}慈^じ為^い室^{しつ}の御^ご恩^{おん}なり第四^ご・第五^ご第六^{だいろく}第七^{だいろく}は柔^{にん}和^{にく}忍^{にん}辱^{にく}衣^えの恩^{おん}

なり第八第九第十は諸法空為座の恩なり、第六の耻小慕大の恩を記の六に云く故に頓の後に於て便ち小化を垂れ彈斥淘汰し槌砧鍛鍊す」と。

葉草喩品五箇の大事

第一葉草喩品の事 記の七に云く無始の性徳は地の如く大乘の心を発するは種の如し二乗の心を発するは草木の芽茎の如し今初住に入るは同じく仏乗の芽茎等を成ずるが如しと。

御義口伝に云く法華の心を信ずるは種なり諸法実相の内証に入れば仏果を成ずるなり、葉とは九界の衆生の心法なり其の故は權教の心は毒草なり法華に値いぬれば三毒の煩惱の心地を三身果満の種なりと開覺するを葉とは云うなり、今日蓮等の類い妙法の葉を煩惱の

草に受くるなり煩惱ぼんのう即すく菩提ぼだい・生死しやうじ即すく涅槃ねはんと覺さとらしむるを喩ゆとは云う
なり、釈に云く喩ゆとは曉きやう訓くんなり」と藥草喩やくそうゆとは我等われら行者ぎやうじやの事なり。

第二此の品述 成段の事

御義口伝おんぎくでんに云く述かしようとは迦葉かしようなり成しやくそんとは釈尊しやくそんなり、述じゆつじよう成じゆつじようの二字は迦葉・釈尊一致する義なり、所詮述は所化の領解、成は仏の印加なり、今日蓮等の類いまにちれんい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようと領するは述なり日蓮にちれんが贊嘆するは成なり我等われらが即身成仏そくしんじようぶつを説き極めたる品なり、述じゆつじよう成じゆつじよう一致符契するは述じゆつじよう成不二そくしんじようぶつの即身成仏なり此の述じゆつじよう成じゆつじようは法界三千ほっかいさんぜんの皆成仏道みなじようぶつの述じゆつじよう成なり。

第三雖一地所生一雨所潤等の事

御義口伝おんぎくでんに云く隨縁不変ずいえんふへんの起る所の文なり、妙樂大師みょうらくだいし云く隨縁ずいえん不変ふへんの説は大教より出で木石無心の言は小宗より生ずぼくせきと、此の大教いっきようとは一經の惣体に非ず此の雖一地所生等すいいちじそしやうの十七字を指すなり、一地所生一雨所潤しやういちゆしよにんは無差別譬・而諸草木各有差別しよそうもくうしやべつひ是有差別譬なり

無差別譬の故に妙なり有差別譬の故に法なり云云、今日蓮等の類い
南無妙法蓮華經と唱え奉るは有差を置くなり廿八品は有差別なり、
妙法の五字は無差別なり、一地とは迹門の大地一雨とは本門の義
天・一地とは從因至果・一雨とは從果向因、末法に至つて從果向因の
一雨を弘通するなり
一雨とは題目に余行を交えざるなり、序品の時は雨大法雨と説き此
の品の時は一雨所潤と説けり一雨所潤は序品の雨大法雨を重ねて仏
・説き給うなり、一地とは五字の中の經の一字なり一雨とは五字の中
の妙の一字なり法蓮華の三字は三千万法・中にも草木なり三乗・五
乗・七方便・九法界なり云云。

第四破有法王出現世間の事

御義口伝に云く有とは謗法の者なり破とは折伏なり法王とは

法華經ほけきょうの行者ぎょうじやなり世間せけんとは日本国にほんこくなり、又云く破は空・有は仮・
法王ほうおうは中道ちゅうどうなり、されば此の文をば釈迦しやか如来にょらいの種子しゆしと伝うるなり
惣そうじて三世さんぜの諸仏しよぶつの出世しゅつせは此の文に依よるなり、有とは三界さんがい廿五有な
り破とは有執を破するなり法王ほうおうとは十界じゆつかいの衆生しゆじやうの心法なり王とは心
法を

云うなり諸法実相しよほうじつそうと開くを破有法王はうほうおうとは云うなり、今日蓮等の類いまにちれん たぐ
南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱え奉るは謗法の有執ぼうほうを断じて釈迦法王しやかほうおうと成る
と云う事なり、破有の二字を以て釈迦如来の種子しやかにようらい しゆしとは云うなり、又
云く有と云うは我等が煩惱生死われら ぼんのうしやうじなり此の煩惱生死ぼんのうしやうじを捨てて別に菩提ぼだい
涅槃ねはん有りと云うは權教權門ごんきやうごんもんの心なり、今經の心は煩惱生死ぼんのうしやうじを
其の儘そのまま置いて菩提涅槃ぼだいねはんと開く所を破と云うなり、有とは煩惱・破と
は南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうなり有は所破しよはなり破は能破のうはなり能破・所破しよは共に
実相じつそうの一理なり、序品じよばんの時は尽諸有結じんしやうけつと説き此の品には破有法王はうほうおうと
説き譬喩品ひゆほんの時は皆是我有かいぜがうと宣べたり云云。

第五我觀一切・普皆平等・無有彼此・愛憎之心・我無貪著・亦無限礙の
事

御義口伝おんぎくでんに云く此の六句の文は五識なり我觀一切・普皆平等がかんいつさい ふかいびやうどうとは九

識なり無有彼此とは八識なり愛憎之心とは七識なり我無貪著とは六識なり亦無限礙とは五識なり我等衆生の觀法の大体なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は豈我觀一切・普皆平等の九識の修行に非ずや爾らば無有彼此に非ずや愛憎之心に非ずや我無貪著に非ずや亦無限礙に非ずや。

授記品四箇の大事

第一授記の事

文句の七に云く授とは是れ与の義なりと。

御義口伝に云く記とは南無妙法蓮華經なり授とは日本国の一切衆生なり不信の者には授けざるなり又之を受けざるなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經の記を受くるなり、又云く授記とは法界の授記なり地獄の授記は惡因なれば惡業の授記を罪人に授くるなり余

は之に准じて知る可きなり、生の記有れば必ず死す死の記あれば又
生ず三世常恒の授記なり、所詮中根の四大声聞とは我等が
生老病死の四相なり、迦葉は生の相・迦旃延は老の

相・日連は病の相・須菩提は死の相なり、法華に來つて生老病死の四相を四大声聞と顯したり是れ即ち八相作仏なり、諸法実相の振舞なりと記を授くるなり妙法の授記なるが故に法界の授記なり、蓮華の授記なるが故に法界清淨なり經の授記なるが故に衆生の語言音声は三世常恒の授記なり、唯一言に授記すべき南無妙法蓮華經なり云云。

第二迦葉光明の事

御義口伝に云く光明とは一切衆生の相好なり光とは地獄の灯燃猛火此れ即ち本覺自受用の智火なり乃至仏果之れ同じ、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經の光明を謗法の闇冥の中に指し出だす此れ即ち迦葉の光明如来なり、迦葉は頭陀を本とす頭陀は爰に抖☆と云うなり、今末法に入つて余行を抖☆して、専ら南無妙法蓮華經と

修するは此經難持行頭陀者是なり云云。

第三捨是身已の事

御義口伝に云く此の文段より捨不捨の起りなり転捨にして永捨に
非ず転捨は本門なり永捨は迹門なり此の身を捨るは煩惱即菩提・
生死即涅槃の旨に背くなり云云、所詮日蓮等の類い南無妙法蓮華經
と唱え奉るは捨是身已なり不惜身命の故なり云云、又云く此の身を
捨すと読む時は法界に五大を捨すなり捨つる処の義に非ず、是の身
を捨てて仏に成ると云うは権門の意なりかかると執情を捨つるを
捨是身已と説くなり、此の文は一念三千の法門なり捨是身已とは
還歸本理・一念三千の意なり、妙樂大師の当知身土・一念三千・故
成道時・称此本理・一心一念・遍於法界と釈するは此の意なり云云。

第四宿世因縁吾今当説の事

御義口伝おんぎくでんに云く宿世すくせの因縁いんねんとは三千塵点さんぜんじんてんの昔の事なり下根げこんの為ために宿世すくせの因縁いんねんを説かんと云う事なり、因縁いんねんと

は因は種なり縁は昔に歸る義なりもとづく^{くん}と訓ぜり、大通結縁^{だいとうけちえん}の
下種^{げしゅ}にもとづく^くと云う事を因縁^{いんねん}と云うなり、今日蓮等の類^{いまいちれん}い南無^{なむ}
妙法蓮華經^{みょうほうれんげきよう}と唱え奉る^{とな たてまつ}は過去^{かこ}の因にもとづきたり、爰^{ここを}を以て妙樂^{みょうらく}
大師^{だいし}の云く^{いわ} 故^{ゆえ}に知んぬ

末代^{まつだい}一時^{いちじ}聞くことを待て聞き已て^{おわつ}信を生ず・事^{すべから}須く宿種^{しゆくしゅ}なるべし」
と、宿^{だいつう}とは大通の往時^{いんねん}なり絶とは下種^{げしゅ}の南無妙法蓮華經^{なむみょうほうれんげきよう}なり此の
下種^{げしゅ}にもとづく^くを因縁^{いんねん}と云うなり、本門^{ほんもん}の意は五百塵点^{じんでん}の下種^{げしゅ}にも
とづくべきなり真実妙法^{しんじつみょうぼう}の因^{もとず}に縁^{じやうぶつ}くを成仏^{じやうぶつ}と云うなり。

化城喩品七箇の大事^{けじやうゆぽん だいじ}

732P

第一化城の事^{だいいちけじやう}

御義口伝^{おんぎくでん}に云く^{いわ}化とは色法なり城とは心法なり、此の色心^{しきしん}の二法を

無常と説くは權教の心なり法華經の意は無常を常住と説くなり

化城即宝処なり、所詮今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る

者は色心妙法と開くを化城即宝処と云うなり、十界皆化城・十界

各各宝処なり化城は九界なり宝処は仏界なり、化城を去つて宝処こ

至ると云うは五百由旬の間なり此の五百由旬とは見思・塵沙・無明

なり、此の煩惱の五百由旬を妙法の五字と開くを

化城即宝処と云うなり、化城即宝処とは即の一字は南無

妙法蓮華經なり念念の化城念念の宝処なり、我等が色心の二法を

無常と説くは權教なり常住と説くは法華經なり無常と執する

執情を滅するを即滅化城と云うなり、化城は皮肉・宝処は骨なり

色心の二法を妙法と開覺するを化城即宝処の実体と云うなり、実

体とは無常常住・俱時相即・隨緣不變・一念寂照なり一念とは

南無妙法蓮華經・無疑曰信の一念なり即の一字心を留めて之を思
う可し云云。

第二大通智勝仏の事

御義口伝に云く大通は心王なり智勝は心数なり大通は迹門智勝は
本門なり大通智勝は我等が一身なり、今日蓮等の類い南無
妙法蓮華經と唱え奉る者は大通なり題目を唱うるは智勝なり、
法華經の行者の智は権宗の大智よりも百千万倍勝れたる所を智勝
と心得可きなり、大は色法通は心法なり我等が生死を大通と云うな
り、此の生死の身心に振舞う起念を智勝とは云うなり、爰を以て
之を思うに南無妙法蓮華經と唱え奉る行者は大通智勝仏なり
十六王子とは我等が心数なり云云。

第三諸母涕泣の事

御義口伝に云く諸母とは諸は十六人の母と云う事なり、実義には母
とは元品の無明なり此の無明より起る惑障を諸母とも云うなり、
流転の時は無明の母とつれて出で還滅の時は無明の母を殺すなり、

無明むみょうの母とは念仏ねんぶつ・禪ぜん・真言等しんごんの人人ひとびとなり而に随送ずいそう之とは謗人ぼうじんを指すなり、然しかりと雖いえども終ついに法華經ほけきょうの広宣流布こうせんるふ顕あらわれて天下一同てんがに法華經ほけきょうの行者ぎやうじやと成る可べきなり 随至道場還欲親近ずいしどうじやうげんよくしんこん是これなり。

第四其祖こそ轉輪聖王てんりんじやうおうの事

御義口伝おんぎくでんに云いく本地身ほんちの仏とは此文このもんを習ならうなり、祖とは法界ほっかいの異名いみなり此これは方便品ほうべんの相性体さうじやうたいの三如是にやぜを祖と云うなり、此の三如是にやぜはより外てんりんじやうおうに轉輪聖王てんりんじやうおう之れ無きなり轉輪とは生住異滅しやうじゆういめつなり聖王とは心法しんぽうなり、此の三如是にやぜは三世さんぜの諸仏しよぶつの父母ふぼなり、今日蓮等けふにちれんの類たぐい南無なむ妙法蓮華經みやうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつる者は三世さんぜの諸仏しよぶつの父母ふぼにして其祖こそ轉輪聖王てんりんじやうおうなり、金銀銅鉄きんぎんとは金は生・銀は白骨びやくこつにして死なり銅は老の相・鉄は病なり此これ即すなわち開示悟入かいじこにゆうの四仏知見しふちけんなり、三世常恒さんぜじやうこうに生死しやうじ・生死しやうじとめぐるを轉輪聖王てんりんじやうおうと云うなり、此の轉輪聖王出現てんりんじやうおうしゆつげんの時の輪宝とは

我^{われ}等^らが吐^はく所^{ところ}の言^ご語^{んご}音^{おん}声^{じょう}なり此^{この}の音^{おん}声^{じょう}の輪^{りん}宝^{ぼう}とは南^な無^む妙^{みょう}法^{ぼう}蓮^{れん}華^{げき}經^{きやう}
なり爰^{ここを}を以^{もつ}て平^ひ等^{よう}大^{だい}慧^えとは云^いうなり。

第五十六王子^{じゅうろくおうじ}の事

御義口伝おんぎくでんに云く十じゅうとは十界じゅうかいなり六ろくとは六根ろくこんなり王わうとは心王しんのうなり子しとは心数しんずなり此これ即すなわち実相じつそうの一理だいつうの大通だいつうの子なり、今日蓮等いまにちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつる者は十六王子じゅうろくおうじなり八方作仏さぶつとは我等われらが八苦はくの煩惱ぼんのう即すなわち菩提ぼだいと開ひらくなり云云。

第六即滅化城の事そくめつけじやう

御義口伝おんぎくでんに云く我等われらが滅めつする当体とうたいは化城けじやうなり、此の滅めつを滅めつと見れば化城けじやうなり不滅ふめつの滅めつと知見ちけんするを宝处ほうしよとは云うなり、是これを寿量品じゆりやうほんにしては而実不滅度にじつめつどとは説めつくなり、滅めつと云う見けんを滅めつするを滅めつと云うなり三權そくいちけん即すなわち一実いちじつの法門ほうもん之これを思おもふ可べし、或あるは即滅化城そくめつけじやうとは謗法ぼうぼうの寺塔じとうを滅めつする事なり、今日蓮等いまにちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつる者は化城けじやう即宝处そくほうしよなり我等われらが居住せんごくの山谷曠野こうや皆皆常寂光みなかいじやうじやうこうの宝处ほうしよなり云云。

第七 皆共至宝処の事

御義口伝に云く皆とは十界なり共とは如我等無異なり至とは極果の住処なり宝処とは靈山なり、日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は一同に皆共至宝処なり、共の一字は日蓮に共する時は宝処に至る可し不共ならば阿鼻大城に墮つ可し云云。

五百弟子品三箇の大事

第一 衣裏の事

御義口伝に云く此の品には無価の宝珠を衣裏に繋ぐる事を説くなり、所詮日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は一乘・妙法の智宝を信受するなり信心を以て衣裏にかくと云うなり。

第二 醉酒而臥の事

御義口伝に云く酒とは無明なり無明は謗法なり臥とは謗法の家に生
るる事なり、三千塵点の当初に悪縁の酒を呑みて五道六道に酔い廻
りて今謗法の家に臥したり、酔とは不信なり覺とは信なり、今日蓮
等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る時無明の酒醒めたり、又云く酒
に重重之れ有り權教は酒・法華經は醒めたり、本・迹相對する時
迹門は酒なり始覺の故なり本門は醒めたり本覺の故なり、又本・迹
二門は酒なり南無妙法蓮華經は醒めたり酒と醒むるとは相離れざる
なり、酒は無明なり醒むるは法性なり法は酒なり妙は醒めたり妙法
と唱うれば無明法性体一なり、止の一に云く無明塵勞即是菩提と。

第三身心遍歡喜の事

御義口伝に云く身とは生死即涅槃なり心とは煩惱即菩提なり、遍と
は十界同時なり歡喜とは法界同時の歡喜なり、此の歡喜の内には

三世諸仏の歡喜納まるなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉れば我則歡喜とて釈尊歡喜し給うなり、歡喜とは善惡共に歡喜なり十界同時なり深く之を思う可し云云。

人記品二箇の大事

第一學無學の事

御義口伝に云く學とは無智なり無學とは有智なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは學無學の人に如我等無異の記を授くるに非ずや、色法は無學なり心法は學なり又心法は無學なり色法は學なり學無學の人とは日本國の一切衆生なり、智者愚者をしなべて南無妙法蓮華經の記を説きて而強毒之するなり。

第二山海慧自在通王仏の事

御義口伝に云く山とは煩惱即菩提なり海とは生死即涅槃なり慧と
は我等が吐く所の言語なり自在とは無障礙なり通王とは十界互具・
百界千如・一念三千なり、又云く山とは迹門の意なり海とは本門の
意なり慧とは妙法の五字なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と
唱え奉る者は山海慧自在通王仏なり全く外に非ざるなり我等行者の
外に阿難之れ無きなり、阿難とは歡喜なり一念三千の開覺なり云云。

法師品十六箇の大事

第一法師の事

御義口伝に云く法とは諸法なり師とは諸法が直ちに師と成るなり
森羅三千の諸法が直ちに師と成り弟子となるべきなり、今日蓮等の
類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は法師の中の大法師なり、

諸法実相の開覚顕れて見れば地獄の灯燃猛火乃至仏果に至る迄
悉く具足して一念三千の法師なり、又云く法とは題目師とは日蓮等
の類なり。

第二成就大願愍衆生故生於惡世広演此經の事

御義口伝に云く大願とは法華弘通なり愍衆生故とは日本国の一切
衆生なり生於惡世の人とは日蓮等の類なり広とは南閻浮提なり此
經とは題目なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者な
り。

第三如来所遣行如来事の事

御義口伝に云く法華の行者は如来の使に來れり、如来とは釈迦如来
事とは南無妙法蓮華經なり如来とは十界三千の衆生の事なり
今日蓮等の類い、南無妙法蓮華經と唱え奉るは真実の御使なり云

云。

第四与如来にょらい共宿の事

御義口伝に云く法華の行者は男女共に如来なり煩惱即菩提・生死
即涅槃なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は与如来
共宿の者なり、傳大士の釈に云く「朝朝仏と共に起き夕夕仏と共に
臥し時時に成道し時時に顯本す」と云云。

第五是法華經藏深固幽遠無人能到の事

御義口伝に云く是法華經藏とは題目なり深固とは本門なり幽遠と
は迹門なり無人能到とは謗法なり、今日蓮等の類い南無
妙法蓮華經と唱え奉る者は無人能到の者に非ざるなり云云。

第六聞法信受隨順不逆の事

御義口伝に云く聞とは名字即なり法とは題目なり信受とは受持な
り隨順不逆とは本・迹二門に隨順するなり、今日蓮等の類い南無
妙法蓮華經と唱え奉る者の事なり。

第七衣座室の事 えざしつ

御義口伝に云く衣座室とは法報応の三身なり空仮中の三諦身口意の三業なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は此の三軌を一念に成就するなり、衣とは柔和忍辱の衣当著忍辱鎧是なり座とは不惜身命の修行なれば空座に居するなり室とは慈悲に住して弘むる故なり母の子を思うが如くなり、豈一念に三軌を具足するに非ずや。

第八欲捨諸懈怠応当聴此經の事 よくしやしよけたい おうとうちようしきよう 御義口伝に云く諸の懈怠とは

四十余年の方便の經教なり悉く皆懈怠の經なり此經とは題目なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは是れ即ち精進なり応当聴此經は是なり、応に日蓮に此の經を聞くべしと云えり云。

第九もんぼう不聞法華經去仏智はなはだ甚遠はなはだの事

御義口伝おんぎくでんに云く不聞いわとは謗法ほうぼうなり成仏じょうぶつの智を遠とほざかるべきなり、
今日蓮等の類いまにちれんい南無妙法蓮華經たぐなむみょうほうれんげきやうと唱え奉る者となたてまつは仏智開悟かいごの者にして
成仏じょうぶつの近き故なり。

第十若説此經時有人惡口罵加刀杖瓦石念仏故あるひとあつくとうじやうがしやくねんぶつ應忍おこの事

御義口伝おんぎくでんに云く此經いわとは題目だいもくなり惡口あつくとは口業くごうなり加刀杖とうじやうは身業しんごう
なり此の身口しんくの二業いごうは意業いごうより起るおこなり、今日蓮等の類いまにちれんい南無なむ
妙法蓮華經みょうほうれんげきやうと唱え奉る者となたてまつは仏勅ぶつちよくを念ずるが故ゆえに應忍おことは云うなり。

第十一及清信士女供養於法師しにょくやうほつしの事

御義口伝おんぎくでんに云く士女しにょとは男女なんよなり法師ほつしとは日蓮等の類にちれんいなり清信たぐと
は法華經ほけきやうに信心しんじんの者なり、今日蓮等の類いまにちれんい南無妙法蓮華經たぐなむみょうほうれんげきやうと唱え
奉る者たてまつ是なり云云、此れ諸天善神等男女しよてんぜんじんなんよと顯あらわれて法華經ほけきやうの行者ぎやうじやを

供養くようす可べしと云いう經文きやうもんなり。

第十二 若人にやくにん欲加惡刀杖とうじやう及瓦石がしやく則遣變化人へんか為之作衛護ごの事

御義口伝おんぎくでんに云いく變化人へんかとは竜口守護たつのくちしゆごの八幡大菩薩はちまんたいぼさつなり、今日蓮等いまにちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつる者しゆごを守護しゆごす可べしと云いう經文きやうもんなり。

第十三 若親近法師しんこんほふし速得菩薩道ぼさつの事

御義口伝おんぎくでんに云いく親近しんこんとは信受しんじゆの異名いみやうなり法師ほふしとは日蓮等にちれんの類たぐいなり菩薩ぼさつとは仏果ぶつかを得うる下地げじなり、今日蓮等いまにちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつる者しゆごの事ことなり。

第十四 隨順ずいじゆん是師学しがくの事

御義口伝おんぎくでんに云く是師これしとは日蓮等にちれんの類たぐいなり学がくとは南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようなり隨順ずいじゆんとは信受しんじゆなり云云。

第十五師と学との事

御義口伝おんぎくでんに云く日蓮等にちれんの類たぐいの南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようは学者がくしゃの一念三千いちねんさんぜんなり師しも学がくも共に法界三千ほっかいさんぜんの師学しがくなり。

第十六得見恒沙仏の事

御義口伝おんぎくでんに云く見恒沙仏みこうしゃぶつとは見宝塔けんほうとうと云う事ことなり、恒沙仏こうしゃぶつとは多宝たほうの事ことなり多宝たほうの多たとは法界ほっかいなり宝ほうとは一念三千いちねんさんぜんの開悟かいごなり法界ほっかいを多宝仏たほうぶつと見るを見恒沙仏みこうしゃぶつと云うなり、故ゆえに法師品ほうしひんの次に宝塔品ほうとうひんは来るなり解行証げぎようしの法師ほうしの乗物ほうとうは宝塔ほうとうなり云云、今日蓮等けふにちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようと唱となえ奉たてまつるは妙解妙行妙証みょうげみょうぎょうみょうしの不思議ふしぎの解ふしぎ・不思議ふしぎの行ぎ・不思議ふしぎの証得しやうとくなり真実しんじつ一念三千いちねんさんぜんの開悟かいごなり云云、此この恒沙こうしゃと云う

は悪を滅し善を生ずる河なり、恒沙ごうしゃ仏とは一一文文みみな皆金色の仏体なり見の字之これを思おもう可べし仏見ぶつけんと云う事なり、随順ずいじゆんとは仏知見ぶつちけんなり得見の見の字と見宝塔けんぼうとうの見とは依正えしやうの二報なり得見恒沙ごうしゃの見は正報しやうほうなり見宝塔けんぼうとうの見は依報えほうなり云云。

宝塔品ほうとうぼん甘箇だんこの大事だいじ

739P

第一だいいち宝塔ほうとうの事

文句もんくの八に云く前仏すで已に居し今・仏・並に座す当仏も亦然またしかなりと。
御義口伝おんぎくでんに云く宝いわとは五陰ごおんなり塔たつとは和合わごうなり五陰和合ごおんわごうを以て
宝塔ほうとうと云うなり、此の五陰和合ごおんわごうとは妙法みやうほうの五字ごじなりと見る是これを見と
は云うなり、今日蓮等いまにちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつる者は見宝塔けんぼうとう
なり。

第二有七宝の事しつぽう

御義口伝おんぎくでんに云く七宝しつぽうとは聞・信・戒・定・進・捨・慙いひなり、又云く頭上かみうへの七穴ななけつなり、今日蓮等いまにちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつるは有七宝しつぽうの行者ぎやうじやなり云云。

第三四面皆出の事しめんかいすい

文句もんくの八はちに云く四面出香しめんすいこうとは四諦しだいの道風四徳の香を吹くなり。御義口伝おんぎくでんに云く四面おもてとは生老病死しょうろうびやうしなり四相を以て我等われらが一身の塔とうを莊嚴そうごんするなり、我等が生老病死しょうろうびやうしに南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつるは併しかしなら四徳の香を吹くなり、南無なむとは樂波羅蜜はらみつ・妙法みょうぽうとは我波羅蜜はらみつ・蓮華れんげとは淨波羅蜜はらみつ・經きやうとは常波羅蜜はらみつなり。

第四出大音声の事すい おんじやう

御義口伝おんぎくでんに云く我等衆生の朝夕吐く所の言語ごんごなり、大音声おんじやうとは

権教は小音声・法華經は大音声なり廿八品は小音声題目は大
音声なり、惣じて大音声とは大は法界なり法界の衆生の言語を
妙法の音声と沙汰するを大音声とは云うなり、今日蓮等の類
南無妙法蓮華經と唱え奉るは大音声なり、又云く大とは空諦・
音声とは仮諦なり出とは中道なり云云。

第五見大宝塔住在空中の事

御義口伝に云く見大宝塔とは我等が一身なり住在空中とは我等
衆生終に滅に歸する事なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と
唱え奉りて信心に住する處が住在空中なり虚空会に住するなり。

第六国名宝浄彼中有仏号曰多宝の事

御義口伝に云く宝浄世界とは我等が母の胎内なり、有仏とは
諸法実相の仏なり愛を以て多宝仏と云うなり、胎内とは煩惱を云う

なり煩惱ぼんのうの淤泥おでいの中に真如しんによの仏あり我等衆生われらしゅじょうの事なり、今日蓮等いまにちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと唱となえ奉たてまつるを当体蓮華とうたいれんげの仏と云うなり云云。

第七しち於十方じゅっぽう国土有說こくど・法華經ほけきょう処我之塔わがとう廟びやう為聽是經故涌現ゆげん其前まへ為作

証しょうみょう明讚言善哉ぜんざいの事

御義口伝おんぎくでんに云く十方じゅうぽうとは十界じゅうかいなり法華經ほけきょうとは我等衆生流轉われらしゅじょうるてんの十二因縁いんねんなり仍よつて言語ごんごの音声おんじやうを指すなり善哉ぜんさいとは善惡不二ぜんあくふに・邪正一如じゃしょういちにょなり、今日蓮等いまいちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつる處ところを多宝涌現たほうゆげんと云うなり。

第八南西北方四惟上下じやうげの事

御義口伝おんぎくでんに云く四方四惟しほう上下じやうげ合あして十方じゅうぽうなり即すなわち十界じゅうかいなり、十界じゅうかいの衆生しゅじやう共さんどくに三毒さんどくの光こ之これれ有あり是これを白毫びやくごうと云いうなり一心いっしん中道ちゆうどうの智慧ちえなり、今日蓮等いまいちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつるは十界同時じゅうかいどうじの光指くわうしなり諸法実相しよほうじつそうの光明くわうみやうなるが故なり。

第九各齋宝華滿掬いづの事

御義口伝おんぎくでんに云く宝華ほうわとは合掌がっしやう一念三千いちねんさんぜんの所表しよへうなり各おんぎくでんとは十界じゅうかいなり満いちねんさんぜんの一字いちごを一念三千いちねんさんぜんと心得こころう可べし、今日蓮等いまいちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと

とな 唱え奉るは仏に宝華を奉るなり宝華即宝珠なり宝珠即一念三千なり
がしやう 合掌以敬心欲聞具足道是なり云云。

第十如却関鑰開大城門の事 補註の四に云く此の開塔見仏は蓋し所
表有るなり、何となれば即ち開塔は即開権なり見仏は即顯実なり
こ また 是れ亦前を証し復將さに後を起さんとするのみ、如却関鑰とは却是
除なり障除こり機動くことを表す謂く法身の居士惑を破し理を顯し
道を増し生を損するなりと。

おんぎくでん 御義口伝に云く関鑰とは謗法なり無明なり開とは我等が成仏なり
だいじやう 大城門とは我等が色心の二法なり大城とは色法なり門とは口なり、
いまにちれん 今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る時無明の惑障却けて
こしん 己心の釈迦・多宝住するなり、関鑰とは無明なり開とは法性なり鑰
とは妙の一字なり天台の云く 秘密の奥蔵を発らく之を称して妙と

為す」と、妙の一字を以て鑰と心得可きなり、此の經文は謗法不信
の関鑰けんやくを却けて己心こしんの仏を開くと云う事なり開仏知見これ之を思ふう可べ
云云。

第十一撰諸大衆皆在虛空の事

御義口伝に云く大衆とは聴衆なり皆在虛空とは我等が死の相なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは生死即涅槃と開覺するを皆在虛空と説くなり生死即涅槃と被撰するなり、大地は色法なり虛空は心法なり色心不二と心得可きなり虛空とは寂光土なり、又云く虛空とは蓮華なり經とは大地なり妙法は天なり虛空とは中なり一切衆生の内菩薩蓮華に座するなり、此れを妙法蓮華經と説かれたり、經に云く 君在仏前蓮華化生」と。

第十二譬如大風吹小樹枝の事

御義口伝に云く此の偈頌の如清涼池と譬如大風と燃大炬火とは三身なり、其の中に譬如大風とは題目の五字なり吹小樹枝とは折伏門なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは大風の吹

くが如くなり。

第十三若有能持則持仏身の事

御義口伝に云く法華經を持ち奉るとは我が身仏身と持つなり、則の一字は生仏不二なり上の能持の持は凡夫なり持つ体は妙法の五字なり仏身を持つと云うは一一文皆金色仏体の故なり、さて仏身を持つとは我が身の外に仏無しと持つを云うなり、理即の凡夫と究竟即の仏と二無きなり即の字は即故初後不二の故なり云云。

第十四此經難持の事

御義口伝に云く此の法華經を持つ者は難に遇わんと心得て持つなり、されば即為疾得無上仏道の成仏は今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る是なり云云。

第十五我則歡喜諸仏亦然の事

御義口伝に云く我とは心王なり諸仏とは心数なり法華經を持ち奉る時は心王心数同時に歡喜するなり、又云く我とは凡夫なり諸仏とは三世諸仏なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱えて歡喜する是なり云云。

第十六説持此經の事

御義口伝に云く五種の修行の説誦と受持との二行なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは説なり此の經を持つは持なり此經とは題目の五字なり云云。

第十七是真仏子の事

御義口伝に云く法華經の行者は真に釈迦法王の御子なり、然る間王位を継ぐ可きなり悉是吾子の子と是真仏子の子と能く能く心得合す可きなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は釈迦

ほうおう
法王の御子なり。

第十八是諸天人・世間之眼の事

御義口伝に云く世間とは日本国なり眼とは仏知見なり法華經は諸天・世間の眼目なり、眼とは南無妙法蓮華經なり是諸天人・世間之眼又云く是諸仏眼目云云、此の眼をくじる者は禪・念仏・真言宗等なり眼等とは目を閉づるなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは諸天・世間の眼に非ずや云云。

第十九能須臾説の事

御義口伝に云く能の一字之を思う可し説とは南無妙法蓮華經なり、今日蓮等の類いは能須臾説の行者なり云云。

第二十此經難持の事

御義口伝に云く此の經文にて三学俱伝するなり、虚空不動戒・虚空

不動定・虚空不動慧・三学俱に伝うるを名け

て妙法みょうぼうと曰いうと、戒とは色法なり定とは心法なり慧とは色心二法しきしんの
振舞ふるまいなり、俱の字は南無妙法蓮華經なむみょうぼうれんげきやうの一念三千いちねんさんぜんなり伝とは末法万年まつぼうまんねん
を指すなり、今日蓮等いまにちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうぼうれんげきやうと唱となえ奉たてまつり權教ごんきやうは無
得道とくどう・法華經ほけきやうは真実しんじつと修行しゆぎやうする是は戒なり防非止惡の義なり、持とつ
所の行者ぎやうじや・決定けつじやう無有疑むうぎの仏体と定む是は定なり、三世さんぜの諸仏しよぶつの智慧ちえ
を一返だいもくの題目だいもくに受持じゆじする是は慧なり、此の三学は皮肉骨・三身さんじん・三諦さんたい
・三軌・三智等なり。

提婆達多品八箇の大事だいばだつただいじ

第一 提婆達多だいばだつたの事

文句もんくの八はちに云いく本地ほんちは清涼しやうりやうにして迹あとに天熱てんねつ

を示しす。

御義口伝おんぎくでんに云いく提婆だいばとは本地ほんちは文殊もんじゆなり、本地ほんち清涼しやうりやうと云いうなり迹あと

には提婆だいばと云うなり天熱てんねつを示す是これなり、清涼しょうりやうは水みづなり此これは生死しやうじ
即涅槃そくねはんなり天熱てんねつは火かなり是これは煩惱ぼんのう即菩提そくぼだいなり、今日蓮等けふれんどうの類たぐい南無なむ
妙法蓮華經みょうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつる

に煩惱ぼんのう即菩提そくぼだい・生死しやうじ即涅槃そくねはんなり、提婆だいばは妙法蓮華經みょうほうれんげきやうの別名みょうなうなり過去かこ
の時に阿私仙人あしせんじんなり阿私仙人あしせんじんとは妙法みょうほうの異名いみやうなり阿あとは無むの義ぎなり
私無しむきの法ぽうとは妙法みょうほうなり、文句もんくの八はちに云いく無私法むしはふを以もつて衆生しゆじやうに灑そぐ
と云いえり阿私仙人あしせんじんとは法界ほうかい三千さんぜんの別名みょうなうなり故ゆゑに私無しむきなり
一いち念ねん三千さんぜん之これを思おもふ可べし云云。

第二 若不違我当為宣說の事

御義口伝おんぎくでんに云いく妙法蓮華經みょうほうれんげきやうを宣說せんぜつする事ことを汝なんじは我たがに違ちがはずして
宣說せんぜつすべしと云いふ事ことなり、若なんじの字じは汝なんじなり、天台てんだいの云いく法ぽうを受うけて
奉行ぶぎやうす」と、今日蓮等けふれんどうの類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつる者ものは日蓮にちれんに

違たがわずして宣せん説ぜつす可べきなり阿あ私し仙せん人にんとは南な無む妙みょう法ほう蓮れん華げき經きょうなり云云。
第三採菓汲水拾薪たきぎ設食の事

御義口伝おんぎくでんに云く採菓さいくわとは癡煩惱ちぼんのうなり汲水きすいとは貪煩惱ぼんのうなり拾薪たきぎとは
瞋煩惱ぼんのうなり設食じやくじきとは慢煩惱まんぼんのうなり、此の下に八種の給仕こ之れ有り此の
外みようほうれんげきように妙法蓮華經みようほうれんげきようの伝受でんじゆ之れ無きなり、今日蓮等いまにちれんの類たぐい南無
妙法蓮華經みようほうれんげきようと唱となえ奉たてまつるは即すなわち千歳給仕せんさいなり是これ即すなわち一念三千いちねんさんぜんなり
貪・瞋・癡慢とん・じん・ちを対治たいじするなり。

第四 情存妙法故身心無懈倦こころなの事

御義口伝おんぎくでんに云く身心しんしんの二字色心妙法しきしんみようほうと伝受でんじゆするなり、日蓮等にちれんの類たぐい
南無妙法蓮華經なむみようほうれんげきようと唱となえ奉たてまつりて即身成仏そくしんじやうぶつす身心しんしん無倦むけんとは一念三千いちねんさんぜんな
り云云。

第五 我於海中唯常宣說わがちゆうの事

御義口伝おんぎくでんに云く我われとは文殊もんじゆなり海うみとは生死しやうじの海うみなり唯ただとは唯有ゆいいう
一乘法いちじやうほうなり常じやうじやうとは常住じやうじやう此說法せつぽうなり妙法蓮華經みようほうれんげきようとは法界ほつかいの言語ごんご

音声おんじやうなり、今日蓮等の類いまにちれんい南無妙法蓮華經たぐと唱となえ奉たてまつる是これなり、生死しやうじの海そく即真如しんによの大海たいかいなり我われとは法界ほっかいの智慧ちえなり文殊もんじゆなり云云。

第六 年始八歳の事

御義口伝おんぎくでんに云く八歳いはちとは八卷はつけんなり提婆だいばは地獄界じごくなり竜女りゆうによは仏界ぶつかいなり然しかる間じゆつかいごや十界互具ひやつかいせんによ・百界千如いちねんさんぜん・一念三千いっねんさんぜんなり、又云く八歳いはちとは法華經ほけきやう八卷はつけんなり我等われら八苦はつくの煩惱ぼんのうなり、惣そうじて法華經ほけきやうの成仏じやうぶつは八歳はちさいなりと心得こころうべ可べし八苦はつく即八卷そくなり八苦はつく八卷はつけん即八歳そくの竜女りゆうによと顯あらわるるなり一義いっしんに云く、八歳の事いはちはたまをひらくと読よむなり、歳さいとは竜女りゆうによの一心いっしんなり八はちとは三千さんぜんなり三千さんぜんとは法華ほっけの八卷はつけんなり、仍よつて八歳はちさいとは開仏知見かいぶつちけんの所表しよへうなり智慧利根ちえりこんより能至菩提ぼだいまで法華ほっけに歸入きにやうするなり、此この中に心念口演くごうとは口業くごうなり志意和雅わげとは意業いごうなり悉能受持じゆじ深入禪定ぜんじやうとは身業しんごうなり三業さんごう即三德そくさんとくなれば三諦法性さんたいほつしやうなり、又云く心

念いちねんとは一念なり口演くげんとは三千さんぜんなり悉能受持じゅじとは童女りゅうにょ法華經受持ほけきょうじゅじの
文なり、歳さいとは如意宝珠にょいほうじゅなり妙法みょうほうなり八はちとは色心しきしんを妙法みょうほうと開く
り。

第七 言論未訖の事

御義口伝おんぎくでんに云く此この文ぶんは無明むみょう即法性そくほつしやうの明文めいぶんなり、其そのの故ゆえは智積ちしやく難問なんもんの言未いまだ訖おわらざるに竜女りゆうによ三行半さんかうはんの偈げを以て答こたうるなり、難問なんもんの意いは別教べつきやうの意いなり無明むみょうなり竜女りゆうによの答こたは円教えんきやうの意いなり法性ほつしやうなり、智積ちしやくは元品がんぽんの無明むみょうなり竜女りゆうによは法性ほつしやうの女人にょにんなり仍よつて無明むみょうに即そくする法性ほつしやう法性ほつしやうに即そくする無明むみょうなり、今日けふ蓮等れんどうの類たぐひ南無妙法蓮華經なむめいほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつるは言論未訖ごろんみけつなり、時ときとは上の事かみの末末むつむつの事ことの始はじなり時ときとは無明むみょう法性ほつしやう同時どうじの時ときなり南無妙法蓮華經なむめいほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつる時ときなり、智積ちしやく菩薩ぼさつを元品がんぽんの無明むみょうと云いふ事は不信ふしん此女ここのめの不信ふしんの二字ふたごなり不信ふしんとは疑惑ぎわくなり疑惑ぎわくを根本こんぽん無明むみょうと云いふなり、竜女りゆうによを法性ほつしやうと云いふ事は我聞がせん大乘教だいじやうの文ぶんなり竜女りゆうによとは竜りゆうは父ふなり女めは八歳はっさいの娘むすめなり竜女りゆうによの二字ふたごは父子同時ふしどうじの成仏じやうぶつなり、其そのの故ゆえは時竜りゆうどう王女おうむすめの文ぶん是これなり既すでに竜王りゆうおうの女むすめと云いふ間

竜王りゅうおうは父なり女とは八歳の子なり、されば女

の成仏じょうぶつは此の品にあり父の竜の成仏じょうぶつは序品じよほんに之れ在り、有八竜王りゅうおうの

文これ是なり、然りと雖いえども父子同時ふしどうじの成仏じょうぶつなり序品じよほんは一經いつきやうの序なる故

なり、又聞成菩提ぼだいとは竜女りゅうによが智積ちしやくを責めたる言なりされば唯我ただが

成仏じょうぶつをば仏御存知ごぞんじあるべしとて又聞成菩提唯仏ぼだいゆいぶつ当証知と云えり苦の

衆生しゆじやうとは別して女人にょにんの事なり、此の三行半の偈げは一念三千いちねんさんぜんの法門ほうもん

なり遍照へんしょう於十方じゅうつぽうとは十界じゅうかいなり、殊ことには此の八歳の竜女りゅうによの成仏じょうぶつは

帝王持經ていおうじきやうの先祖ていおうじきやうたり、人王の始は神武天皇てんのうなり神武天皇てんのうは地神五代ちじんごだい

の第五うがふきあえすのみことの鸕うがふきあえすのみこと鷺あえすのみこと不合尊ふがふきあえすのみことの御子みこなり此の葺不合尊ふがふきあえすのみことは豊玉姫とよたまひめの子なり此

の豊玉姫とよたまひめは沙竭羅竜しゃかくらりゅう王おうの女にょなり八歳の竜女りゅうによの姉あねなり、然る間先祖しか

法華經ほけきやうの行者ぎやうじやなり甚深じんじん甚深じんじん云云、されば此の提婆だいばの一品いつてんは一天

の腰刀こしやうなり無明煩惱むみょうぼんのうの敵てきを切り生死しやうじ愛着あいしやくの繩しやうじを切る秘法ひほうなり、漢高

三尺の劍も一字の智劍に及ばざるなり妙の一字の智劍を以て生死
煩惱ぼんのうの繩を切るなり、提婆だいばは火炎を顯あらわし竜女りゅうにょは大蛇だいじやを示し文殊もんじゅは智
劍を顯あらわすなり仍よつて不動明王ふどうみょうおうの尊形そんぎようと口伝くでんせり、提婆だいばは我等われらが煩惱ぼんのう
即そく菩提ぼだいを顯あらわすなり、竜女りゅうにょは生死しょうじ即そく涅槃ねはんを顯あらわすなり、文殊もんじゅをば

此には妙徳と翻ずるなり煩惱生死具足して当品の能化なり。

第八 有一宝珠の事 文句の八に云く一とは珠を献じて円解を得ることを表すと。

御義口伝に云く一とは妙法蓮華經なり宝とは妙法の用なり珠とは妙法の体なり、妙の故に心法なり法の故に色法なり色法は珠なり心法は宝なり妙法とは色心不二なり、一念三千を所表して竜女宝珠を奉るなり、釈に表得円解と云うは一念三千なり、竜女が手に持てる時は性得の宝珠なり仏受け取り給う時は修得の宝珠なり、中に有るは修性不二なり、甚疾とは頓極・頓速・頓証の法門なり即為疾得無上仏道なり、神力とは神は心法なり力とは色法なり觀我成仏とは舍利弗竜女が成仏と思うが僻事なり、我が成仏ぞと觀ぜよと責めたるなり、觀に六則觀之れ有り爰元の觀は名字即の觀と

心得可きなり、其の故は南無妙法蓮華經と聞ける處を一念坐道場
成仏不虛也と云えり、變成男子とは竜女も本地南無妙法蓮華經な
り其の意經文に分明なり。

勸持品十三箇の大事

747P

第一 勸持の事

御義口伝に云く勸とは化他持とは自行なり南無妙法蓮華經は自行
化他に亘るなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經を勧めて持たしむ
るなり。

第二 不惜身命の事

御義口伝に云く身とは色法命とは心法なり事理の不惜身命之れ有
り、法華の行者田畠等を奪わるは理の不惜身命なり命根を断たる

を事の^{おし}不^{しん}惜^み身命^{よう}と云うなり、今日^{いまに}蓮^{れん}等^{たう}の類^{るい}い南^な無^む妙^{みょう}法^{ぼう}蓮^{れん}華^け經^{きやう}と
唱^{とな}え奉^{たてまつ}る者は事^じ理^り共に

値うなり。

第三 心不実故の事

御義口伝に云く心不実故とは法華最第一の經文を第三と読み最爲
其上の經文を最爲其下と讀みて法華經の一念三千を華嚴・大日等
に之れ有りと法華の即身成仏を大日經に取り入るるは此等は皆心
不実故なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は心実な
るべし云云。

第四 敬順仏意の事

御義口伝に云く法華經に順ずるは敬順仏意なり意とは南無
妙法蓮華經是なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは敬
順仏意の意なり。

第五 作師子吼の事

御義口伝おんぎくでんに云くい師子吼ししこうとは仏の説せつなりほう說法せつぽうとは法華別ほつけしては南無なむ妙法蓮華經みょうほうれんげきなり、師しとは師匠授ししょうさずくる所の妙法子みょうほうしとは弟子受でしくる所の妙法みょうほう吼こうとは師弟共していに唱となうる所の音声おんじやうなり作なとはおこすと読むなり、末法まつぽうにして南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきを作なすなり。

第六 如法修行の事しゆぎやう

御義口伝おんぎくでんに云くい如法修行しゆぎやうの人とは天台・妙楽・伝教等てんだい みょうらく でんぎやうなり、今日蓮いまにちれん等の類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきと唱となえ奉たてまつるは如法修行しゆぎやうなり云云。

第七 有諸無智人の事しよむち

御義口伝おんぎくでんに云くい一文不通いちもんふつうの大俗あづめりなり惡口罵詈ふんみぎ等分明ふんみぎなり日本にほん国の俗しよを諸しよと云うなり。

第八惡世中比丘の事あくせ びく

御義口伝おんぎくでんに云く惡世中比丘あくせ びくの惡世あくせとは末法まつぽうなり比丘びくとは謗法ぼうぽうたる弘法こうぼう等これ是なり、法華ほっけの正智しやちを捨て權教ごんきやうの邪智じやちを本ほんとせり、今日けふ蓮等れんどうの類たぐひい南無妙法蓮華經なむ みょうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつる者は正智しやちの中の大正智だいしやちなり。

第九・或有阿練若の事ある あれんにや

御義口伝おんぎくでんに云く第三だいさんの比丘びくなり良觀りやうかん等らうくつうなり如上らうくつう六通羅漢ろくつうらかんの人と思おもふなり。

第十自作此經典の事きやうてん

御義口伝おんぎくでんに云く法華經ほけきやうを所作なして讀むと謗べす可べしと云う經文きやうもんなり。

第十一為斯所輕言汝等皆是仏の事なんじ みな

御義口伝おんぎくでんに云く法華經ほっけの行者ぎやうじやを蔑あなづり生仏きやうもんと云うべしと云う經文きやうもん

なり、是は輕心を以て誇るなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と
唱え奉る者を云う可きなり。

第十二惡鬼入其身の事

御義口伝に云く惡鬼とは法然・弘法等是なり入其身とは國王・大臣
・方民等の事なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るを
怨むべしと云う事なり、鬼とは命を奪う者にして奪功德者と云うな
り、法華經は三世諸仏の命根なり此の經は一切菩薩の功德を納めた
る御經なり。

第十三但信無上道の事

御義口伝云く無上道とは南無妙法蓮華經是れなり、今日蓮等の類い
南無妙法蓮華經を惜しむ事は命根よりも惜しき事なり、之に依つて
結ぶ處に仏自知我心と説かれたり法華經の行者の心中をば教主

釈尊しやくそんの御存知ごぞんじ有る可べきなり、仏とは釈尊しやくそん我心わがこころとは今日蓮等いまにちれんの類たぐい
南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつる者なり。

安樂行品五箇の大事

第一 安樂行品の事

御義口伝に云く妙法蓮華經を安樂に行ぜむ事末法に於て今日蓮等の類いの修行は妙法蓮華經を修行するに難來るを以て安樂と意得べきなり。

第二 一切法空の事

御義口伝に云く此下に於て十八空之有り十八空の体とは南無妙法蓮華經是なり十八空は何れも妙法の事なり。

第三 有所難問不以小乘法答等の事

御義口伝に云く対治の時は權教を以て会通す可からず。

一切種智とは南無妙法蓮華經なり一切は万物なり種智は万物の種なり妙法蓮華經是なり、又云く一切種智とは我等が一心なり一心

とは万法の惣体なり之を思う可し。

第四 無有怖畏加刀杖等的事

御義口伝に云く迹化の菩薩に刀杖の難之れ有る可からずと云う
経文なり、勸持品は末法法華の行者に及加刀杖者数数見擯出と此
の品には之無し、彼は末法の折伏の修行此の品は像法撰受の修行
なるが故なり云云。

第五 有人来欲難問者諸天昼夜等の事

御義口伝に云く末法に於て法華を行ずる者をば諸天守護之有る
可し常為法故の法とは南無妙法蓮華經是なり。

涌出品一箇の大事

第一 唱導之師の事

御義口伝に云く涌出の一品は悉く本化の菩薩の事なり、本化の菩薩の所作としては南無妙法蓮華經なり此れを唱と云うなり導とは日本国の一切衆生を靈山淨土へ引導する事なり、末法の導師とは本化に限ると云うを師と云うなり、此の四大菩薩の事を釈する時、疏の九を受けて輔正記の九に云く經に四導師有りとは今四徳を表す

上行は我を表し無辺行は常を表し淨行は淨を表し安立行は樂を表す、有る時には一人に此の四義を具す二死の表に出づるを上行と名け断常の際を踰ゆるを無辺行と称し五住の垢累を超ゆる故に淨行と名け道樹にして徳円かなり故に安立行と曰うなり」と今日蓮等の類南無妙法蓮華經と唱え奉る者は皆地涌の流類なり、

又云く火

は物を焼くを以て行とし水は物を淨むるを以て行とし風は塵垢を払うを以て行とし大地は草木を長ずるを以て行とするなり四菩薩の利益是なり、四菩薩の行は不同なりと雖も、俱に妙法蓮華經の修行なり、此の四菩薩は下方に住する故に釈に法性之淵底玄宗之極地」と云えり、下方を以て住处とす下方とは真理なり、輔正記に云く下方とは生公の云く住して理に在るなり」と云云、此の理の住处より顕れ出づるを事と云うなり、又云く千草万木・地涌の菩薩に非ずと云う事なし、されば地涌の菩薩を本化と云えり本とは過去久遠五百塵点よりの利益として無始無終の利益なり、此の菩薩は本法所持の人なり本法とは南無妙法蓮華經なり、此の題目は必ず

地涌の所持の物にして迹化の菩薩の所持に非ず、此の本法の体より用

を出して止観しかんと弘ひろめ一念三千と云う、惣そうじて大師人師だいしにんしの所しょ積しやくも此の
妙法みょうぽうの用ひろを弘ひろめ給たまうなり、此の本法を受持じゅぢするは信の一字なり、
元品がんぽんの無明むみょうを対治たいじする利劍りけんは信の一字なり無疑うたがいなしん曰信の釈これ之を思ふ
可べし云云。

御義口伝卷上おんぎくでん

弘安元年こうあんがねん戊寅つちのえとら正月一日

執筆しつぴつ

日興にっこう

◆九五

御義口伝

卷下

日蓮所立自寿量品至

開結二經

752P

寿量品廿七箇の大事

第一

南無妙法蓮華經如来寿量品第十六の事

文句の九に云く

如来とは十方三世の諸仏二仏三仏本仏迹仏の通号なり別しては

本地三仏の別号なり、寿量とは詮量なり、十方三世二仏三仏の

諸仏の功德を詮量す故に寿量品と云うと。

御義口伝に云く此の品の題目は日蓮が身に当る大事なり神力品の

付属是なり、如来とは釈尊惣じては十方三世の諸仏なり別しては

本地無作の三身なり、今日蓮等の類いの意は惣じては如来とは一切

衆生なり別しては日蓮の弟子・檀那なり、されば無作の三身とは

末法まつぽうの法華經ほけきょうの行者ぎやうじやなり無作むさの三身さんじんの宝号たむを南無妙法蓮華經なむみょうぽうれんげきやうと云う

なり、寿量品じゆりやうぽんの事の三大事だいたいじとは是これなり、六即そくの配立はいだつの時は此の品の如來にょらいは理即りそくの凡夫ぼんぷなり頭こうべに南無妙法蓮華經なむみょうぽうれんげきやうを頂戴ちやうだいし奉たてまつる時名字即みやうじそくなり、其そのの故ゆえは始めて聞く所の題目だいもくなるが故ゆゑなり聞き奉たてまつりて修行しゆぎやうするは觀行即かんぎやうそくなり此の觀行即かんぎやうそくとは事の一念三千いちねんさんぜんの本尊ほんぞんを觀みずるなり、さて惑障わくしょうを伏ふくするを相似即そうじそくと云うなり化他けたに出づるを分真即ぶんしんそくと云うなり無作むさの三身さんじんの仏ぶつなりと究竟くきやうしたるを究竟即くきやうそくの仏ぶつとは云うなり、惣そうじて伏惑ふくわくを以て寿量品じゆりやうぽんの極ごくとせず唯凡夫ただぼんぷの当体とうたい・本有ほんぬの儘ままを此の品の極理ごくりと心得こころうべ可きなり、無作むさの三身さんじんの所作しよさは何物なにものぞと云う時南無妙法蓮華經なむみょうぽうれんげきやうなり云云。

第二如來秘密神通之力の事

御義口伝に云く無作三身の依文なり、此の文に於て重重的の相伝之有り、神通之力とは我等衆生の作作発発と振る舞う処を神通と云うなり獄卒の罪人を苛責する音も皆神通乃力生住異滅の森羅三千の当体悉く神通之力の体なり、今日蓮等の類の意は即身成仏と開覚するを如来秘密神通之力とは云うなり、成仏するより外の神通と秘密とは之れ無きなり、此の無作の三身をば一字を以て得たり所謂信の一字なり、仍て經に云く我等当信受仏語」と信受の二字に意を留む可きなり。

第三我実成仏已来無量無辺等の事会

御義口伝に云く我実とは釈尊の久遠実成道なりと云う事を説かれたり、然りと雖も当品の意は我とは法界の衆生なり十界己己を指し

て我と云うなり、実とは無作三身の仏なりと定めたり此れを實と云
うなり成とは能成所成なり成は開く義なり法界無作の三身の仏な
りと開きたり、仏とは此れを覺知するを云うなり已とは過去なり来
とは未來なり已來の言の中に現在是有るなり、我實と成けたる仏に
して已も來も無道なり無辺なり、百界千如

・一念三千と説かれたり、百千の二字は百は百界千は千如なり此れ
即ち事の一念三千なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る
者は寿量品の本主なり、惣じては迹化の菩薩此の品に手をつけいろ
うべきに非ざる者なり、彼は迹表本裏・此れは本面迹裏・然りと
雖も而も当品は末法の要法に非ざるか其の故は此の品は在世
の脱益なり題目の五字計り当今の下種なり、然れば在世は脱益滅後
は下種なり仍て下種を以て末法の詮と為す云云。

第四如來如實知見三界之相無有生しやうじ死じの事

御義口伝おんぎくでんに云いく如來にやらいとは三界さんがいの衆生しゆじやうなり此この衆生しゆじやうを壽量品じゆりやうほんの眼まなこ
開ひらけてみれば十界じふかい本有ほんぬと實じつの如ごとく知見ちけんせり・三界さんがい之相しとは生老病死しやうろうびやうし死し
なり本有ほんぬの生しやうじ死じとみれば無有生しやうじ死じなり生しやうじ死じ無なければ退出しも無なし唯ただ
生しやうじ死じ無なきに非あらざるなり、

生死しやうじを見て厭離おんりするを迷まよいと云いい始覺しかくと云いうなりさて本有ほんぬの生死しやうじと知見ちけんするを悟いと云いい本覺ほんかくと云いうなり、今日蓮等いまにちれんの類たぐい南無なむ妙法蓮華經みやうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつる時本有ほんぬの生死しやうじ本有ほんぬの退出しゅつだうと開覺かいかくするなり、又云いく無むも有あも生なも死しも若退わくたいも若出わくしゅつも在世ざいせも滅後めつごも悉ことごとく皆本有常住みなほんぬじやうじやうの振舞ふるまいなり無むとは法界同時ほっかいどうじに妙法蓮華經みやうほうれんげきやうの振舞ふるまいより外ほかは無なきなり有あとは

地獄じごくは地獄じごくの有あの儘まま十界本有じゅうかいほんぬの妙法みやうほうの全体ぜんたいなり、生なとは妙法みやうほうの生なれば隨緣ずいえんなり死しとは寿量じゆりやうの死しなれば法界同時ほっかいどうじに責如せきにょなり若退わくたいの故ゆゑに滅後めつごなり若出わくしゅつの故ゆゑに在世ざいせなり、されば無死退滅むしゅたいめつは空くうなり有生出在おうしゅつざいは仮かなり如来如実にょらいにょじつ

は中道ちゆうどうなり、無死退滅むしゅたいめつは無作むさの報身ほうしんなり有生出在おうしゅつざいは無作むさの応身おうしんなり如来如実にょらいにょじつは無作むさの法身ほっしんなり、此この三身さんじんは我が一身いしんなり、一身即そく

三身名さんじんみょういひ為な秘ひとは是これなり、三身即さんじんそく一身名いしんみょう為な密みつも此この意いなり、然しからば無む作さの三身さんじんの当とう体たいの蓮華れんげの仏ぶつとは日蓮にちれんが弟子でし・檀那だんな等らなり南無なむ妙法蓮華經みょうほうれんげきょうの宝号たもを持たち奉たてまつる故ゆゑなり云云。

第五 若くじゅう仏久住くじゅう於世薄徳之人不種善根貧窮下賤貪著五欲入於憶想

妄見網中の事

御義口伝おんぎくでんに云いく此この經文きやうもんは仏世くじゅうに久住くじゅうしたまわば薄徳はくとくの人は善根ぜんこんを殖うゆ可べからず然しかる間妄見網中しやんみんかうちゅうと説しやせんかれたり、所詮しよせん此この薄徳はくとくとは在ざい世せに漏もれたる衆生しゆじやう今滅後日本国けつごにほんこくに生なれたり、所謂いわゆる念仏ねんぶつ・禪ぜん・真言しんごん等の謗法ぼうぽうなり、不種善根ぜんこん

とは善根ぜんこんは題目だいもくなり不種ふしゆとは未いまだ持もたざる者ものなり、憶想おくしやうとは捨閉しやへい闍かく拋ぽう第三だいさんの劣等りやくとう此こくの如ごときの憶想おくしやうなり、妄ごんきやうとは權教妄語ごんきやうもうごの經教きやうきやうなり見けんは邪見じやけんなり法華最第一ほつげさいだいいちの一ひとを第三だいさんと見るが邪見じやけんなり、網中かうちゅうとは

謗法不信の家なり、今

日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者はかかる妄見の經網中の家を離れたる者なり云云。

第六 飲他毒藥藥発悶乱宛轉于地の事

御義口伝に云く他とは念仏・禪・真言の謗法の比丘なり、毒藥とは權教方便なり法華の良藥に非ず故に悶乱するなり悶とはいきたゆるなり、寿量品の命なきが故に悶乱するなり宛轉于地とは阿鼻地獄今入るなり云云。諸子

飲毒の事は釈に云く邪師の法を信受するを名けて飲毒と為す」と、諸子とは謗法なり飲毒とは弥陀大日等の權法なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは毒を飲まざるなり。

第七・或矢本心・或不失者の事

御義口伝に云く本心を失うとは謗法なり本心とは下種なり不失とは法華經の行者なり失とは本有る物を失う事なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは本心を失わざるなり云云」

第八擣☆符和合与子令服の事

御義口伝に云く此の經文は空仮中の三諦戒定慧の三学なり、色香美味の良藥なり擣は空諦なり☆は仮諦なり和合は中道なり与は投与なり子は法華の行者なり服すると云うは受持の義なり、是を此大良藥色香美味皆悉具足と説かれたり、皆悉の二字万行方善・

諸波羅蜜を具足したる大良藥たる南無妙法蓮華經なり、色香等とは一色

一香・無非中道にして草木成仏なり、されば題目の五字に一法として具足せずと云う事なし若し服する者は速除苦惱なり、されば妙法の大良藥を服するは貪・瞋・癡の三毒の煩惱の病患を除くなり、法華の行者南無妙法蓮華經と唱え奉る者は謗法の供養を受けざるは貪欲の病を除くなり、法華の行者は罵詈せらるれども忍辱を行ずるは脹意の病を除くなり、法華經の行者は是人於仏道決定無有疑と成仏を知るは愚痴の煩惱を治するなり、されば大良藥は末法の成仏の甘露なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは大良藥の本主なり。

第九毒氣深入矢本心故の事

御義口伝おんぎくでんに云くい毒氣深入どっけとは權教謗法ごんきやうぼうぼうの執情しゅうじやう深く入りたる者なり、之に依つてよ法華ほつの大良藥りやうやくを信受しんじゆせざるなり服せしむると雖も吐き出だすは而謂不美とてむまからずと云う者なり、今日蓮等の類いまだちれんい

第十是好良藥今留在此汝可取服勿憂不差の事

御義口伝おんぎくでんに云くい是好良藥ぜこうりやうやくとは、或は經教きやうぎやう・或は舍利しやりなりさて末法まつぼうにては南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうなり、好とは三世諸仏さんぜしよぶつの好み物は題目だいもくの五字ごじなり、今留とどとは末法まつぼうなり此とは一閻浮提えんぶだいの中には日本国にほんこくなり、汝なんじとは末法まつぼうの一切衆生いっさいしゆじやうなり取は法華經ほつを受持じゆじする時の儀式なり、服するとは唱となえ奉たてまつる事なり服するより無作むさの三身さんじんなり始成正覺しじやうしやうかくの病患げんいゆ差るなり、今日蓮等の類いまだちれんい南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつる是なり。

第十一 自我得仏來の事

御義口伝おんぎくでんに云くいく一句三身の習ならいの文と云うなり、自とは九界なり我おんぎくでんとは仏界ぶつがいなり此じの十界じゅうがいは本有無作ほんぬむさの三身さんじんにして來る仏なりと云えり、自も我も得たる仏來れり十界本有じゅうがいほんぬの明文めいぶんなり、我は法身ほっしん・仏は報身ほうしん・來は応身おうじんなり此さんじんの三身・無始無終むしむしゅうの古仏こぶつにして自得じとくなり、無上むじょう宝聚ほうじゆ不求自得ふくじとく之を思べう可しかし、然すなわらば即けんぽんち顯本遠寿おんじゆの説は永しよきく諸教しよきやうに絶いまにえたり、今日蓮等ちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつるは自我得仏ぎやうじや來の行者ぎやうじやなり云云。

第十二 為度衆生故方便現涅槃の事

御義口伝おんぎくでんに云く涅槃ねはん經ぎやうもんは法華經ほけきやうより出いでたりと云う經文ぎやうもんなり、既に方便ほうべんと説すかれたり云云。

第十三 常住此說法の事

御義口伝おんぎくでんに云くい常住じやうじやうとは法華經ほけきやうの行者ぎやうじやの住处じやうしよなり、此とは娑婆世界しやばせかいなり山谷曠野せんごくこうやを指して此とは説き給うたま、説法せつぽうとは一切いっさい衆生しゆじやうの語言ごげんの音声おんじやうが本有ほんぬの自受用智じじゆゆうちの説法せつぽうなり、末法まっぽうに入つて説法せつぽうとは南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうなり今日蓮等いまにちれんの類たぐいの説法せつぽう是なり。

第十四 時・我及衆僧俱出 靈鷲山の事

御義口伝に云く靈山一会儼然未散の文なり、時とは感応末法の時
なり我とは釈尊及とは菩薩聖衆を衆僧と説かれたり俱とは十界
なり靈鷲山とは寂光土なり、時に我も及も衆僧も俱に靈鷲山に
出ずるなり秘す可し秘す可し、本門事の一念三千の明文なり御本尊
は此の文を顯し出だし給うなり、されば俱とは不變真如の理なり出
とは隨緣真如の智なり俱とは一念なり出とは三千なり云云。
又云く時とは本時娑婆世界の時なり下は十界宛然の曼陀羅を顯す
文なり、其の故は時とは末法第五時の時なり、我とは釈尊及は菩薩
衆僧は二乗俱とは六道なり・出とは靈山淨土に列出するなり靈山
とは御本尊並びに日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者の住所
を説くなり云云。

第十五 衆生見劫尽○而衆見燒尽の事

御義口伝に云く本門寿量の一念三千を頌する文なり、大火所焼時
とは実義には煩惱の大火なり、我此土安穩とは国土世間なり、衆生
所遊樂とは衆生世間なり、宝樹多華菓とは五陰世間なり是れ即ち
一念三千を分明に説かれたり、又云く上の件の文は十界なり大火と
は地獄界なり天鼓とは畜生なり人と天とは人天の二界なり、天と
人と常に充滿するなり、雨曼陀羅華とは声聞界なり園林とは縁覺
界なり菩薩界とは及の一字なり仏界とは散仏なり修羅と餓鬼界とは
憂怖諸苦惱如是悉充滿の句に摂するなり、此等を是諸罪衆生と説
かれたり、然りと雖も此の寿量品の説顯われては、則皆見我身とて
一念三千なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者はなり
云云。

第十六 我亦為世父の事

御義口伝おんぎくでんに云く我とは釈尊しやくそん一切衆生いっさいしゆじやうの父なり主師親しゅししんに於て仏に約
し經に約す、仏に約すとは迹門しやくもんの仏の三徳さんとくは今此三界こんしさんがいの文是これなり、
本門ほんもんの仏の主師親しゅししんの三徳さんとくは主の徳は我此土安穩しどあんのんの文なり師の徳は常
說法教化せつぽうきやうけの文なり

親の徳は此の我亦また為世父の文是これなり、妙樂大師は寿量品の文を知らざる者は不知恩ふちおんの畜生ちくじやうと釈しゃくし給たまえり經に約すれば、諸經中王は主の徳なり能救一切衆生は師の徳なり又如大梵天王一切衆生之父の文は父の徳なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は一切衆生の父なり無間地獄むげんじごくの苦を救う故なり云云、涅槃經に云く一切衆生の異の苦を受くるは悉く是れ如来一人の苦」と云云、日蓮にちれんが云く一切衆生の異の苦を受くるは悉く是れ日蓮一人の苦なるべし。

第十七 放逸ほういつ著五欲墮だ於惡道中の事

御義口伝おんぎくでんに云く放逸ほういつとは謗法ぼうぼうの名なり入阿鼻獄にゅうあびごく疑無うたがいき者なり、今日蓮等の類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつる者は此の經文きやうもんを免離めんりせり云云。

第十八

行道ぎようどう 不行道ふぎようどうの事

御義口伝おんぎくでんに云くいわ十界じゅうかいの衆生しゅじょうの事を説くなり行道ぎようどうは四聖ししやう不行道ふぎようどうは六道ろくどうなり、又云くいわ行道ぎようどうは修羅しゆら・人天にんてん不行道ふぎようどうは三惡道さんあくどうなり、所詮しよせん末法まつぽうに入つては法華ほつげの行者ぎやうじやは行道ぎようどうなり謗法ぼうぽうの者は不行道ふぎようどうなり、道とは法華經ほけきやうなり、天台てんだい云くいわ仏道ぶつどうとは別して今の經を指す」と、今日蓮等いまにちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱え奉るとなは行道ぎようどうなり唱えざるとなは不行道ふぎようどうなり云云。

第十九

每自作さぜねん是念しねんの事

御義口伝おんぎくでんに云くいわ每さんぜとは三世さんぜなり自とは別しては釈尊しゃくそん惣じては十界じゅうかいなり、是念しねんとは無作むさ本有ほんぬの南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうの一念いちねんなり、作とは此の作は有作あの作むさに非ず無作むさ本有ほんぬの作むさなり云云、広く十界じゅうかい本有ほんぬに約して云わば自とは方法こ己この当体とうたいなり、是念しねんとは地獄じごくの呵責かしやくの音そ其の外

一切衆生の念念皆是れ自受用報身の智なり是を念とは云うなり、
今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る念は大慈悲の念なり云
云。

第二十 得入無上道等の事

御義口伝に云く無上道とは寿量品の無作の三身なり此の外に成就
仏身之れ無し、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は
成就仏身疑無きなり云云。

第廿一 自我偈の事

御義口伝に云く自とは九界なり我とは仏身なり偈とはことわるな
り本有とことわりたる偈頌なり深く之を案ず可し、偈様とは南無
妙法蓮華經なり云云。

第廿二 自我偈始終の事

御義口伝に云く自とは始なり速成就仏身の身は終りなり始終自身
なり中の文字は受用なり、仍つて自我偈は自受用身なり法界を自身
と開き法界自受用身なれば自我偈に非ずと云う事なし、

ほしいまにうけもちいるみ
自受用身とは一念三千なり、伝教云く、二念三千即・自受用身
じじゅうしん
・自受用身とは尊形を出でたる仏と・出尊形仏とは無作の三身と云
そんぎよう
う事なり」云云、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者はな
いまにちれん
り云云。

第廿三 久遠の事

おんぎくでん
御義口伝に云く此の品の所詮は久遠実成なり久遠とははたらかさず
いむ
つくろわずもとの儘と云う義なり、無作の三身なれば初めて成ぜず
また
是れ働かざるなり、卅二相・八十種好を具足せず是れ繕わざるなり
しむ
本有常住の仏なれば本の儘なり是を久遠と云うなり、久遠とは南無
また
妙法蓮華經なり実成無作と開けたるなり云云。

第廿四 此の寿量品の所化の国土と修行との事

おんぎくでん
御義口伝に云く当品流布の国土とは日本国なり惣じては南閻浮提な
いむ
るふ
こくど
にほんこく
そ
えんぶだい

り、所^{しよけ}化^けとは日^に本^{ほん}国^{こく}の一切^{いっさい}衆^{しゆ}生^{じやう}なり修^{しゆ}行^{ぎやう}

とは無疑うたがひわつしん 曰信しんじんの信心しんじんの事なり、授与じゅよの人とは本化ほんげ地涌じゆの菩薩ぼさつなり云云。

第廿五建立御本尊等の事

御義口伝おんぎくでんに云く此の本尊ほんぞんの依文よぶんとは如来秘密神通にょらいひみつじんつう之力りきの文なり、戒定慧かいじやうえの三学さんがくは寿量品じゆりやうぼんの事の三大秘法ひほうこ是れなり、日蓮にちれんに靈山りやうぜんに於て面受めんじゆ口決くけつせしなり、本尊ほんぞんとは法華經ほけきやうの行者ぎやうじやの一身いつたいの当体とうたいなり云云

第廿六寿量品の対告衆の事

御義口伝おんぎくでんに云く經文きやうもんは弥勒菩薩みろくぼさつなり、然りと雖いえども滅後めつごを本とする故ゆゑに日本国にほんこくの一切衆生いつさいしじゆじやうなり、中にも日蓮にちれん等の類たぐい南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうとな唱となえ奉たてまつる者もの是これなり、弥勒みろくとは末法まっぽう法華ほつげの行者ぎやうじやの事なり、弥勒みろくをば慈氏じしと云う法華ほつげの行者ぎやうじやを指すなり、章安大師しやうあんだいし云く爲彼除惡そくぜ即是

彼親』と是れ豈^{あに}弥勒菩薩^{みろくぼさつ}に非^{あら}ずや云云

第廿七無^む作^さ三身^{さんじん}の事 種^{しゅ}子^し尊^{そん}形^{ぎよう}三摩耶^{まや}

御義口伝に云く尊形とは十界本有の形像なり三摩耶とは十界所持の物なり種子とは信の一字なり、所謂南無妙法蓮華經改めざるを云うなり三摩耶とは合掌なり秘す可し秘す可し云云。

分別功德品三箇の大事

第一其有衆生聞仏壽命長遠如是乃至能生一念信解所得功德無有限量^{だいいち しゅじやう じゆみやうちやうおんによぜないしうしやう いちねんしんげ くだく}の事

御義口伝に云く一念信解の信の一字は一切智慧を受得する所の因種なり、信の一字は名字即の位なり仍^{なづけ}つて信の一字は最後品の無明を切る利劍なり、信の一字は寿量品の理顯本を信ずるなり解とは

事顯本を解するなり

此の事理の顯本を一念に信解するなり、一念とは無作本有の一念なり、此くの如く信解する人の功德は限量有る事有る可からざるなり、信の処に解あり解の処に信あり然りと雖も信を以て成仏を決定するなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者はなり云云。

第二是則能信受如是諸人等頂受此經典の事

御義口伝に云く法華經を頭に頂くと云う明文なり、如是諸人等の文は広く一切衆生に亘るなり、然らば三世十方の諸仏は妙法蓮華經を頂き受けて成仏し給う、仍つて上の寿量品の題目を妙法蓮華經と題して次に如来と題したり秘す可し云云、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは此の故なり云云。

第三仏子住此地則是仏受用の事

御義口伝に云く此の文を自受用の明文と云えり、此地とは無作の三身の依地なり仏子とは法華の行者なり仏子は菩薩なり法華の行者は菩薩なり住とは信解の義なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は妙法の地に住するなり仏の受用の身なり深く之を案ず可し云云。

随喜品二箇の大事

第一妙法蓮華經隨喜功德の事

御義口伝に云く隨とは事理に隨順するを云うなり喜とは自他共に喜ぶ事なり、事とは五百塵点の事顕本に隨順するなり理とは理顕本に隨うなり所詮壽量品の内証に隨順するを隨とは云うなり、然るに自他共に智慧と慈悲と有るを喜とは云うなり所詮今日蓮等の類い

南無妙法蓮華經と唱え奉る時必ず無作三身の仏に成るを喜とは云
うなり、然る間随とは法に約し喜とは人に約するなり、人とは五百
塵点の古仏たる釈尊法とは寿量品の南無

妙法蓮華經なり、是に随い喜ぶを随喜とは云うなり惣じて随とは信の異名なり云云、唯信心の事を隋と云うなりされば二巻には随順此經非己智分と説かれたり云云。

第二口氣無 ☆ 優鉢華之香常徒其口出の事

御義口伝に云く口氣とは題目なり、無☆稼とは弥陀等の權教方便無得道の教を交えざるなり、優鉢華之香とは 法華經なり、末法の今は題目なり、方便品に如優量歛華の事を一念三千と云えり之を案ず可し、常とは三世常住なり其口とは法華の行者の口なり出とは南無妙法蓮華經なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは 常從其口出なり云云。

法師功德品四箇の大事

第一法師功德の事

御義口伝に云く法師とは五種法師なり功德とは六根清淨の果報なり、所詮今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は六根清淨なり、されば妙法蓮華經の法の師と成つて大なる徳有るなり、功は幸と云う事なり又は惡を滅するを功と云い善を生ずるを徳と云うなり、功德とは即身成仏なり又六根清淨なり、法華經の説文の如く修行するを六根清淨と得意可きなり云云。

第二六根清淨の事

御義口伝に云く眼の功德とは法華不信の者は無間に墮在し信ずる者は成仏なりと見るを以て眼の功德とするなり、法華經を持ち奉る処に眼の八百の功德を得るなり、眼とは法華經なり此の大乘經典は諸仏の眼目と、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え

奉る者は眼の功徳を得るなり云云、耳・鼻・舌・身・意又又此くの如きなり云云。

第三又如 淨明鏡の事

御義口伝に云く法華經に鏡の譬を説く事此の明文なり、六根清淨の人は瑠璃明鏡の如く三千世界を見ると云う經文なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は明鏡に万像を浮ぶるが如く知見するなり、此の明鏡とは法華經なり別しては宝塔品なり、又は我が一心の明鏡なり、所詮瑠璃と明鏡との二の譬を説かれたり身根清淨の下なり、色心不二なれば何れも清淨の徳分なり淨とは不淨に対して淨と云うなり明とは無明に対して明と説くなり、鏡と一心なり淨は仮諦・明は空諦・鏡は中道なり悉見諸色像の悉は十界なり、所詮沖明鏡とは色心の二法、妙法蓮華經の体なり

浄明鏡じやうみやうきやうとは信心しんじんなり云云、又三千大千世界さんぜんせかいを知見ちけんするとは三世間せけんの事なり。

第四是人持此經安住希有地けうの事

御義口伝おんぎくでんに云く是人いわとは日本国にほんこくの一切衆生いっさいしゆじやうの中には法華ほっけの行者ぎやうじやなり希有地けうとは寿量品じゆりやうほんの事理じりの顯本けんぽんを指すなり、是これを又分別品ぶんべつには「伝説希有法ぶつせつけう」と説かれたり別しては南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうなり、今日蓮等いまにちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつる者の希有地けうとは末法まつぽう弘通くわうつうの明鏡めいきやうたる本尊ほんぞんなり、惣そうじては此の品の六根清淨ろくこんしやうじやうの功德くどくは十信じゆっしん相似そうじそく即そくなり对告衆たいごしゆしゆの常精進菩薩じやうじんぼさつは十信じゆっしんの第三信だいさんしんと云えり、然しかりと雖まづも末法まつぽうに於おいては法華經ほっけきやうの行者ぎやうじやを指して常精進菩薩じやうじんぼさつと心得こころう可べきなり此の經じしやの持者じしやは是則精進しやうじんの故なり。

常不輕品三十箇の大事じょうぶきょうほん
第一だいいち常不輕ふぎょうの事だいじ

7
6
3
P

御義口伝おんぎくでんに云く常の字は三世さんぜの不輕ふぎようの事なり、不輕ふぎようとは一切衆生いっさいしゆじようの
内証ないしやう所具しよぐの三因さんいん仏性ぶつしやうを指すなり、佛性ぶつしやうとは法性ほふしやうなり、法性ほふしやうとは
妙法蓮華經みやうほうれんげきやうなり云云。

第二得大勢菩薩の事

御義口伝おんぎくでんに云く得とは応身おうじんなり大とは法身ほふしんなり、勢とは報身ほうしんなり、又
得とは仮諦けたいなり大とは中道ちゆうどうなり、勢とは空諦くうたいなり、円融えんゆうの三諦さんたい三身さんじんな
り。

第三威音王の事

御義口伝おんぎくでんに云く威とは色法しきほふなり音とは心法しんほふなり王とは色心不二しきしんふにを
王と云うなり、末法まつほうに入つて南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうと唱え奉る是れ併ら
威音王いおんなり云云、其の故そのゆゑは音とは一切權教いっさいこんきやうの題目等だいもくなり威とは首題いおん
の五字ごじなり王とは法華ほつけの行者ぎやうじやなり云云、法華ほつけの題目だいもくは獅子ししの吼こゑゆる

が如く余經は余獸の音の如くなり諸經中王の故に王と云うなり、
今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る威音王仏なり云云。

第四凡有所見の事

御義口伝に云く今日本国の一切衆生を法華經の題目の機なりと
知見するなり云云。

第五我深敬汝等不敢輕慢所以者何汝等皆行菩薩道當得作仏の事

御義口伝に云く此の廿四字と妙法の五字は替われども其の意は
之れ同じ廿四字は略法華經なり。

第六但行礼拝の事

御義口伝に云く礼拝とは合掌なり合掌とは法華經なり此れ即ち
一念三千なり、故に不專読誦經典但行礼拝と云うなり。

第七乃至遠見の事

御義口伝おんぎくでんに云く上かみの凡有所見しよけんの見は内証所具ないしやうしよぐの仏性ぶつしやうを見るなり、此れは理なり遠見ししゆうの見は四衆ししゆうと云う間事なり仍つて上は心法を見る今は色法を見る色法は本門ほんもんの開悟かいご四一開会なり、心法を見るは迹門しやくもんの意又四一開会なり、遠の一字は寿量品じゆりやうほんの久遠くおんなり故に故往礼拝といえり云云。

第八心不浄者の事ふじやう

御義口伝おんぎくでんに云く謗法ぼうぼうの者は色心しきしん二法共に不浄ふじやうなり、先ず心法不浄ふじやうの文は今・此の心不浄ふじやう者なり、又身不浄ふじやうの文は譬喩品ひゆほんに「身常臭処垢穢くえ不浄ふじやう」と云えり、今日蓮等いまにちれんの類たぐいい南無妙法蓮華經なむみょうぼうれんげきやうと唱え奉る者は色心しきしん共に清浄しやうじやうなり、身浄は法師功德品ほうしきとくに云く「若持法華經ほけきやう其身甚清浄じやうじん」の文なり、心浄とは提婆品だいばに云く「淨心信敬じやうしん」と云云、淨とは法華經ほけきやうの信心しんじんなり不浄ふじやうとは謗法ぼうぼうなり云云。

第九言は無智比丘の事

御義口伝に云く此の文は法華經の明文なり、上慢の四衆不輕菩薩を
無智の比丘と罵詈せり、凡有所見の菩薩を無智と云う事は第六天の
魔王の所為なり、末法に入つて日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え
奉る者は無智の比丘と謗ぜられん事經文の明鏡なり、無智を以て
法華經の機と定めたり。

第十聞其所說皆信伏隨從の事

御義口伝に云く聞とは名字即なり所詮は而強毒之の題目なり、皆と
は上慢の四衆等なり信とは無疑曰信なり伏とは法華に歸伏するな
り隨とは心を法華經に移すなり從とは身を此の經に移すなり、所詮
今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る行者は末法の不輕菩薩
なり。

第十一於四衆中說法心無所畏の事

御義おんぎくでん口伝くでんに云く四衆ししゅうとは日本にほん国こくの中なかの一切衆生いっさいしゅじょうなり說法せつぽうとは南無なむ
妙法蓮華經みょうぼうれんげきょうなり、心無所畏しんむしよくいとは今日蓮等けふにちれんの

類たぐいい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと呼ばわる所の折伏しゃくふくなり云云。

第十二常不輕菩薩ふぎやうぼさつ豈異人乎則我身是この事

御義口伝おんぎくでんに云く過去かこの不輕菩薩ふぎやうぼさつは今日の釈尊しゃくそんなり、釈尊しゃくそんは寿量品じゆりやうぼんの教主きやうしゆなり、寿量品じゆりやうぼんの教主きやうしゆとは我等われら・法華經ほけきやうの行者ぎやうじやなり、さては我等われらが事ことなり今日蓮等いまにちれんの類たぐいいは不輕ふぎやうなり云云。

第十三常不值仏不聞法不見僧もんぼうの事

御義口伝おんぎくでんに云く此の文ふみは不輕菩薩ふぎやうぼさつを輕賤けいせんするが故ゆゑに三宝さんぼうを拜見はいけんせざる事二百億劫じやく地獄じやくに墮だちて大苦惱くのうを受くと云えり、今末法まっぽうに入つて日蓮等にちれんの類たぐいい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱え奉る者を輕賤けいせんせん事は彼かしこに過ぎたり、彼は千劫せんじやく此れは至無數劫まじぶつじやくなり末法まっぽうの仏ぼんぶとは凡夫ぼんぶなり凡夫ぼんぶ僧しんかくなり、法だいもくとは題目だいもくなり僧しんかくとは我等われら行者ぎやうじやなり、仏ぼんぶとも云われ又凡夫ぼんぶ僧しんかくとも云わるるなり、深覺しんかく・円理名えんりな之為なり仏ぼんぶの故ゆゑなり円理えんりとは法華經ほけきやう

なり云云。

第十四畢是罪已復遇常不輕菩薩の事

御義口伝おんぎくでんに云く若し法華誹謗ほっけの失を改めて信伏随従しんぷくずいじゆうする共浅く有りては無間むげんに墮だつ可きなり、先謗強きが故に依よるなり千劫無間地獄に墮だちて後に出づる期有つて又日蓮にちれんに値あう可きなり復遇日蓮にちれんなるべし。

第十五於如来滅後等の事

御義口伝おんぎくでんに云く不輕菩薩ふぎようぼさつの修行しゆぎようは此の如くなり仏の滅後めつごに五種ごしゆに妙法蓮華經みようほうれんげきようを修行しゆぎようすべしと見えたり、正まさしくは是故より下廿五字ごじは末法日蓮等まつぽうにちれんの類たぐひの事なるべし、既に是の故かくのゆえにとおさえて於如来にょらい滅後めつごと説かれたり流通るつうの品なる故なり、惣そうじては流通るつうとは未来当今みらいとうこんの為なり、法華經ほけきよう一部は一往いちおうは在世ざいせいの為なり再往さいおうは末法当今まつぽうとうこんの為なり。

り、其の故は妙法蓮華經の五字は三世の諸仏共に許して未來滅後の
者の為なり、品品の法門は題目の用なり体の妙法末法の用たらば何
ぞ用の品品別ならむや、此の法門秘す可し秘す可し、天台の綱維を
提ぐるに目と

して動かざること無きが如し」等と釈する此の意なり、妙樂大師は略して經題を挙ぐるに玄に一部を収む」と、此等を心得ざる者は末法の弘通に足らざる者なり。

第十六此品の時の不輕菩薩の体の事

御義口伝に云く不輕菩薩とは十界の衆生なり、三世常住の礼拝の行を立つるなり吐く所の語言は妙法の音声なり、獄卒が杖を取つて罪人を呵責するが体の礼拝なり敢えて輕慢せざるなり、罪人・我を責め成すと思えば不輕菩薩を呵責するなり折伏の行是なり。

第十七不輕菩薩の礼拝住处の事之に付て十四箇所の礼拝住处の事之有り

御義口伝に云く礼拝の住处とは多宝塔中の礼拝なり、其の故は塔婆とは五大の所成なり五大とは地水火風空なり此れを多宝の塔とも云

うなり、法界ほっかい広しと雖も此の五大には過ぎざるなり故に塔中たつちゅうの礼拝らいはいと相伝そうでんするなり秘す可し秘す可し云云。

第十八かいじこにゅう開示悟入礼拝住処じゅうしょの事

御義口伝おんぎくでんに云く開示悟入かいじこにゅうの四し仏知見ぶつちけんを住処じゅうしょとするなり、然る間方便品ほうべんの此の文を礼拝らいはいの住処じゅうしょと云うなり此れは内に不輕ふぎようの解を懷いだくと釈しやくせり、解とは正因しょういん仏性ぶつしょうを具足ぐそくすと釈するなり開かい佛知見ぶつちけんとは此の佛性ぶつしょうを開かしめんとて佛は出現しゅつげんし給うなり。

第十九さぜん每自作是念えんの文礼拝住処じゅうしょの事

御義口伝おんぎくでんに云く毎の字は三世さんぜなり念えんとは一切衆生いっさいしゅじやうの佛性ぶつしょうを念じ給いしなり、仍よつて速成じやうじゆふしん就佛身じゆふしんと皆当作佛みなさぶつとは同じき事なり仍よつて此の一文を相伝そうでんせり、天台大師てんだいだいしは開三顯一かいさんけんいつ○開近顯遠かいこんけんのんと釈せり秘す可し秘す可し云云。

第二十我本行菩薩道の文礼拝住処の事

御義口伝おんぎくでんに云く我とは本因妙ほんにんみょうの時を指すなり、本行菩薩道ほんぎようばさつどうの文は
不輕菩薩ふぎようばさつなり此れを礼拝じゆうしよの住処じゆうしよと指すなり。

第廿一生老病死礼拝住処の事

御義口伝おんぎくでんに云く一切衆生いつさいしゆじやうしやう生老病死しやうろうびやうしを厭離おんりせず無常遷滅むじやうの当体とうたいに迷
うに依つて後世菩提ごしやうぼだいを覚知かくちせざるなり、此を示す時煩惱ぼんのう即菩提生死じきしやうじ
即涅槃そくねはんと教うる当体とうたいを礼拝と云うなり、左右の両の手を開く時は
煩惱生死ぼんのうしやうじ上慢じやうまん不輕ふぎよう各別かくべつなり、礼拝する時両の手を合するは煩惱ぼんのう即
菩提生死ぼだいしやうじ即涅槃じきしやうじなり、上慢じやうまんの四衆ししやうの所具しよぐの仏性ぶつじやうも不輕ふぎよう所具しよぐの仏性ぶつじやう
も一種みづかの妙法みやうほうなりと礼拝するなり云云。

第廿二法性礼拝住処の事

御義口伝おんぎくでんに云く不輕菩薩ふぎようばさつ法性真如ほつしやうしんによの三因さんいん仏性ぶつじやう南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうの廿

四字に足立て無明の上慢じようまんの四衆ししゆうを拜するは蘊在衆生うんざいしゆじようの仏性ぶつじようを礼拝するなり云云。

第廿三無明礼拝住処さんむの事

御義口伝おんぎくでんに云く自他じたの隔意きやくいを立て彼は上慢じようまんの四衆ししゆう我われは不輕ふぎようと云う、
不輕ふぎようは善人ぜんにん上慢じようまんは惡人あくにんと善惡ぜんあくを立つるは無明むみなり、此に立つて礼拝の行を成す時善惡不二ぜんあくふに・邪正一如じやしやういちにの南無妙法蓮華經なむみょうぼうれんげきやうと礼拝するなり云云。

第廿四蓮華れんげの二字礼拝住処じゆうしよの事

御義口伝おんぎくでんに云く蓮華れんげとは因果いんがの二法にぽうなり、惡因あくいんあれば惡果あくくわを感じ善因ぜんいんあれば善果ぜんくわを感じず内証ないしやうには汝等なんじん三因さんいん仏性ぶつじようの善因ぜんいんあり、事に顕あらわす時は善果ぜんくわと成つて皆当作みなさぶつ仏ぶつす可べしと礼拝はいし給たまうなり云云。

第廿五実報土礼拝住処じつぼうど じゅうしよの事

御義口伝おんぎくでんに云く実報土は豎の時は菩薩ぼさつの住処じゅうしよなり、仍ふぎつて不輕菩薩ふぎようぼさつの住処じゅうしよを实報土と定めて此にて礼拝行を立て給う間実報土は礼拝の住処じゅうしよなり云云。

第廿六慈悲の二字礼拝住処じひ じゅうしよの事

御義口伝おんぎくでんに云く不輕礼拝ふぎようの行は皆当作仏みな さぶつと教うる故に慈悲じひなり、既に杖木瓦石を以て打擲すれども而強毒にこうどく之するは慈悲じひより起れり、仏心ぶつしんとは大慈悲心じひ是なりと説かれたれば礼拝の住処じゅうしよは慈悲じひなり云云。

第廿七礼拝住処分真即じゅうしよ そくの事

御義口伝おんぎくでんに云く菩薩ぼさつは分真即そくの位と定むるなり、此の位に立つて理即りそくの凡夫ぼんぷを礼拝するなり之に依つて理即りそくの凡夫ぼんぷなる間・此の授記じゆき

を受けずして無智の比丘と謗じたり云云。

第廿八究竟即礼拝住処の事

御義口伝に云く凡有所見の見は仏知見なり、仏知見を以て上慢の四衆を礼拝する間究竟即を礼拝の住処と定むるなり云云。

第廿九法界礼拝住処の事

御義口伝に云く法界に立て礼拝するなり法界とは広きに非ず狭きに非ず惣じて法とは諸法なり界とは境界なり、地獄界乃至仏界各各界を法る間不輕菩薩は不輕菩薩の界に法り上慢の四衆は四衆の界に法るなり、仍て法界が法界を礼拝するなり自他不二の礼拝なり、其の故は不輕菩薩の四衆を礼拝すれば上慢の四衆所具の仏性又不輕菩薩を礼拝するなり、鏡に向つて礼拝を成す時浮べる影又我を礼拝するなり云云。

第卅礼拝住処忍辱地の事

御義口伝おんぎくでんに云く既に上慢じょうまんの四衆罵詈瞋恚ししゅうを成して虚妄じゆきの授記じゆきと謗うずと云えども不生瞋恚ふしやうと説く間忍辱地に住して礼拝の行を立つるなり云云、初の一の住処じゅうしょは世流布るふの学者がくしゃ知れり後の十三箇所は当世とうせの学者がくしゃ知らざる事なり云云。已上十四箇条の礼拝の住処じゅうしょなり云云。

神力品八箇の大事

第一妙法蓮華經如来神力の事

文句もんくの十に云く神は不測ふしきに名け力は幹用かんゆうに名く不測ふしきは即ち天然すなわの体たい深く幹用かんゆうは則ち転変すなわの力大なり、此の中・深法じんぼうを付属ふぞくせんが為ために十種の大力けんを現げんず故に神力品じんりきほんと名く。

御義口伝おんぎくでんに云く此の妙法建華經みょうぼうは釈尊しゃくそんの妙法みょうぼうには非あらざるなり

既に此の品の時上行菩薩に付属し給う故なり、惣じて妙法蓮華經を
上行菩薩に付属し給う事は宝塔品の時事起り・寿量品の時事顯れ・
神力属累の時事竟るなり、如来とは上の寿量品の如来なり神力とは
十種の神力なり所謂妙法蓮華經の五字は神と力となり、神力とは上
の寿量品の時の如来秘密神通之力の文と同じきなり、今日蓮等の
類い南無妙法蓮華經と唱え奉る所の題目なり此の十種の神力は在世
滅後に亘るなり然りと雖も十種共に滅後に限ると心得可きなり、又
云く妙法蓮華經如来と神との力の品と心得可きなり云云、如来とは
一切衆生なり寿量品の如し、仍って釈にも如来とは上に釈し畢ぬと
云えり此の神とは山王七社等なり此の旨之を案ず可きなり云云。

第二出 広長舌の事

御義口伝に云く広とは迹門・長とは本門・舌とは中道法性なり十

法界妙法の功德なれば広と云うなり豎に高ければ長と云うなり・広
とは三千重点より已來の妙法・長とは五百塵点已來の妙法・同じく
広長舌なり云云。

第三十方世界衆宝樹下師子座上の事

御義口伝に云く十方とは十界なり此の下に於て草木成仏分明な
り、師子とは師は師匠子は弟子なり座上とは寂光土なり十界即本有
の寂光たる国土なり云云。

第四満百千歳の事

御義口伝に云く満とは法界なり百は百界なり千は千如なり
一念三千を満百千歳と説くなり云云、一時も一念も満百千歳にして
十種の神力を現ずるなり十種の神力とは十界の神力なり、十界の各
各の神力は一種の南無妙法蓮華經なり云云。

第五地皆六種震動其中衆生○衆宝樹下の事

御義口伝に云く地とは国土世間なり其中衆生とは衆生世間なり
衆宝樹下とは五陰世間なり一念三千分明なり云云。

第六娑婆是中有仏名釈迦牟尼仏の事

御義口伝に云く本化弘通の妙法蓮華經の大忍辱の力を以て弘通す
るを娑婆と云うなり、忍辱は寂光土なり此の忍辱の心を釈迦牟尼仏
と云えり娑婆とは堪忍世界と云うなり云云。

第七新人行世間能滅衆生闇の事

御義口伝に云く斯人とは上行菩薩なり世間とは大日本国なり衆生
闇とは謗法の大重病なり、能滅の件は南無妙法蓮華經なり今日蓮
等の類是なり云云。

第八畢竟住一乘ひつぎよう いちじよう○是人於仏道決定無有疑の事ぜにんのうぶつどうけつじようむうぎ

御義口伝おんぎくでんに云く畢竟ひつぎようとは広宣流布こうせんるふなり住一乘いぢじようとは南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようの一法に住す可べきなり是人うたがいとは名字即みょうじそくの凡夫ぼんぷなり仏道ぶつどうとは究竟くきよう即そくなり疑うたがいとは根本疑惑こんぽんぎわくの無明むみようを指すなり、末法まつぽう当今は此の經を受持じゆじする一行計いっけいりにして成仏じようぶつす可べしと定むるなり云云。

囑累品三箇の大事ぞくるい だいじ

第一從法座起の事だいいち ほうざ だいじ

御義口伝おんぎくでんに云く起おことは塔中たつちゆうの座ざを起ちて塔外ぼかの儀式ぎしきなり三摩さんまの付囑ふぞく有あるなり、三摩さんまの付囑ふぞくとは身口意しんくうい三業さんがい三諦さんさんかん三觀さんくわんと付囑ふぞくし給たまう事なり云云。

第二如來是一切衆生之大施主の事にょらい いっさいしゆじよう だいせしゆ

御義口伝おんぎくでんに云く如来にょらいとは本法不思議ふしぎの如来にょらいなれば此この法華經ほけきやうの行者ぎやうじやを指す可べきなり、大施主せしゆの施せとは末法まつぽう当今とうこん流布るふの南無なむ妙法蓮華經みようほうれんげきやう主しゆとは上行菩薩じやうぎやうぼさつの事ことと心得こころうべ可べきなり、然しかりと雖いえども当品たうひんは迹門しやくもん付嘱ふぞくの品ひんなり上行菩薩じやうぎやうぼさつを首しゆとして付属ふぞくし給たまう間ま上行菩薩じやうぎやうぼさつの御本意ごほんいと見たるなり云云。

第三如世尊せそん勅ふき当具奉行たうぐふぎやうの事

御義口伝おんぎくでんに云く諸しよの菩薩等ぼさつの誓言せいごんの文ぶんなり、諸天善神しよてんぜんじん菩薩等ぼさつを日蓮にちれん等の類たぐい諫曉かんぎやうするは此この文ぶんに依よるなり云云。

第一不如受持此法華經乃至一四句偈の事

御義口伝に云く法華經とは一經廿八品なり一四句偈とは題目の
五字と心得可きなり云云。

第二十喩の事

御義口伝に云く十喩とは十界なり、此の山の下に地獄界を含めり、
川流江河餓鬼・畜生を撰せり・日月の下に修羅を収めたり帝釈梵天
は天界なり・凡夫人とは人間なり、声聞とは四向四果の阿羅漢なり
・縁覚とは辟支佉中と説かれたり、菩薩は菩薩為第一と云えり仏界
は如仏為諸法王と見えたり、此の十界を十喩と挙げて教相を分別
してさて妙法蓮華經の於一仏乘より分別説三する時此くの如く挙げ
たり、仍つて一念三千の法門なり一念三千は拔苦与楽なり。

第三離一切苦一切病痛能解一切生死之縛の事

御義口伝に云く法華の心は煩惱即菩提・生死即涅槃なり離解の二字は此の説相に背くなり然るに離の字をば明とよむなり、本門壽量の慧眼開けて見れば本来本有の病痛苦惱なりと明らめたり仍つて自受用報身の智慧なり、解とは我等が生死は今始めたる生死に非ず本来本有の生死なり、始覺の思縛解くるなり云云、離解の二字は南無妙法蓮華經なり云云。

第四火不能燒水不能漂の事

御義口伝に云く火とは阿鼻の炎なり水とは紅蓮の水なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は此くの如くなるべし云云。

第五諸余怨敵皆悉摧滅の事

御義口伝に云く怨敵とは念仏・禪・真言等の謗法の人なり摧滅とは
法華折伏・破権門理なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え
奉る是なり云云。

第六若人有病得聞是經病即消滅不老不死の事

文句の十に云く此に觀解を須ゆべしと。

御義口伝に云く若人とは上仏果より下地獄の罪人まで之を撰す
可きなり、病とは三毒の煩惱・菩薩に於ても亦之れ有るなり、不老
は釈尊不死は地涌の類たり、是は滅後當今の衆生の爲に説かれた
り、然らば病とは謗法なり、此の經を受持し奉る者は病即消滅疑
無きなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は是なり云
云。

妙音品三箇の大事だいじ

第一妙音菩薩だいいち みようおんぼさつの事

御義口伝おんぎくでんに云く妙音菩薩みようおんぼさつとは十界じゅうかいの衆生しゆじやうなり、妙みよとは不思議ふしぎなり
音おんとは一切衆生の吐く所の語言ごげん音声おんじやうが妙法みようぽうの音声おんじやうなり三世常住さんぜじやうじゆう
の妙音みようおんなり、所用しやうように随したがつて諸事しよじを弁べんずるは慈悲じひなり是これを菩薩ぼさつと云う
なり、又云く妙音みようおんとは今日蓮等けふにちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみようほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつる
事は末法まっぽう当今の不思議ふしぎの音声おんじやうなり、其そのの故ゆえは煩惱ぼんのう即そく菩提ぼだい・生死しやうじ即そく
涅槃ねはんの妙音みようおんなり云云。

第二肉髻にくけい白毫びやくごうの事

御義口伝おんぎくでんに云く此この二ふたの相好さうごうは孝順師長かうじゆんしやうより起おこれり法華經ほけきやうを持たもち
奉たてまつるを以もつて一切いっさいの孝養かうようの最頂さいていとせり、又

云く此の白毫とは父の姪なり肉髻とは母の姪なり赤白二・今經に
來つて肉髻白毫の二相と顯れたり、又云く肉髻は隨緣真如の智なり
白毫は不變真如の理なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え
奉るは此等の相好を具足するなり、我等が生の始は赤色肉髻なり死
後の白骨は白毫相なり、生の始の赤色は隨緣真如の智死後の白骨は
不變真如の理なり秘す可し秘す可し云云。

第三八万四千七宝鉢の事

御義口伝に云く此の文は妙音菩薩雲雷音王仏に奉る所の供養の鉢
なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は八万四千の鉢
を三世の諸仏に供養し奉るなり、八万四千とは我等が八万四千の
塵勞なり南無妙法蓮華經と唱え奉る處にて八万四千の法門と顯る
るなり、法華經の文字は開結二經を合しては八万四千なり、又云く

八とは八苦なり四とは生老病死なり七宝とは頭上の七穴なり鉢とは
智器なり妙法の智水を受持するを以て鉢とは心得可きなり云云。

普門品五箇の大事

775P

第一無尽意菩薩の事

御義口伝に云く無尽意とは円融の三諦なり、無とは空諦尽とは仮諦
意とは中道なり、觀世音とは觀は空諦世は仮諦音は中道なり、
妙法蓮華經とは妙とは空諦法蓮華は仮諦經とは中道なり、三諦
法性の妙理を三諦の觀世音と三諦の無尽意に対して説き給うなり、
今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は末法の無尽意なり、
所詮無とは我等が死の相なり尽とは我等が生の相なり意とは我等が
命根なり、然る間一切の法門・境智

冥合等の法門意の一字に之を撰入す此の意とは中道法性なり
法性とは南無妙法蓮華經なり、仍つて意の五字なり我等が胎内の五
位の中には第五番の形なり、其の故は第五番の姿は五輪なり五輪
即ち妙法等の五字なり、此の五字又意の字なり仏意とは妙法の
五字なり此の事別に之無し、仏の意とは法華經なり是を壽量品にし
て是好良藥とて三世の諸仏の好もの良藥と説かれたり森羅三千の
諸法は意の一字には過ぎざるなり、此の仏の意を信ずるを信心とは
申すなりされば心は有分別なり俱に妙法の全体なり云云。

第二觀音妙の事

御義口伝に云く妙法の梵語は薩達摩と云うなり、薩とは妙と翻ず
此の薩の字は觀音の種子なり仍て觀音・法華眼目異名と釈せり、今
末法に入つて日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る事は觀音の

りやく
利益より天地雲泥せり、所詮観とは円観なり世とは不思議なり音と
は仏機なり観とは法界の異名なり既に円観なるが故なり、諸法実相
の観世音なれば地獄・餓鬼・畜生等の界界を不思議世界と知見する
なり、音とは諸法実相なれば衆生として実相の仏に非ずと云う事な
し、寿量品の時は十界本有と説いて無作の三身なり、観音既に
法華經を頂受せり然らば此の經受持の行者は観世音の利益より
勝れたり云云。

第三念念勿生疑の事

御義口伝に云く念念とは一の念は六凡なり一の念は四聖なり六凡
四聖の利益を施すなり疑心を生ずること勿れ云云、又云く念念と
は前念後念なり、又云く妙法を念ずるに疑を生ず可からず云云、
又三世常住の念念なり之に依つて上の文に是故衆生念と、今日蓮

等の類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと唱となえ奉たてまつりて念念ねんねん勿もつ生疑うたがいの信心しんじんに住す
可べきなり煩惱ぼんのう即そく菩提ぼだい生死しょうじ即そく涅槃ねはん疑うたがい有ある可べからざるなり云云。

第四二求兩願の事

御義口伝おんぎくでんに云く二求とは求男求女なり、求女とは世間の果報せけん かほう求男とは出世しゅつせの果報かほう仍なほつて現世安穩げんせ あんのんは求女の徳なり後生善処ごしょうぜんじょは求男の徳なり、求女は童女りゅうによが成仏じやうぶつ生死即涅槃しそくねはんを顯あらわすなり求男は提婆だいばが成仏じやうぶつ煩惱ぼんのう即菩提そくぼだいを顯あらわすなり我等われらが即身成仏そくしんじやうぶつを顯あらわすなり、今日蓮等の類いまたちれん たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱え奉る行者とな たてまつぎやうじやは求男求女を満足まんぞくして父母ふぼの成仏じやうぶつ決定けつじやうするなり云云。

第五三十三身利益の事さんじんりやく

御義口伝おんぎくでんに云く三十とは三千さんぜんの法門ほうもんなり、三身とは三諦さんたいの法門ほうもんなり云云、又云く卅三身さんじんとは十界じゅうかいに三身さんじんづつ具ぐすれば十界じゅうかいには三十・本の三身さんじんを加くわうれば卅三身さんじんなり、所詮しよせん三とは三業さんごふなり十とは十界じゅうかいなり三とは三毒さんどくなり身とは一切衆生いっさいしゆじやうの身なり、今日蓮等の類いまたちれん たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱え奉る者とな たてまつは卅三身さんじんの利益りやくなり云云。

陀羅尼品六箇の大事

777P

第一陀羅尼の事

御義口伝に云く陀羅尼とは南無妙法蓮華經なり、其の故は陀羅尼は諸仏の密語なり題目の五字三世の諸仏の秘密の密語なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは陀羅尼を弘通するなり捨惡持善の故なり云云。

第二安爾曼爾の事

御義口伝に云く安爾とは止なり・曼爾とは觀なり、此の安爾・曼爾より止觀の二法を釈し出せり、仍つて此の咒は藥王菩薩の咒なり藥王菩薩は天台の本地なり、安爾は我等が心法なり妙なり曼爾は我等が色法なり法なり

色心妙法しきしんみょうぽうと呪する時は即身成仏そくしんじょうぶつなり云云。

第三鬼子母神きしもじんの事

御義口伝おんぎくでんに云く鬼とは父なり子とは十羅刹女じゅうらせつによなり母とは伽利帝母かりたいもなり、逆次に次第しだいする時は神とは九識なり母とは八識へ出づる無明むみょうなり子とは七識六識なり鬼とは五識なり、流転門るてんの時は惡鬼あつきなり還滅門げんめつの時は善鬼ぜんきなり、仍つて十界互具じゅうかいごぐ・百界・千如ひゃくかいせんによの一念三千いちねんさんぜんを鬼子母神きしもじん十羅刹女じゅうらせつによと云うなり、三宝荒神さんぼうこうじんとは十羅刹女じゅうらせつによの事なり所謂飢渴神貪欲神障礙神いゝめる けかち とんよく しやうげなり、今法華經ほけききやうの行者ぎやうじやは三毒即三徳と転さんどくそくさんどくずる故ゆゑに三宝荒神さんぼうこうじんに非ざるなり荒神こうじんとは法華不信ほけきふしんの人なり法華經ほけききやうの行者ぎやうじやの前まへにては守護神しゆごしんなり云云。

第四受持法華名者福不可量じゆじ ほつけ めいしやふくふかりやうの事

御義口伝おんぎくでんに云く法華ほつけの名と云うは題目だいもくなり、者と云うは日本国にほんこくの

一切衆生の中には法華經の行者なり、又云く者の字は男女の中には別して女人を讃めたり女人を指して者と云うなり、十羅刹女は別して女人を本とせり例せば竜女が度脱苦衆生とて女人を苦の衆生と云うが如し藥王品の是經典者の者と同じ事なり云云。

第五 皐諦女の事

御義口伝に云く皐諦女は本地は文殊菩薩なり、山海何かなる処にても法華經の行者を守護す可しと云う經文なり、九惡一善とて皐諦女をば一善と定めたり、十惡の煩惱の時は偷盜に皐諦女は当れり逆次に次第するなり云云。

第六 五番神呪の事

御義口伝に云く五番神呪とは我等が一身なり、妙とは十羅刹女なり法とは持国天王なり蓮とは增長天王なり

り華とは広目天王なり經とは毘沙門天王なり、此の妙法の五字は五番神呪なり、五番神呪は我等が一身なり、十羅刹女の呪は妙の一字を十九句に並べたり經文には寧上・我頭上の文是れなり、持国天は法の一字を九句に並べたり經文には四十二億と云えり、四とは生老病死・十とは十界・二とは迷悟なり、持国は依報の名なり法は十界なり、增長天は蓮の一字を十三句に並べたり經文には亦皆隨喜」と云えり隨喜の言は仏界に約せり、広目天は華の一字を四十三句に並べたり經文には於諸衆生多所饒益」と云えり、毘沙門天は經の一字を六句に並べたり經文には持是經者」等の文是なり云云。

嚴王品三箇の大事

第一妙莊嚴王の事 文句の十に云く妙莊嚴とは妙法功德をもつて諸根を莊嚴するなりと。

御義口伝に云く妙とは妙法の功德なり、諸根とは六根なり此の妙法の功德を以て六根を莊嚴す可き名なり、所詮妙とは空諦なり莊嚴とは仮諦なり王とは中道なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は悉く妙莊嚴王なり云云。

第二浮木孔の事

御義口伝に云く孔とは小孔大孔の二之れ有り、小孔とは四十余年の經教なり大孔とは法華經の題目なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは大孔なり、一切衆生は一眼の龜なり梅檀の浮木とは法華經なり、生死の大海に南無妙法蓮華經の大孔ある浮木は法華經に之在り云云。

第三当品邪見即正の事

御義口伝おんぎくでんに云くい嚴王の邪見じゃけん二人の教化きやうけに依りよ功德くどくを得て邪を改あらためて
正とせり、止の二に辺邪みな皆中正と云う

是なり、今・日本国^{にほんこく}の一切衆生^{いっさいしゆじやう}は邪見^{じゃけん}にして嚴王^{げんわう}なり、日蓮^{にちれん}等の類^{たぐ}い南無妙法蓮華經^{なむみょうほうれんげきやう}と唱え奉^{とな たてまつ}る者は二人^{ふにん}の如^{ごと}し終^{つい}に畢竟住^{ひつぎやう}一乘^{いちじやう}して邪見^{じゃけん}即正^{じやう}なる可^べし云云。

普賢品六箇の大事^{ふげん だいいじ}

第一^{だいいち}普賢菩薩^{ふげんぼさつ}の事 文句^{もんく}の十^{じゅう}に云^いく勸発^{かんぱつ}とは恋法の辞^じなりと。

御義口伝^{おんぎくでん}に云^いく勸発^{かんぱつ}とは勸^けは化他^{けた}・発^{はつ}は自行^{じきやう}なり、普^ふとは諸法^{しよほう}実相^{じつさう}迹門^{しやくもん}の不变^{ふへん}真如^{しんによ}の理^りなり、賢^{けん}とは智慧^{ちえ}の義^ぎなり本門^{ほんもん}の随縁^{ずいえん}真如^{しんによ}の智^ちなり、然^{しか}る間經^{きやうまつ}末^{まつ}に來^きつて本・迹二門^{しやくにんもん}を恋法^{れんぽう}し給^{たま}えり、所詮^{しよせん}今日蓮^{けふにちれん}等の類^{たぐ}い南無妙法蓮華經^{なむみょうほうれんげきやう}と唱^{とな}え奉^{たてまつ}る者は普賢菩薩^{ふげんぼさつ}の守護^{しゆご}なり云云。

第二若法華經行闍浮提^{ほけきやう えんぶだい}の事

御義口伝^{おんぎくでん}に云^いく此^この法華經^{ほけきやう}を闍浮提^{えんぶだい}に行^いずることは普賢菩薩^{ふげんぼさつ}の威神^{いしん}

の力に依るなり、此の經の広宣流布することは普賢菩薩の守護なるべきなり云云。

第三八万四千天女の事

御義口伝に云く八万四千の塵勞門なり、是れ即ち煩惱即菩提・生死即涅槃なり七宝の冠とは頭上の七穴なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は是なり云云。

第四是人命終為千仏授手の事

御義口伝に云く法華不信の人は命終の時地獄に墮在す可し、經に云く「若人不信毀謗・此經即斷・一切世間・仏種其人命終・入阿鼻獄」と、法華經の行者は命終して成仏す可し是人命終為千仏授手の文是なり、千仏とは千如の法門なり謗法の人は獄卒來迎し法華經の行者は千仏來迎し給うべし、今日蓮等の類い南無

妙法蓮華經みょうぼうれんげきやうと唱え奉る者とな たてまつは千仏の來迎疑らいじううたがい無き者なり云云。

第五閻浮提内広令流布えんぶだいの事るふ

御義口伝おんぎくでんに云く此の内の字は東西北の三方を嫌きらえる文なり、広令流布ひろにやうりふとは法華經ほけきやうは南閻浮提計えんぶだいけいりに流布りふす可べしと云う經文きやうもんなり、此の内の字これ之を案ず可べし、今日蓮等けふにちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうぼうれんげきやうと唱え奉る者とな たてまつは深く之これを思おもう可べきなり云云。

第六此人不久当詣道場とうけいどうじやうの事

御義口伝おんぎくでんに云く此人いわとは法華經ほけきやうの行者ぎやうじやなり、法華經ほけきやうを持たもち奉たてまつる処ところを當詣道場とうけいどうじやうと云うなり此を去かつて彼かしこに行くには非あらざるなり、道場どうじやうとは十界じゅうかいの衆生しゆじやうの住処じゅうしょを云うなり、今日蓮等けふにちれんの類たぐい南無妙法蓮華經みょうぼうれんげきやうと唱え奉たてまつる者となの住処じゅうしょは山谷曠野さんやこうや皆寂光土みなじやくかうどなり此これを道場どうじやうと云うなり、此因無易故云直至じきしの釈こ之これを思おもう可べし、此の品の時

最上第一さいじょうだいいちの相伝そうでんあり、釈尊しやくそん八箇年はちかねんの法華經ほけきょうを八字とじに留めて末代まつだいの衆生しゆじやうに譲ゆずり給たまうなり八字とは当起遠迎たうきえん当如敬仏たうきふつの文なり、

此の文までにて經は終るなり当そのの字は未來みらいなり当起遠迎とは必ず仏の如ごとくに法華經ほけきょうの行者ぎやうじやを敬うやもふ可べしと云う經文きやうもんなり、法師品ほうしほんには於此經卷きやうかん敬視如仏と云えり、八年の御說法ぎとふほうの口開きは南無なむ妙法蓮華經みやうほうれんげきやう方便品ほうべんの諸仏智慧終しよぶつちえりは当起遠迎当如敬仏の八字なり、但此の八字を以て法華ほつけ一部の要路とせりされば文句もんくの十に云く雪起遠迎当如敬仏よりは其その信者の功德くどくを結むすぶことを述じゆつす」と、

法華ほつけ一部は信の一字を以て本とせり云云。

尋たずねて云く今の法華經ほけきょうに於て序品じよほんには首はじめに如の字を置き終りの普賢品ふげんには去の字を置く羅什三藏らじやうさんざうの心地何しんじいかなる表事へうもんの法門ほうもんぞや、答いて云く今の經きやうの法体ほつたいは実相じつさうと久遠くおんとの二義を以て正体なと為すなり始

の如の字は実相^{じつそう}を表し終りの去の字は久遠^{くおん}を表するなり、其^{その}の故^{ゆえ}は
実相^{じつそう}は理なり久遠^{くおん}は事なり理は空の義なり空は如の義なり之に

依よつてて如をば理空に相配するなり、釈いわに云く、如は不具ふぐに名なく即すなわち空の義なり」と久遠くおんは事なり其そのの故ゆえは本門ほんもん・寿量じゅりやうの心は事円さんぜんの三千を以て正意なと為すなり、去は久遠くおんに当るなり去は開の義如は合の義なり開は分別ぶんべつの心なり合は無分別ぶんべつの意なり、此の開合を生仏に配当する時は合は仏界ぶつがい開は衆生しゆじやうなり、序品じよほんの始に如の字を顯あらわしたるは生仏不二の義なり、迹門しやくもんは不二の分なり不變真如ふへんしんによなる故なり、此の如是我聞によぜがもんの如をば不變真如ふへんしんによの如と習ならうなり、空假中の三諦さんたいには如は空・是は中・我聞は仮諦けたい・迹門は空を面と為す故ゆえに不二の上の而かみなり、然しかる間而じに二の義を顯あらわす時・同聞衆を別に列つらぬるなり、さて本門ほんもんの終りの去は隨緣真如ずいえんしんによにして而じに二の分なり仇あつて去の字を置くなり、作礼而去さらいにこの去は隨緣真如ずいえんしんによと約束やくそくするなり、本門ほんもんは而じに二の上の不二なり而じに二不二・常同常別・古今こうに法爾ほうにの釈これ之を思おもふ可べし、此の去の字は彼

の五千起去の去と習うなり、其の故は五千とは五住の煩惱と相伝する間五住の煩惱が己心の仏を礼して去ると云う義なり、如去の二字は生死の二法なり、伝教云く、丟は無来之如来無去之円去」等と云云。

如の字は一切法是心の義・去の字は心は一切法の義なり、一切法是心は迹門の不変真如なり心は一切法は本門の随縁真如なり、然る間・法界を一心に縮むるは如の義なり法界に開くは去の義なり三諦三觀の口決相承と意同じ云云。

一義に云く如は実なり去は相なり実は心王相は心数なり、又諸法は去なり実相は如なり今經一部の始終諸法実相の四字に習うとは是なり、釈に云く「今經は何を以て体と爲るや諸法実相を以て体と爲す」と、今一重立ち入つて日蓮が修行に配当せば如とは如説修行

の如なり・其そのの故は結要けつよう五字ごじの付属ふぞくを宣のべ給たまう時・宝塔品ほうとうぼんに事起り
声徹しょうてつ下方つげほうし近令有在・遠令有在と云うて有在の二字を以て本化ほんげ・
迹化しゃつけの付属ふぞくを宣のぶるなり仍よつて本門ほんもんの密序みぎょと習ならうなり、さて二仏・
並座びやうざ・分身ふんじんの諸仏しよぶつ集じまつて是好良藥ぜこうりやうやくの妙法蓮華經みょうほうれんげきやうを説とき顯あらわし釈尊しゃくそん
十種じゆしゆの神力じんりきを現げんじて四句に

結び上行菩薩じやうぎやうぼさつに付属ふぞくし給たまう英ふぞくの付属ふぞくとは妙法みやうほうの首題しゅだいなり惣別しゆべつの付属ふぞく塔中たつちゆう塔外たつがい之これを思おもふ可べし、之これに依よつて涌出ゆじゆつ寿量じゆりやうに事顯あらわれ神力じんりきぞくるい属累ぞくるいに事竟おわるなり、此この妙法みやうほう等らの五字ごじを末法まつぽう・白法びやくぽう隱没おんもつの時とき上行菩薩じやうぎやうぼさつ・御出世しゆつせ有あつて五種ごしゆの修行しゆぎやうの中なかには四種ししゆを略りやくして但受持じゆじの一行いっけうにして成仏じやうぶつす可べしと經文きやうもんに親まのあたり之これ有あり、夫それば神力じんりき品ほんに云いく・於我滅度めつど後ご・応受持おうじゆじ斯經しきやう・是人ぜにん於お仏道ぶつどう・決定けつじやう無有疑むうぎ」云云此この文明ぶんめい白はくなり、仍よつて此この文ぶんをば仏ぶつの廻向えきやうの文ぶんと習ならふなり、然しかる間かん此この經きやうを受持じゆじし奉たてまつる心地しんじは如說修行によせつしゆぎやうの如ごとなり此この如ごとの心地しんじに妙法みやうほう等らの五字ごじを受持じゆじし奉たてまつる南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつれば忽たちまち無明むみやう煩惱ぼんのうの病やまを悉ことごとく去さつて妙覺みやうかく極果ごくこの膚はだえを瑩みがく事を顯あらわす故ゆえにさて去さの字じを終はりに結むすぶなり、仍よつて上うへに受持じゆじ仏語ぶつごと説はなけり煩惱ぼんのう惡覺あくかくの魔王まおうも諸法しよほう実相じつそうの光てるに照てらされて一心いっしん一念いちねん・遍へん於お法界ほっかいと觀達くわんたつせらる、然しかる

間還かえつて己心こしんの仏を礼す故ゆえに作礼而去さらいにことは説き給たまうなり、彼彼三千互遍また亦爾またの釈之これを思おもう可べし秘ひす可べし秘ひす可べし唯受ただ一人の相承そうじょうなり、口外くわいす可べからず然しからば此の去の字は不去而去の去と相伝そうでんするを以て至極しごくと為なすなり云云。

無量義經六箇の大事むりやうぎきやう だいいじ

第一無量義經德行品第一の事だいいち むりやうぎきやう とくぎやう だいいち

御義口伝おんぎくでんに云く無量義の三字を本・迹・觀心かんじんに配する事、初の無の字は迹門しやくもんなり其の故は理円を面とし不變真如の旨を談だんず、迹門は無常むじやうの摂属しやくぞくなり常住を談だんぜず但し是法住法位世間相常住じやうじやうと明あきらかせども是れは理常住じやうじやうにして事常住じやうじやうに非ず理常住じやうじやうの相を談だんずるなり、空は無の義なり但し此の無は断無の無に非ず相即そうそくの上の空

なる処ところを無むと云いい空くうと云いなり、円えんの上うへにて是これを沙汰さたするなり、
本門ほんもんの事こと常住じょうじゅう無作むさの三身さんじんに對たいして迹門しやくもんを無常むじょうと云いなり、守護章しゆご
には有為うゐの報ほう仏ぶつは夢中むちゅうの權果ごんか無作むさの三身さんじんは覺前かくぜんの実じつ仏ぶつと云い云い、
今日蓮等こんにちれんとうの類たぐひ南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやう

と唱え奉る者は無作の三身覚前の実仏なり云云。

第二量の字の事

御義口伝に云く量の字を本門に配当する事は量とは權授の義なり、本門の心は無作三身を談ず此の無作三身とは仏の上ばかりにて之を云わず、森羅方法を自受用身の自体顯照と談ずる故に迹門にして不変真如の理円を明かす処を改めずして己が当体無作三身と沙汰するが本門事円三千の意なり、是れ即ち桜梅桃李の己己の当体を改めずして無作三身と開見すれば是れ即ち量の義なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は無作三身の本主なり云云。

第三義の字の事

御義口伝に云く義とは觀心なり、其の故は文は教相義は觀心なり所説の文字を心地に沙汰するを義と云うなり、就中無量義は一法

より無量の義を出生すと談ず、能生は義所生は無量なり是は
無量義經の能生所生なり、法華經と無量義經とを相對する能所に
非ざるなり無相・不相名為実相の理より万法を開出すと云う、源
が実相なる故に觀心と云うなり、此くの如く無量義の三字を迹門・
本門觀心に配當する事は法華の妙法等の題と今の無量義の題と一
体不二の序正なりと相承の心を相伝せむが為なり。

第四処の一字の事

御義口伝に云く処の一字は法華經なり、三藏教と通教とは無の字に
摂し別教は量の字に摂し円教は義の字に摂するなり、此の爾前の
四教を所生と定めさて序分の此の經を能生と定めたり、能生を
且く処と云い所生を無量義と定めたり、仍つて權教に相對して無量
義処を沙汰するなり云云。

第五 無量義処の事

御義口伝に云く法華經八卷は処なり無量義經は無量義なり、無量義は三諦三觀三身三乘三業なり法華經に於一仏乗分別說三と説いて法華の爲の序分と成るなり、爰を以て隔別の三諦は無得道円融の三諦は得道と定むる故に四十余年未顕眞実と破し給えり云云。

第六無量義処の事

御義口伝に云く無量義処とは一念三千なり、十界各各無量に義処たり、此の当体其の儘実相の一理より外は之れ無きを諸法実相と説かれたり、其の爲の序なる故に一念三千の序として無量義処と云うなり、処は一念無量義は三千なり、我等衆生朝夕吐く所の言語も依正二法共に無量に義処りたり、此れを妙法蓮華經とは云うなり然る間法華の爲の序分開經なり云云。

普賢經五箇の大事ふげん だいじ

第一普賢經の事 題号に云く仏說觀普賢菩薩行法經と云云。

御義口伝に云く此の法華經は十界互具三千具足の法体なれば三千
十界悉く普賢なり、法界一法として漏るる義之れ無し故に普賢な
り、妙法の十界蓮華の十界なれば依正の二法悉く法華經なりと結し
納めたる經なれば此の普賢經を結經とは云うなり、然らば十界を
妙法蓮華經と結し合せたり云云。

第二不斷煩惱不離五欲の事ふだんぼんのう

御義口伝に云く此の文は煩惱即菩提・生死即涅槃を説かれたり、
法華の行者は貪欲は貪欲のまま瞋恚は瞋恚のまま愚癡は愚癡のまま
普賢菩薩の行法なりと心得可きなり云云。

第三六念の事

念仏 念法 念僧 念戒 念施 念天

御義口伝に云く念仏とは唯我一人の導師なり、念法とは滅後は題目の五字なり念僧とは末法にては凡夫僧なり、念戒とは是名持戒なり、念施とは一切衆生に題目を授与するなり、念天とは諸天昼夜常為法故而衛護之の意なり、末法当今の行者の上なり之を思う可きなり云云。

第四一切業障海皆從妄想生若欲懺悔者端坐思実相衆罪如霜露慧日能消除の事

御義口伝に云く衆罪とは六根に於て業障降り下る事は霜露の如し、然りと雖も慧日を以て能く消除すと云えり、慧日とは末法当今日蓮所弘の南無妙法蓮華經なり、慧日とは仏に約し法に約するなり、釈尊をば慧日大聖尊と申すなり法華經を又如日天子能除諸闇と説かれたり、末法の導師を如日月光明等と説かれたり。

第五 正法治国不邪枉人民の事

御義口伝に云く末法の正法とは南無妙法蓮華經なり、此の五字は一切衆生をたばらかさぬ秘法なり、正法を天下一同に信仰せば此の国安穩ならむ、されば玄義に云く若し此の法に依れば即ち天下泰平」と、此の法とは法華經なり法華經を信仰せば天下安全たらむ事疑有る可からざるなり。

已上二百三十一箇条の大事

廿八品に一文充の大事

合せて廿八箇条の大事秘す可し云

云

序品

十界也 始覚

於無漏実相 心已得通達

妙法 みょうほう

不變 ふへん

隨緣 ずいえん

此の文・我が心本より覺さとりなりと始めて覺はとるを成仏じやうぶつと云うなり所謂いわゆる
南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと始めて覺さる題目だいもくなり。

真諦 しんたい

方便品 ほうべん

是法住法位 ぜぽうじゅうほうい

世間相常住 せけんじょうじゅう

迹門 しやくもん

本門 ほんもん

此の文衆生の心は本来仏なりと説くを常住じょうじゅうと云うなり万法元より
覺さとりの体なり。

受持人 じゅぢにん

大白牛車 だいびやくこ

譬喩品 ひゆほん

乘此宝乘 じゆぢほうじゆ

凡夫御極 ぼんぶごぎょく
直至道場 じきしどうじやう

題目 だいもく

極果ノ処也 ごくかふしよ

此の文は自身じしんの仏乗ぶつじやうを悟しんつて自身じしんの宮殿に入るなり所謂南無
妙法蓮華經みやうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつるは自身じしんの宮殿に入るなり。

信解品 しんげ

一念三千 いちねんさんぜん
無上宝珠 むじやうほうしゆ

不求自得 ふぐじとく

題目 だいもく

此の文は無始色心本是理性妙境・妙智なれば己心より外に実相を求む可からず所謂南無妙法蓮華經は不求自得なり。

藥草喻品

三世題目一切衆生

又諸弘子專心仏道常行慈悲自知作仏此の文は当来の成仏顯然なり所謂南無妙法蓮華經なり。

授記品 じゆき

十界実相仏 じゆつかいじつそう

三世常住 さんぜじやうじゆう

煩惱即菩提 ぼんのうそくぼだい

生死即涅槃 しやうじそくねはん

於諸仏所常修梵行於無量劫奉持佛法 しよぶつしよじやうしゆうぼんぎやうおむりやうこうほうじぶつぽう

一切業障 いっさいごうしやう

此の文に常と云い無量劫と云う即ち本有所具の妙法なり所謂南無 いむりやうこう すなわ ほんぬしよぐ みやうほう いわゆる なむ

妙法蓮華經なり。 みやうほうれんげきやう

化城喻品 けじやうゆぽん

三千塵点 さんぜんじんてん

觀彼久遠 猶如今日 くおん さんぜん ながおん

在世 さいせい

此の文は元初の一念一法界より外に更に六道四聖とて有る可からざるなり所謂南無妙法蓮華經は三世一念なり今日とは末法を指して今日と云うなり。

五百品

にほんこく いっさいしじょう
日本 国 一切衆生

だいもく ごほんぜん
題目 御本尊

ほんのうそく ぼだい
心法色法 煩惱即菩提 生死即

ねはん
涅槃

ひんじん
貧人

見此珠

かんき
其心大歡喜

しんしん
信心ノカタチ

なむ 此の文は始めて わがこころ
南無妙法蓮華經は 歡喜の 中 の大歡喜なり。
本来の仏なりと知るを即ち大歡喜と名く所謂

にんきほん
人記品

いっぶ
一部

あんじゆ 安住於 仏道

いしゆ 以求 無上道

くわく 広略

だいもく
要目

此の文は本来相即の三身の妙理を初めて覚知するを求無上道とは云うなり所謂南無妙法蓮華經なり。

法師品
ほうしほん

寂光
じやくこう

当知如是人自在所欲生

此の文は我等が一念の妄心の外に仏心無し九界の生死が真如なれば即ち自在なり所謂南無妙法蓮華經と唱え奉る即ち自在なり。

宝塔品
ほうとうほん

受持也
じゆぢ

則為疾得

無上仏道
むじやうぶつどう

凡夫即極也
ぼんぷそく

此の文は持者即ち円頓の妙戒なれば等妙二覚一念開悟なれば疾得と云うなり所謂南無妙法蓮華經と唱え奉るは疾得なり。

提婆品
だいば

忽然之間 變成男子
こつねん

此の文の心は三惑の全体三諦と悟るを變と説くなり所謂南無妙法蓮華經と唱え奉るは三惑即三徳なり。

勸持品

色法心法

我不愛身命但惜無上道

此の文は色心幻化四大五陰元より惡習なり然るに本覺真如は常住なり所謂南無妙法蓮華經なり。

安樂行品 あんらくぎょうぽん

一切諸法いっさいしよぽう空無くうむ所有しやう無有むいう常住じやうじゅう亦無起滅やくむきめつ

此の文は元より常住じやうじゅうの妙法みやうぽうなる故ゆゑに六道ろくどうの生滅しやうめつ本来ふしう不生だんと談だんず故ゆゑに起滅きめつ無むし所謂いゝゆる南無妙法蓮華經なむみやうぽうれんげきやう本来無起滅むじゅうめつなり云云。

涌出品 ゆじゅうぽん

昼夜常精進しやうじん 為求ぶつどう仏道故

此の文は一念いちねんに億劫いゝくせつの辛勞しんろうを尽せば本来無作むさの三身さんじん念念ねんねんに起おこるなり所謂いゝゆる南無妙法蓮華經なむみやうぽうれんげきやうは精進しやうじん行なり。

寿量品 じゅうりやうぽん

如来にょらい如実知見にょじつちけん三界さんがい之相し無有むいう生死しやうじ

此の文は方法むさを無作むさの三身さんじんと見るを如実知見にょじつちけんと云う無作むさの覺体かくたいなれば何いかに依よつて生死しやうじ有りと云わんか。

分別功德品 ぶんべつくどく

持此一心福 いっしん

願求無上道 がんぐむじょうどう

此の文は一切の万行万善但一心本覺の三身を顕さんが為なり、善惡 いっさい まんぎようばんぜん いっしん ほんがくさんじん あらわ
一如なれば一心福とは云うなり所謂南無妙法蓮華經は一心福なり。 いっしん

隨喜功德品 ずいきくどく

言此經深妙 千万劫難遇

此の文は、一切即妙法なれば一心の源底を顯す事甚妙無外なり
所謂南無妙法蓮華經不思議なり。

法師功德品

靜散

入禪出禪者 聞香悉能知

不變死 隨緣生 十界

此の文は一心靜なる時は入禪、一心散亂する時は出禪、靜散即本覺
と知るを悉く知るとは云うなり所謂南無妙法蓮華經は入禪出禪な
り云云。

不輕品

应当一心広說此經世世值仏疾成仏道

此の文は法界皆本来三諦一心に具わる事を顕せば己心の念念・仏に
値う事を即ち世世値仏と云うなり所謂南無妙法蓮華經是なり。

神力品
じんりきほん

斷破元品無明
がんばんむみょう

是人於仏道決定無有疑
ぜにんのうぶつどうけつじうむうぎ

十如是

此の文は十界各各本有本覺の十如是なれば地獄も仏界も一如なれ
ば成仏決定するなり所謂南無妙法蓮華經の受持なり云云。

囑累品

信にょらい如来知慧者当演說此法華經えんぜつ ほけきょう

此の文は釈迦如来の悟の如く一切衆生の悟と不同有ること無し故にしやかにょらい こども いっさいしゆじょう ふどうあ ゆえ
如来の智慧を信ずるは即ち妙法なり所謂南無妙法蓮華經の智慧なにょらい ちえ すなわ みようほう いわゆる なむ みようほうれんげきょう ちえ
り云云。

葉王品やくおうほん

是真精進しやうじん是名真法供養如来くよう にょらい

此の文は色香中道の觀念懈ること無し是を即ち真法供養如来としきこう ちゅうどう かんねん おこた これ すなわ くよう にょらい
名くるなり所謂南無妙法蓮華經唯一乗の故に真法なり世間もいわゆる なむ みようほうれんげきょう ゆい いちじよう ゆえ せけん
出世も純一実相なり云云。しゅっせ じつそう

妙音品みようおん

久遠くおん 寂光土じやくこうど

身不動搖而入三昧さんまい

此の文は即ち久遠を悟るを身不動揺と云うなり惑障を尽くさずして寂光に入るを三昧とは云うなり所謂南無妙法蓮華經の三昧なり云云。

普門品

福智

慈眼視衆生福聚海無量

此の文は法界の依正妙法なる故に平等一子の慈悲なり依正福智共に無量なり所謂南無妙法蓮華經福智の二法なり云云。

陀羅尼品

未來顯 みらい

修行是經者 しゆぎようぜきようしや

令得安穩 あんのん

現在顯 げんざい

此の文は五種妙行を修すれば悟の道に入つて險路に入らざるなり
此れは安穩と云う事なり、所謂南無妙法蓮華經即安穩なり云云。

嚴王品

宿福深厚生値仏法 じんこうしやうちぶつぽう

此の文は一句妙法に結縁すれば億劫にも失せずして大乘無価の
宝珠を研き顯すを生値仏法と云うなり所謂南無妙法蓮華經の仏法
なり。

勸発品 かんぱつぽん

是人命終為千仏授手令不恐怖不墮惡趣 みようじゆう

此の文は妙法みょうぼうを悟れば分段の身即常寂光そくじょうじやつこうと顕るるを命終みょうじゅうと云う
なり千仏とは千如・御手みてとは千如・具足ぐそくなり故に不墮惡趣だあくしゅなり所謂いわれる

南無妙法蓮華經なむみょうぼうれんげきやうの御手みてなり。

已上品品別伝畢じようほん べつてん

一廿八品悉南無妙法蓮華經なむみょうぼうれんげきやうの事

疏じょの十に云く惣いっさうじて一經を結するに唯四ただのみ其その枢柄すうへいを撮とつて之これを
授与じゅよすと。

御義口伝おんぎくでんに云くい一經いつぎようとは本・迹二十八品なり唯四ただとは名用体宗の
四なり枢柄すうへいとは唯題目ただだいもくの五字ごじなり授与じゅよとは上行菩薩じやうぎやうぼさつに授与じゅよするな
り之とは妙法蓮華經みやうほうれんげきなり云云、此の积分明ふんみやうなり今日蓮等いまにちれんの弘通くわつうの
南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきは体なり心なり廿八品は用なり廿八品は助行なり
題目だいもくは正行しやうぎやうなり正行しやうぎやうに助行じゆぎやうを撰せんす可べきなり云云。

一 無量義經の事

御義口伝おんぎくでんに云くい妙法みやうほうの序分じよぶん・無量義經むりやうぎきやうなれば十界じゆつかい悉く妙法蓮華經みやうほうれんげき
の序分じよぶんなり。

一 序品

御義口伝おんぎくでんに云くい如是によぜ我聞がもんの四字よを能くよく能くよく心得こころえれば一經いつぎよう無量の義むりやうのぎ
は知られ易やすきなり十界じゆつかい互具いこぐ三千具足さんぜんぐそくの妙と聞くなり此の所聞しよもんは
妙法蓮華みやうほうれんげと聞く故ゆえに妙法みやうほうの法界互具ほつかいこぐにして三千清淨さんぜんしやうじやうなり此の四字

を以て一經いつきやうの始終しじゆうに亘わたるなり廿八品の文・句句の義理ぎり我が身の上
の法門ほうもんと聞くを如是によぜ我聞がもんとは云うなり、其その聞物は南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやう
なりされば皆成かいじやうぶつじやう仏道と云うなり此の皆成かいじやうの二字は十界三千じゅうつかいさんぜんに亘わた
可べきなり妙法みょうほうの皆成かいじやうなるが故なり又仏とは我が一心いつしんなり是れ又
十界三千じゅうつかいさんぜんの心心なり、道とは能通なすに名なくる故ゆえに十界じゅうつかいの心心に通ずる
なり此の時皆成かいじやうぶつじやう仏道と顯あらわるるなり皆成かいじやうぶつじやう仏道の法は南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやう
なり。

一 方便品ほうべん

御義口伝おんぎくでんに云く此の品には十如是じゆのぜを説く此の十如是じゆのぜとは十界じゅうつかいなり此
の方便ほうべんとは十界三千じゅうつかいさんぜんなり。既に妙法蓮華經みょうほうれんげきやうを頂いたく故ゆえに十方じつぱう仏土
中唯有一乘法ゆいいういちじやうなり妙法みょうほうの方便ほうべん蓮華れんげの方便ほうべんなれば秘妙しやうじやうなり清淨しやうじやうな
り妙法みょうほうの五字ごじは九識方便ほうべんは八識はうし已下いかなり九識は悟ごなり八識はうし已下いかは

迷なり、妙法蓮華經方便品と題したれば迷悟不二なり森羅三千の
諸法此の妙法蓮華經方便に非ずと云う事無きなり品は義類同なり、
義とは三千なり類とは互具なり同とは一念なり此の一念三千を指
して品と云うなり此の一念三千を三仏合点し給えり仍つて品品に題
せり南無妙法蓮華經の信

一念いちねんより三千具足さんぜんぐそくと聞えたり云云。

譬喩品ひゆほん

御義口伝おんぎくでんに云く此の品の大白牛車だいびやくごしやとは無明癡惑本是法性むみょうちわくほんしやうの明闇みょうあん一体の義なり、即ち三千具足さんぜんぐそくの一乗いちじやうをかかげたる車なれば明闇みょうあん一体にして三千具足さんぜんぐそくの義を顯すなり、法界ほっかいに満したれども一法なるをいちじやう一乗と云うなり、此の一乗いちじやうとは諸乗具足しよじやうぐそくの一乗いちじやうなり諸法具足しよほうぐそくの一法いちぽうなり故に一の白牛びやくごなり又白牛びやくごは一なりといえども無量むりやうの白牛びやくごなり一切衆生の体いっさいしゆじやう大白牛車だいびやくごしやなるが故なり、然らば妙法みやうほうの大白牛車だいびやくごしやに妙法みやうほうの十界三千じゆつかいさんぜんの衆生しゆじやう乗じたり蓮華れんげの大白牛車だいびやくごしやなれば十界三千じゆつかいさんぜんの衆生しゆじやうも蓮華れんげにして清淨しやうじやうなり南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうの法体ほつたい此くの如し。

信解品しんげ

御義口伝おんぎくでんに云く此の信解しんげは中根の四大声聞しやうもんの領解りやうげに限るに非ずあら

妙法みょうほうの信解しんげなるが故ゆえに十界三千じゅうかいさんぜんの信解しんげなり、蓮華れんげの信解しんげなるが故ゆえに十界三千じゅうかいさんぜんの清淨しょうじょうの信解しんげなり此この信解しんげの体たいとは南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやう是なり云云。

一 藥草喩品やくそうゆほん

御義口伝おんぎくでんに云いく妙法みょうほうの藥草やくそうなれば十界三千じゅうかいさんぜんの毒草どくそう・蓮華れんげの藥草やくそうなれば本来しょうじょう清淨しょうじょうなり、清淨しょうじょうなれば仏ぶつなり此この仏ぶつの説法せっぽうとは南無なむ妙法蓮華經みょうほうれんげきやうなり云云、されば此この品ひんには種相体性しゅさうたいせうの種しゅの字じに種類種しゅるいじゅ・相体種さうたいしゅの二にの開會かいえ之これ有り、相對種さうたいしゅとは三毒さんどく即すなはち三徳さんとくなり種類種しゅるいじゅとは始はの種しゅの字じは十界三千じゅうかいさんぜんなり、類たぐいとは互具ぎょくなり下したの種しゅの字じは南無なむ妙法蓮華經みょうほうれんげきやうなり種類種しゅるいじゅなり、十界三千じゅうかいさんぜんの草木そうもく各各かくかくなれども只南無ただなむ妙法蓮華經みょうほうれんげきやうの一種いっしゅなり、毒草どくそうの毒どくもなきなり清淨しょうじょうの草木そうもくにして藥草やくそうなり云云。

御義口伝に云く十界已已の当体の言語は妙法蓮華の授記なれば
清淨の授記なり、清淨の授記なれば十界三千の仏なり、爰を以て
仏南無妙法蓮華經と授記するなり云云。

一 化城喩品

御義口伝に云く妙法の化城なれば十界同時の無常なり、蓮華の
化城なれば十界三千の開落なり、常住無常俱に妙法蓮華經の全体
なり、化城宝処は生死本有なり生死本有の体とは南無妙法蓮華經
なり、釈に云く起は是れ法性の起滅は是れ法性の滅」と。

一 五百品

御義口伝に云く此の品には五百弟子授記作仏すと現文に見えたり、
然りと雖も妙法の五百なれば十界三千皆五百の弟子なり、蓮華の
弟子なれば又清淨なり、所詮十界三千南無妙法蓮華經の弟子に

非あらずと云う事なし此の經の授記じゆき是これなり云云。

一 人記品にんきほん

御義口伝おんぎくでんに云く此の品には学無学がくむがくの聖者せいじや来つて成仏じやうぶつするなり、既に妙法頂戴みやうほうちやうだいの学無学がくむがくなれば十界互具じゆつかいごぐ三千具足の学無学がくむがくなり妙法の学無学がくむがくなるが故に不思議ふしぎの十界じゆつかいに煩惱ぼんのう未だ尽くさざるなり蓮華れんげの学無学がくむがくなれば十界三千清淨じゆつかいさんぜんしやうじやうの開落かいらくなり、此の学無学がくむがく何物ぞや学とは法なり無学とは妙なり所謂南無妙法蓮華經いゝゆるなむみやうほうれんげきやうなり云云。

一 法師品ほうしほん

御義口伝おんぎくでんに云く妙法の法師ほうしなれば十界皆妙法受持じゆつかいみなみやうほうじゆじの一句一偈いっくいちげの法師ほうしなり、蓮華れんげの法師ほうしなれば十界三千清淨じゆつかいさんぜんしやうじやうの法師ほうしなり、十界衆生じゆつかいしゆじやうの色法のうじは能持のうじの人なり十界の心性しんしよは所持しよじの法なり、仍よつて色心共しきしんに法師ほうしにして自行化他じぎやうけたを

あらわ
顯すなり所謂南無妙法蓮華經の法師なるが故なり云云。

一 宝塔品

御義口伝に云く此の宝塔は宝浄世界より涌現するなり、其の
宝浄世界の仏とは事相の義をば且らく之を置く、証道觀心の時は母
の胎内是なり故に父母は宝塔造作の番匠なり、宝塔とは我等が五輪
・五大なり然るに託胎の胎を宝浄世界と云う故に出胎する處を
涌現と云うなり、凡そ衆生の涌現は地輪より出現するなり故に従
地湧出と云うなり、妙法の宝浄世界なれば十界の衆生の胎内は皆
是れ宝浄世界なり、蓮華の宝浄なれば十界の胎内
悉く無垢清浄の世界なり、妙法の地輪なれば十界に亘るなり蓮華
の地なれば清浄地なり、妙法の宝浄なれば我等が身体は清浄の
宝塔なり妙法蓮華の涌出なれば十界の出胎の産門本来清浄の宝塔

なり、法界ほっかいの搭婆だばにして十法界じゅうほっかい即塔婆たつばなり妙法みょうほうの二仏にぶつなれば十界じゅうかい
三千さんぜん・皆境智みなきょうちの二仏にぶつなり、妙法みょうほうの一座いざには三千さんぜんの心性しんしよ皆以みなて二尊にそんの
所座

なり妙法蓮華みょうほうれんげ二仏一座にぶつ いざなれば不思議ふしぎなり清淨しょうじやうなり、妙法蓮華みょうほうれんげの見
なれば十界じゅうかいの衆生しゆじやう・三千さんぜんの群類ぐんるい・皆自身みなじしんの塔婆たつばを見るなり、十界じゅうかいの
不同ふどうなれども己おのが身を見るは三千具足の塔さんぜんぐそくを見るなり己の心を見る
は三千具足の仏さんぜんぐそくを見るなり、分身ふんじんとは父母ふぼより相續ふんじんする分身ふんじんの意な
り、迷まよひう時は流轉るてんの分身ふんじんなり悟る時は果中ふんじんの分身ふんじんなり、さて分身ふんじん
の起おこる處ところを習ならうには地獄じごくを習ならうなり、かかる宝塔ほうとうも妙法蓮華經みょうほうれんげきやうの
五字ごじより外こは之れ無きなり妙法蓮華經みょうほうれんげきやうを見れば宝塔ほうとう即一切衆生いっさいしゆじやう
一切衆生いっさいしゆじやう即南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうの全体ぜんたいなり云云。

一
提婆品だいば

御義口伝おんぎくでんに云いく此この品しんには釈尊しやくそんの本師ほんし・提婆達多だいばだつたの成仏じやうぶつと文殊師利もんじゆしり
・教化きやうけの竜女りゆうにょ成仏じやうぶつとを説とくくなり、是これ又また妙法蓮華經みやうほうれんげきやうの提婆だいば竜女りゆうにょな
れば十界三千じゆつかいさんぜん皆みな調達ちやうだつ竜女りゆうにょなり、法界ほっかいの衆生しゆじやうの逆さかの辺へは調達ちやうだつなり
法界ほっかいの貪欲とんよく・瞋恚しんに・愚癡ぐちの方かた

は悉くことごとく竜女なり、調達は修徳の逆罪・一切衆生は性徳の逆罪なり
一切衆生は性徳の天王如来調達は修徳の天王如来なり、竜女は
修徳の竜女・一切衆生は性徳の竜女なり、所詮しよせん釈尊も文殊も
提婆も竜女も一つ種の妙法蓮華經の功能なれば本来成仏なり、仍つ
て南無妙法蓮華經と唱え奉る時は十界同時に成仏するなり、是を
妙法蓮華經の提婆達多と云うなり、十界三千竜女なれば無垢世界
に非ずと云う事なし、竜女が一身も本来成仏にして南無
妙法蓮華經の当体なり云云。

勸持品かんじぼん

御義口伝に云く此の品の姨母・耶輸の記☆は十界同時の授記なり
妙法の姨母・妙法の耶輸なる故なり、十界の衆生の心性は所持の經
の体なり是れ即ち勸持の流通なり、心性所持の經を勸持して自行

化他けたに趣おもむくなり、姨母おば耶輸やしゆは女人にょにんの成仏じやうぶつなり二万ふたよろずの居士けしは男子なんしの流通りつうなり此この文ぶん・陰陽いんよう一体いつたいにして南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうの当体とうたいなり云云。

一 安樂行品

御義口伝おんぎくでんに云く妙法みょうほうの安樂行あんらくぎやうなれば十界三千じゅうかいさんぜん悉く安樂行あんらくぎやうなり、自受用じじゆうゆうの当体とうたいなり身口意誓願しんくいせいがん悉く安樂行あんらくぎやうなり、蓮華れんげの安樂行あんらくぎやうなれば三千十界さんぜんじゅうかい清淨しやうじやうの修行しゆぎやうなり、諸法実相しよぼうじつそうなれば安樂行あんらくぎやうに非ざるあらこと莫なし、本門ほんもんの意いは十界じゅうかいの色心しきしん本来本有ほんねほんゆうとして真実しんじつの安樂行あんらくぎやうなり、安樂行あんらくぎやうの体たいとは所謂いわゆる上行じやうぎやう所伝しよでんの南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやう是なり云云、靈山淨土りやうぜんじやうどに安樂あんらくに行詣ぎやうけいす可べきなり云云。

一 涌出品

御義口伝おんぎくでんに云く此この品しんは迹門流通しやくもんりつうの後のち・本門開顯ほんもんかいけんの序分じよぶんなり、故ゆゑに先まづ本地無作ほんちむさくの三身さんじんを顯あらわさんが為ために釈尊しやくそん所具しよぐの菩薩ぼさつなるが故ゆゑ本地ほんち

本化ほんげの弟子でしを召めすなり、是これ又また妙法みょうぼうの從地じゅうちなれば十界じゅうかいの大地だいちなり、
妙法みょうぼうの涌出ゆじゅつなれば十界じゅうかい

皆涌出なり、十界妙法の菩薩なれば皆饒益有情界の慈悲深重の大
士なり、蓮華の大地なれば十界の大地も十界涌出の菩薩も本来
清淨なり、所詮悟道に約する時は從地とは十界の衆生の大種の
所生なり、涌出とは十界の衆生の出胎の相なり菩薩とは十界の
衆生の本有の慈悲なり、此の菩薩に本法の妙法蓮華經を付屬せんが
為に從地涌出するなり、日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者
は從地涌出の菩薩なり外に求むること莫かれ云云。

一 寿量品

御義口伝に云く寿量品とは十界の衆生の本命なり、此の品を本門
と云う事は本に入る門と云う事なり、凡夫の血肉の色心を本有と
談ずるが故に本門とは云うなり、此の重に至らざるを始覺と云い
迹門と云うなり、是を悟るを本覺と云い本門と云うなり、所謂南無

妙法蓮華經は一切衆生の本有の在処なり爰を以て經に
我実成仏已来とは云うなり云云。

分別品

御義口伝に云く此の品は上の品の時本地無作の三身如来の寿を聞く
故に今品にして上の無作の三身を信解するなり、其の功德を分別す
るなり功德とは十界己己の当体の三毒の煩惱を此の品の時其の儘
妙法の功德なりと分別するなり、其の功德とは本有の南無
妙法蓮華經是なり云云。

隨喜品

御義口伝に云く妙法の功德を隨喜する事を説くなり、五十展転と
は五とは妙法の五字なり十とは十界の衆生なり展転とは一念三千
なり、教相の時は第五十人の隨喜の功德を校量せり五十人とは

一切衆生の事なり、妙法の五十人妙法蓮華經を展転するが故なり、
所謂南無妙法蓮華經を展転するなり云云。

一 法師功德品

御義口伝に云く無作の三身も如来の寿も分別功德も隨喜も我が身の上の事なり、然らば父母所生の六根は清淨にして自在無碍なり妙法の六根なれば十界三千の六根皆清淨なり、蓮華所具の六根なれば全く不淨に非ざるなり、此の六根にて南無妙法蓮華經と見開覺知する時は本来本有の六根清淨なり云云。

一 不輕品

御義口伝に云く此の菩薩の礼拜の行とは一切衆生の事なり、自他一念の礼拜なり父母果縛の肉身を妙法蓮華經と礼拜するなり、仏性も仏身も衆生の当体の色心なれば直ちに礼拜を行ずるなり、仍つて皆当作仏の四字は南無妙法蓮華經の種子に依るなり。

一 神力品

御義口伝おんぎくでんに云いく十種じゆんしゆの神力じんりきを現げんじて上行菩薩じやうぎやうぼさつに妙法蓮華經みやうほうれんげきやうの五字ごじを付属ふぞくし給たまう此じんりきの神力じんりきとは十界三千じゆつかいさんぜんの衆生しゆじやうの神力じんりきなり、凡夫ばんぶは体の神力さんぜ・三世しよぶつの諸仏しよぶつは用の神力じんりきなり神とは心法力とは色法なり力は法神は妙なり妙法みやうほうの神力じんりきなれば十界悉じゆつかいごとく神力じんりきなり、蓮華れんげの神力じんりきなれば十界清淨じゆつかいじやうの神力じんりきなり、惣そうじて三世さんぜの諸仏しよぶつの神力じんりきは此じんりきの品に尽くせり釈尊しやくそん出世しゆつせの神力じんりきの本意ほんいも此じんりきの品の神力じんりきなり、所謂いわる妙法蓮華經みやうほうれんげきやうの神力じんりきなり十界皆成じゆつかいかいじやうと談だんずるより外ほかの諸仏しよぶつの神力じんりきは之これ有ある可べからず、一切いっさいの法門ほうもん神力ほうもんじんりきに非あらずと云いう事なし云云。

一 囑累品ぢやくるい

御義口伝おんぎくでんに云いく此じんりきの品まぢやうには摩項付属ふぞくを説ときて此みやうほうの妙法めつこを滅後めつこに留とどめ給たまうなり、是これ又妙法みやうほうの付属ふぞくなれば十界三千じゆつかいさんぜん皆付属みなふぞくの菩薩ぼさつなり、又三摩さんまする事は能化所具のうけしよぐの三觀三身さんかんさんじんの御手みでを以もつて所化しよけの頭上かみうへに

明珠みょうじゅを譲ゆずり与よえたる心なり、凡おほそ頂上ちやうじやうの明珠みょうじゅは覚悟かくご知見ちけんなり項
上の明珠とは南無なむ妙法蓮華經みやうぼうれんげきやう是なり云云。

一 薬王品 やくおうぼん

御義口伝に云く此の品は薬王菩薩の仏の滅後に於て法華を弘通する
なり、所詮焼身焼臂とは焼は照の義なり照は智慧の義なり智能く
煩惱の身生死の臂を焼くなり、天台大師も本地薬王菩薩なり、能説
に約する時は釈迦なり衆生の重病を消除する方は薬王・薬師如来
なり又利物の方にて薬王と云う自悟の方にては薬師と云う、此の
薬王・薬師出世の時は天台大師なり薬王も滅後に弘通し薬師如来も
像法暫時の利益有情なり、時を以て身体を顕し名を以て義を顕す事
を仏顕し給うなり、薬王菩薩は止観の一念三千の法門を弘め給う、
其の一念三千とは所謂南無妙法蓮華経是なり云云。

一 妙音品 みょうおん

御義口伝に云く此の菩薩は法華弘通の菩薩なり故に卅四身を現じて

十界互具を顯し給い利益說法するなり、是れ又妙法の妙音なれば
十界の音声は皆妙音なり、又十界悉く卅四身の所現の妙音なり、
又蓮華の妙音なれば十界三千の音声皆無染清淨なり、されば
慈覺大師をば妙音の出世と習うなり之に依つて唐決の時・引聲
妙音をば伝え給えり何故有りてか法華を誹謗して大日經等に劣り
たりと云うや云云、所謂法界の音声・南無妙法蓮華經の音声に
非ずと云う事なし云云。

一 觀音品

御義口伝に云く此の品は甚深の秘品なり息災延命の品なり当途王經
と名く、されば此の品に就て職位法門を継ぐぞと習うなり、天台も
三大部の外に觀音玄という疏を作り章安大師は兩卷の疏を作り
給えり能く能くの秘品なり、觀音・法華・眼目異名と云いて觀音即ち

法華ほっけの体なり所謂いわゆる南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうの体なり云云。

一 陀羅尼品

御義口伝に云く此の品は二聖・二天王・十羅刹女・陀羅尼を説きて持経者を擁護し給うなり、所詮妙法・陀羅尼の真言なれば十界の語言音声皆陀羅尼なり、されば伝教大師の云く「妙法の真言は他経に説かず普賢常護は他経に説かず」陀羅尼とは南無妙法蓮華經の用なり、此の五字の中には妙の一字より陀羅尼を説き出すなり云云。

一 嚴王品

御義口伝に云く此の品は二子の教化に依つて父の妙莊嚴王邪見を翻し正見に住して沙羅樹王仏と成るなり、沙羅樹王とは梵語なり此には熾盛光と云う、一切衆生は皆是れ熾盛光より出生したる一切衆生なり、此の故に十界衆生の父なり、法華の心にては

自受用智じじゅうちなり忽然こつねん火起ほんしやう焚燒しやたく舍宅しやたくとは是これなり、煩惱ぼんのうの一念いちねんの火起りて迷悟めいこ不二の舍宅しやたくを燒くなり邪見じゃけんとは是これなり、此の邪見じゃけんを邪見即正じゃけんじしやうと照したる南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうの智慧ちえなり所謂六凡いわゆるは父なり四聖ししやうは子なり四聖ししやうは正見せいけん六凡じやけんは邪見故ゆえに六道ろくどうの衆生しゆじやうは皆是れ我が父母ふぼとは是なり云云。

一
勸發品かんぱつぽん

御義口伝おんぎくでんに云く此の品は再演法華さいえんほつけなり本・迹二門の極理ごくり此の品に至極するなり、慈覺大師じかくだいし云く十界じゆつかいの衆生しゆじやうは発心修行ほつしんしゆぎやうと釈しゃくし給うは此の品の事なり、所詮しよせん此の品と序品じよぽんとは生死しやうじの二法ふたぽうなり序品じよぽんは我等われら衆生しゆじやうの生なり此の品は一切衆生いっさいしゆじやうの死なり生死しやうじ一念いちねんなるを妙法蓮華經みやうほうれんげきやうと云うなり品品ひんひんに於て初おひの題号だいごうは生の方・終の方は死の方なり、此の

法華經は生死・生死と転りたり、生の故に始に如是我聞と置く如は
生の義なり死の故に終りに作礼而去と結したり、去は死の義なり作
礼の言は生死の間に成しと成す処の我等衆生の所作なり、此の所作
とは妙法蓮華經な

り、礼とは不^ふ乱^{らん}の義なり法界妙法なれば不^ふ乱^{らん}なり、天台大師の云く
体^{たい}の字は礼に訓^{くん}ず礼は法なり各々其^その親を親とし各々其^その子を子
とす出^{しゅつ}世^ぜの法^{ほつ}体^{たい}も亦復^{また}是^{かく}の如^{ごと}し」と、体とは妙法蓮華經の事なり先
づ体玄義^{げんぎ}を釈^{しやく}するなり、体とは十界^{じゅうかい}の異体なり是^{これ}を法華經の体とせ
り此^{これら}等^らを作礼而去^{さらいにこ}とは説^{はつ}かれたり、法界^{ほつかい}の千草万木地獄・餓鬼等^{がき}
何^{いずれ}の界も諸法実相^{しよほうじつそう}の作礼に非^{あら}ずという事なし是^これ即^{すなわ}ち普賢菩薩な
り、普とは法界^{ほつかい}・賢とは作礼而去^{さらいにこ}なり此^これ即^{すなわ}ち妙法蓮華經なり、
爰^{こゝを}を以て品品の初めにも五字^{ごじ}を題し終りにも五字^{ごじ}を以て結し前後
中間^{ちゅうけん}南無妙法蓮華經の七字なり、末法弘通^{まつほうくわつう}の要法唯此^{ようほうただ}の一段に
之^これ有^あるなり、此^{これら}等^らの心^{こころ}を失^{うしな}うて要法^{ようほう}に結ばずんば末法弘通^{まつほうくわつう}の法に
は不足^{ふそく}の者なり剩^{あまつさ}え日蓮^{にちれん}が本意^{ほんい}を失^{うしな}う可^べし、日蓮^{にちれん}が弟子^{でし}・檀那^{だんな}別^{べつ}
才覚^{さいかく}無益^{むやく}なり、妙樂^{みょうらく}の釈^{しやく}に云く「子父の法を弘^{ひろ}む世界^{せかい}の益有^{えき}り」と、

子とは地涌じゆの菩薩ぼさつなり父とは釈尊しやくそんなり世界せかいとは日本国にほんこくなり益えきとは成仏じやうぶつなり法ほふとは南無なむ妙法蓮華みやうほうれんげきやう經きやうなり、今又以いままた此こくの如ごとし父ふとは日蓮にちれんなり子ことは日蓮にちれんが弟子でし・檀那だんななり世界せかいとは日本国にほんこくなり益えきとは受持じゆじ成仏じやうぶつなり法ほふとは上行じやうぎやう所伝しよでんの題目だいもくなり

御義口伝おんぎくでん卷下

弘安元年こうあんがねん戊寅つちのえとら正月一日

執筆しつぴつ 日興にっけう

御講聞書

◆九六 御講聞書目錄

804 p

已上九十ヶ条

一、妙法蓮華經序品第一の事みょうほうれんげきょうじよばんだいいち八

〇七

一、妙法みょうほう八〇八

一、蓮華れんげ八〇八

一、本因・本果の事ほんいん・ほんが八〇

九

一、爾前無得道の事にぜんとくどう八〇九

一、序品の事じよばん八〇九

一、品と云う事八〇九

一、如是我聞の事によぜがもん八一〇

一、如是の二字こ八一〇

一、耆闍崛山の事ぎしゃくつせん八一〇

一、与大比丘衆の事びく八一〇

一、爾時・世尊の事せそん八一〇

三

一、淨飯王摩耶夫人成仏証文じようばんまやふじんじようぶつしやうもん

の事八一三

一、方便品の事ほうべん八一三

一、仏所成就第一希有難解之法ぶつしよじようじゆだいいちけううなん

唯仏ゆいぶつ与仏よぶつの事 八一四

一、十如是じゅうにの事 八一五

一、自証むじよう無上道だいいじよう大乘びやうどう平等法どうの事

八一五

一、我始坐道場どうじよう觀樹また亦經行またの事

八一六

一、今・我喜無畏むゐの事 八一

六

一、我聞是法音ほうせいぎ疑網ぎもう皆已除かいの事

八一六

一、以本願ほんがん故說三乘法さんじようの事

八一七

一、有大長者ちやうじやの事 八一八

一、多有田宅でんたくの事 八一九

一、等一大車だいちやの事 八二〇

一、其車高広かうかうの事 八二〇

一、是朽故宅くぐたく属于一人ひとりの事

八二〇

一、諸鬼神等しよきじん揚声やうしやう大叫だいきやうの事

八二一

一、乘此宝乘じきしどうじよう直至道場どうじようの事

八二一

一、若人にやくにん不信ふしん毀謗きぼう此經則斷一切いっさい

世間・仏種ぶつしゆの事 八二二

一、捨惡知識親近善友の事

八二三

一、無上宝聚不求自得の事

八二四

一、藥草喻品の事 八二四

一、現世安穩・後生善処の事

八二五

一、皆悉到於一切智地の事

八二五

一、此の一切智地の四字八二六

一、根茎枝葉の事

八二七

一、枯槁衆生の事

八二七

一、等雨法雨の事

八二七

一、如從飢国来忽遇大王・の事

八二八

一、大通智勝仏○不得成仏道の

事八二九

一、貧人見此珠其心大歡喜の事

八三〇

一、如甘露見灌の事 八三一

一、若有惡人以不善心等の事

八三二

一、如是如是にょぜこの事

八三二

一、是真ぜしんぶつし仏子住淳善地の事

八三二

一、非口所宜非心所測の事

八三三

一、不染せけん世間法如蓮華にょれんげざいすい在水從地

而涌出ゆじゅつの事八三三

一、願みらいえんぜつ仏為未來演説令開解の事

八三四

一、譬如良医智慧聰達ひによりようい ちえの事

八三四

一、一念いちねん信解しんげの事

八三五

一、見もんぼうしんじゅ仏聞法信受教誨の事

八三五

一、若復またあるひと有人以七宝しつぽう滿是人所得

其福最多の事八三五

一、妙音みょうおん菩薩ぼさつの事

八三六

一、爾時むじんい無尽意菩薩ぼさつの事八三六

一、觀音かんのん妙智力みょうちの事

八三六

一、自在じざい之業の事

八三六

一、妙法蓮華經陀羅尼みょうほうれんげきやうだらにの事

八三六

一、六万八千人の事

八三七

一、妙莊嚴王の事

八三七

一、華嚴・大日觀經等の凡夫の

得道の事八三七

一、題目の五字を以て下種の

証文と為す可き事八三七

一、題目の五字末法に限りて持つ

可きの事八三八

一、天台云く是我弟子応弘我法

の事八三八

一、色心を心法と云う事八三八

一、無作の応身我等凡夫也と云

う事八三八

一、諸河無鹹の事

八三八

一、妙樂大師の釈に末法之初

冥利不無の釈の事八三九

一、爾前經瓦礫国の事 八三九

一、無明惡酒の事 八三九

一、日蓮己証の事 八四〇

一、釈尊の持言秘法の事 八四〇

一、日蓮門家大事の事 八四〇

一、日蓮が弟子臆病にては叶う

可からざる事八四〇

一、妙法蓮華經の五字を眼と云

う事

八四〇

一、法華經ほけきようの行者ぎようじやに水火すいかの行者ぎようじや

の事

八四一

一、女人にょにんと妙しやくそんと釈尊しやくそんと一体の事

八四一

一、置不かしやく呵責かの文の事 八四二

一、異念な無く靈山りようぜん淨土じようどへ参る

可き事

八四二

一、不可ふか失本ほんしん心の事 八四二

一、天台大師てんだいだいしを魔王まおう障礙しょうげせし事

八四三

一、法華經ほけきよう極理ごくりの事 八四四

一、妙法蓮華經みようほうれんげきよう五字ごじの蔵の事

八四四

一、我等衆生われらしうじようの成仏じやうぶつは打かため

たる成仏じやうぶつと云う証文しやうもんの事 八四五

一、爾前にぜん・法華ほつげの能くらべの事

八四五

一、授職ほつたいの法体ほつたいの事 八四五

一、末代まつだい讓狀じやうじやうの事 八四五

一、本有ほんぬ止觀しかんと云う事 八四五

一、入末まつぼうし法し四弘誓願しやういがんの事 八四五

一、四弘誓願しやういがん応報えいほう如理にょりと云う事

八四六

一、本来しんごの四弘しごの事 八四六

右日向記の目録は、現行板本の目録に脱せる 如是我聞の事」及び
法華經の行者に水火の行者の事」の二条を加え、新曾本に明かに「已
上九十ヶ条」とあるに合せて、新たに作製せり。現行板本に八十八箇
条とあるは誤なり、但し巻頭の「總」は新曾本にも数えず、故に本目
録にも記載せず。なお同一箇条にして、別条に御講示ある場合、即ち
等雨法雨の事」根莖枝葉の事」等は、新曾本も現行板本も、共に一
条に数うるを以て、本目録も亦た其れに従えり。

已上四行の附記は全く日宗社本に依る、編者。

◆九七

御講聞書

807P

自二弘安元年三月十九日一連連御講至二同三年五月二十八日一也仍テ記シレ之畢

日向 記之

凡そ法華經と申すは一切衆生・皆成仏道の要法なり、されば大覺世尊は説時未至故と説かせ給いて説く可き時節を待たせ給いき、例せば郭公の春をおくり鶏鳥の曉を待ちて鳴くが如くなり、此れ即ち時を待つ故なり、されば涅槃經に云く以知時故名大法師と説かれたり、今末法は南無妙法蓮華經の七字を弘めて利生得益あるべき時なり、されば此の題目には余事を交えれば僻事なるべし、此の妙法の大

曼荼羅を身に持ち心に念じ口に唱え奉るべき時なり、之に依つて一部

二十八品の頂上に南無妙法蓮華經序品第一と題したり。

一妙法蓮華經序品第一の事玄旨伝に云く、一切經の惣要とは謂く

妙法蓮華經の五字なり、又云く、一行一切行恒修二此三昧一文、云う

所の三昧とは即ち法華の有相無相の二行なり、此の道理を以て法華經

を讀誦せん行者は即ち法具の一心三觀なり云云、此の釈に一切經と

云うは近くは華嚴・阿含・方等・般若等なり、遠くは大通仏

より已來の諸經なり、本門の意は寿量品を除いて其の外の一切經な

り、惣要とは天には日月・地には大王・人には神・眼目の如くなり云

う意を以つて釈せり、此れ即ち妙法蓮華經の枝葉なり、一行とは妙法

の一行に一切行を納めたり、法具とは題目の五字に方法を具足すと云

う事なり、然る間・三世十方の諸仏も上行菩薩等も・大梵天王

帝釈・四王・十羅刹女・天照太神・八幡大菩薩・山王二十一社・其の外
日本国中の小神・大神等・此の經の行者を守護すべしと・法華經の第
五卷に分明に説かれたり、影と・身と・音と・響との如し、法華經二十
八品は影の如く

響ひびきの如ごとし、題目だいもくの五字ごじは体の如ごとく音おとの如ごとくなり、題目だいもくを唱となえ奉たてまつる音おとは
十方じゅうぽう世界せかいにとずかずと云いう所ところなし、我等われらが小音せうおんなれども、題目だいもくの大
音おんに入いれて唱となえ奉たてまつる間ま、一大さんぜんかい三千界さんぜんかいにいたらざる所ところなし、譬たとえば小音
なれども貝ばいに入いれて吹ふく時とき・遠ひびきく響ひびきくが如ごとく、手ての音おんは・わづかなれど
も鼓こを打うつに遠ひびきく響ひびきくが如ごとし、一念いちねんさんぜん三千さんぜんの大事だいじの法門ほうもん是これなり、かかる
目出度めだき御經ごぎやうにて渡わたらせ給たまえるを、謗そしる人なん何なんぞ無間むげんに墮だ在ざいせざらん
や、法然ほうねん・弘法こうぼう等らの大惡知識あくちしき是これなり。

一妙法みょうぼう

の二字にじは一切衆生いっさいしゆじやうの色心しきしんの二法にぽうなり、一代説教いちだいせつぎやうの中に

法の字じの上に妙めうの字じを置おきたる經ぎやうは一經いつぎやうもなし、涅槃經ねはんぎやうの題目だいもくにも
大涅槃經だいねはんぎやうと云いいて大だいの字じあれども妙めうの字じなし、但ただし大だいは只是ただこれ妙めうと云
えり然しかれども大だいと妙めうとは不同ふどうなり、同じ大だいなれども華嚴經けこんぎやうの大方広仏けこん
華嚴經けこんぎやうと云いえる題号だいごうの大だいと、涅槃經ねはんぎやうの大だいと天地雲泥てんちうんでいなり、華嚴けこん

經の大は無得道の大なり。涅槃經の大は法華同醍醐味の大なり、然れども然涅槃尚劣と云う時は法華經には劣れり、此の事は涅槃經に分明に法華經に劣ると説かれたり、涅槃經に云く如下法華中八千声聞得レ受二記べつ一成中大果舞上如三秋収冬蔵更無二所作二云云此の文分明に我と法華經に劣れりと説かせ給えり。

一蓮華

とは本因・本果なり、此の本因・本果と云うは一念三千

なり、本有の因・本有の果なり、今始めたる因果に非ざるなり、五百

塵点の法門とは此の事を説かれたり、本因の因と云うは下種の題目な

り、本果の果とは成仏なり、因と云うは信心領納の事なり、此の經を

持ち奉る時を本因とす其の本因のまま成仏なりと云うを本果と

は云うなり、日蓮が弟子・檀那の肝要は本果より本因を宗とするなり、

本因なくしては本果有る可からず、仍て本因とは慧の因にして名字即

の位なり、本果は果にして究竟くきようそく即の位なり、究竟くきようそく即とは九識きんりきぼん本覺ほんかくの
異名いみょうなり、九識きんりきぼん本法の都とは法華ほっけの行者ぎようじゃの住所なり、神力品じんりきぼんに云く
若しは山谷せんごく曠野等と説せつけり即すなわち是れ道場どうじやうと見えたり豈あに法華ほっけの行者ぎようじゃの
住所は生處とくどう・得道てんぼうりん・転法輪ねはん・入涅槃しよぶつの諸仏しよぶつの四處どうじやうの道場どうじやうに非あらずや。

一本因・本果の事

法界悉く常住不滅の爲体を云うなり、され

ば妙樂大師・此の事を釈する時・弘決に云く当七知身土一念三千・故

成道時称二此本理二身一念遍二於法界一云云、此の積分明に

本因・本果を釈したり、身と云うは一切衆生なり、土と云うは此の

一切衆生の住処なり一念とは此の衆生の念念の作業なり、故成道時

称二此本理一とは本因・本果の成道なり、本理と本因・本果とは同じ事

なり法界とは五大なり、所詮法華經を持ち奉る行者は若在仏前蓮華

化生なれば称此本理の成道なり、本理に称うとは妙法蓮華經の本理

に称うと云う事なり、法華經の本理に叶うとは此の經を持ち奉るを云

うなり、若有能持則持仏身とは是なり。

一爾前無得道の事

此の法門は蓮華の二字より起れり、其の故は

蓮華の二字を以て云うなり、三世の諸仏の成道を唱うるは蓮華の二字

より出でたり、權教に於て蓮華の沙汰無し若しありと云うとも
有名無実の蓮華なるべし、三世の諸仏の本時の下種を指して華と名け、
此の下種の華によつて成仏の蓮を取る、妙法蓮華即ち下種な
り、下種即ち南無妙法蓮華經なり、華は本因・蓮は本果なれば華の本
國を不信謗法の人豈具足せんや、經に云く若人・不信毀謗此經則斷
一切世間・仏種云云、此の蓮華に迷う故に十界具足無し、十界具足せ
ざれば一念三千跡形無きなり、一切の法門は蓮華の二字より起れり、
一代説教に於て無得道と云うも蓮華の二字より起れり深く之を案ず
可し。

一 序品の事

此の事は、教主・釈尊・法華經を説き給わんとて先ず

瑞相の顯れたる事を云うなり、今末法に入つて南無妙法蓮華經の顯わ
れ給うべき瑞相は彼には百千万倍勝るべきなり、其の故は雨は竜の

だいしやう
大小により蓮華は池の浅深に随つて其の色不同なるが如くなるべし。

一品と云う事

品とは、釈に云く義類同と云えり、此の法華經は三

仏寄合たまひい給いて定判し給えり、三仏とは釈迦・多宝・分身是なり、此の

三仏・評定ひやうじやうしてのたまわく一切衆生・皆成仏道は法華經に限りて有

りと、皆是眞実かいぜしんじつ

の証明・舌相梵天の誠証・要當說眞実の金言・此等を義類同して題したる品の字なり、天竺には跋渠と云う此には品と云えり、釈迦・多宝・分身の三仏の御口を以て指し合せ同音に定判し給える我等衆生の成仏なり、譬えば鳥の卵の内より卵をつつく時・母又同じくつつきあくるに・同じき所をつつきあくるが如し、是れ即ち念慮の感応する故なり、今法華經の成仏も此くの如くなり、三世諸仏の同音に同時に定め給える成仏なり、故に經に云く從仏口生如從仏等云云。

一如是我聞の事

仰に云く如と云うは衆生の如と仏の如と一如

にして無二如なり、然りと雖も九界と仏界と分れたるを是と云うなり、如は如を不具に名く即ち空の義なりと釈して少しも・ことならざるを云うなり、所詮法華經の意は煩惱即菩提・生死即涅槃・生仏不二・迷悟一体といえり、是を如とは云うなり、されば如は実相・是は

諸法なり、又如は心法・是は色法・如は寂・是は照なり、如は一念・是は三千なり、今經の心は文文・句句・一念三千の法門なり、惣じて如是我聞の四字より外は今經の体全く無きなり 如と妙とは同じ事・是とは法と又同じ事なり、法華經と釈尊と我等との三・全く不同無く・如我等無異なるを如と云うなり、仏は悟り・凡夫は迷なりと云うを是とは云うなり、我聞と云うは、我は阿難なり、聞とは耳の主と釈せり、聞とは名字即なり、如是の二字は妙法なり、阿難を始めて靈山一會の聴衆・同時に妙法蓮華經の五字を聴聞せり仍つて我も聞くと云えり、されば相伝

の点には如は是なりきと我れ聞くとはいえり、所詮末法当今には南無妙法蓮華經を我も聞くと心得べきなり、我は真如法性の我なり、天台大師は同聞衆と判ぜり同じ事を聞く衆と云うなり、同とは

妙法蓮華經みょうぼうれんげきやうなり、聞きこは即身成仏そくしんじやうぶつ・法華經ほけきやうに限ると聞くなり云云。

一如是この二字

を約教やつぎやうの下しもに釈しゃくする時・文句もんくの一いちに又一時いちじに四箭しせん

を接して地に墮だせしめざるも未だいま敢あえてて捷しと称せず、鈍驢どんろに策むちうつて跋はべつ☆

を駡なる尚なおし一いをも得ず何いかに況いわんやや四よをや云云、記の一いに云く、大經だいぎやうに

云いく迦葉菩薩かしやうばさつ

問うて云く云何か智者・念念の滅を觀ずと、仏の言く譬えば四人皆射
術を善し満つて一処に在りて各一方を射るに念言すらく我等は四の
箭・俱に射て俱に墮せんと、復人有りて念ずらく其の未だ墮せざるに
及んで我れ能く一時に手を以て接取せんというが如し、仏の言く、
捷疾鬼は復是の人よりも速なり是くの如く、飛行鬼・四天王・
日月神・堅疾天は展転して箭よりも疾し、無常は此れに過ぎたりと、此
の本末の意は他師・此の經の如是に付て釈を設くと云えども・更に
法蓮華の理に深く叶わざるなり、一二だも義理を尽さざるなり況や
因縁をや、何に況や約教・觀心の四をやと破し給えり、所詮法華經は
速疾頓成を以て本とす、我等衆生の無常のはやき事は捷疾鬼よ
りもはやし、爰を以て出ずる息は入る息を待たず、此の經の如是は
爾前の諸經の如是に勝れて超八の如是なり、超八醍醐の如是とは速疾

頓成とんじやうの故なり、妙樂大師みやうらくだいし云く若し超八しやうはちの如是によぜに非あらずんば、安いずくんぞ此の經の所聞しよもんと為なさんと云云。

と云云。

一耆闍崛山ぎしゃくつせんの事

仰いひに云く耆闍崛山ぎしゃくつせんとは靈鷲山りやうじゅうせんなり、靈さんとは三世さんぜの

諸仏しよぶつの心法しんぽうなり必ず此の山に仏法ぶつぽうを留とどめ給たまう、鷲じうとは鳥とりなり此の山の

南みなみに當あたつて詩うただ戸陀林いだらんあり死人しにんを捨すつる所ところなり、鷲じう此の屍しかばねを取り

食くらうて、此の山に住すむなり、さて靈鷲山りやうじゅうせんとは云いうなり、所詮しよせん今の經の

心こころは迷悟めいご一体いつたいと談だんず、靈りやうと云いうは法華經ほけきやうなり、三世さんぜの諸仏しよぶつの心法しんぽう

にして悟さとなり、鷲じうと云いう卯ちうは畜生ちくしやうにして迷まよひなり、迷悟めいご不二ふにと開ひらく

中道ちゆうどう即法性そくほつしやうの山やまなり、耆闍崛山ぎしゃくつせん中ちゆうと云いうは迷悟めいご不二ふに・三諦さんたい一諦いつたい・

中道ちゆうどう第一義空だいいちぎくうの内証ないしやうなり、されば法華經ほけきやうを行おこなずる日蓮等にちれんが弟子でし・

檀那だんなの住所しよじうはいかなる山野さんやなりとも靈鷲山りやうじゅうせんなり行者ぎやうじや遠とほ釈迦しやか如來にやらいに

あらずや、日本国は耆闍崛山・日蓮等の類は釈迦如来なるべし、惣じて
一乘南無妙法蓮華經を修行せん所は、いかなる所なりとも常寂光の
都・靈鷲山なるべし、此の耆闍崛山中とは煩惱の山なり、仏菩薩等は
菩提の果なり・煩惱の山の中にして法華經を三世の諸仏説き給えり、
諸仏は法性の依地・衆生は無明の依地なり、此の山を寿量品にしては
本有の靈山と説かれたり、本有の靈山とは此の娑婆世界なり、中にも
日本国な

り、法華經の本国土妙・娑婆世界なり、本門壽量品の未曾有の大
曼荼羅建立の在所なり云云、瑜伽論に云く東方に小国有り、其の中
唯大乘の種姓のみ有り、大乘の種姓とは法華經なり法華經を下種と
して成仏すべしと云う事なり、所謂南無妙法蓮華經なり小国とは
日本国なり云云。

一与大比丘衆の事

仰に云く文句の一に云く釈論に明す、大と

は亦は多と言ひ亦は勝と言ひ、遍く内外の經書を知る故に多と言ひ、

又數一万・二千に至る故に多と言ひ、今明さく大道有るが故に・大用

有るが故に・大知有るが故に・故に大と言ひ、勝とは道勝れ・風勝れ・

知勝る、故に勝と言ひ、多とは道多く・用多く・知多し故に多と言ひ

う、又云く含容一心・二切心なり、故に多と名くるなり、記の一に云く

一心一切心と言ひは心境俱に心にして各一切を摂す、一切三千を出で

ざるが故なり、具に止觀の第五の文の如し、若し円心に非ざれば三千を撰せず、故に

三千惣別威く空仮中なり、一文既に爾なり他は皆此れに准せよ、此の

本末の心は心境義の一念三千を釈するなり、止觀の第五の文とは夫一

心具十法界乃至不可思議境の文を指すなり、心境義の一念三千とは

此の与大比丘和が大の字より釈し出だせり、大多勝の三字・三諦・三觀

なり、円頓行者起念の当体・三諦三觀にして大多勝なり、

此の釈に惣と云うは一心の事なり、別とは三千なり、一文とは大の一

字なり、今末法に入つては法華經の行者・日蓮等の類、正しく大多勝

の修行なり、法華經の行者は釈迦如来を始め奉りて悉く大人の爲に

敬い奉るなり誠に以て大曼荼羅の同共の比丘衆なり、本門の事の

一念三千・南無妙法蓮華經・大多勝の比丘衆なり、文文・句句・六万

九千三百八十四字の字ごとに大多勝なり、人法一体にして即身成仏なり、されば釈に云く大は是れ空の義・多は是れ仮の義・勝は是れ中の義と、一人の上にも大多勝の三義・分明に具足す、大とは迹門☆☆多とは本門・勝とは題目なり、法華經の本尊を大多勝の大曼荼羅と云うなり、是れ豈与大比丘衆に非ずや、二界・八番の雜衆悉く法華の会座の大曼荼羅なり、法華經の行者は二法の情を捨てて唯妙法と信ずるを大というなり、此の題目の一心に一切

心かんを含容ようするを多と云うなり、諸經しよきやう・諸人しよにんに勝すぐれたるが故ゆゑに勝と云うなり、一切心いっさいに法界ほっかいを尽す一心いっしんとは法華經ほけきやうの信心しんじんなり、信心しんじん即そくいちねんさんぜん一念三千なり云云。

一爾時・世尊せそんの事

仰いに云く世尊せそんとは釈迦しやか如来にょらい・所詮しよせん世尊せそんとは

孝養かうようの人を云うなり、其そのの故ゆゑは不孝ふかうの人をば世尊せそんとは云わず教主きやうしゆ

釈尊しやくそん

こそ世尊せそんの本にては御座おわし候しやうらえ、父淨飯王じやうはん・母摩耶夫人まやふじんを成道じやうどうせ

しめ給たまうなり、されど今經こんきやうの座には父母御座ふおわしさざれば方便土ほうべん法華經ほけきやう

をば送たまらせ給たまうなり、彼土得聞こゝとは是これなり、但ただし法華經ほけきやうの心は十方じゆつぽう

仏土中ゆゐ・唯い有一いち乘法じやうぼうなり切利夫そくに母摩耶夫人まやふじん人生たまじ給たまえり、仰利天そくに即そく

したる寂光土じやくかうどなり、方便土ほうべんに即そくしたる寂光土じやくかうどなり、四土一念いちねん・皆みな

常寂光じやうじやくかうなれば、何いれも法華經ほけきやうの説せつ処しよなり、虚空会こくうの時の説ほつ・法華ほつに岩

切利天そくもるべきや寂光土じやくかうどの説ほつ・法華ほつに遠方ほうふん方便土ほうべんもるべきや、何いれも

法華經ほけきょうの説所なれば同聞衆にんずうの人数なり云云。

一淨飯王座耶夫人成仏証文の事

仰に云く方便品に云く我始

坐道場・觀樹亦經行の文是なり、又寿量品に云く、然我実成仏已来

の文是なり、教主釈尊の成道の時・淨飯王も摩耶も得道するなり、

本・迹二門の得道の文是なり云云、此の文日蓮が己心の大事なり、我始

と我実との文能く能く之を案ず可し、其の故は爾前經の心は父子

各別の談道なり、然る開成仏之れ無し、今の經の時・父子の天性を定め

父子一体と談ぜり・父母の成仏即ち子の成仏なり、子の成仏・即ち

父母の成仏なり、釈尊の我始坐道場の時・淨飯王・摩耶夫人も同時

に成道なり、釈尊の我実成仏の時・淨飯王・摩耶夫人同時なり始本

共に同時の成道なり、此の法門は天台・伝教等を除いて知る人・一人

も

之れ有る可からず、末法に入つて日蓮等の類・堅く秘す可き法門なり、譬えば蓮華の華果の相離せざるが如くなり、然れば法華經の行者は男女悉く世尊に非ずや、藥王品に云く於一切衆生中亦為第一文、此れ即ち世尊の經文に非ずや、是真仏子なれば法王の子にして世尊第一に非ずや。

一方便品の事 妙法蓮華經の五字とは名体宗用教の五重玄義なり、されば止觀に十章を釈せり此の十章即ち

妙法蓮華經の能釈なり、夫れとは釈名は名玄義なり、体相摂法の二は
体玄義なり、偏円の一は教玄義なり、方便・正觀・果報の三は宗玄義な
り、起教の一は用玄義なり、始の大意の章と終の旨歸との二をば之を
除く、此の意は止觀一部の所詮は大意と旨歸とに納れり無明即明の
大意なる故なり、無明とも即明とも分別せざるが旨歸なり、
今妙法蓮華經の五重玄義を修行し奉れば・煩惱即菩提・生死即涅槃の
開悟を得るなり、大意と旨歸とは法華の信心の事なるべし、以信得入・
非己智分とは是なり、我等衆生の色心の二法は妙法の二字なり
無始色心・本是理性・妙境・妙智と開覺するを大意と云うなり、大は色
法の徳・意は心法の徳なり大の字は形に訓ぜり、今日蓮等の類・南無
妙法蓮華經と唱え奉る男女・貴賤・等の色心本有の妙境・妙智なり、
父母果縛の肉身の外に別に三十二相・八十種好の相好之れ無し

即身成仏そくしんじょうぶつ是なり、然しかる間・大の一字に法界ほっかいを悉く収ことごとおさむるが故ゆえに法華經ほけきょうを大乘だいじょうと云うなり、一切いっさいの仏・菩薩ぼさつ・聖衆しょうしゅう・人畜じんちく・地獄等じごくの衆生しゅじょうの智慧ちえを具足ぐそくし給たまうが故ゆえに・仏意ぶつゐと云うなり、大乘だいじょうと云うも同じ事なり是れ即すなわち妙法蓮華經みょうほうれんげきょうの具徳なり、されば九界の衆生の意を以て仏の意とす、一切經いっさいきょうの心を以て法華經ほけきょうの意とす、於一仏乘いちぶつじょう分別說三とは是これなり、かかる目出度ほけきょうき法華經ほけきょうを謗ぼうじ奉たてまつる事・三世さんぜの諸仏しよぶつの御舌を切るに非あらずや、然しかるに此この妙法蓮華經みょうほうれんげきょうの具徳をば仏の智慧ちえにてもはかりがたく何いかに況いや菩薩ぼさつの智力に及べぶ可べけんや、之に依よつて大聖塔中たつちゅう・偶たまたまの相伝そうでんに云いく、一家の本意ほんいは只一言を以て本と為なす云云、此の一言とは寂照不二じやくしよくふたふたの一言なり・或あるは本末究竟等ほんまつくきやうとうの一言と

も云うなり、真実しんじつの義には南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうの一言なり、本とは凡夫ぼんぷな

り、末とは仏なり、究竟とは生仏一如なり、生仏一如の如の体は所謂
南無妙法蓮華經是なり云云。

一仏所成就第一希有難解之法唯仏与仏の事 仰に云く仏とは釈尊

の御事なり、成就とは法華經なり、第一は爾前の不第一に對し・希有

は爾前の不希有に對し・難解之法は爾前の不難解に對したり、此の仏と

申すは諸法実相なれば十界の衆生を仏とは云うなり、十界の衆生の

語言音声成就にして法華經なり、三世の諸仏の出世の本懷の

妙法みょうぼうにして、優曇華うどんげの妙文みょうもんなれば第一だいいち希有けうなり、九界くかいの智慧ちえは及およばざれば難解なんの法はふなり、成就じょうじゆとは我等衆生われらしゆじやうの煩惱ぼんのう即そく菩提ぼだい・生死しやうじ即そく涅槃ねはんの事ことなり、權教ごんきやうの意いは終ついに不成仏じやうぶつなれば成就じょうじゆには非あらず、迹門しやくもんには二乘にじやう成仏じやうぶつ顯あらわれたり、是れ即すなわち成就じょうじゆなり、是これを仏所成就ぶつしよじやうじゆとは説いかれたり、されば唯仏ただとは釈迦しやか・与仏たはうとは多宝たはうなり、多宝涌現たはうゆげんなれば与仏たはうとは云いいがたし、然しかりと雖いえども終ついには出現しゆつげんあるべき故ゆえに・与仏たはうを多宝たはうといふなり、所詮しよせん日蓮等にちれんの類たぐいの心こころは・唯仏ただは釈尊しやくそん・与仏にちれんは日蓮等たぐの類たぐの事ことなるべし、其そのの故ゆえは唯仏ただの唯ゆいを重かさねて譬喩品ひゆほんには唯我一人ただわれひとりと説いけり、与仏たはうの二字ふたごを重かさねて、方便品ほうべんの末すえに至いたつて若遇余仏よふつと説いけり、釈しやくには深く円理えんりを覺さとるは、之これを名なけて仏ぶつと為なすと釈しやくせり、是れ即すなわち与仏たはうと云いふは法華經ほけきやうの行者男女ぎやうじやなんによの事ことなり、唯我一人ただわれひとりの釈尊しやくそんに与くみし上たてまつる仏ぶつなり、此この二仏ふたふつ寄より合あひて、乃能究尽ないのうくじんする所ところの諸法実相しよほうじつさう

の法ほつ体たいなり、されば十じゅう如に是ぜと云いうは十じゅう界かいなり、十じゅう界かい即すなわ十じゅう如に是ぜなり、
十じゅう如に是ぜは即すなわち法ほけき華き經きやうの異い名みやうなり云云。

一十如是の事

仰いに云いく此この十じゅう如に是ぜは法ほけき華き經きやうの眼がん目もく・一いつ切さい經きやうの

惣そう要ようたり、されば此この十じゅう如に是ぜを開かい覺かくしぬれば語ご法ぽうに於おいて迷めい悟ご無なく、

実じつ相そうに於おいて染せん淨じやう無なし、之これに依よつて天てん台だい大だい師しは止し觀かんの十じゅう章しやうも此この

十じゅう如に是ぜはより釈しやく出しゅせり、然しかる間かん・十じゅう如に是ぜに過あやまる法ほう門もん更さらに以もて之これ無なし、

爰こゝをを以もて和わ尚じやう授じゆけて云いく十じゅう大だい章しやうは是これ全ぜんく十じゅう如に是ぜ・若もし大たい意いを覺さる

時とき・性しやう如に是ぜの意いを以もて下したの玄げん如にの図ずを分ぶん別べつす可べし、十じゅう如に是ぜを十じゅう大だい章しやうに

習ならう事ことは性しやう如に是ぜは大たい意い・和わ如に是ぜは釈しやく名めい・体たい如に是ぜは体たい相しやう・力りき如に是ぜは撰えん法ぽう・

作さく如に是ぜは偏へん円えん・縁えん如に是ぜは方はう使し・因いん如に是ぜは正しやう觀くわん・果か報ほう如に定ていは果か報ほう・本ほん末まつ

究く竟きやう如に是ぜは旨し歸きなり、此この中なに起き教きやうの章しやうは化け他た利り物もつ果か上じやう化け用ようと云いうな

り云云。

一 自証無上道大乘平等法の事

仰に云く末法当今に於て大乘

びようどう

平等の法を証せる事・日蓮等の類に限りされば此の經文は教主

大覺世尊・法華經の極理を証して番番に出世し給いて説き給うなり、

しよせん

所詮此の自証と云うは三十成道の時を指すなり、其の故は教主釈尊

は十九出家・三十成道なり、然る間・自証無上道等文、所詮此の品の

しゅつけ

じようどう

しか

むじようどう

しよせん

心は十界皆成の旨を明せり、然れば自証と云うは十界を諸法実相の
一仏ぞと説かれたり、地獄も餓鬼も悉く無上大乗の妙法を証得した
るなり、自は十界を指したり、恣まに証すと云う事なり、權教は不
平等の經なり、法華經は平等法の經なり、今日蓮等の類いは眞実自証
無上道・大乘平等法の行者なり、所謂南無妙法蓮華經の大乗平等の
広宣流布の時なり云云。

一我始坐道場觀樹亦經行の事

仰に云く、此の文は教主釈尊・

三十成道の時を説き給えり、觀樹の樹と云うは十二因縁の事なり、
所詮十二因縁を觀じて經行すと説き給えり、十二因縁は法界の異名な
り又法華經の異名なり、其の故は樹木は枝葉華菓あり是れ即ち
生住異滅の四相なり、大覺世尊・十二因縁の流轉を觀じ・經行し給え
り、所詮末法当今も一切衆生・法華經を謗じて流轉す可きを觀じて

にほんこく 日本国を日蓮經行して南無妙法蓮華經と弘通する・又又此の如くなり、法華の行者は悉く道場に坐したる人なり云云。

一今・我喜無畏の事

仰に云く此の文は權教を説き畢らせ給いて

法華經を説かせ給う時なれば喜びておそれなしと觀じ給えり、其の故は爾前の間は一切衆生を畏れ給えり、若し法華經を説かずして空しく

やあらんずらんと思召して畏れ深くありと云う文なり、さて今は恐る

べき事なく時節・来つて説く間・畏れなしと喜び給えり、今日蓮

等の類も是くの如く日蓮も三十二までは畏れありき、若しや此の南無

妙法蓮華經を弘めずして・あらんずらんと畏れありき、今は即ち此の

恐れ無く既に末法当時・南無妙法蓮華經の七字を日本国に弘むる間

恐れなし、終には一閻浮提に広宣流布せん事一定なるべし云云。

一我聞是法音疑網皆已除の事

仰に云く法音とは南無

妙法蓮華經なり、疑網とは最後品の無明を云うなり、此の經を持ち
奉れば悉く除くと説かれたり、此の文は舍利弗が三重の無明・一時
俱尽する事を領解せり、今日日本の一切衆生・法華經の法音を聞くと
云えども未だ能く信ぜず豈疑網皆已に除かんや、除かざれば入阿鼻獄
は疑

無きなり、疑うたがいの字は元品がんぽんの無明むみょうの事なり此の疑うたがいを断つを信とは云うなり、釈いわに云く無疑うたがい曰いわ信うたがいと云えり身子しんしは此の疑うたがい無き故ゆえに華光げこう仏ぶつと成なれり、今日けふ蓮等れんどうの類たぐひは題目だいもくの法音ほうせいを信受しんじゅする故ゆえに疑網ぎもう更に無し、如ごと我等われら無異むいとて釈迦しやか同等どうどうの仏ぶつにやすやすとならん事疑うたがい無きなり、疑網ぎもうと云うは色心しきしんの二法にぽうに有ある惑障わくしやうなり、疑うたがいは心法しんぽうにあり・網あみは色法しきぽうに

あり、此の經きやうを持ち奉たてまつり信しんずれば色心しきしんの二法にぽう共に悉ことごとく除とくと云う事なり、此の皆みな已いの已いの字じは身子しんし尊者そんじや・広開くわいかい三頭さんとう一いつを指さして已いとは云うなり、今は領解りやうげの文段ぶんだんなり、身子しんし・妙法みやうぽう実相じつさうの理りを聴聞ちやうもんして心懷しんかい大歡喜だくあんきせしなり、所詮しよせん舍利弗しやりふつ尊者そんじや程ちやうの智者ちしや・法華ほけきやう經きやうへ來きつて華光げこう仏ぶつとなり、疑網ぎもうを断除だんじよせり、何いかに況いわんや末法まつぽう當時とうじの權人ごんじん謗法ぼうぽうの人人ひとひと・此の經きやうに値あわづんば成仏じやうぶつあらんや云云。

一 以本願故說三乘法の事

仰に云く此の經文は身子尊者・成道の

の国・離垢世界にて三乗の法は惡世には非ず、然りと雖も身子本願の

故に説くと云えり、其の本願と云うは身子菩薩の行を立てしに乞眼の

婆羅門に眼を抉じられて、其の時・菩薩の行を退転したり、此の菩薩の

行を百劫立てけるに、六十劫なして今四十劫たらざりき、此

の時・乞眼に眼を抉じられて其の時・菩薩の行を退して願成仏・曰・

開三乘法の願を立てたるなり、上品淨土・不須開漸なれば三乗の法を

説く事は更に以てあるまじけれども以本願故の故にて三乗の法を説く

なり、此の行は禪多羅仏の所にして立つるなり、此の事は身子が六住退

とて大なる沙汰なり、重重の義勢之れ在り輒く心得難きの事なり、或

は欲怖地前の意、或は權者退云云、所詮は六住退とは六根・六道に

菩薩の行を取られたりと云う事な

り、之を以て之を思うに末法当今・法華經を修行せんには、必ず身子
が退轉たいてんの如くなるべし、所詮身子が眼を取らるるは菩薩の智慧の行を
取らるるなり、今日蓮等の類い・南無妙法蓮華經の眼を持ち奉るに
謗法ぼうぼうの諸人に障礙さわりせらるる・宝眼を抉り取らるるに非ずや、所詮彼の
乞眼ぼらもんの婆羅門・眼を乞いしは身子が菩薩の行を退轉たいてんせしめんが為に乞
いて踏みつぶして捨てたり、全く菩薩の供養くようの方を本として眼をば乞わ
ざりしなり、只だ退轉たいてんせしめん為な

り、身子しんしは一念菩薩いちねんぼさつの行を立てて・かかる事に値あえり、向後こうごは菩薩ぼさつの行をば立つ可べからず二乗にじようの行を立つ可べしと云つて後悔こうかいせし故ゆえに成仏じやうぶつの日・説三乘法せつさんじやうぼうするなり、所詮しよせん乞眼婆羅門びらもんの責を堪たえざるが故なり、法華經ほけきやうの行者ぎやうじや・三類さんるいの強敵きやうてきを堪忍かんにんして妙法みやうぼうの信心しんじんを捨すつ可べからざる見り信心しんじんを以て眼まなことせり云云。

一有大長者ちやうじやの事

仰いに云く此この長者ちやうじやに於いて天台大師てんだいだいし・三の

長者ちやうじやを釈しやくし給たまえり、一には世間せけんの長者ちやうじや・二には出世しゆつせの長者ちやうじや・三には

觀心かんじんの長者ちやうじや是なり、此この中に出世しゆつせ觀心かんじんの長者ちやうじやを以て、此の品の長者ちやうじや

とせり、長者ちやうじやとは釈迦しやくか如來にやらいの事なり、觀心かんじんの長者ちやうじやの時ときは一切衆生いっさいしゆじやうな

り、所詮しよせん法華經ほけきやうの行者ぎやうじやは男女なんによ共に長者ちやうじやなり、文句もんくの五ごに委くわしく釈しやくせ

り、

末法まっぽう當今とうこんの長者ちやうじやと申もうすは日蓮等にちれんの類たぐい・南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつる

者なり、されば三の長者ちやうじやを釈しゃくする時、文句もんく五に云く、二に位号いごうを探するに三と為すな、一は世間の長者せけんちやうじや・二は出世しゅつせの長者ちやうじや・三は觀心かんじんの長者ちやうじやなり、世に十徳そなを備う、一には姓貴しやうき・二には位高いこう・三には大富だいふ・四には威猛いもう・五には智深ちしん・六には年耆ねんき・七には行淨ぎやうじやう・八には礼備らいび・九には上歎じやうたん・十には下歸げきなり云云、又云く、出世しゅつせの長者ちやうじやは、仏は三世さんぜの真如實際しんによの中より生ず、功成り、道著みちあわれて、十号じゅうごう極り無し、法財万徳ほふざいばんとく、悉く皆ことごとみな具つぶさみたに満せり、十力雄猛じゅうりきゆうもうにして、魔を降し外げを制す、一心いっしんの三智通達さんちつうだつせずと云うこと無し、早く正覺しやうかくを成じて、久遠くおんなること斯くかの如し、三業智さんごうちに随したがつて、運動して矢無し、仏の威儀いぎを具して、心

大なること海の如しごと、十方じゅうぽうの種覺しゆかく・共に称譽しやうよする所なり、七種しちしゆの方便ほうべん・而も来しかつて依止えしす、是これを出世しゅつせの仏大長者ちやうじやと名くなず、三に觀心かんじんとは、觀心かんじんの智実相ちじつしやうより出いで生じて仏家ぶつかけにあり、種性真正しゆじやうしんじやうなり、三惑さんかく起らず、未だ

眞まことを發はくさずと縮ちぢも是これ如來にょらいの衣えを着きれば、寂滅じやくめつ忍にんと稱しょうす、三諦さんたいに一切いっさいの功徳くどくを含藏がんぞうす、正觀せいこんの慧え・愛見あいけんを降伏かうふくす、中道ちゆうどう双さうべ

照てらして權實ごんじつ並ならに明あなり、久くく善根ぜんこんを積たみて・能よく此この觀くわんを修しゆす、此この觀くわん七方便ほうべんの上うへに出いでたり、此この觀くわん・心性しんしよを觀くわんずるを上定なずと名なくれば、即すなわち三業過無りやくぐえんし、歷緣對境りやくぐえんするに成儀失無とがし、能よく此この如ごとく觀くわんず、是これ深信解しんげの相諸しよぶつ仏みな皆歡喜かんきして持法しほふつの者みなを歎美たんびしたもう、天龍てんりゅう・四部しふ・恭敬供養きやうけいぐやうす、下しもの文ぶんに云いく、仏子ぶつし是この地ちに住すすれば、即すなわち

是れ仏受用し給い、経行し及び坐臥し給わんと、既に此の人を称して
仏と爲す、出田觀心の長者と名けざらんやと此の積分明に觀心の
長者に十徳を具足すと釈せり、所謂引証の文に、分別功德品の則是
仏受用の文を引けり、經文には仏子住此地とあり、此の字を是の字に
うつせり、経行若坐臥の若を及の字にかえたり、又法師品の文を引け
り、所詮仏子とは法華經の行者なり、此地とは真相の大地なり、経行
若坐臥とは法華經の行者の四威儀の所作の振舞、悉く仏の振舞なり、
我等衆生の振舞の当体、仏の振舞なり、此の当体のふるまいこそ長者
なれ、仍つて

觀心の長者は我等凡夫なり、然るに末法当今の法華經の行者より外
に、觀心の長者無きなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る
者、無上宝緊不求自得の長者に非ずや、既称此人爲仏の六字に心を

留めて案ずべきなり云云。

一多有田宅の事

仰に云く田宅とは、長者の財宝なり、所詮田

と云うは命なり、宅とは身なり、文句の五に田宅をば身命と釈せり、

田は米なり、米は命をつぐ、宅は身をやどす是は家なり、身命の二を

安穩にするより外に財宝は無きなり、法門に約すれば田は定・宅は慧

なり、仍つて定は田地の如し、慧は万法の如し、我等一心の田地

より諸法の方法は起れり、法華一部方寸知るべしと釈して八年の法華

も一心が三千と開きたるなり、所詮田は定なれば妙の徳、宅は慧の徳

なれば法の徳、又は本・迹同門なり、止観の二法なり、教主釈尊本・迹

両門の田宅を以つて一切衆生を助け給えり、田宅は我等衆生の色心の

二法なり、法華經に低い奉りて、南無妙法蓮華經と唱え

奉る時・煩惱即菩提・生死即涅槃と体達するなり、山扁多有田宅の

ちようじや

長者ちようじやに非あらずや、多有と云う心は心法に具足ぐそくする心数しんずなり、色法に

具足ぐそくする所作しよさなり、然しからば多有田宅の文は一念三千いちねんさんぜんの法門ほうもんなり、

其そのの故ゆえは一念いちねんは定さだなり、三千さんぜん

は慧えなり、既すでに釈しやくに云く、田宅は別譬べつひなり、田は能よく命を養う、禪定ぜんじよう

の般若はんやを資するに譬たとう、宅は身を栖すます可べし、実境の智の所託すなわと為なる

に譬たとう云云、此の釈分ふん明みょうなり、田宅は身命しんみょうなり、身命しんみょうは即すなわち南無なむ

妙法蓮華經みようほうれんげきようなり、此

の題目だいもくを持ちたも奉たてまつる者は宝多有田宅の長者ちようじゃに非あらずや、今末法まつぽうに入いつて
日蓮等にちれんの類たぐい・多有田宅の本主として如説修行によせつしゆぎようの行者ぎようじゃなり云云。

一等一大車の事

仰いに云いく此の大車とは直至道場じきしどうじようの大白牛車だいびやくこしやに

して其その疾はやきこと風の如ごとし、所詮しよせん南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげききようを等一大車と云うな

り、等と云うは諸法実相しよほうじつそうなり、一とは唯有一乘法ゆいいういちじようなり、大とは大乘だいじような

り、車とは一念三千いちねんさんぜんなり、仍よつて釈しやくには等の字を子等車等と釈しやくせり、子

等の等と如我等にやがとうむい無異の等とは同なり、車等の等は平等大慧びようどうだいえの等なり、

今日蓮等いまにちれんの類たぐい・南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげききようと唱となえ奉たてまつる者は男女なんよ・貴賤きせん共に無上むじよう

宝聚ほうじゆ・不求自得ふぐじとくの金言きんげんを持つ者なり、智者愚者ちしやぐしやをきらわず共に

即身成仏そくしんじようぶつなり云云、疏じよの五いに云く一に等子二に等車・子等しきを以て

の故ゆえに則すなわち心等いっさいししめじようし、一切衆生いっせしうあ等しく仏性ぶつじよう有るに譬たとう、仏性ぶつじよう同じきが

故ゆえに等しく是これ子なり、第二に車等とは法等しきを以ての

故に仏法に非ざることを無し、一切法皆摩訶えんなるに誓う、摩訶えん同じきが故に等しく是れ大車なり、而して各賜と言ふは各々本習に随う、四諦六度無量の諸法・各各旧習に於て真実を開示す、旧習同じからず故に各と言ふ、皆摩訶えんなり故に大車と言ふ云云。

一其車高広の事

仰に云く此の車は南無妙法蓮華經なり、即ち

われらしめじよう

ほつけ

なむみようほうれんげきよう

すなわ

我等衆生の体なり、法華一部の総体なり、高広とは仏知見なり、されば此の車を方便品の時は諸仏智慧と説き其の智慧を甚深無量と称歎せり、歎の言には甚深無量とほめたり、爰には其車と説いて高広とほめたり、されば文句の五に云く其車高広の下は如来の知見深遠

たと

よこしま

へんざい

あまね

さんたい

ゆえ

と言うなりと、所詮此の如来とは一切衆生の事なり既に諸法実相の仏なるが故なり、知見とは色心の二法なり知は心法・見は色法なり、色心

二法を高広と云えり、高広そく即本・迹二門なり此これ即すなわち南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうなり云云。

一是朽故宅属干一人の事 仰いに云いく此の文をば文句もんくの五ごに云いく出火しゅの由よしを明あす文、此の宅たくとは三界さんがいの火宅くわたくなり

り、火と云うは煩惱ぼんのうの火なり、此の火と宅とをば属ぞく于一人として釈迦しやか一仏いちぶつの御利益りやくなり、弥陀みだ・薬師やくし・大日等だいにちの諸仏しよぶつの救護くごに非あらず、教主きやうしゆ釈尊しやくそん一仏いちぶつの御化導けどうなり、唯我一人ただわれひとり・能為救護のういくごとは是これなり、此の属ぞく于一人の文を重かさねて、五卷提婆品だいはに説いて云く觀二三千大千世界一乃至無レ有下如芥子許けし非是菩薩捨二身命一しんみやう一処上為二衆生一故文、妙染みやうらん大師だいし・此の属ぞく于一人の經文を釈しやくする時・記の五に云く、咸ことごとく長者ちやうじやに歸す・二一番・一切皆然いっさいみなしかなりと判ぜり、既に咸歸長者げんきちやうじやと釈しやくして、法界ほっかいに有りいっさいしゆじやとある一切衆生の受くる苦惱くのうをば、釈尊しやくそん一人の長者ちやうじやに歸すと釈しやくせり、一色一香一切皆然いっしきいっかう いっさいみなしかとは、法界ほっかいの千草万木・飛華落葉ひけらくようの為体てい、是れ皆無常遷滅みなむじやうせんめつの質と見て仏道ぶつどうに歸するも、属ぞく于一人の利益りやくなり、此

の利益りやくの本源ほんげんは南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうの内証ないしやうに引入れしめんが為なり、所詮しよせん

末法に入つて属于一人の利益は日蓮が身に当りたり、日本国の一切衆生の受くる苦惱は、悉く日蓮一人が属于一人なり、教主釈尊はただわれひとり能為救護、日蓮は一人能為救護に云云、文句の五に云く、唯我一人・能為救護、日蓮は一人能為救護に云云、文句の五に云く、是朽故宅属于一人の下、第二に一偈有り、失火の由を明す、三界は是れ仏の化応の処発心已来誓つて度脱せんと願う、故に属于一人と云うと、此の釈に発心已来誓願度脱の文、豈日蓮の身に非ずや云云。

一諸鬼神等揚声大叫の事 仰に云く諸鬼神等と云うは親類部類等を鬼神と云うなり、我等衆生死したる時・妻子・眷属あつまりて悲歎するを揚声大叫とは云うなり、文句の五に云く諸鬼神等の下、第四に一行半は被焼の相を明す、或云く親属を鬼神と為し・哭泣を揚声と為すと。

一乘此宝棄直至道場の事

仰に云く此の經文は我等衆生の

煩惱ぼんのう即そく菩提ぼだい・生死しょうじ即そく涅槃ねはんを明あきせり、其そのの故ゆえは文句もんくの五ごに云いく、此このの因いん
易かること無なきが故ゆえに直じき至しと云いう、此このの、釈しゃくの心こころは爾前にぜんの心こころは煩惱ぼんのうを捨すて
て生死しょうじを厭いとうて別べつに菩提ぼだい涅槃ねはんを求もとめたり、法華ほけきやう經きやうの意いは煩惱ぼんのう即そく菩提ぼだい・
生死しょうじ即そく涅槃ねはんと云いえり、直ちくと即そくとは同どうじ事じなり、所詮しよせん日蓮にちれん等らの・類たぐい
南無なむ妙法蓮華みやうほうれんげきやう經きやうと唱となえ奉たてまつる者ものの、住処じゆうしよ即そく寂光じやくかう土どと心得こころう可べきなり、
然しかれば此このの実乘じつじやうに乗のじて、忽たちまちに妙覺みやうかく極果ごくこつか

の位に至るを直至道場とは云うなり、直至と云う文の意は、四十二位を爰にて極めたり、此の直の一字は、地獄即寂光・餓鬼即寂光土なり、法華經の行者の住处、山谷曠野なりとも、直至道場なり、道場とは究竟の寂光なり、仍って乗此宝乗の上の乗は法華の行者、此の品の意にては中根の四大声聞なり、惣じて一切衆生の事なり、今末法に入つては日蓮等の類いなり、宝乗の乗の字は大白牛車の妙法蓮華經なり、然れば上の乗は能乗・下の乗は所乗なり、宝乗は蓮華なり、釈迦・多宝等の諸仏も、此の宝乗に乘じ給えり、此れを提婆品に重ねて説く時・若在仏前蓮華化生と云云、釈迦・多宝の二仏は我等が己心なり、此の己心の法華經に値い奉つて成仏するを顕わさんと
して釈迦・多宝・二仏・並座して乗此宝乗・直至道場を顕わし給えり、此の乗とは車なり、車は蓮華なり、此の蓮華の上の妙法は、我等が

生死しやうじの二法・二仏なり、直至じきしの至は此れより彼へいたるの至いたるには非あらず

住处じゆうしよ即寂光と云うを至とは云うなり、此の宝乗の宝は七宝しつぽうの大神しんなり

り、七宝しつぽう即ち頭上の七穴・七穴即ち末法の要法・南無妙法蓮華經

是これなり、此の題目だいもくの五字ごじ、我等衆生の為ためには、三途の河にては船とな

り、紅蓮地獄ぐれんじごくにては寒さをのぞき、焦熱地獄しやうねつじごくにては涼風となり、死出の

山にては達華となり、渴せる時は水となり・飢えたる時は食となり・裸

かなる時は衣となり、妻となり、子となり、眷属けんぞくとなり、家となり、

無窮むぐうの応用を施ほどこして一切衆生を利益りやくし給たまうなり、直至道場じきしどうじやう

とは是これなり、仍よつて此の身を取りも直さず寂光土じやくくわうどに居るを直至道場じきしどうじやうと

は云うなり、直の字心を留とどめて之これを案べず可べし云云。

一若人にやくにんふしん不信毀謗きぼう此經則新一切世間・仏種ぶつしゆの事 仰いひわに云く此の經文きやうもん

の意は小善成仏しやうぜんじやうぶつを信ぜずんば一切世間の仏種ぶつしゆを断ずと云う事なり、

もんく
文句もんくの五ごに云いく、今こん經ぎやうに小善しょうぜん成じやう仏ぶつを明めいす、此これは縁えん因いんを取とつて仏種ぶつしゆ
と為なす、若もし小善しょうぜんの成じやう仏ぶつを信しんぜずんば、即そくと一切いっさい世間せけんの仏種ぶつしゆを断たずる
なり文ぶん、爾前にぜんきやう經ぎやうの心しんは小善しょうぜん成じやう仏ぶつを明めいさざるなり、法華ほけきやう經ぎやうの意いは一・華
・一香しやうせんの小善しょうぜんも法華ほけきやう經ぎやうに歸かへりすれば大善だいぜんとなる、縦たとい法界ほつかいに充満じゅうまんせる
大善だいぜんなりとも此この經ぎやうに値あわずんば善根ぜんこんとは

ならず、譬たとえば諸河の水・大海たいかいに入りぬれば鹹かんの味となる、入らざれば本の水なり、法界ほっかいの善根ぜんこんも、法華經ほっけきょう・歸入きにゅうせざれば善根ぜんこんとはならざるなり、されば釈いわに云く、断一切仏種いつさいぶつしゅとは淨名じやうみやうには煩惱ぼんのうを以て如来にょらいの種と為す、此れ境界性きやうかいしやうを取るなり、此の釈しやくの心は淨名經じやうみやうきやうの心ならば我等衆生の一日一夜に作す所の罪業・八億四千の念慮を起す、余經よきやうの意は皆三途の業因ごういんと説くなり、法華經ほっけきやうの意は、此の業因ごういん・即ち仏ぞと明せり、されば煩惱ぼんのうを以て如来にょらいの種子しゆしとすと云うは此の義なり、此の淨名經じやうみやうきやうの文は、正しく文在爾前・義在法華の意なり、此の境界性きやうかいしやうと云うは、末師釈しやくする時、能生煩惱のうしやうぼんのう・名境界性きやうかいしやうと判ぜり、我等衆生の眼耳等の六根ろくこんに妄執もうしゆを起すなり、是を境界性きやうかいしやうと云うなり、權教ごんきやうの意は此の念慮を捨てよと説けり、法華經ほっけきやうの心は、此の境界性きやうかいしやうの外に、三因仏性の種子さんいんぶつしやうしゆしなし、是れ則ち三身円満の仏果ぶつかとな

るべき種性なりと説けり、此の種性を、權教を信ずる人は之を知らず
此の經を謗るが故に、凡夫即極の義をも知らず、故に一切世間の仏種
を斷ずるなり、されば六道の衆生も三因仏性を具足して、終に
三身円満の尊容を顯す可き所に、此の經を謗するが故に、六道の仏種
をも斷ずるなり、されば妙樂大師云く、此の經は遍く六道の仏種を開
す、若し此の經を謗するは、義・斷に當るなりと、所詮日蓮が意は一切
の言は十界をさす、此の經を謗するは十界の仏種を斷ずるなり、され
ば、誹謗の二字を大論に云く、口に謗るを誹と云い、
心に背くを謗と云うと、仍つて色心三業に經て、法華經を謗じ奉る人
は入阿鼻獄疑い無きなり、所謂弘法・慈覺・智証・善導・法然・達磨等
の大謗法の者なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る、豈二
世の諸仏の仏種を繼ぐ者に非ずや云云。

一捨惡知識親近善友の事

仰に云く惡知識とは在世にては善星

・瞿伽利・提婆等是なり、善友とは迦葉・舍利弗・阿難・目連等是なり、

末法當今に於て惡知識と云うは法然・弘法・慈覺・智証等の權人謗法の

人人なり、善知識と申すは日蓮等の類の事なり、惣じて知識に於て重

重之れ有り、外護の知識・同行の知識・実相の知識是なり、

所詮実相しよせんじつぞうの知識ちしきとは所謂南無妙法蓮華經いわゆるなむみょうほうれんげきようこれ是なり、知識ちしきとは形をしり、心をしるを云うなり、是れ即ち色心の二法なり、謗法ほうぼうの色心を捨てて法華經ほけきようの妙境・妙智みょうちの色心を顯すべきなり、惡友あくゆうは謗法ほうぼうの人人ひとびとなり、善友ぜんゆうは日蓮等にちれんの類たぐいなり。

一無上宝聚不求自得の事

仰に云く、此の無上宝聚むじようほうじゆに於て一には

釈尊しゃくそんの因行・果徳の万行・万善の骨髓こつずいを宝聚ほうじゆと云うなり、二には

妙法蓮華經みょうほうれんげきようの事なり、不求ふぐとは中根の四大声聞しやうもんは此くの如き宝聚ほうじゆを

任運自在にんうんじざいと得たり此実我子我実其父の故なり、総じては一切衆生の事

なり、自得じとくと云うは自は十界じゅうかいの事なり、此れは自我得仏来の自と

同じ事なり、得も又同じ事なり末法に入つては自得じとくとは日蓮等にちれんの類たぐ

なり、自とは法華經ほけきようの行者ぎやうじや、得とは題目だいもくなり、得の一字には師弟していを含

みたり、与うると得るとの義を含めり、不求ふぐとは仏法ぶつぽうに入るには修行しゆぎやう・

覚道かくどうの辛勞あり、釈迦しやか如来にやらいは往来娑婆しやば八千反の御辛勞にして求め給うたまくどく
功德なり、さて今の釈迦牟尼しやかむにぶつ仏と成り給えり、法華經ほけきやうの

ぎやうじや

行者は求めずして此の功德を受得じゅとくせり仍て自得じとくとは説かれたり、此の

自の字は一念いちねんなり得は三千さんぜんなり、又自は三千さんぜん・得は一念いちねんなり、又た自は

自なり得は他なり、総じて自得じとくの二字に法界ほっかいを尽くせり、所詮しよせん此の
妙法蓮華經みやうほうれんげきやうを自よ

り得たり、自とは釈尊しやくそんなり、釈尊しやくそんは即ち我が一心いつしんなり、一心いつしんの釈迦しやかよ

り受得じゅとくし奉る南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうなり、日蓮にちれんも生年三十二にして自得じとくし

奉る題目たてまつだいもくなり云云。

一葉草喩品やくそうゆほんの事

仰いわに云く葉やくとは是好良葉ぜこうりやうやくの南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうな

り、妙法みやうほうを頂上みやうじやうにいたきたる草なれば、葉あはに非ずと云う事なし、草

は中根しやうもんの声聞しやうもんなれども、惣そうじては一切衆生いっさいしゆじやうなり、譬たとえば土器に葉あはをか

けたるが如し、我等衆生・父母果縛の肉身に南無妙法蓮華經の薬をか
けたり、煩惱即菩提・生死即涅槃は是なり云云、此の分を教う
るを喩とは申すなり、釈に云く、喩とは曉訓なりと、提婆・竜女の
畜生・人間も、天帝・羅漢・菩薩等も、悉く薬草の仏に非ずと云う事な
し、末法当今の法華の行者の日蓮等の類い、薬草にして日本国の一
衆生の薬王なり

云云。

一現世安穩・後生善処の事

仰に云く所詮此の妙法蓮華經を聴聞

し奉るを現世安穩とも後生善処とも云えり、

既に上に聞是法已と説けり聞は名字即の凡夫なり妙法を聞き奉る所

にて即身成仏と聞くなり、若有能持即持仏身とは是なり、聞く故に

持ち奉るの故に三類の強敵来る来るを以て現世安穩の記文顯れたり、

法華の行者なる事疑無きなり、法華の行者はかかる大難に値うべし

と見えたり、大難に値うを以て後生善処の成仏は決定せり是れ豈

現世にして安穩なるに非ずや、後生善処は提婆品に分明に説けり、

所詮現世安穩とは法華經を信じ奉れば三途八難の苦をはなれ善惡

上下の人までも皆教主釈尊・同等の仏果を得て自身本覺の如来なり

と顯す、自身の当体・妙法蓮華經の葉草なれば現世安穩なり、爰を開

くを後生善処ごしょうぜんしよと云うなり、妙法蓮華經みょうぼうれんげきやうと云うは妙法の藥草なり、
所詮現世安穩しよせんげんせあんのんは色法ごしやうぜんしよ・後生善処ごしょうぜんしよは心法なり、十界の色心じゆつかいしきしん・妙法みょうぼうと開覺かいかく
するを現世安穩げんせあんのん・後生善処ごしょうぜんしよとは云うなり、所詮法華經しよせんほけきやうを弘ひろむるを以て
現世安穩げんせあんのん・後生善処ごしょうぜんしよと申すなり云云。

一皆悉かいしつ到於一切智地いっさいちちの事 仰いに云く一切智地いっさいちちと云うは法華經ほけきやうなり、

譬たとえば三千大千世界さんぜんだいせんせかいの土地とち・草木そうもく・人畜等じんちく・皆大地みなだいちに備りたるが如ごとくな

り、八万法藏はちまんほうやう・十二部經じふにぶきやう・悉いく法華ほつけに歸入きにゆうせしむるなり、皆悉かいしつの二字を

ば善人ぜんにんも惡人あくにんも迷まよひも悟いつさいしじやうも一切衆生の惡業あくごうも善業ぜんごうも其その外やくし藥師だいにち・大日

・彌陀みだ並びに地藏じやう・觀音かんのん・横よこに十方じふぱう・豎さんぜに三世有りとある諸仏しよぶつ

の具德しよぼさつ・諸菩薩しよぼさつの行德そう・惣じゆつかいじて十界じゆつかいの衆生の善惡ぜんあく・業作等かいしつを皆悉かいしつと説け

り、是これを法華經ほけきやうに歸入きにゆうせしむるを一切智地いっさいちちの法華經ほけきやうと申すなり、され

ば文句もんくの七いに云く皆悉かいしつ到於一切智地いっさいちちとは、地ちとは実相じつそうなり、究竟くきやうして

二に非あらず故ゆえに

一と名なくるなり、其その性こう広博はくなり、故ゆえに名けて切なと為す、寂じやくにして常照ゆえなり、故ゆえに名けて智なと為す、無住むぢうの本ほんより一切いっさいの法ほふを立たす、故ゆえに名けて地なと為す、此これ円教えんきやうの実説じつせつなり、凡おほそ所説しよせつ有あるは皆衆生みなしゆじやうをして此ちの智地ちぢに到いたらしむ云云、此この釈しやくは一切智地いっさいちぢの四字しじを委くわしく判はんぜり、一いっをば究竟くきやうと云いい切きをば広博こうはくと釈しやくし智ちをば寂而常照じやくにちやうしやうと云いい

地をば無住之本と判ぜり、然るに凡有所説は約教を指し、皆令衆生は
機縁を納るるなり、十界の衆生を指して切と云い凡有所説を指して、
究竟非二故名一也と云えり、一とは三千大千世界・十方法界を云う
なり、其の上に人畜等あるは地なり、記の七に云く、切を衆に訓ずと
文、仍つて一切の二字に法界を尽せりなり、諸法は切なり実相は
一なり、所詮・法界実相の妙体・照而常寂の一理にして十界三千・一
法性に非ずと云う事なし是を一と説くなり、さて三千の諸法の己己に
本分なれば切の義なり、然らば一は妙・切は法なり、妙法の二字・一切
の二字なり、無住之本は妙の徳・立一切法は法の徳なり、一切智地とは
南無妙法蓮華經是なり一切智地・即一念三千なり、今末法に入つて
一切智地を弘通するは日蓮等の類い是なり、然るに一とは一念なり切
とは三千なり、一心より松よ桜よと起る

は切なり、是は心法に約する義なり、色法にては手足等は切なり、一身なるは一切なり、所詮色心の二法・一切智地にして南無妙法蓮華經なり云云。

一此の一切智地の四字

に法華經一部八卷文文・句句を収めた

り、此の一切智地とは三諦・二諦・非三非一なり、三智に約すれば空智なり、さては三諦とは云い難し、然りと雖も三諦・一諦の中の空智なり、されば三諦に於て三三九箇の三諦あり、先ず空諦にて三諦を云う時は空諦と呼出だすが仮諦・空諦なるは空諦なり・不二するは

中道なり、

三諦同じく此くの如く心得可きなり、

所詮此の一切智地

をば九識法性と心得可きなり、

九識法性をば、

迷悟不二・凡聖一如な

れば空と云うなり、

無分別智光を空と云うなり、此の九識法性とは、

いかなる所の法界を指すや、法界とは十界なり、十界即諸法なり、此

の語法ことばの当体とうたい・本有ほんぬの妙法蓮華經みょうほうれんげきょうなり、此の重おもに迷まよう衆生しゅじょうの

為ために、一仏現いちぶつげんじて分別ぶんべつ説三さんするは、九識くしち本法ほんぽうの都みなを立出たていずるなり、さ

て終ついに本の九識くしちに引入いれいする、夫それを法華經ほけきょうとは云いうなり、一切いっさい智地ちちと

は是これなり、一切いっさい智地ちちは我等衆生われらしゅじょうの心法しんぽうなり心法しんぽう即すなわち妙法みょうぽうなり一切いっさい

智地ちちとは是これなり

云云。

一根茎枝葉の事

仰に云く此の文をば釈には信戒定慧と云云、

此の釈の心は草木は此の根茎枝葉を以て増長と云うなり、仏法修行するも又斯くの如し、所詮我等衆生・法華經を信じ奉るは根をつけたるが如し、法華經の文の如く是名持戒の戒体を本として、正直捨方便・但説無上道の如くなるは戒なり、法華經の文相にまかせて、

法華三昧を修するは定なり、題目を唱え奉るは慧なり、所謂法界悉く生住異滅するは信・己己本分は戒・三世不改なるは定なり、各各の徳義を顯したるは慧なり、是れ即ち法界平等の根茎枝葉なり、是れ即ち真如实相の振舞なり、所謂戒定慧の三学・妙法蓮華經なり、此れを信ずるを根と云うなり、釈に云く三学俱に伝うるを名けて妙法と曰うと云云。

一根茎枝葉の事

仰に云く此れは我等が一身なり、根とは心法な

り莖とは我等が頭より足に至るまでなり、枝とは手足なり、葉とは毛なり、此の四を根莖枝葉と説けり、法界三千此の四を具足せずと云う事なし、是れ即ち信戒定慧の体にして実相一理の南無妙法蓮華經の体なり、法華不信の人は根莖枝葉ありて増長あるべからず枯塙の衆生なるべし云云。

一枯塙衆生の事 仰に云く、法華經を持ち奉る者は、枯塙の衆生に非ざるなり、既に法華經の種子を受持し奉るが故なり、謗法不信の人は下種無き故に枯塙の衆生なり、されば、妙樂大師の云く、余教を以て種と為さず文。

一等雨法雨の事 仰に云く等とは平等の事なり、善人・惡人、二乘・闡提、正早・邪見等の者にも、妙法の雨を惜まず平等にふらすと云う事なり、されば法の雨を雨すと云う時は、大覺世尊ふらしてに

成り給^{たま}えり、さて、の雨ふりてとよむ時は、本より実相^{じつそう}平等^{びやうどう}の法雨^{ほうう}は、
常住^{じやうじゆう}本有^{ほんぬ}の雨なれば、今始めてふるべきに非^{あら}ず、されば、諸法^{しよほう}実相^{じつそう}
を、譬喩^{ひゆ}品の時は風月に譬^{たと}えたり、妙樂^{みょうらく}大師^{だいし}は何ぞ隠^{なん}れ何ぞ顕^{あらわ}れんと
釈^{しやく}せり、実相^{じつそう}の法雨^{ほうう}は三世^{さんぜ}常恒^{じやうごう}に

して、おんけん 隠顕更に無きなり、所詮しよせん、等の字はひとしくとよむ時は、しやか 釈迦
如来にょらいの平等びやうどうの慈悲じひなり、さて、ひとしきとよむ時は、びやうどうだいえ 平等大慧の
妙法蓮華經みょうほうれんげきやうなり、ひとしく法の雨をふらすとは、のうぐ 能弘につけたり、ひと
しき法の雨ふり、にりと読む時は、所弘しよぐの法なり、所詮しよせん法と云うは、
十界じゅうがいの語法なり、雨とは十界じゅうがいの言語・音声おんじやうの振舞ふるまいなり、ふると
は自在じざいにして地獄じごくは洞燃猛火みょうか、乃至ないし仏界ぶつがいの上の所作しよさ音声おんじやうを、等雨法雨ほうう
とは説まづけり、此の等雨法雨ほううは法体ほつたいの南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうなり、今末法まっぽうに入
つて、日蓮等にちれんの類たぐいの弘通ぐつうする題目だいもくは、等雨法雨ほううの法体ほつたいなり、此の法雨ほうう
・地獄じごくの衆生しゆじやう・餓鬼がき・畜生ちくじやう等にいた至るまで同時どうじにふりたる法雨ほううなり、
日本国にほんこくの一切衆生いつさいしゆじやうの爲ために付属ふぞくし給たまう法雨ほううは題目だいもくの五字ごじなり、
所謂いわゆる日蓮建立にちれんこんりやうの御本尊ごほんぞん・南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやう是なり云云、方便品ほうべんには
本末究竟等ほんまつくきやうと云えり、譬喩品ひゆほんには等一大事いちだいじと云えり、此の等の字を

重かさねて説とかれたり、或あるは如に我等がとうむい無異と云えり、此の等の字は宝ほう塔とう品ぽんの如に是よとよぜぜ同じなり、

所詮等しよせんとは南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようなり、法雨ほううをふらすとは今身こんじんより仏身ぶつしんに至いたるまで打うつや否いなやと云う受持じゆじの言語ごんごなり云云。

一等雨法雨ほううの事

仰いに云いく此の時みは妙法実相みょうほうじつそうの法雨ほううは十界三千じゅうかいさんぜん

・下じごくは地獄・上じごくは非想非非想よこしまじゅっぽうまで横よこに十方・豎さんぜに三世さんぜに亘わたつて妙法みょうほうの

功徳くどくをふるを等ととは云うなり、さてふるとは一切衆生いっさいしゆじようの色心しきしん・

妙法蓮華經みょうほうれんげきようと三世常住さんぜじようじうふるなり云云、一義いに云く、此の妙法の雨みょうほうは

九識本法ほつたいの法体ほつたいなり、然しかるに一仏現前いちぶつげんぜんして説とき出いす所の妙法みょうほうなれば、

法

の雨をふらすと云うなり、其そのの故ゆゑは、ふらすと云うは上より下へふる

を云うなり、「のつて従果向因じゅうかこういんの義なり、仏に約すれば、第十の仏見ぶつけんよ

り九界へふらす、法体^{ほつたい}にては・ふる処^{ところ}も・ふらす処^{ところ}も、真如^{しんにょ}の一理なり
識分にては八識

へふり下りたるなり、然^{しか}らば今日^{いまにちれん}蓮等^{たぐ}の類^ない南無妙法蓮華經^{なむみょうほうれんげきやう}を日本^{にほん}国^{こく}
の一切衆生^{いっさいしゆじやう}の頂上^{ちやうじやう}にふらすを法の雨をふらすと云うなり云云。

一如^{いこ}從飢国^{けこく}来^き忽遇^{こつぐ}大王膳^{だいおう}の事 仰^{おほ}に云^いく此の文は中根の四大声聞^{しやうもん}・
法華^{ほつげ}に來れる事、譬^{たと}えばうえたる国より

来りて大王だいおうのそなえに値あうが如ごとくの歡喜かんきなりと云えり、然らば此の文の如ごとくならば法華ほっけ已前いぜんの人は餓鬼界がきの衆生しゅじょうなり、既に飢国けこく来と説けり、大王膳だいおうとは醍醐味だいごみなり、中根しゅうもんの声聞ほっけ・法華ほっけに來つて一乘いちじょう醍醐だいごの法味ほうみを得て忽たちまちに法王ほうおうの位そなわに備りたり、忽の字は爾前にぜんの迂廻道の機きに對して忽と云うなり、速疾頓成そくしつとんじょうの義を忽と云うなり、假令外用たとい

の八相となを唱となうる事は所化しよけをして仏道ぶつどうに進めんが爲なり、所詮しよせん末法まつぽうに入つては謗法ぼうぼうの人人ひとひとは餓鬼界がきの衆生しゅじょうなり、此の經に値あい奉り・南無なむ妙法蓮華經みょうほうれんげきょうに値あい奉る事は併しかしながだいおうたてまつ・南無なむ釈に云く、成仏じょうぶつの難がたきには非あらず、此の經に値あうをかたしとすと云えり、不輕品ふぎように云く復また通常不輕ふぎようと云云、嚴王品いんおうに云く生値しやうち仏法ぶつぽう云

云、大王だいおうの膳あに値あいたり、最も以て南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうを信受しんじゆし奉る可きなり、此の經文きやうもんの如ごとくならば法華ほっけより外ほかの一切衆生いっさいしゅじょうはいかに高貴の人

なりとも餓鬼道の衆生なり、十羅刹女は餓鬼界の羅刹なれども法華經を受持し奉る故に餓鬼に即する一念三千なり、法華へ來らずんば何れも餓鬼飢餓の苦みなるべし、所詮必ず中根の聲聞領解の言

に我身を餓鬼に類する事は餓鬼は法界に食ありと云えども食する事を得ざるなり、諸法実相の一味の醍醐の妙法あれども終に開覺に能え

ざる間・四十余年食にうえたり云云、一義に云く序品方便より

諸法実相の甘露顯れて南無妙法蓮華經あれども広略二重の譬說段ま

で悟らざるは餓鬼の満満とある食事をくらわざるが如し、所詮日本國

の一切衆生は餓鬼界の衆生なり、大王膳とは所謂南無妙法蓮華經

是なり、遇の字には人法を納めたり、のつて未に如飢須教食と云えり、

うえたるとも大王のをしえを待ちて醍醐を食するが如しと云えり、今

南無妙法蓮華經有れども今身より仏身に至るまでの受持をうけずん

ば成仏じやうぶつは之これ有あるべからず、教きやうとは爾前にぜん無得道とくじやう・法華成仏ほつけじやうぶつの事なり、
此の教をうけずんば法華經ほけきやうを讀誦どくじゆすとも大王だいおうの位に登る事・之これ有ある
可べからず醍醐だいごは題目だいもくの五字ごじなり云云。

一大通智勝だいづうちしやうぶつ仏十劫坐道場どうじやうぶつばう佛法不現前げんぜんふどくじやうぶつ不得成じやうぶつ仏道の事　仰いに云く
此經文きやうもんは一切衆生いっさいしゆじやうの本法流轉るてんを説かれたり、されば釈しやくにも出世しゆせ以前いぜん
と判ぜり、此は大通だいづ仏出世しゆせし給たまえども十小劫の間・一經いっきやうも説給たまわずと
云う經文きやうもんなり、

仍て仏法も現前せざる故に不得成仏と云えり、されども釈を見るに
出世以前と云う時は、此の經文は何なる事ぞ此は本法の重を説かれた
り、一仏出世すれば流転門となる、一仏も出世無き時は、本法不思議
の体なり、迷悟もなく、生仏もなく、成仏もなく、不成仏もなきなり、
仍つて不得成仏道と云えり、抑も本法と申すは水があつくな
り、火がつめたくならば流転門なるべし、水はいつもつめたく、火はいつ
もあつく、地獄は何も火焰・餓鬼はいつも飢渴・其の外・方法己己の当
位・当位の儘なるを本法の体と云うなり、此の重を説き顯したる經文
なり、此の本法の重は法華經なり、權教は流転なり、此の流転の衆生
を本法の重に引入せられんとての仏の出世なり、其の
本法と云うは此の經なり、所詮此の經文本法とは大通智勝仏と云う
は我等衆生の色心なり、十劫と云うは十界なり、坐道場と云うは

十界じゅうかいの住所そのまゝどうじやう其の儘ど道場どうじやうなり、道場どうじやうなれば寂光土じやくこうどなり、法界ほっかい寂光土じやくこうどにして、十界じゅうかいの衆生しゆじやう悉ことごとく諸法しよほう実相じつそうの仏いちぶつなれば一仏いつぶつ現げんずべきに非あらず、迷まよの衆生しゆじやう無なければ説べく可べき法ぽうも無なし、仍よつて仏法ぶつぽう不現前げんぜんと云いえり、不得ふとく成じやうぶつ仏道ぶつどうとは始しかく覺ほんがく本覺じやうぶつの成じやうぶつ仏ぶつと云いう事ことも無なし、本法ほんぽう不思議ふしぎの体たいにして万法ばんぽう本有ほんぬなり、之これに依よつて釈しやくには出世しゆつせ以前いぜんと判しかぜり、然しからば、其その本法ほんぽうの体たいとは、所詮しよせん南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうなり、此この本法ほんぽうの内証ないしやうに引いん入にやうせんが為ために、住よんじゅうは四十余年よねん誘引ゆういんし、終ついに第五時だいごじの本ほん法ぽうを説とき給たまえり、今末法こんまつぽうに入まづつて上行じやうぎやう所伝しよでんの本法ほんぽうの南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうを弘ひろめ奉たてまつる、

日蓮にちれん・世間せけんに出しゆつせ世せすと云いえども、三十二歳さんじにさいまでは、此この題目だいもくを唱となえ出いさざるは、仏法ぶつぽう不現前げんぜんなり、此この妙法蓮華經みょうほうれんげきやうを弘ひろめて、終ついには本ほん法ぽうの内証ないしやうに引いん入にやうするなり日蓮にちれん・豈あに大通智勝だいどうちしやうぶつ佛ぶつに非あらずや、日本にほん国こくの一切いっさい

衆生こそ十劫坐道場とて十界其の儘・本法の南無妙法蓮華經へ引入するなり、所詮信心を出だして南無妙法蓮華經と唱え奉る可き者なり云云。

一貧人見此珠其心大歡喜の事 仰に云く此珠とは一乘無価の宝珠なり、貧人とは下根の声聞なり、惣じて

一切衆生なり、所詮末法に入つて此珠とは南無妙法蓮華經なり、貧人

一切衆生なり、所詮末法に入つて此珠とは南無妙法蓮華經なり、貧人

とは日本国の一切衆生なり、此の題目を唱え奉る者は心大歡喜せり、

されば見宝塔と云う見と此珠とは同じ事なり所詮此珠とは我等衆生

の一心なり、一念三千なり此の經に値い奉る時、一念三千と開くを珠

を見るとは云うなり、此の珠は広く一切衆生の心法なり此の珠

は体中にある財用なり、一心に三千具足の財を具足せり、此の珠を

方便品にして諸法実相と説き、譬喩品にては大白牛車・三草二木・五

百由旬の宝塔、共に皆一珠の妙法蓮華經の宝珠なり、此の經文色心の

実相歡喜を説けり・見此珠の見は色法なり、其心大と云うは心法な

り、色心共に歡喜なれば大歡喜と云うなり、所詮此珠と云うは我

等衆生の心法なり、仍つて一念三千の宝珠なり、所謂妙法蓮華經な

り、今末代に入つて此の珠を顯す事は日蓮等の類いなり所謂未曾有の

大曼荼羅まんだらこそ正ただしく一念三千いちねんさんぜんの宝珠ほうしゅなれ、見の字は日本国にほんこくの一切いっさい衆生しゅじょう、広ひろくは一閻浮提えんぶだいの衆生しゅじょうなり、然しかりと雖いえども其心大歡喜かんきと云う時は、日蓮にちれんが弟子でし・檀那だんな等の信者しんしやをさすなり、所詮しよせん煩惱ぼんのう即すなはち菩提ぼだい・生死しやうじ即すなはち涅槃たいだつと体達たいだつする、其心大歡喜かんきなり、されば、我等衆生われらしゅじやう・五百塵点じんでんの下種げしゅの珠たまを失うしないて、五道ろくじやう・六道りんねに輪廻りんねし・貧人ひんじんとなる、近くは三千塵点さんぜんじんてんの下種げしゅを捨てて備輪諸道しよせり、之これに依よつて貧人ひんじんと成る、今此の珠たまを釈尊しやくそんに値あひ奉たてまつりて見付け得て本の如ごとく取り得たり、此の故ゆゑに心大歡喜かんきせり、末法まつぽう当とう今こんに於みいて妙法蓮華經みやうほうれんげきやうの宝珠ほうしゅを受持じゆじし奉たてまつりて、己心こしんを見るに、十界互具じゆつかいごぐ・百界千如ひやつかいせんによ・一念三千いちねんさんぜんの宝珠ほうしゅを分明ぶんみやうに具足ぐそくせり、是これ併しかしながまつぽうようほうの要法ようほうたる題目だいもくなり云云。

一如甘露見灌かんろけんかんの事

仰いに云いく甘露かんろとは天上てんじやうの甘露かんろなり、されば

妙樂大師みやうらくだいし云いく実相常住じつじやうじやうぢやうは甘露かんろの如ごとし是これ不死ふじの藥云云、此の釈しやくの心

は諸法しよほう実相じつそうの法体ほつたいをば甘露かんろに譬たとえたり、甘露かんろは不死ふしの薬やくと云えり、
所詮しよせん妙めうとは不死ふしの薬やくなり、此この心こころは不死ふしとは法界ほっかいを指さすなり、其そのの故ゆえ
は森羅しんら三千さんぜんの万法ばんぽうを不思議ふしぎと歎たんじたり、生住異滅しやうじゆういめつの当位たうゐ・三さん世ぜ
常恒じやうていなるを不死ふしと云う、本法ほんぽうの徳とくとして水みづはくだりつめたく火かはのぼ
りあつし、此これを妙めうと云う、此これ即すなわち

不思議なり、此の重を不死とは云うなり、甘露と妙とは同じ事なり、然らば法界の儘に闇いて妙法なりと説くを本法とも甘露とも云えり、火は水にきゆる本法にして不死なり、十界己己の当位当位の振舞、常住本有なるを甘露とも妙法とも不思議とも本法とも止観とも云えり、所詮末法に入つて甘露とは南無妙法蓮華經なり、見灌とは受持の一行なり云云。

一若有惡人以不善心等の事

仰に云く惡人とは在世にては提婆

瞿伽利等なり、不善心とは惡心を以て仏を罵詈し奉る事を説くなり、滅後には惡人とは弘法・慈覺・智証・善導・法然等是なり、不善心とは謗言なり此の謗言を書写したる十住心等選択集等の謗法の書どもなり、さて末法に入て善人とは日蓮等の類いなり善心とは法華弘通の信心なり所謂南無妙法蓮華經是なり云云。

一如にょぜ是こ是この事

仰いに云いく釈しやくに云いく法相ほつそうの是ごとに如ごとし根性こんじようの是に

如にするなり文ぶん、法相ほつそうの是に如ごとすとは諸法実相しよほうじつそうを重かさねて如にょぜ是こと説せつかれた

り、根性こんじようの是に如ごとすとは、九法界ほつかいを説せつかれたり、然しかれば機法きき共に釈迦しやか

如来にょらいの所説しよせつの如ごとく真実しんじつなりと証しやうみやう明たまし給たまえり、始はじめの如にょぜ是こは教かいえ一開会かいえな

り次の如にょぜ是こは人に一開会かいえなり、權教ごんきやうの意いは諸法しよほうを妄法まうほうときらいし

隔別不融きやくべつの教きやくべつなり、根性こんじように於おいては性欲しやうよく不同ふどうなれば種種しゆじゆに説法せつぽうし給たまえ

り、仍よつて人も成仏じやうぶつせず、今の經きんの心しんは諸法実相しよほうじつそうの御經ぎきんなれば十界じゆつかい

平等びやうどうに授さずくる所の妙法みやうほうなり、根性こんじようは不同ふどうなれども同じく如にょぜ是しやう性しやうの一

性しよせんなり、所詮まつぽう今末法まつぽうに

入ほつそうつての如法相たつちやうそうじよう是ほんぞんは塔中相承こんじようの本尊ほんぞんなり如根性こんじよう是也じゆつかいと云いうは十界

宛然おんねんの尊像ほつそうなり法相なむは南無妙法蓮華經みやうほうれんげきやうなり、根性こんじようは日本国にほんこくの一切いっさい

衆生しゆじやう広えんふだいくは一閻浮提しゆじやうの衆生しゆじやうなり云云。

一是眞ぜしん仏ぶつ子し住じゆ淳じゆん善ぜん地ちの事

仰いづに云いく末まつ法ぽう当とう今こんに於おいて釈しや迦か如に來よの

眞しん實じつの御ぎ子じと云いうは法ほ華け經きやうの行ぎやう者じやなり、其そのの故ゆゑは上かみの文ぶんに能ら於い來せ世せ説せつ

持ぢ此し經きやうと説せつけり來らい世せとは末まつ法ぽうなり、説せつむと云いうは法ほ華け經きやうの如に説せつ修しゆ行ぎやうの

行ぎやう者じやなり、弘こ法う・慈じ覺かく・智ち証しやう・善ぜん導どう・法ほ然ねん等とう説せつみて云いく第だい三さんの劣けつ・戲ぎ論ろん

の法しや・捨い閉かく闍ほう・理り同どう事じ勝しやう等とうと説せつむは謗ぼう法ぽうにして三さん仏ぶつの御ぎ舌しや

を切るに非ずや何に況や持たんをや、伝教大師云く法華經を讀むる
と雖も還つて法華の心を死すとは是なり、今日蓮等の類い南無
妙法蓮華經と唱え奉る人は、誦持此經の人なり、豈是真仏子に非ずや
淳善地は寂光土に非ずや、是真仏子の字は十界の衆生なり、所詮
此の子の字は法華經の行者に限る、悉是吾子の字は孝不孝を分別
せざる子なり、我等皆似仏子の字は中根の声聞仏子に似たりと説かれ
たり、為治狂子故の子は、久遠の下種を忘れたれば物にくるう子なり、
仍つて釈尊の御子にも物にくるう子もあり、不孝の子もあり、孝養の
子もあり、所謂法華經の行者真実の釈尊の御子なりと、釈迦・多宝
分身三千三百万億那由他の世界に充滿せる諸仏の
御前にして孝不孝の子を定めをき給えり、父の業をつぐを以て子とせ
り、三世の諸仏の業とは南無妙法蓮華經是なり、法師品に行如來事と

説けり云云、法華經は母なり、釈尊は父なり、我等衆生は子なり、
無量義經に云く諸仏

の國王と是の經の夫人と和合して共に是の菩薩の子を生み給う文、
菩薩とは法華經の行者なり、法師品に云く在家・出家行菩薩道云云。
一非口所宣非心所測の事 仰に云く非口所宣は色法・非心所測

は心法なり、色心の二法を以て大海にして教化したる衆生を宣測する
に非ずと云えり、末に至つては広導諸群生と説かれたり云云。

一不染世間法如蓮華在水從地而涌出の事 仰に云く、世間法と

は全く貪欲等に染せられず、譬えば蓮華の水の中より生ずれども淤泥
にそまざるが如し、此の蓮華と云うは地涌の菩薩に譬えたり、地とは
法性の大地なり、所詮法華經の行者は蓮華の泥水に染まざるが如し、
但だ唯一大事の南無妙法蓮華經を弘通するを本とせり、世間の

法とは國王・大臣より所領を給わり官位を給うとも夫には染せられず、謗法の供養を受けざるを以て不染世間法とは云うなり、所詮蓮華は水をはなれて生長せず水とは南無妙法蓮華經是なり、本化の菩薩は蓮華の如く過去久遠より已來本法所持の菩薩なり蓮華在水とは是なり、所詮此の水とは我等行者の信心なり、蓮華は本因・本果の

妙法なり信心の水に妙法蓮華は生長せり、地とは我等衆生の心地なり
涌出とは広宣流布の時一閻浮提の一切衆生法華經の行者となるべきを涌出とは云うなり云云。

一願仏為未來演說令開解の事

仰に云く此の文は弥勒菩薩等

末法當今の為に我從久遠來教化是等衆の言を演說令開解せしめ給え

と請じ奉る經文なり、此の請文に於て壽量品は顯れたり五百塵点の

久遠の法門是なり、開解とは教主釈尊の御内証に此の分ををさえ

給うを願くは開かしめ給え同じく一会の大衆の疑をも解かしめ給え

と請するなり、此の開解の語を壽量品にして汝等當信解と誠め

給えり、若し開解し給わずんば大衆皆法華經に於て疑惑を生ず可しと

見給えり、疑を生ぜば三惡道に墮つべしと既に弥勒菩薩申されたり、

此の時壽量品顯れずんば即當墮惡道すべきなり壽量品の法門大切な

るは是なり、さて此の開解の開に於て二あり、迹門の意は諸法を

実相の一理と会したり、さては諸法を実相と開きて見れば十界悉く

妙法実相の一理なりと開くを開仏智見と説けり、さて本門の意は

十界本有と開いて始覺のきづなを解きたり、此の重を開解と申された

り仍つて演説の二字は

釈尊開解の両字は大衆なり、此の演説とは寿量品の久遠の事なり、

終に釈尊寿量品を説かせ給いて一切大衆の疑惑を破り給えり云云。

一譬如良医智慧聰達の事 仰に云く良医とは教主釈尊智慧とは

八万法蔵十二部經なり聰達とは三世了達なり藥とは妙法の良藥な

り、さて寿量品の意は十界本有と談ぜりされば此の藥師とは一切

衆生の事なり、智慧とは方法己己の自受用報身の振舞なり聰達とは

自在自在に振舞うを聰達とは云うなり、所詮末法当今の爲の寿量品

なれば法華經ほけきようの行者ぎようじやの上の事なり、此の智慧ちえとは南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようなり、聰達そうだつとは本有無作三身ほんぬむささんじんなりと云う事なり、元品がんぽんの無明むみようの大良藥りようやくは南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようなり、智ちとは一切衆生いっさいしゆじようの力なり、慧えとは一切衆生いっさいしゆじようの言語音声ごんごおんじようなり、故ゆえに偈頌げじゆに云く我智力によぜ如是慧光照無量むりようと云えり云云。

一 一念信解の事

仰に云く此の經文は一念三千の宝珠を納めたる

函なり此れは現在の四信の初の一念信解なり、さて滅後の五品の初

十心具足初隨喜品も一念三千の宝を積みたる函なり、法華經の骨髓、

末法に於て法華經の行者の修行の相貌分明なり、所詮信と隨喜とは

心同じなり隨喜するは信心なり信心するは隨喜なり一念三千

の法門は信心隨喜の函に納りたり、又此の函とは所謂南無妙法蓮華經

是なり又此の函は我等が一心なり此の一心は万法の總体なり總体は

題目の五字なり、一念三千と云うが如く一心三千もあり釈に云く

介爾も心有れば即ち

三千を具すと、又宝函とは我等が色心の二法なり。本・迹兩門・生死の

二法・止觀の二法なり所詮信心の函に入れたる南無妙法蓮華經の函な

り云云。

一見もんぼう仏聞法信受しんじゅ教誨けうゐの事

仰いに云く此きの經文きやうもんは一念いちねん隨喜ずいきの人は五

十じゅうの功德くどくを備そなうべし、然しかる間見かん仏聞法ぶつもんぽうの功德くどくを具足ぐそくせり、此この

五十ごじゅう展轉てんでんの五十ごじゅう人の功德くどくを隨喜ずいき功德品くどくひんには説とくかれたり、仍よくつて世世よよ・

生生しんじの間見かん仏聞法ぶつもんぽうの功德くどくを備そなえたり、所詮しよせん末法まつぽうに入いつては仏ぶつを見ると

は壽量品じゆりやうほんの積尊しやくそん・法ぽうを聞きくとは南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうなり、教誨けうゐとは

日蓮等にちれんの類たぐい教化きやうけする所の諸宗しよしゆう無得道とくどうの教誡けうがいなり、信受しんじゅするは法華經ほけきやう

の行者ぎやうじやなり、所詮しよせん・壽量開顯じゆりやうの眼まなこの顯あらわれては、此この見けん仏ぶつは無作むさの三身さんじん

なり、開法かいぽうは方法ここ己おんじ己おんじの音声おんじやうなり、信受教範しんじゅは本有ほんぬ隨緣ずいゑん真如しんじよの振舞ふるまいな

り、是これ即すなわち

色心しきしんの二法にぽうなり、見聞けんもんとは色法しきぽうなり、信受しんじゅは信心しんじん領納りやうななれば心法しんぽうな

り、所謂いふ色心しきしんの二法にぽうに備そなえたる南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやう是これなり云云。

一若またあるひと復有人しつぽう以七宝しちぽう滿み是人ひと所得其福最多しよとくの事 仰いに云く此きの經文きやうもんは

七宝しっぽうを以て三千大千世界さんぜんだいせんせかいに満みて四聖ししやうを供養くやうせんよりは法華經ほけきやうの一偈いちげを受持じゆじし奉たてまつらんにはをとれりと説とかれたり、天台大師てんだいだいしは生養成榮しやうやうの四よの義ぎを以て、

法華經ほけきやうの功德くどくを釈しやくし給たまえり、所詮しよせん末法まつぽうに入いつては題目だいもくの五字ごじ即すなわち是これなり、此みづかの妙法蓮華經みやうほうれんげきやうの五字ごじは万法能生のうしやうの父母ふぼなり、生養成榮しやうやうも亦復また是かくのくの如ごときなり、仍よつて釈しやくには法ほを以もつて本もとと為なすと釈しやくせり、三世十方さんぜじゆつぽうの諸仏しよぶつは、妙法みやうほう

蓮華經を以て父母とし給えり、此の故に四聖を供養するよりも法華經を持つは勝れたり、七宝は世間の財宝なり、四聖は滅に歸する仏・菩薩羅漢なり、さて妙法の功德は一得永不失なれば朽失せざる功德なり、此の故に勝れたり云云。

一 妙音菩薩の事

仰に云く妙音菩薩とは、十界の語言音声なり、此の音声悉く慈悲なり、菩薩とは是れなり。

一 爾時無尽意菩薩の事

仰に云く此の菩薩は空假中の三諦なり、

意の一字には一切の法門を摂得するなり意と云うは中道の事なり無は空諦なり尽とは仮諦なり、所謂意と云うは南無妙法蓮華經なり、一切諸經の意三世の諸仏の題目の五字なり所詮法華の行者は信心を以て意とせり云云。

一 觀音妙智力の事

仰に云く妙とは不思議なり、智とは隨緣真如

の智力なり、森羅三千の自受用智なり、観音は円観なり、円観とは
いちねんさんぜん 一念三千なり、観音とは法華の異名なり、観音と法華とは眼目の異名
と釈する間・法華經の異名なり、観とは円観・音は仏機なり、仍つて
観音の二字は人法一体なり、所謂一心三觀・一念三千是なり云云。

一自在之業の事

仰に云く此の自在之業とは自受用報身の智力

なり、森羅三千の諸法作業をさして云うなり、其の所作のまま法華經
の意は不思議の自在之業なりと説けり、此の自在之業の本は南無
妙法蓮華經是なり云云。

一妙法蓮華經陀羅尼の事

仰に云く妙法蓮華經陀羅尼とは

正直捨方便・但説無上道なり、五字は体なり陀羅尼は用なり妙法の
五字は我等が色心なり、陀羅尼は色心の作用なり、所詮陀羅尼とは呪
なり、妙法蓮華經を以て煩惱即菩提・生死即涅槃と呪いたるなり、

日蓮等の類い南無妙法蓮華經を受持するを以て呪とは云うなり、若有

能持のうじ即持ぶつしん仏身とまじないたるなり、釈いわに云く陀羅尼だらにとは諸仏しよぶつの密号と判はぜり、所詮しよせん法華折伏ほつしやくふく・破權門理はこんもんりの義遮惡持善ぎしやくしよぜんの義なり云云。

一六万八千人の事

仰いに云く六とは六根ろくこんなり、万とは六根ろくこんに具くわ

る處ところの煩惱ぼんのうなり八とは八苦はくの煩惱ぼんのうなり千とは八苦はくに具足ぐそくする煩惱ぼんのうなり、是これ即すなわち法華經ほけきやうに値あい奉たてまつりて六万八千の功德くどくの法門ほうもんと顯あらわるるなり、所詮しよせん日蓮等にちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつる外ほかに六万八千の功德くどくの法門ほうもん之れ無きなり云云。

一妙莊嚴王の事

仰いに云く邪見じやけん即正てほんの手本てほんなり、所詮しよせん森羅三千

の万法・妙を以て莊嚴そうごんしたる王おうなり妙とは稱歎しょうたんの語ことばなり莊嚴そうごんとは色法しきほふなり王おうとは心法しんほふなり諸法しよほふの色心しきしんを不思議ふしぎとほめたり、然しかれば、妙莊嚴みやうそうごん王おうの言こと・三千さんぜんの諸法しよほふ・三諦さんたい法性ほつしやうの当位たうゐなり、所詮しよせん日蓮等にちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうを以て色心しきしんを莊嚴そうごんしたり、此この莊嚴そうごんとは別べつしてかざり立て

たるには非ず当位即妙の莊嚴なり、煩惱即菩提・生死即涅槃是なり云云。

一華嚴・大日觀經等の凡夫の得道の事 仰に云く彼等の衆皆各各其の経經の得道に似たれども眞實には法華の得道なり、所謂三五下種の輩なり經に云く始見我身聞我所説文、妙樂大師云く脱は現に在りと雖も具に本種を騰ぐと云えり本種と云うは南無妙法蓮華經是なり云云。

一題目の五字を以て下種の証文と為すべき事 仰に云く經に云く教無量菩薩畢責住一乘文、妙樂大師の云く余教を以て程と為さず文、無量の菩薩とは日本国の一切衆生を菩薩と開会して題目を教えたり、畢竟とは題目の五字に畢竟するなり住一乗とは乘此宝乘直至道場是なり文、下種とはたねを下すなり種子とは成仏の種の事なり

り、^{かみ}上の^{きようもん}經文に教無量菩薩の教の一字は下種^{げしゆ}の証文^{しやうもん}なり教とは題目^{だいもく}を授^{さず}くる時の事なり、權教^{ごんきやう}無得道^{とくど}・法華得道^{ほっけとくど}と教うるを下種^{げしゆ}とは云うなり、末法^{まつぽう}に入つて此の經文^{きようもん}を出ださん人は有^ある可^べからざるなり儘^{たしか}に塔中^{たつちゆう}相承^{そうじやう}の秘文^{ひぶん}なり下種^{げしゆ}の証文^{しやうもん}秘^べす可^べし云云。

一題目の五字末法に限つて持つ可きの事

仰に云く經に云く、

惡世末法時能持是經者文、此の經とは題目の五字なり、能の一字に心

を留めて之れを案ずべし云云、末代惡世・日本国の一切衆生に持てと

云う經文なり云云。

一天台云く是我弟子応弘我法の事

仰に云く我が弟子とは

上行菩薩なり我が法とは南無妙法蓮華經なり、權教乃至始覺等は

隨他意なれば他の法なり、さて此の題目の五字は五百塵点より已來、

証得し給える法体なり故に我が法と釈せり、天台云く此の

妙法蓮華經は本地甚深の奥藏なり、三世の如來の証得し給える所とは

是れなり。

一色心を心法と云う事

仰に云く玄の十に云く請を受けて説く

時只だ是れ教の意を説く教意は是れ仏意なり仏意は即ち是れ仏智な

り仏智至つて深し是の故に三止四請す此くの如きの艱難・余經に比するに余經は則ち易し云云、此の釈の意分明なり教意と仏意と仏智とは何れも同じ事なり、教は二十八品なり意は題目の五字なり惣じて仏意とは法華經の異名なり、法華經を以て一切經の心法とせり又題目の五字を以て一代説教・本・迹二門の神とせり、經に云く妙法蓮華經に如來壽量品是なり、此の題目の五字を以て三世の諸仏の命根とせりさて諸經の神

法華經なりと云う証文は妙法蓮華經方便品と題したる是なり云云。一無作の応身我等凡夫也と云う事 仰に云く釈に云く凡夫も亦三身の本を得たりと云云、此の本の字は応身の事なりされば本地無作本覺の体は無作の応身を以て本とせり仍つて我等凡夫なり、応身は物に応う身なり其の上壽量品の題目を唱え出し奉るは眞実に応身如來

の慈悲なり云云。

一 諸河無鹹の事

仰に云く此無鹹の事をば諸教無得道に譬えた

り大海のしをはゆきをば法華經の成仏得道に譬えたり、又諸經に

一念三千の法門無きは、諸河にうしをの味無きが如く死人の如し、

法華經に一念三千の法門

有るはうしをの大海にあるが如く生きたる人の如し、法華經を淺く信ずるはあわのうしをの如し、深く信ずるは、海水の如し、あわはきえやすし、海水は消えざるなり、如説修行最も以て大切なり、然りと雖も、諸經の大河の極深なるも、大海のあわのしをの味をば具足せず、權教の仏は法華經の理即の凡夫には百千万倍劣るなり云云。

一 妙樂大師の釈に末法之初冥利不無の釈の事 仰に云く此の

釈の心は末法に於て冥の利益迹化の衆あるべしと云う事なり、此の釈は藥王品の此經即為闍浮提人病之良藥若人有病得聞是經病即消滅不老不死云云、此の經文の意を底に含めて釈せり、妙樂云く然るに後五百は、且らく一往に従う、末法の初冥利無きにあらず、

且く大教の流行す可き時に抛る、故に五百と云う文、仍つて本化の菩薩は顯の利益迹化は冥の利益なるべし云云。

一 爾前經瓦礫国の事

仰に云く法華經の第三に云く、如從飢国

來忽遇大王・と云云、六の卷に云く我此土安穩天人常充滿我淨土不

毀云云、此の両品の文の意は權教は悉く瓦礫の旅の国なり、あやまり

て本国と思ひて都と思はん事迷の故なり、一往四十二年住したる国な

れば衆生・皆本国と思ひえり、本国は此の法華經なり、

信解品に云く遇向本国と、三五の下種の所を指して本国とも淨土とも

大王・とも云うなり、下種の心地即ち受持信解の国なり云云。

一無明惡酒の事 仰に云く無明の惡酒に酔うと云う事は弘法・

慈覺・智証法然等の人人なり、無明の惡酒と云う証文は勸持品に

云く、惡鬼入其身是なり、惡鬼と惡酒とは同じ事なり惡鬼の鬼は

第六天の魔王の事なり惡酒とは無明なり無明即魔王魔王即無明なり、

其身の身とは日本国の謗法は一切衆生なり、入ると吞むとは同じ事な

り、此の惡鬼あつき入る人は阿鼻あびに入る、さて法華經ほけきょうの行者ぎょうじやは入にゅう仏知見ぶつちけん道故
と見えてぶつじん仏道ぶつどうに入る得入とくにゅうむじょうどう無上道むじょうどうとも説け

り、相構え相構えて無明の惡酒を恐るべきなり云云。

一日蓮已証の事

仰に云く寿量品の南無妙法蓮華經是れなり、

地涌千界の出現末代の当世の別付属の妙法蓮華經の五字を一閻浮提

の一切衆生に取次ぎ給うべき仏勅使の上行菩薩なり云云、取次とは

取るとは釈尊より上行菩薩の手へ取り給うさて上行菩薩又末法当今

の衆生に取次ぎ給えり是を取次ぐとは云うなり、広くは末法万年

までの取次なり、是を無令断絶とは説かれたり、又結要の五字とも

申すなり云云、上行菩薩取次の秘法は所謂南無妙法蓮華經なり云云。

一釈尊の持言秘法の事

仰に云く持言の秘法の經文とは

寿量品に云く、每自作是念の文是なり、毎の字は三世常住なり、是

念の念とは、わすれ給わずして内証に具足し給えり故に持言なり、

秘法とは南無妙法蓮華經是なり秘す可し秘す可し云云。

一日蓮門家の大事の事

仰に云く此の門家の大事は涌出品の前三

後三の釈なり、此の釈無くんば本化・迹化の不同・像法付属・末法付属

・迹門・本門等の起尽之れ有る可からず、既に止善男子の止の一字は

日蓮門家の大事なり秘す可し秘す可し、総じて止の一字は正しく日蓮

門家の明鏡の中の明鏡なり口外も詮無し、上行菩薩等を除いては総じ

て余の菩薩をば悉く止の一字を以て成敗せり云云。

一日蓮が弟子臆病にては叶う可からざる事 仰に云く此の意は

問答対論の時は爾前・迹門の釈尊をも用う可からざるなり、此れは

臆病にては釈尊を用いまじきかなんと思ふべき故なり、釈尊をさえ用

う可からず何に況や其の以下の等覺の菩薩をやまして謗法の人人に

於ておや、所謂南無妙法蓮華經の大音声を出だして諸經・諸宗を

対治すべし、巧於難問答其心無所畏とは是なり云云。

一妙法蓮華經の五字を眼と云う事 仰に云く法華第四に云く、
仏滅度後能解其義是諸天人世間之眼と云云、

此の經文の意は、法華經は人天・二乘・菩薩・仏の眼目なり、此の眼目を弘むるは日蓮一人なり、此の眼には五眼あり、所謂肉眼・天眼・慧眼・法眼・仏眼なり、此の眼をくじりて別に眼を入れたる人あり、いわゆるこうぼうだいしこれ所謂弘法大師是なり、法華經の一念三千即身成仏諸仏の開眼を止めて、真言經にありと云えり、是れ豈法華經の眼を抽れる人に非ずや、又此の眼をとじふさぐ人あり所謂法然上人是れなり、捨閉の閉の文字は、閉眼の義に非ずや、所詮能弘の人に約しては、日蓮等の類い世間之眼なり、所弘の法に随えば、此の大乗經典は、是れ諸仏の眼なり、所詮眼の一

字は一念三千の法門なり、六万九千三百八十四字を此の眼の一字に納めたり、此の眼の字顯われて見れば煩惱即菩提・生死即涅槃なり、今末法に入つて、眼とは所謂未會有の大曼荼羅なり、此の御本尊より

外には眼目無きなり云云。

一法華經の行者に水火の行者の事 仰に云く總じて此の經を信じ奉る人に水火の不同あり、其の故は火の如きの行者は多く水の如きの行者はまれなり、火の如しとは此の經のいわれをききて火炎のもえ立つが如く貴く殊勝に思いて信ぜれども・やがて消失す、此れは当座は大信心と見えたとれども其の信心の灯きゆる事やすしさて水の如きの行者と申すは水は昼夜不退に流るるなり少しもやむ事なし、其の如く法華經を信ずるを水の行者とは云うなり云云。

一女人と妙と釈尊と一体の事 仰に云く女人は子を出生す、此の出生の子又子を出生す此くの如く展転して無數の子を出生せり、此の出生の子に善子もあり惡子もあり端嚴美麗の子もあり醜陋の子もあり長のひくき子もあり大なる子もあり・男子もあり・女子もあり

云云、所詮^{しよせん}・妙^{めう}の一字より万法は出生^{しゆつしやう}せり地獄^{じごく}もあり・餓鬼^{がき}

もあり・乃至^{ないしふっかい}仏界^{ぶつがい}もあり・權教^{ごんきやう}もあり・實教^{じつきやう}もあり・善^{ぜん}もあり惡^{あく}もあり

・諸法^{しよぽう}を出生^{しゆつしやう}せり云云、又釈迦^{しやか}一仏^{いちぶつ}の御身^{おんみ}より一切^{いっさい}の仏^{ぶつ}・菩薩^{ぼさつ}等^{どう}悉^{ことごと}く

出生^{しゆつしやう}せり、阿弥陀^{あみだ}・藥師^{やくし}・大日^{だいにと}等は悉^{ことごと}く釈尊^{しゃくそん}の一月^{いちがつ}より万水^{ばんすい}に浮^うぶ所

の万影^{ばんえい}なり、然^{しか}らば

女人にょにんと妙しやくそんと釈尊しやくそんとの三全ふどろく不同ふどう無きなり、妙樂みょうらく大師だいしの云いわく妙みく即そく三千さんぜん・三千さんぜん即そく法ほふ云云、提婆だいば品ひんに云いわく有ある二ふた宝ほう殊しゆ一いつ価こ直ちやく二ふた三千さんぜん大千だいせん世界かい一いつ是これなり云云。

一置かしやく不呵責ふかしやくの文の事

仰おほに云いわく此きやうもんの經文きやうもんに於おいては日蓮にちれん等たぐいの類るいの

おそるべき文字もんじ一字いち之これ有あり、若もし此もんじの文字もんじを恐おそれざれば縦たとい当座とうざは

事ことなしとも未来みらい無間むげんの業ごふたるべし、然しからば無間むげん地獄じごくへ引ひき入いる獄卒ごくそつなる

べし夫それは置おの一字いち是これなり云云、此この置おの一字いちは獄卒ごくそつなるべし謗法ぼうほう不信ふしん

の失とがを見みながら聞ききながら云いわすして置おかんは必かならず無間むげん

地獄じごくへ墮だ在ざいす可べし、仍よつて置おの一字いち・獄卒ごくそつ・阿防羅刹あぼうらせつなるべし尤もつとも以もつとて恐

る可べきは置おの一字いちなり云云、所詮しよせん此この經文きやうもんの内に獄卒ごくそつの一字いちを恐おそるべ

きなり云云、此この獄卒ごくそつの一字いちを深こく之これを思おもう可べし、日蓮にちれんは此この字じを恐

る故ゆゑに建長けんちやう五年ごねんより今弘安かうあん年中なかつうどまで在ざい在所ざいしよ所しよにて申もうしはりしなり只ただ

偏ひとえに此この獄卒ごくそつを脱まぬかれんが為ためなり、法華經ほけきようには若人やくにん不信ふしんとも

生疑うたがいふしん不信者ふしんとも説とき給たまえり、法華經ほけきようの文文・句句くくをひらき涅槃經ねはんきようの

文文・句句くくをひらきたりとも置いていわずんば叶かなう可べからざるは此の置
の一字より外ぐくそつに獄卒ごくそつは無なきなり云云。

一異念なく無りようぜんく靈山淨土じようどへ参まゐる可べき事

仰いに云いく異念ふしんとは不信ふしんの事

なり若もし我が心なりとも不信ふしんの意出来しゅつたいせば忽たちまちに信心しんじんに住すべし、所詮しよせん

不信ふしんの心をば師しとなすべからず信心しんじんの心を師匠ししやうとすべし淨心じようしん信敬しんけいに

法華經ほけきようを修行しゆぎやうし奉たてまつるべきなり、されば能持のうじ二是經一能説二此經一と

説ときて能の字を説かせ給たまえり靈山りようぜんここにあり四土一みな念皆常寂光じやうじくかうとは

是これなり云云。

一不可失本心ふかしつほんしんの事

仰いに云いく此この本心ほんしんと云いうは法華經ほけきようの信心しんじんの事な

り、失とがと申もうすは謗法ほうぼうの人にすかされて法華經ほけきようを捨すてつる心の出来しゅつたいするを

云うなり、されば天台大師云く若し悪友に値えば則ち本心を失うと
云云、此の釈に悪友とは謗法の人の事なり、本心とは法華經なり、
法華經を本心と云う意は諸法実相の御經なれば十界の衆生の心法を
法華經とは申すなり、而るに此の本心を引きかえて迷妄の法に着する
が故に本心を失うなり、此の本心に

於ては三五の下種の法門なり、若し善友に値う時んば失う所の本心を
忽に見得するなり、所謂迦葉・舍利弗等是なり、善友とは釈迦如来・
悪友とは第六天の魔王・外道・婆羅門是なり、所詮末法に入つて本心と
は日蓮弘通の南無妙法蓮華經是なり、悪友とは法然・弘法・慈覚・智証
等是なり、若し此の題目の本心を失せんに於ては又三五塵点を経べき
なり、但、如是展転至無數劫なるべし、失とは無明の酒に酔いたる事な
り仍て本心を失うと云うなり、此の醉をさますとは權教を捨てしむる
を云うなり云云。

一天台大師を魔王障礙せし事

仰に云く此の事は随分の秘藏な

り、其の故は天台大師・一心三觀・一念三千の觀法を説き顯さんとし
給いしかば父母左右の膝に住して悩まし奉り障礙し給いしなり、是れ
即ち第六天の魔王が父母の形を現じて障礙せしなり、終に魔王に障礙

せられ給たまわらずして摩訶止觀まかしかんの法門ほうもん起れり、何いかに況や今日蓮いまにちれんが弘ひろむる南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようは三世さんぜの諸仏しよぶつの成道じやうどうの師じ・十方薩☆の得道とくどうの師匠ししやうたり、其その上正像しやうざう二千年の仏法ぶつぽうは爾前にぜん・迹門しやくもん

なれば、魔王まおう自身じしん・障礙しょうがいをなさずともなるべし、今末法まつぽうの時は、所弘しよぐの法ほけきは、法華經本門ほうけきようほんもんの事いちねんさんぜんの一念三千の南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようなり、能弘のうぐの導師どうしは本化地涌ほんげじゆの大菩薩ほさつにてましますべし、然しかる間魔王まおう自身じしん下りて障礙しょうがいせずんば叶かなう可べからざるなり、仍よつて自身じしん下りたる事ふんみょう分明めいなり、所謂いわゆる道隆どうりゆう・良觀りやうかん最明寺等さいみやうじ是これなり、然しかりと雖いえども諸天善神等しよてんぜんじんは日蓮にちれんに力ちからを合あはせ給たまう故ゆえに竜口たつのくちまでもかちぬ、其その外ほかの大難だいにんをも脱まぬれたり、今は魔王まおうもこりてや候もちうらん、日蓮死去にちれんしきよ

の後のちは殘党ざんたうども軍いくさを起おこすべきか、故ゆえに夫それも落居らっこは叶かなう可べからざるなり、其そのの故ゆえは第六天だいろくてんの魔王まおうの眷属けんぞく日本国にほんこくに四十九億九万四千八百二十

八人なりしが今は日蓮にぢれんに降参したる事多分たぶんなり、經に云く惡鬼入其身
とは是これなり、此の合戰の起りも、所詮しよせん南無妙法蓮華經是なり、魔王まおうに
於て体の魔王・用の魔王あり、体の魔王とは法性同共の
魔王まおうなり妙法の法是これなり、用の魔王とは此れより出生しゅつしょうする第六天の
魔王まおうなり、用の魔王は障礙しょうがいをなす、然れども体用同共の諸法実相しよほうじつそうの一
理なり、唯有一門ゆいいういちもんの智慧ちえの門に入り、無明法性一体なるべきなり云云、
所謂摩訶止觀いわゆるまかしかんの

だいじ 大事の法門ほうもん是なり、法華經ほけきょうの一代説教いちだいせつぎょうに勝れたるは此の故なり、
いちねんさんぜん 一念三千とは是なり、法華經ほけきょう第三に云く魔及魔民皆護まみんみなまもぶつぼう仏法云云。

一 法華經極理の事

仰いに云く迹門しやくもんには二乗作仏にじようさぶつほんもん本門ほんもんには久遠くおん

実成じつじやう此をさして極理ごくりと云うなり、但し是も未だ極理ごくりにたらず、迹門しやくもんに

して極理ごくりの文は諸仏智慧しよぶつちえ甚深無量じんじんむりやうの文是れなり、其の故は此の文を受

けて文句もんくの三に云く豎いに如理の底に徹し横よこしまに法界の辺を窮きむと釈しやくせ

り、さて本門ほんもんの極理ごくりと云うは如来秘密神通にょらいひみつじんつう之力の文是なり、

所詮しよせん日蓮が意に云く法華經の極理ごくりとは南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやう是なり、一切いっさいの

功德くどく法門・釈尊しやくそんの因行果徳いんぎやうかどくの二法・三世十方さんぜじゆつぽうの諸仏しよぶつの修因感果しゅういんかんか・

法華經の文・句句の功德くどくを取り聚あつめて此の南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと成し

給たまえり、爰こを以て釈しやくに云く惣そうじて一經いつきやうを結するに唯ただ四のみ、其その

枢柄すうへいを撮とつて之これを授与じゅよす云云、上行菩薩じやうぎやうぼさつに授与じゅよし給たまう題目だいもくの外に

法華經の極理は無きなり云云。

一妙法蓮華經五字の蔵の事

仰に云く此の意は妙法の五字の中に

は一念三千の宝珠あり五字を蔵と定む、天台大師玄義の一に判ぜり、

所謂此の妙法蓮華經は本地甚深の奥蔵なり云云、法華經の第四に云く

是れ法華經蔵と云云、妙華嚴法阿含蓮方等華般若經涅槃、又云く妙涅槃

法般若蓮方等華阿含經華嚴、已上妙法蓮華經の五字には十界三千の

宝珠あり、三世の諸仏は此の五字の蔵の中より、或は華嚴の宝を取り出

だし、或は阿含・方等・般若の宝を取り出だし種種說法し給えり、

加之・論師・人師等の疏釈も悉く此の五字の中より取り出だして

一切衆生に与え給えり、此等は皆五字の中より取り出だし給えども

妙法蓮華經の袋をば持ち給わず、所詮五字は上行菩薩の付属にして更

に迹化の菩薩・諸論師いろはざる題目なり、仍つて上行所伝の南無

妙法蓮華經は藏なり、金剛不壞の袋なり此の袋をそのまま日本国の
一切衆生には与え給えり、信心を以て此の財宝を受取るべきなり、今
末法に入つては日蓮等の類い受取る所の如意宝珠なり云云。

一我等衆生の成仏は打かためたる成仏と云う証文の事 仰に云く
經に云く無上宝聚不求自得の文是なり、我等凡夫即極とはたと打かた
めたる成仏なり所謂不求自得する所の南無妙法蓮華經なればなり云
云。

一爾前法華の能くらべの事 仰に云く爾前の經にして十惡・五逆等の
成仏の能なし、今法華經に十界皆成・分明なり、爾前の經の無能と云
う証文とは方便品に云く但似仮名字引導於衆生の文是なり、さて
法華經は能と云う証文は諸法実相の文是なり、今末法に入つて第一の
能たる南無妙法蓮華經是なり云云。

一授職の法体の事 仰に云く此の文は唯仏与仏の秘文なり輒く云う
可からざる法門なり、十界三千の諸法を一言を以て授職する所の秘文
なり、其の文とは神力品に云く皆於此經宣示顯説の文是なり、此の

五字即十界同時に授職する所の秘文なり十界己己の当体・本有妙法蓮華經なりと授職したる秘文なり云云。

一末代讓狀の事 仰に云く末代とは末法五百年なり、讓狀とは

手繼の証文たる南無妙法蓮華經是なり此れを讓るに二義之れ有り、

一には跡をゆずり二には宝をゆずるなり、一に跡を讓ると云うは釈迦

如来の跡を法華經の行者にゆずり給えり、其の証文に云く

如我等無異の文是なり、次に財宝をゆずると云うは釈尊の智慧戒徳

を

法華經の行者にゆずり給えり、其の証文に云く無上宝聚不求自得の

文是なりと云云、さて此の題目の五字は讓狀なり云云。

一本有止觀と云う事 仰に云く本有の止觀と云うは大通を以て習う

なり、久遠実成道の仏と大通智勝仏と釈尊との三仏を次の如く仏法

僧の三宝と習うなり、此の故に大通は本有の止観なれば即ち三世の諸仏の師範と定めたり、仍つて大通仏を法と習う、此の法は妙法蓮華經是なり、仍つて証文に云く大通智勝仏十劫坐道場の文是なり十劫は即ち十界なり云云。

一入末法四弘誓願の事 仰に云く四弘誓願をば一文に口伝せり、其の一文とは所謂神力品に云く於我滅度

後お受う持じ斯し經き是人ぜにん於の仏ぶつ道どう決けつ定じよう無む有う疑ぎと云云、此きの經き文ぶんは法ほ華け經きの
序じよ品ぽんより始はて四し弘ぐ誓せい願がんの法ほう門もんを説とき終はりてさて上じよう行ぎ菩ばつ薩さつに
妙みよう法ほう蓮れん華げ經きを付ふ属ぞくし給たまう時とき・妙みよう法ほうの五ご字じに四し弘ぐ誓せい願がんを結けびて結け句くに
説たまかせ給たまえり滅めつ後ごとは末まつ法ほうの始はの五ご百ひゃく年ねんなり、衆しゆ生じよう無む辺へん誓せい願がん度どと云
うは是人この人の字すなわなり、誓せい願がんは地じ涌ゆの本ほん化げの上じよう行ぎ菩ばつ薩さつの誓せい願がんに入いらん
と此これ即すなわち仏ぶつ道どうの二に字じ度ど脱だつなり、煩ぼん惱のう無む辺へんなれども煩ぼん惱のう即すく菩ばつ提だい・生しやう死じ
即そく涅ね槃はんと体たい達だつす、仏ぶつ道どうに入いつては煩ぼん惱のう更さらになし受じゆ持じ斯し經きの所しよには法ほう門もん
無む尽じん誓せい願がん知ち分ぶん明みやうなり無む上じやう菩ばつ提だい誓せい願がん証しやうと云うは是人ぜにん於の仏ぶつ道どう決けつ定じよう
無む有う疑ぎと定じやうめたる四し弘ぐ誓せい願がん分ぶん明みやうなり、教きやう主しゆ釈しやく尊そん・末まつ法ほうに入いつて四し弘ぐ
誓せい願がんも此この文ぶんなり、上じやう行ぎ菩ばつ薩さつの四し弘ぐ誓せい願がんも此この文ぶんなり深こく之これを思おも案あんす
可べし云云。

一四弘誓願しぐせいがん應報如理おうほうにりと云う事 仰いに云いく衆生無辺誓願度しゆじやうむへんせいがんどは応身おうじんな

り、煩惱無辺誓願断は報身なり、法門無尽誓願知は智法身なり、無上菩提誓願証は理法身なり、所詮誓願と云うは題目弘通の誓願なり、釈に云く彼が為に惡を除くは即ち是れ彼が親なりと是なり云云。

一 本来の四弘の事

仰に云く諸法の当体本来四弘なり、其の故は

衆生と云うは法界なり、所詮法界に理智慈悲の三を具足せり、応報法

の三身諸法の自体なり、無作の応身を以て衆生無辺誓願度と云うな

り、無作の報身には智徳断徳の二徳を備えたり、煩惱無辺誓願断を以

て本有の断徳とは定めたり、法門無尽誓願知を以て本有の

智徳とす、無上菩提誓願証を以て無作の法身と云うなり、所詮四弘

誓願の中には衆生無辺誓願度を以て肝要とするなり、今日蓮等の類い

は南無妙法蓮華經を以て衆生を度する此より外は所詮なきなり、

速成就仏身是なり云云、所詮四弘誓願は一念三千なり、さて四弘の

弘ぐわとは何物なにものぞ、所謂いわゆる上行じようぎよう所伝しよでんの南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようなり、釈いに云いく
四弘能所しぐのうじよみん泯みんすと云云、此の釈しかんは止觀しかんに前三教ぜんさんきようを釈しやくせり、能と云うは
如来にょらいなり所とは衆生しゆじようなり能所各別かくべつするは權教ごんきようの故なり、法華經ほけきようの心
は能所一体みんなり泯みんすと云うは權教ごんきようの心は機法きき共に一同いどうなれば能所泯のうじよみん
すと云うなりあえて能所一同じようぶつして成仏じやうぶつする所を泯みんすと云うには
非あらざるなり、今末法まつぽうに入まづつて法華經ほけきようの行者ぎやうじやは四弘能所感応かんのうの即身成仏そくしんじやうぶつ
の四弘しぐなり云云。

御講聞書
終

◆九八

四九院申状

848P

駿河するがの国蒲原かんばらの庄・四十九院の供僧等謹んで申す。

寺務・二位律師嚴譽りつしごんよの為に日興並に日持・承賢・賢秀等・所学ほつげしゅうの法華宗を以て外道げどう大邪教じやきょうと称し往古の住坊並に田畠でんぱたを奪い取り寺内を追ひ出さしむる謂れ無き子細しさいの事。

右釈迦しやかいちだい一代教の中には天台てんだいを以て宗匠と為す、如来五十年の間は法華ほつげを以て真実しんじつと為す、是れ則ち諸仏しよぶつの本懐ほんかいなり抑亦多宝たぼうの証誠しょうせいなり、上一人より下万民ばんみんに至るまで帰敬きけい年旧ふり渴仰かつじやう日に新なり。

而るに嚴譽ごんよの状に云く、四十九院の内日蓮にちれんが弟子等居住せしむるの由・其の聞え有り、彼の党類とうるい仏法ぶつぽうを学し乍ら外道げどうの教に同じ正見せいけんを改あらためて邪義じやぎの旨むねに住せしむ以ての外しだいの次第しだいなり、大衆等たいしゅう評定ひやうじやうせしめ寺

内に住せしむべからざるの由の所に候なり」云云。

茲に因つて日興等 忽に年来の住坊を追い出され已に御祈☆便宜の
学道を失う、法華の正義を以て外道の邪教と称するは何の経・何れの
論文ぞや、諸経多しと雖も未だ両眼に触れず法華の中に諸経を破る
の文之有りと雖も諸経の裏に法華を破るの文全く之無し、所詮已今当
の三説を以て教法の方便を破摧するは更に日蓮聖人の莠言に非ず皆
是れ釈尊出世の金口なり。

爰に真言及び諸宗の人師等 大小乗の浅深を弁えず権実教の雜乱
を知らず、或は勝を以て劣と称し、或は權を以て実と号し意樹に任せ
て砂草を造る、仍て愚癡の輩・短才の族・経経 顯然の正説を伺わ
ず徒に師資相伝の口決を信じ秘密の法力を行ずと雖も真実の驗証無
し、天地之が為に妖孽を示し国土之が為に災難多し、是れ併ら仏法

の邪正を糺さず僧侶の賢愚を撰ばざる故なり、夫れ仏法は王法の
崇尊に依つて威を増し王法は仏法の擁護に依つて長久す、正法を学ぶ
の僧を以て外道と称せらるるの条理豈然る可けんや外道か外道に非ざ
るか早く嚴誉律師と召し合わせられ真偽を糺されんと欲す。

且去る文応年中・師匠日蓮聖人・仏法の廃れたるを見・未来の災を
鑒み諸経の文を勘え一卷の書を造ると号す、異国の来難果して以て符

合し畢んぬ未萌を知るを聖と謂つ可きか、大覺世尊・靈山・虚空・二処

・三会・二門・八年の間三重の秘法を説き窮むと雖も仏滅後二千二百

二十余年の間・月氏の迦葉・阿難・竜樹・天親等の大論師・漢土の天台・
妙楽・日本の伝教大師等内には之を知ると雖も外に之を伝えず第三

の秘法今に残す所なり、是偏に末法闡靜の始・他国来難の刻・一閭浮
提の中の大合戦起らんの時・国主此の法を用いて兵乱に勝つ可きの秘

術なり、經文きやうもん赫赫たり所説明明たり、彼れと云い此れと云い国の為、
世の為、尤も尋ね聞し食さるべき者なり、仍て款状かんじやうを勸ろくして各言上件ごんじやうくだん
の如し。

承賢

賢秀

弘安元年三月

日

日持

日興

◆九 九

竜泉寺申状

弘安二年十月 五十八歳御代

作 849P

駿河^{するが}の国・富士下方滝泉寺の大衆^{たいしゅう}・越後房日弁^{ぼう}・下野房日秀等謹^{ぼん}んで弁言^{べんごん}す。

当寺院主代・平左近入道行智・条条の自科を塞ぎ遮らんが為に
不実の濫訴を致す謂れ無き事。

訴状に云く日秀・日弁・日蓮房の弟子と号し法華經より外の余經・或
は真言の行人は皆以て今世後世叶う可からざるの由・之を申す云云取
意。

此の条は日弁等の本師日蓮聖人・去る正嘉以来の大彗星大地動等
を觀見し一切經を勘えて云く当時・日本国の体たらく權小に執著し
實經を失没せるの故に當に前代未有の二難を起すべし所謂自界叛逆難
・他国侵逼難なり、仍て治国の故を思い兼日彼の大災難を対治せらる
可きの由、去る文応年中・一卷の書を上表す立正安国論と号す勘え
申す所皆以て符合す既に金口の未來記に同じ宛も声と響との如し、外
書に云く采萌を知るは聖人なり」内典に

云く 智人は起を知り蛇は自ら蛇を知る」云云、之を以て之を思うに
本師は豈聖人なるかな 巧匠内に在り国宝外に求む可からず、外書に
云く 隣国に聖人有るは敵国の憂なり」云云、内経に云く 国に聖人
有れば天必ず守護す」云云、外書に云く 世必ず聖智の君有り而して
復賢明の臣有り」云云、此の本文を見るに聖人・国に在るは
日本国の大喜にして蒙古国の大憂なり諸竜を驅り催して敵舟を海に
沈め梵釈に仰せ付けて蒙王を召し取るべし、君既に賢人に在さば豈
聖人を用いずして徒に他国の逼を憂えん。

抑大覺世尊・遙に末法闍靜堅固の時を鑒み此くの如きの大難を
対治す可きの秘術を説き置かせらるるの經文明明たり、然りと雖も
如来の滅後二千二百二十余年の間・身毒・戸那・扶桑等・閻浮提の内
に未だ流布せず、随つて四依の大士内に鑒みて説かず天台伝教而も

演いべふず時未だ至いたらざるの故なり、法華經ほけきやうに云く 後このごの五百歳ひゃくさいの中に
閻浮提えんぷだいに広宣流布こうせんるふす」云云、天台大師てんだいだいし云く 後・五百歳みょうらく」妙樂みょうらく云く「五
五百歳でんぎやうだいし」伝教大師でんぎやうだいし云く 代を語れば則ち像の終り末の初め地を尋ぬれ
ば唐とうの東・羯とうの西・人を原ぬれば則五濁ごじよくの生・闍靜とうじやうの時」云云、東勝西
負めいぶんの明文めいぶんなり。

法主しやうにん聖人・時を知り国を知り法を知り機きを知り君の為臣の為神の為
仏さいなんの為災難さいなんを対治たいじせらる可きの由・勘かんえ

申もうすと雖も御信用ごしんよう無きの上・剩あまつさえ謗法人等の讒言に依つて聖人・頭に疵きずを負い左手を打ち折らるる上・両度まで遠流おんるの責を蒙こうむり門弟等・所所に射殺され切り殺され毒害・刃傷・禁獄・流罪・打擲・擯出・罵詈等の大難勝だいにんげて計かぞう可からず、茲ここに因よつて大日本国・皆法華經の大怨敵おんてきと成り万民悉ばんみんごとごとくく一闡提いつせんたいの人と為るの故に天神・国を捨て地神・所を辞てんがし天下静ならざるの由・粗伝承するの間其の仁に非ずと雖も愚案ぐあんを顧みず言上ごんじやうせしむる所なり、外經に云く、奸人朝あしたに在れば賢者けんじや進まず」云云、内經に云く、法を壊る者を見て責めざる者は仏法ぶつぽうの中あたの怨あだなり」云云。

又風聞の如ごとくんば高僧等こうそうを囑請くつせいして蒙古国もうこを調伏す云云、其の状を見聞いぬするに去る元暦・承久じやうきゆうの両帝・叡山えいざんの座主・東寺・御室・七大寺・園城寺等・檢校・長吏等の諸しよの真言師しんごんしを請こい向け内裏の紫宸殿にして

咒咀じゅうそし奉る故源みなもと右將軍並に故平右虎牙へいこうがの日記にっきなり、此の法を修しゅうするの仁は敬つて之を行えば必ず身を滅し強いて之を持てば定めて主を失うなり、然れば則ち安徳天皇てんのうは西海に沈没ちんぼつし叡山えいざんの明雲は流矢に当り後鳥羽法皇ほうこうは夷島えびすのしまに放ち捨てられ東寺とうじ・御室は自ら高山みづかこうざんに死しほぐりよう北嶺ざすの座主は改易の恥辱ちじよくに値あう、現罰げんばち・眼に遮り後賢之を畏る聖人山おそしやうにん中の御悲みは是これなり。

次ぎに阿弥陀經あみだを以て例時の勤つとめと為す可きの由の事、夫れ以おもみれば花と月と水と火と時に依つて之を用ゆ必ずしも先例せんれいを追う可からず、仏法ぶつぽう又是かくのくの如し時に随したがつて用捨ようしゃす、其の上・汝等の執する所の四枚あみだの阿弥陀經あみだは四十余年未顯真実よんじゅううよねんみけんしんじつの小經なり、一閻浮提第一えんぶだいいちの智者ちしやたる舍利弗尊しゃりほつそんじや者は多年の間・此の經を誦誦どくじゆするも終に成仏じやうぶつを遂げず然る後・彼の經を抛なげうち末に法華經ほけきやうに至いたつて華光如来にやらいと為なる、況や

末代まつだい惡世あくせの愚人おろか・南無阿弥陀なむあみだぶつ仏の題目だいもく計りを唱えて順次往生を遂ぐ
可いさしや、故に仏之を誡いさめて言いく法華經ほけきょうに云く『正直ほうべんに方便ほうべんを捨て但
無上道むじょうどうを説く』と云云教主きょうしゅ釈尊しやくそん正しく阿弥陀あみだ經を抛なちたまう云云又
涅槃經ねはんきょうに云く如來にょらいは虚妄の言無しと雖も若し衆生しゅじやうの虚妄の説に因る
をし知れば』と云云、正まさしく弥陀みだ念ねん仏ぶつを以て虚妄と称しやうする文なり、
法華經ほけきょうに云く但樂ねがて大乘經典だいじやうきやうてんを受持うけし乃ない至余經しよきやう

の一偈いっげをも受けざれ」云云、妙樂大師みょうらくだいし云く況や彼の華嚴けげん但以ただ稱比しやうひせん此の經の法を以て之を化するに同じからず故に乃至不受余經ふじゆよきやう一偈いっげと云う「云云、彼の華嚴經けこんきやうは寂滅道場の説・法界唯心の法門ほつかいなり、上本は十三世界微塵品中品せかいみじんちゆうばんは四十九万八千偈げ・下本は十万偈じゅうまんげ四十八品今現げんに一切經藏いっさいきやうざうを觀るに唯八十六十四等の經なり、其の外の方等ほうとう・般若はんにや・大日經だいにちきやう・金剛頂經こんこうちやうきやう等の諸の顯密しよけんみつ・大乘經等だいじやうきやうを尚なお・法華經ほけきやうに對当し奉りて仏自らみづか・或は未顯真実みけんしんじつと云い・或は留難多きとどなんが故に・或は門を閉じよ・或は抛て等云云、何に況や阿弥陀經あみだをや、唯大山おほやまと蟻岳ぎがくとの高下こうげ・師子王ししと狐兔こととの☆力すもうなり。

今日秀等專ら彼等小經かれらを抛なげうち專ら法華經ほけきやうを誦誦どくじゆし法界ほつかいに勸進くんじんして南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱え奉る豈殊忠に非ずや、此等の子細御不審しさいふしんを相貽このこさば高僧等かうそうを召され是非ぜひを決せらる可きか、仏法の優劣ゆうれつを糺明致す

事は月氏がつし・漢土かんど日本にほんの先例せんれいなり、今明時に當つて何ぞ三国の旧規に背そむかんや。

訴状そじょうに云く今月二十一日数多あまたの人勢を催し弓箭たいを帶し院主分の御坊内に打ち入り下野坊は乗馬相具じようめあいぐし熱原の百姓・紀次郎男・点札たてふだを立て作毛さくを薙り取り日秀の住房ぼうに取り入れ畢はぬ云云「取意」。

此の条・跡形あとかたも無き虚誕こたんなり日秀等は損亡そんもうせられし行者ぎようじやなり不安堵あんどの上は誰の人か日秀等の点札たてふだを叙用じようようせしむ可き將はた又☆弱おうにやくなる土民どみんの族・日秀等に雇やからい越こされんや、然らば弓箭たいを帶あぐぎようし悪行くわだを企くつるに於ては行智ひとびと云く近隣きんりんの人人争ひとびとつて弓箭きようじきを奪うばい取り其の身に召し取ると云うが如ごとき子細しさいを申さざるや、矯飾きようじきの至り宜しく賢察けんさつに足るべし。

日秀・日弁等は当寺代代の住侶じゆうろとして行法の薰修くんじゅうを積み天長地久てんちようちきゅうの御祈きとう☆を致いたすの処ところに行智たちまちは乍たちまちに当寺靈地の院主代に補し寺家・三河

房ぼう・頼らい・円えん並しやうに少う輔ぼう・房ぼう・日にち・禪ぜん・日にち・秀しゆ・日にち・弁べん等とうに行に智ちより仰うやせて、法ほ・華け・經きやうに於おては不信しん用の法ほうなり速そくに法ほ・華け・經きやうの誦どく誦じゆを停てい止しし一向いっごうに阿あ・弥み・陀だ・經きやうを讀よみ念ねん・仏ぶつを申もうす可かきの由よしの起き・請しやう・文ぶんを書かけば安あん・堵どす可かきの旨むね下げ知ちせし

むるの間、頼円は下知げちに随したがつて起請きしようを書いて安堵あんどせしむと雖も日禅等は起請きしようを書かざるに依つて所職の住坊を奪い取るの時・日禅は即ち離散せしめ畢おわんぬ、日秀・日弁は無頼むらいの身たるに依つて所縁あいたのを相憑あいたのみ猶寺中に寄宿きしゆくせしむるの間・此の四箇年の程・日秀等の所職の住坊を奪い取り嚴重きとうの御祈ぎとう☆を打ち止むるの余り惡行あくぎよう猶以て飽あき足らず為に法華經ほけきよう行者ぎようじやの跡あとを削り謀案ぼうあんを構かまえて種種しゆじゆの不実ふじつを申し付くるの条・豈さい在世さいせの調達ちようだつに非ずや。

凡そ行智の所行は法華三昧ほつげさんまいの供僧・和泉房蓮海ぼうを以て法華經ほけきようを柿紙しぶかみに作り紺形うわぶきくれを彫り堂舎しゅうじの修治しゅうじを為す、日弁に御書下ごしよを給かまい構かまえ置く所まんじころの上葺うわぶき搏うわぶき一万・二千寸の内八千寸を之を私用せしむ、下方の政所代まんじころに勸め去いぬる四月御神事もなかの最中ほけきようしんじんに法華經信心ほけきようしんじんの行人・四郎男にんじようを刃傷にんじようせしめ去いぬる八月弥いよいよ四郎坊男の頸を切らしむ、日秀等に頸はを刎はぬる事

を擬して此の中に書き入れ無智無才の盗人・兵部房静印より過料を取り器量の仁と称して当寺の供僧に補せしめ、或は寺内の百姓等を催し・鶉狩・狸殺・狼落の鹿を取りて別当の坊に於て之を食らい、或は毒物を仏前の池に入れ若干の魚類を殺し村里に出して之を売る、見聞の人・耳目を驚かさざるは莫し仏法破滅の基悲んで余り有り。

此くの如き不善の悪行・日日相積るの間・日秀等愁歎の余り依つて上聞を驚かさんと欲す、行智条条の自科を塞がんが為に種種の秘計を廻らし近隣の輩を相語らい遮つて跡形も無き不実を申し付け日秀等を損亡せしめんと擬するの条言語道断の次第なり、冥に付け頭に付け戒めの御沙汰無からんや、所詮仏法の権実沙汰の真偽・淵底を究めて御尋ね有り且は誠諦の金言に任せ且は式条の明文に准し禁遏を加えられれば守護の善神は変を消し擁護の諸天は咲を含まん、然れば

則ち不善惡行の院主代・行智を改易せられ將た又本主此の重科を脱れ
難からん何ぞ実相寺に例如せん、誤まらざるの道理に任せて日秀・
日弁等は安堵の御成敗を蒙むり堂舎を修理せしめ天長地久御祈☆の
忠勤を抽んでんと欲す、仍て状を勅し披陳言上件の如し。

弘安二年十月

日

沙門

日秀日弁等上

◆一〇〇

百六箇抄

(血脈抄) 弘安三年

854P

与日興

五十九歳

具勝本種・正法の実義・本・迹勝劣正伝、本因妙の教手本門の大師
 日蓮謹んで之を結要す・万年救護写瓶の弟子日異に之を授与す云

云、脱種合して一百六箇之れ在り、

靈山浄土・多宝塔中・久遠実成・無上覚王・直授相承本・迹勝劣の
 口決相伝譜、久遠名字より已来た本因・本果の主・本地自受用報身の
 垂迹上行菩薩の再誕・本門の大師日蓮詮要す。

理の一念三千・一心三觀本・迹

三世諸仏の出世成道の脱益

寿量の義理の三千は釈迦諸仏の仏

心と妙法蓮華經の理觀の一心と

に蘊在せる理なり。

大通今日・法華本・迹

久遠名字本因妙を本として

中間 今日・下種する故に久成を本と為し中

間 今日の本・迹を俱に迹と為る

者なり。

応仏一代の本・迹

久遠下種・靈山得脱・妙法値遇の

衆生を利せん為に無作三身・寂光淨土従り三

眼三智をもつて九界を知見し迹を

垂れ權を施す後に説く妙經の故に今日の本

迹共に迹と之を得る者なり。

迹門為理円の一致の本・迹

松柏風波・方声一如・諸法実相

の理上の觀心かんじんは応仏の域を引かえた

上の法相ほっそうなれば本・迹理觀みようぼうの妙法と

之これを弘ひろめず。

る故ゆえに本・迹とは別れども唯理ただの

顯あらわす、迹化しゃっけは付屬ふぞく無きが故ゆえに

心法そくしんじょうぶつ即身成仏の本・迹

中間ちゅうげん・今日も迹門しやくもんは心法の成仏じょうぶつ

なれば華嚴けこん・阿含あこん・方等ほうとう・般若はんにか・法華ほっけの安

樂行品に至るいたまで円理えんりに同ずるが

故ゆえに迹は劣り本は勝るまさる者なり。

心法みょうほうれんげきよう妙法蓮華經の本・迹

山家いわ云く一切諸法いっさいしよほう・從本このかた已來・

不生不滅ふしようふめつ・性相しやうそうぎようねん凝然しやか・釈迦口しやかを閉ぢて身

子言こを絶す云云、方便品ほうべんには理具

の十界互具じゅうかいごぐを説く本門ほんもんに至つて顕

本理上の法相ほつそうなれば久遠くおんに對して

之これを見るに実相じつそうは久遠垂迹くおんすいじやくの本門ほんもん

なる故ゆえに色法しきふに非るあらざなり。

從困至果ししかちゅうげん・中間ちゅうげん今日の本・迹

像法やうほうの修行しゆぎやうは天台てんだい・伝教弘通でんぎやうくつうの本

・迹は中間・今日の迹門を因と

本果の妙法蓮華經の本・迹

本果には劣るなり、寿量の脱益・

声開の為の觀心なり、我等が為

り、又滅後・像法相似・觀行解了の

・伝教の修行の如く末法に入つ

て我等が為には虚戲の行と成る可

為し本門修行を果と為るなり。

今日の本果は從因至果なれば本の

在世一段の一品二半は舍利弗等の

には教相なり、情は迹劣本勝な

行益も以て是くの如し、南岳・天台

て修行せば帶權隔歷の行と成つ

きなり、日蓮にちれんは一向本いっしやう・天台てんだいは一向いっしやう

迹・能よく能よく之これを問とう可べし。

疏じよの九に云わく爾前にぜんみな皆虚にして実ならず迹門しやくもんは一虚一実いちじつ・本門ほんもんは皆実不虛云云、爾前にぜん二種の失とがの事・二には存行布故仍未聞權とて迹門しやくもんの理の一念三千いちねんさんぜんを隠せり、二には言始成故尚未發迹とて本門ほんもんの久遠を隠せり迹門しやくもん方便品一念三千いちねんさんぜん・二乗作仏を説いて爾膳・二種の失とが一つ脱がれたり、本門ほんもんに至りて迹門しやくもんの十界因果じゅうかいいんがを打破

る是すなわ即ほんち本いん因・本ほん果がの法ほう門もんなり、実じつのいちねんさんぜん一念も三千も顯あらわれず二に乘じよう作さ仏ぶつ
も定さだらず云云、世せ間けんの罪つみに依よつて惡あく道どうに墮おちん者は爪そう上じようの土の・仏ぶつ法ほう
に依よつて惡あく道どうに墮おちちん者は十じ方ゆうの土の如ごとし、故ゆゑは信しん心じんの根こん本ぼんは本

勝しょう迹じ劣りやく余の信しん心じんは枝し葉ようなり。

余よき行ぎやうに渡わたる法ほけき華きやう經きやうの本・迹のほんし
下げ種しゆを受うけて説せつく所しよの教きやうなるが故ゆゑに一

梯てい☆は名み字じの妙みやう法ほうを下げ種しゆして熱ねつ脱だつせし

本・迹のほんしなり。

在ざい世せ觀かん心じん法ほけき華きやう經きやうの本・迹のほんし

觀かん心じんなり天てん台だいの本ほん門もんなり、日に蓮れんが為ためには教きやう相そう

一ざい品せ二に半はんは在ざい世せ一いち段だんの

の迹しやくもん門もんなり云云。

部ぶ八はち卷まん乃ない至いち一だい代だい五ご時じ・次し第だい

一いち代だい八はち万まんの諸しよ法ほうは本ほん因にん妙みやうの

脱益だつえきの妙法みょうぼうの教主きょうしゅの本・迹

説きようしゅしやくそんの教主きょうしゅ釈尊しやくそんは迹門しやくもんなり、法みずか自ひろら弘ひろまら

ともに尊うやまつし。

脱益だつえきの今こん此し三界さんがいの教主きょうしゅ本・迹

身門しんもん・密表じやくりようぽん寿量品じゆりようぽんの今こん此し三界さんがいは即そく本身

脱益だつえき像法ざうぼう時剋じこく弘經くわんぎやうの本・迹

迹門しやくもんなり時剋じこく亦また天地てんちの不同ふどう之の在あり。

脱益だつえき迹門しやくもん修行しゆぎやうの本・迹

り像法ざうぼう一日いちじつの徳とくは勝すぐれたるなるべし。

脱益だつえき迹門しやくもん自解じげ仏乘ぶつじやう修行しゆぎやうの本・迹

所説しよせつの正法しやうぼうは本門ほんもんなり能

ず人・法ひろを弘ひろむる故ゆえに人法

天上てんじやう・天下てんが唯ゆい我が独尊どくそんは迹

門もんなり。

天台てんだいの本・迹とくは俱にちれんに日蓮にちれんが

正法しやうぼう一千年しちゆきやうの修行しゆぎやうの徳とくよ

熱益ねつえきは迹・脱益だつえきは本ほんなり

之に就ついて之これを思し惟ゆいす可べし。

脱の五大尊の本・迹

文殊もんじゆ・弥勒みろく・藥王やくおうは迹なり。

他受用たじゆう応ゆう仏は本・普賢ふげん・

脱の真俗二諦の本・迹

天台大師弘通の本・迹前十四

品は迹門しやくもんに約し後十四品は本門ほんもんに約す云云、

是法住法位世間相常住文。
ぜほうじゅうほうい せけん じやうじゅう

前十四品悉く流通分の本・迹

如来の内証ないしやうは序品じよほんより滅後めつご

正像末しょうざうまつの爲なり、藥王菩薩やくおうぼさつは像法ざうほう

の主天台てんだい是なり、密表の

法師品ほうしほんに云く今此三界文。脱益理觀一致いっちの本・迹

脱益理觀一致いっちの本・迹

本・迹殊ことなりと雖いえども不思議ふしぎ一と云う

は今日こんにち乃至中間ないうちゅうけんの本・迹は本・迹と分別ぶんべつす

れども本因妙ほんにんみょうを下種げしゆとして説

く所の本・迹なれば迹の本は本に非あらず云云。

脱益戒体の本・迹
爾前にぜん・迹門しやくもん・熱益ねつえきの戒躰かいたいを迹とし脱

益かいの戒たい躰たいを本なと為なるなり、迹門しやくもんの・或あるは爾前にぜん

大小だいしやうの戒かいに勝すぐれ本門ほんもんの・或あるは爾前にぜん・

迹門しやくもんの戒かいに勝まさるるなり。

脱しやくつけの迹化しやくけ七面しちめんの本・迹

像法ざうぼうには理觀りくわんを本なと用もちうるなり故ゆゑに

天台てんだいは迹しやくを本なと為なし本ほんを迹しやくと行なず

るなり。

脱しやくつけの迹化しやくけ本尊ほんぞんの本・迹 一部いちぶを本尊ほんぞんと定さだむるに前十四品ぜんじしゆひんは迹

・後十四品ごじしゆひんは本ほんと云云、是こゝは一部八

卷まきなり云云。

脱益しやくご守護神しゆごしんの本・迹 守護しゆごする所ところの法華ほつけは本・守番たてまつし奉ほうる

処ところの神等しんどうは迹しやくなり、本因妙ほんにんみやうの影かげを万水ばんすい

に浮うべたる事ことは治定ちぢやうと云云。

脱益山王さんりうの本・迹

夫それより守り来る所は垂迹すいじやくなり、

久遠・中間くおん ちゅうげんに受くる処ところの法華ほっけは本・

下種げしゅは本

因妙なり云云。

脱迹じゅうらせつ十羅刹女の本・迹

久遠・中間・今日の理事は本・中間ちゅうげん

大通だいつう・今日出世冥守する処は垂迹すいじやくなり

り、下種げしゅは前の如し云云。

脱迹付属ふぞくの本・迹

脱益の迹化付属は中間・大通だいつうを本と

し今日初任の終を迹とするなり、受くる

正法しょうぼうは本・持つ方は迹なり。

脱迹開会かいえの本・迹

大通だいつうの初を開と云い今日初任の終り

を会と云うなり、本は大通だいつう・迹は初任なり

り、初頭を開と云い終合を会と云う

云云、案位も理上の案位なり。

脱益成仏じょうぶつの本・迹

寿量品じゅうりょうぽんは本・応仏は迹なり、無作むさ

三身寂光土さんじんじやくこうどに任して三眼・三智をもつて九界

を知見す云云。

脱迹三種教相の本・迹

二種は迹・無開会・一種は本有の

開会なり、一種は開顯・二種は不開会・

所従者属の教相なり云云。

脱の五味所従の本・迹

天台・伝教の五味は横豎ともに

所従なり、五味は本・修行の人は迹た

り、在世以て此くの如し云云。

脱迹父子の本・迹

応仏は本・迹・仏は迹なり、子・父の法

を弘むるに世界の益ありと云云。

脱迹師弟の本・迹

義理共に上に同じ是れ我が弟子・應に

我が法を弘む可し弘む可し云云。

脱益感応の本・迹

久遠の天月の影を中間・今日の脱益

の水に移すなり、衆生久遠に仏の善巧を

蒙るとは是なり。

脱益寂照の本・迹

理の上の寂照は妙覺・乃至觀行

等の解了なり、理即の凡夫は無駄有用の本・迹

なり。

脱益随縁不変の本・迹

在世と像法と之同じ真如の義理な

り、随縁も不変も共に理の一段の本

迹なり。

脱益九法妙の本・迹

三法妙に各三法妙を具すれば九法

妙なり、法中の心法妙より起る所の生仏

二妙なり本・迹知るべし。

脱益八相・八苦習合の本・迹

八相は本・八苦は迹・同躰の權実

是なり。

脱益灌頂等の本・迹

灌頂とは至極なり後世・仏・菩薩の

灌項かんちようは法華經ほけきようなり、迹門しやくもんの灌項かんちようは方便ほうべん誦

誦じゆ・欲令よくりよう衆生しゆじよう開仏かいぶつ知見ちけんなり、本門ほんもんの

港項じゆうりようは寿量品じゆりようほんどくじゆ誦じゆ然我実成仏がじつじようぶつ已来いらいなり。

脱益說所戒壇本かいだん・迹

とは事行の戒・事戒・理戒・今日と像法ぞうほうと

は理かいたいの戒躰かいたいなり。

脱益さんぜ三世三仏利の本・迹

世世番番ききうしゆの教主きうしゆは本しよけ・所化しゆじようの衆生しゆじようは

迹なり、世世このかた已来いらい常に我が化を

受け番番しゆつせに出世しゆつせし師しと俱ともに生ず。

脱益証明しようみよう・多宝仏塔たほうぶつの本・迹

妙法蓮華經みようほうれんげきよう皆是かいせしんじつ真實しんじつは本たほうぶつ・多宝仏

は迹・迹門しやくもん八品ないしほんもん乃至本門これ之を指

すなり云云。

經文きやうもん釈義しやくぎの如ごとく理の上の正宗しやうしゆ流通るつう

脱益序正流通るつうげんぶん現文げんぶんの本・迹

序文じよぶんなれども本は勝すぐれ迹は劣

るなり、然るに迹は本無今有なれば

久遠くおんの迹を脱として今日の本

を説くなり云云。

脱益しょうじゆしやくぶく撰受折伏の本・迹

天台てんだいは撰受しょうじゆを本とし折伏しやくぶくを迹と

す、其の故は像法ぞうぼうは在世ざいせの熟益冥利じゆくやくみょうりの

故なり福智具足ふそくの故と云えり。

脱益二妙の本・迹

相待妙そうたいみょうは迹・絶待妙ぜったいみょうは本・妙法みょうぼうの外

に更に一句いっくの余経よきやう無し云云、独一どっかい法界ほっかいの故

に絶待ぜったいと名なずくるの釈これ之を思おもふ可べし。

脱益十妙の本・迹

本果妙ほんくみょうは本・九妙くみょうは迹なり在世ざいせと

天台てんだいとは機上ききの理なり、仏ほとけは本因妙ほんにんみょうを本と

為なし所化しよけは本果妙ほんくみょうを本と思えり。

脱益六重所説の本・迹

已今を本と為し余は迹なり本・迹

殊なりと雖も不思議一と云云、理具の

本・迹なれば一部俱に迹の上の本・迹

なり。

脱益六即所判の本・迹

妙覺は本・余は迹なり。

行を果と為す十行を因とし十廻向を果とし十

玄九に云く初の十住を因と為し十

と為し等覺を果とし等覺を因とし妙覺を果

廻向を因とし十地を果とし十地を因

と為す云云。

脱益十不二門の本・迹

理の上の不變の不二にして事行の不

二門には非なるなり。

脱益じゅつかいご十界互具じゅうかいごの本・迹

理具じゆかいごの十界互具じゅうかいごにして事行の互具つぶさに

は非あらざるなり、九界の理を仏界ぶつかいの

理に押し入るる方ならではの脱せざる

なり。

脱益十二因縁四諦の本・迹

經に云く無明乃至老死云云、苦集滅

は迹なり道諦は本なり。脱益

三土の本・迹 報土は本・同居・方便

は迹なり。

妙楽云く雖脱在現・本・迹理上の一致なり心は寿命品も文は現量なれども上行・所伝の本・因・妙を唱え顯して後は只久遠の教相にて成仏・肝要の觀心には非ずと云云。籤一に云く本・中・体等迹と殊ならず脱益の妙覺乃至觀行相似等の妙法蓮華經は理に即して事を含む、然も本・迹一致に非ず破廢立本云云。玄七に云く權實は智に約し教に約す、化他不定の時施す所の權實八教なり而所殊ならず久遠の本・今日の脱益と而所なり。

籤七に云く理淺深無し故に不殊と曰う本・因・本果の理を今日・中間にも寿命・顯本の理に推し入れて顯すと釈するなり。

籤七に云く經に約すれば是れ本門と雖も既に是れ今世迹中の本名本門と

為す故に知んぬ、今日正く迹中利益に当る、乃至本成已後俱に中間と名く中間本を顯すに利益を得る者尚迹益を成ず況や復今日をや文。

意は久遠本巢の迹を中間、今日の本と為す、又久遠名字の妙法の影を中間、今日に垂迹する故に下種に對して脱益寿量を迹と得たる証拠に釈する是なり。

疏の一に云く衆生久遠に仏の善巧を蒙る久遠下種靈山得脱。

籤十に云く故に知んぬ今日の逗会は昔の成熟の機に赴くことを靈山下種・久遠得脱の益。記二に云く本時の自行は唯円と合す本時とは本周妙の時なり。化他は不定亦八教有り中間、今日・化導の儀式なり。

玄七に云く迹の本は本に非ず、今日の本果妙の事なり。

本の迹は迹に非ず本因妙の事なり。本・迹殊なりと雖も不思議一なり本因妙の外全く迹無きなり迹門は即ち顯本の後は本無今有の方便無得道なりと中島の証俊何にと問われし時、俊範法印答えて云く不思議一と、求めて云く其の義如何、答えて云く文在迹門義在本門云云と、会して云く迹門既に益無し本門益有り本・迹勝劣不思議一と云云。

妙樂云く權實は理なり本・迹は事なり天台云く本・迹を二經と為すと云

えり如來にょらいの本・迹は理上ほつそうの法相にちれんなり日蓮にちれんの本・迹は事行ほつそうの法相にちれんなり
以上・脱の上の本・迹勝劣しょうれつ口決くつ畢おわんぬ

事のいちねんさんぜん一念三千・二心三觀いつしんさんかんの本迹ほんしやく

声聞・縁覺・人天えんかく にんてんの唱る方は迹なり、南無なむ

り。

久遠くおん元初直行ほんしやくの本迹

本門ほんもんなり、本果妙よきようは余行わたに渡ゆえる故に本の上の

を今日蓮直いまにちれんただちに唱となうるなり。

久遠実成直体ほんしやくの本迹

種子しゆしなり、名字童形みようじの位、釈迦しやかは迹なり

日蓮にちれんが修行しゆぎようは久遠くおんを移せり。

釈迦三世しやかさんぜの諸仏しよぶつ・

妙法蓮華經みようほうれんげきようは本な

名字本因妙みようじほんにんみようは本種なれば

迹なり、久遠釈尊くおんしやくそんの口唱くしやう

久遠名字くおんみようじの正法しやうぽうは本

我本行菩薩道がほんぎようぼさつどう是なり、

くおん 久遠本果成道の本迹 じようどう ほんしやく

みょうじ 名字の妙法を持つ処は みょうぼう ところ

じきたい 直鉢の本門なり直に唱え奉る我等は迹なり。 ほんもん ただち とな たてまつ われら

くおん 久遠自受用報身の本迹 じじゅうゆう ほうしん ほんしやく

男は本・女は迹・知り

がた 難き勝劣なり。能く能く伝流口決す可き者な しょうれつ よ よ

じようぎよう 上行所伝の妙法は しよでん みょうぼう

みようじ 名字本有の妙法蓮華経なれば事理俱勝の本なり ほんぬ みようほうれんげきよう

くじよう 久成本門為事円の本迹 ほんもん ほんしやく

にちれん 日蓮並に弟子檀袖郡等 でし

は迹なり。

そくしん 色法即身成仏の本迹 じようぶつ ほんしやく

親の義なり父の義なり、

ゆじゅう 涌出品より已後・我等は色法の成仏なり不渡 いご われら じようぶつ ふど

よぎよう 余行の妙法は本・我等は みょうぼう われら

迹なり。

色法妙法蓮華經みょうぼうれんげきようの本迹ほんしやく

男子と成つて名字みょうじの大法だいほうを聞

き己こ己こ・物物・事事・本・迹あらわを顯あらわす者なり、

又今日の二十八品・品品の内の勝劣しょうれつは通号は本なり勝

なり・別号は

迹なり劣なり云云。

妙樂疏記九みょうらくじよきに云いく故ゆゑに知んぬ迹いの実ゆゑは本おに於おて猶なほ虚そなり、籤十に

云いく、今日けふは初成しゅじやうを以もつて元始げんしと為なし

爾前にぜん・迹門しやくもんは大通だいつうを以もつて元始げんしと為なし 迹門しやくもん 本門ほんもんは本因ほんいんを以もつて元

始しと為なす本門ほんもん

此の釈は元始本・迹・遠近勝劣を判ずるなり、本果妙は然
がじつじょうぶついらいなおしやくもん
我実成仏已来猶迹門なり、迹の本は本に非ざるなり、本因妙は
がほんぎようばさつどうしんじつ
我本行菩薩道真実の本門なり、本の迹は迹に非ず云云、我が内証の
じゆりようほん
寿命品は迹化も知らず云云、重位秘蔵の義なり本・迹と分別する
しょうれつ
上は勝劣は治定なれども末代には知り難き故云云。

くおんじゅうかこういん
久遠従果向因の本迹

しやくかぶつ
本果妙は釈迦仏・本因妙は

じようぎようばさつ
上行菩薩・久遠の妙法は果・今日の寿命品は

ゆえ
花なるが故に従果向因の

本・迹と云うなり。

みようほうれんげきよう
本因妙法蓮華經の本迹

よきよう
全く余行に分たざりし

みようほう
妙法は本・唱うる日蓮は迹なり、手本には不

輕菩薩の二十四字はさつ是なこれ

り、又其の行儀ぎようぎ是なり云云。

不ふ渡ど余よ行ぎよう法ほけき華き經きやうの本ほん迹しやく

は本門ほんもん・唱となうる釈迦しやかは迹しやくなり、今日蓮いまにちれんが修しゆう

計たがも違ちがわざるなり。

下種げしゆの法ほけき華き經きやう教主きやうしゆの本ほん迹しやく

は迹しやくなり、我等われらが内証ないしやうの寿量品じゆりやうぽんとは脱益

り、其の教主きやうしゆは某それがしなり。

下種げしゆの今こん此し三さん界がいの主しゆの本ほん迹しやく

唯我独尊ゆいがどくそんは日蓮にちれん是なり、久遠くおんは本・今日

行くおんは久遠みやうじ名字ふるまいの振舞けにに芥爾

自受用身じじゆゆうしんは本・上行じやうぎやう日蓮にちれん

寿量じゆりやうの文底ほんにんみの本因妙ほんにんみの事ことな

久遠くおん元始てんじやうの天上てんが・天下てんが・

は迹なり、三世常住さんぜじょうじゅうの

日蓮にちれんは名字みょうじの利生りしょうなり。

下種げしゅ得法かんじん觀心ほんしやくの本迹

今日ちゅうげん中間等ちゅうげんの得法かんじん觀心ほんしやくは迹なり、分別ぶんべつ功德くどく

久遠くおん下種げしゅの得法かんじんは本なり、

品の名字みょうじ初隨喜しよずいきの文ぶんの如ごとし

云云。

下種げしゅ自解じげ仏乘ぶつじょうの本迹ほんしやく

名字みょうじの妙法みょうぽうを上行じょうぎょう所伝しよでん

と聞き得る方は自解じげ仏乘ぶつじょうの本なり、聞き得て後

受持じゅじする我等われらは迹なり、

故ゆえに伝教でんぎょうより日蓮にちれんは勝まさるなり云云。

末法まつぽう時刻じこくの弘通ぐつうの本迹ほんしやく

本因ほんにん妙みょうを本とし今日けふ寿量じゆりょう

の脱益だつえきを迹とするなり、久遠くおんの釈尊しゃくそんの修行しゆぎやう

と今日けふ蓮れんの修行しゆぎやうとは芥子けし計けい

も違たがわざる勝劣しょうれつなり云云。

本門ほんもん修行しゆぎやうの本迹ほんしやく

正像しょうざう二千年にせんねんの修行しゆぎやうは迹門しやくもん

なり、末法まつぽうの修行しゆぎやうは本門ほんもんなり、又中間ちゆうかん今日の仏ぶつ

の修行しゆぎやうより日蓮にちれんの修行しゆぎやうは勝まさる

る者なり。

本門ほんもん五大尊ごだいそんの本迹ほんしやく

久遠くおん本果ほんくわの自受用じじゆう報身ほうしん如来にょらい

は本なり、上行等じやうぎやうとうの四菩薩しぼさつは迹なり。

日蓮にちれん本門ほんもん弘通くわつうの本迹ほんしやく

本因妙ほんにんみやうは本なり

我本行菩薩道がほんぎやうぼさつどうは迹なり云云。

本化事行ほんげじぎやう一致いっちの本迹ほんしやく

本・迹殊ことなりと雖いえども不思議ふしぎ一

云云、本因妙ほんにんみやうの外に並に迹とて別して之無

し故ゆえに一いと积しやくする者なり、

真実しんじつの勝劣しょうれつの手本てほんの義なり云云。

後十四品皆流通みなるつうの本迹ほんしやく・本果妙ほんくわみやうの积尊しやくそん・本因妙ほんにんみやうの

上行菩薩じやうぎやうぼさつを召し出す事いだいは一向いっかうに滅後末法利めつごまつぽうり

益えきの為なり、然しかる間かん・日蓮にちれん

修行しゆぎやうの時は後の十四品皆滅後みなめつごの流通るつう分なり

下種戒体の本迹げしゅ ほんしやく

雜乱ざうらん、本門ほんもんの戒躰かいたいは純一無雜じゅんいちむざいの大戒だいかいなり。

爾前にぜん・迹門しやくもんの戒躰かいたいは權實ごんじつ

勝劣しょうれつ天地水火てんちすいか尚なお及およばず具つぶさに

戒躰抄かいたいしやうの如ごとし云云。

本化ほんげ七面しちめんの本迹ほんしやく

像法ざうぼうとには理觀りくわんを本とするなり、天台てんだいの本

末法まつぼうには事行じぎやうを本とし在ざい世せいと

書は理の上の事なれば一向いっしやう

迹門しやくもんの七決しちけつ、我家けがの本書ほんしよは事の上の本なり。

下種三種法華の本迹げしゅ さんしゆ ぽうけ ほんしやく

二種は迹なり一種は本なり、

迹門は隱密法華・本門は根本法華・迹本文しやくもん おんみつ ぽうけ ほんもん こんぽん ぽうけ

底の南無妙法蓮華經は顯說なむ みよう ぽうれんげきよう けんせつ

法華なり。

本化本尊の本迹ほんげ ほんぞん ほんしやく

七字は本なり・余の十界は迹じゅうかい

なり、諸經・諸宗中王の本尊万物下種の種子無上しよきよう しよしゅう ほんぞん げしゅ しゆしむじよう

の大曼陀羅なり。

下種守護神の本迹げしゅ しゅごしん ほんしやく

守護し奉る所の題目は本しゅご たてまつ だいもく

護る所の神明は迹なり、諸仏救世者・現無量神まも しんみょう しょうぶつ げんむりよう

力云云。

下種山王神の本迹げしゅ さんおう ほんしやく

久遠に受くる所の妙法は本くおん みよう ぽう

中間・今日・未來までも守り来る所の山王明ちゅうげん きふ みらい さんおう

神は即迹なり。

下種げしゆ十羅刹女じゆうらせつによの本迹ほんしやく

此この義理ぎり上に同じ唯神明ただしんみようと

十女を本・迹に對する時・十羅刹女じゆうらせつによは本・神明しんみよう

は迹なり。

本門ほんもん付属ふぞくの本迹ほんしやく

久遠くおん名字みょうじの時・受る所の妙法みょうぼう

は本・上行じようぎよう等は迹なり、久遠くおん元初げつちの結要けつよう付属ふぞくは

日蓮にちれん今日けふ寿量じゆりようの付属ふぞくと同意どういな

り云云。

本門ほんもん開會かいえの本迹ほんしやく

久遠くおんの本會ほんかいを本なと為す、今日

寿量じゆりようの脱だつを迹しやくと為るななり・

妙樂みょうらく云く始頭しとうを開ひらと云い終合しうがふ

を會と云う文。

下種成仏の本迹げしゅじょうぶつ　ほんしやく

本因妙是本・自受用身は迹・ほんにんみょう　じじゅうしん

成仏は難きに非ず此の経を持つこと難けれじょうぶつ　がた　あら　なん

ばなり云云。

下種三種教相の本迹げしゆ きようそう ほんしやく

二種は迹門・一種は本門しやくもん ほんもんなり

り、本門の教相は教相の主君なり、二種はほんもん きようそう きようそう しゅくん

二十八品・二種は題目なり、だいもく

題目は觀心の上の教相なり。だいもく かんじん きようそう

五味主の中の主の本迹ほんしやく

日蓮が五味は横豎共に五味にちれん おうじゆ

の修行なり、五味は即本門・修行は即迹しゆぎよう そく ほんもん しゆぎよう

門なり。

本種師弟不変の本迹しつてい ふへん ほんしやく

久遠実成の自受用身は本くおん じつじよう じじゆゆうしん

上行菩薩は迹なり、三世常恒不変の約束なりじようぎようぼさつ さんぜ じようこう ふへん やくそく

本種父子常住の本迹ふし じようじゅう ほんしやく

義理上に同じ、久遠ぎり くに おんの

名字即の俗諦常住の父子は今日蓮が修行に殊みょうじそく ぞくたい じようじゅう ふし いまにちれん しゆぎよう

ならず、世間相常住是なり。せけん じようじゅうこれ

四土具足ぐそくの本迹ほんしやく

三土は迹・常寂光土は本じようじやつこうど

り、四土即常寂光・寂光即四土の浄土じようどは唯本門ただほんもん

弘經の道場こうきやう どうじやうなり。

下種げしゅ感応日月かんのう にちがつの本迹ほんしやく

下種げしゅの仏は天月てんげつ・脱仏は池月

なり。天台云く不識天月但觀池月云云。てんだいいわ てんげつ

下種げしゅ隨緣不變ずいゑん ふへんの本迹ほんしやく

体用同時たいゆうどうじの眞実しんじつ・眞如しんにょ・一口

の首題なり、本有ほんぬの迹・本有ほんぬの一念三千是ないちねんさんぜんこれ

り、隨緣ずいゑん不變ふへん一念寂照いちねんじやくしやうの本・

迹なり。

下種げしゅ九法妙くおんげしゅ みやうぼうの本迹ほんしやく

久遠下種くおんげしゅの妙法みやうぼうは本・已來このかたの

九法は迹なり。

下種げしゅ人天にんてんの本迹ほんしやく

久遠下種くおんげしゅの妙法みやうぼうは本なり、

已^{この}来^{かた}の人^{にん}天^{てん}は迹^{あと}なり。

下^げ種^{しゅ}八相・八苦習合実勝の本^{ほん}迹^{しやく}

・脱^{だつ}の八苦は迹・種^{しゅ}の八苦は本

・常^{じようざい}在此^{こゝ}不滅^{ふめつ}と云^いえり。

脱^{だつ}の八相は迹・種^{しゅ}の八相は本

なり煩悩^{ぼんのう}即^{すなは}菩提^{ぼだい}・生^{しやう}死^じ即^{すなは}涅槃^{ねはん}

下種げしゅさいご最後直授摩頂の本迹ほんしやく

項く事は最極無上の灌頂むじょうかんちようなり法は本

下種げしゅぐつう弘通戒壇実勝の本迹ほんしやく

士山本門寺本堂なり。

所は総じて院号なるべし云云

下種げしゅじやくしよう寂照・実事・体用無上の本迹ほんしやく

寂照なり人は迹・仏は本なり

下種げしゅさんぜ三世・三仏実益の本迹ほんしやく

・種熟脱・本有一念の利益なり、天

久遠一念元初の妙法を受けくおんいちねんみようぽう

人は迹なり。

三箇の秘法建立の勝地は富ひほうこんりゅう

（上行院は祖師堂云云弘通じようぎよう

生仏一如の事の上の本覚ほんかく

云云。

日蓮は下種の利益・三世・九世にちれん

法華ほっけの意いの修行しゆぎやうの利益りやくなり。

下種げしゆ証明しやうみやう・多宝たほう仏塔ぶつの本迹ほんしやく

妙法蓮華經みやうほうれんげきやう皆是かいぜしんじつ真実しんじつは本ほんなり、久遠くおん

釈迦しやか・多宝たほうは迹あとなり。

下種げしゆ序正流通るつう・文底ぶんの本迹ほんしやく

半はんを本門ほんもんと定め現文げんぶんの勝劣しょうれつ、報仏ほうぶつと

の勝劣しょうれつなり。

下種げしゆ折摂せつ二門にもんの本迹ほんしやく

迹あとと定む法華折伏ほっけしやくぶく・破権門理はこんもんりとは是これなり。

台たい云いふく若もしは破やぶ若もしは立た皆みな是

久遠くおん実成じつじやう・無始むし無終むしゅう・本法ほんぽうの

の本師ほんしは妙法みやうほうなり、本有ほんぬ実成じつじやう

応仏おうぶつと天台てんだいとは正宗しやうしゅう一品二

日蓮にちれんとは流通るつうを本と定む文底

日蓮にちれんは折伏しやくぶくを本とし摂受しやうじゆを

下種^{げしゆ}二妙実行の本迹^{ほんしやく}

日蓮^{にちれん}は脱の二妙を迹と為し種

の二妙を本と定む、然^{しか}るに相待は迹・絶待^{ぜったい}

は本云云。

下種^{げしゆ}十妙実体の本迹^{ほんしやく}

日蓮^{にちれん}は本因妙^{ほんにんみょう}を本と為し、余

を迹と為すなり、是^これ真実^{しんじつ}の本因^{ほんいん}・本果^{ほんが}の

法門ほうもんなり。

下種げしゅ六重具膳の本迹ほんしやく

日蓮にちれんは脱の六重を迹なと為し、

種の六重を本なと為るなり云云。

下種げしゅ六即実去の本迹ほんしやく

日蓮にちれんは脱の六即そくを迹なと為し種

の三世一即さんぜそくの六即そく・案位あんゐの理即りそくは開会かいえの

妙覺みょうかく・開会かいえの理即りそくは本覺ほんかくの

極果ごくかを本なと為るなり。

下種げしゅ十二因縁いんねんの本迹ほんしやく

日蓮にちれんは応おん所說しよせつの十二因縁いんねん

を迹なと為し、久遠報くおん所說しよせつの十二因縁いんねんを本

と定むるなり。

下種げしゅ十不二門ほんしやくの本迹ほんしやく

日蓮にちれんが十不二門は事上極極の

事理じり一躰用いつたいようの不二門ほんしやくなり。

下種げしゅじゅつかいご十界互具の本迹ほんしやく

唱となえ奉たてまつる妙法みょうぼう・仏界ぶつがいは本・

唱となうる我等われら九界は迹なり、妙覺みょうかくより理即りそくの凡

夫までなり、実じつの十界互具じゅつかいごの

勝劣しょうれつとは是これなり。

下種境智俱実げしゅきょうちの本迹ほんしやく

脱だつの境智きょうちは迹・種しゅの境智きょうちは本

なり、名字即みょうじそくの境智きょうちは境智俱きょうちともに本・觀行即くわんぎょうそく

の境智きょうちは境智俱きょうちともに迹なり云

云。

意いは十界じゅつかいの仏性ぶつじょう只一口ただひとくちに呼よび顯あらわすなり、本因口唱くしやうの勝まさる南無なむ妙法蓮華經みょうぼうれんげきやうなり、初心しよしん成仏抄じやうぶつの如ごときなり、弘ぐ一いつに云いわく理造作りぞうさくに非あらざる故ゆえに天真てんしんと日い証智えんみやう円明ゆえの故ゆえに独朗どくろうと云いう云云、久遠くおんの理りと今日けふの理りと理りに浩作しか無なし、然しかれも久遠くおんは事上じじやうの理りなり今日けふは

理上の理なり故に知んぬ本因妙の理は勝れ今日日本果妙の理は劣るなり是理の本・迹なり是の故に独朗と云うなり、又云く独一法界の故に絶待と名く云云。

天台は唯大綱を存して綱目を事とせず此の釈の意は大綱は本・綱目は迹なり、天台・伝教の修行は綱目・日蓮日興等の修行は大綱なり云云・如来秘密神通之力意得可し是事理の如来の本・迹なり、秘密の如来は理性の如来なり、我等なり、神通の如来は世尊なり秘密は本地神通は垂迹なり、世世以来常受我化、我本行菩薩道所成寿命今猶未盡復倍上数云云。

本・迹勝劣其理甚遠なり、仏若し説かずんば弥勒尚暗し何に況や下地をや何に況や凡夫をや、本仏本化乃能究尽云云、妙樂云く具騰本種 本勝迹劣 故に但名に於て以て本・迹を分つ

下種名字妙法事行の勝劣なる所を判ずるなり本・迹は身に約し
位に約す 久遠名字即の身と位との判なり本従り迹を垂れ迹は
本に依る迹は究責に非ず、玄の一に開示悟入是れ迹の要なりと
雖も若し顯本し已れば即ち本要と成るなり、籤の一に若し迹中の
事理乃至權実無くんば何ぞ能く長寿の本を顯さん云云。

已上程の本・迹勝劣畢んぬ

右此の血脈は本・迹勝劣其の數一百六箇之を注す數量に就て表
事有り之を覺知すべし・釈迦諸仏出世の本懷・真実真実・唯為
一大事の秘密なり、然る間・方年救護の爲に之を記し留む。
就中六人の清弟を定むる表事は先先に沙汰するが如し云云、但し
直授結要付属は一人なり、白蓮阿闍梨日興を以て惣貫首と爲して
日蓮が正義悉く以て毛頭程も之を残さず悉く付属せしめ畢んぬ、
上首已下並に末弟等異論無く尽未來際に至るまで予が存日の如く
日興嫡嫡付法の上人を以て惣貫首と仰ぐ可き者なり。

又五人並に已下の諸僧等日本乃至一閭閻浮捏の外・万国に之を
流布せしむと雖も日興嫡嫡相承の阜茶羅を以て本堂の正本尊と
為す可きなり所以は何ん在世滅後殊なりと雉も付属の儀式之同じ
曹えば四大六万の直弟の大昔属有りと雉も上行儀棒を以て結要の
大導師と定むるが如し、今以て是くの如し六人以下数輩の弟子有
りと雉も日興を以て結要付属の大將と定むる者なり。
又弘長配流の日も文永流罪の時も其の外語処の大難の折節も先
陣をかけ日蓮に影の形に隨うが如くせしなり誰か之を疑わんや、又
延山地頭発心の根元は日興教化の力用なり、遁世の事甲斐の国三牧
は日興衆志の故なり。

又御本尊書写の事予が顕奉るが如くなるべし、若し日蓮御判と
書かずんは天稗地紙もよも用い給わじ上行・無辺行と持国と
淨行・安立行と毘沙門との間には若惱乱者・頭破七分・有供養者
・福過十号と之を害す可きなり、經中の明文等意に任す可きか。
又立つ浪・吹く風・万物に洗いて本・迹を分け勝劣を弁ず可きな

१०

本因妙抄

870p

法華本門宗血脈相承事

本因妙の行者

日蓮にちれん之をしる記す。

予が外用の師・伝教大師生歳四十二歳の御時・仏立寺天台山・大和尚に
 値あい奉り義道を落居らつこし生死一大事の秘法ひほうを決したもうの日、大唐の
 貞元二十一年太歳乙酉五月三日・三大章疏しょうじょを伝え各七面七重の口決を
 以て治定し給たまえり、所謂玄義七面の決とは正釈五重列名に約して決し
 たもう。

一に依名判義の一面・名とは法の分位に於いて施設す・体とは宰主さいしゅを義
 と為す・宗とは所作しよさの究竟くきようなり、受持本因の所作しよさに由つて口唱くしやう本果の
 究竟くきようを得、用とは証体本因・本果の上の功能徳行なり、教とは誠かいを義

と為す誠まこととは本の為の迹あと為れば迹は即ち有名無実無得道よくないむじつなるを実相じつそうの

名題は本・迹同じければ本・迹一致いっちと思惟おもひす可き事を大に誠まことん

が為に三種さんしゆの教相きやうそうを起て種熟脱しゆじゅくだつの論不論を立つる者なり、經文きやうもん解釈

明白めいはくなり、此くの如く文ぶん・句くの句くの名・妙正めうしやうの深義しんぎ・本・迹勝劣しやうれつの本意ほんい

を顯あらわし給う者なり、然りと雖も天台たいたい傳教でんきやうの御弘通ごくわうは偏ひとへに理りの上うへの法相ほつそう

・迹化しやくけ付属ふぞく・像法ざうぼうの理位りゐ・觀行くわんぎやう五品ごほんの教主きやうしゆなれば迹を表と為して衆を

救い、本を隠して裏に用る者なり甚深じんみふ甚深秘じんみふす可し秘ひす可し。

二に仏意ぶつゐ・機情きけい・二意の一面、仏意ぶつゐは觀行くわんぎやう・相似そうじを本と為し機情きけいは理即りそく

・名字みょうじを本と為す、何れも体用たいゆうを離れず体用たいゆうは法華ほつけの心智しんぎに依つて

一代いちだい五時ごじの次第しだい浅深せんしんを開拓かいたくす、次に機情きけいとは大通だいつう結縁けちえんの衆しゆの為に四味

の調養ちやうようを設け法華ほつけに來入らいにす、本・迹二門ふんべつ乃至ないし文ぶん・句く此の二意を以

て分別ぶんべつす可き者なり。

三に四重しじゅう淺深の一面、名の四重しじゅう有り・一には名体無常むじょうの義・爾前にぜんの諸經しよきやう
・諸宗しよしゅうなり、二には体実名仮みやうけ・迹門しやくもん・始覺しかく無常むじょうなり、三には名体俱実・
本門ほんもん本覺ほんがく常住じやうじゅうなり、四には名体不思議ふしぎ是れ觀心かんじん直達じきたつの南無なむ
妙法蓮華經みやうほうれんげきやうなり、湛然たんねんの云く

雖脱在現・具騰本種」云云次に体の四重とは一に三諦隔歴の体・爾前にぜん權教ごんきょうなり、二に理性円融りしやうえんゆうの体・迹門しやくもん十四品さんぜんほんぬなり、三に三千本有の体・本門ほんもん十四品じゆりやうほんなり、四に自性不思議ふしぎの体・我が内証ないしやうの寿量品じゆりやうほん事行ほうべんごんきやうの一念三千いちねんさんぜんなり、次に宗の四重しじゅうとは一に因果異性いんがの宗・方便權教ほうべんごんきやうなり、二に因果同性いんがの宗・是れ迹門しやくもんなり、三に因果並常いんがびやうじやうの宗・即ち本門ほんもんなり、四に因果一念いんがいちねんの宗・文に云く「芥爾けにも心有こころあれば即ち三千さんぜんを具す」と、是れ即ち末法純円まつぽうじゆんえん・結要付属けつちやうふぞくの妙法みやうほうなり云云、次に用の四重しじゅうとは一に神通幻化じんつうげんげの用・今經已前こんきやうに明あきらかす所の仏・菩薩ぼさつ・出仮利生りしやうの事、二に普賢色身ふげんしきしんの用・即ち一身いつしんの中に於おて十界じゅうかいを具する事なり本・迹一代五時いちだいごときに亘わたる、三に無作常住むさじやうじやうの用・証道八相しじやう有あり無作むさ自在じざいの事なり、四に一心いつしんの化用ある・或說己身等こしんなり、次に教の四重しじゅうとは一には但顯隔理たんけんの教・權小ごんしやうなり、二には教即実理そくの教・迹門しやくもんなり、

三には自性会中の教・応仏の本門ほんもんなり、四には一心法界いつしんほつかいの教・寿量品じゅうりょうぼんの文の底ほうもんの法門・自受用報身じじゅゆうほうしん如來にょらいの真実しんじつの本門・久遠くおん一念いちねんの南無なむ妙法蓮華經みょうほうれんげきょう・雖脫在現具騰本種しやうれつこれの勝劣是なり。

第四に八重淺深の一面なり、名の八重とは一に名体永別ようべつの名・二に名体不離るしめつの名・三に従体流出るしめつの名・四に名体具足ぐそくの名・五に本分常住ほんぶんじょうじゅうの名・六に果海妙性の名・七に無相不思議むそうふしぎの名・八に自性己己ここの名・乃至教知まかる可し云云、文に任せて思惟しゆいす可きなり。

第五に還住げんじゅう当文の一面、四八の淺深を以て本・迹勝劣しやうれつを知る可し。

第六に但入己心たんにゅうこしんの一面、始め大法東漸だいほうぜんより第十の判教いたに至るまで文の生起さしを聞きこおき一向いつこうに心理しんりの勝劣しやうれつに入れて正意じやういを成じやうず可し、謂いわく大法だいほうとは即さち行者ぎやうじやの己心こしんの異名いみやうなり云云、釈の意は文義ぶんぎの広博くわはくを離はなれて首題の理を專にすと釈し給うなり。

第七に出離生死しゅつりしやうじの一面、心は一代いちだい応仏おうぶつの寿量品じゅりやうぼんを迹と為し内証ないしやうの
寿量品じゅりやうぼんを本と為し釈尊しゃくそん久遠くおん名字みょうじ即そくの身と位とに約して南無なむ
妙法蓮華經みょうほうれんげきやうと唱え奉る是を出離生死しゅつりしやうじの一面と名なく、本・迹約身約位の
釈・之を思う可き者なり已上。

玄文おわ畢る。

文句もんくの七面の決とは、一に依名の一面・其の義上かみの如し、二に感応かんのうの一
面・三時弘經くきように亘わたる可し、爾前にぜん・迹門しやくもんの正像しょうざう二千年弘經くきようの感応かんのうより
本門末法弘通ほんもんまつぽうぐつうの感応かんのうは真実真実勝しんじつしんじつるなり、三に四教しきようの一面・四に五時
の一面・五に本・迹の一面・六に体用たいゆうの一面・七に入己心こしんの一面・悉ことごとく皆
其の心前に同じ、智威大師だいいしの伝でんには玄義げんぎ・文句もんくの両部りやうぶには爾前にぜん・迹門しやくもんに
各三十重の浅深を以て口決くたつし給たまえり、具には伝教大師七面決の如し。
又摩訶止觀まかしかん一部には十重顯觀を立てて是を通じ給たまえり、一は待教立觀
・爾前にぜん・本・迹の三教を破して不思議実理ふしぎの妙法蓮華經みょうぼうれんげきようの觀を立つ、文
に云く円頓者初緣実相とんと云云、迹門しやくもんを理具いちねんさんぜんの一念三千と云う脱益だつえきの
法華ほつげは本・迹共に迹なり、本門ほんもんを事行じぎの一念三千と云う下種げしゆの法華ほつげは
独一の本門ほんもんなり、是を不思議実理ふしぎの妙觀みょうかんと申すなり、二に廃教立觀・

心は權教並に迹執を捨て本門首題の理を取つて事行に用いよとなり、三に開教顯觀文に云く一切諸法・

本是仏法三諦の理を具するを名けて仏法と爲す云何んぞ教を除かん云云文意は觀行理觀の一念三千を開して名字事行の一念三千を顯す、大師の深意・釈尊の慈悲・上行所伝の秘曲・是なり、四に会教顯觀・教相の法華を捨てて觀心の法華を信ぜよと、五に住不思議顯觀・文に云く理は造作に非ず故に天真と曰う・証智円明なるが故に独朗と云う云云、釈の意は口唱首題の理に造作無し、今日熟脱の本・迹二門を迹と爲し久遠名字の本門を本と爲す、信心強盛にして唯余念無く南無妙法蓮華經と唱え奉れば凡身即仏身なり、是を天真独朗の即身成仏と名く。

問うて曰く前代に此の法門を知れる人之有りや、答えて曰く之有

り、求めて云く誰人ぞや、示して云く釈尊是なり、尋ねて云く仏を
除き奉つて余に之を知れる人師論師有りや、答えて曰く天台の云く
天親竜樹・内鑒冷然・外適時宜」と、今日南無妙法蓮華經は南岳・
天台・妙樂・伝教の内鑒冷然・外適時宜なり、内鑒冷然・外適時宜の
修行の日は本・迹一致なり、有智無智を嫌わず円頓者初縁実相の理
は造作に非ざる故に天真と曰う・証智円明の故に

独朗どくろうと曰うと云つて理位觀行りやくに趣おもむかしめ利益りやくを為し末法まっぽうの時を待つ者なり、故に天台てんだい云く 但當時大利益りやくを獲るのみに非ず後・五百歳遠く妙道みょうどうに霑うるおう」と云云、天台・章安・妙樂・伝教等の大聖は内証ないししょうは本・迹勝劣しょうれつ・外用は本・迹一致いっちなり、其の故は教相きやうそうも觀心かんじんも相似そうじ觀行解了ぎやうげの人師にんし・時機じき亦像法やうほうなり、付属ふぞくは即妄授そくもうじゆ余人よにん・御身おんみも亦迹化しゃくけの衆・觀音かんのん・妙音みやうおん・文殊もんじゆ・藥王やくおう等の化身けしんなり、今末法まつぽうは本化ほんげの薩☆・上行じやうぎやう等の出世しゅつせの境・本門ほんもん流宣りゅうせんの時尅ときなり、何ぞ理觀りかんを用いて事行じぎやうを修しゆせざらんや、予が所存しよぜんは内証ないししょう・外用ぎやう共に本・迹勝劣しょうれつなり、若し本・迹一致いっちと修行しぎやうせば本門ほんもんの付属ふぞくを失う物怪むあやしなり。

本・迹ふどうの不同ふどうは处处しよしよに之を書しかす、然りと雖も宿習拙いえどき者本・迹つたなに迷倒めいとうせんか若し本・迹勝劣しょうれつを知らずんば未来みらいの惡道いんどう最も不便ふびんなり宿業はじを恥はじじず還うらつて予を恨うらむ可べきか、我が弟子等でしの中にも天台てんだい・伝教でんぎやうの

解了の理觀を出でず、本・迹に就て一往勝劣再往一致の謬義を存し
て自他を迷惑せしめんの条・宿習の然らしむる所か、閻浮提第一の
秘事為りと雖も万年救護の為に之を記し留る者なり、我が未來に於
て予が仏法を破らん為に一切衆生の元品の大石・大六天の魔王・
師子身中の蝗蟲と成つて名を日蓮に仮りて本・迹一致と云う邪義を
申し出して多の衆生を当に惡道に引くべし、若し道心有らん者は
彼等の邪師を捨てて宜く予が正義に隨うべし、正義とは本・迹勝劣の
深秘具騰本種の実理なり、日蓮一期の大事なれば弟子等にも朝な
夕なに教え亦一期の所造等悉く此の義なり、然りと雖も迹執を出
でず・或は輕見惑・或は蔑思惑・或は癡塵沙惑・或は迷無明惑、故に日蓮
が立義を用いざるか、予が教相・觀心は理即・名字・愚惡愚見の為
なり。

にちれん 日蓮は名字即の位・弟子檀那は理即の位なり、上行所伝結要付属
ぎようぎ の行儀は教観判乘・皆名字即・五味の主の修行なり、故に教相の
しだい 次第要用に依る可し唯大綱を存する時は余は綱目を事とせず彼は
たいこう 綱目・此れは大綱・彼は綱目の教相の主・此れは大綱首題の主・恐く
にちれん は日蓮の行儀には天台伝教も及ばず、何に況や他師の行儀に於てを
ぎようぎ や、

唯在世八箇年の儀式を移して滅後末法の行儀と為す、然りと雖も仏
は熟脱の教主某は下種の法主なり、彼の一品二半は舍利弗等の為に
は觀心たり、我等・凡夫の為には教相たり、理即・短妄の凡夫の為の
觀心は余行に渡らざる南無妙法蓮華經是なり、是くの如く深義を知
らざる僻人・出来して予が立義は教相辺外と思ふ可き者なり、此等
は皆宿業の拙き修因感果の至極せるなるべし、彼の天台大師には
三千人の弟子ありて章安一人朗然なり、伝教大師は三千人の衆徒
を置く義真已後は其れ無きが如し、今以て此くの如し數輩の弟子有
りと雖も疑心無く正義を伝うる者は希にして一二の小石の如し秘
す可きの法門なり。

第六に住教顯觀七に住教非觀八に覆教顯觀九に住教用觀十に住觀用
教此の五重は上の五重の如し思惟す可し。

問うて云く本・迹雖殊不思議一・本・迹の教に於て別して不思議の觀理を顯わす故に　と云云、機情に約すれば本・迹に於て久近の異なる可し、是れ一往の淺義なり、内証に約して之を論ずれば勝劣有る可からず再往の深義は不思議一なり云云如何が意を得可けんや、答えて云く住教顯觀は煩惱即菩提・住教非觀は法性寂然・覆教顯觀は名字判教・住教用觀は不思議一・住觀用教は以顯妙円と申す大事是なり、教觀不思議・天然本性の処に独一法界の妙觀を立つ是を不思議の本・迹勝劣と云う亦絶対不思議の内証・不可得・言語道斷の勝劣は天台・妙樂・伝教の残す所我が家の秘密觀心直達の勝劣なり、迹と云う名ありといえども有名無実・本無今有の迹門なり、実に不思議の妙法は唯寿量品に限る故に不思議一と釈するなり、迹門の妙法蓮華經の題号は本門に似ると雖も義理・天地を隔つ

成仏じょうぶつ亦すいか水火ふどろの不同ふどうなり、久遠くおん名字みょうじの妙法蓮華經みょうほうれんげきょうの朽木書くちぎがきなる故を
顯あきさんが為なに一ひとと釈しやくするなり末学まつがく疑網ぎがいを残のこすこと勿なかれ、日蓮にぢれん・靈
山会上たほうたつちゅう・多宝塔中たほうたつちゅうに於おて親おやたり釈尊しやくそんより直授しやくそんし奉ほうる秘法ひほうなり、甚深
甚深秘しんしんひす可べし秘ひす可べし伝でんう可べし伝でんう可べし。

摩訶止觀七面口決とは依名判義・附文元意・寂照一相・教行証 六
九二識・絶諸思慮・出離生死の一面已上、一切諸法・從本已來・不生
不滅・性相凝然・釈迦閉口・身子絶言云云、是は迹門天台・止觀の
内証なり、本門日蓮の止觀は釈迦は口を開き文殊は言語す迹門
不思議・不可説・本門不思議可説の証拠の釈是なり、亦三大部に於て
一同十異・

四同六異之有り、伝教仏立寺より之を口決す、一同とは名同なり、十
異とは名同義異・所依異・觀心異・傍正異・用教異・對機異・顯本理異・
修行異・相承異・元旨異、四同とは名同・義同・所依・同所・顯同なり、
六異とは釈異・大綱綱目異・本末異・觀心異・教内外觀異・自行化他異
・是なり、今要を以て之を言わば迹本觀心同名異義なり始終・本末共
に修行も覺道も時機も感応も皆勝劣なり。

此の下・二十四番勝劣なり、彼の本門は我が迹門・彼の勝は此の劣彼の深義は予が浅義・彼の深理は此の浅理・彼が極位は此の浅位・彼の極果は此の初心・彼の觀心は此の教相・彼の台星の国に出生す・此れは日天の国に出世す・彼は葉王・此れは上行・彼は解了の機を利す・此れは愚惡の機を益す・彼の弘通は台星所居の高嶺なり・此の弘經は日王・能住の高峰なり・彼は上機に教え・此れは下機を訓ず・彼は一部を以て本尊と為し・此れは七字を本尊と為す・彼は相對開会を表と為し・此れは絶對開会を表と為す・彼は熟脱此れは下種・彼は衆機の為に円頓者初縁実相と示し・此れは万機の為に南無妙法蓮華經と勸む・彼は惡口怨嫉・此れは遠島流罪・彼は一部を誦誦すと雖も二字を読まざること之在り・此れは文文句句・悉く之を読む・彼は正直の妙法の名を替えて一心三觀と名く・有の儘の大法に非ざれば帶權の法に似たり此れ

は信謗ひし彼此けつじよう・決定ぼだい成菩提なむ・南無妙法蓮華經みまうほうれんげきようと唱えかく、彼は諸宗しよしゆうの
謬義みまうぎを粗書おほき顯あらわすと雖いへども未だ言說ごうてきせず此れは身命しんみまうを惜おしまず他師たしの
邪義じやぎを糺ただし三類さんるいの強敵ごうてきを招まねく・彼は安樂普賢あんらくふげんの説相せつそうに依より此れは勸持かんじ
不輕ふぎようの行相もちを用ゆ・彼は一部に勝劣しょうれつを立て・此れは一部を迹と伝う・彼
は応仏じじゅうのいきをひかう・此れは寿量品じゅうりやうほんの文底もちを用ゆ・彼は応仏昇進じじゅうしんの
自受用報身じじゅうゆうほうしんの一念三千一心三觀いちねんさんぜんいつしんさんかん・此れは久遠元初くおんの自受用報身無作じじゅうゆうほうしんむさ
本有ほんぬの妙法みまうほうを

直に唱う。

此れ等の深意は迹化の衆・普賢・文殊・觀音・藥王等の大菩薩にも付属せざる所の大事なれば知らざる所の秘法なり況や凡師に於てをや。

若し末法に於て本・迹一致と修行し所化等に教ゆる者ならば我が身も五逆罪を造らずして無間に墮ち其れに随從せんともがらも阿鼻に沈まん事疑無き者なり、此の書一見の人人は理普賢智文殊一言の薩☆生死絶断の際・定光覚悟の大菩薩なり、伝教云く文殊の利劍は六輪に通じ十二の生類を切断す、一刀を下して妙法万方に勅するに自然に由お三諦を出だす見聞覚知に明なり」此の一言の三際を示すに一言に如かず、若し未達の者も一頌を開くに題目三般三諦同じく通知せざること無し、生仏自ら一現なる是を一言の妙旨一教の玄義と謂う云云、天台の云く「言三諦・刹那成道・半偈成道」と

云云、伝教でんぎょうの云く、仏界ぶつがいの智は九界を境と為し九界の智は仏界ぶつがいを境と為す境智互きょうちたがいに冥薰みょうくんして凡聖常恒ぼんせいじょうこうなる是を刹那成道じやうじどうと謂いう、三道さんどう即三德そくさんとくと解れば諸惡しよあく ☆ に真善なる是を半偈成道はんげじやうじどうと名なく「今会釈して云く諸仏菩薩しよぶつぼさつの定光三昧さんまいも凡聖ぼんせい一如の証道刹那半偈はんげじやうじどうの成道も我が家の勝劣修行しやうれつしゆぎやうの南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうの一言に摂し尽す者なり、此の血脈けちみやくを列ぬる事は末代浅学まつだいせんがくの者の予が仮字かなじの消息しやうそくを蔑如べつじよし天台の漢字の止觀しかんを見て眼目がんもくを迷まよひし心意きやういを驚動きやうどうし・或は仮字かなじを漢字と成し、或は止觀しかん明靜・前代未聞ぜんだいまもんの見到ふげに耽ふり本・迹い一致いちの思を成す、我が内証ないしやうの寿量品じゆりやうほんを知らずして止觀しかんに同じ但自見の僻見しやうじよを本として予が立義りつぎを破失はしつして惡道に墮だつ可たき故に天台三章疏てんだいさんしやうしよの奥伝に属す、天台伝教等てんだいでんぎやうの秘たし給たまえる正義せいぎ・生死しやうじ一大事いちだいじの秘伝を書き顯あらわし奉る事は且は恐れ有り且は憚はばり有り、広宣流布かうせんるふの日公亭に於て

応に之を披覽し奉るべし、会通えつうを加える事は且は広宣流布こうせんるふの爲且は
末代まつだい浅学の爲なり又天台伝教てんだいでんぎょうの釈等も予が真実しんじつの本懐ほんかいに非ざるか、
未来みらい嬰兒の弟子等彼を本懐ほんかいかと思うべきものか。
去る文永ぶんえいの免許めんきょの日・爾前にぜん・迹門しやくもんの謗法ぼうぼうを対治たいじし本門ほんもんの正義せいぎを立て
被れば不日ふじつに豊歳ならむと申せしかば聞く人毎ひとごと

に舌を振り耳を塞ぐ、其の時方人一人も無く唯我と日蓮与我日興計りなり。

問うて云く寿量品文底の大事と云う秘法如何、答えて云く唯密の正法なり秘す可し秘す可し一代応仏のいきをひかえたる方は理の上の法相なれば一部共に理の一念三千迹の上の本門寿量ぞと得意せしむる事を脱益の文の上と申すなり、文の底とは久遠実成の名字の妙法を余行にわたさず直達じきたつの正觀事行の一念三千いちねんさんぜんの南無妙法蓮華經是なり、權實は理ごんじつ今日本迹理なり本・迹は事久遠本・迹事なり、亦權實は約智約教一代いちだい応仏本・迹は約身約位名みょうじ字身久遠本・迹亦云く雖脱在現具騰本種といへり、釈尊久遠名字即の位の御身の修行を末法今時・日蓮が名字即の身に移せり理は造作ぞうさくに非ず故に天真てんしんと曰い証智円明えんみょうの故に独朗どくろうと云うの行儀本門立行の血脈けちみやく之を注す秘す可し秘す可し。

又日文字の口伝・産湯の口決・二箇は両大師の玄旨にあつ、本尊七箇の口伝は七面の決に之を表す教化弘經の七箇の伝は弘通者の大要なり、又此の血脈並に本尊の大事は日蓮嫡嫡座主伝法の書・塔中相承の稟承唯授一人の血脈なり、相構え相構え秘す可し秘す可し伝う可し、法華本門宗血脈相承畢んぬ。

弘安五太歳壬午十月十一日

日蓮 在御判

◆一〇二

産湯相承事そうじよう

日興にっこう之これを記しるす

878

御名みな乗りの事、始めは是生・実名は蓮長と申し奉たてまつる後には日蓮にちれんと
御名みな乗り有ある御事おんことは悲母梅菊女童女の御名なり平の畠山殿の二類にて御座す云云法号妙蓮みょうれん禅尼ぜんにの御物語
り御座おわす事には、我に不思議ふしぎの御夢想あり、清澄寺きよすみでらに通夜申もうしたりし
時なんじ汝が志こころざし真に神妙なり一閻浮提えんぶだい第一だいいちの宝を与えんと思ふなり、
東条片海に三国の太夫と云う者あり是これを夫と定めよと云云、其その歳としの
春・三月廿四日の夜なり正まさに今も覚おぼえ侍はべるなり。

我父母ふぼに後あとれ奉たてまつりて已い後詮方なく遊女たわれめの如くなりし時御身おんみの父に嫁
げり、或夜あるの靈夢に日いわく叡山えいざんの頂いただきに腰をかけて近江の湖水を以て手

を洗うて富士の山より日輪の出でたもうを懷き奉ると思うて打ち驚いて後・月水留ると夢物語りを申し侍れば、父の太夫我も不思議なる御夢想を蒙るなり、虚空蔵菩薩貌吉き兒を御肩に立て給う、此の少人は我が為には上行菩提薩☆なり日の下の人の為には生財摩訶薩・なり、亦一切有情の為には行く末三世常恒の大導師なり、是を汝に与えんとしたもうと見て後御事懷妊の由を聞くと語り相いたりき、さてこそ御事は聖人なれ。

又産生まるべき夜の夢に富士山の頂に登つて十方を見るに明なる事掌の内を見るが如し三世明白なり、梵天・帝釈・四大天王等の諸天悉く来下して本地自受用報身如来の垂迹・上行菩薩の御身を凡夫地に謙下し給う御誕生は唯今なり、無熱池の主阿那婆達多竜王八・功德水を応に汲み来るべきなり、当に産湯に浴し奉るべしと

諸天しよてんに告たまげ給たまえり、仍ようて竜神王りゆうじん即時そくじに青蓮華せいれんげを一本荷はい来きれり、其その蓮れんより清水しみずを出でして御身おんみを浴あゆみし進まいらせ侍はべりけり、其その余あまれる水みづをば四天下してんげに灑そそぐに其その潤うるおいを受うくる人畜じんちく・草木そうもく・国土こくど・世間せけん・悉ことごとく金色こんじきの光明こうみょうを放はなち四方しほう

の草木花そうもく発ひらき菓このみ成る。

男女座なんよを並べて有あれれども煩惱ぼんのう無く淤泥おでいの中より出れども塵泥じんでいに染ま

ず、譬たとえば蓮華れんげの泥より出いでて泥に染まざるが如ごとし、人天にんてん・竜畜りゆうこく・共に

白き蓮を各手に捧ささげて日に向つて今此三界こんしさんがい・皆是我有かいぜがう・其中衆生ごちゆうしゆじやう・

悉しつ是吾子ぜごし・唯我一人ただわれひとり・能為救護のういくごと唱となえ奉たてまつると見て驚おどろけば則聖人出生しやうにんしゆつしやう

し給たまえり、每自作是念さぜねん・以何令衆生しゆじやう・得入無上道とくにゆうむじやうどう・速成就仏身そくじやうじゆふつしんと苦

我たま・き給たまう。

我少し寐まどろみし様なりし時・梵帝等ぼんたいの諸天しよてん一同・音に唱となえて言いわく

善哉よきかなよきかな善哉どうじ・善日童子まつぼうき・末法教主しきやうしゆしや・釈迦仏しかぶつと三度唱となえて作礼いたして去たまし給たまう

と寤うつつに見聞けんもんきしなりと慥たしかに語かたり給たまいしを聞し食しさては某それがしは日蓮にちれんな

りとの給たまいしなり。

聖人重しょうにんねて日にちれん蓮が弟子でし・檀那等だんな・悲母ひもの物語ものがたりりと思おもうべから

ず即ちすなわ金言きんげんなり其そのの故ゆえは予しゅぎが修行しゅぎは兼かねて母の靈夢しんむにありけり・日蓮にちれんは富士山自然じねんの名号みょうごうなり、富士は郡名ぐんめいなり実名じつめいをば大日蓮華山だいびやくれんげさんと云うなり、我中道ちゅうどうを修行しゅぎする故ゆえに是かくの如ごとく国くにをば日本にほんと云いい神かみをば日神もろと申し仏の童名どうなをば日種太子たいしと申し予が童名どうなをば善日・仮名かりなは是生・実名じつめいは即ち日蓮にちれんなり。

久遠下種くおんげしゅの南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうの守護神しゆごしんは我國あまくだに天下あまくだり始めし国くには出雲いずみなり、出雲に日の御崎みさきと云う所あり、天照太神てんしやうだいじん始めて天下あまくだり給たまう故ゆえに日の御崎みさきと申もうすなり。

我が釈尊しゃくそん・法華經ほけきやうを説とき顕あらわし給たまいしより已来このかた十羅刹女じゅうらせつによと号なづす、十羅刹じゅうらせつと天照太神てんしやうだいじんと釈尊しゃくそんと日蓮にちれんとは一体いみの異名いみ本地垂迹ほんちすいじやくの利益りやく広大なり、日神かみと月神つきかみとを合あして文字もんじを訓くんずれば十なり、十羅刹じゅうらせつと申もうすは諸神しよを一体いに束たばね合あせたる深義じんぎなり、日蓮にちれんの日は即日神・昼ひるなり蓮は

即月神・夜なり、月は水を縁とす蓮は水より生ずる故なり、又是生とは日の下の人を生むと書けり。

日蓮は天上・天下の一切衆生の主君なり父母なり師匠なり、今久遠下種の寿量品に云く、今此三界・皆是我有主君の義なり其中衆生悉是吾子父母の義なり而今此処・多諸患難国土草木唯我一人能為救護師匠の義なり」と云えり、三世常恒に日蓮は今此三界の主なり、日蓮は大恩以事希有・憐愍教化利益・我等無量億劫誰能報者なるべし。

若し日蓮が現在の弟子並びに未来の弟子等の中に日文字を名乗の上の字に置かずんば自然の法罰を蒙ると知るべし、予が一期の功德は日文字に留め置くと御說法ありし儘・日興謹んで之を記し奉る。

聖人の言く此の相承は日蓮嫡嫡一人の口決・唯授一人の秘伝なり神妙神妙とのたまいて留め畢んぬ。

◆一〇三

善無畏三藏抄

文永七年 四十九歳御作

881P

与義淨房淨顯房

於鎌倉

法華經は一代聖教の肝心八万法蔵の依りどころなり、大日經・

華嚴經・般若經・深密經等の諸の顯密の諸經は震旦・月氏・竜宮天上

十方世界の国土の諸仏の説教恒沙塵数なり、大海を硯の水とし

三千大千世界の草木を筆としても書き尽しがたき經經の中をも・或

は此れを見・或は計り推するに法華經は最第一におはします、而るを

印度等の

宗日域の間に仏意を窺はざる論師・人師多くして・或は大日經は

法華經に勝れたり、或る人人は法華經は大日經に劣れるのみならず

けこんきよう
華嚴經にも及ばず、或る人人は法華經は涅槃經・般若經・深密經等には劣る、或る人人は辺辺あり互に勝劣ある故に、或る人の云く機に随つて勝劣あり時機に叶へば勝れ叶はざれば劣る、或る人の云く有門よ

り得道すべき機あれば空門をそしり有門をほむ余も是を以て知るべし
なんど申す、其の時の人人の中に此の法門を申しやぶる人なければお
ろかなる国王等深く是を信ぜさせ給ひ田畠等を寄進して徒党あまたに
なりぬ、其の義久く旧ぬれば只正法なんめりと打ち思つて疑ふ事も
なく過ぎ行く程に末世に彼等が論師・人師より智慧賢き人
出来して、彼等が持つところの論師・人師の立義一一に或は所依の
經經に相違するやう、或は一代聖教の始末淺深等を弁へざる故に
専ら經文を以て責め申す時、各各宗宗の元祖の邪義扶け難き故に陳

し方を失ひ、或は疑つ

て云く論師・人師定めて経論に証文ありぬらん我が智及ばざれば扶け

がたし、或は疑つて云く我が師は上古の賢哲なり今・我等は末代の

愚人なりなんと思ふ故に有徳高人をかたらひえて怨のみなすなり。

しかりといへども予自他の偏党をなげすて論師・人師の料簡を闇いて

専ら経文によるに法華経は勝れて第一におはすと意得て侍るなり、

法華経に勝れておはする御経ありと申す人出来候はば思食べし、此れ

は相似の経文を

見たがえて申すか又人の私に我と經文をつくりて事を仏説によせて候か、智慧おろかなる者弁へずして仏説と号するななんとと思食すべし、慧能が壇經善導が觀念法門經天竺震旦日本国に私に經を説きをける邪師其の数多し、其の外私に經文を作り經文に私の言を加へなんとせる人人是れ多し、然りと雖も愚者は是を真と思うなり、譬えば天に日月にすぎたる星有りななんと申せば眼無き者はさもやななんと思はんが如し、我が師は上古の賢哲汝は末代の愚人なんと申す事をば愚なる者はさもやと思ふなり、此の不審は今に始りたるにあらず陳隋の代に智・法師と申せし小僧一人侍りき後には二代の天子の御師・天台智者大師と号し奉る、此の人始いやしかりし時但漢土五百余年の三藏・人師を破るのみならず月氏・一千年の論師をも破せしかば南北の智人等・雲の如く起り

東西の賢哲等星の如く列りて雨の如く難を下し風の如く此の義を破り
しかども終に論師・人師の偏邪の義を破して天台一宗の正義を立てに
き、日域の桓武の御宇に最澄と申す小僧侍りき後には伝教大師と号
し奉る、欽明已來の二百余年の諸の人師の諸宗を破りしかは始は諸人
いかりをなせしかども後には一同に御弟子となり
にき、此等の人人の難に我等が元祖は四依の論師上古の賢哲なり汝は
像末の凡夫愚人なりとこそ難じ侍りしか、正像末には依るべからず
実經の文に依るべきぞ人には依るべからず専ら道理に依るべきか、外道
仏を難じて云く「汝は成劫の末住劫の始の愚人なり我等が本師は先代
の智者二天三仙是なり」なんと申せしかども終に九十五種の外道とこ
そ捨てられしか。

日蓮八宗を勘へたるに法相宗・華嚴宗・三論宗等は權經に依つて

・或は実經じつぎように同じ・或は実經じつぎようを下せり、是れ論師ろんし・人師にんしより誤りぬと見えぬ、俱舍くしゃ・成実じやうじつは子細しさいある上律宗りつしゆうなどは小乘しょうじやう最下の宗しうなり、人師にんしより論師ろんし權大乘こんだいじやうより 実大乘じつだいじやう經きやうなれば真言宗しんこんしゆう・大日經だいにかきやう等は未だいま華嚴經けこんきやう等に及およばず何いかに況いはんやや涅槃ねはん・法華經ほけきやう等に及およぶべしや、而しかるに善無畏ぜんむい

三藏さんぞうは華嚴けこん・法華ほつげ・大日經だいにかきやう等の勝劣しやうれつを判ずる時とき・理同事勝りどうじしやうの謬みやうしやく・釈しやくを作つくりしより已來このかた・或はあるおごりをなして法華經ほけきやうは

華嚴經にも劣りなん何に況や真言經に及ぶべしや、或は云く印・真言
のなき事は法華經に諍ふべからず、或は云く天台宗の祖師多く
真言宗を勝ると云い世間の思いも真言宗勝れたるなんめりと思へり、
日蓮此の事を計るに人多く迷ふ事なれば委細にかんがへたるなり、粗
余処に注せり見るべし又志あらん人人は存生の時習い伝ふべし人の
多くおもふにはおそるべからず、又時節の久近にも依るべからず専ら
經文と道理とに依るべし、淨土宗は曇鸞道綽善導より誤り多くして
多くの人人を邪見に入れけるを日本の法然是をうけ取つて人ごとに
念仏を信ぜしむるのみならず天下の諸宗を皆失はんとするを叡山三千
の大衆南都興福寺東大寺の八宗より是をせく故に
代代の國王勅宣を下し將軍家より御教書をなしてせけどもとどまら
ず、弥弥繁昌して返つて主上・上皇・万民等にいたるまで皆信状せり。

而るに日蓮は安房の国・東条片海の石中の賤民が子なり威徳なく
有徳のものにあらず、なににつけてか南都北嶺のとどめがたき天子の虎
牙の制止に叶はざる念仏をふせぐべきとは思へども經文を龜鏡と定め
天台・伝教の指南を手ににぎりて建長五年より今年文永七年に至る
まで十七年が間はを責めたるに日本国の念仏大体留り了ぬ
眼前に是れ見えたり、又口にすてぬ人人はあれども心計りは念仏は
生死をはなるる道にはあらざりけると思ふ、禪宗以て是くの如し一を
以て万を知れ真言等の諸宗の誤りをだに留めん事手ににぎりておぼゆ
るなり、況や当世

の高僧真言師等は其の智牛馬にもおとり螢火の光にもしかず只死せる
ものの手に弓箭をゆひつけねごとするものに物をとふが如し、手に印
を結び口に真言は誦すれども其の心中には義理を弁うる事なし、結句

慢心まんしんは山の

如ごとく高く欲心よくしんは海よりも深し、是は皆みな自ら經論きやうろんの勝劣しょうれつに迷まよふより事

起おこり祖師そしの誤あやりをたださざるによるなり、所詮しよせん智者ちしやは八万はちまん法藏ほうざうをも習

ふべし十二部經をも学すべし、末代まつだい濁惡じよくあく世の愚人ぐにんは念仏ねんぶつ等の難行なんぎやう・

易行いぎやう等をば抛なげつて一向いっかうに法華經ほけきやうの題目だいもくを南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうと唱となえ給たまうべ

し、日輪にちりん東方とうほうの空に出いでさせ給たまへば南浮みなうきの空皆明みなあきらかなり

大光を備へ給へる故なり、螢火は未だ国土を照さず宝珠は懷中に持ぬれば万物皆ふらさずと云う事なし、瓦石は財をふらさず念仏等は法華經の題目に対すれば瓦石と宝珠と螢火と日光との如し。

我等が昧き眼を以て螢火の光を得て物の色を弁ふべしや、旁凡夫

の叶いがたき法は念仏・真言等の小乗・權教なり、又我が師釈迦如来

は一代聖教乃至八万法藏の説者なり、此の娑婆無仏の世の最先に

出でさせ給いて一切衆生の眼目を開き給ふ御仏なり、東西十方の

諸仏・菩薩も皆此の仏の教なるべし、譬えば皇帝已前は人父をしらずし

て畜生の如し、堯王已前は四季を弁へず牛馬の癡なるに同じかりき、

仏世に出でさせ給はざりしには比丘。

比丘尼の二衆もなく只男女二人にて候いき、今比丘・比丘尼の真言師

等大日如来を御本尊と定めて釈迦如来を下し念仏者等が阿弥陀仏を

一向いっこうに持つて釈迦如来しやかによらいを抛なげうてたるも教主釈尊きようしゆしくそんの比丘びく・比丘尼びくになり元祖がんそが誤あやまりを伝え来るなるべし。

此この釈迦如来しやかによらいは三さんの故ゆゑましまして他た仏ぶつにかはらせ給たまひて娑婆世界しやばせかいの一切衆生いっさいしゆじようの有縁うゑんの仏ぶつとなり給たまふ、一ひとには此この娑婆世界しやばせかいの一切衆生いっさいしゆじようの世尊せそんにて・おはします、阿弥陀仏あみだぶつは此この国くにの大王だいおうにはあらず釈迦仏しやかぶつは譬たとえば我が国の主上しゆじやうのごとし先まづ此この国くにの大王だいおうを敬たつて後に他国たこくの王わうをば敬たふべし、天照太神てんしやうだいじん・正八幡宮等しょうはちまんぐうは我が国の本主ほんしゆなり迹化しやつけ

の後神あろわと顕あらわれさせ給たまふ、此この神かみにそむく人ひと・此この国くにの主しゆとなるべからず、されば天照太神てんしやうだいじんをば鏡かがみにうつし奉たてまつりて内侍所ないじどころと号なづす、八幡大菩薩はちまんだいぼさつに勅はさ使し有もちつて物申ものまうしあはさせ給たまいき、大覺世尊だいかくせそんは我等われらが尊主そんしゆなり先まづづ御本尊ごほんぞんと定さだむべし、

二ふたには釈迦如来しやかによらいは娑婆世界しやばせかいの一切衆生いっさいしゆじようの父母ふぼなり、先まづづ我が父母ふぼを孝こ

し後に他人たにんの父母ふぼには及ぼすべし、例せば周の武王は父の形を木像に造
つて車にのせて戦の大將と定めて天感を蒙こむり殷いんの紂王ちゆうをうつ、舜王しゆんおうは
父の眼まなこの盲めくらたるをなげきて涙をながし手をもつてのごひしかば本のご
とく眼まなこあきにけり、此の仏も又是くかくの如く我等衆生しゆじようの眼まなこをば
開かい仏知見ぶつちけんとは開き給たまいしか、いまだ他た仏ぶつは開き給たまはず、三には此の仏は
娑婆世界しやばせかいの一切衆生いっさいしゆじようの本師ほんしな

にんじゅう

り、此の仏は賢劫第九人壽百歳の時中天竺淨飯大王の御子十九にし

て出家し三十にして成道し五十余年が間・二代聖教を説き八十にし

て御入滅舍利を留めて一切衆生を正像末に救ひ給ふ、阿彌陀如来

薬師・仏大日等は他土の仏にして此の世界の世尊にてはましまさず、此

の娑婆世界は十方世界の中の最下の処譬えば此の国土の中

の獄門の如し、十方世界の中の十惡・五逆誹謗正法の重罪逆罪の者

を諸仏如来擯出し給いしを釈迦如来此の土にあつめ給ふ、三惡並びに

無間・大城に墮ちて其の苦をつぐのひて人中天上には生れたれども

其の罪の余殘ありてややもすれば正法を謗じ智者を罵り罪つくりや

すし、例せば身子は阿羅漢なれども瞋恚のけしきあり、畢陵は

見思を断ぜしかども慢心の形みゆ、難陀は姪欲を断じてても女人に交る

心あり、煩惱を断じたれども余殘あり何に況や凡夫にをいてをや、さ

れば釈迦如来しやかによらいの御名みなをば能忍のうにんと名けて此の土に入り給うに一切衆生いっさいしゆじやうの誹謗ひぼうをとがめずよく忍び給ふ故なり、此等の秘術は他仏のかけ給へるところなり、阿弥陀仏等の諸仏・世尊悲願をおこさせ給い

て心にははぢをおぼしめして還つて此の界にかよひ四十八願十二大願な
んどは起させ給ふなるべし、觀世音等の他土の菩薩も亦復是くの如し、
仏には常平等の時は一切諸仏は差別なけれども常差別の時は各各に
十方世界に土をしめて有縁無縁を分ち給ふ、大通智勝仏の十六王子
十方に土をしめて一一に我が弟子を救ひ給ふ、其の中

に釈迦如来は此土に当り給ふ我等衆生も又生を娑婆世界に受けぬ、い
かにも釈迦如来の教化をばはなるべからず而りといへども人皆是を知ら
ず委く尋ねあきらめば唯我一人能為救護と申して釈迦如来の御手を
離るべからず、而れば此の土の一切衆生・生死を厭ひ御本尊を崇めん

とおぼしめさば必ず先ず釈尊しやくそんを木画もくえの像あらに顕あわして御本尊ごほんぞんと定めさせ給たまいて其その後力ごうりきおはしまさば弥陀等みだたうの他仏たふつにも及ぶべし。

然しかるを当世とうせ聖行せいぎやうなき此この土ひとびとの人人ひとひとの仏ぶつをつくりかかせ給たまうに先ず他仏たふつをさきとするは其その仏ぶつの御本意ごほんいにも釈迦如来しやくかにょらいの御本意ごほんいにも叶ふべからざる上世間せけんの礼儀れいぎにもはづれて候こう、されば優填大王だいうおうの赤梅檀せんだんいまだ他仏たふつをばきざ

ませ給はず、千塔王の画像も釈迦如来なり、而るを諸大乘經による
ひとびと 人々・我が所依の經經を諸經に勝れたりと思ふ故に教主釈尊をば
次さまにし給ふ、一切の真言師は大日經は諸經に勝れたりと思ふ故に
此の經に詮とする大日如来を我等が有縁の仏と思ひ念佛者等は觀經
等を信ずる故に阿彌陀仏を娑婆有縁の仏と思ふ、当世はことに善導・
法然等が邪義を正義と思ひて浄土の三部經を指南とする故に十造る寺
は八九は阿彌陀仏を本尊とす、在家・

出家一家十家百家千家にいたるまで持仏堂の仏は阿彌陀なり、其の外
木画の像一家に千仏万仏まします大旨は阿彌陀仏なり、而るに当世の
智者とおぼしき人々是を見てわざはひとは思はずして我が意に相叶ふ
故に只称美讚歎の心のみあり、只一向惡人にして因果の道理をも弁へ
ず一仏をも持たざる者は還つて失なきへんもあり

ぬべし、我等が父母世尊は主師親の三徳を備えて一切の仏に擯出せられたる我等を唯我一人能為救護とはげませ給ふ、其の恩大海よりもし其の恩大地よりも厚し其の恩虚空よりも広し、二つの眼をぬいて仏前に空の星の数備ふとも身の皮を剥いで百千万天井にはるとも涙を闕伽の水として千万億劫仏前に花を備ふとも身の肉血を無量劫仏前に山の如く積み大海の如く湛ふとも此の仏の一分の御恩を報じ尽しがたし。而るを当世の僻見の学者等設ひ八万法蔵を極め十二部経を諳んじ大小の戒品を堅く持ち給ふ智者なりとも此の道理に背かば惡道を免るべからずと思食すべし、例せば善無畏三蔵は真言宗の元祖烏萇奈国の大王・仏種王の太子なり、教主釈尊は十九にして出家し給いき此の三蔵は十三にして位を捨て月氏七十箇国九万里を歩き回りて諸経諸論諸宗を習ひ伝へ北天竺金粟王の塔の下にして天に仰ぎ祈請

を致し給えるに虚空の中に大日如来を中央として胎藏界の曼荼羅顯れ
させ給ふ、慈悲の余り此の正法を辺土に弘めんと思食して漢土に入り
給ひ玄宗

皇帝に秘法を授け奉り旱魃の時雨の祈をし給いかば三日が内に天よ
り雨ふりしなり、此の三蔵は千二百余尊の種子尊形三摩耶一事もく
もりなし、当世の東寺等の一切の真言宗一人も此の御弟子に非るはな
し、而るに

此の三蔵さんざう一時いちじに頓死とんしありき数多あまたの獄卒ごくそつ来つて鉄繩てつじやう七すぢ懸けたてまつり閻魔王宮えんまおうきゆうに至る此の事第一だいいちの不審ふしんなり、いかなる罪つみあつて此の責に値あひ給ひけるやらん、今生こんじやうは十惡じゅうあくは有りもやすらん五逆罪ごぎやくざいは造らず過去かこを尋ぬれば大國たいこくの王となり給ふ事を勘かんうるに十善戒じゅうぜんかいを堅く持ち五百の仏陀ぶつだに仕給ふなり何の罪つみあらん、其の上十三にして位いを捨て出家しゅつけし給いき閻浮第一えんぶだいいちの菩提心ぼだいしんなるべし、過去かこ・現在げんざいの輕重けいちようの罪つみも滅すらん其の上月氏がつしに流布るふする所の經論きやうろん諸宗しよしゆを習ならひ極きわめ給たまいしなり何の罪つみか消えざらん、又真言密教しんごんみつぎやうは他に異なる法こたなるべし一印しんごん一真言しんごんなれども手

に結び口に誦じゆすれば三世さんぜの重罪じゆうざいも滅せずと云うことなし、無量むりやう俱低劫きだいきやくの間作ざいしやうる所の衆しゆの罪障ざいしやうも此の曼荼羅まんだらを見れば一時いちじに皆消滅みなしやうめつすところそ申し候もうへ況や此の三蔵さんざうは千二百余尊よそんの印・真言しんごんを誦しんごんに浮そくべ即身成仏しんじんじやうぶつ

観道鏡かんどうきように懸りかか両部灌頂かんちようの御時おんとき大日覚王だいにとにかくおうとなり給いき、如何いかんにして

閻魔えんまの責に豫り給いけるやらん、日蓮にちれんは顯密二道けんみつにとうの中に勝れすぐ

させ給いて我等われら易と生死しやうじを離るべき教に入らんとし候いて真言しんごんの秘

教をあらあら習ならひ此の事を尋ね勘たずうるに一人として答をする人なし、

此の人惡道あくどうを免まぬかれずば当世とうせの一切いっさいの真言しんごん並びに一印一真言しんごんの道俗どうぞく

三惡道さんあくどうの罪を免るべきや。

日蓮にちれん此の事を委くわしく勘かんうるに二つの失有とがつて閻魔王えんまおうの責に予り給たまへり、

一つには大日經だいにといきようは法華經ほけきように劣るのみに非ず涅槃經ねはんぎよう・華嚴經けこんぎよう・般若經はんんにやきよう等

にも及およばざる經にて候を法華經ほけきように勝すぐれたりとする謗法ぼうぼうの失とがなり、二つ

には大日如來だいにちにやらいは釈尊しやくそんの分身ふんじんなり而るを大日如來だいにちにやらいは教主きやうしゆしやくそん釈尊しやくそんに勝れた

りと思ひし僻見びやくけんなり、此の謗法ぼうぼうの罪は無量劫むりようこつの間・千二百余尊よそんの法を

行ずとも惡道あくどうを免るべからず、此の三藏さんざう此の失免とがまぬかれ難がたき故に諸尊しよそんの印・

眞言しんごんを作せども叶ははざりしかば

法華經ほけきよう第二譬喻品ひゆほんの今此三界こんしさんがい・皆是かいぜ我有がう其中衆生うちゅうしゅじやう悉是しつぜ吾子ごし而今此処こんししよ

・多諸患難しよげんなん唯我一人能為救護ただわれひとりの文を唱うたへて鉄くろがねの繩なづなを免まぬかれさせ給たまいき、

而しかに善無畏ぜんむい已後いごの眞言師等しんごんしは大日經だいにちきようは一切經いっけいぎやうに勝まさるるのみに非あらず

法華經ほけきように超過ちやうかせり、或あるは法華經ほけきようは華嚴經けこんきようにも劣おとるなんと申もうす人もあ

り此等これらは人は異ことなれども其その謗法ほうぼうの罪つみは同じきか、又善無畏ぜんむい三藏さんぞう

法華經ほけきようと大日經だいにちきようと大事だいじとすべしと深理じんりをば同おなぜさせ給たまいしかども印いんと

眞言しんごんとは法華經ほけきようは大日經だいにちきように劣おとりけるとおぼせし僻見計びやくけんばかりなり、其その

已後いごの眞言師等しんごんしは大事だいじの理りをも法華經ほけきようは劣おとれりと思おもへり、印いん・眞言しんごんは又

申もうすに及およばず謗法ほうぼうの罪つみ遙はるかにかさみたり、閻魔えんまの責せきにて墮獄でこくの苦くるしみを延のぶべ

しとも見みえず直ただちに阿鼻あびの炎えんをや招まねくらん、大日經だいにちきよう

には本一念三千いちねんさんぜんの深理じんりなし此の理りは法華經ほけきように限かぎるべし、善無畏ぜんむい三藏さんぞう

てんだいだいし 天台大師の法華經の深理を読み出でさせ給いしを盗み取つて大日經に入れ法華經の莊嚴として説かれて候大日經の印・真言を彼の經の得分と思へり、理も

同じと申すは僻見なり真言・印契を得分と思ふも邪見なり、譬えば人の下人の六根は主の物なるべし而るを我が財と思ふ故に多くの失出で来る、此の譬を似て諸經を解るべし劣る經に説く法門は勝れたる經の得分と成るべきなり。

而るを日蓮は安房の国・東条の郷清澄山の住人なり、幼少の時より虚空蔵菩薩に願を立てて云く日本第一の智者となし給へと云云、虚空蔵菩薩眼前に高僧とならせ給いて明星の如くなる智慧の宝珠を授けさせ給いき、其のしるしにや日本国の八宗並びに禪宗・念仏宗等の大綱粗伺ひ侍りぬ、殊には建長五年の比より今文永七年に至る

まで此の十六七年の間禪宗と念仏宗とを難ずる故に禪宗・念仏宗の
学者蜂の如く起り雲の如く集る、是をつむる事一言二言には過ぎず
結句は天台・真言等の学者自宗の廃立を習ひ失いて我が心と他宗に同
じ在家の信をなせる事なれば彼の邪見の宗を扶けんが為に天台・真言
は念仏宗・禪宗に等しと料簡しなして日蓮を破するなり、此れは日蓮
を破する様なれども我と天台・真言等を失ふ者なるべし能く能く恥ず
べき事なり。

此の諸經諸論諸宗の失を弁うる事は虚空藏菩薩の御利生本師道善
御房の御恩なるべし。龜魚すら恩を報ずる事あり何に況や人倫をや、
此の恩を報ぜんが為に清澄山に於て仏法を弘め道善御房を導き奉らん
と欲す、而るに此の人愚癡におはする上念仏者なり三惡道を免るべし
とも見えず、而も又日蓮が教訓を用ふべき人にあらず、

然れども文永元年十一月十四日西条華房の僧坊にして見参に入りし時・彼の人の云く我智慧なければ請用の望もなし、年老いていらへなければ念仏の名僧をも立てず世間に弘まる事なれば唯南無阿弥陀仏と申す計りなり、又我が心より起こらざれども事の縁有つて阿弥陀仏を五体まで作り奉る是れ又過去の宿習なるべし、此の科に依つて地獄に墮つべきや等云云、爾時に日蓮意に念はく別して中違ひまいらす事無けれども東条左衛門入道蓮智が事に依つて此の十余年の間は見奉らず但し中不和なるが如し、穩便の義を存じおだやかに申す事こそ礼儀なれとは思ひしかども生死界の習ひ老少不定なり又二度見参の事難かるべし、此の人の兄道義房義尚此の人に向つて無間地獄に墮つべき人と申して有りしが臨終思ふ様にもましまさざりけるやらん、此の人も又しかるべしと哀れに思ひし故に思ひ切つて強

あながちもう

強に申したりき、阿弥陀仏を五体作り給へるは五度無間地獄に墮ち

たま

給ふべし其の故は正直捨方便の法華經に釈迦如来は我等が親父

あみだぶつ

阿弥陀仏は伯父と説かせ給ふ、我が伯父をば五体まで作り

くよう

供養せさせ給いて親父をば一体も造り給はざりけるは豈不孝の人に

あら

非ずや、中中山人海人などが東西をしらず一善をも修せざる者は

かえ

還つて罪浅き者なるべし、当世の道心者が後世を願ふとも法華經・

しゃかぶつ

釈迦仏をば打ち捨て阿弥陀仏念仏などを念念に捨て申さざるはいか

があるべかるらん、打ち見る処は善人とは見えたと

他人につく失免るべしとは見えず、一向惡人はいまだ仏法に帰せず

たにん

釈迦仏を捨て奉る失も見えず縁有つて信ず

しゃかぶつ

る辺もや有らんずらん、善導・法然並びに当世の学者等が邪義に就い

あみだぶつ

て阿弥陀仏を本尊として一向に念仏を申す人人は多生曠劫をふると

ほんぞん

て阿弥陀仏を本尊として一向に念仏を申す人人は多生曠劫をふると

も此の邪見じゃけんを翻ひるがえりへして釈迦しやか仏ぶつ・法華經ほけきように歸すべしとは見え、されば
雙林最後そうりんさいごの涅槃經ねはんぎように十惡じゅうあく・五逆ごぎやくよりも過すぎておそろしき者を出ださせ
給たまふに謗法闡提ほうぼうせんたいと申もうして二百五十戒たもを持ち三衣一鉢さんねいちぼつを身に纏ちへる智者ちしや
共あの中にこそ有るべしと見え侍はべれとこまごまと申もうして候いしかば此の人
もこころえずげに思おもひて・おはしき、傍座びとびとの人人もこころえずげにをも
はれしかども其その後承たまわりしに法華經ほけきようを持もたるるの由承たまわりしかば此の人

邪見じやけんを翻ひるがえりし給ふか善人ぜんにんに成り給いぬと悦よろこび思おもひ候こう処ところに又此またこのの
釈迦しやか仏ぶつを造らせ給う事申もうす計はかりなし、当座とうざには強つよなる様ように有ありしかど
も法華經ほけきやうの文のままだに説とき候いしかばかうおれさせ給たまへり、忠言耳ちゆうげんみみに
逆さからい良藥口りやうやくぐちに苦くるしと申もうす事は是これなり。

今既すでに日蓮にちれん・師の恩を報ず定めて仏神ぶつしん・納受のうじゆし給はんか、各各此たまたまこのの
由よしを道善房どうぜんぼうに申し聞かせ給ふべし、仮令強言たとひかうげんなれども人をたすくれば
実語じつご・☆語なんごなるべし、設たとひ☆語なれども人を損ずるは妄語もうご・強言かうげんなり、
当世とうせ・学匠等がくしやうとうの法門ほうもんは☆語・実語じつごと人人ひとびとは思食おもほしめしたれども皆強言妄語みなかうげんもうご
なり、仏の本意ほんいたる法華經ほけきやうに背そむく故なるべし、日蓮にちれんが念仏申ねんぶつもうす
者は無間地獄むげんじごくに墮おつべし禪宗ぜんしゆう・真言宗しんこんしゆうも又あやまり謬みうの宗なりなんと申し候
は強言かうげんとは思食おもほしめすとも実語じつご・語ことばなるべし、例せば此このの道善御房どうぜんごぼうの
法華經ほけきやうを迎むかへ釈迦しやか仏ぶつを造らせ給う事は日蓮にちれんが強言かうげんより起おこる、日本国にほんこくの

一切衆生も亦復是くの如し、当世此の十余年已前は一向念仏者にて

候いしが十人が一二人は一向に南無妙法蓮華經と唱へ三三人は

両方になり、又一向念仏申す人も疑をなす故に心中に法華經を信

じ又釈迦仏を書き造り奉る、是れ亦日蓮が強言より起る、譬えば梅檀

は伊蘭より生じ蓮華は泥より出でたり而るに念仏は無間地獄に墮つる

と申せば当世牛馬の如くなる智者どもが日蓮が法門を仮染にも毀るは

糞犬が師子王をほへ癡猿が帝釈を笑ふに似たり。

文永七年

日蓮 花押

義浄房浄顯房

◆一〇四

佐渡御勘氣抄

文永八年十月 五十

歳御作

891P

与円浄房 於佐渡

九月十二日に御勘氣を蒙て今年十月十日佐渡の国へまかり候なり、
本より学文し候し事は仏教をきはめて仏になり恩ある人をも・たすけ
んと思ふ、仏になる道は必ず身命をすつるほどの事ありてこそ仏には
なり候らめと・をしはからる、既に經文のごとく惡口・罵詈・刀杖・
瓦礫・数数見擯出と説かれて・かかるめに値い候こそ法華經をよむにて
候らめと、いよいよ信心もおこり後生もたのもしく候、死して候はば必
ず各各をもたすけたてまつるべし、天竺に師子尊者と申せし人は
檀弥羅王に頸をはねられ提婆菩薩は外道につきころさる、漢土に

竺じくの道生どうしょうと申せし人は蘇山そざんと申す所へながさる、法道三蔵ほうどうさんぞうは面かおにかな

を・やかれて江南かうなんと申す所へながされき、是これ皆みな

法華經ほけきようのとく仏法ぶつぽうのゆへなり、日蓮にちれんは日本国にほんこく・東夷とうじよう・東条とうじよう・安房あわの国・海

辺せんだらの旃陀羅せんだらが子なり、いたづらに・くちん身を法華經ほけきようの御故ゆえに捨てまい

らせん事ことあに石に金を・かふるにあらずや、各各たまたなげかせ給うべから

ず、道善どうぜんの御房ごぼうにも・かう申しきかせまいらせ給たまうべし、領家あまごせんの尼御前あまごせんへ

も御ふみと存じ候へども先かかる身のふみなれば・なつかしやと・おぼさ

ざるらんと申しぬると便宜びんぎあらば各各御物語おんものがたりり申もうさせ給たまい候へ。

十月 日

日蓮花押にちれんかおう

◆一〇五

義淨房御書

892P

御ほうもん法門の事くわ委しく承はりはり候そうらい畢おわんぬ、法ほけき華よう經の功くどく徳と申もうすは
唯ゆい仏ぶつ与よ仏ぶつの境きよう界かい・十じゅう方つほう分ぶん身じんの智ち恵えも及およぶか及およばざるかの内ない証しょうなり、
されば天台てんだい大師だいしも妙めうの一字いちじをば妙めうとは妙めうは不可ふ思かし議ぎと名なくと釈しゃくし給たまい
て候さきざきなるぞ前ぜん前ぜん御ご存ぞん知ちの如ごとし、然しかれども此この經けいに於おいて重しゅ重じゅの修しゅ行ぎやう分ぶんれ
たり天台てんだい・妙めう樂らく・伝でん教ぎやう等とう計けいりしらせ給たまう法門ほうもんなり、就なかんずく中ちゅうく伝でん教ぎやう大師だいし
・天台てんだいの後ご身みにて渡わたらせ給たまへども人ふしんの不ふ審しんを嗜しさんとや思おもし食くしけん
大だい唐とうへ決けつをつかはし給たまふ事こと多おほし、されば今こん經ぎやう
の所しよ詮せんは十じゅう界かい互ご具ぐ・百ひゃく界かい千せん如にょ・一いち念ねん三さん千せんと云いふ事ことこそゆゆしき大だい事じに
ては候ほうなれ、此この法門ほうもんは摩ま訶か止し觀くわんと申もうす文ぶんにしるされて候ほう、次だいに
寿量品じゅうりやうぽんの法門ほうもんは日蓮にちれんが身みに取とつてたのみあることぞかし、天台てんだい・伝でん教ぎやう

等も粗ほしらせ給たまへども言に出して宣のべべ給たまはず竜樹りゅうじゆ・天親てんじん等も亦是またくのごと

し、寿量品じゆりやうほんの自我偈じがげに云く「二心いっしんに仏を見たてまつらんと欲し

て自ら身命みづか しんみやうを惜おしします」云云、日蓮にちれんが己心こしんの仏界ぶつかいを此の文に依よつて顯

はすなり、其の故そのゆゑは寿量品じゆりやうほんの事ことの一念三千いちねんさんぜんの三大秘法ひほうを成就じやうじゆせる事・

此の經文きやうもんなり秘べす可べし秘べす可べし、叡山えいざんの大師だいし・渡唐ととうして此の文の点を

相伝そうでんし給たまう処ところなり、一とは一道清淨しやうじやうの義心ぎしんとは諸法しよほうなり、されば

天台大師てんだいだいし心の字しやくを釈いして云く「二月三星・心果清淨しやうじやう」云云、日蓮にちれん

云く一とは妙くわうなり心とは法ほふなり欲よくとは蓮れんなり見みとは華けなり仏ぶつとは經きやうな

り、此の五字ごじを弘通くわつうせんには不自惜おししんみやう身命みんめい是これなり、一心いっしんに仏ぶつを見る心しんを

一にして仏ぶつを見る一心いっしんを見れば仏ぶつなり、無作むさの三身さんじんの仏果ぶつかを成就じやうじゆせん

事は恐おそくは天台てんだい・伝教でんきやうにも越こへ竜樹りゅうじゆ・迦葉かしょうにも勝すぐれたり、相構さうかう・相構さうかうへ

て心の師しとはなるとも心を師しとすべからずと仏ぶつは記しるし給たまひしなり、

法華經ほけきようの御ため為に身をも捨て命をも惜おししまざれと強情に申せしは是これなり、南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきよう・南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきよう。

ぶんえい
文永十年五月二十八日

にちれんかおう
日蓮花押

ぎよじへんじ
義浄房御返事

◆一〇六

きよすみでら たいしゅう
清澄寺大衆中

建治二年正月

五十五歳御作

893p

新春の慶賀じたこうじんこうじん自他幸甚幸甚、去年こぞ来らず如何いかん定めて子細しさい有らんか、
抑そもそもさんけい参詣くわだを企て候わば伊勢公いせの御房ごぼうに十住じゅうじゅう心論・秘藏宝鑰ひぞうぼうやく二教論等
の真言しんごんの疏じょを借用候へ是かくのことくの如きは真言師しんごんし蜂起ほうきの故ゆえに之これを申もうす、又
止観しかんの第一第二御隨身候ずいしんへ東春輔正記ふしよきなんどや候らん、円智房げんちぼうの
御弟子おんでしに観智房かんちぼうの持たもちて候なる宗要集ようしゅうかしたび候へそののみ

ひとびともう

ならずふみの候由も人人申し候いしなり早々に返すべきのよし申させ

たま

給へ今年は殊に仏法の邪正たださるべき年か浄願の御房義城房等には

もう

申し給うべし、日蓮が度度殺害せられんとし並びに二度まで流罪せら

れ頸を刎られん

とせし事は別に世間の失に候はず、生身の虚空蔵菩薩

より大智慧を給わりし事ありき、日本第一の智者と

たま

なし給へと申せし事を不便とや思し食しけん明星の如くなる大宝珠を

給いて右の袖にうけとり候いし故に一切経を見候いしかば八宗並びに

一切経の勝劣粗是を知りぬ、其の上真言宗は法華経を失う宗なり、

是は大事なり先ず序分に禪宗と念仏宗の僻見を責めて見んと思ふ、

其の故は月氏・漢土の仏法の邪正は且らく之を置く日本国の法華経

の正義を失うて一人もなく人の惡道に墮つる事は真言宗が影の身に

随うがごとく山山・寺寺ごとに法華宗に真言宗をあひそひて如法の

したが

したが

したが

したが

したが

したが

したが

したが

したが

したが

法華經ほけきょうに十八道をそせんぼうに阿彌陀經あみだを加てんだいしゅう天台宗たいていしゅうの學者がくしゃの灌頂かんちようをし
て真言宗しんこんしゅうを正とし法華經ほけきょうを傍おととせし程ほどに、真言經しんこんと申もうすは爾前にぜんこんきよう權教けんきょう
の内の華嚴けごん・般若はんにやにも劣おとれるを慈覺じかく・弘法こうぼうこれに迷惑めいわくして、或あるは法華經ほけきょう
に同じ・或あるは勝すぐれたりなんど申もうして、仏ぶつを開眼かいげんするにも仏眼ぶつげん大日だいにちの印・
真言しんこんをもつて開眼かいげん供養くようするゆへに日本にほん國こく

の木画もくえの諸像しよざう皆無魂無眼みなの者となりぬ、結句けつくは天魔てんま入り替つて檀那だんなを
ほろぼす仏像ぶつざうとなりぬ王法の尽つきんとするこれなり、此の惡真言しんこんかま
くらに來りて又日本国にほんこくをほろぼさんとす。

其の上禪宗ぜんしんしゅう・浄土宗じょうどしゅうなどと申すは又いうばかりなき僻見びやくけんの者な

り、此これを申もうさば必ず日蓮にちれんが命と成るべしと存知せしかども虚空蔵

菩薩ぼさつの御恩ごおんをほうぜんがために建長五年四月二十八日安房あわの国・

東条とうじょうの郷清澄寺道善きよすみでらどうぜんの房持ぼうぢ仏堂の南面にして浄円房じょうえんぼうと申もうす者並ならびに

少少たいたいしゅうの大衆だいうしゅうにあるこれを申もうしはじめて其その後二十余年が間退転たいてんなく申もうす、

・或あるは所を追いひ出いだされ・或あるは流罪るざい等、昔は聞く不輕菩薩ふぎょうぼさつの杖木じょうもく等を今

は見る日蓮にちれんが刀劍とうけんに当る事を、日本国にほんこくの有智うち・無智むち上下万人じやうげばんにんの云いわく

日蓮法師にちれんほうしは古の論師いにしえろんし・人師にんし大師だいし先徳せんとくにすぐるべからずと、日蓮にちれんこの不審ふしん

をはらさんがために

正嘉文永の大地震大長星を見て勘えて云く我が朝に二つの大難あるべし所謂自界叛逆難・他国侵逼難なり、自界は鎌倉に権の大夫殿御子孫どしうち出来すべし、他国侵逼難は四方よりあるべし、其の中に西よりつよくせむべし、是れ偏に仏法が一国挙りて邪なるゆへに梵天帝釈の他国に仰せつけてせめらるるなるべし。

日蓮をだに用いぬ程ならば将門・純友・貞任・利仁・田村のやうなる將軍百千万人ありとも叶ふべからず、これまことならずば真言と念佛等の僻見をば信ずべしと申しひろめ候いき、就中清澄山の大衆は日蓮を父母にも三宝にもをもひをとさせ給はば今生には貧窮の乞者とならせ給ひ後生には無間地獄に墮ちさせ給うべし故・いかなとなれば東条左衛門景信が悪人として清澄のかいしし等をかりとり房房の法師等を念仏者の所従にし・なんとせしに日蓮敵をなして領家のか

たうどとなり清澄・二間ふたまの二箇ふたの寺東条とうじようが方まさにつくならば日蓮にちれん・
法華經ほけきようをすてんと、せいじやうの起請きしようをかいて日蓮にちれんが御本尊ごほんぞんの手にゆい
つけていのりて一年が内に両寺りようじは東条とうじようが手をはなれ候いしな
り、此の事は虚空藏菩薩こくうざうぼさつもいかでかすてさせ給たまうべき、大衆たいしゆうも日蓮にちれんを
心へず・をもはれん人人ひとびとは天にすてられ・たてまつらざるべしや、かう
申せば愚癡ぐちの者は我をのろうと申もうすべし後生ごしように無間地獄むげんじごくに墮おちんが
不便ふびんなれば申もうす

なり。

領家の尼ごぜんは女人にょにんなり愚癡ぐちなれば人人ひとびとのいひをどせば・さこそと
ましまし候らめ、されども恩をしらぬ人となりて後生ごしやうに惡道あくどうに墮おちさ
せ給たまはん事こそ不便ふびんに候へども又一つには日蓮にちれんが父母等ふぼに恩をかほらせ
たる人なれば・いかにしても後生ごしやうをたすけたてまつらんと・こそいのり候
へ法華經ほけきやうと申もうす御經は別べつの事も候はず我は過去五百塵点劫かこごひやくじんでんごうより先の
仏なり、又舍利弗等しゃりほつは未來みらいに仏になるべしと、これを信ぜざらん者は
無間地獄むげんじごくに墮おつべし、我のみかう申すにはあらず多宝仏たほうぶつも証しょう明みやうし
十方じゅうぽうの諸仏しよぶつも舌をいだしてかう候、地涌千界じゆせんがい・文殊もんじゆ・觀音かんのん・梵天ぼんてん・帝釈たいしやく
・日月にちがつ・四天してん・十羅刹じゅうらせつ・法華經ほけきやうの行者ぎやうじやを守護しゆごし給たまはんと説かれたり、さ
れば仏になる道は別べつのやうなし過去かこの事未來みらいの事を申しあてて候がま
ことの法華經ほけきやうにては候なり。

にちれん

日蓮はいまだ・つくしを見ずえぞしらず、一切経をもつて勘へ候へば

・すでに値いぬ、もし・しからは各各不知恩の人なれば無間地獄に墮ち

給うべしと申し候はたがひ候べきか、今はよし後をござらんぜよ日本国は

当時のゆき対馬のやうになり候はんずるなり、其の時安房の国にむこが

寄せて責め候はん時・日蓮房の申せし事の合うたりと申すは偏執の

法師等が口すくめて無間地獄に墮ちん事不便なり不便なり。

正月十一日

日蓮花押

安房の国清澄寺大衆中

このふみはさど殿と・すけあさり御房と虚空蔵の御前にして大衆ごと

に・よみきかせ給へ。

◆一〇七

聖密房御書ぼうちしよ

建治三年 五十六歳御

作 896P

大日経だいにちきようをば善無畏ぜんむい・不空ふくう・金剛智等こんごうちの義ぎに云く、大日経だいにちきようの理りと法華経ほけきようの理りとは同じ事なり但印しんごんと真言しんごんとが法華経ほけきようは劣せうなり」と立てたり、良り・和尚しやうしやう・広修くわしゅう・維ゆい・星しやう・なんど申もうす人は大日経だいにちきようは華嚴経けこんきよう・法華経ほけきよう・涅槃経ねはんきよう等らには及およばず但方等部ほうとうぶの経きやうなるべし、日本にほんの弘法大師こうぼうだいし云く法華経ほけきようは猶華嚴経なげこんきよう等に劣おとれりまして大日経だいにちきようには及およぶべからず」等云云、

又云く、法華経ほけきようは釈迦しやかの説だいにちきよう・大日経だいにちきようは大日如来だいにちによらいの説きやうしゆす・教主きやうしゆす既にことなり・又釈迦しやか如来だいにちによらいは大日如来だいにちによらいの御使おんつかいとして顕教けんきやうをとき給たまうこれは密教みつきやうの

初門じよもんなるべし」・或あるは云いく・法華經ほけきやうの肝心かんじんたる寿量品じゆりやうほんの仏けんぎやうは顯教けんぎやうの中に

しては仏ぶつなれども密教みつぎやうに対すれば具縛ぐばくの凡夫ぼんぷなり」と云云。

日蓮にちれん勘かんえて云いく大日經だいにちぎやうは新詠しんやくの經きやう唐とうの玄宗皇帝げんそうこうていの御時おんとき開元かいげん四年しやにんに

天竺てんじくの善無畏ぜんむい三藏さんざうもて来る、法華經ほけきやうは旧詠くやくの經きやう・後秦こうしんの御宇ぎやうに羅什らじやう

三藏さんざうもて来る其その中間ちゆうげん三百余年さんひやくねんなり、法華經ほけきやう亘わたて後百余年ごひやくねんを経て

天台智者大師てんだいしやだいし・教門きやうもんには五時四教しきやうを立てて上五百余年かふしやの學者きやうその教相きやうさう

をやぶり觀門かんもんには一念三千いちねんさんぜんの法門ほうもんをさとりて始めて法華經ほけきやうの理りを得た

り、天台大師てんだいだいし已前いぜんの三論宗さんろんしゆう・已後いごの法相宗ほうそうしゆうには八界はつがいを立て十界じゆつかいを論

ぜず一念三千いちねんさんぜんの法門ほうもんをば立つべきやうなし、

華嚴宗けこんしゆうは天台てんだい・已前いぜんには南北しやうの諸師しよし華嚴經けこんきやうは法華經ほけきやうに勝すぐれたりとは

申しけれども華嚴宗けこんしゆうの名なは候さきはず、唐とうの代きさきに高宗かうそうの後そくてん・則すなはち天后こうこうと

申もうす人の御時おんとき・法藏法師ほうざうほつし・澄觀ちやうかんなど申もうす人・華嚴宗けこんしゆうの名なを立てたり、

此の宗は教相きようそうに五教を立て觀門かんもんには十玄・六相など申す法門ほうもんなり、
をびただしきやうに・みへたりしかども澄觀ちようかんは天台てんだいをはするやうに
てなを天台てんだいの一念三千いちねんさんぜんの法門ほうもんをかりとりて我が經の心しん如工画師にやくえしの文の
心とす、これは華嚴宗けこんしゅうは天台てんだいに落ちたりというべきか又一念三千いちねんさんぜんの
法門ほうもんを盗みとりたりというべきか、澄觀ちようかんは持戒じかいの人・大小だいしやうの戒を一塵いちじん
をもやぶらざれ

ども一念三千の法門をば・ぬすみとれり・よくよく口伝あるべし、
真言宗の名は天竺にあり・やいなや大なる不審なるべし、但真言經に
てありけるを善無畏等の宗の名を漢土にして付けたりけるか・よくよく
しるべし、就中善無畏等・法華經と大日經との勝劣をはんずるに
理同事勝の釈をばつくりて一念三千の理は法華經・大日經これ同じ
なんどいへども印と真言とが法華經には無ければ事法は大日經に劣れ
り、事相かけぬれば事理俱密もなしと存ぜり、今・日本国及び諸宗の
学者等並びにことに用ゆべからざる天台宗共にこの義をゆるせり例せ
ば諸宗の人人をばそねめども一同に弥陀の名をとなへて自宗の本尊を
すてたるがごとし天台宗の人人は一同に真言宗に落ちた
る者なり。

日蓮・理のゆくところを不審して云く善無畏三蔵の法華經と大日經

とを理は同じく事は勝れたりと立つるは天台大師の始めて立て給へる
いちねんさんぜん 一念三千の理を今大日経にとり入れて同じと自由に判ずる条ゆるさ
るべしや、例せば先に人丸がほのぼのと・あかしのうらの・あさぎりに・
しまかくれゆく・ふねをしぞをもう・とよめるを、紀のしく

ばう源みなもとのしたかうなんどが判じて云く此の歌はうたの父・うたの母」
等云云、今の人・我うたよめりと申して・ほのぼのと乃至船をしぞをも
うと一字をもたがへず・よみて我が才は人丸にをとらずと申すをば人こ
れを用ゆべしや、やまかつ海人あまなんどは用ゆる事もありなん、天台大師
の始めて立て給へる一念三千の法門は仏の父・仏の

母なるべし、百年・已後の善無畏三蔵がこの法門をぬすみとりて大日経
と法華経とは理同なるべし、理同と申すは一念三千なりとかけるをば
智慧かしこき人は用ゆべしや、事勝と申すは印・真言なしなんど申すは

天竺てんじくの大日經だいにちきよう・法華經ほけきようの勝劣しょうれつか漢土かんどの法華經ほけきよう・大日經だいにちきようの勝劣しょうれつか、不空ふくう三藏さんざうの法華經ほけきようの儀軌ぎぎには法華經ほけきように印・真言しんごんをそへて訳

せり、仁王經にんのうきようにも羅什らじゆの訳には印・真言しんごんなし不空ふくうの訳の仁王經にんのうきようには印・

真言しんごんこれあり、此等これらの天竺てんじくの經經きようきようには無量むりようの事あれども月氏がつし・漢土かんど・

国を・へだてて・とをく・ことごとく・もちて来がたければ經を略するな

るべし、法華經ほけきよう

には印・真言しんごんなけれども二乗作仏にじようさぶつ・劫国名号こうこくみょうごう・久遠実成くおんじつじようと申もうすきぼの事ことあり、大日經等だいにちきようには印・真言しんごんはあれども二乗作仏にじようさぶつ・久遠実成くおんじつじようこれなし、二乗作仏にじようさぶつと印・真言しんごんとを並ぶるに天地てんちの勝劣しょうれつなり、四十余年よんじゅうよねんの經經ききようぎきようには二乗は敗種はいしゆの人と一字・二字ならず無量無辺むりやうむへんの經經ききようぎきように嫌きらはれ、法華經ほけききようにはこれを破はして二乗作仏にじようさぶつを宣のべべたり、いづれの經經ききようぎきようにか印・

真言しんごんを嫌きらうことばあるや、その言ことなければ又大日經だいにちききようにも其その名なを嫌きらはず但印・真言しんごんをとけり、印いんと申もうすは手の用もちなり手仏てぶつにならずは手の印・仏ぶつになるべしや、真言しんごんと申もうすは口の用もちなり口仏くふつにならずば口の真言・仏ぶつになるべし

や、二乗にじようの三業さんごうは法華經ほけききように値あいたてまつらずは無量劫むりやうこく・千二百余尊よそんの印いん・真言しんごんを行しんごんずとも仏ぶつになるべからず、勝すぐれたる二乗作仏にじようさぶつの事法じふぽうをばとか

ずと申もうして劣おとれる印・真言しんごんをとける事法をば勝すぐれたりと申もうすは理によ
れば盗人ぬすびとなり

事によれば劣謂勝見れついうけんの外道げどうなり、此の失とがによりて閻魔えんまの責めをばかほり
し人なり、後にくいかへして天台大師てんだいだいしを仰あおいで法華ほつけにうつりて惡道あくどうをば
脱まぬかれしなり。

久遠実成くおんじつじょうなどは大日經だいにちぎょうにはをもひもよらず、久遠実成くおんじつじょうは一切の
仏ほんちの本地・譬たとへば大海たいかいは久遠実成くおんじつじょう・魚鳥ぎょちょうは千二百余尊よそんなり、久遠実成くおんじつじょう
なくば千二百余尊よそんはうきくさの根なきがごとし夜の露つゆの日輪にちりんの出でざ
る程なるべし、天台宗てんだいしゅうの人人ひとびとこの事を弁わきまへずして真言師しんごんしにたばらかされ
たり、真言師しんごんしは又自宗じしゅうの誤あやまりをしらず・いたづらに惡道あくどうの邪念しやねん
をつみをく、空海和尚くうかいわじょうは此の理を弁わきまへざる上華嚴宗けこんしゅうのすでにやぶられ
し邪義じやぎを借りとりて法華經ほけきょうは猶華嚴經なほけこんきょうにをとれりと僻見びやくけんせり、龜毛きもうの

長短・兎角の有無・龜の甲には毛なしなんぞ長短をあらそい兎の頭に
は角なし・なんの有無を論ぜん、理同と申す人いまだ閻魔のせめを脱れ
ず、大日経に劣る華嚴経に猶劣ると申す人・謗法を脱るべしや、人は・
かはれども其の謗法の義同じかるべし、弘法の第一の御弟子かきのもと
きの僧正・紺青鬼となりし・これをもつてしるべし、空海悔改なくば
惡道疑うべしとも・をばす其の流をうけたる人人又いかん。

問うて云わく法師一人・此の惡言をはく如何、答えて云く日蓮は此
の人人を難ずるにはあらず但不審する計りなり、いかりをばせば・さで
をはしませ、外道の法門は一千年・八百年・五天にはびこりて輪王より
万民かうべをかたぶけたりしかども九十五種共に仏にやぶられたり
き、撰論師が邪義・百余年なりしもやぶれき、南北の三百余年の邪見
もやぶれき、日本・二百六十余年の六宗の義もやぶれき、其の上此の

事は伝教大師の或書の中にやぶ

られて候を申すなり、日本国は大乗に五宗あり法相・三論・華嚴・真言

天台、小乗に三宗あり俱舍・成実・律宗なり、真言・華嚴・三論、

法相は大乗よりいでありといへどもくわしく論ずれば皆小乗なり、

宗と申すは戒・定・慧の三学を備へたる物なり、其の中に定・慧をさてを

きぬ、戒をもて大・小のぼうじをうちわかつものなり、東寺の真言

法相・三論・華嚴等は戒壇なきゆへに東大寺に入りて小乗・律宗の乳

驢・臭糞の戒を持つ、戒を用つて論ぜば此等の宗は小乗の宗なるべし、

比叡山には天台宗・真言宗の二宗・伝教大師習いつた給いたりしか

ども天台円頓の円定・円慧・円戒の戒壇立つべきよし申させ給いしゆへに

天台宗に対しては真言宗の名あるべからずとをばして天台法華宗の

止観・真言とあそばして公家へまいらせ給いき、伝教より慈覚たまはら

せ給たまいし誓戒しがいの文には天台てんだい

法華宗ほつげしゅうの止観しがん・真言しんごんと正まさくのせられて真言宗しんごんしゅうの名をけづられたり、

天台法華宗てんだいほつげしゅうは仏立宗ぶつりゅうしゅうと申もうして仏より立てられて候しんごんしゅう、真言宗しんごんの真言しんごんは

当分の宗とうぶん・論師ろんし・人師にんし始めて宗の名をたてたり、而しかるを事を大日如来だいにちによらい・

弥勒菩薩等みろくぼさつによせたるなり、仏御存知ごぞんじの御意みごころは但法華經ほけきょう一宗なるべし

小乗しょうじょうには二宗十八宗二十宗候はつしゅうへとも但所詮しよせんの理は無常むじょうの一理なり、

法相宗ほうそうしゅうは唯心有境ゆいしん・大乘宗だいじょう・無量の宗ありとも所詮しよせんは唯心有境ゆいしんとだ

にいはば但一宗なり三論宗さんろんしゅうは唯心無境ゆいしん・

無量の宗ありとも所詮しよせん・唯心無境ゆいしんならば但一宗なり、此これは大乗だいじょうの空

・有いうの一分いちぶんか、華嚴宗けこんしゅう・真言宗しんごんしゅうあがらば但中たんちゅう・くだらば大乘だいじょうの空・有

なるべし、經文きやうもんの説相せつそうは猶華嚴なほけこん・般若はんにかにも及およばず但ただしよき人とおぼしき

人ひとの多く信じたるあいだ、下女だいにちきを王のあいするにいたり、大日經等だいにちきやうは

下女のごとし理は但中たんちゆうにすぎず、論師ろんし・人師にんしは王のごとし人のあいする
によて・いばうがあるなるべし、上の問答等もんどうは当時とうじは世すえになりて人の
智浅く慢心まんしん高きゆへに用ゆもち

る事はなくとも、聖人・賢人なんども出でたらん時は子細もやあらん
ずらん、不便にをもひまいらすれば目安に注せり、御ひまにはならはせ
給うべし。

これは大事の法門なり、こくうざう菩薩にまいりてつねにより奉ら
せ給うべし。

聖密房に之を遣わす

日蓮花押

◆一〇八 華果成就御書

弘安元年四月 五十七歳

御作

900P

与浄顯房・義浄房 於身延

其の後なに事もうちたへ申し承わらず候、さては建治の比・故道善房

聖人しょうにんのために二札かきつかはし奉りたてまつ侯を嵩が森にてよませ給たまいて侯よし
悦よろこび入つて侯、たとへば根ふかきときんば枝葉しやうかれず、源みなもとに水あれば
流かはかず、火はたきぎ・かくればたへぬ、草木そうもくは大地だいちなくして生長す
る事あるべからず、日蓮にちれん・法華經ほけきやうの行者ぎやうじやとなつて善惡ぜんあく
につけて日蓮房にちれんぼう・日蓮房にちれんぼうとうたはるる此の御恩ごおんながら故師匠ししやう道善房どうぜんぼう
の故ゆゑにあらずや、日蓮にちれんは草木そうもくの如く師匠ししやうは大地だいちの如し、彼の地涌じゆの菩薩ぼさつ
の上首じやうしゆ四人にてまします、一名上行じやうぎやう乃至四名安立行あんりやうぎやう菩薩ぼさつ云云、
末法まっぽうには上行じやうぎやう・出世しゆつせし給はば安立行あんりやうぎやう菩薩ぼさつも出現しゆつげんせさせ給たまうべきか、
さればいねは華果はなみじやうじゆ成就じゆじゆすれども必ず米の精・大地だいちにをさまる、
故ゆゑにひつちおひいでて二度華果けかじやうじゆ成就じゆじゆするなり、日蓮にちれんが法華經ほけきやうを弘ひろむる
功德くどくは必ず道善房どうぜんぼうの身に歸すべしあらたうとたうと、よき弟子でしをもつ
ときんば師弟してい・仏果ぶつかにいたり・あしき弟子でしをたくはひぬれば師弟してい・地獄じごく

にをつといへり、師弟相違せばなに事も成べからず委くは又又申すべく
侯、常にかたりあわせて出離生死して同心に靈山淨土にてうなづきか
たり給へ、経に云く衆に三毒有ることを示し又邪見の相を現ず我が
弟子是くの如く方便して衆生

度す「云云 前前申す如く御心得あるべく候、穴賢 穴賢

弘安元年戊寅卯月 日

日蓮花押

浄顯房

義浄房

◆一〇九

別当御房御返事

901P

聖密房のふみにくはしく・かきて候よりあいて・きかせ給い候へなに
事も二間清澄の事をば聖密房に申しあわせさせ給うべく候か、世間の

りをしりたる物に候へばかう申すに候、これへの所当なんどの事は・ゆめ
ゆめをもはず候、いくらほどの事に候べき、但なばかりにてこそ候はめ、
又わせいづをの事をそれ入つて候、いくほど

なき事に御心ぐるしく候らんと・かへりてなげき入つて候へども・我が恩
をば・しりたりけりと・しらせまつらんために候、大名を計るものは小耻
にはぢずと申して、南無妙法蓮華經の七字を日本国にひろめ震旦高麗
までも及ぶべきよしの大願をはらみて其の願の満すべきしるしにや、
大蒙古国の牒状しきりにありて此の国の人ごとの大な

歎きとみへ候、日蓮又先きより・この事をかんがへたり閻浮第一の高
名なり、先きよりにくみぬるゆへにままこのかうみやうのやうに専心と
は用い候はねども終に身のなげき極まり候時は辺執のものどもも一定
とかへぬとみへて候、これほどの大事をはらみて候ものの少事をあながち

に申し候べきか、但し当時・日蓮心ざす事は生処なり日本国よりも大
切にをもひ候、例せば漢王の沛郡を・をもくをばしめししがごとし・か
れ生処なるゆへなり、

聖智が跡あとの主となるをもつてしろしめせ、日本国にほんこくの山寺の主ともなるべし、日蓮にちれんは閻浮えんぶ第一だいいちの法華經ほけきょうの行者ぎやうじやなり・天のあたへ給たまうべきことわりなるべし。

米一斗・六升あはの米二升・やき米はふくろへ・そのみならず人人ひとびとの御心おんこころざし申しつくしがたく候、これは・いたみをもひ候、これより後は心ぐるしく・をぼしめすべからず候、よく人人ひとびとにしめすべからず候、よく人人ひとびとにもつたへさせ給たまい候へ。

乃時

別当御房御返事
べつとうごぼうごへんじ

◆一一〇

寂日房御書
ぼうごしよ

弘安二年九月 五十八
こうあん

歳御作

902P

与寂日房日家 於身

延

是まで御をとかたじけなく候、夫れ人身をうくる事はまれなるなり、
已にまれなる人身をうけたり又あひがたきは仏法・是も又あへり、同じ
仏法の中にも法華經の題目にあひたてまつる結句題目の行者となれ
り、まことにまことに過去十萬億（じゅうまんおく）の諸仏を供養する
者なり。

日蓮は日本第一の法華經の行者なり・すでに勸持品の二十行の偈の
文は日本国の中には日蓮一人よめり、八十萬億那由他の菩薩は口には
宣たれども修行したる人・一人もなし、かかる不思議の日蓮をうみ出
だせし父母は日本国の一切衆生の中には大果報の人なり、父母となり
其の子となるも必ず宿習なり、若し日蓮が法華經・釈迦如来の

御使おんつかいならば父母ふぼあに其そのの故ゆえなからんや、例せば妙莊嚴王みょうそうごん・淨徳夫人じやうとくふじん・
淨藏じやうざう・淨眼じやうがんの如ごとし、釈迦しやくか・多宝たぼうの二仏にぶつ・日蓮にぢれんが父母ふぼと變たじ給たまうか、然しから
ずんば八十万億ぼさつの菩薩ぼさつの生なれかわり給たまうか、又上行菩薩じやうぎやうぼさつ等の四菩薩ぼさつの
中すいじやくの垂迹ふしぎか不思議おほに覺いづえ候いづ、一切いっさいの物にわたりて名の大切なるなり、
さてこそ天台大師てんだいだいし・五重玄義ごじゆうげんぎの初はつめに名玄義げんぎと釈しやくし給たまへり。

日蓮にぢれんとなのる事じ自解仏乗じげぶつじやうとも云いいつべし、かやうに申せば利口いちがうげに聞きこ
えたれども道理どうりのさすところさもやあらん、經きやうに云いく日にち月がうの光明こうみやうの
能よく諸もろもろの幽冥ゆうみやうを除のぞくが如ごとく斯この人ひと・世間せけんに行いじて能よく衆生しゆじやうの聞きこを滅めつ
す」と此この文ぶんの心こころよくよく案あんじさせ給たまへ、斯し人行世間しにんぎやうせけんの五ごの文字もんじは
上行菩薩じやうぎやうぼさつ・末法まっぽうの始はつの五百年ごひゃくねんに出現しゆつげんして南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうの五ご字じの
光明こうみやうをさして無明煩惱むみやうぼんのうの闇くらをてらすべしと云いう事ことなり、日蓮にぢれんは此この
上行菩薩じやうぎやうぼさつの御使おんつかいとして日本国にほんこくの一切衆生いっさいしゆじやうに法華經ほけきやうをうけたもてと

勸めしは是なり、此の山にしてもをこたらず候なり、今の經文の次下に
説いて云く我が滅度の後に於て応に此の經を受持すべし是の人・仏道
に於て決定して疑い有ること無けん」と云云、かかる者の弟子・檀那
とならん人人は宿縁ふかしと思つて日蓮と同じく法華經を弘むべきな
り、法華經の行者といはれぬる事

はや不祥なりまぬかれがたき身なり、彼のはんいちやうりやうまさす
みといはれたる者は名を・をしむ故にはぢを思ふ故に・ついに臆したるこ
とはなし、同じはぢなれども今生のはぢは・もののかずならず・ただ
後生のはぢこそ大切なれ、獄卒・だつえば懸衣翁が三途河のはたにて・い
しうをはがん時を思食して法華經の道場へまいり給うべし、法華經は
後生のはぢをかくす衣なり、經に云く裸者の衣を得たるが如し」云
云。

此の御本尊こそ冥途のいしやうなれ・よくよく信じ給うべし、をとこ

のはだへをかくさざる女あるべしや・子のさむさをあわれまざるをやあるべしや、釈迦仏・法華経はめやとの如くましまし候ぞ、日蓮をたすけ給う事・今生の恥をかくし給う人なり後生は又日蓮御身のはぢをかくし申すべし、昨日は人の上・今日は我が身の上なり、

花さけばこのみなり・よめのしうとめになる事候ぞ、信心をこたらずして南無妙法蓮華経と唱え給うべし、度度の御音信申しつくしがたく候ぞ、此の事寂日房くわしくかたり給へ。

九月十六日

日蓮花押

にちれんかおう

◆ 一一一

新尼御前御返事あまごぜんごへんじ

文永十二年二月 五

十四歳御作

904P

あまのり一ふくろ送り給ひ畢おわんぬ、又大尼御前あまごぜんよりあまのり畏かしこまり入つて候、此の所をば身延うきしまの嶽たけと申もうす駿河するがの国は南にあたりたり彼の国の浮島うきしまがはらの海ぎはより此の甲斐かいの国・波木井はきりの郷・身延みねの嶺みねへは百余里に及ぶ、余の道せんり・千里せんりよりもわづらはし、富士河と申もうす日本第一にほんだいいちのははやく河・北より南へ流れたり、此の河は東西は高山こうざんなり谷深く左右さうは大石にして高き屏風を立て並べたるがごとくなり、河の水は筒の中に強兵がつぼうが矢を射出したるがごとし、此の河の左右さうの岸をつたい、或あるは河を渡りわた、或時あるは河はやく石多ければ舟破われて微塵みじんとな

る、かかる所をすぎゆきて身延の嶺と申す大山あり、東は天子の嶺・南は鷹取りの嶺・西は七面の嶺・北は身延の嶺なり、高き屏風

を四ついたてたるがごとし、峯に上つてみれば草木森森たり谷に下つて

たづぬれば大石連連たり、大狼の音・山に充満し☆猴のなき谷にひびき

鹿のつまをこうる音あはれしく蟬のひびきかまびすし、春の花は夏にさ

き秋の葉は冬になる、たまたま見るものはやまかつがたき木をひろう

すがた時時とぶらう人は昔なれし同朋なり、彼

の商山の四皓が世を脱れし心ち竹林の七賢が跡を隠せし山もかくやあ

りけむ、峯に上つて・わかめやをいたると見候へば・さにてはなくして・わ

らびのみ並び立ちたり、谷に下つてあまのりや・をいたると尋ぬれば、あ

やまり

てや・みるらん・せりのみしげり・ふしたり、古郷の事はるかに思いわす

れて候いつるに今・此のあまのりを見候いてよしなき心をもひいでて・うくつらし、かたうみいちかはこみなとの磯のほとりにて昔見しあまのりなり、色形あぢわひもかはらず、など我が父母ふぼかはらせ給たまいけんと・かたちがへなる・うらめしさ・なみだをさへがたし。

此これは・さて・とどめ候いぬ、但大尼御前あまごせんの御本尊ごほんぞんの御事おんことおほせつかはされて・おもひわづらひて候、其そのの故ゆえは

此の御本尊は天竺より漢土へ渡り候いし・あまたの三蔵漢土より月氏へ
入り候いし人人の中にもしるしをかせ給はず、西域慈恩伝燈録等の
書どもを開き見候へば五天竺の諸国の寺寺の本尊皆しるし尽して渡す、
又漢土より日本に渡る聖人日域より漢土へ入る賢者等のしるされて
候、寺寺の御本尊皆かんが食し日本国最初の寺・
元興寺・四天王寺等の無量の寺寺の日記、日本紀と申すふみより始め
て多くの日記にのこりなく註して候へば其の寺寺の御本尊又かくれな
し、其の中に此の本尊はあへてまします。

人疑つて云く経論になきかなければこそそこの賢者等は画像
にかき奉り木像にもつくりたてまつらざるらめと云云、而れども経文
は眼前なり御不審の人人は経文の有無をこそ尋ぬべけれ、前代につく
りかかぬを難ぜんと・をもうは僻案なり、例せば釈迦仏は悲母孝養の

ために☆利天とまりてんに隠れさせ給たまいたりしをば一閻浮提えんぶだいの一切いっさい

の諸人しよにんしる事なし、但目蓮尊者そんじや一人此これをしれり此これ又仏おんちからの御力なりと云云、仏法ぶつぽうは眼前がんぜんなれども機きなければ顯あらわれず時ときいたらざればひろまらざる事・法爾ほうにの道理どうりなり、例せば大海たいかいの潮うしおの時ときに隨したがつて増減ぞうげんし上天じようげの月つきの上下じようげにみちかくるがごとし。

今・此この御本尊ごほんぞんは教主きようしゆしやくそん釈尊ごひやくじんてんどう・五百塵点劫しんちゆうより心中しんちゆうにをさめさせ給たまいて世よに出現しゆつげんせさせ給たまいても四十余年よんじゅうよねん・其その後又法華經ほけきやうの中なかにも迹門しやくもんはせすぎて宝塔品ほうとうぼんより事をこりて寿量品じゆりやうぼんに説とき顯あらわし神力品じんりきぼん・属累ぞくるいに事き極きくまりて候まちいしが、金色世界せかいの文殊師もんじゆ・利兜史とした多天宮たみくの弥勒菩薩みろくぼさつ・補陀落山ふだらくさんの觀世音かんぜおん・日月にちがつ・淨明じやうめい・徳仏とくぶつの御弟子おんでしの藥王菩薩やくおうぼさつ等の諸大士しよだい・我われも我もと望たみ給たまいしかども叶こはず、是等これらは智慧ちえいみじく才学さいがくある人ひと人とは・ひびけども・いまだ法華經ほけきやうを学まなする日ひあ

さし学も始なり、末代まつだいの大難忍だいにんしのびがたかるべし、我ご五百塵点劫ひやくじんでんごうより大地だいち
の底にかくしをきたる真まの弟子でしあり・此これにゆづるべしとて、上行菩薩じやうぎやうぼさつ
等を涌出品ゆじゆつぽんに召し出いださせ給たまいて、法華經ほけきやうの本門ほんもんの肝心かんじんたる妙法蓮華經みやうほうれんげきやう
の五字ごじをゆづらせ給たまいて、あなかしこ・あなかしこ・我が滅度めつどの後・正法しやうほう
一千年・像法やうほう一千年に弘通くつうすべからず、末法まつほうの始に

謗法の法師一閻浮提に充滿して諸天いかりをなし彗星は一天にわたらせ大地は大波のごとくをどらむ、大旱魃・大火・大水・大風・大疫病・大飢饉・大兵乱等の無量の大災難並びをこり、一閻浮提の人人・各各・甲冑をきて弓杖を手ににぎらむ時、諸仏・諸菩薩・諸大善神等の御力の及ばせ給わざらん時、諸人皆死して無間地獄に墮ること雨のごとくしげからん時、此の五字の大曼荼羅を身に帶し心に存せば諸王は国を扶け万民は難をのがれん、乃至後生の大火災を脱るべしと仏記しをかせ給いぬ、而るに日蓮上行菩薩にはあらねどもほほ兼てこれをしれるは彼の菩薩

の御計らいかと存じて此の二十余年が間此れを申す、此の法門弘通せんには如来現在猶多怨嫉・況滅度後・一切世間・多怨難信と申して第一のかたきは国主並びに郡郷等の地頭・領家・方民等なり、此れ又第

二・第三の僧侶がうったへについて行者を、或は悪口し、或は罵詈し、或は刀杖等云云。

而るを安房の国・東条の郷は辺国なれども日本国の中心のごとし、其の故は天照太神・跡を垂れ給へり、昔は伊勢の国に跡を垂れさせ給いてこそありしかども、国王は八幡・加茂等を御帰依深くありて天照太神の御帰依浅かりしかば、太神・禰りおぼせし時・源右將軍と申せし人・御起請文をもつてあをかの小大夫に仰せつけて頂戴し・伊勢の外宮にしるびをさめしかば太神の御心に叶はせ給いけるかの故に日本を手ににぎる將軍となり給いぬ、此の人東条の郡を天照太神の御栖と定めさせ給う、されば此の太神は伊勢の国にはをはしまさず安房の国・東条の郡にすませ給うか、例えば八幡大菩薩は昔は西府にをはせしかども、中比は山城の国男山に移り給い、今は相州鎌倉鶴

が岡に栖すみ給たまうこれも・かくのごとし。

日蓮にちれんは一閻浮提えんぶだいの内日本にほんこく安房あわの国・東条とうじょうの郡に始めて此しの正法しょうぼうを弘通くわつうし始めたり、随したがつて地頭敵じとうかたきとなる彼の者すでに半分ほろびて今半分あり、領家りやうけはいつわりをろかにて・或時あるは信じ・或時あるはやぶる不定ふじようなりしが日蓮にちれん御勘氣ごかんきを蒙こもりし時すでに法華經ほけきやうをすて給たまいき、日蓮にちれん先よりけさんのついでごとに難信難解なんしんなんげと申せしはこれなり、

にちれん 日蓮が重恩じゅうおんの人なれば扶たすけたてまつらんとために此この御本尊ごほんぞんをわたし
たてまつ 奉るならば十羅刹じゅうらせつ定めて偏頗へんげの法師ほっしとをぼしめされなん、又また経文きやうもんの
ごとく不信ふしんの人に・わたしまいらせずば日蓮偏頗にちれん へんげはなけれども尼御前あまごぜん
我が身のとがをば・しらせ給たまはずしてうらみさせ給たまはんずらん、此この
由よしをば委細いさいに助阿闍梨すけのあじやりの文にかきて候ぞ召して尼御前あまごぜんの見参みさんに入れ
させ給たまうべく候。

御事おんことにをいては御一味いちみなるやうなれども御信心しんじんは色あらわれて候、
さどの国こくと申し此このの国と申し度度たびたびの御志いみじありてたゆむけしきはみへ
させ給たまはねば御本尊ごほんぞんは・わたしまいらせて候なり、それも終ついにはいかん
がとをそれ思おもう事・薄氷うすらいをふみ太刀に向むかうがごとし、くはしくは又又
申もうすべく候、そのみならずかまくらにも御勘氣ごかんきの時・
千が九百九十九人は墮おちて候人ひと人も・いまは世間せけんやわらぎ候かのゆへに

くゆる人^{ひと}人も候^もと申^{もう}すげに候^もへども此^これはそれには似^にるべくもなくいか
にもふびんには思^{おも}いまいらせ候^もへども骨^{ほね}に肉^{にく}をば・かへぬ事^{こと}にて候^もへば
法^ほ華^け經^{きやう}に相^{そう}違^いせさせ給^{たま}い候^もはん事^{こと}を叶^{かな}うまじき由^{よし}いつまでも申^{もう}し候^もべく
候^も、恐^{きやう}恐^{きやう}謹^{きん}言^{げん}。

二月十六日

新尼御前御返事^{あまごぜんごへんじ}

日蓮花押^{にちれんかおう}

ごくそつえんま王の長は十丁ばかり面はすをさし眼まなこは日月にちがつのごとく
齒はまんぐわのねのやうにくぶしは大石のごとく大地だいちは舟を海にうかべ
たるやうに・うごき・声はらいのごとく・はたはたとなりわたらむには・
よも南無なむ妙法蓮華經みょうぼうれんげきやうとは・をほせ候はじ、日蓮にちれんが弟子でしにも・をはず
よくよく・内をしたためて・をほせをかほり候そうらはん、なづきをわりみをせ
めて・いのりてみ候そうらはん、たださきの・いのりと・をぼしめせ、これより後
は・のちの事をよくよく御かため候へ 恐恐きようきよう。

九月二十日

日蓮にちれん在御

大尼御前御返事あまごぜんごへんじ

◆ 一一三

種種御振舞御書

建長二年五十五歳御作

与光日房

於 身延

909P

去ぬる文永五年後の正月十八日・西戎・大蒙古国より日本国を。
そうべきよし牒状をわたす、日蓮が去ぬる文応元年庚申に勘えたりし
立正安国論今すこしもたがわず符合しぬ、此の書は白樂天が樂府にも
越へ仏の未来記にもをとらず末代の不思議なに事かこれにすぎん、
賢王・聖主の御世ならば日本第一の権状にもをこなわれ現身に大師号
も・あるべし定めて御たづねありていくさの僉義をもいるあわせ調伏な
んども申しつけられぬらんと・をもひしに其の義なかりしかば其の年の
末十月に十一通の状をかきて・かたがたへをどろかし申す、国に賢人な

ண்டும்・あるならば不思議なる事かな・これはひとへにただ事にはあらず、天照太神・正八幡宮の此の僧について日本国の

たすかるべき事を御計らいのあるかと・をもわるべきに・さはなくて・或は使を悪口し・或はあざむき・或はとりも入れず・或は返事もなし・或は返事をなせども上へも申さずこれひとへにただ事にはあらず、設に日蓮が身の事なりとも国主となりまつり事をなさん人人は取りつぎ申したらんには政道の法ぞかし、いわうや・この事は上の御大事いできらむのみならず各各の身にあたりて・をほいなるなげき出来すべき事ぞかし、而るを用うる事こそなくとも悪口まではあまりなり、此れひとへに日本国の上下万人・一人もなく法華經の強敵となりてとしひさしくなりぬれば大禍のつもり大鬼神の各各の身に入る上蒙古国の牒状に正念をぬかれてくるうなり、例せば段の紂王・比干と

いるし者いさめをなせしかば用もちいずして胸をほり周の文武王にほろぼされぬ、呉王は伍子しよがいさめを用もちいず自害じがいをせさせしかば越王勾踐こうせんの手にかかる、これもかれがごとなるべきかと・いよいよ・ふびんに・をぼへて名をもをしまず命をもすて強盛じやうじやうに申しはりしかば風・大なれば波・大なり竜・大なれば雨たけきやうに・いよいよ・あだを

なし・ますますにくみて御評定に僉議あり、頸をはぬべきか鎌倉を・を
わるべきか弟子・檀那等をば所領あらん者は所領を召して頸を切れ
・或はろうにてせめ・あるいは遠流すべし等云云。

日蓮悦んで云く本より存知の旨なり、雪山童子は半偈のために身を
なげ常啼菩薩は身をうり善財童子は火に入り樂法梵士は皮をはぐ
薬王菩薩は皆をやく不輕菩薩は杖木をかうむり師子尊者は頭をはね
られ提婆菩薩は外道にころさる、此等はいかなりける時ぞやと勘うれ
ば天台大師は時に適うのみ」とかかれ章安大師は取捨宜きを
得て一向にすべからず」としるされ、法華経は一法なれども機にしたが

ひ時によりて其の行万差なるべし、仏記して云く我が滅後・正像二千
年すぎて末法の始に此の法華経の肝心題目の五字計りを弘めんもの
出来すべし、其の時惡王・惡比丘等・大地微塵より多くして・或大乘

或はある小乗等をもつて・きそはんほどに、此の題目だいもくの行者ぎやうじやに

せめられて在家ざいけの檀那等だんなをかたらひて・或はあるのり・或はあるうち・或はあるろうに

入れ・或はある所領を召し・或はある流罪・或はある頸をはぬべし、などいふとも退転たいてん

なく・ひろむるほどならば・あだをなすものは国主こくしゅは・どし打ちをはじめ

餓鬼がきのごとく身をくらひ後には他国たこくよりせめらるべし、これひとへに

梵天ぼんてん・帝釈たいしやく・日月にちがつ・四天等してんの法華經ほけきやうの敵なる国を他国たこくより責め

させ給たまうなるべし」ととかれて候ぞ、各各・我が弟子でしとなのらん人人ひとびとは

一人もをくしをもはるべからず、をやを・をもひ・めこを・をもひ所領しよりやうを

かへりみるこゝなかれ、無量劫むりやうこつより・このかた・をやこのため所領しよりやうのため

に命すてたる事は大地だいち微塵みじんよりも・をほし、法華經ほけきやうのゆへには・いまだ

一度もひとたびすてず、法華經ほけきやうをばそこばく行ぜしかども・かかる事出来しゅつだいせしか

ば退転たいてんしてやみにき、譬たとえばゆをわかつて水に入れ火を切るにとげざ

るがごとし、各各思ひ切り給へ此の身を法華經にかうるは石に金をかへ糞に米をかうるなり。

仏滅後・二千二百二十余年が間・迦葉・阿難等・馬鳴・竜樹等・南岳・天台等・妙樂・伝教等だにも・いまだひろめ給わぬ法華經の肝心・諸仏の眼目たる妙法蓮華經の五字・末法の始に一閻浮提にひろまらせ給うべき瑞相に日蓮さきがけしたり、わたうども二陣三陣つづきて迦葉・阿難にも勝ぐれ天台・伝教にもこへよかし、わづかの小島のぬしらがをどさんを・をぢては閻魔王のせめをばいかんがすべき、仏の御使と・なのりながら・をくせんは無下の人人なりと申しふくめぬ、さりし程に念仏者・持斎・真言師等・自身の智は及ばず訴状も叶わざれば上郎・尼ごぜんたちに・

とりつきて種種にかまへ申す、故最明寺入道殿・極樂寺入道殿を無間

地獄に墮ちたりと申し建長寺・寿福寺・極樂寺・長樂寺・大仏寺等をやりきはらへと申し道隆上人・良觀上人等を頸をはねよと申す、御評定になにとなくとも日蓮が罪禍まぬかれがたし、但し上件の事・一定申すかと召し出てたづねらるべしとて召し出だされぬ、奉行人の

云く上のをほせ・かくのごとしと申せしかば・上件の事・一言もたがはず申す、但し最明寺殿・極樂寺殿を地獄という事は・そらごとなり、此の法門は最明寺殿・極樂寺殿・御存生の時より申せし事なり。

詮ずるところ、上件の事どもは此の国を・をもひて申す事なれば世を安穩にたもたんと・をばさば彼の法師ばらを召し合せて・きこしめせ、さなくして彼等にかわりて理不尽に失に行わるるはどならば国に後悔あるべし、日蓮・御勘気をかほらば仏の御使を用いぬになるべし、梵天・帝釈・日月・四天の御とがめありて遠流・死罪の後・百日・

一年・三年・七年が内に自界叛逆難とて此の御一門いちもんどしうちはじめるべし、其その後は他国侵逼難とて四方しほうより・ことには西方さいほうよりせめられさせ給たまうべし、其そのの時後悔こうかいあるべしと平左衛門尉さへもんじように申し付けしかども太攻たこう入道にゅうどうのくるひしやうに・すこしもはばかり事なく物にくるう。

去文永八年太歳庚申辛かのとひつじ 未九月十二日・御勘氣ごかんきをかはる、其そのの時ときの御勘氣ごかんきのやうも常ならず法にすぎてみゆ、了行りようこうが謀反を・をこし大夫たゆうの律師りっしが世をみださんと・せしを・めしとられしにもこえたり、平左衛門尉さへもんじよう・大将として数百人の兵者つわものにどうまろきせてゑぼうしかけてして眼まなこをいからし声をあらうす、大体だいたい・事の心を案ずるに太政入道にゅうどうの世をとりながら国をやぶらんとせしにいたり、ただ事ともみへず、日蓮にちれんこれを見てをもうやう日ごろ月ごろ・をもひまう

けたりつる事はこれなり、さいわひなるかな法華經ほけきようのために身をすてん
事よ、くさきかうべをはなたれば沙さいしに金こがねをか合あ右みぎに珠たまをあきなへるがご
とし、さて平左衛門尉さえもののじようが一いつの郎從ろうじゆう・少輔房しょうぼうと申もうす者はしりよりて日蓮にちれん
が懷かい中ちゆうせる法華經ほけきようの第五の巻を取り出しておもてを三度さいなみて、
さんざんとうちちらす、又九卷ほけきようの法華經ほけきようを兵者つわものども

打ちちらして・あるいは足にふみ・あるいは身にまとひ・あるいはいたじ
き・たたみ等・家の二三間にちらさぬ所もなし、日蓮にちれん・大高聲おほこゑを放ちて
申もうすあらをもしろや平左衛門尉さえもののじようが・ものにくるうを見よ、とのぼら但今
・日本にほん国の柱はしらをたをすと・よばはりしかば上下じやうげ万人ばんにんあわてて見えし、
日蓮にちれんこそ御勘氣ごかんきをかほれば・をくして見ゆべかりしに・さはな

くして・これはひがことなりとや・をもひけん、兵者つわものどものいろこそ・へん
じて見へしか、十日じふにち並びに十二日の間・真言宗しんこんしゆうの失とが・禪宗ぜんしゆう・念仏ねんぶつ等・

りようかん

良観が雨ふらさぬ事・具さに平左衛門尉に・いるきかせてありしに・或

はどつとわらひ・或はいかりなんと・せし事どもはしげければ・しるさ

ず・せんずるところは六月十八日より七月四日まで良観が雨の

りようかん

いのりして日蓮に支へられてふらしかね・汗をながし・なんだのみ下して

くだ

雨ふらざりし上・逆風ひまなくてありし事・三度まで・つかひをつかわし

て一丈のほりを・こへぬもの十丈・二十丈のほりを・こうべきか、いづみし

きぶいろごのみの身にして八斎戒にせいせるうたをよみて雨をふらし、

能因法師が破戒の身として・うたをよみて天雨

てんう

を下らせしに、いかに二百五十戒の人人・百千人あつまりて七日二七日

ふら

ひとびと

せめさせ給うに雨の下らざる上に大風は吹き候ぞ、これをもつて存ぜ

たま

ふら

たいふう

させ給へ各各の往生は叶うまじきぞとせめられて良観がなきし事・

たま

おうじよう

かな

りようかん

人人につきて通せし事・二に申せしかば、平左衛門尉等かたうどし・か

ひとびと

さえもののじよう

なすして・つまりふしし事どもはしげればかかず。

さては十二日の夜・武蔵守殿むさしのかみのあづかりにて夜半に及び頸を切らんがために鎌倉かまくらをいでしに・わかみやこうちにうちいでて四方しほうに兵のうちつつみて・ありしかども、日蓮にぢれん云く各各さわがせ給うなべちの事はなし、八幡大菩薩はちまんだいばさつに最後さいごに申すべき事ありとて馬うまよりさしをりて高声こうせいに申すやう、いかに八幡大菩薩はちまんだいはまことの神か和氣清丸きよまるが

頸を刎られんとせし時は長一丈の月と顯あらわれさせ給たまい、伝教大師の
法華經ほけきようをかうぜさせ給たまいし時はむらさきの袈裟けさを御布施みふせにさづけさせ
給たまいき、今日蓮いまにちれんは日本第一にほんだいいちの法華經ほけきようの行者ぎようじやなり其の上そ・身に一分いちぶんのあ
やまちなし、日本国にほんこくの一切衆生の法華經ほけきようを謗ぼうじじて無間むげん・大城だいいじやうにおつべ
きを・たすけんがために申す法門ほうもんなり、又大蒙古国だいもうこくより・この国をせむ
るならば天照太神てんしやう おおみかみ・正八幡しょうはちまんとても安穩あんのんにおはすべきか、其の上そ・
釈迦仏しゃかぶつ・法華經ほけきようを説き給たまいしかば多宝仏たほうぶつ・十方じゅうぽう
の諸仏しよぶつ・菩薩ぼさつあつまりて日と日と月と月と星と星と鏡と鏡とをならべた
るがごとくなりし時、無量の諸天むりやう しよてん並びに天竺てんじく・漢土かんど・日本国にほんこく等の善神ぜんじん・
聖人しょうにんあつまりたりし時、各各ほけきよう・法華經ほけきようの行者ぎようじやにをろかなるまじき由の
誓状せいじやうまいらせよと・せめられしかば一に御誓状みせいじやうを立てられしぞかし、
さるにては日蓮にちれんが申すまでもなし・いそぎいそぎこそ誓状せいじやう

の宿願をとげさせ給^{たま}うべきに・いかに此^{この}の処^{ところ}には・をちあわせ給^{たま}はぬぞ
と・たかだかと申^{もう}す、さて最後^{さいご}には日蓮^{にちれん}・今夜^{こんや}・頸切^{りょうぜん}られて靈山淨土^{じょうど}へ・
まいりてあらん時はまづ天照太神^{てんしやうだいじん}・正八幡^{しょうはちまん}こそ起請^{きしやう}を用いぬかみにて
候^{そうら}いけれとさしきりて教主釈尊^{きやうしゆしやくそん}に申^{もう}し上げ候^{そうら}はんずるぞいたしと・お
ぼさば・いそぎいそぎ御計^{ごけい}らいあるべしとて又馬^{うま}にのりぬ。

ゆいのはまに・うちいでて御りやうのまへに・いたりて又云^いくしぼし・と
のばら・これにつぐべき人ありとて、中務三郎左衛門尉^{さへもんのかみ}と申^{もう}す者のもと
へ熊王^{くまわう}と申^{もう}す童子^{どうじ}を・つかわしたりしかば・いそぎいでぬ、今夜頸切^{りょうぜん}られ
へ・まかるなり、この數年が間・願^{ねが}いつる事これなり、此^{この}の娑婆世界^{しやばせかい}にして
・きじとなりし時は・たかにつかまれ・ねずみと

なりし時は・ねこにくらわれき、或^{ある}はめこのかたきに身を失^{うしな}いし事・
大地微塵^{だいぢみじん}より多し、法華經^{ほけきやう}の御^みためには一度^{ひとたび}だも失^{うしな}うことなし、され

ば日蓮貧道の身と生れて父母の孝養・心にたらず国の恩を報ずべき力
なし、今度額を法華經に奉りて其の功德を父母に回向せん其のあまり
は弟子・檀那等にはぶくべしと申せし事これなりと申せしか

ば、左衛門尉・兄弟四人・馬の口にとりつきて・こしごへたつの口にゆき
ぬ、此にてぞ有らんずらんと・をもうとところに案にたがはず兵士ども
ちまはり・さわぎしかば、左衛門尉申すやう只今なりとなく、日蓮
申すやう不かく

のとのばらかな・これほどの悦よろこびをば・わらへかし、いかに・やくそくをば・たがへらるるぞと申せし時、江のしまのかたより月のごとく・ひかりたる物まりのやうにて辰巳のかたより戌いぬい亥のかたへ・ひかりわたる、十二日の夜のあけぐれ人の面も・みへさりしが物のひかり月よのやうにて人人ひとひとの面もみなみゆ、太刀取目くらみ・たふれ臥ふし

兵共おぢ怖れ・けうさめて一町計ばかりはせのき、或あるは馬より・をりて・かしこまり・或あるは馬の上にて・うづくまれるもあり、日蓮申にぢれんもうすやう・いかにとのばら・かかる大根ある召人にはとをのくぞ近く打ちよれや打ちよれやと・たかだかと・よばわれども・いそぎよる人もなし、さてよあけば・いかにいかに頸切べくはいそぎ切るべし夜明けなばみぐるしかりなんと・すすめしかども・とかくのへんじもなし。

はるか計ばかりありて云いわくさがみのえちと申もうすところへ入らせ給たまへと

申す、此れは道知る者なし・さきうちすべしと申せどもうつ人もなかりしかば・さてやすらうほどに・或^{ある}如来^{によらい}の云^いく・それこそその道^{みち}にて候^{そうら}へと申せしかば道にまかせてゆく、午の時計^{ばか}りにえちと申すところへ・ゆきつきたりしかば本間六郎左衛門^{さえもん}がいへに入りぬ、さけとりよせて・もののふどもに・のませてありしかば各かへるとて・かうべをうなたれ手をあさへて申^{もう}すやう、このほ

どは・いかなる人にてや・をはすらん・我等^{われら}がたのみて候^{そうら}・阿弥陀^{あみだ}仏^{ぶつ}をそしらせ給^{たま}うと・うけ給^{たま}われれば・にくみまいらせて候^{そうら}いつるに・まのあたりをがみまいらせ候^{そうら}いつる事どもを見て候^{そうら}へば・たうとさに・としごろ申^{もう}しつる念仏^{ねんぶつ}はすて候^{そうら}いぬとて・ひうちぶくろよりすずとりいだして・すつる者あり、今は念仏^{ねんぶつ}申^{もう}さじと・せいじやうをたつる者もあり、六郎左衛門^{さえもん}が郎從^{ろうじゅう}等・番をばうけとりぬ、さえもんのじようも・かへりぬ。

其その日の戌の時計ばかりにかまくらより上の御使おんつかいとてたてぶみをもちて
来ぬ、頸切れという・かさねたる御使おんつかいかと・もののふどもは・をもひてあ
りし程に六郎左衛門さえもんが代官右馬のじようと申もうす者・立ぶみもちて・はし
り来りひざま・つひて申もうす、今夜にて候べし・あらあさましやと存じて
候そうらいつるに・かかる御悦よろこびの御ふみ来りて候、武蔵守殿むさしのかみは

今日・卯の時にあたみの御ゆへ御出で候へば・いそぎ・あやなき事もやと
・まづこれへはしりまいりて候と申す、かまくらより御つかいは二時には
しりて候、今夜の内にあたみの御ゆへ・はしりまいるべしとて・まかりいで
ぬ、追状に云く此の人はとがなき人なり今しばらくありてゆゑ・るさせ
給うべし・あやまちしては後悔あるべしと云云。

其の夜は十三日・兵士ども数十人・坊の辺り並びに大庭になみゐて
候いき、九月十二百の夜なれば月・大に・はれてありしに夜中に大庭に
立ち出でて月に向ひ奉りてこ自我偈少少よみ奉り諸宗の勝劣・法華經
の文あらあら申して抑・今の月天は法華經の御座に列りまします名
月天子ぞかし、宝塔品にして仏勅をうけ給い囑累品にして仏に頂を
なでられまいらせ・世尊の勅の如く当に具に奉行すべし」と誓状をたて
し天ぞかし、仏前の誓は日蓮

なくば虚むなしくてこそをはすべけれ、今かかる事出来しゅたいせばいそぎ悦よろこびをなし
て法華經ほけきょうの行者ぎやうじやにも・かはり仏勅ぶつちやくをも・はたして誓言せいごんのしるしをばとげ
させ給たまうべし、いかに今しるしのなきは不思議ふしぎに候ものかな、何いかなる事
も国になくしては鎌倉かまくらへもかへらんとも思はず、しるしこそなくとも・う
れしがをにて澄渡わたらせ給たまうはいかに、大集經だいしききょうには 日月明にちがつを現げんぜず」と
とかれ、仁王經にんのうききょうには 日月度にちげつどを失うしなう」とかかれ、最勝王經さいしょうおうききょうには『三十三
天各隕恨うらみを生ず』
とこそ見え侍はべるに・いかに月天がつてんいかに月天がつてんとせめしかば、其そのしるしにや
天より明星こせいの如ごとくなる大星だいせい下りて前の梅の木うめの杖えいに・かかりてありしか
ば・もののふども皆みなえんより・とびをり・或あるは大庭おほにわにひれふし・或あるは家の
うしろへにげぬ、やがて即すなわち天あめかきくもりて大風たいふう吹き来りて江の島のな
るとて空のひびく芋大いもなるつづみを打うつがごとし。

夜明れば十四日卯の時に十郎入道にゅうどうと申すもうもの来りて云く・昨日の夜の戌の時計はかりにかうどのに大なるさわぎあり、陰陽師おんようしを召して御うらなひ候そうらへば申せしは大おおに国みだれ候べし・此の御房御勘氣ごぼうごかんきのゆへなり、いそぎいそぎ召しかえさずんば世の中いかが候べかるらんと申せば、ゆりさせ給たまへ候と申す人もあり、又百日の把に軍あるべしと申しつれば・それもうを待つべしとも申す、依智えちにして二十余日・其の間鎌倉かまくらに或あるは火をつくる事・七八度・或あるは人

をころす事ひまなし、讒言ざんげんの者共の云く日蓮にちれんが弟子共でしの火をつくるなりと、さも・あるらんとて日蓮にちれんが弟子等でしを鎌倉かまくらに置くべからずとて二百六十余人しるさる、皆遠島みなへ遣すべしろうにある弟子共でしをば頸をはねらるべしと聞ふ、さる程に火をつくる等は持斎じさい念仏ねんぶつ者が計事けいじなり其その余はしげければかかず。

同十月十日に依智えちを立つて同十月二十八日に佐渡さどの国つぎ・箸ぬ、十一月一日に六郎左衛門さえもんが家のうしろ塚原むらと申す山野やまのの中に洛陽らくようの蓮台れんだい野のやうに死人しにんを捨つる所に一間四面しめんなる堂の仏もなし、上はいたまあはず四壁はあばらに雪ふりりて消ゆる事なし、かかる所にしきがは打ちしき養みのうちきて夜をあかし日をくらす、夜は雪雹雷電ゆきあられいなずま

ひまなし昼は日の光もささせ給たまはず心細かるべきすまるなり、彼の李陵りりようが胡国ここくに入りて巖窟いんくつに・せめられし法道三蔵ほうどうさんざうの徽宗皇帝きそうこうていに・せめられて

かお

面かおにかなやきをさされて江南にはなたれしも只今とおぼゆ、あらうれ

しや檀王だんおう

は阿私仙人あしせんじんに・せめられて法華經ほけきょうの功德くどくを得給たまいき、不輕ふきやう

菩薩ぼさつ

は上慢じやうまんの比丘等びくの杖じやうにあたりて一乗いちじやうの行者ぎやうじやといはれ給たまふ、今日蓮いまにちれん

は末法まっぽうに生れて妙法蓮華經みやうほうれんげきやうの五字ごじを弘ひろめて・かかるせめにあへり、

仏滅度後ぶつめつとご・二千二百余年が間・恐らくは

天台智者大師てんだいちしやだいしも一切世間いっさいせけん・多怨難信たおんなんしんの經文きやうもんをば行たまじ給たまはず

数数見擯出さくさくけんひんずいの明文めいぶんは但日蓮にちれん一人なり、一句一偈いっくいちげ・我皆与授記みなじゆきは我なり

阿耨多羅三藐三菩提あうたろさんみやくさんぼだいは疑うたがいいなし、相模守殿さがみのかみこそ善知識ぜんちしきよ平左衛門さえもんこ

そ提婆達多だいばだつたよ念仏者ねんぶつは瞿伽利尊者くぎやりそんじや・持斎等じさいは善星比丘ぜんしやうびくなり、在世ざいせは今

にあり今は在世ざいせなり、法華經ほけきやうの肝心かんじんは諸法実相しよほうじつそうと・とかれて本末究竟ほんまつくきやう

等とのべられて候は是なり、摩訶止觀まかしかん第五ごに云く行解ぎやうげ既に勤つとめぬれば

三障・四魔さんしやう・紛然ふんぜんとして競きそい起おこる」文、又云く猪いのの金山きんざんを摺すり衆流しゆりうの

海に入り薪たきぎの火を熾さかんにし風の求羅ぐらを益やくすが如ごときのみ」等云云、釈しゃくの心
は法華經ほけきょうを教のごとく機きに叶かなひ時に叶かなうて解行げぎょうすれば七つの大事出来だいじしゅつたい
す、其その中に天子魔てんじまとて第六天だいろくてんの魔王まおう・或あるは国主こくしゅ・或あるは父母ふぼ・或あるは妻子さいし
・或あるは檀那だんな・或あるは惡人等あくにんについて・或あるは随したがつて法華經ほけきょうの行をさえ・或あるは達
してさうべき事なり、何れいすれの經をも行ぜよ仏法ぶつぽうを行ずるには分分に随したがつ
て留難るなんあるべし、其その中に法華經ほけきょうを行ずるには強盛かうじやうにさうべし、法華經ほけきょう
を・をしへ

の如く時機に當つて行ずるには殊に難あるべん、故に弘決の八に云く
君し衆生・生死を出でず仏乗を慕わずと知れば魔・是の人に於て猶
親の想を生す」等云云、釈の心は人・善根を修すれども念仏・真言・禪・
律等の行をなして法華經を行ぜざれば魔王親のおもひをなして人間に
つきて其の人をもてなし供養す世間の人に実の僧と思はせんが為なり、
例せば国主のたとむ僧をば諸人供養するが如し、されば国主等のかた
きにするは既に正法を行ずるに
てあるなり、釈迦如来の御ためには提婆達多こそ第一の善知識なれ、
今の世間を見るに人をよくなすものはかたうどよりも強敵が人をば・よ
くなしけるなり、眼前に見えたり此の鎌倉の御一門の御繁昌は義盛と
隠岐法皇まし

まさずんば争か日本の主となり給うべき、されば此の人人は此の御

一門いちもんの御ごためには第一だいいちのかたうどなり、日蓮にちれんが仏ぶつにならん第一だいいちのかたうどは景信かげのぶ・法師ほふしには良觀りようかん・道隆どうりゅう・道阿彌陀仏あみだぶつと平左衛門尉さへもんじよう・守殿かうどのましまさずんば争いかでか法華經ほけきようの行者ぎようじやとはなるべきと悦ぶ。

かくて・すぐす程に庭には雪つもりて・人もかよはず堂にはあらし風より外は・をとづるものなし、眼まなこには止觀しかん・法華ほつげをさらし口には南無なむ妙法蓮華經みようほうれんげきようと唱となへ夜は月星に向ひ奉りて諸宗しよしゅうの違目いもくと法華經ほけきようの深義じんぎを談だんずる程に年もかへりぬ、いづくも人の心のはかなさは佐渡さどの国の持斎じさい・念仏者ねんぶつの唯阿彌陀仏ただあみだぶつ・生喻房げうぼう・印性房いんしやうぼう・慈道房等じだうぼうの数百人より合あいて僉議せんぎすと承うけたまわる、聞きこふる阿彌陀仏あみだぶつの大怨敵おんてき・一切衆生いっさいしゆじやうの悪知識あくちしきの日蓮にちれん房ぼう・此の国にながされたり・なにと

なくとも此の国へ流しじゅうされたる人の始終しじういけらるる事なし、設たとひいけらるるとも・かへる事なし、又打ちころしたりとも御とがめなし、塚原と云

う所に只一人ありいかにがうなりとも力つよくとも人なき処なれば集
りていころ・せかしと云うものもありけり、又なにとなくとも頸を切ら
るべかりけるが守殿の御台所の御懷妊なれば・しばらく
きられず終には一定ときく、又云く六郎左衛門尉殿に申してきらずん
ば・はからうべしと云う、多くの義の中に・これについて守護所に数百人
集りぬ、六郎左衛門尉云く上より殺しまうすまじき副状下りてあなづ
るべき流人

にはあらず、あやまちあるならば重連が大なる失なるべし、それよりは
只法門にてせめよかしと云いければ念仏者等・或は浄土の三部經・或
は止觀・或は真言等を小法師等が頸にかけさせ・或はわきにはさませ
て正月十六日にあつまる、佐渡の国のみならず越後・越中・出羽・奥州
・信濃等の国国より集れる法師等なれば塚原の堂の大庭・山野
に数百人・六郎左衛門尉・兄弟一家さならぬもの百姓の入道等かず
をしらず集りたり、念仏者は口口に悪口をなし真言師は面面に色を
失ひ天台宗ぞ勝つべきよしを・ののしる、在家の者どもは聞ふる
阿弥陀仏のかたきよと・ののしり・さわぎ・ひびく事・震動雷電の如し、
日蓮は暫らく・さはがせて後・各各しつもらせ給へ・法門の御為にこそ御
渡りあるらめ悪口等よしなしと申せしかば・六郎左衛門を始めて諸人
然るべしとて悪口せし念仏者をば・そくびを

つきいだしぬ、さて止観・真言・念仏の法門一にかれが申す様を・でつ
しあげて承伏せさせては・ちやうとはつめつめ・一言二言にはすぎず、
鎌倉の真言師・禪宗・念仏者・天台の者よりも・はかなきものどもなれ
ば只思ひやらせ給へ・利剣をもて・うりをきり大風の草をなびかすが
如し、仏法のおろかなる・のみならず・或は自語相違し・或は経
をわすれて論と云ひ釈をわすれて論と云ふ、善導が柳より落ち弘法
大師の三鉢を投たる大日如来と現じたる等をば・或は妄語・或は物にく
るへる処を一一にせめたるに、或は悪口し・或は口を閉ぢ・或は色を
失ひ・或は念仏ひが事なりけりと云うものもあり、或は当座に袈裟・
平念珠をすてて念仏申すまじきよし誓状を立つる者もあり。

皆人立ち歸る程に六郎左衛門尉も立ち歸る一家の者も返る、日蓮
不思議一云はんと思ひて六郎左衛門尉を大庭よりよび返して云くいつ

か鎌倉^{かまくら}へのぼり給^{たま}うべき、かれ答えて云^いく下人共に農せさせて七月の比
と云云、日蓮^{にちれん}云く弓^{きゅう}箭^{うせん}とる者は・を・をやけの御大事^{だいじ}にあひて所領^{しよりょう}を
も給^{たま}わり供をこそ田畠^{でんぱた}つくるとは申せ、只今^{ただ}いくさのあらん

ずるに急ぎうちのぼり高名して所知^{しよち}を給らぬか、さすがに和殿原はさ
がみの国には名ある侍ぞかし、田舎^{いなか}にて田つくり・いくさに・はづれたら
んは恥^{はじ}なるべしと申せしかば・いかにや思^{おも}いけめあはててもものもいはず、
念仏^{ねんぶつ}者・

持齋・在家の者どもも・なにと云う事ぞやと恠しむ。

さて皆歸りしかば去年の十一月より勘えたる開目抄と申す文二卷造りたり、頸切るるならば日蓮が不思議とどめんと思いて勘えたり、此の文の心は日蓮によりて日本国の有無はあるべし、譬へば宅に柱なければ・たもたず人に魂なければ死人なり、日蓮は日本の人の魂なり平左衛門既に日本の柱をたをしぬ、只今世乱れてそれと

もなく・ゆめの如くに妄語出来して此の御一門どうちして後には他国よりせめらるべし、例せば立正安国論に委しきが如し、かやうに書き付けて中務三郎左衛門尉が使にとらせぬ、つきたる弟子等もあらぎかなと思へども力及ばざりげにてある程に、二月の十八日に島に船つく、鎌倉に軍あり京にもあり・そのやう申す計りなし、六郎左衛門尉・其の夜にはやふねをもつて一門相具してわたる日蓮にたな心を合せて・たす

けさせ給へ去る正月十六日の御言いかにやと此程疑い申しつるにい

くほどなく三十日が内にあひ候いぬ、又蒙古国も一定渡り候いな

ん、念仏・無間地獄も一定にてぞ候はんずらん永く念仏申し候まじと

申せしかば、いかに云うとも相模守殿等の用ひ給はざらんには日本国

の人用うまじ用るずば国必ず亡ぶべし、日蓮は幼若の者なれども

法華経を弘むれば釈迦仏の御使ぞかし、わづかの天照太神・正八幡な

んど申すは此の国には重けれども梵釈・日月・四天に対すれば小神

ぞかし、されども此の神人などをあやまちぬれば只の人を殺せるには

七人半なんと申すぞかし、太政入道・

隠岐法皇等のほろび給いしは是なり、此れはそれにはにるべくもなし

教主釈尊の御使なれば天照太神・正八幡宮も頭をかたぶけ手を合せ

て地に伏し給うべき事なり、法華経の行者をば梵釈・左右に侍り月月

前後ぜんごを照てらし給たまふ、

かかる日蓮にちれんを用もちいぬるともあしくうやまはば国亡ぶべし、何いかに況や數百
人にくませ二度まで流しぬ、此の国の亡びん事うたがい疑うたがいいなるべけれど
も且しばらく禁をなして国をたすけ給たまへと日蓮にちれんがひかうればこそ今までは
安穩あんのんにありつれども・はうに過すぐれば罰あたりぬるなり、又此の度も用
ひずば大蒙古国より打手だいもうこくを向けて日本国にほんこくほろぼさるべし、

ただ平左衛門尉さへものじょうが好むわざわひなり、和殿原とても此の島とても安穩あんのんなるまじきなりと申せしかば、あさましげにて立歸りぬ、さて在家ざいけの者ども申しけるは、此の御房ごぼうは神通じんつうの人にてましますか・あらおそろし・おそろし、今は念仏者ねんぶつをも・やしなひ持斎じさいをも供養くようすまじ、念仏者・良觀りょうかんが弟子でしの持斎等じさいが云く此の御房ごぼうは謀叛むほんの内に入りたりけるか、さて且くありて世間せけんしつまる。

又念仏者ねんぶつ集りて僉議せんぎす、かうてあらんには我等われらかつえしぬべし・いかにもして此の法師ほっしを失はばや、既に国すでの者も大体だいたいつきぬ・いかんがせん、念仏者ねんぶつの長者ちようじやの唯阿弥陀仏ただあみだぶつ・持斎じさいの長者ちようじやの性論房しょうゆぼう・良觀りょうかんが弟子でしの道觀等だうくわん・鎌倉かまくらに走り登りて武蔵守殿むさしのかみに申す、此の御房ごぼう・島に候ものならば堂塔どうとう一字も候べからず僧一人も候まじ、阿弥陀仏あみだぶつをば、或は火あるに入れ・或は河あるにながす、夜もひるも高き山に登りて日月にちがつに向つて大音声おんじようを

放つて上を呪咀し奉る、其の音声・

一国に聞ふと申す、武蔵前司殿・是をきき上へ申すまでも・あるまじ、

先ず国中のもの日蓮房につくならば・或は国をおひ・或はろうに入れよ

と私の下知を下す、又下文下るかくの如く三度其の間の事申さざるに

心をもて計りぬべし、或は其の前をとをれりと云うて・ろうに入れ・或

は其の御房に物をまいらせけりと云うて国をおひ・或は妻子をとる、か

くの如くして上へ此の由を申されければ案に相違して去る文永十一年

二月十四日の御赦免の状・同三月

八日に島につきぬ、念仏者等・僉議して云く此れ程の阿弥陀仏の御敵・

善導和尚・法然上人をのるほどの者が・たまたま御勘氣を蒙りて此の島

に放されたるを御赦免あるとていけて帰さんは心うき事なりと云うて、

やうやうの支度ありしかども何なる事にや有りけん、思はざるに順風

吹き来りて島をば・たちしかばあはいあしければ百日・五

十日にもわたらず、順風には三日なる所を須臾しゅゆの間に渡りぬ、越後のこ

う・信濃の善光寺の念仏者・持齋じさい・真言等しんごんは雲集うんしゅうして僉議せんぎす、島の法師ほっし

原は今まで・いけてかへすは人かつたいなり、一我等われらはいかにも生身しょうしんの

阿弥陀仏あみだぶつの御前おんまえをば・とをすまじと僉議せんぎせしかども、又越後のこようより

兵者ども・あまた日蓮にちれんにそひて善光寺をとをりしかば力

及およばず、三月十三日に島を立ちて同三月二十六日に鎌倉かまくらへ打ち入りぬ。

同四月八日平左衛門尉さへものじように見参しぬ、さきには・にるべくもなく威儀いぎを和やわらげて・ただしくする上・或る入道にゅうどうは念仏ねんぶつをとふ・或る俗あるは真言しんごんをとふ・或る人は禅をとふ・平左衛門尉さへものじようは爾前得道にぜんとくどうの有無うむをとふ・一に経文きやうもんを引いて申しぬ、平の左衛門尉さへものじようは上の御使おんつかいの様にて大蒙古国だいもうこくはいつか渡り候わたべきと申す、日蓮にちれん答えて云く今年いひわは一定なりそれにとつては日蓮にちれん已前いぜんより勘申かんがもうすをば御用ごようひなし、譬たとえば病の起りを知らざる人の病を治せば弥いよいよ病は倍增ばいぞうす

べし、真言師しんごんしだにも調伏じようふくするならば弥いよいよ此の国軍にまくべし・穴賢あなかしこ・真言師しんごんし・総じて当世とうせの法師等ほうしをもつて御祈あり有るべからず・各各ぶつづは仏法ぶつぽうをしらせ給たまうておわさばこそ申もうすともしらせ給たまはめ、又

何なる不思議にやあるらん他事には・ことにして日蓮が申す事は御用い

なし、後に思い合せさせ奉らんが為に申す隠岐法皇は天子なり

権大夫殿は民ぞかし、子の親をあだまんをば天照太神うけ給いなんや、

所従が主君を敵とせんをば正八幡は御用いあるべしや、いかなりけれ

ば公家はまけ給いけるぞ、此れは偏に只事にはあらず弘法大師の邪義・

慈覚大師・智証大師の僻見をまことと思ひて叡山・東寺・園城寺の人人

の鎌倉をあだみ給いしかば還著於本人とて其の失還つて

公家はまけ給いぬ、武家は其の事知らずして調伏も行はざればかちぬ

今又かくの如くなるべし、ゑぞは死生不知のもの安藤五郎は因果の道理

を弁えて堂塔多く造りし善人なり、いかにとして頸をば・ゑぞに・とら

れぬるぞ、是をもつて思うに此の御房たちだに御祈あらば入道穀・事

にあひ給いぬと覚え候、あなかしこ・あなかしこ・さ・いはざりけると・お

ほせ候など・したたかに申し付け候いぬ。

さてかへりききしかば同四月十日より阿弥陀堂法印に仰付られて雨の御いのりあり、此の法印は東寺第一の智人・をむろ等の御師・弘法大師・慈覚大師・智証大師の・真言の秘法を鏡にかけ天台・華嚴等の諸宗を・みな胸にうかべたり、それに随いて十日よりの祈雨に十一日に大雨下りて風ふかず雨しつかにて一日一夜ふりしかば・守殿御感

のあまりに金三十両むまやうやうの御ひきで物ありと・きこふ、鎌倉中
の上下・万人・手をたたき口をすくめてわらうやうは日蓮にちれんひが法門ほうもん申し
て・すでに頸をきられんとせしが・とかうしてゆりたらば・さではなくし
て念仏・禪をそしるのみならず、真言しんごんの密教みつぎょうなんどをも・そしるゆへに・
かかる法のしるしめでたしと・のしりしかば、日蓮にちれんが
弟子等でしけうさめて・これは御あら義と申せし程に・日蓮にちれんが申すやうはし
ばしまて弘法大師こうぼうだいしの悪義あくぎまことにて国の御いのりとなるべくば隠岐法皇おきほうこう
こそ・いくさにかち給たまはめ、をむろ最愛の児せいたかも頸をきられざる
らん、弘法こうぼうの法華經ほけきょうを華嚴經けこんきょうにをとれりとかける状は十住心論じゅうしゆしんろんと
申す文にあり、寿量品じゆりやうぼんの釈迦仏しゃかぶつをば凡夫ぼんぶなりとするされたしる文は
秘藏宝鑰ひざうぼくに候、天台大師てんだいだいしをぬす人とかける状は二教論いちじょうろんにあり、一乗
法華經ほけきょうをとける仏をば真言師しんごんしのはきもの

とりにも及およばずとかける状は正しょう覚かく房ぼうが舎しや利り講かうの式しきにあり、かかる僻ひが事ごとを申もうす人の弟子でし・阿あ弥み陀だ堂だうの法ほう印いんが日に蓮ちれんにかつならば竜りゅう王おうは法ほ華け經きやうのかたきなり、梵ぼん釈しやく・四し王おうに・せめられなん子し細さいぞあらんずらんと申まうせば、弟子でしどものいはく・いかなる子し細さいのあるべきぞとをこつきし程ほどに、日に蓮ちれん古こく善ぜん無む畏いも不ふ空くうも雨あめのいのりに雨あめはふりたりしかども大たい風ふう吹ふきてありけるとみゆ、弘こう法ぼうは三さん七しち日にちすぎて雨あめをふらしたり、此これ等らは雨あめふらさぬがごとし、三さん七しち・二に十じう

一日いちにちにふらぬ雨あめやあるべき設たいふりたりとも・なんの不ふ思し議ぎかあるべき、天てん台だいのごとく千せん觀くわんなんのごとく一いつ座ざなんど・こそたうとけれ、此これは一定いどうやうあるべしと・いるもあはせず大たい風ふう吹ふ来る、大だい小しやうの舎しや宅たく・堂どう塔とう・古こ木もく・御ご所しよ等とうを・或あるは天てんに吹ふきのぽせ・或あるは地ちに吹ふき入れ、そらには大なる光ひかりり物ものとび地ちには棟とう梁りやうみだれたり、人ひと人びとをも・ふきころし牛ぎ馬ばを・

をくたふれぬ、悪風あくふうなれども秋は時なれば・なをゆるすかたもあり此れ
は夏四月なり、其の上・日本国にほんこくには

ふかず但関東かんとう・八箇国なり八箇国にも武蔵むさし・相模さがみの両国りょうこくなり両国の
中には相州そうしゅうにつよくふく、相州そうしゅうにも・かまくらにも御所・若
宮・建長寺けんぢやうじ・極楽寺ごくらくじ等につよくふけり、ただ事ともみへず・ひとへにこのい
のりの・ゆへにやと・おぼへて・わらひ口すくめせし人人ひとびとも・けうさめてあ
りし上・我が弟子でしどももあら不思議ふしぎやと舌をふるう。

本よりごせし事なれば三度・国をいさめんに・もちゐらずば国をさるべしと、されば同五月十二日にかまくらを・いでて此の山に入る、同十月に大蒙古国よせて壱岐・対馬の二箇国を打ち取らるるのみならず、太宰府もやぶられて少式入道・大友等ききにげににげ其の外の兵者ども其の事ともなく大体打たれぬ、又今度よせくるならば・いかにも此の国よはよはと見ゆるなり、仁王経には「聖人去る時は七難必ず起る」等云云、最勝王経に云く 悪人を愛敬し善人を治罰するに由るが故に乃至他方の怨賊来りて国人喪乱に遇わん」等云云、仏説まことならば此の国に一定悪人のあるを国主たつとませ給いて善人をあだませ給うにや、大集経に云く 日月明を現ぜず四方皆亢旱す是くの如く不善業の悪王・悪比丘我が正法を毀壞せん」云云、仁王経に云く 謂の悪比丘多く名利を求め國王・

太子・王子の前に於て自ら破仏法の因縁・破国の因縁を説く、其の王
別えずして此の語を信聴せん是を破仏法・破国の因縁と為す等云云、
法華經に云く「濁世の惡比丘」等云云、經文まことならば此の国に一
軍惡比丘のあるなり、夫れ宝山には曲林をきる大海には死骸をとどめ
ず、仏法の大海二乗の宝山には五逆の瓦礫・四重の濁水を
ば入るれども誹謗の死骸と一闍提の曲林をば・をさめざるなり、され
ば仏法を習わん人・後世をねがはん人は法華誹謗をおそるべし。

皆人をぼするやうは・いかでか弘法・慈覺等をそしる人を用うべき
と、他人は・さてをきぬ安房の国の東西の人人は此の事を信すべき事な
り、眼前の現証ありいのもりの円頓房・清澄の西堯房・道義房かたうみ
の実智房等は年とかりし僧ぞかし、此等の臨終はいかんがありけんと
尋ぬべし、これらはさてをきぬ、円智房は清澄の大堂

にして三箇年が間・一字三礼の法華經ほけきょうを我とかきたてまつりて十卷を誦そら
に・をばへ五十年が間・一日一夜に二部づつよまれしぞかし、かれをば
哲人は仏になるべしと云云、日蓮にちれんこそ念仏ねんぶつ者よりも道義房どうぎぼうと円智房えんちぼうと
は無間地獄むげんじごくの底にをつべしと申もうしたりしが此の人人ひとびとの御臨終りんじゅうはよく候い
けるか・いかに、日蓮にちれんなくば此の人人ひとびとをば仏になりぬ

らんとこそおぼすべけれ、これをもつて・しろしめせ弘法・慈覚等はあさましき事どもはあれども弟子ども隠せしかば公家にもしらせ給はず未の代は・いよいよあをぐなり、あらはす人なくば未来永劫までも・さであるべし、拘留外道は八百年ありて水となり、迦毘羅外道は一千年すぎてこそ其の失はあらわれしか。

夫れ人身をうくる事は五戒の力による、五戒を持てる者をば二十五の善神これをまほる上同生同名と申して二つの天生れしより・このかた左右のかたに守護するゆへに失なくて鬼神あだむことなし、しかるに此の国の無量の諸人なげきを・なすのみならず、ゆきつしまの兩國の人・皆事にあひぬ太宰府又申すばかりなし、此の国はいかな

るとがのあるやらん・しらまほほしき事なり、一人・二人こそ矢も・あるらめ・そこばくの人人いかん、これひとへに法華經をさぐる弘法・慈覚・

智証等の末の台空白師・善導・法然が末の弟子等・達磨等の人人の末の者どもも国中に充滿せり、故に梵釈・四天等の法華經の座の誓狀のごとく頭破作七分の失にあてらるるなり。

疑つて云く法華經の行者をあだむ者は頭破作七分ととかれて侯に、日蓮房をそしれども頭もわれぬは日蓮房は法華經の行者にはあらざるかと申すは道理なりとをば候はいかん、答えて云く日蓮を法華經の行者にてなしと申さば法華經をなげすてよとかける法然等・無明の辺域としるせる弘法大師・理同事勝と宣たる善無畏・意覺等が法華經の行者にてあるべきか、又頭破作七分と申す事はいかなる事ぞ刀をもてきるやうにわるるとしれるか、經文には如阿梨樹枝とこそとかれたれ、人の頭に七滴あり七鬼神ありて一滴食へば頭をいたむ三滴を食へば寿絶えんとす七滴皆食えば死するなり、今の世の人人は皆頭

阿梨樹ありじゅの枝のごとくに・われたれども惡業あくごうふかくして・しら

ざるなり、例せばてをおいたる人の・或あるは酒にゑい・或あるはねいりぬれば・
をおえざるが如ごとし、又頭破作七分と申もうすは・或あるは心破作七分とも申もうし
て頂いただきの皮の底にある骨のひびたふるなり、死ぬる時は・わるる事もあ
り、今の世の人人ひとびとは去ぬる正嘉しょうかの大地震だいじしん・文永ぶんえいの大彗星すいせいに皆頭みなごうべわれて
候そうなり、其の頭ごうべのわれし時ぜひせひやみ・五臓の損ぜし時あかき

腹をやみしなり、これは法華經の行者をそしりしゆへにあたりし罰とは
しらずや。

されば鹿は味ある故に人に殺され龜は油ある故に命を害せらる女人
はみめ形よければ嫉む者多し、国を治る者は他国の恐れあり財有る者
は命危し法華經を持つ者は必ず成仏し候、故に第六天の魔王と申す
三界の主此の經を持つ人をば強に嫉み候なり、此の魔王疫病の神の目
にも見えずして人に付き候やうに古酒に人の酔い候如く国主
父母・妻子に付きて法華經の行者を嫉むべしと見えて候、少しも違わ
ざるは当時の世にて候、日蓮は南無妙法蓮華經と唱うる故に二十余年
所を追はれ二度まで御勘氣を蒙り最後には此の山にこもる、此の山の
体たらくは西は七面の山・東は天子のたけ北は身延の山・南は鷹取の山
・四つの山高きこと天に付き・さがしきこと飛鳥もとびがた

し、中に四つの河あり所謂・富士河・早河・大白河・身延河なり、其の中
に一町ばかり間の候に庵室を結びて候、昼は日をみず夜は月を拝せず
冬は雪深く夏は草茂り問う人希なれば道をふみわくることかたし、
殊に今年^{こと}は雪深くして人間うことなし命を期として法華經計りをたの
み奉り候に御音信^{おとずれ}ありがたく候、しらず釈迦^{しゃか}仏の御使^{おんつかい}か過去^{かこ}の父母^{ふぼ}の
御使^{おんつかい}かと申すばかりなく候、南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經。

◆ 一一四

光日房御書ぼうごしよ

926P

去るいぬ文永八年太歳辛ふんえい 未九月のころより御勘氣ごかんきをかほりて北国の
海中かいちゆう佐渡さどの嶋にはなたれたりしかば、なにとなく相州鎌倉そうしゅうかまくらに住しには
生国なれば安房あわの国はこひしかりしかども我が国ながらも人の心もいか
にとやむつびにくくありしかば、常にはかよう事もなくしてすぎしに
御勘氣ごかんきの身となりて死罪しざいとなるべかりしが、しばらく

く国の外にはなたれし上はをぼろげならではかまくらへはかへるべから
ず、かへらずば又父母ふぼのはかをみる身となりがたしとをもひつづけしか
ば、いまさらとびたつばかりくやしくてなどかかかる身とならざりし時
・日にも月にも海もわたり山をもこえて父母ふぼのはかをみ師匠ししやうのありや

うをもとひをとづれざりけんとなげかしくて、彼の蘇武そぶが胡国ここくに入りて十九年かりの南へとびけるをうらやみ、仲丸が日本国にほんこくの朝使として・もろこし

にわたりてありしがかへされずしてとしを経へしかば月の東に出でたるをみて、我が国みかさの山にも此の月は出でさせ給たまいて故里の人も只今ただ月に向いてながむらんと心をすましてけり、此れもかくをもひやりし時・我が国より・或人あるのびんにつけて衣をたびたりし時・彼の蘇武そぶがかりのあし此れは現げんに衣ありにるべくもなく・心な

ぐさみて候しに、日蓮にちれんはさせる失とがあるべしとはをもはねども此の国のならひ念仏者ねんぶつと禪宗ぜんしゅうと律宗りっしゅうと真言宗しんこんしゅうにすかされぬるゆへに法華經ほけきょうをば上にはたうとむよしをふるまい心には入らざるゆへに、日蓮にちれんが法華經ほけきょうを
・いみじ

きよし申せば威音王仏いおんおうぶつの末の末法まっぽうに不輕菩薩ふぎようぼさつをにくみしごとく上一人かみいちにん
より下万人ばんにんにいたるまで名をも・きかじ・まして形をみる事はをもひよ
らず、さればたとひ失とがなくともかくなさるる上はゆるしがたし、まして
・いわう

や日本国にほんこくの人の父母ふぼよりもをもく日月にちがつよりもたかくたのみたまへる念仏ねんぶつ

を無間むげんの業もうと申し禪宗ぜんしゅうは天魔てんまの所為しよゐ・真言しんごんは亡国ぼうこくの邪法じゃほう念仏ねんぶつ者もん・禪宗ぜんしゅう

・律僧等りつそうが寺てらをばやきはらひ念仏ねんぶつ者もんどもが頸けいをはねらるべしと申もうす上うへ、

故最明寺極楽寺さいみょうじごくらくの両にゅうどう入道にゅうどう殿だんを阿鼻あび地獄じごくに墮おち給たまひいたりと申もうすほどの

大禍だいわざある身みなり、此これ程ほどの大事だいじを上下じょうげ万人ばんにんに申もうし

つけられぬる上うへは設たとひそらごとなりとも此この世よにはうかびがたし、いか

にいわうやこれはみな朝夕ちようせきに申もうし昼夜じやに談だんぜしう平左衛門尉等さえもんじようの数かず

百人ひゃくにんの奉行人ぶぎように申もうしきかせいかにとがに行いわるとも申もうしやむまじきよ

し・したたかにいるきかせぬ、されば大海たいかいのそこのちびきの石いしはうかぶと

も天てんよりふる雨あめは地ちにをちずとも日蓮にちれんはかまくら

へは還かえるべからず、但ただし法華經ほけきようのまことにおはしまし日月にちがつ我われをすて給たまは

ずばかへり入りて又また父母ふぼのはかをもみるへんもありなんと心こころづよくをも

ひて梵天・帝釈・日月・四天はいかになり給いぬるやらん、天照太神・
正八幡宮は此の国にをはせぬか、仏前の御起請はむなしくて法華經の
行者をばすて給うか、もし此の事叶わずば日蓮

が身のなにともならん事はをしからず、各各現に教主釈尊と多宝
如来と十方の諸仏の御宝前にして誓状を立て給いしが今日蓮を守護
せずして捨て給うならば正直捨方便の法華經に大妄語を加へ給へる
か、十方三世の諸仏をたばらかし奉れる御失は提婆達多が大妄語に
もこ瞿伽利尊者が虚誑罪にもまされたり設ひ大梵天として色界の
頂に居し千眼天といはれて須弥の頂におはすとも日蓮をすて給う
ならば阿鼻の炎にはたきぎとなり無間・大城にはいづるごおはせじ、此
の罪をそろしとおぼさばいそぎいそぎ国土にしるしをいだし給え、本国
へかへし給へと高き山にのぼりて大音声をはなちてさけびしかば、九月の

十二日に御勘氣ごかんき十一月に謀反のもの・いできた

り、かへる年の二月十一日に日本国にほんこくのかためたるべき大將どもよしなく
打ちころされぬ、天のせめという事あらはなり、此れこにやをどろかれけ
ん弟子でしどもゆるされぬ。

而れしかどもいまだゆりざりしかば・いよいよ強盛かうじやうに天に申せしかば頭こづかの

白き鳥からすとび来りぬ、彼の燕のたむ太子たいし

の馬烏からすのれい日藏上人しやうにんの山がらす・かしらもしろく・なりにけり、我が
かへるべき時やきぬらんとながめし此これなりと申しもあへず、文永十一
年二月十四日の御赦免状しやめん同三月八日に佐渡さどの国につきぬ同十三日に国
を立ちて

まうらというつにをりて十四日はかのつにとどまり、同じき十五日に越
後の寺どまりのつにつくべきが大風たいふうにはなたれさいわひにふつかぢをす
ぎてかしはざきにつきて、次の日はこうにつき中十二をへて三月二十六
日

に鎌倉かまくらへ入りぬ、同じき四月八日に平左衛門尉さへもんのだうに見参す、本よりごせし
事なれば日本国にほんこくのほろびんを助けんがために三度いさめんに御用もちいなく
ば山林さんりんにまじわるべきよし存ぜしゆへに同五月十二日に鎌倉かまくらをいでぬ。
但しただ本国にいたりて今一度父母ひとたひふぼのはかをもみると・をもへどもにしき

をきて故郷へはかへれといふ事は内外ないげのをきてなり、させる面目めんもくもなくして本国へいたりなば不孝ふこうの者にてやあらんずらん、これほどのかたかりし事だにもやぶれてかまくらへかへり入る身なれば又にしきをきるへんもやあらんずらん、其そのときの時父母ふぼのはか

をもみよかしとふかくおもうゆへにいまに生国へはいたらねどもさすがこひしくて吹く風立つくもまでも東のかたと申せば庵をいでて身にふれ庭に立ちてみるなり、かかる事なれば故郷の人は設たとい心よせにおもはぬ物なれども我が国の人といへばなつかしくてはんべるところに此の御ふみを給びて心もあらずして・いそぎい

そぎひらきてみ候へばをとしの六月の八日にいや四郎にをくれてとかかれたり、御ふみもひらかざりつるまではうれしくてありつるが、今・此のことはをよみてこそなににかくいそぎひらきけんうらしまが子のは

こなれやあけてくやしきものかな、我が国の事はうくつらくあたりし人のすへまでもをろかならずをもう

にことさら此の人は形も常の人にはすぎてみへうちをもひたるけしきもかたくなにもなしと見えしかども、さすが法華經ほけきょうのみざなればしらぬ人ひと人あまたありしかば言もかけずありしに、經はてさせ給たまいて皆人みなも立ちかへる、此の人もも立ちかへりしが使を入れて申せしは安房あわの国のあまつと申すところの者にて候が、をさなくより

御心ざしをもひまいらせて候上母にて候人もをろかならず申しなれな
れしき申し事にて候へども・ひそかに申すべき事の候、さきさきまひりて
次第になれまいらせてこそ申し入るべきに候へどもゆみやとる人に・み
やづ

かひてひま候はぬ上事きうになり候いぬる上はをそれをかへりみず申す
とこまごまときこえしかば、なにとなく生国の人なる上そのあたりの事
ははばかりのべきにあらずとて入れたてまつりてこまごまとこしかたゆく
すへかたりてのちには世間無常なりいつと申す事をしらず、其の上武士
に身をまかせたる身なり又ちかく申しかけられて候事のがれがたし、さ
るにては後生こそをそろしく候へたすけさせ給へときこへしかば経文を
ひいて

申しきかす、彼のなげき申せしは父はさてをき候いぬ、やもめにて候は

・わをさしおきて前に立ち候そうらはん事こそ不孝ふこうに・をば候へもしやの事候ならば御弟子おんでしに申しつたへてたび候へとねんごろにあつら候いしが、
そのた

びは事ゆへなく候へけれども後にむなしくなる事のいできたりて候いけるにや、人間にんげんに生をうけたる人上下じやうげにつけてうれへなき人はなけれども時にあたり人人ひとびとにしたがひてなげきしなじななり、譬たとへば病のならひは何の病

も重しげくなりぬれば是にすぎたる病なしとをもうがごとし、主のわかれをやのわかれ夫妻のわかれ・いづれか・

おろかなるべきなれども主は又他の主もありぬべし、夫妻は又かはりぬれば心をやすむる事もありなん、をやこのわかれこそ月日のへだつるまににいよいよなげきふかかりぬべくみ候へをやこのわかれにもをやは

ゆきて子はとどまるは同じ無常むじようなれどもことはりにもや、をひたるは、

わはとどまりてわきき子のさきにたつ

なさけなき事なれば神も仏もうらめしや、いかなればをやに子をかへさ

せ給たまいてさきにはたてさせ給たまはず・とどめをかせ給たまいてなげかせ給たまう

らんと心うし、心なき畜生ちくしやうすら子のわかれしのびがたし、竹林精舎しやうじやの

金鳥こんちやう

はかひこのために身をやき鹿野苑ろくやおんの鹿は胎内たいないの子を・をしみて王の前に

まいれり、いかにいわうや心あらん人にをいてをや、されば王陵が母は

子のためになつきをくだき、神堯皇帝こうていの後は胎内たいないの太子たいしの御ために腹を

やぶらせ給たまいき、此等これらを・をもひつづけさせ給たまはんには火にも入り頭こうべを

もわりて我が子の形をみるべきならばをしからずとこそおぼすらめと、

おもひやられてなみだもとどまらず。

又御消息しやうそくに云いく人をもころしたりし者なればいかやうなところにか

生れて候らんをほせをかほり候そうらはんと云云、夫それ針は水にしずむ雨は

空にとどまらず、蟻あり子を殺せる者は地獄じごくに入り死にかばねを切れる者

は惡道あくどうをまぬかれず、何いかに況や人身じんしんをうけたる者をころせる人をや、

但ただし大石も海にうかぶ船の力なり大火だいかもきゆる事

水の用にあらずや、小罪しょうざいなれども懺悔ざんげせざれば惡道あくどうをまぬがれず、大

逆なれども懺悔ざんげすれば罪つみきへぬ、所謂いわれる粟をつみたりし比丘びくは五百ひやくしやう生

が間牛となる、をつみし者は三惡道さんあくどうに墮おちにき、羅摩王らま・拔提王ばつだい・毘樓

真王なごさ・那☆沙王なてい・迦帝王びしやきや・毘舍☆王がっこう・月光王こうみょう・光明王くわうめい・日光王にくわう・愛王持

多人王等の八万余人の諸王しよは皆父みなを殺して位につく、善知識ぜんちしきにあはざ

れば罪つみきへずして阿鼻地獄あびじごくに入りనికి、波羅奈城はらなに惡人あくにんあり其その名を

ば阿逸多あいつたという母をあひせしゆへに父を殺し妻とせり、父が師の阿羅漢あらかん

きようくん

ありて教訓せしかば阿らかむを殺す、母又他の夫にとつぎしかば又母

をも殺しつ、具に三逆罪をつくりしかば隣里の人うとみしかば、一身た

もちがたくして祇・精舎にゆいて出家をもとめしに諸僧許さざりしか

ば悪心強盛にして多くの僧坊をやきぬ、然れども釈尊に値い奉りて

出家をゆるし給にき、北天竺に城あり細石となづく彼の城に王あり竜

印という、父を殺してありしかども後に此れをおそれて彼の国をすてて

仏にまいりたりしかば仏懺悔を許し給いき、阿闍世王はひととなり

三毒熾盛なり十惡ひまなし、其の上父をころし母を害せんとし

提婆達多を師として無量の仏弟子を殺しぬ、惡逆のつもりに二月十五

日仏の御入滅の日にあたりて無間地獄の先相に七処に惡瘡出生して

玉体しづかならず、大火の身をやくがごとく熱湯をくみかくるがごと

くなりしに六大臣まいりて六師外道を召されて惡瘡を治すべきやう

申^{もう}しき、今の日本^{にほん}国^{こく}の人人^{ひとびと}の禪師^{ぜんし}・律師^{りっし}・念佛^{ねんぶつ}者^{しや}・真言^{しんごん}師^し等^らを善^{ぜん}知^ち識^{しき}と
たのみて蒙古^{もうこ}国^{こく}を調伏^{じょうぶく}し後生^{ごしょう}をたすからんとをもうがごとし、其^その

上提婆達多^{だいたばだつた}は阿闍世王^{あじやせ}の本師^{ほんし}なり、外道^{げどう}の六万蔵^{ぶつぽう}仏法^{はつまん}の八万蔵^{はちまん}をそら
にして世間^{せけん}出世^{しゅつせ}のあきらかなる事^{にちがつ}日月^{めいぎよう}と明鏡^{めいぎよう}とに向うがごとし、今の
世^{てんだいしゅう}の天台宗^{せきがく}の碩学^{けんみつ}の顕密^{けんみつ}二道^{にどう}を胸^{むね}にうかべ一切^{いっさい}経^{きやう}をそらんぜしがごと
し、此^これ等の人人^{ひとびとも}諸^{しよ}の大^{だい}臣^{しん}阿闍世王^{あじやせ}を教訓^{きやうくん}せしかば仏^{ぶつ}に帰依^{きえ}し奉^{たてまつ}る事
なかりし程^{ほど}に摩竭堤^{またけつ}に天変^{てんぺん}度^{たひたひ}度^{たひたひ}かさなり地天^{ちよう}しきりな
る上大風^{たいふう}・大早^{たいそう}ばつ飢饉^{ききん}疫癘^{えきれい}ひまなき上他国^{たこく}よりせめられて・すでにか
うとみえしに惡瘡^{あくそう}すら身^みに出^でししかば国土^{こくど}一時^{いちじ}にほろびぬとみえし程
に俄^{ふつぜん}に仏前^{ぶつぜん}にまいり懺悔^{ざんげ}して罪^{つみ}きえしなり。

これらはさてをき候いぬ人のをやは惡人^{あくにん}なれども子善人^{ぜんにん}なればをや
の罪^{つみ}ゆるす事あり、又子惡人^{あくにん}なれども親善人^{ぜんにん}なれば子の罪^{つみ}ゆるさるる
事あり、されば故弥^{いよいよ}四郎殿^{しやうだん}は設^たい惡人^{あくにん}なりともうめる母釈迦^{しやかぶつ}仏^{ぶつ}の御
宝前^{ほうぜん}にして昼夜^{しや}なげきとぶらはば争^{いかで}か彼人^かうかばざるべき、いかにいわ

うや彼の人は法華經ほけきやうを信じたりしかば・をやをみち

びく身とぞなられて候らん、法華經ほけきやうを信ずる人はかまへてかまへて

法華經ほけきやうのかたきを・をそれさせ給たまへ、念仏者ねんぶつと持齋じさいと真言師しんごんしと一切いっさい

南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと申もうさざらん者をば・いかに法華經ほけきやうをよむとも法華經ほけきやう

のかたきとしろしめすべし、かたきをしらねばかたきにたばらかされ候

ぞ、あはれあはれけさんに入りてくわしく申し候はばや、又

これよりそれへわたり候三位房ぼう佐度公等にたびごとにこのふみをよませ

てきこしめすべし、又この御文おんふみをば明慧房みやうえぼうにあづけさせ給たまうべし、なにと

なく我が智慧ちえはたらぬ者が・或あるはをこづき・或あるは此文このもんをさいかくとして

そしり候なり、或あるはよも此の御房ごぼうは弘法大師こうぼうだいしにはまさらじよも慈覺じかく

大師だいしにはこへじなんど人くらべをし候ぞかし、かく申もうす人をばものしら

ぬ者と・をばすべし。

花押かおう

建治二年太歳丙子ひのえね三月

日

甲州南部波木井はきりの郷山中

日蓮にちれん

◆ 一一五

光日上人御返事しやうにんごへんじ弘安四年八月 六こうあん

十歳御作

932P

法華經ほけきやう二の卷に云く、其その人命終みやうじゆうして阿鼻獄あびごくに入らん」云云、阿鼻あび地獄じごくと申もうすは天竺てんじくの言唐土日本もろこしにほんには無間むげんと申もうす無間むげんはひまなしとかけり、一百三十六の地獄じごくの中に一百三十五はひま候、十二時の中にあつけれども又すすしき事もありたへがたけれども又ゆるくなる時もあり、此むげんじごくの無間地獄と申もうすは十二時に一時いちじかた時も大苦なら

ざる事はなし故ゆえに無間地獄むげんじごくと申もうす、此じごくの地獄は此われらの我等が居て候大地だいちの底二万由旬ゆじゆんをすぎて最下さいかの処ところなり、此これ世間せけんの法にもかろき物は上に重き物は下にあり、大地だいちの上には水あり地よりも水かろし、水の上に

は火あり水よりも火かるし、火の上に風あり火よりも風かるし、風の上に空あり風よりも空かるし、人をも此の四大を以て

造れり悪人は風と火と先ず去り地と水と留まる故に人死して後重きは

地獄へ墮つる相なり、善人は地と水と先ず去り風火留る重き物は去り

ぬ軽き物は留まる故に輕し人天全まるる相なり、地獄の相重きが中の

重きは無間地獄の相なり、彼の無間地獄は縦横二万由旬なり八方は

八万由旬なり、彼の地獄に墮つる人人は一人の身大に

して八万由旬なり多人も又此くの如し、身のやはらかなる事綿の如し

火のこわき事は大風の焼亡の如し鉄の火の如し、詮を取つて申さば我

が身より火の出ずる事十三あり、二の火あり足より出でて頂をとを

る・又二の火あり頂より出でて足をとほる又二の火あり背より入りて

胸より出ず又二の火あり胸より入りて背へ出ず・又二の火あり左の脇よ

り入りて右の脇へ出ず又二の火あり右の脇より入りて左の脇へ出ず亦一
の火あり首かしらより下に向いて雲の山を巻くが如くして下る、此の地獄じごくの
罪人ざいにんの身は枯かられたる草を焼くが如しごと東西南北に走れども逃去にげさる所なし、
他の苦は且しばらく之これを置く大火だいかの一苦なり此の大地獄だいじごくの大苦を仏委くわしく
説とき給たまうならば我等衆生聞みいて皆死みなす

べし故に仏委しくは説き給う事なしと見えて候。

今・日本国の四十五億八万九千六百五十八人の人人は皆此の地獄へ

墮ちさせ給うべし、されども一人として墮つべしとはおぼさず、例せば

此の弘安四年五月以前には日本の上下万人・二人も蒙古の責めにあふ

べしともおぼさざりしを日本国に只日蓮一人計りかかる事此の国に

出来すべしとする、其の時・日本国の四十五億八万九千六百五

十八人の一切衆生一人もなく他国に責められさせ給いて、其の大苦は

譬へばほうろくと申す釜に水を入れてざつこと申す小魚をあまた入れ

て枯れたるしば木をたかむが如くなるべしと申せば、あらおそろしいま

いまし・打ち

はれ所を追へ流せ殺せ信ぜん人人をば田はたをとれ財を奪へ所領をめ

せと申せしかども、此の五月よりは大蒙古の責めに値いてあきれ迷ふ

程にさもやと思う人人も・あるやらん、にがにがしうしてせめたくはな
けれども有る事なればあたりたりあたりたり、日蓮が申せし事はあた
りたりばけ物のもの申す様にこそ候めれ。

去る承久の合戦に隠岐の法皇の御前にして京の二位殿などと申

せし何もしらぬ女房等の集りて王を勧め奉り戦を起して義時に責めら

れあはて給いしが如し、今今御覽ぜよ法華経誹謗の科と云ひ日蓮をい

やしみし罰と申し経と仏と僧との三宝誹謗の大科によつて現生には此

の国に修羅道を移し後生には無間地獄行き給うべし、此れ

又偏に弘法・慈覚・智証等の三大師の法華経誹謗の科と達磨善導律僧

等の一乗誹謗の科と此れ等の人人を結構せさせ給う国主の科と、国を

思ひ生処を忍びて兼て勘合告げ示すを用いずして還つて怨をなす大科、

先例を思へば呉王夫差の伍子胥が諫を用いずして越王・勾踐にほろぼさ

れ、殷いんのちゆうの紂王ひかんが比干ひかんが言をあなづりて周の武王に責められしが如ごとし。

而しかるに光日あまごぜん尼御前しゆくじゆうはいかなる宿習ほけきようにて法華經ごしんようをば御信用ごしんようありける

ぞ、又故弥いよいよ四郎殿しろうでんが信じて候しかば子の勸めすすか此の功德くどく空しからざれ

ば子と俱ともに靈山りようぜん淨土じようどへ参り合せ給たまわん事うたがい疑うたがいいなるべし、烏竜おりゅうと云いい

し者は法華經ほけきようを

謗^{ぼうじ}じて地獄^{じごく}に墮^おちたりしかども其^その子に遺^{いり}竜^{りゅう}と云^いいし者・法華^{ほけき}經^{きょう}を書
きて供養^{くよう}せしかば親^{おや}仏^{ぶつ}に成^なりぬ、又妙莊嚴^{みょうそうごん}王^{わう}は惡^{あく}王^{おう}なりしかども御^ご子
の淨藏^{じやうざう}・淨眼^{じやうがん}に導^{みちび}かれて娑羅樹^{しやらしじゆ}王^{わう}仏^{ぶつ}と成^ならせ給^{たま}う、其^{その}の故^{ゆゑ}は子^この肉^{にく}は
母^{はは}の肉^{にく}母^{はは}の骨^{ほね}は子^この骨^{ほね}なり、松榮^{そうもく}れば柏悅^{はくえつ}ぶ芝^{しば}かるれば蘭^{らん}なく情^{じやう}無^むき
草^{そう}木^{もく}すら友^{とも}の喜^きび友^{とも}の歎^{なげ}き一^{いつ}つなり、何^{いか}に況^{いは}や親^{おや}と子^ことの
契^{ちぎ}り胎^{たい}内^{ない}に宿^{むか}して九^く月^{げつ}を經^へて生^なみ落^おし數^{すう}年^{ねん}まで養^{やしな}ひき、彼^{かしこ}になはれ
彼^{かしこ}にとぶらはれんと思^{おも}いしに彼^{かれ}をとぶらふうらめしき、彼^{いかん}如何^ががあらん
と思^{おも}うこころぐるしき・いかにせん・いかにせん、子^こを思^{おも}う金^{こん}鳥^{ちやう}は火^ひの中
に入^いりにき、子^こを思^{おも}いし貧^{ひん}女^{にょ}は恒^{じやう}河^がに沈^{しづ}みき、彼^{かれ}の金^{こん}鳥^{ちやう}は今^{いま}の弥^み勒^{ろく}
菩^ぼ薩^{さつ}なり彼^{かれ}の河^がに沈^{しづ}みし女^{にょ}人^{にん}は大^{だい}梵^{ぼん}天^{てん}王^{わう}と生^なまれ給^{たま}えり、何^{いか}に況^{いは}や今
の光^{しやう}日^{にち}上^{じやう}人^{にん}は子^こを思^{おも}うあまりに法^ほ華^け經^{きやう}の行^{ぎやう}者^{じや}と成^なり給^{たま}ふ、母^{はは}と子^こと
俱^{とも}に靈^{りやう}山^{ぜん}淨^{じやう}土^どへ參^{たま}り給^{たま}うべし、其^{その}の時^{とき}御^{たい}對^{めん}面^{めん}いかにうれしかるべきいか

にうれしかるべき、きようきよう恐恐。

八月八日

かおう花押

にちれん日蓮

しょうにんごへんじ光日上人御返事

◆ 一一六 光日尼御返事ごへんじ

934P

なきなをながさせ給たまうにや、三つのつなは今生こんじょうに切れぬ五つのさわりは・すではれぬらむ、心の月くもりなく身のあかきへはてぬ、即身そくしんの仏なりたうとしたうとし、くはしく申もうすべく候へども・あまりふみを・をくかき候ときにかきたりて候ぞ恐恐きようきよう謹言。

九月十九日

光日尼^ごごぜん^{へん}御返事^じ

日蓮^{にちれん}在御判

◆ 一一七

四恩抄

弘長二年正月十六日 四十一歳御作

935P

与工藤左近尉吉

隆 於伊豆伊東

そもそも

抑此の流罪るざいの身になりて候につけて二つの大事だいじあり、一には大なる

よろこ

悦よろこびあり其の故そのゆえは此の世界せかいをば娑婆しやばと名なく娑婆しやばと申もうすは忍もうと申もうす事な

ゆえ

り故ゆえに仏をば能忍のうにんと名けたてまつる、此の娑婆世界しやばせかいの内に百億の

しゅみせん

須弥山百億の日月百億の四州あり、其の中の中央その須弥山・日月四州しゅみせん にちがつ

に仏は世に出いでまします、此の日本国にほんこくは其の仏の世に出いで

まします国うしとらよりは丑寅の角にあたりたる小島なり、此の娑婆世界しやばせかいより

ほか

外の十方じゅつぽうの国土こくどは皆浄土みなじょうどにて候へば人の心もやはらかに賢聖けんせいをのり

悪む事も候はず、此の国土は十方の浄土にすてはてられて候・十悪・
五逆・誹謗賢聖・不孝父母・不敬沙門等の科の衆生が三惡道に墮ちて
無量劫を経て還つて此の世界に生れて候が、先生の惡業の習氣失せ
ずしてややもすれば十惡・五逆を作り賢聖をのり父母に孝せず沙門を
も敬はず候なり、故に釈迦如来世に出でましませしかば、或は毒藥を
食に雜て奉り、或は刀杖・惡象・師子・惡牛・惡狗等の方便を以て害し
奉らんとし、或は女人
を犯すと云い、或は卑賤の者、或は殺生の者と云い、或は行き合ひ奉る
時は面を覆うて眼に見奉らじとし、或は戸を閉じ窓を塞ぎ、或は
国王・大臣の諸人に向つては邪見の者なり高き人を罵者など申せし
なり、大集經涅槃經等に見えたり、させる失も仏にはおはしまさざり
しかども只此の国のくせかたわとして惡業の衆生が生れ集りて

候上、第六天だいろくてんの魔王まおうが此の国の衆生しゅじょうを他の浄土じょうどへ出いさじとたばかりを

成なしてかく事にふれてひがめる事をなすなり、此のたばかりも詮せんする所

は仏ほとけに法華經ほけきょうを説かせまいらせじ料と見えて候、其そのの故ゆえは魔王まおうの習とし

て三惡道さんあくどう

の業くを作る者つをば悦よろこび三善道さんぜんどうの業くを作る者つをばなげく、又三善道さんぜんどうの業

を作る者つをばいたうなげかず三乘さんじょうとならんとする者つをばいたうなげ

く、又三乘さんじょうとなる者つをばいたうなげかず仏ほとけとなる業くをなす者つをば強あながちに

なげき事

にふれて障さわをなす、法華經ほけきようは一文一句いっくなれども耳みみにふるる者は既にすでに仏ぶつになるべきと思ひて、いたう第六天だいろくてんの魔王まおうもなげき思おもう故ゆゑに方便ほうべんをまはして留難るなんをなし經を信ずる心をすてしめんとたばかり、而しかるに仏ぶつの在世ざいせの時は濁世じよくせなりといへども五濁ごじよくと始たりし上仏おんちからの御力みちからをも恐れ人の貪とん・瞋じん・癡ち・邪見じゃけんも強盛かうじようならざりし時だにも竹杖外道ちくじようげどうは神通第一じんつうだいいちのもくれんそんじや目連尊者もくれんそんじやを殺し、阿闍世王あじやせは惡象あくぞうを放はなて三界さんがいの独尊どくそんををどし奉り、提婆達多だいばだつたは証果しょうかの阿羅漢あらかん・蓮華れんげ比丘尼びくにを害し、瞿伽利尊者くぎやりそんじやは智慧第一ちゑだいいちの舍利弗しやりほつに惡名あくみやうを立てき、何いかに況きやうや世漸ようやく五濁ごじよくの盛さかんになりて候をや、況きやうや世末代まつだいに入りて法華經ほけきようをかりそめにも信ぜん者の人にそねみねたまれん事はおびただしかるべきか、故ゆゑに法華經ほけきように云く如来にょらいの現在げんざいにすら猶なお怨嫉おんしつ多し況きやうや滅度めつどの後をやと云云、始に此の文を見候いし時はさしもやと思ひ候いしに今こそ

仏みことばの御言は違はざりけるものかなと殊ことに身に當つて思ひ知れて候へ。

日蓮にちれんは身に戒行かいぎようなく心に三毒さんどくを離れざれども此の御經を若しや我

も信を取り人にも縁を結ばしむるかと思つて随分ずいぶん世間の事おだやかな

らんと思いき、世末になりて候へば妻子さいしを帶たいして候比丘びくも人の歸依きえをう

け魚鳥を服する僧もさてこそ候か、日蓮にちれんはさせる妻子さいしをも帶せず魚鳥

をも服せず只法華經ただほけきようを弘ひろめんとする失とがによりて妻子さいしを帶せずして犯僧はんそう

の名四海しかいに満ち蟻ろうぎ蟻ろうぎをも殺さざれども惡名あくみよう一天いつてんに弥ほひこれり、恐くは

在世さいせいに釈尊しゃくそんを諸もろもろの外道げどうが毀そしり奉たてまつり

しに似たり、是れ偏ひとえに法華經ほけきようを信ずることの余人よりも少し經文きようもんの

如ごとく信をもむけたる故ゆえに惡鬼あくきそ其の身に入つてそねみをなすかと・をぼえ

候へば是れ程この卑賤ひせん・無智むち・無戒むかいの者の二千余年いぜん已前に説かれて候

法華經ほけきようの文にの

せられて留難るなんに値あうべしと仏記しるしをかれまいらせて候事のうれしさ申もうし
尽くし難かたく候、此の身に学文つかまつりし事やうやく二十四五年にま
かりなるなり、法華經ほけきようを殊ことに信じまいらせ候いし事は・わづかに此の六
七年よりこ

のかたなり、又信じて候いしかども懈怠けたいの身たる上・或あるは学文と云ひ
・或あるは世間せけんの事にさえられて一日にわづかに一卷・一品題目計だいもくなり、
去年こぞの五月十二日より今年正月十六日こんねんむつきに至いたるまで二百四十余日の程
は昼夜十二時に法華經ほけきようを修行しゆぎようし奉たてまつると存じ候、其の故そのゆえは法華經ほけきようの故ゆえに
かかる身となりて候きようじゆうざがは行住坐臥ほけきように法華經ほけきようを読み行ずるにてこそ候へ
人間にんげんに生を受けて是れ程この悦よろこびは何事なにことか候べき。

凡夫ぼんぶの習ならい我とはげみて菩提心ぼだいしんを發おこして後生ごしやうを願うといへども自ら
思みひ出し十二時の間に一時・二時こそははげみ候へ是は思みひ出いださぬに

も御經をよみ読まざるにも法華經を行ずるにて候か、無量劫の間、六道・四生を輪回し候いけるには、或は謀叛をおこし強盜夜打等の罪にてこそ国主より禁をも蒙り流罪・死罪にも行はれ候らめ、是は法華經を弘むるかと思ふ心の強盛なりしに依つて惡業の衆生に讒言せられて・かかる身になりて候へば定て後生の勤にはなりなんと覚え候、是れ程の心ならぬ昼夜十二時の法華經の持經者は末代には有がたくこそ候らめ、又止事なくめでたき事侍り無量劫の間六道に回り候けるには多くの国主に生れ値ひ奉りて、或は寵愛の大臣・閹白等ともなり候けん、若し爾らば国を給り財宝官祿の恩を蒙けるか法華經流布の国主に値ひ奉り其の国にて法華經の御名を聞いて修行し是を行じて讒言を蒙り流罪に行われまいらせて候国主には未だ値いまいらせ候はぬか、

法華經に云く、是の法華經は無量の國中に於て乃至名字をも聞くことを得べからず何に況んや見ることを得て受持し誦誦せんをや」と云云、されば此の譏言の人・国主こそ我が身には恩深き人にはをわしまし候らめ。

仏法を習う身には必ず四恩を報すべきに候か、四恩とは心地觀經に云く一には一切衆生の恩、一切衆生なくば衆生無辺誓願度の願を發し難し、又惡人無くして菩薩に留難をなさずば、いかでか功德をば増長せしめ候べき、二には父母の恩、六道に生を受くるに必ず父母あり、其の中に或は殺盜・惡律儀・謗法の家に生れぬれば我と其の科を犯さざれども其の業を成就す、然るに今生の父母は我を生みて法華經を信ずる身となせり、梵天・帝釈・四大天王・轉輪聖王の家に生まれて三界・四天をゆづられて人天・四衆に恭敬せられんよりも恩

重きは今の某それがしが父母ふぼなるか、三には国王こくおうの恩、天の三光に身をあたため地の五穀ごこくに神を養ふこと皆是みなこれ国王こくおうの恩なり、其その上今度このたび・法華經ほけきょう

を信じ今度生死を離るべき国主に値い奉れり、争か少分の怨に依つてお
ろかに思ひ奉るべきや、四には三宝の恩、釈迦如来無量劫の間菩薩の行
を立て給いし時一切の福德を集めて六十四分と成して功德を身に得
給へり、其の一分をば我が身に用ひ給ふ、今六十三分をば此の世界に
留め置きて五濁雜亂の時非法の盛ならん時・謗法の

者・国に充滿せん時、無量の守護の善神も法味をなめずして威光勢力
減ぜん時、日月光りを失ひ天竜雨をくださず地神地味を減ぜん時、
草木根茎枝葉華菓葉等の七味も失せん時、十善の国王も貪・瞋・癡を
まし父母・六親に

考せずしたしからざらん時、我が弟子無智・無戒にして髪ばかりを剃り
て守護神にも捨てられて活命のはかりごとわからん比丘・比丘尼の命の
ささへとせんと誓ひ給へり、又果地の三分の功德二分をば我が身に用ひ

給ひ、仏

の寿命百二十まで世にましますべかりしが八十にして入滅し、残る所の四十年の寿命を留め置きて我等に与へ給ふ恩をば四大海の水を硯の水とし一切の草木を焼て墨となして一切のけだものの毛を筆とし十方世界の大地を

紙と定めて注し置くとも争か仏の恩を報じ奉るべき、法の恩を申さば法は諸仏の師なり諸仏の貴き事は法に依る、されば仏恩を報ぜんと思はん人は法の恩を報ずべし、次に僧の恩をいはば仏宝法宝は必ず僧によりて住す、譬えば薪なければ火無く大地無ければ草木生ずべからず、仏法有りといへども僧有りて習伝へずんば正法・像法・

二千年過ぎて末法へも伝はるべからず、故に大集經に云く五箇の五百歳の後に無智・無戒なる沙門を失ありと云つて是を悩すは此の人、仏法

の大燈明を滅せんと思えと説かれたり、然れば僧の恩を報じ難し、されば三宝の恩を報じ給うべし、古の聖人は雪山童子常啼菩薩藥王大士普明王等此等は皆我が身を鬼のうちかひとなし身の血髓をうり臂をたき頭を捨て給いき、然るに末代の凡夫三宝の恩を蒙りて三宝の恩を報ぜず、いかにしてか仏道を成ぜん、然るに心地觀經梵網經等には仏法を學し円頓の戒を受けん人は必ず四恩を報ずべしと見えたり、某は愚癡の凡夫血肉の身なり三惑一分も断ぜず只法華經の故に罵詈毀謗せられて刀杖を加えられ流罪せられたる

を以て大聖の臂ひじを焼き髓ずいをくだき頭こうべをはねられたるになぞらへんと思ふ、是れ一つの悦よろこびなり。

第二に大なる歎なげきと申もうすは、法華經ほけきよう第四に云く、若し惡人有あくにんつて不善の心を以て一劫いつこくの中に於おいて現げんに仏前ぶつぜんに於おいて常に仏を毀罵きめせん其の罪つみ尚輕なおかるし、若し人二つの惡言あくげんを以て在家ざいけ・出家しゅつげの法華經ほけきようを讀誦どくじゆする者を毀咎きしせん其の罪そ つみ甚つみはなはだだ重し」等と云云、此等の經文これら きようもんを見るに信心しんじんを起し身より汗を流し兩眼りようげんより涙を流すこと雨の如し我、一人此の

国に生れて多くの人をして一生の業を造らしむることを歎なげく、彼の不輕ふぎよう菩薩ぼさつを打擲ちようちやくせし人現身げんしんに改悔かいげの心を起せしだにも猶罪消え難なくして千劫阿鼻地獄せんこくあびじこくに墮おちぬ、今・我に怨あだを結べる輩やからは未だ一分も悔くゆる心もおこさず、是体これていの人の受くる業報だいいしぎようを大集經だいしききように説いて云く、若し人あつて千万億の仏の所にして仏身ぶつしんより血いを出さん意いに於おいて如何いかん・此

の人の罪つみをうる事寧むしろ多しとせんや否いなや、大梵王ぼんのうもう言さく若もし人只ただ一いち仏ぶつの身より血を出いださん無間むげんの罪尚つみなお多し、無量むりょうにして算をおきても數をしらず阿鼻あびだいじごく大地獄だいちじごくの中に墮おちん、何いかに況や万億ぶつしんの仏身ぶつじんより血を出いださん者を見んをや、終ついによく広く彼の人の罪業果報ざいごう かほうを説く事ある事なからん但ただし如来にょらいをば除たてまつき奉る、仏の言はく大梵王ぼんのうも若し我が為ために髪をそり袈裟けさをかけ片時かたときも禁戒きんかいをうけず欠犯けつはんをうけん者をなやましのり杖をもつて打ちなんどする事有らば罪つみをうる事彼よりは多し」と。

弘長二年 壬戌 正月十六日
こうちよう みずのえいぬ

日蓮 花押かおう

工藤左近尉殿

◆一一八

法華經題目抄

根本大師門人

日蓮撰

文永三年一月六日四十五歲御作

940P

南無妙法蓮華經

問うて云く法華經の意もしらず只南無妙法蓮華經と計り五字七字

に限りて一日一遍一月乃至一年十年一期生の間に只一遍なんど唱え

ても輕重の惡に引かれずして四惡趣におもむかずついに不退の位にい

たるべしや、答えて云くしかるべきなり、問うて云く火火といえども手

にとらざればやけず水水といえども口にのまざれば水の

ほしさもやまず、只南無妙法蓮華經と題目計りを唱うとも義趣をま

ぬかれん事いがあるべかるらん、答えて云く獅子の筋を琴の絃として
一度奏すれば余の絃悉くきれ梅子のすき声をきけば口につたまりう

るをう世間の不思議すら是の如し況や法華經の不思議をや小乗の

四諦の名計りをさやづる鸚鵡なを天に生ず三歸計りを持つ人・大魚の

難をまぬかる何に況や法華經の題目は八万聖教の肝心一切諸仏の

眼目なり汝等此れを唱えて四惡趣をはなるべからずと疑うか、

正直捨方便の法華經には信を以って入ることを得」と云い雙林最後の

涅槃經には是の菩提の因は復無量なりと雖も若し信心を説けば即ち

已に撰尽す」等云云

夫れ仏道に入る根本は信をもて本となす五十二位の中には十信の位

には信心初めなりたとひさとりなければども信心あらん者は鈍根も正見

の者なりたとひさとりあるとも信心なき者は誹謗闡提の者なり善星

比丘は二百五十戒を持ち四禪定を得十二部經を諳にせし者。
提婆達多は六万八万の宝蔵をおぼへ十八變を現ぜしかども此等有
解無信の者今に阿鼻大城にありと聞く、迦葉舍利弗等は無解有信の
者なり仏に授記を蒙りて華光如来

・光明如来といはれき・仏説いて云く「疑いを生じて信ぜざらん者は
即ち当に惡道に墮つべし」等云云、此等は有解無信の者を説き給う、
而るに今の代に世間の學者の云く只信心計りにて解する心なく南無
妙法蓮華經と唱うる計りにて争か惡信をまぬかるべき等云云、此の
人人は經文の如くならば阿鼻大城まぬかれがたし、さればさせる解り
なくとも南無妙法蓮華經と唱うるならば惡道まぬかるべし譬えば蓮華
は日に随つて回る蓮に心なし芭蕉は雷によりて増長す此の草に耳な
し、我等は蓮華と芭蕉の如く法華經の題目は日輪と雷との如し、犀の
生角を身に帶して水に入りぬれば水五尺身に近ずかず梅檀の一葉開き
ぬれば四十由旬の伊蘭を變ず我等が惡業は伊蘭と水との
如く法華經の題目は犀の生角と梅檀の一葉の如し、金剛は堅固にして
一切の物に破られずされども羊の角と龜の甲に破らる尼俱類樹は大鳥

にも枝おれざれどもかのまつげに巢くうせうれう鳥にやぶらる、我等われらが惡業あくごうは金剛こんごう

の如ごとく尼にくるじゆ俱ぐ類るい樹じゆの如ごとし法華經ほけきやうの題目だいもくは羊やうの角かくのごとくせうれう鳥との如ごとし琥珀こはくは塵ちりをとり磁石じしやくは鉄くろがねをすう我等われらが惡業あくごうは塵ちりと鉄くろがねの如ごとく法華經ほけきやうの題目だいもくは琥珀こはくと磁石じしやくの如ごとし。

かくをもひて常に南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱となうべし、法華經ほけきやうの第一だいいちの卷まきに

云いわく「無量むりやう無數むしゆじう劫じやうにも是この法ほけきやうを聞きこふこと亦また難がたし」第五だいごの卷まきに云いわく

是この法華經ほけきやうは無量むりやうの國中おのくにに於おて乃至ないし名字みょうじを聞きこふことも得可べからず」等

云いわく法華經ほけきやうの御名みなを聞きこふ事はをばろげにもありがたき事なり、されば

須仙多しゆせんた仏ぶつ多宝たぼう仏ぶつは世よにいでさせ給たまひたりしかども法華經ほけきやう

の御名みなをだびも説とき給たまわらず釈迦しやか如来にょらいは法華經ほけきやうのために世よにいでさせ

給たまひたりしかども四十二年が間は名をひしてかたりいださせ給たまわらず仏ぶつの

御年七十二と申せし時はじめて妙法蓮華經みょうぼうれんげきやうとなえいでさせ給たまいたり
き、しかりとい

えども摩訶まか尸那しな日本にほんの辺国の者は御名みなをもきかざりき一千余年すぎて
三百五十余年に及びてこそ☆わずかに御名計みなばかりをば聞きたりしか、さればこ
の經あに値あいたてまつる事をば三千年に一度華さんぜんさく優曇華うとんげ・無量無辺劫むりやうむへん
に一度値あうなる一眼の龜にもたとへたり、大地だいちの上に針を立てて
大梵天王宮だいぼんてんのうより芥子けしをなぐるに針のさきに芥子けしの・つらぬかれ

たるよりも法華經の題目に値う事はかたし、この須弥山に針を立てて、かの須弥山より大風のつよく吹く日いとをわたさんにいたりてはりの穴にいとのおさきのいりたらんよりも法華經の題目に値い奉る事かたし、さればこの經の題目をとなえさせ給はんにはをぼしめすべし、生盲の始めて眼をあきて父母等をみんなよりもうれしく強きかたきに・とられたる者の・ゆるされて妻子を見るよりも・めずらしと・をぼすべし。

問うて云く題目計りを唱うる証文これありや、答えて云く妙法蓮華經の第八に云く法華の名を受持せん者・福量る可からず」正法華經に云く若し以の經を聞いて名号を宣持せば特量可からず」添品法華經に云く法華の名を受持せん者・福量る可からず」等云云、此等の文は題目計りを唱うる福齒計るべからずとみへぬ、一部

・八卷・二十八品を受持読誦し隨喜護持等するは広なり、方便品・
壽量品を受持し乃至護持するは略なり、但一四句偈乃至題目計りを
唱えとなうる者を護持するは要なり、広略要の中には題目は要の内な
り。問うて云く妙法蓮華經の五字にはいくばくかの功德をおさめた
るや、答えて云く大海は衆流を納めたり大地は有情非情を持てり
如意宝珠は万財を雨ふらし梵王は山界を領す妙法蓮華經の五字また
是の如し一切の九界の衆生並に仏界を納む、十界を納むれば亦十界の
依報の国土を収む、先ず妙法蓮華經の五字に一切の法を納むる事をい
は

ば經の一字は諸經の中の王なり一切の諸經を納む、仏世に出でさせ
給いて五十余年の間八万聖教を説きをかせ給いき、仏は人壽・百歳の
時・壬申の歳・二月十五日の夜半に御入滅あり、其の後四月八日よ

り七月十五日に至るまで一夏九旬の間・千人の阿羅漢・結集堂にあつまりて一切經をかきをかせ給いき、其の後正法一千年の間は五天竺に一切經ひろまらせ給いしかども震旦国には渡らず、像法に入つて一十五年と申せしに後漢の孝明皇帝・永平

十年丁卯歳・仏教始めて渡つて唐の玄宗皇帝・開元十八年庚午の歳に至るまで渡れる訳者・二百七十六人・持ち来る經・律・論一千七十六部・五千四十八卷・四百八十帙・是れ皆法華經の經の一字の眷属の修多羅なり。

先ず妙法蓮華經の以前・四十余年の間の經の中に大方けごんきよう仏華嚴經と

申す經まします。竜宮城には三本あり上本は十三世界微塵數の品・

中本は四十九万八千八百偈・下本は十万偈四十八品・此の三本の外に

震旦・日本には僅に八十卷・六十卷等あり、阿含・小乘經・方等・

般若の諸大乘經等、大日經は梵本には阿婆ら詞きやの五字計りを

三千五

百の偈をもつてむすべり、況や余の諸尊の種子・尊形三摩耶・其の數を

しらず、而るに漢土には但わずかに六卷七卷なり、涅槃經には雙林

最後の說・漢土には但四十卷是も梵本之れ多し、此等の諸經は皆釈迦

如来の所説の法華經の眷属の修多羅なり、この外過去の七仏・千仏・

遠遠劫の諸仏の所説・現在十万の諸仏の說經皆法華經の經の一字の

眷属なり、されば葉王品に仏・宿王華菩薩に對して云く 譬えば一切の

せんるこうか 川流江河の諸水の中に海為れ第一なるが如く衆山の中に須弥山為れ

第一・衆星の中に月天子最も為れ第一」等云云、妙樂大師の釈に云く

已今当說最為第一」等云云、以の經の一字の中に十方法界の一切經

納めたり、譬えば如意宝珠の一切の財を納め虚空の万象を

含めるが如し、經の一字は一代に勝る故に妙法蓮華の四字も又八万

宝蔵に超過するなり、妙とは法華經に云く方便の門を開いて眞實の相

を示す」、章安大師の釈に云く秘密の奥蔵を発く之を稱して妙と

為す」、妙樂大師・此の文を受けて云く発とは開なり」等云云」、妙と

申す事は開と云う事なり世間に財を積める蔵に鑰なければ開くことか

たし開かざれば蔵の内の財を見ず、華嚴經は仏説き給いたりしかども

經を開く鑰をば仏・彼の經に説き給わず、

阿含・方等・般若・觀經等の四十余年も仏説き給いたりしかども彼の

経經きやうぎやう

の意をば開き給たまわず、門を閉じてをかせ給たまいたりしかば人・彼の

経經きやうぎやう

をさとる者一人もなかりき、たとひ・さとれりとをもひしも

僻見びやくけん

にてありしなり、而しかるに仏・法華經を説かせ給たまいて諸經しよきやうの蔵を開

かせ給たまいき、此の時に四十余年よんじゅうよねんの九界の衆生しゆじやう始めて諸經しよきやうの蔵

の内の財をば見しりたりなり譬たとえば大地だいちの上に人畜じんちく・草木そうもく等あれども

にちがつ

日月の光なければ眼まなこある人も人畜じんちく・草木そうもくの色彩をしらず、日月出で

給たまいてこそ始めてこれをば知る事なれ、爾前にぜんの諸經しよきやうは長夜の闇の如ごとく

法華經の本・迹

ほけきやう

法華經の本・迹

ほけきやう

法華經の本・迹

二門は日月にちがつの如しごと、諸の菩薩もろもろぼさつの二目にじようある二乗みようもくの眇目みようもくなる凡夫ほんぶの盲目もうもくなる闡提せんだいの生盲いきめくらなる共に爾前にぜんの經經きやうぎやうにてはいろいろかたちをばわきまえずありし程に、法華經ほけきやうの時・迹門しやくもんの月輪始めて出で給たまいし時・菩薩ぼさつの両眼りやうげん先にさとにじようり二乗みようもくの眇目次みようもくにさとほんぶり凡夫もうもくの盲目次いっせんだいに開き生盲いっせんだいの一闡提みらい未來まなこに眼の開くべき縁を結ぶ是れ偏ひとえに妙の一字の得なり。

迹門しやくもん十四品の一妙・本門ほんもん十四品の一妙合わせて二妙、迹門しやくもんの十妙合しやくもんわせて二十妙、迹門しやくもんの三十妙・本門ほんもんの三十妙合しやくもんわせて六十妙、迹門しやくもんの四十妙・本門ほんもんの四十妙・觀心かんじんの四十妙合しやくもんせて百二十重の妙なり六万九千三百八十四字一一の字の下に一の妙あり總じて六万九千三百八十四の妙あり、妙とは天竺てんじくには薩さつと云い漢土かんどには妙と云う妙とは具の義なり具とは円満えんまんの義なり、法華經ほけきやうの一一の文字・一字一字に余の六万九千三百八十四字を納おさめたり、譬たとえば大海たいかいの一タイの水に

一切いっさいの河の水を納め一ひとの如意宝珠にょいほうじゆの芥子けし計りなるが一切いっさいの如意宝珠にょいほうじゆの財ふを雨ふらすが如ごとし、譬たとえば秋冬枯れたる草木そうもくの春夏しゆんかの日ひに値あうて枝葉しやう・華菓けか・出来しゅつたいするが如ごとし、爾前にぜんの秋冬しゆうとうの草木そうもくの如ごとくなる九界くきうの衆生しゆじやう・法華經ほけきやうの妙めうの一字いちじの春夏しゆんかの日輪にちりんにあひたてまつりて菩提心ぼだいしんの華けさき成仏じやうぶつ往生おうじやうの菓このみなる、竜樹菩薩りやうじゆばさつの大論だいろんに云いく、譬たとえば大藥師やくしの能よく毒を以もつて藥と為なすが如ごとし」云云、此の文は大論だいろんに法華經ほけきやうの妙めうの徳とくを積しやくする文なり、

妙樂大師みやうらくだいしの釈いに云いく、沼がたし難がたきを能よく治ちす所以ゆゑんに妙めうと稱しやうす」等云云、總すべじて、成仏じやうぶつ往生おうじやうのなりがたき者もの・四人にんあり第一だいいちには決定性けつじやうの二乗にじやう・第二だいじには一闍提人いっせんたい・第三だいさんには空心こくしんの者もの・第四だいしには謗法ぼうぼうの者ものなり、此等これらを法華經ほけきやうにをいて仏になさせ給たまう故ゆゑに法華經ほけきやうは妙めうと云いふなり。

提婆達多だいばだつたは斛飯王こくはんのうの第一だいいちの太子たいし・淨飯王じやうはんにはをひ・阿難尊者あなんそんじやがこの

かみ・教主釈尊きようしやくそんにはいとこに当る・南閻浮提えんぶだいにかろかざる・人なり須陀
比丘びくを師として出家しゅつけし阿難尊者あなんそんじゃに十八変をならひ外道げどうの六万歳・仏の
八万歳はちまんを胸にかべ五法を行じて殆どほとん仏よりも尊きけしきなり、両頭
をたてて破僧罪はそうざいを犯さんために象頭山に戒壇かいだんを築き仏弟子ぶつでしを招き取
り、阿闍世太子あせんたいしをかたらいて云く我は仏を殺して新仏となるべし太子たいしは
父の王を殺して新王となり給へたま

阿闍世太子・すでに父の王を殺せしかば提婆達多是又仏をうかがい大石をもちて仏の御身より血をいだし阿羅漢たる華色比丘尼を打ちころし五逆の内三逆をつぶさにつくる、其の上☆伽梨尊者を弟子とし阿闍世王を檀那とたのみ五天竺・十六の大国・五百の中国等の一逆・二逆・三逆等をつくれる者は皆提婆が一類にあらざる事これなし、譬えば大海の諸河をあつめ大山の草木をあつめたるがごとし、智慧の者は舍利弗にあつまり・神通の者は目連にしたがひ・悪人は提婆に・かたらいしなり、されば厚さ十六万八千由旬・其の下に金剛の風輪ある大地すでにわれて生身に無間・大城に堕ちにき、第一の弟子く伽梨も又生身に地獄に入る施遮婆羅門女も、おちにき・波瑠璃王もをちぬ善星比丘もおちぬ、又此等の人人の生身に堕ちしをば五天竺・十六の大国・五百の中国・十千の小国の人人も

皆これをみる、六欲・四戰中丁無爭梵字音釈・第六天の魔王も
閻魔法王等も皆御覽ありき、三千大千他界・十方法界の衆生も皆開
きしなり、されば大地微塵劫はすぐとも無間・大城を出づべからず、劫
石はひすらぐとも阿鼻大城の苦は・つきじとこそ思い合いたりしに、
法華經の提婆品にして教主釈尊の昔の師・天王如来と記し給う事こそ
不思議にをぼゆれ、爾前の經經・実ならば法華經は大妄語・法華經実
ならば爾前の諸經は大虚誑罪なり、提婆が三逆
を具に犯して其の外無量の重罪を作りし天王如来となる、況や二逆・
一逆等の諸の悪人の得道疑いなき事譬えば大地をかへすに草木等の
かへるがごとく堅石をわる者・☆草をわるが如し、故に此の經をば妙と
云ふ。

女人をば内外典に是をそしり三皇・五帝の三墳・五典に詔曲の者と

定む、されば災は三女より起ると云へり国の亡び人の損ずる源は女人
を本とす、内典の中には初成道の大法たる華嚴經には女人は地獄の
使なり能く仏の種子を断つ外面は菩薩に似て内心は夜叉の如し」と
云い、雙林最後の大涅槃經には一切の江河必ず回曲有り一切の
女人必ず諂曲有りと、又云く所有三千界の男子の諸の煩惱・合集し
て一人の女人の業障と為る」等云云、大華嚴經の文に能く仏の種子を
断つ」と説かれて候は女人は仏になるべき種子をいれり、譬えば大旱魃
の時・虚空の

中に大雲をこり大雨を大地に下すに・かれたるが如くなる無量無辺の草木・花さき菓なる、然りと雖もいれる種はをひずして結句・雨しげければ・くちうするが如し、仏は大雲の如く・説教は大雨の如く・かれたるが如くなる草木を一切衆生に譬えたり、仏教の雨に潤い五戒・十善・禪定等の功德を修するは・花さき菓なるが如し、一雨・ふれどもいりたる種のをひずかへりて・くちうするは女人の仏教にあひて生死を・はなれずして・かへりて仏法を失ひ惡道に墮つるに譬ふべし、是を能く仏の種子を断つ」とは申すなり、涅槃經の文に一切の江河のまがれるが如く女人

も又まがれりと説かれたるは、水はやわらかなる物なれば石山なんどの・こわき物にさへちれて水のさき・ひるむゆへに・あれへ・これへ行くなり、女人も亦是くの如く女人の心をば水に譬えたり、心よわくして水の

如くなり、

道理どうりと思う事も男のこわき心に値あいぬればせかれて・よしなき方へをも
むく、又水にゑがくに・とどまらざるが如しごと、女人にょにんは不信ふしんを体とするゆ
へに只今たださあるべしと見る事も又しばらくあれば・あらぬさまになるな
り、仏もうと申すは正直しょうじきを本とす故ゆえに・まがれる女人にょにんは仏になるべからず
五障ごしょう三従さんじゅうと申して五つのさはり三つしたがふ事あり、されば銀色女經ぎんじきによきよう
には「三世さんぜの諸仏しよぶつの眼まなこは大地だいちに落つとも女人にょにんは仏になるべからず」と
説だいかれ大論だいろんには「渭風ゑいふうは・とると云えども女人にょにんの心はとりがたし」と云へ
り。

此かくの如く諸經しよきやうに嫌きらはれたりし女人にょにんを文殊師利菩薩もんじゆしりぼさつの妙の一字を
説とき給たまいしかば忽たちまちに仏ふにりき、あまりに不審ふしんなりし故ゆえに宝浄世界ほうじやうせかいの
多宝たほう仏ぶつの第一だいいちの弟子でし智積菩薩ちしやくぼさつ、釈迦如来しやかにょらいの御弟子おんでしの智慧ちえ第一だいいち舍利弗しやりほつ

尊者そんじや、四十余年よんじゅうよねんの大小乗經だいしやうじやうの經文きやうもんをもつて竜女りゆうによの仏になるまじき
由よしを難なんぜしかども終ついに叶ははず仏にたりにき、初成道しよじやうどうの罷よく仏の
種子しゆしを断つつ雙林そうりん最後さいごの二切いっさいの江河こうか必ず回曲えこく有り」の文も破われぬ、
銀色女經ぎんじき・並なに大論だいろんの龜鏡きつきやうも空むなしくなりぬ智積ちしやく・舍利弗しかりほつは舌を巻まきて
口を閉ふぢ人天大会にんてんたいえは歡喜かんきせしあまりに掌たなこころを合あせたりき、是これ偏ひとえに妙
の一字の徳とくたり、此この南閻浮提えんぶだいの内に二千五百の河あり一一みなに皆みなまが
れり、南閻浮提えんぶだいの女人にょにんの心のまがれるが如ごとし、但ただし娑婆耶しやばやと

申す河あり繩を引きはえたるが如くして直に西海に入る、法華經を信ずる女人亦復是の如く直に西方淨土へ入るべし此れ妙の一字の徳なり、妙とは蘇生の義なり蘇生と申すは蘇る義なり、譬えば黃鵠の子・死せるに鶴の母・子案となけば死せる子・還つて活り、鳩鳥・水に入れば魚蚌悉く死す犀の角これに・ふるれば死せる者皆よみがえる如く爾前の經經にて仏種をいりて死せる二乗・闡提・女人等・妙の一字を持ちぬれば・いれる仏種も還つて生ずるが如し、天台云く闡提は心有り猶作仏すべし二乗は智を威す心生ず可からず法華能く治す復稱して妙と為すと、妙樂云く但大と云いて妙と名づけざるは一には有心は治し易く無心は治し治し難きを能く治す所以に妙と稱す」等云云、此等の文の心は大方広仏華嚴經・大集經・大品經・大涅槃等は題目に大の字のみありて妙の字なし、但生

る者を治して死せる者をば治せず、法華經は死せる者をも治するが故に妙と云ふ釈なり、されば諸經にしては仏になる者も仏になるべからず其の故は法華は仏になりがたき著すら尚仏になりぬ、なりやすき者は云ふにや及ぶと云う道理立ちぬれば法華經をとかれて後は諸經にもむく一人もあるべからず。

而るに正像二千年過ぎて末法に入つて当世の衆生の・成仏往生のとげがたき事は・在世の二乘闡提等にも・百千万億倍すぎたる・衆生の觀經等の四十余年の經經によりて生死をはなれんと思ふは・はかなし・はかなし・女人は在世・正像末總じて一切の諸仏の一切經の中に法華經を・はなれて・仏になるべからず、靈山の聴衆・道場開悟たる天台智者大師・定めて云く・諸經は但男に記して女に記せず今經は皆記す」等云云。釈迦如来・多宝仏・十方諸仏の御前に

して摩訶提國王舍城の良・鷲の山と申す所にて八箇年の間・説き給たまいし法華經を智者大師まのあたり聞こしめしりるに我五十余年の一代いちだい聖教を説きをく事は皆衆生利益のためなり、但し其の中に四十二年きようぎようの經經には女人・仏に

なるべからずと説きたまひしなり、今法華經にして女人・仏に成ると・とくと・なのらせ給たまいしを仏滅後・一千五百余年に當つて鷲の山より東北・十方八千里の山海をへたてて摩訶訶尸那と申す国あり震旦国是なり、此の国に仏の

御使おんつかいに出でさせ給ひ天台智者大師てんだいちしやだいしとなりて女人にょにんは法華經ほけきやうを・はなれ

て仏になるべかるずと定めさせ給たまひいぬ。

尸那国しなより三千里さんぜんをへだてて東方とうほうに国あり日本国にほんこくとなづけたり、

天台大師・御入滅にゅうめつ・二百余年と申せしに此の国に生れて伝教大師でんきやうだいしとな

のらせ給たまひいて秀句しゅうくと申す書を造り給たまひいしに能化のうけ・所化しよけ俱ともに歴劫りやつこう無し

妙法經みょうほうの力にて即身そくしんに成仏じやうぶつす」と竜女りゅうにょが成仏じやうぶつを定め置き給たまひいたり、

而しかに当世とうせの女人にょにんは即身成仏そくしんじやうぶつこそ・かたからめ往生極樂おうじやうごくらくは法華ほつけを憑たのま

ば疑うたがひいなし、譬たとえば江河かうかの大海たいかいに入るよりもたやすく雨の空より落つ

るよりもはやくあるべき事なり、而しかに日本国にほんこくの一切いっさいの女人にょにんは南無

妙法蓮華經みょうほうれんげきやうとは唱にやうへずして女人にょにんの往生成仏おうじやうじやうぶつをとげざる雙觀かんきやう・觀經かんきやう等

によりて弥陀みだの名号みやうごうを一日に六万遍じゅうまん・十万遍じゅうまんなどとなうるは、仏の

名号みやうごうなれば巧たくみなるには似たれども女人にょにん不成仏じやうぶつ・不往生おうじやうの經

によれるが故にいたずらに他の財を数えたる女人なり、これひとえに
悪知識にたばらかされたるなり、されば日本国の一切の女人の御かた
きは虎狼よりも山賊・海賊よりも父母の敵・とわり等よりも法華經を
ばをしえずして念仏をしゆるこそ一切の女人のかたきなれ。

南無妙法蓮華經と一日に六万・十万・千万等も唱えて後に暇あらば
より阿弥陀等の諸仏の名号をも口ずさみ・なるやうに申し給はんこそ
法華經を信ずる女人にては・あるべきに当世の女人は一期の間・弥陀の
名号をば・しきりに・とな念仏の仏事をば・ひまなくをこなひ法華經
をばつやつや唱へず供養せず・或はわづかに法華經を持經者

に・よますれども念仏者をば父母・兄弟なんどのやうに・をもひなし
持經者をば所従眷属よりもかろくをもへり、かくして・しかも法華經
を信ずる由を・なのるなり、抑も淨徳夫人は二人の太子の出家を許し

て法華經ほけきようをひろめさせりゆうによ童女は我闍がせん大乘教だいじよう・度脫どだつ苦衆生しゅじよう」とこそ誓ひ
しが全く他經たきよう計りばかを行じ・て比の經を行ぜじとは誓はず、今の女人にょにんは
偏ひとえに他經たきようを行じて法華經ほけきようを行ずる方をしらず、とくとく心を・ひるがへ
すべし・心を・ひるがへすべし、南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきよう・南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきよう

日蓮にちれん 花押かおう

文永三年五月六日清澄寺に於て末の時書し畢んぬ。

◆ 一一九

富木殿御消息

文永六年六月

四十八歳御作

949P

大師講の事今月明性房にて候が此月はさしあい候又余人の申せんと
侯人侯はば申させ給えと候、貴辺より仰を蒙り候へ御指合にて候はば
他処へ申すべく候、恐々。

六月七日

日蓮花押

土木殿

◆ 一二〇

富木殿御返事ときどのこへんじ

949P

白米しらよね一ほかひ本斗六升たしかに給侯、ときれうも侯そうらはざりつるに
悦よろこび入り候、何事なにことも見参もにて申すべく候。

乃時

花押かおう

富木殿ときどの

◆ 一二一

真間・釈迦仏御供養逐状

文永七年九

月 四十九歳御作

950P

釈迦仏御造立の御事、無始曠劫よりいまだ顕れましまさぬ己心の
一念三千の仏造り顕しますか、はせまいりてをがみまいらせ候わば
や、「欲令衆生開仏知見乃至然我実成仏已来」は是なり、但し仏の御
開眼の御事はいそぎいそぎ伊よ房をもてはたしまいらせさせ給い候へ
法華經一部御仏の御六根によみ入れまいらせて生身の教主
釈尊になしまいらせてかへりて迎い入れまいらせさせ給へ自身並に子
にあらずばいかんがと存じ候、御所領の堂の事等は、大進の阿闍梨がき
きて候、かへすがへすをがみ結縁しまいらせ候べし、いつぞや大黒を供養

して侯そうらいし其後より世間せけんなげかずしておはするか、此度は大海たいかいのしほの満みつるがごとく月の満みずるが如ごとく福きたり命ながく後生ごしょうは靈山りやうぜんとおぼしめせ。

九月二十六日

日蓮にちれん花押かおう

進上しんじよう

富木殿御返事ときどのごへんじ

◆ 一一二二 土木殿御返事ごへんじ

文永ぶんえい八年九月 五十歳御

作 於相模依智さがみえち

950P

上のせめさせ給たまうにこそ法華經ほけきやうを信じたる色もあらわれ侯そうらへ月はか

けてみち・しをはひてみつる事疑^{うたがい}なし

此れも罰あり必ず徳あるべし・なにしにか・なげかん。

此の十二日酉とりの時・御勘気ごかんき・武蔵守殿御あづかりにて十三日丑すずめの時に
かよくらをいでて佐土の国へながされ侯が、たうじはほん雀もようのえちと
申すところもようにえちの六郎左衛門尉殿の代官・右馬太郎と申す者もようあづか
りて侯が、いま四五日はあるべげに侯、御嘆きはさる事に侯そうらども・これ
には一定と本よりそうらごして侯そうらへ・なげかず侯、いままで

頸の切れぬこそ本意ほんいなく侯そうらへ・法華經ほけきょうの御ゆへに過去かこに頸を・うしないた
らば・かかる少身せうしんのみにて候べきか、又数数見さくさくけんひんずい擯出ひんずいととかれて度度失たびたびとがに
あたりて重罪じゅうざいをけしてこそ仏にもなり侯そうらはんずれば我と苦行くぎやうをいたす
事は心ゆへ
なり。

九月十四日

にちれんかおう
日蓮花押

土木殿御返事ごへんじ

◆一二三

寺泊御書ごしよ

文永八年十月 五十歳ぶんえい

御作

951P

与富木常忍ときじょうにん 於越後寺泊

鷺目一結給び了ぬがもくひとゆい おわん、心ざしあらん諸人は一処いっしょにあつまりて御聴聞ごちやうもんあるべし。

今月十月なり十日相州愛京郡依智の郷そうしゅう えきちを起つて武蔵の国久目河の宿に付き十二日を経て越後の国寺泊の津に付きぬ、此れより大海たいかいを亘わたつて佐渡さどの国に至らんと欲するに順風定まらず其の期を知らず、道の間の事心も及ぶこと莫く又筆にも及ばず但暗に推し度る可し、又本より存

知の上なれば始めて嘆く可きに非ざれば之を止む。

法華經ほけきょうの第四よに云くい而もしか此の經このきやうは如来にょらいの現在げんざいすら猶なほ怨嫉おんしつ多し況んいはや滅度めつどの後のちをや「第五だいごの卷まきに云くい二切いっさい

世間怨多くして信じ難し、「涅槃經の三十八に云く、爾の時に一切の外道の衆咸く是の言を作さく○大王今は唯一の大惡人有り瞿曇沙門なり○一切の世間の惡人利養の爲の故に其の所に往き集り而も眷屬と爲つて善を修すること能わず呪術力の故に迦葉及び舍利弗・目☆蓮等を調伏す」云云、此の涅槃經の文は一切の外道我が本師たる二天三仙の所説の經典を仏陀に毀られて出す所の惡言なり、法華經の文は仏を怨と爲す經文には非ず、天台の意に云く「一切の聲聞・緣覺並に近成を樂う菩薩」等云云、聞かんと欲せず信ぜんと欲せず其の機に當らざるは言を出して謗ること莫きも皆怨嫉の者と定め了んぬ、在世を以て滅後を推すに一切諸宗の學者等は皆外道の如し、彼等が云う一大惡人とは日蓮に當れり、一切の惡人之人に集まるとは日蓮が弟子等是なり、彼の外道は先仏の説教流伝の後之を謬つて後・

仏を怨あだと為なせり、今諸宗しよしゅうの学者等がくしゃも亦復また是かくの如ごとし、所詮しよせん仏教ぶつぎょうに依よつて邪見じゃけんを起おこす目の転ころずる者大山おほ転ころずと欲おもう、今八宗はつしゅう・十宗等多門じゅうしゅうたもんの故ゆえに諍論じやうろんを至いたす、涅槃經ねはんぎやうの第十八じふはちに贖命しよくみやう重宝じゅうほうと申もうす法門ほうもんあり、天台大師てんだいだいしの料簡りやうけんに云いく命めいとは法華經ほけきやうなり重宝じゅうほうとは涅槃經ねはんぎやうに説とくく所の前三教ぜんさんきやうなり、但ただし涅槃經ねはんぎやうに説とくく所の円教えんきやうは如何いかん、此この法華經ほけきやうに説とくく所の仏性ぶつじやう常住じやうじゅうを重かさねて之これを説とくいて歸本きほんせしめ涅槃經ねはんぎやうの円常えんじやうを以もつて法華經ほけきやうに摂せつす、涅槃經ねはんぎやうの得分とくぶんは但ぜんさんきやう前三教ぜんさんきやうに限かぎる、天台てんだいの玄義げんぎの三さんに云いく涅槃ねはんは贖命しよくみやうの重宝じゅうほうなり重かさねて掌てを抵うつのみ」文ぶん、籤せんの三さんに云いく今家けの引意だいきは大經だいぎやうの部ぶを指さして以もつて重宝じゅうほうと為なす」等云云てんだいだいし、天台大師てんだいだいしの四念処ねんじよと申もうす文ぶんに法華經ほけきやうの雖示種種道すいじしじゆじゆ」の文ぶんを引ひいて先せんず四味しよきやうを又重宝じゅうほうと定おめ了わんぬ、若もし爾しからば法華經ほけきやうの先せん後の諸經しよきやうは法華經ほけきやうの為ための重宝じゅうほうなり、世間せけんの学者がくしゃの想おもに云いく此これは

てんだい 天台一宗の義なり諸宗は之を用いず等云云、日蓮之を案じて云く
はつしゅう 八宗・十宗等は皆仏滅後より之を起し論師・人師之を立つ滅後の宗を
げんざい 以て現在の経を計る可からず天台の所判は一切経に叶うに依つて一宗
これ に属して之を弃つ可からず、諸宗の学者等自師の誤りを執する故に
ある ある ・或は事を機に寄せ・或は前師に譲り・或は賢王を語らい結句最後には
あくしんごうじょう 悪心強盛にして闘諍を起し失無き者を之を損うて樂と為す、諸宗の
しんこんしゅうこと 中に真言宗殊に僻案を至す
びやくあん

善無畏・金剛智等の想に云く一念三千は天台の極理一代の肝心なり
顯密二道の詮たる可きの心地の三千は且く之を置く、此の外印と真言
とは仏教の最要等云云、其の後真言師等事を此の義に寄せて印・真言
無き經經をば之を下すこと外道の法の如し、或る義に云く大日經
は釈迦如來の外の説なりと、或る義に云く教主釈尊第一の説な
りと、或る義には釈尊と現じて顯經を説き大日と現じて密經を説く
と、道理を得ずして無尽の僻見之を起す、譬えば乳の色を弁えざる者
種種の邪推を作せども本色に当らざるが如く又象の譬の如し、今汝
等知る可し大日經等は法華經已前ならば華嚴經等の如く已後ならば
涅槃等の如し。

又天竺の法華經には印・真言有れども訳者之を略して羅什は妙法經
と名づけ、印・真言を加えて善無畏は大日經と名づくるか、譬えば

しょうほう

正法華添品法華・法華三昧・薩云分陀利等の如し、仏の滅後天竺に於

いて此の證を得たるは竜樹菩薩、漢土に於いて始めて之を得たるは

天台智者大師なり、真言宗の善無畏等・華嚴宗の澄觀等・三論宗の

嘉祥等・法相宗の慈恩等・名は自宗に依れども其の心は天台宗に落ち

たり其の門弟等・此の事を知らず如何ぞ謗法の失を免れんや、或る人

・日蓮を難じて云く機を知らずして☆議を立て難に値うと、或る人

云く勸持品の如きは深位の菩薩の義なり安樂行品に違すと、或る人

云く我も此の義を存すれども言わずと云云、或る人云く唯教門計り

な

りと、具に我之を存すと雖も卞和は足を切られ清丸は穢丸と云う名

を給うて死罪に及ばんと欲す時の人之を咲う、然りと雖も其の人未だ

善き名を流さず汝等が邪難も亦爾る可し。

勸持品かんじほんに云く諸もろの無智むちの人有つて惡口罵詈あぐめりし」等云云日蓮にちれん此の
經文きやうもんに当れり汝等何ぞ此の經文きやうもんに入らざる、及び刀杖とうじやうを加うる
者」等云云、日蓮にちれんは此の經文きやうもんを讀めり汝等何ぞ此の經文きやうもんを讀まざる
常たいしやうに大衆たいしやうの中に在つて我等が過われらを毀そしらんと欲ほす」等云云、國王こくおう・
大臣婆羅門・居士こじに向つて」等云云、惡口あぐして顰蹙ひんじやくし數數しばしば擯出ひんずいせられ
ん」數數しばしばとは度度たびたびなり日蓮にちれん擯出ひんずい衆度流罪るざいは二度なり、法華經ほけきやうは三世さんぜの
說法せつぽうの儀式なり、過去かこの不輕品ふぎやうは今の勸持品かんじほん

今の勸持品は過去の不輕品なり、今の勸持品は未来は不輕品為る可し、其の時は日蓮は即ち不輕菩薩為る可し、一部八卷・二十八品天竺の御經は一由旬に布くと承わる定めて數品有る可し、いま漢土・日本の二十八品は略の中の要なり、正宗は之を置く流通に至つて宝塔品の三箇の勸宣は靈山虚空の大衆に被らしむ、勸持品の二万・八万・八十万億等の大菩薩の御誓言は日蓮が淺智には及ばず但し恐怖惡世中の經文は末法の始を指すなり、此の恐怖惡世中の次下の安樂行品等に云く、於末世」等云云、同本異訳の正法華經に云く、然後末世」又云く、然後來末世」、添品法華經に云く、恐怖惡世中」等云云、時に當り當世三類の敵人は之れ有るに但八十万億・那由他の諸菩薩は一人も見えたまわず乾たる湖の満たず月の虧けて満ちざるが如し水清めば月を浮かべ木を植うれば鳥棲む、日蓮は八十万

億那由他の諸の菩薩の代官として之を申す彼の諸の菩薩の加被を請う者なり。

此の入道佐渡の国御共為す可きの由之を申す然る可き用途と云いかたがた煩有るの故に之を還す、御志し始めて申すに及ばず候ひとびと人人に是くの如く申させ給え、但し圀僧等のみ心に懸り候便宜の時早之を聴かす可し、穴賢穴賢。

十月二十二日 酉の時

日蓮花押

◆一二四

富木入道殿御返事

文永八年十一

月五十歳御作

於佐渡塚原

955P

此比は十一月の下旬なれば相州鎌倉に候し時の思には四節の転変
は万国・皆同じかるべしと存候し処に此北国佐渡の国に下著候て後二
月は寒風頻に吹て霜雪更に降ざる時はあれども日の光をば見ることな
し、八寒を現身に

感ず、人の心は禽獸に同じく主師親を知らず何に況や仏法の邪正・師
の善悪は思もよらざるをや、此等は且く之を置く。

去十月十日に付られ候し入道・寺泊より還し候し時法門を書き
遣わし候き推量候らむ、已に眼前なり仏滅後・二千二百余年に月氏・

漢土・日本・一閭浮提の内に天親・竜樹・内鑑冷然・外適時宜云云、天台・伝教は粗釈し給へども之を弘め残せる一大事の秘法を此国に初めて之を弘む日蓮豈其の人に非ずや。

前相已に顕れぬ去正嘉の大地震前代未聞の大瑞なり神世十二人王九十代と仏滅後二千二百余年未曾有の大瑞なり神力品に云く正滅度の後に於て能く是の經を持つが故に諸仏皆歡喜して無量の神力を現ず」等云云、如来・一切所有之法」云云、但此の大法弘まり給ならば爾前・迹門の經教は一分も益なかるべし、伝教大師云く「日出て

星隠る」云云、遵式の記に云く「末法の初西を照す」等云云、法已に顕れぬ、前和先代に超過せり日蓮粗之を勘うるに是時の然らしむる故なり經に云く「四導師有り一を上行と名く」云云又云く「惡世末法時能持是經者」又云く「君接須弥擲置他方」云云。

又貴^き辺^{へん}に申^{まう}付^けし高^{こう}經^{けい}の要^{よう}文^{ぶん}智^ち論^{ろん}の要^{よう}文^{ぶん}五^ご帖^{てつ}一^{いつ}処^{しょ}に取^とり集^{じふ}め被^らる可^べ
く候^{こう}、其^{その}外^{がい}論^{ろん}釈^{しゃく}の要^{よう}文^{ぶん}散^{さん}在^{ざい}あるべからず候^{こう}、

又小^こ僧^{そう}達^{だつ}談^{だん}義^ぎあるべしと仰^{おほ}らるべく候^{こう}流^{りゅう}罪^{ざい}の事^{こと}痛^{いた}く歎^{なげ}せ給^{たま}ふべからず、
勸^{かん}持^じ品^{ぽん}に云^いく不^ふ輕^ぎ品^{ぽん}に云^いく、命^{いのち}限^{ぎん}り有^あり

惜む可からず遂に願う可きは仏国也云云。

日蓮にちれん 花押かおう

文永八年十一月二十三日

富木入道殿御返事

小僧達少還えし候此国為体在所の有様御問あい有る可く候筆端ひったんに
載のせ難かたく候。

◆ 一二五 佐渡御書

文永九年三月五十一歳御作 与

弟子檀那 956 P

此文は富木殿のかた三郎左衛門殿大藏たうのつじ十郎入道殿等
さじきの尼御前あまごぜん一一に見させ給べき人人ひとびとの御中おんちゆうへなり、京鎌倉かまくらに

軍に死る人人ひとびとを書付けたび候へ、外典抄文句もんくのこ玄の四の本末ほんまつ
勘文宣旨等かんもんせんじこれへの人人ひとびともちてわたらせ給へたま。

世間せけんに人の恐るる者は火炎の中と刀劍とうけんの影と此身の死するとなるべ

し牛馬猶身ぎゅうばなおを惜む況や人身じんしんをや瀬人猶命なほを惜む何に況や杜人いかにをや、

仏説ぶつせつて云く 七宝しちぼうを以て三千大千世界さんぜんだいせんせかいに布き満るとも手の小指を以て

仏經ぶつきように供養くようせんには如かず」取意、雪山童子せつせんどうじの身をなげし樂法梵志ぎようぼうばんじが

身の皮をはぎし身命しんみように過たる惜き者のなければ是これを布施ふせと

して仏法ぶつぽうを習おしへば必仏となる身命しんみようを捨る人・他の宝を仏法ぶつぽうに惜おしべしや、

又財宝さいほうを仏法ぶつぽうにおしまん物まさる身命しんみようを拾おしべきや、世間せけんの法にも

重恩じゆうおんをば命を捨て報ずるなるべし又主君しゅくんの為ために命を捨る人はすくなき

やうなれども其数

多し男子ははぢに命をすて女人にょにんは男ための為ために命をすつ、魚は命を惜おしむ

故^{ゆえ}に池にすむに池の浅き事を嘆きて池の底に穴をほりてすむしかれどもゑにばかされて釣^{つり}をのむ鳥は木にすむ木のひきき事をおじて木の上枝にすむしかれどもゑにばかされて網にかかる、人も又是^{かくの}くの如し世間^{せけん}の浅き事には身命^{しんみょう}を失へども大事^{だいじ}の仏法^{ぶつぽう}などには捨る事

難^{がた}し故^{ゆえ}に仏になる人もなかるべし。

仏法^{ぶつぽう}は摂受^{しやうじゆ}・折伏^{しやくふく}時^{とき}によるべし譬^{たとえ}ば世間^{せけん}の文武二道^{にとう}の如^{ごと}しされば

昔の大聖^{せきだいせい}は時^{とき}によりて法^{ほふ}を行^{おこな}はず・雪山童子^{せつせんどうじ}・薩☆王子^{さつたみこ}は身^みを布施^{ふせ}とせ

ば法^{ほふ}を教^{おし}へん菩薩^{ぼさつ}の行^{ぎやう}となるべしと責^せしかば身^みをすつ・肉^{にく}をほしがらざ

る時^{とき}身^みを捨^すつ可^べきや紙^しなからん世^よには身^みの皮^{かわ}を紙^しとし筆^{ふで}なからん時^{とき}は

骨^{ほね}を筆^{ふで}とすべし・破戒^{はかい}・無戒^{むかい}を毀^こり持戒^{じかい}・正法^{しょうほう}を用^{もち}ん用^{もち}には諸戒^{しよかい}を堅^{けん}

く持^{もち}べし儒教^{じゆきやう}・道教^{たうきやう}を以^{もつ}て釈教^{しやくきやう}を制^{せい}止^しせん日^{にち}には道安法師^{だうあんほふし}・慧遠^{ゑいゑん}

法師^{ほふし}・法道三蔵^{ほふどうさんざう}等の如^{ごと}く王^{わう}と論^{ろん}じて命^{めい}を輕^{けい}う

すべし・釈教^{しやくきやう}の中^{ちゆう}に小乘^{しょうじやう}・大乘^{だいじやう}・權經^{ごんきやう}・実經^{じつきやう}・雜乱^{ざうらん}して明^{みやう}珠^{じゆ}と瓦礫^{かりやく}

と牛驢^{ごろ}の二乳^{ににちゆ}を弁^{わきま}さる時^{とき}は天台大師^{てんだいだいし}・伝教大師^{でんきやうだいし}等の如^{ごと}く大小^{だいしやう}・確実^{かくじつ}

・頭密^{けんみつ}を強盛^{きやうじやう}に分別^{ぶんべつ}すべし・畜生^{ちくしやう}の心^{こころ}は弱^{じやく}きをおどし強^{きやう}きをおそる

当世^{とうせ}の学者^{がくしや}等は畜生^{ちくしやう}の如^{ごと}し智者^{ちしや}の弱^{じやく}きをあなづり王法^{わうぽう}の邪^{じや}をおそる

諛臣ゆしんと申もうすは是これなり強敵ごうてきを伏ふして始はじて力士りきしをしる、惡王あくおうの正法しょうぼうを破やぶるに

邪法じゃぼうの僧等そうどうが方人かとうどをなして智者ちしやを失うはん時は師子王ししおうの如ごとくなる心をもてる者必ず仏になるべし例せば日蓮にちれんが如ごとし、これおこれるにはあらず正法しょうぼうを惜おしむ心の強盛ごうじやうなるべしおこれる者は必ず強敵ごうてきに値あておそるる心しゅつたい出來するなり

例せば・修羅しゅらのおごり帝釈たいしやくに・せめられて無熱池むねつちの蓮の中に小身と成て隠れしが如ごとし正法しょうぼうは一字・一句いっくなれども時機じきに叶かないぬれば必ず得道とくどうなるべし千經・方論しゅうがくを習学しゅうがくすれども時機じきに相違そういすれば叶かなう可べからず。

宝治の合戦すでに二十六年今年二月十一日十七日又合戦あり外道げどう・惡人あくにんは如来にょらいの正法しょうぼうを破やぶりがたし仏弟子等ぶつでし・必ず仏法ぶつぼうを破やぶるべし師子しし身中の虫の獅子ししを食等云云、大果報かほうの人をば他の敵やぶりがたし親し

みより破るべし、葉師經に云く「百界叛逆難」と是なり、仁王經に云く

『聖人去る時七難必ず起らん』云云、金光明經に云く『三十』

三天各瞋恨を生ずるは其の国王惡を縦にし治せざるに由る」等云

云、日蓮は聖人にあらざれども法華經を説の如く受持すれば聖人の

如し又世間の作法兼て知るによて注し置くことは是違う可らず現世に云

をく言の違はざらんをもて後生の疑をなすべからず、日蓮は此関東の

御一門の棟梁なり・日月なり・亀鏡なり・眼目なり・日蓮捨て去る

時・七難ひちなん必ず起おこるべしと去年九月十二日御勘氣を蒙りし時大音声を放てよばはりし事これなるべし☆に六十日乃至百五十日に此事起このことおこるか
是は華報かほうなるべし実果の成じょうぜん時いかなげかはしからんずらん、世間の愚者ぐしゃの思に云く日蓮智者にちれんちしやならば何ぞ王難なんに値哉あなんと申す日蓮来ての存知ふなり父母ふぼを打子うつこあり阿闍世王あじやせなり仏・阿羅漢あらかんを殺し血いを出す者あり提婆達多だいばだつた是なり六臣これをほめく伽利等これを悦ぶ、日蓮当世にちれんとうせには此御一門いちもんの父位ふゐなり仏阿羅漢あらかんの如ごとし然るを流罪るざいし主従共に悦よろこびぬるあはれに無慙むざんなる者なり誘法の法師等ほつしが自ら禍みずかの既すでに頼るを欺うきしがかく

なるを一旦いったんは悦ぶなるべし後には彼等かれらが欺うき目迎いちもんが一門に劣るべからず、例せば泰衡がせうとを討九郎判官を討て悦こしが如ごとし既すでに一門いちもんを亡もうす大鬼の此国に入なるべし法華經ほけきょうに云く惡鬼入其身あつきと是これなり。

日蓮にちれんも又かくせめらるるも先業せんごうなきにあらず不輕品ふきように云く 其罪つみ
畢已ひつち」等云云、不輕菩薩ふきようぼさつの無量の謗法ぼうぼうの者に罵詈めり打ちやくせられしも
先業せんごうの所感なるべし何いかに況や日蓮にちれん今生こんじやうには貧窮下賤びんぐげせんの者と生れ施陀羅
が家より出たり心こそすこし法華經ほけきやうを信じたる様なれども身は人身じんしんに
似にて畜身なり魚鳥を混丸こまして赤白二滯せきびやくとせり其中ごちゆうに識神しきしんをやどす濁
水に月のうつれるが如ごとし糞囊ふんのうに金こがねをつつめるなるべし、心は法華經ほけきやうを信
ずる故ゆえに梵天ぼんてん・帝釈たいしやくをも猶恐なおしと思はず身は畜生ちくしやうの身なり色心しきしん
ふそうふそうの故ゆえに愚者ぐしゃのあなづる道理どうりなり心も又身に對すればこそ月金に
もたとふれ、又過去かこの謗法ぼうぼうを案ずるに誰かしやういしる勝意しやうい比丘びくが魂たまにもや大
天が神にもや不輕輕毀ふきようの流類るるいなるか失心の余殘よざんなるか五千上慢じやうまん
の眷屬けんぞくなるか大通第三だいつうの余流よるにもやあるらん宿業はかりがたし鉄くろがねは
炎打きたいてば劍となる賢聖けんせいは罵詈めりして試みるなるべし、我今度このたびの御勘氣ごかんきは

世間の失せけん一分とがいちぶんもなし偏ひとえに先業せんごうの重罪じゅうざいを今生こんじょうに消して後生ごしやうの三惡さんあくを
脱まぬかれんずるなるべし、般泥垣經はつないおんきやうに云く、当来とうらいの世か仮りに袈裟けさを被て我が
法の中に於おいて出家しゅつけ學道がくどうし懶惰らんだ懈怠けたいにして此等これらの方等ほうとう契經けいぎを誹謗ひぼうするこ
と有まさらん当に知るべし此等これらは皆是みな今日の諸もろもろの異道いどうの輩やからなり」等云云、
此經文きやうもんを見ん者じしん自身みづかみをはづべし今・我等われらが出家しゅつけして袈裟けさをかけ懶惰らんだ
懈怠けたいなるは是こゝは仏ぶつ在世ざいせの六師外道りくしがいどうが弟子でしなりと仏記しるし給たまへり、法然ほうねんが
一類いちるい大日だいにち

がいちろいねんぶつしゅう一類念仏宗・禪宗ぜんしゅうと号して法華經ほけきょうに捨閉閣拋しゃへいかくほうの四字を副そへて制止せいしを
加ごんきょうて權教ごんきょうの弥陀みだ称名しょうみょう計ばかりを取立教外別伝きょうげべつでんして法華經ほけきょうを月つきをさす指
只ただもんじ文字もんじをかぞふるなんと笑ふ者は六師まつりゅうが末流まつりゅうの仏教ぶつぎょうの中なかに出来しゅつたいせる
なるべし、うれへなるかなや涅槃經ねはんぎょうに仏光明ぶつこうみょうを放はなて地の下一百三十六
地獄じごくを照てらし給たまうに罪人ざいにん・二人もなかるべし法華經ほけきょうの寿量品じゅうりょうほんにして皆みな
成仏じょうぶつせる故ゆゑなり但ただし一闍提人いつせんだいと申まをて謗法ぼうぼうの者計ばかり地獄守じごくしゅに留とどられた
りき彼等かれらがうみげて今の世にほんこくの日本國にほんこくの一切衆生いっさいしゅじょうとなれるなり。
日蓮にちれんも過去かこの種子しゆしすで已すでに謗法ぼうぼうの者なれば今生こんじょうに念仏者ねんぶつにて數年ねんねんが間ま。
法華經ほけきょうの行者ぎょうじやを見ては未みういちにんとくしや有一人得者せんちゅうむいつ千中無一等せんちゅうむいつと笑しなり今謗法ぼうぼうの
醉ごさめて見れば酒に酔よる者父位ふゐを打うて悦えきしが醉ごさめて後歎ごしが如ごとし欺ご
けども甲斐かいなし此罪消つみがたし、何いかに況いかや過去かこの謗法ぼうぼうの心中しんちゅうにそみけん
をや經文きょうもんを見候みそうらへば烏くの黒くろきも鷺さぎの白しろきも先業せんごうのつよくそみけ

るなるべし外道げどうは知らずして自然じねんと云い今の人は謗法ぼうぼうを顛あらわし扶たすけんとすれば我身わがみに謗法ぼうぼうなき由よしをもながちに陳答ちんとうして法華經ほけきょうの門を閉とよと法然ほうねんが書けるをとかくあらかひなんどす念仏者ねんぶつはさてをきぬ天台てんだい・真言等しんごんの人人ひとびと彼が方人かとうど

をあながちにするなり、今年正月十六日十七日に佐渡さどの国の念仏者等ねんぶつ數百人印性房ぼうと申すは念仏者ねんぶつの棟梁とうりやうなり

日蓮にちれんが許もとに来て云く法然上人ほうねんしょうにんは法華經ほけきょうを抛なげうてよとかかせ給あらには非あらずいっさいしゅじやうねんぶつに念仏ねんぶつを申させ給たまいて候此の大功德くどくに御往生おうじやうたがい疑なしと書付て侯を山僧等の流されたる並に寺法師等ほっし・善哉善哉よきかなよきかなとほめ候をいかはがこれを破はし給もうと申しき鎌倉かまくらの念仏者ねんぶつよりもはるかにはかなく候ぞむざん無慙もうとも申す計りなし。

いよいよ日蓮にちれんが先生せんしやう今生こんじやう先日せんじつの謗法ぼうぼうおそろしかかりける者の弟子でしと

成なりけんかかかる国くにに生なれけんいいかになるべしとも覺おぼえず、般はつない泥おんき垣よう經にに云いく
善ぜん男子なんし過か去こに無む量りようの諸しよ罪ざい・種しゆ種じゆの惡あく業ごうを作つくらんに是この諸しよの罪ざい報ほう・或ある
は輕き易ようせられ・或あるは形ぎ狀よう醜しう陋ろう衣え服ふく足あらず飲おん食じき☆疎そ・財そを求もとめて利りあ
らず貧ひん賤せんの家お及よび邪じ見けんの家に生なれ・或あるは王わ難なんに遇あう」等と云い云い、又また云いく
及おび余よの種しゆ種じゆの人にん間げんの苦く報ほう現げん世せに輕かく受うくるは斯これ護ご法ほうの功く徳とく力りきに
由よる故ゆなり」等と云い云い、此こ經き文もんは日に蓮ちれんが身み

なくば殆ど仏の妄語となりぬべし、一には・或被輕易二には・或形状醜陋三には衣服不足四には飲食☆疎五には求財不利・六には生貧賤家・七には及邪見家・八には・或遭王難等云云、此八句は只日蓮が身に感ぜり、高山に登る者は必ず下り我人を輕しめば還て我身人に輕易せられん形状端嚴をそしれば醜陋の報いを得人の衣服飲食をうばへば必ず餓鬼となる持戒尊貴を笑へば貧賤の家に生ず正法の家をそしれば邪見の家に生ず善戒を笑へば国土の民となり王難に遇ふ是は常の因果の定れる法なり、日蓮は此因果にはあらず法華經の行者を過去に輕易せし故に

法華經は月と月とを並べ星と星とをつらね華山に華山をかさね玉と玉とをつらねたるが如くなる御經を・或は上げ・或は下て嘲弄せし故に此八種の大難に値るなり、此八種は尽未來際が間・一つつこそ現ずべかり

しを日蓮にちれんつよく法華經ほけきょうの敵を責るによて一時いちじに聚あつまり起せるなり譬たとえば民の郷郡きやうくんなどにあるにはいかなる利錢りせんを地頭じとう等におほせたれど

もいたくせめず年年にのべゆく其所そのこを出る時に競起きやうきが如ごとし斯これ護法ごほうの功徳力くどくに由よる故なり等は是これなり、法華經ほけきょうには諸もろもろの無智むちの人ひと有あり惡口あくぐ罵めり罵めり等し刀杖瓦石とうじやうがしやくを加くわうる乃至國王ないしこくおう・大臣だいじん・婆羅門ばらもん・居士こじに向むかつて乃至數數ないししほしほ摸も出だせられん」等云云、獄卒ごくそつが罪人ざいにんを責せずば地獄じごくを出る者かたかりなん当世とうせの王臣おうしんなくば日蓮にちれんが過去かこ謗法ぼうぼうの重罪じゅうざい消けし難がたし日蓮にちれんは過去かこの不輕ふきやうの如ごとく当世とうせの人人ひとびとは彼の輕毀きやうきの四衆ししゆうの如ごとし人は替かれども因いんはは一ひとなり、父母ふぼを殺ころせる人異ことなれど

も同じ無間地獄むげんじごくにおついかなれば不輕ふきやうの因いんを行なじて日蓮にちれん一人ひとり釈迦しゃか・彌み・仏ぶつとならざるべき又彼諸人しよにんは跋陀婆羅門ばつだばらもん等と云はれざらんや但せんじう千劫阿鼻あび地獄じごくにて責せられん事ことこそ不快ふかいにはおぼゆれ是これをいかんとすべき、彼輕毀きやうき

の衆は始は謗はうぜしかども後には信しん伏ぶく随ずい從じゅうせりき罪つみ多た分ぶんは滅めつして少せう分ぶん有あしが父ふ母ぼ千人殺ころしたる程の大苦たいくをうく当とう世せの諸しよ人にんは翻ひるがえりす心なし譬ひゆほん喩ご品の如ごとく無む数しゆ劫こくうをや経きんんずらん三五の塵じん点てんをやおくらんずらん。これはさてをきぬ日蓮にちれんを信しんずるやうなりし者どもが日蓮にちれんがかくなれば疑うたがいををこして法華經ほけきようをすつるのみならずかへりて日蓮にちれんを教訓きようくんして我賢われけんしと思おもはん僻人びやくにん等らが念仏ねんぶつ者ものよりも久ひさく阿鼻地獄あびじごくにあらん事こと不ふ便びんとも申もうす計ばかりなし、

修羅しゅらが仏は十八界我は十九界と云ひ外道げどうが云く仏は一究竟道くきやうどう我は九十五究竟道くきやうどうと云いしが如ごとく日蓮御房にちれんごぼうは師匠ししやうにておはせども余にこはし我等われらはやはらかに法華經ほけきやうを弘ひろむべしと云んは螢火ほたるびが日月にちがつをわらひ蟻塚あきづかが華山くたを下し井江せいこうが河海かかいをあなづり烏鵲かささぎが鸞鳳らんほうをわらふなるべしわらふなるべし。

南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやう

文永九年太歲ぶんえい 壬申みずのえさる 三月二十日
花押かおう

日蓮

日蓮弟子にちれんでし・檀那等だんな御中おんちゆう

佐渡さどの国は紙侯そうらはぬ上面面に申せば煩わづらいあり一人ももるれば恨ありぬべし此文このもんを心ざしあらん人人ひとびとは寄合よあて「御覽りようけんじ料簡侯りょうけんて心なぐさませ給たまへ世間せけんにまさる欺きだにも出来しゅつたいすれば劣る欺きは物

ならず當時とうじの軍に死する人人ひとびと実不実ふじつは置く幾か悲しかるらん、い
ざはの入道にゅうどうさかべの入道にゅうどういかになりぬらんかはのべ山城やましろう得行寺殿
等の事いかにと書付て給べし、外典げてん書の貞觀じようかん政要せいようすべて外典げてんの
物語八宗ものがたりはっしゅうの相伝そうでん等此等これらがなくては消息しやうそくもかかれ侯そうらはぬにかま
へてかまへて給侯べし。

◆一二六

富木殿御返事

文永〇年4月51歳御作

於佐渡一の谷

962P

御返事

日蓮が臨終一分も疑無く頭を刎ねらるる時は殊に喜悅有るべし、大賊に値うて大毒を宝珠に易ゆと思う可きか。

鷲目員数の如く給ひ候い畢んぬ御志申し送り難く候、法門の事先度四条三郎左衛門尉殿に書持せしむ其の書能く能く御覽有る可し、粗經文を勘え見るに日蓮・法華經の行者為る事疑無きか但し今に天の加護を蒙らざるは一には諸天善神此の惡国を去る故か、二には善神法味を味わざる故に威光勢力無きか、三には大惡鬼三類の心中に入り梵天・帝釈も力及ばざるか等、二の証文道理追て進せしむ可く候、

但生涯しょうがい本より思い切て候今に翻返ひるがえること無く共の上又遣恨いこん無し諸もろもろの
悪人あくにんは又善知識ぜんちしきなり、撰受しょうじゅ・折伏しゃくふくの二義ふっせつ仏説よに依る、敢あえてて私曲しきよくに非あらず
万事ばんじり靈山淨土りやうぜんじやうどを期こすす、恐恐きようきよう謹言きんげん。

卯月十日

日蓮

花押かおう

土 木 殿

◆一二七

土木殿御返事

文永十年七月 五十二歳

御作

963P

鷲目二貫給侯い畢んぬ、太田殿と其れと二人の御心喜び侯、伊与房
は機量物にて侯ぞ今年留め候い畢んぬ、御勘気ゆりぬ事・御欺き侯べか
らず侯、当世・日本国子細之れ有る可き由之を存ず定めて勘文の如く
侯べきか、設い日蓮死生不定為りと雖も妙法蓮華經の五字の流布は
疑い無き者か伝教大師は御本意の円宗を日本に弘めんとす、
但し定慧は存生に之を弘め円・或は死後に之を顕す事法為る故に一重
大難之れ有るか、仏滅後・二千二百二十余年今に寿量品の仏と肝要
の五字とは流布せず、当時果報を論ずれば恐らくは伝教・天台にも

超え竜樹・天親にも勝れたるか、文理無くんば大慢豈之に過んや、章
安大師・天台を褒めて云く、天竺の大論尚其の類に非ず震旦の人師
何ぞ劣しく語るに及ばん此れ誇耀に非ず法相の然らしむるのみ」等云
云、日蓮又復是くの如し竜樹・天親等尚其の類に非ず等云云、此れ
誇耀に非ず法相の然らしむるのみ、故に天台大師日蓮を指して云く
復の五百歳遠く妙道に結わん」等云云、伝教大師当世を恋いて云く
末法太はだ近きに有り」等云云、幸いなるかな我が身 数数見擯出」の
文に当ること悦ばしいかな悦ばしいかな、諸人の御返事に之を申す故に
委細、恐恐。

七月六日

日蓮

花押

土木殿御返事

◆一二八

富木殿御書 ときどのごしよ

文永十一年五十三歳御作 ぶんえい

964P

けかち申すばかりなし米一合もうらずがししぬべし、此の御房たちも・みなかへして但一人候べし、このよしを御房たちにもかたりさせ給へ。たま

十二日さかわ十三日たけのした十四日くるまがへし十五日を・をみや十六日なんぶ、十七日このところ・いまださだまらずといえども、たいしはこの山中・心中に叶いて候へば・しばらくは候はんずらむ、結句は一人になりて日本国に流浪すべきみにて候、又たちとどまるみならば・けさんに入り候べし、恐恐謹言。しんちゆう かな そうら にほんこく るろう きようきよう きんげん

十七日

日蓮にちれん

在御判

ときどの

◆一二九

土木殿御返事ごへんじ

964P

仕候なり。

褒美ほうびに非ず、実に器量きりよう者なり。来年正月大進阿闍梨と越中に之を遣つかし去るべく候、白小袖一つ給ひ候ひ畢おわんぬ、今年日本にほんこく国一同に飢渴の上、佐渡さどの国には七月七日已下いかぞろ天より忽ちに石灰虫と申もうす虫と雨等に一時いちじに稲穀損し。其の上疫病えきびよう処しよ処しよに遍満へんまんし、方方死難かたがたなん脱れ難なんきか、事事紙上に尽し難なんく候、恐恐謹言きようきようきんげん。

十一月三日

日蓮にちれん在御判

◆一三〇

法華行者逢難事

文永十一年正月

五十三歳

御作与富木常忍

965P

河野辺殿等中

大和阿闍梨御房御中

一切我弟子等中

三郎左衛門尉殿

謹上

日蓮

富木殿

追て申す、竜樹・天親は共に千部の論師なり、但権大乘を申べて
法華經をば心に存して口に吐きたまわず伝有り、天台・伝教は之を宣べ

て本門の本尊と四菩薩と戒壇と南無妙法蓮華經の五字と之を残したもう、所詮一には仏・授与したまわざるが故に、二には時機未熟の故なり、今既に時来れり四菩薩出現したまわんか日蓮此の事先ず之を知りぬ、西王母の先相には青鳥・客人の来相には☆鵲是なり、各・我が弟子たらん者は深く此の由を存ぜよ設い身命に及ぶとも退転すること莫れ。

富木・三郎左衛門の尉・河野辺・大和阿闍梨等・殿原・御房達各各互に読聞けまいらせさせ給え、かかる濁世には互につねに・いるあわせてひまもなく後世ねがわせ給い候へ。

法華經の第四に云く如来の現在すら猶怨嫉多し況や滅度の後をや」等云云、同第五に云く「一切世間怨多くして信じ難し」等云云、涅槃經の三十八に云く爾の時に外道に無量の人有り○心瞋恚を生

ず」等云云、又云^もく

爾その時に多く無量むりようの外道げどう有り和合わごうして共に摩伽陀あじやせの王・阿闍世あじやせの前に
往ゆきぬ○今は唯一ただ大惡人あくにん有り瞿曇沙門くどんしゃもんなり王未いまだ檢校けんぎょうせず我等われらはなはだ甚た
だ畏おそる、一切世間いっさいせけんの惡人利養あくにんりようの爲ための故ゆえに其その所に往集せんぞくして眷屬けんぞくと爲な
ないしかしよう乃至迦葉なりし・舍利弗しゃりほつ・目犍連もげんれん等云云にょらいげんさいゆたおんしつ如来現在にょらいげんさいゆたおんしつ猶多怨嫉ちこうなんじの心是これなり、得一いち
大德天台智者大師だいとくてんだいちしやだいしを罵ののりして曰いわく智公汝ちこうなんじは是れ誰たれが弟子でしぞ三寸さんすんに
足らざる舌根ぜつこんを以て覆面舌ふめんぜつの所説しよせつの教時きょうじを謗ぼうず、又云く豈い是れ
☆狂てんきやうの人に不あらずや」等云云、南都なんと・七

大寺こうとくの高徳等ごみようそうず・護命僧都かげのぶりつし・景信律師等でんぎやうだいし三百余人ののし・伝教大師でんぎやうだいしを罵ののりして
曰いわく西夏せいしやに鬼弁婆羅門ばらもん有り東土とうどに巧言ぎやうげんを吐とく禿頭沙門とくずしゃもんあり此これ
すなわもつるいみしやうしやう乃ち物類冥しやか召しよして世間せけんを誑惑おおわくす」等云云、秀句しゅうくに云く淺いきは易やすく深ふか
きは難がたしとは釈迦しやかの所判しよはんなり淺しやうきを去はなつて深ふかきに就つくは丈夫じやうぶの心なり、
天台大師てんだいだいしは釈迦しやかに信順しんじゆんし法華宗ほつげしゆうを助たすけて震旦しんたんに敷揚ふようし、叡山えいさんの一家は

てんだい そうじよう ほつげしゅう
天台に相承し法華宗を助けて日本に弘通す云云。

そ 夫れ在世と滅後と正像二千年の間に法華經の行者・唯三人有り

いわゆる 所謂仏と天台・伝教となり、真言宗の善無畏・不空等・華嚴宗の杜順

・智儼等・三論・法相等の大師等は実經の文を会して權の義に順ぜしむ

る人人なり、竜樹・天親等の論師は内に鑒みて外に発せざる論師なり、

經の如く宣伝すること正法の四依も天台・伝教には如かず、而るに

仏記の如くんば末法に入つて法華經の行者有る可し其の時の大難・

在世に超過せんと云云、仏に九横の大難有り所謂孫陀利の謗と金鑄と

馬麦と琉璃の釈を殺すと乞食空鉢と旃遮女の誘と調達が山を謗すと

寒風に衣を索むるとなり、其の上一切外道の譏奏上に引くが如し記文

の如くんば天台・伝教も仏記に及ばず。

之を以て之を案ずるに末法の始に仏説の如く行者世に出現せんか、

而るに文永十年十二月七日・武蔵の前司殿より佐土の国へ下す状に云く自判之在り。

佐渡の国の流人の僧日蓮弟子等を引率し悪行を巧むの由其の聞え有り所行の企て甚だ以て奇怪なり今より以後・彼僧に相い随わん輩に於ては炳誠を加えしむ可し、猶以て違犯せしめば交名を注進せらる可きの由の所に候なり、何て執達件の如し。

文永十年十二月七日

沙門觀惠上る

依智六郎左衛門尉等云云。

此の状に云く悪行を巧む等云云、外道が云く瞿曇は悪人なり等云云、又九横の難一一に之在り、所謂琉璃殺釈と乞食空鉢と寒風索衣とは仏世に超過せる大難なり、恐くは天台・伝教も未だ此の難に値い

たまわ^{まさ}ず当^{まさ}に知るべし三人に日蓮^{にぢれん}を入れ四人と爲^なして法華^{ほけき}經^{きやう}の行者^{ぎやうじや}。
末^{まつ}法^{ぽう}に有^あるか、喜^{よろこ}い哉^{しいかな}。況^{きやう}滅^{めつ}度^ど後^ごの記^き文^{もん}に当^{あた}れり悲^{かな}い哉^{かな}。国^{くに}中^{ちゆう}の諸^{しよ}人^{にん}。
阿^あ鼻^び獄^{ごく}に入^いらんこと茂^{しげ}きを厭^{いと}うて之^{これ}を子^し細^{さい}に記^きさず心^{こころ}を以^{もつ}て之^{これ}を推^{すい}せ
よ。

文^{ぶん}永^{えい}十^{じゅう}一^{いつ}年^{ねん}甲^{きの}戌^{えいぬ}正^{せい}月^{げつ}十^{じゅう}四^し日^{にち}日^{にち}蓮^{れん}花^か押^お

一^{いっ}切^{さい}の諸^{しよ}人^{にん}之^{これ}を見^{けん}聞^{もん}し志^{こころざし}有^{ひと}らん人^{ひと}人^{ひと}は互^{たがひ}に之^{これ}を語^{ことば}れ。

◆ 一三二

富木殿御返事

文永十二年五十四歳御作

968P

富木殿御返事

日蓮

かたびら

帷一領給ひ候い畢んぬ、夫れ仏弟子の中・比丘一人はんべり、飢饉

の世に仏の御時事かけて候いければ比丘袈裟をうて其のあたいを仏に

奉る、仏其の由来を問ひ給ひければ・しかじかとありのままに申しけり、

仏云く袈裟はこれ三世の諸仏・解脱の法衣なり、このあたひをば我報

じがたし」と辞退しまししかば此の比丘申すは

「この袈裟あたひをば・いかんがせん」と申しければ、仏の云く「汝悲母

有りや不や」答えて云く有り」仏云く此の袈裟をば汝母に供養すべ

し」此の比丘・仏に云く・仏は此れ三界の中第一の特尊なり一切衆生の

眼目がんもくにてをはす、設たとい十方じゆつぽう世界せかいを覆おおう衣いなりとも大地だいちにしく袈裟けさなりとも能よく報たまじ給たまうべし、我が位むちは無智むちなる事牛うしのごとし羊ひつよりもはかなしいかでか袈裟けさの信施しんせをほうぜん」と云云、仏返して告いげて云いく「汝なんじが身をば誰か生なみしぞや

汝なんじが母ははこれを生なむ此この袈裟けさの恩報おんほうじぬべし」等云云、此これは又また齡よわい九旬くじゆんにいたれる悲母ひもの愛子あいこに・これをまいらせさ給たまえる我われと両眼りやうげんを誕うり身命しんみやうを尽ことごとくせり、我が子の身として此このか帷かたびらの恩おんかたしと・をばして・つかわせるか日蓮にちれん又またはうじがたし、しかれども又返すべきにあらず此この帷かたびらをきて日天にってんの御前おんまえにして此この子細しさいを申もうし上げば定めて

釈梵しやくふん諸天しよてんしろしめすべし、帷かたびらは一なれども十方じゆつぽうの諸天しよてん此れをしり給たまうべし、露つゆを大海たいかいによせ土どを大地だいちに加るがごとし生生に失せじ世世にくちざらむかし、恐きよう恐きよう謹言きんげん。

二月五日

日

蓮

花押^{かおう}

◆ 一二三

富木殿御書

建治元年五十四歳御作

969P

与富木常忍

妙法蓮華經の第二に云く、若し人信ぜずして此の經を毀謗し經を
誦誦し書持すること有らん者を見て輕賤憎嫉して結恨を懷かん
其人命終して阿鼻獄に入らん乃至是の如く展轉して無數劫に至らん」
第七に云く、千劫阿鼻獄に於てす」第三に云く、「三千塵点」第六に云く
「五百塵点劫」等云云、涅槃經に云く、惡象の為に殺されては三惡
に至らず惡友の為に殺されては必ず三惡に至る」等云云、賢慧菩薩の
法性論に云く、「愚にして正法を信ぜず邪見及び☆慢なるは過去の
謗法の障りなり不了義に勤着して供養恭敬に著し唯邪法を見て

善知識ぜんちしきに遠離おんりして謗法者ぼうぼうの小乗しょうじやうの法ほふに樂ぎやう著ちやくする是かくのごとの如ごとき等の衆生しゆじやうに親近しんこんして大乘だいじやうを信ゆえぜず故ゆゑに諸仏しよぶつの法ほふを謗ぼうず、智者ちしやは怨家おんけ・蛇じや・火毒くわどく・因陀羅いんだら・霹靂へきれき・刀杖とうじやう諸もろもろの惡獸あくしよく・虎狼ころう・師子しし等を畏おそるべからず、彼は但よ能よく命いのちを断おそじて人ひとをして畏おそるべき阿鼻獄あびごくに入あらしむるべからず、畏おそるべきは深法じんぼうを謗ぼうずると及および謗法ぼうぼうの知識ちしきとなり決定けつじやうして人ひとをして畏おそるべき阿鼻獄あびごくに入あらしむ、惡知識あくちしきに近づあきて惡心あくしんにして仏ぶつの血ちを出だし及および父母ふぼを殺害さつがいし諸もろもろの聖人しょうにんの命いのちを断わじ和合僧わごうそうを破壊はえし及および諸もろもろの善根ぜんこんを断おずると雖いえども念しやうぼうを正法しやうほうに繋つなぐるを以もつて能よく彼の處ところを解脱げだつせん、若もし復また余人じんじん有あつて甚深じんじんの法ほふを誹謗ひぼうせば彼かの人ひと無量劫むりやうこくにも解脱げだつを得うべからず、若もし人衆生しゆじやうをして是かくのごとの如ごときの法ほふを覺信かくしんせしめば彼かれは是これ我が父母ふぼ亦是またこれ善知識ぜんちしきなり、彼かの人ひとは是ちしや智者ちしやなり如來にやらいの滅後めつごに邪見顛倒じやけんてんどうを廻めぐして正道せいどうに入あらしむるを以もつての故ゆゑに三寶さんぼう清淨しやうじやうの信しん・菩提ぼだい

功德くどくの業ごうなり」等云云、竜樹りゅうじゆ菩薩ぼさつの菩提ぼだい資糧いりやう論ろんに云く「五無間むげんの業ごうを説ときたもう乃ない至し許ゆるし未解みげの深法じんぽうに於おいて執着しやくちやくを起おこせるは○彼の前の五無間むげん等の罪つみ緊きんに之これを比ひするに百分ひゃくぶんにしても及およばず」云云。

未けんじんれ賢人けんじんは安やすきに居ゐて危あやきを欺ねいじんき佞人ねいじんは危あやきに居ゐて安やすきを欺あざむく大火だいかは小水せうすいを畏い怖ふし大樹たいじゆは小鳥せうてうに値あいて枝えだを折おらる智人ちじんは恐く怖ふすべし大乘だいじやうを謗ぼうずる故ゆゑに、天親てんじん菩薩ぼさつは舌しつを切きらんと云いい馬鳴めみやう菩薩ぼさつは頭かうべを刎はねんと願きちやうい吉蔵だいし大師だいしは身みを肉橋にくきやうと為なし玄奥さんやう三蔵さんざうは此これを靈地れいぢに占ふくい不空ふくう三蔵さんざうは疑うたがいいを天竺てんじくに決きし伝教でんぎやう大師だいしは此これを異域いよくに求みなむ皆上みなあに挙あぐる所きやうろんは經論しゆろんを守護しゆごする故ゆゑに。

今いま・日本にほん国こくの八宗はつしゆ並ならびに浄土じやうど・禪宗ぜんしゆ等らの四衆ししゆ上主上かみ・上皇かうわうより下しも臣下しんか万民ばんみんに至いたるまで皆みな一人ひとりも無なく弘法こうぼう・慈覺じかく・智証ちしやうの三大師だいしの末孫ぼつそん・檀越だんのつなり、円仁えんにん・慈覺じかく大師だいし云く故ゆゑに彼かと異いり」円珍えんちん・智証ちしやう大師だいし云く

華嚴・法華を大日經に望むれば戲論と為す」空海弘法大師云く、復に望むれば戲論と為す」等と云云、此の三大師の意は法華經は已・今・當の譜經の中の第一なり然りと雖も大日經に相對すれば戲論の法なり等云云、此の義心有らん人信を取る可きや不や。

今・日本國の諸人・惡象・惡馬・惡牛・惡狗・毒蛇・惡刺・懸岸・險崖・暴水・惡人・惡國・惡城・惡舍・惡妻・惡子・惡所從等よりも此に超過し以て恐怖すべきこと百千万億倍なれば持戒・邪見の高僧等なり、問うて云く上に挙ぐる所の三大師を謗法と疑うか叡山第二の円澄寂光大師・別當光定大師・安慧大樂大師・慧亮和尚・安然和上・淨觀僧都・檀那僧・正・慧心先德・此等の數百人、弘法の御弟子実慧・真濟・真雅等の數百人並びに八宗・十宗等の大師先德・日と日と・月と月と・星と星と並びに出でたるが如し、既に四百余年を経歴するに此等

の人人・二人として此の義を疑わ^{うたが}ず汝何^{なんじ}なる智を以て之^{これ}を難^{なん}ずるや云云。

此等^{これら}の意を以て之^{これ}を案^{あん}ずるに我が門家^{もんか}は夜は眠りを断ち昼は暇を止^{とど}めて之^{これ}を案^{あん}ぜよ一生空^{むな}しく過して万歳悔^くゆること勿^{なか}れ、恐^{きよう}恐^{きよう}謹言^{きんげん}。

八月二十三日

日蓮花押^{にちれんかおう}

富木殿^{とぎどの}

鷺目^{がもく}一結給^{ひとゆい}び候畢^{おわ}んぬ、志^{こころざし}有^あらん諸人^{しよにん}は一処^{いっしょ}に踏集^{ふみあ}して御聴聞^{ちようもん}有^あるべきか。

◆ 一三三

御衣並単衣御書ごしよ

建治元年がんねん

五十四歳御作

971P

御衣ならの布並びに御単衣給そうらひ候おわい畢せんんぬ鮮白比丘尼びくと申せし人は生
れさせ給たまいて御衣をたてまつりたりけり、生長するほどに次第しだいにこの衣
大になりけり、後に尼とならせ給たまいければ法衣ほうえとなりにけり、ついに
法華經ほけきようの座にして記☆をさづかる一切衆生いっさいしゆじよう喜見きけん如来にょらいこれなり、又
法華經ほけきようを説く人は柔和忍辱衣にんにくと申もうして必ず衣あるべし、物たね

と申もうすもの一なれども植えぬれば多くとなり竜は小水を多雨となし人
は小火だいかを大火となす、衣かたびらは一なれども法華經ほけきようにまいらせ給たまい
ぬれば法華經ほけきようの文字もんじは六万九千三百八十四字・一字は一仏いちぶつなり、此の

仏は再生敗種さいしゅうはいしゅを心符しんぷとし顛本遠寿けんほんおんじゅを其その寿いのちとし常住じやうじゅうぶつじやう仏性ぶつじやうを咽喉のんどと

し一乗妙行いちじやうめうを眼目がんもくとせる仏ぶつなり、応化非真仏おうけふしんぶつと申もうして三十二相

・八十種好しじゅうしやうの仏ぶつよりも法華經ほけきやうの文字もんじこそ真の仏しんぶつにては・わたらせ給たまいて

仏在世ざいせに仏ぶつを信ぜし人は仏ぶつにならざる人もあり、仏の滅後めつごに法華經ほけきやうを

信ずる人は無む一いつ不成じやうぶつによらい仏ぶつ如来きんげんの金言きんげんなり、この衣きをつくりてかたびらを

きそえて法華經ほけきやうを

よみて候にちれんわば日蓮むかいは無戒びくの比丘ほけきやうなり法華經しやうじきは正直きんげんの金言きんげんなり、毒蛇どくじやの

珠たまをはき伊蘭いらんの栴檀せんだをいだすがごとし、恐恐きようきよう謹言きんげん。

九月二十八日御返事日蓮こへんじにちれん 花押かおう

◆一三四

観心本尊得意抄 かんじんほんぜんとくいしやう

建治元年十一月 五十四 がんねん

歳御作

972P

鷺目一貫文厚綿がもくの白小袖一つ筆十管墨五丁給び畢おわんぬ。

身延山は知食ごと如く冬は嵐はげしくふり積む雪は消えず極寒ごくかんの処ところにて候間昼夜の行法もはだうすにては堪たえ難かたく辛苦しやうなわしゆうにて候に此の小袖しょうじゆを著あては思おもひ有ある可べからず候なり、商那和修しょうなわしゆうは付法蔵ふほうぞうの第三だいさんの聖人しょうにんなり、此の因位いんいを仏

説いわいて云く乃往過去むかしかこに病の比丘びくに衣を与ようる故ゆえに生生世世しょうじよよよに不思議ふしぎ自在じざいの衣を得たり、今の御小袖は彼かしこに似たり此の功德くどくは日蓮にちれんは之これを知しる可べからず併べながら釈迦しゃかぶつ仏ぶつに任せ奉たてまつり畢おわんぬ。

そもそも

抑も今の御状に云く教信の御房觀心本尊抄の未得等の文字に付

しやくもん

て述門をよまじと疑心の候なる事不相伝の僻見にて候か、去る文永

しやくもん

年中に此の書の相伝は整足して貴辺に奉り候しが其の通りを以て御

きようくんあ

教訓有る可く候、所詮・

しよしよ

在在処処に述門を捨てよと書きて候事は今・我等が読む所の述門にて

しやくもん

は候はず、叡山天台宗の過時の迹を破し候なり、設いたてんたい・伝教の

えいさん

如く法のままありとも今末法に至ては去年の暦の如し何に況や慈覚

ごと

自り已来大小・権実に迷いて大謗法に同じきをや、然る間像法の時の

このかた

利益も之無し増して末法に於けるをや。

ほくけ

一北方の能化難じて云く爾前の経をば未顕真実と捨て乍ら安国論に

にぜん

は爾前の経を引き文証とする事自語相違と不審の事前前申せし如し、

いちだい

総じて一代聖教を大に分つて一と為す一には大綱二には綱目なり、

初の大綱たいこうとは成仏得道じょうぶつとくどうの教なり、成仏じょうぶつの教とは法華經ほけきょうなり、次に綱目
とは法華ほっけ已前いぜんの諸經しよきょうなり、彼の諸經しよきょう等らは不成仏じょうぶつの教なり、
成仏得道じょうぶつとくどうの文言これ之を説くと雖いえども但名字みょうじのみ有て其その実義じつぎは法華ほっけに
之これ有あり、伝教大師でんぎょうだいしの決權實論ごんじつに云く、權智ごんちの所作しよさは唯名ただのみ有て実義じつぎ
有あること無し」云云、但し權教ごんきょうに於おいても成仏得道じょうぶつとくどうの外そとは説相空せつそうしかる
可べからず法華ほっけの為ための

網目なるが故に、所詮成仏の大綱を法華に之を説き其の余の網目は衆典に之を明す、法華の爲の網目なるが故に法華の証文に之を引き用ゆ可きなり、其の上法華經にて実義有る可きを爾前の經にして名字計りのしる事全く法華の爲なり、然る間尤も法華の証文となるべし。

問う法華を大綱とする証如何、答う天台は当に知るべし此の經は唯如來說教の大綱を論じて網目を委細にせざるなりと、問う爾前を網目とする証如何、答う妙樂の云く皮膚毛綵衆典に出在せり」云云、問う成仏は法華に

限ると云う証如何、答う經に云く唯一乗の法のみ有て二も無く亦三も無し」文問う爾前は法華の爲との証如何答う經に云く種種の道を示すと雖も仏乗の爲なり」委細申し度く候と雖も心地違例して候程に省略せしめ候、恐恐謹言。

十一月二十三日

にちれんかおう
日蓮花押

ときどのごへんじ
富木殿御返事

そつどのものがたり
帥殿の物語りしは下総しもふさに目連樹もくれんと云う木の候よし申し候し、其その木

の根をほりて十兩ばかり兩方の切目には焼金やきがねを宛てて紙にあつくつつみて風ひかぬ様にこしらへて大夫次郎たゆうが便宜びんぎに給ひ候べきよし御伝えあるべく候。

◆一三五

聖人知三世事

建治元年

五十四歳御作 与

富木常忍

974 P

聖人と申すは委細に三世を知るを聖人と云う、儒家の三皇・五帝並びに三聖は仏説在を知つて過・末を知らず外道は過去・未来八万を知る一分の聖人なり、小乗の二乗は過去・未来の因果を知る外道に勝れたる聖人なり、小乗の菩薩は過去三僧祇菩薩、通教の菩薩は過去に動踰塵劫を経歴せり、別教の菩薩は一一の位の中に多俱低劫の過去を知る、法華經のの迹門は過去の三千塵点劫を演説す一代超過是なり、本門は五百塵点劫・過去遠遠劫をも之を演説し又未来無數劫の事をも宣伝し、之に依つて之を案ずるに委く過未を知る

は聖人しやうにんの本なり、教主きやうしゆ釈尊しやくそん既に近くは去つて後三月ごさんの涅槃ねはん之を知り遠くは後・五百歳・広宣流布かうせんるふ疑うたがひい無き者か、若し爾もしれば近きを以て遠きを推おし現げんを以て当を知る如是相によせそう乃至本末究竟等ほんまつつきやう是なり。

後・五百歳には誰人だれびとを以て法華經ほけきやうの行者ぎやうじやと之を知る可きや予は未だ我が智慧ちえを信ぜず然りと雖も自他じたの返逆ほんぎやく・伝道之を以て我が智を信あえてず敢て他人たにんの爲に非ず又我が弟子等でし之を存知せよ日蓮にちれんは是れ法華經ほけきやうの行者ぎやうじやなり不輕ふきやうの跡あとを紹繼しやうけいするの故に輕毀きやうきする人は頭七分に破・信ずる者は福を安明あんみやうに積まん、問うて云く何ぞ汝なんじを毀そしる人頭破七分無きや、答えて云く古昔いむの聖人しやうにんは仏を除いて已外いげ之を毀そしる人・頭破但一人・二人なり今日蓮いまにちれんを毀皆みなする事は非一人・二人に限る可らず日本にほん一國・一同に同じく破やぶるるなり、所謂正嘉いふゆるの大地震しやうか・文永ぶんえいの長星は誰か故ぞ日蓮にちれんは一閭浮提えんぶだい第一だいいちの聖人しやうにんなり、上一人より下万民かみいちにんに至るまで之を

輕毀きようきして刀杖とうじやうを加え流罪るざいに処しよするが故ゆえに梵ぼんと釈しやくと日月にちがつ・四天してんと隣国りんごくに
仰おおせ付けて之これを逼責ひつせきするなり、大集經だいしつきやうに云いく・仁王經にんのうきやうに云いく・涅槃經ねはんきやう
に云いく・法華經ほけきやうに云いく・設たといば祈ばんきを作なすとも日蓮にちれんを用もちいずんば必ず此この
国この今の壱岐いき・対馬つしまの如ごとくならん、我が弟子でし仰あいで之これを見よ此これ偏ひとえに日蓮にちれん
が貴尊きそんな

るに非^{あら}ず法華經^{ほけきょう}の御力^{おんちから}の殊勝^{しゆしょう}なるに依^よるなり、身を挙^あぐれば慢^{まん}ずと
想^{おも}い身を下^{くだ}せば經^{きやう}を頗^{すこぶ}る松高^{しょうかう}ければ藤長^{とうぢやう}く源深^{げんしん}ければ流れ遠^{とほ}し、幸^{さい}な
るかな樂^{らく}しいかな穢^{えじ}土^どに於^{おい}て喜樂^{きらく}を受^うくるは但^{にちれん}日蓮^{にちれん}一人^{ひとり}なる而^{のみ}已^い。

◆一三六 富木尼御前御返事^{あまごぜんごへんじ}

建治二年 五十

五歳御作

975p

鷺^{がもく}目^め一貫^{いちくわん}並^{なら}びにつつひとつ給^{たま}い候^い了^{おわ}んぬ・やのはしる事は弓^{ゆみ}のちから
くものゆくことはりうのちから、をとこ

のしわざはめのちからなり、いまときどののこれへ御^{おんちから}わたりある事尼^にござ
んの御力^{おんちから}なり、けぶりをみれば火^かを

みるあめをみればりうをみる、をとこをみればめをみる、今ときどのに

けさんつかまつれば尼ごぜんをみたてま

つると・をぼう、ときどのの御物がたり候はこのは・わのなげきのなかに
りんずうのよくをはせしと尼がよくあたり

かんびやうせし事のうれしさ・いつのよにわするべしともをばえずと・よ
ろこばれ候なり、なによりも・をぼつかな

き事は御所勞なり、かまえてさもと三年はじめのごとくに・きうじせさ
せ給へ、病なき人も無常まぬかれがたし但しとしのはてにはあらず、
法華經ほけきやう ぎやうじやの行者なり非業の死にはあるべからずよも業病にては候はじ、
設たといい業病なりと

も法華經ほけきやう おんちからの御力たのもし、阿闍世王あじやせは法華經ほけきやうを持ちて四十年の命をの
べ陳臣ちんしんは十五年の命をのべたり、尼ごぜん

又法華經ほけきやう ぎやうじやの行者しんじんなり御信心月のまさるがごとく・しをのみつがごとし、

いかでか病も失せ寿ものびざるべきと強

盛にをぼしめし身を持し心に物をなげかざれ、なげき出来^{いでき}る時はゆき

つしまの事・だざひふの事・かまくらの人^{ひと}人^{びと}の

天の樂・のごとにありしが、当時^{とうじ}つくしへむかふとどまる・めこゆくをと

こ、はなるるときはかわをはぐがごとく

かをと・かをとをとりあわせ目と目とをあわせてなげきしが、次第^{しだい}には

なれてゆいのはま・いなぶらこしごえさかわはこねさか一日・二日すぐる

ほどに、あゆみあゆみ・とをさかる・あゆみをかわも山もへだて雲もへだ

つれば・うちそう

ものはなみだなり・ともなうものはなげきなり、いかにかなしかるらむ・
かくなげかんほどに・もうこのつわものせめきたらば山か海もいけとり
か・ふねの内か・かうらいかにて・うきめにあはん、これ・ひとへに失もな
くて日本国にほんこく

一切衆生の父母いっさいしゆじやうふぼとなる法華經ほけきやうの行者日蓮ぎやうじやにちれんをゆへもなく・或あるはのり・或ある
は打ち・或あるはこうじをわたし、ものにくるい

しが十羅刹じゅうらせつのせめをかほりてなれる事なり、又又これより百千万億倍せんまん
たへがたき事どもいで来るべし、不思議ふしぎを

目の前に御らんあるぞかし、我れ等は仏ぶつに疑うたがひいなしと・をばせば・なに
のなげきか有あるべき、きさきになりても・

なにかせん天てんに生れても・ようしなし、竜女りゆうにょがあとをつぎ摩訶波舍波提まかばしはだい
比丘尼びくにのれちにつらなるべし、あらうれし・あらうれし、南無なむ

妙法蓮華經・南無妙法蓮華經と唱えさせ給へ、恐恐謹言。

三月二十七日日蓮にちれん 花押尼ごぜんへ

◆一三七 忘持經事じきよう 建治二年 五十五歳御作 与

富木常忍ときじょうにん

976p

忘れ給う所の御持經追て修行者に持たせ之を遣わす。

魯の哀公云く人好く忘る者有り移宅に乃ち其の妻を忘れたり云云、

孔子云く又好く忘ること此れより甚しき者有り桀紂の君は乃ち

其の身を忘れたり等云云、夫れ桀特尊者は名を忘る此れ閻浮第一の好

く忘るる者なり今常忍上人は持經を忘る日本第一の好く忘るるの仁

か、大通結縁の輩は衣珠を忘れ三千塵劫を経て貧路に踣☆し久遠
下種の人は良薬を忘れ五百塵点を送りて三途の嶮地に顛倒せり、今
真言宗・念仏宗・禪宗・律宗等の学者等は仏陀の本意を忘失し未来
無数劫を経歴して阿鼻の火坑に沈淪せん、此れより第一の好く忘る
る者あり所謂今の世の

てんだいしゅう 天台宗の学者等と持経者等との日蓮を誹謗し念仏者等を扶助する
こ 是れなり、親に背いて敵に付き刀を持ちて自を

破る此等は且く之を置く。

そ 夫れ常啼菩薩は東に向つて般若を求め善財童子は南に向いて華嚴を
せつせん 得る雪山の小児は半偈に身を投げ樂法梵志は一偈に皮を剥ぐ、此等は
みなじょうしやうだいにん 皆上聖大人なり其の迹を☆うるに地・住に居し其の本を尋ぬれば
とうみやう 等妙なるのみ・身は八熱に入つて火坑三昧を得・心は八寒に入つて
せりやうさんまい 清涼三昧を証し身心共に苦無し、譬えば矢を放つて虚空を射・石を握
つて水に投ずるが如し。

じやうにんきへん まつだい 今常忍貴辺は末代の愚者にして見思未断の凡夫なり、身は俗に非ず
あら とくこじ 道に非ず秃居士心は善に非ず惡に非ず羝羊のみ、然りと雖も一人の
ひも 悲母・堂に有り朝に出で主君に詣で夕に入て私宅に返り営む所は悲母

の爲め存する所は孝心のみ、而るに去月下旬の比・生死の理を示さんが爲に黄泉の道に趣く此に貴辺と歎いて言く齡既に九旬に及び子を留めて親の去ること次第たりと雖も倩事の心を案ずるに去つて後來る可からず何れの月日をか期せん二母

国に無し今より後誰をか拝す可き、離別忍び難きの間・舍利を頸に懸け足に任せて大道に出で下州より甲州に至る其の中間往復千里に及ぶ国・皆飢饉し山野に盜賊充滿し宿宿糧米乏少なり我身羸弱・所従亡きが若く牛馬合期せず峨峨たる大山重重として漫漫たる大河多多なり高山に登れば頭を天に☆ち幽谷へ下れば足雲を踏む鳥に非れば渡り難く鹿に非れば越え難し眼眩き足冷ゆ、羅什三歳の葱嶺・役の優婆塞の大峰も只今なりと云云、然る後深洞に尋ね入りて一菴室を見る法華誦誦の音・青天に響き一乘談義の言山中に聞ゆ、案内を触れて

室に入り教主釈尊きようしゆしやくそんの御宝前ほうぜんに母の骨を安置あんちし五臓を地に投げ合掌がつしやうして両眼りやうげんを開き尊容を拝はいし歡喜身かんきに余り心の苦み忽たちまち息やむ、我が頭こうべは父母ふぼの頭こうべ・我が足は父母ふぼの足・我が十指は父母ふぼの十指・我が口は父母ふぼの口なり、譬たとえば種子しゆしと菓子このみと身と影との如ごとし教主釈尊きようしゆしやくそんの成道じやうどうは淨飯じやうはん・摩耶まやの得道とくどう・吉占きつせん師子しし・青提女しやうだいによ・目☆尊者もつげんそんじやは同時どうじの成仏じやうぶつなり、是かくのごとの如く觀ずる時・

無始むしの業障ごうしょう忽ちたちまに消えしんしょ心性みょうれんの妙蓮たちま忽ちたちまに開きたま給うしかか然しかして後ごに随分ずいぶん
仏事ぶつじを為なし事故な無なくく還かえり給たまう云云きようきようきんげん、恐恐きようきよう謹言きんげん。
富木入道殿にゅうどう

◆ 一三八 富木殿御返事 建治二年十万五十五歳御作

978p

鷲目がもく一結ひとゆい天台大師てんだいだいしの御宝前ほうぜんを莊嚴そうごんし侯そうらいた了おわぬ、經きやうに云いく
法華ほつげ最第一さいだいいちなり」と、又云いく 罷よく是この經典きやうてんを受持じゆじすること有あらん者もの
も亦復また是かくの如ごとし一切衆生いっさいしゆじやうの中に於おいて亦またこれ第一だいいちなり」と、又云いく 其その
福復また彼かれれに過すぐみやうらく「妙樂

云いく 若もし悩乱のうらんする者は頭七ことうべ分に破われ供養くようすること有あらん者は

福十号ふくじゅうごうに過ぐす」伝教大師でんきょうだいしも 讀者よみは福ふくを安明あんみょうに積たみ謗者ぼうしやは罪つみを無間むげんに開くひらく」等云云、記きの十じゅうに云く 方便ほうべんの極位きよくいに居ゐる菩薩ぼさつ猶なほ尚なほ第五十人だいごじゅうにんに及およばず」等云云、華嚴經けこんきやうの法慧ほうえ功德林くんとくどくりん大日經だいにちぎやうの金剛薩捶こんごうさくぢ等ら尚なほ法華經ほふけきやうの博地はくぢに及およばず何いかに況いはや其その宗そうの元祖がんそ等ら法藏ほうざう善無畏ぜんむい等らに於おいてをや、是これは且しく之これを置く、尼しごぜんの御所おんところ勞わがみの御事おんこと我身わがみ一身いつしんの上うへとをもひそうら候もちへば昼夜しやに天あめに申もちし候もちなり、此この尼しごぜんは法華經ほふけきやうの行者ぎやうじやをやしなう事こと灯とうに油あぶらをそへ木の根ねに土つちをかさぬるがごとし、願ねがくは日月にちがつ天あめ共どもの命いのちにかわり給たまへ

と申もちし候もちなり、又またをもいわする事こともやと・いよ房ぼうに申もちしつけて供ともそ、たのもしと・をばしめせ、恐きようきよう恐きよう。

十一月二十九日

富木殿御返事ときどのごへんじ

日蓮花押

◆一三九 道場神守護事

建治二年十二月

五

十五歳御作

979p

鷺目五貫文たしかに送り給ひ候おわん了ぬ、且つ知食しろしめすが如く此の所は里中を離れたる深山みやまなり衣食いしょくぼうしやう乏少の間読経どつきやうの声続つき難く談義だんぎの勤め廃しつ可べし、此の託宣たくせんは十羅刹じゅうらせつの御計おぼたりにて檀那だんなの功こうを致いたさしむるか、止觀しかんの第八はちに云いく 帝釈堂たいしやくの小鬼敬やうい避くるが如し道場どうじやうの神大なれば妄みだりに侵しん☆すること無し、又城の主剛たければ守る者も強し城の主・剛たければ守る者忙る、心は是れ身この主なり同名同生の天是れ能く人よを守護しゆごす心固すなわければ則ち強し身の神尚爾なおしかなり況や道場どうじやうの神をや」弘決くわけつの第八はちに云く 常まもに人を護ると雖も必ず心の固きに仮かりて神の守り則ち強し」又云く 身の両肩なほの神尚常いえどに人を護る況や

どうじやう
道場の神をや」云云、人所生の時より二神守護す所謂同生天同名天
これ
是を俱生神と

云う華嚴經の文なり、文句の四に云く、賊南無仏と称して尚天頭を得
たり況や賢者称せば十方の尊神敢て当らざらんや但精進せよ懈怠す
ること勿れ」等云云、釈の意は月氏天を崇めて仏を用いざる国あり而る
に寺を造り第六天の魔王を主とす頭は金を以てす大賊年来之を盗ま
んとして得ず有時・仏前に詣で物を盗んで法を聴く、仏説いて
云く南無とは驚覺の義也盗人之を聞いて南無仏と称して天頭を得た
り、之を糾明する処盗人上の如く之を申す一国・皆天を捨てて仏に
歸せり云云、彼を以て之を推するに設い科有る者も三宝を信ぜば大難
を脱れんか、而るに今示し給える託宣の状は兼て之を知る之を案ずる
に難を卻て福の来る先兆ならんのみ、妙法蓮華經の妙の一字は竜樹

菩薩ぼさつの大論だいろんに釈しやくして云いく「能よく毒どくを變かじて藥やくと為なす」と云云、天台大師てんだいだいに
の云いく「今經こんきやうに記きを得える即すなわち毒どくを變かじて藥やくと為なすなり」と云云、災来さいらい
るとも變かじて幸さいと為ならん何いかに況いはや十羅刹じゅうらせつ之これを兼かるをや、薪火たきぎを熾さかんに
し風・求羅ぐらを益やくすとは是これなり、言ことは紙上しじやうに尽つし難がたし心こころを以もつて之これを量はかれ、
恐きよう恐きよう謹言きんげん。

十二月十三日

日蓮 にちれん

花押 かおう

御返事 ごへんじ

◆一四〇

常忍抄 じょうにん

980p

建治三年十月 五十六歳御作

御文粗拝見仕り候了んぬ。
おんふみほほはいけん

御状に云く常忍の云く記の九に云く權を稟けて界を出づるを名れて
いわ 虚出と為す「云云、了性房云く全く以て其の釈無し云云、記の九に
いわ 云く壽量品の疏 無有虚出より昔虚為実故に至るまでは為の字去声權を稟けて界を出
づるを名け

て虚出と為す三乗は皆三界を出でずと云うこと無し人天は三途を

出でんが為ならずと云うこと無し並に名けて虚と為す」云云、文句の
九に云く虚より出でて而も実に入らざる者有ること無し、故に知んぬ
昔の虚は声実の為の故なり」と云云、寿量品に云く諸の善男子・如来
諸の衆生小法を樂う徳薄垢重の者を見て乃至以諸衆生乃至
未曾暫廢」云云、此の經の文を承けて、天台・妙樂は釈せしなり、此の
經文は初成道の華嚴の別円より乃至法華經
の迹門十四品を・或は小法と云い・或は徳薄垢重・或は虚出等と説
ける經文なり、若し然らば華嚴經の華嚴宗・深密經の法相宗・般若經
の三論宗・大日經の眞言宗・觀經の淨土宗・楞伽經の禪宗等の
諸經の諸宗は依經の如く其の經を説誦すとも三界を出でず三途を
出でざる者なり何に況や・或は彼を實と稱し・或は勝ぐる等云云、此の
人人天に向つて唾を吐き地を☆んで忿を為す者か。

此の法門ほうもんに於て如来滅後にょらいめつご・月氏がつし・一千五百余年ふほうぞう・付法藏ふほうぞうの二十四人・
竜樹りゅうじゆ・天親等知つて未だ此これを顯あらわさず、漢土かんど一千余年の余人も未だ
之これを知らず但天台てんだい・妙樂等粗ほほ之これを演のぶ、然りと雖も未だ其その実義じつぎを
顯あらわさざるか、伝教大師以て是かくの如ごとし、今日蓮粗いまだちれんほほ之これを勘かんうるに法華經
の此の文を重かさねて涅槃經ねはんぎように演のべて云く若し三法に於て異の想を修しゆする
者は当まさに知るべし是の輩やからは清淨しやうじやうの三歸則ち依処すなわ無く所有しやうの禁戒きんかい皆
具足ぐそくせず終に声聞しやうもん・緣覺えんかく・菩薩ぼさつの果を証あかしすることを得ず」等云云、此の
經文きやうもんは正しく法華經ほけきやうの寿量品じゆりやうぼんを顯說けんせつせるなり寿量品じゆりやうぼんは木に譬たとえ
爾前にぜん・迹門しやくもんをば影に
譬たとうる文なり、經文きやうもんに又之有これあり、五時はつきやう・八教とうぶん・当分かせつ・跨節だいしやう・大小の益は
影こゝとの如ほんもんし本門ほうもんの法門ほうもんは木の如こゝとし云云、又寿量品じゆりやうぼん
已前の在世ざいせの益あんちゆうは閻中の木の影かこなり過去じゆりやうぼんに寿量品じゆりやうぼんを聞きし者の事な

り等云云、又不信ふしんは謗法ほうぼうに非あらずと申もうす事、又云く不信ふしんの者地獄じごくに墮おちずとの事、五の巻に云く「疑うたがいを生じて信ぜざらん者は則すなわち當まさに惡道あくどうに墮おつべし」云云。

總じて御心ごしんへ候ほけきへ法華經ほうけきやうと爾前にぜんと引き向えて勝劣しょうれつ・淺深せんじんを伴ばんずるに當分とうぶん跨節かせつの事に三つの様有り日蓮にちれんが法門ほうもんは第三ほうもんの法門ほうもんなり、世間せけんに粗ほぼ夢ごの如く一二をば申せども第三をば申さず候、第三ほうもんの法門ほうもんは天台てんだい・妙樂みょうらく・伝教でんぎやうも粗ほぼ之これを示せども未いまだ事しよせん了まつぜず所詮しよせん末法まつぽうの今いまに譲ゆずり与えしなり、五五百歳ごひゃくさいは是これなり、但ただし此こゝの法門ほうもんの御論談ごろんだんは余うけたまわは承うけたまわらず候彼こゝは広学多聞こうがくたもんの者なりはばかりはばかりみたみた候いしかば此の方こゝのまけなんども申もうしつけられなば・

いかんがし候べき、但ただし彼の法師等ほうしが彼の釈しやくを知り候はぬはさてをき候いぬ、六十卷になしなんと申もうすは天のせめなり謗法ほうぼうの科とがの法華經ほうけきやうの御使おんつかい

に値あうて顯あらわれ候なり、又此この沙汰さたの事を定めてゆへありて出来しゅつだいせり・か
しまの大田次郎兵衛大進房ぼう又本院主もいかにとや申もうすぞよくよくきか
せ給たまい候へ此これ等は經文きやうもんに子細しさいある事なり、

法華經ほけきやうの行者ぎやうじやをば第六天だいろくてんの魔王まおうの必ず障ささうべきにて候、十境じゅうけいの中の魔
境こ此これなり魔まの習ならいは善ぜんを障ささえて惡あくを造らしむるをば悦えつぶ事に候、強しい
て惡あくを造らざる者をば力ちから及およばずして善ぜんを造らしむ又二乗にじやうの行をなす物
をば・あながちに怨あだをなして善ぜんをすすむるなり、又菩薩ぼさつの行をなす物を
ば遮さへぎつて二乗にじやうの行をすすむ是後じゆんえんに純円じゆんえんの行を一向いっけうになす者をば兼別
等だに墮だすなり止觀しかんの八等を御らむあるべし。

又彼が云く止観の行者は持戒等云云、文句の九には初二三の行者の持戒をば此れをせいす經文又分明なり、止観に相違の事は妙樂の問答之有り記の九を見る可し、初隨記に二有り利根の行者は持戒を兼ねたり鈍根は持戒之を制止す、又正像末の不同もあり摂受折伏の異あり伝教大師の市の虎の事思い合わすべし。

此れより後は下総にては御法門候べからず了性思念をつめつる上は他人と御論候わばかへりてあさくなりなん、彼の了性と思念とは年来・日蓮をそしるとうけ給わる、彼等程の蚊虻の者が日蓮程の師子王を聞かず見ずしてうはのそらにそしる程のをこじんなり、天台法華宗の者ならば我は南無妙法蓮華經と唱えて念仏なんど申す者をばあれはさる事なんど申すだにもきくわいなるべきに其の義なき上・偶申す人をそしる・でう・あらふしぎ

ふしぎ、大進房ぼうが事さきざきつかわして候やうにつよづよとかき上もう申させ給たまい候へ大進房ぼうには十羅刹じゅうらせつ

のつかせ給たまいて引きかへしせさせ給たまうとをば候ぞ、又魔王まおうの使者なん
どがつきて候いけるが・はなれて候とをば候ぞ、悪鬼あくき入其身はよも・
そら事にては候はじ、事事重しげく候へども、此の使いそぎ候へばよるかきて
候ぞ、恐恐きようきよう謹言きんげん。

十月一日

日蓮花押にちれんかおう

◆一四一 始聞おつじき仏乘義

与富木常忍ときじょうにん

982p

建治四年二月 五十七歳御作

青鳧七結下州より甲州に送らる其の御志悲母の第三年に相当る御
孝養なり、問う止観明静前代未聞の心如何、答う円頓止観なり、問う
円頓止観の意何ん、答う法華三昧の異名なり、問う法華三昧の心
如何、答う夫れ末代の凡夫法華經を修行する意に二有り一には
就類種の開会二には相對種の開会なり、問う此の名は何より出る

や、答う法華經第三葉草喩品に云く、種相体性の四字なり其の四字の
中に第一の種の一字に二あり、一には就類種二には相對種なり」其の
就類種とは釈に云く、凡そ心有る者は是れ正因の種なり随つて一句を
聞くは是れ了因の種なり低頭拳手は是れ緣因の種なり」等云云、其の
相對種とは煩惱と業と苦との三道其の当体を押えて法身と般若と
解脱と稱する是なり、其の中に就類種の一法は宗は法華經に有りと
雖も少分又爾前の經經にも通ず、妙樂
云く、別經は唯就類の種有つて而も相對無し」と云云、此の釈の別教と
云うは本の別教には非ず爾前の円・或は他師の円なり、又法華經の
迹門の中・供養舍利已下二十余行の法門も大体就類種の開会なり、問
う其の相對種の心如何、答う止觀に云く、云何なるか聞円法なる生死
即法身・煩惱即般若・結業即解脱なりと聞くなり三の名有り

と雖も而も三の体無し是れ一体なりと雖も而も三の名を立つ是の三
即ち一相にして其れ実に異有ること無し、法身究竟すれば般若も解脱
も亦究竟な般若清淨なれば余亦清淨なり解脱自在なれば余亦自在
なり一切の法を聞くこと亦是の如し皆佛法を具して減少する所無し
是を聞円と名く」等云云、此の釈は即ち相對種の手法なり其の意
如何、答う生死とは我等が苦果の依身なり所謂五陰・十二入・十八界
なり煩惱とは見思・塵沙・無明の三惑なり結業とは五逆・十惡・四重等
なり、法身とは法身如来・般若とは報身如来・解脱とは応身如来なり
我等衆生無始曠劫より已來此の三道を具足し今法華經に値つて三道
即三徳となるなり。

難じて云く火より水出でず石より草生ぜず惡因・惡果を感じ善因善
報を生ずるは仏教の定れる習なり而るに我等其の根本を尋ね究むれば

父母ふぼの精血しやく・赤白しやく二☆和合わごうして一身いつしんと為なる惡あくの根本こんぽん不淨ふじようの源みなもとなり、設たとい大たい海かいを傾かたけて之これを洗せんうとも清淨しやうじやうなる可べらず又また此これ苦果くかの依よ身みは其その根本こんぽんを探たづねれば貧・瞋・癡さんじくの三毒さんどくより出いずるなり、此この煩惱ぼんのう苦果くかの二道にとうに依よつて業ごうを構かまう此この業道ごうだう即すなわち是これ結縛けつばくの法ほふなり、譬たとえば籠かごに入いれる鳥とりの如ごとし如何なんぞ此この三道さんだうを以もつて三仏ぶつ因いんと稱しょうするや、譬たとえば糞ふんを集あつめて梅檀めだんを造つくれども終ついに香かうしからざるが如ごとし、答なんじう汝なんじが難なん大だいいに道理どうりなり

我此の事を弁えず但し付法蔵の第十三天台大師の高祖・竜樹菩薩・
妙法の妙の一字を釈して譬えば大薬師の能く毒を以て薬と為すが如し
等云云、毒と云うは何物ぞ我等が煩惱・業・苦の三道なり薬とは何物
ぞ法身・般若・解脱なり、能く毒を以て薬と為すとは何物ぞ三道を變
じて三徳と為すのみ、天台云く妙は不可思議と名づく等云云、又
云く一心乃至不可思議境界意此に在り等云云、即身成仏と申すは此れ
是なり、近代の華嚴・真言等・此の義を盗み取りて我が物と為す大
偷盗天下の盗人はなり。

問うて云く凡夫の位も此の秘法の心を知るべきや、答う私の答は詮
無し竜樹菩薩の大論に云く九十三なり 今漏尽の阿羅漢還つて作仏すと
云うは唯仏のみ能く知ろしめす、論議とは正しく其の事を論ず可し測
り知ること能わず是の故に戲論すべからず若し仏を求め得る時乃ち

能く了知す余人は信ずべく而も未だ知るべからず」等云云、此の釈は
爾前の別教の十一品の断・無明円教の四十一品の断・無明の大菩薩
普賢・文殊等も未だ法華經の意を知らず
何に況や藏通二教の三乗をや何に況や末代の凡夫をやと云う論文な
り、之を以て案ずるに法華經の唯仏与仏・乃能究竟とは爾前の
灰身滅智の二乗の煩惱・業・苦の三道を押えて法身・般若・解脱と説く
に二乗還つて作仏す菩薩・凡夫も亦是くの如しと釈するなり、故に
天台の云く二乗根敗す之を名けて毒と為す今經に記を得る即ち是れ
毒を

變じて藥と為す、論に云く余經は秘密に非ず法華は是れ秘密なり等云
云、妙樂云く論に云くとは大論なりと云云、問う是くの如し之を聞い
て何の益有るや、答えて云く始めて法華經を聞くなり、妙樂云く若し

三道そくこ即是さんどく三德なおよと信まぜば尚た能だく二死じの河がを渡わたる況きやうや三界さんがいをやと云云、
末代まつだいの凡夫ぼんぷ此この法門ほうもんを聞きかば唯我ただわれ一人ひとりのみ成仏じやうぶつするに非あらず父母ふぼも又
即身そくしん成仏じやうぶつせん此これ第一だいいちの孝養こうようなり病身な為なるの故ゆえに委細いさいならず又又
申もうす可べし。

建治四年太歳つちのえとら 戊寅 二月二十八日

日蓮花押にちれんかおう

富木殿ときどの

◆一四二

可延定業書

弘安二年五十八歳御作与

富木常忍妻

985p

夫れ病に二あり一には輕病二には重病・重病すら善医に値う急
に對治すれば命猶存す何に況や輕病をや、業にこあり一には定業二に
は不定業、定業すら能く能く懺悔すれば必ず消滅す何に況や不定業
をや、法華經第七に云く此の經は則為閻浮提の人の病の良藥なり」
等云云、此の經文は法華經の文なり、一代の聖教は皆如來
の金言・無量劫より已來不妄語の言なり、就中此の法華經は仏の
正直捨方便と申して眞実が中の眞実なり、多宝・証明を加え諸仏・
舌相を添え給ういかでか・むなしかるべき、其の上最第一の秘事はんべり

きようもん

此の経文は後・五百歳・二千五百余年の時女人の病あらんと・とかれて侯文なり、阿闍世王は御年五十の二月十五日に大悪瘡・身に出来せり、大医耆婆が力も及ばず三月七日必ず死して無間・大城に墮つべかりき、五十余年が間の大楽一時に滅して一生の大苦・三七日にあつまれり、定業限りありしかども仏・法華経をかさねて演説して涅槃経となづけて大王にあ

だいおう

たい給いしかば身の病・忽に平愈し心の重罪も一時に露と消えにき、

たま

たちまちへいゆ

じゅうざい

いちじ

つゆ

ぶつめつ

仏滅後・一千五百余年・陳臣と申す人ありき命知命にありと申して五

ちんしん

もう

もう

十年に定まりて侯いしが天台大師に伴いて十五年の命を宣べて六十五

そうら

てんだいだいし

のべ

までをはしき、其の上不輕菩薩は更増壽命ととかれて法華経を行じて

そ

ふぎようばさつ

きようやうじゆみよう

ほけきよう

定業をのべ給いき、彼等は皆男子なり女人にはあらざれども

たま

かれら

みな

にょにん

法華経を行じて寿をのぶ、又陳臣は後・五百歳にもあたらず冬の稲米・

ほけきよう

ちんしん

とうまい

夏の菊花のごとし、当時とうじの女人にょにんの法華經ほけきやうを行じて定業を転ずることは
秋の稲米とうまい冬の菊花誰か・をどろくべき。

されば日蓮にちれん悲母ひもをいのりて侯しかば現身げんしんに病をいやすのみならず四
箇年じゆみやうの寿命じゆみやうをのべたり、今女人にょにんの御身おんみとして病を身にうけさせ給たまう・心
みに法華經ほけきやうの信心しんじんを立てて御らむあるべし、しかも善医ぜんいあり中務三郎

左衛門尉殿は

法華經ほけきようの行者ぎようじやなり、命もうと申す物は一身だいいち第一ちんぼうの珍寶ちんぼうなり一日いちだいなりとも。
これを延のるならば千萬せんまん両りやうの金きんにもすぎたり、法華經ほけきようの一代いちだいの聖教しょうきように
超過ちようかしていみじきと申もうすは寿量品じゆりやうほんのゆへそかし、闍浮だいいち第一たいしの太子たいしなれ
ども短命たんめいなれば草くさよりもかろし、日輪にちりんのごとくなる智者ちしやなれども夭死わかに
にあれば生犬いけるに劣おとる、早く心ざしの財さいをかさねていそぎいそぎ
御対治たいじあるべし、此これよりも申もうすべけれども人は申もうすによて吉事きしもあり
又我が志いしやうのうすきかと・をもう者ものもあり人の心しりがたき上先かみ先に
少少せうせうかかる事候こと、此この人は人の申もうせばすこそ心こころすげに思おもう人なり、な
かなか申もうす

はあしかりぬべし、但たなかうどもなく・ひらなさけに又心こころもなくうちた
のませ給たまえ、去年こぞの十月じふがつこれに來りて候まちいしが御所ごしよ勞らうの事ことをよくよくな
げき申もうせしなり、当事だいじ大事だいじのなければ・をどろかせ給たまわぬにや、明年めいねん正

月二月のころをひは必ずをこるべしと申せしかば・これにも・なげきは入つて候。

富木殿も此の厄ごぜんをこそ杖柱とも侍たるに・なんど申して候いしなり随分ずいぶんにわび候いしぞ・きわめて・まけじたましの人にて我がかたの事をば大事だいじと申す人なり、か今いますが今身の財をだに・をしませ給わば此の病治がたかるべし、一日の命は三千界の財にもすぎて候なり先ず御志いんごしをみみへさせ給うべし、法華經の第七の巻に三千

大千世界せかいの財を供養するよりも手の一指を焼きて仏・法華經に供養せよと・とかれて候はこれなり、命は三千にもすぎて候・而も齡しもいまだ・たけさせ給はず、而して法華經にあわせ給いぬ一日もいきてをはせば功德くどくつもるべし、あらをしの命や・をしの命や、御姓名並びに御年を我とかかせ給いて・わざと・つかわせ大日月天に申しあぐべし、いよどのも

あながちになげき候そうらへば日月天に自我じがけ偈をあて候そうらはんずるなり、
恐恐きようきよう。

日蓮花押にちれんかおう

尼にごぜん御返事ごへんじ

◆一四三 富城殿御返事ごへんじ

987 p

あまごぜん じゅみょうちようおん
尼御前御壽命長遠の由・天に申し候ぞ其の故御物語り候へ。
ふだん ほけきよう
不断法華經来年三月の料の分錢三貫文米二斗送り給ひ畢おわんぬ。

十一月二十五日

にちれん
日蓮 在御判

富城殿御返事ごへんじ

◆一四四 四菩薩造立抄ぼさつ

こうあん
弘安二年五月

五十

八歳御作

987 p

白小袖一薄墨染衣一・同色の袈裟一帖・鳶目一貫文給ひ候、今に始めざる御志言を以て宣べがたし何れの日を期してか対面を遂げ心中の朦朧を申し披や。

一御状に云く本門久成の教主釈尊を造り奉り脇士には久成地涌の四菩薩を造立し奉るべしと兼て聴聞仕り候いき、然れば聴聞の如くくば何の時かと云云、夫れ仏世を去らせ給いて二千余年に成りぬ、其の間・月氏・漢土・日本国一閻浮提の内に仏法の流布する事・僧は稲麻のごとく法は竹葦の如し、然るにいまだ本門の教主釈尊・並に本化の菩薩を造り奉りたる寺は一処も無し三朝の間に未だ聞かず、日本国に数万の寺を建立せし人人も本門の教主脇士を造るべき事を知らず上宮太子仏法最初の寺と号して四天王寺を造立せしかども阿弥陀仏

を本尊ほんぞんとして脇士きょうしには観音等・四天王してんのうを造り副えたり、伝教大師・
延暦寺えんりやくじを立て給たまうに中堂ちゅうどうには東方とうほうの鸞王がおうの相貌そうみょうを造りて本尊ほんぞんとして

久成くじようの教主きようしゆ・脇士きやうじをば建立こんりゆうし給たまはず、南京なら七大寺ななだいじの中にも此この事を
未だ聞いまかず田舎いなかの寺てら以もつて爾しかなり、かたがた不審ふしんなりし間ま・法華經ほけきやうの文
を拜見はいけんし奉たてまつりしかば其その旨むね顯然けんねんなり、末法まつぽう・闍靜とうじやう堅固けんこの時ときにいたらず
んば造むねるべからざる旨ふんみやう分明めいなり、正像しやうざうに出世しゆつせせし論師ろんし・人師にんしの造つくらざ
りしは仏ぶつの禁いましめを重おもんずる故ゆゑなり、若もし正法しやうぽう・像法ざうぽうの中に
久成くじようの教主きようしゆ・釈尊しやくそん並びに脇士きやうじを造つくるならば夜中にちりんに日輪にちりん出でで日中じちゆうに月輪げつりん
の出いでたるが如ごとくなるべし、末法まつぽうに入まつて始めはじめの五百年ごひゃくねんに上行じやうぎやう菩薩ぼさつの
出いでさせ給たまいて造つくり給たまうべき故ゆゑに正法しやうぽう・像法ざうぽうの四依しえの論師ろんし・人師にんしは言ことに
も出いさせ給たまはず、竜樹りゆうじゆ・天親てんじんこそ知しらせ給たまいたりしかども口くちより外ぐわいへ
出いさせ給たまはず、天台智てんだいちしや者だ大師だいしも知しらせ給たまいたりしかども迹化しやつけの菩薩ぼさつの
一分いちぶんなれば一端いちたんは仰おほせ出いさせ給たまいたりしかども其その実義じつぎをば宣のべべ出いさ
せ給たまはず、但たねざめの枕まくらに

時鳥ほととぎすの一音を聞きしが如ごとくにして夢のさめて止ぬるやうに弘ひろめ給たまい候けうぬ、夫それより已い外げの人師にんしはまして一言ひとことをも仰おほせ出し給たまう事ことなし、此等これらの論師ろんし・人師にんしは靈山りやうぜんにして迹化しやくけの衆しゆは末法まつぽうに入いらざらんに正像しやうざう二千年の論師ろんし・人師にんしは本門ほんもん久成くじやうの教主きやうしゆ釈尊しやくそん並ならに久成くじやうの脇士きやうじ地涌じゆ上行じやうぎやう等の四よ菩薩ぼさつを影かげほども申出いだしすべからずと御禁いまいめありし故ゆゑぞかし。

今末法まつぽうに入いれば尤もつとも仏ぶつの金言きんげんの如ごとくんば造つくるべき時ときなれば本仏ほんぶつ本脇士ほんきやうじ造つくり奉たてまつるべき時ときなり、当時とうじは其そのの時に相あ当あたれば地涌じゆの菩薩ぼさつやがて出いでさせ給たまはんずらん、先まづ其そのれ程ほどに四菩薩よぼさつを建立こんりゆうし奉たてまつるべし尤もつとも今は然しかるべき時ときなりと云云うんぐん、されば天台大師てんだいだいしは後ごの五百歳ごひやくさい遠とほく妙道みやうどうに沾うるおわんとしたひ、伝教大師でんぎやうだいしは正像しやうざう稍過しやうかうぎ已おわつて末法まつぽう太はなだ近おほきに有あり法華ほつけ一乘いちじやうの機き今正いままに是このその時ときなりと恋こいさせ給たまう、日蓮にちれんは世間せけんには日本にほん第一だいいちの貧ひんしき者ものなれども仏法ぶつぽうを以もつて論ろんずれば一閻浮提えんぶだい

第一だいいちの富る者なり、是これ時の然しからしむる故なりと思へば喜び身にあまり
感かん涙るい押お難かたく教主きようしゅ釈尊しゃくそんの御恩報おんぼうじ奉たてまつり難がたし、恐らくは付法蔵ふぽうぞうの人人ひとびとも
日蓮にちれんには果報かほうは劣らせ給たまいたり天台智者大師てんだいちしやだいし・伝教大師等でんぎやうだいしも及および
給たまうべからず最も四菩薩ぼさつを建立こんりゆうすべき時なり云云、問うて云く四菩薩ぼさつ
を造立しやうもんすべき証文しやうもん之れ有りや、答えて云く涌出品ゆじゅつぽんに云く四の導師どうし有
り一をば上行じやうぎやうと名け二をば無辺行むへんぎやうと名け三をば淨行じやうぎやうと名け四をば
安立行あんりゆうぎやうと名なく」

等云云、問うて云く後・五百歳に限るといへる經文之れ有りや、答えて云く藥王品に云く、我が滅度の後・後の五百歳の中に閻浮提に広宣流布して断絶せしむること無けん」等云云。

一御状に云く大田方の人人・一向に迹門に得道あるべからずと申され候由・其の聞え候とは以ての外の謬なり、御得意候へ本・迹二門の浅深・勝劣・与奪・傍正は時と機とに依るべし、一代聖教を弘むべき時に三あり機もつて爾なり、仏滅後・正法の始の五百年は一向・小乗後の五百年は權大乘像法一千年は法華經の迹門等なり、末法の始は一向に本門なり一向に本門の時なればとて迹門を捨つべきにあらず、法華經一部に於て前の十四品を捨つべき經文之れ無し本・迹の所判は一代聖教を三重に配当する時・爾前・迹門は正法・像法・或は末法は本門の弘まらせ給うべき時なり、今の

時は正には本門傍には迹門なり、迹門無得道と云つて迹門を捨てて
一向本門に心を入れさせ給う人人はいまだ日蓮が本意の法門を習はせ
給はざるにこそ以ての外ほかの僻見びやくけんなり、私ならざる法門ほうもんを僻案びやくあんせん人は
偏ひとえに天魔波旬てんまはじゆんの其の身に入り替りて人をして自身じしんともに無間むげん・大城だいじやうに
墮おつべきにて候つたなしつたなし、此の

法門ほうもんは年来貴辺きへんに申し含めたる様に人人にも披露あるべき者なり総じ
て日蓮が弟子でしと云つて法華經ほけきやうを修行しゆぎやうせん人人は日蓮が如くにし候へ
さだにも候はば釈迦しやか・多宝たほう・十方じゆつぽうの分身ふんじん・十羅刹じゅうらせつも御守り候べし、其れ
さなおひとびと商人なほひとびとの御心中しんちゆうは量りがたし。

一日行房死去ぼうしきよの事不便に候、是にて法華經ほけきやうの文読み進らせて南無
妙法蓮華經みょうほうれんげきやうと唱へ進らせ願くは日行しやかを釈迦しやか・多宝たほう・十方じゆつぽうの諸仏靈山へ
迎へ取らせ給へと申し上げ候いぬ、身の所労いまだきらきらしからず候

間省略せしめ候、又又申す可く候、恐恐謹言。

弘安二年五月十七日

日蓮花押

◆一四五

富木殿女房ときどのにようぼうあまごぜんごしよ尼御前御書

弘安二年十一月こうあん

五十八歳御作

990p

いよ房ぼうは学生になりて候ぞつねに法門ほうもんきかせ給たまへ

はるかに見まいらせ候はねばをばつかなく候、たうじとてもたのしき
事は候はねどもむかしはことにわび

しく候いし時よりやしなはれまいらせて候へばことにをんをもくをもい
まいらせ候、それについては・いのち

はつるかめのごとくさいはいは月のまさりしをのみつがごとくとこそ
法華經ほけきようにはいのりまいらせ候へさては

えち後房ごぼうしもつけ房ぼうと申もうす僧をいよどのにつけて候ぞ、しばらくふびん
にあたらせ給たまへとき殿もには申もうさせ

給へ^{たま}

十一月二十五日

城殿女房^{にようぼう}尼御前^{あまごぜん}

日蓮花押^{にちれんかおう}

富

◆一四六 諸經しよきやうと法華經ほけきやうと難易なんいの事 弘安三年五月 五十九歳

御作

991p

問うて云く法華經ほけきやうの第四法師品ほうしほんに云く難信難解なんしんなんげと云云いかなる事ぞや、答えて云く此の經は仏説とき給たまいて後二千余年にまかりなり候、月氏がつしに一千二百余年漢土かんとに二百余年を経て後へに日本国にほんこくに渡りてすでに七百余年なり、仏滅後ぶつめつに此の法華經ほけきやうの此の句を読みたる人但三人なり、所謂月氏いづゆるがつしには竜樹菩薩りゆうじゅぼさつの大論だいろんに云く譬たとえば大薬師やくしの能く毒を以て薬と為すが如しごと」等云云、此れは竜樹菩薩りゆうじゅぼさつの難信難解なんしんなんげの四字を読み給たまいしなり、漢土かんとには天台智者大師てんだいちしやだいしと申せし人読んで云く『今当説いこんとう最も為れ難信難解なんしんなんげ』と云云、日本国にほんこくには伝教大師でんきやうだいし読んで

云く「已説の四時の經今説の無量義經当説の涅槃經は易信易解なり
隨他意の故に此の法華經は最も為れ難信難解なり隨自意の故に
」等云云、問うて云く其の意如何、答て云く易信易解は隨他意の故に
難信難解は隨自意の故なり云云、弘法大師並びに日本国東寺の門人を
もわく法華經は顯教の内の難信難解にて密教に相對すれば易信易解
なり云云、慈覺・智証並びに門家思うよう法華經と大日經は俱に
難信難解なり但し大日經と法華經と相對せば法華經は難信難解・
大日經は最も為れ難信難解なり云云、此の二義は日本一同なり、日蓮
讀んで云く外道の經は易信易解・小乗經は難信難解・小乗經は
易信易解大日經等は難信難解大日經等は易信易解般若經は
難信難解なり・般若と・華嚴と・華嚴と涅槃と・涅槃と法華と・迹門と
本門と・重重の難易あり。

問うて云く此の義を知つて何の詮か有る答えて云く生死の長夜を照
す大燈・元品の無明を切る利劍は此の法門に過ぎざるか隨他意とは
真言宗・華嚴宗等は隨他意の易信易解なり仏九界の衆生の意樂に
随つて説く所の経経を隨他意という譬えば賢父が愚子に随うが
如し、仏・仏界に随つて説く所の経を隨自意という、譬へば聖父が愚子

を随^つえたるが如^{ごと}きなり、日蓮^{にちれん}此^この義^ぎに付^たて大日^{だい にちぎやう}經^{きやう}・華嚴^{けこん}經^{きやう}・涅槃^{ねはん}經^{ぎやう}等を勘^{かん}え見^み候^{けう}に皆^{みな}随^ず他^た意^いの經^{きやう}經^{ぎやう}なり、問^{もん}うて云^いく其^その随^ず他^た意^いの証^{しやう}拠^こ如何^{いかん}、答^{こた}えて云^いく勝^{しょう}鬘^{まん}經^{きやう}に云^いく非^ひ法^{ほう}を聞^きくこと無^なき衆^{しゆ}生^{じやう}には人^{にん}天^{てん}の善^{ぜん}根^{こん}を以^もて之^{これ}を成^{じやう}熟^{じゆく}す声^{しやう}聞^{もん}を求^{もと}むる者^{もの}には声^{しやう}聞^{もん}乘^{めん}を授^{えん}け縁^{えん}覺^{かく}を求^{もと}むる者^{もの}には、縁^{えん}覺^{かく}乘^{めん}を授^{だい}け大^{だい}乘^{じやう}を求^{もと}むる者^{もの}には授^{さす}くるに大^{だい}乘^{じやう}を以^もてす」と云^い云^い、易^い信^{しん}易^い解^げの心^{こころ}是^{これ}なり、華^け嚴^{こん}・大^{だい}日^{にち}・般^{はん}若^{にや}・涅槃^{ねはん}等^ら又^{また}是^{かく}の如^{ごと}し爾^その時^{とき}に世^せ尊^{そん}・藥^{やく}王^{おう}菩^ぼ薩^{さつ}に因^よせて八^{はち}万^{まん}の大^{だい}士^しに告^こげたまわく藥^{やく}王^{おう}汝^{なんじ}是^{たい}の大^{だい}衆^{しゆ}の中^{ちゆう}の無^む量^{りやう}の諸^{しよ}天^{てん}・竜^{りゆう}王^{おう}・夜^や叉^{しゃ}・乾^{けん}闥^{だつ}婆^ば・阿^あ修^{しゆ}羅^ら・迦^か楼^ら羅^ら・緊^{きん}那^{なら}羅^ら・摩^ま羅^ら伽^か・人^{ひと}と非^{おほ}人^にと及^{およ}び比^ひ丘^く・比^ひ丘^く尼^に・優^う婆^ば塞^{そく}・優^う婆^ば夷^いの声^{しやう}聞^{もん}を求^{もと}むる者^{もの}・辟^{ひやく}支^し仏^{ぶつ}を求^{もと}むる者^{もの}・仏^{ぶつ}道^{どう}を求^{もと}むる者^{もの}を見^みるや、是^{かく}の如^{ごと}き等^{とう}類^{るい}咸^いく仏^{ぶつ}前^{ぜん}に於^{おい}て妙^{みやう}法^{ほふ}華^け嚴^{ぎやう}經^{きやう}の一^{いっ}偈^こ・一^{いっ}句^こを聞^きいて一^{いち}念^{ねん}も随^ず喜^{いき}する者^{もの}には我^{みな}皆^{みな}記^きを与^{あた}え授^{さす}く当^{まさ}に阿^あ○菩^ぼ提^{だい}を得^うべし」文^{ぶん}、

諸經しよきやうの如ごとくんば人は五戒ごかい・天てんは十善じゅうぜん・梵ぼんは慈悲喜捨じひきしや・魔王まおうには一無遮いちむしゃ・比丘びくの二百五十にひゃくごじゅう・比丘尼びくにの五百戒ごひゃくかい・声聞しやうもんの四諦しだい・緣覺えんかくの十二因緣いにねん・菩薩ぼさつの六度たど・譬たとへば水の器きの方円ほうえんに随したがい象しやうの敵てきに随したがつて力りきを出いだすがごとし、法華經ほけきやうは爾しからず八部はちぶ・四衆ししゆ皆みな一同いつどうに法華經ほけきやうを演說えんぜつす、譬たとへば定木の曲まがりを削り師子王ししやうの剛弱きやうじやくを嫌きらわずして大力だうりきを出いだすがごとし。

此この明鏡めいきやうを以もつて一切經いつしきやうを見聞けんもんするに大日だいにちの三部さんぶ・淨土じやうどの三部等さんぶどう隱おんれ無し、而しかるをいかにやしけん弘法こうぼう・慈覺じかく・智証ちしやうの御義おんぎを本もととしける程ほどに此この義ぎすでに隱没おんもつして日本國にほんこく四百余年よひになり、珠たまをもつて石いしにかへせん檀だん檀だんを凡木ふつぼうにうれり、仏法ぶつぽうやうやく顛倒てんどうしければ世間せけんも又濁乱じやくらんせり、仏法ぶつぽうは體たいのごとし世間せけんはかげのごとし体曲たいまがれば影かげななめなり、幸さいなるは我が一門いちもん仏意ぶつゐに随したがつて自然じねんに薩般若海さつぱんにやに流入りゅうりふす、世間せけんの學者がくしやの若ごときは随ず他意いたいを信しんじて苦海くかいに沈しづまんことなり、委細ゐさいに旨むね又又申もうす可べく候う、

きょうきょう
恐恐。

五月廿六日

かおう
花押

にちれん
日蓮

◆一四七 富城入道殿御返事

弘安四年十月 六十

歳御作

993p

与富木胤継 於身延

今月十四日の御札同じき十七日到来、又去ぬる後の七月十五日の御
消息同じて二十比到来せり、其の外度度の貴札を賜うと雖も老病
為るの上又不食氣に候間未だ返報を奉らず候条其の恐れ少からず候、
何よりも去ぬる後の七月御状の内に云く鎮西には大風吹き候て浦浦・
島島に破損の船充滿の間乃至京都には思円上人・又云く理豈然らん
や等云云、此の事別して此の一門の大事なり総じて日本国の凶事なり
仍つて病を忍んで一端是れを申し候はん
、是偏に日蓮を失わんと為て無かろう事を造り出さん事兼て知る、

其の故は日本国の真言宗等の七宗・八宗の人人の大科今に始めざる
事なり然りと雖も且く一を挙げて万を知らしめ奉らん、去ぬる承久
年中に隱岐の法皇義時を失わしめんが為に調伏を山の座主・東寺・
御室・七寺・園城に仰せ付けられ、仍つて同じき三年の五月十五日
鎌倉殿の御代官・伊賀太郎判官光末を六波羅に於て失わしめ畢んぬ、
然る間同じき十九日二十日鎌倉中に騒ぎて同じき二十一日・山道・海
道・北陸道の三道より十九万騎の兵者を指し登す、同じき六月十三日
其の夜の戌亥の時より青天俄に陰りて震動雷電して武士共首の上に鳴
り懸り鳴り懸りし上・車軸の如き雨は篠を立つるが如し、爰に
十九万騎の兵者等・遠き道は登りたり兵乱に米は尽きぬ馬は疲れたり
在家の人は皆隠れ失せぬ冑は雨に打たれて縣の如し、武士共・宇治勢
多に打ち寄せて見ければ常には三丁四丁の河なれども既に六丁・七丁・

十丁に及ぶ、然る間・一丈・二丈の大石は枯葉の如く浮び五丈・六丈の
大木流れ塞がること間無し、昔利綱・高綱等が渡せし時には
似る可くも無し武士之を見て皆臆してこそ見えたりしが、然りと雖も
今日を過さば皆・心を翻し堕ちぬ可し去る故に馬筏を作りて之を渡す
処・或は百騎・或は千万騎・此くの如く皆我も我もと度ると雖も・或
は一丁・或は二丁三丁

渡る様なりと雖も彼の岸に付く者は一人も無し、然る間・緋綴・赤綴等の甲其の外弓箭・兵杖・白星の冑等の河中に流れ浮ぶ事は猶長月神無月の紅葉の吉野・立田の河に浮ぶが如くなり、爰に叡山・東寺・七寺・園城寺等の高僧等之を聞くことを得て真言の秘法・大法の験とこそ悦び給いける、内裏の紫宸殿には山の座主・東寺・御室・五壇・十五壇の法を弥盛んに行われければ法皇の御叡感極り無く玉の巖を地に付け大法師等の御足を御手にて摩給いしかば大臣・公卿等は庭の上へ走り落ち五体を地に付け高僧等を敬い奉る。

又宇治勢田にむかへたる公卿・殿上人は冑を震い挙げて大音声を放つて云く義時・所従の毛人等慥に承われ昔より今に至るまで王法に敵を作し奉る者は何者か安穩なるや、狗犬が師子を吼えて其の腹破れざることを無く修羅が日月を射るに其の箭還つて其の眼に中らざること

無し遠き例は且く之を置く、近くは我が朝に代始まつて人王八十余代

の間・大山の皇子・大石の小丸を始と為て二十余人王法に敵を為し

奉れども一人として素懷を遂げたる者なし皆頸を獄門に懸けられ骸

を山野に曝す関東の武士等・或は源平・或は高家等先祖相伝の君を

捨て奉り伊豆の国

の民為る義時が下知に隨う故にかかる災難は出来するなり、王法に

背き奉り民の下知に隨う者は師子王が野狐に乗せられて東西南北に馳

走するが如し今生の恥之れを何如、急ぎ急ぎ胃を脱ぎ弓弦をはづし

て参参と招きける程に、何に有りけん申西の時にも成りしかば関東の

武士等・河を馳せ渡り勝ちかかりて責めし間京方の武者共一人も無く

山林に逃げ隠るるの間、四つの王をば四つの島へ放ちまいらせ又高僧・

御師・御房達は、或は住房を追われ

・或は恥辱に値い給いて今に六十年の間いまだ・そのはぢをすすがずとこ
そ見え候に、今亦彼の僧侶の御弟子達御祈☆承はられて候げに候あひ
だいづもの事なれば秋風に纔の水に敵船・賊船などの破損仕りて候
を大將軍生取たりなんと申し祈り成就の由を申し候げに候なり、又
蒙古の大王の類の参りて候かと問ひ給うべし、其の外はいかに申し候と
も御返事あるべからず御存知のためにあらあら申し候なり。

乃至此の一門の人人にも相触れ給ふべし又必ずしいぢの四郎が事は
承り候い畢んぬ、予既に六十に及び候へば天台大師の御恩報じ奉らんと
仕り候あひだみぐるしげに候房をひきつくろい候ときにさくれうにお
ろして候なり、錢四貫をもちて一閭浮提第一の法華堂造りたりと靈山
浄土に御参り候はん時は申しあげさせ給うべし、恐恐。

十月二十二日

日蓮花押

◆一四八

治病大小権実違目

富木入道殿御返事

日蓮

995p

さへもん殿の便宜の御かたびら給い了んぬ。

今度の人人のかたがたの御さいども佐衛門尉殿の御日記のごとく
給い了ぬと申させ給い候へ。

太田入道殿のかたがたのもの・ときどのの日記のごとく給い候了ん
ぬ此の法門のかたづらは佐衛門尉殿にかきて候、こわせ給いて御ら
む有るべく候。

御消息に云く凡そ疫病・弥興盛等と云云、夫れ人に二の病あり一
には身の病・所謂地大百一・水大百一・火大百一・風大百一・已上四百
四病なり、此の病は設い仏に有らざれども之を治す所謂・治水・流水
・耆婆・扁鵲等が方薬此れを治するにゆいて愈えずという事なし、二に
は心の病所謂三毒乃至八万四千の病なり、此の病は二天・三仙・

六師等も治し難し何に況や神農・黄帝等の方薬及ぶべしや、又心の病
重重に浅深勝劣分れたり、六道の凡夫の三毒八万四千の心病は小仏・

小乗^{しょうじょう}・阿含經^{あこんきょう}・俱舍^{ぐしや}・成實^{じょうじつ}・律宗^{りっしゅう}の論師^{ろんし}・人師^{にんし}此^これを治するにゆいて
愈えぬべし、但^{ただ}し此

しょうじょう

しょうじょう

ある だいじょう

ある そむ

ある そむ

の 小乗

の 者等

・ 小乗

を 本として

・ 或は 大乘

を 背き

・ 或は 心には

背かざ

れども 大乘

の 国に 肩を 並べ

なんど

する 其の 国

其の 人に

諸病 起る

・ 小乗

等をもつて

此れを 治す

れば 諸病

は 増す

とも 治せ

らるる 事なし

・ 諸

大乘 經の 行者

をもつて

此れを 治す

れば 則ち

平愈す

・ 又 華嚴 經

・ 深密

經・ 般若 經

・ 大日 經

等の 權大乘

の 人人

・ 各各 劣謂

勝見

を 起して

我が 宗

は 或は

法華 經と 齊等

・ 或は 勝れた

り なんと

申す 人多く

出来し

・ 或は 国主

等

此れを 用い

ぬれば 此れによつて

三毒 八万 四千

の 病起る

・ 返つて

自の 依經

をもつて

治す

れども

いよいよ

倍増す

・ 設い 法華 經

をもつて

行う

とも 驗

なし 經は 勝れた

れども

行者

・ 僻見

の 者なる

故なり

法華 經に

又二 經あり

所謂 迹門

と 本門

となり

・ 本迹

の 相違

は 水火

天地

の 違目

なり

・ 例せば

爾前

と 法華 經

との 違目

よりも

猶相違

あり

と迹門しやくもんとは相違そういありといへども相似そうじの辺も有りぬべし、所説しよせつに八教はつぎやうあり爾前にぜんの円しやくもんと迹門しやくもんの円しやくもんは相似そうじせり爾前にぜんの仏しやくもんと迹門しやくもんの仏しやくもんは劣応・勝応・報身ほうしん・法身ほふしん異れども始成しじやうの辺は同じきぞかし、今本門ほんもんと迹門しやくもんとは教主きやうしゅすで已に久始きうしのかわりめ百歳のをきなと一歳の幼子でしのごとし、弟子でし又水火すいかなり土の先後せんごいうばかりなし、而しかるを本迹ほんしやくを混合すいかすれば水火すいかを弁わえざる者しなり、而しかるを仏ふんは分明ふんみやうに説とき分け給たまいたれども仏の御入滅にやうめつより今に二千余年が間三国並ならびに一閻浮提えんぶだいの内ふんみやうに分明ふんみやうに分けたる人なし、但漢土かんどの天台日本てんだいにほんの伝教でんぎやう此の二人計ふたにりこそ粗分ぼぶんけ給たまいて候とこへども本門ほんもんと迹門しやくもんとの大事だいじに円戒えんがいいまだ分明ふんみやうならず、詮せんずる処ところは天台てんだいと伝教でんぎやうとは内には鑒かんみ給たまうといへども一には時来まじらず二には機きなし三には譲たまれ給たまはざる故なり、今末法まうぼうに入りぬ地涌じゆ出現しゆげんして弘通くわうあ有るべき事なり、

今末法まつぼうに入つて本門ほんもんのひろまらせ給たまうべきには小乗しょうじよう・權大ごんだい・乘迹門しやくもんの
人人ひとびと・設たい科いとがなくとも彼れ彼れの法しるしあにては驗有るべからず、譬たとへば春の
藥は秋の藥とならず設たいなれども春夏しゅんかのごとくならず何いかに況や彼の
小乗しょうじよう・權大ごんだい・法華經ほけきようの迹門しやくもんの人人ひとびと・或あるは大小だいしやう・權實ごんじつに迷まよえる上・上
代の国主こくしゅ彼れ彼れの經經きやうきやうに付きて寺を立て田畠でんぱたを寄進せる故ゆえに彼の
法くたを下くだせば申もうし延えんべがたき上・依怙えこすでに失うしなるかの故ゆえに大瞋恚しんにを起して
・或あるは實經じつきやうを謗ぼうじ・或あるは行者ぎやうじやをあだむ国主こくしゅも

又一には多人につき、或は上代の国主の崇重の法をあらため難き故、或は自身の愚癡の故、或は実教の行者を賤しむゆゑ等の故彼の訴人等の語を、をさめて実教の行者をあだめば実教の守護神の梵釈・日月・四天等其の国を罰する故に先代未聞の三災・七難起るべし、所謂去年去ぬる正嘉等の疫病等なり。

疑つて云く汝が申すがごとくならば此の国法華經の行者をあだむ故に善神此の国を治罰する等ならば諸人の疫病なるべし何ぞ汝が弟子等又やみ死ぬるや、答えて云く汝が不審最も其の謂有るか但し一方を知りて一方を知らざるか、善と惡とは無始よりの左右の法なり權教並びに諸宗の心は善惡は等覺に限る若し爾ば等覺までは互に失有るべし、法華宗の心は一念三千・性惡性善・妙覺の位に猶備われり元品の法性は梵天帝釈等と顯われ元品の無明は第六天の魔王と顯わ

れたり、善神ぜんじんは悪人あくにんをあだむ悪鬼あくつきは善人ぜんにんをあだむ、末法まつぽうに入りぬれば自然じねんに悪鬼あくつきは国中あつきに充滿じゅうまんせり瓦石草木がしやくそうもくの並び滋しげきがごとし善鬼ぜんきは天下てんかに少し聖賢せいけんまれなる故なり、此の疫病えきびようは念佛者ねんぶつ・真言師しんごんし・禪宗ぜんしゅう・律僧等りつそうよりも日蓮にちれんが方にこそ多くやみ死ぬべきにて候か、いかにとして候やらん彼等かれらよりもすくなくやみすくなく死に候は不思議ふしぎにをばへ候、人のすくなき故か又御信心しんじんの強盛ごうじようなるか。

問うて云く日本国にほんこくに此の疫病えきびよう先代せんだいに有りや、答えて云く日本国にほんこくは神武天皇てんのうよりは十代にあたらせ給いし崇神天皇てんのうの御代に疫病えきびよう起りて日本国にほんこくやみ死ぬる事半なかばにすぐ、王始めて天照太神等てんしやうだいじんの神を国国あがめに崇しかば疫病えきびようやみぬ故に崇神天皇てんのうと申す、此れは仏法ぶつぽうのいまだわたらざりし時の事なり、人王第三十代並びに一二の三代の国主並びに臣下等しんか痲瘡ほうそうと疫病えきびように御崩去等なりき、其の時は神にいのれども叶かなわざ

りき、去ぬる人王三十代・欽明天皇の御宇に百済国より經・論・僧等を
わたすのみならず金銅の教主・釈尊を渡し奉る、蘇我の宿禰等崇むべし
と申す物部の大連等の諸臣並びに万民等は一同に此の仏は崇むべから
ず若し崇むるならば必ず我が国の神・禰りをなして国やぶれなんと
申す、王は両方弁まえたくをはせしに三災・七難先代に超えて起り
万民皆疫死す、大連等便りを得て

奏問そうもんせしかば僧尼そうに等をはじに及ぼすのみならず金銅しやかぶつの釈迦しやか仏をすみを

・をこして焼き奉たてまつる寺又同じ、爾その時に大連おおむらじやみ死ぬ王も隠れさせ

給たまひい仏をあがめし蘇そ我がの宿禰すくねもやみぬ、大連おおむらじが子もりや・守屋だいじんの大臣いわ云く此

の仏をあがむる故ゆえに三代の国主こくしゅすでに・やみかくれさせ給たまう我が父も

やみ死ぬ、まさに知るべし仏をあがむる聖徳太子しやうとくたいし・馬子等はをやのかた

き公の御かたきなりと申せしかば穴部の王子みこ・宅部の王子みこ等・並びに諸しよ

臣い已下か数千人・一同によりきして仏と堂等をやきはらうのみならず、

合戦すでに起りぬ結句けつくは守屋もりや討たれ了んぬ、仏法渡りて三十五年が間

・年さん年に三災さんさい

・七難疫病起りしが守屋馬子に討たるのみならず神もすでに仏にま

けしかば災難忽さいなんたちまちに止み了んぬ、其の後の代代の三災さんさい・七難等ひちなんは大体は

仏法ぶつぽうの内の乱れみだより起るなり、而れども・或あるは一・人・二人・或あるは一国・

二国・或は一類・二類・或は一処・二処の事なれば神のたたりも有り
謗法の故もあり民のなげきよりも起る。

而るに此の三十余年の三災・七難等は一向に他事を雑えず日本・一

同に日蓮をあだみて国・郡・郷・村・人ごとに上一人より下

万民にいたるまで前代未聞の大曠患を起せり、見思未断の凡夫の元品

の無明を起す事此れ始めなり、神と仏と法華經にいのり奉らばいよいよ

増長すべし、但し法華經の本門をば法華經の行者につけて除き

奉る結句は勝負を決せざらん外は此の災難止み難かるべし、止觀の十

境・十乗の觀法は天台大師説き給いて後・行ずる人無し、妙樂・伝教の

御時少し行ずといへども敵人ゆわきゆへにさてすぎぬ、止觀に三障四魔

と申すは權經

を行ずる行人の障りにはあらず今日蓮が時具さに起れり、又天台・

伝でんぎよう教等の時の三障四魔さんしやうしまよりもいまひとしをまさりたり。一念三千いちねんさんぜんの
観かんぼう法に二つあり一には理二には事なり天台・伝でんぎよう教等の御時おんときには理なり
今は事なり観かんねん念ねんすでに勝まさる故ゆえに大難だいなん又色しやくもんまさる、彼は迹門しやくもんの一念三千いちねんさんぜん
・此これは本門ほんもんの一念三千いちねんさんぜんなり天地てんちはるかに殊ことなりことなりと御臨終りんじゆうの
御時おんときは御心あ有るべく候、恐恐きようきよう謹言きんげん。

六月二十六日

日蓮にちれん花押かおう

◆一四九 金吾殿御返事

文永七年十一月 四十九

歳御作 与大田金吾

999p

止観しかんの五正月一日よりよみ候いて現世安穩げんせあんのん・後生善処ごしやうぜんじょと祈請きしやう仕り候、便宜びんぎに給わり候本末ほんまつは失うせて候いしかどもこれにすりさせて候多く本入るべきに申し候。

大師講だいしに鵜目がもく五連給候たびそうちら了おわんぬ、此の大師講だいし・三四年に始めて候が今年だいちは第一だいちにて候いつるに候。

抑そもそも此の法門ほうもんの事・勘文かんもんの有無うむに依よつて弘ひろまるべきか弘ひろまらざるか・去年こぞ方方かたがたに申もうして候いしかども・いなせの返事候はず候、今年十一月の比方方かたがた申もうして候へば少少返事あるかたも候、をほかた人の心もやわら

ぎて・さもやと・をぼしたりげに候、又上のけさんにも入りて候やらむ、

これほどの僻事ひがこと申して候は流・死の二罪つみの内は一定

と存ぜしがいままでなにと申す事も候はぬは不思議ふしぎと・をぼ候、いた

れる道理どうりにて候やらむ、又自界叛逆じかいほんぎやくなんの經文きやうもんも値べきにて候やらむ、

山門さんもんなんども・いにしへにも百千万億倍せんまんすぎて動揺どうごとうけ給わり候、そ

れならず子細しさいども候やらん震旦しんたん・高麗こますでに禪門ぜんもん・念仏ねんぶつになりて守護しゆご

の善神ぜんじんの去るかの間彼の蒙古もうこに聳もい候いぬ、我が朝も又

此の邪法じやほう弘まりて天台てんだい法華宗ほつけしやうを忽諸ゆるがせのゆへに山門さんもん安穩あんのんならず師檀しだん違叛

の国と成り候いぬれば十が八・九はいかんがと・み候、人身じんしんすでにうけ

ぬ邪師じやし又まぬがれぬ、法華經ほけきやうのゆへに流罪るざいに及びぬ、今死罪しざいに行われぬ

こそ本意ほんいならず候へ、あわれ・さる事の出来しゅつたいし候へかしと・こそはげみ候

いて方方かたがたに強言かうげんをかきて挙げあをき候なり、すでに年五十に及びぬ余命およい

くばくならず、いたづらに曠野こうやにすてん身を同じくは一乗法華いちじょうほっけのかた
になげて雪山童子せっせんどうじ・

薬王菩薩の跡をおひ仙予・有徳の名を後代に留めて法華・涅槃經に
説き入れられまいらせんと願うところなり、南無妙法蓮華經。

十一月二十八日 日蓮花押

御返事

◆一五〇 転重軽受法門 文永八年十月 五十歳御作

与大田左衛門曾谷入道金原法橋 1000p

修利槃特と申すは兄弟二人なり、一人もありしかばすりはんどくと
申すなり、各各三人は又かくのごとし一人も来らせ給へば三人と存じ
候なり。

涅槃經に転重軽受と申す法門あり、先業の重き今生につきずして

未来に地獄の苦を受くべきが今生にかかる重苦に値い候へば地獄の苦
みぱつときへて死に候へば人天・三乗・一乗の益をうる事の候、不輕
菩薩の惡口罵詈せられ杖木瓦礫をかほるもゆへなきにはあらず過去の
誹謗正法のゆへかと・みへて其罪畢已と説れて候は不輕菩薩の難に
値うゆへに過去の罪の滅するかとみへんべり是一、又付法蔵の二十五人
は仏をのぞきたてまつりては皆仏のかねて記しをき給える権者なり、
其の中に第十四の提婆菩薩は外道にころされ第二十五師子尊者は檀
弥栗王に頸を刎られ其の外仏陀密多・竜樹菩薩なんども多くの難に
あへり、又難なくして王法に御歸依いみじくて法をひろめ
たる人も候、これは世に惡国善国有り法に摂受折伏あるゆへかとみへ
はんべる、正像猶かくのごとし中国又しかなり、これは辺土なり末法
の始なり、かかる事あるべしとは先にをもひさだめぬ期をこそまち候い

つれ是二、この上の法門ほうもんはいにしえ申もうしをき候いきめづらしからず円教えんきょう
の六即そくの位に觀行即かんぎようそくと申もうすは所行如所言・所言如所行しよぎようと

云云、理即名字りそくみょうじの人は円人えんじんなれども言のみありて真なる事かたし、例せば外典げてんの三墳さんぶん・五典には読む人かずをしらず、かれがごとくに世を、をさめふれまう事せんまん千万が一つもかたしされば世のをさまる事も又かたし、法華經ほけきょうは紙付に音こえをあげてよめども彼の經文きやうもんのごとくふれまう事かたく候か、譬喩品ひゆほんに云く經を讀誦どくじゆし書持しよじすること有らん者を見て輕賤きやうせん憎嫉ぞうしつして結恨けつこんを懷いだかん」法師品ほうしほんに云く如来現在にやらいげんざいすら猶怨嫉なほおんしつ多し況や滅度めつどの後をや」勸持品かんじほんに云く「刀杖とうじやうを加え乃至ないし数数しうしう擯出へんしゅつせられん」安樂行品あんらくぎやうほんに云く「一切世間いっさいせけん怨多あだおほくして信がたじ難し」と、此等これらは經文きやうもんには候へども何世にかかるべしともしられず、過去かこの不輕菩薩ふきやうぼさつ・覺德比丘かくとくびくなどこそ身にあたりてよみまいらせて候いけるとみへはんべれ、現在げんざいには正像しやうざう二千年はさてをきぬ、末法まっぽうに入つては此の日本国にほんこくには当時とうじは日蓮にちれん一人み候か、昔あくおうの惡王おんときの御時おんとき多くの

聖僧せいそうの難なんに値あい候いけるには又しよじゆう所従けんぞく・眷属等けんぞく・弟子檀那等でしだんないくぞぼく
か・なげき候いづくいちげいけんと今なほをもちてをしはかり候いかに、今日蓮いまにちれん・法華經ほけきよう一部よ
みて候いづくいちげ一句一偈なほに猶受記なほをかほれり何いかにに況や一部をやと、いよいよたの
もし、但おほけなく国土こくどまでとこそをもひて候おもへども我もちと用もちいられぬ世
なれば力およ及およばず、しげきゆへにとどめ候おもい了おわんぬ。

文永八年辛ぶんえい未十月五日かのとひつじ

日蓮花押にちれんかおう

大田左衛門尉殿さえもんのじよう

蘇谷入道殿にゆうどう

金原法橋御房ごぼう

◆一五一 大田殿許御書 文永十二年正月 五十四歳御作

1002p

新春の御慶賀自他幸甚幸甚。

抑俗諦・真諦の中には勝負を以て詮と為し世間出世とも甲乙を以て先と為すか、而るに諸経・諸宗の勝劣は三国の聖人共に之を存し兩朝の群賢同じく之を知るか、法華經と大日經と天台宗と真言宗との勝劣は月支日本未だ之を弁ぜず西天東土にも明らめざる物か、所詮天台・伝教の如き聖人・公場に於て是非を決せず明帝桓武の如き国主之を聞かざる故か、所謂善無畏三蔵等は法華經と大日經とは

理同事勝等と慈覺・智証等も此の義を存するか、弘法大師は法華經を
華嚴經より下す等此等の二義共に經文に非ず同じく自義を存するか
將た又慈覺・智証等表を作つて之を奏す申すに随つて勅宣有り、聞く
が如くんば真言・止觀兩教の宗をば同じく醍醐と号し俱に深秘と稱す
乃至譬えば猶人の兩目・鳥の雙翼の如き者なり等云云、又重誠の勅宣
有り・聞くが如くんば山上の僧等専ら先師の義に違して偏執の心を
成ず殆んど以つて余風を扇揚し旧業を興隆することを顧みず等云云、
余生れて末の初に居し學諸賢の終りを稟く慈覺・智証の正義の上に
勅宣方方之れ有り疑い有るべからず一言をも出すべからず然りと
雖も円仁・円珍の兩大師・先師・伝教大師の正義を劫略して勅宣を
申し下すの疑い之れ有る上・仏誠遁れ難し、随つて又亡国の因縁・
謗法の源初之れに始まるか、故に世の謗を憚らず用不用を知らず

身命しんみょうを捨てて之これを申もうすなり。

疑うたがいつて云いく善無畏ぜんむい・金剛智こんごうち・不空ふくうの三三蔵さんぞう・弘法こうぼう・慈覺じかく・智証ちしょうの三

大師だいし・二經にきやうに相對そうたいして勝劣しょうれつを判ずるの時・或あるは

理同事勝・或は華嚴經より下る等云云、随つて又聖賢の鳳文之れ有り、
諸徳之を用いて年久し此の外に汝一義を存して諸人を迷惑し剩さえ
天下の耳目を驚かす豈増上慢の者に非ずや如何、答えて曰く汝等が
不審尤最もなり如意論師の世親菩薩を炳誠せる言は是なり、彼の状に
云く 覺援の衆と大義を競うこと無く群迷の中に正論を弁ずること無
かれと言ひ畢つて死す」云云、御不審之れに当るか、然りと雖も仏・
世尊は法華經を演説するに一經の内に二度
の流通之れ有り重ねて一經を説いて法華經を流通す、涅槃經に云く
君し善比丘あつて法を壞る者を見て置いて呵責し驅遣し挙処せずんば
当に知るべし是の人は仏法の中の怨なり」等云云、善無畏・金剛智の両
三蔵・慈覺・智証の二大師・大日の權經を以つて法華の実經を破壊せ
り。

而るに日蓮世を恐て之を言わずんば仏敵と為らんか、随つて章安
大師末代の学者を諫曉して云く、仏法を懷乱するは仏法の中の怨なり
慈無くして詐わり親しむは是れ彼の人の怨なり能く糾治する者は即ち
是れ彼が親なり」等云云、余は此の釈を見て肝に染むるが故に身命を
捨てて之を糾明するなり、提婆菩薩は付法藏の第十四・師子尊者は二
十五に当る・或は命を失い・或は頭を刎らる等是なり、疑つて云く
經經の自讃は諸經常の習いなり、
所謂金光明經に云く「諸經の王」密嚴經の「一切經中の勝」蘇悉地經
に云く「三部の中に於て此の經を王と為す」法華經に云く「是れ諸經の
王」等云云、随つて四依の菩薩・兩国の三藏も是くのごとく如何、答えて
曰く「大國・小國・大王・小王・大家・小家・尊主・高貴・各各分育有
然りと雖も國國の萬民・皆大王と号し同じく天子と稱す證を

以つて之を論ぜば梵王を大王と為し法華經を以て天子と稱するなり、
求めて云く其の証如何、答えて曰く金光明經の是諸經之王の文は梵
釈の諸經に相對し密嚴經の一切經中勝の文は次上に十地經・華嚴經・
勝鬘經等を挙げて彼彼の經經に相對して一切經の中に勝ると云云、
蘇悉地經の文は現文之れを見るに三部の中に於て王と為す等云云、
蘇悉地經は大日經・金剛頂經に相對して王と云云、而るに善無畏等
・或は理同事勝・或は華嚴經より下ると

等云云、此れ等の僻文は螢火を日月に同じ大海を江河に入るるか。

疑つて云く経経の勝劣之れを論じて何か為ん、答えて曰く

法華經の第七に云く能く是の經典を受持する者有れば亦復是くの如

し一切衆生の中に於て亦為第一なり」等云云、此の經の藥王品に十喩

を挙げて已今当の一切經に超過すと云云、第八の譬兼ねて上の文に有

り所詮仏の意の如くならば經の勝劣を詮するのみに非ず法華經の

行者は一切の諸人に勝れたるの由之れを説く、大日經等の行者は

諸山・衆星・江河・諸民なり、法華經の行者は須弥

山・日月・大海等なり、而るに今の世は法華經を輕蔑すること土の如し

民の如し真言の僻人等を重崇して国師と為ること金の如し王の如し之

に依つて増上慢の者・国中に充滿す青天曠を為し黃地天☆を致す

涓聚りて☆塹を破るが如く民の愁い積りて国を亡す等是なり、問う

て曰く内外の諸釈の中に是くの如きの例之れ有りや、答え

て曰く史臣吳兢が太宗に上つる表に云く竊かに惟れば太宗・文武皇帝

の政化・曠古より之れ求むるに未だ是くの如くの盛なる者有らず唐堯・

虞舜・夏禹・殷湯・周の文武・漢の文景と雖も皆未だ逮ばざる処なり」

云云、今・此の表を見れば太宗を慢ぜる王と云う可きか政道の至妙

先聖に超えて讃ずる所なり、章安大師・天台を讃めて云く「天台の

大論尚其の類に非ず真丹の人師何ぞ劣く語るに及ばん此れ誇耀に

非ず法相の然らしむるのみ」等云云、從義

法師重ねて讃めて云く「竜樹・天親未だ天台には若かず」伝教大師

自讃して云く「天台法華宗の諸宗に勝ることは所依の經に拠るが

故に自讃毀他ならず庶くば有智の君子・經を尋ねて宗を定めよ」云

云、又云く「能く法華を持つ者は亦衆生の中の第一なり已に仏説に

抛よる豈あに自讃じさんならんや」云云、今愚見ぐけんを以もつて之これを勘かんうるに善無畏ぜんむい

・弘法こうぼう・慈覺じかく・智証ちしょう等は皆みな仏意ぶつゐに違ちがうのみに非あらず・或あるは法ほふの盗人ぬすびと・或あるは

伝教大師でんぎょうだいしに逆さかえる僻人びやくにんなり、故ゆゑに・或あるは閻魔王えんまおうの責こおむを蒙あり・或あるは墓墳ぼふん

無なくく・或あるは事ことを入定にゅうじように寄よせ・或あるは度度たびたび・大火だいか・大兵だへいに値あえり權者ごんしゃは辱はじ

を死骸しがいに与よえざる処ところの本文ほんぶんに違ちがはるか、疑うたがひつて云いく六宗ろくしゅうの如ごとく真言しんごん

の一宗いつしゅうも天台てんだいに落おたる状さう之これ有ありや、答こたう記きの十じゅうの末まつに之これを載のせた

り、

随したがつて伝でんぎよう教大師依憑集を造つくつて之これを集まなこむ眼有したらん者は開ひらいて之これを見
よ、冀ねが哉末代の学者妙楽・伝教の聖言に随したがつて善無畏・慈覚の凡言
を用もちゆること勿なかれ、予が門家等深く此の由よしを存ぞんぜよ、今生こんじように人を恐おそれ
て後生ごしように惡果を招まねくこと勿なかれ、恐恐謹言。

正月廿四日

日蓮にちれん

花押かおう

大田金吾入道殿にゅうどう

◆一五二 太田殿女房御返事にようぼうごへんじ

建治元年がんねん

五十四

歳御作於身延

やつぎぶん
八月分の八木一石給候い了んぬ、即身成仏と申す法門は諸大乘經
ならだいにちきよう
並びに大日經等の經文に分明に候ぞ、爾ればとて彼の經經の人人の
そくしんじようぶつ
即身成仏と申すは二の増上慢に墮ちて必ず無間地獄へ入り候なり、記
の九に云く然して二の上慢深淺無きにあらず如と謂うは乃ち大無慙
の人と成る」等云云、諸大乘經の煩惱即菩提・生死即涅槃の即身成仏
の法門はいみじくをそたかきやうなれども此れはあえて即身成仏の
法門にはあらず、其の心は二乗と申す
そくおん
者は鹿苑にして見思を断じて・いまだ塵沙・無明をば断ぜざる者が我は
すでに
已に煩惱を尽したり無余に入りて灰身滅智の者となれり、灰身なれば
そくしん
即身にあらず滅智なれば成仏の義なし、されば凡夫は煩惱業もあり
くか
苦果の依身も失う事なければ煩惱業を種として報身・応身ともなりな
ん、苦果あれば生死即涅槃とて法身如来ともなりなんと二乗

をこそ彈だん呵かせさせ給たまいしか、さればとて煩惱ぼんのう・業ごふ・苦くが三身さんじんの種とはな
り候さうはず、今法華經ほけきやうにして有余と・無余なごの二乗にじやうが無き煩惱ぼんのう・業ごふ・苦くをとり
出して即身成仏そくしんじやうぶつと説とき給たまう時二乗にじやうの即身成仏そくしんじやうぶつするのみならず凡夫ぼんぷも
即身成仏そくしんじやうぶつするなり

此の法門ほうもんをだにもくはしく案じほどこせ給わば華嚴けごん・真言等しんごんの人人ひとびとの
即身成仏そくしんじょうぶつと申し候もうは依經えきょうに文は候へども其その義はあえてなき事なり
僻事ひがごとの起り此これなり。

弘法こうぼう・慈覺じかく・智証等ちしょうは此の法門ほうもんに迷惑めいわくせる人なりとみ候、何いかに況や
其その已下いのかの古徳ことく・先徳等せんとくは言うに足らず、但天台てんだいの第四十六の座主東ざす
陽の忠尋ちゅうもと申す人こそ此の法門ほうもんはすこしあやぶまれて候事は候へ然れしか
ども天台てんだいの座主慈覺じかくの末をうくる人なれば、いつわりをろかにて・さて
はてぬるか、其その上・日本国にほんこくに生を受くる人はいかでか心にはをもうと
も言に出し候べき、しかれども釈迦しやか・多宝たぼう・十方じゅうぽうの諸仏しよぶつ・地涌じゆ・竜樹りゅうじゆ
菩薩ぼさつ・天台てんだい・妙樂みょうらく・伝教大師でんきやうだいしは即身成仏そくしんじょうぶつは法華經ほけきやうに限ると・をぼしめ
されて候ぞ、我が弟子等でしは此の事を・をもひ出にせさせ給えたま。

妙法蓮華經の五字の中に諸論師・諸人師の釈まちまちに候へども皆

諸經の見を出でず、但竜樹菩薩の大論と申す論に譬えば大藥師の

能く毒を以て藥と為すが如し」と申す釈こそ此の一字を心へさせ給いた

りけるかと見て候へ毒と申すは苦集の二諦・生死の因果は毒の中の毒

にて候ぞかし、此の毒を生死即涅槃・煩惱即菩提となし候を妙の極と

は申しけるなり、良藥と申すは毒の変じて藥となりけるを良藥とは

申し候いけり、此の竜樹菩薩は大論

と申す文の一百の卷に華嚴・般若等は妙にあらず法華經こそ妙にて候へ

と申す釈なり、此の大論は竜樹菩薩の論羅什三蔵と申す人の漢土へわ

たして候なり、天台大師は此の法門を御らむあつて南北をばせめさせ

給いて候ぞ、而るを漢土唐の中・日本弘仁已後の人人の☆の出来し

候いける事は唐とうの第九代・宗皇帝こうていの御宇ぎよう・不空三蔵ふくうさんざうと申す
人の天竺てんじくより渡わたして候論ろんあり菩提心論ぼだいしんろんと申す、此このの論ろんは竜樹りゅうじゆの論とな
づけて候、此このの論ろんに云く唯真言法ただしんごんの中にのみ即身成仏そくしんじやうぶつする故ゆゑに是れ
三摩地さんまいの法ほふを説く諸教しよきやうの中に於おいて闕かひて書せず」と申す文あり、此の釈
にばかされて

弘法・慈覺・智証等の法門はさんさんの事にては候なり、但し大論は
竜樹の論たる事は自他あらそう事なし、菩提心論は竜樹の論・不空の
論と申すあらそい有り、此れはいかにも候へさてをき候ぬ、但不審なる
事は大論の心ならば即身成仏は法華經に限るべし文と申し道理きわま
れり、菩提心論が竜樹の論とは申すとも大論にそむいて真言
の即身成仏を立つる上唯の一字は強と見へ候、何の經文に依りて唯の
一字をば置いて法華經をば破し候いけるぞ証文尋ぬべし、竜樹菩薩の
十住毘婆娑論に云く、經に依らざる法門をば黒論」と云云自語相違あ
るべからず、大論の一百に云く、而も法華等の阿羅漢の授決作仏・乃至
譬えば大藥師の能く毒を以て藥と為すが如し」等云云、
此の釈こそ即身成仏の道理はかかれて候へ但菩提心論と大論とは同じ
竜樹大聖の論にて候が水火の異をばいかんせんと見候に此れは竜樹の

異説にはあらず訳者の所為なり、羅什は舌やけず不空は舌やけぬ、

妄語は・やけ実語は・やけぬ事顕然なり、月支より漢土へ經論わたす人

・二百七十六人なり其の中に羅什一人計りこそ教主釈尊の經文に私

の言入れぬ人にては候へ一百七十五人の中・羅什より先後・二百六十

四人は羅什の智をもつて知り候べし、

羅什来らせ給いて前後・一百六十四人が ☆ も顕れ新訳の十一人が

☆ も顕れ又こそかしくなりて候も羅什の故なり、此れ私の義にはあ

らず感通伝に云く「絶後光前」と云云、前を光らすと申すは後漢より

後秦までの訳者、後を絶すと申すは羅什已後・善無畏・金剛智・不空等

も羅什の智をうけてすこしこそかしく候なり、感通伝に云く

「已下の諸人並びに皆俟つ事」されば此の菩提心論の唯の文字は設い

竜樹の論なりとも不空の私の言なり、何に況や次下に「諸教の中に

於おいて關かいて書かせず」とかかれて候。存ぞん外がいのあやまりなり。

即身成仏そくしんじょうぶつの手本てほんたる法華經ほけきょうをば指さしをいて・あとかたもなき真言しんごんに

即身成仏そくしんじょうぶつを立て剩あまつさえ唯ただの一字いちを・をかるる条てんかだいいち・天下第一びやくけんの僻見へきけんなり

此これ偏ひとえに修羅根性しゆらくんじょうの法門ほうもんなり、天台智者大師てんだいちしやだいしの文句もんくの九くに寿量品じゆりやうぼんの

心しやくを釈いして云いく 仏さんぜ・三世さんぜに於おいて等おしく三身有さんじんり諸教しよきやうの中ちゆうに於おいて之これを

秘ひして伝えず」とかかれて候、此これこそ即身成仏そくしんじょうぶつの明文めいぶんにては候へ

不空三蔵此の釈を消さんが為に事を竜樹に依せて唯真言の法の中にのみ即身成仏するが故に是の三摩地の法を説く諸教の中に於て關いて書せず」とかかれて候なり、されば此の論の次下に即身成仏をかかれて候が・あへて即身成仏にはあらず生身得忍に似て候、此の人は即身成仏は・めづらしき法門とはきかれて候ども即身成仏の義はあへてうかがわぬ人人なり、いかにも候へば二乗成仏・久遠実成を説き給う経にあるべき事なり、天台大師の於諸教中秘之不伝」の釈は千且千且恐恐。

外典三千余卷は政当の相違せるに依つて代は濁ると明す、内典五千・七千余卷は仏法の僻見に依つて代濁るべしとあかされて候、今の代は外典にも相違し内典にも違背せるかのゆへにこの大科一國に起りて已に亡国とならむとし候か、不便不便。

七月二日

太田殿女房御返事にようぼうごへんじ

日蓮花押にちれんかおう

◆一五三 太田入道殿御返事 建治元年十一月 五十四

歳御作

1009p

貴札きさつ之これを開ひらいて拝見はいけんす、御痛ごいたみの事一たびは歎なげき二たびは悦よろこびぬ、
維摩詰ゆいまきつ経きょうに云いく、爾その時に長者ちやうじや維摩詰ゆいまきつ自ら念ねんずらく寝いねて牀ゆかに疾やむ
云云、爾その時に仏もんじゆ・文殊師利もんじゆしりに告つげたまわく、汝なんじ維摩詰ゆいまきつに行詣ぎやうけいして疾やまい
を問とえ「云云、大涅槃だいねはん經きょうに云いく、爾その時に如来にやらい乃至ないし身に疾やまい有あるを現げんじ、
右脇うきやうにして臥ふしたもう彼の病人びやうにんの如ごとくす」云云、法華ほけきやう經きょうに云いく
少病少惱しやうびやうしやうなう「云云、止觀しかんの第八はちに云いく、若もし毘耶びやに偃臥えんがし疾やまいに託たくいて教
を興おこす、乃至ないし如来にやらい滅めつに寄よせて常じやうを談だんじ病びやうに因よつて力ちからを説とくく」云云、又
云いく病びやうの起おこる因縁いんねんを明あすに六有りくいうり、一には四大順しやうだいじゆんならざる故ゆゑに病びやうむ・

二には飲食節ならざる故に病む・三には坐禪調わざる故に病む・四には

鬼便りを得る・五には魔の所為・六には業の起るが故に

病む」云云、大涅槃經に云く世に三人の其の病治し難き有り・一には

大乘を誇ず・二には五逆罪・三には一闡提是くの如き三病は世の中の

極重なり」云云、又云く今世に惡業成就し乃至必ず地獄なるべし

乃至三宝を供養するが故に地獄に墮せずして現世に報を受く所謂頭

と目と背との痛み」等云云、止觀に云く若し重罪有つて乃至

人中に輕く償うと此れは是れ業が謝せんと欲する故に病むなり」云

云、竜樹菩薩の大論に云く問うて云く若し爾れば華嚴經・乃至・般若

波羅蜜は秘密の法に非ず而も法華は秘密なり等、乃至譬えば大藥師の

能く毒を変じて藥と為すが如し」云云、天台此の論を承けて云く譬え

ば良医の能く毒を変じて藥と為すが如く乃至今經の得記は

即ち是れ毒を變じて藥と為すなり」云云、故に論に云く、余經は秘密に
非ず法華を秘密と為すなり」云云、止觀に云く、法華能く治す復稱し
て妙と為す」云云、妙樂云く、沼し難きを能く治す所以に妙と稱す」
云云、大經に云く、爾の時に王舍大城の阿闍世王其の性弊惡にして
乃至父を害し已つて心に悔熱を生ず乃至心悔熱するが故に

偏ひとへ体瘡しやうを生おこず其その瘡臭穢しゅうえにして附近きんすべからず、爾その時ときに其その母
韋提希いだいけと字なづく種種しゆじゆの薬くすりを以もつて而しかも為ために之これを傳そく其その瘡遂きすに増きして降損
有あること無し、王すなわ即すなわち母もに白もうす是かくの如ごときの瘡きすは心こころよりして生おこず四大
より起おこるに非あらず若もし衆生しゆじやうよ能よく治しよする者もの有いりと言いわば是この処ところ有あること
無なけん云云、爾その時ときに世尊せそん・大悲導師だいひどうし・阿闍世王あじゃせのためために月愛三昧さんまいに入
りたもう三昧さんまいに入り已おわつて大光明ごうみやうを放はなつ其その光ひかりり清涼せいりやうにして往ゆいて王
の身みを照てらすに身みの瘡即きすち愈いえぬ」云云、平等大慧びやうどうだいえ・妙法蓮華經みやうほうれんげきやうの第七に
云いく此この經きやうは則すなわち為これ閻浮提えんぶだいの人の病りやうやくの良藥りやうやくなり若もし人病にんびやう有あらん
是この經きやうを聞きこくことを得えば病即すなわち消滅しょうめつして不老不死ふろうふしならん」云云。

已上・上の諸文しよぶんを引ひいて惟こゝにに御病ごびやうを勘かんうるに六病りくびやうを出いでず其その中うちの
五病ごびやうは且しからく之これを置おく第六の業病ごうびやう最も治がたし難がたし、將はた又また業病ごうびやうに輕かろき有
り重おもき有ありて多少定さだまらず就なかな中ちゆう・法華誹謗ほつげの業病ごうびやう最さい第一だいいちなり、神農・

黄帝・華佗・扁鵲も手を拱き持水・流水・耆婆・維摩も口を閉ず、但し
釈尊一仏の妙經の良薬に限つて之を治す、法華經に云く上の如し、
大涅槃經に法華經を指して云く、若し是の正法を毀誘するも能く自ら
改悔し還りて正法に歸すること有れば
乃至此の正法を除いて更に救護すること無し是の故に正法に還歸すべ
し」云云、荊溪大師の云く、天經に自ら法華を指して極と為す」云云、
又云く、尸の地に倒れて還つて地に從りて起つが如し故に正の謗を以て
邪の墮を接す」云云、世親菩薩は本小乗の論師なり五竺の大乗を
止めんが為に五百部の小乗論を造る後に無著菩薩に値ひ奉りて
忽に邪見を翻えし一時、此の罪を滅せんが為に著に向つて舌を切らんと
欲す、著止めて云く、汝其の舌を以て大乘を讚歎せよと、親忽に五
百部の大乘論を造つて小乗を破失す、又一の願を制立せり我一生の

間しょうじょう小乗を舌の上に置かじと、然しかして後罪滅つみして弥勒みろくの天に生ず、馬鳴めみょう

菩薩ぼさつは東印度いんとの人、付法藏ふほうぞうの第十三に列れり本外道の長たりし時

勒比丘びくと内外ないげの邪正じゃせいを論ずるに其その心言下しんごんげに解とけて重科じゅうかを遮しやせんが

為ために自ら頭みずかを刎ころねんと探たづね所謂いふ我われ・我に敵てきして墮獄だごくせしむ、勒比丘びく・

諫いさめ止とどめて云いく汝頭なんじこころを切きること勿なかれ其その頭こころと口とを以もつて大乘だいじょうを讃歎さんたん

せよと、鳴急みょうに

起信論を造つて外小を破失せり月氏の大乗の初なり、嘉祥寺の吉蔵
大師は漢土第一の名匠・三論宗の元祖なり呉会に独歩し慢幢最も高し
天台大師に対して已今当の文を諍い立処に邪執を翻破し謗人・謗法の
重罪を滅せんが為に百余人の高德を相語らい智者大師を屈請して身
を肉橋と為し頭に両足を承く、七年の間・薪を採り水を汲み講を廃
し衆を散じ慢幢を倒さんが為法華經を誦せず、大師の滅後隨帝に往詣
し☆足を☆撰し涙を流して別れを告げ古鏡を觀見して自影を慎辱す
業病を滅せんと欲して上の如く懺悔す、夫れ以みれば一乗の妙經は
三聖の金言・已今当の明珠諸經の項に居す、經に云く「諸經の中に
於て最も其の上に在り」又云く「法華最第一なり」伝教大師の云
く「仏立宗」云云。

予隨分・大・金・地等の詣の真言の經を勘えたるに敢えて此の文の

会通えつうの明文めいぶん無し但畏・智・空・法・覺・証等の曲会に見えたり是に知んぬ
釈尊しゃくそん・大日だいにちの本意ほんいは限ほつて法華ほっけの最上さいじやうに在るなり、而しかるに本朝ほんちやう真言しんこんの
元祖がんそたる法・覺・証等の三大師だいししにゆうどう入唐にゅうどうの時・畏・智・空等の三三藏さんざうの誑惑おおわく
を果・全等に相承そうじやうして歸朝きちやうし了おぬ、法華・真言弘通しんこんぐつうの時三説超過ちやうか
の一乗いちじやうの明月を隠かくして真言兩界しんこんの螢火ほたるびを顯あらわし剩あまつさえ法華經ほっけきやうを罵詈めりして
曰いく戲論けろんなり無明むみやうの辺域へんいきなり、自害じがいの謬みやうこ☆に曰いく大日經だいにちきやうは戲論けろんなり
無明むみやうの辺域へんいきなり本師ほんし既に曲かれり末葉まつよう豈あに直ちならんや源みなもと濁なれば流清りゅうせいか
らず等こ是これ之いを謂いうか、之よに依よつて日本にほん久ひさしく闇夜やみよと為なり扶桑終ふそうついに
他國たこくの霜からに枯かれんと欲ほす。

抑おさ貴辺きへんは嫡嫡ちやくちやくの末流まつりゆうの一分いちぶんに非あらずと雖いえども將はた又檀那だんなの所從しよじゆうな
り身みは邪家しやに処しよして年久とししく心こころは邪師しやしに染そみて月重つきしげなる設たい大山おほは
顔くすれ設たい大海たいかいは乾かわくとも此この罪つみは消けえ難がたきか、然しかりと維しゆくえんも宿縁しゆくえんの催もよおす

所又今生こんじょうに慈悲じひの薰くんずる所存しよぜんの外ひんどうに貧道ちんどうに値遇ちぐうして改悔かいげを發起おこしする
故ゆえに未來みらいの苦くるを償つぐなうも現在げんざいに輕瘡しゆつげん出現しゆつげんせるか、彼の閻王じやおうの身瘡みそうは五逆ごぎやく
誹法ひぽうの二罪ざいの招まねく所なり、仏・月愛三妹そに入そつて其その身みを照てらしたまえば
惡瘡あくそう忽たちまちに消おこえ三七日の短寿たんじうを延のべて四十年の宝算ほうさんを保たもち發はては又千人
の羅漢らかんを屈請くつじようして一代いちだいの金言きんげんを書かき顯あらわし、正像しやうざう未ふに流布りふせり、此の
禪門ぜんもんの惡瘡あくそう

は但謗法ほうぼうの一科とがなり、所持しよじの妙法みょうぼうは月愛ちようあいに超過ちようかす、宝輕瘡いんやを愈いして
長寿ちようじゆを招まねかざらんや、此この語徵ごしるし無くんば声こゑを發はして一切世間眼いっさいせけんは大
妄語もうごの人・一乗妙經いちじようみきやうは綺語きごの典てんなり・名なを惜おししみ給たまわば世尊せそん驗しるしを
顯あらわし・誓ちかを恐れ給たまわば諸もろの賢聖けんせい来きり護まもり給たまえと叫喚きやうかんしたまえと爾しか云
う書は言を尽さず言は心を尽さず事事見參の時を期ごせん、恐恐きようきよう。

十一月三日

日蓮にちれん

花押かおう

太田入道殿御返事たうだうどうごへんじ

一五四 乘明聖人御返事しやうにんごへんじ

建治三年四月五十六歳御作

与大田乗明

1012p

相州そうしゅうの鎌倉かまくらより青鳧せいふ二結

甲州身延こうしゅうしんえんの嶺たかねに送り遣つかわされ候そうら了おんぬ、

昔こと金珠女こんじゆにょは金銭こんせん一文いちもんを木像ぼざうの薄はくと為なし九十一劫いっしゅうこく金色こんしきの身みと為なりき

其その夫その金師こんしは今の迦葉かしょう・未来みらいの光明こうみょう如来にょらい是これなり、今の乘明法師ほつし・妙

日なら並びに妻女さいにょは銅錢どうせん二千枚にせんまいを法華經ほけきやうに供養くやうす彼は仏こなり此これは經きやうな

り經きやうは師しなり仏ぶつは弟子でしなり、涅槃經ねはんぎやうに云いく 謂い仏ぶつの師しとする所しよは所謂いわゆる

法はふなり乃至ないしかくのゆえ是この故ゆゑに諸仏しよぶつ恭敬きやうけい供養くやうす」と、法華經ほけきやうの第七だいしちに云いく 若もし

復人また有あつて七宝しちぽうを以もつて三千大千世界さんぜんだいせんせかいに満みてて仏おほ及び大菩薩だいぼさつ・辟支仏ひやくしぶつ・

阿羅漢あらかんを供養くやうせし、是この人の得とくる所の功德くんとくは此この法華經ほけきやうの乃至ないし一四

句偈くげを受持じゆじする其その福ふくの最も多おほきに如しかず」夫それ劣せうる仏ぶつを供養くやうする尚なほ

九十一劫いっしゅうこくに金色こんしきの身みと為なりぬ勝すぐれたる經きやうを供養くやうする施主せしゆ・一生いっしやうに仏位ぶつゐ

に入いらざらんや、但真言しんごん・禪宗ぜんしゆう・念佛者ねんぶつ等の謗法ぼうぽうの供養くやうを除くき去さるべ

し、譬たとえば修羅しゆらを崇重すうちやうしながら帝釈たいしやくを歸敬きけいするが如ごときのみ、恐恐きやうきやう

し、譬たとえば修羅しゆらを崇重すうちやうしながら帝釈たいしやくを歸敬きけいするが如ごときのみ、恐恐きやうきやう

謹言。
きんげん

卯月十二日

花押
かおう

乗明聖人御返事
しょうにんごへんじ

日蓮
にちれん

一五五 大田殿女房御返事

建治三年十一月 五十六歳

御作 与大田入道女房 於身延

1013p

柿のあをうらの小袖わた十両に及んで候か、此の大地の下は二の地獄あり一には熱地獄すみををこし野に火をつけせうまうの火鉄のゆのごとし、罪人のやくる事は大火に紙をなげ大火になくづをなぐるがごとし、この地獄へはやきとりと火をかけてかたきをせめ物をねたみて胸をこがす女人の墮つる地獄なり、二には寒地獄・

此の地獄に八あり、涅槃經に云く「八種の寒冰地獄あり所謂阿波波地獄・阿☆☆地獄・阿羅羅地獄・阿婆婆地獄・優鉢羅地獄・波頭摩地獄・拘物頭地獄・芬陀利地獄」云云、此の八大かん地獄は或はかんにせ

められたるこえ・或^{ある}は身のいろ等にて候、此の国のすわの御いけ・或^{ある}は越中のたて山のかへし加賀の白山のれいのとりのはねをとぢられ、

やもめをうなのすそのひゆる、ほろろの雪に・せめられたるをもてしろしめすべし、かんに・せめられて・をとがいのわなめく等を阿波波・阿^あ☆^た☆^た・阿羅羅等と申^{もう}すかんに・せめられて身のくれないにたるを紅蓮^{ぐれん}・大紅蓮等と申^{もう}す

なり、いかなる人の此の地獄^{じごく}をつるぞと申せば此の世にて人の衣服^{えぶく}をぬすみとり父母^{ふぼ}・師匠^{ししょう}等のさむげなるを・みまいらせて我はあつくあたにかにして昼夜をすごす人人^{ひとびと}の墮^おつる地獄^{じごく}なり。

六道^{ろくどう}の中に天道と申^{もう}すは其^その所に生ずるより衣服^{えぶく}ととのをりて生るところなり、人道の中にも商那和修^{しょうなわしゅう}鮮白^{せんびやく}比丘^{びく}尼^に等は悲母^{ひも}の胎内^{たいない}より衣服^{えぶく}ととのをりて生れ給^{たま}へり、是^これはたうとき人人^{ひとびと}に衣服^{えぶく}をあたへたる

のみならず父母・主君・三宝にきよくあつき衣をまいらせたる人なり、
商那和修と申せし人は裸形なりし辟支仏に衣をまいら

せて世世・生生に衣服身に随ふ、☆曇弥と申せし女人は仏にきんばら

衣をまいらせて一切衆生喜見仏となり給う、今法華經に衣をまいらせ

給う女人あり後生に・はちかん地獄の苦をまぬかれさせ給うのみなら

ず、今生には大難

をはらひ其その功德くどくのあまりを男女なんよのきんだち・きぬにきぬをかさね・いろ
にいろをかさね給たまうべし、穴賢あなかしこあなかしこ穴賢。

建治三年丁丑ひのとうし十一月十八日 日蓮にちれん在御判

一五六 大田左衛門尉御返事さえもんじょうごへんじ

弘安元年こうあんがんねん四月 五

十七歳御作 1014p

当月十八日の御状、同じき二十三日の午うまのこの剋計りに到来とうらい、臈やがてはいけん拜見仕
り候おわんひ畢ぬ、御状ごじょうの如く御布施ふせ・鳥目がもく十貫文・太刀・五明一本・焼香二
十両給ひ候、抑そもそも専ら御状に云く某今年は五十七に罷まかり成り候へば大
厄おほの年かと覚え候、なにやらんして正月の下旬の比より卯月の此の比に

至り候まで身心しんしんに苦勞多く出来候、本より人身じんしんを受くる者は必ず身心しんしんに諸病しよ相續して五体に苦勞あるべしと申しながら更に云云。

此の事最第一の歎きの事なり、十二因縁いんねんと申す法門ほうもんあり、意は我等が身は諸苦しよくを以て体と為す、されば先世せんぜに業を造る故に諸苦しよくを受け、先世せんぜの集・煩惱ぼんのうが諸苦しよくを招き集め候、過去かこの二因・現在げんざいの五果・現在の三因・未来みらいの兩果とて三世次第さんぜしだいして一切いっさいの苦果くかを感ずるなり、在世ざいせの二乗が此等の諸苦しよくを失はんとて、空理くうりに沈み灰身滅智けしんめつちして、菩薩ぼさつの勤行精進しやうじんの志を忘れ、空理くうりを証得しやうとくせん事を真極と思ふなり、仏・方等ほうとうの時・此等の心地を彈呵だんかし給ひしなり、然るに生を此の三界さんがいに受けたる者苦を離るる者あらんや、羅漢らかんの応供おうぐすら猶此くの如し、況や底下ていげの凡夫ぼんぶをや、さてこそいそぎ生死しやうじを離るべしと勧め申し候へ。

此等体の法門はさて置きぬ、御辺は今年は大厄と云云、昔伏羲の御

宇に、黄河と申す河より亀と申す魚・八卦と申す文を甲に負て浮出た

り、時の人・此の文を取り挙げて見れば、人の生年より老年の終りまで

厄の様を明したり、厄年の人の危き事は、少水に住む魚を鵠鵠な

が伺ひ、灯の辺に住める夏の虫の火中に入らんとするが如くあやう

し、鬼神ややもすれば此の人の神を伺ひなやまさんとす、神内と

申す時は諸の神・身に在り万事心に叶ふ、神外と申す時は諸の神

・識の家を出でて万事を見聞するなり、当年は御辺は神外と申して諸

神他国へ遊行すれば慎んで除災得樂を祈り給ふべし、又木性の人にて渡

らせ給へば、今年は大厄なりとも春夏の程は何事か渡らせ給ふべき、

至門性経に云く、木は金に遇て抑揚し、火は水を得て光滅し、土は木に

値て時に瘦せ、金は火に入て消え失せ、水は土に遇て行かず」等云云。

指して引き申すべき經文にはあらざれども、予が法門は四悉檀を心に懸けて申すならば、強ちに成仏の理に違はざれば、且らく世間普通の義を用ゆべきか、然るに法華經と申す御經は身心の諸病の良薬なり、されば經に云く、此の經は則ち為閻浮提の人の病の良薬なり、若し人病有らんに是の經を聞くことを得ば、病即消滅して不老不死ならん」等云云、又云く、現世は安穩にして、後生には善処ならん」等云云、又云く、諸余の怨敵、皆悉く摧滅せん」等云云、取分奉る御守り方便品・寿量品、同じくは一部書て進らせ度候へども、當時は去り難き隙どもも入る事候へば略して二品奉り候、相構へ相構へて御身を離さず重ねつつみて御所持有るべき者なり、此の方便品と申すは迹門の肝心なり、此の品には仏・十如実相の法門を説て十界の衆生の成仏を明し給へば、舍利弗等は此れを聞て無明の惑を

断じ真因の位に叶ふのみならず、未来華光如来と成て、成仏の覚月を
離垢世界の曉の空に詠ぜり、十界の衆生の成仏の始めは是なり、当時
の念仏者・真言師の人人・成仏は我が依經に限れりと深く執するは、此
等の法門を習学せずして、未顕真実の經に説く所の名字計りなる授記
を執する故なり。

貴辺は日来は此等の法門に迷ひ給ひしかども、日蓮が法門を聞て、
賢者なれば本執を忽に翻し給て、法華經を持ち給ふのみならず、
結句は身命よりも此の經を大事と思食す事・不思議が中の不思議な
り、是れは偏に今の

事に非ず、過去の宿縁開發せるにこそ、かくは思食すらめ、有り難し
有り難し、次に寿量品と申すは本門の肝心なり、又此の品は一部の
肝心、一代聖教の肝心のみならず、三世の諸仏の説法の儀式の主要な
り、教主釈尊、寿量品の一念三千の法門を証得し給ふ事は、三世の
諸仏と内証等しきが故なり、但し此の法門は釈尊一仏の己証のみに非
ず諸仏も亦然なり、我等衆生の無始已来六道生死の浪に沈没せしが、
今教主釈尊の所説の法華經に値ひ奉る事は、乃往過去に此の寿量品
の久遠実成の一念三千を聴聞せし故なり、有り難き法門なり。
華嚴・真言の元祖、法蔵・澄觀・善無畏・金剛智・不空等が、釈尊・
一代聖教の肝心なる寿量品の一念三千の法門を盗み取て、本より自
の依經に説かざる華嚴經・大日經に一念三千有りと云て取り入るる程
の盗人にばかされて、末学深く此の見を執す、墓無し墓無し、結句は

真言しんごんの法師にんしの云く、争たぎて醍醐だいごを盗ぬすて、各自宗じしゆに名なく」云云、又

云く、法華經ほけきやうの二乗にじやう作さ仏ぶつ・久遠実成くおんじつじやうは無明だいにちきやうの辺域だいにちきやう、大日經だいにちきやうに説く所の

法門ほうもんを明あきらの分位ぶんゐ」等云云、華嚴けこんの法師にんし云く、「法華經ほけきやうに説く所の

一念三千いちねんさんぜんの法門ほうもんは枝葉しやう、華嚴經けこんきやうの法門ほうもんは根本こんぽんの一念三千いちねんさんぜんなり」云云、

是跡形これあとかたも無なき僻見へきけんなり、真言しんごん・華嚴經けこんきやうに一念三千いちねんさんぜんを説きたらばこそ、

一念三千いちねんさんぜんと云ふ名目をばつかはめ、おかしおかし、龜毛兎角きもうとかくの法門ほうもんな

り。

正まさしく久遠実成くおんじつじやうの一念三千いちねんさんぜんの法門ほうもんは前四味ぜんしゐ並なに法華經ほけきやうの迹門しやくもん十四

品しんまで秘ひさせ給たまて有ありしが、本門ほんもん正宗しやうしゆに至いたて寿量品じゆりやうぽんに説あき顯あらわし給たまへ

り、此この一念三千いちねんさんぜんの宝珠ほうしゆをば妙法みやうほう五字ごじの金剛こんごう不壞ふゑの袋ふくろに入れて、末代まつだい

貧窮われらしめじやうの我等われら衆生しゆじやうの爲ために残のこし置おかせ給たまひしなり、正法しやうほう・像法やうほうに出いでさせ

給たまひし論師ろんし・法師にんしの中に此この大事だいじを知らず、唯竜樹りゆうじゆ・天親てんじんこそ心の

底に知らせ給ひしかども色にも出ださせ給はず、天台大師は玄・文・止觀に秘せんと思召ししかども、末代の為にや止觀十章第七正觀の章に至て粗書かせ給ひたりしかども、薄葉に釈を設けてさて止み給ひぬ、但理觀の一分を示して事の三千をば斟酌し給ふ。

彼の天台大師は迹化の衆なり、此の日蓮は本化の一分なれば盛に本門の事の分を弘むべし、然に是くの如き

大事だいじの義理ぎりの籠こもらせ給ふ御經ごきやうを書て進らせ候へば、弥いよ信しんを取らせ給ふべし、勸かん発はつ品ぽんに云く、当あたに起て遠く迎へて、当に仏ぶつを敬ことふが如くすべし」等云云、安樂あんらく行品ぎやうぽんに云く、諸しよ天てん昼夜しやに、常に法たのめの爲ゆゑの故に、而も之を衛まも護もす、乃至ないし天の諸しよ童子どうじ、以て給使きよしを爲さん」等云云、譬喻ひゆ品ぽんに云く、其の中の衆生しゆじやうは、悉く是れ吾わが子なり」等云云、法華ほけ經きやうの持者じしやは、教主きやうしゆしやくそん釈尊しやくそんの御子ごしなれば、争いかでか梵天ぼんてん・帝釈たいしやく・日月にちがつ・衆星しゆうせいも昼夜朝暮しやうそに守らせ給はざるべきや、厄さいなんの年災難はらを払はん秘法ひほうには法華ほけ經きやうに過ぎず、たのもしきかな、たのもしきかな。

さては鎌倉かまくらに候ひし時は細細しんしん申し承はり候ひしかども、今は遠国えんごくに居住きやうじゆ候うに依て面謁めんえつを期する事更になし、されば心中しんちゆうに含みたる事も使者たますさ玉章たましやうにあらざれば申すに及ばず、歎かし歎かし、当年の大厄やくそくをば日蓮にちれんに任せ給へ、釈迦しやか・多宝たほう・十方分身じゆつぽうふんじんの諸仏しよぶつの法華ほけ經きやうの御約束やくそくの実

不^ふ実^{じつ}は是^これにて量^りるべきなり、又^{また}又^{もう}申^{もう}すべく候^{こう}、

弘^{こう}安^{あん}元^{げん}年^{ねん}戊^{つち}寅^{のえとら} 四^し月^{げつ}二^に十^{じゅう}三^{さん}日^{にち}

日^{にち}蓮^{れん}花^か押^お

太^さ田^{えもん}左^{のじ}衛^{よう}門^ご尉^{へん}殿^じ御^ご返^{へん}事^じ

◆一五七

大田殿女房御返事

1018p

八木一石付十合者^{ていれは}大旱魃^{かんぱつ}の代に、かはける物に水をほどこしては、
大竜王^{りゅうおう}と生れて雨をふらして人天^{にんてん}をやしなう、うえたる代に、食をほ
どこせる人は国王^{こくおう}と生れて其の国ゆたかなり、過去^{かこ}の世に金色^{もう}と申す^{だいおう}
大王ましましき其の国をば波羅奈国^{はらな}と申す^{もう}、十二年が間、旱魃^{かんぱつ}ゆきて
人民^{じんみん}うえ死ぬ事おびただし。宅中^{しにん}には死人^{しにん}充満^{じゅうまん}し、道路^{みち}には骸骨^{がいこつ}
充満^{じゅうまん}せり、其の時^{そのとき}、大王^{だいおう}一切衆生^{いっさいしゅじょう}をあはれみて、おおくの蔵^{くら}をひらき
て施をほどこし給ひき、蔵の中の財つきて唯一日の御供^{ごこう}のみのこりて候
ひし、衆僧^{しゅうそう}をあつめて供養をなし、王と后^{しゅうそう}と衆僧^{しゅうそう}と万民^{ばんみん}と皆うえ死な
んとせし程に、天より・雨のごとくふりて大国^{たいこく}一時^{いちじ}に富貴せりと、金色
王経にとかれて候、此れも又かくのごとし此の供養によりて現世^{げんせ}には福

人となり、後生ごしょうには靈山淨土じょうどへまいらせ給ふべし。恐恐きょうきょう謹言きんげん。

九月二十四日

日蓮にちれん

花押かおう

大田入道にゅうどう殿女房にようぼう御返事ごへんじ

◆一五八 慈覚大師事

弘安三年正月 五十九歳御作与

大田入道 於身延

1014p

鸛眼三貫・絹の袈裟一帖給い候い了んぬ、法門の事は秋元太郎
兵衛尉殿の御返事に少少注して候・御覽有るべく候、なによりも受け
難き人身・値い難き仏法に値いて候に五尺の身に一尺の面あり其の面の
中三寸の眼二つあり、一歳より六十に及んで多くの物を見る中に悦ば
しき事は法華最第一の経文なり、あさましき事は慈覚大師の金剛
頂經の頂の字を釈して云く『言う所の頂とは諸の大乗の法の中に
於て最勝にして無過上なる故に頂を以て之れに名づく乃至人の身の
頂最も為勝るるが如し、乃至法華に云く是法住法位と今正しく此の

ひみつ 秘密の理を顯説す、故に

こんごう 金剛頂と云うなり」云云、又云く こんごう 金剛は宝の中の宝なるが如く此の經

も亦爾なり諸の經法の中に最為第一にして三世の如来の髻の中の宝

なる故に」等云云、此の釈の心は法華最第一の經文を奪い取りて金剛

頂經に付くるのみならず、如人之身頂最為勝の釈の心は法華經の頭

を切りて真言經の頂とせり、此れ即ち鶴の頸を切つて蝦の頸

に付けけるか真言の蟻も死にぬ法華經の鶴の御頸も切れぬと見え候、

此れこそ人身うけたる眼の不思議にては候へ三千年に一度花開くな

る優曇花は転輪聖王此れを見る。

くきよう えんまん 究竟円満の仏にならざらんより外は法華經の御敵は見しらさんな

り、一乗のかたき夢のごとく勘へ出して候、慈覺大師の御はかはいづれ

のところの有りと申す事きこす候、世間に云う御頭は出羽の国・立石

寺に有り云云、いかにも此の事は頭こづべと身とは別べつの所に有あるか、明雲
座主ざすは義仲に頸を切られたり、天台座主てんだいざすを見候へば伝教大師でんぎょうだいしはさてを
きまいらせ候いぬ、第一義真だいいちぎしん・第二円澄えんちよう・此の兩人は法華經ほけきようを正とし
真言しんごんを傍ぼうとせり、第三の座主ざす・慈覺大師じかくだいしは真言しんごんを正とし法華經ほけきようを傍ぼうと
せり、其その已後いご代代の座主ざすは相論そうろんにて思い定むる事こと無し、第五十五
並びに

五十七の二代は明雲大僧正座主なり、此の座主は安元三年五月日
院勘を蒙りて伊豆の国へ配流、山僧・大津にて奪い取りて後治承三年十
一月に座主となりて源の右將軍頼朝を調伏せし程に寿永二年十一
月十九日義仲に打たれさせ給う、此の人・生けると死ぬと二度大難に
値えり、生の難は仏法の定例・聖賢の御繁盛の花なり死の後の恥辱は
悪人・愚人・誹謗正法の人招くわざわいなり、所謂大慢ばら門・須利等
なり。

粗此れを勘えたるに明雲より一向に真言の座主となりて後・今三十
余代一百余年が間・一向・真言の座主にて法華經の所領を奪えるなり、
しかれば此等の人人は釈迦・多宝・十方の諸仏の大怨敵・梵釈・日月・
四天・天照太神・正八幡大菩薩の御讎敵なりと見えて候ぞ、我が弟子
等・此の旨を存じて法門を案じ給うべし、恐恐。

正月二十七日

にちれんかおう
日蓮花押

太田入道殿御返事
にゅうどうごへんじ

◆一五九 三大秘法稟承事

弘安四年四月 六十

歳御作 与大田金吾 1021p

夫れ法華經ほけきようの第七神力品じんりきばんに云く、要を以て之を言これば如来の一切いっさいの
所有しようの法・如来の一切いっさいの自在じざいの神力じんりき・如来の一切いっさいの秘要ひようの蔵・如来の
一切いっさいの甚深じんじんの事・皆此經みなに於て宣示顯說おのいす」等云云、釈いに云く、經中の
要說ようせつの要・四事に在り」等云云、問う所說しよせつの要言なにもの法とは何物ぞや、答
て云く夫れ釈尊しやくそん初成道しよじやうどうより四味三教しみさんきやう乃至法華經しよかいさんけんの広開三顯一くわいかいさんけんの席を
立ちて略開近顯遠りやくかいこんけんのんを説かせ給たまいし涌出品ゆじゆぽんまで秘せさせ給たまいし真相証得じつそうしやうとく
の当初修行そのかみしゆぎやうし給たまいし処ところの寿量品じゆりやうぼんの本尊ほんぞんと
戒壇かいだんと題目だいもくの五字ごじなり、教主釈尊きやうしやくそん此この秘法ひほうをば三世さんぜに隠れ無き普賢ふげん

・文殊等にも譲り給はず況や其の以下をや、されば此の秘法を説かせ給いし儀式は四味三教並に法華經の迹門十四品に異なりき、所居の土は寂光本有の国土なり能居の教主は本有無作の三身なり所化以て同体なり、かかる砌なれば久遠称揚の本眷属上行等の四菩薩を寂光の大地の底よりはるばると召し出して付属し給う、道遍律師云く法是れ久成の法なるに由る故に久成の人に付す」等云云、問て云く其の所属の法門仏の滅後に於ては何れの時に弘通し給う可きか、答て云く經の第七葉王品に云く「後五百歲の中に閻浮提に広宣流布して断絶せしむること無けん」等云云、謹んで經文を拜見し奉るに仏の滅後正像二千年過ぎて第五の五百歲・闍靜堅固・白法隱没の時云云、問て云く夫れ諸仏の慈悲は天月の如し機縁の水澄めば利生の影を普く万機の水に移し給べき処に正像末の三時の中に末法に限ると

と説き給わば教主釈尊の慈悲に於て偏頗あるに似たり如何、答う諸仏
の和光・利物の月影は九法界の闇を照すと雖も謗法一闡提の濁水
には影を移さず正法一千年の機の前には唯小乘・權大乘相叶へり、
像法一千年には法華經の迹門・機感相応せり、末法の始の五百年には
法華經の本門前後十三品を置きて只寿量品の一品を弘通すべき時な
り機法相応せり。

今・此の本門ほんもんじゅうりょう・寿量じゅうりょうの一品は像法ざうぼうの後の五百歳ごのひゃくさい・機き尚なほ堪たえず況いはや始め

の五百年ごひゃくねんをや、何いかに況いはや正法しょうぼうの機きは迹門しやくもん尚なほ日浅ひせんし増まして本門ほんもんをや、

末法まつぼうに入いて爾前にぜん・迹門しやくもんは全しゆく出離生死しゆつりしじうじの法はうにあらず、但專もつぱら本門ほんもん

寿量じゅうりょうの一品に限りて出離生死しゆつりしじうじの要法ようほうなり、是これを以て思おもうに諸仏しよぶつの化導けどう

に於おいて全へんげく偏頗へんげ無なし等云云、問とう仏ぶつの滅後めつご正像末しじやうまつの三時さんじに於おいて本化ほんげ・

迹化しやつけの各各ふぞくの付属ふぞく分明ふんみんなり但寿量じゅうりょうの一品に限りて末法濁惡まつぼうじよくあくの衆生しゆじやうの

為ななりといへる經文きやうもん未いまだ分明ふんみんならず髓たしかに經げんの現文げんぶんを聞きかんと欲ほす

如何いかん、答こたう汝強なんじあながちに之これを問とう聞きて後堅ごけんく信しんを取とる可べきなり、所謂いわゆる

寿量品じゅうりょうほんに云いく是この好き良藥りやうやくを今留とどめて此こに在おく汝取なんじて服ふくす可べし

差いえと憂うれうる勿なれ」等云云。

問とて云いく寿量品じゅうりょうほん專もつぱら末法惡世まつぼうあくせに限きる經文きやうもんけんねん顯然けんねんなる上うへは私ひそかに難勢なんぜい

を加くう可べからず然しかりと雖いえども三大秘法ひはうそ其そのの体たい如何いかん、答こたて云いく予こしんが己心こしんの

大事之に如かず汝が志無二なれば少し之を云わん寿命品に建立する所の本尊は五百塵点の当初より以来此土有縁深厚本有無作三身の教主釈尊是れなり、寿命品に云く如来秘密神通之力」等云云、疏の九に云く「一身即三身なるを名けて秘と為し三身即一身なるを名けて密と為す又昔より説かざる所を名けて秘と為し唯仏のみ自ら知るを名けて密と為す仏三世に於て等しく三身有り諸經の中に於て之を秘して伝えず」等云云、

題目とは二の意有り所謂正像と末法となり、正法には天親菩薩、竜樹菩薩・題目を唱えさせ給いしかども自行ばかりにしてさて止ぬ、像法には南岳・天台等亦南無妙法蓮華經と唱え給いて自行の爲にして広く他の爲に説かず是れ理行の題目なり、末法に入て今日連が唱る所の題目は前代に異り自行化他に亘りて南無妙法蓮華經なり名体宗用

教ごじゅうげんの五重玄ごじの五字ごじなり、戒壇かいだんとは王法ぶつぽう佛法ぶつぽうに冥みよじ佛法ぶつぽう王法ぶつぽうに合あして
王臣おうしん一同いっどうに本門ほんもんの三秘密ひみつの法たもを持ちもちて有徳王うとく・覺徳比丘かくとくびくの其その乃む往かしを
末法まっぽう濁惡じよくあくの未來みらいに移うつさん時勅宣ちよくせん並なに御教書みきようしょを申もうし下くだして靈山淨土りやうぜんじようどに
似さいたらん最勝さいしやうの地ちを尋たずねて戒壇かいだんを建立こんりゅうす可べき者か時を待まちつ可べきのみ
事の戒法かいほうと申もうすは是これなり、三国並えんぶだいに一閻浮提えんぶだいの人・懺悔滅罪ざんげめつざいの戒法かいほうの
みならず大梵天王だいほんてんのう・帝釈等たいしやくも来下らいげして☆給ふみたまうべき戒壇かいだんなり、此このの戒法かいほう
立ちて後・延曆寺えんりやくじの戒壇かいだんは迹門しやくもんの理戒しなれ

ば益あるまじき処ところに、叡山えいざんに座主ざす始まつて第三・第四の慈覺・智証存の外ほんしに本師・伝教・義真ぎしんに背そむきて理同事勝りどうじしょうの狂言を本として我が山の戒法かいほうをあなづり戯論けろんとわらいし故ゆえに、存の外えんりやくじに延暦寺の戒・清淨しょうじょう無染なげの中道ちゅうどうの妙戒みょうかいなりしが徒いたずらに土泥どどとなりぬる事云うても余りあり歎きても何かはせん、彼の摩黎山まりやの瓦礫がりがくの土となり梅檀林せんだの荊棘いばらとなるにも過ぎたるなるべし、夫れそ一代いちだい聖教しやうきやうの邪正偏円じやせいへんえんを弁わきまえたらん学者がくしやの人をして今の延暦寺えんりやくじの戒壇かいだんを☆ましむべきや、此の法門ほうもんは義理ぎりを案じて義をつまびらかにせよ、此の三大秘法ひほうは二千余年の当初・地涌千界じゆせんがいの上首じやうしゆとして日蓮にちれん慥たしかかに教主大覚世尊きやうしゆだいかくせそんより口決相承くけつそうじやうせしなり、今日蓮いまにちれんが所行しよぎやうは靈鷲山りやうじゆせんの稟承ぼんじやうに芥爾計りけにばかの相違そういなき色も替かわらぬ寿量品じゆりやうぼんの事の三大事だいじなり。

問う一念三千いちねんさんぜんの正しき証文しやうもん如何いかん、答う次に出し申す可べし此ここに於おいて

二種有り、方便品に云く、諸法実相・所謂諸法・如是相・乃至・欲令衆生開仏知見」等云云、底下の凡夫・理性所具の一念三千か、寿量品に云く、然我実成仏已来・無量無辺」等云云、大覺世尊・久遠実成のそのかみしょうとく いちねんさんぜん 当初証得の一念三千なり、今日蓮が時に感じて此の法門広宣流布するなり予年来己心に秘すと雖も此の法門を書き付て留め置ずんば門家の遺弟等定めて無慈悲の讒言を加う可し、其の後は何と悔ゆとも叶うまじきと存ずる間・貴辺に對し書き送り候、一見の後・秘して他見有る可からず口外も詮無し、法華經を諸仏出世の一大事と説かせ給いて候は此の三大秘法を含めたる經にて渡らせ給えばなり、秘す可し秘す可し。

弘安四年卯月八日 日蓮花押

◆一六〇

曾谷入道殿御書

文永十一年 五十三歳

御作 於身延

1024p

自界叛逆難・他方侵逼の難既に合い候い畢んぬ、之を以て思うに多
 く他方の怨賊有つて国内を侵掠し人民諸の苦悩を受け土地に所樂の
 処有ること無けん」と申す經文合い候いぬと覚え候、当時壹岐・對馬
 の土民の如くになり候はんずるなり、是れ偏に仏法の邪見なるによる
 仏法の邪見と申すは真言宗と法華宗との違目なり、禪宗と念仏宗と
 を責め候しは此の事を申し顯さん料なり漢土には善無畏・金剛智・
 不空三蔵の誑惑の心・天台法華宗を真言の大日經に盗み入れて還つて
 法華經の肝心と天台大師の徳とを隠せし故に漢土滅するなり、日本国

は慈覚大師が^{じかくだいし}大日経^{だいにちぎよう}・金剛頂経^{こんごうちようぎよう}・蘇悉地経^{そしつちぎよう}を鎮護国家^{ちんごこくか}の三部と取つて^{でんぎようだいし}伝教大師の鎮護国家^{ちんごこくか}を破せしより^{えいざん}叡山に惡義^{あくぎ}・出来して終に王法^{おうはうだいし}尽きにき、此の惡義^{あくぎ}・鎌倉に下つて又日本国を亡すべし弘法大師の邪義^{じやぎ}は中^{なかな}中^な顯然なれば人もたばらかされぬ者もあり、慈覚大師の法華経^{ほけきよう}・大日経の理同事勝^{りどうじしょう}の積は智人既に許しぬ愚者争でか信ぜざるべき慈覚^{じかく}大師は法華経と大日経との勝劣^{しょうれつ}を祈請せしに箭^やを以て日を射ると見しは此の事なるべし、是れは慈覚大師の心中^{しんちゆう}に修羅の入つて法華経^{ほけきよう}の大日輪^{だいにちりん}を射るにあらずや、此の法門^{ほうもん}は当世^{とうせい}叡山^{えいざん}其の外日本国^{にほんこく}の人用^{もち}べきや、若し此の事^も・実事^{じつじ}ならば日蓮^{にちれん}豈須^{あにしもせん}弥山^{みせん}を投る者にあらずや、我が弟子^{でし}は用^{もち}ゆべきや如何^{いかん}最後^{さいご}なれば申すなり恨み給べからず、恐^{きよう}恐^{きよう}謹言^{きんげん}。

十一月二十日

日蓮花押^{にちれんかおう}

曾谷入道殿

◆一六一

曾谷入道殿御返事

025p

方便品ほうべんの長行書進せ候先に進せ候し自我偈じがげに相副て讀みたまうべし、此の經の文字もんじは皆悉く生身妙覺みなことごとしやうしんみやうかくの御仏みほとけなり然れども我等われらは肉眼にくげんなれば文字もんじと見るなり、例せば餓鬼がきは恒河ごうがを火と見る人は水と見る天人てんにんは甘露かんろと見る水は一なれども果報かほうに随したがつて別別なり、此の經の文字もんじは盲眼めくらめの者は之これを見ず、肉眼にくげんの者は文字もんじと見る二乗にじやうは虚空こくうと見る菩薩ぼさつは無量むりやうの法門ほうもんと見る、仏は一一の文字もんじを金色しやくそんの釈尊しゃくそんと御覽あるべきなり即持仏身ぶつしんとは是これなり、されども僻見びやっけんの行者ぎやうじやは加様に目出度たく渡わたらせ給たまうを破はし奉たてまつるなり、唯相構ただかまえて相構かまえて異念いっしん無く一心いっしんに

靈山淨土を期せらるべし、心の師とはなるとも心を師とせざれとは
ろくはらみつきよう
六波羅蜜經の文ぞかし、委細は見參の時を期し候、恐恐謹言。

文永十二年三月 日 蓮花押

曾谷入道殿

◆一六二

曾谷入道殿許御書

文永十二年三月 五

十四歳御作与曾谷入道

太田金吾

1026p

夫れ以れば重病を療治するには良薬を構築し逆謗を救助するに
は要法には如かず、所謂時を論ずれば正像末教を論ずれば小大・偏円
・権実・顯密・国を論ずれば中辺の両国・機を論ずれば已逆と未逆と
已謗と未謗と師を論ずれば凡師と聖師と二乗と菩薩と他方と此土と
迹化と本化となり、故に四依の菩薩等滅後に出現し仏の付属に随つて
妄りに經法を演説したまわず、所詮無智の者未だ大法を謗ぜざるに
は忽ちに大法を与えず惡人爲る上已に実大
を謗ずる者には強て之を説く可し、法華經第二の卷に仏・舍利弗に對

して云く「無智の人の中にして此の經を説くこと莫れ」又第四の卷に
藥王菩薩等の八万の居士に告げたまわく「此の經は是れ諸仏秘要の藏
なり分布して妄りに人に授与す可からず」云云、文の心は無智の者の
而も未だ正法を謗ぜざるには左右無く此の經を説くこと莫れ、
法華經第七の卷不輕品に云く「乃至遠く四衆を見ても亦復故に
往いて」等云云、又云く「四衆の中に瞋恚を生じ心不淨なる者有り惡口
罵詈して言く是の無智の比丘何れの所従り来りてか」等云云、又云く
「或は杖木瓦石を以て之を打擲す」等云云、第二第四の卷の經文
と第七の卷の經文と天地水火せり。
問うて曰く「一經二說何れの義に就いて此の經を弘通すべき、答えて
云く私に會通すべからず靈山の聽衆爲る天台大師並びに妙樂大師
等処処に多くの釈有り先ず一兩の文を出さん、文句の十に云く問う

て曰く釈迦は出世して脚☆して説かず今は此れ何の意ぞ造次にして説

くは何ぞや答えて曰く本已に善有るには釈迦小を以て之を將護

し本未だ善有らざるには不輕・大を以て之を強毒す」等云云、釈の心は

寂滅・鹿野・大宝・白鷺等の前四味の小大・權実の諸經四教八教の

所被の機縁・彼等が過去を尋ね見れば久遠大通の時に於て純円の種を

下せしかども諸衆

一乗經を謗ぜしかば三五の塵点を經歷す然りと雖も下せし所の下種
・純熟の故に時至つて自ら繫珠を顯す但四十余年の間過去に已に
結縁の者も猶謗の義有る可きの故に且らく權小の諸經を演説して
根機を練らしむ。

問うて曰く華嚴の時・別円の大菩薩乃至觀經等の諸の凡夫の得道は
如何、答えて曰く彼等の衆は時を以て之を論ずれば其の經の得道に似
たれども実を以て之を勘うるに三五下種の輩なり、問うて曰く其の
証拠如何、答えて曰く法華經第五の卷涌出品に云く是の諸の衆生は
世世より已來常に我が化を受く乃至此の諸の衆生は始め我が身を見。
我が所説を聞いて即ち皆信受して如来の慧に入りనికి」等云云、天台
釈して云く「衆生久遠」等云云、妙樂大師の云く「脱は現に在りと
雖も具に本種を騰ぐ」又云く故に知んぬ今日の逗会は昔成熟するの

機きに赴おもむく」等云云、

經きやうしやく釈けんねん 顯然の上は私の料簡りやうけんを待たず例せば王女と下女と天子てんしの種子しゆしを下さざれば国主こくしゆと為ならざるが如ごとし。

問いわうて曰だく大日經等だいにちきやうの得道とくどうの者は如何いかん、答えて曰いわく種種しゆじゆの異義いぎ有りと雖いえども繁しげきが故ゆえに之これを載のせず但ただし所詮しよせん彼れ彼れの經經きやうぎやうに種熟脱しゆじゆくだつを説しかざれば還かえつて灰斷けだんに同じ化しじゆうに始終無しきの經なり、而しかるに真言師等しんごんしの所談しよだんの即身成仏そくしんじやうぶつは譬たとえば窮人きゆうにんの妄みだりに帝王ていおうと号なづして自ら誅滅ちゆうめつを取るが如ごとし王莽おうもう・趙高ちやうこうの輩外やからに求む可べからず今の真言家しんごんなり、此等これらに因よつて論ぜば仏の滅後めつごに於おいて三時さんじ有あり、正像しやうざう二千余年には猶下種なおげしゆの者有あり例せば在世ざいせ四十余年よんじゅうよねんの如ごとし根機こんきを知らずんば左右さう無なくく実經じつぎやうを与べう可べからず、今は既すでに末法まつぽうに入いつて在世ざいせの結縁けちえんの者は漸漸ぜんぜんに衰微すいびして權実ごんじつの二機き皆悉みなことごとく尽つきぬ彼の不輕菩薩ふきやうばさつ末世ふきやうばさつに出現しゆつげんして毒鼓どくこを撃たし

むるの時なり、而るに今時の学者時機に迷惑して、或は小乗を
弘通し、或は權大乘を授与し、或は一乗を演説すれども題目の五字を
以て下種と為す可きの由来を知らざるか、殊に真言宗の学者迷惑を
懷いて三部經に依憑し単に會二破二の義を宣ぶ猶三一相對を説かず
即身頓悟の遺跡を削り草木成仏は名をも聞かざるのみ、而るに善無畏
・金剛智・不空等の僧侶・月氏より漢土に來臨せし時本国に於て未だ存
せざる天台の大法盛に此の國に流布せしむるの間・自愛所持の經弘め
難きに依り一行阿闍梨を語い得て天台

の智慧ちえを盗み取り大日經だいにちきよう等に摂入しやうにゆうして天竺てんじくより有るの由これ之を偽いつわる、然しかるに震旦しんたん一國の王臣おうしん等並びに日本國にほんこくの弘法こうぼう・慈覺じかくの兩大師だいいし之を弁わえきままずして信を加う已下いかの諸學しよは言うに足らず、但漢土かんど・日本にほんの中に伝教でんぎよう大師だいいし一人之を推おしたまえり、然れども未だ分明ふんみんならず所詮しよせん善無畏ぜんむい三藏さんざう・閻魔王えんまおうの責を蒙りて此の過罪かざいを悔くい不空三藏ふくうさんざうの還かえつて天竺てんじくに渡わたつて真言しんごんを捨てて漢土かんどに來臨らいりんし天台てんだいの戒壇かいだんを建立こんりゆうして兩界の中央の本尊ほんぞんに法華經ほけきようを置きし是これなり。

問いうて曰いく今時の真言宗しんごんしゆうの學者等何ぞ此の義を存せざるや、答こえて曰いく眉は近けれども見えず自の禍を知らずとは是この謂いか、嘉祥大師かじやうだいいしは三論宗さんろんしゆうを捨てて天台てんだいの弟子でしと為なる今の末學等まつがく之を知らず、法藏ほうざう・澄觀ちやうくわん・華嚴宗けわんしゆうを置いて智者ちしやに歸す彼の宗の學者之を存せず、玄奘げんじやう・三藏さんざう・慈恩大師じおんだいいしは五性の邪義じやぎを廢して一乘いちじやうの法に移る法相ほつさうの學者堅く之を

あらせ
浄う。

問うて曰く其の証如何、答えて曰く・或は心を移して身を移さず・或は身を移して心を移さず・或は身心共に移し・或は身心共に移さず其の証文は別紙に之を出す可し此の消息の詮に非ざれば之を出すず、仏滅後に三時有り、所謂正法一千年・前の五百年には迦葉・阿難・商那和修・末田地・脇比丘等一向に小乗の業を以て衆生の輕病を対治す

四阿含經・十誦・八十誦等の諸律と相統解脫經等の三藏を弘通して後には律宗・俱舍宗・成実宗と号する是なり、後の五百年には馬鳴菩薩・竜樹菩薩・提婆菩薩・無著菩薩・天親菩薩等の諸の大論師初には諸の小聖の弘めし所の小乗經之を通達し後には一一に彼の義を破失し了つて諸の大乗經を弘通す是れ又中業を以て衆生の中病を対治す

所謂いわゆる華嚴經・般若經・大日經・深密經等・三輪宗・法相宗・真言しんごん陀羅尼・禪法等なり。

問うて曰く迦葉・阿難等の諸の小聖何ぞ大乘經を弘めざるや、答えて曰く一には自身堪えざるが故に二には所被の機無きが故に三には仏より譲り与えられざるが故に四には時来らざるが故なり、問うて曰く竜樹・天親等何ぞ一乘經を弘めざるや、答えて曰く四つの義有り先の如し、問うて曰く諸の真言師の云く仏の滅後八百年に相

當つて 竜猛菩薩・月氏に出現して釈尊の顯經たる華嚴・法華等を
馬鳴菩薩等に相伝し大日の密經をば自ら南天の鉄塔を開拓し面り
大日如来と金剛薩☆とに對して之を口決す、竜猛菩薩に二人の弟子
有り提婆菩薩には釈迦の顯教を伝え竜智菩薩には大日の密教を授く
竜智菩薩は阿羅苑に隱居して人に伝えず其の間に提婆菩薩の伝うる所
の顯教は先づ漢土に渡る其の後數年を経歴して竜智菩薩の伝うる所
の秘密の教を善無畏・金剛智・不空漢土に渡す」等云云此の義如何、答
えて曰く一切の真言師是くの如し又天台・華嚴等の諸家も一同に之を
信ず、抑 竜猛已前には月氏国の中には大日の三部經無しと云うか
釈迦よりの外に大日如来世に出現して三部の經を説くと云うか、顯
を提婆に伝え密を竜智に授くる証文何れの經論に出でたるぞ、此の大
妄語は提婆の欺誑罪にも過ぎ瞿伽利の誑言にも超ゆ漢土・日本の王位

の尽き兩朝の僧侶の謗法と為るの由来専ら斯れに在らずや、然れば
則ち彼の震旦既に北蕃の為に破られ此の日域も亦西戎の為に侵されん
と欲す此等は且らく之を置く。

像法に入つて一千年・月氏の仏法・漢土に渡来するの間・前四百年に
は南北の諸師・異義蘭菊にして東西の仏法未だ定まらず、四百年の後・
五百年の前其の中間一百年の間に南岳・天台等漢土に出現して粗
法華の実義を弘宣したまう然而円慧・円定に於ては国師たりと雖も
円頓の戒場未だ之を建立せず故に国を挙つて戒師と仰がず、六百年の
已後法相宗・西天より来れり太宗皇帝之を用ゆる故に天台法華宗に
帰依するの人漸く薄し、茲に就いて隙を得て則天皇后の御宇に先に破
られし華嚴亦起つて天台宗に勝れたるの由之を称す、太宗より第八代
・玄宗皇帝の御宇に真言始めて月氏より来れり所謂開元四年には

善無畏三藏の大日經・蘇悉地經・開元八年には金剛智・不空の両三藏の金剛頂經此くの如く三經を天竺より漢土に持ち來り、天台の釈を見聞して智發して釈を作つて大日經と法華經とを一經と爲し其の上印・真言を加えて密教と号し之に勝るの由、結句權教を以て實教を下す漢土の學者・此の事を知らず。

像法の末・八百年に相当つて伝教大師・和国に託生して華嚴宗等の
六宗の邪義を糾明するのみに非ずしかのみならず南岳・天台も未だ弘
めたまわざる円頓戒壇を叡山に建立す、日本一州の学者一人も残ら
ず大師の門弟と為る、但天台と真言との勝劣に於ては誑惑と知つて
而も分明ならず、所詮末法に贈りたもうか此等は傍論為るの故に且ら
く之を置く、吾が師・伝教大師三国に未だ弘まらざるの円頓の大戒壇
を叡山に建立したもう此れ偏に上薬を持ち用いて衆生の重病を治せ
んと為る是なり。

今末法に入つて二百二十余年五濁強盛にして三災頻りに起り衆見
の二濁国中に充滿し逆謗の二輩四海に散在す、専ら一闡提の輩を
仰いで棟梁と侍怙謗法の者を尊重して国師と為す、孔丘の孝經之を
提げて父母の頭を打ち釈尊の法華經を口に誦しながら教主に違背す

不孝国ふこうこくは此こゝの国なり勝母さつぼの間他境たがいに求めじ、故ゆゑに青天・眼まなこを瞋いからして
此こゝの国を睨にらみ黄地わうちは憤いきどおりを含んで大地だいちを震ふるう、去る正嘉元年しょうかげねんの大地だいち
動・文永元年ぶんえいげねんの大彗星すいせい・此等これらの天災ようさいは仏滅後ぶつめつご
・二千二百二十余年の間・月氏がつし・漢土かんど・日本にほんの内に未だ出現いまだしゅつげんせざる所の
大難だいにんなり、彼の弗舍密多羅王ぼつしゃみつたらおうの五天じとうの寺塔じとうを焼失しょうしつし漢土かんどの会昌天子えいしやうてんし
の九国の僧尼そうにを還俗げんぞくせしめしに超過ちやうかすること百千倍ひゃくせんばいなり大謗法ほうぼうの輩やから
国中に充滿じゅうまんし一天いつてんに弥はるに依よつて起る所の天災ようさいなり、大般涅槃經だいはつねはんぎやうに
云いく末法まっぽうに入ふつて不孝謗法ふこうほうぼうの者大地微塵だいちみじんの如ごとし」意取、法滅尽經ほうめつじんきやうに
法滅尽めつじんの時は狗犬くけんの僧尼そうに・恒河沙こうがしやの如ごとし」等云云取、今親まのあたり此の国を
見聞けんもんするに人毎ひとごとに此の二の悪有これらり此等の大惡の輩やからは何なる秘術ひかくを以
て之これを扶救ふきうせん、大覺世尊だいかくせそん・佛眼ぶつげんを以もつつて末法まっぽうを鑒知かんちし此の逆・謗つみの二罪つみ
を対治たいじせしめんが為ために一大秘法ひほうを留め置きたもう、所謂いふゆる法華經本門ほけきやうほんもん

久成くじようの釈尊しゃくそん・宝浄世界ほうじようせかいの多宝仏たほうぶつ・高さ五百由旬ひゃくゆじゆん広さ二百五十由旬ゆじゆんの
大宝塔ほうとうの中に於おいて二仏座を並べしこと宛あたかも日月にちがつの如ごとく十方分身じゆつほうふんじんの諸仏しよぶつ
は高さ五百由旬ひゃくゆじゆんの宝樹の下に五由旬ゆじゆんの師子ししの座を並べ敷き衆星しゆうせいの如ごとく
列座れつざしたもう、四百万億那由佗なゆたの大地だいちに三仏二会じゅうまんに充滿じゅうまんしたもうの
儀式けいしきは華嚴寂けこんじやく場の華藏世界けぞうせかいにも勝すぐれ真言しんごん兩界りやうかいの千二百余尊よそんにも超こえ
たり一切世間いっさいせけんの眼まなこなり、此の大会たいえに於おいて六難九易なんくういを挙あげ

て法華經を流通せんと諸の大菩薩に諫曉せしむ、金色世界の文殊師利
・兜史多宮の弥勒菩薩・宝淨世界の智積菩薩・補陀落山の觀世音菩薩
等・頭陀第一の大迦葉・智慧第一の舍利弗等・三千世界を統領する
無量の梵天・須弥の頂に居住する無辺の帝釈・四天下を照耀せる
阿僧祇の日月・十方の佛法を護持する恒沙の四天王・大地微塵の諸の
竜王等我にも我にも此の經を付囑せられよと競い望みしかども世尊
都て之を許したまわず、爾の時に下方の大地

より未見今見の四大菩薩を召し出したもう、所謂上行菩薩・無辺行
菩薩・淨行菩薩・安立行菩薩なり、此の大菩薩各各六万恒河沙の
眷属を具足す形・貌威儀言を以て宣べ難く心を以て量るべからず、
初成道の法慧・功德林・金剛幢・金剛藏等の四菩薩各各十恒河沙の
眷属を具足し仏会を莊嚴せしも大集經の欲・色二界の中間大宝坊に

於て来臨せし十方の諸大菩薩乃至大日經の八葉の中の四大菩薩も
金剛頂經の三十七尊の中の十六大菩薩等も此の四大菩薩に比☆すれ
ば猶帝釈と猿猴と華山と妙高との如し、弥勒菩薩・衆の疑を挙げて
云く「乃一人をも識らず」等云云、

天台大師云く寂場より已降今座より已往十方の居士来会絶えず
限る可からずと雖も我れ補処の智力を以て悉く見・悉く知る而も此の
衆に於ては一人をも識らず」等云云、妙樂云く今見るに皆識らざる
所以は乃至智人は起を知り蛇は自ら蛇を識る」等云云、天台又云く
雨の猛きを見て竜の大なるを知り華の盛なるを見て池の深きを

知る」云云、例せば漢王の四将の張良・樊☆・陳平・周勃の四人を商山
の四皓・綺里柢・角里先生・東園公・夏黄公等の四賢に比するが如し
天地雲泥なり、四皓が為体頭には白雪を頂き額には四海の波を疊

み眉には半月を移し腰には多羅枝を張り恵帝の左右に侍して世を治め
られたる事・堯舜の古を移し一天安穩なりし事・神農の昔にも異なら
ず、此の四大菩薩も亦復是くの如し法華の会に出現し三仏を莊嚴し
謗人の慢幢を倒すこと大風の小樹の枝を吹くが如く衆会の敬心を
致すこと諸天の帝釈に従うが如く提婆が仏を打ちしも舌を出して
掌を合せ瞿伽梨が無実を構えしも地に臥して失を悔ゆ、文殊等の大
聖は身を慙ぢて言を出さず舍利弗等の小聖は智を失して頭を低る、

爾その時に大覺世尊・寿量品を演說し然して後に十神力を示現して四
大菩薩ぼさつに付屬ふぞくしたもう、其その所屬しよぞくの法は何物ぞや、法華經ほけきようの中にも広
を捨て略を取り略を捨てて要を取る所謂妙法蓮華經いわゆるみようほうれんげきようの五字・名・体・宗
・用・教こじゅうげんの五重玄なり、例せば九苞淵ほうえんが相馬そうばの法には玄黄げんこうを略して駿逸しゅんいつ
を取り史陶林しとうりんが講經の法には細料しやうりやうを捨て元意げんいを取るが如し等、此の四
大菩薩ぼさつは釈尊しやくそん成道の始、寂滅道場の砌みぎりにも来らず如来入滅の終り
に拔提河ばつだいの辺にも至らずしかのみならず靈山りやうぜん八年の間に進んでは
迹門序正の儀式に文殊・弥勒等の發起影向の諸聖衆しよしやうしゆうにも列ならず、
退しりぞいては本門流通ほんもんりゅうつうの
座席ざせきに觀音・妙音等の發誓弘經の諸大士しよだいにも交わらず、但此の一大
秘法ひほうを持して本処ほんしよに隱居いんきよするの後・仏の滅後正像二千年の間に於て
未だ一度も出現いまだせず、所詮・仏専ら末法の時に限つて此等の大士に

付属せし故なり、法華經の分別功德品に云く、惡世末法の時能く是の經を持つ者」云云、涅槃經に云く、譬えば七子の父母平等ならざるに非ず然も病者に於て心則ち偏に重きが如し」云云、法華經の藥王品に云く、此の經は則ち為れ閻浮提の人の病の良藥なり」云云、七子の中に上の六子は且らく之を置く第七の病子は一闍提の人・五逆謗法の者・末代惡世の日本

國の一切衆生なり、正法一千年の前五百年には一切の聲聞涅槃し了んぬ、後の五百年には他方來の菩薩・大體本土に還り向い了んぬ、像法に入つての一千年には文殊・觀音・藥王・弥勒等・南岳・天台と誕生し傳大士・行基・伝教等と示現して衆生を利益す。

今末法に入つて此等の諸大士も皆本処に隱居しぬ、其の外・閻浮守護の天神・地祇も・或は他方に去り・或は此の土に住すれども惡國を

守護しゅごせず・或あるは法味ほうみを嘗なめざれば守護しゅごの力無し、例せば法身ほっしんの大士だいしに
非あらざれば三惡道さんあくどうに入いられざるが如ごとし大苦忍しのび難がたきが故ゆゑなり、而しかるに
地涌千界じゆせんがいの大菩薩だいぼさつ・一ひとには娑婆世界しやばせかいに住すること多塵劫たじんこうなり二ふたには
釈尊しやくそんに随したがつて久遠くおんより已來このかた初發心しよほつしんの弟子でしなり三さんには娑婆世界しやばせかいの衆生しゆじやう
の最初下種さいしよげしゅの菩薩ぼさつなり、是かくくの如ごとき等の宿緣しゆくえんの方便ほうべん・諸大菩薩しよだいぼさつに超過ちやうか
せり。

問うて曰く其の証拠如何、法華第五涌出品に云く爾の時に他方の
国土より諸の来れる菩薩摩訶薩の八恒河沙の数に過ぎたる乃至爾の時
に仏諸の菩薩摩訶薩衆に告げたまわく止みね善男子汝等が此の經を
護持せんことを須いじ」等云云、天台云く他方は此の土結縁の事浅し
宣授せんと欲すと雖も必ず巨益無し」云云、妙樂云く岡
偏に他方の菩薩に付せず豈独り身子のみならんや」云云、又云く吾
八万大士とは乃至今の下の文に下方を召すが如く尚本眷属を待つ驗
し余は未だ堪えざることを」云云、經釈の心は迦葉舍利弗等の一切の
声聞・文殊・藥王・觀音・弥勒等の迹化・他方の諸大士は末世の弘經に
堪えずと云うなり、經に云く我が娑婆世界に自ら六万恒河沙等の
菩薩摩訶薩有り一一の菩薩に各六万恒河沙の眷属有り是の諸人等
能く我が滅後に於て護持し誦誦し広く

此の經を説かん、仏是を説きたもう時・娑婆世界の三千大千の国土・地
皆震裂して其の中より無量千万億の菩薩摩訶薩有り同時に涌出せり、
乃至是の菩薩衆の中に四たり導師有り一をば上行と名け二をば
無辺行と名け三をば淨行と名け四をば安立行と名く其の衆の中に
於て最も爲上首唱導の師なり」等云云、天台云く是れ我が弟子底に
我が法を弘むべし」云云、妙樂云く子父の法を弘む」云云道暹云く
付属とは此の經は唯下方涌出の菩薩

に付す何が故に爾る法是れ久成の法なるに由るが故に久成の人に付
す」等云云、此等の大菩薩末法の衆生を利益したもうこと猶魚の水に
練れ鳥の天に自在なるが如し、濁惡の衆生此の大地に遇つて仏種を殖
うることを例せば水精の月に向つて水を生じ孔雀の雷の声を聞いて
懷妊するが如し、天台云く猶百川の海に潮すべきが如し縁に牽れて応

生するも亦復是くの如し」云云。

慧日大聖尊仏眼を以て兼ねて之を鑒みたもう故に諸の大聖を捨棄

し此の四聖を召し出して要法を伝え末法の弘通を定むるなり、問うて

曰く要法の經文如何、答えて曰く口伝を以て之を伝えん釈尊然後

正像二千年の衆生の為に宝塔より出でて虚空に住立し右の手を以て

文殊・觀音・梵帝・日月・四天等の頂を摩でて是くの如く三反して

法華經ほけきょうの要よりの外ほかの広略こうりやく二門にもん並びに前後ぜんごの一代いちだいの一切いっさい經きょうを此等これらの大士ふぞくに付屬ふぞくす正像しょうざう二千年にせんねんの機きの爲ためなり、其その後のち涅槃ねはん經きょうの会かいに至いたつて重かさねて法華經ほけきょう並びに前四味ぜんしみの諸經しよきょうを説しよいて文殊もんじゆ等の諸大菩薩しよだいぼさつに授与じゆよしたもう、此等これらは☆拾くんじゅうの遺屬いしよくなり。

爰ここをを以もつこて滅後めつごの弘經くきょうに於おいても仏しよぞくの所屬しよぞくに随したがつて弘法こうぼうの限り有り然しかれば則すなわち迦葉かしよう・阿難あなん等らは一向いっこうに小乘經しようじようきょうを弘通くつうして大乘經だいじようきょうを申のべず、竜樹りゅうじゆ・無著むぢやく等らは權大乘經こんだいじようきょうを申のべて一乘經いちじようきょうを弘通くつうせず、設たとひ之これを申のべしかども纔わずかかに以もつこて之これを指示しし、或あるは迹門しやくもんの一分いちぶんのみ之これを宣のべべて全ぜんく化道しじゆうの始終しじゆうを談だんぜず、南岳なんがく・天台てんだい等らは觀音かんのん・葉王やくおう等の化身けしんと爲なつて小大・權實こんじつ・迹本てんぽん二門にもん・化道しじゆうの始終しじゆう・師弟していの遠近おんこん等ら悉ことごとく之これを宣のべべ其その上に已今当いこんとうの三説さんせつを立てて一代超過いちだいちやうかの由よしを判はぜること天竺てんじくの諸論しよろんにも勝すぐれ真丹しんたんの衆しゆうしやく衆しやくにも過すぎたり旧訳くやく・新訳しんやくの三藏さんざうも宛あたかも此このの師しには及およば

ず、顯密二道の元祖も敵対に非ず、然りと雖も広略を以て本と為して
未だ肝要に能わす、自身之を存すと雖も敢て他伝に及ばず、此れ偏に
付属を重んぜしが故なり、伝教大師は仏の滅後・一千八百年・像法の
末に相当つて日本国に生れて小乗・大乘・一乗の諸戒一一に之を
分別し、梵網・瓔珞の別受戒を以て小乗の二百五十戒を破失し又
法華・普賢の円頓の大王の戒を以て諸大乘經の臣民の戒を責め下す、
此の大戒は靈山八年を除いて一闍浮提の内に未だ有らざる所の大戒場
を叡山に建立す、然る間八宗共に偏執を倒し一国を挙げて弟子と
為る、觀勒の流の三論・成実道昭の渡せる法相・俱舍・
良弁の伝うる所の華嚴宗・鑒真和尚の渡す所の律宗・弘法大師の門弟
等誰か円頓の大戒を持たざらん此の義に違背するは逆路の人なり、此
の戒を信仰するは伝教大師の門徒なり日本一州・円機純一・朝野遠近

・同歸いっじよう一乘いちじやうとは是この謂いか、此この外ほかは漢土かんどの三論宗さんろんしゅうの吉藏大師きちざうだいし並びに一
百余人ひやくにじふに・法相宗ほうそうしゅうの慈恩大師じおんだいし・華嚴宗けこんしゅうの法藏ほうざう・澄觀ちやうかん・真言宗しんこんしゅうの善無畏ぜんむい・
金剛智こんこうち・不空ふくう・慧果けいか日本の弘法こうぼう・慈覺等じかくの三藏さんざうの諸師しよしは四依しえの大士だいしに
非あらざる暗師ぐにんなり愚人ぐにんなり、經きやうに於おいては大小だいしやう・權實こんじつの旨むねを弁わえず顯あき・密
両道りやうだうの趣しゆを知らず論ろんに於おいては通申つうしんと別申べつしんとを糾たださず申まをと不申ふしんとを
曉あきらめず、然しかりと雖いえども彼の

宗宗の末学等・此の諸師を崇敬して之を聖人と号し之を国師と尊ぶ今
先ず一を挙げんに万を察せよ。

弘法大師の十住心論・秘藏宝鑰・二教論等に云く此くの如き

じようじようじじよう

乗乗 自乗に名を得れども後に望めば戲論と作る」又云く「無明の

辺域」又云く震旦の法師等諍つて醍醐を盗み各自宗に名く」等云云、

しやく 釈の心は法華の大法を華嚴と大日経とに對して・戲論の法と蔑り無明

の辺域と下し・剩え震旦一国の諸師を盗人と罵る、此れ等の謗法

・謗人は慈恩得一の三乘真実・一乘方便の誑言にも超過し善導・法然

が千中無一・捨閉閣抛の過言にも雲泥せるなり、六波羅蜜経をば唐の

末に不空三蔵・月氏より之を渡す後漢より唐の始めに至るまで未だ此

の経有らず南三北七の碩徳未だ此の経を見ず三論・天台・法相・華嚴の

人師誰人か彼の経の醍醐を盗まんや、又彼の経の中に法華経は醍醐に

にんしだれびと

非あらずというの文これあ之有いりや不なや、而しかるに日本にほんこく国の東寺とうじの門人もんじん等堅これく之を信しゆじゆじて種種びやうげんに僻見びくけんを起し非より非を増し・暗より暗に入る不便ふびんの次第しだいなり。

彼の門家もんかの伝法院でんぼういんの本願ほんがんたる正覺しやうかくの舍利講式しかりきやうしきに云く、尊高そんかうなる者は

不二摩訶衍ふにかえんの仏・驢牛ろごの三身さんじんは車を扶たすくること能あたわず秘奥あつわなる者は両部

曼陀羅まんだらの教・顯乘けんじやうの四法の人は履くつをも取るに能たえず「云云、三論・天台

・法相ほつそしやう・華嚴等けこんの元祖等がんそを真言しんごんの師しに相對そうたいするに牛飼およにも及およばず力者

にも足らずと書ける筆なり、乞もとい願もとわくは彼の門徒等もんたとう心在しんざいらん人は

之これを案あんぜよ大惡口あつぐに非あらずや大謗法ほうぼうに非あらずや、所詮しよせん此等これらの誑言かうげんは弘法

大師だいしの望後ぼうご作戲論さくぎろんの惡口あつぐより起おこるか、教主きやうしゆしやくそん・多寶たぼう・十方じゆつぱうの諸しよ佛ぶつは

法華經ほけきやうを以もつて已今いこんとう當とうの諸說しよに相對そうたいして皆是かいぜしんじつ真實しやうじと定め然しかる後世尊ごしやうそんは

靈山りやうぜんに隱居いんきよし多寶諸佛たぼうしよぶつは各本土ほんどに還かえりたまひぬ、三佛さんぶつを除はくの外誰ほかだれか

之これを破失はしつせん。

就なかんずく中こうぼう弘法所覽しんこんの真言經の中に三説を悔くい還すの文これあ之有いりや不いなや、
弘法既こうぼうに之これを出いださず末学まつがくの智いかん如何しせん而かるに弘法大師一人のみ
法華經ほけきを華嚴けこん・大日だいにちの二經に相對そうたいして戲論けろん盜人ぬすびとと為なす所詮しよせん釈尊しやくそん・多宝たぼう
・十方じゆつぽうの諸仏しよぶつを以ぬすびとて盜人しやうと稱まつがくするか末学等眼を閉じて之これを案ぜよ。

問うて曰く昔より已来未だ曾て此くの如きの謗言を聞かず何ぞ上古
清代の貴僧に違背して寧ろ当今濁世の愚侶を帰仰せんや、答えて曰く
汝が言う所の如くば愚人は定んで理運なりと思わんか然れども此等
は皆人の偽言に因つて如来の金言を知らざるなり、大覺世尊・涅槃經に
滅後を警めて言く「善男子我が所説に於て若し疑を生ずる
者は尚受くべからず」云云、然るに仏尚我が所説なりと雖も不審有ら
ば之を叙用せざれとなり、今予を諸師に比べて謗難を加う、然りと
雖も敢て私曲を構えず専ら釈尊の遺誠に順つて諸人の謬釈を糾すも
のなり。

夫れ斉の始めより梁の末に至るまで二百余年の間・南北の碩徳・
光宅・智誕等の二百余人涅槃經の我等悉名邪見之人」の文を引いて
法華經を以て邪見之經と定め一國の僧尼並びに王臣等を迷惑せしむ、

陳隋ちんずいの比智者大師ちしやだいし之を糾明きうめいせし時始めて南北びやつけんの僻見へきけんを破り了んぬ、唐とう

の始めに太宗たいそうの御宇ぎように基法師きほふし・勝鬘經しょうまんの君如来にょらい隨彼所欲ほうべん而方便ほうべん

說・即是大乘そくぜだいじよう無有二乘にじよう」の文を引いて一乘方便いちじようほうべん・三乘真實さんじようしんじつの義を立つ

此の邪義じやぎ・震旦しんたんに流布るふするのみに非ず、日本にほんの得一てんいつが称徳天皇てんとうの御時おんとき

盛んに非義さんを談ず、爰こゝに伝教大師でんぎようだいし悉く彼の邪見じやけんを破はし了んぬ、

後鳥羽院ごとうはいんの御代ごんぐうに源空げんくう・法然觀無量壽經ほうねんかんむりようじゆきようの誦誦どくじゆだいじよう大乘いっくの一句を以て

法華經ほけきようを撰入しやうにゅうし還かえつて称名念仏しょうみょうねんぶつに対すれば雜行方便ざうぎようほうべんなれば捨閑しゃかん

閑かん拋ほうせよ」等云云。

然りと雖しかも五十余年いえどの間・南都なんと・北京ぎやうき・五畿しちどう・七道の諸寺しよ・諸山しよざんの

衆僧等しゆそう・此の惡義あくぎを破やぶること能あたはざりき予が難破なん分明ふんみやう為るの間・一国な

の諸人しよにん忽ち彼の選せん択集ちやくしゆを捨て了んぬ根露ねあらわるれば枝枯かれ源乾みなもとけば

流竭ながれつくとは蓋けだし此の謂いなるか、加之しかのみならずならず唐とうの半玄宗皇帝げんそうこうていの御代ごんぐうに

善無畏・不空等大日經の住心品の如実一道心の一句に於て法華經を
摂入し返つて權經と下す、日本の弘法大師は六波羅蜜經の五藏の中
に第四の熟蘇味の般若波羅蜜藏に於て法華經・涅槃經等を摂入し第
五の陀羅尼藏に相對して争つて醍醐を盜む等云云、此等の禍咎は日本
一州の内・四百余年・今に未だ之を糾明せし人あらず予が所存の難勢
☆く一国に満つ必ず彼の邪義を破られんか此等は且らく之を止む。

迦葉・阿難等・竜樹・天親等・天台・伝教等の諸大聖人知つて而も
未だ弘宣せざる所の肝要の秘法は法華經の文赫赫たり論釈等に載せ
ざることを明明なり生知は自ら知るべし賢人は明師に値遇して之を信ぜ
よ罪根深重の輩は邪推を以て人を輕しめ之を信ぜず且く耳に停め
本意に付かば之を喻さん、大集經の五十一に大覺世尊・月藏菩薩に
語つて云く「我が滅後に於て五百年の中は解脱堅固・次の五百年は
禪定堅固、一千年次の五百年は読誦多聞堅固・次の五百年は多造塔寺
堅固二千年次の五百年は我が法の中に於て闍諍言訟して白法隱没せ
ん」等云云、今末法に入つて

二百二十余年・我法中闍諍言訟・白法隱没の時に相当れり、法華經
の第七葉王品に教主釈尊・多宝仏と共に宿王華菩薩に語つて云く「我
が滅度の後・後の五百歳の中に広宣流布して闍浮提に於て断絶して

悪魔・魔民諸の天竜・夜叉・鳩槃荼等に其の便を得せしむこと無けん」

大集經の文を以て之を案ずるに前四箇度の五百年は仏の記文の如

く既に符合せしめ了んぬ、第五の五百歳の一事豈唐捐ならん、随つて

当世の体為る大日本国と大蒙古国と闍諱合戦す第五の五百に相当れ

るか、彼の大集經の文を以て此の法華經の文を惟うに後・五百歳中

広宣流布・於閻浮提の鳳詔・豈扶桑国に非ずや、弥勒菩薩の瑜伽論に

云く東方に小国有り其の中に唯大乘の種姓のみ有り」云云、

慈氏菩薩・仏の滅後九百年に相当つて無著菩薩の請に赴いて中印度に

来下して瑜伽論を演説す、是れ・或は権機に随い・或は付属に順い・或

は時に依つて權經を弘通す、然りと雖も法華經の涌出品の時・地涌の

菩薩を見て近成を疑うの間・仏・請に赴いて寿量品を演説し分別

功德品に至つて地涌の菩薩を勧奨して云く・惡世末法の時能く是の經

を持たん者」と、弥勒菩薩自身の付属に非ざれば之を弘めずと雖も
親り靈山会上に於て惡世末法時の金言を聴聞せし故に瑜伽論を説く
の時末法に日本国に於て地涌の菩薩・法華經の肝心を流布せしむ可き
の由・兼ねて之を示すなり、肇公の翻經の記に云く 天師須梨耶蘇摩
左の手に法華經を持し右の手に鳩摩羅什の頂を摩で授与して云く仏
・日西に入つて遺耀將に東に及ばんとす此の經典東北に縁有り汝慎ん
で伝弘せよ」云云、予此の記の文を拜見して両眼滝の如く一身悦びを
あまね ☆くす、此の經典東北に縁有り」云云西天の月支国は未申の方、
東方の日本国は丑寅の方なり、天竺に於て東北に縁有りと豈日本国
に非ずや、遵式の筆に云く 始め西より伝う猶月の生ずるが如し今復
東より返る猶日の昇るが如し」云云、正像二千年には西より東に流る
暮月の西空より始まるが如し末法五百年には東より西に入る朝日の東

天より出ずるに似たり、根本大師の記に云く、代を語れば則ち像の終り末の初・地を

尋ぬれば唐の東・羯の西・人を原ぬれば則ち五濁の生・闍靜の時なり、

經に云く猶多怨嫉・況滅度後と此の言良に以有るが故に」云云、又

云く「正像稍過ぎ已つて末法太だ近きに有り法華一乘の機・今正しく

是れ其の時なり何を以て知る事を得ん安樂行品に云く末世法滅の時

なり」云云此の釈は語美しく心隠れたり、読まん人之を解し難き

か、伝教大師の語は我が時に似て心は末法を樂いたもうなり、大師

出現の時は仏の滅後・一千八百余年なり、大集經の文を以て之を勘う

るに大師存生の時は第四の多造塔寺堅固の時に相当る全く第五闍靜

堅固の時に非ず、而るに余処の釈に末法太有近の言は有り定めて知ん

ぬ闍靜堅固の筆は我が時を指すに非ざるなり。

つら

予情事の情を案ずるに大師薬王菩薩として靈山会上に侍して仏・

じようぎようばさつしゅつげん

上行菩薩出現の時を兼ねて之を記したもう故に粗之を喩すか、而るに

予地涌の一分に非ざれども兼ねて此の事を知る故に地涌の大士に

前立ちて粗五字を示す例せば西王母の先相には青鳥・客人の来るには

☆鵲の如し、此の大法を弘通せしむるの法には必ず一代の聖教を

安置し八宗の章疏を習学すべし然れば則ち予所持の聖教多多之有

り、然りと雖も両度の御勘気・衆度の大難の

時は・或は一卷・二巻散失し・或は一字・二字脱落し・或は魚魯の謬☆

・或は一部二部損朽す、若し黙止して一期を過ぐるの後には弟子等定

んで謬乱出来の基なり、爰を以つて愚身老耄已前に之を糾調せんと

欲す、而るに風聞の如くんば貴辺並びに大田金吾殿・越中の御所領の

内並びに近辺の寺寺に数多の聖教あり等云云、兩人共に大檀那為り

所願しよがんを成ぜしめたまえ、涅槃經ねはんぎように云く、内には智慧ちえの弟子でし有つて甚深じんじんの義ぎを解さとり外には清淨しやうじやうの檀越だんのつ有つて佛法ぶつぽう久住くじゅうせん」云云、天台大師てんだいだいしは毛喜等もうきを相語かたらい伝教大師でんぎやうだいしは国道弘世等くにみちひろよを侍怙じこむ云云。

仁王經にんのうきやうに云く、千里せんりの内をして七難ひちなん起らざらしむ」云云、法華經ほけきやうに

云く、百由旬ひやくゆじゆんの内に諸もろの衰患もうすいげん無からしむ」云云、国主正法こくしゆしやうぽうを弘通ぐつうすれ

ば必ず此の徳とくを備そなう臣民等しんみん・此の法しゆぽを守護しゆごせん、豈あに家内かだいの大難だいなんを払はわ

ざらんや、又法華經ほけきやうの第八はちに云く、所願しよがん虚むなしからず亦また現世げんせに於おいて其その

福報ふくほうを得ん」又云く、当まさに今世けんに於おいて現げんの果報かほうを得べし」云云、又云く

此の人は現世げんせに白癩びやくらいの病びやういを得ん」又云く、頭破こうべれて七分しちぶんと作らん」

又第二卷だいにに云く、經きやうを誦誦どくじゆ

し書持しよじすること有らん者ものを見て輕賤きやうせん憎嫉ぞうしつして結恨けつこんを懷いだかん乃至ないし其の人そのひと

命終みやうじゆうして阿鼻獄あびごくに入らん」云云、第五の卷ごに云く、君もし人惡にくみ罵ののらば

口則ち閉塞せんすなわ へいそく」云云、伝教大師でんぎょうだいしの云く、讚さんする者は福を安明あんみょうに積み
謗ぼうずる者は罪つみを無間むげんに開く」等云云、安明あんみょうとは須弥山しゅみせんの名なり、無間むげん
とは阿鼻あびの別名なり、国主持者こくしゅじしやを誹謗ひぼうせば位うしなを失しんい臣民しんみん

行者ぎやうじやを毀き害しすれば身みを喪ほろす一國こぞを挙もちりて用もちいざれば定じめて自反じたん他逼たひつ
出来しゅつせしむべきなり、又上品じやうばんの行者ぎやうじやは大ひちなんちゆうばんの七難しちなん中品ぎやうじやの行者ぎやうじやは二十九
難なんの内げ・下品げばんの行者ぎやうじやは無量むりやうの難なんの随なん一なんなり、又大ひちなんの七難しちなんに於おいて七人有
り第一だいいちは日月にちがつの難なんなり第一だいいちの内に又五だいなんの大難だいなん有り所謂いわゆる日月度にちげつどを失うしない
時節じせつ反逆はんぎやくし・或あるは赤日出せきじつで・或あるは黒日出こくじつで二三四五の日出あるず・或あるは
日蝕にっしよく

して光なく無あるく・或あるは日輪にちりん一重二三四五重輪こじゆうりんげん現げんぜん、又経いわに云く、「二の月
並び出いでん」と、今こ此この国土こくどに有あらざるは二の日・二の月等だいなんの大難だいなんなり
余なんの難だいたいは大體これあ之有あり、今こ此この龜鏡きつぎやうを以もつて日本國にほんこくを浮うべ見るに必ず

法華經ほけきょうの大行者ぎやうじやあ有るか、既にすで之をこれ謗そしる者に大罰有あり之をこれ信しんずる者なん何ぞ大福無からん。

今兩人微力を勵はげまし予が願に力を副そえ仏の金言きんげんを試みよ經文きやうもんの如ごとく之これを行なげんに微無なくくんば釈尊しやくそん正直しやうじきの經文きやうもん多宝証たほうしやうみやう明めいの誠言せいげん・
十方じゆつぽう分身ふんじんの諸仏しよぶつの舌相ぜつさう・有言うごん無実なと為らんか、提婆だいばの大妄語だうごに過すぎ
瞿伽利くぎやりの大誑言おうげんに超こえたらん日月地にちがつに落ち大地反覆だいちはんぷくし天を仰あおいで声を
発ふし地に臥ふして胸むねを押おさう殷とうおうの湯王の玉体を薪たきぎに積み戒日大王だいおうの竜顔りゅうがん
を火に入れしも今・此の時に當るか、若もし此の書を見聞けんもんして宿習しゆくじゅう有ら
ば其その心こころを發得はつとくすべし、使者に此の書を持た

しめ早早北国に差し遣しつかわ金吾殿の返報を取りて速速はやばや是非ぜひを聞かしめ
よ、此の願若もし成ぜば崑崙山こんろんの玉鮮あさやかに求めずして蔵くらに収まり大海たいかいの
宝珠ほうしゅ招かざるに掌たなごころに在らん、恐惶きようこう謹言。

下春十日

日蓮花押にちれんかおう

曾谷入道殿そやにゅうどう

大田金吾殿

一六三

法蓮抄

建治元年がんねん

五十四歳御作

与曾谷そや

法蓮日礼

1040p

夫れそ以おもんみれば法華經ほけきょう第四よの法師品ほうしほんに云く君もし惡人あくにん有つて不善あくなの心を
以て一劫いつこくの中に於て現おいに仏前ぶつぜんに於て常おいに仏を毀罵きめせん其その罪尚輕つみなおかるし

若し人二つの惡言を以て在家・出家の法華經を讀誦する者を毀☆せん
其の罪甚だ重し」等云云、妙樂大師云く、然も此の經の功高く理絶
えたるに約して此の説を作すことを得る余經は然らず」等云云、此の
經文の心は一劫とは人壽八万歳ありしより百年に一歳をすて千年に
十歳をすつ此くの如く次第に減ずる程に
人壽十歳になりぬ、此の十歳の時は當時の八十の翁のごとし、又人壽
十歳より百年ありて十一歳となり又百年ありて十二歳となり乃至一
千年あらば二十歳となるべし乃至八万歳となる、此の一減一増を一劫
とは申すなり、又種種の劫ありといへども且く此の劫を以て申すべし、
此の一劫が間・身口意の三業より事おこりて仏をにくみた
てまつる者あるべし例せば提婆達多のごとし、仏は淨飯王の太子・
提婆達多は斛飯王の子なり、兄弟の子息なる間・仏の御いとこにてをは

せしかども今も昔も聖人しょうにんも凡夫ぼんぷも人の中をたがへること女人にょにんよりして
起りたる第一だいいちのあだにてはんべるなり、釈迦しやか如来にょらいは悉達しつた太子たいしとして・を
はしし時提婆達多だいばだつたも同じ太子たいしなり、耶輸やしゅ大臣だいじんに女あり耶輸多羅女あしゅたら

となづく五天竺第一の美女・四海名譽の天女なり、悉達と提婆と共に
后にせん事をあらそひ給ひし故に中あしくならせ給ひぬ、後に悉達は
出家して仏とならせ給ひ提婆達多・又須陀比丘を師として出家し給ひ
ぬ、仏は二百五十戒を持ち三千の威儀をととのへ給ひしかば諸の天人こ
れを渴仰し四衆これを恭敬す、提婆達多を人たとまざりしかば・いか
にしてか世間の名譽・仏にすぎんと・はげみしほどにとかう案じいだして
仏にすぎて世間にたと

まれぬべき事五つあり、四分律に云く一には糞掃衣・二には常乞食・三
には一座食・四には常露座・五には塩及び五味を受けず等云云、仏は人
の施す衣をうけさせ給う提婆達多は糞掃衣、仏は人の施す食をうけ
給う提婆は只常乞食、仏は一日に一二三反も食せさせ給ひ提婆は只
一座食、仏は塚間・樹下にも処し給ひ提婆は日中常露座なり、

仏は便宜びんぎにはしを復または五味を服し給たまい提婆だいばはしを等を服せず、かうあ

りしかば世間せけん・提婆だいばの仏にすぐれたる事・雲泥うんでいなり、かくのごとくして

仏を失うしないたてまつらんとうかがひし程に頻婆舍羅王びんばしやらは仏の檀那だんななり日

日に五百輛ひとたびの車を數年が間・一度もかかさずおくりて仏・並びに

御弟子等おんでしを供養くようし奉たてまつる、これをそねみ・とらんがために未生怨太子みしょうおんたいし

をかたらいて父・頻婆舍羅王びんばしやらを殺させ我は仏を殺さんとして・或あるは石を

もつて仏を打ちたてまつるは身業しんごうなり、仏は誑惑おおわくの者と罵めり詈りせしは口業くごう

なり、内心ないしんより宿世すくせの怨あだとをもひしは意業いごうなり三業相応そうおうの大惡此これに

はすぐべからず、此の提婆達多だいばだつたほどの大惡人あくにん・三業相応そうおうして一中劫が間

・釈迦しゃかぶつ仏を罵詈めり・打杖ちやうじやうし嫉妬しつとし候そうらはん大罪たいざいはいくらほど

か重しげく候べきや、此の大地だいちは厚さは十六万八千由旬ゆじゆんなりされば四大海たいかい

の水をも九山の土石をも三千の草木さんぜん そうもくをも一切衆生いっさいしゆじやうをも頂戴ちやうだいして候へど

も落ちもせず・かたぶかず破れずして候ぞかし、しかれども提婆達多が
身は既に五尺の人身なりわづかに三逆罪に及びしかば大地破れて地獄
に入りぬ、此の穴・天竺にいます候・玄奘三蔵・漢土より
月支に修行して此れをみる西域と申す文に載せられたり、而るに
法華經の末代の行者を心にも・をもはず色にもそねまず只たわふれて
のりて候が上の提婆達多がごとく三業相応して一中劫仏を罵詈し奉る
にすぎて候と

とかれて候、何に況や当世の人の提婆達多がごとく三業相応しての大
悪心をもつて多年が間・法華經の行者を罵詈・毀辱・嫉妬・打擲・
讒死・歿死に当てんをや。

問うて云く末代の法華經の行者を怨める者は何なる地獄に墮つる
や、答えて云く法華經の第二に云く經を誦誦し書持すること有らん
者を見て輕賤憎嫉して結恨を懷かん乃至其の人命終して阿鼻獄に入
らん一劫を具足して劫尽きなば復死し展轉して無數劫に至らん」等云
云、此の大地の下・五百由旬を過ぎて炎魔王宮あり、その炎魔
王宮より下・一千五百由旬が間に八大地獄並びに一百三十六の地獄
あり、其の中に一百二十八の地獄は輕罪の者の住处・八大地獄は重罪
の者の住处なり、八大地獄の中に七大地獄は十惡の者の住处なり、第
八の無間地獄は五逆と不孝と誹謗との三人の住处なり、今法華經の

末代まつだいの行者ぎようじやを戲論けろんにも罵詈めり・誹謗ひぼうせん人人ひとびとはおつべしと説き給たまへる文なり、法華經ほけきようの第四法師品ほうしほんに云く、人有ひとつて仏道ぶつどうを求めて一劫いつこくの中に於おいて乃至持經者たんにびを歎美そせんは其その福復彼またかしこに過ぎん」等云云、妙樂大師みょうらくだいし云く君もし悩乱のうらんする者は頭こづ七分ふくじゅうこに破われ供養くようする有らん者は福十号ふくじゅうごうに過ぐ」等云云、夫れ人そ中にんちゆうには転輪聖王てんりんじやうおう・第一だいいちなり此の輪王りんかうしゆつげん出現たまたし給うべき前相たいかいとして大海うどんげの中に優曇華もうと申す大木お生おいて華このみさき実なる、金輪王りんかう出現しゆつげんして四天してんの山海たいらを平たいらになす大地だいちは縣わたの如くやはらかに大海たいかいは甘露かんろの如くあまく大山ごは金山そうもく・草木しつぼうは七宝しちほうなり、此の輪王りんかうしゆめ須臾しゆめの間に四天してん下をめぐる、されば天も守護しゆごし鬼神きじんも来きたつてつかへ竜王りゆうおうも時に随したがつて雨をふらす、劣夫れつぷなんども・これに従たてまひ奉しゆめれば須臾してんに四天下してんをめぐる、是れ偏ひとえに転輪王てんりんおうの十善じゅうぜんの感得かんとくせる大果報かほうなり、毘沙門びしゃもん等の四大天王しだいてんわうは又これには似にるべくもなき

四天下してんげの自在じざいの大王だいおうなり、帝釈たいしやくは☆利天とりてんの主だいろくてん第六天だいろくてんの魔王まおうは欲界よっかいの頂いたadakiに居こして三界さんがいを領りやうす、此これは上品じやうほんの十善戒じゆぜんかい・無遮むしやの大善だいぜんの所感しよくかんなり、大梵天王だいぼんてんのうは三界さんがいの天尊てんそん・色界しよくかいの頂いたadakiに居こして魔王まおう・帝釈たいしやくをしたがへ三千大千界さんぜんだいせんかいを手てににぎる、有漏うろうの禪定ぜんじやうを修行しゆぎやうせる上に慈じ・悲ひ・喜き・捨ぜの四無量心むりやうしんを修行しゆぎやうせる人ひとなり、声聞しやうもんと申もうして舍利弗しやりほつ・迦葉かしよう等は二百五十戒むろご・無漏むろの禪定ぜんじやうの上に苦く・空くう・無常むじやう・無我むがの觀かんをこらし三界さんがいの

けんじん 見思を断尽し水火に自在なり故に梵王と帝釈とを眷属とせり、縁覚
しやうもん は声聞に似るべくもなき人なり仏と出世をあらそふ人なり、昔獵師あ
りき飢えたる世に利☆と申す辟支仏にひえの飯を一盃供養し奉りて彼
りやうし の獵師九十一劫が間人中天上の長者と生る、今生には阿那律と
もう てんげん 第一の御弟子なり、此れを妙樂大師釈して云く 釋飯輕し
いとど 雖も所有を尽し及び田勝るるを以ての故に勝るる報を得る」等云云、
しかく 釈の心はひえの飯は輕しといへども貴き辟支仏を供養する故にかかる大
かほう 果報に度度生るところそ書かれて候へ 又菩薩と申すは文殊・弥勒等な
り、此の大菩薩等は彼の辟支仏に似るべからざる大人なり、仏は四十二
むみよう 品の無明と申す闇を破る妙覺の仏なり、八月十五夜の満月のごとし、
むみよう 此の菩薩等は四十一品の無明をつくして等覺の山の頂にのぼり十四
むみよう 夜の月のごとし、仏と申す

は上の諸人しよにんには百千万億倍せんまんすぐれさせ給たまへる大人だいにんなり、仏には必ず三十二相あり其その相と申もうすは梵音聲ぼんおんじやう・無見頂相肉むけんちやうそうにくけいそう・白毫相びやくこう・乃至ないし・千輻輪相等ぶくりんなり、此の三十二相の中の一相をば百福を以て成じ給たまへり、百福と申もうすは假令たとい大医ありて日本国にほんこく・漢土かんど・五天竺てんじく三十六の大国たいこく・五百の中国ちゆうごく・十千の小国しやうこく・乃至ないし・一閻浮提えんぶだい・四天下してんげ・六欲天りくよくてん・乃至ないし・三千大千世界さんぜんだいせんせかいの一切衆生の眼まなこの盲くらたるを本の如ごとく一時いちじに開けたらんほどの大功徳くどくを一つの福として此の福・百をかさねて候そうらはんを以て三十二相の中の一相を成ぜり、されば此の一相の功徳は三千大千世界さんぜんだいせんせかいの草木そうもくの数よりも多く四天下してんげの雨の足よりもすぎたり、設たとい壞劫えいこくの時・僧☆陀そうぎやだと申もうす大風たいふうありて須弥山しゆみせんを吹き抜しきき抜きいて色究竟天しきくきやうてんにあげて・かへつて微塵みじんとなす大風たいふうなり、然しかれども仏の御身おんみの一毛をば動かさず仏の御胸みみに大火あり平等大慧びやうどうだいえ・

大智光明・火坑三昧と云う、涅槃の時は此の大火を胸より出して一身を焼き給いしかば六欲・四海の天神・竜衆等・仏を惜み奉る故にあつまりて大雨を下し三千の大地を水となし須弥は流るといへども此の大火はきへず、仏にはかかる大徳ましますゆへ

に阿闍世王は十六大国の悪人を集め一四天下の外道をかたらひ提婆を師として無量の悪人を放ちて仏弟子をのりうち殺害せしのみならず、賢王にてとがもなかりし父の大王を一尺の釘をもつて七処までうちつけ、はつけ

にし生母をば王のかんざしをきり刀を頭にあてし重罪のつもりに惡瘡七処に出で、三七日を経て三月の七日に大地破れて無間地獄に墮ちて一劫を経べかりしかども仏の所に詣で惡瘡いゆるのみならず無間地獄の大苦をまぬかれ四十年の壽命延びたりき、又耆婆大臣も御つかひなりしかば炎の中に入って瞻婆長者が子を取り出したりき、之を以て之を思うに一度も仏を供養し奉る人はいかなる惡人・女人なりとも成仏得道疑無し、提婆には三十相

あり二相かけたり所謂白毫と千輻輪となり、仏に二相劣りたりしかば弟子等軽く思いぬべしとて螢火をあつめて眉間につけて白毫と云ひ千輻輪には鍛冶に菊形をつくらせて足に付けて行くほどに足焼て大事になり結句死せんとせしかば仏に申す、仏御手を以てなで給いしかば苦痛さりき、ここにて改悔あるべきかと思ひしにさはなくし

て瞿曇が習ふ医師はこざかしかりけり又術にて有るなど云ひしなり、かかる敵にも仏は怨をなし給はず何に況や仏を一度も信じ奉る者をば争でか捨て給うべきや。

かかる仏なれば木像・画像にうつし奉るに優填大王の木像は歩をなし摩騰の画像は一切経を説き給ふ、是れ程に貴き教主釈尊を一時・二時ならず一日・二日ならず一劫が間掌を合せ両眼を仏の御顔にあて頭を低て他事を捨て頭の火を消さんと欲するが如く渴して水を・をもひ飢えて食を思うがごとく間無く供養し奉る功德よりも戲論に一言繼母の繼子をほむるが如く心ざしなくとも末代の法華経の行者を讃め供養せん功德は彼の三業相應の信心にて一劫が間・生身の仏を供養し奉るには百千万億倍すぐべしと説き給いて候、これを妙樂大師は福過十号とは書れて候なり、十号と申すは仏の十の御名なり十号を

供養くようせんよりも末代まつだいの法華經ほけきようの行者ぎようじやを供養くようせん功德くどくは勝まさると

かかれたり、妙樂みょうらく大師だいしは法華經ほけきようの一切經いっさいきように勝すぐれたる事を二十あつむる

其その一なり、已上・上の二つの法門ほうもんは仏説ぶつせつにては候へども心えられぬ事

なり争いかでか仏くようを供養たてまつし奉るよりも凡夫ぼんぶを供養くようするがまさるべきや、而しかれ

ども是これを妄語もうごと云はんとすれば釈迦しやか如来にょらいの金言きんげんを疑うたがいい多宝たぼう仏ぶつの

証明しょうみんを輕かろしめ十方じゅうつぽう諸仏しよぶつの舌相ぜつそうをやぶるになりぬべし、若もし爾しからば

現身げんしんに阿鼻地獄あびじごくに墮おつべし、巖石がんせきにのぼりて・あら馬を走らするが如ごとし
心肝しんかんしづかならず、又信しんぜば妙覺みょうかくの仏ぶつにもなりぬべし如何いかんしてか今度このたび・
法華經ほけきょうに信心しんじんをとるべき信なくして此の經を行ぜんは手なくして宝山
に入り足なくして千里せんりの道を企くわだつるが如ごとし、但ただし近きき現証げんしやうを引いて遠
き信を取るべし仏の御歳八十の正月一日・法華經ほけきょうを説ときおはらせ給て
御物語おんものがたりあり、阿難あなん・彌勒みろく・迦葉かしょう・我世いせいに出いでし事は法華經ほけきょうを説とかんが
ためなり我既すでに本懷ほんかいをとげぬ今は

世にありて詮なし今三月ありて二月十五日に涅槃ねはんすべし」云云、一切いっさい
内外ないがいの人人ひとびと疑うたがいをなせしかども仏語ぶつごむなしからざればついに二月十五
日に御涅槃ねはんありき、されば仏の金言きんげんは実なりけるかと少し信心しんじんはとら
れて候、又仏記しるし給たまふ我滅度めつどの後・一百年と申もうさんに阿育大王あそかだいおうと申もうす
王出現しゆつげんして一閻浮提えんぶだい三分の一が主となりて八万四千の塔を立て我が

舍利しやりを供養くようすべし」云云、人疑うたがいい申もうさんほどに案あんの如ごとくに出現しゅつげんして候
いき是これはよりしてこそ信心しんじんをばとり

て候こういつれ、又云いわく我滅後めつごに四百年しうひゃくねんと申もうさんに迦か式しき色しき迦か王わうと申もうす
大王だいおうあるべし五百ごひゃくの阿羅漢あらかんを集めて婆沙論ばしやろんを造るべし」と是又また仏記ぶつぎのご
とくなりき、是等これらをもつてこそ仏の記文きもんは信ぜられて候こうへ若もし上かみに
拳あぐる所の二ふたの法門ほうもん妄語もうごならば此この一經いつきやうは皆妄語みなもうごなるべし、寿量品じゆりやうぼん
に我は過去かこ五百塵点劫ごひゃくじんてんこくのそのかみの仏ほとけなりと説とき給たまう我等われらは凡夫ぼんぷなり
過ぎすにし方は生れてより已来このかたすらなをおぼへず況や一生二生をや況や
五百塵点劫ごひゃくじんてんこくの事をば争いかでか信しんず

べきや、又舍利弗等しやりほつに記しるして云いわく「汝未来世なんじみらいせに於おいて無量無辺不可思議むりやうむへんふかしぎ
劫すを過ぎ及至また当まさに作仏さぶつすることを得うべし号ごうを華光如来げこうにょらいと曰いわん」云云、
又又摩訶迦葉まかかしやうに記しるして云いわく未来世みらいせに於おいて乃至最後ないしさいごの身みに於おいて仏と

なる
成為ことを得ん名けて光明如来と曰わん」云云、此等の經文は又未來

の事なれば我等凡夫は信ずべしともおぼえず、されば過去

未來を知らざらん凡夫は此の經は信じがたし又修行しても何の詮かあ

るべき是を以て之を思うに現在に眼前の証拠あらんずる人・此の經を

説かん時は信ずる人もありやせん。

今法蓮上人の送り給える諷誦の状に云く、慈父幽靈第十三年の忌辰

に相当り一乗・妙法蓮華經五部を転読し奉る」等云云、夫れ教主

釈尊をば大覺世尊と号したてまつる、世尊と申す尊の一字を高と申す

高と申す一字は又孝と訓ずるなり、一切の孝養の人の中に第一の孝養

の人なれば世尊と号し奉る、釈迦如来の御身は金色にして三十二相を

備へ給ふ、彼の三十二相の中に無見頂相と申すは仏は丈六の御身なれ

ども竹杖外道も其の御長をはからず梵天

も其の頂いただきを見ず故ゆえに無見頂相むけんちようそうと申もうす是れ孝養第一こうようだいいちの大人だいにんなればかか
る相さうを備そなへまします、孝經きうきやうと申もうすに二あり一には外典げてんの孔子こうしと申せし
聖人しようにんの書しよに孝經こうきやうあり、二には内典ないてん今の法華經ほけきやう是なり、内外ないげ異なれども
其意こは是れ同じ、釈尊しやくそん塵点劫じんてんの間修行しゆぎやうして仏にならんとはげみしは
何事なにことぞ孝養こうようの事なり、然しかるに六道ろくどう・四生ししようの一切衆生いっさいしゆじやうは皆父母みなふぼなり
孝養こうようおへざりしかば仏にならせ給たまはず、今法華經ほけきやうと申もうすは一切衆生いっさいしゆじやうを
仏になす秘術ひじゆつまします御經ぎきやうなり、所謂いわゆる地獄じごくの一人・餓鬼がきの一人・乃至ないし・
九界くきやうの一人を仏になせば一切衆生いっさいしゆじやう・皆仏みなになるべきことはり顕あらわる、譬たとえ
ば竹の節ふしを一つ破わりぬれば余の節またふ亦破またやぶるるが如ごとし、囲碁いごと申もうすあそびに
しちようと云いふ事あり一の石死いししぬれば多おほくの石死いしぬ、法華經ほけきやう
も又また此こくの如ごとし金きんと申もうすものは本草もくそうを失うしなう用ようを備そなへ水みづは一切いっさいの火ひをけ
す徳とくあり、法華經ほけきやうも又また一切衆生いっさいしゆじやうを仏になす用ようおはします、六道ろくどう・四生ししよう

の衆生に男女あり此の男女は皆我等が先生の父母なり、一人ももれば
仏になるべからず故に二乗をば不知恩の者と定めて永不成仏と説かせ
給う孝養の心あまねからざる故なり、仏は法華經をさとらせ給いて
六道・四生の父母孝養の功德を身に備へ給へり、此の仏の御功德をば
法華經を信ずる人にゆづり給う、例せば
悲母の食う物の乳となりて赤子を養うが如し、今・此の三界は・皆
是れ我が有なり・其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり」等云云、教主
釈尊は此の功德を法華經の文字となして一切衆生の口になめさせ
給う、赤子の水火をわきまへず毒藥を知らざれども乳を含めば身命を
つぐが如し、阿含經を習う事は舍利弗等の如くならざれども華嚴經を
さとする事解脱月等の如くならざれども乃至一代聖教を胸に浮べたる
事文殊の如くならざれども一字・一句をも之を聞きし人・仏にならざ

るはなし、彼の五千の上慢^{じょうまん}は聞きてさとらず不信^{ふしん}の人なり、然れども
謗^{ぼう}ぜざりしかば三月

を経て仏になりనికి 君しは信じ若しは信ぜざれば即ち不動国に生ぜ
ん」と涅槃經に説かるるは此の人の事なり、法華經は不信の者すら謗ぜ
ざれば聞きつるが不思議にて仏になるなり、所謂七步蛇に食れたる人
ひとあしないし
一步乃至七歩をすぎず毒の用の不思議にて八歩をすごさぬなり、又
胎内の子の七日の如し必ず七日の内に転じて余の形となる八日をすこ
さず、今の法蓮上人も又此くの如し教主釈尊の御功德・御身に入り
かはらせ給いぬ、法蓮上人の御身は過去
聖靈の御容貌を残しおかれたるなり、たとへば種の苗となり華の菓と
なるが如し其華は落ちて菓はあり種はかくれて苗は現に見ゆ、法蓮
上人の御功德は過去聖靈の御財なり、松さかふれば柏よろこぶ芝
かるれば蘭なく情なき草木すら此くの如し何に況や情あらんをや又
父子の契をや。

彼の諷誦に云く、慈父閉眼の朝より第十三年の忌辰に至るまで釈迦
如来の御前に於て自ら自我偈一卷を讀誦し奉りて聖靈に回向す」等
云云、当時・日本国の人、仏法を信じたるやうには見へて候へども古い
まだ仏法のわたらざりし時は仏と申す事も法と申す事も知らず候しを
守屋と上宮太子と合戦の後・信ずる人もあり又信ぜざるもあり、漢土
も此くの如し摩騰・漢土に入つて後・道士と諍論あり道士まけしかば
始て信ずる人もありしかども不信の人

多し、されば烏竜と申せし能書は手跡の上手なりしかば人之を用ゆ、
然れども仏經に於てはいかなる依怙ありしかども書かず最後臨終の時
・子息遺竜を召して云く汝我が家に生れて芸能をつぐ我が孝養には
仏經を書くべからず殊に法華經を書く事なかれ、我が本師の老子は天
尊なり天に二つの日なし而に彼の經に唯我一人と説くきくわい第一な

り、若し遺言を違へて書く程ならば忽に惡靈となりて命を断つべしと云つて舌八つにさけて頭七分に破れ

五根より血を吐いて死し畢んぬ、されども其の子善惡を弁されば我が父の謗法のゆへに惡相現じて阿鼻地獄に墮ちたりともしらず遺言にまかせて仏經を書く事なし況や口に誦する事あらんをや、かく過ぎ行く程に時の王を司馬氏と号し奉る御仏事のありしに書写の經あるべしとて漢土第一の能書を尋ねらるるに遺童に定まりぬ、召し

て仰せ付けらるるに再三辭退申せしかば力及ばずして他筆にて一部の
經を書かせられけるが、帝王心よからず尚遺竜を召して仰せに云く汝
親の遺言とて朕が經を書かざる事其の謂無しと雖も且く之を免ず但
題目計りは書くべしと三度勅定あり、遺竜猶辭退申す大王竜顔心よ
からずして云く天地尚王の進退なり、然らば汝が親は即ち我が家人に
あらずや、私をもつて公事を輕んずる事あるべからず、題目計りは書く
べし若し然らずんば、仏事の庭

なりといへども速に汝が頭を刎ぬべしとありければ題目計り書けり、
所謂妙法蓮華經卷第一・乃至卷第八等云云、其の暮に私宅に歸りて
歎いて云く我親の遺言を背き王勅術なき故に仏經を書きて不孝の者と
なりぬ天神も地祇も定んで瞋り不孝の者とおぼすらんとて寝る、夜の
夢の中に大光明出現せり朝日の照すかと思へば天人二人庭上に立ち

給へり又無量の眷属あり、此の天人の頂上の虚空に仏・六十四仏まします、遺竜・合掌して問うて云く如何

なる天人ぞや、答えて云く我は是れ汝が父の烏竜なり仏法を謗せし故に舌八つにさけ五根より血を出し頭七分に破れて無間地獄に墮ちぬ、彼の臨終の大苦をこそ堪忍すべしともおぼへさりしに無間の苦は尚百千億倍なり、人間にして鈍刀をもて爪をはなち鋸をもて頸をきられ炭火の上を歩ばせ棘にこめられなんどせし人の苦を此の苦にたとへばかずならず、如何してか我が子に告げんと思ひしかどもかなはず、臨終の時・汝を誠て仏經を書くこと

なかれと遺言せし事のくやしき申すばかりなし、後悔先にたたず我が身を恨み舌をせめしかども・かひなかりしに昨日の朝より法華經の始の妙の一字・無間地獄のかなへの上に飛び来つて變じて金色の釈迦仏と

なる、此の仏三十二相を具し面貌めんみょう満月まんげつの如しごと、大音声おんじょうを出して説とて
云いく假令法界あまねくに遍あまねくく善を断ちたる諸もろもろの衆生しゆじょうも一たび法華經ほけきょうを聞かば
決定けつじようして菩提ぼだいを成じようぜん」云云、此の文字もんじの中より大雨降だいうりて無間地獄むげんじごく
の炎をけす閻魔王えんまおうは冠かんむりをかたづけ

て敬うやまひ獄卒ごくそつは杖をすてて立てり、一切いっさいの罪人ざいにんはいかなる事ぞとあはてた
り、又法の一字来れり前の如しごと又蓮・文華・文經・此かくの如しごと六十四字
来つて六十四仏となりぬ、無間地獄むげんじごくに仏・六十四体ましませば日月にちがつの
六十四そらが天に出

たるごとし、天より甘露かんろをくだして罪人ざいにんに与ふ、抑そも此等これらの大善だいぜんは何な
る事ぞと罪人ざいにん等・仏に問たてまつい奉りしかば六十四の仏の答に云く我等われらが金
色の身は栴檀せんた・宝山よりも出現しゅつげんせず是は無間地獄むげんじごくにある烏竜おりゅうが子
遺竜いりゅうが書ける法華經八卷の題目の八八・六十四の文字もんじなり、彼の遺竜
が手は烏竜おりゅうが生める処の身分なり、書ける文字は烏竜おりゅうが書くにてある
なりと説き給たまいしかば無間地獄むげんじごくの罪人等ざいにんは我等われらも娑婆しやばにありし時は子
もあり婦つまもあり眷属けんぞくもありき、いかに・と

ぶらはぬやらん又訪せんこんへども善根ぜんこんの用の弱くして来らぬやらんと歎なげけども
歎なげけども甲斐かいなし、或あるは一日・二日・一年・二年・半劫・一劫いつしやうになりぬ
るにかかる善知識ぜんちしきにあひ奉たてまつつて助けられぬるとて我等われらも眷属けんぞくとなりて
☆利天とらてんにのぼるか、先ず汝なんじをおがまんとて来るなりとかたりしかば、
夢の中にうれしさ身にあまりぬ、別れて後又いつの世にか見んと思ひし

親のすがたをも見奉りたてまつ仏をも拝しはい奉りぬ、六十四仏の物語に云く我等は別の主なし汝は我等が

檀那なり、今日よりは汝を親と守護すべし汝をこたる事なかれ、

一期の後は必ず来つて都率の内院とそつ導くべしと御約束ありしかば遺いり竜こ

とに畏みて誓いて云く今日以後外典の文字を書く可からず等云云、彼

の世親菩薩が小乗經を誦せじと誓い日蓮が弥陀念仏を申さじと願せ

しがごとし、さて夢さめて此の由を王に申す、大王の勅宣に云く此の

仏事已に成じぬ此の由を願文に書き奉れとありしかば勅宣の如くに

し、さてこそ漢土・日本国は法華經にはならせ給いけれ、此の状は漢土

の法華伝記に候。

是は書写の功德なり、五種法師の中には書写は最下の功德なり、

何に況や読誦どくじゆなんと申すは無量無辺の功德なり、今の施主十三年の間

・毎朝誦誦せらるる自我偈の功德は唯仏与仏・乃能究尽なるべし、夫れ
法華経は一代聖教の骨髓なり自我偈は二十八品のたましひなり、
三世の諸仏は寿量品を命とし十方の菩薩も自我偈を眼目とす、
自我偈の功德をば私に申すべからず次下に分別功德品に載せられた
り、此の自我偈を聴聞して仏になりたる人人の数をあげて候には小千
大千・三千世界の微塵の数をこそあげて候へ其の上薬王品已下の六
品得道のもの自我偈

の余残なり、涅槃經四十卷の中に集りて候いし五十二類にも自我偈の
功徳をこそ仏は重ねて説かせ給いしか、されば初め寂滅道場に十方
世界微塵数の大菩薩・天人等・雲の如くに集りて候いし大集・大品の諸
聖も大日經・金剛頂經等の千二百余尊も過去に法華經の自我偈を
聴聞してありし人人、信力よはくして三五の塵点を経しかども今度
釈迦仏に値い奉りて法華經の功徳すすむ故に靈山をまたずして爾前の
經經を縁として得道なると見えたり。

されば十方世界の諸仏は自我偈を師として仏にならせ給う世界の
人の父母の如し、今法華經・寿量品を持つ人は諸仏の命を續ぐ人な
り、我が得道なりし經を持つ人を捨て給う仏あるべしや、若し此れを捨
て給はば仏還つて我が身を捨て給うなるべし、これを以て思うに田村
利仁なんどの様なる兵を三千人生みたらん女人あるべし、此

の女人にょにんを敵とせん人は此こゝの三千人さんぜんの將軍しょうぐんをかたきに・うくるにあらずや、法華經ほけきょうの自我偈じがけを持つ人を敵とせんは三世さんぜの諸仏しよぶつを敵とするになるべし、今の法華經ほけきょうの文字もんじは皆生身みなしやうしんの仏なり我等われらは肉眼にくげんなれば文字もんじと見るなり、たとへば餓鬼がきは恒河じやうがを火と見る・人は水と見・天人てんにんは甘露かんろと見る、水は一なれども果報かほうにしたがつて見るところ各別かくべつなり、此こゝの法華經ほけきょうの文字もんじは盲目もうもくの者は之これを見ず肉眼にくげんは黒色と見る二乗にじやうは虚空こくうと見・菩薩ぼさつは種種しゆじゆの色と見・仏種ぶつしゆ・純熟じゆんじゆくせる人は仏と見奉たてまつる、されば經文きやうもんに云く・君きみし能く持つこと有あるは即ち仏身ぶつしんを持つなり」等云云、天台てんだいの云く

稽首妙法蓮華經一帙・八軸・四七品・六万九千三八四・一一文文・是真仏・真仏說法利衆生しゆじやう」等と書かれて候。

之これを以て之これを案ずるに法蓮法師ほつしは毎朝口より金色の文字もんじを出現しゆつげんす

此の文字もんじの数は五百十字なり、一一の文字もんじ變じて日輪にちりんとなり日輪にちりん變じて釈迦しやか如来にやらいとなり大光明こつみやうを放はなつて大地だいちをつきとをし三惡道さんあくどう・無間むげん・大城だいじやうを照てらし乃至ないし東西南北とうざいなんぼく・上方じやうほうに向つては非想・非非想へものぼりいかなる處ところにも過去かこ・聖靈しやうりやうのおはすらん處ところまで尋ね行き給たまいて彼の聖靈しやうりやうに語たまり給たまうらん、我をば誰たれとか思食おほしめす我は是これ汝なんじが子息しそく・法蓮ほふれんが毎朝誦じゆする所の法華經ほふけきやうの自我偈じがげの文字もんじなり、此の文字もんじは汝なんじが眼まなことならん耳とならん足とならん手とならんとこそねんごろに語かたらせ給たまうらめ、
其の時・過去かこ・聖靈しやうりやう

は我が子息・法蓮は子にはあらず善知識なりとて娑婆世界に向つてお
がませ給うらん、是こそ実の孝養にては候なれ。

そもそもほげきよう

抑法華經を持つと申すは經は一なれども持つ事は時に随つて色色

なるべし、或は身肉をさひて師に供養して仏になる時もあり、又身を

牀として師に供養し又身を薪となし、又此の經のために杖木をかほり

又精進し又持戒し上の如くすれども仏にならぬ時もあり時に依つて

不定なるべし、されば天台大師は適時而已と書かれ、章安大師は取捨

得宜不可一向」等云云。

問うて云く何なる時か身肉を供養し何なる時か持戒なるべき、答え

て云く智者と申すは此くの如き時を知りて法華經を弘通するが第一の

秘事なり、たとへば渴者は水こそ用うる事なれ弓箭兵杖はよしなし、

裸なる者は衣を求む水は用なし一をもつて万を察すべし、大鬼神ありて

法華經を弘通せば身を布施すべし余の衣食は詮なし、惡王あつて法華經を失わば身命をほろぼすとも隨うべからず、持戒精進の大僧等・法華經を弘通するやうにて而も

失うならば是を知つて責むべし、法華經に云く我身命を愛せず但だ無上道を惜しむ」云云、涅槃經に云く寧ろ身命を喪うとも終に王の所説の言教を匿さざれ」等云云、章安大師の云く寧喪身命不匿教とは身は輕く法は重し身を死して法を弘む」等云云。

然るに今日蓮は外見の如くば日本第一の僻人なり我が朝六十六箇国・一の島の百千万億の四衆・上下万人に怨まる、仏法・日本国に渡つて七百余年いまだ是程に法華經の故に諸人に惡まれたる者なし、月氏・漢土にもありともきこえず又あるべしともおぼへず、されば一閻浮提第一の僻人ぞかし、かかるものなれば上には一朝の威を

恐れ下には万民ばんみんの嘲あざけりを顧かえりみて親類しんるいもとぶらはず外人がいじんは申もうすに及およばず
出世しゅっせの恩おんのみならず世間せけんの恩おんを蒙こおむりし人も諸人しよにんの眼まなこを恐おそれて口くちをふさ
がんとめにや心に思おもはねども・そしるよしをなす、数度事ことにあひ兩度
御勘氣ごかんきを蒙こおむりし

かば我が身の失に当るのみならず、行通人人の中にも、或は御勘氣、或は所領をめされ、或は御内を出され、或は父母・兄弟に捨てらる、されば付きし人も捨てはてぬ今又付く人もなし、殊に今度の御勘氣には死罪に及ぶべきがいかと思はれけん佐渡の国につかはされしかば彼の国へ趣く者は死は多く生は稀なり、からくして行きつきたりしかば殺害謀叛の者よりも猶重く思はれたり、鎌倉を出でしより日に強敵かさなるが如し、ありとある人は念仏の

持者なり、野を行き山を行くにもそばひらの草木の風に随つてそよめく声も、かたきの我を責むるかとおぼゆ、やうやく国にも付きぬ北国の習なれば冬は殊に風はげしく雪ふかし衣薄く食ともし、根を移されし橘の自然にからたちとなりけるも身の上につみしられたり、栖にはおぼな・かるかや・おひしげれる野中の三昧ばらにおちやぶれた

る草堂の上は雨もり壁は風もたまらぬ傍あたりにに昼夜・耳に聞く者はまくらにさゆる風の音、朝あしたに眼まなこに遮さへぎる者は遠近おちこちの路を埋む雪なり、現身げんしんに餓鬼道がきを経・寒地獄じごくに墮おちぬ、彼の蘇武そぶが十九年の間・胡国ここくに留とどめられて雪を食し李陵りりょうが巖窟いんくつに入つて六年養みのをきてすごしけるも我が身の上なりき。

今適御勘ごかんき氣ゆりたれども鎌倉中かまくらにも且しばらも身をやどし迹しやくを・とどむべき処ところなければ・かかる山中の石のはざま松の下に身を隠かくし心を静むれども大地だいちを食とし草木そうもくを著くざらんより外は食もなく衣も絶えぬる処ところにいかなる御心ねにて・かく・かきわけて御訪ごいのあるやらん、知らず過去かこの我が父母ふぼの御神みたましいの御身おんみに入りかはらせ給たまうか、又知らず大覺だいかく世尊せそんの御めぐみにやあるらん涙こそ・おさへがたく候へ。

問うて云く抑い正嘉しょうかの大地震だいじしん・文永ぶんえいの大彗星すいせいを見て自他じたの叛逆・我

が朝あしたに法華經ほけきようを失うしなう故としらせ給たまうゆへ如何いかに、答えて云いく此の二の天
災ちよう・地天ちようは外典げてん三千余卷さんぜんにも載のせられず三墳さんぶん・五典ごてん・史記しき等らに記しるする
処ところの大長星だいじしん・大地震だいじしんは・或あるは一尺二尺・二丈二丈・五丈六丈なりいま
だ一天いってんには見みえず地震ちしんも又是また是かくのくの如ごとし、内典ないてんを以もつて之これを勘かんうるに仏御
入滅にゅうめつ已い後はかかると大瑞だいずい出来せず、月支がつしには弗沙密多羅王みつたらおうの五天ごてんの仏法ぶつぽう
を亡たひこし十六大國じとくの寺塔じとうを焼やき払そうい僧尼そうにの頭こうべ

をはねし時も・かかる瑞はなし、漢土には会昌天子の寺院・四千六百余所をとどめ僧尼・二十六万五百人を還俗せさせし時も出現せず、我が朝には欽明の御宇に仏法渡りて守屋・仏法に敵せしにも清盛法師・七大大寺を焼き失い山僧等・園城寺を焼亡せしにも出現せざる大慧星なり。

当に知るべし是よりも大事なる事の一閻浮提の内に出現すべきなりと勘えて立正安国論を造りて最明寺入道殿に奉る、彼の状に云く證此の大瑞は他国より此の国をほろぼすべき先兆なり、禪宗・念仏宗等が法華經を失う故なり、彼の法師原が頸をきりて鎌倉ゆるの浜にすてずば国正に亡ぶべし等云云、其の後文永の大慧星の時は又手ににぎりて之を知る、去文永八年九月十二日の御勘氣の時重ねて申して云く予は日本国の棟梁なり我を失うは

国を失うなるべしと今は用いまじけれども後のためにとて申しにき、又
去年の四月八日に平左衛門尉に對面の時蒙古国は何比かよせ候べきと
問うに、答えて云く経文は月日をささず但し天眼のいかり頻りなり今
年をばすぐべ

からずと申したりき、是等は如何にして知るべしと人疑うべし予不肖
の身なれども法華經を弘通する行者を王臣人民之を怨む間・法華經
の座にて守護せんと誓をなせる地神いかりをなして身をふるひ天神身
より光を出して此の国をおどす、いかに謙むれども用いざれば結局は人
の身に入つて自界叛逆せしめ他国より責むべし。

問うて云く此の事何たる証拠あるや、答う經に云く惡人を愛敬し
善人を治罰するに由るが故に星宿及び風雨皆時を以て行わず」等云
云、夫れ天地は国の明鏡なり今・此の国に天災地天あり知るべし国主

に失ありと云う事を鏡にうかべたれば之を諍うべからず国主・小禍のあ

る時は天鏡に小災見ゆ今の天災は当に知るべし大禍ありと云

う事を、仁王経には小難は無量なり中難は二十九・大難は七とあり此

の経をば一には仁王と名づけ二には天地鏡と名づく、此の国主を

天地鏡に移して見るに明白なり、又此の経文に云く「聖人去らん時は

七難必ず起る」等云云、当に知るべし此の国に大聖人有りと、又知るべ

し彼の聖人を国主信ぜずと云う事を。

問うて云く先代に仏寺を失ひし時何ぞ此の瑞なきや、答えて云く瑞は失の輕重によりて大小あり此の度の瑞は怪むべし、一度二度にあらず一返二返にあらず年月をふるままに弥盛なり、之を以て之を察すべし先代の失よりも過ぎたる国主に失あり、国主の身にて万民を殺し又万臣を殺し又父母を殺す失よりも聖人を怨む事・彼に過ぐる事を、今日本国の王臣並びに万民には月氏・漢土総じて一閭浮提に仏滅後・二千二百二十余年の間いまだなき大科・人ごとにあるなり、たとえば十方世界の五逆の者を一処に集めたるが如し、此の国の一切の僧は皆・提婆・瞿伽利が魂を移し国主は阿闍世王・波瑠璃王の化身なり、一切の臣民は兩行大臣・月称大臣・刹陀耆利等の悪人をあつめて日本国の民となせり、古は二人・三人・逆罪不孝の者ありしかばこそ其の人の在所は大地も破れて入りぬれ、今は

此の国に充満じゅうまんせる故に日本国にほんこくの大地だいち・一時いちじにわれ無間むげんに墮おち入らざらん外は一人・二人の住所の墮おつべきやうなし、例せば老人ろうじんの一二の白毛しらがをば抜けども老耄ろうもうの時は皆白毛なれば何を分けて抜き捨つべき只一度ただひとたびに剃捨そりすつる如くなり、問うて云く汝なんじが義ぎの如きは我が法華經ほけきようの行者ぎやうじやなるを用いざるが故に天変地天等ありと、法華經第八に云く「頭こうべ破われて七分と作らんと、第五に云く「若し人惡にくみ罵のしれば口則ち閉塞すなわ へいそくす」等云云、如何なんぞ数年が間・罵のろとも怨あだむとも其の義なきや、答う反詰はんきつして云く不輕菩薩ふぎようぼさつを毀き☆し罵めりし打擲ちやうちやくせし人は口閉頭破ありけるか如何いかん、問う然しかれば經文きやうもんに相違そういする事如何いかん、答う法華經ほけきようを怨あだむ人に二人あり、一人は先生せんしやうに善根ぜんこんありて今生こんじやうに縁を求めて菩提心ぼだいしんを發おこして仏になるべき者は・或は口閉ぢ・或は頭破やぶる、一人は先生せんしやうに謗人ぼうじんなり今生こんじやうにも謗ぼうじじ生生じやうじやうに無間地獄むげんじごくの業を成就じやうじゆせる者あり是はのれども口

すなわ 則ち閉塞せず、譬えば獄に入つて死罪に定まる者は獄の中にて何なる
ひがごと 僻事あれども死罪を行ふまでにて別の失なし、ゆりぬべき者は獄中にて
ひがごと 僻事あればこれをいましむるが如し、問うて云く此の事第一の大事な
り委細に承わるべし、答えて云く涅槃經に云く法華經に云く云云。

日蓮

花押

◆一六四

曾谷殿御返事

建治二年五十五歳御作

1055p

夫れ法華經第一方便品に云く、諸仏の智慧は甚深無量なり」云云、
釈に云く、境淵無辺なる故に甚深と云い、智水測り難き故に無量と云
う」と、抑此の經釈の心は仏になる道は豈境智の二法にあらずや、
されば境と云うは方法の体を云い、智と云うは自体顕照の姿を云うな
り、而るに境の淵ほとりなく、ふかき時は智慧の水ながるる事つつがな
し、此の境智合しぬれば即身成仏するなり、法華以前の經は境智・各別
にして而も權教方便なるが故に成仏
せず、今法華經にして境智一如なる間・開示悟入の四仏知見をさとり

て成仏じやうぶつするなり、此の内証ないしやうに声聞しやうもん・辟支仏ひやくしぶつ更に及およばざるところを次下つぎしもに一切いっさい声聞しやうもん・辟支仏ひやくしぶつ所不能知しよふのうちと説かるるなり、此の境智きやうちの二法は何物なにものぞ但南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうの五字ごじなり、此の五字ごじを地涌じゆの居士こしを召し出して結要けつやう付属ふぞくせしめ給たまう是これを本化ほんげ付属ふぞくの法門ほふもんとは云うなり。

然しかるに上行菩薩じやうぎやうぼさつ等・末法まっぽうの始はじめの五百年ごひゃくねんに出生しゆつしやうして此の境智きやうちの二法ふたぽうたる五字ごじを弘ひろめさせ給たまうべしと見えたり經文きやうもん赫赫かくかくたり明明めいめいたり誰これか是これを論ろんぜん、日蓮にちれんは其そのの人ひとにも非あらず又御使おんつかいにもあらざれども先序分ますじよぶんにあらあひろら弘ひろめ候こうなり、既すでに上行菩薩じやうぎやうぼさつ・釈迦しやくかに如来にょらいより妙法みやうほうの智水ちすいを受けて末代まつだい惡世あくせの枯槁ここうの衆生しゆじやうに流れかよはし給たまう是れ智慧ちえの義ぎなり、釈尊しやくそんより上行菩薩じやうぎやうぼさつ・議ぎり与たま給たまう然しかるに日蓮にちれん又日本国にほんこくにして此の法門ほふもんを弘ひろむ、又是またには総別そうべつの二義ふたぎあり総別そうべつの二義ふたぎ少しも相そむけば成仏じやうぶつ思しもよらず輪廻りんね生死しやうじのもといたらん、例せば大通だいづう仏ぶつの第十六じふろくの釈迦しやくかに如来にょらい

に下種^{げしゅ}せし今日の声聞^{しょうもん}は全く弥陀^{みだ}・薬師^{やくし}に遇^{じようぶつ}て成仏^たせず譬^{たと}えば大海^{たいかい}の水を家内^{けい}へくみ来^きらんには家内^{けい}の者^{みな}皆縁^{えん}をふるべきなり、然^{しか}れども汲^{くみ}み来^きるところの大海^{たいかい}の一滴^{さしお}を聞^ききて又他^た方^{ほう}の大海^{たいかい}の水を求めん事は大僻^{びやくあん}案^{あん}なり大愚癡^{ぐち}なり、法華^{ほけきよう}經^{きやう}の大海^{たいかい}の智慧^{ちえ}の水を受けたる根源^{こんげん}の師^しを忘^{わす}れて余^{よそ}心をうつさば必ず輪廻^{りんね}生死^{しやうじ}のわざはいなるべし、但^{ただ}し師^しなりと

あやまり

も誤ある者をば捨つべし又捨てざる義も有るべし世間・仏法の道理に
よるべきなり、末世の僧等は仏法の道理をば・しらずして我慢に著して
師をいやしみ檀那をへつらふなり、但正直にして少欲知足たらん僧こそ
真実の僧なるべけれ、文句の一に云く既に未だ真を發さざれば第一義
天に慙じ諸の聖人に愧ず即是れ有羞の僧なり觀慧若し
發するは即真実の僧なり」云云、涅槃經に云く若し善比丘あつて法を
壞る者を見て置いて呵責し驅遣し挙処せずんば当に知るべし是の人は
仏法の中の怨なり、若し能く驅遣し呵責し挙処せんは是れ我が弟子
其の声聞なり」云云、此の文の中に見壞法者の見と置不呵責の置とを
能く能く心腑に染む可きなり、法華經の敵を見ながら置いてせめずん
ば師檀ともに無間地獄は疑いなるべし、南岳大師の云く諸の惡人
と俱に地獄に墮ちん」云云、謗法

を責めずして成仏じやうぶつを願はば火の中に水を求め水の中に火を尋たずぬるが
如ごとくなるべしはかなし・はかなし、何いかに法華經ほけきやうを信じ給たまうとも謗法ぼうぼうあら
ば必ず地獄じごくにをつべし、うるし千ばいに蟹の足一つ入れたらんが如ごとし、
毒氣どくけ深入・矢本心ほんしん故は是これなり、經に云く、在在諸の仏土に常に師と
俱ともに生ぜん」又云く、君もし法師ほふしに親近しんこんせば速すみやかに菩薩ぼさつの道を
得ん是この師に隨順ずいじゆんして学せば恒沙ごうしやの仏を見たてまつることを得ん」釈に
云く、本もと此の仏に従つて初めて道心どうしんを發おこし亦此の仏に従つて不退地ふたいに住
す」又云く、初め此の仏・菩薩ぼさつに従つて結縁けちえんし還此の仏菩薩ぼさつに於て成就
す」云云、返す返すも本従たがへずして成仏じやうぶつせしめ給たまうべし、釈尊しゃくそんは
一切衆生いっさいしじゆじやうの本従の師にて而も主親の徳を備給たまう、此法門ほうもん
を日蓮申にぢれんもうす故に忠言耳さからに逆さかう道理どうりなるが故に流罪ゆえせられ命にも及びし
なり、然しかれどもいまだこりず候・法華經ほけきやうは種たねの如く仏はうへての如く衆生しじゆじやう

は田の如くなり、若し此等の義をたがへさせ給はば日蓮も後生は助け
申すまじく候、恐恐謹言。

建治二年丙子八月三日

曾谷殿

日蓮花押

◆一六五

曾谷入道殿御返事

1057p

妙法蓮華經みょうぼうれんげきょう一部一卷小字經、御供養のために御布施ふせに小袖・二重・
鷲目十貫・並に扇百本、文句もんくの一に云く 如是によぜとは所聞しよもんの法体ほつたいを挙ぐ」
と、記の一に云く 若し超八の如是によぜに非ずんば安いずくんぞ此の經の所聞しよもんと為
さん」云云、華嚴經けこんきょうの題に云く 天方広仏・華嚴經けこんきょう、如是によぜ我聞がもん」云云、
摩訶般若波羅蜜經まかはんにかはらみつ、如是によぜ我聞がもん」云云、大日經だいにとちきょうの題に云く 天毘盧遮那
・神變加持經しんぺんかじきょう、如是によぜ我聞がもん」云云、一切經いっさいきょうの如是によぜは何なる如是によぜぞやと尋ぬ
れば、上の題目だいもくを指して如是によぜとは申すなり、仏、何の經いすれにても・とかせ
給ひし其の所詮の理をさして題目だいもくとはせさせ給ひしを、阿難・文殊・

金剛手等・滅後に結集し給ひし時、題目をうちをいて、如是我聞と申せしなり、一經の内の肝心は題目におさまれり、例せば天竺と申す国あり、九万里・七十箇国なり、然れども其中の人畜・草木・山河・大地・皆月氏と申す二字の内にれきれたり、譬へは一四天下の内に四洲あり、其の中の一切の万物は月に移て、すこしもかくるる事なし、經も又かくのごとく、其

の經の中の法門は其の經の題目の中にあり、阿含經の題目は一經の所詮・無常の理をおさめたり、外道の經の題目のあうの二字にすぐれたる事百千万倍なり、九十五種の外道・阿含經の題目を聞てみな邪執を倒し、無常の正路におもむきぬ、般若經の題目を聞ては体空・但中・不但中の法門をさととり、華嚴經の題目を聞く人は但中・不但中のさとあり、大日經・方等・般若經の題目を聞く人は、或は析空、或は体

空・或は但空・或は不但空・或は但中・不但中

の理をばさとれども、いまだ十界互具・百界千如・三千世間の妙覺の
功德をばきかず、その詮を説かざれば、法華經より外は理即の凡夫な
り、彼の經經の仏・菩薩はいまだ法華經の名字即に及ばず、何に況や
題目をも唱へざれば觀行即にいたるべしや、故に妙樂大師の記に云く
若し超八の如是に非ずんば、安んぞ此の經の所聞と為さん」云云、

かれがれ 彼彼の諸經の題目は八教の内なり、網目の如し、此の經の題目は八教
の綱目に超えて大綱と申す物なり、今妙法蓮華經と申す人人はその心
をしらざれども、法華經の心をうるのみならず、一代の大綱を覺り給
へり、例せば一、二、三歳の太子位につき給ひぬれば、国は我が所領な
り、摂政関白已下は我が所従なりとは、しらせ給はねども、なにも此
の太子の物なり、譬へば小兒は分別の心なけれども、悲母の乳を口にの
みぬれば自然に生長するを、趙高が様に心おごれる臣下ありて、太子
をあなづれば身をほろぼす、諸經・諸宗の学者等、法華經の題目ばか
りを唱ふる太子をあなづりて、趙高が如くして無間地獄に墮つるなり、
又法華經の行者の、心もしらず題目計りを唱ふるが、諸宗の智者にお
どされて退心をおこすは、こがいと申せし太子が趙高におどされ・ころ
されしが如し。

南無妙法蓮華經と申すは一代の肝心たるのみならず、法華經の心な

り、体なり、所詮なり、かかるいみじき法門なれども仏滅後・二千二百

二十余年の間・月氏に付法蔵の二十四人弘通し給はず、漢土の天台・

妙樂も流布し給はず、日本国には聖徳太子・伝教大師も宣説し給は

ず、されば和法師が申すは僻事にてこそ有るらめと諸人疑て信ぜず、

是れ又第一の道理なり、譬へは昭君などを、あやしの兵などがお

かしたてまつるを・みな人よも・さはあらじと思へり、大臣公卿などの

様なる天台・伝教の弘通なからん法華經の肝心・南無妙法蓮華經を、

和法師程のものがいかで唱ふべしと云云、汝等是を知るや・鳥と申す

鳥は無下のげす鳥なれども、驚☆の知らざる年中の吉凶を知れり、

蛇と申す虫は竜象に及ばずとも、七日の間の洪水を知るぞかし、設い

竜樹天台の知り給はざる法門なりとも

經文きやうもん顯然けんねんならばなにをか疑うたがいはせ給ふべき、日蓮にぢれんをいやしみて南無なむ妙法蓮華經みよほうれんげきやうと唱へさせ給はぬは、小兒しょうにが乳をうたがふて・なめず病人が醫師くすしを疑うたがいて藥を服せざるが如し、竜樹りゅうじゅ・天親てんじん等は是を知り給へども、時なく機きなければ弘通ぐつうし給はざるか、余人は又しらずして宣伝せんでんせざるか、仏法ぶつぽうは時により機きによりて弘ひろまる事なれば、云ふにかひなき日蓮にぢれんが時にこそあたりて候らめ。

所詮妙法蓮華經の五字をば當時の人人は名と計りと思へり、さにては候はず・体なり・体とは心にて候、章安云く蓋し序王は經の玄意を叙し、玄意は文の心を述す」云云、此の釈の心は妙法蓮華經と申すは文にあらず、義にあらず、一經の心なりと釈せられて候、されば題目をはなれて法華經の心を尋ぬる者は、☆をはなれて肝をたづねし・はかなき龜なり、山林をすてて菓を大海の辺にもとめし☆猴なり、はかなし・はかなし。

建治三年丁丑霜月二十八日

日蓮花押

曾谷次郎入道殿

◆一六六

曾谷殿御返事

弘安二年八月

五十八歳御

燒米二俵給畢ぬ、米は少と思食し候へども人の寿命を継ぐ者にて

候、命をば三千大千世界にても買はぬ物にて候と仏は説かせ給り、米

は命を継ぐ物なり譬えば米は油の如く命は燈の如し、法華經は燈

の如く行者は油の如し檀那是油の如く行者は燈の如し、一切の百味

の中には乳味と申して牛の乳第一なり、涅槃經の七に云く猶諸味の中

に乳最も為れ第一なるが如し」云云、乳味をせんずれば酪味となる

酪味をせんずれば乃至醍醐味となる

醍醐味は五味の中の第一なり、法門を以て五味にたとへば儒家の三千・

外道の十八大經は衆味の如し、阿含經は醍醐味なり、阿含經は乳味の

如く觀經等の一切の方等部の經は酪味の如し、一切の般若經は生蘇味

・華嚴經は熟蘇味・無量義經と法華經と涅槃經とは醍醐のごとし又

涅槃經は醍醐のごとし法華經は五味の主の如し、妙樂大師

云く君し教旨を論ずれば法華は唯開權顯遠を以つて教の正主と為す

ひとり妙の名を得る意此に在り」云云、又云く故に知んぬ法華は為れ

醍醐の正主」等云云、此の釈は正く法華經は五味の中にはあらず此の

釈の心は五味は

じゅみょう

じゅみょう

てんだいしゅう

壽命をやしなふ壽命は五味の主なり、天台宗には二の意あり一には

けこん

ほうとう

はんにか

ねはん

ほっけ

だいいみ

なり、此の釈の心は爾前

にぜん

と法華とを相似せるにいたり世間の学者等・此の筋のみを知りて

ほけき

ほうもん

めいわく

せけん

がくしや

此の筋のみを知りて

法華経は五味の主と申す法門に迷惑せるゆへに諸宗にたばらかさるる

なり、開未開・異なれども同じく円なりと云云是は迹門の心なり、

諸経は五味法華経は五味の主と申す法門は本門の法門なり、此の法門

は天台・妙楽粗書かせ給い候へども分明ならざる間・学者の存知すく

なし、此の釈に若論教旨とかかれて候は法華経の題目を教旨とはかか

れて候、開権と申すは五字の中の華の一字なり顕遠とかかれて候は

五字の中の蓮の一字なり独得妙名とかかれて候は妙の一字な

り、意在於此とかかれて候は法華経を一代の意と申すは題目なりとか

かれて候ぞ、此れを以て知んぬべし法華経の題目は一切経の神・

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

一切經の眼目なり、大日經等の一切經をば法華經にてこそ開眼供養すべき処に大日經等を以て一切の木画の仏を開眼し候へば日本国の一切の寺塔の佛像等形は仏に似れども心は仏にあらず九界の衆生の心なり、愚癡の者を智者とすることは是より始まり、国のついでのみ入て祈とならず還て仏變じて魔となり鬼となり国主乃至万民をわづらはす是なり、今法華經の行者と檀那との出来する故に百獸の師子王をいとひ草木の寒風をおそるるが如し、是は且くをく法華經は何故ぞ諸經に勝れて一切衆生の爲に用いる事なるぞと申すに譬えば草木は大地を母とし虚空を父とし甘雨を食とし風を魂とし日月をめのととして生長し華さき菓なるが如く、一切衆生は実相を大地とし無相を虚空とし一乗を甘雨とし已今当第一の言を大風とし定慧力莊嚴を日月として妙覺の功德を生長し大慈大悲の華さかせ安樂仏果

の菓このみなつて一切衆生いっさいしゅじょうを養たまひ給ふ、一切衆生又食するによりて寿命じゅみょうを持もつ、食に多数あり土を食し水を食し火を食し風を食する衆生しゅじょうもあり、求羅ぐらと申もうす虫は風を食す・うぐろもち

と申もうす虫は土を食す、人の皮肉・骨髓こつずい等を食する鬼神きじんもあり、尿糞等を食する鬼神きじんもあり、寿命じゅみょうを食する鬼神きじんもあり、声を食する鬼神きじんもあり、石を食するいをくろがねを食するばくもあり、地神・天神てんじん・竜神りゅうじん・

日月・帝釈たいしゃく・大

梵王・二乗・菩薩・仏は仏法をなめて身とし魂とし給ふ、例せば乃往
過去に輪陀王と申す大王ましましき一閻浮提の主なり賢王なり、此の
王はなに物をか供御とし給うと申せば白馬の鳴声をきこしめして身
も生長し身心も安穩にしてよをたもち給う、れいせば蝦蟇と申す虫の
母のなく声を聞いて生長するがごとし、秋のはぎのしかの鳴くに華のさ
くがごとし、象牙草のいかづちの声にはらみ柘榴の石にあふてさかうる
がごとし、されば此の王・白馬を

・をほくあつめて・かはせ給ふ、又此の白馬は白鳥をみてなく馬なれば、
をほくの白鳥をあつめ給いしかば我が身の安穩なるのみならず百官・方
乗もさかへ天下も風雨・時にしたがひ他国もかうべをかたぶけて・すねん
すごし給うにまつり事のさをいにやはむべりけん又宿業によつて果報や
尽きけん・千万の白鳥一時にうせしかば又無量の白馬もなく事やみぬ、

大王は白馬はくばの声をきかざりしゆへに華のしばめるがごとく月のしよくするがごとく、御身おんみ

の色かはり力よはく六根ろっこんもうもうとしてぼれたるがごとくありしかば、きさきももうもうしくならせ給たまひい百官万乗もいかんがせんとなげき、天もくもり地もふるひ大風たいふうかんばちしけかちやくびように人の死する事肉はつか骨はかはらとみへしかば他国たこくよりも・をそひ来れり、此の時大王だいおういかんがせんと・なげき給たまひいしほどに・せんする所は仏神ぶっしんにいのるには・しくべからず、此の国に・もとより外道げどうをほく国国をふさげり、又仏法ぶつぽうという物を・をほ

くあがめをきて国の大事だいじとす、いづれにてもあれ白鳥をいだして白馬はくばをなかせん法をあがむべし、まづ外道げどうの法にをほせつけて数日をこなはせけれども白鳥一疋もいでこず白馬はくばもなく事なし、此の時外道げどうのいのりを

・とどめ

て仏教ぶつぎょうにをほせつけられけり、其そのの時馬鳴菩薩めみょうぼさつと申もうす小僧こぞう一人あり・
めしだいされければ此このの僧たまたの給たまはく國中けどうに外道じやぼうの邪法じやぼうをとどめて仏法ぶつぼう
を弘通ぐつうし給たまうべくば馬うまをなかせん事ことやすしといふ、勅宣ちよくせんに云いくをほせ
のごとくなるべしと、其そのの時ときに馬鳴菩薩めみょうぼさつ・三世十方さんぜじゅうほうの仏ぶつにきしやうし
申まをせしかば・たちまちに白鳥しゅつたい出来きせり、白馬はくばは白鳥しゅつたいを見て一ひとこへなきけ
り、大王だいおう・馬うまの聲こゑを一ひとこへきこしめして眼まなこを開ひらき給たまい白鳥しゅつたい二ふたひき乃な至いたし
百千ひゃくせんいできたりければ百千ひゃくせんの

白馬はくばいちじ一時よろこに悦よろこびなきけり、大王だいおうの御ごいろ・なをること日ひしよくの・ほんに
ふくするがごとし、身の力・心のはかり事・先先せんまんには百千万せんまんばいこへた
り、きさきも・よろこび大臣だいじん・公卿くぎよういさみて万民ばんみんもたな心をあはせ他国たこく
も・かうべをかたぶけたりとみへて候。

今のよも又是またにたがうべからず、天神七代てんじん・地神五代ちじんごだい・已上十二代は
成劫じようこのごとし・先世せんぜのかいりきと福力ふくりきとによつて今生こんじようのはげみなければど
も国もおさまり人の寿命じゆみようも長し、人王にんおうのよとなりて二十九代があひだ
は先世せんぜのかいりきも・すこしよはく今生こんじようのまつり事もはかなかりしかば
国にやうやく三災さんさい・七難ひちなんをこりはじめたり、なを・かんど

より三皇さんこう・五帝ごていの世を・をさむべきふみわたりしかば其それをもつて神をあ
がめて国の災難さいなんをしづむ、人王第三十代欽明天王きんめいの世となりて国には
先世せんぜのかいふくうすく悪心あくしんがうじやうの物をほく出来しゆつたいて善心ぜんしんをろかに

悪心あくしんは・かしこし、外典げてんのをしへはあさしつみをもきゆへに外典げてんすてら

れ内典ないてんになりしなり、れいせばもりやは日本にほんの天神七代てんじん

・地神五代ちじんごだいが間の百八十神をあがめたてまつりて仏教ぶつぎょうをひろめずして・

もとの外典げてんとなさんといのりき、聖徳太子しょうとくたいしは教主きょうしゅ釈尊しやくそんを御本尊ごほんぞんとして

法華經ほけきょう・一切經いっさいきょうをもんしよとして両方りやうほうのせうぶありしに・ついには神は

まけ仏はかたせ給たまいて神国しんこくはじめて仏国ぶつこくとなりぬ、天竺てんじく漢土かんどの例のごと

し、今此三界こんしさんがい・皆是かいぜがう我有きやうもんの經文きやうもんあらはれさせ給たまうべき

序ついでなり、欽明きんめいより桓武かんむにいたるまで二十よ代・二百六十余年が間・仏を

大王だいおうとし神を臣として世を・をさめ給たまいしに仏教ぶつぎょうはすぐれ神はをとり

たりしかども未いまだよをさまる事なし。

いかなる事にやとうたがはりし程に桓武かんむの御宇ぎように伝教大師でんぎやうだいしと申もうす

聖人出来しょうにんしゅつたいして勘かんえて云いわく神はまけ仏はかたせ給たまいぬ、仏は大王だいおう・神は臣

かなれば上下あひついで、れいぎただしければ國中をさまるべしと、をも
ふに国のしづかならざる事ふしんなるゆへに一切經をかんがへて候へば
道理にて候けるぞ、仏教に、をほきなるとがありけり、一切經の中に
法華經と申す大王をはします、ついで華嚴經・大品經・深密經・阿含經
等はあるいは臣の位あるいは

さふらいのくらい・あるいはたみの位なりけるを・或は般若経は法華経
にはすぐれたり三論宗・或は深密経は法華経にすぐれたり法相宗・或
は華嚴経は法華経にすぐれたり華嚴宗・或は律宗は諸宗の母なりなん
ど申して一人として法華経の行者なし、世間に法華経を説誦するは
還つてをこつきうしなうなり、之に依つて天もいかり守護の善神も力よ
はし」云云、所謂法華経を・ほむといえども返つて法華の心をころす」
等云云、南都・七佛寺・
十五大寺・日本国中の諸寺・諸山の諸僧等・此のことばを・ききて・をほ
きにいかり天竺の大神・漢土の道士・我が国に出来せり所謂最澄と
申す小法師是なり、せんする所は行きあはむずる処にてかしらをわれ
・かたをきれ・をとせ・

うてのれと申せしかども桓武天皇と申す賢王たづね・あきらめて六宗

はひが事なりけりとて初めてひへい山をこんりうして天台法華宗とさだめをかせ円頓の戒を建立し給うのみならず、七大寺・十五大寺の六宗の上に法華宗をそへをかる、せんする所六宗を法華經の方便となされしなり、れいせば神の仏にまけて門まほりとなりしが

ごとし、日本国も又又かくのごとし法華最第一の經文初めて此の国に顯れ給い能竊為一人・說法華經の如來の使初めて此の国に入り給いぬ、桓武・平城・嵯峨の三代二十余年が間は日本一州・皆法華經の行者なり、しかれば梅檀には伊蘭釈尊には提婆のごとく伝教大師と同時に弘法大師と申す聖人出現せり、漢土にわたりて大日經・真言宗をならい日本国にわたりてありしかども伝教大師の御存生の御時はいたう法華經に大日經すぐれたりといふ

事はいはざりけるが、伝教大師去ぬる弘仁十三年六月四日にかくれさ

せ給^{たま}いてのちひまをえたりとや・をもひけん、弘法大師去^{こうぼうだいし}ぬる弘仁十四

年正月十九日に真言第一・華嚴第二・法華第三・法華經は戲論^{けろん}の法・

無明^{むみょう}の辺域^{へんいき}・天台宗等は盗人^{ぬすびと}なりなんど申^{もう}す書どもをつくりて、嵯峨^{さが}

の皇帝^{こうてい}を申^{もう}しかすめたてまつりて七宗に真言宗を申^{もう}しくはえて七宗を

方便^{ほうべん}とし真言宗は真実^{しんじつ}なりと申^{もう}し立て畢^{おわ}んぬ。

其^その後・日本一州^{にほん}の人ごとに真言宗になりし上其^その後又伝教大師^{でんぎょうだいし}

の御弟子慈覺^{おんでしじかく}と申^{もう}す人漢土^{かんとど}にわたりて天台^{てんだい}

・真言しんごんの二宗の奥義をきはめて帰朝きちやうす、此の人金剛頂經こんごうちやうぎやう・蘇悉地經そしつちぎやうの二部の疏じよをつくりて前唐院ぜんとういんと申もうす寺えいざんを叡山もうに申もうし立て畢おわんぬ、此これには大日經第一法華經第二其その中に弘法こうぼうのごとくなる過言かごんかずうべからず、せむぜむにせうせう申もうし畢おわんぬ、智証大師ちしやうだいし又此の大師だいしのあとをついでをんじやう寺ぐつうに弘通くつうせり、たうじ寺とて国のわざはいとみゆる寺これ是なり、叡山えいざんの三千人さんぜんは慈覺じかく・智証ちしやうをはせずば真言しんごんすぐれたりと申もうすをばもちいぬ人もありな

ん、円仁大師えんにんだいしに一切いっさいの諸人しよにんくちをふさがれ心をたばらかされてことばをいだす人なし、王臣おうしんの御ごきえも又伝教でんぎやう・弘法こうぼうにも超過ちやうかしてみ候まうへばえい山七寺にほん日本一州一同に法華經ほけきやうは大日經だいにちぎやうにをとりと云云、法華經ほけきやうのぐつう弘通くつうの寺ぐつう寺ぐつうごとに真言しんごんひろまりて法華經ほけきやうのかしらとなれり、かくのごとくして・すでに四百余年になり候いぬ、やうやく此の邪見じやけんぞうじやうし

て八十一ないし乃至五の五王すでにうせぬぶつぼう仏法うせしかば王法すでにつき
畢おわんぬ。

あまつさへぜんしゅう禪宗と申すもう大邪法じやほう念仏宗ねんぶつしゅうと申すもう小邪法じやほう真言しんごんと申すもう
大惡法だいくぼう此の惡宗はなをならべて一国にさかんなり、天照太神てんしやうだいじんはたましい
をうしなつてうぢごをまほらず八幡大菩薩はちまんだいばさつは威力いりよくよはくして国を守護しゆご
せずけつくは他国たこくの物とならむとす、日蓮にちれん此のよしを見るゆへに
仏法中怨ぶつぼうちゅうおん・俱墮地獄等ぐだじごくのせめをおそれて粗国主ほほこくしゅにしめせども、かれらが
邪義じやぎにたばらかされて信じ給たまう事なし還かえつて大怨敵おんてきとなり給たまいぬ
法華經ほけきやうをうしなふ人国中に充満じゅうまんせり

と申せども人しる事なければただぐちのとがばかりにてある事今は又
法華經ほけきやうの行者出来ぎやうじやしゅつたいせり日本国にほんこくの人人癡ひとびとの上にいかりををこす邪法じやほうを
あいし正法しやうほうをにくむ、三毒さんどくがうじやうなる一国いかでか安穩あんのんなるべき、

壊劫えこうの時は大の三災さんさいをこる、いはゆる火災水災風災なり、又滅劫の時は

小の三災さんさいをこる、ゆはゆる飢渴けかち疫病えきびよう合戦けかちなり、飢渴

は大貪おほどんよりをこりやくびやうはぐちよりをこり合戦しんには瞋恚しんによりをこる、

今・日本国にほんこくの人人ひとびと四十九億九万四千八百二十八人の男女にょにん人人ことなれ

ども同じく一の三毒さんどくなり、所謂いわゆる南無妙法蓮華經なむみょうぼうれんげきやうを境としてをこれる

三毒さんどくなれば人ごとに釈迦しやか・多宝たほう・十方じゆつぽうの諸仏しよぶつを一時いちじにのりせめ流しう

しなうなり、是れこ即ち小の三災さんさいの序ついでなり。

しかるに日蓮にちれんが一いちるいいかなる過去かこの宿しゆくしうにや法華經ほけきやうの題目だいもくのだ
んとなり給たまうらん、是これをもつてをばしめせ今梵天ぼんでん・帝釈たいしやく・日月にちがつ・四天してん・
天照太神てんしやうだいじん・八幡大菩薩はちまんだいぼさつ日本国にほんこくの三千一百三十二社さんぜんの大小だいしやうのじんぎは
過去かこの輪陀王りんたおうのごとし、白馬はくばは日蓮にちれんなり白鳥いちもんは我らが一門いちもんなり白馬はくばの
なくは我等われらが南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうのこえなり、此の声をきかせ給たまう梵天ぼんでん・
帝釈たいしやく・日月にちがつ・四天してん等いかでか色をましひかりをさかんになし給たまはざるべ
き、いかでか我等われらを守護しゆごし給たまはざるべきとつよづよと・をばしめすべし。
抑そもそも貴辺きへんの去ぬる三月いの御仏事ぶつじに鷲目がもくそ其の数有そりしかば今年一百よ
人の人を山中にやしなひて十二時の法華經ほけきやうをよましめ談義して候ぞ、
此これらは末代惡世まつだいあくせには一えんぶだい第一だいいちの仏事ぶつじにてこそ候へいくそば
くか過去かこの聖靈しやうりやうもうれしくをばすらん、釈尊しやくそんは孝養かうようの人を世尊せそんとな
づけ給たまへり貴辺きへんあに世尊せそんにあらずや、故大進阿闍梨あじやりの事なげかしく候へ

ども此れ又法華經の流布の出来すべきいんえんにてや候らんとをぼしめすべし、事生命ながらほ其の時申すべし。

弘安二年己卯八月十七日 日蓮花押

曾谷道宗御返事

◆一六七 曾谷二郎入道殿御返事

106

5p

去る七月十九日の消息、同三十日到来す、世間の事は且らく之を置く、専ら仏法に逆ふこと法華經の第二に云く 其人命終入阿鼻獄等云云、問て云く、其の人とは、何等の人を指すや、答て云く、次上に

云く「唯我一人・能為救護・雖復教詔・而不信受」と、又云く

「君人不信」と、又云く「或復瞶瞶」と、又云く「見有誦誦書持經者・

輕賤憎嫉・而懷結恨」と、又第五に云く「生疑不信者・即当墮惡道」と、

第八に云く「君有人輕毀之言・汝狂人耳・空作是行終無所獲」等云云、

其人」とは、此れ等の人人を指すなり、彼の震旦国の天台大師は、南

北十師等を指すなり、此の日本国の伝教大師は、六宗の人人と定めた

るなり、今日蓮は弘法・慈覺・智証等の三大師、並に三階・道綽・善導等

を指して其の人と云ふなり、入阿鼻獄とは、涅槃經第十九に云く「假使

ひ一人独り是の獄に墮ち、其の身長大にして八万由延なり、其の中間

に☆満して空しき処無し、其の身周匝して種種の苦を受く設ひ多人

有て、身亦☆満すとも相い妨碍せず」、同三十六に云く「沉没して阿鼻

地獄に在て、受くる所の身形・縱広八万四千由旬ならん」等云云、普賢

經に云く、ほうとう万等經を謗ずる是の大惡報惡道に墮だつべきこと暴雨にも過ぎ必定して当に阿鼻地獄あびじごくに墮おつべし」等とは、阿鼻獄あびごくに入る文なり。

にちれん日蓮云く、夫れ日本国にほんこくは、道は七、国は六十八箇国、郡は六百四、郷

は一万余、長さは三千五百八十七里、人数にんずうは四十五億八万九千六百

五十九人、或あるは云く四十九億九万四千八百二十八人なり、寺は一萬

一千三十七所、社は三千一百三十二社なり、今法華經ほけきようの「入阿鼻獄にゅうあびごく」

とは、此れ等の人人ひとびとを指すなり、問て云く、衆生しゆじように於て惡人善人の

二類にるい有り、生處せいじよも又善惡ぜんあくの二道にとう有るべし、何ぞ日本国にほんこくの一切衆生いっさいしゆじよう、一

同に入阿鼻獄にゅうあびごくの者と定むるや、答て云く、人数にんずう多しと雖いえども業を造るこ

と是れ一なり、故に同じく阿鼻獄あびごくと定むるなり。

うたがい疑て云く日本国にほんこくの一切衆生いっさいしゆじようの中に、或あるは善人ぜんにん、或あるは惡人あくにんあり善人ぜんにん

とは五戒ごかい・十戒、乃至ないし二百五十戒等なり、惡人あくにんとは、殺生せつじよう・偷盜とんとう、乃至ないし

五逆・十惡等是なり、何ぞ一業と云ふや、答て云く、夫れ小善・小惡は
異なりと雖も、法華經の誹謗に於ては、善人惡人・智者愚者、俱に妨げ
之れ無し、是の故に同じく入阿鼻獄と云ふなり、問て云く、何を以てか
日本國の一切衆生を、一同に法華誹謗の者と言ふや、答て云く、
日本國の一切衆生衆多なりと雖も四十五億八万九千六百五十九人に
過ぎず、此等の人人貴賤上下の勝劣有りと雖も是くの如きの人人の憑
む所は唯三大師に在り

師とする所三大師だいしを離る事無し余残よざんの者有りと雖も信行・善導ぜんどう等の家
を出ずべからざるなり、問て云く三大師だいしとは誰人だれびとぞや、答て曰く、弘法こうぼう
・慈覺じかく・智証ちしょうの三大師だいしなり、疑て云く此の三大師だいしは何なる重科有るに
依て、日本国にほんこくの一切衆生いっさいしゅじやう於經文きやうもんの其の人の内に入るや、答て云く、此
の三大師だいしは大小乗持戒だいしやうじやうの人、面には八万の威儀いぎを備へ、或は三千等
之を具す、顯密兼学けんみつの智者ちしやなり、然れば則ち、日本国にほんこく四百余年の間、
上一人より下万民ばんみんに至るまで、之を仰ぐこと日月にちがつの如く、之を尊むこ
と世尊せそんの如し、猶徳の高きこと須弥しゆみにも超え、智恵の深きことは蒼海に
も過ぎたるが如し但恨うらむらくは法華經ほけきやうを大日真言經だいにちしんごんに相對そうたいして勝劣しょうれつ
を判ずる時は、或は戲論あはの法と云ひ、或は第二第三と云ひ、或は教主あは
を無明の辺域あはと名け、或は行者ぎやうじやをば盜人ぬすびとと名く彼の大莊嚴だいそうごん仏の末の六
百四万億那由他なゆたの四衆ししゆうの如き、各各

の業因異りと雖も、師の苦岸等の四人と俱に同じく無間地獄に入りぬ、又師子音王仏の末法の無量無辺の弟子等の中にも貴賤の異有りと雖も同じく勝意が弟子と為るが故に一同に阿鼻大城に堕ちぬ
今日日本国亦復是くの如し。

去る延暦弘仁年中、伝教大師六宗の弟子檀那等を呵責する語に云く其の師の堕つる所弟子亦堕つ、弟子の堕つる所檀越亦堕つ、金口の明説慎まざるべけんや、慎まざるべけんや」等云云、疑て云く、汝が分齊何を以て三大師を破するや、答て云く、予は敢て彼の三大師を破せざるなり、問て云く、汝が上の義は如何、答て云く、月氏

より漢土本朝に渡る所の経論は五千七十余卷なり、予粗之を見るに、弘法・慈覚・智証に於ては、世間の科は且く之を置く、仏法に入ては、謗法第一の人人と申すなり、大乘を誹謗する者は、箭を射るより早く

地獄に墮すとは如来の金言なり、將又謗法罪の深重は弘法・慈覺等一同定め給ひ畢ぬ、人の語は且く之を置く、釈迦・多宝の二仏の金言虚妄ならずんば、弘法・慈覺・智証に於ては定めて無間・大城に入らん、十方分身の諸仏の舌墮落せずんば、日本国中の四十五億八万九千六百五十九人の一切衆生は、彼の苦岸等の弟子檀那等の如く阿鼻地獄に墮て熱鉄の上に於て仰ぎ臥して九百万億歳伏臥して九百万億歳・左脇に臥して九百万億歳・右脇に臥して九百万億歳、是くの如く熱鉄

の上さんぜんに在あて三千六百万億歳なり、然して後、此あの阿鼻びより転じて他方たほうに生だいじこくれて大地獄くに在あて、無せんまん数百千万億那由なゆた佗歳大苦惱くのうを受けん、彼はしょうじようきよう小乗經を以ごんて權大乘だいじようを破つみせしも、罪つみを受うくることかくのごと是かくのごとの如ごとし、況や今三大師だいしは未顯みけん真実しんじつの經を以ごんて、三世さんぜの仏陀ぶつだの本懷ほんかいの說を破くするのみに非あまつず、剩いっさいしゆじようじようぶつさえ一切衆生成仏じゆじようぶつの道を失ふふ、深重じんじゆうの罪つみは、過げん・現みらい・未みらい來くわいの諸しよぶつ仏ぶつも、争あか之をを窮きうむべけんや、争あか之をを救きうふべけんや。

法華經ほけきようの第四よに云いく「已說こんせつとうせつ今說こんせつとうせつ當說とうせつ 而於其中此法華經ほけきよう 最たきよう為き難信難解なんしんなんげ」、又云いく「最在其上やくおう」、並なに藥王十喻やくおうじゆ等云云、他經たきように於おては、華嚴けこん・方等ほうとう・般若はんにか・深密じんみつ・大雲みづこん・密嚴こんごうみようきよう・金光明經きんくわうみんぎよう等の諸教しよきようの中に、きようぎよう經經しんじんの勝劣しやうれつ之をを說いくと雖あも、或あるは小乘經しょうじようきように對たいして此だいじちの經を第一だいと曰いひ、或あるは眞俗二諦しんじよくにに對たいして中道ちゆうどうを第一だいと曰いひ、或あるは印真言等しんじんごんごんを說いくを以だいじちて第一だいと為なす、此等の說有りと雖も、全ぜんく已今當だいじちの第一だいに非

ざるなり、然而るに末の論師人師等、謬執の年積り、門徒又繁多なり。

爰に日蓮彼の依經に無きの由を責むる間・弥よ瞋恚を懷て是非を

糾明せず唯大妄語を構へて国主・国人等を誑惑し、日蓮を損ぜんと欲

す、衆千の難を蒙らしむるのみに非ず兩度の流罪剩へ頸の座に及ぶ

是なり、此等の大難忍び難き事不輕の杖木にも過ぎ、将又勸持の刀杖

にも越えたり、又法師品の如きは宋代に法華經を弘通せん者は、如来

の使なり此の人を輕賤するの輩の罪は、教主釈尊を一中劫蔑如するに

過ぎたり」等云云、今日日本国には提婆達多・大慢婆羅門等が如く無間

地獄に墮つべき罪人、國中三千五百八十七里の間に、満つる所の四十五

億八万九千六百五十九人の衆生之れ有り彼の提婆・大慢等の無極の

重罪を、此の日本国四十五億八万九千六百五十九人に対せば、輕罪

中の輕罪なり問ふ其の理如何答ふ彼等は、惡人為りと雖も全く法華を

誹謗する者には非ざるなり又提婆達多は恒河第二の人にして第二に
一闡提なり今日いま日本ほんこく四十五億八万九千六百五十九人は皆恒河第一の
罪人ざいにんなり、然れば則ち提婆だいばが三逆罪さんぎやくざは輕毛かやうの如し日本ほんこくの上うへに挙ぐる
所の人人ひとびとの重罪じゅうざいは猶大石おおいしの如し定めて梵釈ぼんしやくも日本ほんこくを捨て

同生同名も国中の人を離れ、天照太神・八幡大菩薩も争か此の国を守護せん。

去る治承等の八十一二三四五代の五人の大王と頼朝・義時と此の国を御諍ひ有て天子と民との合戦なり猶鷹駿と金鳥との勝負の如くなれば、天子頼朝等に勝たんこと必定なり、決定なり、然りと雖も五人の大王は負け畢ぬ、兎、師子王に勝ちしなり、負くるのみに非ず、剩へ或は蒼海に沈み、或は島島に放たれ、誹謗法華未だ年歳を積まざる時、猶以て是くの如し、今度は彼に似るべからず、彼は但国中の災い許りなり、其の故は粗之を見るに、蒙古の牒状已前に、去る正嘉文永等の大地震・大彗星の告げに依て、再三之を奏すと雖も、国主敢て信用無し、然るに日蓮が勘文粗仏意に叶ふかの故に、此の合戦既に興盛なり、此の国の人人今生には一同に修羅道に墮し、後生には皆

阿鼻大城あびだいじょうに入らん事、疑うたがいひ無き者なり。

爰こゝに貴辺きへんと曰蓮にちれんとは師檀しだんの一分なり、然りと雖も、有漏うろうの依身いしんは
国主こくしゅに随したがふが故に、此こゝの難なんに値あはんと欲ほするか、感涙かんだい押お難なんし、何れの
代しろにか対面たいめんを遂げんや、唯一心いっしんに靈山淨土じょうどを期せらるべきか、設たとひ身
は此こゝの難なんに値あふとも、心こゝろは仏心ぶつしんに同じ、今生けんじやうは修羅道しゆらどうに交はるとも、
後生ごしやうは必ず仏国ぶつこくに居せん、恐恐きようきよう謹言きんげん。

弘安四年閏七月一日

日蓮にちれん

花押かおう

曾谷二郎入道殿御返事そや にゅうどう ごへんじ

◆一六八

秋元殿御返事

文永八年正月

五十歳

御作

1070p

於安房保田

御文委く承り候い畢んぬ、御文に云く末法の始・五百年には・いかなる法を弘むべしと思ひまいらせ候しに聖人の仰を承り候に法華經の題目に限つて弘むべき山・聴聞申して御弟子の一分に定まり候、殊に五節供はいかなる由來・何なる所表・何を以て正意として・まつり候べく候や云云、夫れ此の事は日蓮委しく知る事なし、然りと雖も粗意得て候、根本大師の御相承ありげに候、総じて真言・天台兩宗の習なり、委くは曾谷殿へ申候次での御時は御談合あるべきか、先ず五節

供しだいの次第しだいを案あずるに妙法蓮華經みょうぼうれんげきやうの五字ごじの次第しだいの祭まつりなり、正月しょうがつは妙めうの一字いちじのまつり天照太神てんしやうだいじんを歳としの神かみとす、三月さんがつ三日さんじつは法の一字いちじのまつりなり辰しんを以もつて神かみとす、五月ごがつ五日ごじつは蓮れんの一字いちじのまつりなり午うを以もつて

神かみとす、七月しちがつ七日ごちじつは華けの一字いちじの祭まつりなり申しんを以もつて神かみとす、九月くがつ九日くじつは經きやうの一字いちじのまつり戌しゆを以もつて神かみとす、此こくの如ごとく心得こころえて南無妙法蓮華經なむみょうぼうれんげきやうと唱なへさせ給たまへ現世安穩げんせあんのん・後生善処ごしやうぜんしやうたがい疑ぎなかるべし、法華經ほけきやうの行者ぎやうじやをば一切いっさいの諸天しよてん不退ふたい

に守護しゆごすべき經文きやうもん分明ぶんめいなり、經きやうの第五ごに云いく 謂いて天てん昼夜しよてんに常に法ほふの爲ための故ゆゑに而しかも之これを衛護えいごす」云云、又云いく 天てんの諸もろもろの童子どうじ以もつて給使きやうじを爲なす刀杖とうじやうも加くえず毒どくも害がいする能あたわず」云云、諸天しよてんとは梵天ぼんてん・帝釈たいしやく・日月にちがつ・四大天王しよだいてんわう等らなり、法ほふとは法華經ほけきやうなり、童子どうじとは七曜しちやう・二十八宿にじはちしやく・摩利支天まろしてん等らなり、臨兵闘者皆陳列在前りんぺいとうしやがいかいじんれつざいぜん」是又 刀杖とうじやう不加く」の四字しじなり、

此等は随分の相伝なり能く能く案じ給うべし、第六に云く「一切世間の
治生産業は皆実相と相違背せず」云云、五節供の時も唯南無
妙法蓮華經と唱へて悉地成就せしめ給へ委細は又又申す可く候。

次に法華經は末法の始め五百年に弘まり給ふべきと聴聞仕り
御弟子となると仰せ候事、師檀となる事は三世の契り種熟脱の三益別
に人を求めんや、在在諸の仏土常に師と俱に生れん若し法師に親近
せば速かに菩提の道を得ん、是の師に随順して学ばば恒沙の仏を見
奉る事を得ん」との金言違ふべきや、提婆品に云ふ「所生の処常に此の
經を聞くしの人にはあに貴辺にあらずや、其の故は次上に 未來世中・
若有善男子・善女人」と見えたり、善男子とは法華經を持つ俗の事なり
弥信心をいたし給うべし、信心をいたし給うべし、恐恐謹言。

正月十一日

日蓮花押

秋元殿御返事

保国 安房のほた 俵田〱よ

り出す

◆一六九 秋元御書

弘安三年一月 五十九

歳御作 於身延

1071p

筒御器一具付三十並に蓋付六十送り給ひ候い畢んぬ、御器と申すは
うつはものと読み候、大地くぼければ水たまる青天淨ければ月澄めり、
月出でぬれば水淨し雨降れば草木昌へたり、器は大地のくぼきが如し水
たまるは池に水の入るが如し、月の影を浮ぶるは法華經の我等が身に入
らせ給うが如し、器に四の失あり一には覆と申してうつぶけるなり又は
くつがへす又は蓋をおほふなり、二には漏と申して水もるなり、三には

☆と申してけがれたるなり水淨けれども糞の入りたる器の水をば用ゆる事なし、四には雑なり・飯に・或は糞・或は石・或は沙・或は土などを雑へぬれば人食ふ事なし、器は我等が身心を表す、我等が心は器の如し口も器・耳も器なり、法華經と申すは仏の智慧の法水を我等が心に入れぬれば・或は打ち返し・或は耳に聞かじと左右の手を二つの耳に覆ひ・或は口に唱へじと吐き出しぬ、譬えば器を覆するが如し、或は少し信ずる様なれども又惡縁に値うて信心うすくなり・或は打ち捨て・或は信ずる日はあれども捨つる月もあり是は水の漏が如し、或は法華經を行ずる人の一口は

南無妙法蓮華經一口は南無阿彌陀仏なんど申すは飯に糞を雜へ沙石
を入れたるが如し、法華經の文に但大乘經典を受持することを樂う
て乃至余經の一偈をも受けざれ」等と説くは是なり、世間の学匠は
法華經に余行を雜えても苦しからずと思へり、日蓮もさこそ思ひ候へど
も經文は爾らず、譬えば后の大王の種子を妊めるが又民と・
とつげば王種と民種と雜りて天の加護と氏神の守護とに捨てられ其の
国破るる縁となる、父二人出来れば王にもあらず民にもあらず人非人
なり、法華經の大事と申すは是なり、種熟脱の法門法華經の肝心な
り、三世十方の仏は必ず妙法蓮華經の五字を種として仏になり給へ
り、南無阿彌陀仏は仏種にはあらず真言五戒等も種ならず、
能く能く此の事を習い給べし是は雜なり、此の覆・漏・☆・雜の四の失を
離れて候器をば完器と申して・またき器なり、塹つつみ漏らざれば水

失る事なし、信心しんじんのころ全ければ平等びやうどう大慧だいえの智水ちすい乾く事なし、今此の筒おんうつわの御器ごきは固く

厚うすしく候上・漆うるし淨く候へば法華經ほけきやうの御信力しんりきの堅固けんこなる事を顯あらわし給たまうか、毘沙門天びしゃもんてんは仏に四つの鉢まいを進まいらせて四天下してんげだいいち第一の福天と云はれ給たまふ、淨徳夫人じやうとくふじんは雲雷音王うんらいおんのうぶつに八万四千の鉢まいを供養くやうし進まいらせて妙音菩薩みやうおんぼさつと成たまり給たまふ、今法華經ほけきやうに筒御器つつごき三十盡さら六十進まいらせて争いかでか仏に成たまらせ給たまはざるべき。

抑そも日本国にほんこくと申もうすは十の名あり扶桑ふそう・野馬台やまと・水穂みづほ・秋津洲等あきつしうなり、別あしては六十六箇国島ごこき二つ長さんぜんさ三千余里広さは不定ふじやうなり、或あるは百里ある・或は五百里等、五畿ごき・七道しちどう・郡は五百八十六・郷は三千七百二十九・田の代は上田一万一千一百二十町・乃至ないし八十八万五千五百六十七町・人数にんずうは四十九億八万九千六百五十八人なり、神社じんじやは三千一百三

十二・社寺は一万一千三十七所・男は十九億九万四千八百二十八人・女は二十九億九万四千八百三十人なり、其その男の中に只ただ日蓮にちれん第一だいいちの者なり、何事なにことの第一だいいちとならば男女なんよに惡にくまれたる第一だいいちの者なり、其そのの故ゆえは日本にほん国こくに国多くにく人多たしと云いへども其その心一同いっどうに南無阿弥陀仏なむあみだぶつを口くちずさみとす、阿弥陀仏あみだぶつを本尊ほんぞんとし九方きゅうほうを嫌きらいて西方さいほうを願ねがう、設たとい法華經ほけきょうを行おこなずる人も真言しんごんを行おこなふ人も、戒かいを持もつ者ものも智者ちしやも愚人ぐにんも余行よぎょうを傍ぼうとしねんぶつて念仏を正ただとし罪つみを消くさん 謀はかりごとは

名号なり、故に、或は六万・八万・四十八万返、或は十返・百返・千返なり、而るを日蓮一人・阿弥陀仏は無間の業・禪宗は天魔の所為・真言は亡国の惡法・律宗・持齋等は国賊なりと申す故に上一人より下万民に至るまで父母の敵宿世の敵謀叛夜討強盜よりも、或畏れ、或は瞋り、或は罵り、或は打つ、是を☆る者には所領を与へ是を讃むる者をば其の内を出だし、或は過料を引かせ殺害したる者をば褒美などせらるる上兩度まで御勘氣を蒙れり、当世第一の不思議の者たるのみならず人王九十代仏法渡りては七百余年なれども、かかる不思議の者なし、日蓮は文永の大彗星の如し日本国に昔より無き天変なり、日蓮は正嘉の大地震の如し秋津洲に始めての地天なり、日本国に代始まりてより已に謀叛の者二十六人、第一は大山の王子、第二は大石の山丸、乃至第二十五人は

頼朝第二十六人は義時なり、二十四人は朝は責められ奉り獄門に首
を懸けられ山野に骸を曝す、二人は王位を傾むけ奉り國中を手に
拳る王法既に尽きぬ、此等の人人も日蓮が万人に惡まるるに過ぎず、
其の由を尋ねれば法華經には最第一の文あり、然るを弘法大師は法華
最第三・慈覺大師は法華最第二・智証大師は慈覺の如し、今叡山・東寺
・園城寺の諸僧・法華經に向いては法華最第一と読めども其の義をば第
二・第三と読むなり、公家と武家と

は子細は知ろしめさねども御歸依の高僧等皆此の義なれば師檀一同の
義なり、其の外禪宗は教外別伝と云云・法華經を蔑如する言なり、
念仏宗は千中無一・未有一人得者と申す心は法華經を念仏に對して
挙げて失ふ義なり、律宗は小乘なり正法の時すら仏免し給う事なし
況や末法に是を行じて国主を誑惑し奉るをや、姐己・妹喜・褒似の三

女が三王を誑たばらかして代を失うしないしが如ごとし、かかる惡法国に流布るふして

法華經ほけきようを失うしなう故に安德ゆえ・尊成等たかなりの大王だいおう・天照てんしょう

太神しん・正八幡しょうはちまんに捨てられ給たまいて・或あるは海に沈み・或あるは島に放たれ給たまい

相伝そうでんの所従等しよじゆうに傾けられ給たまいしは天に捨てられさせ給たまう故ぞかし、

法華經ほけきようの御敵ごてきを御歸依ごきえ有りしかども是これを知る人なければ其その失とがを知る

事もなし、知人は起を知り蛇じゃは自ら蛇みづかを識しる」とは是これなり。

にちれん ちじん あら
日蓮は智人に非ざれども蛇は竜の心を知り烏の世の吉凶を計るが
ごと
如し、此の事計りを勘得て候なり、此の事を申すならば須臾に失に当
るべし申さずば又大阿鼻地獄に墮つべし。

ほけきよう なら
法華經を習うには三の義あり一には謗人、勝意比丘・苦岸比丘・
むくろんし だいまんばらもん ごと
無垢論師・大慢婆羅門等が如し、彼等は三衣を身に纏い一鉢を眼に
あたり
当てて二百五十戒を堅く持ちて而も大乘の讎敵と成りて無間・大城
にお
に墮ちにき、今・日本国の弘法・慈覚・智証等は持戒は彼等が如く智慧
は又彼比丘に異ならず、但大日經・真言第一・法華經第二・第三と
申す

にちれん もう
事百千に一つも日蓮が申す様ならば無間・大城にやおはすらん、此の
事は申すも恐れあり増して書き付くるまでは如何と思ひ候へども
ほけきよう さいだいいち
法華經最第一と説かれて候に是を二三等と説まん人を聞いて人を恐れ

国を恐れて申さずば即是彼怨と申して一切衆生の大怨敵なるべき由。

經と釈とのせられて候へば申し候なり、人を恐れず世を憚か

らず云う事我不愛身命但惜無上道と申すは是なり、不輕菩薩の惡口

杖石も他事に非ず世間を恐れざるに非ず唯法華經の責めの苦なれば

なり、例せば祐成・時宗が大将殿の陣の内を簡ばざりしは敵の恋しく恥

の悲しかりし故ぞかし、此れは謗人なり。

謗家と申すは都て一期の間・法華經を謗せず昼夜十二時に行ずれど

も謗家に生れぬれば必ず無間地獄に墮つ、例せば勝意比丘・苦岸比丘

の家に生まれて・或は弟子となり・或は檀那と成りし者共が心ならず

無間地獄に墮ちたる是なり、譬えば義盛が方の者・軍をせし者はさて

置きぬ腹の内に有りし子も産を待たれず母の腹を裂かれしが如し

、今日蓮が申す弘法・慈覺・智証の三大師の法華經を正しく無明の

辺域・虚妄へんいき　こもうの法と書かれて候は若し法華經ほけきようの文実ならば叡山・東寺・

園城寺七おんじようじ　ななだいじ大寺日本一万一千三十七所の寺寺の僧は如何いかんが候はんずら

ん、先例せんれいの如くごとならば無間・大城むげん　だいじよう疑無し、是れは謗家ここなり。

謗国もうと申すは謗法ほうぼうの者・其の国に住すれば其の一国・皆無間・大城みなむげん　だいじように

なるなり、大海たいかいへは一切いっさいの水集り其の国は

一切の禍集まる、譬えば山に草木の滋きが如し、三災月月に重なり
七難日日に来る、飢渴発れば其の国餓鬼道と変じ疫病重なれば其の
国地獄道となる軍起れば其の国修羅道と変ず、父母・兄弟姉妹をば簡
ず妻とし夫と憑めば其の国畜生道となる、死して三惡道に墮つるには
あらず現身に其の国四惡道と變ずるなり、此れを謗国と申す。
例せば大莊嚴仏の末法師子音王仏の濁世の人人の如し、又報恩經に
說かれて候が如くんば過去せる父母・兄弟姉妹一切の人死せるを食し
又生たるを食す、今・日本国亦復是くの如し真言師・禪宗持齋等人を
食する者・国中に充滿せり、是偏に真言の邪法より事起れり、竜象房
が人を食いしは万が一顛れたるなり、彼に習いて人の肉を
・或は猪鹿に交へ・或は魚鳥に切り雜へ・或はたたき加へ・或はすしとして
売る、食する者数を知らず皆天に捨てられ守護の善神に放されたるが

故なり、結句は此の国・他国より責められ自国とし打ちして此の国變じて無間地獄と成るべし、日蓮此の大なる失を兼て見し故に与同罪の失を脱れんが為め仏の呵責を思ふ故に知恩報恩の為め国の恩を報ぜんと思いて国主並に一切衆生に告げ知らしめしなり。

不殺生戒と申すは一切の諸戒の中の第一なり、五戒の初めにも不殺生戒八戒・十戒・二百五十戒・五百戒・梵網の十重禁戒・華嚴の十無尽戒・瓔珞經の十戒等の初めには皆不殺生戒なり、儒家の三千の禁の中にも大辟こそ第一にて候へ、其の故は「満三千界・無有直身命」と申して三千世界に満つる珍宝なれども命に替る事はなし、蟻子を殺す者尚地獄に墮つ況や魚鳥等をや青草を切る者猶地獄に墮つ況や死骸を切る者をや、是くの如き重戒なれども法華經の敵に成れば此れを害するは第一の功德と説き給うなり、況や供養を展ぶ可け

んや、故に仙予國王は五百人の法師を殺し覺徳比丘は無量の謗法の者を殺し阿育大王は十万八千の外道を殺し給いき、此等の國王比丘等は閻浮第一の賢王持戒第一の智者なり、仙予國王は釈迦仏覺徳比丘は迦葉仏阿育大王は得道の仁なり、今・日本国も又かくの如し持戒・破戒・無戒王臣万民を論ぜず一同に法華經誹謗の国なり、設い身の皮

をはぎて法華經を書き奉り肉を積んで供養し給うとも必ず国も滅び
身も地獄に墮ち給うべき大なる科あり、唯真言宗・念仏宗・禪宗持齋
等を禁めて身を法華經によせよ、天台の六十巻を空に浮べて国主等に
は智人と思われたる人人の或は智の及ばざるか、或は知れども世を
恐るるかの故に或は真言宗をほめ或は念仏・禪・律等に同ずれば
彼等が大科には百千超えて候、例せば成良義村等が如し、慈恩大師は
玄賛十巻を造りて法華經を讃めて地獄に墮つ
、此の人は太宗皇帝の御師玄奘三蔵の上足十一面觀音の後身と申す
ぞかし、音は法華經に似たれども心は爾前の經に同ずる故なり、嘉祥
大師は法華玄十巻を造りて既に無間地獄に墮つべかりしが法華經を讀
む事を打ち捨てて天台大師に仕えしかば地獄の苦を脱れ給いき、今
法華宗の人人も又是くの如し、比叡山は法華經の御住所・

日本国は一乗の御所領なり、而るを慈覺大師は法華經の座主を奪い
取りて真言の座主となし三千の大衆も又其の所従と成りぬ、弘法
大師は法華宗の檀那にて御坐ます嵯峨の天皇を奪い取りて内裏を
真言宗の寺と成せり、安徳天皇は明雲座主を師として頼朝の朝臣を
調伏せさせ給いし程に、右大將殿に罰せらるるのみならず安徳は西海
に沈み明雲は義仲に殺され給いき、尊成王は天台座主・慈円僧正東寺
御室並に四十一人の高僧等を請下し奉り内裏に大壇を立てて義時右
京の権の大夫殿を調伏せし程に、七日と申せし六月十四日に洛陽破れ
て王は隱岐の国・或は佐渡の島に遷され座主御室は・或は責められ・或
は思ひ死に死に給いき、世間の人人此の根源を知る事なし
此れ偏に法華經・大日經の勝劣に迷える故なり、今も又日本国
大蒙古国の責を得て彼の不吉の法を以て御調伏を行わると承わる又

日記分明なり、此の事を知らん人争か歎かざるべき。

悲いかな我等誹謗正法の国に生れて大苦に値はん事よ、設い謗身は

脱ると云うとも謗家謗国の失如何せん、謗家の失を脱れんと思はば

父母・兄弟等に此の事を語り申せ、或は悪まるるか、或は信ぜさせま

いらするか、謗国の失を脱れんと思はば国主を諫曉し奉りて死罪か

流罪かに行わるべきなり、我不愛身命但惜無上道と説かれ

身輕法重・死身弘法こうぼうと釈しゃくせられし是これなり、過去遠遠劫おんのんじうより今に仏に成
らざりける事は加様の事に恐れて云いい出いださざりける故なり、未來みらいも亦
復また是かくの如ごとくなるべし今日蓮いまにちれんが身に當りてつみ知られて候、設たとい此の事
を知る弟子等の中にも当世とうせの責のおそろしさと申し露つゆの身の消え難がたき
に依よりて・或あるは落ち・或あるは心計ばかりは信じ・或あるはとかうす、御經の文に
難信難解なんしんなんげと説かれて候が身に當つて貴く覚え候ぞ、謗ぼうずる人は大地だいち
微塵みじんの如し信ずる人は爪上そうじようの土の如し、謗ぼうずる人は大海進む人は一いったい。
天台てんだい山に竜門と申もうす所ところあり其その滝百丈なり、春の始めに魚集りて此
の滝へ登るに百千に一つも登る魚は竜と成る、此の滝の早き事矢にも
過ぎ電光にも過すぎたり、登りがたき上に春の始めに此の滝に漁父集り
て魚を取る網を懸かくる事百千重・或あるは射あて取り・或あるは酌くんで取る、鷺しきよう・
鷗しきよう・虎狼・犬・狐集りて昼夜に取り☆くろふなり

十年・二十年に一つも竜となる魚なし、例せば凡下の者の昇殿を望み下女が后と成らんとするが如し、法華經を信ずる事此にも過ぎて候と思食せ、常に仏禁しめて言う何なる持戒智慧高く御坐して一切經並に法華經を進退せる人なりとも法華經の敵を見て責め罵り国主にも申さず人を恐れて黙止するならば必ず無間・大城に墮つべし、
譬えば我は謀叛を發さねども謀叛の者を知りて国主にも申さねば与同罪は彼の謀叛の者の如し、南岳大師の云く法華經の讎を見て呵責せざる者は謗法の者なり無間地獄の上に墮ちん」と、見て申さぬ大智者は無間の底に墮ちて彼の地獄の有らん限りは出ずべからず、日蓮此の禁めを恐るる故に国中を責めて候程に一度ならず流罪・死罪に及びぬ、今は罪も消え過も脱れななと思いて鎌倉を去りて此の山に入つて七年なり。

此の山の為ていたらくにほんこく体日本国の中には七道しちどうあり七道しちどうの内に東海道十五箇国、
其その内に甲州・飯野・御牧・波木井はきりの三箇郷の内波木井はきりと申もうす、此の郷
の内戌亥いぬいの方に入りて二十余里の深山みやまあり、北は身延山・南は鷹取山たかとり・
西は七面山・東は天子山てんしなり、板を四枚つい立てたるが如ごとし、此の外を
回めぐりて四つの河あり北より南富士河・西より東草河

此れは後なり、前に西より東波木井河の内に一つの滝あり身延河と名
けたり、中天竺の鷲峰山を此の処へ移せるか将又漢土の天台山の来れ
るかと覚ゆ、此の四山四河の中に手の広さ程の平かなる処あり、爰に
庵室を結んで天雨を脱れ木の皮をはぎて四壁とし、自死の鹿の皮を衣
とし、春は蕨を折りて身を養ひ秋は果を拾いて命

を支へ候つる程に、去年十一月より雪降り積て改年の正月今に絶る事
なし、庵室は七尺・雪は一丈・四壁は冰を壁とし軒のつらは道場
莊嚴の瓔珞の玉に似たり、内には雪を米と積む、本より人も来らぬ上
雪深くして道塞がり問う人もなき処なれば現在に八寒地獄の業を身
につくのへり、生きながら仏には成らずして又寒苦鳥と申す

鳥にも相似たり、頭は剃る事なければうづらの如し、衣は冰にとぢら
れて鶯鶯の羽を冰の結べるが如し、かかる処へは古へ睨びし人も問わず

弟子等にも捨てられて候いつるに此の御器を給いて雪を盛りて飯と觀じ
水を飲んでこんずと思う、志のゆく所・思い遣らせ給ふ又申すべく
候、恐恐謹言。

弘安三年正月二十七日

日蓮花押

秋元太郎兵衛殿御返事

◆ 一七〇

兄弟抄 きょうだい

文永十二年四月 五十四歳御

作 1079p

与池上兄弟 於身延 きょうだい

夫れ法華經と申すは八万法蔵の肝心十二部經の骨髓なり、三世の諸仏は此の經を師として正覺を成じ十方の仏陀は一乘を眼目として衆生を引導し給ふ、今現に經蔵に入つて此れを見るに後漢の永平より唐の末に至るまで渡れる所の一切經論に二本あり、所謂旧訳の經は五千四十八卷なり、新訳の經は七千三百九十九卷なり、彼の一切經は皆各各分分に随つて我第一なりとなのれり、然而法華經と彼の經經とを引き合せて之を見るに勝劣天地なり高下雲泥なり、彼の經經は衆星の如く法華經は月の如し彼の經經は燈炬・星月の如く

法華經は、大日輪の如し、此れは總なり。

別して經文に入つて、此れを見奉れば、二十の大事あり、第一、第二の

大事は三千塵点劫五百塵点劫と申す二つの法門なり、其三千塵点と

申すは第三の卷化城喩品と申す處に出でて候、此の三千大千世界を

抹して塵となし、東方に向つて千の三千大千世界を過ぎて一塵を下し、又

千の三千大千世界を過ぎて一塵を下し、此くの如く三千大千世界の塵

を下はてぬ、さてかえつて下せる三千大千世界と下さざる

三千大千世界をともし、おしふさねて又塵となし、此

の諸の塵をもてならべをきて一塵を一劫として、經尽しては、又始め又

始めかくのごとく上の諸塵の尽し經たるを三千塵点とは申すなり、今

三周の聲聞と申して、舍利弗・迦葉・阿難・羅云など申す、人人は過去

遠遠劫・三千塵点劫

のそのかみ大通智勝仏だいどうちしょうぶつと申せし仏の第十六の王子みこにてをはせし菩薩ぼさつま
しましき、かの菩薩ぼさつより法華經ほけきょうを習ならいけるが惡縁あくえんにすかされて法華經ほけきょう
を捨あつる心つきにけり、かくして・或あるは華嚴經けこんきょうへをち・或あるは般若經はんぎやきょうへをち
・或あるは大集經だいしつきょうへをち・或あるは涅槃經ねはんきょうへをち・或あるは大日經だいにちきょう・或あるは深密經じんみつ・或ある
觀經等かんきやうとうへをち・或あるは阿含あこん・小乘經しょうじやうきやうへをち・なんどしけるほどに次第しだいに

墮ちゆきて後には人天にんてんの善根ぜんこん・後に惡にをちぬ、かくのごとく墮ちゆく程に三千塵点劫さんぜんじんてんしやうが間、多分たぶんは無間地獄むげんじごく少分は七大地獄だいいじごくたまたまには一百余の地獄じごくまれには餓鬼がき・畜生ちくしやう・修羅しゆらなどに生れ大塵点劫だじんてんなどを經て人天にんてんには生れ候けり。

されば法華經ほけきやうの第二の卷に云く常に地獄じごくに処しよすること園觀おんかんに遊ぶが如く余の惡道あくどうに在ること己が舍宅しゃたくの如し」等云云、十惡じゅうあくをつくる人は等活黑繩とうかつこくじやうなると申す地獄じごくに墮ちて五百生ひやくしやう・或は一千歲せんさいを經、五逆ごぎやくをつくれる人は無間地獄むげんじごくに墮ちて一中劫いちじやくを經て後は又かへりて生ず、いかなる事にや候らん法華經ほけきやうをすつる人はすつる時はさしも父母ふぼを殺すなんどのやうにをびただしくはみ候はねども無間地獄むげんじごくに墮ちては多劫たせうしやくを經候きやう、設父母ふぼを一人・二人・十人・百人・千人・万人・十万人・百万人・億万人ばんにんなど殺して候ともい

かんが三千塵点劫をば経候べき、一仏・二仏・十仏・百仏・千仏・方仏・
乃至・億万仏を殺したりともいかんが五百塵点劫をば経候べき、しかる
に法華經をすて候いけるつみによりて三周の声聞が三千塵点劫を経
諸大菩薩の五百塵点劫を経候けることをびただしくをばへ

候、せんするところは・をもつて虚空を打てばくぶしいたからず石を打
てばくぶしいたし、悪人を殺すは罪あさし善人を殺すは罪ふかし・或は
他人を殺すは☆をもつて泥を打つがごとし父母を殺すは☆をもつて石
を打つがごとし、鹿をほうる犬は頭われず師子を吠る犬は腸くさる
日月をのむ修羅は頭七分にわれ仏を打ちし提婆は大地われて入りに
き、所対によりて罪の軽重はありけるなり。

さればこの法華經は一切の諸仏の眼目教主釈尊の本師なり、一字
一点もすつる人あれば千万の父母を殺せる罪にもすぎ十方の仏の身

より血を出す罪にもこへて候けるゆへに三五の塵点をば經候けるなり此
の法華經はさてをきたてまつりぬ又此の經を經のごとくにとく人に値う
ことは難にて候、設い一眼の龜の浮木には値うとも・はちすのいとをも
つて須弥山をば虚空にかくとも法華經を經のごとく説く人にあひがた
し。

されば慈恩大師と申せし人は玄奘三蔵の御弟子太宗皇帝の御師なり、梵漢を空にうかべ一切経を胸にたたた仏舍利を筆のさきより雨らし牙より光を放ち給いし聖人なり、時の人も日月のごとく恭敬し後の人も眼目とこそ渴仰せしかども伝教大師これをせめ給うには雖讚法華經・還死法華心等云云、言は彼の人の心には法華經をほむと

をもへども理のさすところは法華經をころす人になりぬ、善無畏三蔵は月支国うぢやうな国の国王なり、位をすて出家して天竺五十余の国を修行して顕密二道をきわめ、後には漢土にわたりて玄宗皇帝の御師となる、戸那日本の真言師誰か此人のながれにあらざる、かかる・たうとき人なれども一時に頓死して閻魔のせめにあはせ給う、いかなりける・ゆへとも人しらず。

日蓮此れをかながへたるに本は法華經の行者なりしが大日經を見て

法華經にまされりといふしゆへなり、されば舍利弗・目連等が三五の塵点を經しことは十惡・五逆の罪にもあらず謀反・八虐の失にてもあらず、但惡知識に値うて法華經の信心をやぶりにて權經にうつりしゆへなり、天台大師釈して云く、若し惡友に値えば則ち本心を失う」云云、本心と申すは法華經を信ずる心なり、失うと申すは法華經の信心を引きかへて余經へうつる心なり、されば經文に云く、然と良藥而不肯服」等云云、天台の云く、其の心を失う者は良藥を与うと雖も而かも肯て服せず生死に流浪し他國に逃逝す」云云。

されば法華經を信ずる人のをそるべきものは賊人・強盜・夜打ち虎狼師子等よりも當時の蒙古のせめよりも法華經の行者をなやます人なり、此の世界は第六天の魔王の所領なり一切衆生は無始已來彼の魔王の眷屬なり、六道の中に二十五有と申するををかまへて一切衆生

を入るのみならず妻子と申すほだしをうち父母・主君と申す

あみ網をそらにはり貪・瞋・癡の酒をのませて仏性の本心をたばらかす、

但あくのさかなのみをすすめて三惡道の大地に伏臥せしむ、たまたま

善の心あれば障礙しょうがいをなす、法華經ほけきょうを信ずる人をば、いかにもして惡へ墮だ

さんとをもう

かな

に叶かなわさればやうやく・すかささんがために相似そうじせる華嚴經けこんきやうへをとしつ

杜順とじゆん・智儼ちこん・法蔵ほうぞう・澄觀ちやうかん等是これなり、又般若經はんんにゃきやうへすかしをとす惡友あくゆうは嘉祥かじやう

僧詮そうぜん等是これなり、又深密經じんみつへすかしをとす惡友あくゆうは玄奘げんじやう・慈恩じおん是これなり、又

大日經だいにくきやうへすかしをとす惡友あくゆうは善無畏ぜんむい・金剛智こんごうち・不空ふくう・弘法こうぼう・慈覺じかく・智証ちしやう

是これなり、又禪宗ぜんしゆうへすかしをとす惡友あくゆうは達磨だるま・慧可えか等是これなり、又觀經かんきやうへ

すかしをとす惡友あくゆうは善導ぜんどう・法然ほうねん是これなり、此は第六天だいろくてんの魔王まおうが智者ちしやの身

に入ぜんにんつて善人ぜんにんをたばらかすなり、法華經ほけきやう第五の卷に 惡鬼あくき其の身に入

る」と説とかれて候は是これなり。

設たとひ等覺とうかくの菩薩ぼさつなれども元品がんぽんの無明むみやうと申もうす大惡鬼身あつきに入ほけきやうつて法華經

と申もうす妙覺みやうかくの功德くどくを障いかへ候はなり、何いかに況いわんや其その已下いかの人人ひとびとにをいて

をや、又第六天だいろくてんの魔王まおう・或あるは妻子さいしの身に入ほけきやうつて親おやや夫そをたばらかし・或ある

は國王こくおうの身に入ほけきやうつて法華經ほけきやうの行者ぎやうじやを・をどし・或あるは父母ふぼの身に入ほけきやうつて

孝養の子をせむる事あり、悉達太子は位を捨てんとし給いしかば

羅☆羅はらまれてをはしませしを淨飯王此の子生れて後出家し給えと

いさめられしかば魔が子ををさへて六年なり、舍利弗は昔禪多羅仏と

申せし仏の末世に菩薩の行を立てて六十劫を経たりき、既に四十劫ち

かづきしかば百劫にてあるべかりしを第六天の魔王・菩薩の行の成ぜん

事をあぶなしと思いけん、婆羅門となりて眼を乞い

しかば相違なくとらせたりしかども其より退する心出来て舍利弗は

無量劫が間・無間地獄に堕ちたりしぞかし、大莊嚴仏の末の六百八十

億の檀那等は苦岸等の四比丘にたばらかされて普事比丘を怨みてこそ

大地微塵劫が間・無間地獄を経しぞかし、師子音王仏の末の男女等は

勝意比丘と申せし持戒の僧をたのみて喜根比丘を笑うてこそ無量劫が

間地獄に堕ちつれ。

今又日蓮が弟子・檀那等は此にあたり、法華經には如来の現在に
すら猶怨嫉多し況や滅度の後をや」又云く「一切世間怨多くして信じ
難し」涅槃經に云く「横に死殃に羅り呵嘖・罵辱・鞭杖・閉繫・飢餓・困
苦・是くの如き等の現世の輕報を受けて地獄に墮ちず」等云云、
般泥・經に云く「衣服不足にして飲食・疎なり財を求めるに利あらず貧
賤の家及び邪見の家に生れ、或いは王難及び余の種種の人間の苦報に遭
う現世に輕く受くるは斯れ護法の功德力に由る故なり」等云云、文の
心は我等過去に正法を行じける者にあだをなしてありけるが今かへり
て信受すれば過去に人を障る罪にて未来に大地獄に墮つべきが、今生
に正法を行ずる功德強盛なれば未来の大苦をまね
ぎこして少苦に値うなり、この經文に過去の誹謗によりてやうやうの
果報をうくるなかに、或は貧家に生れ、或は邪見の家に生れ、或は王難

に値う等云云、この中に邪見の家と申すは誹謗正法の家なり王難等と申すは惡王に生れあうなり、此二つの大難は各各の身に當つてをばへべし、過去の謗法の罪を滅せんとして邪見の父母に・せめられさせ給う、又法華經の行者をあだむ国主にあへり經文明明たり經文赫赫たり、我身は過去に謗法の者なりける事疑い給うことなかれ、此れを疑つて現世の輕苦忍びがたくて慈父のせめに隨いて存外に法華經をすつるよしあるならば我身地獄に墮つるのみならず悲母も慈父も大阿鼻地獄に墮ちてともにかなしまん事疑いなかるべし、大道心と申すはこれなり。

各各隨分に法華經を信ぜられつるゆへに過去の重罪をせめいだし給いて候、たとへばくろがねをよくよくきたへばきずのあらわるるがごとし、石はやけばはいとなる金は・やけば真金となる、此の度こそ・まこと

の御信用は・あらわれて法華經の十羅刹も守護せさせ給うべきにて候ら
め、雪山童子の前に現ぜし羅刹は帝釈なり尸毘王

のはとは毘沙門天ぞかし、十羅刹・心み給わんがために父母の身に入ら
せ給いてせめ給うこともや・あるらん、それにつけても、心あさからん事
は後悔あるべし、又前車のくつが今は後車のいましめぞかし、今の世に
は・なにとなくとも道心をこりぬべし、此の世のありさま厭うともよも
厭われじ日本の人人定んで大苦に値いぬと見へて候

眼前の事ぞかし、文永九年二月の十一日にさかなりし華の大風にを
るが・ごとく清絹の大火に・やかるるがごとくなりしに・世をいとう人
のいかでかなかるらん文永十一年の十月ゆきつしまのものども一時に
死人

となりし事は・いかに人の上とを・をぼすか当時も・かのうてに向かいた
る人人ひとびとのなげき老たるをやをさなき子わかき妻めづらしかりし・すみか
うちすてて・よしなき海をまほり雲の・みうればはたかと疑うたがいい・つりぶ
ねの・みゆれば兵船かと肝心かんじんをけす、日に一二度山えのぼり夜に三四
度馬にくらを・をく、現身げんしんに修羅道しゅらどうをかんぜり、各各のせめられさせ
給たまう事も詮せんするところは国主こくしゅの法華經ほけきょうのかたきとなれるゆへなり、国主
のかたきとなる事は持斎等じさい・念仏ねんぶつ・真言師等しんこんしが謗法ぼうぼうよりをこれり、今度このたび
ねうしくらして法華經ほけきょうの御利生心りしやうみさせ給たまへ、日蓮にちれんも又強盛ごうじやうに天に
申し上げもう

候なり、いよいよ・をづる心ねすがた・をはすべからず、定んで女人にょにんは心
よはくをはすれば・ごぜたちは心ひるがへりてやをはすらん、がうじや
うに・はがみをして・たゆむ心なかれ、例せば日蓮にちれんが平左衛門さえもんの尉ゑがも

とにて・うちふるまいいゝしがごとく・すこしもをづる心なかれ、わだが
子となりしもの・わかさのかみが子となりし・将門・

貞当が郎従等となりし者、仏になる道には・あらねども・はぢを・をも
へば命をしまぬ習いなり、なにと・なくとも一度の死は一定なり、いろ
ばしあしくて人に・わらはれさせ給うなよ。

あまりにをぼつかなく候へば大事のものがたり一つ申す、白ひ叔せ
いと申せし者は胡竹国の王の二人の太子なり、父の王弟の叔せいに位を
ゆづり給いき、父して後叔せい位につかざりき、白ひが云く位につき
給え叔せいが云く兄位を継ぎ給え白ひが云くいかに親の遺言をばたがへ
給うぞと申せしかば親の遺言はさる事なれども

いかんが兄を・をきては位には即くべきと辞退せしかば、二人共に父母
の国をすてて他国へわたりぬ、周の文王につかへしほどに文王殷の紂王に

打たれしかば武王百箇日が内にいくさを・をこしき、白ひ叔せいは武王の馬の口にとりつきていさめて云く・をやのしして後三箇年が内にいくさを・をこすはあに不孝にあらずや、武王いかり

て白ひ叔せいを打たんとせしかば大公望せいで打たせざりき、二人は此の王をうとみてすやうと申す山にかくれゐてわらびを・をりて命をつぎしかば、麻子と申す者ゆきあひて云くいかに・これには・をはするぞ

二人

上件かみくだんの事をかたりしかばあさのみ麻子が云くさるにては・わらびは王の物にあらずや、二人せめられて爾その時よりわらびをくわず、天は賢人けんじんをすて給たまわぬならひなれば天白鹿と現げんじて乳をもつて二人をやしなひき、白鹿去つて後に

叔せいが云く此の白鹿の乳をのむだにもうましまして肉をくわんといひしかば白ひせいしかども天これを・

ききて来らず、二人うへて死ににき、一生が間賢なりし人も一言に身をほろぼすにや、各各も御心の内はしらず候へば・をぼつかなしをぼつかなし。

釈迦しやくかに如来は太子たいしにてをはせし時父の浄飯王太子じやうはんたいしを・をしみたてまつりて出家しゅつげをゆるし給たまはず、四門に二千人のつわものをすへてまほらせ給たまひしかども、終ついにをやの御心をたがへて家をいでさせ給たまいき、一切いっさいは・を

やに随したがうべきにてこそ候へども仏になる道は随したがわぬが孝養こうようの本にて候

か、されば心地觀經しんじかんきやうには孝養こうようの本をとかせ

給たまうには棄恩入無為むい真実報恩者等云云、言はまことの道に入るには

父母ふぼの心に随したがわずして家を出て仏になるがまことの恩をほうずるにては

あるなり、世間せけんの法にも父母ふぼの謀反などををこすには随したがわぬが孝養こうよう

とみへ

候ぞかし、孝經こうきやうと申もうす經に見へ候、天台大師てんだいだいしも法華經ほけきやうの三昧さんまいに入ら

せ給たまいてをせし時は父母ふぼ左右さうのひぎに住して仏道ぶつどうをさえんとし給たまいし

なり、此これは天魔てんまの父母ふぼのかたちをげんじてさうるなり。

白ひすくせいが因縁いんねんはさきにかき候ぬ、又第一だいいちの因縁いんねんあり、日本国にほんこくの

人王第十六代に王をはしき応神天王と申もうす今の八幡大菩薩はちまんたいぼさつこれなりこ

の王の御子二人まします嫡子をば仁徳・次男いろとのみこは宇治王子天王・次男つぎの

宇治の王子みこに位をゆづり給たまいき、王ほうぎよならせ給たまいて後・宇治の王子みこの云いわく兄位いろえにつき給たまうべし、兄いろえの云いわく、いかに・をやの

御ゆづりをばもちゐさせ給たまわぬぞ、かくのごとくたがいにろむじて、三箇年が間位に王をはせざりき、万民ばんみんのなげきいうばかりなし天下てんかのさいにてありしほどに、宇治の王子みこ云いわく我いきてあるゆへにあに位に即き給たまわずといつて死させ給たまいにき、仁徳これをなげかせ給たまいて又ふししづませ給たまいしかば、宇治の王子みこい

きかへりて・やうやうに・をほせをかせ給たまいて・又ひきいらせ給たまいぬ、さて
仁徳・位につかせ給たまいたりしかば国を

だやかなる上しんら・はくさひ・かうらいも日本国にほんこくにしたがひて・ねんぐ
を八十そうそなへげると・こそみへて候

へ。

賢王けんおうのなかにも兄弟きょうだいをだやかならぬれいも・あるぞかし・いかなるち
ぎりにて兄弟きょうだいかくはをはするぞ浄蔵・浄眼の二人ふたりの太子たいしの生れかはりて
をはするか薬王やくおう薬上の二人か、大夫志殿たゆうのさかんどの御をやの御勘氣ごかんきはうけ給たまわ
りしか

どもひやうへの志殿さかんどの事は今度このたびはよもあにには・つかせ給たまはじさるにて
はいよいよ大夫志殿たゆうのさかんどのをやの御不審ふしんはをぼろげにてはゆりじなんどをも
つて候へはこのわらわの申し候もうはまことにてや候らん、御同心ごどうしんと申し候もうへ

ば・あまりの・ふしぎさに別の御文をまいらせ候、未来までのものがたり
・なに事かこれにすぎ候べき。

西域と申す文にかきて候は月氏に婆羅☆斯国・施鹿林と申すところ
に一の隠士あり仙の法を成ぜんとをもう、すでに瓦礫を變じて宝とな
し人畜の形をかえけれどもいまだ風雲にのつて仙宮にはあそばざりけ
り、此の事を成ぜんがために一の烈士をかたらひ長刀をもたせて壇の隅
に立てて息をかくし言をたつ、よひよりあしたにいたる

まで・ものいはずば仙の法・成ずべし、仙を求る隠士は壇の中に坐して手
に長刀をとつて口に神呪をずうす約束して云く設ひ死なんとする事あ
りとも物言う事なかれ烈士云く死するとも物いはい、此の如くして
既に夜中を過ぎて

夜まさにあけんとする時、如何が思いけん烈士大に声をあげて呼はる、

既に仙の法成ぜず、隱士烈士に言つて云く何に約束をばたがふるぞ
口惜しき事なりと云う、烈士歎いて云く少し眠つてありつれば昔し仕へ
し主人自ら來りて責めつれども師の恩厚ければ忍で物いはず、彼の主人
怒つて頸をはねんと云う、然而又ものいはず、遂に頸を

切りつ中陰に趣く我が屍を見れば惜く歎かし然而物いはず、遂に南
印度の婆羅門の家に生れぬ入胎出胎するに大苦忍びがたし然而息を
出さず、又物いはず已に冠者となりて妻をとつぎぬ、又親死ぬ又子を
まうけたり、か

なしくもありよろこばしくもあれども物いはず此くの如くして年六十
有五になりぬ、我が妻かたりて云く汝若し物いはずば汝がいとをしみ
の子を殺さんと云う、時に我思はく我已に年衰へぬ此の子を若し殺
されなば又子をまうけがたしと思いつる程に声をおこすとをへばを
どろきぬと云いければ、師が云く力及ばず我も汝も魔に
たばらかされぬ終に此の事成ぜずと云いければ、烈士大に歎きけり
我心わがこころよはくして師の仙法を成ぜずと云いければ、隱士が云く我が失な
り兼て誠めざりける事と悔ゆ、然れども烈士師の恩を報ぜざりける
事を歎きて遂に思ひ死にししぬとかかれて候、仙の法と申すは漢土には
儒家より出で月氏には外道の法の一分なり、云うにかひ無
き仏教の小乗・阿含經にも及ばず況や通別円をや況や法華經に及ぶ
べしや、かかる浅き事だにも成ぜんとすれば四魔競て成じかたし、何に

況や法華經の極理南無妙法蓮華經の七字を始めて持たん日本國の
弘通の始ならん人の弟子・檀那とならん人人の大難の来らん事をば言
をもつて尽し難し心をもつてをしはかるべしや。

されば天台大師の摩訶止觀と申す文は天台一期の大事一代聖教の
肝心ぞかし、仏法漢土に渡つて五百余年・南北の十師・智は日月に齊く
徳は四海に響きしかどもいまだ一代聖教の浅深・勝劣・前後・次第に
は迷惑してこそ候いしが、智者大師再び仏教をあきらめさせ給うのみ
ならず、妙法蓮華經の五字の蔵の中より一念三千の如意宝珠を
取り出して三国の一切衆生に普く与へ給へり、此の法門は漢土に始るの
みならず月氏の論師までも明し給はぬ事なり、然れば章安大師の釈に
云く「正觀の明靜なる前代に未だ聞かず」云云、又云く「天竺の大論尚
其の類に非ず」等云云、其の上摩訶止觀の第五の卷の一念三千は今一

重立ち入たる法門ほうもんぞかし、此の法門ほうもんを申すには必ず魔出来しゅつたい

すべし魔競まきやうはずは正法しょうぼうと知るべからず、第五の巻いに云く行解ぎやうげ既に勤とめ

ぬれば三障四魔さんしょうしよま紛然ふんぜんとして競きそい起おこる乃至ないし随したがう可べからず畏おそる可べからず之に

随つえば将まさに人をして惡道あくどうに向わしむ之これを畏おそれば正法しょうぼうを修しゆすることを妨

ぐ」等云云、此の釈にちれんは日蓮が身に当るのみならず門家もんかの明鏡めいきやうなり謹つしん

で習ならい伝えて未來みらいの資糧しりやうとせよ。

此の釈に三障と申すは煩惱障・業障・報障なり、煩惱障と申すは貪・瞋・癡等によりて障礙出来すべし、業障と申すは妻子等によりて障礙出来すべし、報障と申すは国主父母等によりて障礙出来すべし、又四魔の中に天子魔と申すも是くの如し今日本国に我も止観を得たり我も止観を得たりと云う人人誰か三障四魔競へる人あるや、之に随え

ば将に人をして惡道に向わしむと申すは只三惡道のみならず人天九界を皆惡道とかけり、されば法華經を除きて華嚴・阿含・方等・般若・涅槃・大日經等なり、天台宗を除きて余の七宗の人人は人を惡道に向わしむる獄卒なり、天台宗の人人の中にも法華經を信ずるやうにて人を爾前へやるは惡道に人をつかはす獄卒なり。

今二人の人人は隱士と烈士とのごとし一もかけなば成ずべからず、

譬^{たと}えば鳥の二つの羽人の両^{りやうげん}眼の如^{ごと}し、又二人の御前^{おんまえ}達は此^この人人^{ひとびと}の檀^{だん}那^なぞかし女人^{にょにん}となる事は物に随^{したが}つて物を随^{つが}える身なり夫たのしくば妻もさかふべし夫盗人^{ぬすびと}ならば妻も盗人^{ぬすびと}なるべし、是^これ偏^{ひとえ}に今生計^{こんじやうばか}りの事にはあらず世生生に影と身と華と果と根と葉との如^{ごと}く

にておはするぞかし、木にすむ虫は木をはむ水にある魚は水をくらふ芝かるれば蘭なく松さかうれば柏よろこぶ、草木^{そうもく}すら是^{かくのごと}くの如し、比翼^{もう}と申す鳥は身は一つにて頭^{こゝろ}二つあり二つの口より入る物一身を養ふ、ひほくと申^{もう}す魚は一目づつある故^{ゆえ}に一生が間はなる事なし、夫と妻とは是^{かくのごと}くの如し此の法門^{ほうもん}のゆへには設^{たて}ひ夫に害せらる

るとも悔^くゆる事なかれ、一同して夫の心をいさめば竜女^{りゆうによ}が跡^{あと}をつぎ末代^{まつだい}悪世^{あくせ}の女人^{にょにん}の成仏^{じやうぶつ}の手本^{てほん}と成り給^{たま}うべし、此^かくの如^{ごと}くおはさば設^{たと}ひいかなる事ありとも日蓮^{にちれん}が二聖・二天・十羅刹^{じゅうらせつしや}・多宝^{たほう}に申^{もう}して

順次生じゅんじしやうに仏になしたてまつるべし、心の師とはなるとも心を師とせざれ
とは六波羅蜜經ろくはらみつぎやうの文なり。

設たとひ・いかなる・わづらはしき事ありとも夢になして只法華經ただほけきやうの事の
みさはぐらせ給たまうべし、中にも日蓮にぢれんが法門ほうもんは古今こそ信じかたかりしが
今は前さき前さきいひをきし事既すでにあひぬればよしなく謗ぼうぜし人人ひとびとも悔くゆる心あ
るべし、設たとひこれより後に信ずる男女なんよありとも各各にはかへ思ふべから
ず、始は信じてありしかども世間せけんのをそろしさにすつ

ひとひと
る人人かずをしらず、其の中に返つて本より謗ずる人人よりも強盛に
ひとひと
そしる人人又あまたあり、在世にも善星比丘等は始は信じてありしか
ども後にすつるのみならず返つて仏をはうじ奉りしゆへに仏も叶い給は
むげんじごく
ず無間地獄にをちにき、此の御文は別してひやうへの志殿へまいらせ
候、又太夫志殿の女房兵衛志殿の女房によくよく申しきかせさせ
たま
給うべしきかせさせ給うべし南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經。

ぶんえい
文永十二年四月十六日

にちれん
日蓮
かおう
花押

◆一七一 兵衛志殿御返事

がんねん
建治元年八月五十四歳

御作 於身延

1089p

鷲目二貫文・武蔵房円日を使にて給ひ候い畢んぬ、人王三十六代、
皇極天皇と申せし王は女人にてをはしき、其の時入鹿の臣と申す者あり、あまり・おごりの・ものぐるわしさに王位を・うばはんと・ふるまいしを、天皇王子等不思議とはをばせしかども・いかにも力及ばざりしほどに、大兄の王子・軽の王子等なげかせ給いて中臣の鎌子と申せし臣に申しあわせさせ給いしかば、臣申さく・いかにも人力はかなうべしとは・みへ候はず、馬子が例をひきて教主・積尊の御力ならずば叶がたしと申せしかば・さらばとて・積尊を造り奉りて・いのりしかば入鹿ほどなく打れにき、此の中臣の鎌子と申す人は後には姓をかへ藤原の鎌足と申し内大臣になり大職冠と申す人・今の一人の人の
御先祖なり、此の・積迦仏は今の興福寺の本尊なり、されば王の王たるも・積迦仏・臣の臣たるも・積迦仏・神国の仏国となりし事もえもんのたい

う殿の御文^{おんふみ}と引き合せて心へさせ給^{たま}へ、今代^{きんだい}の他国^{たこく}にうばわれんとする
事・釈尊^{しゃくそん}を・いるがせにする故なり神の力も及ぶべからずと申^{もう}すはこれ
なり、各各は二人は・すでにとこそ人はみしかども・かくいみじくみへさ
せ給^{たま}うは・ひとえに釈迦^{しゃか}仏^{ぶつ}・法華^{ほけ}經^{きやう}の御力^{おんちから}なりと・をぼすらむ、又此^これ
にもをもひ候^{ごしやう}、後生^{ごしやう}のた

のもしさ申すばかりなし、此れより後も・いかなる事ありとも・すこしもたゆむ事なかれ、いよいよ・はりあげてせむべし、設ひ命に及ぶとも・すこしも・ひるむ事なかれ、あなかしこ・あなかしこ、きようきようきんげん 恐恐謹言。

八月二十一日

日蓮花押

兵衛志殿御返事

さかんのこへんじ

◆一七二 兵衛志殿御返事

さかんのこへんじ

建治元年十一月 五十四

がんねん

歳御作 於身延

1090P

かたがたのものふ二人を・もつて・をくりたびて候、その心ざし弁殿の御ふみに申すげに候、さてはなによりも御ために第一の大事を申し候なり、正法・像法の時は世もいまだをとろへず聖人・賢人も・つづき生

しやうぼう

ぞうぼう

しやうにん

けんじん

れ候き天も人をまほり給いき、末法になり候へば人のとんよく貪欲
やうやくすぎ候て主と臣と親と子と兄と弟と諍論ひまなし、まして
他人は申すに及ばず、これによりて天もその国をすつれば三災・七難
乃至一二三四五六七の日いでて草木かれうせ小大河もつき大地はすみ
のごとく・をこり大海はあぶらのごとくになり・けつくは無間地獄より
炎いでて上梵天まで火炎・充滿すべし、これていの事いでんとて・やうや
く世間はをと候なり、皆人のをもひて候は父には
子したがひ臣は君にかなひ弟子は師にゐすべからずと云云、かしこき人
もいやしき者もしれる事なり、しかれども貪欲・瞋恚・愚癡と申すさけ
にえいて主に敵し親をかるしめ師をあなづるつねにみへて候、但師と主
と親とに払いてあしき事をば諫ば孝養となる事はさきの御ふみにかき
つけて候いしかばつねに御らむあるべし。

ただこのたびも^{いひまへ}んの志^し どのかさねて親のかんだうあり・とのの
御前^{おんまえ}にこれにて申せしがごとく一定かんだうあるべし・ひやうへの志^{さかんど}殿^{どの}
をぼつかなしごせんかまへて御心^もへあるべしと申^{もう}して供^{きやう}しなり今^{この}度^{たび}はとの
は一定をち

給たまいぬと・をぼうるなりをち給たまはんをいかにと申もうす事はゆめゆめ候そうらはず
但じこく地獄にて日蓮にちれんをうらみ給たまう事なかれしり候まじきなり千年のかるか
やも一時いちじにはひとなる百年の功も一言にやぶれ候は法のことわりなり、
さえもんの大夫殿たゆうどのは今度このたび・法華經ほけきようのかたきになりさだまり給たまうとみへ
て候、えもんのたいうの志殿さかんどのは今度このたび・法華經ほけきようの行者ぎようじやになり候はんずら
ん、とのげんぜんは現前の計なれば親につき給たまはんずらむ、ものぐるわしき人人ひとびと
はこれをほめ候べし、宗盛むねもりが親父
入道にゅうどうの悪事に随したがいてしのわらにて頸を切られし重盛しづもりが随したがわずして先に
死せしいづれか親の孝人こうじんなる、法華經ほけきようのかたきになる親に随したがいて一乗いちじようの
行者ぎようじやなる兄をすてば親の孝養こうようとなりなんや、せんするところひとすぢ
にをもひ切つて兄と同じく仏道ぶつどうをなり給たまへ、親父は妙莊嚴王みょうそうげんのごとし
兄弟きょうだいは淨藏・淨眼なるべし、昔と今はかわるとも法華經ほけきようのこ

とわりは・たがうべからず・当時も武蔵の入道そこぼくの所領所従等をすてて遁世あり、ましてわどのぼらがわづかの事をへつらひて心うすくて悪道に堕ちて日蓮をうらみさせ給うな、かへすがへす今度とのは堕べしと・をぼうるなり。

此の程心ざしありつるが・ひきかへて悪道に堕ち給はん事がふびんなれば申すなり、百に一つ千に一つも日蓮が義につかんと・をぼさば親に向つていい切り給へ親なれば・いかにも順いまいらせ候べきが法華經の御かたきになり給へば・つきまいらせては不孝の身となりぬべく候へば・すてまいらせて兄につき候なり、兄をすてられ候わば

兄と一同と・をぼすべしと申し切り給へすこしも・をそるる心なかれ・過去遠遠劫より法華經を信ぜしかども仏にならぬ事これなり、しをのひると・みつと月の出づると・いると・夏と秋と冬と春とのさかひには必

ず相違そういする事あり凡夫ぼんぶの仏になる又かくのごとし、必ず三障四魔さんしやうしまと申もうす障さわりいできたれば賢者けんじゃはよろこび愚者ぐしやは退くこれなり、

此の事は・わざとも申もうし又びんぎにと・をもひつるに御使おんつかいありがたし、
墮おち給たまうならば・よもこの御使おんつかいは・あらじと・をもひ候そうらへば・もしやと申もうすなり。

仏になり候事は此の須弥山にはりをたてて彼の須弥山より熊をはな

ちて、そのいとこのすぐにわたりて・はりのあなに入るよりもかたし、いわ

うや・さかさまに大風のふきむかへたらんは・いよいよかたき事ぞかし、

經に云く・億億万劫より不可議に至る時に乃ち是の法華經を聞くこと

を得・億億万劫より不可議に至る諸仏・世尊時に是の

經を説きたもう・是の故に行者・仏滅後に於て是くの如きの經を開いて

疑惑を生ずること勿れ」等云云、此の經文は法華經二十八品の中に・

ことにめづらし、序じ仰より法師品にいたるまで等覺已下の人天・四衆

八部・其のかずありしかども仏は但釈迦如来一仏なり重くてかろきへ

んもあり、宝塔品より囑累品にいたるまでの十二品は殊に重

きが中の重きなり、其の故は釈迦仏の御前に多宝の宝郡部現せり月の

前に日の出でたるがごとし、又十方の諸仏は樹下に御はします十方

世界の草木の上に火をともしせるがごとし、此の御前にてせんせられたる文なり。

涅槃經に云く 昔無數無量劫より來た常に苦惱を受く、一一の衆生一劫の中に積む所の骨は王舍城の毘富羅山の如く飲む所の乳汁は四海の水の如く身より出す所の血は四海の水より多く父母・兄弟・妻子・眷属の命終に哭泣して出す所の目涙は四大海より多く、地の草木を尽くして四寸の籌と爲し以て父母を数うも亦尽くすこと能わじ」云云、此の經文は仏最後に雙林の本に臥てかたり給いし御言なりもつとも心をとどむべし、無量劫より已來生ところの父母は十方世界の大地の草木を四寸に切りてあてかそうとも・たるべからずと申す經文なり、此等の父母にはあひしかども法華經にはいまだ・あわず、されば父母はまうけやすし法華經はあひがたし、今度あひやすき父母のこと

ばを・そむきて・あひがたき法華經ほけきょうのともに・はなれずば我が身・仏になるのみならず・そむきしをやをもみちびき

なん、例せば悉達しつたたいし太子は浄飯王じょうばんの嫡子なり国をもゆづり位にもつけんと・をばして・すでに御位につけまいらせたりしを御心をやぶりて夜中城をにげ出いでさせ給たまいしかば不孝ふこうの者なりと・うらみさせ給たまいしかども仏にならせ給たまうては・まづ浄飯王じょうばん・麻耶夫人まやふじんをこそ・みちびかせ給たまいしか。

を親やという・をやの世をすてて仏になれと申す・やは一人もなきな

り、これは・とによせ・かくによせて・わ和殿どのぼらを持じさい斎・念ねんぶつ仏者等が・つ

くり・をとさんために・をやを・すすめをとすなり、両火房は百万反の

念ねんぶつ仏をすすめて人ひと人の内をせきて法ほけきょう華經のたねを・たたんと・はかると

きくなり、極ごくらく樂寺殿はいみじかりし人ぞかし、念ねんぶつ仏者等に

たばらかされて日蓮にちれんを怨あだませ給たまいしかば我が身みといそい其いちもんの一門皆みなほろび

させ給たまう・ただいまは・へちこの守こうどの殿一人計ばかりなり、両火房を御ごしんよう信用あ

る人はいみじきと御らむあるか、なごへの一門いちもんの善光寺・長ちやうらくじ樂寺・大だいぶつでん仏殿

立てさせ給たまい

て其その一門いちもんのならせ給たまう事をみよ、又守こうどの殿は日本にほんこく国の主にてをはする

が、一閭えんぶだい浮提のごとくなる・かたきをへさせ給たまへり。

わどの見をすてて・あにがあとを・ゆづられたりとも千せんまん万まん年のさかへ・

かたかるべし、しらず又わづかの程にや・いかんが・このよならんずらん、
よくよくをもひ切つて一向いっこうに後世ごせうをたのまるべし、かう申もうすとも・いたづ
らのふみなるべしと・をもへば、かくも・ものうけれども・のちのをもひで
に・しるし申もうすなり、恐恐きょうきょう謹言きんげん

十一月二十日

日蓮にちれん花押かおう

兵衛志殿御返事さかんどのごへんじ

◆ 一七三

兵衛志殿女房御返事さかんのにようぼうごへんじ

1094

先度仏器まいらせさせ給ひ候しが、此度此このたびの尼御前あまごぜん大事だいじの御馬ごまにの
 せさせ給て候由承はり候、法にすぎて候・御志かな・これは殿はさる事
 にて、女房にようぼうのはからひか、昔儒童菩薩じゆどうぼさつと申せし菩薩ぼさつは、五茎いつくきの蓮華れんげを
 五百の金錢を以て・かいとり、定光菩薩ぼさつを七日七夜供養し給ひき、女人にょにん
 あり、瞿夷くゐいとなづく、二茎れんげの蓮華を以て自ら供養みずかして云く、凡夫ほんぶにてあ
 らん時は世世・生生・夫婦とならん、仏にならん時は同時どうじに仏になるべ
 し・此のちかひくちずして、九十一劫いっしゅうの間・夫婦となる、結句けっく、儒童じゆどう
 菩薩ぼさつは今の釈迦しゃか仏ぶつ・昔の瞿夷くゐいは今の耶輸多羅女あしゆたら・今法華經ほけきやうの勸持品かんじに

して具足^{ぐそく}千^{せん}万^{まん}光^{こう}相^{そう}如^に來^{よらい}是^{これ}なり、悉^{しつ}達^{たつ}太^{たい}子^し檀^{だん}特^{とく}山^{せん}に
入^いり給^{たま}しには、
金^{こん}泥^{でい}駒^く・帝^{たい}釈^{しやく}の化^け身^{しん}、摩^ま騰^{とう}迦^か・竺^{じく}法^{ほう}蘭^{らん}の經^{きやう}を漢^{かん}土^どに渡^{わた}せしには十^{じゅう}羅^ら刹^{せつ}・
化^はして白^{はく}馬^ばと^{はくば}なり給^{たま}ふ、此^こ馬^ばも法^ほ華^け經^{きやう}の道^{どう}なれば百^{ひゃく}二^に十^{じゅう}年^{ねん}御^ごさかへ
の
後^ご・靈^{りやう}山^{さん}淨^{じやう}土^どへ乗^{のり}り給^{たま}ふべき御^ご馬^ばなり、恐^{きやう}恐^{きやう}謹^{きん}言^{げん}。

建^{ひの}治^{どう}三^し年^{ねん}丁^{てい}丑^し三^{さん}月^{げつ}二^に日^{にち}

日^に蓮^{ちれん}花^か押^お

兵^さ衛^{かん}志^{どの}殿^の女^に房^{ようぼう}

◆ 一七四

兵衛志殿御書さかんだのごしよ

1095p

久しくうけ給たまわり候はねばよくおぼつかなく候、何よりもあはれにふしぎなる事は大夫志殿たゆうのさかんだのと殿との御事おんこと不思議ふしぎに候、常さまには世末になり候へば聖人しょうにん・賢人けんじんも皆みなかくれたたださんじむねいじんわさんきよくりの者のみこそ国には充満じゅうまんすべきと見へて候へば、喩たとええば水すくなくなれば池さはがしく風ふけば大海たいかいしづかならず、代の末になり候へばかんばち・えきれい大雨大風だいうたいふうふきかさなり候へば広き心もせばくなり道心どうしんある人も邪見じゃけんになるとこそ見へて候へされば他人たにんはさてをきぬ父母ふぼと夫妻と兄弟きょうだいと諍あらそう事れつしと・しかと・ねこと・ねずみと・たかと・きじとの如ごとしと見へて候、良観等りょうかんの天魔てんまの法師ほっしらが親

父左衛門の大夫殿をすかし、わどのぼら二人を失はんとせし

に、殿の御心賢くして日蓮がいさめを御もちる有りしゆへに二のわの車をたすけ二の足の人になへるが如く二の羽のとぶが如く日月の一切衆生を助くるが如く、兄弟の御力にて親父を法華經に入れまいらせさせ給いぬる御計らい偏に貴辺の御身にあり、又真実の經の御ことはりを代末になりて仏法あながちにみだれば大聖人・世に

出ずべしと見へ候、喩へば松のしもの後に木の王と見へ菊は草の後に仙草と見へ候、代のおさまれるには賢人見えず代の乱れたるにこそ聖人愚人は顯れ候へあはれ平の左衛門殿さがみ殿の日蓮をだに用いられて候いしかば、すぎにし蒙古国の朝使のくびはよも切せまいらせ候はじ、くやしくおはすらなん。

人王八十一代安徳天皇と申す大王は天台の座主明雲等の真言師等

數百人かたらひて源みなもとの右將軍頼朝を調伏じょうぶくせしかば還著げんちやく於本人とて
明雲は義仲に切られぬ安徳天皇てんのうは西海に沈み給う、人王八十二三四
隱岐おきの法皇ほうこう・阿波の院さど・佐渡の院とうこん・当今とうこん・已上四人・座主ざす・慈円じえん僧正そうじよう・
御室おむろ・三井等みいの四十余人の高僧等こうそうをもて平の將軍義時しやうぐんよしときを調伏じょうぶくし給う
程に又還著げんちやく於本人とて上の四王島しおう島に放たれ給いき、此の大惡法だいあくほうは
弘法こうぼう・慈覺じかく・智証ちしようの三大師だいし・法華經ほけきやう最第一さいだいいちの釈尊しやくそんの金言きんげんを破りて法華ほつけ
最第二・最第三・大日經だいにちきやう最第一さいだいいちと讀み給いし僻見びやつげんを御信用ごしんよう有りて今生こんじやう
には国と身とをほろぼし後生ごしやうには無間地獄むげんじごくに墮ち給いぬ、今度は又此
の調伏じょうぶく三度なり、今・我が弟子等でし死したらん人人ひとびとは仏眼ぶつげんをもて是を見
給うらん、命つれなくて生たらん眼まなこに見よ、国主等こくしゅは他国たこく貢めわたさ
れ調伏じょうぶくの人人ひとびとは・或は狂死あゐる・或は他国たこく・或は山林さんりんにかくるべし、教主きやうしゅ
釈尊しやくそんの御使おんつかいを二度までこうぢをわたし弟子等でしをろうに入れ・或は殺し

・或^{ある}は害^{ある}し・或^{ある}は所国をおひし故^{ゆえ}に其^その科^{とが}必^{かならず}ず其^その国^{くに}万民^{ばんみん}の身^みに一
にかかるべし、・或^{ある}は又^{また}白癩^{びやくらい}・黒癩^{くろらい}・諸^{しよ}惡^{あく}重^{じゅう}病^{びょう}の人人^{ひとびと}おほかるべし、我^{われ}
が弟子^{でし}等^ら此^この由^{よし}を存^{ぞん}ぜさせ給^{たま}へ、恐^{きよう}恐^{きよう}謹^{きん}言^{げん}。

九月九日

日蓮^{にちれん}花押^{かおう}

此^この文^{ぶん}は別^{わか}しては兵衛^{べいゑ}の志^し殿^{どの}へ、総^{そう}じては我^{われ}が一^{いち}門^{もん}の人人^{ひとびと}御^ご覽^{らん}有^あるべ
し、他人^{たにん}に聞^{きこ}かせ給^{たま}うな。

◆一七五

兵衛志殿女房御返事

1097

P

銅の御器二給び畢おわんぬ、釈迦しゃかぶつ仏三十の御年・仏になり始てをはし候
 時・牧牛女もくごと申せし女人にょにん・乳のかいをにて仏にまいらせんとし候し程にい
 れて・まいらすべき器なし、毘沙門天王等の四天王してんのう・四鉢を仏にまいら
 せたりし、其の鉢そをうちかさねて・かいをまいらせしに仏にはならせ
 給たまう、其の鉢後には人も・もらざりしかども常に飯いひのみちしなり後に
 馬鳴菩薩めみょうぼさつと申せし菩薩・伝へて金錢三貫にほうじたりしなり、今御器二
 を千里せんりにをくり釈迦しゃかぶつ仏にまいらせ給たまは、かの福のごとくなるべし、委くわし
 くは申もうさず候。

建治三年丁丑ひのとうし十一月七日

日蓮花押にちれんかおう

兵衛志殿女房御返事
さかんどのにようぼうごへんじ

◆一七六

兵衛志殿御返事
さかんどのごへんじ

弘安元年

109

7p

みそをけ一給ひ畢ぬ。はらのけ(下痢)は左衛門どのの御薬になをりて候。又このみそ(味噌)をなめて、いよいよこちなをり候ぬ。あわれあわれ今年御つつがなき事をこそ、法華経ほけきょうに申し上げまいらせ候へ。恐恐きょうきょう謹言きんげん。

弘安元年六月二十六日
こうあんがねん

日蓮にちれん 花押かおう

兵衛志殿御返事^{さかんだのこへんじ}

◆一七七

兵衛志殿御返事さかんのこへんじ

弘安元年十一月 五十

七歳御作 於身延

1098p

銭六貫文の内

一貫次郎
よりの分

白厚綿小袖一領四季にわたりて財を三寶さんぼうに供養くよう

し給たまういづれも・いづれも・功德くどくにならざるはなし、但ただし時に随したがいて勝劣しょうれつ

・浅深せんじんわかれて候、うへたる人には衣をあたへたるよりも食をあたへて候

は・いますこし功德くどくまさるこごへたる人には食をあたへて候よりも衣は又

まさる春夏しゅんかに小袖をあたへて候よりも秋冬しゅうとうに

あたへぬれば又功德くどく一倍なり、これをもつて一切いっさいはしりぬべし、ただし此

の事にをいては四季を論ぜず日月にちがつをたださずせに・こめ・かたびら・きぬ

こそで・日日月月にひまなし、例せばびんば類婆娑羅王しやらわうの教主釈尊きょうしゅしやくそんに

日に五百輛の車を・をくり阿育大王あそかだいおうの十億の沙金を鶏頭魔寺にせせしがごとし、大小だいしやうことなれども志こころは彼かにも・すぐれたり。

其その上今年しは子細しさい候、ふゆと申もうすふゆいづれのふゆかさむからざる、なつと申もうすなついづれのなつかあつからざる、ただし今年しは余国あまのくにはいかんが候らんこのはきるは法にすぎてかんじ候、ふるき・をきなどにも・とひ候へば八十九十一百になる者の物語ものがたりり候はすべて・いにしへ・これほどさむき事候はず、此のあんじちより四方しほうの

山の外十町二十町人かよう事候はねばしり候はず、きんぺん一町のほどはゆき一丈二丈五尺等なり、このうるう十月卅日ゆきすこしふりて候しがやがてき候ぬ、この月の十一日たつの時より十四日まで大雪ふりて候しに兩三日へたててすこし雨ふりてゆきかたくなる事金剛こんごうのごとし・いまにきゆる事なし、ひるも・よるも・さ

むくつめたく候事法にすぎて候、さけはこをりて石のごとく、あぶらは金にいたり、なべかまは少し水あればこおりてわれかんいよいよかさなり候は、きものうすく・食ともしくして・さしいづるものもなし。

坊ははんさくにてかぜゆきたまらず・しきものはなし、木はさしいづるものもなければ・火もたかず、ふるき

あかづきなんどして候こそで・なんどきたるものは其身のいろ紅蓮ぐれん
大紅蓮だいぐれんのごとし、こへははは大ばば地獄じごくにことならず、手足かんじてき
れさけ人死ぬことかぎりなし、俗のひげをみれば・やうらくをかけた
り、僧のはなをみればすずをつらぬきかけて候、かかるふしぎ候はず候
に去年こぞの十二月の卅日より・はらのけの候しが春夏しゅんかやむ

ことなし、あきすぎて十月のころ大事だいじになりて候しがすこして平愈へいゆつか
まつりて候へども・ややもすればをこり候に、兄弟きょうだい二人のふたつの小袖
わた四十両をきて候が、なつのかたびらのやうにかろく候ぞ・ましてわ
たうすく・ただぬのものばかりのもの・をもひやらせ給たまへ此の二のこそ
でなくば・今年きょうだいはこごへしに候なん。

其上兄弟きょうだいと申し右近の尉もうの事と申し食もあいついて候、人はなき時
は四十人ある時は六十人、いかにせき候へどもこれにある人人ひとびとのあにと

て出来ししゅつだい舎弟しやていとてさしいでしきる候ぬれば・かかはやさにかにとも
申しもうず・心

にはしずかに、あじちむすびて小法師ほつしと我が身計ばかり御経よみまいらせん
ところ存じて候に、かかるわづらはしき事候はず、又としあけ候わばい
づくへもにげんと存じ候ぞ、かかるわづらわしき事候はず又又申しもうすべく
候。

なによりも・えもんの大夫志たゆうのさかんと・とのとの御事おんことちちの御中おんちゆうと申し上もうの
をばへと申し面もうにあらずば申しつくしがたし、恐恐きようきよう謹言きんげん。

十一月廿九日

日蓮にちれん

花押かおう

兵衛志殿御返事さかんのごへんじ

◆一七八

孝子御書こうしごしよ

1100p

御親父御逝去の由・風聞真にてや候らん、貴辺きへんと大夫志たゆうのさかんの御事おんことは代
末法まつぽうに入つて生を辺土にうけ法華ほっけの大法だいほうを御信用ごしんよう候へば惡鬼あくき定めて
国主こくしゅと父母等ふぼの御身おんみに入りかわり怨あだをなさん事疑うたがいなかるべきところ
に、案にたがふ事なく親父より度度たびたびの御かんだうをかうほらせ給ひしか
ども兄弟きょうだいともに淨蔵・淨眼の後身はが將やくおうた又藥王藥上の御計たまひら
いかのゆへについに事ゆへなく親父に御かんきをゆりさせ給いて前にたて
まいらせし御孝養心ごうようしんに任せさせ給いぬるはあに孝子こうしにあらずや、定めて
天よろこよりも悦よろこびをあたへ法華經十羅刹ほけきようじゅうらせつも御納受のうじゆあるべし。

其その上貴辺きへんの御事おんことは心の内に感じをもう事候、此この法門經ほうもんきやうのごとく

ひろまり候わば御悦よろこび申もうすべし、穴賢あなかしこ穴賢あなかしこ兄弟きょうだいの御中おんちゆう不和ふわにわたらせ給たまふべからず不和ふわにわたらせ給たまふべからず、大夫志殿たゆうのさかんどの御文おんふみにくわしくかきて候きこしめすべし、恐きよう恐きん謹言げん。

弘安二年二月二十一日

日蓮にちれん 花押かおう

◆一七九

兩人御中御書 おんちゆうごしよ

弘安二年 こうあん

五十八歳御

作 於身延

1101p

大國阿闍梨たいこくあじかりえもんのたいう志殿等さかんとのもうに申す、故大進阿闍梨あじかりの坊は各各の御計らいに有るあべきかと存じ候に今に人も住せずなど候なるはいかなる事ぞ、ゆづり状のなくばこそ人人ひとびとも計らい候はめ、くはしくうけ給たまわり候へば べんの阿闍梨あじかりにゆづられて候よしうけ給たまわり候き、又いぎあるべしともをばへず候、それに御用もちいなきは別べつの子細しさいの候か其その子細しさいなくば大國阿闍梨たいこくあじかり大夫殿たゆうどのの御計らいとして弁あじかりの阿闍梨の坊へこぼちわたさせ給たまい候へ心けんなる人に候へいかんがとこそをもち候らめ、弁あじかりの阿闍梨の坊をすりしてひろくもらずば諸人しよにんの御ために御たからにてこ

そ候^{そうら}はんずらむめ、ふゆはせうまうしげし、もしやけなばそむと申し人
もわらいなん、このふみついて両三日が内に事切て各各御返事^{ごへんじ}給^もび
候^{そうら}はん、恐恐^{きようきよう}謹言^{きんげん}。

十月廿日

日蓮^{にちれん}

花押^{かおう}

兩人御中^{おんちゆう}

ゆづり状をたがうべからず

◆一八〇 右衛門太夫殿御返事

1102P

抑そもそも久しく申し承うけたまわらず候ところの処おんふみとうらいに御文到来候おわい畢とんぬ、殊ことにあをき
うらの小袖一ぼうし一をび一すぢ鷲目一貫文くり一籠たしかにうけと
りまいらせ候とうこん、当今は末法まつぼうの始の五百年に当りて候、かかる時刻じこくに
上行菩薩じようぎようぼさつ御出現しゆつげんあつて南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうの五字ごじを日本国にほんこくの一切衆生いっさいしゆじやうに
さづけ給たまうべきよし經文きやうもん分明ふんみやうなり、又流罪るざい・死罪しざいに行いわるべきよし
明あきらかなり、日蓮にぢれんは上行菩薩じようぎようぼさつの御使おんつかいにも似たり此この法門ほうもんを弘ひろむる故ゆえに、
神力品じんりきほんに云いく日にち月の光明こうみやうの能よく諸もろの幽冥ゆうみやうが除とくが如ごとく斯この人・世間せけん
に行いじて能よく衆生の闇しゆじやうを滅しめす」等云云、此このの經文きやうもんに斯し人行世間しにんぎやうせけんの五の
文字もんじの中なかの人の文字もんじをば誰たれとか思おもし食くす、上行菩薩じようぎようぼさつの再誕さいたんの人ひとなるべし

と覚おぼえたり、經いに云いく、我わが滅めつ度の後ごに於おて応まさに斯この經きやうを受じゆ持じすべし
是この人ふつどう・仏ぶつ道どうに於おて決けつ定じやうして疑うたが有あること無なけん」云云、貴き辺へんも
上じやうぎ行ぎやう菩ぼ薩さつの化け儀ぎをたすくる人ひとなるべし。

弘安二年己卯十二月三日

日蓮花押

右衛門太夫殿御返事

◆一八一 大夫志殿御返事たゆうのさかんどの

弘安三年こうあん

五十九歳御作

1103p

小袖一つ直垂三具同じく腰三具等云云、小袖は七貫直垂並びに腰は十貫已上十七貫文に当れり、夫れ以れば天台大師の御位を章安大師あらわ顕して云く正観しかんの第一だいいちに序文じょぶんを引いて云く安禪あんぜんとして化す、位五品ごぼんに居こしたまえ

り、故に経に云く四百万億那由佗ゆゑの国の人こに施すに一一ほどこに皆七宝みなしつぼうを与え又化して六通ろくつうを得しむるすら初随喜しよずいきの人こに如にざること百千万倍ひやくせんまんばいせり況や五品ごぼんをや、文に云く即如来そくによらいの使になり如来にの所遣しよけんとして如来にの事こを行こず」等云云、

伝でん教ぎょう大師だいし・天台てんだいだいし大師だいしを釈しやくして云いわく 今いま吾わが天台てんだいだいし大師だいしは法華ほけきやう經きやうを説とき
法華ほけきやう經きやうを釈しやくし群ぐんに特とく秀しゅうし唐とうに独歩どくぽす」云云、又云いわく 明あきらかに知しんぬ
如來にょらいの使しなり讚ほむる者は福あみを安明あんみやうに積しみ謗そしる者は罪つみを無間むげんに開ひらく」と
云云、是かくの如ごときは且しばらく之これを置おく、滅後めつご・一日いちにちより正像しょうざう二千余年にせうの間
・仏おんづかいの御使みづかい二十四人にせうなり、所謂いづゆる第一だいいちは大迦葉かしやう・第二にかんは阿難あなん・第三は
未田地みでんち・第四は商那和修しやうなわしゅう・第五は☆多た・第六は提多迦だいたか・第七は弥遮迦みしやか・
第八は仏駄難提ぶつだなんだい・第九は仏駄密多ぶつだみつた・第十は脇比丘きやうきびく・第十一は富那奢ふなしや・第
十二は馬鳴めみやう・第十三は毘羅びら・第十四は竜樹りゅうじゆ・第十五は提婆だいは・第十六は
羅☆らご・第十七は僧☆難提なんだい・第十八は僧☆耶奢そうぎや・第十九は鳩摩羅駄くまらだ・第二
十は闍夜那しややな・第二十一は盤駄ばんだ・第二十二は摩奴羅まぬら・第二十三は鶴勒夜かくろくや
奢しや・第二十四は師子尊者ししそんじや、此この二十四人にせうは金口きんくの記しるする所ふほうやうきやうの付法蔵經ふほうざうきやう
に載のす、但ただし小乘しょうじやう・權大乘經こんだいじやうきやうの御使おんづかいなりいまだ法華經ほけきやうの御使おんづかいには

あらず、三論宗の云く

遁朗吉蔵は仏の使なり」法相宗の云く 玄奘

慈恩は仏の使なり」華嚴宗の云く 法蔵・澄観は仏の使なり」真言宗の

云く 善無畏・金剛智・不空慧果弘法等は仏の使なり」

日蓮之を勘えて云く全く仏の使に非ず全く大小乗の使にも非ず、

之を供養せば災を招き之を謗せば福を至さん、問う汝の自義か答え

て云く設い自義為りと雖も有文有義ならば何の科あらん、然りと雖も

釈有り伝教大師云く 誰か福を捨て罪を慕う者あらんや」云云、福を

捨てるとは天台大師を捨てる人なり、罪を慕うとは上に挙ぐる所の

法相・三論・華嚴・真言の元祖等なり、彼の諸師を捨て一向に天台大師

を供養する人の其の福を今申すべし、三千大千世界と申すは東西南北

一須弥山六欲梵天を一四天下となづく、百億の須弥山四州等を小千

と云う、小千の千を中千と云う、中千の千を大千と申す、此の

さんぜんだいせんせかい
三千大千世界を一にして四百万億那由佗国の六道の衆生を八十年や
しなひ法華經より外の已今当の一切經を一一の衆生に読誦せさせて
さんみょうろくつう
三明六通の阿羅漢・辟支仏等覺の菩薩となせる一人の檀那と、世間
しめつせ たから いちぶん ほどこ
出世の財を一分も施さぬ人の法華經計りを一字・一句一偈持つ人と
そつたい くどく
相對して功德を論ずるに、法華經の行者の功德勝れたる事百千万億倍
なり、天台大師此れに勝れたる事五倍なり、かかる人を供養すれば福
を須弥山につみ給うなりと伝教大師ことはらせ給ひて候、此の由を
によろぼう
女房には申させ給へ 恐恐謹言。

たゆうのさかんどのごへんじ
大夫志殿御返事 花押

◆ 一八二

兵衛志殿御返事

青^{せい}鳧^ふ五貫文送り給び了^おんぬ、唱^{とな}え奉^{たてまつ}る南無妙法蓮華經一返の事、
 恐^{きよう}恐^{きよう}。

六月十八日

日^に蓮^{ちれん}

花^か押^{おう}

兵衛志殿御返事^{さかんどのごへんじ}

◆一八三

大夫志殿御返事たゆうのさかんとの

弘安四年十二月こうあん

六十歳御作

1105p

聖人しょうにん一つ味文字みもじ一をけ生和布なまわかめ一こ聖人しょうにんと味文字もんじはさてをき候い

ぬ生和布は始めてにて候、将又病はたまたの由聞かせ給たまひいて不日ふじつに此の物して御使おんつかいをもつて脚力だいちにつかわされて候事心ざし大海たいかいよりふかく善根ぜんこんは大地だいちよりも厚し、かうじんかうじん、恐恐きょうきょう。

十二月十一日蓮花押にちれんかおう

大夫志殿御返事たゆうのさかんとのこへんじ

◆一八四

八幡宮造営事はちまん

弘安四年五月六十歳御作こうあん

此ほうもんもうの法門申し候事すでに廿九年なり、日日の論義ろんぎ月月の難兩度なんの流罪るざいに身つかれ心いたみ候ゆえいし故にや此の

七八年間が間年おとろえ年に衰病をこり候いつれどもなのめにて候いつるが、今年ことしは正月より其その氣分けぶん出来しゅつして既すでに一期いちご

をわりになりぬべし、其その上よわい齡すで既に六十にみちぬ、たとひ十に一今年はすぎ候とも一二をばいかでかすぎ候べ

き、忠言は耳に逆りい良薬は口りょうやくに苦しとは先賢せんけんの言なりやせ病の者は命をきらう佞人ねいじんは諫いさめを用もちいずと申もうすなり、此

の程は上下じょうげの人人ひとびとの御返事ごへんじ申もうす事なし心もものうく手もたゆき故なり、しかりと申せども此の事だいじ大事なれば苦

を忍んで申すものうしとおぼすらん一篇きこしめすべし、村上天皇の前
中書王の書を投げ給いしがごとく・なる
ことなかれ。

さては八幡宮はちまんの御造営につきて一定さむそうや有らんずらむと疑うたがい

いまいらせ候なり、をやと云ひ我が身もと申し二代が間きみにめしつかは
れ奉りてあくまで御恩ごおんのみなり、設一事相違そういすともなむのあらみかあ
るべき、わがみ賢人けんじんならば設上よりつかまつるべきよし仰おほせ下さるると
も一往いちおうはなに事につけても辞退すべき事ぞかし、

幸に讒臣等がことを左右さうによせば悦よろこんでこそあるべきに望まるる事一の
失とがなり、此これはさてをきぬ五戒ごかいを先生せんしやうに持ちて今生こんじやうに人身じんしんを得たり、
されば云うに甲斐かいなき者なれども国主等謂いなく失とがにあつれば守護しゆごの天
いかりをなし給たまう況や命をうばわるる事は天の放ち給たまうなり、いわう
や日本国にほんこく四十五億八万九千六百五十九人の男女なんよをば四

十五億八万九千六百五十九の天まほり給たまうらん、然しかるに他国たこくよりせめ
来る大難だいにんは脱のがるべしとも見え候はぬは、四十五億八万九千六百五十九

人の人人ひとびとの天にも捨てられ給う上六欲四禅梵釈ぼんしやく・日月・四天等にも放

たれまいらせ給うにこそ候いぬれ、然るに日本国の国主等八幡大菩薩はちまんたいぼさつ

をあがめ奉りなばなに事のあるべきと思はるるが、八幡はちまん

は又自力叶じりきかないがたければ宝殿ほうでんを焼きてかくれさせ給うか、然るに自の

大料だいりょうをばかへりみず宝殿ほうでんを造りてまほらせまいらせむとおもへり。

日本国の四十五億八万九千六百五十九人の一切衆生が釈迦・多宝・

十方分身の諸仏・地涌と娑婆と他方との諸大士十方世界の梵釈・

日月・四天に捨てられまひらせん分齊の事ならばはづかなる日本国の小

神天照太神・八幡大菩薩の力及び給うべしや、其の時八幡宮はつくりた

りとも此の国・他国にやぶらればくぼきところにちりたまりひきき

ところの水あつまると、日本国の上一人より下万民にいたるまでさたせ

む事は兼て又知れり、八幡大菩薩は本地は阿弥陀ほとけにまします、

衛門の大夫は念仏・無間地獄と申す阿弥陀仏をば火に入れ水に入れ
其の堂をやきはら

ひ念仏者のくびを切れと申す者なり、かかる者の弟子・檀那と成りて候
が八幡宮を造りて候へども八幡大菩薩用いさせ給はぬゆへに此の国はせ
めらるるなりと申さむ時はいかがすべき、然るに天かねて此の事をしろ
しめすゆへ

に御造営の大ばんしやうをはづされたるにやあるらむ 神宮寺じんぐうじの事の

はづるるも天おんはからの御計おんはからいか。

其そのゆえの故は去ぬる文永十一年四月十二日に大風たいふうふきて其その年の他国たこくよ

りおそひ来るべき前相なり風は是これ天地てんちの使なりまつり事あらければ

風あらしと申もうすは是これなり、又今年四月廿八日を迎むかえて此の風ふき来

る、而しかるに四月廿六日は八幡はちまんのむね上と承はる、三日の内の大風たいふうは疑うたがい

なかるべし、蒙古もうこの使者の貴辺きへんが八幡宮はちまんを造つくりて此の風ふき

たらむに人わらひさたせざるべしや。

返す返す穩便おんびんにして・あだみうらむる気色なくて身をやつし下人を

もぐせずよき馬にもものらず、のこぎりかなづち手にもちこしにつけてつ

ねにえめるすがたてにておわすべし、此の事一事もたがへさせ給たまうなら

ば今生こんじょうに

は身をほろぼし後生ごしようには悪道あくどうに墮おち給たまうべし、返す返す法華經ほけきよううらみ
させ給たまう事なかれ、恐恐きようきよう。

五月廿六日

在御判

大夫志殿たゆうのさかんの

兵衛志殿さかんの

◆一八五

兵衛志殿女房御返事さかんだのにようぼうごへんじ

11

08p

兵衛志殿女房さかんだのにようぼう絹片裏給たまい候、此の御心は法華經ほけきやうの御宝前ほうぜんに申し上もう

げて候、まこととはをばへ候はねども此の御房ごぼうたちの申し候は御子ども
はなしよにせけんふつふつとをもうはすると申され候こそなげかしく候へど
もさりとともとをばしめし候へ恐恐きようきよう。

十一月廿五日

日蓮にちれん 在御判

兵衛志殿女房御返事さかんだのにようぼうごへんじ

◆一八六

兵衛志殿御返事さかんだのごへんじ

110

我が法華經ほけきょうも本・迹わこう和合して利益りやくを無量むりょうにあらはす、各各二人又かくのごとし二人同心して大御所・守殿・法華堂ほっけ・八幡等はちまんつくりまいらせ給たまうならば此これは法華經ほけきょうの御利生りしやうとをもわせ給たまわざるべき、二人・一同の儀は車の二つのわの如ごとし鳥の二つの羽のごとし、設たとい妻子等の中のがわせ給たまうとも二人の御中おんちゆう不和ふわなるべからず、恐れ候へども日蓮にちれんをたいとしとをもひあわせ給たまへもし中不和ふわにならせ給たまうならば二人の冥加みやうがいかんがあるべかるらめと思しめせ、あなかしこ・あなかしこ、各各みわきかたきもたせ給たまいたる人人ひとびとなり、内より論出来しゆつたいれば鷸蚌いつぱうの相あい扼ひしも漁夫いしふのをそれ有あるべし、南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと御唱となえつつしむべし、つしむべし、恐恐きようきよう。

十一月十二日

日蓮にちれん在御判

ひやうえの志殿御返事^{さかんだのこへんじ}

◆一八七

四条金吾殿女房御返事

110

9p

懷胎のよし承り候い畢んぬ、それについては符の事仰せ候、日蓮相承の中より撰み出して候・能く能く信心あるべく候、たとへば秘薬なりとも毒を入れぬれば薬の用すくなし、つるぎなれども・わるびれ「臆病」たる人のためには何かせん、就中夫婦共に法華の持者なり法華経流布あるべきたねをつぐ所の玉の子出で生れん目出度覚え候ぞ、色心二法をつぐ人なり争か・をそなはり候べき、とくとくこそ・うまれ候はむずれ、此の薬をのませ給はば疑いなるべきなり、聞なれども灯入りぬれば明かなり濁水にも月入りぬればすめり、明かなる事・日月にすぎ

んや淨き事・

蓮華れんげにまさるべきや、法華經ほけきょうは日月にちがつと蓮華れんげとなり故ゆえに妙法蓮華經みょうほうれんげきょうと
名なく、日蓮にちれん又日月にちがつと蓮華れんげとの如ごとくなり、信心しんじんの水みづすまば利生りしやうの月・必
ず応おうを垂しれ守護しゆごし給たまうべし、とくとうまれ候まうべし法華經ほけきょうに云いく如是によぜ
妙法みょうほう」又云いく安樂あんらく

産福子くでんそうじやう」云云、口伝相承くでんそうじやうの事は此この弁公べんこうにくはしく申しふくめて候・則

・如来にょらいの使しなるべし返す返すも信心しんじん候まうべし。

天照大神てんしやうだいじんは玉たまを・そさのをのみことにさづけて玉たまの如ごとくの子こをまふけた
り、然しかる間かん・日の神にちのじん・我が子ことなづけたり、さてこそ正哉せいさい吾勝わかつとは名なけ
たれ、日蓮にちれんうまるべき種くさねをさづけて候まうへば争いか我わが子こにをとるべき、有

一宝珠ほうしゆ

価直三千けじきさんぜん」等、無上宝聚むじやうほうじゆ不求自得ふぐじとく・釈迦如来しやかにょらい皆是みな吾子わがこ」等云云、日蓮にちれん

あに此の義にかはるべきや、幸なり幸なり

めでたしめでたし・又又申すべく候、あなかしこ・あなかしこ。

文永八年五月七日

日蓮花押

四條金吾殿女房御返事

◆一八八

月満御前御書

文永八年五月 五

十歳御作

1110p

若童生れさせ給いし由承り候目出たく覚候、殊に今日は八日にて候、彼れと云い此れと云い所願しをの指す

が如く春の野に華の開けるが如し、然ればいそぎいそぎ名をつけ奉る月満御前と申すべし、其の上此の国の主

八幡大菩薩は卯月八日にうまれさせ給ふ娑婆世界の教主釈尊も又卯

月八日に御誕生なりき、今の童女又月は替れども八日にうまれ給ふ

釈尊八幡のうまれ替りとや申さん、日蓮は凡夫なれば能くは知らず

是れ併しながら日蓮が符を進らせし故なり、さこそ父母も悦び給うら

ん、殊ことに御祝として餅酒鳥目一貫文送り給ひ候い畢おわんぬ是ま

た御本尊ごほんぞん十羅刹じゅうらせつに申し上げて候、今日の仏生れさせまします時に三十

二の不思議ふしぎあり此の事周書の異記と云う

文にしるし置けり。

釈迦しゃかぶつ仏は誕生し給いて七歩し口を自ら開いて天上・天下唯我独尊・

三界皆苦我当度之」の十六字を唱たまへ給ふ、今の月満御前はうまれ給いて

うぶごゑに南無妙法蓮華經と唱たまへ給ふか、法華經に云く諸法実相

天台の云く聲為

仏事」等云云、日蓮又かくの如く推し奉る、譬えば雷の音耳しいの

為に聞く事なく日月の光り目くらの為に見

る事なし、定めて十羅刹女は寄り合うてうぶ水をなで養ひ給うらんあ

らめでたやあらめでたや御悦び推量申し

候、念頃じゅうらせつに十羅刹女てんしょうだいじょ天照太神等もにも申して候、あまりの事に候間委くわく
は申もさず、是より重かさねて申もすべく候、
あなかしこあなかしこ
穴賢穴賢。

日蓮にちれん花押かおう

◆一八九

四条金吾殿御書

文永八年七月 五十

歳御作

1111p

雪のごとく白く候白米一斗古酒のごとく候油一筒御布施一貫文、
使者を以て盆料送り給い候、殊に御文の趣有難くあはれに覚え
候。

抑 孟蘭盆と申すは源目連尊者の母青提女と申す人慳貪の業によ
りて五百生・餓鬼道にをち給いて候を目連救ひしより事起りて候、
然りと雖も仏にはなさず其の故は我が身いまだ法華經の行者ならざる
故に母をも仏になす事なし、靈山八箇年の座席にして法華經を持ち
南無妙法蓮華經と唱えて多摩羅跋梅檀香仏となり給い此の時母も仏

になり給う、又施餓鬼の事仰せ候、法華經第三に云く、如從飢国来
忽遇大王膳こつぐ だいおう云云、此の文は中根の四大声聞しやうもん・醍醐の珍膳だいごをおとにも
きかざりしが今經こんきやうに来つて始めて醍醐の味をあくまでになめて昔しうへ
たる心を忽たちまちにやめし事を説き給う文なり、若し爾しからば餓鬼供養がきくやうの時は
此の文を誦じゆして南無妙法蓮華經なむ みやうほうれんげきやうと唱えてとぶらひ給うべく候。

総じて餓鬼がきにをいて三十六種類しゆるい相わかれて候、其の中に☆身餓鬼かくしんがきと
申すは目と口となき餓鬼がきにて候、是は何な

る修因しゆいんぞと申すに此の世にて夜討強盜などをなして候によりて候、
食吐餓鬼じきどがきと申すは人の口よりはき出す物

を食し候是も修因しゆいん上の如し、又人の食をうばふに依り候、食水餓鬼がきと
云うは父母孝養ふぼかうやうのために手向る水などを

吞む餓鬼がきなり、有財餓鬼がきと申すは馬のひずめの水をのむがきなり是は

今生こんじょうにて財たからを・をしみ食をかくす故なり、無財がきと申もうすは生れてよりいらいおんじき以来飲食の名をもきかざるがきなり、食法がきと申もうすは出家しゅつげとなりて仏法ぶつぽうを弘ひろむる

人・我は法を説けば人尊敬するなんと思ひて名聞名利みょうもんめいりの心を以て人にすぐれんと思つて今生こんじょうをわたり衆生しゅじょうをたすけず父母ふぼをすくふべき心もなき人を食法がきとて法をくらふがきと申もうすなり、当世とうせの僧を見るに人に・かくし

て我、一人ばかり供養くようをうくる人もあり是は狗犬くけんの僧ねはんぎようと涅槃經ねはんぎように見えたり、是は未來みらいには牛頭ごずと云う鬼おにとなるべし、又人にしらせて供養くようをうくるとも欲心よくしんに住して人に施ほどこす事なき人もあり是は未來みらいには馬頭めずと云う鬼おにとなり

候、又在家ざいけの人人ひとびとも我が父母ふぼ地獄じごく・餓鬼がき・畜生ちくしようにおちて苦患くかんをうくるをばとぶらはずして我は衣服飲食えぶくおんじきにあきみち牛馬眷属ぎゆうばけんぞく充満じゅうまんして我が心に任まかせてたのしむ人をば・いかに父母ふぼのうらやましく恨み給たまうらん、僧そうの中にも父

母師匠ししやうの命日めいじつをとぶらふ人はまれなり、定めて天てんの日月地にちがつの地神ぢじんいかりいきどをり給たまいて不孝ふこうの者とおもは

せ給たまうらん形かたちは人にして畜生ちくしようのごとし人頭鹿にんずろくとも申もうすべきなり、日蓮にちれん此この業障ごうしやうをけしはてて未來みらいは靈山淨土りやうぜんじやうどに

まいるべしとおもへば種種の大難雨のごとくふり雲のごとくにわき候へど

も法華經の御故なれば苦をも苦と

もおもはず、かかる日蓮が弟子・檀那となり給う人人殊に今月十二日

の妙法聖靈は法華經の行者なり日蓮が檀那なりいかでか餓鬼道にお

ち給うべきや、定めて釈迦・多宝仏・十方の諸仏の御宝前にましまさ

ん、是こそ四条金吾殿

の母よ母よと同心に頭をなで悦びほめ給うらめ、あはれいみじき子を

我はもちたりと釈迦仏とかたらせ給うら

ん、法華經に云く君し善男子・善女人有つて妙法華經の提婆達多品を

聞いて淨心に信敬して疑惑を生ぜざらん者は地獄・餓鬼・畜生に墮ち

ずして十方の仏前に生ぜん、所生の処には常に此の經を聞かん、若し

人天の中に生れば勝妙の樂を受け、若し仏前に在らば蓮華より化生

せん」と云云、此の經文きようもんに善女人ぜんによにんと見へたり妙法みようほう聖靈しょうりようの事にあらずんば誰が事にやあらん、又云くいわ此の經は持つこと難がたし若し暫も持つ者は我即すなわち歡喜かんきす諸仏しよぶつも亦然またしかなり是かくのこの如き

の人は諸仏しよぶつの歎ほめたもう所」と云云、日蓮にちれん讚歎さんたんしたてまつる事はもののかずならず、諸仏しよぶつ所歎しよぶつと見えたり、あら

たのもしやあらたのもしやと信心しんじんをふかくとり給たまうべし信心しんじんをふかくとり給たまうべし、南無妙法蓮華經なむみようほうれんげきよう、南無妙法蓮華經なむみようほうれんげきよう、恐きよう恐きよう謹言きんげん。

七月十二日

日蓮にちれん 花押かおう

四條金吾殿御返事しじようきんごごへんじ

◆一九〇

四条金吾殿御消息しじょうきんご

1113p

度たび度の御おとずれ音信申しつくしがたく候、さてもさても去いぬる十二日の難なんのと
き貴き辺へんたつのくちまでつれさせ給たまい、

しかのみならず腹を切らんと仰おほせられし事こそ不思議ふしぎとも申もうすばかり
なけれ、日蓮にちれん過去かこに妻さい子し所領しりやうけん眷属ぐんぞく等の故ゆゑに身命しんみやうを捨すてし所いくそぼく
かありけむ、或あるは山にすて海にすて、或あるは河、或あるはいそ等路のほとり
か、然しかれども法華經ほけきやう

のゆへ題目だいもくの難なんにあらざれば捨すてし身も蒙ごむる難なん等も成仏じやうぶつのためならず、
成仏じやうぶつのためならざれば捨すてし海・河

も仏土にもあらざるか。

今度このたび・法華經ほけきょうの行者ぎょうじやとして

流罪るざい・死罪しざいに及ぶ、流罪るざいは伊東死罪しざいはたつ

のくち相州そうしゅうのたつのくちこそ日蓮にちれんが命を

捨てたる処ところなれ仏土におとるべしや、其そのの故ゆえはすでに法華經ほけきょうの故なる

がゆへなり、經いに云く「十方じゅうぽう仏土中ちゆう唯有ゆいう

一乘法いちじようふ」と此の意なるべきか、此の經文きやうもんに一乘法いちじようふと説き給たまうは法華經ほけきょう

の事なり、十方じゅうぽう仏土の中には法華經ほけきょうより

外は全くなきなり除ほう方便説へんぽんと見えたり、若もし然しからば日蓮にちれんが難なんにあう

所ごとに仏土なるべきか、娑婆世界しやばせかいの中

には日本国にほんこく日本国にほんこくの中には相模さがみの国相模さがみの国の中には片瀬片瀬の中に

は竜口たつのくちに日蓮にちれんが命をとどめをく事は法

華經の御故なれば寂光土じやくくわうどともいうべきか、神力品じんりきほんに云く、若も於林中若

於園中若山谷曠野是中乃至而般涅槃」と

は是か。

かかる日蓮にちれんにともなひて法華經ほけきょうの行者ぎやうじやとして腹を切らんとたまの給う事かの弘演こうえんが腹をさいて主の懿公いこうがきもを

入れたるよりも百万倍ひゃくせんまんばいすぐれたる事なり、日蓮にちれん靈山りやうぜんにまいりてまづ四條金吾しじようきんごこそ法華經ほけきょうの御故ゆえに日蓮にちれんとをな

じく腹切らんと申し候もうなりと申し上げ候もうべきぞ、又かまくらどのの仰おおせとて内内佐渡さどの国へつかはすべき由

承り候、三光天子の中に月天子は光物とあらはれ竜口の頸をたすけ、
明星天子は四五日已前に下りて日蓮に見参し給ふ、いま日天子ばかり
のこり給ふ定めて守護あるべきかと・たのもしたのもし、法師品に云く
則遣變化人為之作衛護」疑あるべからず、安樂行品に云く 刀杖不
加」普門品に云く 刀尋段段壞」此等の經文よも虚事にて
は候はじ、強盛の信力こそありがたく候へ 恐恐謹言。

文永八年九月二十一日

日蓮

花押

四条金吾殿

◆一九一 同生同名御書

文永九年四月 五十一

歳御作

此の御文は藤四郎殿の女房と常によりあひて御覽あるべく候。

大閼をば日輪やぶる女人の心は大閼のごとし法華經は日輪のごとし、

幼子は母をしらず母は幼子をわすれず、

釈迦仏は母のごとし女人は幼子のごとし、二人たがひに思へばすべては

なれず一人は思へども一人思はざれば・

あるときはあひ・あるときはあわず、仏は・をもふもののごとし女人は

・をもはざるもののごとし、我等・仏を・を

もはば・いかでか釈迦仏見え給はざるべき、石を珠といへども珠とならず

珠を石といへども石とならず、權經の

当世の念仏等は石のごとし、念仏は法華經ぞと申すとも法華經等にあ

らず、又法華經をそしるとも珠の石とならざるのごとし。

昔もろこし唐國きそうに徽宗皇帝こうていと申せし惡王あくおうあり、道士どうしと申すものにすかされて
仏像ぶつざう・經卷きようかんをうしなひ僧尼そうにを皆還俗みなげんぞくせしめ
しに一人として還俗げんぞくせざるものなかりき、其その中に法道三藏ほうどうさんざうと申せし
人ちよくせんこそ勅宣ちよくせんをおそれずして面かおにかなを・

やかれて江南と申せし処へ流されて候いしが、今の世の禪宗と申す
道士の法門のやうなる悪法を御信用ある世に生れて、日蓮が大難に
値うことは法道に似たり、おのおの・わずかの御身と生れて鎌倉にゐな
がら人目をも・はばかりず命をも・おしまず法華經を御信用ある事た
だ事とも・おぼえず、但おしはかるに濁水に玉を入れぬれば水のすむが
ごとし、しらざる事を・よき人におしえられて其のままに信用せば
道理に・きこゆるがごとし、釈迦仏・普賢菩薩・藥王菩薩（やくおうぼさ
つ）・宿王華菩薩等の各各の御心中に入り給へるか、法華經の文に
閻浮提に此の經を信ぜん人は普賢菩薩の御力なりと申す是なるべし、
女人は・たとへば藤のごとし・をとこは松のごとし須臾も・はなれぬれば
立ちあがる事なし。

はかばかしき下人もなきに・かかる乱れたる世に此のとのを・つかは

されたる心ざし大地だいちよりも・あつし地神定めてしりぬらん・虚空こくうよりも・
たかし梵天ぼんてん・帝釈たいしやくもしらせ給たまいぬらん、人の身には同生同名と申もうす二の
つかひを天生るる時よりつけさせ給たまいて影の身にしたがふがごとく須臾しゅゆ
もはなれず、大罪たいざい・小罪しょうざい・大功德くどく・小功德くどくすこしも・おとさずかはる・か
はる天にのぼて申もうし候と仏説とき給たまう、此の事ははや天も・しろしめしぬ
らん、たのもしし・たのもしし。

四月 日

日蓮花押にちれんかおう

四條金吾殿女房御返事しじょうきんごにようぼうごへんじ

◆一九二

四條金吾殿御返事

文永九年五月五十

一歳 御作

1116p

日蓮にちれんが諸難しよなんについて御とぶらひ今に・はじめざる 志こころざし ありがたく候、
法華經ほけきやうの行者ぎやうじやとして・かかる大難だいにんにあひ候は・くやしくおもひ候はず、
いかほど生をうけ死にあひ候とも是ほどの果報かほうの生死しやうじは候はじ、又三惡さんあく
・四趣しうしにこそ候そうらいつらめ、今は生死しやうじ切斷きつだんし仏果ぶつかをうべき身となれば・よろ
こばしく候。

天台てんだい・伝教等でんぎやうは迹門しやくもんの理いちねんさんぜんの一念三千ぼうもんの法門ひろを弘め給たまうすら・なを
怨嫉おんしつの難なんにあひ給たまいぬ、日本にほんにしては伝教でんぎやうより義真ぎしん・円澄えんちやう・慈覺等じかく・
相伝そうでんして弘ひろめ給たまふ、第十八代の座主ざす・慈慧大師じけいだいしなり御弟子おんでしあまたあり、

其の中に檀那・慧心・

僧賀・禪喩等と申して四人まします、法門又二つに分れたり、檀那

そうじよう

僧正は教を伝ふ、慧心僧都は觀をまなぶ、されば教と觀とは日月のご

とし教はあさく觀はふかし、されば檀那の法門はひろくしてあさし、

悪心の法門はせばくしてふかし。

今日蓮が弘通する法門はせばきやうなれどもはなはだふかし、

其の故は彼の天台・伝教等の所弘の法よりは

一重立入りたる故なり、本門・寿量品の三大事とは是なり、南無

妙法蓮華經の七字ばかりを修行すればせばきが如し、されども三世の

諸仏の師範・十方薩埵の導師・一切衆生・皆成仏道の指南にてもしま

すなればふかきなり、經に云く諸仏智慧・甚深無量「云云、此の

經文に諸仏とは十方三世の一切の諸仏・真言宗の大日如来・

浄土宗じょうどしゅうの阿弥陀あみだ・乃至ないし諸宗しよしゅう・諸經しよきやうの仏ぶつ・菩薩ぼさつ・過去かこ・未來みらい・現在げんざいの總しよぶつ諸仏しよぶつ・現在げんざいの釈迦しやか如来にょらい等を諸仏しよぶつと説とき挙あげて次に智慧ちえといへ

り、此この智慧ちえとは・なにもものぞ諸法実相しよほうじつそう・十じふ如果成じこくじやうの法体ほつたいなり、其その法体ほつたいとは又またなにもものぞ南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやう是これなり、釈いに云いく実相じつそうの深理じんり・本有ほんぬの妙法蓮華經みょうほうれんげきやうといへり、其その諸法実相しよほうじつそうと云いうも釈迦しやか・多宝たほうの二仏ふつとならうなり、

諸法しよほうをば多宝たほうに約じつし実相じつそうをば釈迦しやかに約じつす、是これ又また境智きやうちの二法にぽうなり多宝たほうは境きなり釈迦しやかは智ちなり、境智きやうち而に二ににして・しかも境智きやうち不二ふたひの内証ないしやうなり、此等これらはゆゆしき大事だいじの法門ほうもんなり煩惱ぼんのう即そく菩提ぼだい・生死しやうじ即そく涅槃ねはんと云いうもこれなり、まさし

く男女なんよ交會かうかいのとき南無なむ妙法蓮華經みやうほうれんげきやうと・となふるところを煩惱ぼんのう即そく菩提ぼだい・生死しやうじ即そく涅槃ねはんと云いうなり、生死しやうじの当体とうたい不生ふしょう不滅ふめつとさとするより外しやうじに生死しやうじ即そく涅槃ねはんはなきなり、普賢經ふげんに云いく煩惱ぼんのうを断だんぜず五欲ごよくを離はなれず諸根しよこんを淨きよむることを得えて諸罪しよざいを滅除めつじよす」止觀しかんに云いく「無明度勞むみやうどらうは即そく是こ菩滿な生死しやうじは即そく涅槃ねはんなり」寿量品じゆりやうほんに云いく毎みづかに自こらは念なを作なす、何を以もつてか衆生しゆじやうをして無上道むじやうだうに入り、速すみやに仏身ぶつしんを成就じやうじゆすることを得えせしめん」と方便品ほうべんに云いく「世間せけんの相常住じやうじゆなり」等は此この意いなるべし、此この如ごとく法体ほつたいと云いうも全く余あには非あらずただ南無なむ妙法蓮華經みやうほうれんげきやうの事ことなり、か

かる・いみじく・

たうとき法華經ほけきようを過去かこにて勃はつごのしたに・をきたてまつり・或あるはあなづ

りくちひそみ、或あるは信しんじ奉ほうらず、或あるは法華經ほけきようの法門ほうもんをならうて一人

をも教化きやうけし法命きやうめいをつぐ人を惡心あくしんをもつて・とによせ・かくによせ・おこつ

きわらひ、或あるは

後生ごしようのつとめなれども郎ごんじよう今生こんじようかなひがたければ・しばらく・さしをけな

んどと無量むりようにいひうとめ謗ぼうぜしによつて今生こんじように日蓮種にちれんしゆじゆ種の大難だいなんにあう

なり。

諸經しよきやうの項上けいじやうたる御經ごきやうを鵬たてまつきくをき奉ほうる故ゆゑによりて現杜げんぼくに又人に紆ゆげら

れ用もちいられざるなり、譬ひ喩ゆ品ぽんに 人ひとにしたしみつくとも人山じんざんがいれて

不便ふびんとおもふべからず」と説ときたり、然しかるに血月けつげつ辺へ法華經ほけきようの行者ぎやうじやとな

り結句けつくだいなん大難だいなんにも

あひ日蓮にちれんをもたすけ給たまう事、法師品ほうしほんの文に、遷化しゅう四衆・比丘比丘びく優婆塞うぱさく優婆塞うぱさく」と説とき給たまふ此の中の優婆塞うぱさくとは貴辺きへんの事にあらずんば、たれをかささむ、すでに法を聞いて信受しんじゅして逆はざればなり不思議ふしぎや不思議ふしぎや、若もし然しから

ば日蓮にちれん・法華經ほけきょうの法師ほつしなる事、疑うたがいなきか、則すなわち如來にょらいにもにたるらん行如來事にょらいをも行ずるになりなん。

多宝塔中たほうたつちゅうにして二仏・並坐じやうぎようばさつの時・上行菩薩じやうぎようぼさつに譲ゆずり給たまいし題目だいもくの五字ごじを日蓮粗にちれんひろめ申もうすなり、此これ即すなわち上行菩薩じやうぎようぼさつの御使おんつかいいか、貴辺きへん又日蓮にちれんにしたがひて法華經ほけきょうの行者ぎやうじやとして諸人しよにんにかたり給たまふ是これ豈流通あにるつうにあらずや、法華經ほけきょうの信心しんじんを・とをし給たまへ・火をきるに・やすみぬれば火をえず、強盛じやうじやうの大信力しんりきをいだして法華宗ほつげしゅうの四条金吾しじやうきんご・四条金吾しじやうきんごと鎌倉中かまくらの上下万人じやうげばんにん・乃至日本国ないしにほんこくの一切衆生いっさいしゆじやうの口にうたはれ給たまへあしき名さへ流

す況やよき名をや何に況や法華経ゆへ

の名をや、女房にも此の由を云ひふくめて日月・両眼・さうのつばさと
調ひ給へ、日月あらば冥途あるべきや、両眼あらば三仏の顔貌拝見疑
なし、さうのつばさあらば寂光の宝刹へ飛ばん事・須臾刹那なるべし、
委しくは又又申べく候、恐惶謹言。

五月二日

日蓮花押

四条金吾殿御返事

◆一九三 四条金吾殿御返事

文永九年九月 五十

一歳御作

1118p

夫れ齊の桓公と申せし王・紫をこのみて服給いき、楚の莊王と言ひし

王は女の腰のふとき事を・にくみしかば一

切の遊女腰をほそからせんがために餓死しけるものおほし、しかれば一人の好む事をば我が心にあはざれど

も万民ばんみん随したがいしなり、たとへば大風たいふうの草木そうもくをなびかし大海たいかいの衆流しゅうりゅうをひくが

如ごとし、風にしたがはざる草木そうもくはをれう

せざるべしや、小河たいかい大海たいかいにおさまらずばいづれのところにおさまるべき

や、国王こくおうと申もうす事は先生せんしやうに万人ばんにんにすぐ

れて大戒だいかいを持ち天地てんち及び諸神しよゆるし給たまいぬ、其の大戒だいかいの功德くどくをもちて

其の住むべき国土こくどを定む、二人・三人等を

王とせず地王・天王海王山王等悉く来臨こんりんしてこの人をまほる、いかにい

はんや其の国中しよの諸民しよ其の大王だいおうを

背そむくべしや、此の王はたとひ悪逆あくぎやくを犯すとも一二三度等には左右さうなく

此の大王だいおうを罰せず、但しよてん諸天等の御心に叶かなわざるは一往いちおうは天変地天等てんぺんちようを
もちてこれをいさむ、事過分すれば諸天善神等しよてんぜんじん其その国土こくどを捨離しやりし
給たまう、若もしは此

の大王だいおうの戒力けいりきつき期来ききたつて国土こくどのほろぶる事もあり、又逆罪つみ多くにかさまれば隣国りんこくに破らるる事もあり、善惡ぜんあくに付て国は必ず王したに随うものなるべし。

世間せけん此こくの如ごとし仏法ぶつぽうも又然しかなり、仏陀ぶつだすでに仏法ぶつぽうを王法わうぽうに付し給たまうしかればたとひ聖人しょうにん・賢人けんじんなる智者ちしやなれど

も王にしたがはざれば仏法ぶつぽう流布るふせず、或あるは後には流布るふすれども始めには必ず大難だいにん来る、迦式志加王たしきしかは仏の滅後めつご四百余年の王なり健陀羅国けんだらをたなごころ

掌てのうちににぎれり、五百の阿羅漢あらかんを歸依きえして婆沙論ばしやろん二百巻をつくらしむ、國中総しやうじやうて小乗せうじやうなり其その国に大乘だいじやう弘ひろめがたかりき、発舍ほつしや密多羅王みつたらおうは五天竺てんじくを随ぶつぽうへて仏法ぶつぽうを失うしないひ衆僧しゆそうの頸うでをきる、誰の智者ちしやも叶かなわず。

太宗たいそうは賢王けんおうなり玄奘げんじやう三蔵さんざうを師しとして法相宗ほうそうしゆうを持たもち給たまいき誰の臣下しんか

かそむきし、此この法相宗ほうそうしゅうは大乗だいじょうなれども五性各別かくべつと申もうして仏教中ぶつぎょうのおほきなるわざはひと見えたり、なを外道げどうの邪法じゃほうにもすぎ惡法あくほうなり、
月支がつし・震旦しんたん・日本にほん・

三国共さんごくにゆるさず、終ついに日本国にほんこくにして伝教大師でんぎょうだいしの御手みてにかかりて此この
邪法止め畢おわんぬ、大なるわざはひなれども太宗たいそうこれを信仰しんこうし給たまいしか
ば誰たれの人かこれをそむきし。

真言宗しんごんしゅうと申もうすは大日經だいにちぎょう・金剛頂教こんごうちょうきょう・蘇悉地經そしつちぎょうによるこれ大日だいにちの
三部と号ごうす、玄宗皇帝げんそうこうていの御時おんとき・善無畏三藏ぜんむいさんざう・金剛智三藏こんごうちさんざう天竺てんじくより將まさち
来きり、玄宗げんそうこれを尊重そんちようし給たまう事天台てんだい・華嚴宗けこんしゅう等らにもこへたり、法相ほつそう・
三論さんろんにも勝すぐれて思おもは

食めすが故ゆえに漢土かんとどは總だいにちぎょうて大日經ほけきょうは法華經まさに勝まさると・おもひ日本にほんこく当世とうせに
いたるまで天台宗てんだいしゅうは真言宗しんごんしゅうに劣おとるなりと

おもふ、彼の宗を学する東寺・天台の高僧等慢過慢をおこす、但し
大日經だいにちぎようと法華經ほけきようとこれをならべて偏党へんとうを捨

て是を見れば大日經は螢火ほたるびの如く法華經は明月めいげつの如く真言宗は衆星
の如く天台宗は日輪にちりんの如し、偏執へんしよくの者の云く汝未だ真言宗の深義しんぎを
習ならいきはめずして彼の無尽むじんの科とがを申す、但し真言宗漢土かんどに渡つて六百
余年にほん日本に弘ひろま

りて四百余年此の間の人師にんしの難答なんたふあらあらこれをしれり、伝教大師一
人此の法門ほうもんの根源こんげんをわきまへ給う、し

かるに当世・日本国第一の科是なり、勝を以て劣と思ひ劣を以て勝と思ふの故に大蒙古国を調伏する時・還つて襲われんと欲す是なり。

華嚴宗と申すは法藏法師が所立の宗なり、則天皇皇后の御歸依ありしによりて諸宗肩をならべがたかりき、しかれば王の威勢によりて宗の勝劣はありけり法に依つて勝劣なきやうなり。

たとひ深義を得たる論師・人師なりといふとも王法には勝がたきゆへにたまたま勝んとせし仁は大難にあへり、所謂師子尊者は檀弥羅王のために頸を刎ねらる、提婆菩薩は外道のために殺害せらる、竺の道生は蘇山に流され法道三蔵は面に火印をされて江南に放たれたり、而るに日蓮は法華經の行者にもあらず又僧侶の数にもいらす。

然り而して世の人に隨て阿弥陀仏の名号を持ちしほどに阿弥陀仏の化身とひびかせ給う善道和尚の云く千即十生・百即百生乃至

千中無一せんちゅうむいつ」と、勢至菩薩せいしぼさつの化身けしんとあをがれ給たまう法然上人ほうねんしょうにん・此の釈りを料簡りょうけんして云いく、宋代まつだいに念仏ねんぶつの外の法華經等ほけきょうを雜あふる念仏ねんぶつにおいてはせんちゅうむいついこうに念仏ねんぶつせば十即じゅうそく十生じゅうしやう」と云云、日本国にほんこくの有智うち・無智むち仰あおいで

此の義を信じて今に五十余年一人も疑うたがいを加くす、唯日蓮ただにちれんの諸人しよにんにかはる所は阿弥陀仏あみだぶつの本願ほんがんには、唯五逆ただごぎやくと誹謗ひぼう正法しやうぼうとを除のく」とちかひ、法華經ほけきょうには、君もし人信ぜずして此の經を毀謗きぼうせば則ち一切世間の仏種ぶつしゆを斷ないず、乃至ないし

其その人命終みやうじゆうして阿鼻獄あびごくに入らん」と説ことかれたり、此れ善導ぜんどう・法然ほうねん・謗法ぼうぼうの者なればたのむところの阿弥陀仏あみだぶつにすてられをはんぬ、余仏余經よぶつよきやうにおいて是我と抛なげちぬる上は救たい給たまうべきに及およばず、法華經ほけきやうの文ぶんの如ごときは無間地獄むげんじごく・疑うたがい

なしと云云、而るを日本国はをしなべて彼等が弟子たるあひだ此の大難
まぬかれがたし。

無^{むじん}尽の秘計をめぐらして日蓮をあだむ是なり先先の諸難はさておき
候いぬ、去年九月十二日御勘氣をかほりて其の夜のうちに頭をはねら
るべきにてありしがいかなる事にやよりけん彼の夜は延びて此の国に來
りていま

まで候に世間にもすてられ仏法にもすてられ天もとぶらはれず二途に
かけたるすてもものなり、而るを何なる

御志ごいざしにてこれまで御使おんつかいをつかはし御身おんみには一期いちきの大事だいじたる悲母ひもの御追善ついでん第三年の御供養くようを送りつかはされたる両三日はうつともおぼへず、彼の法勝寺ほうしょうじの修行しゆぎやうがいはをが嶋しんじにてとしごろつかひける童にあひたりし心地

なり、胡国ここくの夷陽公といひしもの漢土かんどにいけどられて北より南へ出けるに飛びまひける雁を見てなげきけんも・

これにはしかじとおぼへたり。

但しただ法華經ほけきやうに云く君もし善男子ぜんなんし・善女人ぜんによにん・我が滅度めつどの後に能く竊ひそかに一人一人の爲ためにも法華經ほけきやうの乃至一句ないしいつくを説かん、当まさに知るべし是この人は則すなわち如来にょらいの使如来にょらいの所遣しよけんとして如来にょらいの事を行ずるなり」等云云、法華經ほけきやうを一字いっく・一句いっくも唱え又人にも語り申もうさんものは教主きやうしゆしやくそん・釈尊しやくそんの御使おんつかいなり、然しかれば日蓮にちれん賤身いやしみなれども教主きやうしゆしやくそん・釈尊しやくそんの勅宣ちやくせんを頂戴ちやうだいして此の国に來れ

り、此れを一言もそしらん人人は罪を無間に開き一字・一句も供養せん人は無数の仏を供養するにもすぎたりと見えたり。

教主釈尊は一代の教主一切衆生の導師なり、八万法蔵は皆金言十二部経は皆真実なり、無量億劫より以来持ち給いし不妄語戒の所詮は一切経是なり、いづれも疑うべきにあらず、但是は総相なり別してたづぬれば如来の

金口より出来して小乗・大乘・頭密権経・実経是あり、今この法華経は「正直捨方便等乃至世尊法久後・要当説真実」と説き給う事なれば誰の人か疑うべきなれども多宝如来証明を加へ諸仏舌を梵天に付け給う、されば此の御経は一部なれども三部なり一句なれども三句なり一字なれども三字なり、此の法華経の一字の功德は釈迦・多宝・十方の諸仏の御功德を一字におさめ給う、たとへば如意宝珠の如し一

珠も百珠も同じき事なり一珠も無量の

宝を雨す百珠も又無尽の宝あり、たとへば百草を抹りて一丸乃至百丸となせり一丸も百丸も共に病を治する事これをなじ、譬へば大海の一、も衆流を備へ海も万流の味をもてるが如し。

妙法蓮華經と申すは總名なり二十八品と申すは別名なり、月支と

申すは天竺の總名なり別しては五天竺是なり、日本と申すは總名なり

別しては六十六州これあり、如意宝珠と申すは釈迦仏の御舍利なり

竜王にこれを給いて頂上に頂戴して帝釈是を持ちて宝をふらす、

仏の身骨の如意宝珠となれるは無量劫来持つ所の大戒身に薰じて骨

にそみ一切衆生をたすける珠となるなり、たとへば犬の牙の虎の骨にと

く魚の骨の・の氣に消ゆるが如し、乃至・

師子の筋を琴の絃にかけてこれを弾けば余の一切の獣の筋の絃皆きら

ざるにやぶる、仏の説法せつぽうをば師子吼ししこうと申

す乃至ないしほけきよう法華經は師子吼ししこうの第一だいいちなり。

仏には三十二相そなはり給たまう一一の相皆みな百福莊嚴そうごんなり、肉髻にくけい白毫びやくごう

なんど申もうすは菓このみの如ごとし因位いんいの華の功德等くどくと

成じやうろくつて三十二相を備たまえ給たまう、乃至ないし無見頂相むけんちやうそうと申もうすは釈迦しゃか仏の御身おんみは

丈六じやうろくなり竹杖ちくじやうげどう外道しやくそんは釈尊みたちの御長みたちをはからず御頂みたちを見奉たてまつらんとせしに

御頂みたちを見たてまつらず、応持菩薩おぼさつも御頂みたちを見たてまつらず、大梵天王だいほんてんのう

も御頂みたちをば見たて

まつらず、これは・いかなるゆへぞとたづぬれば父母ふぼ・師匠ししやう主君しゆくんを頂いただきを

地きにつけて恭敬きやうけいし奉たてまつりしゆへに此の相

を感じかんじ得とくせり。

乃至ないし梵音聲ぼんおんじやうと申もうすは仏の第一だいいちの相なり、小王だいうわう大王てんりんおう轉輪王等てんりんおう・此の相

をいちぶん一分備へたるゆへに此の王の一言に國

も破れ國も治まるなり、宣旨せんじと申すは梵音声ぼんおんじやうの一分なり、万民ばんみんの万言

一王の一言に及ばず、則ち三墳・五典みくことばなど申すは小王の御言なり、

此のしょうこく小國を治め乃至大梵天王三界さんがいの衆生しゆじやうを隨ふる事仏の大梵天王・

帝釈等たいしやくをしたがへ

給う事たまもこの梵音声ぼんおんじやうなり、此等これらの梵音声一切經いっさいしゆじやうと成つて一切衆生を

利益りやくす、其その中に法華經ほけきやうは釈迦如来しやかによらいの書き顯あらわして此の御音こえを文字もんじと成

し給うたま仏の御心もんじはこの文字もんじに備れり、たとへば種子しゆしと苗と草と稻とはか

はれども心は

たがはず。

釈迦しやか仏ぶつと法華經ほけきやうの文字もんじとはかはれども心は一つなり、然しかれば法華經ほけきやう

の文字もんじを拜見はいけんせさせ給うたまは生身しやうしんの釈迦如来しやかによらいにあひ進まいらせたりとおぼし

めすべし、此の志^{こころざし}佐渡の国までおくりつかはされたる事すでに釈迦^{しやくあ}仏^{ぶつ}知^しし食^くし畢^{おわ}ん

ぬ、実に孝養こうようの詮しゆんなり、恐恐きょうきょう謹言きんげん。

文永九年ぶんえい 月 日

日蓮にちれん在御判

四條三郎殿御返事ごへんじ

◆一九四

經王御前御書きやうおうごぜんごしよ

文永九年五十一歲御作ぶんえい

1123p

種種しゆじゆ御送り物給ひ候い畢おわんぬ、法華經第八・妙莊嚴王品みやうそうごんと申すには
妙莊嚴王・淨徳夫人じやうとくふじんと申す後は淨藏・淨眼じやうがんと申す太子たいしに導かれ給うと
説かれて候、經王御前きやうおうごぜんを儲させ給いて候たまひは現世げんせには跡あとをつぐべき孝子かうし
なり後生ごしやうには又

導みちびかれて仏にならせ給うべし、今の代は濁世じよくせと申して乱れて候なり、

其の上・眼前がんぜんに世の中みだ乱れて見え候は

皆人みな今生こんじょうには弓箭きゅうせんの難なんに値あいて修羅道しゅらどうにおち後生ごしやうには惡道あくどう疑うたがいな
し。

而しかるに法華經ほけきやうを信ひずる人人ひとびとこそ仏ほとけには成なるべしと見え候へ御覽ごらんある様
にかかる事しゆつたい出来しすべしと見みて候、

故ゆえに昼夜しやに人に申もうし聞きかせ候いしを用もちいらる事こそなくとも科とがに行い
はるる事は謂いわれなき事なれども、古ふるも今いまも人の損そんぜんとては善言ぜんげんを
用もちいぬ習ならいなれば終ついには用もちいられず世の中亡なびんとするなり、是これ偏ひとえ
法華經ほけきやう・釈迦しやか仏ぶつの

御使おんつかいいを責せむる故ゆえに梵天ぼんでん・帝釈たいしやく・日月にちがつ・四天等してんの責せめを蒙こうむつて候なり、

又世は亡なび候とも日本国にほんこくは南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうとは人ひとごとに唱となえ候なりは
ずるにて候ぞ、如何いかんに申もうさじと思おもうとも毀そしらん人ひとには弥いよいよ申もうし聞きかす

べし、命生きて

御坐ば御覽有るべし、又いかに唱うとも日蓮に怨をなせし人人は必ず
無間地獄に墮ちて無量劫の後に日蓮の弟子と成つて成仏す可し、
恐恐謹言。

四条金吾殿御返事

日蓮

花押

◆一九五

経王殿御返事 きょうおうどのごへんじ

文永十年八月 五十二歳 ぶんえい

御作

1124p

其その後御おとづれきかまほしく候いつるところに・わざと人を・をくり給候、又なによりも重宝たるあし山海を尋たずねるとも日蓮にちれんが身には時に当たりて大切に候。

夫について経王御前きょうおうごぜんのこと・二六時中に日月天に祈り申し候もう、先日せんじつのまほり暫時さんじも身を・はなさずたもち給たまへ其その本尊ほんぞんは正法しょうぼう・像法ざうぼう・二時には習へる人だにもなし・ましてかき顕あらわし奉たてまつる事たえたり、獅子王ししおうは前三ぜんさん後・一と申もうして・

ありの子を取らんとするにも又たけきものを取らんとする時も・いきを

ひを出す事いは・ただをなじき事なり、日蓮守護にちれんしゅごたる処ところの御本尊ごほんぞんを・したため参らせ候事ししおうも獅子王ししおうに・をとるべからず、經に云く獅子奮迅ししふんじんしりき之力ちからとは是なり、

此まんだらよの曼荼羅まんだらよ能く能く信ぜさせ給ふべし、南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうは獅子吼ししこうの如ごとし、いかなる病さわりをなすべきや、鬼子母神きしもじん・十羅刹如じゅうらせつ・法華經ほけきやうの題目だいもくを持つものを守護しゅごすべしと見えたり、幸いは愛染あいぜんの如く福は毘沙門びしゃもんの如ごとくなる

べし、いかなる処ところにて遊びたはふるとも・つつがあるべからず遊行ぎやうぎやうして畏れ無きこと獅子王ししおうの如ごとくなるべし、十羅刹如じゅうらせつの中にも皇諦女こうだいによの守護しゅごふかかべきなり、但し御信心ごしんじんによるべし、つるぎなんども・すすまざる人のためには

用る事なし、法華經ほけきやうの劍けんは信心しんじんのけなげなる人こそ用る事なれ鬼に・か

なぼうたるべし、日蓮にぢれんがたましひをすみにそめながして・かきて候ぞ信たまたじさせ給へ仏みこころの御意は法華經ほけきょうなり日蓮にぢれんがたましひは南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうにすぎた

るはなし、妙樂みょうらく云く 顯本遠寿けんぽんおんじゅを以て其の命そと為なす」と釈しゃくし給たまう。

經王御前きやうおうごぜんには、わざはひも転じて幸いとなるべし、あひかまへて御信心しんじん出

し此の御本尊ごほんぞんに祈念きねんせしめ給へ何事なにことか成就じやうじゆせざるべき、充満じゅうまん其願ごがん・

如清涼池・現世安穩げんせあんのん・後生善處ごしょうぜんじょ」疑うたがいなからん、又申もうし候当国の大難だいにんゆ

り候はば・

いそぎ・いそぎ鎌倉へ上り見参いたすべし、法華經の功力を思ひやり候へば不老不死・目前にあり、ただ歎く所は露命計りな天たすけ給へと強盛に申し候、淨徳夫人・竜女の跡をつがせ給へ、南無妙法蓮華經・あなかしこ、あなかしこ

八月十五日

日蓮花押

経王殿御返事

◆一九六

呵責謗法滅罪抄

文永十年 五十二

歳御作

1125p

御文委く承り候、法華經の御ゆへに已前に伊豆の国に流され候いしもかう申せば謙ぬ口と人はおぼすべけれども心ばかりは悦ば入つて候い

き、無始むしより已來このかた法華經ほけきようの御ごゆへに實まことにても虚事そらごとにても科とがに当るならば争いかでか・かか

るつたなき凡夫ぼんぶとは生れ候べき、一端は・わびしき様なれども法華經ほけきようの御ご為ためなればうれしと思おもい候いしに少し

先生せんしやうの罪つみは消えぬらんと思おもしかども無始むしより已來このかたの十惡じゅうあく・四重六重八重十重五無間誹謗正法一闡提の種種しゅじゆ

の重罪じゅうざい大山より高く大海たいかいより深くこそ候らめ、五逆罪ごぎやくざいと申もうすは一逆いつぎやうを造なる猶なほ一劫無間の果はちまんを感かんず。

一劫いつぎやうと申もうすは人壽にんじゆう八万歳はちまんより百年ひゃくねんに一ひとを減かし是かくの如ごとく乃ない至し十歳じゅうさいに成なりりぬ、又十歳じゅうさいより百年ひゃくねんに一ひとを加くわうれば次第しだいに増ふして八万歳はちまんになるをいつぎやう一劫もつと申もうす、親おやを殺ころす者もの・此程このほどの無間地獄むげんじごくに墮おちて隙ひまもなく大苦おほくを受うくるなり、法華經誹謗ほけきようひぼうの者ものは心こころには思おもはざれども色いろにも嫉ねたみ戯あそれに

もゝる程ならば經にて無けれども法華經に名を寄たる人を輕し

めぬれば上の一劫いつこうを重ねて無數劫無間地獄むしゅこうむげんじごくに墮おち候と見えて候、不輕ふぎよう

菩薩ぼさつを罵打し人は始こそさありしかども

後には信しん伏ぶく隨ずい從じゅうして不輕菩薩ふぎようぼさつを仰あおぎ尊そんぶ事諸天しよてんの帝たい釈しやくを敬うやまひ我等われらが

日月にちがつを畏おそるるが如ごとくせしかども始めそし☆り

し大重罪消えかねて千劫大阿鼻地獄に入つて二百億劫三宝に捨てられ奉りたりき。

五逆と謗法とを病に對すれば五逆は霍乱の如くして急に事を切る、謗法は白癩病の如し始は緩に後漸漸に大事なり、謗法の者は多くは無間地獄に生じ少しは六道に生を受く、人間に生ずる時は貧窮・下賤等・白癩病等と見えたり、日蓮は法華經の明鏡をもつて自身に引き向かへたるに都てくもりなし、過去の謗法の我が身にある事疑いなし此の罪を今生に消さずば未來争か地獄の苦をば免るべき、過去遠の重罪をば何にしてか皆集めて今生に消滅して未來の大苦を免れんと勘えしに当世・時に當つて謗法の人人國に充満せり、其の上國主既に第一の誹謗

の人たり、此の時・此の重罪を消さずば何の時をか期すべき、日蓮が小

身を日本国に打ち覆うてののしらは無量無辺の邪法の四衆等無量無辺の口を以て一時に・るべし、爾の時に国主は謗法の僧等が方人として日蓮を怨み

・或は頸を刎ね・或は流罪に行ふべし、度度かかる事、出来せば無量劫の重罪一生の内に消なんと謀てたる大術・少も違ふ事なくかかる身となれば所願も満足なるべし。

然れども凡夫なれば動すれば悔ゆる心有りぬべし、日蓮だにも是くの如く侍るに前後も弁へざる女人なんどの各仏法を見ほどこせ給わぬが何程か日蓮に付いてくやしとおぼすらんと心苦しかりしに、案に相違して日蓮

よりも強盛の御志・どもありと聞へ候は偏に只事にあらず、教主釈尊の各の御心に入り替らせ給うかと思へば感涙押え難し、妙楽大師

の釈に云く記七 故に知んぬ末代一時も聞くことを得聞き已つて信を生ずる事宿種なるべし」等云云、又云く弘二 運像末に在つて此の真文を囑る宿に妙因を殖うるに非ざれば実に値い難しと為す」等云云。

妙法蓮華經の五字をば四十余年此れを秘し給ふのみにあらず迹門

十四品に猶是を抑へさせ給ひ寿量品にし

て本果本因の蓮華の二字を説き顯し給ふ、此の五字をば仏・文殊・普賢・弥勒・藥王等にも付属せさせ給はず、地涌の上行菩薩・無辺行菩薩・淨行菩薩・安立行菩薩等を寂光の大地より召し出して此れを付属し給ふ、儀式ただ事

ならず宝浄世界の多宝如来大地より七宝の塔に乗じて涌現せさせ
たま さんぜんだいせんせかい
給ふ、三千大千世界の外に四百万億那由佗の国土を浄め高さ五
ひやくゆじゅん
百由旬の宝樹を尽一箭道に殖え並べて宝樹一本の下に五由旬の師子の
座を敷き並べ十方分身

の仏尽く来り坐し給ふ、又釈迦如来は垢衣を脱で宝塔を開き多宝如来
に並び給ふ、譬えば青天に日月の並べるが如し帝釈と頂生王との善法
堂に在すが如し、此の界の文殊等他方の観音等十方の虚空に雲集せ
る事星の虚空に

充滿するが如し、此の時此の土には華嚴經の七处八会十方世界の
台上的盧舍那仏の弟子法慧・功德林・金剛幢

・金剛藏等の十方刹土塵点数の大菩薩雲集せり、方等の大宝坊雲集
の仏・菩薩般若經の千仏・須菩提・帝釈等・大日經の八葉九尊の四仏

四菩薩ぼさつこんごうちようきよう金剛頂經きんぐわうていぎやうの三十七尊等涅槃經ねはんぎやうの俱尸那城くしなじやうへ集會すえせさせ給たまいし
じゅつぽう ぼっかい
十方法界の仏菩薩ぼさつを

ば文殊・弥勒等互たがいに見知りて御物語おんものがたりり是ありしかば此等これらの大菩薩ぼさつは出

仕に物狎なれたりと見え候、今・此の四菩薩ぼさつ出でさせ給たまうて後釈迦しやかにようい如来

には九代の本師ほんしさんぜ三世の仏の御母にておはする文殊師利菩薩もんじゆしりぼさつも一生補處ふしよ

と・ののしらせ

給たまうふ弥勒等みろくも此の菩薩ぼさつに値あいぬれば物とも見えさせ給たまはず、譬たとえば

山かつが月卿げつけいに交り☆猴えんどうが師子ししの座に列るが如ごとし、此の人人ひとびとを召して

妙法蓮華經みようほうれんげきやうの五字ごじを付属ふぞくせさせ給たまいき、付属ふぞくも只ただならず十神力じゆりきを現げんじ

給たまふ、釈迦しやかは広長舌こうちやうぜつを色界しつかいの頂いただきに付け給たまへば諸仏しよぶつも亦復また是くかくの如く

四百万億那由他なゆたの国土こくどの虚空こくうに諸仏しよぶつの御舌赤虹を百千万億せんまん・

並べたるが如ごとく充満じゅうまんせしかばおびただしかりし事なり、是くかくの如く

不思議の十神力を現じて結要付属と申して法華經の肝心を抜き出して
四菩薩に譲り、我が滅後に十方の衆生に与へよと慇懃に付属して其の
後又一つの神力を
現じて文殊等の自界他方の菩薩・二乘・天人・竜神等には一經乃至
一代聖教をば付属せられしなり、本より影の身に随つて候様につかせ
給ひたりし迦葉舍利弗等にも此の五字を譲り給はず此れはさてをき
ぬ、文殊・弥勒等に
は争か惜み給うべき器量なくとも嫌ひ給うべからず、方方不審なるを
或は他方の菩薩は此の土に縁少しと嫌ひ、或は此の土の菩薩なれど
も娑婆世界に結縁の日浅し、或は我が弟子なれども初発心の弟子に
あらずと嫌はれさせ

給う程に、四十余年並びに迹門十四品の間は一人も初発心の御弟子
なし、此の四菩薩こそ五百塵点劫より已来教主釈尊の御弟子として
初発心より又他仏につかずして二門をもふまざる人人なりと見えて
候、天台の云く但

下方の発誓を見る」等云云、又云く是れ我が弟子なり応に我が法を
弘むべし」等云云、妙樂の云く子父の法

を弘む」等云云、道暹云く法是れ久成の法なるに由るが故に久成の人
に付す」等云云、此の妙法蓮華經の五字をば此の四人に譲られ候。

而るに仏の滅後・正法一千年・像法一千年・末法に入つて二百二十
余年が間・月氏・漢土・日本一閻浮提の内に未だ一度も出でさせ給はざ
るは何なる事にて有るらん、正くも譲らせ給はざりし文殊師利菩薩は
仏の滅後四百五十年まで此の土におはして大乘經を弘めさせ給ひ、

其の後も香山・清涼山より度度来つて大僧等と成つて法を弘め、

薬王菩薩は天台大師となり觀世音は南岳大師と成り、弥勒菩薩は

傳大士となれり、迦葉・阿難等は仏の滅後二十年四十年法を弘め

給ふ、嫡子として譲られさせ給へる人の未だ見えさせ給はず、二千二百

余年が間・教主釈尊の

絵像・木像を賢王・聖主は本尊とす、然れども但小乗・大乘・華嚴・

涅槃・觀經・法華經の迹門普賢經等の仏・真言・大日經等の仏宝塔品

の釈迦・多宝等をば書けどもいまだ寿量品の釈尊は山寺精舎にまし

まさず何なる事とも量りがたし、釈迦如来は後・五百歳と記し給ひ

正像二千年をば法華經流布の時とは仰せられず、天台大師は

後の五百歳遠く妙道に沾わん」と未来に譲り、伝教大師は「正像

稍過ぎ已つて末法太だ近きに有り」等と書き給いて、像法

の末は未だ法華經流布の時ならずと我と時を嫌ひ給ふ、さればをしはかるに地涌千界の大菩薩は釈迦・多宝・十方の諸仏の御譲り御約束を空く黙止てはてさせ給うべきか。

外典の賢人すら時を待つ郭公と申す畜鳥は卯月五月に限る、此の大菩薩も末法に出ずべしと見えて候、いかんと候べきぞ瑞相と申す事は内典・外典に付いて必ず有るべき事の先に現ずるを云うなり、蜘蛛かかつて喜事来り

かきさき ☆鵲鳴いて客人来ると申して小事すら驗先に現ず何に況や大事をや、
されば法華經序品の六瑞は一代超過の大瑞なり、涌出品は又此れには
似るべくもなき大瑞なり、故に天台の云く雨の猛きを見ては竜の大き
なる事を知り

華の盛なるを見ては池の深き事を知る」と書かれて候、妙樂云く智人
は起を知り蛇は自ら蛇を知る」と云云、

今日蓮も之を推して智人の一分とならん、去る正嘉元年 太歳丁巳
八月二十三日戌亥の刻の大地震と、文永元年甲子七月四日の大彗星、
此等は仏滅後・二千二百余年の間未だ出現せざる大瑞なり、此の大
菩薩の此の大法を持ちて出現し給うべき先瑞なるか、尺の池には丈の
浪たたず驢吟ずるに風鳴らず、日本国の政事乱れ万民歎くに依つ
ては此の大瑞現じがたし、誰か知らん法華經の滅不滅の大瑞なりと。

二千余年の間・悪王の万人に・らるる謀叛の者の誰人にあだまるる等
日蓮が失もなきに高きにも下きにも罵詈毀辱刀杖瓦礫等ひまなき事
二十余年なり、唯事にはあらず過去の不輕菩薩の威音王仏の末に多年
の間・罵詈

せられしに相似たり、而も仏彼の例を引いて云く我が滅後の末法にも
然るべし等と記せられて候に近くは日本

遠くは漢土等にも法華經の故にかかる事有りとは未だ聞かず人は悪ん
ではを云はず、我と是を云はば自讃に似たり、云わすば仏語を空くな
す過あり、身を輕んじて法を重んずるは賢人にて候なれば申す、日蓮
は彼の不輕菩薩

に似たり、国王の父母を殺すも民が考妣を害するも上下異なれども一
因なれば無間におつ、日蓮と不輕菩薩とは位の上下はあれども同業な

れば彼のふぎよう不輕菩薩成仏し給はば日蓮がふつかうたがい仏果疑うべきや、彼は二百五十戒の上慢じようまんの比丘びくに罵られたり、日蓮は持戒第一じかいだいいちの良觀りようかんに讒訴ざんそせられたり、彼は歸依きえせしかども千劫阿鼻獄せんこうあびごくにおつ、此れは未だ渴仰かつかうせず知らず無數劫むしゅうじやうをや経んずらん不便ふびんなり不便ふびんなり。

疑うたがいつて云く正嘉しょうかの大地震等だいじしんの事は去る文応元年ぶんおうがんねん庚申こうしん七月十六日

宿屋やどやの入道にゅうどうに付けて故最明寺入道殿さいみょうじにゅうどうでんへ奉る所の勘文立正安國論かんもんりつしょうあんこくろんには

法然ほうねんが選択せんちやくに付いて日本國にほんこくの仏法ぶつぽうを失ふ故うしなゆえに天地曠てんちいかりをなし自界叛逆じかいほんぎやく

難なんと他國侵遍たこく難起なんこる

べしと勘へたり、此には法華經の流布すべき瑞なりと申す先後の相違之
有るか如何、答えて云く汝能く之を問えり、法華經の第四に云く
而も此の經は如來現在すら猶怨嫉多し況や滅度の後をや」等云云、
同第七に況滅度後を重ねて説いて云く我が滅度の後・後の五百歳の中
に閻浮提に広宣流布せん」等云云、仏滅後の多怨は後・五百歳に
妙法蓮華經の流布せん時と見えて候、次ぎ下に又云く惡魔・魔民・
諸天・夜叉・鳩槃荼」等云云、行滿座主伝教大師を見て云く聖語
朽ちず今・此の人に遇えり我れ披閱する所の法門・日本國の阿闍梨に
授与す」等云云、今も又
是くの如し末法の始に妙法蓮華經の五字を流布して日本國の一切
衆生が仏の下種を懷妊すべき時なり、例せば下女が王種を懷妊すれば
諸女驥りをなすが如し、下賤の者に王頂の珠を授与せんに大難來らざ

るべしや、一切世間いっさいせけん

多怨難信たおんなんしんの經文きやうもん是なり、涅槃經ねはんぎやうに云く、聖人しようにんに難なんを致せば他国たこくより其その国を襲おそう」と云云、仁王經にんのうきやうも亦復また是くかくの如ごとし取意にちれん、日蓮にちれんをせめて弥いよ天地四方てんちしほうより大災雨たいさいの如ごとくふり泉いづみの如ごとくわき浪なみの如ごとく寄せ来るべし、国の大蝗虫いなむし

たる諸僧等近臣等しよそうが日蓮にちれんを讒訴ざんそする弥いよ盛さかなれば大難だいにん倍ます来るべし、帝釈たいしやくを射る修羅しゆらは箭還やかえつて己おのが眼まなこにた

ち阿那婆達多竜あなばだつたりゆうを犯とがさんとする金翅鳥こんじちようは自ら火を出して自身じしんをやく、法華經ほけきやうを持つ行者ぎやうじやは帝釈たいしやく・阿那婆達多竜あなばだつたりゆうに劣るべきや、章安大師だいにしの云く、仏法ぶつぽうを壊乱えらんするは仏法ぶつぽうの中の怨あだなり慈無なくくして詐いつわり親おやむは則すなわち是れ彼が怨あだなり

「等云云、又云く、彼ためが為ために惡を除くは則すなわち是れ彼が親おやなり」等云云。

にほんこく 日本国の一切衆生は法然が捨閉闍拋と禪宗が教外別伝との誑言に
たふら 誑かされて一人もなく無間・大城に墮つべしと勘へて国主・万民を憚か
おんじよう らず大音声を出して二十余年が間よばはりつるは竜逢と比干との直
臣にも劣るべきや、

だいひ 大悲千手觀音の一時に無間地獄の衆生を取り出すに似たるか、火の中
かんのん の数子を父母が一時に取り出さんと思ふに手少なければ慈悲前後有る
いちじ に似たり、故に千手万手億手ある父母にて在すなり、爾前の經經は
ゆえ 一手・二手等に似たり法華經は二切衆生を化して皆仏道に入らしむ」
ほけきよう 一と無數手の菩提是なり、日蓮は法華經並びに章安の釈の
にぢれん

如くならば日本国の一切衆生の慈悲の父母なり、天高けれども耳とければ聞かせ給うらん地厚けれども眼早ければ御覧あるらん天地既に知し食しぬ、又一切衆生の父母を罵詈するなり父母を流罪するなり、此の国此の両三年が間の乱政は先代にもきかず法に過ぎてこそ候へ。

抑 悲母の孝養の事仰せ遣され候感涙押へ難し、昔元重等の五童は五郡の異性の他人なり兄弟の契りをなして

互に相背かざりしかば財三千を重ねたり、我等親と云う者なしと歎きて途中に老女を儲けて母と崇めて一分も心に違はずして二十四年なり、母忽に病に沈んで物いはず、五子天に仰いで云く我等孝養の感無くして母もの云わ

ざる病あり、願くは天孝の心を受け給はば此の母に物いはせ給へと申す、其の時に母五子に語つて云く我は本是れ大原の陽猛と云うもの

の女なり、同郡の張文堅ちやうぶんけんに嫁す文堅死にき、我に一人の児あり名をば烏遣ういと云いいき彼が

七歳の時乱らんに値あうて行く処ところをしらず、汝等なんじ五子に養はれて二十四年此の事を語かたらず、我が子は胸に七星の文あり右の足の下に黒子ありと語かたり畢おわつて死す、五子葬をなす途中にして国令の行くにあひぬ、彼の人物記しるする囊ふくろを

落せり此の五童が取れるになして禁め置いましかれたり、令来つて問うて云いく汝等なんじは何いずくの者ぞ、五童答えて云いく上に言えるが如ごとし、爾その時に令上よりまろび下くだして天に仰あおぎ地に泣く、五人の繩をゆるして我が座に引き上ものせて物語ものがたりり

して云いく我は是これ烏遣ういなり、汝等なんじは我が親を養いけるなり此の二十四年の間多くの楽しみに値あへども非母の事を

のみ思い出いでて楽らみも楽らしみならず、乃至な大王だいおうの見参けんさんに入れて五ご県けんの主しゅと成なせりき、他人たにん集あつて他の親おやを養やしなふに是かくの如ごとし、何いかに況いはや同父どうふ同母どうぼの舍弟妹女等おといもうちとがいういうたるを顧かえりみば天てんも争いかでか御納受のうじゅなからんや。

淨藏・淨眼よんじゅうよねんは法華經ほけきょうをもつて邪見じゃけんの慈父じふを導みちびき、提婆達多だいばだつたは仏ぶつの御敵ごてき四十余年よんじゅうよねんの経經きょうきょうにて捨すてられ臨終りんじゅう悪あくくして大地だいち破やぶれて無間地獄むげんじごくに行いきしかども法華經ほけきょうにて召めし還かえして天王てんのう如來にょらいと記しせらる、阿闍世王あじやせは父ちちを殺ころせども仏ぶつ・涅槃ねはんの時とき・法華經ほけきょうを聞きこいて阿鼻あびの大苦だいこを免まぬかれき。

例せば此の佐渡の国は畜生の如くなり又法然が弟子充滿せり、
鎌倉に日蓮を惡みしより百千万億倍にて候、一日も寿あるべしとも見
えねども各御志ある故に今まで寿を支へたり、是を以て計るに
法華經をば釈迦・多宝・十方の諸仏大菩薩供養恭敬せさせ給へば此の
仏・菩薩は各各の慈父慈母に日日夜夜十二時にこそ告げさせ給はめ、
当時主の御おぼえのいみじくおはするも慈父慈母の加護にや有るらん、
兄弟も兄弟とおぼすべからず只子とおぼせ、子なりとも梟鳥と申す
鳥は母を食ふ破鏡と申す獸の父を食わんとうかがふ、わが子四郎は
父母を養ふ

子なれども悪くばなにかせん、他人なれどもかたらひぬれば命にも
替るぞかし、舍弟等を子とせられたらば今生の方人・人目申す計りな
し、妹等を女と念はばなどか孝養せられざるべき、是は流されしには一

人も訪う人も

あらじとこそおぼせしかども同行七八人よりは少からず、上下のくわても各の御計ひなくばいかがせん、是れ偏に法華經の文字の各の御身に入り替らせ給いて御助けあるとこそ覚ゆれ。

何なる世の乱れにも各各をば法華經十羅刹助け給へど湿れる木より火を出し乾ける土より水を儲けんが如く強盛に申すなり、事繁ければとどめ候。

四条金吾殿御返事

日蓮花押

◆一九七 主君耳入此法門免与同罪事 文永十一年

九月 五十三歳御作 与四条金吾 1132p

錢二貫文給ひ畢おわんぬ。

有情うじようの第一だいいちの財たからは命にすぎず此これを奪う者は必ず三途さんとに墮おつ、然しかれ
ば輪王りんおうは十善じゅうぜんの始はつには不殺生ふせっしょう仏ぶつの小乘經しょうじようきようの始はつには五戒ごかい其その始はつには
不殺生ふせっしょう、大乘だいじよう梵網經ぼんもうきようの十重禁じゅうきんの始はつには不殺生ふせっしょう、法華經ほけきようの寿量品じゅうりようぼんは
釈迦しやか如來にょらいの不殺生戒ふせっしょうかい

の功德くどくに當つて候品ぞかし、されば殺生せつしようをなす者は三世さんぜの諸仏しよぶつにすてられ六欲天ろくよくてんも是これを守る事なし、此この由よしは世間せけんの学者がくしゃも知れり日蓮にちれんもあらあら意得こころうて候、但し殺生せつしように子細しさいあり彼の殺さるる者の失とがに輕重けいちようあり、我が父母ふぼ・主君しゅくん・

我が師匠ししょうを殺せる者をかへりて害せば同じつみなれども重罪じゅうざいかへりて輕罪けいざいとなるべし、此これ世間せけんの学者がくしゃ知れる処ところなり、但し法華經ほけきやうの御かたきをば大慈大悲だいじだいひの菩薩ぼさつも供養くやうすれば必ず無間地獄むげんじごくに墮おつ、五逆ごぎやくの罪人ざいにんも彼を怨あだと

すれば必ず人天にんてんに生を受く、仙予國王せんよこくおう有徳國王うとくこくおうは五百無量の法華經むりやうほけきやうのかたきを打ちて今は釈迦しゃか・迦葉かふつ・阿難あなん・舍利弗しゃりふつ・目連もくれん等の無量の眷属けんぞくは彼の時に先を懸け陣をやぶり、或あるは殺し、或あるは害し、或あるは隨喜ずいきせ

し人^{ひと}人^{びと}なり、覺^{かく}徳^{とく}比^ひ丘^くは迦^か葉^{しやう}仏^{ぶつ}なり、彼の時に此の王^{おう}王^{おう}を勸^{すす}めて
法^{ほけ}華^き經^{きやう}のかたきをば父^ふ母^ぼ宿^{すく}世^せ叛^{はん}逆^{ぎやく}の者^{もの}の如^{ごと}くせし大^{だい}慈^じ大^{だい}悲^ひの法^{ほけ}華^き經^{きやう}の
行^{ぎやう}者^{じや}なり。

今の世は彼の世に当^{あた}れり、国^{こく}主^{しゅ}日^{にち}蓮^{れん}が申^{もう}す事^{こと}を用^{もち}ゆるならば彼がご
とくなるべきに用^{もち}いざる上^{うへ}かへりて彼

がかたうどとなり一^{いつ}国^{こく}こぞりて日^{にち}蓮^{れん}をかへりてせむ、上^{かみ}一^{いち}人^{にん}より下^げ万^{ばん}民^{みん}
にいたるまで皆^{みな}五^ご逆^{ぎやく}に過^すぎたる謗^{ほう}法^{ぽう}

の人となりぬ、されば各^{おの}各^{おの}も彼^{かれ}が方^{かた}ぞかし、心^{こころ}は日^{にち}蓮^{れん}に同^{どう}意^いなれども
身^みは別^{べつ}なれば与^よ同^{どう}罪^{ざい}のがれがたきの御^{おん}事^{こと}に

候^{しゅく}に主^{しゅ}君^{くん}に此^この法^{ほう}門^{もん}を耳^{みみ}にふれさせ進^{しん}せけるこそありがたく候^{しゅく}へ今^{いま}は
御^{もち}用^{もち}いなくもあれ殿^{との}の御^{おん}失^{しつ}は脱^{だつ}れ給^{たま}ひ

ぬ、此^これより後^ごには口^{くち}をつつみておはすべし、又^{また}天^{てん}も一^{いつ}定^{てい}殿^{でん}をば守^{まも}らせ

給^{たま}うらん、此^これよりも申^{もう}すなり。

かまへてかまへて御用心^{ようじん}候^{こう}べし、いよいよにくむ人人^{ひとびと}ねらひ候^{こう}らん、御

さかもり夜^{いっこう}は一向^{とと}に止め給^{たま}へ只女房^{ただにようぼう}

と酒^{さけ}うち飲^のんでなにの御不足^{ふそく}あるべき、他人^{たにん}のひるの御^ごさかもりおこた

るべからず、酒^{さけ}を離^{はな}れて・ねらうひま

有^あるべからず、返^{かへ}す返^{かへ}す、恐^{きよう}恐^{きよう}謹^{きん}言^{げん}。

九月二十六日

日蓮^{にちれん}

花押^{かおう}

左衛門尉殿御返事^{さえもんのかみごへんじ}

◆一九八

四條金吾殿女房御返事

文永十二年

正月 五十四歳御作

1134p

所詮しよせん日本にほん国こくの一切衆生いっさいしゆじやうの目をぬき神をまどはかす邪法じゃほう真言師しんこんしには
すぎず是しほは且しからく之これを置く、十喻じゅうゆは一切經いっさいきやうと法華經ほけきやうとの勝劣しょうれつを説しやうか
せ給たまうと見えたれども仏の御心はさには候はず、一切經いっさいきやうの行者ぎやうじやと
法華經ほけきやうの行者ぎやうじやとをな

らべて法華經ほけきやうの行者ぎやうじやは日月等にちがつのごとし諸經しよきやうの行者ぎやうじやは衆星燈炬しゆうせいとうこのごと
しと申もつす事を詮たとえと思し食され候、なにをもつてこれをしるとならば第
八だいにの譬たとえの下に最大事だいにの文あり、所謂いわゆる此の經文きやうもんに云く有能受持いわ是
經典者きやうてん亦復また如是にやぜ於一切いっさい

衆生しゅじやう中またこれだい亦また為な第一「等云云、此の二十二字は一經いっきやう第一の肝心かんじんなり一切いっさい衆生しゅじやうの眼目がんもくなり、文の心は法華經ほけきやうの行者ぎやうじやは日月大梵王ばんのう仏のごとし、大日經だいにちきやうの行者ぎやうじやは衆星しゆせい・江河凡夫こうかばんぶのごとしとかれて候經文きやうもんなり、されば此の世の中の

男女僧尼なんよそうには嫌きらうべからず法華經ほけきやうを持たせ給たまう人は一切衆生いっさいしゅじやうのしうとこそ仏は御らん候らめ、梵王ぼんのう・帝釈たいしやくは・あをがせ給たまうらめと・うれしさ申もうすばかりなし、又この經文きやうもんを昼夜に案じ朝夕ちやうせきによみ候へば常の法華經ほけきやうの行者ぎやうじやにては候

はぬにはんべり、是經典きやうてん者ものとて者の文字もんじはひととよみ候へば此の世の中の比丘びく・比丘尼びくにうば塞ほけきやううばいの中に法華經ほけきやうを信じまいらせ候人人ひとびとかと思えまいらせ候へばさにては候はず、次下つぎしもの經文きやうもんに此の者の文字もんじを仏かさね

てとかせ給たまうて候には若有にやくうによにん女人ととかれて候、日蓮にちれん・法華經ほけきようより外の一切經いっけきようをみ候には女人によにんとはなりたくも候はず、或經あるには女人によにんをば地獄じじくの使と定められ、或經あるには大蛇だいじやととかれ、或經あるにはまがれ木のごとし、或經あるには仏種ぶつしゆをい

れる者とこそとかれて候へ、仏法ぶつぽうならず外典げてんにも榮啓期えいけいきと申せし者の三樂をうたひし中に無女樂むじやらくと申して天地てんちの中女人によにんと生れざる事を一の樂とこそたてられて候へ、わざわひは三女よりをこれりと定められて候に、此の法華經計ほけきようばかりに此の經を持つ女人によにんは一切いっさいの女人によにんにすぎたるのみならず一切いっさいの男子にこえたりとみえて候、所詮しよせん・

一切いっさいの人にそしられて候にょにんよりも女人の御ためにはいとをしと・をもはしき男にふびんと・をもはれたらんにはす

ぎじ、一切いっさいの人はにくまばにくめ、釈迦しゃかぶつ仏・多宝たほうぶつ仏・十方じゅうぽうの諸しよ仏・乃至ないし梵王ぼんのう・帝釈たいしやく・日月にちがつ等にだにもふびんと・をも

はれまいらせなばなにかくるしかるべき、法華ほけき經にだにもほめられたてまつりなばなにかくるしかるべき。

今三十三の御やくとて御布施ふせ送りたびて候しやかぶつへは釈迦しゃかぶつ仏・法華ほけき經にうてん日天の御まへに申し上もうて候、又人の身には左右

のかたあり、このかたに二つの神をはします一をば同名二をば同生と申もうす、此の二つの神は梵天ぼんでん・帝釈たいしやく・日月にちがつの

人をまほらせんがために母の腹の内に入りしより・このかた一生をわるまで影のごとく眼まなこのごとくつき随したがいて候

が、人の惡をつくり善をなしなむどし候をばつゆちりばかりものこさず
天にうたへまいらせ候なるぞ。

華嚴經けこんきょうの文にて候を止觀しがんの第八に天台大師てんだいだいしよませ給たまへり、但し信心しんじんの
よはきものをば法華經ほけきょうを持つ女人にょにんなれどもすつるとみえて候、例せば大
將軍しょうぐんよはければしたがうものもかひなし、弓よはければ絃いとゆるし・風ゆ
るけ

れば波ちるさきは自然じねんの道理どうりなり、而るにさえもん殿は俗の中日本にほんに
はかたをならぶべき者もなき法華經ほけきょうの信

者なり、是にあひつれさせ給たまいぬるは日本第一にほんだいいちの女人にょにんなり、法華經ほけきょうの御
ためには竜女りゅうにょとこそ仏はをぼしめされ

候らめ、女と申す文字もんじをばかかるとよみ候、藤の松にかかり女の男にか
かるも今は左衛門殿さえもんを師とせさせ給たまい

て法華經ほけきょうへみちびかれさせ給たまい候へ。

又三十三のやくは転じて三十三のさいはひととならせ給たまうべし、七難ひちなん即滅そくめつ・七福ひちふく即生そくしやうとは是これなり、年は・わかうなり福はかさなり候べし、あなかしこ・あなかしこ。

五月二十七日

日蓮花押にぢれんかおう

四條金吾殿女房御返事しじょうきんごにようぼうごへんじ

◆一九九

四條金吾殿御返事

文永十二年三

月 五十四歳御作 一一三六頁

此經難持の事、抑弁阿闍梨が申し候は、貴辺のかたらせ給ふ様に
持つらん者は現世安穩・後生善処と承つて・すでに去年より今日まで・
かたの如く信心をいたし申し候処に、さにては無くして大難雨の如く
来り候と云云、真にてや候らん、又弁公がいつはりにて候やらん、いか
さま・よきついでに不審をはらし奉らん、法華經の文に難信難解
と説き給ふは是なり、此の經をききうくる人は多し、まことに聞き受く
る如くに大難来れども憶持不忘の人は希なるなり、受くるは・やすく
持つはかたし・さる間・成仏は持つにあり、此の經を持たん人は難に

値うべしと心得こころえ

て持つなり、即為疾得・無上仏道そくいしつとくむじょうぶつどう」は疑なし、三世の諸仏の大事たる

南無妙法蓮華經を念ずるを持つとは云うなり、經に云く「護持仏所屬」

といへり、天台大師の云く「信力の故に受け念力の故に持つ」云云、又

云く「此の經は持ち難し若し暫くも持つ者は我即ち歡喜す諸仏も亦

然なり」云云、火にたきぎを加える時はさかなり、大風吹け

ば求羅は倍增するなり、松は万年のよはひを持つ故に枝をまげらる、

法華經の行者は火と求羅との如し薪と風とは大難の如し、法華經の

行者は久遠長寿の如来なり、修行の枝をきられまげられん事疑

なかるべし、此れより後は此經難持の四字を暫時もわすれず案じ給うべ

し、○恐恐きようきよう。

文永十二年乙亥三月六日きのとい

日蓮にちれん

花押かおう

四條金吾殿しじょうきんご

◆二〇〇

王舎城事 おうしゃじょう

建治元年四月 がんねん 五十四歳御作

与四条金吾 しじょうきんこ

1137p

銭一貫五百文給び候い畢んぬ、焼亡の事委く承つて候事悦び入つて
候、だいか大火の事は仁王經の七難の中の第三の火難・法華經の七難の中には
第一の一の火難なり、夫れ虚空をば劍にてきることなし水をば火焼く
ことなし、しょうにん聖人・けんじん賢人・ちしゃ福人・智者をば火やくことなし、例せば月氏に
おうしゃじょう王舎城と申す大城は在家・九億万家なり、七度まで大火をこり
てやけほろびき、万比なげきて逃亡せんとせしに大王なげかせ給う事
かぎりなし、そのときけんじん其の時賢人ありて云く七難の大火と申す事は聖人のさり
王の福の付くる時をこり候なり、然るに此の大火・万民をばやくとい

えとも内裏だいりには

火ちかづくことなし、知んぬ王のとが・にはあらず万民ばんみんの失とがなりされば
万民ばんみんの家を王舎と号せば火神・名にをそれてやくべからずと申せしか
ば、さるへんもとて王舎城おうしゃじょうとそなづけられしかば・それより火災とどま
りぬ、されば

大果報かほうの人をげ大火だいかはやかざるなり。

これは国王こくおう已すでにやけぬ知んぬ日本にほん国こくの果報かほうのつくるしるしなり、然しかりに
此この国は大謗法ほうぼうの僧等そうどうが強盛きやうじやうにいのりをなして日蓮にちれんを降伏かうふくせんとする
故ゆえに弥弥いよいよわざはひ来るにや、其その上名もようと申す事は体を顕あらわし候に両火房
と申す謗法ほうぼうの

聖人・鎌倉中しょうにん かまくらの上下じやうげの師しなり、一火は身に留とどまりて極楽寺ごくらく焼て地獄寺じごく
となりぬ、又一火は鎌倉かまくらにじやなちて御所ごしよやけ候ぬ、又一火は現世げんせの

国をやきぬる上に日本国の師弟ともに無間地獄にはちて阿鼻の炎にも
え候べき先表なり、

愚癡の法師等が智慧ある者の申す事を用い候はぬは是体に候なり、
不便不便、先御文まいらせ候しなり。

御馬のがいて候へば又ともびきしてくり毛なる馬をこそまうけて候へ
あはれ・あはれ見せまいらせ候はばや、名越の事は是にこそ多くの子細
どもをば甲えて候へある人の・ゆきあひて理具の法門自讃しけるを・さ
むざむに

せめて候けると承り候。たまわ

又女房にようぼうの御いのりの事・法華經ほけきようをば疑うたがいひまいらせ候そうらはねども御信心しんじんやよはくわたらせ給たまはんずらん、如法に信じたる様なる人人ひとびとも実にはさもなき事とも是にて見て候、それにも知しるしめされて候、まして女人にょにんの御心・風をば・つ

なぐとも・とりがたし、御いのりの叶かない候そうらはざらんは弓のつよくしてつるよはく・太刀つるぎにて・つかう人の臆病おくびようなるやうにて候べし、あへて法華經ほけきようの御とがにては候べからず、よくよく念仏ねんぶつと持齋じさいとを我もすて人をも力の

あらん程はせかせ給たまへ譬たとへば左衛門殿の人にくまるるがごとしとこまごまと御物語おんものがたりり候そうらへいかに法華經ほけきようを御信用ごしんようありとも法華經ほけきようのかたきを・とわりほどには・よもおぼさじとなり、一切いっさいの事は父母ふぼにそむき

國王こくおうにしたが

はざれば不孝ふこうの者にして天のせめをかうふる、ただし法華經ほけきやうのかたきになりぬれば父母ふぼ・国主こくしゅの事をも用ひざるが孝養こうようともなり国の恩を報ずるにて侯。

されば日蓮にちれんは此の經文きやうもんを見侯しかば父母手ふぼをすりてせいせしかども師にて侯し人かんだうせしかども・鎌倉殿かまくらの御勘氣ごかんきを二度まで・かほり・すでに頸となりしかども・ついにをそれずして侯そうらへば、今は日本国にほんこくのひとびと・人人どうりも道理か

と申もうすへんも・あるやらん、日本国にほんこくに国主こくしゅ・父母ふぼ・師匠ししやうの申もうす事を用いずしてついに天のたすけをかほる人は日蓮にちれんよ

り外は出しがたくや侯そうらはんずらん、是より後も御覽あれ日蓮にちれんをそしる法師原ほつしが日本国にほんこくを祈らば弥弥国亡いよいよぶべし、結句けつくせめの重からん時・

上かみいちにん一人より下げ万民ばんみんまで・もとどりをわかつやつことなりはぞをくうため
しあるべし、後生ごしょう

はさてをきぬ今生こんじょうに法華經ほけきょうの敵となりし人をば梵天ぼんてん・帝釈たいしやく・日月にちがつ・
四天してん・罰たまいし給みないて皆人みなに・みこりさせ給たまへと申しつけて候もう、日蓮にちれん・法華經ほけきょう
の行者ぎやうじやにてあるなしは是これにて御覽ごらんあるべし、かう申せば国主こくしゅ等は此の
法師ほっしのをどすと思へるか、あへてにくみては申もうさず大慈大悲だいじだいひの力・無間むげん
地獄じごくの大苦だいこを今生こんじょうにけさしめんとなり、章安大師ぢやうあんだいし云く 彼が
為ために悪を除くは即すなわち是れ彼が親なり」等云云、かう申もうすは国主こくしゅの父母ふぼ・
一切衆生いっさいしゅじやうの師匠ししやうなり、事事じじ多く候そうらへども

留^{とど}候^めぬ、又麦の白米一だはしかみ送り給^{そうら}び候^{おわ}い畢^{おわ}んぬ。

建^{かん}治^{ねん}元^き年^の乙^{とい}亥^{とい}卯^{とい}月^{とい}十二^{とい}日

四^し条^{じょう}金^{きん}吾^ご殿^{へん}御^ご返^{へん}事^じ

◆二〇一 四^し条^{じょう}金^{きん}吾^ご殿^{へん}御^ご返^{へん}事^じ

113

9p

態^{わざ}と御^{おん}使^{つか}喜^きび入^いつて候^め、又柑^{こう}子^じ五十^{いそ}・鳶^{がもく}目^め五^ご貫^{くわん}文^{ぶん}給^{そうら}び候^{おわ}い畢^{おわ}んぬ、
各^{かく}各^{かく}御^ご供^く養^{よう}と云^い云^い、又御^{おん}文^{ぶん}の中^{なか}に云^いく去^{いぬ}る十六^{いそ}日^{にち}に有^ある僧^{そう}と寄^よ合^あうて
候^め時^{とき}・諸^{しよ}法^{ぽう}実^{じつ}相^{そう}の法^{ぽう}門^{もん}を申^{もう}し合^あいたりと云^い云^い、今^{こん}経^{きやう}は出^{しゅ}世^{つせ}の本^{ほん}懷^{かい}・
一^い切^{せつ}衆^{しゆ}生^{じやう}・皆^{かい}成^{じやう}仏^{ぶつ}道^{どう}の根^{こん}元^{げん}と申^{もう}すも只^{ただ}此^この諸^{しよ}法^{ぽう}実^{じつ}相^{そう}の四^し字^じより外^{ぐわい}は
全^{ぜん}くなきなり、されば伝^{でん}教^{きやう}大^{だい}師^しは万^{ばん}里^りの波^は濤^{たう}をし^しのぎ給^{たま}いて相^{そう}伝^{でん}し
まします此^この文^{ぶん}なり、一^い句^く万^{まん}了^{りやう}の一^い言^{げん}とは是^{これ}なり、当^{とう}世^せ・天^{てん}台^{だい}宗^{しゆ}の開^{かい}会^え

ほうもん の法門を申すも此の経文を悪く意得て邪義を云い出し候ぞ、只此の経
をも 持ちて南無妙法蓮華經と唱えて正直捨方便・但説無上道と信ずる
を諸法実相の開会の法門とは申すなり、其の故は釈迦仏・多宝如来・
十方三世の諸仏を証人とし奉り候なり、相構えてかくの如く

心得させ給いて諸法実相の四の文字を時時あぢわへ給うべし・良薬に毒
をまじうる事有るべきや・うしほの中より河の水を取り出す事ありや、
月は夜に出・日は昼出で給う此の事諍ふべきや、此れより後には加様に
意得給いて御問答あるべし、但し細細は論難し給うべからず、猶も申さ
ばそれがしの師にて候日蓮房に御法門候へとうち咲うて打ち返し打ち
返し仰せ給うべく候。

法門を書きつる間・御供養の志は申さず供、有り難し有り難し
委くは是よりねんごろに申すべく候。

建治元年乙亥七月二十二日 日蓮花押がねんきのとい にちれんかおう

四条中務三郎左衛門尉殿御返事さえもんのじょう ごへんじ

◆二〇二

瑞相御書ずいそうごしよ

建治元年がねん

五十四歳御作

1140p

与四条金吾しじょうきんご

夫それ天てん変へんは衆人しゅうじんをおどろかし地天ちようは諸人しよにんをうごかす、仏ぼつ・法華經ほけきやうを
とかんとし給たまう時五瑞六瑞をげんじ給たまう、其その中に地動瑞ちどうずいと申もうすは
大地六種だいちに震動しんどうす六種もうと申もうすは天台大師文句てんだいだいしもんくの三に釈しゃくして云いく
東涌西没とうゆせいぼつとは東方とうほうは青・肝を主まなこどる肝は眼まなこを主さいほうどる西方は白肺を主
どる肺は鼻を主こどる此これ眼根がんこんの功德生くどくじて鼻根ぼんのうの煩惱互たがいに滅するを表
するなり鼻根くどくの功德生まなこじて眼まなこの中の煩惱互ぼんのうに滅す余方の涌没みょうめつして余根
の生滅しやうめつを表するも亦復また「云云、妙樂大師之みょうらくだいしこれを承うけて云いく、表根いと言うう
は眼鼻すで已すに東西を表す耳舌理じとして南北に對す中央は心なり四方しほうは

身なり身四根を具す心 ☆く四を縁す故に心を以て身に對して涌没を
為す」云云、夫十方は依報なり衆生は正報なり譬へは依報は影

のごとし正報は体のごとし身なくば影なし正報なくば依報なし又
正報をば依報をもつて此れをつくる、眼根を

ば東方をもつてこれをつくる、舌は南方鼻は西方耳は北方身は四方心
は中央等これを・もつて・しんぬべし、

かるがゆへに衆生の五根やぶれんとせば四方中央をどろろべし・されば
国土やぶれんとするしには・まづ山

くづれ草木かれ江河つくるしるしあり人の眼耳等驚そうすれば天変あ
り人の心をうごかせば地動す・抑何の經

經にか六種動これなき一切經を仏とかせ給いしみなこれあり、しかれど
も仏・法華經をとかせ給はんとて六種震動

ありしかば衆も・ことにおどろき弥勒菩薩も疑い文殊師利菩薩もこた

へしは諸經しよきやうよりも瑞おおいも大に久しくありし

かば疑うたがいも大おおいに決しがたかりしなり、故ゆえに妙樂みょうらくの云く何れいずれの大乗經

にか集衆放光雨花動地あらざらん但大疑だいぎ

を生ずること無し」等云云、此の釈しやくの心はいかなる經經きやうぎやうにも序は候へど

も此これほど大なるはなしとなり・されば天台大師てんだいだいしの云く世人あちやう以蜘蛛掛

れば喜び来り・鵲鳴けば行人いた至ると小すら尚なお徵有り大焉ぞ瑞無からん

近きを以て

遠きを表す」等云云。

夫一代四十余年が間なかりし大瑞を現じて法華經の迹門をとかせ

給いぬ、其の上本門と申すは又爾前の經經

の瑞に迹門を對するよりも大なる大瑞なり、大宝塔の地よりをどりい

でし地涌千界大地よりならび出でし大震動は大風的大海を吹けば大山

のごとくなる大波のあしのはのごとくなる小船のをひほにつくがごとく

なりしな

り、されば序品の瑞をば弥勒は文殊に問い涌出品の大瑞をば慈氏は仏

に問いたてまつるこれを妙樂釈して云く

迹事は浅近文殊に寄すべし久本は裁り難し故に唯仏に託す」云云

迹門のことは仏説き給はざりしかども文殊ほ

ぼこれをしれり、本門の事は妙徳すこしもはからず、此の大瑞は在世の

事にて候、仏神力品にいたつて十神力

を現ず此れは又さきの二瑞にはにるべくもなき神力なり、序品の放光

は東方万八千土、神力品の大放光は十方

世界、序品の地動は但三千界神力品の大地動は諸仏の世界地皆六種に

震動す、此の瑞も又又かくのごとし、此

の神力品の大瑞は仏の滅後正像二千年すぎて末法に入つて法華經の

肝要のひろまらせ給うべき大瑞なり、經文に

云く、仏の滅度の後に能く是の經を持つを以ての故に諸仏皆歡喜して

無量の神力を現ず」等云云、又云く、惡世末

法の時」等云云。

疑つて云く夫れ瑞は吉凶につけて、或は一時・二時、或は一日・二日

・或は一年・二年、或は七年十二年か、如何ぞ二千

余年已後の瑞あるべきや、答えて云く周の昭王の瑞は一千十五年に始

めてあえり、訖利季王の夢は二万二千年

に始めてあいぬ、豈二千余年の事の前にあらはるるを疑うべきや、問

うて云く在世よりも滅後の瑞大なる如何、

答えて云く大地の動ずる事は人の六根の動くによる、人の六根の動きの

大小によつて大地の六種も高下あり、爾

前の経経には一切衆生煩惱をやぶるやうなれども実にはやぶらず、

今法華経は元品の無明をやぶるゆへに大動

あり、末代は又在世よりも悪人多多なり、かるがゆへに在世の瑞にも・

すぐれてあるべきよしを示現し給う。

うたがひ
疑

つて云く証文如何、答えて云く而かも此の経は如来の現在すら

猶怨嫉多し況や滅度の後をや等云云、去る正嘉文永の大地震大天変

は天神七代・地神五代はさてをきぬ、人王九十代二千余年が間、

日本国にいまだなき天変地天なり、人の悦び多くなれば天に吉瑞をあ

らはし地に帝釈の動あり、人の悪心盛なれば天に凶変地に凶天

出来す、瞋恚の大小に随いて天変の大小あり地天も又かくのごとし、

今・日本国上一人より下万民にいたるまで大悪心の衆生充滿せり、此

の悪心の根本は日蓮によりて起れるところなり、守護国界経と申す経

あり法華経以後の経なり阿闍世王仏にまいりて云く我国に大早魃・

大風・大水飢饉疫病年年に起る上他国より我が国をせむ、

而るに仏の出現し給える国なりいかんと問いまいらせ候しかば仏答え

て云く善き哉善き哉大王能く此の問をなせり、汝には多くの逆罪あり

て云く善き哉善き哉大王能く此の問をなせり、汝には多くの逆罪あり

て云く善き哉善き哉大王能く此の問をなせり、汝には多くの逆罪あり

て云く善き哉善き哉大王能く此の問をなせり、汝には多くの逆罪あり

て云く善き哉善き哉大王能く此の問をなせり、汝には多くの逆罪あり

て云く善き哉善き哉大王能く此の問をなせり、汝には多くの逆罪あり

て云く善き哉善き哉大王能く此の問をなせり、汝には多くの逆罪あり

て云く善き哉善き哉大王能く此の問をなせり、汝には多くの逆罪あり

て云く善き哉善き哉大王能く此の問をなせり、汝には多くの逆罪あり

て云く善き哉善き哉大王能く此の問をなせり、汝には多くの逆罪あり

て云く善き哉善き哉大王能く此の問をなせり、汝には多くの逆罪あり

て云く善き哉善き哉大王能く此の問をなせり、汝には多くの逆罪あり

て云く善き哉善き哉大王能く此の問をなせり、汝には多くの逆罪あり

て云く善き哉善き哉大王能く此の問をなせり、汝には多くの逆罪あり

て云く善き哉善き哉大王能く此の問をなせり、汝には多くの逆罪あり

て云く善き哉善き哉大王能く此の問をなせり、汝には多くの逆罪あり

て云く善き哉善き哉大王能く此の問をなせり、汝には多くの逆罪あり

て云く善き哉善き哉大王能く此の問をなせり、汝には多くの逆罪あり

て云く善き哉善き哉大王能く此の問をなせり、汝には多くの逆罪あり

て云く善き哉善き哉大王能く此の問をなせり、汝には多くの逆罪あり

て云く善き哉善き哉大王能く此の問をなせり、汝には多くの逆罪あり

て云く善き哉善き哉大王能く此の問をなせり、汝には多くの逆罪あり

て云く善き哉善き哉大王能く此の問をなせり、汝には多くの逆罪あり

て云く善き哉善き哉大王能く此の問をなせり、汝には多くの逆罪あり

て云く善き哉善き哉大王能く此の問をなせり、汝には多くの逆罪あり

て云く善き哉善き哉大王能く此の問をなせり、汝には多くの逆罪あり

て云く善き哉善き哉大王能く此の問をなせり、汝には多くの逆罪あり

て云く善き哉善き哉大王能く此の問をなせり、汝には多くの逆罪あり

て云く善き哉善き哉大王能く此の問をなせり、汝には多くの逆罪あり

て云く善き哉善き哉大王能く此の問をなせり、汝には多くの逆罪あり

て云く善き哉善き哉大王能く此の問をなせり、汝には多くの逆罪あり

て云く善き哉善き哉大王能く此の問をなせり、汝には多くの逆罪あり

て云く善き哉善き哉大王能く此の問をなせり、汝には多くの逆罪あり

て云く善き哉善き哉大王能く此の問をなせり、汝には多くの逆罪あり

て云く善き哉善き哉大王能く此の問をなせり、汝には多くの逆罪あり

て云く善き哉善き哉大王能く此の問をなせり、汝には多くの逆罪あり

て云く善き哉善き哉大王能く此の問をなせり、汝には多くの逆罪あり

て云く善き哉善き哉大王能く此の問をなせり、汝には多くの逆罪あり

て云く善き哉善き哉大王能く此の問をなせり、汝には多くの逆罪あり

て云く善き哉善き哉大王能く此の問をなせり、汝には多くの逆罪あり

て云く善き哉善き哉大王能く此の問をなせり、汝には多くの逆罪あり

て云く善き哉善き哉大王能く此の問をなせり、汝には多くの逆罪あり

て云く善き哉善き哉大王能く此の問をなせり、汝には多くの逆罪あり

て云く善き哉善き哉大王能く此の問をなせり、汝には多くの逆罪あり

て云く善き哉善き哉大王能く此の問をなせり、汝には多くの逆罪あり

て云く善き哉善き哉大王能く此の問をなせり、汝には多くの逆罪あり

其の中に父を殺し提婆だいばを師として我を害せしむ、この二罪つみ大なる故か
かる大難だいにん来る

ことかくのごとく無量むりようなり、其の中に我が滅後めつごに末法まつぽうに入つて提婆だいばがや
うなる僧国中に充満じゅうまんせば正法しょうぽうの僧一

人あるべし、彼の惡僧等正法しょうぽうの人を流罪るざい・死罪しざいに行いて王の后乃至万民
の女を犯おかして謗法者ぼうぼうしやうの種子しゆしの国に充満じゅうまん

せば国中に種種しゆじゆの大難だいにんをこり後には他国たこくに・せめらるべしととかれて
候、今の世の念仏者ねんぶつかくのごとく候上・真言しんごん

師等が大慢提婆達多だいまんだいだつたに百千万億倍せんまんすぎて候、真言宗しんごんしゅうの不思議ふしぎあらあ
ら申すべし、胎藏界たいざうの八葉はちようの九尊を画にかきて其の上そにのぼりて諸仏しよぶつの

御面をふみて灌頂かんちようと申す事を行ふなり、父母の面をふみ天子てんしの頂いただきを
ふむがごとくなる者・国中に充満じゅうまんして上下じやうげの師となれり、いかでか国ほ

ろびざるべき。

此の事余が一大事いちだいじの法門ほうもんなり又又申もうすべし、さきにすこしかきて候、
いたう人におほせあるべからず、びんごとの心ざし一度ひとたび二度ならねば、
いかにとも。

一切衆生・南無妙法蓮華經と唱うるより外の遊樂なきなり經に
云く「衆生所遊樂」云云、この文あに自受法樂にあらずや、衆生のう
ちに貴殿もれ給うべきや、所とは一閻浮提なり日本国は閻浮提の内な
り、遊樂とは我等が色心依正ともに一念三千・自受用身の仏にあらず
や、法華經を持ち奉るより外に遊樂はなし現世安穩・後生善処とは
是なり、ただ世間の留難来るとも・とりあへ給うべからず、賢人・聖人
も此の事はもがれず、ただ女房と酒うちのみて南無妙法蓮華經と・と
なへ給へ苦をば苦とさとり樂をば樂とひらき苦樂ともに思い合わせて

南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうとうちとなへるさせ給へたまこれあに自受法樂じじゆほうらくにあらず
や、いよいよ強盛かうじやうの信力しんりきをいたし給へたま恐恐きようきよう謹言きんげん

建治二年丙子ひのえね 六月二十七日

日蓮にちれん 花押かおう

四条金吾殿御返事しじようきんごごへんじ

◆二〇四

四条金吾釈迦仏供養事

建治二年七月

五十五歳御作

1144p

御日記の中に釈迦仏の木像一体等云云、開眼の事普賢經に云く此
の大乗經典は諸仏の宝蔵なり十方三世の諸仏の眼目なり」等云云、
又云く此の方等經は是れ諸仏の眼なり諸仏是に因つて五眼を具する
ことを得たもう」云云、此の經の中に得具五眼とは一には肉眼二には
天眼三には慧眼四には法眼五には仏眼なり、此の五眼をば
法華經を持つ者は自然に相具し候、譬へば王位につく人は自然に国のし
たがうがごとし、大海の主となる者の自然に魚を得るに似たり、華嚴・
阿含・方等・般若・大日經等には五眼の名はありといへども其の義なし、

今の法華經ほけきょう

には名もあり義も備わりて候、設たとひ名はなけれども必ず其その義あり。

三身さんじんの事、普賢經ふげんに云く、仏三種の身は方等ほうとうより生ず是この大法印ほういんは

涅槃海ねはんを印かす此こくの如ごとき海中かいちゅうより能よく三種の仏の清淨しょうじやうの身を生ず

此の三種の身は人天にんてんの福田ふくでんにして応供おうぐの中の最なり」云云、三身とは一

には法身ほっしん如来にょらい・二には報身ほうしん如来にょらい・三には応身おうじん如来にょらいなり、此の三身如来を

ば一切いっさいの諸仏しよぶつ必ずあひぐす譬たとへば月の体は法身ほっしん月の光は報身ほうしん・月の影は

応身おうじんにたとへ、一の月に三のことわりあり一仏いちぶつに三身の徳まします、こ

の五眼さんじん三身の法門ほうもんは法華經ほけきょう

より外には全く候はず、故ゆえに天台大師てんだいだいしの云く、仏さんぜ・三世さんぜに於て等しく

三身さんじん有り諸教しよきやうの中に於て之これを秘して伝えず」云云、此の釈しゃくの中に於

諸教しよきやう中とかかれて候は華嚴けごん・方等ほうとう・般若はんにかのみならず法華經ほけきょうより外ほかの

一切經いっさいきやうなり、秘ひ之不ふ伝でんとかかれて候こうは法華經ほけきやうの寿量品じゆりやうぼんより外ほかの一切經いっさいきやうには教主きやうしゆしやくそん釈尊しやくそん秘ひめて説とき給たまはずとなり。

されば画像・木像ぼざうの仏ぶつの開眼かいげん供養くやうは法華經ほけきやう・天台宗てんだいしゆうにかぎるべし、其その上うへ一念三千いちねんさんぜんの法門ほうもんと申もうすは三種さんしゆの世間せけんよりをこれり、三種さんしゆの世間せけんと申もうすは一いには衆生世間しゆじやうせけん二にには五陰世間ごおんせけん三さんには国土世間こくどせけんなり、前まへの二ふたは且しからく之これを置おく。

く、第三の国土世間と申すは草木世間なり、草木世間と申すは五色の
糸のぐは草木なり画像これより起る、木と申すは木像是より出来す、
此の画木に魂魄と申す神を入るる事は法華經の力なり天台大師のさと
りなり、此の法門は衆生にて申せば即身成仏といはれ画木にて申せば
草木成仏と申すなり、止觀の明靜なる前代いまだきかず

とかかれて候と無情仏性・惑耳驚心等とのべられて候は是なり、此の
法門は前代になき上・後代にも又あるべからず、設ひ出来せば此の法門
を偷盜せるなるべし、然るに天台以後二百余年の後・善無畏・金剛智・
不空等・大日經

に真言宗と申す宗をかまへて仏説の大日經等にはなかりしを法華經・
天台の釈を盗み入れて真言宗の肝心とし、しかも事を天竺によせて
漢土・日本の末学を誑惑せしかば皆人・此の事を知らず一同に信伏し

て今に五百余年なり、然る間・真言宗・已前の木画の像は靈驗・殊勝なり
真言已後の寺塔は利生うすし、事多き故に委く注さず。

此の仏こそ生身の仏にて・おはしまし候へ・優填大王の木像と影顯王
の木像と一分もたがうべからず、梵・帝・日月・四天等必定して影の身に
隨うが如く貴辺をばまほらせ給うべし是一。

御日記に云く毎年四月八日より七月十五日まで九旬が間・大日天子
に仕えさせ給ふ事、大日天子と申すは宮殿七宝なり其の大さは八百十
六里五十一由旬なり、其の中に大日天子居し給ふ、勝無勝と申して二
人の后あり左右には七曜九曜つらなり前には摩利支天女まします七宝
の車を八匹の駿馬にかけて四天下を一日一夜にめぐり

四州の衆生の眼目と成り給う、他の仏・菩薩天子等は利生のいみじく
まします事・耳に・これをきくとも愚眼に未だ見えぬ、是は疑うべき

にあら^{がんぜん}ず眼前^{りしよ}の利生^{きようし}なり教主^{きようしゅ}釈尊^{しやくそん}にましまさずば争^{いかで}か是^{かくの}くの如^{ごと}くあらたなる事候^{いかに}べき、

一乗^{いちじやう}の妙経^{みやうきやう}の力^{ちから}にあら^{いかに}ずんば争^{いかで}か眼前^{がんぜん}の奇異^{きい}をば現^{あらわ}す可^べき不思議^{ふしぎ}に思^{おも}ひ候^{いかに}、争^{いかで}か此^この天^{てん}の御恩^{ごおん}をば報^はずべきと・もとめ候^{いかに}に仏法^{ぶつぽう}以前^{いぜん}の人人^{ひとびと}も心^{こころ}ある人^{ひと}は皆^{みな}・或^{ある}は礼拝^{らいはい}をまいらせ・或^{ある}は供養^{くよう}を申し皆^{みな}しるしあり、又逆^{またさか}をなす人^{ひと}は皆^{みな}ばつあり、今内典^{ないてん}を以^{もつ}てか^かんがへ候^{いかに}に金光明経^{こんこうめいきやう}に云^いく曰^{いってんし}天子^{てんし}及^{かつ}以^{もつ}月天子^{げつてんし}是^この経^{きやう}を聞^{きこ}くが故^{ゆえ}に精氣充実^{せいきちゆうじつ}す」等云

云、最勝王經に云く、此の經王の力に由つて流暉四天下を遶る」等云云、当に知るべし日月天の四天下をめぐり給うは仏法の力なり彼の金光明經・最勝王經は法華經の方便なり勝劣を論ずれば乳と醍醐と金と宝珠との如し、

劣なる經を食しまして尚四天下をめぐり給う、何に況や法華經の醍醐の甘味を嘗させ給はんをや、故に法華經の序品には普香天子とつらなりまします、法師品には阿耨多羅三藐三菩提と記せられさせ給う火持如来是なり、其の上慈父よりあひつたはりて二代我が身となりてとしひさし争かすてさせたまひ候べき、其の上日蓮も又此の天を待みてたてまつり日本国にたてあひて数年なり、既に日蓮かちぬべき心地す利生のあらたなる事・外にもとむべきにあらず、是より外に御日記たうとさ申す計りなければども紙上に尽し難し。

なによりも日蓮にちれんが心にたつとき事候、父母御孝養ふぼこうようの事度度の御文おんふみに候上こうじょうに今日の御文おんふみなんだ更にとどまらず、我が父母地獄ふぼじごくにやおはすらんとなげかせ給たまう事のあわれさよ、仏の弟子でしの御中おんちゆうに目☆尊者そんじやと申しけるは父をばきつせん師子ししと申し母をば青提女しょうだいによと申しけるが餓鬼道がきにおちさせ給たまいけるを凡夫ぼんぷにてをはしける時は、しらせ給たまわざりければなげきもなかりける程に、仏の御弟子おんでしとならせ給たまいて後阿羅漢あらかんとなりて天眼てんげんをもつて御らんあり

ければ餓鬼道がきにおはしけり、是これを御らんありて飲食おんじきをまいらせしかば炎となりていよいよ苦をましさせまいら

せ給たまいしかば、いそぎはしりかへり仏に此よしの由もうを申させ給たまいしぞかし、爾その時の御心をおもひやらせ給たまへ今

貴辺きへんは凡夫ぼんぷなり肉眼にくげんなれば御らんなけれどももしもさもあらばとなげ

かせ給うこは孝養こうようの一分いちぶんなり梵天・帝釈・日月・四天してんも定めてあはれとおぼさんか、華嚴經けこんきやうに云く、恩を知らざる者は多く横死おうしに遭うあ」等云云、觀仏相海經かんぶつそうかいきやうに云く、是れ阿鼻あびの因なり」等云云、今既に孝養こうようの志こころざしあつし定めて天も納受のうじゆあらんか是二。

御消息しやうそくの中に申しあはさせ給う事くはしく事の心を案ずるにあるべからぬ事なり、日蓮にちれんをば日本国にほんこくの人あだむ是はひとへにさがみどののあだませ給うたまにて候ゆへなき御政りごとなれどもいまだ此の事にあはざりし時よ

りかかる事あるべしと知りしかば今更いかなる事ありとも人をあだむ心あるべからずとをもち候は、此の

心のいのりとなりて候やらんそこばくのなんを・のがれて候、いまは事なきやうになりて候、日蓮にちれんがさどの国に

てもかつえしなず又これまで山中にして法華經ほけきょうをよみまいらせ候はたれかたすけんひとへにとの御たすけな

り又殿の御たすけはなにゆへぞとたづぬれば入道殿にゅうどうの御故ぞかし、あらわにはしろしめさねども定めて御い

のりともなるらんかうあるならばかへりて又との御いのりとなるべし父母ふぼの孝養こうようも又彼の人の御恩ごおんぞかし、

かかる人の御内いなんを如何なる事有あればとてすてさせ給たまうべきやかれより度度たびたびすてられんずらんはいかがすべき・

又いかなる命になる事なりともすてまいらせ給うべからず、上にひきぬ
る経文に不知恩の者は横死有と見えぬ・

孝養の者は又横死有る可からず、鵜と申す鳥の食する鉄はとくれど
も腹の中の子はとけず、石を食する魚あり又腹の中の子はしなず、梅檀
の木は火に焼けず浄居の火は水に消へず仏の御身をば三十二人の力士・
火をつけし

かどもやけず、仏の御身よりいでし火は三界の竜神雨をふらして消し
かどもきえず、殿は日蓮が功德をたすけ

たる人なり悪人にやぶらるる事かたし、もしやの事あらば先生に
法華經の行者をあだみたりけるが今生にむく

ふなるべし、此の事は如何なる山の中海の上にてものがたし、不輕
菩薩の杖木の責も目☆尊者の竹杖に殺

されしも是なり、なにしにか歎かせ給うべき。

但し横難をば忍にはしかじと見へ候此の文御覽ありて後はけつして
百日が間をぼろげならではどうれい

並に他人と我が宅ならで夜中の御さかもりあるべからず主の召さん時
は昼ならばいそぎ参らせ給うべし、夜な

らば三度までは頓病の由を申させ給いて三度にすぎば下人又他人をか
たらひてつじを見せなんどして御出仕あるべし、かうつつしませ給はんほ
どにむこの人もよせなんどし候はば人の心又さきにひきか候べし、かた
きをう

つ心とどまるべしと申させ給う事は御あやまちありとも左右なく御内
を出でさせ給うべからず、ましてなから

んにはなにと人申せくるしかるべからず、おもひのままに入道にゅうどうにもなりておはせばさきさきならぶくるし

からず、又身にも心にもあはぬ事あまた出来しゅたいせばなかなか悪縁あくえん度度来るべし、このごろは女は尼になりて人を

はかり男は入道にゅうどうになりて大悪をつくるなり、ゆめゆめあるべからぬ事なり、身に病なくともやいとを一二箇所

やいて病の由あるべし、さわぐ事ありともしばらく人をもつて見せをほせさせ給たまへ。

事事くはしくはかきつくしがたし、此の故ゆえに法門ほうもんもかき候そうらはず、御經の事はすずしくなり候きようきようきんげんいてかいてまいらせ候そうらはん、恐恐きようきよう謹言。

建治二年丙子ひのえね七月十五日

日蓮にちれん

花押かおう

四條金吾殿御返事^{しじょうきんごごへんじ}

◆二〇五

四條金吾殿御返事^{しじょうきんごごへんじ}

1148p

正法^{しょうぼう}をひろむる事は必ず智人^{ちじん}によるべし、故^{ゆえ}に釈尊^{しゃくそん}は一切経^{いっさいきょう}をとか

せ給^{たまひ}いて小乗経^{しょうじょうきょう}をば阿難大乘経^{あなんだいじょうきょう}をば文殊^{もんじゆ}

師利法華経^{しりほけきょう}の肝要^{かんよう}をば一切^{いっさい}の声聞^{しょうもん}・文殊等^{もんじゆ}の一切^{いっさい}の菩薩^{ぼさつ}をきらひて

上行菩薩^{じょうぎょうぼさつ}をめして授けさせ給^{たまひ}いき、設^{たと}い正法^{しょうぼう}を持^{たも}てる智者^{ちしや}ありとも

檀那^{だんな}なくんば争^{いかで}か弘^{ひろ}まるべき然^{しか}れば釈迦^{しゃか}仏^{ぶつ}の檀那^{だんな}は梵王^{ぼんのう}帝釈^{てしやく}の二人^{ふたり}な

りこれは二人^{ふたり}なが

ら天^{だんな}の檀那^{だんな}なり、仏^{ぶつ}は六道^{ろくどう}の中には人天^{にんてん}・人天^{にんてん}の中には人^{ひと}に出^いでさせ

給^{たまひ}う人^{ひと}には三千^{さんぜん}世界の中央^{せうかい}・五天竺^{てんじく}・五天竺^{てんじく}の中には摩竭^{まがつ}堤国^{ていこく}に出^いで

させ給たまいて候しに、彼の国の王を檀那だんなとさだむべき処ところに彼の国の

阿闍世王あじやせは惡人あくにんなり、

聖人は惡王しやうにんに生れあふ事第一あくおうの怨だいいちにて候しぞかし、阿闍世王あだは賢王あじやせな

りし父をころす、又うちそふわざはひと堤婆達多けんおうを師とせり、達多だったは

三逆罪さんぎやくざをつくる上仏おんみの御身より血を出だしたりし者ぞかし、不孝ふこうの

惡王あくおうと謗法ほうぼうの師とよりあひて候しかば人間にんげんに二のわざはひにて候しな

り、一年・二年ならず数十年が間・仏にあだをなしまいらせ

仏の御弟子を殺せし事数をしらず、かかりしかば天いかりをなして天変てんべん

しきりなり、地神いかりを・なして地天ちよう

申すに及ばず、月月に惡風年年に飢饉疫癘来りて万民ほとんどつきな

んとせし上、四方の国より阿闍世王あじやせ

を責む、既に危く成りて候し程に阿闍世王・或は夢のつげにより・或は

耆婆がすすめにより・或は心にあやしむ事

ありて提婆達多をばうち捨て仏の御前にまいりてやうやうにたいほう

申せしかば身の病忽にいな・他方のいく

さも留まり国土安穩になるのみならず三月の七日に御崩御なるべかり

しが命をのべて四十年なり、千人の阿羅漢をあつめて一切経ことには

法華経をかきをかせ給いき、今・我等がたのむところの法華経は阿闍世

王のあたへ

させ給う御恩なり。

是はさてをきぬ仏の阿闍世王にかたらせ給いし事を日蓮申すならば
日本国の人は今つくれる事どもと申さんずらんなれども我が弟子・
檀那なればかたりたてまつる、仏言わく我が滅後末法に入つて又調達
がやうなる・た

うとく五法を行ずる者・国土に充滿して惡王をかたらせて但一人あら
ん智者を・或はのり・或はうち・或は流罪・或は死に及ぼさん時昔にも・
すぐれてあらん天変地天・大風・飢饉・疫癘・年年にありて他國より責
べしと説かれて候、

守護經と申す經の第十の卷の心なり。

当時の世にすこしもたがはず、然るに日蓮は此の一分にあたれり
日蓮をたすけんと志す人人少少ありといへども・或は心ざしうすし

・或^{ある}は心ざしは・あつけれども身がうごせずやうやうにをはするに御辺
は其^その一分^{いちぶん}なり・心

ざし人にすぐれてをはする上わづかの身命^{しんみょう}をささうるも又御故なり、
天もさだめてしろしめし地もしらせ給^{たま}いぬらん殿いかなる事にもあはせ
給^{たま}うならばひとへに日蓮^{にぢれん}がいのちを天のたたせ給^{たま}うなるべし、人の命は

山海・空市

まぬかれがたき事と定めて候へども又定業^{また}亦能^{また}転^{きようもん}の経文^{きようもん}もあり又天台^{てんだい}
の御釈にも定業をのぶる釈もあり、前に申せしやうに蒙古^{もうこ}国^{こく}のよする
までつつしませ給^{たま}うなるべし、主^ごの御返^{へんじ}事をば申^{もう}させ給^{たま}うべし身に病あ
りては

叶^{かな}いがたき上世間^{せけん}すでにかうと見え候それがしが身は時によりて憶病
はいかんが候^{そうら}はんずらん、只今^{ただ}の心は・いかなる事も出来^{しゅつたい}候はば入道^{にゅうどう}殿
の御前^{おんまえ}にして命をすてんと存じ候、若^もしやの事候ならば越後よりはせ
上らんは・

はるかなる上^{ふじょう}不定なるべし、たとひ所領^{しりょう}をめさるるなりとも今年はき
みをはなれまいらせ候べからず。

是より外はいかに仰^{おお}せ蒙^{ごも}るともをそれまいらせ候べからず、是よりも
大事^{だいじ}なる事は日蓮^{にちれん}の御房^{ごぼう}の御事^{ごんじ}と過去^{かこ}に候父母^{ふぼ}の事なりとののしらせ
給^{たま}へすてられまいらせ候とも命はまいらせ候べし後世^{ごしやう}は日蓮^{にちれん}の御房^{ごぼう}に
まかせまいらせ候と高声^{ひのえね}にうちなのり居させ給^{たま}へ。

建治二年丙子^{ひのえね}九月六日

日蓮花押^{にちれんかおう}

四条金吾殿^{しじょうきんご}

◆二〇六

四条金吾殿御返事

11

50p

はるかに申し承り候はざりつればいぶせく候いつるにかたがたの物と
申し御つかいと申しよろこび入つて

候又まほりまいらせ候、所領の間の御事は上よりの御文ならびに御
消息引き合せて見候い畢んぬ、此の事は御文

なきさきにすいして候、上には最大事とおぼしめされて候へども御きん
ずの人人のざんそうにてあまりに所領

をきらい上をかるしめたてまつり候、ぢうあうの人こそを・をく候にか
くまで候へば且らく御恩をば・おさへさせ

給^{たま}うべくや候^{もう}らんと申しぬらんとすいして候なりそれにつけては御心え
あるべし御用意^{ようい}あるべし、我が身と申しをやるいしんと申しかたがた御
内に不便^{ふびん}といはれまいらせて候大恩の主なる上すぎにし日蓮^{にちれん}が御かん
きの時・日本^{にほん}一同にくむ事なれば弟子^{でし}等も・或^{ある}は所領^{しよりょう}を・ををかたよ
りめされしかば又^{かたがた}方^{ひと}方^{びと}の人人も・或^{ある}は御内内をいだし

ある
或は所領しよりうをおいなんどせしに其その御内ごうちになに事こともなかりしは御身おんみには
ゆゆしき大恩と見み候。

このうへはたとひ一分いちぶんの御恩ごおんなくともうらみまいらせ給たまうべき主ぬしには
あらず、それにかさねたる御恩ごおんを申し所領しよりうをきはせ給たまう事御ごとがに
あらずや、賢人けんじんは八風はふと申もうして八のかぜにをかされぬを賢人けんじんと申もうすな
り、利・

おとろえ
衰・毀・誉・称・譏・苦・楽なり、をを心は利あるによろこばずをとろう
るになげかず等の事なり、此の

八風はふにをかされぬ人をば必ず天はまほらせ給たまうなりしかるをひりに主
をうらみなんどし候へば、いかに申せども天まほり給たまう事なし、訴訟を
申せど叶かないぬべき事もあり、申もうさぬに叶かなうべきを申せば叶かなわぬ事も候、
夜めぐりの

殿原の訴訟は申すは叶いぬべきよしをかんがへて候しにあなたがちになげかれし上日蓮がゆへに・めされて候へ

ば・いかでか不便に候はざるべき、ただし訴訟だにも申し給はずばいのりてみ候はんと申せしかば、さうけ給わ

り候いぬと約束ありて又をりかみをしきりにかき人人訴訟ろんなんどありと申せし時に此の訴訟よも叶わじとをもひ候いしがいままでのびて候。

だいがくどのゑもんのたいうどのの事どもは申すままにて候あいだいのり叶いたるやうにみえて候、はきりどのの事は法門の御信用あるやうに候へども此の訴訟は申すままには御用いなかりしかばいかんがと存じて候

いしほどにさりとてはと申して候いしゆへにや候けんすこししるし候か、

これにをもうほどなかりしゆへに又をもうほどなし、だんなど師とをもひあわぬいのりは水の上に火をたくがごとし、又だんなど師とをもひあひ

て候へども大法だいほうを小法をもつてをかしてとしひさしき人人ひとびとの御いのりは叶かない候はぬ上、我が身もだんなもほろび候なり。

天台てんだいの座主ざす明雲と申せし人は第五十代の座主ざすなり、去ぬる安元二年五月に院勘いんかんをかほりて伊豆国はいる配流・山僧大津よりうばいかへす、しかれども又かへりて座主ざすとなりぬ又すぎにし壽永二年十一月に義仲に・か

し上頸うちきられぬ是はながされ頸きらるをとがとは申さず賢人・

聖人も・かかる事候、但し源氏の頼朝と平家の清盛との合戦の起り

し時清盛が一類二十余人起請をかき連判をして願を立てて平家の氏寺

と叡山をたの

むべし三千人は父母のごとし山のなげきは我等がなげき山の悦びは

我等がよろこびと申して、近江の国・二十四郡を一向によせて候しか

ば、大衆と座主と一同に内には真言の大法をつくし外には悪僧どもを

もつて源氏をい

させしかども義仲が郎等ひぐちと申せしをのこ義仲とただ五六人計り

叡山中堂にはせのぼり調伏の壇の上にありしを引き出してなわをつけ

西ざかを大石をまろばすやうに引き下して頸をうち切りたりき、かか

る事あれども

にほん ひとびとしんごん
日本の人人真言をうとむ事なし又たづぬる事もなし去ぬる承久三年
かのとき
辛巳五六七の三箇月が間・京・夷の合戦ありき、時に日本国第一の秘法
どもをつくして叡山・東寺・七大寺・園城寺等・天照太神・正八幡・山王
等に一一に御いの

りありき、其の中に日本第一の僧四十一人なり所謂前の座主・慈円大
僧正・東寺・御室・三井寺の常住院の僧正等は度度・義時を調伏あ
りし上、御室は紫宸殿にして六月八日より御調伏ありしに、七日と申
せしに同じく十四日に・いくさにまけ勢多迦が頸きられ御室をもひ死
に死しぬ、かかる事候へども真言はいかなるとがとも・あやしむる人候
はず、をよそ真言の大法をつくす事明雲第一度慈円第二度に日本国の
王法ほろび候い畢んぬ、今度第三度
になり候、当時の蒙古調伏此れなり、かかる事も候ぞ此れは秘事なり

人にいはずして心に存知せさせ給^{たま}へ。

されば此の事御訴訟なくて又うらむる事なく御内をばいせず我かま
くらにうちいてさきさきよりも出仕とをきやうにてときどきさしいで
ておはするならば叶^{かな}う事も候なん、あながちにわるびれてみへさせ給^{たま}う
べからず、よくと名聞^{みようもん}願との。

◆二〇七

頼基陳狀 よりもと

建治三年六月 五十六歳御御

作

1153p

去ぬる六月二十三日の御下文・島田の左衛門入道殿・山城の民部
入道殿・兩人の御承りとして同二十五日謹んで拝見仕り候い畢んぬ、
右仰せ下しの状に云く、竜象御房の御説法の所に参られ候いける次第を
ほかた穩便ならざる由、見聞の人遍く一方ならず同口に申し合ひ候事
驚き入つて候、徒党の仁其の數兵杖を帶して出入すと云云。

此の条跡形も無き虚言なり、所詮誰人の申し入れ候けるやらん御
哀憐を蒙りて召し合せられ実否を糾明され候はば然るべき事にて候、
凡そ此の事の根源は去る六月九日日蓮聖人の御弟子三位公頼基が宿

所に來り申して云く近日竜象房と申す僧京都より下りて大仏の門の

西桑か谷に止住して日夜に說法仕るが申して云く現當の爲

仏法に御不審存ぜむ人は來りて問答申す可き旨說法せしむる間、鎌倉

中の上下釈尊の如く貴び奉るしかれども問答に及ぶ人なしと風聞し

候、彼へ行き向いて問答を遂げ一切衆生の後生の不審をはらし候はむ

と思ひ候、聞き給はぬかと申されしかども折節官仕に隙無く候いし程

に思ひ立たず候いしかども、法門の事と承りてたびたび罷り向いて候え

ども頼基は俗家の分にて候い一言も出さず候し上は惡口に及ばざる事

嚴察足る可く候。

ここに竜象房說法の中に申して云く此の見聞満座の御中に御不審

の法門あらば仰せらる可くと申されし処に、日蓮房の弟子三位公問

うて云く生を受けしより死をまぬかるまじきことはり始めてをどろくべ

きに候はねども、ことさら当時・日本国の災☆に死亡する者数を知ら
ず眼前の無常人毎に思いしらずと云ふ事なし、然る所に

京都より上人・御下りあつて人人の不審をはらし給うよし承りて参り

て候つれども御説法の最中骨無くも候なばと存じ候し処に問うべき事

有らむ人は各各憚らず問い給へと候し間悦び入り候、先づ不審に候事

は末法に生を

受けて辺土のいやしき身に候へども中国の仏法幸に此の国にわたれり

是非信受す可き処に経は五千・七千数多なり、然而一仏の説なれば

所詮は一經にてこそ候らむに華嚴・真言乃至八宗浄土・禅とて十宗

まで分れてをはします、此れ等の宗宗も門はことなりとも所詮は一か

と推する処に、弘法大師は我が朝の真言の元祖・法華経は華嚴

経・大日経に相對すれば門の異なるのみならず其の理は戲論の法無明

の辺域なり、又法華宗の天台大師等は靜盜醍醐等云云、法相宗の

元祖慈恩大師云く、法華経は方便深密経は眞実無性有情永不成仏」云

云、華嚴宗の澄觀

云く、華嚴経は本教法華経は末教・或は華嚴は頓頓法華は漸頓」等云

云、三論宗の嘉祥大師の云く、謂大乘経の中には般若教第一」云云、

浄土宗の善導和尚云く、念佛は十即十生・百即百生・法華経等は

せんちゅうむいつ 千中無一「云云、法然上人

云く 法華經を念仏に對して捨閉閣拋・或は行者は群賊」等云云、

禪宗の云く 教外別伝・不立文字「云云、教主釈尊は法華經をば世尊

の法は久しくして後に要當に眞實を説きたもうべし、多宝仏は

妙法華經は皆是眞實なり十方分身の諸仏は舌相梵天に至るところそ見

えて候に弘法大師は法華經をば戲論の法と書かれたり、釈尊・多宝・

十方の諸

仏は皆是眞實と説かれて候、いづれをか信じ候べき、善導和尚・法然

上人は法華經をば千中無一・捨閉閣拋・釈尊・多宝・十方分身の諸仏

は一として成仏せずと云う事無し皆仏道を成ずと云云、三仏と導

和尚然上人とは水火なり雲泥なり何れをか信じ候べき何れをか捨て候

べき就中彼の導然兩人の仰ぐ所の雙觀經の法藏比丘の四十八願の

中に第十八願に云く、設たとい我れ仏を得るとも唯ただ五逆と誹謗ひぼう正法しょうぼうとを除く」と云云、たとひ弥陀みだの本願ほんがん実じつにして往生おうじやうすべくとも、正法しょうぼうを誹謗ひぼうせむ人ひとは弥陀みだ仏ぶつの往生おうじやうには除たてまつかれ奉るべきか又法華經ほけきやうの二の卷まきには君もし人信ひとぜざれば其その人命終みやうじゆうして阿鼻獄あびごくに入らん」と云云、念仏宗ねんぶつしゆうに詮とする導然の兩人は經文実ならば阿鼻大城あびだいじやうをまぬかれ給たまふべしや、彼の上人しょうにんの地獄じごくに墮おち給たまわせば末学弟子まつがくでし・檀那等だんな自然じねんに惡道あくどうに墮おちん事うたがい疑うたがいいなるべし、此等これらこそ不審ふしんに候へ上人しょうにんは如何いかんと問たまい給たまはれしかば。

竜上人答て云く上古の賢哲達をば・いかでか疑い奉るべき、竜象等
が如くなる凡僧等は仰いで信じ奉り候と答え給しを、をし返して此の
仰せこそ智者の仰せとも覚え候へ誰人か時の代にあをがる人師等
をば疑い候べき、但し涅槃經に仏最後の御遺言として法に依つて人
に依らざれ」と見えて候、人師にあやまりあらば經に依れ
と仏は説かれて候、御辺はよもあやまりましまさじと申され候、御房
の私の語と仏の金言と比には三位は如来の金言に付きまいらせむと
思ひ候なりと申されしを。

象上人は人師にあやまり多しと候は・いづれの人師に候ぞと問はれ
しかば、上に申しつる所の弘法大師・法然上人等の義に候はずやと答
え給ひ候しかば象上人は嗚呼叶い候まじ我が朝の人師の事は忝くも
問答仕るまじく候、満座の聴衆皆皆其の流にて御座す鬱憤も出来せ

ば定めてみだりがはしき事候なむ恐れあり恐れありと申されし処に、

三位房の云く人師のあやまり誰ぞと候へば経論に背く人師達をいだし

候し憚あり・かなふまじと仰せ候に

こそ進退きはまりて覚え候へ法門と申すは人を憚り世を恐れて仏の

説き給うが如く経文の実義を申さざらんは愚者の至極なり、智者

上人とは覚え給はず惡法世に弘まりて人惡道に墮ち国土滅すべしと見

候はむに法師の身として争かいますめず候べき、然れば則ち法華經には

我身命を愛まず」涅槃經には寧ろ身命を喪うとも」等云云、

実の聖人にてをはせば何が身命を惜みて世にも人にも恐れ給うべき、

外典の中にも竜蓬と云いし者、比干と申せし賢人は頸をはねられ胸を

さかれしかども夏の桀・殷の紂をばいさめてこそ賢人の名をば流し候し

か、内典には

不ふ輕きやう菩ぼ薩さつは杖じやうもく木もくをかほり師し子し尊そん者じゃは頭こうべをはねられ竺じくのどう生しやうは蘇そ山ざんに
なながなさされれ法ほう道どう三さん蔵ぞうは面かおに火かな印やきを・さささされて江かう南なんにはなたれしかども
正しやう法ほうを弘ひろめてこそ聖しやう人にんの名なをば得え候こうしかと難なんぜられ候こうしかば。

竜りゆう上じやう人にんの云いくさる人ひとは末まつ代だいにはありがたし我われ我われは世よをはばかり人ひとを
恐おそる者ものにて候こう、さやうに仰おほせらる人ひととてことばの如ごとくにはよもを
はしまし候こうはじと候こうしかば。

此の御房は争か人の心をば知り給うべき某こそ当時・日本国に聞え給う日蓮聖人の弟子として候へ、某が師匠の聖人は末代の僧にて御坐候へども当世の大名僧の如く望んで請用もせず人をも☆はず聊か異なる悪名もたたず只此の国に真言・禅宗・浄土宗等の悪法並に謗法の諸僧満ち満ちて上一人をはじめ奉りて下万民に至るまで御帰依ある故に法華經教主釈尊の大怨敵と成りて現世には天神地祇にすてられ他国のせめにあひ、後生には阿鼻大城に墮ち給うべき由・經文にまかせて立て給いし程に此の事申さば大なるあだあるべし申さずんば仏のせめのがれがたし、いはゆる涅槃經に君し善比丘あつて法を壞る者を見て置いて呵責し驅遣し拳処せずんば当に知るべし是の人は仏法の中の怨なり」等と云云、世に恐れて申さずんば我が身惡道に墮つべきと御覽じて身命をすて

て去る建長年中より今年建治三年に至るまで二十余年が間あえてを
こたる事なし、然れば私の難は数を知らず国王の勘氣は兩度に及びき、
三位も文永八年九月十二日の勘氣の時は供奉の一人にて有りしかば同
罪に行はれて頸をはねらるべきにてありしは身命を惜むものにて候かと
申されしかば。

竜象房口を閉て色を変え候しかば此の御房申されしは是程の御
智慧にては人の不審をはらすべき由の仰せ無用に候けり苦岸比丘勝意
比丘等は我れ正法を知りて人をたすくべき由存ぜられて候しかども我
が身も弟子・檀那等も無間地獄に堕ち候き、御法門の分齊にてそこば
くの人を救はむと説き給うが如くならば師檀共に無間地獄に
や堕ち給はんずらむ今日より後は此くの如き御説法は御はからひある
べし、加様には申すまじく候へども惡法を以て人を地獄にをとさん邪師

をみながら責め顯はさずば返つて仏法ぶつぽうの中の怨あだなるべしと仏の御いましめ・のがれがたき上聴聞ちようもんの上下じようげ皆惡道みなあくどうにをち給たまはん事不便ふびんに覺おほえ候へば此かくの如ごとく申し候なり、智者ちしやと申すは国のあやうき

をいさめ人の邪見じゃけんを申しとどむるこそ智者ちしやにては候なれ、是はいかなる

ひが事ありとも世の恐しければ・いさめじと申もうされむ上は力及およばず、

某それがしは文殊もんじゆの智慧ちえも富楼那ふるなの弁説べんぜつも詮候はずとて立たれ候しかば、

諸人しよにん歡喜かんきをなし

たなごころ

掌たなごころを合せ今暫しばらくく御法門ほうもん候へかしと留め申もうされしかどもやがて歸り

給たまい了おぬ、此の外ぐわは別しさいの子細候はず且かつつは御推察あるべし法華經ほけきょうを信

じ参らせて仏道ぶつどうを願ねがひ候はむ者の争いかでか法門ほうもんの時惡行あくぎょうを企くわだて惡口あくぐちを宗

とし候べき、しかしながら御ぎやうさく有ある可べく候其上日蓮聖人にちれんしやうにんの

弟子でしとなのりぬる上罷まかり歸りても御前おんまえに参りて法門問答ほうもんもんどうの様かたり

申し候き、又また其その辺よりもとに頼基たのきしらぬもの候はず只頼基ただよりもとをそねみ候人の

つくり事にて候にや早早召し合せられん時其その隠あれ有べかる可べらず候。

又おほせ下さるる状いわに云く極樂寺ごくらくじの長老ちやうろうは世尊せそんの出世しゅつせと仰あおぎ奉たてまつると

此の条難なんかむの次第しだいに覚え候おほ、其の故そのゆえは日蓮聖人にちれんしやうにんは御經ごきやうにとかれてま

しますが如ごとくば久成くじやう如来にやらいの御使おんつかい上行菩薩じやうぎやうぼさつの垂迹すいじやく法華本門ほつげほんもんの行者ぎやうじや五

百歳ひゃくさいの大導師だうしにて御座候聖人しやうにんを頸けいをはねらるべき由よしの申し状しやうを書きて

殺罪つみに申し行もうはれ候しが、いかが候けむ死罪しざいを止とどめて佐渡さどの

島まで遠流せられ候しは良觀上人の所行に候はずや其の訴状は別紙に之れ有り、抑生草をだに伐るべからずと六齋日夜說法に給われながら法華正法を弘むる僧を斷罪に行わる可き旨申し立てらるるは自語相違に候はずや如何此僧豈天魔の入れる僧に候はずや、但し此の事の起は良觀房常の說法に云く日本国の一切衆生を皆持齋になして八齋戒を持たせて國中の殺生天下の酒を止めむとする処に日蓮房が謗法に障えられて此の願叶い難き由歎き給い候間・日蓮聖人・此の由を聞き給いていかがして彼が誑惑の大慢心をたをして無間地獄の大苦をたすけむ

と仰せありしかば、頼基等は此の仰せ法華經の御方人大慈悲の仰せにては候へども当時・日本国別して武家領食の世きらざる人にてをはしますをたやすく仰せある事いかがと弟子共同口に恐れ申し候し程に、

去る文永八年

太歲辛未六月十八日大旱魃の時・彼の御房祈雨の法を行いて万民をたすけんと申し付け候由日蓮聖人聞き給いて此体は小事なれども此の次でに日蓮が法験を万人に知らせばやと仰せありて、良觀房の所へつかはすに云く七日の内にふらし給はば日蓮が念仏・無間と申す法門すてて良觀上人の弟子と成りて二百五十戒持つべし、雨ふらぬほどな

らば彼の御房ごぼうの持戒じかいげなるが大誑惑おおわくなるは顕然けんねんなるべし、上代あまごいも祈雨あまごいに付て勝負しやうぶを決したる例これ多し、所謂護命いゝゆるごみょうと伝教大師でんぎやうだいしと・守敏しゅびんと弘法こうぼうなり、仍よつて良觀房りやうかんの所もと會周防房いさわにゅうしやう・入沢いるさわの入道にゅうしやうと申もうす念仏ねんぶつ者を遣つかわす御房ごぼうと入道にゅうしやうは良觀りやうかんが弟子でし又念仏ねんぶつ者なりいまに日蓮にちれんが法門ほうもんを用うる事ことなし是これを以て勝負しやうぶとせむ、七日の内に雨降るならば本もとのの八齋戒はっしやうかい・念仏ねんぶつを以て往生おうじやうすべしと思おもうべし、又雨ふらずば一向いっしやうに法華經ほけきやうになるべしといはれしかば是等悦これらよろこびて極樂寺ごくらくじ

の良觀房りやうかんに此この由よしを申もうし候こうけり、良觀房りやうかん悦よろこびないて七日の内に雨あめふらすべき由よしにて弟子でし百二十余人頭ひやくにじゅうににんより煙えんを出し声こゑを天てんにひびかし・或あるは念仏ねんぶつ・或あるは請雨經きんぐきやう・或あるは法華經ほけきやう・或あるは八齋戒はっしやうかいを説ときて種種しゆじゆに祈請きしやうす、四五日ごにじつまで雨あめの氣いき無なければたましるを失うしないて多宝寺たほうじの弟子でし等數百人たうひやくにん呼よび集あつめて力を尽つし祈いのりたるに七日の内に露つゆばかりも雨降あめふら

ず其の時・日蓮聖人使を遣す事三度に及ぶ、いかに泉式部と云いし姪
女・能因法師と申せし破戒の僧・狂言綺語の三十一字を以て忽にふら
せし雨を持戒持律の良觀房は法華・真言の義理を極め慈悲第一と聞へ
給う上人の数百人の衆徒を率いて七日の間にいかにふらし給はぬやら
む、是を以て思ひ給へ二丈の堀を越えざる者二丈三丈の堀を
越えてんややすき雨をだにふらし給はず況やかたき往生成仏をや、
然れば今よりは日蓮怨み給う邪見をば是を以て翻えし給へ後生をそ
ろしくをぼし給はば約束のままにいそぎ来り給へ雨ふらす法と仏にな
る道をしへ奉らむ七日の内に雨こそふらし給はざらめ、早魃弥興盛に
八風ますます吹き重りて民のなげき弥弥深し、すみや
かに其のいのりやめ給へと第七日の申の時使者ありのままに申す処に
良觀房は涙を流す弟子・檀那同じく声をおします口惜しがる日蓮

御勘氣ごかんきを蒙こむる時・此の事御尋たずね有りしかば有りのままに申し給たまいき、
然しかれば良觀房りようかん・身の上の恥はじを思はば跡あとをくらまして山林さんりんにもまじはり
約束やくそくのままに日蓮にちれんが弟子でしともなりたらば道心どうしんの少すくにても・ある
べきにさはなくして無尽むじんの讒言ざんげんを構かまえて殺罪つみに申し行はむとせしは貴とうとき
僧そうかと日蓮聖人にちれんしょうにんかたり給たまいき又賴基よりもとも見聞けんもんき候こうき、他事たじに於おいてはかけ
はくも主君しゅくんの御事おんこと畏れ入り候へども此の事はいかに思おもい候とも・いかで
かと思は

れ候べき。

仰おほせ下くだしの状いに云いく竜象房りゅうざうぼう・極楽寺ごくらくじの長老ちやうろう見参けんさんの後は釈迦しやくか・弥陀みだとあをぎ奉たてまつると云云、此の条又恐れ入り候、彼の竜象房りゅうざうぼうは洛中らくちゆうにして人の骨肉こつにくを朝夕ちやうせきの食物しよくとする由露顕ろけんせしむるの間、山門さんもんの衆徒蜂起しゆうとほうきして世末代まつだいに及びおよて悪鬼国あくきこく中出现しゆつげんせり、山王さんおうの御力おんちからを以て対治たいじを加えむとて住所しよすを焼失しょうしつし其その身を誅罰しゆばつせむとする処ところに自然じねんに逃失にうしつし行方かうを知らざる処ところにたまたま鎌倉かまくらの中に又人の肉を食くらの間情ある人恐怖くふせしめて候に仏・菩薩ぼさつと仰おほせ給たまう事所従しよじゆうの身として争いかでか主君しゆくんの御あやまりをいさめ申もうさず候べき、御内ごうちのをとなしき人人ひとびといかにこそ存ぞんじ候へ。

同じき下くだし状いに云いく是非ぜひにつけて主親しよせんの所存しよぞんには相隨したがつわわんこそ仏神ぶつしんの冥めいにも世間せけんの礼れいにも手本てほんと云云、此の事最第一さいだいいちの大事だいじにて候へば私の

申し状恐れ入り候間、本文を引くべく候、孝経に云く「子以て父に争わずんばあるべからず臣以て君に争わずんばあるべからず」、鄭玄曰く「君父不義有らんに臣子諫めざるは則ち亡国破家の道なり」新序に曰く「王の暴を諫めざれば忠臣に非ざるなり、死を畏れて言わざるは勇士に非ざるなり」、伝教大師云く「凡そ不諛に当つては則ち子以て父に争わずんばあるべからず臣以て君に争わずんばあるべからず当に知るべし君臣父子師弟以て師に争わずんばあるべからず」文、法華経に云く「我れ身命を愛まず但無上道を惜む」文、涅槃経に云く「譬えば王の使の善能談論し方便に巧にして命を他国に奉ずるに寧ろ身命を喪うとも終に王の所説の言教を匿さざるが如し智者も亦爾り」文、章安大師云く「寧ろ身命を喪うとも教を匿さざれとは身は軽く法は重し身を死して法を弘む」文、又云く「佛法を壊乱す

るは仏法ぶつぽうの中の怨あだなり慈なく無くして詐いつわり親すなわむは則すなわち是れ彼あだが怨あだなり能よく
糺治きうぢする者は彼の為めに惡を除く則すなわち是れ彼が親よりもとなり」文、頼基よりもとをば
傍輩ほうはいこそ無礼しやくんなりと思はれ候らめども世の事にをき候ては是非ぜひ父母ふぼ・
主君しゆくんの仰おおせに随したがい参らせ候べし。

其にとて重恩じゅうおんの主の惡法あくほうの者にたばらかされましまして惡道あくどうに墮おち
給たまはむをなげくばかりなり、阿闍世王あじやせは

提婆六師を師として教主釈尊を敵とせしかば摩竭提国・皆仏教の敵
となりて閼王の眷属・五十八万人・仏弟子を敵とする中に耆婆大臣
計り仏の弟子なり、大王は上の頼基を思し食すが如く仏弟子たる事を
御心よからず思し食ししかども最後には六大臣の邪義をすてて耆婆が
正法にこそつかせ給い候しが其の如く御最後をば頼基や救い参ら
せ候はんずらむ此の如く申さしめ候へば阿闍世は五逆罪の者なり彼に
対するかと思し食しぬべし、恐れにては候へども彼には百千万倍の重罪
にて御座すべしと御経の文には顯然に見えさせ給いて候、所謂今・此の
三界は皆是れ我有なり其中の衆生は悉く是れ吾子なり」文文の如くば
教主釈尊は日本国の一切衆生の父母なり師匠なり主君
なり阿弥陀仏は此の三の義ましますさず、而るに三徳の仏を聞いて他仏
を昼夜朝夕に称名し六万八万の名号を唱えましますあに不孝の御

所作しよさにわたらせ給たまはずや、弥陀みだの願ねがひも釈迦しやか如来にょらいの説たまひかせ給たまひいしかども終ついにくひ返し給たまひいて唯我ただわれ一人ひとりと定め給たまひいぬ、其その後は全く二人・三人と見え候いづれはず、随したがつて人にも父母ふぼ二人なし何いづれの經きやうに弥陀みだは此この国の父何いづれれの論ろんに母むねたる旨めづ・見みへ候かんきやう觀經くわんきやう等の念仏ねんぶつの法門ほふもんは法華經ほけきやうを説たまかせ給たまはむ為ための・しばらくの・しつらひな

り、塔びやくあんくまむ為あししろの足代あししろの如ごとし、而しかるを仏法ぶつぽうなれば始終しじやうあるべしと思おもう人・大僻案びやくあんなり、塔あきらか立てて後もう・足代あししろを貴とうとぶほどのはかなき者ものなり、又日ひよりも星あきらかは明もうと申もうす者ものなるべし、此この人ひとを經きやうに説いいて云いく復また教詔きやうちやくすいと雖いえども而しかも信受しんじゆせず其その人ひと命終みやうじやうして阿鼻獄あびごくに入いらん、当世とうせ・日本国にほんこくの一切衆生いっさいしゆじやうの釈迦しやか仏ぶつを抛なげうつて阿弥陀あみだ仏ぶつを念ほけきやうじ法華經ほけきやうを抛なげうつて觀經かんきやう等を信あずる人ひと・或あるは此この如ごとき謗法ぼうぽうの者ものを供養くやうせむ俗男ぞくなん・俗女ぞくじよ等ら・存外ぞんがいに五逆七逆ごぎやく・八虐はつごくの罪つみを・をかける者ものを智者ちしやと竭仰きやくやうする諸もろもろの大

名僧なら並びに国主こくしゅ等なり、如是によせてんでん展転至無數劫むしゅこうとは是これなり、此ごとの如ひがごとき僻事

をなまじるに承りたまわて候間次を以て申せしめ候、宮仕みやずかえをつかまつる者

上下じやうげありと申せども分分に随したがつて主君しゅくんを重んぜざるは候は

ず、上の御ため現世げんせ後生ごしやうあしくわたらせ給たまうべき事を秘たかにも承りたまわて

候はむに傍輩ほうはい・世に憚りはばかりて申し上もうざらむは与同罪よどうざいにこそ候まじきか。

随したがつて頼基よりもとは父子二代・命を君に・まいらせたる事顕然けんねんなり・故親父

某某務故君ごかんきの御勘気ごかんきかふらせ給たまいける時・数百人の御内ごみの臣等心おみかはりし

候けるに中務いぬ一人・最後さいごの御供奉ごぶつらして伊豆の国まで参りて候き、頼基よりもとは

去る文永ぶんえい十一

年二月十二日の鎌倉かまくらの合戦の時、折節おりふし伊豆の国に候しかば十日の

申さるの時に承りたまわて唯一人・宮根山はこねを一時いちじに馳はせ越えて御前おんまえに自害じがいすべき

八人の内に候き、自然じねんに世しづまり候しかば今に君も安穩あんのんにこそわた

らせ給たまい候へ爾来・

大事だいじ小事しょうじに付けて御心やすき者にこそ思い含まれて候頼基よりもとが今更何いかに

つけて疎縁そえんに思いまいらせ候べき、後生ごしょうまでも随従ずいじゆうしまいらせて頼基よりもと

成仏じやうぶつし候はば君をもすくひまいらせ君成仏じやうぶつしましまさば頼基よりもとも・たす

けられ・まいらせむとこそ存じ候へ。

其それに付ひて諸僧しよそうの説法せつぽうを聴聞ちやうもん仕りて何いずれれか成仏じやうぶつの法とうかがひ

候処ところに日蓮聖人にちれんしょうにんの御房ごぼうは三界さんがいの主一切衆生いっさいしゆじやうの父母釈迦ふぼしやかによらい如来おんつかいの御使

上行菩薩じやうぎやうぼさつにて御坐候おわしける事の法華經ほけきやうに説かれてましましけるを信じま

いらせたるに候、今こそ真言宗しんこんしゆうと申もうす惡法あくほう・日本国にほんこくに渡りて四百余年

去いぬる延暦えんりやく二十四年に伝教大師でんぎやうだいし・日本国にほんこくにわたし給たまいたりしかども此の

国にあしかりなむと思し食し候間宗の字をゆるさず天台法華宗てんだいほつげしやうの方便ほうべん

となし給たまい畢おわんぬ、其その後・伝教でんぎやう

大師御入滅の次をうかがひて弘法大師・伝教に偏執して宗の字を加え
しかども叡山は用うる事なかりしほどに慈覚・智証短才にして二人の
身は当山に居ながら心は東寺の弘法に同意するかの故に我が大師には
背いて始めて叡山に真言宗を立てぬ日本亡国の起り是なり、爾来三百
余年・或は真言勝れ法華勝れ一同なむと諍論・事き
れざりしかば王法も左右なく尽きざりき、人王七十七代後白河法皇の
御宇に天台の座主明雲一向に真言の座主になりしかば明雲は義仲にこ
ろされぬ頭破作七分是なり、第八十二代隠岐の法皇の御時・禪宗・
念仏宗出来つて真言の大惡法に加えて国土に流布せしかば、天照太神
・正八幡の百王百代の御誓やぶれて王法すでに尽きぬ、関東の権の大
夫義時に天照太神・正八幡の御計いとして國務をつけ給ひ畢んぬ、爰に
彼の三の惡法・関東に落ち下りて

存外ぞんがいに御歸依ごきえあり、故ゆえに梵釈ぼんしやく・二天にちがつつ・日月しってん・四天しってんいかりを成せいし先代せんだい未有むいうの天変地天てんぺんちようを以もつていさむれども用もちい給たまはざれば鄰国りんこくに仰おほせ付けて法華經ほけきよう誹謗ひぼうの人ひとを治罰ちばつし給たまう間ま、天照太神てんしやうだいじん・正八幡しょうはちまんも力およ及び給たまはず、日蓮聖人にちれんしょうにん・一人ひとり此この事ことを知しし食くせり、此かくの如ごとき嚴重じゆうじやうの法華經ほけきようにてをはして候間しゆくん、主君しゆくんをも導みきまいらせむと存ゆえじ候故むりやうに・無量むりやうの小事しょうじをわすれて今いまに仕つかわれまいらせ候、頼基よりもとを讒言ざんげん申もうす仁には君きみの御ご為ため不忠ふちゆうの者ものに候あはずや、御内ごうちを罷まかり出でて候あはば君きみたちまちに無間地獄むげんじごくに墮おちさせ給たまうべし、さては頼基よりもと・仏ほとけに成なりり候あても甲斐かいなしとなげき存あじ候あ。

抑そもそも彼しやうじやうの小乗しょうじやう戒かいは富楼那ふうるなと申まをせし大阿羅漢あらかん諸天しよてんの為ために二百五十戒にふじごかいを説とき候あしを・浄名居士じやうみやうこじたんじて云いく穢食えじきを以もつて宝器ほうきに置おくこと無なれ」等云云、鶯峯摩羅おうくつまらは文殊もんじゆを呵責かしやくし・嗚呼蚊蚋あゐもんぜいの行あは大乗空だいじやうくうの理りを

知らずと、又小乗戒をば文殊は十七の失を出だし如来は八種の譬喩を以て是をそしり給うに驢乳と説き蝦蟇に譬えられたり、此れ等をば鑒真の末弟子は伝教大師をば惡口の人とこそ嵯峨天皇には奏し申し候しかども經文なれば力及び候はず、南都の奏状やぶれて叡山の大戒壇立ち候し上は、すでに捨てられ候し小乗に候はずや、頼基が良觀房を蚊蚋蝦蟇の法師なりと申すとも經文分明に候はば御とがめあるべからず。

剩へ起請に及ぶべき由仰せを蒙むるの条存外に歎き入て候、頼基不法時病にて起請を書き候程ならば君忽に法華經の御罰を蒙らせ給うべし、良觀房が讒訴に依りて釈迦如来の御使日蓮聖人を流罪し奉りしかば聖人の申し給いしが如く百日が内に合戦出来して若干の武者滅亡せし中に、名越の公達横死にあはせ給いぬ、是れ偏に良觀

房うしなが失なひ奉たてまりたるに候はずや、今又竜象良觀りゅうぞうりようかんが心こころに用意よういせさせ給たまい
て頼基よりもとに起請きしょうを書かかしめ御座おわしさば君又其その罪つみに当あたらせ給たまはざるべしや、
此こくの如ごとき道理どうりを知らざる故か、又君をあだし奉らむと思おもう故か、
頼基よりもとに事を寄よせて大事だいじを出いださむとたばかり候人等御尋たずねあつて召めし合
わせらるべく候、恐惶きようこう謹言きんげん。

建治三年丁丑ひのとうし六月二十五日

四条

中務尉頼基よりもと・請文

◆二〇八

四条金吾殿御返事

11

63p

去月二十五日の御文・同月の二十七日の酉の時に来りて候、仰せ下
さるる状と又起請かくまじきよしの御せいじやうとを見候へば優曇華の
さきたるをみるか赤梅檀のふたばになるをえたるか、めづらしかうば
し、三明六通を得給う上法華經にて初地・初住にのぼらせ給へる証果
の大阿羅漢得無生忍の菩薩なりし舍利弗・目連・迦葉
等だにも娑婆世界の末法に法華經を弘通せん事の大難こらへかねけれ
ばかなふまじき由辞退候いき、まして三惑未断の末代の凡夫が争か此
經の行者となるべき、設い日蓮一人は杖木瓦石惡口王難をも忍ぶとも
妻子を帶せる無智の俗ななどは争か叶うべき、中中信ぜざらんはよか

りなんすへとをらずしばしならば人に・わらはれ

なんと不便ふびんにをもひ候たまたいしに、度度たびたびの難なん二箇度の御勘ごかん氣に心ざしをあ

らはし給たまうだにも不思議ふしぎなるに、かく・おどさるるに二所の所領しりょうをすて

て法華經ほけきょうを信じとをすべしと御起請きしょう候事いかにとも申もうす計ばかりなし、

普賢ふげん・文殊もんじゅ等なを末代まつだいはいかんがと仏思ぶつしし食して妙法蓮華經みょうぼうれんげきょうの五字ごじを

ば地涌千界じゆせんがいの上首じょうしゅ上行じょうぎ等の四人にこそ仰おほせつけられて

候ただ只事の心を案ずるに日蓮にちれんが道をたすけんと上行菩薩貴辺じょうぎようぼさつきへんの御身おんみに

入りかはらせ給たまへるか又教主きようしゅ釈尊しやくそんの御計おんはからいか、彼の御内ひとびとの人人ひとひとうちは

びこつて良觀りようかん竜象りゅうざうが計きひにてやぢやうあるらん、起請きしょうをかせ給たまい

ば・いよいよかつばらをごりてかたがたにふれ申もうさば鎌倉かまくらの内に日蓮にちれんが

弟子等でし一人もなくせめうしなひなん、凡夫ぼんぷのならひ

身の上けんじんははからひがたし、これをよくよくしるを賢人けんじん・聖人しやうにんとは申もうすな

り、遠きをばしばらくをかせ給へたま近きは武蔵むさしのかう殿両所をすてて
入道にゅうどうになり結局は多くの所領しよりょう男女なんよのきうだち御ぜん等をすてて御
遁世とんせいと承うけたまわる、とのは子なしたのもしき兄弟きょうだいなしわづかの二所の所領しよりょう
なり、一生はゆめの上明日をごせすいかなる乞食こつじきにはなるとも法華經ほけきょう
にきずをつけ給たまうべからず、されば同くはなげきたるけしきなくて此の
状に・かきたるが・

ごとくすこしもへつらはず振舞^{ふるまい}仰^{おほ}せあるべし、中中へつらふならば・あし
かりなん、設^{たと}ひ所領^{しよりょう}をめされ追^おい出し給^{たま}うとも十羅刹女^{じゅうらせつにょ}の御計^{おんはから}いにて
ぞあるらむとふかくたのませ給^{たま}うべし。

日蓮^{にぢれん}はながされずしてかまくらにだにも・ありしかば・有りし・いくさ
に一定打ち殺されなん、此^これも又御内にてはあしかりぬべければ
釈迦^{しやかぶつ}仏^{おんはから}の御計^{おんはから}いにてやあるらむ、陳状^{ちんじょう}は申^{もう}して候へども又それに僧は候
へども・あまりのおぼつかなさに三位房をつかはすべく候にいまだ所労き
らきらしく候はず候へば同事に此の御房^{ごぼう}をまい

らせ候、だいがくの三郎殿かたきの太郎殿かとき殿かにいとまに随^{したが}いて
かかせてあげさせ給^{たま}うべし、これはあげなば事きれなむいたういそがず
とも内内うちをしたため・又ほかの・かつばらにも・あまねく・さはがせ
て・さしいだしたらば・若や此の文かまくら内にもひろうし上へもまいる

事もやあるらん、わざはひの幸はこれなり。

法華經ほけきょうの御事おんことは已前いぜんに申もうしふりぬ、しかれども小事しょうじこそ善よりはをこ

て候へ大事だいじになりぬれば必ず大なる・さはぎが大なる幸となるなり、

此の陳狀人ごとにみるならば彼等かれらがはぢあらわるべし、只一口ただに申もうし

給たまへ我とは御内を出て所領しよりようをあぐべからず、上よりめされいださむは

法華經ほけきょうの御布施幸ふせと思うべしとののしらせ給たまへ

かへすがへす奉行人ぶぎょうにへつらうけしきなかれ、此の所領しよりようは上より給たるに

はあらず、大事だいじの御所勞ほけきょうを法華經の薬をもつてたすけまいらせて給て候

所領しよりようなれば召めすならば御所勞こそ又かへり候はむずれ、爾時そのときは頼基よりもとに

御たいじゃう候とも用ひまいらせ候まじく候とうちあてにくさうげに

てかへるべし。

あなかしこ・あなかしこ御よりあひあるべからず、よるは用心ようじんきびし

く夜廻の殿原かたらいて用ひ常にはよりあはるべし今度御内をだにもい
だされずば十に九は内のものねらひなむかまへてきたなきしにすべから
ず。

建治三年丁丑七月

ひのとうし

日蓮花押

にちれんかおう

四条金吾殿御返事

しじょうきんごごへんじ

◆二〇九

四条金吾殿御返事

建治三年 五十六歳

御作

1165p

御文おんふみあらあらうけ給たまわりて長き夜のあけとをき道をかへりたるがごとし、夫それ仏法ぶつぽうと申もうすは勝負しょうぶをさきとし、王法おうほうと申もうすは賞罰しょうばつを本とせり、故ゆえに仏ぶつをば世雄よゆうと号し王わうをば自在じざいとなづけたり、中にも天竺てんじくをば月氏げつしという我國わがくにをば日本にほんと申もうす一閭浮提えんぶだい八万はちまんの国の中に大なる国は天竺てんじく小なる国は日本にほんなり、名のめでたきは印度いんど第二ふそう扶桑ふそう第一だいいちなり、仏法ぶつぽうは月の国より始めて日の国にとどまるべし、月は西より出いで東に向ひ日は東より西へ行く事天然てんねんのことはり、磁石じしやくと鉄くろがねと雷いかずちと象華しょうかとのごとし、誰か此のことはりをやぶらん。

此の国に仏法わたりし由來をたづぬれば天神七代・地神五代すぎて
人王の代となりて第一神武天皇乃至第三十代欽明天皇と申せし王を
はしき、位につかせ給いて三十二年治世し給いしに第十三年壬申十月
十三日辛酉に此の国より西に百済国と申す州あり日本国の大王の御
知行の国なり、其の国の大王・聖明王と申せし国王あり、年貢
を日本国にまいらせしついでに金銅の釈迦仏・並に一切経・法師・尼等
をわたしたりしかば天皇大に喜びて群臣に仰せて西蕃の仏をあがめ
奉るべしやいなや、蘇我の大臣いなめの宿禰と申せし人の云く西蕃の
諸国みな此れを礼すとよあきやまとあに独り背やと申す、物部の大
むらじをこし中臣のかまこ等奏して曰く我が国家・天下
に君たる人はつねに天地しやそく百八十神を春夏秋冬にさいはいす
るを事とす、しかるを今更あらためて西蕃の神を拜せばおそらくは我

が国の神いかりをなさんと云云、爾その時に天皇てんのうわかちがたくして勅宣ちよくせんす、此の事を

只ただ心みに蘇我そがの大臣だいじんにつけて一人にあがめさすべし、他人用たにんもちいる事なかれ、蘇我そがの大臣おとどうけ取りて大に悦よろこび給たまいて此の釈迦しやか仏ぶつを我が居住のおはたと申もうすところに入まいらせて安置あんちせり、物部の大連おおむらじ・不思議ふしぎなりとて・いきどを

りし程に日本国に大疫病おこりて死せる者大半に及ぶすでに国民尽きぬべかりしかば、物部の大連・隙を得て此の仏を失うべきよし申せしかば勅宣なる、早く他国の仏法を棄つべし云云、物部の大連御使として仏をば取りて炭をもつてをこしつちをもつて打ちくだき仏殿をば火をかけてやきはらひ僧尼をばむちをくわう、其の時

天に雲なくして大風ふき雨ふり、内裏天火にやけあがつて大王並に物部の大連蘇我の臣三人共に疫病あり・きるがごとくやくがごとし、大連は終に寿絶えぬ蘇我と王とはからくして蘇生す、而れども仏法を用ゆることなくして十九年すぎぬ。

第三十一代の敏達天皇は欽明第二の太子治十四年なり左右の両臣は一は物部の大連が子にて弓削の守屋父のあとをついで大連に任ず蘇我の宿禰の子は蘇我の馬子と云云、此の王の御代に聖徳太子生給へ

り用明の御子・敏達のをいなり御年二歳の二月東に向つて無名の指を開

いて南無仏と唱へ給へば御舍利掌にあり、是れ日本国の

釈迦念仏の始めなり、太子八歳なりしに八歳の太子云く西国の聖人

釈迦牟尼仏の遺像末世に之を尊めば則ち禍を銷し福を蒙る之を蔑れ

ば則ち災を招き寿を縮む」等云云、大連物部の弓削宿禰の守屋等いか

りて云く蘇我は勅宣を背きて他国の神を礼す」等云云、又疫病未だ

息まず人民すでにたえぬべし、弓削守屋又此れを間奏す云云、勅宣に

云く蘇我の馬子仏法を興行す宜く仏法を卻ぞくべし」等云云、此に

守屋中臣の臣勝海大連等兩臣

と、寺に向つて堂塔を切たうし仏像をやきやぶり、寺には火をはなち

僧尼の袈裟をはぎ笞をもつてせむ・又天皇並に守屋馬子等疫病す、

其の言に云く焼くがごとしきるがごとし」又瘡をこるはうそうといふ、

馬子歎なげいて云いく 岡三宝なおさんぼうを仰あおがん」と勅宣ちよくせんに云いく「汝なんじひと独ひとり行たえ但ただし余

人を断ことわてよ」等云云、馬子欣悦しんえつし精舎しょうじやを造つくりて

三宝さんぼうを崇あがめめぬ。

天皇てんのうは終八月十五日崩御ほうぎよ云云、此の年は太子たいしは十四なり第三十二

代用明天皇ようめいてんのうの治二年欽明きんめいの太子たいし・聖徳

太子たいしの父なり、治二年ひのとひつて丁未四月に天皇てんのう疫病えきびようあり、皇勅みかどして云く
『三宝さんぼうに帰せんと欲ほす』云云、蘇我そが我がの大だい臣じん詔しに隨したがう可べしとて遂に法師ほつしを
引いて内裏だいりに入る豊国の法師ほつし是なり、物部の守屋大連等もりやおおむらじ大に瞋おおいり横よこに
睨いんで云く天皇てんのうを厭魅つゐすと終に皇みかど隠れさせ給たまう五月に物部の守屋もりやが
一族淡河の家いにひきこもり多勢をあつめぬ、太子たいしと馬子と押
し寄せてたたかう、五月・六月・七月の間に四箇度・合戦す、三度は
太子たいしまけ給たまう第四度めに太子願たいしを立てて云く、釈迦しやか如来によらいの御舎利しやりの塔
を立て四天王寺してんのうを建立こんりゆうせん」と・馬子願いて云く、百濟くだらより渡わたす所の
釈迦しやか仏ぶつを寺を立てて崇重すうちようすべし」と云云、弓削いなのつて云く、此これは我
が放はなつ矢にはあらず我が先祖崇重すうちようの府都ふとの大明神だいまうじんの放はなち給たまふ矢な
り」と、此の矢はるかに飛んで太子たいしの鎧よろいに中る、太子たいしなるる、此は我が
放はなつ矢にはあらず四天王してんのうの放はなち給たまう矢なり」とて迹見の赤椿もと申もうす舎

人にいさせ給へは矢はるかに飛んで守屋が胸に中りぬ、はだのかはかつを
ちあひて頸をとる、此の合戦は用明崩御崇峻未だ位に即き給わざる
其の中間なり。

第三十三・崇峻天皇位につき給う、太子は四天王寺を建立す此れ
釈迦如来の御舍利なり、馬子は元興寺と申す寺を建立して百済国よ
りわたりて候いし教主釈尊を崇重す、今の代に世間第一の不思議は
善光寺の阿弥陀如来という誑惑これなり、又釈迦仏にあだをなせしゆへ
に三代の天皇並に物部の一族むなしくなりしなり又太子・教主釈尊の
像一体つくらせ給いて元興寺に居せしむ今の橘寺の御本尊これなり、
此れこそ日本国に釈迦仏つく
りしはじめなれ。

漢土には後漢の第二の明帝永平七年に金神の夢に見て博士蔡☆

王^{おうじゅん}遵^{じゅん}等の十八人を月^{がつ}氏^しにつかはして仏^{ぶつ}法^{ぽう}を尋^{たず}ねさせ給^{たま}いしかば中天竺^{てんじく}の聖^{しょう}人^{にん}摩^ま騰^{とう}迦^か・竺^{じく}法^{ほう}蘭^{らん}と申^{まう}せし二人の聖^{しょう}人^{にん}を同永平十年丁卯^{ひのとう}の歳迎へ取りて崇^{すう}重^{ちゆう}ありしかば、漢^{かん}土^どにて本より皇の御いのりせし儒^{じゅ}家^け道家の人人^{にんずう}数千^{せん}人・此の事をそねみてうつたへしかば、同永平十四年正月十五日に召し合せられしかば漢^{かん}土^どの道^{どう}士^し悦^{よろこ}びをなして唐^{もろこし}土^この神百靈を本尊^{ほんぞん}としてありき、二人の聖^{しょう}人^{にん}

は仏の御舍利しやりと釈迦しやか仏の画像と五部の經を本尊ほんぞんと侍たの怙たまみ給う、道士どうしは
本より王の前にして習ならいたりし仙經・三墳さんぶん・五典・二聖・三王の書を薪たきぎ
につみこめてやきしかば古はやけざりしがはいとなりぬ、先には水にう
かびしが水に沈みぬ、鬼神きじんを呼しも来らず、あまりのはづかしさに
ちよぜんしん ひしゆくさい
☆善信・費叔才ひしゆくさいなんど申せし道士どうし等はおもひ死にししぬ、

二人の聖人しやうにんの説法せつぽうありしかば舍利しやりは天に登りて光を放ちて日輪にちりんみゆる
事なし、画像しやかぶつの釈迦しやか仏は眉間みけんより光を放ち給う、呂慧通等の六百余人
の道士どうしは帰伏きふくして出家しゅつけす、三十日が間に十寺立ちぬ、されば釈迦しやか仏は
賞罰しょうばつただしき仏なり、上に拳かみぐる三代の帝みかど・並に二人の臣下しんか・釈迦しやか
如来にょらいの敵とならせ給いて今生こんじやうは空く後生ごしやうは惡道あくどうに墮おちぬ。

今の代も又これに・かはるべからず、漢土かんどの道士どうし信費等日本にほんの守屋等
は漢土かんど・日本にほんの大小の神祇じんぎを信用しんようして教主きやうしゅ釈尊しやくそんの御敵となりしかば神

は仏したがに随たてまつい奉ぎようじやり行者みなは皆ほろびぬ、今の代も此かくの如ごとく上にあ挙あぐる所
の百濟くだら国の仏は教主きようしゆ釈尊しやくそんなり、名を阿弥陀あみだ仏と云ぶつつて日本にほん国をこくたば
らかして釈尊しやくそんを他た仏ぶつにかへたり、神と仏と仏と仏との差別さべつ

こそあれども釈尊しやくそんをすつる心はただ一なり、されば今の代の滅せん事
又疑うたがいいなるべし、是は未だ申さざる法門ほうもんなり秘す可し秘す可し、又
吾一門いちもんの人人ひとびとの中にも信心しんじんもうすく日蓮にちれんが申す事を背そむき給たまはば蘇我そが
が如ごとくなるべし、其の故は仏法ぶつぽう・日本にほんに立ちし事は蘇我そがの宿禰すくねと馬子うまこと
の父子ふし二人の故ぞかし、釈迦しやか如来にやらいの出世しゆつせの時の梵王ぼんのう・帝釈たいしやくの

如ごとくにてこそあらまじなれども、物部ものりやと守屋もりやとを失うしなひし故ゆえに只一門ただいちもんに
なりて位もあがり国をも知行ちぎようし一門いちもんも繁昌はんじやうせし故ゆえに高拳たかいこぶしをなして崇峻すしゆん
天皇てんのうを失うしないたてまつり王子みこを多く殺し結句けつこは太子たいしの御子みこ二十三人を馬
子うまこがまご入鹿いるかの臣下しんかう失うしなひまいらせし故ゆえに、皇極てんのう天皇てんのうは中臣なかとみの鎌子かまこが計

いとして教主釈尊きようしやくそんを造り奉りたてまつてあながちに申せしかば入鹿いるかの臣並おみに父等の一族一時いちじに滅びぬ。

此れをもつて御推察あるべし、又我が此の一門いちもんの中にも申しとをらせ給はざらん人人ひとびとは・かへりて失とがあるべし、日蓮にちれんをうらみさせ給うな少輔房能登房等を御覧あるべし、かまへてかまへて此の間はよの事なりとも御起請きしょうか

かせ給たまうべからず火はをびただしき様なれども暫しばらくあればしめる水はのろき様なれども左右さうなく失うしないがたし、御辺は腹あしき人なれば火の燃るがごとし一定人にすかさねなん、又主のうらうらと言和やわらかにすかせ給たまうならば火に水をかけたる様に御わたりありぬと覺おほゆ、きたはぬかねはさかなる火に入ればとくとけ候、氷こおりを

ゆに入るがごとし、劍なんどは大火だいかに入るれども暫しばらくはとけず是きたへる故なり、まへにかう申もうすはきたうなるべし仏法ぶつぽうと申もうすは道理どうりなり道理どうりと申もうすは主に勝つ物なりいかにいとをしはなれじと思うめなれども死しぬればかひなしに所領しよりようを・をししと・をばすとも死しては他人たにんの物、すでにさかへ年久しすこしも惜おしむ事なかれ、又さきさき申もうすがごとくさきさきよりも百千万億倍御用心せんまん いうじんあるべし。

日蓮にちれんは少こんじようより今生のいのりなし只仏ただにならんとをもふ計ばかりなり、さ

れども殿の御事をばひまなく法華經・釈迦仏・日天に申すなり其の故

は法華經の命を継ぐ人なればと思ふなり。穴賢穴賢あらかるべからず

吾が家に・あらずんば人に寄合事なかれ、又夜廻の殿原はひとりもたの

もしき事はなけれども法華經の故に屋敷を取られた

る人人なり、常はむつばせ給うべし、又夜の用心の為と申しかたがた殿

の守りとなるべし、吾方の人人をば少少の事をばみずきかずあるべしさ

て又法門などを聞ばやと仰せ候はんに悦んで見え給うべからず、いか

んが候はんずらん、御弟子共に申してこそ見候はめとやわやわとあるべ

しいかにもうれしさにいろに顯われなんと

覚え聞かんと思ふ心だにも付かせ給うならば火をつけてもすがごとく

天より雨の下るがごとく万事をすてられんずるなり。

又今度いかなる便も出来せばしたため候し陳状を上げらるべし、

大事だいじの文ぶんなればひとさはぎはかならずあるべし、穴賢あなかしこ穴賢あなかしこ。

四條金吾殿しじょうきんご

日蓮花押にちれんかおう

◆二一〇

四条金吾殿御返事

117

0 p

法華經本・迹相對して論ずるに迹門は尚始成正覺の旨を明す故に
 いまだ留難るなんかかれり、本門はかかる留難るなんを去りたり然りと雖も題目の
 五字に相對する時は末法の機にかなはざる法なり、眞実一切衆生色心
 の留難るなんを止むる秘術は唯南無妙法蓮華經なり。
 四條金吾殿御返事

日蓮にちれん

◆二一一

崇峻天皇御書

建治三年九月 五十六歳御

作 与四條金吾しじょうきんご

1170 p

白小袖一領錢一ゆひ又富木殿ときどのの御文おんふみのみなによりもかきなしまひ
じきひるひじきやうやうの物うけ取りしなじな御使おんつかいにたび候いぬ、さて
はなによりも上の御いたはりなげき入つて候、たとひ上は御信用ごしんようなき様
に

候へどもとの其その内に・をはして其その御恩ごおんのかげにて法華經ほけきようをやしなひ
まいらせ給たまい候へは偏ひとえに上の御祈とぞな

り候らん、大木の下したの小木大河の辺の草は正ただしく其その雨にあたらず其その
水をえずといへども露つゆをつたへ・いきを

えて・さかうる事に候。

此これもかくのごとし、阿闍世王あじやせは仏の御かたきなれども其その内にあ
りし耆婆大臣きばだいじん仏ぶつに志いっしやうありて常に供養くようありしかば其その功大王だいおうに帰す
ところ見へて候へ仏法ぶつぽうの中に内薫外護ないくんげごと申もうす大なる大事だいじありて宗論しゅうろん

にて候、法華經ほけきようには我われ深く汝等なんじを敬うやう」涅槃經ねはんぎようには「一切衆生悉いっさいしゆじようことごとく
仏性ぶつしやう有あり」馬鳴菩薩めみようぼさつの起信論きしんろんには眞如しんによの法常くんじやうに薰習くんじゆうするを

以ての故に妄心即滅して法身顯現す」弥勒菩薩の瑜伽論には見えたり、かくれたる事のあらはれたる徳となり候なり、されば御内の人人には天魔ついて前より此の事を知りて殿の此の法門を供養するをささえんがために今度の狂妄語をば造り出だしたりしを御信心深ければ十羅刹たすけ奉らんがために此の病はをこれるか、上は我がかたきとはをばさねども一たんかれらが申す事を用い給いぬるによりて御しよらうの大事になりて・ながしらせ給うか、彼等が柱とたのむ竜象すでにたうれぬ、和議せし人も又其の病にをかされぬ、良観は又一重の大科の者なれば大事に値うて大事をひきをこして・いかにもなり候はんずらん、よもただは候はじ。

此れにつけても殿の御身もあぶなく思いまいらせ候ぞ、一定かたきにねらはれさせ給いなんすぐろくの石は二つ並びぬればかけられず車の輪

は二あれば道にかたぶかず、敵も二人ある者をばいぶせがり候ぞ、いか
にとがありとも弟どもしばらも且くも身をはなち給うな、殿は一定腹あしき相
かをに顕あらわれたり、いかに大事だいじと思へども腹あ

しき者をば天は守らせ給はぬと知らせ給たまふ殿の人にあだまれてをはさば
設たといい仏にはなり給うとも彼等かれらが悦よろこびと云う、此れよりの歎なげきと申し
口惜くちおししかるべし、彼等かれらがいかにもせんとはげみつるに、古よりも上に引
き付けられまいらせてをはすれば外ほかのすがたはしづまりたる様にあれど
も内の胸はもふる計はかりにや有らん、常には

彼等かれらに見へぬ様にて古よりも家のことを敬うやまひきうだちまいらせ給たまいてをは
さんには上かみの召めしありとも且く・つつしむべし、入道にゅうどう殿いかにもならせ
給たまはば彼の人人ひとびとはまどひ者になるべきをばかへりみず、物をばへぬ心・
とののいよいよ来るを見ては一定ほのを・を胸にたきいきをさかさまにつ

くらん、若しきうだちきり者の女房にようぼうたちい

かに上の御そろうはと問もうい申されば、いかなる人にも候へひき・膝をかがめて手を合せそれがし某が力の及ぶべき御所おお勞には候はず候をいかに辞退申せどもただと仰おおせ候へば御内の者にて候間かくて候とてびむをもかかずひたたれこはからず、さはやかなる小袖色ある物なんともきずして且しばくねうじて御覽あれ。

返す返す御心への上なれども末代まつだいのありさまを仏の説かせ給たまいて候まちには濁世じよくせには聖人しょうにんも居こしがたし大火だいかの中の石いしの如ごとし、且しばくはこらふるやうなれども終ついにはやけくだけで灰となる、賢人けんじんも五常ごじやうは口に説ときて身には振舞ふるまいいがたしと見へて候ぞ、かうの座をば去れと申もうすぞかし、そこばくの人の殿を造つくり落さんとしつるにをとされず

してはやかちぬる身が穩便おんびんならずして造つくり落されなば世間せけんに申もうすこぎこひでの船こぼれ又食の後に湯の無きが如ごとし、上より命たまいを給たまいて居こしてをばせば其処にては何事こと無くとも日ぐれ曉なんど入り返りなんどに定めて・ね

らうらん、又我が家の妻戸の脇・持仏堂・家の内の板敷いたじきの下か・天井なんどをば、あながちに心えて振舞ふるまいい給たまへ今度このたびはさきよりも彼等かれらはたばかり賢かるらん、いかに申もうすとも鎌倉かまくらのえがら夜廻りの殿原にはすぎ

じ、いかに

心にあはぬ事有りと・かたらひ給へたま

義経よしつねはいかにも平家へいけをばせめおとしがたかりしかども・成良しげよしをかたら

ひて平家へいけをほろぼし、大將殿は・おさだを親のかたきと・をばせしかど

も平家へいけを落さざりしには頸を切り給はずたま、況や此の四人は遠くは

法華経ほけきょうのゆへ近くは日蓮にちれんがゆへに命いのちを懸かけたるやしきを上へ召された

り、日蓮にちれんと法華経ほけきょうとを信ずる人人ひとびとをば前さき前さき彼の人人ひとびといかなる事ありと

もかへりみ給たまうべし、其の上殿の家その此の人人ひとびと常にかようならばかたきは

よる行きあはじと・をぢ

るべし、させる親のかたきならねば顯あらわれてとはよも思はじ、かくれん

者は是これ程の兵士はなきなり、常にむつばせ給たまへ殿は腹悪き人にてよ

も用ひさせ給たまはじ、若もしさるならば日蓮にちれんが祈りの力及びがたし、竜象りゅうざう

と殿の兄とは殿の御ためにはあしかりつる人ぞかし天の御計おんはからいに殿の御心の如ごとくなるぞかしいかに天の御心に背そむかんとは

をぼするぞ設たといい千万よろずの財たからをみちたりとも上にすてられまいらせ給たまひいて

は何の詮すかあるべき已すでに上にはをやの様に思はれまいらせ水の器しだがに随したがう

が如ごとくこうしの母を思ひ老者の杖をたのむが如ごとく主のものを思食おぼしめされ

たるは法華經ほけきょうの御たすけにあらずや、あらうらやましやとこそ御内の

人人ひとびとは思はるるらめとくとく此の四人かたらひて

日蓮にちれんにきかせ給たまへさるならば強盛じやうじやうに天てんに申もうすべし、又殿とのの故御父御母
の御事おんことも左衛門さえもんの尉ゑいがあまりに歎なげき候こうぞと天てんにも申もうし入れて候こうなり、
定じやうめて釈迦しやかぶつ仏ぶつの御前おんまえに子細しさい候こうらん。

返す返す今に忘れぬ事は頸切れんとせし時殿はともして馬の口に付
きてなきかなし給たまいしをばいかなる世にか忘れなん、設たとい殿どのの罪つみふか
くして地獄じごくに入り給たまはば日蓮にちれんをいかに仏ぶつになれと釈迦しやかぶつ仏ぶつこしらへさせ
給たまうとも用ひまいらせ候こうべからず同じく地獄じごくなるべし、日蓮にちれんと殿どのと共に
地獄じごくに入るならば釈迦しやかぶつ仏ぶつ・法華經ほけきやうも地獄じごくにこそを

はしまさずらめ、暗に月つきの入るがごとく湯ゆに水みづを入るるがごとく氷こおりに
火かをたくがごとく日輪にちりんにやみをなぐるが如ごとくこそ候そうらはんずれ、若もしす
こしも此この事をたがへさせ給たまうならば日蓮にちれんうらみさせ給たまうな。

此この世間せけんの疫病えきびやうはとののまうすがごとく年とし帰かへりなば上うへへあがりぬと。

をばえ候ぞ、十羅刹じゅうらせつの御計おんはからいか今し且ばらく世よに・をはして物を御覽あれかし、又世間せけんのすぎえぬやうばし歎なげいて人に聞かせ給たまうな、若もしさるならば賢人けんじんに

ははづれたる事なり、若もしさるならば妻子さいしがあとにとどまりてはぢを云うとは思はねども、男のわかれのおしさに他人たにんに向いて我が夫のはぢをみなかたるなり、此これ偏ひとえにかれが失とがにはあらず我がふるまひのあしかりつる

故なり。

人身じんしんは受けがたし爪の上の土人身じんしんは持たもちがたし草の上の露つゆ、百二十まで持たもちて名を・くたして死せんよりは生きて一日なりとも名をあげん事こそ大切なれ、中務三郎左衛門尉さえもんのかようは主の御ためにも仏法ぶつぽうの御ためにも世間せけんの心

ねもよかりけりよかりけりと鎌倉かまくらの人人ひとびとの口にうたはれ給へたま
あなかしこあなかしこ
穴あな賢けん穴あな賢けん、蔵くらの財たからよりも身の財たからすぐれたり身の財たからより心の財たから第一だいいち
なり、此このの御文おんふみを御覧あらんよりは心の財たからつませ給うべし。

第一だいいち秘蔵ひぞうの物語ものがたりあり書きてまいらせん、日本にほん始りて国王こくおう二人人ひとびとに殺ころ
され給うたま、其そのの一人は崇峻すしゅん天皇てんのうなり、此このの王は欽明天皇きんめいてんのうの御太子たいし
聖徳太子しょうとくたいしの伯父ちやくふなり、人王第三十三代の皇にてをはせしが聖徳太子しょうとくたいしを
召よして勅宣下ちよくせんさ

なんじ

る、汝は聖智の者と聞く朕を相してまいらせよと云云、太子三度まで

もう

辞退申させ給いしかども頻の勅宣なれば止みがたくして敬いて相しま

たま

いらせ給う、君は人に殺され給うべき相ましますと、王の御氣色かはら

たま

せ給いて・なにと云う証拠を以て此の事を信ずべき、太子申させ給はく

しやうこ

御眼に赤き筋とをりて候人にあだまるる相なり、皇帝

ちよくせん

勅宣を重ねて下しいかにしてか此の難を脱れん、太子の云く免脱がた

ただ

し但し五常と申すつはものあり此れを身に離し給わずば害を脱れ給は

こ

ん、此のつはものをば内典には忍波羅蜜と申して六波羅蜜の其の一なり

しばら

と云云、且くは此れを持ち給いてをはせしがややもすれば腹あしき王

これ

にて是を破らせ給いき、或時人猪の子をまいらせたり

ある

しかばこうがいをぬきて猪の子の眼をづぶづぶとささせ給いていつかに

またなこ

くしと思うやつをかくせんと仰せありしかば、太子其の座にをはせし

おお

たいしそ

が、あらあさましや・あさましや・君は一定人にあだまれ給いなん、此の御言は身を害する剣なりとて太子多くの財を取り寄せて御前に此の言を聞きし者に御ひきで物ありしかども、有人蘇我

の大臣・馬子と申せし人に語りしかば馬子我が事なりとて東漢直駒・

直磐井と申す者の子をかたらひて王を害しまいらせつ、されば王位の身

なれども思う事をばたやすく申さぬぞ、孔子と申せし賢人は九思一言

とてこのたびおもひて一度申す、周公旦と申せし人は沐する時は三

度握り食する時は三度はき給いき、たしかにきこしめせ我ばし恨みさせ

給うな仏法と申すは是にて候ぞ。

一代の肝心いちだいかんじんは法華經ほけきょう法華經ほけきょうの修行しゆぎやうの肝心かんじんは不輕品ふぎやうにて候なり、不輕

菩薩ぼさつの人を敬いしは・いかなる事ぞ教主きやうしゆしやくそん釈尊しやくそんの出世しゆつせの本懐ほんかいは人の振舞ふるまい

にて候けるぞ、穴賢あなかしこあなかしこ穴賢あなかしこ、賢けんきを人と云いいはかなきを畜いふといふ。

建治三年丁丑ひのとうし九月十一日
花押かおう

四条左衛門尉殿御返事さえもんのだじょうごへんじ

日蓮にちれん

◆二二二

四条金吾御書^{しじょうきんごごしよ}

建治四年一月 五十七

歳御作

1175p

鷹取^{たかとり}のたけ身延のたけなないたがれのたけいいだにと申し、木のもと

かやのねいわの上土の上いかにたづね候へどもをひて候ところなし、されば海にあらざればわかめなし山にあらざればくさびらなし、法華經^{ほけきょう}にあらざれば仏になる道なかりけるかこれはさてをき候いぬ、なによりも承^{たまわ}りてすずしく候事は・いくばくの

御にくまれの人の御出仕に人かずにめしぐせられさせ給^{たま}いて、一日・二日ならず御ひまもなきよし・うれしさ申^{もう}すばかりなし、えもんのたいうのをやに立ちあひて上の御一言にてかへりてゆりたると殿のすねんが間

のにくまれ去年こぞのふゆはかうとききしにかへりて日日の御出仕の御とも
いかなる事ぞ、ひとへに天の御計おんはからい法華經ほけきようの

おんちから

御力おんちからにあらずや、其その上えんきよう円教房の来りて候いしが申し候は、えまの四

郎殿の御出仕に御ともものさふらい二十四・五其その中にしうはさてをきた
てまつりぬ、ぬしのせいといひかをたましひむま下人までも中務のさえも
んのじやう第一だいいちなり、あはれをとこやをとこやとかまくらわらはべはつ
じちにて申しあひて候しとかたり候。

もう

これにつけてもあまりにあやしく候、孔子こうしは九思一言周公旦しゅうこうたんは浴あゆみ
る時は三度にぎり食する時は三度はかせ給たまう、古の賢人いにしえけんじんなり今の人の
かがみなり、されば今度このたびはことに身をつつしませ給たまうべし、よるはいかな
る事ありとも一人そとへ出いでさせ給たまうべからず、たとひ上の御めし有り
ともまづ下人をこそへつかわして、なひなひ一定

をききさだめてはらまきをきてはちまきし、先後^{せんごさう}左右に人をたてて出仕し御所のかたわらに・心よせの・やかたか又我がやかたかにぬぎをきてまいらせ給^{たま}うべし、家へかへらんにはさきに人を入れてとのわきはしのしたむまやのしりたかどの一切^{いっさい}くらきところをみせて入るべし。せうまうには我が家よりも人の家よりもあれ・た

からを・をしみてあわてて火をけすところへつとよるべからず、まして走り出る事なかれ、出仕より主の御ともして御かへりの時はみかどより馬よりをりて、いとまのさしあうよしはうくわんに申して・いそぎかへるべ

し、上のを・をせなりともよに入りて御ともして御所にひさしかるべからず、かへらむには第一^{だいいち}心にふかきえうじんあるべし、ここをばかならずかたきのうかがうところなり。

人のさけたばんと申す^{もう}ともあやしみてあるひは言をいだしあるひは用いることなかれ、又御をととどもには常はふびんのよしあるべし、つねにゆせにぎうりのあたいなんど心あるべし、もしやの事のあらむには・かたきはゆるさじ、我がためにいのちをうしなはんずる者ぞかしと・をばして、とがありともせうせうの失^{とが}をば・しら

ぬやうにてあるべし、又女るひはいかなる失^{とが}ありとも一向^{いっとう}に御けうくんまでも・あるべからず、ましていさかうことなかれ、涅槃^{ねはんぎよう}經に云く罪極^{つみ}て重しと雖^{いえど}も女人^{にょにん}に及ぼさず」等云云、文の心はいかなる失^{とが}ありとも女の^{とが}を・をこなはざれ、此れ賢人^{けんじん}なり此れ仏弟子^{ぶつでし}なりと申^{もう}す文なり、此の文は阿闍世^{あじゃせ}王父を殺すのみならず母をあやま

たむとせし時耆婆^{ぎば}月光^{がっこう}の両臣^{おみ}がいさめたる經文^{きようもん}なり、我が母心ぐるしくをもひて臨終^{りんじゅう}までも心にかけし・いもうとともなければ失^{とが}をめんじて不便^{ふびん}というならば母の心やすみて孝養^{こうよう}となるべしとふかくおぼすべし、他人^{たにん}をも不便^{ふびん}というぞかしいわうやをとをとどもをや、もしやの事の有^あるには一所にていかにもなるべし、此等^{これら}こそ

とどまりゐてなげかんずればをもひでにとふかくをぼすべし、かやう申^{もう}すは他事^{たじ}はさてをきぬ、雙六^{すうろく}は二ある石はかけらず、鳥の一の羽にて

とぶことなし、將門さだたふがやうなりしいふしやうも一人は叶^{かな}わず、
されば舍弟^{しやてい}等を子とも郎等ともうちたのみてをはせば、もしや法華^{ほけき}經^{きやう}
もひろまらせ給^{たま}いて世にもあらせ給^{たま}わば
一方^{いつぽう}のかたうどたるべし。

すでにきやうのだいり院のごそかまぐらの御所並に御うしろみの御
所一年が内に二度正月と十二月とに

やけ候いぬ、これ只事にはあらず謗法ぼうぼうの真言師等しんごんしを御師おんしとたのませ給たまう上かれら法華經ほけきょうをあだみ候ゆへに天のせめ法華經ほけきょう十羅刹じゅうらせつの御いさめあるなり、かへりて大さんげあるならばたすかるへんもあらんずらん、いたう天

の此の国を・をしませ給たまうゆへに大なる御いさめあるか、すでに他国たこくが此の国をうちまきて国主国民こくしゅを失はん上おつしん仏神ぶつしんの寺社百千万せんまんがほろびんずるを天眼てんげんをもつて見下くだして・なげかせ給たまうなり、又法華經ほけきょうの御名みなをいういうたるものどもの唱となうるを誹謗正法ひぼうしやうぼうの者どもがをどし候を天のにくませ給たまう故なり。

あなかしこ・あなかしこ、今年かしこくして物を御らんぜよ、山海・空市まぬかるところあらばゆきて今年はすぎぬべし、阿私陀仙人あしだせんじんが仏の生れ給たまいしを見て、いのちを・をしみしがごとしをしみしがごとし、恐恐きようきよう

謹言。きんげん

正月二十五日

中務左衛門尉殿
さえもんのかみ

日蓮花押
にちれんかおう

◆二二三

陰徳陽報御書ごしよ

11

78p

いよいよかない候べし、いかにわなくともきかぬやうにてをはすべし、
此の事をみ候に申すやうにだにふれまわせ給うならばなをも所領もか
さなり人のをぼへもいできたり候べしと・をぼ候、さきさき申し候いし
やうに陰徳あれば陽報ありと申して、皆人は主にうた全もいかんぞを
ぼせしかどもわどのの正直の心に主の後生をたすけたてまつらむとを
もう心がうじやうにしてすれんをすすればかかるしやうにもあづか
らせ給うぞ

かし此は物のはしなり大果報は又来るべしとおぼしめせ、又此の法門の
一行いかなる本意なき事ありとも・みずきかずいわずしてむつばせ給へ

大人^{だいじん}にはいのりなしまいらせ候^{こう}べし、上に申^{もう}す事私^しの事にはあらず外典^{げてん}
三千^{さんぜん}・内典^{ないてん}五千の肝心^{かんじん}の心をぬきて・かきて候、あなかしこ・あなかしこ
恐^{きよう}恐^{きよう}謹言^{きんげん}。

卯月二十三日

日蓮^{にちれん}在御

判

御返事^{ごへんじ}

◆二一四 中務左衛門尉殿御返事^{さえもんのかみじょうごへんじ}

弘安元年^{こうあんがんねん}

六月 五十七歳御作 1178p

夫^それ人に二病あり、一には身の病所謂^{いふゆゑ}地大百一水・大百一火・大百

一風・大百一已上四百四病・此の病は治水・流水・耆婆・偏鵲等へんじやくの方薬をもつて此これを治す、二には心の病所謂三毒・乃至八万四千の病なり、仏に有らざれば二天三仙も治しがたし何いかに況や神農・黄帝こうていの力及ぶべしや、又心の病に重重の浅深せんじん分れたり 六道ろくどうの凡夫ぼんぷの三毒・八万

四千の心の病をば小乗しょうじやうの三蔵さんざう俱舎ぐしや・成実じやうじつ・律宗りつしゆうの仏こ此れを治す大乘だいじやうの華嚴けこん・般若はんにか・大日經だいにちきやう等の經經きやうぎやうをそしりて起る三毒さんどく八万はちまんの病をば小乗しょうじやうをもつて此れを治すればかへりては増長ぞうちやうすれども平愈へいゆ全くなし、大乘だいじやうをもつて此れを治すべし、又諸大乘經しよだいじやうきやうの行者ぎやうじやの法華經ほけきやうを背そむきて起る三毒さんどく八万はちまんの病をば華嚴けこん・般若はんにか・大日經だいにちきやう・真言三論等しんごんさんろんをもつて此れを

治すればいよいよ増長ぞうちやうす、譬たとへば木石等ぼくせきより出でたる火は水をもつて消しやすし水より起る火は水をかくればいよいよ熾盛しじやうに炎上りて高くあがる、今の日本にほんこく去今年えきびやうの疫病えきびやうは四百四病にあらざれば華陀かだ偏鵲へんじやくが治おほも及おほばず小乗しょうじやう・權大乘ごんだいじやうの八万四千はちまんの病にもあらざれば諸宗しよしゆうの人人ひとびとのいのりも叶はずかへりて増長ぞうちやうするか、設たとい今年ことしは・とどまるとも年年に止がたからむか、いかにも最後さいごに大事だいじ出来しゅつたいして後定まる

事も候はんずらむ、法華經に云く「若し医道を修して方に順つて病を治せば更に他の疾を増し、或は復死を至さん而も復増劇せん」涅槃經に云く「爾の時に王舎大城の阿闍世王○偏体に瘡を生じ乃至是くの如き創は心に從て生ず、四大より起るに非ず、若し衆生能く治する者有りと言はば是の処有ること無けん」云云、妙楽の云く智人は起を知り蛇は自ら蛇を識る」云云、此の疫病は阿闍世王の瘡の如し彼の仏に非ずんば治し難し此の法華に非ずんば除き難し、将又日蓮下痢去年十二月卅日事起り今年六月三日四日日に度をましまし月々に倍增す定業かと存ずる処に貴辺の良薬を服してより已来日日月月に減じて今百分の一となれり、しらず教主釈尊の入りかわりまいらせて日蓮をたすけ給うか、地涌の菩薩の妙法蓮華經の良薬をさづけ給えるかと疑い候なり、くはしくは筑後房申すべく候。又追つ

て申すきくせんは今月二十五日戌の時来りて候・種種しゅじゆの物かずへつくし
がたし、ときどののかたびらの申し給たまわるべし、又女房にようぼうの御を・をちの
御事おんことなげき入つて候よし申し給たまふべし、恐恐きようきよう。

六月廿六日

日蓮花押にちれんかおう

中務佐衛門尉殿御返事ごへんじ

◆二一五

四条金吾殿御返事^{しじょうきんごごへんじ}

弘安元年九月 五十^{こうあんがんねん}

七歳御作

1180p

錢一貫文給^{たまい}いて頼基^{よりもと}がまいらせ候^{そうろう}とて法華經^{ほけきやう}の御宝前^{ほうぜん}に申^{もう}し上げて候^{こう}、定めて遠^きくは教主^{きやうしゅ}釈尊^{しやくそん}・並に多宝^{たほう}・十方^{じゆつぱう}の諸仏^{しよぶつ}・近くは日月^{にちがつ}の宮殿^{みやうだん}にわたらせ給^{たま}うも御照覽^{しやうらん}候ぬらん、さては人のよに・すぐれんとするをば賢人^{けんじん}・聖人^{しやうにん}と・をばしき人人^{ひとびと}も皆^{みな}そねみ・ねたむ事に候^{こう}、いわうや常^{じやう}の人をや、漢皇^{かんわう}の王昭君^{しやうくわん}をば三千^{さんぜん}のきさき是^{これ}をそねみ帝釈^{たいしやく}の九十九億那由佗^{なゆた}のきさきは☆戸迦^{きやうしか}をねたむ、前^{まへ}の中書王^{ちゆうしやう}をば・をの宮^{みやう}の大臣^{だいじん}是^{これ}をねたむ、北野^{きたの}の天神^{てんじん}をば時平^{ときへい}の大臣^{だいじん}是^{これ}をざんそうして流^{たてまつ}し奉^{こゝろ}る、此等^{これら}をもて・をばしめせ、入道殿^{にゅうどうだん}の御内^{ごうち}は広かりし内なれども

・せばく

ならせ給たまいきうだちは多くわたらせ給たまう、内のとしごろの人人ひとびと・あまた
わたらせ給たまへば池の水すくなくなれば魚さわがしく秋風立てば鳥こず
えをあらそう様に候事そうらに候へば、いくそばくそ御内ひとびとの人人ひとびとそねみ候らん
に度度たびたびの仰せおおをかへし・よりよりの御心しんにたがはせ給たまへはいくそばくのざ
んげんこそ候らんに、度度たびたびの御所領しりょうをかへして今又所領給しりょうたまはらせ給たまう
と云云、此れ程この不思議ふしぎは候はず此れ偏ひとえに陰徳あれば陽報ありとは
此れなり。

我が主あじやせに法華經ほけきょうを信じさせまいらせんと・をばしめす御心のふかき故
か、阿闍世王あじやせは仏の御怨あだなりしが耆婆ぎば大臣だいじんの御すすめによつて法華經ほけきょう
を御信じじありて代たもを持ち給たまう、妙莊嚴王みょうそうごんは二子の御すすめによつて
邪見じゃけんを・ひるがへし給たまう、此れ又しかるべし貴辺きへんの御すすめによつて今は

御心も・やわらがせ給たまいてや候こらん・此これ偏ひとえに貴き辺へんの法華ほつけ

經しんじんの御信心しんじんのふかき故なり、根ふかければ枝さかみなもととお源遠ければ流長しと

申もうして一切いっさいの經は根あさく流ちかく法華ほけきょう經は根ふかく頂いただきとをし、

末代まつだい・惡世あくせまでも・つきず・さかうべしと天台大師てんだいだいしあそばし給たまへり、此の

法門ほうもんにつきし人あまた候いしかども・をほやけかたくしの大難だいなん・度度たびたび重

なり候いしかば一年・二年こそつき候いしが後後には皆みな

或はをち・或はかへり矢をいる、或は身はをちねども心をち・或は心はをちねども身はをちぬ。

釈迦しゃかぶつ仏は浄飯王じやうばんの嫡子・閻浮提えんぶだいを知行ちぎようする事・八万四千二百一十

の大王だいうなり・閻浮提えんぶだいの諸王しよ・頭こうべをかたぶけん上・御内に召しつかいし

人十萬億人じゅうまんなりしかども十九の御年・浄飯王宮じやうばんおうぐうを出でさせ給たまいて

檀特山だんどくせんに入りて十二年、此の間御ともの人五人なり、所謂拘鄰いゑるくりんと☆☆

と跌提ぼつだいと十力迦葉かしようと拘利太子くりたいしとなり、此の五人も六年と申せしに二人

は去りぬ残りの三人も後の六年にすて奉りて去んぬ、但一人残り給たまう

てこそ仏にはならせ給たまいしか、法華經ほけきやうは

又此これにもすぎて人はじがたかるべし難信難解なんしんなんげこ此れなり、又仏の在位よ

りも末法まつぽうは大難だいにんかさなるべし、此これをこらへん行者ぎやうじやは我が功德くどくには・す

ぐれたる事・一劫いつこくとこそ説かれて候へ仏滅度後ぶつめつとご・二千二百三十余年に

なり候に月氏がっし・二千余年が間・仏法ぶつぽうを弘通ぐつうせる人・伝記でんきにのせて・かく
れなし、漢土かんど二千年・日本にほん七百年・文目録にのせて候そうらいし

かども仏のごとく大難だいにんに値あえる人少ひとびとし、我も聖人しょうにん・我も門人もんじんとは申
せども況滅度きやうめつど後の記文きもんに値あえる人・一人も候はず、竜樹菩薩りゅうじゅぼさつ・天台てんだい・
伝教でんぎやうこそ仏法ぶつぽうの大難だいにんに値あえる人ひとびとにては候へども此等これらも仏説ぶつせつには及ぶ
事なし、此これ即代そくのあがり法華經ほけきやうの時に生れ候はせ給たまはざる故なり。

今は時すでに後・五百歳まっばう・末法まつぽうの始なり、日には五月十五日・月には
八月十五夜に似たり、天台・伝教でんぎやうは先に生れ給たまへり今より後は又のち
ぐへなり、大陣だいじんすでに破われぬ余党よとうは物のかずならず、今こそ仏の記しるしを
き給たまいし後・五百歳まっばう・末法まつぽうの初はじめ・況滅度きやうめつど後の時に当りて候そうらへば仏語ぶつごむなし
からずば一閻浮提えんぶだいの内うちに定しやうにんしゆつげんめて聖人出現しょうにんしゆつげんして候らん、聖人しょうにんの出いずるし
るしには一閻浮提えんぶだい第一だいいちの合戦をこるべしと説かれて候にすでに合戦も

起りて侯にすでに聖人しやうにんや一閭浮提えんぶだいの内に出でさせ給たまいて候らん、きり
ん出いでしかば孔子こうしを聖人しやうにんとする鯉社りしやなつて聖人出しやうにんいで給たまう事疑うたがいなし、
仏には

梅檀せんだんの木をひて聖人しやうにんとする、老子らうしは二五の文を結んで聖人しやうにんとする、
末代まつだいの法華經ほけきやうの聖人しやうにんをば何を用つてかするべき、經に云いく能説此經・
能持此經のうじしきやうの人・則すなはち如来にやらいの使なり」八卷・一卷・一品・一偈いちぎの人・乃至ないし
題目だいもくを唱となうる人・如来にやらいの

使なり、始中終しちゅうじゅうすてずして大難だいにんを・とをす人・如来にょらいの使なり。

日蓮にちれんが心は全く如来にょらいの使にはあらず凡夫ぼんぷなる故なり、但し三類さんるいの大怨敵おんてきにあだまれて二度の流難なんに値あへば如来にょらいの御使おんつかいに似たり、心は三毒さんどくふかく一身凡夫ぼんぷにて侯そうらへども口に南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようと申せば如来にょらいの使に似たり、過去かこを

尋ぬれば不輕菩薩ふぎょうぼさつに似たり、現在げんざいを・とぶらうに加刀杖瓦とうじようにたがう事なし、未来みらいは当詣道場とうけいどうじよう疑うたがいいなからんか、

これをやしなはせ給たまう人人ひとひとは豈淨土あにじようどに同居するの人にあらずや、事多しと申せどもとどめ侯心をもて計らせ給たまうべし。

ちこのそらうよくなりたり悦よろこび侯ぞ、又大進阿闍梨あじゃりの死去しきよの事・末代まつだいのぎば・いかでか此これにすぐべきと皆人みな・舌をふり候なり、さにて候いけるやらん、三位房が事さう四郎が事・此の事は宛あたかも符契符契ふけいふけいと

申しあひて候、日蓮にちれんが死生をば・まかせまいらせて候、全く他のくすし
をば用もちいまじく候なり。

弘安元年こうあんがねん戊寅九月十五日

日蓮にちれん

花押かおう

四条金吾殿しじょうきんご

◆二一六

四條金吾殿御返事

11

83p

鷺目がもく一貫文給たまい候おわい畢おわんぬ、御所領上しよりうより給たまわらせ給たまいて候なる事
 まこととも覺おぼえず候夢かとあまりに不思議ふしぎに覺おぼ候おぼ、御返事ごへんじなんともい
 かやうに申もうすべしとも覺おぼえず候、其そのの故ゆえはとのの御身おんみは日蓮にちれんが法門ほうもんの御
 ゆへに日本国にほんこく並にかまくら中御内の人人ひとびときうだちまでうけずふしぎに
 をもはれて候そは其の御内にをはせむだにも不思議

議ごに候に御恩ごおんをかうほらせ給たまはうちかへし又うちかへしせさせ給たまへはい
 かばかり同れいどももふしぎとをもひ上もあまりなりとををぼすらむ、
 さればこのたびはいかんが有あるべかるらんとうたがひ思おもい候つる上・御内

の數十人の人人^{ひとびと}うつたへて候へばさればこそいかにもかなひがたかるべし、あまりなる事なりと疑^{うたがい}候いつる上・

きようだい

兄弟にもすてられてをはするにかかる御をん面目^{めんもく}申すばかりなし、か

の処^{ところ}はとのをかの三倍とあそばして候上さどの国のもののこれに候がよ

くよく其^その処^{ところ}をしりて候が申し候は三箇郷の内^{うち}にいかだと申すは第一^{だいいち}

の処^{ところ}なり、田畠^{でんぱた}はすくなく候へどもとくははかりなしと申し候ぞ、二所

はみねんぐ千貫一所は三百貫と云云、かかる

処^{ところ}なりと承はる、なにとなくともどうれいといひしたしき人人^{ひとびと}と申し

すてはてられてわらひよろこびつるにとのをかにとりて候処^{ところ}なりとも

御下^{くだ}し文は給たく候つるぞかしまして三倍の処^{ところ}なりと候、いかにわろく

ともわろきよし人にも又上へも申^{もう}させ給^{たま}うべからず候、よきところ・よ

きところと申し給^{もう}はば又かさねて給^{たま}はらせ給^{たま}う

べし、わろき処^{ところ}・徳分なしなむど候はば天にも人にも・すてられ給^{たま}い候
はむずるに候ぞ、御心へあるべし。

阿闍^{あじや}世王^せは賢人^{けんじん}なりしが父をころせしかば即時^{そくじ}に天にもすてられ
大地^{だいち}もやぶれて入りぬべかりしかども・殺されし父の王一日に五百りや
う五百りやう数^{かず}年が間・仏を供養^{くよう}しまいらせたりし功德^{くどく}と後に法華^{ほけ}經^{きやう}
の檀那^{だんな}となる

べき功德くどくによりて天もすてがたし地もわれずついに地獄じごくにをちずして仏
になり給たまいき、とのも又かくのごとし・兄弟きょうだいにもすてられ同れいにもあ
だまれきうだちにもそばめられ日本国にほんこくの人にもにくまれ給たまいけれども、
去ぬる文永八年ぶんえいの九月十二日の子丑うしの時・白蓮にぢれんが御勘氣ごかんきをかほりし時
馬の口にとりつきて鎌倉かまくらを出いでてさがみのえちに

御ともありしが、一閻浮提えんぶだい第一だいいちの法華經ほけきょうの御かたうどにて有りしかば
梵天ぼんてん・帝釈たいしやくもすてかねさせ給たまへるか、仏にならせ給たまはん事もかくのごと
し、いかなる大科だいかありとも法華經ほけきょうをそむかせ給たまはず候いし、御とももの御
ほうこうに

て仏にならせ給たまうべし、例せば有徳国王うとくこくおうの覚徳比丘かくとくびくの命にかはりて
釈迦仏しゃかぶつとならせ給たまいしがごとし、法華經ほけきょうはいのりとはなり候いけるぞ。
あなかしこ・あなかしこ、いよいよ道心堅固どうしんけんこにして今度このたび仏になり給たまへ

御一門いちもんの御房ごぼうたち又俗人等にも・かかるうれしき事候はず、かう申せば今生こんじょうのよくと・をばすか、それも凡夫ぼんぷにて候へばさも候べき上慾うえをも・はなれずして仏になり候ける道の候けるぞ、普賢ふげん經に法華經ほけきょうの肝心かんじんを説ときて候 煩惱ぼんのうを断だんぜず五欲ごよくを離りれず」等云云、天台てんだい
大師だいしの摩訶止觀まかしかんに云く 煩惱ぼんのう即菩提ぼだい・生死しやうじ即涅槃ねはん」等云云、竜樹りゅうじゆ菩薩ぼさつ
の大論だいろんに法華經ほけきょうの一代いちだいにすぐれて・いみじきやうを釈しゃくして云く 譬たとえば
大藥師やくしの能よく毒どくを變じて藥なと為なすが如ごとし」等云云、小藥師やくしは藥を以て
病を治す大医だいゐは大毒だいどくをもつて大重病じゆうびやうを治す」等云云。

弘安元こうあん 戊寅つちのえとら 年十月 日

日蓮にちれん

花押かおう

四条金吾殿御返事しじょうきんごごへんじ

◆二一七

四条金吾殿御返事^{しじょうきんごごへんじ}

弘安元年十月^{こうあんがんねん}

五十

七歳御作

1185p

今月二十二日信濃より贈られ候いし物の日記^{にっき}☆錢三貫文・白米能米

俵一・餅五十枚・酒大筒一・小筒一・串柿五把・柘榴^{じやくろ}十、夫れ王は民を^そ

食とし民は王を食とす衣は寒温をふせぎ食は身命^{しんみょう}をたすく、譬^{たとえ}ば油

の火を継ぎ水の魚を助くるが如し^{ごと}、鳥は人の害せん事を恐れて木末に

巢くふ、然れども食のために地にをりてわなにかかる、魚は淵^{ふち}の

底に住みて浅き事を悲しみて穴を水の底に掘りてすめども餌にばかさ

れて鉤をのむ、飲食^{おんじき}と衣薬^すとに過ぎたる人の宝や候べき。

而るに日蓮^{しかにちれん}は他人^{たにん}にことなる上山林^{さんりん}の栖就^{なかんずく}中今年^{しんねん}は疫癘^{えきれい}飢渴^{けかち}に

春夏は過越し秋冬は又前にも過ぎたり、又身に当りて所勞大事になり
て候つるをかたがの御藥と申し小袖彼のしなじなの御治法にやうやう
驗し候て今所勞平愈し本よりもいさぎよくなりて候、弥勒菩薩の瑜伽
論竜樹菩薩の大論を見候へば定業の者は藥變じて毒と

なる法華經は毒變じて藥となると見えて候、日蓮不肖の身に法華經を
弘めんとし候へば天魔競ひて食をうばはんとするかと思ひて歎かず候い
つるに今度の命たすかり候は偏に釈迦仏の貴辺の身に入り替らせ給い
て御たすけ候か。

是はさてをきぬ、今度の御返りは神を失いて歎き候いつるに事故なく
鎌倉に御歸り候事悦びいくそぼくぞ、余りの覺束なさに鎌倉より来る
者ごとに問い候いづれば、或人は湯本にて行き合せ給うと云い、或人は
こうづにと、或

人は鎌倉かまくらにと申し候もういしにこそ心落居おちいて候へ是より後はおぼろげなら
ずば御渡りわたあるべからず大事だいじの御事候おんことはば御使おんつかいにて承うけたまわり候べし、返
す返す今度このたびの道は・あまりに・おぼつかなく候いつるなり、敵と申もうす者
は・わすれさせ

てねらふものなり、是より後に若やの御旅には御馬をおしましませ給ふ
べからず、よき馬にのらせ給へ又供の者どもせんにあひぬべからんもの
又どうまるもちあげぬべからん御馬にのり給うべし、摩訶止觀第八に
云く弘決

第八に云く 必ず心の固きに仮つて神の守り則ち強し」云云、神の護る
と申すも人の心つよきによるとみえて候、法華經はよきつるぎなれども
つかう人によりて物をきり候か。

されば末法に此の經をひろめん人人舍利弗と迦葉と觀音と妙音と
文殊と藥王と此等程の人やは候べき、二乗は見思を断じて六道を出で
て候菩薩は四十一品の無明を断じて十四夜の月の如し、然れども此等
の人人には・ゆづり給はずして地涌の菩薩に譲り給へり、されば能く
能く心をきたはせ給うにや、李広將軍と申せし・つはもの

は虎に母を食^{かま}れて虎に似たる石を射しかば其^その矢羽ぶくらまでせめぬ、
後に石と見ては立つ事なし、後には石虎將軍と申しき、貴^き辺^{へん}も又かくの
ごとく敵はねらふらめども法華經^{ほけきやう}の御信心^{しんじん}強盛^{かうじやう}なれば大難^{だいなん}も・かねて
消え候か、是につけても能^よく能^よく御信心^{しんじん}あるべし、委^{くわ}く紙^しには尽しがた
し、恐^{きよう}恐^{きよう}謹言^{きんげん}。

弘安元年^{こうあんがねん}戊寅^{つちのえとら}後十月二十二日

日蓮花押^{にちれんかおう}

四条左衛門殿御返事^{さえもんごへんじ}

◆二一八 日眼女造立釈迦仏供養事 弘安二年二月

五十八歳御作

1187p

御守書てまいらせ候三界の主教主釈尊一体三寸の木像造立の檀那

日眼女・御供養の御布施前に二貫今一貫云云。

法華經の寿量品に云く「或は己身を説き・或は他身を説く」等云

云、東方の善徳仏・中央の大日如来・十方の諸仏・過去の七仏・三世の

諸仏・上行菩薩等・文殊師利・舍利弗等・大梵天王・第六天の魔王・

釈提桓因王・日天・月天・

明星天・北斗七星・二十八宿・五星七星・八万四千の無量の諸星・

阿修羅王・天神・地神・山神・海神・宅神・里神・一切世間の国国の主と

ある人何れか教主釈尊ならざる天照太神・八幡大菩薩も其の本地は

教主きようしゅ釈尊しやくそんなり、例せば釈尊しやくそんは天の一月諸仏しよぶつ・菩薩等ぼさつは万水ばんすいに浮べる影なり、釈尊しやくそん一体を造立する人は十方世界じゆつぽうせかいの諸仏しよぶつを作り奉たてまつる人なり、譬たとえば頭こづべをふればかみゆるぐ心はたらけば身うごく、大風吹けば草木そうもくしづかならず大地だいちうごけば大海たいかいさはがし、教主きようしゅ釈尊しやくそんをうごかし奉たてまつればゆるがぬ草木そうもくやあるべきさわがぬ水やあるべき。

今日眼女は三十七のやくと云云、やくと申もうすは譬たとえばさいにはかどますにはすみ人にはつぎふし方まさには四維よすみの如ごとし、風は方よりふけばよはく角より吹けばつよし病は肉より起れば治しやすし節より起れば治しがたし、家にはかきなければ盗人ぬすびといる人にはとがあれば敵便たてまをうく、やくと申もうすはふしぶしの如ごとし、家にかきなく人に

科とがあるがごとし、よきひやうしを以てまほらすれば盗人ぬすびとをからめとる、ふしの病をかめて治すれば命ながし、今教主きようしゅ釈尊しやくそんを造立し奉たてまつれば下女

が太子をうめるが如し國王尚此の女を敬ひ給ふ何に況や大臣已下を
や、大梵天王・釈提桓因王・日月等・此の女人を守り給ふ況や大小の
神祇をや、昔優填大王・釈迦仏を造立し奉りしかば大梵天王・日月等・
木像を礼しに参り給いしかば木像説いて云く我を供養せんよりは優填
大王を供養すべし」等云云、影堅王の画像の釈尊を書き奉りしも又又
是くの如し、法華經に云く若し人・仏の爲の故に諸の形像を建立す
是くの

如き諸人等皆已に仏道を成じき」云云、文の心は一切の女人釈迦仏を造り奉れば現在には日日・月月の大小の難を払ひ後生には必ず仏になるべしと申す文なり。

そもそもによん

抑女人は一代五千・七千余卷の経經に仏にならずときらはれま

します、但法華経ばかりに女人・仏になると説かれて候、天台智者大師

の釈に云く、女に記せず」等云云、釈の心は一切経には女人・仏になら

ずと云云、次下に云く「今経は皆記す」と云云、今の法華経にこそ

童女仏になれりと云云、天台智者大師と申せし人は仏滅度の後・一千

五百年に漢土と申す国に出でさせ給いて一切経を十五返まで御覽あそ

ばして候いしが法華経より外の経には

女人・仏にならずと云云、妙樂大師と申せし人の釈に云く「一代に絶

えたる所なり」等云云、釈の心は一切経にたえたる法門なり、法華経と

申すは星の中の月ぞかし人の中の王ぞかし山の中の須弥山水の中の大海
の如し、是れ程いみじき御経に女人・仏になると説かれぬれば一切経に
嫌はれたるになにかくるしかるべき、譬えば盗人・

夜打・強盗・乞食・渴体にきらはれたらんと国の大王に讃られたらんと
何れかうれしかるべき、日本国と申すは女人の国と申す国なり、
天照太神と申せし女神のつきいだし給える島なり、此の日本には男十

九億九万四千八百二十八人女は二十九億九万四千八百三十人なり、
此の男女は皆・念仏者にて候ぞ皆・念仏なるが故に阿弥陀仏を本尊

とす現世の祈りも又是くの如し、設い釈迦仏をつくりかけども
阿弥陀仏の浄土へゆかんと置いて本意の様には思ひ候はぬぞ、中中つく
りかかぬにはをとり候なり。

今日眼女は今生の祈りのやうなれども教主釈尊をつくりまいらせ

給たまい候けうへは後生ごしやうも疑うたがいなし、二十九億九万四千八百三十人の女人にょにんの中
の第一だいいちなりとおぼしめすべし、委くわくは又又申もうすべく候、恐恐きようきよう謹言きんげん。

弘安二年己卯二月二日

日蓮にちれん 花押かおう

日眼女御返事にこへんじ

◆二一九

聖人御難事

弘安二年十月五十八歳御作

与門人等

1189p

去ぬる建長五年癸丑四月二十八日に安房の国・長狭郡の内東条の郷

今は郡なり、天照太神の御くりや右大將家の立て始め給いし日本第二

のみくりや今は日本第一なり、此の郡の内清澄寺と申す寺の諸仏坊の

持仏堂の南面にして午の時に此の法門申しはじめて今に二十七年弘安

二年太歳己卯つちのとうなり、仏は四十余年天台大師は三十余年・

伝教大師は二十余年に出世の本懐を遂げ給う、其中の大難申す計り

なし先先に申すがごとし、余は二十七年なり其の間の大難は各各かつ

しろしめせり。

法華經に云く、而も此の經は如来の現在にすら猶怨嫉多し、況や

滅度の後をや」云云、釈迦如来の大難はかずをしらず、其の中に馬の麦をもつて九十日・小指の出仏身血・大石の頂にかかりし、善生比丘等の八人が身は仏の御弟子・心は外道にともないて昼夜十二時に仏の短をねらいし、無量の釈子の波瑠璃王に殺されし・無量の弟子等が惡象にふまれし阿闍世王の大難をなせし等、此等は如来現在の小難なり、況滅度後の大難は竜樹・天親・天台・伝教いまだ値い給はず法華經の行者ならずといわば・いかでか行者にてをはせざるべき、又行者といはんとすれば仏のごとく身より血をあやされず、何に況や仏に過ぎたる大難なし經文むなしきがごとし、仏説すでに大虚妄となりぬ。

而るに日蓮二十七年が間弘長元年辛酉五月十二日には伊豆の国へ流罪、文永元年子十一月十一日頭にきずをかほり左の手を打ちをら

る、同文ぶんえい永八年辛未九月十二日佐渡の国はいる配流又頭ごうべの座に望む其の
外に弟子でしを殺され切られ追出くわれう等かずをしらず仏の大難だいなんには及
ぶか勝すぐれたるか其は知らず、竜樹りゅうじゅ・天親てんじん・天台てんだい・伝教でんぎょうは余に肩を

並べがたし、日蓮末法に出でずば仏は大妄語の人多宝・十方の諸仏は
大虚妄の証明なり、仏滅後・二千二百三十余年が間・一閻浮提の内に
仏の御言を助けたる人但日蓮一人なり、過去・現在・未来の法華經の
行者を輕賤する王臣万民始めは事なきやうにて終にほろびざるは候
はず、日蓮又かくのごとし、始めはしるしなきやうなれども今二十七
年が間、法華經守護の梵釈・日月・四天等さのみ守護せずば仏前の御
誓むなしくて無間・大城に墮つべしとお
そろしく想う間今は各各はげむらむ、大田の親昌・長崎次郎兵衛の尉
時綱・大進房が落馬等は法華經の罰のあらわるるか、罰は総罰・別罰・
顯罰・冥罰・四候、日本国の大疫病と大けかちとどうちと他国より
せめらるるは総ばちなり、やくびやうは冥罰なり、大田等は現罰なり
別ばちなり、各各師子王の心を取り出していかにかに人をどすと

もをづる事なかれ、師子王は百獸にをぢず師子の子又かくのごとし、
彼等は野干のほうるなり日蓮が入門は師子の吼るなり、故最明寺殿の
日蓮をゆるししと此の殿の許ししは禍なかりけるを人のさんげんと知
りて許ししなり、今はいかに人申すとも聞きほどこかずしては人のさんげ
んは用い給うべからず、設い大鬼神のつける人なりと
も日蓮をば梵釈・日月・四天等・天照太神・八幡の守護し給うゆへにば
つしがたかるべしと存じ給うべし、月月・日日につより給へすこしもたゆ
む心あらば魔たよりをうべし。

我等凡夫のつたなさは経論に有る事と遠き事はおそるる心なし、一
定として平等も城等もいかりて此の入門をさんざんとなす事も出来せ
ば眼をひさいで観念せよ、当時の人人のつくしへかさされんずらむ、又
ゆく人・又か

しこに向える人人を我が身にひきあてよ、当時までは此の一門に此のなげきなし、彼等はげんはかくのごとし殺されば又地獄へゆくべし、我等現には此の大難に値うとも後生は仏になりなん、設えば灸治のごとし当時はいたけれども後の薬なればいたくしていたからず。

彼のあつわらの愚癡の者どもいるはげましてをどす事なかれ、彼等に
はただ一えんにおもい切れ・よからん

は不思議ふしぎわるからんは一定と・をもへひだるしとをもわば餓鬼がき道を・
をしへよ、さむしといわば八じゅうかん地獄じごくを・をしへよ、をそろししといわば
たかにあへるきじねこにあえるねずみを他人たにんとをもう事なかれ、此これは
こまごまと

かき候事もうはかくとしどし月月・日日に申もうして候へどもなごへの尼せう房
のと房三位房なんどのやうに候、をくびやう物をばへずよくふかくうた
がい多き者どもはぬれるうるしに水をかけそらをきりたるやうに候ぞ。

三位房が事は大不思議ふしぎの事ども候いしかどもとのぼらのをもちには
智慧ちえある者をそねませ給たまうかと・ぐちの人をもいなんとをもちて物も
申もうさで候いしが、はらぐろとなりて大難だいにんにもあたりて候ぞ、なかなかさ
んざんと・

だにも申せしかばたすかるへんもや候いなん、あまりにふしぎさに申もうさ

ざりしなり、又かく申せばおこ人どもは死もうの事を仰せ候と申すべし、鏡のために申す又此の事は彼等の人人も内内はおぢおそれ候らむと・おぼへ候ぞ。

人のさわげばとてひやうじなんと此の一門にせられれば此れへかきつてたび候へ 恐恐 謹言。

十月一日

ひとびとおんちゅう
人人御中

さぶらうざへもん殿のもとにとどめらるべし。

にちれんかおう
日蓮花押

◆二二〇

四條金吾殿御返事

弘安二年十月

五十八歳御作

1192p

先度強敵ごうてきととりあひについて御文給おんふみたまいき委くわく見まいらせ候、さても・
さても・敵人てきじんにねらはれさ給たまいしか、前前さきざきの用心ようじんといひ又けなげといひ
又法華經ほけきようの信心しんじんつよき故ゆえに難なんなく存命ぞんめいせさせ給たまい目出たし目出たし、
夫それ運うんきはまりぬれば兵法へいぽうもいらす・果報かほうつきぬれば所従しよじゆうもしたがは
ず、所詮しよせん運うんものこり果報かほうもひかゆる故なり、ことに法華經ほけきようの行者ぎやうじやをば
諸天しよてん・善神ぜんじん・守護しゆごすべきよし属累品ぞくるいぼんにして誓状せいじやうをたて給たまい・一切いっさいの
守護神しゆごしん・諸天しよてんの中にも我等われらが眼まなこに
見みへて守護しゆごし給たまうはうは日月天にちがつなり争いかでか言をとらざるべき、ことにこ

とに日天にってんの前に摩利支天ましあままします。日天にってん・法華經ほけきょうの行者ぎやうじやを守護しゆごし給たまはんに所従しよじゆうの摩利支天尊ましあまたんすで給たまうべしや、序品じよばんの時・名月天子がつてんし・普光天子ふくわうてんし・宝光天子ほうくわうてんし・四大天王しよだいてんわう与其眷属けんぞく・方天子てんし俱れつぎと列座れつざし給たまふ、まりし天は三万天子さんまんとんしの内うちなるべし、もし内うちになくば地獄じごくにこそおはしまさんずれ、今度このたびの大事だいじは此この天あのまほりに非あらずや、彼の天あは劍形けんぎやうを貴辺きへんにあたへ此こ下りぬ、此この日蓮にちれんは首題ごの五字ごじを汝なんじこさづく、法華經ほけきょう受持じゆじのものを守護しゆごせん事うたがひ疑うたがひあるべからず、まりし天あも法華經ほけきょうを持たもちて一切衆生いっさいしゆじやうをたすけ給たまう、臨兵闘者りんぺいとうしや皆陣列みなじんれつ在前ざいぜんの文ぶんも法華經ほけきょうより出いでたり、君説俗間經きんせつよくかんきやう書治世語しよちせいご資生業等しせいぎやうじやう皆順正法みなしやうほうとは是これなり、これに・つけても・いよいよ強盛きやうじやうに大信力だいしんりきをいだし給たまへ我が運命うんめいつきて諸天守護しよてんしゆごなしとらむる事あるべからず。

將門は・つわものの名どとり兵法の大事だいじをきはめたり、されども王命にはまけぬ、はんくわひ・ちやうりやうもよしなし・ただ心こそ大切なれ、いかに日蓮にぢれんいのり申すもうとも不信ふしんならばぬれたる・ほくちに・火をうちかくるが・ごとくなるべし、はげみをなして強盛じやうじやうに信力をいだし給たまうべし、すぎし存命ふしぎ不思議とおもわせ給たまへなにの兵法よ

りも法事経の兵法をもちひ給うべし、たまた 諸余怨敵・皆悉摧滅」の金言む
なしかるべからず、兵法剣形の大事も此の妙法より出でたり、ふかく
信心をとり給へあへて臆病にては叶うべからず候、おそびよう 恐恐謹言。きようきようきんげん

十月二十三日 日蓮花押 にちれん かおう

四条金吾殿御返事 しじょうきんご ごへんじ

◆ 二二二 四条金吾殿御返事 しじょうきんご ごへんじ

弘安三年十月五十 こうあん

九歳御作

1193p

殿岡より米送り給ひ候、今年七月・孟蘭盆供の僧膳にして候、自恣
の僧・靈山の聴衆・仏陀・神明も納受随喜し給うらん、尽きせぬ
志・連連の御訪い言を以て尽くしがたし。
りようぜん ちようしゅう ぶつだ しんみよう のうじゆずいき たまた たいけん

何となくとも殿の事は後生菩提ごしょうぼだい疑うたがいなし、何事なにことよりも文永八年の

御勘氣ごかんきの時既に相模さかみの国竜の口にて頸切られんとせし時にも殿は馬の

口に付いて足歩かち赤足はだしにて泣き悲み給たまいし事実にならば腹きらんとの氣

色なりしをば、いつの世にか思い忘るべき、そのみならず佐渡さどの島に放

たれ北海の雪の下に埋もれ北山の嶺の山下風に命助かる

べしともをばへず、年来の同朋ともどちにも捨てられ故郷へ歸らん事は大海たいかいの底

のちびきの石の思ひしてさすがに凡夫ほんぶなれば古郷の人人ひとびとも恋しきに

在俗ざいぞくの官仕隙みやすかえひまなき身に此の経を信ずる事こそ稀有なるに山河さんがを凌しのぎ

蒼海へを経て遙はるかに尋ね来り給たまいし志いしつろいし 香城に骨を砕くだき雪嶺に身を投げ

し人人ひとびとにも争いでか劣り給たまうべき、又我が身はこれ程に浮うび難なんか

りしがいかなりける事にてや同十一年の春の比赦免しやめんせられて鎌倉かまくらに歸

り上りけむ、情事の情を案ずるに今は我身わがみに過あやまち あらじ、或あるは命に

及およばんとし弘こう長ちやうには伊豆の国ぶん文永えいには佐渡さどの島かんぎ謙き曉やう再三に及べば
留難るなん重ちやうじやう疊じやうせり、仏法ぶつぽう中ちゆう怨おんの誠かい責しやくをも身にははや免まぬれぬらん。

然るに今山林に世を遁れ道を進まんといいしに人人の語様なりしかども旁存ずる旨ありしに依りて当国・当山に入りて已に七年の春秋を送る、又身の智分をば且らく置きぬ法華經の方人として難を忍び疵を蒙る事は漢土の天台大師にも越え日域の伝教大師にも勝れたり、是は時の然らしむる故なり、我が身法華經の行者ならば靈山の教主釈迦宝浄世界の多宝如来・十方分身の諸仏本化の大士迹化の大菩薩梵釈竜神十羅刹女も定めて

此の砌におはしますらん、水あれば魚すむ林あれば鳥来る蓬萊山には玉多く摩黎山には梅檀生ず麗水の山には金あり、今此の所も此の如し仏・菩薩の住み給う功德聚の砌なり、多くの月日を送り誦誦し奉る所の法華經の功德は虚空にも余りぬべし、然るを毎年度度の御参詣には無始の罪障も定めて今生一生に消滅すべきか、弥はげむべ

しはげむべし。

十月八日

花押かおう

四条中務三郎左衛門殿御返事さえもんごへんじ

日蓮にちれん

◆一二二二

四条金吾許御文 しじょうきんご おんふみ

弘安三年十二月 五 こうあん

十九歳御作

与四条金吾女房 しじょうきんごにようぼう

1195p

白小袖一つ・わた縣十両たしかたびそうら・おわ給候い畢んぬ、歳もかたぶき候又ところ処は山の中風はげしく庵室あんしつはかごの目の如ごとし、うちしく物は草の葉きたる物はかみぎぬ身のひゆる事は石の如ごとし、食物は冰こおりの如ごとくに候へば此の御小袖給候て頓やがて

身をあたたまらんと・をもへども明年の一日とかかれて候へば迦葉尊者かしようそんじゃの・足山にこもりて慈尊じそんの出世しゅつせ・五十六億七千万歳せんまんをまたるるもかくやひさしかるらん。

これはさてをき候ぬ、しるぢの四郎がかたり申し候・御前ごぜんの御法門ほうもんの

事うけ給たまわり候こそ・よに・すずしく覺おぼえ候へ此の御引出物に大事だいじの
法門ほうもん一つかき付けてまいらせ候、八幡大菩薩はちまんだいぼさつをば世間の智者愚者大體せけんちしやぐしやだいたい
は阿弥陀仏あみだぶつの化身けしんと申し候ぞ、其れもゆへなきにあらず中古の義に・或ある
は八幡はちまんの御託宣たくせんとて阿弥陀仏あみだぶつと申しける事少少候、
此これはをのをの心の念仏ねんぶつ者にて候故ゆえにあかき石を金と思いくひせをう
さぎと見るが如ごとし、其れ実そには釈迦しゃかぶつ仏にて・おはしまし候ぞ、其の故そのゆえは
大隅の国に石体の銘と申もうす事あり、一つの石われて二つになる、一つの
石には八幡はちまんと申もうす二字あり、一つの石の銘には 晉靈鷲山りやうじゅうせんに於おいて
妙法蓮華經みょうほうれんげきやうを説とき今正宮の中に在りて大菩薩ぼさつと示現じげんす」云云、
是れ釈迦しゃかぶつ仏と申もうす第一だいいちの証文しょうもんなり、此れよりもことにまさしき事候、
此の八幡大菩薩はちまんだいぼさつは日本国にほんこく人王第十四代・仲哀天皇てんのうは父なり、第十五代
神功皇后しんこうこうごうは母なり、第十六代応神天皇てんのうは今の八幡大菩薩はちまんだいぼさつ是なり、父の

仲哀天皇てんのうは天照太神てんしょうだいじんの仰おほせにて新羅国しらぎを責めんが為ために渡り給たまいしが

新羅しらぎの大王だいおうに調伏じょうふくせられ給たまいて仲哀天皇てんのうははかたにて

崩御ほうぎよ

ありしかば、きさきの神功皇后しんこうこうごうは此この太子たいしを御懷妊かいにんありながらわ

たらせ給たまいしが、王わうの敵てきをうたんとて数万騎しそくばんきのせいをあい具ぐして新羅国しらぎ

へ渡り給わたいしに、浪なみの上船かふねの内うちにて王子みこ御誕生ごたんじの氣いきいでき見え給たまう、

其そのの時とき

神功皇后ははらの内の王子にかたり給ふ、汝は王子か女子か王子ならばたしかに聞き給へ我は君の父仲哀天皇の敵を打たんが為に新羅国へ渡るなり、我が身は女の身なれば汝を大将とたのむべし、君日本国の主となり給うべきならば今度生れ給はずして軍の間腹の内にて数万騎の大将となりて父の敵を打たせ給へ是を用ひ給はずして只今生れ給うほどならば海へ入れ奉らんずるなり、我を恨みに思い給うなと有りければ、王子本の如く胎内にをさまり給いけり、其の時石のをびを以て胎をひやし新羅国へ渡り給いて新羅国を打ちしたがへて還つて豊前の国うさの宮につき給いここに王子誕生あり、懐胎の後三年六月三日と申す甲寅の年四月八日に生れさせ給う是を応神天皇と号し奉る、御年八十と申す壬申の年二月十五日にかくれさせ給ふ、男山の主・我が朝の守護神正体めづ

らしからずして靈驗れいけん新たにおはします今の八幡大菩薩はちまんだいばさつ是なり。

又釈迦しやかによらい如来は住劫ぢうきやく第九の滅・人壽にんじゆう百歳の時淨飯王じようばんを父とし摩耶まや

夫人ふじんを母として中天竺てんじく毘羅衛國びららんびに蘭らんと申もうす処ところにて甲寅きのえとらの年

四月八日に生れさせ給たまいぬ、八十年を経て東天竺てんじくくしな俱尸那城くしなじよう跋提河はちまんだいばさつの辺

にて二月十五日壬みづのえさる申まゐにかくれさせ給たまいぬ、今の八幡大菩薩はちまんだいばさつも又

是かくのごとくの如がし、月氏がと日本にほんと父母ふぼはかわれども四月八日きのえとらと甲寅まゐと

二月十五日みづのえさると壬まゐ申まゐとはかわる事なし、仏滅度ほとけめつどの後・二千二百二十余

年が間・月氏が・漢土かんど・日本にほん・一閻浮提えんぶだいの内に聖人しようにん・賢人けんじんと生るる人をば

皆釈迦みなしやかによらい如来けしんの化身けしんとこそ申まゐせども・かかる不思議ふしぎは未だ見聞けんもんせず。

かかる不思議ふしぎの候上八幡大菩薩はちまんだいばさつの御誓がいは月氏がにては法華經ほけきようを説ほい

て正直捨方便しやうじきしやほうべんとなのらせ給たまい、日本國にほんこくにしては正直しやうじきの頂いただきにやどらん

と誓たまい給たまふ、而しかるに去いぬる十一月十四日の子の時に御宝殿ほうでんをやいて天

にのぼらせ給たまいぬる故をかんがへ候に此の神は正直しやうじきの人の頂いただきにやどら
んと誓ちかへるに正直しやうじきの人の頂いただきの候はねば居き処しよなき故ゆゑに

栖すなくして天にのぼり給たまいけるなり、日本にほん国の第一だいいちの不思議ふしぎには釈迦しやか
如来にやらいの国に生れて此の仏をすてて一切衆生いっさいしゆじやう・皆みな一同に阿弥陀仏あみだぶつにつけ
り、有縁うゑんの釈迦しやかをばすて奉たてまつり無縁むゑんの阿弥陀仏あみだぶつをあをぎたてまつりぬ、
其その上親父

釈迦仏しゃかぶつの入滅にゅうめつの日をば阿弥陀仏あみたぶつにつけ又誕生の日をば薬師やくしになしぬ、
八幡大菩薩はちまんたいぼさつをば崇あがむるやうなれども又本地ほんちを阿弥陀仏あみたぶつになしぬ、本地ほんち
垂迹すいじやくを捨すつる上に此の事を申もうす人をばかたきとする故ゆえに力およ及おばせ給たまは
ずして此の神は天すむにのぼり給たまいぬるか、但ただし月は影を水にうかぶる濁れ
る水には栖すむことなし、木の上草の葉なれども澄つゆめる露つゆには移る事なれば
・かならず国主こくしゅならずとも正直しやうじきの人のかうべにはやどり給たまうなるべし。
然しかれば百王ひやくおうの頂いただきに・やどらんと誓ちかい給たまいしかども人王いちだい八十一代・安
徳天皇てんのう・二代隱岐おきの法皇ほうこう・三代阿波あ・四代佐渡さど・五代東一条等とういちやうとうの五人の
国王こくおうの頂いただきにはすみ給たまはず、諂曲てんくつの人の頂いただきなる故なり、頼朝よりともと義時よしときと
は臣下しんかなれども其その頂いただきにはやどり給たまふ正直しやうじきなる故か、此これを以て思
うに法華經ほけきやうの人人ひとびとは正直しやうじきの法しやうじきにつき給たまふ故ゆえに釈迦仏しゃかぶつ・猶なほ是これをまほり
給たまふ、況すいじやくや垂迹すいじやくの八幡大菩薩はちまんたいぼさつ争いかでか是これをまほり給たまはざるべき、淨き水な

れども濁りぬれば月やどる事なし、糞水なれどもすめば影を惜み給はず、濁水は清けれども月やどらず糞水はきたなければどもすめば影ををしまず、

濁水は智者ちしや学匠がくしようの持戒じかいなるが法華經ほけきように背くが如し、糞水は愚人ぐにんの無戒むかいなるが貪欲どんよくふかく瞋恚しんに強盛ごうじようなれども法華經ほけきよう計りばかを無二無三に信じまいらせて有るが如し、涅槃經ねはんぎようと申す經には法華經ほけきようの得道の者を列ねて候に☆☆蝮蠍ふくかつと申して糞虫あを挙げさせ給ふ、竜樹菩薩りゅうじゆばさつは法華經ほけきようの不思議ふしぎを書き給うに☆☆虫と申して糞虫あを仏になす等云云、又涅槃經ねはんぎように法華經ほけきようにして仏になるまじき人をあげられて候には「一闍提いつせんたいの人の阿羅漢あらかんの如く、大菩薩ぼさつの如き」等云云、此等は濁水は淨けれども月の影を移す事なしと見えて候、されば八幡大菩薩はちまんたいばさつは不正直しやうじきをにくみて天にのぼり給うとも、法華經ほけきようの行者ぎやうじやを見ては争か其の影をばをしみ

給^{たま}うべき、我が一門^{いちもん}は深く此の心を信ぜさせ給^{たま}うべし、八幡大菩薩^{はちまんだいぼさつ}は
此^{ここ}にわたらせ給^{たま}うなり、疑^{うたがい}い給^{たま}う事なかれ疑^{うたがい}い給^{たま}う事なかれ、
恐^{きようきようきんげん}恐^{きようきようきんげん}謹言^{きんげん}。

十二月十六日

日蓮^{にちれん} 花押^{かおう}

四条金吾殿女房御返事^{しじようきんごにようぼうごへんじ}

◆二二三

四条金吾殿御返事^{しじょうきんごごへんじ}

弘安五年正月六十^{こうあん}

一歳御作

1198p

満月^{まんげつ}のごとくなるもちる二十かんろのごとくなる・せいす一つ・

給候^{たびそうら}い畢^{おわ}んぬ、春のはじめの御悦^{よろこ}びは月のみつるがごとく・しをのさすが
ごとく・草のかこむが如^{ごと}く・雨のふるが如^{ごと}しと思し食すべし。

そもそも

抑^{おさ}八日は各各の御父^{しやかぶつ}・釈迦^{しやか}仏の生れさせ給^{たま}い候し日なり、彼の日に
三十二のふしぎあり・一には一切^{いっさい}の草木^{そうもく}に花さき・みなる・二には大地^{だいち}
より一切^{いっさい}の宝わきいづ・三には一切^{いっさい}のでんばたに雨ふらずして水わきい
づ・四には夜変

じてひるの如^{ごと}し・五には三千世界^{さんぜんせかい}に欺きのこゑなし、是^{かく}くの如^{ごと}く吉瑞の

相のみにて候し、是より已^{このかた}来今にいたるまで二千二百三十余年が間・吉事には八日をつかひ給^{たま}い候なり。

然^{しか}るに日本^{にほんこく}・皆^{みな}釈迦^{しやくか}仏^{ぶつ}を捨てさせ給^{たま}いて候に・いかなる過^か去^この善^{ぜん}根^{こん}にてや・法^ほ華^け經^{きやう}と釈迦^{しやくか}仏^{ぶつ}とを御^お信^{しん}心^{じん}ありて・各^{おの}各^{おの}あつまらせ給^{たま}いて八日^{はつにち}をくやう申^{もう}させ給^{たま}うのみならず・山^{やま}中^{ちゆう}の日蓮^{にちれん}に華^{はな}かうを・をくらせ候やらん、たうとし・たうとし、恐^{きよう}恐^{きよう}。

正月七日

日蓮^{にちれん}花押^{かおう}

人人^{ひとびと}御返事^{ごへんじ}

◆二二四

月水御書ごしよ

文永元年四月四十三歳御作
ぶんえいがんねん

1199p

伝え承はる御消息しやうそくの状に云く法華經ほけきやうを日ごとに一品づつ二十八日
が間に一部をよみまいらせ候しが當時とうじは藥王品やくおうぼんの一品を毎日まいにちの所作しよさに
し候、ただ・もとの様に一品づつを・よみまいらせ候べきやらんと云云、
法華經ほけきやうは一日いちにちの所作しよさに一部八卷・二十八品・或は一卷・或は一品・
一偈いちげ・一句いっく二字・或は題目だいもくばかりを南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと只一遍ただいっぺんとなへ・
・或は又一期いちごの間に只一度ただひとたびとなへ・或は又一期いちごの間にただ一遍唱いっぺんとなうる
を聞いて隨喜ずいきし・或は又隨喜ずいきする声を聞い
て隨喜ずいきし・是体これていに五十展転ごじゅうてんでんして末になりなば 志いっしよめし もうすくなり隨喜ずいきの

心の弱き事・二三歳の幼稚の者のはかなきが如く・牛馬なんどの前後を
弁へざるが如くなりとも、他經を学する人の利根にして智悪かしこく・
舍利弗・目連・文殊・弥勒の如くなる人の諸經を胸の内にうかべて御坐
まさん人人の御功德よりも勝れたる事・百千万億倍なるべきよ
し・經文並に天台・妙樂の六十巻の中に見え侍り、されば經文には
仏の智慧を以て多少を籌量すとも其の辺を得ず」と説かれて仏の御
智慧すら此の人の功德をば・しろしめさず、仏の智慧のありがたさは此
の三千大千世界に七日・若しは二七日など・ふる雨の数をだにも・し
ろしめして御坐候なるが只法華經の一字を唱えたる人の功德
をのみ知しめさずと見えたり、何に況や我等逆罪の凡夫の此の功德を
しり候いなんや、然りと云えども如来滅後二千二百余年に及んで五濁
さかりになりて年久し事にふれて善なる事ありがたし、設ひ善を作人

も一の善に十の悪を造り重ねて結句は小善につけて大悪を造り心には
大善を修したりと云ふ慢心を起す世となれり、然るに如来

の世に出でさせ給いて侯し国よりしては二十万里の山海をへたてて東に
よれる日域辺土の小嶋に生まれ・五障の雲厚うして三従の・きづなに・つ
ながれ給へる女人などの御身として法華經を御信用侯は・ありがたし
なんど・

とも申すもうに限りなく候、凡そおよ一代いちだい聖教しやうきやうを扱おさき見てけんみつにどうを究めきわ給たまへる様なる智者ちしや学匠がくしやうだにも・近來きんらいは法華經ほけきやうを捨てねんぶつ念仏もんぶつを申し候にいか何なる御宿善しゆくぜんありてか此この法華經ほけきやうを一偈いちげ・一句いっくもあそばす御身おんみと生れさせ給たまいけん。

されば此この御消息しやうそくを拜はいし候そうらへば優曇華うどんげを見たる眼まなこよりもめづらしく一眼いっけんの亀うきぎの浮木うきぎの穴あなに値あへるよりも乏すくなき事かなと・心ばかりは有がたき御事おんことに思いまいらせ候間、一言・一点も隨喜ずいきの言を加えて善根ぜんこんの余慶よけいにもやと・はげみ候そうらへども只恐らくは雲の月をかくし塵ちりの鏡をくもらすがごとく如く短く拙つたなき言にて殊勝しゆしやうにめでたき御功德くどくを申し隠かくしくもらす事にや候らんといたみ思ひ候ばかりなり、然しかりと云えども貴命きめいもだす黙止もくしへきにあらず一滴を江海に加へ

☆火しやつかを日月にちがつにそへて水をまし光を添そふると思し食すべし、先法華經ほけきやうと

申すは八卷・一卷・一品・一偈・一句・乃至・題目を唱ふるも功德は同じ
事と思し食すべし、譬えば大海の水は一滴なれども無量の江河の水を
納めたり、如意宝珠は一珠なれども万宝をふらす、百千万億の滴珠も
又これ同じ法華経は一字も一の滴珠の如し、乃至万億の字も
又万億の滴珠の如し、諸経・諸仏の一字一名号は江河の一滴の永山海
の一石の如し、一滴に無量の水を備えず一石に無数の石の徳をそなへも
たず、若し然らば此の法華経は何れの品にても御坐しませ只御信用の
御坐さん品こそめづらしくは候へ。

総じて如来の聖教は何れも妄語の御坐すとは承り候はねども・再び
仏教を勘えたるに如来の金言の中にも大小・權実・顯蜜など申す事
・經文より事起りて候、随つて論師・人師の釈義にあらあら見えたり、
詮を放つて申さば釈尊の五十余年の諸教の中に先四十余年の説教は

猶^{なほ}うたがはしく候ぞかし、仏^{みづか}、自ら無量義經^{むりようぎきよう}に 四十余年^{よんじゅうよねん}未だ真実^{しんじつ}
を顯^{あらわ}さず」と申^{もう}す經文^{きやうもん}まのあたり説かせ給^{たま}へる故なり、法華經^{ほけききよう}に於^{おい}ては
仏^{みづか}、自ら一句^{いっく}の文字^{もんじ}を 正直^{しやうじき}に方便^{ほうべん}を捨てて但^ただ無上道^{むじやうどう}を説く」と定^た
めさせ給^{たま}いぬ、其^その上^{うへ}・多宝^{たほう}・大地^{だいち}より涌出^いでさせ給^{たま}いて 妙法華經^{みやうほけききよう}・
皆^{かい}是^ぜ真実^{しんじつ}」と証^{しやう}明^{みやう}を加^くへ十方^{じゅうぱう}の諸^{しよ}佛^{ぶつ}・皆^{みな}法華經^{ほけききよう}の座^ざにあつまりて舌^{しや}を
出^でして法華經^{ほけききよう}の文字^{もんじ}は一字^{いちじ}なりとも妄語^{もうご}なるまじきよし

助成をそ給へり、譬えば大王と后と長者等の一味同心に約束をなせるが如し、若し法華經の一字をも唱えん男女等・十惡・五逆・四重等の無量の重業に引かれて惡道におつるならば日月は東より出でさせ給はぬ事はありとも・大地は反覆する事はありとも・大海の潮はみちひぬ事はありとも、破たる石は合うとも江河の水は大海に入らず

とも・法華經を信じたる女人の世間の罪に引かれて惡道に墮つる事はあるべからず、若し法華經を信じたる女人・物をねたむ故・腹のあしきゆへ・食欲の深きゆへなどに引れて惡道に墮つるならば・釈迦如来・多宝仏・十方の

諸仏・無量曠劫より・このかた持ち來り給へる不妄語戒忽に破れて調達が虚誑罪にも勝れ瞿伽利が大妄語にも超えたらん争か・しかるべきや。
法華經を持つ人・惡しく有りがたし、但し一生が間二惡をも犯さず・

五戒・八戒・十戒・十善戒・二百五十戒・五百戒・無量の戒を持ち、
一切經をそらに浮べ・一切の諸仏・菩薩を供養し無量の善根をつませ
給うとも、法華經計りを御信用なく又御信用はありとも諸經・諸仏に
も並べて思し食し・又並べて思し食さずとも他の善根をば隙なく行じ
て時時・法華經を行じ・法華經を用ひざる謗法の念仏者なんどにも
語らひをなし、法華經を末代の機に叶はずと申す者を科とも思し食さ
ずば・一期の間・行じさせ給う處の無量の善根も忽にうせ・並に法華經
の御功德も且く隠れ
させ給いて、阿鼻大城に墮ちさせ給はん事・雨の空にとどまらざるが
如く・峰の石の谷へころぶが如しと思し食すべし、十惡・五逆を造れる
者なれども法華經に背く事なければ往生成仏は疑なき事に侍り、
一切經をたもち諸仏・菩薩を信じたる持戒の人なれども法華經を用る

ことな
事無ければ惡道あくじどうに墮おつる事疑うたがひなしと見えたり。

予が愚見ぐけんをもつて近來きんらいの世間せけんを見るに多くは在家ざいけ・出家しゅつけ・誹謗ひぼうの者の
みあり、但し御不審ふしんの事・法華經ほけきやうは何れの品も先に申しつる様に愚かな
らねども殊ことに二十八品の中に勝すぐれて・めでたきは方便品ほうべんと寿量品じゆりやうぼんにて
侍はべり、余品は皆枝葉みなしやうにて候なり、されば常の御所作しよさには方便品ほうべんの長行
と寿量品じゆりやうぼんの長行とを習ならひ読よませ給たまひ候そうらへ又別に書き出

しても・あそぼし候べく候、余の二十六品は身に影の随したがひ玉に財たからの備そなわ
るが如ごとし、寿量品・方便品をよみ候へば自然じねんに余品はよみ候はねども
備はり候なり、薬王品・提婆品は女人にょにんの成仏往生を説かれて候品にて
は候へども提婆品は方便品の枝葉・薬王品は方便品と寿量品の枝葉に
て候、されば常には此の方便品・寿量品の二品をあそぼし候て余の品
をば時時・御いとまの・ひまに・あそぼすべく候。

又御消息の状に云く日ごとに三度づつ七つの文字を拜しまいらせ候
事と、南無一乗妙具と一万遍申し候事とをば日ごとにし候が、例の事
に成つて候程は御経をばよみまいらせ候はず、拜しまいらせ候事も
一乗妙典と申し候事も・そらにし候は苦しかるまじくや候らん、それ
も例の事の日数の程は叶うまじくや候らん、いく日ばかりに
て・よみまいらせ候はんずる等と云云、此の段は一切の女人ごとの御

不審に常に問せ給い候御事にて侍り、又古へも女人の御不審に付いて申したる人も多く候へども一代聖教にさして説かれたる処のなきかの故に証文分明に出したる人もおはせず、日蓮粗聖教を見候にも酒肉・五辛・婬事などの様に不浄を分明に月日をさして禁めたる様に月水をいみたる経論を未だ勘へず候なり、在世の時多く盛んの女人・尼になり仏法を行ぜしかども月水の時と申して嫌はれたる事なし、是をもつて推し量り侍るに月水と申す物は外より来れる不浄にもあらず、只女人のくせ癖かたわ生死の種を継ぐべき理にや、又長病の様なる物なり例せば屎尿などは人の身より出れども能く淨くなしぬれば別にいみもなし是体に侍る事か。

されば印度・戸那などにもいたくいむよしも聞えず、但し日本国は神国なり此の国の習として仏・菩薩の垂迹不思議に経論にあひにぬ

事も多く侍るに・是をそむけば現に当罰あり、委細に経論を勘見る
に仏法の中に随方毘尼と申す戒の法門は是に当れり、此の戒の心はい
たう事かけざる事をば少少仏教にたがふとも其の国の風俗に違うべか
らざるよし仏一つの戒を説き給へり、此の由を知ざる智者共神は鬼神な
れば敬ふべからずなんと申す

強義じやうぎを申もうして多くの檀那だんなを損こずる事ありと見えて候もちなり、若もし然しからば

此この国の明神みやうじん・多分たぶんは此この月水をいませ給たまへり、生なまを此この国にうけん

ひとびと おおい いみ たま ひとびと 人人ひとは大おおいに忌いみ給たまうべきか、但ただし女人にょにんの日の所作しよさは苦くるしかるべからずと

覚おほえ候そうろうか、元もとより法華經ほけきやうを信しんせざる様ようなる人人ひとが經きやうをいかにしても

云いいうとめんと思おもうが・さすがに・ただちに經きやうを捨てよとは

云いいえずして、身みの不淨ふじやうなんどにつけて法華經ほけきやうを遠とほざからしめんと思おもう

程ほどに、又不淨ふじやうの時とき・此これを行おこすれば經きやうを愚おろかにしまいらする・なんど・お

どして罪つみを得えさせ候もちなり、此この事をば一切いっさい御心得ごころえ候もちて月水おんときの御時ときは七

日ひまでも其その氣いきの有あらん程ほどは御經ごきやうをば・よませ給たまはずして暗くらに南無なむ

妙法蓮華經みやうほうれんげきやうと唱となえさせ給たまい候もちへ礼拝らいはいをも經きやうにむかはせ

給たまはずして拝をせさせ給たまうべし、又不慮りんじゆうに臨終りんじゆうなんどの近づそき候もちはんに

は魚鳥ぎよなんどを服ふくせさせ給たまうても候そうらへ・よみぬべくば經きやうをもよみ及および

南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようとも唱えさせ給たまい侯そうらべし、又月水なんどは申もうすに及び
侯そうらはず又南無一乗妙具なむいちじようと唱えさせ給たまう事 是これ同じ事には侍はべれども
天親菩薩てんじんぼさつ・天台大師等てんだいだいしの唱えさせ給たまい侯そうらしが如ごとく・只南無妙法蓮華經ただなむみょうほうれんげきよう
と唱となえさせ給たまうべきか、是これ子細しさいありてかくの如ごとくは申もうし侯そうらなり、
穴賢あなかしこあなかしこ穴賢あなかしこ。

文永元年ぶんえい甲子がねね四月十七日

日蓮にちれん

花押かおう

大学三郎殿御内御報

◆一二二五 大学三郎殿御書ごしよ

建治元年がねねん七月 五十四

歳御作

1203p

外道げどうには天・人・畜の三善道さんぜんどうを明あかし鬼道の有無うむ之これを論じて地獄道じごくは
其その沙汰さた無し、小乗經しょうじょうきやうには六道ろくどうの因果いんがを明あかして四聖ししようの因果いんが以て分明ふんみやう
ならず、俱舍くしや・成実じやうじつ・律の三宗はしょうじょうきやう小乗經しょうじょうきやうに依憑えひようして但六道ろくどうを明あかす
是これなり、三論宗さんろんしゆうは天台宗てんだいしゆう已前いぜんに天竺てんじくより之これを渡わたす八界はつがいを立てて十界じゆっかい
を明あかさず、法相宗ほうそうしゆうは又天竺てんじくの宗しゆなり天台てんだい已後いごに唐とうの太宗たいそうの世これに之これを
渡わた

す、又八界を立つ大乘だいじやうな為りと雖もいえど五性各別を立て無性有情は永く
成仏じやうぶつせずと之これを立つ殆んど外道げどうの法に似たり自他宗じたの歎なげきなり、
華嚴宗・真言宗けこんしゅう しんこんしゅうの両宗は天台已後に之有これあり、華嚴宗は唐とうの則天皇后の
御宇ぎやうに之これを立つ、真言宗しんこんしゅう
は玄宗げんそうの時善無畏三藏ぜんむいさんざう之これを渡す但し天竺てんじくに真言宗しんこんしゅうの名これな之無なし無畏
三藏さんざう・大日經だいにちぎきやうを以て宗と為すの故に猥ゆゑに天竺てんじくの宗と稱しょうするか、此の
二宗共に十界じゅうかいを立つ但し天台宗たんだいしゅう已後いごなり智者大師ちしやだいしの巧智こうちを偷盜ちゆうとうして
自身じしんの才能さいのうと

号するか。

仏説ぶつせつの如ごとく之これを勘かんうれば法華經ほけきやうの外華嚴經けこんきやう・大集經だいしつきやう・般若經はんのにききやう・大日經だいにちぎきやう・
深密經じんみつ等の諸經しよきやうは但小衍相對しやうえんそうたいなり但法華經ほけきやう計ばかりに限いつて已今当いこんとうを以
て眷属けんぞくの修多羅しゆたらと為す、然しかりと雖も天台已前てんだい いぜんの諸師しよし法華經等ほけきやうの一切いっさいの

大乘經を小衍相對を以て之を釈す、王臣の差別無く上下之を混す
仏法未だ顯れず愚癡の失之有り、天台已後に諸宗小衍相對の經經
を以て權實相對之を定む、天台の智之を盜めり、日月に背いて灯・に向
い丘塚を華恒に比する是なり、仏は十八界修羅は十九界天台は四智
真言は五智天台は九識十識真言は十識十一識而るを天台の學者之に
誑惑

せられ悉く実義なりと思ひ、法華經は釈尊の所説にて民の万言の
如く大日經は天子の鳳文にて王の一言の如し」等云云、善無畏三藏事
を天竺に寄せ法華經と大日經と理同事勝と立つ是れ一の謬言なり、
日蓮は論師・人師の添言を捨てて専ら經文を勘うるに大日經一部六
卷並びに供養法の卷・一卷・三十一品之を見聞するに声聞乗と緣覺乘
と大乘の菩薩と仏乘の四乗之を説く、其の中の大乗の菩薩乘とは

三蔵教さんぞうの三祇さんぎの菩薩乘ぼさつなり仏乘ぶつじやうは実大乘じつだいじやうなり

り法華經ほけきやうに及およばざるの上華嚴けこん・般若はんにかにも劣たり但た阿含あこんと方等ほうとうとの二經なり、大日經だいにちきやうの極理ごくりは未いまだ天台てんだいの別教べつきやう・通教つうきやうの極理ごくりにも及およばざるなり。

弘法大師こうぼうだいし延暦えんりやく二十三年にゅうとうに入唐にやうし大同二年きちやうに歸朝きちやうす、三箇年けいかの間慧果けいか和尚わじやうに値あいて真言しんごんの秘教しやくを學習しやくし歸朝きちやうの後じゆうじゆう十住じゆう心二教論しんにきやうろん之これを注しよして世間せけんに流布るふす、釈迦牟尼しやくかむに仏ぶつ・並びに大日經だいにちきやう二仏ふつの所説しよせつの勝劣しやうれつ之これを定じやうむ、第一大日經だいいちだいにちきやう・

第二・華嚴經・第三法華經・淺きより深きに至る義なり華嚴經・法華經に勝るとは南北の二義を取るなり又華嚴宗の義なり、南北並びに弘法大師は無量義經・法華經・涅槃經の三經を見ざる愚人なり、仏既に分明に華嚴經と無量義經との勝劣之を説く、何ぞ聖言を捨てて南北の凡謬に付かんや、近きを以て遠きを察するに將た又大日經と法華經との勝劣之を知らず、大日經には四十余年の文之無く又已今当の言之を削る二乗作仏・久遠実成之無し、法華經と大日經との勝劣之を論ぜば民と王と石と珠との勝劣高下是なり、而るに安然和尚粗之を顯す然りと雖も但だ華嚴經と法華經との勝劣は之を明むるに似たれども法華・大日經の勝劣之に聞うして聞と漆との如くなり、慈覺大師は本伝・教大師に稟くと雖も本を捨て末に付き入唐の間、真言家の人人に誑惑せらるるの間又大日經と法華と理同事勝と云云、

賢きに似たれども但だ善無畏の僻見を出でざるのみ。

而るに日蓮末代に居し粗此の義を疑う遠きを尊み近きを賤み死せ

るを上げ生けるを下す、故に当世の学者等之を用いず、設い堅く三歸

五戒・十善戒・二百五十戒・五百戒十無尽戒等の諸戒を持てる比丘・

比丘尼等も愚癡の失に依つて小乗經を大乘經と謂い權大乘經を

実大乘經なりと執する等の謬義出来す、大妄語大殺生大偷盜等の

大逆罪の者なり、愚人は之を知らずして智者と尊む、設い世間の諸戒

之を破る者なりとも堅く大小・權実等の經を弁えれば世間の破戒は佛法

の持戒なり、涅槃經に云く戒に於て緩なる者を名けて緩と為さず乘

に於て緩なる者を乃ち名けて緩と為す」等云云、法華經に云く是を

持戒と名く」等云云、重き故に之を留む、事事靈山を期す、恐恐

謹言。

七月二日

大学三郎殿

日蓮にちれん

花押かおう

◆二二六

星名五郎太郎殿御返事

文永四年十二

月 四十六歳御作

1206p

漢の明夜夢みしより迦竺二人の聖人初めて長安のとぼそに臨みしより以来唐の神武皇帝に至るまで天竺の仏法震旦に流布し、梁の代に百済国の聖明王より我が朝の人王三十代欽明の御宇に仏法初めて伝ふ、其れより已来一切の経論諸宗皆日域にみてり、幸なるかな生を末法に受くるといへども靈山のきき耳に入り身は辺土に居せりといへども大河の流れ掌に汲めり、但し委く尋ね見れば仏法に於て大小・権実前後のおもむきあり、若し

此の義に迷いぬれば邪見に住して仏法を習ふといへども還つて十惡を

犯し五逆を作る罪よりも甚しきなり、爰を以て世を厭ひ道を願はん人先ず此の義を存ずべし、例せば彼の苦岸比丘等の如し、故に大經に云く「君し邪見なる事有らんに命終の時正に阿鼻獄に墮つべし」と云へり。

問う何を以てか邪見の失を知らん予不肖の身たりといへども随分後世を畏れ仏法を求めんと思ふ、願くは此の義を知らん、若し邪見に住せばひるがへして正見におもむかん、答う凡眼を以て定むべきにあらず浅智を以て明むべきにあらず、經文を以て眼とし仏智を以て先とせん、但恐くは若し此の義を明さば定めていかりをなし

憤りを含まん事を、さもあらばあれ仏勅を重んぜんにはしかず、其れ世人は皆遠きを貴み近きをいやしむ但愚者の行ひなり、其れ若し非ならば遠とも破すべし其れ若し理ならば近とも捨つべからず、人貴む

とも非ならば何ぞ今用いん、伝え聞く彼の南三・北七の十流の学者
威徳ことに勝れて天下に尊重せられし事既に五百余年まで有り
しかども陳隋二代の比天台大師是を見て邪義なりと破す、天下に此の
事を聞いて大きに是をにくむ、然りといへども陳王隋帝の賢王たるに
依て彼の諸宗に天台を召し決せられ、邪正をあきらめて前五百年の
邪義を改め

皆悉く大師に歸す。

又我が朝の叡山の根本大師は南都北京の碩學と論じて仏法の邪正を
ただす事・皆經文をさきとせり、今当世の道俗貴賤皆人をあがめて法
を用いず心を師として經によらず、之に依て・或は念仏權教を以て
大乘妙典をなげすて・或は真言の邪義を以て一実の正法を謗ず、是等
の類豈大乘誹謗のやからに非ずや、若し經文の如くならば争か那落
の苦みを受けざらんや、之に依て其の流をくむ人もかくの如くなるべ
し、疑つて云く念仏・真言は是れ
・或は權・或は邪義又行者・或は邪見・或は謗法なりと此の事甚だ以
て不審なり、其の故は弘法大師は是れ金剛薩・の化現第三地の菩薩な
り、真言は是れ最極甚深の秘密なり、又善導和尚は西土の教主弥陀
如来の化身なり、法然上人は大勢至菩薩の化身なりかくの如きの上人

を豈あにに邪見じゃけんの人と云うべきや、答えて云いく此の事本より私の語ことばを以

て是これを難なんずべからず經文きやうもんを先として是これをただすべきなり、真言しんごんの教は

最極ひみつの秘密なりと云うは三部經さんぶきやうの中に於おいて蘇悉地經そしつちきやうを以て王とすと見

えたり、全く諸もろもろの如來にょらいの法の中に於おいて第一だいいちなりと云う事を見ず、凡およそ

仏法ぶつぽうと云うは善惡ぜんあくの人をゑらばず皆みな仏になすを以て最第一さいだいいちに定むべ

し、是これ程の理をば何いかなる人なりとも知るべきことなり、若もし

此の義に依よらば經と經とを合せて是これを×すべし、今法華經ほけきやうには二乘にじやう

成仏じやうぶつあり真言經しんごんには之これ無しあまつさへ・あながちに是これをきらへり、

法華經ほけきやうには女人成仏にょにんじやうぶつ之これあり真言經しんごんにはすべて是これなし、法華經ほけきやうには惡人あくにん

の成仏じやうぶつ之これあり真言經しんごんには全くなし、何を以てか法華經ほけきやうに勝すぐれたりと云

うべき、又若もし其その瑞相ずいさうを論ぜば法華ほけには六瑞あり、所謂いふゆる

雨華地動びやくちうし白毫相びやくごうの光り上は有頂きわを極め下は阿鼻獄あびごくを照てらせる是これなり、

又多宝たほうの塔だい大地だいちより出て分身ふんじんの諸仏しよぶつ・十方じゆっぽうより来る、しかのみならず
上行等じやうぎやうの菩薩ぼさつの六万恒沙ごうしや五万四万三万乃至ないし一恒沙半恒沙等ごうしや大地だいちよ
りわきいでし事此ことの威儀いぎ不思議ふしぎを論ぜば何を以て真言しんごん・法華ほつけにまされ
りと云わん、此等これらの事委くわしくのぶるにいとまあらず・はづかに大海たいかいの一滴
を出いだす。

爰こゝに菩提心論ぼだいしんろんと云う一卷の文あり、竜猛菩薩りゅうもうぼさつの造と号す、此の書に云く、唯真言法ただしんごんの中に即身成仏そくしんじょうぶつす故ゆゑに是れ三摩地さんまじの法を説く諸教しよきやうの中に於おいて關かいて書るさず」と云えり、此の語ことばは大おおに不審ふしんなるに依よつてて經文きやうもんに就おいてこれを見るに即身成仏そくしんじょうぶつの語ことばは有あれども即身成仏そくしんじょうぶつの人全くなし、たとひありとも法華經ほけきやうの中に即身成仏そくしんじょうぶつあらば諸教しよきやうの中にをいてかいて而しかもかかずと云うべからず此の事甚はなはだだ以て不可ふかなり、但ただし此の書は全く竜猛りゅうもうの作にあらず委むねき旨めは別あに有るべし、設たとひ竜猛菩薩りゅうもうぼさつの造なりともあやまりなり、故ゆゑに大論だいろんに一代いちだいをのぶる肝要かんようとして般若はんにかは秘密ひみつにあらず二乗作仏にじやうさぶつなし法華ほつけは是秘密ひみつなり二乗作仏にじやうさぶつあり」と云えり、又云く「二乗作仏にじやうさぶつあるは是秘密ひみつ二乗作仏にじやうさぶつなきは是顯教けんきやう」と云えり、若もし菩提心論ぼだいしんろんの語ことばの如ごとくならば別しては竜樹りゅうじゆの大論だいろんにそむき総じては諸仏出世しよぶつしゆつせの本意ほんい・一大事いちだいじの

因縁をやぶるにあらずや、今竜樹・天親等は皆釈尊の説教を弘めん
が爲に世に出ず、付法蔵二十四人の其の一なり何ぞ此くの如き妄説を
なさんや、彼の真言は是れ般若經にも劣れり何に況や法華に並べん
や、爾るに弘法の秘蔵宝鑰に真言に一代を撰ずるとして法華を第三番
に下し、あまつさへ戲論なりと云えり、謹んで法華經を披きたるに諸の
如来の所説の中に第一なりと云えり、又已今当の三説に勝れたりと見
えたり、又藥王の十喻の中に法華
を大海にたとへ日輪にたとへ須弥山にたとへたり、若し此の義に依らば
深き事何ぞ海にすぎん・明かなる事何ぞ日輪に勝れん高き事何ぞ
須弥山に越ゆる事有らん、喩を以て知んぬべし何を以てか法華に勝れ
たりと云はんや、大日經等に全く此の義なし但己が見に任せて永く
仏意に背く、妙樂大師曰く謂う眼有らん者は委悉に之を

尋ねよ」と云へり、法華經を指て華嚴に劣れりと云うは豈眼ぬけたるものにあらずや、又大經に云く、若し仏の正法を誹謗する者あらん正に其の舌を断べし」と、嗚呼誹謗の舌は世世に於て物云うことなく邪見の眼は生生にぬけて見ること無らん加之らず若し人信ぜずして此の經を毀謗せば乃至其の人命終えて阿鼻獄に入らん」の文の如くならば定めて無間・大城に墮ちて無量億劫のくるしみを受けん、善導・法然も是に例して知んぬべし、

誰か智慧有らん人・此の謗法の流を汲んで共に阿鼻の焰にやかれん、
行者能く畏るべし此れは是れ大邪見の輩なり、所以に如来誠諦の
金言を按ずるに云く、我が正法をやぶらん事は譬えば獵師の身に袈裟
をかけたるが如し、或は須陀・斯那含阿那含阿羅漢・辟支仏及び仏の
色身を現じて我が正法を壊らん」といへり。

今・此の善導・法然等は種種の威を現じて愚癡の道俗をたぶらかし
如来の正法を滅す、就中彼の真言等の流れ偏に現在を以て旨とす、
所謂畜類を本尊として男女の愛法を祈り莊園等の望をいのる、
是くの如き少分のしるしを以て奇特とす、若し是を以て勝れたりといは
ば彼の月氏の外道等にはすぎじ、彼の阿竭多仙人は十二年の間・恒河の
水を耳にただへたりき、又耆菟仙人の四大海を一日の中にすひほし、☆
留外道は八百年の間石となる豈是

にすぎたらんや、又瞿曇仙人が十二年の程積身と成り說法せし、弘法
が刹那の程にびるさな毘盧舍那の身と成りし、其の威徳を論ぜば如何、若し彼の
變化のしるしを信ぜば即ち外道を信ずべし当に知るべし彼れ威徳あり
といへども猶阿鼻の炎をまぬがれず、況やはづかの變化にをいてをや況
や大乘誹謗にをいてをや、是一切衆生の惡知識
なり近付くべからず畏る可し畏る可し、仏の曰く惡象等に於ては畏る
る心なかれ惡知識に於ては畏るる心をなせ、何を以ての故に惡象は但
身をやぶり意をやぶらず惡知識は二共にやぶる故に、此の惡象等は但
一身をやぶる惡知識は無量の身無量の意をやぶる、惡象等は但不淨の
臭き身をやぶる惡知識は淨身及び淨心をやぶる、惡象は但肉身をや
ぶる惡知識は法身をやぶる、惡象の為にころされては三惡に至らず
惡知識の為に殺されたるは

必ず三惡さんあくに至るいた、此の惡象あくざうは但身の為のあだなり、惡知識あくちしきは善法の為ために
あだなり」と、故ゆえに畏おそる可そべきは大毒蛇どくじや惡鬼神きじんよりも弘法善導こうぼうぜんどう・法然等ほうねんの
流あくちしきの惡知識おそを畏おそるべし、略りやくして邪見じやけんの失とがを明あすこと畢おわんぬ。

此の使あまりに急いそぎ候こうほどにとりあへぬさまにかたはしばかりを申もうし
候、此の後又便宜びんぎに委くわしき経釈きやうしやくを見調みべてかくべく候、穴賢あなかしこあなかしこ・外
見あるべからず候若命もつつれなく候はば仰おほせの如ごとく明年の秋下り候て且もつ
申もうすべ

く候、きようきよう恐恐。

十二月五日

日蓮にちれん花押かおう

星名五郎太郎殿御返事ごへんじ

◆ 二二七 大豆御書ごしよ

文永七年十月 四十九歳御作ぶんえい

1210p

大豆一石かしこまつて拝領し畢おわんぬ法華經ほけきようの御宝前ほうぜんに申し上候、一・
の水を大海たいかいになげぬれば三災さんさいにも失せず一華を五淨によせぬれば劫火ごうか
にもしばまず、一豆を法華經ほけきようになげぬれば法界ほっかいみな蓮なり、恐惶きようきよう
謹言きんげん。

十月二十三日

にちれんかおう
日蓮花押

ごへんじ
御所御返事

◆ 二二八

じゅりようほん とくいしやう
寿量品得意抄

ぶんえい
文永八年四月 五十歳

御作

1210p

きやうしゆしやくそんじゅりようほん
教主釈尊 寿量品を説き給うに爾前・迹門のききをあげて云く
いっさいせけん てんにんおよ
一切世間の天人及び阿修羅は皆今の釈迦牟尼仏は釈氏の宮を出でて
がや
伽耶城を去ること遠からず道場に坐して阿耨多羅三藐三菩提を得た
りとおも
りと謂えり」云云、此の文の意は初め華嚴經より終り法華經安樂行品
にいた
に至るまで一切の仏の御弟子大菩薩等の知る処の思いの心中をあげ

たり、爾前にぜんの經に二つの失とがあり、一には行布そんを存ゆえする故に仍未いまだ權を
開もうせず」と申もうして迹門しやくもん方便品ほうべんの十如是この一念三千いちねんさんぜん開權顯實かいこんけんじつ二乗作仏にじようさぶつの
法門ほうもんを説かざる過なり、二には娑成しじようを言う故ゆえに尚未なおいまだ迹を發ゆえわず」と
申もうして

くおんじつじょう　じゅうりょうほん

久遠実成の寿量品を説かざる過なり、此の二つの大法は一代聖教の

綱骨一切経の心髓なり、

しゃくもん

迹門には二乗作仏を説いて四十余年の二つの

よんじゅうよねん

とが

失一つを脱したり、然りと雖も未だ寿量品を説かざれば実の

いちねんさんぜん

にじょうさぶつ

一念三千もあらはれず二乗作仏も定まらず、水にやどる月の如く根無

し草の浪の上に浮べるに異ならず、又云く然るに善男子・我実に成仏

してより已来無量無辺百千万億那由佉劫」等云云、此の文の心は

華嚴経の始成正覚と申して始めて仏になると説き

給ふ阿含経の初成道　浄名経　の始坐仏樹大集経の始十六年大日経

の我昔坐道場　仁王経の二十九年、無量義経の我先道場法華経方便品

の我始坐道場等を一言に大虚妄なりと打破る文なり、本門寿量品に

至って始成正覚やぶるれば四教の果やぶれ四教の果やぶれぬれば四教

の因やぶれぬ、因とは修行弟子の位なり、爾前・迹門の因果を

打破つて本門ほんもんの十界因果じゅうかいいんがをときあらはす是れ則ち本因・本果ほんがの法門ほうもんなり、九界も無始むしの仏界ぶつがいに具し仏界ぶつがいも無始むしの九界にそなへて実のじゅつかいごくひゃつかいせんによいちねんさんぜん

十界互具・百界千如・一念三千なるべし、かうしてかへてみるときはけこんきようるしやなあこんきようじようろく

華嚴經の台上盧舍那・阿含經の丈六の小釈迦方等・般若金光明經・阿彌陀經・大日經等の權仏等は此の寿量品じゅうりょうぼんの仏の天月てんげつのしばらくかけを

大小だいしやうのうつはものに浮べ給うを、諸宗しよしゅうの智者ちしや学匠がくしやう等は近くは自宗じしゅうにまどひ遠くは法華經ほけきやうの寿量品じゅうりょうぼんを知らず水中の月に実月のおもひをなして・或あるは入つて取らんと・おもひ・或あるは繩をつけてつなぎとどめんとす、此これを天台大師てんだいだいし釈して云く天月てんげつを識しらずして但池月を觀ず」と、心にぜんは、爾前しやくもん・迹門に執着する者はそらの月をしらずして但池の月をのぞみ見るが如ごとくなりと釈しやくせられたり、又僧祇律の文に五百の×

山より出でて水にやどれる月をみて入つてとらんとしけるが実には無き
水月なれば月とられずして水に落ち入つて×は死にけり、×とは今の
提婆達多・六群比丘等なりとあかし給へり。

一切経の中に此の寿量品ましまさずは天に日月無く国に大王なく
山海に玉なく人にたましる無からんがごとし、されば寿量品なくして
は一切経いたづらごとなるべし、根無き草はひさしからず・みなもとな
き河は遠から

ず親無き子は人にいやしまる、所詮^{しよせん}寿量品^{じゆりやうほん}の肝心^{かんじん}南無妙法蓮華經^{なむみょうほうれんげきやう}こそ十方三世^{じゅっぽうさんぜ}の諸仏^{しよぶつ}の母にて御坐^{おわ}し候へ 恐恐^{きようきよう}謹言^{きんげん}。

四月十七日

日蓮^{にちれん} 花押^{かおう}

◆二二九 五人土籠御書^{ごしよ}

文永^{ぶんえい}八年十月 五十歳

御作^{ごさく} 於相模依智作^{さがみえち}

与日朗・日心・坂部入道^{にゅうどう}・伊
沢入道^{にゅうどう}・得業寺

五人御中参^{おんちゆう}

日蓮^{にちれん}

せんあくてご房をばつけさせ給へ又しらうめが一人あらんするが

ふびんに候へば申す。

今月七日さどの国へまかるなり、各各は法華經一部づつあそぼして候へば我が身並びに父母・兄弟・存亡等に回向しまし申し候らん、今夜のかんずるにつけていよいよ我が身より心くるしき申すばかりなし、ろうをいで

させ給いなば明年のはるかならずきたり給えみみへまいらすべし、せうどのの但一人あるやつをつけよかしとをもう心心なしとをもう人・一人もなければしぬまで各各御はぢなり。

又大進阿闍梨はこれにさたすべき事かたがたあり、又をのをの御身の上をもみはてさせんがれうにとどめをくなり、くはしくは申し候わんずらん、恐恐謹言。

十月三日

日蓮にちれん花押かおう

五人御中おんちゆう

◆ 二三〇

土籠御書^{ごしよ}

文永八年十月

与日郎

1213p

日蓮^{にぢれん}は明日・佐渡^{さど}の国へまかるなり、今夜のさむきに付けても・ろうの
うちのありさま思いやられて・いたはしくこそ候^{そうら}へあはれ殿は法華經一
部を色心^{しきしん}二法共にあそばしたる御身^{おんみ}なれば・父母^{ふぼ}・六親^{ろくしん}・一切衆生^{いっさいしゆじやう}を
も・たすけ
給^{たま}うべき御身^{おんみ}なり、法華經^{ほけきやう}を余人のよみ候は口はかり・ことばはかりは
・よめども心はよまず・心はよめども身によまず、色心^{しきしん}二法共にあそば
されたるこそ貴く候^{そうら}へ天諸童子^{しよどうじ}・以為給使^{きやうし}・刀杖^{とうじやう}不加毒不能害と説
かれて候^{そうら}へば別の事はあるべからず、籠^{かご}をばし出^いでさせ給^{たま}い候はば・とく

とく・きたり給へ見たてまつり見えたてまつらん、きようきようきんげん恐恐謹言。

ぶんえい文永八年辛未十月九日 にちれんかおう日蓮花押

筑後殿

◆一二三一 日妙聖人御書しやうにんごしよ

ぶんえい文永九年五月 五十

一歳 1213p

御作過去かこに樂法梵志ぎやうぼうじんじと申す者ありき、十二年の間、多くの国をめぐりて如来にょらいの教法きやうぽうを求む、時に総て仏法僧ぶつぽうそうの三宝さんぽう一つもなし、此の梵志の意は渴して水をもとめ飢えて食をもとむるがごとく仏法ぶつぽうを尋ね給たまいき、時に婆羅門ばらもんあり求めて云く我れ聖教しやうきやうを一偈持いちげてり若し實に仏法ぶつぽう

を願はば^{まさ}当にあたふべし、梵志^{いんし}答えて云くしかなり、婆羅門^{ばらもん}の云く実^{いみ}に
志^{いし} あらば皮をはいで紙とし・骨をくだいて筆とし・髓^いをくだいて墨と
し・血をいだして水として書かんと云

はば仏の偈げを説かん、時に此の・梵志ぶつし悦よろこびをなして彼が申もうすごくとくして皮かわをはいで乾ぼして紙しとし乃ない至一言をもたがへず、時に婆羅門ばらもん・忽然こつねんとして失うしなぬ、此の梵志・天にあふぎ・地にふす、仏陀ぶつだ此れを感じて下くだ」万より涌ゆ出でて・説いて云いく如法まさは応まに修行しゆぎやうすべし非法ひほうは行なずべからず今世このよ若もしは後世ごしやう・法を行なずる者は安穩あんのんなり」等云云、此の梵志・須臾しゆゆに仏になる・此これは二十字なり、昔釈迦菩薩しやかばさつ・轉輪王てんりんおうたりし時とき 天生ちやうし輒死ちやうし此滅めつ為い樂らく」の八字を尊たび給たまう故ゆえに身

をかへて千燈にともすして此の八字を供養くやうし給たまい人をすすめて石壁・要路ようろに・かきつけて見る人をして菩提心ぼだいしんをおこさしむ、此の光明くわうみやう・とう利天いたに至いたる天の帝釈たいしやく並びに諸天しよてんの燈とうとなり給たまいき。

昔しやかばさつ釈迦菩薩ぶつばう・仏法ぶつぽうを求め給たまいき、癩人らいにんあり此の人このひとにむかつて我われれ正法しょうほうを持たてり其その字そ・二十なり我が癩病らいびやうをさすりいだきねぶり日に兩

三斤の肉をあたへば説くべしと云う、彼が申すごとくして二十字を得て
仏になり給う、所謂如来は涅槃をを証し永く生死を断じ給う、若し
至心に聴くこと有らば当にに無量の樂を得べし」等云云。

昔雪山童子と申す人ありき、雪山と申す山にして外道の法を通達せ
しかども・いまだ仏法をきかず、時に大鬼神ありき説いて云く諸行
無常是生滅法」等云云、只八字計りを説いて後をとかず時に雪山童子
・此の八字を得て悦きはまなけれども半なる如意珠を得たるがごとく
華さき菓ならざるに・にたり、残の八字を。きかんと申す、

時に大鬼神の云、我れ数日が間・飢えて正念乱るゆへに後の八字をとき
がたし食をあたへよと云う、童子問うて云く何をか食与る、鬼答えて
云く我は人のあたたかなる血肉なり、我れ飛行自在にして須臾の間に
四天下を回つて尋ぬれどもあたたかなる血肉得がし、人をば天守り

給^{たま}う故^{ゆえ}に失^{とが}なければ殺^{さつ}害^{がい}する事かたし等云云、童子^{どうじ}

の云^{いわ}く我が身を布施^{ふせ}として彼の八字^{はち}を習^{なら}い伝えんと云云、鬼神^{きじん}の云^{いわ}く

智慧^{ちえ}甚^{はなはだ}だ賢^{けん}し我をや・すかさんずらん、童子^{どうじ}答^{こた}えて云^{いわ}く瓦礫^{がりやく}に金銀^{きんぎん}

をかへんに是^{これ}をかえぎるべしや我れ徒^{いた}に此^{こゝ}の山^{さん}にして・死^ししなば鴟^{しき}梟^{よう}

虎^{こう}狼^{ろう}に食^くはれて一分^{いちぶん}の功徳^{くどく}なかるべし、後の八字^{はち}にかえなば糞^{ふん}を飯^{はん}にか

ふるがごとし、鬼^{おに}の云^{いわ}く我^{われ}いまだ信^{しん}ぜず、童子^{どうじ}の云^{いわ}く証^{しやう}人^{にん}

あり過去かこの仏も・たて給たまいし大梵天王・釈提桓因・日月・四天も証人に
たち給たまうべし、此の鬼神きじん後の偈げをとかと申もうす、童子身どうじにきたる鹿の皮
を・ぬいで座にしき踞跪合掌こきがっしょうして此の座につき給たまへと請しょうす、大鬼神きじん・此
の座について説いわて云く「生滅滅已・寂滅為樂」等云云、此の偈げを習ならひ
学がくして若もしは木・若もしは石等もに書き付けて身みを大鬼神きじんの□になげいれ
給たまう、彼の童子どうじは今の釈尊しやくそん☆☆彼の鬼神きじんは今の帝釈たいしやくなり。

葉王菩薩やくおうぼさつは・法華經ほけきやうの御前おんまえに臂ひじを七万二千歳せんさいが間まともし給たまい、不輕ふぎやう
菩薩ぼさつは多年が間・二十四字の故ゆえに無量無辺むりやうむへんの四衆ししゆうに罵詈めり毀辱きにく・杖木じやうもく・
瓦石がしやく・而打擲ちやうちやく之をせられ給たまいき、所謂いひゆる二十四字と申もうすは我深く汝等なんじ
を敬うやまう敢あえてて輕慢きやうまんせず所以ゆえんは好ん汝等なんじ皆菩薩みなぼさつの道みちを行なじて当まさに作仏さぶつす
ることを得うべし」等云云、かの不輕菩薩ふぎやうぼさつは今の教主きやうしゆしやくそん釈尊しやくそんなり、昔の須頭
檀王だんおうは妙法蓮華經みやうほうれんげきやうの五字ごじの為ために千歳せんさいが間ま・阿私仙人あしせん人にせめつかはれ身

を床となさせて給いて今の釈尊と

なり給う。

然るに妙法蓮華經は八卷なり・八卷を読めば十六卷を読むなるべし、

釈迦・多宝の二仏の經なる故へ十六卷は無量無辺の卷軸なり、十方の

諸仏の証明ある故に一字は二字なり釈迦・多宝の二仏の字なる故へ、

一字は無量の字なり十方の諸仏の証明の御經なる故に、譬え

如意宝珠の玉は一珠なれども二珠乃至無量珠の財をふらすこと。

これをなじ・法華經の文字は一字は一の宝・無量の字は無量の宝珠な

り、妙の一字は二つの舌まします釈迦・多宝の御舌なり、この二仏の御

舌は八葉の蓮華なり、この重なる蓮華の上に宝珠あり妙の一字なり。

此妙の珠は昔釈迦如来の檀波羅密と申して身をうえたる虎にかひし

功德・鳩にかひし功德・戸羅波羅密と申して須陀摩王として・そらごと

せざりし功德等、忍辱仙人として・歌梨王に身をまかせし功德・
能施太子・尚闍梨仙人等の六度の功德を妙の一字にをさめ給いて末代・
悪世の我等衆生に一善も修せざれども六度万行を満足する功德をあ
たえ給う、今此三界・皆是我有・其中衆生・悉是吾子これなり、我等
具縛の凡夫忽に教主釈尊と功德ひとし彼

の功德を全体受け取る故なり、經に云く「如我等無為」等云々、法華經を心得るものは釈尊と齊等なりと申す文なり、譬えば父母和合して子をうむ子の身は全体父母の身なり誰か是を争そうべき、牛王の子は牛王なりいま獅子王とならず、獅子王の子は獅子王となる。いまだ天王・天王よならず、今法華經の行者は其中衆生悉是吾子と申して教主釈尊の御子なり教主釈尊のごとく法王とならん事・難かるべからず、但し不孝の者は父母の跡をつがず

堯王には丹朱と云う太子あり舜王には商均と申す王子あり、二人共に不孝の者なれば父の王にすてられて現身に民となる、重華と禹とは共に民の子なり・孝養の心ふかかりしかば堯・舜の二王・召して位をゆづり給いき、民の身・忽ち玉体にならせ給いき、民の現身に王となると凡夫の忽に仏となると同じ事なるべし、一念三千の肝心と申すはこれな

り、なをいかにとしてか此功德くどくをばうべきぞ、樂法梵志ぎようぼうばんじ・雪山童子せつせんどうじ等のごとく皮をはぐべきか・身をなぐ

べきか臂ひじをやくべきか等云云、章安大師だいいし云く取捨宜しゆしゃしきを得て一向いっこうに

すべからず」等これなり、正法しやうぽうを修しゆして仏になる行は時によるべし、

日本国にほんこくに紙なくば皮をはぐべし、日本国にほんこくに法華經ほけきやうなくて知れる鬼神きじん一

人出来しめづたいせば身をなぐべし、日本国にほんこくに油なくば臂ひじをも・ともすべし、あつ

き紙・国にほんこくに充満じゅうまんせり皮を・はいで・なにかせん、然しかるに玄奘げんじやうは西天さいてんに法

を求めて十七年・十万里じゅうまんにいたれり、伝教御人でんぎやう唐但二年とうなり波濤はとう三千

里をへたてたり。

此等これらは男子にようこなり・上古けんじんなり・賢人しやうにんなり・聖人せいじんなり・いまだきかず女人にょにん

の仏法ぶつぽうをもとめて千里せんりの路をわけし事を童女りやうにょが即身成仏そくしんじやうぶつも摩訶まか波闍はじや

波提比丘尼はだいびくにの記べつにあづかりしも、しらず権化ごんげにやありけん、又在世ざいせ

の事なり、男子・女人にょにんそ其の性本より別れたり・火はあたたかに・水はつめ
たし海人あまは魚をとるに・たくみなり・山人やまかつは鹿をとるに・かしこし、女人にょにん
は物をそねむに・かしこしとこそ経文きやうもんには・あかされて候そうらへいまだきか
ず仏法ぶつぽうに・かしこしとは、女人にょにん

の心を清風に譬たとえたり風はつなぐとも・とりがたきは女人にょにんの心なり、
女人にょにんの心をば水にゑがくに譬たとえたり、水面には文字もんじとどまらざるゆへな
り、女人にょにんをばおう人にたとへたり、或時あるは実なり・或時あるは虚なり、女人にょにん
をば河に譬たとえ

たり・一切いっさいまがられる・ゆへなり、而しかるに法華經ほけきょうは・正直捨方便等・
皆是かいぜしんじつ真實等・質直意柔軟等・柔和質直者等と申もうして正直しやうじきなる事・弓の
弦のはれるがごとく・墨のなはを・うつがごとくなる者の信じまいらす
御經なり、糞を梅檀せんだと申もうすとも梅檀せんだの香なし、妄語もうごの者を不妄語もうごと
申もうごすとも不妄語もうごにはあらず、一切經いっさいきやうは皆仏みなの金口きんくの説・不妄語もうご
の御言みことばなり、然しかれども法華經ほけきやうに對し・まいらすれば妄語もうごのごとし・椅語こごば
のごとし・惡口あくぐのごとし・兩舌のごとし、此の御經こそ実語じつごの中の実語じつごに
て候へ実語じつごの御經をば・正直しやうじきの者心得こころえ、候なり、今実語じつごの女人にょにん・にて・
おはすか当まさに知るべし須弥山しゆみせんを戴いたきて大海たいかいをわたる人をば見るとも此
の女人にょにんをば見るべからず、砂をむして飯となす人を

ば見るとも此の女人にょにんをば見るべからず、当まさに知るべし釈迦しゃか・多宝たほう・
十方分身じゆつぽうふんじんの諸仏しよぶつ・上行じやうぎやう・無辺行等むへんぎやうの大菩薩だいぼさつ・大梵天王だいぼんてんのう・帝釈たいしやく・四王等しおう

・此女人（よにん）をば影の身に・そうがごとく・まほり給うらん、日本第一（にほんだいいち）の
法華經（ほけきょう）の行者（ぎようじゃ）の女人（よにん）なり、故（ゆえ）に名を一つつけたてまつりて不輕菩薩（ふぎようぼさつ）の
義（ぎ）になぞらへん・日妙聖人等云云。

相州鎌倉（そうしゅうかまくら）より北国佐渡（さど）の国・其（そ）の中間二千余里に及べり、山海はる
かに・へたて山は蛾蛾（がが）・海は濤濤（とうとう）・風雨（ふうう）・時にしたがふ事なし、山賊（さんぞく）・海賊（かいぞく）
克満（くく）せり、宿宿とまり・とまり・民の心・虎のごとし・犬のごとし、現身（げんしん）
に三惡道（さんあくどう）の苦をふるか、其（そ）の上当世（とうせ）は世乱（みだ）れ去年（こぞ）より謀叛（むはん）の者・国に
充満（じゅうまん）し今年二月十一日合戦、其（そ）れより今五月のすゑ・いまだ世間安穩（せけんあんのん）
ならず、而れども一（し）の幼子あり・あづくべき父も・たのもしからず・離別
すでに久し。

かた・がた筆も及ばず心弁（わきま）へがたければとどめ畢（おわ）んぬ。

ぶんえい
文永九年太歳壬（みずのえさる） 申五月二十五日

日蓮 にちれん

花押 かおう

日妙 にちめう
聖人 しょうにん

◆ 二二三二

乙御前御消息 おとごぜん
しやうそく建治元年八月 がんねん 五十四歳

御作

1218p

漢土かんどにいまだ仏法ぶつぽうのわたり候そうらはざりし時は三皇さんこう・五帝ごてい・三王さんわう・乃至ないし
大公望たいこうぼう・周公旦しゅうこうたん・老子ろうし・孔子こうしつくらせ給たまいて候そうらいし文ぶんを・或あるは經きやうとなづけ
・或あるは典等てんとうとなづく、此この文ぶんを披ひらいて人に礼儀れいぎをおしへ・父母ふぼをしらしめ
・主臣しゅしんを定めて世をおさめしかば人もしたがり天てんも納受のうじゆをたれ給たまふ、
此これに・たがいし子をば不孝ふこうの者と申し臣おみをば逆臣ぎやくしんの者として失とがにあてら
れし程がに、月氏がより仏經ぶつきやうわたりし時とき・或ある一類いちるいは用もちふべからずと申し・或ある
一類いちるいは用もちうべしと申せし程がに・あら

そひ出来しゅつたいて召めし合せたりしかば外典けいてんの者・負おけて仏弟子ぶつでし勝ちにき、其その

後は外典げてんの者と仏弟子ぶつでしを合せしかば・氷こおりの日に・とくるが如くごと・火の水に滅ことするが如く・まくるのみならず・なにともしなき者となりしなり、又
仏經ぶきよう漸ようくわたり来りし程に仏經ぶきようの中に又勝劣しょうれつ・浅深せんじん候そうらいけり、所謂いわゆる
小乘經しょうじようきよう・大乘經だいじようきよう・顯經けんきよう・密經みつきよう・權經ごんきよう・實經じつきようなり、譬たとえば一切いっさいの石
は金に對すれば一切いっさいの金に劣おとれども・又金の中にも重重あり、一切いっさいの
人間にんげんの金は閻浮檀金えんぶには及び候そうらはず、閻浮檀金えんぶは梵天ぼんてんの金には及びおよざ
るがごとく、一切經いっさいきようは金の如ごとくなれども又勝劣しょうれつ・浅深せんじんあるなり、
小乘經しょうじようきようと申もうす經は世間せけんの小船のごとく・わづかに人の二人・三人等は
来すれども百千人は乗せず、設たとひ二人・三人等は来すれども此岸しがんにつ
けて彼岸ひがんへは行きがたし、又すこしの物をば入るれども大なる物をば入
れがたし、大乘だいじようと申もうすは大船なり人も十・二十人も来る上・大なる物
をも・つみ・鎌倉かまくらより・つくしみちの国へもいたる。

実經じつぎようと申もうすは又彼の大船の大乗經だいじようきようには・にるべくもなし、大なる
珍寶ちんぼうをも・つみ百千人のりて・かうらいなんどへも・わたりぬべし、一乘いちじよう
法華經ほけきようと申もうす經も又是くのごと、提婆達多だいばだつたと申もうすは閻浮第一えんぶだいいちの大惡人あくにん
なれども法華經ほけきようにして天王如来てんのうによらいとなりぬ、又阿闍世王あじゃせと申せしは父を
ころせし惡王あくおうなれども法華經ほけきようの座つらなに列りて一偈いちげ・一句いっくの結縁けちえん

衆となりぬ、竜女りゅうにょと申せし蛇体じやの女人にょにんは法華經ほけきようを文殊師利菩薩もんじゆしりぼさつ説き
給ひしかば仏になりぬ、其その上ふつせつ仏説ふつせつには惡世あくせ末法まつぽうと時をささせ給たまいて
末代まつだいの男女なんによに・をくらせ給たまいぬ、此これこそ唐船とうせんの如ごとくにて侯いちじやう・一乘經いちじやうに
てはおはしませ、されば一切經いっけいぎやうは外典げてんに對すれば石と金との如ごとし、又
一切いっさいの大乗經だいじやうきよう・所謂華嚴經いわゆるけこんきよう・大日經だいにちきよう・觀經かんきよう・阿彌陀經あみだ・般若經はんにやきよう等の
諸もろもろの經經きやうきやうを法華經ほけきように對すれば螢火ほたるびと日月にちがつと華山くわざんと蟻塚ぎづかとの如ごとし、經
に勝劣しょうれつあるのみならず大日經だいにちきようの一切いっさいの眞言しんごん
師ほけきようと法華經ぎやうじやの行者がうとを合すれば水に火をあはせ露つゆと風とを合するが
如ごとし、犬は師子ししをほうれば腸くさる・修羅しゆらは日輪にちりんを射奉れば頭七分に
破る、一切いっさいの眞言師しんごんしは犬と修羅しゆらとの如ごとく・法華經ほけきようの行者ぎやうじやは日輪にちりんと師子しし
との如ごとし、泳にちりんは日輪にちりんの出でざる時は堅き事金の如ごとし、火は水のなき時は
あつき事・鉄くろがねをやけるが如ごとし、然れども夏の日にあひぬれ

ば堅泳のとけやすさ・あつき火の水にあひて・きへやすさ、一切の真言師
は気色のたうとげさ・智慧のかしこげさ・日輪をみざる者の堅き泳をた
のみ・水をみざる者の火をたのめるが如し。

当世の人人の蒙古国をみざりし時のおごりは御覽ありしやうに・か
ぎりもなかりしぞかし、去年の十月よりは・一人も・おごる者なし、きこ
しめしし・やうに日蓮一人計りこそ申せしが・よせてだに・きたる程なら
ば面をあはする人も・あるべからず、但さるの犬を・をそれ・かゑるの蛇
を・をそるるが如くなるべし、是れ偏に釈伽仏の御使い
たる法華經の行者を・一切の真言師・念仏者・律僧等に・にくませて我
と損じ、ことさらに天のにくまれを・かほれる国なる故に皆人・臆病に
なれるなり、譬えば火が水をおそれ・木が金をおぢ・雉が鷹をみて魂を
失ひ・ねずみが猫に・せめらるるが如し、一人も・たすかる者あるべから

ず、其そのの時は、いかがせさせ給たまうべき、軍には大將軍しやうぐんを魂とす大將軍しやうぐんを
くしぬれば歩兵臆病つわものおくびやうなり。

女人にょにんは夫を魂とす・夫なければ女人魂なし、此の世に夫ある女人にょにんす
ら世の中渡りわたがたふみえて侯に、魂もなくして世を渡わたらせ給たまうが・魂あ
る女人にょにんにも・すぐれて心中しんちゆうかひがひしくおはする上・神にも心を入れ
仏をもあがめさせ

給へば人に勝れておはする女人なり、鎌倉に候いし時は念仏者等はさて
をき候いぬ、法華經を信ずる人人は志あるもなきも知られ候はざ
りしかども、御勘氣をかほりて佐渡の島まで流されしかば問ひ訪う人
もなかりしに、女人の御身として、かたがた御志ありし上、我と来り
給いし事うつつならざる不思議なり、其の上いまの事つで又申すばかり
なし、定めて神もまほらせ給ひ十羅刹も御あはれみましますらん、
法華經は女人の御ためには暗きにと

もしび・海に船・おそろしき所にはまほりと・なるべきよし・ちかはせ
給へり、羅什三蔵は法華經を渡し給いしかば毘沙門天王は無量の兵士
をして葱嶺を送りしなり、道昭法師・野中にして法華經をよみしかば
無量の虎来りて守護しき、此れも又彼にはかはるべからず、地には三
十六祇・天には二十八宿まほらせ給う上・人には必ず二つの天・影の

如くごとにそひて候、所謂いわゆる一をば同生天と云いい二をば同名天と申もうす左右さうの肩にそひて人を守護しゅこすれば、失とがな

き者をば天もあやまつ事なし・況ぜんや善人ぜんにおひてをや、されば妙薬みょうやく

大師だいしのたまはく・必ず心の固きに仮かりて神の守り則すなわち強し」等云云、人

の心かたければ神のまほり必ずつよしとこそ候そうらへ、是は御ために申もうすぞ

古いにしえへの御心おんこころざし申まうす計りなし・其ほかよりも今一重強盛じゅうじやうに御志ごしあるべ

し、其そのときの時は弥弥いよいよ十羅刹女じゅうらせつにょの御まほりも・つよかるべしと・おぼ

すべし、例には他を引くべからず、日蓮にちれんをば日本国にほんこくの上かみ一人いちにんより下万民ばんみん

に至いたるまで一人もなくあやまたんと・せしかども・今までかう斯のて候事

は一人なれども心のつよき故なるべしと・おぼすべし、一つ船に乗りぬれ

ば船頭のはかり事ことわるければ一同に船中の諸人しよにん損じ・又身つよき人も

心かひなければ多くの能も無用むようなり、日本国にほんこくには・か

しこき人人ひとびとはあるらめども大将のはかり事つたなければ・かひなし、
壱岐いぎ・対馬つしま・九ヶ国のつはもの並に男女なんよ多く・或あるはころされ・或あるはとらは
れ・或あるは海に入り・或あるはがけよりおちしもの・いくせんまんと云う事な
し、又今度このたびよせなば先には・にるべくも・あるべからず、京と鎌倉かまくらとは但
壱岐いぎ・対馬つしまの如くなるべし、前にしたくして・いづくへも・にげさせ給たまへ
其の時そのときは苦し日蓮にちれんを見聞みきこかじと申せし人人も 掌ひとびと たなごころをあはせ法華經ほけきょう
を信ずべし、念仏者ねんぶつ・禪宗ぜんしゅうまでも

南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようと申すもうべし、抑そも法華經ほけきようをよくよく信したらん男女なんによをば肩かたに・になひ背そむに・おうべきよし經文きようもんに見えて侯上そうら・くまらゑん三藏さんぞうと申せし人をば木像しやかの釈迦しやかをわせ給たまいて侯そうらいしぞかし、日蓮にぢれんが頭こうべには大覺世尊だいかくせそんかはらせ給たまいぬ昔いかにと今いまと一同いどうなり、各各にぢれんは日蓮にぢれんが檀那だんななり争いかにか仏ぶつにならせ給たまはざるべき。

いかなる男おとこをせさせ給たまうとも法華經ほけきようのかたきならば随したがひ給たまうべからず、いよいよ強盛かうじようの御志ごしあるべし、冰こおりは水より出いでたれども水よりもすすまじ、青き事は藍あいより出いでたれども・かさぬれば藍あいよりも色いろまさる、同じ法華經ほけきようにては・をはすれども志しをかさぬれば・他人たにんよりも色いろまさり利生りしようも・あるべきなり、木は火にやかるれども梅檀せんだの木は、やけず、火は水にけさるれども仏ぶつの涅槃ねはんの火はきえず、華は風にちれども淨居じやうきの華は・しばまず・水は大旱魃かんぱつに失れども黄河くわはふに入りぬれば

失せず、檀弥羅王と申せし惡王は月氏の僧の類を切りしに・とがなかりしかども・師子尊者の頸を切りし時・力と手と共に一時に落ちにき、弗沙密多羅王は鷄頭摩寺を焼し時・十二神の棒にかふべわ

られにき、今・日本国の人人は法華經の・かたきと・なりて身を亡ぼし國を亡ぼしぬるなり、かう申せば日蓮が自訟なりと心えぬ人は申すなり、さには・あらず是を云わずば法華經の行者にはあらず、又云う事の後にあへばこそ人も信ずれ、かうただ・かきをきなばこそ未來の人は智ありけりとは・しり候はんずれ、又身輕法重・死身弘法と

のべて候ば身は輕ければ人は打ちはり惡むとも法は重ければ必ず弘まるべし、法華經弘まるならば死かばね還つて重くなるべし、かばね重くなるならば此のかばねは利生あるべし、利生あるならば今の八幡大菩薩と・いははるるやうに・いはうべし、其の時は日蓮を供養せる男女は武内

・若宮なんどのやうにあがめらるべしと・おぼしめ

せ、抑そもそも一人の盲目もうもくをあけて候そうらはん功德くどくすら申もうすばかりなし、況や

日本にほんこく国こくの一切衆生の眼いつさいしゆじようをあけて候そうらはん功德くどくをや、何いかに況や一閻浮提えんぶだい・

四天下してんげの人の眼まなこのしるたるを・あけて候そうらはんをや、法華經ほけきようの第四いっに云く

仏滅度ほとけめつどの後に能よく其その義を解げせんは是諸もろもろてんにんの天人てんにん・世間之眼せけんなり」等云

云、法華經ほけきようを持つ人ひとは一切世間の天人いつさいせけんの眼まなこなりと説かれて

侯、日本国にほんこくの人の日蓮にちれんをあだみ侯そうらは一切世間いっさいせけんの天人てんにんの眼まなこをくじる人なり、されば天てんもいかり日日にんに天変てんべんあり地ちもいかり月月げつに地天ちてんかさなる、天てんの帝釈たいしやくは野干やかんを敬やういて法はふを習ならいしかば今の教主きやうしゆしやくそん釈尊しやくそんとなり給たまい、雪山童子せつせんどうじは鬼きを師しとせしかば今の三界さんがいの主しゆとなる、大聖しやうにん・上人しやうにんは形かたちを摘つまみて法はふを捨てざりけり、今日蓮けふにちれんおろかなりとも野干やかんと鬼きとに劣くわるべからず、当世とうせの人ひといみじくとも帝釈たいしやく・雪山童子せつせんどうじに勝まさるべからず、日蓮にちれんが身の賤せんきについて巧言ぎやうげんを捨てて侯故ゆうえに国既すでに亡なびんとする、かなしさよ、又日蓮にちれんを不便ふびんと申しぬる弟子でしどもをも・たすけがたからん事ことこそ・なげかしくは覺おほえ侯そうらへ。

いかなる事ことも出来侯しゆつたいそうらはば是こゝ御ごわたりあるべし見奉たてまつらん・山中やまなかにて共にうえ死しにし侯そうらはん、又乙御前おとこぜんこそおとなしくなりて侯そうららめ、いかにさかしく侯そうららん、又又申もうすべし。

八月四日

日蓮にちれん 花押かおう

乙御前おとこぜんへ

◆一二三三

乙御前母御書おとこぜん ゴシよ

1222p

をとござんのはは

いまは法華經ほけきょうをしらせ給たまいて仏にならせ給たまうべき女人にょにんなり、かすがへ
すふみものぐさき者なれども・たびたび申もうす、又御房ごぼうたちをも・ふびん
にあたらせ給たまうとうけ給たまわる・申もうすばかりなし。

なによりも女房にようぼうのみとしてこれまで来りて候いし事・これまで・なが

され候いける事は・さる事にて御心おんこころざしざしの・あらわるべきにや・ありけん

と・ありがたくのみをば候、
釈迦如来の御弟子あまた・をわしし・なかに
十大弟子

とて十人ましまししがなかに目・連尊者そんじやと申せし人は神通第一じんつうだいいちにてをはしき、四天下してんげと申して日月のめぐり給うところをかみすぢ一すぢきらざるにめぐり給いき、これは・いかなるゆへぞと・たづぬれば・せんしやうに千里せんりありしところをかよいて仏法ぶつぽうを聴聞ちやうもんせしゆへなり、又天台大師てんだいだいしの御弟子おんでしに章安と申せし人は万里ばんりをわけて法華經ほけきやうをきかせ給へり、伝教大師でんきやうだいしは二千里せんりをすぎて止観しかんをならい玄奘三蔵げんじやうさんざうは二十万里ばんりをゆきて般若經はんにやきやうを得給へり、道のとをきに心ざしのあらわるにやかれば皆男子みななり権化ごんげの人のしわざなり、今御身おんみは女人にょにんなりごんじちはしりがたし・いかなる宿善しゆくぜんにてやをはすらん、昔女人にょにんすいをとをしのびてこそ・或は千里せんりをもたづね・石となり・木となり・鳥となり・蛇じやとなれる事もあり。

十一月三日

日蓮にちれん

在御判

をとごぜんのはは

をとごぜんが・いかに尼となり候いつらん、法華經ほけきょうにみやづかわせ候
ほうこうをば・をとごぜんの尼は・のちさいわいなり候に○○○。

◆一二三四

辨殿御消息べんどのしやうそく

文永九年七月 五十

一歳御作

1223p

不審ふしん有らばじようろんなく靜論じやうろん無く書き付けて一日まい進らしむべし。

此このの書は随分ずいぶんの秘書ひしょなり、已前いぜんの学文がくぶんの時ときもいまだ存ぞんぜられざる事
粗之ほこれを載のす、他人たにんの御聴聞ちやうもんなからん已前いぜん

に御存知有るべし、総じてはこれよりぐしていたらん人にはよりて法門ほうもん
ちようもんあ
御聴聞有るべし互たがいに師弟していと為らんか、恐恐きようきよう謹言きんげん。

七月二十六日

日蓮花押にちれんかおう

辨殿べんどの・大進阿闍梨御房あじやりごぼう・三位殿

◆二二三五 辨殿尼御前御書べんどのあまごぜんごしよ

文永十年九月 五十二歳ぶんえい

御作 与日昭母妙一

1224p

しげければとどむ、辨殿べんどのに申もうす大師講だいしを・をこなうべし・大師だいしとてま
さえもんのじよう
いらせて候、三郎左衛門尉殿おんふみに候、御文おんぶんのなかに涅槃經ねはんぎようの後分二卷・

もんく ほんまつ じゅけつしゅう
文句五の本末・授決集の抄の上巻等・御隨身ごしんあるべし。

貞当は十二年にやぶれぬ・将門は八年にかたふきぬ、第六天だいろくてんの魔王まおう・

十軍のいくさを・をこして法華經ほけきょうの行者ぎやうじやと生死海しやうじの海中かいちゆうにして同居

穢土えどを・とられじ・うばはんと・あらそう、日蓮にちれん其の身にあひあたりて大

兵を・をこして二十余年なり、日蓮にちれん一度もしりぞく心なし、しかりとい

えども弟子等でし・檀那等だんなの中に臆病おくびようのもの大体だいたい・或はをち・或はある

退転たいてんの心あり、尼ごぜんの一文不通いちもんふつうの小心に・いままで・しりぞかせ

給たまわぬ事申もうすばかりなし、其の上自身じしんのつかうべきところそに下人を一人

つけられて候事定めて釈迦しやか・多宝たぼう・十方分身じゆつぽうふんじんの諸仏しよぶつも御知見ちけんあるか、

きようきようきんげん
恐恐謹言

九月十九日

にちれん
日蓮
かおう
花押

辨^{べん}殿^{どの}
尼^{あま}御^ご前^{ぜん}
に申^{もう}さ
せ給^{たま}へ

◆二三六

辨殿御消息べんどのしやうそく

建治二年七月

五十五歳御

作 与日昭

1225p

たきわうをばいゑふくべきよし候けるとてまかるべきよし申し候へばつかわし候、ゑもんのたいうどののかへせにの事は大進の阿闍梨あじやりのふみに候らん。

一 十郎入道にゅうどう殿の御けさ悦よろこび入つて候よしかたらせ給たまえ。

一 さぶらうさゑもんのの・このほど人をつかわして候しが、をほせ給たまいし事あまりに・かへすがへすをばつかなく候よし、わざと御わたりありて・きこしめして・かきつかはし候べし、又さゑもんのにもかくと候へかわのべどの等の四人の事はるかにうけ給たまはり候はずおぼつかなし、

かの辺になに事か候らん一一にかきつか

はせ、たびたび度度この人人ひとひとの事はことに一大事いちだいじと天をせめまいらせ候なり、さ

だめて後生ごしやうはさてをきぬ今生こんじやうにしるしあるべく候と存すべきよししたた

かにかたらせ給たまへ伊東の八郎やしろさゑもん今はしなののかみはげんに、しに

たりしをいのりいけて念仏ねんぶつ者等になるまじきよし明性房めいしやうぼうにをくりたりし

がかへりて念仏ねんぶつ者・真言師しんごんしになりて無間地獄むげんじごくに墮だぬ、のと房はげんに身

かたで候しが世間せけんのをそろしさと申しよくと申し日蓮にちれんをすつるのみなら

ず・

かたきとなり候ぬ、せう房もかくの如ごとし。

おのおのは随分ずいぶんの日蓮にちれんがかたうどなり、しかるをなづきをくだきてい

のるにいままでしるしのなきはこ

の中に心のひるがへる人の有あるとをば候ぞ、をもちあわぬ人をいのる

は水の上に火をたき空にいゑを・つく
るなり、此の由よしを四人にかたらせ給たまうべし、むこり国の事ことのあうをもつ
ておぼしめせ、日蓮にちれんが失とがにはあらず、ちくご房三位ぼうみそつ等をばいとまあ
らばいそぎ来るべし大事だいじの法門ほうもん申もうすべしとかたらせ給たまえ、十住毘婆沙じゅうじゅう びばしや
等の

要文を大帖にて候と真言の表のせうそくの裏にさど房のかきて候と・
そうじて・せせと・かきつけて候ものの・かろき・とりてたび候へ紙なく
して一紙に多く要事を申すなり。

七月二十一日

日蓮花押

辨殿

◆二二二七

弥源太殿御返事

1226p

抑日蓮は日本第一の僻人なり、其の故は皆人の父母よりもたかく
主君よりも大事におもはれ候ところの阿弥陀仏大日如来薬師等を
御信用ある故に、三災・七難先代にこえ天変地天等昔にもすぎたりと
申す故に・結句は今生には身をほろぼし国をそこない後生には大阿鼻

地獄じごくに墮おち給たまうべしと、一日いちにち片時かたときもたゆむ事なくよ

ばわりし故ゆえにかかる大難だいにんにあへり、譬たとえば夏の虫の火にとびくばりねず
みがねこのまへに出いでたるが如ごとし、是こゝに我が身を知つて用心ようじんせざる
畜生ちくしょうの如ごとくにあらずや、身命しんみょうを事失うしなふ・併しかしなが
り、但ただし石

は玉をふくむ故ゆえにくだかれ鹿は皮肉の故ゆえに殺され魚はあぢはひある
故ゆえにとらるすいは羽ある故ゆえにやぶらる・女人にょにんはみめかたちよければ必ず
ねたまる此の意なるべきか、日蓮にちれんは法華經ほけきょうの行者ぎやうじやなる故ゆえに三種さんしゆの強敵きやうてき
あつて種種しゆじゆの大難だいにんにあへり然しかるにかかる者の弟子でし・檀那だんなとならせ給たまう事
不思議ふしぎなり定めて子細しさい候らん相構かまえて能よくよく能しんじん御信心候
て靈山淨土りやうぜんじやうどへまいり給たまへ。

又御祈きと☆のために御太刀同く刀あはせて二つ送り給たまはて候、此の太

刀はしかるべきかち作り候かと覺おぼ候、あまくに・或あるは鬼きり・或あるはやつ
るぎ異朝いちようにはかむしやうばくやが劍けんに争いでかことなるべきや此これを
法華經ほけきようにま

いらせ給^{たま}う、殿の御もちの時は悪の刀今・仏前^{ぶつぜん}へまいりぬれば善の刀なるべし、譬^{たと}えば鬼の道心^{どうしん}をおこしたらんが如^{ごと}し、あらず思議^{ふしぎ}や不思議^{ふしぎ}や、後生^{ごしょう}には此の刀をつえとたのみ給^{たま}うべし、法華經^{ほけきよう}は三世^{さんぜ}の諸^{しよ}仏^{ぶつ}発心^{はつしん}のつえにて候ぞかし、但^{ただ}し日蓮^{にちれん}をつえはしらともたのみ給^{たま}うべし、けはしき山^{こゑ}あしき道^{みち}つえを・つきぬれば・たをれず、殊^{こと}に手をひかれぬればまろぶ事なし、南無妙法蓮華經^{なむみょうほうれんげきよう}は死出の山にてはつえはしらとなり給^{たま}へ釈迦^{しゃか}仏^{ぶつ}・多宝^{たほう}仏^{ぶつ}・上行^{じやうぎやう}等の四菩薩^{ぼさつ}は手を取り給^{たま}うべし日蓮^{にちれん}さきに立ち候はば御迎^{ごむかひ}にまいり候事もやあらんずらん、又さきに行かせ給^{たま}はば日蓮^{にちれん}必ず閻魔^{えんま}法王^{ほうおう}にも委^{くわ}く申^{もう}すべく候、此の事少しもそら事あるべからず、日蓮^{にちれん}・法華經^{ほけきよう}の文^{ぶん}の如^{ごと}くならば通塞^{つうそく}の案内者^{たのいしや}なり、只一心^{しんじん}に信心^{しんじん}おはして靈山^{りやうぜん}を期^{もち}し給^{たま}へぜにと云うものは用にしたがつて変ずるなり、法華經^{ほけきよう}も亦復^{また}是^{かく}の如^{ごと}し、や

みには燈となり渡りには舟となり・或は水ともなり・或は火ともなり
給うなり、若し然らば法華經は現世安穩・後生善處の御經なり。

其上日蓮は日本国の中には安州のものなり総じて彼国は天照太神の
すみそめ給いし国なりといへりかしこにして日本国をさぐり出し給ふあ
はの国御くりやなりしかも此国の一切衆生の慈父悲母なりかかるいみ
じき国な

れば定んで故ぞ候らんいかなる宿習にてや候らん日蓮又彼国に生れ
たり第一の果報なるなり此消息の詮にあらざれば委しくはかかず但お
しはかり給うべし。

能く能く諸天にいのり申べし、信心にあかなくして所願を成就し給へ
女房にも・よく・よく・かたらせ給へ 恐恐謹言。

二月二十一日

日蓮にちれん

花押かおう

弥源太殿御返事やげんたごへんじ

◆ 二三八

弥源太入道殿御返事

1228p

別の事候まじ憑み奉り候上は最後はかうと思し食し候へ河野辺の
入道殿のこひしく候に漸く後れ進らせて其のかたみと見まいらせ
候はん、さるにても候へは如何が空しかるべきやさこそ覚え候へ。

但し当世は我も法華經をしりたりと人毎に申し候、時に法華經の
行者はあまた候、但し法華經と申す經は転子病と申す病の様に候、転
子と申すは親の様なる子は少く候へども此の病は必ず伝わり候なり、
例せば犬の子は母の吠を伝へ、子の子は母の用を伝えて鼠を取る、日本国
は六十六箇国・嶋二つ、其の中に仏の御寺は一万一千三十
七所其の内に僧尼・或は三千・或は一万・或は一千一百・或は十人・或は

一人候へども其の源は弘法大師・慈覺大師・智証大師・此の三大師の御弟子にて候、山の座主・東寺・御室・七大寺の檢校・園城寺の長吏・伊豆・箱根・日光・慈光等の寺寺の別当等も皆此の三大師の嫡嫡なり、此の人人は三大師の如く読むべし、其れ此の三大師・法華經と一切經との勝劣を読み候しには弘法大師は法華經最第三と慈覺・智証は法華經最第二・或は戲論なんどこそ読み候いしか今又是くの如し。但し日蓮が眼には僻目にてや候らん、法華經最第一皆是眞実と釈迦仏・多宝仏・十方の諸仏は説いて証明せさせ給へり此の三大師には水火の相違にて候、其の末を受くる人人彼の跡を繼で彼の所領の田畠を我が物とせさせ給いぬれば何に諍はせ給うとも三大師の僻事ならば此の科遁れがたくやおはすらんと見え候へども・日蓮は怯弱の者にて候へばかく申す事をも人・御用いなし、されば今・日本国の

人人ひとひとの我も我も経を読むといへども申もうす事もち用もちゆべしとも覚えおぼえず候。

是はさて置き候ぬ御音信おとずれも候はねば何いかにと思いて候つるに御使おんつかいうれしく候、御所ごしよの御平愈へいゆの由うれしく候うれしく候、尚なお仰おほせを蒙こもる可べく候恐恐謹言きようきようきんげん。

九月十七日

日蓮にちれん

花押かおう

弥源太入道殿御返事やげんたにゅうどうごへんじ

◆二三九

弥源太入道殿御消息やげんたにゅうどうしやうそく

229p

一日の御帰路をぼつかなか候つる処ところに御使悦おんつかいび入つて候、御用事の

御事共は伯耆殿の御文に書かせて候、然るに道隆の死して身の舍利となる由の事、是は何とも人知らず用いまじく候へば兎角申して詮は候はず、但し仏の以前に九十五種の外道ありき各各是を信じて仏に成ると申す、又皆人も一同に思いて候し程に仏世に出でさせ給いて九十五種は皆地獄に墮ちたりと説かせ給いしかば五天竺の国王・大臣等は仏は所詮なき人なりと申す、又外道の弟子どもも我が師の上を云れて悪心をかき候、竹杖外道と申す外道の目連尊者を殺せし事はなり、苦得外道と申せし者を仏記して云く七日の内に死して食吐鬼と成るべしと説かせ給いしかば外道瞋りをなす、七日の内に食吐鬼と成りたりしかば其を押し隠して得道の人の御舍利買うべしと云いき、其より外に不思議なる事数を知らず。

但し道隆が事は見ぬ事にて候へば如何様に候やらん、但し弘通する

ところの説法せつぽうは共に本權教ごんきやうより起りて候しを今は教外別伝きやうべつでんと申もうして物
にくるひて我と外道げどうの法と云うか、其の上建長寺けんちやうじは現げんに眼前がんぜんに見へて
候にほんこく、日本国の山寺の敵とも謂いいつべき様なれども事を御威ぎゐによせぬれば
皆人みな恐れて云わず、是は今生こんじやうを重しげくして後生ごしやうは輕くす

る故なりされば現身げんしんに彼の寺ゆゑの故に亡国ぼうこくすべき事当りぬ、日蓮にちれんは度た度た知ちつて日本にほんの道俗どうぞくの科とがを申せば是こんじやうは今生の禍ごしやう後生の福たなり、但ただし道隆どうりゆうの振舞ふるまいは日本にほんの道俗どうぞく知ちりて候へども上おそを畏おそれてこそ尊そんみ申せ又また内心ないしんは皆みなうとみて候らん、仏法ぶつぽうの邪正じやせいこそ愚人ぐにんなれば知らずとも世間せけんの事は眼前がんぜんなれば知りぬらん、又一または用もちいずとも人の骨こつの舍利しやりと成なる事は易やすく知ちれ候事こうじにて候、仏の舍利しやりは火にやけず水にぬれず金剛こんごうのかなづちにてうてども摧くだけず、一ひとくだきして見みよかしあらずしあらずし、建長寺けんちやうじは所領しりやうを取られてまどひたる男おとこどもの入道にゅうどうに成なりて四十五十六などの時走はしり入りて候が用もちは之これ無なく道隆どうりゆうがかげにしてすぎぬるなり、云いうに甲斐かいなく死しぬれば不思議ふしぎにて候をかくして暫しばらくもすぎき。

又は日蓮房にちれんが存知ぼうちもんの法門ほうもんを人に疎そませんとこそたばかりて候らめ、

あまりの事どもなれば誑惑顯おおくあらわれなんとす、但ただしばらくねうじて御覽
ぜよ、根露あらわれぬれば枝かれ源みなもと渴かわけば流なが尽ことごとくると申もうす事あり、恐恐きょうきょう
謹言きんげん。

弘安元年 戊寅 八月十一日

日蓮 花押

弥源太入道殿

◆二四〇 さじき女房御返事にようぼうごへんじ

建

治元年がねん五十四歳御作

1231p

女人にょにんは水のごとし・うつは物にしたがう・女人にょにんは矢のごとし・弓につがはさる・衆人しゅうじんはふねのごとし・かぢのまかするによるべし、しかるに女人にょにんはをとこ・ぬす人なれば女人にょにんぬす人となる・をとこ王なれば女人にょにんきさきとなる・をとこ善人ぜんにんなれば女人にょにん・仏になる、今生こんじょうのみならず後生ごしやうも・をとこによるなり、しかるに兵衛のさゑもんどのほけきやうは法華經

の行者ぎやうじやなり、たとひ・いかなる事ありとも・をとこのめなればほけきやう法華經の女人にょにんとこそ仏は・しろしめされて供らんに・又我とこころを・をこしてほけきやう法華經の御ために御かたびらをくりたびて候。

法華經ほけきょうの行者ぎやうじやに二人あり・聖人しようにんは皮をはいで文字もんじをうつす・凡夫ぼんぷは・

ただ・ひとつきて焼かたびら・などを法華經ほけきょうの行者ぎやうじやに供養くやうすれば皮をはぐうちに仏をさめさせ給たまうなり、此の人のかたびらは法華經ほけきょうの六万九千三百八十四の文字もんじの仏にまいらせさせ給たまいぬれば・六万九千三百人十四のかたびらなり、又六万九千三百八十四の仏・一一・六

万九千三百八十四の文字もんじなれば・此のかたびらも又かくのごとし、たとへばはるの野の千里せんりばかりに・くさのみちて候そうらはんに・すこしの豆ばかりの火を・くさ・ひとつにはなちたれば一時いちじに無量無辺むりやうむへんの火となる、此のかたびらも又かくのごとし、ひとつのかたびら・なれども法華經ほけきょうの一切いっさいの文字もんじの仏にたてまつるべし。

この功德くどくは父母ふぼ・祖父母そふ・乃至無辺ないしむへんの衆生しゆじやうにも・をよぼしてん、まして・わが・いとをしと・をもふ・をとこは申もうすに及およばずと、おぼしめすべ

し、おぼしめすべし。

五月二十五日

日蓮にちれん

花押かおう

さじき女房御返事にようぼうごへんじ

◆二四一

棧敷女房御返事

建治四年

二月五十七歳御作

1232p

白かたびら布一給い畢んぬ、法華經を供養申しまいらせ候に十種く
やうと申す十のやう候、其のなかに衣服と申し候はなににても候へ僧
のき候物をくやうし候、其の因縁をとかれて候には過去に十萬億の仏
をくやうせる人・法華經に近づきまいらせ候とこそとかれて候へあら
あら申すべく候へども、身にいたはる事候間こまやかならず候、恐恐
謹言。

二月十七日

日蓮 花押

さじきの女房御返事にようぼうごへんじ

◆二四二

善無畏抄ぜんむい

建治元年五十四歳御

作

1232p

善無畏ぜんむい三歳は月氏がっし烏菟奈国うとなの仏種王ぶつしゆの太子たいしなり、七歳にして位に即
き給たまう十三にして国を兄このかみに譲ゆずり出家遁世しゅつげとんせいし五天竺てんじくを修行しゆぎやうして五乗の
道を極きわめ三学を兼ね給たまいき、達磨掬多だるまきくたと申もうす聖人しやうにんに値あひ奉たてまつりて真言しんごんの
諸印契しよいんけい一時いちじに頓受とんし即日とんに御灌頂かんちやうなし人天にんてんの師と定まり給たまいき、☆足けいそく
山に入りては迦葉尊者かしょうそんじやの髪を剃そり王城おうじやうに於おいて雨を祈り給たまい
しかば観音日輪かんのんにちりんの中より出て水瓶すいびやうを以て水を灌そそぎ、北天竺てんじくの金粟王こんぞくの

塔の下にして仏法ぶつぽうを祈請きしやうせしかば文殊師利菩薩大日經もんじゆしりぼさつだいにかきやうの胎藏たいざうの曼荼羅まんだらを現して授け給たまう、其その後開元四年かいげん丙辰ひのえたつに漢土かんどに渡わたる玄宗皇帝げんそうこうてい之これを尊そんむこと日月にちがつの如ごとし、又大旱魃かんぱつあり皇帝勅宣こうていちよくせんを下す、三藏さんざう一鉢いちぱつに水を入いれれ暫しばらく加持かじし給たまいしに水の中に指許ばかりの物有り變じて竜

と成る其の色赤色なり、白氣立ち昇り鉢より竜出でて虚空に昇り忽に
雨を降す、此の如くいみじき人なれども一時に頓死して有りき、
蘇生りて語つて云く我死する時獄卒来りて鉄の繩七筋付け鉄の杖
を以て散散にさいなみ閻魔宮に到りにき、八万聖教一字・一句も覚え
ず唯法華經の題名許り忘れざりき題名を思いしに鉄の繩少し許ぬ息
続いて高声に唱えて云く今此三界・皆是我有其中衆生悉是吾子
而今此処・多諸患難唯我一人能為救護等云云、七つの鉄の繩切れ碎
け十方に散す閻魔冠を傾けて南庭に下り向い給いき、今度は命尽き
ずとて歸されたるなりと語り給いき、今日蓮不審して云く善無畏三蔵
は先生に十善の戒力あり五百の仏陀に仕えたり、今生には捨て難き
王位をつばきを捨てるが如く之を捨て幼少十三にして出家し給い、
月支国を廻りて諸宗を習い極め天の感を蒙り化道

の心深くして震旦国に渡りて真言の大法を弘めたり、一印一真言を結び誦すれば過去・現在の無量の罪滅しぬらん何の科に依りて閻魔の責をば蒙り給いけるやらん不審極り無し、善無畏三藏真言の力を以て閻魔の責を脱れずば天竺震旦日本等の諸国の真言師地獄の苦を脱る可きや、委細に此の事を勘えたるに此の三藏は世間の輕罪

は身に御せず諸宗並びに真言の力にて滅しぬらん、此の責は別の故無し法華經誹謗の罪なり、大日經の義釈を見るに此の經は是れ法王の秘宝妄りに卑賤の人に示さず、釈迦出世の四十余年に舍利弗慇懃の三請に因つて方に為に略して妙法蓮華の義を説くが如し、今此の本地の身又是れ妙法蓮華最深秘處なり、故に寿命品に云く常に靈鷲山及び余の諸の住處に在り、乃至我が淨土は毀れざるに而も衆は燒き尽くと見る」と、即ち此の宗瑜伽の意なるのみ、又補處の菩薩の慇懃

三請しょうよに因よつて方まさに為ために之これを説く」等云云、此の釈しゃくの心は大日經だいにちぎように本迹ほんしやく

二門・開三

顯一・開近顯遠かいこんけんのんの法門ほうもん有り、法華經ほけきようの本・迹二門ごとの如し、此の法門ほうもんは法華經ほけきように同じけれども此の大日經だいにちぎように印しんごんと真言しんごんと相加そうおうわりて三密相応さんみつそうおうせり、法華經ほけきようは但意密許いみつばかりにて身口しんくの二密か開けたれば法華經ほけきようをば略説りやくせつと云い大日經だいにちぎようをば広説こうせつと申す可べきなりと書かれたり、此の法門ほうもん第一だいいちの☆謗法あやまほうの根本こんぽんなり、此の文に二つの☆り有り、又義釈ぎしゃくに云く

此の経横に一切の仏教を統ぶ」等云云、大日経は当分隨他意の経なるを☆りて隨自意跨節の経と思えり、かたがた・りたるを實義と思し食す故に閻魔の責をば蒙りたりしか智者にて御座せし故に此の謗法を悔い還えして法華經に翻りし故に此の責を免がるるか、天台大師釈して云く法華は衆經を總括す乃至輕慢止まざれば舌口中に爛る」等云云、妙樂大師云く己今当の妙此に於て固く迷えり舌爛止まざるは猶華報と為す、謗法の罪苦長劫に流る」等云云、天台・妙樂の心は法華經に勝れたる経有りと云はむ人は無間地獄に墮つ可しと書かれたり善無畏三藏は法華經と大日経とは理は同じけれども事の印・真言は勝れたりと書かれたり、然るに二人の中に一人は必惡道に墮つ可しと・をばふる処に天台の釈は經文に分明なり、善無畏の釈は經文に其証拠見え、其の上閻魔王の責の時・我が内証の肝心

とおぼしめ だいにちきよう と思食す大日経等の三部経の内の文を誦せず、法華経の文を誦して此
の責を免れぬ、疑 うたがひなく 無く法華経に真言勝ると思う ☆ あやま を翻したるなり
其の上善無畏三歳の御弟子不空三歳の法華経の儀軌には大日経
・金剛頂経の両部の大日をば左右に立て法華経多宝仏をば不二の
大日と定めて両部の大日をば左右の巨下の如くせり。

伝教大師は延暦二十三年の御入唐靈感寺の順曉和尚に真言三
部の秘法を伝う、仏滝寺の行満座主に天台止観宝珠を請け取り顕密
二道の奥旨を極め給いたる人、華嚴三論・法相律宗の人人の自宗我慢
の辺執を倒して天台大師に帰入せる由を書かせ給いて候、依憑・集
守護章・秀句なむと申す書の中に善無畏・金剛智・不空等は天台宗に
帰入して智者大師を本師と仰ぐ由のせられたり、各各思えらく宗を立
つる法は自宗をほめて他宗を嫌うは常の習

なりと思えり、法然ほうねんなむどは又此例を引ききて曇鸞どんらんの難易道綽なんいどうしやくの聖道しょうどう・
浄土善導じょうどぜんどうが正雜しょうざう二行の名目みょうもくを引ききて天台てんだい・真言等しんごんの大法だいほうを念仏ねんぶつの
方便ほうべんと成せり、此等これらは牛跡あとに大海たいかいを入れ県の額を州に打つ者なり、
世間せけんの法には下剋上げこくじやう・背上向そむ下は国土亡乱こくどぼうらんの因縁いんねんなり、仏法ぶつぽうには権小ごんしょう
の經經きやうぎやうを本として実經じつぎやうをあなづる、大謗法ほうぼうの因縁いんねんなり恐る可し恐る

可^べし。

嘉祥寺の吉蔵大師は三論宗の元祖・或時は一代聖教を五時に分け

・或時は二蔵と判ぜり、然りと雖も竜樹菩薩の造の百論・中論十二門

論大論を尊んで般若經を依憑と定め給い、天台大師を辺執して過ぎ

給いし程に智者大師の梵網等の疏を見て少し心とけやうやう近づき

て法門を聴聞せし程に結句は一百余人の弟子を捨て般若經並びに

法華經をも講ぜず七年に至つて天台大師に仕えさせ給いき、高僧伝に

は衆を散じ身を肉橋と成す」と書かれたり、天台大師高坐に登り

給えば寄りて肩を足に備え路を行き給えば負奉り給うて堀を越え給い

き、吉蔵大師程の人だにも謗法を恐れてかくこそ仕え給いしか、然るを

真言三論・法相等の宗宗の人人今末末に成りて辺執せさせ給うは

自業自得果なるべし。

今の世に浄土宗・禪宗など申す宗宗は天台宗にとされし真言
華嚴等に及ぶ可からず、依経既に楞伽經・觀經等なり此等の經經
は仏の出世の本意にも非ず一時一会の小經なり一代聖教を判ずるに
及ばず、而も彼の經經を依経として一代の聖教を聖道・浄土・
難行・易行・雜行・正行に分ち教外別伝なむどののしる、譬えば民が
王をしえたげ小河の大海を納むるが如し、かかる謗法の法師どもを信
じて後生を願う人人は無間地獄脱る可きや、然れば当世の愚者は仏に
は釈迦牟尼仏を本尊と定めぬれば自然に不孝の罪脱がれ法華經を信じ
ぬれば不慮に謗法の科を脱れたり。

其の上女人は五障三従と申して世間出世に嫌われ一代の聖教に捨
てられ畢んぬ、唯法華經計りにこそ童女が仏に成り諸の尼の記☆は、
さづけられて候ぬれば一切の女人は此の經を捨てさせ給いては何の經を

か持たせ給うべき、天台大師は震旦国の人・仏滅後・一千五百余年に仏の御使として世に出でさせ給いき、法華經に三十卷の文を注し給い文句と申す文の第七の卷には、他經には但男に記して女に記せず」等云云、男子も余經にては仏に成らざれども且らく与えて其をば許してむ、女人に於ては一向諸經に於ては叶う可からずと書かれて候、縦令千萬の經經に女人成る可しと許され為りと雖も法華經に嫌われなば何の憑か有る可きや。

教主釈尊我が諸經四十余年の經經を未顕眞実と悔い返し涅槃經等をば当説と嫌い給い無量義經をば今説と定め置き、三説に秀でたる法華經に正直に方便を捨て但無上道を説く世尊の法は久しくしてのちかならずまさ後要當に眞実を説くべし」と釈尊宣べ給いしかば、宝淨世界の多宝仏は大地より出でさせ給いて眞実なる由の証明を加え、十方分身

の諸仏しよぶつ広長舌こうちやうぜつを梵天ぼんてんに付け給う、十方世界微塵數の諸仏の舌相は不
妄語戒の力に酬いて八葉の赤蓮華はちようれんげに生出させ給いき、一仏・二仏三仏・
乃至十仏・百仏・千・万億仏の四百万億那由他の世界に充滿せる仏の御
舌を以て定め置き給える女人成仏の義なり、謗法無くして此の經を持
つ女人は十方虚空に充滿せる慳貪・嫉妬・瞋恚・十惡・五逆なりとも
草木の露の大風にあえるなる可し三冬の氷の夏の日に滅するが如し、
但滅し難き者は法華經謗法の罪なり、譬えば三千大千世界の草木を
薪と為すとも須弥山は一分も損じ難し、縦令七つの日出でて百千日照
すとも大海の中をばかわかしがたし、設い八万聖教を読み大地微塵の
塔婆を立て大小乗の戒行を尽し十方世界の衆生を一子の如くに
為すとも法華經謗法の罪はきゆべからず、我等過去・現在・未來の三世
の間に仏に成らずして六道の苦を受くるは偏に法華經誹謗の罪なるべ

し、女人にょにんと生れて百惡身に備ふるも根本こんぽん此の経誹謗ひぼうの罪つみより起れり。
然者あれば此の経に値あい奉らむ女人にょにんは皮をはいで紙と為し血を切りて墨と
為なし骨を折りて筆と為し血の涙を硯の水と為なして書き奉たてまつると雖いえども飽あく
期あるべからず、何いかに況や衣服えぶく・金銀きんぎん・牛馬ぎゅうば・田畠等でんぱたの布施ふせを以て供養くよう
せむは・ものの

かずにてかずならず。

◆二四三

妙密上人御消息しやうにん

建治二年三月 五十五

歳御作 与 ☆谷妙密くわがやつ

1237p

青鳧せいふ五貫文たまい給たまい候おわい畢おわんぬ、夫それ五戒ごかいの始はは不殺生戒ふさつしやうかい六波羅蜜ろくはらみつの始は檀波羅蜜だんはらみつなり、十善戒じゅうぜんかい・二百五十戒にひゃくごじうかい・十重禁戒等じゅうじゆうきんの一切いっさいの諸戒しよの始はめは皆みな不殺生戒ふさつしやうかいなり、上大聖おほなみづかひより下蚊虻もんもうに至いたるまで命を財たからとせざるはなし、これを奪だへば又また第一だいいちの重罪じゅうざいなり、如来世にょらいに出いで給たまいては生をあわれむを本とす、生をあわれむしには命を奪だはず施食せじきを修しゆするが第一だいいちの戒にて候なり、人に食を施ほすに三の功德くどくあり・一には命をつぎ・二には色をまし・三には力を授さく、命をつぐは人中天上にんちやうてんじやうに生れては長命の果報かほうを得仏に成りては法身如来ほっしんにょらいと顕あらわれ其の身虚空こくうと等

し、力を授く

る故に人中天上に生れては威徳の人と成りて眷属多し、仏に成りては報身如来と顕れて蓮華の台に居し八月十五夜の月の晴天に出でたるが如し、色をます故に人中天上に生れては三十二相を具足して端正なる事華の如く、仏に成りては応身如来と顕れて釈迦仏の如くなるべし、夫れ須弥山の始を尋ぬれば一塵なり大海の初は一露なり一を重ぬれば二となり二を重ぬれば三乃至十百千万億阿僧祇の母は唯一なるべし。

されば日本国には仏法の始まりし事は天神七代・地神五代の後人王百代其の初めの王をば神武天皇と申す、神武より第三十代に当りて欽明天皇の御宇に百済国より経並びに教主釈尊の御影僧尼等を渡す、用明天皇の太子の上宮と申せし人、仏法を読み初め法華経を漢土

よりとりよせさせ給たまいて疏じょを作りて弘ひろめさせ給たまいき、それより後人王三十七代孝徳天皇てんのうの御宇ぎように觀勒僧正かんろくそうじようと申もうす人新羅国しらぎより三論宗さんろんしゅう・成実宗じようじつを渡わたす、同じき御代に道昭もうと申もうす

僧漢土かんどより法相宗ほうそうしゅう・俱舍宗ぐしやしゅうを渡わたす、同じき御代に審祥大徳しんじようだいとく・華嚴宗けこんしゅうを渡わたす、第四十四代・元正天皇てんのうの御宇ぎように天竺てんじくの上人しやうにん・大日經だいにちきようを渡わたす、第四十五代・聖武天皇しやうむてんのうの御宇ぎように鑑真和尚わじやうと申もうせし人漢土かんどより日本国にほんこくに律宗りっしゅうを渡わたせし・

次でついでに天台宗てんだいしゅうの玄義げんぎ・文句もんく・円頓止觀えんどんしかん・淨名疏等じやうみやうじよを渡すわた、然れども
真言宗しんこんしゅうと法華宗ほつげしゅうとの二宗をはいままだ弘め給はずたま、人王第五十代桓武かんむ
天皇てんのうの御代ごだいに最澄さいちようと申す小僧こそうあり後には伝教大師でんぎやうだいしと号す、此の人
入唐にゅうとう已前いぜんに真言宗しんこんしゅうと天台宗てんだいしゅうの二宗の章疏しやうじよを十五年が間・但一人見
置き給たまいき、後に延暦二十三年七月に漢土かんどに渡りわた、かゝる年の六月に
本朝ほんちように著かせ給たまいて、天台てんだい・真言しんこんの二宗を七大寺ななだいじの碩学せきがく数十人に授け
させ給たまいき、其その後いまに于今四百年なり、総じて日本国にほんこくに仏法ぶつぽう渡りて于今いまに
七百余年なり、或あるは弥陀みだの名号みやうごう・或あるは大日だいにちの名号みやうごう・或あるは釈迦しやかの名号みやうごう
等をいっさいしめじようば一切衆生いっさいしゆじように勸め給たまへる人人ひとびとはおはすれども、いまだ法華經ほけきやうの
題目だいもく・南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうと唱すへよと勸めたる人なし、日本国にほんこくに限ら
ず月氏等がしにも仏滅後ぶつめつ・一千年の間・迦葉かしやう・阿難あなん・馬鳴めみやう・竜樹りゆうじゆ・無著むちやく・天親てんじん
等の大論師ろんし・仏法ぶつぽうを五天竺てんじくに弘通くつうせしかども・漢土かんどに仏法ぶつぽう渡りて数百

年の間・摩騰・迦竺・法蘭・羅什三藏・南岳・天台・妙樂等・或は疏を作
り・或は經を釈せしかどもいまだ法華經の題目をば弥陀の名号の如く
す・勧められず、唯自身一人計り唱へ・或は經を講ずる時・講師計り唱る事
あり、然るに八宗・九宗等其の義まちまちなれども多分は弥陀の名号
次には觀音の名号次には釈迦仏の名号・次
には大日・藥師等の名号をば唱へ給へる高祖先徳等はおはすれども何な
る故有りてか一代諸教の肝心たる法華經の題目をば唱へざりけん、
其の故を能く能く尋ね習い給ふべし、譬えば大医の一切の病の根源藥の
浅深は弁へたれども故なく大事の藥をつかふ事なく病に隨ふが如し。

されば仏の滅後正像二千年の間は煩惱の病・輕かりければ一代
第一の良藥の妙法蓮華經の五字をば勧めざりけるか、今末法に入りぬ
ひとごと
人毎に重病有り阿弥陀・大日・釈迦等の輕藥にては治し難し、又月は

いみじけれども秋にあらざれば光を惜む・花は目出けれども春にあらざれば・さかず、一切・時による事なり、されば正像二千年の間は題目の流布の時に当らざるか、又仏教を弘るは仏の御使なり随つて仏の弟子の譲りを得る事各別なり、正法千年に出でし論師像法千年に出づる人師等は多くは小乗・権大乘・法華經の・或は迹門・或は枝葉を譲られし人人なり、

いまだ本門ほんもんの肝心かんじんたる題目だいもくを譲られし上行菩薩じやうぎやうぼさつ世しに出現しゆつげんし給たまはず、此の人末法まつぽうに出現しゆつげんして妙法蓮華經みやうほうれんげきやうの五字ごじを一閻浮提えんぶだいの中うち・国こくごと人ひとごとに弘ひろむべし、例せば当時とうじ・日本国にほんこくに弥陀みだの名号みやうごうの流布るふしつるが如ごとくなるべきか。

然しかるに日蓮にぢれんは何いずれの宗がんとその元祖げんそにもあらず又末葉まつようにもあらず持戒じかい・破戒はかいにも闕かけて無戒むかいの僧有智うち・無智むちにもはづれたる牛羊ぎやうようの如ごとくなる者ものなり、何いかにしてか申し初めもうけん上行菩薩じやうぎやうぼさつの出現しゆつげんして弘ひろめさせ給たまうべき妙法蓮華經みやうほうれんげきやうの五字ごじを先立さきだちてねごとの様に心こころにもあらず南無なむ妙法蓮華經みやうほうれんげきやうと申し初そもて候とし程ほどに唱となうる者ものなり、所詮しよせんよき事にや候あらん。

又悪き事にや侍はべるらん我われもしらず人もわきまへがたきか、但ただし法華經ほけきやうを開ひらいて拜はいし奉たてまつるに此の經きやうをば等覺とうかくの菩薩ぼさつ文殊もんじゆ・弥勒みろく觀音かんのん普賢ふげんまでも

輒たやすく一句一偈いちくいちげをも持つ人なし、「唯ゆい仏与ぶつ仏」と説とき給たまへり、されば

華嚴經けこんきようは最初の頓說とんせつ円満えんまんの經なれども法慧等ほうえの四菩薩ぼさつに説たまかせ給たまふ、

般若經はんんにききようは又華嚴經程けこんききようこそなければども当分とうぶんは最上さいじようの經ぞ

かし、然しかれども須菩提しゅぼだいこれを説く、但ほけき法華經計りこそ三身さんじん円満えんまんの釈迦しやか

の金口きんくの妙説にては候なれ、されば普賢ふげん・文殊もんじゆなりとも輒たやすく一句一偈いちくいちげ

をも説かせ給たまうべからず、何いかに況や末代まつだいの凡夫ぼんぶ我等衆生われらしゆじようは一字・二字

なりとも自身じしんには持たもちがたし、諸宗しよしゆうの元祖等がんそ・法華經ほけきを讀み奉たてまれば各

各そ其でしの弟子等は我が師ほけきは法華經きの心を得給たまへりと思へり、然しかれ

ども詮を論ずれば慈恩大師じおんだいしは深密經じんみつ唯識論ゆいしきろんを師として法華經ほけきをよみ、

嘉祥大師かじやうだいしは般若經はんんにききよう中論を師として法華經ほけきをよむ、杜順とじゆん法藏等ほうぞうは

華嚴經けこんきよう十住毘婆沙論じゆうびしやもんろんを師として法華經ほけきをよみ、善無畏ぜんむい・金剛智こんこうち・

不空等ふくうは大日經だいにちききようを師として法華經ほけきをよむ、此等これらの人人ひとびとは各法華經ほけきをよ

めりと思へども未だ一句一偈もよめる人にはあらず、詮を論ずれ

ば伝教大師でんぎょうだいしことはりて云くいわ法華經ほけきょうを讀さんすと雖いえども還かえつて法華の心を死

す「云云、例せば外道げどうは仏經ぶつきょうをよめども外道げどうと同じ・蝙蝠へんぷくが昼を夜と見

るが如ごとし、又赤き面おもての者は白き鏡も赤しと思ひ太刀に顔をうつせるも

の円かなる面をほそながしと思ふに似たり。

今日蓮いまにちれんは然しからず已い今当こんとうの經文きやうもんを深くまほり一經いつきやうの肝心かんじんたる題目だいもくを

我も唱すすへ人にも勸すすむ、麻の中の蓬よもぎ・墨すみうてる

木の自体は正直しやうじきならざれども自然じねんに直ぐなるが如ごとし、経のままだに唱となうればまがれる心なし、当まさに知るべし仏の御心の我等われらが身に入らせ給たまはずば唱なへがたきか、又それ他人たにんの弘ひろめさせ給たまふ仏法は皆師みなより習ならひ伝たへ給たまへり、例せば鎌倉の御家人等の御知行所領の地頭・或あるは一町二町なれども皆故大將家の御恩ごおんなり、何いかに況や百町・千町・

一國・二國を知行する人人をや、賢人けんじんと申もうすはよき師より伝たへたる人しやうにんと申もうすは師なく無くして我さとと覚される人なり、仏滅後・月氏がつし・漢土かんど・日本國に二人の聖人しやうにんあり所謂天台・伝教の二人なり、此の二人をばしやうにん聖人とも云うべし又賢人とも云うべし、天台大師は南岳なんがくに伝たえたり是は賢人けんじんなり、道場どうじやうにして自解じげ仏乗ぶつじやうし給たまいぬ又聖人しやうにんなり、伝教でんぎやう

大師は道邃どうずい・行滿しやうまんに止觀しがんと円頓えんどんの大戒だいかいを伝たへたりこれは賢人けんじんなり、入唐にゅうたう已前いぜんに日本國にほんこくにして真言しんごん・止觀しがんの二宗を師しなくしてさとり極きわめ、

てんだいしゅう ちえ
天台宗の智慧を以て六宗・七宗に勝れたりと心得給いしは是れ聖人なり、然れば外典に云く 坐れながらにして之を知る者は上なりの名なり学んで之を知る者は次なりの名なり」内典に云く

我が行師の保無し」等云云、夫れ教主釈尊は娑婆世界第一の聖人なり、天台・伝教の二人は聖賢に通ずべし、馬鳴・竜樹・無著・天親等老子・孔子等は或は小乗・或は権大乘・或は外典の聖賢なり、法華經の聖賢には非ず。

今日蓮は聖にも賢にも非ず持戒にも無戒にも有智にも無智も当らず、然れども法華經の題目の流布すべき後・五百歳二千二百二十余年の時に生れて近くは日本国遠くは月氏・漢土の諸宗の人人唱へ始めざる先に・南無妙法蓮華經と高声によばはりて二十余年をふる間・或は罵られ打たれ・或は疵をかうほり・或は流罪に二度死罪に一度

定められぬ、其その外ほかの大難だいなん数をしらず・譬たとへば大湯に大豆を潰ひたし小水に
大魚あの有ことるが如ごとし、經きやうもんに云いく・而しかも此の經は如來にやらいの現在げんざいにすら猶なお怨おん嫉しつ
多し況めつどや滅度めつどの後をや」又云いく・二切世間いっさいせけん怨あだ多おおくして信がじ難たし」又云いく
諸もろもろむちの無智

の人あぐ有りて惡口罵めりす」・或あるは云いく・刀杖瓦石とうじやうがしやくを加え・或あるは数数しばしば擯ひん出すせ
らる」等云云、此等これらの經文きやうもんは日蓮にちれん・日本にほん国こくに生なぜずんば但み仏ぶつの御言みことばの
み有りて其その義空ぎこしかるべし、譬たとへば花さき菓このみみならず雷いかずちなりて雨ふ
らざらんが如ごとし

、仏の金言きんげんむなし空くうくして正直しやうじきの御經に大妄語もうごを雜まじへたるなるべし、此等これらを以

て思ふに恐くは天台・伝教てんだい でんぎやうの聖人しやうにんにも及ぶべし又老子・孔子らうし こうしをも下くだしぬ

べし、日本国にほんこくの中に但一人南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱となえたり、これは須弥山

の始いちじんたいかいの一塵大海の始の一露なり、二人・三人・十人・百人・百国・二国・

六十六箇国・已すでに島二にも及びぬらん、今は謗ぼうぜし人人ひとびと

も唱たまへ給たまうらん、又上一人かみいちにんより下万民ばんみんに至いたるまで法華經ほけきやうの神力品じんりきばんの

如ごとく一同に南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱たまへ給たまふ事もやあらんずらん、木はしづ

かならんと思へども風やまず春を留とどんと思へども夏となる、日本国にほんこくの

人人ひとびとは法華經ほけきやうは尊とけれども日蓮房にちれんが悪ければ南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうとは

唱となえまじとことほり給たまふとも今一度ひとたびも二度も大蒙古国だいもうここくより

押し寄せて壹岐対馬いきつしまの様に男をば打ち死し女をば押し取り京鎌倉かまくらに打

ち入りて国主並こくしゆならびに大臣百官等だいじんを搦からめ取り牛馬ぎゅうばの前に・けたて・つよく

責めん時は争か南無妙法蓮華經と唱へざるべき、法華經の第五の巻をもつて日蓮にぢれん

が面おもてを数箇度打ちたりしは日蓮にぢれんは何とも思はずうれしくぞ侍りし、
不輕品の如く身を責め勸持品の如く身に當つて貴し貴し。
ふぎよう ごとく かんじほん ごとく とおと とおと

但し法華經の行者を惡人に打たせじと仏前にして起請をかきたりし
ただ ほけきよう ぎようじや あくにん ぶつぜん きしよう

梵王・帝釈・日月・四天等いかに口惜かるらん、現身にも天罰をあたら
ぼんのう たいしやく にちがつ してん げんしん

ざる事は小事ならざれば始中終をくくりて其の身を亡すのみならず
しょうじ しちゅうじゅう ほか

議せらるるか、あへて日蓮が失にあらざらば謗法の法師等をたすけんが為
にぢれん とが ほうぼう ほつし ため

彼等が大禍を自身に招きよせさせ給うか。
かれら じしん たま

此等を以て思ふに便宜ごとの青鳧五連の御志は日本国の法華經の
これら びんぎ せいふ いんぎ ほんこく ほけきよう

題目を弘めさせ給ふ人に当れり、国中の諸人・一人・二人・乃至千万億
だいもく ひろ たま くにん ひとり ふたり ないしせんまん

の人・題目を唱うるならば存外に功德身にあつまらせ給うべし、其の
だいもく とな ぞんがい くどく たま ほか

功德は大海の露をあつめ須弥山の微塵をつむが如し、殊に十羅刹女は
法華經の題目を守護せんと誓わせ給う、此を推するに妙密

上人並びに女房をば母の一子を思ふが如く☆牛の尾を愛するが如く
昼夜にまほらせ給うらん、たのもしたのもし、事多しといへども委く
申すにいとまあらず、女房にも委く申し給へ此は諂へる言にはあらず、
金はやけば弥

色まさり劍はとげば弥利いよいよとくなる法華經ほけきょうの功德くどくはほむれば弥功徳いよいよくどくまさる、二十八品まさしは正き事は・わずかなり讃ほむる言こそ多く候へと思食おほしめすべし。

閏三月五日

日蓮にちれん
花押かおう

くわがやつ
☆谷妙密上人御返事

◆二四四

道妙ぜんもん禪門ごしよ御書
四種きとう祈☆御書

1
2

42p

御親父きとう祈☆の事承り候間、仏前ぶつぜんにて祈念きねん申すべく候、祈☆に於ては、
顕祈きとう顕応・顕祈冥応・冥祈冥応・冥祈顕応の祈☆有りと雖も、只肝要かんよう

は、此の經の信心を致し給ひ候はば、現當の所願満足有るべく候、法華
第三に云く魔及び魔民有りと雖、皆仏法を護る」、第七に云く病即
消滅して不老不死ならん」との金言之を疑ふべからず、妙一尼御前
当山參詣有難く候、巻物一卷之を進らせ候、披見有るべく候、南無
妙法蓮華經。

建治二年丙子八月十日

日蓮 花押

道妙禪門

◆二四五

にちによごぜんごへんじ
日女御前御返事

建治三年八月 五十六

歳御作

1243p

御本尊供養の御為に鷲目五貫・白米一駄・菓子其の数送り給ひ
侯い畢んぬ、抑此の御本尊は在位五十年の中には八年・八年の間にも
涌出品より属累品までに八品に顕れ給うなり、さて滅後には正法・
像法・末法の中には正像二千年にはいまだ本門の本尊と申す名だに
もなし、何に況や顕れ給はんをや又顕すべき人なし、天台・妙楽・伝教
等は内にはかんがみ給へども故こそあるらめ言には出だし給はず、彼の
顔淵が聞きし事・意にはさるといへども、言に出していはざるが如し、
然るに仏滅後・二千年過ぎて末法の始の五百年に出現せさせ給ふべき

山經文赫赫たり明明たり・天台・妙樂等の解釈分明なり。

ここに日蓮いかなる不思議にてや候らん竜樹・天親等・天台・妙樂等だ

にも顕し給はざる大曼荼羅を・末法二百余年の比はじめて法華弘通の

はたじるしとして顕し奉るなり、是全く日蓮が自作にあらず多宝塔中

の大牟尼世尊分身の諸仏すりかたぎたる本尊なり、されば首題の五字

は中央にかかり・四天王は宝塔の四方に坐し・釈迦・多宝・

本化の四菩薩肩を並べ普賢・文殊等・舍利弗・日蓮等坐を屈し・日天・

月天・第六天の魔王・竜王・阿修羅・其の外不動・愛染は南北の二方に

陣を取り・惡逆の達多・愚癡の竜女一座をはり・三千世界の人の寿命

を奪ふ惡鬼たる鬼子母神・十羅刹女等・加之・日本国の守護神たる

天照太神・八幡大菩薩・天神七代・地神五代の神神・総じて大小の神祇

等・体の神つらなる・其の余の用の神豈もるべきや、宝塔品に云く・諸の

大衆たいしゅうを接みして皆みな虚空こくうに在あり」云云、此等これらの仏・菩薩ぼさつ・大聖等・総じて
序品じよほん列坐りゃくざの二界八番の雜衆等一人ももれず、此の御本尊ごほんぞんの中に住し
給たまい妙法みょうほう五字ごじの光明あきらかにてらされて本有ほんぬの尊形そんぎようとなる是これを本尊ほんぞんとは
申もうすなり。

經に云くいわ 諸法実相しよほうじつそう「是なり、妙樂云くみょうらくい 実相は必ず諸法・諸法は必ず
十如ないしじゆつかい乃至十界は必ず身土しんど」云云、又云く「実相の深理じんり本有の
妙法蓮華經みょうほうれんげきよう」等と云云、伝教大師云く「二念三千即自受用身・
自受用身とは出尊形しんぎようの仏ぶつ」文、此の故に未曾有みぞうの大曼荼羅まんだらとは名付け
奉るなり、仏滅後・二千二百二十余年には此の御本尊ごほんぞんいまだ出現しゆつげん
給はずと云う事なり。

かかる御本尊ごほんぞんを供養くようし奉り給ふ女人にょにん・現在げんざいには幸さいわいをまねぎ後生ごしように
は此の御本尊ごほんぞん左右前後さうぜんごに立ちそひて闇に燈の如くごと・險難けんなんの処ところに強力を
得たるが如く・彼こへまはり此へより・日女御前にちによごぜんをかこみ・まほり給うべ
きなり、相構え相構えてとわりを我が家へよせたくもなき様に誘法の者
をせかせ給うべし、悪知識あくちしきを捨てて善友ぜんゆうに親近しんこんせよとは是なり。
此の御本尊ごほんぞん全く余所よそに求る事なかれ・只我れ等衆生しゆじようの法華經ほけきようを打ち

て南無妙法蓮華經と唱うる胸中の肉団におはしますなり、是を九識心王賁如の都とは申すなり、十界具足とは十界一界もかけず一界にあるなり、之に依つて曼荼羅とは申すなり、曼荼羅と云うは天竺の名なり此には輪円具足とも功德聚とも名くるなり、此の御本尊も只信心の二字にをさまれり以信得入とは是なり。

日蓮が弟子・檀那等・正直捨方便・不受余經一偈と無二に信ずる故によつて此の御本尊の宝塔の中へ入るべきなり・たのもし・たのもし、如何にも後生をたしなみ給ふべし・たしなみ給ふべし、穴賢・南無妙法蓮華經とげかり叫へて仏になるべき事尤も大切なり、信心の厚薄にやるべきなり仏法の根本は信を以て源とす、されば止觀の四に云く「仏法は海の如し唯信のみ能く入る」と、弘決の四に云く「仏法は海の如し唯信のみ能く入るとは孔丘の言

尚なお信しんを首はじめと為なす況ぶつや仏ぶつ法ぽうの深じん理りんをや信なく無くして寧むしろ入いらんや、故ゆえに
華け嚴こんに信しんを道だうの元げん・功く徳とくの母ぼと為なす」等、又止との一いつに云いく何なんが円えんの法ぽう
を開ひらき日にちの信しんを起おこし円えんの行ぎやうを立て円えんの位ゐに住すせん」弘くわの一いつに云いく円えん信しん
と二ふたうは理り

に放つて信を起す信を行の本と為す」云云、外典に云く、漢王位の説を
信ぜしかば河上の波忽ちに冰り李広父

の☆を思いしかば草中の石羽を飲む」と云えり、所詮・天台・妙樂の釈

分明に信を以て本とせり、彼の漢王も疑はずして大臣のことばを信ぜ

しかば立波こほり行くぞかし、石に矢のたつ是れ又父のかたきと思ひし

至信の故なり、

何に況や仏法においてをや、法華經を受け持ちて南無妙法蓮華經と

唱うる即五種の修行を具足するなり、比の事伝教大師入朽して道邃

和尚に値い奉りて五種頓修の妙行と云う事を相伝し給ふなり、日蓮が

弟子・檀那の肝要是より外に求る事なかれ、神力品に云く、委くは又又

申す可く狭、穴賢穴賢。

建治三年八月二十三日

日蓮

花押 かおう

にちによござんこへんじ
日女御前御返事

◆二四六

にちによござんこへんじ
日女御前御返事

こうあんがんねん
弘安元年六月

五十七歳

御作

1245p

御布施七貫文送り給ひ畢んぬ、属累品の御心は仏・虚空に立ち給ひ

て四百万億那由佗の世界にむさしののすすきのごとく富士山の木のご

とくぞくぞくとひざをつめよせて頭を地につけ身をまげ掌をあはせ

あせを流し、つゆしげくおはせし上行菩薩等・文殊等・大梵天王・帝釈

・日月・四天王・竜王・十羅刹女等に法華経をゆづらん

がために、三度まで頂をなでさせ給ふ、譬えば悲母の一子が頂のか

みをなづるがごとし、爾その時に上行じようぎよう乃至ないし・日月等にちがつ・忝かたじけき仰おおせを蒙こむりて
法華經ほけきようを末代まつだいに弘通ぐつうせんとちかひ給たまひいしなり、藥王品やくおうぼんと申もうすは昔喜見きけん
菩薩ぼさつと申もうせし菩薩ぼさつ・日月淨明徳にちがつじようみょうとく・徳ふつに法華經ほけきようを習ならわせ給たまひいて其その師の恩
と申もうし法華經ほけきようのたうとさと申もうしかんにたへかねて万よろずの重宝じゆうぼうを尽つくさせ
給たまひいしかどもなを心ゆかずして身に油をぬりて千二百歳せんにひゃくじの間・当時とうじの油
にとうしみをに入れてたく

がごとく身をたいて仏を供養くようし後に七万二千歳せんさいが間ひぢをともしびと
してたきつくし法華經ほけきようを御供養候くようき。

されば今法華經ほけきようを後・五百歳の女人供養にょにんくようせば其その功德くどくを一分いちぶんものこ
さずゆづるべし、譬たとえば長者ちやうじやの一子いつさいに一切いたからの財宝たからをゆづるがごとし、
妙音品みやうおんと申もうすは東方とうほうの淨華宿王智仏じやうけしゆくおうちぶつの国くにに妙音菩薩みやうおんぼさつと申もうせし菩薩ぼさつあ
り、昔うんらいおんのうぶつの雲雷音王うんらいおんのうぶつの御代みように妙莊嚴王みやうそうごんの後きさき淨徳夫人じやうとくふじんなり、昔ほけきよう法華經
を供養くようして今妙音菩薩みやうおんぼさつとなれり、釈迦しやかに如来にらいの娑婆世界しやばせかいにして法華經ほけきようを
説とき給たまふにまいりて約束やくそく申もうして末代まつだいの女人にょにんの法華經ほけきようを持たまち給たまうをまも
るべしと云云。觀音品かんのんと申もうすは又普門品ふもんぼんと名なく、始かなは觀世音菩薩かんぜおんぼさつを
持たまち奉たてまつる人ひとの功德くどくを説ときて候と、此かんのんを觀音品かんのんと名なづく後あとには觀音かんのんの持たまち
給たまへる法華經ほけきようを持たまつ人ひとの功德くどくをとけり此ふもんぼんを普門品ふもんぼんと名なく、陀羅尼品だらにぼんと
申もうすは二聖・二天じゆうらせつによ・十羅刹女じゆうらせつによの法華經ほけきようの行者ぎやうじやを守護しゆごす

べき様を説きけり、二聖と申すは薬王と勇施となり・二天と申すは毘沙門と持国天となり十羅刹女と申すは十人の大鬼神女四天下の一切の鬼神の母なり又十羅刹女の母あり鬼子母神是なり、鬼のならひとして人を食す、

人に三十六物あり所謂糞と尿と唾と肉と血と皮と骨と五藏と六腑と髪と毛と氣と命等なり、而るに下品の鬼神は糞等を食し中品の鬼神は骨等を食す上品の鬼神は精氣を食す、此の十羅刹女は上品の鬼神として精氣を食す疫病の大鬼神なり、鬼神に二あり一には善鬼二には惡鬼なり、善鬼は法華經の怨を食す惡鬼は法華經の行者を

食す、今・日本国の去年今年の大疫病は何とか心うべき此を答ふべき様は一には善鬼なり梵王・帝釈・日月・四天の許されありて法華經の怨を食す、二には惡鬼が第六天の魔王のすすめによりて法華經を修行す

る人を食す、善鬼ぜんきが法華經ほけきょうの怨あだを食ふことは官兵ちやうてきの朝敵あさてきを罰するがご

とし、惡鬼あつきが法華經ほけきょうの行者ぎやうじやを食ふは強盜夜討等が官兵を殺

すがごとし、例せば日本国にほんこくに仏法ぶつぽうの渡りてありし時、仏法ぶつぽうの敵たりし物

部の大連守屋等も疫病えきびやうをやみき蘇我そが・宿禰すくねの馬子等もやみき、欽明きんめい・

敏達用明の三代の国王こくおうは心には仏法ぶつぽう釈迦しやくか如来を信じまいらせ給たまひいてあ

りしかども外には国の礼にまかせて天照太神熊野山等てんしやうだいじんくまのさんを仰あおぎまいらせ

させ給たまひひしかども仏と法との信はうすく神の信はあ

つかりしかば強きにひかれて三代の國王・疫病瘡瘡にして崩御ならせ給いき、此をもて上の二鬼をも今の代の世間の人人の疫病をも日蓮が方のやみしぬをも心うべし、されば身をすてて信ぜん人人は・やまぬへんも・あるべし・

又やむともたすかるへんも・あるべし、又大惡鬼に値いなば命を奪はる人も・あるべし、例せば畠山重忠は日本第一の大力の大將なりしかども多勢には終にはほろびぬ。

又日本國の一切の真言師の惡靈となれると並に禪宗・念佛者等が日蓮をあだまんがために國中に入り乱れたり、又梵釈・日月十羅刹の眷屬日本國に乱入せり、兩方互に責めとらんとはげむなり、而るに十羅刹女は総じて法華經の行者を守護すべしと誓はせ給いて候へば一切の法華經を持つ人人をば守護せさせ給うらんと思ひ候

に法華經ほけきようを持つ人ひと人も・或あるは大日經だいにちきようはまされりなど申もうして真言師しんごんしが法華經ほけきようを讀誦どくじゆし候はは・かへりてそしるにて候はなり、又余またの宗宗そうそうも此こを以て押し計はかりるべし、又法華經ほけきようをば經のごとく持つ人ひと人も法華經ほけきようの行者ぎやうじやを・或あるは貪とん・瞋じん・癡ちにより・或あるは世間せけんの事により・或あるはしなじなのふるまひによつて憎にくむ人あり、此こは法華經ほけきようを信しんずれども信しんずる功徳くどくなしかへりて罰ばつをかほるなり、例たとせば父母ふぼなどには謀反ぼうはん等より外ほかは子息しそく等の身みとして此こに背そむけば不孝ふこうなり、父ちちが我われがいとをしきめをとり母ははが我われがいとをしきおとこを奪うばふとも子この身みとして一分いちぶんも違ちがはば現世げんせには天てんに捨てられ

後生ごしやうには必ず阿鼻地獄あびじごくに墮おつる業ごふなり、何いかに況いはや父母ふぼにまされる賢王けんおうに背そむかんをや、何いかに況いはや父母ふぼ國王こくおうに百千万億倍せんまんまされる世間せけんの師しをや、何いかに況いはや出世間せけんの師しをや、何いかに況いはや法華經ほけきようの御師おんしをや。

黄河は千年に一度ひとたびすむといへり聖人は千年に一度ひとたび出ずるなり、仏は無量劫に一度出世ひとたびしゅつせし給ふ、彼には値うといへども法華經には値いがたし、設たとひ法華經に値あい奉るとも末代の凡夫法華經の行者には値いがたし、何ぞなれば末代の法華經の行者は法華經を説まづざる華嚴・阿含・方等・般若・大日經等の千二百余尊よりも末代に法華經を説く行者は勝れて候なるを、妙樂大師釈して云く、供養すること有る者は福十号に過ぎ若し悩乱する者は頭七分に破れ

ん」云云、今・日本国にほんこくの者去年今年の疫病えきびようと去正嘉しょうかの疫病えきびようとは人王始
まりて九十余代に並なき疫病えきびようなり、聖人しょうにんの国にあるをあだむゆへと見
えたり、師子ししを吼ほうる犬は腸切れ日月にちがつをのむ修羅しゅらは頭こころべの破われ候なるはこ
れなり、日本国にほんこくの一切衆生いっさいしゅじやうすでに三分が二はやみぬ又半分は死しぬ今
一分いちぶんは身はやまざれども心はやみぬ、又頭こころべも頭みようにも冥
にも破わりぬらん、罰に四あり総罰そうばち・別罰べつばち・冥罰みようばち・頭罰けんばちなり、聖人しょうにんをあだめ
は総罰そうばち一国にわたる又・四天下してんげ・文六欲・四禪にわたる、賢人けんじんをあだめ
ば但敵人等てきじんなり、今・日本国にほんこくの疫病えきびようは総罰そうばちなり定めて聖人しょうにんの国にある
をあだむか、山は玉をいだけば草木そうもくかれず国に聖人しょうにんあれば其その国やぶ
れず、山の草木そうもくのかれぬは玉のある故とも愚者ぐしやはしらず、国のやぶる
は聖人しょうにんをあだむ故とも愚人ぐにんは弁わきまさるか。

設たとひ日月にちがつの光ありとも盲目もうもくのため用ゆる事なし、設たとひ声ありとも

耳しひのためににの用かあるべき、日本国にほんこくの一切衆生いっさいしゅじょうは盲目もうもくと耳しひのごとし、此の一切いっさいの眼まなこと耳とをくじりて一切いっさいの眼まなこをあけ一切いっさいの耳に物をきかせんはいか程の功德くどくかあるべき、誰の人か此の功德くどくをば計るべき、設たとひ父母子ふぼをうみて眼耳げんに有りとも物を教ゆる師なくば畜生ちくしょうの眼耳げんににてこそあらましか、日本国にほんこくの一切衆生いっさいしゅじょうは十方じゅうほうの中なには西方さいほうの一方一切いっほういっさいの仏ぶつの中なには阿弥陀仏あみだぶつ一切いっさいの行ぎょうの中なには弥陀みだの名号みょうごう此の三を本として余行よぎょうをば兼ねたる人もあり一向いっこうなる人もありしに、某それがしい去ぬる

建長五年より今に至るまで二十余年の間・遠くは一代いちだい聖教しやうきやうの勝劣しやうれつ先後せんご浅深せんじんを立て近くは弥陀念仏みだねんぶつと法華經ほけきやうの題目だいもくとの高下こうげを立て申す程かみいちにんに上一人より下万民ばんみんに至るまで此の事を用ひず、或あるは師師ししに問もんい・或あるは主主に訴へ・或あるは傍輩ほうはいにかたり・或あるは我が身の妻子さいし・眷属けんぞくに申す程

に、国・国・郡・郡・郷・郷・村・村・寺・寺・社・社に沙汰ある程に、人ごとに日蓮にちれんが名を知り法華經ほけきようを念仏ねんぶつに對して念仏ねんぶつのいみじき様法華經ほけきようの叶ひがたき事諸人しよにんのいみじき様・日蓮にちれんわろき様を

申もうす程に上もあだみ下も惡む日本にくむにほん一同に法華經ほけきようと行者ぎようじゃとの大怨敵おんてきとなりぬ、かう申せば日本にほんこくの人人並に日蓮にちれんが方の中にも物におぼえぬ者は人に信ぜられんとあらぬ事を云うと思へり、此は仏法ぶつぽうの道理どうりを信じたる男女なんよ

に知らせんれうに申す、各各の心にまかせ給うべし。

妙莊嚴王品と申すは殊に女人の御ために用る事なり、妻が夫をすすめたる品なり、末代に及びても女房の男をすすめんは名こそかわりたりとも功德は但淨徳夫人のごとし、いはうや此は女房も男も共に御信用あり、鳥の二の羽そなはり車の二つの輪かかれり何事か成ぜざるべき、天あり地あり日あり月あり日てり雨ふる功德の草木花さき菓なるべし。

次に勧発品と申すは釈迦仏の御弟子の中に僧はあまたありしかども迦葉・阿難左右におはしき王の左右の臣の如し、此は小乗經の仏なり、又普賢・文殊と申すは一切の菩薩多しといへども教主釈尊の左右の臣なり、而るに一代超過の法華經八箇年が間十方の諸仏・菩薩等大地微塵よりも多く集まり候しに左右の臣たる普賢菩薩のお

はせざりしは不思議なりし事なり、而れども妙莊嚴王品をとかれてさ
ておはりぬべかりしに東方宝威徳浄王仏の国より万億の伎楽を奏し無
数の八部衆を引率して・おくればせして参らせ給いしかば、仏の御きそ
くや・あし

からんずらんと思ひし故にや色かへて末代に法華經の行者を守護すべ
きやうを・ねんごろに申し上られしかば、仏も法華經を閻浮に流布せ
んことことにねんごろなるべきと申すにやめでさせ給いけん、返つて上の
上位よりもことにねんごろに仏ほめさせ給へり。

かかる法華經を末代の女人・二十八品を品品ごとに供養せばやとお
ぼしめす但事にはあらず、宝塔品の御時は多宝如来釈迦如来・十方の
諸仏・一切の菩薩あつまらせ給いぬ、此の宝塔品はいづれのところにか只
今ましますらんとかが候へば、日女御前の御胸の間・八葉の心蓮華の

内におはしますと日蓮にぢれんは見まいらせて候、例せば

蓮れんのみに蓮華れんげの有あるがごとく后きさきの御腹ぎふくに太子たいしを懷妊かいにんせるがごとし、

十善じゅうぜん

持たもてる

人太子たいし

と生なんとして后きさき

の御腹ぎふくにましませば諸天しよてん此を

守護しゆご

故ゆえに

太子たいし

をば天子てんし

と号なづす、

法華經ほけきやう

二十八品の文字もんじ

六万九千

三百八十四字・二一の

もんじ
文字は字ごとに太子のごとし字毎に仏の御種子なり、闇の中に影あり
人・此をみず虚空に鳥の飛跡あり人・此をみず・大海に魚の道あり人こ
れをみず月の中に四天下の人物一もかけず人・此をみず、而りといへど
も天眼は此をみる。

にちによごぜん おんみ ないしん ほうとうぼん
日女御前の御身の内心に宝塔品まします凡夫は見ずといへども釈迦
たほう じゅつぽう しよぶつ にちれん
・多宝・十方の諸仏は御らんあり、日蓮又此をすいすあらたうとした

うとし、周の文王は老たる者をやしなひていくさに勝ち、其の末・三十

七代・八百年の

間するゑはひが事ありしかども根本の功によりてさかへさせ給ふ、
あじやせ あくにん
阿闍世王は大悪人たりしかども父びんばさら王の仏を数年やしなひま
いらせし故に九十年の間位を持ち給いき、当世も又かくの如く法華經
ゆえ たも たまい とうせ ごと ほけきよう
の御かたきに成りて候代なれば須臾も持つべしとはみえねども・故権の

大夫殿武蔵の前司入道殿の御まつりごと・いみじくて暫く安穩なるか、
其も始終は法華經の敵と成りなば叶うまじきにや。

此の人人の御僻案には念仏者等は法華經にちいなり日蓮は念仏の
敵なり、我等は何れをも信じたりと云云、日蓮つめて云く代に大禍な
くば古にすぎたる疫病・飢饉・大兵乱はいかに、召も決せずして
法華經の行者を二度まで大科に行ひしはいかに・不便・不便、而るに
女人の御身として法華經の御命をつがせ給うは釈迦・多宝・十方の
諸仏の御父母の御命をつがせ給うなり此の功德をもてる人・一閻浮提
に有るべしや、恐恐謹言。

六月二十五日日蓮花押

日女御前御返事

◆二四七

出家功德御書

弘安二年五月

五十八歳御

作

1251p

近日このころ誰やらん承りて申し候は内内還俗げんぞくの心中出来候由・風聞候ひけるは実事じつじにてや候らん虚事そらごとにてや候らん心元なく候間・一筆啓せしめ候、凡父母ふぼの家を出いでて僧となる事は必ず父母ふぼを助くる道にて候なり、出家功德經しゅつげくどくに云く高き三十三天に百千の塔婆とうばを立つるよりも一日出家しゅつげの功德は勝すぐれたり」と、されば其その身は無智無行むちむぎようにもあれかみをそり袈裟けさをかくる形には天魔てんまも恐をなすと見えたり、大集經だいしききやうに云く「頭こうべを剃そり袈裟けさを著けくれば持戒じかい及び毀戒きかいも天人てんにん供養くやうす可べし則すなわち仏を供養くやうするに為なりぬ」云云、又一經いつきやうの文ぶんに有人あるひと海辺をとを

る一人の餓鬼あつて喜び踊れり、其の謂れを尋ねれば我が七世の孫今日出家になれり其の功德にひかれて出離生死せん事喜ばしきなり

と答へたり、されば出家と成る事は我が身助かるのみならず親をも助け上無量の父母まで助かる功德あり、されば人身をうくること難く人身をうけても出家と成ること尤も難し、然るに悪縁にあふて還俗の念起る事浅ましき

次第なり金を捨てて石をとり薬を捨てて毒をとるが如し、我が身惡道に墮つるのみならず六親眷属をも惡道に引かん事不便の至極なり。

其の上在家の世を渡る辛勞一方ならずやがて必ず後悔あるべし、只親のなされたる如く道をちがへず出家にてあるべし、道を違へずば十羅刹女の御守り堅かるべし、道をちがへたる者をば神も捨てさせ給へる理りにて候なり、大勢至經に云く「衆生五の失有り必ず惡道に墮ち

ん一には出家還俗しゅつげんぞくの失とがなり、又云く 田家しゅつけの還俗げんぞくは其その失とが
五逆ごぎやくに過すぎたり、五逆罪ごぎやくざいと申もうすは父を殺し母を殺し仏を打ち奉たてまつりな
んどする大なる失とがを五聚いつつあつめて五逆罪ごぎやくざいと云うなり、されば此この五逆罪ごぎやくざいの
人は一中劫むげんじこくの間無間地獄むげんじこくに墮おちて浮ぶ事なしと見えたり。

然るに今宿善薰發して出家せる人の還俗の心付きて落つるならば彼
の五逆罪の人よりも罪深くして大地獄に墮つべしと申す經文なり、
能く能く此の文を御覽じて思案あるべし、我が身は天よりもふらず地
よりも出でず父母の肉身を分たる身なり、我が身を損ずるは父母の身
を損ずるなり、此の道理を弁へて親の命に隨ふを孝行と云う
親の命に背くを不孝と申すなり、所詮心は兎も角も起れ身をば教の
如く一期出家にてあらば自ら冥加も有るべし、此の理に背きて還俗せ
ば仏天の御罰を蒙り現世には浅ましくなりはて後生には三惡道に墮ち
ぬべし、能く能く思案あるべし、身は無智無行にもあれ形出家にてあら
ば里にも喜び某も祝著たるべし、況や能き僧にて候はんをや、委細の
趣・後音を期し候。

弘安二年五月日

日蓮 にちれん

花押 かおう

◆二四八

妙一尼御前御消息 あまごぜん しやうそく

1252

p

妙一尼御前 あまごぜん

夫^それ天に月なく日なくば草木^{そうもく}いかでか生ずべき、人に父母^{ふぼ}あり一人も
かけば子息^{こども}等そだちがたし、其^その上過去^{かこ}

の聖靈^{しやうりやう}は、或^{ある}は病子あり、或^{ある}は女子あり、とどめをく母もかいがいしか
らず、たれにゐるあつてか冥途^{めいと}にをもむき給^{たま}いけん。

大覺世尊^{だいかくせそん}・御捏盤^{ぎねっばん}の時なげいてのたまはく、我^{ねはん}涅槃^{ねはん}すべし但心にかか
る事は阿闍世王^{あじゃせ}のみ、迦葉童子^{かしょうどうじ}菩薩^{ぼさつ}・仏に申^{もう}さく仏は平等^{びやうどう}の慈悲^{じひ}なり

一切衆生のため^{いっさいしゆじょう}にいのちを惜^{おし}み給^{たま}うべし、いかにかきわけて阿^あ笹^さ吾^ご人と
をほせあるやらんと問^といまいらせしかば、其^その御^ご返^{へん}事^じに云^いく 譬^{たと}えば
一人にして七子有^あり是^この七子の中に一子病^{びやう}に遇^あえ

り、父母の心平等ならざるには非ず、然れども病子に於ては心則ち偏に重きが如し」等云云、天台摩訶止觀に此の經文を釈して云く
譬え七子の父母平等ならざるには非ず然れども病者に於ては心則ち偏に重きが如し」等云云・とこそ仏は答えさせ給いしか、文の心は人にはあまたの子あれども父母の心は病する子にありとなり、仏の御ためには一切衆生は皆子なり其の中罪ふかくして世間の父母をころし仏經のかたきとなる者は病子のごとし、しかるに阿闍世王は摩竭提国の主なり・我が大檀那たりし頻婆舍羅王をころし我がてきとなりしかば天もすてて日月に變いで地も頂かじとふるひ・万民みな仏法にそむき・他国より摩竭国をせむ、此等は偏に惡人・提婆達多を師とせるゆへなり、結句は今日より惡瘡身に出て三月の七日・無間地獄に墮つべし、これがかなしければ我涅槃せんこと心にかかるという

なり、我阿闍世王あじやせをすくひなば一切いっさいの罪人ざいにん・阿闍世王あじやせのごとしと・なげかせ給たまいき。

しかるに聖靈しょうりやうは、或あるは病子あり・或あるは女子あり・われすて冥途めいどにゆきなばかれたる朽木のやうなるとしより尼が一人とどまり此の子どもをいかに心ぐるしかるらんと・なげかれぬらんとおぼゆ、かの心の・かたがたには又は日蓮にちれんが事・心にかからせ給たまいけん、仏語ぶつごむなしからざれば法華經ほけきやうひろまらせ給たまうべし、それについては此の御房ごぼうは

いかなる事もありて・いみじくならせ給たまうべしとおぼしつらんに、いうか
いなく・ながし失うしなしかば・いかにや・いかにや法華經ほけきやう十羅刹じゆうらせつはとこそ・を
もはれけんに、いままでだにも・ながらえ給たまいたりしかば日蓮にちれんがゆりて
侯そうらいし時に悦よろこばせ給たまはん。

又いゑし事むなしからずして・大蒙古国だいもうこくもよせて国土こくどもあやをしげに

なりて候そうらへば・いかに悦よろこび給たまはん、これは凡夫ぼんぷの心なり、法華經ほけきやうを信ずる人は冬のごとし冬は必ず春となる、いまだ昔よりきかず・みず冬の秋とかへれる事を、いまだきかず法華經ほけきやうを信ずる人の凡夫ぼんぷとなる事を、經文きやうもんには君有にやくう開法者無二小成仏じやうぶつ」ととかれて候。

故聖靈しやうりやうは法華經ほけきやうに命をすてて・をはしき、わづかの身命しんみやうをささえしところを法華經ほけきやうのゆへにめされしは命をす

つるにあらずや、彼の雪山童子の半偈のために身をすて薬王菩薩の臂をやき給いしは彼は聖人なり火に水を入るるがごとし、此れは凡夫なり紙を火に入るるがごとし・此れをもつて案ずるに聖靈は此の功德あり、大月輪の中

か大日輪の中か天鏡をもつて妻子の身を浮べて十二時に御らんあるらん、設い妻子は凡夫なれば此れをみずきかず、譬へば耳しるたる者の雷の声をきかず目つぶれたる者の日輪を見ざるがごとし、御疑あるべからず定めて御まほりとならせ給うらん・其の上さこそ御わたりあるらめ。

力あらばとひまひらせんと・をもうところに衣を一つ給ぶでう存外の次第なり、法華経はいみじき御経にてをはすれば・もし今生にいきある身ともなり候いなば尼ごぜんの生きてをわしませ、んあれ、をさなきき

んだち等をばかり見たてまつるべし。

さどの国と申しこれと申し下人・一人つけられて候は・いつの世にかわ
すれ候べき、たてまつり候べし、南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經・
恐恐謹言。

五月 日

妙一尼御前

日蓮

花押

◆二四九

妙一尼御前御返事

弘安三年五月 五十

九歳御作

1255p

夫信心と申すは別にこれなく候、妻のをとこをおしむが如くをとこの妻に命をすつるが如く、親の子をすてざるが如く子の母にはなれざるが如くに、法華經・釈迦・多宝・十方の諸仏・菩薩・諸天善神等に信を入れ奉りて南無妙法蓮華經と唱へたてまつるを信心とは申し候なり、しかのみならず正直捨方便・不受余經一偈の經文を女のかがみをすてざるが如く男の刀をさすが如く、すこしもすつる心なく案じ給うべく候、あなかしこ・あなかしこ。

五月十八日 日蓮花押 妙一尼御前御返事

◆二五〇

妙一女御返事

弘安三年七月

五十九

歳御作

1255p

問うて云く、日本国に六宗・七宗八宗有り何れの宗に即身成仏を
立つるや、答えて云く伝教大師の意は唯法華經に限り弘法大師の意は
唯真言に限れり、問うて云く其の証拠如何、答えて云く伝教大師の
秀句に云く 当に知るべし他宗所依の經には都て即身入無し一分即入
すと雖も八地已上に推して凡夫身を許さず天台法華宗のみ具に
即入の義有り」云云、又云く 能化所化俱に歴劫無し妙法經力
即身成仏す」等云云、又云く 当に知るべし此の文に成仏する所の人を

問うて此の經の威勢を顯すなり」と等云云、此の釈の心は即身成仏は
唯法華經に限るなり。

問うて云く弘法大師の証拠如何、答えて云く弘法大師の二教論に
云く菩提心論に云く唯真言法の中に即身成仏する故は是れ三摩地の
法を説くなり諸教の中に於て關いて書さず、論して曰く此の論は竜樹
大聖の所造千部の

論の中に秘藏肝心の論なり此の中に諸教と謂うは他受用身及び變化身等の所説の法諸の顯教なり、是れ三摩地の法を説くとは自性法身の所説秘密真言の三摩地の行是なり金剛頂十万頌の經等と謂う是なり

問うて云く此の兩大師所立の義水火なり何れを信ぜんや、答えて云く此の二大師は俱に大聖なり同年に入唐して兩人同じく真言の密教を伝受す、伝教大師の兩界の師は順・曉和尚・弘法大師の兩界の師は慧果和尚・順・曉・慧果の二人俱に不空の御弟子なり、不空三蔵の師は慧果和尚・順・曉・慧果の二人俱に不空の御弟子なり、大日如来六代の御弟子なり、相伝と申し本身といひ世間の重んずる事日月のごとし、左右の臣にことならず末学の膚にうけて是非しがたし、定めて惡名天下に充滿し大難を其の身に招くか然りと雖も試に難じて両義の是非を糾明せん、問うて云く弘法大師の即身成仏は真言

に限ること何れの經文何れの論文ぞや、答えて云く弘法大師は竜樹

菩薩の菩提心論に依るなり、問うて云く其の証拠如何、答えて

云く弘法大師の二教論に菩提心論を引いて云く唯真言法の中のみ

乃至諸教の中に於て闕いて書さず「云云、問うて云く經文有りや、答

えて云く弘法大師の即身成仏義に云く六大無礙にして常に瑜伽なり

四種の曼荼各離れず三密加持すれば速疾に顯る重重にして帝網の如く

なるを即身と名く、法然として薩般若を具足す心王心数剎塵

に過たり各五智無際智を具す円鏡力の故に実の覺智なり」等云云、

疑つて云く此の釈は何れの經文に依るや、答えて云く金剛頂經

大日經等に依る、求めて云く其の經文如何、答えて云く弘法大師其の

証文を出して云く此の三昧を修する者は現に仏菩提を証す」文、又

云く此の身を捨てずして神境通を逮得し大空位に遊歩して身秘密を

成す「文、又云く我本より不生なるを覺る」文、又云く「諸法は本より不生なり」云云。

難じて云く此等の經文は大日經・金剛頂經の文なり、然りと雖も經文は或は大日如來の成正覺の文、或は眞言の行者の現身に五通を得るの文、或は十回向の菩薩の現身に歡喜地を証得する文にして猶生身得忍に非ず何に況や即身成仏をや、但し菩提心論は一には經に非ず論を本とせば背上向下の科・依法不依人の仏説に相違す。

東寺の眞言師日蓮を惡口して云く汝は凡夫なり弘法大師は三地の菩薩なり、汝未だ生身得忍に非ず弘法大師は帝の眼前に即身成仏を現ず、汝未だ勅宣を承けざれば大師にあらず日本国の師にあらず等云云は一、慈覺大師は伝教・義眞の御弟子智証大師は義眞・慈覺の御弟子安然和尚は安慧和尚の御弟子なり、此の三人の云く法華

てんだいしゅう 天台宗は理秘密の即身成仏真言宗は事理俱密の即身成仏と云云、
でんぎょう 伝教・弘法の両大師何れもをろかならねども聖人は偏頗なきゆへに
じかく 慈覚・智証安然の三師は伝教の山に栖むといへども其の義は弘法東寺の
心なり、随つて日本国・

四百余年は異義なし汝不肖の身としていかんが此の悪義を存ずるや是
二、答えて云く悪口をはき悪心を・をこさば汝にをいては此の義申す
まじ、正義を聞かんと申さば申すべし、但し汝等がやうなる者は物を
いはずば・つまりぬとをもうべし、いうべし悪心を・をこさんよりも悪口
をなさんよりもきらきらとして候経文を出して・汝が

信じまいらせたる弘法大師の義をたすけよ、悪口悪心をもてをもうに
きょうもん 経文には即身成仏無きか、但し慈覚・智証安然等の事は此れ又覚証
の両大師・日本にして教大師を信ずといへども、漢土にわたりて有りし

時・元政・法全等の義を信じて心には教大師の義をすて、身は其の山に住すれどもいつわりてありしなり。

問うて云く汝が此の義はいかにしてをもひいだしけるぞや、答えて云く伝教大師の釈に云く、当に知るべし此の文は成仏する所の人を問うて此の經の威勢を顯すなり」とかかれて候は、上の提婆品の我於海中の經文をかきのせてあそばして候、釈の心はいかに人申すとも即身成仏の人なくば用ゆべからずと・かかせ給へり、いかにも純円一実の經にあらずば即身成仏はあるまじき道理あり、大日經・金剛頂經等の真言經には其の人なし又・經文

を見るに兼・但・対・帝の旨分明なり、二乗成仏なし久遠実成あとをけづる、慈覺・智証は善無畏・金剛智・不空三藏の釈にたばらかされて、をはするか、此の人人は賢人・聖人とは・をもへども遠きを貴んで近き

をあなづる人なり、彼の三部經さんぶきやうに印と真言しんごんとあるにばかされて大事だいじの
即身成仏そくしんじやうぶつの道をわすれたる人人ひとびとなり、然しかるを当時とうじ・叡山えいざんの

ひとびと 法華經の即身成仏のやうを申すやうなれども慈覺大師安然等の
即身成仏の義なり、彼の人人の即身成仏は有名無実の即身成仏なり
其の義専ら伝教大師の義に相違せり、教大師は分段の身を捨てても捨て
ずしても法華經の心にては即身成仏なり、覺大師の義は分段の身を
すつれば即身成仏にあらずと・をもはれたるがあへて即身成仏の義をし
らざる人人なり。

求めて云く慈覺大師は伝教大師に値い奉りて習い相伝せり汝は四
百余年の年紀をへたてたり如何、答えて云く師の口より伝うる人必ず
あやまりなく後にたづねあきらめたる人をろそかならば經文をすてて
四依の菩薩につくべきか、父母の譲り状をすてて口伝を用ゆべきか、
伝教大師の御釈無用なり慈覺大師の口伝真実なるべき
か、伝教大師の秀句と申す御文に一切經になき事を十いだされて候に

第八に即身成仏化導勝とかかれて次下に 当に知るべし此の文成仏する所の人を問うて此の經の威勢を顯すなり、乃至当に知るべし他宗所依の經には都て即身入無し」等云云、此の釈を背きて覺大師の事理俱密の大日經の即身成仏を用ゆべきか。

求めて云く教大師の釈の中に菩提心論の唯の字を用いざる釈有りや不や、答えて云く秀句に云く「能化所化俱に歷劫無く妙法經力即身成仏す」等云云、此の釈は菩提心論の唯の字を用いずと見へ候、問うて云く菩提心論を用いざるは竜樹を用いざるか答えて云く但恐くは訳者の曲會私情の心なり、疑つて云く訳者を用いざれば法華經の羅什をも用ゆ可からざるか、答えて云く羅什には現証あり不空には現証なし、問うて云く其の証如何、答えて云く舌の焼けざる証なり具には聞くべし、求めて云く覺証等は此の事を知らざるか、答えて

云く此の兩人は無畏等の三蔵を信ずる故に伝教大師の正義を用いざるか、此れ則ち人を信じて法をすてたる人人なり。

問うて云く日本国にいまだ覚証然等を破したる人をきかず如何、
答えて云く弘法大師の門家は覚証を用ゆべしや覚証の門家は弘法
大師を用ゆべしや。

問うて云く兩方の義相違すといへども汝が義のごとく水火ならず
誹謗正法とはいわず如何、答えて云く誹謗正法とは其の相貌如何
外道が仏教をそしり小乗が大乘をそしり・權大乘が実大乘を下し
実大乘が權大乘に力をあわせ詮ずるところは勝を劣という法にそむく
がゆへに謗法とは申すか、弘法大師の大日經を法華經・華嚴經に勝れ
たりと申す証文ありや、法華經には華嚴經・大日經等を下す文分明
なり、所謂已今当等なり、弘法尊しと雖も
釈迦・多宝・十方分身の諸仏に背く大科免れ難し事を權門に寄せて
日蓮を・をどさんより但正しき文を出だせ、汝等は人をかたうどとせ
り日蓮は日月・帝釈・梵王をかたうどとせん、日月・天眼を開いて御覽
あるべし、將又日月の宮殿には法華經と大日經と華嚴經とをはすとけ
うしあわせて御覽候へ弘法・慈覺・智証安然の義と日蓮が義と

は何れがすぐれて候、日蓮が義もし百千に一つも道理に叶いて候はば、
いかにたすけさせ給はぬぞ彼の人人の御義もし邪義ならば、いかに
日本国の一切衆生の無眼の報を候はんをば不便とはをぼせ候はぬぞ。
日蓮が二度の流罪結句は頸に及びしは釈迦・多宝・十方の諸仏の御
頸を切らんとする人ぞかし日月は一人にてをはせども四天下の一切
衆生の眼なり命なり、日月は仏法をなめて威光勢力を増し給うと見
へて候、仏法のおぢわいをたがうる人は日月の御力をうばう人、一切
衆生の敵なり、いかに日月は光を放ちて彼等が頂をてらし寿命
と衣食とをあたへてやしなひ給うぞ、彼の三大師の御弟子等が法華經
を誹謗するは偏に日月の御心を入れさせ給いて謗ぜさせ給うか、其の
義なくして日蓮がひが事ならば日天もしめし彼等にもめしあはせ其の
理にまけてありとも其の心ひるがへらずば天寿をもめしとれかし。

其その義はなくしてただ理りふじん不尽に彼等かれらにさるの子を犬にあづけねづみ
の子を・にたぶやうにうちあづけて・さんさんにせめさせ給たまいて彼等かれらを
罰たまし給はぬ事心へられず、日蓮にぢれんは日月にちがつの御ためにはをそらくは大事だいじの御
かたきなり、教主きようしゆしやくそん釈尊おんまえの御前にてかならずうたへ申もうすべし、其そのの時ときうら
みさせ給たまうなよ、日月にちがつにあらずとも地神も海神

もきかれよ日本にほんの守護神しゅごしんもきかるべし、あへて日蓮にちれんが曲意まがごころはなきなり、
いそぎいそぎ御計ごけいらいあるべし、ちちせさせ給たまいて日蓮にちれんをうらみさせ
給たまうなよ、南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやう・南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやう、恐恐きようきよう。

七月十四日

日蓮にちれん

花押かおう

妙一女御返事ごへんじ

◆二五一

妙一女御返事ごへんじ

弘安三年十月

五十九歳御

作 1260p

去る七月いぬ ふずき中旬しんごんの比ほつけ、真言そくしんじやうぶつ・法華ほうもんの即身成仏だいたいの法門まい・大体註し進らせ
候そ、其その後ほけきは一定法華經そくしんじやうぶつの即身成仏もちを御用もちい候らん、さなく候ては

とうせ ひとびと
当世の人人の得意候無得道の即身成仏なるべし不審なり、先日書きて
まい
進らせ候いし法門能く心を留めて御覽あるべし、其の上即身成仏と
もう ほうもん
申す法門は世流布の学者は皆一大事とたしなみ申す事にて候ぞ、
なかんずく もんてい ばんじ
就中予が門弟は万事をさしをきて此の一事に心を留む可きなり。

けんちよう
建長五年より今弘安三年に至るまで二十七年の間在在処処にして

もう のべ
申し宜べたる法門繁多なりといへども所詮は只此の一途なり、世間の

がくしや しんこん
学者の中に真言家に立てたる即身成仏は釈尊所説の四味三教に接入

だいにちきよう さんぶきよう べつきよう ぼさつ じゆしよく かんちよう しごく そくしんじようぶつ
したる大日経等の三部経に別教の菩薩の授職灌頂を至極の即身成仏

等と思う、是は七位の中の十回向の菩薩の歡喜地を証得せる

えんきよう そくしんじようぶつ ほうもん
体為なり、全く円教の即身成仏の法門にあらず、仮令經文にあるよ

のし のし
しを☆るとも歡喜行証得の上に得たるところの功德を沙汰する分齊

こ じゅうち ぼさつ しよきよう じゅうち とうかく
にてあるなり、是れ十地の菩薩の因分の所行にして十地等覺は果分を

知らず、円教えんきょうの心

を以て奪つていへば六即そくの中の名字みょうじ觀行かんぎょうの一念いちねんに同じ、与えて云う時は
觀行即かんぎょうそくの事理じり和融わじゅうにして理慧りゑ相応そうおうの觀行かんぎょうに及およばず、或あるは菩提心論ぼだいしんろんの
文ぶんにより、或あるは大日經だいにとくきょうの三部の文によれども即身成仏そくしんじょうぶつにこそあらざら
め生身得忍しょうしんとくにんに

だにも云いよせざる法門なり。

されば世間の人人は菩提心論の唯真言法中の文に落されて即身成仏

は真言宗に限ると思へり、之に依つて正しく即身成仏を説き給いたる

法華經をば戲論等云云、止観五に云く設し世を厭う者も下劣の乗を

翫んで枝葉に攀附す狗作務に狎れ☆猴を敬いて帝釈と為し瓦礫を

崇めて是れ明珠とす此の黒闇の人豈道を論ず可けんや」等云云、此の

意なるべし、歎かわしきかな華嚴・真言法相の学者・徒に・いとまをつい

やし即身成仏の法門をたつる事よ、

夫れ先ず法華經の即身成仏の法門は竜女を証拠とすべし、提婆品に

云く須臾の頃に於て便ち正覺を成ず」等云云乃至變じて男子と成

る」と、又云く即ち南方無垢世界に往く」云云、伝教大師云く龍化

の竜女も歴劫の

行なく無く所しよげ化けの衆しゆじやう生じやうも亦またり歷りやう劫くわう無くし能のう化け所しよげ化け俱ともに歷りやう劫くわう無くし妙みやう法ぽう經きやう力りき
即そく身しん成じやう仏ぶつす」等云云、又法華經の即そく身しん成じやう仏ぶつに二種あり迹しやく門もんは理具の
即そく身しん成じやう仏ぶつ本門は事の即そく身しん成じやう仏ぶつなり、今本門の即そく身しん成じやう仏ぶつは当位即妙
本有ほんぬ不ふ改かいと斷きずるなれば肉身を其そのまま本有ほんぬ無む作さの三身如来と云え
る是これなり、此の法門は一代諸教の中に之これ無なし文句に云く「諸教の中に
於おいて之これを秘して伝えず」等云云。

又法華經の弘ひろまらせ給たまうべき時に二度有り所謂在世と末法となり、
修しゆ行ぎやうに又二意有り仏世は純円一実・滅後末法の今の時は一向本門の
弘ひろまらせ給たまうべき時なり、迹しやく門もんの弘ひろまらせ給たまうべき時は已すでに過すぎて二
百余年になり、天台・伝教こそ其の能弘の人にてましまし候いしかども
それもはや入滅し給いぬ、日蓮は今時を得たり豈此の所囑の本門を弘ひろ
めざらんや、本・迹二門は機も法も時も遙に各別なり。

問うて云く日蓮計り此の事を知るや、答えて云く「天親・竜樹
ないがんれいねん
内鑑冷然」等云云、天台大師云く「後の五百歳遠く妙道に沾わん」
でんぎようだいし
伝教大師云く「正像稍過ぎ已つて末法太だ近きに有り法華一乗の機
まさ
今正しく是れ其の時なり、何を以て知ることを得んや、安樂行品に
いわ
云く末世法滅の時」云云、此等の論師・人師末法闍靜堅固の時・地涌
しゅつげん
出現

し給いて本門の肝心たる南無妙法蓮華經の弘まらせ給うべき時を知り
て恋させ給いて是くの如き釈を設けさせ給いぬ、尚尚即身成仏とは
迹門は能入の門本門は即身成仏の所詮の実義なり、迹門にして得道
せる人人・種類種・相對種の成仏・何れも其の実義は本門寿量品に限
れば常にかく觀念し給へ正觀なるべし。

然るにさばかりの上代の人人だにも即身成仏には取り煩はせ給いし
に、女人の身として度度此くの如く法門を尋ねさせ給う事は偏に只事
にあらず、教主釈尊御身に入り替らせ給うにや竜女が跡を継ぎ給う
か・又☆曇弥女の二度来れるか、知らず御身は忽に五障の雲晴れて
寂光の覺月を詠め給うべし、委細は又又申す可く候。

弘安三年十月五日

日蓮

花押

妙一女御返事ごへんじ

◆二五二

日嚴尼御前御返事あまごぜんごへんじ

弘安三年十一月

五十九歳御作

1262p

弘安三年十一月八日、尼日嚴の立て申す立願の願書並びに御布施の
錢一貫文又たふかたびら一つ法華經の御宝前並びに日月天に申し上げ
候い畢おわんぬ、其の上は私に計り申すに及ばず候叶ひ叶はぬは御信心に
より候べし全く日蓮にちれんがとがにあらず、水すめば月うつる風ふけば木ゆる
ぐごとくみなの御心は水のごとし信のよは

きはにこるがごとし、信心のいさぎよきはすめるがごとし、木は道理
のごとし風のゆるがすは經文をよむがごとしと・をばしめせ、恐恐。

十一月二十九日

日蓮にちれん花押かおう

日嚴あまごぜん尼御前ごへんじ御返事

◆二五三

王日女殿御返事 おうにちにょ

弘安三年 こうあん

五十九歳御

作

1263p

弁房べんのぼうの便宜びんぎに三百文今度このたび二百文給び畢おわんぬ、仏は真に尊くして物に
よらず、昔の得勝童子どうじは沙いさごの餅もちいを仏に供養くようし奉りて阿育大王あそかだいおうと生れ
て一閻浮提えんぶだいの主たりき、貧女ひんにょの我がかしらをおろして油と成せしが
須弥山しゅみせんを吹きぬきし風も此の火をけさず、されば此の二三の鷲目がもくは
日本国にほんこくを知る人の国を寄せ七宝しつぼうの塔を☆利天とりてんにくみあげたらん
にもすぐるべし、法華經ほけきょうの一字は大地だいちの如し万物ばんぶつを出生しゅつしょうす、一字は
大海たいかいの如し衆流しゅうりゅうを納む一字は日月にちがつの如し四天下してんげを照す、此の一字変じ
て仏となる、稲変じて苗なえとなる・苗変じて草となる草変じて米となる・

米變じて人となる・人變じて仏となる女人にょにん變じて妙の一字となる妙の一字變じて台上の釈迦しゃか仏となるべし、南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經、
恐恐謹言。きょうきょうきんげん

王日おおにちどの殿

日蓮にちれん

花押かおう

◆二五四

御輿振御書^{ごしよ}

文永元年^{ぶんえいがんねん}三月

四十三歳御作

与三位公日行

1264p

御文^{おんふみ}並びに御輿振^{ごしよ}の日記^{にっき}給^{たま}ひ候^{もち}いぬ悦^{よろこ}び入^いつて候^{もち}、中堂^{ちゅうどう}炎上^{えんじやう}の事

其^その義^ぎに候^{もち}か山門^{さんもん}破滅^{はめつ}の期^き其^その節^{せつ}に候^{もち}か、此等^{これら}も其^{その}の故^{ゆえ}無^なきに非^{あら}ず

天竺^{てんじく}には祇園^{ぎおん}精舍^{しやうじや}・頭摩^{だうま}寺^じ・漢土^{かんど}には天台^{てんだい}山^{さん}・正像^{しやうざう}二千年^{にせんねん}の内^{うち}に以^{もつ}て

滅尽^{めつじん}せり、今末^{いままつ}法^{ほう}に当^{あた}つて日本^{にほん}国^{こく}計^{けい}りに叡山^{えいざん}有^あり三千^{さんぜん}界^{かい}の中^{なか}の但^{ただ}此^{この}の

処^{ところ}のみ有^あるか、定^あめて惡魔^{あくま}一跡^{ひとあと}に嫉^{とど}を留^{とど}むるか、小乘^{しょうじやう}權教^{ごんきやう}の輩^{やから}も

之^{これ}を妬^{ねた}むか、随^{したが}つて禪僧^{ぜんそう}・律僧^{りつそう}・念仏^{ねんぶつ}者^{もの}・主臣^{おうしん}に之^{これ}を訴^{こた}へ三千^{さんぜん}人^{にん}の大衆^{たいしゆ}

は我^{われ}が山^{さん}・破滅^{はめつ}の根源^{こんげん}とも知^しらず師檀^{しだん}共^{ども}に

破国^{はこく}・破仏^{はぶつ}の因縁^{いんねん}に迷^{まよ}えり、但^{ただ}恃^たむ所^{ところ}は妙法^{みやうほう}蓮華^{れんげ}經^{きやう}第七^{だいしち}の卷^{まき}の後^{のち}・五

百歳・於閻浮提・広宣流布の文か、又伝教大師の「正像稍過ぎ已つて
末法太だ近きに有り法華一乗の機今正しく是れ其の時なり」の釈な
り、滅するは生ぜんが為下るは登らんが為なり、山門繁昌の為に
かくの如き留難を起すか、事事紙面に尽し難し早早見参を期す、
謹言。

三月一日

日蓮

花押

御返事

◆二五五

法門申さるべき様の事

文永六年 四十八

歳御作

与三位公日行

1265p

法門申さるべきやう、選択をばうちをきて先ず法華經の第二の卷の

今此三界の文を開いて釈尊は我等が親父なり等定め了るべし、何の仏

か我等が父母にてはをはします、外典三千余卷にも忠孝の二字こそせ

んにて候なれ忠は又孝の家より出ずとこそ申し候なれ、されば外典は

内典の初門此の心は内典にたがわず候か、人に尊卑・上

下はありといえども親を孝するにはすぎずと定められたるか、釈尊は

我等が父母なり一代の聖教は父母の子を教えたる教経なるべし、其の

中に天上竜宮天竺などには無量無辺の御経ましますなれども、

漢土・日本には・わづかに五千・七千余卷なり、此等の經經の次第
勝劣等は私には弁えがたう候、而るに論師大師先徳には末代の人

の智慧こへがたければ彼の人人の料簡を用ゆべきかのところに、華嚴宗

の五教四教法相・三論の三時二藏・或は三転法輪世尊法久後・

要当說真実の文は又法華經より出て候金口の明說なり、仏說すでに

大に分れて二途なり、譬

へば世間の父母の議の前判後判のごとし、はた又世間の前判後判は

如來の金言をまなびたるか、孝不孝の根本は前判後判の用不用より事

をこれり、かう立て申すならば人人さもやと・をばしめしたらん時申す

べし。

抑淨土の三部經等の諸宗の依經は当分四十余年の内なり、世尊は

我等が慈父として未顯真実ぞと定めさせ給ふ御心はかの四十余年の

きようぎよう

經經に付けとをぼしめし候か、又説眞実の言にうつれとをぼしめし

候か、心あらん人人・御賢察候べきかとしばらくあぢわひてよも仏程の

親父の一切衆生を一子とをぼしめすが眞実なる事をすてて

未顕眞実の不実なる事に付けとはをぼしめさじ、さて法華經にうつり

候はんは四十余年の經經をすてて遷り候べきか、はた又かの經經

並びに南無阿弥陀仏等をばすてずして遷り候べきかとおぼしきところ

に凡夫の私の・

はからいぜひにつけてをそれあるべし、仏と申す親父の仰を仰ぐべしと
まつところに仏定めて云く「正直捨方便」等云云、方便と申すは
無量義經に未顕真実と申す上に以方便力と申す方便なり、以方便力
の方便の内に浄土三部經等の四十余年の一切經は一字一点も漏るべか
らざるか、されば四十余年の經經をすてて法華經に入らざら
ん人人は世間の孝不孝はしらず仏法の中には第一の不孝の者なるべし、
故に第二譬喩品に云く、今此三界乃至雖復教詔而不信受」等云云、
四十余年の經經をすてずして法華經に並べて行ぜん人人は主師親の
三人のをほせを用いざる人人なり。

教と申すは師親のをしゑ詔と申すは主上の詔勅なるべし、仏は閻浮
第一の賢王・聖師・賢父なり、されば四十余年の經經につきて法華經
ほうつらず、又うつれる人人も彼の經經をすててうつらざるは三徳備

えたる親父の仰もちを用いざる人天地にんてんの中に住むべき者にはあらず、この
不孝ふこうの人の住处じゅうしょを経の次下つぎしもに定めて云く 若人にやくにんふしん不信ないし乃至其人命終ごにんみょうじゅう
入阿鼻獄にゅうあびごく等云云、設たとい法華經ほけきょうをそしらずともうつり付ざらん人人ひとびと。
不孝ふこうの失疑とがうたがいなかるべし、不孝ふこうの者
は又惡道疑あくどううたがいなし故に仏は入阿鼻獄と定め給たまいぬ、何いかに況や爾前にぜんの
經經きょうきょうに執心しゅうしんを固かたなして法華經ほけきょうへ遷うつらざるのみならず、善導ぜんどうが
千中無一せんちゅうむいつ・法然ほうねんが捨閑闍しゃかんかく抛ほうとかけるは・あに阿鼻地獄あびじごくを脱のがるべしや、
其その所化しよけ並びに檀那だんなは又申もうすに及およばず、雖復すいふく教詔きょうしう而不信受ふしんじゅと申もうすは孝
に二つあり世間せけんの孝の孝不孝ふこうは外典けいてんの人人ひとびとこれをしりぬべし、内典ないてんの孝
不孝ふこうは設たとい論師等ろんしなりとも実教じつきょうを弁わえざる權教ごんきょうの論師ろんしの流を受けた
る末の論師ろんしなんどは後生ごしやうしりがたき事なるべし、何いかに況や末末の人人ひとびとを
や。

涅槃經の三十四に云く、人身を受けん事は爪上の土・三惡道に墮ち
ん事は十方世界の土・四重・五逆・乃至涅槃經を謗ずる事は十方
世界の土四重五逆乃至涅槃經を信ずる事は爪の上の土」なにとと
か
れて候、末代には五逆の者と謗法の者は十方世界の土のごとしとみ
ぬ、されども當時五逆罪つくる者は爪の上の土・つくらざる者は

じゅうぽうせかい
十方世界の土と説かれ候へば経文きやうもんそらごととなるやうにみ候をくはし

くかんがへみ候へば不孝ふこうの者を五逆罪ごぎやくざいの者とは申し候か、又相似そうじの五逆ごぎやく

と申す事も候、さるならば前王ぜんおうの正法しょうほう・実法じつほうを弘めさせ給えと候を今いま

の王ごんぼうの権法ごんぼう・相似そうじの法を尊んで天子本命てんしほんめいの道場どうじやうたる正法しょうほうの御寺ごきえの

御歸依ごきえうすくして、権法ごんぼう・邪法じゃほうの寺の国に多くいできたれ

るは、愚者ぐしやの眼まなこには仏法ぶつぽう繁盛はんじやうとみへて仏天智者ぶつてんちしやの御眼まなこには古き正法しょうほう

の寺ふやうやくうせ候へば一ふには不孝ふこうなるべし賢かしこけなる父母ふぼの氏寺ふをすつ

るゆへ一ふには謗法ぼうほうなるべし、若ししからば日本国当世にほんこくとうせは国一同に不孝ふこう

謗法ぼうほうの国な

るべし、此の国は釈迦しやか如来にやらいの御所領しよりやう仏の左右臣下さうおみたる大梵天王だいぼんてんのう・

第六天だいろくてんの魔王まおうにたはせ給いて大海たいかいの死骸をとどめざるがごとく宝山くわんがの

曲林まがをいとうがごとく此の国の謗法ぼうほうをかへんとおぼすかと勘かんがえ申すな

りと申せ。

この上捨てられて候四十余年の経経の今に候はいかになんど俗の難
せば返詰して申すべし、塔をくむあししろは塔くみあげては切りすつる
なりなんど申すべし、此の譬は玄義の第二の文に 今の外教若し起れば
方便の教絶す」と申す釈の心なり、妙と申すは絶という事絶と申す事
は此の経起れば已前の経経を断止ると申す事なる

べし、正直捨方便の捨の文字の心・又嘉祥の日出ぬるに星かくるの心な
るべし、但し爾前の経経は塔のあししろなれば切りすつるとも・又塔を
すりせん時は用ゆべし又切りすつべし、三世の諸仏の説法の儀式かくの
ごとし。

又俗の難に云く慈覚大師の常行堂等の難これをば答うべし、内典の
人・外典をよむ得道のためにはあらず才学のためか、山寺の小児の俱舎

の頌をよむ得道のためか、伝教慈覚は八宗を極め給へり一切経をよみ給う、これみな法華経を詮と心へ給はん梯磴なるべし。

又俗の難に云く何にさらば御房は念仏をば申し給はぬ、答えて云く伝教大師は二百五十戒をすて給いぬ時にあたりて法華円頓の戒にまぎれしゆへなり、当世は諸宗の行多けれども時にあたりて念仏をもてなし法華経を謗ずるゆえに金石迷いやすければ唱え候はず、例せば仏十二年が間・常樂我淨の名をいみ給いき、外典にも寒食

のまつりに火をいみあかき物をいむ、不孝ふこうの国と申もうす国をば孝養こうようの人はとをらず、此等これらの義なるべし、いくたびも選択せんちやくをばいろへずして先ずかうたつべし。

又御持仏堂にて法門ほうもん申もうしたりしが面目めんもくななどかかれて候事かへす不思議ふしぎに・をばへ候、そのゆへは僧となりぬ其その上一閻浮提えんぶだいにありがたき法門ほうもんなるべし、設たい等覺とうかくの菩薩ぼさつなりともなにとかをもうべき、まして梵天ぼんてん・帝釈たいしやく等は我等われらが親父釈迦しやか如来にょらいの御所領しよりようをあづかりて正法しょうぼうの僧をやしなうべき者につけられて候、毘沙門びしゃもん等は四天

下の主此等これらが門まほり又四州の王等は毘沙門びしゃもんてん天てんが所従しよじゆうなるべし、其その上・日本秋津嶋にほんあきつしまは四州の輪王りんおうの所従しよじゆうにも及およばず・但嶋おきの長おきなるべし、長おきななどにつかへん者どもに召されたり上ななどかく上・面目めんもくななど申もうす

は・旁かたがた

せんずるところ日蓮にちれんをいやしみてかけるか、総じて日蓮にちれんが弟子でしは京にのぼりぬれば始は・わすれぬやうにて後には天魔てんまつきて物にくるうせう房がごとし、わ御房ごぼうもそれていになりて天のにくまれかほるな。

のぼりていくばくもなきに実名をかうるでう物くるわし、定めてことばつき音なんども京なめりになりたるらん、ねずみがかわほりになりたるやうに鳥にもあらずねずみにもあらず・田舎法師いなかほっしにもあらず京法師きやうほっしにもにず・せう房がやうになりぬと・をばゆ、言をば但いなかことばにてあるべしなかなか・あしきやうにて有るなり、尊成たかなりとかけるは隠岐おきの法皇ほうこうの御実名かかたがた不思議ふしぎなるべし。

かつ・しられて候やうに当世とうせの高僧真言こうそうしんごん・天台等てんだいの人人ひとびとの御いのりは叶かなうまじきよし、前前ぜんぜんに申し候上もう・今年鎌倉かまくらの真言師等しんごんしは去年こぞより変成男子じたんの法をこなはる、隆弁りゅうべんなどは自歎じたんする事かぎりなし、七八百

余人の眞言師・東寺・天台の大法秘法尽して行ぜしがついにむなしくな
りぬ、禪宗・律僧等又一同に行いしかどもかなはず、日蓮
が叶うまじと申すとして不思議なりなんどをどし候いしかども皆むなし
くなりぬ、小事たる今生の御いのりの叶はぬを用つてしるべし大事たる
後生叶うべしや。

真言宗しんこんしゅうの漢土かんどに弘ひろまる始はじは天台てんだいの一念三千いちねんさんぜんを盗ぬすみ取とつて真言しんこんの

教相きょうそうと定さだめて理りの本ほんとし枝葉しやうたる印いん・真言しんこんを宗しゆと立たて宗しゆとして天台宗てんだいしゅうを立たて下くだす条じょう謗法ぼうぼうの根源こんげんたるか、又また華嚴けこん・法相ほっそう・三論さんろんも天台宗てんだいしゅう日本にほんになかりし時ときは謗法ぼうぼうともしられざりしが伝教大師でんぎやうだいし円宗えんしゅうを勘かんえいだし給たまひて後のち謗法ぼうぼうの宗しゆともしられたりしなり、当世真言等とうせしんこんの七宗しちしゆの

者ものしかしながら謗法ぼうぼうなれば大事だいじのいのり叶かなうべしとも・をぼへず、天台宗てんだいしゅうの人人ひとびとは我が宗しゆは正ただなれども邪よこしまなる他宗たしゅうと同おなずれば我が宗しゆの正ただをもしらぬ者ものなるべし、譬たとへば東あづまに迷まよう者ものは対当たいとうの西よしに迷まよい東西まよに迷まようゆへに十方じふぱうに・

迷まようなるべし。

外道げどうの法ほうと申もうすは本内道もとないどうより出いでて候しか、而しかれども外道げどうの法ほうをもつて内道ないどうの敵たきとなるなり、諸宗しよしゅうは法華經ほけきやうよりいで天台宗てんだいしゅうを才学さいがくとして而しかも

てんだいしゅう うしな

天台宗を失うなるべし、天台宗の人人は我が宗は実義とも知らざるゆ

へに我が宗のほろび我が身のかるくなるをばしらずして他宗を助けて我

が宗を失うなるべし、法華宗の人が法華經の題目南無妙法蓮華經とは

となえずして南無阿弥陀仏と常に唱えば法華經を失う者なるべし、例

せば外道は三宝を立つ其の

中に仏宝と申すは南無摩醯修羅天と唱えしかば仏弟子は翻邪の三歸

と申して南無釈迦牟尼仏と申せしなり、此れをもつて内外のしるしと

す、南無阿弥陀仏とは浄土宗の依經の題目なり、心には法華經の

行者と存すとも南無阿弥陀仏と申さば傍輩は念仏者としりぬ、

法華經をすてたる人とをもうべし、叡山の三千人は此の旨を弁えずし

て王法にもすてられ叡山をもほろぼさんとするゆへに自然に三宝に

申す事叶わず等と申し給うべし。

人不審して云く天台・妙楽・伝教等の御釈に我がやうに法華經並びに一切經を心えざらん者は惡道に墮つべしと申す釈やあると申さば、玄の三籤の三及び已今当等をいだし給うべし、伝教大師六宗の學者・日本国の十四人を呵して云く顯戒論の下に云く昔齊朝の光統を聞き今は本朝の六統を見る、実なるかな法華の何況や」等云云、華嚴・真言・法相・三論の四宗を呵して云く依憑集に云く新來の真言家は即ち筆受の相承を泯ぼし、旧到の華嚴家

は則ち影響の軌模を隠す。沈空の三論宗は彈訶の屈恥を忘れ称心の
醉を覆う、著有の法相宗は僕陽の帰依を非し青竜の判経を撥う」等
云云、天台・妙楽・伝教等は真言等の七宗の人人は設い戒定はまつた
くとも謗法のゆへに惡道脱るべからずと定められたり、何に況や禪宗・
浄土宗等は勿論なるべし、されば止観は偏に達磨をこそはして
候めれ、而るに当世の天台宗の人人は諸宗に得道をゆるすのみならず
諸宗の行をうばい取つて我が行とする事いかん、当世の人人ことに
真言宗を不審せんか立て申すべきやう、日本国は八宗あり真言宗
大に分れて二流あり所謂東寺・天台なるべし、法相・三論・華嚴・東寺の
真言等は大乘宗設い定慧は大乘なれども東大寺の小乗戒を持つ
ゆへに戒は小乗なるべし、退大取小の者小乗宗なるべし、叡山の
真言宗は天台円頓の戒をうく全真言宗の戒なし、されば天台宗の

円頓戒えんどんにをちたる真言宗しんこんしゅうなり等申もうすべし、而しかるに座主ざす等の高僧こうそう名を
天台宗てんだいしゅうにかりて一向・真言宗しんこんしゅうによて法華經ほけきょうをさぐるゆへに・叡山えいざん皆みな
謗法ぼうぼうになりて御いのにしるしなきか。

問いわうて云てんだいく天台法華宗ほつげしゅうにたいして真言宗しんこんしゅうの名をけづらるる証文しょうもん

如何いかん、答えて云いわく学生式くわんがくしきに云いわく傳教大師でんきょうだいし作なり天台法華宗てんだいほつげしゅう年分ねんぶん学生式くわんがくしき一首年分いっしゅねんぶん

度者どしやの人おほ傳法者でんぽうしやに加おほえらる凡おほそ法華宗ほつげしゅう天台てんだいの年分ねんぶんは弘仁九年こうにんくわんねんより叡山えいざんに住

せしめて一十二年じふにねん山門さんもんを出いださず兩業りやうごふを修しゅう学がくせしめん、凡おほそ止觀しがん業ごふの者

○凡おほそ遮那しやな業ごふの者おほ等云云とんぐん、顯戒論緣起けんかいろんえんぎの上に云いわく新法華宗しんほつげしゅうを加くわえ

んことを請こまう表一首しやもんさいしゅ、沙門最澄しゃもんさいしやう○華嚴宗けこんしゅうに二人ふにん天台法華宗てんだいほつげしゅうに二人ふにん等

云云とんぐん、又云いわく天台てんだいの業ごふに二人ふにん一人摩訶止觀まかしかんを讀よましむ此等これらは天台宗てんだいしゅうの内に

真言宗しんこんしゅうをば入れて候まちこそ候めれ、嘉祥元年かじやうがんねん六月十五日むつきにじふにちの格いに云いわく右

入唐廻にゅうとうて請益しやうやくす伝灯法師でんとうほふし位円仁えんにんの表いに☆く、伏ふして天台宗てんだいしゅうの本朝ほんちやうに

伝たずわることを尋たずぬれば○延えん暦りやく廿四

年○廿五年特ひとりてんだい天台てんだいの年ねん分ぶん度ど者しや二人ふたりを賜たまう一人ひとりは真言しんごんの業ごふを習ならわし一

人は止しかん觀くわんの業ごふを学まなす○然しかれば則すなわち天台てんだい宗しゅうの止しかん觀くわんと真言しんごんとの両りやう業ごふは

是これ桓武かんむてんのう天皇てんのうの崇建すうけんする所ところ等ら云云うんぐん、叡山えいざんにををいては天台てんだい宗しゅうにたいして

は真言しんごん宗しゅうの名なをけづり天台てんだい宗しゅうを骨こつとし真言しんごんをば肉にくとなせるか。

而るに末代に及びて天台・真言・兩宗中あしうなりて骨と肉と分け座主は一向に真言となる骨なき者のごとし・大衆は多分天台宗なり肉なきもののごとし、仏法に諍いあるゆへに世間の相論も出来して叡山静ならず朝下にわづらい多し、此等の大事を内内は存すべし、此の法門はいまだをしえざりきよくよく存知すべし。

又念仏宗は法華經を背いて浄土の三部經につくゆへに阿弥陀仏を正として釈迦仏をあなづる、真言師・大日をせんとをもうゆへに釈迦如来をあなづる、戒にをいては大小殊なれども釈尊を本とす余仏は証明なるべし、諸宗殊なりとも釈迦を仰ぐべきか、師子の中の虫師子をくらう、仏教をば外道はやぶりがたし内道の内に事いできた
りて仏道を失うべし仏の遺言なり、仏道の内には小乗をもつて大乘を失い權大乘をもつて実大乘を失うべし、此等は又外道のごとし、又

小乗・權大乘よりは実大乘法華經の人人がかへりて法華經をば失はん
が大事にて候べ

し、仏法の滅不滅は叡山にあるべし、叡山の仏法滅せるかのゆえに異国
我が朝をほろぼさんとす、叡山の正法の失するゆえに大天魔日本国に
出来して法然・大日等が身に入り、此等が身を橋として王臣等の御身
にうつり住み

、かへりて叡山三千人に入るゆえに師檀中不和にして御祈☆しるしな
し、御祈請しるしなければ三千の大衆等檀那にすてはてられぬ。

又王臣等・天台・真言の学者に問うて云く念仏・禪宗等の極理は
天台・真言とは一つかとはせ給へば、名は天台真言にかりて其の心も
弁えぬ高僧天魔にぬかれて答えて云く、禪宗の極理は天台・真言の
極理なり・弥陀念仏は法華經の肝心なりなんと答え申すなり、而るを

念仏者・禪宗等のやつばらには天魔乗りうつりて当世の天台真言の
僧よりも智慧かしこきゆえに全くしからず、禪ははるかに天台・真言に
超えたる極理なり、或は云く「諸教は理深我等衆生は解微なり、機
教相違せり得道あるべからず」なんど申すゆへに、天台・真言等の学者・
王臣等・檀那皆奪いとられて御帰依なければ現身に餓鬼道に堕ちて友
の肉をはみ・仏神にいかりをなし檀那をすそし年年に災

を起し・或は我が生身の本尊たる大講堂の教主釈尊をやきはらい・或は生身の弥勒菩薩をほろぼす、進んでは教主釈尊の怨敵となり退いては当来弥勒の出世を過たんとくるい候か、この大罪は経論にいまだとかれず、又此の大罪は叡山三千人の失にあらざ公家・武家の失となるべし。

日本一州上下万人・一人もなく謗法なれば大梵天王帝桓並びに天照大神等隣国の聖人に仰せつけられて謗法をためさんとせらるるか、例せば国民たりし清盛入道王法をかたぶけたてまつり結句は山王大仏殿をやきはらいしかば天照大神正八幡山王等よりきさせ給いて源の頼義が末の頼朝に仰せ下して平家をほろぼされて

国土安穩なりき、今一国挙りて仏神の敵となれり、我が国に此の国を領すべき人なきかのゆへに大蒙古国は起るとみへたり、例せば震旦高麗

等は天竺てんじくについては仏国ぶつこくなるべし、彼の国国禪宗ぜんしゅう・念仏宗ねんぶつしゅうになりて蒙古もうこにほろぼされぬ、日本国にほんこくは彼の二国の弟子でしなり二国のほろぼされんにあに此の国安穩あんのんなるべしや、国をたすけ家を・をもは

人ひと人ひとはいそぎ禪念ぜんねんがともがらを經文きやうもんのごとくいましめらるべきか、經文きやうもんのごとくならば仏神ぶつじん・日本国にほんこくにまします、かれを請しやうしまいらせんと術はおぼろげならでは叶かないがたし、先ず世間せけんの上下万人じやうげばんにん云く八幡大菩薩はちまんたいぼさつは正直しやうじきの頂いただきにやどり給たまい別べつのすみかなし等云云、世間せけんに正直しやうじきの人なければ大菩薩ぼさつのすみかまします、又仏法ぶつぽうの中に法華經ほけきやう計りこそ正直しやうじきの御經ぎきやうにてはおはしませ、法華經ほけきやうの行者ぎやうじやなければ大菩薩ぼさつの御すみか・おはせざるか。

但し日本国にほんこくには日蓮にちれん一人計りこそ世間出世正直せけんしゅつせしやうじきの者にては候へ、其の故は故最明寺入道さいみやうじにやうどうに向つて禪宗ぜんしゅうは天魔てんまのそいなるべしのちに勘文かんもん

もつてこれをつげしらしむ、日本^{にほんこく}の皆人^{みな}無間地獄^{むげんじごく}に墮^おつべし、これほど
有^ある事を正直^{しやうじき}に申^{もう}すものは先代^{せんだい}にもありがたくこそ、これをもつて推
察^{さつ}あるべしそれより外^{ほか}の小事^{しょうじ}曲^{まが}ぐべしや、又聖人^{しやうにん}は言

をかざらずと申^{もう}す、又いまだ顯^{あらわ}れざる後^{あと}をしるを聖人^{しやうにん}と申^{もう}すか、日蓮^{にちれん}
は聖人^{しやうにん}の一分^{いちぶん}にあたれり、此^この法門^{ほうもん}のゆへに二十余所^{にじゅうよ}をわれ結句^{けつこ}流罪^{りゅうざい}
に及^{およ}び身に多くのきずをかをほり弟子^{でし}をあまた殺^{ころ}させたり、比干^{ひかん}にも
こえ伍^ごしそ

にもをとらず、提婆菩薩の外道に殺され師子尊者の檀弥利王に頸をは
ねられしにもをとるべきか、もししからば八幡大菩薩は日蓮が頂をは
なれさせ給いてはいづれの人の頂にかすみ給はん、日蓮を此の国に
用いずばいかんがすべきとなげかれ候なりと申せ、又日蓮房の申し候。
仏菩薩並びに諸大善神をかへしまいらせん事は別の術
なし、禪宗・念仏宗の寺寺を一つもなく失い其の僧らをいましめ叡山の
講堂を造り靈山の釈迦牟尼仏の御魂を請し入れたてまつらざらん外
は諸神もかへり給うべからず、諸仏も此の国を扶け給はん事はかたと
申せ。

◆二五六

十章抄

文永八年五月 五十歳御作

与三位公日行

1273p

華嚴宗けこんしゅうと申もうす宗しゅうは華嚴經けこんきょうの円えんと法華經ほけきょうの円えんとは一しなり而しかれども

法華經ほけきょうの円えんは華嚴けこんの円えんの枝末しまつと云云いふいふ、法相ほつそう・三論さんろんも又またかくのごとし、

てんだいしゅう

天台宗てんだいしゅう彼の義ぎに同どうぜば別宗べつしゅうと立てなにかせん、例れいせば法華ほつけ・涅槃ねはんは一

つ円えんなり先後せんごに依よつて涅槃ねはん尚なおをとるとさだむ、爾前にぜんの円えん・法華ほつけの円えんを一

とならば先後せんごによりて法華ほつけ豈あに劣せうらざらんや、詮せんずるところ・

この邪義じゃぎのをこり此妙しめよう彼妙ひめよう・円実えんじつ不異ふい・円頓えんどん義齊ぎさい・前三ぜんさん為い☆等の釈しやくにば

かされて起おこる義ぎなり、止觀しがんと申もうすも円頓えんどん止觀しがんの証文しょうもんには華嚴經けこんきょうの文ぶんを

ひきて候こうぞ、又二の卷まきの四修しゅう三昧さんまいは多分たぶんは念仏ねんぶつと見みへて候こうなり、源みなもと

濁しずれば流清りゅうせいからずと申もうして爾前にぜんの円えんと法華經ほけきょうの円えんと一つと申もうす者が

止觀しがんを人ひとによませ候こうえば但念仏ねんぶつ者もののごとくにて候こうなり、但止觀しがん

は迹門しやくもんより出でたり本門ほんもんより出でたり本・迹わたくしに亘わたると申もうす三つの義ぎいにし

えよりこれあり、これは且しくこれををく、故ゆえに知る一部の文共に円乗えんじょう開權かいこんの妙觀みょうかんを成すと申して止觀しがん一部は法華經ほけきょうの開會かいえの上に建立こんりゅうせる文なり、爾前にぜん

の經經きょうきょうをひき乃至外典ないしげてんを用いて候も爾前にぜん・外典げてんの心にはあらず、文をばかれども義をばけつりすてたるなり、境は昔に寄ると雖いえども智は必ず円えんに依よる」と申して文殊問方等請觀音等もんぼうとうこうんのんの諸經しよきょうを引いて四種ししゆを立つれども心は必ず

法華經ほけきょうなり 諸文しよぶんを散引さんしんして一代いちだいの文体ぶんたいを該たれども正意たては唯二經ただふたきやうに歸かへりす」と申もうす・これなり。

止觀しがんに十章じふしやうあり大意たいい・釈名しやくめい・体相たいしやう・撰法えつぽう・偏円へんえん・方便ほうべん・正觀しやうがん・果報かほう・起教ききやう・旨歸しきなり、前六重ぜんりくじゆうは修多羅しゆたらに依よると申もうして大意たいいより方便ほうべんまでの六重りくじゆうは先四卷せんしきに限る、これは妙解みやうげ迹門しやくもんの心こころをのべたり、今妙解みやうげに依よつて以もつて正行しやうぎやうを立つと申もうすは第七の正觀しやうがん・十境じゆきやう・十乘じゆじやうの觀法くわんぽう本門ほんもんの心こころなり、一念三千いちねんさんぜん此れよりはじまる、一念三千いちねんさんぜんと申もうす事は迹門しやくもんにすらなを許ゆるされず何いかに況いはや爾前にぜんに分わかたへたる事なり、一念三千いちねんさんぜんの出処しゆくしよは略開りやくかい三の十如実相じつじやうなれども義分ぎぶんは本門ほんもんに限る・爾前にぜんは迹門しやくもんの依義判文いぎはんぶん迹門しやくもんは本門ほんもんの依義判文いぎはんぶんなり、但真実しんじつの依文判義いぶんはんぎは本門ほんもんに限るべし、されば円の行ぎやうまちまちなり沙さをかかず大たい海かいをみるなを円の行ぎやうなり、何いかに況いはや爾前にぜんの經きやうをよみ弥陀みだ等の諸仏しよぶつの名号みやうごうを唱となうるをや。

但これらは時時の行なるべし、真実に円の行に順じて常に口ずさみにすべき事は南無妙法蓮華經なり、心に存すべき事は一念三千の觀法なり、これは智者の行解なり日本国の在家の者には但一向に南無妙法蓮華經ととな

へさすべし、名は必ず体にいたる徳あり、法華經に十七種の名ありこれ通名なり別名は三世の諸仏皆南無妙法蓮華經とつけさせ給いしなり、阿彌陀・釈迦等の諸仏も因位の時は必ず止觀なりき口ずさみは必ず南無妙法蓮華經なり、此等をしらざる天台・真言等の念仏者口ずさみには一向に南無阿彌陀仏と申すあひだ在家の者は一向に念うやう天台・真言等は念仏にてありけり、又善導・法然が入門はすなわち天台・真言の人人も実に自宗が叶いがたければ念仏を申すなり、わづらわしくかれを学せんよりは法華經をよまんよりは一向に念仏を

申もうして浄土じょうどにし

て法華ほけきょう經をもさとるべしと申もうす、此この義ぎ日本にほん國こくに充満じゅうまんせし故ゆえに天台てんだい・
真言しんごんの学がく者在しやざい家の人人ひとびとにすてられて六十余州ろくじゅうしゅうの山寺さんじはうせはてぬるな
り。

九十六種くじゅうろくしゆの外道げどうは仏慧ぶつて比丘びくの威儀いぎよりをこり、日本にほん國こくの謗法ほうぼうは爾前にぜん
の円えんと法華ほつげの円えんと一つという義ぎの盛さかなりしよりこれはじまれり、あわれ
なるかなや、外道げどうは常樂我淨じょうらくがじようと立てしかば仏世ぶつぜにいでまさせ給たまいては
苦く・空くう・無常むじよう・

無我と・とかせ給いき、二乗は空觀に著して大乘にすすまざりしかば
仏誠めて云く五逆は仏のたね塵勞の疇は如来の種二乗の善法は永不
成と嫌わせ給いき、常樂我淨の義こそ外道はあしかりしかども名はよ
かりしぞかし、

而れども仏名をいみ給いき、惡だに仏の種となるましてぜんはとこそを
ぼうれども仏二乗に向いては惡をば許して善をばいましめ給いき。

当世の念仏は法華經を国に失う念仏なり、設いぜんたりとも義分あ
たれりというとも先ず名をいむべし、其の故は仏法は国に隨うべし、
天竺には一向小乗一向大乘大小兼学の国ありわかれたり、震旦亦復
是くの如し、

日本国は一向大乘の国大乘の中の一乗の国なり、華嚴・法相・三論等
の諸大乘すら猶相應せず何に況や小乗の三宗をや、而るに当世には

やる念仏宗と禪宗とは源方等部より事をこれり法相・三論・華嚴の見
を出すべからず、南無阿弥陀仏は爾前にかぎる、法華經にをいては
往生の行にあらず開会の後・仏因となるべし、南無妙法蓮華經
は四十余年にわたらず但法華八箇年にかぎる、南無阿弥陀仏に開会せ
られず法華經は能開・念仏は所開なり、法華經の行者は一期南無
阿弥陀仏と申さずとも南無阿弥陀仏・並びに十方の諸仏の功德を備
えたり、譬えば如意宝珠の如し金銀等の財を備えたり、念仏は一期
申すとも法華經の功德をぐすべからず、譬へば金銀等の如意宝珠をか
ねざるがごとし、譬へば三千大世界に積みたる金銀等の財も一つの
如意宝珠をばかうべからず、設い開会をさ
とれる念仏なりとも猶体内の権なり体内の実に及ばず、何に況や当世
に開会を心得たる智者も少なくこそをはすらめ、設いさる人ありとも

弟子・眷属・所従なんどはいかんがあるべかるらん、愚者は智者の念仏を申し給うをみては念仏者とぞ見候らん、法華經の行者とはよも候はじ、又南無妙法蓮華經と申す人をばいかなる愚者も法華經の行者とぞ申し候はんずらん、当世に父母を殺す人よりも謀反ををこす人よりも天台・真言の学者と云はれ

て善公が礼讃をうたひ然公が念仏をさえづる人人はをそろしく候なり。

この文を止観しかんよみあげさせ給たまいて後ふみのぞの人ひとにひろめてわたらせ給たまうべし、止観しかんよみあげさせ給たまはばすみやかに御わたり候へ。

沙汰さたの事は本より日蓮にちれんが道理どうりだにもつよくば事切れん事かたしと存じて候いしが人ごとに問注もんしゆは法門ぼうもんにはにずいみじうしたりと申し候もうなるときに事切るべしとも・をば候ははず、少弼殿しょうひつより平三郎左衛門さえもんのもとに・わたりて

候とぞうけ給たまわり候、この事のび候わば問注もんしゆはよきと御心得ごころえ候へ又いつにてもよも切れぬ事は候はじ、又切れずば日蓮にちれんが道理どうりとこそ人人ひとびとはをもい候ははんずらめ、くるしく候はず候、当時とうじはことに天台てんだい・真言等しんごんの人人ひとびとの多く来て候なり、事多き故ゆえに留め候とどい了おわんぬ。

◆二五七

教行証御書

文永十二年三月五十四歳御

作 与三位房日進於身延

1276p

夫れ正像二千年に小乗・権大乘を持依して其の功を入れて修行せしかば大体其の益有り、然りと雖も彼れ彼れの経経を修行せし人人は自依の経経にして益を得ると思へども法華経を以て其の意を探れば一分の益なし、所以は何ん仏の在世にして法華経に結縁せしが其の機熟否に依り円機純熟の者は在世にして仏に成れり、根機微劣の者は正法に退転して権大乘経の浄名・思益・觀経・仁王般若経等にして其の証果を取れること在世の如し、されば正法には教行証の三つ俱に兼備せり、像法には教行のみ有つて証無し、今末法に入りては教のみ有つて行証無く

在世結縁ざいせけちえんの者一人も無しごんじつ権実ごんじつの二機き悉ことごとく失うせり、此の時じよくあくは濁惡じよくあくたる
当世とうせの逆謗ぎやくぼうの二人に初めて本門ほんもんの肝心かんじん寿量じゆりやう品の南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうを以
て下種げしゆと為なす是この好き良藥りやうやくを今留とどめて此こに在おく汝取なんじつて服べす可べし差
えじと憂うれる勿なかれ」とは是これなり、乃往過去むかしかこの威音王いおんおう仏ぶつの像法ぞうほうに三寶さんぼうを知
る者一人も無かりしに不輕菩薩ふぎやうばさつしゆつげん出現ふぎやうしゆとして教主きやうしゆと説たまき置たまき給たまい

し二十四字を一切衆生に向つて唱えしめしがごとし、彼の二十四字を聞きし者は一人も無く亦不輕大士に値つて益を得たり、是れ則ち前の聞法を下種とせし故なり、今も亦是くの如し、彼は像法此れは濁惡の末法・彼は初隨喜の行者此れは名字の凡夫彼は二十四字の下種此れは唯五字なり、得道の時節異なりと雖も成仏の所詮は全体是れ同じかるべし。

問うて云く上に挙ぐる所の正像末法の教行証各別なり何ぞ妙樂大師は末法の初冥利無きにあらず且く大教の流行すべき時に抛る」と釈し給うや如何、答えて云く得意に云く正像に益を得し人人は顯益なるべし在世結縁の熟せる故に、今末法には初めて下種す冥益なるべし已に小乗・權大乘爾前・迹門の教行証に似るべくもなし現に証果の者之無し、妙樂の釈の如くんば、冥益なれば人は是を知らず見

ざるなり。

問うて云く末法まつぽうに限りて冥益みょうやくと知る経文きやうもん之これ有りや、答えて云く
法華經ほけきやう第七藥王品やくおうほんに云く此の經は則ちすなわ為閻浮提えんぶだいの人の病りやうやくの良藥なり
若し人病有らんに是の經を聞くことを得ば病即ち消滅しょうめつして不老不死ふろうふしな
らん」等云云、妙樂大師云く「然も後の五百は且く一往いちおうに従う
末法の初冥利無きにあらず且く大教の流行りやうこうす可き時に抛よるが故ゆえに五
百と云う」等云云。

問うて云く汝が引く所の経文きやうもん釈まつぽうは末法の初五百に限ると聞きたり
権大乘經こんだいじやうきやう等の修行の時節じせつは尚末法万年まなねんと云へり如何、答えて曰く前
釈すでに且從一往と云へり再往は末法万年まつぽうまなねんの流行りやうこうなるべし、天台大師上
の経文を釈して云く但當時大利益を獲るのみに非ず後の五百歳遠く
妙道みやうどうに沾うるわん」等云云、是れ末法万年を指せる経釈きやうしやくに非ずや、

法華經第六分別功德品に云く、惡世末法の時能く是の經を持てる者と安樂行品に云く末法の中に於て是の經を説かんと欲す等云云此等は皆末法万年と云う經文なり、彼れ彼れの經經の説は四十余年未顯眞実なり、或は結集者の意に拠るか依用し難し、拙いかな諸宗の學者・法華經の下種を忘れ三五塵点の昔を知らず純円の妙經を捨てて亦生死の苦海に沈まん事よ、円機純熟の國に生を受けて徒に無間・大城に還らんこと不便とも申す許り無し、崑崙山に入りし者の一の玉をも取らずして貧國に歸り梅檀林に入つて瞻蔔を踏まずして瓦礫の本國に歸る者に異ならず、第三の卷に云く飢國より來りて忽ち大王の膳に遇うが如し」第六に云く我が此の土は安穩○我が淨土は毀れず」等云云。

狀に云く難問に云く爾前当分の得道等云云、涅槃經第三に善男子
应当修習」の文を立つ可し之を受けて弘決第三に所謂久遠必無大
者」と会して爾前の諸經にして得道せし者は久遠の初業に依るなるべ
し」と云つて一分の益之無き事を治定して、其の後滅後の弘經に於ても
亦復是くの如く正像の得益証果の人は在世の結縁に依るなる
べし等云云、又彼が何度も爾前の得道を云はば無量義經に四十余年の
經經を仏・我れと未顕眞実と説き給へば我等が如き名字の凡夫は
仏説に依りてこそ成仏を期すべく候へ人師の言語は無用なり、涅槃經
には依法不依人と説かれて大に制せられて候へばなんと立てて未顕
眞実と打ち捨て打ち捨て正直捨方便・世尊法久後なんどの經釈をば
秘して左右無く出すべからず。

又難問に云く得道の所詮は爾前も法華經もこれ同じ、其の故は觀經

の往生・或は其の外・例の如し等云云と立つ可し、又未顕真実其の外
但似仮名字等云云と、又同時の經ありと云はば法師品の已今當の説を
もつて会す可きなり、玄義の三籤の三の文を出す可し、經釈能く能く
料簡して秘す可し。

一 狀に云く真言宗云云等、答う彼が立つる所の如き弘法大師の
戲論無明の辺域何れの經文に依るやと云つて・彼の依經を引かば云う
べし大日如來は三世の諸仏の中には何れぞやと云つて・善無畏三藏・
金剛智等の偽りをば

汝は知れるやと云つて其の後・一行筆受の相承を立つ可し、大日經に
は一念三千跡を削り漢土にして偽りしなり、就中僻見有り毘廬の
頂上を蹈む証文は三世の諸仏の所説に之有りや、其の後・彼云く等
云云、立つ可し

大慢婆羅門が高座の足等云云、彼れ此れ是くのごと、如き次第何なる経文
ろんぶん 論文に之を出すやと等云云、其の外常に教へし如く問答対論あるべし、
たと 設ひ何なる宗なりとも真言宗の法門を云はば真言の僻見を責む可く
候。

次に念仏の曇鸞法師の難行・易行道緯が聖道・浄土善導が雑行・
しょうぎよう 正行法然が捨閑閑抛の文、此等の本経・本論を尋ぬべし、經に於て
ごんじつ 権実の二經有ること例の如し、論に於ても又通別の二論有り、黒白の
二論有ること深く習うべし、彼の依經の浄土三部經の中に是くのごと
等の所説ありや、又人毎に念仏・阿弥陀等之を讀す又前の如し、
しよせん 所詮和漢両国の念仏宗法華經を雜行なんど捨閑閑抛する本経・
ほんろん 本論を尋ぬべし、若し慥なる經文なくんば是くのごと、ごんぎよう
を誹ずるの過罪、法華經の譬喩品の如くば阿鼻大城に墮落して展転

無數劫を經歷し給はんずらん、彼の宗の僻謬を本として此の三世諸仏の皆是真實の証文を捨つる其の罪實と諸人に評判せさすべし、心有

らん人誰か実否を決せざらんや、而して後に彼の宗の人師を強に破すべし、一經の株を見て万經の勝劣を知らざる事未練なる者かな、其上・我と見明らめずとも釈尊並びに多宝分身の諸仏の定判し給へる經文法華經許り皆是真實なるを不真實・未顯真實を已顯真實と僻める眼は牛羊の所見にも劣れる者なるべし、法師品の已今当・無量義經の歷劫修行未顯真實何なる事ぞや五十余年の諸經の勝劣ぞかし、諸經の勝劣は成仏の有無なり、慈覺・智証の理同事勝の眼・善導・法然の余行非機の目・禪宗が教外別伝の所見は東西動転の眼目・南北不弁の妄見なり、牛羊よりも劣り蝙蝠鳥にも

異ならず、依法不依人の經文毀謗此經の文をば如何に恐れさせ給はざるや、惡鬼入其身して無明の惡酒に酔ひ沈み給うらん。

一切は現証には如かず善無畏・二行が横難横死弘法・慈覺が死去の有様・実に正法の行者是くの如くに有るべく候や、觀仏相海經等の諸經並びに竜樹菩薩の論文如何が候や、一行禪師の筆受の妄語・善無畏のたばかり・弘法の戲論慈覺の理同事勝・曇鸞道綽が余行非機・是くの如き人人の所見は權經權宗の虛妄の仏法の習いにてや候らん、

それほどに浦山敷もなき死去にて候ぞやと和らかに又強く両眼を細
めに見・顔貌に色を調へて閑に言上すべし。

状に云く彼此の経経得益の数を挙げ等云云、是れ不足に候と先ず

陳ぶべし、其の後汝等が宗宗の依経に三仏の証・誠之有りや未だ聞か

ず、よも多宝分身は御来り候はじ、此の仏は法華経に來り給いし間・

一仏二言はやはか御坐候べきと次に六難九易何なる経の文に之有り

や、若し仏滅後の人人の偽経は知らず、釈尊の実説五十年の説法の内

には一字・一句も有るべからず候なんと立つ可し、五百塵点の顕本之有

りや三千塵点の結縁説法ありや・一念

信解・五十展転の功德何なる経文に説き給へるや、彼の余経には一二

三乃至十功德すら之無し五十展転まではよも説き給い候はじ、余経に

は一二の塵数を挙げず何に況や五百三千をや、二乗の成・不成竜畜

下賤げせんの即身成仏そくしんじょうぶつ今

の經に限こんきようれり、華嚴けこん・般若等はんによの諸大乘經しよだいじようきように之これ有りや、二乗作仏にじようさぶつは始め

て今經こんきように在り、よも天台大師程てんだいだいしほとの明哲めいせつの弘法こうぼう・慈覺じかくの如ごとき無文無義むぎの

偽いつはりりはおはし給たまはじと我等われらは覺おほえ候、又惡人あくにんの提婆だいば天道國てんどうこくの成道じやうどう

法華經ほけきように並ならびて何いかなる經にか之これ有りや、然しかりと雖いえども万よろずの難なんを聞きいて

何いかなる經にか十法界じふほくがいの開會等かいえ草木成仏そうもくじやうぶつ之これ有りや、天台てんだい・妙樂みやうらくの無非

中道ちゆうどう惑耳驚心わくにきやうしんの釈じかくは慈覺ちしやう・智証ちしやうの理同事勝りどうじしやうの異見いけんに之これを類るいす可べく候

や、已すでに天台等てんだいは三国伝灯さんこくでんとうの人師にんし・普賢ふげん開発かいはつの聖師せいし・天真てんしん・堯明はつめいの權者ごんしや

なり、豈經論あにきやうろんになき事を偽いつはりり釈しやくし給たまはんや、彼れ彼れの經經きやうきやうに何いかな

る一大事いちだいじか之あ有あるや、此の經には二十の大事だいじあり就なかならず中五百塵点じんてん顕本

の寿量じゆりやうに何いかなる事を説とき給たまへるとか人人ひとびとは思召しめし候、我等われらが如ごとき凡夫ぼんぶ

無始むし已來生死このかたしやうじの苦底くるぞこに沈輪ちんりんして仏道ぶつどうの彼岸ひがんを夢にも知らざりし衆生しゆじやう

界を・無作本覺の三身と成し實に一念三千

の極理を説くなんと淺深を立つべし、但し公場ならば然るべし私に問

註すべからず、慥に此の法門は汝等が如き者は人毎に座毎に日毎に

談ずべくんば三世諸仏の御罰を蒙るべきなり、日蓮已証なりと常に申

せし是なり、大曰

經に之有りや、淨土三部經の成仏已來凡歷十劫之に類す可きや、な

んど前後の文乱れず一一に会す可し、其の後又云うべし、諸人は推量

も候へ是くの如くいみじき御經にて候へばこそ多宝遠來して証・誠を加

え分身來集し

て三仏の御舌を梵天に付け不虛妄とは☆しらせ給いしか、地涌千界出現して濁惡末代の当世に別付属の妙法蓮華經を一閻浮提の一切衆生に取り次ぎ給うべき仏の勅使なれば・八十萬億の諸大菩薩をば止善男子と嫌はせ給しか等云云、又彼の邪宗の者どもの習いとして強に証文を尋ぬる事之有り、涌出品並びに文句の九・記の九の前三後三の釈を出すべし、但日蓮が門家の大事之に如かず。

又諸宗の人・大論の自法愛染の文を問難とせば、大論の立所を尋ねて後執權謗実の過罪をば竜樹は存知無く候いけるか、余經は秘密に非ず法華是れ秘密」と仰せられ・譬如大藥師と此の經計り成仏の種子と定めて又悔い返して目法愛染・不免墮惡道」と仰せられ候べきか、さで有らば仏語には「正直捨方便・不受余經一偈」なると法華經の実語には大に違背せり、よもさにては候はじ、若し末法の当世時剋相應せる

法華經ほけきょうを謗ぼうじたる弘法曇鸞こうぼうどんらんなどを付法藏ふぼうぞうの論師ろんし釈尊しゃくそんの御記文きもんにわたらせ給たまう菩薩ぼさつなれば鑒知かんちしてや記せられたる論文ろんぶんなるらん、覺束無おぼつかしなんどあざむくべし、御辺みへや不免墮惡道あくとどうの末学まつがくなるらん 痛敷候いたわしくそうろう、未来無数劫みらいむしゅこつの人数にんずうにてや有あるらんと立つ可べし。

又律宗りつしゅうの良觀りょうかんが云いわく法光寺殿そじょうへ訴狀たてまつそを奉る其の狀いに云く、忍性年来にんじやう歎なげいて云いわく当世とうせ・日蓮法師にちれんほつしと云える者世しやうに在り齋戒さいがいは墮獄だごくす云云、所詮しよせん何なる經論きやうろんに之有これありや是一、又云いわく当世とうせ・日本国にほんこく上下じやうげ誰か念仏ねんぶつせざらん念仏ねんぶつは無間むげんの業ごふと云云、是れ何なる經文きやうもんぞや慥たしかなる証文しやうもんを日蓮房にちれんに對して之これを聞かん是二、總じて是体これていの爾前得道にぜんとくどうの有無うむの法門ほうもん六箇条云云、然るに推知すいちするに極樂寺良觀ごくらくりやうかんが已前いぜんの如く日蓮にちれんに相値あうて宗論しゅうろん有る可べきの由のし☆る事有らば目安めやすを上げて極樂寺ごくらくに對して申すべし、某それがしの師しにて候者は去る文永八年ぶんえいはちに御勘氣ごかんきを蒙り佐州さしゅうへ遷され

給^{たま}うて後・同じき文永^{ぶんえい}

十一年正月の比御免許^{めんきよ}を蒙^ごり鎌倉^{かまくら}に歸る、其の後平金吾^{へいきんご}に対して様様の次第^{しだい}申し含ませ給^{たま}いて甲斐^{かい}の国の深山^{みやま}に閉籠^{こも}らせ給^{たま}いて後は、何なる主上女院^{みじじろ}の御意^{みこころ}たりと云えども山の内^{うち}を出^いで諸宗^{しよしゆ}の学者^{がくしや}に法門^{ほふもん}あるべからざる由^{よし}仰^{おほ}せ候^{けう}、随^{したが}つて其^その弟子^{でし}に若輩^{わくはい}のものにて候^{けう}へども師^しの日蓮^{にちれん}の法門^{ほふもん}九牛^{きうぐ}が一毛^{いちもう}をも学^{まな}び及^{およ}ばず候^{けう}といへども

法華經ほけきょうに付いて不審ふしん有りと仰おほせらるる人わたらせ給たまはば存ぞんじ候こうなんど云いつて、其その後は隨問而答ほうもんもうの法門ほうもん申もうす可べし、又前六箇条なん一一の難門なん・兼兼かねがね申もうせしが如ごとく日蓮にちれんが弟子等でしは臆病おくびょうにては叶かなうべからず、彼れ彼れの經經ききょうと法華經ほけきょうと

勝劣しょうれつ・淺深せんじん成仏じやうぶつ不成じやうぶつを判はぜん時・爾前にぜん・迹門しやくもんの釈尊しやくそんなりとも物の數かずならず何いかに況そや其その以下の等覺とうかくの菩薩ぼさつをや、まして權宗ごんしゅうの者どもをや、法華經ほけきょうと申もうす大梵王ぼんのうの位ゐにて民たみとも下くだし鬼畜きしゆくなんどと下くだしても其その過有からんやと意いを得えて宗論しゅうろんすべし。

又彼の律宗りつしゅうの者どもが破戒はかいなる事山川さんせんの類るいるるよりも尚無戒なむむかいなり、成仏じやうぶつまでは思おももよらず人天にんてんの生なまを受うくべしや、妙樂大師みょうらくだいし云いく君もし一戒いつかいを持もてば人中にんちゅうに生なまずることを得も若もし一戒いつかいを破やれば還かえりて三途さんずに墮だす」と、其その外齋法經しやうほうねききょう正法しやうほう念經ねんききょう等の制法あごんききょう阿含經あがんききょう等の大小乘經だいしやうじきょうの齋法しやうほう

齋戒今程の律宗忍性が一党誰か一戒を持てる還墮三途は疑無し、
若しは無間地獄にや落ちんずらん不便など立てて宝塔品の持戒
行者と是を☆しるべし、其の後良有

つて此の法華經の本門の肝心妙法蓮華經は三世の諸仏の万行万善の
功德を集めて五字と為せり、此の五字の内に豈万戒の功德を納めざら
んや、但し此の具足の妙戒は一度持つて後行者破らんとすれど破れず
是を金剛宝器戒とや申しけんなんと立つ可し、三世の諸仏は此の戒を
持つて法身・報身・応身など何れも無始無終の仏に成ら

せ給う、此れを「諸教の中に於て之を秘して伝ふ」とは天台大師は書
き給へり、今末法当世の有智・無智・在家・出家上下万人・此の
妙法蓮華經を持つて説の如く修行せんに豈仏果を得ざらんや、さてこ
そ決定無有疑とは

滅後濁惡の法華經の行者を定判せさせ給へり、三仏の定判に漏れたる
權宗の人人は決定して無間なるべし、是くの如くいみじき戒なれば
爾前・迹門の諸戒は今一分の功德なし、功德無からんに一日の齋戒も
無用なり。

但此の本門の戒を弘まらせ給はんには必ず前代未聞の大瑞あるべし、
所謂正嘉の地動文永の長星是なるべし、抑当世の人人何の宗宗にか
本門の本尊戒壇等を弘通せる、仏滅後・二千二百二十余年に一人も候
はず、日本人王・三十代欽明天皇の御宇に仏法渡つて今に七百余年
前代未聞の大法此の国に流布して月氏・漢土・一閭浮提の内の一切
衆生・仏に成るべき事こそ有り難けれ有り難けれ、又已前の重末法に
は教行証の三つ俱に備われり例せば正法
の如し等云云、に地涌の大菩薩上行出でさせ給いぬ結要の大法亦

ひろ
弘まらせ給うべし、日本・漢土・万国の一切衆生は金輪聖王の出現の先
兆の優曇華に値えるなるべし、在世四十二年並びに法華經の迹門十四
品に之を秘して説かせ給はざりし大法本門正宗に至つて説き顯し
給うのみ。

良觀房が義に云く彼の良觀が日蓮遠国今下向と聞く時は諸人に向
つて急ぎ急ぎ鎌倉へ上れかし為に宗論を遂げて諸人の不審を晴さんな
んど自讃毀他する由其の聞え候、此等も戒法にてや有らん強ち尋ぬ
可し、又日蓮鎌倉に罷上る時は門戸を閉じて内へ入るべからずと之を
制法し、或は風氣なんど虚病して罷り過ぎぬ、某は日蓮に非ず
其の弟子にて候まますし言のなまり法門の才覚は乱れがはしくとも、
律宗国賊替るべからずと云うべし、公場にして理運の法門申し候へばと
て雑言・強言・自讃氣なる体・人目に見すべからず浅・しき事なるべし、

いよいよしんくい
弥身口意を調え謹んで主人に向うべし主人に向うべし。

三月二十一日

花押かおう

三位阿闍梨御房あじやりごぼう之これを遣はす

日蓮にちれん

◆二五八

諸人御返事

1284p

三月十九日の和風並びに飛鳥同じく二十一日戌の時到来す、日蓮
一生の間の祈請並びに所願忽ちに成就せしむるか、将又五五百歳の
仏記宛かも符契の如し、所詮真言・禪宗等の謗法の諸人等を召し合せ
是非を決せしめば日本国一同に日蓮が弟子・檀那と為り、我が弟子等
の出家は主上・上皇の師と為らん在家は左右の臣下に列ならん、将又
一閭浮提皆此の法門を仰がん、幸甚幸甚。

弘安元年三月二十一日

日蓮 花押

諸人御返事

◆二五九

小蒙古御書もうこしよ

1284p

小蒙古もうこの人・大日本にほんこく国に寄せ来るの事、我が門弟もんてい並びに檀那だんな等の中
に若もし他人たにんに向い將又はたまた自ら言語ごんごに及べぶ可べからず、若もし此この旨むねに違背いはいせ
ば門弟もんていを離すべき等の由存知せる所なり、此の旨むねを以て人人ひとひとに示す可
く候なり。

弘安四年こうあん太歳かのとみ辛巳六月十六日

花押かおう

人人御中ひとひとおんちゅう

◆二六〇

さだしげ殿御返事ごへんじ

1285p

さきざきに申しつるがごとし、世間の学者・仏法を学問して智慧を明
めて我も我もと・おもひぬ、一生のうちにむなしくなりて・ゆめのごとく
に申しつれども唯一大事を知らずよくよく心得させ給うべし、あなかし
こ・あなかしこ。

十二月二十日

日蓮にちれん

在御判

さだしげ殿御返事ごへんじ

◆二六一

霖雨御書ごしよ

1285p

山中のながきあめつれづれ申もうすばかり候はず、えんどうかしこまりて
給たまい候いし、ことに・よろこぶよし玄性房申もうしあげさせ給たまい候へ 恐きょう恐きょう。

五月廿二日

日蓮にちれん

在御判

御返事ごへんじ

◆二六二

玄性房御返事ごへんじ

1286p

いやげんだ入道にゅうどうのなげき候いしかばむかはきと玄性御房ごぼうこのよしを
かみもう申させ給たまい候へ恐恐きょうきょう。

七月十八日

日蓮にちれん

花押かおう

玄性御房ごぼう

◆二六三

智妙房御返事ちみょうぼうごへんじ

弘安三年十二月 五

十九歳御作

1286p

鷲目一貫送り給いて法華經の御宝前に申し上げ了んぬ。

なによりも故右大將家の御廟と故權太夫殿の御墓とのやけて候由承わりてなげき候へば又八幡大菩薩並びに若宮のやけさせ給う事いかなが人のなげき候らむ。

世間の人人は八幡大菩薩をば阿弥陀仏の化身と申ぞ、それも中古の人人の御言なればさもや、但し大隅の正八幡の石の銘には一方には八幡と申す二字一方には昔靈鷲山に在つて妙法蓮華經を説き今正宮の中に在つて大菩薩と示現す等云云、月氏にては釈尊と顯れて法華經を説き給い日本国にしては八幡大菩薩と示現して正直の二字を誓いに立て給う、教主釈尊は住劫第九の減・人寿百歳の時四月八日甲寅の日中天竺に生れ給い八十年を経て二月十五日壬申の日御入滅なり給う、八幡大菩薩は日本国第十六代応神天皇四月八日

甲寅きのえとらの日生れさせ給たまいて御年八十の二月の十五日みずのえさる 申に隠れさせ
給たまう、釈迦しやかぶつ仏の化身けしんと申もうす事はたれの人かあらそいをなすべき、

しかるに今・日本国にほんこくの四十五億八万九千六百五十九人はちまんの一切衆生いっさいしゆじやう・
善導ぜんどう・慧心えしん・永観ようかん・法然等ほうねんの大天魔てんまにたばらかされて・釈尊しやくそんをなげすて
て阿弥陀仏あみたぶつを本尊ほんぞんとす、あまりの物のくるわしさに十五日を奪い取つて
阿弥陀仏あみたぶつの日となす八日をまぎらかして薬師やくし・仏の日と云云、あまり
にをやをにくまんとて八幡大菩薩はちまんたいばさつをば阿弥陀仏あみたぶつの化身けしんと云
云、大菩薩ばさつをもてなすやうなれども八幡はちまんの御かたきなり、知らずわさ
でも・あるべきに日蓮にちれん此の二十八年が間・今此三界こんしさんがいの文を引いて此の迷まよい
をしめせば信ぜずはさでこそ有るべきに・いつき・つころし・つながしつ・お
うゆへに八幡大菩薩はちまんたいばさつ・宅をやいてこそ天へはのぼり給たまひいぬらめ日蓮にちれんがか
んがへ候し立正安国論りっしょうあんこくろん此れなり、あわれ他国たこくよりせめ来りてたかのき
じをとるやうに・ねこのねずみをかむやうに・せめられん時、あまや
女房にようぼうどもの・あわて

候はんずらむ、日蓮にちれんが一あるるいを二十八にちれん年が間せめ候いしむくいに、或あるは
いころし・切りころし・或あるはいけどり・或あるは他方たほうへわたされ・宗盛むねもりがなわつ
きてさらされしやうに・すせんまんの人人ひとびとのなわつきてせめられんふび
んさよ、しかれども日本にほんこく国こくの一切衆生いっさいしゆじやうは皆五逆罪みなごぎやくざいの者なれば・かくせ
められんをば天よろこも悦よろこび仏ぶつもゆるし給たまはじ、あわれあわれはぢみぬさき
に阿闍世王あじやせの提婆だいばを・いましめしやうに・真言師しんごんし・念仏者ねんぶつ・禪宗ぜんしゆの者ど
もをいましめて・すこし・つみをゆるくせさせ給たまえかし、あらをかし・あ
らふびん・ふびん・わわくのやつばらの智者ちしやげなれば・まこととて・もて
なして事にあはんふびんさよ、恐恐きようきよう謹言きんげん。

十二月十八日

日蓮にちれん 花押かおう

ちめう房御返事ごへんじ

◆二六四

十住毘婆娑論尋出御書

1288p

昨日武藏前司殿の使として念仏者等召相せられて候いしなり、又十郎の使にて候はんずるか、十住毘婆娑論を内内見る可き事候、万事を抛ちて尋ね出だし給い候え。

十月十四日

日蓮在御判

武藏公御房

十住毘婆娑論十四卷拜上せしむ、今一卷は求め失せ候なり、御要以後は早早返し給わる可く候、愚身も必ず必ず参り候いて承わる可く候、昨日の論談五十展転の随喜誠に以て有難く候、又袴品賜わる可し、穴賢穴賢、恐恐。

十月十一日

判

日蓮阿闍梨御房
にちれんあじやりごぼう

◆二六五

武蔵殿御消息
むさししやうそく

1288p

撰論じょうろん三卷は給候たまひへども釈論しゃくろん等の各疏候じょはざるあひだ事ゆかず候、を
なじくは給たまひ候いてみあわすべく候、見参の事いつにてか候べき、仰をか
ほり候そうらはん。

八講はいつにて候やらん。

七月十七日

にちれん
日蓮在御判

むさし
武蔵殿御房

◆二六六

破良觀等御書

1289p

りようかん どうりゅう
良觀・道隆・悲願聖人等が極樂寺・建長寺・寿福寺・普門寺等を立
てて叡山の円頓大戒を蔑如するが如し、此れは第一には破僧罪なり二
には仏の御身より血を出だす、今の念仏者等が教主釈尊の御入滅の
二月十五日を・をさへとり・阿弥陀仏の日とさだめ仏生日の八日をば
葉師・仏の日といふ、一切の真言師が大日如来をたのみて教主釈尊

は無明に迷える仏・我等が履とりにも及ばず結句は灌頂して釈迦仏の頭をふむ、禪宗の法師等は教外別伝とのしりて一切経をば・ほんぐには・をとり我等は仏に超過せりと云云、此は南印度の大慢ばら門がながれ出仏身血の

一分なり、第三に蓮花比丘尼を打ちころす・これ仏の養母にして阿羅漢なり、此れは阿闍世王の提婆達多をすてて仏につき給いし時かりをなして大火・☆をやきしかば・はらをすへかねて此の尼のゆきあひ候たりしを打ち殺

せしなり、今の念佛者等が念佛と禪と律と真言とをせめられて・のぶるかたわなし、結句は檀那等をあひかたらひて日蓮が弟子を殺させ・予が頭等にきずをつけ・さんそうをなして二度まで流罪・あわせて頸をきらせんと・くわだて・弟子等数十人をろうに申し入るるのみならず、かま

くら内に火をつけて日蓮が弟子の所為なりとふれまわして一人もなく失わんとせしが如し。

而るに提婆達多が三逆罪は仏の御身より血をいだせども爾禪の仏、久遠実成の釈迦にはあらず、殺羅漢も爾前の羅漢法華經の行者にはあらず、破和合僧も爾前小乗の戒なり法華円頓の大戒の僧にもあらず、大地われて無間地獄に入りしかども法華經の三逆ならざればいたうも深くあらざりけるかのゆへに提婆は法華經にして天王如来とならせせ給う、今の真言師・念仏者・禪・律等の人人・並に此れを御歸依ある天子並びに將軍家・日本国の上
下万人は法華經の強敵となる上一乗の行者の大怨敵となりぬ、されば設い一切經を覺り十方の仏に歸依し一国の堂塔を建立し一切衆生に慈悲を・をこすとも・衆流大海に入りかんみとなり衆鳥・須弥山に近

ずきて同色となるがごとく、一切の大善變じて大惡となり七福かへりて
七難をこり現在眼前には他国のせめきびしく、自身は兵にやぶられ
妻子は敵にとられて後生には無間・大城に墮つべし。

此れをもんてをもうに故弥四郎殿は設い大罪なりとも提婆が逆に
はすぐべからず、何に況や小罪なり法華經を信ぜし人なれば無一不
成仏疑なきものなり。

疑て云く今の真言師等を無間地獄と候は心へられぬ事なり、今の
真言は源弘法大師・伝教大師・慈覺大師・智証大師・此の四大師のなが
れなり、此の人人地獄に墮ち給はずば今の真言師いかで墮ち候べき、答
えて云く地獄は一百三十六あり一百三十五の地獄へは墮つる人雨のご
とし其の因やすきゆへなり、一の無間・大城へは墮つる人
かたし五逆罪を造る人まれなるゆへなり、又仏前には五逆なし但殺父

殺母の二逆計りあり、又二逆の中にも仏前の殺父殺母は決定として
無間地獄へは墮ちがたし畜生の二逆のごとし、而るに今・日本国の人人
は又一百三十五の地獄へはゆきがたし、日本国の人人形はことなれども
同じく法華経誹謗の輩なり、日本国異なれども同じく法華誹謗の者
となる事は源伝教より外の三大師の義より事をこれり。

問うて云く三大師の義如何、答えて云く弘法等の三大師は其の義こ
となれども同じく法華経誹謗は一同なり、所謂善無畏三蔵・金剛智
三蔵・不空三蔵の法華経誹謗の邪義なり。

問うて云く三大師の地獄じごくへ墮おつる証しょうこ拠い如何、答えて云く善無畏三蔵ぜんむいさんぞうは漢土・日本国の真言宗の元祖なり彼のとが人すでに頓死して閻魔のせめにあへり、其のせめに値う事は他の失ならず法華經は大日經に劣ると立てしゆへなり、而るを此の失を知らずして其の義をひろめたる慈覺・智証地獄を脱るべしや、但し善無畏三蔵の閻魔のせめにあづかりし故をだにもたづねあきらめば此の事自然に顕れぬべし・善無畏三蔵の鉄の縄七すぢつきたる事はだいにちきよう大日經の疏に我とかかれて候上・日本醍醐の閻魔堂・相州鎌倉の閻魔堂にあらわせり、此れをもつて慈覺・智証等の失をば知るべし。

問うて云く法華經と大日の三部經の勝劣は經文如何、答えて曰く法華經には諸經の中に於て最も其の上に在りと説かれて此の法華經は一切經の頂上の法なりと云云、大日經七卷・金剛頂經三卷・

蘇悉地經三卷・已上十三卷の内法華經に勝ると申す經文は一句一偈もこれなし、但蘇悉地經計りにぞ三部の中に於て此の經を王と為すと申

す文候、此れは大日の三部經の中の王なり全く一代の諸經の中の大王にはあらず、例せば本朝の王を大王といふ此れは日本国の内の大王なり・全く漢土・月支の諸王に勝れたる大王にはあらず、法華經は一代の一切經の中の王たるのみならず三世十方の一切の諸仏の所說の中の大王なり、例せば大梵天王のごときんば諸の小王・轉輪王・四天王・釈王・魔王等の一切の王に勝れたる大王なり、金剛頂經と申すは眞言教の頂王・最勝王經と申すは外道・天仙等の經の中の大王・全く一切經の中の頂王にはあらず、法華經は一切經の頂上の宝珠なり、論師・人師をすてて専ら經文をくらべば・かくのごとし、而るを

てんだいしゅう 出来の後 月氏よりわたれる経論並に天竺漢土にして立て
たる宗宗の元祖等・修羅心をさしはさめるかのゆへに・或は経論にわた
くしの言をまじへて事を仏説によせ・或は事を月氏の経によせなどし
て私の筆をそへ仏説のよしを称す、善無畏三蔵等は法華経と大日経と
の勝劣を定むるに理同事勝と云云、此れは仏意にはあらず、仏説のご
とくならば大日経等は四十余年の内・四十余年の内

にも華嚴・般若等には及ぶべくもなし、但阿含・小乘經にすこしいさ
てたる經なり、而るを慈覺大師等は此の義を弁えずして善無畏三蔵を
重くをもうゆへに理同事勝の義を實義とをもえり、弘法大師は又此等
には・にるべくもなき僻人なり、所謂法華經は大日經に劣るのみなら
ず華嚴經等にもをとれり等云云、而を此の邪義を人に信

ぜさせんために・或は大日如来より写瓶せりといふ・或は我まのあたり
靈山にしてきけりといふ・或は師の慧果和尚の我をほめし・或は三鈷を
なげたりなどと申し種種の誑言をかまへたり、愚な者は今信をとる、

又天台の真言師は

慈覺大師を本とせり、叡山の三千人もこれを信ずる上墮つて代代の
賢王の御世に勅宣を下す、其の勅宣のせんは法華經と大日經とは同
醍醐・譬へば鳥の両翼・人の左右の眼等云云、今の世の一切の真言師は

此の義をすぎず、此等は螢火を日月に越ゆとをもひ蚯蚓を花山より高しという義なり、其の上一切の真言師は灌頂となづけて釈迦

仏を直ちにかきてしきまんだらとなづけて弟子の足にふませ、或は法華經の仏は無明に迷える仏・人の中のいぞのごとし真言師が履とりにも及ばずなんどふみにつくれり、今の真言師は此の文を本疏となづけて日日・夜夜に

談義して公家・武家のいのりと・がうしてを・をくの所領を知行し檀那をたばらかす、事の心を案ずるに彼の大慢ばら門がごとく無垢論師にことならず、此等は現身に阿鼻の大火を招くべき人人なれども強敵のなければ・さてすぐるか、而りといへども其のしるし眼前にみへたり、慈覺と智証との門家等・闍諍ひまなく・弘法と聖覺が末孫が本寺と伝法院・叡山と蘭城との相論は修羅と修羅と猿と犬とのごと

し、此等これらは慈覺じかくの夢想に日をいとみ・弘法こうぼうの現身妄語げんしんもうごのすへか、仏
末代まつだいを記しるして云く謗法ぼうぼうの者は大地微塵だいちみじんよりも多く正法しょうぼうの者は爪上そうじょうの
土よりすくなかるべし、仏語ぶつごまことなるかなや今・日本国にほんこくかの記にあた
れり。

予はかつしろしめされて候がごとく幼少ようしょうの時より学文に心をかけし
上・大虚空藏菩薩こくうざうぼさつの御宝前ごぼうぜんに願を立て日本第一にほんだいいちの智者ちしやとなし給たまへ十
二のとしより此の願を立つ其その所願しよがんに子細しさいあり今くはしく・のせがた
し、其その後先ず

浄土宗・禅宗をきく・其の後叡山・蘭城・高野・京中・田舎等処処に
修行して自他宗の法門をならひしかども我が身の不審はれがたき上・
本よりの願に諸宗何れの宗なりとも偏党執心あるべからず・いづれも
仏説に証拠分明に道理現前ならんを用ゆべし・論師・訳者・人師等には
よるべからず専ら經文を詮とせん、又法門によりては設い王のせめ
なりともはばかりるべからず何に況や其の已下の人をや、父母・師兄等の
教訓なりとも用ゆべからず、人の信不信はしらずありのままに申すべし
と誓状を立てしゆへに三論宗の嘉祥華嚴宗の澄觀法相宗の慈恩等を
ば天台

・妙楽・伝教等は無間地獄とせめたれども真言宗の善無畏三蔵弘法
大師慈覚・智証等の僻見は・いまだ・せむる人なし、善無畏不空等の
真言宗をすてて天台による事は妙楽大師の記の十の後序並に伝教

大師の依憑集にのせられたれどもいまだくはしからざればにや慈覺・
智証の謬☆は出来せるかと強盛にせむるなり。

かく申す程に年卅二・建長五年の春の比より念仏宗と禪宗と等を

せめはじめて後に真言宗等をせむるほどに念仏者等始にはあなづる、

日蓮いかに・かしこくとも明円房・公胤僧上・顕真座主等には・すぐべか

らず、彼の人人だにもはじめは法然上人をなんぜしが後にみな堕ちて

・或は上人の弟子となり・或は門家となる、日蓮は・かれがご

とし我つめん我つめんとはやりし程に・いにしへの人人は但法然をなんじ

て善導道・綽等をせめず、又経の権実をいわざりしかばこそ念仏者はを

ごりけれ、今日蓮は善導・法然等をば無間地獄につきをとして専ら

浄土の三部

経を法華経に・をしあはせて・せむるゆへに、螢火に日月・江河に大海の

やうなる上念仏ねんぶつは仏のしばらくの戲論けろんの法実に・これをもつて生死しやうじを・
はなれんとをもわば大石を船に造り大海たいかいをわたり・大山をになて巖難けんなん
を越ゆるがごとしと難なんぜしかば面おもてをむかうる念仏者ねんぶつなし。

後には天台宗てんだいしゅうの人人ひとひとを・かたらひて・どしうちにせんとせしかども・

それもかなはず、天台宗てんだいしゅうの人人ひとひとも・せめられしかば在家ざいけ・出家しゅつけの心ある

人人ひとひと・少少念仏ねんぶつと禪宗ぜんしゅうとをすつ、念仏者ねんぶつ・禪宗ぜんしゅう・律僧等りつそう我が智力か叶なわ

ざるゆへに諸宗しよしゅうに

入りあるきて種種しゆじゆの譏奏ざんそうをなす、在家ざいけの人人ひとびとは不審ふしんあるゆへに各各の持
僧等ある・或は真言師しんこんし・或は念仏者ねんぶつ・或はふるき天台宗てんだいしゆう・或は禪宗ぜんしゆう・或は
律僧等りつそうをわきにはさみて・或は日蓮にちれんが住处じゆうしよに向い・或はかしこへよぶ、
而れども一言二言にはすぎず迦旃延かせんねんが外道げどうをせめしがごとく徳慧とくえ
菩薩ぼさつが摩沓婆まどうをつめしがごとくせめしゆへに其その力及およばず、人は智か
しこき者すくなきかのゆへに結句けつくは念仏者等ねんぶつをばつめさせてかなはぬと
ころには大名だいめいしてものをばへぬ侍さむらいどものたのしくて先後せんごも弁えぬ在家ざいけの
徳人等あけ挙あて日蓮にちれんをあだするほどに・或は私ひそかに狼藉ろうぜきをいたして日蓮にちれんが・か
たの者を打ち・或は所あるを・をひ・或は地あるをたて・或はかんだうをなす事か
ずをしらず、上に奏そうすれども人の主となる人は・さす
が戒力けいりきといふ福田ふくでんと申し子細しさいあるべきかともひて左右さうなく失とがもなさ
れざりしかば・きりものども・よりあひてまちうど等らをかたらひて数

万人ばんにんの者をもつて夜中にをしよせ失わんとせしほどに・十羅刹じゅうらせつの御計ら
いにてやあ

りけんにちれんそ日蓮其の難なんを脱まぬかれしかば・両国りょうこくの吏・心をあわせたる事なれば
殺されぬを・とがにして伊豆の国へながされぬ、最明寺さいみょうじ殿計りこそ子細しさい
あるかとをもわれていそぎゆるされぬ。

さりし程に最明寺さいみょうじ入道殿隠れさせ給たまいしかば・いかにも此の事あし
くなりなんず、いそぎかくるべき世なりとは・をもひしかどもこれにつけ
ても法華經ほけきょうのかたうど・つよくせば一定事いで来るならば身命しんみょうを・すつ
るにてこそあらめと思ひ切りしかば讒奏ざんそうの人人いよいよ・かずをしらず、
上下万人じょうげばんにん・皆父母みなふぼのかたきとわりをみるがごとし、不輕菩薩ふぎようぼさつの威音いおん
王おう仏ぶつのすへにすこしもたがう事なし。

◆二六七

檀越某御返事^{だんのつそれがしごへんじ}

弘安元年四月五十七歳御作^{こうあんがんねん}

1294p

御文^{おんぶん}うけ給^{たま}わ良^おい了^わんぬ、日蓮^{にちれん}流罪^{るざい}して先先にわざわいども重^{かさなり}て

候に又なにと申^{もう}す事か候べきとはををも

へども人のそんぜんとし候には不可思議ふかしぎの事の候へば・さが候はんずら
む、もしその義候わば用いて候はんには百千万億倍のさいわいなり、
今度このたびぞ三度になり候、法華經ほけきようも・よも日蓮にちれんをば・ゆるき行者ぎやうじやとはをば
せじ、釈迦しやか・多宝たほう・十方じゅうぽうの諸仏しよぶつ・地涌千界じゆせんがいの御利生りしやう・今度このたびみはて候はん、
あわれ・あわれ・さる事の候へかし、雪山童子せつせんどうじの跡あとを・をひ
不輕菩薩ふぎようぼさつの身になり候はん、いたづらに・やくびやうにや・をかされ
候はんずらむ、をいじににや死に候はんずらむあらあさましあさまし、
願くは法華經ほけきようのゆへに國主こくしゆにあだまれて今度このたび・生死しやうじをはなれ候わばや、
天照太神てんしやうだいじん・正八幡しやうはちまん・日月にちがつ・帝釈たいしやく・梵天等ぼんてんの仏前ぶつぜんの御ちかい今度このたび心み候わ
ばや、事事さてをき候いぬ、各各の御身おんみの事は此れより申し
はからうべし、さで・をはするこそ法華經ほけきようを十二時に行ぜさせ給うにて
は候らめ、あなかしこ・あなかしこ、御みやづかいを法華經ほけきようと・をぼしめ

せ、二切世間の治生産業は皆実相と相違背せず」とは此れなり、かへ
す・がへず御文の心こそ・をもられ候へ 恐恐謹厳。

四月十一日

日蓮花押

◆二六八

法衣書ほうえ

1296p

御衣布並に単衣布給候たびぞうら おわい了んぬ、抑そもそも食は命をつぎ衣は身をかくす、
食を有情うじように施すほどこものは長寿ちようじゆの報をまねぎ人の食を奪うものは短命の
報をうく、衣を人にほどこさぬ者は世世ぞんしやう存生に裸形らぎやうの報をかんず、
六道ろくどうの中に人道いなか已下みなは皆形裸みなにして生る天は隨生衣ずいしやうえなり、其その中の鹿
等は無衣にして生るのみならず、人の衣をぬすみしゆ

へに身の皮を人に・はがれて盗し衣をつぐのうほうをえたり、人の中にも
鮮白比丘せんびやくびくには生ぜし時・衣を被て生れぬ、仏法ぶつぽうの中にも裸形らぎやうにして法
を行ずる道なし、故ゆえに釈尊しやくそんは摩訶大母比丘尼まかびくにの衣を得て正覺しやうかくをなり
給たまいき、諸もろもろの比丘びくには三衣さんねをゆるされき、鈍根どんこんの比丘びくは衣食いしよくととのわざ

れば阿羅漢果を証せずと・みへて候、殊に法華經には

柔和忍辱衣と申して衣をこそ本として候へ又法華經の行者をば衣を

もつて覆せ給うと申すもねんごろなるぎ

なり。

日蓮は無戒の比丘・邪見の者なり故に天これをにくませ給いて食衣と

もしき身にて候、しかりといえども法華經を口に誦し・とき・どき・これ

をとく、譬へは大☆の珠を含みいらんよりせんだんを生ずるがごとし、

いらんをすてて・せんだん・まいらせ候・☆形をかくして珠を授けたてま

つる、天台大師云く・他經は但男に記して女に記せず」等云云、法華經

にあらざれば女人成仏は許されざるか、具足千万光相如来と申すは

摩訶大比丘尼のとなり、此れ等もつてをしはかり候に女人の成仏は

法華經により候べきか、要當說眞實は教主釈尊の金言・皆是眞實は

多宝仏たほうぶつの証明しょうみょう・舌相至梵天ぜつそう ほんてんは諸仏しよぶつの誓狀せいじょうなり、日月にちがつは地に落つべしや
須弥山しゆみせんはくづるべしや・大海たいかいの潮は増減ぞうげんせざるべしや大地だいちは翻覆ほんぷくすべし
や、此の御衣くどくの功德ほけきは法華經ようけにとかれて候、但心をもつて・をもひやら
せ給たまい候へ言にはのべがたし。

◆二六九

慧日天照御書 えにち てんしやう ごしよ

1297p

もつて一閻浮提えんぶだいの者の眼まなこを抉えぐるべきか、釈迦仏しやくかぶつの御名みなをば幼稚ようちにては日種ひしゆという、長大ちやうだいの後の異名いみよをば慧日えにちという、此の国を日本にほんという主をば天照てんしやうと申す。

◆二七〇

釈迦御所領御書 しやくか しよりやう ごしよ

1297p

是れ我が有うなり其その中の衆生しゆじやうは悉く是れ吾子わがこなり」等云云、この文のごとくならばこの三界さんがいは皆釈迦如来みなしやくかによらいの御所領しよりやうなり、寿量品じゆりやうぼんに云く我常わじやうに此の娑婆世界しやばせかいに在り」等云云、この文のごとくならば乃至過去ないしかこ

五百塵点劫より・このかた此の娑婆世界は釈迦菩薩の御進退の国土なり、其の上仏の滅後・一百年に阿育大王と申す王をはしき此の南閼浮提を三度まで僧に付属し給いき、又此の南閼浮提の内の大日本国をば尸那国の南岳大師・此の国の上宮太子と生れてこの国の王となり給いき、しかれば聖徳太子已後の諸王は皆南岳大師の末葉なり、桓武天王已下の諸王は又山王。

◆二七一 大果報御書かほうごしょ

1298p

者どもをば少少はをひいだし・或あるはきしやうかかせて・はうにすぎて
候いつるが・七月末八月の始しりように所領しりようかわり一万余束の作毛をさへ・から
れて山やにまとひ候ゆへに・日蓮にちれんなを・ばうじつるゆへかと・ののしり候上
・御かへり

の後七月十五日より上下じょうげいしはいと申もうす虫ふりて国大体だいたい三分のうへそん
じ候いぬ、をほかた人のいくべしともみへず候、これまで候をもいたたせ
給たまう上なに事もとをもひ候へども・かさねての御心おんこころざしざしはうにもすぎ候
か。

なによりもおぼつかなく候いつる事はとののかみの御気色みけしきいかんがと・

をぼつかなく候いつるに・なに事もなき事申すばかりなし。

かうらいむこの事うけ給わり候ぬ、なにとなくとも釈迦如来法華經を失い候いつる上は大果報ならば三年はよもとをもひ候いつるにいくさけかちつづき候いぬ、国はいかにも候へ法華經のひろまらん事疑なかるべし。

御母への御事経をよみ候事に申し候なり、此の御使いそぎ候へはくはしく申さず候、恐恐。

◆二七二

除病御書

1298p

其の上日蓮の身並びに弟子又過去謗法の重罪未だ尽きざるの上現在多年の間謗法の者と為り亦謗法の国に生る、当時信心深からざら

んか豈^{あにこれ}之^{まぬか}を脱れんや、但^{ただ}し貴^き辺^{へん}此^この病^{びょう}を受^うくるの理^り・或^{ある}人^{ひと}之^{これ}を告^つぐ予^よ
日^{ちようば}夜^{ちようば}朝^{ほけき}暮^{きよう}に法^{ほう}華^け經^{きやう}に申^{もう}し上^あげ朝^{ちようば}暮^{きよう}に青^{せい}天^{てん}に訴^うう除^{じょ}病^{びょう}の由^{よし}今^け日^{にち}之^{これ}を聞^き
く喜^き悦^{えつ}何^{なに}事^{こと}か之^{これ}に過^すぎん、事^{こと}事^{こと}見^み参^{さん}を期^ごせん、恐^{きよう}恐^{きよう}。
。

◆二七三

根露枝枯御書からごしよ

1299p

三論宗さんろんしゅうも分別ぶんべつならざる証文しょうもんをもつて立てたりしかば・盲目もうもくの衆生しゅじょうに
値あうて誑惑おおわくせしかども・明眼めいがんの智者ちしやに値あうて邪義じやぎ顕あらわれぬ、此これ即そく
根露ねあらわるれば枝枯かられ源みなもと乾かけば流竭ながれつく自然じねんの道理どうりなり、念仏宗ねんぶつしゅう・禪宗ぜんしゅうと
真言しんごんとは其その根本こんぽん謬びようご☆を

本おとし誑惑おおわくを源もとせり、其その根源こんげん顕あらわれなば設たといにちれん日蓮にちれんはいやしくとも天
のはからひ大法流布だいほうるふの時来きるならば・彼あの惡法あくぼうやぶれて此この眞実しんじつの法立はふたつ
つ事うたが疑いなかるべし。

すでに此この惡法あくぼう消えんとするは汝なんじ知るやいなや、日蓮にちれんをいやしみて・
さんざんとするほどにするほどに。

◆二七四

南無御書

1299p

堂塔どうとうつくらず布施ふせまいらせずらん、をしき物は命ばかりなり、これを
法華經ほけきようにまいらせんとをもし、三世さんぜの仏は皆凡夫みなぼんぶにてをはせし時命を
法華經ほけきようにまいらせて仏になり給う、此の故ゆえに一切いっさいの仏の始には南無と
申す南無なむと申すは月氏がっしの語ことば・此の土にては歸命きみようと申すなり、歸命と
申すは天台てんだいの釈いに云く、命を以て自ら歸す」等云云、命を法華經ほけきようにまい
らせて仏にはならせ給う、日蓮にちれん今度命このたびを法華經ほけきようにまいらせて。

◆二七五

題目功德御書だいもくくどくごしよ

1300p

功德くどくは先の功德くどくにたくらぶれば・前の功德くどくは爪上そうじょうの土のごとし、
法華經ほけきょうの題目だいもくの功德くどく十方じつぱうの土のごとし、先の功德くどくは一の水のごとし、
題目だいもくの功德くどくは大海たいかいのごとし、先の功德くどくは瓦礫がりやくのごとし・過日くわにちの功德くどくは
金銀きんぎんのごとし、先の功德くどくは螢火ほたるびのごとし・題目だいもくの功德くどくは日月にちがつのごとしと
申す經文きやうもんなり。

◆二七六

大惡大善御書だいぜんごしよ

1300p

大事だいじには小瑞せうずいなし、大惡だいあくをきれば大善だいぜんきたる、すでに大謗法ほうぼう・国くににあ

り大正法しやうぼう必ずひろまるべし、各各なにかなげかせ給たまうべき、迦葉尊者かしやうそんじやにあらずとも・まいをも・まいぬべし、舍利弗しやりほつにあらねども・立たつてをどりぬべし、上行菩薩じやうぎやうぼさつの大地だいちよりいで給たまいしには・をどりてこそいで給たまいしか、普賢菩薩ふげんぼさつの来るには大地だいちを六種にうごかせり、事多しといへども・しげきゆへにとどむ、又文申もすすべし。

◆二七七

来臨曇華御書らいりんどんげごしよ

1300p

追もつて申もす、御器の事は越後□□房申もし候こべし、御心おんこころざしふかき由・
内房うちぶさ申もさせ給たまい候こへ。

春の始の御悦び自他申し籠め候い畢んぬ、抑 去年の來臨は曇華の
如し、將又夢か幻か疑いまだ晴れず候処に。

◆二七八

常樂我淨御書

1301p

出でさせ給いて諸大乘經をかんがへ出し十方の淨土を立て一切の
諸法は常樂我淨と云云、其の時・五天竺の十六の大国・五百の中国・
十千の小国・無量の粟散国の諸の小乗經の無量無辺の寺寺の衆僧
二同に蜂のごとく蜂起

し・蟻のごとく緊集し・雷のごとくなりわたり、一時に緊集して頭を
あわせて・なげいて云く仏在世にこそ五大の外道は我等が本師・教主

釈尊しやくそんとわ・あらそいしが・仏は一人なり・外道げどうは多勢なりしかども・
外道げどうはありのごとし・

仏は竜のごとく・師子王ししおうのごとくましませしかばこそせめかたせ給たまいぬ、
此これはそれには・にるべくもなし、馬鳴めみょうは一人なれども・我等われらは多人な
れども・代末すへになれば・悪はつよく善はゆわし、仏の在世ざいせの外道げどうと仏法ぶつぽう
とは水火すいかなり。

◆二七九

帰伏正法御書きふくしょうぽうごしよ

1301p

上一人下万民かみいちにん ばんみん一同に帰伏きふくする正法しょうぽうなり始めて勝劣しょうれつを立てて慈覺じかく・
智証ちしょう・弘法こうぼうそむかんとをほせある○べかりしと・をばすか強敵じやうてきを仏法ぶつぽうの

中にあらそい出来しゅつだいすべきたね国のみだるべきせんてうなりいかなる聖人しやうにん
の御ことばなりとも用ゆべからず各各日遮をいやしみて○真言宗しんこんしゅうと
法華經宗ほけきょうと叡山末寺えいざんまつじ蘭城おんじょうなら。

◆二八〇

現世無間御書

1302p

或^{ある}はくびをきり、或^{ある}はながさればととかれて此^{この}の法門^{ほうもん}を涅槃^{ねはん}經^{ぎょう}守護^{しゆご}經^{ぎょう}等の法華^{ほけ}經^{ぎょう}の流通^{りつう}の御經^{ぎぎょう}にときをかせ給^{たま}いて候^{まち}は此^{この}の国^{くに}をば梵王^{ぼんのう}・帝釈^{たいしやく}に仏^{ぶつ}をほせつけてよりせめさせ給^{たま}うべしととかれて候^{まち}されば此^{この}の国^{くに}は法華^{ほけ}經^{ぎょう}の大怨敵^{おんてき}なれば現世^{げんせ}に無間地獄^{むげんじごく}の大苦^たすこし心^{こころ}みさせ給^{たま}うか教主^{きょうしゅ}・釈尊^{しやくそん}の日蓮^{にちれん}がかたうどをしてつみしらせ給^{たま}うにやよもさるならば天照太神^{てんしやうだいじん}・正八幡^{しょうはちまん}等は此^{この}の国^{くに}のかたうどにはなり給^{たま}はじ日蓮房^{にちれん}のかたきなりすずにてなをわかし候^{そうら}はんとぞはやり候^{まち}らむいのらばいいよあしかりなんあしかりなん、恐恐^{きようきよう}謹言^{きんげん}。

二月十三日

にちれん
日蓮

在御判

こへんじ
御返事

◆二八一

いしよくごしよ
衣食御書

1302p

あまごぜん
尼御前へ参る

がもく
鷺目一貫給い畢んぬ、それじきはいろをまし・ちからをつけ・いのちを

のぶ、ころもは・さむさをふせぎあつさ

をさえ・はぢをかくす、人にものをせする人は人のいろをまし・ちからを
そえいのちをつぐなり。

◆二八二

釈迦如来御書

1303p

釈迦如来は正しく法華經に惡世末法の時能く是の經を持つ者」等云云、善導云く千中無一等云云、いづれを信ずべしや、又云く日蓮がみる程の經論を善導・法然上人は御覽なかりけるかと申すか、若しこの難のごとくならば音の人の謬をば後の人のいかにあらわすべからざるか。

◆二八三

破信墮惡御書

1303p

かたきはをくかたきはつよく、かたうどはこわくしてしまけ候

へは悪心あくしんを・をこして・かへつて法華經ほけきようの信心しんじんをも・やぶり惡道あくどうにをち候
なり、あしきところをば・ついしさりてあるべし、釈迦しやか仏ぶつは三十二相そな
わつて身は金色面まんげつは満月まんげつのごとし、しかれども・或あるは惡人あくにんはすみとみる
・或あるは惡人あくにんははいとみる・或あるは惡人あくにんはかたきとみる。

◆二八四

阿仏房御書 あぶつぼうごしよ

・或文永九年三月十三日 あるぶんえい

五十一歳御作

与阿仏房 あぶつぼう

1304p

御文委く披見いたし候い了んぬ、抑宝塔の御供養の物銭一貫文白 おんふみくわし ひけん おわ そもそもほうとう ぐきやう

米しなじなをくり物たしかにうけとり候い了んぬ、此の趣御本尊 ほけきよう おもむきごほんぞん
法華經にもねんごろに申し上げ候御心やすくおぼしめし候へ。

一御文に云く多宝如来・涌現の宝塔・何事を表し給うやと云云、此 おんふみ いわ たほうにょらい ゆげん ほうとう なにごと たま

の法門ゆゆしき大事なり宝塔をことわるに天台大師文句の八に釈し ほうもん だいじ ほうとう てんだいだいしもんく しやく
給いし時証前起後の二重の宝塔あり、証前は迹門・起後は本門なり たまい しょうぜん きご ほんもん

・或は又閉塔は迹門・ ある へいとう しやくもん

開塔は本門是れ即ち境智の二法なりしげきゆへにこれををく、所詮 かいとう ほんもん すなわ ぎやうち しょうせん

三周の^{しょうもん}声聞・^{ほけきよう}法華經に來て己^{こしん}心の^{ほうとう}宝塔を見ると云う事なり、今日^{いまにちれん}蓮が^{でし}弟子・^{だんな}檀那又又かくのごとし、末^{まつほう}法に入つて^{ほけきよう}法華經を持つ男女のすがたより外には^{ほうとう}宝塔

なきなり、若し然れば^{きせんじようけ}貴賤上下をえらばず南無妙法蓮華經と・となうるものは我が身^{ほうとう}宝塔にして我が身又多宝^{たほう}如来なり、妙法蓮華經より外に^{ほうとう}宝塔なきなり、^{ほけきよう}法華經の題目^{だいもくほうとう}宝塔なり^{ほうとう}宝塔又南無妙法蓮華經なり。

今阿仏上人の一身は^{すいか}地水火風空の五大なり、此の五大は^{だいもく}題目の五^{ごじ}字なり、然れば阿仏房^{あぶつぼう}さながら^{ほうとう}宝塔・^{ほうとう}宝塔さながら阿仏房此れより外^{ほか}の才^{さいかくむやく}覺無益なり、聞・信・戒・定・進・捨・慚の七宝^{しつぽう}を以てかざりたる^{ほうとう}宝塔なり、多宝^{たほう}如来の^{ほうとう}宝塔を^{くよう}供養し給うかとおもへばさにては候はず我が身^{くよう}を^{たま}供養し給う我が身又三身^{さんじん}即一の^{ほんがく}本覺の^{にようらい}如来なり、かく信^{たまい}じ給いて南無妙法蓮華經と^{とな}唱え給へここさながら^{ほうとう}宝塔の^{じゅうしよ}住処なり、

經に云く 法華經を説くこと有らん 処は我が此の宝塔其の前に涌現
す」とはこれなり、あまりにありがたく候へば宝塔をかきあらはし・まい
らせ候

ぞ、子にあらずんばゆづる事なかれ 信心強盛の者に非ずんば見する事
なかれ、出世の本懐とはこれなり。

阿仏房しかしながら北国の導師とも申しつべし、淨行菩薩うまれか
わり給いてや日蓮を御とふらい給うか

不思議ふしぎなり不思議ふしぎなり、此の御志ごしをば日蓮にちれんはしらず上行菩薩じやうぎやうぼさつの御出現しゆつげんの力にまかせたてまつり候ぞ、別の故べちはあるべからずあるべからず、宝塔ほうとうをば夫婦ふうふひそかにをがませ給たまへ、委くわしくは又又申もうすべく候、恐恐きやうきやう謹言きんげん。

文永九年壬申ぶんえい みにすのえさる 三月十三日

日蓮にちれん 花押かおう

阿仏房上人所へあぶつぼうしやうにん

◆二八五 妙法曼陀羅供養事みやうほう まんだら ぐやう

文永十年 五十

二歳御作 与千日尼 1305p

妙法蓮華經みやうほうれんげきやうの御本尊供養候ごほんぞん ぐやういぬ、此の曼陀羅まんだらは文字もんじは五字七字ごじ しちじにて

候へども三世さんぜの諸仏しよぶつの御師おんし一切いっさいの女人にょにんの成仏じやうぶつの印文いんぶんなり、冥途めいどにはともしびとなり死出ししゅつの山さんにては良馬りやうめとなり・天てんには日月にちがつの如ごとし地ちには須弥山しゆみせんの如ごとし・生死しやうじ海の船ふねなり成仏じやうぶつ得道とくどうの導師どうしなり。

此の大曼陀羅だいまんだらは仏滅後ぶつめつ・二千二百二十余年の間・一閻浮提えんぶだいの内には

未だいまひろまらせ給たまはず、病によりて薬あり軽病には凡薬をほどこし重病じゆうびやうには仙薬をあたうべし、仏滅後ぶつめつより今までは二千二百二十余年

の間は人の煩惱ぼんのうと罪業ざいごうの病軽かりしかば智者ちしやと申す医師くすしたちつづき

出でさせ給たまいて病に随したがつて薬をあたえ給たまいき、所謂いわゆる俱舍宗くしやしゆう・成実じやうじつ

宗・律宗りつしゆう・法相宗ほうそうしゆう・三論宗さんろんしゆう・真言宗しんごんしゆう・華嚴宗けごんしゆう・天台宗てんだいしゆう・淨土宗じやうどしゆう・禪宗ぜんしゆう

等なり、彼の宗宗に一一に薬あり、所謂いわゆる華嚴の六相十玄・三論の八不

中道ちゆうどう・法相ほつそうの唯識觀ゆいしき・律宗りつしゆうの二百五十戒・淨土宗じやうどしゆうの弥陀みだの名号みやうごう・

禪宗ぜんしゆうの見性成仏けんしやうじやうぶつ・真言宗しんごんしゆうの五輪觀ごりんくわん・天台宗てんだいしゆうの一念三千等なり。

今の世は既に末法にのぞみて諸宗の機にあらざる上、日本国一同に
一闡提大謗法の者となる、又物に譬うれば父母を殺す罪謀叛ををこせ
る科・出仏身血等の重罪等にも過ぎたり、三千大千世界の一切衆生の
人の眼をぬける罪よりも深く十方世界の堂塔を焼きはらへるよりも
超えたる大罪を一人して作れる程の衆生日本国に充滿せり、されば
天は日日に眼をいからして日本国をにらめ、地神は忿りを作して時時
に身をふるうなり、然るに我が朝の一切衆生は皆我が身に科なしと思
ひ必ず往生すべし成仏をとげんと思へり、赫赫たる日輪をも目無き者
は

見ず知らず、譬えばたいこの如くなる地震をもねぶれる者の心にはおぼ
えず、日本国の一切衆生も是くの如し女人よりも男子の科はを・をく
男子よりも尼のとはは重し尼よりも僧の科はを・をく破戒の僧よりも

持戒じがいの法師ほうしのとは重し、持戒じがいの僧そうよりも智者ちしやの科とがはをもかるべし、
此等これらは癩病びやくらいの中の白癩病びやくらい、白癩病びやくらいの中の大白癩病びやくらいなり。

末代まつだいの一切衆生いっさいしゆじやうはいかなる大医りやうやくいかなる良薬りやうやくを以てか治す可べきとか

んが候だいにちによらいへは大日如来ちけんの智拳ならの印並びに大日だいにちの真言しんごん・阿弥陀如来あみだによらいの四十

八願やくし・薬師如来によらいの十二大願しゅうびやう・衆病しつじよ悉除しつじよの誓も此の薬には及ぶべから

ず、つやつや病消滅しやうめつせざる上いよいよ倍增ばいぞうすべし、此等これらの末法まつぽうの時のた

めに教主きやうしゆしやくそん釈尊たほう・多宝如来じゆつぽう・十方分身ふんじんの諸仏しよぶつを集めさせ

給たまうて一の仙薬たまたをとどめ給たまへり所謂妙法蓮華經いわゆるみやうほうれんげきやうの五の文字もんじなり、此の

文字もんじをば法慧ほうえ・功德林くどく・金剛薩こんごうさつ・普賢ふげん・文殊もんじゆ・薬王やくおう・観音かんのん等にもあつらへ

させ給たまはず、何いかに況や迦葉かしやうしやり舍利弗等ほつをや、上行菩薩等じやうぎやうぼさつと申して四人の

大菩薩ぼさつまします、此の菩薩ぼさつは釈迦しやか如来によらい・五百塵点劫ごひやくじんでんごうより・このかた

御弟子おんでしとならせ給たまいて一念いちねんも仏を・わすれず・まします大菩薩ぼさつ

を召し出して授けさせ給へり、されば此の良薬りょうやくを持たん女人等にょにんをば此の四人の大菩薩ぼさつ・前後左右ぜんごさうに立そひて・此の女人にょにんたたせ給へば此の大菩薩ぼさつも立たせ給ふ乃至此の女人・道を行く時は此の菩薩ぼさつも道を行き給ふ、譬たとへば・かげ

と身と水と魚と声とひびきと月と光との如し、此の四大菩薩ぼさつ南無妙法蓮華經みょうほうれんげきょうと唱となえたてまつる女人にょにんをはなるるならば釈迦しやか・多宝たぼう・十方じゅっぽう分身ふんじんの諸仏しよぶつの御勘氣ごかんきを此の菩薩ぼさつの身に蒙こうむらせ給うべし、提婆だいばよりも罪つみ深く瞿迦利くくかりよりも大妄語もうごのものたるべしと・をばしめすべし、あら悦よろこばしやあら悦よろこばしや、南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょう・南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょう。

日蓮花押にちれんかおう

◆二八六

阿仏房尼御前御返事

建治元年九月三

日 五十四歳御作 与千日尼 1307p

御文に云く謗法の浅深輕重に於ては罪報如何なりや云云、夫れ
法華經の意は一切衆生・皆成仏道の御經なり、然りといへども信ずる
者は成仏をとぐ謗ずる者は無間・大城に墮つ、若し人信ぜずして斯の
經を毀謗せば即ち一切世間の仏種を断ぜん、乃至其の人命終して
阿鼻獄に入らん」とは是なり、謗法の者にも浅深輕重の異あり、
法華經を持ち信ずれども誠に色心相應の信者能持此經の行者はまれ
なり、此等の人は介爾ばかりの謗法はあれど
も深重の罪を受くる事はなし、信心はつよく謗法はよはき故なり、

たいすい
大水を以て小火をけすが如し、涅槃經に云く、若し善比丘法を壞る者
を見て置いて呵責し驅遣し挙処せずんば當に知るべし、是の人は仏法中
の怨なり、若し能く驅遣し呵責し挙処せば是れ我が弟子眞の聲聞な
り」云云、此の經文に・せめられ奉りて日蓮は種種の大難に値うといへ
ども仏法中怨のいましめを免れんために申すなり。

ただ
但し謗法に至って淺深あるべし、偽り愚かにしてせめざる時も・あるべ
し、眞言・天台宗等は法華誹謗の者いたう呵責すべし、然れども大智慧
の者ならでは日蓮が弘通の法門分別しがたし、然る間まづまづ・さしを
く事あるなり立正安國論の如し、いふと・いはざるとの重罪免れ難し、
云つて罪のまぬがるべきを見ながら聞きながら置い

ていましめざる事眼耳の二徳忽に破れて大無慈悲なり、章安の云く、惡
無くして詐り親むは即ち是れ彼が怨なり」等云々、重罪消滅しがたし

弥利益いよいよやくの心尤もつとしも然しかる可べきなり、輕罪つみの者をばせむる時も・あるべし・又
せめずしてをくも候まぬかべし、自然じねんになをる辺あるべしせめて自他じたの罪つみを
脱だつれてさてゆるすべし、其そのの故ゆえは一向いっこう謗法ぼうぼうになればまされる大重罪じゅうざいを
受くるなり、彼たが為ために惡を除けば即すなわち是これ彼が親なりとは是これなり。

日蓮にちれんが弟子でし・檀那だんなの中にも多く此こくの如ごとき事共候、さだめて尼御前あまごぜんもきこしめして候らん、一谷いちやうの入道にゅうどうの事日蓮にちれんが檀那だんなと内には候へども外ねんぶつは念仏者ねんぶつにて候ぞ後生ごしやうはいかんとすべき、然しかれども法華經ほけきやう十卷渡わたして候いしなり。

弥信心いよいよしんじんをはげみ給たまうべし、仏法ぶつぽうの道理どうりを人に語かたらむ者をば男女なんによ僧尼そうに必ずにくむべし、よしにくまばにくめ法華經ほけきやう・釈迦しやか仏天台ぶつてんだい・妙樂みやうらく・伝教章安等でんぎやうの金言きんげんに身をまかすべし、如説修行によせつしゆぎやうの人とは是これなり、法華經ほけきやうに云く、忍畏にんくゐ

の世おいに於よて能よく須臾しゆゆも説く云云、惡世末法あくせまつぽうの時三毒強盛さんどくかうじやうの惡人等集あくにんりて候時しやうほう正法しやうほうを暫時ざんじも信じ持たもちたらん者をば天人供養てんにんくやうあるべしと云う經文きやうもんなり。

此の度大願を立て後生ごしやうを願はせ給たまへ少しも謗法不信ぼうぼうふしんのところが候はば

無間・大城疑むげん だいじょううたがい いなかるべし、譬たとえば海上を船にのるに船おろそかにあら

ざれどもあか入りぬれば必ず船中の人人ひとびと・一時いちじに死するなり、なはて

堅固けんこなれども蟻の穴あれば必ず終ついに湛たたへたる水のたまらざるが如ごとし、

謗法不信ぼうぼうふしんのあかをとり信心しんじんのなはてをかたむべきなり、浅き

罪つみならば我よりゆるして功德くどくを得さすべし、重きあやまちならば信心しんじん

をはげまして消滅しょうめつさすべし、尼御前の御身あまごぜん おんみとして謗法ぼうぼうの罪つみの浅深せんじんけい輕重いちよう

の義をとほせ給たまう事まことにありがたき女人にょにんにておはすなり、竜女りゅうにょに

あにをとるべ

きや、我大乘だいじようの教を聞ひらいて苦の衆生しゆじようを度脱どだつせん」とは是これなり、其その

義趣ぎしゆを問こうは是これ則すなわち難がたしと為なす」と云つて法華經ほけきようの義理ぎりを問こう人は、

かたしと説かれて候、相構かまえて相構かまえて力あらん程は謗法ぼうぼうをばせめさ

せ給たまうべし、日蓮にちれんが義を助け給たまう事・不思議ふしぎに覺おほえ候ぞ不思議ふしぎに覺おほえ

候ぞ、穴賢あなかしこあなかしこ穴賢。

九月三日

日蓮にちれん花押かおう

阿仏房あぶつぼう尼御前あまごぜん御返事ごへんじ

◆二八七

千日尼御前御返事

弘安元年七月二十

八日 五十七歳御作 与阿仏房尼 1309p

弘安元年太歳 戊寅 七月六日佐渡の国より千日尼と申す人、同じく
日本国甲州・波木井郷の身延山と申す深山へ同じき夫の阿仏房を使と
して送り給う御文に云く、女人の罪障はいかがと存じ候へども御法門
に法華経は女人の成仏をさきとするぞと候いしを万事はたのみまいら
せ候いて等云云。

夫れ法華経と申し候・御経は誰れ仏の説き給いて候ぞとをもひ候へば
此の日本国より西漢土より又西・流沙・葱嶺と申すよりは又はるか西・
月氏と申す国に浄飯王と申しける大王の太子・十九の年・位をすてさ

せ給たまいて檀だんどく山さんと申もうす山さんに入り御出家しゅっけ三十にして仏ぶつとならせ給たまい身みは金色こんしきと変かはじ神かんは三世さんぜをかがみさせ給たまう、すぎにし

事来きるべき事ことかがみにつけさせ給たまいておはせし仏ぶつの五十余年いちだいいが間ま・一代いちだい

・一切いっさいの経きやうぎやうを説ときおかせ給たまう、此この一切いっさいの経きやうぎやう・仏ぶつの滅めつ後ご・二千年

が間ま月氏がつし国こくにやうやくひろまり候こういしかどもいまだ漢土かんど・日本国にほんこく等らへ

来きり候こうはず、仏滅ぶつめつ度ど後ご・一千十五年いっせんごじゅうごと申もうせしに漢土かんど・仏法ぶつぽう渡わたりはじめて

候こういしかども又またいまだ法華ほけきやう経きやうは・わたり給たまはず。

仏法ぶつぽう漢土かんどにわたりて二百余年にふひゃくごじゅうごねんに及およんで月氏がつしと漢土かんどとの中間ちゆうげんに龜茲きんぢ

国こくと申もうす国こくあり、彼の国こくの内に鳩摩羅くまらえん三蔵さんざうと申もうせし人ひとの御弟子おんでしに

鳩摩羅くまら什じと申もうせし人ひと彼の国こくより月氏がつしに入り・須利耶しゆりや蘇磨そま三蔵さんざうと申もうせし

人ひとに此この法華ほけきやう経きやう

をさづかり給たまいき、其その経きやうを授おんこじほけし時ときの御語おんごに云いく此この法華ほけきやう経きやうは東北とうほく

の国に縁ふかしと云云、此の御語を持ちて月氏より東方漢土へは・わたし給いしなり。

漢土には仏法わたりて二百余年後秦王の御宇に渡りて候いき、

日本国には人王第三十代欽明天皇の御宇治十三年・壬申十月十三

日辛酉の日・此れより西・百済国と申す国より聖明皇・日本国に仏法を

わたす、此れは漢土に仏法わたりて四百年・仏滅後・一千四百余年な

り、其の中にも法華經はまししまししかども人王第三十二代・用明天皇

の太子聖德太子と申せし人・漢土へ使をつかわして法華經をとりよせ

まいらせて日本国に弘通し給いき、それよりこのかた七百余年なり、

仏滅度後すでに二千二百三十余年になり候上・月氏・漢土・日本の山

山・河河・海海・里

里・遠くへたり人人・心心・国国・各各・別別にして語かわりしなこと

なれば、いかでかぶつぼう仏法の御心をば我等凡夫は弁え候べき、ただきようぎよう經經の文字を引き合せてこそ知るべきに一切いっさい經はやうやうに候へどもほけきよう法華經と申す御經は八卷まします流通に普賢經序文の無量義經各一卷已上此の御經を開き見まいらせ候へば明かなる鏡をもつて

我が面を見るがごとし、日出でて草木の色を弁えるにいたり、序品の無量義經を見まいらせ候へば四十余年未だ真実を顕わさず」と申すきようもん經文あり、法華經の第一の卷方便品の始めに世尊の法は久しき後に要らず当に真実を説きたもうべし」と申すきようもん經文あり、第四の卷の宝塔品には妙法華經・皆是真実」と申す明文あり、第七

の卷には舌相梵天に至る」と申すきようもん經文赫赫たり、其の外は此の經より外のさきのちならべるきようぎよう經經をば星に譬へ江河に譬へ・小王に譬へ・小山に譬へたり、法華經をば月に譬へ・日に譬へ・大海・大山・大王等に譬へ

給へり、
たま

此の語は私の言には有らず皆如来の金言なり十方の諸仏の御評定の

御言なり、一切の菩薩・二乘梵天・帝釈今の天に懸りて明鏡のごとく

にまします、日月も見給いき聞き給いき其の日月の御語も此の經にの

せられて候、月氏・漢土・日本国のふるき神たちも皆其の座につらなり

給いし神神なり、天照太神・八幡大菩薩・熊野・すずか等の

日本国の神神もあらそひ給うべからず、此の經文は一切經に勝れたり

地走る者の王たり師子王のごとし・空飛ぶ者の王たり鷲のごとし、南無

阿弥陀仏經等はきじのごとし兎のごとし鷲につかまれては涙をながし・

師子に・せめられては腸わたをたつ、念仏者・律僧・禅僧・真言師等又か

くのごとし、法華經の行者に値いぬれば・いろを失い魂をけすなり。

かかるいみじき法華經ほけきょうと申もうす御經はいかなる法門ほうもんぞと申せば、一の卷ほうべん方便品よりうちはじめて菩薩ぼさつ・二乘凡夫にじようばんぷみな皆みな仏になり給たまうやうをとかれて候もとへどもいまだ其そのしるしなし、設たとえば始めたる客人きやくじんが相貌そうみょううるわしくして心もいさぎよくよく口もきいて候もとへばいう事うたがひ疑うたがひなけれどもさきも見ぬ人なればいまだあらわれたる事なけ

れば語ことばのみにては信しんじがたきぞかし、其の時語そのときことばにまかせて大なる事度度たたびあひ候もとへばさては後の事うらもたのもしなうらんど申もうすぞかし、一切いっさい信じて信しんぜられざりしを第五の卷ごに即身成仏そくしんじょうぶつと申もうす一經いっきやう第一の肝心かんじんあり、譬たとへばくろき物を白いくなす事漆うるしを雪となし不浄ふじようを清浄しやうじやうになす事・濁水にょいじゆに如意珠にょいじゆを入れたるがごとし、竜女りゆうにょと申せし小蛇くちなわを現身げんしんに仏になしてましましき、此の時こそ一切いっさいの男子の仏になる事をば疑うたがひう者は候はざりしか、されば此の經は女人成仏にょにんじょうぶつを手本てほんとしてとかれた

りもうと申す、されば日本にほん国に法華ほけき經の正義せいぎを弘通ぐつうし始めましませし叡山えいざん
の根本こんぽん伝教でんぎょう大師だいしの此この事を釈しゃくし給たまうには能化のうけ所化しよけ俱ともに歴劫りゃくこつ無なし
妙法みょうぼう經力そくしんじようぶつ即身じくしん成仏じようぶつす」等、漢土かんどの天台てんだい智者いちしやだいし大師だいし・法華ほけき經の正義せいぎ
をよみはじめ給たまいしには他經たきようは但男しるに記しして女にに記しせず乃ない至今しこん經は
皆みな記しす」等云云、此これは一代いちだい聖教しやうきやうの中ちゆうには法華ほけき經第一だいいち法華ほけき經の中ちゆうに
は女人にょにん成仏じようぶつ第一だいいちなりとことわらせ給たまうにや、されば日本にほんの一切いっさいの女人にょにん
は法華ほけき經より外ほかの一切いっさい經には女人にょにん成仏じようぶつせずと嫌きらうとも法華ほけき經にだに
も女人にょにん成仏じようぶつゆるされなばなにかくるしかるべき。

しかるに日蓮にちれんはうけがたくして人身じんしんをうけ値あいがたくして仏法ぶつぽうに値あい
奉たてまつる、一切いっさいの仏法ぶつぽうの中ちゆうに法華ほけき經に値あいまいらせて候そ、其その恩徳おんとくををもへ
ば父母ふぼの恩主こくしゆの恩いっさい一切衆生いっさいしゆじやうの恩いっさいなり、父母ふぼの恩いっさいの中ちゆうに慈父じふをば天たに
譬たとへ悲母ひもをば大地だいちに譬たとへたりいづれもわけがたし、其その中ちゆうにも悲母ひもの大

恩ことにほうじがたし、此れを報ぜんと・をもう

に外典げてんの三墳さんぶん・五典ごてん孝經等きやうきやうとうによて報ぜんと・をもへば現在げんざいをやしないて

後世ごしやうをたすけがたし、身をやしない魂をたすけず内典ないてんの仏法ぶつぽうに入りて

五千・七千余卷しやうじやうの小乗しやうじやう・大乘だいじやうは女人成仏にょにんじやうぶつかたければ悲母ひもの恩報おんぽうじが

たし・小乗しやうじやうは女人成仏にょにんじやうぶつ一向いっかうに許ゆるされず、大乘だいじやうきやう經きやうは・或あるは成仏じやうぶつ・或あるは

往生おうじやうを許ゆるたるやうなれども仏かりごとの仮言かりごとにて実事じつじなし、但法華經ほけきやう

計りこそ女人成仏悲母の恩を報ずる実の報恩經にて候へど見候いしか
ば悲母の恩を報ぜんために此の經の題目を一切の女人に唱えさせんと
願す、其れに日本國の一切の女人は漢土の善導日本の慧心永觀・法然
等にすかされて詮とすべきに南無妙法蓮華經をば一國の一切の女人・
一人も唱うるることなし、但南無阿彌陀仏と一日に一返

・十返・百千万億反・乃至三万・十万反・一生が間・昼夜十二時に又
他事なし、道心堅固なる女人も又悪人なる女人も彌陀念仏を本とせ
り、わづかに法華經をこととするやうなる女人も月まつまでのてずさび
をもわしき男のひまに心ならず心ざしなき男にあうがごとし。

されば日本國の一切の女人・法華經の御心に叶うは一人もなし、我
が悲母に詮とすべき法華經をば唱えずして彌陀に心をかけば法華經は
本ならねばたすけ給うべからず、彌陀念仏は女人たすくるの法にあら

ず必ず地獄じごくに墮おち給たまうべし、いかんがせんとなげきし程に我が悲母ひもをたすけんがために弥陀みだ念仏ねんぶつは無間地獄むげんじごくの業ごきやくなり・五逆

にはあらざれども五逆ごぎやくにすぎたり、父母ふぼを殺す人は其その肉身にきんをばやぶ

れども父母ふぼを後生ごしょうに無間地獄むげんじごくには入れず、今・日本国にほんこくの女人にょにんは必ず

法華經ほけきょうにて仏になるべきを・たばらかして一向いっこうに南無阿弥陀仏なむあみだぶつになし

ぬ、悪ならざればすかさねぬ、仏になる種くさねならざれば仏にはならず

弥陀みだ念仏ねんぶつの小善しょうぜんをもつて法華經ほけきょうの大善だいぜんを失うしなう小善しょうぜんの念仏ねんぶつは大悪だいあくの

五逆ごぎやくにすぎたり、譬たとへば承平じやうへいの将門しやうもんは関東八箇国かんとうはつかんとくをうた天喜てんぎの貞任さだとうは

奥州おうしゅうをうちとどめし民たみを王わうへ通とほせざりしかば朝敵ちやうてきとなりてついにほろ

ぼされぬ、此等これらは五逆ごぎやくにすぎたる謀反ばうはんなり。

今・日本国にほんこくの仏法ぶつぽうも又かくのごとし色いろかわれる謀反ばうはんなり、法華經ほけきょうは

だいおうだいにちきようかんむりようじゆきようしんこんしゅうじようとしゅうぜんしゅうりつぞう
大王大日經觀無量壽經真言宗・淨土宗・禪宗・律僧等は彼れ彼れの

小経ほけきによて法華經ほうけきの大怨敵おんてきとなりぬるを日本にほんの一切いっさいの女人等にょにんは我が心のをろかなるをば知らずして我をたすくる日蓮にちれんをかたきとをもひて大怨敵おんてきたる念仏者ねんぶつ・禅・律・真言師等しんごんしを善知識ぜんちしきとあやまてり、たすけんとする日蓮にちれんかへりて大怨敵おんてきとをもわるるゆへに女人にょにんこそりて国主こくしゅに讒言ざんげんして伊豆の国いずのくにながせし上・

又佐渡の国へながされぬ。

ここに日蓮願つて云く日蓮は全く☆なし設い僻事なりとも日本国の

一切の女人を扶けんと願せる志はすてがたかるべし、何に況や

法華經のまに申す、而るを一切の女人等・信ぜずばさでこそ有るべき

にかへりて日蓮をうたする、日蓮が僻事か釈迦・多宝・十方の諸仏・

菩薩・二乗梵釈・四天等いかに計らい給うぞ、日蓮僻事な

らば其の義を示し給へことには日月天は眼前の境界なり、又仏前にし

てきかせ給える上法華經の行者をあだまんものをば「頭破れて七分と

作らん」等と誓わせ給いて候へはいかんが候べきと日蓮強盛にせめまい

らせ候ゆへに天此の国を罰すゆへに此の疫病出現せり、他国より此の

国を天をほせつけて責めらるべきに・両方の人あ

また死ぬべきに天の御計らいとしてまづ民を滅ぼして人の手足を切るが

ごとくして大事だいじの合戦なくして・此の国の王臣おうしん等をせめかたぶけて
法華經ほけきょうの御敵を滅ぼして正法しょうぼうを弘通くつうせんとなり。

而しかるに日蓮にちれん・佐渡さどの国くに流されたりしかば彼の国の守護しゅご等は国主こくしゅの御
計しらいに随したがいて日蓮にちれんをあだむ・方民ばんみんは其その命いのちに随したがう、念仏者ねんぶつ・禪・律・
真言師等しんごんしは鎌倉かまくらよりも・いかにもして此これへわたらぬやう計しると申もうしつ
かわし・極樂寺ごくらくの良觀房等りようかんは武藏むさしの前司殿ぜんしの私の御教書みきょうしょを申もうして弟子でし
に持たせて日蓮にちれんをあだみなんとせしかば・いかにも命いのちた

すかるべきやうはなかりしに天の御計みけいらいはさてをきぬ、地頭じとう・地頭じとう・
念仏者ねんぶつ・念仏者等ねんぶつ・日蓮にちれんが庵室あんしつに昼夜に立ちそいてかよう人も・あるを
まどわさんとせめしに阿仏房あぶつぼうに・ひつを・しおわせ夜中に度度たびたび・御わた
りありし事こといつの世にか・わすらむ、只悲母ただひもの佐渡さどの国くにに生れかわりて
有あるか。

漢土に沛公と申せし人王の相有りとて秦の始皇の勅宣を下して云く
沛公打ちて・まいらせん者には不次の賞を行うべし、沛公は里の中には
隠れがたくして山に入りて七日・二七日など有るなり、其の時命すで
に・をわりぬべかりしに沛公の妻女呂公と申せし人こそ山中を尋ねて
時時命をたすけしが彼は妻なればなさけすてがたし、此れ

は後世ごしやうを・をぼせずばなにかかくはおはすべき、又其そのの故ゆえに・或あるは所
を・をい・或あるはくわれうをひき・或あるは宅をとられなんどせしについにとを
らせ給たまいぬ、法華經ほけきやうには過去かこに十萬億の仏を供養くやうせる人こそ今生こんじやうには
退せぬとわみへて候へされば十萬億供養くやうの女人にょにんなり、其その上・人は見る
眼まなこの前には心ざし有りと・もさしはなれぬれば・心

はわすれずともさでこそ候いに去ぬる文永ぶんえい十一年より今年弘安元年まで
は・すでに五箇年が間・此の山中に候に佐渡さどの国より三度まで夫をつか
はす、いくらほどの御心おんこころざしぞ大地だいちよりもあつく大海たいかいよりもふかき
御心おんこころざしぞかし、

釈迦如来しやかによらいは我が薩☆王子さつたみこたりし時うへたる虎に身をかいし功德くどく尸毘王くどくしびおう
とありし時鳩ほとのために身をかへし功德くどくをば我が末の代かくのごとく
法華經ほけきやうを信ぜん人にゆづらむとこそ多宝・十方たほうの仏じゆつぽうの御前おんまえにては申さもう

せ給たまひいしか。

其その上・御消息しやうそくに云く尼が父の十三年は来る八月十一日又云くいぜに

一貫もん等云云、あまりの御心おんこころざしの切に候へはありえて御はしますに

随したがいて法華經十卷をくりまいらせ候、日蓮にちれんがこいしくをはせん時は学乘

房によませて御ちやうもんあるべし、此の御經をしるしとして後生ごしやうには

御たづねあるべし、抑そもそも去年今年のありさまは・いか

にかならせ給たまひいぬらむと・をばつかなさに法華經ほけきやうにねんごろに申し候い

つれどもいまだいぶかしく候いつるに七月二十七日の申さるのときの時に阿仏房あぶつぼうを

見つけて尼ござんはいかにこう入道殿にゅうだうでんはいかにとまづといて候いつれば

いまだやまず、こう入道殿にゅうだうでんは同道にて候いつるがわせは・すでにちかづ

きぬこわなしいかんがせんとて・かへ

られ候いつるとかたり候いし時こそ盲目もうもくの者の眼まなこのあきたる死たまし給える

父母ふぼの閻魔宮えんまより御をとづれの・夢の内に有あるをゆめにて悦ぶがごとし、あわれあわれふしぎなる事かな、此これもかまくらも此の方の者は此の病にて死ぬる人はすくなく候、同じ船にて候へばいづれもたすかるべしとも・をばへず候いつるに・ふねやぶれて・

たすけぶねに値あえるか、又竜神りゅうじんのたすけにて事なく岸へつけるかこそ不思議ふしぎがり候へ

さわの入道にゅうどうの事なげくよし尼ごぜんへ申もうしつたへさえ給たまえ、ただし入道にゅうどうの事は申し切り候いしかば・をもち合

せ給^{たま}うらむ、いかに念^{ねんぶつ}仏堂ありとも阿^あ弥^み陀^だ仏^{ぶつ}は法^{ほけき}華^き經^{きやう}のかたきをばた
すけ給^{たま}うべからず、かえりて阿^あ弥^み陀^だ仏^{ぶつ}の御^おかたきなり後^ご生^{しやう}惡^{あく}道^{どう}に墮^おち
てくいられ候^{こう}らむ事^{こと}あさまし。

ただし入^に道^{ゆうどう}の堂^{どう}のらうにていのちをたびたびたすけられたりし事^{こと}

そいかにすべしとも・をばへ候^{こう}はね、学^{がく}乘^{じやう}房^{ぼう}をもつてはかにつねづね
法^{ほけき}華^き經^{きやう}をよませ給^{たま}えとかたらせ給^{たま}え、それも叶^{かな}うべしとはをばえず、さ
ても尼^にのいかにたよりなかるらむとなげくと申^{もう}したへさせ給^{たま}い候^{こう}へ又
又^{もう}申^{もう}すべし。

七月二十八日

日蓮^{にちれん} 花押^{かおう}

佐渡^{さど}国^{くに}府^ふ阿^あ仏^{ぶつ}房^{ぼう}尼^に御^ご前^{ぜん}

◆二八八

千日尼御前御返事

弘安元年十月十九

日 五十七歳御作

与阿仏房尼 1315

青鳧一貫文・干飯一斗・種種の物給い候い了んぬ、仏に土の餅を供養

せし徳勝童子は阿育大王と生れたり、仏に漿を・まひらせし老女は

辟支仏と生れたり、法華経は十方三世の諸仏の御師なり、十方の仏

と申すは東方善徳仏・東南方無憂徳仏・南方栴檀徳仏・西南方宝施仏

・西方無量明仏・西北方華徳仏・北方相徳仏・東北方三乗行仏・上方

広衆徳仏・下方明徳仏なり、三世の仏と申すは過去・莊嚴劫の千仏・

現在・賢劫の千仏・未来・星宿劫の千仏・乃至華嚴経・法華経・涅槃経

等の大小・権実・顕密の諸経に列り給へる一切の諸仏・尽十方世界の

微塵数の菩薩等も・皆悉く法華経の妙の一字より出生し給へり、故に

法華經ほけきようの結經けつきようたる普賢經ふげんに云く「ほうとう三種の身は方等ほうとうより生ず」等云云、
方等ほうとうとは月氏がつしの語ことば・漢土かんとには大乘だいじようと翻ず・大乘だいじようと申すは法華經ほけきようの名な
り、阿含經あこんきようは外道げどうの經きやうに対すれば大乘經だいじようきよう、華嚴けごん・般若はんにか・大日經だいにちきよう等
阿含經あこんきように対すれば大乘經だいじようきよう、法華經ほけきように対すれば小乘經しょうじようきようなり、法華經ほけきよう
に勝すぐれたる經きやうなき故ゆゑに一ひとつ

大乘經なり、例せば南閻浮提・八万四千の国国の王王は其の国国にて
は大王と云う・転輪聖王に対すれば小王と申す、乃至六欲・四神の王
王は大小に破る、色界の頂の大梵天王独り大王にして小の文字をつ
くる事なきが如し、仏は子なり法華經は父性なり、譬えば一人の父母
に千子有りて一人の父母を讃歎すれば千子悦びをなす、一人の父母を
供養すれば千子を供養するになりぬ。

又法華經を供養する人は十方の仏・菩薩を供養する功德と同じき
なり、十方の諸仏は妙の一字より生じ給へる故なり、譬えば一の師子
に百子あり・彼の百子諸の禽獸に犯さるるに・一の師子王吼れば百子
力を得て諸の禽獸皆頭七分にわる、法華經は師子王の如し一切の獸の
頂きとす、法華經の師子王を持つ女人は一切の地獄・餓鬼・畜生
等の百獸に恐るる事なし、譬えば女人の一生の間の御罪は諸の乾草の

如しほけきよう法華經の妙の一字は小火の如しごと、小火を衆草しゅうそうにつきぬれば衆草焼
け亡ぶるのみならず大木大石照焼てりやけ失せぬ、妙の一字の智火以て此かく
の如しごと諸罪消ゆ

るのみならず衆罪しゅうざいかへりて功德くどくとなる毒藥變じて甘露かんろとなる是なり、
譬えたとば黒漆うるしに白物おしろいを入れぬれば白色となる、女人にょにんの御罪は漆うるしの如しごと
南無妙法蓮華經の文字なむみょうほうれんげきようもんじは白物おしろいの如しごと人は臨終りんじゅうの時地獄じごくに墮おつる者は
黒色となる上そ其の身重き事・千引ちびきの石の如しごと善人ぜんにんは設たとひ七尺八尺の
女人にょにんなれども色黒き者なれども臨終りんじゅうに色變じて白色となる又輕き事・
鷲毛じうまうの如しごと軟なる事・兜羅縣わたくしの如しごと。

佐渡さどの国より此の国までは山海さんかいを隔へだてて千里せんりに及びおよび侯こうに女人にょにんの御身おんみ
として法華經ほけきようを志こころざししましますによりて年年ねんねんに夫おんつかいを御使ごしとして御訪ごむらい
あり定めて法華經ほけきよう・釈迦しゃか・多宝たほう・十方じゅうぽうの諸仏しよぶつ・其の御心をしろしめすら

ん、譬^{たと}えば天^{てん}月^{げつ}は四^よ万^{まん}由^ゆ旬^{じゆん}なれども大^{だい}地^ちの池^いには須^し臾^ゆに影^{えい}浮^うび雷^{らい}門^{もん}の
鼓^こは千^{せん}万^{まん}里^り遠^{えん}けれども打^{うち}ちては須^し臾^ゆに聞^{きこ}ゆ、御^{おん}身^みは佐^さ渡^{わた}の国^{くに}にをはせ
ども心^{こころ}は此^{こゝ}の国^{くに}に來^きれり、仏^{ぶつ}に成^なる道^{みち}も此^{こゝ}く^の如^{ごと}し、我^{われ}等^らは穢^え土^どに候^{そうら}へ
ども心^{こころ}は靈^{りやう}山^{ぜん}に住^すべし、御^{おん}面^{めん}を見^みてはなにかせん心^{こころ}こそ大^{だい}切^{せつ}に候^{そうら}へい
つかいつか釈^{しゃ}迦^か仏^{ぶつ}のをはします靈^{りやう}山^{ぜん}会^{かい}上^{じやう}にまひりあひ候^{そうら}はん、南^{なん}無^む
妙^{みやう}法^{ぽう}蓮^{れん}華^{げきやう}經^{きやう}

南無妙法蓮華經、恐恐謹言。
なむみょうぼうれんげきよう　きようきようきんげん

弘安元年後十月十九日
こうあんがんねん

日蓮 花押
にちれん　かおう

千日尼御前御返事
あまごぜんごへんじ

◆二八九 阿仏房御返事
あぶつぼうごへんじ

1317p

御状の旨・委細承り候了んぬ、大覚世尊説いて曰く、生老病死・
むね　いさい　たまわ　そうら　だいかくせそん　いわ　しやうろうびやうし
生住異滅」等云云、既に生を受けて齡六旬に及ぶ老又疑い無し只残
しやうじゅういめつ　すで　よわい　うたがい　ただ
る所は病死の二句なるのみ、然るに正月より今月六月一日に至り連連
しか
此の病息むこと無し死ぬる事疑い無き者か、経に云く「生滅滅已・
や　うたがい

寂滅じやくめつ為樂いらく」云云、今は毒身を棄すてて後に金身を受ければ豈あに欺あざむくべけんや。

建治三年丁丑ひのとうし六月三日

阿仏房あぶつぼう

日蓮にちれん

花押かおう

◆二九〇 千日尼御返事

弘安三年七月二日 五十九

歳御作 与阿仏房尼

1318p

追伸、絹の染袈裟一つまいらせ候、豊後房に申し候べし既に法門・
日本国にひろまりて候、北陸道をば豊後房なびくべきに学生なら
では叶うべからず・九月十五日已前に・いそぎいそぎまいるべし、こ
う入道殿の尼ごぜんの事なげき入つて候、又こいしこいしと申しつ
たさせ給へかずの聖教をば日記のごとくたんば房にいそぎいそ
ぎつかわすべし、山伏房をばこれより申すにしたがいてこれほ・わ
たすべし、山伏の現にあだまれ候事悦び入つて候。

鷲目一貫五百文のりわかめほしいしなじなの物給ひ候い了んぬ、

法華經ほけきようの御宝前ごほうぜんに申し上げて候もう、法華經ほけきように云く、若し法を聞く者有らば一として成仏じやうぶつせざること無し」云云、文字もんじは十字にて候へども法華經ほけきようを一句いっくよみまいらせ候へば釈迦しやかにやらい如来いちだいししうきようの一代聖教いちだいししうきようをのこりなく読むにて候なるぞ、故に妙樂大師めうらくだいしの云く、若し法華ほつけを弘ひろむるは凡そ一義を消するも皆一代みないちだいを混じて其の始末しまつを窮めよ」等云云、始と申すは華嚴經けこんきよう・末と申すは涅槃經ねはんきよう・華嚴經けこんきようと申すは仏最初成道の時しよじやうどう法慧ほうえ・功德林等の大菩薩ぼさつ・解脫月菩薩げだつがつぼさつと申す菩薩ぼさつの請しやうに趣いて仏前ぶつぜんにてとかれて候、其の經

は天竺てんじく・竜宮城りゆうぐうじやう・兜率天等とそつてんは知らず日本國にほんこくにわたりて候は六十卷・八十卷・四十卷候、末と申すは大涅槃經だいねはんきよう・此れも月氏がつし・竜宮等りゆうぐうは知らず我が朝には四十卷・三十六卷・六卷・二卷等なり、此れより外の阿含經あこんきよう・方等經ほうとう・般若經はんんにやきよう等は五千・七千余卷なり、此れ等の經經きやうぎようは見ず・き

かず候へども但ほけきよう法華經の一字・一句いっくよみ候へは彼れ彼れの經經きようぎようを一字
もとさずよむにて候なるぞ、譬たとへは月氏がつし日本にほんと申もうすは二字・二字に五
天竺てんじく十六のたいこく大国・五百のちゆうこく中国・十千のしやうこく小国・無量むりやうの粟散ぞくさん国の大地だいち大山
草木人畜等そうもくじんちくをさまれるがごとし、譬たとへは鏡は・わづかに一寸・二寸・三寸さんすん
・四寸・五寸と候へども一尺・五尺の人をもうかべ二丈・二丈・十丈・百
丈の大山をもうつつすがごとし。

されば此の經文きやうもんをよみて見候へば此の經をきく人は一人もかけず仏
になると申もうす文なり、九界くくじょう六道ろくどうの一切衆生いっさいしゆじやう各各心心たかわれり、譬たとへば
二人・三人・乃至ないし百千人候へども一尺の面の内しちににたる人・一人も
なし、心のにざるゆへに面にもにず、まして二人十人六道ろくどう九界しゆじやうの衆生の心
いかんがかわりて候らむ、されば花をあいし・月

をあいしすきをこのみにがきをこのみちいさきをあいし大なるをあいし
いろいろなり、善をこのみ悪をこのみしなじななり、かくのごとく・いろ
いろに候へども法華經ほけきやうに入りぬれば唯一人ただの身一人の心なり、譬たとへば衆
河の大海たいかいに入りて同一の鹹味かんみなるがごとく衆鳥しゆうちやうの須弥山しゆみせんに近ずきて
一色なるがごとし、提婆だいばが三逆さんぎやくも羅☆羅らごらが

二百五十戒も同じく仏になりぬ、妙莊嚴王みやうそうごんの邪見じやけんも舍利弗しやりほつが正見せいけんも
同じく授記じゆきをかをほれり、此これ即すなわち無む一いつ不成じやうぶつ仏のゆへぞかし、

よんじゅうよねん
四十余年の内の阿弥陀經等には舍利弗が七日の百万反大善根をとかれ
しかども未顕真実ときらわれしかば七日ゆをわかつて大海になげたる
がごとし、ゐ提希が觀經をよみて無生忍を得しかども正直捨方便
とすてられしかば法華經を信ぜずば返つて本の女人なり、大善を用う
る事なし法華經に値わざればなにかせん、大惡をも歎く事無かれ一乗
を修行せば提婆が跡をもつぎなん、此等は皆無一不成仏の經文のむ
なしからざるゆへぞかし。

されば故阿仏房の聖靈は今いづくにかをはすらんと人は疑うと
も法華經の明鏡をもつて其の影をうかべて候へば靈鷲山の山の中に
多宝仏の宝塔の内に東むきにをはすと日蓮は見まいらせて候、若し此の
事そらごとにて候わば日蓮がひがめにては候はず、釈迦如来の世尊
法久後・要當說真実の御舌も多宝仏の妙法華經・皆是真実の舌相

も四百万億那由佗の国土にあさのごとくいねのごとく星のごとく竹の
ごとくぞくぞくとすきまもなく列なつてをはしましし諸仏如来の一仏
もかけ給はず、広長舌を大梵王宮に指し付けてをはせし御舌どものく
ぢらの死にてくされたるがごとく・いわしのよりあつまりてくされたる
がごとく・皆一時にくちくされて十方世界の

諸しよぶつ仏ぶつ如来にょらい大妄語もうごの罪つみにをとされて寂光じやくくわうの浄土じやうどの金かねるり大地だいぢはたとわれ
て提婆だいばがごとく無間むげん・大城だいじやうにかつぽと入り法蓮香ひく比丘尼にがごとく身みよ
り大妄語もうごの猛火みやうかぽといでて実報華王じつぽうけおうの花はなのその一時いちじに灰燼かいじんの地ぢとなるべ
し、いかでかさる事は候あふつぱうべき、故阿仏房あふつぱう一人ひとりを寂光じやくくわうの浄土じやうどに入れ給たまはず
ば諸しよぶつ仏ぶつは大苦おに墮たまち給たまうべし、ただをいて

物を見よただをいて物を見よ、仏のまことそら事は此これにて見奉たてまつるべし、
さてはをとこははしらのごとし女にょにんはなかわのごとし、をとこは足のごと
し女人にょにんは身のごとし、をとこは羽のごとし女にょにんはみのごとし、羽とみとべ
ちべちになりなばなにをもつてかとぶべき、はしらたうれなばなかは地に
墮おちなん、いへにをとこなければ

人のたましるなきがごとし、くうじをたれにかいるあわせん、よき物を
ばたれにかやしなうべき、一月二日たがいしをだにもをばつかなくをも

いしに、こぞの三月の二十一日にわかれにしがこどもまちくらせどまみ
ゆる事なし、今年もすでに七つきになりぬ、たといわれこそ来らずとも
いかにをとづれはなかるらん、ちり

し花も又さきぬおちし菓^{このみ}も又なりぬ、春の風もかわらず秋のけしきも
こぞのごとし、いかにこの一事のみ・かわりゆきて本のごとくなかるら
む、月は入りて又いでぬ雲はきへて又来る、この人人^{ひとびと}の出^いでてかへらぬ事
こ

そ天もうらめしく地もなげかしく候へさこそをぼすらめいそぎいそぎ
法華經^{ほけきょう}をらうれうとたのみまいらせ給^{たま}いて、りやうぜん浄土^{じょうど}へまいらせ
給^{たま}いてみまいらせさせ給^{たま}うべし。

抑^{そもそも}子^こはかたきと申^{もう}す經文^{きょうもん}もあり 世人^{よじん}子の為^{ため}に衆^{しゆ}の罪^{つみ}を造^{つく}る」の
文なり、☆^{くまたか}驚^{もう}と申^{もう}すとりはをやは慈悲^{じひ}をもつて養^{やしな}へば子は・かへりて

食とす梟きょうちよう鳥と申すもうとりは生まれては必ず母をくらう、畜生ちくしやうかくのごとし、人の中に

もはるり王は心もゆかぬ父の位を奪い取る、阿闍世王あじゃせは父を殺せり、安祿山は養母をころし安慶緒あんけいしよと申すもう人は父の安祿山を殺す安慶緒は又史師明ししめいに殺されぬ史師明ししめいは史朝義しちやうぎと申すもう子に又ころされぬ、此れは敵と申すもうもことわりなり、善星比丘ぜんしやうびくと申すもうは教主釈尊きやうしゆしやくそんの御子なり、苦得外道くどくげどうをかたらいて度度父たびたひの仏を殺し奉らんとす、又

子は財と申す（たから　もう　きやうもん）経文もはんべり所以に（ゆえん　きやうもん）経文に云く其の男女追つて福を（そ　なんよ）修すれば大光明有つて地獄を照し其の父母に信心を顕さしむ」等と（しゆ　こうみょう　じごく　てら　そ　ふぼ　しんじん　あらわ　もう　たといふつ　まなこ）申す、設い仏説ならずとも眼の前に見えて候。

天竺に安足国王と申せし大王はあまりに馬をこのみて・かいしほど（てんじく　こくおう　だいおう）

に・後には・かいなれて鈍馬を竜馬となすのみならず・牛を馬ともなす・
結句は人を馬と・なしてのり給いき、其の国の人あまりになげきしかば（けつく　たまひ　そ）
知らぬ国の人を馬となす、他国の商人のゆきたりしかば薬をかいて・馬
となして御まやうに・つなぎつけぬ、なにと・なければども

我が国はこいしき上妻子ことにこいしくしのびがたかりしかどもゆるす（さいし）
事なかりしかばかへる事なし、又かへりたりともこのすがたにては由な
るべし、ただ朝夕にはなげきのみにしてありし程に二人ありし（ちゆうせき）

子父のまちどきすぎしかば人にや殺されたるらむ又病にや沈むらむ子（しず）

の身としていかでか父をたづねざるべきといでたちければ母なげくらく男も他国たこくよりかへらず一人の子もすててゆきなば我いかんがせんと・なげきしかども子ちちのあまりにこいしかりしかば安足国へ尋ねゆきぬ、ある小屋にやどりて候しかば家の主申すやうあらふびんやわどのはをさなき物なり而もみめかたち人にすぐれたり、我に一人の子ありしが他国たこくに

ゆきてしにやしけん又いかにてやあるらむ、我が子の事を・をもへばわどのをみてめもあてられず、いかにと申せば此の国は大なるなげき有り、此の国の大王だいおうあまり馬をこのませ給いて不思議の草を用い給へり、一葉せば

き草をくわすれば人馬となる、葉の広き草をくわすれば馬人となる、近くも他国たこくの商人の有りしを・この草をくわせて馬となして第一だいいちの御ま

やに秘藏^{ひざう}してつながれたりと申^{もう}す、此の男これをきいてさては我が父は馬と成りてけりとをもいて返つて問^そう其の馬は毛はいかにとといければ家の主答えて云^{いわ}く栗毛なる馬の肩白^{いわ}く・

ぶちたりと申^{もう}す、此の物此の事をききてとかうはからいて王宮^{おうぐう}に近づき葉の広き草をぬすみとりて・我が父の馬になりたりしに食せしかば本のごとく人となりぬ、其^その国の大王^{だいおう}不思議^{ふしぎ}なるおもひをなして孝養^{こうよう}の者なりと

て父を子にあづけ給へり、其れよりついに人を馬となす事とはとめられぬ。

子ならずば、いかでか尋ねゆくべき、目連尊者は母の餓鬼の苦をすくひ淨藏・淨眼は父の邪見を・ひるがいます、此れよき子の親の財となるゆへぞかし、而るに故阿仏聖靈は日本国・北海の島のいびすのみなりしかども後生を・をそれて出家して後生を願ひしが此の人・日蓮に値いて法華經を持ち去年の春仏になりぬ、戸陀山の野干は仏法に値いて生をいとひ死を願いて帝釈と生れたり、阿仏・上人は濁世の身を厭いて仏になり給いぬ、其の子藤九郎守綱は此の跡をつぎて一向法華經の行者となりて去年は七月二日・父の舍利を頸に懸け、一千里の山海を経て甲州・波木井身延山に登りて法華經の道場に此れをおさめ、今年は又七月一日身延山に登りて慈父のはかを拜見す、子にすぎたる

財^{たから}なし子にすぎたる財^{たから}なし南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經。

七月二日

日蓮^{にちれん}花押^{かおう}

故阿仏房尼御返事^{あぶつぼうごへんじ}

◆二九一

国府入道殿御返事にゅうどう

文永十二年 五

十四歳御作

1323p

あまのりのかみぶくろ二つわかめ十でうこものかみぶくろ一つたこひ
とかしら。

人の御心は定めなきものなればうつる心さだめなし、さどの国に候い
し時御信用ごしんようありしだにもふしぎに・をば候いしに、これまで入道殿を
つかわされし御心おんこころざし又国もへだたり年月ねんげつもかさなり候へばたゆむ御心
もやとうたがい候にいよいよいろをあらわしこうをつませ給たまう事但一生
二生の事にはあらざるか、此の法華經ほけきようは

信じがたければ仏人の子となり父母ふぼとなり女となりなんどしてこそ信

ぜさせ給たまうなれ、しかるに御子もをはず但をやばかりなり、其中ごちゆう
衆生しゆじやう悉是しつぜ吾子の經文きやうもんのごとくならば教主きやうしゆ釈尊しやくそんは入道にゆうどう殿あまご尼御前ぜんの
慈父じふぞかし、日蓮にぢれんは又御子にてあるべかりけるが、しばらく日本にほん国こくの人
をたすけんと中国ちゆうごくに候か、宿善しゆくぜんたうとく候、又蒙古もうこ国この日本にほんにみ
だれ入る時はこれ御わたりあるべし、又子息しそくなき人なれば御としのすへ
にはこれへとをばしめすべし、いづくも定めなし、仏になる事こそつるの
すみかにては候いしとをもひ切らせ給たまうべし、恐恐きようきよう。

卯月十二日

日蓮にぢれん 花押かおう

こゝう入道にゆうどう殿ご御返事へんじ

◆二九二 国府尼御前御書

建治元年

五十四歳御

作 1324p

阿仏御房ごぼうの尼ごぜんよりぜに三百文、同心なれば此の文を二人して人によませてきこしめせ。

単衣一領さど佐渡さどの国より甲斐かいの国波木井はきりの郷きりの内の深山みやままで送り給候たひそうらいおわ了わんぬ、法華經ほけきよう第四法師品ほうしほんに云く、人有いつて仏道ぶつどうを求めて一劫いつこうの中に於おいて合掌がつしようして我が前に在あつて無数の偈げを以て讃ほめん、是この讃仏さんぶつに由よるが故ゆえに無量の功德くどくを得ん、持經者じきようを歎美たんびせんは其その福復ふくた彼かしこに過ぎすん」等云云、文の心は釈尊しやくそんほどの仏を三業相応そうおうして

一中劫ちちうが間ねんごろに供養くようし奉たてまつるよりも末代まつだい惡世あくせの世に法華經ほけきようの行者ぎようじやを供養くようせん功德くどくはすぐれたりと・とかれて候、まことしからぬ事にては

候へども仏の金言にて候へば疑うべきにあらず、其の上妙樂大師と申す人此の

經文を重ねてやわらげて云く、若し毀謗せん者は頭七分に破れ若し供養せん者は福十号に過ぎん」等云云、釈の心は末代の法華經の行者を供養するは十号を具足します如来を供養したてまつるにも其の功德すぎたり、又濁世に法華經の行者あらんを留難をなさん人は頭七分にわるべしと云云。

夫れ日蓮は日本第一のゑせものなり、其の故は天神七代はさておきぬ、地神五代も又はかりがたし、人王始まりて神武より今に至るまで九十代欽明天王より七百余年が間世間につけ仏法によりても日蓮ほど、あまねく人にあだまれたるものは候はじ、守屋が寺塔をやき清盛入道が東大寺興福寺を失せし彼等が一類は彼がにくま

ず、將門貞たうが朝敵と成りし伝教大師の七寺にあだまれし彼等も
いまだ日本一州の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の四衆にはにくまれ
ず、日蓮は父母・兄弟師匠同法上一人下万民一人ももれず父母のかた
きのごと

く謀反強盜にもすぐれて人ごとにあだをなすなり、されば或時は数
百人にのられ或時は数千人に取りこめられて刀杖の大難にあう、所
ををはれ国を出さる・結句は国主より御勘氣二度一度は伊豆の国
今度は佐渡の嶋

なり、されば身命しんみょうをつぐべきかつてもなし形体を隠すべき藤の衣ももたず、北海の嶋にはなたれしかば彼の国の道俗どうぞくは相州そうしゅうの男女なんよよりもあだをなしき、野中に捨てられて雪にはだへをまじえくさをつみて命をささえたりき、彼の蘇夫が胡国ここくに十九年雪を食くらうて世をわたりし、李呂が北海に六ヶ年がにくつに・せめられし・我は身にてしられぬ、これはひとえに我が身には失とがなし日本国にほんこくをたすけんとをもひしゆへなり。

しかるに尼とがごぜん並びならに入道殿にゅうどうでんは彼の国あに有る時は人めを・をそれて夜中に食を・をくり、・或あるる時は国のせめをもはばかりず身にもかかわらんとせし人人ひとびとなり、さればつらかりし国なれどもそりたるかみをうしろへひかれ・すすむあしもかへりしぞかし、いかなる過去かこのえんにてやありけんとおぼつかなかりしに・又いつしか・これま

でさしも大事だいじなるわが夫を御つかいにてつかはされて候、ゆめかまぼろ

しか尼ごぜんの御すがたをば・みまいらせ候はねども心をばこれにとど
めをばへ候へ日蓮にちれんをこいしくをはしせば常に出いずる日ゆうべに・いづる
月を・をがませ給たまえ、いつとなく日月にちがつにかけをうかぶる身なり、又後生ごしやう
には靈山淨土りやうぜんじやうどにまいりあひまひらせん、南無妙法蓮華經。

六月十六日

日蓮にちれん

花押かおう

さどの国のこうの尼御前あまごぜん

◆二九三 一谷入道御書

建治元年五月八日 五十

四歳御作 与一谷入道日学女房 1326p

去る弘長元年いぬ こうちよう太歳辛酉五月十二日に御勘氣を蒙つて伊豆の国伊東の

郷と云う処ところに流罪るざいせられたりき、兵衛の介頼朝よりとものながされてありし

処ところなり、さありしかども程なく無く同三年太歳癸亥二月二十二日に召し返さ

れぬ、又文永八年ぶんえい太歳辛未九月十二日重ねて御勘氣を蒙りしが忽たちまちに頸を

刎はねらるべきにてありけるが子細しさいありけるかの故ゆえに・しばらく

のびて北国佐渡さどの嶋しまを知行ちぎようする武蔵むさしの前司預りて其その内の者どもの

沙汰さたとして彼の嶋しまに行き付いてありしが・彼の島の者ども因果いんがの理をも

弁わきまへぬあらゑびすなればあらくあたりし事は申もうす計はかりなし、然れども

一分いちぶんも恨うらむる

心なし、其そのの故ゆえは日本にほん国こくの主として少しも道理どうりを知りぬべき相模さがみ殿だににも国をたすけんと云う者を子細しさいも聞ほどこかず理り不ふ尽じんに死罪しさいにあてがう事なれば・況ましてや其その末の者どもの事はよきもたのまれずあしきもにくからず。

此このの法門ほうもんを申し始めしより命をば法華ほけき經きやうに奉たてまつり名をば十方じゆつぱう世界せかいの諸しよ仏ぶつの浄土じやうどにながすべしと思おもひ儲もけしなり、弘演かうえんと云いいし者は主衛きみえいの懿公いこうの肝を取りて我が腹を割さいて納おさめて死にき、予讓よじやうと云いいし者は主の知伯はじが恥はじをすすがんがために劒を呑んで死せしぞかし、是は但ただわづかの世間せけんの恩を報はぐぜんがためぞかし。

況わりや無量劫むりやうきやくより已来このかた六道ろくどうに流轉るてんして仏にならざりし事は法華ほけき經きやうの御ために身を惜おしみ命を捨てざる故ぞかし、されば喜見きけん菩薩ぼさつと申まをせし菩薩ぼさつは千二百歳の間・身を焼いて日月にちがつ淨明じやうみやう徳とく仏ぶつを供養くやうし、七万二千歳せんさんさいの間

臂ひじを焼やいて法華經ほけきようを供養くようし奉たてまつる其そのの人は藥王菩薩やくおうぼさつぞかし、不輕菩薩ふぎようぼさつは法華經ほけきようの御ごために多劫たかつの間・罵め罵り毀辱きにく・杖じょう木瓦石もくがしやくに・せめられき、今の釈迦しやくか仏ぶつにあらずや、されば仏ぶつになる道みちは時ときにより品品しんしんに替かつて行いずべきにや、今の世よには法華經ほけきようは・さる事ことにておはすれども時ときによりて事こととなるなれば山林さんりんに交まじわりて読誦どくじゆすとも將又里はたまたに住すまして演說えんぜつすとも・持戒じかいにして行いずとも臂ひじを焼やいて供養くようすとも仏ぶつにはなるべからず、日本国にほんこくは仏法盛ふつぽうなるやうなれども仏法ぶつぽうについて

不思議あり人は是を知らず、譬えば虫の火に入り鳥の蛇の口に入るが
如し真言師華嚴宗法相・三論禪宗・淨土宗・律宗等の人人は我も法
を得たり我も生死を離れたる人とは思へども立始めし本師等依經の心
をも弁えず、但我が心の思い付いて有りしままに其の經を取り立てんと
思へる墓無き心計りにて法華經に背けば又仏意にも
叶わざる事をば知らずして弘め行く程に国主・万民是を信じぬ又他国
へ渡り又年久しく成りぬ、末学の者共本師の誤をば知らずして弘め
習ひし人人をも智者とは思へり、源濁りぬれば流淨からず身曲りぬ
れば影直から
ず、真言の元祖善無畏等は既に地獄に墮ちぬべかりしが、或は改悔して
地獄を免れたる者もあり、或は唯依經を弘めて法華經の讚歎をもせ
ざれば生死は離れねども惡道に墮ちざる人もあり、而るを末末の者・

此の事を知らずして諸人・一同に信をなしぬ、譬えば破たる船に乗つて大海に浮び酒に酔る者の火の中に臥せるが如し。

日蓮是を見し故に忽に菩提心を発して此の事を申し始めしなり、

世間の人人何に申すとも信ずる事はあるべからず、還つて流罪・死罪せ

らるべしとは兼て知つてありしかども今の日本国は法華經に背き釈迦仏

を捨つる故に後生は必ず無間・大城に墮ちん事はさておきぬ今生にも

必ず大難に値うべし、所謂他国より責め來つて上一人より

下万民に至るまで一同の歎きあるべし、譬えば千人の兄弟が一人の親

を殺したらんに此の罪を千に分ては受くべからず、一一に皆無間・大城

に墮ちて同じく一劫を経べし、此の国も又又是くの如し、娑婆世界は

五百塵点劫より已來教主釈尊の御所領なり、大地虚空山海草木一分

も他仏の有ならず、又一切衆生は釈尊の御子なり、

たと 譬えじようごうば成劫じようごうの始め一人の梵王ぼんのう下くだつて六道ろくどうの衆生しゆじようをば生おいて候ぞかし、
梵王ぼんのうの一切衆生いつさいしゆじようの親おやたるが如ごとく・釈迦しやくか仏ぶつも又一切衆生いつさいしゆじようの親おやなり、又此
の国の一切衆生いつさいしゆじようのためには教主きようしゆしやくそん釈尊しやくそんは明師めいしにておはするぞかし、父母ふぼ
を知るも師しの恩おんなり黒白こくびやくを弁わきまうも釈尊しやくそんの恩おんなり、而しかるを天魔てんまの身みに
入いつて候善導ぜんどう・法然ほうねんなどが申もうすに付ついて・国土こくどに阿弥陀堂あみだだうを造つくり・或ある
は一郡いっぐん・一郷いっけう・一村いっこん等に阿弥陀堂あみだだうを造つくり・或あるは百姓ひやくせい万民ばんみんの宅たくのごとに
阿弥陀堂あみだだうを造つくり・或あるは宅宅いえいえ・人人ひとひとごと

に阿弥陀仏あみだぶつを書造りつく・或は人ごとに口口に・或は高声に唱へある・或は一万遍ある・或は六万遍あるなんど唱うるに・少しも智慧ちえある者はいよいよこれをすすむ、譬たとへば火にかれたる草をくわへ水に風を合せたるに似たり、此の国の人人ひとびとは一人もなく教主釈尊きょうしゅしゃくそんの御弟子おんでし御民ぞかし、而るに阿弥陀等たぶつの他仏いちぶつを一仏もつくらずかかず念仏ねんぶつも申さず・ある者は悪人あくにんなれども釈迦仏しゃかぶつを捨て奉る色は未だ顕いまれず、一向に阿弥陀仏あみだぶつを念ずる人人ひとびとは既に釈尊しゃくそん仏を捨て奉る色顕然けんねんなり、彼の人人ひとびとの墓はかな無き念仏ねんぶつを申す者は悪人あくにんにてあるぞかし、父母ふぼにもあらず主君しゅくん・師匠ししやうにてもおはせぬ仏をばいとをしき妻の様にもてなし、現に国主こくしゅ父母ふぼ明師めいしたる釈迦しゃか仏ぶつを捨て乳母にちぼの如ごとくなる法華經ほけきやうをば口にも誦じゆし奉らず是れ豈あに不孝ふこウの者にあらずや、此の不孝ふこウの人人ひとびと・一人・二人・百人・千人ならず一國・二國ならず上かみ一人より

下万民ばんみんに至るいたまで日本国にほんこく・皆みなこぞりて一人もなく三逆罪さんぎやくざいの者なり、されば日月にちがつは色を變じて此これをにらめ・大地だいちも瞋いかりてをどりあがり大すいせい彗星天にはびこり大火国だいかに充滿じゅうまんすれども僻事ひがことありともおもはず、我等われらは念仏ねんぶつにひまなし其その上念仏堂ねんぶつを造り阿弥陀仏あみだぶつを持ち奉たてまつるなんと自讃じざんするなり、是は賢き様にて墓無はかなし、譬たとえば若わかき夫妻等が夫は女を愛し女は夫をいとおしむ程に父母ふぼのゆくへをしらず、父母は衣薄けれども我はねや熱し、父母は食せ

ざれども我は腹に飽あきぬ、是は第一だいいちの不孝ふこうなれども彼等かれらは失とがともしらず、況や母に背そむく妻父にさかへる夫・逆重罪じゅうざいにあらずや、阿弥陀仏あみだぶつは十萬億のあなたに有つて此の娑婆世界しやばせかいには一分いちぶんも縁なし、なにと云うとも故もなきなり、馬に牛を合せ犬に☆さるをかたらひたるが如ごとし。

但日蓮にちれん一人計ばかり此の事を知りぬ、命を惜おしみて云はずば国恩を報ぜぬ

上・教主きようしゅく・御敵ぎてきとなるべし、是これを恐れずして有のままに申もうすならば死罪しざいとなるべし、設たとひ死罪しざいは免まぬらるとも流罪るざいは疑うたがいなかるべしとは兼かねて知つてありし

かども仏の恩重ゆえきが故ゆえに人をはばからず申もうしぬ、案にたがはず兩度ま
で流されて候いし中に・文永九年ぶんえいの夏の比佐渡さどの国石田の郷一谷と云いい
し処ところに有ありしに・預りたる名主等は公と云ひ私と云ひ父母ふぼの敵よりも
宿世すくせ

の敵よりも悪げにありしに宿むかしの入道にゅうどうと云ひ妻と云ひつかう者と云ひ始
はおぢをそれしかども先世せんぜの事にやありけん、内内・不便ふびんと思ふ心付き
ぬ、預りよりあづかる食は少し付ける弟子でしは多くありしに僅の飯の二口
三口

ありしを・或あるはおしきに分け・或あるは手に入て食しに宅主内心ないしんあつて外
にはをそるる様なれども内には不便ふびんげにありし事何いずれの世にかわすれん、
我を生みておはせし父母ふぼよりも当時は大事だいじとこそ思いしか、何いかなる恩お
も・はげむべしまして約束やくそくせし事たがうべしや。

然しかれども入道にゅうどうの心は後世ごしやうを深く思いてある者なれば久しく念仏ねんぶつを
申しつもりぬ、其その上阿弥陀堂あみだだうを造り田畠でんばたも其その仏の物なり、地頭じとうも
又をそろしななど思いて直ちに法華經ほけきやうにはならず、是は彼の身には第一だいいち
の道理どうりぞかし、然しかれども又無間むげん・大城だいじやうは疑無うたがいし、設たとひ是より法華經ほけきやうを

つかわ 遣したりとも世間せけんもをそろしければ念仏ねんぶつすつべからずな

んど思はば、火に水を合せたるが如ごとし、謗法ほうぼうの大水たいすい・法華經ほけきょうを信ずる小

火をけさん事うたがい疑なかるべし、入道にゅうどう・地獄じごくに墮おつるならば還かえつて日蓮にちれんが

失とがになるべし、如何いかんんがせん如何いかんんがせんと思いわづらひて今まで

法華經ほけきょうを渡わたし奉らず、渡わたし進せんが為ためにまうけまいらせて有りつる

法華經ほけきょうをば鎌倉かまくらの焼亡に取り失うしなひ参せて候由申す、旁かたがたに入道にゅうどう

の法華經ほけきょうの縁はなかりけり、約束やくそく申しける我が心も不思議ふしぎなり、又我

とは・すすまざりしを鎌倉かまくらの尼かえの還りの用途なげに歎なげきし故ゆえに口入くちゅう有りし

事ことなげかし、本錢もとせんに利分りぶんを添えて返さんとすれば又弟子でしが云いわく御約束やくそく

違たがひなんど

申す、旁かたがたに進退極しんたいきわまりて候へども人の思わん様は狂惑きやうかくの様なるべし、力

及およばずして法華經ほけきょうを一部十卷わたと・渡わたし奉たてまつる、入道にゅうどうよりもうばにてありし

者は内^{ない}心^{しん}よせなりしかば是^{これ}を持^もち給^{たま}へ。

日蓮^{にちれん}が申^{もう}す事は愚^{おろか}なる者の申^{もう}す事なれば用ひず、されども去^{いぬ}る

文永^{ぶんえい}十一年^{甲太歳}十月に蒙古^{もうこ}国より筑紫^{つくし}によせて有りしに对^{つしま}馬の者かため

て有りしに・宗総^{そうそう}馬尉^{まのじよう}逃ければ百姓^{ひやくせい}等は男をば・或^{ある}は殺^{ころ}し・或^{ある}は生取

にし・女をば・或^{ある}は取り集めて手をとをして船に結い付け・或^{ある}は生け取

にす・一人も助かる者なし、壹岐^{いっき}によせても又是^{かくの}くの如し、船おしよ

せて有りけるには奉行入道・豊前前司は逃げて落ちぬ、松浦党は數百

人打たれ・或は生け取にせられしかば寄せたりける浦浦の百姓ども

壹岐對馬の如し、又今度は如何が有るらん彼の国の百千万億の兵、

日本国を引回らして寄せて有るならば如何に成るべきぞ、北の手は先

ず佐渡の島に付いて地頭守護をば須臾に打ち殺し百姓等は北山

へにげん程に・或は殺され・或は生け取られ・或は山にして死ぬべし、

抑是れ程の事は如何として起るべきぞと推すべし、前に申しつるが

如く此の国の者は一人もなく三逆罪の者なり、是は梵王・帝釈・日月・

四天の彼の蒙古国の大王の身に入らせ給いて責め給うなり。

日蓮は愚なれども釈迦仏の御使法華經の行者なりとなのり候を

用いざらんだにも不思議なるべし、其の失に依つて国破れなんとす、況

や・或は国を追ひ・或は引はり・或は打擲し・或は流罪し・或は弟子

を殺し・或は所領を取る、現の父母の使をかくせん人人よかるべしや、
日蓮は日本国の人人の父母ぞかし・主君ぞかし・明師ぞかし・是を背ん
事よ、念仏を申さん人人は無間地獄に堕ちん事決定なるべし、たのも
したのもし。

抑蒙古国より責めん時は如何がせさせ給うべき、此の法華經をい

ただき頸にかけさせ給いて北山へ登らせ給うとも年比念仏者を養ひ
念仏を申して、釈迦仏・法華經の御敵とならせ給いて有りし事は久し
し、又若し命ともなるならば法華經ばし恨みさせ給うなよ、又
閻魔王宮にしては何とか仰せあるべき、おこがましき事とはおぼすと

も其の時は日蓮が檀那なりとこそ仰せあらんずらめ、又是はさてをき
ぬ、此の法華經をば学乗房に常に開かさせ給うべし、人如何に云うと
も念仏者・真言師持斎なんどにばし開かさせ給うべからず、又日蓮が

弟子でしとなのるとも日蓮にちれんが判はんを持もざらん者ものをば御用もちいあるべからず、
恐恐きょうきょう謹言きんげん。

五月八日日蓮にちれん花押かおう

一谷入道にゅうどう女房にようぼう

◆二九四

中興入道消息

弘安二年十一月三十日

五十八歳御作

与中興入道女房

1331p

鷺目一貫文送り給い候い了んぬ妙法蓮華經の御宝前に申し上げ候い

了んぬ、抑日本国と申す国は須弥山よりは南一閻浮提の内縦広七

千由旬なり、其の内に八万四千の国あり、所謂五天竺十六の大国五百

の中国・十千の小国無量の粟散国微塵の島あり、此等の国国は皆

大海の中にありたとへば池にこのはのちれるが如し、

此の日本国は大海の中の小島なりしほみては見えずひればすこしみゆる

かの程にて候いしを神のつき出させ給いて後人王のはじめ神武天皇と申

せし大王をはしましき、それより・このかた三十余代は仏と経と僧とは

・まし

まさずただ人と神とばかりなり、仏法をはしまさねば地獄もしらず、
浄土もねがはず、父母・兄弟のわかれありしかどもいかながなるらん、
ただ露のきゆるやうに日月のかくれさせ給うやうにうちをもいてあり
けるが・然る

に人王第三十代欽明天皇と申す大王の御宇に此の国より戊亥の角に
当りて百済国と申す国あり、彼の国よりせいめい王と申せし王金銅の
釈迦仏と此の仏の説かせ給へる一切経と申すふみと此をよむ僧をわた
してありし

かば仏と申す物もいきたる物にもあらず、経と申す物も外典の文にも
にず、僧と申す物も物はいへども道理もきこへず形も男女にもにざりし
かばかたがたあやしみをどろきて左右の大臣大王の御前にしてとかう

僉議

ありしかども多分たぶんはもちうまじきにてありしかば、仏はすてられ僧はい
ましめられて候いしほどに・用明ようめいてんのう天皇の御子聖徳太子と申せし人びだつ
の二年二月十五日東に向いて南無釈迦牟尼仏なむしやかむにぶつと唱となえて御舎利しやりを御手みてよ
り出し給たまいて同六年に法華經ほけきょうを説誦どくじゆし給ふ、それより・このかた七百余
年王は六十余代に及ぶまでやうやく仏法ぶつぽうひろま
り候いて日本にほん六十六箇国・二つの島にいたらぬ国もなし、国・郡・郷・里・村に堂塔どうとうと申し寺と申し仏法ぶつぽうの住所すでに十七万一千
三十七所なり、日月にちがつの如くあきらかなる智者代ちしや代に仏法ぶつぽうをひろめ衆星しゅうせい
のごとく・かが

やくけんじん国に充満せり、かの人人は自行には、或は真言を行じ
・或は般若・或は仁王・或は阿弥陀仏の名号・或は観音・或は地藏・或
は三千仏・或は法華経読誦しをるとは申せども無智の道俗をすすむる
にはただ南無阿弥陀仏と申すべし、譬えば女人の幼子をまうけたるに
・或はほり・或はかわ・或はひとりなるには母よ母よと申せば・
ききつけぬればかならず他事をすてたすくる習なり、阿弥陀仏も又
是くの如し我等は幼子なり阿弥陀仏は母なり地獄のあな餓鬼のほりな
んどにをち入りぬれば南無阿弥陀仏と申せば音と響きとの如く必ず
来りてすくひ給うなりと一切の智人ども教へ給いしかば我が日本国か
く申しならはして年ひさしくなり候。

然るに日蓮は中国都の者にもあらず辺国の將軍等の子息にもあら
ず遠国の者民が子にて候いしかば・日本国七百余年に一人もいまだ唱へ

まいらせ候はぬ南無妙法蓮華經と唱え候のみならず、皆人の父母のごとく日月の如く主君の如くわたりに船の如く渴して水のごとくうえて飯の如く思いて候南無阿弥陀仏を無間地獄の業なりと申し候ゆへに食に石をたひたる様にがんせきに馬のはねたるやうに渡りに大風の吹き来たるやうに・じゆ

らくに大火のつきたるやうに俄にかたきのよせたるやうにとわりのきさきになるやうに・をどろき・そねみ・ねたみ・候ゆへに去ぬる建長五年四月二十八日より今弘安二年十一月まで二十七年が間退転なく申しつより候事月のみつるがごとく・しほのさすがごとく・はじめは日蓮只一人・唱候いしほどに、見る人値う人聞く人・耳を

ふさぎ眼をいからかし・口をひそめ・手をにぎり・はをかみ・父母・兄弟・師匠ぜんうも・かたきとなる、後には所の地頭・領家かたきとなる後に

は一国さはぎ後には万民をどろくほどに、或は人の口まねをして南無
妙法蓮華經みょうほうれんげきやうとなへ・或は惡口あくくのためになへ・或は信ずるに似て唱へ
・或はそしるに似て唱へあるなにんどする程に、すでに日本国にほんこく
十分が一分は一向南無妙法蓮華經いちふん いっかう なむ みょうほうれんげきやうのこりの九分は・或は兩方・或はう
たがひ・或は一向念佛ある いっかう ねんぶつ者なる者は父母ふぼのかたき主君しゅくんのかたき宿世すくせのかた
きのやうにののしる、村主郷主国主等こくしゅは謀叛むほんの者のごとくあだまれた
り、かく

の如く申す程に大海の浮木の風に随いて定めなきが如く輕毛の虚空に
のぼりて上下するが如く日本国ををはれあるく程に、或時はうたれ
・或時はいましめられ・或時は疵をかほふり・或時は遠流・或時は弟子を
ころされ・或時はうちをはなれなんどする程に、去ぬる文永八年九月十
二日には御かんきをかほりて北国佐渡の島にうつされて候い
しなり、世間には一分のともなかりし身なれども故最明寺入道殿
極樂寺入道殿を地獄に墮ちたりと申す法師なれば謀叛の者にもすぎ
たりとて相州・鎌倉・竜口と申す処にて頸を切らんとし候いしが科は
大科なれども法華經の行者なれば左右なくうしなひなばいかんがとや
をもはれけん、又遠国の島にすてをきたるならば・
いかにもなれかし。

上ににくまれたる上萬民も父母のかたきのやうにおもひたれば道に

ても又国にても若しはころすか若しはかつえしぬるかにならんずらんとあてがはれて有りしに、法華經ほけきょう・十羅刹じゅうらせつの御めぐみにやありけん、或はある天とがなきよしを御らんずらんやありけん、島にてあだむ者は多かりしかども中興ちゅうきょうの次郎にゅうじろう入道と申せし老人ろうじんあり

き、彼の人は年ふりたる上心かしこく身もたのしくて国の人にも人とをもはれたりし人の此こゝの御房ごぼうはゆへある人にやと申しけるかのゆへに子息等しそくもいたうもにくまず、其その已下いかの者どもたいし彼等かれらの人人ひとびとの下人にてありしかば内内あやまつ事もなく唯上ただの御計おんはからいのままにてありし程に、水は濁れども又すみ月は雲かくせども・

又はることはりなれば、科とがなき事すでにあらわれてゐし事もむなしからざりけるかのゆへに、御一門いちもん・諸大名しよだいめいはゆるすべからざるよし申さもうれけれども相模守さがみのかみ殿の御計らひばかりにてついにゆりて候いてのぼり

ぬ、ただし日蓮にぢれんは日本国にほんこくには第一だいいちの忠の者なり肩をならぶる人は先代せんだいにも・あるべからず後代ごだいにも・あるべしとも覚えおぼえず。

其そのゆえの故は去ぬる正嘉年しょうか中の大地震だいじしん文永元年ぶんえいがんねんの大長星の時内外ないけの智人ちじん其そのゆえの故をうらなひしかども・なにのゆ

へ・いかなる事の出来しゅつたいすべしと申もうす事をしらざりしに、日蓮一切経蔵に
入りて勘かんへたるに真言・禪宗・念仏律等の権小の人人をもつて法華経を
かろしめたてまつる故に梵天・帝釈の御とがめにて西なる国に仰せ付け
て日本国にほんこくをせむべしとかんがへて、故最明寺入道殿にまいらせ候いき、
此の事を諸道しよの者、をこつきわらひし程に・九箇

年いすぎて去ぬる文永五年に大蒙古国より日本国にほんこくを・をそうべきよし

牒状ちやうじやう

わたりぬ、此の事ゆえのあふ故に念仏者・真言師等あだみて失はんと

せしなり、例せば漢土かんどに玄宗皇帝と申せし御門みかどの御后きさきに上陽人と申

せし美人あり、天下第一てんかだいいちの美人にてありしかば楊貴妃と申もうすきさきの

御らんじて此の人王へまいるならば我がをほへをとりなんとて

宣旨せんじなりと申もうしかすめて、父母・兄弟ふぼ・きやうだいをば・或あるはながし・或あるは殺し上・陽

人をばろうに入れて四十年までせめたりしなり、此これもそれにて候、

にちれん かんもん 日蓮が勘文あらわれて大蒙古国を調伏し日本国かつならば此の法師は
にほん だいいち 日本第一の僧となりなん、我等が威徳をとろうべしと思ふかのゆへに
さんげん 譏言をなすをばしろしめさずして、彼等がことばを用い

ほろぼ て国を亡さんとせらるるなり、例せば二世王は趙高が譏言によりて
りし うしない 李斯を失ひかへりて趙高が為に身をほろぼされ、延喜の御門はしへいの
さんげん をとどの譏言によりて菅丞相を失いて地獄におち給いぬ、此れも又か
ごと ほけきよう くの如し、法華經のかたきたる真言師・禪宗・律僧・持斎・念佛者等が
もち 申す事を御用いありて日蓮をあだみ給うゆへに、日蓮

にちがつ してん ちがつ はいやしけれども所持の法華經を釈迦・多宝・十方の諸仏・梵天・帝釈
りゅうじん てんしやうだいいしん はちまんだいばさつ ・日月・四天・竜神・天照太神・八幡大菩薩・人の眼をおしむがごとく
しやてん たいしやく 諸天の帝釈をうやまうがごとく母の子を愛するがごとくまほりおもん
たま 給うゆへに、法華經の行者をあだむ人を罰し給う事父母のかたきよ

りも朝敵ちようてきよりも重く大科だいかに行ひ給うたまなり。

然るしかに貴辺きへんは故次郎入道殿にゅうどうの御子にて・をはするなり御前ごぜんは又よめ
なり・いみじく心かしこかりし人の子とよめとにをはすればや、故入道にゅうどう
殿のあとをつぎ国主こくしゅも御用もちいなき法華經ほけきやうを御用もちいあるのみならず
法華經ほけきやうの行者ぎやうじやをやしなはせ給たまいてとしどしに千里せんりの道をおくりむかへ
去いぬる幼子のむすめ御前ごぜんの十三年に丈六じやうろくのそとばを

たてて其その面かおに南無妙法蓮華經なむみょうぼうれんげきやうの七字しちじを顯あらわしてをはしませば、北風吹
けば南海にしやまのいろくづ其その風かぜにあたりて大海たいかいの苦くるしみをはなれ東風とうふうきたれば
西山にしやまの鳥鹿とりか其その風かぜを身にふれて畜生道ちくしやうだうをまぬかれて都率とそつの内院ないえんに生
れん、況や・かのそとばに隨喜ずいきをなし手をふれ眼まなこに見まいらせ候人類
をや、過去かこの父母ふぼも彼のそとばの功德くどくによりて天てんの日月にちがつ
の如ごとく浄土じやうどをてらし孝養かうやうの人並ならびに妻子さいしは現世げんせには寿いのちを百二十年持たもち
て後生ごしやうには父母ふぼとともに靈山りやうぜんじやうど浄土じやうどにまいり給たまはん事水すゐすめば月つきうつり
つづみをうてばひびきのあるがごとしと・をぼしめし候こう等云云どううんうん、此これよ
り後後の御ごそとばにも法華經ほけきやうの題目だいもくを顯あらわし給たまへ。

弘安二年己卯十一月卅日

身延山

日蓮 花押

中興入道殿女房

◆二九五

是日尼御書ごしよ

1335p

さどの国より此の甲州まで入道にゅうどうの来りたりしかば・あらふしぎとを
もひしに又今年来りなつみ水くみたきぎこりだん王の阿志仙人せんじんにつかへ
しがごとくして一月に及びぬる不思議ふしぎさよ、ふでをもちてつくしがた
し、これひ

とへに又尼ぎみの御功德くどくなるべし、又御本尊ごほんぞん一ふくかきてまいらせ候、
靈山浄土りょうぜんじょうどにては・かならずゆきあひ・たてまつるべし、恐恐きょうきょう謹言きんげん。

卯月十二日

日蓮にちれん

尼
是
日

◆二九六

遠藤左衛門尉御書

1336p

日蓮にちれん此の度赦免しやめんを被かむり鎌倉かまくらへ登るにて候、如我にやがしやくしやがん昔所願こんじやいまんぞく今者已満足
此の年に当るか、遠藤殿御育み無なくくんば命永らう可べしや亦赦免またしやめんにも預
かる可べしや、日蓮にちれん一代いちだいの行功ぎやうくは偏ひとえに左衛門殿等遊ところし候処ところなり、御經に
「天諸童子しやどうじ以て給使きゅうじを為し刀杖とうじやうも加えず毒も害すること能あたはず」と候
得がたば有難ありがたき御經なるかな、然さば左衛門殿さえもんは梵天ぼんてん釈天しやくてんの御使おんつかいにてましま
すか、靈山りやうぜんえの契約けいやくに此の判を参せ候、一流みらいは未来みらいえ持せ給たまえ靈山りやうぜんに
於おいて日蓮にちれん日蓮にちれんと呼よび給たまえ、其の時御迎むかえに罷まかり出でず可べく候、猶なお又鎌倉かまくら
より申もうし進すすす可べく候なり。

文永ぶんえい十一年甲戌きのえいぬ三月十二日

にちれん
日蓮

さえもんのじょう
遠藤左衛門尉殿

◆二九七

生死しやうじいちだいじ一大事血脈抄けちみやく

ぶんえい
文永九年二月十一

日五十一歳御作

さいれんぼう
与最蓮房日淨

1336p

にちれん
日蓮記之

御状委細いさいひけん披見ひけんせしめ候い畢おわんぬ、夫れ生死しやうじいちだいじ一大事血脈けちみやくとは所謂いわゆる
妙法蓮華經みょうほうれんげきやう是これなり、其そのの故ゆえは釈迦しやか・多宝たほうの二仏宝塔ほうとうの中なにして
上行菩薩じやうぎやうぼさつに譲ゆずり給たまいて此この妙法蓮華經みょうほうれんげきやうの五字ごじ過去かこ遠遠おんのんごう劫くわより已このかた来きた寸すん
時も離れざる血脈けちみやくなり、妙は死法は生なり此この生死しやうじの二法じふつかが十界じゅうかいの

当とう体たいなり又此これを当とう体たい蓮れん華げとも云いうなり、天てん台だい云いく、当まさに知しるべし
依え正しょうの因いん果がは悉ことごとく是これ蓮れん華げの法はなり」と云い云い此この釈しやくに依え正しょうと云いうは
生しょう死じなり生しょう死じ之これ有あれば因いん果が又蓮れん華げの法はなる事こと明めいけし、伝でん教ぎょう大だい師し云いく
生しょう死じの二に法はは一いつ心しんの妙みょう用ゆう・有う無むの二に道どうは本ほん覺がくの真ま徳とく」と文ぶん、天てん地ち・
陰いん陽よう・日にち月がつ・五ご星せい・地じ獄ごく・乃ない至し仏ぶつ果か・

生死しやうじの二法に非あらずと云うことなし、是かくの如ごとく生死しやうじも唯ただ妙法蓮華經みょうほうれんげきやうの生死しやうじなり、天台てんだいの止觀しかんに云いく起きは是これ法性ほつしやうの起き・滅こは是これ法性ほつしやうの滅めつ」云云、釈迦しやか・多宝たほうの二仏も生死しやうじの二法なり、然しかれば久遠実成くおんじつじやうの釈尊しやくそんと皆成かいじやう仏道ぶつどうの法華經ほけきやうと我等衆生われらしゆじやうとの三つ全く差別さべつ無しと解さりて妙法蓮華經みょうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつる處ところを生死しやうじ一大事いちだいじの血脉けちみやくとは云うなり、此の事但日蓮にちれんが弟子でし・檀那だんな等の肝要かんようなり法華經ほけきやうを持つとは是これなり、所詮臨終しよせんりんじゆう只今ただにありと解さりて信心しんじんを致いたして南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱となうる人を是人じにん命終みやうじゆう為千仏授手くふ令不恐怖だあくしゆ不墮惡趣ふたあくしゆう」と説かれて候、悦よろこばしい哉一仏いちぶつ・二仏あらに非あらず百仏二百仏あらに非あらず千仏あらまで来迎らいじゆうし手を取り給たまはん事歡喜かんきの感涙かんるい押がえ難がたし、法華不信ほつけふしんの者は其人命終入阿鼻獄ごにんみやうじゆうにゆうあびごく」と説かれたれば定ていめて獄卒迎ごくそつむかえに來つて手をや取り候そうらはんずらん淺☆淺☆、十王は裁斷くしやうしんし俱生神かしくくは呵責かしやくせんか。

いまだにちれん
今日蓮が弟子・檀那等・南無妙法蓮華經と唱えん程の者は千仏の手
を授け給はん事譬えば☆夕顔の手を出すが如くと思し食せ、過去に
法華經の結縁強盛なる故に現在に此の經を受持す、未來に仏果を
成就せん事疑有るべか

らず、過去の生死現在の生死未來の生死三世の生死に法華經を離れ切
れざるを法華の血脈相承とは云うなり、謗法不信の者は即断一切
世間・仏種」とて仏に成るべき種子を断絶するが故に生死一大事の
血脈之無きなり。

総じて日蓮が弟子・檀那等自他彼此の心なく水魚の思を成して
異体同心にして南無妙法蓮華經と唱え奉る處を生死一大事の血脈と
は云うなり、然も今日蓮が弘通する處の所詮是なり、若し然らば広宣
流布の大願も叶うべき者か、剩え日蓮が弟子の中に異体異心の者之有

れば例せば城者として城を破るが如し、日本国の一切衆生に法華經を
信ぜしめて仏に成る血脈を継がしめんとするに還つて日蓮を種種の難
に合せ結句此の島まで流罪す、而るに貴辺日蓮に随順し又難に値い
給う事心中思い遣られて痛しく候ぞ、金は大火にも焼けず大水にも漂
わず朽ちず鉄は水火共に堪えず賢人は金の如く愚人は鉄の如し
貴辺豈真金に非ずや法華經の金を持つ故か、經に云く「衆山の中に
須弥山為第一此の法華經も亦復是くの如し」又云く「火も焼くこと
能わず水も漂わすこと能わ

ず「云云、過去の宿縁追い來つて今度日蓮が弟子と成り給うか釈迦・多宝こそ御存知候らめ、在在諸仏土常与師俱生」よも虚事候はじ。

殊に生死一大事の血脉相承の御尋ね先代未聞の事なり貴貴、此の

文に委悉なり能く能く心得させ給へ、只南無妙法蓮華經・釈迦・多宝

上行菩薩血脉相承と修行し給へ火は焼照を以て行と為し水は垢穢

を淨るを以て行と為し風は塵埃を払ふを以て行と為し又人畜・草木の

為に魂となるを以て行と為し大地は草木を生ずるを以て行と

為し天は潤すを以て行と為す妙法蓮華經の五字も又是くの如し本化

地涌の利益是なり、上行菩薩末法今の時・此の法門を弘めんが為に御

出現之れ有るべき由・經文には見え候へども如何が候やらん、

上行菩薩出現すとやせん出現せずとやせん、日蓮先ず粗弘め候な

り、相構え相構えて強盛の大信力を致して南無妙法蓮華經臨終正念

と祈念きねんし給たまへ生死しやうじ一大事の血脈けちみやく此れより外に全く求むることなかれ、
煩惱ぼんのう即そく菩提ぼだい・生死しやうじ即そく涅槃ねはんとは是これなり、信心しんじんの血脈けちみやく無なくくんば法華經ほけきやうを持
つとも無益むやくなり、委細いさいの旨むね又又申もうす可もうく候、恐恐きやうきやう謹言。

文永九年壬ぶんえい 申二月十一日桑門みずのえさる

日蓮にちれん 花押かおう

最蓮房上人御返事さいれんぼうしやうにんごへんじ

◆二九八 草木成仏口決そうもくじやうぶつぐけつ

文永九年二月二十日ぶんえい

五十一歳御作さいれんぼうし 与最蓮房日淨2338p

問いうて云いく草木成仏そうもくじやうぶつとは有情非情うじやうひじやうの中何れぞや、答こたえて云いく草木
成仏じやうぶつとは非情ひじやうの成仏じやうぶつなり、問いうて云いく情非情ひじやう共に今經こんきやうに於おて成仏じやうぶつす

るや、答えて云く爾なり、問うて云く証文如何、答えて云く
妙法蓮華經是なり・妙法とは有情の成仏なり蓮華とは非情の成仏な
り、有情は生の成仏非情は死の成仏生死の成仏と云うが有情非情の
成仏

の事なり、其の故は我等衆生死する時塔婆を立て開眼供養するは死の
成仏にして草木成仏なり、止觀の一に云く「二色一香中道に非ざる
こと無し」妙樂云く「然かも亦共に色香中道を許す無情仏性・
惑耳驚心す」此の一色とは五色の中には何れの色ぞや、青黄赤白黒の
五色を一色と釈せり一とは法性なり、爰を以て妙樂は色香中道
と釈せり、天台大師も無非中道といへり、一色一香の一は二三相對の一
には非ざるなり、中道法性をさして一と云うなり、所詮十界三千・
依正等をそなへずと云う事なし、此の色香は草木成仏なり是れ即ち
蓮華の成仏なり、色香と蓮華とは言はかはれども草木成仏の事なり、
口決に云く「草にも木にも成る仏なり」云云、此の意
は草木にも成り給へる寿命品の釈尊なり、經に云く「如来秘密神通之
力」云云、法界は釈迦如来の御身に非ずと云う事なし、理の顯本は死

を表す妙法みょうほうと顯あらわる・事の顯本は生を表す蓮華れんげと顯あらわる、理の顯本は死に
て有情うじようをつかさどる事の顯本は生にして非情ひじようをつかさどる、我等衆生われらしゅじよう
のために依怙えこ・依託えたくなるは非情ひじようの蓮華れんげがなりたるなり・我等われら
衆生しゅじようの言語ごんご・音声おんじよう・生の位みゐには妙法みょうほうが有情うじようとなりぬるなり、我等一身われら
の上うじようには有情うじよう・非情ひじよう具足ぐそくせり、爪と髪とは非情ひじようなりきるにもいたまず
其その外うじようは有情うじようなれば切るにもいたみくるしむなり、一身所具しよぐの有情うじよう
非情ひじようなり此うじようの有情うじよう・非情ひじよう十如是じゆじゆの因果いんがの二法ふそくを具足ぐそくせり、衆生世間しゅじようせけん・
五陰世間ごおんせけん・国土世間こくとせけん・此うじようの三世間せけん・有情うじよう・非情ひじようなり。
一念三千いちねんさんぜんの法門ほうもんをふりすすぎたてたるは大曼荼羅まんだらなり、当世とうせの習ならい
そこないの学者がくしやゆめにもしらざる法門ほうもんなり、天台てんだい・妙樂みょうらく・伝教内でんぎやうにはか
がみさせ給たまへどもひろめ給たまはず、一色一香いつしきいつかうとののしり惑耳驚心わくにきやうしんとささや
き給たまいて・

妙法蓮華と云うべきを円頓止觀とかへさせ給いき、されば草木成仏は
死人の成仏なり、此等の法門は知る人すくなきなり、所詮妙法蓮華を
しらざる故に迷うところの法門なり、敢て忘失する事なかれ、恐恐
謹言。

二月二十日

日蓮 花押

最蓮房御返事

◆二九九

最蓮房御返事さいれんぼうごへんじ

1340p

夕あざりは相構あいかまええ相構そうかまええて御入ごり候けうへ得受とくじゆ職人功徳法門委細いさい申し候そうらはん。

御礼の旨委細承むねいさいたまわり候おわい畢おわんぬ、都とよりの種しゆじゆ種しゆじゆの物たしか慥たしかかに給たまひ候おわい畢おわん

ぬ、鎌倉かまくらに候おわいし時ときこそ常じょうにかかる物ものは

見候みいづれ此この島しまに流罪るざいせられし後いは未いまだ見みず候けう、是これ体ていの物ものは辺土へんの
小島こしまにてはよによに目出度めでたき事ことに

思おもい候けう。

御状ごじやうに云いく去いる二に月げつの始はじより御弟子おんでしとなり歸伏きふく仕しり候けう上うへは自今いま
以後いごは人数ひとかずならず候けうとも御弟子おんでしの一分いちぶんと思おもひ食くされ候けうはば恐悦おそえつに相あ

存ず可く候云云、經の文には 在在諸仏しよぶつの土に常に師と俱ともに生れん」とも・或はある若しも法師ほふしに親近しんこんせば速すみかに菩薩ぼさつの道を得ん是この師しに隨順ずいじゆんして学せば恒沙ごうしやの仏を見たてまつることを得ん」とも云へり、釈

には 本此の仏に従つて初めて道心どうしんを發おこし亦此の仏に従つて不退地ふたいに住せん」とも、・或は云く初此の仏・菩薩ぼさつに従つて結縁けちえんし還かえつて此の仏・菩薩ぼさつに於て成就じやうじゆす」とも云えり、此の經釈きやうしやくを案ずるに過去無量劫かこむりやうこうより已來このかた師弟していの契約けいやく

有りしか、我等末法濁世われらまつぼうじよくせに於て生を南閻浮提大日本國えんだいにうけ忝かたじけなくも諸仏出世しよぶつしゆつせの本懷ほんかいたる南無妙法蓮華經なむみよほうれんげきやうを口に唱へ心に信じ身に持ち手に翫もてあそぶ事・是れ偏ひとえに過去かこの宿習しゆくじゆうなるか。

予日本にほんの体を見るに第六天だいろくてんの魔王智者まおうちしやの身に入りて正師しやうしを邪師じやしとなし善師ぜんしを惡師あくしとなす、經に惡鬼入其身あくきとは是これなり、日蓮智者にちれんちしやに非あらず

と雖も第六天の魔王我が身に入らんとするに兼ての用心深ければ身によせつけず、故に天魔力及ばずして主臣を始として良觀等の愚癡の法師原に取り付いて日蓮をあだむなり、然るに今時は師に於て正師・邪師・善師・惡師の不同ある事を知つて邪惡の師を遠離し正善の師に親近すべきなり、設い徳

は四海に齊く智慧は日月に同くとも法華經を誹謗するの師をば惡師
邪師と知つて是に親近すべからざる者なり、或る經に云く「若し誹謗
の者には共住すべからず若し親近し共住せば即ち阿鼻獄に趣かん」と
禁め給う是なり、いかに我が身は正直にして世間出世の賢人の名をと
らんと存ずれども惡人に親近すれば自然に十度に二度・三度
其の教に隨ひ以て行くほどに終に惡人になるなり、釈に云く「若し人本
惡無きも惡人に親近すれば後必ず惡人と成り惡名天下に遍からん」
云云、所詮其の邪惡の師とは今の世の法華誹謗の法師なり、涅槃經に
云く「菩薩惡象等に於ては心に恐怖すること無かれ惡智識に於ては
怖畏の心を生ぜよ、惡象の為に殺されては三趣に至らん」
ず、惡友の為に殺さるれば必ず三趣に至らん、法華經に云く「惡世の
中の比丘は邪智にして心諂曲」等云云、先先申し候如く善無畏・

金剛智達磨・慧可善導・法然東寺の弘法園城寺の智証山門の慈覚闍東
の良觀等の諸師は今の正直捨方便の金言を読み候には正直捨実教
但説方便教と読み・或は於諸經中最在其上の經文をば於諸經中最
在其下と・或は法華最第一の經文をば法華最第二・第三等と読む、
故に此等の法師原を邪惡の師と申し候なり。

さて正善の師と申すは釈尊の金言の如く・諸經は方便法華は眞実と
正直に読むを申す可く候なり、華嚴の七十七の入法界品之を見る
可し云云、法華經に云く・善知識は是れ大因縁なり所謂化導して仏を
見たてまつり阿耨菩提を發することを得せしむ」等云云、仏説の如きは
正直に四味三教・小乘・權大乘の方便の諸經・念仏・眞言・禪・律等の
諸宗並びに所依の經を捨て但唯以一大事因縁の妙法蓮華經を説く師
を正師善師とは申す可きなり、然るに

にちれんまつぼうのはじめ
日蓮末法の初の五百年に生を日域に受け如来の記文の如く三類の強敵
を蒙り種種の災難に相値つて身命を惜まずして南無妙法蓮華經と
とな
唱え候は正師か邪師か能能御思惟之有る可く候。

上に挙ぐる所の諸宗の人人は我こそ法華經の意を得て法華經を
修行する者よと名乗り候へども予が如く弘長

には伊豆の国に流され・文永には佐渡嶋に流され・或は竜口の頸の座等
此の外種種の難数を知らず、経文の如くならば予は正師なり善師な
り・諸宗の学者は悉く邪師なり悪師なりと覺し食し候へ此の外善惡
二師を分別する

経論の文等は是れ広く候へども兼て御存知の上は申すに及ばず候。

只今の御文に自今以後は日比の邪師を捨て偏に正師と憑むとの仰せ
は不審に覺へ候、我等が本師・釈迦如来法華經を説かんが為に出世まし
ませしには他方の仏・菩薩等來臨影響して釈尊の行化を助け給う、さ
れば釈迦・多宝・十方の諸仏等の御使として來つて化を日域に示し
給うにもやあるらん、經に云く我於余国遣化人・為其集聽法衆亦遣
化隨順不逆」此の経文に比丘と申すは貴辺の事なり、其の故は聞法
信受隨順不逆眼前なり争か之を

疑うたがいい奉たてまつるべきや、設たといい又在在諸しよぶつ仏土常与師俱生の人なりとも三周の
声聞しょうもんの如ごとく下種げしゅの後に退大取小して五道ろくどう・六道ちんりんに沈輪たまいし給たまいしが成仏じやうぶつ
の期来至らいしして順次に得脱とくだつせしむべきゆへにや、念仏ねんぶつ・真言等しんごんの邪法じやほう・邪師じやし
を捨てて日蓮にちれんが弟子でしとなり給たまうらん有り難がたき事なり。

何いづれれの辺に付いても予が如ごとく諸宗しよしゅうの謗法ほうぼうを責め彼等かれらをして捨邪歸正
せしめ給たまいて順次に三仏座を並べたもう常寂光土に詣りて釈迦しやか・多宝たほうの
御宝前ごほうぜんに於おいて我等無始われらむしより已来このかたしてい師弟しだいの契約けいやく有りけるか無かりけるか又
釈尊しやくそんの御使おんつかいとして来つて化し給たまへるかさぞと仰おほせを蒙こうむつてこそ我が心
にも知られ候そうらはんずれ、何様いかようにも・はげませ給たまへ・はげませ給たまへ。

何となくとも貴辺きへんに去いぬる二月こうの比だいじより大事だいじの法門ほうもんを教たてまつへ奉りぬ、
結句けっくは卯月八日・夜半・寅の時に妙法みょうほうの本円戒を以て受職もつ灌頂かんだんせしめ
奉たてまつる者なり、此の受職を得るの人争いかでか現在げんざいなりとも妙覺みょうかくの仏を成ぜざ

らん、若し今生妙覺こんじやうみやうかくならば後生豈等覺等の因分ごしやうあにとうかくならんや、実に無始むし曠劫こうこつの契約常けいやく与師俱生の理りならば日蓮にちれん今度成仏このたびじやうぶつせんに貴辺きへん豈相離あいはなれあくしゅて惡趣ださいに墮在ださいしたもう可べきや、如来にょらいの記文きもん仏意ぶつゐの辺おひに於おては世・出世しゅつせに就ついて更に妄語もうご無し、然しかるに

法華經には、我が滅度の後に於て応に斯の經を受持すべし、是の人・
仏道に於て決定して疑有ること無けん」・或は速為疾得・無上仏道」
等云云、此の記文虚くして我等が成仏今度虚言ならば・諸仏の御舌も
され・多宝の塔も破れ落ち二仏・並座は無間地獄の熱鉄の牀となり方
実寂の三土は地餓畜の三道と變じ候べし、争か・さる事候べきやあらた
のもしやたのもしや是くの如く思いつづけ候へば我等は流人なれども
身心共にうれしく候なり。

大事の法門をば昼夜に沙汰し成仏の理をば時時刻刻にあぢはう、
是くの如く過ぎ行き候へば年月を送れども久からず過ぐる時刻も程あ
らず、例せば釈迦・多宝の二仏塔中に並座して法華の妙理をうなづき
合ひ給いし時・五十小劫仏の神力の故に諸の大衆をして半日の如しと
謂わしむと云いしが如くなり、劫初より以来父母・主君等

の御勘氣を蒙り遠国の島に流罪せらるるの人・我等が如く悦び身に余
りたる者よもあらじ、されば我等が居住して一乗を修行せんの外は
何れの処にても候へ常寂光の都為るべし、我等が弟子・檀那とならん
人は一步を行かずして天竺の靈山を見本有の寂光土へ昼夜に往復し
給ふ事うれしとも申す計り無し申す計り無し。

余りにうれしく候へば契約一つ申し候はん、貴辺の御勘氣疾疾許さ
せ給いて都御上り候はば・日蓮も鎌倉殿はゆるさじとの給ひ候とも
諸天等に申して鎌倉に帰り京都へ音信申す可く候、又日蓮先立つてゆ
り候いて鎌倉へ帰り候はば貴辺をも天に申して古京へ歸し奉る可く候、
恐恐謹言。

四月十三日

にちれん かおう
日蓮 花押

最蓮房御返事^{さいれんぼうごへんじ}

◆三〇〇

祈☆抄

文永九年

五十一歳御作

本朝

沙門

日蓮撰

1344p

問うて云く華嚴宗・法相宗・三論宗小乗の三宗真言宗・天台宗の祈をなさんにいづれかするしあるべきや、答て云く仏説なればいづれも一往は祈となるべし、但法華經をもつていのらむ祈は必ず祈となるべし、問うて云く其の所以は如何、答えて云く二乗は大地微塵劫を経て先四味の經を行ずとも成仏すべからず、法華經は須臾の間此れを聞いて仏になれり、若爾らば舍利弗迦葉等の千二百万二千総じて一切の二乗界の仏は必ず法華經の行者の祈をかなふべし、又行者の苦にもかわるべし、故に信解品に云く世尊は大恩まします希有の事を

もつ
以て憐愍教化
れんみんきょうけ

して我等を利益し給う無量億劫にも誰れか能く報ずる者あらん、手足

をもて供給し頭頂をもつて礼敬し一切をもつて供養すとも皆報ずるこ

と能わず、若しは以て頂戴し両肩に荷負して恒沙劫に於て心を尽して

恭敬し、又美膳無量の宝衣及び諸の臥具種種の湯藥を以てし

牛頭梅檀及び諸の珍宝以つて塔廟を起て宝衣を地に布き斯くの如

き等の事もつて供養すること恒沙劫に於てすとも亦報ずること能わじ」

等云云、此の経文は四大声聞が譬喩品を聴聞して仏になるべき由を

心得て、仏と法華経の恩の報じがたき事を説けり、されば二乗の御

為には此の経を行ずる者をば父母よりも愛子よりも両眼よりも身命

よりも大事にこそおぼしめすらめ、舍利弗・目連等の諸大声聞

は一代聖教 いづれも讃歎せん行者をすておぼす事は有るべからずと

は思へども爾前にぜんの諸經しよきやうは・すこし・うらみおぼす事も有らん 於おつ仏法中ぶつぽう

已はい如敗種しゆ」なにとしたたかにいましめられ給たまいし故なり、今の華光げこう如来にょらい

・名相みやうさう如来にょらい・

普明ふみやう如来にょらいなにとならせ給たまいたる事は・おもはざる外ほかの幸なり、例せば

崑崙こんろん山のくづれて宝の山に入りたる心地しんじしてこそおはしぬらめ、されば

領解りやうげの文に云く 無上宝珠不求自得等むじやうぼうしゆふぐじとく」云云。

されば一切の二乗界法華經の行者をまほり給はん事は疑あるべからず、あやしの畜生なんども恩をば報ずる事に候ぞかし、かりと申す鳥あり必ず母の死なんとする時孝をなす、狐は塚を跡にせず畜生猶此くの如し況や人類をや、されば王寿と云ひし者・道を行きしにうえつかれたりしに、路の辺に梅の樹あり其の実多し寿とりて食し

てうへやみぬ、我れ此の梅の実を食して氣力をます其の恩を報ぜずんばあるべからずと申して衣をぬぎて梅に懸けてさりぬ、王尹と云いし者は道を行くに水に渴しぬ、河をすぐるに水を飲んで錢を河に入れて是を水の直と

す、竜は必ず袈裟を懸けたる僧を守る、仏より袈裟を給て竜宮城の愛子に懸けさせて金翅鳥の難をまぬがる故なり、金翅鳥は必ず父母孝養の者を守る、竜は須弥山を動かして金翅鳥の愛子を食す、金翅鳥

は仏の教によつて

父母の孝養をなす者僧のとりさんばを須弥の頂にきて竜の難をまぬかるる故なり、天は必ず戒を持ち善を修する者を守る、人間界に戒を持たず善を修する者なければ人間界の人死して多く修羅道に生ず、修羅多勢なれば

ををりをなして必ず天ををかず、人間界に戒を持ちて善を修するの者多ければ人死して必ず天に生ず、天多ければ修羅をそれをなして天ををかず、故に戒を持ち善を修する者をば天必ず之を守る、何に況や二乗は六凡より戒徳も勝れ智慧賢き人人なり、いかでか我が成仏を遂げたらん法華經を行ぜん人をば捨つべきや。

又一切の菩薩並に凡夫は仏にならんがために、四十余年の經經を無量劫が間行ぜしかども仏に成る事なかりき、而るを法華經を行じて

仏と成つて今十方世界におはします仏・仏の三十二相・八十種好をそ
なへさせ給いて九界の衆生にあをがれて、月を星の回れるがごとく
須弥山を八山の回るが如く、日輪を四州の衆生の仰ぐが如く輪王
を万民の仰ぐが如く、仰がれさせ給うは法華經の恩徳にあらずや、さ
れば仏は法華經に誡めて云く須らく復た舍利を安ずることをもちい
ざれ」涅槃經に云く諸仏の師とする所謂法なり是の故に如来恭敬
供養す」等云云、法華經には我舍利を法華經に並ぶべからず、涅槃經に
は諸仏は法華經を恭敬供養すべしと説せ給へり、仏此

の法華經ほけきょうをさととりて仏に成りしかも人に説き聞かせ給はずば仏種ぶつしゅをた
たせ給ふ失たまたあり、此の故ゆえに釈迦しやか如来にょらいは此の娑婆世界しやばせかいに出でて説かんと
せさせ給たまいしを、元品がんぽんの無明むみょうと申す第六天だいろくてんの魔王まおうが一切衆生いっさいしゅじょうの身に入
つて、仏をあだみて説かせまいらせじとせしなり、所謂波瑠璃王いはゆるはるりの五百
人の釈子しやくしを殺し、鴛鴦摩羅おうくつまらが仏を追、提婆だいばが大石はなちを放・
旃遮婆羅門女ばらもんが鉢はちを腹はらにふせて仏の御子ごしと云いし、婆羅門城ばらもんには仏を
入れ奉たてまつる者は五百兩の金をひきき、されば道にはうばらをたて井には
糞ふんを入れ門にはさかむきをひけり食には毒を入れし、皆是れ仏をにく
む故ゆえに、華色

比丘尼びくにを殺し、目連もくれんは竹杖外道ちくじょうげどうに殺され、迦留陀夷とどは馬糞うなに埋れし皆
仏をあだみし故しかなり、而れども仏さまさまの難なんをまぬかれて御年七十
二歳ふつばう、仏法ぶつぽうを説き始められて四十二年と申せしに中天竺王舍城てんじくおうしやじょうの丑寅うしとら

・耆闍崛山ぎしゃくつせん

と申もうす山にして、法華經ほけきょうを説とき始められて八年まで説かせ給たまいて、東天竺てんじく俱尸那城くしなじょう跋提河ばつだいがの辺にして御年八十と申せし、二月十五日の夜半に御涅槃ねはんに入らせ給たまいき、而しかりといへども御悟りをば法華經ほけきょうと説ときをかせ給たまへば、此の經の文字もんじは即釈迦そくしや如來かによういの御魂みたまなり、一一の文字もんじは仏の御魂みたまなれば此の經を行ぜん人をば釈迦しや如來かにようい・我が御眼ごがんの如くまほり給たまうべし、人の身に影のそへるがごとくそはせ給たまうらん、いかでか祈とならせ給たまはざるべき。

一切いっさいの菩薩ぼさつは又始め華嚴經けこんきょうより四十余年よんじゅうよねんの間・仏にならんと願たまい給たまいしかどもかなはずして、法華經ほけきょうの方便品ほうべんの略開三顯一りやくかいさんけんいつの時・仏を求もとむる諸もろの菩薩ぼさつ大数八万有はちまんり、又諸もろの万億国まんいつこくの轉輪聖王てんりんじょうおうの至いたれる合掌がっしょうして敬心を以て具足もつぐそくの道を聞かんと欲ほす」と願たまいしが、広開三顯一くわいかいさんけんいつを聞きい

て菩薩ぼさつ是この法ほうを聞いて疑網ぎもう皆みな已すに断たちぬ」と説たかせ給たまい

ぬ、其その後ご自界じく他方たほうの菩薩ぼさつ雲うんの如ごとく集つり星せいの如ごとく列つらり給たまいき、宝塔ほうとう品ぽんの

時じ十方じゅうぽうの諸仏しよぶつ各各かくかく無辺むへんの菩薩ぼさつを具足ぐそくして集たまり給たまいき、文殊もんじゆは海うみより

無量むりやうの菩薩ぼさつを具足ぐそくし、又また八十はち万億まんにやく那由ないう佗たの諸菩薩しよぼさつ又また過こ八恒河沙ごうがしやの

菩薩ぼさつ・地涌じゆせん千界せんがい

の菩薩ぼさつ・分別ぶんべつ功德くどく品ぽんの六百八十ななひゃくはちじゅう万億まんにやく那由ないう佗た恒河沙ごうがしやの菩薩ぼさつ・又また千倍せんばいの

菩薩ぼさつ・復また一世界せかいの微塵じんじゆ數すうの菩薩ぼさつ・復また三千大千世界さんぜんだいせんせかいの微塵じんじゆ數すうの菩薩ぼさつ・復また二

千中国土せんちゆうこくどの微塵じんじゆ數すうの菩薩ぼさつ・復また小千国土せうこくどの微塵じんじゆ數すうの菩薩ぼさつ・復また四天下してんげの

微塵じんじゆ數すうの菩薩ぼさつ・三四天下してんげ・一四天下してんげの微塵じんじゆ數すうの菩薩ぼさつ・復また八

世界微塵せかいじんじゆ數すうの衆生しゆじやう・藥王品やくおうぽんの八万四千はちまんの菩薩ぼさつ・妙音品みやうおんの八万四千はちまんの

菩薩ぼさつ・又また四万二千しふせんにの天子普門品てんしふもんぽんの八万四千はちまん・陀羅尼品だらにぽんの六万八千人ろくまんはちせん・

妙莊嚴王品みやうそうこんの八万四千はちまん・勸発品かんぱつぽんの恒河沙ごうがしや等の菩薩ぼさつ三千大千世界微

塵じんじゆ数等の菩薩ぼさつこ此等の菩薩ぼさつを委くわしく数へば十方世界じゆつぽうせかいの微塵みじんの如ごとし、
十方世界じゆつぽうせかいの草木そうもくの如ごとし、十方世界じゆつぽうせかいの星せいの如ごとし、十方世界じゆつぽうせかいの雨うの
如ごとし、此等これらは皆法華經みなほけきようにして仏たまいにならせ給いて、此さんぜんだいせんせかいの三千大千世界ちじようの
地上・

地下こくう虚空こくうの中にまします、迦葉尊者かしようそんじやは☆足山けいそくざんにあり、文殊師利もんじゆしりは
清涼山せいうりやうざんにあり、地藏菩薩じざうぼさつは伽羅陀山からだせんにあり、觀音かんのんは補陀落山ふだらくざんにあり、
彌勒菩薩みろくぼさつは兜率天とそつてんに、難陀等なんだの無量むりやうの竜王りゅうおう阿修羅王あしゅらは海底海畔かいだいかいばんにあ
り、帝釈たいしやくは☆利天とよりてんに梵王ぼんのうは有頂天いうてんに・魔醯修羅まけいしゆらは第六の佉化天こくわてんに・
四天王してんのうは須弥しゆみの腰こしに・日月にちがつ・衆星しゅうせいは我等われらが眼まなこに見へて頂上ちやうじやうを照てらし
給たまふ、

江神・河神・山神等も皆法華經みなほけきようの会上しよそんの諸尊しよそんなり。

仏・法華經ほけきようをとかせ給たまいて年数二千二百余年にんげんなり、人間にんげんこそ寿も短

き故に仏をも見奉り候人も待らぬ、天上は日数は永く寿も長ければ
併ながら仏をおがみ法華經を聴聞せる天人かぎり多くおはするなり
人間の五十年は四王・天の一日一夜なり、此れ一日一夜をはじめとし
て三十日は一月十二月は一年にして五百歳なり、されば人間の二
千二百余年は四王・天の四十四日なり、されば日月並びに毘沙門天王
は仏におくれたてまつりて四十四日いまだ二月にたらず、帝釈・梵天
などは仏におくれ奉りて一月一時にもすぎず、わづかの間にいかで
か仏前の御誓並びに自身成仏の御經の恩をばわすれて、法華經の行者
をば捨てさせ給うべきなんと思いつらぬれば・たのもし
き事なり、されば法華經の行者の祈る祈は響の音に応ずるがごとし影
の体にそえるがごとし、すめる水に月のうつるがごとし方諸の水をまね
くがごとし磁石の鉄をすうがごとし琥珀の塵をとるがごとし、あき

らかなる鏡の物の色をうかぶるがごとし世間の法には我がおもはざる
事も父母・主君・師匠妻子をろかならぬ友なんどの申す事は恥ある者は
意にはあはざれども名利をもうしなひ、寿ともなる事も侍るぞかし、
何に況や我が心から

をこりぬる事は、父母・主君・師匠などの制止を加うれどもなす事あり。

さればはんよきと云いし賢人は我頸を切つてだにこそけいかと申せし人には与へき、季札と申せし人は約束の剣を徐の君が塚の上に懸けたりき、而るに靈山会上にして即身成仏せし童女は小乗經には五障の雲厚く三従のきづな強しと嫌はれ、四十余年の諸大乘經には、或は歴劫修行にたえずと捨てられ、或は初発心時・便成正覚の言

も有名無実なりしかば女人成仏もゆるさざりしに設けい人間天上の女人なりとも成仏の道には望なかりしに・竜畜下賤の身たるに女人とだに生れ年さへいまだ・たけずわづかに八歳なりき、かたがた思ひもよらざりしに文殊の教化によりて海中にして法師提婆の中間わづかに宝塔品を説かれし時刻に仏になりたりし事は・ありがたき

事なり、一代超過いちだいちようかの法華經ほけきようの御力おんちからにあらずば、いかでかかくは候べき、

されば妙樂みょうらくは行淺功深ぎようせんくじん以顯經力けんききよく」とこそ書かせ給へ、たま竜女りゅうによは我が仏

になれる經なれば仏の御諫なくともいかでか法華經ほけきようの行者ぎようじやを捨てさせ

給うべき、たまされば自讚歎さんたん仏の偈げには我大乘だいじようの教ひらを聞きこいて苦しの衆生しゆじようを

度脱どだつせん」等とこそ・すすませさせ給たまいしか、りゅうによ竜女りゅうによの

誓そは其しよじゆうの所従しよじゆうの非口所宣しよしき非心所測いっさい」の一切いっさいの竜畜りゅうちゆうの誓しよしきなり娑竭羅しやから

竜王りゅうおうは竜畜りゅうちゆうの身なれども子を念おもう志いしき深いんしんかりしかば大海第一たいかいだいいちの宝

如意宝珠にようほうじゆをもむすめにとらせて即身成仏そくしんじようぶつの御布施ふせにせさせつれ此この珠たま

は直三千大千世界あたいさんぜんだいせんせかいにかふる珠たまなり。

提婆達多だいばだつたは師子類王ししきようおうには孫釈迦如来しんしやかにらひには伯父ちやくふたりし斛飯王こくはんのうの御子ごし

阿難尊者あなんそんじやの舍兄あになり、善聞長者ぜんもんちやうじやのむすめの腹はらなり、てんりんじようおう轉輪聖王てんりんじようおうの御一門いちもん

南閻浮提えんぶだいには賤せんしからざる人ひとなり、在家ざいけにましましし時は夫妻ふさいとなるべ

きやすたら女を悉達しつたたいし太子に押し取られ宿世すくせの敵と思ひしに、出家しゅつけの後
に人天大会にんてんたいえの集まりたりし時・仏に汝なんじは癡人ちじん・唾つばきを食へる者とのられ
し上名聞利養深みょうもんりようかりし人なれば仏の人にもてなされしをそねみて我が
身には五法を行じて仏よりも尊くろがねげになし鉄くろがねをのして千輻輪ふくりんにつけ
螢火ほたるびを集めて白毫びやくごうとなし・六万宝蔵ほうぞう・八万宝蔵はちまんほうぞうを胸に浮べ、象頭山に
戒場

を立て多くの仏弟子をさそひとり、爪に毒を塗り仏の御足にぬらむと
企て蓮華比丘尼を打殺し・大石を放て仏の御指をあやまちぬ、具に三
逆を犯し結句は五天竺の悪人を集め仏・並びに御弟子檀那等にあだを
なす程に、頻婆娑羅王は仏の第一の御檀那なり、一日に五百輛の車を
送り日日に仏・並びに御弟子を供養し奉りき、提婆そねむ心
深くして阿闍世太子を語いて父を終に一尺の釘七つをもつてはりつけに
なし奉りき、終に王舎城の北門の大地破れて阿鼻大城に墜ちにき、
三千大千世界の人・一人も是を見ざる事なかりき、されば大地微塵劫
は過ぐとも無間大城をば出づべからずとこそ思ひ候に法華經にして
天王如来とならせ給いけるにこそ不思議に尊けれ、提婆達多・
仏になり給はば語らはれし所の無量の悪人、一業所感なれば皆無間
地獄の苦ははなれぬらん、是れ偏に法華經の恩徳なり、されば

提婆達多並びに所従の無量の眷属は法華經の行者の室宅にこそ住せ給うらめと・たのもし。

諸の大地微塵の如くなる諸菩薩は等覺の位までせめて元品の無明計りもちて侍るが釈迦如来に値い奉る元品の大石をわらんと思ふに、教主釈尊四十余年が間は因分可說果分不可說」と申して妙覺の功德を説き顯し給はず、されば妙覺の位に登る人・一人もなかりき本意なかりし事なり、而るに靈山八年が間に唯一仏乘名為果分」と説き顯し給いしかば諸の菩薩皆妙覺の位に上りて釈迦如来と悟り等しく須弥山の頂に登つて四方を見る

が如く長夜に日輪の出でたらんが如くあかなくならせ給いたりしかば仏の仰せ無くとも法華經を弘めじ・又行者に替らじとはおぼしめすべからず、されば我不愛身命但惜無上道・不惜身命当広説此經」等と

こそ誓ひ給たまいしか。

其その上慈父じふの釈迦しやか仏ぶつ悲母ひもの多宝たほう仏ぶつ慈悲じひの父母ふぼ等同じく助証じゆつぽうの十方
の諸しよ仏ぶつ一座いざうに列らせ給たまいて、月と月とを集めたるが如ごとく日と日とを並べ
たるが如ごとくましましし時、諸もろもろの大衆たいしゆうに告ぐ我が滅度めつどの後誰か能よく此の
經ぎやうを護持ごぢし読誦どくじゆせんものなる、今・仏前ぶつぜんに於おいて自ら誓言みずかを説せけ」と三度
まで諫たまさせ給たまいしに、八方・四百万億那由他なゆたの国土こくど

に充満じゅうまんせさせ給たまいし諸大菩薩しよだいぼさつ身を曲低頭合掌がっしやうし俱ともに同時どうじに声をあげて世尊せそんの勅ごつの如ごとく当まさに具くさに奉行ぶぎやうしたてまつるべし」と三度まで・声を惜おまず・よばわりしかば、いかでか法華經ほけきやうの行者ぎやうじやには・かわらせ給たまはざるべき、はんよきと云いいしものけいかに頭こうべを取せきさつと云いいしもの徐の君が塚に刀をかけし、約束やくそくを違たがへじがためなり、此等こ等は震旦しんたん辺土のえびすの如ごとくなるものどもだにも友の約束やくそくに命をも亡ぼし身に代かへて思ふ刀をも塚に懸かくるぞかし、まして諸大菩薩しよだいぼさつは本より大悲代受苦の誓ひ深し仏の御諫なしともいかでか法華經ほけきやうの行者ぎやうじやを捨て

給たまうべき、其の上・我が成仏じやうぶつの経たる上仏慇懃おんこんに諫め給たまいしかば仏前ぶつぜんの御誓丁寧ていねいなり行者ぎやうじやを助け給たまう事疑うたがうべからず。

仏は人天の主・一切衆生の父母なり而も開導の師なり、父母なれども賤き父母は主君の義をかねず、主君なれども父母ならざればおそろしき辺もあり、父母・主君なれども師匠なる事はなし諸仏は又世尊にてもましませば主君にてはましませども娑婆世界に出でさせ給はざれば師匠にあらず・又「其中衆生悉是吾子」とも名乗らせ給は
ず釈迦仏独主師親の三義をかね給へり、しかれども四十余年の間は提婆達多を罵給ひ諸の声聞をそしり菩薩の果分の法門を惜み給しかば、仏なれどもよりよりは天魔・破旬ばしの我等をなやますかの疑ひ人には・いはざ

れども心の中には思ひしなり、此の心は四十余年より法華經の始まで失せず、而るを靈山八年の間に宝塔虚空に現じ二仏・日月の如く並び、諸仏大地に列り大山をあつめたるがごとく、地涌千界の菩薩虚空に星

の如く^{ごと}列り^{つらな}給いて^{たまひ}、諸仏^{しよぶつ}の果分の功德^{くどく}を吐き給い^{たまひ}しかば宝蔵^{ほうぞう}をかたぶけて貧人^{ひんじん}にあたうるがごとく崑崙山^{こんろん}のくづれたる

にいたりき、諸人^{しよにん}・此の玉をのみ拾うが如く^{ごと}此の八箇年^{はちかねん}が間珍しく貴き^{とうと}事心髓^{しんみ}にもと・をとりしかば・諸菩薩^{しよぼさつ}・身命^{しんみょう}も惜ま^{おし}ず言をはぐくま^{たまひ}ず誓をなせし程に・属累品^{ぞくるいほん}にして釈迦如来宝塔^{しやくかにょらいほうとう}を出でさせ給いて^{たまひ}とびらを押したて給い^{たまひ}しかば諸仏^{しよぶつ}は国国へ返り給ひき、諸の菩薩等^{しよぼさつ}も諸仏^{しよぶつ}に随ひ奉りて返らせ給ひぬ。

やうやう心ぼそくなりし程に 卻後三月当般涅槃」と唱えさせ給い

し事こそ心ぼそく耳をどろかしかりしかば諸菩薩・二乘人天等ことごと

とく法華經を聴聞して仏の恩徳心肝にそみて、身命をも法華經の御

ために投て仏に見せまいらせんと思ひしに仏の仰の如く若し涅槃せさせ

給はば・いかに・あさましからんと胸さはぎして・ありし程

に仏の御年満八十と申せし二月十五日の寅卯の時・東天竺・舍衛國・

俱尸那城・跌提河の辺にして仏御入滅なるべき由の御音上は有頂横に

は三千大千界までひびきたりしこそ目もくれ心もきえはてぬれ、五

天竺・十六の大

国五百の中国十千の小国無量の粟散國等の衆生一人も衣食を調へず

上下をきらず、牛馬・狼狗・☆驚・☆等の五十二類の一類の数大地

微塵をもつくしぬべし況や五十二類をや、此の類皆華香衣食をそなへて

最後の

供養くようとあてがひき、一切衆生の宝の橋おれなんとす一切衆生の眼まなこぬ

けなんとす一切衆生の父母・主君・師匠死なんとすなんと申もうすこえひ

びきしかば身の毛のいよ立のみならず涙を流す、なんだをながすのみな

らず頭こうべをたたき胸を・をさへ音こえも惜おしまず叫おほびしかば血の涙血のあせ

くしなじょう俱尸那城に大雨だいうよりもしげくふり大河よりも多く流れたりき、是これ

偏ひとえに法華經ほけきょうにして仏になりしかば仏の恩の報ずる事かたかりしなり。

かかるなげきの庭にても法華經の敵をば舌をきるべきよし座につらな

るまじきよしののしり侍はべりき、迦葉童子菩薩かしょうどうじぼさつは法華經の敵の国には霜雪そうばく

となるべしと誓たまい給たまいき、爾その時・仏は臥ふよりをきてよろこばせ給たまいて

善哉善哉と讃ほめ給たまいき、諸菩薩しよぼさつは仏の御心を推すして法華經の敵をうた

んと申もうさば、しばらくもいき給たまいなんと申もういて一一の誓はなせしなり、

されば諸菩薩・諸天人等は法華經の敵の出来せよかし仏前の御誓はた
して釈迦尊並びに多宝仏諸仏如来にもげに仏前にして誓いしが如く、
法華經の御ためには名をも身命をも惜まざりけりと思はれまいらせん
とこそおぼすらめ。

いかに申す事はをそきやらん、大地はささばはづるるとも虚空をつな
ぐ者はありません潮のみちひぬ事はありません

とも日は西より出づるとも法華經ほけきようの行者ぎようじやの祈りのかなはぬ事はあるべからず、法華經ほけきようの行者ぎようじやを諸もろの菩薩ぼさつ・人天八部等にんてんはちぶ・二聖・二天・十羅刹等じゅうらせつ・千に一も来つてまほり給たまはぬ事侍らば、上は釈迦諸仏しやくかしよぶつをあなづり奉りたてまつ下は九界をたばらかす失とがあり、行者ぎようじやは必ず不実ふじつなりとも智慧ちえはをろかなりとも身みは不浄ふじようなりとも戒徳かいとくは備なへずとも・南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようと申さば必ず守護しゆごし給たまうべし、袋きたなしとて金を捨る事なかれ伊蘭いらんをにくまば梅檀せんだあるべからず、

谷ふじようの池ふじようを不浄ふじようなりと嫌きらはば蓮を取らざるべし、行者ぎようじやを嫌きらい給たまはば誓ちかを破たまいり給たまいなん、正像しょうざう既に過すぎぬれば持戒じかいは市ちの中の虎この如ごとし智者ちしやは麟角りんかくよりも希まれならん、月を待つまでは灯たのむを憑ほうしゆべし宝珠ほうしゆのなき処ところには金銀きんぎんも宝なり、白鳥はくちようの恩をば黒鳥くろちように報せうずべし聖僧せいそうの恩をば凡僧ぼんそうに報せうずべし、とくとかく利生りしやうをさづけ給たまへと強盛きやうじやうに申もうすならば・いかでか祈りの

かなはざるべき。

問うて云く上にかかせ給ふ道理・文証を拜見するにまことに日月の天に・おはしますならば大地に草木のおふるならば、昼夜の国土にあるならば大地だにも反覆せずば大海のしほだにもみちひるならば、法華經を信ぜん人現世のいのり後生の善処は疑いなかるべし、然りと雖も此の二十余年が間の天台・真言等の名匠・多く大事のいのりをなすにはかばかしくいみじきのりありともみえず、尚外典の者どもよりもつたなきやうにうちをぼへて見ゆるなり、恐らくは經文のそらごとなるか行者のをこなひのをろかなるか・時機のかなはざるかと、うたがはれて後生もいかと・をぼう。

それは・さてをきぬ御房は山僧の御弟子とうけ給はる父の罪は子にかかり師の罪は弟子にかかるとうけ給はる、叡山の僧徒の蘭城山門の

どうとうぶつぞうきようかん　せんまん
堂塔仏像經卷數千萬をやきはらはせ給うが、ことにおそろしく世間の
ひとひと
人人もさわぎうとみあへるはいかに前にも少少うけ給はり候ぬれども
このたび
今度くわしくききひらき候はん、但し不審なることはかかる惡僧ども
さんぼう　みいどう
なれば三宝の御意にもかなはず天地にもうけられ給はずして、祈りも
叶はざるやらん

とをばへ候はいかに、答て云くせんぜんも少少申しぬれども今度又あらあら申すべし、日本国にをいては此の事大切なり、これをしらざる故に多くの人口に罪業をつくる、先づ山門はじまりし事は此の国に仏法渡つて二百余年、桓武天皇の御宇に伝教大師立て始め給ひしなり、当時の京都は昔聖徳太子王氣ありと相し給ひしかども・

天台宗の渡らん時を待ち給ひし間都をたて給はず、又上宮太子の記に云く我が滅後二百余年に仏法・日本に弘まる可し」云云、伝教大師延暦年中に叡山を立て給ふ桓武天皇は平の京都をたて給いき、太子の記文たがはざる

故なり、されば山門と王家とは松と栢とのごとし、蘭と芝とににたり、松かるれば必ず栢かれらんしほめば又しほしほむ、王法の榮へは山の悦び王位の衰へは山の歎きと見えしに既に世・関東に移りし事なにと

おぼしめ
か思食しけん。

秘法ひほう四十一人の行者・承久三年辛巳四月十九日・京夷乱れし時

関東調伏かんとうてうふくの爲め隠岐おきの法皇の宣旨せんじに依つて始めて行はれ御修法しゅう十五

檀ひほうの秘法、一字金輪法てんごう天台座主慈円てんたいざす僧正じやう伴僧はんじやう十二口くち関白殿基通かんぱくでんきとうの御沙汰ごさた四天王法してんのう成興寺せいけいじの宮僧みやじやう正伴しやうはん八口はくち広瀬殿ひろせでん

不動明王法ふどうみやうおう成宝せいほう僧正じやう伴僧はんじやう八口はくち山院さんえん神門しんもんの御沙汰ごさた大威徳法だいゐとく七条院しちじょうえんの御沙汰ごさた転輪聖王法てんりんじやうおう成賢せいけん僧正じやう伴僧はんじやう八口はくち同院どうえんの御沙汰ごさた十壇じゅうだん

大威徳法だいゐとく伴僧はんじやう六口りくち寛朝かんしやう僧正じやう後性ごせい法印ぽういん永信えいしん法印ぽういん兼円けんえん僧都じやう慈賢じせん僧正じやう賢乗けんじやう僧都じやう仙せん大旨だいし本坊ほんぽうに於て之を修す如意輪法にょゐりん妙高院めうかうえん僧正じやう伴僧はんじやう八口はくちの御沙汰ごさた

毘沙門法びしゃもん常住じやうじやう院僧えんじやう正三井しやうさんけい伴僧はんじやう御沙汰ごさた御本尊ごほんぞん一日いちにち之を造らせらる調伏てうふくの行儀ぎやうぎは如法にょぽう

愛染王法あいぜん仁和寺にんわじ御室ごむすの行法ぎやうぽう五月三日ごごさん之を始めてはじめて修せらるおほ仏眼ぶつげん法ぽう大政だいせい僧正じやう三さん七日しちにち之を修す六字法ろくじぽう僧都じやう愛染王法あいぜん

不動法ふどう僧じやう八口はくち皆僧綱みなじやうきやう大威徳法だいゐとく僧正じやう金剛童子こんかうどうじ法人ぽうじん已上いじやう十五壇じふごだんの法ぽう了りやうれ

り、五月十五日伊賀太郎判官光季京にして討たれ、同十九日鎌倉かまくらに聞きこえ、同二十一日大勢軍兵上ると聞えしかば残る所の法六月八日之れ

を行ひ始めらる、尊星王法そんせいおうぽう僧正じやう太元法たいげんぽう僧都じやう五壇法ごだんぽう僧都じやう飲円いんえん僧都じやう行遍ぎやうへん僧都じやう守護しゆご

を行ひ始めらる、尊星王法そんせいおうぽう僧正じやう太元法たいげんぽう僧都じやう五壇法ごだんぽう僧都じやう飲円いんえん僧都じやう行遍ぎやうへん僧都じやう守護しゆご

経法きようほう
源氏げんじ

御室みむろ之を行はせらる

我朝わに二度に之を行う

五月二十一日

武蔵むさしの

守殿こうどのが

海道より上洛し甲斐かい

は山道たてまつを上る式部殿は北陸道を上り給たまう、六月五日大津をかたむる手
甲斐源氏かいげんじに破られ畢おわんぬ、同六月十三日十四日宇治橋の合戦・同十四
日かみがたに京方破られ畢おわんぬ、同十五日に武蔵守殿六条へ入り給たまふ諸人しよにん入り
畢おわんぬ、七月十一日に本院は隱岐おきの国へ流され給ひ中院は阿波の国へ流
され給ひ第三院は佐渡さどの国へ流され給たまふ、殿上人しやうにん七人誅殺せられ畢おわん
ぬ、かかる大惡法年だいあくほうねんを経て漸漸ぜんぜんに關東かんとうに落ち下りて諸堂しよどうの別当べつどう・供僧
となり連連これと之を行これう、

本きようほうより教法じやせいしやうれつの邪正勝劣じやせいしやうれつをば知食ししめさず、只三寶たださんぼうをば・あがむべき事と・
ばかり・おぼしめす故ゆえに自然じねんとして是これを用ひきたれり、關東かんとうの国国のみ
ならず叡山えいざん・東寺とうじ・蘭城寺おんじやうじの座主ざす・別当べつどう・皆關東みなかんとうの御計みけいと成りぬる故ゆえに
彼の法の檀那だんなと成り給たまいぬるなり。

問いわて云しんこんく真言しんこんの教あながちじやきようを強あながちに邪教じやきようと云いう心い如何い、答いえて云いく弘法大師こうぼうだいし

云く第一^{だいいち}大日經第二^{だいにちぎよう}・華嚴經第三^{けこんぎよう}法華經^{ほけきよう}と能^{よくよく}能^{よくよく}此^この次第^{しだい}を案^{あん}ずべし、

仏^{いか}は何^いなる經^{きやう}にか此^この三部^{さんぶ}の經^{きやう}の勝劣^{しょうれつ}を説^とき判^たじ給^{たま}へるや、若^もし第一^{だいいち}

大日經第二^{だいにちぎよう}・華嚴經第三^{けこんぎよう}法華經^{ほけきよう}と説^とき給^{たま}へる經^{きやう}あるならば尤^{もつとし}も然^{しか}るべ

し、其^その義^ぎなくんば甚^{はなはだ}だ以^{もつ}て依用^{えよう}し難^{がた}し、法華經^{ほけきよう}に云^いく、棄王^{やくおう}今^{なんじ}汝^{なんじ}に

告^{しよせつ}ぐ我^{われ}所説^{しよせつ}の諸經^{しよきやうし}而^しかも此^この經^{きやう}の中に於^{おい}て法華最^{ほつけ}も第一^{だいいち}なり」云云、

仏正^{まさし}く諸教^{しよきやう}を挙^あげて其^その中に

於^{ほつ}いて法華第一^{だいいち}と説^とき給^{たま}ふ、仏^{ぶつ}の説法^{せつぽう}と弘法大師^{こうぼうだいし}の筆^{すい}とは水火^{すいか}の相違^{さうい}

なり尋^{たず}ね究^{きわ}むべき事^{こと}なり、此^こ筆^{ふで}を數^{かず}百年^{ひゃくねん}が間^{かん}凡^{こう}僧^{そう}高僧^{こうそう}是^{これ}を學^{がく}し貴賤^{きせん}

上下^{じやうげ}是^{これ}を信^{しん}じて大日經^{だいにちぎよう}は一切^{いっぺん}經^{きやう}の中に第一^{だいいち}とあがめける事^{こと}仏意^{ぶつゐ}に叶^あは

ず、心^{こころ}あらん人^{ひと}は能^よく能^よく思^{おも}ひ定^{さだ}むべきなり、若^もし仏意^{ぶつゐ}に相叶^{あひあ}はぬ筆^{ふで}な

らば信^{しん}ずとも豈^{あに}成^{じやう}仏^{ぶつ}すべきや、又是^{これ}を以^{もつ}て国土^{こくど}を祈^{いの}ら

んに当^{まさ}に不祥^{ふしやう}を起^{おこ}さざるべきや、又云^いく、震旦^{しんたん}の人師^{にんし}等^ら靜^{じやう}て醍醐^{だいご}を盜^{たう}

む」云云、文の意は天台大師等真言教の醍醐を盗んで法華經の醍醐と
名け給へる事は、此の筆最第一の勝事なり、法華經を醍醐と名け給へる
事は、天台大師・涅槃經の文を勘へて一切經の中には法華經を醍醐と
名くと判じ給へり、真言教の天竺より唐土へ渡る事は天台出世の以後
二百余年なり、されば二百余年の後に渡るべき真言の醍醐を盗みて
法華經の醍醐と名け給ひけ

るか此の事不審なり不審なり、真言未だ渡らざる以前の二百余年の
ひとびと 人人を盗人とかき給へる事証拠何れぞや、弘法大師の筆をや信ずべき、
ねはんぎよう 涅槃經に法華經を醍醐と説けるをや信ずべき、若し天台大師盗人なら
ねはんぎよう ば涅槃經の文をば云何がこころうべき、さては涅槃經の文真実にして
こうぼう 弘法の筆邪義ならば邪義の教を信ぜん人人は云何、只弘法大師の筆と
せつぼう 仏の説法と勘合せて正義を信じ侍るべしと申す計りなり。

うたがい 疑て云く大日經は大日如来の説法なり若し爾らば釈尊の説法を
だいにちによらい 以て大日如来の教法を打ちたる事都て道理に相叶はず如何、答えて
だいにちによらい 云く大日如来は何なる人を父母として何なる国に出で大日經を説き
ふぼ 給けるやらん、もし父母なくして出世し給うならば釈尊入滅以後、
じそん 慈尊出世以前、五十六億七千万歳が中間に仏出でて説法すべしと云
いか う事何なる經文ぞや、若し証拠なくんば誰人か信ずべきや、かかる

僻事ひがごとをのみ構もうへ申もうす間邪教じやきやうとは申もうすなり、

其その迷謬めいびやう尽つしがたし纔わずかか一二を出いだすなり、加しか之のみ並ならびに禪宗ぜんしやう・念仏ねんぶつ

等を是これを用もちる、此これ等の法みは皆未顯みなみけん真実しんじつの權教ごんきやう不成じやうぶつ仏ぶつの法むげん無間じこく地獄じこく

の業ごふなり、彼の行人ぎやうじん又謗法ぼうぽうの者ものなり争いでか御祈ぎと☆叶ふべきや、然しかるに

国主こくしゅと成なり給たまふ事は過去かこに正法しやうぽうを持たもち仏ぶつに仕つかふるに依よつて大小だいしやうの王わう

皆梵王みなぼんのう・帝釈たいしやく・日月にちがつ・四天してん等の御計おんけいひとして郡郷ぐんじやうを領りやうし給たまへり、所謂いわゆる經

に云いく我今われいま五眼ごがんをもて明あきらかに三世さんぜを見るに一切いっさいの国王こくおう皆過去みなかこ世ぜに五百

の仏ぶつに侍まじするに由よつて帝王主ていおうしゅと為なるこ

とを得えたり」等云云し、然しかるに法華經ほけきやうを背そむきて真言しんごん・禪ぜん・念仏ねんぶつ等の邪師じやしに

付ついて諸もろもろの善根ぜんこんを修しゆせらるるとも、敢あえてて仏意ぶつゐに叶あはず神慮しんりょにも違いする

者ものなり能よく能よく案あんあるべきなり、人間にんげんに生なまを得える事こと都すて希まれなり適生たまたま

を受けて法ほふの邪正じやせいを極きくめて未来みらいの成仏じやうぶつを期こせざらん事返返ほんい本意ほんいに

あら
非ざる者なり、又慈覚大師・御入唐以後・本師・伝教大師に背か
せ給いて叡山に真言を弘めんが為に御祈請ありしに・日を射るに日輪
動転すと云う夢想を御覧じて、四百余年の間諸人は是を吉夢と思へり、
日本国は殊に忌むべき夢なり、殷の紂王・日輪を的にして射るに依つて
身亡びたり、此の御夢想は権化の事なりとも能く能く思惟あるべきか、
仍つて九牛の一毛註する所件の如し。

◆三〇一

祈☆經送狀

文永十年正月 五十二歳御作

与最蓮房日淨

1356p

御礼の旨委細承はり候畢んぬ、兼ては又末法に入つて法華經を持ち
候者は三類の強敵を蒙り候はん事は面拜の時大概申し候畢んぬ、仏の
金言にて候上は不審を致すべからず候か、然らば則日蓮も此の法華經
を信じ奉り候て後は、或は頭に疵を蒙り、或は打たれ、或は追はれ、或
は頸の座に臨み、或は流罪せられ候し程に結句は此の嶋まで遠流せら
れ候ぬ。

何なる重罪の者も現在計りこそ罪科せられ候へ日蓮は三世の大難
に値い候ぬと存し候、其の故は現在の大難は今の如し、過去の難は当世
の諸人等が申す如くば、如来在世の善星俱伽利等の大悪人が重罪の

余習を失せずして如来にょらいの滅後めつごに生れて是かくの如ごとく仏法ぶつぽうに敵をなすと
申し候もう是これなり、次に未来みらいの難なんを申し候もうはば当世とうせの諸人しよにんの部類ぶるい等ら謗ぼうじ
候そうらはん様は此この日蓮房にちれんは存在しゆじゆの時ときは種種だいにんの大難だいにんにあひ死門しもんに趣おもむく
時ときは自身じしんを自ら食みして死しる上うへは
定めて大阿鼻地獄あびじごくに墜いまして無辺むへんの苦を受くるらんと申し候もうはんずる
なり、古より已来このかた世間せけん出世しゆつせの罪科つみの人・貴賤きせん上下じやうげ持戒じかい毀戒きかい凡聖ぼんせいに付け
て多く候へども但其おの其のは現在げんざい計りにてこそ候に日蓮にちれんは現在げんざいは申すに及およば
す過去かこ・未来みらいに至るまで三世さんぜの大難だいにんを蒙こむり候そうらはん事は只偏ただひとえに法華經ほけきやうの
故ゆえにて候なり、日蓮にちれんが三世さんぜの大難だいにんを以て法華經ほけきやうの三世さんぜの御利益りやくを覺さま
食され候へ過去かこ久遠劫くおんより已来このかた未来永劫みらいえいこまで妙法蓮華經みやうほうれんげきやうの三世さんぜの御
利益りやく尽くすべからず候なり

り、日蓮にちれんが法華經ほけきやうの方人かとうどを少分仕り候だにも加様だいなんの大難だいにんに遭あひ候、ま

して釈尊しやくそんの世世番番ほけきようの法華經ほけきようの御方人かとうどを思い遣りまいらせ候に道理どうり
申す計りもうなくこそ候へばかされば勸持品かんじほんの説相せつそうは暫時さんじも廃せず殊更殊更ことさら ことさら
貴く覚え候おぼ。

一 御山籠いざなごの御志いざなごころの事、凡そ末法折伏まつぽうしやくふくの行に背くと雖も病者いえどに
て御座候上天下てんかの災国土こくどの難強盛なんごうじように候はん時・我が身につみ知り候は
ざらんより外はいかに申し候とも国主信こくしゆぜられまじく候へば日蓮尚籠にちれん なの
居の志候いざなごころ、

まして御分の御事はさこそ候はんずらめ、仮使山谷に籠居候とも御病も平癒して便宜も吉候はば身命を捨て弘通せしめ給ふべし。

一 仰せを蒙りて候末法の行者・息災延命の祈☆の事、別紙に一卷註し進らせ候、毎日一返闕如無く読誦せらるべく候、日蓮も信じ始め候し日より毎日此れ等の勘文を誦し候て仏天に祈誓し候によりて、種種の大難に遇うと雖も法華經の功力積尊の金言深重なる故に今まで相違無くて候なり、其れに付いても法華經の行者は信心に退転無く身に詐親無く・一切法華經に其の身を任せて金言の如く修行せば儘に後生は申すに及ばず今生も息災延命にして勝妙の大果報を得広宣流布大願をも成就す可きなり。

一 御狀に十七出家の後は妻子を帶せず肉を食せず等云云、權教を信ぜし大謗法の時の事は何なる持戒の行人と申し候とも、法華經に

そむ ほうぼうつみ ゆえ しょうぼう
背く謗法罪の故に正法の破戒の大俗よりも百千万倍劣り候なり、彼の
ほうぼう びく じかい いえど むげん しょうぼう
謗法の比丘は持戒なりと雖も無間に墜す、正法の破戒なりと
いえど じようぶつうたがい
雖も成仏疑い無き故なり、但今の御身は念仏等の權教を捨てて
しょうぼう
正法に歸し給う故に誠に持戒の中の清淨の聖人なり、尤も比丘と成
つては權宗の人すら尚然る可し況や正法の行人をや、仮使權宗の時
さいし だいなん
の妻子なりとも・かかる大難は遇はん時は振捨て正法を弘通すべきの
ところ ちたい しょうにんもつとよ もつとよ
処に地体よりの聖人尤も吉し尤も吉し、相構え相構え向後も夫妻等
よりくる おんり
の寄来とも遠離して一身に障礙無く国中の謗法をせめて釈尊の化儀を
たてまつべ なおなおこうこ
資む奉る可き者なり、猶猶向後は此の一卷の書を誦して仏天に祈誓し
ぐつうあ ぐつう いたくおし
御弘通有る可く候但此の書は弘通の志 有らん人に取つての事なり、
ぎようじや
此の經の行者なればとて器用に能はざる者には左右無く之を授与すべ
あなかしこあなかしこ きようきようきんげん
からず候か、穴賢穴賢、恐恐謹言。

文永十年癸酉正月二十八日

最蓮房御返事

日蓮

花押

◆三〇二

諸法実相抄

文永十年五月 五十二歳御作

与最蓮房日淨

日蓮之を記す

1358p

問うて云く法華經の第一方便品に云く 諸法実相乃至本末究竟等」云云、此の經文の意如何、答えて云く下地獄より上仏界までの十界の依正の当体悉く一法ものこさず妙法蓮華經のすがたなりと云ふ經文なり依報あるならば必ず正報住すべし、釈に云く 依報・正報常に妙經を宣ぶ」等云云、又云く 実相は必ず諸法・諸法は必ず十如・十如は必ず十界・十界は必ず身土」、又云く 阿鼻の依正は全く極聖の自心に処し、毘盧の身土は凡下の一念を逾えず」云云、此等の釈義分明なり誰か疑網を生ぜんや、されば法界

のすがた妙法蓮華經の五字にかはる事なし、釈迦・多宝の二仏と云う
も妙法等の五字より用の利益を施し給ふ時事相に二仏と顕れて宝塔
の中にしてうなづき合い給ふ、かくの如き等の法門日蓮を除きては申し
出す人・二人も・あるべからず、天台・妙楽・伝教等は心に

は知り給へども言に出し給ふまではなし胸の中にしてくらし給へり、
其れも道理なり、付囑なきが故に・時のいまだいたらざる故に・仏の
久遠の弟子にあらざる故に、地涌の菩薩の中の上首唱導・上行・
無辺行等の菩薩より外は、末法の始の五百年に出現して法体の
妙法蓮華經の五字を弘め給うのみならず、宝塔の中の二仏・並座の儀
式を

作り顕すべき人なし、是れ即本門寿量品の事の一念三千の法門なるが
故なり、されば釈迦・多宝の二仏と云うも用の仏なり、妙法蓮華經こ

そ本仏ほんぶつにては御座候へ、經きやうに云く「如来秘密神通之力にょらいひみつじんつうのちから」是これなり、如来にょらい秘密ひみつは体の三身さんじんにして本仏ほんぶつなり、神通じんつう之力のちからは用の三身さんじんにして迹仏しやくぶつぞかし、凡夫ぼんぷは体の三身さんじんにして本仏ほんぶつぞかし、仏は用の三身さんじんにして迹仏しやくぶつなり、然しかれば釈迦しやくか仏は我れ等衆生しゆじやうのためには主師親しゆししんの三徳さんとくを備たてまつへ給たまうと思おもひしに、さにては候はず返かへつて仏に三徳さんとくをかふらせ奉たてまつるは凡夫ぼんぷなり、其そのの故ゆゑは如来にょらいと云いうは天台てんだいの釈しやくに如来にょらいとは十方じふつぽう三世さんぜの諸仏しよぶつ・二仏・三仏・

本仏ほんぶつ迹仏しやくぶつの通号なり」と判じ給たまへり、此の釈しやくに本仏ほんぶつと云うは凡夫ほんぶなり

迹仏しやくぶつと云ふは仏ぶつなり、然しかれども迷悟めいごの不同ふどうにして生仏せいぶつ異ことなるに依よつて

俱体くたい俱用くゆうの三身さんじんと云ふ事をば衆生しゆじやうしらざるなり、さてこそ諸法しよほうと十界じゆつかい

を挙あげて実相じつそうとは説かれて候へ、実相じつそうと云うは妙法蓮華經みやうほうれんげきやうの異名いみやうなり

諸法しよほうは妙法蓮華經みやうほうれんげきやうと云う事なり、地獄じごくは地獄じごくのすが

たを見せたるが実の相なり、餓鬼がきと變かぜば地獄じごくの実のすがたには非あらず、

仏は仏のすがた凡夫ほんぶは凡夫ほんぶのすがた、万法の当体とうたいのすがたが

妙法蓮華經みやうほうれんげきやうの当体とうたいなりと云ふ事を諸法実相しよほうじつそうとは申もうすなり、天台云く

実相じつそうの深理じんり本有ほんぬの妙法蓮華經みやうほうれんげきやうと云云、此の釈しやくの意は実相じつそうの名言みやうごんは

迹門しやくもんに主しゆづけ本有ほんぬの妙法蓮華經みやうほうれんげきやうと云うは本門ほんもんの上の法門ほうもんなり、此の釈

能よく能よく心中しんちゆうに案たまじさせ給たま候へ。

日蓮末法にちれんまつぽうに生にれて上行菩薩じやうぎやうぼさつの弘ひろめ給たまうべき所の妙法みやうほうを先立さきだちて粗ほひろ

め、つくりあらはし給うべき本門 寿量品の古仏たる釈迦仏迹門
宝塔品の時涌出し給う多宝仏涌出品の時出現し給ふ地涌の菩薩等を
先作り顕はし奉る事、予が分育にはいみじき事なり、日蓮をこそにくむ
とも内証にはいかが及ばん、さればかかる日蓮を此の嶋
まで遠流しける罪無量劫にもきへぬべしとも覺今す、譬喩品に云く 若し
其の罪を説かば劫を窮むるも尽きず」とは是なり、又日蓮を供養し又
日蓮が弟子・檀那となり給う事、其の功德をば仏の智慧にてもはかり
尽し給うべからず、經に云く 仏の智慧を以て籌量するも多少其の辺
を得ず」と云へり、地涌の菩薩のさきがけ日蓮一人な
り、地涌の菩薩の数にもや入りなまし、若し日蓮地涌の菩薩の数に入
らば豈に日蓮が弟子・檀那地涌の流類に非ずや、經に云く 能く竊かに
一人の爲めに法華經の乃至一句を説かば当に知るべし是の人は則ち

如来にょらいの使し・如来にょらいの所遣しよけんとして如来にょらいの事を行ずるなり」と、豈あにに別人にの事

を説とき給たまうならんや、されば余あまりに人の我われをほむる時は

如何いかよう様ようにもなりたき意いの出来しゅつたいし候こうなり、是こゝろほむる処ところの言ことよりをこり候

ぞかし、末法まつぽうに生なれて法華經ほけきやうを弘ひろめん行者ぎやうじやは、三類さんるいの敵てき人有じんつて流罪るざい・

死罪しざいに及およばん、然しかれどもたえて弘ひろめん者ものをば衣もつを以もつて釈迦しやか仏ぶつをほひ

給たまうべきぞ、諸天しよてん

は供養くようをいたすべきぞ・かたにかけせなかにをふべきぞ・大善根ぜんこんの者にて

あるぞ・一切衆生いっさいしゆじやうしうのためには大導師どうしにてあるべしと・釈迦しゃか・彌陀みだ・多宝たぼう・

十方じゅうぽうの諸仏しよぶつ・菩薩ぼさつ・天神てんじん七代・地神ちじん五代の神神・鬼子母神きしもじん・十羅刹女じゅうらせつによ・

四大天王ぼんでん・梵天ぼんでん・

帝釈たいしやく・閻魔えんま・法王ほうおう・水神みづかみ・風神ふうかみ・山神さんかみ・海神かいじん・大日だいにと・如来にょらい・普賢ふげん・文殊もんじゆ・日月にちがつ

等の諸尊しよそんたちにほめられ奉るたてまつ間、無量むりやうの大難だいにんをも堪忍かんにんして候なり、ほめ

られぬれば我が身の損ずるをもかへりみず、そしられぬる時は又我が身

のやぶるるをもしらず、ふるまふ事は凡夫ぼんぷのことはざなり。

いかにも今度このたび信心しんじんをいたして法華經ほけきやうの行者ぎやうじやにてとをり、日蓮にちれんが一門いちもん

となりとをし給たまうべし、日蓮にちれんと同意どういならば地涌じゆの菩薩ぼさつたらんか、地涌じゆの

菩薩ぼさつにさだまりなば釈尊しやくそん・久遠くおんの弟子でしたる事あに疑うたがはんや、經きやうに云いく

「我く久遠おんより来このかた是等これらの衆しゆを教化きやうけす」とは是これなり、末法まつぽうにして

妙法蓮華經みょうほうれんげきやうの五字ごじを弘ひろめん者は男女なんによはきらふべからず、皆地涌みなじゆ

の菩薩ぼさつの出現しゆつげんに非あらずんば唱なへがたき題目だいもくなり、日蓮にちれん一人ははじめは南無なむ

妙法蓮華經みょうほうれんげきやうと唱なへしが、二人・三人百人と次第しだいに唱なへつたふるなり、

未来みらいも又しかるべし、是あに地涌じゆの義ぎに非あらずや、剩あまつさへ広宣流布こうせんるふの時は

日本にほん一同ひとに南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱なへん事は大地だいちを的まととするなるべし、と

もかくも法華經ほけきやうに名をたて身をまかせ給たまうべし、釈迦しやか仏ぶつ

・多宝たほう仏ぶつ・十方じゆつぽうの諸仏しよぶつ・菩薩ぼさつ・虚空こくうにして二仏ふつうなづき合あひ、定めさせ

給たまいしは別べつの事ことには非あらず、唯ただひとへに末法まっぽうの令法りやうぽう久住くじゅうの故ゆゑなり、既すでに

多宝たほう仏ぶつは半座はんざを分わけて釈迦しやか如来にょらいに奉たてまつり給たまいし時とき、妙法蓮華經みょうほうれんげきやうの旛はたをさ

し顯あらわし、釈迦しやか・多宝たほうの二仏ふつ大將だいしやうとしてさだめ給たまいし事ことあにいつはりなるべ

きや、併しかしながわれらしめじやう
きや、併しら我等衆生わがしやうじやうを仏ぶつになさんとの御談合だんごうなり。

日蓮にちれんは其その座ざには住すし候こうはねども經文きやうもんを見候みにすこしもくもりな

し、又其の座にもやありけん凡夫なれば過去をしらず、現在は見へて
法華經の行者なり又未来は決定として当詣道場なるべし、過去をも
是を以て推する

に虚空会にもやありつらん、三世各別あるべからず、此くの如く思ひつ
づけて候へば流人なれども喜悅はかりなしうれしきにもなみだつらきに
もなみだなり涙は善惡に通ずるものなり彼の千人の阿羅漢の事を思
ひ

でて涙をながし、ながしながら文殊師利菩薩は妙法蓮華經と唱へさせ

給へば、千人の阿羅漢の中の阿難尊者は・なきながら如是我聞と答え

給う、余の九百九十人はなくなみだを硯の水として、又如是我聞の上

に妙法蓮華經とかきつけしなり、今日蓮もかくの如し、かかる身となる

も妙法蓮華經の五字七字を弘むる故なり、釈迦仏・多宝仏

・未来・日本国の一切衆生のためにとどめをき給ふ処の妙法蓮華經な

りと、かくの如く我も聞きし故ぞかし、現在の大難を思いつづくるにも

なみだ、未来の成仏を思うて喜ぶにもなみだせきあへず、鳥と虫とはな

けどもなみだをちず、日蓮は・なかねども・なみだひまなし、此のなみだ

世間の事には非ず但偏に法華經の故なり、若しか

らば甘露のなみだとも云つべし、涅槃經には父母・兄弟・妻子・眷属には

かれて流すところの涙は四大海の水よりもを・をしといへども、仏法のた

めには一滴をもこぼさずと見えたり、法華經の行者となる事は過去の宿習なり、同じ草木なれども仏とつくらるるは宿縁なるべし、仏なりとも權仏となるは又宿業なるべし。

此文には日蓮が大事の法門にもかきて候ぞ、よくよく見ほどこせ給へ意得させ給うべし、一閻浮提第一の御本尊を信じさせ給へあひかまへてあひかまへて信心つよく候て三仏の守護をかうむらせ給うべし、行学の二道をはげみ候べし、行学たへなば仏法はあるべからず、我もいたし人をも教化候へ行学は信心よりをこるべく候、力あらば一文一句なりともかたらせ給うべし、南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經、恐恐謹言。

五月十七日

日蓮 花押

追申候、日蓮が相承の法門等前前かき進らせ候き、ことに此の文に

は大事だいじの事どもしるしてまいらせ候ぞ不思議ふしぎなる契約けいやくなるか、六万恒沙ごうしゃの上首じょうしゅ上行じょうぎょう等の四菩薩ぼさつの变化へんかか、さだめてゆへあらん、総じて日蓮にちれんが身に当あたりりの法門ほうもんわたしまいらせ候ぞ、日蓮にちれんもしや六万恒沙ごうしゃの地涌じゆの菩薩ぼさつの眷属けんぞくにもやあるらん、南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱なへて日本国にほんこくの男女なんよをみちびかんとおもへばなり、經きやうに云いく一名い上行じょうぎやう乃至ないし唱導しょうどう之師しとは説せつかれ候はぬ

か、まことに宿縁しゆくえんのをふところ予が弟子でしとなり給うたま、此の文あひか
まへて秘し給へたま日蓮にちれんが己証こしやうの法門ほうもん等かきつけて候ぞ、とどめ畢おわんぬ。
さいれんぼうごへんじ
最蓮房御返事

◆三〇三

十八円満抄えんまん

日蓮にちれん之これを記しるす

136

2p

問うて云く十八円満えんまんの法門ほうもんの出処いっかん如何、答えて云く源蓮の一字より
起れるなり、問うて云く此の事所釈しよしゃくに之これを見たりや、答えて云く伝教でんぎやう
大師だいしの修禪寺相伝しゆぜんじそうでんの日記にっきに之在り此法門ほうもんは当世天台宗とうせてんだいしゅうの奥義なり秘
すべし秘すべし。

問うて云く十八円満えんまんの名目みやうもく如何、答えて云く一に理性円満りしやうえんまん・二に

修行円満・三に化用円満・四に果海円満・五に相即円満・六に諸教
円満・七に一念円満・八に事理円満・九に功德円満・十に諸位円満・十
一に種子円満・十二に權実円満・十三に諸相円満・十四に俗諦円満・十
五に内外円満・十六に觀心円満・十七に寂照円満・十八に不思議円満
上巳。

問うて云く意如何、答えて云く此の事伝教大師の釈に云く次に蓮の
五重玄とは蓮をば華因成果の義に名く、蓮の名は十八円満の故に蓮と
名く、一に理性円満謂く方法悉く真如法性の実理に歸す実性の理に
万法円満す故に理性を指して蓮と為す、二に修行円満謂く有相無相
の二行を修して万行円満す故に修行を蓮と為す、三に化用円満謂く
心性の本理に諸法の因分有り此の因分に由つて化他の用を具す故に蓮
と名く、四に果海円満とは諸法の自性を尋ねて悉く本性を捨て無作の

三身さんじんを成なりす法ぽうとして無作むさの三身さんじんに非あらざること無し故ゆえに蓮れんと名なく、五ごに
相即そうそく円満えんまん謂いわく煩惱ぼんのうの自性じしやう全ぜんく菩提ぼだいにして一体不二いつたいふじの故ゆえに蓮れんと為なす、六
に諸教しよきやう円満えんまんとは諸仏しよぶつの内証ないしやうの本蓮ほんれんに諸教しよきやうを具足ぐそくして更さらに闕減けつげんなきが
故ゆえに、七しちに一念いちねん円満えんまん謂いわく根塵相對こんじんさうたいして一念いちねんの心起おこるに三千世間さんぜんせけんを具ぐ
るが故ゆえに、八はちに事理じり円満えんまんとは

一法の当体而二不二にして闕減無く具足するが故に、九に功德円満
謂く妙法蓮華經に万行の功德を具して三力の勝能有るが故に、十に諸
位円満とは但だ一心を点ずるに六即円満なるが故に、十一に種子円満
とは一切衆生の心性に本より成仏の種子を具す權教は種子円満無き
が故に皆成仏道の旨を説かず故に蓮の義無し、十二に權実円満謂く
法華実証の時は実に即して而かも權權に即して而かも實權實相即して
闕減無き故に円満の法にして既に
三身を具するが故に諸仏常に法を演説す、十三に諸相円満謂く一一の
相の中に皆八相を具して一切の諸法常に八相を唱う、十四に俗諦円満
謂く十界・百界乃至三千の本性常住不滅なり本位を動せず当体即理
の故に、十五に内外円満謂く非情の外器に内の六情を具す有情数の中
に亦非情を具す、余教は内外円満を説かざるが故に草木成仏

すること能あたわず草木非成そうもく じようぶつ仏の故ゆえに亦蓮またと名なけず十六に觀心かんじん円満えんまんとは六塵ちり六作常ろくさくじように心相しんさうを觀かんず更に余義あざに非あらざるが故ゆえに、十七に寂じやくしやう照えん円満えんまんとは文ふに云いく法性ほつしやう寂然しかなるを止やめんと名なく寂じやくにして而しかも常に照てらすを觀かんとは名なくと、十八に不思議ふしぎ円満えんまん謂いく細さいしく諸法しよほうの自性じしやうを尋たずねるに非有非無なすにして諸もろの情量じやうりやうを絶たして亦三千三觀またさんぜんさんかん並びに寂じやく照等しやうとうの相さう無なくく大分の深義じんぎ本来ふしぎ不思議ふしぎなるが故ゆえに名なけて蓮なと為なるなり、此この十八円満えんまんの義ぎを以もつて委くわく經意きやういを案あんずるに今經こんきやうの勝能しやうのう並ならに觀心かんじんの本義ほんぎ良もとに蓮れんの義ぎに由よる、二乘にじやう惡人あくにん草木等そうもくの成仏じやうぶつ並ならびに久遠くおん塵点じんてん等は蓮れんの德とくを離はなれては余義あ有あること無し、座主ざすの伝でんに云いく玄師げんしの正決しやうけつを尋たずねるに十九円満えんまんを以もつて蓮れんと名なく所謂いわゆる當体たうたい円満えんまんを加くわう、當体たうたい円満えんまんとは當体たうたいの蓮華れんげなり謂いく諸法しよほう自性じしやう清淨じやうじやうにして染濁せんじやくを離はなるるを本ほんより蓮れんと名なく、一經いつきやうの說しやくに依よるに一切衆生いつさいしゆじやうの心しんの間に八葉はちやうの蓮華れんげ有あり男子なんしは上うへに向むかひ

い女人にょにんは下に向う、成仏じょうぶつの期きに至ればいた設たい女人にょにんなりと雖もいえど心の間の蓮華速れんげすみやかに還かえりて上に向う、然るに今の蓮仏意ふつゐに在るの時ときは本性しやうじやう清淨じやうじやう当体とうたいの蓮と成る若し機情ききやうに就ついては此の蓮華譬喩れんげひゆの蓮と成る。

次に蓮の体とは体たいに於おいて多種おほい有り、一には徳体とくたいの蓮謂いく本性ほんしやうの三諦さんたいを蓮の体と為す、二には本性ほんしやうの蓮体れんたい三千さんぜんの諸法しよほう本ほんより已来このかた当体とうたい不動ふどうなるを蓮の体と為す、三には果海真善くわかいしんぜんの体一切いっさい諸法しよほうは本是ほんぜれ三身さんじんにして寂光土じやくかうどに住す設たい一法いつぽうなりと雖もいえど三身さんじんを離はなれざる故ゆゑに三身さんじんの果もつを以もつて蓮の体と為す、四には大分真如おほいぶんしんによの体謂いく不變隨縁ふへんずいゑんの二種にしゆの真如しんによを並ならびに証分しやうぶんの真如しんによと名なく本・迹寂じやくしやく照等しやうとうの相あひを分わかたず諸法しよほうの自性じしやう不可思議ふかしぎなるを蓮の体と為す。

次に蓮の宗とは果海くわかいの上の因果いんがなり、和尚わじやうの云いく六即ろくじやくの次位そくゐは妙法蓮華經みやうほうれんげきやうの五字ごじの中には正まさしく蓮の字じに在り蓮門れんもんの五重玄ごじゆうげんの中には

まさしく蓮の字より起る、所以何ん理即は本性と名く本性の真如理性
円満の故に理即を蓮と名け果海本性の解行証の位に住するを果海の次
位と名く、智者大師自解仏乗の内証を以て明に経旨を見給うに
蓮の義に於て六即の次位を建立し給えり故に文に云く此の六即の義は
一家より起れりと、然るに始覺の理に依て在纏真如を指して理即と
為し妙覺の証理を出纏真如と名く、正く出纏の爲めに諸の万行を
修するが故に法性の理の上の因果なり故に亦蓮の宗と名く蓮に六の勝
能有り一には自性清淨にして泥濁に染まず理即、二には華・台・実の
三種具足して減すること無し名字即諸法即是れ三諦と解了するが故に、三には初め種子より実を
成ずるに至るまで華・台・実の三種相統して断ぜず修行即念念相統して修し廢するなき故に、四に
は華葉の中に在つて未熟の実真の実に似たり相似即、五には花開き蓮現
ず分真即、六には花落ちて蓮成ず究竟即、此の義を以ての故に六即の

深義じんぎは源蓮げんれんの字より出いでたり。

次に蓮の用とは六即ろくご円満えんまんの徳とくに由よつて常に化用けえを施ほすが故ゆえに。

次に蓮の教とは本有ほんぬの三身果海さんじんの蓮性れんじやうに住して常に淨法じやうぽうを説とき八相

成道じやうどうし四句成利しごうじやうりす、和尚わじやう云いく証道じやうどうの八相はさうは無作三身むささんじんの故ゆえに四句の

成道じやうどうは蓮教れんぎやうの処ところに在り只無作三身ただむささんじんを指して本覺ほんがくの蓮れんと為なす、此の本

蓮れんに住して常に八相はさうを唱なへ常に四句しごうの成道じやうどうを作なす故ゆえなり已上いじやう、修禪寺しゆぜんじ

相伝さうでんの日記にっき之これをみるに妙法蓮華經みやうほうれんげきやうの五字ごじに於おいて各各五重玄ごじやうげんなり

蓮れんの字じの五重玄ごじやうげん義ぎ此こくの如ごとし余よは之これを略りやくす、日蓮案にちれんじて云いく此の相伝さうでんの義ぎの如ごとくんば万法まんぽうの根源こんげん、

一心三觀いっしんさんかん・一念三千三諦いちねんさんぜんさんたい・六即ろくご・境智きやうちの円融えんゆう・本迹ほんしやくの所詮しよせん源蓮げんれんの一字

より起おこる者ものなり云云。

問いうて云いく総説ごうしやうげんの五重玄ごじやうげんとは如何いかん、答こたえて云いく総説ごうしやうげんの五重玄ごじやうげんとは

妙法蓮華經みやうほうれんげきやうの五字ごじ即そく五重玄ごじやうげんなり、妙は名。

法は体蓮は宗華は用經は教なり、又總説の五重玄に二種有り一には
仏意の五重玄二には機情の五重玄なり。

仏意の五重玄とは諸仏の内証に五眼の体を具する即ち妙法蓮華經

の五字なり、仏眼は妙・法眼は法・慧眼は蓮・天眼は華・肉眼は經なり、

妙は不思議に名く故に真空・冥寂は仏眼なり、法は分別に名く法眼は

仮なり分別の形なり、慧眼は空なり果の体は蓮なり、華は用なる故に

天眼と名く神通化用なり、經は破迷の義に在り迷を以て所対

と為す故に肉眼と名く、仏智の内証に五眼を具する即ち五字なり

五字又五重玄なり故に仏智の五重玄と名く、亦五眼即五智なり、

法界体性智は仏眼大円鏡智は法眼平等性智は慧眼妙觀察智は天眼

成所作智は肉眼なり、問う一家には五智を立つるや、答う既に九識を

立つ故に五智を立つべし、前の五識は成所作智第六識は妙觀察智第七

識は平等性智第八識は大円鏡智第九識は法界体性智なり。

次に機情の五重玄とは機の爲に説く所の妙法蓮華經は即ち是れ機情の五重玄なり首題の五字に付いて五重の一心三觀有り、伝に云く、

妙 不思議の一心三觀 天真独朗の故に不思議なり。

法 円融の一心三觀 理性円融なり総じて九箇を成す。

蓮 得意の一心三觀 果位なり。

華 複疎の一心三觀 本覺の修行なり。

經 易解の一心三觀 教談なり。

玄文の第二に此の五重を挙ぐ文に随つて解すべし、不思議の一心三觀とは智者已証の法体理非造作の本有の分なり三諦の名相無き中に於て強いて名相を以つて説くを不思議と名く、円融とは理性法界の処に本より已来三諦の理有り互に円融して九箇と成る、得意と

は不思議と円融との三觀は凡心の及ぶ所に非ず但だ聖智の自受用

の徳を以て量知すべき故に得意と名く、複疎とは無作の三諦は一切法
に遍して本性常住なり理性の円融に同じからず故に複疎と名く、
易解とは三諦円融等の義知り難き故に且らく次第に附して其の義を
分別す故に易解と名く、此れを附文の五重と名く、次に本意に依て亦
五重の三觀有り、一に三觀一心の機、二に一心三觀の機、
三に住果還の一心三觀上の機有りて知識の一切の法は皆是れ仏法なり
と説くを聞いて真理を開す入真已後觀を極めんが為に一心三觀を
修す、四に為果行因の一心三觀謂く果位究竟の妙果を聞いて此の果を
得んが為に種種の三觀を修す、五に付法の一心三觀五時八教等の種
の教門を聞いて此の教義を以て心に入れて觀を修す故に付法と名く、
山家の云く言なり亦立行相を授く三千三觀の妙行を修し解行の精微に
由つて深く自証門に入る我汝が

証相を領するに法性寂然なるを止と名け寂にして常に照すを觀と名くと。

問うて云く天真独朗の止觀の時一念三千・一心三觀の義を立つるや、答えて云く兩師の伝不同なり、座主の云く天真独朗とは一念三千の觀是なり、山家師の云く一念三千而も指南と為す一念三千とは一心より三千を生ずるにも非ず一心に三千を具するにも非ず並立にも非ず次第にも非ず故に理非造作と名く、和尚の云く天真独朗に於ても亦多種有り乃至迹中に明す所の不變真如も亦天真なり、但し大師本意の天真独朗とは三千三觀の相を亡し一心一念の義を絶す此の時は解無く行無し教行証の三箇の次第を経るの時行門に於て一念三千の觀を建立す、

故に十章の第七の処に於て始めて觀法を明す是れ因果階級の意なり、

大師内証の伝の中に第三の止観には伝転の義無しと云云、故に知んぬ
証分の止観には別法を伝えざることを、今止観の始終に録する所の
諸事は皆是れ教行の所撰にして実証の分に非ず、開元符州の玄師
相伝に云く言を以て之を伝うる時は行証共に教と成り心を以て之を
観ずる時は教証は行の体と成る証を以て之を伝うる時は教行亦
不可思議なりと、後学此の語に意を留めて更に忘失すること勿れ宛か
も此の宗の本意立教の元旨なり和尚の貞元の本義源此れより出でた
るなり。

問うて云く天真独朗の法滅後に於て何れの時か流布せしむべきや、
答えて云く像法に於て弘通すべきなり、問うて云く末法に於て流布の
法の名目如何、答えて云く日蓮の己心相承の秘法此の答に顕すべきな
り所謂南無妙法蓮華經是なり、問うて云く証文如何、答えて云く
神力品に云く爾の時・仏・上行等の菩薩に告げたまわく要を以て
之を言わば乃至宣示顯說す」云云、天台大師云く爾時・仏告・上行の
下は第三結要付属なり」又云く經中の

要説要は四事に在り総じて一經を結するに唯四ならくのみ其の枢柄
を撮つて之を授与す」問うて云く今の文は上行菩薩等に授与するの文
なり汝何んが故ぞ己心相承の秘法と云うや、答えて云く上行菩薩の
弘通し給うべき秘法を日蓮先き立つて之を弘む身に当るの意に非ずや
上行菩薩の代官の一分なり、所詮末法に入つて天真独朗の法

門無益なり助行には用ゆべきなり正行には唯南無妙法蓮華經なり、
伝教大師云く天台大師は釈迦に信順して法華宗を助けて震旦に
敷揚し叡山の一家は天台に相承して法華宗を助けて日本に弘通す
今日蓮は塔中相承の南無妙法蓮華經の七字を末法の時・日本国に
弘通す是れ豈時国相応の仏法に非ずや、末法に入つて天真独朗の法を
弘めて正行と為さん者は必ず無間・大城に墜ちんこと疑無し、貴辺
年来の權宗を捨てて日蓮が弟子と成り給う真実・時国相応の智人なり
総じて予が弟子等は我が如く正理を修行し給え智者学匠の身と為り
ても地獄に墜ちて何の詮か有るべき所詮時時念念に南無妙法蓮華經と
唱うべし。

上に挙ぐる所の法門は御存知為りと雖も書き進らせ候なり、十八
円満等の法門能く能く案じ給うべし並びに当体蓮華の相承等日蓮が

己証こじしょうの法門ほうもん等前前さきざきに書き進まいらせしが如ごとく委くわくは修禪寺相伝日記しゆぜんじそうでんにっきの如ごとし
天台宗てんだいしゅうの奥義おくぎ之のに過すぐべからざるか、一心三觀いっしんさんかん・一念三千いちねんさんぜんの極理ごくりは
妙法蓮華經みょうぼうれんげきやうの一言いを出いでず敢あえてて忘失もうしつすること勿なかれ敢あえてて忘失もうしつするこ
と勿なかれ、伝教大師でんぎやうだいし云いく和尚慈悲有わじやうじひつて一心三觀いっしんさんかんを一言いに伝でんう」玄旨げんじ
伝いに云いく「言いの妙旨むねなり一教いっけうの玄義げんぎなり」と云云、寿量品じゆりやうぼんに云いく毎つね
に自みづからは是この念なを作なす何もを以もつてか衆生しゆじやうをして無上道むじやうどうに入り速すみに仏身ぶつしんを
成就じやうじゆすることを得えせしめん」と云云、每自作是念さぜんの念ねんとは一念三千生いちねんさんぜん
仏本有ほんぬの一念いちねんなり、秘へす可べし秘へす可べし、恐恐きようきよう謹言きんげん。

弘安三年十一月三日

日蓮 花押

最蓮房に之を送る

◆三〇四 六郎恒長御消息しやうそく

文永元年九月 四十三

歳御作 与南部六郎恒長 於安房あわ 1368p

所詮しやせん念仏ねんぶつを無間地獄むげんじごくと云う義に二つ有り、一には念仏者ねんぶつを無間地獄むげんじごくとは日本にほん・一切いっさい念仏衆ねんぶつしゆの元祖がんそ法然上人ほうねんしやうにんの選集せんしゆに浄土三部じやうどさんぶを除いてより以外いちだいしやうきやう一代い聖教しやうきやう所謂しやうきやう・法華經ほけきやう・大日經だいにちきやう・大般若經だいはんにやきやう等一切いっさい大小の經を書き上げて捨しや閉へい閣かく抛ほう等云云、之に付いて上人しやうにん龜鏡ききやうと拳こころられし処の浄土三部經じやうどさんぶきやうの其その中に、雙觀經そうかんきやう・阿彌陀仏あみだぶつの因位いんい・法藏比丘ほうぞうびくの四十八願しやうはちじふはちがんに云く唯ただ五逆ごぎやくと誹謗ひぼう正法しやうぽうとを除くと云云、法然上人ほうねんしやうにんも乃至ないし十念の中なかつには入れ給たまふといえども、法華經ほけきやうの門を閉じよと書かれ候へば阿彌陀仏あみだぶつの本願ほんがんに漏もれたる人に非あらずや、其その弟子でし其その檀那等だんななも亦また以て此かくの如ごとし、法華經ほけきやうの文には若もし人信ぜずして、乃至ないし其その人命終みやうじゆうして

阿鼻獄あびごくに入らんと云云、阿弥陀仏あみだぶつの本願ほんがんと法華經ほけきようの文と眞実しんじつ

ならば法然上人ほうねんしやうにんは無間地獄むげんじごくに墮おちたる人に非あらずや、一切いっさいの經の性相しやうそう

に定めて云く師墮しおつれば弟子墮でしおつれば檀那だんな墮おつと云云、譬たとえ

ば謀叛むほんの者の郎從等ろうじやうとうの如ごとし、御不審有ふしんらば選せん択たくを披見ひけんあるべし是一。

二には念仏ねんぶつを無間地獄むげんじごくとは法華經ほけきようの序分じよぶん・無量義經むりやうぎきように云く方便ほうべんの

力を以て四十年もつには未いまだ眞実しんじつを顯あらわさず」云云、次下つぎしもの文に云く無量むりやう

無辺むへんを過すぐるとも乃至終ないしつひに無上菩提むじやうぼだいを成じやうずることを得えじ」云云、仏

初成道しよじやうどうの時より白鷺池びやくろちの辺いたに至るまで年紀ねんきをあげ四十余年よんじゆうよねんと指して

其その中うちの一切經いっさいききやうを挙あぐる中に大部たいぶの經四部そ・其その四部しよぶの中に次に方等ほうとう

十二部經じふにぶきやうを説くと云云、是これ念仏ねんぶつ者の御信用候ごしんしやう三部經さんぶきやうなり、此これを

挙あげて眞実しんじつに非あらずと云云、次に法華經ほけきよう

に云く世尊せそんの法は久しくして後要のちかならずまさ当に真実しんじつを説くべし」とは念仏等ねんぶつの不真実しんじつに対し南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようを真実しんじつと申す文なり、次下に云く仏みずかは自ら大乘だいじように住したまへり乃至若し小乗しょうじようを以て化すること乃至一人なひしに於てせば我即ち慳貪けんどんに墮す此の事は為て不可ふかなり」云云、此の文の意は法華經を仏・胸むねに秘しをさめて觀經・念仏等の四十余年よんじゅうよねんの經計けいりを人人に授けて法華經を説かずして黙止もくしするならば我は慳貪けんどんの者なり三惡道さんあくどうに墮だすべしと云う文なり、仏すら尚唯念仏なまたねんぶつを行じて一生をすごし法華經に移らざる時は地獄じごくに墮だすべしと云云、況や末代まつだいの凡夫一向ぼんぷいこうに南無阿彌陀仏なむあみだぶつと申して一生をすごし法華經に移つて南無妙法蓮華經みょうほうれんげきようと唱えざる者三惡道さんあくどうを免るべきや、第二の卷に云く今此三界等と云云、此の文は日本国六十六箇国嶋二つの大地だいちは教主きようしゆ釈尊しゃくそんの本領しやばもつなり娑婆しやば以て此くの如く全く阿彌陀あみだの領あちに非ず、其中

衆生しゅじやう悉しつぜ是こ吾子ごしと云云、日本にほん國こくの四十九億九万四千八百二十八人の
男女なんによ各ふ父母ぼ有ありといへども其その詮せんを尋たづぬれば教主きやうしゅ釈尊しやくそんの御子ごしなり、
三千さんぜん余社いしやうの大小だいしやうの神祇じんぎも釈尊しやくそんの御子ごし息そくなり全く阿弥陀仏あみだぶつの子に
非あらざるなり。|| 文永元年ぶんえいがんねん甲子きのえね九月 日

日蓮にちれん 花押かおう

南部六郎恒長殿

◆三〇五

波木井三郎殿御返事はきりごへんじ

文永十年八月

五十二歳御作

与南部六郎三郎 1369p

鎌倉かまくらに筑後房弁阿闍梨あじやり大進阿闍梨あじやりと申もうす小僧等こぞう之これ有あり之これを召よして

御尊あび有べる可べし御談義有ある可べし大事だいじの法門ほうもん等粗ぼぼ申もうす、彼等かれらは日本にほんに未いまだ流布るふせざる大法だいほう少少これ之これを有います随したがつて御学問注もうるし申べす可べきなり。

鳥跡てがみ飛あび来きれり不審ふしんの晴はること疾風やえくもの重雲おもを巻まいて明月めいげつに向むかうが

如ごとし、但ただし此この法門ほうもん当世とうせいの人上じやうげ下げを論ろんぜず信心しんじんを取り難がたし其そのの故ゆゑは

仏法ぶつぽうを修行しゆぎやうするは現世げんせ安穩あんのん・後生ごしやう善処ぜんしょ等と云云と云ふ、而しかに日蓮にちれん法師ほうし

法華經ほけきやうの行者ぎやうじやと称しょうすと雖いえども留難るなん多まさし当まさに知しるべし仏意ぶつゐに叶かなわざるか等

云云と云ふ、但ただし此この邪難じやなん先業せんごうの由よし御勘氣ごかんきを蒙ごおむるの後始おどろめて驚おどろく可べきに

非あらず、其そのの故ゆゑは法華經ほけきやうの文ぶんを見聞けんもんするに末法まっぽうに入いつて教ごの如ごとく法華經ほけきやう

を修行しゆぎやうする者は留難るなん多まさかる可べきの由よし・經文きやうもん

赫赫かくかくたり眼有まなこらん者は之これを見みるか、所謂いわゆる法華經ほけきやうの第四だいよに云いく如來にやらいの

現在げんざいにすら猶なほ怨嫉おんしつ多おほし況めつどや滅度めつどの後のちをや」又五いつさいの卷せけんに云いく一切世間いっさいせけん

怨多あだおほくして信がたじ難がたし」等云云又云いく諸もろもろの無智むちの人の惡口あくぐち罵詈めり等らし

とうじやうがりやく

刀杖瓦礫を加うる有らん」等云云、又云く「惡世の中の比丘」等云云、

又云く「或は阿蘭若に納衣にして空閑に在る有らん乃至白衣

の与に法を説いて世に恭敬せらるること六通の羅漢の如くならん」等云

云、又云く「常に大衆の中に在つて我等を毀らんと欲する故に国王・

大臣波羅門居士及び余の比丘衆に向つて誹謗して我が惡を説かん」等

云云、又云く「惡鬼其の身に入つて我を罵詈毀辱せん」等云云、又云く

「數數擯出せらる」等云云、大涅槃經に云く「闍提

羅漢の像を作し空閑の処に住し方等大乗經典を誹謗すること有る

を諸の凡夫人見已つて皆眞の阿羅漢なり

是れ大菩薩なりと謂わん」等云云、又云く「正法滅して後・像法の中に

於て当に比丘有るべし持律に似像して少しく經を誦誦し飲食を貪嗜し

其の身を長養し乃至袈裟を服すと雖も猶獵師の細めに視て徐に行く

が如く猫の鼠を

伺ふが如し」等云云、又般泥・經に云く阿羅漢に似たる一闍提有り、

乃至」等云云、予此の明鏡を捧げ持つて日本国に引き向けて之を浮べ

たるに一分も陰れ無し惑有阿蘭若・納衣在空閑とは何人ぞや為世所

恭敬如六通羅漢とは又何人ぞや、諸凡夫見已・皆謂真阿羅漢・是大

菩薩とは此れ又誰ぞや、持律少誦誦經とは又如何、是の經文

の如く仏・仏眼を以て末法の始を照見したまい当世に當つて此等の

人人無くんば世尊の謬乱なり、此の本・迹二門と雙林の常住と誰人

か之を信用せん今日蓮仏語の眞実を顯さんが為日本に配當して此の經

を誦誦するに・或有阿蘭若住於空処等と云うは、建長寺・寿福寺・極樂

寺建仁寺東福寺等の日本国の禪・律念仏等の寺寺なり、是等の

魔寺は比叡山等の法華天台等の仏寺を破せん爲に出来するなり、納衣
持律等とは当世の五・七・九の袈裟を着たる持斎等なり、爲世所恭敬
是大菩薩とは道隆・良觀・聖一 etc. 等なり、世と云うは当世の国主等な
り、有諸無智人諸凡夫人等とは日本国中の上下万人なり、日蓮凡夫た
る故に仏教を信ぜず但し此の事に於ては水火の如く手に當てて之を知
れり、但し法華經の行者有らば惡口・罵詈・刀杖・擯出等せらる可し
云云、此の經文を以て世間に配當するに
一人も之れ無し誰を以てか法華經の行者と爲さん敵人は有りと雖も
法華經の持者は無し、譬えば東有つて西無く天有つて地無きが如し
仏語妄説と成るを如何、予自讃に似たりと雖も之を勘え出して仏語を
扶持す所謂日蓮法師是なり、其の上仏・不輕品に自身の過去の現証を
引いて云く爾の時に一りの菩薩有り常不輕と名く等云云、又云く惡口

罵詈等せらる、又云く・或は杖木瓦石を以て之を打擲す等云云、
釈尊我が因位の所行を引き載せて末法の始を勸励したもう不輕菩薩
既に法華經の為に杖木を蒙りて忽に妙覺の極位に登らせたまひぬ、
日蓮此の經の故に現身に刀杖を被むり二度遠流に當る当來の妙果
之を疑う可しや、如來の滅後に四依の居士正像に出世して此の經を
弘通したもうの時にすら猶留難多し、所謂付法藏第二十の提婆菩薩第
二十五の師子尊者等・或は命を断たれ頸を刎らる、第八の仏駄密多第
十三の竜樹菩薩等は赤き旛を捧げ持ちて七年十二年王の門前に立て
り、竺の道生は蘇山

に流され法祖は害を加えられ法道三藏は面に火印を捺され、慧遠法師
は呵責せられ天台大師は南北の十師に對当し、伝教大師は六宗の
邪見を破す、此等は皆王の賢愚に當るに依つて用取有るのみ敢て仏意

に叶^{かな}わざるに非^{あら}ず正像^{しょうぞう}猶^{なほ}以て是^{かく}の如^{ごと}し何^{いか}に況^{まづ}や末法^{まつぽう}に及^{およ}ぶにおいて
をや、既^{すで}に法華^{ほけき}經^{きやう}の爲^{ため}に御勘^{ごかん}氣^きを蒙^{こうむ}れば幸^{さい}の中の幸^{さい}なり瓦礫^{がりやく}を以^{もつ}て
金銀^{きんぎん}に易^かゆるとは是^{これ}なり、但^{ただ}し歎^{なげ}くらくは仁王^{にんのう}經^{きやう}に云^いく「聖人^{しょうにん}去^さる時^{とき}
七難^{ひちなん}必^{かならず}起^{おこ}る」等云云、七難^{ひちなん}とは所謂^{いわゆる}大旱魃^{かんぱつ}・大兵乱^{ひやうらん}等是^{これ}なり、
最勝^{さいしょう}王經^{おうきやう}に云^いく「惡人^{あくにん}を愛敬^{あいぎやう}し善人^{ぜんにん}を治罰^{ちばつ}するに由^よるが故^{ゆゑ}に星宿^{せいしゆく}
及^{およ}び風雨^{ふうう}皆^{みな}時^{とき}を以^{もつ}て行^{おこな}われず」等云云、愛惡^{あくにん}人^{にん}とは誰人^{だれびと}ぞや上に挙^あぐ
る所^{しよにん}の諸人^{しよにん}なり治罰^{ちばつ}善人^{ぜんにん}とは誰人^{だれびと}ぞや上に挙^あぐる所^{しよにん}の數數^{さくさく}見^{けん}擯^{ひん}出^{すい}

の者なり、星宿せいしゆくとは此の二十余年の天変地夭てんぺんちよう等是なり、經文きやうもんの如くならば日蓮にちれんを流罪るざいするは国土滅亡こくどの先兆なり、其の上・御勘氣ごかんき已前いぜんに其その由これ之かんがを勘いえ出いだす所謂立正安國論いわゆるりつしょうあんこくろん是なり誰か之これを疑うたがわん之これを以もつて歎なと為たす、但し仏滅後ぶつめつ・今に二千二百二十二年なり、正法しょうぼう一千年には竜樹りゅうじゆ・天親等てんじん・仏の御使おんつかいと為もつて法を弘ひろむ然りと雖もいえど但小・權の二教を弘通くつうして実大乘じつだいじやうをば未だ之これを弘通くつうせず像法ざうぼうに入いつて五百年に天台大師てんだいだいし・漢土かんどに出現しゆつげんして南北の邪義じやぎを破失はしつして正義せいぎを立てたもう、所謂教門いわゆるきやうもんの五時觀門かんもんの一念三千いちねんさんぜん是なり、國を挙あげて小釈迦しやかと号す、然りと雖もいえど円定えんてい・円慧えんねに於おては之これを弘宣くせんして円戒えんかいは未だ之これを弘ひろめず、仏滅後ぶつめつ・一千八百年に入りて日本にほんの伝教大師世でんきやうだいしに出現しゆつげんして欽明きんめいより已来このかた二百余年の間六宗ろくしやうの邪義じやぎ之これを破失はしつす、其の上天台てんだいの未だ弘ひろめたまわざる円頓戒えんどんかい之これを弘宣くせんしたもう所謂叡山円頓いわゆるえいざんえんどんの大戒だいかい是なり、但し

仏滅後・二千余年三朝の間數萬の寺々之有り、然りと雖も本門の教主

の寺塔地涌千界の菩薩の別に授与したもう所の妙法蓮華經の五字未だ

之を弘通せず弘むべしと云う經文は有つて国土には無し時

機の未だ至らざる故か、仏記して云く我が滅度の後・後の五百歳の中

に広宣流布し閻浮提に於いて断絶せしむること無けん」等云云、天台

記して云く後の五百歳遠く妙道に沾わん」等云云、伝教大師記して

云く「正像稍過ぎ已つて末法太だ近きに有り法華一乘の機今正しく

是れ其の時なり」等云云、此れ等の經釈は末法の始を指し示すなり、

外道記して云く我が滅後・一百年に當つて仏世に出でたもう」と云云、

儒家に記して云く「千年

の後・仏法漢土に渡る」等云云、是くの如き凡人の記文すら尚以て符契

の如し況や伝教天台をや何に況や釈迦・多宝の金口の明記をや、當に

知るべし残る所の本門ほんもんの教主きようしゅ妙法みょうぼうの五字ごじ一閻浮提えんぶだいに流布るふせんこと疑うたがい
無き者か、但しただ日蓮法師にちれんほっしに度度たびたび之これを聞きける人人ひとびと猶此なほの大難だいなんに値あつて
の後之これを捨すつるか、貴辺きへんは之これを聞きたもうこと一兩度いちりょうど・二時いちじ
・二時ふたじか然しかりと雖いふとも未だ捨すてたまわす御信心しんじんの由これ之これを聞く偏ひとえに今生こんじやう
の事に非みじ、妙樂大師みょうらくだいしの云いく故ゆゑに知んぬ末代まつだい一時いちじ聞きくことを得聞とくもんき
已おつて信しんを生なずること宿種しゅくしゅなるべし」等云云、又云いく運像末うんざうまつに居こし此
の真文しんもんを囑みる

妙因みょういんを植うえたるに非あらざるよりは実に遇あい難がたしと為なす」等云云、法華經ほけきょうに云いく、過去かこに十萬億の仏くわうを供養くやうせん人人人間にんげんに生はれて此この法華ほつを信しんぜん」又涅槃經ねはんぎょうに云いく、熙連きれん一恒供養くやうの人、此この惡世あくせに生はれて此この經きやうを信しんぜん」等云云取意、阿闍世王あじやせは父ちちを殺害ころし母ははを禁固さつがいせし惡人あくにんなり、然しかりと雖いえども涅槃經ねはんぎょうの座ざに來きつて法華經ほけきょうを聽聞ちやうもんせしかば現世げんせの惡瘡あくそうを治いするのみに非あらず四十年の壽命じゆみやうを延引のびしたまひ結句けつこは無根初住しよじやうの仏記ぶつきを得えたり、提婆達多だいばだつたは閻浮第一えんぶだいいちの一闍提いっせんたいの人、二代いちだい聖教しやうきやうに捨すて置おかれしかども此この經きやうに値あひ奉たてまつりて天王てんのう如來にょらいの記き☆を授与じゆよせらる彼かを以もつて之これを推すいするに末代まつだいの惡人あくにん等の成仏じやうぶつ不成じやうぶつは罪つみの輕重けいちやうに依よらず但此經せつしやうの信不信ふしんに任まかす可べきのみ、而しかるに貴辺きへんは武士ぶしの家の仁昼夜殺生せつしやうの惡人あくにんなり、家いを捨すてずして此所こゝに至いたつて何いかなる術じゆつを以もつてか三惡道さんあくどうを脱のがる可べきか、能よく能よく思案あ有べる可べきか、法華經ほけきょうの心しんは

とういそくみよう 当位即妙・不改本位と申して罪業を捨てずして仏道を成ずるなり、
てんだい 天台の云く 他経は但善に記して惡に記せず今経は皆記す」等云云、
みょうらく 妙樂の云く 唯円教の意は逆即是順なり自余の三教は逆順定まる
ゆえ が故に」等云云、爾前分分の得道有無の事之を記す可しと雖も名目を
やから 知る人に之を申すなり、然りと雖も大体之を教る弟子之れ有り此の
輩等を召して粗之を聞くべし、其の時之を記し申す可し、恐恐謹言。

ぶんえい 文永十年太歳癸酉八月三日

にちれん 日蓮
かおう 花押

かいのくに 甲斐国南部六郎三郎殿御返事

◆三〇六

南部六郎殿御書

1374p

眠れる師子に手を付けざれば瞋らず流にさをを立てざれば浪立たず謗法を呵嘖せざれば留難なし、若善比丘見壞法者置不呵嘖の置の字をををそれずんば今は吉し後を御らんぜよ無間地獄疑無し、故に南岳大師の四安樂行に云く 若し菩薩有りて悪人を將護して治罰すること能わず、其れをして惡を長ぜしめ善人を悩亂し正法を敗壞せば此の人は実に菩薩に非ず、外には詐侮を現じ常に是の言を作さん、我は忍辱を行ずと、其の人命終して諸の悪人と俱に地獄に墮ちなん」云云、十輪經に云く 若し誹謗の者ならば共住すべからず亦親近せざれ、若し親近し共住せば即ち阿鼻地獄に趣かん」云云、梅檀の林に入りぬ

ればたをらざるに其身に薰くんず誹謗ひぼうの者に親近しんこんすれば所修しよしゅう

の善根ぜんこん悉く滅めつして俱ともに地獄じごくに墮落だらくせん、故ゆえに弘決くけつの四よに云いく、若もし人本もと

惡無なけれども惡人あくにんに親近しんこんすれば後あとに必ず惡人あくにんと成なりりて惡名あくみょう天下てんかに

遍へんし」凡およそ謗法ほうぼうに内外ないげあり国家こつかの二是これなり、外そととは日本にほん六十六ヶ国の

謗法ほうぼう是これなり、内うちとは王城ここのえ九重ここのえの謗是これなり、此こゝの内外ないげを禁制きんせいせずんば

宗廟社禰そうびようの神かみに捨すててられて必ず国家こつか亡なぶべし、如何いかんと云いうに宗廟そうびよう

とは国王こくおうの神かみを崇あがむ社やしろとは地ちの神かみなり禰たみとは五穀ごこくの總名ごうめい五穀ごこくの神かみな

り、此こゝの兩りうの神法ほうみ味みに飢うえて國くにを捨すてて給たまう故ゆえに國土こくど既にすでに日日じじつ衰滅すいめつせ

り、故ゆえに弘決くけつに云いく、地ち広ひろくして尽ことごとく敬けいす可べからず封ほうじて社やしろと為なす禰たみ

とは謂いく五穀ごこく

の總名ごうめいにして即すなはち五穀ごこくの神かみなり」故ゆえに天子てんしの居こする所ところには宗廟そうびようを左ひだりにし

社やしろ禰たみを右みぎにし四時しじ・五行ごうぎを布つちき列つらぬ故ゆえに國くにの亡なぶるを以もつて社やしろ禰たみを失うしなう

と為すな、故ゆえに山家大師だいいしは国くにに謗法ぼうぼうの声あ有るによつて万民ばんみん数を減じ家に
讀教どくきょうの勤つとめあれば七難ひちなん必ず退散たいさんせん」と、故ゆえに分分ぶんぶんの内外ないがい有るべし。

五月十六日

日蓮にちれん在御判

南部六郎殿

◆三〇七

地引御書ごしよ

弘安四年十一月 六十歳御作

与南部六郎

1375p

坊は十間四面しめんにまたひさしさしてつくりあげ二十四日に大師講だいし並ならびに延年心のごとくつかまつりて二十四日の戌亥いぬいの時御所にすゑして三十余人をもつて一日経いちにちきようかきまいらせ並ならびに申酉さるとりの刻に御供養くようすこしも事ゆへなし、坊は地ひき山づくりし候いしに山に二十四日一日もかた時も雨ふる事なし、十一月ついたちの日せうばう

つくり馬やつくる八日は大坊のはしらだて九日十日ふき候い了おわんぬ、しかるに七日は大雨だいう八日九日十日はくもりてしかもあたたかなる事春の終りのごとし、十一日より十四日までは大雨だいうふり大雪下りて今に里にきへ

ず、山は一丈二丈雪こほりてかたき事かねのごとし、二十三日四日は又
そらはれてさむからず人のまいる事洛中かまくらのまぢの申酉さるとりの時のご
とし、さだめて子細しさいあるべきか。

次郎殿等の御きうだちをやのをほせと申し我が心こころにいれてをはしま
す事なればわれと地をひきはしらたて、とうひやうえむまの入道にゅうどう三郎
兵衛尉等已下ひょうゑのじょうの人人ひとびと・一人もそらくのぎなし、坊はかまくらにては一
千貫にても大事だいじとこそ申し候へ。

ただし一日経いちにちきようは供養くようしさして候、其の故そのゆゑは御所念の叶かなわせ給たまひいて候
ならば供養くようしはて候そうらはん、なにと申もうして候とも御きねんかなはずば言の
み有りて実なく華さいてこのみなからんか、いまも御らんぜよ此の事叶
はずば今度このたび

・法華經ほけきようにては仏になるまじきかと存ぞんじ候そうらはん、叶かないて候はば二人より

あひまいらせて供養くようしはてまいらせ候そうらはん、神たましいならはすはねぎからと
申もうす、此の事叶はずば法華經ほけきよう信じてなにかせん、事事又又申もうすべく候
恐きようきよう恐きようきよう。

十一月廿五日

日蓮にちれん

花押かおう

南部六郎殿

◆三〇八

波木井殿御報 はきり

弘安五年九月 こうあん 六十一歳

御作

1376p

畏^{かしこ}み申し候^{もう}、みちのほどべち事候はでいけがみまでつきて候、みちの間
山と申しかわと申し^{もう}そこばく大事^{だいじ}にて候いけるをきうだちにす護^{まも}せら
れまいらせ候いて難^{なん}もなくこれまででつきて候事をそれ入り候ながら悦^{よろこ}び
存し候、さてはやがてかへりまいり候^{そうら}はんずる道にて候へども所らうのみ
にて候へは不ぢやうなる事も候^{そうら}はんずらん。

さりながらも日本^{にほんこく}国にそこばくもてあつかうて候みを九年まで御き
え候いぬる御心^{おんこころ}ざし申すばかりなく候へいづくにて死に候ともはかを
ばみのぶさわにせさせ候べく候。

又くりかげの御馬はあまりをもしろくをばへ候程にいつまでもうしな
ふまじく候、ひたちのゆへひかせ候はんと思ひ候がもし人にもぞとられ
候はん、又そのほかいたはしくをばへはゆよりかへり候はんほど・かづさの^上総
もばら殿のもとにあづけをきたてまつるべく候にしらぬとねりをつけて
候ては・をばつかなくをばへ候、まかりかへり候はんまで此のとねりをつ
けをき候はん^{きんげん}とぞんじ候、そのやうを御ぞんぢのために申し候、^{きようきよう}恐恐
謹言。

九月十九日 ^{にちれん} 日蓮

^{しんじよう} 進上 ^{はきり} 波木井殿 御報

所らうのあひだはんぎやうをくはす候事恐れ入り候。

◆三〇九

大井莊司入道御書

建治二年

五十

五歳御作

1377p

柿三本酔一桶・くぐたち・土筆給い候い畢んぬ、唐土に天台山と云
う山に竜門と申して百丈の滝あり、此の滝の麓に春の初より登らんと
して多くの魚集れり、千万に一も登ることを得れば竜となる、魚・竜と
成らんと願うこと民の昇殿を望むが如く貧なるものの財を求むるが
如し、仏に成ることも亦此くの如し彼の滝は百丈早き事合張
の天より箭を射徹すより早し、此の滝へ魚登らんとすれば人集りて羅網
をかけ釣をたれ弓を以て射る左右の辺に間なし、空には・鷺・鵲・烏・夜は虎
・狼・狐・狸・何にとなく集りて食い噬む、仏になるをも是を以て知りぬ

べし、有情輪廻生死六道と申して我等が天竺に於て師子と生れ漢土・
日本に於て虎狼野干と生れ天には☆鷲・地に

は鹿蛇と生れしこと数をしらず、或は鷹の前の雉・☆の前の鼠と生
れ、生ながら頭をつつき・ししむらをかまれしこと数をしらず、一劫が
間の身の骨は須弥山より高く大地よりも厚かるべし、惜き身なれども
云うに甲斐なく奪われてこそ候いけれ、然れば今度・法華經の為に身を
捨て命をも奪われ奉れば無量無數劫の間の思ひ出なるべしと思ひ切り
給うべし、穴賢穴賢、又又申すべし、恐恐謹言。

日蓮花押

大井莊司入道殿

建治二年丙子

柑子一籠・種種の物送り給候、法華經第七卷藥王品に云く衆星の中に月天子最も為第一なり此の法華經も亦復是くの如し、千万億種の諸の經法の中に於て最も為照明なり云云、文の意は虚空の星は或は半里・或は一里・或は八里・或は十六里なり、天の満月輪は八百里にてをはします、華嚴經六十卷・或は八十卷・般若經六百卷・方等經六十卷・涅槃經四十卷・三十六卷・大日經・金剛頂經・蘇悉地經觀經・阿彌陀經等の無量無辺の諸經は星の如し、法華經は月の如しと説かれて候經文なり、此れは竜樹菩薩無著菩薩・天台大師善無畏三蔵等の論師・人師の言にもあらず、教主釈尊の金言なり譬へば天子の一言の

如し、又法華經の藥王品に云く能く是の經典を受持すること有らん者
も亦復是くの如し一切衆生の中に於て亦為第一等云云、文の意は
法華經を持つ人は男ならば何なる田夫にても候へ、三界の主たる
大梵天王・釈提桓因・四大天王・轉輪聖王乃至漢土・日本の国主等に
も勝れたり、何に況や日本国の大臣・公卿源平の侍・百姓等に勝れた
る事申すに及ばず、女人ならば女・戸迦・吉祥天女・漢の李夫人・楊
貴妃等の無量無辺の一切の女人に勝れたりと説かれて候、案ずるに
經文の如く申さんとすればをびただしき様なり人もちるん事もかた
し、此れを信ぜじと思へば如来の金言を疑ふ失は經文明かに阿鼻
地獄の業と見へぬ、進退わづらひ有り何がせん、此の法門を教主釈尊
は四十余年が間は☆の内にかくさせ給う、さりとてはとて御年七十二
と申せしに南閻浮提の中天竺王舍城の丑寅耆闍崛山にして説かせ給い

き、今・日本^{にほんこく}国には仏御入滅^{にゅうめつ}一千四百余年と申せしに來りぬ、夫より
今七百余年なり、先き一千四百余年が間は日本^{にほんこく}国の人国王^{こくおう}・大臣^{だいじん}乃至^{ないし}
万民^{ばんみん}一人も此の事を知らず。

今・此（この）の法華經（ほけきょう）わたらせ給（たま）へども・或（ある）は念仏（ねんぶつ）を申し・或（ある）は眞言（しんごん）にいとま
を入れ・禪宗（ぜんしゅう）持齋（じさい）なんど申し・或（ある）は法華經（ほけきょう）を読む人は有りしかども南無（なむ）
妙法蓮華經（みょうほうれんげきょう）と唱（とな）うる人は日本国（にほんこく）に一人も無し、日蓮（にちれん）始めて建長五年（けんちよう）
の夏の始より二十余年が間唯一（ただ）一人当時（とうじ）の人の念仏（ねんぶつ）を申すやうに唱（とな）うれ
ば人ごと（こ）に是（こ）れを笑ひ結句（けつこ）はのりうち切り流し頸（けい）をはねんと

せらるること一日・二日・二月・二年ならざればこらふべし
ともをばえ候はねども、此の經の文を見候（だんおう）へは檀王（だんおう）と申せし王は千歳（せんさい）が
間阿私仙人（あしせんじん）に責めつかはれ身を牀（ゆか）となし給（たま）ふ、不輕菩薩（ふぎようぼさつ）と申せし僧は
多年が間・

惡口罵詈（あぐめり）せられ刀杖瓦礫（とうじょうがりやく）を蒙（こむ）り、藥王菩薩（やくおうぼさつ）と申せし菩薩（ぼさつ）は千二百年
が間・身をやき七万二千歳（せんさい）ひぢを焼（や）き給（たま）ふ、此（こ）れを見はんべるに何（いか）なる
責め有りともしいかでかさてせき留（とど）むべきと思ふ心に今まで退轉（たいてん）候はず。

然るに在家の御身として皆人にくみ候に、而もいまだ見参に入り候はぬに何と思し食して御信用あるやらん、是れ偏に過去の宿植なるべし、来生に必ず仏に成らせ給うべき期の来りてもよをすところなるべし、其の上経文には鬼神の身に入る者は此の経を信ぜず釈迦仏の御魂の入りかはれる人は此の経を信ずと見へ候へば水に

月の影の入りぬれば水の清むがごとく御心の水に教主釈尊の月の影の入り給ふかとたのもしく覚候、法華経の第四法師品に云く人有て仏道を求めて一劫の中に於て合掌して我が前に在つて無数の偈を以て讃めん、是の

讃仏に由るが故に無量の功德を得ん、持経者を歎美せんは其の福復た彼れに過ぎん」等云云、文の意は一劫が間教主釈尊を供養し奉るよりも末代の浅智なる法華経の行者の上下万人にあだまれて餓死すべき

比丘等くすうを供養くようせん功德くどくは勝まさるべしとの經文きようもんなり。

一劫いつこくと申もうすは八万里はちまんなんど候そうらはん青めの石いしをやすりもつを以もつて無量劫むりようこくが
間まするともつきまじきもつを、梵天ぼんてん三銖さんしゆの衣えと申もうしてきはめてほそくうつく
しきあまの羽衣うゐを以もつて三年さんねんに一度ひとたび下くだてなづるになでつくしたるを一劫いつこく
と申もうす、此この間無量むりようの財たからを以もつて供養くようしまいらせんよりも濁世じよくせの法華經ほけきよう
の行者ぎようじやを供養くようしたらん功德くどくはまさるべきと申もうす文なり

ほけきよう

、此の事信じがたき事なれども法華經はこれていにをびただしく、こと

たほうぶつ

ごとしき事どもあまた侍べり、又信ぜじと思へば多宝仏は証明を加へ

きようしゅしやくそん

きんげん

しょうみょう

教主釈尊は正直の金言となのらせ給ふ、諸仏は広長舌を梵天につけ

たまひ

給いぬ、父のゆづりに母の状をそゑて賢王の宣旨を下し給うが如し、三

つ是一同なり誰か是れを疑はん、されば是れを疑いし

無垢論師は舌五つに破れ嵩法師は舌ただれ三階禪師は現身に大蛇とな

むくろんし

わ

ほつし

げんしん

だいじや

る徳一は舌八つにさけにき、其れのみならず此の法華經並に行者を用

ひずして身をそんじ家をうしない国をほろぼす人人・月支・震旦に其の

数をしらず、第一には日天朝に東に出で給うに大光明を放ち天眼を

開きて南閻浮提を見給うに法華經の行者あれば心に歡喜し

えんぶだい

にってん

ほけきよう

ぎようじや

かんき

行者をにくむ国あれば天眼をいからして其の国をにらみ給い、始終

ぎようじや

てんげん

そのゆえ

そ

たまひ

用いずして国の人にくめば其の故と無くいくさをこり他国より其の国を

もち

そ

しじゅう

用いずして国の人にくめば其の故と無くいくさをこり他国より其の国を

もち

そ

しじゅう

用いずして国の人にくめば其の故と無くいくさをこり他国より其の国を

もち

そ

しじゅう

用いずして国の人にくめば其の故と無くいくさをこり他国より其の国を

もち

そ

しじゅう

破るべしと見えて候。

昔し徳勝童子と申せしをさなき者は土の餅を釈迦仏に供養し奉り
て阿育大王と生れて閻浮提の主と成りて結句は仏になる、今の施主の
菓子等を以つて法華經を供養します、何かに十羅刹女等も悦び給
らん、悉く尽しがたく候、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。

二月十七日

日蓮花押

松野殿御返事

鷺目一結白米一駄白小袖一送り給畢ぬ、抑も此の山と申すは南は
野山漫漫として百余里に及べり、北は身延山高く峙ちて白根が嶽につ
づき西には七面と申す山峨峨として白雪絶えず、人の住家一字もな
し、適ま問いくる物としては稍を伝ふ☆猴なれば少も留まる事なく
還るさ急ぐ恨みなる哉、東は富士河漲りて流沙の浪に異ならず、かか
る所なれば訪う人も希なるに加様に度度音信せさせ給ふ事不思議の中
の不思議なり。

実相寺の学徒日源は日蓮に帰伏して所領を捨て弟子・檀那に放され
御座て我身だにも置き処なき由承り候に日蓮を訪い衆僧を哀みさせ

給^{たま}う事誠^{じょうしん}の道心^{どうしん}なり聖人^{しょうにん}なり、已^{すで}に彼の人は無雙^{むそう}の学生^{がくせい}ぞかし然^{しか}るに
名聞^{みょうもん}名利^{みょうり}を捨てて某^{それがし}が弟子^{でし}と成^{なり}りて我が身^みには我不愛^{がふあいしん}身命^{みんみょう}の修行^{しゆぎやう}
を致^{いた}し仏^{ぶつ}の御恩^{ごおん}を報^{はう}ぜんと面^{めん}面^{めん}までも教化^{きやうけ}申し此^こくの如^{ごと}く供養^{くやう}
等^{たう}まで捧^{ささ}げしめ給^{たま}う事不思議^{ふしぎ}なり、末世^{まうし}には狗犬^{くけん}の僧尼^{そうに}は恒沙^{ごうしゃ}の如^{ごと}し
と仏^{ぶつ}は説^{たま}かせ給^{たま}いて候^{まち}なり、文^{ぶん}の意^いは末世^{まうし}の僧比丘尼^{びくに}は名聞^{みょうもん}名利^{みょうり}に
著^{じゃく}し上^{じやう}には袈裟衣^{けささ}を著^きたれば形^{かたち}は僧比丘尼^{びくに}に似^にたれども内心^{ないしん}には邪見^{じゃけん}
の劍^{けん}を提^{ひさ}げて我^{われ}

が出入^{だに}する檀那^{だんな}の所^{もと}余^{ほか}の僧尼^{そうに}をよせじと無量^{むりやう}の譏言^{ざんげん}を致^{いた}す、余^{そうに}の僧尼^{そうに}
を寄^よせずして檀那^{だんな}を惜^{おし}まん事譬^{たと}えば犬^{いぬ}が前^{まへ}に人^{ひと}の家^{いへ}に至^{いた}て物^{もの}を得^えて食^く
ふが、後^{あと}に犬^{いぬ}の来^きるを見^みていがみほ食合^{くいあう}が如^{ごと}くなるべしと云^いう心^{こころ}なり、
是^{かく}くの如^{ごと}きの僧尼^{そうに}は皆^{みな}皆^{みな}惡道^{あくどう}に墮^だすべきなり、此^こ学^{がく}徒^た日源^{にっげん}は学^{がく}生^{せい}なれ
ば此^この文^{ぶん}をや見^みさせ給^{たま}いけん、殊^{こと}の外^{ほか}に僧衆^{そうしゆ}を訪^{かえり}ひ顧^{かへり}み給^{たま}う事誠^{じょうしん}に有^あ

り難く覚え候。

御文に云く此の経を持ち申して後退転なく十如是自我偈を読み
奉り題目を唱へ申し候なり、但し聖人の唱えさせ給う題目の功德と我
れ等が唱へ申す題目の功德と何程の多少候べきやと云云、更に勝劣あ
るべからず候、其の

故は愚者の持ちたる金も智者の持ちたる金も愚者の然せる火も智者の然せる火も其の差別なきなり、但し此の經の心に背いて唱へば其の差別有るべきなり、此の經の修行に重重のしなあり其大概を申せば記の五に云く

惡の数を明かすことをば今の文には説不説と云ふのみ、有る人此れを分つて云く、先きに惡因を列ね次ぎに惡果を列ぬ惡の因に十四あり、一に慢・二に懈怠・三に計我・四に淺識・五に著欲・六に不解・七に不信・八に顰蹙・

九に疑惑・十に誹謗・十一に輕善・十二に憎善・十三に嫉善・十四に恨善なり」此の十四誹謗は在家・出家に亘るべし恐る可し恐る可し、過去の不輕菩薩は一切衆生に仏性あり法華經を持たば必ず成仏すべし、彼れを輕んじては仏を輕んずるになるべしとて禮拜の行をば立てさせ

給たまいしなり、法華經ほけきようを持たざる者をさへ若もし持たもちやせんずらん
仏性ぶつじやうありとてかくの如ごとく礼拝らいはいし給たまう何いかに況たもや持たもてる在家ざいけ・出家しゅつけの者を
や、此の經の四の卷には 若もしは在家ざいけにてもあれ出家しゅつけにてもあれ、
法華經ほけきようを持たもち説たもく者を一言にても毀そしる事あらば其その罪多つみき事、釈迦しゃか・
一劫いつくわうの間直ちに
毀そしり奉たてまつる罪には勝すぐれたり」と見へたり、或あるは 若にやくじつにやくふじつ実若じつ不実ふじつ」とも説かれ
たり、之これを以もつてて之これを思ふに忘れても法華經ほけきようを持たもつ者をば互たがいに
毀そしるべからざるか、其故ほけきようは法華經ほけきようを持たもつ者は必ず皆みな仏なり仏を毀そしりて
は罪つみを得るなり。

加様に心得こころえて唱となうる題目だいもくの功德くどくは釈尊しゃくそんの御功德くどくと等しかるべし、釈
に云いく阿鼻あびの依正えしやうは全ごとくく極聖ごくしやうの自身じしんに処びるし毘盧しんどの身土しんどは凡下ほんげの一念いちねん
を逾こえず云云、十四誹謗ひぼうの心は文に任まかせて推量あるべし、加様に法門ほうもん

を御尋ね候事誠に後世を願はせ給う人か能く是の法を聴く者は斯の人
亦復難しとて此経は正き仏の御使世に出でずんば仏の御本意の如く説
く事難き上、此の経のいはれを問い尋ねて不審を明らめ能く信ずる者
難かるべしと見えて候、何に賤

者なりとも少し我れより勝れて智慧ある人には此の経のいはれを問い
尋ね給うべし、然るに惡世の衆生は我慢・偏執名聞名利に著して彼れ
が弟子と成るべきか彼れに物を習はば人にや賤く思はれんずらんと、
不斷惡念に住して惡道に墮すべしと見えて候、法師品には人有りて八
十億劫の間無量の宝を尽して仏を供養し奉らん功德

よりも法華經ほけきょうを説かん僧くそうを供養くようして後に須臾しゆゑの間も此の經の法門ほうもんを
聴聞ちやうもんする事あらば我れ大なる利益功德りやくくどくを得べしと悦うぶべし」と見えた
り、無智むちの者は此の經を説く者に使れて功德くどくをうべし、何なる鬼畜いかなり
とも法華經ほけきょうの一偈いちげ・一句いっくをも説かん者をば、当まさに起ちて遠く迎むかえて当まさに
仏ぶつを敬うやうが如ごとくすべし」の道理どうりなれば仏ぶつの如ごとく互たがいに敬うやうべし、例せば
宝塔品ほうとうばんの時の釈迦しやか・多宝たほうの如ごとくなるべし。

此の三位房げれつは下劣げれつの者なれども少分ほけきょうも法華經ほうもんの法門ほうもんを申もうす者なれば
仏ぶつの如ごとく敬うやいて法門ほうもんを御尋みねあるべし、依法えぼう不依人ふえに此これを思ふべし、さ
れば昔独ひとりの人有ひとりて雪山せつせんと申もうす山に住み給こき其その名を雪山童子せつせんどうじと云
う、蔵くらひをおり菓このみを拾ひろいて命をつぎ鹿の皮きを著物きものとこしらへ肌かわをかくし
閑ひまに道みちを行なじ給たまい、此の雪山童子せつせんどうじおもはれけるは情つらつら

世間せけんを觀みずるに生死しやうじ無常むじやうの理りなれば生なずる者は必ず死しす、されば憂世うきよ

の中なかつのあだはかなき事こと譬たとへば電光でんくわの如ごとく朝露あさつゆの日に向むひて消きるに似にたり、風かぜの前のの灯ともしびの消きへやすく芭蕉ばしやうの葉はの破ややすきに異みなならず、人みな皆みな此この無常むじやうを遁のがれず終ついに一度ひとたびは黄泉こうせんの旅りに趣おもむくべし、然しかれば冥途めいどの旅りを思おもうに闇闇くらくらとしてくらければ日月にちがつ・星宿せいしゆくの光ひかりもなく、せ

めて灯燭ともしびとてともす火ひだにもなし、かかる闇くらき道みちに又またともなふ人もなし、娑婆しやばにある時は親類しんるい兄弟きやうだい・妻子さいし・眷属けんぞく集あはりて父ちちは慈あわれみの志こころざし高く母ははは悲かなしみの情深こころふかく、夫婦ふうふは海老かいろう同穴どうけつの契ちぎりとて大海たいかいにあるえびは同じおなじ畜生ちくしやうながら夫妻ふうさいちぎり細こかに、一生いっしやう一処いつしよにともなひて離いぬれ去さる事ことなきが如ごとく・鴛鴦えんおうの衾ふすまの下したに枕まくらを並ならべて遊あそび戯たわむる中ななれども・彼かれの冥途めいどの旅りには伴ともなふ事ことなし、冥冥めいめいとして独ひとり行いく誰たれか来きりて是こ非ひを訪まはんや、或あるは老少ふじやう不定ふじやうの境さかいなれば老おいいたるは先立わか若わかきは留とどまる是これは順次じゆんじの道理どうりなり歎なげきの中なにもせめて思おもいなくさむ方かたも有ありぬべし、老

いたるは留まり若きは先立つされば恨の至つて恨めしきは幼くして親に
先立つ子、嘆きの至つて歎かしきは老いて子を先立

つる親なり、是くの如く生死無常老少不定の境あだにはかなき世の中
に但昼夜に今生の貯をのみ思ひ朝夕に現在の業をのみなして、仏を
も敬はず法をも信ぜず無行無智にして徒らに明し暮して、閻魔の庁庭
に引き迎へ

られん時は何を以つてか資糧として三界の長途を行き、何を以て船筏として生死の曠海を渡りて実報・寂光の仏土に至らんやと思ひ、迷へば夢覺れば寤しかじ夢の憂世を捨てて寤の覺りを求めんにはと思惟し、彼の山に籠りて觀念の牀の上に妄想顛倒の塵を払ひ偏に仏法を求め給う所に。

帝釈遙に天より見下し給いて思し食さるる様は、魚の子は多けれども魚となるは少なく菴羅樹の花は多くさけども菓になるは少なし、人も又此くの如し菩提心を発す人は多けれども退せずして実の道に入る者は少し、都て凡夫の菩提心は多く惡縁にたばらかされ事にふれて移りやすき物なり、鎧を著たる兵者は多けれども戰に恐れをなさざるは少なきが如し、此の人の意を行て試みばやと思ひて帝釈鬼神の形を現じ童子の側に立ち給う、其の時・仏世にましまさざれば

雪山童子せつせんどうじ普あまねく大乘だいじようき經きやうを求もとむるに聞きこくことあたはず、時に諸行無常しよぎやうむじやう是生滅法しやうめつと云いふ音おとほのかに聞きこゆ、童子驚どうじおどろき四方しほうを見給たまうに人もなし但鬼神きじん近付きんぷて立ちたり、其その形かたちけはしくをそろしくて頭こうべのかみは炎えんの如ごとく口の齒はは劍けんの如ごとく目を瞋いからして雪山童子せつせんどうじをまほり奉たてまつる、此これを見るにも恐れず偏ひとえに仏法ぶつぽうを聞きこかん事を喜むあやび怪あやしむ事なし、譬たとえば母を離はなれたるこうしほのかに母の音おとを聞きこきつるが如ごとし、此事誰このことか誦じゆしつるぞ・いまだ残こたはの語ことばあらんとて普あまねく尋たずね求もとるに更に人もなければ、若もしも此ことばの語ことばは鬼神きじんの説ときつるかと疑うたがいへどもよも・さもあらじと思おもひ彼の身みは罪報ざいほうの鬼神きじんの形かたちなり此の偈げは仏の説とき給たまへる語ことばなり、かかる賤いひしき鬼神きじんの口より出いづべからずとは思おもへども、亦殊またことに人もなければ若もし此ことばの語ことば汝なんじが説ときつるかと問とへば、鬼神答きじんて云いふ我われれに物ものな云いふそ食くせずして日数にっすうを経へぬれば飢うえ疲つかれて正念しやうねんを覺おぼえず、既すでに

あだごと云いいつるならん我われうつける意いにて云いへは知る事

もあらじと答ふ、童子どうじの云いく我われは此この半偈はんげを聞きつる事半なる月を

見るが如ごとく半なる玉を得るに似たり、慥たしかに汝なんじが語ことばなり願ねがひは残れる

偈げを説とき給たまへとのたまふ、鬼神きじんの云いく汝なんじは本より悟さとあれば聞きかずとも

恨あは有あるべからず吾われは今飢うに責とがめられたれば物を云いうべき力ちからなし都すて

我われに向むかいて物ものな云いいそと云いう、童子どうじ猶なほ物を食くては説とかんやと

問う、鬼神きじん答て食ては説ときてんと云う、童子どうじ悦よろこびてさて何物なにものをか食とするぞと問へば、鬼神きじんの云く汝なんじ更に問うべからず此これを聞きては必ず恐を成さん、亦汝またなんじが求むべき物にもあらずと云へば童子どうじ猶責めて問たい給たまはく其その物をとだにも云はば心みにも求めんとの給たまえば鬼神きじんの云く我れ但人の和やわらかなる肉を食し人のあたたかなる血を飲

む、空そらを飛び普あまねく求れども人をば各守り給う仏神ぶつしんましませば心に任まかせて殺しがたし、仏神ぶつしんの捨て給う衆生しゅじやうを殺して食するなりと云う、其時そのとき・雪山童子せつせんどうじの思おもひ給たまはく我れ法の為ために身を捨て此の偈げを聞き畢おわらんと思おもひて、汝なんじが食物ここに有り外に求むべきにあらず、我が身いまだ死そせず其の肉あたたかなり我が身いまだ寒ひえず其の血あたたか

ならん、願くは残の偈げを説とき給たまへ此の身を汝なんじに与えんと云う、時に鬼神大に瞋きじんて云く誰か汝なんじが語ことばを實たのとは憑たのむべき、聞いて後には誰をか

証人として糾たださんと云う、雪山童子せつせんどうじの云く此の身は終ついに死すべし徒いたずらに死せん命を法の為ために投げばきたなくけがらはしき身を捨てて後生ごしょうは必ず覺さとりを開き仏となり清妙なる身を受くべし、土器を捨てて宝器たからに替かわるが如ごとくなるべし、梵天ぼんてん・帝釈たいしやく・四大天王じゅうつぽう十方じゅうぶつの諸仏しよぶつ・菩薩ぼさつを皆証人みなとせん我れ更に偽いつわるべからずとの給たまえり、其の時鬼神きじん少し和も若なんじし汝が云う処ところ実ならば偈げを説かんと云う其の時雪山童子せつせんどうじ大おおに悦よろこんで身に著きたる鹿の皮を脱いで法座ほうざに敷頭しきこうべを地に付け掌たなこころを合せ跪ひざまずき、但願くは我が為ために残の偈げを説き給へと云うて至心に深く敬たまたい給ふ、さて法座ほうざに登り鬼神きじん偈げを説いて云く生滅滅已しょうめつめつち・寂滅じやくめつ為樂いらくと此の時雪山童子せつせんどうじ是を聞き悦よろこび貴とうとみ給う事限なく後生ごしょうまでも忘れじと度度たたびたび誦じゆして深く其その心にそめ、悦よろこばしき処ところはこれ仏の説き給へるにも異ならず歎なげかわ敷とこころき処ところは我れ一人のみ聞きて人の為ために伝たへざらん事をと

深く思いて石の上・壁の面・路の辺の諸木ごとに此の偈を書き
付け願くは後に来らん人必ず此の文を見其の義理をさとり実の道に入
れと云い畢つて、即高き木に登りて鬼神の前に落ち給へり、いまだ地に
至らざるに鬼神俄に帝釈の形と成りて雪山童子の其身を受取りて平
かなる所にすえ奉りて恭敬礼拝して云く我れ暫く如来の聖教を惜
みて試に菩薩の心を悩し奉るなり、願くは此の罪を許して後世

には必ず救ひ給へたまと云ふ、一切の天人又来りて善哉善哉実には是れ菩薩よきかなよきかななりと讃め給ふ、半偈の爲めに身を投げて十二劫生死の罪を滅し給へたまり此の事涅槃經に見えたり、然れば雪山童子の古を思へば半偈の爲になほ猶命を捨て給ふたま

、何に況や此の經の一品・一卷を聴聞せん恩徳をや何を以てか此れを報ぜん、尤も後生を願はんには彼の雪山童子の如くこそあらまほしくは候へ、誠に我が身貧にして布施すべき宝なくば我が身命を捨て仏法を得べき便あらば身命を捨てて仏法を学すべし。

とても此の身は徒に山野の土と成るべし惜みても何かせん惜むとも惜みとぐべからず・人久しといえども百年には過ず其の間の事は但一睡の夢ぞかし、受けがたき人身を得て適ま出家せる者も・仏法を学し謗法の者を責めずして徒らに遊戲雑談のみして明し暮さん者は法師の皮を

著^きたる畜^{ちく}生^{しょう}なり、法師^{ほっし}の名を借りて世^よを渡^{わた}り身を養^{やしな}う

といへども法師^{ほっし}となる義^ぎは一もなし法師^{ほっし}と云^いう名^な字^じをぬすめる盗^{ぬす}人^{びと}なり、恥^はづべし恐^{おそ}るべし、迹^{しやく}門^{もん}には我^{われ}身^み命^{めい}を愛^{あい}せず但^た無^む上^{じやう}道^{どう}を惜^{おし}しむ」ととき本^{ほん}門^{もん}には自^{みづか}ら身^{しん}命^{めい}を惜^{おし}まず」ととき涅槃^{ねはん}經^{ぎやう}には身^みは輕^{かろ}く法^{ほふ}は重^{おも}し

身^みを死^しして法^{ほふ}を弘^{ひろ}む」と見えたり、本^{ほん}・迹^{しやく}兩^{りやう}門^{もん}涅槃^{ねはん}經^{ぎやう}共^{ども}に身^{しん}命^{めい}を捨^{すて}て法^{ほふ}を弘^{ひろ}むべしと見えたり、此^{これ}等^らの禁^{きん}を背^{そむ}く重^{じゆう}罪^{ざい}は目^めには見えざれども積^つりて地^じ獄^{ごく}に墮^おつる事^{こと}譬^{たと}えば寒^{かん}熱^{ねつ}の姿^{すがた}形^{かたち}もなく眼^{まなこ}には見えざれども、冬^{ふゆ}は寒^{さむ}来^きりて草^{そう}木^{もく}人^{じん}畜^{ちく}をせめ夏^{なつ}は熱^{あつ}来^きりて人^{じん}畜^{ちく}を熱^{あつ}惱^{なう}せしむるが如^{ごと}くなるべし。

然^{しか}るに在^{ざい}家^けの御^{おん}身^みは但^よ余^{ねん}念^んなく南^{なん}無^む妙^{みやう}法^{ぽう}蓮^{れん}華^げ經^{きやう}と御^{おん}唱^{とな}えありて僧^{そう}をも供^く養^{やう}し給^{たま}うが肝^{かん}心^{じん}にて候^{こう}なり、それも經^{きやう}文^{もん}の如^{ごと}くならば隨^{ずい}力^{りき}演^{えん}說^{ぜつ}

も有るべきか、世の中ものうからん時も今生の苦さへかなしし、況や
来世の苦をやと思し食しても南無妙法蓮華經と唱へ悦ばしからん時
も今生の悦びは夢の中の夢・靈山淨土の悦びこそ実の悦びなれ
と思し食し合せて又南無妙法蓮華經と唱へ退転なく修行して最後
臨終の時を待つて御覽ぜよ、妙覺の山に走り登つて四方をきつと見る
ならばあら面白や法界寂光土にして瑠璃を以つて地とし金の繩を以つ
て八の道を界

へり、天より四種の花ふり虚空に音楽聞えて、諸仏・菩薩は常楽我淨の
風にそよめき娛樂・快樂し給うぞや、我れ等も其の數に列なりて遊戯
し樂むべき事はや近づけり、信心弱くしてはかかる目出たき所に行くべ
からず行くべからず、不審の事をば尚尚承はるべく候、穴賢穴賢。

建治二年丙子十二月九日

日蓮 花押

松野殿御返事

◆三一二 松野殿御消息

138

7p

昔乃往過去の古へ珊提嵐国と申す国あり彼の国に大王あり無靜念

王と申しき、彼の王に千の王子あり又彼の王の第一の大臣を宝海梵志と申す・彼の梵志に子あり法蔵と申す、彼の無靜念王の千の太子は穢土を捨てて淨土を取り給ふ、其の故は此の娑婆世界は何なる所と申せば十方の国土に父母を殺し正法を誹謗し聖人を殺せる者彼の国より此の娑婆世界追い入れられて候、例せば此の日本国の人大科有る者の獄に入れらるるが如し、我が力に叶はざれば哀愍せずして捨て給ふ、宝海梵志一人請け取りて娑婆世界の人の師と成り給ふ、宝海梵志の願に云く我未來世の穢惡土の中に當に作仏することを得べし、即ち十方淨土より擯出せる衆生を集めて我れ當に之れを度すべしと誓ひ給ひき、無靜念王と申すは阿弥陀仏なり、其の千の太子は今の觀音・勢至普賢・文殊等なり、其の宝海梵志と申すは今の釈迦如来なり、此の娑婆世界の一切衆生は十方の諸仏に抜き捨てら

れしを釈迦しやか一人ひとり計りはかして扶たすけさせ給たまうを唯我ただわれひとり一人ひとりと申もうすなり。

日蓮にちれん 花押かおう

松野殿

◆三二七

松野殿御返事

1388p

鷺目一貫文・油一升・衣一・筆十管給い候、今に始めぬ御志申し尽しがたく候へば法華經・釈迦仏に任せ奉り候。

先立より申し候、但在家の御身は余念もなく日夜朝夕・南無妙法蓮華經と唱え候て最後臨終の時を見させ給へ妙覺の山に走り登り四方を御覽ぜよ、法界は寂光土にして瑠璃を以て地とし・金繩を以て八の道をさかひ、天よ

り四種の花ふり虚空に音楽聞え、諸仏・菩薩は皆常樂我淨の風にそよめき給へば・我れ等も必ず其の數に列ならん、法華經はかかる・いみじき御經にて・をはしまいらせ候、委細はいそぎ候間申さず候、恐恐謹言。

建治三年丁丑九月九日

日蓮花押

松野殿御返事

追て申し候目連樹十両計り給はり候べく候

◆三二四

松野殿御返事

1388p

種種の物送り給い候畢ぬ山中のすまる思遣せ給うて雪の中ふみ分け
て御訪い候事御志定めて法華經十羅刹も知し食し候らんさては
涅槃經に云く人命の停らざることは山水にも過ぎたり今日存すと
雖も明日保ち難し」摩耶經に云く譬えば旃陀羅の羊を驅て屠家に
至るが如く人命も亦是くの如く歩歩死地に近く」法華經に云く「三界

は安きこと無し猶^{なほ}火宅^{くわたく}の如^{ごと}し衆苦充満^{しゅうくちゅうまん}して甚^{はなはだ}だ怖畏^{ふい}すべし」等云云、
此^これ等の經文^{きやうもん}は我等^{われら}が慈父^{じふ}・大覺世尊^{だいかくせそん}・末代^{まつだい}

の凡夫ぼんぷをいさめ給たまい、いとけなき子どもをさし驚おどろかし給たまへる経文きやうもんなり、然しかりと雖いふども須臾しゆゆも驚おどろく心なく刹那せつなも道心どうしんを発おこさず、野辺に捨てられなば一夜の中にはだかになるべき身をかざらんがために、いとまを入れ衣かきを重ねんとはげむ、命終みょうじゆうりなば三日の内に水と成りて流れ塵ちりと成りて地にまじはり煙と成りて天にのぼりあともみえずなる

べき身を養はんとして多くの財たからをたくはふ、此のことはりは事ふり候ぬ但ただし当世とうせの体こそ哀れに候へ日本国にほんこく数年の間打ち続きけかちゆきて衣食いしょくたへ畜るひをば食いつくし結句けつこ人をくらう者出来しゅたいして・或あるは死人しにん・或あるは小兒しょうに・或あるは病人等の肉を裂取さきとりて魚鹿等に加へて売りしかば人これ是を買いくへり此の国存の外に大惡鬼あつきとなれり、又去年こぞの春より

今年の二月中旬まで疫病国えきびやうに充満じゅうまんす、十家に五家・百家に五十家皆みなやみ死し・或あるは身はやまねども心は大苦に値あへりやむ者よりも怖し、た

またま生残たれども・或は影の如くそいし子もなく眼の如く面をならべし夫婦もなく・天地の如く憑し父母もをはず生きても何にかせん・心あらん人人争か世を厭はざらん、三界無安とは仏説き給て候へども法に過ぎて見え候。

然るに予は凡夫にて候へども・かかるべき事を仏兼て説きをかせ給いて候を国王に申しきかせ進らせ候ぬ、其れにつけて御用は無くして弥怨をなせしかば力及ばず此の国既に謗法と成りぬ、法華經の敵に成り候へば三世十方の仏神の敵と成れり、御心にも推せさせ給い候へ日蓮何なる大科有りととも法華經の行者なるべし、南無阿弥陀仏と申さば何なる大科有りととも念仏者にて無しとは申しがたし、南無妙法蓮華經と我が口にも唱へ候故に罵られ打ちはられ流され命に及びしかども、勧め申せば法華經の行者ならずや、法華經には行者を怨む

者は阿鼻地獄の人と定む、四の巻には仏を一中劫罵るよりも末代の
法華經の行者を惡む罪深しと説かれたり、七の巻には行者を
輕しめし人人千劫阿鼻地獄に入ると説き給へり、五の巻には我が末世
末法に入つて法華經の行者有るべし、其の時其の国に持戒・破戒等の
無量無辺の僧等集りて国主に讒言して流し失ふべしと説かれたり、然る
にかかる經

文かたがた符合し候畢んぬ未来に仏に成り候はん事疑いなく覚え候、
委細は見参の時申すべし。

建治四年 戊寅 二月十三日

日蓮 花押

松野殿御返事

◆ 三一五 松野殿御返事

1390p

日月は地におち須弥山はくづるとも、彼の女人・仏に成らせ給わん
事疑いなし、あらたのもしや・たのもしや。

干飯一斗・古酒一筒・ちまき・あうざし・たかなな方方の物送り給い

て候草にさける花・木の皮を香として仏に奉る人 靈鷲山へ参らざるは
なし、況や民のほねをくだける白米・人の血をしぼれるが如くなるふる
さを仏・法華經にまいらせ給へる女人の成仏得道疑うべしや。

五月一日

日蓮 にちれん 花押 かおう

妙法尼御返事 みょうぼう ごへんじ

◆三二六

松野殿後家尼御前御返事 ごけあまごぜんごへんじ

1390p

法華經第五の卷安樂行品に云く文殊師利此法華經は無量の国の中
に於て乃至名字をも聞くことを得べからず云云、此の文の心は我等
衆生の三界六道に輪回せし事は、或は天に生れ、或は人に生れ、或は

地獄じごくに生れ・或あるは餓鬼がきに生れ・畜生ちくしやうに生れ・無量むりやうの国くにに生をうけて・無辺むへんの
苦しみをうけて・たのしみにあひしかども一度ひとたびも法華經ほけきやうの国くにには生ぜ
ず、

たまたま生れたりといへども南無妙法蓮華經と唱へず、となふる事はゆめにもなし人の申すをも聞かず、仏のたとへを説かせ給うに一眼の亀の浮木の穴に値いがたきにたとへ給うなり、心は大海の中に八万由旬の底に亀と申す大魚あり、手足もなくひれもなし腹のあつき事はくろがねのやけるがごとし、せなかのこうのさむき事は雪山ににたり、此の魚の昼夜朝暮のねがひ時時剋剋の口ずさみには腹をひやしこうをあたたためんと思ふ、赤梅檀

と申す木をば聖木と名づく人の中の聖人なり、余の一切の木をば凡木と申す愚人の如し、此の梅檀の木は此の魚の腹をひやす木なり、あはれ此の木にのぼりて腹をば穴に入れてひやしこうをば天の日にあてあたためばやと申すなり、自然のことはりとして千年に一度出る亀なり、しかれども此の木に値事かたし、大海は広し亀はちい

さし浮木うきぎはまれなり、たとひよのうききにはあへども梅檀せんだにはあはず、

あへども亀の腹をえりはめたる様に、がい分に相応そうおうしたる浮木うきぎの穴にあ

ひがたし我が身をち入りなばこうをもあたためがたし誰か又とりあぐべき、又穴せばくして腹を穴に入れえずんば波にあらひをとされて大海たいかいにしづみなむ、たとひ不思議ふしぎとして梅檀せんだの浮木うきぎ

の穴にたまたま行きあへども我一眼のひがめる故ゆえに浮木西うきぎにながるれば東と見る故ゆえにいそいでのとらんとおよげば弥弥いよいよとをさかる、東に流るを西と見る南北も又此かくの如ごとし云云、浮木うきぎには・とをさかれども近づく事はなし、是かくのごとの如く無量無辺劫にも一眼の亀の浮木うきぎの穴にあひがたき事を仏説とき給たまへり、此の喩をとりて法華經ほけきやうにあ

ひがたきに譬たとふ、設たひあへどもとなへがたき題目だいもくの妙法みやうほうの穴にあひがたき事を心うべきなり、大海たいかいをば生死しやうじの苦海なり亀をば我等衆生われらしゆじやうにたと

へたり、手足のなきをば善根ぜんこんの我等われらが身にそなはらざるにたとへ腹のあ
つきをば我等われらが瞋恚しんにの八熱地獄じごくにたとへ背そむのこうのさむきをば貧欲はちかんの
八寒地獄じごくにたとへ千年大海たいかいの底にあるをば我等われらが三惡道さんあくどう

に墮おちて浮びがたきにたとへ千年に一度浮ぶをば三惡道さんあくどうより無量劫むりょうこくに
ひとたびひとたびにんげん一度人間にんげんに生れて釈迦しやか仏ぶつの出世しゅつせにあひがたきにたとへ、余の松木しょうぼくひの
木の浮木うきぎにはあひやすく梅檀ばいだんにはあひがたし、一切經いっさいきやうには値あいやしく
法華經ほけきやう

にはあひがたきに譬^{たと}へたり、たとひ梅檀^{せんだん}には値^あうとも相応^{そうおう}したる穴^{あな}にあひがたきに喩^{たと}うるなり、設^{たと}ひ法華經^{ほけきょう}には値^あうとも肝心^{かんじん}たる南無^{なむ}妙法蓮華經^{みょうほうれんげきょう}の五字^{ごじ}をとなへがたきにあひたてまつる事のかたきにたとう、東を西と見・

北を南と見る事をば我れ等衆生^{しゅじょう}かしこがほに智慧^{ちえ}有^ある由^{よし}をして勝を劣と思ひ劣を勝と思ふ、得益^{とくやく}なき法をば得益^{とくやく}あると見る機^きにかなはざる法をば機^きにかなう法と云う、真言^{しんごん}は勝^{すぐ}れ法華經^{ほけきょう}は劣^{しんごん}り真言^{しんごん}は機^きにかなひ法華經^{ほけきょう}は機^きに叶はずと見る是^{これ}なり。

されば思ひよらせ給^{たま}へ仏^{ぶつ}・月氏^{がつし}国に出でさせ給^{たま}いて一代^{いちだい}聖教^{しやうきやう}を説かせ給^{たま}いにしに四十三年と申せしに始めて法華經^{ほけきょう}を説かせ給^{たま}ふ、八箇^{はちかねん}年が程^{いっさい}・一切^{おんでしみな}の御弟子^{おんでし}皆如意宝珠^{にようほうしゆ}のごとくなる法華經^{ほけきょう}を持ち候^{たも}き、然^{しか}れども日本^{にほん}国^{こく}と天竺^{てんじく}とは二十万里^{ばんり}の山海をへだてて候しかば法華經^{ほけきょう}の名字^{みょうし}

をだに聞くことなかりき、しやくそん 釈尊御入滅にゅうめつならせ給たまいて一千二百余年と申せしに漢土かんどへ渡わたし給たまふ、いまだ日本国にほんこくへは渡わたらず、仏滅後・一千五百余年と申もうすに日本国にほんこくの第三十代・

欽明天皇と申せし御門みかどの御時百済国より始めて仏法渡ぶつぼうわたる、又上宮じやうぐう太子たいしと申せし人唐土より始めて仏法渡ぶつぼうわたさせ給たまいて其れより以来今に七百余年の間・一切經並に法華經はひろまらせ給たまいて、上一人より下万人に至るまで心あらむ人は法華經を一部・或は一卷・或は一品持たもちて・或は父母の孝養とす、されば我等も法華經を持つと思ふ、しかれども未だ口くちに南無妙法蓮華經とは唱なへず信じたるに似にて信ぜざるが如ごとし、譬たとえば一眼の龜のあひがたき梅檀せんだの聖木にはあいたれどもいまだ龜の腹を穴に入れざるが如ごとし、入れざればよしなし須臾しゆゆに大海たいかいにしづみなん、我が朝七百余年の間・此の法華經弘ほけきやうひろまらせ給たまいて・或は読よみむ人

或^{ある}は説く人・或^{ある}は供養^{くよう}せる人・或^{ある}は持つ人・稻麻竹葦^{とうま ちくい}よりも多し、然^{しか}れどもいまだ阿弥陀^{あみだ}の名号^{みょうごう}を唱^{とな}うるが如^{ごと}く南無妙法蓮華經^{なむ みょうほうれんげきよう}とすすむる人もなく唱^{とな}うる人もなし、一切^{いっさい}の經・一切^{いっさい}の仏の名号^{みょうごう}を唱^{とな}うるは凡木^{ぼんぼく}にあうがごとし、未^{いま}だ梅檀^{せんだん}ならざれば腹^{はら}をひやさず日天^{にってん}ならざれば甲^{こう}をもあたたためず、但目^{このみ}をこやし心を悦^{よろこ}ばしめて実^じなし華^{はな}さいて菓^{このみ}なく言^{こと}のみ有りてしわざなし。

但日蓮一人ばかり日本国に始めて是を唱へまいらする事、去ぬる
建長五年の夏のころより今に二十余年の間・昼夜朝暮に南無
妙法蓮華經と是を唱うる事は一人なり、念仏申す人は千万なり、予は
無縁の者なり念仏の方人は有縁なり高貴なり、然れども師子の声には
一切の獸・声を失ふ虎の影には犬恐る、日天東に出でぬれば万星の光
は跡形もなし、法華經のなき所にこそ弥陀念仏はいみじかりしかども
南無妙法蓮華經の声・出来しては師子と犬と日輪と星との光くらべの
ごとし、譬えば鷹と雉との・ひとしからざるがごとし、故に四衆とりど
りにそねみ上下同くにくむ讒人国に充滿して奸人士に多し故に劣を
取りて勝をにくむ、譬えば犬は勝れたり師子をば劣れり星
をば勝れ日輪をば劣るとそしるが如し然る間邪見の惡名世上に流布
し・ややもすれば讒訴し・或は罵詈せられ・或は刀杖の難をかふる・或

は度度流罪にあたる、五の巻の經文にすこしもたがはず、さればなむだ左右の眼にうかび悦び一身にあまれり。

ここに衣は身をかくしがたく食は命をささへがたし、例せば蘇武が胡国にありしに雪を食として命をたもつ、伯夷は首陽山にすみし蕨ををりて身をたすく父母にあらざれば誰か問うべき三宝の御助にあらずんばいかでか一日片時も持つべき未だ見参にも入らず候人のかやうに度度御をとづれの・はんべるは・いかなる事にや・あやしうこそ候へ法華經の第四の巻には釈迦・凡夫の身にいりかはらせ給いて法華經の行者をば供養すべきよしを

説かれて候、釈迦の御身に入らせ給い候か又過去の善根のもよをし、竜女と申す女人は法華經にて仏に成りて候へば末代に此の經を持ちまいらせん女人をまほらせ給うべきよし誓わせ給いし、其の御ゆか

りにて候か、貴し貴し。
とおととおと

弘安二年己卯三月二十六日
こうあん つちのとう

日蓮 花押
にちれん かおう

松野殿後家尼御前御返事
こけあまごぜんごへんじ

◆三二七

松野殿女房御返事にようぼうごへんじ

1394p

麦一箱いゑのいも一籠うり一籠かたがた 旁の物六月三日に給候しを今まで
御返事ごへんじ申し候はざりし事恐れ入つて候、此の身延の沢と申す處ところは甲斐
の国の飯井野御牧波木井の三箇郷の内波木井の郷の戌亥の隅にあたり
て候、北には身延の嶽たけ天をいただき南には鷹取たかとりが嶽雲につづき東には
天子てんしの嶽日とたけをなじ西には又峨峨ががとして大山

つづきてしらねの嶽たけにわたれり、☆のなく音天おんてんに響ひびきき蟬のさゑづり地
にみてり、天竺てんじくの靈山りようぜん此の處ところに來れり唐土もろこしの天台てんだい山親まのあたりここに見る、
我が身は釈迦しゃか仏ぶつにあらず天台大師てんだいだいしにてはなけれども、まかるまかる昼
夜ほけきに法華經ようきやうをよみ朝暮ちやうぼに摩訶止觀まかしかんを談だんずれば靈山りようぜん淨土じやうどにも相似そうじたり

・天台山にも異ならず。

但有待の依身なれば著ざれば風身にしみ食ざれば命持ちがたし、灯に油をつがず火に薪を加へざるが如し命いかでかつぐべきやらん、命続がたく・つぐべき力絶えては、或は一日乃至・五日既に法華經読誦の音も絶えぬべし止觀のまどの前には草しげりなん、かくの如く候にいかにして思い寄せ給いぬらん、兎は経行の者を供養せしかば天帝哀みをなして月の中にをかせ給いぬ。今天を仰ぎ見るに月の中に兎あり。

されば女人の御身として・かかる濁世末代に法華經を供養しましませば、梵王も天眼を以て御覽じ帝釈は掌を合わせてをがませ給ひ地神は御足をいただきて喜び釈迦仏は靈山より御手をのべて御頂をなでさせ給うらん、南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經、恐恐謹言。

弘安二年己卯六月二十日

日蓮 にちれん

花押 かおう

松野殿女房御返事 にようぼうごへんじ

◆三二八

松野殿女房御返事

1395p

白米一斗・芋一駄・梨子一籠・名荷・はじかみ・枝大豆・ゑびね・旁の
 物給び候ぬ、濁れる水には月住まず枯たる木には鳥なし、心なき女人
 の身には仏住み給はず、法華經を持つ女人は澄める水の如し釈迦仏の
 月宿らせ給う、譬へば女人の懷み始めたるには吾身には覺えねども、月
 漸く重なり日も屢過ぐれば初にはさかと疑ひ後には一定と思
 ふ、心ある女人はをのこごをんなをも知るなり法華經の法門も亦かく
 の如し、南無妙法蓮華經と心に信じぬれば心を宿として釈迦仏懷まれ
 給う、始はしらねども漸く月重なれば心の仏夢に見え悦こばしき心
 漸く出来し候べ

し、法門^{ほうもん}多しといへども止め候、法華^{ほけ}經は初は信ずる様なれども後^{とぐ}遂る
事かたし、譬^{たと}へば水の風にうごき花の色の露^{つゆ}に移るが如^{ごと}し、何として今
までは持たせ給^{たま}うぞ是・偏へに前生の功力の上・釈迦^{しやか}仏の護^{まも}り給^{たま}うか、
たのもししたのもしし、委^{くわ}くは甲斐^{かい}殿申^{もう}すべし。

九月一日

日蓮^{にちれん} 花押^{かおう}

松野殿女房御返事^{にようぼうごへんじ}

◆三一九

松野尼御前御返事あまごぜんごへんじ

1396p

日本にほんこく国の人にはにくまれ候ぬ、みちふみわくる人も候はぬにをもちよ
らせ給たまひいての御心おんこころざしざし、石の中の火のごとし火の中の蓮のごとし、あり
がたしありがたし、恐きょうきよう恐。

正月二十一日

日蓮にちれん在御判%

松の尼御前御返事あまごぜんごへんじ

◆三二〇

浄蔵浄眼御消息じようぞう

1396p

きごめの俵一・瓜籠一うりこひとつ・根芋品品の物給たまひい候畢おわんぬ、衆徳と名付けけ

る長者に身を入れて我が身も妻も子も夜も昼も責め遣はれける者が、
 余りに責められ堪えがたさに隠れて他国に行きて其の国の大王に官仕
 へける程に・きりものに成りて関白と成りぬ、後に其の国を力として我
 が本の主の国を打ち取りぬ、其の時本の主・此の関白を

見て大に怖れ前に悪く当りぬるを悔ひかへして官仕・様様の財を引き

ける、前に負けぬる物の事は思ひもよらず今は只命のいきん事をはげ

む、法華経も又斯の如く法華経は東方の薬師・仏の主・南方・西方・北

方・上下の一切の仏の主なり、釈迦仏等の仏の法華経の文字を敬ひ給ふ

ことは民の王を恐れ星の月を敬ふが如し、然るに我等衆生は

第六天の魔王の相伝の者地獄・餓鬼・畜生等に押し籠められて氣もつ

かず朝夕獄卒を付けて責むる程に、兎角して法華経に懸り付きぬれば

釈迦仏等の十方の仏の御子とせさせ給へば、梵王・帝釈だにも恐れて

寄り付かず何いふに

況や第六天の魔王をや、魔王は前には主なりしかども今は敬ひ畏れて、
あしうせば法華經十方の諸仏の御見参にあしうや入らんずらんと恐
れ畏て供養をなすなり、何にしても六道の一切衆生をば法華經へつけ
じと・はげむ

なり、然るに何なる事にや・をはすらん皆人の憎み候日蓮を不便とお
ぼして、かく遙遙と山中へ種種の物送りたび候事一度二度ならず、ただ
ごとにあらず偏へに釈迦仏の入り替らせ給へるか、又をくれさせ給ひけ
る御君達の御仏にならせ給いて父母を導かんために御心に入り替らせ
給へるか。

妙莊嚴王と申せし王は悪王なりしかども御太子淨藏・淨眼の導かせ
給いしかば父母二人共に法華經を御信用有りて仏にならせ給いしぞか
し、是もさにてや候らんあやしく覚え候、甲斐公が語りしは常の人よ

りもみめ形も勝すぐれて候し上・心も直くて智慧賢く、何事なにことに付けてもゆゆしかりし人の疾はかなく成りし事の哀れさよと思ひ候

しが、又傭つらつら思へば此の子なき故ゆえに母も道心者どうしんしゃとなり父も後世者ごしやうに成

りて候は只ただとも覚え候はぬに、又皆人みなの惡にくみ候法華經に付かせ給たまへば偏

へこれに是なき人の二人の御身おんみに添すすうて勸め進まいらせられ候にやと申せしが、

さもやと覚えおほ

候、前前さきさきは只荒増ただの事かと思ひて候へば是程御志これほど いひつゝのこしの深く候ひける事

は始めて知りて候、又若もしやの事候はばくらき闇に月の出づるが如ごとく

妙法蓮華經みょうほうれんげきやうの五字・月と露れさせ給たまうべし、其の月の中には釈迦しやくか仏・

十方じゅうぽうの諸仏しよぶつ・乃至前ないしに立たせ給ひし御子息しそくの露れさせ給たまふべしと思し

召せ、委くわくは又又申もうすべし、恐恐謹言きようきようきんげん。

七月七日

日蓮 にちれん

花押 かおう

◆三二一

刑部左衛門尉女房御返事 ぎょうぶ さえもん の じようぼう ご へんじ

13

97p

今月飛来の雁書に云く此の十月三日母にて候もの十三年に相当れり
錢二十貫文等云云、夫外典三千余卷には忠孝の二字を骨とし内典五
千余卷には孝養を眼とせり、不孝の者をば日月も光ををしみ地神も
瞋をなすと見へて候、或経に云く六道の一切衆生・仏前に参り集りた
りしに仏彼れ等が身の上の事を一一に問い給いし中に仏地神に汝大地
より重きものありやと問い給いしかば地神敬んで申さく大地より重き
物候と申す、仏の曰くいかに地神

へんげ 偏頗をば申すぞ此の三千大千世界の建立は皆大地の上にそなわれり、
いゆるしゅみせん 所謂須弥山の高さは十六万八千由旬横は三百三十六万里なり大海は
じゅうおうはちまん 縦横八万四千由旬なり、其の外は一切衆生・草木等は皆大地の上にそ
なわれり、此れを持てるが大地より重き物有らんやと問ひ給ひしかば、
地神答て云く仏は知食しながら人に知らせんとて問ひ給う
か、我地神となること二十九劫なり其の間大地を頂戴して候に頸も
腰も痛むことなし、虚空を東西南北へ馳走するにも重きこと候はず、但
ふこう 不孝の者のすみ候所が身にあまりて重く候なり、頸もいたく腰もお
れぬべく膝もたゆく足もひかれず眼もくれ魂もぬげべく候、あわれ此の
人の住所の大地をばなげすてばやと思う心たびたび出来
し候へば不孝の者の住所は常に大地より候なり、されば教主釈尊の御
いとこ提婆達多と申せし人は閻浮提第一の上臈王種姓なり、然れども

不孝ふこうの人なれば我等われら彼の下したの大地だいちを持つことことなくして大地だいち破やれて無間むげん地獄じごくに入り給たまいき、我れ等われらが力ちから及およばざる故ゆゑにて候と、かくの如ごとく地神こじんこまごまと仏もうに申し上げ候しかば仏ぶつはげにもげにもと合点がてんせさせ給たまいき、又仏なげ歎なげいて云いく我が滅後めつごの衆生しゆじやうの不孝ふこうならん事・提婆だいばにも過すぎ瞿伽利くぎやりにも超こえたるべし等云云取意ねはんぎやう、涅槃經まつだいあくせに末代まつだい惡世あくせに不孝ふこうの者は大地だいち微塵みじんよりも多く孝養こうやうの者は爪上そうじやうの土よりもすくなからんと云云。

今日蓮案いまにちれんじて云いく此こゝの經文きやうもんは殊ことにさもやと・をば候、父母ふぼの御恩ごおんは今初めて事あらたに申もうすべきには候はねども母の御恩ごおんの事殊ことに心肝こかんに染そみて貴たかくをば候、飛鳥との子をやしなひ地を走る獸けの子に・せめられ候事・目もあてられず魂たまもきえぬべくをば候、其につきても母の御恩ごおん忘れがたし、胎内たないに九月ここのつきの間の苦み腹は鼓こをはれるが如ごとく頸くびは針はりをさげたるが如ごとし、氣いきは出づるより外そとに入る事なく色いろは枯かれたる草くさの

如^{ごと}し、臥^{ふせ}ば腹もさけぬべし坐すれ

ば五体やすからず、かくの如くして産も既に近づきて腰はやぶれてき
れぬべく眼はぬけて天に昇るかと・をばゆ、かかる敵をうみ落しなば
大地にもふみつけ腹をもさきて捨つべきぞかし、さはなくして我が苦を
忍びて急ぎいだきあげて血をねぶり不浄をすすぎて胸にかきつけ懷き
かかへ三箇年が間慰懃に養ふ、母の乳をのむ事・二百

八十斛三升五合なり、此乳のあたひは一合なりとも三千大千世界にか
へぬべし、されば乳一升のあたひを・へて候へば米に当れば一万一千八百
五十斛五升稲には二万一千七百束に余り布には三千三百七十段なり、
何に況や一百八十斛三升五合のあたひをや、他人の物は錢の一文米一
合なりとも盗みぬれぼうのすもりとなり候ぞか

し、而るを親は十人の子をば養へども子は一人の母を養ふことなし、あ
たたかなる夫をば懷きて臥せどもここへたる母の足をあたたむる女房

はなし、給孤独園の金鳥は子の為に火に入り・☆戸迦夫人は夫の為に父を殺す、仏

の云く父母は常に子を念へども子は父母を念はず等云云、影現王の云く父は子を念ふといえども子は父を念はず等是れなり、設ひ又今生には父母に孝養をいたす様なれども後生のゆくへまで問う人はなし母の生てをはせしには心には思はねども一月に一度一年に一度は問いしかども死し給いてより後は初七日より二七日乃至・第三年ま

では人目の事なれば形の如く問い訪ひ候へども、十三年四千余日が間の程はかきたえ問う人はなし、生てをはせし時は一日片時のわかれをば千万日とこそ思はれしかども十三年四千余日の程はつやつやをとづれなし如何にきかまほしくましますらん夫外典の孝経には唯今生の孝のみを・をしつて後生のゆくへをしらず身の病をいやして心の歎きをやめざ

るが如しごと内典ないてん五千余卷には人天にんてん・二乗にじようの道に入れていまだ仏道ぶつどうを引導する事なし。

夫目連尊者もくれんそんじやの父をば吉占師子きつせんし・母をば青提女しやうだいによと申せしなり、母死して後餓鬼道がきに堕おちたり、しかれども凡夫ぼんぶの間は知る事なし、証果しょうかの二乗にじようとなりて天眼てんげんを開きて見しかば母餓鬼道がきに堕おちたりき、あらあさましやといふ計りばかもなし、餓鬼道がきに行きて飯をまいらせしかば纔わずかに口に入るかと見えしが飯変じて炎となり・口はかなへの如く飯ごと

は炭をおこせるが如し、身は灯炬の如くもえあがりしかば神通を現じて
水を出だして消す処に、水変じて炎となり、弥火炎のごとくもゑあが
る、目連自力には叶はざる間、仏の御前に走り参り申してありしかば、
十方の聖僧を供養し其の生飯を取りて纔に母の餓鬼道の苦をば救い
給へる計りなり、釈迦仏は御誕生の後、七日と申せしに母の
摩耶夫人にをくれまいらせましき、凡夫にてわたらせ給へば母の生
処を知しめすことなし、三十の御年に仏にならせ給いて父淨飯王を
現身に教化して証果の羅漢となし給ふ、母の御ためには☆利天に昇り
給いて摩耶経を説き給いて父母を阿羅漢となしまいらせ給いぬ、此れ等
をば爾前の経経の人人は孝養の二乗孝養の仏とこそ思
い候へども、立ち還つて見候へば不孝の声聞不孝の仏なり、目連尊者程
の聖人が母を成仏の道に入れ給はず、釈迦仏程の大聖の父母を二乗の

道に入れ奉りて永不成仏の歎きを深くなさせまいらせ給いしをば・孝養
とや申す、べき不孝とや云うべき、而るに浄名居士目連を毀て云く六
師外道が弟子なり等云云、仏自身を責めて云く我則ち
慳貪に堕ちなん此の事は爲めて不可なり等云云、然らば目連は知らざ
れば科浅くもやあるらん、仏は法華經を知ろしめしながら生てをはす
る父に惜み・死してまします母に再び値い奉りて説かせ給はざりしかば
大慳貪の人をばこれより外に尋ぬべからず。

つらつら事の心を案ずるに仏は二百五十戒をも破り十重禁戒をも
犯し給う者なり、仏・法華經を説かせ給はずば十方の一切衆生を
不孝に墮し給ふ大科まぬかれがたし、故に天台大師・此の事を宣べて
云く・邇則ち仏に属す」云云、有人云く是れ十方三世の御本誓に違背
し衆生を欺誑すること有るなり等云云、夫四十余年の大小・顯密の

一切經並に眞言・華嚴・三論・法相・俱舍・成実・律淨土・禪宗等の仏・
菩薩・二乗・梵釈・日月及び元祖等は法華經に隨ふ事なくば何なる
孝養をなすとも我則墮慳貪の科脱るべからず、故に仏本願に趣いて
法華經を説き給いき、而るに法華經の御座には父母ましまさざりしか
ば親の生れてまします方便土と申す國へ贈り給て候なり、其の御言

に云く而かも彼の土に於いて仏の智慧を求めて是の經を聞くことを得
ん」等云云、此の經文は智者ならん人人は心をとどむべし、教主釈尊
の父母の御ために説かせ給いて候經文なり、此の法門は唯天台大師と
申せし人計りこそ知りてをはし候ひけれ、其の外の諸宗の人人知らざ
る事なり、日蓮が心中に第一と思ふ法門なり。

父母に御孝養の意あらん人人は法華經を贈り給へし、教主釈尊の
父母の御孝養には法華經を贈り給いて候、日蓮が母存生しておはせし
に仰せ候し事をもあまりにそむきまいらせて候しかば、今をくれまいら
せて候が・あながちにくやくしく覺て候へば一代聖教を☆へて母の孝養
を仕らんと存じ候間、母の御訪い申させ給う人人をば

我が身の様に思ひまいらせ候へば、あまりにうれしく思ひまいらせ候間
あらあらかきつけて申し候なり、定めて過去聖靈も忽に六道の垢穢を

離れて靈山淨土りようぜんじょうど御参り候らん、此の法門ほうもんを知識ちしきに値あわせ給たまいて度度たびたび
きかせ給たまうべし、日本国にほんこくに知る人すくなき法門ほうもんにて候ぞ、くはしくは又
又申もうすべく候、恐恐きようきよう謹言きんげん。

十月二十一日

日蓮にちれん 花押かおう

尾張刑部左衛門尉殿女房御返事おわりぎようぶさえもんのじよう にようぼうごへんじ

◆三三三

春麦御書ごしよ

1401p

女房御参詣にようぼう さんけいこそゆめとも・うつつとも・ありがたく候しか、心ざしい
ちのはせ申もうす、当時とうじの御いもふゆのたかうなのごとしあになつのゆきに

ことならむ。春麦一俵・芋一籠^{かご}・笋^{たかな}二丸給^{たま}い畢^{おわ}んぬ。
五月廿八日

先法華經につけて御不審をたてて其趣を御尋ね候事ありがたき大善根にて候、須弥山を他方の世界へつぶてになぐる人よりも、三千大千世界をまりの如くにけあぐる人よりも無量の余の經典を受け持ちて人に説ききかせ聴聞の道俗に六神通をえせしめんよりも、末法のけふこのごろ法華經の一句一偈のいはれをも尋ね問う人はありがたし、此の趣を釈し給いて人の御不審をはらさすべき僧もありがたかるべしと、法華經の四の卷宝塔品と申す処に六難九易と申して大事の法門候、今此の御不審は六の難き事の内なり、爰に知んぬ若し御持ちあらば即身成仏の人なるべし、此の法華經には我等が身をば法身如来・

我^{われ}等^らが心^{こころ}をば報^{ほう}身^{しん}如^に来^{らい}・我^{われ}等^らがふるまひをば応^{おう}身^{じん}如^に来^{らい}と

説^{せつ}か^かれて候^{こう}へば、此^この經^{きやう}の一句^{いっく}一偈^{いちげ}を^{もつ}持^もち信^{しん}ずる人^{ひと}は皆^{みな}此^この功^く徳^{とく}をそなへ候^{こう}、南^な無^む妙^{みやう}法^{ぽう}蓮^{れん}華^{げき}經^{きやう}と申^{もう}すは是^これ一句^{いっく}一偈^{いちげ}にて候^{こう}、然^{しか}れども同^{どう}じ一^{いっ}句^くの中^{なかつ}にも肝^{かん}心^{しん}にて候^{こう}、南^な無^む妙^{みやう}法^{ぽう}蓮^{れん}華^{げき}經^{きやう}と唱^{とな}うる計^{はか}りにて仏^{ぶつ}になるべしやと、此^この御^お不^ふ審^{しん}所^{しよ}詮^{せん}に候^{こう}一^{いっ}部^ぶの肝^{かん}要^{よう}八^{はつ}軸^{ちよく}の骨^{こつ}髓^{ずい}にて候^{こう}。

人^{ひと}の身^みの五^ご尺^{しゃく}六^{りく}尺^{しゃく}のたましひも一^{いっ}尺^{しゃく}の面^{かお}にあらはれ・一^{いっ}尺^{しゃく}のかほのたましひも一^{いっ}寸^{すん}の眼^{まなこ}の内^{うち}におさまり候^{こう}、又^{また}日^{にっ}本^{ぽん}と申^{もう}す二^にの文^{もん}字^じに六^{りく}十^{じゅう}六^{りく}箇^{かん}国^{こく}の人^{ひと}畜^{ちく}・田^{でん}畠^{はた}・上^{じやう}下^げ・貴^き賤^{せん}・七^{しち}珍^{しん}万^{まん}宝^{ぼう}・一^{いっ}もかくる事^{こと}候^{こう}は^はず収^{おさ}めて候^{こう}、其^その^{ごとく}南^な無^む妙^{みやう}法^{ぽう}蓮^{れん}華^{げき}經^{きやう}の題^{だい}目^{もく}の内^{うち}には一^{いっ}部^ぶ八^{はつ}卷^{くわん}・二^に十^{じゅう}八^{はち}品^{ひん}・六^{りく}万^{まん}九^{きゅう}千^{せん}三^{さん}百^{ひゃく}八^{はち}十^{じゅう}四^しの文^{もん}字^じ・二^に字^じももれず・か^かけ^けずお^おさ^さめて

候^{こう}、されば經^{きやう}には題^{だい}目^{もく}たり仏^{ぶつ}には眼^{まなこ}たりと樂^{らく}天^{てん}ものべられて候^{こう}、記^きの八^{はち}に略^{りやく}して經^{きやう}題^{だい}を拳^あぐるに玄^{はる}に一^{いっ}部^ぶを収^{おさ}むと妙^{みやう}樂^{らく}も釈^{しやく}しおはしまし

候、心は略して經の名計りを挙ぐるに一部を収むと申す文なり、一切
の事につけて所詮・肝要と申す事あり、法華經一部の肝心は南無
妙法蓮華經の題目にて候、朝夕御唱え候はば正く法華經一部を真読

にあそばすにて候、二返唱となうるは二部ないし乃至・百返は百部・千返は千部・
加様に不退ふたいに御唱となえ候はば不退ふたいに法華經ほけきようを読む人にて候べく候、天台
の六十巻と申す文には此のやうを釈しやくせられて候、かかる持たもちやすく行
じやすき法にて候を末代まつだい惡世あくせの一切衆生いっさいしゆじやうのために説ときをかせ給たまいて
候、經文きやうもんに云いく 於末法まつぼう中於後末世おごまつせ法欲滅ほうよくめつじ時受持じゆじ読誦どくじゆ・惡世あくせ
末法時まつぼう・能持是經者のうじぜきやうしや後・五百歲中ごうせん広宣流布ふと、此れ等の文の心は当時とうじ
末法まつぼうの代には法華經ほけきようを持たもち信しんずべきよしを説かれて候、かかる明文めいぶんを
學がくしあやまりて日本にほん・漢土かんど・天竺てんじくの謗法ほうぼうの學匠達がくしやう・皆みな念仏者ねんぶつ・真言しんごん・禪

・律しやうじやうの小乘ごんきやう・權教ごんきやうには

隨したがい行はじて法華經ほけきようを捨てはて候ぬ、仏法ぶつぼうにまどへるをばしろしめされず、
形うたがまことしげなれば云う事も疑うたがひあらじと計ばかり御信用候間ごしんやう、をものは
ざるに法華經ほけきようの敵しやかぶつ・釈迦しやかぶつ・佛あだの怨あだとならせ給たまいて今生こんじやうには祈しやがんる所願しやがんも

虚しく命もみじかく後生には無間・大城をすみかとするべしと正しく
経文に見えて候。

さて此の経の題目は習い読む事なくして大なる善根にて候、悪人も
女人も畜生も地獄の衆生も十界ともに即身成仏と説かれて候は、水
の底なる石に火のあるが如く百千万年くらき所にも燈を入れぬればあ
かくなる、世間のあだなるものすら尚加様に不思議あり、何に況や
仏法の妙なる御法の御力をや、我等衆生・悪業・煩惱・生死・果縛の
身が、正・了・縁の三仏性の因によりて即・法・報・応の三身と顕われん
事疑ひなかるべし、妙法経力即身成仏と伝教大師も釈せられて候、
心は法華経の力にてはくちなはの竜女も即身成仏したりと申す事なり
御疑候べからず委くは見参に入り候て申すべく候と申させ給へ。

弘安元年 戊寅 七月三日

にちれん
日蓮

かおう
花押

みようほう
妙法
あまごぜん
尼御前
へんじ
御返事

◆三二四

妙法尼御前御返事

1404

P

御消息しやうそくに云く・めうほうれんくゑきやうを・よるひるとなへまいらせ、すでにちかくなりて二声かうしやうにとなへ乃至ないしいきて候し時よりもなを・いろもしろく・かたちもそむせずと云云。

法華經ほけきやうに云く 如是相によぜそう乃至本末究竟等ほんまつくきやう」云云、大論だいろんに云く 臨終りんじゆうの時・色黒き者は地獄じごくに墮おつ」等云云、守護經しゆごに云く 地獄じごくに墮おつるに十五の相・餓鬼がきに八種の相・畜生ちくしやうに五種の相」等云云、天台大師てんだいだいしの摩訶止觀まかしかんに云く 身の黒色は地獄じごくの陰に譬たとう」等云云、夫それ以おもんれば日蓮にちれん幼少ようしやうの時より仏法ぶつぽうを学び候しが念願ねんがんすらく人の寿命じゆみやうは無常むじやうなり、出る氣いきは入る氣いきを待つ事なし風の前の露尚つゆ譬えたとにあらざ、かしこきもはか

なきも老いたるも若きも定め無き習いなり、

されば先臨終ますりんじゆうの事を習うて後に他事たじを習うべしと思ひて、一代聖教いちだいしやうきやう

の論師ろんし・人師にんしの書釈しよしゃくあらあらかんがへあつめて此を明鏡めいきやうとして、一切いっさいの

諸人しよにんの死する時と並に臨終りんじゆうの後とに引き向えてみ候へばすこしもくも

りなし、此の人は地獄じごくに墮おち給う乃至たま人天ないしにんてんとはみへ候を、世間せけんの人人ひとびと

・或師匠父母等あるししやうふぼの臨終りんじゆうの相をかくして西方浄土往生さいほうじやうどおうじやうと

のみ申し候、悲いかな師匠ししやうは悪道あくどうに墮おちて多くの苦み・しのびがたけれ

ば、弟子でしはとどまりゐて師りんじゆうの臨終りんじゆうをさんだんし地獄じごくの苦を増長ぞうちやうせしむ

る、譬たとへば・つみふかき者を口をふさいで・きうもんし・はれ物の口をあ

けずしてやま

するがごとし。

しかるに今の御消息しやうそくに云く・いきて候し時よりも・なを・いろしらく・

かたちもそむせずと云云、天台てんだいの云いわく白白はくはくは天てんに譬たとふ、大論だいろんに云いわく
赤せき白はく端たん正しやうなる者ものは天てん上じやうを得える」云云、天台てんだい大師だいし・御臨終りんじゆうの記きに云いわく
色いろ白しろし、玄奘げんじやう三藏さんざう御臨終りんじゆうを記しるして云いわく色いろ白しろし、一代いちだい聖教しやうきやうを定さだむる
名目なみよくに云いわく黒業くわくごうは六道ろくどうにとどまり白業はくごうは四聖ししやうとなる」此等これらの文証もんしやうと
現証げんしやうをもんてかんがへて候こうに、此この人ひとは天てんに生なぜるか、はた又また法華經ほけきやうの
名号なごうを臨終りんじゆうに二反にへんとなうと云云、法華經ほけきやう

の第七の卷に云く我滅度の後に於て応に此の經を受持すべし、是の人
・仏道に於て決定して疑有ること無けん」云云、一代の聖教いづれも
いづれもをろかなる事は候はず、皆我等が親父大聖教主釈尊の金言
なり皆眞実なり皆実語なり、其の中にをいて又小乗・大乘・顯教・
密教・權大乘・実大乘あいわかれて候、仏説と申すは二天・三仙・
外道・道士の經經にたいし候へば此等は妄語仏説は実語にて候、此の
実語の中に妄語あり実語あり綺語もあり惡口もあり、其の中に法華經
は実語の中の実語なり眞実の中の眞実なり、眞言宗と華嚴宗と三論
と法相と俱舍・成実と律宗と念仏宗と禪宗等は実語の中の妄語より
立て出だせる宗宗なり、法華宗は此れ等の宗宗には・にるべ
くもなき実語なり、法華經の実語なるのみならず一代妄語の經經す
ら法華經の大海に入りぬれば法華經の御力に・せめられて実語となり

候、いわうや法華經の題目をや、白粉の力は漆を變じて雪のごとく
白くなす。須弥山に近づく衆色は皆金色なり、法華經の名号を持つ人
は一生乃至過去遠遠劫の黒業の漆變じて白業の大善となる、いわう
や無始の善根皆變じて金色となり候なり。

しかれば故聖靈最後臨終に南無妙法蓮華經ととなへさせ給いし
かば、一生乃至無始の惡業變じて仏の種となり給う、煩惱即菩提・
生死即涅槃即身成仏と申す法門なり、かかる人のえんの夫婦にならせ
給へば又女人成仏も疑なかるべし、若し此の事虚事ならば釈迦・多宝
・十方分身の諸仏は妄語の人・大妄語の人・惡人なり、一切衆生
をたばらかして地獄におとす人なるべし、提婆達多是寂光淨土の主と
なり教主釈尊は阿鼻大城のほのをにむせび給うべし、日月は地に落ち
大地はくつがへり河は逆に流れ須弥山はくだけをつべし、日蓮が妄語

にはあらず十方三世の諸仏の妄語なりいかでか其の義候べきところを
ば候へ委くわしくは見参の時申もうすべく候。

七月十四日

日蓮にちれんかおう花押

妙法みょうぼう尼御前あまごぜん申もうさせ給たまへ

◆三三五

妙法比丘尼御返事

1406P

御文に云くたふかたびら一つあによめにて候女房のつたうと云云、

又おはりの次郎兵衛殿六月二十二日に死なせ給うと云云。

付法蔵經と申す經は仏・我が滅後に我が法を弘むべきやうを説かせ

給いて候、其の中に我が滅後・正法一千年が間次第に使をつかはすべ

し、第一は迦葉尊者二十年第二は阿難尊者二十年第三は商那和修二

十年乃至第二十三は師子尊者なりと云云、其の第三の商那和修と

申す人の御事を仏の説かせ給いて候やうは、商那和修と申すは衣

の名なり、此の人生れし時衣をきて生れて候いき不思議なりし事なり、

六道の中に地獄道より人道に至るまでは何なる人も始はあかはだかに

て候に天道こそ衣をきて生れ候へたとひ何なる賢人・聖人も人に生る

るならひは皆あかはだかなり、一生補処の菩薩すら尚はだかにて生れ給へり何かに況や其の外をや、然るに此の人は商那衣と

もう

申すいみじき衣にまとはれて生れさせ給いしが、此の衣は血もつかずけるる事もなし、譬えば池に蓮のをひをしの羽の水にぬれざるが如し、

此の人次第に生長ありしかば又此の衣次第に広く長くなる、冬はあつ

く夏はうすく春は青く秋は白くなり候し程に長者にてをはせしかば

なにこと

何事もともしからず、後には仏の記しをき給いし事た

がふ事なし、故に阿難尊者の御弟子とならせ給いて御出家ありしかば

此の衣変じて五条七条九条等の御袈裟となり候き、かかる不思議の候

し故を仏の説かせ給いしやうは、乃往過去・阿僧祇劫の当初・此の人は

あきひと

商人にて有り

しが、五百人の商人と共に大海に船を浮べてあきなひをせし程に海辺に

重病じゅうびょうの者あり、しかれども辟支仏ひやくしぶつと申もうして貴人なり、先業せんごうにてや有り
けん、病にかかりて身やつれ心をぼれ不浄ふじょうにまとはれてをはせしを、此
の商人あきひとあは

れみ奉りてねんごろに看病して生しまいらせ、不浄をすすぎすてて☆布
の商那衣をきせまいらせてありしかば、此聖人悦びて願して云く汝我
を助けて身の恥を隠せり此の衣を今生後生の衣とせんとてやがて涅槃
に入り給いき、此の功德によりて過去・無量劫の間・人中天上に生れ
生るる度ごとに、此の衣・身に隨いて離るる事なし、乃至
今生に釈迦如来の滅後第三の付嘱をうけて商那和修と申す聖人とな
り、摩突羅国の優留茶山と申す山に大伽藍を立てて無量の衆生を教化
して仏法を弘通し給いし事二十年なり、所詮商那和修比丘の一切のた
のしみ不思議は皆彼の衣より出生せりとこそ説かれて候へ。

而るに日蓮は南閩浮提日本国と申す国の者なり、此の国は仏の世に
出でさせ給いし国よりは東に当りて二十万余里の外遙なる海中の小島
なり、而るに仏御入滅ありては既に二千二百二十七年なり、月氏・

漢土かんどの人の此の国の人人ひとびとを見候へば此の国の人の伊豆の大島奥州おうしゅうの東
のえぞなんどを見るやうにこそ候らめ、而しかるに日蓮にちれんは日本国にほんこく安房の国
と申もうす国に生れて候しが、民の家より出いでて頭こうべをそり袈裟けさをきたり、
此の度いかにもして仏種ぶつしゅをもうへ

生死しやうじを離るる身とならんと置いて候し程に、皆人みなの願ねがひを給たまふ事なれ

ば阿弥陀仏あみだぶつをたのみ奉たてまつり幼少ようしやうより名号みやうごうを唱となえ候し程に、いささかの

事ありて、此の事を疑うたがいいし故ゆゑに一の願をおこす、日本国にほんこくに渡わたれる処ところの

仏經ぶつきやう並ならに菩薩ぼさつの論ろんと人師にんしの釈しやくを習ならひ見候はばや、又俱舎宗ぐしやしゆ・成実宗じやうじつ・

律宗りつしゆ・法相宗ほうさうしゆ・三論宗さんろんしゆ・華嚴宗けこんしゆ・真言宗しんごんしゆ・法華天台宗ほつけてんだいしゆと申す宗しゆと

もあまた有りとときく上に、禪宗ぜんしゆ・淨土宗じやうどしゆと申す宗も候なり、此等これらの宗

宗しゆ枝葉しやうをばこまかに習はずとも所詮しよせん肝要かんようを知る身とならばやと思ひし

故ゆゑに、随分ずいぶんに・はしりまはり十二・十六の年より三十二に至いたるまで二十

余年が間、鎌倉・京・叡山・園城寺・高野・天王寺等の国国・寺寺あらあ
ら習い回り候し程に・一の不思議あり、我れ等が・はかなき
心に推するに仏法は唯一味なるべし、いづれもいづれも・心に入れて
習ひ願はば生死を離るべしとこそ思いて候に、仏法の中に入りて悪しく
習い候ぬれば謗法と申す大なる穴に墮ち入つて、十悪・五逆と申して
日日・夜夜に

殺生偷盜邪婬妄語等をおかす人よりも

五逆罪と申して

父母等を殺す

悪人よりも、

比丘・比丘尼となりて

身には二百五十戒をかたく持ち心

には八万法蔵をうかべて候やうなる、

智者聖人の一生が間に一惡をも

つくらず人には仏のやうにをもはれ、

我が身も又さながらに惡道には

よも墮ちじと思ふ程に、

十惡・五逆の罪人よりも・つよく

地獄に墮ちて

阿鼻大城を栖として

永く地獄をいでぬ事の候けるぞ、

譬え

人ありて世にあらんがために国主につかへ奉る程に、させるあや

まちはなければども我心のたらぬ上・身にあやしきふるまひかさなるを、

猶我身にも失あ

りともしらず又傍輩も不思議ともをもはざるに

后等の御事によりて

あやまつ事はなければども自然にふるまひあしく王ななどに

不思議に見へ

まいらせぬれば、謀反の者よりも其の失重し、此の身とがにかかりぬれ

ば父母・兄弟・所従^{ふぼ・きょうだい しよじゅう}なんども又かるからざる失^{とが}にをこなはるる事あり。
謗法^{ほうぼう}と申^{もう}す罪^{つみ}をば我れもしらず人も失^{とが}とも思はず但^{ぶつ}仏法^{ぶつぼう}をならへば
ととおと
貴^{たか}しとのみ思^{おも}いて候程に此の人も又此の人にしたがふ弟子^{でし}・檀那^{だんな}等も
無間地獄^{むげんじごく}に墮^おつる事あり、所謂^{いわれる}勝意比丘^{しょういひく}・苦岸比丘^{くがんひく}など申せし僧は
二百五十戒をかたく持^{たも}ち三千^{さんぜん}の威儀^{いぎ}を一もかけずありし人なれども、
無間^{むげん}・大城^{だいじょう}に墮^おちて出づる期見^{きけん}へず、又彼の比丘^{ひく}に近づきて弟子^{でし}となり
檀那^{だんな}となる人人^{ひとびと}存^{ぞん}の外に大地微塵^{だいぢみじん}の数よりも多く地獄^{じごく}に墮^おちて師と・
ともに苦を受けしぞかし、此の人後世^{ごしやう}のために衆善^{しゆぜん}を修^{しゆ}せしより外は
又心なかりしかども・かかる不祥^{ふしやう}にあひて候しぞかし。

かかる事を見候しゆへにあらあら経論^{きやうろん}を勘^{かん}へ候へば、日本国^{にほんこく}の当世^{とうせ}こそ其^こに似^にて候へ代末^{だいまつ}になり候へば世間^{せけん}のまつり事のあらきにつけても世
の中あやうかるべき上、此の日本国^{にほんこく}は他国^{たこく}にもにず仏法^{ぶつぼう}弘^{ひろ}まりて国を

さまるべきかと思ひて候へば、中中・仏法弘まりて世もいたく衰へ人も

多く悪道に墮つべしと見へ候、其の故は日本国は

月氏・漢土よりも堂塔等の多き中に大体は阿弥陀堂なり、其の上家ご

とに阿弥陀仏を木像に造り画像に書き人毎に六万八万等の念仏を

申す、又他方を抛うちて西方を願う愚者の眼にも貴しと見え候上、

一切の智人も皆い

みじき事なりとほめさせ給う。たま

又人王五十代桓武天皇かんむてんのうの御宇ぎように弘法大師こうぼうだいしと申す聖人しようにん・此の国に生れて、漢土かんどより真言宗しんこんしゅうと申すめずらしき法ならを習い伝へ平城嵯峨淳和等へいぜいさがじゆんなの王の御師おんしとなりて東寺とうじ・高野こうやと申す寺を建立こんりゆうし、又慈覚大師じかくだいし・智証ちしよう大師だいしと申す聖人しようにん同じく此宗ならを習い伝えて叡山えいさん・園城寺おんじようじに弘通くつうせしかば日本国にほんこくの山寺一同に此の法を伝へ今に真言しんこんを行ひ鈴をふりて公家くげ・武家ぶけの御祈いのをし候、所謂二階堂いゐゆる・大御堂おおみどう・若宮等の別当べつどう等是れなり、是れは古も御たのみある上当世とうせの国主等家には柱天こくしゆには日月河にちがつには橋海こゑには船の如く御たのみあり。

禪宗ぜんしゅうと申すは又当世とうせの持斎等じさいを建長寺等けんちやうじに아가めさせ給うて父母ふぼよりも重んじ神よりも御たのみあり、されば一切いっさいの諸人頭しよにんこどうべをかたぶけ手をあさふ、かかる世にいかなればにや候らん、天変てんべんと申して彗星すいせい長く

東西に渡り地天と申して大地をくつがへすこと大海の船を大風の時・大波のくつがへすに似たり、大風吹いて草木をからし飢饉も年年にゆき疫病月月におこり大旱魃ゆきて河池・田畠・皆かはきぬ、此くの如く三災・七難・数十年起りて民半分

に減じ残りは・或は父母・或は兄弟・或は妻子にわかれて歎く声・秋の虫にことならず、家家のちりうする事冬の草木の雪に・せめられたるに似たり、是は・いかなる事ぞと経論を引き見候へば仏の言く法華經と申す経を謗じ我れを用いざる国あらばかかる事あるべしと、仏の記しをかせ給いて候・御言にすこしもたがひ候はず。

日蓮疑て云く日本には誰か法華經と釈迦仏をば謗すべきと疑ふ、又たまさか謗する者は少少ありとも信ずる者こそ多くあるらめと存じ候、爰に此の日本国に人ごとに阿弥陀堂をつくり念仏を申す、

其その根本こんぽんを尋たずぬれば道どう緯し禪ぜん師せん・善ぜん導どう和わ尚じょう・法ほう然ねん上しょう人にんと申もうす三人さんの言ごより出いでて候こう、是これは浄じょう土と宗しゅうの根本こんぽん今こんの諸しよ人にんの御おん師しなり、此この三人さんの念ねん仏ぶつ

を弘ひろめさせ給たまいし時ときにのたまはく未み有う一人ひとり得とく者しゃ・千せん中ちゅう無む一いつ・捨しや閉へい闍かく拋ほう等どう云う云う、いふこころは阿あ弥み陀だ仏ぶつをたのみ奉たてまつらん人ひとは一切いっさいの經きやう・一切いっさいの仏ぶつ・一切いっさいの神かみをすてて但あ阿み弥だ陀ぶつ・南な無む阿あ弥み陀だ仏ぶつと申もうすべし、其その上うへこと
に法ほ華け經きやうと

釈迦しやかぶつ仏を捨てまいらせよとすすめしかばやすきままに案もなくばらばらと付き候ぬ、一人付き始めしかば万人ばんにん・皆付き候いぬ、万人付きしかば上は国主こくしゅ・中は大臣だいじん・下は万民ばんみん一人も残る事なし、さる程に此の国存の外に釈迦しやかぶつ仏・法華經ほけきやうの御敵人てきじんとなりぬ。

其故は 今此三界こんしさんがいは皆是れ我が有なり其の中の衆生しゅじやうは悉く是れ吾わが子なり而も今此処ここは諸の患難多し唯我れ一人のみ能く救護くごを為す」と説いて、此の日本国にほんこくの一切衆生いっさいしゅじやうのためには釈迦しやかぶつ仏は主なり師なり親なり、天神七代・地神五代・人王九十代の神と王とすら猶釈迦しやかぶつ仏の所従しよじゆうなり、何かに況や其の神と王との眷属等けんぞくをや、今日本国にほんこくの大地山河大海草木等は皆釈尊みなしやくそんの御財たからぞかし、全く一分も薬師やくし仏・阿弥陀あみだぶつ仏等の他仏たふつの物にはあらず、又日本国にほんこくの天神・地神・九十余代の国主並に万民牛馬・生いきと生る生ある者は皆教主釈尊みなきやうしゅしやくそんの一子なり、又

にほんこく 日本国の天神・地神・諸王・万民等の天地・水火・父母・主君・男女・
さいし 妻・黒白等を弁え給うは皆教主釈尊・御教の師なり、全く薬師・
あみだ 阿弥陀

等の御教にはあらず、されば此の仏は我等がためには大地よりも厚く
こくう 虚空よりも広く天よりも高き御恩まします仏ぞかし、かかる仏なれば
おうしんばんみんと 王臣万民俱に人ごとに父母よりも重んじ神よりもあがめ奉るべし、かく
だにも候はば何なる大科有りと天も守護して・よもすて給はじ・地も
いかり給うべからず。

然るに上一人より下万人に至るまで阿弥陀堂を立て阿弥陀仏を
ほんぞん 本尊ともてなす故に天地の御いかりあるかと見え候、譬えば此の国の
かんど 者が漢土・高麗等の諸国の王に心よせなりとも、此の国の王に背き候な
ば其の身はたちかたかるべし、今・日本国の一切衆生も是くの如し、

さいほう 西方の国主阿弥陀仏には心よせなれども我国主釈迦仏に背き

奉る故に此の国の守護神いかり給うかと愚案に勘合候、而るを此の国の

人人阿弥陀仏を・或は金・或は銀・或は銅・或は木画等に志を尽くし

仏事をなし、法華経と釈迦仏をば・或は墨画・或は木像にはくをひかず

・或は草堂に造りなんどす、例せば他人をば志を重ね妻子をばもて

なして父母におろかなるが如し。

又真言宗と申す宗は上一人より下万民に至るまで此れを仰ぐ事
日月の如し、此れを重んずる事珍宝の如し、此の宗の義に云く大日經
には法華經は二重三重の劣なり、釈迦仏は大日如来の眷属なりな
んと申す此の事は弘法・慈覚・智証の仰せられし故に今四百余年に叡山・
東寺・園城・日本国の智人・一同の義なり。

又禪宗と申す宗は眞実の正法は教外別伝なり法華經等の經經は
教内なり、譬えば月をさす指・渡りの後の船・彼岸に到りて・なにかせ
ん月を見ては指は用事ならず等云云、彼の人人謗法ともをもはず習い
伝えたるままに存の外に申すなり、然れども此の言は釈迦仏をあなづ
り法華經を失ひ奉る因縁となりて、此の国の人人・皆一同に五逆罪に
すぎたる大罪を犯しながら而も罪ともしらず。

此大科・次第につもりて人王八十二代・隱岐の法皇と申せし王並びに

佐渡さどの院等は我が相伝そうでんの家人にも及およばざりし、相州鎌倉そうしゅうかまくらの義時よしときと申せし人に代を取られさせ給たまいしのみならず、島島にはなたれて歎なげかせ給たまいしが、終ついには彼の島島にして隠れさせ給たまいぬ、神かみひは悪靈あくりょうとなりて地獄じごくに墮おち候まういぬ、其その召仕はれし大臣だいじん已下いげは、或あるは頭こづへをはねられ、或あるは水火すいかに入り、其その妻子等さいしは、或あるは思おもひ死に死に、或あるは民の妻となりて今五十余年、其外ほかの子孫しそんは民のごとし、是これ偏ひとえに真言しんごんと念佛ねんぶつ等をもてなして法華經ほけきょう・釈迦しゃか仏ぶつの大怨敵おんてきとなりし故ゆえに天照太神てんしやうだいじん・正八幡しょうはちまん等の天神てんじん・地祇ちぎ・十方じゅうぽうの三宝さんぼうにすてられ奉りて、現身げんしんには我が所従しよじゅう等にせめられ後生ごしょうには地獄じごくに墮おち候まういぬ。

而しかるに又代東よあずまにうつりて年をふるままに彼の国主こくしゅを失うしないし、真言宗しんごんしゅう等の人人ひとびと・鎌倉かまくらに下り相州そうしゅうの足下そくげにくぐり入りてやうやうにたばかる故ゆえに、本もとは上臈じやうろうなればとてすかされて鎌倉かまくらの諸堂しよどうの別当べつどうとなせり、又

念ねんぶつ仏者をば善ぜんちしき知識とたのみて大だいぶつ仏・長ちやうらくじ樂寺・極ごくらく樂寺等とあがめ、禪ぜんしゆ宗をば寿福寺・建けんちやうじ長寺等とあがめをく、隱おき岐の法皇ほうこうの果報かほうの尽つき給たまいし失とがより百千万億倍せんまんすぎたる大科だいか鎌倉かまくらに出来しゅつたいせり、かかる大科だいかある故ゆえに天照太神てんしやうだいじん・正八幡等しやうはちまんの天神てんじん・地祇ちぎ・釈迦しやか・多宝たほう・十方じゆつぽうの諸しよ仏ぶつ・一同おおいに大にとがめさせ給たまう故ゆえに、隣国りんこくに聖人しやうにん有りて万国の兵のあつめたる大王だいおうに仰おおせ付け

て、日本国にほんこくの王臣おうしん万民ばんみんを一同に罰せんとたくませ給たまうを、日蓮にちれんかねて
経論きょうろんを以もつて勘かん候がういし程に、此これを有りのままに申もうさば国主こくしゅもいかり、
万民ばんみんも用ひざる上、念仏者ねんぶつ・禅宗ぜんしゅう・律僧りつそう・真言師しんごんし等定めて忿いりをなして
・あだを存おうしんじ王臣おうしん等に讒奏ざんそうして我が身みに大難だいにんおこりて、弟子でし乃至ないし檀那だんな
までも少しも日蓮にちれんに心よせなる人あらば科とがになし、我が身みもあやうく
命いのちにも及およばんずらん、いかが案あんもなく申もうし出いすべきとやすらひし程に、
外典げてんの賢人けんじんの中にも世の

ほろぶべき事ことを知りながら申もうさぬは諛臣ゆしんとて・へつらへる者ふちおん不知恩ふちおんの人な
り、されば賢けんなりし竜逢比干りゅうほうひかんなど申もうせし賢人けんじんは、頸くびをきられ胸むねをさ
かれしかども国の大事だいじなる事をばはばかり申もうし候がういき、仏法ぶつぽうの中には
仏ぶついま

しめて云いく法華經ほけきやうのかたきを見て世をはばかり恐おそれて申もうさずば、

釈迦仏しやかぶつの御敵ちじんいかなる智人・善人ぜんにんなりとも必ず無間地獄むげんじごくに墮おつべし、
譬たとへば父母ふぼを人の殺さんとせんを、子の身として父母にしらせず、王を
あやまち奉たてまつらんとする人のあらむを、臣下しんかの身として知りながら代を
おそれて申もうさざらんがごとしなんど禁られて候。

されば仏おんつかいの御使たりし提婆菩薩だいばぼさつは外道げどうに殺され、師子尊者ししそんじやは檀弥羅
王てうわに頭こづをはねられ、竺二じくのどうしやうの道生は蘇山そざんへ流され、法道ほうどうは面かおにかなやきを
あてられき、此等これらは皆仏法みなぶつぽうを重んじ王法を恐れざりし故ぞかし、され
ば賢王けんおうの時は仏法ぶつぽうをつよく立つれば王兩方を聞あきらめて勝れ給う
智者ちしやを師とせしかば国も安穩あんのんなり、所謂陳・隋いわゆるの大王・桓武・
嵯峨等さががは天台智者大師てんだいちしやだいしを南北の学者がくしやに召し合せ、最澄和尚さいちやうわじやうを南都の
十四人たいろんに對論たいろんせさせて論じかち給たまいしかば寺をたてて正法しやうぽうを弘通くつうし
き、大族王・優陀延王・武宗・欽宗・欽明・用明・或は鬼神きじん・外道げどうを崇重すうちやう

し、或あるは道士どうしを歸依きえし、或あるは

神あがめを崇めし故ゆえに、釈迦しやか仏ぶつの大怨敵おんてきとなりて身を亡ぼし世も安穩あんのんなら

ず、其そのときの時は聖人しょうにんたりし僧侶そうりやだいなん大難だいにんにあへり、今にほんこく日本国にほんこくすでに大謗法ほうぼうの

国たこくとなりて他国たこくにやぶらるべしと見えたり。

此これを知りながら申もうさずば縦たとひ現在げんざいは安穩あんのんなりとも後生ごしょうには無間むげん・

大城だいじやうに墮おつべし、後生ごしょうを恐れて申もうすならば流罪るざい・死罪しざいは一定なりと思ひ

定めて去いぬる文応ぶんおうの比故さいみようじにゅうどう最明寺さいめいじ入道殿にゅうどうでんに申もうし上げぬ、されども用もちい

給たまう事なかりしか

ば、念仏者等・此の由を聞きて上下の諸人をかたらひ打ち殺さんとせし程にかなはざりしかば、長時武蔵の守殿は極楽寺殿の御子なりし故に親の御心を知りて理不尽に伊豆の国へ流し給いぬ、されば極楽寺殿と長時と彼の一門は皆ほろぶるを各御覧あるべし、其の後何程もなくして召し返されて後又経文の如く弥よ申しつよる、又去ぬる

文永八年九月十二日に佐渡の国へ流さる、日蓮御勘氣の時申せしが如くどしうちはじまりぬ、それを恐るるかの故に又召し返されて候、しかれども用ゆる事なければ万民も弥弥悪心盛んなり。

縦ひ命を期として申したりとも国主用いずば国やぶれん事疑なし、つみしらせて後用いずば我が失にはあらずと思ひて、去ぬる文永十一年五月十二日相州鎌倉を出でて六月十七日より此の深山に居住して門一町を出でず既に五箇年をへたり。

本は房州の者にて候いしが地頭東条左衛門尉景信と申せしもの極楽寺殿・藤次左衛門入道・一切の念仏者にかたらはれて度度の問註ありて・結句は合戦起りて候上・極楽寺殿の御方人理をまげられしかば東条の郡ふせがれて入る事なし、父母の墓を見ずして数年なり、又国主より御勘氣二度なり、第二度は外には遠流と聞こへしかども内には頸を切るべしとて、鎌倉竜の口と申す処に九月十二日の丑の時に頸の座に引きすへられて候いき、いかがして候いけん月の如くにをはせし物江の島より飛び出でて使の頭へかかり候いしかば、使おそれてきらず、と

かうせし程に子細どもあまたありて其の夜の頸はのがれぬ、又佐渡の国にてきらんとせし程に日蓮が申せしが如く鎌倉にどうち始まりぬ、使はしり下りて頸をきらず結句はゆるされぬ、今は此の山に独りすみ

候。

佐渡さどの国にありし時は里はるより遙かにへたたれる野と山との中間ちゅうげんにつかはらと申もうす御三昧さんまい所あり、彼処そこに一間四面しめんの堂あり、そらはいたまあわず四壁はやぶれたり・雨はそとの如ごとし雪は内に積つもる、仏はおはせずむしろたたみ筵しん・畳たたみは一枚もなし、然しかれども我が根本こんぽんより持たもちまいらせて候・教主きょうしゅ・釈尊しやくそんを立てまいらせ法華經ほけきょうを手ににぎり養みのをき笠かさをさ

して居たりしかども、人もみへず食もあたへずして四箇年なり、彼の蘇武そぶが胡国ここくにとめられて十九年が間養みのをき雪を食としてありしが如しごと。

今又此山に五箇年あり、北は身延山と申もうして天にはしだて・南は・たかとりと申もうして鷄足山けいそくの如しごと、西はなないたがれと申もうして鉄門に似たり・東は天子てんしがたけと申もうして富士の御山にたいしたり、四の山は屏風の如しごと、北に大河あり早河と名づく早き事・箭やをいるが如しごと、南に河あり波木井河と名づく大石を木の葉の如く流す、東には富士

河北かほくより南へ流れたりせんのはこをつくが如しごと内に滝あり身延の滝と申もうす白布を天そらより引くが如しごと此の内に狭小の地あり日蓮にちれんが庵室あんしつなり深山みやまなれば昼も日を見奉らず夜も月を詠むる事なし峯にははかうの☆さるかまびすしく谷には波の下る音鼓を打つがごとし地にはしかざれども

大石多く山には瓦礫がりがくより外には物もなし国主こくしゅはにくみ給ふたま

万民ばんみんはとぶらはず冬は雪道を塞ぎふさ夏は草をひしげり鹿の遠音うらめしく蟬の鳴く声かまびすし訪う人なければ命もつぎがたしはだへをかくす衣も候はざりつるにかかる衣を・をくらせ給えるたまこそいかにとも申すもうばかりなく候へ

見し人聞きし人だにもあはれとも申さず、年比なれし弟子でしつかへし下人だにも皆みなにげ失とがとぶらはざるに聞きもせず見もせぬ人の御志ごうき哀あわれなり、偏ひとえに是れ別れし我が父母ふぼの生れかはらせ給たまいけるか、十羅刹じゅうらせつの人の見に入りかはりて思いよらせ給たまうか、唐とうの代宗皇帝こうていの代に蓬子將軍ほうししようぐんと申せし人の御子・李如暹將軍りじよせんしようぐんと申せし人勅定てきぢやうを蒙りて

北の胡地を責めし程に、我が勢数十万騎は打ち取られ胡国ここくに生け取られて四十年漸くようやへし程に、妻をかたらひ子をまうけたり、胡地ならの習い生

取をば皮の衣を服せ毛帶をかけさせて候が、只正月一日計り唐の衣冠をゆるす、一

年ごとに漢土を恋いて肝をきり涙をながす、而る程に唐の軍おこりて唐の兵胡地をせめし時ひまをえて胡地の妻子をふりすててにげしかば、唐の兵は胡地のえびすとして捕へて頸をきらんとせし程に、とかうして徳宗皇帝

にまいらせてありしかば、いかに申せども聞も・ほどこせ給はずして・南
の国・呉越と申す方へ流されぬ、李如暹歎いて云く進ては涼原の本郷を
見ることを得ず退ては胡地の妻子に逢ふことを得ず云云、此の心は胡
地の妻子をもすて又唐の古き栖をも見ず・あらぬ国に流されたりと
歎くなり、我が身には大忠ありしかども・かかる歎きあり。

日蓮も又此くの如し日本国を助けばやと思ふ心に依りて申し出す
程に、我が生れし国をもせかれ又流されし国をも離れぬ、すでに此の
深山にこもりて候が彼の李如暹に似て候なり、但し本郷にも流されし
処にも妻子なけ

れば歎く事はよもあらじ、唯父母のはかとなれし人人のいかが・なるら
んと・をばつかなしとも申す計りなし、但うれしき事は武士の習ひ君の
御為に宇治勢多を渡し前を・かけなんどして・ありし人は、たとひ身は

死すれども名を後代に挙げ候ぞかし、日蓮は法華經のゆへに度度所をおはれ戰をし身に手をおひ弟子等を殺され両度まで遠流せられ既に頸に及び、是れ偏に法華經の御為なり、法華經の中に仏説かせ給はく我が滅度の後・後の五百歳・

二千二百余年すぎて此の經閻浮提に流布せん時、天魔の人の身に入りかはりて此の經を弘めさせじとて、たまたま信ずる者をば・或はのり打ち所をうつし・或はころしなどすべし、其の時先さきをしてあらん者は三世十方の仏を供養する功德を得べし、我れ又因位の難行・苦行の功德を讓るべしと説かせ給う取意。

されば過去の不輕菩薩は法華經を弘通し給いしに、比丘・比丘尼等の智慧かしこく二百五十戒を持てる大僧ども集まりて優婆塞・優婆夷をかたらひて不輕菩薩をのり打ちせしかども、退転の心なく弘めさせ

給たまいしかば終つひには仏となり給たまう、昔むかしの不ふ輕ぎ菩ぼ薩さつは今の釈しや迦か仏ぶつなり、それ
をそねみ打ちなんどせし大僧だいそうどもは千劫せんじやう阿鼻あび地獄じごくに墮おち

ぬ、彼の人人ひとびとは觀經かんきやう・阿彌陀經あみだ等の数千いくさうの經・一切いっさいの仏名あみだねんぶつ・阿彌陀念仏あみだねんぶつ

を申し法華經ほけきやうを昼夜しやに讀よみしかども、実まことの法華經ほけきやうの行者ぎやうじやをあだみしか

ば法華經ほけきやう・念仏ねんぶつ・戒等かいどうも助け給たまはず千劫せんじやう阿鼻あび地獄じごくに墮おちぬ、彼の比丘びく

等は始はじめには不ふ輕ぎ菩ぼ薩さつをあだみしかども後あとには心こころを・ひるがへして、身みを

不ふ輕ぎ菩ぼ薩さつに仕つかうる事ことやつこの主しやうに隨したがうがごとく有ありしかども

無間地獄をまぬかれず、今又日蓮にあだをせさせ給う日本国の人人も
此くの如し、此は彼には似るべくもなし彼は罵り打ちしかども国主の
流罪はなし杖木瓦石はありしかども疵をかほり頸までには及ばず、是
は悪口杖木は二十余年が間・ひまなし疵をかほり流罪・頸に及ぶ、
弟子等は・或は所領を召され・或はろうに入れ・或は遠流し・或は其の
内を出だし・或は田畠を奪ひなんどする事・夜打・強盜・海賊・山賊・
謀叛等の者よりもはげしく行はる、此れ又偏に
真言・念仏者・禅宗等の大僧等の訴なり、されば彼の人人の御失は
大地よりも厚ければ此の大地は大風に大海に船を浮べるが如く動転
す、天は八万四千の星曠をなし昼夜に天変ひまなし、其の上日月大に
変多し仏滅後既に二千二百二十七年になり候に大族王が五天の寺を
やき十六の大国の僧の頸を切り武宗皇帝の漢土の寺を失ひ仏像

をくだき、日本国にほんこくの守屋もりやが釈迦しやく仏ぶつの金銅きんどうの像ようを炭火もつを以てやき僧尼そうにを
打ちせめては還俗げんぞくせさせし時も是これ程ほどの彗星すいせい大地震だいじしんはいまだなし、彼かしこに
は百千万倍ひやくせんまんばいす過ぎて候大惡おほあくにてこそ候いぬれ、彼は王一人おうひとりの惡心あくしん大臣だいじん以
下おちは心より起る事なし、又權仏ごんぶつと權經ごんきやうとの敵なり僧も法華經ほけきやうの行者ぎやうじや
にはあらず、是は一向いっかうに法華經ほけきやうの敵・主・一人のみなら

ず一國の智人ちじん並びに万民ばんみん等の心より起れる大惡心あくしんなり、譬たとえば女人物にょにん
をねためば胸の内に大火だいかもゆる故ゆえに、身變じて赤く身の毛さかさまに
たち五体ごたいふるひ面に炎かおあがりかほは朱をさしたるが如ごとし眼まなこまろになり
てねこの眼まなこのねづみをみるが如ごとし、手わななきてかしわの葉を風の吹く
に似たりかたはらの人は是これを見れば大鬼神きじんに異ならず。

日本国にほんこくの国主こくしゆ諸僧しよそう比丘びく比丘尼びくに等も又是かくのくの如ごとし、たのむところの
弥陀念仏みだねんぶつをば日蓮にちれんが無間地獄むげんじこくの業と云うを聞き真言しんごんは亡国ぼうこくの法と云

うを聞き持斎じさいは天魔てんまの所為そいと云うを聞いて念珠ねんじゆをくりながら齒をくひ
ちが念鈴ねんりやうをふるにくびをどりたり戒たもを持ちながら惡心あくしんをいだく極樂寺ごくらくの
生仏りやうふつの良觀りやうかん聖人折紙しやうしをささげて上かみ訴かみ建長寺けんちやうじの道隆どうりやう聖人しやうにんは興に乗
りて奉行人ぶぎやうにひざまづく諸もろもろの五百戒あまごぜんの尼御前ねぎぜん等ははくをつかひてでんそ
うをなす、是れ偏こに法華經ひとえ ぼけきやうを讀みてよまず聞きいてきかず善導ぜんどう・法然ほうねんが
千中無一せんちゆうむいつと弘法こうぼう・慈覺達磨等じかくだるまの皆是みな戲論けろん教外別伝きやうがいべつでんのあまきふる酒にえ
はせ給たまい

てさかぐるひにておはするなり、法華最第一の經文を見ながら大日經
は法華經に勝れたり禪宗は最上の法なり律宗こそ貴けれ念仏こそ
我等が分にはかなひたれと申すは酒に酔える人にあらずや星を見て月
にすぐれたり石を見て金にまされり東を見て西と云い天を地と申す物
ぐるひを本として月と金は星と石とには勝れたり東は東天は天なんど
有りのままに申す者をばあだませ給はば勢の多きに付くべきか只物ぐ
るひの多く集まれるなり、されば此等

を本とせし云うにかひなき男女の皆地獄に墮ちん事こそあはれに候へ
涅槃經には仏説き給はく末法に入つて法華經を謗じて地獄に墮つる者
は大地微塵よりも多く信じて仏になる者は爪の上の土よりも少しと説
かれたり此れを以つて計らせ給うべし日本国の諸人は爪の上の土日蓮
一人は十方の微塵にて候べきか、然るに何なる宿習にてをはすれば

御衣をば送らせ給うぞ爪の上の土の数に入らんとおぼすか又涅槃經に
云く天地の上に針を立てて

大風の吹かん時大梵天より糸を下さんに糸のはしすぐに下りて針の穴

に入る事はありとも、末代に法華經の行者にはあひがたし法華經に

云く天海の底に龜あり三千年に一度海上にあがる梅檀の浮木の穴に

ゆきあひてやすむべし而るに此の龜一目なるが而も僻目にて西の物を

東と見東の物を西と見るなり」末代惡世に生れて法華經並

びに南無妙法蓮華經の穴に身を入るる男女にたと給へり何なる過去の

縁にてをはすれば此の人をとふらんと思食す御心はつかせ給いけるや

らん、法華經を見まいらせ候へば釈迦仏の其の人の御身に入らせ給いて

・かかる心はつくべしと説かれて候譬へばなにも思はぬ人の酒をのみて

えいぬればあらぬ心出来り人に物をとらせばや・なんと思ふ心出来る、

此れは一生慳貪けんどんにして餓鬼がきに墮おつべきを其その人の酒の縁へんに菩薩ぼさつの入いりかはらせ給たまうなり、濁水

に珠たまを入れぬれば水すみ月に向いまいらせぬれば人の心あこがる、画にかける鬼には心なけれどもおそろし、とわりを画にかけば我が夫をばとらねども・そねまし、錦のしとねに蛇じやをおれるは服せんとも思はず、身のあつきにあたたかなる風いとはし、人の心も此かくの如ごとし、法華經ほけきようの方かたへ御心をよせさせ給たまうは女人にょにんの御身おんみなれども竜女りゅうにょ

が御身おんみに入らせ給たまうか。

さては又尾張おわりの次郎兵衛尉殿ひょうえのじょうの御事見参おんことに入りて候いし人なり、

日蓮にちれんは此こゝの法門ほうもんを申し候もうへば他人たにんにはにず多くの人に見て候もとい

をしと申もうす人は千人に一人もありがたし、彼かの人はよも心よせには思

はれたらじなれども、自体人がらくくげなるふりなく・よろづの人に・な

さけあらんと思ひし人なれば、心の中は・うけずこそ・

をばしつらめども、見参の時はいつはりをろかにて有りし人なり、又

女房にようぼうの信じたるよしありしかば実とは思ひ候はざりしかども、又いたう

法華經ほけきように背そむく事はよもをはせじなればたのもしきへんも候、されども

法華經ほけきようを失うしなふ念仏ねんぶつ・並びに念仏者ねんぶつを信じ我が身たぶんも多分ねんぶつは念仏者ねんぶつにてを

はせしかば後生ごしようはいかがと・をばつかなし、譬たとえば国主こくしゅは

みやづかへのねんごろなるには恩のあるもあり又なきもあり、少しもを

ろかなる事候へばとがになる事うたがい疑なし、法華經ほけきょうも又此こくの如ごとし、いかに信ずるやうなれども法華經ほけきょうの御かたきにも知れ知らざれ、まじはりぬれば無間地獄むげんじごくは疑うたがいなし。

是はさてをき候ぬ、彼の女房にようぼうの御歎なげいかかと・をしはかるに・あはれなり、たとへば・ふじのはなのさかなるが松にかかりて思ふ事もなきに松のにはかにたふれ、つたのかきにかかれるが・かきの破やぶれたるが如ごとくに・をばすらん、内へ入れば主なし・やぶれたる家の柱なきが如ごとし、客人来れども外に出いでて・あひしらうべき人もなし、夜

のくらきには・ねやすさまじく・はかをみれば・しるしはあれども声もきこえず、又思ひやる死出の山・三途の河をば誰とか越え給たまうらん只ただひと独り歎なげき給たまうらん、とどめをきし御前ごぜんたち・いかに我をば・ひとりやるらん、さはちぎらざりとや歎なげかせ給たまうらん、かたがた秋の夜の・ふけゆくまま

に冬の嵐の・をとづるる声につけても
弥^い弥^い御^い歎^{なげ}き重^{おも}り候^{さぶ}らん、南^な無^む
妙^み法^{ほう}蓮^{れん}華^け経^{ぎょう}・南^な無^む妙^み法^{ほう}蓮^{れん}華^け経^{ぎょう}。

弘安元年 戊寅 九月六日

日蓮 花押

◆三二六

妙法比丘尼御前御返事

141

9P

明衣ゆかたびら一つ給び生んぬ、女人にょにんの御身おんみ・男にもをくれ親類しんるいをも・はなれ一

二人ある・むすめもはかばかしからず便りたよなき上・法門ほうもんの故ゆえに人にも・

あだまれさせ給ふ女人たま にょにん、さながら不輕菩薩ふぎようぼさつの如ごとし、仏の御姨母おば・摩訶まか

波闍波提はじゃ はだい比丘尼びく にょにんは女人にょにんぞかし、而しかるに阿羅漢あらかんとならせ給たまいて声聞しょうもんの

御名みなを得させ給ひ永不成仏ようふじょうぶつの道に入らせ給たまいしかば、女人にょにんの姿をかへ・

きさきの位を捨てて仏の御すすめを敬うやまひ、四十余年よんじゅうねんが程・五百戒を

持たもちて昼は道路にたたずみ・夜は

樹下に坐ごしやうして後生ごしょうをねがひしに、成仏じょうぶつの道を許ゆるされずして永不成仏ようふじょうぶつの

うきなを流させ給たまいし、くちをしかりし事ぞかし、女人にょにんなれば過去かこ遠おん劫のんじょうの間有あるに付けても無きに付けても・あだなを立てし、はづかしくちおしく口惜くちかりしぞかし、其その身をいとひて形をやつし尼と成りて狭はは・かかる・なげきは離れぬとこそ思ひしに、相違そういして二乗にじようと

なり永不成ようふじようぶつ仏と聞きしは・いかばかり・あさましくをわせしに、法華經ほけきよう

にして三世さんぜの諸しよ仏ぶつの御勘氣ごかんきを許ゆるされ、一切衆生喜見いっさいしゆじようきけんぶつ仏と成らせ給たまいし

は・いくら程か・うれしく悦よろこばしくをはしけん、さるにては法華經ほけきようの御為ごため

と申もうすには何いかなる事有ありとも背かせ給そむうまじきぞかし、其に仏の言のたまわ

く大音声おんじようを以もつて普あまねく四衆ししゆに告つげたまわく誰たれか能よく此この

袈婆国土しやばこくどに於おいて広ひろく妙法華經みようほけきようを説とかん等云云、我も我もと思おもうに諸しよ仏

の恩を報あまごぜんぜんと思おもはん尼御前ににょぜん女人達、何事なにことをも忍しのびて我が滅後めつごに此この

袈婆世界しやばせかいにして法華經ほけきようを弘ひろむべしと三箇度まで・いさめさせ給たまいしに、

御用ひなくして他方たほうの国土こくどに於おいて広ひろく此の經のへを宣のたまべんと申もうさせ給たまいしは
能よく能よく不得心こころえの尼にぞかし、幾いくくか仏ぶつ惡あくしと・をばしけん、されば仏は
そぼむきて八十萬億那由他の諸菩薩しよぼさつをこそ・つくづくと御覽ごらんぜしか。

されば女人にょにんは由なき道には名を折り命を捨つれども成仏じやうぶつの道はよは

かりけるやと・をば候に、今末代まつだいあくせ惡世にょにんの女人と生れさせ給たまいて・かかる

ものをばえぬ島のえびすにのられ打たれ責られねび法華經ほけきやうを弘ひろめさせ

給たまう彼の比丘尼びくにには雲泥勝うんでいすくれてありと仏は靈山りやうぜんにて御覽あるらん、彼

の比丘尼びくにの御名みなを一切衆生喜見仏いっさいしゆじやうきけんぶつと申もうすは別べつの事にあ

らず、今の妙法尼御前みやうほうあまごぜんの名にて候べし、王となる人は過去かこにても現在げんざいに

ても十善じゅうぜんを持つ人の名なり名は・かはれども師子ししの座は一也なり、此の名も

・かはるべからず、彼の仏の御言みことばをさかがへす尼だにも一切衆生喜見仏いっさいしゆじやうきけんぶつ

となづけらる、是は仏の言をたがへず此の娑婆世界しやばせかいまで名を失うしなひ命をす

つる尼なり、彼は養母として捨て給たまはず是は他人たにん

として捨てさせ給たまはば偏頗へんげんの仏なり、争いでかさる事は候べき、況や其中ごとちゅう

衆生しゆじやう悉しつ是吾子の經文きやうもんの如くならば今の尼は女子なり彼の尼は養母な

り、養母を捨てずして女子を捨つる仏の御意みいやあるべき、此の道理どうりを深く御存知ごぞんじあるべし、しげければ・とどめ候そうらい畢おわんぬ。

日蓮花押にちれんかおう

妙法尼御前みょうぼうあまごぜん

◆三二七

内房女房御返事にようぼうごへんじ

142

Op

内房ないぼうよりの御消息しやうそくに云く八月九日父にてさふらひし人の百箇日に
相あい当あたりてさふらふ、御布施料ふせに十貫まいらせ候ないし乃至なあなかしこ・あなかしこ、御願文がんもんの状いわに云く説誦どくじゆし奉たてまつる妙法蓮華經みょうぼうれんげきやう一部説誦どくじゆし奉たてまつる方便ほうべん

じゅりょうぽん
寿量品三十巻読誦し奉る自我偈三百巻唱え奉る妙法蓮華經の題名
だいまい
五万返」云云同状に云く伏して惟れば先考の幽靈生存の時弟子遙に
おもんみ
せんり さんが しの まのあた みようほう
千里の山河を凌ぎ親子妙法の題名を受け然る後三十日を経ずして永
だいまい
く一生の終りを告ぐ」等云云、

又云く、囑呼閻浮の露庭に白骨仮りに塵土と成るとも、靈山の界上に亡魂・定んで覺蕊を開かん」又云く、弘安三年女弟子大中臣氏敬白す」等云云。

夫れ以れば一乗・妙法蓮華經は月氏國にては一由旬の城に積みにほんこく日本國にては唯八卷なり、然るに現世後生を祈る人・或は八卷・或は一巻・或は方便寿量・或は自我偈等を讀誦し讚歎して所願を遂げ給ふせんれい先例之多し此は且らく之を置く、唱へ奉る妙法蓮華經の題名五万返と云云、此の一段を宣べんと思ひて先例を尋ぬるに其の例少なし、或は一返二返唱へて利生を蒙る人粗これ有るか、いまだ五万返の類を聞かず、但し一切の諸法に亘りて名字あり其の名字皆其の体徳を顯はせし事なり、例せば石虎將軍と申すは石の虎を射徹したりしかば石虎將軍と申す、的立の大臣と申すは鉄的を射とを

したりしかば的立の大臣と名く、是皆名に徳を顯はせば今妙法蓮華經
と申し候は一部八卷・二十八品の功德を五字の内に収め候、譬へば
如意宝珠の玉に万の宝を収めたるが如し、一塵に三千を尽す法門是な
り、南無と申す字は敬う心なり隨う心なり、故に阿難尊者は一切經の
如是の二字の上に南無等云云、
南岳大師云く南無妙法蓮華經云云、天台大師云く稽首南無
妙法蓮華經云云、阿難尊者は斛飯王の太子・教主釈尊の御弟子なり、
釈尊御入滅の後六十日を過ぎて迦葉等の一千人・文殊等の八万人・
大闍講堂にして集会し給いて仏の別を悲しみ給ふ上、我等は多年の間・
隨逐するすら六十日の間の御別を悲しむ、百年千年乃至末法の一切
衆生

は何をか仏の御形見とせん、六師外道と申すは八百年以前に二天・三

仙等の説き置きたる四韋陀・十八大經を以てこそ師の名残とは伝へて候へいざさらば我等五十年が間・一切の声聞・大菩薩の聞き持ちたる經經を書き置き

て未來の衆生の眼目とせんと僉議して、阿難尊者を高座に登せて仏を仰ぐ如く、下座にして文殊師利菩薩・南無妙法蓮華經と唱へたりしかば、阿難尊者此れを承け取りて如是我聞と答ふ、九百九十九人の大阿羅漢等は筆を染めて書き留め給いぬ、一部八卷・二十八品の功德は此の五字に収めて候へこそ文殊師利菩薩かくは唱へさせ給う

らめ、阿難尊者又さぞかしとは答え給うらめ、又万二千の声聞八万の大菩薩二界八番の雜衆も有りし事なれば合点せらるらめ、天台智者大師と申す聖人・妙法蓮華經の五字を玄義十卷・二千丁に書き給いて候、其の心は華嚴經は八十卷・六十卷・四十卷・阿含經數百卷・大集方等數十卷・大品般若四十卷・六百卷・涅槃經四十卷・三十六卷、乃至月氏・竜宮・天上・十方世界の大地微塵の一切經は妙法蓮華經の經の一字の所從なり、妙樂大師重ねて十卷造るを釈籤と名けたり、天台以後に渡りたる漢土の一切經新訳の諸經は皆法華經の眷屬なり云云、日本の伝教大師重ねて新訳の經經の中の大日經等の真言の經を皆法華經の眷屬と定められ候い畢んぬ、但し弘法・慈覺・智証等は此の義に水火なり此の義後に粗書きたり、譬へば五藏・七道・六十六箇国・二つの島・其の中の郡と莊と村と田と

島と人と牛馬ぎゅうばと金銀等きんぎんは皆日本国みなにほんこくの三字の内に備りて一つも闕かくる事
なし、又王と申もうすは三字の字を横よこしまに書きて一の字を豎たてさまに立てたり、横
の三字の字は天・地・人なり、豎の一文字は王もんじなり、須弥山しゅみせんと申もうす山の
大地だいちをつきとをして傾かざるが如ごとし、天・地・人を貫くわんきて少しも傾かざ
るを王とは名けたり、王に二つあり一には小王なり人王
天王是これなり二には大王だいおうなり大梵天王是これなり、日本国にほんこくは大王だいおうの如ごとし国
の受領等じゅりやうどうは小王こわうなり、華嚴經けこんきやう・阿含經あこんきやう・方等經ほうとう・般若經はんんにやきやう・大日經だいにちぎやう・
涅槃經ねはんぎやう等の已今当いこんとうの一切經いっさいきやうは小王こわうなり、譬たとへは日本国にほんこく中の國王受領等こくおう
の如ごとし、法華經ほけきやうは大王だいおうなり天子てんしの如ごとし、然しかれば華嚴宗けこんしゆう・真言宗しんごんしゆう等の
諸宗しよしゆうの人人ひとびとは国主こくしゆの内の所從等しよじゆうなり、国国の民の身として天子てんしの徳を
奪うばひ取るは下剋上げこくじやう背上はいじやう向下こうじやう破上下じやうげらん乱等らんどうこれなり、設たといにかに世間せけんを治
めんと思ふ志しありとも国みだも乱れ人も亡

びぬべし、譬たとへば木の根を動さんに枝葉しやう静なるべからず大海たいかいの波あらか
らんに船おだやかなるべきや、華嚴宗・真言宗・念仏宗・律僧・禪僧等
我が身持戒じかい正直しやうじきに智慧ちえいみじく尊しといへども、其その身既すでに下剋上げこくじやうの
家に生れて法華經ほけきやうの大怨敵おんてきとなりぬ、阿鼻大城あびだいじやうを脱のがるべきや、例せば
九十五種きゆうじゆうごしゆの外道げどうの内には正直しやうじき有智うちの人多しといへども、二天三仙じやぼうの
邪法じやほうを承うけしかば終ついには惡道あくどうを脱のがるる事なし。

然るに今の世の南無阿弥陀仏と申す人人、南無妙法蓮華經と申す人を、或は笑ひ、或はあざむく、此れは世間の譬に稗の稻をいとひ家主の田苗を憎む是なり、是国将なき時の盗人なり日の出でざる時の☆なり、夜打強盜の科めなきが如く地中の自在なるが如し、南無妙法蓮華經と申す国将と日輪とにあはば大火の水に消へ☆猴が犬に値うなるべし、当時南無阿弥陀仏の人人南無妙法蓮華經の御声の聞えぬれば、或は色を失ひ、或は眼を瞋らし、或は魂

を滅し、或は五体をふるふ、伝教大師云く日出れば星隠れ巧を見て拙きを知る、竜樹菩薩云く謬辞失い易く邪義扶け難し、徳慧菩薩云く面に死喪の色有り言に哀怨の声を含む、法歳云く昔の義虎今は伏鹿なり等云云、此等の意を以て知ぬべし、妙法蓮華經の徳あらあら申し開くべし、毒藥変じて藥となる妙法蓮華經の五字は惡変じて善と

なる、玉泉と申す泉は石を玉となす此の五字は凡夫を仏となす、されば過去の慈父尊靈は存生に南無妙法蓮華經と唱へしかば即身成仏の人なり、石變じて玉と成るが如し孝養の至極と申し候なり、故に法華經に云く此の我が二りの子已に仏事を作しぬ」又云く此の二りの子は是我が善知識なり」等云云。

乃往過去の世に一の大王あり名を輪陀と申す、此の王は白馬の鳴くを聞きて色もいつくしく力も強く供御を進らせざれども食にあき給ふ他国の敵も胄を脱き掌を合す、又此の白馬鳴く事は白鳥を見て鳴きけり、然るに大王の政や悪しかりけん又過去の惡業や感じけん、白鳥皆失せて一羽もなかりしかば白馬鳴く事なし、白馬鳴かざりければ大王の色も變じ力も衰へ身もかじけ謀も薄くなりし故に国既に乱れぬ、他国よりも兵者せめ来らんに何とかせんに歎きし程に、

だいおう ちよくせん いわ
大王の勅宣に云く国には外道多し皆我が帰依し奉る仏法も亦かくの
ごと し か げどう ぶつぽう
如し、然るに外道と仏法と中惡し何にしても白馬を鳴かせん方を信じ
いっぼう
て一方を我が国に失ふべしと云云、爾の時に一切の外道集りて
うしな
白鳥を現じて白馬を鳴かせんとせしかども白鳥現ずる事なし、昔は雲
はくば
を出だし霧をふらし風を吹かせ波をたて身の上に火を出だし水を現じ
げん
人を馬となし馬を人となし一切自在なりしかども、如何がしけん白鳥
いかん
を現ずる事な
げん

かりき、爾その時に馬鳴菩薩めみょうぼさつと申もうす仏子ぶつしあり十方じゅつぽうの諸仏しよぶつに祈願きがんせしかば白鳥はくばう則出いで来りて白馬はくば則鳴なけり、大王だいおう此こを聞食きこしめし色いろも少し出いで来り力ちからも付きはだへもあざやかなり、又白鳥又白鳥と千せんの白鳥出現しゅつげんして千せんの白馬はくば一時いちじに鶏にわとりの時ときをつくる様に鳴きしかば、大王だいおう此この声を聞食きこしめし色いろは日輪にちりんの如ごとし膚くは月の如ごとし力ちからは那羅延ならえんの如ごとし謀はは梵王ぼんのうの如ごとし、爾その時ときに綸言汗りんげんの如ごとく出いでて返らざれば一切いっさいの外道等げどう其その寺てらを仏寺ぶつてらとなしぬ。

今いま・日本国にほんこく亦またかくの如ごとし、此この国は始めは神代しんよなり漸ようやく代の末すえになる程ほどに人の意曲いせまり貪瞋癡とんじんち・強盛ごうじやうなれば神の智浅ちせんく威いも力ちからも少し、氏子ししこ共ともをも守護しゆごしがたかりしかば漸ようやく仏法ぶつぽうと申もうす大法だいほうを取り渡わたして人の意いも直ただちに神も威勢強いせいかりし程ほどに、仏法ぶつぽうに付き謬あやまり多く出来しゅつたいせし故ゆえに国あやうかりしかば、伝教大師でんぎやうだいし・漢土かんどに渡りて日本にほんと漢土かんどと月氏がつし

との聖教を勘合せて、おろかなるをば捨て賢きをば取り偏頗もなく
勘合給いて、法華經の三部を鎮護國家の三部と定め置きて候しを、弘法
大師・慈覺大師・智証大師と申せし聖人等、或は漢土に事を寄せ、或
は月氏に事を寄せて法華經を、或は第三・第二・或は戲論・或は無明
の辺域等と押し下し給いて、法華經を真言の三部と成さしめて候
いし程に、代漸く下剋上し此の邪義既に一国に弘まる、人多く惡道に
落ちて神の威も漸く滅し氏子をも守護しがたき故に八十一乃至八十五
の五主は、或は西海に沈み、或は四海に捨てられ今生には大鬼となり
後生は無間地獄に落ち給いぬ、然りといえども此の事知れる人なけれ
ば改る事なし、今日蓮此の事をあらあら知る故に國の恩を報ぜんとす
るに日蓮を怨み給ふ。

此等はさて置きぬ氏女の慈父は輪陀王の如し氏女は馬鳴菩薩の如し、

白鳥は法華經の如し白馬は日蓮が如し・南無妙法蓮華經は白馬の鳴く
が如し、大王の聞食して色も盛んに力も強きは、過去の慈父が氏女の
南無妙法蓮華經の御音を聞食して仏に成せ給ふが如し。

弘安三年八月十四日

日蓮

花押

白米一斗・☆荷の子・はじかみ一つと送り給ひ候い畢んぬ。

仏には春の花秋の紅葉・夏の清水・冬の雪を進らせて候人人皆仏に成
らせ給ふ、況や上一人は寿命を持たせ給ひ下万民は珠よりも重くし候
稲米を法華經にまいらせ給う人争か仏に成らざるべき、其の上世間に
人の大事とする事は主君と父母との仰せなり、父母の仰せを背けば
不孝の罪に堕ちて天に捨てられ、国主の仰せを用いざれば違勅の者と
成りて命をめさる、されば我等は過去遠遠劫より菩提をねがひしに、
或は国をすて或は妻子をすて或は
身をすてなんどして、後生菩提をねがひし程にすでに仏になり近づきし

時は、一乗・妙法蓮華經と申す御經に値いまいらせ候いし時は、第六天の魔王と申す三界の主をはします、すでに此のもの仏にならんとするに二の失あり、一には此のもの三界を出ずるならば我が所従の義をはなれなん、二には此のもの仏になるならば此のもの

が父母・兄弟等も又娑婆世界を引き越しなん、いかがせんとして身を種種に分けて、或は父母につき、或は国主につき、或は貴き僧となり、或は惡を勧め、或はおどし、或はすかし、或は高僧・或は大僧・或は智者・或は持斎等に成りて、或は華嚴・或は阿含・或は念仏・或は真言等を以て法華經にすすめかへて、仏になさじとたばかり候なり、法華經第

五

の卷には末法に入りては大鬼神第一には国王・大臣・万民の身に入りて法華經の行者を、或は罵り、或は打ち切りて、それに叶はずんば無量

無^む辺^{へん}の僧^{そう}と現^{げん}じて一切^{いっさい}經^{きやう}を引いてすかすべし、それに叶はずんば二百五十戒^{さんぜん}・三千の威儀^{いぎ}を備へたる大僧と成りて国主^{こくしゅ}をすかし国母をたばらかして、或^{ある}はながし・或^{ある}はころしなどすべしと説かれて候。

又七の卷の不輕品・又四の卷の法師品・或は又二の卷の譬喻品、或
は涅槃經四十卷・或は守護經等に委細に見へ候が、當時の世間に少し
もたがひ候はぬ上、駿河の国賀島の莊は殊に目の前に身にあたらせ給い
て覺へさせ給ひ候らん、他事には似候はず、父母国主等の法華經を御
制止候を用ひ候はねば還つて父母の孝養となり国主の祈りとなり候ぞ、
其の上・日本国はいみじき国にて候神を敬ひ仏を崇むる国なり、而れど
も日蓮が法華經を弘通

し候を上一人より下万民に至るまで御あだみ候故に、一切の神を敬ひ
一切の仏を御供養候へども其の功德還つて大惡となり、やいと還つて
惡瘡となるが如く藥の還つて毒となるが如し、一切の仏神等に祈り
給ふ御祈りは還つて科と成りて此の国既に他国の財と成り候、又大な
る人人皆平家の亡びしが様に百千万億すぎて御歎きたるべきよし、兼て

より人人ひとびとに申し聞きこせ候畢おわんぬ、又法華經ほけきようをあだむ人の科とがにあたる分齊ぶんさいをもつて還かえつて功德くどくとなる

分齊ぶんさいをも知らせ給たまうべし、例せば父母ふぼを殺す人は何いかなる大善根ぜんこんをなせども天是これを受け給たまう事なし、又法華經ほけきようのかたきとなる人をば父母ふぼなれども殺しぬれば大罪還たいざいかえつて大善根ぜんこんとなり候、設たといじゆつぼうさんぜさんぜの諸仏しよぶつの怨敵おんてきなれども法華經ほけきようの一句いっくを信じぬれば諸仏しよぶつ捨たて給たまう事なし、是これを以もつて推すいせさせ給たまへ、御使おんつかいいそぎ候へば委くわしくは申もうさず候、又又申もうすべく候、恐恐きようきよう謹言きんげん。

八月二十二日

日蓮にちれん 花押かおう

◆三二九

孟蘭盆御書

1427p

☆こめ牙一俵やいごめうりなすび等・ぶつぜん仏前にささげ申し上候畢おわんぬ。

うらばん孟蘭盆と申し候事はおんでし仏の御弟子の中にもくれんそんじや目連尊者と申し、しやりほつ舍利弗に

ならびてちえ智慧第一・じんつう神通第一と申し須弥山ににちがつ日月のならび大王に

さう左右の臣のごとくにをはせし人なり、此の人の父をきつせんば吉饑師子と申し

母をしやうだいによば青提女と申す、其の母のけんどん慳貪の科によつてがき餓鬼道に墮おちて候し

をもくれんそんじや目連尊者のすくい給うより事をこりて候、其のいんねん因縁は母はがき餓鬼道に

墮おちてなげき候けれどももくれん目連は凡夫ほんぶなれば知ることなし、ようしやう幼少にして

げどう外道の家に入り四しる陀だ・十八大經

と申すも外道の一切いっけい經をならいつくせども・いまだ其その母の生所をしら

ず、其の後十三のとし舍利弗とともに釈迦仏にまいりて御弟子となり、
見惑をだんじて初果の聖人となり修惑を断じて阿羅漢となりて三明
をそなへ六通を給へり、天眼をひらいて、三千大千世界を明鏡のかけ
のごとく御らむありしかば、大地をみとおし三惡道を見る

事氷の下に候魚を朝日にむかいて我等がとをしみるがごとし、其の中
に餓鬼道と申すところに我が母あり、のむ事なし食うことなし、皮はき
んてうをむしれるがごとく骨はまるき石をならべたるがごとし、頭はま
りのごとく頸はいとのごとし腹は大海のごとし、口をはり手を合せて物
をこへる形は・うへたるひるの人のかを・かけるが
ごとし、先生の子をみて、なканとするすがた・うへたるかたちたとへを
・とるに及ばず、いかながかなしかりけん。

法勝寺の修行舜觀が・いわうの嶋にながされてはだかにてかみくびつ

きにうちをい・やせをとろへて海へんにやすらいてもくづをとりてこしに
まき魚を・みつけて右の手にとり口にかみける時、本つかいしわらわの

たづねゆきて見し時と、目連尊者もくれんそんじやが母を見しといづれかをろかなるべきかれはいますこしかなしさわまさりけん。

目連尊者もくれんそんじやはあまりのかなしさに大神通じんつうをげんじ給ひ・はんをまいらせたりしかば、母よろこびて右の手にははんをにぎり左の手にては・はんをかくして口にをし入れ給たまいしかば、いかんがしたりけんはん変じて火となり・

やがてもへあがり、とうしびをあつめて火をつけたるがごとくばともへあがり、母の身のごことやけ候しを目連見給もくれんたまいて、あまりあわてさわぎ大神通じんつうを現げんじて大なる水をかけ候しかば、其その水たきぎとなりていよいよ母の身のやけ候し事こそあはれには候しが、其そのの時目連もくれんみずからの神通じんつうかなわざりしかばはしりかへり須臾しゅゆに仏

にまいりてなげき申せしやうは、我が身は外道げどうの家に生れて候しが仏の

御弟子になりて阿羅漢の身をへて、三界の生をはなれ三明六通の羅漢
とはなりて候へども、乳母の大苦をすくはんとし候にかへりて大苦にあ
わせて候は、心うしとなげき候しかば、仏け説いて云く汝が母はつみふ
かし汝一人が力及ぶべからず、又何の人なりと

も天神・地神邪魔外道道士四天王・帝釈梵王の力も及ぶべからず、七

月十五日に十方の聖僧をあつめて百味をんじきをととのへて母のくを

はすくうべしと云云、目連仏の仰せのごとく行いしかば其の母は餓鬼道

一劫の苦を脱れ給いきと、盂蘭盆經と申す經にとかれて候、其によつて

滅後末代の人人は七月十五日に此の法を行ひ候なり、此は常のごとし。

日蓮案じて云く目連尊者と申せし人は十界の中に声聞道の人二百

五十戒をかたく持つ事石のごとし、三千の威儀を備えてかけざる事は

十五夜の月のごとし、智慧は日にたり神通は須弥山を十四さうまき

大山をうごかせし人ぞかし、かかる聖人しょうにんだにも重報の乳母の恩ほうじがたし、あまさへほうぜんとせしかば大苦をまし給たまい

き、いまの僧等の二百五十戒は名計なけいりにて事をかいによせて人をたばらかし一分いちぶんの神通じんつうもなし、大石の天にのぼらんとせんがごとし、智慧ちえは牛にるいし羊にことならず、設たい千万人ばんにんをあつめたりとも父母ふぼの一苦すくうべし

や、せんするところは目連尊者もくれんそんじやが乳母の苦をすくわざりし事は、小乗しょうじょう

の法を信じて二百五十戒と申す持斎じさいにてありしゆへぞかし、されば
じようみようきよう

浄名経じやうめいきやうと申す経には浄名居士と申す男目連房もくれんぼうをせめて云く汝を
もう

供養くようする者は三惡道さんあくどうに墮おつ云云、文の心は二百五十戒のたうとき
もくれんそんじや

目連尊者をくやうせん人は三惡道さんあくどうに墮おつべしと云云、此又ただ目連一
もくれん

人

がきくみみにはあらず、一切いっさいの声聞しょうもん乃至末代まつだいの持斎等じさいがきくみみな
じようみようきよう

り、此の浄名経じやうめいきやうと申すは法華経ほけきやうの御ためには數十番の末への郎従ろうじゆうに
もう

て候、證せんするところは目連尊者もくれんそんじやが自身じしんのいまだ仏にならざるゆへぞか
じしん

し、自身じしん仏にならずしては父母ふぼをだにもすくいがたし・いわうや他人たにんを
や。

や。

しかるに目連尊者もくれんそんじやと申す人は法華経ほけきやうと申す経にて正直捨方便しやうじきしやほうべんと
もう

て、小乗しょうじょうの二百五十戒立ちどころになげすてて南無妙法蓮華經なむみょうぼうれんげきやうと申せしかば、やがて仏になりて名号みょうごうをば多摩羅跋梅檀香たまらばせんたんかうぶつ仏もつと申す、此の時こそ父母ふぼも仏になり給たまへ故ゆえに法華經ほけきやうに云く我が願すで既に満ち衆の望またも亦足またる云云、目連もくれんが色身しきしんは父母ふぼの遺体いたいなり目連もくれんが色身しきしん仏になりしかば父母ふぼの身も又仏になりぬ。

例せば日本にほん国八十一代いちだいの安徳天皇てんのうと申せし王の御宇ぎように平氏の大將安芸の守清盛きよもりと申せし人をはしき、度度たびたびの合戦くわつせんに国敵こくてきをほろぼして上かみ太政大臣だいにじんまで官位くわんゐをきわめ当今とうこんはまごとなり、一門いちもんは雲客月卿うんかくげつけいにつらなり、日本にほん六十六国島二を掌たなづての内にかいにぎりて候いしが、人したが順したがうこと大風たいふうの草木そうもくをなびかしたるやうにて候しほどに、心こころを
ごり身あがり結句けつこは神仏をあなづりて神人と諸僧しよそうを手てににぎらむとせしほどに、山僧と七寺との諸僧しよそうのかたきとなりて、結句けつこは去いぬる治承四じしやう

年十二月二十二日に七寺の内の東大寺・興福寺の両寺を焼きはらいて
ありしかば其の大重罪・入道の身にかかりて・かへるとし養和元年潤
二月四日身はすみのごとく面は火のごとくすみのをこれる

がやうにて結句は炎身より出でてあつちじにに死ににき、其の大重罪
をば二男宗盛にゆづりしかば西海に沈むとみへしかども東天に浮び
出でて、右大将頼朝の御前に縄をつけて・ひきすへて候き、三男知盛は
海に入りて魚の

糞となりぬ、四男重衡は其の身に繩をつけて京かまくらを引かれて
結句けつこなら七大寺ななだいじにわたされて、十万人の大衆等我等が仏のかたきなり
とて一刀づつきざみぬ、悪の中の大悪は我が身に其の苦をうくるのみ
ならず子と孫と末へ七代までもかかり候けるなり、善の中の大善も又
又かくのごとし、目蓮尊者が法華經を信じまいらせし大善

は我が身仏になるのみならず父母仏になり給う、上七代下七代上無量
生下無量生の父母等存外に仏となり給う、乃至・子息・夫妻・所従・
檀那・無量の衆生・三惡道をはなるるのみならず皆初住・妙覺の仏と
なりぬ、故に法華經の第三に云く願くは此の功德を以て普く一切に及
ぼし我等と衆生と皆共に仏道を成ぜん」云云。

されば此等をもつて思うに貴女は治部殿と申す孫を僧にてもち給へ
り、此僧は無戒なり無智なり二百五十戒一戒も持つことなし三千の威

義一も持たず、智慧は牛馬に在るいし威儀は猿猴に在て候へども、あをぐ
ところは釈迦仏信ずる法は法華經なり、例せば・の珠をにぎり竜の舍利
を戴くがごとし、藤は松にかかりて千尋をよぢ鶴は

羽を待みて万里をかける此は自身の力にはあらず、治部房も又かくの
ごとし、我が身は藤のごとくなれども法華經の松にかかりて妙覺の山
にものぼりなん、一乗の羽をたのみて寂光の空にもかけりぬべし、此の
羽をもつて

父母・祖父・祖母乃至七代の末までもとぶらうべき僧なり、あわれ・いみ
じき御たからは・もたせ給いてをはします女人かな、彼の竜女は珠をさ
さげて仏となり給ふ、此女人は孫を法華經の行者となして・みちびか
れさせ給うべし、事事そうそうにて候へば・くはしくは申さず、又又
申すべく候、恐恐。

七月十三日 日蓮^{にちれん}花押^{かおう}

治部殿うばごぜん御返事^{ごへんじ}

◆三三〇

浄蓮房御書^{ごしよ}

建治元年六月^{がんねん}

五十

四歳御作

1431P

細美^{かたひら}帷^{かたひら} 一つ送り給ひ候い畢^{おわ}んぬ、善導^{ぜんどう}和尚^{わじょう}と申^{もう}す人は漢土^{かんど}に臨^{りん}☆
と申^{もう}す国^{こく}の人なり、幼少^{ようしょう}の時・密州^{みくしゅう}と申^{もう}す国^{こく}の明勝^{めいしょう}と申^{もう}す人を師と
せしが・彼の僧^{そう}は法華^{ほけ}經^{きやう}と 浄名^{じやうみ}經^{きやう}を尊重^{そんぢやう}して我も読誦^{どくじゆ}し人をもす
すめしかば善導^{ぜんどう}に此^これを教^{しやう}ゆ、善導^{ぜんどう}此^これを習^{なら}いて師^しの如^{ごと}く行^{ぎやう}ぜし程^{ほど}に
過^か去^この宿習^{しゆくじゆう}にや有^ありけん、案^いじて云^いく仏法^{ぶつぽう}には無量^{むりやう}の行^{ぎやう}あり機^きに随^{したが}い
て皆^{みな}利益^{りやく}あり・教^{なら}いみじと・いへども機^きにあたらざれば虚^こきがごとし、さ
れば我^{われ}法華^{ほけ}經^{きやう}を行^{ほけ}ずるは我^{われ}が機^き
に叶^あはずは・い^あかんが有^あるべかるらん、教^{きやう}には依^よるべからずと思^{おも}いて

一切経蔵に入り

両眼を閉ぢて

經をとる觀無量壽經を得たり、披見す

れば此の經に云く

未來世の煩惱の賊に害せらるる者の為

清淨の業を

説く」等云云、華嚴經は二乗のため

法華經・涅槃經等は五乗に・わたれ

ども・たいしは聖人のためなり、末法の我等が為なる經は

ただ観經にかぎれり、釈尊最後の遺言には涅槃經にはすぐべからず、彼

唯觀經にかぎれり、

釈尊最後の遺言には涅槃經にはすぐべからず、彼

の經には七種の衆生を列ねたり、第一は入水則没の一闍提人なり生死

の水に入りしより已來いまに出でず譬へは大石を大海に投入たるがごと

し、身重くして浮ぶことを習はず常に海底に有り此れを常没と名く、

第二をば出已復没と申す譬へは身に力有りとも浮ぶこ

とをならはざれば出で已つて復入りぬ此れは第一の一闍提の人には有

らねども一闍提のごとし又常没と名く、第三は出已不没と申す・生死

の河を出でてより・このかた没することなし、此れは舍利弗等の声聞な

り、第四は出已そく即住第五は觀方・第六は淺処・第七は到彼岸ひがん等なり、第
四・第五・第六・第七は緣覺・菩薩なり、釈迦しゃか如来世に出でさ
せ給たまいて一代五時の經經きやうぎやうを説き給たまいて第三・已上の人人ひとびとを救い給たまい
畢おわんぬ、第一だいいちは捨てさせ給たまいぬ、法藏比丘阿彌陀仏此れをうけとつて
・四十八願を発おこして迎むかえとらせ給たまう、十方三世の仏と釈迦しゃか仏とは第三
已上いっさいしじやうの一切衆生

を救い給う、あみだ仏は第一第二を迎えとらせ給う、而るに今末代の
凡夫は第一第二に相当れり、而るを淨影大師・天台大師等の他宗の
人師は此の事を弁えずして九品の淨土に聖人も生ると思へり☆りが
中の☆りなり、一向末代の凡夫の中に上三品は遇大始めて大乘に値
える凡夫、中の三品は遇小始めて小乘に値へる凡夫、下の三品は
遇惡一生造惡無間非法の荒凡夫、臨終の時・始めて上の七種の衆生を
弁えたる智人に行きあひて岸の上の經經を
うちすてて水に溺るるの機を救はせ給う、觀經の下品下生の大惡業に
南無阿彌陀仏を授けたり、されば我れ一切經を見るに法華經等は末代
の機には千中無一なり、第一第二の我等衆生は第三已上の機の為に説
かれて候、法華經等を末代に修行すれば身は苦しんで益なしと申して
善導和尚は立所に法華經を抛げすてて觀經を行ぜしかば三昧発得し

て阿弥陀仏に見参して重ねて此の法門を渡し給う四帖の疏是なり、導
の云く然るに諸仏の大悲は

苦なる者に於て心偏に常没の衆生を愍念す是を以て勧めて浄土に帰
せしむ亦水に溺るる人の如く急に須く偏に救うべし岸上の者何ぞ用い
て済うことを為さん」と云云、又云く深心と言えは即ち是れ深信の
心なり、亦二種有り、一には決定して自身は現に是れ罪惡生死の凡夫
なり曠劫より已来常に没し常に流転して出離の縁有ること

無しと深信す」又云く「二には決定して彼の阿弥陀仏の四十八願は
衆生を摂受したもうこと疑無く慮り無く彼の願力に乗ずれば定め
て往生を得ると深信す」云云、此の釈の心は上にかき顕して候。
浄土宗の肝心と申すは此れなり、我等末代の凡夫は涅槃經の第一・第
二なり、さる時に釈迦仏の教には出離の縁有ること無し、法蔵比丘の

本願にては「定得往生と知るを三心の中の深心とは申すなり」等云

云、此又導和尚の私儀には非ず、緯禪師と

申せし人の涅槃經を二十四反かうぜしが曇鸞法師の碑の文を見て立所

に涅槃經を捨てて觀經に遷りて後此の法門を導には教えて候なり、鸞

法師と申せし人は斉の代の人なり漢土にては時に独歩の人なり、初に

は四論と涅槃經とをかうぜしが菩提流支と申す三蔵に値いて四論と

涅槃經を捨て觀經に遷りて往生をとげし人なり、三代が間

伝え候ほうもん法門はつしゅうなり、漢土かんど・日本にほんには八宗はつしゅうを習ならう智人ちじんも正法しょうぼうすでに過すぎて像法ざうぼうに入りしかば・かしこき人人ひとびとは皆みな自宗じしゅうを捨てて浄土じょうどの念仏ねんぶつに遷うつりし事こと此こなり、日本国にほんこくのいろはは天台山てんだいの慧心えしんの往生おうじょう要集ようしゅう此こなり、三論さんろんの永觀ようかんが十因じゅういん・往生講おうじょうこうの式しき・此等これらは皆みな此この法門ほうもんをうかがい得ひとびとたる人人ひとびとなり、法然上人ほうねんしょうにんも亦爾またしかなり云云。

日蓮にちれん云いひく此この義ぎを存ひとびとずる人人ひとびと等らも但恒河じやうがの第一だいいち第二だいいちは一向浄土いっしやうじやうどの機きと云云、此これ此この法門ほうもんの肝要かんようか、日蓮にちれん・涅槃經ねはんぎやうの三十二と三十六を開ひらき見るに第一だいいちは誹謗正法ひぼうしやうぼうの一闡いつせん提常没だいじやうぼつの大魚だいぎやうと名なけたり、第二だいいちは又常没じやうぼつ其その第二だいいちの人ひとを出ださば提婆達多だいばだつた・瞿伽梨くぎやり・善星ぜんしやう等らなり、此これは誹謗五逆ひぼうごぎやくの人人ひとびとなり、詮せんする所だいいち第一だいいち第二だいいちは謗法ぼうぼうと五逆ごぎやくなり、法蔵ほうぞう比丘ひくの設たといわれほとけしやうかくを得えんに十方衆生じふつぱうしゆじやう至心しんぎやうに信樂しんぎやうして我が国こくに生なれんと欲ほし乃至十念ないしして若もし生なぜずんば正覺しょうかく

を取らじ唯五逆と誹謗正法とを除く」云云、此の願の如きんば法蔵
比丘は恒河の第一第二を捨ててこそ候いぬれ、導和尚の如くならば
末代の凡夫阿弥陀仏の本願には千中無一なり、法華經の結經たる普賢
經には五逆と誹謗正法は一乗の機と定め給いたり、されば末代の凡夫
の爲には法華經は十即十生・百即百生なり、善導和尚が

義に付いて申す證は私案にはあらず阿弥陀仏は無上念王たりし時
娑婆世界は已にすて給いぬ、釈迦如来は宝海梵志として此の忍土を取
り給い畢んぬ、十方の淨土には誹謗正法と五逆と一闡提とをば迎う
べからずと阿弥陀仏・十方の仏誓い給いき、宝海梵志の願に云く即ち
十方淨土の擯出の衆生を集めて我当に之を度すべし」云云、法華經に
云く唯我一人のみ能く救護を為す」等云云。

唯我一人の經文は堅きやうに候へども釈迦如来の自義にはあらず、

阿弥陀仏等の諸仏・我と娑婆世界を捨てしかば教主釈尊・唯我一人と
誓つてすでに娑婆世界に出で給いぬる上はなにをか疑い候べき・鸞・
綽・導・心・觀・然等の六人の人人は智者なり日蓮は愚者なり非学生な
り、但し上の六人は何れの国の人ぞ三界の外の人か六道の外の人か、
阿弥陀仏に値い奉りて出家受戒して沙門となりたる僧か、今の人人は
将門・純友・清盛・義朝等には種性

も及およばず威徳いとくも足らず、心のがうさは申もうすばかりなけれども朝敵ちやうてきとなりぬれば其その人ならざる人人ひとびとも将門しやもんか純友じゆんかと舌にうちからみて申せども・彼しの子孫しそん等も・とがめず、義朝よしともなんど申もうすは故右大将家の慈父ちちぎみなり、子を敬よしともいまいらせば父をこそ敬よしともいまらせ候べきに・いかなる人人ひとびとも義朝よしとも為朝もうなんど申もうすぞ、此これ則王法の重しげく逆臣ぎやくしんの罪つみのむくるなり、上の六人も又かくのごとし、釈迦しやかに如来世に出でさせ給たまいて一代いちだいの聖教しやうきやうを説ときをかせ給たまう、五十年の説法せつぽうを我と集めて浅深せんじん勝劣しょうれつ虚妄しやうむつ眞実しんじつを定めて四十余年は未だ眞実しんじつを顕あらわさず已今当第一等と説たまかせ給たまいしかば多宝たぼう・十方じゆつぽうの仏眞実しんじつなりと加判かはんせさせ給たまいて定めをかれて候を・彼の六人は未顕みけん眞実しんじつの觀經くわんきやうに依りて皆是みなこれ眞実しんじつの法華經ほけきやうを第一第二の惡人あくにんの為ためにはあらずと申もうさば・今の人人ひとびとは彼かしこにすかされて數年を経たるゆへに・將門・純友等が所從しよじゆう等彼を用いざり

し百姓等を・或は切り・或は打ちなんどせしがごとし、彼をおそれて従
いし男女は官軍に・せめられて彼の人人と一時に水火のせめに値いしな
り。

今・日本国の一切の諸仏・菩薩・一切の経を信ずるやうなれども・心
は彼の六人の心なり身は又彼の六人の家人なり、彼の将門等は官軍の
向はざりし時は大将の所従知行の地且らく安穩なりしやうなりしか
ども違勅の責め近づきしかば、所は修羅道となり男子は厨者の魚をほ
ふるがごとし、炎に入り水に入りしなり、今・日本国も又かく

のごとし、彼の六人が僻見に依って今生には守護の善神に放されて
三災・七難の国となり後生には一業所感の衆生なれば阿鼻大城の炎に
入るべし、法華経の第五の巻に末代の法華経の強敵を仏記し置き給え
るは如六通羅漢と云云、上の六人は尊貴なること六通を現ずる羅漢の

如し。

然るに淨蓮上人の親父は彼等の人人の御檀那なり、仏教実ならば
無間・大城疑いなし、又君の心を演ぶるは臣・親の苦をやすむるは子
なり、目☆尊者は悲母の餓鬼の苦を救い淨蔵・淨眼は慈父の邪見を
翻し給いき、父母の遺体は子の色心なり、淨蓮上人の法華經を持ち
給う御功德は慈父の御力なり、提婆達多是阿鼻地獄に墮ちしかども

天王てんのう如来によらいの記を送り給たまいき彼は仏だと提婆たいばと同性一家なる故なり、此これは又慈父じふなり子息しそくなり、淨蓮じやうれん上人しやうにんの所持しよじの法華經ほけきやういかで彼の故しやうりやう聖靈しやうりやうの功德くどくとならざるべき、事多しと申せども止とどめ畢おわんぬ三反人さんべんに、よませてききこしめせ、恐恐きやうきやう謹言きんげん。

六月二十七日

日蓮にちれん 花押かお

返す返すするがの人人ひとびとみな同じ御心もうと申させ給たまい候へ。

◆三三三

新池殿御消息しんちそうそく

弘安二年五月こうあん

五十八歳御作

1435p

八木三石送り給たまい候、今一乗いちじやう・妙法蓮華經みやうほうれんげきやうの御宝前ほうぜんに備たてまつ奉りて

南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようと只一遍ただいっぺん唱えまいらせ候い畢おわんぬ、いとをしみの御子を靈山淨土りようぜんじょうどへ決定無有疑けつじようむうぎと送りまいらせんがためなり。

抑そもそも因果いんがのことはりは華と果との如ごとし、千里の野の枯かられたる草に螢火ほたるび

の如ごとくなる火を一つ付けぬれば須臾しゆゆに一草・二草・十・百・千萬草につき

わたりてもゆれば十町・二十町の草木そうもく・一時いちじにやけつきぬ、竜は一しずく☆の

水を手に入れて天に昇りぬれば三千世界さんぜんせかいに雨をふらし候、小善しょうぜんなれど

も法華經ほけきように供養くようしまいらせ給たまいぬれば功德くどく此この如ごとし、

仏滅後ぶつめつ・一百年と申せしに月氏国がつしに阿育大王あそかだいおうと申せし王ましましき・

一閻浮提えんぶだい・八万四千の国を四分が一御知行ちぎようありき、竜王りゅうおうをしたがへ

鬼神きじんを召し仕はせ給たまう、六万の羅漢よろずを師として八万四千の石塔はちまんを立て

十萬億の金を仏に供養くようし奉らんと誓はせ給たまいき、かかる大王だいおうにてをはせ

し其その因位いんいの功德くどくをたづぬればただ土の餅一・釈迦仏しゃかぶつに供養くよう

し奉りし故ぞかし、釈迦仏の伯父に斛飯王と申す王をはします、彼の
王に太子あり阿那律となづく此の太子生れ給いに御器一つ持ち出で
たり、彼の御器に飯あり食すれば又出でき又出でき終に飯つくる事な
し、故にかの

太子たいしのをさな名をば如意にょいとなづけたり、法華經ほけきょうにて仏に成り給ふ普明ふみょう如來にょらい是なり、此の太子たいしの因位いんいを尋ぬればうへたる世にひえの飯を辟支仏ひやくしぶつと申す僧に供養くようせし故ぞかし、辟支仏ひやくしぶつを供養する功德くどくすら此かくの如し、況や法華經ほけきょうの行者ぎやうじやを供養くようせん功德くどくは無量無辺むりやうむへんの仏を供養くようし進まいらする功德くどくにも勝すぐれて候なり。

抑そも日蓮にちれんは日本にほんの者なり、此の国は南閻浮提えんぶだい七千由旬しちせんゆじゆんの内に八万

四千の国あり、十六の大国たいこく・五百の中国ちゆうこく・十千の小国しょうこく・無量の粟散むりやうむくさん国あり、其その中に月氏国がつしと申す国は大国たいこくなり、彼の国に五天竺てんじくあり、其それより東海の中に小島あり日本にほん是なり、中天竺てんじくよりは十万余里の東なり、仏教ぶつぎょうは仏滅度後正法ぶつめつごししょうほう一千年が間は天竺てんじくにとどまりて余国

にわたらず、正法しょうほう一千年の末像法まうぼうに入つて一十五年と申せしに漢土かんどへ渡る、漢土かんどに三百年すぎて百濟国くだらに渡る、百濟国くだらに一百年已上一千四

百十五年と申せしに・人王三十代・欽明天皇の御代に日本国に始めて
釈迦仏の金銅の像

と一切経は渡りて候いき、今七百余年に及び候、其の間・一切経は五千

余卷・或は七千余卷なり、宗は八宗・九宗・十宗なり、国は六十六箇

国・二つの島・神は三千余社・仏は一万余寺なり、男女よりも僧尼は半

分に及び、仏法の繁昌は漢土にも勝れ天竺にもまされり。

但し仏法に入つて諍論あり、浄土宗の人人は阿弥陀仏を本尊とし・

真言の人人は大日如来を本尊とす・禪宗の人人は経と仏とをば闡いて

達磨を本尊とす、余宗の人人は念仏者・真言等に随へられ何れともな

けれども・つよきに随ひ多分に押されて阿弥陀仏を本尊とせり、現在の

主師親たる釈迦仏を闡きて他人たる阿弥陀仏の十万億の他

国へにげ行くべきよしをねがはせ給ひ候、阿弥陀仏は親ならず主ならず

師ならず、されば一經いっきやうの内・虚言そらごとの四十八願を立て給たまいたりしを愚おろかな
る人ひと人実ひとと思ひて物狂はしく金拍子かねばうしをたたきおどりはねて念仏ねんぶつを申もうし
親の国をば

いとひ出いでぬ、来迎らいじやうせんと約束やくそくせし阿弥陀仏あみだぶつの約束やくそくの人ひとは来らず中有ちゆうう
のたびの空に迷まよひて謗法ぼうぼうの業にひかれて三惡道さんあくどうと申もうす獄屋ごくへおもむけば
獄卒ごくそつ・阿防あぼう・羅刹らせつ悦よろこびをなし・とらへからめてさひなむ事限りなし、こ
れをあらあ

きようもん

まか

にほんこく

なんよ

ら經文に任せてかたり申せば日本国の男女四十九億九万四千八百二

十八人ましますが某一人を不思議なる者に思いて余の四十九億九万

四千八百二十七人は皆敵と成りて、主師親の釈尊をもちひぬだに

不思議なるに、かへりて、或はのり、或はうち、或は処を追ひ、或は譏言

して流罪し死罪に行はるれば、貧なる者は富めるをへつらひ賤き者は

貴きを仰ぎ無勢は多勢にしたがう事なれば、適法華經を信ずる様な

る人人も世間をはばかり人を恐れて多分

は地獄墮つる事不便なり、但し日蓮が愚眼にてやあるらん又宿習に

てや候らん法華經最第一已今当說難信難解唯我一人能為救護と説か

れて候文は如来の金言なり敢て私の言にはあらず、当世の人は人師の

言を如来の金言と打ち思ひ、或法華經に肩を並べて斉しと思ひ、或は

勝れたり、或は劣るなれども機にかなへりと思へり、し

かるに如来にょらいの聖教しょうきょうに随他意ずいたい随自意ずいじいと申もうす事あり、譬たとえば子の心に親おやの随したがうをば随他意ずいたいと申もうす親の心に子の随したがうをば随自意ずいじいと申もうす、諸経しよきやうは随他意ずいたいなり仏ぶつ・一切衆生いっさいしよじやうの心に随したがひ給たまふ故ゆえに、法華經ほけきやうは随自意ずいじいなり一切衆生いっさいしよじやうを仏の心に随したがへたり、諸経しよきやうは仏説ぶつせつなれども是これを信しんずれば衆生しよじやうの心にて永く仏にならず、法華經ほけきやうは仏説ぶつせつなり仏智ぶつちなり一字一点

も是これを深く信しんずれば我が身み即すく仏となる、譬たとえば白紙を墨に染そむれば黒くなり黒漆うろしに白き物を入いるれば白いくなるが如ごとし毒藥どくやく變へんじて藥やくとなり衆生しよじやう變へんじて仏となる故ゆえに妙法みやうほうと申もうす、然しかるに今の人人ひとびとは高たかきも賤いやしきも現在げんざいの父ちちたる釈迦しゃか仏ぶつをばかろしめて他人たにんの縁えんなき阿彌陀あみだ・大日等だいにちを重たてんじ奉たてまつるは是これ不孝ふこうの失とがにあらずや是これ謗法ほうぼうの人ひとにあらず

や、と申せば日本にほん国こくの人ひと・一同いどうに怨あだませ給たまうなり、其それもことはりなりまがれる木きはすなをなる繩なはをにくみいつはれる者ものはただしき政まつりごとを

ば心にあはず思うなり。

我が朝人王九十一代いちだいの間に謀叛むほんの人人ひとびとは二十六人なり、所謂いわず大山の
王子みこ・大石の丸なにし・乃至將門なにしすみとも悪左府等なり、此等これらの人人ひとびとは吉
野とつ河の山林さんりんにこもり筑紫・鎮西の海中かいちゅうに隠るれば・島島のえびす
浦浦のもののふどもうたんとす、然れどもそれは貴き聖人とうと・山山・寺寺
・社社の法師ほっし・尼女人にょにんはいたう敵と思ふ事なし、日蓮にちれんをば

上下じやうげの男女なんよ・尼ほつし・法師とうと貴きき聖人しようにんなんと伝ひとびとはるる人人こごは殊ことに敵てきとなり候、
其そのの故ゆえはいづれも後生ごしやうをば願ねがへども男女なんよよりは僧尼そうにこそ願ねがふ由よしはみえ候
へ彼等かれらは往生おうじやうはさてをきぬ今生こんじやうの世よをわたるなかだちとなる故ゆゑなり、
智者ちしや聖人しようにん又我われ好我勝かうしやうたりと申もうし本師ほんしの跡あとと申もうし・所領しよりやうと申もうし・名聞みやうもん
利養りやうを重しげくして・まめやかに道心どうしんは輕かろし、仏法ぶつぽうはひがさま
に心得こころえて愚癡ぐちの人ひとなり、謗法ぼうぽうの人ひとなりと言ことをも惜おしまず人をも憚はばからず、
当知ぶつぽう是人ちゆうおん、仏法ふつぽう中怨ちゆうおんの金言きんげんを恐おそれて我是せそん世尊せそん使し衆無しゆむ所畏しゆふと云いう文
に任まかせていたくせむる間・未得みとく謂い為得がまん・我慢がまん心しん充満じゆうまんの人人ひとひと争いかにくみ
嫉やまざらんや。

されば日蓮にちれん程てんじん天神てんじん七代ちちだい・地神ちじん五代ごだい・人王じんわう九十くじゅう余代いにいまだ此これ程
法華ほけき經きやうの故ゆゑに三類さんるいの敵人てきじんにあだまれたる者ものなきなり、かかる上下じやうげ万人ばんにん・
一同いつどうのにくまれ者ものにて候こに此これまで御渡わたり候こいし事ことおぼろげの縁ゆかりには

あらず宿世すくせの父母ふぼか昔きようだいの兄弟きやうだいにて・おはしける故ゆえに思い付かせ給たまうか、
又過去かこに法華經ほけきやうの縁深このたびくして今度このたび仏ほとけにならせ給たまうべきたねの熟せるか
の故ゆえに在俗ざいぞくの身みとして世間せけんひまなき人の公事くじのひまに思い出ださせ給たまい
けるやらん。

其その上遠江その国より甲州波木井はきりの郷身延山はきりは道三百余里に及べり、
宿宿のいぶせさ嶺に昇れば日月をいただき・谷へ下れば穴へ入るか
覚おぼゆ、河の水は矢を射るが如ごとく早し大石ながれて人馬むかひ難がたし、船
あやうくして紙を水にひたせるが如ごとくし、男は山かつ女は山母の如ごとく、道
は繩この如ごとくほそく・木は草の如ごとくしげし、かかる所へ
尋たずね入らせ給たまいて候事・何いかなる宿習しゆくじゆうなるらん、釈迦しやくか仏は御手みてを引き
帝釈たいしやくは馬となり梵王ぼんのうは身に随したがひ日月は眼まなことなりかはらせ給たまいて入らせ
給たまいけるにや、ありがたしありがたし、事多しと申せども此の程風おこ

りて身苦しく候間留め候い畢んぬ。

弘安二年己卯五月二日

日蓮花押

新池殿御返事

◆三三三二

新池御書^{ごしよ}

弘安三年二月^{こうあん} 五十九歳御作

1439p

うれしきかな末法^{まつぽう}流布^{るふ}に生れあへる我等^{われら}かなしきかな今度^{このたび}此の経を
 信ぜざる人人^{ひとびと}、抑^{そもそも}人界^{にんかい}に生を受くるもの誰か無常^{むじよう}を免れん、さあら
 んに取つては何ぞ後世^{なんごしやう}のつとめをいたさざらんや、倩^{つらつら}世間^{せけん}の体を観ず
 れば人皆口^{みな}には此の経を信じ手には経巻^{きやうかん}をにぎるといへども経の心に
 そむく間惡道^{あくどう}を免れ難し、譬^{たと}えば人に皆五臟^{みな}あり一臟も損ずれば其^その
 臟より病出て来て余の臟を破り終に命を失うが如し、爰^{ここを}を以て伝教^{でんぎやう}
 大師^{だいし}は法華^{ほけきやう}經を讃^{さん}すと雖^{いえど}も
 還^{かえ}つて法華^{ほけ}の心を死す」等云云、文の心は法華^{ほけきやう}經を持ち讀み奉^{たてまつ}り讃^ほむ

れども法華の心に背きぬれば還つて釈尊・十方の諸仏を殺すに成りぬ
と申す意なり、終に世間の惡業衆罪は須弥の如くなれども此の經にあ
ひ奉りぬれば・諸罪は霜露の如くに法華經の日輪に値い奉りて消ゆべ
し、然れども此の經の十四謗法の中に一も二もをかしぬれば
其の罪消えがたし、所以は何ん一大三千界のあらゆる有情を殺したり
とも争か一仏を殺す罪に及ばんや、法華の心に背きぬれば十方の仏の
命を失ふ罪なり、此のをきてに背くを謗法の者とは申すなり、地獄お
そるべし炎を以て家とす、餓鬼悲むべし飢渴にうへて子を食ふ、修羅は
鬪諍なり畜生は殘害とて互に殺しあふ、紅蓮地獄と申す
はくれなるのはちすとよむ、其の故は余りに寒につめられてこごむ間せ
なかわれて肉の出でたるが紅の蓮に似たるなり、況や大紅蓮をや、かか
る惡所にゆけば王位將軍も物ならず獄卒の呵責にあへる姿は猿をまは

すに異ならず、此の時は争か名聞名利・我慢偏執有るべきや。

思食すべし法華經をしれる僧を不思議の志にて一度も供養しなば

悪道に行くべからず、何に況や十度・二十度乃至五年・十年・一期生

の間供養せる功德をば仏の智慧にても知りがたし、此の經の行者を

一度供養する功德は釈迦仏を直ちに八十億劫が間無量の宝を尽して

供養せる功德に百千万億勝れたりと仏は説かせ給いて候、此の經にあ

ひ奉りぬれば悦び身に余り左右の眼に涙浮びて釈尊の御恩報じ尽し

がたし、かやうに此の山まで度度の御供養は法華經並に釈迦尊の御恩

を報じ給うに成るべく候、弥はげませ給うべし解ることなかれ、皆人

の此の經を信じ始むる時は信心有る様に見え候が中程は信心もよはく

僧をも恭敬せず供養をもなさず自慢して惡見をな

す、これ恐るべし恐るべし、始より終りまで弥信心をいたすべしさなく

して後悔こうかいやあらんずらん、譬たとえば鎌倉かまくらより京へは十二日の道なり、それを十一日余り歩をはこびて今日に成りて歩をさしをきては何として都の月をば詠ながめ候べき、何としても此の経の心をしれる僧に近づきいよいよ弥法の道理どうりを聴聞ちやうもんして信心しんじんの歩を運ぶべし。

噫す過ぎし方の程なきを以て知んぬ我等われらが命今幾程もなき事を春の朝に花をながめし時ともなひ遊びし人は花と共に無常むじやうの嵐に散りはてて名のみ残りて其その人はなし花は散りぬといへども又こん春も発ひらくべしされども消えにし人は亦またいかならん世にか来るべき秋の暮に月を詠ながめし時戯れむつびし人も月と共に有う為いの雲に入りて後面影ばかり身にそひて物いふことなし月は西山にしやまに入るといへども亦またこん秋も詠ながむべし然しかれどもかくれし人は今いづくに

か住みぬらんおぼつかなし無常むじやうの虎のなく音は耳にちかづくといへども

聞いて驚くことなし屠所の羊の今幾日か無常の道を歩まん雪山の寒苦
鳥は寒苦に・せめられて夜明なば栖つくらんと鳴くといへども日出でぬ
れば朝日のあたたかなるに眠り忘れて又栖をつくらずして一生虚く鳴
くことをう一切衆生も亦復是くの如し地獄に堕ちて炎に
むせぶ時は願くは今度人間に生れて諸事を閑ひて三宝を供養し後世
菩提をたすからんと願へどもたまたま人間に来る時は名聞名利の風は
げしく仏道修行の灯は消えやすし、無益の事には財宝をつくすにおし
からず、仏法僧にすこしの供養をなすには是をものうく思ふ事これた
だごとにあらず、地獄の使のきをふものなり寸善尺魔と申すは是なり、
其の上此の国は謗法の土なれば守護の善神は法味にうへて社をすて天に
上り給へば社には悪鬼入り

かはりて多くの人を導く、仏陀化をやめて寂光土へ歸り給へば堂塔寺社は徒に魔縁の栖と成りぬ、国の費民の歎きにいらかを並べたる計りなり、是れ私の言にあらざる經文にこれあり習ふべし。

諸仏も諸神も謗法の供養をば全く請け取り給はず況や人間としてこれをうくべきや、春日大明神の御託宣に云く飯に銅の炎をば食すとも心穢れたる人の物をうけじ、座に銅の焰には坐すとも心汚れたる人の家にはいたらじ、草の廊・萱の軒にはいたるべしと云へり、縦令千日のしめを引くとも不信の所には至らじ、重服深厚の家なりとも有信の所には至るべし云云、是くの如く善神は此の謗法の国をばなげきて天に上らせ給いて候、心けがれたると申すは法華經を持たざる人の事なり、此の經の五の巻に見えたり、謗法の供養をば銅焰とこそおほせられたれ、神だにも是くの如し況や我等凡夫としてほむらをば食すべしや、人の子

として我が親を殺したらんものの我に物をえさせんに是を取るべきや、
いかなる智者聖人も無間地獄を遁るべからず、又それにも近づくべか
らず

与同罪恐るべし恐るべし。

釈尊は一切の諸仏・一切の諸神人天大会一切衆生の父なり主なり

師なり、此の釈尊を殺したらんに争か諸天善神等うれしく思食すべ

き、今此の国の一切の諸人は皆釈尊の御敵なり、在家の俗男・俗女等

よりも邪智心の法師ばらは殊の外の御敵なり、智慧に於ても正智あり

邪智あり智慧ありとも其の邪義には随ふべからず、貴僧・高僧

には依るべからず、賤き者なりとも此の経の謂れを知りたらんものをば

生身の如来のごとくに礼拝供養すべし是れ経文なり、されば伝教

大師は無智破戒の男女等も此の経を信ぜん者は小乗二百五十戒の僧

の上に座席ざせきに居すえよ末座まつざすべからず況や大乘だいじよう此の経の僧をやとあそばされたり、今生身こんじしようの如来にょらいの如ごとくにみえたる極楽寺ごくらくじの良觀房りようかんより

も此の経を信じたる男女なんよは座席ざせきを高く居すめることこそ候へ彼の二百五十戒りようかんの良觀房にちれんも日蓮にちれんに会いぬれば腹をたて眼まなこをいからす是ただごとにはあらず、智者ちしやの身に魔の入りかはればなり、譬たとえば本性よき人なれども酒に酔い

ぬればあしき心出来し人の為にあしきが如し、仏は法華以前の迦葉・
舍利弗・目連等をば是を供養せん者は三惡道に墮つべし、彼が心は
犬野干の心には劣れりと説き給いて候なり、彼の四大声聞等は二百五
十戒を持つことは金剛の如し・三千の威儀具足する事は十五夜の月の
如くなりしかども・法華經を持たざる時は是くの如く仰せられたり、
何に況やそれに劣れる今時の者共をや。

建長寺・円覺寺の僧共の作法戒文を破る事は大山の頽れたるが如く
・威儀の放埒なることは猿に似たり、是を供養して後世を助からんと思
ふは・はかなし・はかなし、守護の善神此の国を捨つる事疑あることな
し、昔釈尊の御前にして諸天善神・菩薩・声聞・異口同音に誓をたて
させ給いて若し法華經の御敵の国あらば・或は六月に霜霰と成りて国
を飢饉せさせんと申し、或は小虫と成りて五穀をはみ失はんと申し、

・或は旱魃をなさん・或は大水と成り

て田園をながさんと申し、或は大風と成りて人民を吹き殺さんと

申し、或は悪鬼と成りてなやまさんと面面に申させ給ふ、今の八幡大

菩薩も其の座におはせしなり争か靈山の起請の破るるをおそれ給はざ

らん、起請を破らせ給はば無間地獄は疑なき者なり恐れ給うべし恐

れ給うべし、今までは正く仏の御使出世して此の経を弘めず国主もあ

ながちに御敵にはならせ給はず但いづれも貴しとのみ思ふ計りなり。

今某仏の御使として此の経を弘むるに依りて上一人より下万民に

至るまで皆謗法と成り畢んぬ、今までは此の国の者ども法華經の御敵

にはなさじと一子のあひにくの如く捨てかねて・おはせども・靈山の

起請のおそろしさに社を焼き払いて天に上らせ給いぬ、さはあれども

身命をおしまぬ法華經の行者あれば其の頭には住むべし、天照太神・

八幡大菩薩・天に上らせ給はば其の余の諸神争か社に留るべき、縦ひ捨てじと思食すとも靈山のやくそ

くのままに某呵責し奉らば一日もやはか・おはすべき、譬えば盗人の候に知れぬ時は・かしこやここに住み候へども能く案内知りたる者の是こそ盗人ののしりどめけば・おもはぬ外に栖を去るが如く、某にささへられて社を

ば捨て給ふ、然るに此の国思いの外に悪鬼神の住家となれり哀なり
哀なり。

又一代聖教を弘むる人多くおはせども是れ程の大事の法門をば
伝教天台もいまだ仰せられず、其も道理なり末法の始の五百年に
上行菩薩の出世あつて弘め給ふべき法門なるが故なり、相構へていかに
しても此の度此の経を能く信じて命終の時千仏の迎いに預り靈山
浄土に走りまいり自受法樂すべし、信心弱くして成仏ののびん時・
某をうらみさせ給ふな、譬えば病者に良薬を与ふるに毒を好んでく
ひぬれば其の病愈えがたき時・我がとがとは思はず還つて医師を恨むる
が如くなるべし、此の経の信心と申すは少しも私なく経文の如くに人
の言を用ひず法華一部に背く事無ければ仏に成り候ぞ、仏に成り候事
は別の様は候はず、南無妙法蓮華經と他事なく唱へ申して

候へば天然と三十二相・八十種好しゅごうを備そなうるなり、如我等無異むいと申もうして
釈尊程しやくそんの仏にやすやすと成り候なり、譬たとえば鳥の卵は始は水なり其その
水の中より誰か・なすとも・なけれども鶯よ目よと嚴かざり出来しゅつて虚空こくうにか
けるが如ごとし、我

等も無明の卵にして・あさましき身なれども南無妙法蓮華經の唱への母
にあたためられ・まいらせて三十二相の背出いでて八十種好しゅごうの鰓毛よくいけ生おい
ろひて実相真如じつそう しんにょの虚空こくうにかけるべし、爰ここを以て經に云く「一切衆生は
無明の卵むみょうに処しよして智慧ちえの口ばしなし、仏母の鳥は分段同居の古栖すみかに返
りて無明の卵むみょうをたたき破りて・一切衆生の鳥をすだてて法性真如ほつしやう しんにょ
大虚にとぼしむ」と説けり取意。

有解無信げ なとて法門ほうもんをば解さとりて信心しんじんなき者は更に成仏じやうぶつすべからず、
有信無解うしん むげとて解はなくとも信心しんじんあるものは成仏じやうぶつすべし、皆此の經の意みな

なり私の言にはあらずされば二の巻には 信を以て入ることを得己が
智分に非ず」とて智慧第一の舍利弗も但此の經を受け持ち信心強盛に
して仏になれり己が智慧にて仏にならずと説き給へり、
舍利弗だにも智慧にては仏にならず、況や我等衆生少分の法門を心得
たりとも信心なくば仏にならんことおぼつかなし、末代の衆生は法門
を少分こころえ僧をあなづり法をいるかせにして惡道におつべしと説き
給へり、法を

こころえたる・しるしには僧を敬うやまひ法をあがめ仏を供養くようすべし、今は仏
ましまさず解悟の智識を仏と敬ふべし争いかでか徳分なからんや、後世ごしやうを願
はん者は名利名聞みやうりみやうもんを捨てて何いかに賤せんしき者なりとも法華經ほけきやうを説かん僧を
生身しょうしんの如来にやらいの如ごとくに敬ふべし、是れ正まさしく經文きやうもんなり。

今時の禪宗ぜんしゅうは大段仁義礼智信の五常ごじやうに背そむけり、有智うちの高徳こうとくをおそれ
老いたるを敬うやまひ幼きを愛するは内外典ないげてんの法なり、然しかるを彼の僧家の者
を見れば昨日・今日まで田夫野人てんふのじんにして黒白こくはくを知らざる者も・かちん
の直綴ちくそくをだにも著そつればうち慢まんじて天台てんだい・真言しんごんの有智高德うちこうとくの人をあなづ
り礼をもせず其その上に居らんとするなり、是これ傍若無人ちやくしやうにして畜生ちくしやうに
劣おとれり、爰ここを以て伝教大師でんぎやうだいしの御釈いわに云く川瀬祭魚せんせさいぎよのこころざし・林鳥りんう
父祖ふその食を通きやうず鳩きゆう・三枝さんしの礼あり行雁連こうがんづらを乱みだらず・羔羊こうやう踞うずくまりて乳を
飲いむ・賤いふしき畜生ちくしやうすら礼を知ることかくのこと是なんくの如じんりんし、何ぞ人倫おに於そて其の礼

なからんやとあそばされたり取意、彼等が法に迷ふ事道理なり、人倫にしてだにも知らず是れ天魔破旬のふるまひにあらずや。

是等の法門を能く能く明らめて一部八巻・廿八品を頭にいただき

解らず行ひ給へ又某を恋しくおはせん時は日々に日を拝ませ給へ。

某は日に一度・天の日に影をうつす者にて候、此の僧によませまひら

せて聴聞あるべし、此の僧を解悟の智識と憑み給いてつねに法門御たづ

ね候べし、聞かずんば争か迷闇の雲を払はん足なくして争か千里の道

を行かんや、返す返す此の書をつねによませて御聴聞あるべし、事事面

の次を期し候間・委細には申し述べず候、穴賢穴賢、

弘安三年二月 日

日蓮 御判

新池殿

◆三三三

船守弥三郎許御書

弘長元年六月四十

歳御作

1445p

わざと使を以てちまきさけほしひさんせうかみしなじな給侯い畢んぬ、又つかひ申され候は御かくさせ給へど申し上げ候へど日蓮心得申べく候、日蓮去る五月十二日流罪の時その津につきて供しに、いまだ名をもききをよびまいらせず候ところに、船よりあがりくるしみ侯いきところ、ねんごろにあたらせ給い候し事は、いかなる宿習なるらん、過去に法華經の行者にて、わたらせ給へるが今末法にふなもりの弥三郎と生れかわりて日蓮をあ

われみ給うか、たとひ男は、さも、あるべきに女房の身として食をあたへ

洗足せんぞくてうづ其その外そさも事ねんごろなる事・日蓮にちれんはしらず不思議ふしぎとも申もうすばかりなし、ことに三十日あまりありて内心ないしんに法華經ほけきょうを信じ日蓮にちれんを供養くようし給たまう事いかなる事のよしなるや、かかる地頭じとう・方民ばんみん・日蓮にちれんをにくみねだむ事・鎌倉かまくらよりもすぎたり、みるものは目をひき・

きく人はあだむ、ことに五月さつきのころなれば米もとぼしかるらんに日蓮にちれんを内内ないないにて・はぐくみ給たまいしことは日蓮にちれんが父母ふぼの伊豆の伊東かわなと云うところに生れかわり給たまうか、法華經ほけきょう第四に云く・及清信士女しにょ供養くよう於法師ほふしと云云、法華經ほけきょうを行ぜん者をば諸天善神等しよてんぜんじん・或あるはをとことなり・或あるは女となり形をかへさまさまに供養くようしてたすくべしと云う經文きやうもんなり、弥三郎殿夫婦やさぶろうの士女しにょと生れて日蓮法師にちれんほふしを供養くようする事疑うたがいなし。

さきにまいらせし文につぶさにかきて供きようし間・今はくはしからず、ことに当地頭ちうどの病悩びやうについて祈いのせし申もうすべきよし仰おおせ供きようし間・案にあつか

ひて候、然れども一分信仰の心を日蓮に出し給へば法華經へそせうとこそをもひ候へ

此の時は十羅刹女もいかでか力をあわせ給はざるべきと思ひ候いて、
法華經・釈迦・多宝・十方の諸仏・並に天照・八幡・大小の神紙等に
申して候、定めて評議ありてぞしるしをばあらはし給はん、よも日蓮
をば捨てさせ給は

じ、いたきとかゆきとの如くあてがわせ給はんと・をもひ候いしについに

病悩なをり・海中かいちゅう いろくづの中より出現しゅつげんの仏体を日蓮にちれんにたまわる事・

此れ病悩のゆへなり、さだめて十羅刹女じゅうらせつにょのせめなり、此の功德くどくも夫婦二

人の功德くどくとなるべし、我等衆生われらしゅじやう無始むしより・このかた生死海しやうじの中にありし

が・法華經ほけきやうの行者ぎやうじやとなりて無始むし色心しきしん・本是理性ほんぜりしやう・

妙窮妙智みやうち・金剛不滅こんごうふめつの仏身ぶつしんとならん事あにかの仏にかわるべきや、過去かこ

久遠くおん五百塵点じんてんのそのかみ唯我一人ただわれひとりの教主きやうしゅ釈尊しやくそんとは我等衆生われらしゅじやうの事な

り、法華經ほけきやうの一念三千いちねんさんぜんの法門ほうもん・常住じやうじやう此說法せつぽうのふるまいなり、かかるた

うとき法華經ほけきやうと釈尊しやくそんにてをはずども凡夫ぼんぷはしる事なし。

寿量品じゆりやうぽんに云く顛倒てんどうの衆生しゅじやうをして近しと雖も和も見えざらしむ」と

はこれなり、迷悟めいごの不同ふどうは沙羅さらの四見ごの如し、一念三千いちねんさんぜんの仏と申すは

法界ほっかいの成仏じやうぶつと云う事にて候ぞ。

せつせんどうじ

雪山童子のまへにきたりし鬼神は帝釈の變作なり、戸毘王の所へにげ

入りし鳩は毘首羯摩天ぞかし、班足王城へ入りし普明王は教主釈尊に

てまします、肉眼はしらず仏眼は此れをみる、虚空と大海とには魚鳥

の飛行するあとあり此等は經文にみえたり、木像即金色なり金色即

木像なり、あぬるだが金はうさぎとなり死人となる、釈摩男が

たなごころにはいさごも金となる、此等は思議すべからず、凡夫即仏な

り仏即凡夫なり・一念三千我実成仏これなり。

しからば夫婦二人は教主大覺世尊の生れかわり給いて日蓮をたすけ

給うか、伊東とかわなのみちのほどはちかく候へども心はとをし・後のた

めにふみをまいらせ候ぞ、人にかたらずして心付させ給へすこしも人し

るならば御ためあしかりぬべし、むねのうちにをきてかたり給う事なれ

・あなかしこ・あなかしこ、南無妙法蓮華經。

弘長元年六月二十七日

船守弥三郎殿許之を遣わす

日蓮花押

◆三三四

同一 鹹味御書

1447p

夫れ味に六種あり・一には淡・二には鹹しおからき・三には辛・四には酸・五には甘六には苦なり、百味の飭膳を調ふといへども一つの鹹しおの味なければ大王の膳とならず、山海の珍物も鹹しおなければ氣味なし、大海に八の不思議あり、一には漸漸に転深し・二には深くして底を得難し・三には同じ一鹹の味なり・四には湖限りを過ぎず・五には種種の宝蔵有り・六には大身の衆生中に在つて居住す・七には死屍を宿めず・八には万流大雨之を収めて不増不減なり、漸漸に転探しとは法華経は凡夫無解より聖人有解に至るまで皆仏道を成ずるに譬うるなり、深くして底を得難しとは法華経は唯仏与仏の

境界きょうがいにして等覺とうかく已下いげは極きくむることなきが故なり、同じ一鹹いつかんの味なりとは諸河しよに鹹しおなきは諸教しよきやうに得道とくどうなきに譬しよふ、諸河の水・大海たいかいに入いつて鹹しおとなるは諸教しよきやうの機類きるい・法華經ほけきやうに入いつて仏道ぶつどうを成じやうずるに譬しよふ、潮限りを過ぎずとは妙法みやうほうを持もつ入牢しんみやう身命しんみやうを和わするとも不退ふたい転てんを得るに譬しよふ、種種しゆじゆの宝蔵ほうざう有ありとは諸仏しよぶつ・菩薩ぼさつの万行まんぎやう方善まんぎやう・諸波羅蜜しよはらみつの功德くどく・妙法みやうほうに納おさまるに譬しよふ、大身しゆじやうの衆生しゆじやう所居しやうじよの住処じやうしよとは仏ぶつ・菩薩ぼさつ・大智慧ちえあるが故ゆえに大身しゆじやう衆生しゆじやうと名なく大身しゆじやう・大心そうこん・大莊嚴だいじやうぎん・大調伏だいせつぷく・大說法たいせい・大勢たいせい・大神通じんつう・大慈だいじ・大悲だいひ・おのづから法華經ほけきやうより生はずるが故なり、死屍ししを宿めずとは永えいく謗法ぼうほう一闡提いつせんたいを離るるが故なり、不增ふぞう不滅ふめつとは法華ほけの意いは一切衆生いっさいしゆじやうの仏性ぶつじやう同一性ぶつじやうなるが故なり、蔓草つるくさ漬すけたる桶とう☆の中の鹹しおは大海たいかいの鹹しおに随したがつて満干みちひぬ、禁獄ごんぐくを被こむる法華ほけの持者じしやは桶とうびようの中の鹹しおのごとく如く・火宅いを出いで給たまへる釈迦しやか如来にょらいは大海たいかいの鹹しおのごとく如く・法華ほけの持者じしやを禁いましむ

るは釈迦如来を禁むるなり、梵釈・四天も如何頂き給わざらん、
十羅刹女の頭破七分の誓ひ此の時に非ずんば何の時か果し給ふべき、
頻婆娑羅王を禁獄せし阿☆世早く鋭身に大惡瘡を感得しき、法華の
持者を禁獄する人何ぞ現身に惡瘡を感ぜざらんや。

花押

日蓮

◆三三五

椎地四郎殿御書

弘長元年四月 四十

歳御作

1448p

先日御物語の事について彼の人の方へ相尋ね候いし処・仰せ候いしが

如く少しもちがはず候いき、これにつけても・いよいよ・はげまして

法華經の功德を得給うべし、師曠が耳・離婁が眼のやうに聞見させ

給へ末法には法華經の行者必ず出来すべし、但し大難来りなば強盛

の信心弥弥悦びをなすべし、火に薪をくわへんにさかなる事なかるべ

しや、大海へ衆流入る・されども大海は河の水を返す事ありや、法華

大海の行者に諸河の水は大難の

如く入れども・かへす事とがむる事なし、諸河の水入る事なくば大海あ

るべからず、大難だいなんなくば法華經ほけきょうの行者ぎやうじやにはあらず、天台てんだいの云く衆流海しゅうりゅうかいに入り薪火たきぎを熾さかんにす」と云云、法華經ほけきょうの法門ほうもんを一文一句いっくなりとも人に・かたらん

は過去かこの宿縁しゆくえんふかしとおぼしめすべし、經いに云く亦不開またしやうぼうによぜ正法如是人難度なん」と云云、此の文の意は正法しやうぼうとは法華經ほけきょうなり、此の經をきかざる人は度しがたしと云う文なり、法師品ほうしほんには若是善男子・善女人・乃至則なほ・如来使にょらいと説かせ給たまいて僧も俗も尼も女も一句いっくをも人にかたらん人は如来にょらいの使と見えたり、貴辺きへんすでに俗なり善男子ぜんなんしの人なるべし、此の經を一文一句いっくなりとも聴聞ちやうもんして神にそめん人は生死しやうじの大海たいかいを渡わたるべき船なるべし、妙樂大師みょうらくだいし云く「二句いっくも神に染ぬれば成く彼岸ひがんを資たすく、思惟しゆい・修習しゅうしゆ永く舟航しやうかうに用たり」と云云、生死しやうじの大海たいかいを渡わたらんことは妙法蓮華經みょうほうれんげきやうの船にあらずんば・かなふべからず。

抑おさ法華經ほけきょうの如渡得船にょとくとくせんの船ふねと申もうす事は・教主大覺世尊きょうしゅだいかくせそん・巧智無辺こうちむへんの
番匠ばんしやうとして四味八教はつぎきやうの材木はいつぎきを取り集め・正直捨權しやうじきしやけんとけづりなして
邪正一如じやしやういちにょときり合せ・醍醐一実だいごいちじつのくぎを丁と・うつて生死しやうじの大海たいかいへ・を
しうかべ・中道一実ちゆうどういちじつのほばしらに界如三千かいにょさんぜんの帆ふをあけて・諸法実相しよほうじつそうのお
ひでをえて・以信得入いしんとくにゅうの一切衆生いっさいしゆじやうを取りのせて・釈迦如来しやくかにょらいはかぢを

取り・多宝如来はつなでを取り給へば・上行等の四菩薩は函蓋相応し
て・きりきりとこぎ給う所の船を如渡得船の船とは申すなり、是にのる
べき者は日蓮が弟子・檀那等なり、能く能く信じさせ給へ四条金吾殿
に見参候はば能く能く語り給い候へ、委くは又又申すべく候、恐恐
謹言。

四月二十八日

日蓮

花押

椎地四郎殿え

◆三三六

弥三郎殿御返事

建治三年

五十六歳御作

1449p

是は無智むちの俗にて候へども承うけたまわり候いしに貴く思ひ進まいらせ候いしは
法華ほっけの第二の巻に今こん此三界さんがいとかや申もうす文にて候なり、此の文の意は今・
此の日本にほんこく国は釈迦しゃかぶつ仏の御領なり、天照太神てんしやうだいじん・八幡大菩薩はちまんだいぼさつ・神武天皇等
の一切いっさいの神・国主こくしゆ並に万民ばんみんまでも釈迦しゃかぶつ仏の御所領しよりやうの内なる上此の仏は
我等衆生われらしゆじやうに三の故御坐まします大恩の仏なり、一には国主こくしゆなり・二には師匠ししやう
なり・三には親父おやなり、此の三徳さんとくを備へ給たまう事は十方じゆつぱうの仏の中に唯ただ
釈迦しゃかぶつ仏計けいりなり、されば今の日本にほん
国の一切衆生いっさいしゆじやうは設たといしやかぶつ
如くすとも又他仏たふつを並べて同じ様にもてなし進まいらせば大なる失とがなり、
譬たとえば我が主しの而も智者ちしやにて御坐ましまさんを他国たこくの王に思ひ替えて・
日本にほんこく国にすみながら漢土高麗かんどこまの王を重んじて・日本にほんこく国の王におろそか
ならんをば・此の国の大王だいおういみじと申もうす者ならんや、況や日本にほんこく国

の諸僧しよそうは一人もなく釈迦しやか如来にょらいの御弟子おんでしとして頭こうべをそり衣きを著きたり、
阿弥陀仏あみだぶつの弟子でしにはあらぬぞかし、然しかるに釈迦堂しやか法華堂ほつけ画像お・木像そうぼう法
華經一部たもも持ち候たもはぬ僧共あみだぶつが・三徳さんとく全く備たはり給たまへる釈迦仏しやかぶつをば聞おき
て・二徳もなき阿弥陀仏あみだぶつを国みやうこくこそりて郷・村・家もごとに人の数かずよりも多
く立てならべ阿弥陀仏あみだぶつの名号いづなうを一向いっしやうに申もうして一日いちにちに六万・

はちまん

八万なんどす、打ち見て

候所

はあら貴や貴やと見へ候へども、

法華經を以て見進らせ候へば中中日日に十惡を造る惡人よりは過重

きは善人なり、惡人は何れの仏にも・よりまいらせ候はねば思い替る辺

もなし、若し又善人とも成らば法華經に付き進らす事もや有りな

ん、日本国の人人は何にも阿弥陀仏より釈迦仏・念仏よりも法華經を

重くしたしく心よせに思い進らせぬる事難かるべし、されば此の人人は

善人に似て惡人なり、惡人の中には

一閻浮提第一の大謗法の者大闡提の人なり、釈迦仏・此の人をば

法華經の二の巻に其の人命終して阿鼻獄に入らん」と定めさせ給へ

り、されば今の日本国の諸僧等は提婆達多・瞿伽梨尊者にも過ぎたる

大惡人なり、又在家の人人は此等を貴み供養し給う故に此の国眼前に

無間地獄と變じて諸人現身に大飢渴大疫病先代になき大苦を受

無間地獄と變じて諸人現身に大飢渴大疫病先代になき大苦を受

無間地獄と變じて諸人現身に大飢渴大疫病先代になき大苦を受

無間地獄と變じて諸人現身に大飢渴大疫病先代になき大苦を受

無間地獄と變じて諸人現身に大飢渴大疫病先代になき大苦を受

無間地獄と變じて諸人現身に大飢渴大疫病先代になき大苦を受

無間地獄と變じて諸人現身に大飢渴大疫病先代になき大苦を受

無間地獄と變じて諸人現身に大飢渴大疫病先代になき大苦を受

無間地獄と變じて諸人現身に大飢渴大疫病先代になき大苦を受

無間地獄と變じて諸人現身に大飢渴大疫病先代になき大苦を受

無間地獄と變じて諸人現身に大飢渴大疫病先代になき大苦を受

くる上た他こ国くより責めらるべし、此これは偏ひとえに梵ぼん天てん・帝たい釈しやく・日にち月がつ等の御ごはか
らひなり、かかる事をば日にほん本こく国こくには但にち日れん蓮れん一人ひとり計はかり知しつて始はは云いうべき
か云いうまじきかとうらおもひけれども・さりとは何いかにすべき、一切いっさい
衆しゆ生じやうの父ふ母ぼたる上おほ仏ぶつの仰おほせを背そむくべきか、我われが身みこそ何いか様ようにも・ならめ
と思いひて云いい出いせしかば二十余年・所しよをおはれ弟で子し
等を殺ころされ・我われが身みも疵きずを蒙こもり・二度まで流ながされ結け句くは頸けい切せつられんと
す、是これ偏ひとえに日にほん本こく国こくの一切いっさい衆しゆ生じやうの大だい苦くにあはんを兼かねて知しりて歎なげき候こうな
り、されば心こころあらん人ひと人ひとは我われ等らが為ためにと思おほ食しめすべし、若もし恩おんを知しり
心こころ有ある人ひと人ひとは二当ふたらん杖じやうには一ひとは替かわるべき事ことぞかし、さこそ無なからめ
還かえつて怨あだをなしなんど・せらるる事ことは心得こころえず候こう、又また在ざ家いけの人ひと
人ひとの能よくも聞ききほどかずして・或あるは所しよを追おひ・或あるは弟で子し等らを怨あだまるる心こころ
えぬさよ、設たとい知しらずとも誤あやりて現げんの親おやを敵てきぞと思おもひたがへて罽のり・或ある

は打ち殺したらんは何に科を免るべき、此の人人は我があらぎをば知らずして日蓮があらぎの様に思へり、譬えば物ねたみする女の眼を瞋らかして・とわりをにらむれば己が氣色のうとましきをば知ら

ずして還つてとわりの眼おそろしと云うが如し、此等の事は偏に国主の御尋ねなき故なり、又何なれば御尋ねなきぞと申すに此の国の人人余り科多くして一定今生には他国に責められ後生には無間地獄に墮つべき悪業

の定まりたるが故なりと、きようもんれきれき経文歴歴と候いしかば信まじ進まらせて候、此の事は各各たといわれら設たい我等が如ごとくなる云うにかひなき者共を責めおどし・或あるは所を追たわせ給たまい候ともよも終ついには只ただは候はじ、此の御房ごぼうの御心をば設たといいてんしょうだいじん天照太神・正八幡もよも随まへさせ給たまひ候はじ、まして凡夫ぼんぶをや、されば度度たびたびの大事だいじにもおくする心なく弥いよいよ強盛ごうじように御坐すと承たまわり候と加様のすぢに申もうし給たまうべし。

さて其その法師物申ほつしさば取り返してさて申もうしつる事は僻事ひがごとかと返して釈迦しやくか仏は親なり・師なり・主なり・と申もうす文・法華經には候かと問うて有もうりと申もうさばさて阿弥陀あみだ仏は御房ごぼうの親・主・師と申もうす經文きようもんは候かと責めて・無しと云わんずるか又有りと云はんずるか若もしさる經文きようもん有りと申もうさば御房ごぼうの父は二人かと責め給たまへ又無しといはば・さては御房ごぼうは親をば捨てて何いかに他人たにんをもてなすぞと責め給たまへ其その上法華經ほけきようは他經たきようには

似させ給はねばこそとて四十

余年等の文を引かるべし、即往安樂の文にかからば・さて此れには先ず

つまり給へる事は承伏かと責めてそれもとて又申すべし、構へて構へて

所領を惜み妻子を顧りみ又人を憑みて・あやぶむ事無かれ但偏に思い

切るべし、今年の世間を鏡とせよ若干の人の死ぬるに今まで生きて有り

つるは此の事にあはん為なりけり、此れこそ宇治川を渡せし所よ是こそ

勢多を渡せし所よ・名を揚るか名をくだすかなり、人身は受け難く

法華經は信じ難しとは是なり、釈迦・多宝・十方の仏・來集して我が

身に入りかはり我を助け給へど觀念せさせ給うべし、地頭のもとに召さ

る事あらば先は此の趣を能く能く申さるべく候、恐恐謹言。

建治三年丁丑八月四日

日蓮花押

弥三郎殿御返事

◆三三七

新田殿御書

1452p

使ひ御志いひごし限り無き者か、経は法華経・顯密第一の大法なり、仏は
釈迦仏・諸仏第一の上仏なり、行者は法華経の行者に相似たり、三事
既に相応せり檀那の一願必ず成就せんか、恐恐謹言。

五月二十九日

日蓮在御判

新田殿御返事

並に女房の御方

◆三三八

実相寺御書

建治四年正月十六日

五十

七歳御作

1452p

新春の御札の中に云く駿河の国実相寺の住侶尾張阿闍梨と申す者。
玄義四の巻に涅槃經を引いて、小乗を以て大乘を破し大乘を以て
小乗を破するは、盲目の因なりと釈せる由申し候なるは實にて候や
らん不審に候。

反詰して云く小乗を以て大乘を破し大乘を以て小乗を破する者
盲目とならば弘法大師・慈覺大師・智証大師等はされば盲目となり
給いたりけるか、善無畏・金剛智・不空等は盲目と成り給うとの給うか
とつめよ、玄義の四に云く問う法華にを開して皆妙に入る涅槃何の
意ぞ更に次第の五行を明すや、答う法華は仏世の人の為に權を破して
實に入れ復・有ること無く教意整足せり、涅槃は末代の凡夫の見思の
病重く一実を定執して方便を誹謗

し甘露かんろを服ふくすと雖いふとも事に即そくして真まなる能あたわらず命いのちを傷やつけて早はや夭たうするが
為ための故ゆえに戒かい定じやう慧えを扶たすけて大おほ涅槃ねはんを顯あらわす、法ほ華けの意いを得えれば涅槃ねはんに於おいて
次第しだいの行ぎやうを用もちいざるなり」釈しやく籤せんの四よに云いく、次りの料りやう簡けんの中ちゆう・扶ふ戒かい定じやう慧えと
言いうは事じ戒かい事じ定じやう前ぜん三さん教きやうの慧え並ならびに事じ法ほふを扶たすくるが為ための故ゆえなり具ぐには
止し觀かんの対たい治ち助じ開かいの中ちゆうに説せつくが如ごとし、今こん時じの行ぎやう者じゃ・或あるは一向いっしやうに理りを尚おほぶ
ときは則すなわち己おのれれ聖せいに均ひとしと謂おもい及および実じつを執しゆして權けんを謗ぼうず、或あるは一向いっしやうに
事じを尚おほぶときは則すなわち功こうを高かう位い
に推ゆずり及および実じつを謗ぼうじて權けんを許ゆるす、既すでに末まつ代だいに処しよして聖むね旨めを思おもはず其それ
誰たれか斯この二ふたの失とがに墮だせざらん、法ほ華けの意いを得えれば則すなわち初しよ後ご俱ともに頓とんなり、
請こうう心しんを揣はかり臆おくを撫なで自みづから浮う沈しんを曉さとれ」と等たう云いふ、此この釈しやくに迷めい惑わくする
者ものか、此この釈しやくの所しよ詮せんは、或あるは一向いっしやう尚おほ理りとは達たつ磨ま宗しゆに等たうしきなり、及および
執しつ實じつ謗ぼう權けんとは華け嚴いん宗しゆ・真しん言いん宗しゆなり、或あるは一向いっしやう尚おほ事じとは淨じやう土ど宗しゆ・

りつしゅう
律宗なり、及び謗実許權とは法相宗なり。

夫れ法華經の妙の一字に二義有り一は相待妙・☆を破して妙を顯す
二は絶待妙・☆を開して妙を顯す、爾前の諸經並びに法華已後の諸經
は破☆顯妙の一分之を説くと雖も・開☆顯妙は全く之無し、爾るに
諸經に依憑する人師・彼れ彼れの經經に於て破顯の二妙を存し・或は
天台の智慧を盗み・或は民の家に天下を行うのみ、設い開☆を存すと
雖も破の義免れ難きか、何に況や上に挙ぐる所の一向執權・或は一向
執実等の者をや、而るに彼の阿闍梨等は自科を顧みざる者にして
嫉妬するの間・自眼を回轉して大山を眩ると觀るか、先ず実を以て權
を破し權執を絶して実に入るは釈迦・多宝・十方の諸仏の常儀なり、
実を以て權を破する者を盲目と為せば釈尊は盲目の人か乃至天台・
伝教は盲目の人師なるか如何、笑う可し返す返す。

四十九院等の事、彼の別当等は無智の者たる間・日蓮にちれんに向かつて之を
恐る小田一房等怨あだを為すか弥いよいよ彼等が邪法滅じやほうす可べき先兆なり、根露ねあらわる
れば枝枯かられ源みなもと竭ことごとれば流れ尽くと云う本文虚むなしからざるか、弘法こうぼう・
慈覚じかく・智証ちしよう三大師だいしの法華經ほけきよう誹謗ひぼうの大科だい四百余年の間隠せる根露あらわれ枝枯から
る、今日蓮いまにちれん之を糾明きうめいせり拘留外道ととげどうが石と為もつて數百年、陳那ちんな菩薩ぼさつに責
められ石即すなわち水と為なる、尼にげん☆が立てし塔は馬鳴めみう之を頽くずす、臥ふせる師子しし
に手を触れば瞋いかりを為なす等是これなり。

建治四年正月十六日

日蓮にちれん

花押かおう

駿河国実相寺豊前公御房御返事するが じつそうじ ごぼうごへんじ

◆三三九

石本日仲聖人御返事しやうにんごへんじ

1454p

同時どうじに二仏にぶつに亘わたるか將はた又一方いつぽうは妄語もうごなるか、近來きんらい念仏ねんぶつ者もの天下てんかを
誑惑おおわくするか、早早御存知有る可べきか。

抑そも駿馬しゅんめ一足追しゅんめい遣つかわさる事存外ぞんがいの次第しだいか事事見参しんさんの時ときを期こす、
恐恐きようきよう謹言きんげん。

九月二十日

日蓮にちれん在御

判

石本日仲聖人御返事しやうにんごへんじ

◆三四〇

聖人等御返事

145

5p

今月十五日酉時御文同おんふみじき十七日酉時とうらい到来す、彼等御勘氣を蒙るの
 時・南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經と唱となえ奉たてまつると云云、偏ひとえに只事ただに
 非あらず定めて平金吾の身に十羅刹じゅうらせつ入り易かわりて法華經の行者を試みたも
 うか、例せば雪山童子せっせんどうじ・戸毘王等しびおうの如ごとし將はた又惡鬼其の身に入る者か、
 釈迦・多宝・十方じゅうじゅうほうの諸仏・梵帝等ぼんたい・五五百歳の法華經の行者ぎやうじやを守護しゅごす
 可べきの御誓これは是ななり、大論だいろんに云いわく能よく毒を變じて藥と為なす、天台云く
 毒を變じて藥と為なす云云、妙の字虚むなしからずんば定めて須臾しゅゆに賞罰有
 らんか。

伯耆房等深く此の旨むねを存じて問注を遂ぐ可し、平金吾に申す可き様
は文永ぶんえいの御勘氣ごかんきの時聖人しょうにんの仰せ忘れ給うか、其その殃未いまだだ畢らず重ねて
十羅刹じゅうらせつの罰を招き取るか、最後に申し付けよ、恐恐きょうきょう。

十月十七日戌時

日蓮にちれん 在御判

聖人等御返事しょうにんごへんじ

この事のぶるならば此方このかたにはとがなしとみな人申すべし、又大進房
が落馬あらわるべし、あらわれば人人ひとびとことにおづべし、天の御計ら
いなり、各にはおづる事なかれ、つよりもてゆかば定めて子細しさいいで
きぬとおぼふるなり、今度このたびの使にはあわぢ房を遣すべし。

◆三四一

伯耆殿等御返事

弘安二年十月十二日

五十八歳御作

1456p

大体此の趣を以て書き上ぐ可きか、但し熱原の百姓等安堵せしめば
日秀等別に問注有る可からざるか、大進房・弥藤次入道等の狼藉の
事に至つては源は行智の勧めに依りて殺害刃傷する所なり、若し又
起請文に及ぶ可き云云の事之を申さば全く書く可からず、其の故は人
に殺害刃傷せられたる上・重ねて起請文を書き失を守るは古今未會有
の沙汰なり、其の上行智の所行・書かしむる如くならば身を容るる
処なく行う可きの罪・方無きか、穴賢穴賢、此の旨を存じ問注の時・
強強と之を申さば定めて上聞に及ぶ可きか、又行智・証人立て申さば

彼等かれらの人人ひとびと行智ぎょうちと同意どういして百姓等ひやくせいが田畠でんばた數十か疇しゆり取る由よし之これを申せ、
若し又証文しやうもんを出さば謀書ぼうしよの由よし之これを申せ、事事証人きしやうふんの起請文もを用ゆべか
らず、但し現証げんしやうの殺害刃傷さつがいじんじやう而已のみ、若し其その義ぎに背く者そむは日蓮にちれんの門家もんかに
非ず日蓮にちれんの門家もんかに非ず候あら、恐恐きやうきやう。

弘安二年十月十二日

日蓮にちれん 在御判

伯耆殿

日秀

日弁等 下

◆三四二

高橋殿御返事ごへんじ建治元年七月がんねん

五十四歳

御作

1457p

瓜一籠かじささげひげこえだまめねいもかうのうり給おわひ候い畢おわんぬ、
付法蔵經ふぼうぞうきようと申もうす經きようにはいさごのもちるを仏くきように供養くきようしまいらせしわらは
百年申もうすしに一閻浮提えんぶだいの四分が一の王おうとなる所謂いわゆる阿育大王あそかだいおうこれなり、
法華經ほけきようの法師品ほうしほんには而いつこう於一劫中いつこうと申もうして一劫いつこうが間・釈迦しゃかぶつ仏ぶつを種種しゆじゆに
供養くきようせる人の功德くどくと・末代まつだいの法華經ほけきようの行者ぎきやうを須臾しゆゆも供養くきようせる
功德くどくと・たくらべ候に其福復彼またかしこに過すぐと申もうして法華經ほけきようの行者ぎきやうを供養くきようす
る功德くどくすぐれたり、これを妙樂大師みょうらくだいし釈しゃくして云いく 供養くきようすること有あらん
者は福十号ふくじゅうごうに過すぐ」と云云、されば仏くきようを供養くきようする功德くどくよりも・すぐれ

て候なれば仏にならせ給はん事疑いなし。

其の上女人の御身として尼とならせ給いて候なり・いよいよ申すに
及ばず但しさだめて念仏者にてやはすらん、たうじの念仏者・持斎は
国をほろぼし他国の難をまねくものにて候、日本国の人人は一人もな
く日蓮がかたきとなり候いぬ、梵王・帝釈・日月・四天のせめをかほりて
・たうじのゆきつしまのやうになり候はんずるに・いか

がせさせ給うべきいかがせさせ給うべき、なによりも入道殿の御所勞な
げき入つて候、しばらくいきさせ給いて法華經を謗する世の中御覽あれ
と候へ日本国の人人は大体はいけどりにせられ候はんずるなり、日蓮
を二度までながし法華經の五の巻をもてかうべを打ち候いしは・こり
候はんずらむ。

七月二十六日

日蓮にちれん

御返事ごへんじ 花押かおう

◆三四三

高橋入道殿御返事にゅうどう ごとへんじ

建治元年七月がんねん

五十四歳御作

1458p

進上しんじょう

高橋入道殿御返事にゅうどう ごとへんじ

日蓮にちれん

我等が慈父・大覺世尊は人壽百歳の時・中天竺に出現しまして
一切衆生のために一代聖教をとき給う、仏在世の一切衆生は過去の
宿習有つて仏に縁あつかりしかば・すでに得道成りぬ、我が滅後の
衆生をば・いかにせんとなげき給いしかば八万聖教を文字となし
て・二代聖教の中に小乗經をば迦葉尊者にゆづり・大乘經並びに
法華經涅槃等をば文殊師利菩薩にゆづり給う、但八万聖教の肝心・
法華經の眼目たる妙法蓮華經の五字をば迦葉・阿難にもゆづり給は

ず、又文殊・普賢・觀音・弥勒・地藏・竜樹等の大菩薩にもさづけ給はず、此等の大菩薩等ののぞみ申せしかども仏ゆるし給はず、大地の底より上行菩薩と申せし老人を召しだして・多宝仏・十方の諸仏の御前にして釈迦如来・七宝の塔中にして妙法蓮華經の五字を上行菩薩にゆづり給う。

其の故は我が滅後の一切衆生は皆我が子なりいづれも平等に不便にをもうなり、しかれども医師の習い病に隨いて藥をさづくる事なれば、我が滅後・五百年が間は迦葉・阿難等に小乘經の藥をもつて一切衆生にあたへよ、次の五百年が間は文殊師利菩薩・弥勒菩薩・竜樹菩薩・天親菩薩に華嚴經・大日經・般若經等の藥を一切衆生にさづけよ、我が滅後・一千年すぎて像法の時には藥王菩薩・觀世音菩薩等、法華經の題目を除いて余の法門の藥を一切衆生にさづけよ、末法に入

りなば迦葉・阿難等・文殊・弥勒菩薩等・藥王・觀音等のゆづられしところのしょうじょうきよう小乘經・大乗だいじょう

經・並びに法華經は文字はありとも衆生の病の藥とはなるべからず、
所謂病は重し藥はあさし、共の時上行菩薩出現して妙法蓮華經の五字
を一閻浮提の一切衆生にさづべし、共の時一切衆生・此の菩薩をかた
きとせん、

所謂しよゐさるのいぬをみたるがごとく・鬼神きじんの人をあだむがごとく・過去かこの
不輕菩薩ふきやうぼさつの一切衆生いつさいしゆじやうにのりあだまれしのみならず杖木瓦礫じやうもくがりやくに・せめら
れしがごとく覺徳比丘かくとくびくが殺害さつがいに及およばれしがごとくなるべし。

其そのときの時は迦葉かしやう・阿難あなん等も・或あるは靈山りやうぜんにかくれ恒河ごうがに没みろくし・彌勒もんじゆ・文殊
等も・或あるは都率とそつの内院ないえんに入り・或あるは香山せんざいに入らせ給たまい、諸經しよきやうは行ずる人是有さいほう
西方さいほうにかへり・普賢菩薩ふげんぼさつは東方とうほうにかへらせ給たまい、諸經しよきやうは行ずる人是有さいほう
とも守護しゆごの人なければ利生りしやうあるべからず、諸仏しよぶつの名号みやうごうは唱となうるものありとも天神てんじんこれをかごすべからず、但ただし小牛の母をはなれ金鳥きじのたかに
あえるがごとくなるべし、其そのときの時十方世界じふぱうせかいの大鬼神きじん・閻浮提えんぶに充滿じゅうまん
して四衆ししゆの身に入つて・或あるは父母ふぼ
をがいし・或あるは兄弟等きやうだいを失はん、殊ことに国中の智者ちしやげなる持戒じかいげなる
僧尼そうにの心に此の鬼神きじん入つて国主こくしゆ並びに臣下しんかをたばらかさん、此の時

上行菩薩じやうぎやうぼさつの御かびをかほりて法華經ほけきやうの題目南無妙法蓮華經だいもくなむみょうほうれんげきやうの五字計ごじばかりを一切衆生いつさいしゆじやうにさづけば・彼の四衆等ししゆとう・並びに大僧等なら・此の人をあだむ事こと父母ふぼのかたき宿世すくせのかたき朝敵怨敵ちやうてきおんてきのごとくあだむべし、其の時そのとき大なる天変てんべんあるべし、所謂日月蝕いわゆるにちがつし大なる彗星天すいせいにわたり大地震動だいいじしんして水上の輪のごとくなるべし、其の後そは自界叛逆難じかいほんぎやくなんと申して国主・兄弟もう並びに国中の大人だいにんをうちころし・後には他国侵逼難たこくしんびつなんと申して郷国もうより・せめられて・或あるはいけどりとなり・或あるは自殺をし国中の上下じやうげ・方民ばんみん・皆大苦に値あうべし、此れひとへに上行菩薩じやうぎやうぼさつのかびをかをほりて法華經ほけきやうの題目だいもくをひろむる者を・或あるはのり・或あるはうちはり・或あるは流罪るざいし・或あるは命をたちなんどするゆへに・仏前ぶつぜんにちかひをなせし梵天ぼんてん・帝釈たいしやく・日月にちがつ・四天等してんの法華經ほけきやうの座ざにて誓狀せいじやうを立てて法華經ほけきやうの行者ぎやうじやをあだまん人をば父母ふぼのかたきよりもなをつよくいましむべしと・ちかうゆへなりと

みへて候に、今日蓮いまにちれんにほんこく日本国に生れて一切経並びに法華経の

明鏡めいきようをもて・日本国にほんこくの一切衆生の面に引向たるに寸分もたがはぬ上・

仏の記しるし給たまひいし天変てんぺんあり地天ちようあり、定んで此の国・亡国ぼうこくとなるべしとか

ねてしりしかば・これを国主こくしゅに申もうすならば国土安穩こくとあんのんなるべくも・たづね

あきらむべし、亡国ぼうこくとなるべきならば・よも用もちいじ、用もちいぬ程ならば日蓮にちれん

は流罪るざい・死罪しざいとなるべしとしりて候いしかども・仏いまし

めて云く此の事を知りながら身命ををしみて一切衆生にかたらずば
我が敵たるのみならず一切衆生の怨敵なり、必ず阿鼻大城に墮つべし
と記し給へり。

此に日蓮進退わづらひて此の事を申すならば我が身いかにもなるべ
し我が身はさてをきぬ父母・兄弟並びに千万人の中にも一人も随うも
のは国主・万民にあだまるべし、彼等あだまるるならば仏法はいまだわ
きまへず人のせめはたへがたし、仏法を行ずるは安穩なるべしとこそをも
うに此の法を持つによつて大難出来するはしんぬ此の
法を邪法なりと誹誘して惡道に墮つべし、此れも不便なり又此れを
申さずは仏誓に違する上・一切衆生の怨敵なり大阿鼻地獄疑いな
し、いかんがせんとをもひしかどもをもひ切つて申し出しぬ、申し始め
し上は又ひきさす

べきにもあらざれば・いよいよつより申せしかば、仏の記文のごとく国主
もあだみ万民もせめき、あだをなせしかば天もいかりて日月に大變あ
り大せいせいも出現しぬ大地もふりかえしぬくなりぬ、どううちもは
じまり他国よりもせめるなり、仏の記文すこしもたがわず・日蓮が
法華經の行者なる事も疑はず。

但し去年かまくらより此のところへにげ入り候いし時・道にて候へば各
各にも申すべく候いしかども申す事もなし、又先度の御返事も申し
候はぬ事はべちの子細も候はず、なに事にか各各をば・へだてまいらせ候
べき、あだをなす念仏者・禪宗・真言師等をも並びに国主等をもたす
けんがためにこそ申せ、かれ等のあだをなすは・いよ
いよ不便にこそ候へまして一日も我がかたとて心よせなる人人はいかで
かをろかなるべき世間のをそろしさに妻子ある人人のとをざかるをば・

ことに悦ぶ身なり、日蓮にちれんに付てたすけやりたるかたわなき上・わづかの
所領しよりょうをも召さるるならば子細しさいもしらぬ妻子さいし・所従等しよじゅうがいかになげか
ずらんと心ぐるし。

而も去年しかの二月に御勘氣ごかんきをゆりて三月の十三日に佐渡さどの国を立ち同
月の二十六日にかまくらに入る、同四月の入日平左衛門尉さえもんのかみにあひたり
し時・やうやうの事ども・とひし中に蒙古国もうこは・いつよすべきと申せしか
ば、今年よす

べし、それにとて日蓮にぢれんはなして日本国にほんこくにたすくべき者一人もなし、たす
からんとをもひしたうならば日本国にほんこくの念仏者ねんぶつと禪ぜんと律僧等りつそうが頸を切つ
てゆいのはまにかくべし、それも今はすぎぬ・但しただ皆人みなのをもひて候はそうら
日蓮にぢれんをば念仏師ねんぶつと禪ぜんと律りつをそしるをもひて候、これは物のかずにてか
ずならず・真言宗しんごんしゅうと申もうす宗がうるわしき日本国にほんこくの
大なる呪咀あくほうの惡法あくほうなり、弘法大師こうぼうだいしと慈覺大師じかくだいし・此の事にまどひて此の
国を亡さんとするなり、設たとい二年三年にやぶるべき国なりとも真言師しんごんし
にいのらする程ならば一年半年に此のくに・せめらるべしと申もうしきかせ
て候そうらいき。

たすけんがために申もうすを此程あだまるる事なれば・ゆりて候いし時さ
どの国より・いかなる山中海辺にもまぎれ入るべかりしかども・此の事
をいま一度平左衛門ひとたび さえもんに申もうしきかせて日本国にほんこくにせめのこされん衆生しゅじょうをた

すけんがためにのぼりて候いき、又申しきかせ候いし後は・かまくらに
有るべきならねば足にまかせていでしほどに便宜にて候いしかば設い各
各は・いとはせ給うとも今一度はみたてまつらんと千度をもひしかども
・心に心をたたかいて

すぎ候いき、そのゆへはするがの国は守殿の御領ことにふじなんどは後
家尼ごぜんの内の人人多し、故最明寺殿・極楽寺殿のかたきといきどを
らせ給うなればききつけられれば各各の御なげきなるべしと・おもひし心
計りなり、いまにいたるまでも不便にをもひまいらせ候へば御返事まで
も申さず候いき、この御房たちのゆきすりにも・あなかしこ・あなかしこ
・ふじかじまのへん・立ちよるべからずと申せども・いかが候らんと・をぼ
つかなし。

ただし真言の事ぞ御不審にわたらせ給い候らん、いかにと法門は申す

とも御心へあらん事かたし但眼前がんぜんの事をもつて知しめせ、隱岐おきの法皇ほうこうは
人王入十二代・神武よりは二千余年・天照てんしやう太押入りかわらせ給たまいて人
王とならせ給たまう、いかなる者かてきすべき上きんめい欽明より隱岐おきの法皇ほうこうにいた
るまで漢土かんど・百濟くだら・新羅しらぎ・高麗こまよりわたり来る大法秘法だいほうひほうを
叡山えいざん・東寺とうじ・園城おんじやう・七寺並びに日本国にほんこくにあがめをかれて候、此これは皆国みな
を守護しゆごし国主こくしゅをまほらんためなり、隱岐おきの法皇世ほうこうをかまくらにとられ
たる事を口をしと・をばして叡山えいざん・東寺とうじ等の高僧等こうそうをかたらひて義時よしときが
命をめしと

れと行ぜしなり、此の事一年・二年ならず数年調伏せしに・権の
大夫殿はゆめゆめしろしめさざりしかば一法も行じ給はず・又行ずと
も叶うべしともおぼへずありしに・天子いくさにまけさせ給いて隱岐の
国へつかはされさせ給う、日本国の王となる人は天照太神の御魂の入り
かわらせ給う王なり、先生の十善戒の力といひ・いかでか國中
の万民の中にはかたぶくべき、設いとがありともつみあるをやをとがな
き子のあだむにてこそ候いぬらめ、たとい親に重罪ありとも子の身とし
てとがに行はん天うけ給うべしや、しかるに隱岐の法皇のはじにあは
せ給いしはいかなる大禍ぞ・此れひとへに法華經の怨敵たる日本国の
真言師をかたらはせ給いしゆへなり。

一切の真言師は灌頂と申して釈迦仏等を八葉の蓮華にかきて此れを
足にふみて秘事とするなり、かかる不思議の者ども諸山・諸寺の別当と

あおぎてもてなすゆへに・たみの手にわたりて現身げんしんにはぢにあひぬ、此の
大悪法だいあくほう又かまくらに下つて御一門いちもんをすかし日本国にほんこくをほろぼさんとする
なり、此の事最大事だいじなりしかば弟子等でしにもかたらず・

只ただいつはり・をろかにて念仏ねんぶつと禪等計りぜんばかをそしりてきかせしなり、今は
又用もちいられぬ事なれば身命しんみよもおしまず弟子どもにも申もうすなり、かう申
せば・いよいよ御不審ふしんあるべし、日蓮にちれんいかにいみじく尊くとも慈覚じかく・弘法こうぼう
にすぐるべきか、この疑うたがいすべてはるべからず・いかにとかすべき。

但しただ皆人みなはにくみ侯にすこしも御信用ごしんようのありし上・此れまでも御たづ
ねの侯そうらは只今生計りただこんじょうばかの御事おんことにはよも侯はじ定めて過去かこのゆへか、御所勞
の大事だいじにならせ給たまいて侯なる事あさましく侯、但しただつつるぎはかたきの
ため薬は病のため、阿闍世王あじゃせは父をころし仏の敵となれり、惡瘡身あくそうに
出いで後に仏に歸伏きふくし法華經ほけきやうを持ちしかば惡瘡あくそうも平癒へいゆし

寿をも四十年のべたりき、而も法華經は閻浮捏人病之良藥とこそとか
れて侯へ閻浮の内えんぶの人は病の身なり法華經ほけきようの藥あり、三事すでに相応そうおう
しぬ一身いかでかたすからざるべき、但し御疑おんうたがいのわたり侯はんをば力
をよばず、南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經。

覚乗房は・わき房に度度よませてきこしめせ・きこしめせ。

七月十二日

進上

高橋六郎兵衛入道殿

御返事

日蓮 花押

◆三四四

異体同心事

1463p

白小袖一つあつわたの小袖は・わき房のびんぎに鷲目一貫並びにうけ
給^{たま}わる、は・わき房さど房等の事あつわらの者どもの御心ざし
異体同心なれば万事を成し同体異心なれば諸事叶う事なしと申す事
は外典三千余巻に定りて候、殷の紂王は七十万騎なれども同体異心
なればいくさにまけぬ、周の武王は八百人なれども異体同心なればか

ちぬ、一人の心なれども二つの心あれば其の心たがいて成ずる事なし、

百人・千人なれども一つ心なれば必ず事

を成ず、日本国の人人は多人なれども体同異心なれば諸事成ぜん事

かたし、日蓮が一類は異体同心なれば人人すくなく候へども大事を成

じて一定法華經ひろまりなんと覺候、悪は多けれども一善にかつ事な

し、譬は多くの火 あつまれども一水にはきゑぬ、此の一門も又かくの

ごとし。 其の上貴辺は多年としつもりて奉公法華經にあつくをはす

る上今度はいかにもすぐれて御心ざし見えさせ給う よし人人も申し

候、又かれらも申し候、一一に承りて日天にも大神にも申し上げて候

ぞ。

御文はいそぎ御返事申すべく候ひつれどもたしかなるびんぎ候はで

いままで申し候はず、べんあさがびんぎあまりそうそうにてかきあへ

ず候いき、さては各各としのころいかんがとをぼしつる、もうこの事す
でにちかづきて候か、我が国のほろびん事はあさましけれども、これだ
にもそら事になるならば日本^{にほんこく}の人人^{ひとびと} いよいよ

法華經ほけきょうを謗ほうして万人無間地獄ばんにんむげんじごくに墮おつべし、かれだにもつよるならば国
はほろぶとも謗法ほうぼうはうすくなりなん、譬たとへば灸治やいとをしてやまいをいやし
針治はりたてにて人をなをすがごとし、当時とうじはなげくとも後は悦よろこびなり、日蓮にちれん
は法華經ほけきょうの御使おんつかいい日本国にほんこくの人人ひとびとは大族王だいくおうの一閻浮提えんぶだいの仏ぶつ法ほうを失うしないし
がごとし、蒙古国もうこは雪山せつせんの下王げわうのごとし天の御使おんつかいとして法華經ほけきょうの行者ぎやうじや
をあだむ人人ひとびとを罰ひとびとせらるるか、又現身げんしんに改悔かいげををこしてあるならば
阿闍世王あじやせの仏ぶつに歸かへして白癩びやくらいをやめ四十年の寿しゅをのべ無根の信しんと申もうす位
にのぼりて現身げんしんに無生忍むしやうにんをえたりしがごとし、恐恐きようきよう謹言きんげん。

八月六日

日蓮にちれん 花押かおう

◆三四五

六郎次郎殿御返事ごへんじ

建治三年三

月

五十六歳御作

1464p

白米三斗油一筒給ひ畢おわんぬいまにはじめぬ御心おんこころざし申しつくしがた

候日蓮にちれんが悦よろこび候のみならず釈迦しやか仏定めて御悦よろこび候らん、我則かんき歡喜

諸仏しよぶつ亦然または是これなり、明日三位房をつかはすべく候、その時委細いさい申すべく

候、恐きよう恐きよう。

建治三年丁丑ひのとうし三月十九日

日蓮 花押かおう

六郎次郎殿

次郎兵衛殿

◆三四六

滅劫御書ごしよ

1465p

滅劫もうと申すは人の心の内に候、貪とん・瞋じん・癡ちの三毒さんどくが次第しだいに強盛ごうじやうになり
もてゆくほどに次第しだいに人のいのちもつづまりせいもちいさくなりもつて
まかるなり、漢土かんど・日本国にほんこくは仏法ぶつぽう已前いぜんには三皇さんこう・五帝ごてい三聖等の外經をも
つて民の心をととのへてよをば治めしほどに次第しだいに人の心はよきことは・
はかなく・わるき事は・かしこくなりしかば・

外經の智あさきゆへに惡のふかき失とがをいましめがたし、外經をもつて世
をさまらざりしゆへに・やうやく仏經ぶつぎやうをわたして世間せけんを・をさめしかば
世をだやかなりき、此これはひとへに仏教ぶつぎやうのかしこきによつて人民じんみんの心を
くはしくあかせるなり、当時とうじの外典けてんと申すは本の外經の心にはあらず、

仏法のわたりし時は外經と仏經とあらそいしかど

もやうやく外經まけて王と民と用いざりしかば・外經のもの内經の
所従となりて立ちあうことなくありしほどに外經の人人内經の心をぬ
きて智慧をまし外經に入れて候を・をろかなる王は外典のかしこきかと
をもう。

又人の心やうやく善の智慧は・はかなく惡の智慧かしこくなりしかば
仏經の中にも小乗經の智慧世間を・をさむるに代をさまることなし、
其のとき大乗經をひろめて代を・をさめしかば・すこし代をさまりぬ、
其の後大乘經の智慧及ばざりしかば一乗經の智慧をとりいだして代
を・をさめしかば・すこししばらく代をさまりぬ、今の代は外經も
小乗經も大乘經も一乘法華經等もかなわぬよとなれり、ゆえいか
んとなれば衆生の貪・瞋・癡の心のかしこきこ

と大覺世尊だいかくせそんの大善だいぜんにかしこきがごとし、譬たとへば犬は鼻のかしこき事人に
すぎたり、又鼻の禽獸きんじゅうをかぐことは大聖の鼻通にもをとらず、ふくろ
うがみみのかしこきとびの眼まなこのかしこき・すずめの舌のかろき・りうの
身のかしこき皆みなかしこき人にも・すぐれて候、そのやうに末代濁世まつだいじよくせの心
の食欲とんよく・瞋恚しんに・愚癡ぐちのかしこきは・いかなる賢人けんじん・聖人しょうにん

も治めがたき事なり、其の故は貪欲をば仏不淨觀の藥をもて治し瞋恚をば慈悲觀をもて治し愚癡をば十二因縁觀をもてこそ治し給うに・いまは此の法門をとひて人を・をとして貪欲・瞋恚・愚癡をますなり、譬へば火をば水をもつてけす・惡をば善をもつて打つ・しかるにかへりて水より出ぬる火をば水をかくればあぶらになりていよいよ大火となるなり。

今末代惡世に世間の惡より出世の法門につきて大惡出生せり、これをば・しらずして今の人人・善根をすすればいよいよ代のほろぶる事出来せり、今の代の天台・真言等の諸宗の僧等をやしなうは・外は善根とこそ見ゆれども内は十惡・五逆にもすぎたる大惡なり、しかれば代のをさまらん事は・大覺世尊の智慧のごとくなる智人・世に有り

て仙予國王のごとくなる賢王とよりあひて・一向に善根をとどめ大惡をもつて八宗の智人とをもうものを・或はせめ・或はながし・或はせを

とどめ・或は頭あたまをはねてこそ代はすこし・をさまるべきにて候へ。

法華經ほけきょうの第一だいいちの卷の 諸法実相しよほうじつそう乃至ないし唯仏ただと仏と乃すなわち能く究尽し

給たまう」ととかれて候はこれなり、本末究竟ほんまつくきようと申すは本とは惡のね善の根

・末もうと申すは惡のをわり善の終りぞかし、善惡ぜんあくの根本こんぽん枝葉しやうをさとり極きめ

たるを仏とは申もうすなり、天台てんだい云く 天それ一心いつしんに十法界じふぽうかいを具ぐす」等云云、

章安い云く 仏なほ尚こ此だいれを大事だいじと為なす易解いげを得うべきなり」妙樂みょうらく云く

乃至終窮究竟ないししゅうぐくきようの極説ほけきなり」等云云、法華經ほけきに云く 智実相みなじつそうと相違背そういそむせ

ず」等云云、天台てんだい之これを承うけて云く 一切世間いっさいせけんの治生ちせい産業さんぎやうは皆実相みなじつそうと

相違背そういそむせず」等云云、智者ちしやとは世間せけんの法より外ふつぽうに仏法ぶつぽうを行なす、世間せけんの

治世ちせいの法を能く能く心こころへ候あひまを智者ちしやとは申もうすなり、殷いんの代ちゆうの濁なりて民の

わづらいしを大公望出世たいこうぼうしゅつぜして殷いんの紂ちゆうが頸けいを切りて民の

なげきをやめ、二世王にせおうが民の口くちににがかりし張良ちやう出いでて代を・をさめ民

の口をあまくせし、此等これらは仏法ぶつぽう已前いぜんなれども教主きょうしゅ釈尊しやくそんの御使おんつかいとして
民をたすけしなり、外經ひとびとの人人ひとひとは・しらざりしかども彼等かれらの人人ひとひとの智慧ちえ
は内心ないしんには仏法ぶつぽうの智慧ちえをさしはさみたりしなり。

今の代には正嘉しょうかの大地震だいいしんぶんえい文永の大せひせひの時智慧ちえかしこき国主こくしゅあらましかば日蓮にちれんをば用もちいつべかりしなり、それこそなからめ文永九年のどしうち・十一年の蒙古もうこのせめの時は周の文王の大公望たいこうぼうをむかへしがごとく・殷の高丁王の傳悦ふえつを七里より請しょうせしがごとくすべかりしぞかし、にちがつ いきめくら日月は生盲の者には財たからにあらず賢人けんじんをば愚王ぐおうのにくむとはこれなり、しげきゆへにしるさず、法華經ほけきょうの御心もうと申すはこれてひの事にて候・外ほかのことと・をばすべからず、大悪は大善だいぜんの来るべき瑞相ずいそうなり、一閻浮提えんぶだいうちみだすならば閻浮提えんぶだい内広令流布るふはよも疑うたがいい候はじ。

此の大進阿闍梨あじやりを故六郎入道殿にゅうどうどうの御はかへつかわし候、むかしこの法門ほうもんを聞いて候人人ひとびとには関東の内ならば我とゆきて其そのはかに自我じがけ偈ぎよみ候そうらはんと存じて候、しかれども当時とうじのありさまは日蓮にちれんかしこへゆくならば其その日に一国にきこへ又かまくらまでもさわぎ候そうらはんか、心ざし

ある人なりともゆきたらんところの人人めを・をそれ

ぬべし、いままでとぶらい候はねば聖靈いかにこひしくを・はすらんと・

をもへば・あるやうもありなん、そのほど・まづ弟子をつかわして御はかに自我偈をよませまいらせしなり、其の由御心候へ恐恐。

◆三三七

高橋殿御返事

1467p

米穀も又又かくの如し、同じ米穀なれども謗法の者をやしなうは
仏種をたつ命をついで弥弥強盛の敵人となる、又命をたすけて終に
法華經を引き入るべき故か、又法華の行者をやしなうは慈悲の中の
慈悲の米穀なるべし、一切衆生を利益するなればなり、故に仏舍利變
じて米と成るとは是なるべし、かかる今時分人をこれまでつかはし給う
事うれしさ申すばかりなし、釈迦仏・地涌の菩薩御身に入りかはらせ

給^{たま}うか。

其^その国^{こく}の仏法^{ぶつぽう}は貴^き辺^{へん}にまかせたてまつり候^{こう}ぞ、仏種^{ぶつしゆ}は縁^{ゆかり}に従^{したが}つて起^{おこ}る
是^{かくのゆえ}の故^{ゆゑ}に一乘^{いちじやう}を説^{とく}くなるべし、又治部房^{しむづけ}・下野房^{しもつけ}等来^{きた}り候^{こう}は・ばいそぎ
いそぎつかはすべく候^{こう}、松野殿^{まつのどの}にも見参^{けんさん}候^{こう}はば・くはしくかたらせ給^{たま}へ。

◆三四八

三三歳祈雨事

建治元年六月五十四歳

御作 与西山入道

1468p

夫れ木をうえ候には大風吹き候へどもつよきすけをかひぬればたうれず、本より生いて候木なれども根の弱きはたうれぬ、甲斐無き者なれどもたすくる者強ければたうれず、すこし健の者も独なれば悪しきみちにはたうれぬ、又三千大千世界のなかには舍利弗迦葉尊者をのぞいては仏よにいで給はずば一人もなく三悪道に墮つ

べかりしが、仏をたのみまいらせし強縁によりて一切衆生はをほく仏になりしなり、まして阿闍世王・あうくつまらなんど申せし悪人どもはいかにもかなうまじくて必ず阿鼻地獄に墮つべかりしかども・教主釈尊と申す大人にゆきあはせ給いてこそ仏にはならせ給いしか、されば仏に

なるみちは善知識にはすぎず、わが智慧な

にかせん、ただあつきつめたきばかりの智慧だにも候ならば善知識たい

せちなり、而るに善知識に値う事が第一のかたき事なり、されば仏は

善知識に値う事をば一眼のかめの浮木に入り・梵天よりいとを下て

大地のはりのめに入るにたとへ給へり、而るに末代悪世には悪知識は

大地微塵よりもをほく善知識は爪上の土よりもすくなし、

補陀落山の觀世音菩薩は善財童子の善知識別円二教ををしへていま

だ純円ならず、常啼菩薩は身をうて善知識をもとめしに曇無竭菩薩

にあへり、通別円の三教をならひて法華經ををしへず、舍利弗は金師

が善知識・九十日と申せしかば闍提の人となしたりき、ふるなは一夏の

説法に大乘の機を小人となす、大聖すら法華經をゆるされ

ず証果のらん機をしらず、末代悪世の学者等をば此をもつてすひし

ぬべし、天を地といふ東を西といふ。火を水とをし、星は月にすぐれた
り、ありづかは須弥山しゆみせんにこへたり、なんど申もうす人人ひとひとを信じて候そうらはん人人ひとひと
は、ならはざらん悪人あくにんにはるかをとりにてをしかりぬべし。

日蓮にちれん佛法ぶつぽうをこころみるに道理どうりと証文しやうもんとはすぎず、又道理どうり証文しやうもんよ

りも現証げんしやうにはすぎず、而しかるに去いぬる文永五年ぶんえいの比、東には俘囚えびすをこり西

には蒙古もうこよりせめつかひつきぬ、日蓮案にちれんじて云いく佛法ぶつぽうを信ぜざればなり

定めて調伏じやうぶくをこなはれずらん、調伏じやうぶくは又真言宗しんこんしやうにてぞあらんずらん、

月支がつし・漢土かんと・日本にほん・三箇国の間に且しかく月支がつしはをく、漢土かんと・日本にほんの二国は

真言宗しんこんしやうにやぶらるべし、善無畏ぜんむい三蔵さんざう・漢土かんとに亘わたりてありし時は唐とうの

玄宗げんそうの時なり、大旱魃かんぱつありしに祈雨きううの法

を、をほせつけられて候しに、大雨だいうふらせて上かみ一人より下した万民ばんみんにいたる

まで大おおに悦よろこびし程に須臾しゆゆありて大風たいふう吹き来りて国土こくどをふきやぶりしか

ば・けをさめてありしなり、又其の世に金剛智三蔵こんごうちさんざうわたる、又雨の御い

のりありしかば七日が内に大雨下り上のごとく悦よろこんでありし程に、

前代未聞の大風吹きしかば・真言宗は・をそろしき惡法あくほうなり

とて月支がつしへをわれしが・とかうしてとどまりぬ、又同じ御世に不空三蔵・

雨をいのりし程三日が内に大雨下る悦さきのごとし、又大風吹きてさ

き二度よりも・をびただし数十日とどまらず、不可思議ふかしぎの事にてありし

なり、此は日本にほんこくの智者愚者一人もしらぬ事なり、しらんと・をもはば

日蓮にちれんが生きてある時くはしくたづねならへ日本にほんこくに

は天長元年がんねん二月に大旱魃かんばつあり、弘法大師こうぼうだいしも神泉苑しんせんおんにして祈雨きうあるべき

にてありし程に守敏しゅびんと申せし人すすんで云く・弘法こうぼうは下臈げろうなり我は

上臈じやうろうなり・まづをほせを・かほるべし」と申す、こうに随したがいて守敏しゅびんをこな

う、七日と申すには大雨下りしかども京中計ばかりにて田舎いなかにふらず、

弘法こうぼうにをほせつけられてありしかば七日にふらず二七日に

ふらず三七日にふらざりしかば、天子てんし我といのりて雨をふらせ給たまいき、

而しかるを東寺とうじの門人もんじん等我が師の雨とがうす、くわしくは日記にっきをひきて

習ならうべし、天下てんか第一だいいちのわうわくのあるなり、これより外に弘仁九年こうにんの春

のえきれい又三古なげたる事に不可思議ふかしぎの誑惑おおわくあり口伝くでんすべし。

天台大師てんだいだいしは陳の世に大旱魃かんぱつあり法華經をよみて・須臾しゅゆに雨下り王臣おうしん

かうべをかたぶけ万民ばんみんたなごころをあはせたり、しかも大雨だいうにもあらず

風もふかず甘雨かんうにてありしかば、陳王大師だいいしの御前おんまえに・をはしまして内裏だいり

へかへらんことをわすれ給たまいき、此の時三度の礼拝らいはいはありしなり。

去る弘仁九年の春・大旱魃ありき・嵯峨の天王真綱と申す臣下をも
つて冬嗣のとり申されしかば・法華經・金光明經・仁王經をもつて
伝教大師祈雨ありき、三日と申せし日ほそきくもほそきあめしづしづ
と下りしかば天子あまりによろこばせ給いて、日本第一のかたことたり
し大乘の戒壇はゆるされしなり、伝教大師の御師・護命と申せし聖人
は南都第一の僧なり、四十人の御弟子あいぐして仁王經をもつて祈雨
ありしが五日と申せしに雨下りぬ、

五日はいみじき事なれども三日にはをととりて而も雨あらかりしかばま
けにならせ給いぬ、此れをもつて弘法の雨をばすひせさせ給うべし、か
く法華經はめでたく真言はをろかに候に日本のほろぶべきにや一向・
真言にてあるなり、隱岐の法王の事をもつてをもうに真言をもつて蒙古
とえぞとをでうぶくせば日本国やまけんずらんと・すひせしゆへに此の

事のちをすて・いゐて・みんとをもひしなり、いゐし時はでしらせいせしかども・いまは

あひぬれば心よかるべきにや、漢土・日本かんど にほんの智者・五百余年の間・一人もしらぬ事をかんがへて候なり、善無畏・金剛智・不空等の祈雨ぜんむい こんごうち ふくう きううに雨は下りて而も大風のそひ候は・いかに心合せ給うべき、外道の法なれども・いうにかひなき道士どうしの法にも雨下る事あり、まして仏法ぶつぽうは小乗しょうじやうなりとも法のごとく行うならば・いかでか雨下らざるべき、

いわうや大日經だいにちきやうは華嚴・般若けこん はんにかにこそをよばねども阿含あこんにはすこしまさりて候ぞかし、いかでか・いのらんに雨下らざるべき・されば雨は下りて候へども大風のそいぬるは大なる僻事ひがごとのかの法の中にまじわれるなるべし、弘法大師こうぼうだいしの三七日に雨下らずして候を天子てんしの雨を我が雨と申すは又・善無畏等ぜんむいよりも大にまさる失おおいのあるなり。

第一だいいちの大妄語もうごには弘法大師こうぼうだいしの自筆じひつに云く、弘仁九年こうにんの春疫れいをいのりてありしかば夜中に曰いいでたり」と云云、かかるそらごとをいう人なり、此の事は日蓮にちれんが門家第一もんかだいいちの秘事ひじなり本文をとりつめていうべし、
仏法ぶつぽうはさてをきぬ上にかきぬる事天下第一てんかだいいちの大事だいじなり、つてに・をほせあるべからず御心おんこころざしのいたりて候へばをどろかしまいらせ候、日蓮にちれんをばいかんがあるべかるらんと・をばつかなしと・をばしめすべきゆへに・かかる事ども候、むこり

国だにも・つよくせめ候わば今生こんじょうにもひろまる事も候いなん、あまりに
はげしくあたりし人人ひとびとは・くゆるへんもや・あらんずらん。

外道げどうと申すは仏前ぶつぜん・八百年よりはじまりて、はじめは二天三仙にてあ
りしが・やうやく・わかれて九十五種きゅうじゅうごしゆなり、其その中に多くの智者神通ちしゃじんつう
もの・ありしかども一人も生死しやうじをはなれず、又歸依きえせし人人ひとびとも善につけ
惡につけて皆三惡道みなさんあくどうに墮おち候いしを・仏出世しゆつせさせ給たまいてありしかば、
九十五種きゅうじゅうごしゆの外道げどう十六大國たいこくの王臣おうしん諸民しよをかたらひて

・或あるはのり・或あるはうち・或あるは弟子でし・或あるはだんな等無量無辺むりやうむへんころせしかども
仏たゆむ心なし、我此わこゝの法門ほうもんを諸人しよにんにをどされているやむほどならば
一切衆生地獄いっさいしじゆじごくに墮おつべしとつよくなげかせ給たまいしゆへに・退する心なし、
この外道げどうと申すは先仏きんぶつの經經きやうきやうを見て・よみそこないて候いしより事を
これり。

今も又かくのごとし、日本の法門多しといへども源は八宗・九宗・十

宗よりをこれり、十宗のなかに華嚴等の宗宗はさてをきぬ、真言と天台との勝劣に弘法・慈覚・智証のまどひしによりて日本国の人人・今生には他国にもせ

められ後生にも悪道に墮つるなり、漢土のほろび又悪道に墮つる事も善無畏・金剛智・不空のあやまりよりはじまれり、又天台宗の人人も慈覚・智証より後は・かの人人の智慧にせかれて天台宗のごとくならず、されば・さのみやはあるべき。

いわうや日蓮はかれにすぐべきとわが弟子等をばせども・仏の記文にはたがはず、末法に入つて仏法をばうじ無間地獄に墮つべきものは大地微塵よりも多く、正法をへたらん人は爪上の土よりも・すくなしと涅槃經にはとかれ、法華經には設い須弥山をなぐるものはありとも・我

が末法まつぽうに法華經ほけきようを經のごとくにとく者ありがたしと

記しるしをかせ給たまへり、大集經だいしつきよう・金光明經こんこうみようきよう・仁王經にんのうきよう・守護經しゆごはちなひをん經

・最勝王經さいしょうおうきよう等に末法まつぽうに入つて正法しょうぽうを行ぜん人出来しゅつたいせば邪法じゃぽうのもの

王臣等おうしんにうたへて・あらんほどに彼の王臣等おうしん・他人たにんが・ことばにつひて一

人の正法しょうぽうのものを

・或あるはのり・或あるはせめ・或あるはながし・或あるはころさば梵王・帝釈・無量の諸天・天神・地神等りんごくの賢王の身に入りかはりてその国をほろぼすべしと記しるし給たまへり、今の世は似て候者かな。

抑そもそも 各各はいかなる宿善しゆくぜんにて日蓮にちれんをば訪はせ給たまへるぞ、能く能く過去かこを御尋たずね有らばなにと無くとも此度生死このたびしやうじは離れさせ給たまうべし、すりはむどくは三箇年に十四字を暗くらにせざりしかども仏に成りぬ提婆だいばは六万歳を暗くらにして無間むげんに墮おちぬ是れ偏ひとえに末代まつだいの今の世を表するなり、敢あえてて人の上と思し食すべからず事繁しげければ止め置き候い畢おわんぬ、抑そもそも 当時の忽忽とうじに御志ごし申す計はかり候はねば大事だいじの事あらあらをどろかしまひらせ候、ささげ青大豆給たまい候いぬ。

六月二十二日

日蓮にちれん 花押かおう

西山殿御返

◆三四九

蒙古使御書

建治元年五十四歳御作

与西山高橋入道

1472p

鎌倉より事故なく御下りの由承り候いてうれしき申す計りなし、又

蒙古の人の頸を刎られ候事承り候日本国の敵にて候念仏・真言・禪・律

等の法師は切られずして科なき蒙古の使の頸を刎られ候ける事こそ

不便に候へ子細を知ざる人は勘へあてて候をおごりて云うと思ふべし此

の二十余年の間私には昼夜に弟子等に歎き申し公には度度申せ

し事是なり一切の大事の中に国の亡びるが第一の大事にて候なり

最勝王経に云く害の中の極めて重きは国位を失うに過ぎたること無

し」等云云、文の心は一切の悪の中に国王と成りて政悪くして我が

国を他国に破らるるが第一の惡にて候と説れて候又金光明經に云く
惡人を愛敬し善人を治罰するに由るが故に乃至他方の怨賊來りて
国人喪乱に遇う」等云云、文の心は国王と成りて惡人を愛し善人を
科にあつれば必ず其の国・他国に破らるると云う文なり、法華經第五
に云く世に恭敬せらるるを爲ること六通の羅漢の如くならん」等云
云、文の心は法華經

の敵そどうみょうの相貌そうみょうを説ときて候とに二百五十戒にひゃくごかいを堅たもく持かち迦葉かしょう舍利しやり弗ほつの如ごとくな
る人ひとを・国主こくしゅこれを尊こゝろしめみて法華經ほけきやうの行者ぎやうじやを失うなはむとするなりと説とれ
て候とぞ。

夫それ大事だいじの法門ほうもんと申もうすは別べつに候とはず、時あたりに当あたて我われが為ためめ国くにの為ため
大事だいじなる事ことを少せうしも勘かんへたがへさるが智者ちしやにては候となり、仏ぶつのいみじき
と申もうすは過去かこを勘かんへ未来みらいをしり、三世さんぜを知しめすに過すぎて候と・御智ちえ慧えは
なし、設たとい仏ぶつにあらねども竜樹りゅうじゆ・天親てんじん・天台てんだい・伝教でんぎやうなんど申もうせし聖人しょうにん・
賢人けんじん等は仏程ぶつじやうこそ・なかりしかども三世さんぜの事ことを粗知そししめされて
候としかば名なをも未来みらいまで流ながされて候とき、所詮しよせん・方法こしんは己心おさに収おさまりて
一塵いちじんもかけず九山くしやん・八海はかいも我われが身みに備そなわりて日月にちがつ・衆星しやうせいも己心こしんにあ
り、然しかりといへども盲目もうもくの者ものの鏡かがみに影かげを浮うべるに見みえず・嬰兒えいじの水みづ火かを
怖これざるが如ごとし、

外典げてんの外道げどう内典ないてんの小乗しょうじょう・権大乘こんだいじょう等は皆己心みなこしんの法はふを片端かたはし片端かたはし説ときて候なり、然しかりといへども法華經ほけきょうの如ごとく説とかず、然しかれば經經きょうきょうに勝劣しょうれつありひとびと人人せいけんにも聖賢せいけん分れて候ぞ、法門ほうもん多おほ多おほなれば止とどめ候い畢おわんぬ。

鎌倉かまくらより御下くだりそうそうの御隙すきに使もち者申す計はかりなし、其の上種しゅじゅ種しゅの物送なげり給候事悦よろこび入いつて候、日本にほんは皆人みなの歎なげき候に日蓮にちれんが一類いちるいこそ歎なげきの中に悦よろこび候へ国に候へば蒙古もうこの責せはよも脱まぬかれ候はじなれども・国のために責せられ候いし事は天しんも知しめして候へば後生ごしょうは必ずたすかりなんと悦よろこび候に・御辺ごへんこそ今生こんじょうに蒙古もうこの恩こうむを蒙たまらせ給い

て候へ此の事起おこらずば最明寺殿さいみょうじの十三年に当らせ給たまいては御かりは所領しりやうにては申もうす計はかりなし、北条六郎殿ほうじょうのやうに筑紫つくしにや御坐おわしなん、是は各々の御心のさからせ給たまうて候なり、人の科とがをあてるにはあらず、又一には法華經ほけきょうの御故ゆえにたすからせ給たまいて候いぬるか・ゆゆしき御僻事ひがことな

り、是程これほどの御悦よろこびまいりても悦よろこびまいらせ度たく候こへども人聞おつつましく
候こいてとどめ候おい畢おんぬ。

乃 時

日蓮にちれん 花押かおう

西山にしやま殿ご御返事へんじ

◆三五〇

1474p

西山殿御返事にしやまごへんじ

建治二年 五十五歳御作

青鳧せいふ五貫文給たまひい候おほい畢おわんぬ、夫それ雪いた至いたつて白しろければそむるにそめられ
ず・漆うるし至いたつてくろければしろくなる事ことなし、此これよりうつりやすきは人
の心こころなり、善惡ぜんあくにそめられ候おほ、真言しんごん・禪ぜん・念仏ねんぶつ宗等しゅうとうの邪惡じゃあくの者ものにそめら
れぬれば必ず

地獄じごくにををつ、法華經ほけきょうにそめられ奉たてまれば必ず仏ぶつになる、經きょうに云いく
諸法實相しよぼうじつそう「云云、又云く、若人にやくにんふしん不信ふしん乃至入阿鼻獄にいしにゅうあびごく」云云、いかにも御
信心しんじんをば雪漆うるしのごとくに御おほもち有あるべく候おほ、恐恐きようきよう。

建治二年丙子ひのえね

にちれん
日蓮 花押 かおう

にしやま
西山殿御返事 ごへんじ

◆三五

宝輕法重事

こうあん
弘安二年五月

五十八歳御

作 与西山入道
にしやまにゆうどう

1474p

たかん
筭 百本又二十本追給い畢んぬ、妙法蓮華經第七に云く 若し復人 また

しつぽう
有つて七宝を以て三千大千世界に満てて仏及び大菩薩・辟支仏 ひやくしふつ

あらかん
阿羅漢に供養せん、是の人の所得の功德も此の法華經の乃至一四句偈 くいげ

じゆじ
を受持する其の福の最も多きには如かじ」云云、文句の十に 七宝を しつぽう

ししやう
四聖に奉るは一偈を持つに如かずと云うは法は是れ聖の師なり能生能 のうしやう

養能成能榮法に過ぎたるは莫し故に人は輕く法は重きなり」云云、記

の十に云く父母必ず四の護を以て子を護る

が如し、今発心は法に由るを生と為し始終随逐するを養と為し極果を
満ぜしむるを成と為し能く法界に応ずるを榮と為す、四つ同じからず
と雖も法を以て本と為す」云云、経並に天台・妙樂の心は一切衆生を
供養せんと

阿羅漢あらかんを供養くようせんと乃至ないし一切いっさいの仏を尽しつして七宝しつぼうの財たからを三千大千世界さんぜんだいせんせかいにもりみて供養くようせんよりは法華經ほけきょうを一偈いちげ・或あるは受持じゅじし・或あるは護持ごじせんはすぐれたりと云云經いふに云く此この法華經ほけきょうの乃至ないし一四句偈くげを受持じゅじする其その福の最も多きには如しかず天台てんだい云く「人は軽く法は重きなり」妙樂みょうらく云く四つ同じからずと雖いえども法を以て本と為す」云云、九界

の一切衆生を仏に相對そつたいして此これをはかるに一切衆生いっさいしゅじやうのふくは一毛のころく仏の御ふくは大山のをもきがごとし、一切の仏の御ふくは梵天ぼんてん三鉢しふの衣のかるきがごとし、法華經ほけきょうの一字の御ふくの重き事は大地のをもきがごとし、人輕かろしと申すは仏を人と申す法重しと申すは法華經ほけきょうなり夫それ法華已前の諸經しよきやう並に諸論しよは仏の功德くどくをほめて

候仏のごとし、此この法華經ほけきょうは經の功德くどくをほめたり仏の父母ふぼのごとし、華嚴經けこんきやう・大日經だいにちきやう等の法華經ほけきやうに劣る事は一毛と大山と三鉢だいちと大地だいちのご

とし、乃至ないしほけきよう法華經の最下さいかの行者ぎようじやと華嚴けこん・真言しんごんの最上さいじようの僧そうとくらぶれば
帝釈たいしやくと☆猴さると師子ししと兎うとの勝劣しょうれつなり、而しかるをたみが王とののしればか
ならず命いのちとなる、諸經しよきようの行者ぎようじやが法華經ほけきようの行者ぎようじやに勝すぐれたりと申せば必
ず国くにもほろび地獄じごくへ入り候なり。

但かたきのなき時はいつわりをろかにて候、譬たとへば将門さだもつ・貞任さだもりも貞盛さだもり・
頼義らいぎがなかりし時は・国をしり妻子さいしあんのん安穩あんゑんなり云云、敵なき時はつゆも
空そらへのぼり雨も地に下り逆風の時は雨も空そらへあがり日出の時はつゆも地
にをちぬ、されば華嚴けこん等の六宗ろくしゅうは伝教でんぎようなかりし時はつゆのごとし真言しんごん
も又かくのごとし、強敵きやうてきしゆつげん出現しゆげんして法華經ほけきようをもつて・

つよくせむるならば叡山えいざんの座主ざす・東寺とうじの小室こしつ等も日輪にちりんに露つゆのあへるがご
としと・をばしめすべし、法華經ほけきようは仏滅後ぶつめつ・二千二百余年にいまだ經の
ごとく説とききわめてひろむる人なし、天台てんだい・伝教でんぎようもしろしめさざるには

あらず・時も来らず機きもなかりしかば・かききわめずして・をわらせ給たまへ
り、日蓮にちれんが弟子でしとならむ人人ひとびとは・やすくしりぬべし。

一閻浮提えんぶだいの内に法華經ほけきょうの寿量品じゅうりょうほんの釈迦仏しやくかぶつの形像ぎやうざうを・かきつくれる
堂塔どうとういまだ候こうはず、いかでか・あらわれさせ給たまわざるべき、しげければと

どめ候。

たけのこは百二十本法華經ほけきようは二千余年にあらわれ候ぬ、布施ふせはかろ
けれども志こころざし重き故なり、当時とうじはくわんのうと申し大宮づくりと申し
かたがた民のいとまなし、御心おんこころざしざしふかければ法もあらわれ候にや、
恐きよう恐きよう謹言きんげん。

五月十一日

日蓮にちれん 花押かおう

西山殿御返事にしやま ごへんじ

◆三三三

西山殿御返事にしやま ごへんじ

弘安四年こうあん

六十歳御作

1467p

あまざけ一をけ・やまのいも・ところせうせう給了おわんぬ、梵網經ぼんもうきようと
申す經もうには一紙・二草と申もうしてかみ一枚くさひとつ大論だいろんと申もうするろんに

はつちのもちるを仏にくやうせるもの閻浮提えんぶだいの王となるよしを・とかれて候。

これは・それには・にるべくもなし・そのうへをとこにもすぎわかれ・たのむかたもなきあまのするがの国西山にしやまと申すところより甲斐国かいのくにのはきるの山の中にをくられたり、人にすてられたるひじりの寒さに・せめられて・いかに心ぐるしかるらんとをもひやらせ給たまいて・をくられたるか、父母ふぼにをくれしより・このかた・かかるねんごろの

事にあひて候事こそ候はね、せめての御心おんこころさしに給たまうかとおぼえてなみだもかきあへ候はぬぞ、日蓮にちれんは・わるき者にて候へども法華經ほけきやうは・いかでか・おろそかにおわすべき、ふくろはくさけれども・つつめる金はきよし・池はきたなければどもはちすしやうじやうなり、日蓮にちれんは日本第一にほんだいいちのえせものなり、法華經ほけきやうは一切經いっけきやうにすぐれ給たまへる經な

り、心あらん人金をとらんとおぼさばふくろをすつる事なかれ、蓮をあ
ひせば池をにくむ事なかれ、わるくて仏になりたらば法華經ほけきょうの力あら
はるべし、よつて臨終りんじゅうわるくば法華經ほけきょうの名をりなん、さるにては日蓮にちれんは・
わるくてもわるかるべしわるかるべし、恐恐きょうきょう謹言。

月 日 御 返 事

◆三五三

西山殿御返事にしやまごへんじ

1477p

としごろ後生ごしやうをぼしめして御心おんこころざしをはすれば名計なけいり申し候、同行どうこうどもにあらあきこしめすべし、やすき事なれば智慧ちえの入る事にあらず、智慧ちえの入る事にあらず、恐きよう恐きよう。

一月廿三日

日蓮にちれん

在御判

西山殿御返事にしやまごへんじ

◆三五四

妙心尼御前御返事みょうしんあまごぜんごへんじ

建治元年八月がねん

五十四歳御作

1477p

すずの御志こころざし 送り給ひ候おほい了おぬ、おさなき人の御ために御まほり
さづけまいらせ候、この御まほりは法華經ほけきょうのういちのかんじん一切經いっさいきょうのげ
んもくにて候、たとへば天には日月にちがつ・地には大王だいおう・人には心・たからの中
には如意宝珠にょいほうじゅの・たまいえにははしらのやうなる事にて候。

このまんだらを身にたもちぬれば王を武士ぶしのまほるがごとく子を・を
やのあいするがごとくいの水をたのむがごとく草木そうもくのあめをねがうご
とく・とりの木をたのむがごとく・一切いっさいの仏神等ぶつしんのあつまり・まほり昼夜
に・かげのごとく・まほらせ給たまう法たにて候、よくよく御信用ごしんようあるべし、あ
なかしこ・あなかしこ、恐恐きょうきょう謹言きんげん。

八月二十五日

日蓮にちれん

花押かおう

妙心尼御前御返事みょうしんあまごぜんごへんじ

◆三五五

窪尼御前御返事あまごぜんごへんじ

弘安元年五月 五十こうあんがねん

七歳御作

1478p

粽ちまき五把は・笋たかんな十本・千日さけひとつつ給たまひい畢おわんぬ、いつもの事に候へども・

ながあめふりてなつの日ながし、山はふかく・みちしげければ・ふみわくる人も候はぬに・ほととぎすにつけての御ひとこへありがたし・ありがたし。

さてはあつわらの事こんどをもつて・をぼしめせ・さきもそら事なり、かうのとは人のいるしに・つけて・くはしくも・たづねずして此の御房ごぼうをながしける事あさましと・をぼしてゆるさせ給たまひいてののちは・させるともなく

てはいかんが・又あだせらるべき、すへひとびとの人人ほけきようの法華經の心にはあだめども・うへにそしらば・いかんがと・をもひて・事にかづけて人をあだむほどにかへりてさきざきのそら事のあらわれ候ぞ、これはそらみげうそと申もうす事はみぬさきよりすいして候、さどの国にてもそらみげうそを三度までつくりて候しぞ、これにつけても上と国と

の御ためあはれなり、木のしたなるむしの木をくらひたうし・師し子しの中ひとびとのむしの師し子しを食らいうしなふやうに守殿こうどのの御をんにてすぐる人人ひとびとが守殿こうどのの御威ぎいをかりて一切いっさいの人人ひとびとを・をどし・なやまし・わづらはし候うへ上の仰おほせとて法華經ほけきようを失うしないて国もやぶれ主をも失うしなうて返つて各々が身をほろぼさんあさましさよ、日蓮にちれんはいやしけれども

經は梵天ぼんでん・帝釈たいしゃく・日月にちがつ・四天してん・天照太神てんしやうだいてじん・八幡大菩薩はちまんだいぼさつのまほらせ給たまう御經なれば・法華經ほけきようのかたをあだむ人人ひとびとは・劍をのみ火を手てににぎるなる

べし、これにつけても・いよいよ御信用ごしんようのまさらせ給たまう事、たうとく候ぞ。

五月三日

日蓮にちれん

花押かおう

窪尼御返事こへんじ

◆三五六

窪尼御前御返事あまごぜんごへんじ

弘安元年六月こうあんがんねん

五十七歳

御作

1479p

すずの御供養くよう送り給たまい了おわんぬ、大風たいふうの草をなびかしいかづちの人を、
をどろかすやうに候、よの中にいかにいままで御しんようの候いけるふ
しぎさよ、ねふかければはかれず・いづみに玉あれば水たえずと申もうすや
うに・御信心しんじんのねのふかく・いさぎよき玉の心のうちに・わたらせ給たまう
か、たうとしたうとし、恐きよう恐きよう。

六月二十七日

日蓮にちれん 花押かおう

くぼの尼御前御返事あまごぜんごへんじ

◆三五七

妙心尼御前御返事 みょうしん あまごぜんごへんじ

弘安元年八月 こうあんがんねん

五十

七歳御作

1479p

あわしかき二箒なすび一こ給い候たまひ了おわんぬ、入道殿にゅうどうの御所ごしょ勞らうの事、
唐土もうこしに黄帝こうてい・扁鵲へんじやくと申せしくすしあり天竺てんじくに持水ていすい耆婆ぎばと申せしくすし
あり、これらはその世のたから末代まつだいのくすしの師しなり、仏と申せし人は
これには

にるべくもなきいみじきくすしなり、この仏・不死の薬をとかせ給たまへり。
今の妙法蓮華經みょうほうれんげきやうの五字ごじ是これなり、しかも・この五字ごじをば閻浮提えんぶだい人病之
良薬りやうやくとこそとかれて候へ。

入道殿にゅうどうは閻浮提えんぶだいの内日本にほん国こくの人なり、しかも身に病をうけられて候
病之良薬りやうやくの經文きやうもん顯然けんねんなり、其その上蓮華經れんげは第一だいいちの薬なり、はるり王と

申せし惡王おうぶつ仏のしたしき女人にょにん五百余人を殺して候いしに・仏阿難あなんを
靈山りょうぜんにつかはして青蓮華せいれんげをとりよせて身にふれさせ給たまいしかば・よみか
へりて七日ありて☆利天とうりてんに生れにき、蓮華れんげと申もうす花はかか
るいみじき徳ある花にて候は仏妙法みょうぼうにたとへ給たまへり、又人の死ぬる事
は・やまひにはよらず・当時とうじのゆきつしまのものどもは病なけれども・み
なみなむこ人に一時いちじに・うちころされぬ・病あれば死ぬべしといふ事
不定ふじようなり、又

このやまひは仏の御はからひか・そのゆへは 浄名經 涅槃經には病あ

る人・仏になるべきよしとかれて候、病によりて道心はをこり候なり、又

一切の病の中には五逆罪と一闍提と謗法をこそおもき病とは仏はいた

ませ給たま今の日本にほん

国の人は一人もなく極大重病あり所謂大謗法の重病なり今の禪宗

・念仏宗・律宗真言師なりこれらはあまりに病おもきゆへに我が身にも

おぼへず人もしらぬ病なりこの病のこうずるゆへに四海のつわものただい

ま来りなば王臣万民みなしづみなんこれをいきてみ候はんまなここそあ

たあたしく候へ。

入道殿は今生にはいたく法華經を御信用ありとは見え候はねども・

過去の宿習のゆへの・もよをしによりて・このなが病にしづみ日日夜夜

に道心ひまなし、今生につくりをかせ給ひし小罪は・すでにきゝ候いぬ

らん、謗法ほうぼうの大悪は又法華經ほけきょうに歸しぬるゆへに・きへさせ給たまうべしただいまに靈山りやうぜんにまいらせ給たまいなば日いいでて十方じゅうぽうをみるが・

ごとくうれしく、とくしにぬるものかなとうちよろこび給たまい候そうらはんずらん、中有ちゆううの道にいかなる事もいできたり候はば日蓮にちれんがでしなりとなのらせ給たまへわずかの日本にほん国なれどもさがみ殿のうちのものと申もうすをば・さうなく

おそるる事候、日蓮にちれんは日本にほん第一だいいちのふたうの法師ほっしただし法華經ほけきょうを信じ候事は一閻浮提えんぶだい第一だいいちの聖人しょうにんなり、其その名は十方じゅうぽうの淨土じやうどにきこえぬ、定めて天地てんちもしりぬらん・日蓮にちれんが弟子でしとなのらせ給たまはば・いかなる惡鬼あくきなりともよもしらぬよしは申もうさじとおぼすべし、さては度度たびたびの御心おんこころざし申もうすばかりなし、恐恐きょうきょう謹言きんげん。

さるは木をたのむ魚は水をたのむ・女人にょにんはおとこをたのむ・わかれ

のをしきゆへにかみをそり・そでをすみにそめぬ、いかでか十方じゅうっぽうの
仏もあはれませ給たまはざるべき、法華經ほけきょうもすてさせ給たまうべきとたのま
せ給たまえ・たのませ給たまえ。

八月十六日

日蓮にちれん 花押かおう

妙心尼御前御返事みょうしんあまごぜんごへんじ

◆三五八

窪尼御前御返事あまごぜんごへんじ

弘安二年五月こうあん

五十八歳御作

1481p

御供養くようの物数のままに慥たしかに給たまい候、当時とうじは五月の比おひにて民のいと
まなし其その上宮じようぐうの造営にて候なり、かかる暇なき時・山中の有り様思
ひやらせ給たまいて送りたびて候事御志殊ことにふかし。

阿育大王あそかだいおうと申せし王はこの天の日のめぐらせ給たまう一閻浮提えんぶだいを大体だいたいし

ろしめされ候いし王なり、此の王は昔徳勝とくしやうとて五になる童にて候いしが
釈迦しやか仏ぶつにすなのもちるをまいらせたりしゆへにかかる大王だいおうと生れさせ
給たまう、此の童はさしも心ざしなしたわふれなるやうにてこそ候いしかど
も仏のめでたくをはすればわづかの事も・ものとなり

て・かかる・めでたき事候、まして法華經ほけきょうは仏にまさらせ給たまう事星と月
ともしびと日とのごとし、又御心おんこころざしざしも・すぐれて候。

されば故入道殿にゅうどうだんも仏にならせ給たまうべし、又一人をはする・ひめ御前ごぜん
も・いのちもながく・さひわひもありて・さる人の・むすめなりと・きこえ
させ給たまうべし、当時とうじもおさなけれども母をかけてすごす女人にょにんなれば父
の後世ごしやうをもたすくべし。

から国にせいしと申せし女人にょにんは・わかなを山につみて・をひたるは・わ
をやしなひき、天あはれみて越王と申もうす大王だいおうのかりせさせ給たまいしが・み
つけてきさきとなりనికి、これも又かくのごとし・をやを・やしなふ女人にょにん
なれば天もまほらせ給たまうらん仏もあはれみ候らん、一切いっさいの善根ぜんこんの中に
孝養父母こうようふぼは第一だいいちにて候なれば・まして法華經ほけきょうにてをはす、金のうつわも
のに・きよき水を入れたるがごとく・すこしももるべからず候、めでたし

めでたし、
恐^{きょう}恐^{きょう}謹^{きん}言^{げん}。

五月四日

日蓮にちれん

花押かおう

くぼの尼御前御返事あまごぜんごへんじ

このなかの御くやうのものは・ところところ略して法門ほうもんを書写しよしやし

おわ
畢んぬ。

◆三五九

妙心みょうしん尼御前御返事あまごぜんごへんじ

弘安こうあん二年十一月 五

十八歳御作

1482p

御そうぜんれう送り給たまい了おんぬ、すでに故入道殿にゅうどうのかくるる日にて・

おはしけるか、とかうまぎれ候いけるほどに・うちわすれて候いけるなり、よもそれには・わすれ給たまはじ。

蘇武^{そぶ}と申せし男は漢王の御使^{おんつかい}に胡国^{ここく}と申^{もう}す国に入りて十九年めもおとこをはなれ・おとこもわするる事なし、あまりのこひしさに・おとこの衣を秋ごとにきぬたのうへにて・うちけるが・おもひやとをりて・ゆきにけん・おとこのみみにきこへたり、ちんしといいしものは・めおとこはなれけるに・かがみをわりて・ひとつづつ・とりにけり、わするる時はとりとび去りけり、さうしといふしものは・おとこをこひてはかにいたりて木となりぬ、相思樹^{そうしじゆ}

と申^{もう}すはこの木なり、大唐^{だいどう}へわたるにしがの明神^{みょうじん}と申^{もう}す神をはす・おとこのもろこしへ・ゆきしをこひて神となれり・しまのすがたおうなにたり、まつらさよひめといふ是^{これ}なり、いにしへより・いまにいたるまでをやこのわかれ主従のわかれ・いづれかつらからざる、されども・おとこをんなのわかれほど・たとげなかりけるはなし、過去^{かこ}遠遠より女の身となりし

が・このおとこ・娑婆^{しやば}最後のぜんちしきなりけり。

ちりしはな・をちしこのみも・さきむすぶ・いかにこ人の・返らざるら
む。

こぞもうくことしもつらき・月日かな・おもひはいつも・はれぬものゆ
へ。

ほけきよう だいもく
法華經の題目をとなへまいらせてまいらせ候。

十一月二日

にちれん かおう
日蓮 花押

みようしん あまごぜんごへんじ
妙心尼御前御返事

◆三六〇

あまごぜんごへんじ
窪尼御前御返事

こうあん
弘安二年十二月 五十八

歳御作

1483p

十字五十まい・くしがき一れん・あめをけ一・送り給たまい了おんぬ、
おんこころざし
御心ざしさきざきかきつくしてふでもつひゆびもたたぬ、三千大千世界
に七日ふる雨のかずは・かずへつくしてん、十方世界じゅうぽうの大地せかいのちりは知

る人もありなん、法華經ほけきょうの一字供養くようの功德くどくは知りがたしとこそ仏はと
かせ給たまいて候こへ此れをもつて御心ごこころへあるべし、恐恐きょうきょう謹言きんげん。

十二月二十七日

日蓮にちれん 花押かおう

くぼの尼御前御返事あまごぜんごへんじ

◆三六一

妙心尼御前御返事みょうしんあまごぜんごへんじ

弘安三年五月 五十

九歳御作

1483p

すずのものを給たまいて候こ、たうじはのう時にて人のいとまなき時・かやう
に・くさぐさのものども・をくり給たまいて候事こといかにも申もうすばかりなく

候、これもひとへに故入道殿にゅうどうの御わかれの・しのびがたきに後世ごしよの御た
めにてこそ候らんめ、ねんごろにごせをとぶらはせ給たまい候まいは・いくそば
く・うれしくおはしますらん、とふ人もなき草むら

あらわに露しげきやうにて・さばせかいにとどめをきしをさなきものなんどの
ゆくへきかまほし。

あの蘇武そぶが胡国ここくに十九年ふるさとの妻と子とのこひしさに雁の足につけしふみ、安部の中麻呂が漢土かんどにて日本にほんへかへされざりし時・東にいでし月をみてかのかすがの月よと・ながめしも身にあたりてこそ・おはすらめ。

しかるに法華經ほけきやうの題目だいもくをつねは・となへさせ給たまへば此の妙の文じ御つかひに変ぜさせ給たまい・或あるは文殊師利菩薩もんじゆしりぼさつ・或あるは普賢菩薩ふげんぼさつ・或あるは上行菩薩じやうぎやうぼさつ・或あるは不輕菩薩ふぎやうぼさつ等とならせ給たまうなり、譬たとえばちんしがかがみのとりの・つねにつげしがご

とく蘇武そぶがめのきぬたのこえのきこえしがごとくさばせかいの事を冥途めいどにつげさせ給たまうらん、又妙の文字もんじは花のこのみとなるがごとく半月の

満月まんげつとなるがごとく変じて仏ぶつとならせ給たまう文字もんじなり。

されば經きやうに云いく「能よく此この經きやうを持もつは則すなわち仏身ぶつしんを持もつなり」と、

天台大師てんだいだいしの云いく「一文文もんもん是これ真ま仏ぶつなり」等云云、妙めうの文字もんじは三十二

相しやう・八十種しゆしゆ好こう円えん備びせさせ給たまう釈迦しやくかによらい如来にて・おはしますを我等われらが眼まなこつ

たなくして文字もんじとは・みまいらせ候たなり、譬たとへばはちすの子この池いけの中に

生おいて候たがやうに候たはちすの候たをとしよりて候た人は眼まなこくらくし

てみず、よるはかげの候たをやみにみざるがごとし、されども此この妙めうの字じ

は仏ぶつにて・おはし候たなり、又また此この妙めうの文字もんじは月つきなり日ひなり星ほしなりかがみ

なり衣えなり食くなり花はななり大地だいちなり大海たいかいなり、一切いっさいの功徳くどくを合あせて妙めうの

文字もんじとならせ給たまう、又または如意宝珠にょいほうじゆのたまなり、かくのごとくしらせ

給たまうべし、くはしくは又また申もうすべし。

五月四日

日連

花押^{かおう}

はわき殿^も申^{もう}させ給^{たま}へ

◆三六二

窪尼御前御返事あまごぜんごへんじ

弘安三年六月こうあん

五十九歳

御作

1485p

仏の御弟子おんでしの中にあなりちと申せし人はこくぼん王の御子いえにたからをみて・おはしき、のちに仏の御でしとなりては天眼第一てんげんだいいちのありちとして三千大千世界さんぜんだいせんせかいを御覧ありし人、法華經ほけきょうの座にては普明如来ふみょうにょらいとならせ給うたま、そのさきのよの事をたづねればひえのはんを辟支仏ひやくしぶつと申すもう仏の弟子でしにくやうせしゆへなり、いまの比丘尼びくにはあわのわさごめ山中さんちゅうにをくりて法華經ほけきょうにくやうしまいらせ給うたま、いかでか仏にならせ給はざるべき、恐恐謹言きょうきょうきんげん。

六月二十七日

日蓮 にちれん 花押 かおう

くぼの尼御前御返事 あまごぜんごへんじ

◆三六三

窪尼御前御返事 あまごぜんごへんじ

弘安四年十二月 六十歳 こうあん

御作

1485p

しなじなのものをくり給て候。

善根と申すは大なるによらず又ちいさきにもよらず・国により人に ぜんこん もう

より時により・やうやうにかわりて候、譬 たとへばくそをほしてつきくだきふ

るいてせんだんの木につくり又女人天女 にんてん・仏につくりまいらせて候へども

火をつけてやき候へばべちの香なくそくさし、そのやうに・ものをころ

し・ぬすみをしてそのはつを・をとりて功德善根くどくぜんこんをして候へども・かへりて悪となる。

須達長者すだつちやうじゃと申せし人は月氏第一がつしだいいちの長者ちやうじゃぎをん精舎しやうじゃをつくりて仏を

入れまいらせたりしかども彼の寺焼けてあとなし、この長者ちやうじゃもといをを・ころしてあきなへて長者ちやうじゃとなりしゆへに・この寺つるにうせにき、今

の人人ひとひとの善根ぜんこんも又かくのごとく大なるやうなれども・あるひは・いくさ

をして所領しやうりやうを給・或あるはゆへなく民をわづらはして・たからをまうけて

善根ぜんこんをなす、此等これらは大なる仏事ぶつじとみゆれども仏にもならざる上そ其の

人人ひとひとあともなくなる事なり。

又人をも・わづらはさず我が心もなをしく我とはげみて善根ぜんこんをして

候も仏にならぬ事もあり、いはくよきたねをあしき田にうえぬれば・たねだにもなき上かへりて損となる、まことの心なれども供養くようせらるる人

だにも・あしければ功德くどくとならず、かへりて惡道あくどうにおつる事候。

此これは日蓮にちれんを御くやうは候はず法華經ほけきやうの御くやうなれば釈迦しやか仏ぶつ・

多宝たほう仏ぶつ・十方じゅうぽうの諸しよ仏ぶつに此この功德くどくはまかせまいらせ候、抑そも今年しんねんの事は

申しふりて候上とうじ當時とうじはとしのさむき事生れて已このかた来きたいまだおぼおほ候うわす、

ゆきなんどのふりつもりて候事おびただし、心ざしある人もとぶらひが

たし、御をとづれをぼろげの御心おんこころざしにあらざるか、恐恐きようきよう謹言きんげん。

十二月二十七日

日蓮にちれん

花押かおう

くぼの尼御前御返事あまごぜんごへんじ

◆三六四

三沢御房御返事ごぼうごへんじ

文永十二年ぶんえい

五十四歳御

作 与三沢小次郎

1468p

佐渡さどの国の行者ぎやうじや数多あまた此の所まで下向げこうゆへに今の法門ほうもん説き聞かせ候え
ば未来みらいまでの仏種ぶつしゆになる事こと是れ皆みな釈尊しやくそんの法恩ありがたし、越後にて此
の歌詠かぎじ候ゆへ書き送り候なり。

おのづから・よこしまに降雨はあらし風こそ夜の・をうつらめ。

二十一日

◆三六五 三沢抄

建治四年二月 五十七歳

御作 与三沢小次郎

1487p

かすがへず・するがの人人ひとびとみな同じ御心と申もうさせ給たまい候そうらへ。

柑子こうじ一百・こぶ・のり・をご等の生の物はるばると・わざわざ山中へ
をくり給たまいて候、ならびに・うつぶさの尼たまいござんの御こそで一給たまい
候そうらい了んぬ。

さては・かたがたのをほせくはしくみほどき候。

そもそもぶつぼう

抑おさ仏法をかくする者は大地微塵だいちみじんよりをほけれども・まことに仏に

なる人は爪の上の土よりも・すくなしと・大覚だいかく世尊せそん・涅槃經ねはんぎょうにたしかに

・とかせ給たまいて候いしを、日蓮にちれんみまいらせ候て・いかなれば・かくわ・かた

かるらむと・かんがそうらへ候いしほどに・げにも・さならむとをもう事候、
仏法ぶつぽうをばがくすれども・或あるは我が心のをろかなるにより・或あるはたとひ
智慧ちえは・かしこき・やうなれども師によりて我が心のまがるをしらず、
仏教ぶつぎょうをなをしくならひうる事かた

し、たとひ明師並じつぎように実経じつぎように値あい奉りて正法しょうほうをへたる人なれども生死しょうじを
いで仏にならむとする時には・かならず影の身にそうがごとく・雨に雲
のあるがごとく・三障四魔さんしょうしまと申もうして七の大事だいじしゅつげん出現たす、設たとひ・からくして
六は・すぐれども第七だいなんにやぶられぬれば仏になる事かたし、其その六は
且しばらくをく第七の大難だいにんは天子魔てんじまと申もうす物なり、設たとい末代まつだいの凡夫ぼんぶ・一代いちだい
聖教しょうぎょうの御心をさとり・摩訶止観まかしかんと申もうす大事だいじの御文おんふみの心を心えて仏に
なるべきになり候そうらいぬれば・第六天だいろくてんの

魔王まおう・此の事を見て驚おどろきて云いく、あらあさましや此の者・此の国あとに跡あとを

止ならば・かれが我が身の生死しやうじをいづるかは・さてをきぬ・又人を導くべ
し、又此の国土こくどを・をさへとりて我が土を浄土じやうどとなす、いかんがせんとて
欲・色・無色の三界さんがいの一切いっさいの眷属けんぞくをもよをし仰おおせ下くだして云いわく、各各の
うのうに随したがつて・かの行者ぎやうじやをなやましてみよ・そ

れに・かなわすば・かれが弟子^{でし}だんな並に国土^{こくど}の人の心の内に入りかわりて・あるひはいさめ・或^{ある}はをどしてみよ・それに叶はずば我みづから・うちくだりて国主^{こくしゅ}の身心^{しんしん}に入りかわりて・をどして見むに・いかでか・とどめざるべきとせんぎし候なり。

日蓮^{にぢれん}さきより・かかるべしと・みほどき候いて末代^{まつだい}の凡夫^{ぼんぷ}の今生^{こんじょう}に仏になる事は大事^{だいじ}にて候いけり釈迦^{しやくか}仏の仏にならせ給^{たま}いし事を経^き経^きにあまたとかれて候に第六天^{だいろくてん}の魔王^{まおう}の・いたしける大難^{だいなん}いかにも忍^{しの}ぶべしとも・み^{そうら}候はず候、提婆達多^{だいばだつた}・阿闍世王^{あじやせ}の悪事は・ひとへに第六天^{だいろくてん}の魔王^{まおう}のたばかりとこそみて候へ、まして如来^{にょらい}現在^{げんざい}・猶多^{ゆた}怨^{おん}嫉^{しつ}・況滅^{きやうめつ}度^ど後^ごともう申^{もう}して大覺世尊^{だいかくせそん}の御時^{おんとき}の御難^{なん}だにも凡夫^{ぼんぷ}の身^み・日蓮^{にぢれん}にかやうなる者は片時^{かたとき}一日も忍^{しの}びがたかるべし、

まして五十余年が間の種種^{しじじゆ}の大難^{だいなん}をや、まして末代^{まつだい}には此等^{これら}は百千万^{せんまん}

億倍すぐべく候なる大難だいなんをば・いかでか忍しのび候べきと心に存して候いし
ほどに・聖人しょうにんは未萌みぼうを知ると申もうして三世さんぜの中に未来みらいの事を知るを・まこ
との聖人しょうにんとは申もうすなり、而しかるに日蓮にちれんは聖人しょうにんにあらざれども日本国にほんこくの今
の代にあたりて・此の国亡亡たるべき事をかねて知りて

候そうらいしに・此これこそ仏のとかせ給たまいて候・況滅度後の經文きやうもんにあたりて
候そうらへ此これを申もうしいだすならば仏の指させ給たまいて候未来みらいの法華經ほけきやうの行者ぎやうじや
なり、知りて而しかも申もうさずば世世・生生の間・をうしことどもり生ん上
・教主きやうしゆしやくそん・釈尊の大怨敵其の国の国主の大讎敵・他人たにんにあらず、後生ごしやうは又
無間むげん・大城だいじやうの人・此これなりとかんがへみて・或あるは衣食いしよくに・せめられ・或あるは
父母ふぼ・兄弟きやうだい・師匠ししやう・同行どうぎやうにもいさめられ・或あるは国主こくしゆ・方民ばんみんにも・をどされ
しに・すこしもひるむ心あるならば一度ひとたびに

申もうし出ださじと・としごろひごろ心をいましめ候そうらいしが・抑そもそも過去かこ

遠おん遠ん劫ごうより定めて法華經ほけきようにも値あい奉たてまつり菩提心ぼだいしんもをこしけん、なれども
設たとい一難なん二難なんには忍しのびけれども大難次第だいにんしだいにつづき来りければ退たいしける
にや、今度このたびいかなる大難だいにんにも退せぬ心ならば申もうし出いだすべしとて申もうし出し
て候そうらいしかば・經文きようもんにたがわず此の度度たびたびの大難だいにんにはあいて候そうらいしぞかし。

今は一こうなり・いかなる大難だいなんにも・こらへてんと我が身に当あたてて心みて候はは・不審ふしんなきゆへに此の山林さんりんには栖すみ候なり、各各は又たとい・すてさせ給たまうとも一日かたときも我が身命しんみょうをたすけし人人ひとびとなれば・いかでか他人たにんにはにさせ給たまうべき、本より我、一人いかにもなるべし・我いかにしなるとも心に退転たいてんなくして仏になるならば・

とのぼらをば導きたてまつらむとやくそく申もうして候いき、各各は日蓮にちれんほども仏法ぶつぽうをば知らせ給たまわざる上俗なり、所領しよりようあり・妻子さいしあり・所従しよじゆうあり・いかにも叶かないがたかるべし、只ただいつわりをろかにて・をはせかしと申もうし候そうらいき・こそ候そうらへけれ、なに事につけてか・すてまいらせ候べき・ゆめゆめをろかのぎ候べからず。

又法門ほうもんの事はさどの国こくへながされ候そうらいし已前いぜんの法門ほうもんは・ただ仏にぜんの爾前にぜんの経と・をばしめせ、此の国の国主こくしゅ我が代をも・たもつづくば真言師しんごんし等

にも召し合せ給はんずらむ、爾の時まことの大事をば申すべし、弟子等にもなひなひ申すならばひろうしてかれらしりなんず、さらば・よもあわじと・をもひて各各にも申さざりしなり。

而るに去る文永八年九月十二日の夜たつの口にて頸をはねられんとせし時より・のちふびんなり、我につきたりし者どもにまことの事をいわざりけるとをもうて・さどの国より弟子どもに内内申す法門あり、此れは仏より後迦葉・阿難・竜樹・天親・天台・妙楽・伝教・義真等の大論師・大人師は知りてしかも御心の中に秘せさせ給いし、口より外には出し給はず、其の故は仏制して云く、我が滅後・末法に入らずば此の大法いふべからず」と・ありしゆへなり、日蓮は其の御使にはあらざれども其の時剋にあたる上・存外に此の法門をさとるぬれば・聖人の出でさせ給うまでまづ序分にあらあら申すなり、而るに此の

法門出現せば正法・像法に論師・人師の申せし法門は皆日出で

て後の星の光・巧匠の後に拙を知るなるべし、此の時には正像の寺堂の
佛像・僧等の靈驗は皆きへうせて但此の大法のみ一閻浮提に流布すべし
とみへ候、各各はかかる法門にちぎり有る人なれば・たのもしと・をば
すべし。

又うつぶさの御事は御としよらせ給いて御わたりありしいたわしくを
もひまいらせ候いしかども・うちがみへ

まいりてあるついでと候しかば・けさんに入るならば・定めてつみふかか
るべし、其の故は神は所従なり法華經は主君なり・所従のついでに
主君への・けさんは世間にも・をそれ候、其の上尼の御身になり給いては
・まづ仏をさきとすべし、かたがたの御とがありしかばけさんせず候、
此の又尼ごぜん一人にはかぎらず、其の外の人人も・しも
べのゆのついでと申す者をあまた・をひかへして候、尼ごぜんは・をやのご
とくの御としなり、御なげきいたわしく候いしかども此の義をしらせ
まいらせんためなり。

又とのは・をととしかのけさんの後そらごとにてや候いけん御そらう
と申せしかば・人をつかわして・きかんと申せしに・此の御房たちの申せ
しはそれはさる事に候へども・人をつかわしたらば・いぶせくやをもはれ
候はんずらんと申せしかば・世間のならひは・さもやあるらむ、げんに

御心おんこころざしまめなる上・御所おんつかい勞ならば御使おんつかいも有りなんと・をもひしかども・御使おんつかいもなかりしかば・いつわりをろかにて・をばつかなく候そうらいつる上無常むじようは常のならひなれ

ども・こそことしは世間せけんはうにすぎて・みみへまいらすべしとも・をばへず、こひしくこそ候そうらいつるに御をとづれあるうれしとも申もうす計ばかりなし、尼あまござんにも・このよしをつぶつぶとかたり申もうさせ給たまい候そうらへ法門ほうもんの事こまごまと・かきつもう申もうすべく候そうらへども事ひさしくなり候そうらへばとどめ候。

ただし禪宗ぜんしゆうと念仏宗ねんぶつしゆうと律宗りつしゆう等の事は少少前にも申もうして候、真言宗しんごんしゆうがことに此の国とたうどとをば・ほろぼして候ぞ、善無畏ぜんむい三蔵さんざう・金剛智こんごうち三蔵さんざう・不空三蔵ふくうさんざう・弘法大師こうぼうだいし・慈覺大師じかくだいし・智証大師ちしようだいし・此の六人が大日だいにちの三蔵さんざうと法華經ほけきようとの優劣に迷惑めいわくせしのみならず、三三蔵さんざう・事をば天竺てんじくによせて両界をつくりいだし狂惑しけるを・三大師だいしうちぬかれて

日本にほんへならひわたし国主こくしゅ並に万民ばんみんにつたへ漢土かんどの玄宗皇帝げんそうこうていも代をほろ
ぼし日本国にほんこくもやうやくをとろへて八幡大菩薩はちまんだいぼさつの百王ひやくおうのちかいもやぶ
れて八十二代おき隱岐ほうおうの法王あすま・代を東にとられ給たまいしはひとへに三大師だいし
の大僧等だいたうがいのりしゆへに還著げんちやく於本人おほんにんして侯、関東かんとうは此の惡法惡人あくほうあくにんを
対治たいじせしゆへに十八代ひやくおうをつぎて百王ひやくおうにて侯そうらべく侯そうらいつる

を、又かの悪法あくぼうの者どもを御歸依ごきえ有るゆへに一国には主なければ・梵釈ぼんしやく

・日月にちがつ・四天してんの御計おんはからいとして他国たこくにをほせつけて・をどして御らむあり、

又法華經ほけきようの行者ぎようじやをつかわして御いさめあるを・あやめずして・彼の法師ほつし

等に心をあわせて世間出世せけんしゅつぜの政道をやぶり、法にすぎて法華經ほけきようの御か

たきにならせ給たまう、すでに時すぎぬれば此の国やぶれなんとす。

やくびやうは・すでにいくさにせんふせわまたしるしなり、あさまし・

あさまし。

二月二十三日 日蓮にちれん 花押かおう

みさわどの

◆三六六

十字御書ごしよ

十字一百まい・かしひとこ給たまい了おんぬ、正月の一日は日のはじめ月の始めとしのはじめ春の始め此これをもてなす人は月の西より東をさしてみつがごとく日の東より西へわたりてあきらかなるがごとく・とくもまさり人にもあいせられ候なり。

そもそも抑おさ地獄と仏とはいづれの所に候ぞとたづね候へば・或あるは地の下と申もうす経文きやうもんもあり・或あるは西方等ほうとうと申もうす経も候、しかれども委細いさいにたづね候へば我等われらが五尺の身の内に候とみへて候、さもやをばへ候事は我等われらが心の内に父をあなづり母を・をろかにする人は地獄じごく其の人の心の内に候、譬たとへば蓮のたねの中に花と菓このみとのみゆるがごとし、仏と

申もうす事も我等われらの心の内に・をはします・譬たとへば石の中に火あり珠たまの中に財たからのあるがごとし、我等凡夫われら ばんぶはまつげのちかきと虚空こくうのとをきとは見

候事なし、我等が心の内に仏はをしましけるを知り候はざりけるぞ、
ただし疑^{うたがい}ある

事は我等は父母の精血變じて人となりて候へば三毒の根本姪欲の源
なり、いかでか仏は・わたらせ給うべきと疑い候へども又うちかへしう
ちかへし案じ候へば其のゆわれもやと・をば候、蓮はきよきもの泥より
いでたり、

せんだんはかうばしき物大地よりをいたり、さくらはをもしろき物・木
の中よりさきいづ、やうきひは見めよきもの下女のはらよりむまれた
り、月は山よりいでて山をてらす、わざわいは口より出でて身をやぶる・
さいわいは心よりいでて我をかざる。

今正月の始に法華經をくやうしまいらせんと・をばしめす御心は・木
より花のさき・池より蓮のつぼみ・雪山のせんだんのひらけ・月の始めて
出るなるべし、今・日本国の法華經をかたきとしてわざわいを千里の外
よりまねき

よせぬ、此れをもつてをもうに今又法華經ほけきょうを信ずる人は・さいわいを
万里ばんりの外よりあつむべし、影は体より生ずるもの法華經ほけきょうをかたきとする
人の国は体に・かげのそうがごとく・わざわい来るべし、法華經ほけきょうを信ずる
人は・せんだんに・かをばしさのそなえたるがごとし、又又もう申し候べし。

正月五日

日蓮にちれん 在御判

をもんすどのにようぼうごへんじの女房御返事

◆三六七

南条兵衛七郎殿御書

文永元年十二月

四十三歳御作 与南条兵衛七郎

1493p

御所^{ごしょ}勞^{らう}の由^{よし}承^{たも}り候^{こう}はまことにてや候^{こう}らん、世間^{せけん}の定^{さだ}なき事は病^{やま}なき人も留^{とど}まりがたき事に候^{こう}へば・まして病^{やま}あらん人は申^{もう}すにおよばず・但^た心あらん人は後世^{ごしよ}をこそ思^{おも}いさだむべきにて候^{こう}へ又後世^{ごしよ}を思^{おも}い定めん事は私^{ひそ}にはかなひがたく候^{こう}、一切衆生^{いっさいしゆじやう}の本師^{ほんし}にてまします釈尊^{しやくそん}の教^{きやう}こそ本^{ほん}にはなり候^{こう}べけれ。

しかるに仏^{ぶつ}の教^{きやう}へ又まぢまぢなり人の心^{こころ}の不定^{ふじやう}なる故^{ゆゑ}か。

しかれども釈尊^{しやくそん}の説教^{せつきやう}五十年^{ごじゅうねん}にはすぎず、さき四十余年^{よんじゅうよねん}の間の法門^{ほふもん}に華嚴經^{けこんきやう}には心仏^{しんぶつ}及衆生^{しゆじやう}・是三無差別^{これさんむさべつ}・阿含經^{あこんきやう}には苦^{くる}・空^{くう}・無常^{むじやう}・無我^{むが}大集經^{だいしつきやう}には染淨融通^{せんじやうゆうずう}・大品經^{だいほん}には混同無二^{こんどうむに}・雙觀經^{そうかんきやう}・觀經^{かんきやう}・

阿弥陀經等には往生極樂、此等の説教は皆正法・像法・末法の一切衆生をすくはんがためにこそとかれはべりけんめ、しかれども仏いかながおぼしけん無量義經に方便の力を以て四十余年には未だ眞實を顯さず」と説かれて先四十余年の往生極樂等の一切經は親の先判のごとくくひかへされて無量無辺不可思議・阿僧祇劫を過ぐるとも終に無上菩提を成ずることを得ず」といふきらせ給いて法華經の方便品に重ねて正直に方便を捨て但無上の道を説く」と説かせ給へり、方便をすてよととかれてはべるは四十余年の念仏等をすてよととかれて候、かうたしかにくひかへして実義を定むるには世尊の法は久くして後要当に眞實を説くべし」といひ欠しく斯の要を黙して務いで速かに説かず」と等と定められしかば、多宝仏は大地よりわきいでさせ給いてこの事眞實なりと証誠をくわへ十方の諸仏は八方に

あつまりてこうちようぜつそ広長舌相を大梵ぼんてん天宮につけさせ給ふ、二処三會二界八番の衆生しゆじよう一人もなくこれをみ候いき、此等これらの文をみ候にぶつぎよう仏教を信ぜぬ惡人あくにん外道げどうはさておき候いぬ、ぶつぎよう仏教の中に入り候てもにぜん爾前・ごんぎよう權教・ねんぶつ念仏等を厚く信じて十遍・百遍・千遍・一万乃至ないし六万等を一日にはげみて十年・二十年のあひだにも南無なむ妙法蓮華經みょうぼうれんげきようと一遍いっぺんだにも

申さぬ人人は先判に付いて後判をもちぬ者にては候まじきか、此等は
仏説を信じたりげには我身も人も思いたりげに候へども仏説の如く
らば不孝の者なり。

故に法華經の第二に云く、今、此の三界は皆是れ我が有なり、其の中の
衆生は悉く是れ吾が子なり、而も今、此の処は諸の患難多し、唯我一人
のみ能く救護を為す復教詔すと雖も、而も信受せず、等云云、此の文
の心は釈迦如来は我等衆生には親なり、師なり、主なり、我等衆生のため
には阿弥陀仏薬師・仏等は主にてはまします、親と師とにはましま
さず、ひとり三徳をかねて恩ふかき、仏は釈迦一仏にかぎりたてまつる、
親も親にこそよれ、釈尊ほどの親・師
も師にこそよれ、主も主にこそよれ、釈尊ほどの師主はありがたくこそはべ
れ、この親と師と主との仰せをそむかんもの、天神・地祇にすてられたて

まつらざらんや、不孝ふこう第一だいいちの者なり故に雖復またきようちよく教詔しんじゆ而不信受等と説か
れたり、たとひ爾前にぜんの経につかせ給たまいて百千万億劫行ぜさせ給たまうとも
法華經ほけきようを一遍いっぺんも南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようと申もうさせ給たまはずば不孝ふこうの人たる故に
さんぜじゅつぼうの聖衆しやうしゆうにもすてられ天神てんじん・地祇ちぎにもあだまれ給たまはんかは一。
たとひ五逆ごぎやく・十惡無量の惡をつくれる人も根だにも利なれば得道とくどうな
る事これあり、提婆達多だいばだつた・鴛鵒摩羅等おうくつまらこれなり、たとひ根鈍なれども罪つみ
なければ得道とくどうなる事これあり須利槃特等しゆりはんどく是なり、我等衆生は根の鈍な
る事すりはんどくにもすぎ物のいろかたちをわきまへさる事羊目のごと
し、貪とん・瞋じん・癡ちきわめてあつく十惡じゅうあくは日日にをかし五逆ごぎやく
をばおかさざれども五逆ごぎやくに似たる罪つみ又日日におかす、又十惡じゅうあく・五逆ごぎやくに
すぎたる謗法ほうぼうは人毎ひとごとにこれあり、させる語ことばを以て法華經ほけきようを謗ほうずる人は
すくなけれども人ごとに法華經ほけきようをばもちゐず、又もちゐたるやうなれ

ども念仏等ねんぶつのやうには信心しんじんふかからず、信心しんじんふかきものも法華經ほけきょうのか
たきをばせめず、いかなる大善だいぜんをつくり法華經ほけきょうを千

万部読み書しよしゃ写いちねんさんぜんし一念三千の觀道くわんどうを得たる人なりとも法華經ほけきょうの敵をだに

もせめざれば得道とくどうありがたし、たとへば朝につかふる人の十年二十年の

奉公ほうこうあれども君の敵をしりながら奏もせず私ひそかにもあだまずば奉公ほうこう皆みなう

せて還かえつ

てとがに行はれんが如し、当世の人人は謗法の者としろしめすべし是二。

仏入滅の次の日より千年をば正法と申して持戒の人多く得道の人

これあり。正法千年の後は像法千年なり破戒の者は多く得道すくな

し、像法千年の後は末法万年なり持戒もなし破戒もなし無戒の者のみ

国に充満せん、而も濁世と申してみだれたる世なり、清世と申してす

める世には直繩のまがれる木をけづらするやうに非をすて是を用うる

なり、正像より五濁やうやういできたりて末法になり候へば五濁さか

りにすぎて、大風の大波を起し

て岸を打つのみならず又波と波とをうつなり、見濁と申すは正・像やう

やうすぎぬれば、わづかの邪法の一つをつたへて無量の正法をやぶり

世間の罪にて惡道におつるものよりも仏法を以て惡道に墮つるもの多し

とみへんべり。

しかるに当世は正・像二千年すぎて末法に入つて二百余年、見濁さ
かりにして惡よりも善根にて多く惡道に墮つべき時刻なり、惡は愚癡の
人も惡とすればしたかはぬ辺もあり火を水を以てけすが如し、善は但
善と思ふほどに小善に付いて大惡の起る事をしらず、所以に伝教・
慈覺等の聖跡あり・すたれあばるれども念仏堂にあらずと

いひてすてをきて・そのかたはらにあたらしく念仏堂をつくり彼の寄進
の田畠をとりて念仏堂によす、此等は像法決疑經の文の如くならば
功德すくなしとみへはべり、これらをもつてしるべし善なれども大善をや
ぶる小善は惡道に墮つるなるべし、今の世は末法のはじめなり、
小乘經の機・權大乘經の機・皆うせはてて唯・実大乘經の
機のみあり、小船には大石をのせず惡人愚者は大石のごとし、
小乘經並に權大乘經・念仏等は小船なり、大惡瘡の湯治等は病・

大なれば小治およばず、末代濁世まつだいじよくせの我等われらには念仏等ねんぶつはたとへば冬田
を作つくるが如ごとし時があはざるなり是三知。

国をしるべし国に随したがつて人の心不定ふじようなり、たとへば江南の橘たちばなの淮北わいぼく
にうつされてからたちとなる、心なき

草木すらところによる、まして心あらんもの何ぞ所によらざらん、されば玄奘三蔵の西域と申す文に天竺の国を多く記したるに国の習として不孝なる国もあり孝の心ある国もあり瞋恚のさかんなる国もあり愚癡の多き国もあり、一向に小乗を用る国もあり一向大乘を用る国もあり大小兼学する国もありと見侍り、又一向に殺生の国一向に偷盗の国又穀の多き国又粟等の多き国不定あり、抑日本国はいかなる教を習つてか生死を離るべき国ぞと勘えたるに法華經に云く如来の滅後に於て閻浮提の内に広く流布せしめ断絶せざらしむ」等云云、此の文の心は法華經は南閻浮提の人のための有縁の經なり、弥勒菩薩の云く東方に小国有り唯だ大機のみ有り」等云云、此の論の文の如きは閻浮提の内にも東の小国に大乘經の機あるか、肇公の記に云く茲の典

は東北とうほくの小国しょうこくに有縁うえんなり」等云云、法華經ほけきょうは東北の国に縁ありとかか
れたり、安然和尚あんねんわじょうの云く、我が日本国にほんこく・皆大乘みなだいじょうを信ず」等云云、慧心えしんの
一乗要決いちじょうようけつに云く、日本一州にほん・円機純一えんきじゆんいつ」等云云、釈迦如来しやくかにょらい・弥勒菩薩みろくぼさつ・
須梨耶蘇摩三蔵しゆりやそまさんざう・羅什三蔵らじゆさんざう・僧肇法師そうひつほつし・安然和尚あんねんわじょう・慧心えしんの先徳等せんとくの心な
らば日本国にほんこくは純に法華經ほけきょうの機きなり、一句一偈いっくいちげなりとも行ぜば必ず得道とくどう
なるべし有縁うえんの法なるが故なり、たとへばくろかねを磁石じしやくのすうが如し
方諸もろもろの水をまねくにいたり、念仏ねんぶつ
等の余善よぜんは無縁むえんの国なり磁石じしやくのかねをすわず方諸もろもろの水をまねかざるが
如しごと、故に安然ゆえの釈あんねんに云く、如実乘もしじつじように非ずんば恐らくは自他じたを欺あざむかん」
等云云、此の釈しやくの心は日本国にほんこくの人に法華經ほけきょうにてなき法をさずくるもの
我が身をもあざむき人をもあざむく者と見えたり、されば法は必ず国
をかんがみて弘ひろむべし、彼の国によりし法なれば必ず此の国にもよか

るべしとは思ふべからず是四。

又仏法流布ぶつぽうの国においても前後ぜんごを勘かんうべし、仏法ぶつぽうを弘ひろむる習ならい必ず
さきに弘ひろめける法の様を知るべきなり、例せば病人に薬をあたふるには
さきに服したる薬の様を知るべし、薬と薬とがゆき合いてあらそひをな
し人をそんずる事あり、仏法ぶつぽうと仏法ぶつぽうとがゆき合いてあらそひをなして
人を損ずる事のあるなり、さきに外道げどうの法弘ひろまれる

国ならば仏法をもつて・これをやぶるべし、仏の印度にいでて外道をやぶ
り・まとうか・ぢくほうらんの震旦に來つて道士をせめ上宮太子・和国
に生れて守屋をきりしが如し、仏教においても小乗の弘まれる国をば
大乗經をもつてやぶるべし、無著菩薩の世親の小乗をやぶりしが
如し、權大乘の弘まれる国をば実大乘をもつて・これを
やぶるべし、天台智者大師の南三・北七をやぶりしが如し、而るに
日本国は天台・真言の二宗のひろまりて今に四百余歳、比丘・比丘尼・
うばそく・うばひの四衆・皆法華經の機と定めぬ、善人・惡人・有智・
無智・皆五十展轉の功德をそなふ、たとへば崑崙山に石なく蓬萊山に毒
なきが如し、而るを此の五十余年に法然といふ大謗法の者いでき
たりて、一切衆生をすかして珠に似たる石をもつて珠を投させ石をと
らせたるなり、止觀の五に云く「瓦礫を貴んで明珠なりと申す」は是な

り、一切衆生石をにぎりて珠とおもふ、念仏を申して法華經をすてたる是なり、此の事をば申せば還つてはらをたち法華經の行者をのりて、ことに無間の業をますなり是五。

但とのはこのぎをきこしめして念仏をすて法華經にならせ給いてはべりしが、定めてかへりて念仏者にぞならせ給いてはべるらん、法華經をすてて念仏者とならせ給はんは峯の石の谷へころび空の雨の地におつると、おぼせ大阿鼻地獄疑なし、大通結縁の者の三千塵点劫を久遠下種の者の五百塵点を経し事、大惡知識にあいて法華經をすてて念仏等の權教にうつりし故なり、一家の人人念仏者にてましましげに候いしかばさだめて念仏をぞすすめまいらせ給い候らん、我が信じたる事なればそれも道理にては候へども惡魔の法然が一類にたばらかさ

れたる人^{ひと}なりとおぼして大信心^{しんじん}を起し御用^{もち}いあるべからず、大惡魔^{あくま}は
貴^{とうと}き僧^{そう}となり父母^{ふぼ}・兄弟^{きょうだい}等^らにつきて人の後世^{ごしやう}をば障^{さわ}るなり、いかに申^{もう}す
とも法華經^{ほけきやう}をすてよとたばかりげに候^{そうら}はんをば御用^{もち}いあるべからず、ま
づ御^ごきやうさくあるべし。

念仏^{ねんぶつ}実に往生^{おうじやう}すべき証文^{しょうもん}つよくば此^この十二年^{じふにねん}が間念仏^{ねんぶつ}者^{むげん}無間地獄^{じごく}
と申^{もう}すをばいかなるところ申^{もう}しいだして

もつめずして候べきか、よくよくゆはき事なり、法然・善導等が・かきを
きて候ほどの法門は日蓮らは十七八の時よりしりて候いき、このごろの
人の申すもこれにすぎず、結句は法門はかなわずしてよせてたたかひに
し候なり、念仏者は数千万かたうど多く候なり、日蓮は唯一人かたう
どは一人もこれなし、今までもいきて候はふかしぎ

なり、今年も十一月十一日安房の国・東条の松原と申す大路にして、
申酉の時数百人の念仏等にまちかけられて候いて、日蓮は唯一人十人
ばかりものの要にあふものは・わづかに三四人なり、いるやはふるあめの
ごとし・うつたちはいなづまのごとし、弟子一人は当座にうちとられ二
人は大事のてにて候、自身もきられ打たれ結句

にて候いし程に、いかが候いけんうちもらされていままでいきてはべり、
いよいよ法華經こそ信心まさり候へ、第四の巻に云く、而も此の經は

如來にょらいの現在げんざいすら猶なお怨嫉おんしつ多し況めつどや滅度めつどの後のちをや」第五ごの卷まきに云いく 一切いっさい
世間せけん怨多あだおほくく

して信がたじ難がたし」等云云、日本にほん國こくに法華經ほけきやうよみ學まなする人ひとこれ多し、人の妻めかけをねらひぬすみ等らにて打うはらるる人ひとは多おほけれども法華經ほけきやうの故ゆゑにあやま
たる人ひとは一人ひとりもなし、されば日本にほん國こくの持經者じきやうはいまだ此こゝの經文きやうもんには
あわせ給たまはず唯ただ日蓮にちれん一人ひとりこそよみはべれ我不愛身命がふあいしんみやう・但惜たんしやく無上道むじやうどう是これな
りされば日蓮にちれんは日本にほん第一だいいちの法華經ほけきやうの行者ぎやうじやなり。

もしさきにたたせ給たまはば梵天ぼんてん・帝釈たいしやく・四大天王えんまたいおう・閻魔大王えんまたいおう等らにも
申もうさせ給たまうべし、日本にほん第一だいいちの法華經ほけきやうの行者ぎやうじや日蓮房にちれんの弟子でしなりとなのなら
せ給たまへよもはうしんなき事は候ひとたひはじ、但ひとたひ一度ねんぶつひとたひは念仏ねんぶつ一度ひとたひは法華經ほけきやうとな
へつ・二心ふたこころましまし人の聞きこにはばかりなんど・だにも候ひとたひはばよも日蓮にちれんが
弟子でしと申もうすとも御用ごようる候ひとたひはじ後にうらみさせ給たまうな、

但し又ただ法華經ほけきょうは今生こんじょうのいのりともなり候なれば・もしやとして・いきさ
せ給たまい候はば・あはれ・とくとく見参してみづから申もうしひらかばや、語ことば
はふみにつくさず・ふみは心をつくしがたく候はとどめ候いぬ、恐きよう恐きよう
謹言きんげん。

文永元年ぶんえいがんねん十二月十三日

日蓮にちれん 花押かおう

なんでうの七郎殿

◆三六八

薬王品得意抄

文永二年

四十四歳御作

与上野時光妻

1499p

此の薬王品の大意とは此の薬王品は第七の八巻・二十八品の中には
第二十三の品なり、此の第一巻に序品方便品の二品有り序品は二十八
品の序なり、方便品より人記品に至るまで八品は正には二乗作仏を
明し傍には菩薩・凡夫の作仏を明かす、法師宝塔提婆勸持安樂の五品
は上の八品を末代の凡夫の修行す可き様を説くなり、又涌出品
は寿量品の序なり、分別功德品より十二品は正には寿量品を末代の
凡夫の行ず可き様を傍には方便品等の八品を修行す可き様を説くな
り、然れば此の薬王品は方便品等の八品並びに寿量品を修行す可き
様を説きし品なり。

此の品に十の譬有り、第一大海の譬、先ず第一の譬を粗申す
可し、此の南閻浮提に二千五百の河あり、西俱耶尼に五千の河あり総
じて此の四天下に二万五千九百の河あり、或は四十里乃至百里・一里
・一町・二尋等の河之有り、然りと雖も此の諸河は総じて深淺の事大海
に及ばず、法華已前の華嚴經・阿含經・方等經・般若經・深密經・
阿彌陀經・涅槃經・大日經・金剛頂經・蘇悉地經・密嚴經等の釈迦
如来の所説の一切經・大日如来の所説の一切經・阿彌陀如来の所説の
一切經・藥師如来の所説の一切經過去・現在・未來三世の諸仏所説の
一切經の中に法華經第一なり、譬えば諸經は大河・中河・小河等の
如し法華經は大海の如し等と説くなり、河に勝れたる大海に十の徳有
り、

一に大海は漸次に深し河は爾からず、二に大海は死屍を留めず河は

爾しからず、三に大海たいかいは本の名字みょうじを失うしなう河しかは爾しからず、四に大海たいかいは一味いちみなり
河しかは爾しからず、五に大海たいかいは宝等有あり河しかは爾しからず、六に大海たいかいは極きわめて深し
河しかは爾しからず、七に大海たいかいは広大無量むりやうなり河しかは爾しからず、八に大海たいかいは大身だいじんの
衆生しゆじやう等有あり河しかは爾しからず、九に大海たいかいは潮しほの増減ぞうげん有あり河しかは爾しからず、十に
大海たいかいは大雨だいう・大河たいがを受けて盈溢よういつ無なし河しかは爾しからず。

此この法華經ほけきやうには十の徳有とくあり諸經しよきやうには十の失有とがり、此この經きやうは漸次深多ぜんじしんた
にして五十展転ごじゆうてんでんなり諸經しよきやうには猶なほ一も無なし

況や二三四乃至五十展転をや河は深けれども大海の浅きに及ばず

諸経は一字・一句・十念等を以て十悪・五逆等の悪機を撰すと雖も

未だ一字・一句の随喜五十展転には及ばざるなり、此の経の大海に

死屍を留めずとは法華經に背く謗法の者は極善の人為りと雖も猶之を

捨つ何に況や惡人なる上謗法を為さん者をや、設い諸経を謗すと雖も

法華經に背かざれば必ず仏道を成ず、設い一切経を信ずと雖も

法華經に背かば必ず阿鼻大城に墮つ、乃至第八には大海は大身の

衆生あり等と云うは大海には摩竭大魚等大身の衆生之有り、無間

地獄と申すは縦広八万由旬な

り五逆の者無間地獄に墮ちては一人にて必ず充滿す、此の地獄の衆生

は五逆の者大身の衆生なり、諸経の小河・大河の中には摩竭大魚

之無し法華經の大海には之有り、五逆の者・仏道を成す是れ実には

本色ほんじきを失うしなつて金色なり余山しやは爾いからず一切いっさいの諸經しよきやうは法華經ほけきやうに依よれば本の色うしなを失うしなう例せば黒色の物の日月にちがつの光に値あえば色を失うしなうが如ごとし諸經しよきやうの往生おうじやう成仏等じやうぶつの色は法華經ほけきやうに値あえば必ず其その義うしなを失うしなう。

第三には月に譬たとう衆星しやうせいは或あるは半里ある・或あるは一里ある・或あるは八里ある・或あるは十六里あるには過すぎず、月は八百余里なり衆星しやうせいは光有りと雖いえども月に及およばず、設たとい百千万億せんまん乃至ないし一四天下してんげ・三千大千さんぜん・十方世界じゆつぱうの衆星しやうせい之これを集むとも一の月の光に及およばず、何いかに況や一の星月の光に及およぶ可べきや、華嚴經けこんきやう・阿含經あこんきやう・方等ほうとう・般若はんや・涅槃經ねはんぎやう・大日經だいにちきやう・觀經くわんきやう等いっさいの一切の經之これを集むとも法華經ほけきやうの一字に及およばじ、一切衆生いっさいしやうじやうの心中しんちゆうの見思けんじ・塵沙じんじや・無明むみやうの三惑さんかく並なに十惡じじうあく・五逆等ごぎやくの業やみよは暗夜やみよのごとし華嚴經けこんきやう等いっさいの一切經いっさいきやうは闇夜やみよの星のごとし法華經ほけきやうは闇夜やみよの月のごとし法華經ほけきやうを信しんずれども深く信ぜざる者は半月やみよの闇夜やみよを照てらすが如ごとし深く信しんずる者は満月まんげつの闇夜やみよを照てらすが如ごとし月

無くして但星のみ有る夜には強力の者かたましき者などは行歩すと
いへども老骨の者女人なむどは行歩に叶わず、満月の時は女人老骨なむ
ども、或は遊宴のため、或は人に値わんが如き行歩自在なり、諸經に
は菩薩大根性の凡夫は設い得道なるとも二乗凡夫惡人・女人・乃至
末代の老骨の懈怠・無戒の人人は往生成仏不定なり、法華經は爾ら
ず、二乘惡人・女人等猶仏に成る何に況や菩薩・大根性の凡夫
をや、又月はよいよりも曉は光まさり春夏よりも秋冬は光あり、
法華經は正像二千年よりも末法には殊に利生有る可きなり、問うて
云く証文如何答えて云く道理顯然なり、其の上次ぎ下の文に云く我
が滅度の後・後の五百歳の中に広宣流布して閻浮提に於て斷絶せしむ
ること無し」等云云、此の經文に二千年の後南閻浮提に広宣
流布すべし・ととかれて候は、第三の月の譬の意なり、此の意を根本

伝でんぎやう教だいし大師しやく釈くして云いわく「正しょうぞう像す稍おわつ過まづぎはな已はて末まつ法ぽう太なだ近きはきに有ほり法ほ華つけ一いち乘じよう
の機き今いま正まさしく是これ其そのの時ときなり」等な云いふ、正しょう法ほう千せん年ねんも像ぞう法ほう千せん年ねんも法ほ華けき經きやう
の利り益やく諸しよ經きやうに之これ勝まさる可べし然しかりと雖いえども月いづの光くわうの春しゆん夏かの正しょう像ぞう二に千せん年ねん、
末まつ法ぽうの秋しゆ冬とうに至いたつて光くわうの勝まさるが如ごとし。

第だい四しに日にちの譬たとへは星せいの中ちゆうに月げつの出いでたるは星せいの光くわうには月げつの光くわうは勝まさると
も未いまだ星せいの光くわうを消しょうさず、日にち中ちゆうには星せいの光くわう消しょうゆるのみに非あらず又また月げつの光くわうも
奪うばいて光くわうを失うしなう、爾にぜん前ぜんは星せいの如ごとく法ほ華けき經きやうの迹しやく門もんは月げつの如ごとし寿じ量りやう品ぽんは
日にちの如ごとし、寿じ量りやう品ぽんの時ときは迹しやく門もんの月い未まだ及およばず何いかに況にや爾にぜん前ぜんの星せいをや、
夜よは星せいの時とき・月げつの時ときも衆しゆう務むを作なさず、夜あけ曉てて必しず衆しゆう務むを作なす、
爾にぜん前ぜん・迹しやく門もんにして猶な生しやう死じを離がれ難がたし本ほん門もん寿じ量りやう品ぽんに至いたつて必しず生しやう死じを
離はなる可べし、余よの六ろく譬れ之を略りやくす、此この外がに又また多おほくの譬たとへ此この品しんに有そり、其その
中ちゆうに渡わたりに船ふねを得えたるが如ごとしと此この譬たとへの意いは生しやう死じの大海たいかいには爾にぜん前ぜんの經きやう

は
或^{ある}
は筏
或^{ある}
は小
船

なり、生死しやうじの此岸しがんより生死しやうじの彼岸ひがんには付くと雖も生死しやうじの大海たいかいを渡り
極楽ごくらくの彼岸ひがんにはとつきがたし、例せば世間の小船等が筑紫より坂東に
至り鎌倉かまくらよりいの嶋しまなどへとつけども唐土もうこしへ至らず唐船とうせんは必ず日本国
より震旦国しんたんに至る

るに障さわり無きなり又云く貧いきに宝を得たるが如し」等云云、爾前にぜんの国
は貧国ひんくなり爾前にぜんの人は餓鬼がきなり法華經は宝の山なり人は富人なり。

問うて云く爾前にぜんは貧国ひんくといふ經文如何答えて云く授記品に云く飢
えたる国より来つて忽ちたちまに大王だいおうの膳ぜんに遇へるが如く」等云云、女人にょにんの
往生おうじやう成仏じやうぶつの段は經文に云く君もし如来にょらいの滅後めつご・後の五百歳ごひやくさいの中に若し
女人にょにん有つて是この

經典きやうてんを聞いて説ごの如く修行しゆぎやうせば此こに於て命終みんじやうして即ち安樂世界すなわ あんらくせかい
阿弥陀仏あみだぶつの菩薩ぼさつ・大衆たいしやうに囲遶いにやうせられて住する処ところに往ゆいて蓮華れんげの中宝座

の上に生じ」等云云。

問うて曰く此の經・此の品に殊に女人の往生を説く何の故か有るや、答えて曰く仏意測り難し此の義決し難きか但し一の料簡を加えば女人は衆罪の根本破国の源なり、故に内典・外典に多く之を禁しむ其の中に外典を以て之を論ずれば三従あり三従と申すは三したかうと云ふなり、一には幼にしては父母に従う嫁して夫に従う老いて子に従う此の三障有りて世間自在ならず、内典を以て之を論ずれば五障有り五障とは一には六道輪回の間男子の如く大梵天王と作らず二には帝釈と作らず三には魔王と作らず四には転輪聖王と作らず五には常に六道に留まりて三界を出でて仏に成らず經の文なり、銀色女經に云く『三世の諸仏の眼は大地に墮落すとも法界の諸の女人は永く成仏の期無し』等云云、但し凡夫すら賢王聖人は妄語せずはんよきといふし

者はけいかに頸をあたいきさつと申せし人は徐君が塚に劍をかけたたりき
これ約束やくそくを違えず妄語もうご無き故なり何に況や声聞しょうもん・菩薩ぼさつ・仏をや、仏は
昔凡夫ぼんぷにてましましし時しやうじやうきやう小乗經ならを習い給いし時たまい五戒ごかいを受け始め給い
き五戒ごかいの中の第四の不妄語もうごの戒を固く持ち給いき財たからを奪われ命をほろ
ぼされし時も此の戒をやぶらず大乘經だいじやうきやうを習い給いし時又十重禁戒じゅうきんを
持ち其その十重禁戒きんかいの中の

第四の不安語戒もうごを持ち給たまいき、此の戒を堅く持ちて無量劫むりようこう之を破りたまわす終ついに此の戒力に依よつてて仏身ぶつしんを成じ三十二相の中に広長舌相こうちようぜつそうを得たまえり、此の舌うすくひろくながくして、或あるは面かおにををい、或あるは髮際あるにいたり、或あるは梵天ぼんてんにいたる舌の上に五の画あり印文のごとし其その舌の色は赤銅のごとし舌の下に二の珠たまあり甘露かんろを涌出いだす此ここれ不安語戒の徳の至いたす所なり、仏、此の舌を以もつて三世さんぜの諸仏しよぶつの御眼まなこは大地だいちに落つとも法界ほっかいの女人にょにんは仏になるべからずと説かれしかば一切いっさいの女人にょにんは何なる世にも仏には成らせ給たまうまじきところぞ覺おほえて候へさるにては女人にょにんの御身おんみも受けさせ給たまいては設たとひ后三公きさきの位にそなはりても何かはすべき善根ぜんこん仏事ぶつじをなしてもよしなしとこそ覺おほえ候へ而しかるを此ほけきようの法華經やくおうぼんの藥王品にょにんに女人おうじようの往生おうじようをゆるされ候ぬる事又不思議ふしぎに候、彼の經もうごの妄語もうごか此の經もうごの妄語もうごかいかにも一方いっぽう

は妄語たるべきか、若し又一方妄語ならば一仏に一言あり信じ難し
但し無量義經の四十余年には未だ眞實を顯さず涅槃經の如來には
虚妄の言無しと雖も若し衆生虚妄の説に因ると知しめすの文を以て
之を思えば仏は女人は往生成仏すべからずと説かせ給いけるは妄語と
聞えたり、妙法華經の文に世尊の法は久くして後に要す当に眞實
を説くべし妙法華經乃至皆是眞實と申す文を以て之を思うに女人の
往生成仏決定と説かるる法華經の文は実語不妄語戒と見えたり、
世間の賢人も但一人ある子が不思議なる時・或は失ある時は永く子
為るべからざるの理・起請を書き・或は誓言を立てると雖も命終の時に
臨めば之を許す、然りと雖も賢人に非ずと云わず又妄語せる者とも云
わず仏も亦是くの如し、爾前四十余年が間は菩薩の得道凡夫の得道
善人男子等の得道をば許すやうなれども、

二乗惡人・女人にじようあくにん　にょにんなんどの得道とくどう此れをば許ゆるさず・或は又許ゆるすににたる事もあり、いまだ定めがたかりしを仏の説教せつぎょう・四十二年すでに過ぎて八年が間・摩謁提國王舍城おうしゃじよう・耆闍崛山ぎしゃくつせんと申す山にして法華經ほけきようを説かせ給うとおぼせし時先づ無量義經むりようぎきようと申す經を説かせ給ふ無量義經むりようぎきようの文に云くよんじゅうよねん四十余年云云。

月　日

日蓮　花押にちれん　かおう

◆三六九

上野殿うえのどの後家尼御返事ごへんじ

文永ぶんえい十一年七月

五十三歳御作

1504p

御供養くようの物種しゅじゅ種給畢おわんぬ、抑そもそもも上野殿死去うえのどのしきよの後ごはをとづれ冥途めいどよ
り候こうやらんきかまほしくをぼ候こう、ただしあるべしとも・をぼず、もし
夢ゆめにあらずんばすがたをみる事ことよもあらじ、まぼろしにあらずんばみ
みえ給たまう事こといか候そうらはん、さだめて靈山淨土りやうぜんじやうどにてさばの事をばちうや
にきき御覽ごらんじ候こうらむ、妻子等さいしは肉眼にくげんなればみさせ・

きかせ給たまう事ことなしついにたまたは一所と・をぼしめせ、生生世世しやうじよよよの間ちぎりし
夫は大海たいかいのいさごのかずよりもを・をくこそをはしまし候こういけん、今度このたびの
ちぎりこそまことのちぎりのをとこよ、そのゆへはをとこのすすめにより

て

法華經ほけきようの行者ぎやうじやとならせ給たまへば仏とをがませ給たまうべし、いきてをはしき時は生の仏今は死の仏生死しやうじともに仏なり、即身成仏そくしんじやうぶつと申もうす大事だいじの法門ほうもんこれなり、法華經ほけきようの第四に云く、若もし能く持よつこと有あれば即ちすなわ仏身ぶつしんを持つなり」云云。

夫れ浄土じやうどと云うも地獄じごくと云うも外には候はずただ我等われらがむねの間にあり、これをさとるを仏といふ・これにまよふを凡夫ぼんぷと云う、これをさとるは法華經ほけきようなり、もししからば法華經ほけきようをたもちたてまつるものは地獄じごくとくそくじゃつとじやつと即寂光そくじやうくわうとさとり候ぞ、たとひ無量億歳むりやうゑいざいのあひだ權教ごんきやうを修行しゆぎやうすとも、法華經ほけきようをはなるるならばただいつも地獄じごくなるべし、

此の事日蓮にちれんが申もうすにはあらず釈迦しやか・彌陀ぶつ・多宝たほう・十方分身じゆつぽうふんじんの諸仏しよぶつの定めをき給たまいしなり、されば權教ごんきやうを修行しゆぎやうする人は火にやくるもの又火の中

へいり、水にしづむものをふちのそこへ入るがごとし、法華經ほけきょうをたもた
ざる人は火と水との中にいたるがごとし、法華經ほけきょう誹謗ひぼうの惡知識あくちしきたる
法然ほうねん・弘法等こうぼうをたのみ阿弥陀經あみだ・大日經等だいにちきょうを信じ給たまうはなを火より火
の中水より水のそこへ入るがごとし、いかでか苦患くかんをまぬかるべきや、
等活とうかつ・黒繩こくじょう・無間地獄むげんじごくの火坑かきよう・

ぐれん 紅蓮・だいぐれん 大紅蓮の氷の底に入りしづみ給はん事疑なかるべし、法華經の
第二に云く 其の人命終して阿鼻獄に入り是くの如く展転して
無數劫に至らん」云云。

故聖靈は此の苦をまぬかれ給い・すでに法華經の行者たる日蓮が
檀那なり、經に云く 設い大火に入るも火も焼くこと能わず、若し大水
に漂わされ為も其の名号を称れば即ち浅き処を得ん」又云く 火も焼
くこと能わず水も漂すこと能わず」云云、あらたのもしや・たのもしや、
詮するとところ地獄を外にもとめ獄卒の鉄杖阿防羅刹のかし
やくのこゑ別にこれなし、此の法門ゆゆしき大事なれども、尼にたいし
まいらせておしへまいらせん、例せば竜女にたいして文殊菩薩は
即身成仏の秘法をとき給いしがごとし、これをきかせ給いて後はいよい
よ信心をいた

させ給へたま法華經ほけきようの法門ほうもんをきくにつけて・なをなを信心しんじんをはげむを・まことの道心者どうしんしゃとは申すもうなり、天台云くてんだいいわ 從藍而青じゅうらんにしやう」云云、此の釈しゃくの心はあいは葉はのときよりも・なをそむれば・いよいよあをし、法華經ほけきようはあいのごとし修行しゆぎやうのふかきは・いよいよあをきがごとし。

地獄じごくと云う二字をばつちをほるとよめり、人の死する時つちをほらぬもの候べきか、これを地獄じごくと云う、死人しにんをやく火は無間むげんの火炎えんなり、妻子さいし・眷属けんぞくの死人しにんの前後ぜんごにあらそひゆくは獄卒ごくそつ阿防羅刹あぼうらせつなり、妻子等さいしのかなしみなくは獄卒ごくそつのこゑなり、二尺五寸の杖は鉄杖てつざうなり馬頭めづ・牛は牛頭ごずなり、穴は無間むげん・大城だいじやう八万四千のかまは八万はちまん四千の塵勞門家じんろうもんかをきりいづるは死出ししゅつの山・孝子こうしの河のほとりにたたずむは三途の愛河あいがなり、別に求むる事はかなしはかなし、此の法華經ほけきようをたもちたてまつる人は此これをうちかへし・地獄じごくは寂光土じやくくわうど・火焰けつえんは報身ほうしん如来にょらいの

智火・死人は法身如来火坑は大慈悲為室の応身如来、又つえは妙法
実相のつえ、三途の愛河は生死即涅槃の大海・死出の山

は煩惱即菩提の重山なり、かく御心得させ給へ・即身成仏とも

開仏知見ともこれをさと・これをひらくを申すなり、提婆達多は

阿鼻獄を寂光極楽とひらき、竜女が即身成仏もこれより外は候はず、

逆即是順の法華経なれば

なりこれ妙の一字の功德なり。

竜樹菩薩の云く 譬えば大薬師の能く毒を変じて薬と為すが如し」

云云、妙楽大師云く 豈伽耶を離れて別に常寂を求めん寂光の外別

に娑婆有るに非ず」云云、又云く 実相は必ず諸法・諸法は必ず十如・

十如は必ず十界・十界は必ず身土なり」云云、法華經に云く

諸法実相乃至本末究竟等」云云、寿量品に云く 我実に成仏してよ

り已来無量無辺なり」等云云、此の經文に我と申すは十界なり十界

本有の仏なれば浄土に住するなり、方便品に云く 是の法は法位に住

して世間の相常住なり」云云、世間のならひとして三世常恒の相なれ

ばなげくべきにあらずをどろくべきにあらず、相の一字は八相なり八相

も生死の二字をいはず、かくさとるを法華經の行者の即身

成仏と申すなり、故聖靈は此の經の行者なれば即身成仏疑いな

し、さのみなげき給^{たま}うべからず、又なげき給^{たま}うべきが凡^{ぼんぶ}夫のことわりなり、ただし聖^{しょうにん}人の上にもこれあるなり、釈^{しゃかぶつ}迦^{にゅうめつ}仏^{にゅうめつ}御入滅のとき諸^{しよだい}大弟子等^たのさとりのなげき凡^{ぼんぶ}夫のふるまひを示し給^{たま}うか。

いかにもいかにも追^{つい}善^{ぜん}供^く養^{よう}を心のをよぶほどはげみ給^{たま}うべし、古徳のことばにも心^{しんじ}地^じを九識^{しゅうし}にもち修^{しゆぎ}行^{ぎやう}をば六識^{りくし}にせよとをし給^{たま}うことわりにもや候らん、此の文には日^{にちれん}蓮^{れん}が秘^ひ藏^{ざう}の法^{ほう}門^{もん}かきて候ぞ、秘^ひし^しさせ給^{たま}へ秘^ひし^しさせ給^{たま}へあなかしこ・あなかしこ。

七月十一日

日^{にちれん}蓮^{れん} 花^か押^お

上野殿後家尼御前御返事
うえのとのごけあまごぜんごへんじ

◆三七〇

上野殿御返事うえのどのごへんじ

文永十一年七月 五十三

歳御作

1507p

鷺目十連がもくとつる

・かわのり二帖

・しやうかう二十束

・給候たひそうらい畢おわんぬかまくら

にてかりそめの御事おんこととこそ

をもひまいらせ候いしに、をもひわすれさせ

給たまわざりける事

申もうすばかりなし、

こうへのどのだにも

をはせし

かばつね

に申もうしうけ給たまわりなんと

なげきをもひ候いつるに、

をんか

たみに御みを

わかくして・とどめをかれけるか・すがたのたがわせ給たまわぬに、御心さひ

にられける事こというばかりなし、法華經ほけきやうにて仏ほとけにならせ給たまいて候ことうけ

給たまわりて、御はか

にまいりて候いしなり、又この御心おんこころざしざし申もうすばかりなし、今年ことしのけかち

にはじめたる山中に木のもとに・このはうちしきたるやうなる・すみか・
をもひやらせ給え、たまこのほどよみ候・御經の一分をいちぶんここのへ廻向えこうしまいら
し候、あわれ人はよき子をもつべかりけるものかなと、なみだかきあえ
ずこそ候いし、妙莊嚴王は二子にみちびかる、かの王は悪人あくにんなり、こう
へのどのぜんにんは善人なり、かれにはにるべくもなし、南無妙法蓮華經・南無
みょうほうれんげきょう妙法蓮華經。

七月二十六日

にちれん日蓮 かおう花押

ごへんじ御返事

人にあながちにかたらせ給うべからず、若き殿が候へば申すべし。
わか
もう

◆三七一

上野殿御返事

文永十一年十一月

五

十三歳御作 与南条七郎次郎

1508p

聖人二管・柑子一籠・☆☆十枚・薯蕷一籠・牛房一束・種種の物送り給ひ候。

得勝・無勝の二童子は仏に沙の餅を供養したてまつりて閻浮提三分が一の主となる所謂阿育大王これなり、儒童菩薩は錠光仏に五茎の蓮華を供養したてまつりて仏となる今の教主釈尊これなり、法華經の第四に云く人有つて仏道を求めて一劫の中に於て合掌して我が前に在つて無數の偈を以て讃めん、是の讃仏に由るが故に無量の功德を得ん、持經者を歎美せんは其の福復彼れに過ぎん」等云云、文の心は仏を

一中劫が間供養くようしたてまつる

より、末代まつだい悪世あくせの中に人のあながちににくむ法華經ほけきようの行者ぎようじやを供養くようする

功德くどくはすぐれたりと・とかせ給たまう、たれの人のかかるひが事をばおほせ

らるるぞと疑うたがい いおもひ候きようへは教主きようしゆしやくそん釈尊しやくそんの我とおほせられて候なり、

疑うたがはんとも信おほぜんとも御心ごしんにまかせまいらする、仏の御舌ごしは・或あるは面かおに

覆おほひ・或あるは三千大千世界さんぜんだいせんせかいに覆おほひ・或あるは色究竟天しきくきようてんまでに付け給たまう

、過去かこ遠遠劫おんのんこうより・このかた一言も妄語もうごのましまさざるゆへなり、され

ば・或ある経きやうに云いく・須弥山しゆみせんはくづるるとも・大地だいちをばうちかへすとも仏に

は妄語もうごなし」ととかれたり、日は西よりいづとも大海たいかいの潮はみちひずと

も・仏の御言みことばはあやまりなしとかや、其その上此このの法華經ほけきようは他經たきようにも・す

ぐれさせ給たまへば・多宝仏たぼうぶつも証しょうみよう明しよふつし諸仏しよぶつも舌を梵天ぼんてんにつけ給たまう、一字一

点も妄語もうごは候まじきにや。

其^その上殿はをさなくをはしき、故親父は武士^{ぶし}なりしかどもあなかに
に法華經^{ほけきょう}を尊^{たまい}み給^{たま}いしかば・臨終^{りんじゅう}正念^{しょうねん}なりけるよしうけ給^{たま}わりき、
其^その親の跡^{あと}をつがせ給^{たま}いて又此の經を御信用^{ごしんよう}あれば・故^し聖靈^{しょうりょう}いかに草
のかげにても喜びおぼすらん、あわれいきてをばせば・いかにうれしかる
べき、此の經を持つ^{ひと}人人^{ひと}は他人^{たにん}なれども同じ靈山^{りょうせん}へまいり

あはせ給^{たま}うなり、いかにいはんや故^し聖靈^{しょうりやう}も殿も同じく法華經^{ほけきやう}を信じさせ給^{たま}へは同じところに生れさせ給^{たま}うべし、いかなれば他人^{たにん}は五六十までも親と同じしらがなる人もあり、我がわかき身に親にはやくをくれて教訓^{きやうくん}をもうけ給^{たま}はらざるらんと御心のうちをしはかるこそなみだもとまり候はね。

抑^{そも}日蓮^{にちれん}は日本国^{にほんこく}をたすけんとふかくおもへども・日本国^{にほんこく}の上下^{じやうげ}万人^{ばんにん}・一同に国のほろぶべきゆへにや用^{もち}いられざる上^{たひたひ}度^{たび}あだをなさるれば力をよばず山林^{さんりん}にまじはり候いぬ、大蒙古国^{だいもうこく}よりよせて候と申せば、申せし事を御用^{もち}いあらば・いかになんど・あはれなり、皆人^{みな}の当時^{とうじ}のいきつしまのやうにならせ給^{たま}はん事おもひやり候へば・なみだもとまらず。

念仏宗^{ねんぶつしゅう}と申^{もう}すは亡国^{ぼうこく}の悪法^{あくほう}なり、このいくさには大^{だい}体^{たい}人^{ひと}人^{びと}の自害^{じがい}を

し候そうらはんずるなり、善導ぜんどうと申もうす愚癡ぐちの法師ほつしがひろめはじめて自害じがいをして候まうゆへに念仏ねんぶつをよくよく申もうせば自害じがいの心出来しゅつたいし候まうぞ。

禪宗ぜんしゅうと申もうし当時とうじの持斎じさい法師ほつし等は天魔てんまの所為しよゐなり、教外別伝きやうげべつでんと申もうして神かみも仏ぶつもなしなんと申もうすものくるはしき惡法あくほうなり。

真言宗しんこんしゅうと申もうす宗そうは本ほんは下劣げれつの經きやうにて候まういしを誑惑おおわくして法華經ほけきやうにも

勝まさるなんと申もうして多くの人人ひとびと・大師だいし僧正そうじやうなどになりて日本国にほんこくに大体だいたい

充満じゅうまんして上一人かみいちにんより頭こづべをかたぶけたり、これが第一だいいちの邪事じやじに候まうを昔むかし

り今いまにいたるまで知る人なし、但ただ伝教大師でんぎやうだいしと申まうせし人こそしりて候まういし

かどもくはしくもおほせられず、さては日蓮にぢれんほぼこの事こと

をしれり、後白河こうはくわの法皇ほうこうの太政たいうぢやうの入道にゅうどうに・せめられ給たまいし、隱岐おきの法王ほうおう

のかまくらにまけさせ給たまいし事ことみな真言しんごん惡法あくほうのゆへなり、漢土かんどにこの法ほう

わたりて玄宗皇帝げんそうこうていほろびさせ給たまう、この惡法あくほうかまくらに下くだつて当時とうじかま

くらにはやる僧正そうじょう法印ほういん等は是これなり、これらの人人ひとひとこのいくさを調伏じょうぶくせば百日たたかふべきは十日につづまり十日のいくさは一日にせめらるべし。

今始めて申すもうにあらず二十余年が間音こえもをしまずよばはり候いぬるなり、あなかしこ・あなかしこ、この御文おんふみは大事だいじの事どもかきて候、よくよく人によませてきこしめせ、人もそしり候へものともおもはぬ法師等ほっしなり、恐恐きようきよう謹言きんげん。

文永十一年太歳甲戌ぶんえい十一月十一日

日蓮にちれん 花押かおう

南条七郎次郎殿御返事ごへんじ

◆三七二 春の祝御書ごしよ

1510p

春のいわいわすでに事ふり候いぬ、さては故ななんうでうどのはひさしき

事には候はざりしかども・よろず事にふれて・なつかしき心ありしかば・
をろかならずをもひしに・よわひ盛さかんなりしに・はかなかりし事わかれ
かなしかりしかばわざとかまくらよりうちくだかり御はかをば見候い
ぬ、それよりのちはするがのびんにはと・をもひし

にこのたびくだしには人にしのびてこれへきたりしかばにしやまの入道にゅうどう

殿にもしられ候はざりし上は力をよばずとをりて候いしが心にかかりて
候その心をとげんがために此の御房ごぼうは正月の内につかわして御はかにて
自我じがけ偈一卷よませんとをもひてまいらせ候、御とのの御かたみもなしな
んとなげきて候へは・とのをとどめをかれ

ける事よろこび入つて候、故殿は木のもと・くさむらのかげ・かよう人も
なし、仏法ぶつぽうをも聴聞ちやうもんせんず・いかにつれづれなるらん、をもひやり候へ
ばなんだもとどまらず、とのの法華ほけきやう經の行者ぎやうじやうちぐして御はかにむか

わせ給^{たま}うには、いかにうれしかるらんいかにうれしかるらん。

◆三七三

上野殿御返事うえのどのごへんじ

建治元年五月がんねん 五十四歳

御作 与上野次郎時光

1511p

さつきの二日にいものかしらいしのやうにほされて候を一駄、ふじのうへのよりみのぶの山へをくり給たまいて候。

仏の御弟子おんでしにあなりちと申せし人は天眼第一てんげんだいいちのあなりちとて十人の

御弟子おんでしのその一迦葉舍利弗かしようしゃりほつ・自連阿難もくれんあなんにかたをならべし人なり、この人

のゆらひをたづねみれば・師子しし・王きやうおうと申せし国王こくおうの第二の王子みこに・こく

ばん王と申せし人の御子しやかに釈迦しやかに如来のいとこにて・おはしましき、この人の

御名みな三つ候、一には無貧・二には如意にょい・三にはむれう

と申すもう一一にふしぎの事候、昔うえたるよにりだそんじやと申せした

うとき辟支仏ありき、うえたるよに七日ときもならざりけるが山里に

れうしの御器に入れて候いけるひえのはんをこひてならせ給う、このゆへ

にこのれうし現在には長者となりのおち九十一劫が間人中天上にたの

しみをうけて今最後にこくぼん王の太子と

むまれさせ給う、金のごきにはんとこしなへにたえせずあらかんとなら

せ給う、御眼に三千大千世界を一時に御らんありていみじくをはせし

が法華經第四の巻にして普明如来と成るべきよし仏に仰せをかほらせ

給いき、

妙楽大師・此の事を釈して云く 釋飯輕しと雖も所有を尽し、及び田

勝るるを以ての故に故に勝報を得る」と云云、釈の心かるきひえのはん

なれども此れよりほかには・もたざりしを・たうとき人のうえておはせ

しに・まいらせてありしゆへに・かかるめでたき人となれりと云云。

此の身のぶのさは石なんどはおほく候されども・かかるものなし、
その上夏のころなれば民のいとまも候はじ、又御造営と申もうしさこそ候ら
んに山里の事を・をもひやらせ給たまいて・をくりたびて候、所詮しよせんは・わがを
やのわかれ

をしさに父の御ために釈迦しやかぶつ・法華經ほけきやうへまいらせ給うたまにや孝養こやうようの御心か、さる事なくば梵王ぼんのう・帝釈たいしやく・日月いちがつ・四天してんその人の家をすみかとせんとちかはせ給たまいて候はいふにかひなきものなれども約束やくそくと申もうす事はたがへぬ事にて候に、さりとともこの人人ひとびとはいかでか仏前ぶつぜんの御約束やくそくをばたがへさせ給たまい候べき、もし此の事まことになり候はば・

わが大事だいじとおもはん人人ひとびとのせいし候、又おほきなる難来なんるべし、その時すでに此の事かなうべきにやとおぼしめしていよいよ強盛かうじやうなるべし、さるほどならば聖靈しやうりやう・仏になり給たまうべし、成り給たまうならば来りてまほり給たまうべし、其の時一切そのときいつさいは心にまかせんずるなり、かへす・がへす人のせいしあらば心にうれしくおぼすべし、恐恐きようきよう謹言きんげん。

五月三日

日蓮にちれん 花押かおう

上野殿御返事うえのどのごへんじ

◆三七四

上野殿御返事うえのどのごへんじ

建治元年七月 五十四歳がんねん

御作

1512p

むぎひとひとつ・かわのり五条・はじめ六十給了おわんぬ、いつもの御事おんことに
候へばをどろかれずめづらしからぬやうにうちをばへ候はばむぶの心
なり、せけんそうそうなる上を・をみやつくられさせ給へば百姓ひやくせいと申し
我が内の者と申しけかちと申しものつくりと申しいくそばくいとまなく
御わたりにて候らむに山のなかの・すまる

さこそと思ひやらせ給いて鳥のかい子をやしなふが如く灯に油をそふる
がごとく・かれたる草に雨のふるが如く・うへたる子に乳をあたふるが
如く法華經の御命をつがせ給う事三世の諸仏を供養し給へるにてある

なり、十方じゅうぽうの衆生しゅじょうの眼まなこを開く功德くどくにて候べし、尊しとも申もうす計ばかりなし、あなかしこ・あなかしこ恐恐きょうきょう謹言きんげん。

七月十二日 日蓮花押にちれんかおう 進上しんじょう

上野殿御返事うえのどのごへんじ

◆三七五

上野殿御書うえのとのごしょ

建治元年八月がんねん 五十四歳御作

与南条時光なんじょうときみつ

1513p

態わざと御使おんつかいい有難かたく候そ、夫れについては屋形造の由目出度たくこそ候へ
何か参り候わたましもういて移徙申わたましもうし候はばや、一つ棟札むなふだの事承たまわり候書き候いて此の
伯耆公に進きせ候。

此の経文きようもんは須達長者すだつちようじや祇園精舍ぎおんしやうじやを造つくりき、然しかるに何いなる因縁いんねんにやよ
りけん須達長者すだつちようじや七度まで火災にあひ候時ちようじや・長者・此の由よしを仏に問いい
奉たてまつる、仏答のたまわえて曰く汝けんぞくが眷属貪欲とんよく深き故ゆえに此の火災の難なん起おこるなり、
長者申ちようじやもうさくさていかんして此の火災の難なんをふせぎ申もうすべきや、仏の
給たまはく辰巳の方ずいそうより瑞相なんじしやうじんあるべし汝精進なんじしやうじんして彼まさの方あなたに向むかへ彼方

より光ささば鬼神きじん三人来りて云わん、南海に鳥あり鳴忿めいふんと名なく此の鳥の住処じゅうしょに火災なし、又此の鳥一つの文を唱となうべし、其の文に云く聖主せいしゅ天中天迦陵頻伽声哀愍衆生者我等今敬礼あいかんしゅじやう云云、此の文を唱へんには必ず三十万

里が内には火災をこらじと此の三人の鬼神かくの如く告ぐべきなり云云、須達すだつ・仏の仰せの如くせしかば少しもちがはず候いき、其の後火災なきと見えて候、これに依りて滅後めつご・末代まつだいにいたるまで此の經文きやうもんを書きて火災をやめ候、今以てかくの如くなるべく候、返す返す信じ給うべき經文きやうもんなり、是は法華經ほけきやうの第三の卷化城喻品に説かれて候、委しくは此の御房ごぼうに申し含めて候、恐恐謹言きやうきやうきんげん。

八月十八日

日蓮にちれん 花押かおう

上野殿御返事うえのどのごへんじ

◆三七六

单衣抄

建治元年八月

五十四歳御作

1514p

单衣一領送り給たまい候おい畢おんぬ。

棄老国には老者をすて日本国にほんこくには今法華經ほけきょうの行者ぎようじゃをすつ、抑そも此この

国開闢かいびやくより天神七代てんじん・地神五代ちじんごだい人王百代あり、神武より已い後ご九十代

欽明きんめいより仏法ぶつぽう始まりて六十代七百余年に及べり、其その中に父母ふぼを殺す

者朝敵ちやうてきとなる者山賊海賊さんぞくかいぞく数かずを知らざれどもいまだきかず法華經ほけきょうの

故ゆえに日蓮程人にちれんに惡にくまれたる者はなし、或あるは王おうに惡にくまれたれども民には

惡にくまれず、或あるは僧そうは惡にくめば俗ぞくはもれ、男おとこは惡にくめば女めはもれ、或あるは愚ぐ人にん

は惡にくめば智人ちじんはもれたり、

此これは王おうよりは民男女なんによよりは僧尼そうに愚人ぐにんよりは智人ちじん惡にくむ惡人あくにんよりは善人ぜんにん

悪む、前代未聞の身なり後代にも有るべしともおぼえす、故に生年三十二より今年五十四に至るまで二十余年の間、或は寺を追ひ出され、或は処をおわれ、或は親類を煩はされ、或は夜打ちにあひ、或は合戦にあひ、或は悪口数をしらず、或は打たれ、或は手を負う、或は弟子を殺され、或は頸を切られんとし、或は流罪兩度に及べり、二十余年が間、一時片時も心安き事なし、頼朝の七年の合戦もひまやありけん、頼義が十二年の闘諍も争か是にはすぐべき。

法華經の第四に云く、如来の現在にすら猶怨嫉多し」等云云、第五に云く、「一切世間怨多くして信じ難し」等云云、天台大師も恐らくはいまだ此の經文をばよみ給はず、一切世間皆信受せし故なり、伝教大師も及び給うべからず況滅度後の經文に符合せざるが故に、日蓮日本国に出現せずば如来の金言も虚くなり多宝の証明もなに

かせん十方じゅうぽうの諸仏しよぶつの御語おんごも妄語もうごとなりなん、仏滅後・二千二百二十
余年がとし月氏かんど・漢土にほん・日本いっさいに一切世間せけん・多怨難信たおんなんしんの人なし、日蓮にちれんなくば仏語ぶつご
既すでに絶えなん、かかる身なれば蘇武そぶが如く雪を食として命を継ぎ、
李陵りりやうが如く簞みのをきて世をすごす、山林さんりんに交つて果なき時は空むなしくして兩
三日を過すぐ鹿の皮破ぬれば裸にして三四月に及べり、かかる者

をば何としてか哀とおぼしけん、未だ見参にも入らぬ人の膚を隠す衣を送り給候こそ何とも存じがたく候へ此の帷をきて仏前に詣でて法華經を読み奉り候いなば・御經の文字は六万九千三百八十四字・一の文字は皆金色の仏なり、衣は一つなれども六万九千三百八十四仏に一一にきせまいらせ給へるなり、されば此の衣を給て候わば夫妻二人ともに此の仏御尋ね坐して我が檀那なりと守らせ給うらん、今生には祈りとなり・財となり・御臨終の時は月となり・日となり・道となり・橋となり・父となり・母となり・牛馬となり・輿となり・車となり・蓮華となり・山となり二人を靈山淨土へ迎え取りまいらせ給うべし、南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經。

建治元年乙亥八月 日

日蓮 花押

此の文は藤四郎殿女房と常により合いて御覽あるべく候。

◆三七七

上野殿母尼御前御返事

1515p

母尼ごぜんにはことに法華經の御信心のふかくましまし候なる事
悦び候と申させ給候へ。

止觀第五の事正月一日辰の時此れをよみはじめ候、明年は世間忽々
なるべきよし皆人申すあひだ一向後生のために十五日まで止觀を談ぜ
んとし候が、文あまた候はず候・御計らい候べきか、白米一斗御志
申しつくしがたう候、鎌倉は世間かつして候、僧はあまたをはします
過去の餓鬼道の苦をばつくのわせ候ひぬるか。

法門の事、日本国に人ごとに信ぜさせんと願して候いしが願や成熟

せんとし候らん、とうじ当時は蒙古もうこの勘文かんもんによりて世間せけんやわらぎて候なり
子細しさいありぬと見へ候、本より信じたる人人ひとびとはことに悦ぶげに候か、
恐恐きようきよう。

十二月二十二日

日蓮にちれん

花押かおう

上野殿母尼御前御返事うえのどの あまごぜんごへんじ

◆三七八

神国王御書

1516p

夫れそ以おもんみればにほんこく日本国またを亦水穂の国と云い亦野馬台又秋津島又扶桑等
云云、六十六ヶ国二つの島已上・六十八ヶ国・東西三千余里さんぜん・南北は
不定ふじようなり、此の国に五畿ごき・七道しちどうあり・五畿ごきと申すは山城・大和・河内・和
泉・摂津等なり、七道しちどうと申すは東海道十五箇国・東山道八箇国・北陸
道七箇国・山陰道八ヶ国・山陽道八ヶ国・南海道六ヶ国・西海道十一ヶ
国・亦鎮西またと云い・又太宰府と云云、已上こ此れは国なり、国主こくしゅをたづぬ
れば神世十二代は天神七代・地神五代なり、天神七代の第一は国常立
尊ないし乃至・第七は伊奘諾尊男いざなぎのみことなり、伊奘册尊妻いざなみのみことなり、地神五代の第一は
天照太神てんしょうだいじん・伊勢太神宮日いせだいじんぐうの神これ是なりいざなぎいざなみの御女なり、

ないし
乃至第五は彦波瀲武☆☆草葺不合尊・此の神は第四のひこほの

御子なり母は竜の女なり、已上地神五代・已上十二代は神世なり、人

王は大體百代なるべきか其の第一の王は神武天皇此れはひこなぎさの

御子なり、乃至第十四は仲哀天皇父なり第十五は神功皇后母なり第十六

は応神

天皇にして仲哀と神功の御子今の八幡大菩薩なり、乃至第二十九代は

宣化天皇なり、此の時までは月支漢土には仏法ありしかども日本国に

はいまだわたらず。

第三十代は欽明天皇此の皇は第二十七代の継体の御敵子なり治三

十二年、此の皇の治十三年壬申十月十三日辛酉百濟国の聖明皇金銅の

釈迦仏を渡し奉る、今・日本国の上下万人・一同に阿弥陀仏と申す

此れなり、其の表の文に云く臣聞く方法の中には仏法最善し世間の道

にもぶつぼう仏法最上さいじょうなり天皇陛下てんのう亦また修行しゆぎやうあるべし、故ゆゑに敬うやまつつてぶつぞう仏像きようざう經教きやうきやう
ほつし法師ささを捧たかげて使つかに附ふして貢獻きやうけんす宜よろしく信行しんぎやうあるべき者ものなり已上いじやう、然しかりとい
へどもきんめい欽明びんたつ・びんたつ敏達ようめい・用明ようめいの三代・三十余年あがめは崇たかめ給たまう事ことなし、其その間まの事
さまざまなりといへども其そのの時ときの天変地天てんぺんちちやうは今の代よにこそにて候まちへども・
今は亦また其その

代にはにるべくもなき変天なり、第三十三代崇峻天皇すしゅんてんのうの御宇ぎようより仏法
我が朝に崇められて、第三十四代推古天皇すいこてんのうの御宇ぎように盛さかんにひろまりき、
此の時三論宗さんろんしゅうと成実宗じやうじつと申もうす宗始めて渡りて候いき、此の三論宗は
月氏がっしにても漢土かんどにても、日本にほんにても大乘宗だいじやうの始なり、故に宗の母とも
宗の父とも申もうす、人王三十六代・皇極天皇てんのうの御宇ぎように禪宗ぜんしゅうわた
る、人王四十代・天武の御宇ぎように法相宗ほうそうしゅうわたる、人王四十四代元正天皇てんのう
の御宇ぎように大日經だいにちきやうわたる、人王四十五代に聖武天皇しやうむてんのうの御宇ぎように華嚴宗けこんしゅうを
弘通くわつうせさせ給たまう、人王四十六代・孝謙天皇かうけんてんのうの御宇ぎように律宗りつしゅうと法華宗ほつげしゅうわた
る、しかりといへども唯律宗ただりつしゅう計はかりを弘ひろめて天台法華宗てんだいほつげしゅうは弘通くわつうなし。

人王第五十代に最澄さいちやうと申もうす聖人しやうにんあり、法華宗ほつげしゅうを我と見出して
俱舎宗くしやしゅう・成実宗じやうじつ・律宗りつしゅう・法相宗ほうそうしゅう・三論宗さんろんしゅう・華嚴宗けこんしゅう等の六宗ろくしゅうをせめをと
し給たまうのみならず、漢土かんどに大日宗だいにちと申もうす宗有りとしろしめせり、同じ

き御宇ぎように漢土かんどにわたりて四宗をならいわたし給うたま、所謂いわゆる法華宗ほつげしゅう・
真言宗しんこんしゅう・禪宗ぜんしゅう大乘だいじようの律宗りつしゅうなり、しかりといへども法華宗ほつげしゅうと律宗りつしゅうとを
ば弘通ぐつうあ

りて禪宗ぜんしゅうをば弘め給はずひろ、真言宗しんこんしゅうをば宗の字をけづり七大寺等の
諸僧しよそうに灌頂かんちようを許し給うゆる、然れども世間の人人せけんは・いかなるという事を
しらず、当時の人人とうじの云く此の人は漢土かんどにて法華宗ほつげしゅうをば委細いさいになら
て真言宗しんこんしゅうをばくはしくも知ろし食し給はざりけるかとすいし申すな
り。

同じき御宇ぎように空海くうかいと申す人漢土かんどにわたりて真言宗しんこんしゅうをならう、しか
りといへどもいまだ此の御代みよには歸朝きちようなし、人王第五十一代いちだいいに平城天皇へいぜいてんのう
の御宇ぎように歸朝きちようあり、五十二代嵯峨さがの天皇てんのうの御宇ぎように弘仁十四年癸卯正月こうにん
十九日に・真言宗しんこんしゅうの住処東寺じゅうしやとうじを給いて護国教王院たまいとがうす、伝教まも

大師御入滅の一年の後なり。

人王五十四代・仁明天皇の御宇に円仁和尙・漢土にわたりて重ねて
法華・真言の二宗をならいわたす、人王五十五代・文徳天皇の御宇に
仁寿と斉衡とに金剛頂經の疏・蘇悉地經の疏・已上十四卷を造りて
大日經の義釈に並べて真言宗の三部とがうし、比叡山の内に總持院を
建立し真言宗を弘通する事此の時なり、叡山に真言宗を許されし

かば座主ざす兩方を兼ねたり、しかれども法華宗をば月のごとく真言宗をば日のごとしといひしかば、諸人等しよにんは真言宗はすこし勝れたりとをすくもへけり、しかれども座主ざすは兩方を兼ねて兼学し給いけり大衆も又かくのごとし。

同じき御宇ぎように円珍和尚えんちんわじようと申す人・御入唐漢土にゅうとうかんどにして法華・真言の兩宗をならう、同じき御宇ぎように天安二年に帰朝す、此の人は本朝ほんちようにしては叡山第一の座主ざす・義真第二の座主ざす円澄・別当光定第三の座主ざす円仁等にえいさんだいいち法華・真言ほつけ しんごん

の兩宗をならいきわめ給うのみならず又東寺の真言をも習ならい給へり、其の後に漢土かんどにわたりて法華・真言ほつけ しんごんの兩宗をみがき給う今の三井寺みいでらの法華・真言ほつけ しんごんの元祖智証大師此れなり、已上四大師だいしなり。

総じて日本国には真言宗しんごんしゆうに又八家あり、東寺とうじに五家・弘法大師こうぼうだいしを

本とす・天台てんだいに三家・慈覺大師じかくだいしを本とす。

人王八十一代いちだいいちをば安徳天皇あんとくてんのうと申す父は高倉院たかくらいんの長子・母は太政

入道にゅうどうの女建礼門院けんれいもんいんなり、此の王は元暦元年げんねん乙巳三月二十四日八島にし

かいちゅう

て海中に崩じ給たまいき、此の王は源ノ頼朝將軍みなもとよりともしょうぐんに・せめられて海中かいちゅうの

いろくづの食となり給たまう、人王八十二代は隱岐おきの法王ほうおうと申す高倉もうの第

三の王子みこ・文治元年ぶんげいねん丙午御即位ひのえうまごく、八十三代には阿波の院おき隱岐おきの法皇ほうこうの

長子建仁けんじ二年に位を継ぎ給たまう、八十四代には佐渡さどの院おき隱岐おきの法皇ほうこうの

第二の王子みこ・承久三年じようきう辛巳二月二十六日に王位につき給たまう、同じき

七月に佐渡さどの島にうつされ給たまう、此の二・三・四の三王は父子ふしなり鎌倉かまくら

の右大将の家人・義時よしときに・せめられさせ給たまへるなり。

此こに日蓮大いに疑うたがいつて云く仏と申すは三界さんがいの国主・大梵王ぼんのう・第六天だいろくてん

の魔王まおう・帝釈たいしやく・日月にちがつ・四天してん・転輪聖王てんりんじようおう・諸王しよの師なり主なり親なり、

三界さんがいの諸王しよわうは皆みなは此この釈迦しやくか・仏ぶつより分わち給たまいて諸国しよこくの総領そうりやう・別領べつりやう等の主しゅとなし給たまへり、故ゆゑに梵釈ぼんしやく等は此この仏ぶつを・或あるは木像もくざう・或あるは画像がざう等にあがめ給たまう、須臾しゆゆも相背そむかば梵王ぼんのうの高台かうたいもくづれ帝釈たいしやくの喜見きけんもやぶれ輪王りんかうもかほり落ち給たまうべし、神かみと申もうすは又国こく・国こくの国主こくしゅ等の崩去いし給たまえるを生身しやうしんのごとくあがめ給たまう、此これ又国王こくおう・国人こくにんのための父母ふぼなり・主君しゅくんなり・師匠ししやうなり・片時かたときもそむかば国安こくあん・隱いんなるべからず、此これを崇あがむれば国こくは三災さんさいを消ひし七難しちなん

を払い人は病なく長寿を持ち後生には人天と三乗と仏となり給うべし。

しかるに我が日本国は一閭浮提の内・月氏・漢土にも・すぐれ八万の国にも超えたる国ぞかし、其の故は月氏の仏法は西域等に載せられて候但だ七十余国なり其の余は皆外道の国なり、漢土の寺は十万八千四十所なり、我が朝の山寺は十七万一千三十七所なり、此の国は月氏・漢土に対すれば日本国に伊豆の大島を對せるがごとし、寺をかざうれば漢土・月氏のも雲泥すぎたり、かれは又大乗の国小乗の国大乘も權大乘の国なり、此れは寺ごとに

八宗・十宗をならい家家宅宅に大乘を誦誦す、彼の月氏・漢土等は仏法を用ゆる人は千人に一人なり、此の日本国は外道一人もなし、其の上神は又第一天照太神第二八幡大菩薩第三は山王等の三千余

社、昼夜に我が国をまほり朝夕に国家を見そなわし給う、其の上
天照太神は内侍所と申す明鏡にかけをうかべ内裏にあがめられ給い
八幡大菩薩は宝殿をすてて主上の頂を栖とし給うと申す、仏の加護
と申し神の守護と申しいかなれば彼の安徳と隠岐と阿波佐渡等の王は
相伝の所従等に・せめられて・或は殺され・或は島に放れ・或は鬼とな
り・或は大地獄には堕ち給いしぞ、日本国の叡山七寺東寺・園城等の十
七万一千三十七所の山山寺寺に・いささかの御仏事を行うに
は皆天長地久玉体安穩とこそ・いのり給い候へ其の上八幡大菩薩は
殊に天王守護の大願あり、人王第四十八代に高野天皇の玉体に入り
給いて云く、我が国家開闢より以来臣を以て君と為すこと未だ有らざ
る事なり、天之日嗣必ず皇緒を立つ等云云、又太神行教に付して
云く我に百王守護の誓い有り等云云。

されば神武天皇てんのうより已来百王ひやくおうにいたるまではいかなる事有りとも玉
体はつつがあるべからず・王位を傾くる者も有あるべからず、一生補処ふしょの
菩薩ぼさつは中天ちゅうてんなし・聖人しょうにんは横死おうしせずと申もうす、いかにとして彼れ彼の四王しおう
は王位を・をいをとされ国をうばはるのみならず・命を海にすて身を
島島に入れ給たまいけるやらむ、天照太神てんしやうだいじんは玉体に入りかわり給たまはざりけ
るか・八幡大菩薩はちまんだいぼさつの百王ひやくおうの誓はいかにとなりぬるぞ、其その上安徳天皇てんのうの
御宇ぎようには明雲めいぐんの座主ざす・御師おんしとな

り太上入道並びに一門怠状を捧げて云く彼の興福寺を以て藤氏の
氏寺と為し春日の社を以て藤氏の氏神と為すが如く、延暦寺を以て平
氏の氏寺と号し日吉の社を以て平氏の氏神と号す」云云、叡山には明
雲座主を始めと

して三千人の大衆五檀の大法を行い、大臣以下は家家に尊勝陀羅尼
不動明王を供養し・諸寺・諸山には奉幣し大法秘法を尽くさずとい
事なし。

又承久の合戦の御時は天台の座主・慈円仁和寺の御室三井等の
高僧等を相催して・日本国にわたれる所の大法秘法残りなく行われ
給う、所謂承久三年辛巳四月十九日に十五檀の法を行わる、天台の
座主は一字金輪法等五月二日は仁和寺の御室如法愛染明王法を
紫宸殿にて行い給う、又六月八日御室守護經法を行い給う、已上四

十一人の高僧こうそう

大法だいほう

此この法ほうを行なう事ことは日本にほんに第二度だいにどなり、權けんの

大夫たゆうどの殿どの

は此この事ことを知しり給たまう事ことなければ御調じようぢやく伏ふくも行ない給たまはず、又またいかに

行ない給たまうとも

彼かの法ほう法ほうの人人ひとびとにはすぐべからず、仏ぶつ法ぽうの御力おんちからと申もうし

王法わうぽうの威力いりきと申もうし

彼かは国主こくしゆなり

三界さんがいの諸王しよわう守護しゆごし給たまう、此これは日本にほん国こく

の民たみなりわづかに小鬼こゝろぞまほりけん代しろ代の所しよ從じゆ・重ちゆう

重ちゆうの家人かじんなり、譬たとへば王威わういを用もちいて民たみをせめば鷹たかの雉きじをとり・のねずみ

を食じやい蛇へびのかへるをのみ

師子しし王わうの兎うを殺ころすにてこそ有あるべけれ、なにしに

かかろがろしく天神地祇てんじんちぎには申もうすべき、仏ぶつ・菩薩ぼさつをばをどろかし奉たてまつるべ

き、師子しし王わうが兎うをとらむには精進しやうじんすべきか、たかがきじを食くんにはい

り有あるべしや、いかにいのらずとも大王だいうわうの身み

として民たみを失うしなわんには大水たいすいの小火しょうかをけし大風たいふうの小雲しょううんを巻まくにてこそ

有あるべけれ、其その上うへ大火だいかに枯木からを加くわうるがごとく大河だいうに大雨だいうを下くだすが

ごとく・主法の力に大法だいほうを行い合せて頼朝よりともと義時よしときとの本命ほんめいと元神とを
ば梵王ぼんのうと帝釈たいしゃく等に抜き取らせ給たまう、譬たとへば古酒こしゅに酔えいる者のごとし・蛇じゃの
魂かえるを奪かうがごとし・頼朝よりともと義時よしときとの御魂みたま・御名みな・御姓うじを

ばかきつけて諸尊しよそん諸神しよ等の御足みそくの下にふませまいせていのりしかば・いか
にもこらうべしともみへさりしに・いかにとして一年・一月も延びずして
・わづか二日一日にはほろび給たまいけるやらむ、仏法ぶつぽうを流布るふの国主こくしゅとなら
む人ひとと
む人

は能く能く御案ありて後生をも定め御いのりも有るべきか。

而るに日蓮此の事を疑いしゆへに幼少の比より随分に顕密二道・

並びに諸宗の一切の経を・或は人にならい・或は我れと開見し勘見て

候へば故の候いけるぞ、我が面を見る事は明鏡によるべし国土の盛衰を

計ることは仏鏡にはすぐべからず、仁王経・金光明経・最勝王経・

守護経・涅槃経・法華経等の諸大乘経を開き見奉り候に・仏法に付

きて国も盛へ人の寿も長く又仏法に付いて国もほろび人の寿も短かかる

べしとみて候、譬へば水は能く船をたすけ水は能く船をやぶる、五穀

は人をやしない人を損ず、小波小風は大船を損ずる事かたし大波・

大風には小船

をやぶれやすし、王法の曲るは小波小風のごとし大国と大人をば失い

がたし、仏法の失あるは大風・大波の小船をやぶるがごとし国のやぶる

る事疑うたがいいなし、仏記ぶつぎに云く我滅するの後末代まつだいには惡法あくほう・惡人あくにんの国をほ
ろぼしぶつぼう佛法とがを失には失すべからず譬たとへば三千大千世界さんぜんだいせんせかいの草木そうもくを薪たきぎとし
て須弥山しゅみせんをやくにやけず劫火ごうかの時須弥山しゅみせんの根より大豆ばか計りの火出いでて
須弥山しゅみせんやくが如くごと・我が法も又此かくの如ごとし惡人あくにん・外道げどう・天魔てんま・波旬はじゆん・五
通等にはやぶられず、仏の

ごとく六通ろくつうの羅漢らかんのごとく三衣さんねを皮のごとく身に紆まとい・一鉢いちぱつを兩眼りやうげんに
あてたらむ持戒じかいの僧等と・大風たいふうの草木そうもくをなびかすがごとくなる高僧等こうそう
我が正法しょうぼうを失うしなうべし、其の時梵釈そのときばんしやく・日月にちがつ・四天してんいかりをなし其その国に大
天變てんべん・大地天等ちようちう

を發おこしていさめむにいさめられずば其その国の内に七難ひちなんを・をこし
父母ふぼ・兄弟王臣万民等きょうだいおうしんばんみん互たがいに大怨敵おんてきとなり梟きようちよう鳥が母を食い破鏡はけいが父を
がいするがごとく自国をやぶらせて結句けつく他国たこくより其その国をせめさすべ

しとみへ候。

今日蓮いまにちれん・二代聖教いちだいしやうきやうの明鏡めいきやうをもつて日本国にほんこくを浮べ見候に・此の鏡に浮ひとびとんで候人人は国敵こくてき・仏敵ぶつてきたる事疑うたがいいなし、一代聖教いちだいしやうきやうの中に法華經ほけきやうは明鏡めいきやうの中の神鏡しんきやうなり、銅鏡どうきやう等は人の形をばうかぶれども・いまだ心をばうかべず、法華經ほけきやうは人

の形を浮ぶるのみならず・心をも浮べ給たまへり、心を浮ぶるのみならず・先業せんごうをも未来みらいをも鑒かんみ給たまう事くもりなし、法華經ほけきやうの第七の巻を見候へば如来にょらいの滅後めつごにおいて仏の所説しよせつの經の因縁いんねん及び次第しだいを知り義したがに随つて実ことの如く説か

にちがつ

ん、日月の光明の能く諸の幽冥を除くが如く斯の人・世間に行じて

よく衆生の闇を滅す」等云云、文の心は此の法華經を一字も一句も説

く人は必ず一代聖教の浅深と次第とを能く能く弁えたらむ人の説く

べき事に候、譬へは曆の三百六十日をかながうるに一日も相違せば万日

俱に反逆すべし、三十一字を連ねたる一句・二字も相違せば

三十一字共に歌にて有るべからず、謂る一經を讀誦すとも始め寂滅

道場より終り雙林最後にいたるまで次第と浅深とに迷惑せば其の人は

我が身に五逆を作らずして無間地獄に入り此れを帰依せん檀那も

阿鼻大城に墮つべし何に況や智人・一人・出現して一代聖教の浅深

勝劣を弁えん時・元祖が迷惑を相伝せる諸僧等・或は国師となり・或

は

諸家の師となりなんどせる人人・自のきずが顕るる上人にかろしめら

れん事をなげきて、上に挙ぐる一人の智人を・或は国主に訴へ・或は万人にそしらせん、其の時・守護の天神等の国をやぶらん事は芭蕉の葉を大風のさき小舟を大波のやぶらむがごとしと見へて候。

無量義経は始め寂滅道場より終り般若経にいたるまでの一切経を

・或は名を挙げ・或は年紀を限りて未顕真実と定めぬ、涅槃経と申すは

仏最後の御物語に初め初成道より五十年の諸教の御物語四十余年を

ば無量義経のごとく邪見の経と定め法華経をば我が主君と号し給う、

中に法華経ましまして已今当の勅宣を下し給いしかば・多宝

・十方の諸仏加判ありて各各本土にかへり給いしを・月氏の付法蔵の二

十四人は但小乗・權大乘を弘通して法華経の実義を宣べ給う事なし、

譬へば日本国の行基菩薩と鑒真和尚との法華経の義を知り給いて弘通

なかりしがごとし、漢土の南北の十師は内にも仏法の勝劣を弁えず外

にも浅深に迷惑せり、又三論宗の吉蔵・華嚴宗の澄観・

ほうそうしゅう

法相宗の慈恩・此れ等の人人は内にも迷い外にも知らざりしかども・

どうしんけんこ

道心堅固の人人なれば名聞をすてて天台の義に付きにき、知らずされ

ひとびと

ば此の人人は懺悔の力に依りて生死やはなれけむ、將た又謗法の罪は

しげ

重く懺悔の力は弱くして阿闍世王無垢論師等のごとく地獄にや墮ちに

けん。

善無畏三藏・金剛智三藏・不空三藏等の三三藏は一切の真言師の
申すは大日如来より五代六代の人人即身成仏の根本なり等云云、
日蓮勘えて云く法偷の元祖なり盗人の根本なり、此れ等の人人は月氏
よりは大日經・金剛頂經・蘇悉地經等を齎し来る、此の經經は
華嚴經・般若經・涅槃經等に及ばざる上・法華經に対すれば七重の
下劣なり、經文に見へて赫赫たり明明たり、而るを漢土に來りて
天台大師の止觀等の三十卷を見て舌をふるい心をまよ
わして此れに及ばずば我が經弘通しがたし、勝れたりといはんとすれ
ば妄語眼前なり、いかんがせんと案ぜし程に一つの深き大妄語を案じ
出だし給う、所謂大日經の三十一品を法華經二十八品並に無量義經
に腹合せに合せて三密の中の意密をば法華經に同じ其の上に印と真言
とを加えて法華經は略なり大日經は広なり・已にも入れず・

今にも入れず当にもはづれぬ、法華經をかたうどとして三説の難を

脱れまぬか結句は印と真言とを用いて法華經を打ち落して真言宗を立てて

侯、譬たとへば三女が后きさきと成りて三王を喪せしがごとし、法華經の流通の

涅槃經ねはんぎょうの第九に我れ滅して後の惡比丘等我が正法しょうぼうを滅すべし、譬たとへば

女人のごとしと記し給たまいけるは是なり、されば善無畏三藏は

閻魔王に・せめられて鉄くろがねの繩七脉すじつけられてからくして蘇りたれども

又死する時は黒皮隱隱こくひいんいんとして骨甚はなはだだ露焉あらわと申して無間地獄の前相・

其の死骨しこつに顛あれ給たまいぬ、人死して後色の黒きは地獄に墮おつとは一代いちだい

聖教しょうきょうに定むる所な

り、金剛智・不空等も又此れをもつて知んぬべし、此の人人は改悔かいげは有

りと見へて候へども強盛かうじょうの懺悔ざんげのなかりけるか、今の真言師しんごんしは又あへ

知る事なし、玄宗皇帝げんそうこうていの御代の喪いし事も不審ふしんはれて候。

日本国は又弘法・慈覚・智証此の謗法を習い伝えて自身も知ろしめ
さず人は又をもひもよらず、且くは法華宗の人人・相論有りしかども
終には天台宗やうやく衰えて・叡山五十五代の座主・明雲・人王八十
一代の安徳天皇より已来は叡山一向に真言宗となりぬ、第六十一代
の座主顕真権僧正は天台座主の名を得て真言宗に遷るのみならず、
然る後・法華・真言をすて一向謗法の法然が弟子となりぬ、承久
調伏の上衆・慈円僧正は第六十二代並びに

五・九・七十一代いちだいの四代の座主ざす隱岐おきの法皇ほうこうの御師おんしなり、此等これらの人人ひとびとは
善無畏ぜんむいさんぎょう三藏さんざう・金剛智こんこうちさんぎょう三藏さんざう・不空ふくうさんぎょう三藏さんざう・慈覺じかく・智証ちしょう等の真言しんごんをば器きはかわ
れども一の智水ちすいなり、其その上天台宗てんだいしゅうの座主ざすの名を盗ぬすみて法華經ほけきょうの御領ぎりやう
を知行ちぎやうして三千さんぜんの頭こづかべとなり一國いこくの法の師あおと仰おほがれて大日經だいにちきやうを本とし
て七重しちげくだれる真言しんごんを用もちいて八重勝はつじやうすくれりと・をもへるは・天を
地とをもい民を王とあやまち石を珠たまとあやまつのみならず珠たまを石とい
う人なり、教主きやうしゆしやくそん・多宝たほうぶつ・十方じゆつほうの諸仏しよぶつの御怨敵おんてきたるのみならず
一切衆生の眼目がんもくを奪うばい取り三善道さんぜんどうの門を閉ぢ三惡道さんあくどうの道を開く、
梵釈ぼんしやく・日月にちがつ・四天等してんの

諸天善神しよてんぜんじんいかでか此の人を罰たせさせ給たまはざらむ、いかでか此の人の仰あおぐ
檀那だんなをば守護しゆごし給たまうべき、天照太神てんしやうだいじんの内侍所ないじどころも八幡大菩薩はちまんたいぼさつの百王ひやくおう
守護しゆごの御ちかいも・いかでか叶たまはせ給たまうべき。

余・此の由を且つ知りしより已来・一分の慈悲に催されて粗随分の弟子にあらあら申せし程に次第に増長して国主まで聞えぬ、国主は理を親とし非を敵とすべき人にてをはすべきかいかがしたりけん諸人の讒言を・をさめて一人の余をすて給う、彼の天台大師は南北の諸人あだみしかども陳隋二代の帝重んじ給いしかば諸人の怨もうすかりき、此の伝教大師は南都・七大寺讒言せしかども桓武・平城・嵯峨の三皇用い給いしかば怨敵もおかしがたし、今日蓮は日本国十七万一千三十七所の諸僧等のあだするのみならず国主用い給わざれば万民あだをなす事父母の敵にも超え宿世のかたきにも・すぐれたり、結句は二度の遠流一度の頭に及ぶ、彼の大莊嚴仏の末法の四比丘並に六百八十万億那由佗の諸人が普事比丘一人をあだみしも超へ師子音王仏の末の勝意比丘・無量の弟子等が喜根比丘をせめし

にも勝れり、覺徳比丘がせめられし不輕菩薩が杖木をかをほりしも、
限りあれば此れにはよもすぎじとぞをば候。

若し百千にも一つ日蓮・法華經の行者にて候ならば日本國の諸人
後生の無間地獄はしばらくをく、現身には國を失ひ他國に取られん事
彼の徽宗・欽宗のごとく優陀延王・訖利多王等に申せしがごとくなら
ん、又其の外は或は其の身は白癩黒癩・或は諸惡重病・疑いなるべ
きかもし其の義なくば又日蓮・法華經の行者にあらじ此の身現身には
白癩・黒癩等の諸惡重病を受け取り後生には提婆瞿伽利等がごとく
無間・大城に墮つべし日月を射奉る修羅は其の矢還つて我が眼に立ち
師子王を吼る狗犬は我が腹をやぶる釈子を殺せし波琉璃王は水中の
大火に入り仏の御身より血を出だせし提婆達多是現身に阿鼻の炎を感
ぜり金銅の釈尊をやきし守屋は四天王の矢にあたり東大寺興福寺を

焼きし清盛入道は現身に其身もうる病をうけにき彼等は皆大事なれども日蓮が事に合すれば小事なり小事すら猶しるしあり大事いかでか現罰なからむ。

悦ばしいかな経文に任せて五五百歳広宣流布をまつ悲いかな闍諍堅固の時に当つて此の国修羅道となるべし、清盛入道と頼朝とは源平の両家本より狗犬と猿猴とのごとし、少人・少福の頼朝をあだせしゆへに宿敵たる入道の一門ほろびし上科なき主上の西海に沈み給いし事は不便の事なり、此れは教主・釈尊・多宝・十方の諸仏の

御使として世間には一分の失なき者を一国の諸人にあだますのみならず兩度の流罪に当てて日中に鎌倉の小路をわたす事朝敵のごとし、其の外小菴には釈尊を本尊とし一切経を安置したりし其の室を刎ねこぼちて・仏像・経巻を諸人にふまするのみならず糞泥にふみ入れ日蓮が

懷かいいちゆう中に法華經ほけきようを入れまいらせて候いしを・とりいだして頭こづべをさんざんに打ちさいなむ、此の事いかん如何なる宿意とうざもなし当座とがの科とがもなし、ただ法華經ほけきようを弘通ぐつうする計りばかの大科だいなり。

日蓮にちれん天に向つて声をあげて申もうさく法華經ほけきようの序品じよばんを拜見はいけんし奉たてまれば梵ぼん釈しやくと日月にちがつと四天してんと竜王りゆうおうと阿修羅あしゆらと二界八番の衆むりようと無量こくどの国土しよの諸しよ神しんと集會しゅうえし給たまいたりし時とき已今当まさに第一だいいちの説を聞きし時・我とも雪山せつせん童子どうじの如ごとく身を供養くようし藥王菩薩やくおうぼさつの如ごとく臂ひじをも・やかんとをもししに、教主きようしゆ・多宝たほう・十方じゆつぽうの諸仏しよぶつの御前おんまえにして今・仏前ぶつぜんに於おいて自ら誓言せいごんを説せけと諫曉かんぎようし給たまいしかば・幸に順風せんぷんを得て世尊せそんの勅ごの如ごとく当まさに具つぎさに奉行ぶぎようすべしと二処三會の衆・一同に大音声おんじようを

放ちて誓い給いしは・いかなが有るべき、唯仏前にては是くの如く申して
多宝・十方の諸仏は本土にかへり給う、釈尊は御入滅ならせ給いて・
ほど久くなりぬれば・末代辺国に法華經の行者有りとも梵釈・日月等
・御誓いをうちわすれて守護し給う事なくば日蓮がためには一旦のな
げきなり、無始已来・鷹の前のきじ・蛇の前のかへる・☆の前のねずみ・犬
の前のさると有りし時もありき、ゆめの代なれば仏・菩薩・諸天にすか
され・まいらせたりける者にてこそ候はめ。

なによりも・なげかしき事は梵と帝と日月と四天等の南無
妙法蓮華經の法華經の行者の大難に値をすてさせ給いて現身に天の
果報も尽きて花の大風に散るがごとく雨の空より下ることく其の人
命終入阿鼻獄と無間・大城に堕ち給はん事こそあはれにはをばへ候
へ・設い彼の人人は三世十方の諸仏をかたうどとして知らぬよしのべ

申しもう

給たまうとも日蓮にちれんは其その人人ひとびとには強きかたきなり、若し仏もの返へん頗ばをはせず

ば梵ぼん釈しやく・日月にちがつ・四天してんをば無間むげん・大城だいじやうには必ずつけたてまつるべし、日蓮にちれん

が眼まなこをそろしくば・いそぎいそぎ仏前ぶつぜんの誓ちかいをばはたし給たまへ日蓮にちれんが口、

○。

又むぎひとひつ鷲目がもく両貫りやうくわん・わかめ・かちめ・みな一俵たまい給おわい畢おわんぬ、干

い・やきごめ・各各一おわかうぶくろ給たまい畢おわんぬ、一一の御志ごしはかき

つくすべしと申まうせども法門ほうもん巨多こたに候とどへは留おわめ畢おわんぬ、他門たもんにきかせ

給たまうなよ大事だいじの事ことどもかきて候まうなり。

◆三七九

上野殿御消息うえのどのしやうそく

建治元年がんねん

五十四歳御

作 与南条時光なんじょうときみつ

1526p

三世さんぜの諸仏しよぶつの世に出でさせ給たまいても皆みな皆みな四恩を報ぜよと説とき。
三皇さんこう・五帝ごてい・孔子こうし・老子ろうし・顔回がんかい等の古いにしえの賢人けんじんは四徳を修しゅうせよとなり、四徳とは一には父母ふぼに孝あるべし・二には主に忠あるべし・三には友に合うて礼あるべし・四に

は劣おとれるに逢うて慈悲じひあれとなり、一に父母ふぼに孝あれとはたとひ親はものに覺おほえずとも悪さまなる事を云うとも聊いささかかも腹も立てず誤あやまりる顔を見せず親の云う事に一分いちぶんも違たがへず親によき物を与へんと思ひてせめてする事なくば一日に二三度えみて向へとなり、二に主に合うて忠あるべしとはいささかも主にうしろめたなき心ある

べからず、たとひ我が身は失うしないしなはるとも主にはかまへてよかれと思ふべし、かくれての信あればあらはれての徳あるなりと云云、三には友にあふて礼あれとは友達の一日に十度・二十度来れる人なりとも千里・二千里・来れる人の如ごとく思ふて礼儀いささか・をろかに思ふべからず、四に劣おとれる者に慈悲じひあれとは我より劣りたらん人を

ば我が子の如ごとく思ひて一切いっさいあはれみ慈悲じひあるべし、此これを四徳と云うなり、是かくのことくの如く振舞ふるまいうを賢人けんじんとも聖人しょうじんとも云うべし、此の四の事あれ

ば余の事にはよからねどもよき者なり、是くの如く四の得を振舞ふ人は外典三千巻をよまねども読みたる人となれり。

一に仏教の四恩とは一には父母の恩を報ぜよ・二には国主の恩を報ぜよ・三には一切衆生の恩を報ぜよ・四には三宝の恩を報ぜよ、一に父母の恩を報ぜよとは父母の赤白二☆・和合して我が身となる、母の胎内に宿る事・二百七十日・九月の間・三十七度死るほどの苦みあり、生落す時たへがたしと思ひ念ずる息・頂より出づる煙り梵天に至る、さて生落されて乳をのむ事一百八十余石・三年が間は父母の膝に遊び人となりて仏教を信ずれば先づ此の父と母との恩を報ぜべし、父の恩の高き事須弥山・猶ひきし・母の恩の深き事大海還つて浅し、相構えて父母の恩を報ずべし、二に国主の恩を報ぜよとは・生れて已来・衣食のたぐひより初めて・皆是れ国主の恩を得てある者な

れば現世安穩・後生善処と祈り奉るべし、三に一切衆生の恩を報ぜよ
とは、されば昔は一切の男は父なり・女は母なり・然る間・生生世世に
皆恩ある衆生なれば皆仏になれと思ふべきなり、四に三宝の恩を報ぜ
とは・最初成道の華嚴經を尋ねれば經も大乘・仏も報身如来にて坐ま
す間・二乗等は昼の梟・夜の鷹の如くして・かれを聞くとい

へども耳しる・目しるの如し、然る間・四恩を報ずべきかと思ふに女人を
きらはれたる間・母の恩報じがたし、次に仏阿含・小乗經を説き給い
し事・十二年・是こそ小乗なれば我等が機にしたがふべきかと思へば・
男は五戒・女は十戒・法師は二百五十戒・尼は五百戒を持ちて三千の
威儀を具すべしと説きたれば末代の我等かなふべしとも・

おぼえねば母の恩報じがたし、況や此の經にもきらはれたり、方等・
般若・四十余年の經經に皆女人をきらはれたり、但天女成仏經・
觀經等にすこし女人の得道の經文有りといへども・但名のみ有つて実な
きなり、其の上未顕眞実の經なれば如何が有りけん、四十余年の
經經に皆女人を嫌われたり、又最後に説き給いたる涅槃經にも女人
を

嫌はれたり、何れか四恩を報ずる經有りと尋ぬれば法華經こそ女人

成仏じょうぶつする経なれば、八歳の童女りゅうにょ・成仏じょうぶつし・仏の姨母おば・曇弥女きようどんみ・
耶輸陀羅比丘尼記やしゅだらびくにきべつ☆記にあづかりぬ、されば我等われらが母は但女人にょにんの体にな
てこそ候ちくしやうへ・畜生ちくしやうにもあらず蛇身じやしんにもあらず・八歳の童女りゅうにょだにも仏にな
る、如何なんぞ此の経の力にて我が母の仏にならざるべき、されば法華経ほけきやうを
持つ人は父と母との恩を報ずるなり、我が心には報ずると思はねども
此の経の力にて報ずるなり。

然しかる間・釈迦しやくか・多宝等たぼうの十方無量の仏・上行じやうぎやう・地涌等じゆうの菩薩ぼさつも普賢ふげん
・文殊等もんじゆの迹化しやつけの大士だいしも舍利弗等しやりふつの諸大声聞しよだいしやうもんも・大梵天王だいぼんてんのう・日月等にちがつの
明主諸天しよてんも・八部王はちぶおうも・十羅刹女等じゆうらせつにょも・日本国中の大小の諸神しよも・総じ
て此の法華経ほけきやうを強く信じまいらせて余念よねんなく一筋に信仰しんこうする者をば影
の身にそふが如くごと守らせ給ひ候なり、相構あいかまえて相構あいかまえて心を翻ひるがえりへさず・一
筋に信じ給ふたまならば・現世安穩げんせあんのん・後生善処ごしやうぜんしよなるべし、恐恐きようきよう謹言きんげん。

上野殿うえのどの

日蓮花押にちれんかおう

◆三八〇

南条殿御返事ごへんじ

建治二年正月 五十

五歳御作 与南条七郎次郎

1529p

はるのはじめの御つかひ自他じたもう申しこめまいらせ候、さては給たまはるところのすずの物の事、もちろ七十五まい・さけひとつつ・いもいちだ・河のりひとかみぶくろ・だいこんふたつ・やまのいも七ほん等なり、ねんごろの御心おんこころざしざしは・しなじなのものに・あらはれ候いぬ。

法華經ほけきょうの第八の巻に云く・所願しよがん虚むなしからず亦また現世げんせに於おいて其の福報を得ん」又云く・当まさに現世げんせに於おいて現の果報かほうを得べし」等云云、天台大師てんだいだいし云く・天子てんしの一言虚むなしからず」又云く・法王ほうおう虚むなしからず」等云云、賢王けんおうとなりぬれば・たとひ身をほろぼせどもそら事せず、いわうや釈迦しゃか如来にょらい

は普明王とおはせし時ははんぞく王のたてへ入らせ給い

き不妄語戒を持たせ給いしゆへなり、かり王とおはせし時は実語少人・

大妄語入地獄とこそおほせありしか、いわうや法華經と申すは仏・我

と要当說真実となのらせ給いし上・多宝仏・十方の諸仏あつまらせ

給いて日月・衆星の

ならばせ給うがごとくに候いしざせきなり、法華經にそら事あるなら

ばなに事をか人信すべき、かかる御經に一華一香をも供養する人は

過去に十萬億の仏を供養する人なり、又釈迦如来の末法に世のみだれ

たらん時・主臣・方民・心を一にして一人の法華經の行者をあだまん時

・此の行者かんばちの小水に魚のすみ・万人にかこまれたる鹿のごとく

ならん時、一人ありて・とぶらはん人は生身の教主釈尊を一劫が間・

三業相応して供養しまいらせたら

んよりなを功德くどくすぐるべきよし・如来にょらいの金言きんげん・分明ぶんめいなり、日は赫赫かくかくたり
月は明明めいめいたり・法華經ほけきょうの文字もんじはかくかく・めいめいたり・めいめい・かくか
くたり、あきらかなる鏡にかを・をうかべ、すめる水に月のうかべるがご
とし。

しかるに亦また於現世げんせ得其福報ちよくせんの勅宣ちよくせん・当於現世げんせ得現果報げんかほうの鳳詔ほうしやう・南条
の七郎次郎殿にかぎりて・むなしかるべしや、日は西よりいづる世月は
地よりなる時なりとも・仏の言むなしからじとこそ定めさせ給たまいしか、
これをもつて・おもうに慈父過去じふかこの聖靈しやうりやうは教主きやうしゆしやくそん・釈尊おんまへの御前ごぜんにわたら
せ給たまい・だんなは又現世げんせに大果報かほうをまねかん事疑うたがいあるべからず、かう
じんかうじん。

建治二年正月十九日

日蓮にちれん 花押かおう

◆三八一

南条殿御返事ごへんじ

南条殿御返事ごへんじ 建治二年三

月 五十五歳御作

1530p

いものかしら・河のり又わさび・一一・人人ひとびとの御志ごいし承り候いぬ、鳥のかいこをやしなひ・牛の子を牛のねぶるが如しごと、夫れ衣は身をつつみ・食は命をつぐ、されば法華經ほけきょうを山中にして読みまいらせ候人を・ねんごろに・やしなはせ給ふは、釈迦しやか仏ぶつをやしなひまいらせ・法華經ほけきょうの命をつぐにあらずや、妙莊嚴王みょうそうげんは三聖を山中にやしなひて・

沙羅樹王しやらじゆ・仏となり、檀王だんおうは阿私仙人あしせんじんを供養くようして釈迦しやか仏ぶつとならせ給ふ、されば必ずよみかかねども・よみかく人を供養くようすれば仏になる事疑うたがひ

ひなかりけり、經に云く是の人・仏道に於て決定して疑有ること無
けん」南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。

建治二年三月十八日

日蓮 花押

謹上 南条殿御返事

橘三郎殿・太郎大夫殿・一紙に云云恐れ入り候、返す返すははき殿
読み聞かせまいらせ給へ。

◆三八二

南条殿御返事^{ごへんじ}

建治二年三月 五

十五歳御作

1531p

かたびら一つ・しをいちだ・あぶら五そう・給^おび候い了んぬ、ころもは
かんをふせぎ又ねつをふせぐ・みをかくし・みをかざる、法華^{ほけきょう}經の第七
やくわうぼんに云^いく・如裸者得衣」等云云、心ははだかなるものの・ころ
もをへたるがごとし、もんの心はうれしき事をとかれて候。

ふほうぞうの人のなかに商那和衆と申^{もう}す人あり衣をきてむまれさせ
給^{たま}う、これは先生^{せんしやう}に仏法^{ぶつぽう}にころもをくやうせし人なり、されば法華^{ほけきょう}經
に云^いく・柔和忍辱衣」等云云、こんろん山には石なしみのぶのたけにはし
をなし、石なきところには・たまよりも・いしすぐれたり、しをなきとこ

ろには・しを・こめにも・すぐれて候、国王こくおうのたから

は左右さうの大臣だいじんなり左右さうの大臣だいじんをば塩梅あんばいと申す、みそしを・なければよわたりがたし左右さうの臣おみなければ国をさまらず、あぶらと申すは涅槃經ねはんぎょうに云く風いのなかに・あぶらなし・あぶらのなかに・かぜなし・風をぢする第一だいいちのくすりなり、かたがたのものをくり給たまいて候・御心おんこころざしのあらわれて候事申すばかりなし、せんするところは・こなんであどのの法華經ほけきょうの御しんようのふかかりし事のあらわるるか、王の心ざしをば臣おみのべ・をやの心ざしをば子の申もうしのぶるとはこれなり、あわれことのの・うれしと・をばすらん。

つくしにを・をはしの太郎と申しける大名ありけり、大将どのの御か
んきを・かほりて・かまくらゆひのはまつちのろうにこめられて十二年め
しはじしめられしときつくしをうちいでしに・ごぜんにむかひて申せしは

・ゆみやとるみとなりてきみの御かんきを・かほらんことは・なげきなら
ず、又ごぜんに・をさなくよりなれしかいまはなれん事いうばかりなし、
これはさてをきぬ、なんしにても・によしにても一人なき事なげきなり、
ただしくわいにん

のよし・かたらせ給^{たま}う・をうなごにてやあらんずらん・をのこごにてや
候^{そうら}はんずらん、ゆくへをみざらん事くちおし、又かれが人となりて・ち
ちというものも・なからんなげき・いかがせんと・をもへども・力^{およ}及ばずと
ていでにき。

かくて月ひすぐ・れことゆへなく生れにき・をのこごにてありけり、七
歳のとし・やまでらにのぼせてありければ・ともだちなりけるちごども・
をやなしとわらひけり、いへにかへりて・ははにちちをたづねけり、ははの
ぶるかたなくしてなくより外^{ほか}のことなし、此のちご申^{もう}す天なくしては雨
ふらず地なくしてはくさをいず、たとい母

ありとも・ちちなくばひととなるべからず、いかに父のありどころをば・
かくし給^{たま}うぞとせめしかば・母せめられて云うわちごをさなければ申^{もう}さ
ぬなり・ありやうはかうなり、此のちごなくなく申^{もう}すやう・さてちちの

かたみはなきかと申せしかば、これありとて・ををはしのせんぞの日記につき
☆ならびにはらの内なる子に・ゆづれる自筆じひつの状なり、

いよいよをやこひしくてなくより外ほかの事なし、さて・いかがせんといふし
かば・これより郎従ろうじゅうあまた・ともせしかども・御かんきをかほりければ・
みなちりうせぬ、そののちは・いきてや又しにてや・をとづる人なしと
・かたりければ・ふしころび・なきて・いさむるをも・もちるざりけり。

ははいわく・をのれをやまでらにのぼする事は・をやのけうやうのため
なり、仏に花をもまいらせよ・経をも一巻よみて孝養こうようとすべしと申せし
かば・いそぎ寺にのぼりて・いえへかへる心なし、昼夜に法華経ほけきょうをよみしか
ば・よみわたりけるのみならず・そらに・をぼへてありけり、さて十二の
とし出家しゅつげをせずして・かみをつつみ・とかくしてつくしをにげいでて・かま
くらと申すもうところへたづねいりぬ。

八幡はちまんの御前おんまえにまいりてふしをがみ申しけるは八幡はちまん大菩薩だいぼさつは日本にほん第
十六じゅうろくの王わう・本地ほんちは靈山りょうぜん淨土じょうどに法華ほけき經きやうをとかせ給たまいし教主きやうしゆ釈尊しやくそんなり、
衆生しゆじやうのねがいをみて給たまわんがために神とあらわれさせ給たまう、今わがね
ががいみてさせ給たまえ

、をやは生きて候か・しにて候かと申^{もう}して・いぬの時より法華經^{ほけきょう}をはじめ
て・とらの時まで・に・よみければ・なにとなき・をさなきこへはうでんに・
ひびきわたり・こころすごかりければ・まいりてありける人人^{ひとびと}も・かへら
ん事をわすれにき、皆人^{みな}いちのやうに・あつまりてみければ・をさなき
人にて法師^{ほっし}ともをばえず・をうなにてもなかりけり。

をりしも・きやうのにゐどの御さんけいありけり、人めをしのばせ
給^{たま}いてまいり給^{たま}いたりけれども御經のたうとき事つねにも・すぐれたり
ければはつるまで御聴聞^{ちようもん}ありけりさてかへらせ給^{たま}いて・おはしけるがあ
まりなごりをしさに人をつけてをきて大将殿へかかる事ありと申^{もう}させ
給^{たま}いければめして持仏堂^{ちぶつどう}にして御經よませまいらせ給^{たま}いけり。

さて次の日又御聴聞^{ちようもん}ありければ西のみかど人さわぎけり、いかなる
事ぞとききしかば・今日はめしうどの・くびきらると・ののしりけり、

あわれ・わがをやは・いままで有^あるべしとは・をもわねども・さすが人のくびをきらると申せば我が身のなげきとをもひて・なみだぐみたりけり、大将殿あやしと・ごらんじて・わちごはいかなるも

のぞ・ありのままに申せとありしかば・上くだんの事・一一に申^{もう}しけり、をさふらひにありける大名・小名・みすの内みな・そでをしほりけり、大将殿・かぢわらをめして・をほせありけるは・大はしの太郎という・めしうど・まいらせよとありしかば・只^{ただ}今くびきらんとて・ゆいのはまへ・つかわし候いぬ、いまはきりてや候らんと申せしかば・こ

のちご御まへなりけれども・ふしころびなきけり、を・をせのありけるは・かぢわらわれと・はしりて・いまだ切らずばぐしてまいれとありしかば・いそぎいそぎゆいのはまへはせゆく、いまだいたらぬに・よばわりければすでに頸切らんとて刀をぬきたりけるときなりけり。

さてかじわらををはしの太郎をなわつけながらぐしてまいりてをを
にはひきすへたりければ大將殿こ

のちごに・とらせよとありしかば・ちごはしりをりて・なわをときけり、
大はしの太郎は・わが子ともしらず・いかなる事ゆへに・たすかるともし
らざりけり、さて大将殿又めして・このちごに・やうやうの御ふせたび
て・ををはしの太郎をたぶのみならず、本領をも安堵ありけり。

大将殿をほせありけるは法華經の御事は昔よりさる事とわききつた
へたれども・丸は身にあたりて二つのゆへあり、一には故親父の御くびを
大上入道に切られてあさましとも・いうばかりなかりしに、いかなる神
・仏にか申すべきと・おもいしに走湯山の妙法尼より法華經をよみつた
へ千部と申せし時、たかをのもんがく房をやのくび

をもて来りて・みせたりし上・かたきを打つのみならず・日本国の武士の
大将を給いてあり、これひとへに法華經の御利生なり、二つには・このち
ごが・ををやをたすけぬる事不思議なり、大橋の太郎というやつは頼朝き

くわいなりとをもうたとい勅宣ちよくせんなりとも・かへし申もうして・くびをきりて
ん、あまりのにくさにこそ十二年まで・土のろうに

は入れてありつるに・かかる不思議ふしぎあり、されば法華經ほけきようと申もうす事はあり
がたき事なり、頼朝よりともは武士ぶしの大將まささにて多くのつみを・つもりてあれども
法華經ほけきようを信じまいらせて候は・さりとともと・こそをもへど・なみだぐみ
給たまいけり。

今の御心おんこころざしざしみ候は故ゆゑなんでうどのは・ただ子なれば・いとをしとわ
・をぼしめしけるらめども・かく法華經ほけきようをもて我がけうやうをすべしと
は・よもをぼしたらじ、たとひつみありて・いかなるところに・おはすとも
・この御けうやうの心こころざしをば・えんまほうわう・ぼんでん・たひしやく・
までも・しろしめしぬらん、釈迦しゃか仏ぶつ・法華經ほけきようもいかでか・すてさせ給たまうべ
き、かのちこのちちのなわを・ときしと・この御心おんこころざしざし・かれにたがわず、

これはなみだをもちて・かきて候なり。

又むくりのおこれるよし・これにはいまだうけ給たまわらず、これを申せば日蓮房にちれんはむくり国のわたるといへば・よろこぶと申もうす・これゆわれなき事なり、かかる事あるべしと申せしかば・あだがたきと人ごとにせめしが・経文きようもんかぎり

あれば来るなり・いかにいうとも・かなうまじき事なり、失もなくして国
をたすけんと申せし者を用いこそあらざらめ、又法華經の第五の巻を
もつて日蓮がおもてをうちしなり、梵天・帝釈・是を御覽ありき、鎌倉
の八幡大菩薩も見させ給いき、いかに今は叶うまじき世にて候へは、
かかる山中にも入りぬるなり、各各も不便とは思へ

ども助けがたくやあらんずらん、よるひる法華經に申し候なり、
御信用の上にも力もをします申させ給え、あえてこれよりの心ざしのゆ
わきにはあらず、各各の御信心のあつくうすきにて候べし、たいしは
日本国のよき人人は一定いけどりにぞなり候はんずらん、あらあさま
しや・あさましや、恐恐謹言。

後三月二十四日

日蓮

花押

南条殿御返事ごへんじ

◆三八三

九郎太郎殿御返事ごへんじ

建治二年九月

五十五歳御作

1535p

いゑの芋一駄・送り給ひ候、こんろん山と申す山には玉のみ有りて石なし、石ともしければ玉をもつて石をかう、はうれいひんと申す浦には木草もくそうなし・いをもつて薪たきぎをかう、鼻に病ある者はせんだん香・用にあらず、眼まなこなき者は明なる鏡なにかせん。

此の身延の沢と申す処ところは甲斐国かいのくに・波木井はきりの郷の内の深山みやまなり、西には七面のかれと申すもう・たけあり・東は天子てんしのたけ・南は鷹取たかとりのたけ・北は身延のたけ・四山の中に深き谷あり・はこのそこのごとし、峯にははこう

の☆の音かまびすし、谷にはたいかいの石多し。

然れどもするがいのものやうに候石は一も候はず、いものめづらしき
事くらき夜のともしびにもすぎ・かはけ

る時の水にもすぎて候ひき、いかに・めづらしからずとは・あそばされて候ぞ、されば其には多く候か・あらこひしあらこひし、法華經・釈迦仏にゆづりまいらせ候いぬ、定めて仏は御志をおさめ給うなれば御悦び候らん、靈山淨土へまひらせ給いたらん時・御尋ねあるべし、
恐恐謹言。

建治二年丙子九月十五日

日蓮

花押

九郎太郎殿御返事

◆三八四 本尊供養御書

建治二年十二月 五十

五歳御作 与南条平七郎 1536p

法華經御本尊御供養の御僧膳料の米一駄・蹲鴟一駄・送り給ひ候い

畢おわんぬ、法華經ほけきようの文字もんじは六万九千三百八十四字・一一の文字もんじは我等われらが
目めには黒くろき文字もんじと見え候さうへども仏ぶつの御眼ごがんには一一に皆みな御仏みほとけなり、譬たとえ
ば金粟王こんぞくと申まをせし国王こくおうは沙さを金きんとなし・釈摩男しやくまなんと申まをせし人は石いしを珠たまと
成なし給たまふ、玉泉ぎよくせんに入りぬる木きは瑠璃るりと成なる・大海たいかいに入りぬる
水みづは皆鹹みなしおばゆし、須弥山しゆみせんに近きづく鳥とりは金色こんじきとなるなり、阿伽陀藥あかだは毒どくを藥
となす、法華經ほけきようの不思議ふしぎも又是またくの如ごとし凡夫ぼんぷを仏ぶつに成なし給たまふ、蕪かぶらは
鶉うずらとなり・山の芋いもはうなぎとなる・世間せけんの不思議ふしぎも又またくの如ごとし。
何いかに況ほけきや法華經ほけきようの御力ごんちからをや、犀さいの角かくを身みに帶おびすれば大海たいかいに入るに水みづ・
身みを去さる事こと五尺ごせふ、梅檀せんだんと申まをす香かうを身みにぬれば大火たいかに入るに焼やくること
無なし、法華經ほけきようを持たもちまいらせぬれば八寒地獄はちかんじごくの水みづにもぬれず八熱地獄じつねつじごく
の大火たいかにも焼やけず、法華經ほけきようの第七だいしちに云いく・火かも焼やくこと能あたわず水みづも漂ひた
すこと能あたわず」等あた云云、事多ことおほしと申まをせども年としせまり御使おんつかい急いそぎ候さうへば筆

を留候い畢んぬ。

建治二年丙子十二月 日

花押

南条平七郎殿御返事

日蓮

◆三八五

上野殿御返事うえのどのごへんじ

建治三年五月

五十六歳御作

1537p

五月十四日にいものかしら一駄・わざとおくりたびて候、当時とうじのいも
は人のいとまと申し珠たまのごとしくすりのごとし、さてはおほせつかはさ
れて候事うけ給たまわり候いぬ。

尹吉甫いんきつぽと申せし人は・ただ一人子あり・伯奇はくきと申す、をやも賢なり・
子もかしこし・いかなる人かこの中をば申もうしたがふべきと・おもひしかど
も・継母けいぼよりより・よりうたへしに用いざりしほどに・継母けいぼすねんが間・
やうやうのたばかりを・なせし中に、蜂と申もうすむしを我がふところに入
れて・いそぎいそぎ伯奇はくきにとらせて・しかも父にみせ・われをけそうする

と申しなして・うしなはん^{もう}とせしなり。

びんばさら王と申せし王は賢王^{けんおう}なる上仏の御だんなの中に閻浮第一^{えんぶだいいち}

なり、しかもこの王は摩竭提^{まかたこく}国の王なり、仏は又此の国にして法華經^{ほけきょう}を

・とかんとおぼししに・主と仏と一同なれば一定法華經^{ほけきょう}とかれなんとみ

へて候しに、提婆達多^{だいばだつた}と申せし人・いかんがして此の事をやぶらんと・お

もひしに・すべて・たよりなかりしかば・とかうはかり

しほどに・頻婆沙羅王^{びんばしやら}の太子阿闍世王^{たいしあじやせ}をとしごろとかくかたらひて・や

うやく心をとる・をやと子とのなかを申したが・阿闍世王^{あじやせ}をすかし

父の頻婆沙羅王^{びんばしやら}をころさせ・阿闍世王^{あじやせ}と心を一にし提婆^{だいば}と阿闍世王^{あじやせ}と

一味^{いちみ}となりしかば・五天竺^{てんじく}の外道^{げどう}・惡人^{あくにん}・雲かすみのごとくあつまり・国

をたび・たからをほどこし・心をやわらげすかししかば・一

国の王すでに仏の大怨敵^{おんてき}となる、欲界^{よっかい}・第六天^{だいろくてん}の魔王^{まおう}・無量の眷属^{けんぞく}を

具足ぐそくしてうち下り、摩竭まかだ提国ていこくの提婆だいば・阿闍世あじやせ・六大臣だいにしん等の身に入りかはりしかば、形は人なれども力は第六天だいろくてんの力なり、大風たいふうの草木そうもくをなびかすよりも、大風たいふうの大海たいかいの波をたつるよりも、大地震だいじしんの大地だいちをうごかすよりも、大火だいの連宅だいかをやくよりも、さはがしくをぢわななきし事

なり。

さればはるり王と申せし王は阿闍世王あじやせにかたらはれ釈迦仏しやくかぶつの御身おんみしたしき人数にんずう百人切りころす、阿闍世王あじやせは醉象を放ちて弟子でしを無量無辺むりやうむへんふみころさせつ、或あるは道に兵士をすへ、或あるは井に糞を入れ、或あるは女人をかたらひて、そら事いひつけて仏弟子ぶつでしをころす、舍利弗しやりほつ・目連もくれんが事にあひ・かるだいが馬のくそにうづまれし、仏はせめられて一夏いちげ

九十日・馬のむぎをまいりしこれなり、世間せけんの人のおもはく・悪人あくにんには

仏の御力おんちからもかなはざりけるにやと思ひて信じたりし人人ひとびとも音こえをのみて

もの申さず眼まなこをとちてもものを・みる事なし、ただ舌をふり手をかきし

計ばかりなり、

結句けつくは提婆達多だいばだつた・釈迦如来しやくかにょらいの養母・蓮華比丘尼れんげびくにを打ちころし・仏の御身おんみより血を出せし上・誰の人か・かたうどになるべき、かくやうやうにな

りての上・いかがしたりけん法華經をとかせ給いぬ、此の法華經に云く
而も此の經しか

は如来の現在にすら猶怨嫉多し況や滅度の後をや」と云云、文の心は

我が現在いましして候だにも此の經の御かたきかくのごとし、いかにいわうや

末代まつだいに法華經を一字一点もとき信ぜん人をやと説かれて候なり、此れ

をもつておもひ候へば仏・法華經をとかせ給いて今にいたるまでは二千

二百二十余年になり候へどもいまだ法華經を仏のごと

くよみたる人は候はぬか、大難だいなんをもちてこそ・法華經しりたる人とは

申すべきに、天台大師・伝教大師こそ法華經の行者とは・みへ候しか

ども在世のごとくの大難なし、ただ南三・北七・南都・七大寺の小難な

り、いまだ国主

かたきとならず・万民つるぎをにぎらず・一國惡口をはかず、滅後

法華經ほけきょうを信まことぜん人ひとは在世ざいせの大難だいなんよりもすぐべく候なるに同じほどの難なんだにも来きらず・何いかに況いはやすぐれたる大難多難だいなんなんをや。

虎こうそぶけば大風たいふうふく・竜りゅうぎんずれば雲うみをこる・野兎のうのうそぶき驢馬ろばのいはうるに・風ふうふかず雲うみをこる事なし、愚者ぐしゃが法華經ほけきょうをよみ賢者けんじやが義ぎを談だんずる時は国くにもさわかず事こともをこらず、聖人しょうにん出現しゅつげんして仏ぶつのごとく法華經ほけきょうを談だんぜん時とき・一ひと国くにもさわぎ在世ざいせにすぎたる大難だいなんをこるべしとみえて候まう、今日蓮けんにんは賢人けんじんにもあらず・まして聖人しょうにんは・おもひも

よらず天下てんか第一だいいちの僻人びやくにんにて候が・但經文計りにはあひて候やうなれば

大難だいにん来り候へば父母ふぼのいきかへらせ給たまいて候よりにもくきものことにあ

ふよりも・うれしく候なり、愚者ぐしやにて而も仏しかに聖人しょうにんとおもはれまいらせ

て候はん事こそ・うれしき事にて候へ・智者ちしやたる上二百五十戒かたくた

もちて万民ばんみんには諸天しよてんの帝釈たいしやくをうやまふよりも・う

やまはれて・釈迦しやくか仏ぶつ・法華經ほけきやうに不思議ふしぎなり提婆だいばがごとしと・おもはれま

いらせなば・人目はよきやうなれども後生ごしやうはおそろし・おそろし。

さるにては殿ほけきやうは法華經ぎやうじやの行者ぎやうじやににさせ給たまへりと・うけ給たまはれば・もつ

てのほかに人のしたしきも・うときも日蓮房にちれんを信じては・よもまどいなん

・上の御氣色みけしきもあしかりなんと・かたうどなるやうにて御けうくむ候な

れば・賢人けんじんま

でも人のたばかりは・おそろしき事なれば・一定法華經ほけきやうすて給たまいなん、

なかなか色みへでありせば・よかりなん、大魔のつきたる者どもは一人をけうくんしをとしつればそれをひつかけにして多くの人をせめをとすなり。

日蓮にぢれんが弟子でしにせう房もうと申し・のと房もうといふ・なごえの尼しなんど申せし物どもは・よくふかく・心をくびやうに・愚癡ぐちにして・而しかも智者ちしやとなのりし・やつばらなりしかば・事のをこりし時・たよりをえて・おほくの人を・おとせしなり、殿もせめをとされさせ給たまうならば・するがにせうせう信ずるやうなる者も・文信ぶんしんぜんと・おもふらん人人ひとびとも皆みな

法華經ほけきょうをすつべし、さればこの甲斐かいの国にも少少信もうぜんと申ひとびとす人人候ひとびとへども・おぼろげならでは入れまいらせ候はぬにて候、なかなかしき人の信ずるやうにて・なめりて候しんじんは人の信心しんじんをも・やぶりて候なり。

ただをかせ給たまへ・梵天ぼんてん・帝釈たいしやく等の御計ごけいとして、日本国にほんこく・一時いちじに信ずる

事あるべし。爾時そのとき・我も本より信じたり信じたりと申す人こそおほくを
はせずらんとおぼえ候。御信用ごしんようあつくをはするならば・人ためにあらず
我が故父の御ため・人は我がをやの後世ごしやうには・かはるべからず・子なれば
我こそ故をやの後世ごしやうをばとぶらふべけれ、郷一郷・知るならば半郷は父
のため半郷は妻子さいし・眷属けんぞくをやしなふべし、我が命は事出いできたらば上に
・まいらせ候べしと・ひとへ

におもひきりて何事なにごとにつけても・言をやわらげて法華經ほけきようの信を・うすく
なさんずる・やうを・たばかる人出来しゅつたいせば我が信心しんじんを・こころむるかど・
おぼして各各これを御けうくんあるは・うれしき事なり、ただし御身おんみの
けうくんせ

させ給たまへ上の御信用ごしんようなき事は・これにもしりて候を上をもつて・おどさ
せ給たまうこそかしく候へ参りてけうくん申もうさんと・おもひ候つるに・うわ
てうたれまいらせて候、閻魔王えんまおうに我が身と・いとをしとおぼす御めと・
子とを・ひつばられん時は・時光に手をやすらせ給たまい候そうらはんずらんと・
にくげに・うちいひて・おはすべし。

にいた殿の事まことにてや候らん、をきつの事きこへて候、殿もびんき
候はば其その義にて候べし、かまへておほきならん人申もうしいだしたるらんは
あはれ法華經ほけきようのよきかたきよ、優曇華うどんげか盲龜うきぎの浮木うきぎかと・おぼしめして

・したたかに御返事あるべし。

千丁・方丁しる人もわづかの事にたちまちに命をすて所領をめさる人もあり、今度・法華經のために命をすつる事ならば・なにはをしかるべき、薬王菩薩は身を千二百歳が間・やきつくして仏になり給い・檀王は千歳が間・身をゆかとなして今の釈迦仏といはれさせ給うぞかし、されば・ひが事をすべきにはあらず、今はすてなば・かへりて人わらはれになるべし、かたうどなるやうにて・つくりおとして、我もわらひ人にもわらはせんとするがきくわい

なるに・よくよくけうくんせさせて人のおほくきかんとおころにて・人をけうくんせんよりも我が身をけうくんあるべしとて・かつぽとたたせ給へ一日・二日が内にこれへきこへ候べし、事おほければ申さず又又申すべし、きようきようきんげん恐恐謹言。

建治三年五月十五日

日蓮にちれん花押かおう

上野殿御返事うえのどのごへんじ

◆三八六

南条殿御返事ごへんじ

1541p

白麦一俵・小白麦一俵・河のり五でふ・送り給び了おわんぬ。

仏おんの御弟子でしに阿那律尊者あなりつそんじやと申せし人は・をさなくしての御名みなをば

如意によいと申すもう、如意によいと申すもうは心のおもひのたからをふらししゆへなり、こ

のよしを仏にとひまいらせ給たまいしかば・昔うえたるよに縁覚えんかくと申すもう聖人しようにん

をひゑのはんをもつて供養くようしまいらせしゆへと答えさせ給たまう。

迦葉尊者かしようそんじやと申せし人は仏にいつでも閻浮提えんぶだい第一だいいちの僧なり、俗にてをは

せし時は長者ちようじやにて・からを六十そのくらに金を百四十こくづつ入れさ

せ給たまう、それより外ほかのたから申すもうばかりなし、この人のせんじやうの

御事おんことを仏にと

ひまいらせさせ給たまいしかば・むかしうえたるよにむぎのはんを一ぱひ

供養くようしたりしゆへに・☆利天とうりてんに千反生れて今釈迦しゃか仏ぶつに値あいまいらせ僧そうの
中の第一だいいちとならせ給たまい法華ほけき經きやうにて光明くわうみやう如来にやらいと名をさづけられさせ
給たまうと天台大師てんだいだいし・文句もんくの第一だいいちにしるされて候。

かれをもつて此これをあんずるに迦葉かしやう尊者そんじやの麦のはんは・いみじくて
光明くわうみやう如来にやらいとならせ給たまう、今のだんなの白麦はいやしくて仏にならず候
べきか、在世ざいせの月は今も月・在世ざいせの花は今も花・むかしの功德くどくは今の
功德くどくなり、その上上かみいちにん一人より下万民ばんみんまでに・にくまれて山中にうえしに
ゆべき法華ほけき經きやうの行者ぎやうじやなり、これをふびんと・をぼして山河さんが
をこえわたり・をりくたびて候・御心おんこころざしは麦にはあらず金こがねなり・金こがねに
はあらず法華ほけき經きやうの文字もんじなり、我等われらが眼まなこにはむぎなり・十らせつには此
のむぎをば仏のたねとこそ御らん候らめ、阿那律あなりつがひゑのはんはへんじ
てうさぎとなる、

うさぎ・へんじて死人^{しにん}となる・死人^{しにん}へんじて金^{こがね}となる・指をぬきてうりしかば又いできたりぬ、王のせめのありし時は死人^{しにん}となる、かくのごとく・つきずして九十一劫^{いっくわう}なり、釈まなんと申せし人の石をとりしかば金^{こがね}となりき、

金ぞく王は・いさごを金となし給いき。こがね たまい

今のむぎは法華經ほけきょうのもんじなり、又は女人にょにんの御ためには・かがみとなり・身のかざりとなるべし、男のためには・よろひとなり・かぶとなるべし、守護神しゅごしんとなりて弓箭きゅうせんの第一だいいちの名をとるべし、南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょう・南無妙法蓮華經、恐恐謹言。

このよの中は・いみじかりし時は何事なにごとかあるべきとみえしかども・當時とうじはことにあぶなげに・みえ候ぞ、いかなる事ありともなげかせ給たまうべからず、ふつと・おもひきりてそりやうなんども・たがふ事あらば・いよいよ悦びよろことこそおもひて・うちうそぶきて・これへわたらせ給たまへ所地ひとびとしらぬ人もあまりにすぎ候ぞ、當時とうじつくしへ・むかひて・なげく人人ひとひとは・いかばかりとか・おぼす、これは皆日蓮みなにちれんを・かみのあなづらせ給たまいしゆへなり。

七月二日

日蓮花押 にちれん かおう

南条殿御返事 ごへんじ

◆三八七

庵室修復書 あんしつ

建治三年 五十六歳御作

1542p

去文永^{ぶんえい}十一年六月十七日に・この山のなかに・きをうちきりて・かり

そめにあじちをつくりて候いしが・やうやく四年がほど・はしらくちか
きかべをち候へども・なをす事なくて・よるひを・とぼさねども月のひか
りにて聖教^{しょうきょう}をよみまいらせ・われと御経をまきまいらせ候はねども・

風をのづから・ふきかへし・まいらせ候いしが、今年は十二

のはしら四方^{しほう}にかふべをなげ・四方^{しほう}のかべは・一そにたうれぬ、うだいた

もちがたければ・月はすめ雨はとどまれとはげみ候いつるほどに・人ぶ
なくして・がくしやうどもをせめ・食なくして・ゆきをもちて命をたすけ
て候ところに・さきに・うへのどのよりいも二駄これ一だは・たまにもす
ぎ。

◆三八八

大白牛車書だいびやくごしや

建治三年十二月十七日 五十

六歳御作

与南条七郎次郎

1543p

夫それ法華經第二の巻に云いく此の宝乗ほうじやうに乗り直ちに道場どうじやうに至いたる」と云云、日蓮にちれんは建長五年四月二十八日初めて此の大白牛車だいびやくごしやの一乘法華いちじやうほつけの相伝そうでんを申し顯もうはせり、而しかるに諸宗しよしゆうの人師等にんし・雲霞うんかの如ごとくよせ来り候、中にも真言しんこん・浄土じやうど・禪宗等ぜんしゆう・蜂へうの如ごとく起りせめたたかふ、日蓮にちれん大白牛車だいびやくごしやの牛の角最第一さいだいいちなりと申もうしてたたかふ、両の角は本・迹二門ほんしやくにもんの如ごとく二乗作仏にじやうさぶつ・久遠実成くおんじつじやう是なり、すでに弘法大師こうぼうだいしは法華最第一ほつけさいだいいちの角を最第三となをし、一念三千いちねんさんぜん・久遠実成くおんじつじやう・即身成仏そくしんじやうぶつは法華ほつけに限れり、是これをも真言しんこんの經きやうにありとなをせり、かかる謗法ぼうぼうの族やからを責めんとするに

返いよいよつて弥た怨たをなし候、譬たとえば角を・なをさんとして牛をころしたるが如ごとくなりぬべく候ひしかども・いかでさは候べき。

そもそも

抑もつ此の車と申すは本・迹二門の輪を妙法蓮華經の牛にかけ、三界さんがい

の火宅を生死しやうじ・生死しやうじとぐるり・ぐるりとまはり候ところの車なり、ただ

信心しんじんのくさびに志いしやくしのあぶらをささせ給たまいて靈山淨土りやうぜんじようどへまいり給たまうべ

し、又心王しんのうは牛の如ごとし・生死しやうじは兩の輪の如ごとし、伝教大師でんきやうだいし云く生死しやうじの二

法いつしんは一心みやうゆうの妙用・有無うむの二道にとうは本覺ほんがくの真徳なり」云云、天台てんだい云く干如

は只是ただこれ乃至今境ないしは是れ体こ」と云云、此の文よくよく機能能案たまたじ給たまうべし、南無

妙法蓮華經・南無妙法蓮華經。

十二月十七日

日蓮にちれん 花押かおう

◆三八九

上野殿御返事うえのどのごへんじ

建治四年二月二十五日

五十七歳御作

与南条七郎次郎

1544p

蹲鴟いえのいも・くしがき・焼米・栗・たかなな・すづつ給ひ候おわい了んぬ。

月氏がつしに阿育大王あそかだいおうと申す王もうをはしき、一閻浮提えんぶだい四分の一を・たなごこ

ろににぎり・竜王りゅうおうをしたがへて雨を心にまかせ・鬼神きじんをめしつかひ給たまい

き、始は悪王あくおうなりしかども後には仏法ぶつぽうに歸し・六万人ぼんにんの僧を日々に

供養くようし・八万四千はちまんの石の塔をたて給たまう、此の大王だいおうの過去かこをたづぬれば仏

の在世ざいせに徳勝童子とくしょうどうじ・無勝童子むしょうどうじとて二人のをさなき人あり、土

の餅を仏に供養くようし給たまいて一百年の内に大王だいおうと生れたり、仏はいみじしと

いへども法華經ほけきょうにたいしまいらせ候ほたるびは・螢火へいかりと日月にちがつとの勝劣しょうれつ・天と地と

の高下こうげなり、仏を供養くようして・かかる功德くどくあり・いわうや法華經ほけきょうをや、土

のもちゐる

を・まいらせて・かかる不思議ありいわうやすずのくだ物をや、かれは
けかちならず・いまはうへたる国なり、此をもつて・をもふに釈迦仏・
多宝仏・十羅刹女いかでかまほらせ給はざるべき。

そもそも

抑今の時・法華經を信ずる人あり・或は火のごとく信ずる人もあ

り・或は水のごとく信ずる人もあり、聴聞する時は・もへたつばかりを

もへども・とをざかりぬれば・すつる心あり、水のごとくと申すは・いつ

も・たいせず信ずるなり、此れはいかなる時も・つねは・たいせずとわせ

給えば水のごとく信ぜさせ給へるかたうとし・たうとし。

まことやらむ・いへの内に・わづらひの候なるは・よも鬼神のそゐには

候はじ、十らせち女の信心のぶんざいを御心みぞ候らむ、まことの鬼神

ならば法華經の行者をなやまして・かうべをわらんとをもふ鬼神の候べ

きか、又釈迦しやかぶつ仏・法華ほけきよう經の御そら事の候べきかと・ふかくをぼしめし候
へ恐恐きようきようきんげん謹言。

二月廿五日

日蓮にちれん花押かおう

御返事ごへんじ

◆三九〇

上野殿御返事うえのどのごへんじ

弘安元年こうあんがんねん

四月一日 五十七

歳御作

与南条七郎次郎

1545p

白米一斗・いも一駄・こんにやく五枚・わざと送り給ひ候い畢おわんぬ、
なによりも石河の兵衛入道殿にゅうどうのひめ御前ごぜんの度度御たびたびふみをつかはしたり
しが、三月の十四五やげにて候しやらむ御ふみありき、この世の中をみ
候に病なき人

も・こねんななどをすぐべしともみ合候はぬ上・もとより病ものにて候が
・すでにきうになりて候さいごの御ふみなりと・かかれて候いしが、され
ば・つゐに・はかなくならせ給たまいぬるか。

臨終りんじゅうに南無阿弥陀仏なむあみだぶつと申しあはせて候人は・仏の金言きんげんなれば一定の

おうじよう

往生とこそ人も我も存じ候へしかれども・いかなる事にてや候いけん、

仏のくひかへさせ給いて未顕眞実・正直捨方便と・とかせ給いて候が・

あさましく候ぞ、此れを日蓮が申し候へばそら事うわのそらなりと

にほんこく

日本国にはいかられ候、此れのみならず仏の小乗経には十方

に仏なし一切衆生に

いっさいしゆじよう

ぶつしよう

仏性なしと・とかれて候ども・大乘経には十方

だいじしゆきよう

じゆつぽう

に仏まします一切衆生に仏性ありと・とかれて候へば・たれか小乗経

を

もち

いっさいしゆじよう

ぶつしよう

を用い候べき皆大乘経をこそ信じ候へ此れのみならず・ふしぎのちが

しゆじしゆきよう

ひめども候ぞ

かし、法華経は釈迦仏・已今当の経経を皆くひかえしうちやぶりて・

ほけきよう

しゃかぶつ

いこんとう

きようぎよう

みな

此の経のみ眞実なりと・とかせ給いて候いしかば御弟子等用ゆる事な

し、爾の時・多宝仏・証明をくわへ十方の諸仏・舌を梵天につけ給い

そ

たま

たほうぶつ

しょうみょう

じゆつぽう

しょうぶつ

おんでし

き、さて多宝仏はとびらをたて十方の諸仏は本土に・かへらせ給いて後

き、さて多宝仏はとびらをたて十方の諸仏は本土に・かへらせ給いて後

たほうぶつ

じゆつぽう

しょうぶつ

ほんど

かへらせ給いて後

たま

は・いかなるきようぎよう経経ありて法華経ほけきようを釈迦しゃか仏ぶつやぶらせ給たまうとも他人たにん

わゑになりて・やぶりがたし、しかれば法華経ほけきよう已い後の経経・普賢ふげん経・

涅槃ねはん経等ぎようには法華経ほけきようをば・ほむる事はあれどもそしる事なし、而しかるを

真言宗しんこんしゅうの善無畏ぜんむい等・禪宗ぜんしゅうの祖師そし等・此これをやぶれり、日本国にほんこく・皆みな此の

事を信じぬ、例せば将門さだもと・貞任さだとうなんどに・かたらはれし人人ひとびとのごとし、

日本国にほんこくすでに釈迦しゃか・多宝たほう・十方じゅうぽうの仏ぶつの大怨敵おんてきとなりて数年になり

候へば・やうやく・やぶれゆくほどに・又かう申す者を御あだみあり、わざはひにわざはひのならべるゆへに・此の国土すでに天のせめをかほり候はんずるぞ。

此の人は先世の宿業か・いかなる事ぞ、臨終に南無妙法蓮華經と唱えさせ給いける事は・一眼のかめの浮木の穴に入り・天より下いとの大地のはりの穴に入るがごとし、あらふしぎふしぎ、又念仏は無間地獄に墮つと申す事をば經文に文明なるをば・しらずして皆人・日蓮が口より出でたりとおもへり、天はまつげのごとしと申すはこれなり、虚空の遠きと・まつげの近きと人みなみる事なきなり、此の尼御前は日蓮が法門だにひが事に候はば・

よも臨終には正念には住し候はじ。

又日蓮が弟子等の中に・なかなか法門しりたりげに候人人はあしく

候げに候、南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと申もうすは法華經ほけきやうの中の肝心かんじん・人の中の神のごとし、此これにものを・ならぶれば・きさきのならべて二王をおとことし、乃至ないしきさきの大おみ臣いか已下おみいかになひなひとつぐがごとし、わざはひのみなもととなり、正法しやうほう・像法ぞうほうには此この法門ほうもんをひろめず余經よきやうを失わじがためなり、今末法まつぽうに入りぬりば余經よきやうも法華經ほけきやうもせんなし、但なむ南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうなるべし、かう申し出だして候も・わたくしの計ばたりにはあらず、釈迦しやか・多宝たほう・十方じゆつぽうの諸仏しよぶつ・地涌千界じゆせんがいの御計ごけいなり、此この南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうに余事よじを

まじへば・ゆゆしきひが事なり、日出いでぬれば・とほしびせんなし・雨のふるに露つゆなにのせんかあるべき、嬰兒えいじに乳ちちより外ほかのものをやしなうべきか、良藥りやうやくに又藥やくを加えぬる事なし。

此この女人にょにんは・なにとなければども自然じねんに義ぎにあたりてし・ををせるな

り、たうとし・たうとし、
恐恐謹言。
きようきようきんげん

弘安元年四月一日
こうあんがねん

日蓮 花押
にちれん かおう

上野殿御返事
うえのどのごへんじ

◆三九一

南条殿女房御返事

弘安元年五月二十四日

五十七歳御作

与南条七郎次郎女房

1547p

八木二俵送り給ひ候い畢おわんぬ、度度たびたびの御志ごし申し尽し難かたく候。

夫それ水は寒積つもれば氷と為なる・雪は年累としつみつて水精すいしょうと為なる・惡積つもれば

地獄じごくとなる・善積ぜんれば仏となる・女人にょにんは嫉妬しつとかさなれば毒蛇どくじやとなる。

法華經供養ほけきょうくようの功德くどくかさならば・あに竜女りゅうにょがあとを・つがざらん、山とい

ひ・河といひ・馬といひ・下人といひ・かたがた・かんなんのところに・度度たびたび

の御志ごし申すばかりなし。

御所勞の人の臨終正念りんじゅうしょうねん・靈山淨土疑りやうぜんじやうどうたがいなかるべし・疑うたがいなかるべし。

五月二十四日

日蓮 にちれん

花押 かおう

◆三九二

種種物御消息 しゅじゅつ しようそく

弘安元年七月七日 五十七

歳御作

与南条平七郎

しなしなのものをくり給びて法華經にまいらせて候。

そもそもにほんこく

抑 日本国の人を皆やしないて候よりも父母一人やしないて候は

功德まさり候、日本国にほんこくの皆人みなをころして候は七大地獄だいちじごくに墮おち候、父母

をころせる人は第八はちの無間地獄むげんじごくと申もうす地獄じごくに墮おち候、人ありて父母ふぼを

ころし釈迦しゃかぶつ仏おんみの御身おんみよりちをいだして候人は父母ふぼをころすつみにては

無間地獄むげんじごくに墮おちず、仏おんみの御身おんみよりちをいだすつみにて無間地獄むげんじごく

に墮おち候なり、又十惡じゅうあく・五逆ごぎやくをつくり十方じゅうぽう・三世さんぜの仏の身より・ちをい
だせる人の法華經ほけきょうの御かたきとなれるは・十惡じゅうあく・五逆ごぎやく・十方じゅうぽうの仏の
御身おんみより・ちをいだせるつみにては阿鼻地獄あびじごくへは入る事なし・ただ法華經ほけきょう
不信ふしんの大罪たいざいにより

て無間地獄へは堕ち候なり、又十惡・五逆を日日につくり・十方の諸仏を月月にはうずる人と・十惡・五逆を日日につくらず十方の諸仏を月月にはうぜず候人・此の二人は善惡はるかにかわりて候へども・法華經一字一点もあひそむきぬれば・かならず・おなじやうに無間地獄へ入り候なり。

しかればいまの代の海人・山人・日日に魚鹿等をころし・源家平家等の兵士等のとしどしに合戦をなす人人は・父母をころさねば・よも無間地獄には入り候はじ、便宜候はば法華經を信じて・たまたま仏になる人も候らん、今の天台の座主・東寺・御室・七大寺の檢校・園城寺の長吏等の真言師・並びに禪宗・念佛者・律宗等は眼前には法華經を信じよむにたれども・其の根本をたづぬれば弘法大師・慈覺大師・智証大師・善導・法然等が弟子なり、源にこりぬれば流きよからず・

天くもれば地くらし、父母謀反をおこせば妻子ほろぶ・山くづるれば草木たふるなら

ひなれば・日本六十六ヶ国の比丘・比丘尼等の善人等・皆無間地獄に墮つべきなり、されば今の代に地獄に墮つるものは悪人よりも善人・善人よりも僧尼・僧尼よりも・持戒にて智慧かしこき人人の阿鼻地獄へは墮ち候なり。

此の法門は当世・日本国に一人もしりて候人なし、ただ日蓮一人計りにて候へば・此れを知って申さずば・日蓮・無間地獄に墮ちて・うかぶ期なかるべし、譬へば謀反のものを・しりながら国主へ申さぬとがあり、申せばかたき雨のごとし風ののごとし・むほんのものののごとし・海賊・山賊のものののごとし、かたがた・しのびがたき事なり、例せば威音王仏の末の不輕菩薩のごとし歡喜仏のすえの覺徳比丘のごとし

し、天台のごとし・伝教のごとし、又かの人人ひとひとよりも・かたきすぎたり、
かの人人ひとひとは諸人しよにんにくまれたりしかども・いまだ国主こくしゅにはあだまれず、
これは諸人しよにんよりは国主こくしゅにあだまるる事父母ふぼのかたきよりも・すぎたるを
みよ。

かかるふしぎの者をふびんとて御くやう候は・白蓮にぢれんが過去かこの父母ふぼか又
先世せんぜの宿習しゆくじゅうか・おぼろげの事にはあらじ、某それがしの上雨うへあめふりかぜふき人
のせいするにこそ心させしはあらわれ候へ此これも又かくのごとし、ただ
なる時だに

も・するがとかいとのかかひは山たかく河ふかく石おほくみちせばし、い
わうやたうじは・あめはしのをたてて三月におよびかわはまさりて九十
日、やまくづれ・みちふさがり人も・かよはずかつてもたえて・いのちか
うにて候いつるに・このすずのもの給いて法華經の御うえをもつぎ
釈迦仏の御いのちをも・たすけまいらせ給いぬ、御功德ただをしはから
せ給うべし、くはしくは又又申すべし、恐恐。 七月七

日蓮花押
にちれん かおう

◆三九三 時光御返事ごへんじ

弘安元年七月八日 五十七
こうあん がんねん

歳御作 与南条時光
なんじょうときみつ
1549p

むぎのしろきこめ一駄はじかみ送り給ひ畢おわんぬ。

解解版版王王 かくばんわうの太子たいしあなりちと申もうす人は家にましましし時は俗性は月がつ氏国の本主てんりん聖王のすえ師し子けう王のまご浄飯王じやうばんのおひこくぼん王には太子たいしなり、天下てんかにいやしからざる上・家中には一日の間・一万・二千人の人出入す、六千人はたからをかりき六千人は・かへりなす、かかる富人にておはする上天眼第一てんげんだいいちの人・法華經ほけきやうにては普明如来ふみやうにょらいとなるべきよし仏記しるし給たまう。

これは過去かこの行は・いかなる大善だいぜんぞとたづぬるに・むかしれうしあり山のけだものをとりて・すぎけるが又ひえをつくり食とするほどに飢えたる世なればものもなし、ただ・ひえのはん一ありけるを・くひければ・りだと申もうす辟支仏ひやくしぶつの聖人しやうにん来たりて云いく我七日の間食なし汝なんじが食者えさせよとこわせ給たまいしかば・きたなき俗のごきに入れて・

けがしはじめて候と申しければ、ただえさせよ今食せずば死ぬべしと云
う、おそれながらまいらせつ、此の聖人しょうにんまいり給たまいしがただひえ一つび
を・とりのこして・れうしにかへし給たまいき、ひえへんじていのことなる、いの
こ

変じて金こがねとなる金こがね変じて死人しにんとなる死人しにん變じて又金人こがねとなる指をぬいて売れば本のごとし、かくのごとく九十一劫いっじゅうしちようじや長者に生れ今はあなりちと申もうして仏の御弟子おんでしなり、わづかの・ひえなれども飢えたる国に智者ちしやの御いのちをつぐゆへに・めでたきほうをう。

迦葉尊者かしようそんじやと申せし人は仏の御弟子おんでしの中には第一だいいちにたとき人なり、此

の人の家をたづぬれば摩かだい国の尼くりだ長者ちようじやの子なり、宅にたたみ千でうあり一でうはあつさ七尺下品げぼんのたたみは金千両なり、からすき九百九十九・一のからすきは金千両、金三百四十石入れたるくら六十・かかる大長者ちようじやなり、めは又身は金色にして十六里をて

らす、日本国にほんこくの衣通姫そとおりひめにもすぎ漢土かんとのりふじんにもこえたり、此の夫婦道心どうしんを發おこして仏の御弟子おんでしとなれり、法華經ほけきようにては光明如来こうみょうにょらいといはれさせ給たまう、此の二人の人人ひとびとの過去かこをたづねれば麦飯を辟支仏ひやくしぶつに供養くようせし

ゆへに迦葉尊者かしようそんじやと生れ、金のぜに一枚を仏師にあつらへて毘婆尸仏の像

の御はくにはひきし貧人ひんじんは此の人のめとなれり。

今日蓮は聖人いまにちれん しようにんにはあらざれども法華經ほけきように御名みなをたてり、国主こくしゅにく

まりて我が身をせく上弟子でしかよう人をも・或あるはのり・或あるはうち・或あるは

所領しりようをとり・或あるはところをおふ、かかる国主こくしゅの内にある人人ひとびとなれば・た

とひ心ざしあるらん人人ひとびともとふ事なし、此の事事ふりぬ、なかにも今年

は疫病えきびようと申し飢渴けかちと申しとひくる人人ひとびともすくなし、たとひ

やまひなくとも飢えて死なん事うたがひなかるべきに麦の御とぶらい

金こがねにもすぎ珠たまにもこえたり、彼のりだがひゑは變じて金人となる、此の

時光ときが麦何なんぞ變じて法華經ほけきようの文字もんじとならざらん、此の法華經ほけきようの文字もんじは

釈迦しゃか仏となり給たまひ時光ときが故親父さうの左右さうの御羽となりて靈山淨土りようぜんじようどへとび

給たまへかけり給たまへかへりて時光ときが身をおほひ・はぐくみ給たまへ 恐恐きようきよう謹言きんげん。

弘安元年七月八日

日蓮花押

上野殿御返事

◆三九四

上野殿御返事うえのどのごへんじ

弘安元年九月十九日 五十

七歳御作 与南条時光なんじょうときみつ

1551p

塩一駄はじかみ送り給ひ候。

金こがね多くして日本にほんこく国の沙のごとくならば誰か・たからとして・はこのそ

こにおさむべき、餅多くして一閭えんぶだい浮提だいちの大地のごとくならば誰か米の恩を・おもくせん。

今年は五月より日に雨ふり・ことに七月より大雨だいうひまなし、このところは山中なる上・南は波木井はきり・河北かほくは早河東は富士河・西は深山みやまなれば長雨・大雨だいう・時時・日ににつづく間・山さけて谷をうづみ・右ながれて道をふせぐ・河たけくして船わたらず、富人なくして五穀ごこくともし商人あきひとな

くして人あつまる事なし、七月なんどは・しほ一升を・

ぜに百しほ五合を麦一斗にかへ候しが今はぜんたい・しほなし、何を以て
か・かうべき、みそも・たえぬ、小児しょうにのちをしのぶがごとし。

かかるところに・このしほを一駄給びて候・御志いっしゆみし・大地だいちよりもあつく

虚空こくうよりもひろし、予が言は力及ぶべからずただ法華經ほけきょうと釈迦しゃか仏ぶつとに・

ゆづりまいらせ候、事多しと申せども紙上には・つくしがたし、恐恐きょうきょう

謹言きんげん。

弘安元年こうあんがねん九月十九日

日蓮にちれん 花押かおう

上野殿御返事うえのどのごへんじ

◆三九五

上野殿御返事うえのどのごへんじ

弘安元年十月十二日 五十

七歳御作

与南条時光なんじょうときみつ

1552p

いゑのいも一駄・かうじ一こ・ぜに六百のかわり御ざのむしろ十枚給
び畢おわんぬ。

去今年は大えき此の国にをこりて人の死ぬ事大風たいふうに木のたうれ大雪
に草のおるるがごとし一人ものこるべしともみへず候いき、しかれども又
今年の寒温時にしたがひて五穀ごこくは田畠でんばたにみち草木そうもくはやさんにおひふさ
がりて堯ぎょうしゆん舜しゆんの代のごとく成劫じようこくのはじめかとみへ候いしほどに八月九
月だいうたいふうの大雨大風に日本にほん一同不熟ふじやくゆきてのこれる

万民ばんみん冬をすごしがたし、去いぬる寛喜・正嘉しょうかにもこえ来らん三災さんさいにも・お

とらざるか、自界叛逆して盜賊国に充滿し他界きそいて合戦に心をつひやす、民の心不孝にして父母を見る事他人のごとく僧尼は邪見にして狗犬と☆猴

のあへるがごとし、慈悲なければ天も此の国をまほらず邪見なれば三宝にもすてられたり、又疫病もしばらくはやみてみえしかども鬼神かへり入るかのゆへに北国も東国も西国も南国も一同にやみなげくよしきこへ候、かかるよにいかなる宿善にか法華經の行者をやしなわせ給う事ありがたく候ありがたく候、事事見参の時申すべし、恐恐謹言。

弘安元年後十月十二日

日蓮 花押

上野殿御返事

◆三九六

九郎太郎殿御返事^{ごへんじ}

弘安元年^{こうあんがんねん}十一月一

日 五十七歳御作

与南条九郎太郎

1553p

これにつけてもこうえのどのの事こそをもひいでられ候へ。

いも一駄・くり・やきごめ・はじめ給ひ候いぬさてはふかき山にはい
もつくる人もなし・くりもならず・はじめもをひず・ましてやきごめみ
へ候はず、たとえくりなりたりともさるのこずへからす、いえのいもはつ
くる人なし・たとえつくりたりとも・人にくみてたび候はず、いかにして
か・かかるたかき山へは・きたり候べき。

それ山をみ候へば・たかきよりしだいにしもえくだれり、うみをみ候へ
ば・あそきより・しだいにふかし、代をみ候へば三十年・二十年・五年・四

三二一・次第しだいにをとろへたり、人の心もかくのごとし、これはよのすへになり候へば山には・まがれるきのみとどまり・のには・ひききくさのみをひたり、よには・かしこき人はすくなく・はかなきものはをほし、牛馬ぎゅうばのちちをしらず兎羊の母をわきまえざるがごとし。

仏御入滅にゅうめつありては二千二百二十余年なり代すへになりて智人ちじん次第しだいにかくれて山のくだれるがごとく・くさのひききにいたり、念仏ねんぶつを申しかいたもちなんどする人は・ををけれども法華經ほけきょうをたのむ人すくなし、星は多けれども大海たいかいをてらさず草は多けれども大内の柱とはならず、念仏ねんぶつは多けれども仏と成る道にはあらず戒たもは持て

ども浄土じょうどへまひる種とは成らず、但南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうの七字のみこそ仏になる種には候へ此れこを申せば人はそねみて用ひざりしを故上野殿信うえのどのじ給たまいしによりて仏に成らせ給たまいぬ、各各そは其の末にて此の御志ごしをと

げ給^{たま}うか、竜馬につきぬる。だには千里^{せんり}をとぶ、松にかかれるつたは千尋^{せんじん}
をよづと申^{もう}すは是か、各各主の御心なり、つちのもちるを仏に供養^{くやう}せし
人は王となりき、法華^{ほけき}経は仏にまさらせ給^{たま}う法なれば供養^{くやう}せさせ給^{たま}い
て、いかでか今生^{こんじやう}にも

利生りしやうにあづかり後生ごしやうにも仏にならせ給たまはざるべき、その上みひんにして
・げにんなし、山河さんがわづらひあり、たとひ心ざしありともあらはしがた
きに・いまいろをあらわせ給たまうにしりぬ、をぼろげならぬ事なり、さ
だめて法華經ほけきやうの十羅刹じゅうらせつまほらせ給たまいぬらんと・たのもしくこそ候へ事つ
くしがたし、恐恐きようきよう謹言きんげん。

弘安こうあん元年十一月一日

日蓮にちれん 花押かおう

九郎太郎殿御返事ごへんじ

◆三九七 上野殿御返事うえのどのごへんじ

弘安こうあん二年一月三日 五十八

歳御作

1554p

餅九十枚・やまのいも五十本・わざと御便を以って正月三日羊の時に
するが駿河の国・富士郡上野郷より甲州は波木井の郷身延山のほらへ・おくり
たびて條。

夫れ海辺には木を財とし山中には塩を財とす、早魃には水を財と
そ
あんちゅうし闇中には灯を財とし・女人は夫を財とし夫は女人を命とし、王は
たから
たから民を親としは民は食を天とす、此の両三箇年は日本国の中に大疫起り
て人半分減じて候か、

去年の七月より大なるけかちにて里市とをき無縁の者と山中の僧等は
こぞ
にちれん命存じしがたし、其の上日蓮は法華経誹謗の国に生れて威音王仏の
まっぽう
ふぎようぼさつ末法の不輕菩薩の如し、将又歡喜増益仏の末の覚悟比丘の如し、王も
にくみ民もあだむ

・衣もうすく食もとぼし・布衣はにしききの如し・草葉をば甘露と思

ふ、其^その上去年^{こぞ}の十一月より雪つもりて山里路たえぬ、年返れども鳥の
声ならでは・をとづる人なし、友にあらずばたれか問うべきと心ばそ
くて過し候に

元三の内に十字九十枚・満月^{まんげつ}の如^{ごと}し、心中^{しんちゅう}もあきらかに生死^{しょうじ}のやみも
はれぬべし、あはれなり・あはれなり、こうへどのをこそ・いろあるをとこ
と人は申せし・其^その御子なればくれないの、こきよしをつたへ給^{たま}えるか、
あいよ

りもあをく・水よりもつめたき氷かなと・ありがたし・ありがたし、
きようきようきんげん
恐恐謹言。

正月三日

上野殿御返事
うえのとのごへんじ

◆三九八 上野殿御返事
うえのとのごへんじ

弘安二年四月二十日
こうあん

五十八歳御作

1555p

抑日蓮・種種の大難の中には竜口の頸の座と東条の難にはすぎ
抑日蓮・種種の大難の中には竜口の頸の座と東条の難にはすぎ
そのゆえ
ず、其の故は諸難の中には命をすつる程の大難はなきなり、或はのり
そのゆえ
せめ・或は処をおわれ無実を云いつけられ・或は面をうたれしなどは物
あるところ
のかずならず、されば色心の二法よりをこりてそしられたる者は
しきしん

にほんこく 日本国の中には日蓮にちれん一人なり、ただしありとも法華經ほけきょうの故ゆえに

はあらじ、さてもさても・わすれざる事はせうぼうが法華經ほけきょうの第五の巻を取りて日蓮にちれんがつらをうちし事は三毒さんどくよりをこる処ところのちやうちやくなり。

天竺てんじくに嫉妬しつとの女人にょにんあり男をにくむ故ゆえに家内の物をことごとく打ちやぶり、其その上にあまりの腹立にや・すがた・けしきかわり眼まなこは日月にちがつの光のごとくかがやきくちは炎をはくがごとし・すがたは青鬼赤鬼のごとくにて年来男のよみ奉たてまつる法華經ほけきょうの第五の巻をとり両の足にてさむざむにふみける、其その後命ごうめいつきて地獄じごくにをつ両の足

ばかり地獄じごくにいらす獄卒鉄杖ごくそつてつぼうをもつてうてどもいらす、是は法華經ほけきょうをふみし逆縁ぎやくえんの功德くどくによる、いま日蓮にちれんをにくむ故ゆえにせうぼうが第五の巻を取りて予がをもてを・うつ是も逆縁ぎやくえんとなるべきか、彼は天竺てんじく此れは日本にほん

・かれは女人にょにんこれはをとこ・かれは両のあし・これは両の手・彼は嫉妬しつとの
故こ此これは法華經ほけきょうの御故なり、されども法華經ほけきょう第五の巻は・をなじきな
り、彼の女人にょにんのあし地獄じごくに入らざらん此の両の手・無間むげんに入るべき
や、ただし彼は男をに

くみて法華經ほけきょうをば・にくまず、此これは法華經ほけきょうと日蓮にちれんとを・にくむれば一身むげん無間むげんに入るべし、經きやうに云いく其その人命終みやうじゆうして阿鼻獄あびごくに入らん」と云々、手ばかり無間むげんに入るまじとは見みえず不便ふびんなり不便ふびんなり、ついには日蓮にちれんにあひて仏果ぶつかをうべきか不輕菩薩ふぎやうぼさつの上慢じやうまんの四衆ししゆうのごとし。

夫それ第五の卷は一經いつきやう第一の肝心かんじんなり竜女りゆうによが即身成仏そくしんじやうぶつあきらかなり、提婆だいばはこころの成仏じやうぶつをあらはし竜女りゆうによは身の成仏じやうぶつをあらはす、一代いちだいに分絶ぶんたつたる法門ほうもんなり、さてこそ伝教大師でんぎやうだいしは法華經ほけきやうの一切經いっさいきやうに超過ちやうかして勝すぐれたる事を十あつめ給たまいたる中に即身成仏そくしんじやうぶつ化導勝けどうしやうとは此の事なり、此この法門ほうもんは天台宗てんだいしゆうの最要そくしんじやうぶつにして即身成仏そくしんじやうぶつ義ぎと申もうして文句もんくの義科ぎかなり真言しんごん・天台てんだいの両宗りやうしゆうの相論さうろんなり、竜女りゆうによが成仏じやうぶつも法華經ほけきやうの功力こうりきなり、文殊師利菩薩もんじゆしりぼさつは唯常宣說ただせんぜつみやうほけきやう妙法華經ただしんごんとこそかたらせ給たまへ唯常ただの二字ふたごは八字の中の肝要かんようなり、菩提心論ぼだいしんろんの唯真言法中ただしんごんの唯ただの字と・今の唯ただ

字と・いづれ

を本とすべきや、彼の唯の字はをそらくはあやまりなり、無量義經に
云くいわ四十余年よんじゅうよねん未だ真実しんじつを顯さずあらわ、法華經ほけきょうに云くいわ世尊せそんの法は久しく
して後に要當まさに真実しんじつを説きたもうべしと、多宝仏たほうぶつは皆是真実かいぜしんじつとて法華經ほけきょう
にかぎりて即身成仏そくしんじょうぶつありとさだめ給へりたま、爾前經にぜんきやうにいかように成仏じょうぶつあ
りともとけ權宗ごんしゅうの人人ひとびと・無量むりやうにいひくるふとも・ただほうろく千につち
一つなるべし、法華折伏ほつしやくふく・破權門理はごんもんりとはこれなり、尤もつともいみじく秘奥な
る法門ほうもんなり。

又天台の學者てんだい がくしゃ・慈覺じかくより・このかた玄・文・止の三大部たいぶの文をとか・く
れうけんし義理ぎりをかまうとも去年こぞのこよみ昨日の食のごとし・けうの用
にならず、末法まつぽうの始の五百年ごひゃくねんに法華經ほけきょうの題目だいもくをはなれて成仏じょうぶつありとい
ふ人は・仏説ぶつせつなりとも用ゆべからず、何いかに況や人師にんしの義をや、爰ここに日蓮にちれん

思ふやう提婆だいば品を案ずるに提婆だいばは釈迦しやか如来にょらいの昔の師な

り、昔の師は今の弟子でしなり今の弟子でしはむかしの師なり、古今能所不二に
して法華經ほけきやうの深意じんいをあらわす、されば惡逆あくぎやくの達多だつたには慈悲じひの釈迦しやか如来にょらい
師となり愚癡ぐちの竜女りゆうによには智慧ちえの文殊師もんじゆとなり・文殊もんじゆ・釈迦しやか如来にょらいにも
日蓮にぢれんをとり奉るたてまつべからざるか、日本にほんの男は提婆だいばがごとく女は竜女りゆうによに
あひにたり、逆順ぎやくじゆんともに成仏じやうぶつを期すこすべきなり是れ提婆だいば品

の意なり。

次に勸持品に八十万億那由佗の菩薩の異口同音の二十行の偈は日蓮

一人よめり、誰か出でて日本国唐土天竺・三国にして仏の滅後によみた

る人やある、又我よみたりと・なるべき人なし又あるべしとも覺へず、

及加刀杖の刀杖の二字の中に・もし杖の字にあう人はあるべし刀の字

に・あひたる人をきかず、不輕菩薩は杖木瓦石

と見えたれば杖の字に・あひぬ刀の難はきかず、天台・妙楽・伝教等は

刀杖不加と見えたれば是又かけたり、日蓮は刀杖の二字ともに・あひ

ぬ、剩・刀の難は前に申すがごとく東条の松原と竜口となり、一度も

・あう人なきなり日蓮は二度あひぬ、杖の難には・すでにせうぼうにつ

らをうたれしかども第五の巻をもつてうつ、うつ杖も第五の巻

うたるべしと云う經文も五の巻・不思議なる未來記の經文なり、され

ば・せうばうに日蓮にちれん數十人の中にしてうたれし時の心中しんちゅうには法華經ほけきょうの故とは・をもへども・いまだ凡夫ぼんぷなればうたてかりける間・つえをも・うばひ・ちからあるならば・ふみをりすつべきことぞかし、然れども・つえは法華經ほけきょうの五の卷にてまします。

いまをもひ・いでたる事あり、子を思ふ故ゆえにや・をやつぎの木の弓をもつて学文せざりし子にをしへたり、然る間しか・此の子うたてかりしは父にくかりしは・つぎの木の弓、されども終ついには修学増進しゅうがくして自身得脱じしんとくだつをきわめ・又人を利益りやくする身となり、立ち還かえつて見れば・つぎの木をもつて我をうちし故なり、此の子そとばに此の木をつく

り父の供養くようのためにたててむけりと見へたり、日蓮にちれんも又かくの如くあるべきか、日蓮仏果にちれんぶつかをえむに争いかにかせうばうが恩をすつべきや、何に況いかや法華經ほけきょうの御恩ごおんの杖をや、かくの如く思おもひつづけ候もとへは感涙かんだいをさへがたし。

又涌出品は日蓮がためには・すこしよしみある品なり、其の故は
上行菩薩等の末法に出現して南無妙法蓮華經の五字を弘むべしと見へ
たり、しかるに先日蓮一人出来す六万恒沙の菩薩より・さだめて忠賞
をかほるべしと思へば・たのもしき事なり、とにかくに法華經に身をまか
せ信ぜさせ給へ殿一人にかぎるべからず信心をすすめ

給たまいて過去かこの父母等ふぼをすくわせ給たまへ。

日蓮にちれん生れし時より・いまに一日片時かたときも・こころやすき事はなし、此の

法華經ほけきょうの題目だいもくを弘ひろめんと思おもうばかりなり、相かまへて相かまへて自他じたの

生死しょうじはしらねども御臨終りんじゅうのきざみ生死しょうじの中間ちゅうげんに日蓮にちれんかならず・むかい

にまいり候さうべし、三世さんぜの諸仏しよぶつの成道じやうどうはねうしのをわり・とらのきざみの

成道じやうどうなり、仏法ぶつぽうの住処じゅうしょ・鬼門きもんの方に三國さんごくともにたつなり此等これらは相承そうじやうの

法門ほうもんなるべし委くわくは又申もうすべく候、恐恐きようきよう謹言きんげん。

かつて食をねがひ渴して水をしたうがごとく恋いて人を見たきが

ごとく病にくすりをたのむがごとく、みめかたちよき人・べにしる

いものをつくるがごとく法華經ほけきょうには信心しんじんをいたさせ給たまへさなくし

ては後悔こうかいあるべし、云云。

弘安二年己卯卯月二十日

にちれん
日蓮
かおう
花押
うえのとのこへんじ
上野殿御返事

◆三九九

上野殿御返事うえのとのごへんじ

弘安二年こうあん

五十八歳御作

1559p

鷺目がもく一貫・しほ一たわら蹲鴟いせのいも一俵・はじかみ少々使者をもつて送り
給おわび畢おわんぬ、あつきには水を財たからとす・さむきには火を財たからとす・けかち
には米を財たからとす、いくさには兵杖ひょうじょうを財たからとす・海には船を財たからとす・山
には馬をたからとす・武蔵下総むさししもふさに石を財たからとす、此の山中にはいえのいも
・海のしほを財たからとし候ぞ、竹の子木の子等候へどもしほなければそのあ
ぢわひつちのごとし、又金こがねと申もうすもの国王こくおうも財たからとし民たからも財たからとす、た
とへば米のごとし一切衆生いっさいしゆじやうのいのちなり。

ぜに又かくのごとし、漢土もうこしに銅山もうと申もうす山あり彼の山よりいでて候ぜ

になれば一文もみな三千里さんぜんの海をわたりて来るものなり、万人ばんにん皆たまとおもへり、此れこを法華經ほけきょうにまいらせさせ給うたま、釈まなんと申せし人のたな心には石變じて珠たまとなる金ぞく王は沙を金こがねとなせり、法華經ほけきょうは草木そうもくを仏となし給うたま、いわうや心あらん人をや、法華經ほけきょうは燒種にじょうの二乗を仏となし給うたま、いわうや生種の人をや、法華經ほけきょうは一闡提いつせんたいを仏となし給うたま、いわうや信ずるものをや、事事つくしがたく候、又又申すべしもう、恐恐きょうきょう謹言きんげん。

八月八日 日蓮花押にちれんかおう

上野殿御返事うえのどのごへんじ

◆四〇〇

上野殿御返事うえのどのごへんじ

弘安二年こうあん

五十八歳御

作

1560p

唐土もろこしに竜門もうと申すたきありたかき事十丈・水の下ることがつひやう
が・やをいとすよりもはやし、このたきにを・をくのふなあつまりて・の
ぼらむと申すもう、ふなと申すいをのぼりぬれば・りうとなり候、百に一・
千に一・方に一・十年二十年に一・ものぼる事なし、或あるははやきせにか
へり・或あるははしたか・とび・ふくろうにくらわれ、或あるは十丁のたきの左右さう
に漁人ども・つらなりゐて・或あるはあみ網をかけ・或あるはくみとり・或あるはいてと
るものもあり、いをの・りう
となる事かくのごとし。

日本国にほんこくの武士ぶしの中に源平二家と申して門守もんまほりの犬二足候、二家ともに

王を守りたてまつる事やまかつが八月十五夜のみねより・いづるを・あいするがごとし、でんじやうの・なんによの・あそぶをみては月と星との・ひかりをあわせたるを木の上にて・さるのあいするがごとし、かかる身にてはあれども・いかんがして我等^{われら}でんじやう

の・まじわりをなさんと・ねがいし程に平氏の中に貞盛^{さだもり}と申せし者將門を打ちてありしかども昇でんをゆるされず、其^その子正盛又かなわず其^その子忠盛が時・始めて昇でんをゆるさる、其^その後清盛・重盛等でんじやうにあそぶ

のみならず、月をうみ日をいだくみとなりనికి、仏になるみち・これにとるべからず、いを・をの竜門をのぼり・地下の者の・でんじやうへ・まいるがごとし。

身子^{しんし}と申せし人は仏にならむとて六十劫が間・菩薩^{ぼさつ}の行をみてしか

ども・こらへかねて二乗にじようの道に入りなき、大通結縁だいづうけちえんの者は三千塵点劫さんぜんじんてんごう
久遠下種くおんげしゆの人の五百塵点劫生死ごひやくじんてんごうしやうじにしづみし此等これらは法華經ほけきやうを行ぜし程に
第六天の魔王だいろくてんまおう・国主等こくしゆの身に入りて・とかうわづらわせしかば・たいして
すてしゆへに・そこばくの劫ろくごとうに六道には・めぐりしぞかし。

かれは人の上とこそ・みしかども今は我等がみにかかれり、願くは我が弟子等・大願ををこせ、去年去年のやくびやうに死にし人人の・かすにも入らず、又当時・蒙古のせめに・まぬかるべしともみえず、とにかくに死は一定なり、其の時のなげきは・たうじのごとし、をなじくは・かりにも法華經のゆへに命をすてよ、つゆを大海にあつらへ・ちりを大地にうづむと・をもへ、法華經の第三に云く「願くは此の功德を以て普く一切に及ぼし我等と衆生と皆共に仏道を成ぜん」云云、恐恐謹言。

十一月六日

日蓮 花押

上野賢人殿御返事

此れはあつわらの事の・ありがたさに申す

御返事なり。

◆四〇一

上野殿御返事うえのとのごへんじ

1561p

白米一だをくり給び了おわぬ。

一切いっさいの事は時による事に候か、春は花・秋は月と申もうす事も時なり、仏も世にいでさせ給たまいし事は法華經ほけきょうのためにて候いしかども・四十余年はとかせ給たまはず、其そのの故を經文きやうもんにとかれて候には説時未至せつじみしこ故等と云云、なつあつわたのこそで冬かたびらをたびて候はうれしき事なれども・ふゆのこそで・なつのかたびらには・すぎず・うへて候時のこがね・かつせる時のこれ・うはうれしき事なれども・ほんと水みづにはすぎず、仏に土をまいらせて候人・仏となり玉をまいらせて地獄じごくへゆくと申もうすことこれか。

日蓮にちれんは日本にほん国に生れてわわくせず・ぬすみせず・かたがたのとな

し、末代まつだいの法師ほつしには・とがうすき身なれども・文をこのむ王に武のすてられ・いろをこのむ人に正しょう直物じきのにくまるるがごとく・念仏ねんぶつと禪しんと真言ごんと律りつとを信ずる代に値あうて法華經ほけきょうを・ひろむれば王臣おうしん・方民ばんみんににくまれて・結句けっくは山中に候へば天いかんが計らわせ給たまうらむ、五尺のゆきふりて本よりも・かよわぬ山道ふさがり・といくる人もなし、衣もうすくて・かんふせぎがたし・食たへて命

すでに・をはりなんとす、かかるきざみに・いのちさまたげの御とぶらひ・かつはよろこびかつはなけかし、一度ひとたびにをもひ切つて・うへしなんと・あんじ切つて候いつるに・わづかの・ともしびに・あぶらを入そへられたるがごとし、あわれあわれたうとく・めでたき御心かな、釈迦しゃか仏ぶつ・法華經ほけきょう定めて御計ごけいらい給たまはんか、恐恐きょうきょう謹言きんげん。

弘安二年十二月廿七日
こうあん

日蓮にちれん

花押かおう

上野殿御返事うえのどのごへんじ

◆四〇二

上野殿御返事うえのどのごへんじ

1562p

十字六十枚・清酒一筒・薯蕷五十本・柑子二十・串柿一連・送り給
び候い畢おわんぬ、法華經ほけきょうの御宝前ぼうぜんにかざり進まいらせ候、春の始め三日種種しゅじゅの
物・法華經ほけきょうの御宝前ぼうぜんに捧ささげ候い畢おわんぬ。

花は開いて果となり月は出いでて必ずみち燈は油をさせば光を増し
草木そうもくは雨ふればさかう人は善根ぜんこんをなせば必ずさかう、其その上元三の御
志いっし元一にも超へ十字の餅もちい・満月まんげつの如ごとし、事事又又申もうすべく候。

弘安三年庚辰正月十一日

日蓮にぢれん

花押かおう

上野殿うえのどの

◆四〇三

上野殿御返事うえのとのごへんじ

63p

15

故上野殿うえのとの・御忌日きじつの僧・料米一たはら・たしかに給ひ候い畢おわんぬ、
御仏みほとけに供きようしまいらせて自我偈じがけ一卷よみまいらせ候べし。

孝養こうようと申もうすは・まづ不孝ふこうを知りて孝をしるべし、不孝ふこうと申もうすは西夢と
云う者父を打ちしかば天雷身てんらいみをさく班婦はんぷと申せし者・母をのりしかば
毒蛇どくじゃ来りてのみき、阿闍世王あじやせ・父をころせしかば白癩病びやくらいの人となり
き、波瑠璃王はるりは親をころせしかば河上に火出いでて現身げんしんに無間むげんにをちに
き、他人たにんをころしたるには・いまだかくの如く例たとなし。

不孝ふこうをもつて思ふに孝養こうようの功德くどくのおほきなる事も・しられたり、外典げてん

三千余卷は他事なし。ただ父母の孝養ばかりなり、しかれども現世をやしなひて後生をたすけず、父母の恩のおもき事は大海のごとし現世をやしなひ後生をたすけざれば、☆のごとし、内典五千余卷又他事なし。ただ孝養の功德をとけるなり、しかれども如来四十

余年の説教は孝養にたれども、その説いまだあらはれず孝が中の不孝なるべし、目連尊者の母の餓鬼道の苦をすくひしは、わづかに人天の苦をすくひて、いまだ成仏のみちにはいれず、釈迦如来は御年三十の時、父淨飯王に法を説いて第四果をえせしめ給へり、母の摩耶夫人をば御年三十八の時、阿羅漢果をえせしめ給へり、此等は孝養

ににたれども還つて仏に不孝のとがあり、わづかに六道をば、はなれしめたれども父母をば永不成仏の道に入れ給へり、譬へば太子を凡下の者となし王女を匹夫に、あはせたるが如し、されば仏説いて云く我則ち

慳^{けん}貪^{どん}に墮^だせん此の事は為^{もつ}て不可^{ふか}なり」云云、仏は父母^{ふぼ}に甘露^{かんろ}をおしみて
麦飯を与へたる人・清酒をおしみて濁酒をのま

せたる不孝第一の人なり、波瑠璃王のごとく現身に無間・大城におち
阿闍世王の如く即身に白癩病をも・つぎぬべかりしが、四十二年と申せ
しに法華經を説き給いて是の人滅度の想を生じて涅槃に入ると雖も
而も彼の土に於て仏の智慧を求めて是の經を聞くことを得ん」と、父母
の御孝養のため法華經を説き給いしかば、宝淨世界の
多宝仏も実の孝養の仏なりと・ほめ給い・十方の諸仏もあつまりて一切
諸仏の中には孝養第一の仏なりと定め奉りき。

これをもつて案ずるに日本国の人々は皆不孝の仁ぞかし、涅槃經の文に
不孝の者は大地微塵よりも多しと説き給へり、されば天の日月八万四
千の星・各いかりをなし眼をいからかして日本国をにらめ給ふ、今の
陰陽師の天変・頻りなりと奏し申す是なり、地天・日に起りて大海の
上の小船をうかべたるが如し、今の日本国の小児は魄をうしなひ・女人

は血をはく是なり。

貴^き辺^{へん}は日^に本^{ほん}国^{こく}・第^{だい}一^{いち}の孝^{こう}養^{よう}の人なり・梵^{ぼん}天^{てん}・帝^{たい}釈^{しやく}をり下^さりて左^さ右^うの羽^うとなり四^し方^{ほう}の地^ち神^{しん}は足^{あし}をいただいて父^ふ母^ぼとあをぎ給^{たま}うらん、事^{こと}多^{おほ}しといへどもとどめ候^{おほ}い畢^{おひ}んぬ、恐^{きよう}恐^{きよう}謹^{きん}言^{げん}。

弘^{こう}安^{あん}三年三月八日

日^に蓮^{れん}花^か 押

進^{しん}上^{じょう} 上^う野^え殿^{どの}御^ご返^{へん}事^じ

◆四〇四

上^う野^え殿^{どの}御^ご返^{へん}事^じ

弘^{こう}安^{あん}三年七月二日 五

十九歳御作

1565p

去ぬる六月十五日のけさん悦び入つて候、さては・かうぬし等が事い
ままでかかへをかせ給たまいて候事ありがたくをばへ候、ただし・ないないは
法華經ほけきょうをあだませ給たまうにては候へども・うへには・たの事によせて事かづ
け・にく

まるるかのゆへに・あつわらのものに事をよせて・かしこ・ここをもせかれ
候こそ候いめれ、さればとて上に事をよせて・せかれ候はんそうらに御もちる
候はずは物をぼへぬ人に・ならせ給たまうべしをかせ給たまいて・あしかりぬべき
やうにて候わば・しばらく・かうぬし等をば・これへとをほせ候べしめこな
んどはそれに候とも・よも御たづねは候
はじ、事のしづまるまで・それに・をかせ給たまいて候わば・よろしく候いなん
と・をば候。

よのなかに上につけ下によ・せてなげきこそををく候へよにある人々ひとびとを
ば・よになき人々ひとびとは・きじの・たかをみ・がきの毘沙門びしゃもんをたのしむがごと
く候へども・たかは・わしにつかまれ、びしやもんは・すらに・せめらる、
そのやうに当時とうじ・日本国にほんこくのたのしき人々ひとびとは蒙古国もうこくの事をききては・ひつ
じの虎の声を聞くがごとし、また筑紫つくしへおもむきて・

いとをしきめを・はなれ子をみぬは皮をはぎ肉をやぶるが・ごとくにこ
そ候らめ、いわうや・かの国より・おしよせなば蛇じやの口のかえる・はうち
やうしがまないたに・をける・こゑふなのごとくこそおもはれ候らめ、
今生こんじやうはさて

をきぬ命きえなば一百三十六の地獄じごくに墮おちて無量劫むりやうこくふべし、我等われらは
法華經ほけきやうをたのみまいらせて候へば・あさきふちに魚のすむが天くもりて
雨のふらんとするを魚のよろこぶがごとし。

しばらくの苦こそ候とも・ついには・たのしかるべし、国王こくおう一人の太子たいし
のごとし・いかでか位につかざらんと・おぼしめし候へ 恐恐きよくきよく謹言きんげん。

弘安三年七月二日こうあん

日蓮にちれん 花押かおう

上野殿御返事うえのどのごへんじ

人にしらせずして、ひそかにをほせ候べし。

◆四〇五

上野殿御返事うえのどのごへんじ

1566p

女子は門をひらく男子は家をつぐ日本国にほんこくを知つても子なくは誰にか。
つがすべき、財たからを大千にみてても子なくば誰にかゆづるべき、されば
外典げてんさんぜん三千余巻には子ある人を長者ちやうじやといふ、内典ないてん五千余巻には子なき
人を貧人ひんじんといふ、女子一人・男子一人・たとへば天には日月にちがつのごとく地
には東西にかたどれり、鳥の二つのはね車の二つのわなり、さればこの男
子をば日若御前ごぜんと申もうさせ給たまへくはしくは又又申もうすべし。

弘安三年八月二十六日こうあん

日蓮花押にちれんかおう

上野殿御返事うえのどのごへんじ

◆四〇六

南条殿御返事こへんじ

1566p

はくまいひとふくろいも一だ給び了おわんぬ、抑そもそも故なんでうの七らうご
らうどの事、いままでは・ゆめかゆめか・まぼろしか・まぼろしかとう
たがいて・そらごととのみをもひて候へば・此の御ふみにも・あそばされ
て候、さては、まことかまことかとはじめて・うたがいいできたりて候。

◆四〇七

上野殿御書

1567p

大海たいかいの一☆は五味ごみのあぢわい江河こうかの一☆は一つの薬いぐすなり、大海たいかいの一☆は万種ばんしゆの瓦わのごとし、南無阿弥陀なむあみだぶつ仏は一河いちがの一☆南無妙法蓮華なむみょうほうれんげきやう經は大海たいかいの一☆阿弥陀あみだ經は小河こがの一てい・法華ほけきやう經の一乗いちじやうは大海たいかいの一てい、故五郎殿ごごろうだんの十六年じゅうろくねんが間の罪つみは江河こうかの一てい、須臾しゆゆの間の南無妙法蓮華なむみょうほうれんげきやう經は大海たいかいの一ていのごとし、夫それ以もつれば華はなはつぼみさいて菓このみなる、をやは死しにて子こになわる、これ次第しだいなり。

◆四〇八

上野殿御書

1567p

南条七郎五郎殿なんじょうしちろうごろうだんの御死去ごしきよの御事ごんこと、人は生なれて死しするならいとは智者ちしやも愚者ぐしやも上下一同じやうごうに知りて候こうへは始めてなげくべしをどろくべしとわを

ぼへぬよし我も存じ人にもをし候へども時にあたりて・ゆめか・まぼろしか・いまだわきまへがたく候、まして母のいかんがなげかれ候らむ、父母きようだいにも兄弟きようだいにもをくれはてて・いとをしきをとこ

に・すぎわかれたりしかども・子ども・あまたをはしませば心なぐさみてこそ・をはしつらむ、いとをしき・てこご・しかもをのこごみめかたちも人にすぐれ心も・かいがいしくみへしかば・よその人ひと人も・すずしくこそみ候い

しに・あやなく・つぼめる花の風にしほみ・満つる月の・にわかとがに失たるがごとくこそをぼすらめ、まこととも・をば候はねば・かきつくるそらも・をば候はず、又又申すべし、きようききようきんげん恐恐謹言。

弘安三年九月六日

日蓮 花押

うえのとのごへんじ
上野殿御返事

追申、此の六月十五日に見奉り候いしに・あはれ肝ある者かな男
や男やと見候いしに・文見候はざらん事こそかなしくは候へさは候へど
も釈迦しゃかぶつ・法華ほけきょう經に身を入れて候いしかば臨終りんじゅう・自出りようぜんじようどたく候いけり、心
は父君と 一所に靈山淨土に参りて手を取り頭こゝろを合せてこそ悦よろこば
れ候らめ、あはれなり・あはれなり。

◆四〇九
うえのとのごへんじ
上野殿母御前御返事

1568p

南条故七郎五郎殿の四十九日御菩提ぼだいのために送り給う物たまの日記につぎの
事がもく、鷲目うしめ両ゆひ・白米一駄・芋一駄・すりだうふ・こんにやく・柿一籠・
ゆ五十等云云御菩提ぼだいの御ために法華ほけきょう經一部・自我じがげ偈数度・題目だいもく百千返

唱たてまつへ奉り候おわんい畢ぬ。

そもそもほけきよう

抑もつ法華經と申す御經は一代聖教には似にるべくもなき御經にて

而しかも唯ゆい仏ぶつと説かれて仏と仏とのみこそ・しろしめされて等とう覺かく

已い下かない乃至凡夫は叶ふはぬ事に候へ。

されば竜樹菩薩の大論には仏已いか下はただ信じて仏になるべしと見え

て候ほけき、法華經の第四法師品に云く、棄王今汝に告ぐ我が所説しよせつの諸經しよきようあ

り而しかも此の經の中に於て法華最も第一だいいちなり」等云云、第五の卷に云く

又殊師利此の法華經は諸仏如来の秘密ひみつの藏なり諸經の中に於て最も

其その上に在り」等云云、第七の卷に云く、此の法華經も亦

復また是くかくの如し諸經の中に於て最も其の上たり」又云く、最も照明しやうめいたり

最も其その尊たり」等云云、此等の經文私の義にあらず仏の誠言せいげんにて候へ

ば定めてよもあやまりは候はじ、民が家に生れたる者我は侍ひとに齊しなん

ど申せ

ば必ずとが来るまして我れ國王こくおうに斉ひとしまして勝すぐれたりなんと申せば我が身のとがとなるのみならず父母ふぼと申し妻子さいしと云ひ必ず損こずる事大火だいかの宅を焼き大木の倒るる時・小木等の損こずるが如ごとし。

仏教ぶつぎょうも又かくの如ごとく華嚴・阿含あこん・方等ほうとう・般若はんにか・大日經・阿弥陀經あみだ等に依よる人人ひとびとの我が信しんじたるままに勝劣しょうれつも弁わきまえへずして我が阿弥陀經あみだ等は法華經ほけきょうと斉等さいとうなり將はた又勝すぐれたりなんど申せば其その一類いちるいの人人ひとびとは我が經きやうをほめられうれしと思へども還かえつてとがとなりて師でしも弟子でしも檀那だんなも惡道あくどうに墮おつること箭やを射こるが如ごとし、但ただし法華經ほけきょうの一切經いっさいきやう

に勝れりと申して候はくるしからず還つて大功徳となり候、経文の如くなるが故なり。

此の法華経の始に無量義経と申す経おはします、譬えば大王の行幸の御時・將軍前陣して狼籍をしづむるが如し、其の無量義経に云く四十余年には未だ真実を顕さず」等云云、此れは將軍が大王に敵する者を大弓を以て

射はらひ又太刀を以て切りすつるが如し、華嚴経を読む華嚴宗阿含経の律僧等觀経の念仏者等・大日経の真言師等の者共が法華経にしたがはぬをせめなびかす利劍の勅宣なり、譬えば貞任を義家が責め清盛を頼朝の打ち失せしが如し、無量義経の四十余年の文は不動明王の劍索愛染明王の弓箭なり。

故南条五郎殿の死出の山三途の河を越し給わん時・煩惱の山賊・

罪業ざいごうの海賊かいぞくを静めて事故なく靈山淨土りやうぜんじようどへ參らせ給たまうべき御供つわものの兵者は無量義經むりやうぎきやうの四十余年よんじゅうよねん未顯みけん眞實しんじつの文ぞかし。

法華經ほけきやう第一だいいちの卷・方便品ほうべんに云く世尊せそんの法は久くして後要かならず当まさに

眞實しんじつを説ときたもうべし」又云く正直しやうじきに方便ほうべんを捨てて但無上道むじやうどうを説く」

云云、第五の卷に云く唯譬ただけい中の明珠みやうじゆ」又云く獨り王ひとの頂上ちやうじやうに此の

一珠有り」又云く彼の強力いぢの王の久しく護まもれる明珠みやうじゆを今乃すなわち之これを与

うるが如ごとし」等云云、文の心は日本国にほんこくに一切經いっさいきやうわたれり七千三

百九十九卷なり彼れ彼れの經經きやうぎやうは皆法華經みなほけきやうの眷属けんぞくなり、例せば

日本国にほんこくの男女なんよの数・四十九億九万四千八百二十八人候へども皆一人みなの

国王こくおうの家人ごとうたるが如ごとし、一切經いっさいきやうの心は愚癡ぐちの女人にょにんなんどの唯一時ただいちじに心

うべきやうは・たとへ

ば大塔だいとうをくみ候には先ず材木より外に足代あししろと申もうして多くの小木を集め

一丈二丈計りゆひあげ候なり、かくゆひあげて材木を以て大塔をくみ
あげ候いづれば返つて足代を切り捨て大塔は候なり、足代と申すは
一切經なり大塔と申すは法華經なり、仏・一切經を説き給いし事は
法華經を説かせ給はんための足代なり、正直捨方便と申して法華經
を信ずる人は阿彌陀經等の南無阿彌陀仏大日經等の真言宗阿含經
等の律宗の二百五十戒等を切りすて抛ちてのち法華經をば持ち候な
り、大塔をくまんがためには足代大切なれども大塔をくみあげぬれば
足代を切り落

すなり、正直捨方便しやうじきしやほうべんと申す文の心こゝろ是なり、足代あししろより塔しゅつたいは出来して候へども塔たを捨てて足代あししろを・をがむ人なし、今の世の道心者等どうしんしや一向いつこうに南無阿弥陀仏なむあみだぶつと唱となえて一生をすごし南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと一返も唱ひとびとへぬ人なりは大塔だいとうをすてて足代あししろを・をがむ人なり、世間せけんにかしこくはかなき人と申すこゝろは是なり。

故七郎五郎殿は当世とうせの日本国にほんこくの人人ひとびとには・にさせ給たまはず、をさなき心なれども賢さとしき父の跡あとをおひ御年ごねんいまだ・はたちにも及およばぬ人が、南無妙法蓮華經みょうほうれんげきやうと唱となえさせ給たまいて仏ぶつにならせ給たまいぬ無む一不成いつふじやうぶつ仏ぶつは是なり、乞こい願ねがわくは悲母ひも我が子を恋こしく思食おぼしめし給たまいなば南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱となえさせ給たまいて・故南条殿・故五郎殿と一所いしょに生れんと願ねがはせ給たまへ一つ種くさねは一つ種くさね・別の種べつぐさは別の種べつぐさ・同じ妙法蓮華經みょうほうれんげきやうの国くに生れさせ給たまうべし、三人面さんにんめんをな

らべさせ給はん時御悦びいかがうれしくおぼしめすべきや。

そもそも

抑此の法華經を開いて拝見仕り候へば如来則ち為に衣を以て之を

おお

覆いたもう又他方現在の諸仏の護念する所と為らん」等云云、經文の

心は東西南北・八方・並びに三千大千世界の外・四百万億那由佗の

こくど

国土に十方の諸仏ぞくぞくと充滿せさせ給う、天には星の如く地に

は稲麻のやうに並居させ給ひ、法華經の行者を守護せさせ給ふ

事、譬えば大王の太子を諸の臣下の守護するが如し、但四天王・一類の

まほり給はん事の・かたじけなく候に、一切の四天王・一切の星宿・

一切の日月・帝釈・梵天等の守護せさせ給うに足るべき事なり、其の上

一切の二乗・一切

の菩薩・兜率・内院の弥勒菩薩・迦羅陀山的地蔵・補陀落山の觀世音・

清凉山の文殊師利菩薩等・各各眷属を具足して法華經の行者を守護

せさせ給^{たま}うに足るべき事に候に又かたじけなくも釈迦^{しやか}・多宝^{たぼう}・十方^{じゆつぽう}の諸仏^{しよぶつ}のてづからみづから来り給^{たま}いて昼夜十二時に守らせ給^{たま}はん事のかたじけなさ申^{もう}す計^{ばか}りなし。

かかるめでたき御経^{ごしんよう}を故五郎殿^{ごしんよう}は御信用^{ごしんよう}ありて仏^{ぶつ}にならせ給^{たま}いて今日は四十九日^{いっさい}にならせ給^{たま}へば一切^{いっさい}の諸仏^{しよぶつ}靈山淨土^{りやうぜんじやうど}に集まらせ給^{たま}いて・或^{ある}は手にすへ・或^{ある}は頂^{いただき}をなで・或^{ある}はいだき・或^{ある}は悦^{よろこ}び月の始めて出^いでたるが如^{ごと}く・

花の始めてさけるが如くいかに愛しまいらせ給うらん、抑そもそもいかなれば
三世・十方さんぜ じゅうぼうの諸仏しよぶつはあながちに此この法華經ほけきやうをば守らせ給ふと勘かんへて候へ
ば道理どうりにて候けるぞ法華經ほけきやうと申もうすは三世十方さんぜ じゅうぼうの諸仏しよぶつの父母ふぼなり・め
となり・主しゅにてましましけるぞや、かえると申もうす虫は母の音こえを食とす母
の声を聞かざれば生長する事なし、からぐらと申もうす

虫は風を食とす風吹かざれば生長せず、魚は水をたのみ鳥は木をすみ
かとす仏またも亦かくの如く法華經ほけきやうを命とし・食とし・すみかとし給うな
り、魚は水にすむ仏または此の經にすみ給う鳥は木にすむ仏または此の經にす
み給う月たまは水にやどる仏または此の經にやどり給う、此の經なき国には仏
まします事なしと御心得ごしんえあるべく候。

古昔輪陀王りんだおうと申せし王をはしき南閼浮提えんぶだいの主なり、此の王はなにを
か供御とし給いしと尋ぬれば白鳥のいなくなを聞いて食とし給う、此の

王は白馬のいななけば年も若くなり色も盛んに魂もいさぎよく力もつよく又政事も明らかなり、故に其の国には白馬を多くあつめ飼いしなり、譬えば魏王と申せし王の鶴を多くあつめ・徳宗皇帝のほたるを愛せしが如し、白馬のいなく事は又白鳥の鳴きし故なり、されば又白鳥を多く集めしなり、或時如何しけん白鳥皆うせて白馬いなくなざりしかば、大王供御たえて盛んなる花の露にしほれしが如く満月の雲におほはれたるが如し、此の王既にかくれさせ給はんとせしかば、后・太子・大臣・一国・皆母に別れたる子の如く皆色をうしなひて涙を袖におびたり如何せん如何せん、其の国に外道多し当時の禪宗・念仏者・真言師・律僧等の如し、又仏の弟子もあり当時の法華宗の人人の如し、中悪き事水火なり胡と越とに似たり、だいおうちよくせんくだいおうちよくせんくだ一切の外道・此の馬をいななかせば仏教を

失^ういて一向^{いっこう}に外道^{げどう}を信^しぜん事^{こと}・諸天^{しよてん}の帝釈^{たいしやく}を敬^{うや}うが如^{ごと}く

ならん、仏弟子^{ぶつでし}此^この馬^{うま}をいななかせば一切^{いっさい}の外道^{げどう}の類^{るい}を切り其^その所^{ところ}を
うばひ取りて仏弟子^{ぶつでし}につくべしと云云、外道^{げどう}も色^{いろ}をうしなひ仏弟子^{ぶつでし}も
歎^{なげ}きあへり、而^{しか}れども・さてはつべき事^{こと}ならねば外道^{げどう}は先^{まづ}に七日^{ななひ}を行^なひ
き、白鳥^{めみ}も来^きらず白馬^{はくば}もいななかず、後^{のち}七日^{ななひ}を仏弟子^{ぶつでし}に渡^{わた}して祈^{いの}らせ
しに馬鳴^{めみ}と申^{もう}す小僧^{こそう}一人^{ひとり}あり、諸仏^{しよぶつ}の御本尊^{ごほんぞん}とし給^{たま}う

法華經を以て七日祈りしかば白鳥壇上に飛び来る、此の鳥一声鳴きしかば・一馬・一声いなく、大王は馬の声を聞いて病の牀よりをき給う、后より始めて諸人・馬鳴に向いて礼拝をなす、白鳥・一・二・三乃至・十・百・千・出来して国中に充滿せり、白馬しきりに・いなき一馬・二馬・乃至百・千の白馬いなきしかば大王此の音を聞こし食し面貌は三十計り心は日の如く明らかに 政 正直なりしかば、天より甘露ふり下り、勅風・万民をなびかして無量・百歳代を治め給いき。

仏も又かくの如く多宝仏と申す仏は此の經にあひ給はざれば御入滅・此の經をよむ代には出現し給う、釈迦仏・十方の諸仏も亦復かくの如し、かかる不思議の徳まします經なれば・此の經を持つ人をばいかでか天照太神・八幡大菩薩富士千眼大菩薩すてさせ給うべきと・たの

もしき事なり、又此の経にあだをなす国をば・いかに正直しやうじき

に祈り候へども必ず其その国に七難ひちなん起りて他国たこくに破られて亡国ぼうこくとなり候

事たいかい大海の中の大船の大風たいふうに値あうが如く・大旱魃かんばつの草木そうもくを枯かららすが如ごとし

と・をばしめせ、当時とうじ・日本国にほんこくのいかなる・いのり候とも日蓮にちれんが一門いちもん

法華経ほけきようの行者ぎやうじやを

あなづらせ給たまへばさまざまの御いのり叶はずして大蒙古国だいもうここくに・せめられ

て・すでに・ほろびんとするが如ごとし、今も御覽ぜよただかくては候まじき

ぞ是これ法華経ほけきようをあだませ給たまう故と御信用ごしんようあるべし。

そもそも抑故五郎殿おしごろうだんかくれ給たまいて既すでに四十九日なり、無常むじやうはつねの習ならいなれ

ども此の事うち聞く人すら猶忍なおしのびがたし、況や母となり妻となる人を

や心の中をしはかられて候、人の子には幼きもあり長きもありみにく

きもありかたわなるも・ある物をすら思いに・なるべかりけるにや、をの

こごたる上よろづに・たらひなさけあり、故上野殿うえのどのには壮なりし時をく
れて歎なげき浅からざりしに此の子を懷妊かいにんせずば火にも入り水にも入らんと
思ひしに此の子すでに平安なりしかば誰にあつらへて身をも・なぐべき
とて、此こゝに心をなぐさめて此の十四五年はすぎぬ、いかにいかにと
すべき、二人のをのこごにこそ・になわれめと・たのもしく思ひ候いつるに

今年九月五日・月を雲

にかくされ花を風にふかせて・ゆめか・ゆめならざるか・あわれひさしき
ゆめかなと・なげきをり候へば・うつつににて・すでに四十九日はせすぎ
ぬ、まことならばいかんがせん、さける花はちらずしてつぼめる花のかれ
たる、をいたる母はとどまりてわかきこは・さりぬ、なさけなかりける
むじよう無常かなむじよう無常かな。

かかるなさけなき国をば・いとい・すてさせ給いて故五郎殿の御信用
ありしほけきよう法華經につかせ給いてたまい常住じようじゅう不壊ふえのりやう山浄土じようどへとくまいらせ
給うたまたうちはりやうぜんにまします母はしやば娑婆にとどまれり、二人の中間ちゆうげん
に・をはします故五郎殿の心こそ・をもひやられて・あわれに・をばへ候
へ事多しと申せどもとどめ候いおわ畢んぬ、きようきようきんげん恐恐謹言。十月二十四日

日蓮にちれん
花押かおう

上野殿母尼御前御返事
うえのどの あまごぜんごへんじ

◆四一〇

南条殿御返事

1573p

☆しらよね牙二石並ならびに ☆いものかしら鶏一だ・故五郎殿百ヶ日等云云、法華經ほけきようの第七
 に云く、川流江河諸水の中に海これ第一だいいちなり此ほけきようの法華經ほけきようも亦復また
かくのごと是くの如し」等云云、此ほけきようの經ほけきようは法華經ほけきようをば大海たいかいに譬たとへられて候、大海たいかいと
もう申すは・ふかき事八万四千由旬ゆじゆん広きこと又かくのごとし、此たいかいの大海たいかいの中
 にはなになにのすみ有りと申し候あしゅらへは阿修羅王・凡夫ぼんぶにてをは
もうこせし時不妄語戒たもを持ちて・まなこをぬかれ・かわをはがれ・ししむらをや
 ぶられ血をすはれ骨かれ子を殺され・めをうばわれなんどせしかども
むりようごう無量劫むいが間・一度もそら事なくして其その功よに依りて仏となり給たまいて候が
むい無一不成仏と申して南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようを只一度申せる人・一人として
 仏にならざるはなしと・とかせ給たまいて候、釈迦一仏しやかいちふつの仰おほせなりとも疑うたがい

うべきにあらざるに十方じゅっぽうの仏おんまゑの御前じゅっぽうにて・なにのゆへにか・そら事をば
せさせ給たまうべき、其の上そ釈迦しゃかぶつ仏と十方じゅっぽうの仏おんまゑと同時どうじに舌を大梵天ぼんてんに。

◆四一一

上野殿御返事

1574p

鷺目一貫文送り給い了んぬ、御心ざしの候へば申し候ぞ・よくふかき
御房とおぼしめす事なかれ。

仏にやすやすとなる事の候ぞ・をしへまいらせ候はん、人のものを・をし
ふると申すは車のおもけれども油をぬりてまわり・ふねを水にうかべ
てゆきやすきやうにをしへ候なり、仏になりやすき事は別のやう候は
ず、旱魃にかわけるものに水をあたへ寒氷にここへたるものに火をあた
ふるがごとし、又二つなき物を人にあたへ命のたゆるに人のせにあふが
ごとし。

金色王と申せし王は其の国に十二年の大旱魃あつて万民飢え死ぬる
事かずをしらず、河には死人をはしとし陸にはがいこつをつかとせり、

其の時・金色大王・大菩提心を・をこしておほきに施をほどこし給いき、

せすべき物みなつきて蔵の内にただ米五升ばかりのこれり、大王の一日

の御くごなりと臣下申せしかば大王五升の米をとり出だして一切の飢

えたるものに・或は一りう・二りう・或は三りう・四りうなんど・あまね

くあたへさせ給いてのち

天に向わせ給いて朕は一切衆生のけかちの苦に・かはりて・うえじに候

ぞと・こえをあげて・よばはらせ給いしかば天きこしめして甘呂の雨を

須臾に下し給いき、この雨を身にふれ・かをにかけりし人・皆食にあき

みちて一国の万民・せちななほに命よみかへりて候いけり。

月氏国にす達長者と申せし者は七度貧になり七度長者となりて

候いしが最後の貧の時は万民皆にげうせ死にをはりて・ただ・めおとこ

二人にて候いし時・五升の米あり五日のかつてとあて候いし時・迦葉・

舍利弗・阿難羅☆羅・釈迦仏の五人・次第に入らせ給いて五升の米をこ
ひとらせ給いき、其の日より五天竺第一の長者となりて祇園精舎を
ばつくりて候ぞ、これをもつてよろづを心合せ給へ

貴^き辺^{へん}は・すでに法華^{ほけきよう}經^{ぎよう}の行者^{ぎようじや}に似^たさせ給^{たま}へる事さるの人に似^たもちるの
月に似^たたるがごとし、あつはらのものどもの・かくをしませ給^{たま}へる事は承
平^{さだその}の將門・天喜^{たの}の貞当^{さだその}のやうに此^この國^{くに}のものどもは・おもひて候ぞ、これ
ひとへに法華^{ほけきよう}經^{ぎよう}に命^{いのち}をすつるがゆへなり、まつたく主君^{しゅくん}にそむく人とは
天御覽^そあらじ、其^その上^{うへ}わづかの小郷^{せうきやう}に・をほくの公事^{くじ}せめあてられて・わ
が身^みは・のるべき馬^{うま}なし・妻子^{さいし}はひきかくべき衣^いなし。

かかる身^みなれども法華^{ほけきよう}經^{ぎよう}の行者^{ぎようじや}の山中^{さんちゆう}の雪^{ゆき}に・せめられ食^たともしか
るらんと・おもひやらせ給^{たま}いて・ぜに一貫^{いっくわん}をくらせ給^{たま}へるは・貧女^{ひんによ}がめお
とこ二人^{ふたり}して一つの衣^いをきたりしを乞食^{こじき}にあたへりだが合子^{がし}の中^{うち}なり
し・ひえを辟支^{ひやくし}仏^{ぶつ}に・あたへたりしがごとし、たうとし・たうとし、くはし
くは又^{また}又^{また}申^{もう}すべく候^{きよう}、恐恐^{きようきよう}謹言^{きんげん}。

弘安^{こうあん}三年十二月二十七日

にちれん
日蓮

かおう
花押

うえのとのごへんじ
上野殿御返事

◆四一二

あまごぜんごへんじ
上野尼御前御返事

1573p

しょうにん

聖人ひとつつ・ひさげ十か・十字百・あめひとをけ二升か柑子ひとこ

串柿十くし・ならびにおくり候い了んぬ春のはじめ御喜び花のごとくひ

らけ月のごとくみたせ給うべきよしうけ給わり了んぬ。

そもそも

抑故五らうどのの御事こそ・をもいいでられて候へちりし花もさか

んとす・かれしくさもねぐみぬ、故五郎殿もいかでか・かへらせ給はざる

むじよう

べき、あわれ無常の花と・くさとのやうならば人丸にはあらずとも花の

もとも・はなれじ、いはうるこまにあらずとも・草のもとをばよもさら

じ。

経文きやうもんには子をばかたきととかれて候、それもゆわれ候か梟ふくろうと申もうす
とりは母をくらう破鏡はけいと申もうすけだものは父をがいます、あんろく山と申
せし人は師史明と申もうす子にころされぬ、義朝よしともと申せしつはものは為義ためよしと
申もうすちちを

ころす、子はかたきと申すきようもん経文ゆわれて候、又子は財たからと申すきようもん経文あり、妙みょう壯そう嚴ごん王のうは一期いちきの後ご無む間げん・大だい城じょうと申すきようもん地獄じごくへ墮おちさせ給たまうべかりしが淨じやう蔵ざうと申せし太子たいしにすくわれて大だい地獄じごくの苦くるしみをまぬがれさせ給たまうのみならず娑さ羅ら樹じゆ王おうと申すきようもん仏ぶつとならせ給たまう、生なま提だい女にょと申せし女人にょにんは慳けん貪どんのけんどんとがによつて餓が鬼き道だうに墮おちて候いしが目も連れんと申すきようもん子こにたすけられて餓が鬼き道だうを出いで候いぬ、されば子こを財たからと申すきようもん経文たがう事なし。

故五郎殿はとし十六歳・心ね・みめかたち人にすぐれて候いし上男じやうなんのうそなわりて万人ばんにんにほめられ候いしのみならず、をやの心こころに随したがうこと水のうつわものに・したがい・かげの身に・したかうがごとし、いへにては・はしらとたのみ道にては・つへとをもいき、はこのたからも・この子のため・つかう所しよじゆう従しよじゆうもこれがため、我しなば・になわれて・のぼへゆきなんのちの・あとをもちをく事なしとふかくをばし

めしたりしに・いやなくさきにたちぬれば・いかにや・いかにや・ゆめ
か・まぼろしか・さめなん・さめなんと・をもへどもさめずして・としも又
かへりぬ、いつとまつべしとも・をぼへず、ゆきあうべき・ところだにも申し
をきたらば・はねなくとも天へものぼりなん、ふねなくとも・もろこしへ
も・わたりなん、大地だいちのそこに・ありときかば・いかでか地をもほらざる
べきと・をぼしめすらむ。

やすやすとあわせ給たまうべき事候、釈迦しゃかぶつ仏を御使おんつかいとして・りやうぜん
浄土じょうどへまいりあわせ給たまへ、若有聞にやくうもんぼう法者無む一不成いつふじやうぶつ仏と申もうして大地だいちはささ
ば・はづるとも日月にちがつは地に墮おち給たまうとも・しをはみちひぬ世はありとも
花はなつにならずとも南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと申もうす女人にょにんの・をもう子にあわ
ずという事はなしととかれて候ぞ、いそぎいそぎつとめさせ給たまへつとめさ
せ給たまへ 恐恐きようきよう謹言きんげん。

正月十三日

日蓮にちれん花押かおう

上野尼御前御返事あまごぜんごへんじ

◆四一三 上野殿御返事うえのどのごへんじ

1577p

蹲いゑのいも鴟一俵給び了おわぬ。

又かうぬしのもとに候・御乳塩一疋なら並びに口付一人候、さては故五郎殿の事は・そのなげきふりずとおもへども御けさんははるかなるやうにこそおぼえ候へなをもなをも法華經ほけきようをあだむ事はたえつとも見え候はねば・これよりのちも・いかなる事そうらか候はんずらめども・いままでこらへさせ給たまへる事まことしからず候、仏の説いての給たまはく火に入りて・やけぬ者はありとも大水たいすいに入りてぬれぬものはありとも大山そらは空へ・とぶとも大海たいかいは天へあがるとも末代まつだい惡世あくせに入れば須臾しゆゆの間も法華經ほけきようは信じがたき事にて候ぞ。

徽宗皇帝は漢土の主じ蒙古国に・からめとられさせ給いぬ、隠岐の
法王は日本国のあるじ右京の権大夫殿に・せめられさせ給いて島にては
てさせ給いぬ、法華經のゆへにてだにも・あるならば即身に仏にもならせ
給いなん、わづかの事には身をやぶり命をすつれども、法華經の御ゆへ
に・あやしのとがに・あたらんとおもふ人は候はぬぞ、身にて心みさせ
給い候いぬらん、たうとし・たうとし、恐恐謹言。

弘安四年三月十八日

日蓮

花押

上野殿御返事

◆四一四

南条殿御返事

1578p

御使おんつかいの申し候もうを承り候たまわ、是この所勞難儀なんぎのよし聞え候、いそぎ療治りょうじを
いたされ候いて御参詣さんけい有るべく候。

塩一駄大豆一俵とつさか一袋酒一筒給ひ候、上野の国より御帰宅候
後は未いまだ見参に入らず候、牀敷存じ候いし処ところに品品の物ども取り副そえ
候いて御音信おとすれに預り候事申し尽し難がたき御志いっしんにて候。

今申せば事新しきに相似にて候へども徳勝童子は仏に土の餅を奉りて
阿育大王あそかだいおうと生れて南閭浮提えんぶだいを大体知行だいたいちぎようすと承り候、土の餅は物ならね
ども仏のいみじく渡わたらせ給たまへば・かくいみじき報いを得たり、然しかるに
釈迦しやか仏は我を無量むりようの珍ちん宝ぼうを以て億劫の間・供養くようせんよりは末代まつだいの

法華經の行者を一日なりとも供養せん功德は百千万億倍・過ぐべしとこそ説かせ給いて候に、法華經の行者を心に入れて数年供養し給う事有り難き御志かな、金言の如くんば定めて後生は靈山淨土に生れ給うべしいみじき果報なるかな。

其の上此の処は人倫を離れたる山中なり、東西南北を去りて里もなし、かかる・いと心細き幽窟なれども教主釈尊の一大事の秘法を靈鷲山にして相伝し、日蓮が肉団の胸中に秘して隠し持てり、されば日蓮が胸の間は諸仏入定の処なり、舌の上は転法輪の所・喉は誕生の処・口中は正覺の砌なるべし、かかる不思議なる法華經の行者の住処なれば・いかでか靈山淨土に劣るべき、法妙なるが故に人貴し・人貴きが故に所尊しと申すは是なり、神力品に云く若しは林の中に於ても若しは樹の下に於ても若しは僧坊に於て

も乃至而般涅槃ねはんしたもう」と云云、此の砌みぎりに望まん輩やからは無始むしの罪障ざいしょう
たちまちしようめつ忽たちまちに消滅しょうめつし三業さんごふの惡転あくてんじて三徳さんとくを成じようぜん、彼の中てんじく天竺てんじくの無熱池むねつちに臨のぞみ
し惱者のうしやが心中しんちゆうの熱氣ねつきを除愈そして其その願ねがひを充満じゆうまんする事こと清涼池しやうりやうちの如ごとしと
うそぶきしも彼れこ此れ異なりといへども、其その意いは争いでか

替かわるべき。

彼の月がつ氏の靈りよう鷲じゅう山せんは本朝ほんちよう此の身延しんえんの嶺みねなり、参詣さんけい遙はるかに中絶ちゆうぜつせり
急急きうきくに來臨らいりんを企くつべし、是こゝにて待ち入いつて候くわべし、哀哀も申しつくしがたき
御志ごしかな御志ごしかな。

弘安こうあん四年九月十一日

南条殿御返事ごへんじ

日蓮にちれん

花押かおう

◆四一五 上野殿御返事うえのどのごへんじ

1579p

いゑのいも一駄い・ごぼう一つと・大根だいこん六本、いもは石のごとし・ごぼう
は大牛の角のごとし大根は大仏堂だいはつどうの大きくぎのごとしあぢわひは☆利天とまりてん

の甘露かんろのごとし、石を金にかうる国もあり土をこめにうるところもあり、千金の金をもてる者もうえてしぬ、一飯をつとにつめる者にこれをとり、経いふに云く「うえたるよにはよねたつとし」と云云、一切いっさいの事は国により時による事なり、仏法ぶつぽうは此の道理どうりをわきまうべきにて候、又申もうすべし、恐恐きょうきょう謹言。

弘安四年九月廿日

日蓮花押にちれんかおう

上野殿御返事うえのとのごへんじ

◆四一六

上野尼御前御返事

1580p

☆しらよね牙一駄しらくね四斗定あらひいも一俵・送り給びて南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱へま

いらせ候おわ了んぬ。

妙法蓮華經みょうほうれんげきやうと申すは蓮に譬たとえられて候、天上てんじやうには摩訶曼陀羅華まかまんだらけ・

人間にんげんには桜の花・此等これらはめでたき花なれども此れ等この花をば法華經ほけきやうの

譬たとには仏取り給たまう事なし、一切いっさいの花の中に取分けて此の花を法華經ほけきやうに

譬たとへさせ給たまう事は其そのの故候なり、或あるは前花後菓このみと申して花は前に菓このみ

は後なり・或あるは前菓後花と申して菓このみは前に花は後なり、或あるは一花

多菓ある・或あるは多花一菓ある・或あるは無花有菓と品品に候へども蓮華れんげと申す花は

菓このみと花と同時どうじなり、一切經いっさいきやうの功德くどくは先に善根ぜんこんを作なして後に仏とは成る

と説くかかる故ゆえに不定ふじやうなり、法華經ほけきやうと申すは手に取れば其その手やがて

仏に成り口に唱ふれば其の口即仏なり、譬えば天月の東の山の端に出ずれば其の時即水に影の浮かぶが如く音とひびきとの同時なるが如し、故に經に云く、若し法を聞くこと有らん者は一として成仏せざることを無し」云云、文の心は此の經を持つ人は百人は百人ながら千人は千人ながら一人もかけず仏に成ると申す文なり。

抑御消息を見候へば尼御前の慈父・故松野六郎左衛門入道殿の忌日と云云、子息多ければ孝養まぢまぢなり、然れども必ず法華經に非ざれば謗法等云云、釈迦仏の金口の説に云く、世尊の法は久しくして後要らず当に眞實を説きたもうべし」と、多宝の証明に云く、妙法蓮華經は皆是れ眞實なりと十方の諸仏の誓に云く舌相梵天に至る云云、これよりひつじさるの方に大海をわたりて国あり漢土と名く、彼の国には或は仏を信じて神を用いぬ人もあり、或は神を信じ

て仏もちを用いぬ人もあり・或あるは日本にほんこく国も始は・さこそ候いしか、然しかるに彼の
国おりゆうに烏竜もうと申す手書ありき漢土かんとだいち第一の手なり、例せば日本にほんこく国の道風・
行成等の如ごとし、此の人、仏法ぶつぽうをいみて経をかかじと申もうす願

を立てたり、此の人・死期来りて重病をうけ臨終にをよんで子に遺言して云く汝は我が子なり・その跡絶ずして又我よりも勝れたる手跡なり、たとひいかなる悪縁ありとも法華經をかくべからずと云云、然して後・五根より血の出ずる事・泉の涌くが如し・舌八つにさけ身くだけて十方にわかれぬ、然れども一類の人人も三惡道を知らざれば地獄に墮つる先相ともしらず。

其の子をば遺竜と申す又漢土第一の手跡なり、親の跡を追うて法華經を書かじと云う願を立てたり、其の時大王おはします司馬氏仏法を信じ殊に法華經をあふぎ給いしが同じくは我が国の中に手跡第一の者に此の經を書かせて持經とせんとて遺竜を召す、竜申さく父の遺言あり是れ計りは免し給へと云云、大王父の遺言と申す故に他の手跡を召して一經をうつし畢んぬ、然りといふ御心に叶い給はざりし

かば又遺竜を召して言はく

なんじ

汝親の遺言と申せば朕まげて経を写させず但八巻の題目計りを勅に

随うべしと云云、返す返す辞し申すに王瞋りて云く汝が父と云うも我

が臣なり親の不孝を恐れて題目を書かずば違勅の科ありと勅定度度重

かりしかば不孝はさる事なれども当座の責をのがれがたかりしかば

法華經の外題を書きて王へ上げ宅に歸りて父のはかに向いて血の涙を流

して申す様は天子の責重きによつて亡き父の遺言をたがへ既に法華經

の外題を書きぬ。

不孝の責免れがたしと歎きて三日の間墓を離れず食を断ち既に命

に及ぶ、三日と申す寅の時に已に絶死し畢つて夢の如し、虚空を見れば

天人・一人おはします帝釈を絵にかきたるが如し無量の眷属・天地に

充滿せり、爰に竜問うて云く何なる人ぞ答えて云く汝知らずや我は

是れ父の烏竜^{おりゅう}なり、我人間^{にんげん}にありし時・外典^{げてん}を執^しし仏法^{ぶつぽう}を

かたきとし、殊^{こと}に法華經^{ほけきょう}に敵^{てき}をなしまいらせし故^{ゆえ}に無間^{むげん}に墮^おつ、日日に

舌をぬかる事・數百度・或^{ある}は死^しし・或^{ある}は生き天に仰^{おほ}き地に伏^ふしてなげ

けども叶^{かな}う事なし、人間^{にんげん}舎^{しや}げんと思^{おも}へども便^{たよ}りなし、汝^{なんじ}我が子として

遺言^{ゆいごん}なりと申^{まを}せしかば其^その言炎^{ごんえん}と成^なつて身を責^せめ・劍^{けん}と成^なつて天より雨

り下^{くだ}る、汝^{なんじ}が不孝^{ふこう}極^{きく}り無^なかりしかども我が遺言^{ゆいごん}を違^{たが}へ

ざりし故に自業自得果うらみがたかりし所に金色の仏一体無間地獄に
出現して仮使遍法界斷善諸衆生一聞法華經決定成菩提と云云、此の
仏・無間地獄に入り給いしかば大水を大火になげたるが如し、少し苦み
やみぬる処に我合掌して仏に問い奉りて何なる仏ぞと申せば・仏答え
て我は是れ汝が子息遺童が只今書くところの法華經の題目六十四字
の内の妙の一字なりと言ふ、八卷の題目は八八六十四の仏・六十四の
満月と成り給へば・無間
地獄の大閻即大明となりし上・無間地獄は当位即妙・不改本位と申し
て常寂光の都と成りぬ、我及び罪人とは皆蓮の上の仏と成りて只今
都率の内院へ上り参り候が先ず汝に告ぐるなりと云云、遺童が云く、
我が手にて書きけり争でか君たすかり給うべき、而も我が心よりかくに
非ず・いかに・いかにと申せば、父答えて云く汝はか

なし汝が手は我が手なり汝が身は我が身なり汝が書きし字は我が書きし字なり、汝心に信ぜざれども手に書く故に既に・たすかりぬ、譬えば小児の火を放つに心にあらざれども物を焼くが如し、法華經も亦かくの如し存外に信を成せば必ず仏になる、又其の義を知りて謗ずる事無かれ、但し在家の事なれば・いひしこと故大罪なれども懺悔しやすしと云云、此の事を大王に申す、大王の言く我が願既にしるし有りとして遺竜弥朝恩を蒙り国又こそつて此の御經を仰ぎ奉る。

然るに故五郎殿と入道殿とは尼御前の父なり子なり、尼御前は彼の入道殿のむすめなり、今こそ入道殿は都率の内院へ参り給うらめ、此の由をは・わきどのよみきかせまいらせ給うべし、事そうそうにてくはしく申さず候。

きようきよう きんげん
恐恐 謹言

十一月十五日

日蓮にちれん 花押かおう

上野尼御前御返事あまごぜんごへんじ

◆四一七

上野殿母御前御返事うえのどののははごぜんごへんじ

583p

乃米一だ・聖人しょうにん一つつ・二十ひさげか・かつかう・ひとかうぶくろおく
り給ひ候おわい了ぬ。

このところの・やう・せんぜんに申しもうふり候いぬ、さては去ぬる文永十
一年六月十七日この山に入り候いて今年十二月八日にいたるまで此の
山・出いずる事一步も候はずただし八年が間やせやまいと申しもうしとしと
申しとしどしに身ゆわく・心をばれ候いつるほどに、今年は春より此の
やまい・をこりて秋すぎ・冬にいたるまで日日にをとろへ・

夜夜にまさり候いつるが・この十余日は・すでに食も・ほとをととどまり

て候上・ゆきはかさなり・かんはせめ候、

身のひゆる事石のごとし胸のつめたき事氷のごとし、しかるに・このさけ
はたたかに・さしわかして、かつかうを・はたと・くい切りて一度ひとたびのみて候
へば火を胸に・たくがごとし、ゆに入るにいたり、あせに・あかあらい・し
づくに足をすすぐ、此の御志ごしは・いかんがせんと・うれしくをもひ候
ところに両眼りょうげんよりひとつのなんだをうかべて候。

まことやまことや去年こぞの九月五日こ五郎殿のかくれにしはいかになり
けると胸うちさわぎて・ゆびををりかず・候へばすでに二ヶ年十六月四
百余日にすぎ候が、それには母なれば御をとづれや候らむ、いかに・き
かせ給たまはぬやらむ、ふりし雪も又ふれり・ちりし花も又さきて候いき、
無常むじょうばかり・またも・かへりきこ候はざりけ

るか、あらうらめし・あらうらめし余所よそにても・よきくわんざかな・よき

くわんざかな玉のやうなる男かな男かないくせ・をやのうれしく・をば
すらむと見候いしに、満月まんげつに雲のかかれるが・はれずして山へ入り・さか
んなる花のあやなく・かぜのちらせるがごとしと・あさましくこそをばへ
候へ。

にちれん
日蓮は所らうのゆへに一人の御文の御返事も申さず候いつるがこの事

はあまりになげかしく候へばふでをとりて候ぞ、これもよもひさしくもこのよに候はじ、一定五郎殿にいきあいぬとをば候、母よりさきにけさんし候わば母のなげき申しつた候はん、事事又又申すべし、
きようきようきんげん
恐恐謹言。

十二月八日

にちれん
日蓮 花押 かおう

うえのとははごぜんごへんじ
上野殿母御前御返事

◆四一八

だいびやくごしや
大白牛車御消息

1584p

そもそもほけきよう

びやくご

もう

ほけきよう

ぎようじや

抑 法華經の太白牛車と申すは我も人も法華經の行者の乗るべき車

にて候なり、彼の車をば法華經の譬喩品と申すに懇に説かせ給いて供、
たまい

但し彼の御経は羅什・存略の故に委しくは説き給はず、天竺の梵品には車の莊り物・其の外・聞信戒定進捨懺の七宝まで委しく説き給ひて候を日蓮あらあら披見に及び候、先ず此の車と申すは縦広五百由旬の車にして金の輪を入れ・銀の棟をあげ・金の繩を以て八方へつり繩をつけ・三十七重のきだはし

をば銀を以てみがきたて八万四千の宝の鈴を車の四面に懸けられたり、三百六十ながれの・くれなひの錦の旗を玉のさほにかけながし、四万二千の欄干には四天王の番をつけ、又蜜の内には六万九千三百人十余人の仏・菩薩・宝蓮華に坐し給へり、帝釈は諸の眷属を引きつれ給ひて千二百の音楽を奏し、梵王は天蓋を指し懸け・地神は山

河・大地を平等に成し給ふ、故に法性の空に自在にとびゆく事をこそ大白牛車とは申すなれ、我より後に來り給はん人人は此の車にめさ

れて靈山りようぜん 御出いで有るべく侯、日蓮にちれんも同じ事に乗りて御迎いにまかり向
ふべく供、南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやう 南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやう。

日蓮にちれん 花押かおう

◆四一九

春初御消息しやうそく

1585p

ははき殿かきて候事よろこびいりて候。

春の初の御悦よろこび木に花のさくがごとく山に草の生い出いずるがごとしと

我も人も悦よろこび入いつて候、さては御送り物の日記にっき☆八木一俵・白塩一俵・

十字三十枚・いも一俵・給おわび候い畢おわんぬ。

深山みやまの中に白雪・三日の間に庭は一丈につもり谷はみねとなり・みね

は天にはしかけたり、鳥鹿は庵室あんしつに入り樵牧は山にさしいらず、衣はう

すし食はたえたり夜はかんく鳥にことならず、昼は里へいでんとおもふ

心ひまなし、すでに読経どつきのこえもたえ観念かんねんの心もうすし、今生退転こんじようたいてんし

て未来三五みらいを経ん事をなげき候いつるところに此の御とぶらひに命いき

て又もや見参そうちに入り候はんずらんと・うれしく候。

過去の仏は凡夫にて・おはしまし候いし時五濁乱漫の世にかかる飢え
たる法華經の行者をやしなひて仏にはならせ給うぞとみえて候へば
法華經まことならば此の功德によりて過去の慈父は成仏疑なし。

故五郎殿も今は靈山淨土にまいりあはせ給いて故殿に御かうべをな
でられさせ給うべしと・おもひやり候へば涙かきあへられず、恐恐
謹言。

正月二十日 蓮花押

上野殿御返事

申す事恐れ入つて候、返返ははき殿一一によみきかせまいらせ候

へ。

◆四二〇

法華証明抄

法華經の行者

にちれんかおう
日蓮花押

1586p

末代悪世まつだいあくせに法華經ほけきようを経をのごとく信じまいらせ候者まちをば法華經ほけきようの御鏡
にはいかんがうかばさせ給たまうと拝見はいけんつかまつり候へば、過去かこに十萬億の
仏くふつを供養くようせる人なりとたしかに釈迦しやかぶつ仏の金口きんくの御口ごくちより出いでさせ給たまい
て候まちを・一仏いちぶつなれば末代まつだいの凡夫ぼんぶはうたがいや・せんずらんとて、此より
東方とうほうにはるかとほの国をすぎさせ給たまいて・おはします宝浄世界ほうじょうせかいの多宝たほうぶつ仏わざ
わざと行幸かうきやうならせ給たまいて釈迦しやかぶつ仏にをり向むかいまいらせて妙法華經みょうほけきよう・
皆是かいせしんじつ真実しんじつと証しょうみよう明めいせさせ給たまい候まちいき、
此の上かみはなにの不審ふしんか残のこるべき・なれども・なをなを末代まつだいの凡夫ぼんぶは・をば

つかなしと・をぼしめしや有りけん、十方じゅうぼうの諸仏しよぶつを召しあつめさせ給たまい
て広長舌相こうちやうぜつそうと申もうして無量劫むりやうじやくより・このかた永くそらごとなきひろくな
がく大なる御舌しゆみせんを須弥山しゆみせんのごとく虚空こくうに立てならべ給たまいし事は・をびた
だしかりし事なり、かう候まうへば末代まつだいの凡夫ぼんぶの身として法華經ほけきやうの一字・二
字を信じまいらせ候じゅうぼうへは十方の仏の御舌を持つ物ぞかし、いかなる過去かこ
の宿習しゆくじゅうにて・かかる身とは

生るらむと悦よろこびまいらせ候・上の經文きやうもんは過去かこに十萬億の仏にあいまいら
せて供養くやうをなしまいらせて候いける者が法華經計ほけきやうばかりをば用もちいまいらせず
候いけれども仏くやうの功德くどく莫大ばくだいなりければ謗法ぼうぼうの罪つみに依よりて貧賤ひんせんの
身とは生れて候へども又此の經を信ずる人となれりと見みて候、此これを
ば天台てんだいの御釈いおに云く、尸の地に倒れて還かえつて地より起おこつが如ごとし」等云云、
地にたうれたる人は・かへりて地よりをく、法華經謗法ほけきやうぼうぼうの人は三惡さんあく並ならび

に人天にんてんの地には・たうれ候うけへともかへりて法華經ほけきようの御手みてにかかりて仏にな
るとことわられて候。

しかるにこの上野の七郎次郎は末代まつだいの凡夫武士ぼんぶの家に生れて悪人あくにんと
は申もうすべけれども心は善人ぜんにんなり、其そのの故

は日蓮にちれんが法門ほうもんをば上かみ一人いちにんより下した万民ばんみんまで信たじ給たまはざる上たまたま信ずる人あれば・或あるは所領しよりよう・或あるは田畠等でんぱたにわづらひをなし結句けっくは命に及ぶひとびと人人もあり信じがたき上・はは故上野は信じまいらせ候いぬ、又此の者敵子となりて人もすすめぬに心中しんちゅうより信じまいらせて上下万人じやうげばんにんにあるいは・いさめ・或あるはをどし候いつるに・ついに捨つる心なくて

候へばすでに仏になるべしと見み候へば天魔てんま・外道げどうが病をつけてをどさんと心み候か、命はかぎりある事なり・すこしも・をどろく事なかれ、又鬼神きじんめらめ此の人をなやますは剣をさかさまにのむか又大火だいかをいだくか、三世十方さんぜじゆつぽうの仏の大怨敵おんてきとなるか、あなかしこ・あなかしこ、此の人のやまいを忽たちまちになをして・かへりてまほりとなりて鬼道の大苦をぬくべきか、其その義ぎなくして現在げんざいには頭破七分ずはしちぶんの科とがに行われ後生ごしょうには大無間むげん地獄じごくに墮おつべきか、永くとどめよ・とどめよ、日蓮にちれんが言をいやしみて後悔こうかい

あるべし・後悔こうかいあるべし。

弘安五年二月廿八日

下伯耆房

◆四二一

蕤三枚御書ごしよ

1587p

蕤三枚・生和布一籠かご・給たまいおわぬ。

そもそも

抑 三月一日より四日にいたるまでの御あそびに心なぐさみて・やせやまいもなをり虎とるばかりをば候上此の御わかめ給びて師子ししにのりぬべくをば候。

さては財たからはところにより人によつてかわりて候、此の身延の山には石は多けれども餅なし、こけは多けれどもうちしく物候はず、木の皮をはいでしき物とす・むしろいかでか財たからとならざるべき。

億耳居士と申せし長者は足のうらに・けのをいて候いし者なり、ありきのところ・いへの内は申すにをよばず・わたを四寸しきて・ふみし人なり、これは・いかなる事ぞと申せば先世に・たうとき僧に・くまのかわをしかせしゆへとみへて候。

いわうや日本国は月氏より十万よりをへたてて候辺国なる上・へびすの島・因果のことはりも弁えまじき上・末法になり候いぬ、仏法をば信ずるやうにてそしる国なり、しかるに法華經の御ゆへに名をたたせ給う上・御むしろを法華經にまいらせ給い候いぬれば。

◆四二二 芋一駄御書

1588p

いも一駄はじかみ五十ぱをくりたびて候。

このみのぶのやまと申し候は・にしはしらねのたけ・つねにゆきをみる、ひんがしにはてんしのたけ・つねにひをみる、きたはみのぶのたけ・みなみはたかとのたけ四山のあひ・はこのそこのごとし、いぬるのすみより・かはながれて・たつみのすみにむかう・かかるいみじきところみねには・せひのこへ・たには・さるのさけび木は・あしのごとし・くさは・あめにいたり、しかれども・かかるいもはみ候はず、はじかみはをひず、いしにて少しまもりやわらかなり、くさににて・くさよりもあぢあり。
法華經ほけきょうに申しあげ候もういぬれば御心おんこころざしはさだめて釈迦しやか仏ぶつしろしめしぬらん、きようきようきんげん恐恐謹言。

八月十四日

日蓮にちれん在御判

御返事ごへんじ

◆四二三

閻浮提中御書えんぶだい ごとしよ

1589p

閻浮提中飢餓えんぶだい きが□□□□示現閻浮提中□□□□、又云く又示現
 閻浮提中えんぶだい□□□劫起等云云、人王三十代□□□□国の聖明王せいめいおう□□□□
 国にわたす王此れを用いずして三代仏罰にあたる□□□□、釈迦仏を
 申し隠すとが□□□念仏者等善光寺の阿弥陀仏云云、上一人より下
 万民にいたるまで皆人□□□□此れをあらわす、日蓮にあだをなす人
 は惣て日蓮を犯す、天は惣て此国を□□□□□□言く經を誦誦し
 書持すること有らん者を見て輕賤憎嫉して結恨を懷かん」等云云、又
 云く多病☆瘦「第八に云く諸惡重病」又第二に云く君し医道を
 修し方に順て病を

治せば更に他の疾を増し・或は復死を致す」又云く・若し自ら病有らんに人の救療すること無く・設い良薬を服すとも而も復増劇せん」等云云、弘法大師は後に望んで戲論と作す、東寺の一門上御室より下一切の東寺の門家は法華經を戲論と云云、叡山の座主並びに三千の大衆□日本国・山寺一同の云く□□□□□大日經等云云、智証大師の云く法華尚及ばず等云云、園城の長吏並びに一国の末流等の云く法華經は真言經に及ばずと云云、此の三師を用ゆる国主終に法皇了んぬ、明雲座主の義仲に殺されし、承久に御室思ひ死にせし是なり。

願くは我が弟子等は師子王の子となりて群狐に笑わるる事なかれ、過去遠遠劫より已来日蓮がごとく身命をすてて強敵の科を顕せ・師子は値いがたかるべし、国主の責め・なををそろし・いわうや閻魔のせめをや、日本国のせめは水のごとし・ぬるるを・をそるる事なかれ、閻魔のせ

めは火のごとし・裸にして入ると・をもへ大涅槃だいねはんきようの文の心は仏法ぶつぽうを信
じて今このたび度生死しやうじをはなるる人のすこし心のゆるなるをすすめむがために
疫病えきびようを仏のあた給たまうはげます心なり・すすむる心なり。

日蓮にちれんは凡夫ぼんぷなり天眼てんげんなければ一紙をもみとをすことなし、宿命きようもんなれば三世さんぜを知ることなし、而しかれども此の經文きやうもんのごとく日蓮にちれんは肉眼にくげんなれども天眼てんげん宿命きようもん□□□日本にほんこく国七百餘歳の仏眼ぶつげんの流布るふせしやう、八宗はっしゅう・十宗じゅうしゅうの邪正じやせい漢土かんど・月氏がつしの論師ろんし・人師にんしの勝劣しょうれつ八万十二の仏經ぶつきやうの旨趣ししゆをあらあらずいちし□□・我が朝ばうこくの亡国ぼうこくとなるべき事先こに此れをかながて宛あたかも符契ふけいのごとし、此これ皆法華經みなほけきやうの御力おんちからなり、而しかるを国主こくしゆは讒臣ざんしん等が凶言きやうげんを・をさめてあだをなせしかば、凡夫ぼんぷなれば道理どうりなりとをもつて退する心なかりしかども度度たびたびあだをな。

◆四二四

衆生身心御書しゆじやうしんしんごしよ

1590p

衆生しゆじやうの身心しんしんをとかせ給たまう其その衆生しゆじやうの心にのぞむとて・とかせ給たまへ人

の説なれども衆生しゅじょうの心をいわず、かるがゆへに隨他意ずいたいの經となづけた
り、譬たとへばさけもこのまぬをやのきわめてさけをこのむいとをしき子あ
り、かつはいとをしみ・かつは心をとらんがために・かれにさけをすすめ
んがために・父母ふぼも酒をこのむよしをするなり、しかるをはかなき子は
父母ふぼも酒をこのみ給たまうと・をもへり。

提謂經とうゐきやうと申もうす經は人天にんてんの事をとけり、阿含經あこんきやうと申もうす經は二乗にじやうの事を
とかせ給たまう、華嚴經けこんきやうと申もうす經は菩薩ぼさつのとなり、方等ほうとう・般若經はんんにやきやう等は・或ある
は阿含經あこんきやう・提謂經とうゐきやうにいたり、或あるは華嚴經けこんきやうにもいたり、此れ等の經經きやうきやう
は末代まつだいの凡夫ぼんぷこれをよみ候へば仏の御心に叶かなうらんとは行者ぎやうじやは・をもへ
ども・くはしく・これをろむずれば己おのが心をよむなり、己おのが心は
本よりつたなき心なれば・はかばかしき事なし、法華經ほけきやうと申もうすは隨自意ずいじい
と申もうして仏の御心をとかせ給たまう、仏の御心はよき心なるゆへに・たとい・

しらざる人も此の經をよみたてまつれば利益はかりなし、麻の中のよもぎ・つつの中のくちなは・よき人にむつぶもの・なにとなけれども心もふるまひも言も・なをしくなるなり、法華經ほけきょうもかく

のごとし・なにとなければども・この經を信じぬる人をば仏のよき物と・をばすなり、此の法華經ほけきょうにをひて又機きにより時により国によりひろむる人により・やうやうにかわりて候をば等覺とうかくの菩薩ぼさつまでも・このあわひをば・しらせ給たまわずとみへ候、まして末代まつだいの凡夫ぼんぷは・いかでか・ちからひを・ををせ候べき。

しかれども人のつかひに三人あり、一人はきわめてごごかしき、一人ははかなくもなし又ごごかしからず、一人はきわめて・はかなくたしかなる、此の三人に第一だいいちはあやまちなし、第二は第一だいいちほどこそ・なければども・すこしごごかしきゆへに主の御ことばに私の言をそうるゆへに第一だいいちのわるきつかいとなる、第三はきわめて・はかなく

あるゆへに私の言をまじへず・きわめて正直しやうじきなるゆへに主の言ばを・たがへず、第二よりもよき事にて候あやまつて第一だいいちにも・すぐれて候なり、

第一だいいちをば月支がつしの四依しえにたとう、第二をば漢土かんどの人師にんしにたとう、第三をば末代まつだいの凡夫ぼんぶの中に愚癡ぐちにして正直しやうじきなる物にたとう。

仏ざいせ在世ざいせはしばらく此これををく仏の御入滅にやうめつの次の日より一千年をば

正法しやうぽうと申もうす、この正法しやうぽう一千年を二つにわかつ、前の五百年が間は

小乗經しょうじやうきやうひろまらせ給たまう、ひろめし人人ひとびとは迦葉かしやう・阿難あなん等なり、後の五百

年は馬鳴めみやう・竜樹りやうじゆ・無著むぢやく・天親てんじん等ごんだい権大乘經こんだいじやうきやうを弘通くわつうせさせ給たまう、法華經ほけきやう

をば・かたはし計ばかりかける論師ろんしもあり、又つやつや申しいださぬ人もあ

り、正法しやうぽう一千年より後の論師ろんしの中には少分ぶつせつを仏説ぶつせつににたれども多分たぶんを

あやまりあり、あやまりなくして而しかも

たらざるは迦葉馬鳴かしやうめみやう・阿難あなん・竜樹りやうじゆ・無著むぢやく・天親てんじん等なり、像法ぞうぽうに入り一千

年かんど・漢土かんどに仏法ぶつぽうわたりしかば始めは儒家じゆけと相論そうろんせしゆへにいとまなきか

のゆへに仏教ぶつぎやうの内の大小だいしやう・権実ごんじつの沙汰さたなし、やうやく仏法ぶつぽう流布るふせし上・

月支がつしより・かさねがさねぶつぼう仏法わたり来るほどに・前ひとびとの人人は・かしこきやうなれども後にわたるきょうろん経論をもつて・みれば・はかなき事しゅつたいも出来す、又はかなくをもひしひとびと人人もかしこくみゆる事もありき、結句けっくは十流じゅうりゅうになりて千万よろずの義ありしかば愚者ぐしやはいづれに・つくべしともみみず、智者ちしやとをばしき人はへんしゅう辺執かぎりなし、而れども最極しきは一同の義あり・

いわゆるいちだいいち けこんきよう 所謂一代第一は華嚴經・第二は涅槃經・第三は法華經此の義は上一人より下万民にいたるまで異義なし、大聖とあうぎし法雲法師・智藏法師等の十師の義一同なりしゆへなり。

而るを像法の中の陳隋の代に智☆と申す小僧あり後には智者大師とがうす、法門多しといへども詮するところ法華・涅槃華嚴經の勝劣の一つ計りなり、智・法師云く仏法さかさまなり云云、陳主此の事をたださんがために南北の十師の最頂たる恵☆僧上・恵光僧都・恵栄法蔵法師等の百有余人を召し合わせられし時、法華經の中には

「諸經の中に於て最も其の上に在り」等云云、又云く「已今当説最為難信難解」等云云、已とは無量義經に云く摩訶般若・華嚴海空」等云云、当とは涅槃經に云く般若はら蜜より大涅槃を出だす」等云云、此の經文は華嚴經・涅槃經には法華經勝ると見ゆる事赫赫たり明明たり

御会通えつうあるべしと・せめしかば、或あるは口をとぢ・或あるは惡口あくぐをはき・或あるは色をへんじなんど・せしかども、陳主ちんしゅ立つて三拝はいし百官たなごころ掌てをあわせしかば力及およばずまけにき。

一代いちだいの中には第一だいいち法華經ほけきやうにてありしほどに像法ざうぼうの後の五百しんやくに新訳しんやくの經論きやうろん重ねてわたる大宗皇帝だいそうこうていの貞觀じやうかん三年げんじやうに玄奘もうと申す人あり月支がっしに入りて十七年・五天ふつぽうの仏法ぶつぽうを習ならいきわめて貞觀じやうかん十九年かんどに漢土かんどへわたりしが・深密經じんみつ・瑜伽論ゆいが・唯識論ゆいしきろん・法相宗ほうそうしゅうをわたす、玄奘げんじやう云く月支がっしに宗宗多けんおうしといへども此の宗だいいち・第一だいいちなり」大宗皇帝だいそうこうていは又漢土かんど第一だいいちの賢王けんおうなり玄奘げんじやうを師とす、此の宗しよせんの所詮しよせんに云く・或あるは三乘さんじやう方便ほうべん・一乘いちじやう眞実しんじつ」・或あるは一乘いちじやう方便ほうべん・三乘さんじやう眞実しんじつ・又云く五性は各別かくべつなり決定性けつじやうと無性むじやうの有情うじやうは永く仏に成らず」等と云云、此の義は天台宗てんだいしゅうと水火すいかなり而も天台大師てんだいだいしと章安大師だいいしは御入滅にゅうめつなりぬ其その已下いかの人人ひとびとは人非人にんびにんなり・すでに

天台宗破れてみへしなり。

其の後則天皇皇后の御世に華嚴宗立つ前に天台大師に・せめられし六十卷の華嚴經をば・さしをきて後に日照三藏のわたせる新訳の華嚴經八十卷をもつて立てたり、此の宗のせんにいわく華嚴經は根本法輪・法華經は枝末法輪等云云、則天皇皇后は尼にてをはせしが内外典に・こざかしき人なり、慢心たかくして天台宗をさげをばしてあり

しなり、法相ほふそうといひる華嚴宗けこんしゅうといひる二重にじゅうに法華經ほけきょうかくれさせ給うたま。

其その後玄宗皇帝げんそうこうていの御宇ぎように月支がっしより善無畏三藏ぜんむいさんざう・金剛智三藏こんごうちさんざう・不空ふくう

三藏さんざう・大日經だいにちききょう・金剛頂經こんごうちようききょう・蘇悉地經そしつちききょうと申す三經をわたす、此の三人は

人がらといひる法門ほふもんといひる前前さきさきの漢土かんどの人師にんしには対すべくもなき人人ひとびとな

り、而も前しかになかりし印しんごんと真言しんごんとをわたすゆへに仏法ぶつぽうは已前いぜんには此の国

になかりけりと・をぼせしなり、此の人人ひとびとの云く天台宗てんだいしゅうは華嚴けこん・法相ほつそう・

三論さんろんには勝すぐれたり・しかれども此の真言經しんごんきょうには及およばずと云云、其の後そ

妙樂大師みょうらくだいしは天台大師てんだいだいしのせめ給たまはざる法相宗ほふそうしゅう・華嚴宗けこんしゅう・真言宗しんごんしゅうをせめ

給たまいて候へども天台大師てんだいだいしのごとく公場こうじょうにてせめ給たまはざれば・ただ闇夜やみよの

にしきのごとし、法華經ほけききょうになき印しんごんと真言しんごんと現前げんぜんなるゆへに皆人みな・一同いどうに

真言しんごんまさりにて有りしなり。

像法ぞうぽうの中に日本国にほんこくに仏法ぶつぽうわたり所謂いわず欽明天皇きんめいてんのうの六年なり、欽明きんめいより

桓武かんむにいたるまで二百余年が間は三論・成実・法相・俱舍・華嚴律の
六宗弘通ろくしゅうぐつうせり、真言宗しんこんしゅうは人王四十四代・元正天皇の御宇ぎようにわたる、
天台宗は人王第四十五代聖武天王の御宇ぎようにわたる、しかれどもひろま
る事なし、桓武かんむの御代に最澄法師さいちようほつし・後には伝教大師でんぎようだいしとがうす、
入唐にゅうとう已前いぜんに六宗を習ならいきわむる上・十五年が間・天台てんだい・真言しんこんの二宗を
山にこもり給たまいて御覽ありき、入唐にゅうとう已前いぜんに天台宗をもつて六宗をせめ
しかば七大寺皆せめられて最澄さいちようの弟子でしとなりぬ、六宗の義ぎやぶれぬ、
後延暦えんりやく廿三年に御入唐にゅうとう・同じき廿四年御歸朝きちよう・天台てんだい・真言しんこんの宗を
日本国にほんこくにひろめたり、但し勝劣ただの事は内心ないしんに此れを存じて人に向つて
とかざるか。

同代どうだいに空海くうかいという人あり後には弘法大師こうぼうだいしとがうす、延暦えんりやく廿三年に
御入唐にゅうとう・大同三年御歸朝きちよう但真言しんこんの一宗を習ならいわたす、此の人の義に

云くい法華經ほけきやうは尚華嚴經なわけこんきやうに及およばず何いかに況いはや真言しんごんにをひてをや。

伝教大師でんぎやうだいしの御弟子おんでしに円仁えんにんという人あり後に慈覺大師じかくだいしとがうす、

去ぬる承和五年じやうわの御入唐にやうとう・同十四年に御歸朝きちやう・十年が間・真言しんごん・天台てんだいの

二宗にそうをがくす、日本国にほんこくにて伝教大師でんぎやうだいし・義真ぎしん・円澄えんちやうに天台てんだい・真言しんごんの二宗

を習ならいきわめたる

上・漢土にわたりて十年が間・八箇の大徳にあひて真言を習い宗叡・志遠等に値い給いて天台宗を習う、日本に帰朝して云く天台宗と真言宗とは同じく醍醐なり俱に深秘なり等云云、宣旨を申して・これにそう。

其の後円珍と申す人あり後には智証大師とがうす、入唐已前には義真和尚の御弟子なり、日本国にして義真・円澄・円仁等の人人に天台・真言の二宗習いきわめたり、其の上去ぬる仁嘉三年に御入唐同貞観元年に御帰朝七年が間・天台・真言の二宗を法全良・等の人人に習いきわむ、天台・真言の二宗の勝劣は鏡をかけたり、後代に一定あらそひありなん定むべしと云つて天台・真言の二宗は譬へば人の両の目・鳥の二の翼のごとし、此の外異義を存ぜん人人をば祖師・伝教大師にそむく人なり山に住むべからずと宣旨を申しそへて弘通せさせ給いき

されば漢土・日本に智者多しといへども此の義をやぶる人はあるべからず、此の義まことならば習う人人は必ず仏にならせ給いぬらん、あがめさせ給う国王等は必ず世安穩になりぬらんとをぼゆ。

但し予が愚案は人に申せども、御もちあるあるべからざる上・身のあだとなるべし、又きかせ給う弟子・檀那も安穩なるべからずとをもひし上其の義又たがわず、但此の事は一定仏意には叶わでもや・あるらんとをぼへ候、法華經一部八卷・二十八品には此の經に勝れたる經をはせば此の法華經は十方の仏あつまりて大妄語をあつめさせ

給えるなるべし、随つて華嚴・涅槃・般若・大日經・深密等の經經を見るに「諸經の中に於て最も其の上に在り」の明文をやぶりたる文なし、随つて善無畏等玄奘等弘法・慈覺・智証等種種のたくみあれども法華經を大日經に対してやぶりたる經文はいだし給わず、但印・真言

計りばかの有無うむをゆへとせるなるべし、数百巻のふみをつくり

漢土かんと・日本にほんに往復またして無尽むじんのたばかりをなし宣旨せんじを申しそへて人を・を

どされんよりは経文きやうもん分明ふんみやうならばたれか疑うたがいをなすべき、つゆつもりて

河となる河つもりて大海たいかいとなる塵ちりつもりて山となる山かさなりて

須弥山しゅみせんとなれり小事しょうじつもりて大事だいじとなる何いかに況や此の事は最も大事だいじな

り、疏じょをつくられけるにも両方の道理どうり・文証もんしやうをつくさるべ

かりけるか、又宣旨も両方を尋ね極めて分明の証文をかきのせていましめあるべかりけるか。

已今当の經文は仏すらやぶりがたし何に況や論師・人師・国王の威徳をもつて・やぶるべしや、已今当の經文をば梵王・帝釈・日月・四天等聽聞して各各の宮殿にかきとどめて・をはするなり、まことに已今当の經文を知らぬ人の有る時は先の人人の邪義は・ひろまりて失なきやうにては・ありとも・此の經文を・つよく立て退転せざるこわ物出来しなば大事出来すべし、いやしみて・或はのり・或は打ち・或はながし・或は命をたたんほどに・梵王・帝釈・日月・四天をこりあひて此の行者のかたうどを・せんほどに・存外に天のせめ来りて民もほろび国もやぶれんか、法華經の行者はいやしけれども守護する天こわし、例せば修羅が日月をのめば頭七分にわる犬は師子をほゆれば・はらわ

たくさる、今予みるに日本国かくのごとし、又此れを供養せん人人は
法華經供養の功德あるべし、伝教大師釈して云く 讀めん者は福を
安明に積み謗せん者は罪を無間に開かん」等云云。

ひへのはんを辟支仏に供養せし人は宝明如来となり・つちのもちるを
仏に供養せしかば閻浮提の王となれり、設いこうをいたせども・まこと
ならぬ事を供養すれば大悪とは・なれども善とならず、設い心をろかに
・すこしきの物なれども・まことの人に供養すれば・こう大なり、何に況
や心ざしありて・まことの法を供養せん人人をや。

其の上当世は世みだれて民の力よわし、いとまなき時なれども心ざし
のゆくところ山中の法華經へ・まうそうか・たかなををくらせ給う
福田によきたねを下させ給うか、なみだもとどまらず。

◆四二五

白米一俵御書ごしよ

1596p

白米一俵・けいもひとたわら・こふのりひとかご・御つかいを・もつて
わざわざをくられて候。

人にも二つの財たからあり一には衣二には食なり経いけに云く 有情うじようは食に
依よつて住す」と云云文の心は生ある者は衣と食によつて世にすむと申もうす
心なり、魚は水にすむ水を宝とす木は地の上にをいて候・地ちを財たからとす、
人は食によつて生あり食を財たからとす、いのちと申もうす物は一切いっさいの財たからの中に
第一だいいちの財たからなり、遍満へんまん三千界無有直身命しんみようととかれて
三千大千世界さんぜんだいせんせかいにみて候財たからも・いのちには・かへぬ事に候なり、されば・
いのちは・ともしびのごとし食はあぶらのごとし、あぶらつくれば・とも

しびきへぬ食なければ・いのちたへぬ、一切のかみ・仏をうやまいたてまつ
る・始の句には南無と申す文字を・をき候なり、南無と申すは・いかな
る事ぞと申すに・南無と申すは天竺のことばにて
候、漢土・日本には歸命と申す歸命と申すは我が命を仏に奉ると申す
事なり、我が身には分に隨いて妻子・眷属・所領・金銀等をもてる人人
もあり又財なき人人もあり、財あるも財なきも命と申す財にすぎ
て候財は候はず、さればいにしへの聖人・賢人と申すは命を仏にまいら
せて仏にはなり候なり。

いわゆる雪山童子と申せし人は身を鬼にまかせて八字をならへり、
薬王菩薩と申せし人は臂をやいて法華經に奉る、我が朝にも聖徳太子
と申せし人は手のかわをはいで法華經をかき奉り、天智天皇と申せし
国王は無名指と申すゆびをたいて釈迦仏に奉る、比れ等は賢人・聖人

の事なれば我等は叶いがたき事にて候。

ただし仏になり候事は凡夫は志ざしと申す文字を心へて仏になり候なり、志ざしと申すはなに事ぞと委細にかんがへて候へば觀心の法門なり、觀心の法門と申すはなに事ぞとたづね候へばただ一つきて候衣を法華經に

まいらせ候が身のかわをわぐにて候ぞ、うへたるよに・これはなしでは、
けうの命をつぐべき物もなきに・ただひとつ候これうを仏にまいらせ候
が身命しんみょうを仏にまいらせ候にて候ぞ、これは藥王やくおうのひちをやき雪山童子せっせんどうじ
の身を鬼にたびて候にも・あいをとらぬ功德くどくにて候へば聖人しょうにんの御ために
は事供ほんぶやう凡夫ぼんぷのためには理くやう止觀しかんの第七の

觀心かんじんの檀だんばら蜜みつと申もうす法門ほうもんなり、まことの・みちは世間せけんの事法じほうにて候、

金光明經こんこうめいぎょう

には 若もし深く世法せほうを識しらば即すなわち是これ仏法ぶつぽうなり」ととかれ

涅槃經ねはんぎょうには 一切世間いっさいせけんの外道げどうの經書きょうしょは皆是みなこれ仏說ぶつせつにして外道げどうの說ごうに

非あらず」と仰おほせられて候を妙樂みょうらく大師だいしは法華經ほけきょうの第六の卷の 一切世間いっさいせけんの

治生産業ちせいさんぎょうは皆実相みなじつそうと相あい違背いはいせず」との經文きょうもんに引き合せて

心をあらわされて候には彼れ彼れの二經は深心の經經きょうきょうなれども彼の

經經きょうきょうはいまだ心あさくして法華經ほけきょうに及およばざれば世間せけんの法ぶつぽうを仏法ぶつぽうに依

せてしらせて候、法華經はしからず・やがて世間の法が仏法の全体と
釈せられて候。

爾前の經の心心は、心より万法を生ず、譬へ心は大地のごとし草木
は万法のごとしと申す、法華經はしからず心すなはち大地・大地即
草木なり、爾前の經經の心は心のすむは月のごとし心のきよきは花の
ごとし、法華經はしからず月こそ心よ花こそ心よと申す法門なり。

此れをもつてしろしめせ、白米は白米にはあらずすなはち命なり。

美食を・をさめぬ人なれば力をよばず山林にまじわり候いぬ、されど
も凡夫なればかにも忍びがたく熱をもふせぎがたし、食ともし表○目
が万里の一食・忍びがたく・思子孔が十旬・九飯堪ゆべきにあらず、
読經の音も絶えぬべし觀心の心をろそかなり。

しかるに・たまたまの御とぶらいただ事にはあらず、教主釈尊の御す

すめか將又過去宿習の御催か、方方紙上に尽し難し、恐恐謹言。

◆四二六

食物三徳御書さんどくごしよ

1598p

かゆへに大國たいこくの王は民を・をやとし民は食を天とすとかかれたり、食には三の徳あり、一には命をつぎ二にはいろをまし三には力をそう、人に物をほどこせば我が身のたすけとなる、譬たとへば人のために火をともしれば我がまへあきらかなるがごとし、悪をつくるものを・やしなへば命をますゆへに氣いきながし、色をますゆへに眼まなこにひかりあり、力をますゆへに・あしはやく・てきく、かるがゆへに食をあたへたる人かへりて・いともなく氣いきもゆわく力もなきほうをうるなり。

一切経いっさいきやうと申もうすは紙の上に文字もんじをのせたり、譬たとへば虚空こくうに星月のつらなり大地だいちに草木そうもくの生ぜるがごとし、この文字もんじは釈迦しやか如来にょらいの氣いきにも候なり、

氣いきと申もうすは生氣なり・この生氣に二あり、一には九界。

◆四二七 一定証伏御書ごしよ

1598p

一定と証伏せられ候いしかば其その後の智人ちじんかずをしらず候へども今に四百歳が間さで候なり、かるがゆへに今に日本にほん國の寺寺・一万余さんぜん三千余の社社・四十九億九万四千八百二十八人の一切衆生いっさいしゆじやう・皆彼の三大師だいしの御弟子おんでしとなりて法華最第一ほつげさいだいいちの經文最第二最第三とをとされて候なり、されども始は失とがなきやうにて候へども・つゆつもりて大海たいかいとなり・ちりつもりて大山となる。

◆四二八

初穂御書ごしよ

1599p

石給たまひいて御はつをたるよし、法華經ほけきようの御宝前ほうぜんへ申もうし上げて候かしこまり申もうすよし、けさんに入らせ給たまひい候へ 恐恐きようきよう謹言きんげん。

十月二十一日

日蓮にちれん 在御判

御所御返事ごへんじ

◆四二九

五大の許御書ごしよ

1599p

□□りげなくなに事もかくの事□不沙汰さたあるか○す御尋たずねあるべし、経あるは、或あるは前後ぜんごし、或あるは落経あるにても候はず。□ものくるわしきとはこれなり法門ほうもんもかしこきやうにて候へはわるかるべし。

追申

五大のもとへは三伊房も申もうして候・他所に於いて之これを聞かしめ將又事はたまたに依り子細有るべきか、伯耆阿闍梨事は但我祖なるやうなるべし、設たとひ件くだんの人見参為と雖も其の義を存じて候へ。

◆四三〇

一大事御書いちだいじごしょ

1599p

あなかに申もうさせ給たまへ日蓮にちれんが身のうえの一大事いちだいじなり、あなかしこ・あなかしこ。

五月十三日

日蓮にちれん在御判

◆四三二

身延相承書

総付嘱書

1600p

日蓮一期の弘法、白蓮阿闍梨日興に之を付嘱す、本門弘通の大導師
たるべきなり、国主此の法を立てらるれば富士山に本門寺の戒壇を
建立せらるべきなり、時を待つべきのみ、事の戒法と云うは是なり、
就中我が門弟等此の状を守るべきなり。
日蓮在御判血脈の次第 日蓮日興

弘安五年壬午九月 日

◆四三二

池上相承書

別付嘱書

1600p

釈尊・五十年の説法、白蓮阿闍梨日興に相承す、身延山久遠寺の

別べつ当とうたるべきなり、背そむく在家ざいけ・出家しゅっけどもの輩やからは非法ひほうの衆たるべきなり。

弘安五年壬午十月十三日

武州池上

日蓮にちれん 在御判

◆四三三

富士一跡門徒存知の事

1

601p

先ず日蓮聖人の本意は法華本門に於ては曾つて異義有るべからざる
の処、其の整足の弟子等忽に異趣を起して法門改変す況や末学等に
於ては面面異轍を生ぜり、故に日興の門葉に於ては此の旨を守つて一
同に興行せしむべきの状仍つて之を録す。

一、聖人・御在生の時弟子六人を定むる事、弘安五年十月 日 之を定む

一 日昭 弁阿闍梨

二 日朗 大國阿闍梨

三 日興 白蓮阿闍梨

四 日向 佐渡阿闍梨さどあじかり

五 日頂 伊予阿闍梨いよあじかり

六 日持 蓮華阿闍梨れんげあじかり

此の六人の内五人と日興一人と和合せざる由緒条条の事。

一、五人・一同に云く、日蓮聖人の法門は天台宗なり、仍つて公所に捧ぐる状に云く天台沙門と云云、又云く先師日蓮聖人天台の余流を汲むと云云、又云く桓武聖代の古風を扇いで伝教大師の余流を汲み法華宗を弘めんと欲す云云。

日興が云く、彼の天台・伝教所弘の法華は迹門なり今日蓮聖人の弘宣し給う法華は本門なり、此の旨具に状に載せ畢んぬ、此の相違に依つて五人と日興と堅く以て義絶し畢んぬ。

一、五人・一同に云く、諸の神社は現当を祈らんが為なり仍つて

伊勢太神宮と二所と熊野と在在所所に参詣を企て精誠を致し二世の
所望を願う。

日興一人云く、謗法の国をば天神・地祇並びに其の国を守護するの
善神捨離して留らず、故に悪鬼神其の国土に乱入して災難を致す云
云、此の相違に依つて義絶し畢んぬ。

一、五人・一同に云く、如法経を勤行し之を書写し供養す仍つて
在在所所に法華三昧又は一日経を行ず。

日興が云く、此くの如き行儀は是れ末法の修行に非ず、又謗法の代
には行ずべからず、之に依つて日興と五人と堅く以て不和なり。

一、五人・一同に云く、聖人の法門は天台宗なり仍つて比叡山に
於て出家授戒し畢んぬ。

日興が云く、彼の比叡山の戒は是は迹門なり像法所持の戒なり、

にちれんしょうにん　日蓮聖人の受戒は法華本門の戒なり今末法所持の正戒なり、之に依つて日興と五人と義絶し畢んぬ。

已前の条条大綱此くの如し此の外巨細具に注し難きなり。

一、甲斐の国・波木井郷・身延山の麓に聖人の御廟あり而るに日興彼の御廟に通ぜざる子細は彼の御廟の地頭南部六道入道法名日円は日興最初発心の弟子なり、此の因縁に依つて聖人・御在所九箇年の間帰依し奉る滅後其の年月義絶する条条の事。

釈迦如来を造立供養して本尊と為し奉るべし是一。

次に聖人・御在所生九箇年の間・停止せらるる神社参詣其の年に之を始む二所三島に参詣を致せり是二。

次に一門の勧進と号して南部の郷内のフクシの塔を供養奉加之有り是三。

次に一門仏事の助成と号して九品念佛の道場一字之を造立し莊嚴せり、甲斐国其の処なり是四。

已上四箇条の謗法を教訓するに日向之を許すと云云、此の義に依つて去る其の年月・彼の波木井入道の子孫と永く以て師弟の義絶し畢んぬ、よつて御廟に相通ぜざるなり。

一、聖人の御例に順じ日興六人の弟子を定むる事。

一 日目

二 日華

三 日秀
聖人に常随給仕す

四 日禪

五 日仙

六 日乗 聖人に値い奉らず。

已上の五人は詮ずるに聖人給仕の輩なり、一味和合して異義有るべからざるの旨・議定する所なり。

一、聖人・御影像の事。

或は五人と云い・或は在家と云い絵像・木像に図し奉る事在在所所に其の数を知らず而るに面面不同なり。

爰に日興が云く、御影を図する所詮は後代に知らしめん為なり是に付け非に付け有りの儘に図し奉る可きなり、之に依つて日興門徒の在家・出家の輩聖人を見奉る仁等一同に評議して其の年月図し奉る所なり、全体異らずと雖も大概麁相に之を図す仍つて裏に書き付けを成すなり、但し彼の面の図像一も相似ざる中に去る正和

二年日順図絵の本有り、相似の分なけれども自余の像よりも少し面影有り、而る間後輩に彼此是非を弁ぜしめんが為裏書に不似と付け置く。

一、聖人御書の事 付けたり十一ヶ条

彼の五人・一同の義に云く、聖人・御作の御書積は之無き者なり、縦令少少之有りと雖も・或は在家の人の為に仮字を以て仏法の因縁を粗之を示し、若は俗男・俗女の一毫の供養を捧ぐる消息の返札に施主分を書いて愚癡の者を引撰したまえり、而るに日興、聖人の御書と号して之を談じ之を読む、是れ先師の恥辱を顕す云々、故に諸方に散在する処の御筆を・或はスキカエシに成し・或は火に焼き畢んぬ。

此くの如く先師の跡を破滅する故に具に之を註して後代の龜鏡と

為すなり。

一、立正安國論一卷。

此れに兩本有り一本は文應元年の御作是れ最明寺殿宝光寺殿へ奏上の本なり、一本は弘安年中身延山に於て先本に文言を添えたもう、而して別の旨趣無し只建治の広本と云う。

一、開目抄一卷、今開して上下と為す。佐土国の御作しじょうきんごよりもと四条金吾頼基に賜う、日興所持の本は第二転なり、未だ正本を以て之を校えず。

一、報恩抄一卷、今開して上下と為す。身延山に於て本師道善房しじょうりょうの為に作り清澄寺に送る日向が許に在りと聞く、日興所持の本は第二転なり、未だ正本を以て之を校えず。

一、撰時抄一卷、今開して上中下と為す。

駿河国西山由井某（それがし）に賜る、正本日興（にっこう）に上中二卷之れ在り（此中に面目俄に開く事）

下巻に於いては日昭（もと）が許に之在り。

一、下山抄一卷（しもやま）。

甲斐（かい）の国・下山郷（しもやまじょう）の兵庫五郎光基の氏寺・平泉寺の住僧因幡房日永
追（い）い出さるる時の述作なり、直（ただち）に御自筆（じひつ）を以て遣さる、正本の在所を
知らず。

一、観心本尊抄一卷（かんじんのほんぞんしょう）。

一、取要抄一卷。

一、四信五品抄一卷（ごぼん）。法門不審（ほうもんふしん）の条条申（もう）すに付いての御返事（ごへんじ）なり

仍（よ）つて彼の進状を奥に之（これ）を書く。」

已上の三巻は因幡国富城莊の本主今は常住（じょうじゅう）下総国五郎入道（ふさのくににゅうどう）日常
に賜わる、正本は彼の在所に在り。

一、本尊問答抄一卷。

一、唱題目抄一卷。

此の書最初の御書文応年中常途天台宗の義分を以て且く爾前・法華の相違を註し給う、仍つて文言義理共に爾なり。

一、御筆抄に法華本門の四字を加う、故に御書に之無しと雖も日興今義に従つて之を置く、先例無きに非ざるか。

一、本尊の事四箇条

一、五人一同に云く、本尊に於ては釈迦如来を崇め奉る可しとて既に立てたり、随つて弟子・檀那等の中にも造立供養の御書之れ在りと云云、而る間・盛に堂舎を造り・或は一鉢を安置し・或は普賢・文殊を脇士とす、仍つて

しょうにん
聖人御筆の本尊ほんぞんに於おいては彼の仏像ぶつぞうの後面こうめんに懸かけ奉たてまつり又は堂舎だうしゃの廊らうに之これを捨て置く。

にっこう
日興にっこうが云いく、聖人御立しょうにんの法門ほうもんに於おいては全く絵像えざう・木像もくざうの仏ぶつ・菩薩ぼさつを以もつて本尊ほんぞんと為なさず、唯御書ただごしよの意いに任まかせて妙法蓮華經みょうほうれんげきやうの五字ごじを以もつて本尊ほんぞんと為なす可べしと即すなわち御自筆じひつの本尊ほんぞん是これなり。

一、上の如ごとく一同いどうに此の本尊ほんぞんを忽緒こつしよし奉たてまつるの間ある・或あるは曼荼羅まんだらなりと云いつて死人しにんを覆おほうて葬やからる輩あはも有り、或あるは又沽却こかくする族やからも有り、此かくの如ごとく輕賤きやうせんする間たぶん・多分もつは以とがて失おわせ畢おわんぬ。

にっこう
日興にっこうが云いく、此の御筆ごほんぞんの御本尊ごほんぞんは是これ一閻浮提えんぶだいに未いまだ流布るふせず正像末しょうざうまつに未いまだ弘通くわつうせざる本尊ほんぞんなり、然しかれば則すなわち日興門徒にっこうもんとの所持しよじの輩やからに於おいては左右さう無なくく子孫しそんにも讓ゆずり弟子等でしにも付嘱ふそくすべからず、同一所どういしよに

安置し奉り六人・一同に守護し奉る可し、是れ偏に広宜流布の時本化
国主御尋有らん期まで深く敬重し奉る可し。

一、日興弟子分の本尊に於ては一一皆書き付け奉る事・誠に凡筆を
以て直に聖筆を贖す事最も其の恐れ有りと雖も・或は親には強盛の
信心を以て之を賜うと雖も子孫等之を捨て、或は師には常隨給仕の
功に酬いて之を授与すと雖も弟子等之を捨て、之に依つて・或は以て交
易し・或は以て他の為に盗まる、此くの如きの類い其れ数多なり故に所
賜の本主の交名を書き付くるは後代の高名の為なり。

一、御筆の本尊を以て形木に彫み不信の輩に授与して輕賤する由
諸方に其の聞え有り所謂日向日頂日春等なり。

日興の弟子分に於ては在家・出家の中に・或は身命を捨て・或は疵を
被り若は又在所を追放せられ一分信心の有る輩に忝くも書写し奉り

之^{これ}を授与^{じゅよ}する者なり。

本尊^{ほんぞん}人数^{にんずう}等又追放^{ついほう}人等、頸切られ、死を致^{いた}す人等。

一、本門寺を建つ可き在所の事。

五人一同に云く、彼の天台・伝教は存生に之を用いらるるの間、直に寺塔を立てたもう、所謂大唐の天台山本朝の比叡山是なり而るに彼の本門寺に於ては先師何の国何の所とも之を定め置かれずと。

爰に日興云く、凡そ勝地を撰んで伽藍を建立するは仏法の通例なり、然れば駿河国富士山は是れ日本第一の名山なり、最も此の砌に於て本門寺を建立すべき由・奏聞し畢んぬ、仍つて広宣流布の時至り国主此の法門を用いらるる時は必ず富士山に立てらるべきなり。

一、王城の事。

右、王城に於ては殊に勝地を撰ぶ可きなり、就中仏法は王法と本源一なり居処随つて相離るべからざるか、仍つて南都・七大寺・北京

ひえいざん・せんしやう
比叡山・先蹤之同じ後代改まらず、然れば駿河の国富士山は広博の地
なり一には扶桑国なり二には四神相応の勝地なり、尤も本門寺と王城
と一所なるべき由且は往古の佳例なり且は日蓮大聖人の本願の所な
り。

一、日興集むる所の証文の事。

御書の中に引用せらるる若は經論書釈の文若は内外典籍傳の文等、
あるたいこうずいぎてんよう
・或は大綱隨義転用し・或は粗意を取つて述用し給えり、之に依つて
にっこう
日興散引の諸文典籍等を集めて次第に証拠を勘校す、其の功未だ終
らず且らく集むる所なり

一内外論の要文上下二卷開目抄の意に依つて之を撰ぶ。

一本・迹弘經要文上くきようようぶんじようちゆうげ中下三卷撰時抄せんじしようの意に依つて之を撰ぶ。
一漢土の天台・妙樂邪法を対治たいじして正法を弘通しやうほうする証文一卷。
一日本の伝教大師南都の邪宗を破失はしつして法華の正法を弘通しやうほうする証文一卷。
証文一卷。

已上七卷之を集めて未だ再治せず。

一、奏聞狀の事。

一先師聖人文永五年申狀一通。一同八年申狀一通。

一日興其の年より申狀一通。

一漢土の仏法先ず以て沙汰の次第之を図す一通。

一本朝仏法先ず以て沙汰の次第之を図す一通。

一三時弘經の次第並びに本門寺を建つ可き事。

一 先師せんしの書しよ積しやく要文ようぶん一通。

一、追加八箇条。

近年きんねん以来いらい日興にっこう所立しよりゅうの義ぎを盗ぬすみ取り己おのが義ぎと為なす輩やから出来しゅつする由緒ゆいちょ条条の事。

一、寂仙房にっせんぼう日澄にっしょう始めて盗ぬすみ取とつて己おのが義ぎと為なす彼のかの日澄にっしょうは民部みんぶ阿闍梨あじかりの弟子でしなり、仍よつて甲斐国かいのくに下山郷しもやまごうの地頭じとう左衛門さえもん四郎しろう光長みつちやうは聖人しようにんの御弟子おんでしなり御遷化おんせんけの後民部阿闍梨みんぶあじかりを師しと為なす僧そうなり、而しかるに去いぬる永仁年中・新堂を

造立し一駄仏を安置するの刻み、日興が許に來臨して所立の義を難
ず、聞き已つて自義と為し候処に正安二年民部阿闍梨彼の新堂並び
に一駄仏を開眼供養す、爰に日澄本師民部阿闍梨と永く義絶せしめ
日興に歸伏して弟子と為る、此の仁盜み取つて自義と為すと雖も後
改悔歸伏の者なり、

一、去る永仁年中越後国に摩訶一と云う者有り天台宗の学匠なり
日興が義を盜み取つて盛んに越後国に弘通するの由之を聞く。

一、去る正安年中以来浄法房天目と云う者有り聖人に値ひ奉る日興
が義を盜み取り鎌倉に於て之を弘通す、又祖師の添加を蔑如す。

一、弁阿闍梨の弟子少輔房日高去る嘉元年中以来日興が義を盜み
取つて下総の国に於て盛んに弘通す。一、伊予阿闍梨の下総国真間
の堂は一駄仏なり、而るに去る年月日興が義を盜み取つて四脇士を副

う彼の菩薩ぼさつの像は宝冠形なり。

一、民部阿闍梨みんぶあじやりも同く四脇士きようじを造り副う、彼の菩薩像ぼさつは比丘形びくにして納衣のうえを著じやくす、又近年きんねん以来諸神しよじんに詣とどずる事を留とどむるの由聞くなり。

一、甲斐国かいのくにに肥前房日伝かいのくにと云う者有り寂日房しやくにちぼう向背かうはいの弟子でしなり日興にっこうが義を盗み取つて甲斐国かいのくにに於おいて盛さかんに此の義を弘通くわつうす是れ又四脇士きようじを造り副う彼の菩薩ぼさつの像は身みな皆金色剃髮しはつの比丘形びくなり、又神詣とどを留とどむるの由之これを聞きこく。

一、諸方しよほうに聖人しやうにんの御書ごしよ之これを讀む由の事。此の書札の抄別状有り之これを見るべし。

◆四三四

五人所破抄

1610p

夫れそ以おもんみれば諸しよ仏ぶつ懸けん遠えんの難がたきことは譬たとえを曇どん華げに仮かり妙みやう法ぼう値ち遇ぐうの縁ぐうは
比うを浮う木きぎに類るいす、塵じん数じゆ三さん五ごの施せ化けに猶なほ漏もれて正しやう像ざう二に千せんの弘くき經きやうも
稍ややす過すぎ已いんぬ、闍と靜じやう堅けん固この今けいは乘じやう戒かい俱ともに緩ゆるうして人へいには弊あく惡くの機きのみ
多おほし何えびの依よ憑ぼうしきこと有あらんや、設たい内ない外がい兼けん包ぱうの智ちは三さん祇ぎに積たみ大だい小しやう
薰くん習じゆうの行ぎやうは百ひやく劫けつを満まんつとも時ときと機きとを弁べんぜず本ほんと迹せきとに迷めい倒とうせば
其それも亦また信しんじ難なんからん。

爰こゝに先せん師し聖しやう人にん親まのり大だい聖せいの付つを受けて末まつ法ぼうの主な為なりと雖いえども、早はやく
無む常じやうの相さうを表あらわして円えん寂じやくに歸き入にゅうするの刻こ五ご字じを紹しやう繼けいするが為ために六りく人にんの
遺ゆい弟ていを定さだめたもう。

日昭と日朗と日興と日向と日頂と日持と已上六人なり。

五人武家に捧ぐる状に云く未だ公家に奏せず。

天台の沙門日昭謹んで言上す。

先師日蓮は忝くも法華の行者と為て専ら仏果の直道を顕し天台の

余流を酌み地慮の研精を尽すと云々。

又云く、日昭不肖の身為りと雖も兵火永息の為副将安全の為に法華の道場を構え、長日の勤行を致し奉る、已に冥冥の志有り豈昭昭の

感無からんや詮を取る。

天台沙門日朗謹んで言上す。

先師日蓮は如来の本意に任せ先判の権経を聞いて後判の実教を弘通せしむるに、最要未だ上聞に達せず愁鬱を懷いて空しく多年の星霜を送る玉を含みて寂に入るが如く逝去せしめ畢んぬ、然して日朗

忝かたじけなくも彼のいちじょうみようとん一乗妙典を相伝そうでんして鎮とこしなえこつに国家を祈り奉たてまつる証を取る。

天台法華宗の沙門日向日頂謹つしんで言上ごんじょうす。

桓武聖代かんむせいだいの古風を扇あおぎ伝教大師でんぎやうだいしの余流を汲りつしやうあんごくろんみ立正安国論じゆんに准じゆんじて

法華ほつけいちじやう一乗を崇あがめめられんことを請こそううの状。右謹つしんで旧規きうきを檢かんがへたるに

祖師そし・伝教大師でんぎやうだいしは延暦年中えんりやくに始めて叡山えいさんに登り法華宗ほつけしやうを弘通くつうしたも

う云云。

又云いわく法華ほつけの道場どうじやうに擬ごして天長地久てんちやうちきやうを祈り今こんに断絶だんぜつすること無し

証を取る。

日興公家にっこうくけに奏そうし武家ぶけに訴いえて云いく。

日蓮聖人にちれんしょうにんは忝かたじけなくも上行菩薩じやうぎやうぼさつの再誕さいたんにして本門弘經ほんもんくきやうの大権たいけんなり、

所謂大覺世尊いゝゆるだいかくせそん未來みらいの時機ときを鑒かんがみたまい世を三時さんじに分ち法しを四依しえに付し

て以來いらい、正法千年しやうぽうの内には迦葉かしょう・阿難あなん等の聖者せいじゃ先せんず小ひうを弘ひろめて大だいを略りやく

す竜樹・天親等の論師は次に小を破りて大を立つ、像法千年の間異域には則ち陳隋兩主の明時に智者は十師の邪義を破る、本朝には亦桓武天皇の聖代に伝教は六宗の僻論を改む、今末法に入つては上行出世の境本門流布の時なり正像已に過ぎぬ

何ぞ爾前・迹門を以て強いて御歸依有る可けんや、就中天台・伝教は像法の時に當つて演説し日蓮聖人は末法の代を迎えて恢弘す、彼は葉王の後身此れは上行の再誕なり經文に載する所・解釈炳焉たる者なり。

凡そ一代教籍の濫觴は法華の中道を解かんが為三国伝持の流布は蓋ぞ真実の本門を先とせざらんや、若し瓦礫を貴んで珠玉を棄て燭影を捧げて日光を睥せば只風俗の迷妄に趁いて世尊の化導を謗するに似るか、華の中に優曇有り木の中に梅檀有り凡慮覃び難し併ながら冥

鑑まかに任まかす云云、本と迹と既すでに水火すいかを隔へだて時と機きと亦天地またてんちの如ごとし、何なんぞ地涌じゆの菩薩ぼさつを指さして苟こも天台てんだいの末弟まくだいと称なづせんや。

次に祈国すでの段亦またもつ以もつて不審ふしんなり、所以ゆえんは何いかん文永免許ぶんえいめんきよの古先師素意いにしえせんしの分既すでに以もつて顕あらわれ畢おわんぬ、何なんぞ僧聖道門しやうどうもんの怨敵おんてきに交まじり坐まして鎮とこしなえにてんちようちきゆう天長地久てんちようちきゆうの御願ごがんを祈いのらんや、況いはや三災さんさい弥い起いり一分いちぶんも徴しるし無なし啻ただにそし祖師そしの本懷ほんかいに違いする

のみにあらず還つて己身の面目を失うの謂いか。

又五人一同に云く凡そ倭漢兩朝の章疏を披いて本・迹二門の元意を
探るに判教は玄文に尽し弘通は残る所無し、何ぞ天台一宗の外に胸臆
の異義を構えんや、拙いかな尊高の台嶺を編して辺鄙の富山を崇み、明
静の止觀を聞いて仮字の消息を執する、誠に是れ愚癡を一身に招き
耻辱を先師に及ぼす者か、僻案の至りなり甚だ以て然るべからず、
若し聖人の製作と号し後代に伝えんと欲せば宜く卑賤の倭言を改め
漢字を用ゆべし云云。

日興が云く、夫れ竜樹・天親は即ち四依の居士にして円頓一実の
中道を申ふと雖も而も權を以て面と為し実を隠して裏に用ゆ、天台・
伝教は亦五品の行位にして専ら本・迹二門の不同を分ち而も迹を弘め
衆を救い本を残して末に譲る、内鑒は然りと雖も外は時宜に適うかの

故に・或は知らざるの相を示し・或は知つて而も未だ闡揚せず、然るに
今本・迹・兩經 共に天台の弘通と称するの条は經文に違背し解釈は抛
を失う、所以は宝塔三箇の鳳詔に驚き勸持二万の勅答を挙げて此土
の弘經を申ぶと雖も迹化の菩薩に許さず、過八恒沙の競望を止めて不
須汝等護持此經と示し地涌千界の菩薩を召して如来・一切所有の法
を授く、迹化他方の極位すら尚劫数の塵点に暗し止善男子の金言に豈
幽微の実本を許さんや、本門五字の肝要は上行菩薩の付囑なり誰か
胸臆なりと称せんや（委細文の如し經を。開いて見るべし。）

次に天台大師經文を消したもうに、如来之を止むるに凡そ三義有
り汝等各各自ら己が住有り若し此の土に住すれば彼の利益を廃せん、
又他方は此土に結縁の事浅し宣授せんと欲すと雖も必ず巨益無から
ん、又若し之を許さば則ち下を召すことを得ず下若し来らずんば迹も

破はすることを得ず遠あらかも顯あらわすことを得ず是これを三義と為なす、如來にょらい之これを止とどめ
て下方を召よして來きらすに亦また三義有あり、是これ我われが弟子でし応まさに我われが法ひうを弘ひろむ
べし、縁深じんこう厚こうなるを以もつて能よく此土しどに遍へんして益やくし分身ふんじんの土どに遍へんして益やくし
他方たほうの土どに遍へんして益やくし、又開近顯遠かいこんけんのんすることを得、是かくのゆえの故ゆえに彼とどを止とどめて
下めを召よすなり」文、又云いわく 爾前にぜん仏告ぶつこう上行じようぎやうの下こ是これ第三に結要付囑けつちやうふぞく」
と云々、伝教大師でんぎやうだいしは本門ほんもんを慕もいて「正像しやうざう稍過ややすぎ已おわつ

て末法まつぽうただ近きはきに有ほつり法華いちじよう一乗きの機ま今正まさしく是これ其そのの時ときなり」文、又云く代こたはを語すなわれば則すなわち像なたずの終たすり末とうじようの初いめ地ちを原もとめれば則すなわち唐とうの東かつ・羯かつの西たす・人たすを尋たすめれば則すなわち五濁ごじよくの生とうじよう・闍とうじよう諍じようの時とき・經いに云く猶多ゆた怨嫉おんしつ・況滅度後きやうめつどごと此の言良まことに以有ゆえあるなり」云云。

加之しかのみならず大論だいろんの中に法華ほつは是これ秘密ひみつなれば諸もろもろの菩薩ぼさつに付つす」と宣のぶ、今の下文くだしぶみに下方めを召よすが如ごとく尚本眷属なほ けんぞくを待まちつ驗あきらけし余いは未いまだ堪たえず、輔正記ふしやうきに云く付嘱ふぞくを明あせば此の經ただをば唯下方ゆじゆつ涌出ゆづつの菩薩ぼさつに付つす、何を以もつての故ゆえに爾しかる、法こ是これ久成くじやうの法よなるに由よるが故ゆえに久成くじやうの人に付す」論釈ろんしやく一あらに非はんず繁はんを恐これて之これを略りゃくす。

觀音かんのん・藥王やくおうは既すでに迹化しゃつけに居こす南岳なんがく・天台てんだい誰人だれの後身ごしんぞや、正像過しやうざうすぎて二千年未いまだ上行じやうぎやうの出現しゆつげんを聞きかず末法まつぽうも亦また二百余廻にひやくよゐまいなれば本門ほんもん流布るふの時節じせつなり何ぞ一なん部の總もつ釈しやくを以もつて猥みだりに三時ぐきやうの弘經なんを難なんぜんや、次

にほんに日本と云うは惣名なり亦本朝を扶桑国と云う富士は郡の号即ち
だいびゃくれんげさん大日蓮華山と称す、爰に知んぬ先師自然の名号と妙法蓮華の経題と
山州共に相応す弘通此の地に在り、遠く異朝の天台を訪えば台星の
所居なり大師・彼の深洞を下して迹門を建立す、近く我が国の大日山
を尋ねれば日天の能住なり聖人・此の高峰を撰んで本門を弘めんと
欲す、閻浮第一の富山なればなり五人争でか辺鄙と下さんや。
次に上行菩薩は本極法身微妙深遠にして寂光に居すと雖も未了の
者の為に事を以て理を顕し地より涌出したまいて以来付を本門に承け
時を末法に待ち生を我朝に降し訓を仮字に示す、祖師の鑒機失無く
ば遺弟の改転定めて恐れ有らんか、此等の所勘に依つて浅智の仰信を
致すのみ、抑梵漢の両字と扶桑の一点とは時に依り機に随つて互に
優劣無しと雖も情上聖被下の善巧を思うに殆んど天竺震旦の方便

に超えたり、何ぞ倭国の風俗を蔑如して必ずしも漢家の水露を崇重せん、但し西天の仏法東漸の時・既に梵音を翻じて倭漢に伝うるが如く本朝の聖語も広宣の日は亦仮字を訳して梵震に通ず可し、遠沾の翻訳は諍論に及ばず雅意の改変は独り悲哀を懷く者な

り。

又五人一同に云く、先師所持の釈尊は忝くも弘長配流の昔之を刻み、弘安歸寂の日も隨身せり何ぞ輒く言うに及ばんや云云。

日興が云く、諸仏の莊嚴同じと雖も印契に依つて異を弁ず如来の本迹は測り難し眷属を以て之を知る、所以に小乗三歳の教主は迦葉・阿難を脇士と為し伽耶始成の迹仏は普賢・文殊左右に在り、此の外の一鉢の形像豈頭陀の応身に非ずや、凡そ円頓の学者は広く大綱を存して綱目を事とせず、倩聖人出世の本懷を尋ぬれば源と權実已過の化導を改め上行所伝の乗戒を弘めんが為なり、図する所の本尊は亦正像二千の間・一閻浮提の内未曾有の大漫荼羅なり、今に當つては迹化の教主既に益無し況や☆☆婆和の拙仏をや、次に隨身所持の俗難は只是れ継子

一旦の寵愛月を待つ片時の螢光か、執する者尚強いて帰依を致さんと欲せば須らく四菩薩を加うべし敢て一仏を用ゆること勿れ云云。

又五人一同に云く、富士の立義の体為らく啻に法門の異類に擬するのみに匪ず剩え神無の別途を構う、既に以て道を失う誰人か之を信ぜんや。

日興が云く、我が朝は是れ神明和光の塵仏陀利生の境なり、然りと雖も今末法に入つて二百余年御帰依の法は爾前・迹門なり誹謗の国を棄捨するの条は経論の明文にして先師の勸うる所なり、何ぞ善神聖人の誓願に背き新に悪鬼乱入の社壇に詣でんや、但し本門流宣の代、垂迹還住の時は尤も上下を撰んで鎮守を定む可し云云。

又五人一同に云く、如法・一日の兩経は共に以て法華の真文なり、書写・読誦に於ても相違有るべからず云云。日興が云く、如法・一日

の両経は法華の真文為りと雖も正像転時の往古・平等・授受の修行なり、今末法の代を迎えて折伏の相を論ずれば一部読誦を専とせず但五字の題目を唱え三類の強敵を受くと雖も諸師の邪義を責む可き者か、此れ則ち勸持不輕の明文上行弘通の現証なり、何ぞ必ずしも折伏の時・授受の行を修すべけんや、但し四悉の廃立・二門の取捨宜く時機を守るべし敢て偏執すること勿れ云云。

又五人の立義既に二途に分れ戒門に於て持破を論ず云云。

日興が云く、夫れ波羅提木叉の用否行住四威儀の所作平巖の時機に随い持破に凡聖有り、爾前・迹門の尸羅を論ずれば一向に制禁す可し、法華本門の大戒に於ては何ぞ又依用せざらんや。

但し本門の戒牒委細の経釈面を以て決す可し云云。

身延の群徒猥に疑難して云く、富士の重科は専ら当所の離散に有

り、縦い地頭非例を致すとも先師の遺跡を忍ぶ可し既に御墓に参詣せず争か向背の過罪を遁れんや云云。

日興が云く、此の段顛倒の至極なり言語に及ばずと雖も未聞の族に仰せて毒鼓の縁を結ばん、夫れ身延興隆の元由は聖人・御座の尊貴に依り地頭発心の根源は日興教化の力用に非ずや、然るを今下種結縁の最初を忘れて劣謂勝見の僻案を起し師弟有無の新義を構え理非顯然の諍論を致す、誠に是れ葉を取つて其の根を乾かし流を酌んで未だ源を知らざる故か、何に況や慈覺・智証は即伝教入室の付弟、叡山住持の祖匠なり、若宮八幡は亦百王鎮護の大神日域朝廷の本主なり、然りと雖も明神は仏前に於て謗国捨離の願を立て先聖は慈覺を指して本師違背の仁と称す、若し御廟を守るを正と為さば円仁所破の段頗る高祖の誤謬なり、非例を致して過無くんば其の国・棄捨の誓

い都べて垂迹すいじやくの不覚ふかくか、料はかり知しんぬ惡鬼あくぎ外道げどうの災なを作そうし宗廟そうびよう社稷しゃしよくの
處ところを辭せんじんす善神しやうにん聖人しやうにんの居すなわは即しやうじきち正直しやうほう正法いただきの頂ななり、抑そも身延しん一沢じの
余流いまま未ほつだ法水すいの清濁わかを分わたず強しいて御廟ごびようの参否さんを論ろんぜば汝等なんじ將まさに碎くだ
身の舍利しやりを信しんぜんとす何なんぞ法華ほつげの持者じしやと号ごうせんや、迷暗まよい尤もつも甚はなし之
に准じゆんじて知しる可べし伝でんえ聞きこく天台大師てんだいだいしに三千余さんぜんの弟子でし有あり章安しやうあん朗然らうぜんとし
て独ひとり之これを達たつす、伝でん教大師きやうだいしは三千さんぜん侶りふの衆徒しゆとを安やすく義真ぎしん以後いごは其それ無
きが如ごとし、今日けふ蓮聖人れんしやうにんは万年まんねん救護くごの為ために

六人の上首じようしゆを定む然しかりと雖いえども法門ほうもん既に二途に分れ門徒もんた亦また一准いちじゆんならず、宿習しゆくじゆうの至り正師しようしに遇いうと雖いえども伝持でんじの人自他じた弁がたじ難がたし、能よく是この法を聴く者・此の人亦復難またがたしと此の言若もし墮おちなば将来悲べむ可べし、
經文きやうもんと解げ釈しやくと宛あたかも符契ふけいの如ごとし迹化しやつけの悲歎ひたん猶な此このくの如ごとし本門ほんもんの墜だ墜つい
寧むしろ愁しゆえざらんや、案立あんたつ若もし先師せんしに違たがわば一身いつしんの短慮たんりょ尤もつとも恐おそれ有あり言
う所亦また仏意ぶつゐに叶かなわば五人ごにんの謬義みやうぎ甚はなはだだ憂うれう可べし取捨しゆしや正見せいけんに任まかす思惟しゆゐ
して宜よろしく解と解とすべし云云。

此の外支流異義いぎを構かまえ諂曲てんきく稍数多あまたなり、其の中に天目てんもくの云いく、已前いぜん
の六人の談だんは皆みな以もつて嘲哂ちやうしやうすべきの義ぎなり但ただし富山ふさん宜よろしと雖いえども亦過失有またとが
り迹門しやくもんを破はし乍なら方便品ほうべんを讀よむこと既すでに自語相違じごそうゐせり信受しんじゆすべきに
足らず、若もし所破しよはの為と云いわば弥陀みだ經をも誦じゆすべけんや云云。

日興につこうが云いく、聖人しようにんの炳誠へいかいの如ごとくんば沙汰さたの限りに非あらずと雖いえども慢幢まんどうを

倒さんが為に粗一端を示さん、先ず本・迹の相違は汝儘に自發するや
去る□□□□二年の比天目当所に来て問答を遂ぐるの刻み日興が
立義・一一証伏し畢んぬ、若し正見を存せば尤も帰敬を成すべきの処
に還つて方便読誦の難を致す誠に是れ無慚無愧の甚しきなり、夫れ
狂言綺語の歌仙を取つて自作に備うる卿相すら尚短才の耻辱と為す、
況や終窮究竟の本門を盗み己が徳と称する逆人争か無間の大苦を
免れんや、照覽冥に在り慎まざるばあるべからず。

次に方便品の疑難に至つては汝未だ法門の立破を弁ぜず恣に
祖師の添加を蔑如す重科一に非ず罪業上の如し、若し知らんと欲せば
以前の如く富山に詣で尤も習学の為宮仕を致す可きなり、抑彼等
が為に教訓するに非ず正見に任せて二義を立つ、一には所破の為二に
は文証を借るなり、初に所破の為とは純一無雜の序分には且く権乗の

得果を挙げ、はいしやく廢迹はいしやく顯本の壽量じゆりようには猶伽耶なおがやの近情を明す、此れを以て
之をこれ思うに方便稱読ほうべんの元意は只是ただこ是れ牒破の一段なり、若しも所破しよはの為と
云わば念仏ねんぶつをも申す可もうきか等の愚難おろかなんは誠に四重しじゅうの興廢こうはいに迷まよい未だ三
時の弘經くきようを知らず重ちようじよう疊の狂難なん嗚呼ああの至極しごくなり、夫れそ諸宗しよしゅう破失はしつの基もとは
天台・伝教てんだい でんぎようの助言にして全く先聖せんしようの正意せいぎに非あらず何ぞなん所破しよはの為ために読ま

ざるべけんや、きようしやく経釈めいきようすでの明鏡既に日月にちがつの如ごとし天目あんじゃやうんの暗者邪雲おほに覆おほわる故なり、次に述の文証もんしやうを借りて本の実相じつそうを
あらわ顯あらわすなり、此等これらの深義じんぎは聖人しようにんの高意こういにして浅智せんちの覃あぶ所に非あらず正機しようきには
まさ將これに之を伝つたうべし云云。

嘉曆三戊辰年七月草案す

日順

◆四三五

日興遺誠置文

1617p

そ夫おもれ以おもみれば末法まつぽう弘通くわつうの恵日ゑにちは極惡ごくあく謗法ぼうぽうの闇やみを照てらし久遠くおん寿量じゆりやうの
みようふう妙風めうふうは伽耶がや始成しじやうの権門こんもんを吹ふき払はらう、於戲あ仏法ぶつぽうに値あうこと希まれにして喩たとえ
を曇華どんげの萼はなしべに仮かり類るいを浮木うきぎの穴あなに比ひせん、尚なお以もつて足たりらざる者か、爰こゝに

われらしゅくえんじんこう
我等宿縁深厚なるに依つて幸に此の経に遇い奉ることを得、随つて後
学ための爲に条目じようもくを筆端ひつたんに染むる事、偏ひとえに広宣流布こうせんるふの金言きんげんを仰あおがんが為な
り。

一、富士の立義りつぎいささか聊せんしも先師の御弘通ぐつうに違せざる事。

一、五人の立義りつぎ一先師の御弘通ぐつうに違する事。

一、御書ごしよいずれ何れも偽書ごしよいずれに擬し当門流ごらを毀謗きぼうせん者之有る可し、若し加様も
の悪侶あくりよしゅつたい出来せば親近しんこんす可からざる事。

一、偽書を造つて御書ごしよと号し本迹ほんしやく一致の修行しゆぎやうを致す者は師子身中の
虫と心得こころえ可き事。

一、謗法ほうぼうを呵責かしやくせずして遊戯ゆげ雑談ざうだんの化儀けぎ並に外書歌道を好む可べからざ
る事。

一、檀那だんなの社参物詣を禁ず可べし、何に況や其その器にして一見と称しょうして

謗法ほうぼうを致せる惡鬼あくき乱入らんにゅうの寺社ていしゃに詣よず可べけんや、返す返すも口惜くちおし

しき次第しだいなり、是れ全こく己義こぎに非あらず經文きやうもん御抄ごしょう等に任まかす云云。

一、器用でしの弟子でしに於おいては師匠ししやうの諸事しよじを許ゆるし聞おき御抄ごしょう以下の諸聖教しよしやうきやうを
教学べす可べき事。

一、學問未練にして名聞名利の大衆は予が末流に叶う可からざる事。

一、予が後代の徒衆等權實を弁えざる間は父母・師匠の恩を振り捨て出離証道の為に本寺に詣で学文す可き事。

一、義道の落居無くして天台の学文す可からざる事。

一、当門流に於ては御書を心肝に染め極理を師伝して若し間有らば台家を聞く可き事。

一、論議講説等を好み自余を交ゆ可からざる事。

一、未だ広宣流布せざる間は身命を捨て随力弘通を致す可き事。

一、身軽法重の行者に於ては下劣の法師為りと雖も当如敬仏の道理に任せて信敬を致す可き事。

一、弘通の法師に於ては下輩為りと雖も老僧の思を為す可き事。

一、下劣げれつの者な為なりと雖いえども我われより智勝すくれたる者ものをば仰あおいで師匠ししやうとす可べき事。

一、時の貫首な為なりと雖いえども仏法ぶつぽうに相違そういして己義こぎを構かまえば之これを用もちう可べからざる事。

一、衆議な為なりと雖いえども仏法ぶつぽうに相違そうい有あらば貫首これ之を摧くだく可べき事。

一、衣の墨黒すみくろくすべからざる事。

一、直綴じきとつを着きす可べからざる事。

一、謗法ほうぼうと同座どうざす可べからず与同罪よどうざいを恐おそる可べき事。

一、謗法ほうぼうの供養くようを請うく可べからざる事。

一、刀杖等とうじやうに於おいては仏法守護ぶつぽうしゆごの為ために之これを許ゆるす。

但ただし出仕だての時節じせつは帶おびす可べからざるか、若もし其それ大衆等たいしやうに於おいては之これを許ゆるす可べきかの事。

一、若輩な為りと雖いえども高位こういの檀那だんな自り末座まつざ

に居べる可べからざる事

一、先師せんしの如ごとく予が化儀けぎも聖僧せいそう為る可べし、但ただし時の貫首ある・或あるは習学しゅうがくの

仁おいに於おては設たといいつたん一旦の・犯有りと雖いえども衆徒しゅうとに差置さく可べき事。

一、巧ぎょう於難問答おうなんもんどうの行者ぎやうじやに於おては先師せんしの如ごとく賞翫しょうがんす可べき事。

右の条目大略じょうもく此かくの如ごとし、万年救護まんねんくごの為ために二十六箇条を置く後代の

学侶敢あえてて疑惑ぎわくを生ずる事勿なかれ、此の内一箇条おに於おても犯おす者は

日興にっこうが末流まつりゅうに有ある可べからず、仍よつて定さだむる所の条条くだん条件ごの如ごとし。

元弘三年癸酉正月十三日

日興判